

---

**現代ダンジョンライフの続きは異世界オープンワールド  
で！【書籍2巻5月25日発売】**

---

しば犬部隊

HinaProject Inc.

## 注意事項

このPDFファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をPDF化したものです。

このPDFファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

### 【小説タイトル】

現代ダンジョンライフの続きは異世界オープンワールドで！【書籍2巻5月25日発売】

### 【Nコード】

N4169HA

### 【作者名】

しば犬部隊

### 【あらすじ】

【お陰様で2巻が出ます。2023年 5月25日 オーバーラップ文庫様より発売されます。ストルのイラストが最高です】

Q 明らかにメインクエストがバッドエンドへ誘導してくるのですがバグでしょうか？

A いいえ、仕様です。鬱バッドエンドがトゥルーendになっております。

Q 嫌なので、この「仲間を殺せ」というクエストメーカー、お前にぶん投げておきますね

現代ダンジョンで死んだ強欲な探索者が異世界オープンワールドで奴隷スタートから少しづつ成り上がるお話です。

パン屋になり、国中にホットドック流行らせたり、貴族にダイエットの概念やサウナの喜びを布教し、孤児どもを悪辣な方法でもてなし、格安（現代倫理基準）の労働力としてパン屋で過酷な労働に従事させたり（月残業15時間完全週休2日、福利厚生、年次有休有り）貴族のやんごとない血筋メスガキの家庭教師になったり、脳内クエストメーカー女とマウント合戦したり、竜のヒモになったり、吸血鬼のオヤツにされたりします。

Q 生活基盤がないのですがどうしたらいいですか？

A 冒険者で日銭を稼ぎつつ、トカゲと一緒にパン屋でもしたらどうでしょうか？

Q あのままてめえの言う通りにしてたらトカゲは死んでいたんで

すが、何か言うことはありませんか？

A あなた話を聞かずにクエストマーカーぶん投げてメインクエスト無視したから、トカゲ生きてるでしょ。良いじゃないですか、それで

Q お前いつかぶちのめしに行くからな

A あなたメインクエストぶん投げてサイドクエストしかせずに冒険者生活満喫してるでしょ、好き勝手しすぎて草

やたらメインクエストが鬱end推しなので、全力でメインクエストを無視してたのしい冒険者ライフを送ります。

強欲冒険者は欲望のまま、鬱endをぶち壊してハッピーエンドへ向かいます。

主人公はそれなりに戦えますが最強枠ではありません。しかしどんな敵にもワンチャン狙える感じの切り札あったりします（リスク有り）

ゲーム風表現ありますが、夢オチ、仮想空間、VRゲームオチで  
ないのでご安心ください。作者はそのオチに親を殺されたので憎  
悪しています

人は割と死にますが犬や猫は死にません。死んでません。

# 1話 奴隷スタート(前書き)

↳2028年、9月、ニホン、バベル島直下

↳現代ダンジョン、“バベルの大穴”、第二階層”大草原地帯”にて

## 1話 奴隷スタート

湖のほとりに小さな家を建てたかった。

遠山鳴人はふと、思う。

腹の傷、既に痛みはなく、ただ暖かいだけ。

「いい、景色、だなあ…… ちくしょう」

目の前には青々とした大草原。

足をひきずり、血を流しながら1人ゆく。

「……そうだ、パソコンのHDD…… 処分、してもらわねえと……」

家はモダンなログハウス。

畳マットで、優しい草の香り。もちろん冷暖房床暖房完備、冬は暖かく、夏は涼しい、そんな家。

湖のほとりにには、サウナを建てよう。

朝、まだ鳥も起きていない時間からサウナに入り、誰も触れていない湖で体を冷やす。

「マジでやらかした。コレまじでやべえ」

俺だけの家を建てたかった。

そこにはお抱えのシェフ、パン職人がいてその日の気分に合わせて焼き立てのパンが出るんだ。

「あー、コレヤバイ。死ぬ、今度こそ死ぬ、カッコつけるんじゃないかったわ、マジで」

歩き続ける、一歩進むたびに腹から血が垂れ続ける。止まらない。



犬も、飼おう。

しば犬でもなんでもいい、ある程度大きくてもふもふしてるやつがいい。

その家にたまに、気の合う仲間を呼んで、酒飲んで騒いで歌って泳いで、美味しいモン食って。

ドサッ。

「かね、金にも困らねえ…… 食いたいモンを食いたいだけ買って、栄養バランスの取れた最高の飯を用意して、無駄に飲みもしねえ高い酒買ったり、使わねえ家電買ったり…… 贅沢、して」

急に膝が抜けた。うつ伏せに倒れる。

衝撃で内臓がこぼれたかと錯覚するが、まだ大丈夫なようだ。

身体が妙に暖かい。

ああ、自分の血溜まりか。

遠山はもう薄く笑うしかなかった。

草原の青い匂いと、血の鉄錆の匂いが混じり合う。

「何匹殺した……？ あいつら、逃げ切れたのか？」

うわごとのように、遠山は呟く。

怪物種。一ツ目草原オオザルの固い骨を砕く感触はもう手のひらから消えて久しい。

5匹殺した所までは覚えていたが、後は分からない。気付けばこんな風に朦朧と歩き続けていた。

「大草原が、死に場所か…… 出来ればベッドの上で死にたかったな」

赤茶色の登山用パーカーのような上着、カーゴパンツに機能性に

秀でた革の加工ブーツ。

キツめのアウトドアスタイルに身を包んだ遠山がブツブツと、血を流しながら呟く。

遠山 鳴人は、探索者だ。

3年前、世界に突如現れたその土地。

怪物蔓延り、財宝が眠るこの世唯一にして、最後の神秘の場所。現代ダンジョン、バベルの大穴を進む少しいかれた人種。

探索者を始めて3年。

現代ダンジョンが世界に現れるのと同時に探索者になった数少ない古株の探索者だった。

「あー、クソ。せっかく上級探索者になれたのに…… これから楽しくなる所だったのによー……」

素質はあった。

怪物を始末することに抵抗はなかった。甘い青い血の匂いもすぐに慣れた。

鍛える事にも真摯に向き合って来た。どうすれば効率よく殺せるか。それを覚えるのにあまり苦労しなかった。

「はあ…… あんだけ、殺したから、か。ま、殺されも、する、よなあ」

探索の準備を怠る事もなく、己の力を過信せずに逃げる時は逃げ、生き延びて来た。

怪物種を殺し、その素材を剥ぎ金にする。怪物種の宝を奪い、金にする。

「もっと、早めに、逃げれば、……あ、やべ、暗い……」

自分の欲望を叶える為に、探索者になった。

遠山 鳴人は探索者になってようやく、人生は割と楽しいものなんじゃないかと考えるようになっていた。

失っただけだった人生が上向きになる筈だった。

それでも、死ぬときは死ぬ。

今日がその時だ。

「どこで……間違えたんだ……俺」

眦に浮かぶのは涙。悔しさか怖さか、あるいは両方か。

依頼を受けたのが間違いだったのか。

仲間を庇ったのが間違いだったのか。

仲間を作ったのが間違いだったのか。

それとも、

「探索者……なったのが間違いだったか……」

呟き、笑う。

馬鹿か、俺は。

遠山の頭の中に探索者になってからの3年が駆け巡る。

「たのしかった…… 本当に楽しかった。戦って、殺して、また戦って、殺して、金稼いで、うまいモン食って、贅沢して」

たのしかった。

遠山は楽しかったのだ。

探索者という血みどろの生き方が。

奪って、戦って得る。その生き方がとても楽しかった。

まるで幼い頃に憧れた創作物の登場人物、ファンタジーに出てくる荒くれ者達、“冒険者”のような生き様が楽しかったのだ。

「……は、はは。次は、間違えねえ…… そうだ、戦術を見直そう、

早めにキリヤイバを使って……銃弾もケチらずに……」

頭に巡るは今回の戦闘の反省点、どこか貧乏性が抜けなかった為に、”切り札”を使うのを躊躇った。

遠山はエリクサーは使わずに取っておくタイプの人間だった。

「あー… 次だ、次。次はもうドバドバ使お。開幕ブツパとかも、いいかな……」

ゴポリ、口を開くと、黒い塊のような血がまろび出る。飲み込もうとしてもダメだ。喉に力が入らない。

身体力が抜けていく。

ず、ズズズズズ。

その時、まるで身体がダンジョンに沈み込んでいくような錯覚。

「……ワオ、沈殿現象…… はは、絶対死ぬ奴じゃん」

錯覚ではない。

現代ダンジョン、バベルの大穴において確認されている異常現象の一つ。

沈殿現象。

意味はその名の通り、その地帯が沈んで消えるのだ。

満身創痍の死にかけ、もう指先しか動けない遠山が静かに、しかし確実にダンジョンへ沈んで行く。

遠山 鳴人は遺体すら残らない。このまま消えて行く。

遠山の意識がちぎれかけたその時、胸元のポケットに入れていた端末が鳴り響いた。

「鳴人！！ 鳴人！！ 聞こえるか？！ 俺だ！ 今自衛軍の救援チームと合流した！ 頼む、返事してくれ！！」



仲間の声だ。

気の良い馬鹿だ。せっかく逃したのに来てどうすんだ、馬鹿。お前、来月結婚するんだろっが。

遠山は溢れる笑いを抑えなかった。

最期に、声が聞こえてよかった。そう思った。

「鳩村…… 聞こえ、てる、無事か……」

「鳴人！！ よかった……！ おい、今どんな状況だ？！ 俺たちは無事だ！ お前のお陰で、日下部も生きてる！ 後はお前さえ生還すりゃ、大勝利なんだよ！」

「……ならいい。まあ、お前らが生きてんなら、俺の勝ちだな……」

「おい…… 何言ってるやがる？！ お前今大丈夫なんだよな？！  
おい！ 怪我は？」

端末の音が割れて聞こえる。機械がダメになったんじゃなく自分の耳がダメになっているんだろう。

「鳩村…… もう、時間がない……、頼みが、あるんだ、聞いてくれ」

「な、なんだ！ なんでも聞く、なんでも聞いてやるから！ お前、頑張れよ！！！」

「……俺のHDに入れてある秘蔵フォルダ…… ファンタジーコスプレモノのR18お宝画像…… あとエルフとか吸血鬼モノの薄い本、あれ処分して。遺品整理の時に恥ずかしいから…… それと、俺の異世界転生ファンタジー小説は全部お前にや……るから」

「ば、馬鹿野郎！！んなもんいらねえ！！ 縁起でもねえ事言ってるじゃー」

ブツッ。

回線が途切れる。

気付けば身体の半分以上が地面に沈んでいる。

蟻地獄の巢みてえだな。遠山は呑気に考える。

「……これで、問題ねえ。仲間は生きてた。HDの秘蔵コレクションの削除も頼んだ…… お気に入りの小説は少し勿体ないが…… はは、俺の勝ちだな」

視界が暗くなる。

目を開けているのに、いや、目を開けている事すらわからなくなる。

今、自分がどんな状況にいるのかも理解できなくて、無性に寒くて、頼りなくて、寂しかった。

これが、死。

俺の、死。

俺の終わり。

怖くてたまらない、悔しくてたまらない。

だが、それでも最期に、遠山は笑った。

「ああ、愉しかった。次はもっと、うまくやってやあ。金、稼いで、家建てて、そうだ、店もやっちまうか。もっと自由に、好き放題……  
…… 探索、冒険して、金、飯、か、ぞく…… いぬ…… ア  
あ、タロウ……」

ひどい人生だった。親は早くに2人とも死ぬし、仲良くなった子犬は大雨の日に川に流されるし、施設では職員にしばかれ続けるし、好きになった子は医者と結婚しちまうし。

しかし、次こそは――

探索者になってからの3年、たのしい現代ダンジョンライフは遠山にそう思わせてくれるものだった。

最期にそう思えるのは、とても幸運な事だ。

遠山は満足げに笑って――

闇が。

もう、何も分からない。

上級探索者、遠山鳴人の端末反応は二階層にて消失。

駆け付けた救援チームが最後の端末反応の地点を探すも、遺体を発見出来ず。周囲には大規模な沈殿現象の痕跡有り。

血の匂いに寄せられた怪物種の攻撃を受け、救援チームは撤退。

後日

探索者組合より、上級探索者、遠山鳴人の遺体搜索任務がとある探索者チームへと依頼された。

遠山の行方は、誰も知らない。

…  
…

「あら、濃い匂い。あなたもまた、”貴方”なのね？」

「私の箱庭をたのしんでくれて、ありがとう。あなたもまた貴方に成る可能性がある人だった」

「耳も、腕も、目も、内臓も、脚も、脳みそも、口も、心臓も。みんな目覚めた。あの子達も自分の意思で動き始めた。あの子を、あの子達にしようとして色々してるみたいね。ふふ、あなたが沢山来てくれたからかも」

「あなたは惜しいな。あなたはかなり”貴方”に近いみたい。その欲張りな所とても素敵よ。でもここではダメね。もう死んじゃったもの」

「ここは私の箱庭、貴方の墓所、あなたの終わりの場所。でも、あ

あなたはここで終わっても良いの？」

「ふふ、そうね。あなたでも”貴方”でも同じ事を言うよね。いいよ。あなたを続けさせてあげる。でもね、ここじゃダメなの、あなたはここでは終わったの」

「1つのことが終わったら元に戻ることでとても難しいの、だから無理なのよ。あなたはもうここでは生きることが出来ない」

「でも安心して！ あなたに向いた場所がある。あなたは貴方に成るかもしれないのだから！ 少しエコひいきしてあげちゃうね」

22

「そこはここではない世界。こことは異なる世界。それでもきつとあなたは楽しめるはず。あなたはそこで好きにしているの」

「ねえ、あなたはどんな風にしたいの？ どんな人生を歩みたいの？ 何が欲しくて、何を大事にしてるの？」

「市民になって普通の生活を送るもよし。商人になってお金を稼ぐのもありね。あ！ 大道芸人とかもありね！ 見てみたいかも！」

「もちろん、危険な生き方もある。兵士になって戦争に行くのも良いし、騎士になって武功を立てるのも良い、貴族にだってなれるかもよ？」

「あなたが興味あるなら、学院を探して魔術を習ってみてもいいかも！　素質があるかどうかは分からないけれど……　でもあなたならなんとかなりそう！　あとは、そうね！　教会！……  
……はちよつと恥ずかしいから、出来ればあまり来なくてもいいかな……？　でもでも貴方に似てるあなたにお願いされたらまたエゴひいきしちゃうかも」

「悪いことをしても良いの。泥棒になってたくさんのお宝を盗むのも素敵、そうね、暗殺者のギルドもあるからそれを探して、血で生きて行くのもいいかも。あなたも素質あるもの！」

「後は、あとはね、人間以外の種族と仲良くなるのもいいかもね。エルフと唄を歌ったり、ホビットと賭け事したり、ドワーフと酒盛りしたり！　後は竜族と食べ比べしたり、そう！　吸血鬼のお城も探してみても綺麗なのよ！」



「でもね、わたしはやっぱりあなたは冒険者が向いてると思うな。この箱庭を心から楽しんでくれてたもの。きつと、その世界の柱も気にいるわ」

「うん！　　そうしましょ！　　ねえ、最上階まで来てよ！　　もし、あなたが望むのならここへまた戻れるかも知れないわ」

「貴方に近いあなたが柱を登り切った後に世界がどうなるか、とても気になるわ！　　柱を登りなさいな、探索者さん！」

「それにそうだわ！！　　柱に置いてきた貴方の副葬品！　　あなたなら少しだけ使ってもいいわ！　　許してあげる！！　　貴方はあなたに顔や体格も似ているからきつと、似合うわ！」

「ふふ、楽しみだなあ。どれだけかかっても良い。全ての経験が、あなたの道のりが、その全てが、あなたを貴方へと至らせるのだから」

「それと、これは私からの贈り物。」お耳さん”が面白いことしてたからそれを私なりにアレンジしてみたの。あなたがこれから行く世界は、その、少しだけこの世界より難しいからね」

「安心して！」 難しい”だったのが”すごく難しい”になるくらいだから！ これはあなたの助けになるわ。きっと、あなたのライフをよりわかりやすくしてくれる筈よ。” 矢印の導き”を助けにしてね、”あの子”もそろそろ退屈してる頃だし、お話相手になつてあげて！ 大丈夫、きっと気が合うわ。だってあの子も元は上の島に住んでたんだもの！」

「ああ、大丈夫よ？ 本当に肝心な時は矢印は出てこないわ！！ ふう、こういうの”縛りプレイ”っていうのよね？ ええ、素敵な言葉だわ。全部簡単じゃ、つまらないもの」

「あ、そろそろだね。わたしの箱庭を楽しんでくれてありがとう。ねえ、あなた、あなたの人生の続きを見せてよ、ええ、そうー」

「現代ダンジョンライフの続きは異世界オープンワールドで」

「たのしんでね！ あなたは、どんな人生をみせてくれるのかな」  
声が消えて、それから。

光。

闇の中に光が何度か瞬いた。

落ちていくような、登っていくような浮遊感。

そして――

ver1.0から、ver¥\$へ。

”探索者深度” 引継ぎ

「所有”遺物” 引継ぎ

獲得技能を”スキル”へと変換…………… 変換失敗。

”鈍器取扱い”、”いぬ大好き人間”、”殺人適性”、”オタク”、”頭ハッピーセット”、”戦闘思考”、”女運：hopeless”などの技能をそのままに引き継ぎ。

プレゼント特典 ”秘蹟” 【クエストマーカー<sup>BADエンド好き</sup>】を獲得……………

……………

…

ごんごん、ごんごん。

揺れていた。

ごんごん。大きく、揺れた。

「……………ふが」

目が覚める。尻と背中に硬い感触、自分が何かに座っていることに気付く。

遠山鳴人はゆっくり、目を開けた。

「ああ、そのあなた、やっと目を覚ましたか」

「……あ？」

やけに渋い声、声の方を見る。

「あの街の関所を抜けようとしたんだろう？ 俺やそこらへんの難民連中と同じで、”冒険者”共の罠に飛び込んだわけだ。だが、ついていないな、よりによって”冒険奴隷”を探していた連中に捕まるとは、ロクな死に方は出来ないみたいだ」

誰だ、こいつ、何言ってるー

遠山が、息を呑む。

目の前に座って、話しかけて来た男の顔を見て、固まった。

「……どうしたんだい？ リザドニアンがそんなに珍しいかな？」

トカゲだ。

トカゲヅラの男が座っている。

目の前で、ボロの服を纏ったトカゲ男がそれはもう流暢な言葉で話していた。

遠山は目をこする。トカゲヅラを眺めて、彼の頭の上にフヨフヨと浮いているそれに気付いた。

こんなのが、フヨフヨと浮いている。

「……やじるし……？」

ふわり、矢印の上にまたフヨフヨと何かが浮かんでいた。

なんど、目を擦っても、ソレははっきりとー

メインクエスト

【冒険奴隷】

クエストマーカーが、デンドンと低い太鼓の音ともに。

遠山だけにソレは聞こえた。

## 1話 奴隷スタート（後書き）

ゲーム風ギミックありますがVR才、仮想空間才、夢才ではありませぬのでご安心ください。作者はその展開に村を焼かれたので憎悪しています

お待たせしました！

新作始まります。＜苦しいです、評価してください＞ デモンズ  
感



2話 メインクエスト【冒険奴隷 遠山鳴人】（前書き）

く???? 奴隷馬車3号車のホロの中にてく

2話 メインクエスト【冒険奴隷 遠山鳴人】

「……………ウソだろ」

「どうした？ ずっと眠っていたようだがあンタ、この状況でずいぶん、その、肝が太いんだな」

【目標達成 ”リザドニアンの奴隷” と会話する】

トカゲが喋った。また視界に言葉が流れて風景に溶けるように消えていく。

いつのまにか矢印も消えていた。

「矢印、消えた……………」

「……どうやらまだ寝ぼけているようだな。うむ、その、もし、よければだが」

トカゲ男が懐から何かの包みを取り出す。紙？ いや何かの植物の葉に包まれていたのは、茶色のふわふわした何か。

「俺が作っておいた黒パンがある。食うかい？」

どういうことだ、これ。

ダンジョンで死んだと思ったら同じ馬車に乗っているトカゲにパンを勧められている。

遠山がぼーっと、差し出されたパンを眺めて固まっていると

「……ああ、いや、すまない、リザドニアンが作ったものなど気持ち悪くて食えないよな」

しょんぼりした様子なのがはっきりわかる。

尻尾がへにょんと垂れて目尻が下がった表情は人間よりもわかりやすい。

「あ、いやいや、食っていいんならもうつよ。どうも」

ライ麦のパンだろうか？ 遠山は差し出されたそれをパクリと口に放り込む。

もふり。少しパサパサしてるが良く噛むとほのかな甘みに生地の柔らかさがよくわかる。滋養の感じる味だ。

「……食った？ 食ったのか？」

トカゲが目を丸くした。

「え、ダメだった？ うめえな、好みの味だ。甘さ控えめで健康的、ライ麦か？」

遠山の言葉にトカゲ男が、あ、うと言葉を詰まらせている。

縦に大きく開かれた瞳孔が、黒パンをモグモグと頬張るその姿をじっと映していた。

「うまい、うまいのか、……そうか、そうか……」

顔を抑えてトカゲ男が下を向く。

渡したパンが惜しくなったのだろうか。肩を震わせるトカゲ男を見つめ、遠山はあることに今更気づいた。

「……あれ、てかなんでお前手錠外れてんの？」

「あ、ああ、連中安物使ってたからな。忍ばせておいたロックピックで外したんだ。荷馬車の中じゃバレないさ」

「ほーん、夢にしては設定がしつかりしてんな」

「おい！！　うるせえぞ！！　静かにしてろ！　奴隷ども！」

ホロの向こうから下品な声が響いた。耳に響く大声に遠山が顔を顰める。

「……思ったより耳のいいやつもいるそうだな。獣人も混じってそうだな」

「獣人……　ほーん。あれか、異世界転生モノに最近ハマってたからそういう夢か。死んだ後に見る夢、いや走馬灯とはまた違うな」

死後体験？　花畑の中で死んだ家族が待ってるのが定石だが、家

族がないとこういう夢になるわけか。

遠山はなんとなく自分を納得させ、息を吸う。身体感覚もまるで現実だ。何一つ朧気な部分がない。

「……アンタとは微妙に話が噛み合わないな。どこから来たんだい？ 故郷は？ 見た目的には帝国の東の出かな？ 黒い髪と栗色の瞳は珍しい」

「あー、故郷？ ニホン。ニホンのヒロシマだ、まあ物心ついた頃には施設暮らしだったからどこで生まれたかまでは覚えてねーけどな」

「ニホン……？」 第二文明の大ニホン共和国”の話か？ ふむ、アンタさつき冒険者の連中と大立ち回りしてたからな。頭でも打つたんだろう。……だけど、いい奴だな。リザドニアンとこうしてまともに話して、あまつさえ差し出されたパンを食べてくれるんだから」

「いや、逆だろ。パンわけてくれたアンタの方がいい奴だと思っけど」

遠山の何気ない呟きに、トカゲ男の動きが止まった。口を開けて、ポカんと、固まる。

がらら。車輪の一際大きな音。

馬車が止まったのだと感覚で分かった。

「……止まってしまったか。最期にいい思い出が出来た。ありがとう、旅人さん」

トカゲ男がどこか影のある笑いを浮かべる。

「え？ 夢？ なんだ、止まったってどう言うことだ？」

「……一巻の終わりってやつさ。ああ、偉大なる祖、そして清廉な



る我らが天使に感謝を。最期の瞬間にあなたたちは俺に夢を見せてくれた」

「世界観が分からん、どういう夢だ。……夢にしちゃあ、なんか、なあ……」

祈り出すトカゲに遠山が頭を捻る。未だに状況が掴めない。

「おい！！ さっさと降りろ！！ 目的地だ！！ 妙な真似すんなよ！！」

「スプーン、その馬車はあの男が入ってる馬車だ。ロン隊長からの指令ではあまり刺激するなって言われただろ？」

「うるせえよ！！ ちんけなコソ泥リザドニアンに、お登りのヒューマン程度だろうが！ ロンの野郎の肝っ玉がちいせえただけ！ おい、降りろ！ 咬み殺すぞ！ 奴隷ども！」

「……いくか。獣人は短気だ。癩癩で殺されかねん」

「お、おお、獣人……？ トカゲ男の次は獣人…… えらくフアンタジー気味な夢だな。異世界転生モノ読みすぎたなこりゃ」

立ち上がり、トカゲ男に先を促されるまま腰をかがめてホロの中を進む。

開かれた扉から外へ降りるー

「ようやく降りてきたか、往生際が悪い！ オラ！ さっさと降りるー！ クソが！」

まじか。

トカゲの次は、犬みたいな男、犬男だ。

皮の胸当て、簡素なズボン、けむくじやらだが身体は完全に人間、首からは尖った口に、尖った犬耳。

犬ヅラ。だがあまり可愛くない。人間の嫌なところと獣の不気味さが合体した顔だ。

マジで、獣人。ファンタジーモノの獣人、そのまんまのやつがいた。

周りをよく見ると同じような馬車がたくさん停まっている、いくつかの連中がその御者をして、荷台から人を下ろしていた。

「フラン、このひとたち、みんな……」

「エル、仕方ないでしょ？ 塔は危険なんだから。彼らを使ってあの程度モンスターの位置や危険地帯を把握しておかないと。みんながみんな塔級のような真似が出来るわけないわ」

近くの馬車の御者席から聞こえた綺麗な声、遠山がそちらをちらりと見て、固まる。

まじかよ。

びよこん。その女、頭の上についているあるモノに釘付けになる。

簡素で実用的そうな軽そうな革鎧、タイツのようなボトムス、西洋人風の整った顔、そして――

「猫耳…… マジか、いい夢すぎるだろ」

遠山の視線に気づいたのだろうか、小柄な方の猫耳がちらりとこちらを見て、気まずそうに目を伏せた。

え、どう言う反応？

「おい！！ 早く一列に並べ！！ お前はこつちだ！」

ぐいっと、肩を引っ張られる。しかし遠山はびくともしない。あまり力を感じなかったので引っ張られたことにも気付かない。

どこだ、ここ？

建物、洞窟？

遠山があたりの様子を確認する。広いホールのような空間、床や壁は人工物らしく磨かれている。所々に灯されたたいまつが光源みたいだ。

「な、に？ なん、だコイツ、重てえ……？！ おい、この、こつちだ！ この！！」

いよいよ両手で坊主頭の男が遠山の肩を引っ張り、ようやく引っ張られていたことに気付いた。

「おっと、ああ、そっちね、へいへい」

「なん、だ、こいつ……」

気味の悪いものを見たかのように坊主頭の男がその場から立ち去る。

遠山は同じボロボロの服装をしている連中の方へと歩く。

歩きながら周りをよく見ると武器を揃えて武装している連中が多い。馬車に乗っている女も男も、武装しているのがある。

「ここで待て！！ 命令あるまで動くなよ！ 奴隷！」

遠山がキョロキョロし続けていると、不意に声をかけられた。

「おい、てめえ、今さっきエル・フラン姉妹に色目送ってたよな？」

遠山よりも2つ頭ほど高い身長、上から獣の唸り声混ざりの言葉がふりかかる。強い獣臭とともに、

「え、なに？ ヴっ?!」

いきなり鳩尾を殴られた。思わずその場に倒れ込む。

「次、舐めたことしてみる。その耳、引きちぎって目を引き抜いてやる。奴隷風情が調子に乗んなよ」

髪の毛を引っ張られ、耳元で凄まれる。

けむくじゃらの獣ヅラ、酒臭さと獣臭さが混じる体臭。

夢とは思えないリアル。

だからこそ遠山スイッチは簡単に入った。遠山鳴人を”探索者”たらしめていた適性だ。

あと2回、ムカついたら殺人適性コイツを殺そう。

「おい、スプーン、いいの入ってたな」

「ああ、あの奴隷、我らがお姫様たちに色目つかってやがったからな。猿野郎はどこでも誰にでも発情するから手に負えねえよ、ぎやはは！」

遠山が、仲間と笑いながら背を向けて歩いていく犬男をじっと見る。

仲間からチベットスナギツネに似ていると言われた細い目がじつと、自分を殴った犬男の背中を見つめていた。

「……おい、あんた、大丈夫か？ 1番最悪な奴隷、冒険者の奴隷



らしい扱いだっ たな…… ” 塔のカナリア ” か

手を貸して起こしてくれたのはさっきのトカゲ男だった。いつのまにか外していたはずの手錠を付け直している。手先が器用なのだろうか？

「いてて、冒険者…… あいつら、冒険者？ あのギルドとかなんやらでわちゃわちゃするやつ？」

ファンタジー小説などでお馴染みのそれ。

遠山は割と簡単にそれを受け入れた。馴染みのある言葉だ。

「ああ、その冒険者だ。数ある奴隷の雇い主でも最悪の部類だ。……この感じ、おそらく塔への挑戦を許された1級、もしくは2級の徒党つてところか。カナリア奴隷とは…… 1番ロクな目に合わない奴隷だな」

「ほー、夢にしてはなんか複雑だな。いてて、それにしてもリアルだ。腹あ、殴られた感触もリアルですよ」

「……あなたが正気に戻ればもしま、とも思っていたがどうやら無理らしいな。どうやら2級の徒党が複数組んでいるみたいだ。……  
良い思い出を胸に覚悟を決めるとしよう」

トカゲ男はそれから俯き、黙ってしまふ。なんか夢の割にマジに細部が細かいな。

遠山は何ともなしに、ざわつく周りに聞き耳を立てる。

馬車がどんどん後続から現れてちよつとした集団になりつつある。馬の匂いが少し、鼻についた。

回廊、馬車が何台も通れるのに屋内か。遠山はその場所にどこか懐かしい感覚を覚える。

ダンジョン、現代ダンジョン、バベルの大穴の中で感じるヒリついた感覚をここでも感じていた。

「アイリス！ それぞれのメンバーに装備チェック！！ 徹底させな！ それと奴隷連中の要注意メンバーの引率を一度集めて！ 特にあのアホ三兄弟！ 今日失敗するわけにはいかないよ！」

「ロン隊長はどこ？ またお腹下したの？ もう、あの人はほんとメンタルがミジンコなんだから、腕だけなら1級にも引けを取らないのに」

「各員、”サイクロプス”の出現予想の区間を再整理！ それぞれの区間にまず”カナリア奴隷”を放って様子を見ます、奴隷の手錠に探査系の魔術式紋が入ってるか再確認しておいてください！」

「あの暴れた奴はこの馬車だ？ ああ、あの三兄弟んどこか。なら大丈夫だろ。中々頑丈な奴だったな。出会いが違ってりゃ冒険者になってそこそこ行けたんじゃないか？」

「まあ、巡り合わせだわね。とにかく今日の仕事はミスは許されない。後もう少して”竜の巫女”様も参られる、情けない所は見せれないよ、少しでもあの方の興を引かないと」

「塔級冒険者”との狩り競争、ね。これさえうまくやれば俺らも一級の目が出てくる、やっと運が廻ってきたんだ、成功させるぞ」

うん、やっぱり、細かい。夢、夢だよな。

身体感覚や着ているものを確認する。

粗末な布の服、腰に巻かれている布、粗末なズボンに、グダグダの革の靴。

トカゲ男と似たり寄ったりの粗末な服装。 奴隷衣装のような。

「……なんかサウナの館内着をしょぼくしたような服だな、こりゃ」

「おい！！ 無駄口たたくんじゃないぞ！！ ぶち殺すぞ！」

叫ぶ犬男、殺す、という言葉をあまりにも軽く扱い、弱々しい奴隷達を蹴飛ばしたりするその様子。

遠山はまたムカついた。

あと1回。

ポロ布の集団が冒険者達に追い立てられながら、動き始める、

遠山もぼんやりと流れに乗って前についていく。ポロ布の服を着せられている人間は皆一様に手首を手錠で縛られているようだ。

……どう言う夢だ、これ、ほんとに。

てか、俺、死んだよな？

あの化け猿の群れ突破して、一層デカイ化け猿始末して、そのあと腹を抉られて、なんとかにげて、でも、ダメだったはずだ。

……そこから、どうなった？ 誰か、が、何か言っていたような

……

遠山が記憶を掘り起こそうとしたその時

「トカゲ！！ てめえもさっさと歩け！ 皮を剥いでサイフにしてやろうか?!」

またやかましい声が響いた。低く怒鳴る声、子供の頃にいた施設の職員が子どもたちに向ける怒鳴り声に似ていた。

「ああ、わかってるよ……ッブ?!」

「あ、ひでえ」

トカゲ男が、犬男に殴り飛ばされた。警告も何もなく、なんの遠慮もなく振われた拳。

暴力。自分がやるのは別として、他人が振るうのを見るのは気分が悪い。

それでも遠山はそれから目を離さない。

「偉そうな話し方してんじゃねえ、リザドニアン。許可なくしゃべるな、トカゲ野郎と同じ空気を吸うだけでも気分が悪くなる」

「……………」

地面に這いつくばり

「あ？　なんだ、こいつ、まだ何か隠し持ってやがる……………　なん  
だ、こりゃ、パン、か？」

「ほー、こりやすげえ、ロン隊長の持ち物検査を潜ったのかよ。コソ泥にしとくにゃ惜しいなあ」

「リザドニアンが。汚ねえモン見せやがって。隠し持って食おうとしてたのか？」

「……違う、誰か、腹を空かせたらいけないと思って」

トカゲ男がよろよろと体を起こす、しゃがみながらも、犬男が投げ捨てた黒パンを拾おうとして

「あ」

ぐしゃり。

トカゲ男の目の前で、武装した犬男がそのパンを踏み潰した。



「ぶふ！！ ギャハハははは！！ おい！ 聞いたかよ！！ 誰か腹を空かせたらってよ！！ 馬鹿が！ リザドニアンの持ってたパンなんて誰が食うかよ！！ 俺なら餓死寸前でもてめえが触れたもんなんざ舐めたくもねえよ！」

「……………あ、俺の作った、パンが……………」

トカゲ男が呆然と、踏み潰されたパンクズを眺めて呟く。

その呟きでさらに周りの連中の笑い声が大きく、大きく。

「作ったあ！？ おい、お前ら聞いたかよ！ リザドニアンのパンを作ったってよ！！！」

「略奪と侵略しか能のねえ呪われた種族がパン作り！！ 笑わせるなよ！ 気持ち悪い！！！」

「賭けてもいいぜ！ てめえの作ったパンなんざ誰も食わねえ！！ 気持ち悪くて吐きそうだ！！ 奴隷ですら絶対にそんな気持ち悪いモン食わねえよ！！！」

「おいおい、あんまいじめんなよ、お前ら。まあ、トカゲヤローなら別にいいか」

「汚い、ちよつと、その奴隷あたしたちに近づけないでよね。鳥肌立ってきちゃっ」

ぎゃはははははは

汚い笑いが渦巻く。

「……く、う」

トカゲ男が、うずくまり、丸まる。長い尻尾がぐるりと身体を巻いていた。

粗野な男たちの嘲り、罵倒、汚い言葉が、広い回廊に響き渡り続けた。

周りの誰一人それを咎める奴はいない。

同じボロを纏った奴隷と呼ばれている連中さえ、どこかニヤニヤとした笑いをその口に浮かべてさえいた。

「あ？」

「お？」

「なんだあ？」

その笑いを止めたのは、ある奴隷だ。

ふっと、列からはみ出て、静かにその耳障りな笑いを響かせる奴らのもとへ現れた。

遠山鳴人が、その笑いを止めた。犬男たちは笑いを止めて急に現れた奴隷を見つめていた。

「もったいねえ」

パンを、拾った。

踏み潰されてもまだきちんと形が残っていた。いいパンの証拠だ。

手錠で縛られた手、指先をプラプラ揺らし、可能な限り埃を払って、そのままそれを口に放り投げる。

「……………え？」

「……………あ？」

踏み潰されたパンを遠山鳴人がひょいと拾いそのまま食べた。

もぐり、もぐり。じゃり。

砂まじり、埃まじり。

それでも呆気に取られた犬男たちのツラを見ながら食べるパンは悪くなかった。

「美味え」

遠山が、げふっ。ゲップをかます。

「て、てめえ！！！！ 何勝手に動いてやがる！！ 奴隷が！！」

「こ、コイツ、汚ねえ、リザドニアンが作ったパン、食いやがった」

「黒い髪に栗色の瞳、1番暴れてたやつだ！ロン隊長が押さえつけた奴隷だ！！」

一気に逆立つ毛、犬男たちが唾を飛ばして叫び散らす。

「あ、あんた……」

「トカゲ男、まだパンあるのか？」

「え、あ、いや、今ので最後だ」

「そうか、じゃ、また作ってくれ。美味かった、金は今度払う」

「あ、あ、ああ。いや、アンタ、なんで、大丈夫なのか？」

「まあこの量なら腹は壊さんだろう、それより」

遠山は、トカゲ男の前に立ち、絡んできていた犬男たちを眺める。

まただ、また矢印。犬男たちをフヨフヨ浮かぶ が指している。

1、2、3匹。

武装、手斧、腰に刺した剣、背中に引っ掛けているデカイ槌。

軽装、毛皮が分厚いから余計なもんがいららないのか？ 夢のくせに設定がこまけーな！。

遠山は呑気に、そいつらを眺めて定めた。

「何勝手に話してんだ！？！ また痛めつけられてえのか！！ 奴隷！！ 俺たち冒険者を舐めてんのか！？ 2級の徒党だぞ！！」

「もう少し痛めとこうぜ、どうせサイクロプスを誘き出す餌なんだ、足や腕折っておいてもいいだろ」

「ロン隊長にはまたコイツが暴れたからっつとこうぜ！！ 舐めた

真似しやがって！！」

「おい見ろよ、あの兄弟がまた奴隷に絡んでやがる」

「スプーン、あんま殺すなよ！ そいつらにだって経費かかってんだからな！」

周りの人間。

武装している連中は止めようとはしない。面白い見せ物が始まった、といわんばかりにヤジやガヤを飛ばし始める。

下卑たヤジ、耳に響く口笛。

「うざいな、こいつら」

”仕込みは既に終わっている”



皆殺しにしてやるうかと遠山は一瞬考えたが、アレを使用した後のぶり返しを考えてそれを抑えた。

「民度が低い、おまけに練度も低そうだ」

「しーちやしーちや何言ってるんだ!! 奴隷!!」

「おい、おいおい、俺聞こえたぞー! なんかそいつ、お前らのこと雑魚とか言ってるたぞ、スプーン、マクロ!」

「ぎゃはは! 奴隷にバカにされてんじゃないか!」

「あーあ、あの奴隷死んだな」

周りの武装した男たちのヤジに犬男3人がキレ散らかす。

「このやろっ、は？ 奴隷が俺たちに舐めた口たたいたってのか？」

1番手前の犬男がずかずかと近づいてくる。牙を剥き出しにして、腰に刺してあった剣を引き抜いていた。

「痛い目にあってもらうぜ、ヒューマン。俺はなあ、てめえみたいな奴隷が好き勝手に調子乗るのが我慢ならねえんだ」

犬男が、手斧の峰、それをハンマーのように遠山に向けて振り上げて。

「3回目」

「あ？」「」「」

遠山の呟きに犬男たちが同時に間抜けな声を上げた。

「3回目だ、お前」

遠山が、凄む犬男たち、自分よりも頭2つは身長の高いそいつらを見上げた。

「人のこと殴る奴は悪い奴だ。食いもん粗末にする奴はクソだ。人の作ったものを踏み躪る奴は怪物だ。……俺は探索者だからな、怪物は殺すぞ」

コイツらよく見ると、あの時の猿どもと似たような雰囲気するな。

本格的にムカついてきた。

遠山が通告を犬男たちに告げる。



「エル、もう見るのはおよし。まあ、バカどものガス抜きに1人の奴隷で済むのなら安いものさね」

好き勝手宣う連中、”冒険者”とやらを遠山は顔色1つ変えずに、観察する。

そして、やれる。そう判断した。体付き、腕は太いが腹が突き出ている奴が多い。

動作、顎をあげて背筋がフラフラしてる奴がほとんど。

どれを見ても、2流、いや3流と判断した。

獲物の品定めを静かに終えて、遠山がその準備を始める。誰も気付かない、その奴隷がその身体に忍ばせている兵器のことに。

「人生をなるべく豊かに生きる方法は沢山ある。俺の場合は1つのルールに従うって決めたあんだ」

「なんだ、コイツ、気持ち悪い、おい、何か聞こえたかよ」

「俺は俺のやりたいことをやる、欲しいものを手に入れようと努力する。自分の願いに正直に生きる、俺は俺の欲を裏切らない。それだけは、決めてんだよ」

「いや、怖くて頭いかれたんだろ。やっちまおうぜ！」

「それは夢の中でも、変わんねー。ムカつく奴をぶちのめしたいっつーのも、欲。俺の欲望だ」

遠山は言葉を止めない。目の前で殺意をわかりやすく膨らませる犬男たちに向けて、淡々と言い放つ。

「俺は俺の欲望のままに。そーゆーふうに決めてんだよ」

「何いつてんでちゆかー？ ぎやは、冒険奴隷、恐ろしくて頭おかしくなつたか？ ほれ、ほれ、殺せるもんなら殺してみろよ、ほれ」

犬男の1匹が、手錠をはめられている遠山に対して顔を差し出すように戯ける。

「俺らのうち、1人の顔を殴れでもしたら逃してやってもー…  
…あ？」

へちや。

犬男の言葉が止まる。

遠山が至近距離で吐いた唾が、けむくじゃらの顔から垂れていた。

今の遠山の欲望は1つ。

「ケモノ臭えんだよ、シャワー浴びてこい、タコ」

コイツらを永遠に黙らせることだ。

「こ、コイツ、唾を!!!? 猿野郎!!!」

遠山に向かって振り下ろされた手斧。バカらしく手だけは早いよ  
うだ。



遠山は両手を手錠で縛られて丸腰状態。

トカゲ男が、新たな暴力の予感にまた目を覆った――

ジャリリリリリリリ！！

「あ？」

手錠、左右をつなぐその鎖で遠山が振り下ろされた手斧の一撃を滑り、絡め取るように受け止め

「な！？」

「安物だな、こりゃ」

ばきり。簡素な作り、粗末な素材の鎖が千切れる。

遠山鳴人の、” 上級探索者 ” の両腕が自由になった。

「あ、ぎゃ?!?!」

結果的に空振りした一撃、すきだらけの犬男。

指を2本、そのまま犬男の目に突き刺す。目潰し。

悲鳴、呆気にとられる他の獣人を尻目に悲鳴をあげる犬男が、手斧、自分の獲物を手から滑り落とした。

「武器手放すとか、お前ド素人か？」

そのまま手斧を遠山が拾い、当たり前のように振り下ろす。

ぐしゃり。脳天へ振り下ろした刃が簡単に頭蓋を砕く。

見た目よりもこの頭蓋、毛皮、骨は柔らかかった。

「1人」

「は、べ？」

どかっと、白目を向いて血を流しながら、倒れるそれを蹴り飛ばす。

まだ、取り巻きは呆気に取られて動いていない。

簡単すぎる、怪物種の群れの方が何倍も手強い。

「あ、ヨイシヨ」

「うア？」

踏み込み、手斧を振り上げる。容赦、加減、一切存在しない。遠山鳴人はそういう人間だ。

ぶん！ 空を裂く手斧の一撃。2人目の獣人、ズボンの下、股間に向けてゴルフスイングのように振り上げる。

キン。

何かを潰した。

「べ、べ、べ、べ」

あぶくを吹きながら2人目が倒れる。

「あ、は、はあ？！ お前ら、どうして、なんで！？ 奴隷があああ！！」

「お、お前、さっき俺の鳩尾とトカゲさん殴ったやつか。リベンジするわ」

「あああああああ?!」

ようやく、事態を理解したのか。最後に残った犬男が剣を振りかぶる。

仲間を殺した奴隷をたたきろうとしてー

「ぶ、え？」

脇腹に、手斧が食い込む。大ぶりすぎるその剣の振り方は容易に遠山鳴人の脇腹への攻撃を許した。

「痛くても止まんなよ。気合い見せろ、気合い」

ぶるぶると痛みで体をくの字に曲げる犬男。

ぱっり。

「あ」

「目には目を、みぞおちにはみぞおちを」

ぶっつ。

犬男の力の抜けた手から剣を遠山が奪う。あとはもう雑にそのまま剣先を犬男のみぞおちにねじり込んだ。

「え、ぶ」

「死ね、タコ」

そのまま、さらに剣の突き刺さった腹へ前蹴り。

もちろん剣は杭のように蹴りによって打ち込まれ、更に犬男の鳩尾に食い込む。

「ぎゅぶ」

潰れた力エルみたいな声を吐き出し、犬男が仰向けに倒れる。タバタと手足を暴れさせていたが、すぐに死んだセミみたいに固まって静かになった。

あつという間に、3人死んだ。

探索者が、冒険者を3人殺した。

「武器はよく手入れしてんじゃねえか。でも手斧か。いまいち中途半端で好みじゃねえんだよなあ」

からん。

役目を終えた手斧を投げ捨てる音が大きく、広く、響いていた。

【オプション目標達成 冒険者を始末する】

【メイン目標更新 冒険者の包囲網から逃げる！】

目の端にまた、メッセージが。

ははん、なるほど。これ、結構便利だな。

遠山が視界に映る、フヨフヨ浮かぶ矢印が示す先を眺めた。



2話 メインクエスト【冒険奴隷 遠山鳴人】（後書き）

< 苦しいです、評価してください > デモンズ感

次の更新はお昼頃！ たくさん感想、ブックマ評価ありがとうございます！

### 3話 走れ！

「あ、アンタ、すごいな……」

トカゲ男が目を白黒させる、目の前で起きた一瞬の攻防への感想はそれだけだった。

「おう、トカゲ男、怪我ないか？ わりいな、アンタのパン、クズどもに踏み潰させちまった」

おいしかったのによー。遠山が呟きながら手についた返り血を、死んだ犬男たちの服で拭う。

「うまかった、そうか……」

じーんとトカゲ男が目を瞑り、尻尾を揺らしていた。なんとなくこのトカゲの性格を遠山はわかり始めていて。

「あ、やべ。悠長にしてる場合じゃねえな」

ふと気付く。ここは、敵のど真ん中。

この時点でようやく、周りの冒険者達が状況を理解した。

奴隷が、仲間を、殺した。

素行が悪く、評判も良くない。それでも同じ徒党の仲間で、そいつらが腕が立つことも知っていた。

なのに、ヤジを飛ばして、奴隷がどんな死に方をするかの賭けを誰かが言い出して話がまとまる前に、気付けば仲間が3人死んでいたのだ。

「ろ、せ」

誰かが、言葉を。その声は震えて

「あの奴隷を殺せエエエエエエエ！！」

裏返っていた。ひどい、焦りようだ。

「よつちやくかよ、灰ゴブリン連中のがよほと反応いいぞ」

遠山がにいい、と凶暴な笑みを浮かべる。細長の目がそれはもう醜く歪んでいた。

「あ、アンタ……」

「安心しろよ、トカゲさん。俺はもう、出し惜しみはしない」

「え？」

プランはもう出来ている。

ムカつく奴を3人始末してスッキリ、だがここは敵のど真ん中。

コツがある。怪物種の群れを相手にするときのコツが。

衝撃

速攻

攪乱

そして、

「頼む、――」

遠山が小さくつぶやく。既に張り巡らせ、広げていたソレを起動する。

「絶対殺せ！！ 逃すな！ 俺らのメンツにかかわるぞ！！ 冒険  
奴隷に逆らわれるなんざー え？」

「な、なにこれ、お姉ちゃん」

「エル、私のそばに、動いたらダメよ」

冒険者達が、目を向く。

ある者は言葉を失い、あるものは恐れ、あるものは庇う。

真っ白。

真っ白のモヤが彼ら冒険者を、いや、奴隷たちごと辺り一面を閉ざした。

数十センチほどの先も見えぬ、真白のモヤ、それは

「これは、霧……？　なんで、こんな、急に?!　いくらヘレルの塔っていつてもまだここは一階層だぞ!？」

キリだ。数メートル先も見通せない、霊山から降りてきたような  
真白のキリ。

重たい霧が、世界を閉ざす。

誰も動かない。動けなかった。

2人の奴隷を除いては――

「トカゲさん、いくぞ！今のうちだ！」

「その声、アンタか?! 前が、前が見えないんだが」

「手出せ！引っ張る！ついてこい！あの人数皆殺しはもう少しノリノリにならんと無理だ！」

遠山がトカゲ男を引っ張り、走り始める。



迷いなく、なにも見えぬ霧中をかける。

「アンタ、なんで前が見える?! この霧は、なんだ!？」

「味方さ! 俺たちの! おっと、そうだ! ダメ押ししとくか!!  
おーい、奴隷、てか捕まってる連中! こんなチャンスもうねー  
ぞ! 俺らは逃げる! てめーらはどうだ?! 好きにしたほうが  
いーぞ! どうせ残ってもロクなことになんねーぞ!」

遠山が振り向き、真白な霧の中を叫ぶ。

少しの沈黙のあと、

わあああああ!!??

逃げろ、逃げろオオオオオオ!!

どっちに、どっちに逃げる!?

奴隷どもを逃すな!! 逃すくらいなら殺せ!!

ぎゃあ?! てめえ、なんで俺を斬ってんだ!? ぶっ殺す!

あ、悪—— ギャ?!

チツ、やられた! よしな! お前ら! この霧の中じゃ同士  
討ちになるよ!!

混乱、完全に冒険者達は統制を失った。

「ヨシ！ 作戦成功！ トカゲさん、ほら、進むぞ！」

「あ、アンタ、ほんとに何者だ？ 学院の魔術師？ いや、教会の騎士？ それとも王国の冒険者？」

「いや、探索者だ！ 2流のな！」

「タンサクシャ？ いや、それよりもアンタなんでこの霧の中スイスイ進めるんだ？！ 見えてるのか？」

「いや全く！ でも、なんか知らねえけど”矢印”が見えるんだよ！ 作戦通りだ！」キリ”を最大限濃くしても、”矢印”は見えない！ ヒヒヒヒ、まるでゲームのマーカーだな！」

そう、遠山の視界には再びあの”矢印”が浮かんでいる。先見えぬ霧の中、ご丁寧【逃げる！】というメッセージ付きだ。

「ユーザーフレンドリーで助かるよ！ ヒヒヒヒ、これが夢じゃなけりゃ最高だったんだけどな！」

探索の時にこれがあればかなり優位じゃないか？ 進むべき地点を教えてくださいだけでもありがたい。

まあ、夢でもなければこんな怪しい矢印信じる気はまったくないが。

「何の話をしている?! ま、まさか、この霧はアンタが?! スキル? 魔術式、いや、まさか秘蹟?!」

「なんだそりゃ? まあとにかく走れ走れ! 中には勘のいいやつもいるだろ、ヤマカンで追ってくるかもしれないねえっーぞいや?! うわ、へ?」

ずるり。

2人がこける。

急に地面がななめに、そして濡れて、水が流れ始める。

「うお、なんじゃこりゃー!」

ウォータースライダー。つい先程まで石畳みの平行な回廊だった場所が傾き、流れる。

もちろん、探索者とトカゲ男もつるつるりん、流しそうめんのように地面を滑り落ちていく。

「う、く、く、」ヘレルの塔”だ!! 何が起きてもおかしくない! うおおおおお?!!」

「ヘレルの塔ってなんじゃあああああああ?!!」

夢とは思えないリアルな墜落感、水が踊り、身体が跳ねて、目の前が真っ暗に――

【クエスト目標 達成 冒険者の包囲網を突破する】

……

……

……

わん！ わん！

あはは、おまえ賢いなあ！ ……なんで捨てられんだろうね

わうん？ わん！

あ、ごめんな、そろそろ門限だ。……ぼくんち、施設だから、おまえを連れて帰れないんだ。……また来るから。ごめんよ、僕も食べ物、持ってないんだ。

きゅうくん、ふん

ぼくたち同じだね、捨てられて家もない。だけど、ご飯は食べた  
いよなあ。

くくん……

そうだ、ごうしよう。ぼく、あの場所から食べ物とってくるよ。  
しせつのやつらぼくを殴るんだ。生意気で頭がおかしいからなおし  
てやってるんだって……

あんなともういやだ。出てやる。ねえ、お前さ、よかったら、  
ぼくとー

……  
……  
……

ぴちよん。

「ん…… た、ロウ……」

「おい！ アンタ、大丈夫か？ よし、息はしてるな？ 俺がわかるか？」

うつすらと目を開ける。トカゲツラが覗き込んでいた。

「んあ、トカゲ……？ あれ、タロウは…… ん、てか、あれ、バベルの大穴、あれ？」

目を擦りながら遠山が身体を起こす。ボロ布の服は濡れているが身体に異常はなさそうだ。



「寝ぼけてるところ悪いが起きてくれ。俺はアンタと違って腕に覚えがないんだ。……偉く不思議なところまで滑り落ちたものだな」

トカゲ男の言葉に、遠山が辺りを見回す。

滝だ。

滝つぼのほとりにいる。辺りは薄暗く、しかし緑、赤、青に輝く岩が光源となり見通すことができた。

滝の上を眺めても何も見えない。どれほどの高さから滑り落ちたのか見当もつかなかった。

滝壺から伸びる小川、空気の流れ、風が吹いている。その感覚は本当にリアルで、これが夢なのかと本気で違和感を覚え始めていた。

「夢から覚めて、また、夢……か。でも背中痛えな…… まさか、これ夢じゃなかったりするか？」

「なあ、頼む、しっかりしてくれ、こうなっちまったいざ頼りにな

るのはアンタだ……け……」

ぼんやり呟く遠山の様子に息を吐くトカゲ男。しかしすぐにとある一点を見つめて口をあんぐり開けて固まる。

「あ？ どした？ 固まってから、に……」

遠山もその視線に釣られ、そしてそれを見て、言葉を失った。

【クエスト更新 ” サイクロプス ” から生き残れ】

それは一つ目の巨人。

みどり色の肌に、粗末な腰蓑。

8メートルほどありそうな巨人が、しゃがみ込み遠山たちを見て、

よだれを垂らしていた。

「oh…… 仲良くは出来なさそうだな」

「さ、サイクロプス…… 俺でも知ってる…… モンスター、巨人種……」

『愚ウ……ウオオオオオオオオオオ!!』

「トカゲさん!! 伏せろ!!」

「え、あ?」

大きな手のひらが横薙ぎに。

トカゲ男を突き飛ばしながら遠山は地面に転がるように伏せる。

「愚ウオオオオオオ!?」

ひゅおつ。髪の毛先、チリチリとした感覚、その化け物の一撃が掠めた。

「うひゃあ!? ひ、ヒヒヒヒヒ、これは1発食らったらアウトだな! ”マザーグース”を思い出す!」

探索者は危機を嗤う。ダンジョンの酔いで茹だった脳みそが危機感や恐怖を、高揚へと変えていく。

「あ、アンタなに、笑って」

「ああ?! 怖くて面白いからに決まってるだろ! 笑いたい時には俺は笑うんだよ! それも俺の欲望だから、なあ!」

ああ、探索者は命の危機に酔うのだ。

笑いながら遠山が近くにある手頃な石を拾い、思い切り投げつける。狙いはあのデカイ目。

ばち。

『愚っ。』

目に直撃した投石。しかし、なんの意味もない。

「うーん、やっぱりダメか。手斧捨てんじゃなかったな」

割とノリで生きている遠山が首を捻る。

さて、まだ”キリ”が充分には広がっていない。

だが、ここは風上、化け物は風下。もういっそ使っちゃまうかと考えていると

『愚ウオオオオオオ！！』

「あ、やべ」

武器もない。道具もない。まだ切り札の仕込みも出来ていない。

大腕の一撃、タイミングを間違えればぺちゃんこになり、死ぬ。

それを理解していながら、遠山鳴人はどうしても笑いを止めることが出来なかった。

「ほう、死を前に笑うか。奴隷」

ジュ……

『愚？』

ぐらり。サイクロプスの首が、傾いた。

大腕が首を押さえようと動き、ぴたりと止まる。

かと思えば、その首がもげる。鋭利な刃物により斬り落とされたのだ。

肉が焼ける良い匂いが漂った。

「ふん、あつけないものだ。こんな獲物を狩り比べの目標にするとは…… やはり、塔級、せめて”一級”程度でないと遊び相手にもならんな」

金属が重なる音。くぐもり、男か女かわからぬ声が空間に響いた。

首のなくなった巨人の肩に誰かが、いた。

「おお、マジか」

「ばか、な…… サイクロプスを一撃？ 一級でも数人がかりの巨人種だぞ？ い、や、まさか」

「かかか、ほう、我らの傍流のリザドニアン、どうした？ 鱗色が悪いぞ」

ぐらり、地鳴りを鳴らし、首を失った巨体が倒れる。



当たり前のように飛び降りたソイツが巨人の身体を踏みつけながら歩いてきた。

鎧だ。

この暗がり、光る岩しか光源のないこの空間でもよくわかる金ピカの鎧。

雄々しい2本の角があしらわれた豪華なフルフェイスの冑に、すげえ豪華なマント付きの鎧騎士がそこにいた。

その手には、赤熱している三叉の大槍が掲げられる。あれで巨人の首を落としたのか？ 信じられない膂力だ。

「お、おう、トカゲさんどうした？ 腹でも下したか？」

トカゲ男が途端に、体を丸める。

尻尾をたたみ、震えながら地面に這いつくばり始めた。

「……まさか、あんた、いや、あなたは…… 竜？」

「ほう！ ほう！ かかか！ 身隠しの祈りが込められた我が鎧の中身を見抜くか！ リザドニアン、貴様、なかなか血が濃いと見える…… よい、褒めて遣わす」

「……竜？ あの鎧が？」

鎧を見る。どこにも竜要素が見当たらない。

「アンタ、アンタ本当に帝国領の人間か？ ヘレルの塔、そして竜あの金色の鎧…… 1人しか、いないだろう……?!」

「その人間種。貴様はリザドニアンと違って察しが悪いな、死ぬか？」

鎧のくぐもった声。男か女かわからない。

「は？　なんだ、てめえ、ぶえ！？　と、トカゲさん！　何すんだ！？」

遠山が鎧ヤローの言葉に言い返すと同時に、トカゲに肩を掴まれ、下に押し込まれる。

「た、頼む、アンタ、アンタは恩人だ！　だが今は頭を低くしてくれ、頼む！」

トカゲに押さえ込まれながら、遠山は仕方なく膝をおろす。その様子を見て鎧ヤローは満足そうに眺めていた。

「ほう、ほうほうほう、リザドニアン、貴様、いいな。立場を弁える賢しいトカゲは嫌いではない」

「故に1つ興を思いついたぞ。奴隷狩りよりも面白そうな、興をな」

巨人の肩から飛び降りた鎧ヤローが、ふむふむと楽しそうにこちらへ歩んでくる。

マントを偉そうに翻しながら。

「おい、なんでアイツあんな偉そうなんだ、あとトカゲさん、アンタ震えてないか？」

「静かにしろ！ 逆に何でアンタはそんなに落ち着いてられるんだ！？ 竜だぞ？！」 塔級、タワークラスの冒険者”だ！ いくらアンタが腕が立ってもアレは別格、この世の理を半分踏み越えるような存在だ！」

「ククク、トカゲ、そう褒めるな。うむ、悪い気分ではないな。奴隷、良い、面をあげよ、おれが許す」

「は、はは……！」

「……………」

「ふんむ、人間種、貴様…… 妙な香りがするな…… まあ、いい。奴隷、褒めて遣わす、よくぞ冒険者どもの枷を破り、逃げ切ったものだ。今頃ここより少し上の階層は面白いことになっておるぞ」

「面白いこと、ですか…………？」

「まあ、だろうな、それ狙いだし」

「かか！ 人間の奴隷、やはり貴様狙っておったか！ 良い、その態度は別として存外悪くないではないか」

「ど、どついついことなんだ？」

遠山と鎧ヤローの様子にトカゲ男が目をパチクリさせながら混乱していた。

遠山は少し考えた後、

「……トカゲさん、ここ、化け物がいるようなところなんだから？  
んで上の連中、あの冒険者とかいうプライドだけは高そうなおトシ  
ローども。そして、俺が煽って一斉に逃げ出した奴隷。化け物の巣  
窟で人間同士の大騒ぎ、……何が起これると思う？ 誰が喜ぶと思う  
？」

トカゲ男もそれで理解したようだ。ごくりと喉を鳴らして頷いた。

「かかか！ ああ、いや、なんだ、貴様、いい目をしてるではな  
いか。殺せる者の目だ。数多の命を己の意思と欲望のもとに奪って  
きた目だ」

その鎧が喋るたびに、身体の芯が震える。よく似た感覚を遠山は知  
っている。

度を超えた存在、怪物種、現代ダンジョンに巢食うあの強い生き物と相対している時と同じ感覚だ。

「……………なあ、トカゲさん、もしかして、だけど、これ夢とかでは、ない？」

あまりにリアルな感覚に、遠山が汗を流す。

「アンタ、まだそんなこと言ってるのか?! 頼む、しっかりしてくれ、今、あの方の目の前でふざけるのだけはよしてくれ」

「かか! まあよいよい! さて、そんなうぬらに私からの提案だ、なに、そう気構えるな、そう、ゲームだ」

「ゲ、ゲーム、ですか?」

「……………ロクなもんじゃねえなこれ」

嫌な予感がする。この鎧ヤローからはとても嫌な予感がしていた。

「貴様ら、今から殺し合え。生き残った方を奴隷から解放し、この塔からも生きて返してやるっぞ」

とても明るい声だ。くぐもっていてもわかった。鎧ヤローがたのしんでいることが。

「このオレ、”蒐集竜”の名に誓って、な」



クエスト目標更新

【”蒐集竜”の言う通りに、トカゲの奴隷を殺し、ヘレルの塔から脱出する】

「……は？」

「ほら、さっばら」

3話 走れ！（後書き）

< 苦しいです、評価してください >      デモンズ感

次の更新は夕方！ 見てね！

#### 4話 メインクエストぶん投げプレイ

「む？ どうした、トカゲ。先程までの察しの良さをを見せてみよ、それともこのオレの言葉が気に入らなかったのか？」

鎧ヤローがくっくっくと喉を鳴らし、トカゲの奴隷をからかう。

遠山の視界にいつのまにかまた、 が浮き出る。それはトカゲ男を指していた。こいつが目標だ、といわんばかりに。

「こ、殺し合えとは……」

「2度は言わん、まさかこのオレの言が聞こえなかった、とは言つまい、ああ、そうか、なるほど、褒美を実際に見るまでは……と  
いう奴か！ かか！ トカゲ、貴様なかなかにしたたかよの！」

鎧野郎が笑いながら懐から何かを取り出し、こちらに見せびらかす。

「それは、まさか……」

遠山にはさつぱりだが、トカゲ男にはわかつたらしい。

「教会の帰還印”だ。オレの爪と女教皇の血を混ぜた一品よ。かか！ これをもっているだけで奴隷からは即時解放、この塔からも生き延びれて、さらには冒険都市、我が街で職につくことも可能だ。まさに、今の貴様らにとっては喉から手が出るほど、というやつだろっ？」

鎧野郎がそれをプラプラ揺らしながら喉を鳴らす。

「貴様ら2人、殺し合い、生き残った方にくれてやる」

「き、教会の…… あ、あれさえ、あれば、俺も……」

「トカゲさん？　ありやなんだ？」

「……………」

トカゲ男は答えない。これまでなんだかんだ色々答えてくれたのに、今回は血走った目で鎧ヤローが投げた小さな印を見つめている。

「くく、それと、ほれ、トカゲ。その奴隷はなかなか腕が立つ、ハンデだ。使え」

「っ！　これは」

「光栄に思えよ、オレのナイフだ。金剛石に我が祖父、”炎竜”の

竜骨を混ぜた刃、王国の”樹海”にある創生樹から削り出した持ち手、それ1つで7代は遊んで暮らせる一品ぞ」

ポイツと投げられたそれがくるくる回り、地面に突き立つ。

驚くほど透明で、美しいそれは

「……………竜のナイフ……………」

「くく、くくく、さあ、踊ってみせよ、興じてみよ、奴隷ども。殺せ、戦え、でなければ生き残れんぞ」

「……………帰れる、のか」

トカゲ男がふらふらと歩み始める。足元に抜き身のまま放り投げられたナイフを拾った。

その刃にたたえた剣呑な光、それと同じ殺意がトカゲ男の目に宿る。

遠山はじつ、とその様子を見つめている。

トカゲ男の目、爬虫類特有の縦に裂けている目が大きく揺れて、  
その中に遠山鳴人の栗色の目が映り

「……………」

「……………」

遠山はこの段階で少し考え始めていた。もしかしたらこれは夢ではないのかもしれない。

トカゲ男の激情が伝わる沈黙、それがどうも夢とは思えない。

……………殺したくないな。

自分の隣でナイフを握り、こちらを見つめる縦に裂けた瞳孔を眺めた。

――俺が作ったパンだ

――だれか、腹をすかせたらいけないと

いい奴だ。間違いなく。誰かの空腹を満たそうとしてくれる奴に悪い奴はいない。

だから助けた。

トカゲ男をあゝの冒険者とやらに踏み躪られたままにしておくなかつた。それは紛れもなく、遠山鳴人が全てにおいて優先する己の欲望だった。



「どうした？ 早く始めよ。ああ、仮にどちらも何もしない場合は貴様ら2人ともオレが殺すからな、出来れば生きる目がある方を選ぶのが賢明とは思うぞ」

鎧ヤローの言葉は毒だ。恐怖と褒美、その両方で人をがんじがらめにする。

実は遠山鳴人の準備は既に完了している。時間はかかったが、鎧野郎の長話のおかげでもう充分だ。

その気になれば今、この瞬間にでも敵を全て始末する仕込みは終わっていた。

でも、割と、本気で

「……………決めたよ、蒐集竜殿」

トカゲ男が立ち上がる。ナイフを手に持ち、その瞳には覚悟を決めた者特有の昏い光をともらせて。

ああ、やだなあ。

遠山がため息をつきそうになる。

そのナイフの行方を目で追う。ライ麦に似た黒パンの優しい味が舌に、まだ残っていた。

からん。

「え？」

「……ほじっ……」

遠山が声を漏らす。

鎧ヤローがつぶやく。

トカゲ男が、構えていたナイフを一瞬チラリと眺めて、ゴミでも捨てるようにポイっと、投げた。

「ほう、ほう、ほうほう、なるほど、愚かな選択をしたな、トカゲ、貴様——」

鎧ヤローの声が少し低くなって——

「――湖のほとりに店を建てたかった」

トカゲ男が、ぼそり。

その言葉、その言葉はある男の欲望とよく似ていた。

ぞわり。遠山が目を見開く、己の体に流れる痺れのままに。

トカゲ男が遠山を見つめる。諦めたような笑い、それは優しい顔

色で。

「俺だけの店だ。そこは朝、湖の水面からつつすらと霧がかかる、俺の店の煙突から登る煙だけがその湖に映ってるんだ」

「大きな店じゃなくていい。信頼出来る友人がたまに手伝いにきてくれたり、数は少ないが鼻肩にしてくれる客が朝の開店直後にやってくる、日が昇ればレイクビューの広がるそこで、俺のパンを食べてもらおう」

「……それが、俺の夢だった、夢…… だっただけだな」

トカゲ男の目には涙が溜まっていた。ソレは果たして恐怖か、それとも別の感情から溢れた涙か。

「……だが違った。ふふ、なんのことはない、俺の夢は今日、叶ってしまったんだよ、竜殿」

震える手、水かきのついた鱗の手をトカゲ男は握りしめる。

「……はじめてだった、リザドニアンの俺の作ったパンを、気色悪がるどころか、なんのこともなく受け取り、ソイツは食べた、そして、ふふふ、そしてだ、ソイツは言った、言ってくれたんだ」

身体は震えている。それでもトカゲ男は前を見た。

鎧野郎、竜をはっきりと見つめた。

「美味いって、言ってくれたんだよ、竜殿」

ドサリ、トカゲ男がその場に座り込む。

震える手を見つめて、涙をこぼしうずくまる。

「俺は……俺は死にたくない、だが、ふふ、叶っちゃった。俺は

満足してしまっただ……」

「一瞬でも、彼を殺して生き残ろうなんて考えた自分が恥ずかしくて情けない……俺はどうなってもいい、俺のパンを美味しいと言ってくれた人がいる、ああ、我らが偉大なる大いなる”歯”よ、この導きに感謝を……」

何かに向けた祈り、トカゲが大きく息を吸う。

「彼はいい奴だ、薄汚いリザドニアンの盗人の作ったパンを、粗末にされたパンの為に怒ってくれるいい奴、なんだよ……」

そう言ったきりトカゲ男が座り込んだままに俯く。それきりもう動かない。

「……………心底、心底つまらぬな、トカゲ。貴様ら定命の者の持つ生への渴望、我ら”上位種”が時に羨むそれを、自ら手放すとは……  
ほんとにつまらぬ。おい、黒髪の奴隷」

底冷えする低い声。兜ごしにくぐもって女か男かわからない声でも、機嫌が相当悪いことだけは伝わった。

鎧野郎の手が遠山に向けられる。ヒュンっと、空気を軽く引っ掻く音がして

「……………これは」

投げられたそれを遠山がキャッチする。

「帰還印だ、それを手に持ち、自分の名前を唱えろ。」塔級冒険者”にしか所持を許されない一品ではあるが、貴様がこの世界の生き物ならば問題なく扱えるだろう。……………ふん、竜は約束は違えん、が、想像以上につまらん興になってしまったものよな」

がちやり。鎧野郎が大槍を肩にかつぎため息をつく。

「ふうん、名前、ねえ……………金メツキ鎧、このあとお前、このトカゲさんをどうするんだ？」



「決まっておる、そやつは自らそのチャンスを放り出した。竜は約束を守る、2人のうち、1人は必ず殺す、そういう約束だろう」

「ははは、なるほど、約束を守るか。たしかにそれは大事なことだなあ」

ぱし、ぱし。

遠山が手のひらに収まるその爪の意匠の印鑑を弄ぶ。親指で弾き、手のひらでキャッチ。おもちゃを弄るように何度も、何度も。

「……奴隷、その価値が分からんようだな、……さつさと往ね、つまらん幕引きだが、そのトカゲの死が貴様を生かすのだ。定命の者らしく、それを握りしめ、今日より新しい明日を――」

「トトトトトト」

探索者の嗤い声が、鎧の言葉を遮った。

「……オレの勘違いか？ 貴様、今、このオレ、”蒐集竜”の言葉  
を笑ったのか？」

怒髪。

周囲の空気が歪むのを感じる。接触許可制怪物種87号、”ソウ  
ゲンオオジグモ”、あの、家くらいサイズのある化けクモを目の前

にした時以上の圧迫感。

それでも、遠山はそれを無視する。

「トカゲさん、顔上げろよ」

「……なんだい、これでも、精一杯なんだ。頼む、見知らぬ人よ、俺のちっぽけなプライドが死の恐怖を抑えている間に、行ってくれ。また、変な気を起こさないとも限らない」

「まあ、そう言うなよ。そういや、アンタの名前、聞いてなかったなって。トカゲさん、じゃあ締まらねえだろ？」

が未だ、トカゲ男を指している。

それは何かを示す遠山鳴人への指令、遠山鳴人の道しるべ。

遠山はそれを見て鼻で笑った。

「……ラザール」

俯いたまま、トカゲ男がー　ラザールが己の名前をつぶやく。

「姓はない、ただのラザールだ。薄汚いリザドニアン、そして呪われた盗人の、ラザールだよ、旅人さん」

「鳴人だ、ラザール」

「え？」

「俺の名前は鳴人、姓は遠山。ダンジョン酔いで頭が少しだけハッピーになった探索者だ、ほら、手、出せ」

誰が従つかよ。タコメツセージが。

え、と顔をあげるラザール。彼に向けて遠山はそれをぽいっと投げた。

友人にガムでも渡すような気軽さで放り投げられた”帰還印”。

ラザールが反射的にそれを受け取り、

「ーそれに触れ、名前を唱えればー」

「ラザール」

遠山が、彼の名前を唱えた。

「……………は？　?!　あ、アンタ?!」

その印が設定された機能を発揮する。レーザーの身体に触れた状態で、その名前が伝わったのだ。

瞬時に輝く帰還の光、それがトカゲ男、レーザーを包んで。

「嫌いじゃねえ。嫌いじゃねえんだよ、そついつの」

遠山が、その愉快的な頭の中で欲望を描く。

湖のほとりに建てる家、そこに必要な1人を見つけたのだ。

「あんだと話がしたくなつた。音楽性の一致だ。お前のその夢、俺の欲望と、とても相性が良い」

【クエスト目標レーザーを殺せ、ヘレルの塔から脱出しろ】

【クエスト目標レーザーを殺せ、ヘレルの塔から脱出しろ】

【クエスト目標 ラザールを殺せ、ヘレルの塔から脱出しろ】

【クエスト目標 ラザールを殺せ、ヘレルの塔から脱出しろ】

【クエスト目標 ラザールを殺せ、ヘレルの塔から脱出しろ】

【クエスト目標 ラザールを殺せ、ヘレルの塔から脱出しろ】

「やかましい」

それを全て無視する。ラザールの頭の上にフヨフヨ浮いている、  
矢印、それに手を伸ばした。

【キャッ?!】

「え?」

レーザーが大きく目を向いて、遠山が握りしめたそれを振りかぶる。

「てめえは、あっち、だ」

むんと掴んだ を投げ捨てる。

方向は1つ、この場で唯一、真に、死ぬべき存在は誰か。

鎧ヤローへ向けて遠山が を投げつけた。

「アンタ…… ナルヒト!!!??」

「またすぐに会おう、レーザー。良い話がある、ビジネス、お前の夢と、俺の欲望の話だ」

光に包まれ消えていくレーザーに向けて人差し指を指す。



「待っー」

しゅん。

帰還の法則が為される。この世界の生命であるリザドニアンが塔から安全に排出された。

「ああ、バカ矢印。最初からそうだろうが。お前が指し示すべきものは。この場で死ぬべきクソは」

振り返り、遠山が前を見る。

矢印、 が示す、新たななる目標をはっきりと見据えた。

「この場で、俺が殺すべきムカつくヤローは1人だけだ」

メッセージ、遠山鳴人にだけ告げられるメッセージが現れた。

ト崩壊】

【メインクエスト

「……………不愉快だ、奴隷」

矢印が、目標を示すそれが鎧ヤローを示していた。

「焦るな、今からもつと不愉快にしてやるからよ。俺の欲望のままに、だ」

もう、遠山鳴人には矢印に対する不満は微塵もなかった。

隠しクエスト

【Dragon Hunt】

ト目標更新”蒐集竜”の討伐【

クエス

#### 4話 メインクエストぶん投げプレイ（後書き）

< 苦しいです、評価してください > デモンズ感

次の話は夜20時頃！是非よろしくお願いします！

5話 隠しクエスト【Dragon Hunt】(前書き)

現在のクエスト

メインクエスト【冒険奴隷】クエスト崩壊

隠しクエスト【Dragon hunt】進行中

## 5話 隠しクエスト【Dragon Hunt】

「……………久しぶりだ、褒めてやる。ここまで不愉快な気分は本当に久しぶりだ」

「キレんなよ、どうした、さっきまでのたのしそうな態度は？」

遠山が軽口を返す。

空気が震えている。その鎧野郎の存在に世界が怖じけているようだ。

だが、遠山は退かない。

既にダンジョン酔いがその恐怖を感じるべき脳を茹だらせて、壊していた。

「似てるな、お前。俺と違う、本物だ。本当に数少ないマジでやばい奴だ」

一度だけ、遠山鳴人は”本物”を見たことがある。

国家よりその力を認められ、国家戦力の1つとして指定された探索者――

「指定探索者”、連中と同じ化け物だな、お前」

探索者の中の最高峰の存在。その中で最も輝く存在、人でありながらアメリカ合衆国の国旗を飾る星の1つとして数えられた現代の英雄。

現代ダンジョンから”嵐”を持ち帰った52番目の星。

遠目から一度見たことがある彼女の輝き、それと同じ感覚を鎧やローは放っていた。

「シテイ、タンサクシャ？ ふん、まあ、いい。覚悟は出来ているようだ。……竜は約束は破らん、そして言葉を違えることはない。この場に残った、ということは貴様が死ぬわけだな」

「ひ、ヒヒヒヒヒ、バァカ。この場に残ってるのはてめえも同じだろ？」

「……なんだと？」

「ノーミソの回転がトロイな。朝飯食ってんのか？ ……この場で死ぬべき奴は俺じゃねえってことだよ」

「……よい、許す、轉ってみよ、奴隸」

「てめえが死ぬ、この場で死ぬのはてめーだけだ。タコ鎧」



「…………く、ククククク、ははははははハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」

辺りが揺れた。軽い地震でも起きたのかと思えば違う。鎧野郎の笑いに世界が揺れているのだ。

びり、びり、と身体が痺れる。それでも遠山はじっと、時を待つ。

「もうよいわ」

圧力が膨らむ。

鎧野郎の大槍、三又のゴテゴテした大槍が赤熱している。

傍らで倒れている一つ目の化け物、巨人、サイクロプス。首チヨンパされたそいつからはしかし、血が流れていない。

つまり

「火、熱か。……斬り結ぶことすら出来ねえクソ武器、厄介だな」

「ははハハハハハハ！ やけに冷静ではないか！ 良い、獲物としては退屈はせぬ！」

膨らむ、膨らむ、膨らむ。殺気、大型の怪物種が向けてくるそれより何倍も大きく、身体の動きを鈍くする殺意。

遠山は動かない。

鎧が、地面を踏みしめる、踵が地面を割り沈むレベルの膂力。

人の形に押し込められた竜が、奴隷を殺そうとー

「獲物はお前だ、マヌケが」

関係なかった。いかに奴の武装が恐ろしくても、いかに奴が本物のヤバい奴であろうとも。

この瞬間、この勝負に限ってはもう、決着がついていた。

「っー？!」

鎧野郎は踏み入れてしまった。いや、どちらにせよもう遅すぎた。

遠山鳴人の準備は、既に終わっているのだから。

遠山が風上に立っている時点で、全ての準備は終わっていた。もう、これは戦いではない。

「お前が、死ね」

上級探索者の狩り、だ。

ソレは、現代ダンジョンの中でのみ見出される探索者への”報酬”

現代ダンジョンの中でしか出土しない、特異現象を引き起こす物品。

時に荘嚴な宝のように人の足の届かぬ領域にそつと隠されている。

時に大いなる試練、強大なる怪物種の亡骸から見出されることもある。

そして時に、あつけないほど簡単に巡り会うこともある。

「っー き、さま、ソレは」

鎧が足を止めた。獲物へとびかかる肉食獣のごとき勢いが鳴りを潜めた。だが、もう遅い。全てが遅い。

ソレは2028年、現代ダンジョンが現れた地球において物理法則を覆し、”かがく”を嘲笑う存在。

ダンジョンが孕む、この世の理を書き換えるモノ。

ソレを人は、ことう名付けた。

「仕事の時間だ」

アーティファクト、レリック、あるいは――

「遺物、霧散」

遺物<sup>イブツ</sup>、と。

「満たせ、”キリヤイバ”」

遠山鳴人の右胸から何かが引きずり出される。

それは酷く傷んだ刀剣。湾曲した刃はしかし、半ばから欠けて壊れていた。

主人の肉から溶けるように出でし刃。しかし、主人の肉を傷付けない。

折れた刃の先を、遠山がヘラヘラしながら鎧に向けていた。

「その香り、まさか、”副葬品”っ?! バカ、な?! ア?! ギャツ?!」

突如、鎧が悲鳴を上げた。身体を掻きむしり、膝をつく。

「何、を、奴隷、このオレに、何をした……っ?! 答えよ!!! 人間!!!」

「あ？ 言つたら、殺そうとしてんだよ、マヌケが」

遠山が見下し、鎧が見上げる。

金色の鎧の隙間から漏れ出す液体、真っ赤な液体、血液だ。

「キリヤイバ」は既に、半径50メートル範囲に広がっている。  
お前が間抜けにも風下に立ってくれて助かったよ」

縫い目、関節、鎧の至る所からポタポタと血が流れ始めた。

「キリヤイバ」は空気の中に見えない刃をばら撒く。仕組みなんか知らねー。そうなるからそうなるんだ。お前がいくら分厚い鎧着込んでてもよー、空気に触れないなんてことはねえだろ？」



「ア、痛い？ このオレの鱗、身体が、バカ、な？！ バカなバカ  
なバカナ…… ど、奴隷！！ これを止めー！」

「ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ、ああ、怪物狩りはたのしいなあ」

「アー」

ばちやり。

あっという間に、鎧からは致死量を超える血液が流れた。

「すげえ鎧だな。ソウゲンオオジグモの甲殻すらキリヤイバは刻め  
るんだが…… まあ、鎧の中身はそうはいかなかったみたいだな」

その分厚い鎧の内側を、遠山鳴人の探索者道具がズタズタに引き

裂いていた。

これが遺物、世界の理を書き換えるチート。

遠山鳴人はその主人でもあった。

「……うえ、気分悪……」

使いすぎると異様に腹が減り、気分が一気に悪くなるのが欠点だ。

「うえ、ウエエエエエエ」

その場で遠山がキラキラを吐き始める。頭が痛く、世界がグルグル廻り始める。鎧の死体のすぐそばで奴隷が吐き続ける。

おぞましい光景が広がっていた。

「ウエップ…… あー、気持ち悪。使うといっつもこうだから、出し惜しみしちまったんだよな」。まあ、反省を生かして開幕ブツパしてみたが、効果は大なり、ってか」

あの最期、一つ目オオザルもとの大乱闘、キリヤイバの攻撃は遠山にも影響することや、この揺り戻しのこと使用を躊躇った。

だから、死んだ。だから、負けた。

もう、遠山は今の状況を夢とは思っていない。

リアル、すぎた。慣れ親しんだ己の兵器を扱う感覚も、その代償のこの気持ち悪さも。

あのトカゲ男、レーザーのパンの味、夢とか関係なしに気に入ったあの言葉。

「ひ、ヒヒヒヒヒヒ、ああ、でも、たのしい、なあ」

そして、この探索者としての狩りの成功の昏い高揚も。

夢でもなんでも、もう関係なかった。欲望を満たすその感覚がはつきりと遠山鳴人に生を知らせていた。

「なめ、るなよ、下等生物が」

「お？」

は未だ消えず。

血の海に沈むその鎧を刺し示していた。

やりを杖のように地面に突き立て、鎧野郎が立ち上がるうとする。

バキリ、鎧が膨らみ、弾けた。背中の部分のプレートを突き破り、現れ出るのは金色の――

「……………翼?!」

雄々しく開く、大空を制する上位生物の証。輝く翼膜はまるで陽光を透かしたかのように。広がる翼骨は黄金の如く。

ばきり。

背中、腰のあたりのプレートを突き破り、這い出るのは金色の

――

「は？ 尻尾？！」

木々を薙ぎ倒すその上位生物の尻尾は始祖の名残り。

「ア、アアアアアアアアア」

竜。世界に選ばれた上位生物。

この帝国においては”教会”の認める”天使”とその眷属以外で  
唯一、信仰の対象として存在する現人神ならぬ、現竜神。

「リユ、ウ、カ」

神威すら内包するその圧倒的な力が、傷を癒やし、殺意をたぎらせる。己に反抗するちっばけな奴隷を狩る為、その力が目覚めよう  
とー

「あ、そういつのいいんで」

バチャ。

「ーアア？」

大きく、激しく。

翼が、尻尾が、その竜に変化していく部位が裂けた。

立ち上がりかけていた鎧、その身体が跳ねて、仰向けに。再び血の池に沈む。

翼、尾、まるで内側から弾けたかのようにグズグズのボロボロに成り果てー

「言っただろうが、死ぬべきはお前。獲物はお前だってよー」

再生、復活。竜が竜たる所以、その生命の強さ。

しかし、相手が悪すぎた。遠山鳴人は探索者だ。再生する敵、己よりも遥か強大な生命。



その相手に慣れていた。

その殺し方を熟知していた。

「キリヤイバ」は既に、とも言ったよな。ああ、もう聞こえてなくてもいい。説明した方が何故かキリヤイバの効果は強くなるんだよ。えーと、続けるぞ？ 空気に混ざるんだ、目に見えねえ細かいヤイバがな」

「お前、何のために呼吸してる？ その喧しいくぐもった声を叫び散らすだけか？ 違うよな、てめえも血をながすんなら、その血が赤いんなら答えは簡単。呼吸、空気を吸うことによる酸素を利用してのエネルギー変換で生きてるんだよな」

遠山が、血の池に沈む獲物を冷たく見下ろす。折れた刃、己の遺物をクルクルと掌で弄びながら。

「ならもう、仕込みは完了してんだよ。てめえの血、てめえの身体全部”キリヤイバ”が入り込んでる。便利だろ？ 上でやったみたいに真っ白に”キリ”を流す事もできる、てめえにやったみたい

透明に、見えない”ヤイバ”を仕込むことも出来る……  
まあ、次があつたら活かせよ」

びくり。

その鎧の身体が痙攣する。

遠山は顔色一つ変えず、

「殺せ、キリヤイバ」

びち。

その名前を呼ぶ。鎧の身体が一瞬跳ねる。さらにズタズタに、鎧に仕込まれたヤイバが生命を切り刻む。

「しぶてえな。俺はこう見えて慎重なたちでな。確実に殺しとかね

えと夜、寝れなくなるんだよ。ほら、いやだろ？ 夜は11時までには寝て、6時くらいまではぐっすりしたいんだ。睡眠欲も俺の欲望だからなあ」

遠山が、拾う。

レーザーが勇気を持って投げ捨てたそれ。

やたら美しいナイフ。その刃は透き通り、分厚い。そつと切れ味を確かめるために、親指の爪に刃を立てる。

「いてっ！！ マジかよ、すげえな。刃当てただけだぞ」

軽く刃を当てただけの親指の爪、スツと赤い線、つぶり、血が滲み出した。

「いい、ナイフだ。これなら充分だろ」

遠山が、血の池に踏み込む。身体を内側からキリヤイバに斬り刻まれ続ける鎧。

その生命力に感嘆しつつ、鎧の顔近くを覗き込むようにしゃがんだ。

「じゃあ、まあ、ほれ、返すぜ、高いんだろ？」

ぐっ、と。

遠山が逆手に持ち直したナイフを真下に振り下ろす。鎧のツラ、目の辺り目掛けて振り下ろしたナイフが兜ごとその顔面を貫いた。

硬い物、柔らかいもの、硬くてざらざらしたもの。ナイフを通してその感覚が返ってくる。

「うへえ、気持ち悪」

びくり、びくり。

顔にナイフを突き立てられた鎧が一際大きく身体を痙攣させ、そして動かなくなった。

が、その死骸を示した。

【HUNTED DRAGON】

メッセージが流れる。

手についた返り血を拭い、その遺物を己の身体に収納しながら、遠山が見下ろす。

「探索完了」

死すべきものが、死んで。

「あばよ、鎧ヤロー」

探索者が、生き残った。

【隠しクエスト ” Dragon Hunt ”

達成】

【隠し技能 ” 竜特攻 ” が解放されました】

## 5話 隠しクエスト【Dragon Hunt】（後書き）

TIPS € ”竜特攻”

竜に対する特攻を得る。この技能を持つ者は戦闘に限らず、あらゆる”竜”との関わりにおいて非常に優位な補正を得る。

この技能を得るには最低1柱の竜を殺さねばならない。本来”竜”特性を持つ者しか得るところは出来ない技能である。

そもそも”竜”を殺すためにはこの技能が必要になるので、実質的に生まれた瞬間から”竜特攻”を持つ”竜”でない限りは後天的に得るのは不可能な技能である。

ただし、抜け道はどこにでもあるものだ、例えばこの世界のルール外の力で、竜を一度でも殺せた存在にはこの技能が発生する。

それはしかし、歪みとなるだろう。持たざる者に備わっていいはずの力ではないのだ。

ここに天使の創り出した世界においてまたバグが生まれた。物語を好む”彼女”は喜ぶだろう。

ちあ、もっど、もっど面白きものをと。



6話 辺境伯、壊れる(前書き)

「冒険都市、アガトラ」、中央区、冒険者ギルド敷地内の”領主邸”にて

## 6話 辺境伯、壊れる

「……………は？」

その日、【帝国南部領】、冒険都市”アガトラ”に激震が走る。

まず、初めにそれに気付いたのはこの男、南部領主にして、冒険都市アガトラの最高責任者である小太りのこの男。

冒険者ギルドと同じ敷地にある領主邸、自室で朝の至福のティータイムを楽しもうとしていた時のことだ。

「……………え、えっー、ちょ、うそうそうぞ、えっ、えー」

アガトラ、この街は帝国において中央の帝都、皇帝が住むその都と同じレベルに重要視されている街だ。

”ヘレルの塔”を始め、竜大使館、天使教会大聖堂、貴族居留地に、勇者パーティの生き残り。そのほか多数の帝国にとって重要な施設や存在が一同に会する火薬庫。

どこを叩いても即大爆発し、その爆発は国家運営にすらかわる規模となることが簡単にわかる厄介な土地。

おまけに周囲の平原や森は、塔に影響されてモンスターが生態系を成し、繁栄すらしてしまっている恐ろしき場所。

「んあああああ！！ 私のさあ！ 任期中になああんでもう！ こんなことが起きるのですかあああ！！ 天使さまあああ！！ あなたはいつつも私に試練ばかりおあたえになりますねえええ！！」

3年前の貴族領会議でこのアガトラ領の領主、そして冒険都市の管理者を半ば押し付けられたのがこの男。

海老反りで絨毯の上を転げ回るその男の名前。

サパン・フォン・ティーチ辺境伯であった。

「もおおおおお、やだああああ、おうちかえつづつづつづつ、あ、おうち、ここでした。んほほほのほおおおおー！」

いよいよ男が、その高価な調度品に囲まれたシックな部屋をエビ反りで反復横跳びを始め出した時だった。

「失礼、領主様、先ほどから少し騒がしすぎ……」

黒檀の木をふんだんに使われた豪華な扉が音もなく開く。

シルクのタイツに、タイトスカート。ワイバーンの翼膜で作られたジャケット、メガネ姿のよく似合う長身の美女がその部屋に入る。

「ああああー！ マリーくうつづつづんー！ すげえ良いタイミング！ マイフェイバリットパートナっぶげらー！」

小太りの領主がエビゾリのまま、長身の美女にとびかかる。しかし冷静に振り下ろされる美女の右拳の振り下ろしがサパンを地面にたたきつける。

「あ、失礼、つい。ですがエビ反りで肉体関係を求められてはこのような態度をとっても仕方ありませんよね。つまり、私は何も悪くない」

見事なカウンター。小太りの領主は絨毯に叩きつけられ動かない。

「ぐほ、ごほ、さすがはギルドマスター……　　いい右のチョッピングライトだよ、あ、パンツ見えそう」

「黒のレースです。今の発言は議事録に残し、数ヶ月後の貴族院の査定に出しますので」

メガネをくいっと、整えながら口元のホクロが眩しい彼女が冷静に手に持っているバインダーに何やら書き込んでいく。

「エッ！エッ！エッ！エッ！……いや、違う違う、それは勘弁してよー。  
……はあ、はしゃぎすぎて逆に落ち着いてきた」

「どうされたんですか、奇行がお目立ちになるあなたですから今更  
あまり驚きは……… え？」

彼女もまた、部屋のとある点を見て、それから固まった。

「あ、やっぱり？ だよな、その反応になるよね？ ね？」

「………うそ、”命のともしび”、これ、蒐集竜さま、”竜の巫女  
”の、命の火が」

「だ、よねー。ね、一応マリーくん、数えてみてくれない？ ほら、  
私の目がこわれてるかもしれないし」

その部屋、暖炉のすぐ隣にあるずっしりした木のチェスト。

その上に広がるのは優しい火が灯る数十本のロウソクだ。

円形に並べられたそのロウソクを中心、一際かがやく杯の上にシヤンデリアのごとく揃えられた金色のロウソクがたっている。

マリーと呼ばれた鉄面皮の女性がずりさがった眼鏡を直しながら細く白い指で、ゆっくりそれを数え始める。

「いち、に、さん、……し、じ、ろく……　ろく……　ろく、  
しかありませんね」

「だ、よね……　ろく、しかないよね。7つ。ないとまずいよね  
……」

「え、ええ、竜には7つの命がありますから……　え、うそ、こ  
れ、領主様、そついうことですか？」

「あー、吐きそうになってきたよ、うん。まあ、”副葬品”である”命のともしび”が嘘をつくことはないだろうから、ねえ」

領主が、テーブルで淹れたての紅茶を音もなく啜る。

ティーカップから上る王国から取り寄せたその高貴な香りを愉しみ、静かに皿にコップを戻してー

「いや死んだらうつつうつつうつつ!!?!?!?!?! 帝国の守り竜! 上位生物の竜が死んだらうつつうつつうつつ!!?! 蒐集竜だよ?! 竜の巫女だよ!? 帝国有数のVIP中のVIP!! 7つの命のうち、1つが消えたらうつつうつつうつつ!!?! おんぎゃあああ!?!」



辺境伯、壊れる。赤ちゃんに戻る。

「これは……、にわかには信じられませんが、たしかに竜の巫女さまのともしびが1つ消えておりますね…… 今日確か、”ヘレルの塔”に狩りに出かけておられたはずです」

「いやいやいや!! 例えね、あの人外魔境の地、ヘレルの塔だっ  
ていつても、竜よ!? 竜、竜竜竜竜!! 第二文明!! 天に輝  
く星々すらも支配した時代から生き残る上位種よ?! そう簡単に  
死ぬもんですか!! あのワガママ金ピカ竜が! あ、やべ、ワガ  
ママとか言っちゃった」

「領主様、落ち着いてください。今、竜大使館より送られて来てい  
た本日の巫女さまのご予定を確認しています。……ふむ、2級冒険  
者の徒党【ライカンス】とのサイクロプスを標的にしてのハンテイ  
ング…… 到底、巫女様が命を落とされる要素は見当たりませ  
んが」

「塔級冒険者の生死を知らせるこのロウソク一本消えるだけでも帝  
都に報告せにやならんのに!! 何で死んだるんじゃ! なんて死

「んどうるんじゃ！　なんで死んだるんじゃ！」

白目を剥いた領主が、両手をシュッポシュッポと機関車のように動かしながら部屋を走り回り始め――

「えい」

「きゅぷ」

「がしりと途中でギルドマスターに首をキュッと、締め上げられた。」

「彼女の方が遥かに身長が高いため、豚が屠殺人に絞められているように見えなくてもない。」

「落ち着かれましたか？　領主様」

「かふ、あ、けほ、う、うん。え？ 今、喉を？ ま、まあいいや、ああ、ありがとう、少しなんか落ち着いたよ」

絨毯に崩れ落ちた領主が目をぱちくりしながら自分の喉を撫でる。

え、我、貴族ぞ？ ノブリスぞ？ 辺境伯ぞ？ え？ 首を、絞められ……？

真面目に抗議しようとしたが、メガネの奥からジロリと見つめてくるギルドマスターの目が怖かったので何も言わなかった。

「では、まず状況の整理と対策を。……今日のスケジュールは大幅に変更ですね、1級、いえ、”塔級冒険者”への蒐集竜様の探索依頼を正式にギルドから発行しましょう」

「今日は待機の塔級がいるのかい？ ああ、ロウソクが消えたことは帝都の皇帝閣下も既にご存知だろうし、教会のあの銭ゲバ女教皇も掴んでるだろう。わあ、竜大使館への説明もいるし…… なんで、竜が死んだるんや」

「記録に残っている竜の死亡ではおよそ200年振りでしょうか？  
大戦期に”魔術学院”が炎竜を一度殺しています。まあ、そのあと復活した炎竜に学院は焼き尽くされていますが」

「はあ、いつそ連中の命が1つだけならまだマシなんだが……不  
死寸前の生き物だからなあ。……マリーくん、各地方、そして帝都  
にはもう”竜祭”の届出を出しておこうか、竜大使館から言われる  
より先にこの都市として竜を盛大に迎えることを発表しての方が体  
裁がいいだろう」

「あら、領主様、いいお顔になられてきましたね。貴方様はやはり、  
追い詰められないと本気が出せないようで」

「まあ、やるしかないから……んおおおおお？！ やべえ！ 竜  
の巫女様が亡くなったってことは、あのクソガ……じゃなかった非  
常に聡明にあらされる、”姪御殿”へもお知らせしなければ……」

「ああ、皇帝閣下の。なんでも、また家庭教師をクビにしたらしい

ですね。齡7つにして”古代二ホン神国語”の学位を取得されている才女様ですから。帝国の未来は非常に明るいかと」

「あの知識マウントだけは勘弁してほしいけどね……」

もう叫び疲れたよ…… とほほのほ。なんで私の任期中にこんな厄介ごとが起きるんだ…… ま、まあ、こんなこと一度きりか！ うん、もう大丈夫、これ以上のことはもう絶対起きない！ 竜が死ぬより厄介なことなんてない！」

領主が自分を鼓舞することく満面の笑みで頷く。

ピコン、誰にも聞こえない旗の立つ音が世界のどこかで響いた。

「今、どこかで何かが立った音が…… あら、領主様、少しだけいいお知らせです」

ギルドマスターが手に持っている千年樹のバインダーを覗きながら呟いた。

「そういうのはもっとちょうだい、で、なにぞ」

「本日の地下待機冒険者の中に、”塔級冒険者”が1人、いらつしやいました。ふふ、なんの因果でしょうね。死んだ竜を彼女に搜索しにいつてもらつとは」

「え？ 誰？」

メガネがキラリ、反射して。

「元勇者パーティ 射手」

その言葉に領主が固まる。

200年前の大戦、それを終わらせた英雄達

帝国と王国を除き、他の人類国家と魔の王と呼ばれる未知大陸の支配者を滅ぼした、世界の免疫システム。

”勇者パーティ” その生き残りの1人。竜と同じくらいこの帝国、いや、王国にすら影響力のある人物。

「塔級冒険者、”ウエンフィルバーナ”様が現在、ギルド地下にて待機中です。いかがいたしますか？」

「う、うーん、厄介」

ぎゅぎゅぎゅ、領主の膨れた腹が音を立てた。

……  
……

帝国暦第3紀

28年

開花の月

12日。

この日、帝国全土に衝撃が走る。

伝書鷹の中で最速、最優、コンドミニウムがその日午前中には帝都にその知らせを報告。

帝国と竜界の融和の象徴。

竜の巫女、”蒐集竜”、その7つある生命のうち、1つの落命。

その死の追悼と、約束された復活の祝いで2000年振りに冒険都市のみならず、帝国全土での”竜祭り”の開催の具申。

皇帝の判断により貴族院の会議を経ずに、この開催を決定。

これにより帝国の経済は一気に加熱。帝都を中心に食料品や高級品の商人ギルドによる買い付けが加熱。



物流の活発化により護衛の為の冒険者ギルドへの依頼が殺到。多くの冒険者の懐が潤う。

その金は飲食店、そして色街へと流れ込み行き渡る。暗い場所を生業とする存在たちにもまた竜の死と復活の恩恵は生き届く。

帝国。

未知大陸を除き、別大陸の王国を除けばたった1つの亜人を含む人類種国家。

歴史において帝国の激動の時代の始まりはいつも、その街、冒険都市から始まるものだった。

今回も、それは例外ではない。

この日、ギルドより地下待機していた”塔級冒険者”。

元勇者パーティ、射手。ウエンフィルバーナへと指定依頼が発行。

ウエンフィルバーナはこれを快諾。その日のうちにヘレルの塔へ  
と出発し、すぐに壊滅状態の2級徒党、「ライカンズ」の生き残り  
と接触。

とある”カナリア冒険奴隷”2人を逃したことをきっかけに起きた騒ぎ。  
それに引き寄せられたヘレルの塔原生のモンスターの襲撃を受け同  
徒党は壊滅。

ウエンフィルバーナは生き残りをギルドへ送還したのち再び、塔  
の探索を開始。

第一階層下に新たに見つかった光る滝壺付近にて復活直後の”蒐  
集竜”を発見。

黄泉がえりを果たした竜は非常に凶暴になっている故、戦闘の危  
険もあつたが蒐集竜は恐ろしいほどにおとなしかったという。

ウエンフィルバーナが”蒐集竜”とともにギルドへ帰還。

そして、その後、蘇ったその竜。

帝国において”竜の巫女”と崇められる蒐集竜の言葉は大陸を大きく揺らすことになる。

「オレを殺した奴隷を探し出せ」

「人間の黒髪の奴隷だ。出来ぬのなら竜界は今後、帝国との縁を切る。だが、その奴隷を探し、オレの元へ連れてきたのならば竜界と帝国の盟約は永遠のものとなり、更に我が蒐集品、その全てをくれてやっても構わん」

蒐集竜自らの言葉での明かされた衝撃の事実。

つまり、奴隷が竜を殺したのだ。

この言葉によって冒険都市では辺境伯の抜け毛が通常の10000倍に増え、帝都では皇帝が紅茶を天井にまで吹き出したという。

”蒐集竜”の下知により、冒険者界隈の経済は活発化。

ヘレルの塔への常の挑戦を認められている塔級冒険者はもちろん、1級冒険者や2級冒険者も我先にとギルドへ塔への挑戦申請を提出。

ギルドはその処理に追われるも、竜協定に基づき、特例的にほぼ全ての2級以上の冒険者にヘレルの塔への登頂を許可。

多くの冒険者が塔に挑むための武具を買い揃えることにより、鍛冶屋も大繁盛。

鍛冶屋が忙しければ鉷山所有者もホクホク。

そして多くの冒険者が実力不足のまま、魔境である塔へ挑む為にたくさん死ぬ。

祈りやら葬儀やらで教会もホツクホツク。銭ゲバ女教皇の内陣室からはしばらく笑い声が止まらなかったとか。

まさに、竜が死ねば全てが儲かる、と言った様子で帝国、その巨大な1つの生物が蠢き始めていた。

しかし、肝心かなめのその”黒髪の奴隷”は未だ、見つからず。

竜に挑むことを誉とし、それに打ち勝つことで竜の番にならんとする名誉ある”教会騎士”たちは総力を上げて帝国中を探し回るも見つからず。

若い教会騎士の何人かは無謀にも、奴隷に殺される程度の竜なら

ば自分にだつてと勇足に駆られるものもいた。

もちろん、皆、もうこの世にいない。消し炭か、生首か。蒐集竜のその日の機嫌次第でミディアムかレアかを選ばされていた。

また、似たような奴隷を用意して竜を騙そうとした冒険者は皆一様に、消し炭にされ、それに恐れた生半可な冒険者は次第に塔への挑戦をやめていた。

竜祭りの準備が進めば進むほど、経済だけが加熱、膨張を続けていく中。

あつという間に、蒐集竜の死と復活から1ヶ月が経とうとしていた。

……  
……  
……

「そして時は、遡り。ある黒髪の奴隷が蒐集竜を殺した直後のこと」

「よし、ぶっ殺した。あー、いい満足感だ。さて、トカゲさん、ラザールも多分逃がせたことだし。こっからどうすっかな」

背伸びしながらあくびをする遠山。

するとまだ矢印がフヨフヨしていることに気づく。

「ん？」

はキリヤイバが殺し尽くした生命の抜け殻を指していた。

【死骸を漁る】

「おっ、そういうのもあるのか。いいね」

キリヤイバの力すら通さないその鎧。そして恐らく予備を持って  
いるだろう帰還手段。

ああ、そうだとも。探索者の勝利の後には報酬が必要なのだ。

遠山鳴人が血の池に沈む”戦利品”へとゆっくり、足を伸ばして  
いった。



6話 辺境伯、壊れる（後書き）

< 苦しいです、評価してください >      デモンズ感

次は21時過ぎ更新予定！

よろしく願いします！

7話 剥ぎ取り×再会×奇妙な女、ここから始まるたのしい異世界ライフ

「えーと、鎧……は、だめだ。外し方がわかんねーし、そもそも殺した奴の鎧なんざ着たくねえ」

血だまりに沈む鎧野郎、遠山はしゃがみ込んでその死骸を漁り始める。

「大槍…… あんまデカイ武器好きじゃねえんだよな。カッコいいんだけど実用性がなあ。そっぴや組合やらアメリカがパワーアーマーの開発をしてるって都市伝説あったけど、そういうの欲しいなあ」

「角つきの兜…… うん、ナイフ完全にこりや頭蓋骨まで行ってるな。キモいから触らんとこ」

「マント、すげえいい素材、てかこれ素材なんで出来てんだ？ ま

あ普通にいらんな。なんかコイツの格好、バチカン市国の指定探索者共と似てんなあ」

いまいち役に立ちそうなものがない。

だが、遠山は鎧野郎があるものの予備を持っているのでないかとあたりをつけていた。

「お、ペンダント？ 当たりじゃねーか？ 爪の形に、印文……  
やっぱ予備あるじゃねーか。ん？ もう一つある。なんだこりゃ、ドックタグ？ まあ金ピカで高そうで持ち歩きしやすそうだし、これもーらい」

首元に光るソレをぶちりと剥ぎ取る。ラザールに渡した帰還印とやら。それと一緒に軍隊が使う識別証のような金色のプレートを剥ぎ取る。

「てか、コイツ、マジで何者だったんだ？ 翼に、尻尾。人間、じやねえのか？ ……まあ、ぶっ殺したからもういいか。南無阿弥陀

仏、南無阿弥陀仏。まあ次があつたら今度はてめえが勝つだろうな。2度とてめえが生まれてこないことを祈るよ」

余裕勝ちに見えて、その実、かなり綱渡りだった。

遠山鳴人の切り札、【未登録遺物キリヤイバ】は、ハマればそれこそ格上にすら通用する兵器だが、性能はその実かなりピーキーだ。

「キリヤイバは俺も巻き込まれるからなあ。風が吹いててよかったぜ。仕込みも充分殺せるレベルに広がらせるには時間かかるし……ぶり返しもキツいしなあ。まあ、生きてるからいつか」

相手がこちらを完全に舐めていたこと。遠山の切り札の存在を知らなかったこと。

そして何より一対一のタイマン勝負、遠山が周りの巻き添えを気にせずに戦えたこと。

全ての要因が絡み合い、遠山は命を勝ち得た。

遠山が軽く戦闘の振り返りを終え、鎧ヤローから剥ぎ取ったそれを見つめる。

「よし、じゃあもうさっそく使っちゃまうか」

事実だけを考える。ここが夢なのか、それとも現実なのか。

「夢だった時は別にいい。なにしようとか俺はあん時に死んで、全部おわったんだ。ソレは受け入れよう」

だが、もし、もし仮にー

「これが現実で、俺がまだ生きている。続きがここだとしたら俺はめっちゃくちゃにラッキーだ。現代ダンジョンなんてモンがあるんだ。こんなことがあっても、おかしくはない」

夢なら夢で全て諦める。だが万が一の可能性、つまり、自分はまだマジで生きていて、あの最期の瞬間の続きにいたとしたなら――

「……今度は死なねえ。生き残ってやる」

この状況に対する遠山の答えはシンプルだった。

ひとまずの納得を終わらせて、改めて遠山は手のひらの印を見つめる。

使い方はもう知っている。仕組みは意味わからないが方法はこれしかない。

どこの場所がどこかもわからないが、辺りに満ちる空気はよく知っている。

現代ダンジョン、バベルの大穴と同じ空気、つまり人間がいるべきところではない別世界の空気。

「落ち着け、よく考える」

事実だけを、見つめる。まず人を殺したことについて――

「ふう、まあよく考えてみりゃ化け物殺して平気なんだ。人の時だけ感傷的になんのもおかしい話だな」

斜め上の考え方で遠山は1つ現実を受け入れる。現代ダンジョン、バベルの大穴は人を酔わせる。

扁桃体や脳のシナプスに影響するその現象は、倫理観を狂わせ、人を探索者へと変えていくのだ。

その酔いは3年という探索者期間により、遠山鳴人の脳を変異さ

せていた。

「そして、もう一つ、レーザーは確かにここから離脱している。この帰還印、とやらを使って」

事実、2つ目。

レーザーがこの場から離脱しているということだけ。

同じ帰還印、そして同じ方法ならばレーザーが向かった場所にいるのではないか、遠山はそう仮説立てる。

その他色々考えたいことはあったが、場所が場所だ。

遠山は思考を放棄して、その印鑑を手握る。

「遠山鳴人！」



持って、名前を唱えれば。まるでマジックアイテムだな。遠山は少しワクワクしながら待つ。

……なにも起こらない。

「ん？ あれ。遠山、鳴人」

ただ、滝壺から落ちる水の音と小川が流れる音だけが聞こえる。

「……とおやまなるひと」

「トーママナルヒト」

少し発音を変えてもダメだ。ラザールの時のように光に包まれたりも、この場から離脱することも出来ない。

「なんも反応しねえ……」

「不良品か？」

「ばちやり。」

遠山が印を見つめてぼやいていると、ふと、水の音。

「いや、違う。水面がめくれて何か濡れたものが地面を打つ音がした。」

「ワニ」

「ん？」

気付けば、足元にソイツはいた。

濡れそぼる身体、ワニのやうな大顎、地面を這う身体はおたまじやくしのやうに手足がなく縦に備わるヒレだけが備わる。

「おっと、マジか」

目は白く濁り、その牙ははっきりと鋭い。肉食、一瞬で遠山は理解して

「ワニワニ」「ワニワニ」「ワニワニ」「ワニワニ」「ワニワニ」「ワニワニ」「ワニワニ」「ワニワニ」「ワニワニ」「ワニワニ」「ワニワニ」「ワニワニ」

ばちゅ、ばちゅ、ばちゅ。

次々、小川から黒い身体を震わせて、ソイツらが現れる。ぬめぬめした身体を捻り、揺らし、ねめつけながら遠山に近づいてきた。

「……あらー、ぼつちやまたち、なんでみんな出てきたの？」

「ワニ」

がちん！

突然、1匹がその大顎を開いて遠山の足を狙う。

間一髪、足を引いてかわす遠山

「ひえ！？ やる気まんまんかよ！？」

「ワニワニ」

「パニック」

「なんだあそのふざけた鳴き声は！？ おたまじゃくしとワニ？！  
ふざけた怪物だな！！」

「やべえ、血の匂いに寄せられたのか？ くそ、ノリノリになりすぎてた、おいこら！ ワニジャクシども！！ こんな貧相なナリで元気ピンピンの俺よりそこに血だらけのたった今生肉になった鎧があるだろっが！ そっち狙え、そっち！」

「ワニ？」

「ワニワニ？」

「ワニニニニ？」

遠山の声にワニとおたまじゃくしの合いの子、仮名称ワニジャクシ達が仲間内でワニワニ喋り始める。

全員が血溜まりに沈む鎧をチラリと一瞥し

「パニック」

頭をふりながらまた遠山に向き直る。ギラついた牙を覗かせ、涎を垂らしながら。

「そーですか。生きてる方が新鮮ですか。はいはい。っふ！ーお  
りゃあ！ー！」

遠山が一気に駆け出す。

少しの間、探索者の判断は早い。瞬時にその場からの逃走を選ぶ。

野生動物に背を向けて逃げ出すのは刺激してしまうため悪手だが、  
怪物は別だ。刺激しようとしまいとこちらを食い殺そうとしてくる  
のだから。

「「「「ワニー！ー！」「」」」」

「くそ、クソクソクソ！ー！ 奇襲には弱いんだよ、キリヤイバは！  
」！」

案の定、追いかけてくる。足がないにもかかわらず地上での速度  
もなかなか速い！

粘液、地面を滑っている。

「ワニ?!」

「ひゃあああ!? めっちゃ増えとるうつつう!? なんだコイツら、なんで俺を狙うんだ!? ええい、一か八か!! 遺物、霧散!! キリヤイバ!! 濃い目!! 超濃い目!!」

走りながら後ろを振り向く。数えるのが嫌になるほど増えていた。

遠山が、悲鳴を上げながら遺物を起動。胸からいづるのは”竜”すら殺し尽くした世界のバグ。

一気に、遠山を中心に深く重たいマシロの霧が世界にまろびでる。

「ワニ?!」

「やべえ!? 俺も見えねえ!? 矢印さん!! 矢印さああん!! 目的地、目的地教えてえええ!!」

サイドクエスト発生

「お？ いいね、そのレスポンス」

【訪問者との再会】

【クエスト目標 ウ\$\$\$ン@&&a aファイル&b&aバナ¥¥・  
ジ###&|ソル・ウ¥2スクとマ&スのキャンプ地までたどり着  
く】

「文字化けしてるけど、まあいい！ 矢印、矢印！ あった！」

白い空間、しかし矢印だけははっきりと進むべき道を示させる。

奴らが霧に迷っている今のうちに――

「ワニー！！」



がちん！！

かわせたのはたまたまだ。遠山の首を狙った一撃、たまたましゃがんだことでワニジャクシが空振り、遠山を飛び越す。

「うおば?! は?! 俺の場所がバレてる?! 視覚感知型じゃないのか!?!」

「ワニワニワニ」

パニックになりながらも遠山の探索に最適化された脳みそが回転する。

視覚以外で感覚器官になりうるもの、耳、鼻、だがコイツらはあの川から出て来ている、水棲の生き物、だとしたら聴覚も嗅覚もメインの感覚器としては弱い。

あと残るのは――

「熱……！ ピット器官……！ まさか、コイツら」

「ワニィ」

「見た目がおたまじゃくしとワニヅラのクセして、まさか、蛇の仲間？！」

「ワニィ」

「その鳴き声はてめえ、詐欺だろ！？ くそ、殺せ、キリヤイバ！  
！で、イダダダダダダ！」

「一か八か。リスク承知でノープランの遺物使用、しかし案の定ソレは悪手だ。」

プシ、ペシ。

遠山の衣服が切り裂かれる。その力は主人にさえ牙を剥く。世界を切り刻むにあたって霧の中にいるのなら主人さえ、関係ない。

キリヤイバの誤発、ピーキーなその性能はこの乱戦の中では自殺行為に等しい。

「やっぱ、無理あるか!! 中止、キリヤイバ、とまれ!! すてい! ホーム!! ごーほーむ!!」

すぐに遠山の指示通り、キリヤイバがその動きを止める。何匹かは殺せたらしいがだめだ。充分に行き渡っていないキリヤイバの殺傷力は低い。

「くそ!! 走りにくい!! このボロボロ靴!!」

ぬるり。粗末な皮のペラペラな靴、川辺、濡れた砂利石の上を滑り。

「ワニワニ」

「あ、や、ば」

遠山がこける。あの時と同じだ。化け物に多数の化け物になぶり殺しにされる。

「まじ、かよ」

また殺されー

『ネガティブ、多数の水棲型怪物種の群れを確認、およびそれに追われている現地人らしき人影を視認』

『警告、頭を低くしてその場に伏せるのを推奨します』

よく通る声だった。

果てなく続く麦畑、その上を自由に駆ける風のような声。喋り方はどこかロボットぽかったけど。

「っ！？ どうせい！！」

反射、言われた通り体勢を崩したそのままに頭からスライディング。  
グ。

『ポジティブ、いい反応です、現地人。ウエンフィルバーナ、交戦を許可してください、表に出ている私が救出します』

無機質な声が闇の奥から。

「ワニ！！！！」

「あ、危ねえ！！！」

『PERK ON』

ホーク・アイ  
『鷹の目』

「ワニワニワニワニワニワに！ パニックー！」

『さらに、ウエンフィルバーナの風の権能を使用』

辺りを照らす光る岩が、その姿を照らした。

『戦闘効率評価、無傷での殲滅を可能と判断、M-66、寄生生物兵器”マルス”、”臨時共生体”ウエンフィルバーナ』

女だ。

長い、髪ー

『コールサイン、”シエラ・スペシャル”』

交戦  
ENGAGED

”金色”——薄暗い空間でもソレ自体が輝くように。

金色の髪、豊かに腰まで伸びるそれが波打つ。

青い瞳が怪物の群れを全て捉える。

華奢な身体、流れる動作で女が弓を引く。

「パニック?!?!?」

放たれる矢、遠山へ飛びかかる化け物の頭へ飛ぶ。

スパン、良い音がして。



「うそ、だろ」

それだけで全てが終わった。

たった一本の矢、のはずだ。

それが生き物のように空間を飛び、化け物の頭を貫く。

1匹を貫いた後、そのまま次の獲物を探すように。物理法則を完全に無視し、生き物の如く動く矢が全ての化け物を貫き殺した。

一瞬で、怪物の群れは沈黙した。

『敵性反応の殲滅を確認。戦闘効率評価、さらに上昇。……あまり調子に乗らないください、ウエンフィルバーナ。それでも、彼と私のコンビのほうが強力です』

彼女の金色の髪が、なびいている。そこだけ不自然に風が吹いている。まるで彼女が風を吸い寄せているように。

「す、げえ。なんだ、弓矢？ か、ぜ？」

『お怪我はありませんか？ 現地人。あなたは非常に運が良ー』

奇妙な服装。

モコモコの民族衣装のようなデザイン、様々な人種が集まる”バベル島”でも見たことない。

弓矢を背中のベルトにしまいながら、その金髪の女が手を差し伸べて

『えっ？』

固まった。

青色の瞳が、大きく見開かれ、形の良い口がぽかんと開いている。

ド級の美人だ。遠山は少しビビりながらも

「あ、ああ、どうも。いやほんと助かりました。……あの、どうか  
なさいました？」

『ネガティブ…… まさか、黒髪、栗色の目、そのDNA構造…  
… “日本”人？』

「あ、はい、”ニホン”人ですが……」

何か不味かったのだろうか。

そして突如、金髪の女が顔を顰めた。

『ネガティブ、なんですか、ウエンフィルバーナ、今、この現地人の解析を、え？ 知り合い？ ちよ、待ちなさい、本日の肉体の操作権は私にー』』

まるで、そう、誰かと話しているようだ。

遠山とこの女しかいないのにもかかわらず金髪の女が誰かと1人で喋り始める。

そして急に黙ったかと思うと、がくりとその首を下げ、動かなくなった。

「え?! ちよ、もしもし!! 大丈夫です? ちよっー あ  
?」

言葉を失う。目の前で起きた明らかな異常に。

金の髪、豊かな黄金の麦畑、太陽をイメージさせるこの金の髪が  
変わり始めた。

月、夜空に光る月、冷たい匙、幽谷を吹きすさぶ風。

その髪が、みるみる”銀色”に変わっていく。

「ーーク、クク、ああ、なんてことだい。そうか、そういうことだ  
っただね」

風が、彼女の髪を掬う。

長い髪の真ん中だけ器用に、母親が娘の髪を結うように、風が彼  
女の髪を二つ編みに結う。

「は？ 髪、なん、で？」

遠山が目を剥く。

「ククク、ああ、そんなに驚いた顔をしないでくれよ。やあ、久しぶりだね、ニホン人」

目の色も変わっていた。青空、夏の海と空を閉じ込めていたような瞳が、今や理解不能の七色に変わる。

見ているだけでおかしくなりそうな、虹色の瞳が遠山を面白いものをみた、とばかりに歪んでいた。

「は？ だ、れだ？」

「ああ、そうか。そうだった。”風”にとってはこれは再会だが、キミにとっては初対面か。ククク、面白い場所だね、この塔は本当に。まさに全ての時と場所がごちゃ混ぜになった収束点というわけだ」

「……すまん、助けてもらって悪いけど、アンタ、大丈夫か？　なんか、ついさっきと話し方とか、雰囲気全然」

「クク、ああ、少し、色々あるのさ。すまない、混乱させたね。改めて、はじめましてニホン人」

「……あんた、なにもんだ」

「ウエンフィルバーナ・ジルバソル・トウスク」、旅人さ、今はもう、ただの、ね」

「う、うえんふいるばーな？」

「ククク、新鮮だね、キミのそんな顔を見るのは。風はキミの人間らしい顔はあまり、見た記憶はなかったから。まあ、あの時の風とキミの関係では仕方ないか」

「……………」

理解出来ない奇妙な言葉、まるで遠山を知っているかのような口ぶり。

反射的に遠山は静かに、ソレを起動する。

自分の周りに透明にした”キリ”を撒き始めて

「そう警戒するなよ、懐かしき驚きの再会に少し昂ってしまってるだけさ。だから、”キリヤイバ”を広げるのはやめておくれ。――トオヤマ ナルヒト君」

「……………マジか、ほんとになんなんだ、あんた」

警戒度数が一気に上がる、名前だけでなくその武装まで把握されている。



「うーん、キミの……未来の宿敵？」

顎に人差し指を当てて首をかしげるその仕草。

この世のものと思えないほど可愛いので少し見惚れかけつつ、顔には出さない。

「なんの、話だ？」

「マルス、少し彼と話したい。そう怒るなよ、キミも聞いていていからさ」

遠山の問いかけに答えず、また銀髪の女が誰かと話し始めた。

まるで2人、同じ顔をした人間が2人いるかのような。

「まあ、ここではなんだ。すぐ近くに風たちのキャンプ地がある。そこまで案内するよ。招待させてくれないかい？」

「……遠慮したいって言ったら？」

「うーん、困るなあ。ああ、そうか、キミはそういう奴だったね。メリットを先に提示しよう。キミが素直に風の招待を受けてくれたら、今のキミの状況を教えてあげようじゃないか。あとは、そうだね、美味しい紅茶がある。どうだい？」

紅茶。

酷く疲れた遠山の脳みそがその香りと温もりを求めて抗議を始めた。

一度ついた欲望に遠山は物凄く弱い。

「……よろしく願いします」

「うん、素直でケツコー、さあ、こつちだ。トオヤマナルヒト、ついできておくれ」

「あ、はい、ウエ…… えーと、なんとお呼びすれば？」

「うん？ あー、そうか。気軽に、ウエンとー いや、やはりやめておこう。キミに名前を呼ばれるのは、クク、少し怖くて嫌だな」

「……俺、嫌われています？」

「クク、キミが風を嫌うのさ。ああ、そうだ、とても良い呼び名がある」

その銀髪の女が虹色の瞳をネコのようになめる。

ふわふわの帽子を少しずらして、顔を傾け、ある部位を遠山に見

せつけるように笑った。

「その、耳、尖った？ まさか、アンタ、あのファンタジーモノで有名な……」

尖っていた。

人の耳ではない。それはファンタジーでお馴染みのあの種族の特徴

――

「クク、ああ、そう。風のことには気軽にこう呼んでおくれ。えーと。確かあの時、キミは…… ああ、そうそう」

まるで、昔を、遠い記憶を思い出すように耳長の女が頭を触りどこか遠くを見つめて

「クソエルフ」だったかな？」

ニヤリと笑い、片目を閉じてウインクするその耳長の女。

「……………ドMの方？」

「安心してくれ、”風”はキミにだけはそういつの求めないから」

揺れる銀色の髪を追いかけていく。

すぐにテントや椅子、そしてぱちり、ぱちりと火の粉をあげる焚き火が見えた。

く強欲冒険者はメインクエストをぶん投げて冒険したりパン屋や  
って竜のヒモや吸血鬼のエサになりつつ、欲望のままにクソ鬱バツ  
トエントをぶちのめしますく

はじまり

7話 剥ぎ取り×再会×奇妙な女、ここから始まるたのしい異世  
界ライフ(後書き)

< 苦しいです、星での評価してください > デモンズ感

ここまでご覧頂きありがとうございました！

今日の更新はこれでおしまい！

おやすみー！

## 8話 異世界転移と”オタク”技能

「まあ、ズバリ言うとなね、うん、やはりキミはばっちり生きてると思うよ、この状況は残念ながら夢でもなんでもない、キミの現実の続きさ」

小川の流れる地下空間、そこには場違いに広がられたキャンプ地ができていた。

ロッキングチェアに、自立式のハンモック。

極め付きは完全にどこかでみたことのあるブランドマークがついたテントにタープ。

「あ、この紅茶うまい。なんのお茶葉だろう」



ツッコむのが面倒だったのであまり考えず、銀髪の耳長女と火を囲み、チェアに揺られながら紅茶を啜る。

「こらこら、現実逃避するのはやめておくれ。あ、やっぱり美味しいだろう？ ヘレルの塔の隠し階層でしか取れない茶葉なんだ」

「はえー、ヘレルの塔、すか」

なんのお茶葉だろう。カモミールとダーズリンの中間くらいの香り。嗅いでいると気分が落ち着いてくる。

「ふむふむ、やはりキミは彼方から来てたわけか。マルスが反応したということは風の見立て通り日本人なわけだろうし」

「はあ、まあ、純ニホン人ですが」

「やー、まさかキミとこうしてお茶を飲む日が来るとはねえ……  
少し信じられないよ、まったく」

マグカップを互いに啜り、火が弾ける音を聞く。完全にキャンプ

だ。

「……えーと、すまん。話を戻しますけど、シンプルに話をまとめると、だ。えっと、エルフさん。俺はつまり、あれだ。まだ生きてるってことでいいわけか？」

遠山が居心地の良さに呑まれかけたところをなんとか保ち、話を戻す。

「ああ、そうだとも。トオヤマナルヒト。キミは確かに生きている。ここはキミの脳が臨死の際に作り出した幻影でも、まやかしてもない。はつきりとした現実、”日本”とはまた違う異なる世界さ」

「異世界……」

「まあ、ショックなのはわかるよ、でも落ち着ー」

銀髪のエルフが虹色の目を優しく細め、遠山を諫めようと新しいお茶を注ぐとして

「え、これつまり異世界転移ってこと？」

思った以上に、遠山のその声は明るかった。

少なくとも、落ち込んだり、パニックになっている人間の声ではない。むしろ――

「うん？」

エルフが首を傾げて固まる。予想していた反応とちがったのだらう。

「え、うそ、マジ？ え？ ほんとのほんとに来た感じ？ ええええ、嘘。マジ？ 2020年代に流行ってた異世界転移なんか？」

ものすごい早口で、遠山が喋り始める。

「ど、どうしたんだい、キミ。なんか風が思ってた反応と随分違うね、なんか嬉しそうに」

「いやこれはテンション上がるでしょうよ……!!」

すばーんと、立ち上がり紅茶を飲み干し叫ぶ。焚き火が気味悪がるように揺れた。

遠山鳴人には、想像以上にショックがなかった。

むしろ自分が生きているという他人からの言葉、そして戦闘直後の興奮、異世界というワード。

凹むどころか、どちらかといえば

「……わーお。すごい良い笑顔。キミ、かなり愉快的な人間だったんだねえ。彼と気が合いそうだよ、変人的な意味で」

「彼？ いやそれより!! エルフさん、エルフさんエルフさん!!  
! つまり! 俺はまだ死んでなく! ここは異世界!! あの冒険者とかいう連中やトカゲ男のラザール、そして俺がぶっ殺した獣人や翼やら尻尾やら生やした鎧野郎も、あれか! 異世界の、ほん

とに生きてる連中ってわけなんだな！」

プチ凸。わかりやすくアガっていた。もとより探索者になるような人間が、ダンジョン酔いにより頭を茹でられ早3年。

爬虫類脳が変異しているその男はめっぽっ己の欲望、己の楽しみに弱い。

早口で一気に喋り始める。細い目を糸のようにして満面の笑顔を浮かべエルフに迫る。

「うん、近い近い。少し離れてくれ。キミには風、若干トラウマあるからさ。いや、今のキミに言っても意味わかんないとは思っけども」

わかりやすくエルフの顔が曇る。先程までの余裕たっぷりの表情はそこになく、ただただ困っていた。

「あ？　トラウマ？　アンタとはさっきから微妙に話が噛み合わね

えな。だが、今はそんな些細なことどうでもいい！！ ひ、ヒヒヒヒヒヒ、そうか、ついにしてしまったか、異世界転生、いや、転移か？ その辺はつきりさせとかないとな、ジャンル詐欺はトラブルのもとだ」

「うわ、すごい早口。……うん、なんだって、マルス？ ああ、なるほどあれがデータベースにある”オタク”という奴かい。ふうん、まあ図太いことはいいいことじゃないか」

「誰がオタクだ！ 俺はただガキの頃にそういうものに触れることが出来なかったから歳をとったあとに空想やらファンタジーに触れて拗らせただけだ！」

言葉の端に軽い闇を感じる言葉。

遠山はしかし、思い切りはしゃいでいた。

「ああ、うん。キミ、なんかもう色々面白いな…… うん、待てよ？ 今さっき、キミなんていった？」

「にしてもこの紅茶美味しいな。すげえ深い。え？ なに？ 俺がオタクじゃない話です？」

エルフが継ぎ足してくれた黄金色の紅茶をまた啜る。

飲めば飲むほど元気が湧いてくるような味だ。

「いや、それよりも前、前だよ。あのパン屋のラザールくんやらなんやら、翼の生えた鎧野郎？ 待てよ、待て待て、蒐集竜の方はまだいい。それは知っているからね。だが、何故今この段階でラザールくんの名前が出てくるんだ？」

エルフの声が少し低くなっていた。

首を傾げ、仕草こそかわいいものの、虹色の瞳に無機質な光が宿る。

ピリ、遠山が空気が変わり始めるのを肌で感じる。

「あ？ アンタ、ラザールの知り合いか？ いや、同じ奴隷の馬車に、乗って……」

言葉を途中で止める。

エルフの表情を見て、遠山が内心、舌打ちをした。

しまった、はしゃぎすぎた。

コイツがあゝの冒険者どもや鎧野郎の関係者だった時、場合、非常にまずい。

「……………アンタ、鎧野郎や冒険者とかいう奴らとはどんな関係なんだ？」

遠山が思考を切り替える。喜色満面のオタクフェイスが嘘のように消え去る。

真夜中、雪が積もって辺りを白く染め上げるように、遠山の顔から表情が抜け落ちる。



無風状態、静かに無意識に、キリヤイバを広げ始め――

「……キミさあ、ほんとあの時もそうだったけど、スイッチの切り替え激しいよね。まるで1人の人間の中に2つの人格があるみたいだよ。まあ、今の風は人のことは言えないが」

ずずず。見た目に反して割と豪快に紅茶を啜りながらエルフが言葉紡いだ。

パチリ。その長い華奢な指を鳴らす。

指先に風が逆巻き、白いモヤがその風に巻き取られる。

「……マジ、か」

空気中に溶かしていたキリヤイバが、消えた。

遠山は遺物を解除していない。エルフの指先に集められたキリは風に巻かれて散ってゆく。

「キリヤイバでは風を殺すことは出来ないよ、トオヤマナルヒト。少なくとも今の軽いキリヤイバでは、ね」

ニヤリ、笑うエルフの顔。ゾツとする美しさ。遠山の額から冷たい汗が浮き出る。

「そう殺気たつなよ、トオヤマナルヒト。安心してくれ。キミが殺したその鎧野郎や、冒険者の連中と風は別に仲良しこよしの関係じゃない。ただ、あれさ。思い出したただだよ」

「……………何をだ？」

「風が勝てた理由。そして負けた理由さ。んー、だとするとやはり辻褄が合わないなあ。ラザールくんが奴隷？ しかもキミが今ここにいるということは…………… 風はあの時、ここではなくて上の階層でキミと出会っていた気がするんだが…………… ふんむ、ふんむ」

「……アンタの話はどうも、よくわかんねえな。アンタだけしか知らないことが多過ぎる、そしてソレを説明する気もねえ。だが、1つはつきりしていることがある、アンタは俺のことを知っている、なぜだ？」

「言わなければ痛めつける、とでもいいだけな顔、だね。ああ、トオヤマナルヒト。らしいじゃあないか。その冷たくイかれた表情……  
風にとっては、その顔の方が馴染みがあるというものさ」

良くない空気が満ちる。

探索者街の路地裏で、ガラの悪い探索者連中に絡まれている時、バベルの大穴で、怪物種がこちらを品定めするように見つめている時。

冷たい争いの空気。

「……1つ聞かせる」

遠山が口を開く。先程のやりとりでキリヤイバでは始末出来ないことを確認した。

ならば現状、このエルフと敵対するのはやばい。殺し方がイメー  
ジ出来ない相手とは争うべきではない。遠山の戦闘思考がそう結論  
を出す。

この空気をなんとかしようとして、己の持ちえるユーモアのセンスを  
フル活用してー

「何かな」

「アンタ、その、一人称…… 風って、独特すぎねえ？」

「お……お……」

さらに空気が重たくなる。遠山には残念ながら人を和ますユーモアのセンスはなかった。

「おっと、ああ、マルス、久しぶりの宿敵に会えてテンション上がっただけさ。キミや彼だっていつも無茶苦茶してるじゃないか。そう怒るなよ」

「……………」

もつどうしていいかわからなくなった遠山はとりあえず、雰囲気を保つために怖い顔を維持する。

「おや、ふふ、”パン屋付き”、或いは、そう、”鴉狩り”の雰囲気じゃないか。良い顔になったね、トオヤマナルヒト」

「こちらの質問に答える気のなさそうな態度。しかしなんとか話は続きそうだ。」

「……だがますます解せないな。ふむ、キミと風がここで出会うと  
なると…… 何かがおかしいぞ。なあ、キミ、風とは初対面なんだ  
よね?」

「いやアンタ自身がさっき初対面がどうとか再会がどうとか言っ  
てなかつたか?」

若干意味のわからないエルフの言葉。おかしいのはてめえの方だ、  
という言葉が喉から溢れそうになるのを気合いで止める。

「まあ、そうなんだけどね。ん? んん? キミ、その服装……? ?  
どうしてそんなボロい服装なんだい? 探索服、拳銃や金槌は?」

「うわ。なんで俺の探索者道具のことまで知ってたんだよ。気味悪い  
な…… なくなってたんすよ、気付いたら馬車の上で、この格好  
でした」

「……ふむ、ふむ。まずいな。風の時と状況が明らかに違うね。あまり悠長にしているわけには行かなそうだ。うん、決めたよ。トオヤマナルヒト、キミには今すぐここから脱出してもらおう」

「いや、そのノリで脱出出来れば苦労はしねえでしょうが」

遠山の言葉にエルフが片目を瞑って答える。

ロッキングチェアから立ち上がり、背伸びをぐぐつと。

仕草が可愛い。遠山がまた目を奪われているとー

「ク、ああ、やはり風はキミのことが嫌いだよ」

「あ?」

虹色の瞳が、遠山を見ていた。

エルフがその桜色の唇に細い指を当て

「我が運命に現れた欲深き濃霧よ、世界を保存する力を持ちながら、世界を進めた”強欲冒険者”よ」

遠山に告げられる言葉。

「欲望のままに生きるといいさ。キミに阻まれた我が夢、忘れた日はない。だが、きつとそれで良かったのだらうね」

それは恨言のようでもあり、また祝言のようでもあり

「……アンタ、何を」

「ここから帰還しようとしてたんだらう？ だんだんこのあとの流れを思い出してきたよ。キミは確か、ギルドに突然現れたんだってね。だが”蒐集竜”の持っていた帰還印はキミには使えない。キミはこの世界の命ではないんだからね」



「この、世界…… そうか、異世界だから。その世界の奴だけしか使えないのアレか」

数々の異世界転移転生モノのエンタメに浸かり、培っていた予備知識が遠山にひらめきを与える。

あの鎧野郎も似たようなことを言っていたはずだ。

「くく、キミ、本当こういうの察しいいね。ああ、”オタク技能”か。ギルドの水晶じゃ観れないだろうねえ」

「誰がオタクじゃ！！ って、なんだ、これ、お前、何した？」

風だ。

気付けばいつのまにか遠山の身体の周りに風が張っていた。四方八方から扇風機の強に囲まれているようなー

「だから怖いよその切り替え。クク、ああ、キミをここから逃してあげよう。今のキミではこの”塔”はまだ登れない。街で生きるといい。キミが守るあの街、冒険都市、でね」

「街……？ ギルド…… なるほど、探索者と同じようにあの連中を管轄する組織があんのか。冒険者ギルド…… 2級…… 職業としてこの塔を探索するのが冒険者ってわけか」

オタクとしての察しの良さが遠山に理解をもたらす。

「ああ、うん。キミもう説明いらねえね。まあ、アレだ。悪いけど、ここで風と出会ったことはナイシヨにしてみらうよ。まあ出来る限りは流れに沿おうじゃないか。何か狂ってるとしても、あまり状況が変わりすぎるのも心配だ」

「ナイシヨ？ てか、俺とアンタで知ってることと知らんことの違いがありすぎるような」

「……うん、やはり、同じ方向で行こうか。記憶を封じ込めさせて

もらおう。なに、害はないさ」

物騒なことを言い出すエルフに遠山が目を剥く。

「いやそれ、待て待て待て、記憶洗浄だろ？ 害ありまくりだろ。俺、何回もそれ探索者組合にされてるけど、頭かなりハッピーセツトになってんぞ」

「ええ……なにそれこわい。 そっちは怖いね。さすがマルスを作り出す文明だよ。……クク、まあ。なんだ、精々頑張るといいさ、強欲冒険者」

「いや待て、まだアンタには聞きたいことが山ほど」

「焦るなよ、いずれまたキミと風は出会う。いや、そのときの風はまだ、私の時かな、まあいいんだ、そんなことは……期待してるよ、強欲冒険者」

「これ、風、くそ、前が……」

びゅおう。

いよいよ、風が強くなる。もう扇風機がどつどつというレベルではない。

テントやハンモックは全く揺れていないのに遠山の身体の周りだけ突風が吹き荒れる。

「ギルドの連中や、昼行灯の領主殿、そしてあのいけすかない竜たちによるしく。ああ、あと、キミ、貧血には気をつけな。クク、竜のヒモに吸血鬼のエサ、これから大変だね」

「ぐ、お」

風に足を取られ倒れかける。

「ああ、あと、ラザールくん。彼にもよろしく。考えてみれば彼のパン、アレがもう食べれないのはかなり、残念だな」

「お、おまえ、なんでそんなことまで知ってやがるんだ?!」

「キミ達のパン屋のファンだからさ。まあ、途中からは食べられなくなってしまったのは残念だけどね……　キミ、鴉どもには気をつけたまえよ?」

「は？　鴉?」

「では、また。トオヤマナルヒト」

「おまえ、ほんと、意味わかんねー」

「苦労をかけるが頼んだよ、きちんと殺しておくれ。バカな風を、キミの欲望のままに、ね」

「まで、おい、エルフさん!!」

「クク、またね、いいや、違うか、この風とはこれでさよならだ。  
我が運命を阻んだ重く深い霧よ。竜から愛された男、吸血鬼を拐か  
した罪人、強欲で厄介で、そして、素晴らしきー」

エルフが言葉を選ぶ。相応しい言葉を頭を捻って絞り出すように。

ぱつ、と。顔をあげて、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「さよなら、良き旅を。クソ冒険者」

風が遠山の視界を塞ぐ。

「待て、このクソエルフ!!」

一際大きな風音が舞い、そして、足が浮いてー

サイドクエスト達成

【訪問者との再会】

【ウエンフィルバーナ・ジルバソル・トウスクとマルスのキャンプ地にたどり着く】

【ヘレルの塔から脱出する】

オプション目標 達成

【記憶洗淨を10回以上受けている状態で、ウエンフィルバーナの

”忘却の風”を受ける】

隠しクエスト

【k n o w s   y o u r   n a m e】が解放されました

” ウエンフィルバーナ・ジルバソル・トウスク ” との会話を覚えている状態で、塔級冒険者” ウエンフィルバーナ ” に出会うことでクエストが進行します

遠山の視界に踊る文字、耳長女が手を振る光景、そして視界が風にまぶれて消えた。

……

……

…

遠山がいなくなったキャンプ。1人そのエルフはまた紅茶を飲み



始めた。

とくり、とくり。喉を鳴らす。

ああ、手は震えていなかったらうか？

ああ、声は裏返ってなかったらうか？

もこもこの服の下、そのしなやかなカラダには冷や汗がしつとりと肌を湿らせていることだろう。

「ふう、……ああ、気にしないでくれ、マルス、言ったらうか？ ト  
ラウマなんだよ、彼のこと」

自分の肩を抱きながらエルフがロッキングチェアにカラダを沈める。

火にあたっているはずなのに、かちかち、歯が噛み合わない。

あの男が、怖かった。それから解放されて安堵が逆に気を緩める。

「恐ろしい人間さ。風はあの時、たしかに世界を手に入れた。かつて世界を滅したタダビトの力を以って、神、いや、天使にさえ至れるはずだった。全てを破壊し、全部を戻して、全部手に入れ、全て保存し、戻るつもりだった。でもね、彼の欲望には敵わなかったんだよ」

「欲望のままに彼は進むだろう。彼の気に入らない終わりを、その手でぶち壊すまで、ね」

「……いや。でも、うん、どうだろう。全て同じにはならないかも知れないな。忘却の風、アレの手応えがなさすぎた。クク、早速、筋道は狂ってるのかも知れないね」

「まあいいさ、風は風、ウエンフィルバーナはウエンフィルバーナ。彼女がどういう選択をして、彼がソレをどうするかは今回の彼ら、彼女の話、さ」

「……少し眠るよ、マルス。……少し、疲れた。起きたら、そろそろ行くでしょう。今の風、あの時の”私”と出逢ってしまっただけです。……少し眠るよ、マルス。……少し、疲れた。起きたら、そろそろ行くでしょう。今の風、あの時の”私”と出逢ってしまっただけです。……少し眠るよ、マルス。……少し、疲れた。起きたら、そろそろ行くでしょう。今の風、あの時の”私”と出逢ってしまっただけです。」

「彼は彼の物語を、彼女は彼女の物語を、風たちは風たちの物語を」

「さあ、”生存”を続けよう」

ぱちり、焚き火の弾けるそのキャンプの中。

銀色の髪のエルフは静かに、静かにその火を見つめ続け、静かに目を瞑った。

8話 異世界転移と”オタク”技能（後書き）

たくさん感想ありがとうございます！

ジャンル別でも1位取らせてもらい感謝です！

< 苦しいです、評価してください >

Twitter上で更新告知しています。下のランキングタグにアカウント貼ってるのでよければフォローしてやって下さい

9話 はじめての冒険者ギルド（不法侵入）（前書き）

「早朝、」冒険者ギルド」一階、窓口酒場にて」

## 9話 はじめての冒険者ギルド（不法侵入）

「そりゃ俺の依頼だ！ このノロマー！」

「なんだと?! 俺が先に手をつけたんだ！ てめえはその塩漬  
け依頼でもしゃぶってる!!」

「はい、押さないでくださいーい！ 早朝依頼は5番窓口から12  
番窓口で受け付けてまーす。おさないでー！ おさないで、って押  
すなっつてんだろ?! このダボハゼどもがああああ!？」

「ぎゃああああ、ウーさんがキれた!!」

「バカ冒険者ども!! お前ら責任とれよ!!」

冒険都市アガトラの朝は早い。

帝国南部領の物流の中心、そして帝国きつてのモンスター素材の生産地でもある帝国経済にとっての要の地。

朝日が昇った瞬間に、ギルド酒場に張り出される依頼書の取り合いはちよつとした名物だ。

「えー、もう割の良い依頼残ってねえじゃん」

「スガル村でまた山賊が出たんだってよ。この依頼受けるか？」

「んーむ、やり方が狡猾すぎるな。王国の間者かもしれん。きなくせえ、パスだ、パス」

「じゃー、今日も元気に下水道掃除にするか……」

「あーあ、1級連中みてえに地下待機しときゃ手当がつく生活がいよいよなあ」

「バーカ、お前、上位モンスターの討伐なんかできねえだろうが。」

飛竜種に巨人種や伝承種とかのバケモンをタイムマンで殺してようやくなれる人間の形した化け物だぞ、1級なんて。俺らにや、平原での間引きがお似合いだ」

「そしたら塔級の連中はなんだよ」

「決まってるだろ、バケモン以上のバケモンだ」

「へーへー、凡人はらしくいきますかね。たまには割りの良い依頼うけてみてーな。じゃあ今日も平原で元気にモンスター狩りといきますか」

比較的实力があり、安全マージンを取りながらモンスターを狩れる2級の冒険者達が呑気に腸詰めやら、焼いたじゃがいもやらをつつきながら、仕事の話に興じる。

その日は冒険者ギルドにとって、なんの変哲もない1日のはずだった。

「クソ、2級の連中、呑気に朝飯なんか食ってやがる……」



「馬鹿、聞こえるぞ、平原での薬草採取依頼取れたから今日はラッキーじゃねえか」

室内に、風が突如、吹いた。

「なんだ、風？」

「あああ、俺の依頼書が！？」

「なにこれ?! ちょっと、誰かの”スキル”が暴走してんじゃないの?!」

「お、落ち着いてください! ギルド内でのスキル使用は認められていません!」

さかまく風が、依頼書をさらい、冒険者がそれを奪い合う。

ギルド受付嬢たちのスカートがまくれ、それを見て鼻を伸ばしている男の冒険者が、連れ合いの女冒険者にしばかれる。

いつもの光景。しかし、次の瞬間に風共に現れたソレは明らかに、イブツだった。

「クソエルフ！！　って、は？　どこ、だ。　ここ」

「「「「は？」「」」」

風と共に現れた男、冒険者ギルド全員が固まった。

……

…

遠山は風が消え、視界が戻った途端、その場所の光景に目を奪われた。

「ローロロ、どこだ？」

建物の中だ。木の壁に、木の床。動物の毛皮のラグがそこら中に敷き詰められ、丸テーブルや、長テーブルがひしめき合う。

部屋の中央には大きなたいまつのようなものが赤々と灯されており、その周りで肉やら野菜やら魚やらが串にさされて焼かれている。

「……………酒場？」

バベル島の歓楽街にある酒場に構造がそっくりだ。そして何より周りにいる連中。

みな一様に何かしらの武器を装備している。剣、斧、槌、弓。

「……………は？」

「な、なんだ、コイツ、どこから出てきた？」

「スキル？ でも、奴隷服着てるぞ」

「え？ 黒髪？」

「人間で、黒髪で、栗色の目……」

がしゃん。ぺたり。

音。遠山を囲んで眺めていた武装した連中、その中の1人が自分の武器を落とした音だ。

みんながその、武器を落とし、腰を抜かして床に座り込んでいる女を見つめた。

遠山は、その女に見覚えがあった。

あの馬車、遠山が始末した犬男達、それと一緒にいた獣耳の小さい美少女、そのうちの1人――

「……そいつ、だ」

「あ？ エル、どうしたんだ、おまえ」

「そいつよ！！ そいつ！！ 黒髪！ 栗色！！ 竜の巫女サマを殺した奴隷！！ 私たちの徒党をめちゃくちゃにした奴隷！！ そいつよおおおおおお！！」

「あ、あんたあん時の馬車に乗ってたネコ耳――」

「……ありゃ、怪しいものじゃないんだけどな。えーと、はうあーゆー？」

「おい！ おい、おい、エル！ 今の言葉ウソじゃねえんだな！！  
コイツがああ竜の巫女が探してる奴隷なんだな！」

「そう、そうよ！ 忘れるもんか！ コイツの、コイツとあのリザ  
ドニアンのせいでお姉ちゃんは…… みんなは……」

「おい、あそこ今、奴隷がどうとかって」

「なんだなんだ、揉め事か？ 喧嘩だ喧嘩だ！」

「おい、あれ、エルじゃねえか？ ほら、この前壊滅したライカ  
ズの生き残り……」

「おー、あの竜の巫女からの大チャンスを不意にした間抜けどもか、  
ぎゃはは、なんだ、なんだ、また笑わせてくれんのか？」

「くそ、ゾロゾロと…… あーと、そのネコ耳さん。その節は  
どーも。だけどアンタその被害者ヅラはどーよ」

「うるさい!! 奴隷!! みんな、聞いて!! コイツ、こいつ  
コイツ!! 帝国中が探してる奴隷! 竜の巫女が探してる奴隷よ  
! 帝国金貨10000枚の奴隷!」

「おっと、まるで400億の男みたいな言葉だな。悪い気はしねー」

「黙りな、奴隷、てめえどうやってこのギルドに現れた? スキル  
持ちか?」

「待て待て待て、さっきのクソエルフといい、てめえといい俺の知  
らん単語で会話すんな、コミュ障どもが、あとハゲ、俺にそんな嬉  
しげに武器向けんな。ビビって殺したくなるだろうが」

「あ?! 冒険奴隷風情が何いってんだ?」

「お、おい、ハゲ待てよ、あの奴隷、竜を殺した奴なんだろ? あ  
んま刺激したらやべえんじゃねえか」

「馬鹿が！！ 見てみるよ！！ あのみすばらしい服装に汚ねえボサボサの髪！ 腕には手錠がついたままじゃねえか！ やれるだろ！ ここです！ あと俺はハゲじゃねえ！ スキンヘッドだ！」

「た、確かにハゲの言う通り、なんか、全然弱そうだ。お、俺ら、これチャンスなんじゃ…… 一生下水道攫いの底辺冒険者卒業出来るんじゃない？」

「さて、さてさて、おまえらだけでやんなよ、オラもオラもかませろ。ほら、武器、武器抜いたぞ、オラもこれでこの奴隷捕まえた時は協力したことになるぞな！？」

「リズ、俺らはどーする？」

「ジャル、すぐギルドから離れよう。俺のスキルが反応しちまった。ここはヤバすぎる。知り合い見つけて声かけてズラかるぞ」



「了解、くわばらくわばら。あの武器抜いてる3級とか4級、一部は2級もか。あんだけいてもダメなのか？」

「ダメだな、話になんねえ。巻き添え喰らう前に出るぞ」

遠山が耳をすます。この酒場らしき場所で屯していたマトモそうな奴が早々とこの場を離れていく。

よかった、アイツらは厄介そうだ。

それに比べてー

「……おまえらは簡単そうだな。飯、きちんと食ってんのか」

「あ？」

「なんだ、コイツ！」

「お、おい、早く誰か捕まえるんだど！ に、逃げられたらも、もつたいないんだ」

やせっぽっち。ハゲ、デブ、腹が出てるやつ。

体つきを見たらわかる。おそらくロクなモノ食べてない。脂だけとか炭水化物だけとか、あとは酒だけ。

およそ戦う人間の身体つきではなかった。武器もあまり手入れされてない。

剣先が欠けていたり、持ち手の結びがほつれている。

殺せる。

5人。他のそれなりに出来そうな奴が参戦してくる前なら1人を瞬殺出来る。

それにコイツらからは殺意を感じない。

「ちて、どつてくれようー」

遠山が頭の中、戦闘思考をまとめたその時だった。

「殺して！！」

「殺してよ！ この奴隷、殺して！」

ネコ耳がヒステリックに叫び始めた。初めて見た時のオドオドしていた様子はもつどこにもない。

「お、おい、エル、落ち着けよ、コイツは生け捕りにしねえと意味がねえだろ？」

「しらない！ そんなの知らないよ！ コイツのせいでお姉ちゃん  
は化け物に食い殺されたんだ！ コイツが逃げなければ！ コイツ  
が他の奴隷を煽らなければ！ ぜんぶうまくいったのに！ なん

で、お前みたいな奴隷が生きてて、お姉ちゃんが死んだのよ!」

「いやそりやおまえらが俺を奴隷なんかにするからだろ。ふうん、そうか、たくさん死んだのか。ま、あんな化け物が多いところではめえら程度の練度で騒げばもう收拾つかねえよな」

ナチュラルに鬼畜な遠山がヒステリックなネコ耳に言葉を返す。  
悪気はあまりなかった。

一瞬、ネコ耳女がポカンと口を開けて

「あ、あああ?! 殺す、殺す殺す殺す殺す!! みんな!  
何ぼうっとしてるの?! 早く殺してよ!」

「あ、いや、殺すのはなあ?」

「そ、そうだ、ギルドから出てる指示も捕まえる、だしよ」

「そ、そうだと、エルちゃん、捕まえないとお金貰えないんだと」

あまりのヒス女の変わりように他の冒険者達が引き始めていた。

あれ、これもしかしたらやり合わなくても済むかも。遠山が少し甘いことを考えてー

「いいから！ 殺して！ そいつ殺した奴にはなんでもしてあげるから！ カラダでもなんでも欲しいものあげるから！ ヤらせてあげるから、殺してよおおおおー！」

「……エル、それほんとかよ」

「お、おい、聞いたか？ あの姉妹の生き残りが、なんでもって」

「や、や、やれるのか？ マジで？」

「え、えるたんと、おでが、ぶ、ぶひひひひ」

もわり。

キモい殺意が一気に膨れた。

欲望。遠山が重視するそれを刺激された冒険者たちが一気にその目に情欲の火を灯す。

「お、おい、ほんとにいいのかよ、エル」

「いい！ なんでもするから！ いつも、口説いてきてたでしょ！  
もう、どうでもいいの！ アイツさえ死ねば！」

ヒステリックになってもそのネコ耳は確かに異性を刺激する外見をしていた。

ツヤツヤの肌、華奢な脚はタイトのような装備に包まれ、太ももが少しだけチラリと覗くそのデザインは確かに男ウケがいいだろう。薄い装備からはカラダのメリハリもはっきりわかる。

「なんで。なんで、お姉ちゃんやみんなが死んで、お前なんか！」

お前なんかが！」

冒険者達が、下品な目で喚き続けるネコ耳女のカラダを舐め回すように見つめ、そのあと遠山を見た。

あれを殺せばー とでもいいだけなわかりやすい目つきで。

「……ダメダメだな、おまえら」

遠山はしかし、あからさまに落胆する。

その欲望はダメだ。他人にその場限りの勢いで煽られ芽生えるそれはただの欲求に過ぎない。

「おまえらはほんとダメだな。女に欲求抱くのは仕方ねえけど、てめえらのそれは美しくねえ。ただ、本能を煽られてるだけ、動物と変わんねえな」

サイドクエスト発生

【人間の証明】

【クエスト目標、ライカンズの生き残り”エル”の結末を決める】

でんでん。低い太鼓の音とともに、喚くネコ耳女に矢印が立つ。

ああ、なるほど。まあ今回は割とどうでもいい。

「……数が多いな」

ネコ耳女のご褒美発言を受けて遠山を囲む連中は倍くらいに膨れていた。

女の冒険者の何人かは付き合っていられないとばかりにその場を立ち去り、他のマトモそうな連中は既に姿を消している。

窓口みたいなところにたくさんいた制服の人達も姿が、見えない。



「使っちゃうか」

流石にこの人数を武装なしで皆殺しはキツイ。遠山はもう2度と出し惜しみはしない。

静かに、キリを広げ始める。確実に、殺すために。

「おい、一斉にかかるぞ、竜がどうのこうのとか関係ねえ、この人数だ、殺せるぞ」

「お、おい、エル、殺すって、最初に殺した奴だけしかご褒美ねえのか？ なあ？」

「いいよ、みんな相手してあげる、ソイツの死体をぐちゃぐちゃにしてくれたらみんなになんでもしてあげる！ だから！ 早く！」

「よおおおし！ 聞いたか！おまえら！ やっちまおっぜえええ  
！！」

ウオオオオオオオオオ！！

浅い欲求に煽られた馬鹿達が騒ぎ始める。

ここだ。

遠山が、一気にキリヤイバを前方に展開する。自分に影響なく、  
敵だけを殺せるように。

「死んじゃえ、奴隷」

ネコ耳女が、勝利を確信した顔で男たちに囲まれながら笑った。

馬鹿が、死ぬのはお前だ。遠山が真つ先にそのネコ耳女が死ぬよ

うにキリの濃度を調整して――

「おや、おやおやおやおやおや。オレの言。帝国中に響き、物  
乞いですら我が令通りにしていると聞くが、どうやらここにいてるの  
は人ではないらしいな」

「――あ」

「へ？」

「ば、あ、え？」

空気がおじけた。

かしゅん、かしゅん。

金属が重なる音。

人が、自然と1人、1人、膝を折り、首を垂れていく。

ネコ耳女に向けて欲を、遠山へ向けて殺意を飛ばしていた冒険者、3級、4級中心の下位の冒険者達が1人1人、地面に這いつくばり始める。

誰しもが震えて、誰しもが地面に頭を、血が出るほどに擦りつけていた。

「はて、メス猫の音が聞こえた気がしたが。なにぞ、愉快なことを鳴っていたような」

女だった。

腰まで伸びたその豪華な金髪。陽炎に灯されているかのごとく豊穡の金が波打つ。何故か、前髪が片側だけ長く片目を隠している。

「オレは確かに奴隷を探せ、と言った。探せ、だ。殺せ、ではない。さ、が、せ、とな」

「あ。あ、あ……」

背は高く、脚は長い。プロポーションを隠す気のないヘソだしの窮屈そうな胸当てだけがついた革の鎧。

脚と腰には金色の意匠が施されたスカートのような鎧が備わる。

アホみたいに細いくびれた腰に手を当て、女が立ち止まる。

震えて動けないネコ耳女の近くで立ち止まった。

「さて、匂うな。発情したメス猫の匂いだ。ほれ、囓ってみよ。先程の、殺せ、という鳴き声の主を探しておるのだ。さあ、囓れ、メス猫」

蒼い目、前髪で隠されていない方、青い片目がネコ耳女を見下ろす。

ネコ耳女は顔を真っ青にして、それでもその目と己の目を合わせて

「にゃん……」

ぶくぶくぶく、カニのように泡を吹いて倒れた。気絶しているよ

うだ。

「ふん、つまらん、が、命は長らえたか。一言でも喋ればその首を、焼き落としてくれたのにのう」

「この場に立っているのは、もう遠山とその金髪の女だけだ。

「……っ！？」

重い空気。金髪女が遠山を見つめる。それだけで身体の芯が痺れて重くなる。

そのかんかくは、ダンジョンで、そしてあの塔とやらで感じた感覚。自らよりも上の段階にいる生物と相対した時、一番最近で、言えば、あの鎧の――

「まったく、探したぞ。ああ、探した。探したのだぞ。このオレがまるで幼子のように貴様を求めて探したのだ」

「……………あ？」

フツ、と。その女が微笑んだ。

太陽が人に好意を持てば、そんな笑い方をするのではないか。そんな笑顔だ。

「疼いたのだぞ。眠るたびに疼くのだ。貴様に刻まれた傷が、貴様に植え付けられた恐怖が、貴様に貫かれた眼窩が。かかかか、ああ、ほんとうに、ほんとうに、心地よく、寂しい夜が続いていたのだ」

「……………警告だ。それ以上俺に近づくな。わからねえと思うが、お前は既に俺の射程範囲に――」



「ああ、かか、それか。それはもう覚えたぞ。ふむ。ああ、貴様の言う通り、次に活かさせてもらった。」

「なに？」

遠山が聞き返した瞬間、女の青い目が光り

しゅぽ。空気が、焼けた。一瞬だが。

辺りの空気にぱっと、炎が走り、そして気づけば

「うそ、だろ。今日2度目なんですけど」

キリヤイバが、空気中に広げていたキリヤイバが瞬時に焼き尽くされた。もう手応えがない。キリヤイバは発動しない。

「かか、貴様とはたくさん話がしたいのだ。語りたいことがたくさんあるのだ。さあ、帰ろうか」

「待て、待て待て待て、意味がわからん、な、なんだこの状況?! お前、どうやって、キリヤイバを、いや、なんで、知ってる?!」

「決まっておるだろう? オレはそれに殺されたのだから。ああ、得難い経験だったぞ。褒めて遣わす。貴様はまことに、見事な狩人であった」

満面の笑みで、女がまた近づいてくる。

遠山が焦り始める。

一目見てわかった。身体つき、歩き方。

コイツ、ヤバすぎる。

白兵戦では勝ち目が万に1つもない。切り札のキリヤイバは何故かタネが、割れており、わけわからん方法で無効化された。

「おまえ、マジで誰……ん？」

焦りながらも、回転し続ける戦闘思考。それがありえない、しかしそれが一番確率の高い可能性にたどり着く。

「どうした？ そう怯えるな、くるしゅうない、ちこつよね。かか、まあ、貴様が来ずともオレがゆくがな」

「その話し方、歩き方、上背…… 威圧感、キリヤイバ、次に、活かした？ いや、ありえねえ、だって、あんなだけ、念入りに、あ、ありえねえ」

「ああ、あのダメ押しは効いたよ。かかか、母上に話したらおおいに貴様を気に入っていた。父上は何故か貴様に同情していたがな。」

かか、思い出しただけでも、愉快だよ、本当に」

ばさり。

女が、前髪をもちあげ、隠れていた片目を露にする。

「あ……うそ、マジ、マジ、かあ……」

全て理解した。その女の片目を、見ると。

ナイフの感覚が手のひらに浮かぶ。

傷だ。女の片目は傷で塞がれていた。まるで刃物で突き刺されたように。

「……お前、まさか」

遠山の言葉に、女がまた嬉しそうに口元に手を当て笑った。

「ああ、本当に会いたかったよ。オレを殺した狩人、オレを超えた人間。我が愛おしい番よ」

「ツガイ……？」

「む、人間種には相応しくない言葉か？ ふむ、ならば、うむ」

女が立ち止まり、ほおに手を当て首を捻った。

それから何か閃いたとばかりに頷き

少し頬を赤らめて。

「旦那殿、迎えに来たぞ」

太陽が、遠山鳴人に微笑んだ。

9話 はじめての冒険者ギルド（不法侵入）（後書き）

< 苦しいです、評価してください > デモンズ感

Twitterアカウント下に貼っています。更新告知してるので良ければフォローしてやってください。

10話 人生の行く末

「だん。な？」

遠山が言葉を復唱する。脳が理解することを拒んでいるようにし  
つくりこない。

「ああ、旦那殿、だ。いつまで経っても奴隷ではカッコがつくまい  
て。かか、いやなんだ、今日はいい日だな。あの下衆の予言も馬鹿  
にはならん。爺や、爺やはあるか」

女が愉快げに喉を鳴らす。ぱちぱちと手を叩き

「ここに、お嬢様」

遠山が、また目を剥いた。



人だ。黒い燕尾服を着た白髪のお爺さん。やけに背筋はピンと張り、髪もぱっしり固まったナイスシルバー。

いや、違う、そんなことはどうでもいい。

どこから、どうやって現れた？ 完全に認識外の状態から音もなく現れたその老人の存在に遠山の背筋が震える。

「今期の竜大使館からの教会への寄付金、あれを2倍、いや3倍にでも上げておけ。つまらん予言ならば干上がらせてやろうと思っていたが、かか、あの俗物め、実力だけは本物ではないか」

「かしこまりました。すぐに手配致します。……して、この御仁が……」

すつと、細められた目つき。身体の芯に電撃の痺れが走り全身が硬直する。

この爺さん、やばい。遠山の本能が全力で警報を鳴らしまくって

いた。

「おお、そうだ。オレを殺した奴隷。いやなに、見事であったぞ。爺やにも見せたかったものだ。かかか！ 己の血の海に沈み、身体を内側から切り裂かれる体験なぞそうそうできたものでもないぞな！」

何故かウキウキした様子で金髪ド美人がはしゃぎ始める。金色の髪全体が横に跳ねてぴこぴこ動いていた。

どういう仕組み？ 遠山はツッコミを口には出さず。

「ほう、そうですね。お嬢様のお身体を…… それは、それは「

「っひ

燕尾服の爺さんに見つめられる、それだけで喉が詰まって悲鳴が漏れた。

逃げる、身体が叫びまくっている。

「ほう、今のがわかるのか。見たか、爺や、オレの旦那殿は鋭いだろう？ お前のわかりにくい殺気にも気づいて見せたぞ」

金髪の女が目を輝かせて、自分よりも頭2つほど背の小さい爺さんの服を引っ張る。

祖父にじゃれつく孫に見えないこともない。外見は孫感ゼロだが。

「ほほ、確かに、ただの奴隷ではないようで……　して、お嬢様、彼のお名前は？」

「……む、爺やも意地が悪いな。……そ、そのあれだ。雌の方から雄の方へと名前を聞くなど……　す、少しはしたないだろう？」

モジモジしながら体を丸める金髪女。蛍雪のごときほのかに光すら感じる白い肌が僅かに赤くなっていた。

照れるポイントが分からん、もちろん遠山はこれも言葉には出さない。

「ほほほ、お嬢様のそのようなお顔は初めて見ますな。爺やはとてもうれしゅうございまする……」

「な、なんだ、あんたら……」

2人。化け物だ。イメージが湧かない。どうやってもこの場を切り抜ける方法が見当たらない。

キリヤイバすら対策され完封されている。白兵戦？ 馬鹿が、一瞬で崩されて殺される。

特にやばいのは、あの爺さん。底が知れない。

「ほ。若者殿、貴方様なかなか業が深いようで。血に親しみ、戦

うことに非常に慣れておられる。死を何度も見た人間とお見受けいたしました。なるほど、お嬢様を一度殺せるのも納得がいけますな」

「じ、爺さん、あんたナニモンだ。ば、化け物よりも、化け物だ。意味がわかんねえ」

声が震えないようにはつきりと言葉を紡ぐ。

「かかか、流石は旦那殿！ 爺やの凄さも理解出来るか！ なあなあなあ、爺や言つたろう？ とてもおもしろき人間種だと！」

「ええ、そのようですな。ではここでお会いできたのも何かのご縁。若者殿、1つご足労いただけますかな？」

「……ずりいな。こっちに選択肢があるとは思えねえんだけど」

遠山が無意識に視界を探る。建物の構造、出入り口らしき扉。

脱出のルートは1つ、前方。しかし、じいさんと鎧ヤローも前方。

つまり、この2人を抜かなければこの場から逃げられない。

「ほほほ、試して見られたらよろしい。あなたさまはそうおっしゃいながらも、ほら、目線ではこのギルド酒場の出入り口を探しておられる。焦りとは別に頭の回転は落ちておいではない。ほほほ、良い狩人ですなあ」

「む、出入り口。なんでだ、旦那殿？ 外には迎えの馬車を用意しておる。送り届ける故遠慮などいらんぞ」

キョトンと金髪女が首を傾げる。ぴこりと豊かな金髪も一緒に傾く。

「いやあ、なんだ、あれだよ。確かにぶっ殺したはずの相手がピンピンしてたり、いけすかねえタコ鎧の中身が激マブの女の人だったり、そいつが旦那がどうこう言ってるもんでな。頭おかしくなってきたよ、少し1人になりてえんだ」

遠山が汗を流しながらじりりと、足に力を込める。このボロいグズグズの靴でどれだけ走れるか。

ほんと足回りは大事だね。この場を切り抜けたらまずは靴だな、靴、と呑気なことを考えて少し現実逃避する。

「む、なるほど、そういうことなら少し外の空気でも吸ってくればよい」

「……お嬢様、今は人なりの皮肉でござますれば。かのお方は我々から逃げようとしてらっしゃるのです」

「んな！ なぜだ?! オレ、今日はかなり一応念入りに湯浴みもしたし、香油もお母様から贈られたモベームベンベ百葉の蜜を使った一級品で髪を整わせたのだぞ！ お、おしゃれしてきているのだ！ な、なんで旦那殿はにげるのだ?!」

あれ、コイツバカなのか？ 遠山は少し涙目になりながら叫んでいる金髪女を眺める。

「……おっと、なんだコイツ可愛いぞ。じゃなくて、あんたらと俺に温度差がありすぎてな。うまい話には乗らないようにしてんだ。だいたい、どうしててめえを殺した相手にそんな友好的なんだ、そ

れが理解出来ん」

少し本音が口に漏れながら時間稼ぎ。

だがわからないのは事実だ。どういう理屈かは知らないが、間違  
いなくこの金髪女とあの鎧ヤローは同一人物で、それを遠山は一度  
殺した。

殺した者と殺された者。そこにあるのは恨みや憎しみなどの感情  
しかないはず。

なのに、金髪女からはそれを感じない、むしろー

「ほ？ あなた様、もしかや帝国の出ではないのですかな？ 竜とは  
そういう生き物なのです。7つの命を持ちてこの世に発生した上位  
種。それを打ち倒した相手と番になり、また強い種を生み出す役割  
を持った選ばれし命…… 王国でも一般教養となっているんですが」

爺さんの雰囲気は僅かに緩む。



「おっと、一気に異世界設定でてきたな。こりゃ早めにこの世界の図書館行かねえと……」

急に出てきた世界観説明に、オタク心を刺激されつつも遠山が気を引き締めなおす。

「ほほ、良い心がけですな。……うん？ おや、あなたさま……  
ほう、珍しい、心の中に風景をお持ちの人でしたか。なんの風景  
までかはわかりかねるが…… なるほど、良くないモノが棲んで  
るようですな」

「む？ 爺や、どうかしたか？」

「いえいえ、お嬢様、かの御仁はどうやら混乱しておいでのように  
です。多少手荒にはなりますが、実力を以ってお屋敷にお連れにな  
る方がいいかもしれませぬ」

雰囲気なんか急に変わった。

足の裏が痺れる、逃げる、逃げる、逃げる。

3年間の探索者生活という死と隣り合わせの生活で培った危険を感じる何かが遠山にそれを知らせる。

#### 【メインクエスト発生】

ここで、またあのメッセージが世界に浮き出た。

は3本、ギルドの出入り口の扉と、爺さんと金髪女、それぞれを指している。

#### 【クエスト名 人生の行く末】

【クエスト目標、ギルドから脱出する】

【オプション目標、蒐集竜の討伐、執事の殺害（非推奨、超高難易度）】

簡単に目標とか言いやがって。遠山はそのメッセージに舌打ちして吐き捨てる。

言われなくてもこの2人をどうかしようなんて思わない。無理だ、今の戦力ではどう考えても勝てない。

「むむ、あまり傷付けるなよ、旦那殿はもう、オレの蒐集品なのだから」

「おっと、ナチュラルに上から目線アンド畜生発言。てめえやつば外見が変わっただけで中身はあのクソムカつく鎧ヤローそのままだな」

軽口を叩き、隙を探す。鎧ヤローはかなりプライドが高かった筈だ。怒らせれば少しくらい付け入る隙がー

「かか、ああ、いいなその目。ゾクゾクするよ。凡百の人間種がそ

のような口を叩けば滅したくなるものだが、貴様に言われると何故か、心の臓が跳ね回るのだ。ああ、痛い、気持ちいい」

「やべえ、コイツ無敵か」

ダメだ。なぜか金髪女は怒るところか嬉しそうにしている。

頬を抑えて顔を背けている。顔を背けているのに隙が全く見えな  
いのはどういうバグだろうか。

「ほほ、竜に愛されるとはそう言うことです、若者殿。さて、それ  
では言葉によるお願いはこれで最後です。御同行、願えますかな？」

爺さん、燕尾服の老人の声に、空気の変化をはっきりと感じた。

知っている、この感覚。怪物種がこちらに攻撃してくる瞬間の空  
白のようないー

「悪いな、知らねえ人にはついて行くなつて。学級会議で言われたことあんだよ」

遠山はもう、笑うしかなかった。

空気が張り詰め、そして

老人の姿が消えた。本当に消えたのだ。

「ほっ」

「うわばっ！　じ、じい！？」

たまたまだ。

老人が消えた瞬間に、たまたま鳩尾の辺りに腕を構えていた。

気付けば鳩尾目掛けて放り込まれていた馬鹿みたいに硬い老人の拳を遠山のクロスさせた腕のガードが受け止める。

みしり。鳴ってはいけない音がした。

「おお、これは驚いた！発目を受け止められるとは。ほぼ、動体視力、いや、ヤマカンですな。死を何度も見たことがある生き物特有の反応です。嫌いではありませんよ」

「てめ、何買ったたらそんなスピード…… あり？」

かくん。顎の辺りに違和感。何も見えなかった。

だが、わかった。顎を殴られ

膝が消えたような感覚、ああ、この感じ、あの時と同じ。

気づいた時には遠山は床に倒れ込んでいた。

「良かったです、2発目はきちんと当たったようです。ほほ、これでも塔級冒険者の末席を汚すものでございませうねば」

「いやしかし、頑丈な身体ですな。良きものを食べておいでのようだ。」

頭上からふりおりてくる呑気な爺さんの声が遠くなる。

「くそ、じ、じい…… 顎、いいの、うちやがる」

自分の軽口さえ遠くなり、そのまま遠山の意識は沈んだ。

【メインクエスト 人生の行く末 失敗】

【”王国”ルート消滅】

……

「あ、わわわわ、しゅ、蒐集竜様に、執事殿、これは、その一体……」

遠山が床に沈んだ直後だ。

ギルド窓口の奥からそろり、そろりと現れたのは仕立てのよいウエストコートを羽織った小太りの男と、その後ろを歩むスタイルのいいクールビューティー。

この街の領主、辺境伯と冒険者ギルド責任者、ギルドマスターだ。

「おお、領主か。相変わらずふくよかな腹よの。何、探しモノが見



つかつてな、これから竜大使館に連れて帰る。おお、そうだ、5時間後、竜大使館から発表があるでな。竜議場にて此度の件の説明と収束を説明してやるう。あの銭ゲバ女主教やらこの街のまとめ役を連れて、竜大使館に足を運ぶことを許すぞ」

領主は心の中、ギョツと驚く。

え、えええ、めっちゃ機嫌良！！ 満面の笑顔なんですがこのドラゴン。

口に出せば貴族といえど残念ながら消し炭になってもおかしくない、悲しい力関係ゆえに辺境伯、サパンは満面の愛想笑いをかましながら驚きを隠す。

「は、ははあ、承知致しました」

「かしこまりました、蒐集竜さま、……この気絶している冒険者達は…… なにか貴女さまに無礼を働いたのでしょうか？」

ギルドマスターは相変わらずの鉄面皮。ドラゴン相手に怖気もせ

ず淡々と竜に質問を投げかける。

かつこ良！！ サパンがギルドマスターの態度に恥ずかしげもなく見惚れていると

「んむ？ ああ、良い良い。今日は気分が良いでな。理性なき獣をいたずらに殺すほどイラついておらん。しかし、ギルドマスター、マリーよ。やはり冒険者連中の質の差とはひどいのう。オレに迫るレベルの塔級からこのような下等生物どもまで幅が広い、底上げの施策など考えた方がよいのではないか？」

「……はは、ありがたきお言葉です。我らが護り神、我らが竜の巫女。本日中になんらかの方策を用意し、竜大使館に報告いたします」

やはり、竜はめちやくちやに機嫌が良かった。

この1ヶ月で挑んできた教会騎士を30人以上消し炭にしたり、生首にしたりしてきた化け物と同一の存在とは思えない。

普通なら今もこの地べたに這いつくばって動かない冒険者の連中はこの瞬間にもその命を竜に奪われていてもなんらおかしくない。

そついう存在なのだ。この生き物は。なのにー

「かか、面白いのう、人間種は。ここでオレの威にあぶくを吹いて倒れるやつから、そなたのように真つ直ぐ向かい合うモノ、領主のように腹にイチモツ抱えつつオレと接するモノ、そして我が旦那殿のようにオレに殺意を向けるモノ。良い、実にいい」

金髪の女、蒐集竜が笑う。

「退屈せぬで済むよ。愛しき定命のモノ、愛しき変化の申し子達よ。くるしゅうない、それでは5時間後にまた、会おうぞ」

その笑顔は優しく、慈愛に満ちたものだった。

辺境伯、ギルドマスター、2人が見惚れるほどには。

「お嬢様、参りましょう。彼は爺めがお運びいたします」

気絶している奴隷の男、信じられぬが竜を一度殺した男を執事がさらっと持ち上げる。

「む、できればオレが……」

「お嬢様、お顔が真っ赤ですが、彼に触れますか？」

「……むむ、雌として意識のない雄に触るのははしたないか。お母様のような貞淑なレディとなるにはやはりふぁーすとたちはやはり旦那殿から…… ふむ、またお母様にお父様との馴れ初めを聞いてみるほかあるまい」

むむむむ、と蒐集竜がうなっているのを尻目に執事はすでにひよいひよいと男を抱えてギルドの出入り口に向かっていた。

「お嬢様、行きますぞー」

「あ、待て爺や！ もそつと丁寧に、優ししゅう運ばぬか！ あ、姫抱きはだめぞ！ それはいずれオレがやるのだからな！」

ぴょーんと、蒐集竜が金髪を揺らしながら滑るようにギルドを駆け、執事に追いつく。

まるで。

まるで孫と祖父がお店へ買い物に来て、帰るかのような気軽さで。

冒険者ギルドに訪れた嵐達は去っていった。

残されたのは失禁している低級の冒険者達と、半ば途方に暮れるこの街の冒険者機能を統括する苦勞人2人。

「マリーくん、マリー君。なあに、あれ？」

「竜……ですね、ツガイを見つけた上位生物です」

「そつすか。……このあと竜大使館行きたくないんだけど、古代二ホン語の塾あるからって言ったら許してもらえるかな」

「今日は休んでください、領主さま」

2人は同時に、これから訪れる胃痛の予感に大きなため息をついた。

## 10話 人生の行く末（後書き）

< 苦しいです、評価してください >      デモンズ感

下にTwitterアカウント貼っています。更新告知などしている  
ので良ければフォローしてやってください

## 11話 鳴人の夢と、キリの夢

…  
…

――なんだよ、これ。

今日から始まるはずだった。

ようやく見つけた友。自分と同じ捨てられて、一人ぼっちの小さなけむくじやらの友と共に、ぼうけんのたびが始まる筈だった

――タロウ!!　　タロウ!?　　どこ?!

街を流れる大きな川、その高架下。

小さな友が住んでいた段ボールの粗末な住処はぐちゃぐちゃに破壊され、壁には趣味の悪いラクガキがぶちまけられて。



――あ？　なんだ、このガキ。あつ君の知り合い？

自分の頭より遙か上から聞こえてくる聞いているだけでわかる嫌な声。

――いや知らねえな。おい、お前、小学生か？　ここ俺らのシマなんだけど、それ知ってここにいんのか？　お？

振り返るとニヤニヤした笑いを浮かべた汚い茶髪と金髪の制服の男たち。中学生くらいの奴が4人。示し合わせたよう全員バカヅラ。

似合っていない茶髪が、すごく鼻についた。

――どこ？　タロウは？　ここにいた、タロウは？

彼はつぶやく。昨日までいたのだ。たった一人の友が。ふかふかして暖かいもふもふの友が、いたのに。

――タロウ？　誰だそりゃ？　あ、もしかして、ここにいた汚ねえ野良犬のことか？

――ああ、アレか！ あれは面白かったよな！ キャンキャン吠えて、震えながら吠え続けてたよ！

――腹蹴つたら逃げるかと思つたら逃げなかったよな！ キャンキャン言いながら、それでも噛み付いてきたからよー

――へへへ、やめろよ、あつくん、ドーブツアイゴホーで捕まっちゃまう

――バーカ、イヌは法律上、器物扱いなんだよ、殺したってよほどじゃねえ限り捕まんねー。 パパがそう言ってたからな

ぎゃはははは。

耳障りな笑いがうるさい。

彼は小さな身体、小さな拳を握りしめて笑い続けるソイツらにもう一度聞いた。

ー タロウは、どこ？

その問いかけに。

バカどもの笑いが止まり、ニンマリ浮かんだ汚い笑顔。

そいつらが指を指して示した先は、河原の向こう側。

ヒロシマを貫いて流れる大河。高架の下に流れる水の流れるところ

彼の目が見開かれる。毛穴が全身開いて、それから

ー ーうるせえから、捕まえて、川に流した。キャンキャン言いながら流れて沈んでいくのは、超ウケた。

その日、彼は初めて本気で人を殺したいと願った。

そしてその願いは届いてしまった――

……

……

…

初めての友だった。

ボクの初めての友たちだった。

彼にはボクと違って、牙も爪もなかった。でも代わりにとても暖かかった。

彼にはボクと同じ毛皮がない。だからだろうか、よくボクを抱えて抱きしめてくれた。

お腹が空いていても、彼が抱きしめてくれると不思議と辛くなかった。

彼は会ったびいつも、悲しい香りを放っていた。それはきつとボクと同じ香りだったのだらう。だから彼といえるのはとても心地よかった。

彼はボクのことを妙な鳴き声で、呼ぶ。

タロウ、タロウ。なんの意味があるのかわからないけど、その鳴き声にボクが返事をするとても嬉しそうにするから、ボクも嬉しかった。

彼とボクは友だちだった。

生きる世界が違ってても、彼とボクは確かに対等な友だちだった。

一緒に冒険に出よう。

彼はある日そう言った。彼がより一層深い悲しみの香りを纏っていた日のことだ。

よくわからなかったけど、彼がとてもたのしそうだったからボクもたのしかったのを覚えてる。

ーあした、またここに来るから、タロウもいてね！ 施設からたくさん食べ物と飲み物とってくるから！ それをしょくりよーにしてぼうけんのたびにでるんだ！

ーだいじょうぶ、僕知ってるんだ、アイツらしちゃいけないことしてる。僕らの為に使われるお金を誤魔化したり、施設の女の子たちをいじめたりしてるんだ。もう嫌だ、あんなとこいたくないよ

彼の悲しみの香りが深くなった。ボクはそういう時彼の鼻を舐めてあげていた。そうすると彼はすぐに笑顔になるから。

ーお前は優しいね、タロウ、じゃああした、約束だよ、この場所でもた会おう。それでここじゃないどこかに行くんだ

ーぼくと、お前で、ここじゃないどこかをぼっけんしよう！  
だいじょうぶ、僕とお前がいたら無敵さ！　どんなやつにだって負けやしない

その意味はほとんどわからなかったけど、彼はとても嬉しそうだったのしそうだった。

だから、ボクもとても嬉しくて、たのしかった。ボクはきつとキミとこうしてあそぶために生まれてきたんだ、そう思えた。

あした。

知ってる。明るいあとに暗いのがきて、それからまた明るくなる。それがあした。

彼をみおくって、ボクはそれから明るいうちから眠りにつこうとした。くらくらになってあかるくなった時に眠かったらいやだからね。

ねどこでまるまり、目を瞑って、それから

ーーお、ニニ、涼しいじゃん。あつくん、ニニにじみじみせ

ーーへー、悪くねえ、ん？ てか、なんか臭くね？

ソイツらがやってきた。



いたい、なんでいしをなげるの。

ーおら！ クソイヌ！ さっさとどっかいけ！

おなががいたい。なんでけるの？

ーこいつ、震えてね？ ウケるんですけど！

こわくて、たまらない。彼と同じ生き物なのに、彼とぜんぜん違う。

くさくて、あつくて、いたくて、こわい。

ボクが吠えると、ソイツらは笑う。笑いながらボクのおなかを蹴ってくる。ボクにいしや、熱くて煙たいものを投げつけてくる。

いたい、あつい。

ーここは俺らの場所なんだよ！ 汚ねえからさっさとどっか  
いけ！ おら！

いたくて、あつくて、こわい。

でも、ダメだ。逃げるわけにはいかない。

だって、ここはボクと彼のー

タロウとナルヒトの場所なんだ、ナルヒトがさみしがる、ボクが  
いないとナルヒトは1人になる。

嫌だ、イヤダ、あついのより、いたいのより、こわいのよりも、  
ナルヒトが悲しむほうが嫌だ。

オオオオオオオオオオオ

ボクの身体から、ボクも知らない鳴き声が響く。それはきつと、むかしのむかしのずっとうつと暗くて明るいのを飛び越えたむかしからあったもの。

ボクの中にある何かが吠えた。

ここはボクの縄張りだ。ナルヒトとボクだけの場所だ。

オマエラが気安く踏み入れるな

ーいてっ！ コイツ、噛みやがった！？

ーあー、もういい、白けた。殺すか

キャン?! 声がもれでた。口の中、へんな味がする。

おなかをまた蹴られた。

その瞬間、首の皮を掴まれて、ふわり。

身体が浮いたと思うと、次は冷たくて、足が地面から消えた。

そのあとすぐに、くるしくなって、こわかった。

――ぎゃははは！ めっちゃ流れとる！！

――いぬかきしろー、いぬかき

――あ、沈んだ

ごめんね、ごめんね、ナルヒト。

守れなかったよ、ボク達の場所を。

ごめんね、キミはあした。くらくらなって、あかるくなったあとあの場所にくるよね。

そこにボクがいないとキミはきっと悲しむんだろう。

苦しくて冷たいのよりも、そっちのほうが、ナルヒトがまた悲しむほうが怖かった。

ああでも

ごめんね、もう動けない、もう吠えもできない。

「JJJ、JJJJ?」

ナルヒト、ナルヒト、とても、冷たくてこわいよ。でも、それよりも、やだなあ、キミともう、会えないのが一番いやだよ。

ナルヒト、ボクの、友達――

目の前が真っ白に変わる。

ボクはそのマツシロのなかに、何か大きなものが動いているのを見つけてー

それもボクを見つけてー

『驚いた、貴様、珍しいモノが混じつとるのう、犬畜生。天原より高き、暗き空、綺羅星の向こう側、ねじれたコトワリの外、鋭角の奥より出るモノが混ざつとる。ワケミタマのようなものかえ』

『ああ、深い怨。憎いのか。その怨念、ワシの依代に相応しいのう』

『かの”光”、あの忌々しい女によりて奪われしワシの全て、しかし、貴様がおればまだ滅ばすにはすみそうだ』

ボクとそのマツシロは1つになった。

そのあとすぐにくるしいのもつめたいのもなくなっ  
てね、それから、キミの声が聞こえたんだ。

”殺してやる”

ナルビトの声だ。とても、とても、悲しい声。ああ、やはり、キ  
ミはきてしまったんだね。

ごめんね、待てなくて。ごめんね、約束をまもれなくて。

でも、今のボクだからこそ出来ることがあるんだ。

”ころしてやる”

うしろ、うしろ。そ、そ、そ。

キミには牙も爪もない。だからボクがキミの牙と爪になるよ。

キミと一緒にぼっけんにはもういけない。でもキミのぼっけんをたすけるよ。

キミに抱きしめてもらうことも出来ないけど、代わりにキミを苦しめる獲物をボクがこの、爪と牙でとってこよう。

『畜生よ、ワシの側面となりし畜生よ、それは違う、人の扱う牙と爪には相応しい名前がある』

マッシロが何か言ってる。うるさいな、キミには感謝してるけどキミのいうことは聞かないよ。

ボクが言うこと聞くのはナルヒトだけだ。

『……思ったより自我が強いなこの畜生…… まあよい、名前があるのだ。我がこの白きはマッシロではなく、キリ、高き山々、あるいは広き野に広がるキリにて』



『そして、人が扱いし牙と爪は名前を変えるのだ、相応しきその名前は』

ちよ、うるさいよ。今、いいところなんだから。ナルヒト、だいじょつぶ、怖がらないで、全部ボクがコロシテあげる

【“ー”ヤイバ”と、言うのだよ。犬畜生】

なんでもいいよ、別に。

ボクはそのマッシロ、”キリ”の中でキミを見ている。キミのぼうけん、それをいつまでもいつまでも、たすけるから。

キミがもう泣かないですむように、いつまでも。

キミが欲しいものを手に入れるまで、なんどでも

.....

.....

...

「じ、る……してやる」

「おおっ、さすがは旦那殿。寝言ですら戦の香りを忘れぬとは、我がツガイにふさわしい」

優しいな声。髪を撫でるその手の温かな感触が心地よい。

遠山鳴人は、その声と感触で目覚める。

自分になにかふかふかなものに包まれて寝転がっていることに気付いた。

「あ、ふが？ うお、すげえ、ふかふか」

なにか、夢を見ていた、そんな気がする。それはもう手のひらの隙間から溢れる水の如く、すり抜けていってしまったが。

「かか、だろう？ 綿毛鳥から数gしか取れんフワフワの真毛から作らせたオレ専用の寝所よ。この場に入ったのはお父様とお母様を除けば、旦那殿、貴様だけ故にな」

「ほえー、そーなんか。すげえ枕も、ふわ、ふわ……………」  
「エッ？」

自分を覗き込む蒼い瞳。

空を閉じ込め、海をやどした、いや、違う。

それは空の最も高く、深きダークブルー。それは海の最も透き通ったクリアブルー。

複雑で、しかし、この世のものと思えぬ蒼い瞳、片方だけの瞳が遠山を移していた。

「どうした？ 疲れておるだろう？ 情眠と朝寝は竜のたしなみ、奴ら街の連中がするまであと3時間は眠れるぞ」

ふにやりと、女が遠山と自分に掛け布団をかけてもぞもぞと身を寄せる。

「……………うそだろ」

遠山の隣に、金髪のおの女。蒐集竜が眠っていた。

馬鹿みたいにデカイベットだ。シルクよりも肌触りの良いシート、天蓋つきの丸い形のベッド。

そして隣には絶世の金髪美人。片目が潰れていてもその傷さえ個性となるような。

掛け布団の隙間から覗く鎖骨は間違いなく、白く肌の色で、全裸で女が添い寝していた。

「むづ、うるさい、オレは寝る…… むにゃむにゃ」

少し考える。

色々なことを考えてそれで

「わあ、あつたかふわふわ」

遠山は自ら知性を放棄し、再び目を瞑り、眠りに落ちる。

今度はもう、悪夢はみない。代わりに、良い夢だ。

幼い頃に別れた小さなフワフワの友。彼を抱いて眠る夢を再びみていた。

## 11話 鳴人の夢と、キリの夢（後書き）

ヒロシマ県警管轄、未解決事件記録簿

2009年 ヒロシマ市西区オオタ川河川敷付近にて地元中学に通う少年4人の他殺体が発見。

検死の結果、鋭利な刃物で全身に負わされたと思われる傷により出血性ショック死と判定される。

あまりにも痛ましいこの事件は当時センサーショナルに全国規模のニュースとして取り扱われるが、犯人の手がかりがあまりに少なく未だ事件解明には至っていない。

事件現場において不可解な点は、凶器はもちろんのこと死亡した少年4人、そして同じく全身に同様の切り傷を負い、辛くも一命を取り留めた小学生の少年以外の人物がいた痕跡もないこと。

そしてその死因となった傷の異常性につきる。どのような刃物を用いて、どのように使えば人間の身体をあまでズタズタに出来るのか、当時新法解剖に当たった医師は後日、検察官とのやりとりの中でこう語っている。



才オタ川少年殺人事件の非公開情報を公開

事件の被害者となった少年4人には窃盗や傷害、また動物虐待などの暗い噂が市内で有名であったことが判明している。

また現場近く、リュウオウ山付近の”異界封印式”が消滅していることを公安部公安第13課異常事件対策室”キタノ”所属の調査員が確認

キタノの調査によると当時、少年たちの死亡推定時刻である午前9時半頃、現場には季節外れの濃霧が発生していたとのこと。

異界封印式により閉じ込められていた      との関連性が深い  
と見られこの事件はキタノ管轄となる。

キタノの追加調査により現場の唯一の生存者である当時8歳の孤児施設出身の少年Tが回復したのち、カウセリングと称して事件当時の話を聴衆。

少年の話によると、高架下に捨てられていた子犬を死亡した少年たちが川に流して殺した。気付いたら辺りが霧に包まれてそこからは何も覚えていないと繰り返す。

キタノ所属の異能者による読心を試みるも、少年の心にはなににもな



く、事件当日の記憶も存在していなかったとのこと。

この異能者はまるで心に霧が満ちているかのように何も見えないとキタノに報告。2回目のカウンセリングの際に、異能者の体調に明らかな異変が発生したため、少年Tに対するカウンセリングは中止。

以降は最重要監視人物として公安キタノによる監視体制を敷く。

2025年、少年Tは現代ダンジョン、バベルの大穴の探索者となる。以降は監視体制をキタノ、そしてバベル島内の管轄担当である内閣情報調査室との合同で行う。

ハトムラ、クサカベ公安組織員を、元少年T、以降探索者Tのパイティメンバーとして選出。彼の動向を逐一監視、報告する任務に従事。

2028年まで、10回以上の探索者組合ニホン支部協力の元、探索後の洗浄と合わせて、探索者Tに対する記憶洗浄、及び自白剤投与などを繰り返すも、19年前の事件については本人による供述はなし。

以降は継続的な監視が続くも、去る2028年9月、探索者Tは、異常発生した怪物種の生態調査中、怪物種の奇襲を受ける。

ハトムラ、クサカベ組織員を逃すために殿となり、探索者Tはバベル島内で行方を断つ。

端末反応の消滅、及びそれからの24時間の経過を持って探索者Tを死亡判定。以降の監視を解除。

また、ハトムラ、クサカベ両名については公安に無断で、探索者Tの搜索依頼を組合に提出、ニホン支部ではなくアメリカ支部に提出したことにより対応が遅れ、探索者Tの情報がアメリカ合衆国に漏洩。

ハトムラ、クサカベ両名を即時拘束し、記憶洗浄を施した上で再教育プログラム処分を適用。

探索者Tについてはアメリカ合衆国所属探索チーム。”アレフチーム”による搜索が近日行われるとのこと。

またアレフチームには要監視人物であるニホン人補佐探索者、内閣情報監視室の監視体制に置かれている”探索者A”が所属している。

以上のことを受け、アレフチームによる探索者Tの搜索についてはチヨダ、ゼロ、サクラ、キタノによる合同での監視任務が計画されている。

## 12話 男と竜

「う、ご。あれ、やべ、ガチ寝してた……」

ぱちり、目を覚ます。ふかふかのベッドに沈んでいた身体を起し目をこすった。

驚くほど、身体が軽い。このベッドのおかげだろうか。

「すう、すう、むふふ、母様……なるほど、雄からナイフを、突き刺すというのは、もはや交尾に近い行為、むふふ」

「うわ」

びくり。隣から響いた女の声に今更驚く。

長いまつ毛に白い肌、アホみたいに小さな顔のやばい美人がはな

ちようちんをぶくーっと思らませながら寝言をまにゃまにゃと。

遠山はそいつを起こさないようにベッドから降りようとして動きを止めた。

「なんだ、このデカイベッド。バカが作ったのか？ 20人以上寝れるぞ」

ベッドがデカすぎる。一人暮らしの宿舎アパートのローベットならごろりと転がればそのままベッドから出られたのに、このベッドは広すぎた。

フチがすぐに見えないのだ。膝をついたまま背伸びするとようやくフチがあるのがわかる。

「なんか、あれだな、部屋のサイズ感がやばい。これ部屋ってより広間だろ、もはや」

静かにハイハイしながら遠山がベッドから降りる。部屋もこれ、

1人用の部屋というより、どちらかと言えばホテルのロビーのような。

ふかふかの絨毯の上をそっと歩く。気付けば寝巻きもあのボロの奴隷服から、バスローブのようなものになっていった。

「失礼、しましたー」

一応、女の寝室にいたのだ。変なところで律儀な遠山が頭を下げて扉をゆっくり開く。

そっと、閉めて、部屋から脱出。まだベッドの中心からはムニヤムニヤ言う声が聞こえていた。

さて、ズラかるか。今は考えをまとめるために1人にー

「おはようございます、若者殿。いや、婿殿が相応しいですかな」

額を拭っていた遠山の動きがピシリと止まった。

声、隣から。

燕尾服を着こなしたナイスシルバーが胸に手を当てて一礼を。

「げえ！？ ゲキ強爺さん、あんた。どこから」

「この部屋の前にずっとおりましたとも。お嬢様の寝所をお守りするのも執事の仕事ですので」

ほほほ、と柔らかく笑う爺さん。だが遠山は知っている。この老人の信じられない戦闘力の高さを。

「して、婿殿、どちらへ向かわれるおつもりでしょうか？」

すつと、細められる目に漏らしてしまいそうになりながら遠山は頭を回転させる。

力づくでの突破は無理。かと言って誤魔化す方法も思い当たらない。

「い、いや、どちら入って…… 考えたら俺、いくあてないな」

しぼん。冷静に考えるとここまで連れてこられた時点で割と詰んでいることに気づく。

「ほほほ、無鉄砲さはしかし、若さの特権です。……お嬢様からのご命令であなた様が起きた後は、衣服をご用意せよ、と。ああ、それと」

朗らかに笑う老人、彼の手が一瞬ブレた。

いや正確には手刀がすぱりと遠山に向けて振われたのだが、寝起きの遠山にはそれを視認することは出来ない。

「う、わ」

「じつり。」

遠山の手首に巻きついたらまだつた手錠が外れる。

あり、うそ？ 安物の手錠だけでもスツパリ行きすぎじゃね？  
わあ、鉄ってチョップで斬れるんだ。わあ。

「ばぶじ」

言葉を編もうとしたが、驚きすぎて赤ちゃんになっちゃってしまった。  
仕方ねえだろ、赤ちゃんなんだから。

「手錠はもう、必要ありませんまい。いえ、なに、鎖が外れているの  
で不自由はないでしょうが、なにぶん見た目がよろしくない」

「あー、妙に軽いんで気にしてなかったけど、手首に手錠ついたらま



までしたね」

なんとか赤ちゃんから成人男性に戻ったが内心ビビりまくりだ。この時点で完全にちからづくでこの場から逃げるといふ選択肢が消え失せた。

「ほう、軽い……ですか。婿殿は先程のことといい中々に頑健なお身体をお持ちで。失礼ですがそのような”スキル”をお持ちで？……おっと失礼、まだお嬢様が知ってもいないのに、出過ぎた真似を」

「あ、はあ、スキル？ てかこの服、すげえ着心地いいすね」

「それは寝巻きにございます。貴方様はこれから議場に入られますゆえに、それ相応の服装にお着替え願います」

ぱんぱん、と老人が手のひらを叩く。

大理石の廊下、高級ホテルのような作りの柱の陰からたくさんの

メイドさんが現れた。

ふりっふりのロングスカートに頭に付けてるなんか白いアレ。うん、メイドさんだ。

「このお方はお嬢様の賓客だ。お召し物をご用意して差し上げなさい。お着替えも手伝うように」

「「「かしこまりました」」」

お人形のようにこれまたメイドさん達全員も美しい。

なんとなくだが、あの鎧野郎、もとい鎧女の趣味がわかってきた。いい趣味してる。

「……………選択肢、ねえですよね」

遠山がつぶやく。

老人が目を細め、遠山を見る。

そしてにこりと微笑んだ。

「……やはり貴方様は面白いお方でございます。理性と狂気がなんの齟齬もなく同時に存在しておられる。今、この場では私を殺せない、だから言うことを聞く。……底冷えするような人間性です」

「人を殺人鬼みたいにいますね」

「まさか、貴方様はアレらの種とは正反対でしょう。ほんとうは殺したくないし、大して殺すことにも興味はない。ただ、その方法が1番確実でおかつ、”出来る”から選ぶ。それだけの話でしょう？ ほほほ、竜に見込まれることだけはありますなあ」

どこか老人が嬉しそうに見える。

足元に転がっている綺麗な断面の手錠。それをチラリと見て、遠山が息を吐いた。

「で、どこに行けばいいんでしょうか、僕は」

全ての疑問や考えることを放棄し遠山が問う。

ルンルンの顔の老人が道を示す。素直にそれについて行くことにした。

……

……

…

「うお、なんか、すげえなこれ」

案内されたのはドレスルームだった。アホみたいに広い部屋にマネキンが博物館のように並べられていた。

メイド達が遠山に服を着せようと囲んできたが、それだけは大人のプライドで拒み、用意されていた服装に何とか自分で着替えて部屋を出る。

メイドさん達は相変わらず無表情だったが

「……………」

「……………」さすがおじょうさまが認めたオス

「……………」お世話したかった

ぼそり、ぼそり。メイドさん達が固まってヒソヒソ話を響かせる。振り返ってはダメだ。遠山は本能で悟り、静かにドレスルームを後にする。

「おや、お早いお着替えで。メイドたちの手伝いも必要なかったみたいだな」

「いやまあ、一応社会人なんで。スーツ……………」異世界なのに服装のセンスが似てるな」

「はて、どこかで着たことが？ お嬢様がデザインされた新しい舞踏会用のウエストコートだとか。ふむ、貴方様の出自に興味が湧いてくるところですが、あまり時間がありません。お嬢様もそろそろ目覚める頃合いでしょうし、参りましょう」

老人が再び歩みを進める。遠山はもう流れに身を任せることにした。

今の気分は状況が掴めなさすぎて、もうどうにでもなあれ、だ。

「どうぞ、こちらが竜議場、帝国において竜に関する重大な事柄を決める神聖な場です。皆様既にお揃いのように」

一際大きな観音開きのドア。蝶番からドアの衣装。

竜の顔が映えてるんですが、デザイナーは中学生なのだろうか。

「これ、このドア開けるのにボス部屋のカギとかありません？ ち

いさなカギでは開かないタイプのドアですよね」

「はて、ほすべや？ ほほほ、そう緊張なさらずに。貴方さまはお嬢様の賓客ゆえに、では」

遠山の戯言を老人が華麗に受け流し、ドアを開く。

まあもついいや、と遠山がノリでそのドアをくぐり。

「わお」

まず目についたのはステンドグラス。

広間の奥、天井の壁に貼られた色とりどりのガラスがキラキラと陽光を通して広間全体を光らせる。

他の部分も天窓仕様、すごい高いホテルか、海外の聖堂みたいだ。遠山は残念ながらそう言うところに行つたことがないので感受性が

乏しかった。

「かか、ああ、主役が来てくれたな。旦那殿、さあ、広間の中心へ」

広間だ。赤い絨毯が引かれた先、遠山の眼前、前方にはこれまた  
デカイ椅子。

玉座。

豪華。それしか感想がない。だって、もう足から持ち手から背も  
たれまで金ピカなもの。

「かか、どうした、旦那殿。オレの広間の豪華さに目でも奪われた  
か？ まあ、オレは貴様に片目をうばわれたけどな！」

「ご機嫌が非常によろしい金髪美人が、にかりと笑う。

金ピカの椅子にこれでもかと言つほど偉そうに座るその女。



金の髪はしかし、その玉座に引けを取らぬほど美しく煌々と輝く。

長い脚を組み、肘に顎をやり深く椅子に腰掛けるその姿。

生まれた時からの強者、上に立つ者の所作。普通の人間がすればともすれば下品、滑稽に見える仕草でも、その女がすれば、それはまさしく、王の風格。

「さあ、旦那殿、良い、許す。その椅子に腰掛けよ」

「……………」

玉座と向かい合うように、広間の中心に置かれている木の椅子。派手さはないが、これもいい素材で出来ている。

遠山が促されるままに広間を進み、椅子に腰掛け、女をみる。

羽衣のようなドレス。そこから覗く白い脚が眩しく割と遠山は全力でガン見していた。

「アレが、竜の巫女の……」

「黒髪、栗色の眼。珍しい……」

「へえ、悪くないじゃない。スヴィ、何か見える？」

「いいえ、主教さま。何も、見えません。何かモヤが……」

「ふん、衣装だけは一級品か……」

「あー、天使さま、眷属さま、お願いですから何も起きませんように、お願いですからギルドと都市運営に何も影響なく全てが終わりますように」

「領主さま、あまり、その心配事をそんなに具体的におっしゃられると逆に嫌な予感がするのですが」

その王の席と遠山の席から離れ、一段下、広間を挟むように列を成して並べられている席にもそれぞれ彼らが座っている。

みな一様に、遠山を眺める。品定めをするかのように。

「……そろそろ良いか？」

金髪の女が声を紡ぐ。

それだけで辺りの空気が恐ろしいほどに静かになった。

生き物の消えた森のように。

「さて、さて、我が愛しき冒険都市。それを支える定命のモノ、ヒトの中でも選りすぐりの優秀なるモノたちよ。今日はよく集まってくれた。くるしゅうない。ああ、辺境伯、ギルドマスター、先のギルド内では騒がせてしまったな、許せ」

「……は、蒐集竜さまにおかれましては誠、寛大なお心で我がギルドの冒険者の粗相お目溢し頂きましたこと、心より感謝申し上げます次第であります」

「……蒐集竜さまのお言葉を蔑ろにしかねない言動、態度を取った冒険者につきましてはみな、そのお心のままに厳罰をちょうだいしたく、それがギルドの総意なれば」

女の言葉に、一段下の席に座っていた小太りの男とメガネの美人が立ち上がり恭しく頭を下げる。

「かかかか、ギルドマスター、そちはほんに、聡明よな。ふんむ、そうさな。今日は気分が良い。あの騒ぎ立てていたメス猫、アレ！匹、我が館の地下によこせ。ワームどもに狩りの練習がさせたい」

「ご機嫌に、朗らかな口ぶりで金髪の女がなにか残酷なことを言っている。このナチュラル畜生ぶりで遠山は120%確信を得た。」

この女、あの傲慢な態度ら間違いなくあの鎧ヤローだ。

「……承知いたしました。一級冒険者にすぐに彼女に対しての拘束命令を出します」

「うむ、そうせい。なかなかあのメス猫の言葉は聞くに耐えんかったゆえに。自らの力で復讐をなすのならいざ知らず、恥もなく己はただ泣きじゃくるのみ。みるに耐えん、竜としてあのようなもの因子を後世に残すことは許し難くての、ああ、そうだ。あのメス猫、家族があるのならそれも全て連れて来い、仲良くワームの狩りのおもちやにしてやる故」

「……は、我らが竜の巫女の仰せのままに」

竜の言葉は重い。帝国において、今や声を届けぬ天使よりもその存在は身近で、しかしそれゆえに強いのだ。

傍若無人、傲慢無比。

この広間に集まっているのはみなそれぞれが、冒険都市を構成する勢力のトップ。

冒険者ギルド、人間社会、貴族、天使教会、商人ギルド、などなどみなそれぞれが優秀で選ばれた者たち。

中にはその竜の言葉に思うところがある者もいるがみな一様に目を伏せるのみ。

「かか、くるしゅうない。ギルドマスター、辺境伯、下がってよい、許す」

「は」

現人神、ならぬ。現竜神。実在する護り神なのだ。

人がその存在に出来ることなど、ただ首を垂れ、その機嫌を損ねぬようにただ、通り過ぎるのを待つのみ。

ここに集まる名士たちはみな、それぞれそれを熟知していたし、慣れてもいた。

竜の言葉に逆らわないこと。竜の意に反しないこと。

それがどれだけ、己の意思と反することであっても、人が竜に抗うことなど

「いやまで、鎧やロー。おまえそれはやりすぎだろ。家族ってことは、まさか飼いだまでもか？」

は？

その場にいた人間、全員が目を剥いた。もちろん竜の許可なく発言などすればどのような目に遭わされるかわからない。

だからみんな、目を剥いたまま、ソイツを見た。

竜の許可なく、不遜な声を上げたその、奴隷を、

「……もちろんだ。1匹残らず、我が眷属の餌食となってもらう。それが飼い犬、飼い猫であつても」

底冷えする、声だ。竜が炎を操る寸前、彼らは独特な音を出す。それによく似た声だ。

この場にいる帝国、いや、この世界に生きる命たちみなが確信した。次の瞬間にでもその男が消し炭になってもおかしくはない、と。

「そりゃねえだろ。あのネコ耳女はたしかにムカついたから別にど



「でもいいけどよー、おまえ、わんこに罪はねえだろ、わんこに……やめるよ、そーいつの」

「」「」「！? ? ? ! ? ? ?」「」「」「」

死んだ。

みな、そう思った。木の椅子に座った男はこれから竜に殺される。

竜は皆全て誇り高く、自らより下のモノに意見されるのを何より嫌う。竜より上位の存在はこの世にいないため、つまり、竜以外の何人たりとも、竜に意見することは出来ない。

竜の言葉の否定。竜への意見。

それはすなわち、安易な死を意味して

「む？　そうか。貴様がそう言うのならそうしよう。ギルドマスタ  
ー、先ほどのナシだ。連れてくるのは雌猫だけでいい。奴の家族  
はいらぬ。これでよいのか？　旦那殿」

「おう、文句ねーよ」

けろりと、2人が言葉を交わす。

男はまだ、死んでいなかった。いや、それどころか、あり得ない  
光景がそこにある。

竜が他人の、ましてや、人間の意見を無視するどころか、殺さな  
いどころか。

男の言う通りにした。

「  
「  
「  
「  
「  
「  
「  
「  
「  
「  
はい？  
「  
「  
「  
「  
「  
「

みんなもう、声を出すのを我慢出来なかった。

12話 男と竜（後書き）

感想、ブックマたくさんありがとうございます。

お礼に更新し続けます。読んでくれてありがとうございます。

13話 遠山鳴人と蒐集竜

「む？ ギルドマスター、どうした、貴様。鳩が弓矢でも喰らうたような呆けた顔しおって。其方にはその顔は似合わんぞ」

「……あ、は、い、いえ、大変失礼を。竜の言葉有り難く頂戴致します。全てそのお心のままに」

ギルドマスターがありえぬものを見た、と言う顔のまま、ギクシヤクと頭を下げる。

「うむ、ご苦労。下がって良いぞ」

金髪の女は相変わらずご機嫌だ。頬杖をつきつつ、遠山に視線を戻し、目を大きく開いた。

「おお、そういえば旦那殿、その服よく似合っているではないか」

「お、おお、どうも。……アンタも、あのかけえ鎧もいいけど、その服もすごいな。なんか、その、ローマの偉い人って感じで」

「ろーま、とな？　かか、まあ良い、褒め言葉として受け取っておこう」

ケラケラと笑う金髪の女。

帝国の民にとってその姿はまさに、異常。

「マリーくん、なに、あれ」

「竜……だと、思う、のですが……」

辺境伯とギルドマスター。この都市の中でかなり竜大使館と距離が近い派閥の長たちはあり得ない光景にかなり正気を持っていかれていた。

そしてその光景を、黙って見ることも、受け入れることも出来ない者もいた。

「……………おい！！ 奴隷！！ 不敬だぞ！！」

高い男の声が響く。

豪華な装備、装飾の施された儀礼用の鎧に身を包んだ美青年だ。

遠山を指差し、あまつさえ席を離れて、遠山へとズカズカ近づいていく。

「あ、ちょ！ クラン！？ やばいって、今はやばいって！」

「……………」

隣の席に座っていた黒いシスター服の糸目の女性が男を止めるも、もはや間に合わず。白い修道服の女性は黙ってピクリとも、動かさずただ、虚空を見つめている。

「あ？」

「先ほどから黙って聞いていればなんだ、その態度は？！ 目の前に座す方をどなたと心得る！！ 帝国の護り神、人と竜の縁の結び目、竜の巫女様になんたる態度だ！！」

遠山に今にも殴り掛からんという勢いで男が迫る。鎧の音がうるさい。

「竜の、巫女？」

ちよこちよこ聞いていたワードだが意味がわからない。だが、響きのおそらくあの鎧ヤローの呼び名の1つか。

遠山は呑気に推測を始める。



「な、なんだ、その顔は？ まさか、知らないとも言うつもりか？ 不敬すぎるにもほどがある！ 本来であるならば貴様のような出自もわからぬ下賤な者が目にするにすることすら憚れるお人なのだ！ その態度、許せぬ！！」

「あ、はあ、そつすか。お兄さん、やめてくれよ。こっちは丸腰だ。その大層な腰の剣から手、離してくれ。こわくてしかたねえ。まあ武器も持ってねえ人間に対して剣をチラつかせるのが趣味ならもう言うことねえけどよ」

品定め。やかましい割にはこの男は強い。タイムンでやれば自分に勝ち目はないだろう。キリヤイバを使えば話は別だが。

つまり、いつでも殺せるというわけだ。遠山は割と余裕だった。

だがその態度が青年のプライドに障ったのだろう。

青年がその腰の剣に手をかける。

「な、ぐ、わ、私を愚弄するか！！ 表へ出る！！ 教会騎士として今の言葉は捨て置けん！」

名誉ある彼らは何より侮辱されることを嫌う。奴隸風情が竜と対等に話すその姿、そしてここ最近の一件で溜まっていた不満が、ここに爆発――

「騎士よ」

その声が、ふりおりる。それは分岐点だ。それは死線だ。

「お恐れながら蒐集竜様に申し上げます！！ この者は明らかに御身に対して明らか―― っあ？！ 火、火？！ あ、ああああアアアアアアアアア」

そして若さゆえにその騎士はそれに気づかなかつた。騎士が、竜の言葉に意見した瞬間、彼は炎に包まれていた。

「ぎゃ、アアアアアアア？！　り、ゆうよおお、なぜ、なぜええええ、僕、だけえええ」

炎だるまになりながら地べたを悶え回るその姿。

「うわ。まじか」

普通に遠山は引いていた。肉の焼ける臭いに少し吐きそうになる。

「貴様、誰の許可を得て囀るか。今、オレは旦那殿と話しているのだ」

女の声はどこまでも冷たく。転がり回る青年には届いていないだろうが。

「あつちやー、だから言ったのに……　はあ、かしこみかしこみ、我らが竜よ、その愚か者の責任は全てわたくしにございますれば。ただ、そこな男の発言は全て、御身を想うあまりのこと。竜に焦が

れる哀れな人の性として、どうかお目溢しちょうだい出来ませぬか？」

黒いシスター服の糸目女性。おずおずと、しかし、かなり呑気な様子で声を上げた。

金髪女は一瞬、場が凍るような殺意を放つが、発言したのがその糸目のシスター服だと分かるとその雰囲気や和らげた。

「む、銭ゲバよ。そういうえば貴様の予言がオレと旦那殿を引き合わせたのだったな。よい、許す」

ぱち。

悶えて地面に暴れ回る男を包む炎が嘘のように消えた。

「あ、ね……」

黒焦げ。

美しいブロンドヘアは溶け落ち、黒コゲの人間がピクピクと痙攣していた。

「はあ、まったく、だーから連れてきたくなかったのに。竜の巫女よ、その愚か者、しかし我ら天使教会の剣のうち、最も鋭き者の中の10本に入る男です。どうか寛大な御心をもって、治療の許し頂きたい」

「ほう、なんだ、此奴、10騎士の1人か。かかかか！ どうりで消し炭にしてやるつもりがまだ息があるわけだ。良い、許す、治してやれ」

「御心、有り難く。スヴィ？」

「はい、主教さま」

白い修道服の小柄な女性、140センチもなさそうだ。

彼女がととと、とその黒焦げの男の元へ歩み寄り、しゃがんで手をかざす。

「いと高き、貴女のお恵みを私の手のひらに」

透き通る声。紡がれる言葉。

「サクラメント秘蹟治癒の手」

それは天使に与えられた奇蹟。教会に属する一部の人間にしか扱えぬ天の力。

癒しの権能が黒焦げの男に作用する。

「……………う、あ……………」

驚いたことにまだ男は生きているらしかった。オレンジ色の光が灯るたびに、小さく呻く。

「ほう、教会の聖女。噂に違わぬ濃い香り、天使の深い香りが其方から漂うぞ」

「もったいなきお言葉です、竜の巫女」

「わ、たしは」

「黙って。あなたが今生きているのは竜の巫女様の気紛れと主教様が命をかけて上申してくれたおかげ。それもわからぬのなら、ここで私があなたを殺す」

「く……」

それから男はもう何も言わなかった。

しかし、黒焦げの顔は遠山の方を向いていた。グロいのですが、遠山はそれから目を逸らしたが。

「かかか、さて、一悶着あったが、まあここにいる選ばれたヒトである貴様らならば、もう理解しておろう？　なぜ呼ばれたのかをな」

改めて、金髪女が再び話し始める。

「今、オレの目の前におるこの男。黒髪の奴隷。此奴こそ、このオレ、蒐集竜を殺した男。紛うことなき、真剣勝負にて、オレはこの男に敗れた」

「故に許すのだ。オレの目の前に座ることを。オレの言葉を遮ることを。オレの言葉に意見することを。オレと、対等であることを許すただ一人の人間種である」

「そこな教会騎士はなんぞ勘違いしたのだろう。竜が人に絆されているのだ。かかか、代償は高くついたな。否、断じて否、だ」

「オレが許し、絆されるのはただ一人。この男のみ、ぞ」



「ここまで言えばオレの意思が貴様ら全員、すなわち冒険都市、いや、帝国に伝わっただろう？ 本日をもって、オレはこの男をツガイとすることに決めた。竜の婿イレぞ。誉れと思え、冒険都市、祀るといい、帝国よ。この男とオレの婚姻を持ち、帝国と竜界の縁は永遠のモノとなるのだから」

その言葉は竜の言葉。

帝国に今、宣言されたのだ。

竜が、ツガイを見出したのだと。

「おお…… やはり」

「うわお、マリーくん、胃薬頂戴」

「ごめんなさい、先ほど全部飲みました」

「……なるほど、こうなったか」

広間がざわつく。

この場にいるのは帝国の運営にも関わる有力者たち。予想はしていたが改めて竜自身の口から告げられたソレはやはり衝撃だ。

「かか、ざわつくのも分かる。が、しかし、だ。婚姻とはつまり祝福だ。この婚姻に不服がある者は手を挙げよ。ないのならば沈黙と恭順を持って、賛成の意を示せ」

あるわけがない。

人界において竜の言葉を覆す出来るものなどいないのだから。

「かか、良いよい。ふむ、これで今日より竜と人。古の約定の1つがまた為された。ああ、竜冥利に尽きるのう。竜殺しと結ばれるのは、竜の本懐よな」

「……冒険者ギルドを代表し、この度の蒐集竜様の婚姻、真、おめでたくお祝い申し上げたく、つきましては竜祭りの折には闘技場に於て祝いの一戦を奉りたく存じます」

音もなくたちあがり、恭しく頭を下げるのはメガネの女。

「おお、よいではないか。ふんむ、そうさな。エルダーと塔級の試合が見たい。塔級は誰でも構わぬ。奴らは数少ない、オレから見ても退屈せぬ人種ゆえに」

「はっ、必ずや御身の退屈を晴らす試合をご用意いたします」

「かか、よいよい、励めよ」

「……お恐れながら、帝国を代表し申し上げます、この度の婚姻、誠にめでたい。帝都にて座する皇帝におかれましてもこの場に居合すことの出来なかったこと大変悔いておられることでしょう」

続けて小太りの男もそれにならう。

「ああ、あのジジイもそれなりに忙しいであろう。よい、許す。辺境伯、貴様ならばあのジジイの代理として申し分ない。罰することはありません、安心せよ」

「は、なんと慈悲深きお言葉でしょうか。帝国にもちましては、此度の婚姻を祝う形として、軽い犯罪により牢に入れられているものの特赦、そして農村地帯への租税の減税、また都市部においては徳政令をもって借金の打ち消しを行おうかと。蒐集竜さまのお慈悲、という形を考えております」

「うむ、悪くない。だが金貸しの連中が哀れよの。ふむ、こうしよう。徳政令により貸付の回収ができなくなった金貸し連中に関しては、竜大使館名義でその文を補填してくれてやろう。帳簿の提出、血判状、契約書の類を用意させておけ」

「はは、なんとありがたきお言葉でしょう」

「かかか、まあ、のう。お主の商売にも金貸しどもが困窮すれば影響があるだろうし……　　かか、日頃の貴様のタヌキぶりを評価しての判断よ。存分に私服を肥やすがよい」

「は、はは、竜の巫女さまも、お人、いえ、竜が悪う存じます」

脂汗をかきながら小太りの男が愛想笑い。竜はソレきり興味をなくしたのだらう、男から視線を外した。

「して、他に？」

金髪の女が青暗い目で広間の席を見回す。

競うようにその場に集まった名士たちが竜の婚姻を祝い、そのの祝いとして自分たちの派閥が何をするか、何を出来るかを口々に発表し始める。

竜がそれを機嫌よく聞き、鷹揚に頷き話が進んでいく。

この世界において、竜の婚姻とはすなわち並ぶことのない名誉であり、歴史に残る祝い事なのだ。

少しでも竜の興をひこうと派閥の長たちが竜への敬意を示すための祝いを提案していく。

「このたびの蒐集竜さまの婚姻を祝い、商人ギルドにつきましては、貸店舗の賃料の引き下げ、またギルドの影響の及ぶ商人全てに、竜の婚姻に関わる祝いごとの商品を並べることといたします」

「ふんむ、ちと弱い。明日までに他の案を大使館へ提出せよ。つまらぬものであれば、貴様らの交易路を全て潰す」

「は、全ての知恵を集め、御身の興をひいてみせます」

「ほう、かか、娘。悪くないな、貴様。期待しておるぞ」

「もったいなきお言葉」

人、本来ならば竜の目に個としてとらえられることもないちっぽ

けな存在。

しかし歴史の中、いくつかで時折、たまに竜に見初められる人が現れる。

「竜の巫女さま、先ほどの教会騎士の蛮行、この首をもつても贖えぬことは存じております。しかし、それでも御身の祝いの前にまず、ふさわしき罰を。教会の者の不備は全て、このわたくしに責がありますれば」

「かか、銭ゲバめ。金に汚く、およそ聖職者らしからぬ貴様を憎みきれんのはその度胸よ。貴様、オレがどうあっても貴様を殺さんとみてのその言葉であろう。かかか、許す、全て許す。そこな騎士の暴走、全てもう良い。貴様の予言と、貴様の度胸に免じてな」

「……あなた様はいと高き我らが光と並び立つほどの素晴らしい存在であります。帝国にあなた様があることを誇りに」

「かかか、良い、よい。して、教会は此度の祝賀、どう考えておる？」

竜という数多の生命の到達点、それにツガイとして選ばれる。それはすなわち、神から直接寵愛を受けることに等しい。

人を超えた叡智、財、不老不死、美しさ、大凡人が求めてやまないものその全てを、竜は持っている。

「は、蒐集竜さまの名の元に、まず教会が物流権と販売権を確保している聖品の大幅な値下げと市場への放出を。具体的には”天使粉”を中心とした食品必需品への教会税の減税、そしてあなた様を謳う讚美歌の創曲をひとまずのところに」

「ほう、かか、良いだろう。許す。竜祭りまでには全て完成させよ」

「は」

皆が、頭を下げる。人と竜の関係は古より決まりきっていた。

竜が上、人が下。



人は竜に選ばれることでしかその存在に触れることさえ許されない。  
い。

竜が人を試すのだ、竜が人を選ぶのだ。そして人は竜に見初められることを最大の栄誉の1つとして求める。

天使教会の教会騎士が竜に打ち勝ち、そのツガイに選ばれることを至高の目的とするのも、帝国という国自体が竜を護り神と崇めるのも全て、竜という存在の絶対性、神聖さ。

だからだろうか。

この場にいる全員。この帝国で生きる皆が忘れていたのだ。

皇帝からこの要所を任された昼行灯の辺境伯も。

荒くれモノ、曲者揃いのアウトローのとりまとめ、ギルドマスターも。

帝国国教、唯一の統一宗教総本山、錢ゲバ女主教に、歴代最優と歌われる教会最強戦力、聖女も。

帝国随一の経済特区をとりまとめる辣腕の商人ギルドの長も。

その他、人の中での選りすぐり。最低でも竜の大使館に招かれることを許された人間たち。

誰もが忘れていたのだ。

そう、竜でさえも。数百年ぶりの竜殺しの存在に本当に当たり前のことを忘れていたのだ。

「いや、お前とは俺、結婚しねえよ？ 婚姻とか祝いとか言ってるけどよお、俺まだ独身でいたいし」

空気が凍りついた。

婚姻とは、片方だけの意思で決まるものではない。

3歳のこともでも知っていることを皆が忘れていた。

竜との婚姻を断る人間など、この世界にいるわけがないから。

「……………は？」

「いや、いやいや、は？ じゃねえよ、こっちがは？ だよ。話がわからん、なんで俺がお前と結婚するみたいな流れになっただ？ 新手の詐欺にしてもガバガバすぎるだろ、設定が」

「……………旦那殿、オレは、竜、だぞ？」

「あ、はい。で、それが？」

「……ッ?!?!」

「お嬢様!?!」

「あ、ああ、すまぬ、爺や。少し悪い夢を見ていた。……オレの婚姻を、旦那殿が断る夢だ、かか、さて、婚姻衣装に着替えねば……あれ、もう着てる……」

「お嬢様、お気をたしかに。夢ではありませんせぬ」

「え、は？ オレ、竜ぞ？」

「はい、竜にいますれば」

「……………ふう。よしわかった、状況が掴めた。まさかオレはいま、  
婚姻を断られたのか？」

「そういつごとく思います」

「そうか」

「ッ?!」

遠山の身体が強張る。

がたん、気付けば周り、先ほどまで竜に頭を下げていた偉そうな  
人物たちのうち、殆どが椅子から転げ落ち、苦しそうに地べたに這  
いつくばっていた。

「げ、うえ」

「こ、れは、りよ、領主、さま、お気をたしかに……」

「す、ヴい、秘蹟を……」

「はい、主教様」

「おええ…… し、ひぬ」

顔色を変えずにいるのは本当に数人だけ。ほとんどみな、あぶくを吐いたり、白目を剥いたり阿鼻叫喚。

生き物が、生き物に触れもせずにもこのような影響を与えていいものなのだろうか。

いや、いいのだ。これが竜。上位生物の威。下位生物たる人間はその威に首を垂れるのみ。

辛うじて椅子に座ったままでいられる遠山。探索者としての化物殺しの3年がなければおそらく気絶していたほどのプレッシャー。

「は、はあ、はあ。おい、なんの、つもりだ」

「なんのつもり、だと。貴様、旦那殿。何か勘違いしているようだな」

「……婿殿。あなた様は竜との婚姻が何を意味するか、わかっておいでではないようですな」

玉座の隣に立つ老人が静かに、遠山に向けて言葉を紡ぐ。

「は？　なんだ、そりゃ。何を意味しようとも、そんなもんー」

遠山が身体に力をみなぎらせ、言い返そうとして

「全て、です。婿殿」

「は？」

「あなたも人ならば欲があるでしょう。生命、金銭、名誉、性、実現。人の身にとって欲とはその者を前に進める原動力のようなもの。人はそれを叶える為に生きている、乱暴な言い方かもしれませんが一つの真実であることは確かです」

「ひ、ひひ、それは否定しねえよ、爺さん」

欲望の話。それは遠山鳴人にとって聞いてみる価値のあるものだ。

「ほう、であるならば。この言い方であれば婚姻をご納得していただけますかな？ もう一度言います。全て、ですよ。お嬢様、つまり竜との婚姻とは人の身が求める欲の全てを手に入れると同じことです」

低い声が、ステンドグラスを通して降りる光に混ざる。



「竜と婚姻し、竜に選ばれるそれだけであなたの名前はこの帝国の歴史に刻まれる。例えあなたが滅びたのちも、帝国臣民全ての記憶にあなたは名誉の象徴として生き続ける」

「尽きぬ財、この世の全ての悦楽をあなたはなんの苦労もなく得ることができなのです。竜との婚姻とはつまり、欲望その全ての完成とも言える、ご覧なさい、お嬢様の威に伏する彼らの姿を」

老人の汚れの一切ない白い手袋につつまれた指が、彼らを示す。

竜の威に平伏す人間たちを、示すのだ。

「人とは他者より秀でたい、他者に勝ちたい、他者より優れたい、比較の欲を持つ存在。ご覧なさい、あなたが竜と婚姻したのち見ることのできる光景を。どれだけ人の世界で上に立つモノであれ、竜の前にはこれ、この通り、皆が平伏す。つまり、あなたに平伏すのですよ」

「全て、叶う。全て、手に入ります。あなたが欲しいもの、その全て、が」

その老人の言葉は、甘い毒だ。

人を超えた存在が、人を唆す言葉である。人である以上、その言葉は抗いがたく。

その言葉の対象ではないはずの者まで夢想する。もし、自分が竜に選ばれていたら。

ああ、全て手に入るのだ。竜との婚姻とはつまり、欲望の完成に他ならぬ。

人の身で有り余るこの世の欲望の全てを、欲望のままに貪ることができる、その権利そのもの――

「……………」

遠山が、深く椅子に座り込む。竜の本気の殺意に触れた身体が疲れ果て、目はうつろに天井、天窓からさす光を仰いでいた。

「2度は言わん、人間。オレは貴様を選んだ。我がツガイとなれ、我がモノとなれ。オレの7つある命のうち、1つを奪った貴様にはその権利がある」

「お選びなさい。選ばれし人よ。あなたはこの世界で誰よりも幸運なお人なのだから」

竜と超人。

2つの超越者が、遠山鳴人に声と威を届ける。

選ぶべくもないだろう。それは完成、それは全て。ただ、頷くだけで全てが手に入るのだ。

そうだ、死んだのだ。あの時、仲間を庇い、死んだのだ。

そして、なんの偶然か、なんの因果か。

続きがあつた。次があつたのだ。

いいじゃないか、もう。意味もわからないが、理由もわからないが。

婚姻、それをすれば全て手に入るらしい。湖の辺りに立てる家、それも手に入るのだろうか。

「旦那殿」

「婿殿」

超越者、上位存在たちがその欲望のままに、下位の存在、その全てを手に入れようと言葉を向けてー

ああ、もういいか。全部、手に入るんなら、それで――

遠山鳴人がそれに屈するように、頭を縦に振る

――ぼうけんのたびにでるんだ！ ぼくと、おまえで！

――わん。わん！

――湖のほとりに、店を建てたかった。

全てを手に入れるために、全てを投げ出そうとした遠山。しかし、その首が縦に振られることはなかった。

はじまりもしなかった友との、ぼうけん。

身体に痺れをもたらせたある男の言葉。

それらに共通していたこと。ああ、ぜんぶ、たのしそうだった。

欲望とはたのしむものなのだ。

遠山鳴人が求めてやまないもの、欲望のままに。それが大切だ。

「ひ、ヒヒヒヒヒヒ。ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ、あ  
あ、そうか、バカか、俺は」

「……旦那殿。答えを」

言葉は静か。しかし、至近距離で銅鐸を鳴らせたかのような圧力に、心臓が軋む。

だが、もう、遠山の嗤いを止めることは出来なかった。

「休みの日ってよ、実は一番楽しいのは休みが始まる前日の夜なんだよなあ」

「……なに？」

「ああ、そうだ。そうだよ、ゲームとかもよ、レベルがMAX、所持金マックスの全クリ状態より、序盤の金策やらなんやらが一番たのしかった。G級もG級なりたてでスキル構成見直したりしてる時

が1番たのしいもんなあ」

「婿殿、あなた、何を？」

「ヒビヒビヒビ、いや、なんだ。改めて理解したんだよ。欲望ってのは、1番たのしいのはそれを叶えようと足掻いてる時だって。ああ、そうだー」

立ち上がる。

身体が悲鳴をあげる、動くな、と。目の前の生き物の機嫌を損ねるな、死ぬぞ、と。

だが、それを無視する。それが遠山の欲望だから。

「湖のほとりに家を建てよう」



その言葉は続いていた。最期の瞬間からたしかにこの場に続いていた。

「その為にはまず、金だ。土地を買うにも、家を建てるにもまず金がある。この世界の経済、貨幣制度も勉強しよう。カネを稼ぐ為に仕事もしよう、その為にこの世界をよく知ろう、ああ、なんだ、なんだよ、叶えたい欲望は1つなのに」

「やることがたくさんある。めんどくせえ、だがその全てがたのしみだ。その全てが俺の欲望に繋がる道だ。道中の苦勞、困難、試験、それを達成した時の喜び。ああ、そうだ、その全ては俺のもんだ」

一歩進む。

誰しもが超越者たちの圧に平伏すその温かなひかりがさす広間に、強欲な人間のみが、ただ、進む。

目を爛々と怪しく輝かせ。

「おまえらに1つたりともくれてやるものか。全て、だと？ タコが。なんもいらねえ。おまえらのモンなんて、お前らが俺に与えるものなんて、何一つ興味はない」

「なんもいらねえ。だから、俺のモンに触るな、殺すぞ」

「ほっ」

「これは」

キリだ。遠山鳴人の身体からキリが漏れ始める。竜の威がすぐさまそのキリに混ざるヤイバを焼き尽くす。

だが

「……なるほど、婿殿の中にいた者、予想外に手強い」

「爺や?! まさか」

老人が、その豊かな白い口髭の隙間から、こぼり。赤い血をまろびだす。

消えない。今度は消えない。

遠山の身体から漏れ出たキリはしかし、消え去っても、焼き切れ  
ても、消えないのだ。

むしろ満ちていく。ああ、何故だろうか、それはやけに部屋の角  
からどンドン次々、キリが満ちる。

「警告だ。俺を自由にしろ。決めるのはお前たちじゃない。俺だ。  
欲望のままに、全てを決めるのは俺だ」

そのキリは、主人の欲望を全て肯定する。

そのキリは、主人のぼうけんを邪魔するものを全て狩る。

誰もが、眼を剥いた。

竜の言葉に意見する、竜と対等に接する。百歩除いてここまではいいいい。

だが、なんだ、この光景は。

竜との婚姻を断るだけでも、帝国の歴史、いやこの世界の摂理からすら外れた蛮行、なのに、あまつさえ、今——

「うえ、ほんと、新しい胃薬ほしい」

ゲロまみれの辺境伯が、虚な視界の中それを見る。

ああ、悪夢だ。

ーひとが、りゅうを脅している。

「俺にはこれからやらないといけないことがたくさんある。邪魔するか、クソドラゴン、クソジジイ、どけ」

「ふ、フフフフ、若造が、イキがいい」

「そっちが本性かよ、ジジイ。どけ、年寄りいじめる趣味はねえ」

「ははは、言うじゃねえか、クソガキ」

遠山の足が止まる。圧が、尋常ではない。

死ぬかもしれない。容易にそれが予想できた、だが、もう悔いはない。

「ああ、ぼうけんだ。欲望を通す。俺のやりたいようにやるための冒険だ。冒してやろう、危険を飲み込もう。死んでも、俺は欲望のままに全てを叶える」

「ハハハハハハハ、それが最期の言葉で、いいんだな？」

「てめえこそ、品がなくなってんぞ、爺さん」

「ぬかせ、クソガキ」

老人から放たれる殺意が膨れ上がる。

それに反応するように、ああ、部屋の角という角から濃い、とても濃い、遠山の支配下にはないキリが立ち込める。

超越者と冒読者。

互いに譲れぬ、しかし、対等な殺し合いが始まるつとして

「……………旦那殿、そんなにオレとの婚姻は嫌なのか」

ぼそり、呟かれた言葉。

老人の殺意が少し萎む。

あまりにもその声が、しょぼくっていた為に遠山は思わず返事をした。

「い、いや。だって、俺のお前への印象最悪だし。トカゲさん殺そうとするわ、舐めた態度とるわ、偉そうだね。普通に嫌いだ」

「嫌い、なのか」

「うん」

「そうなのか」

「ああ」

「……………ぐすん」

「お、お嬢様?!」



老人の殺意が一気に消えた。萎むどころから消えたのだ。それに伴い、部屋の角に満ちていたキリも嘘のように消えていく。

「……………もうよい。ぐすん。……………旦那殿、すまぬことをした。爺や、オレは少し休む。……………旦那殿を浴場に案内し綺麗にしたあと、街へ送ってやれ…………… 丁重にな」

「は、は、よ、よろしいので？」

「……………だって、きれいってゆわれたもん。これ以上、オレ、きれいたくないし…………… おふる、入れてあげて、服もかえしてやれ。ぐすん」

ばさり。

女が、しょぼくれた女が立ち上がる。

かと思えば、その華奢な背中から大きな金色の翼がに広がる。

風がはためき、その翼にみちて、はためく。

真上に飛ぶ、女。天窓を突き破り、一瞬で遙か彼方、高く、高く空に向かう。

砕けた天窓のガラスがキラキラと光を受けて輝いた。

竜の涙も同じように輝くことを、遠山は知らない。

「お、お嬢様、お待ちを！！ お嬢様！ くそ！！ ファノン！ 婿殿をお嬢様の言いつけ通りに浴場へご案内して差し上げる！ あとお越しの冒険都市の皆様にはお茶と菓子を振る舞い、丁寧に都市へと送れ！！ 俺はお嬢様を追う！ お嬢様！！ お待ちを！！ アリスお嬢様アアア！！」

老人が優雅さを全て捨て去り、大声で叫ぶ。かと思うとそのままジャンプ。一瞬で見えなくなった。

遠山がそれを見て固まっていると

「はい、承知いたしました」

「お世話します、むじどの」

「ふふ、おせわチャンス到来」

気付けば、同じ顔をした人形のようなメイド集団に囲まれて、わっしょいわっしょいと複数人に持ち上げられて運ばれる。

「……………うん、まあ、もういいや」

遠山が目を瞑り、そのまま抵抗するのをやめた。あまりにも空気の寒暖差が激しすぎて、全ての思考が回らなくなったのだ。

わっしょい、わっしょい。メイドに運ばれるスーツ姿の男。

天窓を突き破り、目に涙を溜めて空へ逃げた竜。

そしてそれを素ジャンプで追いかけた老人。

「……やっぱり、古代ニホン語の、塾、いってればよかった」

「……です、ね」

とぼつちりでぶっ倒れているビビりすぎてキラキラまみれの辺境伯、割と平気そうなギルドマスター。

彼らの声は割れた天窓から広間に迷い込んだであろう、ピチチチと歌う小鳥の声に混ざっていた。

13話 遠山鳴人と蒐集竜（後書き）

お待たせしました。いつもご覧頂きありがとうございます。

< 苦しいです、評価してください > デモンズ感

またみてね！ Twitterで更新通知、予告してます。下のリンクタグから願います。

14話 アリス・イン・テルマエ

「おっふぁ、あああ、なんで俺、殺し合ったり殺し合いしそうにな  
ったやつの家で風呂はいつてんねん、ああああ、溶けるっつ」

かっぽーん。

温泉だ。浴場だ。もうそれ以外にない。

無表情の割のくせしてやけに自己主張の強いメイドさんたちにわ  
っしょいされ、身ぐるみ剥がされて放り込まれた場所は、これまた  
バカ広い浴場だった。

「すげえ風呂。スーパー銭湯を超えたハイパー銭湯だな」

思わず知性の低い言葉でつぶやく。遠山は湯に溶けながらその豪  
華な浴場を改めて見回した。

金ピカのライオン像の口から白く濁るお湯がドバドバと。広い浴槽の蓋や中心には美術館に置いてそうな様々な像が飾られる。

大理石っぽい石材で囲われた浴槽は人間100人が入ってもまだ余裕がありそうなほどに広い。

「……あああ、でも、やっぱり、温泉、いい。あー、もう友達とかいらねー、あああああ」

気持ち良すぎて心地良すぎる。湯が身体に染み込み、脳がとろける。

友達なんていらぬほどの心地良さに大きな唸り声を上げながら温泉を満喫する遠山。

「……アイツ、泣いてた、な」

そんな心地良さに棘がささる。

あの鎧ヤローのしょんぼりした声がふと脳裏に翻った。

「いやいやいやいや、泣くのは反則だろ。なんなんだ、アイツ。初対面で舐めた感じにぶっ殺そうとしてくるくせに、あの謎の好感度の高さはマジでなんだ」

そうだ、初対面は最悪だ。遠山の最も嫌悪するタイプの種類。

強く、その強さを振りかざすタイプ。

「……悪くねえ、俺はなんも悪くねえ筈だ。てか、そもそもぶっ殺したはずなのに、なんで当たり前のようにリスポンしてんだ。1人FPSかよ」

殺した、それは確実だ。

だが終わりではなかった。次があったら活かせよ、とかカッコつけてたらマジで次があるとかギャグだろ。

「はあ……くそ、気持ちいいのに、面白くねえ……」



深く深く、お湯の中に沈む。

ああ、気持ちいい。湯気を吸い込むとそれが身体に満ちていく。信じられないほどの力が湧いてくるような感覚。

「婿殿、どうですか、お嬢様が誇る竜大使館大浴場、”竜の泉”の湯加減は？」

「ああ、正直、最高っす。なんか温度も熱めでこの大理石の浴槽も背もたれがついててすごく、いい。寝れる……………　　嘘だろ……………  
…　　爺さん、アンタ、いつから」

遠山が額に手をやって俯く。

ありえない、ほんとなんなんだ、この爺さん。

いつのまにか、遠山1人じめだったはずの浴槽に、筋骨隆々の執事もかぼーんと。

「貴方さまがメイドたちに身ぐるみ剥がされた所あたりですか。先に頂いておりました」

口髭を撫でながらほっほっほっと笑うその様子からは先程の凶暴さは一切見つけられない。

「……………俺が風呂に入った時は誰も、人っ子1人いなかったはずですが」

「ほほほほほ、執事の嗜みにございますれば」

そんな嗜みがあつてたまるか。

「……………お嬢様とやらは追いかけていいんですか？」

遠山がぼそりとつぶやく。

「ほほ、ご安心めされよ。既に確保して、今は寝室にておやすみ中にございます。よほど、あなたさまに言われた言葉が応えたようです。ふて寝、というやつですな」

「……意味わかんね」

ずきり。また、だ。どうもおかしい。何か気分が悪かった。

「婿殿、あなた、やはり不思議な人ですな。この状況、恐ろしくないので？ 私、誠に恐縮ながら先程は本気であなたを、殺そうとしていたのですが」

「まあ、そりゃ怖いですよ。アンタは間違いなく俺より強い、化け物だ。まあでも、ほら、風呂頂いてるし、あんま常にケン力腰なのも失礼だなんて」

いくら殺し合いかけた仲なれど、温泉の中では全てがノープロブ

レム。この空間での争いはご法度だ。

ローマの時代から決まっている。

「しつ、れい？ …… ククク、ハハハハハハハハハハ！！ これは、これはいい！ 失礼、ですか、ハハハハハハ」

キヨトンとした様子から一転、執事が背もたれに身体を大きく預けて大口を開いて笑い出す。

「なんかそんな面白いこと言いました？」

「いえ、なに、竜からの求婚を断った人間が、真面目な顔で礼儀の話をされるので、つい、くくく、これは、いい」

まだ笑いが溢れている。愉快で仕方ないとばかりに老人は静かに肩を震わせ続ける。

「……解せん。爺さん、あの女。あれはたしかに俺が殺した筈の鎧ヤローだ。それがなんでぴんぴんして、あまつさえ俺に好意を、いや、特別な感情を抱いてる？ ソレがわかんねえ」

遠山が心のままをぼやく。お湯に当てられてあまり頭がうまく働かない。

「本気で仰られていますのかな？ 婿殿は帝国の出ではない……？ いやしかし、王国であれ竜の話は幼子でも知っている周知の事実のはず……、むしろ王国では竜信仰が盛んでは？」

「あー、……その、ここより遙か遠いところが故郷なんですよ。ずっと遠い、帰る方法もわかんねー場所。それで親もいなくて孤児だったもんで、学がねーんです」

何一つ嘘はついていない。

ニホンがおそらく、もう遠いこと。身寄りのなかったことに関しては何一つ、嘘はない。

「ふむ、故郷というのがどこなのかは気になりますが、孤児、なるほど。そういうことならば…… あなた様は竜に関してはどうくらしいのご存知で？」

「俺に竜を語らせると長いですよ？ 竜、ドラゴン。神話においては数多の英雄への試練や、天よりの災害の象徴として描かれる爬虫類の特徴を持つ空想の生物。西洋における捉え方と東洋における竜の捉え方は異なりー」

ピロン

【技能”オタク”自動発動】

すらすらと遠山にとっては基礎教養であるファンタジーの話を始め。もちろん早口で。

「竜は7つの命を持っております」

「東洋においては自然の権化…… あ？ 7つ？」

オタクの早口を止めたのは老人の静かな言葉だった。

「はい、7つ。人、定命の者であるならば制限があり、そして1つしかない命。竜は生まれながらに世界より7つの命を与えられ生まれてくる上位生物」

7つの命？ なにそれチートかよ。遠山が目を細めてこの言葉を聞く。

「不老。不死ではないがそれに限りなく近い完璧な命。その力は強く、”魔術式”も”スキル”も”秘蹟”すら関係なく、ただ一瞥するだけ世界に影響を及ぼすことすら可能な理の外の存在、それが竜です」

「傍若無人に振る舞い、好きなように生きる。そこに他者への思いやりや、世界への配慮など存在しない。全ては己の気分のままに、自らの愉しみのためだけに生きる、それが竜という生き物、ソレが許された生き物なのです…… そのはずでしたがね」

「……そのはずだった？」

首を傾げる遠山に、老人が視線を返す。その眼差しはどこか優しく、そして今まで遠山には向けられたことのない類の表情。

――憧憬

「ええ、ソレが竜です。だが今日、全てが覆ってしまった、ある男が竜との婚姻を断り、あまつさえ、ククク、その全てがいらぬ、と言い切ったのですから」

愉快げに老人が喉を鳴らす。

「そりゃそうだろ。俺はたしかに欲しいものがたくさんある。金も夢も力も、色々なものが欲しくてたまらない。でも、なんだ、それを他人がぼいっと用意されるのは違う。ウキウキして買った大作ゲームを始めた瞬間、エンディングが来てみる、戦争が起きるぞ戦争が」



あの時の気持ち、言葉に嘘はない。

欲望のままに。それが遠山鳴人の生きる指針であり、絶対のモノだ。

その欲望は安易な完成を決して認めない。

「ゲーム？ はて。あなた様は時折、不思議な言葉を使われる。ほほ、個人的にあなたに興味が湧いているのですが、それを聞くのは私の役割ではないですな」

「あ？」

音もなく、老人が湯船からあがり、浴槽の蓋に立つ。

そしてそのまま90度に腰を曲げ、頭を下げた。

「婿殿、この度の度重なる無礼、重ねてお詫び申し上げます」

「うわ、すげえ身体」

老人の言葉より、遠山の目はその練り上げられた身体に釘付けとなる。

どのような、一体どのような鍛錬に身を晒せば人の身体がそのような陰影を生むのか。

その身体はルネサンス期の彫刻よりも遙かに、それは神々しく。

「……あなた様をみくびり、安易に脅したこと、言い訳のしようもありません。この老骨の命までのものでしたらなんなりと、その代償に捧げます、だが、どうか、どうか、恥を承知で我が願いを聞いてはくれませぬか」

「いやいやいや、たしかにあの瞬間は俺もカチンと来てぶっ殺すつもりだったけど、今はもう、完全に毒気抜かれてるよ、やめてください、マジで。ムカつくことはムカつくけど、まあ、温泉、入れてくれてるし」

90度を超えてなんか前屈みみたいになっている老人を遠山が思わずさめる。

本心から、遠山にはもうあまり老人に対するわだかまりは消えていた。温泉、すごい。

「おお、なんと寛大なお言葉か！ では願いの方なんですが」

にっかり。

すごい満面の笑顔。どこか図々しさすら感じるような。

「は？ 待て、爺さん、アンタの詫びはいらねえけど、願いとかなんとかは別ー」

「お願い申し上げます！！ 婿殿！！ アリスお嬢様とのご婚姻、今すぐとは申し上げません、二度と力による平伏を求めることも致しません、ですが、何卒、もう一度チャンスを！！ いえ、まずはどうでしょう、おトモダチから始めては頂けませんか？！」

「と、トモダチ？」

また音もなく老人は湯船につかる。さりげないみのこなしが化け物の証左だ。

「そうです！ 友です！ このベルナル！ 初めてです！！ お嬢様にお仕えして早100年！！ その100年の中で始めてお嬢様は、他者を鑑みるということをし、今日初めて行われたのです！！」

「あ、は、はあ……」

「これがどれだけ異質なことか！！ あの竜が、あなた様を、あなた様たった1人のために矛を納めた！ あなた様に嫌われたくない、その一心で自らの欲望を抑えたのです！ これは兆しです、お嬢様が真の竜になる、いいえ、彼女は今、成長しようとしている！ 他でもないあなたという人間の存在のおかげで！」

「いや、いやいやいや、待て待て、そんな大層なことか？ なんなんだ、アイツほんと」

「竜はご存知の通り、世界のバランスを司る存在でもありません。竜の名前とはすなわち、それぞれが均衡を保つ世界の概念そのもの。"蒐集"、超然的なものが多い竜の中でお嬢様の名は異質そのもの。本来、竜にはなかつた概念なのです、何かを集め、何かを愛でて、何かを己がものする欲望というものは」

「ん？ いやまで、古今東西、竜ってのはお宝が好きだったような気が」

「む？ どの竜でしょう？ 少なくとも私はお嬢様ほど人に近い竜を知りませぬ。そう、彼女はとても、人に近いのです。欲望、何かを求める心、それこそがお嬢様の司るバランス。それは人が最も濃く受け継ぐ性質。つまり、蒐集竜とはどの竜よりも人に近く、人界に強い影響を及ぼす竜なのです！」

「あ、はい」

「お嬢様は他の竜とは違う。蒐集竜という人に近いその存在は今のお嬢様のままではいずれ、確実に歪んでしまう！ お嬢様は他の竜と同じ超越者になるべきではないのです、彼女には人が、共に並び

立てる人がどうしても必要なのです、彼女の行いを諫め、彼女に齒向かうことのできる人間が！」

「……アンタでもいいんじゃないの、それ」

そうだ。並び立つというのならば文字通り、この老人でいい。

遠山も一流ではないし、選ばれた者ではないがそれなりに鉄火場に馴染み、生き残ってきた人間だ。

故に、分かる。

この老人が生物として遥か高みにいることを、下手をすれば、鎧ヤロー、いや竜よりも……

「私はすでに人ではございません。人のままいることが出来なかった、弱者です。私ではお嬢様と対等の位置には立てない。竜に並び立つべきは人なれば」

「なにもんだよ、アンタ」

「私のことはどうでもよいのです。人よ、私は今日はあなたのその欲望に気高さを見ました。竜の威にも、超越者の圧にも負けぬ、歪み、捻れ、イカれている、しかし、あなたの姿、欲望を叶えるための辛苦すらも我がものと言ひ張るあのお姿！ 確信いたしました、あなたしかいない、お嬢様と並び立てるのは、お嬢様の友になれるのは貴方様しか！」

「う。うーん、テンションの落差がどうもなあ。俺、アイツに殺されかけたし、何より気に入らねえのはアイツは人を楽しんで試していた。トカゲ男のラザールと俺、殺し合わせようとしてた奴だぞ」

やはり、そこだ。

あの態度、今思い出しただけでもむかついてくる。

「む、ぐ。たしかに竜と残虐性は切り離せないものです。お嬢様に

もそのような面があるのは事実、しかしそれは幼子のそれです。善悪、これも人の概念ではありませんが、善悪の判断すらついていないのです、あの方は。人と共にあるべき竜なのに、それを彼女に教えてあげる人がこれまで現れなかった……　いえ、言い訳にしか過ぎないことは存じておりますが」

「ああ、なるほど。ガキの時にバッタ捕まえて足もいでアリの巣の近くに置いたり、カマキリ捕まえてケツを水に浸して寄生虫ひりだしたりして遊ぶのと同じか。なるほど、それならわからんでもないな」

少し親近感。

遠山が頷きながら答えると

「え、それは、なんででしょう、若造、お前、まじか。少し、引くわ……」

割とドン引きしている老人がそこにいた。

なんだろう、すごく裏切られた気分だ。



「爺さん、素が出てんで、素が」

言いながら遠山は少し思う。

善悪のつかないガキ。言い当て妙だ。

――興じさせる

――退屈しない

ああ、たしかに思い返してみればそんなことを言っていた気がする。

間違いを教えてくれる存在も、諫める友もない孤独な竜。

「……くそ、泣くのは反則だろ」

自分と少し、似ている、そんな気がした。事実遠山は割と自覚がある。自分の感性や考え方が少し常識とは剥離していることに。

だがそれでも、善悪の区別がつくのは一重に周りに他者がいたからだ。子ども時代にはいなかった友人。探索者になり始めて得た対等の友。

遠山鳴人が命をかけてでも、生きていて欲しいと願った2人の仲間。彼らと出会えなかった自分を想像する。

ソレがどうも、あの金髪女。いや、蒐集竜とかぶるのだ。

「…………やはり、虫が良すぎる申し出でしたな。…………あいや、すみませぬ、しかし、これだけはご理解頂きたい。お嬢様があなたに抱く気持ちに嘘はない。あの方は、はじめて対等に、誰かを尊んでおられる。あなたの在り方を尊び、あなたを想っておられる、その気持ちだけはー」

まだこの老人は諦めない。よほど、あの竜が大切らしい。まるで孫にどうしても友達をつくってやろうと努力するどこにでもいるおじいちゃんみたいだ。

遠山は、またため息をついた。

「……蒐集竜つてのはよ、ダチの作り方も知らねえみたいだな」

ああ、もう。絆されたわけじゃない。ただ、筋が違つとおもつただけだ。

「……ほ？」

「保護者がガキ同士の争いに首突つ込んで、仲直りしてくれとか、ダサすぎるだろ。本人が来い、本人が」

本人がいないのに、何を話すと言つのか。ぐしゃぐしゃと癖つ毛をいじり遠山が吐き捨てた。

「お、おお、ま、まさか」

「まあ、その、あれです。考えてみれば俺、アイツ一度ぶっ殺してるわけだし、目ん玉にナイフ突き立てて念入りにトドメ刺したりもしたわけで。……まあ、もう2度と俺を殺そうとしたり、レーザーに手を出さねえんなら、その……　まあ、お互い様なわけで」

クソ、なんか逆に恥ずかしくてキモい感じになってしまった。  
誰へ言い訳してるんだ。

遠山が誤魔化すためにはちゃばちゃとお湯をすくい顔にぶつける。

ちらり、急に静かになった爺さんを一瞥すると

「……………私はいま、猛烈に、感動しております……………　炎竜のナル  
シス野郎とのケンカを終えた時と同じ、感覚。これが、感動……………」

「あ、あの、爺さん、なんか、その静かにボロボロ泣くのやめても  
らっていいです?」

「婿殿！！ いえ、友人殿！！ 今のお言葉、嘘はございませぬな  
！！！」

がばり。マツスルジジイが遠山の肩をがしりと掴む。大きくそして職人に彫られたかのような胸板が近い。

生物としての危機感を感じつつ、遠山が叫ぶ。

「うげつ。カツよ！？ あ、ああ、嘘はいわねえです、だから、ちよ、揺らすな！？ 頭プリンになるわ！」

「おっと、失礼！！ そして、あなた様の言うことはごもつとも！！ こういうのはたしかに当人同士の話し合いが肝要！！ では、あとはお若い2人に任せます！ お嬢様、ご健闘を！ 勝ち目がありますぞ！」

「うえつぶ、て、嘘だろ、消えてる…… なんだ、あのジジイ、ランプの魔人かなんか？」

ぐわんぐわんと揺らされ、頭を抑えた瞬間、もう老人は消えていた。

なんなんだ、本当あのジジイ。

「か、かか、爺やは塔級冒険者のなかでも上澄みの中の上澄み。歩法と速度で、その、姿を絡ませるのは朝飯前よ」

「まさかの身体能力かよ。……おれ、恐ろしい相手に殺し合い挑もうとしてたな」

「か、か。まあ、でも、あれじゃ、あの時の貴様は目が離せんほどに美しかったぞ」

「……………もしかして、俺の後ろに誰がいる？」

あまりにも自然にかけられた女の声。なんなんだコイツら、なん

で俺毎回近付かれたの気づかないんだ。

それは遠山と彼らとの絶望的な実力の差を示していた。

「だ、ダメだ、振り向くな。オレだ、オレがいる」

振り向こうとした瞬間、

「WOW……」

ちゅぷり。遠山ががっくりと首を曲げて顔を湯につける。

普通に入ってきてちゃったよ。ジジイじゃないよ、女だよ。

「か、かか……、ち、違うのだ、だ……人間殿。メイド連中が今とでもお湯がいい感じに湧いているから、100年に一度の出来栄えだの、みずみずしさが感じられ肌に染み渡る泉質などと言うのだ、だから、その、決して貴様と一緒に風呂はいりたいとかそういうのではないのだ」

目が自然と隣に向いてしまう。

金の髪は結われてまとめられる。白濁の湯が隠しているだるう身体のライン。

しかし、見えてしまう真白の鎖骨や胸元、肩からその完成された美しい肉体が容易に想像できる。

「……お前んとこのメイドさん、副業でワイン作ってないか？ 毎年11月に」

なんとか目線をまつすぐに戻し、平静を装う。

あ、だめだ、無理だ、ものすつこいい匂いするもの。なんで？ 温泉の素入れた？

遠山は豪華な花のような香りに頭がおかしくなり始める。

それは間違いなく隣、肩を並べて湯船に浸かる女の香りだ。



「じゅういちがつ？　む、確かに竜大使館では早夕の月になるとワインを作るが」

「ほんとに作るのかよ……　えっと、俺、その見てねえから。ほら、目瞑ってるから、その、セクハラとか通報とか勘弁しろ」

そう、目を瞑ればいいのだ。大丈夫、冷静だ、問題ない。自分に言い聞かせる。

「せく、はら？　つつほう？　人間殿は奇妙な言葉を使うな。まあ、その、オレの身体に恥じる部分など一切ないので本来ならば何も問題ないのだが、その、貴様にはあまり見せたくないのだ」

「見せたくないなら風呂入ってくんなや」

おずおず呟く女に思わず遠山が素で突っ込む。

「……やはり、怒っておるな……。きらい、だもんな、オレのこと」  
ぴしゃりと言いつつ放った遠山にか細い声が返ってくる。いや、もう  
涙ぐんだ声だ。

やめて、ほんとやめてそついうの。遠山はかなり焦り始めていた。

「いや、待て、なんだ、その殊勝な態度は……お前、ほんとにあの  
鎧ヤローか？」

「……り、す、だ」

「あ？」

「だから、その、オレは鎧ヤローではないのだ！ 名前がある！  
お母様とお父様がつけてくれた名前が！」

ばちやばちやとお湯を叩き、彼女が叫ぶ。

「まあ、そりゃあるだろうが。あ、あの爺さんがそういや叫んでたな。えーと、確か」

遠山が頭を捻る。そう、確かあの爺さんが垂直跳びで空に向かう寸前、叫んでいた。

この、女の名前を

「アリス」

覚えていた、その名前を

「ギャオウ」

女が鳴いた。

えらく、そう、ドラゴン風の鳴き声で。

「え、今、なんか吠えなかった？」

「は、吠えてなどおらぬわ！ オレは蒐集竜！ もう大人の竜なのだぞ！ 子どもの竜のように鳴くなどあり得ぬ！」

詰め寄ってくる女、遠山は目を瞑ったまま、またつぶやく。

「アリス」

「ギャウ」

また、女が鳴いた。どこか、嬉しげな声色のような気がする。

「……………やめよ、人間殿。貴様はいじわるだ」

沈黙のあと、女がぼそりつつぶやく。

「あ、はい、すみません」

ギャオウって言った。ギャウって鳴いた。

遠山はぼんやりと考える。

「……………人間殿、爺やと何を話していたのだ」

沈黙を破るのは女の声。どこかムスツと、いじけてる風にも聞こえる。

「……………多分、お前のこと。トモダチになって欲しいんだとよ。俺が、蒐集竜とやらの」

「な！？　だ、ダメだ、人間殿はオレのツガ、イ……………そうか、こ  
ういうのがダメだったな、おのれ、しゅうしゅうりゆ……………」

ばちゃん。湯が弾ける音。立ち上がったのだろう。ダメだ、目を開けたら覗きになってしまう。

遠山が必死にまぶたに力を入れて。

「蒐集竜はオレではないか！！」

がびーんと、元気な声が響く。なんだ、コイツ、ボケて突っ込んでまたボケたぞ。無敵か？

「うわ、もうなんだよ、お前そんなキャラだった？ もっと、こう、ム力つく感じの奴だったじゃん、やめるよここでそういう無邪気な感じ出すの。念入りにぶっ殺した俺がすげー悪者みたいに見えるじゃんよ」

「ふ、ふぶん、あの徹底さは素晴らしかったぞ。2000年前の大戦期の”狩人”どもを彷彿とさせる容赦のなさ。かかか、竜殺しはそんでないとな」

「なんなのその高評価…… 正直、お前がなんでそんなに俺への好感度が高いかがやはり分からん。殺し、殺された、ソレが俺たちの関係だろ」

「……………だからだよ、人間殿」

やけに落ち着いた声色だ。

「あ？」

「……………初めてだったのだ。オレに真正面から向かってきた人間は。貴様が初めてだったのだよ。……………オレも意外だったのだ。蘇った直後、この身体を包んだのは怒りではなく興味、この魂に満ちたのは憎しみではなく、喜びだったのだから」

「もう貴様のことしか頭になかった。なぜ、貴様はオレに逆らったのだろう、何故、貴様はオレの思い通りにならなかったのだろう。一度気にするともう、止まることは出来なかったのだ。ああ、そうだ、オレは欲望として貴様が欲しいのだ。知りたいのだ、眺めたい

のだ

「……………」

「その筈、だったのだが、……もう正直、よくオレ自身もわからん。かか、100年生きていて、何故だろうな。全て思い通りにしてきたのに、貴様も力づくで手に入れればいいのに、……いやなのだ。それをすると貴様はオレを嫌うのだろう。いやなのだ、貴様に嫌われるのが、とても、……怖いのだ」

その最後の声は小さく、かぼそく。

夜が来るのを怖がる迷い子の声。

「む、ぐ……………」

気付いてしまった。

コイツは、ガキだ。



そして、コイツは俺だ。

遠山は思う。

コイツは探索者にならなかった時の自分自身だ。

世界との関わり方がわからない、他者への接し方が分からない。それを教えてもらうことも、何よりそれを学ぶ必要すらなかったのだろう。

「竜、だから、か」

「かか…… 笑い話だろう。竜なのに、オレは今どこがおかしい。病気、なのかもしれないなあ」

どこか寂しげな声だった。

ーわん！

湯煙の向こう側から彼、もしくは彼女の声がした、ような気がした。

始まらなかったぼうけん。しかし、確実に子ども時代の遠山鳴人を孤独から救ってくれた、モフモフのトモの声。

ああ、分かったよ、タロウ。

「ビョーキなんかじゃねー」

「む？」

「そりゃてめーがコミュ障極めてるだけだ。普通だよ、誰かと仲良くなりたいたい、誰かと一緒にいたい、それは正しい欲望だ」

「人間、殿？」

「鳴人だ。人間じゃねえ、名前がある。遠山鳴人。27歳、独身。趣味は読書にゲームにテラリウムにキャンプに釣りになんやらかんやら。あと自炊。夢は湖のほとりに家を建てること、だ」

「え？」

「え、じゃねーよ、自己紹介だ、自己紹介。てめえのあのお節介のジジイにも言われたからじゃねー。……俺が決めたからだ。ツガイとか婚姻とかはごめんだけどよー、まあ、なんだ、友達、友人なら、……俺も欲しい。友達、少ねえからな、俺」

「まずい、マジでキモいぞ。早口になっているのを自覚しつつ遠山が湯にまた顔をつける。」

「もっと、こつスマートに言えないものなのか。男のツンデレなど害悪以外のなにものでもないというのに。」

引かれたりしてないだろうか。もしそんな反応を取られたら心が死んでしまう。

ドキドキしながら遠山が薄目を開き、なるべく竜の身体を見ないように最大限努力しつつ様子を確認して

「な、るひと……… ふ、ふかか、ナルヒト、ナルヒト、そうか、  
貴様は、ナルヒト………」

口に手を当てて、にやにやしてる女がそこにいた。

大丈夫そうだ。

「おう、鳴人だ。で、お前は？」

「う、ぬ？」

「ぬ、じゃねえよ。俺は名乗ったぞ。で、お前は？ どの誰だ？」

まだお前の口からきちんと聞いてねえ。名前も自分で言えねえ奴と友達にはなれねえからなあ」

「あ。う…… お、オスから、名前を…… ま、まさかこれがお母様が言っていたぶろぼーず……？」

「待て、それはお前のお母さまがアナキーすぎるだけだ。コミュニケーションだ、コミュニケーション。俺は遠山鳴人、好きに呼んで、お前は？」

遠山が薄目で女を見る。なるべく身体は視界に入れないように。

「ア、リスだ」

「なんて？」

「ーっ！！」  
”アリス・ドルル・フレアテイル”！！  
それがオレの名前だ！」

一息で叫ぶように。

「ああ、いい名前じゃん。よろしくな、アリス・ドラル・フレアテイル。今日からダチだ。まあ特にだからどうこう言うこともないけど」

「ダチ……、友、お、オレに、友が…… 貴様が友に？」

「あ、まさか、嫌だった？」

やべえ、ノリノリでダチとか言っちゃった。ダサイとかのレベルじゃねえじゃん。

「いいいいいいいい、イヤではない！ 断じて、イヤではないぞ！！！ そんなわけがないのだ！ 知っている、お母様が言っていた！ お友達から始めようという奴なのだな！」

「うん、お前、一度その情報ソース、お母様を疑おうか」

「ふ、ふふふ、かかかか、そうか、ナルヒト、ナルヒト、貴様は、

ナルヒト」

「ま、好きに呼んでくれ。アリス・ドラル・フレアテイル……  
長えな。アリスって呼んでもいいか？」

「ギヤオ?! い、い、のだが、す、少し恥ずかしい、その名前は、  
そのお母様やお父様、限られたものしか呼ばない名前なのだ」

もう顔が赤いのを誤魔化そうともせず、女がもじもじと、身体を  
丸める。

「あー、イヤか。まあそういうこともあるよな。うーん、蒐集竜に  
鎧ヤローはアレだしなあ。……アリス・ドラル・フレアテイル……  
あ、そうだ。じゃあ、ドラ子で」

「どら、ドラ」

キョトンと首を傾げる女。いやドラ子。少し、遠山は見惚れる。

「あだ名、ニックネームだな。鳩村が言った、友達同士だけで呼

ぶ名前らしい。まあ、俺も友達いなかったからあだ名で呼ぶのなんて初めてだけど」

「は、はじめて、トモダチ、悪くない！ 悪くないぞ！ よい、よいぞ！ 許す！ ナルヒト、貴様にオレをどらこと呼ぶのを許すぞ！」

「ああ、どうも、ドラ子」

「ギャウ！ あ、違う、違うのだ、今のはその、鳴き声とかではないのだ！」

「ああ、へいへい。……あれ、お湯熱くなってね？ まあ、ドラ子、これ」

肌を感じるお湯の温度が高くなったような。

「あだ名で、呼ばれてしまったのだ…… これはもう、婚姻以上の関係なのではないか？ すぐ、お母様にまた相談しなければ……」

ドラコ、ドラコ、ふかか、いい、すぐくよいぞ」



「おい、ちよつ、ねえ、聞いてる？ お湯が本当、どんどん熱くなつて、んですが」

ドラ子は自分の世界に入ってしまったようだ。

遠山の言葉に反応すらない。

「ああ、なんと言う日なのだ。な、な、ナルヒトを旦那殿と呼べないのは少し残念だが…… まあよい、ここからオレの素晴らしさと凄さを見せつけければそのうちナルヒトから求婚、ギャウ…… だめだ、考えるだけのぼせてしまう」

もじもじもじもじ。ドラ子が自分の頬に手を当ててふにやふにやになつていくにつれ、はつきり温泉の温度が異様なことに。

「おい！ おい！ お湯、シャレになんねえ！！ ドラ子、俺もつ上がるぞ！ こっちみんなよ、絶対こっちみんなよ！！ 俺がつつり裸なんだからな！」

ばしゃり。遠山がお湯から飛び出る、ジャグジーでもないのに白く濁ったお湯がぼこり、ぼこり滾りはじめていた。

遠山が耐えきれなくなり飛び出る。もちろん、前を隠すタオルなどなく。

「む、もう上がるのか？ ナルヒ、……………ギャ……………」

そしてドラ子は遠山の話聞いていない。

必然、ドラ子は見てしまう。生まれたままのすっぱんぼんの男の体を。

「あ

遠山のタボリス（急所）に、ドラ子の視線がじいっと固まり。

「ギャウン……」

ばちゃん。

鳴き声をあげて、ドラ子が倒れた。お湯の中にブクブクと沈んでいく。

「嘘だろ?!?! おい、おい! ドラ子?!? ってアツツウイ?!? くそ、なんでこんな熱湯に…… ええい!!? 心頭滅却!!?」

流石にまずいだろ。お湯の中に沈むのは。

遠山は後先考えず、すぐに浴槽に飛び込んで

「ギヤアアツツウウウイイイイイ?!? ドラ子、起きろ! ドラ子さん!!? 起きて、マジで! 茹で蛸になる!?!? ジジイイイイイ!!? メイドさあん!!? 助け、助けてええええ!!?」

本当に洒落にならないお湯の温度。肌を真っ赤にやけどしつつ、  
気合いで我慢しながらお湯の中に沈んだドラ子を引き上げる。

もうお湯の熱さがわからなく、むしろ冷たいような気さえしてき  
た。

ドラ子は遠山より頭一つ身長が高い。しなやか、しかし色々なと  
ころが豪華な女の身体をなんとか引き上げ、助けを呼んだ。

「どうなされたお嬢様！！ 友人殿！！ オッフ…… 浴槽プレイ  
……ふ、若さつて奴はよ……」

飛び出てきた老人、ベルナル。

慌てた様子はしかし、湯船の中でドラ子に抱きついた形になっ  
ている遠山を見た瞬間、ふっと表情を緩め、鼻をさする。

「お呼びですか、おじょうさま、おむこどの。む、お風呂プレイ。

……ぽっ

メイドさんも出てきた。遠山とドラ子を見て、ぽっと頬を染める。

「ふざける、タコども!! あつうう、ちよ、死ぬ、マジで死ぬから、ゆで死ぬから! はよ助けるやあああああ!!」

館全体に遠山の叫びが響く。

それは帝国に竜と人界を結ぶ象徴、竜大使館の長い歴史において最も騒がしいひと時となった。

「ギヤオウ…… ふかか、ナルヒト…… ふ、か」

1柱の竜は気絶しつつも、どこかその喧騒を喜ぶかのように、熱湯の中、遠山に支えられつつふにやりと笑っていた。



14話 アリス・イン・テルマエ（後書き）

TIPS € 竜について

TIPS € 竜はそれぞれ生まれた時から”笑い声”を持っている。仔竜から成竜になるにつれ、独特な笑いは消えていくが、極、親しいもの、あるいは竜に心を許されたもので有れば、竜本来の笑い声を聞くことが出来るだろう。

だがしかし、この世界に何人いるというのだろうか。上位生物の歪みを受け入れ、壊れずに共にいることが出来るものなど

15話 メインクエスト（BADエンド仕様）

「うお、これ美味えな。なんの肉だ？」

灼熱の温泉から生還した遠山。

招かれた食事、クソでかテーブルの上には銀色の皿に載せられた  
食事がいくつも。

「ふかか、だろう？ ファノン、我がメイド長の作る料理は帝国広  
しといえど五本の指に入ろう。この肉は都市の壁の外、平原地帯に  
たまにしか現れぬ”七面豚”から数百gしか取れぬ希少部位なのだ。  
うむ、美味い」

絶妙な焼き加減のステーキ。初めて聞く生き物の肉だが、美味い。

「これは、黒胡椒に、ナツメグ、グレービーソースにはワイン混ぜ  
てんのか？ 醤油なしでもここまでコクが出るのは肉汁が美味いか  
ら？」



溢れる肉汁の中に感じる香辛料の味。

熱々の肉の脂に溶け込んだスパイスの刺激と脂自体のまろやかな味が混ざり合い、飲むように食べることが出来る。

かけられているソースも深い味わいで飽きが来ない。少しフルーティーな味は、肉ととても相性が良かった。

「む、むむ？ すまんがオレは料理の製法まではー」

「おめ、お目が高いです、友人さま。……お嬢様や執事を始め、この屋敷の方は基本、食材の良し悪ししかわからないのに！ 調味料などにお詳しいのですね！」

そばに控えていたメイドさんがぐわりと前に出てきた。

「おおう、すごいキラキラした目。……良かった、味覚の好き嫌いは同じみたいだな」

遠山は心配ごとが1つ消えたことに内心胸を撫で下ろす。食事の嗜好が全く合わないことが不安だったのだ。

「お口にあってなによりです。この胡椒は、”王国”の一部地域からしかとれない希少な香辛料でして…… よよよ、仕入れるのもそれなりに苦労しているのです」

「待て、メイドさん。もしかしてこの黒胡椒、かなり高かったりするの？ いや、黒胡椒だけじゃない、香辛料、えーと伝わるか？ こういう香り付けの為の乾き物なんだが」

おっと、まずいな。スパイスの類がもし貴重品だった場合、この味もごく一部の富裕層しか味わえないものになってしまう。

「お料理に相当おくわしいとお見受けしました！ 友人どの！ ええ、ええ！ そうなのです！ 当大使館で使われる1週間分の香辛料でおそらく、冒険都市の貴族地区以外でしたら家を建てる事が出来るほどの金額です！」

そしてその嫌な予感当たっていた。ドラ子は恐らく状況や、周囲の反応から察するにこの世界ヒエラルキーの中でも相当上位の存在だ。

故に食べられるこの味。

つまり、遠山が生活基盤を整える中、普通の市民の生活水準だと食事が合わない可能性がまだ存在しているということだ。

非常にまずい。メシがまずいのはつらい、辛すぎる、耐えられない、死んでしまう。

「……なるほど、産地が少ない、いや、航海技術の関係か？　メイドさん、もし知ってたらでいいんだけどこの胡椒やら香辛料やらの産地と、この街？　はどれくらい離れてる？　輸送の手段は？」

ニホン人として譲れない食へのこだわりが、遠山を行動させる。ついでにこの世界の技術やら地理やらも学ぶために会話の中から探ろうとして

「距離、までは細かいことは分かりませんが、仕入れ先の商人が言うには海路にて1月から3月ほどかかるとのことですね。モニターに襲われるかどうかでも日程が変わるとぼやいていましたし」

「モンスター……　　さて、まさか、あの塔以外にも怪物が出る、  
つてことか。なるほど……　　さすが異世界」

オタク知識と地頭の回転を合わせ、仮説立てる。

技術レベルはつまり、現代の基準に合わせれば大航海時代前。所  
々、中世とルネサンス期にも似ている部分もある。

あの大浴場も恐らく富裕層ゆえの施設だろう。

まずいな、庶民レベルの生活だとメシと風呂、あとトイレがどう  
なっているのかすげえ不安。

遠山が現代生活において確保された生活面の一定水準のことを心  
配しはじめていたところ、

「一つ、よろしいですか、友人殿」

「へい」

「貴方様、何者にございますでしょうか。一般常識を知らないにしては、その、妙に教養があるといえますか。……先程、故郷は遠いと申しておられたが、生まれはどちらに？」

執事からの質問。

遠山はすぐに答えることはしない。

「……その前に聞かせてくれ。この国に、異世界、転移、この辺の言葉が禁句になってたりとか、あとはそうだな、魔法とかで違う世界から人間を呼んだりする儀式があったりしねえか？」

そろそろ色々なことを考えていかなければならぬだろう。

だがオタク知識が伝える。ここは慎重に対応すべきだと。

「いせかい？ ま、ほう？ ナルヒト、それはなんだ？」

「……失礼、お嬢様、ギルドからの情報だと友人殿は冒険奴隷に身を落とす前、冒険者と戦闘になり、頭を打たれているとのこと、……ここは話を合わせてあまり刺激なさないほうが」

「うっ、くろっしてきたんですね、友人どの。おかわりもありますので、どうぞ」

「おいコラ、竜グループ。可哀想な人扱いしてんじゃねえ」

生暖かい視線を向けられた遠山が文句を言う。

だが、今の反応で可能性が絞れてきた。

異世界転生、転移のお約束、その1。

世界の常識として異世界を認識しており、また国単位で異世界か

ら人間を呼び寄せているパターン。

今回はそれには当てはまらない。つまり、今の遠山の状況はこの世界においてもイレギュラーというワケだ。

「下手に異世界やらなんやら言わない方が良さそうだな。頭の愉快な人間扱いだ……」

だとすると、適当にカバーストーリーを作らなければならない。それにはマジでこの世界へのある程度の理解が必要不可欠だ。

「む、ナルヒト、すまぬ。話にくいことを聞いたな。良いのだ、オレはナルヒトが何者であろうと気にせぬ。……それよりも貴様、これからどうするつもりなのだ？ 行く当てはあるのか？」

ドラ子の言葉に遠山が頭を回す。

正直、安全策を取るのならドラ子に甘えて、この竜大使館とやらを生活基盤にしつつ、この世界を学ぶのが安全策ではある、のだが。

「嬉しくて涙が出そうだよ、ドラ子。……んー、まあ行く当てはな  
いんだが、探さんといけん奴がいる。ドラ子、俺のあのボロい奴隷  
服はどこにある？」

今はそれよりもあいつを探さなければならぬ。

「む、あれか。……やっぱかえさぬとダメか？」

「いや、え？ なにそれどういう意味だ？ いや服が大事というよ  
りはあのポケットの中に入れていたモンなんだけど」

「というと、友人殿、仰られているのはこれですか？」

老人、執事のベルナルがお盆に載せたあるものを遠山に差し出す。

金色のプレート状の首飾りに、竜の爪のデザインの印鑑。



「おお、それぞれ。ドラ子から剥ぎ取った印鑑と首飾り。すまん、それお前ぶつ殺した時に取ってたんだよ」

「ああ、冒険者章と帰還印か。ふかか、良い良い、2つともナルヒトにくれてやるわい。オレを一度殺した報酬よ。……んむ？ 帰還印が起動していないな……ナルヒト、貴様、どうやって塔から脱出したのだ？」

ドラ子が印鑑をつまみ、首を捻りながらそれを見つめる。

「……おお、その辺も説明いるか。なんかよくわかんねえ気取った喋り方の女だ。あれ、でもなんかそいつ記憶を奪うだとかなんとか言ってたな……」

そうだ、あの妙なエルフのこともある。あいつ記憶がどーのこーの言っていたが、なんだったんだ？

遠山にはあの時のやりとりが記憶としてがつつり残っていた。

「お嬢様」

ベルナルが優しい目を遠山に向けたあと、ドラ子をたしなめる。

お前、その可哀想な人間見る目やめてくんない？

そう思いつつ、詮索を交わせそうだったのであえて否定はしなかった。

「む、そ、そうか。いや、良いのだ、ナルヒト。すまぬな。そのまま落ち着いたらで構わん。オレにとって大事なのは貴様とこうしてまた再会出来たこと、そして、貴様と、と、ととと、友になれたこと、のだから」

「お嬢様、尻尾が出ておいでです。竜変化をおやめください」

ドラ子はドラ子でその辺はどうでもよかったのだろう。

照れるように頬に手を添えながら、白い服の裾から急に生えた金色の尻尾をフリフリと振り始めている。

「む、すまぬ。して、ナルヒト。探したい者とはやはり、あのリザドニアンか？」

しゅんっと、一瞬で尻尾が消える。どういふシステムなのだろうか。

「リザドニアン…… ラザールのことか？ ならそうだ。あのトカゲさんと話したいことがあってな。ドラ子お前はきつと嘘はつかない奴だ。お前が帰れるって言ったんだ。ラザールはこの街にいないだろ？」

そう、遠山の目下の目標はあのトカゲ男だ。

トカゲ男のラザール。塔で別れたあの人？の良い奴との再会こそ遠山鳴人が自分で決めた最初の目標である。

「お嬢様、もしや、そのラザールというリザドニアンは……」

「うむ、で、あるうな。ナルヒト、そのリザドニアンのことだがな、実はオレも探していたのだ」

「マジか!? ん、いた?」

思ってもいない声に遠山が反応する。だがすぐにベルナリヤドラ子の表情や言葉にひっかった。

「そう、いた、だ。もう探してはおらぬ。正確にはあの銭ゲバ女教皇の予言が今日という日を指して以降その必要はなくなったからのう」

「……そうか、俺を探すためにラザールを探していたわけか」

瞬時にピンと来た。

そうだ、ドラ子が自分を探していたならあの時行動を共にしていたラザールが手がかりとするのは必然だ。

「その通り、ふかか、ナルヒト、貴様中々に頭の回転が早くていいのう。そう、貴様を探す唯一の手がかりはあのリザドニアンだった。オレは竜大使館の権力を用いて、ギルドや教会、さまざまな勢力に

あのリザドニアンを探させたのだがな、結局見つからなかったのだ」

「……死んでる、あの印を使って飛ばされたのが別の場所だった、なんて間抜けなことはねえよな」

最悪のパターンを予想し、遠山は無意識に声を低くした。

「ふかか、舐めるなよ、ナルヒト。竜は約束を守る、これは絶対の事実だ。あのリザドニアンは間違いなくこの冒険都市に送還された」

ドラ子是不敵な表情を浮かべ遠山へ答える。友となってもその竜独特の威圧感や、考え方に変わりはないようだ。

「例え死んでいたとて、オレは死体ですら手がかりとして求めているのだ。未だ何も報告がないというのはつまり、あのリザドニアンはオレ、ひいては冒険都市の追跡を掻い潜り、身を潜めているということだ」

「それ、割とすげえな。探すのも苦勞ー」

でんでん。

遠山の耳に響く太鼓の音。

視界に流れるのはクエストからのメッセー<sup>運命</sup>ジ

【サイドクエスト発生

【路地裏のトカゲを追って】

【目標、冒険都市アガルタ、スラム街を調べる】

「……いや、なんとかかなりそうだわ。ふう、美味かった、ご馳走でした。この礼はさせてもらう。風呂も入れて貰って飯までご馳走になった。ありがとう、ドラ子」

これ、便利だな、やっぱり。

由来がわかんねーのが気になるが今はこれに従うのがはやそうだ。

遠山の行動指針が固まった。クエストマーカー、オープンワールドゲームでそれに従うのに慣れ親しんでいるのでそんなに違和感はなく。

「ふ、かか。何、気にするでない。と、友達なのだからな、だが、ほ、ほんともう行ってしまっのか…… よ、よいのだぞ、せめて1日くらい、いや、な、ナルヒトならばもう竜大使館に住んでもいいのだぞ?」

「いや流石にそれはいいわ。そこまで世話になるわけにゃいかん」

「……………」

「んな顔すんなよ、ドラ子。もうダチだ。どうしてもやばくなったら力借りるかも知れねえし、また顔見せに来るから」

「ほ、ほんとか? ほんとにほんとなのだな?! 貴様、竜に嘘を

つくとロクなことにならんぞ」

「嘘は吐かねえよ、少なくとも友達には。まあ、多分」

「む。むむ…… わかった。またナルヒトを怒らせるのも嫌だし、貴様のことを尊重しよう」

「お、いい兆候だ。尊重つてのは大事だぜ、じゃ、俺のボロい服返してくれ。流石にこの寝巻きみてーな格好じゃまずいしな」

「む、むむ、しかしあの服は…… あ、じいや、あれを」

「は、お嬢様、既に用意してございます」

ぱちり。

ベルナリが指を鳴らす。



部屋の扉が開き、メイドさんがマネキンの乗った台車を押し入室した。

「あ、うそ、それ！」

遠山が目を輝かせる。見慣れた原色の赤がどぎつい化学繊維と怪物素材で編まれたマウンテンパーカー、防刃素材の灰色のカーゴパンツ。

遠山鳴人の探索服がマネキンに揃えられていた。

「2級冒険者パーティ、”ライカンズ”の生き残り、いや、正確には奴らの昇級調査をしていた男から買い取った代物だ。ナルヒトを探す手がかりとして蒐めた物だが…… 貴様がこれを着るのが正しいだろう?」

ニヤリとドラ子が形の良い唇を吊り上げて笑う。

「お、おおお…… ドラ子、俺は今猛烈に感動している。……2度

とコイツは着れねえと思ってたが」

「不思議な素材ですな。工房の連中が何日もこれを見せて欲しいと竜大使館に陳情していたほどに」

「ふん、ドワーフ風情にオレの蒐集品を触らすものかよ、ファラン」

ドラ子がメイドさんに視線で指示を出し、

「はい、承知いたしました、お嬢様」

竜大使館の誇るメイド部隊が一瞬で遠山を取り囲んだ。

「うお?!」

「着せ替え完了。赤色の服装は悪目立ちするのでローブをご用意してみました」

「ふかか、良い、似合うではないか、ナルヒト。そのローブはまあ、なんだ。オレからの贈り物だ、えっと、着てくれると嬉しい」

「うおおおお、これイカすな！マジかドラ子！ すごい、ビロードっぽいにすぎえ頑丈。ジェダイじゃん…… かつこよ。こりゃあデカイ借りだな。……アリス・ドラル・フレアテイル」

大満足。こんな、ローブ、しかもフード付き。ジェダイ以外の何者でもない。とてもいいものだ。

「な、なんだ？」

「ありがとう、お前の俺への施しは忘れない。ムカつく奴をぶちのめすのも、いい奴に借りを返すのも、俺の欲望だ。ありがとう、ほんとに」

「ふ、かか。……なるほど、これはいいものだな。ナルヒト、そのあれだ。オレと貴様は友達なのだからあれだぞ、何か困ったことがあったら言え。オレが助ける」

「お、お嬢様……」

「お、おー」

「そうか、心強いよ。お前も困ったことがあったら言ってくれ、俺が助けるよ」

「ふかか、文だ、オレ、文を書くからな！ 宿が決まったら教えるのだぞ！ 絶対だ、絶対ぜったい絶対だぞ！」

「ひひひ、ああ、わかったよ」

「うむ、約束だ。……爺や、ナルヒトを送ってやれ。それと、冒険都市と帝国に、知らせを。今日を以って黒髪の奴隷の搜索を全て止めさせよ。今後一切、黒髪の奴隷への詮索は許さぬ」

「は、そのように徹底させましょうぞ」

「悪いな、何から何まで」

「ふむ、惚れたか？」

にししと笑うドラ子。

「うるせえよ、鎧ヤロー」

遠山が軽口をかえす。それはもう気軽な友のやりとりで。

「では善は急げということぞ。ファラン」

「執事殿、既に外に馬車をご用意してます。御者は執事殿でいいですよね」

「うむ、ベルナル、ナルヒトを頼む。街まで送るのだ、む、そうだが、路銀はどれほど持たすべきか？ 白金貨50枚もあればよいか？」

「……すまん、白金貨50枚ってどれくらいのことが出る金額なんだ？」

「そうですね…… だいたい都市の市民の平均年収が年に銀貨500枚ですので。その100倍の金額かと。貴族街に家を建てることも容易ですな」

「ひえ」

「む、足りぬか？」

キョトンとした顔で小首を傾げるドラゴン。遠山はがくりと肩を落とした。

金銭感覚の違いだけは、どうしようも無さそうだと。

デンデン、太鼓の音がまた。

【メインくえすと』

【竜を狩ルモノ】

【ああ、良いじゃないか。竜は油断し、あなたに心を許した。狙い通りじゃないか。今の竜ならば残り6つの命もあなたに捧げるだろう】

【クエすと目標 蒐集竜の殺害】

どくん。

メッセージが揺らぐ。遠山の瞳孔が開き、抗いがたい衝動が身体に満ちる。

酔いにも似た感覚。使命感じみた殺意。

それは確実に遠山自身のものではない。植え付けられた悪意――

「どうした？ ナルヒト」

ああ、竜は気付かない。どこまでも傲慢で気高く、そして純粹なこの生き物は気づかない。

友を疑うことなど、考えもしない。そんな生き物なのだから。

遠山の手が震える。熱病に浮かされるように、その手がドラ子の白い首にふと伸びて

「…………ナルヒト？」

がしり。遠山がそれを掴んだ。にぎりしめ、潰すつもりで。



「舐めるのも大概にしろ、てめえ」

【ぎゅぶ】

矢印、

遠山の手は、友を傷付けることは絶対でない。

友を殺せと指す示す、そのクソ矢印クエストマークを握りしめ

「死んでろ」

ぐしゃり。大理石の床に矢印を叩きつけ、思い切り踏みつける。

じゃり、じゃり。遠山にしか見出せないその矢印を粉々に踏み崩した。

「トコ」

もう はびくりとも動かない。

「うわ……」

「やはり、友人殿…… いえ、いいのです、皆まで言わなくて……  
ファラン、我々は暖かく見守るのみ」

「……ナルヒト、やはり少し我が館で休んだほうがいいのではない  
か？ 悩みがあるなら聞くぞ？」

急に虚空に手を伸ばしたかと思えば、地面をふみつけはじめ、静かに笑う遠山。

そんな彼に向けて暖かな視線がいくつか。

「いや、違って」

遠山は結局、そのヤバイ奴という誤解を解くことはできなかった。

……

…

かぼ、かぼ。

昼過ぎを少し回ったころだろうか。

馬鹿みたいな大金を持たせて文通の為の紙やペンを持たせてくるドラゴンや、無表情でハンカチを振るメイドさんに見送られ出発する。

遠山は馬車に揺られていた。

「本当によろしかったのですか？ 銅貨50枚の路銀だけで。それだと場末の安宿ですら3日泊まれば尽きる金額ですが」

「ああ、充分すよ。ぼろ宿3日分だけでいって言った時のドラ子

の顔、ありゃ見物でしたね」

3日分の路銀だけもらう。そしてこの金は必ず返す。そう言った瞬間のドラ子の顔を思い出す。

背景に宇宙が広がり、ポケッーとした顔はかなり笑えた。宇宙ドラゴン。

「ほほほ、お嬢様からしたら銅貨という存在が理解出来ぬのでしよう、そろそろ大使館の庭園を抜けます。冒険都市を一望することが出来ますよ」

うららかな日差しが差し込むケヤキの林。

整地された土の道路を馬車が進む。

「お、おお……マジか、これが……」

林を抜ける。

小高い丘、そこからその街が、その光景が遠山鳴人の目に飛び込んだ。

「冒険都市、”アガトラ”、帝国において帝都に並び立つ国家の要所。第三文明、第一紀に何者かが作りし、壁に囲まれた防壁都市でもあります」

街、建物。人の営み。

冒険都市、異世界の光景が広がる。

レンガ作りの家々、都市を貫く川、一際目立つ聖堂のような建物。

そして気づいた。その街並みの光景の向こう側に壁が広がっていることを。

「壁、これ、街一つ全部壁で覆われてんのか？」

「おっしゃる通りです。約100メートルほどの高さでしょうか。壁にはそれぞれ東西南北に門が存在し、都市への出入り口となっているのです」

「水源は？　これだけの街だ。あの流れてる川か？」

「ほう……　おっしゃる通り、北のヒナヤ山脈地方から流れるウイン大河の支流が都市の中心を貫いています、生活水はその川か、地下水を汲み上げてまかなっているのです」

「なるほど、これだけ発展するわけだ。てか、あれ、塔……か？」

そして嫌でも目に飛び込んでくるのはそのデタラメな風景。

バベル島のイギリス街やフランス街の街並みに似た光景の中、街の中央には異物が聳え立つ。

塔。

天に伸びる黒い建造物。それは太く街の中央に楔が打たれているのかと錯覚する光景だ。

「ほほ、塔よりも先に水源を気にされる方はあなたくらいでしょうな。ええ、あれこそが、人界におけるこの世に残った神秘の地、そのうちの1つ」

「帝国、いえ、人類種の悲願たる制覇がかけられし神秘の土地、  
「ヘレルの塔」にございますれば」

そして、何より遠山が理解出来なかったのは、

「上が見えねえんだけど、どういう仕組みだ？」

「じつはの通り。上が見えない。」

塔は文字通り天に向かって伸びているのだがどう見ても途中で消えているのだ。

「“魔術学院”の話信じるのであれば、曰く、塔はズレている、だそうです」

「ズレている？」

「ええ、ここより異なる場所につながっている、人界でも竜界でもない遠く離れたどこか、でしたかな？ 故に外からでは塔の全容は目では確認出来ない、と。おや……：そういうえはあなたさまも似たようなことを先程おっしゃられておりましたな、いせかい、ふむ、異なる世界ということですかな？」

「おっと、なーんか俺、予想ついてきちやっただぞ」

「ほほ、もしかあなたさま、塔の上からやって来られたのですか？  
ここではないどこかからの旅人……　ほほ、これは失礼、私もこれで塔級冒険者の末席を汚すもの。ロマンがつきぬものでして」



「ロマンが嫌いな男はいませんよ。俺もあの塔の上に何かあるか気になりますね」

「……おとぎ話を信じるのであれば、ヘレルの塔の頂上には”全て”があるのだそうです」

「異なる場所がどうのこうのって話じゃなかったですっけ」

「ほほ、それはいわゆる大人の話。私のこれは幼子が子守に聞く”天使教会”が伝える御伽噺の類です、この世界を創りたもった”天使”。それが手慰みにつくったのがあの塔。天使の試練たる塔の制覇者には全てが与えられる、でしたかな」

「子供向けのおとぎ話にしてはいやに、なんか、くすぐりますね、ロマンを」

「ほほ、ロマンは大事ですので」

老人と探索者。カポカポとどこか心地よい馬のひづめの音。

海外旅行にでもきたかのような高揚感。ああ、すげえ、ファンタジーの街並みだ。遠山はその光景を噛み締める。

ゆっくり、ゆっくり丘を下りながらその都市を眺めつつ時間がのんびり流れていった。

【メインクエスト はっせい】

【帰還】

【クエスト目標 ”ヘレルの塔”を制覇する】

「……きなくせー」

「ほ、なにか？」

遠山が冷ややかな目で景色の中に混じる塔を眺める。

すぐに、そのメッセージは流れて消えた。

15話 メインクエスト（BADエンド仕様）（後書き）

< 苦しいです、評価してください > デモンズ感

いつもありがとうございます。

## 16話 サイドクエスト【路地裏のトカゲを追って】

「友人殿、お嬢様からはいつでも困ったことがあれば頼ってほしいとのご伝言をこれでもかと伝えられておりますので、お困りの際はいつでも、竜大使館へ」

御者台から降りた遠山へ、ベルナルのどこか優しい声がふりかかる。

目的地へ到着したのだ。

「いやいや、何から何まで助かりました。ドラ子、いや、蒐集竜殿にもよろしくお伝えください」

御者台へ向けて頭を下げる。

ついでに馬車を引いてくれたでかい馬にも礼を言いながら首を撫でた。手のひらに感じる馬の肉と皮、生命が伝わってくる。

「ブヒヒン」

満足そつに体を震わせる黒馬、まあ気にすんなよ、また運んでやるぜ、と言ってくれていたらいいな。

「ほほ、これはこれは。我が愛馬、ブエノスが初対面の人間にタテガミを触らせることは滅多にないので……友人殿、あなたであればあまり心配はいらないかとは思いますが、しかし、冒険都市はお広うございます。さまざまな種類の人間がいる故に、ゆめゆめご油断召されるな」

「ええ、わかりました。ベルナルさん。じゃあ行きます。また遊びにいくんでそのときはよろしくお願いします」

「ほほ、あなたさまに天使と我らが竜の加護が在らんことを」

御者台のベルナルがおでこに人差し指を当て頭を下げた。この世界の社交辞令だろうか。

「ええ、ベルナルさんにも、フォースの導きがあらんことを」

ならば俺もと、遠山が自分が知りうる中で最高にカッコいい社交辞令を決める。

May the Force be with you。

「ふおーす?」

「おっとすみません、なんかそのセリフ言われてこのローブ着てた  
ら言わないといけない気がして。じゃあ、これで」

かばかば、ブエノスのでかい蹄が石畳みを鳴らす。

馬車がゆっくりと、広場を進み始める。

「ええ、ご無事を祈っております、それでは」

遠山はしばらくその馬車を見送り、そして辺りを改めて見回した。

「すげえ、マジでファンタジーじゃん」

そこには、異世界の光景が、いや、遠山鳴人は確実に異世界ファンタジーの光景の中にいた。

「奥さん、おくさん！ 今晚の夕飯にうちの野菜はどうだい？ 都市近くの農場から朝、仕入れた新鮮なガイモとトマトだ！！ おつと、アポルもあるよ、どうだいひとつ？」

「うーん、このアポル、いい色だけでも銅貨7枚は高いわねー」

広場に広がる沢山の出店。

「そこゆく冒険者さん！ 鉄の防具は要らんかね？ 工房から特別におろしてもらった一品だよ」



「うお、本物か？ 印章もついてんな……」

「はいはいはい、今ならこれが銀貨9枚で君のもんだよ？ 今ならほら、平原のホーンボアの毛皮のポンチョもおまけしちまう！ 買わねえんなら他の冒険者さんを当たるさ！」

「待て待て待て！ くそ、銀貨9枚…… パーティの共有貯金使えば…… おっさん、少し相談してきたらダメか？！」

「道ゆくみなさん、寄ってらっしゃいみてらっしゃい！ 今日皆さんに紹介するのは、沼オークの内臓から創り出したこの霊薬だ、これを怪我にひとぬりすれば魔術式やスキルも青ざめるほど1発完治！」

怪しい出店に、威勢のいい商人。武装した人間が店を冷やかしたり、主婦が買い物をしたり。

るつぽ。

さまざまな人間で賑わうその広場、この都市が帝国とやらの要所だというベリナルの言葉がはつきりと理解出来た。

「すげえ活気だな……　　バベル島の祭りの時みたいだ。やべ、ワクワクしてきた。オープンワールドゲームのチュートリアルが終わった直後だな、1番たのしい奴やん」

オタク知識によるお約束で言えば、ここからは自由行動。

何をしてもいい。メインクエストを進めようが、金策に走ろうが、世界を片っ端から探索し回ろうが全て自由だ。

いや、もとより人生だって同じことだ。

仕事やら家族やら責任やらなんやらでつい忘れてしまっが、本来、人は自由だ。どこへだっていけるし、なんにだってなれる。

「……ま、前のところで俺は好き勝手やったしな。ここでもそのまま、欲望のままに、ってか」

雑踏を避け、数多の出店が並ぶその広場の中心に向かう。

泉だ。翼の生えた女神っぽい像を中心にわくでかこつた人工の泉がある。

「さて、考えることは山ほどあるが、まずはシンプルに行くか」

泉のそばに置いてある木のベンチに腰掛け、静かにつぶやく。

この状況下において、遠山は改めてその情報量の多さに驚く。

異世界、竜、生死、国、言語、貨幣 e t c ……

だがあえてそれらについて考えることを一旦やめた。

「まずはラザールだ。アイツを探す。クソ矢印、起きろ」

【サイドクエスト】

【路地裏のトカゲを追って】

【クエスト目標、冒険都市 スラム街にてレーザーを探す】

言葉の通り、異世界の雑踏の中メッセージが世界に浮かび上がる。

矢印が、向かうべき道、広場の出入り口らしい場所を指し示して

「この矢印も信用ならねーが、まあ、手がかりはこれしかない、か」

さっきドラ子のところで踏み潰したから出てこないかと思ったが大丈夫らしい。遠山が立ち上がり、その矢印を追おうとして

「おっと」

「あ、い、いめんなわさ……」

とすつ。

人にぶつかつた。考え事をしていたせいか接近に気づかなかつた。

よれたハンチング帽を被つた少年だ。ぺこりと頭を下げ、足早にその場を去つてゆく。

まあ、いちいち気にすることでもないか。奇しくも矢印の指し示す道と、その少年が去つていく方向が同じで――

【サイドクエスト 更新】

【目標 スリを捕まえる】

「は？ スリ？」

「っ！？」

遠山が突如流れたメッセージに間抜けな声をあげるのと、ぶつか

ったハンチング帽の少年がびくりとこちらを振り向くのは同時だった。

「……………」

遠山がふと、懐を確認する。あるはずのもの。即ち、ドラ子から貰ったおこづかいがなくなっていて

「……………っ!」

振り返った少年と目があり、少年が一気に駆け出した。

「あー、ほいほい、なるほどなるほど。海外旅行とか行ったら気をつけるって言うよなー……………ん待てィ!! クソガキ!!! 止まれコラー!!!」

鬼の形相に切り替わる。チベットスナギツネのような凶相が、スリにあったパニックと怒りでそれはもう見るもおぞましい顔になる。

「くそ、気づかれた！」

駆ける。街並みの中、行き交う人々をすり抜けて。

「なああにが、気づかれただ、クソガキ！！ 止まれ！ ほら、今なら指の骨で許してやるから！」

距離は近い。

スピードは遠山の方が速いが、少年はすばしこい。

雑踏の中を泳ぐようにすいすいっと駆け抜けていく。

「チツ、冒険者、だったか。しくじったな」

まだだいたい余裕がありそうなスリの少年が後ろを確認しながら吐き捨てる。

「てめえ!! さっきのオドオドしてたのは演技か?! 許さん!  
! 足の骨ペキペキにしてやる!」

遠山はもう頭が茹で上がっている。自分のモノを盗られるのはこの男にとって容易にキチガイスイッチが入るきっかけの1つだ。

少年が路地にすいっと、入り込む。

遠山も急停止、こけそうになりつつも石畳みを蹴り路地に入り込む。

「参ったな…… 思ったより、速いや、リダに怒られるけど、仕方ないな」

一直線。

置かれた荷車を少年がかるやかに、跳び箱でも飛ぶように飛び越える。



「おんどりゃあー!!」

遠山は勢いのままその荷車を蹴り飛ばし、少年を追う。

「うわ、捕まったらやばそうだ」

「ヒビヒビヒビ、どしたあ!? クソガキ、ペースが落ちてんぞ!  
! 終盤の追い上げが課題であれば根性が足りないのかもしれないかもしれませ  
んねえ!!」

体力、速度。走ることが仕事なのは自衛軍だけではない。探索者  
も最後の最後にモノを言うのは基礎体力だ。

2流ではあるが、遠山も鍛えることには真摯に向き合ってきた自  
負がある。

路地。

さまざまな箱や、ゴミの山などの障害物を少年は軽業師のごとき身軽さで乗り越える、遠山はやばい形相でそれを跳ね飛ばしたり、蹴り飛ばしたりして進んでいく。

「厄介だな…… まあいいや」

徐々に縮まるその距離。

驚異的な末脚で遠山が、ついに手が届く範囲まで距離を詰めた。

ギタギタにしてやるぞ、コソ泥が。

「おら、つかまえ、た!!」

少年の首ねっここに手をかけようとして――

「スキル・セット」

たしかに聞こえた。

アドレナリンと酔いが混じった高揚感の中、少年期特有の美しい、声変わりを迎える前の透き通った声だった。

「アクロスピード」

フツ、一瞬のことだった。

指先が少年のハンチング帽のとすりと触れたその瞬間。

「え、スキル？　あり？」

少年が消えた。

遠山の手は空振る。

「悪いね、旅人さん、いや、冒険者さん。ちび達が腹すかしてんだ」

声がした方を見上げる、そう、上だ。上から声はふりおりてきた。

一瞬で、少年は路地の上、建物の屋根まで跳んだのだ。

8メートルはありそうな、屋根の上に。

そのまま少年は屋根の上を走り、跳び回り、あっという間に見えなくなってしまうた。

「はあ?!?! 屋根の上に?! クソ!! おまわりさん! ……  
はいねえんだった。あまり目立ちたくねえし、矢印!!」

ピロン。

予想通りだ。スリの姿は見えなくても矢印がきちんと屋根の向こう側に飛び跳ねている。

「ヒビヒビヒビ、クソガキがあ。探索者のモンに手を出した生き物がどうなるか、思い知らせてやるぜえ」

遠山は気付かない。少年が逃げた先、そして当初向かおうとしていた場所、スラム街の方角が同じだったことに。

竜からもらったロープをはためかせ、探索ブーツに力を込めて遠山が異世界の街並みをゆく。

昼過ぎ、わずかに日が傾き始めるがまだ1日は始まったばかりだった。

……  
……

…

ふう、危なかった。

あの旅人、いや、冒険者かな。

かなり出来る奴だ。スキル抜きでも、スリをして追いつかれかけたのは久しぶりだ。

「結構、入ってるな……　クズ肉の串焼き、全員分買えそうだ」

俺は懐から仕事の成果を取り出して、その皮袋の重さを確かめる。

屋根を何個か駆け抜けて、たどり着いたそこは俺たちの場所だ。

スラム街。俺が生まれて、そして死んでいくだろう暗くて臭い場所。

まともな人間、少しでも常識ある帝国の人間ならば冒険都市のスラム街には近付かない。

まともに生きているやつが欲しがるモンなんか何もなくて、  
まともに生きている奴から何かを奪おうとしてる連中しかいない場  
所だから。

親の顔は知らない。

多分、冒険者と、色街の女かなにかだと思う。リダやニコ、仲間  
たちや他のちびすけも同じだから俺もそうなのだろう。

「帽子、蒸れてやだな」

髪の毛の色がここでは珍しい色らしいから。

いつもスリをするときはこの格好だ。リダやニコとも違う。俺も  
茶葉や金色が良かったな……

スラムの広場の隅っこ、座り込んで帽子で顔を仰ぐ。

リダとの待ち合わせは夕方。それまでにもう一度くらい仕事して  
こようか。

「……いや、やめとくか。アイツ、スラムの外、まだ探し回ってる  
かも知れないし」

久しぶりに背筋に冷や汗をかいた。

捕まっていたらどうなっただろう。スリをするとき身体をぶつけ  
てわかった。

まるで岩だ。まるで壁だ。

冒険者相手にもこれまで同じ手口で何度も仕事をしてきたけど、  
身体のツクリがまるで違う。

「いいモン、食べてるんだろうな……」

いいじゃないか。アイツは多分冒険者だ。戦える人間で自分で金



を稼げる恵まれた奴だ。

なら、少しくらいそんな恵まれたやつから俺たちみたいなのがおこぼれをもらっても悪くない筈だ。

俺は誰に向けてか分からない言い訳を頭の中でぐるぐると。

「おお？　なんだあ？　リダのこの黒髪ヤロウじゃねえか？」

「ほんとだ、リダはどうした？　いつつもパクミーのフンみてえにくつついてるのによ、ついに見捨てられたか？」

「ぎゃはは、黒髪に茶色の瞳なんて気味わるいからなあ。リダの野郎も物好きだぜ、ほんと」

だから、そいつらが近づいたことに気づかなかった。想像以上にあの冒険者から逃げるのに神経使ってたみたいだ。

「別に、リダとは別行動なだけだ。あんた達に迷惑はかけないよ」  
さりげなく、仕事の成果。たくさんの銅貨とピカピカした何かが入った革袋を懐にしまう。

たのむ、たのむ、いつもみたいに間抜けヅラの節穴のままいてくれ。

年上のグループだ。俺たちみたいなみなしごにはそれぞれグループがある。

奴らはその中でもタチの悪い奴ら。噂では”カラス”から仕事を貰ったりしてると聞いていたことも。

「んん？ お前、今なんか隠したな？ おい、見せて見るよ」

くそ、最悪だ。コイツらは自分より弱いみなしごから平気で食べ物や、盗んだ金を奪うような奴らだ。

リダもいない、いつもみたいに誤魔化すことは出来ないだろう。

スキルもダメだ。アレを使えるのは俺には1日に1回が限界。広場を見回す、大人の浮浪者はニヤニヤしてるか、そっと目を逸らすかのどちらかしかない。

「……なんでもないって。オレ、忙しいから」

「まあまああま、待てよ、黒髪」

肩を掴まれる。あの冒険者から感じた力とは大違いだ。がそれでも俺より確実に強い。掴まれた肩がみしりと音を立てた。

「……なんだよ」

「なあ、おい、お前ら、この場所ってよー、俺の場所だったよな？」

歯が抜けたマヌケヅラが、にいいと笑う。

「は？」

「おお、そうだな、ルー。ここはお前の貸し座り込み場所だな。昨日からだっけ？」

「そうそう、ここで座ったり、立ったり、誰かを待ったりとかよ、勝手にされちゃあ困るんだよ、商売だからさあ。なあ？ 黒髪、お前も嫌だろ、仕事したのに金もなんも入ってこないってのはよ」

周りの同じろくでなし連中も同じように、ヘラヘラ笑い始める。アイツらは笑ってるだけなのに、俺は笑えない。

やばい。この感じ。

「なに、何が言いたいんだよ」

声は裏返ってなかっただろうか。

やばい、やばいやばい。コイツら、まさか

「あ？ てめえ頭悪いなあ、オイ。リョーキンだよ、リョーキン、この場所だよ、てめえ座ってたよな？ だからそのリョーキン払えよ」

周りの奴らが大笑いし始める。

クズが。冗談じゃない、コイツら見てやがった。おれが隠したのが金だつて気付いたんだ。

「……金、持っていないんだ、知らなかったのは悪かった、謝っぐえ？！」

腹、殴られた。息が、出来ない。

「ブツブツうっせえんだよ、ガキ！！ 胸元になんか隠してるんだろっが！？ てめえが

思わずその場にうつ伏せに倒れる。腹を丸めてないと中身が全部出てしまいそうぞ。

「おー、ルーが切れた。黒髪、さっさと出すモン出した方がいいと思っぞー」

「お、コイツ、なんだ？ 女みてえな顔してやがるな。ひひひ、なあ、どうする？」

「やめとけ、お前の悪い趣味だ。俺は本物の女がいい」

「じゃあ、俺だけで楽しませてもらうかあ？ おい、こっちこいよ、オラー!!」

「ひ、ヤダ！ この、さわんな！」

俺があばれることに腹を立てたのだろう。

男の顔が一気に険しくなり

「この、あばれんな!! オラ！ 金と、てめえで楽しませてもらうぞー」

「ぶえっ?! い、やだ。これは俺の稼ぎだ…… 仲間にメシを…  
ぶげ」

蹴られた。顔、歯、痛い。

口の中が、じゃりじゃりする。

「けけけけ、なーにが稼ぎだ！ 偉そうなこと言ってるじゃねー。  
おら、さっさと！、よ、こせー!」

「ゲボツ!! ぐえ!?!」

また腹。蹴られた。

何も食べてないから、胃液しか出ない。

痛みと怖いので頭がいつぱいになる、その場から這って離れよう  
としたけど、背中を踏みつけられて動けない。

「おっ、あった、あった。ずっしりしてんじゃねーか!… ヒュウ

「！！ こりゃ今日はお楽しみだな！」

服を弄られる。盗られた。

俺の、金。

「臨時収入ゲーツ、酒場で女も引っかけれるかもなあ」

「バーカ、スラムの女なんか怖くて手出せるかよ！ 色街には少し足りねえが、酒なら充分飲めるなあ、おい！ ……ん、こりゃ、なんだ？ 銅貨以外のモンも入ってるな」

「お？ なんだ、これ、ピカピカして…… 金色……？ お、おい、ルー、これ、冒険者章じゃね？」

そいつらの1人が皮袋の中身を数えていた時、なにか、銅貨以外のものを取り出していた。

首、かざり？



「バーカ、お前なわけねえだろが。金色の冒険者章って言えば塔級冒険者の色だぜ？　こんなチンケナ黒髪ヤローが塔級冒険者からスれるわけねーよ、大方偽物だろ、質屋にでも入れて酒の足しにしよーぜ」

「ま、て……　それは、ちび、たちの……」

笑いながら去っていくことするそいつら、まて、ふざけるな。

その金がないと、メシが買えない。

ちびすけ達はそろそろ何も食べてなくて3日になる、それだけはダメだ。

「あ？　まーだ意識あったのか？　……どーする、殺しとくか？」

「いや殺したらリダがめんどいぞ。もう何発か蹴って骨でも折つとーぜ」

「あー、そうすつか、でも、その前に、やっぱりロイツちょっと遊んでいていいか？」

「手短にな。まあ、その心配はいらねーか」

「うるせーよ」

背筋が、ぞわり。

やばい、まじでやばい。

「ぐくそ、ちく、しゅう」

「ったく、手間かけやがって。ま、これに懲りたら素直に金出せよな。頑張つてまたスリに精を出してくれ！ またもらいにきてやつからな！ な？」

「終わったあと折るのはどーがいい？ 足にするか？」

「いや、足だと死ぬかもしれねーから腕でいいだろ、腕で」

「うーし、やっか」

「やめ、ろ、やめろ、やめ、くそ、返せ、返せよ！ それは俺の、俺の金なのに！！ やめろ、触んな！ 触んなよ！」

叫ぶ。もう俺の頭からそれがスツた金であることなんて消えていて

「ぎゃはははは、バーカ、てめえがスツた金だろうが！ まあ、今はもう俺のモンだ。よえーやつは強い奴に全てを奪われる、それがこのルールだ。授業料としてもらってくぜ」

「くそ、クソクソ！ 俺の、俺の金！！ ちびすけ達が、待ってるのに、俺の、金ー！！」

返せ、返せ、返してくれ。

なんで、俺たちばかり、なんで。

「かねかねかね、うっせえなあー！　だ、か、ら！　これはもう俺の金なんだよー！　おら、こっちこい！　なあに、てめえもすぐたのしくなるからよ、もしよかったら、ひひひ、俺のペットにしてやってもいいぜえ？」

そいつらがまた、俺を蹴ろうと足を振り上げる。

1人は汚い唇をべろりと舌で舐め回している。

痛みとそれ以外の恐怖に身体を反射的に丸めて

「ひっ?!」

不思議なことに、予想していた衝撃は来なかった。

恐る恐る、目を開ける。

3人の年上のみなしごども。

そいつらの後ろに、人が立っていた。

上等なローブを着込んだ、男。

につこり。笑ってるのに、その顔が俺は怖くてたまらなかった。

「あ？　なんだ、おまー」

「いや、それ俺のお金」

「は？ へぶらっ?!」

人が吹っ飛んだ。

みなじごの1人、俺をめちゃくちゃ蹴っていた奴が顔面を凹ませて壁に激突する。

ずるり、そいつは壁からずり落ちて動かない。

「あ、え？」

「それ、俺のお金なんですがあああああ!!」

「げぼろっ?!?!」

いきなり気でも違ったかのようにロープの男が叫びながら、もう1人の奴の足下に潜り込み、ひょいっと麦袋でも抱えるように持ち上げて、そのままぶん投げた。

また壁に叩きつけられ、そいつも動かない。

人って、そんな簡単に、ぶっ飛ぶんだ。

蹴りまくられた身体の痛みをよそに、俺はそんなことをぼんやり思った。

ああ、これは、死んだな。ごめん、リダ、ニコ。

俺はそのまま、全てを諦めて目を瞑った。せめてあの男の怒りが俺の仲間達に向かわないようにと祈りながら。





16話 サイドクエスト【路地裏のトカゲを追って】（後書き）

< 苦しいです、評価してください >      デモンズ感

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さー！

下にTwitterアカウントあります、更新告知などしてるので  
ぜひフォローしてやってください

## 17話 スラム街の交流

「てめえ！！ 俺らに手を出してタダで済むと思うなよ、俺らの後ろにはカラスがついてんだ！！ おい、おい、やめろ、よせ！！」

「カラス？ 意味わかんね、それが今のお前を助けてくれんのか？」

3人組の最後の1匹。イキるのか怯えるのかどっちかにしてほしい。

「ひ、ひぎ？！ や、やめー」

思い切り首を掴み、腹に膝を入れる、くの字に折れ曲がり下がった後頭部を掴む。

「はい、いってみよう」

「はな！ きちゃべー」

そのまま壁に野郎の顔面をぶつけて潰す。

遠山がつぶやく。

「よっわ、え、死んでねえよな？」

ずるりと、男がうつ伏せに崩れる。

あまりにも手応えが無さすぎる。まだ18くらいのガキっばいとはいえ全員遠山より背は高い。

なのに、心配になるほど呆気なく全員ぶちのめしてしまった。

あまりにも力が弱い、なんだこれは。

「よし、息はしてるな…… うん、まあこれで死んだらためえら

が弱かったってことで」

白目剥いて気絶している3人を引きずり、一箇所に固める。壁際に積んでおけば邪魔にもならないだろう。

「にしても、軽いなマジで。うーん、……栄養が足りてねえのか？  
にしては身長は高い……だが背丈の割には肉は薄いのか？ う  
む」

片足を掴み、朝のゴミ出しくらいの気軽さで人間を3人山積みにした遠山が首を捻った。

「ゲホッ、ゲホ…… あ、アンタ…… どうやって」

「お、サイフみつけ。よかったよかった。あ？ よう、クソガキ。いいザマだな。この様子じゃあトンビに油揚げを、ってやつか。たしかにめえにスられたコイツは返してもらったぜ」

「……うぐ。……やねよ」

「あ？」

「……スリしてる時点で、覚悟は出来てる…… 殺すんだろ？  
一思いにやってくれ、ちくしょう……」

「へえ、クソガキ。コソ泥はコソ泥なりのプライドがあるわけだ。  
なるほどなるほど」

「……羨ましいよ、アンタみたいに強い奴が…… 俺もアンタみ  
たいに強けりゃ、くそ……」

「ふん、コソ泥に褒められても嬉しくねーな。それに俺は別に特別  
強いわけじゃねー。どう考えても相手が弱すぎだ。まあ、そんなよ  
えー奴らにボコられてるためえが1番ミジメだけどな」

「……くそ、くそ」

さて、どうしたものか。

正直、あの間抜けヅラ3人をボコボコにしたことで、火のついていた遠山のキチガイスイッチはだいぶ落ち着いていた。

それに、スリの少年のその有様。かなり痛ぶられたようだ。顔中青あざ、擦り傷、出血。

「これじゃ弱いものいじめだな……」

捕まえたら絶対にボコボコにしばき倒そうと思っていたが、あまりにも傷んでいるので少し考える。しかも、このスリ、かなりー

「……おい、コソ泥、お前、歳は？」

「ゲホツ…… 11だ…… なんだよ、歳の数だけ骨でも折るのか？ へ、冒険者らしいやり方、だね」

ガキじゃん…… 小5じゃん。

遠山は偉く覚悟が決まっているガキを見て本格的に悩む。

めっちゃくちゃ、やりにくい。

さっきのめした奴らみたいに背丈があったり見るからにクズの雰  
囲気であれば気持ちよくぶちのめせるが、これはやりにくい。

顔立ちも幼く、帽子の脱げたその姿から顔もよく見える。

整った顔だ。目はまんまる、鼻は小さいが形が良い。唇もツヤツ  
ヤして、まるでー

「お前、男か？ それとも女？」

走り方や運動性能、骨格から男だとは推測できるがあまりにもその顔立ちが中世的で判別に迷う。

女といっても充分納得できる顔だ。男でも、成長したらモテモテだろう。羨ましい。

「俺は、男、だ……　くそ、アンタみたいに鋭い目だったりすれば俺も舐められねえのに……」

「おお、オブラートに包んだ表現どうも。はあ、なんかやりにくいなあ」

遠山が地面にはいつくばったままの少年のもとにしゃがみ込む。なるべく視線を合わせて、

「お前、なんで俺から金をスツた？　スリなんざいつかこうなるのがわからねえのか？」

少年に問いかける。



あることを確認するために。

「へ、へへ、表の、真っ当に生きてるアンタにわかるかよ、ネズミの死体を食べて飢えを凌ぐ辛さとか、自分より小さなちびすけが、昨日までにいちゃんにいちゃん言ってたちびが、飢えて死ぬ時の気持ちかわかるのかよ！！ ゲホツゲホツ！！」

「リダやニコと違って俺には頭も愛嬌もない…… だから、スリでも、なんでもして、金を稼ぐんだ！ アイツらに腹いっぱいーゲホツ！！」

ヤケになっている。目を細め、自重気味に唇を歪めて少年が叫ぶ。

痛々しくもあり、どこか気高くもある。

だが、どちらにせよ薄汚い盗人であることには変わりない。しかし、それでいてガキでもある。何も知らない、ガキだ。

「あー、もういい。わかった」

やはりか。

遠山はどんどんやりにくくなってきた。

思わず、顔を覆う。

聞こえていたのだ。

矢印の導きに従い、街の表通りから大きく外れたこの廃墟じみた街並みに入った時、少年を見つけて、忍び寄っているときに聞いてしまっていたのだ。

この少年がなぜ、スリをしてるのか。今はもう白目剥いて動かない奴らとのやり取りを遠山は息を潜めて聞いていた。

「……はあ、どうしたもんかなー」

ムカつく奴を、ぶちのめすのも遠山の欲望だ。ならばそこに嘘をつくつもりはない。

だが、普段なら身を焦がす衝動であるそれ、遠山の欲望はいまいちやる気がなかった。

「ルカ?!?! ルカ!?!」

「ちょ、嘘でしょ? ルカ!?!」

「あ?」

どうしたものかと頭を悩ませているそこに、新しい声。

少し低めの少年の声と、甲高い少女の声。

「リダ…… ニコ…… じゅん…… しくじった」

「ルカ……！？ ちょっと、そのアンタ……！ ルカになんてこと……！」

ショートボブの赤毛の少女、目のつりあがった気の強そうな少女だ。年はおそらくこのスリガキと変わらない。

ボロ布のスカートとチュニツクの粗末な格好。

面倒くさいことになってきたぞ。

遠山が少し顔を顰める。たしかにこの状況、側からみれば遠山が少年をいたぶっているようにみえなくもない。

そしてあの2人の少年と少女、様子からしてこのコソ泥の仲間だろうということは想像出来る。

さて、どうしたものか。遠山が対応を少し考えていると

「待て、ニコ…… 怒鳴るな。周りを良く見ろ」

少女を、嗜めたのは少し大人びた様子の刈り上げヘアの少年だ。

浅黒い日焼けした肌と、切長の目が年齢を少し高めに見せている。

「はあ?! 周り……? あ! あの連中…… 年長の、この前  
カラスから仕事貰ったとか言いふらしてた下品な連中!」

少女が山積みになって白目向いてる奴らに気づく。

「アイツらが倒れてて、ルカが倒れてる、そしてその兄さん、服装からしてスラム街の人間じゃあない筈だ…… そういうことか。ルカ!! お前、またスリをしたのかよ!!」

大声で刈り上げの少年がスリガキに怒鳴った。

え、ええ…… どういう思考回路でその結論に行き着くんだ？

遠山が黙って様子を見守る。

「え、ちょ、どう言うこと?! リダ、説明しなさいよ!？」

「簡単な推理だ。倒れてるのがルカだけじゃなく、あのボンクラ全員が倒れてること。無傷で服装のいい表の住人がいること。どう考えてもルカじゃあのボンクラどもには勝てねえ。状況から考えて、大方ルカはボンクラどもからスリの獲物を横取りされかけたんだ、そこにルカにサイフをさられた兄さんが現れ、ボンクラどもをのめしてくれたんだろうよ」

「お前、賢いな」

少し遠山は笑っていた。早口で語られたその少年の予想は全て当たっていた。

「え、じゃ、じゃあ、あの人、ル力を助けてくれてたってこと？  
ご、ごごめんない！！ あたし、勘違いしちゃって！！ 恩人  
に乱暴な言葉を！」

少女は思ったより素直な子らしい。涙目になりながら頭を何度も下  
げてくる。

「ぐ、つ、都合のいいこと言ってるのはわかってる！！ その服装、  
一端の冒険者か旅人さんとお見受けした！！ 頼む、そのバカは  
俺の弟分なんだ！！ 弟の粗相は俺の責任だ！！ スリの落とし前  
は俺に！！ 全て俺にむけてくれ！ 殴っても蹴ってもいい！」

刈り上げの少年は意を決したように地面にずさりと、跪き、あたま  
を思い切り石畳に擦り付ける。

土下座に近い格好だ。

「や、やめろ、2人とも、なあ、アンタ、俺だ、悪いのは全部俺な  
んだ、だから、殺すなら俺だけにしてくれ。頼む、ムシがいいのは

わかってるから、2人はいい奴なんだ、だから……」

ポロポロのスリガキが、地べたを這い、身体を持ち上げて遠山にか細い声を向ける。

「ルカ！！ てめえは黙ってる！ 兄さん！ コイツらの中で年長は俺だ！ 頼む、俺1人でどうにか、どうにか！」

「ちよ、待って、まってよ、アタシやだよ！ ルカもリダもヤダ！ しんじやだよー！！ うわーん！！」

地べたに頭を擦り付ける短髪の少年、ぼろぼろになり、涙を流しながらも自分の行いの責任を取ろうとするスリのガキ、そして2人をおろおろと見て、大泣きするショートボブの茶髪の少女。

3人の、遠山からみれば児童ともいえる子供たちに囲まれ、泣きかけの声で懇願される。



遠山は思わず顔に手をやり

「せ、せりてくうう……」

「こんなん、無理だろ。」

完全に毒気を抜かれた遠山はため息をつきながら皮袋の中身を確認していた。

「ここで買えるメシっていくらするんだろつか、と考えながら。」

……  
……  
……

「お、俺は、夢を見てるのか、ニコ、これ夢か？」

「わ、わわかんないわよ！ アタシだって何がなんだか！？」

「……………つまそっ」

少年、少女は大きく目を見開いて呻いた。

スラム街の中心区、違法な店、主に冒険都市で真つ当な商売が出来なくなった人間や、そもそもハナからまともな商売をする気がないものが集まる出店地区。

「へい、まいどありー。クズ肉の串焼き、3人分で銅貨5枚、確かに。ヒひ、あんちゃんも物好きだねー」

「うるせえ、タコ。2度とこねえよ」

廃材で作ったボロい屋台。なんの肉かわからない焼きすぎのカチカチの串焼きを遠山は受け取る。

広場にはこれまたボロい箱やらなんやらで無理やり作られたような椅子やテーブルが乱雑に並んでいる。

見るからに浮浪者じみたおっさんや、目の死んだ女やら、一目で落伍者だとわかる連中が思い思いに飯を食ったり、ボロい瓶の中を一気に煽ったりして騒いでいる。

ショッピングモールのフードコートの治安を最低より悪くしたらこんなふうになるのだろうか。

「ほら、ガキども。んな目で見るな。3人分ある、座れ」

遠山は空いてる席に座る。椅子の表面をローブの裾で払い、テーブルに置かれたままのゴミを隅によけて、少年たちを席に促した。

「い、いいのか？ 兄さん、俺の弟分はアンタから盗みを働いたんだぞ」

刈り上げの少年が信じられないとばかりに声を上げる、しかし目線はテーブルに置かれた串焼きへと釘付けになっている。

「……………」

遠山は黙って下を俯くスリガキを一瞥して、ため息をついた。

「その報いはもう受けたろ。ほんとは指の骨3本くらい折ってやるつもりだったけど、もういい」

「……………こわ」

まだ足を庇いながら歩いていたスリガキがぼそりと。

遠山が少しその態度に力チンときた瞬間、それよりも力チンと来た奴がいたようだ。

「ルカ！ アンタ何よ！ その態度は！！ にいさんに謝りなさい  
！ 見逃してもらえるところかご飯奢ってくれたのよ、ご飯！！」

ばかり。

小さな拳、しかし腰の入ったいいパンチがスリガキの顔を捉えた。

赤毛の少女の渾身の右ストレート。

筋がいい。

「いて！！ ニコ、やめろよ！ まだ痛むんだから」

たたらを踏みながら、スリガキが声を荒げる。

「ルカ！！ ニコの言う通りだ！！ お前、そこにいさんに言う  
ことがあるだろ！」

刈り上げの少年がドスの効いた声でスリガキに怒鳴る。

なるほど、コイツらの関係が少しわかってきた。

遠山がその様子を観察していると、スリガキが近寄ってきた。

「……悪かったよ、ごめん」

「は？」

謝り方が気に入らず、つい本気で殺意を向けた。

「ゴッ、っ、ごめんなさい……」

それがわかったのだろう。背筋をびしりとただし、スリガキがあた

まを下げる。

その小さな身体が小刻みに震えていた。

やべ、本気で脅かしすぎた。

遠山がためいきを深く、スリガキに声を向ける。

「バカガキが。人にメシおごって貰ったら謝る前にまず言うことがあるだろ」

「え？」

「え、じゃねえ、タコガキ。俺の目、見ろ、わかるよな、お前が言わないといけない言葉がよ」

空き箱の椅子から身を乗り出し、スリガキと視線を合わせる。

遠山の栗色の瞳と、スリガキの栗色の瞳が交じった。

「う、あ、ありがとうございます……」

こんどこそ、本気で謝ったのだろつ。俯き、しかし最後には視線を上げて遠山の目を見ながらスリガキが頭を下げた。

「ん、それでいい。そのガキンチョども。お前らもさっさと座って食っちまえ。飯は熱いうちに食うのが礼儀だ」

遠山が、がきんちよたちを対面のベンチに促す。

3人がおずおずとベンチに座り、置かれた串焼きを見つめていた。

「……買った食べ物、店の近くで食べるのは久しぶりですよ、にいね」

「横取りされんのか？」



遠山はジロジロと感じる視線から予想する。

「う、うん、アタシたちみたいな子どもはどうやったって大人にはかてない、から」

赤毛の少女が俯いて、小さくつぶやく。

子供たちは恐らくこの場ではヒエラルキーの底辺なのだろう。

広場の浮浪者どもは皆、子どもたちへ視線を送っている。

「チッ、おい、そこのおっさんども、なんか用か？ ジロジロみてんじゃねえぞ」

「ひっ」

「な、なんでもねえですよ、冒険者様……」

遠山が浮浪者たちを睨んで声を向ける。それだけで蜘蛛の子を散らすやうに奴らは愛想笑いを浮かべてどこかへ消えていく。

なるほど、弱者だ。

ここにいる連中はみな弱い、そして弱いから自分よりももっと弱い連中から奪うことでしか生きることが出来ないのだ。

「最悪の生き方だな…… お前ら、ここにきて長いのか？」

遠山の1番嫌いなタイプだ、自分の弱さを、更に弱い奴にぶつけることでしか向き合うことが出来ないタコ以下のクソども。

ほんの少し湧き上がる怒りを抑えて、少年たちに問いかける。

「生まれた時からここにいるよ、ずっと」

「ああ、ルカの言う通り、俺らはガキだが物心ついた時からここにいる。だが、にいさん、なんてアンタみたいな人がスラムに……？」

いや、待て…… 人探し、か？」

スリガキの言葉を捕捉していた刈り上げヘアが、言葉を止めて、それから少し黙って、答えに一気にたどり着いた。

今度こそ、遠山は割と本気で驚いていた。

「……おまえ、さっきから察しがすげえな。シャーロックホームズみてえだ。なんでそう思う？」

頭の回転が速い奴は好きだ。会話にストレスを感じなくて済む。遠山はその日焼けした短髪の少年に興味を持つ。

「簡単な推理です、まずアンタのそのローブ、高級品だ、学がねえ俺でもわかる素材の良さ。外套に金をかけれるような人がスラムに真つ当な用事があるとは思えねえ」

「ふむ、それで？ それだけじゃねえだろ？」

小気味良い会話が続く。

刈り上げヘアは片目をつむって、鼻をかく。

それからまっすぐ遠山を見つめた。

「ここは冒険都市のスラム街だ。冒険者のアウトロー連中だって普段は寄り付かねえ街の暗闇。カラスと揉めるのを冒険者は嫌がります。だが、アンタはサイフをさられたとは言え、この街に入り込んだ。もちろん、ルカを追うのが目的だったとは思いますが、それならもうサイフを取りもどした時点で用は済んでるはずだ。俺たちみたいなのに、飯を奢るメリットがない」

「ふうん」

いいね、いい感じだ。

遠山は言葉を挟まず次を促す。

「あんたは多分、混ぜってる人だ。損得勘定と、それを無視する感情が混ざってる。無駄なことはしねえが、無意味なことはしてしまっ  
うタイプと見た。俺たちに飯を奢る、これは無駄かもしれねえが、  
無意味じゃない、そして、あんたは俺たちにスラムは長いのか、っ  
て聞いたな。そこだ、あんたは確認したかったんだ、俺たちがこの  
場所に詳しいのかどうかを」

驚いたことに、遠山のプロファイリングまで済ませているらしい。

遠山は自分の欲望に、少し火がつき始めるのを感じる。

コイツならもしかしてー

「ここまで来たら答えは1つ。スラムのことは知らないが、あなたの求めるモンがスラムにはある。だがここには価値があるモノなんてない。あるとしたら、人だ。訳ありの人間が身を隠すには絶好の場所だからな」

「驚いた、マジですげえな。ガキンチョ、名前は？」

合格だ。申し分ない。

遠山は改めてその少年の名前を問う。

「合ってたか。俺はリダ。この辺で同い年の孤児のまとめ役、といつても俺と、ここにいるニコとルカ、そんで残りの2人を合わせて5人程度のグループだけだな」

リダ。なるほど、この少年がリーダー格か。

遠山は品定めを始める。

「へえ、なるほど。そこのスリガキがまだ生きてるのはお前のおかげか」

隣で俯いているスリガキに向けて遠山がニヤリと笑う。

「……あんだ、俺になんか当たり強くない？」

「ガキ、指の骨を折らねえとやっぱりわかんねえか？ 口の利き方から教えてやるうか？」

静かな口調、その中に少しの怒気を混ぜる、混ぜてみる。

「ヒッ……、じゅめんなさい」

予想通り、スリガキはそれに気付いたらしい。

なるほど、頭の回転の良いリダと、勘のいいスリガキ。

この2人が、がきちよだけで生活が成り立っている要か。

「チツ、そこでびびんなよ、俺が悪いみたいだろうが。リダ、だつたよな？ おまえの頭の回転には正直驚いた。お前の言う通り、俺はここで人を探してる」

遠山は懐から革袋を取り出す。

銅貨が残り25枚、それとドラ子が記念にくれた金の首飾り、冒険

者章とかいうもんがはいつた遠山の全財産。

「……にいさん、これは？」

リダが片目を瞑り、遠山へ静かに問いかける。

考えているのだろう、遠山の行動の意味を。

にやり、遠山は笑う。

「前金だ。お前たちと商売の話をしたい。いくらかかる？ 俺の人探しを手伝ってほしいんだ」

「わ、わ、すごい、リダ、きちんとお金もらって雇われてる」

ぴよこんぴよこんと椅子に座ったまま、ニッコと呼ばれていた赤毛の少女がはしゃぎ始めた。



なるほど、ここでは子供に金を払って仕事を依頼する奴はいないらしい。遠山が、子供達の反応から情報を探る。

「……………」

スリガキ、ルカも目を丸くして固まっている。自分が盗んだ革袋と、それから遠山を交互に見つめていた。

「い、いいのか？ 俺の仲間はあるから盗みを働いたんだぞ」

「リダ、お前が手綱を握ってるんだろ？ なら信用する。お前の性格や人間性じゃない、俺の狙いに気付いたその頭の回転を信用する、力が借りたい、そして、ルカ、だったか？」

「……………うん」

「次はねえ。もし、俺からホコリ一つパクってみる。お前だけじゃ

ない、この場にいる全員、お前の友達全員に代償を支払わせてやる、わかったな？」

「わ、わかった、わかり、ました」

スリガキ、ルカが何度も、なんども深く頷く。

もしこれでまた、自分のものに手をかけた瞬間、気兼ねなく始末出来る。

遠山は己の中にある歪なルールを遵守していた。

「……にいさん、あんただただのお人好しじゃないんだな。てつきり、たまにいる金持ちの道楽かと思ってたよ。俺たちを可哀想な存在って見下してるやつだ」

「理解が早くて助かるよ、リダ。仕事に大事なのは正しい相手への認識だ。対等にフェアに行こう。お前たちは俺が憐れむような可哀想なガキじゃない、そして俺もお前らが力モだと舐めていいようなお人好しじゃあない」

対等に。それが遠山の他人に対する基本的なスタンスだ。

能力と話の通じるオツムがあれば例え相手が赤ちゃんであれ敬意を持って接する必要がある。

少なくとも、リダは遠山にとって充分敬意を払うに値する人間だった。

「俺は人を探してる、お前らは俺が探してる人の情報、もしくはそいつ自身の居場所を俺に教える、対価は金だ。何か異議はあるか？」

「ない、あるわけがない…… 値段は、アンタの言い値で構わない」

「リダ、お前は頭はすこぶる良いが少し甘いな。ダメだ、値段は売る側が決める、それがルールだ。健全な経済活動のな」

遠山の言葉に、リダが押し黙る。それから手のひらを開き、5本の指を立てた。

「銅貨…… 5枚だ。それだけありゃ他のチビにメシが買える」

「OK、なら俺は銅貨10枚払おう、契約成立だな」

「な?! なんで、わざわざアンタが多めに払うんだ?!」

さらりと遠山が革袋から銅貨を10枚取り出し、テーブルの上に置く。

リダ、ニコ、ルカ。3人の取引相手が目を丸くしてさげんだ。

「簡単だ、お前らに後先なくすためだ。俺は絶対にそいつを見つけたい。このスラム街にいるある男をな。そのためにお前らを最大限利用したいんだ。もし、逃げたり、見つけられなかった場合は、銅貨10枚分の代償を払ってもらおう。それが仕事だ、違うか?」

「……あんたみたいな人は初めてだ、兄さん。乗った！仲間たちに誓い、必ずアンタの探し人を見つけてみせる」

「契約成立だな」

遠山がリダに向けて手を差し出す。

右手。

「これは？」

「握手だ。俺んこの故郷ではあんましねえんだが、なぜか仕事の約束を果たすときはこうするんだ」

「わかった、にいさん。銅貨10枚分の仕事は必ずやってみせるよ。ニコ！ルカ！チビどもを呼べ、俺たち全員でこのにいさんの期待に応えるぞ！」

がちりと掴まれる握手。

驚くほどに、リダの力は弱く、手のひらは小さい。

やはり、栄養……？ どうもこの世界の人間の強さに差がありすぎる気がする。

「わ、わー！ すごい。銅貨10枚！？ すごいわ！ これで見んなにひもじい思いをさせなくていいのね！」

「ニコ、喜ぶのはまだはやい！ なんとしても、にいさんの期待に応えるぞー！」

遠山の思考をよそにこどもたちが大はしゃぎしている。

「……あの、にいさん」

「あ、なんだ、スリガキ」

「……スリガキじゃない、ルカだ、……ルカです。そのほんとに、ごめんなさい。あなたみたいなお人からサイフ、盗んで……」

少し驚く。

自分から再び、謝ってきたのは予想外だ。

「……ルカ、顔上げる」

「う、うん」

遠山がじっと、ルカを見据える。

「俺は正直でめえが嫌いだ。サイフをパクられた時の怒りは今でも鮮明に思い出せる。てめえがスリしようが何しようがどうでもいいが、俺のモンに手を出したってのが気に食わねえ」

「し、ごめんなさい」

ルカがどもりながら答える。

いつのまにかルカも、リダも黙ってその様子を見つめていた。

「だが、アレだ。お前はやり方を知らないだけ、なのかもしれない。いいか？ 金って奴はな、正しい稼ぎ方がある、それがなんだかわかるか？」

「わ、わからない……」

首を振るルカ。遠山な対等に、その盗みをした人間を見つめる。

「それはな、稼いだ金を眺めたりした時に、たのしいと感じるかどうか、だ。預金通帳の金額を眺めて、それを稼いだ時の仕事を思い出す、その時にな、まあきつかったけど金が入るんなら良かったな、と思えるかどうか、それが大事なんだよ、それが正しい稼ぎだ。ルカ」

「たの、しい？」

遠山の言葉にルカが、小さくつぶやいた。

「そうだ、てめえスリで手に入れた金を眺めてどう思った？ 他



人の大切な金だ。それを稼ぐのに誰しもがそいつにしか分らない苦勞をして、お前と同じように誰かの為に稼いだ金だ。それをパクって、数える時、お前は何を考えてた？」

「おれ、……仕方ないって、思ってた。恵まれた奴から盗むのは仕方ないことだって。……たのしくなんてなかった」

声はか細く。遠山は大げさにためいきをつく。

「それは最悪のパターンだな。根本的に才能がねえ。正直な、カネを稼ぐ方法に善悪はない、俺はそう思ってる。何かを傷つけて稼ぐ金も、誰かを助けてもらう金も、変わりにはねえ。だがな、てめえの仕事に、てめえのやった事に対して言い訳をする、これは最悪だ。マジで才能ねえからやめた方がいい」

「でも、なら俺は……」

「知るか、てめえで考える。俺は胸を張って言えるぞ」

思つ。はじめての探索。

「怪物ぶち殺して金を稼ぐのは楽しかった」

大トカゲの化け物のあたまをめつた打ちにして駆除し、尻尾をひきずって死骸丸ごと持って帰った初探索のことを。

1匹30、000円。死骸の損壊が酷かったから半額になってしまったこともいい思い出だ。

「気に入らねえ奴、絡んでくるバカをぶちのめすのもたのしかった」

たまに探索を邪魔するバカもいた。皆例外なく、もうこの世にはいない。仲良く怪物の腹の中、だ。

「全ては俺の欲望のままに。そこに嘘は許されない、誤魔化しも、正当化も許されない」

「あ、う……」

遠山の言葉に、何かに打たれたかのようにルカが固まる。

「おまえも考えてみる、ほんとに自分のやりたいことを、後悔しない、自分だけの欲望を見つめてみる」

「俺の、ほんとに……」

「まあ個人的には悪い奴やムカつく奴には何してもいいと考えるからな。そういう奴らからは盗んだら奪ったりしてもいいんじゃないかね。まあ、ルカ、あれだ」

「わ」

ぼすつと、ハンチング帽越しにルカの頭を遠山が撫でた。

嫌がるかと思っただらそうでもないようだ。ルカは抵抗しない。

「お前の欲望、それはお前だけのもの、誰にも触ることの出来ない唯一無二のものだ。好きにしろ、その権利がお前にはある」

「おれ、だけの……」

「うまく使えよ、欲望は使い道は難しいが、それは最高最強の味方だ。それはお前自身でもある。自分に言い訳をするってことはな、欲望を裏切ることでもあるんだ。繰り返していると、お前、ほんとに腐るぞ」

「う、うん、わかった…… 考えてみる、アンタの教えてくれたこと」

「ああ、そうしろ。それがお前の欲望なら、俺は否定しない。好きにしろ、それが大事なことだ」

にかりと遠山が笑う。

仲間からは毒を持った獣が嗤うとおまえの笑いになるとよくからかわれたものだ。少し、昔を懐かしむ。

「てか、ルカ、おまえ見た目より頑丈だな？ かなりいためつけられてたる？」

「……昔から、傷の治りだけ早いんだ…… にいさん」

「あ、あのルカが大人の話を聞いてる……？ ち、ちょっとリダ、なにあれ」

「わ、わっかんねえ。ナニモンだ、あのにいさん……」

信じられないものをみたかのように、リダとニコは固まっていた。

「さて、なんか真面目な話しちまったところで仕事にもどるか。お前らに探してもらいたい人のことなんだがよ、トカゲだ。トカゲ男。名前はラザール」

「トカゲ？ リザドニアンのことか？」

「おお、なんかそんな呼ばれ方もしてたな。まあ、そいつだ。自立つ容姿だし、みたことはないか？」

「……実はちょうど今から一ヶ月前、リザドニアンの流れ者がスラムにやってきたことがある」

遠山の言葉にリダが答える。

「ほう」

「直接会ったわけじゃねえが、少し有名だ。なにせ”カラス”の連中も奴を探していたらしいからな」

「カラス？ 鳥の？」

「冒険都市、いや、帝国の闇に巣食う連中だ。盗み、暗殺、脅迫。暗い仕事を一手に請け負ってる、いわば犯罪者ギルドっていったところか」

「ふうん、スリガキ、いや、ルカ。お前と揉めてたあのザコども、確かなんかカラスがどーたらこーたら言ってたよな」

「カーラスがついてんだ！」

さっきの場所に置きっぱなしにしてきた雑魚ども。最後の1匹が気絶するまえにそんなことを喚いていたような。

「うん…… アイツら前に自慢してたから。カーラスから仕事をもらえたとかなんとか、大騒ぎしてたの覚えてるわ」

ニコがつぶやく。

「なるほど、レーザールめ。さすがだな、厄介そうな連中に目をつけられてやがる」

早めに来てやはり正解だった。さっさとレーザーを見つけ、スラムから出た方が良さそうだ。

「あとは、帝国の官憲や、教会の騎士なんてのも一時期よくそのリ

ザドニアンを探してた。……なんでも、竜を殺した男の手がかりだ  
って」

「アタシ、今でも信じられないわ。蒐集竜サマよ？ 人間が殺せる  
なんてあり得るのかしら。アタシたちみたいな孤児でも竜の恐ろし  
さは知ってるのに」

「ニコ、だがあれは真実だ。噂だけならまだ眉唾だったが、実際に  
騎士やらなんやらがスラムに来てるってのが何よりの証拠さ、おっ  
と、にいさん、悪いな、話が逸れた」

「いや、微妙に逸れてねえんだよ。……おっと、これは半分くらい  
俺のせいかな？ やべえ、レーザーに謝んねえと」

あのドラゴン、やはりすごい奴なのだろうか。

表社会から溢れた存在であろう路上生活の孤児たちですら竜に対す  
る認識は、偉そうなあの連中と同じらしい。

「？ まあ、とにかくそんなこんなでそのリザドニアンはスラムで



も噂になってんだが、妙なことがある」

「へえ、事情通だな。カネを払った甲斐がありそうだ。リダ、なんだそれは」

「……誰も、そのリザドニアンの居場所がわかんねえんだ」

雲行きが怪しくなってきた。

「話が見えん。いるのか、いないのか？」

「いる、それは間違いない。俺も何度か見かけたことはある。でも、そいつがどこで寝泊まりしてるとか、どこを拠点にしてるとか、一切わかんねえ」

「普通さ、スラムってのは広いようで狭いから、大体誰がどこで生活してるのかわかるものなの。特に新参者で、リザドニアンでしょ？ いやでも目立つ筈なんだけど」

「ふむ、なるほど、既にスラムを出たっていう線はないか？」

自分で言いながら、なんとなくそれはないだろうな、と遠山は感じていた。なぜなら矢印は依然としてこのスラムの至るところを指し続けている。

【オプション目標 スラム街を調べる】

このメッセージが至る所にぴよこんぴよこん飛び跳ねてる。

さて、どうしたものか。

そういえばコイツら、まだ肉に手をつけてないな。話を先にしたから遠慮したのだろうか。

遠山が一旦、串焼きを食べることを促そうとした、その時だった。

「あー、こんなところにいたー！ リダ、ニコ、ルカ！」

「あーっー」

呑気、かつ元気そうな幼い声と、言葉になっていない声が近づく。

「ペロ！？ シロ？！ アンタたち、ダメじゃない！ 勝手にこんなところ歩いてちゃー！」

ニコがいのちにベンチから立ち、その新しく現れたたちびっこたちに駆け寄る。

なるほど、しっかりお姉さんだ。

「あー、ニコ、なんか食べ物の匂いするー いいなー」

金髪の天パ。

年の頃はおそらく3人よりも更に幼い、そしてその背中には更に小さな子ども、下手したら2歳か3歳くらいのスーパーチびっ子がおんぶひもで括られている。

「もう、ほら、あげるから食べなさい。あ、待って、そのこのロープのお兄さんにきちんとお礼言っのよ、ご馳走になったんだから」

「ペロ、俺のも食べ、シロと分ける。悪いな、あれが残りの俺がめんどろつ見てるガキだ」

ちびっこ2人がきんちよたちがそれぞれ食べ物を与えている。

「…………お前ら、肉食わなかったのはアイツらにわかる為か？」

気付き。

肉を見つめる様子からして相当腹を空かせていたコイツらが一向に

たべものに口をつけない理由がわかった。

「まあ、な。年上が年下の面倒見るのは当たり前だろ？」

「リダ、ニコ、俺のを分けようよ、お前らもたべないと、2日ほど食べてないじゃん」

ルカが自分の串焼きをリダとニコに分ける。

「ああ、悪い、正直かなり食べたかった、ん、うめえ」

「ほら、ニコも」

「ありがと、ルカ。いただきます、お兄さん」

ルカの差し出した串焼きにそれぞれ2人が順番に噛み付く。

一口、ほんとに一口ずつしか食べていない。

いや、無理だろこれは。

「……ちょっと待ってる」

遠山は財布を握りしめ、席を立つ。

「あ、ああ？」

いや、もうあれですよ。そんなん見せられたらあれですよ。

遠山は色々言い訳を考える。

別にこれは同情とかそう言うのじゃない。そう、リダの話が思ったより分かりやすく必要な情報がすんなり手に入ったことによる正式なポーナス、うんぬんかんぬん。

席を外した遠山は迷わない足取りで、顔を顰めながらまた、その屋台の前に立っていた。

「おや、お早いお戻りで。……物好きだね、毎度あり」

わかっていた、と言わんばかりに笑う店主に銅貨5枚を支払い、遠山はまたなんの肉かわからない串焼きを持ってみなしごたちのもとに戻る。

「……お前らもきちんと食べ、ガキが飯食わねえでどうする」

遠山が頭をかきながら、雑になんかの葉っぱで包まれた串焼きを渡す。

今度はきちんと熱々のままだ。

「う、そ、ほ、ほんとにいいの？ あ、ありがと！ お兄さん！」

少女、ニコが目をぱちくり、受け取った串肉を見て目を輝かせる。

「……すまん、恩に切る、ありがとう、にいさん

刈り上げ短髪の利発なガキ、リダが深々と頭を下げる。

「……………かつこいい」

その様子をどこか、キラキラした栗色の瞳、ルカが見つめていた。

小さな歓声に迎えられ、スラム街での搜索が始まった。

もぐもぐと串焼きを食べてご満悦の2人のちびっこにも、トカゲ男を知らないかと問う。

まあ、流石に幼すぎるかと遠山が思っていると1人のコロコロよく笑うちびっこ、ペロが頭を捻って答えた。



「あ！もしかしてー、レーザーのこと？ ぼく知ってるよ！ 今日もいたもん！」

ぼすん。

遠山にだけ聞こえるメッセージの音。

ペロの頭の上に文字が踊った。

【オプション目標達成 スラム街のみなしこと友好的に接する】

【サイドクエスト目標更新、トカゲの足取りを追う】

「おっと、そういうパターンか」

遠山は最速で、帝国からも逃げおおせたトカゲ男の足取りに近づいていた。

## 17話 スラム街の交流（後書き）

TIPS € 冒険都市 スラム街

TIPS € 冒険都市、南区の色町より更に奥、普通の人間は立ち入りもしない冒険都市の闇の入り口。廃屋同然の家が並び、廃材を利用した小屋や、商業区から廃棄された布やらを利用して作られたホロで路上生活者は雨露をしのいでいる。

スラム街の更に奥には帝国随一の犯罪者ギルド、“カラス”の本拠地があるとかないとか。

色街などの大きな金が動く夜の世界にもカラスの濡れ羽は届いていない。

天使教会や冒険者ギルドは共同で“カラス”の撲滅を通年目標に掲げているが、ここ100年なんの進展もない。後ろ暗い金が満たすのは夜の住人の懐だけではないのだ。

## 18話 キリとカゲ、カラスの狩り

「ここだよー！ トカゲのレーザーと今日ここでごあいさつしたよ  
」！

子供たちが肉を頼張りつくした後、レーザーを見たという少年、  
ペロの案内でここにたどり着いた。

廃屋。崩れかけの家だ、ペロが案内したのは到底人など住んでい  
ないだろう朽ちた住居、その庭先だった。

「ペロ。ほんとにここなの？ なんにもないわよ、ここ」

「いや、奥に天幕が張ってあるぜ、誰かがここにいたようだが、今  
は空みたいだな。わりい、にいさん、リザドニアンについては他の  
ツテも当たって探すよ、料金分の仕事をさせてもらう」

リダが庭の奥、ちょうど家の側面側、目立たない場所にそれがあることを見つける。

確かに言う通り、ボロ木とボロ布で作られたテントがぽつんと立っていた。

「……リダ、俺も手伝う、街を走り回ってくるよ」

リダとルカはやる気まんまんだ。

しかし遠山は首を振る。

「いや、がきんちども、ここでいい。どうやら当たりみたいだ」

「でも、誰もいないよ？ 火を使っていたみたいだけど」

ルカがテントのそば、焚き火の跡のような焦げた地面を指さす。

「問題ねえ、後はこっちで探すさ、リダ、世話になったな」

遠山が子供たちに軽く礼を言い、別れの言葉を口にする。

「あ、ああ。にいさんさえ良ければまだ手伝っぞ、俺たちは」

「そ、そうよ！ ご飯までご馳走になって、銅貨10枚も払ってくれたんだもん。なんでも言ってちょうだい！」

「……そうだよ、まだ何も返せてない」

だがどうやら子供たちは不服らしい。遠山を手伝つと口々に言葉にした。

「……いや、大丈夫だ。仕事は完了。ここでおまえらとはさよならだ。ペロ、教えてくれてありがとう」

遠山は手伝つと申し出る彼らから目を逸らし、手近にあったペロの頭を撫でた。癖っ毛に絡まないようにほわほわと撫でる。

「んー、もうお別れー?」

くすぐったそうに目を細め、ペロが間延びした声で問いかけた。トロそうに見えてこの子は案外賢いのもかもしれない。

「ああ、助かったよ。元気だな。シロ、ペロの髪の毛噛んだらダメだぞ」

遠山がペロと視線が合うようにしゃがみ込み、更にその小さな背に負ぶわれているちみっこのほおを突く。

ぶにぶにして、柔らかい。ふとした拍子に自分の指がその柔らかかなほおを破ってしまわないか心配になった。

「あーっー!」

シロはしかし、嬉しさにニコニコ笑う。遠山もつられて笑ってし

まった。

「にいさん」

リダの声、何かいいたげなその声色に遠山は首を振り、彼を見据えた。

「リダ、優先順位を考えてくれ。俺とお前たちは対等なビジネスの関係だ。仕事は終わった、ならあんま必要以上に馴れ合う必要もねえ。お前ならわかるだろ？」

その肩に手を置いて諭す。

賢い子だ。この言い方で充分伝わるだろう。

「あ、ああ、そう、ですね」



それでも何かを言いたそうなりダ、しかしそれをぐつと堪えて遠山に頷いた。

「え、ほんとのほんとに、もう、お別れ？ 仲良く、なれそうだったのに」

ニコがまた、気の強そうな吊り目に涙を溜めながらオロオロとリダとルカを順番に見つめて、最後に遠山を見上げた。

小さな女の子に上目遣いで涙目をされると、こちらがものすごく悪いことをしてくる気になる。

遠山はニコと視線を合わせて、静かに頷いた。

「……ニコ、ダメだよ、困らせることになる。にいさん、その、ありがとう。肉、美味しかった」

意外なことに、ニコを諫めたのはスリの少年、ルカだ。

「おう、今度はもう俺からスるんじゃないぞ」

「……もう、会えない？」

ルカがおずおずと遠山を見上げた。

今度は目を逸らさずに遠山が答える。

「ああ、さよならだけが人生だ、ってな。あんまお互い入れ込みすぎるのは無しにしようや。ルカ、お前には俺になかったもんがある、それを大事にな」

「アンタになくて俺にあるもの？」

信じられないといった顔でルカがつぶやく。

「リダとニコとペロにシロ。俺がお前くらい歳の時には、友達や仲間は1人もいなかった。いや、いなくなっちまった。そいつとはもう2度と会えない」

どうしても、被るのだ。弱く、儂く、しかし世界に身を寄せ合って精一杯生きる彼らと、昔の自分が被ってしまう。

「あ……」

ルカが周りにいる仲間を見つめる。

それは幼き日の遠山が焦がれ、しかし奪われてしまった憧憬にも似ていた。

「だから、大事にしる。人間、大事に出来る人間の数は限られてる。俺はお前たちをその中には選べないし、お前らだって同じなんだ」

「にいさん、それでも、俺はアンタが俺たちを対等に扱ってくれたことを忘れねえ。何かまた俺らが力になれることがあったら呼んでくれ。対等に、手伝わせてもらおう」

遠山の冷たい言葉にもリダはおじけない。

しっかり遠山を見つめる目には知性の光が灯る。

「ありがとな、リダ。おい、ニコ、泣くのはやめてくれ。ペロとシロが不安がる、お姉ちゃんだろ？」

ぐずっていたニコの頭を遠山が撫でる。

「だ、だって…… いや、な、泣いてなんかないわ！ このくらいのことです泣くわけじゃないじゃない」

涙をぬぐいながらニコがふんつと、胸を張る。気が強い振る舞いは多分泣き虫を隠すためのものだろう。

遠山は笑いながら、ニコの涙をローブの裾で拭う。

「そうか。悪かった。リダ、ルカ、ニコ、ペロ、シロ」

改めて、遠山が立ち上がり彼らを見回す。スラム街でのわずかな交流、しかしたしかに言葉を交わした彼らを。

「ありがとな、お前らには助けられた。でも、ここでさよならだ」

深入りするつもりはない。それが遠山の現時点での結論だ。

「……うん、わかった」

ルカが小さく頷く。

「にいさん、俺らはあの広場の近くに家がある、いつでも訪ねてきてくれ！」

リダが自分の胸をドンと叩いた。

「お、おにいさん、絶対よ、絶対また遊びにきてよね！」

ニコが遠山に駆け寄り、ロープを掴みながら懇願する。

「おにいさん、ごちそうさまでしたー！ 久しぶりにおにく食べれ

て嬉しかったー、ほら、シロも」

「あーう、うー！」

ペロとシロが小さな手を精一杯振っていた。

遠山は苦笑しながら素直に去っていく子供達に手を振る。

本格的に情がうつりかける前に別れて正解だ。犬猫を飼うのとは違う。

「……これでいい、何も間違っていない」

いつときの感情で必要以上に踏み入るのはあいつらにとっても良くない。

だから、これでいい。

他人に必要以上踏み込み、なんとかしてやる余裕も義理もない。

それは遠山の欲望ではない、はずだ。

「……じゃあなんで、俺はあの時、ラザールを助けた？」

小さな呟きはしかし、理性とは別の場所から湧いた言葉だ。

遠山はその言葉を振り払う。

ほんの少し胸につつかえる感覚を飲み干し、彼らの姿が見えなくなった後、改めて遠山は周りを見回す。

「やっ、ぶっくいるっ。」

気を取り直し、本腰入れてそいつを探そうとして。

ピロン。

矢印が、空っぽの天幕を指す。

【クエスト目標更新 ラザールの痕跡を調べる】

メッセージ的にもここがラザールの居場所というのは間違いなさそうだ。

遠山はまず、焦げた地面に近づく。

炭化したボロ木や、焼き付けが灰になっている。

「焼き火の後…… 火を使ってたのか」

地面を確認した後、そばに置かれている桶の中身を覗く。

「これは服……か？ 洗濯されてある、どこで手に入れた？」

動きやすそうなユニックに清潔な感じの布のズボン。ラザールのあの時の服装とは違う。



「コップ、なんだ、コーヒーとか紅茶とは違うな」

その方にわずかに残っている液体、黒と茶色が混じったそれは嗅いでみるとわずかに甘い香りがした。

「廃材、板をベッド代わりに？ 天幕の素材もボロ布、ジーンズみたいな生地だな」

空っぽのテントの中を覗く。廃材の板が2枚ほど敷かれていた。人間1人くらいなら余裕で寝れるほどのスペースだ。

「ん？ なんだ、何か……」

覗き込んだテントのなか、わずかに感じる違和感。

誰もいないはずなのに、どこか、こっ、息遣いのようなものを感じる。怪物種の巣穴に侵入した時の感覚に近い。

遠山はすぐにテントから出て、改めて周りを見回す。

「いねえ……でも、この焚き火……」

焚き火の跡に手をかざす。

じんわりと、余熱が手のひらを温める。

「まだ暖かい、火が消えてからそんなに時間は経っていないのか」

出かけているのか？ それにしては何か様子がおかしい。遠山が考えをまとめようと、その場に座ろうとききた瞬間だった。

「うお?! な、なんだ？」

心臓の辺りからざわつく。不快感はない、そしてこの感覚はよく知っている。

「キリヤイバ……?」

まるで、俺を抜け！ そう言わんばかりに遠山の身体のなかに眠るその遺物がざわめき始める。

いままでこんなこと一度もなかった。

血液が身体中を走り回り、暴れ回るような感覚、身体の中で子犬がはしゃぎ周っているような衝撃。

不思議と、痛くも、そして不快でもなかった。

「うわわ！？ わかった、わかったよ！ 来い、キリヤイバ！」

心臓に手を当て、名前を呼ぶ。当たり前のように身体の中に棲みついているその遺物を世界へと引き出す。

組合の身体検査でも見つからなかったのはどういう仕組みなのだろうか。真面目に考えると、怖いのであまり気にしないことにはしていたが。

「うお?!」

まだ不思議な挙動は終わらない。

胸から引き出したキリヤイバがカタカタ揺れて、その弾みで手のひらから飛び出した。

「ええー…… お前、そんな機能ついていたの？」

衝撃。

キリヤイバがカタカタ揺れながら辺りをぐるぐる巡り始めた。

焚き火、桶、カップ、天幕。

遠山が調べた順番に、先端が欠けて刃はボロボロに傷んでいるその小さな湾曲した刀剣がひとりでに動き続ける。

なんのホラーだろうか。

「まあ、説明書ねえからなあ……  
炊飯器でハンバーグ作れるよ  
うなもんか」

探索者特有の知性の低い考えで、遠山は目の前の現実を受け入れる。世の中、バカにならないとやってられないこともあるのだ。

カタカタ、カタカタ。

辺りを這い回るキリヤイバ。

何故だろう、いや、似ても似つかないはずなのに、どこかその姿が、そう、おもちゃのボールを探す、けむくじやらの古い友の姿に――

「ほ？　おい、キリヤイバ？」

ぶさゆづ。

キリが、辺りに立ち込める。

もちろんキリヤイバの仕業だ。白く重たい煙のようなキリ。遠山  
の意思とは無関係に、世界に霧をもたらして。

「なんかお前相当アグレッシブになってー え？」

キリの中、何かが動いた。

黒い、モヤ。

影ー

キリが、カゲを浮かび上がらせ、燻り出した。

「ごほ！ ごほ！？ なんだ、なにごと、だ……？！俺のカゲが、

なぜ？ ……まさか、おお、我らが”歯”にかけて！！ ナルヒト、まさか、ナルヒトなのか！？」

キリがあっという間に晴れる。

黒い影も溶け去るようになくなっていき、そこから現れたのは一度見たら忘れないトカゲヅラ。

あの時の奴隷服に、鱗の肌、縦に裂けた瞳孔。妙に色気のあるイケメンボイス。

「えええ……ら、レーザー、まじか。もう何がなんだか」

リザドニアンのレーザーが、そこにいた。

ぼすん。

【サイドクエスト”路地裏のトカゲを追って”完了!】

【技能更新 ” 遺物保有者” NEW!! ”キリの容れ物”】

……  
……

「いい、人だったわね」

「うん、だねー。ぼく、大人の人にご飯ご馳走になったのはじめてだよ。そういえばシロが全然怯えてなかったのもはじめてだ、きつといい人なんだろうね」

「ああ、あの兄さんは俺たちを人間扱いするどころか、対等な存在として扱ってくれた。金も最後まで返せとか、そういうのもなかったしな」

遠山と別れた子供たちはいつものスラム街の光景を歩く。道の隅、なるべく目立たないところを固まって歩く。



この街の圧倒的弱者たる彼らの知恵。そんな細かいことの積み重ねが彼らをこの歳までこの街で生きながらえさせてきたのだ。

「……あんな大人もいるんだね」

ルカがボソリとつぶやく。

ハンチング帽を目深に被り、しかし視界は前を歩くニコたちをきちんと捉えていた。

「ああ、敵だけじゃねえんだ。俺たちはまだガキでなんも知らねえだけなのかもしれない。ルカ、俺は決めたぞ」

同じく隣を歩くりダが強い口調で言い放つ。

「え？」

「今よりでかくなって、身体も出来上がったら俺は冒険者になる。」

そこで金を稼いで、お前らに腹一杯食わせてやるんだ」

リダの声はいつになく、熱く、力強い声だった。頭はいいくせにリダは影響されやすい。

きつと、あの人に影響されたのだろう。

「リダには向いてないよ、スキルもないし、ケンカも弱いじゃん」

ルカが隣の年上の友に笑いかける。

リダは頭がいいが、弱い。多分根本的に力を用いた争いごとに向いていない。

頭を使うことに関しては敵わないが、腕っ節なら自分の方が遙かに強いとルカは自覚していた。

「うるせえ、これから特訓するんだよ！ あのにいさん、あれも多分冒険者だろ？ かつけえじゃねえか。あのにいさんは全部自分で決めることが出来るんだ。それはあの人に力があるからだ。俺もそ

うなりてえ」

腕を振り回し、いつになくリダがはしゃぐ。

その眼は輝いていた。久しぶりに、リダの子供っぽいところが見れて、ルカは少し嬉しくなる。

「……リダじゃ冒険者になってもすぐ死ぬだけだよ。10人に8人が4級のまま死んでいく世界らしいじゃん。それに冒険者になるのにも金がいる」

そんな話を聞いたことがある。スラム街まで堕ちた元冒険者から聞いた話だ。

彼も冒険者だったらしい。

4級、最下層の冒険者のまま命を落とすもののほうが多い弱肉強食の世界。

「ふん、どぶさらいでもなんでもして稼いでやるさ。俺が納得する

仕事でな」

その言葉にルカが自分の胸に手を当てた。

あの人の言葉が、今もここに残っている。

「……納得か、リダ、俺、もうスリはやめるよ」

「お？」

ルカの言葉にリダが目丸くした。

「あの人に言われた時、気付いたんだ。俺、いつも言い訳してた。これは仕方ないことなんだって。恵まれた奴らから盗むのは仕方ない」

言い当てられた時は、ほんとに驚いた。

心を読まれたんじゃないかって。

ルカはあの時の衝撃を思い出しながら、リダを見た。

あの人になくて、自分にあるもの。

仲間、友達の顔を見て言い放つ。

「でも、やめるよ。リダが冒険者になるんなら俺もなる。リダ1人だとすぐ死んじやいそうだからね」

「このやるう、ぶっ、好きにしる。足引っ張るんじやねえぞ」

どちらともなく腕を差し出す。

「どっちがだよ、リダ」

こつんと、2人の小さな拳が合わさった。

「わー、せいしゅん？」

「あーっ?。」

「男って影響されやすいわねえ。まあ、そこが可愛くもあるけど」

前を歩いていたニコとペロシロが振り向き、2人のやりとりをニヤニヤしながら眺めていた。

ある旅人の交流はわずか、ほんの少しの影響を彼らに与えた。

諦観と墮落の道を進むスラム街に生きる小さな生命たち。彼らの運命という道に突如現れた、強欲な人間。

大人、という存在とまともに触れ合うことのなかった彼らの心に、強欲な人間が与えた影響はしかし、彼らの歩き方を変えるだろう。

「まずは、クズ拾いから始めるか。銅貨が拾えるかもしんねえ」

「だね、俺も手伝うよ。どぶさらいの仕事、この辺の取りまとめ役からもらえるか聞いてみようかな」

希望。

緩やかに絶望に向かうだけの筈だった彼らは今、変わりつつある。それはほんの少しのちっぽけな変化。

しかし、彼らにとって、それは誰にも奪えないはずの最高のもので――

「あ！？ み、見つけた！ やつとみつけたぜ！ てめえら！」

とても、脆いものだ。

大人はみんな、知っている。彼らはまだ知らない。

夢に湧き始めた彼ら、当たり前の大人との交流でほんの少し未来に希望を抱き始めた彼らはまだ、知らない。

「あー！！ あのガキです！！ ワイズさん！」

「ふーん、あの子らか。やあやあ、君たち」

すいつ、と。

その男は当たり前のように彼らの道を塞いだ。

決して視線の高さを合わせることなく、見下ろし、ニコリと微笑んだ。

「うー……」

ロープの旅人よりも遥かに整った顔立ち、しかし、その笑みを見た1番幼いこども、シロが声も上げずに泣き始めた。



「あ……」

ルカ、リダ、ニコ。

3人のスラムの住人の顔が青ざめる。

沢山の大人の浮浪者に囲まれた、からではない。

ルカを痛めつけていた年長のグループ、そいつらがその中にいてボロボロの顔面を歪め、ニヤニヤこちらを見つめていた、からでもない。

632

「まあまあ、そうおびえなさんなよ、ひどいことはしないさ」

その優しい顔立ちの男、その頬に刻まれていた刺青を見たからだ。

「すーし、おにーさんとお話ししてくれないかい？ なーに、時間とはらせやしないから……ね」

”カラス羽の刺青”を讃えて、優男がほんとうに優しい笑みで、どこまでもどこまでも冷たく子供たちを見下ろしていた。

「カ、ラス……」

そう世界とは――

ちょっとばかりの特別な出会い一つで変わるほど、この世はそんなに甘くなく。

それでいて、弱い者にはとことん厳しいものだ。

18話 キリとカゲ、カラスの狩り（後書き）

閑話休題 不定期連載

『わがままだよ！ ドラゴンさん』

「爺や、ナルヒトから手紙はきたか？」

「いえ、まだ、にございます。つい先ほどかのお方を送り届けたばかりにございますれば」

「む、そうか、仕方ないな…… 手紙がきたらすぐに言うのだぞ。オレも返事を書くからな」

「は、承知いたしました」

……

…

（10分後）

「爺やー、ナルヒトから手紙はきたかの？」

「いえ、まだ、にございます」

「むづ、そうか。もう1日くらい経つか？」

「いえ、先ほどお嬢様にお呼びされてからまだ10分も……」

「む、そうか」

……

…

そこから20分後

「爺やー！ 爺や爺や爺や！ そろそろきたらう？！ ナルヒトからの手紙！ オレな、魔術学院のものが発行しておる誰でもかける文通のススメという怪文書を読破してしまったぞ、はよ、はよ、う、ナルヒトの手紙を見せてくれ！」

「いえ、お嬢様、まだ、にございます。恐らく早くても明日、いえ、2日ほどかかるかと」

「む？ 待て、まだ1日も経っていないのか？」

「は、作用にございますれば」

「……………ふむ、そうか。待つのは、こんなにも長いのか、ふむ……………」

……………

（数時間後）

「お嬢様、 ファランの食卓の準備が整い…… お嬢様……？」

書き置き。

『待てぬので、都市に探しにいつてくる。なに、心配するな。オレはこつ見えて変装が得意なのだ』

「…………… ファラン！！ ファラアアアン！！ お嬢様が脱走された！！ 捕まえるのだ！！ あの方をお一人で街にやってはならん！」

「はい、執事どの。すでに”対蒐集竜”魔術式を並列起動してまーす。……………あ、まずい、魔術式による防護壁、お嬢様の炎で500枚焼かれました、残り800枚でーす」

「お嬢様！ あのドラゴン、ほんっと…… お嬢様あああああ」

割と本気でキレた執事により、ドラゴンは館に連れ戻されました。

19話 汝、その強欲をいだいて率いよ

「待ってくれ、頭が追いつかない…… シエラ・スペシャル？  
筋肉ゲキ強ジジイ？ それに、ドラ子？ 待て、俺は頭がおかしく  
なったのか？ その、ドラ子とは、蒐集竜のことなのか？」

目の前で、ラザールが額に手を当て唸っている。

ジロジロ見つめてくる浮浪者を睨みつけて散らしつつ、遠山とラザールは屋台広場に場所を移していた。

「おう、ドラ子。アリスって名前は恥ずいらしいぞ、いい名前だと  
思うけどな」

遠山が廃材のテーブルに頬杖ついて呟く。

そういえば手紙がどうのこうの言っていたが、住所不定無職のこ  
の状態では無理そうだ。まあ、竜だし気は長いだろう、多分。



「我が偉大なりて大いなる齒よ、俺は頭がおかしくなりそうだ…  
… 蒐集竜から逃げおおせるだけでも奇跡なのに、それを倒し、  
あまつさえ友人、しかも名前呼び……」

「お、おいおい、レーザー、大丈夫か？ 頭痛いんか？」

レーザーが頭を抑えて机に突っ伏す。頭から生えているトゲが机に刺さらないだろうかと少し遠山は心配した。

「あ、ああ、すまない。こつも簡単に自分の常識が壊されるとはね  
…  
まあ、アンタが嘘をつくとは思いいくない。信じるよ、ナル  
ト」

ため息つきつつ、レーザーが頷く。

「そーか、まあざつと、こつちの状況はそんな感じだ。早めに合流  
できてよかったぜ」

「まったく、アンタはほんとにめっちゃくちゃだな…… まあ、だがこうしてまた会えてよかったよ、必死で身を隠していた甲斐があったというものだ」

身を隠していた、やはり苦労をかけていたらしい。

「それだ、ラザール。俺は話した、次はお前の番だ。ありやどーいう仕組みだ？ 影がモワーツてよ」

明らかにラザールのアレは異常だ。

普通の人間が出来ていい芸当じゃない。いや、普通のトカゲ人間が出来ていい芸当じゃない。

「……俺からすればアンタの霧の方が気になるんだが…… アンタは命の恩人だ、そんなアンタに隠し事をこれ以上続けるのは、我らの祖に恥じることになるな」

しゅー、とラザールが息を吐いた、ため息の音がユニークだな。遠山は頬杖ついたまま呑気に対面に座るラザールを見つめる。

「あれは俺の”スキル”だ。影の中に身を隠すことが出来るものな。あの中でグースカと寝ていたらアンタの霧に燻り出されたわけさ」

「スキル……？　そっぴゃルカもそんなこと言ってたような」

ルカを追いかけていたことを思い出す。捕まえる寸前、スキルなんたらかんたらとか言っていたような。

スキル。なるほど、そういうのがあるパターンの異世界か。いいね、嫌いじゃない、そういうのでいいんだよ、そういうので。

遠山はポカーンと口を開けつつ、頭の中で情報を整理する。

スキル、とやらを使える人間がいる、と。

「おい、待ってくれ、なんだその顔は？　アンタのその霧もスキルなんだろう、はじめて聞いたみたいな顔をしてるぞ」

「あー、いやまあ、なんだ。一般教養としては履修済みなんだが実際、その他人が口にしてるところに遭遇するのはじめてでなあ。俺の故郷でスキルとかどーとか言い出したら多分、暖かい目で見つめられちまう」

「……なんだ、それは？ まあアンタにも事情があるんだろ？ 深くは聞かないよ」

ラザールがあたりを見回し、机に身を乗り出し声をひそめた。

「だが、信じられないな…… はは、まさか蒐集竜に見初められ、あまつさえ自由を許されるとは…… ああ、愉快だ」

「ラザール、ドラ子はアンタのことも評価してたぞ。帝国中がアンタを探しても、見つからなかったって」

「はは、まあ、唯一の取り柄でね、逃げたり隠れたりするのは得意なんだ…… だが、よかった。この1ヶ月、隠れ続けた甲斐があった。俺が捕まることでアンタに迷惑がかかったらどうしようかと、それだけが気がかりだった」

「おお、1ヶ月…… まで、1ヶ月？ いやいやいや、お前と別れてから1時間も経って…… いや、待て、ドラ子もそんなこと言っていたよな」

今更ながら、そのタイムラグに気づく。

ドラ子をぶちのめし、ワニジャクシから逃れて、怪しいエルフ女に出会ってからは体感では1時間ほどしか経っていないはずだが……

「ふむ、塔の中では時間が捻じ曲がった場所もあるという。そこでは過去に生きていた人間と出会ったり、逆に未来を生きる人間とも話せたりするようだ、アンタ、そこに迷い込んだんじゃないか？」

「おいおいおい、バベルよりも魔境じゃねーか。下手したらウラシマ太郎ってか？ 笑えねー」

当たり前のようにラザールが告げるやばい真実。

科学は残念ながらこの世界では無力らしい。

「ウラシマが何かは知らないが、事実、2000年前の大戦の折に消  
失した物品や副葬品が見つかることもあるからな。塔はだからこそ、  
この国にとっての重要な場所でもあるのさ」

「なるほど、読めてきた。だから、冒険都市ってわけか」

バベル島と同じ理屈だ。

やばい場所にはしかし、財宝が眠る。時代も世界も関係なく、人  
は宝と危険に惹かれるのだろう。

炎に向かう蛾のように。

「はは、まるで帝国に来たのが初めて、いや、常識を知るのとはじ  
めてと言った様子だな」

「案外そうかもしれないねえぜ、ラザール。どうする、俺が別の世界か

らやってきたって言ったらよ  
「

ラザールの言葉に遠山がニヤリと笑う。さて、どの辺りまで自分の来歴を話すべきか。

会話の中でそれを探っていこうとしたところ、

「関係ないな」

「お？」

意外な言葉。しかし、それは頼もしく。

「関係ないさ、ナルヒト。アンタはいい奴で俺の命の恩人だ。それだけわかっていればたとえアンタが何者だろうと俺の信頼は変わらない」

「ほ、ほーん」

少し、照れる。なんだかんだ遠山は友達が少ない。面と向かって褒められることに慣れていなかった。

「……だが逆に問おう。気にならないのか？ 俺のスキル……俺の、過去のことややってきたこと」

「ひひひ、ラザール、そりやねえよ。お前が俺のことを気にしないって言ったのに、俺だけためえの前歴気にして詮索なんて、ダサい真似出来るかよ」

ラザールの言葉を笑う。やはり、このトカゲはいい奴だ。

「……それがカラスに追われるようなことだとしてもか？」

笑う遠山に、ラザールの声が低くなった。

「カラス？」



恐らく文脈的に、鳥のあれとは違うだろう。

遠山が聞き返す。そうだ、確かリダたちとの会話でも出てきていたはずだ。

カラス。 犯罪者ギルドー

「ああ、この1ヶ月、俺が追跡をかわしていたのは帝国や冒険者、そして教会騎士だけではないんだ。カラス、俺は奴らにも追われている」

ラザールの表情が暗くなる。後悔と、不安。それが入り混じる表情。

縦に避けた目は細まり、尻尾がくるりと丸まっていてー

「あ、そうなんか。まあ、そんなことよりよ、ラザール、お前の夢の話だが」

あっけかららん。遠山が言葉を右から左に受け流す。

「ああ、気にするのも無理はー ……さて、ナルヒト、今、ア  
ンタ、ものすごい軽く流さなかったか？ 聞いていたのか？俺の話  
を」

ラザールが目を剥く。ありえない、といったように。

「あー、なんかカラスがどうのこうのたる？ 聞いてたよ。ルカや  
リダもカラスがうんたらかんたら言ってたな。気にした方がいいの  
か？」

実感がないのと、遠山はすでにラザールを抱き込むことを決めて  
いた。

だから、竜にも挑み殺したのだ。

今更、ラザールの過去や、トラブルなどは遠山の決定を変えるに

値しないものだった。

レーザーが、ぱちくり、ぱちくり、目を瞬かせ、それから

「ふ、はははははははははは！！ ああ、これはいい！！ アンタ、ほんとに大バカかあるいは大物だな！ そうか、そうだよな。そりゃそうだ！ 竜を恐れぬアンタが、カラス程度恐るわけはない！ はははははは！」

周りの人間がギョツとするほどの音量。

トカゲが大口をあけて、腹を抱えて大笑い。

「おお、レーザー、アンタそんな笑うこともあるんだな」

「ふふふふ、心底愉快だったからね。だが、フェアではないな。ナルヒト、俺の過去を気にしないと云ってくれたアンタに、俺は誠実でいたい。だから、聞いてくれ」

腹を抱え、眼を拭いながらラザールが居住まいを正す。

遠山も頼杖をやめて、椅子に座り直した。

「あ？」

「俺は”王国”の出身だ。あの国で俺は、”シャドウ・トウース”と呼ばれていた」

「なにそれかつこいい」

いいなあ。そういう通り名。

おれ、”カナヅチの遠山”とかいうセンスゼロの呼び名だったなあ。なんだよ、カナヅチって。それただの泳げない人じゃん。

上級探索者試験で一緒になったあの灰色髪のイケメンのことをわずかに思い出す。

アイツがつけたあだ名は一気に広まっていた。まあ、悪い気はしなかったが。

「……やはり知らないか。帝国にもその名前は広がっている筈なんだがな。……ナルヒト、俺は薄汚い、呪われた犯罪者だ」

「へえ」

ラザールの言葉に遠山が短く返事をする。

「盗み、脅迫、殺し、詐欺、誘拐…… およそ社会において悪と呼ばれることは全てやった。荒れた王国の風土や、種族への差別を言い訳にすることはない、俺は自分で選び、悪事を仕事として行ってきた」

縦に裂けたラザールの爬虫類の目。

それが写しているのは、今か、それとも過去の記憶か。

「才能もあった。俺は影に愛されている。天使の眷属の1人、”悪事のフローリア”、俺は彼女の口づけを受けている、そう持て囃されてきた」

ラザールの指が、こつん、こつんとボロテーブルを規則的に叩く。

「お、ファンタジーぽいな。それで？」

「……王国は帝国よりも貧富の差が激しい。俺の種族は過去の過ちから人類国家の全てで迫害の対象になっている。まともな職どころか都市部では住む場所すら与えられないのが普通だ。……長い内乱、募る不和、俺の才能を発揮するに王国は最適な場所だった」

「ふーん」

リザドニアン、だったか。確かに周りの連中の反応や会話の内容をおもいかえしてみると、どこか差別的な印象があるのは間違いない。

「アンタ、ほんとに理解しているのか？ 俺は、俺は他人を傷つけて生きてきた悪党なんだぞ」

ラザールが心配するように遠山に語りかける。

遠山はその様子がおかしくて、おかしくて。

「ひひひ」

笑いを止めることが出来なかった。

「何がおかしい？」

「いや、悪い。悪党がよ、いちいちそんなこと他人に言うなんて、偉い律儀な悪党もいたもんだと思ってな」

だめだ、やっぱこいついいやつだ。遠山は自分の見立てが間違っていることを確信する。

「そ、それは、アンタに不義理だと」

「それだよ、ラザール。俺がアンタを気に入ったのはそれだ。不義理、ラザール、この世には不義理を不義理とも思わないたまたま人間の形をしてるだけの化け物がうじゃうじゃいる。……アンタは違うよ、ラザール」

はつきりと言葉を伝える。

「な、ナルヒト……」

「他人を傷付けて、か。それを言うなら俺もだ。俺は自分の欲望のために命を殺して金を稼いできた人間だ。化け物を殺した、あいつらだって生きるために人を食うだけだ。そのただ、生きてる命を俺は踏み潰し、自分の欲望を満たすための仕事にしていた」





あの塔の中で。

ラザールは、常に遠山に証明してきたのだ。その隠しきれない善性を。

それはもう遠山鳴人の欲しいものになっていた。

「例え世界の全てがアンタを悪人だと、呪われた咎人と貶めようとも、俺だけは知っている、アンタがいい奴だということ」

だから、言い切る。それは誰に覆すことの出来ない事実。

「アンタのことを悪人だと誹る奴は俺の敵だ、世界全てがアンタの敵になると、俺だけは味方だ。俺はもう、そう決めている」

だから、決めた。その為ならば敵を殺すことを。

「な、なんで、そこまで」

「――湖のほとりに家を建てたかった」

その言葉は光景。

遠山鳴人の間違いない最期の瞬間に浮かんだ願いの光景。

「そ、れは……」

「俺が最期の瞬間思ったのはそれだった。そしてあの時、アンタが最期に口にしたのもそれだった。ラザール、俺たちは恐らく幸運だ」

「幸運？」

「死ぬ瞬間、ここが自分の最期だと覚悟したとき、いまわのきわの最期の言葉。その景色、死を前に思う光景を共有出来る人間と出会える奴が、いつたいこの世に何人いる？」

「あ……」

ラザールが目を見開く。遠山の茶色い瞳がそのトカゲヅラを映す。

「俺は決めた。今度こそ、俺は湖のほとりに家を建てる。金を稼ぎ、敵を殺し、欲望を叶える。それにはアンタが必要だ。俺と同じ、欲望の光景を持つアンタという相棒が必要なんだ」

もう2度と、終わらない。

ここに続きがあったのだから。

「だからラザール。俺はアンタの味方だ。そしてアンタも俺の味方だ。約束通り、話をしようぜ、俺たちのこれからの話。そしてたり着くべき欲望夢の話を」

今度こそ、必ず辿り着く。

欲望のままに、欲しいものを手に入れる。それが遠山鳴人の全てだ。

そこには、このトカゲ男が、このお人好しがどうしても必要なのだ。

「……俺みたいな男が夢を見てもいいのだろうか」

「いい」

縦に裂けたひとみが、揺れる。

「俺が傷付けた人々はそれを許してくれないだろう」

「俺が許す」

トカゲ男の声が、水気を帯びる。

「……アンタに迷惑をかけるぞ」

「俺はお前の3倍は迷惑かける自信がある」

ぼたり、ぼたり。

廃材のテーブルに、雫がおちて、染み込んだ。

「は、はは…… ジョーヤニヲコクウコ。ああ、齒よ。貴女が俺たちを創り出してくれたことを感謝する」

不思議な言葉を唱えた後、ラザールが胸に手を当てて俯く。

何かへ祈りを捧げながら、静かにその目には涙を湛えて。

「お、おいおい、泣くなよ！ 勘弁してくれ、何か気に障ったか？」

「いや、いや、逆だよ、ナルヒト。……こんな言葉をかけられたのは生まれて初めてだ、俺は生きてて、よかった……」

「ラザール……」

ラザールの気持ちが見えぬのはわかる。

生きるというのは、やはり辛いことだ。暗闇に進めなくなる時もある。よく、知っている。

「……改めて、ナルヒト。答えさせてくれ。ああ、そうだ。湖のほとりに店を建てたかった。これが死を前にした時に現れた願いで、俺の夢だ。俺も噛ませてくれ、ナルヒト。君のその強く、そして強欲な夢に俺も賭けてみたい」

「ひひ、ラザール、いいツランなつたじゃねえか。これは契約だ。俺の欲望とアンタの夢は重なっている。俺たちは生きる限り、それを追い求める。己の全能力をかけて、そこに辿り着く。一抜けはない。死ぬことも許されない」

ここに、しかし、2人が揃う。

同じ強欲の景色を共有する冒険奴隷が2人、再会したのだ。

「望むところだ。我が祖、偉大なる祖にかけて誓う。アンタの欲望が俺の夢。必ず、俺たちの光景に辿り着くことを約束する」

もう2度と、道を誤ることはない。

進むべき道を見失い、過去に悩んでいた影に愛されし牙は、彼方よりやってきた強欲に見出されたのだから。

「イエース、交渉成立だな。こーゆーときは酒でも酌み交わすのが俺の故郷の習わしなんだが、あいにく金がねえ」

遠山はえらく軽くなってしまった革袋を揺らす。

調子に乗って使いすぎた感は否めない。



「おっと、それならいいものがある」

ニヤリと、ラザールが笑う。

「ラザール、これは？」

ニヤリ、遠山も笑う。

「天使教会謹製のハチミツ酒、その名も”天使のくちづけ”、まあ、なんだ、冒険都市にも俺のセーフハウスがあつてね。そこから持ってきたシロモノさ。どうだい、俺たちの夢の始まりを天使のキスに祝福してもらうのは」

「ひひひ、ラザール、アンタ結構キザだな」

「アンタに言われたくないよ、ナルヒト」

チベットスナギツネのような細い目が歪む。

爬虫類特有の冷たい瞳が、細められた。

2人の凶相が、ニタリ。

その笑顔は不思議なことによく似ていた。

ラザールが2つの小さな盃を懐から取り出す。

どちらともなく、その琥珀色の液体が揺れるビンに手を出して伸ばしてー

「お、にいさんー!」

痛々しいほど、弱く、しかし通る声だった。

「んあ？」

「おっと？」

ビンに伸びかけた手が止まり、遠山が目を丸くする。

その声の主を知っていたから。

「ニコ？」

「おねがい……！ おにいさん、お願い！ リダが、ルカが、ころされちゃ……っ」

ボロボロの姿、目に青あざを持つニコがよろめきながら地面に倒れた。

「いかん！」

ラザールが慌てて少女に駆け寄り、遠山は立ち上がりその光景を見ていた。

ピコン

メッセージが世界に踊る。

【サイドクエスト】

【”汝、その強欲をいだいて率いよ”】

【クエスト目標 子供たちの運命を決める】

「……………なんだよ、それ」

ずきり。

遠山の頭が痛む。痛めつけられたニコと、幼い頃に別れたけむくじやらの友の姿がどうしようもなく――

19話 汝、その強欲をいだいて率いよ（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さい！

< 苦しいです、評価してください > デモンズ感

次回大暴れ回、お楽しみに！

下にTweeterあるのでよければフォローしてください。更新  
告知などしてます！

## 20話 トオヤマナルヒト

「ナルヒト！ きてくれ！ 酷い怪我だ、クソ…… まだ子供だぞ」

「お、おう。ニコ、なんで……」

「ごめんなさい、ごめんなさい、おにいさん…… めいわく、かけちゃって、ごめんなさい……」

倒れかけたニコをラザールが優しく受け止める。ブツブツつぶやくニコは、明らかに悪意をもって痛めつけられていた。

「知り合いか？ ナルヒト」

「ああ、アンタを探すのに協力してもらったこの街の住民だ。別れてからまだ時間も経ってねえんだが……」

「ごめん、ごめんなさい、めいわく、だよね……でも、頼れる人、あなたしかいなくて……それで」

消え入りそうな声、小さな顔には殴られた痕が痛々しく。

「ナルヒト……」

ラザールが遠山に視線を向けて。

「ああ、ニコ、何があった？」

遠山がしゃがみ込み、ニコに語りかける。

「カラスが、おにいさんを探してる…… ロープの男、トカゲを探してるロープの男の場所を教えろって、その人が、ゆって」

こほ、こほ、とむせるニコの目には涙が溜まっている。

「カラス…… いや、その前に、お嬢ちゃん、口を開けるかい？  
ああ、いい子だ」



「レーザー？」

懐から小さな瓶を取り出したレーザーに遠山が問う。

「部族に伝わる霊薬だ。痛みを和げ、血を止めてくれる。素材が希少で帝国ではあまり作れないのが難点だな」

広場の隅にニコを運び、仰向けに寝かせる。そのままレーザーが瓶の中身をニコの口元に運ぶ。

「けほ、けほ。ありがとう、トカゲさん…… にがい、わ」

「いい薬の証拠さ。お嬢ちゃん、その傷は……」

「うん。奴らにやられたの…… 狭い路地に連れ込まれて、シロとペロだけはなんとか逃がせたんだけど…… わたし達はそのまま捕まって……」

「ペロ……まさか、金髪の癖っ毛の子かい？　小さな子をいつもおんぶひもで背負ってる……」

ラザールを見たというのは確かペロだ。顔見知り程度の仲ではあったのだろう。

「えけ、そうよ……　カラスに捕まって、それで路地裏に連れていかれたの……　けほ」

「……なんてことだ、なぜ、カラスが……」

「俺とコイツらが話してたのを見てた奴がチクツたか？　リダとルカは？」

おそらく遠山に関わったせいだろう。カラスとやらはラザールを追っていた。それを探している男、遠山はカラスの興味をひいてしまっただらしく。

「わたしを、逃すために、そいつらに逆らって……　ルカがスキル

で、私を屋根に……それで、にげれたの。でも、もう、ルカはスキ  
ルも使えない…… どうしよう…… 2人が、殺されちゃう」

「奴らはごどもにも容赦がない…… ナルヒト、どうする?」

「どつするって、お前……」

ラザールからの問いかけに遠山が慄いた。

「俺の命はアンタに助けられたものだ。だから、決めた。これから  
先、命を賭けるかどうかの瀬戸際で、おれはアンタについていくよ」

「お、にいさん……」

ニコが遠山を見る。縋るような目つき。遠山は意識してその視線  
に気づかないふりをした。

「カラスってのは組織だったな。規模は?」

「帝国全土に奴らの商売の手は広がっている。王侯貴族や帝都の冒険者ギルドとも繋がりはあるだろう」

「ヤマグチ組みたいなもんか…… だめ、だな。悪い、ニコ。リダとルカは助けられない」

迷う暇もなく、遠山は結論を出した。

「え……」

「ナルヒト、それは……」

ニコの目が大きく開かれる。ラザールも同じく。

2人にとって、遠山のその反応は意外だったのだろう。

「ラザール、アンタならわかるだろ。リスクとメリットが釣り合わねえ。もし、仮にアンタが奴らに攫われたりしたら、俺は迷い無しでそいつらを追うだろう。だが、ラザール、それはアンタが俺の相棒で、俺に必要な人間だからだ」

遠山鳴人には理由が必要だ。

遠山はおそらく狂人の類ではあるが、行くところまではまだ行っていない。

これが本当に、もうどうしようもなくイかれてしまった後戻り出来ない真の狂人ならばニコの言葉にすぐ頷いただろう。

”気分が悪い” 真の狂人とはそんな本当に下らない理由で世界をぶち壊す、そんな存在なのだから。

だが、遠山はそうではない。

イかれたことをするにも理由があるのだ。そして、彼らは、リダは、ニコは、ルカはその理由にはなれない。

「あ……、お、にいさん」

「悪いな、ニコ。俺はこういう人間だ。お前らとは対等なビジネスの関係だった筈だ。銅貨10枚で俺とお前らの関係は終わっている。気の毒だが、助けられない」

「……あ、あ………」

泣く、だろうか。

それとも、怒るだろうか。

冷たいこちらの言い分に対しての、ニコの反応を遠山は予想する。

「でも、おにいさん、あんなに、私たちに、優しく………」

「そりゃ勘違いだよ、ニコ。俺は……優しくない。こういう人間だ」

そういうのは慣れてる。

人じゃない。人でなし、化け物、クズ、カス、ゴミ。

――悪魔。

数々の周りの人間達が遠山に対して投げかけてきた言葉の数々。

遠山鳴人はその欲望に従う時ならば、この世の不条理、理不尽その全てを嗤いながら殺しに向かう人間だ。

ラザールを送還し、アリスに挑んだのも、それが遠山の欲望だったからだ。同じ夢の光景を共有するラザールを死なせたくなかったからだ。それが遠山の欲望だったからだ。

今は違う。

ニコたちは理由にはなれない。

「俺は…… お前たちの為には命を賭けられない。悪い……」

そう、彼ら子どもたちは違う。

シンプルに、遠山は彼らをその強欲の範囲に入れることが出来なかった。

だから、頼む。

惨めに泣き喚いてくれ、唾を散らし罵ってくれ、やり場のない怒りと悲しみを俺にぶつけてくれ。

俺を、失望させてくれ。見捨てさせてくれ。頼むから。

遠山は願う、子ども達はその範囲から外れてくれることを願う。

でないと、あまりにもー



「……………リダ、ルカ」

薬を飲み、少し回復したニコがゆっくりと立ち上がる。

憔悴しきった顔、ボロ布の服は所々破れ、赤毛も埃まみれ、可愛い顔にはつい先程付けられただろっ生傷が、生々しく。

そして、今、その最後の希望を、遠山は振り払った。

ニコが、遠山を見つめる。遠山はそのまっすぐな目からつい、目を逸らしてしまった。

さあ、喚け、怒れ、それで、全部終わりだ。

遠山が目を瞑る――

「ありがとね、おにいさん！」

「……………は？」

素で、そうつぶやいてしまった。いま、目の前のこの少女はなんと言ったのだろうか。

絶望に沈み、自分や仲間の命の危機のなか、力を振り絞って差し出した助けを求める小さな手のひら。

それをあっけなく振り払った人でなしに、なぜ、そんな顔で――

遠山は晒していた目を、少女へと向ける。

「いや、ニコ。なんで……………」

笑っていた。

ボロボロの姿。

目には青あざ。服は所々破け、砂まみれ。

「嬉しかったのは、リダやニコだけじゃないわ。わたしも、大人の人に優しくされたの生まれてはじめてだったの」

ふらつきながら、ニコが立ち上がる。薬が効いてるのは確かだが、その足取りからはつきりダメージが見てとれた。

「お、おい、キミ……」

「困らせてごめんなさい、トカゲのおにいさんもおくすり、ありがとうごさいました」

「……なんで、そんなこと言える？ 俺はお前らを見捨てたんだぞ」

「え？ どうして？ そんなの当たり前じゃない。ごめんなさい、おにさんがとても、とても暖かいから忘れちゃってた……自分のことは自分でなんとかしないと、いけないもの」

「それでね、たぶん、もう会えないから言いたかったの！ ありがとう！ おにさん、私たちを人間として扱ってくれて、ありがとう！」

大きな声で、しっかり彼女は頭を下げた。

遠山とニコの目が合う。

大きな緑色の瞳、遠山を捉えてにっかりと。

なんのことはない、ただの無邪気な少女そのものの笑顔で。

「さよなら!」

「……ああ、さよなら」

少女がぴよこんと頭を下げて、歩いていく。よたよたと、身体のダメージが抜けていないのだろう。

元気な声は明らかに、彼女なりの強さからくるもので。

遠山はそれから目を逸らした。

被る、かぶる。

かぶるのだ。彼らがどうしても昔の自分とあのけむくじやらの友とかぶって仕方がない。

彼らは弱い。だから、奪われる。昔の自分たちのように。

もう嫌だ。弱い奴を欲しくなるのはもうやめた筈だ。だって、弱いからすぐいなくなる、消えてしまう。

遠山は自分を理解している。その手に、その強欲に抱える範囲は思ったよりも少ないこと。

「ナルヒト……いいのか？」

「……俺は慈善家じゃねー。アイツらを助けてなんになるんだよ」

ラザールを助けたのは彼が同じ夢を共有していたこと、そして何より彼が大人で強いと解っていたからだ。

自分の面倒を、自分で見れる人物だと遠山は理解していた。事実、その通りラザールは結局、帝国という国家、その他の勢力の手から1ヶ月も逃げ延びていたのだから。

「……そうか」

「ああ」

きっと、もう彼ら、彼女とは2度と会うことはないだろう。遠山はその欲望のままに、生きていく。

その人生の光景の中に、彼らはいない。遠山はどうしても彼らにその価値を見出せない。

己の強欲の中に彼らはいないのだ。

だから、これでいい。

これでいい。

「なんで……」

なんだよ、ありがとつって。

ニコの笑顔。きっと、本当は泣きたかったのだろう。まなじりに  
は涙が溜まっていた。

雑踏をゆく、その背中を横目でちらり。

今、彼女の心の中には絶望が詰まっている。それでも小さな身体  
を引きずり仲間のもとに戻るのだ。

その先にはちっばけな悲劇しか待っていないとしても。

「知らねー……俺には、関係ねえ」

「好きにしている筈だ。」

思ったとおりにしてる筈だ。だってそうだと、元々ここにはラザ  
ールを探しに来たんだ。アイツらはたまたまその途中で出会っただ  
けの他人だ。



「知らねー……、俺は間違っ、なんか」

目を逸らす。早く、早く消えてくれ。

そういうのに、弱いんだ。でも、だめだ。理由がねえ、理由が。

これでいい。進もう。ようやく夢を共有出来る奴を見つけた。ラザールは必要だ、だけど子ども達はそうじゃない。

遠山が、去っていくニコから顔を晒す。

嵐が通り過ぎるのは待つように、ぐっと目を瞑り、息を、止めた。

「高揚したんだ、あの時」

低く、しかしよく聞こえる声、ラザールの声だ。

「あ？」

「あの時だよ、アンタが、俺の名前を呼んでくれた時だ。覚えているかい、ナルヒト」

「ドラ子んときか……それがどうした」

「高揚したんだ。あの時のアンタの顔を見て。竜すら食い殺さんばかりの顔、何かに酔っているようにも、茹っているようにも見えた。アンタの顔」

「また会おう、と言ってくれたあの顔だ。俺はあの時心底から思ったよ。また、アンタに会いたいと」

「だから、何が言いてえんだよ、ラザール。簡潔に言え」

「……アンタが今、本当にやりたいことはなんなんだ？」

「は、そんなん決まってるだろ。計画があるんだ。この街で店をやる。アンタ、パン作れるんだろ？ あれは美味かった。俺はこう見えてかなり美食家でな。俺が監修、市場調査、商品開発、アンタが作る。売れるぞ、俺たちのパン屋。そこで金を稼ぐ。色々考えてんだ、俺はー」

遠山の言葉はいつになく、荒々しく早口で。何かを誤魔化したいようにも思えた。

「ナルヒト、今、アンタがやりたいことはなんだ。俺のことや、ほかのことを無視して、教えてくれ」

ラザールがそんな遠山とは対照的に、静かに、そして短く言葉を紡ぐ。

「なんだよ、だからいま言ったろ？ 早くここから離れよう。面倒ごとに巻き込まれるわけにはいかねー」

「違う。アンタの顔はそれじゃない」

「……………あ？」

「これから長い付き合いになるんだ、アンタは恩人だが言いたいことは言わせてもらう。アンタとは知り合ってまだ時間が経っていない、だが言っぞ」

すう、とラザールが息を吸って。

「らしくない、らしくないじゃないか、トオヤマナルヒト」

「……なんだって」

「あの時のアンタはそんな顔していなかった。なんだ、そのしょぼくれたツラは。何を我慢している？ らしくない、お前らしくないんだ、ナルヒト」

「ち、ちょっと、待てよラザール。お前、何言ってるんだ」

「欲望のままに」

ラザールの言葉に、遠山の動きが止まる。

「アンタの言葉だ。今のアンタは本当にそうなのか？」

「……ああ、そうだよ」

「だったら、笑え！あの時みたいに、笑ってくれよ！なんで、そんな、辛そうな顔をしてるんだ、ナルヒト！」

「は？俺が、何。辛そう……？」

椅子に座り込む。

廃材のテーブルの上に忘れたように置かれたビン。

琥珀色の液体の向こう側に、遠山の顔が歪んで映り込む。

きつと、それは目の錯覚なのだろう。しかし、遠山には一瞬それが見えた。

ガキの頃の自分、そして毛むくじやらの友がそばにいて。

2人でどこかを歩いていた。あの時、間に合っていれば、そんな未来もあったのかも知れない。

「あ……」

そんなもしもの光景は、琥珀色の向こうにすぐに溶けて、当たり前  
前の自分がビンに映る。

酷く、疲れて、ひどく、弱そうな自分の顔が頼りなく映っていた。

「……ひでえツラだな」

頭を搔く。

あの時は間に合わなかった。あの時は遠山も、友も弱かった。

今は、どうなんだろうか。

あの時、もし、遠山が強ければ。金が、力が、考えが有れば。

あの毛むくじゃらで、モフモフの友を喪うことはなかったのかも  
しれない。

「くそ」

メッセージが視界に躍る。

【クエスト目標 子供たちの運命を決める】

今、遠山には何があるのだろう。

うずり。身体のコが疼いた。

それは欲望の萌芽。

知りたくなる。未知を、もしもを探りたくなるのも人の欲望なれ  
ば。



「今の俺が、もし、あの時と同じ状況にいれば」

敵は、理不尽。弱者を踏みつけ、己の欲望を武器として遠山の領域を冒そうとしている外敵。

「あの時はだめだった。タロウは死んだ。……一緒にはもう、いられなくなった」

幼く、愚かで、弱かった。

じゃあ、今は？

「歳とって、バカだ。でも、……殺せる、大抵の奴を、俺は殺せる」

遠山のそれに火がつく。

ラザールや夢のことを置いて、好奇心が、欲望の呼び水となる。

知りたい。あの時、もし俺が強ければ、どうなっていたのかを、知りたい。

理不尽なクソどもが、弱いものから奪おうとするその時、今の俺がいればどうなるのか。

知りたい、知りたい、知りたい。

「……いい顔になってきたな、ナルヒト」

「うるせえ」

遠山はこういう人間だ。他人の為にその心はブレても動くことはない。

だが、ひとたび己の中にあるその力。強欲が疼けば、もうそれに逆らうことはない。

今の自分がこのクソだらけの世界に何が出来るか、知りたい。

それが、今の遠山の欲望だ。

「アンタが何を選ぼうと、これだけは確かだ」

ラザールが、遠山を見つめ

「ーアンタについていくよ、ナルヒト」

口角を上げて、笑った。

遠山鳴人も、同じく。

「……ラザール、パン屋には従業員が必要だよな？　なるべく素直に働く奴らがいい。心当たりがある、ラザールベーカーリー最初の人材登用の時間だ」

「フッ、いいだろう」

「ニコ！！！！　待て！」

遠山鳴人の大声がスラムを貫いた。

死地へ向かう少女の足が止まり、振り返る。

「……………えっ？」

その目、歩き始めた後に泣いていたのがわかる。青あざと別に、赤く大きく腫れていた。

「お前、料理はできるな？」

ずかずかと遠山が歩み寄る。ニコの肩に手を置いてその場に膝をついて視線を合わせた。

「え、え？ おにいさん？ お、おりょうり？ う、ううん、お料理なんて、ネズミを焼いたりぐらいしか」

「いよおおおし！！ 採用！！ ネズミを焼けるってのは料理が出るわけだ！ ニコ、お前は栄えある我がパン屋会社、”ラザール・ベーカリー”の面接に合格した！！ もうこの時点で、お前はうちの従業員だ！ 俺の資産だ！ オーケー?!」

「え、え、え？ お、おに、いさん？」

「あと他にも何人かいる！！ ニコ、お前の友達を紹介しろ！ そいつらをスカウトしていく、たまたまもし、そいつらが誰かにぶち殺されかけていたりした場合は！！ ラザールベーカー―販売部兼人材開発部兼広報部兼商品開発部兼警備部兼管理部”部長”のこの俺が厳正に対処しなければならぬ！！」

早口。こじつけ。

でも、これが遠山には必要だった。理由は出来た。

リダとルカ、ニコ、シロとペロ。

全員、必要だ。全員、欲しいのだ。

「へ？ あ、あの、おにいさんが何を言ってるか、わたし……」

目を白黒させるニコ。まともな彼女は目の前の狂人がなにを言っているのか理解できない。

「ああ、もう！！ あれだよ！ リダとルカんとこに案内しろってこと！ アイツら助けに行くって言うてんの！ あー…… もう、クソダセえ」

「……！！ だいすき！」

目に涙を溜め、ニコが遠山の腰に抱きつく。あまりにも軽い彼女を受け止め、遠山が笑い、そして、ハツとした顔で動きを止めた。

「うお？ ら、ラザール、これ事案じゃないよな！ ニコから触ってきたから、セーフだよな？！」

「アンタは何を言ってるんだ？ お嬢ちゃん、案内してくれ。うちの偏屈屋はどうやら君たちを助ける理由をようやく見つけたらしい」

くっくっく、レーザーが喉を鳴らす。満足げにその爬虫類の目を細めて。

「誰が偏屈屋だ、誰が」

「うん！！ うん！ こっち、こっちよ！ 案内するわ！」

元気りんりん。傷だらけだが、希望がニコの身体を軽やかに。

その様子を眺め、遠山が、レーザーが一步、前へ。

「レーザー、作戦がある。約束通り、全能力を懸けて頑張って貰う。俺は割と人使いが荒いぞ？」

「ああ。覚悟の上さ。いい顔になったな、それでこそ、だ」

2人が、並び立ち、少女を追って進み始める。



目も合わさずに、どちらとも突き出した拳と拳、コツンと合わせて

「行くぞ、相棒」

「望むところだ、友よ」

遠山達がスラム街を進み始めた、標的は決まった。今から欲望のままに助けるもの、そして滅ぼすべきものも決まっていた。

【サイドクエスト ” 汝、その強欲をいだいて率いよ】

【クエスト目標更新 従業員を救え】

【オプション目標 ” カラス” と友好関係を築く 失敗】

【カラスルート 消滅、メインクエスト ” 黒羽のはためきと共に ” が発生しなくなりました】

……  
……  
……

暗い路地裏の中、捕食者たちがニヤニヤと嗤い続けていた。

「いやさあ、正直、なんていうの。結構ムカついちゃったんだよね  
ー、俺」

頬にカラス羽の刺青を刺した長身の優男。にっこりと浮かんだ笑顔が、彼らを見下していた。

「ゲボツ?!」

取り押さえられたリダの腹に長身の優男のつま先が食い込む。

黒い革鎧の上から外套を羽織ったその姿。カラスの中である程度の自由行動を許された構成員の証だ。

「リダ?!」

同じく取り抑えられているルカ。顔はボコボコ。殴られ蹴られ、痛ぶられたあとだ。

「おっと、動くなよ、おい、きちんと抑えておきなよ」

「は、はい！ オラっ！ 暴れんじゃねえ！ このガキ」

がっしりとカラスの構成員たちに身体を抑えられてリダとルカは暗い路地裏で、リンチに遭い続ける。

起死回生の一手はしかし、ニコを逃すことで精一杯だった。

「ほいほいほいっと、えーと、リダくんだったかな？ なー、もうそろそろ話してくれよう、俺もさ、君らみたいにヒマじゃないわけ。時間取られるの好きじゃ、ないんだよねっ！」

執拗に優男はリダを狙い続ける。この男はもう理解していた。リダこそがこの集団の柱。

それを折れば、話がはやいということ。

「ヴっ?! …… こと、わる、なにも。しらねえ。ローブの男も、リザドニアンのこと、もしらねえ」

しかし、何度蹴られ、殴られてもリダは口を割らない。

本人も知らないその感情の名前は、誇り。

自らを対等に扱ってくれた存在を裏切る、それはリダにとって肉体の死よりも重たいことだった。

「なわけないじゃん、いろんなスラムのクズどもが見てんのよ、君たちがトカゲを探しているローブの男といたことをさー、なーんで庇うわけ? 意味わかんないんだけど」

「はあ、はあ…… しらねえもんはしらねえ……」

胃液を吐き散らかす。吐瀉物はもう出し切っていた。

「ふーん、ねえ、もしかして、あれかな。君ら、さつき逃した女の子がさ、ローブの男を呼んできてくれるとか思ってる？ それで助けに来てくれるとか、思ってるない？」

リダの髪を掴み、首を持ち上げながら優男が笑う。

張り付いた笑顔、目だけ笑っていないその顔がリダを見つめる。

「……………なん、のことだ」

「いやいやいやいや、もしさ、そんなこと思ってたんなら早めに否定しておいてあげないと思ってさ！ お前らみたいなボロ雑巾助けに来る奴なんかいないって」

話の合間にリダの首を殴り、優男が立ち上がる。

壊れない程度の暴力を振るう、それはカラスの構成員にとって造作もないことだ。

「ぐほ?! げほ、げほ!」

「なんとなく、なーんとなくなんだけど、君ら勘違いしてんじゃない? ロープの男に絆されてさ、優しくでもされて、勘違いしてんじゃない?」

「な、にを、だ……」

リダが息も絶え絶えに、しかし目に宿した光だけは絶やさずそいつを見上げた。

「君らが、自分を人間だと勘違いしてんじゃないかって。はは、お前らスラムのガキなんてなんの価値もないチリゴミなのにね。ウケる」

「……………」

笑顔で告げられる言葉。それはしかし、この世界の人間にとって  
は当たり前という言葉だ。

社会の底辺、スラム街。行き場をなくし、もうこれ以上墮ちると  
こさえない場所、その中で最弱者。それがリダたち、みなしごだ。

「君らみたいな汚いのにほんとなら触るのも嫌なんだけどさ、仕事  
だからね、仕方ないね。ほら、早く教えるよ、この後も忙しいんだ  
からさ」

「しらねえ……」

リダの言葉に、優男が息をついた。心底めんどくさそうに、がっ  
くりと肩を落として。

「はあ、めんどくさくなったなー、ま、ゴミムシはまだ2匹いるし、  
よし、こうしよう」

ほんと、手を叩き徐に腰からなにかを引き抜いた。

すらり。それは夕方直前、傾きはじめて陽光を受けて鈍く光って。

「は？ え……」

「り、だ……？」

すっくり。

男が、リダの横腹にナイフを刺し入れた。

リダがその場にうつ伏せに崩れる。膝をついたまましかし上半身は力なく。



必死に傷口に手を当てる。しかし、赤黒いシミがどんどんそのポロ布のチェニックに広がる。

「急所は外してるよー、でもさ、早めに治療しないとま、死ぬでしよ。ほれほれ、ゴミムシでも死にたくないっしょ？ そんな君たちにもう一度くえすちょーん」

心底楽しそうに、優男が血のついたナイフを振りながらニコニコ笑う。

「ローブの男はどこにいる？ リザドニアンをどこへ探しに行った？ 言え、教えればそのガキを治療してやるから」

そして明るい声のあと、冷たい声でリダとルカに問いかける。

「ほ、んとに、教えたら……」

折れたのは、リダではなく、ルカだった。

「る、か、やめ、る」

リダの声が途切れ途切れ。

その様子が更にルカの心を折る。

「チツ、はい、黙っててねー」

「げほ」

ゴミでも蹴飛ばすように、優男が瀕死のリダを蹴りつける。

本気で死んでも、どうでもいい。どんな言葉よりもその蹴りが優男の心境を伝えている。

「や、やめろ、やめてくれ、わ、わかった、言う、言うから!!」  
教えるから、リダを蹴るのをやめて!!」

ルカはもう半分泣いている。

恐怖と怒り。しかし万人がそれを立ち向かう為の力に変えることができるわけではない。

むしろ、それに屈する人の方が多いだろう。ルカにはまだ恐怖に立ち向かえるだけの心も、力もなかった。

「オラっ、おっと、1発多めに蹴っちった。もうっ、最初から素直に教えてくれよー、ほら、蹴って悪かった、で？ 居場所は？」

いい汗かきながらリダをなぶるカラスの優男。

「ル、か、ばかやろう……」

「お前は黙ってるっての。あ、うそだった場合は戻ってきてお前ら皆殺しにするからね。ほい、どうぞ」

必ずそうするだろう。それはルカにもわかった。

リダの静止を無視して、ルカが告げる。

「廃屋通りの、古屋敷…… 下水道への降りるところの1番近い屋敷だ、あの人はあそこにいる、筈だ」

あの人と別れた場所を嘘偽りなく、伝えた。

「はずうう？ はい、ふざけた答えなのでマイナス5点。よいしょっ！」

しかしその曖昧な言い方は優男の気に障ったらしい。

また、容赦なくリダが蹴られる。

「づえっ……」

悲鳴すら、もうリダは力なく。赤色のシミが石畳みに沈んでいく。

「やめろよ！ うそじゃない！ すぐに別れたんだ！ だから今もそこにいるかなんてわからないんだよ！」

「ふーん、ほんほん。なるほどねえ。あの辺は確かにあんま探してなかったなあ。OK、そこ探してみよう。お前ら、ついてこいよー」

「ういーす」

ルカは言ってしまった。あの男を売ってしまった。

でも、これでリダはー

ルカはそれに縋る。希望。

しかし、ルカは知らなかった。

「ワイズさん、こいつらはどうします？」

「うーん、殺す価値もないし、どーでもいいや、その短髪のはぼちぼち死ぬっしょ、ほっとけほっとけー。ナイフ磨くのだってタダじゃねーんだからさ」

誰かに与えられる希望ほど、いい加減なものはないということに。その希望は容易に絶望へと変わることを今、知らされた。

「……………は？ い、いや、待て、待てよ。リダは？ リダを、治してくれるって」

「およ？ なに？ まだなんかあんの？」

「とぼけるなよ！ あんた、言ったじゃないか！ リダを治してくれるって！ あの人の場所を教えたら治してくれるって、約束——」

ルカの言葉が止まる。

そいつらの表情を見て、気付いたのだ。初めから——

「プッ」



で冷たくなるお友達にきちーんとお別れ言ってなちゃい。よーし、お前からお仕事の再開だー、張り切っていくぞー」

「うーす」

「ひゃはは、リダもこれでようやく終わりだな。目障りだったんだよ、今まで」

スラムの年長組もニヤニヤ笑いながらルカとリダを見下ろし去るうとしていた。

「なん、で……」

「……………ルカ」

「リダ！？ リダ、ああ、こんなに、こんなに血が…… ダメだ、ダメだよ、リダ、死んじゃだめだ！」



「る、か…… すまん…… しくじ、った……」

「リダ、ダメだ！ 喋ったら血が」

「お？ なんか、面白そうだ。お前ら、ちょいあれ最後まで見てから行くぞぜ」

「ワイズさん趣味ワリー」

「うるせー。ほい、じゃあ俺、あのガキがキレて俺に向かってくるに銀貨1枚、ストーン、お前胴元やれよー」

「うす」

「あー、じゃあ、俺泣いてなにも出来ないに大銅貨5枚で！」

「俺もそれに大銅貨一枚！」

「ケチーな、お前、俺はキレル方に大銅貨2枚！」

「てめえも変わんねえじゃねえか」

陽気に笑うそいつらが賭けを始める。

今、まさに友を失いそうになっているルカで賭けをしているのだ。

向かってくるか、諦めるか。こいつらは仕事の時にいつも似たようなことをする。

「る、か…… おれのごとは、も、いい。ニコと、プロと、シロを  
頼む……」

「何言つてんだよ、リダもいないと意味ねえじゃん！ やめる、やめるよ。お前ら、笑うな、笑うなよ！！ リダが、死にそうなのに……！！！」

「ぎゃっはははははははははは！！ 聞いたかよ！ リダがちにそうなのに、だつてよ」

「だーからどうしたつてんだよ、ガキ！ スラムのゴミが一つ片付いていいじゃねーか」

「あははは、いやー、ルカくんにリダくんいいねー。うん、この仕事の愉しみだよ、全く。君らみたいなゴミムシいじって遊ぶのはさー。死ねよ、もう」

「なんで、俺たちを、なんで俺たちだつて生きてんのに！」

「あはははは！ 聞いた？ お前ら？ 生きてんのにだつてさ！ お前ら死ねばいいじゃん、生きてる価値ないんだから。親もなく、

金もない。薄汚いところにネズミのように集まってカスを食って生き延びている…… あー、やだやだ、ばっちくてやってらんねー。ほれ、しーね、しーね」

ばん、ばん。

ほおにカラス羽の刺青を入れた優男が手を叩き始める。酒を飲む人間を煽るようなコール。

死にかけのこどもと、涙と鼻水まみれの子供に向かい、大人が唾を向け続けた。

723

「しーね、しーね、それ」

「ひやははは、趣味わりーな、ほんと、ほれ、しーね、しーね！」

「「「「「しーね、しーね」「「「「「」

嗤いと言葉がルカとリダを包んでいた。

深い絶望の中にルカはいる。友は血を流し死にかけている。その魂すら侮辱されつくされ、誇りも踏み躪られた。

「る。か…… いい、おとなしく、してろ…… 反応するな」

リダの顔色がどんどん悪くなる。それでも静かに傷口を押さえながら、ルカに言うのだ。

やり過ぎせ。反応するな。反抗するな、そうすれば過ぎ去る。

ルカは気付いた。リダはもう自分の生を諦めている。この場をやり過ぎし、ルカだけでも生き残らせる方に思考を切り替えている、と。

「ああ、ああ…… リダ……」

死に向かつていく友に、なにも出来ない。なにもしてやれない。

なぜだ？

アイツらは嗤って、リダが死にかけている。

この差はなんなんだ？

ルカは小さな脳みそで必死に考える。かんがえて、考えて、結局なにも分からなかった。

アイツらが生きて、リダが死ぬ理由がわからない。

ルカはしかし、その疑問に答える力がない。知力も暴力もなにも足りなかった。

「なんで、……てんじさま」

だからつぶやいたのは、てんしへの祈り。この世界に住まう人間ならば皆が知っている創造主への言葉。

それしか出来ない弱者のあり方。

「お？」

「そっちかー。天使頼りの方かー。誰か賭けてたっけ？」

少年の願いや祈りは届かない。

どんな世界でも共通の事実があるのだ。

たいてい肝心な時に天使神は留守だ。弱者の祈りは届かず聞きいられないことはない。

「よし、まあもうこれ以上面白くなさそうだから、撤収するかー。  
つまんねー」

「なんかぶつぶつ言ってますがいいんすか、ワイズさん」

「あー、いい。肝心な時にキレることも出来ねーゴミムシだ。ああやって、天使に祈ってりゃなんかした気になるんだろ。弱いってのはほんと罪だねえ」

奴らが嗤って去ろうとする。いつものことだ。好き放題に振る舞い弱者から奪ってそれで終わり。

弱者の怨嗟も、祈りも彼らには届かない。

昨日も、そのまた昨日も、ずっと前の昨日もそうだった。彼らは弱者を踏み躪り、生きてきた。

そして、皆が確信している。それがずっと続くのだ。

今日も明日も、自分たちは弱者を踏み躪り続ける、捕食者のままでいられる。そう、信じていた。



「あれ？　なんだ、これ」

ふと1人のカラスの構成員が気付いた。

視界。曇る。

空気がひんやりとしていたことに。

「あ？　なんだ、こりゃ、霧？」

白いモヤが急に彼らを包んでいた。

「リダ、リダ、お願いします、てんしさま、リダを助けて……」

少年の声、祈りはてんしへは届かない。人の祈りをそれらは決して聞き入れない。

だが、それをたまに聞き入れる存在がいる。

天使よりも人に近く、神よりも傲慢で、人ほどではないがあくどい存在。

人の作り出した概念。祈りと願いを割とよく聞き入れることがあるものが、いる。

”悪魔”――

「霧だ……  
おいおいおい、なんだ、こりゃ、お前ら早くここを  
離れるぞ」

「そつすね、なんか、キミワルイ……  
ん？　ワイズさん、いま  
なんか、そこで動きませんでした？」

1人のカラスの構成員が薄いキリの向こうにそれを一瞬見た。

黒い影が、ふわりと霧の中を進んだことを。

「はー？　なんだよ、ビビらせんなよ、なんもねーってさ」

「……え？　あれ、ワイズさん、あの、ガキどもが……」

「あ？」

男が後ろを振り向く。白いモヤの向こう、壁際にいたはずのガキどもが

「……おい、ガキども、どこにいった。誰かみてたか？」

ガキどもが、消えていた。

こぼした血はそのままに、嘘のようにその場から消えていて。

「いや、なんにも見てないです、ていうか、この霧、どんどん濃くなつてませんか？」

「……嫌な感じだ。おい、お前ら、ここから離れるぞ」

優男の判断は早かった。異常に対し、退避を優先。

しかし、その”キリ”相手ではもう、全てが手遅れで――

「いて！！　へ、なんで、俺、血……」

1人。指から血を流した。唐突に、意味も分からず。

それが始まりの合図だった。

「おい、どうし、ギヤ？！　痛い！　痛い？！　なんで、ギヤアアア！！」

そのキリの中で悲鳴が響き始める。

肉が裂かれ、皮が斬られ、血が吹き出し始める。

「なにがあつた？　おい、お前、イ、痛っ？！　噛まれ、いや、違う、斬られてる……？！　あ、俺の指――ヒ、ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア？！」

肉が飛ぶ。命が流れていく。

「おい、なにがあつてー　べべババババ」

キリの中にいた。真白で、いつのまにか前も見えないほど濃くなつたキリの中。

赤い血と、汚い悲鳴が飛び散り、獲物たちが死んでいく。ここは、もう彼らの狩場なのだから。

「ひ、ヒイ?!　なんだ、なにが起きてる?!　おい、お前ら、なにがあつた?!」

もう、その優男の顔に余裕はなかった。リダヤルカに向けていた嘲笑いもなにもなく、ただそこには被食者の恐怖だけが張り付いて。

彼らは忘れていたのだ。弱者を狩り続け、いたぶり続けていたから忘れていた。

昨日は永遠には続かない。強者のふりをしていた、捕食者ぶつていた。彼らはそして知るだろう。

「皆殺せ、キリヤイバ」

真の捕食者がいかに、恐ろしい存在なのかを。

20話 トオヤマナルヒト（後書き）

クソ長文量お疲れ様でした。しば犬部隊がまとまるの下手すぎるので話がモニヨる時はもう一気にスッキリするとこまで行っただれいという悪癖があります。

次回も宜しくお願いします。



## 21話 害鳥駆除

「い、ぎゃあああああ?!?!」

汚い悲鳴がそこかしこ。

命がキリに飲まれて斬り刻まれ消えていく。

そこに彼らのような嘲りも、笑い声も、罵倒もない。

ただ、殺す。殺し尽くす。それだけの現象。真の捕食者の狩りとはそういうものだ。

「おれ、の、身体……あ」

優男、最後に息があつた男が、血の石畳を這う。つい1分前まで強者の余裕は影も形もなく。

部下の恐怖に歪んだ死相をかきわけ、優男が地べたを這い続ける、逃げる、逃げる、逃げ

ぺちゅ。

足音。

「あ……」

「おっと、生き残りか。ふーん、数が多いと威力が減るのか？ 人間相手に使ったことはあんまねえからな。ま、これから調整していくか」

「な、なんだ、おばー」

べちゅり。優男が血だまりに沈む。

足音の主が、ぱちりと指を鳴らした瞬間、優男の身体の中に染み込んだヤイバがその肉と魂を刻んだ。

容赦も、嘲りも、躊躇いもなく、捕食者が仕事を終わらせた。

……  
……

「いやー、絶好のシチュエーション。いつもこんな使いやすい状態だといーんだけどなあ」

濃い死の匂いの中、遠山鳴人が己の胸の中に欠けたヤイバを収納する。死と血に馴染むキリがみるみる間に晴れていく。

「にしても、ひでえ臭いだ…… ひえー、南無阿弥陀南無阿弥陀」

元の世界で同じことをすれば情状酌量の余地なく死刑判決だろう。

今、殺した数は20は下らない。キリヤイバ、遠山鳴人のその兵器は遺憾無く性能を発揮していた。

「ラザールはうまく仕事をしたな。うーむ、1人くらい生かしておけば良かった。身元やら俺やラザールを追う理由を知りてえ」

ヤクザの厄介さはよく知っている。奴らはメンツが趣味の悪いスーツを着て歩いているようなものだ。目をつけられた時点で美味くない。

「最低でも、この件に関わってる人数は把握しておきてえ。遺恨は残さねえ、やる時は徹底的だ」

過去の経験から、遠山は悪い奴らをぶちのめす時はその件に関わってる連中全てを黙らせるしかないと理解していた。

組織まるごとは無理でも最低限、遠山やラザールを追っていたこといつらと関わる人間の口を塞がなければ面倒なことになる。

「さて、さて、なんか持ってねえか？」

手当たり次第に、死骸を漁り始める遠山。常人であれば忌避するその行動もしかし、頭の茹った探索者にとっては朝飯前だ。

「こいつ、コイツが1番身がいいな。周りの奴らの比べて装備が豪華だ。革鎧、外套…… ふむ」

ひとは死と血を目の前にすれば、慄くものだ。しかし探索者は違う。死と血に酔うのだ。遠山はまともに健全に、酔っていた。

「年齢は、俺より少し若いくらいか？ どうでもいいがこの世界、顔がいい奴多いな」

「獲物は、ナイフか…… チツ、血がついてやがる。このつき方は、誰かを刺したか？ リダ、ルカ、死んでねえよな」

「革鎧の良し悪しはわかんねえが、装飾が多い。ふむ、防具というより、見栄えのためでもある、のか？」

最後にトドメを刺した長身の男を漁る。外套を剥ぎ、内ポケットを探っていると、すぐにそれを見つけた。

「お、これは、いかにもって感じだなあ、オイ」

封印がつけられた羊皮紙、のようなもの。しっとりしたその素材は遠山のよく知るパルプ紙ではないようだ。

「いかん、よめん」

すぐに問題が発生した。開いても、そこに書かれてるのは遠山にとっては呪文のような文字だった。外国人が書いた手書きの手紙よりも読めない。

「あつれー、マジか。言葉が通じるから文字もいけるって思ってたんだが…… 何語だこれ。しゃーねー、ラザールに読んでもらうか」

羊皮紙を丸めてロープの内ポケットに入れようとしてー

チャキ。

背後で響く音に遠山は動きを止めた。

「……ふーん。妙だな、確実に周りの奴は皆殺しにしたはずだけど」

「あははのは。はい、ゆっくり、手を挙げて！。両手ね。そうそう上手いじゃん。はい振り向いて！、ゆっくりね。とりあえずさあ、その手紙、こっちに渡してくんない？」

背後に誰かいた。

遠山がしゃがんだまま、言われた通り両手を挙げてゆっくり振り返る。

「おまえ……」

目を剥いた。足元の血溜まりに沈んだ死骸の顔と、目の前でニタニタ笑う顔があまりにも似ていて。

いや、同じ顔だ。

「あらら、どしたの、驚いた顔してさ。まるで殺した獲物が生きてるのを見たような顔じゃんさ」

遠山の背後に立っている男。片手で扱えるサイズの小さなボウガン、それをこちらに構えてニタニタ笑うその顔、見覚えがある。

足元で血に沈んでいる死骸と全く同じ顔で。

「双子、ってわけじゃねえよな」

「はは、さあ、どつだろね。さあ、さっさと渡せよ」



手品のタネをペラペラしゃべるほどバカではないらしい。遠山にとっても重要なのはどうやって、ではなくこれからどうするか、なのでそれ以上の追求はしない。

「よしよし、いい子だ。中身みたかい？」

「字、読めねえんだよ」

「ふうん、ボスからは確か冒険奴隷とか聞いてたけど…… まあ、なら仕方ないか。さて、どうしてくれようか、この状況」

「……死人が蘇るのがここらじゃ当たり前なのか？」

「あー、ダメダメ。会話で仕掛けを読み解こうとしてもダメだよ。この人数を皆殺しにする異能、ノータイムで死体から情報さらおうとする頭、アンタ完全に、こっち側の人間じゃん。あーあ、厄介な件にクビ突っ込んだな」

「は、ならさっさと引き金を引けよ。この距離だ、外す心配もないだろ？」

「いやね、そーなんだけどさ。なかなか殺さないようにするのが難しいわけよ。今からアンタを生かしたまま拷問にかける。トカゲの話を知りたいんだ。ボスからトカゲはなるべく生かして連れてこいって言われてるし」

「……ボス、ねえ」

「あ、口滑らしちった。ねえアンタ、不思議だね。それほど力、それほど適性、間違いなく俺と同類なのに、なんであんなガキどもに肩入れするわけ？」

「偉い余裕だな、早く俺の口を塞いだ方がいいんじゃないかねえの？」

「あひ、いやー、いいねえ。ちよろい仕事だと思ってたけど中々どうして。久しぶりにやりがいのある仕事だよ。この状況で、出てくる言葉が命乞いじゃないのかよ。アンタ完全にこっち側の人間だね。で、質問に答えてくれる？　なんでガキを助けた？」

「そうしたいって思えたから、思わせてくれたからだ。アイツらは

俺の欲望を叶えるために必要なんでな」

「はは、あんなゴミムシどもが？ 変わりもんだね」

「は、部下をこんだけ簡単に死なせる無能より使えるだろうよ」

「はい？」

優男の笑顔が固まった。

お？ コイツ、案外チヨロいな。

遠山の思考が回り始める。余裕ぶつた態度はおそらく薄っぺらい仮面に過ぎなかったのだろう。

予想より簡単そつだ。

「だってそうだろうが。てめーなんかの組織の人間だろ？ エラソ  
ーな態度はある程度人を率いる立場にあると見た。ヒヒヒヒヒ、

笑えるな、部下こんだけ死なせといて、よくそんな態度でいられるよ。羨ましいな、想像力の足りないバカはよ」

遠山は優男の反応を探るように言葉を手繰る。

みるみる間に優男の雰囲気が変わる。

なるほど、コイツ、簡単だ。馬鹿にされ慣れていない。

「……俺のことをさ、舐めた奴はみんなもうこの世にいないよ」

「ヒヒヒ、セリフが安いなあ、おい。なら俺も始末すりゃあいいんじゃないねえの？ この距離だ、おまえみたいな無能でも外しゃしねえだろ？」

獲物は弩。もちろんまともに撃たれば躲せるわけがない。

だが、遠距離から撃てばいいものを、コイツはかなり近づいてきている。3メートルも、ない。

チャンスは一瞬。賭けだが、不可能ではない。

【技能 戦闘思考】

コイツの殺し方はもう出来上がった。あとは実行するだけ。

遠山はその瞬間を待つ、優男の顔が強ばり、そして表情が冷たくなって

「ボスの指令は、トカゲは生かして連れてこい、だ。ローブの男についてはなんも言ってなかったな、そういえば」

人殺し同士、向かい合う。

互いが互いに殺しに躊躇いはない。呪われた魂の持ち主が相対する。

優位は、優男。

手を挙げて、丸腰の遠山に向ける弩の狙いは冷たく、正確だ。

ちゃき。小さな弩の先端が遠山に向く。膝を軽く、地面を確認――

「よっ――」

躊躇いなく、優男が弩の引き金を引いた。勝利を確信した顔――

「ッ!」

膝抜き。古武術における予備動作なしで動くための技術。遠山鳴人は探索者時代に培った身体の動きを使う。

右に倒れ込む。スパン。かわしきれず、左腕に鏃のボルトが突き刺さる。皮を、肉を、ボルトが抉った。

だが

「ヒヒッ」

「なっ?!」

優男のボルトは、遠山の命は奪えなかった。

それが決着の瞬間だった。

プジッ。

「あ、……げほ、え？」

優男が目を見開く。己の胸に生えた異物。ああ、何故か、その胸に剣が突き刺さっていた。

「オラァ!!!」

左腕を貫かれながらも、遠山が地面を這うように駆ける。優男が懐に隠していたもう一つの弩を構える、だが遅い、遅すぎる。

胸に突き刺さった刃が、その動きをどうしようもなく鈍重にしている。

「ゲぶっ!?!」

地面スレスレから振り上げられた遠山の拳、優男の顎を下から真上に打ち抜く。

「返してもらっせ」

ぶじ。胸に突き刺さっていた剣、遠山が無造作にそれを引き抜き血が噴き出る。

刃は湾曲し、傷み、そして欠けていた。



「な、んで」

「さっき思いついたんだよ」

遠山鳴人の身体に収納されている遺物、キリヤイバ。なんのことはない。遠山は弩を躲した瞬間、それを己の胸から射出したのだ。

やれると思ったからやった。うまくいって、何よりだ。

遠山の目が歪む。チベスナによく似た細い瞳、にやりと半月のよ  
うに細まり

「ピッ?!」

「おっと、寝てる」

足を引つ掛け、首を抑えて地面に優男を叩きつける。死んだら、死んだで構わない。そんな勢いだ。

「げほっ?! あ、げあ…… な、にを、どうやって……」

うつ伏せに倒れた優男の背中に膝を押し付け、左手で頭を床にこすりつける。

驚くほどに、力が弱い。身長割に筋力をまるで感じなかった。

「お、重…… な、んだ、こいつ……?!」

優男が遠山を跳ね除けようと抵抗するがピクリとも動かなかった。

左腕に突き刺さったボルトを抜く。血が出るが、戦闘の興奮で溢れるアドレナリンと、酔いがそれを無視させる。

「この仕事を指示した奴の名前は？」

「は？」

優男が遠山の質問を聞き返し――

ザクッ。

食材に包丁を入れるくらいの気軽さで、片方の手で握っていたキリヤイバで優男の右手の人差し指を切り分けた。

「――っあああああああ？！！ おれ、俺の、ゆびいいいいい？！！」

「質問に答えない、嘘を言う。俺が嘘と思うその時点で、指を落としていく。次は親指と小指をもらっ、その次は中指も薬指、その次は残った手の指全部、素直に答えれば解放する。約束、するよ。」

「――ひ、ひ、ひ」

優男が、息を漏らす。もうそれは声になっていない。胸の傷、指、新たなる血が汚い街の石畳に染み込んでいく。

「この仕事を指示したやつの名前は？」

「し、知らねえ！！ ぼ、ボスの名前は誰も知らっー ひぎ？！  
あ、あああ、また、ゆびいいい」

欠けた刃、キリヤイバの湾曲した刃が優男の指を2本、切り分ける。

「なん、なんで、なんでええ、嘘じゃないのにいいい……」

「この仕事に関係している奴の人数は？ お前の仕事に関連している人間の数は？ どこにいる？」

「ひ、や、やめて、もう、切らないで！ いねえ！ 俺以外にいねえよ！！ ひ、独り占めしようとしてたんだ！ トカゲヤローを追ってるのは組織全体だけど、スラム街に当たりつけて探してたのは俺だけだ！ あ、アンタのこと誰にも喋ってない！ ほ、ほんただ！」

じょおおお。石畳に血以外の排泄物が染み込み始める。優男の股間からそれは漏れ出していた。

遠山はピクリとも動かず、夜の山奥の闇を移した瞳で獲物を見下ろし続ける。

「……お前は殺した筈だ、何で生きている？」

「は、は、……ひ、ひい、も、もうやめ、ああああアアアアついいい、指イイイイイ、やべて」

すぱり、すぱり。

質問に答えなかったから優男の右手、残った指である中指と薬指を切り分けた。右手はもうドラえもんだ。

「お前は殺した筈だ、なんで生きている？」

再度同じ質問を淡々と。優男は荒い息をひっ、ひ、と漏らしながら喉を震わせた。

「ス、スキルだ！！ 俺のスキル！！ 双子たちのチャンス！！」

ツインズ・チャンス

「……簡潔にそのスキルの概要を話せ」

「ぶ、分身だ！！ 自分の近くに一体まで自分の分身を作ることが出来る！ 本体が死んだら、片方の分身に意識を移すことが出来るんだ！ も、もう今日は使えねえ！ た、たのむ、今殺されたらこれで終わっちゃう！ な、なあ、話したら、話したら助けてくれるんだよな？」

反応から嘘ではないと判断する。

淡々と遠山が次の質問を投げかける。

「……なんでレーザーを探していた？」

「ひ、し、知らねえ、ボスからの指令には理由なんか書いてねえ！  
ほ、本当だ！ カラスのボスの名前も顔も誰も知らねえ、”三羽”  
の幹部連中しかボスの居場所すらわからねえんだ！」

頭の中にメモをする。後でレーザーと相談しよう。

「お前の組織での立ち位置を教えろ」

「あ、ああ、答える！”三羽”の1人、”嘴のミルダ”の下部組織の一員だ！ し、仕事はスラム街の管理、住人の間引きに、アガリの徴収、ち、チンケな仕事なんだ、俺なんか殺しても、意味ねえよ！」

聞きたいことは全て聞いた。コイツの対応も決まった。

遠山は静かに、なるべく口調を柔らかくして問いかける。

「そうか…… それ以外、何か俺に役に立ちそうな話をしろ」

「は、は？ な、なんだ、そりゃー！ いたあああ！？ 痛い、痛いやめてえええ、あ、ああ…… ゆび、せんぶつう」

遠山が優男の両手をドラえもんに変えた。顔色1つ変わらない。

「何か俺に役立つ話をしろ」

同じ言葉、繰り返す。

「ひ、あ、ああ、金、金か？ こ、こうしないか？ と、あ、アンタがなんでリザドニアンなんぞに手を貸すかは知らねえ！ あ、アンタには才能がある！ こっち側の才能だ！ 俺、俺が組織にアンタを推薦するよ！ 金だ！ 使いきれねえほどの金が入る、女もだ！ アンタが望めばどんな女だって手に入るよ！ り、リザドニアンの肩持つなんてもったいねえって！ な？ 仲間に、仲間にならないか？」

「仲間、ねえ……」

稼げるのか？ その仕事」



初めて遠山が優男の言葉に興味を持った、そんなふう<sup>に</sup>に聞こえたの<sup>だ</sup>らう<sup>。</sup>。

優男が汗まみれの顔をにんまりと歪めて叫ぶ。

命の危機にもう子供たちをいたぶっていた時の余裕などどこにもなかった。

「稼げるさ！ 帝国中の金<sup>が</sup>カラスには集まる！ バカどもから金を巻き上げて、奪い尽くそうぜ！ ひ、人を殺して褒められんだ！ あ、アンタにはびったりだ！ その目、アンタの目、幹部連中と同じ目だ！ 才能があるんだよ！ なあ！ なあなあなあ、あ、相棒って呼ばせてくれよ！ 一緒に成り上がろうぜ」

「……ふうん。ま、それも面白いかもな」

「だろ？ だろだろ？！ だから、なあ、離してくれよ、たのむから、さあ」

懇願する優男。

遠山がぼつりと、つぶやいた。

「……………子供たちの名前を知ってるか」

「へ？」

あまりにも予想外の問いだったのだろう。ポケっと、優男が言葉を返す。

「お前がボコってたガキの名前だ。知ってるか？」

「し、知らねえよ、あんなゴミムシどもの名前なんて興味ねえ！  
す、スラムのガキだぞ！ 生まれてこなけりゃいいような連中だ！」

こんな状況なのに、優男は言葉を、子どもたちへの差別を隠そうともしない。

遠山は予想した。

つまり、これがこの世界のスラム街の住人への認識なのだ。恐らく世界全体の倫理観は、現代と比べて非常に低いのだろう。

「ふうん。そうか。じゃあ、トカゲだ。トカゲヤローの名前。探せと言われてるんだ、それくらい知ってるだろ？」

それを気にする風でもなく、遠山が更に言葉を続ける。

「し、知らねえ！ リザドニアンだぞ！ 呪われた種族だ！ 知りたくもねえよ！ あんな薄汚い連中！ あ、ち、違う、アンタは違うんだぞ！ アンタは特別な人間だ、悪の才能があるよ、俺にはわかるんだ、アンタはあんな連中とは違う！ あんな路傍を這うイモムシ以下のクズどもとは違う人間なんだぞ！ な、だ、だから、たのむ、頼むよ」

子どもたちへの言葉と同じような返答。

この辺でいいか。

本格的に、もう、コイツから得られる情報はなさそうだ。

「……ラザールだ」

「は？ な、なに？」

「リザドニアンとやらの名前はラザール。パン作りが上手い。子どもたちの名前は短髪の刈り上げがリダ、生意気そうな帽子がルカ、赤毛の女の子がニコ、金髪の癖っ毛がペロ、その背に負ぶわれているのがシロ」

「な、なに、なんだ、なんで、そんな名前なんか」

「わかるよ、お前の気持ち。自分にとって心底どうでもいい、死のうが生きようがどうでもいい奴らの名前なんか知る必要も、知りたくもないよな。すぐく、わかるよ」

「へ、へへ、だ、だろ、気が合うな……」

「だが俺にとって、アイツらは名前を知りたくなるような存在なんだ。俺の周り、俺の世界、俺の人生を構成する一員だ。だから、名前を知ってるんだ」

「え、へ、な、何の話……だ？」

「俺は、お前の名前は、どうでもいいな、知りたくも、知る必要もない」

遠山の言葉。

少しの時間を置いて、何が言いたいかを、優男を理解したようだ。

自分の末路を――





痙攣。

遠山はやはり顔色を変えず、ぐりぐりとキリヤイバをさらに深く優男の首に押し込む。

コリ。何かを完全に破壊した。

すぐに、ぱちやり。

他の死骸と2回目のチャンスを不意にした優男は同じく、血溜まりに沈んだ。

「あばよ、ゴミ野郎」

ずるり、両手で引き抜いたキリヤイバ。

遠山が血しぶきを払う、その動作に合わせて霧に姿を変える遺物は静かに、主人の身体の中に戻っていった。



カラスの羽、その刺青をつけた者はみな、探索者に駆除された。

「探索完了」

濃い死の臭いが満ちるその場に、遠山の低い声が静かに。

ピコン

【”汝、その強欲を抱いて率いよ”】

【クエスト完了】

【オプション目標、”目撃者、全員殺害”達成】

【冒険都市の勢力情報に”カラス”が追加されました】

【目撃者を全員殺害した為、すぐには勢力評価は変わりません、しかしいずれ”カラス”は貴方の脅威に気づくことでしょう。早めに冒険都市でどこかの勢力の庇護下に入るか、冒険都市内での地位確立を目指すのをおすすめします】

21話 書寫驅除（後書き）

< 苦しいです、評価してください >      デモンズ感

ありがとうございました！

## 22話 スラム街を出よう

「イーナルヒト!! よかった、無事か!!」

「あ、おにいさん! おにいさん! 怪我、してるの?」

全てを終えて、ラザールと打ち合わせしていた場所へと遠山が戻る。

771

ラザールの潜伏場所、廃屋の中庭だ。

「おう、ラザール、流石の手際、だったな。それとただいま、大丈夫だ、ニコ、かすり傷だ」

正直、弩で撃たれた腕がズタボロに痛むのだが遠山はそれを誤魔

化す。

「ラザール、2人は？」

「帽子の子は薬を飲ませて眠らせている……　だが、その、刈り上げの子は、出血がひどい。止血は施したが、正直期待はしない方がいい」

「リダ……」

ニコが放心した顔で座り込んでいた。

廃材の板、ベット代わりに粗末な寝床に転がるルカとリダ。

ルカは穏やかな顔で眠っている、しかし、リダは違う。苦悶の表情、青ざめた顔に脂汗。

「…………マジか」

一目見て、状態が良くないことがわかる。遠山は呆然と呟いた。

「…………そ、その声、にいさん、か？」

遠山の言葉に反応したのだろう。リダが目を開き起きあがろうとする、しかし痛みですぐにまた横たわる。

「リダ！ お、起きたらダメよ！」

「す、すまねえ、あ、アンタに迷惑かけちゃった…………」

驚いたことに、リダが口にしたのは間に合わなかった遠山への恨言ではなかった。

「いい。全部終わらしてきた。気にすんな」

静かに遠山がリダのそばにしゃがみ込む。

小さな額に浮かぶ脂汗を指で掬い取った。その肌は冷たく。

「お、終わらし……　　へへ、アンタ、やっぱ、すげえなあ……」

苦しそうな顔、しかし笑うリダが痛々しい。

「リダ、血が……?!」

「いかん、きみ、今はしゃべるな。傷が開く」

じわり。リダの腹、巻かれた包帯が赤くなり始めた。レーザーが

慌ててリダを制する。

「へ、へ。自分の身体だ。よく、わかる…… もう、無理だ。ニコ、悪いが、みんなを、頼む」

「ちょっと、いや、私嫌よ！ そんなの！ お兄さんとトカゲさんが助けてくれたのにそんなこと言わないでよ」

もうニコは泣き出す寸前だ。大きな目に涙が溜まっている。

「……ああ、そこさ、俺が1番情けねえのはそこだ。……俺たちを、たいとうに扱ってくれた人に、面倒を…… げほ！げほ」

咳に、血が混じっている。傷ついているのは臓器だ。即死しない、しかしいずれ必ず死ぬだろう傷付け方。

アイツがやりそうな事だ。遠山は始末したゴミをもう少し苦しめれば良かったと後悔した。



「いい、休め。治ったら、またー」

気休めだ。治らないのはもうわかっていた。

「へへ、アンタなら分かるだろ？ もう、無理だ。俺は、ここで終わりだ…… ああ、くそ、ようやく、もく、ひょう、できたのに」

「レーザー……」

遠山がそばにいるレーザーの名前を呼ぶ。

頼りになるトカゲ男はしかし、首をゆっくりと横に。

「すまない…… 俺に、これ以上のことはできない」

「アンタ、みたいに、なりたかった…… てめえの足で歩いてる……  
… てめえの基準で、選ぶことができる、そんな強さが、ほし、  
かった」

うわごとだ。リダの目、虹彩がどんどん暗く、光を失っていく。

「はじめて、ああ、敬意つてのを覚えた、よ。ゆめ、ゆめができた  
んだ…… もくひょう、アンタ、みたいに」

命の終わりが近いのだ。

遠山にはよくわかった。

「もういい、リダ。……お前は十分にすごい奴なんだよ」

その小さな手を握る。弱い力だ。

「すまねえ、すまねえ、ちくしょう、死にたくねえ、しにたく、ねえよう」

ボロボロと溢れるリダの涙。遠山にもラザールにもそれを止める術はなく。

「二コも理解したのだろう。もう、涙を止めることは出来なかったようだ。」

「リダ……」

遠山は、自分の無力を呪う。

欲望の結果を知れた。あの時、幼かった自分と今の自分で何が変わったのか。

弱者を踏み躪る強者を殺すことは出来た。

だけど、それだけだ。弱者を救うことは出来なかった。

「あの時と、同じか……」

タロウ。別れた友。喪った友。なんのことはない。あの時と同じなのだ。遠山は誰も救えない。

「ああ……いやだ、まだ、俺は……」

震えるリダ。

忍び寄る死が彼の中ではっきりと存在を増していく。

遠山鳴人は、ふと、彼の手を握り、静かにつぶやいた。

「……目、瞑れ。ここにいるから」

「……こい、ちゃん」

リダが一瞬安心したように身体力を抜く。

遠山の口からふと漏れたのは、とある本で読んだ死を想う太古の詩。

「あすしらぬ我身と思えど 暮れぬまの、けふは人こそ悲しかりけれ」

去りゆく人と、それを見送るしかない人。

人の無力さと死の絶対さ、それはどのような世でも変わらない。

「え……」

「俺も。いつか必ず死ぬ。お前と同じ場所に行く時が必ず来る」

死。遠山はそれを知っている。重く、冷たく、果てしなく広い感覚。

無力さ。

死を前に、出来ることがあまりにもない。ただ、死にゆく子どもにやってやれることがこれしかなかった。

遠山はリダから目を逸らさない。静かに語りかける。

「ー冷たい水がきつと、そこにはある。リダ、お前は朝、目が覚めるとまずそこにいくんだ」

それは光景。せめて今からゆく場所が怖くないのだと伝えられた。

「……うん」

リダの口調、幼いごどものように。

「そこはお前だけの場所だ。もう誰もお前を傷つけるものはいない。お前は好きなだけその冷たい水を飲み、浴びていい、誰もお前を責めやしない」

そうでなければいけない。生きることはこんなにも辛いのだ。ならば、せめて死くらい、その終わりの場所くらいは――

「うん…… い、いの？」

「ああ、いいとも。そこはお前とお前を愛してくれるやつしかいない場所だ。そこでお前はずっと静かに暮らす。水を浴びたら、草花の上で眠るんだ。風がお前の身体を優しく撫でる、空を見上げればそこには高く、高く雲が一つ浮かんでる」

――せめて優しい場所でありませう。それは遠山の祈りに過

ぎない。

遠山の言葉が重なるたびに、リダの呼吸が弱々しく。しかし、穏やかに変わっていく。

「何も怖がる必要はない。何も恐れる必要はない。お前はみんなより先にそこにいっただけ。心配するな、後からみんなやってくる」

「……………る、かも？」

リダの口からつつつと、血が垂れる。

「ああ」

遠山が頷く。

「に、こも？　へロも、シロも？」



「間違いなく」

頷く。

「アンタ、も……」

「……ああ、努力するよ」

その優しい場所に自分が行けるとは限らない。だが今は嘘をついた。

「そ、うか…… に、いさん、そりゃいい、な」

「ああ、だろ」

リダの声色にもう恐怖はなく。

「この、街、出て……俺は、はじめたかった、あんた、みたい  
に、なりたくて……」

「ああ、出れるさ、リダ。スラム街を出よう。もう誰もお前を傷付  
けることはない」

「そっ、か…… ありがとう……」

「おやすみ、リー」

遠山が力の抜けていくリダの手を強く握りしめ、光の消えていく  
瞳をじっと見つめていた。

「その子、助けようか……?」

足の裏から背筋にかけて、サブイボが一気に粟立つ。

背後からかかってくる声。驚くべきことに、遠山はおるか隠形に長けているはずのラザールですらその声の主の接近に気づかず。

「?!」

「っ何者だ?!」

完全な後手。

現れた人物と、遠山やラザールの力関係がはっきりと現れる。

遠山はその、女を見て目を見開いた。

ああ、またこれかよ。

見ただけで分かる。

「わお、すごい、殺気。しょぼん」

超越者だ、間違いなく。モノが違う。ドラ子や、ベリナルの筋肉  
ジジイと同じ、遙か高みの化け物。

外見は幼い、下手したらリダやニコと同じくらいにも見える。

身長は低く、140センチほどしかないだろう。金髪のシュート  
ボブ、泉のように澄んだ青い目が遠山とラザールを交互にみつめて

いた。

「ッ、お前、どこかで……　　さて、ラザール」

「知り合いか？　ナルヒト」

「確か、ドラ子の家……　大使館にいた奴」

白い修道服で思い出した。フードを外しているがあのマフラーみたいな装飾は印象に残っている。

「おお、覚えていてくれたんだ、竜の人。やつほ、天使教会主席聖女のスヴィです」

やーやーと呑気な表情を少女が浮かべる。

遠山とラザールは気が気ではない。彼女が動作するたびに身体がびりびりとその威圧に反応するのだから。

「聖女?!! 天使教会の兵器が、なぜここに？」

「しょぼーん。ひどい、そんな言い方。……まあいいや、それよりその子、もうすぐ死ぬね。いいの？」

首を傾げる少女。人はずなのに、人ではない。その異質さが空気を激ませていくようだ。

「……よくねえよ、お前に何がー いや、待て、お前ドラ子に黒焦げにされたやつを治療してたな」

言っていて遠山が思い出す、そうだ、こいつ確かドラゴ子に黒焦げにされていたやつを治していたような。

「ああ、クランのバカ。ふん、即死したら良かったのに、生きてたから。主教様に言われて仕方なく、はい、治しました」

心底どうでもいいような表情、泉のような青い目が遠い場所を見つめる。不思議なペースに飲み込まれないように遠山が呼吸を整える。

「治せる、のか？」

だったら、リダも。

「よゆー」

遠山の予感に少女がピースサインで答える。

「……条件は？ わざわざこんなタイミングで出てきたんだ。善意で出てきたんじゃないかねえだろ？」

「んー、主教サマからはあなたの監視をしろってゆわれた。上手いことしろって言われたからー。んー、なんだろ、上手いことって」

子どものように顎の下に人差し指をあてながら、んーと少女が唸る。

見た目だけは天使のように愛らしいが相対すると恐ろしくて仕方ない。

遠山からすれば怪物種が人間の形をしているようなものだ。

「おにいさん、この子……」

ニコはよくわかっていないらしい。自分と同年くらいの少女に遠山とラザールが怯えているのを不思議そうに首を傾げた。

「動くな、ニコ、ゆっくり、ラザールのそばに」

「う、うん」



だが賢い子だ。遠山の声色にただごとではないとすぐに悟ったらしい。ラザールのそばに、とてつと向かう。

「……そんな警戒しなくていいのに。しょぼん、私、あなたに何かしたっけ？」

「ネズミが蛇を見たらびびるのは当たり前だろーがよ、蛇の自覚がないならせめて近寄らねえでもらえるか？」

「おお、難しい言葉。主教サマみたい、ふふふふのふ」

軽口を返すのすら気を使う。おそらく殺意を向けた瞬間、全部終わる。そんな気すらしていた。

「うほ……」

「リダ……！」

「あら、そろそろ危ないね。……どうする？ 竜殺しさん、その子

助ける？」

「……ナルヒト、あ、怪しすぎないか、そもそもほんとに治せるのか？」

「ふふふ」

いや、治せるのだ。

遠山はそれを知っている。ドラ子にお手本のような黒焦げにされたあの騎士とやら、あれすら目の前の女は生かしていたはず。

時間は、ない。

女の狙い、理由、それを問い詰め、確認する時間もない。そしてさつき始末したクソ野郎と違い、この女を拷問にかけるのは不可能だ。

その気になれば、レーザーも遠山も一瞬で殺されてもおかしくな

い。見ただけで分かる絶望的な実力差。

選択肢が、あまりになく。

「……じ、にたく……な」

ーリダの血の混じる呟き

「おれ、いき、たい……」

それは紛うことなき、生への欲望。

タロウは死んだ。けむくじやらの友は救う機会すら得られず、  
選択の余地なくお別れになった。

じゃあ、こいつらは？

あの時、もしも、自分に力があって、友を救う機会があったのなら

らば俺はどつした？

「……ばか、やることなんて決まってるだろうが」

目を瞑ると耳の真裏に甦るけむくじやらの友の声。

わかってるよ、タロウ。

遠山は、決断を終える。

「で、どつするっ？」

「助けてくれ」

遠山が女のもとにひざまずく。頭を地面に擦り付け言い切った。

土下座——

「ナルヒト、おまえ」

「お、にいさん……」

「アンタが怪我を治せるのは知ってる。俺が死ぬこと以外なら条件を全て飲む、だから、リダを助けてくれ、生かしてくれ、頼む」

「……お顔、あげて？」

「……………」

茶色の瞳、泉のような薄い青い目。それが互いを映した。

「あは、綺麗な目。主教サマと同じ、ニンゲンの目だ…… 竜殺  
しさん、あなたの言葉とても綺麗だった、だから、うん、いいよ、  
助けてあげる」

主教サマも遠くから監視して、それとなく恩をつまいこと売れとかなんとか言ってたからいいよね？

着崩したシスター服の少女はふと何か思い出すように眩き、すぐにまた視線を遠山に落とす。

「っ……」

そして、上位存在、聖女であるはずの彼女は一瞬言葉を失った。

「だが、そのかわり必ず助けるよ。しくじったら、お前を許さない」

「……へえ、ふふ、蒐集竜サマを殺したのもなっとく」

遠山の目に聖女が釘付けとなる。

自らを見上げてくるその茶色のひとみのなかに彼女が何を見たのか。

聖女が身体をわずかに悦びに震わせて微笑んだ。なるほど、あの竜が欲しがるわけだ、と。

「じゃあ、条件ね。うーん…… 主教サマならこうするか。今年の冬、静雪の月までに白金貨50枚用意すること、いいかな？」

少女が綺麗な指をピンっと立ててニコリ、笑った。

「な?! 冬までに、白金貨50枚だと!? む、無茶だ!! い、家が建つ金額じゃないか?!」

ラザールが目を向いて悲鳴のようにさげぶ。

「しろ、きんか? トカゲさん、お金って銅貨以外にもあるの?」

ニコが首を傾げてラザールを見上げていた。

「おともだちはそう言ってるけど、あなたはー」

少女が遠山に問うて、

「払う、耳揃えて、払う。だから、頼む」

遠山がノータイムでそれに答えた。

「ーへえ」

少女がにいつと口を吊り上げた。

ぱちり、指を鳴らす。

どこに納めていたのかも見当がつかないが、いつのまにか、何かの巻き物、羊皮紙のようなものを手に携えて。



「それは？」

「ブリジ・スクロール 教会誓約書”、天使教会の保有する”副葬品”の1つだよ？  
これに誓った内容は必ず履行されるの」

掲げるように開かれた羊皮紙の巻き物。何やら筆記体のような文字や赤いインクでつけられた模様が羊皮紙の中を動き回っている。

わお、ファンタジー。

遠山が明らかかなファンタジーグッズに目を奪われていると。

「ブリジ・スクロールだと?! 第3紀の大戦で焼失したはずだ！」

知ってるのか、ラザール。と言いたくなるが遠山は口を挟まない。

「おお、詳しいねトカゲさん。詳しくは、主教サマに口止めされるけど、副葬品は消えないよ、隠れちゃっただけだから」

「く、ナルヒト、ダメだ！プリジスクロールに誓った内容を守れなかった場合、誓約者は廃人にされる！！その誓約内容を遵守するだけの存在にされてしまうぞ！」

過去の仕事柄、”副葬品”の持つ恐るべき効果を熟知しているラザールが友に警告を――

「サイン、ここでいいの？ 認め印と実印ないんだけど拇印でいい？」

「あ、うん、拇印だけでいいよ。ナイフいる？」

「ああ、どうも」

遠山は親指の腹をナイフの刃に当てて、ぷつりと湧き出た血をインクに羊皮紙へと拇印を押し付けた。

「ナルヒト?!?!」

ラザールが牙を剥き出し、尻尾をピンと立てながら叫んだ。ほぼ悲鳴だ。

「ラザール、悪いな。ビビったり後悔するのは後にする。今はリダを救うのが先だ」

遠山が申し訳なさそうに頭をかく。

「ナルヒト……く、待て！ プリジ・スクロールは連名も可能だったな！」

ラザールがしかし、口を結んで、頭を抑えてぱつと顔を上げる。

「うん、大丈夫だよ」

少女が愉快げにラザールへと返事をして。

「レーザー、やめろ、お前までリスクを」

「やかましい！！ 友にだけリンドローへの片道馬車券を買わせるなんて真似ができるか！！ 祖先に、我が”歯”にかけて断じてそんなことは許さん！ 聖女、これでいいか！？」

ズカズカと歩いてきたレーザーが、少女から羊皮紙とナイフを受け取る。

遠山と同じようにその血を副葬品へ誓いの形として残した。

「くすくす、めーずらしいな。リザドニアンが他種族のためにそんな本気になるなんて」

心底愉快、そう言わんばかりの態度だ。少女が羊皮紙を眺めて目を細めた。

「馬鹿が、レーザー」

「お前ほどバカじゃないさ、ナルヒト」

短い言葉。似たもの同士が悪態をつく。

「確かに、竜殺さんと王国の”影の牙”、プリジスクロールに存在を連ねたこと、教会主席聖女、スヴィ・ダクマーシャルの名の下に認めます、誓約は天使のお力のもとに絶対のものになりました」

羊皮紙を懐にしまい、少女が礼をする。見惚れるような動作、しかし遠山にはそんな余裕はない。

「満足かよ、早く、リダを」

「もう治してます」

治せ、という前に少女がニコリと微笑んだ。

「は？」

「サクラメント秘蹟” 聖別」

「治癒の手」

ぱちり。綺麗な指がしなやかに心地よい音を鳴らす。

たった、それだけー

「え？」

むくり。地面に横たわり死人の顔色に限りなく近かったリダが起き上がった。

「リダアー!! 良かった! よか、う、うわーん!!」

「ぐわ! ニコ! く、くるしい…… うそだろ、傷が、塞がっ

てる……」

「キミ、身体に異常はないか？ めまいや吐き気は？」

ラザールがぐわりとリダに近づく。

「うお、り、リザドニアン?! い、いや、ない、です。さっきまで、俺、死にかけて……」

「むふふ、君、運がよかったね。その竜殺しさんにありがとうって言うっておきなよ」

少女が起き上がったリダに言葉を向ける。

リダが目をパチクリしながらそれでも頷いた。

「に、にいさん、俺は何がなんだか」

「ふ、リダ。お前、はあ、良かった。本当に」

遠山もリダのもとにしゃがみこみ、その額や手を握る。体温が戻っていた。

「竜殺しさん。いいもの、みせてくれたお礼だよ。サービスでこの帽子の子の怪我と、あなたの腕の怪我也治しといたから。……。その帽子の子、面白い子だね。ふふ、じゃあ、竜殺しさんと牙さん、条件のことはお忘れなく」

ニコニコ笑う少女。殺せる気がしない。

「マジかよ、傷が…… ああ、約束は守る、アンタみたいな人間との約束は必ずな」

遠山が荒々しい選択肢をひとつ潰して少女へ返事をした。

遠山の傷すら、いつ治ったのかもわからない。

「ふふ、ふふふふ。綺麗な言葉、綺麗な景色をありがとね。死にゆく人にあんなふうな言葉を渡すことが出来るあなた、教会に興味はない？」



「悪いが仏教徒でな。ま、クリスマスは祝うし、肉は食いまくるし、神社に初詣はいくけど」

「ブツキョウ？ ふーん、よくわかんないけど。キミは心にきちん  
と景色があるもんね。ふふ、それじゃ、冬までに。いつでも気軽に  
天使教会総本山に遊びにきてねー」

現れた時と同じく少女が消えた。

寒気がしてくる。目の前で視界に捉えていてなお、少女が何をし  
たのかすら分からない。

戦闘になっていれば同じように何が起きたかわからないうちに殺  
されていただろう。

「いった、か？」

「……少なくとも俺が分かる気配はもう、ない。あれだけ近づかれて気付けなかったから意味ないかも知らないがね」

遠山がラザールに確認する。自信なさげにラザールが辺りを見回していた。

「っどへえ！！ 疲れた！ な、なんだあのバケモン……」

その場に崩れるように座り込む遠山。

「俺も初めて見たよ、あれが教会最高戦力、主席聖女…… 生き  
た心地がしなかったな」

ラザールも憔悴している。しゃがみ込み大きく息を吐いていた。

「ドラ子やジジイみたいなバケモンがまだいんのかよ。勘弁してくれ」

「竜を一度とはいえ殺したアンタも大概だよ、ナルヒト。嵐のよう  
なひと時だったな、ん？」

ラザールが目を大きく開いた。

「おい、リダ、ニコ、なんしてんだ？」

遠山もその視線に吊られる。そしてその先には地べたに座り込み  
頭を下げているリダとニコ。

「アニキ!!!」

「アニキさん!!」

「「「ありがとうございます!!!」」」

同時に響く声。

いきなりの呼び方や勢いに遠山がおののく。

「あ、う、うん。え？」

「アニキ、アニキと呼ばせてくれ！ 俺やルカ、ニコにみんなを助けてくれた恩を俺は一生忘れねえ！」

「アニキさん、ほんと、本当にありがとう、ほんととはわたし、あの時、すごく怖くて、うええええええん！！！」

「まで、までまで、土下座はやめろ、お前ら。ニコ泣くな、リダ、アニキはよせ、ガラじゃない」

「いいや、呼ばせてもらう。これが敬意だ、俺なりの敬意の形だ！ この命はアンタのために使わせてもらう、俺はそう決めた！」

遠山が止めてもリダは土下座をやめない。本当に傷、いや失った体力や活力さえも戻っているように見える。

「ええ、なんか、ノリが重いな…… ラザール？」

「ふ、それはアンタの行った行動の結果だ。俺はついていっただけだよ、ナルヒト」

ラザールに助けを求めるが、フツといい声で笑っただけでたすけてくれる気はなさそうだ。

「はあ…… まあ、人事の仕事か、これも。……リダ、お前らを雇いたい」

口実、しかし今となっては割と悪くないプランを遠山が口にする。

「……っ?! ほ、ほんとか?! ま、任せてくれ! タダでもいい! 金はいらねえ! アンタのためならドブさらいでもなんでも!」

リダが喜色満面、笑顔で遠山に答えた。

「アホ、金の発生しない仕事はほにやららと、俺の尊敬すべき偉大なるハゲが言ってるんだよ。そうだな、待遇は正社員、業務内容は今のところ雑務全般、後々とある業務に従事してもらう。完全週休2日制、給与締めは月末締めの当月払い、賞与は年2回ってとこか」

「セイシャイン？ キュウヨ？ な、なんのことだ？」

「お前らの仕事だ。まあ、詳しい話は場所変えてしよう。で、どうする？ 興味あるか？」

「ある！！ あるに決まってる！！ スラムのことなら任してくれ  
「！」

「あ？ いまいちうまく伝わってねえな。ルカが起きたら出発するぞ。ペロとシロを探してみんなでここを出る」

「へ、す、スラム街から、出れる、の？」

ニコがキョトンとつぶやく。顔から表情が抜け落ちていた。

「当たり前だろ。お前らには悪いが俺はここで働く気はねえ。お前らにはこれから真つ当に汗水垂らして金と生活の為に働いてもらう。しばらくは俺とラザールと衣食住仲良く一緒だ、嫌がられてもな」

流石にまずいか？

住み慣れた場所を捨てるといつてるようなものだ。しかも労働条件で肝心の給与額はまだ伝えてすらない。

遠山が事を性急に進めすぎたかと危ぶみ

「ーう、うわああああん！ わああああああん！」

「に、にこ、よせ、ズび、な、泣くんじゃねえ…… ああ、天使よ、これは夢か？ 夢なら頼む、醒さないでくれ…… う、うわあああああ」

2人が何故か泣き始めた。わんわんと、崩れるニコ、それを諷めるリダも鼻を翳り上げている。

「え、えええ…… ラザール、なに、これ」

「号泣、だな。ふむ、ナルヒト、子どもたちを泣かせるのが趣味とは、いい趣味をお持ちで」

壁によりかかったラザールが、喉を鳴らしながらくくくと笑う。

「てめえ結構いい性格してるな」



「ちがう、ちがうのおお、アニキさんは何も、悪くなくて、アタシたち、う、嬉しくて…… あ、諦めてたのに、アタシたち、スラムで死んでいくって、諦めてたのに」

「アニキ、アンタには本当に、ぐ、なんて言えばいいか……」

「え、これ、そんなテンションになる言葉なのか？」

「……彼らスラムで生まれた子どもたちにとって、スラム以外は全て外の世界だ。常識も生き方もまるでちがう。彼らは彼らだけではスラムでしか生きることができないのさ。……物好きな誰かの庇護に入れば話は別だろうが」

ラザールが目を細めて爬虫類ヅラを遠山に向ける。

コイツ、悪役似合う顔してんなと遠山がぼんやり考えて。

「はー？ 庇護？ ばか、お前。今からこいつらにきちんと働いてもらうんだぞ？ のんびんだらりと出来ると思うなよ」

「ふ、それを庇護というんだ、友よ。仕事を与え、共に過ごすという事自体、この街に生まれた彼らにとっては奇跡のようなものなのさ」

「アニキ、あにき、ほんとに、いいのか？ 俺らはスラムの生まれだ。ほんとに一緒に行っていいのか？」

「あ、ああ。まさか泣かれるほどはな。だが、勘違いするなよ。ラザールにも言った通り、きちんと働いてー」

「なんでもする！！ アンタのためなら殺しだってやるさ！ だから、頼む、俺たちを連れていってくれ！」

ものすごい勢いでリダが叫ぶ。

意気込みは十分らしい、しかし遠山が首を横に振る。

「ばか、殺しなんざお前らにさせるか。ああ、こき使うからな、覚悟しておけ」

普通に適材適所的に考えて、必要な殺しは自分の仕事になるだろう。遠山は彼らの活用法をいくつか思いついていた。

「殺してもねえ、盗みでも、ねえ。真つ当な、仕事……　　なんなんだ、今日は……　　アニキ、この命、アンタに預ける。姓はねえ、ただのリダ、アンタに全て預けさせてくれ」

「いやいい、そこまでのあれはいらん。業務内容を守り、言うこと聞いただけでいいから。……ル力が起きたらペロシロ探しに行く。それまで休んどけ」

「ああ！ 了解だ、アニキ！　　なあ、ニコ、きいたかよ！　　俺が、俺たちに仕事だよ！」

「うん！　　うん！　　ル力が起きたら驚くわ！」

「う、うーん、うるさい…… あれ、リダ、ニコ、俺……」

「ルカア！ おきたのね！ あのね、聞いて聞いてすごいよね！ アニキさんがね！」

「ルカ！ すげえぞ！ 俺たち、俺たちー」

「あれ、リダ、傷は？！ カラス、アイツらは？！」

「ルカ！ 全部終わったんだ！ アニキとトカゲの旦那が助けてくれたんだよ！」

「そうよ、ルカ、わたし達を雇ってくれるって！ う、よかった、リダもルカも生きてて、よかったああ、うわああん！」

子どもたちの大騒ぎをラザールと共に見守る遠山。

ふとその光景が、重なった。

あの、高架下の語りいと。

――でね、タロウ、僕とお前でぼっけんに出るじゃん、そこでさ、色々人助けとかもしようと思っただい！

――わうん？

――なんでそんなことするかって？ ふふん、タロウ、それはね

「そっちのぼっけ、たのしいから、か」

タロウ、俺とお前が始めたかった冒険、始まらなかった冒険がここに  
あるよ。

お前はもういないけど、でも俺は始めるよ。もう何もできないお  
前の代わりにおれは頑張るから。見ていてくれ。

遠山が空を見上げる。夕空と、青空の混じる高い空。

ぼんやり渡る雲を見上げて、そこにいるかもしれない亡き友を想  
う。

「さあ、ルカも起きたことだし、いくか」

遠山がラザールへ声をかける。

「ああ、君たちもだ。ついてきてくれ」

頷いたラザールが子どもたちへ声を向ける。

「いくつて、どした？」

ルカがハンチング帽をまぶかに被り直し、首を傾げた。

「ルカ、もう！ 決まってるじゃない！ 私たちはジューギョーイン、セイシャインなのよ！」

「ジューギョーイン、セイシャインって、なに？」

「……そついえばなんだろう」

「アニキ、まずは何から始めるんだ？ なんでもやるぞ！」

「ペロシロ拾ってから宿探し。金足りるかな、まあいいや、リダ、ルカ、ニコ、ついてこい」

遠山が振り返る。

そのクエストの報酬、勝ち取り、遠山が選んだ救いといった小さな彼らを眺めた。

「スラム街を出よう」

遠山の言葉。子どもたちは目を大きく見開き、顔を見合わせ、一斉に大きく頷いた。

遠山は知らない。

彼らの顔が、あの時、毛むくじゃらの友と冒険のたびに出ようと決めたあの日の自分とそっくりだったことなど。

【サイドクエスト 路地裏のトカゲを追って】

【孤児ルートクリア】



【報酬 ラザールが仲間になりました。孤児たちを雇用することが可能になりました。技能”カラス殺し”を獲得しました。”キリヤイバ”の新たな使用法が追加されました。技能”上位生物フェロモン（偽）”を獲得しました】

ぶるり。

胸の中に収めたその霧の兵器が何故か、揺れた。

「……………なんだ？」

遠山は知らない、気付かない。

己のその武器、己の最強の探索者道具、その真のカー

【隠しクエスト” Fog dream”】が発生するようになり  
ました。経験を積んだ後、宿屋や自分のベッドで眠ることにより、  
”キリヤイバ”への理解を深めることが出来ます。

……

……

…

↳ 遠山たちが歩き始めた時と、ほぼ同時期↳

↳ ”カラス”ワイズマン・ボラーのセーフハウス↳

「はアッ！！？ はあ！ はあ！ はあ！ …… は、ははは、はは  
はははははハハハハハハは！！ やった、成功、成功だ！！ ”  
スキル・アナザー”！！ 俺は成功したんだ！」

椅子にだらりと座り込んでいた男が、くわりと急に目を見開いた。



高揚していた。自分は更に強くなれる。この才能を活かしてカラスを上り詰めることが出来る、と。

ぶるり。高揚しつつ、身体は震えていた。高揚ではない、恐怖にだ。

「……殺す、顔と名前を覚えてぞ、トオヤマナルヒト…… 絶  
対に、殺す」

そしてその恐怖を握りしめる。屈辱と恐怖は必ず返す。

ワイズマンには悪の才能がある。計画を練り直し、確実に進める。今度こそ、今度こそ、殺す。

「お前だけじゃない、ガキもひきずりだして、ぶち殺す、目の前で全部殺してやる、ひ、ひ、ひ、だから大丈夫、俺は、まだ、やれる」

震える手を握りしめ、セーフハウスの水差しに口をつけ生ぬるい水を嚙下した。

びたびたと、床に水が溢れるのも気にしない。

「まずはミルダに、全部報告して、上手いこと誤魔化しながら言え  
ばあの馬鹿女なら簡単にー」

三羽。あの連中の力が必要だ。あの男はカラスの総力を挙げて殺す。

本物の鳥類、カラスが執念深いのも同じで彼らもまた、そのドス黒い執着深さは変わらない。

受けた屈辱を返す、その瞬間を思い浮かべて、ワイズマンがニヤリと笑みを浮かべた。

「……え？」

そして、異変に気付く。

笑みはあっけなく消えた。

もう、全てが手遅れだ。

そのチャンスを得たワイズマンがするべきだったのは、一刻も早くその部屋からでて、逃げることだったのに。

全てをふいにしたのだ。

部屋の四隅から、部屋のカドから、それは始まった。

キリ。濃いキリが満ちる。

狭いセーフハウス、その室内のあらゆる角という角から突如、溢れるのはキリ。

それが何を意味するのか、その優男はもう知っていて。

「ひ?! き、霧?! あ、あの時と同じ……な、なんで、なんでこの場所が?! で、出てこい、トオヤマナルヒト!! 姿を現せ！」

その声に反応する人間はいない。ワイズマンは知らない、ここにそのキリの主はいない。

いるのは、その薄汚い血の匂いを覚えたキリだけ。主すら把握していないその恐るべき力は、獲物の匂いを決して忘れない。

主にあだなすもの、そのぼっけんの邪魔をするもの、全てがキリにとつて、その爪と牙のもと狩り殺すべき敵だった。

「あ、ああ、い、いやだ、もう、予備はない、おれ、これで最後なのに、やだヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダアアアアアアアアアアアア」

男の悲鳴は届かない。四隅から満ちるキリに包まれ、悲鳴がかき消える。

「ーアア、テンシさま」

ワイズマンは最期の、瞬間、キリの中に何かが蠢いているのを見た。



しかしそれが何かを理解する前に、身体が三枚おろしになったので結局、何もわからなかった。

ワイズマンの死をカラスが認識したのはこれより3日ほど経ってから。

あまりに凄惨なその現場は、悪人揃いのカラスの構成員をもってしてこう言わしめた。

人間のすることではない、と。

22話 スラム街を出よう(後書き)

TIPS € そしてお前の力を見つめる

NAME 遠山鳴人

RACE 人間 ホモ・サピエンス

AGE 27歳

STR (筋力) 6 (ベンチプレス100キロギリ行ける)

INT (知性) 7 (小学生の国語の教科書の内容を覚えて  
いる、モチモチの木を暗唱できる)

POW (精神) 5 (挫けない、ブレない、カリスマに支配され  
ない)

レベル# € ¥ 1 ¥ 1 バージョン不適合により設定不可能

” 探索者深度 ”

保有技能 一部公開

### 【探索者適性】

探索者としてバベルの大穴内で酔いに飲まれずに活動出来る。脳の一部が長い時間酔いにさらされたことにより変異している。会話の選択肢を選ぶとき、倫理的に非道なことを容易に選ぶことが出来る。また状態異常”恐怖”に陥った時、高い確率でそれを無効化し、精神状態を”怒り”に変更することができる。

### 【鈍器取り扱い】

刃のついていない武器の取り扱いがうまい。メイス、槌、棍棒などの武器を使用した時、戦闘にプラスの補正が発生する。遠山鳴人は接触許可制怪物種、ソウゲンオオジグモの単独討伐の際に、キリヤイバと打撃武器の相性の良さを発見した。

### 【犬だいきにんげん】

犬を殺した人間は殺す。例えそいつがどんな奴だろうとしても。犬との共闘時、戦闘に絶大な補正が発生する。

### 【頭ハッピーセット】

酔いが脳を変異させ、さらに何度も無茶な記憶洗浄を受けた弊害により生まれた技能。善悪を認識することは出来るが、善悪の基準による行動のブレーキがなくなる。善い事も悪い事も全て等しく、愉快な頭は全てをハッピーに解釈する。

特定行動時、精神値に多大なる補正を発生させる。他者からの精神汚染の影響を非常に受けづらい、また狂人とのある程度の意思疎通を可能にする。

### 【オタク】

雑多な知識を媒体問わず吸収している。あらゆる状況下においてその知識を活用する術を身につけている。

アイデアロール時にプラス補正を得る、また会話時に特殊な選択肢を選ぶことができる。

興奮すると早口になったり、作品の解釈違いで争いを起こしたりするので他者とのコミュニケーションにマイナスの補正を受けることもある。

## 23話 宿屋に泊まる

「え、ま、まじ、いいんですか？ 泊まっても？」

遠山鳴人は、カウンターの前で目を丸くして言葉を漏らした。

年季の入った木の建物。薄暗いが窓から絶妙に入る夕光りが室内をぼんやり照らしている。

「なんだい、ここは宿屋だよ、お代さえ貰えれば誰でも泊める、うちのルールを守る限りだけだね。で、どするんだい？」

愛想のない恰幅のいいババ…… もとい婦人。

カウンターの向こう側、安楽椅子に揺られパイプを吹かしながらため息をつく。

接客業舐めてんのかと文句を言いたくなるが、遠山はそれを我慢する。ようやく、ありつけそうな寝所だ。逃すわけにはいかない。

「はい！ はい、泊まります、泊まります！」

色々交渉しようと思っていたが次の瞬間にはその考え全てをほっぽりだして手を挙げていた。

もう歩くのは嫌だ、そして宿を断られるのも嫌だ。

12件。

スラム街を出て後、宿泊を断られた宿屋の数だ。

どうやら粗末な服装の子供たちと差別種族であるリザドニアン、そして目つきの悪いローブだけは上等な怪しい恰好の男は泊める側にとつていい客ではなかったらしい。

一縷の望みをかけて訪れた喧騒から離れたこじんまりした安宿も断られたらどうしようかと不安ではあったが、

「あいよ、人数は？」

だが、この愛想の悪いババアは違ったようだ。

「みなさん！ 点呼！」

疲れて逆にハイになっている遠山が後ろに固まっている連中に声をかける。

「1」

「に！」

「3」

「4です！」

「5！」

「あーっ」

割とまだみんな元気らしい。どうやら疲れているのは遠山だけだ。現代においては宿を探して歩きくたびれるなんてことはなかったのだろうか。

「7人かい、大所帯だね。あんたら家族かい？」

「いや、社員と経営陣だ。アットホームな職場とかふざけたもんを憎悪してるからな、俺」

あんなもん存在しないからね。職場がアットホームってことはお前、永遠にここにいろよ、働き続けるよ、家なんだからよ、という隠れたメッセージに他ならない。

遠山はバイトの求人雑誌に騙された記憶を思い出し、ほんの一瞬殺意を滲ませる。

「何言ってるかわかんないけど、その大人数なら大銅貨1枚か、銅



「貨10枚で一晩だね。どうする？」

「払った！ 持ってけ泥棒！」

相場よりだいぶ高いその金額にラザールが目を開く。しかし、疲れ切っている遠山はそれを完全に無視して、財布をカウンターにひっくり返した。

「誰が泥棒だよ、ったく。ふうん、あなたはそこそこ身なりがちゃんとしてるね。でも他の連中はちよつと臭うよ。庭の桶に水を張ってるから部屋に入る前に身体でも拭いとくんだね。タオルは庭の物干し竿から勝手に取りな、使い終わったらここにまた届けておくれ」

「ぶはーと、紫煙を弛わせながら女主人が中庭への道を示す。ロビ―からそのまま出ていけるみたいだ。」

「やだ、ホスピタリティ雑…… でも、そこがいい。なんだろこのファンタジー感、ワクワクしてきた」

「ナルヒト、お言葉に甘えて水を使わせてもらおう。ご婦人、ご好意感謝する」

「ふん、料金のうちだよ。食事がしたいなら一階に食堂がある。別料金だが味は保証するよ」

「すまん、婆さん。もうすかんぴんなの」

遠山が見事に空っぽ、金色の冒険者章だけ素早く手の中に隠して空っぽのサイフをめくる。

「チツ、貧乏人め。まあいい、面倒起こすんじゃないよ…… あんた、きちんとそののがきんちよたちには食べさせてるんだろっね」

女主人が目を細めて、子どもたちを見た。

今までの宿屋の人間は汚いゴミを見るような目だったが、この老婆は違う。

憐れみと、ほんの少しの暖かさ。

「あら、大丈夫よ、おばさま！ アニキさんはとても親切なんだから！」

ニコが胸を張って、物怖じせずに答える。

「そーだよー、おにいさんごちそうもしてくれるんだよー」

ペロがニコニコしながら間延びした声で返事をする。

「ふうん、躰はできてるわけだ。……ちよいと、そのの」

目を細めて、顔のサイズのわりに小さな老眼鏡を触りながら主人が遠山を手招きした。

「ん？」

「食堂の営業が終わった後、顔出しな。あまりモンだけがきんちよたちに食わしてやんなよ」

声を潜めながら主人が遠山に伝える。

遠山は割と驚いていた。短い時間であるが、子ども達やラザールを連れて都市を歩いていた時、周りの人間から向けられていた視線は全てひどいものだった。

中には直接絡んできたオッサンもいた。

ニコを無理やり連れて行こうとしたので路地裏に連れて行って、指を5本折り、金的を中心にボコボコにしたことによりなんとか、ことなきを得たほど。

スラムの住人達は都市の人々から本当に人間扱いされていないことを思い知らされた。

「ば、婆さん、アンタ態度は接客業舐めてんのかって感じたがマジいい人じゃん」

「ふん、さっさと身体洗ってきな。臭いったらありゃしない。……特にアンタ、濃い血の匂いがするよ、ったく」

ツンデレババアが遠山をしっしつと追い払う。シワシワの顔の向こう、理知の光を持つ目が一瞬、遠山を見通すように細められた。

「なんのことだか。ありがとっぱあさん、水、使わせてもらっぜ」

遠山は手を振り、中庭へ向かう。

芝生が張られた中庭は広く、洗濯ものが干されたり、日除けの小さな屋根の下に大きな桶が置かれている。

木造の古めかしい建物、ボロいレンガとすすけた木で建てられている、ザ・ファンタジーな建物の様子に少し遠山はテンションが上がった。

「……いい宿屋だな、ナルヒト」

中庭の芝生を撫でながらラザールがつぶやく。

「いやー、あの婆さんなかなかただもんじゃねえな。でも良かったぜ、日が落ちるまでに宿を確保できて。8連続で宿屋断られた時はもう焦ったよ」

「……まあ、大抵俺のせいだろうな。あの女主人が剛毅な人物で助かったよ」

「差別ねえ。まあ、どこにでもある話か」

差別。前の世界でもそれはしつかりと存在していた。人種、生まれ、境遇。どこの世界でも人間の本质は同じらしい。

その後ろ暗い人間の一面に遠山はどこか、安心してー

「わ、わ、わ！ お水、とても綺麗なお水よ！ 濁っても臭くもな  
いわ！」

「……嘘みたいだ、これ飲み水じゃなくて、体を洗うことなんか  
つかっていいの？」

「お前ら、これが表の常識ってやつだ！ アニキ、どうぞ先に使っ  
てくれ！」

「どうぞぞー！」

「あつー！」

はしゃいでる子供たちを眺めて、少し笑った。

人間はクソで、敵が多い。だけど

「敵ばかりじゃねえよ、ラザール」

「ん？ 何か言ったか、ナルヒト」

「いやなんでもないんだ。おい、お前ら先に身体洗、ってニコちやああああああん！？ ストップ、ストップ！！ 君何普通に服脱ごうとしてんの？！」

遠山が大慌てで、桶の前で服をよいしょと脱ごうとしていたニコを静止する。

歳や、あの生活の割にメリハリのついた身体をしているせいで遠山は更に焦る。

たくし上げた服から覗くウエストは陶磁器のように白く、そして綺麗なラインをしていた。

「え？ だってアニキさん、お服脱がないと体を拭けないわ」



きよとんとニコが首を傾げる。

「女の子でしょうがあんた！ はい、服戻す！ お腹出さない！  
おい、リダ、お前らいつも身体洗う時どうしてんだ？」

ニコの服を元に戻しながら隣で平然としているガキ大将、リダに  
問いかけた。

「え？ 身体を洗うことなんかほとんどなかったからな……  
雨が降って来た時にみんなで服脱いで浴びたりはしてたけど」

雨

うーんと首を捻るリダ。

自分の幼少期や子ども時代もなかなか酷かったがそれほどではな  
かった、はずだ。

「OH……マジか…… この分だと身体の洗い方から教えんと  
いかな……」

改めて、セーフティネットのない世界の厳しさを痛感しつつ遠山がつぶやく。

清潔。

それは遠山が生活の中でかなり上位に重きを置いている概念の1つだ。汚かったり臭いのが無理というのももちろんだが、それより衛生を保つことによる体調管理が何よりの理由だ。

まだ調べてないが、おそらく医療概念についてもファンタジーおなじみでたいして進歩してないのだろう。

聖女、あの金髪の化け物みたいな魔法みたいな力がそこかしこにあるとも考えにくい。あれはおそらく例外だ。

疫病や風土病、それに対する治療法、色々この世界については考えることが多い。

あとで落ち着いたらラザールと一度話をしなければ。遠山が顎を撫でる。ああ、たのしいじゃないか。

異世界だ。常識も仕組みも法則もなにもかもが違うのだろう。スキルやら竜やら聖女やら。

だが、変わらないこともある。

自分の力はこの世界でもある程度通用し、絶対不変の原則はここでも変わらない。

敵は、殺せる。なら、何も問題はない。

ワクワクしてきた。

遠山が知らずのうちに、邪悪な笑いを浮かべる。細い目が吊り上がり、昏い悦びに歪む。

「アニキさんが教えてくれるの?! あたし教えてほしいわ!  
わあーい! アニキさんが身体の洗い方を教えてくれるってー!」

そんなことは知らぬとばかりに遠山の呟きにたいして素敵な解釈をしたニコがぴよんぴよんと飛び跳ねる。

いいなーとリダやペロが羨ましがるように呟き、ルカがそれをぼーっと眺めてー

「ふっふーん! アニキさん、優しいから好きよ! アタシ、きちんと覚えるから! 身体の洗い方おしえて!」

ニコが満面の笑みで遠山に微笑む。

やべえ、事案だなこれ。あの女主人に頼んでみるか? 流石に自分  
分がニコにそついうのを教えるのはアウトー

「ふん、石鹸が余ってたよ、臭くて敵わないから使いな……ち  
よいと、あんた、今のはなんだい？」

アウトになった。

都合よく、そしてタイミング悪く肝心な部分を聞かずに、重要なことだけ耳に入ったらしいツンデレババアが、遠山を睨んだ。

「OH…… 事案の予感。ラザールくん、助けて」

「リダ、ルカ、ペロ、シロ。いいか、基本的に女性とは裸の状態と同じ空間にいるのは良くないんだ。紳士として女性には敬意を払うのが大事だ。わかるかい？」

「……はい！ トカゲの旦那！」

ダメだ、割といい性格しているらしいラザールは既に遠山を見捨てて、メンズの世話をしていた。

「アイツ、ああいうところあるよねー。合コンで気付いたら一番可愛い子と消えてそんな感じ、ヤダヤダ」

遠山が肩をすくめ、さりげなくその場を去ろうとして

「ヤダヤダじゃないよ！ ちょっとツラ貸しな！ 女の子になんてことしようとしてんだい！」

がっど、肩を掴まれる、わあ、力強い。

「お、おばさま、違うのよ！ アニキさんはアタシをいじめようとしてるわけじゃないわ！ ただ、身体の洗い方を教えないといけないうって！」

ニコが慌ててツンデレババアを止める、しかしその言葉がババア

の琴線に触れた。みしり、掴まれた肩が軋んだ。

「ニコちゃん、気持ちはありがたいけど少しお口チャックしててね。アニキさん、今からババアに殺されてくるからね」

「誰がババアだい！ わたしはこう見えてまだ75だよ！」

「後期高齢者！！ ギャア？！！」

遠山の悲鳴をよそに、レーザーが子ども達に身体の洗い方を教える。

彼らは初めて、飲む以外の水の素晴らしさを知ることになった。年相応の笑顔とはしゃぎ声が、夕焼けの下に響いていた。

「ほんぎゃあああ？！ てめ、ババアああ？！ 上級探索者舐めんじゃねゴリアアアアア！！」

「この、いたいけな女の子に何しようとしてんだい！ ドスケベが！ 小僧！！ 100年早いよ！！」

「ギヤアアアアアアア！？ また、股が裂けるウブヴヴヴヴ」

汚い叫びも中庭の奥から響く。ラザールは一瞬、その叫び声の方を見て、それからすぐに子ども達へ向き直った。

友よ、助けられない時もあるんだ。そう、小さくつぶやきながら。

.....  
.....  
.....

「すす、すす」

「ぐぐ、ぐが」



「すー、すー」

「みんな寝てしまったな。……こつ見ると彼らも当たり前の子どもたちだ。大人が守るべき、な」

大きな藁と布のベッドに固まって寝息を立てる子ども達をラザールが優しい目つきで見守る。

ツンデレババアの好意で渡された料理の残り物に、目を輝かせ、涙を流しながら貪ったりして一気に緊張の糸が切れたのだろう。

「厄介ごと抱え込んだのは否めないけどな。いてて、あのクソババア。冒険者とやらよりもよほど強いぞ…… まあ、なんだありがとな、ラザール」

遠山は粗末なソファに背中を預けて、目の前の椅子に座るラザールに語りかける。

「なにがだい？」

「あの時、ニコを、ガキども助けようと思ったのはお前のことばのおかげだ。俺は本気である時コイツから見捨てようとしてた」

あの時はそれが最適解だと思っていた。余計な敵を作らずラザールだけをスラム街から連れて行くつもりだった。

その選択をしていればこの光景は見れなかったのだろう。後悔はなかった。遠山はきちんとその欲望を満たしていた。

「フツ、なんだそんなことか。違うさ、ナルヒト。決めたのも行動したのもお前だ。今、彼らが呑気に眠ってるこの光景は全てあんたの行動の結果だよ、俺は何一つ決めてはいない」

「それでも、だよ」

「……そうかい、なら素直に受け取っておくさ」

小さなロウソクと、油のカンテラだけが光源だ。

窓を開ける。

この冒険都市には割と高低差がある。坂を登った先にあるため、灯りの少ない冒険都市の街並みを眺めることが出来た。

遠く、一部明るい箇所もあるようだ。朝になれば街を散策しなければならぬだろう。土地勘があまりにもない。

「ああ、それでまあ、ラザール、喫緊の課題だけ話しておきたい」

窓から入る夜風を感じつつ、少し声を潜めて遠山がつぶやく。

「ああ、それは俺もそう思っていた所さ。だが、その前にどうだい？ 一杯」

ラザールも声を潜めた、しかしニヤリと笑い懐から何かを取り出す。

琥珀色の液体が入った瓶だ。見覚えがある。

「ああ、あん時飲みそびれた奴か。もらうよ」

「一気に煽らないでくれよ？　ちびちびやるのがいいんだ、こつこつのは」

ラザールが笑いながら部屋に置かれていた木のコップを小さなテーブルに置いた。

遠山も席を移り、椅子に座る。

ラザールが満足そうに頷き、瓶のコルクを引き抜く。

キュポン、気味のいい音が子ども達の寝息と重なる。

とくとくと少なめに注がれた琥珀色の酒。遠山は香りを嗅いで、それを煽り舌の上に広がる。

「……ん、お。……驚いた、こりゃ、美味しい」

甘み、同時に鼻に抜ける濃厚なハチミツの香り。好物のお菓子を思い出した。

「ふ、まさに、天使のキスだろう？ ああ、美味しい。天使の祝福様々だよ。ハチミツをこんな天上の飲み物に変えるなんて。天使教会が200年以上隠し通している秘密の味、という奴だ」

「ふんふん、なるほど…… 待て、ラザール。今なんつった？」

「天使教会が2000年隠している秘密、かな？」

「いやその前だ。天使の祝福が八チミツを酒に変えるやらどうたらこうたら」

なんだ、それは。独特の言い回しなのだろうか？ いや、それにしても言葉のニュアンスがおかしかった。

「おいおい、アンタでもそれは知ってるだろう？ パンが膨らむのも、グレブの絞り汁がワインになるのも全て天使のお力さ。教会しかその細かな仕組みは知らないよ」

言葉を失う。

遠山は今、ラザールが挙げた現象、それを起こす存在や原理を知っている。

現代に生きるものなら、大抵は一般常識として知っているそれ。

――発酵。

「……ラザール、発酵とか醸造、イースト菌、酵母。これらの言葉に聞き覚えはないか？」

発酵だ。微生物の活動を利用して人間にとって都合の良い腐敗の名称。

パン種が膨らむのも、果実の搾り汁がワインになるのも、決して天使の祝福とやらが理由でないことを遠山は知っている。

「ハツコウ？ 醸造はわかるぞ。教会が全て醸造所の権利を持っているからな。だがイーストキン、コーボ、ふむ、初めて聞く言葉だ」

「……醸造所つー言葉があるのに発酵が隠されている？ ラザール、お前、酒やパンがどうやって作られるかの仕組みを知らないのか？」

「おいおい、からかっているのか？ それは天使教会の主教クラスや聖人でないと分からない天使の秘密、というやつだよ。まさか、ナ

ルヒト、アンタそれをしってるとかー」

ラザールが朗らかに笑う、しかし次の瞬間には真顔に戻った。

「酒は発酵によって原材料の糖分が炭酸ガスとアルコールに置き換わることによって生まれるんだ。天使とやらがどうこうしてるわけじゃない。全て菌の活動のほず。パンだって同じだ。イースト菌やら酵母やらの発酵でパンは膨らむわけだが」

遠山がその祝福とやらの正体を語る。本来、天使教会のごく一部しか知らないそれを、つらつらと。

「……なんだって？ ナルヒト、それはー」

ラザールの顔がどんどん険しくなる。

彼にとっては遠山の話は荒唐無稽そのものだが、友人の言葉を最



初から否定するような男ではなかった。

そして、ラザールが酔っ払いの戯言だと断じるにはあまりにも、遠山の言葉ははっきりとしていて。

「あー、嫌な予感してきたぞ。いや、でもこの世界とあつちでは自然の法則が違う可能性も……いや、でも発酵に関してだけ違つとか都合いいことあるか？」

色々な可能性を考える。

まだこの世界の食については情報が足りない。しかし街並みや、先程子ども達が食べていた残り物を見る限り、おそらく主食はパンだ。

発酵の仕組みを隠す。知識の占有が狙いなのだろうか。主食に関わるそれを200年続けることのできる組織とは、つまり。

「……ナルヒト、そのことの真偽がどうであれ、あまり教会を刺激しないほうが賢明だろう。教会には後ろ暗い部分もある。”聖女”や”教会騎士”とは別に、彼らの敵を秘密裏に処理する”審問会”がね」

「ああ、分かってるよ。これを教会とやらが秘密にしてるってこと。それを200年隠してるってこと。どう考えてもきなくせえ。あんな化け物がある組織だ、表立って敵対する気はないさ。……天使とやら、いい仕事するじゃねえか。美味しいよ、この八チミツ酒」

おそらく意図的に、教会とやらは発酵の仕組みを隠している。天使がどういふものかは知らないがおそらく信仰対象なのだろう。

うまく人々の信仰心を利用し、身近な食品に絡める。なるほど、天使とやらの信仰心を高めるとともに、発酵の仕組みも隠しやすい方便だ。

そこまで考えて、遠山はこれ以上の追求をやめた。現代知識無双には憧れるが、藪蛇にしかならない気がする。

「ハツコウ、ではなかったのかい？」

レーザーが小さくつぶやく。

「知らねえな。微生物による分解による化学現象なんてもんは。この件に首突っ込むのは止めとくよ。で、それとは別にレーザー、これからのことだが」

遠山が戯けて返事をする。昼間に出会った金髪シスター服の威圧感はずくに思い出せる。あれと敵対するような真似は避けた方がいいだろう。

それよりも、今は目の前の話が重要だ。

「ああ、俺もその話がしたかった。悪いがセーフハウスから持ち出した金は多くない。おそらくこの宿代も5日泊まればすかんぴんだろう」

「いや、5日保つただけでだいぶありがたいさ。あの時バタバタして

うまく話せなかったな。ラザール、俺たちのこれからだが」

5日間の猶予はありがたい。

異世界オープンワールドでお馴染みのアレの方法を考えるのに時間があればあるだけ良いものだ。

「う、うーん…… あ、アニキ、その話、俺も混ぜてくれ。わりい、寝ちまつてた……」

遠山とラザールの声に反応した子どもが1人いた。

目を擦りながら、起き上がる。

「リダ、お前は寝てる。ただでさえ身体ボロボロになってんだから」

「いや、1時間寝たからだいぶ楽になったぜ。頼む、話の邪魔はしねえ。ただ、これからアンタたちの下につくんだ。こいつらの代表

として俺も話には参加しときてえ」

完治したとはいえ、腹を刺されていたはずだ。なかなかタフなやつだと遠山は少し感心した。

「どっする？」

ラザールへと視線を投げかけて。

「まあ、いいんじゃないか。ナルヒトも気付いているだろうが、リダは歳からは考えられないほど聡明だ。物事を考える力においては大抵の大人よりも優れているだろう」

「……場所変えるか」

遠山の言葉にリダが満面の笑顔を浮かべる。

大人2人とこども1人。夜はまだ、続く。気の合う仲間とこれからの予定を話し合う。

例え異なる世界でも、それは割とたのしい作業だった。

……

……

…

〈天使教会、聖別室〉

「ふんふんふん、ふんふんふん、ふんふん」

そこは天使教会200年の歴史においても、歴代の主教とそれに許されたものしか立ち入ることの許されない神聖な部屋。

「はー、ほんとこの時間だけが至福ですなあ。金ピカちゃりんちゃ

りんの白金貨。んっんー」

腰まである長い白髪をひとまとめにした糸目の女性。黒いシスタ―服を着崩したその姿はこの部屋にいる時しかないオフの格好。

艶めく王国から取り寄せた世界でも最高級の調度品に囲まれた部屋。

「可愛いかわいい、金貨ちゃん、ああ、美しいわ…… 今月の天使粉の売り上げ、天使の祝福使用料、もとい、お布施もたんまり、ああ、帝国よ、永遠なれ……」

黒く輝くテーブルの上には白い金貨が山のように積もっている。一枚一枚、うっとりしたため息を吐きながらそれを布で磨いていく。

天使教会、最高指導者。女主教と呼ばれる彼女の至福の時。

しかし、彼女は今日珍しく金貨を100枚ほど磨いただけで手を止めた。いつもならその10倍は熱い吐息を吐きながら続けるその

趣味を、だ。

「はあ、頭いたいわ、ほんと。まさか蒐集竜が殺されるなんて……

あー、でもわたしほんとよく頑張った！ すり抜けた、すり抜けたわよ！ 試練を！」

頭痛のタネ。

竜殺し。帝国どころか人類の歴史の中でも本当に数える程度にしか存在しない大偉業。

教会の長たる彼女からすれば大迷惑もいところだった。竜を殺したということにアホみたいに反応した脳筋集団、教会騎士の抑え込みや、竜の絶対制をこごぞとばかりに非難してくる天使原理主義。

天使教会は一枚岩ではない。帝国という国と対等な関係を維持している巨大なその組織は、蒐集竜の死という大きな投石により大きく揺らめいていたのだ。



「まあ、一応スヴィには監視だけお願いしてるけど。他の勢力もこのタイミングでの竜殺しに手出すほどバカじゃないと思うけど」

そして何より厄介なのは、あの竜殺し本人。

未だに信じられないが、今日、たしかにあの男は蒐集竜と事実上、対等な関係を築きあげたのだ。

上位生物たる竜に真正面から意見を伝え、あまつさえ再び立ち向かおうとした。あの化け物ジジイにもまとめてケンカを売ったのはもう驚きを超えて少し笑ってしまったが。

目の前で見ていたからわかる。

あの男は劇薬だ。関わりたくない。しかし放っておくのも恐ろしい、かと言って消すのはもってのほか。

竜と教会の全面戦争間違いない。余波で帝国が滅びてもおかしくない。

彼女はこの世界と国、正確に言えば貨幣経済と富を愛している。

その愛を貫くためにはこの今の世を続けなければならない。

竜を絶対視するゆえに、竜殺しに対してお門違いの敵意、いや、嫉妬を抱く教会騎士、竜殺しを抱き込もうとするであろう天使原理主義者。救いようのないアホ  
タラ共  
拗らせオ

考えることが多すぎる為、とりあえず手駒のうちで最も最強のコマを監視に出していた。

騎士や原理主義者を近づけないようにする番犬のつもりだったが、ここに来て女主教はとてつもなく嫌な予感を感じ始めていたのだ。

「……スヴィ、大丈夫よね？ 上手いことしてって言ったけど、超越者たるあの子だもの。いちいち他人に必要以上に関わったりしてないわよね？ 大丈夫よね？」

彼女自身のスキルが、囁く。

あー、やらかしたね、これは、と。

「いやいやいやいや、大丈夫大丈夫。危険が迫れば助けてあげなさいとは言ったものの、それ以上言っていないものわたし。うん、自然に恩を売るのはいいけど、あれはあくまで蒐集竜のモノ、下手に手を出したら竜の怒りを買うことくらいスヴィもわかってるわよね」

しかし、彼女はそれを振り払うように金貨に頬擦りしながら早口で独り言をブツブツと。

「あれ、なんだろう？ 冷や汗が止まなくなってきたゾ？ いやいや大丈夫。大丈夫よ、わたし。スヴィよ？ 聖女よ？ ただの人間に必要以上に興味なんか持たないはず。わざわざ接触もしないわよ。そう、定例の報告が遅れてるのも、わたしのスキルがさつきからものすごく嫌な予感を伝えてるのもゼーんぶ気のせいよ。うん」

その早口がピークに達した瞬間。

彼女の最強の審問会が虚空より現れた。

「ただいま、主教さま。ごめんね、遅くなりました」

当たり前のようにいつのまにか現れた小柄な白いシスター服。教会主席聖女の姿を、彼女もまた当たり前のように受け入れる。

「ごほん、スヴィ、よく戻りました。その様子だと務めは果たせようですね。かの竜殺し、冒険都市に降りたとのことですが、特に何もなかったのですね、ね？ ね、ね？」

取り繕いながら、最後らへんはもう半分懇願しつつ、女主教が聖女へと問いかける。

「むふふのふ。はい、主教さまの言いつけ通り、スヴィは彼の監視を果たしました。カラスの人員を始末していたようです」

無表情の割に愛嬌のある聖女がVサインをかましながら監視の報告を始めた。

「カラス?! え、あの男、冒険都市に降りてまだ1日も経ってないわよね? え、揉めるの早くない? こ、コホン、まあ構いません。あの害鳥が1匹でも少なくなるのならはそれに越したことはありませんし、それ以外何もなかったですよ? あの恩をそれとなく売ってもいいとは言いましたけど、スヴィわかってますよね? あれはあくまで竜の所有物であってー」

竜から解放されて都市に降りたのは知っていたが、まだ1日も経っていないはずだ。もう早速この街のタブーに手を出しているとは

まあ、竜を殺すのだ。カラスなぞ当たり前に殺すか。キチガイってこえー。女主教は少し呑気に考えて。

「むふふ、ご安心を。皆まで言わなくても主教サマの御心は存じております、貴女の聖女故に」

そんな彼女に向けて、聖女が懐から何かを取り出した。

ネコが主人に見て見ると獲物を見せびらかすように。

女主教は子供を見守る母親のごとき笑顔でその様子を見つめて、  
見つめて……

「スヴィ、アナタって子は……

……Why?????

」

固まった。

聖女が見せびらかした羊皮紙。生き物のように字が踊る羊皮紙な  
ど、彼女の知る限りアレしかないからだ。

「ブリジ・スクロール教会誓約書にばっちり、かの竜殺し、その血判をもらっちゃいま  
した。むふふ、次の冬までに白金貨50枚を条件に彼をお願いを聞  
いてあげました。主教サマの言いつけ通り、彼にうまくさりげなく  
恩を売ってきたのです」

ネコが、セミを得意げに見せつける。褒めて褒めてと言わんばかりに。

そんなネコに対して飼い主が何を出来るだろう。いや、何も出来ない。

「????????」

主教の背後に宇宙が広がる。

そう、空、空にあるたくさんの星々、第二文明の人々の足はその星々にすら届いたらしい。

え、どうして？　なんで？

「スヴヴヴヴヴヴイ？　な、なして、なしてアナタそんなこと…」

もう声が震えるしかない。現実を見たくないが、がっつりはつきり目の前の誓約書には血判が押されていて。

「ぼっ、竜殺しさんが、主教サマと同じでどこまでも人間だったから、つい…… 主教サマを思い出してしまいました」

聖女が何故かほおを染めて、女主教を熱い瞳で見つめる。

女主教は正反対に、真つ青な顔で高い天井を見上げていた。

あ、天使教会、私の代で終わるかもしれん。

「ああ、そう、そっか、うん、そっかー、似てたかー、しゃーねーわねー、うん」

うふふのふ、私も星の世界に連れて行ってくれないかしら。え、なにこれ、ゆめ？ 竜殺しにプリジ・スクロール？ うん？ え、なに、つまり、あれ？ 教会の首輪つけちゃったこと？ りゅうのお気に入り勝ちに首輪つけちゃったの？ よーし、ママ今日はりきって竜に中指立てて全面戦争かましちゃうぞなの？ 原理主義



の拗らせバカに頭下げて聖女全員と脳筋共に竜殺しの件で火をつけて第一騎士ぶつけければワンチャンある？ あーもう、カノサ知らない。

「ばぶう」

ばたん。

泡を吹いて彼女。天使教会主教、”カノサ・ティエール・ファイルドをは金貨がたんまり積まれた机に崩れる。

「主教サマ?! なんで?!」

「あぶぶぶ」

主教は壊れながらも、そのスキルと頭をフル回転させる。

どうやって竜に釈明するか、炎で焼かれるの熱いのだろうか、クランのバカにどんな感じだったのか聞いとこ、とか思いながら。

ふっと、目を瞑りそのうち主教は考えるのを、やめた。

## 23話 宿屋に泊まるっ(後書き)

< 苦しいです、評価してください > デモンズ感

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください  
さいー！

下にTwitterアカウント貼っています。更新告知などして  
るので是非フォローしてください。

明日から繁忙期入るので少し更新ペース落ちます、ごめんね。リ  
マンだからね、ちかたないね。

24話 父さんな、仕事辞めてパン屋しようと思うんだ

「父さんな、仕事やめてパン屋しようと思うんだ」

部屋から出て、中庭のベンチに腰掛けた遠山、ラザール、リダ。

油で燃え続けるカンテラの周りに羽虫がたかるのをぼーっと眺めながら遠山はつぶやいた。

883

「え？」

「何を言ってるんだ、ナルヒト」

その眩きは完全に滑った。

遠山は咳払いしながら言葉を続ける。

「……まあ、そのままの意味だ。俺の人生の目標は欲望のままにハッピーに人生を生きること、目下1番やりたいことは湖のほとりに家を建てることなんだが……」  
「そのために何が必要かわかる？」

「……かね、か？」

リダが首を傾げながら遠山へ。

「リダくん、正解、その通りだ。金だ、結局、人間社会の中で自分の願いを叶える為には多かれ少なかれ絶対に金が必要になる。経済システムと社会が繋がっている以上、金っつーモンから目を逸らすことはできないわけだ」

「金のない惨めさ、そして金が人生に及ぼす影響を遠山はよく知っている。」

それは自由への切符であり、不自由からの首輪でもある。

「む、要はナルヒト、君は金が一番大事と言いたいわけか？」

ラザールが少し口を尖らせて遠山へ。

彼のことだ。金に関していい思い出ばかりじゃないのだろう。

「いや、一番じゃねー。金つっーのが厄介なのはそこだよ、ラザール。金は万能だ、俺ら人間の発明した最大の成果と言ってもいい。こいつが有れば大抵のことはなんとかなっちまう。だからみんな勘違いするんだよ。金があれば幸せになれるってな」

「違うのか、アニキ？」

「ああ、違う。金がねえと不幸になる、これはあながち間違ってねえ。食いたいもんも食えねえ、やりたいことが出来ねえ、これは容易に不幸に繋がるからな。だが金があったら幸せなのか、これも微妙に違うと俺は思う」

リダの問いかけに遠山がすんなり返事を返す。

灯りの少ない中庭。

しかし、夜空の中にぼっかり浮かぶ白い月が、闇を薄くしてくれていた。

「じゃあ、どうすればいいんだ？」

「簡単なことだよ、リダ。金とはあくまで手段だ。たどり着くための切符だと思えばいい。まあ要はバランスだ。程よく貯めて程よく使う。どちらに傾くのも不健康だ。たくさん稼いでたくさん使う、これが肝要だ」

金。

社会の中で関係せずにはいられないもの。

力であり、重しであり、そして報酬でもある。

「一番大事なのは光景だ。自分がどこにいつてどうなりたいのか。俺たちの目の前にあるのは全てだ。実質的に俺らは自由なんだよ、行って、見て、俺らは自分のなりたいもんになり、やりたいようにやる権利がある。金はそれを円滑に行うための道具に過ぎねえ……みんなそれを忘れてるんだ」

目の前の生活のことに囚われると、一気にそれが見えなくなる。不安や毎日の辛さは呪いとなり、進む力を奪っていく。

遠山はそれをよく知っていた。進むことが出来なくなった人間に待つのは絶望しかなく、よく。

「なりたい自分、か……」

「欲望のままに。俺のブレないモンはそれだ。そのためには金がいる。ラザール、お前のなりたいモン、辿り着きたい光景はなんだ？」



光景。人にはそれが要だ。簡単に絶望に飲まれる毎日の中、一  
欠片でもいい。

こうなりたいたいという光景、希望。決して滅ばないそれを遠山はき  
ちんと認識している。

仲間たちとそれを共有すべく遠山が言葉を紡ぐ。

### 【隠し技能発動】

一瞬、現れたメッセージ、しかし月明かりにほどかれるように消  
えていく。

「……俺は、誰かを満たしてやりたい。奪うだけだった自分を変え  
たい。誰かに何かを与えたい」

ラザールが問いかけに答える。彼の言葉は闇を彷徨つかのごとく。  
しかしきちんと吐き出された声は遠山に届く。

カンテラの灯りが揺れた。

「よしきた、ならもうパン屋するしかないでしょ、はい論破。次、リダ」

力技しかない返事で遠山がラザールの運命を決めた。

「え、おい、ナルヒト」

ラザールが呆れた声をだす。しかし、どこかその顔は嬉しそうで。

「え、な、なんだ、アニキ？ なんの会話だこれ」

急に話を振られたリダがしどろもどろになり始める。

「いいから、お前は何がしたい？ これからどうなって何が欲しくて何を求める？ それを言え」

希望なんぞなかったはずのスラム街の孤児。

彼にも同じく遠山は問いかける。

希望を、欲望の光景を問う。

「俺、俺は……」

遠山にじっと、見つめられたリダは言葉をモゴモゴ繰り返し、やがて息を吸って、吐いた。

「……水が、冷たかったんだ」

「ほっ」

リダの落ち着いた言葉。遠山とラザールは静かにそれを聞く。

月明かりの下で虫の音が静かに重なっていく。

「さつき、身体を洗った時、とても冷たくて、……その、初めてだった。雨みたいに温くない水…… 気持ちよかった。アイツらも、気持ちよさそうに身体を洗って…… 正直、今恵まれ過ぎててよくわかんねえ。でも、今が続けばいいと思う、俺はそれで充分だ……」

「維持することも戦いだ、リダ。はい、つまり、パン屋するしかねえな」

「……その、なんだ。ナルヒト、パン屋、したいのか？」

「したい！！ 元々よ、探索者辞めたあとはなんか商売して見たかったんだよ。永遠に続けられる仕事じゃねーからな」

「商売、ね。なるほど、……俺に気を遣う必要はない、アンタのやることに俺はついていくと決めているからな」

「あ、アニキ！俺だってそうだ！あんたについてくぜ！」

心強い言葉。遠山は少し笑う。

そして夜空を見上げて、月を見た。

「はは、ありがたくて涙出るわ」

「……だが、どうしてパン屋なんだい？ナルヒト、店をやるのなら他にもたくさんあると思うんだが」

ラザールから至極当たり前の問いかけが。

その問いに、つぶやく。

「ラザールのパンとドラ子んこのステーキだけだ」

口の中に蘇るラザールのパンの優しい味。香辛料と肉汁が溶け合ったステーキの熱さ。

あれは美味かった。

「なに？」

「こつちに来て俺の口にあったもんだよ。まああんまり他のモン食べてねえから一概には言えねえんだけど、その、なんだ。俺はおそらくこの世界でかなり上位で舌が肥えていると思う」

「なんの話だ？」

「あー、その、あんまこつちの話はしたくねえんどけど。リダ、お前さつきババアがわけてくれたメシ、アレどうだった？ 美味かったか？」

「ああ！ 美味かったぜ！ あんな美味しいモン初めて食った」

「……そうか。ラザールは？」

「ああ、おいしく頂いたが、そういえばナルヒト、お前はほとんど食べていなかったな」

「……まずかつたんだよ。食べねえ訳じゃねえ。腹壊すような料理でもねえ。だが、塩っ辛くて旨味がなく、煮詰め過ぎてパッサパサ、まるやかさも香り高さもなんもなかった。……イギリス街の料理みてえだった」

要は口に合わなかったのだ。食っても食っても塩っ辛いだけのドロドロのスープにパッサパサの野菜や何かの肉。

一口食べて理解した。

この都市の庶民の食べ物には食が合わない可能性が非常に高いと。

「塩っ辛い？ 旨味？」

「俺の生まれたところはおかしな国だな。”食”に関することにか  
けたら世界でもおそらく一位か二位を争うほどのうまい国なんだ」

「国………?」

「ああ、それが美味しいモンだと分ければ、全身が痺れて死ぬ毒があ  
ろうと食べる。国の真上にミサイルぶち込まれても遺憾の意で済ま  
せるが、おそらく食料に手を出されたらマジで殺しにいく、そんな  
国だな」

「み、みさ? アニキ、なんだそりゃ」

「まあみんな食べるってことに異様なこだわりを持つ民族だと思っ  
てくれればそれでいい。まあ御多分に漏れず俺もその国の民らしく  
舌が肥えに肥えている。多分帝国の料理はほとんどが口に合わねえ  
んだと思うよ。由々しき事態ではあるが、これは利用出来る」

ニホン人にとって最大級のピンチだ。

飯が合わない。これは早急に解決するべき事案だ。



しかし、だからこそ気付けたこともある。

「ど、どついつことだ、ナルヒト」

目を丸くするトカゲ男。遠山鳴人は彼の才能に気づいていた。

「ラザール、つまり、あなたのパンは本当に美味しいんだよ」

「お、おれの？」

「ああ、優しい味だった。さっき出された硬いだけのざらついたパンとは違う。生地はふんわり、しかしきちんと噛み応えもあり、素朴だが小麦本来の味も楽しめた、あれ、美味かったよ、ほんと」

「そ、そうかい。なんだ、その、改めて言われると照れるな。俺の一族に伝わる作り方なんだ。天使粉の中でも安めの黒くてふすまの多いやつを使ってるんだが」

「ああ、なるほど。黒パンってやつか。玄米的な感じで俺は好きだった」

舌が肥えている人間ならあの良さがわかるだろう。おそらくバターやらなんやら使われていない素材そのものの味。

なぜあんな滋味深くなるのかわからないが。

「まあ。要はな、ラザール。何度も言うがお前のパンは美味いんだ。売れる、間違いなくお前のパンは売れるんだよ、商機と勝機をあんたのパンに俺は見た」

遠山にはすでにイメージが出来上がっている。

この異世界ライフの攻略法。どのようにして辿り着くかをイメージしている。

「だ、だが、ナルヒト、俺はリザドニアンだ。俺なんぞが作ったパンをこの都市の人間が受け入れてくれるとは思えない……」

上擦った声と裏腹にラザールの尻尾がしょげている。

その言葉はたしかにその通りだろう。商売をするにあたりその人物のイメージとはかなり重要なものとなる。

「安心しろ、ラザール。職人と社長はあんた。あんたの仕事は美味しいパンを作ること、そしてそれを売るのは部長たる俺の仕事だ。方法を必ず見つける、アンタのパンをこの都市、いや、帝国とやら全域に広げてやる」

「あ、アニキ、アンタそんなこと考えて……　でも、それはかなり難しいんじゃないか」

リダはやはり賢い。その道の困難さを理解できるほどには。

遠山は心強い従業員に笑いかける。

「でも、じゃねえ、リダ。いいじゃないか、ワクワクしてこないか？」

【隠し技能 発動】

その舌は、人を茹らせる。

「差別種族のリザドニアン、スラム街から出たばかりのガキども、そして住所不定無職の流れ者。まあ、みんな残念ながら社会のど底辺だ。これより下を探すのが難しいほどにな」

「……………」

遠山の自虐の言葉、しかしそれは真実だ。

だが――

「ひひひひひ、せつかくの異世界ライフだ。俺は俺の好きなように、欲望のままに生きてやる。お約束のことを始めるんだ、俺たちで」

だが遠山はその真実ごときであゆみを、欲望を諦める男ではない。

「お約束？　なんだそれは？」

「成り上がり」

短い言葉。

遠山がカンテラに揺蕩う炎をじっと、目に収めつぶやく。

「いつときの流行りからは外れてるかもしんねえが、これは良いものだ。良いものは決して滅びない。俺がそれを証明する、俺たちの存在をこの世界に刻む、価値を証明する」

この短い時間でも感じた彼らへの差別。

特にそれに対して義憤に駆られたわけでもない。人間である以上、いや生き物である以上、差別は必ず存在するものだ。

だが、それを覆してやるのも面白いかもしれない。

遠山鳴人の原動力。欲望、それにさまざまな燃料が焚べられていく。

「湖のほとりに家を建てる、店を建てる、今を維持する。俺はお前から全ての欲望を肯定する。必ず、お前たちをそこへ連れて行く。だから、頼む。力を貸してくれ。俺の異世界成り上がりライフにはお前たちが必要だ」

成せなかったこと。現代ダンジョンライフは終わった、しかし続きはここにある。

ならば今度こそ全てをやるう。やりたいことを全て、欲しいものを全て手に入れて、それから死のう。

やりたいことをしない理由、欲しいものを諦める言い訳。それらを考える時間すら、惜しい。

「……ふ、ナルヒト。お前は不思議な奴だ。何を言ってるのかわからないのに、お前の言葉を聞いてると、ワクワクしてしまう。まるで蛇の舌でも持っているようだな」

「アニキ、俺はアンタに与えられた側の存在だ。少なくとも俺はアンタについていきたい。アンタの側にいてアンタの見る光景と同じものを見ていたいと思う。こっちから、よろしく頼みてえ」

「よし、話は決まりだな。俺らの当面の目標は”パン屋の開業”だ。そのために必要なもんをこれから集める」

最短最速で、全ての困難をぶちのめす。必ず、たどり着く。

遠山鳴人が、簡潔に言葉を述べる

「まずは”金”、これがないとなんも始まんねえ。最低でも寝る場所と食うモンに困らねえ額は確保しておきたい」

「それはそうだが、どうやって稼ぐ？」

「法に触れる方法はNGだ。企業活動にはコンプラがついて回る。あくまでクリーンな方法で金を稼ぐしかない。リダ、ラザール。俺は少し常識に疎いところがある。コネやらなんやら無しで生命の危険がなく、手っ取り早く金を稼げる方法、犯罪以外で思いつくものは？」

「そんな方法……」

「アニキ、流石にそれは……」

「まあ、どこの世界でもそれは一緒か。じゃあ条件を緩くしよう。生命と引き換えに金を真っ当に稼ぐ方法は？」



「……なるほど、そういうことか。フ、それなら話は別だ。ア  
ンタにピッタリの仕事があるよ、竜殺し」

「……冒険者」

「やっぱりそうなる訳だ。ふーん、冒険者、ねえ」

遠山はニヤニヤが抑えられない。はじめて探索者という職業を知  
った時の瞬間を思い出す。

人生が動き出す瞬間の痺れ。

異世界ライフだ、冒険者になり、化け物を殺し金を稼いで店をや  
る。

仲間は少なく、立場は弱い。

パン作りの得意なトカゲに、割と賢い孤児たち。

イロモノばかりだが、それがいい。退屈とは無縁だろう。

「よし、シンプルに行こう。まずは生活に苦労しないためだけの金を稼ぐ” たのしいたのしい金策パートの始まりだ」

「アニキ。その、俺も冒険者に」

「いや、リダ。悪いがしばらくお前らは大人しくしとけ。カラスとか言う連中、あの時絡んできた奴らは皆殺しにしてるから大丈夫だとは思うが、ほとぼり冷めるまでお前らは目立たない方がいい」

「う、わ、わかった」

「いや、一緒に行動した方が安全か？ ラザール、どう思う？..」

「ふむ、奴らは狡猾で執念深い。だがナルヒトの言う通り俺たちと子供たちの関係を知っているカラスはもうこの世にいない。しばらくは追手もないと考えていいだろう。むしろ、俺たちは目立つからな。あまり一緒にいるところを人々に見られない方が噂も広まりにくいはずだ」

「OK、決まりだ。リダ、お前はルカたちの面倒を見る。それがお前にしか出来ない仕事だ。いいな？」

「……わかったよ、それがあんたの助けになるなら」

「聞き分けいいガキは好きだぜ、さて、ラザールアンタには」

「おいおい、ナルヒト。選択肢は1つだ。俺も冒険者になるさ。アンタだけにリスクは負わせない」

「いや、でもお前にはパン製造の全てを任せたいんだが」

「完全な分業は店を持つてからの話だろう？ 俺はたしかに戦闘は苦手だが、斥候役としてならおそらく一級冒険者並みの仕事をするぞ」

「あの、影か…… なるほど、うーん、でもなあ……」

「なに、無茶はしない。基本的に鉄火場ではアンタの指示に従う。ホロームの頸は1人では狩れない、と言う奴だな」

「ああうん。何となく言いたいことはわかるよ。……わかった、ラザール、力を貸してくれ」

「アンタについていくよ。それに冒険者となりモンスターを狩ってレベルを上げればそれだけ体も強くなる。パン作りには体力も欠かせないしな。運が良ければ器用さも上がるかもしれない」

「ああ、そうだな……うーん？ レベル？」

「ああ、レベルだ。たしかにリスクはあるかも知れないがそれなり

のリターンはある。……おい、まさか、レベルのことまで知らないなど言わないでくれよ」

「いや、その概念は知ってるんだけど、え、あんの？ レベル」

「……本当にどうやって竜を殺したんだ？ ナルヒト、アンタほんとはどこからやってきた？」

「だからニホンだって言ってるだろ？」

「またそうやって…… まあいい。とにかく俺が冒険者になるのもリスクばかりじゃない。リターンもあるんだ。金を稼ぐのに人手は多い方がいいだろう？」

「まあ確かに。しかし、レベルか。そーか、レベルあんのか……」

「……そんなに気になるなら冒険者ギルドで調べてもらおうといい。帝国のやり方がどうかはわからないが少なくとも王国では冒険者になれば、そういうサービスを、受けることが出来たぞ」

「マジでか？ やべえ、こっしちやいらねえ。明日の予定は冒険者になることだな。えーと、やっぱ組合、違うな、ギルドに登録しに行く感じか？」

「まあ、そうだろう。王国と帝国では申請方法が違うかもしれないから一概には言えないけどな」

「よし、明日の行動方針決まり！ とにかく金だ、金稼ぐぞー！  
金策パートの始まりじゃい」

「元気がいいな、ふわあ。俺もそろそろ眠らせてもらう。リダ、君もゆっくり休むといい。宿屋の主人には明日、俺から5日分泊まれるように金を支払っておくよ」

「すまねえ、何から何まで、アンタらに。俺ら、恩を返せる時があるのか？」

「当たり前だろ、お前らにはこれからじゃんじゃん働いてもらう。明日は俺らが帰るまではとりあえず宿から出るなよ。部屋で休んだら中庭で遊んどけ。ガキにはそういう時間も必要だ」

「遊ぶ……か。俺たちに、こんな時間がくるなんて、昨日まで思っ  
てなかった。ありがとう、アニキ、ダンナ。働ける時が来たら、い  
つでも言ってくれ」

「おう、こき使うから覚悟しといてくれよ？ ラザール、俺あ、寝  
る。明日はどれくらいに起きればいい？」

「ふむ、冒険者ギルドは早朝から開いている筈だ。朝にしか出ない  
モンスターを狩る冒険者もいるからね。早めに動くに越したことは  
ないだろう」

「あいよ、じゃあ日の出とともに行動開始だな。あー、歯あ磨きて  
ー。その辺の生活水準も見直さねーとなー。そーいや部屋にメモ用  
紙置いてたよな？ この辺じゃあ紙は貴重じゃないのか？」

「紙かい？ パルプ紙なら帝国の主要産業の1つだ。特に貴重品と

「いうわけではないな」

「ふーん、技術進歩に偏りがある気がするな、建物やらなんならは中世ヨーロッパなんだが……」

「何の話だい？」

「いや、気にすんな。まあ、色々常識知らずだからな。またいろいろ聞くかも。ほんじゃ寝よつぜ。明日は早い」

「ああ、そうしよう」

「俺、ベッドで寝るの初めてだよ、あんなにぐっすり眠れるんだな」

「わかる、石の上とかで寝た後だとベッドのありがたみすげえよな。んー、藁と布じゃなくてマットとスプリングが恋しい……」

3人が思い思いに呟きながら、部屋に戻る。



穏やかに夜が過ぎていく。明日への期待と目標を決めた遠山たちは部屋に戻り寝床についた瞬間、驚くほどすんなりと眠りに落ちた。

「ねっむ……」

部屋に置いてあるメモ帳。羽ペンの先をインクに浸し、わずかなロウソクの火と窓から差し込む月明かりを頼りに、遠山がメモを書き終える。

「だいたいこんなもんか。……異世界、実際に異世界に来ちまうと考えること多すぎてやべえな。はー、ステータスオープンとか言えは見えるタイプの奴ならもーちよい楽だったんだけどなー」

その辺のお約束は残念ながら当てはまらないらしい。それらしいものといえば、あの要所で現れる矢印とメッセージだけだ。

「信用しきるのは論外だが、完全無視も違う気するな。……まあ今

日はもう寝よ、明日は冒険者ギルドかー、む、ふふふ。やべえ、冒険者ギルドって、もう名前だけでテンション上がるわ、寝れるかなこの感じで」

ベッドで固まって眠る子供たちの寝息と、部屋の片隅で立ったまま眠るラザール。

「ま、悪くねーか、たまにはこんなのも」

遠山も藁と布のソファに寝転んだ瞬間、がくりと眠りに落ちる。

初めて探索に出た時の夜と同じく、自分がいつ眠りについたらのかすらわからない深く、迷うような眠りに。

……

…

夢を見た。

霧が立ち込める平原の中、何かはその霧の中で蠢いている。

それはどこか懐かしいような気もするし、全く知らない何かのよ  
うな気もする。

そのもつと奥には灯りが見える。ゆらゆら揺れるカンテラの灯り。

建物……

気付けば、その建物を見上げていた。

円形のガラス張りが印象的な建物。なぜかその建物は燃えていた。  
火の粉がぱちり、ぱちり飛んでいる。

触れても熱くない。ふと、看板が目の前に立っていて。

『バ&#ルト€2・公文書館』

その文字の意味を理解する前に、夢は唐突に終わった。

24話 父さんな、仕事辞めてパン屋しようと思うんだ(後書き)

遠山のメモ

とりあえず今日から気が向いた時にメモをとることにした。わけわかんねー状況なのは変わらないうが大事なのは自分が今、生きてて、ここが現実だつてことだ。

生きてんなら、俺は欲望のままに進んでいく。だが気持ちだけで何とかなるほど人生は甘くねー。

状況整理と考えをまとめるために箇条書きで気になることと、いまわかってることをまとめようと思う。

・わかってること

1 ラザールとガキども。これは少なくとも俺の味方で仲間だ。身内な以上こいつらの欲望も全て叶えてやりたい。それはもう俺のやりたいことで欲望になっちまった。

2 今の状況。あのエルフ、何言ってるかほとんどわからなかったし、もうあんま覚えていないが俺は生きてる、そう言った。心臓も動いてるし腹も減る、このメモ書いてる今も眠たくて仕方ねー。身体の感覚、そして何よりキリヤイバを使用した時の感じ。前の世界っていうとなんか変な感じするけどその時となんら変わんねー。まあ、あとは敵を殺す時の手応え。これも同じだ。夢や幻じゃあない、俺

はたしかに生きて、続きの中にいる。そうしていつかして今は納得  
しておいてほしい

## 25話 冒険者ギルドの長い1日

……  
……

冒険者ギルドの朝は早い。

「うわー！ もう”平原地帯”の依頼ねえじゃん！ ちくしょう！  
姉ちゃん、”自由探索”で！ 申請はもういいか？！」

「はい、承りましたー！ 自由探索なのでギルドからの報酬金は  
ありませんが、平原にて狩られたモンスターについては査定したの  
ち適性価格で買い取らせてもらいまーす。荷車など必要でしたら各  
所の門でお伝えくださいねー」

都市部の外、壁の外の平原地帯に出没する怪物は早朝、活発に動  
く種類も多く、それだけ狩りの機会が増えるのだ。

「いやー、いつもの朝だねえ。冒険者のみなさんも活気があって大変結構」

窓口の奥で椅子に腰掛け、冒険者ギルド全体を眺める腹のでた中年男。

サパン・フォン・ティーチ辺境伯。

平穩と己の私腹を肥やすことを何より愛するこの街の領主。

彼の朝もまた早い。

理解しているのだ。己の街、己が皇帝より任されているこの都市のキモはこのギルドにあると。

「ふむ。ふむふむ。ジャイアントボアの肉の流通数が先月より少なくなってるのか…… ふんむ、帝都への輸出の主力商品だからもう少し量を増やしたいとこだけど……」



「ふむ、”ハーFRING”による軽犯罪が増えてるね…… おまけに近隣の村での略奪も増加傾向か。一度教会の騎士派と話した方がいいかもしれないなあ」

「ドワーフの人口比が減っている…… む、”工房”と商人ギルドからも陳情が増えてるな…… 原因は天使教会の祝福税の高さか…… だが酒は奴らの領域だしなあ、どうしたものか」

い。 辺境伯邸が数多の書類に目を通していく。その速さは尋常ではない。

「見て、また領主様がものすごい勢いで書類片付けてる」

「立派な人よね。普通なら文官に任せる仕事も全部自分でやってるんだもの」

「噂ではギルドマスターとデキてるらしいけど、あれだけ仕事でき

「たら嘘じゃないのかも」

ヒソヒソとざわめくギルド受付嬢達の声。しかし過集中している彼の耳には雑音は一切入らない。

「おっと、”姪御殿”がまた家庭教師をクビにしたのか……。帝都でも有名な古代二ホン学の学者だったのだが……。ネイティブで二ホンのタンカやハイクや物語に詳しいものを用意しろ、か。ふん、魔術学院に過去へ戻ることでできる魔術式を開発させる方が早そうな話だね」

ギルドと同じ敷地内にあるのは彼の意向によるもの。曰く、冒険都市の行く末を左右する彼ら冒険者に少しでも近い存在でいたいから、と。

まあ、本当の理由は別にあるのだが。そんなことはおくびにも出さない。

数多の報告書や陳情書を一通り読み終え、1つ1つに対策を考えていく。

思考の間を縫って、ふとかけられた声。

「領主様。おはようございます」

「冒険者ギルドの長。」

「ギルドマスター、”ハイデマリー・スナベルア”。

じゃっかん  
弱冠<sup>12</sup>歳で帝国中、最難関の教育施設、ランドナー帝国学院を  
主席入学、主席卒業した才媛。

その後、帝都での冒険者ギルド勤務を経て、23歳の若さで皇帝  
直々に、“冒険都市アガトラ”のギルドマスターに選ばれた優秀す  
ぎる人間だ。

「ああ、マリーくん、おはよう。いい朝だね」

小太りの中年辺境伯と違ってギルドマスターには華がある。タイトなスカートから伸びるスラリとした足、丁寧にまとめられた緑色の髪、胸元をぐっと持ち上げるギルドの制服。

「もうお加減は宜しいので?」

そんな対照的な2人にはあるが、妙に彼と彼女が揃うと絵になる。ギルドの受付嬢達がチラチラとデキていると噂の2人を盗み見していた。

「はは、なんとかね。……うん、きつかったよ、ほんと」

そんな冒険都市でも有数の人物2人。

そんな2人でも厄日という日はある。昨日の竜大使館での出来事はまさに厄、災いといっても良いことで。

「わたしもまだまだでした…… 昨日のことは良い経験になったと考えるようにいたします」

「あ、うん。君のそういうところ素直にすごいと思うわ」

竜に呼びつけられ、その婚姻を認め祝いに行ったらなんかよく分からんうちに奴隷が竜へ喧嘩を売って、その余波を食らった。

いや多分なんのプラスにもならないけどね、あんなもん1000年生きてようと普通は巡り合わないけどね。

喉まで出掛かった言葉をサパンは飲み干す。

「まあ、昨日のあれは事故みたいなもんだよ、事故。今日の地下当番に竜殿はいないし、例の竜殺しもおそらくなんだかんだまだ大使館にいるだろうね。いやー、世はこともなし、いい言葉だねー」

サパンが明るく振る舞う。自分に言い聞かせるように続ける言葉。

そう、もうあんなことは起こり得ない。

竜関係のトラブルはごめんだ。巻き込まれた時点で命の危機が発生するのだから。

だが、そうそう起こるものではない。そう、ないない。もうないから。

サパンが何度も心の中で頷きまくる。完全に昨日の出来事。竜と超越者の怒気にあてられたのがトラウマになっていた。

「領主さま、あまりそういうこと言わない方が…… 蒐集竜様に常識という言葉は通用しませんので」

「なははは！ 大丈夫だよ、こちららゲロは吐くわ漏らすわ昨日は大変な目にあっただ。そんなことそうそう続くものかね」

空明るい言葉は完全に空元気。

「漏らしてたんですか」

さりげなくカミングアウトされた事実にもリーが少し引いた。

辺境伯はそんなことを微塵も気にせず、しかし、急に首を傾げた。

「ん？ おや、いきなり静かになったね。何があったのかな？」

まだこの時間はギルド中に依頼を取り合う冒険者たちの怒号が響いていておかしくない時間帯なのだが……

「……領主様、その、お伝えするのが遅くなったことはお詫び申し上げます。昨日はお調子が優れないと思い、私の判断でご報告を上げていませんでしたから」

「うん？」

言いづらそうな顔。声色。サパンはマリーの様子を感じた瞬間、急に胃が縮む感覚を覚える。

「その後、領主様が気を失っている中、蒐集竜、及び竜大使館より冒険都市、ひいては帝国に宣言されました」

「せ、宣言？」

「”冒険奴隷、トオヤマナルヒトの奴隷登録を抹消、及びかのものとの婚姻発表を撤回、彼自身の自由と意思を尊重する”とのことです」

「マ？」

竜が人を尊重する。

その逆は当たり前だがこれはあり得ない。すくなくともサパンの知る中でそのような事例は知らない。

「マです。公式な声明として帝国に広がるのは少し時間がかかるでしょうが。それと昨日のお昼の時点で彼はすでに冒険都市へ降りて



います。残念ながらギルドとして監視までは行っていませんが……  
ただ、冒険者の中にスラム街へ入っていくトオヤマナルヒトの  
姿をみたものが」

「す、スラム街？　なんでまた……　てか、ほんとに静かだね。  
一体何があつてー　アツ」

小さな悲鳴はサパンのものだ。

窓口の向こう側、冒険酒場の様子を覗き見た彼が、小鳥が絞め殺  
されたような声をあげて。

「……何も言わないでください、お願いしますから」

何かを察したマリーが眼鏡を拭きながらその場につづくまる。彼  
女を知る人間からすればありえない姿だ。

「あ、あの、あのあのあの、ママママママママリリリリリククク  
クン、君、ギルドマスターだよ、ね」

リズムを刻んだサパンの声。彼の胃の中は既にオオシケになっていた。

彼が見た光景が、そうさせているのだ。

「アー、何も聞こえません、アー！」

頭の回転が速く、聡いのも考えものだ。恐るべき光景も可能性も全て気付いてしまうのだから。

帝国屈指の才媛、冒険者の聖地、アガトラのギルドマスターが幼子のように耳を押さえて、いやいやと首を振る。

「あの、蒐集竜様と、その、彼女がいるんですが！」

そしてサパンはその恐るべき光景を自分一人で抱える気も、ギルドマスターを逃す気も一切なかった。

「アー、アーア！」

「蒐集竜と”元勇者パーティ 射手”！！ 塔級冒険者、ウエンフ・イルバーナ嬢がメンチきり合っ  
てんですが！” トオヤマナルヒト  
”を挟んで！」

「言わないでって言ったのにいいいい、もおおおお！」

マリーの悲鳴がギルドに響く。

冒険者ギルドの長い1日は、竜と英雄のメンチから始まった。

25話 冒険者ギルドの長い1日（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをじっくりご覧ください！

26話 お前の名前を――

「よし、じゃあ、入るぞ、ラザール」

「ああ、大丈夫、そばにいるさ」

遠山は円形の建物を見上げる。

造りは木造、ロングハウスという奴だろうか？ 船を逆さまにしたような作りの大きな建物だ。

わかりやすく建物の壁や屋根には盾や剣、そして見たことない生き物の骨がオブジェとして飾られている？

「失礼しまーす」

冒険者ギルドの扉を開ける。初めて入る飲食店のドアを開ける時に似た微妙なドキドキを携えて。

そこには、やはり、遠山の思い描いていた光景が広がっていた。

「順番！ 順番にお並びください！」

「依頼貰ったあ！ ジャイアントボアの牙の収集！ 俺これな！」

活気。

朝だというのに強いビールの匂いに、火にかけられた肉の脂が弾ける音。

「この前行った色街の新店舗、ありゃあ良かったなあ。ひひひ、獣人のかわいい子たくさんいてよ」

「いやそれよりレイン・インっていう店いいぜ？ 女は一級品でシステムも斬新、逆指名制度つつてよー」

耳をすませば下世話な話、血気盛んな連中は色街と深いつながりがある。

「装備の確認が完了次第出発するぞ。外で待たせてる冒険奴隷を餌にして、森林地帯のベロアフォルスを誘き出す」

「うーす。何人生き残るかなあー」

多種多様。バベル島も様々な人種の集う坩堝だったが、ここは別格。

何しろー

「うみや、なんか急に湿気てきたな……」

毛がべたついてきたよ」

「ふおふお、ワシの髭もなんか湿気とるわ、一雨くるかのう」

「この前発売されたオイルよかったぜ。尻尾のツヤが違うわ」

巫人、そう呼んでいいのかわからないが明らかに遠山の知るホモ・サピエンスとは程遠い姿のヒトもたくさん。

獣耳に尻尾付きの獣人。

豊かな髭に筋骨隆々の身長の高いおっさん連中、多分ドワーフ。

シンプルに身長が低い、しかし顔は成人のホビットっぽい。

ザ・ファンタジーの光景に遠山が目を輝かせる。

指輪物語やらなんやらの王道ファンタジーから2010年代から



2020年代に流行ったライトノベルやWEB小説ファンタジー、それらにどっぷり浸かっていた男からすればもう、遊園地みたいなものだ。

角笛みたいな杯で酒飲んでるよ。あれ欲しい。

もうワクワクして仕方ない。

「やべえ。ドワーフにホビット、獣人かよ。あとはエルフがいりや  
全て揃うな」

「はは、純粋なエルフはいないだろうがハーフェルフなら多いだろ  
う。ナルヒトはギルドは初めてかい？」

ラザールが目をキラキラさせる遠山に話しかける。

「似たような所はよく行ってたけどな。でもあれだ、朝からこんな  
騒がしいとはな」

「ああ、勤勉な冒険者や新人がこの時間が多いからな。みんな少しでも割りのいい依頼を取ろうと必死なわけだ」

入り口を進み、建物の中に入る。

火の灯されたシャンデリア、テーブルやイスの並ぶ飲食出来るスペースと、依頼書の張り付けられたでかいボード、ガラスで仕切られた銀行に似た受付スペース。

冒険者ギルド。昨日ここを訪れた時は観察する暇がなかった。

見回せば見回すほど、テンションが上がってくる。

「すげえ、テーマパークに来たみたいだぜ……　だが、あの揉み合いの中に突撃する気はねえな」

遠山が大混雑の受付スペースを眺める。超人気のアトラクションに民度低い連中が詰め寄せてるみたいだ。

依頼書らしき紙の取り合い、順番の奪い合い、なんでもありの大乱戦。

遠山は嫌いなものが多い。人混みもその中の一つだ。

「ああ、登録にはおそらく時間がかかるだろうしね。ふむ、だがやはりさすがはアガトラの冒険者ギルド、活気が違うものだ」

ラザールが長い顎に手を当てふむ、と唸る。

どんッ、ラザールの身体がよろけた。

「おいお前ら何つつたてんだよ、邪魔だ！ どけ」

わざと、だろう。背後からぶつかってきた大男が唾を散らして怒鳴り始める。

「おっと、すまない」

「うわ、リザドニアンかよ。ふん、ここにはてめえが盗めるようなもんなんざねえぞ、プツ」

落ち着いて謝るラザール、それを汚いものでも見る目つきで見下ろし、大男がラザールの足元に唾を吐き捨てる。

「……………面倒を起こす気はない、すまなかった。ナルヒト、行こう」

侮辱に対してもラザールは表情を変えない。冒険者ギルドに来たのはカネを稼ぐためだ。トラブルを起こす為ではない。

感情を押し殺す術を身につけているリザドニアンがその大男の視界から逃れるべく頭を下げる。

だが、残念ながらこの聡明なりザドニアンの友人はそういうのではない。聡明ではないのだ、ハッピーセットなのだ、頭が。

「いいのかよ、レーザー。そもそもぶつかってきたのはこのウスノ口だ。どうやら前もはつきり見えねえ間抜けでもあるらしいな」

遠山は感情を殺すよりもムカつく存在を殺す方が好きなタイプだ。

がつつり聞こえるように、大男を貶す。

「あ？ なんだって？」

ピクリ、ロン毛の大男が目には血管を浮き立たせる。

鉄の胸当てに毛皮のズボン、腰に差している剣、間違いなく荒くれ者の冒険者。

遠山が自分より頭2つほど身長の高いそいつを見上げて、値踏みする。

「……ナルヒト、お前はまたそうやって…… 連れがすまない、

まだ都市に来たばかりで不慣れなんだ。無礼を許つー うっ」

ぼす。

大男の拳がラザールの鳩尾を捉える。たまらずラザールが身体をくの字におってその場に膝をついた。

はい、殺そ。遠山のスイッチが異様に簡単に入る。

「グダグダうつせえんだよ！ トカゲ！ おい、そのロープ！  
俺のことをなんつた？！ ウスノ口だつて？」

「……………大丈夫か？ ラザール」

唾を吐き散らすそいつを無視して遠山がラザールに手を貸す。

「あ、ああ、大丈夫だ。今面倒ごとを起こすのはまずい。ここはひとまず……………」

引き起こしたラザールはそれでもこの場を収めようとしていた。

「おい、見ろよ、ガルドの奴が誰かいじめてんぞ」

「リザドニアンじゃねえか、珍しいな。ヒヒ、冒険奴隷にでもするか？ 奴ら斥候としてはなかなかだぜ」

「おい、ガルド、勢い余ってこの前みたいに殺すなよ、可哀想だったな、あのガキ。田舎から出てきていきなりガルドに絡まれてよ、連れの女も奪われてガルドにおもちゃにされて捨てられてよ」

「まあ仕方ねえよ、自己責任が俺たち冒険者のルールだからなあ」

汚い唾いが耳に触る。

何人かの冒険者がこちらに気づき、ニヤニヤと見せ物を見るかのように囁し立て始める。

「まずいな、注目されている…… ナルヒト、一旦出直そう、あまり騒ぎを起こすと厄介だ」

至極当たり前の意見、ラザールが痛みに顔を歪めつつも遠山を外へ促し、

「すまん無理」

短い言葉で遠山がそれを無視する。

「お、おい、ナルヒト」

ラザールを庇うように大男と対面する遠山、じっと、ソイツの身体を観察する。

「なんだあ？ その目、なんか文句あんのかよ？」

大男が下卑た嗤いを唇に浮かべる。



遠山の嫌いなタイプの人間だ、それなりに腕が立ち、暴力が得意で、そして思慮が浅くて不潔で凶暴。

コイツはいなくてもいい人間だ。子供時代に、けむくじやらの友を奪った奴らと同じ匂いが大男から漂う。

「……………三流だな。酒くせえ。朝まで飲んでた証拠だ。体臭で容易に化け物どもに位置を悟られるな、それじゃ」

品定めは終わった。

殺せる、そう判断した。

「は？」

「背丈の割に腹が出る。上半身に比べて下半身が貧弱だ。ろくに走り込んでもねえ、鍛えてもねえ身体。でけえ凶体だけに頼った肉の塊だ」

遠山が指を差しながら男の体つきを評価する。やはりこの世界の人間は差が激しい。雑魚とヤバい奴の間に隔絶した差がある。

「てめえ、何言ってるやがる？ あ？ 死にてえのか？」

常人であればその体格を見ただけで少し圧されるだろう大男の威圧。

しかし、遠山はにやにやした笑みを崩さない。

「聞こえなかったのかよ、目だけじゃなくて耳も悪いんだな。いや、顔と頭もか。ヒヒヒ、いいところなさすぎだな、生きてる価値あんのか？ お前」

弱い、それだけで遠山がコイツに遠慮する理由はなくなった。

「殺す！！」

大男がその太い腕を遠山の首に伸ばす、それよりも遙かに先んじて、遠山の前蹴りが大男の股間に食い込んだ。

ぶち、なにかを蹴り上げるキモい感触、だがクリーンヒットだ。

「オバっ?!」

大男が、身体を痙攣させ股を押さえながらその場に崩れる。

「やっぱのろいな」

見下ろす遠山。

遠山が狙いを定める、痛みにもんどりうつ大男、その下がった首をじっと見つめて。

「お、おい、ガルド、アイツやべえんじやねえの？」

「嘘だろ、なにが起きた？ ガルドが膝ついてんぞ」

野次馬たちも異様に気づいたのかざわめき始める。

だが、遠山には、獲物の仕留め方を考えている探索者にはなににも聞こえない。

「てぐ、きん、きん、は……」

よだれを垂らし、目を真っ赤に充血させた大男が遠山のダーティ  
ープレイに文句を言う。しかし、彼は勘違いしていた。

今するべきことは、ケンカのやり方に文句を言うことではなく、  
痛みを無視して這いつくばっても逃げることだった。

大男は選択肢を間違えた。

大男にとつては、ほんのお遊び。ギルドに現れた見慣れない顔の奴らをおちよくり、突き回して遊ぶ、それだけだった。

だが、それは決して大男ごときが突っついていい存在ではなかったのだ。もう、遅いが。

「殺すってんなら、殺されることも覚悟しとるよな？」

突っつかれたら、殺す。

おちよくられても、殺す。

欲望のままに、生かすもの、殺すもの。決めるのは俺だ。

遠山が、殺すべきものを見下ろして。

「ーは？」

伝わったのだ。遠山の異様な雰囲気。大男の顔が一気に青ざめる。

遠山が金的を抑えて這いつくばる男の首に狙いをつける。一撃で踏み折る、そのつもりで。

「よせ、ナルヒト！！ 殺すな！」

ラザールの静止虚しく。

遠山は少し不思議に思えた。はて、妙だ。ここまで自分は血の気が多かつただらうか？

一瞬湧き出た疑問はしかし、霧に覆われるかのように消えていく、まあ、いいか。

「……」

短い唾いの元、大男の首を踏み折——

「はい、おしまい。おしまいだ。動かないでよ、黒髪くん」

勢いよく足を振り下ろし、しかしピタリと止まった。止めさせられた。自分よりも遥かに鋭く濃い殺気を背中に浴びたからだ。

「……誰だ？」

冷水を頭からぶっかけられたに等しい感覚に耐え、遠山が短く問いかける。

「今日の地下当番。君らみたいな血の多い馬鹿たちのお目付役さ。私の仕事、あまり増やさないでくれると助かるんだけど」

ぎりり、引き絞られる音は、おそろく弓の音。

狙われている、背中を。見てもないのに分かる圧倒的な殺気。アリスや、ベリナル、そしてあの聖女とやらと同じ気配。

「あ、あなたは…… ナルヒト、頼む。言う通りにしてくれ」

ラザールの声がさらに硬く。今度は遠山はきちんと頷いた。

ゆっくり両手を上げて、敵意のないことをアピールする。

「……運が良かったな、ウスノ口。次から喧嘩売る相手は選べよ」



本気で踏み折るつもりだった足をゆっくりと戻す。少しでも妙なことをすれば射抜かれる、それに気づいたからだ。

「ひ、ひ、ひい」

色々漏らしながら、大男が這いつくばって離れていく。惨めな姿だ、始末するのは今度にしよう。遠山はソイツの顔を覚えていた。

「あらら、本気で殺す気だったわけね。……キミ、嫌な風を纏うね。ドロドロして血生臭い……でも、とても暖かい。不思議で奇妙な風…… 邪悪と善良がぐちゃぐちゃになってる風だ」

「血生臭いとか言っんなら問答無用で鋏を向けるアンタも人のことは言えねえんじゃねえの？」

どこかで、聞いたことがある声だ。遠山は背後からかけられる女の声に聞き覚えがあることに気づく。

「ふうん、度胸もある、か。ゆっくり、振り向いてもらえるかな？」

女の声に遠山が頷く。

「あ、アンタ、まさか、その銀髪、銀色の目に、羽弓……」

狼狽したラザールの声。こいつ色々事情通だな、と遠山がどこか呑気なことを思い。

「トカゲさん、キミも動かないでね。フロリアの風を纏う悪事の申し子。悪いけど、私はキミも充分に怖いよ」

「お、おい、あれ、あの銀髪、あの人……」

「うそ、ほんとだ。ほんものだ。……初めて見た……　　いつも地下にいる時はでてこないのに」

「同じ人間とは思えないほど、綺麗……」

「ガルドと揉めてた奴ら、あいつら誰だ？ 見たことあるか？」

「お、おい、あの黒髪の男、昨日の……」

「あ、しゅ、蒐集竜の……」

周囲が明らかにざわめき始める。

「どつやら遠山に見覚えがある奴らもいるらしい、まあ昨日のことだ、それもそうだろう。」

「辺りが騒がしくなってきたね。振り向いてもらえるかな？」

「へいへい…… あー？」

振り向き、驚く。

見たことがあった。

「どうしたんだい？ 驚いた顔をするね。鍬を向けられてるのも気付いてただろうに。私が誰かも知ってるだろ？」

長い銀色の髪、その中で一房結ばれた三つ編みがどこから吹く風に揺蕩う。

陶磁器のような肌、桜色の唇、芸術品のような小さな鼻。

服装こそ、あの時のモコモコ民族衣装とはちがう。小さな肩掛けのマントに上品な皮のジャケット、短いパンツに動きやすそうな白いタイツ。

「アンタ…… ウェンフィルバーナ、か……？」

目の色は、虹色ではなく、何故か銀色。

塔で。出会ったあのクソエルフ。

羽飾りのついた弓矢を遠山に構えて。

「いかにも、元勇者パーティ射手のー」

「ウェンフィルバーナ・ジルバソル・トウスク！ なんだよ、アンタもここにいたんかよ！ あの後大変だっー あえ？」

遠山がその名前を口にす。瞬間、比較的友好的な表情だった女から、全ての感情が抜け落ちた。まるで本来の貌はそれだと言わんばかりに。

ピロソ

【隠しクエスト発生】

【Know your name】

こんな時にー

「ー誰に、その名を聞いた」

メッセージに気を取られた瞬間だ。冷たい声が全身に浴びせられる。

気付けば視界が転がり、肺から息が叩き出された。

叩きつけられ、床に押さえつけられている。動きも気配も、反応すら出来なかった。

「が、は……」

「ナルヒト！！　グウ?!」

「動くな、リザドニアン、次は殺す。答えろ、ヒューマン、その名を誰に聞いたんだ」

ウエンフィルバーナ。銀髪の少し以前と様子が違うそいつが、遠山を地面に押し倒し、拘束する。

駆け寄ろうとしたレーザーも、ウエンフィルバーナが指先を向けただけで吹き飛ばされ壁に叩きつけられた。

冒険者ギルドの空気が一変する。

なんだなんだと野次馬が集まり初めて

「ー寄るな、有象無象ども」

ばた、り、ばたばた。ウエンフィルバーナがその銀色の瞳を向けた瞬間：半分以上の冒険者、主に3級以下の練度の低い者が倒れふした。

「ゲホっ！？ てめ、なんだア、健忘症か？ 自分で名乗ったんだろうが！ シエラスペシャルがどうとかよ！」

知人、そのはずの女からの急な蛮行に遠山が叫ぶ。もがこうとす  
るが動けない、全く動けない。その華奢な体のどこにこの剛力が備  
わるのか。

「しえら、スペシャル？ 意味が分からない、答える。さもなければトカゲごと殺す」

自分で名乗ってその言葉を初めて聞いたかのように女がつばやく。



冷たい声と殺気はラザールまでにも向けられて。

「……どう言っことだ。お前、誰だ？ クソエルフじゃないのか？」

遠山が別れ際の言葉を使って。

「ーエルフじゃない」

静か、しかし、ああ、悲鳴、泣き声にも似た女の声。

「あぶ」

「ア」

「ウエ」

人がまた倒れる。その言葉を向けられたわけでもないのに。

しかし、呪詛の如き力の籠る言葉は半端な人間全ての意識を刈り取る。古き英雄の舌にはその力があるのだ。

大いなる魔の王を討ち滅ぼした英雄、彼ら彼女らに与えられた報

酬――

「お、おいおいおい、何、なんかスイッチ押しちまった？ なあ、あんま殺意ぐつぐつ向けるのやめてもらえるか？」

「……答えないわけだ。なら、いい。キミを殺して風に聞かすよ」

「なんだそのJ・POPみたいなセリフは」

「ナルヒト!!! だめだ! やめろ!」

「死ね」

そこには明確な死があった。

ほんの少しのボタンを遠山は掛け違えた。先程の大男と同じように間違えた、気付けなかったのだ。目の前の女が何者なのかを。

交通事故のようなものだ、死とはいつもこうして理不尽に降りかかる。

――しかし、遠山もまた理不尽に素直に斃れる人間ではなかった。

「お前が死ね」

その頭はハッピーセット。死ねと言ってくる人間に死ねと返す人間性は既に覚悟を決めていた。

キリヤイバ最大出力。キリ範囲最小限。

ラザールを巻き込まずにコイツと自分にだけ影響がある範囲にできただけキリを絞る。

自分1人で死んでたまるか、俺を殺すのなら、お前も死ね。

キリヤイバは既にー

「おやおやおやおやお、これはこれは、存外賤がなっておらんな。射手」

冷たい殺気が蒸れて、水に変わる。そんな感覚。

熱だ。明らかに熱を持った新たな殺気がギルドの酒場に満ちた。

「勇者がいなければやっていいことと悪いことの区別すらつかんとは、かか、獣と変わらんわけだ。ほんに笑わせてくれるものよ」

冷たくて、熱くて、クラクラする。遠山は濃密なプレッシャーに意識を持っていかれないように歯を食いしばる。

見れば酒場にいる連中の半分は泡を吹いて倒れていた。

だが、その熱気が今は同時に心強く。

「ッ……」

濃い気配。明らかに人ではない何かの持つそれを銀髪女も感じたのだろう。動揺が遠山を押さえつけている腕から伝わる。

「あ、アンタは」

辛うじて、意識を保っていたらしいラザールが言葉を詰まらせる。

息することすら億劫になりそうな気配。自然と首を垂れなくなる  
圧倒的上位者の気配。

それを遠山は知っていた。

「……はは、ナイスタイミング。お前、良くも悪くもタイミングいいやつだな」

遠山が声をかける。

長い金髪はひとりでに輝き、その顔は神が鼻肩したかのように美しい。

空の最も蒼く、暗いダークブルーの領域、きっとそこに繋がる片眼を女は宿していた。

「ドラ子」

アリス・ドラル・フレアテイル、帝国の護り竜。

豪華な金髪の隻眼ど美人。

白いワイシャツに似た上着。長い脚にアホほど似合う皮のズボン。シンプルな格好なのに存在感が際立つ。

少し前は宿敵、今は友達、きっと、多分。

友達の金髪の竜が、くびれた腰に手を当て、遠山に向けて鼻息を漏らす。

「ふん、手紙も送らぬ貴様など知らぬ。……怪我はないか、ナルヒト」

どこか拗ねた言葉、しかしその声音は柔らかく。

「頑丈なのが取り柄でな、あとお前無茶言つな。俺まだ住所ねえよ」

「……蒐集竜、なぜ貴女がここに」

銀髪の女、ウェンフィルバーナがアリスへ問いかける。



「黙れ、射手、オレに質問するな、貴様が手にかげようとしている  
その男、それはこのオレ、蒐集竜の………」

問いを一蹴、ウエンフィルバーナへ向けた鋭い威圧はしかし、遠  
山を見つめモゴモゴ言い始めることで消えていく。

「……要領をえないね、蒐集竜。何が言いたい？」

その竜らしからぬ様子にウエンフィルバーナが眉を顰め

「その男から手を離せ、というか誰の断りをえて其奴に触れておる  
？ 貴様ごとき勇者のオマケ風情が手を出していい男ではないのだ」

しかし、また空気が一変。ウエンフィルバーナに話しかけられた瞬間、竜の声が怒気に塗れる。

「……嫌だと言ったら？」

彼女は例えるならば月だ。その怜悯な白銀の煌めきは生命を見惚れるうちに一瞬で刈り取ってしまう、そんな輝き。

「塔級冒険者が1人、帝国から消えることになる。なに、それだけのことだ」

彼女は例えるならば太陽だ。その輝きと熱の前に生命はひれ伏し焼き尽くされるのは待つだけ。

「それは、貴女が消えるということかな、蒐集竜」

「かか、よい、轉るではないか、主人を失くした哀れな従者よ」

月と太陽が、向かい合う。理外の存在。指先を動かすことすら躊躇う濃い怒気と殺気を匂いすら感じそうなそれを纏いて。

しかし互いに表情は朗らかで。

「……こわー」

遠山の感想はそれしか、なかった。

26話 お前の名前をー（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さい！

＜ 苦しいです、評価してください ＞ デモンズ感

## 27話 スピーチ・スピーチ・チャレンジ

「……勇者のことを軽々しく口にするのはやめてくれないかな、竜  
よ」

風が彼女から吹き付ける。空気の流れが皮膚を裂く錯覚。

「かか、既に終わり、消え去ったものに対しオレは価値を見出せん。  
軽々しく語るに相応しい話題だろうに。もうここにいない去った者  
のことなどはな」

空気が焼け焦げる。呼吸するたびに熱が喉を爛らせる錯覚。

「いや、こわー」

そんな威圧の中、遠山鳴人は考える。

どうしてこうなった。異世界お気楽ファンタジーがこれから始まるはずだったのに。

レベルとか水晶とか色々楽しみにしてたのに、なんで自分はゴジラとキングギドラの睨み合いの中に放り込まれているのか。

いや考えようによっては貴重な体験か。

酔いやら興奮やらで茹だるその頭は既に正常な考えはできていない。遠山は命の危機の中で、割と呑気していた。

「………今のは侮辱と受け取っていいのかい？」

「おお、なんだ、射手、貴様そのような顔もできるのか？　かか、先程の言、訂正しようぞ。勇者め、中々に飼い犬の躡が上手いではないか」

まだ朗らかな顔で静かに語り合う彼女たち。2人ともこの世のも

のと思えぬほどに容姿が整い過ぎてる為、余計に怖い。

傍目には、ド美人2人、長身目隠れ金髪美女と、銀髪クールビューティが微笑ましく会話しているように見える。

しかし遠山にな強大な怪物種が互いに一撃で殺せるチャンスをとっているようにしか見えなかった。

「……100とそこらの幼竜が知った口をたたくな。私たちが旅をしていた頃、キミは卵の筈だったけど」

「おお、これはこれは、偉大なる先達に対して口が過ぎたか？ 何か、いやなんだ、しかし、品性とは齢に比例せんものよな。……痴れ者め、早うその男を解放せよ」

どついうマウンツの取り方だよ、てかコイツドラ子より年上？

遠山が次第に這いつくばったまま頼杖をついて床をゆびで叩き始める。

「へえ、随分彼に執着するじゃないか、蒐集竜…… ああ、なるほど、これがキミを殺した男かい」

ウエンフィルバーナが遠山を見下ろす。

「ふん。良いだろう？ やらんぞ」

何故かドラ子が腕を組み、むふーと鼻息を鳴らしていた。

「……いらないよ、こんな血生臭いヒト。見たら分かる。彼は呪われている、産まれた時からの悪だ」

「はっ、勇者のオマケが言うとは。素晴らしいな、ナルヒト、お墨付きだぞ」

「普通に悪とか傷つくんですけどそれは」



誰が邪悪だ、誰が。

遠山が気分を悪くしながら床を指で叩き続ける。鼻を近づけると木のいい匂いがした。

そうだ、金が溜まって生活に余裕出来たら木のサウナでも作りたいな、でもこの世界サウナあるのかな、とか現実逃避を続けていると

「キミ、状況理解しているのかい？ 随分余裕そうだね」

見透かされたらしい。ウェンフィルバーナの声が上から降りてくる。

「理解できるわけねーだろうが、いきなりこんな押さえつけられてよー。離してくんねーかな、マジで、どっちが悪だよ、こんな無抵抗な人間を床に押し付けてよー」

指をコツコツ、コツコツ。

――あともう少し。

薄く透明、しかし濃く。ヤイバを大きく、鋭く。

「ナルヒト、少し待っていよ。すぐにそれを退けてやるでな。オレの、オレの……と、ひよも、友を足蹴にして無事で済むと思うなよ」

「ドラ子、お前いい奴じゃん……」

少し噛んだドラ子の言葉に遠山はじーンと感じいる。友達少ないから面と向かってそう言ってくれるのは素直に嬉しかった。

「友……？ バカな、竜と竜殺しの関係は執着、愛憎しかない筈だろう、なんだい、それは」

ドラ子の言葉にウエンフィルバーナが片目を吊り上げる。余程意外だったのだろう、声が僅かにうわずっていて。

「……貴様に関係あることか？　かか、ああ、そうか。貴様にはもう友も呼べる者などいないか。勇者という特異点によってのみ繋がりがあった者たちよ。」魔導士”は塔に消え、”盗賊”は影に溶け、”剣士”は既に伏した。かか、独り身の女は妬み屋でいかな」

竜が、笑う。トガった歯をぎらつかせ、蒼暗い目を歪ませて愉快地に英雄を嗤う。

「なんだって？」

部屋の温度が下がる感覚。エアコンでもついてんのかと天井に視線をやるが何も無い。

背筋の冷える感覚の元は、銀髪の女、ウェンフィルバーナ。ドラ子という言葉に表情を失くした。

「妬んでいるのだろう。おお、おお、その目だよ、射手。”魔王”を殺した特異点の1人よ。お前は死ぬまで1人、並び立つものなどなく、またお前を見つけてくれる者などいないのだ」

それを向けられただけで死を覚悟する者もいるだろう氷の視線。

しかし竜には効かぬ、愉快げに己の同類、すなわち上位の存在に  
対してからかうような声をあげ。

「……キミがそれを言うかい。竜でありながら人の営みを愛する歪  
な存在であるキミが。どこにも居場所などないキミが、私を独りと  
言うのか」

同類なのだ。互いにいる頂上が違うだけ。

魔の王を滅ぼしめた惑星に選ばれた特異点。

他の生物よりも強く尊く、世界の概念を固めるため、そうあれか  
しと創られた上位生物。

「かか、オレは違う。オレは見つけたのだ、オレは得たのだ。オレ  
は、見つけてもらえたのだ」

だが、違う、己と貴様は違うと竜はのたまう。

エルフに押さえつけられたヒトの友を蒼暗い目で見つめて。

ぎゅっと、豊満な胸のあたりに手をやって、アリスは遠山を見つめていた。己を世界に繋ぎ止めた、恐ろしくも、しかし愛しい生き物のことをじっと。

蒐集電

「最後の忠告だ、そこをどけ、オレの友を離せ」

「断る、そう言った筈だよ」

太陽と月。熱と冷たさ、金と銀。

よく似ていて、しかし決定的に違う両者は相入れぬ。

上位生物2人の威圧に、冒険者たちの本拠地が揺れる。今この場

にきちんと意識を保っているのはそれなりに腕の覚えある者のみ。

気が弱いもの、鍛錬が足りぬもの、弱者はみな、震えて動けなくなるか、気を失って倒れるか。

聡いものや、真に強きものは既にこの冒険者ギルドから離れていた。獣が己より強き獣に逆らわないのと同じように。

しかし、この男は弱くも、そして聡くも、真に強いものでもない。

只の、

「おい、こらこら。君ら俺無視して盛り上がるのやめてくんない？ ドラ子心配サンキュー」

頭のイカれた1人の人間。

「……今、キミは黙っててくれないかい？」

誰しも思うだろう。あの男は自分の状況が理解出来ていないのだと。

「ナルヒト、少し静かにしている。オレがこの残りカスに引導を渡してやる」

誰もが思っただろう。事の重大さ、塔級冒険者2人の争いの中心に在ることの重大さに気づくことすら出来ぬ馬鹿なのだ。

「……吠えるね、幼竜」

「轉るな、過去の遺物め」

口火が切られる、蒐集竜と射手、竜と英雄。御伽噺の中でしか争

う事の許されない2人が1人の強欲な男を巡って殺し合ー

「おい」

だが、どちらでもないのだ。男は状況が理解出来ないのでも、事の重大さがわかっていないのでもない。

ただ、静かに時を待ち、誰よりも潔く覚悟を決めていただけ。

「だから、今はー」

英雄が口数の多い男に冷たい声を向けた。

だが彼女は気付いていなかった。

決してこれは竜と英雄の争いではない。



強欲な男と、銀髪の風のケンカなのだ。

「ー俺を無視すんなって」

キリヤイバは既に、準備を終えている。そして遠山の覚悟も決まっていた。

完成だ。当たるも八卦、当たらぬも八卦、ならば。

「キリヤイバー」

死ぬも八卦生きるも八卦。

薄く狭く、しかし濃く強く。

キリヤイバは既に、遠山とウエンフィルバーナの周囲に満ちている。室内に風はなく、故にキリはその場に残る。

遠山がニイツと笑う。遠山鳴人の首あたりからキリと共に欠けた剣がニユツと飛び出て。

その笑いを目にしたウエンフィルバーナ、目を見開く。

「ッ?!?! フッ!?!」

天敵と出会った被食生物のごとき素早さ。

その場から一気に飛び退いた。息を大きく乱し、白磁の顔に冷や汗を垂れ流して。

毒虫を見るかのような目つきで、遠山を睨む。

「おっと、なんだよ、気付いたのか。ヒヒヒヒ、良い勘してるな」

毒虫が、嗤う。

ロープについた埃を払いつつ、その欠けたヤイバを己の体に収納しながら遠山がゆらりと立ち上がる。

唇に、ヒビヒビと嫌な歪んだ笑みを浮かべつつ。

あまりに簡単に自らの生命と敵の生命を奪う選択をした男が嗤う。

ギリギリだった。

あとコンマ1秒でもウエンフィルバーナの反応が遅ければ遠山鳴人はキリヤイバを発動していただろう。

「……………イカれてるのかい？」

遠山がやるうとしたことを理解したウエンフィルバーナがおぞましいものを見る目つきで遠山に問いかける。

「バカか。俺は組合の精神カウンセリングでいつも満点だったんだ。正常に決まってるだろ」

キリヤイバでの自滅攻撃。

遠山は命拾いした高揚を抑えきれない。呼吸を浅くすることなど色々工夫はしていたが発動すれば大ダメージは避けられなかっただろう。

「ナルヒト…… 貴様」

遠山の行動に気付いたらしいドラ子が責めるような声をあげた。

「睨むなよ、ドラ子。友達におんぶに抱っこは趣味じゃないだけだ。ま、結果的には生きてるから許せ」

あのケンカはそもそも遠山に売られたものだ。そしてウエンフィルバーナとやらのなんらかの地雷を押ししたのも遠山。

ドラ子がいくら強かろうと、頼りになろうと任せっきりなのは性

に合わない。

「……はあ、貴様になにを言っても無駄、か。むづ、友情、いや、友人関係とは難しいものだな」

へらへら笑う遠山を見て、ドラ子が根負けしてため息をつく。

「……嫌な顔で嗤うね。その笑い方をするやつを昔、見たことあるよ、ほんとに厄介で、大嫌いだった」

ぐっしより。

ウエンフィルバーナの顔には汗が。それを拭いながら英雄が遠山を評する。

「人の外見のこと言うのは反則だろ、クソエ…… いや、違う、のか？ キリヤイバへの反応も遅かった。お前、誰だ？」

あの時出会ったウエンフィルバーナ・ジルバソル・トウスクと目の前のウエンフィルバーナ。

同じだが、違う。今の反応で分かった。

コイツはキリヤイバを知らない。あまりにも対応がお粗末だ。

あの時出会ったやつは少なくとも、キリヤイバのことを知っていた。通用しなかったのだから。

「……………キミは妙だ。何かがおかしい。蒐集竜、彼を貰うよ、聞きたいことが山ほどある」

「かかかかか！！これは面白い、射手、それをオレが許すと思うか？」

「だーから俺抜きで盛り上がるなっつ」

三者三様。

英雄と竜のメンチの切り合い。その間に探索者が挟まる。

「すまんどラ子、巻き込んだ」

「ふん、気にするな。オレを殺した時のような冴えを期待しているぞ」

すつと、竜が前に歩む。探索者を庇うでもなくただ、隣に立つ。

「遠山とドラ子が並び立つ。」

白銀の風、弓矢に愛された英雄、魔王を討ち落とした元勇者パーティの前に立ち塞がる。

「……竜を、狩るのは久しぶりだよ、蒐集竜」

その2人を見る銀色の瞳。果たしてその白銀に浮かぶ情念は敵意か、それとも、羨望か。

己と同じ、選ばれし者ゆえに世界から隔絶され独りぼっちのはずの竜。

しかし、その同じ孤独のはずの竜には友がいて。

自分の隣には誰もいない。

「……………なんで」

果たしてその白銀に浮かぶ情念は敵意か、それとも――

「あ、わわ、あ、あああああなののののの、ほほほほほほは  
はんじつつつは、おひひひがらもよよよよく、ですなたなね」



「あ？」

互いの殺気が膨れた直後、裏返った男の声が酒場に広がる。

見れば脂汗をダラダラ流し小太りの上品な髭の中年男が直立不動で立っていた。

「……………やあ、領主殿。良い天気だね、だが感心しないな。キミは安全と危険を見分けることのできる人だと思っていたけど」

「領主、見ての通り取り込み中だ、控えよ、巻き込むぞ」

「ぴぎい！ ひ、ひ、し、し、しかしです、その、お二方が  
そう意気軒昂されると、周りのヒトがその、ですね」

竜と英雄に言葉を向けられ、中年男は顔を真っ青に、滝のような汗を流す。しかし、その言葉は彼女たちに向けられて。

「……あんだ、確か大使館にいた人か？」

「……………!!!」

ぶんぶんぶん、首が取れるほどの勢いで遠山の呟きに中年が反応する。そして懇願するように遠山にジエスチャーを送ってきた。

”お願い、ムリ、あの人たちどうにかして”

「あー、なるほど、そういうね」

おっさんの涙目に心を動かされたわけではないが、遠山はこの2

人を止めた方がいいことに気づく。

死屍累々。

いや死んではないんだらうがついさっきまでは活気に満ちていたはずの冒険者ギルド内は静まりかえっていた。

まともに意識のある人間がほとんどいない。

竜と英雄の威圧のぶつかりに当てられて半分以上が失神、残りの半分はかろうじて顔を色々な色にしながら耐えているといった様子だ。

「お恐れながら！ 偉大なりし帝国の護り竜、蒐集竜様、いと高き伝説、大悪を討ちし誇り高き勇者パーティが一角、ウエンフィルバ―ナ様に申し上げます！」

ガクガク震える中年の男の隣に寄りそうように脚の長い美女が駆け寄ってきた。

はつきりとした口調、伸びた姿勢、しかし力チ力チと歯の根が噛み合っておらず。

「……ハイデマリー君、キミもかい」

ウェンフィルバーナが冷たい銀の目をギルドマスターに向ける。

びくり、と身体を跳ねさせながらもギルドの責任者は己の責務を果たさんと言葉を紡ぐ。

「私の言、間違っていればこの身、如何様にも！ しかし、今領主様が申し上げた通りに！ お二方、伝説の存在のその意気に我ら凡人みな、呼吸もままならぬ始末！ そしてここは、冒険者ギルド内でございます！ どうか！ 塔級冒険者の取り定めを今一度思い出していただきたい」

才媛として帝国にその名を知られる彼女、しかし相手が悪い。竜と英雄、互いにお伽噺に語られるような存在だ。

それでも彼女は頭を下げる。目の前の2人、どちらかの気分1つで生命を終わらせられると理解しながらも。

「ほう、なるほど、なるほどなるほど。ギルドマスター、そなたやはり頭が回るな。ふうむ、たしかにオレは竜であると同時に塔級冒険者でもある、か」

「……」ギルド内での私闘の禁止” 塔級冒険者にのみ課せられた約定、そんなのもあったね。私闘の禁止が塔級だけに絞られている点が実に、我々冒険者らしいじゃあないかい」

ハイデマリーの言葉は、竜と英雄としての2人ではなくギルドの管轄にある冒険者としての2人への言葉。

塔級の名前に関する冒険者でもある竜と英雄が素直にその才媛の言葉に感心する。

「……………!」

「……………!!!」

ギルドマスターと領主。2人の物言わぬ圧力が遠山にふりかかる。

言葉はなくても、伝わる。

即ち、”マジリマジリマジリ！ これ以上はムリ！ お願  
いだからなんとかしてください、やくめでしょ”

2人の泣きそうな顔に遠山はたじろいだ。確かにこれ以上は気の  
毒だ。2人とも充分役目は果たしただろう。

遠山が冷静になる。

考えてみればここには金を稼ぐため冒険者として登録しに来たの  
だ。決して竜と共闘して英雄をぶち殺しにきたわけではない。

「あ、はい。……あー、ドラ子、その悪いんだが、ここは収めねえか？ よく、考えたら、俺が何か失礼なことを言ってしまったのかもしれないねえ、うん」

「貴様、正気か？ あの女は確実に貴様を殺そうとしてたぞ」

「ああ、でもそれは俺もだ。殺そうとしたことが罪なら同罪、喧嘩両成敗で、その、あそこの気絶しそうな2人の顔を立てるのも、竜らしくてかっこいい気がするけど」

ドラ子は遠山の茶色の目をじっと、見つめる。

なんとなく遠山はこの恐ろしい存在はしかし、自分の言葉に耳を傾けてくれるのではないかという予感があった。

「ふむ、ふむふむ、竜らしく、か。かか、ナルヒト、貴様なかなか口に回る、竜の舌でも持っているかのようだな」

OKみたいだ。ドラ子はうんうん頷きながら遠山に一步近づく。

「まあ、俺も今あれよ、ノリノリだから平気だけど、お前ら2人、正直こえーし。そのアンタ、ウェンフィルバーナさん、気に障ったんなら悪かった、もう2度とさっきのことは口に出さないし、余計なこともしないよ」

そして、残るは1人。こっちは厄介だ。

ドラ子と違って、友達でもなんでもないのだから。

「……それを私が信じるんでも？」

だよなー、さてどうするか。どうやって誤魔化すか。

遠山がそう考えた瞬間――



ピロン

「おっと、今かよ」

それが現れた。

遠山にしか見えない矢印が現れ、ウエンフィルバーナを指さす。

【”隠し技能”発動】

【スピーチチャレンジ開始】

見た事のないメッセージが流れ、遠山はひりつく空気の中で、舌を回す。

考える、どうすればコイツと戦わなくて済む？

会話の中にヒントがあったはずだ。

「信じてもらうしか、この場を流血なしで抜けられる方法ねえだろ？」

「……流血も辞さないと言えば？」

完全にドラ子の殺気に当てられてやる気満々になってしまっている。これだから血の気の多くてブレーキが壊れてる奴はダメだ。

常識がねえんだよ、ほんと。遠山が頭の中で愚痴りながらハツピ―かつクレバーな脳みそを回転させる。

コイツがこだわっていること、コイツが頻繁に口にしたワード。人を説得させるにはそれが必要だ。そいつにとってのキラーワード。えーと、そう、コイツは何かにずっとこだわっていた。

ドラ子はそのワードを口にするたびに、どんどん機嫌が悪くなっ  
てー

回転する、危機と死の気配の中で真価を発揮する遠山の頭脳が回る。

ぐるぐる廻る脳内、無意識と意識がその答えを掠めた。

【ウェンフィルバーナに最低一度以上、ーーを思い出させる】

メッセージが舞う。

遠山の舌が知らずに紡いだ言葉、それが漏れた。

「……………勇者」

「なんだって？」

反応した。

ウェンフィルバーナがその言葉に、“勇者”というワードに反応した。

「いや、アンタやドラ子がさっきから言ってる勇者、その人のこと俺全然知らねえけど、まあ”勇者”って呼ばれるくらいだ。すごい奴だったんだろうな」

これだ。糸口を掴んだ遠山の舌が廻り始める。

「……ああ、そうさ。そこの幼竜に貶されることなど許されないほどだね」

「なんだと、出洩らしが」

ドラ子が唸りながら前へ出ようとするとするのを遠山が抑える。

「どつどつ、ドラ子、すこーし待て…… ああ、分かるよ、勇者  
つてのは大抵すげえ奴だ。親父を殺されて奴隷にされて石にされて  
魔王を倒すためにひのきのぼうしか貰えなくても最後にはたどり着  
くすこい奴らだよ」

【技能”オタク”により特殊会話発生】

「……何が、言いたいんだい、黒髪くん」

ウェンフィルバーナが完全に遠山の話聞いていた。じとり、湧  
く汗。それを無視して遠山が言葉を繰る。

それは、架空の物語のある英雄の物語。遠山鳴人が一時期ハマリ  
まくっていたアメリカのファンタジーRPG。

「同時に、勇者ってやつはみんないい奴だ。俺の知る中で最高の勇  
者はある人物に、何故世界を救う必要があるのだって聞かれた時、  
こつ、答えたんだ」

ゲームのコントローラーを通じて、その英雄と遠山は1つの存在になっていた。架空の世界、架空の人物、フィクションはしかし確かな思い出として此処にある。

「この世界が好きだ、滅んで欲しくない」

その作りものの物語はしかし、確かに遠山鳴人の血肉となっていて生きている。

「いやー、痺れたぜ。あのセリフ。アイツらはそんなことを真顔で言う連中だ。アンタの勇者、世界を救うって奴だ、すごい奴で、そんで、とんでもなくいい奴なんだろうなあ」

「……ああ、彼女もいい奴だったよ」

食いついた。遠山は確信する。

「ここだ。」

「へえ。やっぱりそうか。じゃあ、その勇者がここにいたらどうするんだろな。てめえよりはるかに強く恐ろしい存在におびえながらも正しいことを成すために、自らの職務に従事するあそこの2人。勇者は、彼らをどう扱うんだ？」

遠山がちらりと2人を見る。なんの力なくとも保身と責務、そして命を天秤にかけこの場に声を上げることを選択した彼らを見る。

「……………ああ、なるほど。くくく、キミ、本当に悪だね」

ウェンフィルバーナが、遠山の言いたいことを理解したらしい。

冷たい空気、風が遠山の首を撫でた。比喻ではなく本当に。その皮膚、血管の位置を探るように。

「っ……………」

ゴクリ、唾を飲む。まるでその言葉、その舌、その想いに嘘がな  
いかを確認されているようだった。

永遠と感じる時間、ふっと、風が止み、ウエンフィルバーナがた  
め息をついた。

「…………ふう、ああ、その通りだ。彼女なら彼らを尊ぶ。何より勇を、  
献身を尊んでいた、何より自らを顧みないその姿を尊んでいた彼女  
なら………… 彼らの言葉に耳を傾けるだろう。ふふ、ああ、いいだ  
ろう。勇者の名前と彼女への正しい認識に敬意を表することにしよ  
うか」

ウエンフィルバーナが放っていた冷たい殺気が嘘のように晴れる。  
どこか遠くを見つめる瞳は優しく揺らぐ。



「……勇者、か」

小さく呟き喉を鳴らして彼女が笑った。

「蒐集竜、彼にきちんと首輪をつけておくことだね。ソレは、そうしなければならぬ種類の生き物だ。よく廻る舌と狩りと血に愛されている戦士、いや、なんだろう、もっとおぞましい何かだよ」

「ふん、そうしたいのは山々だがオレの友はそれを嫌がる。本で読んだのだ、友達の嫌がることはやめたほうが良い、とな、それとこやつは人間だよ、オレと貴様と違ってな」

「……ああ、もう手遅れか。すっかり絆されてまあ…… 領主殿、そしてハイデマリー君、騒がせたね。この詫びはいずれ正式に今日は気分が優れないから帰らせてもらうよ」

ウェンフィルバーナが表情を崩し、ヒラヒラと領主たちに手を振る。

「ほ！ は、はは！ ご自愛くださいいいいい！」

直角90°に腰を曲げ、領主が震える声で礼をする。小さくガッツポーズしてたのを遠山は見逃さなかった。

「……………貴女のご配慮に感謝を。我らの英雄」

上品に腰を曲げ、ギルドマスターもまた同じように弓を収めた英雄へ礼を。

髪の毛から汗が滴になり床に落ちていた。

「……………黒髪くん、名前は？」

ウェンフィルバーナが彼らから視線を切り、遠山を見つめる。

「……遠山鳴人」

短く答える。あの時のアイツは知っていたはずの名前だ。ということは一

「ふうん、トオヤマナルヒト…… 聞かない名前だね。ようこそ、冒険都市アガトラへ。キミは何しにここに来た？」

「……言いたくねえ」

「くく、そうか。実は私も聞きたくなかった、なんてね。……もう会わないことを祈るよ。嫌な風を纏う新入りさん」

そう言ってウェンフィルバーナが振り返る、かと思うと吹き付ける一陣の風。

遠山があまりの風にたたらをふみ、視線を切った瞬間、ウェンフィルバーナは消えていた。

風は、去った。人死もなく。

「ぶふ、ふー、あー、きつかった」

緊張の糸が切れる、その場に倒れるように遠山が座り込む。

ゆらゆら揺れるのはメッセージ。

【スピーチチャレンジ成功!!】

【ウエンフィルバーナの説得に成功したため、隠しクエストKnob  
your nameが続行します】

【報酬獲得”隠し技能”の強化】

「なんだよ、そりゃ」

「ふ、かか。やるではないか、ナルヒト。驚いたぞ、あの女を舌だけで退治してしまうとは」

ドラ子が笑いながら遠山に手を差し伸べる。

「お前っつー戦力あつてのことだよ。さすがドラゴン、仲間にする  
と心強い」

その手を取る、あまりにも簡単にヒョイっを持ち上げられたので  
少し怖かった、力強い。

「かかか、なんだなんだ愛い奴め、うむ、許す。もっと褒めるがい  
い。他者からの賞賛を素直に受け入れるのはこみゆにけーしよんの  
基本だと本にも書いてあつたのだ」

むふーと息を吐くドラゴンを見て遠山はほんやり思ひ。

割といい事言つ本読んでんな、と。

27話 スピーチ・スピーチ・チャレンジ（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さい！

頑張って書籍化したので面白ければ評価貰えたら嬉しいです。

## 28話 長い1日の始まり

「よい、楽にせよ、オレが許す」

大きなソファにこれでもかと身体を深く沈めた金髪美人が脚を組む。

長い脚だ、尊大な態度ですら絵画のような上品さがそこにはある。

「は、はは」

「蒐集竜さま、先程は我等が弱き者のために矛を納めていただき誠にありがとうございます」

おどおどと下座に座った2人、辺境伯とギルドマスターが目の中の美人、竜に対して頭を下げた。



ここはギルドの来賓室、本来この部屋の主はギルドマスターで竜の方は客であるはずなのに、まるで我が物顔だ。

「かか、よいよい、マリーよ、手間をかけさせたな。ふむ、オレの友が何やらよからぬ者に絡まれておつてな。貴様らには迷惑をかけた、許せ」

「……………ほへ？」

竜がぺこりと頭を下げる。ソファに腰掛けたまま、背もたれに身体を預けたままの最悪の態度であるが、頭を下げたのだ。

それは彼、辺境伯にしてこの街の領主、サパンにとってありえない光景で思わずといった様子で間抜けな声を出す。

「ちよ、領主様!!!」

「あ、わわわわ、いえ、いいえいえいえ！ 蒐集竜様からそんなお言葉、このサパン、とても受け取れきまれせぬ」

「かか、よい、楽にせよ。のう、ナルヒト、リザドニアン、貴様らも座らぬか。マリーがオレたちに気を使って一席設けた意味がないではないか」

竜はその態度を咎めず、部屋のすみっこに固まっている2人。あの意味騒動の原因である遠山鳴人とラザールに声をかけた。

「お、おー…… どうする、ラザール」

「……今の俺たちを選択肢があると思うのか？ あ、あー、ゴホン、蒐集竜殿、お気遣いありがとう」

恭しくラザールがドラ子に頭を下げる。

「かか、よいよい。ああ、リザドニアン、貴様とも一度話して見たかったのだ。やるではないか、まさか帝国の追跡を本当に一月も躲すとはな」

「御身の手を煩わせたのなら、謝罪を」

機嫌良さげにヒラヒラ手を振るドラ子、コロコロ変わる表情は感情を覚えた幼子にも似ていて。

「かかかか、良いさ、貴様を探していたのはナルヒトを探すため。褒めて遣わす、その隠遁の業、見事であった」

「勿体ないお言葉だ、偉大なる竜よ」

ラザールが敬意を込めた態度でドラ子の言葉に答える。

遠山はその様子を眺め、こっそりラザールに耳打ちを。

「ラザール、ラザール、ドラ子ってやっぱ偉いやつなのか？」

「……ナルヒト、今は頼むから勘弁してくれ。英雄、勇者パーティーやらアガトラの冒険者ギルドマスター、それに”辺境伯”に竜、めまいがしてきた……」

額に手をやりながらラザールがコソコソとした声量で遠山に返事

をする。

「そ、そそそそれですね、我らが竜よ。本日はど、どのような御用件でギルドへ？ 本日は地下番でもなければ、塔への探索予定もなかったはず……」

「かか、なんだ、領主よ、オレがギルドへ来たらダメなのか？」

揶揄うようにドラ子が笑う。遠山からすればいつものドラ子だが領主にとっては違うようだ。

「ピえ?! めめめめめめめ、めっそうもございませぬ!」

顔を真っ赤、その次は真っ青にして領主が鳴いた。脂汗が滝のよう  
うに流れる。

「ドラ子、あんま揶揄うなよ、その人顔色が信号機みたいに変わっ  
ちってる」

「シンゴーキ？　なんだ、それは？　まあいい、領主、すまぬ、からかいすぎたな」

遠山の言葉に首を傾げながらもドラ子が頷く。手を振りながら領主へ軽く謝意を述べた。

「……マリーくん、今、僕聞き間違いしたのかな？　竜の巫女殿が、すまぬってー　へぶら!？」

ぼけーっ、と表情をなくした領主が隣の女、ギルドマスターにぽかんと問いかけて。

「何蒸し返してんですか?!　バカですか!?!　バカなんですわね!?!　……コホン、竜の巫女様、大変失礼を。領主様は少し、おつかれのようでした」

「び、じ、じひゅ」

目にも止まらぬ速さ。

領主の首をキュッと締め上げてギルドマスターが咳払いをする。

小動物のような声をあげて領主はかくりと背もたれに崩れた。

「お。おう、そうか、よ、養生せいと目が覚めたら伝えてくれ。ナルヒト、いつまでそうしておる？ はよ、座らぬか。リザドニアン、貴様も許す。あ、オレの隣はナルヒトだけだ、その椅子にでも腰掛けよ」

ギルドマスターの行いはドラ子ですら少し慄かせる。すごい技だ、落とされた領主は穏やかに眠ってるようにすら見える。

「竜よ、寛大な言葉に感謝する。……ナルヒト、ほら」

「あ、お、おう。いいのか？」

ラザールだけ別の席に座ることに遠山が確認を取り、

「いいに決まってるだろ、早く。竜の機嫌がいつうちに頼む、これ以上超越者の気に当てられると俺は倒れるぞ」

ラザールはブンブン頭を縦に振りながら遠山を急かせる。目がギロリと余裕なさそうに見開かれていた。

「そりゃ困るな、悪い、ドラ子、失礼する」

「うむ！ うむ、良い、よいぞ！ ほら、ふかふかなのだ…… おつと、してマリー本題に移るぞ。今日ここにきたのはな、オレとナルヒト、ついでにそこなりザドニアンで徒党を組もうと思うのだ、その申請をしにきてやったぞ」

遠山はドラ子の隣に座る。甘い果物、柑橘の爽やかな匂いが一瞬、遠山の鼻をくすぐった。

「徒党ですね、はい承知—— 徒党……？ どなたと、どなたが？」

ドラ子の言葉に、ギルドマスターの動きが悪くなる。潤滑油の切れた機械のようだ。

「ここにいる3人だ。かか、パーティを組むのは初めてでな。マリー、どのようによければいいのだ？」

遠山とラザールの意思無視で、勝手にドラ子の中で決まってるら

しいパーティ結成。

しかし考えてみればドラ子の実力はよくわかっている。遠山はと  
りあえず話を見守ろうと口をつぐむ。

「竜の巫女様…… その、基本冒険者ギルドでのパーティ組成基  
準では、上下1つ差の範囲でしかパーティが組めないように出来て  
います……」

しかし、ギルドマスターが言いにくそうに頭を下げた。

「む？ どういうことだ？」

「そ、その、”塔級冒険者”つまり、貴女さまは帝国とギルド両方  
がヘレルの塔に挑戦すべき最強の冒険者であると認められておりま  
す。冒険者階級制度における頂点に合わす方です」

「ふむ、当然だな」

「ええ、はい。ですので、蒐集竜様とパーティが組めるのは一級冒  
険者以上でなければ不可能です。そこにいる方々と蒐集竜様はパー  
ティを組むことはギルド規則に反することに……」



「……………む？　む？　待て、マリーよ。ナルヒトの等級はいくつだ？」

頭の上にハテナマークをたくさん浮かべたドラ子が首を傾げる。

「……………ドラ子、俺らまだ登録もしてねえから等級とかないぞ」

どうやら根本的な勘違いがあるらしい。

ドラ子はこちらをもうすでに冒険者になっていると思っていたよ  
うだ。

「んんん??！　待て、待て待て待て、ナルヒト、そもそも貴様、  
冒険者ではなかったのか？　冒険奴隷だったのだろう？　それに貴  
様ことあるごとに冒険者がどうのここの言っておらなかったか？」

「いや多分それ探索者な、探索者」

冒険奴隷と冒険者にどのような関係があるかはわからないが遠山  
はうなっているドラ子に事実を伝える。

「む、むー、むむむむ、マリーよ、普通冒険者登録したものは何級から始まるのだ？ 一級からか？」

頭を傾げたドラ子が問いかける。

「い、いえ、貴女のような特別な例以外は皆、最低等級である4級からのスタートになります」

「よ、4級だと？ むー、むむむむ」

がーんと口を開けて、ドラ子が唸り出した。いつのまにか金色の鱗に包まれた尻尾がにゅっと飛び出して、ゆらゆらゆらゆら忙しなげなく揺れている。

「へえ、意外だな、ドラ子。お前、こつ言う規則とかは尊重するんだな」

遠山は素直に思ったことを口にする。

「ひっ、なんてことを」

ギルドマスターが遠山のあまりにも気軽な物言いに目を剥いていた。

「ナルヒト、貴様竜のことをわかっておらぬな」

一瞬、ドラ子から漏れる不穏な声、しかし今の遠山には、ドラ子を友達とした遠山にはその程度なんのことはない。

しれっとその怒気を受け流し、素直に想いを舌にのせ。

「ああ、だから教えてくれよ、お前の口から聞きたい」

### 【スピーチ成功】

「……………　　かか、仕方ないの。我等竜は”約束”を守る種族なのだ。ギルドの規則とは要は冒険者とギルドの間に定められた約束に他ならぬ。それ以外のことであればこのオレを縛るルールなぞ知らぬが、約束だけは別なのだ」

メッセージが流れて、ドラ子はどこか上機嫌げに話始める。

「へえ、約束ね。たしかにそれは大切だよな」

遠山の中で、ドラ子。蒐集竜、アリス・ドルル・フレアテイルに  
対する認識が深まる。

独特なルール、独特な感性。多少気安くはなったがやはりこいつ  
は違う生き物だ。

そこだけは忘れてはならないだろう。遠山は静かに分析を続ける。

「ああ、それこそが我らの誉れゆえにな。約束だけは必ず守るのだ」

たしかにあの時のドラ子はそうだった。

ラザールと遠山に仕掛けた最低最悪の二者択一。しかし、たしか  
にラザールに渡した帰還印は本物で、言葉通りに逃してくれていた。

「だがどうしたものか。マリー、4級から1級に上がるにどれくらいかかるモノなのだ？ 3日くらいか？」

遠山との会話を切り上げたドラ子がギルドマスターに問いかける。

「い、いえ、1級冒険者とはその、冒険者ギルドにおきても特例である塔級を除けば最強クラスの戦力です。功績はもちろん、貴族院に伝わるほどの実力やその他方面でのギルドへの寄与、または冒険都市からの許可などその道は険しいかと、その、一生を4級で終える冒険者の方が多いくらいです」

「なんと、そういうものか。ふーむ、塔級か1級しかおらんと思っていたな。どうしたものか。マリー、この男、トオヤマナルヒトはしかし、竜殺し、ぞ？ その功績を以って認定も無理か？」

あくまでドラ子はギルドのルールを守った上でのパーティ結成を望むようだ。

フェアネス精神とでもいうのか。嫌いじゃない、そういうの嫌いじゃないよと遠山がうんうん頷く。

「……あ、いえ、その前例がないわけではないのですがそれでも特例で3級からの認定になります。いきなり1級は難しく……」

ギルドマスターが一言一言に気をつけながら、しかしはつきり事実だけを伝えていく。

竜の威とはただそこにいるだけで有るもの、しかしそれに負けず己の責務をギルドマスター、ハイデマリーが負っていく。

内心で反射的に領主を落としてしまったことを悔いながらではあったが。

「むー、むー。ナルヒト、貴様、はよう1級にあがれ。オレは貴様と狩りに行きたいのだ」

口を尖らせてドラ子が不貞腐れたように背もたれに体を沈め、遠山に迫る。

どうやら今の所のパーティ結成を諦めたようだ。

聞き分けのいい子どもが、おもちゃを諦めてぶーたれているよう

な雰囲気思わず遠山の口が緩んだ。

「お、おう、なんだお前可愛いな、まあ級がどうのこうのいまいちわかんねえけどお約束のアレだろ。ランクとかその辺なんだろ？指定探索者と組めるのが上級探索者以上ってルールとほぼ同じようなもんだ」

ドラ子が、何言ってるんだコイツ、みたいな顔で遠山を見つめる。

アホみたいに整った顔、アーモンド型の瞳に、長い金色のまつ毛、深い蒼の瞳、美貌に一瞬固まるがなんとかそれに耐えて言葉を続ける。

「まあすぐに追いつくさ、ドラ子。どのみち俺らは金をたくさん稼ぐためにバリバリ冒険者で働かんといけんからな。えーと、ギルドマスターさん、やっぱりその等級が高い方が報酬の良い依頼を受けれるんだよな？」

「ええ、特に一級への指名依頼は、ボードに貼られている無指名依頼とは報酬がまるで違います。一回の依頼で莫大な富を得ることもあるでしょう。そのぶん難易度も比例しますが」

遠山の言葉にはスラスラ答えるギルドマスター、すんつとした顔には理知の光が宿る、本来の彼女の仕事モードはこちらなのだろう。

「まあそりゃそうだろ。あれ、でも考えたらドラ子、お前なんで俺が冒険者やるって知ってたんだ？ 館を出た時はまだギルドに行くなんて考えてなかったし、お前に行先伝えてもなかったよな？」

ふと遠山が気付く。遠山たちとパーティを組むためにここに来たというのなら、まず前提として遠山が金稼ぎの方法を冒険者に定めたことを知らなければならぬ筈だ。

もちろんそれを知ってるのは宿屋にいたメンバーだけ。まだドラ子には何も言っていないはずだったが。

「むづ……… 言いたくない」

ぶいっと、ドラ子が顔を背ける。いたずらがバレたことどものように知らないっといった感じに。



「は？ なんだそりゃ」

遠山が眉を顰めて、ドラ子の肩を掴んだ。びくりっと、身体を跳ねさせるドラ子。

その遠山の行いを見ていたラザールとギルドマスターが青い顔をしてなんかいきなり祈りの言葉を紡ぎ始める、歯やら天使やらモニヨモニヨ言い始めていた。

「おーい、こっち向けこっち」

竜への不敬を働く男は祈りを念じる彼らを見無視して、ドラ子の意外と細い肩をがしりと掴んで引き寄せる。

ドラ子が観念したようにくるりと振り向き、目を逸らしながら呟いた。

「……………本に書いてあったのだ。適度な距離感が友情を育むのだ。と。なんか、オレが貴様のことをコソコソ調べさせていたよつで言いたくないのだ」

少し頬を染め、いじいじと長い金髪を自分で触り続けるドラ子。

遠山はしばらくその言葉をの意味することを考えて。

「……つまり、なんか尾行でもしてたわけか？」

「……………」

ドラ子は何も言わない。いじいじ、いじいじ。髪をときながら天井や床をキョロキョロ見回す。

「いや、もうそれ答えじゃん」

「だって、貴様が手紙書かなかったから。……オレに黙って冒険都市を出たのかと」

ぼそりとして、ドラ子が遠山をじっと見つめてつぶやく。

見るものがみれば卒倒しかねないその光景。竜がまるで年頃の少女のように振る舞うその姿。自分の興味ある異性がなにをしているのか気になって仕方ない、そんな当たり前の少女――

「いやだから住所ねえから、俺がお前と別れてまだ1日だぞ」

だがこの男、遠山の頭はハッピーだ。頭の回転は速いがそういう人間味溢れた解釈はできない、ずばりと事実だけを少女に突きつける。

もちろん、現代の世界で、遠山はモテなかった。それはもう悲しくなるほどに。

「む、ならもうあれだ！俺が貴様に家を買ってそこに貴様が住めば――いや、いやいや、あれだったな。こういうのを貴様は嫌うのだったな。むむむむむ、友情とは難しのう」

何やらダメンスウオーカーみたいなことを言い出したドラ子はしかし、すんでのところで言葉を濁した。どうやらきちんと大使館で遠山のスイッチがどこで入るかを学習しているようだ。

「わかってくれて何よりだ。まあ早めにお前と組めるように努力するからよ。それに拠点が出来たら絶対教えるから」

遠山はこちらを尊重してくれようとしているドラ子の態度に表情を柔らかくする。

いい奴だな、コイツ。ドラ子をあやすようにきちんと言葉を伝えて。

「絶対だぞ！ 絶対絶対教えるのだぞ…… うん？ すん、すんすんすんすん」

いきなり。

遠山の首元をドラ子が握り、引き寄せる、かと思えば遠山の胸に顔を埋めて、すんすんすん嗅ぎ始めた。

「うわ！？ お、おい、なに？ え？ まさか嗅いでる？ うそ、俺やっぱ臭っ？」

ドラ子が自分の胸に顔を埋めたことよりも、自分が臭いかもしれ

ないことの方が気になる遠山。

遠山は部屋が片付いていないのはまあまあ平気だが、体臭があったり不潔なのは無理なタイプの人間だった。洗濯物は畳まないけど、洗剤はめちやくちや使うし、トイレはかなり掃除するタイプのやつだ。

「臭う……、濃い臭いだ」

遠山の胸からすつと、顔を離れたドラ子。ふらりと立ち上がり、己の鼻を撫でる。

その表情はさきほどまでの人間味溢れた少女の顔ではない。暗い瞳、表情のない顔。

この世のことわりから外れた上位生物。世の全て、己の欲望の対象を手元におくことを至上とする竜。

蒐集竜の顔つきに、ドラ子が変わる。

「うげ、マジかよ、ここにくる前にも水浴びて軽く昨日洗濯もしたんだが…… やっぱ臭つか。こりゃ早めに風呂と洗剤を確保しねえ

と」

遠山はしかしそれどころではない。ラザールやギルドマスターが無意識に傅き始める竜の威よりも、自分が臭うかもしれないという事実の方がよほど遠山の心を乱す。

急がなければ、浴槽につかれる、毎日風呂に入れる生活環境を手に入れなければならない。

「違う、貴様の匂いではないのだ。これは、天使の臭い……」

ボソリ、遠山の空気読めていない言葉にドラ子、アリス・ドラル・フレアテイルが小さく答える。

その声には力がある、その声には感情が宿る。

竜の怒りが静かに込められた声――

「ひ」

「ぐ、む」

息苦しさにギルドマスターとラザールがうめいた。それが普通の反応だ。

「あ？ お、おい、ドラ子、どした？　なんかプレッシャーでみんな気分悪そうなんだが」

バカが1人、ようやくドラ子の様子に気付いた。ラザールやギルドマスターが恨めしそうな目で遠山を睨んでいて。

「ナルヒト」

「あ、はい」

「貴様、天使、いや、教会の者と会わなんだか？　なんだ、この濃い、ねばつく奴らの臭いは」

「あー、教会、教会。ああ、プリジ・スクロールの奴か」

教会、その言葉は簡単にアレと繋がる。

黒い小柄なヤバ強いだろっシスター。聖女とやら。

「……………いま、なんと？」

「あー、まあなんだ、その、色々あつてな。教会の聖女とやらに助けてもらう代わりに、そのプリジ・スクロールとやらにサインしたんだ。血判をこう、ね。……………なんか不味った？」

リダの命を救う代わりに彼女と交わした契約書、血判を押した事実をぼそり。

ドラ子の周囲の空気が冷えて、かと思えば熱くなる。

世界が竜の怒りに慄いてるかのように、部屋の温度が低くなり、高くなる。先程のウェンフィルバーナとの一悶着の時ですら起こらなかった現象。

スヤスヤ眠る領主、顔を真っ青にして首を垂れるラザールとギルドマスター。またしても何も分かっていない遠山鳴人27歳独身。



「……いや、良い。貴様はいいのだ。貴様がなにをしようとか俺はその全てを肯定しよう。貴様が自由を尊ぶのなら俺も貴様の自由を尊ぼう。だが、なるほど、なるほどなるほど。これが奴らのやりかた、か」

「え、ドラ子、ドラコさん？ ああ、なんだがお顔がとてもこわいのですが」

遠山はしかし、その表情。あまりに人間味のない無表情のドラ子にそーっと声をかける。

「かか、かかかかか。かか禍禍禍禍禍禍禍。なるほどなあ、オレの友と知ってるはずだ、奴らはあの場にいたのだから。ナルヒト、プリジ・スクロールの契約内容は？」

笑い方がいつもと違う。

静かな問いかけ、遠山は素直に答える。

「……あるガキを助ける代わりにこの冬までに白金貨50枚、だつたな」

「そうか、そうかそうか。貴様はそれを自力で稼ぐのか」

竜の問い。ここにきてようやく遠山は背筋が冷え始める。

ドラ子が明確に怒っているのがわかる。何気なくかけられた言葉、まるで答え方を間違えれば殺されてしまうのかと思う錯覚。

力有るものとはそういう存在だ。

しかし、遠山は事実だけを、己の美学と生き方に準じて答える。

「当たり前だろ。お前と一緒にだよ、ドラ子。約束や契約は放り出さねえ。ロクなことになんねえからな」

欲望のままに生きることと、ルールを守めることは矛盾しない。遠山の中でそれは全く相反せずに有る決まり事だ。

「……かか、それでいい。それでいいぞ、人間よ。見事、天使の、

教会の試練を打ち破ってみよ。……しかしやるではないか、天使のおもちやどもめ。久しぶりに、コケにされたものだ」

遠山の答えに、僅かドラ子の怒気が和らぐ。

ぱちりと、長い指を鳴らした。

「フアラン」

短く呟かれた言葉は名前。竜に仕える特異生物。

「は、すでに使い魔を教会へ送っております」

その言葉に、すうつと空間を割って現れるメイドさん。あの無表情のメイドさんだ。

え、いたの？

遠山が表情でつつこむが誰も答えてくれない。レーザーやギルドマスターと一緒に突っ込もうよ、メイドが急に現れたよ、と視線で

訴えても完全に無視された。

「うむ、良い。主教に伝えよ。全て説明しろ、とな」

「はい、そのように。……今、使い魔を通して伝えました」

「反応は？」

「泡を吹きながら金貨を隠し込んでいる部屋で奇妙な踊りを始めました。挑発、でしょうか？」

「……面白いではないか、銭ゲバめ。聖女やら第一騎士やらで勘違いしているようだな、竜という存在を再度教えてやらねば、な」

冷たい嗤い。遠山はその顔を見て再確信する。

やはり、コイツは別の生き物だと。どれだけ気安くてもそれだけは忘れないでおこうと心に決めた。

「ナルヒト、その首輪、見事外してみせよ、出来んとは言わさんぞ」

「あー？ なんだそりゃ。払うに決まってるだろ。借りたモンは必ず返すぞ」

だがそれと怯えて恐るのは別だ。あくまで遠山はこちらを心配してくれる友人へ言葉を返す。

「ふん、その言葉覚えておく。……急用が出来た、もう少し貴様と共にいたかったがオレはもうゆく。ナルヒト、落ち着いたらでかまわん、また大使館へ遊びにこい」

「おお、ありがとう。顔出しに行くさ。拠点出来たらまた教える」

「うむ、それと早う等級を上げるのだ。竜の狩りに参列することを許してやる」

「ああ、そりゃたのしみだ」

「ふん、ではな。……絶対絶対遊びに来いよ、来なかったらひどいぞ」

「わかってるって、今日は助かった、ありがとう、ドラ子」

遠山がすっと、差し出す。

「……これはなんだ？」

ドラ子がじっと、差し出されたそれと遠山の顔を交互に見つめた。

「え、握手だけど。ダメだった？」

「……ふふ、バカめ、ダメなわけなかるうが」

ふっと、顔を緩めたドラ子、差し出された遠山の手をぎゅっと握

る。

「わ、ちからつよ」

「貴様が弱いのだ、バカめ……  
では行ってくる、良き冒険を、  
トオヤマナルヒト」

「おう、サンキュー。良い探索を、ドラ子」

ドラ子に言葉を返す遠山。その言葉はいつも仲間に向けていた定型文。探索者の中でいつのまにか馴染みの言葉になっていた再会を願う言葉。

「ふん。マリー、では其奴らを頼んだぞ。領主が目を覚ましたなら  
よろしく伝えておいてくれ」

「は、承知致しました」

ギルドマスターが頭を下げる。顔を悪くして、竜の威に伏せていても彼女はこの街の、冒険都市の冒険者ギルドの長たりえる人物であった。

ふ、と笑うドラ子、そのそばには無表情なメイドさん。

彼女達が振り向き、メイドさんが革靴をコツリ鳴らす。

瞬間、嘘のようにドラ子とメイドさんの輪郭が景色に溶けて消えていく。

数秒後にはその気配すらも消えて。

竜たちがギルドを去っていった。

「えー、かつけー」



「……………嵐は去ったか」

遠山が呑気に、ラザールが重いため息を。

コホン、綺麗な咳払い。竜にこの場を託されたギルドマスター、ハイデマリーが息を整えて。

「……………それでは、その、改めまして、お2人とも、ようこそ、冒険者ギルドへ」

ぎこちなく、微笑んだ。

長い1日はまだ続く。

28話 長い1日の始まり(後書き)

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを！ご覧くだ  
さい！

29話 たのしい冒険者登録、キャラ・ロール！

「色々ございましたが、当ギルドのルールは変わらず。」くるもの拒まず去るものは赦されない” この原則に則り、貴方たちを歓迎いたします」

コホン、スーツに似た制服姿の美女がソファに浅く腰掛け咳払いをした。

「……ああ、感謝する、ようやく本来の目的を果たせそうだ」

ラザールが眉間に手をやりながら美女の声に頷く。

「ええ、ほんと、お気持ちはわかります…… 」「ご苦労されるでしょうね」

ギルドマスターとラザールが互いにうんうんと頷き合う。2人と  
もえらく憔悴した様子で。

「ら、ラザール、なんかえらく疲れてるけど大丈夫か？」

遠山がラザールへ声をかける、本人はあくまで割と呑気にしていた。

「ふ…… 大丈夫さ。朝から超越者同士のいざこざに巻き込まれたり、竜と同じ部屋に入れられたり、竜と教会の戦争の始まりを目撃したような気がしたが全てはノープロブレムだよ、ナルヒト」

「……女主教さまの無事を祈るしかありません、強く、生きて欲しいものですね」

「あー、やっぱりそういう話になんのか。なんでまたそんなことに」

英雄と竜の小競り合いに巻き込まれた男はしかし、いまいちことの重大さを理解していない。

やべえ奴同士の喧嘩に巻き込まれた、怖かったーくらいの感覚だ。

しかし、この世界の常識をきちんと理解しているギルドマスターとラザールはそうではない。

「……………失礼ながら、彼はいつもこんな感じなのですか？」

じとーっと、風呂場にいるナメクジを見つめる目つきでギルドマスターが遠山を見つめる。

「ああ……………出会った時からこんな感じさ」

どこか遠い目をしたラザールが力なく頷いた。

「それは……………ご苦労、ご心中、お察し致します……………」

「心遣い感謝する、ギルドマスター殿」

互いに静かに何かを分かち合いながら頷くラザールとギルドマスター。

「え、なに、ちょいちょい、その手のかかる子供を持つ保護者ムーブはなんだね、ラザールくん」

遠山が首を傾げて問いかける、しかし――

「それでギルドマスター殿、竜の言葉通り俺たちは冒険者になりました。色々あったが登録自体は問題ないだろうか？」

するりとラザールは遠山の絡みを見無視し、話を続けた。

「ガン無視?!　なんで、ラザール!　あれ、なに、少し怒ってる?　おーい」

「ええ、もちろんです。冒険者ギルドにおいては明確な帝国での犯罪歴、それもよほど凶悪なものでない限りは基本的に過去を問うこともありません。ええ、帝国においての犯罪歴がないのであれば」

喚く遠山をおいといて、ギルドマスターが眼鏡を吹きつつラザールの言葉に返事をする。

「ふ、なるほど、流石は冒険都市アガトラのギルドマスター、伊達ではないという訳だ」

ギルドマスターの射抜くような鋭い目つき、しかしラザールは静かに笑いそれをいなす。

「それほどでもありません、常に”王国”の情勢は嫌でも冒険都市や帝都には伝わるものです。……貴方がここにいる時点で”王国”の諜報もかなり弱体化していることがわかりますね」

「帝国ほどあの国は度量が深くなくてね。王族は古い血に拘り、貴族は利権にしか価値を見出さない。人心は荒れ、国は乱れている。帝国とは大違いだ」

ラザールの声が僅かに低くなった。

「我々の国には竜を始め、手本となるべき存在が多く存在しますゆえに。しかし、王国のギルドはまだまだ意気軒昂と聞きますが」

「意気軒昂、ね。ああ、逆にあの国はもう”樹海”の深層到達に全てを賭けている状態なのだろう。冒険者ギルドも棄民の体のいい隠れ蓑として使われるほどにな」

自嘲気味のその笑いは、一応ラザール自身の祖国…… たまたま  
生まれた集落があった国に対する小さな郷愁か。

「……なるほど、そういうことでしたか。繰り返しますが我々は来  
るもの拒まず。貴方が帝国において”影の牙”とならない限り、我  
々は貴方を歓迎します。鱗の民、竜に近い、”齒”の子よ」

ギルドマスターはラザールの言葉から”王国”の現状を察したら  
しい。息を吐き、奇妙な言葉で返事を締める。

「ほう、ギルドマスター殿は博学であられるな。その呼ばれ方をす  
るのは久しぶりだ。くく」

ラザールが少し愉快げに笑った。

「……帝国、いえ、人類国家に蔓延するあなた方リザドニアンへの  
偏見、蔑視は別としてあなたという個人に思うところはありませぬ。  
ギルドマスターとして貴方がその能力をギルドへ寄与してくださる  
ことを祈っております」



ラザールとギルドマスター、大人のテンポとやりとりを理解している2人が静かに会話を繰り返す。

「……ほへー」

ぼけーっと、口を開けてるのは遠山鳴人。先程の一件で見せた剣呑な雰囲気はどこへやら。

完全にスイッチの切れている男は知性の感じられない顔でそのやりとりを見つめていた。

「なんだ。ナルヒト」

ラザールがあまりにもな顔をしている遠山に声をかける。

「いや、ラザールがこんな喋るの珍しいって思ってな」

遠山が呑気に返事をする。今の遠山脳みその浅い部分、1センチ

くらいの位置しか使っていない顔をしていた。

「ふ、俺もたまには知性的な人間と話したくなる時があるのさ」

「あー？ たまには？ それはおかしいぜ、お前俺と毎日会話してんじゃない」

何言っただこいつ、知性の権化とも言える存在がここにいるのに。

ラザールの言葉に心底不思議そうな顔で、遠山が首を傾げた。

「……………すまない、ギルドマスター殿、彼は、その、悪い奴ではないんだ」

ラザールが何か、とても口に合わない食べ物を食べてしまったよ  
うな顔をした後、何故か対面のギルドマスターに頭を下げた。

「え、ええ、ご心中、ご心労ほんとお察し致します」

ギルドマスターも同じく、ラザールに頭を下げる。その顔は優しく。

しかし、2人とも決して遠山とは目を合わそうとしていない。

「あれね、なんでだ、ラザールもお姉さんさんも俺と目合わせてく  
んないぞ？」

「コホン、では本題へ移りましょう。冒険者ギルド、ひいては冒険  
者について説明しても？」

「ああ、よろしく頼む」

「え、無視？ ……はい、よろしくお願ひします」

「ではまず、冒険者とはどんな存在なのか。リザドニアンのあなた、ラザール氏は既にご存知とは思いますが、冒険者とは冒険者ギルドにおいて公式の認可を受けた労働従事者を指します。我々というギルドを通して冒険者は日夜、帝国の基幹産業として活動して頂いております」

「自分で冒険者と名乗るだけではダメなわけだな」

「はい、正直、その仕事柄冒険者という職業を選ぶものは血の気の多い人物や暴力的な性質を待つ人物が多いです。統制なき力自慢は山賊と変わりありません。奴らのような獣と冒険者の違いは誇りとルールを理解出来るか否か、逆に言えばこれくらいしかあの犯罪者たちと冒険者を明確に分ける区別はございません」

「ほう、中々に辛口だな、ギルドマスター殿」

「冒険者を貶すつもりはありません。大戦以前、及び大戦期に存在した”狩人”のシステムを受け継ぎ、国家の運営に寄与する冒険者は帝国の重要な礎です。しかし、同時に危険な暴力装置であるという自覚も必要だと私は考えております」

「ああ、同感だ。冒険奴隷などの仕組みから何から、連中はなかなかに残忍なやつも多いからな」

「ご理解いただけで何よりです。我々ギルドは冒険者たちの活動を支援すると同時に彼らを統制する役目、社会に対する防波堤の役割も受け持っております」

「まあ、つまるところ、アウトロー。公認された荒くれ者、かいつまんで言えばそれが冒険者です」

「公認された荒くれ者、か。くく、違くない」

「では次に主な冒険者の仕事と報酬体系について。基本的に4級から2級までの冒険者は自由業です。一部の例外を除きギルドからの拘束命令などはありません。日々、ギルドに舞い込んでくる依頼をご自分でお選びになって受ける形になります」

「ふむ、その辺は王国と一緒に。失礼だが、依頼の種類はどんなものがある？」

「はい、基本的にはありとあらゆるものが。というのが適切な表現でしょうか？ 4級向けの清掃から始まる委託仕事から一級向けの討伐依頼、下水道の清掃や、都市周辺の脅威の排除、多岐に渡っております」

「なるほど、迷子の搜索からモンスターの討伐まで、国の何でも屋というのは王国も帝国も同じか」

「ええ、動かないゴミから動いて喋るゴミ、失礼、帝国から手配されている山賊団や盗賊団の清掃もまた冒険者ギルドに舞い込んでくる仕事の一つです。ただ、基本的に討伐依頼は3級冒険者からが受けることが可能となっておりますのであしからず」

動かないゴミ、綺麗な笑顔で辛辣な言葉を紡ぐギルドマスター、山賊とやらの苦労させられているのだろうか？

遠山がふと、言葉をあげた。

「ん？ それじゃ4級の時はほとんど鉄火場、命のやり取りは無しってことなんか？」

討伐依頼、要は命を奪う仕事は3級から。この言葉に遠山は引っかかっていた。

「いえ、決してそういうわけではありません。ギルドにおいては都市周辺、特に壁の外に広がる”平原地帯”などの狩場におけるモンスターの狩猟を推奨しております。冒険者の自己責任で依頼にないモンスターに挑むことは特に禁じられておりませんので」

「ふーん、なるほど、なるほど。思ったより厳しい組織だな。命の価値が低いわけだ」

ギルドマスターの言葉。

自己責任、禁じていない。つまり依頼という形でなければモンスターに挑んで死のうがどうなるうが知らないというわけだ。

己の力の見極めも出来ない頭も力も弱いものはいらないうことなのだろう。

逆に力がなくとも少し頭を働かせることができれば、安全な依頼で経験を積むことが出来る。

自然に篩がかけられていくシステム。現代のように人権という仕組みが過剰なほどに守られている社会基盤ではおおよそ為し得ないだろう冷たい合理性に遠山は気付いた。

「……貴方はやはり、只の変人ではないようですね。竜が気にかける理由が今、少しわかりました」

そのシステムに遠山が気付いたことを察したらしいギルドマスターが少し目を愉快げに歪めた。

「え、褒められてる？ 貶されてる？」



「こほん、かいつまんで話せば冒険者の仕事には大きく分けて2種類の仕事の方法があるという訳です。1つは今説明した、”依頼”を受けてそれを達成し報酬金を得るやり方。そしてもう1つは”狩猟”。依頼を受けずにギルドの管理している土地、もしくは未開の地でモンスターを狩り、その素材をギルドへ売却し報酬を得るやり方」

遠山の問いかけを咳払いでスルーしつつ、ギルドマスターが淡々と説明を続ける。

「主に”依頼”と”狩猟”、この2つが冒険者の仕事と思って頂ければ結構です」

「ふうん、自由探索みたいなもんか。狩猟ってのは無許可で狩り放題になるんですか？」

現代ダンジョンの運営システムにも似たような仕組みが存在していたことから遠山の理解は早い。疑問を端的に問いかけていく。

「いえ、モンスターといえどやはり生態系の一部を形成する大事な

存在です。冒険者ギルドと帝国はなるべくそのバランスを取ることとを重視しています。厳しい取り締まりがあるわけではありませんが、狩猟の場合でも窓口での申請が必要です」

「なるほど、行政がしっかりしてる。……ちなみに狩猟で狩ったモンスターの卸先はー」

遠山の問いかけ。

ギルドマスターの眼鏡の奥の瞳が少し揺れた。

「冒険者が狩ったモンスターは全て、ギルドの預かりとなります。……基本的にはギルドを通して商人ギルドや各地の商人に卸されるのが通例です」

「通例…… 基本的……ですか」

僅かな言葉の澁み、それを遠山は見過ごさない。威圧的ではないにしろ更なる説明を態度で求める。

「はあ…… なかなかにめざとい方ですね。ええ、あまりギルドとしては好ましくないのですが、例外として商人ギルドからの公認を得ている商人に対してのみ冒険者から直接モンスター素材の交渉を許可しています。ただ、やはりあちらは交渉ごとにかけては海千山千の達人たち、値切りなどにあうのが多いためおすすめは出来ません」

「いやいや、なるほど、ご忠告痛み入ります。ほんと予想よりすげえシステムがしっかりしてる」

遠山は内心ほくそ笑む。

たしかに手間を考えればギルドへ卸すのが一番早いのだが、商人との直接交渉とはつまり個人間でのコネ作りが可能という訳だ。

あくまで今のところ遠山たちの目標は生活資金の確保だが、最終的な目的の為には商人たちとのコネも早いうちに作るに越したことはないだろう。

パターンとこれからの行動のプランが次々組み立っていく、生活の工面を考えること、あまり遠山はそういうの嫌いではなかった。

「……出来ればギルドを通じてモンスター素材をおろして頂ければ助かります。彼らの素材は生活の基礎はもちろん、食料、嗜好品、贅沢品など多岐に渡り、帝国という国を為す基幹産業と言っても過言ではありません。その素材の均一化も我々の職務ですので」

「ええ、もちろんもちろん。ギルドに逆らうことはしませんとも。お世話になるぶん義理は果たしますよ」

要は、やりすぎるなという意味だろう。

モンスター素材とやらの市場価格の操作もギルドの仕事のうちの一つなのだ。遠山は会話から予想する。

「ええ、それに4級冒険者の1番多い死因が狩猟です。一攫千金を狙い、自分の手に負えないモンスターを狙って全滅、遺体も残らないというのが常ですわい。いますので」

「ああ、たしかに、どこも考えることは同じか」

現代ダンジョンでも同じだ。

探索者制度黎明期、と言っても初年度の話だが同じように探索者が大金を得るために実力以上の怪物種の討伐を狙う時期があった。

怪物種 87号 ソウゲンオオジグモ。

馬鹿でかい二階建ての家くらいの大きさの地面に潜む地クモだ。

そいつの蜘蛛糸が新開発の衝撃吸収繊維の材料になることから一気に市場取引価格が高騰。確か300センチの蜘蛛糸で先進国で家が立つレベルの金額だったはず。

まあ死ぬわ、死ぬわ。

酔いで恐怖心を無くした探索者がたくさんソウゲンオオジグモのオヤツになったのをよく覚えている。

結局、それを受けて探索者組合が怪物種に対しての接触禁止制度を取り入れたことによりブームは去った筈だ。

「あん時は無茶したなあ……」

もちろん例に漏れず遠山も欲に目が眩んだバカの1人。大多数の欲に目が眩んだバカと違う点は1つ、遠山はオヤツにならず生き残った、ただそれだけだ。

ただ、1匹をタイムンでぶち殺したまでは良かったが結局2匹3匹と血の匂いに釣られて地面から這い出てきた為、素材を諦めて逃走するという間抜けな結末には終わっていたが。

「ナルヒト？」

「お、おお、すまんすまん、ちょっと思い出に浸ってた」

「……です。で充分な実力がつくまでは基本的には”依頼”を受けてコツコツやるのが大成への近道かと存じます。依頼もまた冒険者等級と同じようにランクづけされており、自分の依頼と同等か、ひとつ上の等級までしか受けることが出来ない、つまりそれぞれよ身の丈にあったものを受けれるようにできておりますので」

「4級なら3級の依頼までは受けれるということか。なるほど、王国のギルドと違いきちんと整備されているな。帝国の国力の高さの秘訣がわかるよ」

「光栄です、影の牙、いえ、ラザール氏」

「ふ、中々に人が悪いな、ギルドマスター殿」

ふふ、と2人が静かに微笑み合う。

どことなくいい雰囲気の中、遠山だけがそのノリからあぶれており

「……ラザール、お前もしかして結構モテる？」

「さあ、考えたことも無かったな」

「モテる奴のセリフ!!」

サラリといいのけるラザールに遠山が目を剥いた。

遠山はモテない、金も割とあつて、性格も自己認識では善人のはずなのに恐ろしいほどにモテなかった。

「コホン、では以上が冒険者に関する大体の説明です。お二人とも冒険者登録ということでもよろしいですね？」

ギルドマスターが場の空気を締め直す、

「ああ、宜しく頼む」

「お願いします!」



「では手続きに入りましょう。ウーノ、お願いします」

「はい、失礼します、ギルドマスター」

音もなく、部屋のドアが開いた。ギルドマスターとよく似た簡素な白シャツに黒いサスペンダー付きのスラックスの制服姿。

ボーイッシュな短髪美女がバインダーを遠山達の目の前に広げる。

「……これは？ 書類？」

遠山がそれを眺めて、つぶやく。踊る字の数々、名前を書くための空欄から何かの契約書だと予想する。

「はい、冒険者契約者、ああ、先程の竜の逆鱗に触れたブリジ・スクロールのような真の意味での強制力はございませんのでご安心を。内容をよく読み、納得いただければサインをお願いします。それが終わればお2人は晴れて冒険者、です」

「これは、分厚い契約書だな。全部読む奴はいるのかい？」

ラザールがバインダーを一枚一枚めくりながら目を細めた。

「いえ、残念ながら全てに目を通される方はいらっしやいません。しかし、冒険者とは一生の仕事です。一度冒険者になった者は社会に対して責任を負う存在となります。契約事項がそれなりの量になって然るものかと」

首をふりつつ、ギルドマスターが言葉を連ねる。じつと理知的な瞳が遠山とラザールを値踏みするように見つめ続けている。

「ふむ、なるほど、2級からは冒険者ギルドの管理している不動産を借りることが出来るのか。それに1ヶ月に金貨1枚の定期給金、各種ギルドからの幫助…… 驚いたな、流石は帝国といったところか」

ラザールが書類を静かに机に戻し息を吐いた。

「……随分読まれるのがお早いのですね」

静かに、しかし僅かに目を見開いたギルドマスターがラザールへつぶやく。

「まあ、前の仕事柄、ね。ナルヒト、俺の方は特に契約に関しては異論はない。内容としては冒険者としての恩恵を本格的に受けれるのは2級になってからということだな。4級、3級は日雇い労働者と同じ扱いだ」

「ええ、ですのでギルドとしても2級冒険者、つまり冒険者として最低限の働きが出来る存在が増えることを願い、そのような制度を取らせて貰っています」

ラザールが遠山に書類の内容をかいつまんで伝える、遠山の意見を待ち、そのまま黙っていると

「……………よめねえ」

小さく、しかし唸るような声を遠山があげた。食い入りながら書類の文に目玉をギョロギョロ動かす遠山、しかし何が書いてあるか

は1文字たりともわからなかった。

「なに？」

「あら、意外ですね」

「うそだろ、なんだよ、この筆記体を更に異次元にした文字は」

ロシア人探索者が書く筆記体のメモ帳よりも何が書いてあるかわからなかった。少なくとも遠山の知る言語体系、そのどれとも似ていない。

強いて言うなら、完全に筆記体だ、もはや文字というより絵にすら見えてしまっていたが。

「代表的な統一言語だ。ナルヒト、字が読めないのか？」

「……んー、そうみたいだな。そういやバベルの大穴の共通語現象に慣れてたから忘れてたけど、俺の言葉ってラザールにどう聞こえてんだ？」

「普通に”統一言語”だ」

「ふーん、統一言語、ねえ」

遠山はその言葉に違和感を覚えた。

まだ本格的にこの世界のことを調べたわけではないが、話の節々に出てくる”王国”と”帝国”、ドラ子の大使館で聞いた海洋貿易の情報。

少なくとも、異なる大陸に2つの国が存在している、なのに、言語は1つ。王国で活動していたらしいラザールが字を扱えるということとは統一言語とやらはその名前の通りの存在なのだろう。

しかも獣人やトカゲ人間、アメリカもびっくりな多種多様な人の存在する中で、”統一言語”ときたものだ。

きな臭い、そして何か不安になる、遠山が思考の沼に沈みはじめて――

「……………失礼ながら、もしよろしければ代読や代筆も請け負います  
が」

「んー、いや、ラザールの判断を信じる。予想より時間をかけてるし、そろそろ働きに出たいしな、えーと、名前どこです？」

「え、ええ、そこに記入していただければ……………」

「いいのか？ ナルヒト、お前でも時が読めないといいうことは書くことも出来ないんじゃない？」

字が読めない男が書けるわけもない。周りの反応は当たり前なのだ。

確かに遠山はこの世界の字を書くことは出来ない、だが書き慣れた字はあるのだ。

「あ、やべ、普通に書きちゃった」

” 遠山鳴人 ”

探索者業ということさら申請が多い、ニホンの探索者組合支部においては未だに紙書類が多く使われている、その時のノリで反射的に書類にはニホン語で名前が記入されていて。

「やべ、これじゃダメだよな」

言語体系が違うのだ、ニホン語を書いたところで意味がない。

遠山が羽ペンで書いてしまった自分の名前をじっと、眺めた。

「まあ……　　ふふ、お人が悪いのですね」

しかし、ギルドマスター、そしてラザールの反応は遠山が予想していたものとは違っていた。

「この字……　　まさか、ナルヒト、これは名前か？」

愉快げに口に手を当てて笑うギルドマスター、目を剥いて遠山と書類を見比べるラザール。

「え？　　あ、うん」

どこか、感心したような様子のラザールに遠山が頷く。

なんだ、この反応。2人の悪くない反応に遠山が眉を顰めていると。

「クスクス、統一言語が読めないなどと言いつつ、まさか”古代ニホン語”を嗜んでおられるとは。さすが、竜の巫女様にあれほど気



に入られてるわけです。失礼ですが、二ホン語はどちらで学ばられたのですか？」

「……古代二ホン語？」

ドンピシャで嫌な予感が加速する、その時、遠山の脳裏を駆け巡るのは存在している記憶。

宇宙、猿、惑星、自由の女神……

まさかそのパターンの異世界転生なのか？ いや、でもー

遠山が固まり、視線を下げた。

「ふふ、意地悪なのですね、ふふ、言いたくなればまた教えてくださいね」

その様子を勘違いしたらしいギルドマスターはしかし、確かな親しみを感じる声色で遠山に笑いかけた。

「すごいな、ナルヒト。自分の名前が書けるレベルとは、大学で教鞭が取れるんじゃないか？」

「え？ 遠回しにバカにされてる？」

駆け巡る思考を一度止める、そういうのを調べるのは生活に余裕が出来てからだ。遠山はわざと戯けてラザールの言葉をかわした。

「ふふ、では、たしかにお2人のサインを受領しました。今、この瞬間からあなた達2人はこの冒険都市アガトラ所属の冒険者です。あなた達を我々は歓迎いたします」

「ああ」

「ごじも」

「はい、では晴れて冒険者となられたので最後に適性検査を受けていただきます」

書類を受け取りながら微笑むギルドマスター。

「適性検査？ 心理テストとか、カウンセリングか？」

何故か自分だけ組合からテストやらカウンセリングの案内が頻繁に来ていた探索者時代を思い出す。

「いいえ、テストなどではありません。ギルドにおいては冒険者の方の能力の把握も業務内容のうちでございます。レベルやスキル、素質などを知ることによりギルドとしては適正なランク付を、そして冒険者の方には己の現在の立ち位置を理解することにより成長や仕事選びに活かしてもらうことが可能です。ウーノ？」

「はい、既に。よいしょっと」

ギルドマスターの呼びかけに、ウーノと呼ばれた女性が部屋の隅に置いていたワゴンを運んでくる。

布を被せられた箱をゆっくり、テーブルの上に置きそれが開かれた。

「こりゃ、なんだ、水晶？」

クッションが詰められた箱の中にあっただのは占い師が使うような玉、水晶玉だ。人間の頭くらいのサイズ、僅かに紫色がかかるそれが窓から差す光に透かされている。

「キャラ・ロール人見水晶、天使教会の許可を得て冒険者ギルドに所有が認められている知識の眷属”ハーヴィー”の副葬品です。ラザール氏には馴染み深いのでは？」

ギルドマスターがラザールへ微笑む。

「ああ。だが、ここまで大きな水晶は初めて見た。さすがは天使教会総本山といったところか」

何か嫌なことを思い出したような顔のラザールがモゴモゴとその言葉に答えた。

遠山はその様子を眺めて、そして勘づいた。数々の異世界転生モノを読み尽くし、サブカルにどっぷり浸かっているこの男は察しが良い。

冒険者ギルド、適性、なんか高そうな水晶とくればもう1つしかない。

「……まで、まさかラザールが言ってたレベルやらスキルやら、なんやらかんやら、まさかこれでワカンのか?！」

目を輝かせ、息を荒くしながら遠山がラザールを見て、ギルドマスターを見る、その目は爛々と瞳孔が歪んでいて。

「……ナルヒト、たまにお前は急に興奮することがあるな。その、あまり他の人がいるところでは落ち着いた方がいいぞ」

「あ、はは、こりゃ失敬。えー、でも、えー。やっぱあるわけね、ステータスやらレベルやら。ええやん、そういうお約束、僕は嫌い

じゃないよ、うん」

ラザールの忠告はしかし、火のついたオタクのワクワクを止めることは出来ない。

遠山はゲームとかでもキャラメイクやスキル振りができるタイプが好きだ。ゲームのトレーラーでスキルツリーとか見てるだけでワクワクしてしまうタイプのオタクなのだ。

それが、自分自身で、自分のそういうアレを可視化出来る。テンションが上がらないわけがなかった。

「すまない、彼はたまに、その…… 我を失うことがある。そっ  
としておいてくれると助かる」

付き合いは短いが、遠山がどういう人間かを理解し始めているラザールは既に諦めていた。

「え、ええ、存じております。竜に気に入られるような方です。その、多少は変わってる部分があつてしかるものかと」

ギルドマスターも大人の態度で気にしないでいてくれる。

「ウツヒヨヒヨヒビヒビ、たんのしみだなあ、ステータス。凄いなんかがあったりしたらどうしょ、やべー」

そしてこの場で最も幼稚な男は大人達の態度など知らぬとばかりにテンションを上げ続け、ついにはよだれを垂らしながら笑い始めていた。

「で、では、まずはどちらからお調べになりますか？」

「ラザール、お前、先いいぞ」

「……いいのか？ 早く試したくてうずうずしてるように見えるが」

急にスソツとした態度で遠山がラザールに先を譲る。ラザールが

見るからにヤバいやつを見る目で遠山を見つめていた。

「俺は給食のプリンは最後に食うタイプなんだよ、いいから早く」

「ああ、わかったわかった。手をかざすやり方でいいのかな」

問答を早々に諦めたラザールが、遠山から視線をギルドマスターに移す。

「はい、”知識の眷属”が所有するこの世界の生命全ての情報の一端を水晶が出力してくれます。……ご安心をラザール氏、あくまで一端、全てではありませんから」

「フツ、意地が悪いのは果たしてどっちやら」

ラザールがかすかに口を歪め、立ち上がり手のひらを水晶の上に翳した。



すぐに異変は起きた。

明らかに、水晶が輝き始める。光が水面を泳ぐ魚のように揺らぎ、紫色の光が部屋に満ちてゆく。

「うお、光って……」

不思議と眩しくないその光、遠山は湧き上がるテンションを抑えつつ様子を見守る。

「……水晶がここまで光るのは珍しいです。情報が多ければ多いほど輝きを増すものですが、これは……」

「……………」

部屋の中、しばらくその紫の光が揺蕩ってー

『HEY!! Listen!!』

「ふむ、始まったか」

「あー、ダメだ、読めねー」

水晶に文字が浮かび上がる。残念ながら遠山にはやはり判別不明の文字だったが、レーザー達は読めるらしい。

「静かに、ウーノ、筆記の準備を」

「おまかせを！」

盛り上がる周りに疎外感を感じつつ、遠山もその水晶を見つめて

――

『NAME ラ・ザール（いい名前ですね、古い竜の言葉では、たしか、”再び、立ち上がる者”でしたか）

「え？ 声ついてんじゃん」

「ナルヒト」

「あ、ごめん」

文字は読めないが、その後に声が響いた。よかった、これならなんとなくわかりそうだ。遠山は素直に黙って水晶を見つめ始める。

文字が、踊る。

『RACE リザドニアン（侵略者の血筋、果たして良き者として生まれてくるのが正しいのか、それとも悪しき者として生まれつつも、善くあるうとするのが正しいのか）

AGE 32歳

STR（筋力） 4 （一般人よりは鍛えていらっしやいますね。そこのチンピラでは相手にならないでしょう）

INT（知性） 4 （物事の道理を理解し、人の話を聞くことが出来る、ああ、稀有な人物ですよ、この世界においてなんと人の話を聞けない愚か者の多いことか）

POW（精神） 3 （このくらいがちょうどいいでしょうね。人間で精神が5以上あるともはやそれは化け物と変わりませんもの）

レベル2 （鉄火場にそれなりに慣れてるわけですね、しかしこれ以上の存在は存在します。人類の中では上位でしょうが、超越者達にはとても敵いませんね）

【スキル ”影の導き”】

この人物は影に愛され、導かれている。自らの影の中に潜んだり、影を物質化して扱うことが出来る。”悪事の眷属”フロリアの名の下に、影と共に歩め。

(フロリア、彼女とは関わりたくありませんね)

推奨冒険者ロール ”斥候”

文字がふつと、消える。

同時に響いていた声、不思議とどこかで聞いた覚えのある声に似たそれも止まる。

「……あまりいい気分ではないな。自分を丸裸にされている気分だよ」

ラザールがソファの背もたれに体を預けて大きなため息をつく。

「ふふ、天使の”眷属”の力は我々の理解を超えておりますので致し方ないことかと。水晶の情報からするとやはりラザール氏は斥候タイプのようですね。ギルドの登録もこれでよろしいですか？」

「ああ、構わない。どのみち索敵や隠密は得意だからな。ナルヒトもそれで構わないかい？」

「斥候…… 役割を明確に分けてる感じなのか？」

「はい、冒険者にはそれぞれの適性に応じて等級とは別にクラスもギルドにて設定しております、パーティ募集の際にもクラスによる選抜を利用したりするので便利かと。それでは、次はトオヤマ氏、よろしいですか？」

「お、おう」

出番が来た。気分はジェットコースターの順番待ちが終わった時のようだ。

ワクワクと少しの恐ろしさに遠山は唇を舐めた。

「では、手をかざしてください。水晶が貴方の情報をステータスとして扱ってくれますので」

「たんのしみー」

やべースキルとか必殺技とかあったらどうしょ、いやいやいや、魔法とかそんなんとかさー。

お約束だろ、そういうの、異世界転生だもの、いや、転移か？あー、生きるのたのしー。

IQがだいぶ下がっている遠山がニヤニヤしながらその時を待つ。

ぴかーっと、水晶が光るのを待ってー

待つて……………

「……………あれ？」

光らない。水晶は、遠山が手を翳しているにもかかわらず何も起きない。

「何も出てこない？ ギルドマスター殿、これは？」

「いえ、そんな…………… おかしいですね。こんなこと今まで一度も……………」



ギルドマスターが首を捻る。側に仕える女性も首を捻り、さつき  
オとされている領主はまた意識を失ったままぐーぐー寝息を立てて  
いた。

『パーガガ、ピーピー、ver不適合のため、変換チユウ変換チユ  
ウ』

壊れたディスプレイだ、ぴか、ぴか、と断続的に光が瞬いた。

「……………え？」

「なんだ、この文面は？」

遠山には読めないその字、それを見たラザールが怪訝な声を上げ  
る。

「え、おい、なんだ？ 何があった？ 読めねえんだけど、俺読め  
ねえんだけど」

「静かに、ナルヒト」

「あ、また光っー」

「一部技能をスキルへと変換試みましたが、失敗。ver不適合につきレベル設定不可。」

エラーエラーエラーエラーエラーエラーエラーエラーエラーエラー  
ーエラーエラーエラーエラーエラーver不適合ver不適合ver不適合  
合ver不適合、パッチ認定、認証不可不可不可不可不可不可  
遠山鳴人404404404 遠山鳴鳴ナルヒトナルトオヤマ保有、  
ーー螟ウ葱 強髯ア逾、蝗ス 狗 髯ア逾  
保有ーー ノ迪溲堪

N A M E 遠 b t 鳴 人

a g e 2 7 ?

L E V E L # # # #

探索 ¥ 深度

S T R # # #

I N T 7 (キモ)

P O W 5 (うわ)

スキるるるるるる\*変換不可

クエスト・マママママママママ¥¥2222222¥¥  
冒 ¥ 2 N O 舌

パッシブスキキキキキキキキキキ\*変換不可

” 技能 ” 一部公開

\* 頭ハッピーセット

# | t b x

( 探索者ってほんと気持ち悪いですね )

\* 鈍器取り扱い

( 殺すのが中々にお上手で。あの時、もし貴方があの島にいればどうなったか。少し気になりますね )

\* 拡大してゆく自我

¥ 2 < タ ^ 夢 |

( あなたは完成していない、故に人々に強い影響を拡げていくのでしょうね )

\* キリの主人

+ 2 1 | 冒険 |

( なるほど、そういうことですか。はあ、マジで気持ち悪い )

\* 恐怖耐性

\* 1 ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ ¥ +

(うわ、逆にもう何になら怯えるの、アンタ、おっと、失礼、つい……)

\* 戦闘思考

+ 2 ¥ 1 ¥

(頭のいいイカれた人間ほど厄介なものはありませんね、あなたの敵に同情します)

\* オタク

+ 1 1 . + ^ 2 下

(まあ、嫌いではないです。公文書館の扉を開く権利があなたにはあるでしょう)

\* 竜特攻

h h h h h g g g w g g g g g

(果たして、鶏が先か卵が先か。悪魔を倒したから英雄たりうるのか、英雄たりうるから悪魔を倒せるのか。そして、竜殺しだから竜を殺せたのか、それとも竜を殺したから竜殺しなのか。どちらにせよあなたは既に異物です。人の身でありながら竜を殺してしまった君は逆説的に竜を殺したりうるモノと成り果てた。世界の概念を滅ぼせる存在、ああ、つまりそれはー)

\*カラス殺し

+ 16 1 1 1 1 0

(容赦なく、呵責なく。あの場で1匹残らずカラスどもを始末した手腕は賞賛に値します。1匹でも逃していれば今頃こんなに呑気にはできていなかったでしょうね。まあ、それも時間の問題です。早めに力を手に入れることですね。降りかかる火の粉は払いましよう)

\*女運: hopeless

(うわ... ニホン人、こわい)

..... エラーエラーエラーエラーエラーエラーエラーエラー

エラーエラー ver 不適合 ver 不適合エラーエラーエラーエラー  
エラーエラーエラー他技能、スキル変換... 失敗、探索者適性の  
技能変換... 頭ハッピーセットの補正へ加算... 殺人適性:

恒常的素質へ定着中、一瞬ウ葱狗強 ア逾、蝗ス葱狗強 ア、  
ノ迪溥堪の影響により殺人適性のランクが最大値へと

上昇... 処理難航、人格への影響、性格変貌... 元々そういうモ  
ノのため特に無し、身体、精神に異常なし... ウ葱狗強髯

ア逾、蝗ス 狗強髯ア、 ノ迪溥堪による”精神汚染  
” ロール発生... ”頭ハッピーセット”により判定無しで成功:

特に影響なし... 属性判定... 中立・悪...

文字が、消えた。

読めないのは相変わらずだったが、なんとなくラザールの時より

さらにめっちゃくちゃな文字のようにも思えた。

「…………読めねえんだけど、いい感じだった？」

恐る恐る問いかける遠山、しかし誰も一言も発してくれない。

ノートに記録を取っていた女性は、一瞬、遠山へ視線を向け、すぐにそらす。ヤバい奴から目を逸らすように。

「ギルドマスター、俺にはほとんど読めなかった。文字が歪んでいたり、壊れていたり……………なんだい、あれは、よくあることなのかい？」

ラザールがいつもより低い声でギルドマスターに問いかける。その視線は鋭く。

「……こんなこと、初めてです……  
副葬品の誤作動？ 文字化  
け、不可解な出力……  
ウーノ」

表情を険しくしたギルドマスターが短く呼びかける。

「……あ！ は、はい、ギルドマスター、一応全て文字化けや理解  
不能な部分も含めて一言一句書き写しています。書庫の厳重保管区  
でよろしいですか？」

少し呆けていた彼女はしかし、ギルドマスターからの言葉にびく  
りと反応する。

「ええ、それで問題ありません。……申し訳ございません、トオヤ  
マ氏。少し、その副葬品の調子が悪いみたいでして……  
冒険者  
登録は問題ありませんが正確な適性検査はまた後日でも？」

「ああ、オツケーす、オツケーす。へえ、俺には全部読めないけど  
そついうこともあるんですね。でも、音声機能の方はまともに動い  
てませんでした？」



やはり何か不備があったのだろう。音声もどことなくラザールの時より不機嫌そうな感じだった。まあ細かいことは知ることが出来ないのは残念だが、ファンタジーを嗜むものとして実際にスキルやらなんやらをチェックする場に立ち会えただけでも感動モノでー

「ん？」

遠山は異変に気づく。

部屋の空気が明らかに、こわばっていた。

ラザールは遠山を見て首を傾げていた。

領主は眠りこけたまま。

そして、ギルドマスターともう1人の書記係は明らかに顔を硬らせていた。

「……………音、声……………？　そんな機能、人見水晶にはございませんが」

「え？」

ぞわり、

背筋が。

「ナルヒト、何を言っている？　この水晶には音声機能などはないぞ、少なくとも俺には何も聞こえていない」

「え？　いやいやいやいや、冗談よせよ。なんか水晶に字が写されるたびに声が出てたる？　ラザールの名前の由来とか、フローリアがどつたらこつたらとか」

「っ!?!? …… 申し訳ございません、お2人とも。実はこれから早急に片付けなくてはならない案件がございます」

「ああ、わかった、ギルドマスター殿、時間を取らせてすまなかった、ほら、ナルヒト、行こう」

「えー、ちょ、ラザール、ほんとなんだったば! フローリアが性悪とかなんとかよー、えー、待てよ、それ怖くね? 怖くねーから?」

「俺はお前が怖いよ、ナルヒト。だが、大丈夫だ。わかってる、わかってるからナルヒト。うん、あれだけ色々なことがあったんだ、疲れるのは当たり前さ」

「その優しい目つきをやめろ! 俺は正気だ!」

「……またのお越しを、お帰りの前にカウンターにて冒険者章をお受け取りください。本日より酒場のボードにて依頼も受けることが

出来ます」

「あー、どうも」

「……最後に2つ、トオヤマ氏。何かギルドで揉め事が起きた時は、竜の巫女が貴方に渡している冒険者章、それが役立つはずです。肌身離さず持つことをおすすめます」

部屋から出て行くこととした瞬間、ギルドマスターが遠山を呼び止める。あまり、顔色がよろしくない。

「あ？ あー、あのドラ子の金色のドッグタグみたいな奴か。なるほど、あいつ偉い奴だから紋所みたいなもんか。ご親切にどうも」

「……いえ、どういたしまして。……トオヤマ氏、貴方が聞いた声、とは、どのような？」

「え？ いや、女の、声だったと思うけど。え、なにこれ、悪辣な

ドッキリ?」

「そう、ですか。……いえ、引き止めて申し訳ございません。それではお気をつけて」

「めっちゃくちゃ気になるんですがそれは」

「ナルヒト、もう行こう。ほら、一度外の空気を吸った方がいいぞ」

「ラザールくん、その生暖かい優しさやめてくんない?」

なんとなくわちゃわちゃしながら部屋を出る遠山とラザール。

その様子をギルドマスターはじっと、眺めて見送っていた。

彼女がちらりと視線を向けた水晶はもう、なんの光も発さず、部屋に積もる沈黙に従いただそこに佇んでいた。

29話 たのしい冒険者登録、キャラ・ロール！（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください  
さいー！

レビューや感想ほんとありがとうございます！あなたのお陰で更  
新続けていられます、たのしんでもらえるようにやっていきますん  
でこれからもお願いします

### 30話 街の外へ

……  
……  
……

「……………彼らは行ったかい？」

ぱちり。

遠山とラザールの2人が部屋から出て行った瞬間、伸びていたはずの小太りの男が片目を開いた。

「……………ええ、無事、冒険者登録も完了しております」

書類をまとめながらギルドマスターが返事を返す。

「おや、起きてること気づいてたの？」

「貴方のことです、肝心な所は見逃さないと存じております。領主様」

「いやはや、さすがはマリーくん。……人見水晶はほんとうに不調なのかい？」

狸寝入りを決め込んでいた曲者、サパンがテーブルの上に置かれたままの副葬品を見つめる。

ギルド運営において絶対の基準となるこのアイテム、その不可解な反応を見過ごすような無能はこの都市の責任者にはなれない。

「まさか。あり得ません、副葬品に誤作動など聞いた事がございません、それにほら、正常です。なんの問題もなく起動しております」



マリーが手をかざす。すると自然に人見水晶はほのかに紫色の光を灯し、彼女の情報を写し始めた。

「……………竜に気に入られ、統一言語が読めないと思えば異様に古代二ホン語に精通し、人見水晶による検査を受け付けない、極め付けは人見水晶からの声を聞く男、かい」

厄ネタしかない。

サパンは薄くなり始めてカツラで誤魔化している頭をかきむしりながらうつむく。

扱い方がわからないのだ。あの男を果たして取り込むのが正しいのか、放っておくのが良いのか。

「“眷属憑き”、でしょうか？ であるなら、彼の異質さは全て説明できますが」

マリーがつぶやく言葉。

”眷属憑き” 各時代において、争乱の種になってきた厄介で、秘匿されている存在たち。

サパンは思考を巡らせる、あの男、竜殺し、トオヤマナルヒトの不透明さはたしかに眷属憑きならば説明をつけることが出来る。

だが、サパンの勘、主に嫌な予感を感じるのに長けたそれが警鐘を鳴らしていた。

安易な答えを出すべきではない、と。

「……判断を急ぐ必要はないさ。彼の動向はこの街の勢力のほとんどが監視しているはずだしそのうち判断材料も揃う…… 竜をあまり刺激したくもないしね。……おや、マリーくん、人見水晶が」

サパンはその勘に従い、結論を先送りにする。ギルドマスターもそれに頷いて。

ふと、人見水晶がまたおかしな動きを見せた。

断続的に、ぱっ、パッ、と紫色の光を点滅させて――

「……………え？」

彼らは知る故もない。

現代世界においてパソコンがたまに見せるその挙動、あまりに情報量の多すぎる作業をさせた際にたまに見せる動き。

処理落ちしたパソコンのような動きを人見水晶が見せていた。

サパンとマリーが固唾を呑んで、人見水晶を見守って。

『トオヤマ ナルヒト 推奨ロール』

『探索者』

はつきりと人見水晶が文字を写した。読める文字だ、しかしその言葉の意味はこの世界にはもう残っていないかった。

「タン、サクシャ？」

マリーが小さくつぶやく。教養深い彼女も知らない言葉だ。

「……マリーくん、これは」

「初めて見る、冒険者ロールです……」

サパンの問いにマリーが首を振る。

サパンが自分の顎を撫でる。数秒で結論を出した。

「ウーノくんが残した記録、あれを全て帝都大学の調査機関へ。竜専門学と先史文明学、天使学の権威の意見が聞きたい」

「かしこまりました、領主さま。……直接的な監視はいらないので？」

「今は彼の不透明さも怖いけど、何より怖いのは蒐集竜だよ、見ただろう？ 彼女の様子を。変わりすぎた、たった1日で。あの男、竜殺しが彼女を変えてしまった。あれでは竜ではなく、ヒトだ。竜の力を持ったヒト、しかも10代程度の精神年齢のね。それでいて倫理観や判断基準は竜独特の超然的なものときている、何が彼女の逆鱗に触れるかわからない以上、直接干渉は一切抜きだ、いいね」

竜殺しの不透明さは言うなれば真昼の大通りに死者が徘徊してるような不気味さ。そこにいるはずのないものが当たり前顔をして存在している恐怖。

しかし蒐集竜への恐怖はそのまま、文字通り竜という規格外への恐れだ。

真昼の死者より、普通に竜の方が怖い。

それがたとえ竜を殺す死者であってもあれはまだ人の範疇にいると領主は判断した。

「お言葉のままに、サパン・フォン・ティーチ辺境伯。我らが街、冒険都市アガトラの領主様」

「頼んだよ、ハイデマリー・スナベリア、冒険都市アガトラのギルドマスター」

短い言葉、小さく礼をし部屋を出て行くギルドマスターをサパンが見送る。

優秀な街の勢力の代表に心強さを感じつつ、サパンがソファから立ち上がり伸びをした。

「ふう、さてさて、やることが山積みだ。竜のご機嫌取りに、各勢力との情報共有、帝都への報告…… 貴族院の連中め、ここで死んだら化けて出てやるぞう」

いやだいやだ、小さくつぶやくその声とは裏腹に、その髭に隠れた唇はどこか愉快そうにつり上がっていた。

……

……

「で、ナルヒト、本当にいきなりこれでいいのか？ 一応申請はしてきたが」

「おー、ラザール、サンキュー。手間かけたな。ああ、問題ねえ」

街を歩く。

レンガで作られた建物、赤茶けた石畳の道路は思ったより歩きにくい。アスファルトって案外すごいものだったんだな、と遠山はの

んびり現代の技術の素晴らしさを考える。

「狩猟、ね。たしかに稼ぎは大きいかも知れないがその分リスクもある、覚悟の上というわけかい？」

ギルドにて冒険者章を受け取った遠山たちが次に行ったのは依頼の受理ではなく、狩猟の申請だった。

「おお、さっきの説明聞いて確信した。彼らの目的に近づくためには仕事としては狩猟っつーのが一番合ってる。なにより、商人とのコネが手に入るのがでけー」

「商人とのコネ？」

遠山は隣に歩くラザールににやりと笑いかける。

指をふりながら頭の中で組み立てていた計画を言葉にした。



「ああ、ラザール、俺ら探索者…… じゃない、冒険者の強みって何かわかるか？」

「冒険者の強み？ …… そうだな、帝国でいえばギルドの後ろ盾を得ることが出来ることか？」

「まあそれもあるな。嬉しい誤算だが行政のレベルが予想よりかなり高い。だが最大の強みはそうじゃない」

目抜き通りを進む。馬車が行き交い、人々が血管を通る血液のよう  
うに進み続ける。

所々に出店している店、店舗を構えていたり、露店だったり営業  
方法は様々だが、どの店も活気がある。

それだけでこの帝国とやらの治世がそれなりにうまく行っている  
とが伝わる。

「自分自身を商品化出来ることだ」

遠山が自分を指差して、それからラザールを指さす。

― 際背の高い獣人が向こうから歩いてくる。遠山は目線も合わせずするりと躲し、舌打ちを背中にあびながら歩き続ける。

「」どつという意味だ？」

ラザールが遠山のみこのなしに目を見開きながらも商品化という言葉を確認する。

「俺はまだこの辺の常識には疎いが、おそらくモンスター素材とやらの供給はほとんど冒険者ギルド頼りなんだろう？　そして、実質その素材を回収してくんのは俺たち冒険者なわけだ」

遠山の目線は、目抜き通りのそこら中に置かれてある商品に注がれる。

鉄製の武器を飾っている店舗、生活雑貨のようなものを売っている露店、木のジョッキになみなみの飲み物を注いでいる店。

さまざまな店が入り乱れるこの通り、しかしそのなかの商品のほとんどに動物の毛皮や、甲殻のようなものをあつらえたデザインが見てとれる。

ギルドマスターの言葉通り、モンスター素材とやらはこの国の経済商品のほとんどに流通しているらしい。

「……ああ、なるほど。お抱え、か」

ラザールが遠山の言いたいことを理解したようだ。なるほどと小さく頷く。

「おっと、もうそういう概念があるのか？ そゆこと。いわば俺らは一次産業者、なるのは簡単かも知れないが、続けるのは誰でも出来る仕事ではない。安定してモンスター素材を回収出来る優秀な冒険者ってのはその個人そのものが資産になれる、俺はそう思う」

需要の高いその商品はしかし、取り引きや畜産では手に入らない。文字通り命懸けでモンスターを狩り殺さないと手に入らないものだ。

なるほど、ギルドが自分たちを介しての取り引きを願うわけだ。これはたしかに金になる。

遠山は歩きながら街並みをつぶさに観察する。

露店でも日差しよけの屋根はおそらく布ではなく、何かの皮？いや翼膜か？

街を行き交う馬車も幌の素材が木だけではない、黒っぽい甲羅や骨が使われているものも何台かみかけた。

すれ違う冒険者らしき武器を構え、装備を整えた人間。その鎧や

武器にも明らかに鉄だけじゃなく生き物の骨や角が使われている。

経済の基礎。おそらくこの世界、少なくともこの都市の経済活動の礎の1つには密接にモンスターが関わっている。

「ということは、ナルヒトの狙いは商人への売り込みか？」

ラザールの声に遠山が頷く。

「正解、今俺らに必要なのは冒険者ギルドつー組織の中での地位や評価よりも金とコネだ。狩猟を通じての商人との個人的繋がりはこちらから先、パン屋を運営するのに必ず生きてくる」

商人とのコネ。なんの縁もない土地での商売の開業には必ずコレが必要だと遠山は睨んでいる。

商人ギルドという言葉が存在しているのだ。連中は必ず既得権益

を守るため連携している。それは敵に回すよりも利用する方が得だと遠山は判断していた。

「……………驚いたな。アンタはほんとに不思議な奴だ。子どもでも知ってる常識を知らないかと思えば、今はこれだ。ふ、ああ、わかった。アンタについていくさ」

「おう、どうも。と言ってもまずは獲物の選定からだな。目端の利く商人からの接触を待つにも、それとガキどもの食費や宿代にもまらずは今日成果を得ないと。えーと、都市から一番近い狩場で獲れるのはなんだったけ？」

「ああ、これに書いてある通りだ。ジャイアントボア、ホーンラビット、スマイルバード…………… 野獣種かつ、3級クラスのものスタ―が殆どだ」

ラザールが懐から折られた冊子を取り出す。そこには遠山の読めない文字と、いくつかのわかりやすい絵が書かれていた。

「いやー、周辺に出る獲物の情報まで無償で配ってるとは思わなかったな、あのギルドマスター相当やり手だぜ」

ギルド内で無償で配っているのを見つけた時は口を開けて固まっていた。まったくくだらぬ。

正直、これが1番の懸念だったのだがそれはこの冊子により一気に解決した。

遠山の最大の懸念、それは獲物の情報不足だ。

現代ダンジョンの探索者ならば組合の情報端末やら、果ては民間のWikiなどで怪物種の生態情報や特徴、時には攻略法まで調べられてしまうのだが、ここではそうはいかない。

見知らぬ土地どころか見知らぬ世界。通常の生態系から外れ、独自の生態を持つ明らかに危険な生物、モンスター。

探索者時代の経験ややり方がそのまま通用するほど甘いものではないだろう。あまりにもその獲物に対して知識がないのが心配では

あつたのだが全てこの冊子で解決した。

「だろうな、王国ではこのようなモノ存在すらしていなかった。だがしかし、かなりこの冊子も余っていたな」

ラザールが見事な仕事だ、と小さく唸る。

読むことは出来なかったがラザールの翻訳曰く、そのモンスター  
の名前から生態情報、目撃情報が多い時間帯、場所、そしてなんと  
他の冒険者から聞き取りしたうえで簡易ではあるが注意点までも  
が示された冊子だ。

遠山からしたら金以上に価値のある代物だった。その冊子の存在  
も遠山に狩猟という選択肢を選ばせた1つの要因だろう。

「あー、たしかに。まああれだろ。俺らに絡んできたりしてきた連  
中のレベルから察するに奴らは情報の重要性を理解出来るオツムが  
ないんかもな。ひひひ、競合相手が少ないっつーのはラッキーだぜ」



「それはあるかもな。3級モンスターの情報を必要とするレベルの連中は敵の情報よりも、己の装備や仲間の質を重視して、情報の重要性を理解している連中には逆にこの冊子程度の情報は既に必要なくなっているのかも知れないな」

「お、レーザー、いい事言うな。なるほど、需要と供給のミスマッチか。んー、あのギルドマスターの年から考えてちょうど今は組織の変革期なんかもしれねーな。ギルド全体のボトムアップを図るため、色々なことを試して、変化してる最中。いいねえ、商売のチャンスが増える」

遠山が笑う。ギルドマスターの少し疲れた顔を思い出し――

するとそこに風体の悪い男が真正面から急にぶつかろうとしてきた。するり、躲し、同時に遠山のローブのポケットへ伸ばされていた指を掴む。

「ああ、だが俺たちと同じく金が入り用で狩猟を狙ってる同業者も多い。油断はできないぞ、おっと、スリか」

「ああ、スリだ。よいしょっと」

ぼきり。

なんの反応も躊躇いもなしに細い指を反対側に折り曲げる。骨が折れて腱がだめになる感覚。それを捨てるように折った手をぺしりと放して、悲鳴をあげるスリを蹴飛ばし、進み始める。

ラザールもあまり気にしていない。スリを見下ろしたため息をついたあと、また歩き始める。

「えっと、なんの話だっけ。ああ、同業者との競合か、ショージキあんま気にする必要もねえと思うぞ」

「何故だ？」

「近道狙う奴はすぐに死ぬからな、回転も速いだろ。こーゆーお室同然の冊子が余ってるっていう時点で俺らと同じランクの奴らはおそらくほとんど素人だ。普通、こーいうのに飛びついて当たり前だと思っただけだな」

恐らくこれの価値を知る連中はもう無茶な狩猟に頼らなくても生活できるやつなんじゃないか？

遠山はスリの悶絶と悲鳴を背中につけながら進む。

「ふむ、帝国人はわりかし名誉や慣習を重んじる者が多いからな。新しいことに対しての感受性は薄いのかもしれん」

「ふうん…… それは少し、パン屋業の方では厄介だな。ま、その辺はおいおい考えるところとして、見えたな、あそこか？」

街並みを見たり、スリの指を折ってたりしたらいつのまにか辿りついたようだ。

巨大な都市を覆う壁がいつのまにか遠景から、見上げるオブジェになる位置まで街の外縁部に来たようだ。

「ああ、東門。アガトラの出入り口の1つだ。あそこで申請書を出せば平地帯のモンスターの狩猟が可能なはずだよ」

ラザールが申請書を広げながらつぶやく。

「おー、こうしてみると壁すげーたけーな。城塞都市って奴だな、ほんと」

遠山が海外旅行にきた気分で見上げる。

何十メートルあるんだ、ありゃ。100メートルはないかもしれないが少なくとも人が登れるような高さではない。

そんなのが街をぐるりと囲んでいるのだ、中に巨人が入っていないかと少し心配になった。

「大戦期に帝国の初代皇帝と天使教会の第一主教が作った街と壁だ。ざっと考えると200年モノだな。当時の聖人と、”秘蹟持ち”の

力で作られたこの壁は噂では”竜”と争うために作られたとかなんとか」

「はは、そりゃいいな。竜は呑気に壁のうちで好き放題してんのに」

軽口叩きながらこれまた馬鹿でかい開かれた門のどこまで歩く。

道路も広く、門も見上げるほどにでかい。

戦車やらなんやらでも平気で進めそうだ。遠山たちがそのまま進む。

いつのまにか人の通りが極端に少なくなっている。

「そこで止まれ、この東門は冒険者ギルドにより認可を受けている者しか通れない、旅人や市民は反対の西門からのみ都市の出入りが許可されている」

門まであと少し、と言ったところで一際大きな建物、タペストリ  
ーや旗が飾られた建物に待機していた人物たちに呼び止められる。

帽子のような兜に、銀色の鎧にこれみよがしの大きな鉾槍。

「いや、冒険者です。これ、冒険者章」

遠山がロープから青銅で出来たドックタグに似たプレートを掲げ  
る。

「……チツ、4級の青銅章か。依頼ではないな、その様子だと。狩  
猟の申請書は？」

明らかに門番たちの表情が変わった。侮蔑と見下しをミックスさ  
せた嫌な顔だ。

「ああ、ここに」

「……リザドニアンか。ギルドも落ちたもんだ。お前みたいなトカゲも受け入れるんだからな」

ラザールが広げた申請書をひったくるように奪う門番。遠山が一言文句を言おうと一歩進む、それをラザールが視線で制した。

「はは、帝国人の懐の深さに感謝するよ」

門番の言葉に笑顔で対応するラザール。遠山は一瞬目を瞑り、小さく息を吐いた。

「ふん、ヘラヘラしやがって。この辺の錠前を一つでも触ってみろ。その手を斬り落としてやるからな」

「ああ、それは恐ろしい、気をつけるとしよう」

「……もういいか、確認出来たる？」

低い声が出た。レーザーが大人の対応をしているんだ、自分がキレたら意味がない。遠山はさっさとここを離れたくて仕方ない。

「あ？　なんだ、貴様その態度は？　4級のなりたて風情が口の利き方を知らんらしいな」

門番が遠山の態度にめくじらを立てる。かちやりと鎧を鳴らして遠山に近づいた。

「……ナルヒト、よせ。教会騎士の警邏だ。ギルドの時と違い、揉めればこちらが拘束されるぞ」

「……了解、レーザー」

負けじとその門番に詰め寄ろうとする遠山をレーザーが制す。その言葉に遠山が頷き、喧嘩を買うのをやめた。



そつだ、落ち着け、落ち着け。ちょっとムカついたくらいでいちいち揉めてたらキリがない。こいつらは言うなれば畜生揃いの暗黒時代のヨーロッパくらいの倫理感しかないんだ。

現代ニホンの常識と倫理を備えた俺の方が譲るべきだ、うん、コイツらは動物なんだから優しくしよう、うん。

頭の中で色々考えて遠山は目の前の門番を許すロジックを編み出す。

落ち着いてきた、手続きは済んだろうからもう行くこうとして前へ進もうとした、その時だ。

「ふん、まあいい、身の程知らずに狩猟に向かうバカだ。すぐに死ぬだろつね……ん」

門番がニヤニヤして顔で、遠山とラザールに手を差し出す。

手のひらを上に、まるで何かを渡せとばかりの態度だった。

「……なんだ、いや、なんです？ 書類の確認は終わったら、通るぞ」

「素人が、知らないのか？ 通行料と手数料を払ってもらおう。ギルドで教わらなかったのか？」

当たり前のように、そしてヘラヘラした笑みを貼り付けたまま門番が言い切る。

「……………」

遠山の頭の中、脳みそに冷たい水が広がる感覚が走った。

「……………そんな話は聞いていない。門番に金を払うなんてギルド

から説明はなかったぞ」

の。  
賄賂の要求だ、それもクソみたいな理由とクソみたいな人種から

「そりゃ残念、伝達がうまく行ってなかったな。周りの奴らにも聞いてみようか？　なあ、お前ら！　こここの冒険者が外に出たらしいんだが、手数料貰わないといけないよな！？」

ラザールの抗議の言葉に、門番はしかし笑いながら周りの仲間を呼ぶ。

「あー、そだな、4級で、徒党にも入ってないんなら、保証金があるな、補償金だ」

「ああ、そうだな、俺ら門番の大事な時間を、てめえらみたいな素人に使ってるんだ。ほら、素直に出すもん出せよ」

ゾロゾロと遠山とラザールを囲むように集まる門番たち。ヘラヘ

ラしつとも、全員武器は握っている。

なるほど、今、自分たちはカモにされかけてるらしい。遠山は状況を理解する。

「あ、またやってるよ、あいつら。おい、ヴィル、俺らの徒党これからいつもの狩猟だから、通るぞー」

「おう、稼いでこい、今度奢れよー」

困まっている遠山たちを尻目に、門番たちを素通りする連中がいた。3人組、みな武装している所からおそらく同業者だろう。

「……おい待て、何故あいつらを通している？ アンタらの言う保証金だか、通行料はおろか申請書や冒険者章の確認もしていないぞ」

ラザールがすんなりと門をくぐっていく冒険者たちをみて更に声

を上げる。

「あー？ あいつらはいいんだよ、3級の徒党で、信頼がある。いちいち申請なんぞ確認しなくてもギルドの方できちんと処理してるさ」

いい加減な仕事に、汚職。おそらくあの連中とこの門番はなんらかの利害関係にあるのだろう。

「……なるほど、こーゆー構造か。ギルドマスターもこりゃ相当苦労してんな」

あの冊子に見られるギルドマスターの努力はしかし、残念ながら末端までは届いていない。

教会とやらとギルドの足並みも揃っていないのだろう。

遠山は黙って、そいつらを観察する。

装備がなかなか潤沢だ、人数も多い。レーザーもいることから真正面から無傷で皆殺しは難しいだろう。それに時間を掛ければ目撃者も出る。

教会の警邏、昨日始末したカラスとかいう連中とは違い、体制側の人間だ。真正面から殺すところらが悪者にされてしまう。

「……めんどいな」

「あ？　なんか言ったか？　俺はどっちでもいいんだぜ。通行料2人で銀貨1枚、払えねえのなら通さねえよ？」

「むしろ教会の公務の邪魔として牢に入るか？　ん？　どっちでも構わないけど」

門番たちがヘラヘラ笑い続ける。完全にこちらを舐めている顔だ。彼らからすれば低級の冒険者などその程度の存在なのだろう。

「……ナルヒト、穩便に行こう。コイツらを敵に回しても得はない」

「……だな。っふー、わかったよ、わかったさ。払うよ、悪かった、  
アンタらの手間をかけちゃった」

遠山はやり方を変える、そうだ、大人になれ、大人に。

「ここで揉めても仕方ないー」

遠山がそいつらに頭を下げようとした時、門番が遠山の態度にわかりやすい笑顔を浮かべた。

「お？ 物分かりいいじゃねーか、そうそう最初から素直に金払えばいいんだよ」

「へへ、女なら金以外でも通してやる方法もあるけど、リザドニア  
ンと黒髪男なら銀貨以外に通る方法はねえわな」

「ぎゃはははは、ああ、この前のあの田舎女！　可愛いそーにもう1週間見かけてねえな、そっぴや」

「お前が使いすぎたからじゃねーのかよー！」

「ばーか、最後の方は女の方も悦んでたっつーのー！」

下卑た笑いが遠山とラザールを包んだ。

人の痛みを理解どころか、想像すらすることのないだろう人間の顔。

ラザールが一瞬、怒気を現し牙を剥きかける。

「……………」

「っ！？……………」



遠山がすつ、と腕を上げてレーザーを制した。遠山の栗色の眼に笑い合う門番たちの顔が映り込む。

生まれつき強い側、奪う側にしかいなかった人間の顔だ。自分より強い相手には決して逆らわず、自分より弱い相手にだけその幼稚な攻撃を向ける人間の顔だ。

ぴきり、奥歯の奥、こめかみの中に音が響いた。

遠山鳴人の1番嫌いなタイプの人種だ。

気が、変わった。穏便に済ませるのも、金を払うのもナシだ。

黙ってくれてやるものなど、一文たりともありはしない。遠山が、静かに笑った。

「はは、あ、そうだ、金を払う前に1つ聞かせてくれ。アンタらんとこの教会ってさ、”竜”をどう思ってたんだ？」

とぐるを巻くような苛立ちと怒りを笑顔に隠して、遠山は自然に話しかける。

「ナルヒト？」

ラザールの怪訝な声。

「あ？　なんだ、竜？」

「どーでもいいから早く金払えよ、しよっぴくぞー」

遠山の言葉にそれぞれの反応を返す門番たち。

ピコン、奴らの顔に矢印が浮かんだ。

【スピーチ・チャレンジ発生】

【会話材料多数】 ”ギルドマスター” ”天使教会” ”竜大使館”、 ”ギルドの改革”】

【”蒐集竜”の塔級冒険章】

「いやいやちょい気になったんだ。竜とかギルドマスターがぼやいててな。最近、この東門でギルドや教会に許可を得ずにお小遣い稼ぎしてる奴らがいるって」

スピーチチャレンジ。遠山の舌が蠢く。真っ赤な嘘あ、そんな話、ギルドマスターは一切していない。

「……………あ？」

「いま。なんて？」

それでも、奴らは反応した。後ろ暗い行動だとは理解しているの  
だろう。バテてはまずいと理解しているのだろう。

だからこそ、遠山の呟きは毒のように広がる。

「ギャハ、おいおい、冒険者、お前嘘下手すぎだろ。お前みたいな  
こつぱものがあの人らの知り合いのわけねえだろうが」

門番の1人がうわずった声を上げる。周りの門番たちもその声に  
1人、また1人とヘラヘラ笑い始めた。

「ああ、はは、ばれちった？ いや、なに、ジョーク、ジョークさ。  
えーと、銀貨1枚だったな、少し待ってくれ。いま、財布の中ひっ  
くり返すからよ……」

遠山もその笑いに合わせてヘラヘラ笑い出す。

懐から革袋を取り出した。中身に金はもう入っていないことなど百も承知。

しかし、その革袋の中にはアレが入っていた。

「おっと、間違えた」

ぼとり。

ひっくり返した革袋からそれが滑り落ちて、遠山の手のひらに。

金色のドックタグ。プレート、竜を殺したなによりの証拠。

「……………っは？ おい、お前、それ」

門番の1人が目をむいた。それが何か一目で理解したらしい。

「ああ、気にしないでくれ。すまんすまん、これは違うよな。金色だけどお金じゃないもんな。いやー、そっかそっか。通行料かー、いや別に気にしないでくれよ。そういうの大事だよな。これから長い付き合いになるんだ。きちんとアンタらの顔も覚えてよ」

遠山がこれみよがしに金色の冒険者章をてのひらで転がす。

門番たちの目線はそれに釘付けとなっていた。

「……………まで、まてまて、お前、それ、手に持ってるの、金色の冒険者章……………か？」

「あ、はは、いやいや、ニセモンだろ、おい、な？ てか、え？ さっき、竜とかギルドマスターが俺たちのことをー」

明らかに奴らの声がつわずり始めた。

4級冒険者のくだらないブラフなど、彼らにとってはいつものことだ。

ワイロを誤魔化すために下手な嘘や、しょうもない脅しをかけてくる。そんな冒険者たち、主に道理を知らない新人の冒険者を痛めつけ、金品を剥いたら、時にはそれ以外のものでも払わせたりするのが彼らの副収入だった。

だが、今日は違う。明らかに目の前のローブの冒険者は何かが違うと感じ始めて。

「いや悪い悪い、あれはだからジョーダンですって。ジョークだよ、……ギルドマスターとしても冒険者ギルドと教会の關係にヒビが入るような真似する奴は目障りだろっし、竜の方はシンプルに癩癩で人を殺すからなあ。ワイロとかあんま好きなタイプじゃねーからな、アイツ」

「お前、なんの話をしてる？　つまらねえジョークで揶揄うんならタダじゃおかねーぞ」

「お、おい、待て、待てよ、あれ間違いなく塔級冒険者章だろ、あの金色、騎士長と同じ奴だろ?!」

「ば、ばか言うな!?!　ニセモンに決まってるだろ！　おい、冒険者、それ貸せ!」

1人の門番はその違和感、いや恐怖に耐えられなかった。

遠山が手のひらで転がすそれ、金色の冒険者章を強引に奪い取って。

「あ」

「こんなおもちゃで俺らをビビらせよー」



遠山がぼかんと口を開ける。

そしてにやりと笑った門番はしかし、言葉の途中で白目を剥いて、そのまま受身も取らずに地面に倒れた。

「おい！？ どうした？！ 倒れたぞ！？」

「……ほ、本物だ。本物の、”塔級冒険者章”、本人か、本人が認められた者が触ったら、災いが起きるって」

「お、おい、待てよ、コイツ、じゃあ、まさか本当に」

「……………黒髪、リザドニアン……………おい！？！ 教会報に載ってた蒐集竜様を殺した冒険奴隷！ そいつらも黒髪とリザドニアンの奴隷の2人組だって」

門番たちに動揺が、広がる。

遠山の舌が彼らを絡め取る。

「お、おい、おい！ 冒険者、フードを取れ、早く」

「はいどーぞ」

門番の言う通り、遠山がロープのフードを下げる。狡猾な肉食の獣に似た顔で、おののく小悪党たちを眺めた。

「黒髪、栗色の眼…… お前、いや、アンタまさかー 本当  
に」

「ヒヒヒヒヒヒヒヒ、なあその前に聞かせてくれ。アンタらはギルドと竜の敵か？」

歪んだ笑い、的確な言葉。

「は？」

毒となり、門番たちを蝕む。

「冒険者ギルドは現在、体制の改革を進めるために賄賂や汚職に関わる存在の炙り出しを行っていてな。竜もまた、自分の足元に浅ましい虫が這うのを快く思っていないんだよ、可哀想にこの虫どもはギルドと竜に目障りな敵だと認識されちゃったらしい」

「ひ……」

「あぶく噴いてら、可哀想に。これは返してもらっせ」

遠山が白目をむいてびくびく痙攣する門番からプレートを回収し、話を続ける。

「……こいつ、触っても平気なんだ。……蒐集竜の冒険者章だから」

ずり、誰か1人、門番のうちの1人があとずさりを始めた。

「その虫どもはなかなか小賢しいらしく。なかなか尻尾を掴ませねえらしい。そこで、竜が認めるほどの実力を持ち、なおかつ冒険者ギルドにおいてはカモにされるような新人の協力者による囷調査が近々実行されるらしい……」  
ああ、まあ、ジョークだよ、全部ただの冗談さ。門番さんたち」

「あ、う……」

「だがまあ、この協力者も不真面目でな。必ずしもギルドや竜との共同歩調をとるわけではない。むしろ厄介ごとには関わりたくないんだ。だから、うん、きつとこの協力者はこう考えてる。門番の中にワイロを要求するような虫などいない、ただの噂だった。ああ、こういう報告が1番全て穩便にすむんだけどなあ」

遠山が門番の1人1人を眺める。

もう、そいつらからは余裕の溢れる笑顔は消えていて。

「で、なんだっただけ？ えーと、通行料、いくら必要なんだ？」

「い。いや。なんでもない、書類を確認した。良いあ狩り……」

その言葉のあと、一斉に頭を下げる門番ども。

ラザールは苦笑し、頭を下げて通り始める。

遠山はしかし、じっと門番を見つめて動かない。

1、2、3、4。

4人。こちらに頭を下げて、剣呑な目つきをしている人間を4

人見つけた。

遺恨は残さない。穏便に済ませたつもりだが、やはりコレが1番  
確実だ。

「ナルヒト？」

なかなかその場を動こうとしない遠山にラザールが声をかける。

「……ああ、どうも。お仕事ご苦労さん。……安心しろよ、全部、  
ジョークさ。今行くよ、ラザール」

ようやく、遠山が歩き始めた。

ロープの内側、誰も見えないその位置で静かに欠けたヤイバを己  
の身体から取り出して。

「あ、ああ」

「……ラザール、今あの辺りに俺たち以外の人間はいたか？」

「いや、先程素通りした彼ら以外はいなかった」

「そうか、なら、いいや」

遠山たちが門をくぐる。

分厚いかべのトンネルを通る、灯されるカンテラの光の先に陽光に満ちる出口が見えた。

「何をする気だ？」

ラザールが首を傾げる。

その時だった。

遠くの方、トンネルの入り口、遠山とラザールの背後から大きく、

汚い悲鳴が聞こえた。

断末魔の叫びー

「いや、もう終わった」

ヤイバをしまう。

時間差での使用は初めてだが、たしかな手応えをきちんと感じた。

「……そこまでやる必要があったか？」

「悪い、なんか女がどうたらこうたら言ってたのが無性にムカついで……」

「……………細かくは聞かないでよくよ」

「おう、助かる。なに、死んでいい虫が数匹この世から消えただけ



だ。後から変に絡まれても厄介だしな」

「……確かに何人かはアンタを睨んでいたな。殺気も漏れていた。教会も下の方は腐っているらしい」

「だな。汚物を消毒する趣味はねえがはこつちに飛び跳ねてくるな。話は別だ。きちんと掃除するのが全うな人間の仕事ってな」

言いながら遠山は思う。

明らかにここに来てから、殺すということへの抵抗感がどんどん薄れている。

静かに冷たく酔っているような感覚。少し考えて小さく息を吐いた。

まあ、いつか。死んで困るような奴らでもなさそうだったし。

「よし、気を取り直して、行こうぜ、ラザーー」

ル。遠山は、言葉を失った。

トンネルをくぐった先には、世界が広がっていた。

蒼い空。見上げていると上下の感覚を失いそうになる、現代では見られない青い空。

風が草原の上を泳いでいるようだ。薄緑の大地が風がそよぐたびにみじろぎしていく。

圧倒的な、自然と世界。広い広い外の世界が壁の向こうに広がる。

「ふ、どうしたナルヒト。まるで、街の外を見るのが初めてだ、ていう顔だぞ」

「へ、へへ、うるせーよ、少し腹減ってるだけだ」

キリを使った反動による空腹と眩暈、それを押し殺して遠山は思い切り目の前に広がる平原の空気を吸った。

仕事を始めよう。

緑の匂いを吸い込み、吐き出す。蒼空が広がり、雲が揺蕩つ。

「いい景色だ……」

カスのようだ。この自然の光景の前では奴らの命を奪ったこと、なんとちっぽけなことだろうか。

遠山は3歩ほど地面を踏みしめたあとすぐに自分が殺した門番たちの顔を忘れた。

ピコソ

【目撃者、全員殺害につき勢力評価変動なし、犯罪歴追加なし】

30話 街の外へ（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを「こ覧くだ  
さい！

### 31話 生活のはじまり

「やあ、友よ、そのいでたちに目つき、冒険者だろうか？」

「あ？」

「誰だ？」

門を出て少し歩いた時だった。

道端に立っている旗と台車のようなものを積み上げた小さな露店がぼつりと。

そこを通りがかった瞬間、どこかインチキ臭い声が遠山とラザールにかけられる。

「おおっと、そう警戒しないでくれ、ここはまだ都市門の付近だ。君たち冒険者が警戒すべきモンスターは現れないさ」

髪を一つに束ね、質素なシャツ姿の壮年の男性がひらひらと手を振る。

「モンスター以外にも警戒すべき敵はいると思うけどな」

「ほう、はははは、これはこれは。なるほど、口も立つらしいな、冒険者」

遠山の皮肉にニヤリとした笑みを返す壮年の男性。

少し脅かすように睨んだつもりだが全く気にしていないようだ。

「……何者だ？」

ラザールも同じく声を低くしながら男を見つめる。縦に裂けた瞳孔が細まっている。

「あまり警戒しないでくれ、リザドニアン。君のその縦に裂けた目を見ると懐かしき故郷を思い出す」

「王国民か？」

男の言葉にラザールが少し雰囲気を和らげた。

「元、だがね。一月前に帝国民としての戸籍を手に入れている。資産も全てこの国に移している今、私はすでに帝国民さ」

「……で、おっさん、なんか用か？」

遠山が男を観察する。露店の旗や看板の文字が読めない為アレだが、店の背後に積まれているのは台車だ。

商人なのだろう、別の店員らしき若い男が台車を布巾で磨いている。



「ああ、もちろん、もちろん用だとも。そして商人が人間に話しかける用など一つき。君たちに素晴らしい商品を紹介したくてね」

「台車、か？」

背後の商品を手で示す男、促されるままに遠山とラザールがその商品を見つめる。

「おお、友よ、その通りだ。君たちのような優秀な冒険者にこそ必要な商品だろう？」

「なるほど…… 獲物の運搬用か。たしかにそれは考えていなかったな」

「あー、たしかに。探索者ん時は組合の回収チームやら巡回部隊いたしな」

失念していた。怪物を始末してそれを売る狩猟。考えたら解体の

段取りや回収の方法をとくに考えていなかった。

探索者時代は割と分業が進んでいたためその辺に遠山は気を回してはいなかったのだ。

「ふふ、わたしにはわかる。君たちは非常に優れた冒険者だ。獲物を追い詰め、その素材を持ち帰る帝国の資産になり得るだろう。そんな君たちの手助けをするためにわたしはここで商売をしているわけだ」

「ほーん、で、いくらだ？」

ニヤニヤした笑みを浮かべる店主、その言葉に間髪入れず遠山は商談を開始する。

「ふふふ、話が早いな。一目でこの商品の価値を見抜いたと見える。ああ、友よ、手助けと言ったろう？ この押し車、素材はなんと王国の”樹海”から切り出したホウレンの木材に、工房の技師が設計製造した一品ものだ。丈夫で軽く、しなやかな素晴らしいものだ。通常買うとしたらまあ、金貨2枚はかかるだろう」

すつと、笑みを薄めつつ店主が言葉を手繰り始める。

「かなり割高だな。金貨2枚とは帝都の役人の一月分の給金に等しい」

ラザールが腕を組み、ふんつと息を鳴らしつつ口を尖らせた。店主はまるで気にしていないようだ。

「価値を理解してもらえて嬉しいよ、リザドニアン。だが君たちにそこまでの負担をしてもらう気はない。レンタルだ、今日一日この台車を大銅貨一枚で貸し出そう。どうだい？」

「大銅貨一枚？　こちらとしてはありがたいが……」

店主の言葉にラザールが僅かに目を見開いた。やはりというかなんというか、ラザールはあまりこの手の腹芸は得意ではないようだ。

「んー、なるほど、そういうことか。……おっさん、最近、景気はどうだい？　需要と供給、そう例えば、市場で不足しているモンスター素材とやらがあったりするの？」

しかし、この男は違う。腹芸、齋し、嘘、説得、なんでもござれ。副葬品にキモいと言われた知性と、殺すべき時に殺せるハッピーな頭を持つ探索者は、すぐに店主の意図を察していた。

「ナルヒト？」

ラザールは遠山の言葉がまるで理解できていないようだ、首を傾げておしだまる。

「ほう！ ほうほうほう！ ふふふ、素晴らしい、本当に腕だけでなく、口も回り、頭も切れるらしい。冒険者しておくのがもったいないと感じるほどにな。冒険者、その質問に答えよう」

だが店主は遠山の言いたいことに気づいたらしい。ニヤニヤした笑いを完全に消して、

「興味深いとしか言いようがない、帝国は今大きな内乱を抱えているわけでもなく平和な状況だ。物流は滞りなく進み、災害に悩まされることなく、物価の乱高下もない、いわゆる平和と呼ばれる状況

だ。このような世相で価値の上がる商品といえば――」

店主が指をくるくる振りながら言葉を回す、そのいきつぎの間に、

「なるほど、贅沢品か。それも承認欲求やらを高める高級品に稀少品。シンプルに手に入れるのが難しくて珍しいものだ」

遠山が店主の言葉の先を予想し、重ねる。すらすらと流れるようにつむがれていた言葉と呼吸がこの時、初めて止まった。

「――失礼だが、君は帝都の学位の人間かね？ それとも商人上がりの冒険者…… 良家の子息…… いや、恵まれた者特有の雰囲気ではない、どちらかと言えば飢えと渴望を知る人間の眼…… 何者だね？」

すうつと、細められる目、飄々としていた態度は消えて残ったのは冷徹に目の前の人物の価値を探ろうとする商人本来の姿だった。

「今日なりたての冒険者だ。決めた、アンタから台車を借りたい。大銅貨一枚、ラザールまだ金残ってるか？」

「あ、ああ。ギリギリだが払うことは出来る」

サラリと遠山が商人の冷たい視線をかわしつつ、ラザールにサイフの中身を確認する。料金を払うことを伝えようとして

「待ちたまえ、気が変わった。無料だ、金はいらない、使ってくれ」

店主が遠山の差し出した大銅貨を受け取らずに、積み重ねた台車を指さした。

「……商人の言うタダは信用ならないぞ、ナルヒト」

「ああ、そりゃ俺もそう思う、でも今回は多分話は別だよ、ラザール

ル。……おっさん、アンタ良い商売考えたな。たしかにこのやり方ならめんどくさがるの冒険者と直接商談出来る可能性が増すわけだ」

にやりと遠山が店主に笑う、似たような笑いを店主も浮かべた。

「ナルヒト、何を？」

急に笑い始めたキモい2人に戸惑うラザール。しかし遠山と店主は互いに、フフフと笑い続ける。

「ふふふふ、やはり気付いていたか。冒険者でなければうちの店員として雇いたいほどだよ。ああ、その通り、しかし勘違いしないでくれ。私は何も強制しない。君たちに願うのは1つだけ、台車を使い終わったあとはきちんと私のところに返してくれるだけでいいさ」

「ん、了解。ちなみに、参考までに聞きたいんだけど、アンタの思うこの平原地帯のモンスターの中で1番これからの市場の目玉になれるのはどいつだ？」

「友よ、平原地帯のモンスター素材は汎用性が高く誰も素晴らしいものだ。しかし、特筆して言うのであれば、2級モンスター、テイ

タノスメヤ。奴の眼と皮は貴族階級の人間にも需要のある高級品だ。少しでも目端の効く商人ならそのような素材を持ち帰る冒険者と懇意になるうとするだろう。ふふ、なに、他意はないけどね」

「ふーん。なるほどね。OK、了解。ありがたくこれ借りるよ」

「ああ、良い狩りを。私は昼まではここにいる。昼以降の返却の場合は、商業区の青空市場にいる、そこに返しにきてくれ」

「おう。わかった。壊さないように気をつけるよ」

「ふふ、幸運を祈る、友よ」

若い男が引いてきた台車を受け取り、遠山とラザールはその店を後にする。

台車を引いた遠山はその軽さに驚いていた。小さな馬車のホロク



らいの大きさなのに、ありえないほどに軽い。

ラザールからの台車交代の声をかわし、しばらく2人は街道を歩き続ける。

平原に渡る風は涼しく、ピクニックにでも来たような気分になる。

「なあ、ナルヒト、一体アンタとあいつはなんの話をしていったんだ？」

ふと、隣を歩くラザールが遠山に問いかけた。

「ああ、悪い、説明してなかったな。なに、俺たちは運が良かった。スポンサー候補を早くも見つけられたってわけだ」

ガラガラと台車を引きつつ、遠山がその問いに答えた。

「スポンサー？」

「ラザール、商人の立場で冒険者との直接取引をしたい場合、一番の障害が何かわかるか？」

「……む。そうだな、……ギルドか？」

「正解。ギルドの立場としてはモンスター素材はなるべく自分を通して卸したい、利益の固まり、ドル箱だからな。だが商人としては正直、まとも取引出来る相手ならギルドを通さずに直接商品を仕入りたい。1円でも経費を節約したがるのは商人のサガだ」

「イチエン？　だがそれとさっきの会話、何の関係あるんだ？」

「ラザール、ギルドマスターとの会話覚えてるか？　冒険者はあまり商人とは直接交渉しないって。なんで冒険者が商人よりもギルドへ素材を引き取ってもらってると思う？」

「ふむ、信用の問題じゃないか？　商人連中は口が回る、冒険者は

正直腹芸が得意な人種がなる仕事でないからな」

「ああ、それもある。だが俺が考えるに、一番の障害、それはな、めんどくさいんだ」

「めんどくさっ？」

遠山の言葉にラザールが聞き返す。遠山が頷き言葉を紡ぐ。

「ああ、ギルドに素材を卸す奴が多いのは恐らくそれが一番楽なんだよ。たしか初心者には”依頼”、ギルドに持ち込まれた仕事からこなすのがセオリーだったな」

「ああ、こんなふうにつけから狩猟を行うのは珍しいだろうな」

ラザールが肩をすくめ、遠山を見る。

「そこだよ、ラザール。つまり真つ当な冒険者はひよっこの頃に慣習づけられるんだ。仕事はギルドが回してくれるもの、仕事の成果

はギルドに提出するものつてな。コツコツ依頼でやりくりしてた奴らが狩獵も狙えるようになった時、その成果をどこに売るようになると思う?」

遠山がレーザーに指を立て、問いかける。

「……なるほど、そういうことか。ギルドだ。新人の頃に植え付けられた慣れを利用するわけだ。……ふ、あのギルドマスター、やはり色々考えてるな」

少し考えた後、レーザーが頷いた。頭の回転が早い奴とする会話は楽でいい。

「ああ、生半可なカシコじゃねえ。人の心理とかも良く理解しているすげえカシコだ。で、あの商人のおっさんはその仕組みに気付いている、気付いた上で冒険者からの直接仕入れが出来る商売の仕組みを考えたんだろ」

基本的に冒険者が面倒くさがりという前提で組まれたギルド優位のシステム。それを自然に運営している事実にあのギルドマスターの有能さが現れている。

「だが、それがどうして台車の賃貸業に繋がるんだ？」

ラザールの言葉はもつともだ。しかし遠山には確固とした確信がある。

「ラザール、あのおっさんの言ってた青空市場の場所と冒険者ギルドの位置を思い返してくれ。何か気付かないか？」

「位置……… 近いな。冒険者ギルドへの道はいくつかあるが、台車を引けるほどの大きな道となるとどうしても商業区の青空市場を通る…… あ、そういうことか！」

ラザールが懐から取り出した地図を眺め、そして急に声を張り上げた。

遠山が頷く。

「気付いたか。その通り、あのおっさんから台車を借りた冒険者は高い確率で冒険者ギルドへたどり着く前に、またあの商人のおっさんと接触する仕組みになっているわけだ」

遠山が台車を引きながら、ラザールに視線を投げる。

「狩りを終えた冒険者が、ギルドより先に会う取引先が自然に出来る、そりゃ全員と取引が出来るわけじゃねえし、そもそも商品的確な仕入れが出来るわけでもない。ただチャンスは増えるわな。気に入った、あのおっさん、きなくせえが抜け目がない。組むんならああいう相手がいいな」

つまり、あの商人は

「抜け目がないのはどっちだか……」

ラザールがため息をつきながらつぶやく、しかし遠山を見る目はどこか嬉しそうで。

「ひひ、褒め言葉と受け取っておくさ。まあ、とりあえず何はともあれ狩りを成功させねえとな、どんな奴がいるんかなー」

遠山はにかりと歯を剥き出して笑い、想像する。異なる世界の怪物、それは一体どのような化け物だろう。

「……やり込んだゲームのダウンロードコンテンツみてえだなあ。  
ヒヒヒヒ、たのしみだ」

遠山もやはり、どこまで行っても探索者。

欲望と夢、それが遠山鳴人の根っこであり、幹。しかしそれとは別に好きなのだ。全てを賭けて怪物と殺し合うその瞬間、そういう生き方が好きだった。

「ふ、頼りにしてるよ、ナルヒト。そうだな、ジャイアンボア辺りが食用にもなってるしいんじゃないか？ 3級冒険者の徒党がよく狙ってるらしいが」

「ふうん、灰ゴブリン的な感じか？ んー、いやでもアイツらグループによっては初見殺しの要素もあるから一概には言えねえか」

「いよおーし、バンバンぶっ殺してじゃんじゃん稼ぐぞー！ たのしそー」

台車が呑気にガラガラと鳴る。ケラケラ笑う遠山に、ラザールが力を抜いて笑った。

「ほんと、頼りになる奴だよ、アンタは」

……

……

…

「驚いたな、まさか冒険者に商売の仕組みを見透かされるとは。少し舐めすぎていたらしい」

奇妙な冒険者2人組だった。

差別種族であるリザドニアンに、南部領では珍しい黒髪の男。

リザドニアンを冒険奴隷ではなく、仲間として扱っていた点もこ



の帝国では珍しい。

商人ギルド所属、ドロモラ商会会長、ドロモラ・グレーメンは台車を引いていく彼らの後ろ姿を見つめる。

まあ、何よりの異質な点は、冒険者という人種らしからぬ観察眼と考察力。成り立てと言っていたからには4級の冒険者なのだろう、しかし、そんなルーキーとは思えない奇妙な場慣れ感。

「店長お、もう青空市場に戻るんですか？　いつもならまだ門の前でカモ、じゃない、貸し出しのためにあそこにまだ残ってる時間ですよ？」

撤収の指示をつけて、王国からの従業員である若い男が呑気な声を上げる。

「ビスエ、早急に商人ギルドに向かえ、先程の冒険者の外見から情報を得てこい」

背後にいる従業員の方を振り向かずに、ドロモラは簡潔な指示を出した。

黒髪の男に、リザドニアン。心当たりがある2人組だ。まさか、という気持ち強いが少しの疑念を無視しない姿勢がドロモラを自分の商会を持つ商人にまで押し上げていた。

「えー、パシリですかあ？」

「馬鹿者、俺の従業員だろうが。業務範囲だ。もしかるとあの冒険者ども、とんだ掘り出し物かもしれん。王国はおるか、この帝国でも俺の商売の仕組みを見抜いた冒険者は初めてだ」

冒険者という連中への認識を改めなければならぬかもしれない。

特にあの黒髪の男、アレはどちらかと言えばこちら側の人間、頭を使って事を成す人間の目をしていて、筈だ。

すこし物騒すぎる気もしたが。

「それ店長の思い込みじゃないです？」

「いや、少なくともあの黒髪は全てを見抜いた上で俺から台車を借りたはずだ。俺が無料で台車を貸し出した意図も全て理解している。ふふ、久しぶりにまともな人間と取引が出来そうだ。残りの台車は丁稚連中に運ばせておく。急げよ、商売は常にー」

ドロモラが商会の社訓を口にして。

「正しく、早く、速く、疾く。わかってますよ」

従業員の男がその言葉を遮った。呑気な部分もあるが、この従業員の聡明な部分をドロモラは気に入っていた。

「ならその言葉通りに急いでくれると助かる。ギルドからの情報を確認したら青空市場の露店に戻れ。必ず、あの冒険者たちが冒険者ギルドへ戻る前に声をかけるぞ。……いや、奴らならあっちから俺たちの元へ戻るか」

「ほっ」

ふと、いつのまにかドロモラの前に立っていた従業員の男が吹き出した。

「どうした、ビスエ」

ドロモラが眉を顰めてその様子に首を傾げた。

「いんやいんや、なに、店長が笑ってるとこ初めて見たなって」

しししと、短く笑う愛想の良い従業員。

「ふん、どうだかな」

鼻息をふんつと、しかしドロモラは顔を晒す。

たしかに、先程の会話は楽しかった。決して言葉に出すつもりはなかったが。

### 31話 生活のはじまり（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを「こ覧くだ  
さい！

＜ 苦しいです、評価してください ＞      デモンズ感

32話 やったね、ナルちゃん、ケツモチが増えるよ

「いや、だみだよ、これは、ラザール君や」

門から数十分、台車を借りてからしばらくほど歩いた場所。

街道から大きく離れた平原のど真ん中、台車をおいてその場にラザールと遠山は座り込んでいた。

へたり込んだ遠山の背中はずすけていた。

「なんだその喋り方は」

「いやいやいやいや、ラザール、なんだあの筋肉イノシシは。アレが本当に冒険者なりたての人間が狩ってもいい生き物かね」

ジャイアントボア。

平原地帯に生息するイノシシによく似たモンスター。割と狩猟の入門的モンスターという情報や、生息数が多いことからはじめの獲物として遠山はそれを選んだ。

選んだのは良かったのだが……

「速い、デカイ、突進オンリー、無理無理、そーゆーシンプルなのが1番めんどくせえ」

結果は惨敗。

遠山とラザールの武装はそれぞれ、キリヤイバ、そしてラザールのナイフ、それだけしかないのだ。

場を整えて、条件を満たすことによって確殺するスタイルのキリヤイバと速攻問答無用で突進してくるイノシシは致命的なまでに相性が悪かった。

「まあ、狩猟の難しさはそういうことだろう。レベルが上がればまともに戦えるかもしれないが、腐っても3級のモンスターだ。真正面からやり合うにはレベルが3ではないと無理だろうな」

同じく憔悴しきった様子のレーザーが項垂れつつ、つぶやく。

なるほど、レベルとやらが上がって基礎能力があのにノシシよりも上の人間にとっての”入門”という意味らしい。

遠山はスライディングやら顔面ダイブなどで逃げ回り草や土だらけのロープをはたきながらレーザーへと話しかける。

「レーザーたしか、2レベだよな」

「ああ、凡人の到達点と言われるレベルだ。レベル3からは明らかになんらかの才能か、試練を乗り越えなければ到達出来ないだろうな」



「3級やら2級の冒険者も平均値がレベル2だったな。そこからレベル3に上がったのが1級やらになるとかならんとか。うーむ、なるほど、はつきりモンスターの方が強いわけだ」

「基本的に狩猟はレベル2の冒険者が複数でトントンだ。例えば3級のモンスターが相手でもな」

「ふむ、ふむ。少し舐めすぎてたな。特にあのイノシシ、あれはダメだ。俺と相性悪すぎる」

「どうする？ 今からでも別の仕事に切り替えるか？ たしかこの冊子では平原地帯に群生している薬草の採取もギルドでの買い取りを行なっていると書いてるぞ」

息を整えつつ、ラザールが提案する。たしかにその方法もありだ。

「というか明らかにアレだ。この世界、人間とモンスターの力量差がデカイ気がする。」

人間と人間もだ。遠山があしらってしげける程度の冒険者もいれば、相対するだけで震え上がってしまうヤバいのもうじゃうじゃいる。

レベルの低い連中などは基礎体力と筋力の違いで、雑にケンカにも勝ててしまいそうなのに、ドラ子やベリナル、そしてあの聖女とやらはどうしようもなさそうだ。

レベル、とやらが違うのだろうか。改めてあの水晶で自分の今の立ち位置がはつきりわからなかったのが惜しい。

「うーん、そうだな。その薬草、探しつつ……　　さて、ラザール、伏せる、何か様子がおかしい」

遠山が思考を巡らせつつ、ラザールの案に賛同……　　した時だ。

がぞがさ。近くで四つ足が草花を踏みしめる音が聞こえた。

反射的にその場にしゃがみ込む遠山、それに続いてラザールもまた同じように伏せる。

「ジャイアントボア、辺りを見回しているな。俺たちに気づいたか？」

レーザーの声に遠山は首を振る。

「いや、それならとつくに突進してきてるはずだ。アレは敵を探してるというより、何かに怯えてるみてえだ」

2人が伏せた辺りから8メートル先、黒色の体毛、突き出た鼻に、短い四つ足、そして雄々しい牙。

ちよつとした軽自動車くらいの大きさのイノシシ、ジャイアントボアがいた。

遠山たちを見つけたのなら鼻息を荒くして、すぐに突進してくるはず。少なくとも先程までに遭遇した個体はみんな同様の反応だった。

縄張り意識が強いのか、その割には奴らは4〜5頭の群れで行動する、軽自動車複数台に追われるようなものだ。遠山とは相性が悪い。

だが、目の前にいる個体は何か様子がおかしい。1頭だけしかない、それに鼻息を荒くしつつ、辺りを見回している。

まるで何かに怯えてー

「ープギ?! プギイイイイイ?!」

「うお、なんだ、ありゃ」

悲鳴、次の瞬間、黒いイノシシに纏わりつくウネウネした太い幹のようなナニカ。

見た瞬間、怖気のたつ感覚を遠山は知っている。爬虫類に似た怪物種と相対した時に感じる怖気だ。

悲鳴をあげるイノシシを襲っているのはー

「蛇、か？　おいおいおい、嘘だろ、アレ、今までまさか平原の緑色に擬態してなかったか？」

蛇だ。

突如現れた大蛇が、大イノシシを襲っている。

必死にもがき、牙を振り回すイノシシ。逃れようとするもダメだ、短い足が草花を散らすだけ、身体は完全に捕食者に巻き付かれた。

既にそれは闘いではなく、狩りだ。太くしなやかな蛇の体がイノシシに巻き付き、締め上げ始める。

「ッギアイイイイ？！！」

獲物と狩人の関係は固まっていた。耳をふさぎなくなる悲痛なイノシシの叫びは、どこか人の声にも似ていて。

「まで、書いてある。平原地帯の北側に群生している森林を住処とする大蛇のモンスター。」ティタノスメヤ”…… 2級の爬虫類モンスター……！ とんでもない大物だ！」

「ほへー、どこの世界でも蛇の化け物はあるんだな。うお、丸呑みし始めた」

みしり、みしり、べきべき。

もうジャイアント・ボアはもがくことすらやめていた。万力のごとく締め付けられたその身体、骨がおしつぶされ、身体の面積を折り畳まれ、蛇に丸呑みにされていく。

尻の方から身体半分丸呑みにされていくジャイアントボア、蛇の口にまだ収まっていない上半身が、びくり、びくりと痙攣している。

生気のない獣の目、それが遠山を見ていた。食われていくモノ、獣の表情はわからないがそこにはたしかに恐怖と絶望があるのだから。

いきたまま食われるその姿、自然のありのままの残虐な光景を遠山はただ眺めたまま。

「……その割にはいやに落ち着いてるな。俺は正直、アンタがここにいなければすぐにでも逃げたいんだが」

「地元にはもつとやばい蛇の化け物がいてな。マザー・グースって愛称がついててよ、唄うんだぜ、その蛇、まあラザール本当にやばくなったらお前だけでも逃げろ。影に潜れば大抵の奴は追いつけねえだろ」

声をひそめ、テイタノスメヤというモンスターの狩りを見つめたまま遠山は静かにつぶやく。

蛇の化け物はその場から動くつもりはまだないようだ。イノシシ

の身体の形に膨れた胴体を地面に寝転がし、舌をチラチラしながら横たわっている。

「馬鹿言つな、その時はアンタを影に引き摺り込んで一緒に連れ帰るぞ」

「そりゃ怖い……………ん？ 待て待て、ラザール、なに、もしかして今影の中に引きずるとか言った？」

ラザールの言葉、遠山が目を剥いて反応する。

「なんだ、冗談だと思ってるのか？ 俺は本気だぞ。アンタ抜きでこの先俺たちが帝国でやっていけるとは思えない」

「ナチュラルにガキどもを身内に数えてるお前のお人好しは嫌いじゃないが、いやいや違う違うよラザールくん。…………お前の影、俺も入れるのか？」

もう一度確認する。それが真実ならば、狩猟において取れる選択



肢が一気に増える。

「ああ、俺ともう一人くらいなら影に包むことは出来…………… ああ、なるほど。……………話し合いとは大事だな」

返事しつつ、ラザールも遠山のしたいことに気付いたらしい。

ラザールはその力を敵から逃れる為に使い続けていた。己の姿を眩まし、影と同化する才能はラザールという人物のものだからこそ与えられたのかも知れない。

遠山鳴人に与えられる能力としては物騒すぎる。

ラザールは影を逃げ隠れるものとして扱う、ならば、探索者は――

「気づいたか。ふーん、ふんふん。ラザール、そのテイタノなんたらの情報、全部読み上げてくれないか？」

「あ、ああ。名称、テイタノスメヤ 等級は2級。昼間は大人しいが夜になると活発化する夜行性。蛇に酷似した姿の爬虫類種に分類されるモンスター。周囲の光景に溶け込むように体色を変えて待ち伏せして獲物を待つ、額にも目を備えており、個体により色の違うその瞳は、加工されて宝飾品としても扱われるため市場において高値で取り引きされている。細かな生態は不明…… とのことだ」

遠山の言葉通り、ラザールがギルドの冊子を広げて読み始める。

「ふうん…… いや、それだけあれば充分だ。蛇、蛇…… 夜行性つつーのは理解出来る、だが分かんねえのは今は真昼も真昼、なのに獲物を捕らえて狩りをしている…… 普通、夜だろ、なんで今なんだ？」

聞いた情報を元に、遠山がそれを整理しやり方を考える。言葉に出しながら不確定要素をはっきりさせてゆく。

体色を変えて待ち伏せするのが狩りのスタイル、なるほど夜ならば余程目のいい生き物ではないと見破るのは難しいだろう。

なら、今、テイタノスメヤが狩りをしている理由はなんだ？ そ

れに本来の生息地は森林とやららしい。

「ここは平原地帯のど真ん中、生息地とされる場所からは少し離れている。そんな場で、待ち伏せー」

「さあな、イノシシがよほど好物なんじゃないか？　すごいな……丸呑みにしちゃった。どうする、ナルヒト、獲物を飲み込んで鈍重な今なら好機ではないか？」

思考を続ける遠山ヘラザールが声をかけた。その線もあり得る、好物を求めて生息地から離れた場所で狩りをする怪物種も、珍しくはない。

「いやまで、昔、似たような怪物をやった時、その判断で2人死んだ。普通の蛇なら獲物を飲み込んだ直後なら大チャンスだが、アレは化け物だ。もうすこし慎重にいきたい」

怪物種17号ハイイロヘビ。

割と活発に動く蛇の姿の現代ダンジョンに巣食う怪物種。亜生体

の討伐でも割と人が死んでいるイメージがある。

遠山も一度締め付けられて殺されかけた経験がある。爬虫類の形をした怪物種は厄介だ。

まともな人間はどうしても爬虫類系の化け物と相對すると身がすくむ。それは原初の祖先たちの捕食者への恐怖の記憶からだろうか。

油断も侮りも一切ない。遠山は狩りの標的を決めていた。

「ではどうする？ あれは諦めて別の獲物を狙うか？」

「……んー、いや、すこし考えがある。ラザール、少し待ってもらえるか？」

「ああ、なにをするつもりだ」

「ん、まあ、気休めなんだが、よしよしこの辺の土は湿ってんな。

よっと」

おもむろに、遠山が地面の草をむしる。荒々しく湿った土ごとむしった草花を体にまぶし始めた。

「……ナルヒト、なにをしている？」

「泥塗ってる。怪物といえど蛇の形をしてんなら蛇と同じ生態機能を持っててもおかしくない。お前の影を信用してないわけじゃないが、これが一番早い」

湿った土を掬い、ぐちゃぐちゃと手のひらでかき混ぜて顔や首にぬりたくる。

ラザールは狂人を刺激しないための笑顔を浮かべてその様子を見守っていて。

「んな顔すんなよ、ラザール。ピット器官つつてな。蛇とかトカゲとかには生き物の体温を感知出来る器官が備わってる。泥を塗って体温を誤魔化すんだ。心配するな、俺の知りうる中で最強の特殊部隊の男もこれで宇宙最強の狩人をボコボコにしたんだぜ」

「……またわけの分からないことを。はあ、だがわかったよ」

「悪いな、ラザール」

「いい、気にするな。俺はアンタに賭けてるんだ、今さらこの程度、さ」

ラザールもため息をつきながら、遠山と同じく露出した体の部分に湿った土を塗りたくり始める。

土の匂いが鼻につく。青臭く、鼻の奥に溜まる匂いに遠山はなぜか生きている実感を覚えた。

「まあこんだけ塗りたいくらいにいいだろ。じゃあ、ラザール、俺はどつすればいい？」

泥だらけになった遠山の準備は終わった。

「なにもしなくて構わない、能力を使用した後は自分の身体の輪郭のことだけ考えててくれ」

「輪郭？」

「濃すぎる影は人の形を忘れさせることがあるのさ、まあ、俺がいるからそんなに心配することはない。では、始めるぞ」

「おっ、よろしく」

ラザールが徐に立ち上がり、手を広げた。

そして言葉を、届ける。

それは己に影を歩む運命をもたらした世界の天辺にいるはずのナニカ、高度の情報の集合体への言葉。

――祈り

「フローリア、貴女の外套で我らを包め。我らの足音、我らの息音、そして我らのよからぬ企みは貴女の外套で隠すべき悪徳だ」

「シャドウ・ハイチュー影の導き」

「う、お？！」

闇が、レーザーの手のひらから広がる。視界を一瞬暗く塗りつぶす深い影が遠山を包んだ。

冷たく、涼しい。一瞬で濃い闇は晴れたがしかし、視界は全てがモノクロに染まっている。



空を見上げて、もう、青い空はなく、ただ世界を白黒に染めていた。

「完了だ、並大抵の存在なら俺たちに気づくことは不可能だろう、視界は能力を解除すれば元に戻る、安心してくれ」

「こりやすげえ。ステルス技術やらがバカみたいになるな。外からはどう見えてんだ？ これ」

「影さ、空に浮かぶ雲から落とされる影、路地裏の奥に溜まる影、それそのものになる。この場においては我々は平原の草花の影にか見えないだろう」

「お前それスークとしては反則級の力じゃね」

「ああ、誰かさんに簡単に見つかった時を除いて、影の中の俺を見つけないのは例え塔級探索者でさえ困難だろうな」

「まああれは俺というよりキリヤイバが。まあいいや、これ俺普通に歩いてもいいのか？」

「いや、俺から3歩以上離れると影が落ちてしまっ。ついていこう、あまり激しく動かないようにしてくれ」

「了解、あの蛇の化け物、テイタノスメヤを追う。俺の予想が正しけりゃ、アイツはこれから巢へ戻るはずだ。ヒビヒビ、台車が活用できそうだな」

これ以上ないほど、ワクワクした顔で探索者と暗殺者が蛇の化け物のトラッキングを開始する。

化け物に対する恐怖よりも、その仕留め方を考える愉しさが遙かに勝る。

遠山は知らずのうちに乾いていた自分の唇を舐めつつ、影に紛れて進み始めた。

.....

……  
…

「遠山たちの狩り、それからしばらく経った頃、冒険都市アガトラ”竜大使館”にて」

「おやおやおやおやおや、これはこれは。帝国にとどろく天使教会の優れたる賢人よ。よくきたな、歓迎するぞ」

「……もつたいないお言葉です、偉大なる竜よ」

「この度はお招きいただき恐悦のきわみです」

尊大。そう表現するより他にない態度。

玉座にも似た椅子にふんぞり返り、脚を組んで笑う金髪蒼眼の絶世の美女。

片目を隠した前髪をそつと、長い指が流れた。

「ふむ、よい、くるしゅうない」

3段ほど高い場所から竜が座ったまま、見下ろすのは2人の人間。

帝国唯一の統一宗教、天使教会のトップ、女主教、カノサ・ティエル・フィルドと、第一聖女、スヴィ・カーナ。

竜に呼ばれたのはこの2人。決して触れてはいけない竜の逆鱗に首輪をかけてしまったことについての弁明、もしくは処刑。

カノサは呼吸をするたびに、命が縮まっていく感覚を覚えていた。

もおおお、やだあああ、キョワイ！ 竜の隣にはあの鬼人までいるじゃない、はい詰めましたー！ ヤケになって対抗しても確実に死ぬのが確定しましたー！ おっぴろびー。

恐怖でおかしくなっている内心を少したりとも出さず、カノサは  
恭しく首を垂れる。

聖女のやらかしから、竜への発覚、それが想像以上に早く教会全  
体としての対応も練ることが出来ないまま呼び出された彼女の焦り  
ときたら。

「蒐集竜さま、この度のー」

なんとか、カノサが平坦な声を死に物狂いで絞り出してー

「ふと、昔話を思い出した」

竜の咳きかカノサの声を遮った。

「ー昔、話？」

見上げる、椅子に背中を埋まらせる美しき竜が金色の髪を己の手

櫛でときながら退屈そうに目を細める。

「ひとりぼっちの天使、あらしの天使、……竜に伝わる数多の天使の物語はいつも、嫉妬と執着と破滅に満ちておったわ。他人のモノを欲しがるばかりの嫉妬深いオンナ…… 天使とはそういうモノだ」

竜であるからこそ許される天使への侮辱。

天使教会において唯一絶対の偶像たる天使への侮辱は戒律により禁じられている。だが、その戒律など竜が気にすることではない。

「さすがは帝国に轟く天使教会、貴様らの仰ぐ偶像のソレに倣うとは。信仰心とは恐ろしいものよな、死をも厭わぬ愚行すらためらわぬようになるとは、何も天使のモノマネなどせんでもよかるうに」

心底、退屈、無為であるかのように竜がつぶやく。

隣に侍る執事、鬼が差し出した銀の盆においてある果実を掬い、舌の上で転がし飲み込む。

傲慢な所作、しかし、どこまでもそれはただ美しく、絵画のよう  
なワンシーンで。

「……………スヴィ」

「……はい」

カノサにしか分からない聖女の静かな怒り、それを一言で鎮める。

今は、ダメだ。竜を刺激することはすなわち全ての終わり、竜と  
教会の全面戦争を意味する。

この場で自分たちに来れることはただ1つ、どうやって穏便に死  
ぬか、だ。

「おや、どうした、聖女。天使の祝福をうけたヒトよ。何か、言い

「たいことがあるのか？」

「……いえ。なにも」

聖女、スヴィが竜の問いに端的に答える。あれれれ、スヴィちゃんちゃん、そんな睨むような目はやめなさいよほんと、なんなのキミは、そんな子じゃないでしょ。

カノサの内心の焦りはスヴィには伝わらない。

ダメなのだ、聖女という特別として生まれた彼女は己より強き存在というのをどうも信じていないフシがある。

「な、に、も」

竜が、かくりと首をかしげながらスヴィの言葉を復唱する。



カノサの胃は残念ながら死んでしまった。もう一生お湯しか飲めないかも知れない。

「ヒ、りりりりり、ゆう、我らが蒐集の竜よ、こ、この度は謝罪、謝罪に参った次第です。不幸な行き違いにより貴女の飼いな人と契約を結んでしまったことにつきましては」

シュバッと、聖女ですら反応出来ない速度でカノサは平伏した。頭を上げて立っているとそれだけで殺されてしまいそうな気がしていた。

だが、カノサとてこの街、冒険都市にとどろく権力者の1人。竜とのいざこざもこれまで何度か、その全てを生きてくぐり抜けてきた逸物だ。

その経験からして、なんやかんや竜は人に甘い。きちんとその怒りを理解し、謝ることを間違えなければ――

「か、い、び、と」

「え？」

あれれ？ あれれれれれれ？

すっごい、空気、ねばついて。息が、出来ない。

カノサの言葉を復唱する竜、彼女から広がる圧力が空気に影響したのだろうか？ それともカノサの人間としての本能が生きていることを諦めたのだろうか。

パクパクと口を動かし、必死に呼吸を続ける。聖女、スヴィが必死にカノサの背中をさすり続ける、その感覚すらわからない。

今の言葉の何が竜の琴線に触れてしまったのだ。カノサは苦しみの中で必死に脳を働かせる。

「オレと貴様らの間には認識の齟齬があるようだ。あの男は、オレの飼いつトではない」

「あー」

「あの男は自由だ、あの男は個人だ、オレがそう認めた、オレがその在り方を尊ぶと決めた。あの男はまだオレのモノではないのだ……  
…… ああ、そうだ、尊いのだ。オレの決定に反き、オレの興を超え、オレを殺し、そしてオレのモノにならない、その在り方をオレはとても愉快に思っている」

「何を」

「ス…… ヴイ、黙り…… なさい」

一言一句、竜の言葉を聞き逃すわけにはいかない。竜への認識、それが何か致命的にズレている。

修正しなければ、死ぬ。次また一言でも竜への言葉を違えれば全て終わる。

「あの男は好きに生きるのだ、己の身、定命のか弱き身体に渦巻く”欲望”、それを為すために動き続ける。良いモノとはそれに相応しい蒐集の法がある、アレは手元に置くのではなく隣に立たせる、オレはそう決めていたのだ」

誤った、見誤った。ミス、ミスミスミスミスミスミスミスミスミスミス！

ありえない、そんな馬鹿な。

竜が、人を気遣っている？

個人を認めている、個人の自由を尊び、個人を己が対等な存在として扱っている？

ありえない、そんなわけが。

カノサの知識と経験による竜という生き物への理解からすれば今の蒐集竜の言葉はありえない。

彼ら彼女らは超越者だ、並び立つ者はなく、それを戒めるものも、縛るものもない。

故に、他者との関わり方は限定される。支配、使役、強奪。たまに同盟を組むこともあるだろうが、それはあくまで同じ超越者同士の話だ。

竜は決して人とは並び立たない、それが竜という生き物――

カノサのその考えはしかし、目の前の竜の表情をみたことで打ち碎かれる。

「自由なあやつが見たい、己の内なる欲望のままに生きるその姿こそ、オレの愉しみ、オレの友の姿。貴様らはそれを汚した」

それは、人の顔だ。友人を想い、友人の為に怒るヒトの顔だ。

「あ、う……………」

完全に見誤った。変わっている、変わりつつある。不滅であるが故に不変であるはずの竜が変化を迎えている。

だれだ？　なんだ？　どうやって？

カノサは今、恐怖よりも遥かに大きな困惑の嵐の中にいた。

「許せぬ、見過ごせぬ。あやつのみちゆきにオレ以外が触れるのは許さぬ。オレでさえ、我慢したのだ。本当なら今すぐ欲しいが、我

慢、しているのだ」

竜が竜座に腰掛けたまま、火の息を紡ぎヒトを見下ろす。

シャンデリアの光が彼女の身体を照らす、床に映される影法師はしかし一瞬、ヒトの形ではなく翼持ち、尾を振るう竜の姿に変わって。

「貴様らはあやつに枷を課した。竜の友に、不粹な首輪をつけたのだ。なんたる屈辱、なんたる侮辱、なあ、聞かせておくれ、天使の子らよ」

白磁の顔、深海か、天辺の空の色を宿した隻眼が人を見つめた。そこには驚くほど表情は無く――

「貴様らは竜を怒らせたいのか？」

「…………ツ」

「……………」

息が、出来ない。

肺から空気が逃げていく。空気ですら、ここにはいたくない、そう怖気ているような感覚。

「そう怯えた顔をするな、主教。オレは貴様のことはこうっておるのだ。なに、此度のことは確かに非常に気分を害された。しかし、天使教会全てを滅ぼすつもりはない」

「あ、ありがたきお言葉に」

声を絞れたのは奇跡だ。

カノサは息も絶え絶えに竜の問答に答える。



「よい、その聖女。オレの友に枷を課したその女、その首を貴様が刎ねよ、それで全て終わらせてくれよう」

「……………は、は」

……………やはり。

予想していた代償。竜は人に選ばせるのが好きだ。定命の者がその短い生涯の中で下す決断や、選択を見るのが好きだ。

それがどんなに残酷な選択であろうと、竜はそれを好む。

「どうした？ 何か問題があるのか？ わかるさ、主教。貴様は

弁えている人間だ。正しくオレを恐れ、正しく現状を理解することが出来る人間だ。此度の不遜、貴様の考えでないことはわかっている」

「そ、それは」

選択の時、迷わずそれを選ぶことの出来る人間は少ない。

誰もが強欲な男のように己の信念欲望のままに笑うことが出来るわけではない。

誰もがイかれた男のようにテンションその時の気分のままに挑むことができるわけではない。

誰もが壊れた男のままにその善性生存理由を握りしめることが出来るわけではないのだ。

忘れているかもしれないが誰もみんな、頭がハッピーなわけではない。

「わたしはー」

震える身体、まとまらない思考。それがカノサの判断を鈍らせていた。

「あー 主教サマを、泣かせた」

ふわり、竜の圧が和らぐ。聖女だ、聖女、スヴィ。天使の祝福を色濃く与えられて生まれてきた特別な者。

その秘蹟は生命を癒し、その肉体に宿る剛力は人中を超えている。

スヴィが立ち上がり、竜を睨みつける。その小さな身体に宿る剛力、逆立つ髪の毛、膨らむ鬨気。並大抵の者ならば相対するだけでみのすくむ強者の覇気ー

だが、今は、ダメだ。

それでも聖女は竜には及ばない。この場においては聖女ですら中途半端としか言いようのない存在で。

「轉るな」

竜が、一言。

「ガッ?!」

スヴィの悲鳴、見えなかった。

一瞬で、竜の隣に侍る執事服の鬼が聖女を押さえ込み床に叩きつけた。

「喋るな、オレの許可なしに。そこな聖女。天使と同じく浅慮で頭の足りない獣の仕業だろう。驕っていたか？ それとも絶望的に頭

が弱いのか？ どうして聖女ごときが、竜と並べると思うっ？」

玉座に膝をつき、手の甲に頬を預けて竜が首を傾げる。

「……あ、き、き、き、キギキギが」

き、き、き、き。

スヴィの剛力が鬼を跳ね除けようと軋む。噛み締めた奥歯が1つ、2つ砕けた。

頑丈なロイト石、冒険都市の防壁や、帝都の城の石材にも使われている素材。それをふんだんに使っている床がひび割れていく。

「お嬢様、いかがなさいますか？」

しかし、執事は平然と汗1つかかずに聖女を床に押さえつける。いや汗どころか、顔色1つ変わっていない。

圧倒的な実力差。カノサの予想以上に、教会勢力と竜大使館には絶望的な戦力差が存在していた。

「ふむ、そのまま抑えていよ。なるほど、聖女。天使からの愛を強く受けし異分子。優れているだろうさ、凡百の人間多数よりも、抜きん出ているだろうさ、だが弁えていない、他を抜きん出ているだけで、決して貴様が竜と並び立てるわけではないのだ」

どこまでも、冷たく。

「故に、不遜。その蒙昧、その行動の責は貴様の命を以って償え。主教、はよう」

どこまでも、強く。

竜が人に選択を強いる。

「……………主教さま、竜の言葉通りに」

頂垂れる聖女、ぐったりとその小さな身体を投げ出して。

「いさぎの良さは認めよう、そろ」

からん、からん。

どこからか現れた剣がカノサの足元に放り投げられる。

銀色に輝く刀身に、カノサの見開かれた目が映り込む。

「あ、……………え……………」

ふらつき、身体の痺れを覚えながら、カノサが剣を拾った。

やるべきことは、1つ。選択肢も、もはやなく。

「主教サマ……」

己の右腕。敵ばかりの世界で唯一信頼出来る愚かで、強くて、可愛らしい右腕が全てを諦めたように、ほほえんだ。

首をぐったりと横たえる。

「主教」

竜の言葉は、人に響く。呼びかけは処刑の合図と同様で。

天使教会はこれから代償を払うのだ。竜の怒り、いや、竜を見誤った代償を。



変化を促された竜。それはたった1人の強欲な男の起こしたこの世界への侵略。

手を出すべきではなかった。関わるべきではなかった。竜をすら変えるその人の本質は猛毒と変わらないのだから。

「……………」

カノサが、剣を構える。

「それで良い」

竜が頷く。

「……………主教さま、おてまを」



ー スヴィ、わたしの可愛いスヴィ

走馬灯にも似た景色の中、銭ゲバと呼ばれた女主教、カノサ・テ  
イエル・フィルドの脳裏に最期に残るのは、ちいさなせいじよの静  
かな笑顔でー

限界を超えたカノサ、人間の脳がこの状況を打開するための言葉をひとりでに、主人の許可なく呟かせた。

それはまさしく奇跡。タダビトであればもたらされない、天使に對する信仰を捧げたものだからこそ、舞い降りた天啓――

「え？」

聖女が、間の抜けた声を。

「なに？」

竜が僅かに目を見開く。

「ふむ」

鬼が愉快がに目を細めた。

「試練、試練に、ございますれば。我らの竜。人界と竜界を繋ぐ誇り高き巫女や、御身の関心を惹くかのモノ、竜殺しへの試練です」

アアアアアアアアアア！？！　　もー知らん、もー知らん知らん知らん！！　　アー？！　　やっちまいました！　　やっちまいましたよー！　　スヴィー人犠牲にすれば終わってたものをやらかしましたよー！

い。  
カノサの頭がパンクする。もう自分が何を言ってるかもわからない。

だが、今言葉を止めれば死ぬ、それだけはわかる。

「貴様……………　　抜かしたな」

ほら、激おこですもの。空気が燃え始めている、何それ、バーベ

キュー特化生物ですかー?! ドラゴンしゅーい!!

カノサの頭がハッピーに。それは一時的なものではある、だがもう止まることはできない。

「奴を試すな、奴を測るな、それはオレですら我慢していることなのだ、それはオレの愉しみなのだ、天使教会、貴様らが竜のモノに触る権利があるとでも?」

竜が怒る。カノサは瞬時に竜に対する理解を最新のものへアップグレードする。

つまり、要は、お気に入りのおもちゃを他人に汚されたような感覚、いや、恋人を寝取られた? それとも初恋の相手に好きな相手がいた感覚?

童貞厨がよ、ドラゴンじゃなくてユニコーンの間違いなんじゃあねえのかあ??

言葉に出せば一瞬で消し炭にされるであろうセリフを押し込み、別の言葉へと昇華させる。

「ええ、ええ！ その通り、竜よ。ああ、お許しを、お赦しを乞いたいのです、竜」

追い詰められたカノサが、涙を流しながら竜へ嘆願する。

「もつよー」

その様子を見る竜の目は冷たい。光の届かぬ深海にもその冷たさがきつとあるだろうと感じさせる目つき。

「貴女への愛ゆえに！ 愚行に走った我らを！ が弱く、愚かで蒙昧なヒトの持つ、貴女様への愛を、お許しいただきたいのです」

カノサが叫んだ。

「主教、サマ？」

聖女が、呆然と呟く。

あまりに突拍子もなく、あまりにトンチンカンなセリフ。

セリフなのだが、しかし、これも奇跡か。竜の怒気がわずかに和らいだ。

「……………」  
「おっけよ」

そう、竜。アリサ・ドラル・フレアテイルは割と自分への好意に弱い。



オラッ シュアアアアアア！ 奇跡、奇跡キタアアアアア、  
首の皮、首の皮いんちまい、繋がったアアアア！

最適解にたどり着いた女が、心の中で両手を上げて叫んだ。

女主教は内心の爆発しかねない激情を己の全性能を用いて抑える。

「ええ！ 貴女さまがかのモノに関心をお寄せになるそのお気持ちと同じく我らもまた心を貴女に向けているのです！ 人域の外、この世の柱、超越者すら超えし偉大なる生命！ そんな貴女に焦がれるのです、狂おしく魅せられているのですよ、我らか弱きヒトは！」

「……………ふむ」

竜の眼は嘘を見抜く、ゆえにここでカノサが語るのは本心。竜と  
いう存在への本心からの憧れ、敬愛。それを間違はなく彼女は持つ  
ていて。

それをヒトの叡智による弁舌で料理する。

回れ、舌や。

うごめけ、脳や。

ここで働かねば二度と金貨を磨き、それを肴に酒を飲む時間は訪れぬと覚悟しろ。

カノサは自分で自分に鞭打ち言葉を弄する。それもまた一つの竜へ立ち向かうヒトの姿。

「貴女の言う通り、嫉妬にございます。貴女、理解の巫女の関心を独占するかの竜殺しに我々はやいているのです、貴女の視線、貴女の声、それは今、帝国でななくかのモノに向いている、ああ、だからこそ、我らは愚行を為した！ 貴女の竜殺しに近づけば、貴女が我らを見てくれるのではないかと！」

「ふむ、なるほど」

頷く竜、大袈裟に天を仰ぐ女主教、呆然とする聖女に、笑いを堪える老執事。

「嗚呼、だからこそ、我らはこれに満足です！ 蒐集竜よ、貴女は聖女一人の首で御許しになられると仰った！ いいえ、いいえ！ 足りませぬ！ 私も、この聖女、スヴィと共に焼いてくだされば！ 貴女の関心、敵意だろうとそれを少しでも独り占め出来る時をいただけたのならば！」

ここは今、カノサのステージ。

「し、しゅきょー」

「ー」

何か言おうとした聖女スヴィを目で黙らせる、あまりにも血走り余裕のない死地にて躍るカノサ派聖女の言葉を自力で止めた。

「つまり、貴様、オレの気を引きたいがためにこのようなことを？」

「愚かなことでした」

「オレが怒ることも理解した上に？」

「その怒りすら、ああ、我らには得難いものです」

つらつらと語られる言葉の数々。一歩でもミスれば消し炭のたのしいデスクゲームをカノサは踊る。

「そうか、なら、望み通り終わらせてくれよう」

竜が目を細める、ああ、そうだ。こつこつ生き物だ、こつこつ存在だ。

己の舌で言いくるめることが出来る簡単な存在ではない、そんなこと百も承知。

熱が、炎が。

ヒトの女の形を象るその姿、その中に押し込められている竜の力が、天使の教えを守る人間2人に向けられる。

竜の力の前に這いつくばる聖女、その炎と熱、死を前に呆然と立つ主教。

「主教サマ……」

女主教の剣、竜に手折られた剣が力なくつぶやいて。

「シャコラ、スツゾコラ」

女主教は唇を噛んで、独特な心から湧いた鼓舞の声をつぶやく。

少し自分の人生を思い返して、笑う。

ある男は、その身に蠢く欲望と、キリの力を宿すイレギュラーを用いて竜に立ち向かった。

カノサは身に余る天使の奇跡と、やけっぱちのド根性で竜と相対する。

ヒトは誰しも武器を持つのだ、時に竜をも殺す毒を誰しもが持ちうる。

それこそがヒト、可能性の生物最大の武器にして、狂気――

女主教は賭けに出る。やけっぱちの自暴自棄でもなければ決して  
言えない言葉。

だが、カノサは知っている。死に1番近い場所でこそ、生は光輝  
くことを。

だから、覚悟してその言葉を言うー

「あーあ、竜殺しも大したことなかったなー」

心底、つまらなさそうに。

カノサは、竜の逆鱗に再び触れた。むしろビンタだ、竜の逆鱗を逆撫でするのではなく鼻くそほじった手でビンタをかました。

「ー今、なんと？」

竜の周囲に満ちていた熱、それが揺らいだ。

あまりの言葉だったのだろう、予想だにしない言葉だったのだろう。

だからこそ、竜はポカンと口を開いて固まった。  
戸惑い、それが竜に現れて。



「ああ、白金貨50枚の契約、たしかに凡百の人間であればそれは生涯をかけても手に入れることの困難な金額でしょう」

プリジ・スクロールの契約内容。聖女が竜殺しと結んだ懲罰規定  
つきの契約を女主教がつぶやく。

言っただ、言っただ、言っただでもーた。もう止まらない、止められない、その困惑が怒りに変わる前に、カノサは舌をフル回転させまくる。

ここからが、正念場。

「ですがかのモノは”竜殺し”、人でありながら、人を超えず、人のままに竜を殺したまつろわぬ者。ああ、残念だ。であるのに竜は、彼をその程度のものと考えていらっしやる。白金貨50枚も集められぬ程度の実力しかない」と

「……………」

「スヴィ、聴かせてちょうだい。貴女は何故、竜殺しと契約を結ばせたの？」

これも賭けだ。スーパード天然のこの子に腹芸は期待していない。だが、だからこそ使える方法もある。

「……それは、尊かったから、です。ヒトの死を、ヒトの終わりを見つめ、静かに送るその姿が、主教サマに似ていたから……」  
「だから、助けました。だから、契約を結んで貸し借りを、なしに……」  
「天使の教え、対等を尊び、契約をかわしました、それとー」

それは心の底からの真実。

竜もそれを理解したのだろう、スヴィの言葉を遮ることはしない。

「ああ、その通り！ その通りです！ 全ては愛！ 竜殺しの力を、我ら天使教会は認めております、竜殺しの行く末を見届けたい、その姿、その有り様を我らは肯定しているのです！ ああ、光栄です、

竜が彼の力を信じぬゆえに、竜が彼を庇護するゆえに、我らは貴女の関心を引けた、それで滅ぶのなら本望です」

何が続けて言おうとしたスヴィの言葉に被せてカノサがクルクル廻りながら、竜へ手を広げる。

「いかように、この生命、貴女の意味のままに。我らの竜。貴女の庇護下に生きる竜殺しにも、溢れんばかりの光がありますように」

そして、思い切り微笑む。本人は最高級の美しい笑顔のつもりだったが、この場にいる者には狂人の微笑み以外の何者でもなかった。

「.....」

竜が、ついに、押し黙る。

「主教サマ……」

「静かに」

カノサがダンスの決めポーズのまま、聖女の言葉を遮る。やるべきことは全てやった。これで死ぬのなら仕方ない。

奇妙な満足感のなかに、カノサはいて。

「……………ふむ、ベリナル、どう思っ？」

竜がふと、聖女を抑え続ける執事に問いかける。

「失礼ながら、お嬢様の完敗かと。ここで彼女らを処断すれば、彼女の言葉が真実であるとお嬢様本人が、お認めになられたことになりますな」

くくく、喉で笑いながら執事が答える。

「ふむ、ナルヒトがオレの庇護下にある、というのか？」

「ええ、それと、かの者の実力をお嬢様自身が信じていないことにもなりますな。白金貨50枚も集められぬ程度の人間であると認められたことにもなります」

「ふむ、たしかに」

「加えていうのなら、彼女たちは見事、竜の関心を引き、竜への愛のために滅んだ者として記録されましょう。竜界にもそのように伝わることになります。ふ、一本取られておりますな、既に」

「ふむ、そうか」

「そしでいじめます」

淡々と問答を続ける主人と従者。小気味の良い信頼がその会話に浮き出ていた。

超越者同士のただししい同盟の姿。竜と執事はまるで聞き分けの良  
い孫と、聡明な祖父のように会話を続けて。

「面をあげよ」

「はっ」

「はい……」

カノサが汗まみれの顔をあげる。

執事の拘束から解き放たれた聖女がすぐさまカノサに寄り添い同  
じく膝について顔をあげる。

「見事。女主教、オレの前でホラを吐き、舌を回せたこと、褒めてやる」

「ありがたき」

「気が変わった、オレの竜殺しへの愚行、それを償う方法は貴様らの生命ではなく、別の方法で返してもらおう」

「……いかようにも！」

奇跡は成った。ふつつつと湧いてくる歓喜をカノサは抑える。

「ふむ、その言葉に異はないな？」

「は、勿論です」

だからだろうか。カノサは気付かない。竜がどこか笑いを堪えたかのように首を傾けて、瞳を猫のようにぎらつかせたことを。

「では1つだけ。これから奴がこの街に、そしてこの国に起こすだろう数々の騒動、その後始末を貴様ら天使教会の主命とせよ」

「そ、騒動？」

「アレは異物だ。湖の水面に波紋をおこすもの、完成したものを壊すものもあり、凝り固まったものを進める者でもある。ああ、色々考えていたのだ。あまりオレがでしゃばりすぎるのを奴は嫌う。だが何か手助けはしたいものなのだ、友、だからな」

カノサと、スヴィはしばし、ぼうっとした。

生物的には同じ女、同性であるはずの、竜、竜の巫女、蒐集竜の”奴”のことを語る顔が、あまりにも――



「ゆえに、天使教会。冒険者、トオヤマナルヒトの庇護は貴様らがせよ。表立ってする必要はない、契約が貴様らを縛る間、奴を見守れ、此度のことはそれで不問とする」

「お言葉……まこと、まこと、ありがたく」

「ありがたきしあわせ」

シャアアアオラアアア！　勝った、勝ったわよおおお！

庇護、騒動の後始末？　もうなんでもやりますとも！　そんなもの、いくら竜殺しと言えど個人だ、人間だ。

たか．が．知．れ．て．い．る．。

竜との約束は、口約束と言えどプリジ・スクロールに匹敵する絶

対契約に近い、しかしどう考えてもこれは儲けものだ。

個人の庇護と、少しばかりの便宜で竜との全面戦争を回避出来た。

出来過ぎだ、さすがわたし、日頃の行いが全てなのだ。よっしゃ勝ったな、風呂入ってこよ。

カノサが心の中で花びらを振り撒きながら踊り始めていたその時だ。

「失礼致します、お嬢様。今、走り狗からの報告であの方にトラブルが発生しているようです」

竜の隣、空間が歪んだ。ぐにやりとガラス細工の成形段階のように歪んだ空間からひよこりとメイドさんが現れた。

隣にいるスヴィが僅かに息を呑むのがわかる、あのメイドさんも

また聖女をすら戦慄させる存在なのだろう。

カノサはしかし、どこか他人事のように超越者同士のやりとりを見つめる。

「いやー、いやいやいやい、もう余裕っしょ、これ以上はもうないっしょ、勝ちっしょ、アザアザのアザス。」

比較的調子に乗りやすいカノサの脳内に冷静さはない。少しでも冷静になれば恐怖で死んでしまいそうだからちよつどよかった。

「む？ ファラン、よい、許す、話してみよ」

「現在、商業区にて4級冒険者トオヤマナルヒトと、天使教会騎士団、”第一騎士”が戦闘中とのこと。東門での門兵殺害にトオヤマナルヒトが関与していること、また2級モンスター、テイタノスメヤ、4級冒険者ではどう考えても狩ることの出来ないモンスター素材を数匹、商人に持ち込んだことによる冒険者殺しの疑いがかけられているようです」

「……………エッ？」

不穏な、言葉。思わず身体が飛び跳ねた。

ン？ 第一騎士ってあのイノシシバカ？ 脳みそが多く見積もってもスプーン大さじ1しかない戦闘バカ？

おやおや？ あれね？ なんか空気変わってきたぞ？

カノサは額に大粒の汗が浮き出ていることに今、ようやく気づいた。

「かかかか、早速やらかしおったな、ナルヒトめ。良い、面白いやつよ」

どこまでも愉快げに、そしてわずかに熱を帯びた竜の声。ナルヒト、そう呼ぶ声は今まで一番高い声だった。

「いかがいたしますか？ お嬢様。第一騎士相手にかなり善戦してらっしゃいますが、時間の問題かと」

「かか、安心せい、ファラン。つい今しがた話がついた所よ、のう、女主教」

「……………ア、ハイ」

「そういつことだ、では1つよろしく頼む。穩便に、オレの友を救い出せ。頼んだぞ、天使教会よ」

「……………（問題起きるのが）早ない？」

呆然とつぶやく女主教。

その不遜なる言葉にしかし、蒐集の竜は長い金髪を揺らし、愉快げに喉を鳴らしていた。

32話 やったね、ナルちゃん、ケツモチが増えるよ（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください  
さいー！

< 苦しいです、評価してください > デモンズ感

レビューや感想ほんとありがとうございます！ 助かります、更新  
し続けますので完結までよろしく願います。

## 捕食者の狩り

……

……

……

くそして時は戻り、冒険都市近郊 平原地帯北部の森林にてく

ソレは違和感を覚えた。

1263

ソレにとって今日は良い日になる筈だった。土は湿っており、風はそよぐ。天高く雲が空を泳ぎ、日差しは柔らかく。

おまけに狩りはこれ以上なくうまくゆき、大物を丸呑み、お腹も一杯、文句なし。

それでもソレは違和感を覚えた。



「.....」

振り向く。

何も、いない。エサやテキの中には身を隠すのが上手いのもいることをソレは知っている。

だが、身を隠してもソレには無意味だ、ソレは生まれた時から己の体の性能を知っている、色を変えても暗がりにも潜んでも、ソレはエサやテキの居場所がわかる。

あたたかいのがわかる、そこにエサがあることをソレは卵から這いずり出した瞬間に知っていた。

「.....?」

もう一度、振り向く。

何も、いない。見えないし、ミエナイのだ。だから何もいないはず、ソレは自分の違和感を気のせいだと結論づけた。

地面の温度が下がった。照りつける日光はソレの住処である森林のけやきたちに遮られる。

「……………」

ソレには家族がいる。

まだ狩りに出られぬ、卵から出たばかりの幼い個体、そして共に家族を支える伴侶がいる。

未だ腹の中で消化しきれぬ大物、これをまず半分吐き出して伴侶に授ける、そして残りの半分を幼体、子供たちへ分け与える。

「……………」

穴蔵。ソレが身を振り、父母へ作り方を教わった己の巣へ身体を忍ばせる。

地面を掘って、地下に広がる空間はソレの家、狩場にも繋がっているセーフハウスでもあり、中継地点でもあるのだ。

「  
」

「  
」

「  
」

家族がいた。ソレの群れがソレの帰還を歓迎する。

ソレの群れは皆、肥えて体も大きかった。ソレが狩りを得意とし

ていたおかげだろう。

才能があつた。無慈悲で、残酷で、強靱で、的確だつた。

エサ、平原の黒い牙をもつたヤツ、ちいさい茶色のけむくじやら、すばしこくてつかまえるのが楽しいヤツ。

テキ、空を飛ぶ大きなヤツ、牙と爪を持つ四つ足のヤツ。

エサとテキ、両方。

二本足のきみようなサル。弱いヤツと強いヤツ両方いる。弱いヤツはエサで強いヤツはテキ。

ソレはその二本足のサルの弱いヤツを殺すのが好きだ。

狩る時にわざと、すぐに仕留めないことがある。ソレの鱗と筋肉で覆われた身体でゆるゆる絞め殺すのが好きだ。

弱いヤツの爪は弱い、ペシリ、ぱしりと締め付けるソレの鱗を削ることすらできず、それにパニックになって騒ぎ始めるのを見るのはとても面白い。

タスケテ、オカサアーン、オトウサーン、テンシサマー。しめ殺している最中、似たような鳴き声がか細く消えていくのを聞くのも好きだ。

大口を開けて、今から呑み込むぞ、食い殺してやるぞと脅かすと身体中から余計な水分が消えて食べやすくなるのも好きだ。

「  
」

伴侶がソレに尻尾を絡めてくる。美しい伴侶、ここらの縄張りでは一番美しく、強い子どもを産むメスだ。何匹ものオスと取り合いをして手に入れた自慢のメスだ。

「  
」

「  
」

「  
」  
エサとテキ、その全てに勝利してきた。奪い、殺し、手に入れた。  
きた。

ソレは今、絶頂の中にいた。数多の血を流し、肉を食らい、生命を乗り越え、勝利し、たどり着いてきた。

これからもそうだ。自分はずっと奪う側なのだ。ソレは信じて疑わない。

強者としての立場、生命として、捕食者の地位、それはこの先も永遠に続くものだ。と本気で信じ込んでいた。

明日は何を狩ろうか、そうだ、久しぶりにサルを狩りたい。弱いヤツがいい、メスがいい。肉も柔らかく、飲み込むときの喉越しも絶妙、そしてなにより、鳴き声が素晴らしい。

殺すのはたのしい、狩るのはたのしい。

「……………」

ソレは紛うごとなない強者である。生来の捕食者<sup>プレデター</sup>ある。

その体の機能は狩り殺すために遺伝子により設計されている。

その心は狩りを好み、残酷で、冷徹であった。

ソレは強く、しかし、少し強すぎた。テキはいた、しかし命を懸けた戦いはなく、あぶなげなく勝利を重ねてきた。

重ねてきてしまった。

故に、ソレは知らない。

己より狡猾で、己より、残酷で、己より、冷徹な生き物のことなど想像すら出来なかった。

ああ、そつだ、想像できなかったのだ。自らを脅かす外敵を認識することすら出来なかった。

それが、ソレとソレの家族の運命を決めた。

「……………?!?!」

まず、体の小さい子が死んだ。突如、身体から血を噴き出し、身体の中から切り刻まれて死んでいく。

少しでも想像するべきだった、己よりも優れた捕食者の存在を。

「?!?!?!?!?!」



次に、伴侶が悶え苦しみ始めた。身体から血を流し、半狂乱になった伴侶が穴蔵から、何より安全な筈の家から抜け出す。

嗚呼、しかしそこは死出の道。出口に待ち構えるは、影の外套に身を潜め、知識による業によって全ての準備を終えている捕食者の狩場。

『アアアアアアアアアアアアアアアア？！！？』

ソレにしかわからぬ伴侶の悲鳴が、外から聞こえる。その悲鳴、鳴き声はまさにソレがよく聞いていた鳴き声だ。

獲物が、最期にあげる情けない断末魔――

「?!!!!!!」

いたい、くるしい、いたい、張り裂ける、裂ける。

そして、最期に残ったソレへ、捕食者の牙が突き刺さる。嗚呼、なんとあつけない。生来の強者であったはずのソレは痛みと恐怖の中、安易に伴侶と同じ選択をした。

住処を抜け出し、地上へ、出口へ。

逃げたのではなく、炙り出されたこと、それすらに気づくことはなく。

『トトトトトトト、いらっしやい』

ソレは声を聞いた。穴蔵から出る最中、出口から響いた声を、確かに聞いた。

サルの声、しかし、今まで聞いたことのない声だ。

恐怖でも、絶望でもないその声。

出口にて待ち構えるだろう、どこか楽しげな捕食者の声を、ソレは聞いた。

『殺せ、キリヤイバ』

とても、冷たく、とてもたのしげなその声。

ああ。

生まれて初めてソレは、被食者の恐怖を最期に知った。

捕食者の狩り（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを「こ覧くだ  
さい！

### 33話 バカが空から降ってきた

……

…

「アアアシャアアアアアアアアアアシャア!!?!?!?」

「ヒヒヒヒヒヒ!! フィューシュ!! 2匹目エエエエエエエ  
!!」

穴蔵から飛び出た巨大な蛇の化け物、2級モンスターテイタノス  
メヤ。

炙り出しは成功だ。危険を込みで巣穴に腕を突っ込み、キリヤイ  
バを流し込んだ甲斐がある。

「シャアアアア!？」

穴蔵から身をよじり、瀑布の如く這い出るその巨体。蛇の化け物が外敵を、遠山鳴人の存在を認識した。

口から青い血を吐き散らしつつ、蛇の化け物が外敵に向かって身体をもたげ、口を開いて叫びを放つ。

常人であれば、気を失ってもおかしくない光景、自らを容易に締め殺せるだろうその体躯、狩りに最適化したその進化。

モンスター。人間の上、食物連鎖の上に存在するもの――

人間よりも強く、人間を喰らう生命。両者の関係はシンプルな弱者と強者のはずでいて。

「おっ？ 気合い入ってんなこいつ!」

しかし、ソレを無視するものが人間の中にはいる。

力、知性、精神を武器として携え、自らよりもはるか上の生命に立ち向かうものがある。

現代において、怪物に挑むものは探索者と呼称されていた。

そしてこの世界においては――

「ヒヒヒ、キリヤイバ」

探索者  
遠山鳴人が、化け物を目の前にして嗤った。

冒険者  
遠山鳴人が、化け物へその見えざる牙と爪を向けた。



「シャアアアアアア！」

牙を剥く蛇の化け物。遺伝子が殺す為の形を象り、強きものとして存在する生命はしかし、まだ死なぬ。

身体の中身をキリに刻まれようとも、その身に宿す膨大な生命の力はまだ潰えぬ。

「うおっと?! タフいなこいつ!？」

上から噛み付いてくる蛇の一撃。

遠山が地面に滑り込みながらそれを躲し、森の中を駆け出す。このモンスターの狩り方は既に組み立ててある。

遠山には、人間にはモンスターのような機能はない。爪も、牙も、

鱗も、その身体に生命を殺す為の機能は元々備わってすらいない。

「シャアアア！…… アアアア？！」

ぼた、ぼた。青い血を蛇が吐き続ける。そう、人にはモンスターのような戦うための機能など存在しない。

人とモンスターには生命としての歴然とした差が存在する、なのに――

「手加減しすぎたか。本気だとぶり返しがやべーんだよな」

なのに、今、嗤っているのは人の方だ。狩りを楽しんでいるのは人の方だ。

「シャ……アアア……！」

蛇の化け物が命を振り絞る。

巨体を震わせ、森の合間を駆ける人を追う。人などエサのはず、人など食料のはず。

なのに、その巨体は遠山鳴人を捉えることは出来ない。

木々を盾に、時には地面に躊躇いなく飛び込み、蛇の攻撃を遠山がかわし続ける。

「うおっと！ 今のはやばかった！」

紙一重。

蛇の巨体が遠山目掛けて一直線、シンプルな速さはあともう少し

で遠山を捉えていた。蛇の化け物はそのまま大きな幹に頭から突っ込む。

木が揺れる。大きく開かれた蛇の顎が木の幹を啜え込んでいた。みしり、木々が軋む。

「シャ…… は、グア」

「いやー、蛇の癖に噛み付くのかよ。さすが化け物、なんでもありだな」

どの攻撃も、蛇の化け物のどのような動きも当たればタダでは済まない。今、遠山が生きているのはたまたま蛇の化け物の攻撃をかわし続けることが出来ただけだ。

なのに、嗤う。化け物は、笑えない。

その身に仕込まれたキリが体の表面を傷つけずにじわり、じわりと身体を内側から切り刻み続ける。

「シャア……アアアアア」

蛇の化け物が木の幹から顎を外す。突き刺さっている牙の跡、人間など一撃で串刺しだろう。

「ああ、いい位置だ」

それでも、遠山は笑い続ける。ソレが化け物と理解していても、ソレの攻撃を一度でも喰らえば多分死ぬことを理解していながら、狩りを。

化け物との殺し合いを愉しむ。

「……」

人という生命、その種としての恐ろしさとはなにか。

知性？ 凶暴性？ 団結力？ 持久力？

そのどれももあり、どれもでない。

人類という種の持つ最も恐ろしき特性。

モンスターの跋扈する大地にて彼らを惑星の支配者たらしめたものは何か。

――多様性

人というか弱い生命、その中からたまたまソレらは現れる。

ソレらは多数の人が恐れ、逃げ惑うモノに自ら近づく。

死と危険、しかしその中でのみ見出せるモノがあるとして、ソレらは危険を冒すのだ。

才能か、成り行きか、意思か、偶然か、運命か、気分か、欲望か、善性か。

理由はそれぞれ。しかし必ず、人が生きている以上彼らは必ず現れる。

群れの中から脱却するもの、未知に挑むもの、試練を望むもの。

怪物と戦う者。

ああ、要は――

「シャ?! アアアア?!」

「身体は傷付けねえよ、お前らの鱗やら皮は高く売れるらしいからなあ!」

キリヤイバ、出力増加。自分が倒れず、しかし確実に相手の生命を蝕む強度へ。

ーイかれた奴らは必ず現れる。恐怖を、理不尽を、危険を、それら全てをもともせず、笑いながら進む者。

そんな連中が常に、人類の殻を壊してきた。

人の中にはそんな連中が確かに存在する。そして、遠山鳴人もまたそんなイかれた連中の1人だった。



イかれた男が、叫ぶ。

「ラザール！」

そして常に、人間という種の段階を進めたのはそんなイかれた奴らだ。

毒があると知っていながら美味いという理由だけで毒魚をも喰らう、そんな奴らが必ず現れる。

ソレが人類の恐ろしさ。上位生物の存在するこの世界においてなお、繁栄する種族たる所以。

そんな連中をも孕み、存在を許す。

おぞましい多様性。それこそが最も繁栄した種族の恐ろしさ――

「既に」

影に愛された男が、音もなく樹上から舞い降りる、構えるのは市販品の太刀のナイフ。

三日月のように湾曲した刀身を逆手に構えて影が落ちた。

「シャ?! ア……」

アンプッシュ、忍殺。

遠山鳴人にしか注意を向けていなかった蛇の化け物、その頭に深々と突き刺さる刃。

「フン、又!!」

ラザールが身体を捻り、刃を挟り込ませる。蛇が身体を大きく震わせ、そして3つある瞳を見開き叫び、すぐに力なく地面にその身

体を沈めた。

「おみごと、ラザール」

「アンタこそ、まさか本当にテイタノスメヤを2頭も狩ってしまったとは……」

「まあこれが相性の差ってヤツだな。イノシシを獲物とするコイツらは俺にとってとても相性の良い獲物だった、でもイノシシの化け物には今の俺ではこんな簡単には勝てねえ。生態の違いで、狩る側と狩られる側が簡単に入れ替わるのが恐ろしいところだよ」

1 匹目の蛇の化け物はキリヤイバの使用だけで仕留めた。

2 匹目の体の大きな個体は事前の打ち合わせ通り、仕留めきれなかった時のトドメとして樹上に潜んでいたラザールの一撃により終わらせた。

「……アンタ、怖くないのか？」

「あ？」

ラザールの静かな問いかけに、遠山が首を傾げた。

「オレの影があつたとはいえ、テイタノスメヤの巢の入り口に腕を突っ込んだり、あまつさえ飛び出してきた連中の真正面に陣取ったり……　なぜ、そんなことが出来る？」

ラザールの縦に裂かれた瞳孔が遠山をじっと、見つめている。その声色に込められた感情を遠山は察した。

怒っているような、恐れているような。

ああ、やはり、ラザールはいいやつだ。遠山は真面目にその問いに答える。

「んー、いや、怖いよ、普通に。コイツらは紛うことなき化け物だ。俺たち人間と違ってその身体全てが殺すこと、狩ることに特化してやがる。コイツらにとっては殺すことがすなわち生きることだからな、コイツらが強者で、俺は弱者だ」

「だったらなぜ……」

「え？ だってそうしないと殺せねーじゃん。巢に腕突っ込んだのは俺の仕込みを素早く完了させるため、真正面に立ってたのは、ラザールのトドメの一撃を確実にするためと、キリヤイバの威力を底上げするため。まあやっぱ距離が近い方が確実に殺せるんだよ」

ケロツと遠山は心のままに答える。今回の作戦ではそれが一番効率が良かった、そしてソレは充分にリスクとリターンが見合った行動だった。

「……フ、俺には化け物よりよほど、アンタのが怖いよ」

ふにやりとラザールの雰囲気や和らいだ。ため息を吐き、近くの木の幹にもたれかかる。

「あー？ いやどう見ても化け物の方が怖いだろ？ ほら、みてみるよ、この牙に、この筋肉。こりや締め付けられたらマジで人間なんかぺちゃんこだな」

生き絶えた丸太よりも太い蛇の胴体を遠山がパシパシと叩く。恐るべき筋肉の固まり、ヒトの身体がいかに脆弱かを思い知らされる。

「頼りになるヤツだよ、ナルヒト」

「いや、ラザール、あんたもやつぱやるな。木の上からの一撃、見事だよ、俺に出来るかな……」

「まあ、不意打ちは得意でね、こんど時間があつたら少し教えようかい？」

「マジ？ 頼むわ、戦闘技術はいくら学んでも無駄にはならねーかなー」

「ああ、さて、じゃあコイツらを積み込むか、台車に載ればいいが」

「ああ、かなりでかいな。まあ台車も何故かそこそこでかいの貸してくれてるしなんとかなるだろ。てか、この台車、マジで軽すぎてビビるんだが」

「王国の木材を使っているんだろう？ 頑丈で軽い種類がほとんどだ。特に樹海から伐り出された木は特殊なものは変わったものも多くてな。ひとりで動き出す木材や、地面から浮く木材なんてのも」

「何ソレ怖い」

なんだ、その面白木材。遠山はファンタジー的な世間話を聞き流しつつ、大きな獲物の運搬にとりかかる。

日は高く、しかしそよ風が涼しい。日差しから守られたけやきの中、冒険者たちが荷運びを進める。

遠山の冒険者としての一日はまだ、続く。

……  
……  
……

「ほんとに軽いな、この台車。だが、アレだな、獲物の重さと大きさを考えればよかった」



「あ、ああ、ほんとにその通りだよ、ナルヒト。アンタがいなければ台車を引くのも無理だった、ろくな」

仲良く台車をひきながら息を切らす遠山とラザール。

森林の道をゴリゴリと車輪が音を鳴らして進んでいく。なんとか気合いで2頭の仕留めた蛇の化け物を台車に詰め込めたものの、やはり運搬はなかなかキツイ。

「重い…… 100キロ以上ありそうだし…… この台車じゃなけりゃ運べてもいねえな。タイヤもスプリングもないのになんだこれ、チートか？」

「タイヤ？ スプリング？ くそ、重い…… だが、休憩しながらだとなんとか街まで帰れそうだな」

「ああ、筋トレの1つとして考えようぜ。キリヤイバの全力使用控えて良かったぜ。本気出してたら今頃ゲロゲロでー ラザール」

遠山がすっと、表情を消す。

疲労した様子を隠すように瞬時に息を整え、足を止めた。

「……ああ、つけられてるな。数は恐らく5人。装備は軽装備が殆ど…… チツ、弓を持つてるのが3人」

レーザーも同じく、一瞬で息を整え目つきを鋭くした。

2人はほぼ同時に気づいた、尾けられている。確実に、不特定多数の人間が遠巻きからこちらを尾行している。

「すげえな、数と装備までわかんのか。下手くそな尾行だが、人数まではわからなかったな」

遠山がわからなかった人数までレーザーは把握していた。なるほど、”斥候”という役割はかなり重要らしい。

「二手に別れた…… 2人、正面…… 3人、背後、出てくるぞ」

ラザールが目を瞑り、静かにつぶやく。

次の瞬間、軽薄な男の声が藪の中から響いた。

「よー、よー！ お2人さん、すこーし止まってくれるかあ？」

道の脇から藪をかき分けてそいつらは現れた。

革の鎧、腰に下げた剣、丸い軽盾。同業者だ。

「……誰だ？」

遠山とラザールは足を止めて、急に目の前に現れた男2人と相対する。ラザールへ視線を投げると、まだ後ろに3人いると小声で教えてくれた。

「お？ お前ら、サバスたちと揉めてた新入りか？ おいおいおい、嘘だろ？！ お前らがソレ、狩ったのかよ？」

ツীবブロックヘアの男が遠山とラザールを見て指を鳴らす。言われてみればこちらもなく見覚えがある連中だ。

あの始末した門番たちと仲良さげにしていた冒険者のチーム、そいつらだ。

「テイタノスメヤ？！ マジかよ！？ ギルドに卸せば3ヶ月は遊んで暮らせるぞ！」

そいつらはしかし、遠山の問いに答えない。軽薄な微笑みをへらへら浮かべながら遠山たちの引いている台車を指さす。

目が見開き、顔に興奮の色が広がっている。その台車の価値を知っているのだろうか。

「だとしたら？」

遠山が短く言葉を返す。このあとの展開に備えて心を落ち着かせる、頭も冷やす、息を整える。

「あーん？　おいおい、睨むなよ。まあ、なんだ。ほら、わかるだろ？」

「ああ、その通り。まああれだよ、ほら、俺たちは言うなればお前から新人の先輩だろ？　後輩の様子が気になって少し見にきたわけさ。そしたらなんとびっくり、テイタノスメヤだろ、それ？　どうやって狩ったんだ？」

男たちの顔にわかりやすい欲望が見えた。軽薄で薄っぺらい欲望。

遠山が嫌うものの1つ。

欲望と向き合うのではなく、それに吞まれた雑魚の顔。あの門番たちと同じ顔をそいつらもしていた。

「言いたくねえ」

「ぶは！ ボーン、きいたかよ、言いたくねえだつてよ！ あー、一応聞くけど状況わかってるよな？」

「……ああ、ご丁寧に道を塞ぎやがって。悪いが早くこの商品を捌きたいんだ。どいてくれるか？ 先輩」

遠山が言葉を返す。コイツらが退く気はないことなど理解していた。

「んー、口の利き方がなつちゃあいねーなあ…… 先輩らしく、後輩の指導してやらんといけないみたいだ」

「ああ、そのとおりだなー。指導料は、そうだな、その台車、オレたちによこせよ」

「やっぱりか」

予想通りだ。コイツらは自分たちの獲物を奪おうとしている。こちらが死に物狂いで得た商品を、楽しんで労せず奪おうとしている。

想像力のない薄い笑顔をそいつらがへらへら浮かべ続ける。

「……横取りする気か？」

ラザールが低い声でつぶやく。目の瞳孔が開き、少し開いた口からは鋭い牙が見え隠れしていた。

「おーおー、薄汚えリザドニアンもいるなー。ん？ リザドニアンに、黒髪の男、なんか聞いたことあるような組合せだな。まあいいや、おい」

「ああ、狙いもつけてるよ、リーダー」

「動かないでねー、リザドニアンに黒髪ニンゲン」

ザザ。後ろの藪をかき分ける音。隠れていた奴らが遠山たちの背後をとっていた。

射手の声、2人と女だ。1人は獣人、1人は人間。男女混合のチーム、装備から見て男が前衛、女が後衛。

ラザールの言葉が正しいなら、あと1人潜んでいる。



「そういうわけだ。いや勘違いしないでくれ、何も指導料で全部もらうわけじゃねえよ。これは決して横取りとかそういうのではない。獲物が重そうで苦労してたる？俺たちがギルドに持って行ってやるよ。ああ、手間賃と運び代で売り上げの9割をもらうだけでいいんだ。社会勉強も一緒に出来る、ほら？わかるだろ？」

「年長者の言うことは聞いてくもんだぜ？怪我したくねえよな？まああれだよ、ほら、お前らみたいな新人がこんな大物をまっとうな方法で狩れるわけもねえ。ん？スラム街のガキでも攫って囮にしたか？毒でも飲ませてそれを化け物に食わせたりしたんだろ？」

ききき。

背後で、矢を弓に番える音が聞こえた。

距離はそんな離れていない。下手くそでも外すことはない距離だろ。

「……」

脅されている。

コイツらは、遠山たちの獲物を奪おうとしている。

へらへら笑う知性の感じられないそのツラに浮かぶのは余裕。

コイツらは自分が強者であると信じている、遠山たちは獲物で、自分たちはそれを狩る力のある強者だと本気でそう考えている、そんな顔。

「あーん？　なんだ、文句あるのか？　してたらなんかお前に関係あるのかよ？」

「いやー、ありがとうありがとう。ここんところ実入りが悪くてな。久しぶりにいい酒飲んでいい女抱けるってもんだ。ほら、うちのメンバーも悪くはねえんだが……　飽きるだろ？　いつも同じメニ

ユーだとよ?」

「ちよつとー、ボーン聞こえてるんだけどー、指滑らしてアンタに矢尻向けそうだわ」

ギャハハハハハハハ。

冒険者のパーティが笑いをあげる。どいつもこいつもみんな浮かれている。彼らの頭にはこれから先のハッピーな事実しか写っていない。

素人がまぐれで狩った大物を奪い、その金で豪遊することしか頭がない。

彼らはあくまで小悪党だ。少しばかり小賢しく、少しばかり腕が立つだけの普通の人間だ。

今回だけでなく、いつもこのように稼いでいる。門番とつるんで

分け前をワイロとして渡している為、被害者は泣き寝入りするしかない。それを経験として知っている。

もちろん彼らの脅しだ。彼らには遠山たちを殺すつもりなど微塵もなかった。むしろ、人殺しという大それたことが出来るような人間でもない。

ただイタズラに毎日を面白おかしく、楽に生きていければいい。そんな人種だった。

だから、気づかない。目の前にいる2人。彼らが脅している新人2人がどれだけ懸命に、本気で人生を生きようとしているかを。

だから、想像することも出来ない。懸命に生きる人間が敵に対してどういう反応をとるかも、想像することすら出来なかった。

「まあ、いーからさっさとその台車よこしな、新人」

彼らはこう考えていた。いつもと同じ。最悪骨の一つや二つ折って無理やりでも奪えばいい。

「いい勉強になったろ？ 人生そんな甘くねーんだよ」

いつも上手くいつている、だから今日もうまくいく

「ごめんねー、新人さん。でもほら、また頑張つて狩つてきなよ！ 大丈夫大丈夫！ 若いんだからなんでも出来るつて！」

自分たちは奪うだけ。面白おかしく人生を歩んでいくのだ。

「矢が刺さると痛いよー、こつちも大事にはしたくないしさ！ あ、助けとか呼んでも意味ないからね！ あと門番とかにチクツてもいいことないよー」

ギャハハハハハハハ。響く笑い。

そう、そんな毎日がずっと続く。彼らは本気でそう信じていた。

ああ、しかし、彼らは知らない。もう、明日どこるか今日すらきえて亡くなることを。

遠山とラザールが黙って、そいつらを見つめて――

「ぶっ殺す理由モチベーションをありがとう」

判断は早く。そこに笑いも何もない。

「は？」

訳の分からない言葉に、未だ冒険者たちはうすら笑いを浮かべて。

最期の瞬間を迎えた。

「レーザー」

「シャドウ・ハイチュー  
影の導き」

言葉にせずとも、レーザーと遠山の意味は同じ。

「は？」

悪事を覆い隠す眷属の外套が、悪人2人を覆い隠す。

悪人2人が完全に見えなくなる。

「き、消えた?! どこに?!」

小悪党は慄くだけ。彼らは知らないのだ。本物の悪意と決意がどのようなものか。

「一匹目」

「え? ぶつ?!」

本物の悪意と決意がどれだけ簡単に、あっけなく命を奪うのか、それを最期まで知ることはなかった。



影が、動く。

突如、射手の背後に現れた遠山。背後からその軽い体を押し倒す。女の腰から短剣を奪い、それをそのまま押し倒すと同時に女の心臓に突き立てた。

「ぼ、え????」

「じゃあな」

ぐじり。分厚い刃が革鎧の薄い部分を突き破り、捻られた刀身が心臓を破壊する。とどめとばかりに抜かれた短剣が女の喉を裂いた。

肉食の獣がウサギを噛み殺すかのごとく、遠山がうさぎ耳の獣人を殺す。

「ぶえ」

「2匹だ、ナルヒト」

ラザールはさらにスマートだ。もう1人の射手の女の口を抑え、自分の短剣で喉を掻き切る。

びくり、びくりと震え、口と首から血を流しながら女の身体が崩れ落ちた。

「サンキュ」

「は？ え？」

あつという間に訪れた最期の時、自分達の選択ミス。本物の悪意、本物の殺人者の前に冒険者たちは未だ、事態が飲み込めていない。

「ギヤツ?!」

「いい弓じゃないか」

藪の方から悲鳴が響く。備えのために隠れていた最後の射手、しかしその隠密は”影の牙”からすればおふざけにしか見えない。

ラザールは死体が手放した弓矢を奪い、それをなんともなしに扱い、射殺した。

「あ、ぐ?! あああああ?! 脚が!？」

「うわ、難しいな、弓。探索者街でアーチェリーたまにしてたんだけど」

対して遠山も同じように、死骸から弓矢を奪ってシャバリ。

弦を弾き、片目を瞑り狙いをつけるが、やはりなかなか難しい。リーダー格のよく喋る男の腹を狙ったのだが、太腿に突き刺さってしまう。

「ひ、な、なんだコイツら?!」

まだ無事な男が慄く。剣を腰から引き抜くもその手はすでに震え、剣先が定まってすらいなかった。

「いや、お前らがなんだよ、急に襲いかかってきやがって、怖いだろっつが」

「まだこっちは手を出してなかったろうが！ ウエザ！？ ホルン  
？！ バーティ？！ うそだろ、死んじまったのか？ チクシヨ  
ウ！？ なんて、こんな……？！ 3人とも女だぞ！！」

涙声で叫ぶ男。

まだ手を出していない？ 女？

遠山は心底そいつの言動が心底理解出来なかった。

「……………??？」

だから、黙って首を傾げるだけ。

「っひひひひひひ化け物……………」

その様子が何に見えたのだろうか？ 叫んだ男は短い悲鳴をあげて尻餅をついた。

「どうする、ナルヒト。残りは2人。1人は手負い、もう1人は…  
… そもそも簡単そうだな」

「……うーん、まあなんか横取りの常習犯っぽいし、あの門番ども見てたら取り締まる側も当てになんねー。また絡まれたり、逆恨みも面倒だから殺すわ」

そうか、と短くレーザーが眩き、ウサギ耳の獣人から剣を奪う。

「は？ こ、殺す？ お、おい冗談だよな？！ い、いかれてんのか！？ まだ俺たちなんもしてないのに」

太腿に矢が突き刺さっているリーダー格の男がひきつった声を絞り出す。

「弓矢むけてうちの商品パクろうとした時点で立派な強盗だろーが、虫けらめ。ところで不思議だな、殺人犯したヤツよりも万引きとかカツアゲしてるヤツの方がムカつくのは俺だけか？」

見逃す理由が何一つなかった。遠山が一步、近づぐ。

「ひ、ひ」

唯一無傷だった男、女だぞ！ と叫んだ割と良識のありそうだった奴は耐えきれないとばかりに立ち上がり、背中を見せて逃げ出した。

「あ？！ ボーン！？ 逃げんな、置いてくなよ！」

残された仲間の声はもう、その背中には届かない、が、しかし。

「よこっよ」

「ピッ?！」

仲間の声は届かずとも、遠山の殺意は届いた。背中に矢が突き刺さり、おもちゃのようにその場に倒れる。

「お、ストライク。弓もなかなか悪くないな。トドメ刺してくるわ」

「ああ、お気をつけて、ほら、使うといい」

「サンキュー」

なるほど、弓矢も練習すれば悪くはないかも知れない。遠山はラザールから剣を受け取り、口笛を吹きながら歩いていく。

呆然とこちらを見上げる負傷した男を横目に、背中に矢が突き刺さった男の元へ歩く遠山。



「あ、あああえ、いたい、くるし、なんで、どうして、こんなひどいこと…… ひど、すぎるう、ああ、パーティー…… うっ」

矢が刺さった男は泣いていた。死んだ仲間を想い、惨めに、それでも生き足掻こうと地面を這っている。

「あ、ああ…… た、たのむ、たのむよう…… ほんと俺は反対だったんだ…… 強盗なんて、ずっと上手くいく訳ないって…… 反対だったんだよう…… お、お願い、こ、殺さないで……」

最期の命ごい。この期に及んでまだ、この男も理解していなかった。他人が命懸けで得たものを奪うと言うことがどういいうことなのかを。

死ぬその寸前まで理解することは出来なかった。

この男にも色々あるのだろう。話を聞けばもしかしたら同情出来る点もあるのかも知れない。少し、遠山は考えて

「すまん、こつちもやること多くてさ。いちいちお前1人に時間かけねえんだ」

「へ」

死骸から奪った剣を無造作に突き立てる。

首の真後ろに突き刺した剣が皮膚を、骨を、肉を抉り、命を終わらせた。

「こ、殺した、ほんとに、殺した…… え？ も、もう俺だけ？」

一瞬で仲間を失った男。リーダー格のソイツが目をぱちくりさせ



「は、あ？ なにを」

「でも、そうじゃないんだよ。俺は弱い。敵は殺さないと無害化出来ない。俺は臆病だ、お前を生かして仕返しされなにか怖くて仕方ない」

「し、仕返し？！ し、しない！！ そんなことしない！ た。たのむ、見逃して、見逃してくれ！ か、家族う、家族がいるんだ！ こんなところで、死ねないんだよ！」

「……………そうか、家族か……………」

男の喚き声に、遠山が立ち止まる。

「あ、ああ、そうだ！ まだ2歳にもなっていない娘と、体の弱い妻がー」

「光明、助かる道筋を見つけたとばかりに男がペラペラ話し始めて

「じゃあ、そいつらも始末しないとな。復讐されるのも面倒だ」

遠山が力強く頷いた。敵は始末する、復讐されるのは面倒くさい。遺恨は残さず全て消す。それが1番確実だ。

「――は？」

ようやく、この男は理解できた。

「笑えよ、どうした？ さっきまで仲間とたのしく笑ってたよな？」

命かけて得た報酬を、笑いながら奪うつもりだったんだろ？ ほんら、笑えって」

自分たちが、ナニに手を出してしまったのかと言っことを。

この世には敵に回してはいけない人種が存在するということをややく知ることが出来た。あまりにも遅すぎて、あまりにも高い授業料を払った後ではあったが。

「ひ、ひ、や、ヤダ！ 嫌だ！ 嫌だアアア！ くるな、近寄るなあああ！」

誰も聞かない命乞いが、森に響く。助けは来ない、彼らの言葉通りだ。

「……笑えねえな、お前」



反射的に遠山は後ろへ飛び退く。

「ナルヒト!？」

「ゲホ! ゲホツ、な、なんだ?」

土が舞い上がる。湿った森の土の匂いが鼻に飛び込む、顔に飛び散った砂埃を払い、前を見た。

「あ、は、え?」

立ちはだかっていた。



今まさに、トドメを刺そうとした男の目の前に、1人の女が庇うように立ちはだかる。

いや、意味がわからない。この女、一体どこから現れたー

「ウィーフック！ 天使の羽にかけて！ ややや、これはいけません！ いけませんよ、そのあなた！」

「は？ 俺？ て、というかアンタ、今空から……」

藍色髪を一纏め、金属の薄い銀鎧は身体に馴染むが如く。腰に指すは奇妙なデザインの持ち手の剣。

「私が空から降ってきたことなど些細なことデイス！ 天使様の剣として、大ジャンプ程度は嗜みですので！ いえ、今はそんなことは良いのデイス！ 天使様の兵たる門兵を殺害した犯人を探していればなんと！ また別の殺人現場に行くわしてしまいました！ あなた！ 彼の命乞いにまるで聞く耳を持ちませんでしたね！ ソレはいけません！ 汝”慈愛”をもって人と接せよ！ 天使様のお言

葉にそうあるのデイス！」

キンキンとよく響く声。まん丸の眼がキラキラ光る。ついでになぜか銀鎧もキラキラ光る。

「誇り高き天使教会、騎士団の”第一騎士”としてその蛮行、見過ごせません！ 見過ごせませんとも！」

星の形をした虹彩をキラキラと見開き、テンションのヤバい女がビシッと、遠山を指さした。

「……………やべえヤツ出てきたな」

遠山は更なる厄介ごとの予感を確かに感じとる。

目の前の女騎士から放たれる、私！ 人の話を聞かない人間です  
！オーラに思わずうなだれた。

33話 バカが空から降ってきた（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを「」覧くださいー！

< 苦しいです、評価してください > デモンズ感

34話 "VS" 正義

「ヤベエ奴?! ど、どこですか?! ご安心ください! この第一騎士、ストル・プーラ! やべえ奴などに遅れは取りません!」

空から降ってきたその少女の騎士。

遠山の呟きに過剰に反応するその姿から、遠山はその予感を確認にする。

あ、コイツ、バカだ。厄介なバカだ、と。

「……………ラザール、たのむ、会話代わってくれ。頭が痛い、吐き気もする」

「すまん、ナルヒト。今新しいパンのレシピ考えてるから……」

「微妙に押し付けづらい言葉を選びやがって」

助け舟を求めたラザールはお空を見上げて顔を背ける。このやろう、地雷を見抜く力は本物だ。

「で！ どこです？！ そのヤベエ奴…… ふお？！ いけないいけない、巧みな話術に乗せられ、現行殺人犯と仲良くしてしまうところでした！ 私、こう見えて賢いので！ あなたのような悪人の舌には乗せられませんとも！」

「あ、はい」

チツチツチと得意げに指を振る少女に遠山は静かに返事をする。

「だ、第一騎士？！！ 今、第一騎士って言ったのか？！ 天使教会最大戦力、騎士団最強の騎士！？」

耳障りな叫び声はキルカウントのラスト1人。一手遅かった。さて、どうやって始末したのか。

「む、ふふふふふ！ その人、あなたはなかなか良い人のようデイス！ そう、その通り、この私こそ、天使教会騎士団において最強の騎士！ 第一騎士、ストル・プーラなのデイス！」

得意げに腰に手を当てて笑う少女。身長は低い、150センチあるか、ないかの小さな上背。しかしその身に纏う鎧やみのこなしから只者ではないと容易に判断出来る。

「すごい全部既出の情報だよ、知ってる内容を自己紹介してるよこの人」

「ナルヒト、気持ちはわかるがあまり刺激しない方がいい。……別格だ」

「……ああ、だな。神様なんてのがいるとして、どうしてこう、バカに力を持たせたがるかね」

だが多分、オツムはアレだ。もう話している言葉や話し方から知性というものが感じられない。

「む？ 今、あなたバカって言いましたか？ ダメデイス！ 人のことをバカなんて言うのはいけないことデイス！ さあ、その人にバカって言ったのを謝りなさい！」

バカにはバカという言葉すら届かないのか。

遠山は一気に疲れ始める。

「いや、バカってのはソイツじゃなくて。まあ、確かに力量の差を理解できなかった点は馬鹿か……」



「第一騎士!!! こ、殺される?! その殺人鬼どもに殺される! た、助けてくれ!!!」

割と呑気している遠山とは裏腹に、最後の生き残りが必死な声を叫ぶ。

「は?」

ラザールはそのいい加減な言葉に呆気にとられ

「チッ、こつなるか」

遠山は小さく舌打ちを。

この状況だ。確かに一見すると遠山たちが加害者側に見えないこともない。

「む、むむむむむ、その方！ お話を詳しく！ むお？！ しかし気づけば骸が4つも！！ むむむむ！？ あなた、何をされたのデイスか？ 大丈夫デイス！？」

「あ、ああ、騎士、騎士様！ 聞いてくれ！ あ、あいつらに仲間が殺されたんだ！ 命乞いした奴も、お、女も！ 女も殺された！ あ、あとそうだ！ か、家族！！ 家族も殺すつて、脅されて、おれ、おれっ！」

「ああっ、なんと！？ 真実！ 真実デイスね！ あなたは嘘を言っていない！ む、ムムム！ その人！ リザドニアンと黒髪さん、動かないでくださいね！ 今、あなた達には容疑がかけられているのデイス！ 天使様と皇帝陛下から頂いている法執行の権利を示します！」

予想通り、人の話を聞かないバカが遠山達に敵意を向ける。

どこの世界でもクソ野郎ほど声が大きく、そしてバカほどこの声を信じてしまうものだ。

本当に大切な言葉や、正しい言葉は小さな声に宿るということを知る人間はあまりにも少なく。

「法執行、難しい言葉知ってんのな」

「ナルヒト！ 今は軽口はよせ。あ、ああ、わかった。だが、騎士殿、俺たちの言い分も聞いてはくれないか？」

小さな声でぼやく遠山をラザールが嗜める。その落ち着いた声を少女の騎士に向けて。

「む、それもそうデイスね…… あなた達はなぜー」

「嘘だ！ 騎士様、アイツらは嘘を言ってる！！ 信じちゃダメだ！ こ、こんな、こんな簡単に人を殺せるような連中なんだぞ！ 嘘だ、嘘、ウソウソウソウソー！！」

喚く喚く喚く。唾を飛ばし、叫び声にも等しい大声で最後の生き残りが喚いている。

必死だ、ここを正念場として定めたのだろう。騎士とやらに守ってもらったことでこの場を切り抜けようとしている。

「……………よく回る舌だな、引っこ抜いてやろうか？」

あまりにも楽観、そして短絡的な浅ましい考えにイラつく。遠山が静かに殺意を改めてそいつにむけた。

「ひ?! き、聞いたでしょう、騎士様!! あの恐ろしい言葉! ! た、助けて、助けてくださいいい、ほら、矢、矢も刺さってるんですっつ、死んじゃうよおお」

泣き始めるその男、ラザールですらその有様に舌打ちをしていた。

「あ、わわわ、ほ、ほんとです！ ひ、ひどい怪我！！ えと、えつと、あった！ ありましたデイス！” 天使の涙”！ 矢、抜きますね！」

だがその浅ましい態度も、少女からすれば弱者の助けを求める言葉に聞こえるのだろう。

騎士の責務を果たすべく、少女がその男の治療を始める。

太ももに深く突き刺さる遠山が放った矢、無造作にそれを掴んで

「よ、つと」

一気に引き抜く。栓が抜けたように血が溢れ始めて。

「え、ヒツギ?! ああアアアア…… あ、あれ? い、痛くない?」

雑な対処に苦悶の声、しかしそれはすぐに立ち消えた。

少女騎士が懐から取り出したガラス瓶、それを傾け薬液を2滴ほどその傷口へ、ぽたり、ぽたり。

それだけで、矢尻がえぐったはずの傷が塞がり始めてー

「ふう、よかった。主席聖女の癒しほどではありませんが、充分癒しの力はあるはずデイス。これで、怪我の心配はいりません」

「……ラザール、アレはなんだ」

「……天使教会の秘薬。製法は不明だが、大戦時には千切れた腕や

「ら脚やらを繋げたとかいう噂もあるほどの効力のアイテム…… 実物を見るのは初めてだ」

「ふーん、さて、どうしたものかね」

そんなものを持っている騎士。恐らく実力者、かつ組織の中でもそれなりの立場なのだろう。

「と、いうことはつまり、目の前のバカは只のバカではないということになる。」

「では、あらためて。何かあなた達に申し開きはありますか？ いくら冒険者同士の争いとはいえ、理由もなくこのような酷いことをしたというのならば、私は天使教会の剣として、役目を果たさなければなりませんデイス」

男の治療を終えた騎士が立ち上がり、改めて遠山とラザールを見つめる。

わずかに雰囲気が変わり始めている。遠山とラザールは敏感にそれを察した。

「も、申し開きなんて聞く必要はないでしょう！ 騎士様、こちらは仲間が殺されてるんです！ は、早くあいつらを殺してください！ あ、あんな獣のような連中をのさばらせていいとでもー」

しかしソイツはそんなことには気づかない。駄々をこねるガキのように騒ぎ立てる。いつもここうしてきたのだろう。何か困ったことがあれば大声出して、騒いでー

クズは生きやすくて羨ましい。遠山は目の前の男をただ、静かに見つめた。

「むむ、確かにこんな数を殺してます、これはやはり、悪……」



そのクズの声にバカが悪い方に反応し始める。

「ナルヒト」

ラザールが小さく遠山の名前を呼ぶ。その意味を遠山も理解する。

残念だが、クズの言葉が誰かに届くこともある、だが今この場でこれはまずい。

「ああくそ、なんでいつもいつも勝てねえ奴とばかり揉めるかね、

…… あー、騎士ストル殿、申し開きのチャンス、いただいても？」

なんとか弁明しようと遠山がはっきり、その騎士の名前を呼んだ。

「む、むむ、その豪胆さ、逆に気になります、ハイ、許可します」

少女が遠山の言葉を聞き始めてー

「許可?! バカな!? 騎士様、アンタ、あんな犯罪者の言葉をきくのか?! 天使教会は殺人犯を匿うつツ― ひ!？」

クズがしかし、大声をまた出す。もうそれしかコイツには方法がないゆえに。

そしてその大声は、言うてはならない言葉に触れた。

クズでもわかる鋭い殺気は、遠山やラザールのものではない。

少女騎士から放たれたもので。

「冒険者、私のことをばかにしたりするのはまあ、いいでしょう。しかし、教会のことをつぎ、その汚い口で少しでも貶めてみなさい、その首と胴体、別れさせます…… デイス」

重く、冷たい声だ。現れた直前のわちゃわちゃしていた彼女の雰  
囲気はどこにもない。

天使教会、第一騎士としての言葉が、愚かな冒険者の口を止める。

「は、は、はひい」

「……ただのバカでもない、か」

厄介だ。遠山は目の前の少女の騎士への警戒をさらに強める。

「お待たせしました！推定殺人鬼さん。では、あなた達の罪を語って  
ください！」嘘”をついた時点で残念ですが、償っていただけ  
ようになりますので”注意を！！”

気になるワードを言いつつ、少女の雰囲気はまだ明るくなる。

警戒を解かずに、遠山は頭を回してこの場で最善の言葉を選んだ。

「……………アンタの法では、強盗にも慈愛を示せと言ってるのか？」

「むむむ？ 強盗…… いえ！！ 天使様のご意志をもとに作られた帝国法では個人の財産を尊重しております！ 強盗はつまり、いけないことです！ 私、こう見えて賢いので！ 縛り首です！」

「ふうん。じゃあ聞くけど冒険者同士のいざこざについてはどう思う？ 例えば苦労して狩った獲物を横取りしてくる奴を殺した場合、それは殺した側が悪いのか？」

「む？！ いいえ！ そんなわけありません！ 基本的に冒険者職は自己責任！ 冒険中に起きた全ての過失や失敗は当人の責任です！ ましてや他人の成果を横取りするなど言語道断！ ギルドにおいて把握が難しいためなかなか犯罪としての立証は難しいデイスが、振り返ちにするのは全く問題ないデイス…… ん？ むむむむむ？！ もしかして、その荷車に積んである獲物は……」

「あ、おい、ちょっと」

ぴよん、ぴよんと飛び跳ねるように移動する彼女が、遠山達の荷車に近づく。

そしてそこに積まれてある戦利品を見て、目を見開いた。

「テイタノスメヤ！！ およよよ！ 驚きました！ このモンスターを狩ることが出来る冒険者はそう多くありません！ よよ？！ しかも2人？！ む、むむ。2人、5人、弓矢…… あ！ 私、閃きました！ あなた、強盗を返り討ちにしただけですわね！ ふふふ、状況を当てたことに驚くのも無理はありません、私、こう見えて賢いので！」

「あ、はい。いやそれ俺最初からそう言って…… いえ、なんでもないです。そういう感じですよ」

言っても無駄だろう。遠山は素直に頷くことにした。

そして、少女は笑う。全ての事実を正しく、認識した騎士が朗らかに笑って。

「ウーック！ やはりそうでしたか！ むむ、見えてきました！ 見えてきましたよ！ つまり、この倒れている可哀想な死骸たち、そして今、私が治療して差上げた方がー」

悪、デイスね？」

ぎゅろり。笑顔のまま、その顔がまだ尻餅ついたまま、騒ぐだけのソイツへと向けられた。

あわよくば、騎士を遠山たちに向けしかけようとしていた愚か者。

その命運が終わろうとしている。

「ひ?!! ち、違う! 違う違う違う! 騎士様、そいつらデタラメだ! デタラメなんだ! 嘘だ、嘘、ウソウソ! 嘘をついてます!」

もうその男の言葉にはなんの筋道も意味も存在しない。ただ感情を吐き散らすだけの戯言。

「こいつ、ほんと口が減らねえな」

遠山がいい加減、我慢できなくなる。黙らせるかと一歩進もうと

して、しかし、ラザールの手がそれを制した。

「待て、ナルヒト。様子が変だ」

「あ？」

「……ウソ、デイスか。あなたは彼らがウソをついていると？」

静かな声だった。小さな声だった。

少女騎士が男へ向ける言葉は小さかった。

だから、男はそれを御しやすい言葉と認識したのだろう。いままで自分が大声で上書きしてきた力のない言葉と勘違いしたのだろう。



「あ、ああはい！　そうです、その通りですう。アイツら、アイツらが殺したんだ！　俺の仲間を！　何も、何もしていなかったのにいいい！」

目を見開き、ここぞとばかりにアピールする。

「なるほどなるほど、確かに彼らは人を殺してしまっています。うんうん、あなたは失ってしまったのデイスね」

「そ、そうなんですううう！　騎士様、裁きを！　奴ら人殺しを裁いてくださいいいい！」

もう恥も外聞もなく、男が騎士にすがりつく。大の大人がまだ少女というべき年頃の女の子へするその姿は害悪でしかなく。

しかし、男が御しやすいと判断したその静けさは、遠山とラザールの目には全く別のものに映っていた。

「ラザール……」

「ああ、静かにしていよう、今は、まずい」

肉食の獣、捕食者が獲物を殺す寸前の静けさー

「ふうん、そう、デイスか。わかりました。あなたにも彼らにも言い分はあるのでしよう。ええ、わかりましたデイス！ 私はその言い分全てを聞き入れましょう！ 天使様の定めた法に従う帝国の正義としてあなた方に正義を問いますよ！」

「あ、ああ！ ありがとうございますっ、騎士様ああ、……正義を、問う？」

「はい！ 残念デイスが、いくら賢い私でも人の嘘を見破るのは困難なのデイス！ で、す、の、で！ ここからは”正義”に問わせていただきますデイス！ 安心してください、被害者サン！ あなたがすることはシンプルデイス！ 私の質問に正直に答えればいい！ それだけのデイスから！」

「え、し、正直？」

「ハイ！ これから私の質問に答えてもらいます！ あなたが嘘をついた時点で、あなたを殺しますのです！ あ！ 大丈夫デイスよ！ 正義の質問に正直に答える！ それだけ守ってくれば問題はないデイスから！」

朗らかに、明るく。その言葉は告げられる。

「……………え、へ？ な、こ、殺す？ じ、冗談、ですよね？」

鼻水たらした男が、反応を遅らせて、首をかしげた。媚をつるよ  
うな薄ら笑いを浮かべつつ。

「いえ！ 私、冗談と嘘つきは嫌いデイスので！ では、始めます  
デイス！」

そして彼女はその薄ら笑いを笑顔で切り捨て、男に現実を突きつけた。

「……ラザール、アイツ、なんかヤバイ」

それは例えるならば、深夜の道、街灯が途中でなくなり闇に飲まれた道を目の当たりにしたときのような――

「……チツ、この気配…… 最悪だ、”秘蹟持ち”だ」

ラザールの呟きがいやにはつきり聞こえた。

「秘蹟 執行 決めてよ、正義」  
ジャスティス

始まった。天使の騎士、それに選ばれた所以。スキルを超えたこの世界の選ばれし者の証。

「は？」

「おい、マジか」

「……天使教会、第一騎士、そういうことか」

少女騎士以外の全員が目を剥いた。

異様。

ソレが、突如、少女の背後に現れた。

折れた翼、何本もある異形の腕。

女神の像に見えるソレはしかし、つぎはぎであらゆるデザインの像が無理やりにつなぎ合わせられたような姿。

『汝、真実を供述せよ』

正義が、目覚めた。

「あ、え、え？」

男は、事態を理解できていない、いや、理解することを放棄していた。

いつもそうだ、肝心なことをこの男は考えなかった。安易に、楽に、人生を進めようとして生きてきた。

自分より弱く愚かなものを食い物にして生きてきた。

その生き方で得た全てが、今から試される。

「質問します、汝、あなたは彼らから荷を奪おうとしたのですか？ その結果、振り返ちに遭ったのですか？」

「は、は、はい、は……。そ、それ、な、なんで、すか？」

問いに答える能力すらなく。男はただ、聞くだけ。

この期に及んでまだ、この男は理解していない。自分が今、どう  
いう立場にいるのか。

問う、ということが出来るほどの権利すらもつこの男にはなく。

「『次、質問に答えなかった場合は、嘘とみなします。汝、貴方は  
悪、ですか？ 汝、貴方は彼らから奪おうとしたのですか？』」

「あ、はっ、ハッ、ハッ、ハッ……」

息を荒く、男はただ、息を荒くするだけ。認めたくない事実、受  
け入れたくない真実はしかし、確実にその男へ歩み寄る。



この男は考えることをしてこなかった。だから、今、本当に考えて応えなければならぬことすら、考えられなくて。

「『答えよ』」

また、いつものように安易な道を選ぶのだった。

「し、してませ、エン…………… あぴよ、う、ヴヴヴヴヴヴヴヴ  
ヴウ？！ ヴヴッ、ウエ……………」

嘘。

正義の前で嘘をついた罪人がどうなるのか。そんなもの決まっている。

男が、首を掻きむしり始める。えづき、むせ、自分の首を触り、抑え、そして地面に倒れてもがき始めた。

『「汝、罪人なり」』

正義の判断は下った。

手足をジタバタ、あぶくを吹き続ける男を騎士は静かに見下ろす  
まだ。

「づ、エ、えづ、エ……………」

そして、喉を掻きむしり続け、その男は動かなくなった。

「……残念デイス、さようなら、嘘つきさん」

「……どこの村の症候群だよ、オイ。ラザール、どうやって殺したかわかったか？」

「……全くわからん。だが、一瞬、腰の剣に触れていたような……」

「やっ」

正義が、次の判決先を見つめた。

「ッ?!」

「……………」

「ウイーフック！ そんな警戒しないでくださいデイスよ！ いやー！ お時間を取らせて申し訳ないデイス！ この場における嘘つきが誰かは判明しましたので貴方達は無罪デイス！ 冒険者同士のいざこざ、狩場における違法行為への反撃はきちんと帝国法でも認められていますのでご安心くださいデイスよー」

コロコロと笑うその顔。少女じみた雰囲気と豊かな表情を浮かべる騎士。

見た目だけではただの可愛い女の子だが、今の遠山とレーザーカラスれば人食いライオンが目の前にいるのと同じくらいの緊張感だ。

おそらく、ドラ子や、聖女よりかは弱い。それはわかる。だが確実に、自分やレーザーよりも強い。

今、目の前の彼女がその気になれば、おそらく殺される。そんな

予感が遠山にのしかかる。

彼女の背後に現れていた奇妙な像は消えている、だが理屈がわからない。喉をかきむしりながらあぶくを噴いて死んだクソ野郎、どいういっ組みで殺したのかが理解できない。

それが何よりの恐怖でー

「では、お時間取らせて申し訳ありませんデイス！ 素晴らしい狩りの獲物デイスね！ あなた達の技術と強さに最大の敬意を！ そして嘘をつかなかった誠実さに、天使様のご加護がありますように！」

ニコニコ笑う少女。その顔には全く悪意がない。人を殺した直後だというのになんの曇りも、陰もないその顔が気色悪くて仕方なかった。

「あ、ああ、どうも。騎士さんもお仕事頑張ってください。……いこう、ラザール」

「そ、そうだな。誇り高き我らが騎士よ。貴方の剣を天使の光が宿らんことを」

「およよ！ リザドニアンさんは天使教にお詳しいんですね！  
ふふ、騎士にとっての誉れの言葉デイス！ ありがとおー！！」

手を振る少女。大人2人は冷や汗をかきつつ、荷車を引き始める。

「……………やべえ、アイツやべえ」

「シッ、聞こえるぞ。早くここを離れよう」

コロコロ、コロコロ、車輪が回る。

はやく、はやく、ここから離れる。たのむ、たのむ、こっちを向くな。

遠山とラザールが、無言で、その場から少しでも離れようと必死に、しかし焦らず荷車を引き続け――

「……………ふうふうん。あれね、やっぱり少し、待ってもらえますデイスか？」

やっぱりね、そうだろうね、知ってたよ。遠山が心の中で神を呪う。もしそんなのがいるとしたらソイツは絶対に性格が悪い。

ひとの苦勞をみて愉しむタイプのドグサレ野郎に違いない。

遠山とラザールは顔を見合わせ、立ち止まる。

「ラザール、呼ばれたぞ」

「ナルヒト、呼ばれてるぞ」

数メートルも歩かぬうちに呼び止められてしまった。荷台を引いているため、いや荷台がなくとも恐らく逃げられない。

「デイスデイス。貴方たち2人デイス。もう少しお時間よろしいデイスか？」

素直に言われたまま立ち止まる。



「よろしくないのデイスけど」

「ナルヒト、お前まだ割と余裕あるな」

「……………ふーん、ふんふんふん。あなた達、不思議な人たちですね。目の前で人が死んだのに、心が全然動いていないのデイス」

「……………まあ、こういう仕事ですんで」

「ええ、もちろん。それは存じておりますデイス。……………狩りに優れ、冷徹で、決意に満ちている…………… ああ、いい冒険者ですね、お2人とも」

「何が言いたい？」

「私、今、殺人鬼を追っているのデイス。東門で起きた門兵殺害、皆それなりに腕に覚えのある人間のはずですが、つい先ほど、全滅が確認されました」

「門番が？ 全滅……」

遠山の渾身の演技。心を鎮める、自分が連中を始末したという事実をこの瞬間だけでも忘れる。

口数は少なく、視線は相手の目を見て。

「……………」

ラザールは沈黙を保っている。その表情にこれっぽっちの変化もない。

「ええ、嘆かわしいことデイス。その死骸は損傷が激しく、身体はズタズタに裂かれ、表情は恐怖に染まっています。……天使様に仕えた敬虔な彼らに安息が訪れることを祈るばかりデイス」

「……そりゃ、お気の毒。ああ、だから犯人を探して大ジャンプ……  
……ジャンプ？」

「ふふ、私、こう見えて身体も少し特別製なのデイスよ。いずれきたる竜とのー いえ、ごほん！ なんでもありませんデイス！  
で、私の同僚のクレイデアが言うには、犯人は恐ろしく冷酷で、そして揺らがない人物だということなのデイス」

「へえ…… すごいですね。そんなこと分かる人がいるんですか」

「ええ！ 死の眷属に愛されたクレイデア、第6騎士の彼は”死”の香りを嗅ぐことができますので！ 犯人が残した香りはそういう香りでした。決意と信念に基づいた殺し……… 貴方も、恐ろしく冷酷で、揺らがない人、デイスよね……？」

「……えーと、疑われています?」

「くす、ええ、はい。3流とは言え、5人近い冒険者を無傷で返り討ちにした技量、容赦なく始末している事実、……わたし、とつても気になるデイス。その目、ああ、貴方はとても良い冒険者デイスね…… 無慈悲で冷酷で、強い決意と目的を持つ人間の目……」

少女の目、水色の瞳が遠山を見つめる。

そしてその綺麗な顔、口元が半月のような笑みを浮かべて。

「ジャステイス  
”正義”」

ソレが現れた。

歪な像、正義の姿が強欲の前に晒される。

「ッ……………」

「そんな怖い顔しないでくださいデイス。ええ、お時間は取らせませんので。ええ、私の質問に、正直に答えてくれれば良いのデイスから」

まずい、完全に疑われている。あの門番を始末したことに後悔はない、後悔はないが、まさかこんな形で疑われるなんて想像もしていなかった。

死の香り？　なんだそりゃ、ファンタジーかよ、ファンタジーだったわ。

遠山は反省する。

まだ現代の常識を元に行動していた。監視カメラも衛星もドローンもないのなら目撃者を全員始末すればバレないと思っていたが、予想外の所から足が付き始めている。

「……それ、なんだ」

遠山が少しでも時間を稼ごうと、目の前、少女の背後に佇む像を指さした。

神聖さとおぞましさを併せ持つ奇妙なその存在を。

「サブフラメント”秘蹟”デイス。冒険者ならご存知でしょう？ 選ばれた人間に与えられるスキル、それに天使様の奇跡が加わることで形を変えた人間の才能の極地…… まあ、クレイディアの受け売りデイスが……」

冷たい目だ。あのハイテンションな声色は今や消え、しっとりしたその声色には背筋を冷やす色気が混じる。

IQがかなり上がってるような。

「さて、冒険者サン。正義の名の下に、天使教会第一騎士として貴方に問わせて頂きますデイス」

やばい、これはかなりまずい。

原理は不明だが、この女は恐らく”嘘を見破る”ことが出来る。それはあそこで喉を掻きむしって死んだ冒険者が証明してくれている。

その死因と、この女に嘘をついたことがイコールであるかは不明だが少なくとも、嘘はバレる。

どつする、殺すか？ ーじじい。

いや、だめだ。強すぎる。キリヤイバがハマれば殺すことは出来るだろうが、風も強く、開けた空間、仕込みも間に合わない。

遠山が、頭を回す。力づくで始末もできない、そもそも遠山が目の前の女を殺すにはどうもモチベーションが足りない。

疑われたから殺すなんてことをしてたら、あっという間に本物の殺人鬼だ。文化的な社会人の自覚のある遠山にとって、それはなるべく避けたい事態でもある。

「どうしましたか？ 顔色が、悪いようデイスが。心配しないでくださいデイス。あなたは、私の質問に、正直に答えれば良いだけデイス」

『汝、真実を告げよ、汝の虚偽は正義の光の下に暴かれるだろう』



首を傾げる女騎士、その背後に陽炎のよつに朧げに浮かび上がるのは奇妙な像。翼が欠け、仏像やら女神像やらが繋ぎあったような悪趣味なナニカが、女騎士の背後に聳える。

腹、くくるしかないか。

覚悟を決める、ここで振るべき武器は怪物を殺すための爪と牙ではなく――

ピコン。

が、女騎士とその悪趣味な像を指す。

【隠し技能発動】

【 によりスピーチチャレンジ開始】

【”@文 館 書・知識の 属 からの助け”により、スピーチ・チャレンジヒントを追加】

【Hey! listen!

天使教会第一騎士 ストル・プーラ

age ????(乙女の秘密、今回は必要ないでしょ)

RACE ヒューマン

STR 12 } 100 (まあ、モンスターでも素手でくびり殺せ

るだろね、ちなみにさっきアンタが始末した蛇が10くらいだから

INT 1 (おお、もう……)

POW 2(3) まあ、この年頃の女の子なんてこんなもんでし  
よ)

所有” 副葬品” 【首吊りの剣】 剣先を向けた対象の首を吊る  
ことが出来る。

保有スキル ????

秘蹟 ”正義” この世全ての正義の概念の権化。幾人もの人  
が持つあらゆる正義の習合体のためそのビジョンは歪んでいる。

”正義”の使用によりこの秘蹟の持ち主は、自身の考える、もし  
くは感じる正義にまつわる全ての行動に絶大な補正を得る。

また正義の問答により、他者の言葉が嘘であるかどうかを見破る  
ことも出来る。

本来であればこの秘蹟が発現した時点で常人であれば”正義”に

意識を乗っ取られる。しかし卓越した精神力と身体を持ち主、それか他者に侵されることのない完成された自我の持ち主、もしくは正義という存在について考えることが出来ないほどの低い知能の持ち主であるのなら、”正義”の主人になれるやもしれない。

頭が良いということが必ずしも、良いことに働くわけではないのだ。

正義の正義は正義が決める、どのような時代であれ正義とはそういうものだろう】

「え、1?」

「えっ?」

「ナルヒト、何を」

一斉に流れたメッセージ。その全てを読み込んだ遠山が思わず、目の前の少女騎士のステータス、それが告げた悲しい事実を口に出してしまふ。

「あ、いや、なんでもない！！ いや、すみません、少し緊張して」

「……まあ、いいのデイス。わたし、こう見えて賢いので。あなたが緊張する理由もわかります。第一騎士デイスからね、私」

したり顔で頷く知性1。

遠山は少しかわいそうな気持ちになりつつも、目の前の存在が化け物であるという認識を新たにす。

空から舞い降りる大ジャンプ、STR 12、100というモン  
スター超えのわけのわからない数字。

怪物だ。まず準備なしに戦ってはいけない。頭が弱いだけでそれ以外は超一流の敵。

「では、あなたに質問します、正義の名の下に」

その質問は正義の天秤にかけられる。嘘をつき、悪とみなされれば人外の力により裁かれる。

『汝、真実を告げよ』

正義が探すのは、その剣の行く末。正義の敵は、正義が決める。

「貴方は、門番達を殺しましたか？」

低い知能はしかし、余計なものを孕まずシンプルに素早く真実を問う。

余計なものがないものは、美しさに繋がるのか。

遠山を見つめる少女騎士は剣にも似た機能美に満ちていて。

「……………」

正義の名の下に、遠山の首に突きつけられた審判の力。

嘘を言えば、正義に暴かれ縛り首。真実を言えば哀れ残念、犯罪者。恐らく夢には届かない。

「どうしましたか？ 『汝、答えを』」

力ある正義が遠山に立ちはだかる。牙も爪もここでは使えぬ。正義には届かない。

「……………」

息が、少し乱れる。失敗出来ない綱渡り、間違えれない選択肢。

恐怖、緊張。人の歩みを止める負の全てが今、遠山にのしかかる。

「……………言えないなら、『沈黙は、虚偽』そういうことと受け取りますが」

騎士の手が、首吊りの剣にかけられて――

「門番」

それでもなお、止まらぬのは強欲な男の舌と脳みそ。



奪われ続けた人生だ、敵ばかりの人生だ。この世界に生きる人間のほとんどはクソで、常に他人から何かを奪おうとするクソ野郎だらけ。

遠山鳴人はそれを知っている。

「門番、死んだ、門番たち。ああ、そいつら、そいつらだ」

止まらぬ舌、回る頭脳。

クソだらけの人生において、しかし、遠山鳴人は決してそれだけはやめなかった。

「なにを言ってる」

少女の騎士、愚か故に正義に吞まれぬ教会の剣が息を呑んだ。目の前の男の顔を見た、人間の、顔を見た。

遠山鳴人は決して、どんな瞬間、どんな場面においても”考えること”だけはやめなかった。

人体のふしぎ、使えば使うほどそれらは最適化されていく。生きることの障害をどのように始末するか。

「ああ、門番だよ、騎士ストル。天使教会、俺たち帝国の誇り」

幼い頃からそれを考え続けてきた遠山鳴人の頭脳、知性は危地にてなお、その鋭さを増すのだから。

「それらが有する門番、冒険都市において要所を衛る誇り高い彼ら」

さあ、滾らせろ、人を人たらしめる脳みそを。

さあ、回せ、人の心を動かし、クソだらけの世を渡るための舌を。

失敗すれば、死ぬだけだ。

「きつと、みんないい奴だったんだろ？ 職務に忠実で、真面目で、天使に祈りを捧げて日々を過ごす無辜の人々だったんだろ？」

いつのまにか、問うのは強欲。正義は気付かぬ、いつのまにか話がすりかわり始めていることに。愚かゆえに、気づけない。

「え、ええ、もちろんデイス。末端とはいえ、彼らは天使教会の兵。この都市と帝国、そして信仰のために日々を生きていた善良な人たちのデイス。」

そして、その一言を、するり。

言ってしまった。

「ああ、そう、” 善良な人々”、そうだな」

舌が回る、脳みそがたぎる。爪、牙、獣の武器が通じずとも、遠山鳴人にはこれがある。

知性と悪性。これこそがこの男の真骨頂。

冒険を始めよう、爪と牙は彼の領分。知性と悪は遠山の領分。

ーワン！

耳の裏、ここではないどこかで何か満足するように一声鳴いた、そんな気がする。

「誓って言うよ、騎士殿。俺も、ここにいるラザールも、誓って善

良·な·人·た·ち、職·務·に·忠·実·で、真·面·目·で、天·使·に·祈·り·を·捧·げ·て·日·々·を·過·ご·す·無·辜·一·の·門·番·た·ち·を·殺·し·て·な·ん·か·い·ない」

遠山が言い切る。何一つ、嘘はついていない。

善·良·な·門·番·は·殺·し·て·い·ない·の·だ·か·ら。

冒険だ、冒険だ。あの時始まらなかった冒険だ。

”正義”すら捕らえることのできない狡猾な知恵、竜すら屠る爪と牙。

愉快的影を友にして、みなしご達の居場所となり、竜の視線を独り占め。

たのしい冒険の最中だ、ようやく始まったたのしい時間だ。

正義ごときが、邪魔するな。

『汝、全て真実なりて。汝、罪人にあらず』

正義が消える、正直者に突き立てる刃はなし。強欲な男の告げた真実の前に正義がその役目を喪う。

「……む、ムムム、あ、わわわわ」

騎士が目を回す。己の指針、正義が告げる、目の前の男の無実を高らかに。

その直感は確かに、目の前の悪に反応できた。それでもそれでも足りない知性。

彼女の正義は強欲の舌に及ばずに。

「わわ、わわわわわ！！？　ぐ、ぐごごご、ごめんなさいデイスう  
うううう！　わ、私完全に、完全に貴方達のこと疑って、あ、い  
けない、エイ！！　エイ！　首吊り解除！！　だ、大丈夫デイスか  
？　くび、苦しくないデイスか？！」

少女の剣呑、冷たい機能としての美しさもどこへやら。知性1と  
銘打たれた道理の落ち着きのなさで騒ぎ始める。

「よかったー、信じてくれて何よりですよ。いやいや、何も苦しく  
なんて。騎士さん、すみません、その  
獲物の鮮度も落ちちゃうんで、俺らそろそろこれで……　な、ラ  
ザール」

「あ、ああ。そうだな。第一騎士殿、貴方の誇り高き職務に敬意を。  
俺たちはこの辺でー」

「あ、ああ?! す、すみませんすみませんデイス! ほんっとおおにごめんなさいデイス! お、お仕事のお邪魔を完全にしてしまいましたデイス! う、うう、野党の襲撃を受けた直後に私がやってきてって。完全に私の先走りじゃないデイスかー! ウイーフック! 善良な帝国民、そして優秀な冒険者の方のお邪魔をしたとあっては騎士団の名折れ、団長にしかられてしまいますデイス!」

涙目で、ワタワタし始める少女がそこにいた。

先ほどまでの、死んだ魚の目は嘘のように消え去っていた。

「い、いやいや、そんな勿体お言葉です。ほんとお気になさらずに、な、なあ、ラザール」

「あ、ああ、その通りです、騎士殿。は、ははは」

乾いた笑いを浮かべるラザールと遠山。ほんと早くここから立ち去りたい。



むがああ、と頭を掻きむしり始める知性<sup>1</sup>。彼女こそ間違いなく  
善良な人間だ。

己の間違いを恥じて、謝ることが出来る、当たり前のように見え  
てそれが出来ない人間のなんと多いことだろうか。

「……ラザール、もう俺ら行っていいかな」

「そ、そうだな。これ以上ここにいたら心臓がどうにかなりそうだ」

こそつと、2人が重たい荷車を押し始めてー

「閃きました、デイス！」

「「え？」」

こつそりこの場から離れようとしていた遠山とラザール、2人の前に回り込み、目を輝かせる知性<sup>1</sup>。

「この度はほんとにご迷惑をおかけしましたデイス！ お、お詫びにこの荷車、私が責任を持って都市の東門入り口まで運ばせていただきますデイス！ あ、あと、都市までの護衛もさせていただけますデイス！ ご、ご安心ください、私こう見えて賢いだけでなく、強いので！」

どん、と銀鎧の胸を叩く少女騎士。

遠山とラザールはその様子に真顔で固まるだけ。

「まあ、強いのは確かだろうけども」

むふふーと鼻息を吐き出す筋力12〜100を目の前に遠山は力なくつぶやくしかなかった。

34話 ”正義” (後書き)

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！

＜ 苦しいです、評価してください ＞ デモンズ感

35話 それは死すら恐れる強欲にて

「いやー、それにしてもあなた達2人、只者ではありませんデイスねー！ テイタノスメヤを無傷で狩れるのは騎士団の中でも上位の騎士、もしくは私達10剣くらいのものでイス！ 冒険者ギルドも節穴じゃないデイスねー！」

「あ、はは。いえいえそんな、運が良かっただけです。な、ラザール」

「あ、ああ、そうだな。その通りだ。騎士殿のように真っ向からの勝負というわけでもないしな」

「ご満悦でニコニコ笑いながら、荷車を引き続ける第一騎士、数歩後ろを歩きながら愛想笑いを浮かべる遠山とラザール。」

奇妙な3人組は帰路をゆく。

「ほへー、なるほどなるほど、何か作戦があつたのデイスね！ 素晴らしいじゃないデイスか！ 知恵と勇気と狂気を持って大いなるモンスターに挑む！ うーん、冒険者！ いいデイス！ とてもしい！」

ニッコニコのその笑顔は年相応の少女にしか見えない。

しかしそのどう見積もってもおそらく15歳以下であろう彼女はラザールと遠山2人がかりでなんとか引けていた荷車を軽々と引き続ける。

「は、はは。騎士殿は冒険者にご興味をお持ちで？」

屈託ない様子に、ラザールが思わずと言ったように問いかけた。

朗らかでのどかな会話のきっかけ。少なくともラザールに悪気な

ど一切なく。

「ーいいえ、まさか。天使様の剣たる私がそんなわけないでしょ」

すんつと、少女から表情が滑り落ちた。全くの無表情、声も抑揚なく、冷たく重たい。

場の雰囲気が一気に冷えて。

「ラザールくうつうん、なんかすっごい彼女表情一気に消えてるんですが、責任を取れるのでしょうかかねええ」

「し、しかたないだろ！あの流れだと聞いてしまうだろ！そ、それにナルヒト声がかい、聞こえるぞ」

「あ、やべ」

遠山とラザールがわちゃわちゃし始める。

今は何としても穩便に街までたどり着き、この騎士とさよならする。それを目標としていた2人だが、まさかのコミュニケーション、初手においての地雷を踏んでしまっていた。

「あなた達は」

ストルの冷たい声、わちゃわちゃしていた遠山とラザールがぴり、固まる。

「はい」

大人2人が少女の言葉をじっと待つ。



お前なんとかしろよ、いや、お前がなんとかしてくれ。遠山とラザールがバチバチにアイコンタクトを繰り返して。

「とても、楽しそうデイス。仲が良いのデイスね。……ふふ、いつまでもあなた達がそのままであることをお祈りしますデイス」

ストルが目を細めて2人を見つめていた。

眩しいものを見る時と、羨ましいものを見る時、人は似たような顔をする。

「「あ、どうも」

セーフ、なんかセーフだった！ 遠山は息を吐き、ラザールは額を拭う。

よし、これでなんとか話題が変わるはずー

遠山が口を開こうとした時、

「ふふ、それにしても。リザドニアンと黒髪の帝国人の組み合わせ  
というと、噂の竜殺しを思い出しますデイスね！ ご存知デイスか  
？ 2日前に帝国に突然現れた竜を殺した冒険奴隷！」

話題は変わらない。何も変わっていない。むしろドストライクに  
当事者の話が出てきた。

屈託なく笑うストル。

笑えない遠山とラザールはしかし、なんとか大人として本気で少  
女を誤魔化さなければならぬ。

(勉強しろ、ラザール。俺のコミュニケーションを)

(いやいやな予感しかしないのだが。もうなんかオチが見えたのだが……)

「そこそ話をしつつ、遠山がストルに近づく。

軽快なトークでなんとか竜殺しとかその辺の突っ込まれそうな話題を遠ざけようと。

「ああ、はは。話は聞いてますよ。えーと、騎士様は」

「ストル、で構いませんよ、黒髪さん」

「あ、どうも、ストル、さんはその竜殺しとやらに「興味をお持ちで?」

「ええ、もちろんデイス。人界においての柱。第二文明の時より生まれし偉大なる上位の存在、竜。我ら騎士にとって、至上の存在たる竜を滅ぼした人間。興味ないわけないデイス」

「へえ、竜というのはそんなに特別なものなんですね」

「ええ！ その通りです！ 元々天使教会の騎士団は王国の竜教団から別れたものでして！ 竜に対する憧れはやはり特別なものがあるのデイス！ 炎を操り大空を我が物とし、世界のバランスを調停するこの世の理の守護者！ そんな存在にいどみ、己の力を世界に示すこと、それすなわち！ 天使様の御威光を世に刻む最大の信仰の顕れなのデイスよ！」

「ふーん、なるほど。どこの世でも竜ってのはそういう対象になるわけか」

オタク技能の発動により遠山の脳裏に自分のいた現代においての”竜”という存在の情報が駆け巡る。

試練、あるいは災い、あるいは神、あるいは自然。東洋と西洋で若干その存在に違いはあれど、どの時代、どの文化圏においてもその空想上の存在は創られていた。

この世界と現代双方の共通点は、超常のものとして存在しているということだ。

遠山が考えを巡らせる、だからすぐに気付かなかった。ふと隣を見ると、ゴロゴロ荷車を引くストルの唇がにいつと吊り上がっていた。

「そんな竜を殺した存在、ええ、すごく気になるのデイス……  
ムフッフ、一度、本気で手合殺し合いわせをお願いしたいものデイス  
ね……」

うつとりとした顔、その表情はまさしく闘争をたしかに楽しむ強者の微笑み。

ぴりっと、ほおに感じるのは殺気に似た気配。怪物がにじり出す強大な生命としての圧力をまたこの少女も兼ね備えていて。

(……………)

遠山は無言でレーザーに助けを求める。

(だから言ったじゃん、だから言ったじゃん)

首をプルプルと横に振りながらレーザーが声を潜めて繰り返した。

ゴロゴロ、コロコロ。車輪が回る。

ゾツとする美しさと凶暴性を秘めた笑顔はその幼い容姿に映した教会の剣と、思わず地雷を踏んでしまった冒険者達が道を行く。

「こそこそ、こそこそ、レーザーと遠山がアイコンタクトを取りながら内緒話。」

(ナルヒト、あなたは竜の一件といい、今の話といいなんなんだ、ヴィオラパッチの幼体の上でシツクダンスをする趣味でもあるのか)

(は？ なに？ ヴィオラ？ 地雷原でタップダンスって言いたいのか？ やべ、地雷原って言っちゃった)

そんな内緒話に気づくわけもなく、天使の剣は上機嫌。大蛇を積んだ台車をなんのこともなくゴロゴロ引き続ける。

「さて、そろそろ見えてきましたデイスね！ 東門は今、封鎖しているので南門から入りましょうデイス！ ふふふふ、なんか冒険者みたいでたのしーなー」

「……ストルさん、なんで、騎士になっただ？」

遠山は思わず、聞いてしまった。踏み込む必要はなかったのに。

「おい、ナルヒト」

嗜めるラザールの声、ストルがラザールに微笑みかける。

「むふふ、構いませんよ。うーん、簡単な話デイス。そうあれかしと決められて、私は生まれたのデイス。天使様の定めた宿命に人は皆従って生きています。ただ、それだけのことデイスよ」

今度は冷ややかな怒りも、闘争への愉悦も、およそ恐ろしさを感じる気配は微塵もなく。

ただ、当たり前のことを当たり前のように少女は口にした。



「……そうか。答えてくれてありがとうございます」

「むふふ、いーえ、いえいえ。ま、実は冒険者って言う生き方も少し興味があつたのデイス！ 今日あなた達を見て少し、ほんの少しですが、そういう生き方もきつと、楽しかったのかなーと思ったり思わなかったり！ さて、南門はこつちデイス！ 張り切ってくださいましょー！」

「うわ、走り出したよ、アイツ」

「……なんであの重さをあの体躯で軽々と運べるんだ…… 心底敵対しなくてよかったよ。……なあ、ナルヒト。今の彼女への質問は」

「……別に。なんでもねえよ。ただ、あれだ。どこにでもいるんだな。自分で自分のことを不自由にしてる奴ってのは」

遠山は、少し昔のことを思い出した。もう戻れない場所、ほんの少しだけあった学生らしい時代のことを。

――そうあれかしと決められて。

――私はそうしないといけないから

「どこにでも、いるんだな」

目を細めて、ズドドドと砂煙を巻き上げ進んでいく荷車を見送っていた。

「っつて、アイツどこまで走る気だ!?! まさかあのまま門まで行く気?!」

「い、逃げ、ナルヒト、置いていかれるぞ！ 持ち逃げはされないだろうが、なんとなくあれを放っておくと面倒なことになりそうない気がする！」

気付けばかなり小さくなりつつある荷車を慌てて2人が追いかける。空にはぼんやり、小さな雲がぼつぼつ浮かんでいた。

……  
……  
……

「ダメっすね、店長。商人ギルドからの返答は時間がかかります。さっきの冒険者2人の情報、はっきりしたことはまだわかりやせんね」

商業区、賑やかな青空市場。ここはまだ店舗を持っていない商人ギルドのメンバー向けに解放されている市場。

食料品、日用品から武器、防具、お土産、雑貨、さまざまな種類の露店がひしめく冒険都市の目玉の1つだ。

「ふむ、そうか。で、街のウワサではどうだ？」

王国からの移住者にして、遠山やレーザーに無償で荷車を貸し出した商人、ドロモラもまた未だ店舗を持たない夢追い人だった。

「うーん、あの2人の見た目と関係ありそうなウワサはどれもこれも荒唐無稽すぎて微妙っすね」

ドロモラ商会唯一の部下であるビスエへ任せたあの2人の調査。

あの2人組は色々特徴的すぎた。調べればすぐに情報が集まると思ったがそうでもないようだ。

「構わん、全部話せ」

「うーん、ほら、僕らが帝国に来た時はやってたウワサってか、お達しあつたじゃないすか。竜を殺した冒険奴隷」

「ああ、そんな話もあつたな。だがちよつど昨日辺りにその奴隷たちの搜索令は取り消しになつていなかったか？」

露店に置いてある商品、王国から持ち込んだ木彫り細工や食器を磨きながらドロモラが問いかける。

「そうそう、それなんすけどね。その2人もあれなんすよ。黒髪とリザドニアンの2人組なんす。なんでも昨日起きた冒険者ギルドでの竜が起こした一悶着、ついでに今日の朝起きたあのウエンフィルバーナと竜のトラブル、その全てに関わっていたとか、スラム街から出てきたとか、もつぐちやくちやくすね、んぐ、んぐ」

水差しに入れてある水を直飲みしながら、ビスエが答えた。

短時間で街を走り回せたのだ、これくらいはいいだろうとドロモラが目を細める。

「ふむ、あまりに荒唐無稽だな。冒険奴隷がこんな短時間で冒険者になれるとは考えにくい。だが無視するにも組合が特徴的すぎるな……  
やめだ、中途半端な情報で他人を押し量るものではないな」

「店長がそこまでひとりの人間に気を回すの珍しいっすね」

「商人にとって情報とは時になにより優先するべきものだ。さて、そろそろかな」

「ことん、木彫りのコップを商品棚に戻しドロモラが番台の椅子に座る。」

青空市場はその名の通り雲一つない青空の下、都市の活気が熱量となり動き続けている。

いい街だ、やはり王国から帝国へきたのは間違いなかった。

ドロモラは自分が根差そうとしている土地と都市の力を活気から読み取る。

「店長ー、ほんとにあの冒険者2人に無料で貸し出してよかったんすか？」

水差しを空っぽにしたビスエがその癖っ毛をびよんびよんといじりながら口を挟んだ。

ドロモラが深く椅子に腰掛け、手を揺らして堪える。

「ふん、問題はない。片方の黒髪の男いただろう。アレには投資価値がある。あの目、そしてあの頭回転、アレはどちらかと言えば冒険者というよりも、我々側の人間だ」

「我々って？」

「利益のためならなんでもやる、いや、成し遂げる人間さ。あの目をした人間は基本的に危険なことは自分ではやらないことぎ多いのだが、彼は例外らしい。私の話の一部からこちらの求めることを察知し、私の商売の仕組みを一目で見破った男だ。まあ、荷車の一つや二つ程度の投資なら安いものさ」

「おりよ、高評価。店長、まさかほんとにあの2人があの2級の高級モンスター、テイタノスメヤを獲ってくると思ってます？」

「まさか。ああは言ったがそこまでの高望みはしていない。これは先行投資、今の段階でジャイアント・ボアの1匹や2匹狩ってこれればかなり優秀な冒険者と評価していいだろう。我々のようなこの



都市に縁のないものにとって、商會を大きくするためには冒険者との直接取引は避けては通れん」

これは試金石だ。冒険者等級までは確認していないが装備や人員の数からして良くて3級、おそらくは4級の冒険者のはず。

ちようどいい等級だ。王国であれ、帝国であれ冒険者とはたいいてい2級ともなれば自尊心やらなんやらで増長する人種が多い。

対等な商売関係を個人間でやりとりするのはそのくらいの等級の方がやりやすいことをドロモラは経験から知っている。

「いやー、王国だとギルドが機能してないからそこら辺余裕だったんすけどねー。帝国の冒険者ギルドはかなりのキレモノが運営しているように」

「ふん、予想できていた事だ。勇者や英雄が生まれる王国という存在があつてなお、帝国が未だ存続しているのはつまり、民と政治の質が高いことに起因する。帝都の教育機関による優秀な人材育成、民が愚民であると前提した皇帝と貴族院による中央集権体制、まさしく人間の国としての最優は帝国だろうな」

ドロモラは言いながら改めてこの帝国という国家の治世が上手くいっていることを確認する。

この都市の活気こそ、その証拠に他ならない。

目抜き通りには店が多く立ち並び、貧富の差はあれどスラム街という暗部を除いて致命的な貧困はなく、いやむしろ、スラム街という底辺すら貧困層を押し留める一種の受け皿として活用されているような。

まさに、人が当たり前に人として生きていける国。

王国とはまるで違う国だった。

「王国はアレですからねえ」

「ふん、いつ生まれるかも分からん勇者という偶像に頼りきりの衆民、血と過去の栄光しか誇るもののない王侯貴族、政治の甘い汁を啜ることを覚えた竜教団。あの国はもう長くないさ」

かつての本拠にして故郷を話すドロモラの口調に熱はなく。

「まあ、でも王国がヤバくなればー」

ビスエが背もたれなしの椅子に座り込み、息を吐いた。

「勇者”が生まれるだろうな。だが奴らは勘違いしている。勇者が生まれるのは決まって歴史上、人類の存続が危ぶまれた事態になった時だけだ。王国という国が滅びようとて、帝国が無事ならば勇者は生まれんだろうな、王侯貴族の連中はそれがわかっておらん」

選民思想に囚われ、それを政にすら持ち込む無能ども。

ドロモラは完全に王国への愛想を尽かしていた。

「ひっひっひ、いやー、店長についてきて正解だったなーて。せっかく王国で国王御用達の調達商人まで上り詰めておきながら、それぜーんぶ捨てちゃうんすもん。マジウケるっす」

「沈むのが決まっている船に乗り続けるほど愛着もなかったしな。それに、あの第6王女…… 竜狂いの王女に王室はすでに侵されている。悪いが俺は人間のままがよくてね」

舌打ちしながら、ドロモラは脳裏に浮かぶ毒婦の声や姿を頭から追い出す。

邪悪とは常に善意と笑顔でこの世に現れる。愚者はその中身が毒の泥で出来ていることに気づかない、そして賢者はその毒の泥に殺される。

ドロモラは臆病者であったために命を長らえることの出来た数少ない賢者のうちの1人でもあった。

「いやー、店長の先見の明を信用してますよ、あっしは」

「ふん、まあ、無事にここまでたどり着いたのも”契約の商売の眷属”たるコトシロのお陰だろう。天使教会の分霊堂へまたそのうち参ることにするさ、これから先も俺の商会を見守ってくれるようせいぜい媚を売ることによつ」

「……へへ。そりゃいいや。おやおや、なんか騒がしくなってきたね」

ふとビスエが顔を上げて、青空市場の中心街へ顔を向けた。

ドロモラもそれに従い、椅子から立ち上がって目を細める。

「んむ？　人ばかり、か？」

「お、おい、アレみるよ、テイタノスメヤだ……！　久しぶりに狩られてるの見たぜ？」

「荷車引いてるの1人だぞ？！　それにあの銀の鎧に星の鎧匠……  
教会騎士か？」

「あの側を歩いている奴らはなんだ？　騎士じゃないぞ」

「冒険者？ 冒険者が騎士に荷物持ちさせてんのか？」

「んな、バカな。教会騎士がそんな事するわけ、嘘だろ……」

「なにもんだ、アイツら。リザドニアンと、黒髪の冒険者？」

「なんかどっかで聞いたことがある組み合わせのような……」

騒がしかった市場がどんどん熱を帯びていく。大物を狩った冒険者が目抜き通りを進んでいるのだろう。ここは冒険者ギルドへの通り道でもある。

「なんか、騒がしくなってきましたね。……え？ 教会騎士が荷車引いて……」  
「で、店長！ 店長オ！？」

ただいつもも違うのはどよめきがどんどんこちらへ近づいてきている点だ。

人だからの向こうに荷車が見える。

「なんだ、騒々しい。他の連中が騒いでいようがなんだろうが商人に大事なのはどんな時でも焦らない鋼の精神だ。教会騎士が荷車引いていようが、竜が目の前で暴れていようが顔色一つ変えない冷静さこそー」

騒ぎ始めるビスエの声に、ドロモラがため息をつく。まだまだ修行がたりんよ、修行が。

ちらりと片目でまた外の様子を確認し、

「黒髪さん！ リザドニアンさん！ あそこの露店でいいんデイスね！ いやー、久しぶりに商業区までやってきましたデイスが、活気があって何よりデイス！ これも天使さまのご加護あつてのもの



「デイスね」

「「そうデイスね」」

活気ある少女の飛び跳ねるような声、そして疲れ切った男の声が届いた。

気付けば人だかりを割って、目の前にその話題の荷車が停まっていた。

「とうか、これ、うちの荷車じゃん。ドロモラの顔が固まって。」

「……はい？」

思わず、ドロモラが目を剥いた。

「あ、店主のおっさんだ。こんちはー。言われた通り荷車返しに来ましたー」

黒髪の男だ。先ほどの冒険者が疲れた顔を一瞬で隠して、ニコリとわらう。

細い目で作られた歪むような笑顔は、腹の中にイチモツを抱えた人間特有の笑い方だ。

「……………マジ？」

しかし、ドロモラにはそんなことどうでもいい。何より重要なのはその荷車に積まれた成果だ。

黒い体に美しい額の瞳。

2級モンスター、テイタノスメヤ、それが2頭たしかに荷車に乗  
っついて。

「店長、葉巻、逆だぜ」

「葉巻なんぞ吸っておらんわ。ゴホン、これはこれは…… 先ほど  
の冒険者殿、約束を守ってくれたようで何よりだ。持ち逃げの心配  
はしていないかったけどね」

ビスエのつぶやきを雑に返し、ドロモラはなんとか態度を取り繕  
う。

頭がようやく事態に追いついた。

本物だ。自分の目利きは間違っていないかった。こみあげそうな笑いをなんとか押し込めながら事態を理解する。

黒髪とリザドニアンの冒険者2人が、テイタノスメヤを狩ったのだ。

「こんな商売の仕組みを思いつく人を荷車一つで敵には回したくねえよ。で、ついでに商談もしたい。アンタのお眼鏡に叶う商品だといいいんだが……」

「うっわー、店長、これマジでテイタノスメヤっすよ…… 本物初めて見たわー」

「く、くはは、ああ、もちろんだとも。冒険者、予想通り、いや、予想以上だよ」

「ああ、そりゃよかつー」

「おおおー！　すごいデイスすごいデイス！　リザドニアンさん、これ知ってますデイスか？！　王国の細工職人の中でも一部の存在しか作れないビン細工、ボトルシップって言うんデイスよー！」

「ほう、見事なものだ。露店に置く商品にするのはもったいないな」

呑気な少女の声と、リザドニアンの声が会話を途切らせる。

「……………良ければうちの若いのに店の商品を案内させるが……………と、  
いづかなぜ教会騎士が君達の荷車を引いてるんだ……………」

「あ、ああ、話せば長くなるんで、今はスルーで。出来ればそうして  
てくれると助かる……………」

ドロモラが目線でビスエに合図する。

「へいへい、お嬢さんとトカゲさんはこちらへ。はい、わるい  
大人が今からわるい話をしますからねー」

ビスエがへいへいと頷き、にこっーと相好を崩し、少女の騎士へ  
と声をかけた。

「むむむ!? 悪デイスか?! それはいけないデイス! む、で  
も私の正義は黒髪さんには反応しなかつたので問題ないデイスね!」

「あ、やべ。この子そついえば教会騎士……… 教会騎士?!?!  
なんで!?!」

今さらながら状況の意味のわからなさに驚くビスエ。

教会騎士という存在を知っていればいるほど今の状況が余計にわ  
からなくなるのだろう。

「むふふ！ その反応悪くないデイス！ そう、この私、何を隠そう天使教会第一騎士、ストル・プーラなのデイス！ ワッ、このコップ可愛い！」

「ワ、ワア……っ、つまり、すごい人、ツてコト？」

「すまない、店員殿。このボウル、なんの素材でできているんだい？ 木製、まさかこれも樹海素材かい？」

「ワッ、ワア、情報が、情報が多い」

あまりの情報の多さにビスエの語彙力はちいさくかわいくなりつつあった。

「……あちらは大丈夫そうだ」

「ほんとに大丈夫か？」

ドロモラの言葉に黒髪の男がつぶやく。あちらのお遊戯会はビスエに完全に任せることにしたドロモラは強引に話を続けることにした。

「大丈夫だ、問題ない。さて、それでは改めて商談を、始めよう。まず荷車だ、無事に返してくれてありがとう。役に立ったようで何よりだよ」

「ええ、おかげで獲物を運べたよ。アンタが気に入ってくれたらいいんだが……」

「ふ、そんな人を食うような目をするな、友よ。まさかほんとうにテイタノスメヤを獲ってくるとは……」  
確認だが、2人でやったのか？」



「ああ、相棒が凄腕だね。楽な仕事じゃないが、出来ない事ではなかったよ」

「素晴らしい……ちなみに経費はいくらほどかかったのかな？ ああ、特に他意はないが、後字のためおしえてもらえると助かるのだが……」

「さあ、どう出る？ ドロモラは僅かに目を細めつつ、目の前の優秀な男を見定める。」

願わくば、自分の言葉の中に隠した意図を彼が見つけてくれるといい。そんな願いを孕みつつ。

ドロモラが目の前の男を見るその目はまさに、商品の目利きをしているときとまったく同じもので――

「〇」

「はい？」

そんな思惑や思考が一瞬、全て消えた。

「ゼロだ。金は一切かけてない。特別な道具を用意したりもしてねえ。ラザールの獲物のナイフと、俺の隠し玉で狩った」

「……………」

あっけにとられたのも束の間。ドロモラは頭を回らせる。どついでどついで、この男は自分の意図を読んだ上で今の答えを？

ドロモラの言葉に隠された意図、つまり経費を確認することによりその経費分を支払うつもりがある、要はお抱えの契約を提案する心算があることを匂わせたつもりだった。

王国の人間は、こういう遠回しの方法を好む。恋を伝える時は手紙で、殺意を伝える時は毒で、そして利益を伝える時は言葉の森に心を隠すのだ。

「信じてないのか？ まあ、無理もねえ。相性だよ、おっさん。俺とラザールのコンビはこの蛇の化け物ととても相性が良かった。それだけの話だ。まあ、もしアンタが俺たちのことを信用できないなら仕方ない。この蛇はギルドにでもー」

「待て！！ 待ってくれ！ ……おっと」

自分でも驚くほどの大声を出してしまった。にやりと笑う黒髪の男を見てドロモロを内心で舌打ちする。

このままでは会話の主導権を握られてしまう。内心、彼らが運んできたテイタノスメヤ、これは喉から手が出るほどに欲しい。

その皮は工房の武器細工に使えるし、何より特筆するべき額にある宝石目と言われる部位は貴族ですら欲しがらる一品だ。

この商品をきっかけに新たな販路の拡大など多くの効果が予想出来る。だが、何よりドロモラが欲しくなったのは――

「……仮の話だが、正式に私が君たちと契約を結びたいと言ったらどうする？」

「……へえ、契約？」

黒髪の男の細い目にある種の光が宿った。打算と品定め。ドロモラは正しく自分の現状を理解する。

品定めするのは、選ぶのはこちらではない。彼の方だ、と。

「やめた、君との取引の間によつ面だけのやりとりは必要ない。決

めるのは君だ、選択肢があるのは君だ。認めよう、テイタノスメヤを狩ってした時点で我々の力関係は決まっている」

だが、負けるつもりはない。損して得を取る。ドロモラの商売における鉄則の一つだ。

目の前の男の目利きは終わった。聡明で狩りに優れ頭の回転が早い。自らの舌で転がし利益を吸い取るよりも、むしろ身内にして共に利益を共有する方が遥かに美味しい。

ドロモラはそう判断した。この方針転換の早さこそが彼を王国でも有数の王室付き商人にのしあげ、そして王国からの脱出をいち早く成功させた所以で。

「君相手につまらない隠しことはいらないだろう、友よ。私には今後ろ盾も、独自の搬入ルートもない。まだこの国での商売の基盤が何一つない状態なのだ」

「店はそれなりに繁盛してるみたいだが？」

ウワー！ なにこれナニコレエエ！ こんな小さいのに木で作ってある犬の置物！ カワイーデイイス！

ム！ コレは王国で人気の木彫り細工だ。モンスターから動物まで数多く存在しているが1人の人気職人による手作り品のため同じものは何一つないというあの蒐集癖のある人間殺しと噂の――

露店を見ながらはしゃぎ回る騎士とトカゲ男を指さしながら黒髪の男がニヤリと笑う。

「今だけさ。あれは全て王国から持ってきたものだ。帝国に来た時の繋ぎとして用意している商品に過ぎん。私が必要としているのはこの土地に根ざした新たなる基盤だ」

「……契約内容を聞かせてくれ」

「話が早くて助かる、友よ。手っ取り早く言うのなら、君と君の相棒の腕を買いたい。直接的な雇用関係をとるつもりはない。ただ、君たちが持ち帰るモンスター素材、それを我がドロモラ商会に全て卸してほしい」

「……強気な提案だな。俺たちには他にいくらでも選択肢があるわけだけど」

「その通りだ。何度もいうが選択肢があるのは君たちだ。君の自由を侵すつもりは毛頭ない。私は君に対する利益を示すことしかできない」

「その利益ってのは？」

黒髪の男の目が細まる。鋭く、そして冷たい。理性と狂気が混じり合っている良い商人の素質を感じる目だ。

「君の目は野望……いや、少し違うか。ふむ、とてつもなく遠い場所を目指す者の目だ。その目をしている人間に渡すことが出来る利益は一つしかない」

目の前の男を少ない情報からドロモラは推察する、

頭がキレ、腕も立つ、酷薄な目と冷徹な言葉を併せ持つ油断ならない人物。

だが、一点の事実がそれはその男の本質ではないと告げている。

故に、ドロモラは最短最速で答えにたどり着いた。目の前の男の本質と、そういう男が弱い言葉へ。

「誠意だ、冒険者」



「は？」

ドロモラの言葉に、ようやく初めて黒髪の男から動揺が見えた。

「ここだ、言葉をたたみかける。」

「君は目指す者だ。君は進む者だ。選ばれた者でも選ばれなかった者でもない。求める者、自らにないものにそれでも手を伸ばし続ける人間。我々と同じ種類の人間だ」

「目指す者、ね。アンタも同じってのは」

「私はこの国1番の大商人になる、いや、なれる男だ。人の世において商売とはこの世をこの世たらしめる人間の叡知にほかならん。奪い、奪われるだけの獣と人間を違う存在とたらしめる尊い行為だ。私はそれに魅せられている」

「君も同じだ、冒険者。君は何かに魅せられている。そこへ辿り着くためにあらゆる犠牲を払うことのできる人間だ。君が私に力を貸してくれるのなら私も君に力を貸そう。君が私に利益を与えるのなら、私も君に利益を渡そう」

「……………アンタの得になるのか？ 商人のアンタが利益を人に回すとはあまり考えられないな」

「おお、友よ。君は賢いが少しばかり世を憎みすぎだ。だがその通りだ。故に私ははつきり言おう。君が10の利益を得るのなら私は11を貰う。君にはわからないような商売の仕組みを駆使し、君よりも確実に儲ける」

「ここからが正念場。この場に必要なのは話術でも説得でもなく、  
真実のみ。」

そう、真実と誠意だ。

この黒髪の男の本質は、冷徹さでもキレル頭でも、腕が立つとい

う部分ではない。

根っからのお人好しだ。

答えは簡単に導けた。あのリザドニアンを相棒とし、そのやりとりから良好な関係を築けていること。それが何よりの証左だ。

リザドニアンは他者からの悪意に敏感な分、同じくらい信義にも敏感な種族だ。

過去の行いのら差別種族として存在するリザドニアンを相棒に選  
び、なおかつ友好関係を結んでいる人間の本质など、お人好し以外  
に何があるというのだ。

少ない情報からしかし、ドロモラはシンプルな真実へとたどり着  
いていて。

「だが同時に約束しよう。君の10の利益を一つたりとも奪うこと  
はしない。むしろ10を20にする努力も惜しまない。君の邪魔も  
強制もしない。ただ互いの利益だけを担保とする君との協力関係、  
それが私は、欲しい」

だからこそ、冷徹で頭のキレるお人好しへ、なんの隠し事もなく  
全てを語る。

それが最優の方法であると理解していた。

「……そしてアンタは21の利益を得る、と。つまりは俺を儲けさ  
せてくれる代わりにアンタはもっと儲ける、そういうことか？」

「包み隠すことなく、それが真実だ。全て話したのがつまり、君に  
提示出来る私の最大の商品だよ、冒険者」

打てば響く会話、ドロモラと黒髪の男が黙り合う。

商品に目を輝かせる少女とトカゲの騒ぎ声、こちらを遠巻きに眺める人だかりの声。

青空市場の活気や喧騒だけが、じわじわと高まり続け――

「……トオヤマだ、遠山鳴人。呼び方はなんでもいい」

黒髪の男、遠山鳴人が先に音を上げた。

商談において、最後の詰めで先に声を出した方が負けだ。

今回の勝負はドロモラに軍配が上がった。

「ほう……」

「アンタの誠意、確かに見せてもらった。商売の才能も十分理解出来た。OKだ、今後、俺とラザールは優先的にアンタに商品を卸す」

「全て、という話だが？」

ドロモラはふふんと笑みを浮かべつつ、目の前の優秀な取引相手に微笑みかける。

「ひひ、ごうつくばりが。ケースバイケースだ。選択はさせてもらう。だが約束しよう、必ず最初はここに商品を持ってくる。あとついでにあの荷車だけど」

遠山がその声に同じような悪い笑顔を浮かべ、そのあと荷車に目をやった。

「ふん、どちらがごうつくばりかよ。好きにしたまえ。普段はこの露店で確保している。必要になれば好きに持って行って構わん」

何が言いたいのかを瞬時に理解するドロモラ。まあこの程度は痛くも痒くもない譲歩である。

だから次の言葉が本命の駆け引きだろう。ドロモラはの遠山の言葉を待つ。

「ああ、そりゃどうも。ついでに経費、の話だが」

「ふむ、経費については我々に持ち込んだモンスター素材の狩猟に關してのみ払わせて貰う。雇用關係ではない以上、買取金額を増や

す形で払わせて貰ってもいいかな。商人ギルドの監査は厳しくてね」

ここだけは確実に決めていた。こちらに利益をもたらす存在には十分な恩恵を。

信頼できる取引相手には結局、誠意と対価を返すのが1番安上がりに済むことをドロモラは知っている。

さて、そうなると今回の経費はどのくらいのものか。だがまあ、商品はテイタノスメヤだ。いくらでも経費分はペイできるだろう。ギルドでの買い取り相場は金貨7枚から10枚、しかしこの獲物の良好な状態から考えれば一体まるまるオークションに流しても金貨20枚は硬い。買い取りに金貨11枚を払い、経費を払っても確実に利益は出る、いや、いつそ加工して貴族への流通まで関わった方が利益がー

「OK、まあ今回はゼロって言っちゃまったからな。経費の上乗せはなしでいい」

「はい？」



加速していた商売への思考へ冷や水をかけられたような言葉がびしゃり。

ドロモロは思わず素で、口を開いてしまった。

「待て、あれは、その、つまり本気で言っているのか？ テイタノスメヤを？ なんの道具も、設備も、罾も使わずに2頭も？」

「ああ、言つたら。相性が良いつて。まあつっても危険がないわけじゃない。だいたい、そうだな、安全パイ考えて、狩れてあと2頭くらいか？」

「おいおい、友よ。それは流石に」

ドロモラが喉を鳴らして笑う。

生涯ににテイタノスメヤを複数狩れる冒険者などそうはいない。獲物の獰猛さ、強大さ、何より普段は巣穴に潜っているという生態からもその狩猟の困難さは知られていて――

「あ？ 1日に4頭ペースだと足りないか？ 多分荷車で運べる限界が2頭だからな。巣穴の構造や住処の特徴は覚えた。見つけるのさえうまくいけば輸送の時間考えると1日使ってもそれが限界だな」

「……………はい？」

「あ？ なんだその反応。うーん、輸送の時だけ人員雇うのもありだけど弱い奴だと食われるだろうし邪魔だな。まあ、現実的にラザールと俺が組んで狩っていくのがいいだろ。つーか現状、安全パイ取りながら確実に狩れる獲物はこの蛇の化け物だけだ」

「まで、まってくれ、頭が痛くなってきた。今の言い方だとまるで一日最大4頭テイタノスメヤを狩れるという風に聴こえたのだが……」

「いやそう言ってるだろ。こつちもこれから色々資金が必要でね。今のうちにたくさん稼ぎたいんだ。んで、おっさん、そろそろあの蛇の化け物の買取金額について話そうぜ。誠意をもってな」

「……………素晴らしい」

「は？」

「ふ、ふふ、今の言葉が真実だとするならば…………… テイタノスメヤの宝石眼を主軸に我が商会専用の商品開発も可能…………… いや、待て待て、まだトオヤマの自己申告にすぎない、次の成果を持って判断してもー」

「おーい、おっさん？」

「おっと、すまない。つまり、アレかな。君はこのテイタノスメヤを常態的に我が商会に卸せると、そう言いたいのかね？ 信じるよ？ もう信じちゃうよ？ テイタノスメヤ一本賭けで事業計画練っちゃうよ？」

「この蛇そんだけ商品力あるのかよ、ああ、嘘はつかねえ。誠意には誠意を、だ、これからよろしく、店長殿」

「ふ、ふん。ドロモラで構わん。トオヤマ、君との利益関係が長く続くことを竜に祈ることにするよ」

「……………いや、アイツには祈らない方がいいと思うけど」

「はは、友よ。まるで竜と顔見知りのようなことをいうのだな……………  
うん、……………え、違うよね、そんなことないよな」

ドロモラの声が先細っていく。

今、さりげなく見せつけられた異常性と、あの噂の竜殺しの話。

仮に、そうだ。仮に竜を殺せるような存在、特異性を持つ人間ならば、テイタノスメヤの狩猟をなんなく行ってもおかしいことは――

「騎士ストル！ もう、アナタなんでこんなところにいるのよ！」

綺麗な声が、響いた。

驚きと、しかし確かな信頼が混じった女の声。

細身の身体に、ストルと同じ銀色の薄い鎧。ケープに似たマントだけのシンプルな装飾。

ストルと同じ一括りにされたポニーテールは長く、腰のあたりまで下げられていて。

「あ！ クレイデアじゃないデイスか！ 見てください！ このコップ、すごく可愛くないデイス？」

ストルがニコニコ顔でお店の商品をその女性に見せる。

「あ、かわいい……じゃなくて！ もう、このおバカ！ 犯人を見つけてきます！ とか言ってどこかに行ったと思ったらこんな所でなにしてるのよー！」

理知的で、綺麗に整った顔をしかめさせ、細身の女騎士がストルへ詰め寄る。

「あ、えへへ。すみませんデイス。ちょっとその冒険者さんたちと色々ありまして」

「はあ？ 冒険者……？ あの申し訳ありません。うちのバカがご迷惑をおかけしたようで」

「ストルが指さした冒険者、遠山とラザールがわかりやすい愛想笑いを浮かべた。」

「む、いや、そんなことは…… なあ、ナルヒト」

「お、おお。獲物運んで貰ったしな。ストルさん、そのお友達が来たんだろ？ そろそろ仕事に戻った方が……」

「む、そうデイスね！ いやー、なかなか楽しい時間でしたデイス！ こんどオフのときにお買い物に來ますデイス！」

「教会騎士様にお越し頂けるのは光栄です、またのお越しを」

ビスエが、ほっと一息つきつつ礼儀的に問題ない所作で頭を下げる。

「ほんと、ごめんなさい。ストール、なんでこんなことになってるか説明してもらっわよ」

ペこりペこりと頭を何度も下げる細身の女騎士。苦勞していることがすぐにわかる。

その場にいた全員に律儀に頭を下げた細身の女騎士はくわりと目を吊り上げて、ストールの小さな顔をつかみ、ほっぺたをぐによくゆと掴み回した。

「イダっ！？ イダダダ！！ クレイデア！ 顔、掴まないでっ、かお！ 顔の皮が剥げる！」



「お婆か！ あなたがそんなやわなもんですか！ ようやく”死の気配”を探れたのよ！ これから門番殺害の犯人を追うのだからあなたもー」

どこかほのぼのした空間。美少女と美少女が戯け合う非常に遠山にどって素晴らしい空気が流れていた空間。

しかし、それは呆気なく終わった。

細身の女騎士が、ふと、遠山を見つめ始める。

何かに気づいたように、何かに目を奪われているように。

ああ、人は真に恐ろしいものをみた時、固まるものだ。

「……………なにか？」

遠山が静かに言葉を投げかけて。

「う、う、あ…………… う、そ、なに、アナタ……………？ ありえない、  
……………は？ いみ、わかんない」

先ほどまでの清廉な雰囲気は消えた。

頬にさしていた赤みはいつきに消え失せまっしろに。

真っ黒の黒曜石のごとき瞳は頼りなく揺れ動く。

明らかに細身の女騎士の身体は怯えていた。

「どうしたのデイスか、クレイデア。黒髪さんを見て、そんな震えて」

ストルがその異変に気づいたのだろう。カタカタと揺れている細身の女騎士の手のひらを握る。

「……………ストル、アナタ、なんでこの人たちと一緒にここまで来たの……………」

絞り出したかのような声は儚く。

目は真っ直ぐ、遠山から離れない。

「え、へへ、お恥ずかしいのデイスが、私がその、この2人を門番殺害の犯人だと勘違いしちゃって……………そのお詫びに「違う」

頭を掻きながらえへへと話すストルの言葉、それを細身の女騎士の  
声が途切らせた。

「え？」

「勘違いなんかじゃない、……なんて、なんておぞましい死の香り  
…… いや違う、死者？ ううん、死者なのに死んでない、生き  
てる、死んでるのに、生きてる……なに、これ、ほんとに、人？」

自分の口元を押さえ、つぶやく細身の女騎士。

身体は震えて、顔面は蒼白。しかしその身に染み付いた騎士の誇り  
は彼女の足を退げることはしない。

「やばい雰囲気がある、ラザール」

「ああ、俺もそう思うよ、ナルヒト」

明らかに様子のおかしい女を前に、冒険者がぼやいた。

自分達には常にトラブルが降りかかる。それを諦めている、そんな声色だった。

「クレイデア？」

ストルがその細身の騎士へ声をかけた瞬間だった。

「お、オエエエエエエエ！！ オエ、プあ、オウえ」

遠山を見て、細身の女騎士がえづく。嫌悪感そのまま吐瀉物に変わり、キラキラを石畳に撒き散らす。

「え?! もももももも、クレイデア?! なんで? どうして  
デイス? なにか、悪い物でも食べたのデイスか?!」

「違う、違うの、ストル。あなた、2人に正義の問答は使ったのよ  
ね、ねえ」

口を拭いながら、細身の騎士が首を振る。本当に理解できないものを恐れる目は、遠山鳴人に向けられていて。

「え、ええ、もちろん、それで正義は何も……」

「質問は?! 質問と答えは?! きちんとハイかいいえで答えさせたの?! はぐらかせられたり、誤魔化したり、言葉をすり替えたりは?!」

「そんなこと…… あっ」

「やばい、これはヤバいぞラザール」

「ああ、ヤバいな」

「死が、私に見せる。彼を指差す死の姿が。死の呪いをすら嗤うそのおぞましさ、なんなの、一体どう生きればそんなに、そんな風になるの?! あなた、中に何がいて…… あ、ああ、怖い、怖い怖い怖い! 死すら届かない境界…… なに、それ、けむくじやらふかいきり、こつぶんしょかん? いや、いや! 見ないで、こつちを見ないで!」

「いや、お前がこつちを見てんだろ。ラザール、あの女酷くないか、人の顔見て吐いたぞ」

「ふむ、俺だったらショックで寝込むが、ナルヒトなら大丈夫だろう」

「てめ、なんか愉快的な性格を隠さなくなってきたな」

まだ軽口を叩き続ける遠山とラザール。

しかし静かにラザールは周囲の様子を確認し、腰の短剣をいつでも抜ける準備をしている。

遠山は身体の中に意識を集中、キリヤイバの状態を身体と相談中、……ヤバい、割と疲れが溜まっている。うまく使えるか自信がない。

「クレイデア、まさか」

ストルが静かに、取り乱しつつある細身の女騎士に声をかけて。



しかし、その声色からはもう、ラザールと一緒に商品を眺めてはしゃいでいた少女性は消えていた。

「この人、この人よ、門番を殺したのは！ ”死” が告げている、死が呪ってる！ 私の秘蹟は誤魔化せない、黒髪の冒険者！ 門番たちの死が彼を指さした！ 自らを殺した殺人者を、教えてくれている！」

指を刺す細身の騎士、その指先はもちろん、死すら乗り越えてこの世界にたどり着いた強欲な男へ向けられていて。

「……………」

ああ、”正義” が再び、その矛先を探し始めた。

その水色の目、遠山に向けられて――

「おめめ、こわっ」

完全にストルのスイッチが切り替わったことを否応なく遠山は理解した。

35話 それは死すら恐れる強欲にて（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さい！

< 苦しいです、評価してください > デモンズ感

36話 VS正義 その2

その場の当事者たる人間は、皆全て動ける人間だった。

人生において、本当の危機を一度は体験し、それを生き延びてきた人間たちだった。

故に、行動も早かった。

「っラザール！」

遠山が、この世界に来た時より共にいる仲間へ呼びかける。

1秒

「ああ！」

ラザールがその身に、外れた世界より送られる寵愛を、悪事を隠す影の外套を広げようとする。

1・2秒

「やべ、店長！ こっちへ！」

「うぐお?!」

冒険者たちよりワテンポ遅れて、しかし戦闘に生きるものでないなら十分に早い速度で癖っ毛の青年、ビスエがドロモラの首根っこをつかみ、その場から退散しようとする。

2・9秒

「むお?! ビスエ?! つ! ええい! 店台の裏側だ! それと盾は剥げるぞ! 好きに使え!」

首根っこを掴まれつつ、機を見、場を理解するのが生業のドロモラが、女騎士と冒険者の殺気を理解したドロモラが、自分出来る

最大の譲歩を叫ぶ。

己の聡明な取引相手ならば、今の言葉だけで理解出来るだろうと  
確信していた。

4・2秒――

皆が、それぞれの最大最速最善の行動を取り始める。

だが、悲しきかな。それよりも夙く、正義はそのスイッチを切り  
替える。己よりも信頼出来る”死”に愛された賢い同僚の言葉を信  
ずるが故に。

0・6秒

「遅いデイス」

「は、やー」

正義が、なんの容赦も躊躇いもなく襲いかかる。

石畳を蹴り、野生の獣もかくやという速度で冒険者の懐へ踏み込んだ。

振われたのは只の拳の一撃。少女の小さな握り拳はしかし同時に天使教会騎士の一撃でもある。

「う、げ」

腹にまともに差し込まれた拳が、遠山の身体をくの字に曲げる。噴き出る脂汗、背中につけ抜ける衝撃、込み上げる吐き気。

いいのを、まともにもらってしまった。

だが、

「チツ、頑丈、デイスね」

同時に食い込んだ細い腕は、遠山鳴人のこの世界の栄養基準では考えられないほどの筋肉密度を誇る両腕にがっしり抑えられた。

抜けない、動けない。それを理解したストルが舌打ちをする。

「っ、ナルヒト!?!」

「いい!! ラザール! 逃げろ! コイツはヤバすぎる! 2人がかりでも無理だ!」



探索者は、只では転ばない。そして遠山鳴人はその中でも断然、悪あがきをしまくるタイプだ。

「だ、だが」

「判断しろ！ お前はそれが出来るだろうが！」

躊躇うラザールに遠山が檄を飛ばす。ラザールの善性は知っている、同時にその優秀さも理解している。

「っ、”影の導き”！！」

遠山の期待通りに、ラザールが影を纏う。2人同時に共倒れする必要はない。

「これは、悪事のフロリアの影……！なるほど、そういうことですか。ストル、私はリザドニアンを追います。彼もまた死の香りが濃い存在。私の秘蹟と彼の力は相性が良い」

影に消えたラザール、しかし細身の女騎士もまた”眷属”の寵愛を受ける存在の1人。

悪事と死、関係の濃い眷属であるが故にその能力はある意味互いに干渉出来る近いものでもあった。

「わかりましたデイス、第7騎士クレイデア、お気をつけて」

「ええ、あなたも、第一騎士ストル」

教会騎士2人もまた歴戦。短い会話と早い判断、遠山の相手は第一の騎士、正義が。そしてラザールを第7の騎士、死が追う形となる。

「あ、ため、待て！ っげぶ!？」

腹に突き刺さる膝蹴り、思わず手を離し、たたらを踏む遠山。

膝をつきそうになるも、奥歯を噛み潰してそれに耐える。

「頑丈な身体、よく鍛えていますデイスね。黒髪さん」

「……ひ、でえな。一緒に小さな冒険をした仲なのに」

「ええ、残念デイスよ、黒髪さん。あなた達のこと少し気に入って  
ましたが、それももう終わりデイス」

「……丸腰相手に武装はどうよ」

「仕事が早く済んで助かるので問題ないデイスよ」

「それは賢い」

「当然デイス」

会話の終わり、意識の狭間を狙った一撃。

「うえ?!」

悲鳴を上げながら遠山が転がりながらそれをかわす。石畳が痛い。

「また、かわした……」

ストルがハイライトの消えた目で遠山を見つめる、仕留められるのも時間の問題だ。

もう今の彼女はディスプレイス言ってた能天気な少女ではない。敵を仕留めるハンターだ。

「くっそ!! スイッチの切り替えの早いことで!」

店台の裏側――

焦りの中、脳が生き残る術を見つけた。想像以上に俊敏な店員に首根っこを掴まれこの場から退散したドロモラの言葉。

「っ、もしかして」

言葉通り。店台の裏側に潜り込む。

「でも、終わりデイス、丸腰の冒険者さん」

ストールが笑う。低い知性は遠山がその場凌ぎにそこに隠れたとしか思えずー

「ええい！ 南無三！！」

店台、引き出しを強引に引き出す。

べき、い。鈍い音、建て付けが悪い、いや、初めからめちやくちやに強く引つ張らなければ引き出せないようにできている。

「はっ？」

ストールが、目を丸めた。

店台の裏から飛出てきた遠山の手になんか握られていたから。

「は、はは、ひ、ひひひ。なんだよ、良いもん揃えてるじゃん、やっぱ」

黒鉄。白い模様がまだらに。

片手で持てるサイズ長さ約80センチほどの鉄の棒、しかしそれは明確に凶器である。

刃はない、しかし明確に命を奪う武器である。

膨れた先端には黒鉄で象られ、菱形を成している。膨らんだそれは単なる棒ではない。

「お店の商品を勝手に使うのはいけませんデイスよ」

棍棒。<sup>メイス</sup>遠山のいた現代において生み出された騎士鎧を崩すことに使われた鈍器。

騎士殺しとも呼ばれる凶器を、遠山鳴人が握りしめる。

「代金は払うぞ」

遠山はメイスの持ち手を強く握る。しっくり、馴染む。己の手の延長線上のようにメイスを意識する。

鈍器は好きだ。凝り固まったうざいもの全てを叩き壊すことが出来る。

高校時代、大企業の役員の高邸に押し入った時も、半グレ集団の乗り回すバンの窓ガラスを割った時も。



生まれて初めて、怪物を殺した時も。

常に人生において必要な戦いの時間、己を脅かす危機の中、鈍器は遠山鳴人の手の中に握られていた。

「これで拳銃があれば、カナヅチの遠山の復活なんだが、まあ、無理か」

前方、敵。それを見つめる。探索者時代からの癖、探索者が講習で習う始めの一步。

敵を、見よ。己を脅かそうとする敵を正しく認識せよ。

己の身体の奥底、原始より備わる生物としての闘争機能を自覚せよ。

それが、”酔い”の呼び水となる。

「そうデイスか。聞きますが、投降するつもりはありますか？」

「ないな。俺は自分のやりたいようにやる。欲望のままに」

” ダンジョン酔い ”

遠山のいた現代において、ダンジョン内で活動する人間に起きる酩酊に似た現象。

これにより探索者は本来生き物として忌避すべき殺傷、そして恐るべき怪物への恐怖を誤魔化し、進んでいく。

人は、ダンジョンに酔うのだ。そして遠山鳴人の脳はとっくにこの酔いにより破壊されている。

「それが殺人であつても？」

ストルの問いに、遠山は笑った。なぜ殺したのか、そう問いかける少女の目から決して遠山は目を逸らさない。

本質、その人間の本質を酔いが曝け出す。

欲望のままに。遠山鳴人はそのシンプルなルールの下生きている。

「それが俺の欲望ならな。嫌いなんだよ、他人を傷付けてそれを笑う奴らが。ムカつくんだよ、クズが集団でヘラヘラしてんのが。許せねえんだよ、弱いモンを食い物にしてのうのうと生きてるクズどもが」

そんな真似しといて当たり前前に、幸せに生きている奴らに虫唾が走る――

遠山が犯した殺人理由なんてそんなものだ。

今日一日で手をかけた連中の顔、もう思い出せないがその笑い声、ヘラヘラした想像力のない笑顔だけは残っている。

その顔は奴らと似ている。

その笑い声はいつも同じだ。

集まって、唾って、臭い。

幼き日。もふもふの友を奪った連中と全てが同じで。

奴らを始末したことになるの負い目もなかった。

「そうデイスか」

「ああ、そうだよ」

もう言葉はいらぬ。ストルは己の存在理由のため、遠山は遠山望のままにのまま生きるため。正義

前方、敵。

天使教会第一騎士 ストル・プーラ。

「それがあなたの正義なら、私の正義とは相いれませぬ。  
……」  
ジャステイス  
正義”」

「ああ、正義ってのはそういうもんだろ、知ってるよ」

純然たる正義と、強欲が向かい合う。

互いに、スイッチはもう入り切っていて。

観衆の1人が、ごくりと唾を飲む。

それが、合図となった。

「ハッ！！」

「オラ！」

ストルの振るう細剣、その真っ直ぐに進む剣尖が遠山の胴体を狙う。

遠山が身体を大きく逸らしかわす。同時に大振りでメイスを振り回す。遠心力のまま振り上げられたメイスがストルの小さな頭を狙う。

「遅い」

「だろうな」

ひょいっとそれを後方に跳んでかわすストル、しかし遠山は焦らない。

ストルとの距離を取った遠山がニヤリと笑い、

「これも、借りるぜ！」

遠山は、露店の店棚に置いてある盾を剥ぎ取り左手に構える。

「チツ、わざとディスクか」

「押し通る…！」

遠山が盾を構え、地面を蹴る。当然、ストルはその迎撃の準備を構えて

「は？」

ストルが目を見開いた。メイスに軽盾、完全な近接ムーブから始まると予想していた格闘戦、しかし、遠山鳴人は

「バーカバーカ！　こんなところで真面目に戦つかよ！」

逃げた。

「おら、どげどげ！　巻きこまれても知らねえぞ！」



「う、わあ！ こっちに来るぞ！」

「ふざけんな！ 戦えよー！」

突撃と見せかけて、急転回、ドロモラの露店から一気に離れ、何事かと集まっていた野次馬の中に紛れた。

ぽつんと露店の前、腰に差した細剣の柄を握ったままのストルが遠山が紛れ込んだ群衆を見つめる。

「……………私がバカデイスか」

俯き、つぶやく。

騎士の誇りとは闘争の中にある。騎士の名誉とは命を賭けた信仰

のための戦いの中にある。

予感が、していたのに。

黒髪の男、殺人者は確かに強者の香りがしていた、教会の正義、帝国の法を破った者、それも強者。

互いに誇りを賭けた殺し合いが出来ると思っていた。法を侵した罪人を裁く名誉の戦い。己が生まれた理由を今日もまた証明出来る、役割を果たせる喜びに浸れる、そんな予感があった。

そして、また良い生き方をしている人であると思っていた。出会う方が違えば友人になれるかも、そんなことも思った。

化け物を狩り、相棒とそれを運び、商人と値段の交渉をして……

ああ、なんてー

遠山鳴人はきつと、自分に生の実感を与えてくれる予感があった。

しかしなのに、逃げた。騙した

「……じゃない」

かた、かた。震える小さな手のひら。同僚であるクレイデアは遠山への恐れからその身体を震わせた。

では、ストルは？

「私は、バカじゃないデイス！！！！！！」

怒りだ。少女の騎士はわかりやすい侮蔑と、期待を裏切られた怒

りによりその小さな身体を震わせる。

「ひ」

「き、教会騎士がキレてる…… こ、ここ離れた方がいいんじゃない」

「ばか、店はどうするんだよ！」

群衆がパニックに陥る。みな知っている、みな分かっている。世に広く拡がる天使教会。

その武力の象徴たる騎士たちの勇壮さ、そして苛烈さを。

歴史と歌が証明している。教会騎士の怒りに触れることが何を意味するのかを。

「逃しません、あなたが戦わないのなら、今よりこれは法と正義の下における闘争ではない。狩りの時間デイス！ どこへ逃げようとも、あなたの首を吊って飾ってやるデイス！」

ワアアアアアア？！

に、逃げるオオオオオ！

ま、まで、置いていくな！

青空市場が、恐慌の波に吞まれる。人が入り乱れ、群衆が蜘蛛の子を散らすように拡がる。

遠山を探すためストルが進む。青空市場を進むたび、1人が走り出す、逃げ出す。

人混みはストルを避けるように動いていたが、次第にそんな余裕はなくなる。

恐怖とパニックは伝染する。何に怯えているのか、何から逃げないといけないのか、それを理解していない人間もどんどん増える。

あつという間に、青空市場は混沌と化した。逃げ惑う人々、露店を閉める人々、その場につづくまる人々。

その混沌は、人混みを作り出したストルでさえ、飲み込む。

「チツ、これじゃあ探すのも一苦労デイスね」

思わず舌打ち。しかし、いくら邪魔とはいえ無辜の民に手を出すわけには行かない。

遠山の姿を探す、しかし背丈の低いストルの視界が人混みに邪魔され始め――

「っ?!?!?」

それは理由のある反応ではない、脊髓反射にも似た動き。

逃げ惑う人々の中に、どろり現れた明確な殺意を感じての行動。

ストルが半歩、身を逸らす。

鼻先をかすめて振り下ろされる鉄塊の一撃。

「おっと、すげえ反応、いやほとんど反射だな」

ストルが避けれたのはその天性の才能ゆえに。

人混み中、逃げ惑う人々に紛れながら振われたのは戦意ある一撃。

ストルの頭を狙ったそれは空振り、勢いのまま石畳を強く叩いた。

石畳に小さなヒビを入れる一撃は、その男から繰り出されたもの。

「あなた……っ」

「怪物とまともにもやりあう趣味はねえ、追いかけてこいよ、騎士」

遠山鳴人だ。



ニヤリと笑い、一撃離脱。

踵を振り返し、人混みの中に紛れ込む。

「この、逃げるな！ く、待ちなさいディスプレイ！」

反射的に、追う。

ストルはしかし、思考できない。

男の狙いを理解できないまま、追いかける。そこがより、人混みが濃く多い場所だという認識もしないまま。

「どけ！ どきなさい！」

ストルが声を荒げる、しかしそれは群衆のパニックを広げるだけ。

また、人混みが混沌さを増して。

「ツア?!！」

「うお、今のも防ぐかよ。やばいな」

また振られる一撃、群衆の中に紛れて真下から掬い上げられたメイスの一撃をなんとか剣で逸らす。

遠山の体勢が大きく崩れる、ガラ空きの胴体、それを見逃す第一騎士ではない。

「ーあ」

「ヒヒ」

絶好のチャンス。細剣に手をやり、仕留めようとするストルはしかし、この段階でようやく気付き、声を漏らす。

遠山は自らの策が成ったことに、笑みをこぼした。

「く、そ、卑怯な……」

つぶやいた頃には遠山はまた人混みへ逃げ去る。

剣を振るえなかった。

シンプルだ、シンプルに遠山と自分の周りに人が多すぎた。細剣でもそれを抜き、振るえば遠山以外にあたってしまいかもしれない、その可能性が騎士としての剣を鈍らせる。

「ヒビヒビ、よかったよ、お前が口だけの正義じゃなくて」

遠山はまた人混みに紛れる。自分の立場と相手の立場、力量差と環境。

戦闘思考がこれが最高効率だと導き出す。

おそらく技量的に言えば、ストルは何の問題もなくこの人混みの中でも遠山だけを貫ける、しかし可能性だ。それでも他の人間を傷つける可能性がある。

そのもしかしたらが、少女の剣先を鈍らせるのだ。

「く、そ……」

「おら、隙だらけだぜエエエエエ！！」

「く、！」

逃げ惑う人々の隙間から、再び遠山が強襲する。

対して遠山はなんの躊躇いもない。メイスを振り回すことはしないものの、気にせず振りかぶり、思いっきり脳天目掛けて振り回す。

鈍器と剣という獲物の違い。剣であれば触れるだけで大怪我させてしまうが、鈍器とあれば話は別。

そのシンプルな構造と作りは明確に殺意を向けたもののにのみ、死を届ける。

「ふっ、と」

「アッ!?!」

連打、連打、乱打。

一度その事実、周囲の人間を傷つけてしまう可能性を自覚したストルの動きが一気に鈍くなる。

「ジュ」

それを見逃す男ではない。

ストルに向けて何度も何度も振り下ろすメイスの一撃。信じられない筋力と技量によりそれを防ぎ、捌き続けるストルだが

「どっしやらあああ!?!」

「きゃっ!?!」

気合一撃、大きく振りかぶった盾を薙ぐようにストルの剣を持つ  
右手めがけてぶつける。

キン。金属と金属が響く、

遠山の盾が、ストルの手から細剣を弾いた。

「とつた」

殺す気はない。門番たちの時と状況は違う。今は始末していい夕  
イミングではない。

遠山はそのまま再び、手ぶらになり体制を崩したままの少女の脳  
天目掛けて盾を振り下ろす。

ずがんと1発ぶち当てて、そのままトンスラ、レーザーを探して

状況を打開するための一手を考える。

戦闘思考が駆け巡る。遠山の動きにはなんのくもりもなかった。

戦術と抜け目なさで、教会騎士をすら無力化して――

「――勝ったと、思ったデイスか？」

確かに聞いた。盾を振り下ろす一瞬。

確かに見た、天使教会第一騎士たる少女の顔に酷薄な笑みが浮かぶところを。



「正義”は、勝つ、デイス」

ピコン。

【DANGER 危険なクエストが開始されます。DANGER  
頑張つて生き残りましょう】

【DEAD クエスト”絞首刑” 発生

クエスト目標 生き残る

クエスト失敗の場合、死亡します】

「ーは?」

それは遠山の理解を遙かに超えた現象だ。

本人が意識していない油断がそこにあつた。竜を乗り越え、烏を縊り殺した、短時間に積み重ねた勝利がその本能を鈍らせていたのかもしれない。

「<sup>ケツズ</sup>副葬品」

遠山が弾いた細剣、細剣はどこに？

「ー上」

見上げる、くるくる回る細い剣。

廻る思考が加速する。

「ーわからない、だが一瞬、剣先を向けたような

ラザールの言葉、野盗の死に方。

「ー”正義”の使用によりこの秘蹟の持ち主は、自身の考える、もしくは感じる正義にまつわる全ての行動に絶大な補正を得る。

メッセージの文面、つまり、なんだ。こいつの行動、その全てが上手くいくということか？

まさか、いや、待てこれ、なんだ、思考が早すぎて。

遠山は気付かない、周りの時間が遅く感じるほどの思考の加速。

それが、走馬灯であることを。

”正義”の使用により、今、盤面は全てストルの都合の良いように進んでいた。

遠山の弾いた、いや、弾かされた細い剣、首吊りの剣がくるくる回る。

そのの、剣先が、遠山に向いていた。

そのゆっくりな世界の中、正義が少女の笑みがゆっくり、つりあがる。

己の才を人にぶつける昏い歓びの微笑み。

「副葬品 執行 吊れ、”ハンギンケ 首吊りの剣”」

「あ、」

ストルの声が聞こえた次の瞬間には、もうー

36話 VS正義 その2 (後書き)

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さい！

下にTwitterのアカウント貼っています、更新通知などして  
るのでよければフォローしてやってください。

37話 隠しクエスト 【DOG is GOD】

それは、全て補正された事実だった。

”正義”が世界を侵食する。正義の干渉により、全てがストルへ味方する。

弾かれた剣が上方へ飛んでいったのも、ストルの技量と正義の干渉による必然であった。

1510

故に、この時点でそれは始まった

「ア

首に、圧迫を感じた次の瞬間

うー、うー。

風の音がする。

「は？」

まっくら。

気付けばあたりがまっくらで、なにも見えない。

青空市場でも、冒険都市でもないどこかに遠山はいた。

ウー、ウー。



風の音だけが、闇の中をぐるぐる巡っている。

「汝、罪人なり」

「……………ああ、そうだ」

ぼんやりと、頭に霞がかかったように考えるのが億劫だ。

かたん、かたん。うー、うー。

気付けば、遠山は階段を登っていた。

闇の中、足元だけがスポットライトに照らされている。

「あれ、俺……………なに……………」

自分の独り言が、遠くから聞こえる。自分が話しているはずなのに他人が喋っているようだ。

「汝、罪人なり」

「罪を濯げ、罪を贖え、その命で」

闇の中。階段の下から声がした。多くの人間の声が入り混じったような声。

「命…… 贖う……」

うー、うー。

かたん、かたん。

そつだ、思い出した。何かわるいことをしたんだ。ああ、そつだ、おじさんや、おばさん、しせつのひともいってた。

わるいことしたら、あやまらないといけないって。わるいことしたらあやまってもだめだって。

あれ、じゃあどうしたらいいんだ。わるいことしたらせんぶ、おわり？

わるいことって、なに？

遠山鳴人の体は気付けば、少年の頃に戻っていた。

鍛えた身体も、経験によって変わった顔つきも、戦うための武器も。

竜からもらったロープも、なにもない。

「価値なき命よ、進め」

「……価値なき、命、そっか、おれ、ひとりだから、いみ、ないんか」

かたん、かたん。う、うーうー。

とおやまが階段を登る。素直な少年だった、周りの空気を読み、求められることをした、それが出来る少年だった。

「でも、結局、いみなかったな。おじさんもおばさんも、しせつのひともおれのこと、きみわるいって、おとなをばかにしてるって。

なにしてもきらわれるんなら、いみ、なかつたな」

かたん、かたん。

のぼる、のぼる。すなおな少年が階段を登り続ける。

うー、うー、かぜのおとがきこえた。

「あ、だ、だめデイス…… それ以上登ったら、だめ！」

「え？」

ぐいっと、手を引っ張られる。

水色の瞳に、涙を溜めた女の子。階段を登り続けるとおやまを引き止めた。

「だれ、きみ？」

しってるような、しらないような。水色の目の女の子、泣きそつな女の子にとおやまは首を傾げて、

「だめデイス！ いったらだめデイス！ ああ、違う！ 違うのデイス！ わたし、こんなことしたいんじゃないのに！ わたし、正義、わからない、わたし、わたしは正しいのデイスか？！ わたし、わからー」

ぶちゅ。

「え？」

「愚かなる少女、正義を疑うのも悪なり」

「汝はその愚かさゆえに素晴らしく、その蒙昧さゆえに正義の担い手にふさわしい、故に疑うこと許さず」

唐突に振り下ろされた光の剣が、水色の瞳の少女を挽肉に変えた。

「進め、罪人」

少女を潰したナニカの声が響いた。

「……ま、いいか」

かたん、かたん。きょうふもぎもんもない。しょうねんがひたすらに、階段をのぼる。

かたん。

終着点。もう登るべき階段もない。

1人分のスペース、蓋みたいな跡がある板の上にとおやまはたつ。

もう、なんでもいいや。

しょうねんが、全てを諦めて目を瞑るー

「価値なき命よ、正義に逆らった愚かをその薄汚い命で濯ぐといい」

「価値なき命よ、正義にひれ伏せ、正義に捧げよ、その価値なき命  
よ」

うー、うー。

かぜのおとがする。



「価値、なき……いのち」

ぱちり。しょうねんが目を開く。頭に充満していた眠気が薄れていくのを感じた。

【技能 頭ハッピーセット】

「いや、それは言い過ぎじゃね？」

少年がぼやく。気付けば声が元のアラサーの低さに。顔つきもチベットスナギツネのような虚無と苛立ちが色濃く残る大人の顔に。

身体も、生命を殺すに能う鍛えられたそれに戻る。

なんだ、そりゃ。

突きつけられたクソみたいなワードが遠山の胡乱としていた意識を目覚めさせた。

「……愚かな、純粋なまま逝けたものを」

「愚かな、その悪にまみれた魂のまま逝くというのか」

声があきれたようにぼやいた。だが、驚愕はない。ただ、ただ、遠山を馬鹿にしたようにぼやき続けるだけ。

「ッ、思い出した、俺、なんで、……!? くそ、なんだ、これ、身体が動かねえ」

廻る記憶、そうだ、今は戦闘中、戦闘中……… まで、それでど

うなっただ？

最後の一撃、盾でぶん殴ろうとして、それでー

「汝、刑場にて止まれ」

「刑場？ ……っ!？」

息を、飲んだ。

うー、うー、うー、うーうー。

違う。

意識が覚醒していくにつれ、それが、闇の中で巡っていたのが風

の音ではないと気づいた。

かん、かん。

スポットライトが、闇を少しずつ切り取っていく。

それが照らし出される。

遠山は、笑うしかなかった。

「趣味、わりー……………」



スポットライトに照らされるのは、数多の吊られた人間たち。

足をばたつかせ、首元に手をやり、ぶらん、ぶらん。

永劫の苦しみ、永劫の刑罰、闇の中でそれらはずっと吊られていた。

風の音だとおもっていたそれは、刑死者たちの苦しみの声。

1525

正義に逆らった者の末路がここに。

「あ

その中にどこかで見たとあるやつがいた。革の軽鎧に逆立つ髪型。

ああ、あいつだ。荷物を狙ってきた連中最後の生き残り。第一騎士が始末した野盗の1人もまた、ぶらん、ぶらん。

「ヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴ……………」

そいつと、目が合う。

血走り、目のふちから血の涙を流し続けるそれ、顔は膨れ上がり、真っ青に鬱血した刑死者の顔――

「にiiiiiiiiiiiiiiiiiiii」

と、嗤う、破顔う。

お前も、来たのか、お前も、来い、こっちに来いと罪人が笑った。

それを皮切りに、吊られた刑死者たちみんなが笑い始めた。にいいいいと歪んだ顔で手を振る。

こっちへ、こっちへ来いと言わんばかりに。

「やべー……これ、マジでやべー」

まだ、恐怖は追いつかない。

だが、確実に理解し始める。このままでは死ぬよりも恐ろしい目に遭うと。

「ちょ、ほんと、ほんと待て、説明、！ てめ、説明しろおお！ なんじゃあ、こりゃあ！！」

叫び。喚く。なるべく強いことば、明るい口調で繰り返す。そう



しなければ呑まれてしまいそうだった。

「汝、罪人なり、罪を濯げ」

なまじ、頭の回転が早い分すぐに気付いてしまう。

自分の状況が”詰み”に近いことに。

「ふざけんな、サイコ野郎 くそ、キリヤイバー！」

己の信頼する最強の武装を呼ぶ。

しかし、何も出てこない。いつもならそこにあるはずのそれは今はなく。

「……あり？」

「ここは、我が異界。我が領域、”正義”と”首吊り”の場。故に何者も入ること能わず」

「ここにあるのはお前の魂のみ。ゆえに肉体に宿るものは何一つここには持ち込めず」

「……お前、誰だ」

遠山は動かない身体で、しかしその声のする暗闇を睨んだ。

闇に響くといかけの声。

つめき声をわって、それらが返事をした。

「我は”正義”」「我は”首吊り”」

多くの人の声が混じったような声。

石像だ、像だ。

闇の中から翼を生やした歪んだ像が現れる。数多の女神像、男神像が溶かされてまた固められたような歪さ。

折れた翼が何本も無理やりに背中へ、はりぼてのごとく。

そして、首には何重にも重ねられた縄が備わっていた。

「うわ」

冒瀆的な存在。根源的な恐怖、遠山が顔を歪める。

「汝、罪人なり。薄汚い命を捧げよ」

像から声が響く。

無機質な声、しかしその中にはたっぷりの殺意。

「おい、まで、待て待て待て待て！！ くそ、やばい、まじでやばいってー！」

「良い。こうしてまた一つ正義が為される」

「く、そ。ふざけんな、こんなとこで……！ あっっっっっ  
ッッッッッッッッッッ？！」

しゅるり、首にいつのまにか縄が。

そう思った瞬間にはもう、足元の板がぱかりと抜けていた。

「首吊り開始、苦しめ、永劫の時を吊られ続けよ」

「捧げ、苦悶を。悔いよ、罪を」

「づ、っ、ウウウッ？！」

当然、吊られる。首に食い込む荒縄、目が弾けとびそんな衝撃。  
苦しみよりもまず衝撃が先に。

「お前は死ねない。身体は滅ぶとも、お前の魂はここで永劫の刑死を繰り返す」

「お前は苦しみ続ける、我らの正義に反したその愚かさゆえに」

「ヴっ?! う、う」

ぼきり。衝撃が首の骨を折る。肉体があれば死んでいる。でもここには死すべき肉体がない。

ゆえに。

「その縄は、永遠にお前の首を絞め、骨を折り続ける」

「その苦しみは永劫にお前の魂を痛めつける」

「正義に反した故に。正義に刃向かったゆえに」

「あ、ア」

いつまでも、遠山は死に続ける。

ケタケタ、ケタケタケタケタケタ。

石像が、嗤う。

我慢できずにと言うように、首元に手をやり、外せるわけのない縄をどうにか外そうともがき続ける遠山を見て、嗤う。

「その顔が見たかった」

「見せる」「見せるみせる、みせるみせる」

「正義に刃向かう末路を見せる」

「罰だ」「裁きだ」「報いだ」

それはまさに、”正義”と首吊りの化身<sup>罰</sup>だった。

現代においても、そうだ。正義という世間が決める概念から少しでも道を踏み外したものを人は異様に叩きつける。

個人の正義感。理屈ではなく心から生まれるその感情を誰しも人は持っている。それは社会を形成するためになくてはならない防衛機構だ。

だが――

「ああ、見せる、見せる。正義に刃向かう愚かもの」



「悔いろ、悔いよ、罰におののけ、命乞いをしろ、謝れ、あやまれ、醜く謝れ」

「  
我らは正義」

「  
我らは首吊り<sup>正しい罰</sup>」

「  
我らこそが、正しめ」

「  
正しくない貴様は苦しめ」

「  
正義ではない貴様は死ね」

「  
うぐぐぞ……ウグヅッ」

ぼきん、また自分の重みで骨がずれた。でも、死ねない。口があぶくで濡れ続ける、目玉から血が滲み出る、でも、遠山は死ねない。

永劫の責め苦の中、絞首刑が執行され続ける。

泳ぐようにもがく足を見て、正義が嗤う。

呼吸を求めて、ぱくぱく開く口を、首吊りが嗤う。

「ああ、面白い」「おもしろい」「正義に逆らうからだ」「正義に反するからだ」「正義とは、違うからだ」

「我らには権利がある」「そう、正しい我らには権利がある」「罪人を裁く権利が」「罪人を糾弾する権利が」「罪人を苦しめてもいい」「罪人などどうなっている」「しね、しね、くるしめ」

「正義の為なら、我らはなにをしてもいい」

「なぜなら、我らは、我らこそが」

正義。

行きすぎたそのなんと、醜いことか。だがこの姿は正義の概念。人の生み出したもの、人の姿、それそのもの。

社会から道を踏み外したものを叩く、社会の道義からそれたものに怒る。

「う、ヴヴヴ、ぐ、ウ、もつ、やめ、ヴウっ」

遠山が数度目の死を迎える。だが、この世界では死ねない。正義の異界の中で罪人が死に続ける。

「あは

石像が、嗤う。目のないその顔、口だけが耳のあたりまで裂けるほどに、嗤う。

「あはは八八八八八八八八！！」

「おもしろい！」「じら／＼」「じら／＼だ」

「やめてっていった！正義に逆らうバカがやめてってゆった！」

取り繕っていた荘嚴な言葉遣いが一転。

まるで、幼い子どものように。

「もっと、もっと苦しめよう！　もっと長く痛めつけよう！　もっと、もっと、たのしいぞう！」

「我らはせいぎ！　われらはばつ！　ただしいせいぎ、ただしいばつ！　だから、なにをしてもゆるされる！」

「そう！　せいぎはなにをしてもいい！　だって」

「我らは正義なのだから」

「ーだが、行きすぎた正義は、少なくとも悪よりも醜いものだ。自らの醜さに気づくこともなく、他者を傷つけ続けるその姿はどうしようもなく醜く。」

だが、正義は止まることがない。

けたけた、けたけた、けたけたけたけた。

正義の異界で誰もが嗤う。

正義と首吊りは大笑い。

他の刑死者たちもいつしか嗤う、遠山をみて吊られながらも嗤う。

正義は感染る。だってそれは気持ちいいから。安全な場所から好き放題に他人を傷つけることができる。

だって正義は正しいから。

「ウヴ、う」

「……あきた。あきてこない？」

「飽きた」

正義は次を求める。罪に対する罰を充分たのしみ、飽きるのだ。

石像が歪んだ翅を広げて、ばっさ、ばさ。

吊られて、もがき続ける遠山のもとへ。

「飽きた、次はなににする、なにで遊ぶ？」

「こいつであそぶ。こいつにはなにをしてもいい」

「だって、こいつは正義をばかにした、正義に逆らう大バカもの。だから我らは何をしてもいい」

人と同じだ。彼らは人の正義という概念、正義という行いから生まれた存在。

現代社会に生きる人間なら誰もが知っている、行きすぎた正義、陶醉する心地よい正義に浸かった人間は何故か、皆、その罪人のことを調べようとする。

特定、晒し。過去を調べたり、家を調べたり、人を調べたり。

ああ、正義は知っているのだ。それがどんな痛みになるか。

「しりたい、しりたい。我らには権利がある。罪人のことを知る権利がある」



「せいかつ、いきざま、生き方、生まれ、全部さらけだせ、罪人。我らは正義、だから、許される、なにをしても許される」

ああ、正義は本気で思っている。

罪人を調べ、晒すことが”正義”の行為であることを。

”正義”は、我にありー

その姿のなんと、醜い気高いことだろうか。

石像が、その長くのびた爪が、遠山の頬を撫でてー

「みせる、お前の過去、今、未来、全てを――」

正義が、罪人から全てを奪う。

正義は何をしてもいいのだから。

遠山の思い出。誰も触れる権利はなく、本人だけが大事にしているもの。

もう戻れない過去。青い春、冷たい夜、夕方の匂い、夏休みのプール、読み込んだ教科書、朝の図書室。

涼しい、高架下、けむくじゅらのかおり――

正義が、その宝物に手を触れて

「それに、触るな」

「っ！」

だが、正義は知らない。

奴らにこれっぽちも権利はないことを。

だが、正義はわからない。

何をしてもいいわけがない、そんな簡単なことを。

罪人が、目を見開く。

罰により鬱血した顔、血を流す目。

正義が動きを止める。

「いま、さからった」「さからった」「今、こいつ、正義に逆らった逆らうさからったさからった、さあらっカラカタあやあやあるかヤア皿またらとわ逆らうりとさから」「おわうっら

正義が、膨らむ。

「タコどもが……」

遠山はミスをした。

正義、その何よりの厄介さ。



正義。

人はみな、その言葉が大好きだ。

だって、正義は正しく。

「きも……」

「せいじぎぎぎぎぎぎぎ、正義iiiiii!」

正義であれば、何をしてもいいのだから。

人が積み重ねてきた歴史が、“正義”という概念をそう定義していた。

「……ほんと」

正義から最も遠く、カケラもそれを持っていない罪人が吐き捨てる。

ぶん、ぶん。

だが、遠山の抵抗もここまで。人である以上、社会に根差す人間という存在である以上は、“正義”からは逃れない。

「せぎ！ 正義！ せぎ、せぎい！ きぎい いせせせせせせせ  
いいいいいいいいああ、正義正義正義正義正義正義正義正義正義  
正義正義正義正義正義正義正義正義正義正義正義正義正義正義  
しいいせぎぎたこやおをあせいじせちぎせいぎせいぎいいいいき  
いちい」



膨れる正義が遠山に手を伸ばす。

逃れられない。遠山鳴人は欲望のままに生きる人間であり、その欲望は人間社会の中でのみ満たされる。

これがもし、そう、例えば、本質から他人を必要としない”完成された人間”であるならば、膨張した正義を殺すことが出来たかもしれない。

これがもし、そう、例えば、”英雄”であるならば正義に対して更に強い確固とした己の”正義”で太刀打ちすることができたかもしれない。

「くそ、タ」……」

「せいぎいいいいい」

だが、遠山はどちらでもない。欲望を求め、拡大してゆくその自我の成長にはいつも、“他人”が存在していた。

決して1人では完結出来ない人間は、膨れる正義から逃れられない。

吊られた罪人へ、巨大化した”正義”が手を伸ばす。

足をひきちぎろう、手を潰そう、耳をくりぬき、目をかきませ、腹をねじきり、腸を結ぼう。

くるしめて、くるしめて、あそぼう。

遠山鳴人が、正義の異界で死に続ける。

遠山は、逆らえない。

「ほんと、キモいわ」

諦めたように、力なく笑って。

ああ、くそ。

また、かよ。

2度目の終わりの実感。吊られた男の脳裏に流れるのは遠い光景。

冷たい水、暖かい椅子、遠くから聞こえる仲間の声。青い空、白い雲。

そこにはもう、たどり着けない。

仲良くなれた影に愛された嫌われ者、ひとりぼっちの不器用な竜、すなおなこどもたち。

ようやく始まった冒険。それが終わる。

「いえ、みとめる」

「自分のおこないが悪くて、反省していると、いえ」「

「せいぎにさからって、ごめんなさいと、いえ」

膨れたそれはもうなんなのかすらわからない。

正義の原型すら失ったそれは、ただひたすらに醜く、そして、どこまでも幼稚だった。

「いえ、じぶんがまちがって、いたと」

正義はそれを求める。自分のおこないが正しかったと認めたいが故に。

罪人に反省を。

「そうすれば、少しは許してやってもー」

正義が、罪人に、吊られた男の心にトドメをー

「バーカ、俺はなんも間違っただけでねえ、なんも後悔してねえ。次も、同じことを何度でもしてやるよ」

嗤う、笑え。

自由なる罪が、正義を嗤った。

「欲望のままにな」

ペッ。

吐き出された赤黒い唾と痰。

汚く、不浄なるもの。遠山の生きた証、身体からの分泌物が飛ぶ。

ぺちやり。醜い正義に当たって垂れた。

「正義」

鉄槌、無表情で、振り下ろされる光の剣。遠山の存在をこの世から完全に消しー

## ピコン

【”正義”と”首吊り”のコンボ 異界 ”絞首刑”内において技能、”頭ハッピーセット”及び、POW値による対抗ロールに成功。唾と痰、不浄なるものにて、”正義と罰” 人間により生み出され



た”清浄”なるものへの対抗に成功】

【知の眷、の 書館の知識から”人類の概念”への対抗神性を検索、正義と罰を”清浄なるもの”と仮定。”強欲と遠山鳴人”を不浄なるものへと認定】

【遠山鳴人の過去の思い出より、 獵の未覚醒幼体との接触、交流を確認。 の概念体、 及び の合一体と未覚醒幼体の集合体、通称”キリヤイバ”の結合を確認】

【縲舌つ綱？レ縛ッ蠢控↑縛エ縛い、決して】

ソレは、最期まで悔やんでいた。

自分と同じ、孤独な彼を1人にしてしまうことを。

ソレは匂いで知っていた。彼は自分と同じでほんとは1人が嫌なことを。でも、意地を張り、強く在ろうとしていた。

ソレはとても嬉しかった。彼がこどもから大人になるまでの過程でさまざまな冒険を繰り返したことを。

「……………ば、かな」

人間社会に根差す概念、正義が固まった、概念としての本能がソレを見て動きを止めた。

「くさい、なんだ、悪臭、これは、世の不浄全てを煮えたぎらせて蒸留したような悪臭は?!?!」

目に見えて、正義が狼狽えはじめる。

いいや、違ひ。

遠山はぶらんぶらんと揺れながら、正義を見た。

怯えている、正義はその匂いにおびえていた。

「この、におい……」

悪臭と騒ぐ正義とは裏腹に、遠山はそのにおいがきらいではなかった。

お日様ののにおいと、ポップコーンのにおいと、香ばしいなにかのにおい。わずかに土にも似たそのにおい。

ああ、ソレを遠山は知っている。

【異界内での”鋭角”の存在を確認。遠山鳴人の眼窩において12

0。以下の鋭角を確認】

ーチベットスナギツネみてーな目してるよな、鳴人

いつか、探索者時代に仲間から言われた言葉。遠山鳴人の特徴的な目。

それは、ソレの出入り口となれる。

1563

「あ、ああ……?! あああああ……!?! 不浄…… 不正義、  
ああああ、なに、なん、なんだ?!」

正義の石像。膨張した自意識の塊が今度こそわかりやすく、おの  
のき、遠山から一步、二歩あとずさった。

あ、あああ

じじじじじじじ

いいいいいい

ぶらん、ぶらん。

正義に屈した刑死者たちもまた同じように怯え始める。  
折り重なる悲鳴とともに、彼らの首を吊る縄が揺れぐるぐる回り始  
めた。

1564

悪趣味なお遊戯会にいるようないー

恐慌がその異界を支配する中、でも、何故だろう。

遠山だけは決してソレが怖いものだとは思えなかった。

「す、姿を見せよ！！ 姿を見せよ！ 我ら正義と首吊りの異界に  
紛れ込んだ異物！」

「然り！ 姿を見せよ！ その悪臭、許すまじ！ その不浄、断ち  
切ってくれる！」

喚く正義の原型、慄く正義の集合体。光の剣をぶんぶん振り回し  
始める。

意思持つそれは今、明らかに怯えていて。

ソレは、決して許さない。

遠山鳴人を害すもの、遠山鳴人を脅かすもの、遠山鳴人を傷付け

たものを。そして何より

【DEADクエスト”絞首刑” クエスト更新】

【隠しクエスト Dog is God

クエスト目標”クソ正義”に死を】

遠山鳴人のぼうけんを邪魔するものを決して許さないのだ。

「あ、ああああ?!! なんだ、なんだあ!? ソレ、ソレはああ

あ?!?!」

「え?」

正義が、遠山を、いや、遠山の背後にアるものを指差して――

気付けば、首の苦しさが消えている。

首を吊られたまま振り返る。

ただ、ソレは巨大だった。

膨れあがった正義と同じか、それよりも少し大きいくらい。

闇の中、何故かソレの姿は浮かび上がるように見えていた。

青い粘液が滴る身体、大きな四つ足、大きな口からは太くしなや



かに伸びる注射針のような舌が覗いている。

ドロドロの青い粘液を纏う獣には、燃え上がるように金色に輝く  
2つの目がそなわり。

――ずぶずぶに溶けかけたなにか。

おおきなくち、おおきなさんかくのみみ、しっぱ。

「…………い、ぬ…………？」

何故、そんな呟きが出たのか遠山にもわからない。

見るだけでおぞましい存在のはず、その姿は明らかに正しいもの  
ではない。

なのに、なんで、なんで、こんなにも胸を締め付けるのだろうか。

なんで、なぜか懐かしいのだろうか。

遠山はぼんやりと鋭角のある細い目でソレを眺め続けた。

ソレも燃え上がる目で遠山を見つめていた。

がちり。

ソレがおもむろに、牙を鳴らす。およその顎から逃れることのできる存在などいないだろう。

首吊りの縄など問題にもならない。

「おっおっ」

遠山の首に巻きつき、締め上げていた吊り縄が千切れる。

《……………》

ぽふ。

縄がちぎれ、落ちていく遠山をソレが顔を伸ばして掬い取る、おひさまの匂いと香ばしいポップコーンの香りに遠山は包まれた。

「……………お前」

ゆっくりと、ソレが鼻に乗せた遠山を闇の底に下ろした。

遠山が巨大なソレを見上げる、

ソレがゆっくりと首を下げる。まるで、遠山と視線を合わせようとして  
しているかのようだ――

「不浄！ 不潔！ 正義にあらず、我が異界を侵す悪臭を絶つ！」

正義の像が、声を響かせた。

その手に握る断罪の剣、光そのものといった剣を振りかぶり、ソ  
レに振り下ろす

ん

「ーエ？」

光の剣、虚しく、闇の中にくるくる廻る。

ソレが、おもむろに牙を鳴らした。

それだけで、正義の像はその面積の6割を消失した。

何かに噛みちぎられたような断面、歪な像の無機質なはずの表情はしかし、はつきりと恐怖の色に染まって。

「あ、エ？ ま、待っ《わん》 じゃすていじゅッ」

がちり。

2度目、ソレが青い粘液の滴る顎を鳴らす。

正義が、ぷちり。光を漏らし潰れて消えた。

獣DOGに正義など関係ない、知るものか。

《フンッ》

ソレがぶるぶると首を振り身体を震わせる。雑魚が、と言いたげに消えていく光のカスに向かって鼻を鳴らした。

「……………」

遠山にはソレがなんなのか、理解出来ない。形を認識しようとも意識が理解を邪魔する。

目の前にある存在に霧がかかっているような違和感。

《……………》

「う、あ

あまりの、異様。

思わず、遠山がうめく、恐れたのだ、その未知、その力が怖かった。

ソレは黙って遠山を見下ろし、そして後ろを向いて去り始めた。

何故だろう、その去りゆく背中、尻尾のようなモヤが元氣なく垂

れ下がっているように見えた。

三角の耳もぺたりと垂れ下がり、燃え上がるような目が寂しげに揺れた気がしてー

《……………フウン……………》

闇に溶けるように、巨大なソレが去っていく。

どくん、どくん。

心臓が、うるさい。恐怖のせいでも、痛みのせいでもない。

胸を締め付けるこの感覚が、なんなのかわからない。ただ、寂しげに消えていくソレに気付けば手を伸ばしていて。



「ーま、て」

呼び止めた。ソレをこのまま返してはいけない。帰してはいけない。

理解もできぬ、人知を超えた力に殺されかけた。だがソレは更なる力をもって正義を噛み殺した。

明らかな危険、明らかな恐怖を感じるべき存在。そのまま行かせた方が絶対に安全、刺激するべきでない、関わるべきではない。

理性はそう叫ぶ。

でも、ダメだ。

理性以外の全てが遠山にソレを呼び止めさせた。

手を、伸ばす。

《……………ブフ、クオン》

ず、ずずず。

ソレが闇を引きずりながら遠山へ駆け寄る。巨大な牙、大きな耳、青く濡れた体毛。

「……………」

言葉はない。

ただ、手を伸ばす。

《……フンフンフンフン》

ソレが、身体を出来る限り縮め、遠山の手にも鼻を伸ばした。

ぺちゅり、濡れている。青い粘液にまみれた鼻が遠山の手につきられる。

遙か巨大なソレは、しばらく遠山の手を嗅ぎ続けた。まるで懐かしさを味わうように。

《フン、ぶふ、フーンン》

ソレが鼻を鳴らす。

遠山が闇に座ったまま手を伸ばし続ける。

あの日、高架下での出会い。

ひとりぼっちの少年と、ひとりぼっちのソレの道が交差した僅かな夏の日の時間が、今また、ここに。

「おまえ……」

遠山にはソレがなんなのか認識できない。霧と闇に紛れた巨大なソレを理解も視認も出来ない。

でも、手を伸ばさずにはいられなかった。

《…………… 蜈ア縋オ》

ソレが鼻を鳴らし、満足げに燃え上がる金の目を細めた。

ツンと、鼻で遠山を押し出す。

行っってきて。

ソレは願いを込めて、ソレは親愛を込めて、強欲冒険者を正義の異界から押し出す。

「あ………」

ソレの姿が今度こそ、はっきりばやけ始めた。闇に溶けて崩れていく。

でも、今度は尻尾は垂れておらずゆっくり振り回されて。三角の耳はヒコーキのように平行に伸びていて。

——いっしょに、ぼっけんにでるんだ！

——わん！ わん！

あの日、世界に奪われて叶わなかったぼっけんがあった。

あの日から遠山はさらに世界が大嫌いになった。この世は基本的には奪われるように出来ていると知った。

世界とは容赦するべきでない敵だと知った。

《……………》

ソレは溶けながら、じっと、遠山を見ていた。

遠山も、黙ってソレを見ていた。

あの日の続きは、たしかにここに。

「ソレがなんなのか理解出来ない遠山、しかし気づけば喉を震わせる、舌を嚙んだ。」

「」

名を、呼ぶ。自分が何を言ったのかすら壊れゆく世界の中の遠山はわからない。時間も空間も超越した異界が崩れていく。

《！ フン、ブフ、ワフ！》

満足そうに、ソレが身体を揺らす。

青い粘液、闇と霧を纏うソレの音が異界を破る。

主人の旅路を、友の冒険を。

例え己が滅びても、ソレは決して忘れない。高架下で交わしたゆ  
うじょうのひびを。

決して。

「行ってくる」

《ワン！》



あの時と変わらない声。

しょうねんとけむくじゅらのぼづけんはまだおわっていない。

何一つ、奪われてなどいなかった。

世界が割れる、異界が崩れる。

遠山の視界が、ぼやけて、消えて。

ああ、でもなつかしいその香り。香ばしい犬の匂いだけはいつも  
でもー

ピロン

【正義の消滅を確認、異界の主が倒された為、元の世界に帰還します】

【DEADクエストを乗り越えました。の公書で特別な技能を選ぶことができます】

【隠しクエスト DOG is GOD クエスト目標達成】

【キリヤイバへの理解を深めました。特殊なクエストを繰り返し、キリヤイバの秘密に迫ることで秘められた力の全てを扱うことができますようにります】

……  
……  
……

「…………ア、ア…………」

ひととおり暴れ、もがき苦しんだその動きが止まったのをストルは確認した。

喉はかきむしられ、皮膚がじゅくじゅくに剥げている、手の爪は喉のほかに石畳を掻きむしったせいで剥がれたり、傷んでいる。

「……………」

誰にも聞こえない声で、ストールは今自分が殺した男を無表情で見下ろし続ける。

水色の瞳にはなんの感情も、映っていない。

正義の裁きは下った。少々のアクシデントはあったが概ね戦術通り、首吊りの剣がまた教会の法に逆らう、正義に逆らう愚か者を裁いた。

「……………強かったデイスよ、あなたは」

唇の中で、ストールが黒髪の冒険者の死骸を見下ろしつぶやいた。

ふと、気付く。彼の右手はまだメイスを握りしめていたことに。

「……見事、デイス」

あれだけ苦しんでいた。首吊りの剣による窒息の苦しみは人が耐えられるものではない。

顔は青く腫れ上がり、口は泡を噴いている。死相は壮絶、目を見開き、目の端からは圧迫によって血が滲む。

なのに、彼は最後まで武器を手放していなかった。今更その事実  
に、ストルは敬意とともに少しの恐怖を感じた。

「第一騎士、ストル様！！ ご無事ですか！！」

ばから、ばから。

軍馬の集団が街を駆け抜け、市場にたどりつく。

フルプレートの鎧に豪華なマントをあしらう教会騎士の部隊のお  
でました。

馬から降りた彼らが一斉にその場に片膝をつき、右手を胸に添え  
て首を垂れた。

その敬意の向く先は、第一の騎士。少女の姿に身をやつした教会  
騎士最高の剣へ。

「……ええ、お仕事ご苦労様デイス、楽にしてください」

「ハッ！！」

正義の担い手、理想の騎士へ憧憬を孕んだ声で騎士たちが答える。

「お見事です、ストール様。この短時間で教会に仇なす賊に裁きを下されるとは」

「あなたこそ、正義の具現、天使の光に愛された教会最高の剣」

騎士たちから放たれる数々の賛辞。それに精一杯の作り笑いで答えるストール。

今日は、今日はとても疲れた。

帰りたい、もう、帰りたくて仕方なかった。

「……もう1人の方は？」

だが、そういわけにはいかない。己の職務に邁進することこそ騎士の本分。ストールはおるか故に気付かない、その気持ちを認識するのも、言語化するのも知性が足りない。

なんで、ころしてしまったんだろう。

一瞬芽生えた迷い、それは決して自分が抱いてはならないものだ。  
愚か故に聡い彼女は自分に沸いたナニカを握りつぶした。

……



びく。

びく、  
――

――なあ、起きて。ぼっけんのはじまりだよ。

37話 隠しクエスト 【DOG is GOD】(後書き)

イツヌは決して忘れない、あなたとすごしたじかんを、決して

38話 ラ・ザールと遠山鳴人

「もう1人は？」

「は！ 先ほど、第7騎士クレイデア様、及び第4騎士クラン様によりその身柄を捕縛！ こちらへ連行中とのことですよ！」

ストルの短い問いかけに、現れた部隊の男が答える。

「その情報、遅いものだな」

「……クラン、デイスか」

「やあ、ストル殿、おや、どうしたんだい？ らしくなくあまり元気がないように見えるが」

部隊を率いていた銀髪碧眼の美青年。第4騎士クランが微笑みながら、ストルへ声をかけた。

「……別にそんなことないデイス。あなたは逆に、竜に焼かれたと  
いうのにお元気そうで何よりデイスね」

皮肉たつぷりにストルがつぶやく。今はこの男とまともに話す気にはとてもなれなかった。

「ははは！ 当然だとも！ あの瞬間、僕と蒐集竜様は絆で結ばれていた！ 私だけに向けられたあの炎はまさに、蒐集竜様からの愛というわけさ！ 私がしんでいないのが何よりの証拠！」

10剣の中でも特に竜への執着が強いこの男。

この男はつい先日、竜の巫女の不興を買い、死にかけていた。そんなことおくびにも出さずに髪をばさり整えつつ、きららと笑う。

「……聖女がその場にいたからデイスよ、あなたが死ななかったのは」

「ふ、君が妬くのも分かるよ。”竜殺し”などという下賤な奴隷のお陰で私も苦労しているものだ」

うんうんと頷きながら克蘭がつぶやく。竜殺しという言葉を語る瞬間、声が低くなっていた。

「竜、殺しデイスか」

そう、竜殺し。騎士の間で持ちきりの奴隷の名前。

黒髪、茶眼の帝国東部の人種らしい。今しがた手にかけて男と全く同じ容姿なことに少しストルは言葉を濁した。

「ストル！！ よかった！ 無事なのね！」

遅れて馬に乗ってやってきた細身の女騎士が相好を崩した。

「クレイデア！ 貴女も…… よかった お怪我は？」

「ええ、問題ないわ。かなりの手練れだったけど。クランが途中で参加してくれなければ、逃してたでしょうね」

馬を撫でて諫めつつ、するりと下馬するクレイデア。

「ははは、クレイデア。そう贅美されると私も恥ずかしいですよ。まあ、罪人にしては特異な才能の持ち主でしたが、我が剣の追撃からは逃れませんでしたねえ」

クレイデアはクランの言葉を無視し、馬のお尻のあたり手足を拘束され、荷物のように載せられていたソレを肩に担ぎ、ゆっくりと地面に下ろした。

「う…………… ニ、ニニは。くそ…………… 逃げ切れなかったのか」

ほこりに塗れ、切り傷や生傷が目立つ。

手足を後ろ手に縛られた罪人、ラザールだ。気絶していた状態から目が覚め、自分が捕縛されてる事態を理解した。

「トカゲさん……………」

「チツ、こんな形で再会するとはな…… 待て、ナルヒトは？ ナルヒトも捕まったのか？ アンタが無事ということは、逃げたのか？ 逃げ切れたのか？」

小さな声でつぶやく少女の騎士。第一騎士ストルにラザールが問いかける。

辺りは教会騎士が集まり、しかもそのうちの3人は10剣の連中、簡単に出し抜ける相手ではない。

だが、トオヤマナルヒトがいるのならどうにかなる。ラザールはたった2日ほどの付き合いであるはずのその男の実力を既に信用しきっていた。

「……………」



スツと、ストルが視線を外した。

嫌な、予感がした。王国時代、いつも悪いことが起きる時と同じ空気を感じて。

「ストル様、罪人の遺体の確認が終わりました。死んでいます、呼吸も瞳孔も開ききっております」

「.....は？」

ぼかん、口が開いた。

「……クラン、彼を押さえてください」

「む？」

ストルの小さな言葉、クランが目線を向ける。

「うそ、だ」

目を凝らす。

見えてしまった。騎士達に囲まれる中、石畳に仰向けに倒れている何かを見た。

「うそだ、おい……　　なんだ、これ……　　はは、なんだこれは……  
どうして……」

そのあつらえの良いローブ、そして奇妙なつくりの履き物。それを着ている人間をラザールは1人しか知らない。

「ふん、おい、君、トカゲを抑えたまえ。悪いが、これ以上鎧を汚したくないのでね」

クランがラザールに触れることを嫌い、部下の1人に命令する。

「は！　おら、立て！　トカゲ！　手間をかけさせるなーっ」

地面に座り込み、ただ一点、動かない人の遺体を眺めるラザールを立たせようと、騎士の1人がその肩を掴んでー

ばきん。

こてん。

騎士の施した拘束を神業の速度で解き、肩を掴んだ騎士の無防備な顎へ裏拳をかます。

崩れる騎士を尻目に、ラザールが駆け出した。

「ナルヒト!?!?!」

逃げるのではなく、友の元へ。

「く、この！？ トカゲ！！」

「動くな！ それ以上近づくのなら！」

騎士が色めき立つ。剣を抜き、死体への道を塞ぐように隊列を為して――

「邪魔だ」

「「「あ！」「」」

どろり。レーザーが影に溶ける。

騎士たちを簡単にすり抜け、すぐにたどり着いた。

「ナルヒト！ 俺だ！ ラザールだ！ 頼む、たのむから起きてくれ！ おい、嘘だろう！ これからじゃないか！ ようやく、ようやく始まったのに！ なんて、なんでアンタが…… 何故だ！」

ああ、くそ。やはり、倒れているのはトオヤマナルヒトだ。

揺さぶる、その肩を。

叩く、そのほおを。

しかし、遠山鳴人は全く動かない。

「あ……」

開き切った瞳孔の上を、小蠅が歩いていた。

パチパチと叩いたほおは恐ろしいほど冷たく、硬くー

「……………あ、ああ、いやだ、いやだ、そんなの。ちくしょう、  
なんで、いつも……………いつもこうなる……………」

死んでいる。

生きていない。ラザールはそれを理解してしまった。

「この、トカゲ！」

呆然とするラザールが、地面に叩きつけられる。

石畳に打ち付けられる身体、しかし痛みも感じない。

「おーいこちらから、君たち、殺してはだめだよ、適度に痛めつけておいてくれたまえ」

「はっ！ この、離れる！ 薄汚いトカゲめ！ そいつはもう死んでるんだ！ 我ら教会騎士に刃向かったものがどうなるか、よくわかっただろうが！」

地面に倒れたまま、腹を蹴られた。

「ぐぐ？！ っ……………」



「オラ！ クラン様の慈悲に感謝するんだな、お前たちのようなクズ、本来なら全員その場で切り捨てるのが当たり前なんだから、な！」

「じぼ！？ ……く」

次は首を蹴られる。

「おー？ なんだ、その目は？ その罪人はもう死んでるんだ、終わってたんだよ。賢くなれよ、リザドニアン、おら、大人しくしろ」

集団にたかられ、殴られ、蹴られ、地面に叩きつけられる。

1人の兜をつけていない騎士がニヤニヤしながら、しゃがみ込みラザールを笑う。

何も言わない、悲鳴もあまりあげないリザドニアンを面白がって騎士が痛めつけ続ける。



「我ら教会騎士を愚弄するクズめ」

「しにくされ、罪人」

なんと、誇り高い姿だろう。友の亡骸を守ろうとする瀕死の男を完全武装、多人数で囲み殴り、蹴り、痛ぶる姿は。

なんと薄汚い顔だろう。兜に包まれたその顔には弱者を虐げる愉悦が滲み出て。

「ち、ちよっと、クラン、やりすぎよ！ 死んでしまっわ！」

クレイデアが流石にといったふうにはじめた。

その声に、第4騎士、クランが肩をすくめて首を傾げる。

「はて、だがね、クレイデア殿。アレは今、我ら教会騎士を愚弄したのですよ。彼らの誇りに唾を吐きかけたのです。あの程度の制裁は権利でしょう？ まあ、これで死んだら、希少な眷属のスキルが失われますからね、程々のところで止めますよ」

顎を撫でながらクランが軽薄な笑みを浮かべる。殺しはしないが助けるつもりも毛頭ない。

部下のガス抜きにちょうどいい、その辺にしか考えていない。

「クラン」

「はい？　なんでしょう、騎士ストル」

「今すぐ、彼らを止めなさい」

「はは！　どうしたのですか、ストル殿、貴女まで。先程の私の話聞いてー」

端正なクランの顔が、引き攣った。

隣にいる自分より頭3つ小さい、見下ろすサイズしかない小柄な少女の顔を見た瞬間に言葉がつまる。

天使教会第一騎士、その怒りが自分に向けられていると理解したからだ。

「2度、言わせないでくださいデイス…… 私は、あなたにあのりザドニアンを抑えると伝えたはずデイスが」

「ひ……、や、やだなあ。そんな怒らないでくださいよ、は、はは。おい！ 君たち、ストップだ、やめたまえ！ その罪人は教会裁判にかけたのち、眷属の寵愛を回収する必要がある！」

「は、は！！ クラン様！」

「ケツ、命拾いしたな、クズトカゲ」

「自分が眷属憑きなことを感謝しとけよ」

「……………」

ボロ雑巾のように地面に倒れ伏すラザール。

服はボロボロ、身体には血が滲み、爪は折れた。

噛み締めるキバにもはや力はなく、冷たい石畳に全身を預けるのみ。

ああ、ここでもそうなのか。ここでも、奪われるのか。

いつも、そうだった。いつも、こうなった。自分が何をしても運命は変わらない。

「……………もう、疲れた」

希望と絶対はいつも簡単に入れ替わる。遠山鳴人という異物との出会いは、ラザールにとって希望そのものであった。

だがその希望は死んだ。終わったのだ。彼と共に見た夢も、未来も、全て終わってしまった。

「……………ナルヒト」

同じ石畳に斃れる仲間を見る、首には無数の掻きむしった痛ましい傷跡、顔は真っ青に膨れ上がり、目は見開かれ、血の涙の跡が痛々しい。

苦しんで、死んだのだろう。もう、彼は動かない、喋れない。

「ん、んん？ 君、少しどきたまえ。その罪人の顔が見たい」

クランがふと、首をかしげた。

「は、は！ このトカゲでしょうか？」



ぐいっと、倒れ伏したままのラザールの首もとを雑に騎士が掴む。

「違う違う、そのリザドニアンの顔はもう見飽きた。そこの斃れている罪人だ。黒髪……の男だよね」

「は！ 帝国には珍しい黒い髪です。なにか？」

騎士の問いかけを無視して、長身の騎士、クランが斃れている男の死体を見下ろす。

酷薄な色、緑色の瞳がその死に顔を写して――

「……ぶぶぶ」

嘔き出したのは、笑い。

「騎士クラン？」

「ブフ、ふふふ、フフフフフ、アハハ！　まさか、おお、天使よ。ああ、貴方はやはり最高だ。ああ、そうだ、そうだろう、そんなわけがなかったのだ」

ストルの問いかけを無視して、クランが笑い続ける。

それが誰なのか。斃れている罪人が誰なのか、クランだけは知っている。

あの時、竜大使館にいたこの男だけは、遠山鳴人が何を殺した存在なのかをよく、覚えていた。

「おっと、失礼しました。いえいえ、なんとも。罪人の死相があま  
りにも滑稽で。いえ、さすがは”正義”と首吊り、2つの天使から  
の贈り物を赦された我ら最強の剣。第一騎士にかかれば、まあ、こ  
んなものでしょうね」

それを誤魔化し、クランがニヤニヤと笑う。

その視線は次に、ラザールへと向いた。

「……お、お前……」

笑った？ 笑ったのか、この男は？

何が、そんなに面白くてー

がしゃ。

クランが、しゃがみ込む。

そのまま、地面に倒れ伏しているラザールの耳元に口を近づけて、ささやいた。

「ああ、なるほど。報告にあったりザドニアンの冒険奴隷とは貴様のことが。ふふふ、ざまあみろ、身の程知らずども。……無駄な努力ご苦労様」

男の嫉妬ほど、醜いものはない。

あの場で竜の関心を獲得したであろう竜殺しを誰よりも憎んでいたのはこの第4の騎士であった。

「う、あ  
「あ

悪意が微笑む。

ラザールのボロボロの心はもはや悪意に立ち向かう気力はなく。

満足そうに鼻歌を歌いながら去っていく男をただ、見送るのみ。

こんなとき、奴ならどうするだろう？ ふと、思つのはもつと亡く  
なつた友の顔。

ああ、なんだったんだろうか。

彼が困難や敵に臨むとき、いつも口ずさんでいたそれ。

しかし、絶望の中にいるラザールにはもうその言葉は――

「……はは、もう、思い出せないよ、ナルヒー」

諦めと絶望は仲が良い。

もういい、疲れた。とても疲れた。終わりたい。

目を瞑ろうとする。あまりに辛いことが多すぎた。あまりにこの世界は残酷で悲しすぎた。

ラザールはもう、それに怒ることも抗う気力もなく。

全部諦めて、全て投げ出してー 楽に。

《うめえな、好みの味だ。甘さ控えめで健康的、ライ麦か?》

《お前のその夢、俺の欲望と、とても相性が良い》

「……………あ」

それなのに、消えない。彼と初めて出会ったときの声。彼から貰った言葉だけが、消えてくれない。

全部諦めたいのに、投げ出したいのに、それだけがレーザーの胸に、心に今も、爪痕のごとく残り続ける。

”拡大する自我”は、確かにラザールへ託していた。

「……………ナルヒト」

その時、ラザールはそれを見た。

遠山鳴人の右手を見た。

「……………はは、アンタらしい」

それを見て、こぼれたのは笑いだ。



地面に仰向けに倒れ、瞳孔は開ききり、顔に生氣はなく、呼吸もしていない。

しかして、なおその手に握られたままのそれ。

武器。人が敵に立ち向かうために生み出したモノ、叛逆の意思、立ち向かう意思、敵を殺す、己の邪魔をするモノを始末するための道具。

それを、死してなお遠山鳴人は握り続けていた。

それだけで理解した。

ああ、遠山鳴人は、最期のその瞬間まで遠山鳴人で在り続けたのだ。

そつだ、奴はいつも、絶望の中で

「ーの井井に」

「.....」

喉が引き攣るような笑いは、ラザールの出した声だ。

ラザールの目に光が戻った。

ああ、そうだな、ナルピト。思い出したよ、アンタの口癖。

ー好きに、やってしまおう。

ソレが目覚める。

「それじゃあ連中を運ぶっー」

ラザールと遠山に背を向けて、クランの言葉を聞いていた騎士達。

その1人が振り返る寸前、石畳からラザールが跳ね起きた。

「ー動くな」

1000年封印された、雪国の井戸の底から届いたような、冷たい声。

「ひっ」

短い悲鳴は、誇り高き天使の剣から漏れ出した。

「わかるだろう、鎧の隙間から影の牙が貴様の喉笛に触れている」

影の牙が、目覚める。

影がまるびながら、騎士の背後をとる。

分厚い銀鎧に包まれた教会騎士の鎧の隙間から、どこからともなく取り出した黒い短剣を喉笛に突きつけていた。

「は？」

「お、おい」

あまりの早業、あまりの隠形。あまりの業。

遅れてその場にいる人間は理解した、つい先程まで虫の息の筈だったリザドニアンが、一手で場の主導権を握ったことを。

騎士の首に影の短剣を突き立て、盾にするラザール。

縦に開いた人ならざる瞳が、天使の剣たちを睨みつける。

「動くな、だ。2度も言わせるな。そのアンタ達もだ。お仲間の首が胴体とサヨナラしたいところを見たいというなら、話は別だが」

「ひ、ひいっ」

「口が臭い、しゃべるな。慄くのも耳障りだ、次、喋れば貴様はもういらぬ。人質なら、お前じゃなくてもいいんだ」

その口調、その表情、それは遠山鳴人と出会って時のラザール、パン職人を目指して、己の過去を悔やむラ・ザールではない。

古い血と古い約定、人類の救済システムの生産地、そして”終わり”が眠る土地、”王国”の暗部に潜む最優のウエットワーカー。

「影の、牙…… あなた、まさか、王国の……」

「ああ、お嬢さん。お望みとあらばいつでも、我が業、お見せしよう」

ストルへおどけながら、答えるラザール。

目は全く笑っていない。

「や、やめなさい、冷静になって。」死”は貴方まで指差していなかったわ。今、ここで罪を重ねるのはよして。お願い」

クレイディアの懇願する声は、しかし影の牙には届かない。

天使の騎士、全員が彼女の持つ善性のカケラでも兼ね備えていればラザールはもしかすると降っていたかも知れない。

だが、その道はもうなく。

「無駄ですよ、クレイディア殿。ご覧よ、あの子。アレはもう呪われた魂の目だ。いいじゃないか、リザドニアン。君の影と、私の剣、どちらが正しいか比べてみるのも一興だ」

愉快げにクランが嗤う。その心にあるのは暗い嫉妬と、甘い憧憬。



故に影の牙とは決して相容れない。

「正しい、正しいだと？ 恥知らずどもが。貴様らのうち、誰一人として正しいやつなぞいるものか」

クランの言葉に、ラザールが笑いを噛み殺して吐き捨てる。

言葉だけでここまで吐き気を催すのは、ラザールにとって初めてだった。

「天使教会を侮辱する、かい？」

「ああ、ヘドが出るよ、ヒューマン。貴様らのその二枚舌には本当に吐き気を催す。表面では平和と誠実を謳っておきながら、その内面は下水道の淀んだ汚水よりもひどい醜えた悪臭そのもの、自らの

醜さを表面の輝きで固めた貴様らほど醜い生き物はいないだろう」

「……口が過ぎるな、罪人」

「は！ 罪人！ いいだろう、その通りだとも！ 俺は所詮、薄汚れた罪人だ！ 罪を犯し、人を傷つけることでしか生きる術を見出せなかつた罪人だ！ だがそれは貴様らも同じだ！ 門番ども、あの下卑た笑い声の持ち主ども！ 奴らが何をしていたか知っているか？！」

人間が嫌いだ。言ってることと思ってることがまるで違う。

なのに、それを前提として群れて生きるソレが今は気持ち悪くて仕方がない。

「……っ、クラン様、罪人への制裁のき、許可を！」

ラザールを取り囲んでいた数人の騎士が、何故かびくりと身体を震わせた。

まるで、何かを焦るように。

「そうだね、まあ、人質の彼は、仕方ないか」

顎を撫でつつ、クランが笑う。軽薄な笑いはどこまでも鼻につき、どこまでも冷たい。

「ひ、ク、クラン様」

見捨てられたと理解した騎士が情けない声を漏らした。

「チッ」

コイツは間違いなくやる。人質が通用しない。それを理解したらザールが男を蹴飛ばそうとしてー

「待て」

少女騎士の声が、場の展開を止めた。

強者にとって、盤面の流れは乗るものではなく作り出すものに過ぎない。

「……っ」

「ストル殿、困ります。あまり罪人にペラペラ喋らすものでもないでしょう。ほら、市民たちの目もありますので、ね」

「はー、額にぺしりと手のひらを当てて大袈裟にクビを振るクラン。」

「興味がありますデイス、リザドニアンさん。門番たちがなにをしていたって？」

それを無視して、表情を変えずにストルがラザールへ問いかけた。

「は！ 騎士様はご存知ないだろう！ 連中は冒険者の中でも力の弱い、立場の弱い者へ補償金だか手数料だか知らんワイロの強要、それを払えない女の冒険者へはその他の方法で搾取をしていた！ 少し調べればわかるだろうさ、見るからにマヌケヅラが揃っていたからな！」

声を荒げるラザール。

遠山が手を下したクズの顔がまだはつきりと残っている。

「き、貴様！ て、ててて、適当なことを言っな！ クラン様、処  
理のご許可を！」

「そ、そうだ！ それ以上の愚弄、ゆ、許せん！」

明らかに、色めき立つ何人かの騎士達。

” 拡大する自我 ” は、レーザーにその閃きをもたらした。

彼がこの場にいたなら気づくであろうことを、またレーザーも気  
付くことができた。

「ははは！ これは面白い、その雑魚ども！ これは、もしや、お前らも奴らの悪事に噛んでいたな？ やけに饒舌、しかもこいつの心音が今大きく跳ねたぞ！ 三下ども、正義が聞いて呆れるわ！」

ハツタリだ、鎧の奥の心音など聞こえるものか。

だが、その言葉、”舌”から生まれた毒はきちんとこの場において機能した。

遠山鳴人と同じように、ラザールが言葉を操り、<sup>スピーチ</sup>世界に挑む。<sup>チャレンジ</sup>

「で、デタラメです！ クラン様、こいつ、追い詰められたからデタラメを！」

「ふうん…… うーん、まあそうだろうけど、ねえ。ストル殿、ほ

ら、貴女なら判断出来ますよね？」

その毒はきちんと、まわり切っていた。

「ジャスティス  
”正義”」

言葉も、確認もなく。

第一の騎士がその機能を発揮する。正義の問答は例え、教会に仕える騎士であろうとも逃れることはできない。

「は、ひ、これが」

「第一騎士、正義……?!」



「『質問に、はいか、いいえで答えよ。汝ら、罪人たるか?』」

「……一応伝えとくけど、貴方たち、ストルの正義に虚偽は通用しないわよ。……ストル、残念だけど彼の言うことは真実みたい。」  
”死”が教えてくれたわ」

「ひ、ひ、ひ…… ち、違います! お、俺たちはやめとけって言ったのに!」

「そ、そうです! お、俺たち騎士と、あのトカゲどちらを信用なさるんですか?」

「『答えられないのなら、汝ら、罪人なりて』」

「ひ

「び、ぎー！」

「ひ、あ？！ う、うぶ

正義の裁きは平等に下る。

首吊りの剣が教会騎士の何人かを吊り殺す。

「……あら。これは残念ですねえ。教会騎士ともあるうものがほんとに不貞を働いていたとは」

「……どちらが正義かわからないデイスね、これでは」

「あ、あ、ああ、お、お助け……っ！！」

ラザールの盾となっていた男もまた、吊られて死んだ。

正義は、罪人を決して逃さない。

「……っ！ どついう風の吹き回しだ」

「勘違いなならないように、リザドニアン。……私の存在意義は教会の剣、天使様の教え、正義に反する存在への罰。それはたとえ騎士であろうと関係ありませんデイス、私の役割を果たしたまで」

「……そうかい、その冷静さを少しでもナルヒトに分け与えてくれたらよかったよ」

「……私は私の正義を執行するまでデイス」

「はは、そうかい。なら、俺も同じだ」

「ストール殿……」

「ええ、わかっています。これが最後の警告デイス、リザドニアン。たとえ彼らが罪人であれ、貴方達が教会に牙を剥いたことは事実、大人しくするのであれば――」

「タコどもが」

ラザールの言葉が、正義の言葉を遮る。

普通の紳士的な口調ではなく、それは彼の友、今は亡き友の口ぶり  
りと酷似していた。

「誰がお前たちのような不愉快な正義に従うものか。俺は決めた、俺は決めたぞ。俺は2度と諦めない、俺はもう屈しない。連れて帰る、彼の遺体は必ず俺が連れて行く」

” 拡大する自我 ”、例え本人が死のうともそれは滅ばない。

完成されていない、他者を必要とするが故に、また他者も遠山鳴人を必要としてくれる。

死んでも死なない、しんでもしなない。それは受け継がれて、なお拡大するのだ。

「欲望のままに――俺は、俺の求める場所へ必ず辿り着く」

その在り方は人を侵す、その在り方は世界を歪める。

不滅にも似た自我、それは の在り方にも似ていて。

「約定をここに」

ラザール、いや、リザドニアンの祖たる”大いなる歯”。

隠された歴史の中でのみ存在するそれら。その中の一つ。

”歯”と呼ばれるナニカが、彼らリザドニアンを作りたもつたそ

の時に与えた機能。

「……これは、なんだ？」

「お、おい、何か、何かまずい、これ」

生き残った騎士達、悪事に手を染めていなかった純粋な騎士たちが慄く。

目の前の罪人から感じる圧を彼らもまた、知っている。

教会騎士の最優、到達点、”10剣”。”竜”をはじめとする上位生物への対抗手段として用意された彼ら極点の存在。

それと同じ”圧”を取るに足らないはずの罪人から感じとり。

「某はもはや亡く、”光”もまた亡く。”腕”により終わりし世界、恐るべき人により終わりし我ら、しかしてここに証を残さん。我が残りし証をここに」

べき、べき。

ラザールの身体が変わっていく。

皮膚が溶け始め、鱗が剥がれる。剥き出しになる爬虫類の骨格、まるで骨の竜、剥き出しの歯。

「ほう、へえ。初めて見ましたね。リザドニアン種族スキルのフィード”歯の尖兵”でしたかね？」

「濃い死の香り……　　そういうこと、ね。1人1人の死を種族全体で共有し、力に変える。これが、侵略種、リザドニアンの本気……」



「 竜 ” に近い種族、いえ、竜の眷属たる存在というわけデイスか」

「 フローリア、力を貸せ。アンタが俺を愛してるなら、全てくれてやる」

ラザールの本領はここからだ。

種族全体が使えるその先祖の力、そこにさらに加わるのはラザール個人に与えられた力。

「……………クス」

微笑みかけるのは悪事の女神、天使の眷属、その名はフローリア。

どこまでも純粹で、どこまでも不運、そしてどこまでもお人好しの男にその祝福を授ける。

「おっと、まずいですね。フィードと眷属憑き、両方の存在でしたか。……惜しいな、殺すのが」

「……残念だけど、危険、すぎるわね」

「……第4騎士クラン、第7騎士クレイデア」

「「はっ」」

「教会法8条 ” 眷属憑きの天使教会総本山付近での武力行使” を確認。全副葬品、全スキル、全秘蹟、全戦力の解放を、第一騎士ストルの名のもとに許可しますデイス」



見よ、その異形。肉も鱗も皮も爛れ、骨が剥き出しのその姿。拡大する骨の姿勢は四つ足に変わり、どんどん巨大になっていく。

骨ゆえに頼りない部分に、影の肉が象られる。見よ、その姿、竜に足らず、しかしもはや尋常の生命からかけ離れるその姿。

影の牙、その本領、リザドニアン、侵略種。かつて大戦時に7つの国を滅びした恐るべき種族。

「オオオオオオ！ おオオオオオオ！！」

彼が吠える、それは亡き友への鎮魂歌。

「ひ、ひ……」

「り、竜、竜だ、竜が出た！」

「うそだろ」

遠巻きに見ていた観衆が蜘蛛の子を散らすように消える、教会騎士達もその多くが戦意を失い尻餅をつく。

影を纏いし、骨の竜、歯の眷属、リザドニアン竜形態、出現。

「ふふふ、あはは。これはちょうどいい。竜殺しを守る竜もどきか。いいですね、興が湧いてきました」

「騎士クラン？」

「手出しは無用。あれは私の獲物です。副葬品、起床、追え、” 獵犬の劍」

一歩前に踏み出る美丈夫、第4の騎士クラン。その手に握る細い劍、ヤイバはなく、ただ劍先は針の如く。

レイピア。帝国においては貴族の儀礼用の美術品としての側面が強いその武器を、クランが握る。

「ふふん、覚えているだろう？ 我が” 獵犬の劍” は貴様の薄い影を貫き、どこまでも追い詰める。貴様と私はどこまでも相性が悪いのだよ」

そう、もしラザールを追ったのがクレイデアだけであればラザールは逃げ切れていただろう。クランの副葬品、獵犬の劍の斬撃はどこまでも、どこまでも標的を追いかける。

それはラザールの影でさえも。

「あ、アア、こいいい、薄汚い、セイギどもオオオオオオ」

「ははは、これは良い。少しばかり格落ちだが、紛れもない竜殺しの英雄譚だ！ ああ、これこそが正しい、私、教会騎士こそ竜に並ぶに相応しい存在！ 感謝するよ、罪人、君がそれに成り上がってくれたことに」

銀色の鎧。教会の祝福を受け、装着者のステータスに補正をかける一品がクランの身体を強化する。

手に握るレイピア、” 猟犬の剣” もまた、大いなる獲物の気配にカタカタと武者震いして――

カタカタ、震えていた。その副葬品の犬の顔を模した丸い持ち手がカタカタと。

鞘にいられたまま、クランが地面を駆け抜けた。

「猟犬の剣、再び罪人の肉を貫け！」

「オオオオオオオオオオ！」

強大、歯の竜の腕が雑に振るわれる、真っ向からクランがそれを迎え撃つ。強化された肉体、そしてその副葬品の斬撃ならば、その腕ごと歯の竜を貫ける――



シーン。

「……………んん？」

獵犬の剣が鞘から抜かれることはなかった。カタカタ、カタカタ。

武者震いではない。それは本気で震えていたのだ。

犬は格付けに敏感だ。

”獵犬の剣”は怯えていた。目の前の齒の竜……ではなく。

もっと、もっと、遙かにおぞましいにかの気配に。

犬・同・士・の・格・付・け・は・既・に・終・わ・っ・て・い・る・。

「え、うそ、なんで？ 抜けなー！ あ」

「オオオオオオオオオ」

ぼびん。

振るわれた竜の骨腕。あっけなくおもちゃのようにクランの身体を吹き飛ばす。

スーパーボールのように跳ねるその銀鎧の男は地面を何度か抉ったのち、露店に突っ込み、そこから起き上がることはなかった。

「オオオオオオオオオ！ オオオオオオオオオ！」

「ひ、う、うそだ、クラン様が一撃で?!」

「た、助ける、助けるんだ!」

騎士達がゴミのように吹き飛んだクランのもとへ駆け出す。

「……………ストル、貴女わかっててクランの一騎打ちを?」

「まさか、彼とは連携が合いません。一騎打ちの方が正しい彼の使い方だと判断したまでデイス、では、クレイデア、そろそろ本番といきましようか」

それらを素知らぬ顔で動かない2人、正義と死の騎士が2人、ここに立つ。

「ええ…… せめて彼を苦しめないように」

ずっ。

クレイデア、細身の女騎士の背後から黒いボロボロの騎士鎧が頭れる。

ガイコツだ。ガイコツが騎士鎧を身につけて。

それが手に握っているのは大きな馬上槍

恭しく、捧げるようにソレがクレイデアにランスを手渡す。

「秘蹟 来訪 死の眷属 ” 13番目のペールの槍 ”」

この世あらゆる場所からもたらされる”死”を凝縮した武器。

死に愛されたクレイデアにしか握ることのできない眷属からの贈り物。

それは条件さえ整えば、竜の命にすら届き得る概念の兵器。

それがラザールへ向けられる。

「私の信じる、正義のために」

水色の髪少女は、何かを振り切るごとく、一歩前へ。

「秘蹟 執行 ” 正義”」

少女の背から、像が顕れる。

歪な像、数多の種類、像が歪んで無理やりに混ぜ合わされたよう  
なそれ。

「問う必要もありませんデイス、貴方は罪人デイス」

それは着属には数えられぬ正体不明のナニカ。人の世が続けば続  
くほど力を増す”正義”という概念の固まり。

1人1人のたしかに正しい想いから生まれたそれはしかし、同じ  
く1人1人の人間によって歪んでいく。

主人を無くした正義の行き着く先は、正義という悪意に他ならな  
い。しかし、それを知るにはあまりに少女は幼く、そして愚かであ  
った。

「私には、何が正しいのかわかりません、だからこそ、”正義”の正義を、教会の正義をこそ、正しいものとして在り方を決めますデイス」

しかし、愚かゆえにまだ少女は正義に飲まれず。

ああ、しかし、しかし。愚かゆえに気付かない。正義の像に薄いヒビが入り始めていることに。

その背に広がる翼が、傾き始めていることに。

同時に、腰から細剣。首吊りの剣を抜く。

「リザドニアン、罪人、最期に、言い残すことはありますか？」

天使教会騎士団、最高戦力、10剣。

第一の騎士ストル。

第7の騎士クレイデア。

竜に抗う為の剣が、ありえざる歯の竜と対峙する。

その問いかけは――

「くたばれ、タコども」

歯の竜には届かない。



連れていく、渡さない。友の亡骸をその夢の光景へと必ず連れていく。友の亡骸を庇い、竜が世界へと唾を吐く。

リザドニアンは、同胞を絶対に裏切らない。

「……教会法に基づき、刑の執行を開始します」

「はい、騎士ストル」

死と、正義と、首吊りが、歯の竜へと向けられた。

ああ。

歯の竜は、ラザールは理解した。



つめき声。

首吊りの剣が、歯の竜の首を絞める。ばき、ばき。未だ生命の仕組みから抜け出せぬその影と歯の体は、確実に壊れていく。

歯の竜の攻撃は当たらない。

鋭き剣が、作業のように巨大な骨と歯と影の亜竜を解体していく。

ああ、勝てない。勝てない。

「オオオオオオオオオオ」

それでも、吠える。吠えるのだ。

遠山鳴人は、世界に抗い続けた。ならば、己も同じように。

遺体が握りしめた武器、その光景だけが齒の竜をくいしばらせた。

「しんでも、しなない、死んでも、死なない シンデモ、シナナイ  
……」

「いいえ、貴方は死ぬのデイス」

齒の竜、その一撃を掻い潜り、トッ。

跳ねるように舞う第一の騎士。一っ飛びで齒の竜の真上まで。

振り抜くは、細身の剣。

正義の罰、その化身。

「副葬品 開廷」

正義と首吊りの同時使用。第一の騎士だからこそ扱えるその才能。

竜を殺す為に造られた、その生命。その機能の全開。

1668

「吊れ、ハンギング首吊りの剣」

「ちく、シヨウ」

影の眷属、ラザールを愛するその存在が全力で警鐘を鳴らす。

ニゲテ、オネガイ。

ラザールを愛する影が懇願する。それには勝てない。それには届かない。

人である以上、正義と罰には抗えない。それを悪事の眷属は知っていた。

そして、あぁー

「コ、イ、モウ、ウバワセることは、ない!」

ラザール  
歯の竜が、《再び立ち上がる者》が、もう2度と逃げないことも、  
悪事の眷属は知っていてー

全部、終わる。

齒の竜はこれより、正義と罰の異界に送られてそこで死ぬ。

存在を吊られ、悪虐なる正義に弄ばれ殺される。

悪事の眷属は、それを知っていた。

物語が、英雄譚に塗り替えられー

わおーん。

どこか香気で、どこか嬉しげな遠吠えが、世界に響いた。

「ーは？」

ぱきん。



砕けた。レーザーではない。

首吊りの剣。天使がナニカに贈ったと語られる副葬品。

決して壊れぬはずのその人域を超えた存在が、嘘のように、呆気なく砕けた。

「は？」

誰もが、動きを止めた。

わおーーーーーん。

呑気な遠吠えはまだ続く。

どこから響くもわからないその声。ああ、その声。

それは鬨の声だ。それは見送る声だ、それは始まりの声だ。

それは、仲間には

「ナンダ、これ、なんて、美しい声……　なんて、頼りのある声」

勇気と希望を。

敵には

「ひ、ヒ、い、いや、なに、これ………？　幽玄？　異界、違う、  
どれも違う、どこでもない、まるみのないせかい、なに、とがって

る？ なに、これ、いや、イヤアアアアアアアアアア？！！ 見  
ないで、ミナイデエエエエエエエエ！！ いない、いない、私はど  
こにもいないから！！ いや、イヤ、イヤアアアア、た、たすけ、  
やだ、ストル、助けて、あーー ミラレテル」

「クレイデア？！ 何故？！」

敵には、恐怖と狂気を。

ああ、誰も知らない。

眷属、教会、竜。

だあれも知らないのだ。

「ッ……………ケッー」

フオヌ、コポオ

死骸の胸が大きく膨らみ、息を吐き出した。

決着が、ついた。

どこでもないどこか。

正義の異界の中で、決着はついたので。

”正義”は、イツヌにひれ伏した。

もう、どこにも行くことはない。

「……………は？」

ストルが、固まる。

齒の竜の目の前で、その竜が護るソレを見て、身体を固めた。

「ガキの頃、ずっーと思ってんだけどよお」

ソレは、右手に武器を握りしめたままだ。

誰もが固まり、言葉を発さない、その中でただ1人呑気に話し始めた。

「死刑になった人間が死刑で死ななかつたらどうなのかなー」

ぼり、ぼり。

頭を掻きながら、ゆっくり立ち上がる。大きく何度も何度も、息を吸って、吐いてを繰り返す。

あんぐり。歯の竜が、顎が外れるほどに口を開いてそれを見る。

「セキテツ県死刑囚蘇生事件みたいになんのかあ？ ヒヒヒ、この世界だとどーなのかね」

こぎ、こぎ。身体の機能を取り戻すように首を鳴らし、肩を回す。

「どー思うっ？ ラザール」

わおーん。

また、どこかで遠吠えが響いた。

やはり、その声は明らかに嬉しそうで。何か、何かを自慢する、そんな響きを含んでいた。

「……………知るものか」

「あり？ ラザール、なんかイメチェンした？ お前、それ、かっこいいな」

「……………馬鹿野郎が、生きてたのなら、さっさと起きてきてくれよ、ばかやろっ……………」

「おー、悪い悪い。なんか夢みてたよーな気がするよ。すげえ懐かしくて、少し寂しいそんな夢」

2人が笑う。

ボロボロの歯の竜と、絞首刑後の吊られた男。



満身創痍の2人は、しかしまだ死んでおらず。

故に、彼らの冒険は未だ終わらず。

「……………意味が、わからないデイス」

「俺は死ななかつた。死刑執行中！ ではなくて死刑終了！ っ  
てわけだ。で、この場合どうするよ？」

へらへら、どこまでもへらへらと遠山鳴人が笑う。

「……………」正義」

シン、何も出てこない。

砕けた剣はもはや鉄屑と同じ。

「悪いな、よく覚えてないけど、あれだ。正義はばらばらになった！ てやつだ。2対1だな。周りの腰抜かしてる雑魚は多分相手になんねーよ？ ラザール先生の敵じゃねえ」

「俺かよ、ナルヒト」

ははははと呑気に笑う男2人。

それを少女が睨みつける。

「私の正義は」

「正義は死んだ、殺したぞ」

「ツーー 私は、私の生まれた理由に従うのデイス、教会の正義、いえ、教会の敵を滅ぼす！ そうして生まれた、そう望まれた！ 私はその為に生きてるのデイスから！」

「なら初めからその為に戦えよ。正義、正義、馬鹿みたいに繰り返しゃがって、このバカが、あ、デカイの取れた」

瞳に涙を溜めて叫ぶ少女。

その必死の叫びを鼻くそほじりながら、やべ、血が出たとロープでそれを拭うアラサーの男が聞き流す。

「私は、バカじゃないディスー!!!」

第一の騎士、武装を全て無くしてなお、その強き造られた肉体が躍動する。

強欲冒険者と、歯の竜がそれを迎え撃つ。

教会の正義と、教会の敵。

それはもはや、誰にも止められぬ殺し合いとして――

「大主教令」 発令。寿命3年使用。止まれ、第一の剣

「――えっ」

物凄い勢いで、馬車が青空市場に乱入した。

露店を蹴散らし、車輪を歪ませ、大爆走。

びたん。

跳んだストルの身体が、物理法則を無視して固まり、地面に落ちる。

「ふん」

「聖女?!?!」

「えい」

ぼかん。

馬車から砲弾のごとく飛び出した黒い修道服の少女が、地面に倒れたストルの頭をぶん殴る。

「「え？」」

ピクリとも動かないストル。顔面が、石畳に食い込んでいた。

「主教サマ、第一騎士を止めました」

「ぜえー、ぜえー、ゲホ！ よ、よくやりました、スヴィ、ゲホゲホ、あー、ほんと寿命縮まるわ。あ、縮んでたわ、ほんとに」

きい、ぱたり。

ドリフトしながら止まった馬車から現れたのは、同じく黒い修道服に身を包んだ糸目の女。

青い顔、ケープからはみ出た白髪がぴこんと跳ねていて。

よたり、よたり。

ふらつきながらも、馬車から這い出て、その女が遠山とラザールの元へたどり着く。

だれだ？





土下座しつつ、キラキラを撒き散らす女。

「ええ……」

遠山とラザール、それしか言うことがなかった。

38話 ラ・ザールと遠山鳴人（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さい！

< 苦しいです、評価してください > デモンズ感

39話 竜大使館のお昼過ぎ

……  
……

〔竜大使館、中庭にて〕

「ふむ、いい香りだ…… やはり茶葉は中央栽培のものに限る……」

白を基調とした大理石の建物。

柔らかな日差しが差し込むガーデンテラス。小鳥がちちちと鳴き戯れる。

日差しはしかし、あまどいに張り巡らされたツタ状の植物にうまく具合に散らかされ、眩しくはない。

竜の執事、ベルナルがティータイムを楽しんでいたその時だ。

ふわりと花の香りが顕れる。

「執事さま、お茶の時間失礼します。ご報告をば。先ほど、冒険都市での遠山鳴人と、第一騎士の戦闘が無事、終了いたしました」

「そうか、結果は？」

シックな袖の長いメイド服に身を包んだ短髪の女性、竜大使館のメイド長、ファランであった。

彼女の報告に、ティーカップを皿に戻し、脚を組み直すベルナル。新調したモノクルの奥にある赤い目が僅かに細くなる。

「……うーん、どういえばいいものか」

顎に手を当て首を傾げるファラン。黒いショートボブの髪に飾るホワイトブリンが揺れた。

「なんだ、らしくないな。ファラン、言葉を濁すような性根でもあるまい、言ってみなさい」

未だ、優雅。ナイスシルバーであるベルナルがティーカップを揺らし、その香りを嗅ぐ。

先ほど女主教とのやりとりが終わり、なんだかんだ彼女のことを気に入っている彼の主人も機嫌が良い。

今頃呑気に湯浴みしているところだろう。竜大使館では割と珍しい平和な時間をベルナルは満喫していてー

「は、はい。えーと、遠山鳴人は一度副葬品により、死亡、に近いところまで追い込まれました。その間に、彼とチームを組んでいるリザドニアンが、眷属の力と種族の力を解放、亜竜形態となり、天使教会第一騎士、第4騎士、第7騎士と交戦、この戦いで第4騎士が重傷を負いました。その後、リザドニアンと騎士の交戦中、遠山鳴人が蘇生、リザドニアンと遠山鳴人、そして騎士が再び交戦、と言ったところでお嬢様に脅ー いえ、仄めかされた天使教会女主教と、聖女によりその場は落ち着きました。あ、女主教は継承秘蹟である”大主教令”を使用してます。あ、それとゲロ土下座かましてました」

「ふむふむ…………… は？」

かたり。わずかな音を立ててベルナルがティーカップを置いた。

「ほらー、そんな反応になるじゃないですかー。私も走り狗を通して見て何度も突っ込みましたからね。いや、そうはならんやろ、みたいな。あ、それと、つーん、走り狗が途中からおかしくなり始めて…… まるで、お嬢様が本気になった時と同じです、冒険都市の青空市場が異界化しかけてましたー」

「あ、頭が痛いな。……さて、異界化？ 副葬品や秘蹟による異界への取り込みではなく？」

「はい、どちらかという人界への侵食、でも途中で止まりましたね。遠吠えが霧に遮られた、って感じですか？ うーん、なんでしょうね。遠吠えの持ち主はほんと無邪気、純粹って感じでー、霧の方は打算、焦りって感じでしたー」

「ちなみにその異界の楔は？」



「もちろん婿殿、じゃないや、友人殿、トオヤマサマですー」

「……確認するが、友人殿の”竜化”の線は？」

「確実にないですねー。その方面の才能はないと思いまーす。魂喰  
らいの兆候はありますけど、それは本人というより、なんか、うー  
ん、よくわかんないけど、彼というよりも彼の中にあるもの？ う  
ーん、私ではその辺りまでしかわかんないですネー」

「ふむ、ならいい。油断していた状況とはいえ、友人殿はお嬢様のお命を1つ奪えるほどの優秀な狩人だ。少しばかり異質な部分があることの方がむしろ当たり前だ」

「だがしかし、お嬢様にどうお伝えしたのか。あまりそのままを

お伝えすると興奮しすぎるだろうし、かといって、竜たるお嬢様に嘘は通用せんしなあ」

うつむくとベルナルが頭を捻る。さてどうしたものか。トオヤマナルヒトのことであれば伝えるべきだが今の内容をそのまま伝えるのは――

「ふふ」

悩むベルナル、上品な微笑みがテラスを潤す。

「む？ どうした？」

「いえ、かの鬼もお嬢様のこととなると本当におじいちゃんみたいだなって」

ニコニコと微笑むファラン。仕事の上下関係ではベルナルが上ではあるが、この2人は少し特殊な立ち位置だ。

そのどちらもが数少ない、”竜”と並び立てる上位生物。

「抜かせ、ファラン。恐るべし”奉仕の眷属”よ。貴様こそ、人界でかなり毒気がぬかれたのではないか？」

「ふふふ。私は分霊ですからいいんですよーだ。本体が生命に友好的ですからね。”悪事”や”死”みたいに眷属憑きを生むほどじゃないですけど。”商売と契約”なんて1000年先を見越して、後継者を見つけたーとか言っつて本体が人間と共にいますからねー」

「ふん、ままならんな。鬼と眷属2人をして、あの幼竜に振り回さ

れっぱなしなのだから」

首をすくめるベルナル、しかし、彼の顔は朗らかだ。暖かくふわふわしたものを見つめるような目で、空を見上げた。

「ふふ、あの子は竜の中でも特別ですからね、人と竜そのどちらの世界でも生きていける護り竜。見てて退屈しないし、ご奉仕しがいがありますー。お嬢様からこれからどちらになるのか」

ファランも同じ、ニコニコと微笑みを崩さない。白い手袋に包まれた長い指に小鳥を止まらせながら、くすひと笑う。

「世界の柱たる、竜として生きるか、それとも人界の護り手たる護り竜として生きるか、か。まあ、どちらにしてもこのベルナル、最後までお供する所存だ」

「ふふ、私もです。それに最近、ていつか昨日からのお嬢様可愛すぎて推せますもん。トオヤマサマと一緒にいる時とか、竜体のほうはずっと尻尾振って、角光らせてるんですよー」

ふふふと笑いを堪えられないファラン。ぴちちち、小鳥も同じく笑っている。

「む、それは少しあれだな。複雑だ」

「むふふ、孫を取られたおじいちゃん？」

「抜かせ、阿呆」

ふ、とベルナルがため息をつく。

まあ、街はそれなりに大変な事態になっているが、想定範囲内

だ。

あの男、トオヤマナルヒト。

あの小僧は、そういう存在だ。生きている限り、自分の求めるものに必ず辿り着こうと足掻き続ける存在だ。

さまざまな勢力が入り混じり、さまざまな欲望が食い合うあの街に、あんな男が向かえば必ずこうなる。

――欲望のままに。

あの時、竜と鬼を前にして、尚啖呵をきつたのだ。で、あるならば冒険都市、なにをするものぞ。あれは必ずやらかす存在であること。ベルナルは理解していた。

だが、まさかこんな早くに騒ぎを起こすとは。それはベルナルの目をもってしても見抜けない。

「そういえば、肝心のお嬢様はどこに？ 普段ならばこの時間は湯浴みされてらっしゃるはずだが」

ふと、ベルナルがファランに問いかける。

「うーん、あれね。大浴場にはいらっしやいませんね。んん？ お部屋にもいないし、炊事場にもいない、ありり？ 鍛錬場も、いなか」

ファランが手で輪っかを作り、それを覗き込みながら首を傾げる。

「……嫌な予感がしてきた」

ベルナルの予感とは裏腹に日差しは暖かく燦々と降り注ぎ

「し、失礼します。執事様、メイド長！」

どもりながら、また新たなメイドがテラスに現れる。白い肌に玉のような汗をうかばせ、その手に何か、紙のようなものを握りしめていて。

「あらら、パル。どうしたのですかー？ お嬢様のお風呂場のお掃除の時間でしょ？」

ファランが優しくメイドに話かける。



「あ、あの、そのその」

どもりつつも、メイドが何かを伝えようとしているのはわかった。

たしか新人、どこか頼りなく焦りまくっているが、奉仕の眷属たるフランが見つけた人材だ。

なにかしらの才能があるのだろう。

「よい、落ち着いて話せ」

ベルナルが務めて優しく声をかける。

びくりと小動物のように跳ねるメイド、しかし深呼吸しながらしっかりとベルナルを見つめて、

「あ、は、はい！　　そ、そのお掃除してたら、脱衣場にこのお手紙が置いてあって」

2人にそれを広げて見せた。

「「……………??」」

ベルナルとフアラン、顔を見合わせてその紙、置き手紙を読んだ。

「ナルヒトからてがみがこないし、なんか仲間はずれにされてる気がしてきたのだ。オレを差し置いてあの竜の眷属のリザドニアンとばかり仲良しになっていく気がしてきたのだ。しんぱいなのでオレも街に降りる。ねとられはいやなのだ。ナルヒトは気難しいやつだからな、バレないように助けてやろうと思う。しんぱいするな、フアランに教わった変化の術式をマスターしたのだ。じゃ、そゆこと  
で」

「」  
.....  
W O W  
「」

鬼と、眷属が同時に固まり、同時につぶやいた。

冒険都市に、竜が降りるー

「ちなみにこの手紙を見つけたのは……」

「えっと、ついさっきなんですけど、その…… インクが完全に乾いているので、お手紙書いてから時間は経ってるかと……」

「「W O M……」」

もつとっくに降りていた。

「あ、あのー」

「ど、どうしました、パル。す、少しファランさん、今あまり余裕が……」

ファランがくらりとその場に崩れ落ちる。

ちちち、小鳥たちが心配するようにファランの頭や周りに留まり始める。

「よし、落ち着こう、落ち着いて紅茶を飲もう、うむ、美味しい」

ぐいっと一気にベルナルがポットの中身を一気に煽る。

喉越し爽やか。

「し、執事様、それ、ただのお湯ですうつ。え、えっと、その、じ、実はさっき、帝都のワシ便で、執事様とメイド長、それと竜大

使館、アリス・ドルル・フレアテイル竜爵名義宛へのお手紙も……」

恐る恐る、もう一つの手紙。青い封蝋が張られた便箋をおずおず差し出す。

「内容は？」

竜大使館宛て、竜爵への手紙。その言葉を聞いた瞬間、ベルナルとフアランが雰囲気を切り替える。

「えと、その。よろしいので？」

「構わん、竜爵宛の手紙はこの私がいる時に限り開封の許可を頂いておる。差出人は？　皇帝か？」

「い、いえ、差出人は、その”魔術学院”ですつ。魔術学院学長、サイノーム様からのお手紙で……」

魔術学院。

天使教会と対をなす、王国と帝国以外の国家級勢力。

魔術式によって生み出された空飛ぶ島、ピユタラを拠点に存在する魔術師たちの本拠地。

王国や帝国に存在する魔術師もみな、その学院で学び、ルーツをそこに置く特異な存在である。

「開けて読み上げてもらえるか？」

ベルナルの声が低い。とある歴史から魔術学院と”竜”は仲が悪い。

その学院からの手紙、時候の挨拶ではないことは確かだった。

「は、はいいい。ごほん。………え？」

メイドが丁寧に封蝋を解き、便箋を開く。

中身をみて、また、固まった。

「パル？」



ファランの言葉にもメイドは反応しない。文面を追う目が泳ぎ、口をわなわな震わしていた。

「……パル、貸しなさい」

ベルナルが優しく手を伸ばして、

「は、はいい、ご、ごめんなさい、わたし、私驚いちゃってええ」

それを受け取った。

美しい文字で、踊るような文面――

「パンパカパーン、サイノームの坊やからの手紙ってのはウツソです。やつほ、ぼくだよ。大切な友人の可愛い孫娘のこと、聞いたよ。久しぶりに顔が見たくなったので今から冒険都市にお邪魔します。冒険都市の”対竜災防御結界”を解いてくれると助かります。あ、解いてくれなくても私が解いちゃうけどね。」

PS アリスちゃんを一度殺した竜殺しにも興味があります。ついでに興味の魔道具店も開店する予定なのでその辺ベルナル君、シクヨロ」

”人知竜”より』

「Whooops……」

今度こそ、ベルナルも地面に倒れ込む。

上位種2人が、日差しと小鳥の鳴き声のもとで倒れ込む。

ちちちち、まん丸の小鳥が首を傾げて小さく鳴いた。

39話 竜大使館のお昼過ぎ（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！

< 苦しいです、評価してください > デモンズ感

40話 私の胃が壊れる寸前なのはどう考えてもお前らが悪い

……  
……

　　少し前、竜大使館での竜からのお願い（威圧）を食らった直後の教会最高権力者たち、猛スピードで街を駆ける馬車の中にて

　　ぼんぽこばオオオオおん！

　　っべー、っじべー。やべーよ、やべーよ、マジやべーよ。

　　がつん。

　　馬車の車輪が石畳を跳ねる。私のお尻を立ち上げる座席に舌打ち

しつつ、頭をフル回転。

「し、主教サマー、こ、これ以上のスピードは危ねえだよ、オラの馬っことも馬車っことも壊れちまうだ」

御者台の方から情けない間延びした声が響く。自分のポケットマネーで雇っているお抱えの御者だ。

教会の正式な人員ではないが、数少ない信頼出来る部下の1人でもある田舎出身の彼の声は本気で焦っていた。

「気合い！ こんな速度で走れる御者と馬車なんて帝国で貴方しかないんだから頑張つて！ お馬ちゃんには後で高級ジンニンご馳走してあげるし、怪我したらスヴィが治すし、馬車なんて壊れたら私のポケットマネーから出すわよ！」

「ほ、ほんげー、銭ゲバ主教サマが自腹切るだべか？ 竜でも降ってくるんじゃないべ？」

「今それはギャグになんねーんだつつうの！ あと誰が銭ゲバじゃー！！ 給料減らすぞ！ 良いからもつと速度上げて！ 人跳ねちゃダメよ！ あとお馬ちゃんにもあんまり無理させたらダメ！ お馬ちゃんを利用した新しい金儲け昨日考えたんだから！ その名もウマを競わせると書いて、ケイベっ！！！」

がつん。

跳ねる馬車、次は舌を噛んだ。痛くて泣いちゃいそう、女の子だもの。

「主教サマ、そんなにペラペラ喋るから…… はい、治癒の光」

すつと、差し出される小さな指先。黄色い優しい光が私の口元に当てられる。



それだけで嘘のように痛みが引いて消えていく。

「あ、ありがとうスヴィ。そんなハイお茶、みたいなテンションで秘蹟使えるのは貴女くらいよ。って、とにかく急いで！ 竜殺しに何かあったらもうほんとにやばいわ！ 竜を敵に回すとかマジやばいからほんと！」

「……………あの人なら多分大丈夫だろうけど」

竜殺しを知っているスヴィが隣でうーんと首を傾げる。この子に  
そう言わせる人物だ。

確かにすぐにはあの第一騎士が相手でも死なないだろう。だけど、  
問題はそうじゃない。

「それもそれでヤバいのよ！ あんの脳筋集団、騎士ども！ アイ  
ツらは政考える能力なくせに、教会の運営への発言権無駄にある

んだから！ 竜殺しが1人でも雑魚ならまだしも、10剣を1人で  
も殺したら、騎士団は必ず暴走する！」

「……暴走？どうなるんです？」

「決まってるでしょ？！ 竜殺しへの報復で、竜殺しをぶっ殺す、  
で、そのあとはあの金ピカドラゴンに皆殺しにされるわ！」

そして、それを英雄譚として語り継ぐ。狂っているのだ。王国の  
竜教団の流れを汲む騎士派はとかく、竜への執着が強い。

ドラキチめ、滅べ。私の権力が固まって用済みになった暁には絶  
対滅ぼす。

でも、それは今じゃない。

「でもね！ あんなド低脳の脳筋集団でも教会を維持するバランスの1つなの！ 今、このタイミングで失うわけにはいかないわ！ んああああ！ もおおおお、なんで私ばかりこんなこと考えないといけないのおお！ 騎士団長のバカボンボンは論外だし、少しは話の出来る副団長のフェミニン女も外ヅラだけの脳内花畑女だし！ まあ、顔がいいのは認めるけども！」

「私には、主教サマの方が素敵です、ぽっ」

「ありがとうスヴィ！ 愛してるわ！ でも今ごめんね、お姉さんあんまり余裕ないの！ えーと、待てよ待てよ、考える考える考えるー」

馬車の外、流れる景色。

石畳の轍を車輪が回る、群衆が慌てて道を開けていく。

集中。馬車の音を遮断。目を瞑り、揺れ動く馬車内の光景を遮断。

考える。考える、事態がややこしくなりすぎている。

シンプルに、私のたどり着くべき答えを簡単に導け。

まず最優先事項は、竜殺しの安全の確保。今回の目的はなんとし  
てでも、竜の意向を護ること。

つまり、竜殺しのケツ持ちだ。それにはまず竜殺しの生命の無事  
が必要不可欠。

「あああああ？！ なんでもおおお！ よりによって、相手が  
あの、ストルなのよおおお！ 騎士団長の肝いり、孤児院育ちの

正義の兵器！ 自分で考える力ゼロのクソガキじゃない！ ほんと  
どついう教育してんだあの顔だけ女アああ…… いや、違う。わ  
ざと？ わざと必要な教育を受けさせなかったの？ て、違う、  
聡明すぎて別のこと考えちゃうわ、かーっ、ツレー、頭良すぎるの  
もツレーわ」

そして第二は竜殺しの立ち位置の確保。これはある程度の道筋が  
みえている。

騎士派と揉めた彼はいわば反体制側の犯罪者となっている、それ  
はまずい。

竜殺しを体制側の組織へ取り込む必要がある。

そして、それは問題ない。クリアするべき課題はあるが、不可能  
ではない。

「ふ、ふふ、権力とお金って、す、て、き。私こそが体制側なんだから。うふふのふ」

「スヴィの嬢ちゃん、主教さま、大丈夫だべか？」

「……大丈夫、主教さまは追い詰められるとこんな感じになる。でも、追い詰められた時の主教さまは誰よりもかっこいいから、私的には非常にあり…… ぶい」

「この親にしてこの子あり、だべな」

「だあああれが行き遅れの未婚の親よ！ 私はモテないわけじゃないから！ 私のステが高すぎるだけなのよ」

「まだだいぶ余裕ありそうだな」

「主教サマ、素敵……」

「おっと、こっちは手遅れだべ」

「は?! いかんいかん、愉快な連中とお話ししてる場合じゃないわ。落とし所、落とし所…… 竜殺しは偶然だろうがなんだろうが、それでもあの竜を殺した男、ならすぐには死なない? いや、そもそもなぜ、第一騎士と竜殺しは敵対してるの…… 情報が足りない…… スヴィ?」

そう、あまりにこの状況の意味がわからなすぎる。

このままでは事前情報なしに、場のコントロールに臨まなければならぬ。

「冗談じゃない、そんなもの装備なしで戦争するようなものだ。そんな装備で大丈夫か？」

「はい、主教さま、そろそろかと」

この事態を収めるために、クリアすべき敵は2つ。

「ド脳脳ドラフェチ脳筋集団、”教会騎士団”」

私のストマックブレイカー&ポンポンペインの元凶、”竜殺し”

「騎士団は余裕。赤ちゃんを説得する方が難しいほどに。余裕で言いくるめることが出来る。武力行使もスヴィー1人いれば護衛も十分………」



「厄介なのは、竜殺し。その目的も出自も不明……でも、これまでの立ち回りから感じるのは、知性。感覚で動いているように見えて、その実、その恐ろしいまでのバランス感覚で立ち回ってる…  
… 確実に、厄介な敵ね」

勝利条件を仮定しろ。

必要なものは、相手への理解。

私の勝利条件はつまり、少しでも安く”竜殺し”を買い叩くことだ。

そうすれば、竜の意向には逆らわず、かつ竜殺しの行動をコントロール出来る、はず。

「あの竜の態度……つまり、竜殺しの自由意志を尊重しつつ、かつ、彼のこの街での安全を教会が担保すれば、逆鱗には触れないはず……」

「こちらの非を認め、事情を理解させ、利益を提示し、こちらへ引き込む。」

ポイントはいかにも、この利益を安く済ませるか。

頭ならいくらでも下げよう。

言葉ならいくらでも与えよう。

態度ならば、心ならばいくらでも捧げよう。

でも――

「でも、金だけはいや、絶対いやよ」

ケチとか言うな。

「適正価格、予算内で必ず収めてやる……」  
金だけはびた銅貨無  
駄にはしない。適正に買い叩かせてもらっわ、竜殺し」

ケチとか言うな。適正価格だ。

竜殺しと実際に話し、会って、見て、彼の価値は私が決める。

そこでもし、価値なしと判断すればどんな方法を使っても買い叩いてやる。

「説得、おそらく”竜殺し”は交渉を理解できる程度の頭はあるはず…… 問題は――」

問題はある。

竜殺しの性格、目的。安く彼を買い叩くための戦術それを作るためのピースが足りない。

だが、それはもうじき届く――

ああ、ほんと、私のスキル、使いにくすぎ。もっとシンプルな未

来予知らしいのに。

「失礼、主殿、隊長殿、指示通り、情報を集めてまいりました」

トツ、スル。

馬車の屋根から響く音、かと思えばするりと馬車窓から車内に滑り込む白い人影。

「ナイス！ えらい！ ナイスタイミング！ さすが私の羽！」

「よーしよしよし、角砂糖あげますよー。何個ほしいんですかー？」

私は思わずガッツポーズ、スヴィはどこからか取り出した角砂糖を指の隙間に挟んで揺らす。

白い三角の耳、白い修道服、かわいいニャンコフェイス。修道服のケープからニャンコ耳だけが出るデザインにしたのはマジ私天才だと思うわ。

猫獣人のトッスルちゃん。私のお気に入り。の審問会メンバーの1人。

既に白い毛と緑色の瞳、するりとした尻尾がチャームポイントの彼女に竜殺しの調査は任せてあった。

我ながら仕事出来すぎて、ワロタ。

「長殿、私は角砂糖は食べません。主殿、火急かと、情報お伝え申し上げます、まず竜殺しと第一騎士の衝突、これは本日のお昼前に起きた東門での騎士派所属の門兵殺害事件が原因です」

美しいハスキーニャンコボイスに私とスヴィがうふふと微笑みを浮かべる。

やっぱり時代はニャンコだわ。

「……東門、以前汚職の報告が上がってた区域ね。審問会による肅清対象に入ってたかった？」

ただ、ニャンコボイスにメロってる場合ではない、彼女の報告に

私は以前上がっていた報告を思い返す。

「おつしやる通りです。確認されているだけでも、低級の冒険者、その中でもこの都市に地盤のない地方出身者や仲間の少ない孤立しがちなものへの賄賂の強要、そして女性の冒険者へは性行の強要などを証明する証拠が出ております、つい最近も、王国より流れつき、冒険者となった女性への脅迫と姦通の痕跡が」

弱きを助け、強きをくじく。潔癖のきらいがあるトッスルちゃん  
のニヤンコ目が細まる。

今回の死んだ門番たちの素行に思うところがあつたのだろう。

「ふん、無能だけならまだしもクズまで備わるともはや粗大ゴミね。誰だか知らないけど殺してくれてせいせいー 待って、もしかして、そゆこと？」



かつー、べー。全て、繋がってきた。

頭回りすぎるのも大概だわ。私は全ての点と点がつながり、それが線となり絵となる感覚を得る。

「そゆことがどうかはわかりませぬが、殺害事件の実行犯が竜殺しである、と騎士団は結論づけたそうです。”死”の眷属憑きである第7騎士の異能による調査でしょう」

「あのチート女ね。探偵でもしてりゃいいのに」

頭を回せ。既に必要な情報は得た。

恐らく事の発端は、竜殺しとあのクス門番どもにある。

まずは竜殺しの性格のプロファイル。

常識がなく、イかれてる。うん、これは間違いない。竜を殺すよ  
うな存在だ、まともなわけではない。

しかし一方で、あの侵略種、リザドニアンを手懐けている。スヴ  
イからの報告ではかなり良好な信頼関係を築いているとのことだ。

「あのぼっち嗜好のくせに寂しがりやの面倒臭い種族を相棒にしてる  
…… 物好きね。ま、嫌いじゃないけど」

奴らは人の好悪にとってもうるさい種だ。

温厚な癖にその裏側には種としての悪性をたぎらせている厄介な連中、それが少なくとも今のところ何の問題もなく竜殺しと共にいる。

「リザドニアンは人の性格の表裏にうるさい……　　童貞拗らせた40歳の男よりもその辺はうるさいはず……　　つまり、竜殺しの本質に二面性はない、ということ?」

連中はしかし、悪事を嫌う。その癖に悪事を行うのに非常に適性がある厄い連中だ。

状況から考えてリザドニアンの価値観と竜殺しの価値観は似ていると理論づけていい。

法による秩序よりも、己の中にあるルールを守るタイプ。例えばそれが殺人だとしても、己の中にある譲れないものを守るためには容赦なくそれを行うタイプだ。

そして、あの第7騎士が調査をしたということは「第7騎士のスキルを使わなければ特定が出来ないほどの巧妙な殺しだったということ。」

「狩りに優れ、冷徹で残忍、しかしリザドニアンを惹きつける魅力もある。自分のルール、ああ、だから、あの時も、竜に……」

ピースがはまっていく。理解不能と思っていた竜殺し、その人格人となりの辻褄が合っていく。

だが、まだ足りない。危険だ、この男は危険すぎる。本音を言えば始末してしまいたい。だがそれをすれば竜を敵に回すことになる。

理屈ではなく、感情が欲しい。

竜に言われたからでなく、私個人の意思として、竜殺しを抱き込むための納得が欲しい。

「……主殿、それとも一つ。鴉の情報です」

「は？ あの忌々しい害鳥ども？ 今あんな木端どもなんてどうでもー」

「鴉にリザドニアンの冒険奴隷、及び黒髪の冒険者を探している動きあり。スラム街にて殺害された鴉の幹部、どうやらこれも竜殺しによる殺人の可能性が高いかと、そして数名のスラムの子供たちを竜殺しが連れ出している情報も羽先から伝わっています。……保護、といってもいいでしょう」

「ンでかした！！ ナイス、ナイス情報！ それそれそういうのよ、そういうのよ！ 交渉材料ゲーっツ！」

素晴らしい。私は歓喜に思わず叫ぶ。あの忌々しい鴉ども、あの骨なしチキンと竜殺しは敵対している？

いや、もうオツケーオツケー、感情はクリアです。あの害鳥と敵対するのならつまりは、私の味方となりえるわけだ。

「イエス、イエスイエス、いける、行けるわ！ その他なんやらかんやら含めても、竜殺しを抱え込むメリットが見えてきたわ！ まあなんやかんや言ってもこれ以上の厄ネタなんてないだろうしい！？」

竜殺しの人格、性格の予想図は出来た。

残忍、理性的、お人好し。

客観的に見れば相反し、矛盾しているその人格はしかし、当人中では何一つ矛盾などしていない。

己の中に法を敷き、己の中に光景と基準を持つ人間。

他者にそれを強いることはせず、しかしそれが犯されれば牙を剥く獣の残忍。

他者を本質的には敵だと理解している、しかし敵ばかりではないということも知っている人の理性。

だが、恐ろしいのは、お人好し。

ここだけがわからない。リザドニアンと手を組んでいるのも、スラム街から子どもを連れ出しているのも、その行動だけ理由がわからない。

「どれもこれもリスクにしなければならないはず…… 不気味ね、彼のものさし、あと1つ手がかりがー」

「主教サマ」

「……ごめんね、スヴィ、今ちよーっと考え事してるから」

小さな呼びかけの声。私はそれを一旦かわし、思考の海へ。私の周りの信頼出来る部下はみーんな、少し頭が足りない。



いや、私にしてみればこの世界の人間は全て頭が足りないように見える。

お金への認識の甘さ、社会システムへの解釈の甘さ、そして何より”竜”という上位生物への理解。

そのどれもが、てめーら本気で脳みそついてんのか？ と首元揺らしたくなる程度にはノータリンに見えて仕方なかった。

「……あの人ね、主教サマと同じ匂いしたよ。優しい人の匂いがした」

「――あ」

流されていることにも気にしないスヴィの言葉で、私の中の全てが  
つな  
が  
つ  
な  
が  
つ  
た。

「ああ、そゆこと」

ああ、なるほど、世界が嫌いなタイプだ。世界に嫌われ、世界を  
嫌  
つ  
た  
人  
間  
だ。だが、決して絶望はしないタイプの人間だ。

この世は汚くて、人はクソばかりで、人生に意味はない。

けれど、それでもまだ諦めていない。そんな人間なのだ。

残念さも、理性も全て、弱さを覆い隠すための武器。

世界に抗うための武器でしかない。

その本質は、つまるところ――

「――私とおんなじね」

竜殺しは私だ。思考パターンが似ている。

「ふふ、主教さま、いいおかげ」

ごたん。

一際大きく馬車が跳ねて。

ぶるるるるる！ 馬たちの声、わたしにもわかる、それは悲鳴のよつに聞こえた。

明らかに馬車の動きが精彩を欠きはじめて。

「しゅ、主教サマー！！ お、オラの馬っこの様子がおかしいべ！ 怯えちよる！ こ、この先んなんがウマを怯えさせるなんかがおるどー！」

同じく御者台から悲鳴に似た声。馬思いの彼のことだ。きっと馬車を止めてあげたいはず。うんうん、動物には優しくしなきゃ、ね。

「行きなさい！ お馬さんたち！ あなたのためじゃない！ この私の保身のために！」

でも、わたしは残念ながらそういうタイプではないのだ。

働け、経済動物ども。

「め、めちやくちゃだで！ 絶対、今のセリフは説明せずに色々こじれるやつ」のセリフだで！ ええい！ もう行くしかねえべ！」

ぶるるん。

それでも馬車が進むのは一重にこの地方から見出した田舎っぺ大将の手綱の巧さだろう。

何かに怯える馬をそれでも、巧みに操り馬車は進んでいく。よし、OK、あとでお馬さんたちにはジンニンをあげよう。

「主教さま！ あれ！ あの人は、それに、アレは……」

「トツスルちゃん、状況確認！ あなたなら馬車の屋根から見えるでしょ！」

ナイスネコちゃんのトツスルが私の声に反応し、しやなりと猛スピードの馬車の屋根へ飛び移る。

「承知！ あれは、青空市場に竜…… 骨の竜？」

らしくない戸惑いの声。

「状況報告！ トツスル！」

私は声を張り上げる。猫獣人のトツスルはヒューマンと比べ物にならないほどに目が良い、市場の状況を全て見回せるはず。

「は、ハツ！ ご報告します！ 青空市場にて、巨大な骨の、竜です！ それに並び立つ黒髪の男！ 第一騎士ストルの姿もあります！ 向かい合って今にも殺し合いを始めそうです！ え？ そ、それと第7騎士クレイデアが、泡を吹いて倒れています、し、白目剥いてる……」

「はあ?! し、死んでない? 死んでないわよね?!」

「わ、わかりません! それと、露店の残骸に第4騎士クランが巻き込まれて」

「あ、そいつはどうでもいいわ。むしろ死んで欲しいくらい」

ん?

骨? 骨の竜……………

あ、やべ。リザドニアンのフィードじゃん。それ使うほど追い詰められてる、騎士ストルがまだやる気まんまん……

「トツスルちゃんトツスルちゃんトツスルちゃん! 竜殺しは?! 黒髪の男! 生きてるわよね! 大きな怪我とかしてないわよね?!」



「い、いえ、首に掻きむしった傷がたくさん…… 第一騎士に殺された死体と同じような傷が竜殺しにも見られます！」

「がつつり殺しにいつとるうつつう！！ え、てかそれ首吊りの剣の傷よね？ なんで竜殺し生きてんの！？」

「あ、主殿！ ストルが彼らに再び向かっていきー」

トツスルの悲鳴に似た声。

走り抜ける馬車、馬の荒い息、揺れる車内。

限界にやばい状況の中、わたしは無意識にその名を叫ぶ。

「スヴィー!!」

この世界で数少ない信頼出来る人間の名前を、私の最強の愛しい道具の名前を。

「おまかせ」

猫獣人のみのこなしよりも更に、夙く。

黒い影が、馬車よりも速く。

都市を駆け抜け、石畳を碎き、そして第一騎士の元へ飛ぶ。

「大主教令」 発令。寿命3年使用。止まれ、第一の剣」

無意識に使ってしまった奥の手。ああ、信じたくないけど、万が一にでもスヴィに第一騎士からの反撃がないような選択を取ってしまった。

さあ、どうする。

馬車は進む、市場に突っ込む。

教会戦力と殺し合い、やる気まんまんの竜殺しとその相棒。

利益？ 理屈？ 脅し？ どうすれば殺し合いを止められる？

加速する世界の中、割と簡単に残り少ない寿命を使ってハイになってしまった私の選択は1つだった。

プライド？ 銅貨一枚の価値を持ってから出直せ。

「土下座しかぬえ！！」

わたしはギリギリで倒れるのを避けた馬車から転がるように飛び出た。

竜殺しが、骨の竜がこっちを、ぽかんと口を開けて見ている。

なあ、ゴロウ、見せてやるわ、私のやり方ってやつをね。

あれ？

急に飛び出たから？ それとも緊張？

少し、吐きそー

……  
……  
……

「天使教会総本山”大聖堂” 地下大浴場にて」

「かっぱーん。」

「竜大使館のものとはまた、異なる意匠の湯船。」

「プールに似た浴槽に、地下水を汲み上げて張られた湯水。」

「チベットスナギツネに似た顔の男は頭の上にタオルを巻いて。」

「傷だらけのトカゲ男は爬虫類特有の大きな鼻と口にタオルをかけ

て。

「……いい湯だな」

「……ああ」

男2人で湯船にどぼり。

ここは、天使教会総本山、大聖堂の浴場。

賓客向けにあつらえた豪華な浴場は、シツクな黒い石で作られ、  
絶えず床は新鮮な水がどこからか湧き出ている。

「……なんか、こういうの入ってたら全てどうでも良くなるよな」

泉質は透明、かつまるやか。水源が豊富なのだろう。案内してくれた白い猫の獣人シスターの話曰く全て驚くことに掛け流しらしい。

遠山がまるやかな湯に身体を委ね、隣のラザールへ声をかける。

「……………ああ」

茹でトカゲになりつつあるラザール。体には生傷が絶えないが、それも既に塞がり始めている。

爬虫類すげーな、遠山は湯気を深く吸い込みながら呑気な感想を抱いた。

「……………疲れてる？」



「……蕩けそうだ」

「最高のコンディションだな」

短い会話、耳をすませば豊かな湯の流れる音。

流れ、砕け、満ちて、流れる。

温泉の音は生命を豊かにしてくれる。

「……で、次はどうする？ 完全に湯まで浸からせてもらってしま  
ったわけだが」

茹でトカゲこと、ラザールが大きく息を吐きながら、遠山へ短く  
問いかける。

「あー…… まあ、色々話し合いの余地がありそうだよなあ」

そう、その後、あの衝撃のゲロ土下座のせいで完全にテンションが落ち着いてしまった遠山とラザールは、馬車に乗せられ、この場に連れてこられていた。

「ナルヒト、まったく、きんちょうかんが、ないな…… これも教会のわなだったらどうする…… あー、いきるのたのしい」

やけに腰の低い糸目の女と、面識のある聖女からまずは汚れと疲れを落としてはどうかと提案を受けたのだ。

いや、アンタが先にゲロ落とした方がよくな？　と云う言葉が喉まで出かけたが、なんとか我慢した2人だった。

「今のお前に緊張感とか1番言われたくねえよ、茹でトカゲ」

訳の分からない状況ではあるが、ニホン人特有の温泉欲には逆らえず、そしてラザールも温泉と聞いて目の色を変えて頷いたおかげで、この状況にたどり着く。

殺されかけた勢力のお膝元で呑気に温泉。

しかし、割と図太い2人は大してその辺は気にしていない。面倒な駆け引きよりも、目先の温泉。

「しかた、ないだろ。暖かい湯と豊かな湯気は、我らの祖たる”齒”も大好物だ。齒の言葉通り、風呂には全てが宿るとされてだな…」

それこそが、生きるといふことなのだ、という雑な結論で自分達

を誤魔化し、今に至る。

「種族単位で風呂好きなのは、お互い様か。あー、この後話し合うとか、駆け引きとかしたくねー。めんどくさー」

「もうその辺、任せていいか？ もう一生ここにいたい」

「アホ、お前もくるんだよ、ラザール」

「……ああ、わかってるさ、ナルヒト」

湯の音だけが、広がる。

少しの沈黙、しかし流れる豊かな水の音が静寂を寄せ付けない。

「こんなに良い浴場があんなら、サウナもあつたらいいのにな」

「さうな？　なんだそれは？」

「……………え？　待て、こんなに温泉施設あんのにサウナもしかしてないの？」

「初めて聞いた名…………　いやまて、王国の歴史書で見かけた記憶があるな。湯を使わず、熱で体を温める温室だったか？」

「んー、微妙にズレてるがそんな感じ、え？　待て、歴史書ってこととはもしかして、今はない感じ？」

「ふむ、確か、大戦中に突如現れた”ダイミヨウ”というヒューマンが各地に奇妙な温室を作って旅をしていたとか、そんな伝承は残

ついていたような……  
……とかなんとか」

今は滅んだ北の大陸の亡国から流れてきた

「嘘だろ、この文化体系でサウナが生まれてない？ まさか、ラザール、帝国って、地下水とか火山とかめっちゃくちゃある国なのか？」

「ああ、妙なことを聞くな。だがその通りだ。竜界の影響を強く受ける国土だからか、魔術師の話では帝国近海の海の底にも火山が多数あるとのことだ。まあ、炎竜が初代皇帝と共に興した国だ。源泉が豊富なのもそのおかげかもな」

「水が豊富すぎて、サウナの必要がなかった？ 蒸し風呂より源泉流す方が楽とか？ マジかよ……もしかして、帝国って雪降らないのか？」

「む？ そんなことはない。中央や北部では早霜の月になれば道は凍るし、雪は降るぞ？」

「オーロラとか見える土地は？」

「オーロラ？ はて？」

「アホみたいに寒い土地があるわけじゃないのか。そうだよな、霧  
困気似てるとはいえ、同じ文化そのままあるわけじゃないよな……」

「まあ、何を気落ちしてるが知らんが、湯をたのしめよ、ナルヒト」

くだらない話を湯の湧き出る音ともに繰り返す。

遠山は喉の掻き傷が染みる感覚に目を細めつつ、息を吐いた。

「……ラザール、まあ、なんだ、その心配かけたか？」

「……ああ、思わず2度と使わないと誓っていた切り札まで使ってしまうほどにはな。……この都市ごと全部壊してやるうと思っただが、あれだな、教会騎士恐るべし、だ。あのまま続けてたら、間違  
いなく死んでたよ」

2人は目を合わせず、言葉だけを交わす。

互いに黒い天井を肩まで湯につかり、ぼーっと眺め続けた。

「お前あんなドラゴラムみたいなん、ずりーよ」

「いい男は変身するものだよ、ナルヒト」

「その理屈だと俺も変身できて然るべきだとおもっただけど」



「……………」

きよとん、ラザールが首を傾げた。

「ため、無表情のトカゲみたいな顔で首傾げてんじゃねえよ」

「トカゲ男、だからな」

「タコ、違っただろ？」

「むっ」

「リザドニアン、だろっが」

かぼーん。

ラザールが目をぱちくり。タオルを尖った鼻と口の上に載せ直し、そしてでかい口をにいと吊り上げた。

「ふ、そうだな。その通りだ。なあ、ナルヒト」

「あ？」

「いい湯だな」

「ああ、ほんとにな」

男2人。敵地にて、呑気に風呂に浸かる。暖かい湯気を呼吸で取り込む。

流れる湯を皮膚で感じる。

ああ、たしかに2人は生きていた。教会騎士を相手取り、正義を乗り越え、死を躲し、追跡を食いちぎり、生きていたのだ。

ピコン。

【メインクエスト開始】

【クエスト名 ” 同胞の選択 ” が開始されます】

【クエスト目標、あなたの滅ぼすべき敵を決める】

【オプション目標

天使教会最高指導者”主教”カノサ・ティエル・フィールドとのスピーチ・チャレンジを成功させる

相手の知性値があなたの知性値の2倍以上です。達成は非常に困難でしょう、技能やヒントを活用しない限り達成は不可能でしょう】

湯気にまみれて浮かび上がるメッセージ、遠山はチベットスナギツネに似た虚無顔を浮かべて、湯船から立ち上がる。

「……よし、じゃあ、もうひとふんばり行きますか」

「働き者で涙が出るよ、ナルヒト」

茹でトカゲがおどけて、涙を拭って。

「うるせーよ」

交わす軽口、ああ、2人はたしかに冒険者としての初日をなんとか生き延びていた。

40話 私の胃が壊れる寸前なのはどつ考えてもお前らが悪い  
後書き(

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください  
さい！

< 苦しいです、評価してください > デモンズ感

シンパシー、人間の感覚の中には理屈では説明出来ない不思議なものがある。

問答無用の共感性。

何一つ同じ部分などないはずの人間という个体間においての気持ちが悪いくほどの瞬間的な相互理解。

遠山鳴人は今日、それを感じる事となった。

「今回は度重なる騎士派の不手際、非礼。そして何より御身とご友人を危険な目に合わせたこと、重ねて、深くお詫び致します」

湯浴みを終え、いつのまにか洗濯されていた服装に着替えた遠山と、ラザール。

白毛の猫獣人シスターに案内されるまま、ステンドグラス張り巡らせる廊下を渡り、部屋へと通され、その女に出会った。

「む……」

ラザールが、その女の雰囲気を目を白黒させる。

宗教画的一幕。

確かな高貴、確かな知性。本当に小一時間前にゲロ土下座かました人間と同じ人間とは思えない品をその女は纏う。



シックな茶色の毛皮の絨毯、ろうそくで飾られるシャンデリア、嫌味にならない程度に金糸でゆわれたソファに座るその女に遠山とラザールは思わず、息を飲んだ。

「どうぞ、おかけくださいませ。スヴィ、トツスル。お2人にお飲み物を。湯浴み後です、はちみつを溶かした清水を銀の入れ物へ」

「かしこまりました」

長いまつ毛に隠された糸目。黒いケープに白い肌がコントラストに映るその容姿。

狐が化けて出たような美人だ。

ゲロ土下座女、いや、”メッセージ”の示した情報によれば、天

使教会最高指導者、”主教”。遠山が彼女を黙って見つめる。

風呂上がりの火照りとは関係なく、汗を掻いた。

こいつ、やべえ。

シンパシー。

説明不可能の感覚が、遠山にその女の本質を伝えた。メッセージもヒントでもない、それは遠山鳴人本人の感覚だ。

立ち振る舞い、所作、視線、声。

その全てが造りもの、何一つ自分自身から出たものがない。

その全てが計算されて、それを完全に演じている。

竜大使館の時はドラ子と揉めたせいでなんとも思ってたが、  
相対して初めてわかるその意味不明さ。

「あ、ああ、座らせてもらっつよ」

ラザールが浮足だっているのがその証拠だ。その声、目線は人を  
惹きつける。ドラ子の持つ上位生物としての威厳や圧とはまた違う  
異様。

カリスマ。その偽物、しかし下手な本物よりも魅力のあるそれを  
目の前の女は持っていた。

「……………うっわ」

遠山は思わず呻いた。

うさんくせえ、その言葉、眼差しのどれひとつほんものはない。

「どうぞ、お飲み物です」

「……………どうも」

差し出された銀の杯、薄い黄金色の水が天井のシャンデリアの火を写す。

「……………ナルヒト？」

「……………」

そういうのに全く気づかないっぽいラザールが水差しを見た後にこちらへ問いかける。

飲んでもいいのか、とその目が語っていた。好きにしるや。

「ふふ、そう警戒なさらなくてください。毒なんて入っておりませんから」

「あ！ ああ、これは失礼…… う、うまい」

銀のコップを傾けたラザールが目を大きく開いて唸った。そうだね、良かったね。遠山はまだ飲み物には手をつけない。

「ふふ、お口にあつて何よりです。教会の運営している養蜂場から今朝採れた蜜を溶かしていますの。お風呂上がりの火照る体を冷ましてくれますから」

「お気遣いどうも。主教どの。……てつきり俺たちはこのまま罪人として裁かれるのかと思ったよ。風呂に入れてくれたのも最後の慈

悲かなんかじゃないかってな」

考えることが多すぎる、そのくせ相手への理解が全く足りていない。

遠山はあえて、態度を尖らせ相手の反応を伺う。

あのメッセージ、矢印こそ出ていないがスピーチ・チャレンジがどうのこうの。つまりこの女との何かしらの厄介ことがこれから起こる、それだけしか遠山には判断の情報がなく

「ーそうですね。いえ、ややこしい言葉遊びなどは必要ないでしょう。竜殺し、トオヤマナルヒト様、そしてそのお仲間、レーザー様、この度は誠に、騎士派がご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした」

「……………」

嘘を言っているようには見えない、だがきつと本当の方を言うつもりもない。

遠山にはそう見えた。

「裁く、などとの口が言えまじょうか。今回の件は完全に、私たち教会に非がありますゆえ」

完璧な所作で頭を深く下げる女、主教という立場から考えても社会的地位は、住所不定、孤児のコブ付きである遠山たちとは比べるべくもない。

なのに、目の前の女は本気で、心の底から真摯に頭を下げていた、少なくとも、そう見えた。

「よ、よしてくれ、王国にも天使教会の威光は届いている。今回の

ことはそもそも騎士の連中と俺たちの問題だった。あなたはそれを助けてくれたんじゃないか」

「まあ、なんと、なんとお優しいお言葉でしょう、レーザー様、あなたの行く先々に、天使の光が満ちているようですわ」

レーザーくんに至ってはもう完全に萎縮していた。

ついさっきまで骨の竜の姿になるという超かっこいいドラゴラムしてなおかつ影まで纏うという厨二スタイルで暴れていた奴とは思えない。

借りてきたトカゲだ。目をパチパチ瞬かせながら、蜂蜜入りの水を舐めるようにちびちび飲んでいる。



相棒が完全に籠絡されている、だからこそ遠山は冷静でいられた。

「で、結局、主教様の本題はなんでしょうか？」

主教の言葉をあしらい、遠山が続ける。

「な、ナルヒト、態度が悪いぞ、この人は俺たちに礼儀を尽くしてくれているのに」

「うん、ラザールくん。お前はそのままできてくれ。こーゆうのは俺の仕事だ。……ずるいな、あんた。俺のツレはもうしてやられる」

ラザールを制して、遠山が小さく首を傾げながら主教を見つめる。

一筋の糸のように笑顔の形のまま動かない瞼。その奥にある瞳は果たして何色か。

「はて、なんのことでしょうか？」

「こつちのことは全て調べ尽くしてんだろ？ ラザールの性格、俺の事情。始める前から勝負決めにきてんじゃねえか。勝ち目がねえよ、これじゃあ」

当てずっぽうの鎌かけ。

相手に乗ってくれば儲けもの一言。

「ふふ、なんのお話でしょうか？」

ムソッ

女主教の糸目は変わらない。穏やかな微笑みを張り付けそれを遠山に向けるだけ。

矢印が現れた。

「……まだとぼけるか。アンタは一体俺たちから何が欲しい？何を得ようとしてんだ？」

「な、ナルヒト？」

「……ふふ、まあ。そんな怖い顔をされて。滅相ありません、ただ、私たちは貴方達を保護、いえ、支援させて頂きたいだけです。」

「……質問に答えてくれよ、主教サマ。俺はアンタが何が欲しいか聞いたんだぜ、いや、正確には、何をどう欲して、それをいくらで買い取るつもりなんだ……ってどこか？」

遠山にはぼんやりと、この女主教の目的が予想できていた。

あのゲロ土下座、聖女とやらの存在、そして竜大使館で見たドラ子と教会の関係、そして騎士、ストルが話していた竜という存在への認識。

自分が、竜殺しと呼ばれている事実も把握していた。

「……………へえ、なかなかどうして。やはり、思った通り、か」

すつ、と。切れ込みが入るかのように糸目が僅かに見開かれる。そこから覗くのは暗い紫水晶を溶かした瞳。

「嫌な目だな」

茶色の目が、その怪しい色を写す。

「あら、ひどいお言葉です。ふふ。傷付きますわ、遠山様は意地悪なお方ですね」

共感性。

ふたりは決して、互いに殺気をぶつけているわけでもない。決して敵意を交わしているわけではない。

なのに、聖女も、隠密も、影の牙も言葉を発することはない。

毒虫と毒蛇が微笑み、互いにいつ牙を突き立てるかを伺う、そんな嫌な空気が部屋に満ちる。

女主教の糸目は、変わらずニコニコと歪み遠山をみる。

遠山はチベットスナギツネのような鋭い目を隠そうともせず、女  
主教を睨む。

共感性、ある意味でとても似ていて、しかし決して分かり合えな  
い2人。

しかし、両者の想いは1つ。全く同じことを笑顔と、虚無顔の裏  
で考えていた。

（こいつ、性格ワツワツツツル！！ 絶対友達と恋人もいねーよ）

「ふ、ふふふふふ」

「あは、あはははは」

同時に朗らかに笑い合う2人。互いに同時に、目を合わせたまま銀の杯にある飲み物を口に含む。

「うわ」

「ダメです、長殿。お気持ちはわかりますがここは主殿にお任せしましょう」

笑顔なのに、目の笑っていない主教と遠山。聖女が顔を顰め、猫シスターがそれを諫める。

ここより始まるのは化かし合い。欲望と欲望を舌に乗せ、剣ではなく言葉にて利益を掠め合う人間の戦い。

知性、人を人たらしめるその要素。それをもしこの場で互いに可視化できるのであれば。

冒険者ギルドにて採用されている副葬品 キャラ・ロールの示す



人の力。

遠山鳴人の知性は7。

充分に世の中を渡り、嘘を嘘と見抜き、歴史から学ぶことが出来る知性である。

それに対し、糸目で笑う女の知性、実に

INT 2811

それはつまり、己の嘘で世界を騙す稀代の才能。

その舌と頭脳で、歴史すら作れる異才。

舌と舌を噛み合う、絶望のスピーチチャレンジがはじま

「全員動くな！！！！ 栄えある天使教会騎士団の公務だ！！ 繰り返す、全員動くな！！」

はじまらなかった。

ドアが蹴破られ、部屋に響くは軍靴と銀鎧の擦れる音。

「ご報告！ 罪人2人の姿を確認！ 騎士団に逆らった逆賊です！」

「出入り口を塞げ！ 廊下には教会術師を配備しろ！」

「第2騎士ブレナ様以下10剣と副団長殿もまもなく到着になられる！ 道をあけておけ！」

「動くな！ 罪人！ 少しでも動けばその首、叩き落とす！」

数多の騎士が一気に部屋にガチャガチャ集まる。

四隅を抑えられ、

抜かれる剣、銀の輝きを持つ幅広の直剣が遠山とラザールに突きつけられて

「うおっほん！ ああ、よくやった、諸君。それでこそ栄えある騎士団の仕事だ。やあ、主教、邪魔させてもらおうか。いやとは言わさんぞ」

髭の生えたでかいデブ、膨れた銀の騎士鎧、高慢な顔で部屋に押し入るのは

「天使教会騎士団、団長、ドアゴ・フォン・スーパナ男爵だ。薄汚い逆賊、”竜殺し”、及び”王国”王家の暗殺者、”影の牙”の処刑のため、その身柄預からせてもらおう、天使の威光と、騎士の誉に、天明にお縄につくのだ！」

筋肉ヒゲダルマがそのテカッた顔をきらり、なめ光らせた。

「「あ???」「」

遠山と主教、2人同時に声を上げ。

奇しくも同時に、同じ場所、こめかみに青筋を立てていた。



41話 INTT2811 INTT0(後書き)

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！

＜ 苦しいです、評価してください ＞ デモンズ感

42話 キミを幸せにするキミだけのさいきょーに賢いドラゴンさ、ただし火と河童と鬼とバカだけは勘弁な

「よし！ ひっ捕えよ！ 抵抗は認めん！ 薄汚い罪人め」

突如押し入る騎士たち、それを引き連れた筋肉ダルマが檄を飛ばす。

「ナルヒト」

瞬時にスイッチが切り替わるラザール。さっきまでのポワポワトカゲから一転、何考えるかわからない冷徹な捕食者、無表情の爬虫類顔に戻る。

「いや。まだまだ、ラザール」



遠山がラザールを制する。その目は目の前で俯いている主教へ向けられて――

「主教サーー!!!」

聖女がハッと、目を見開きそれに呼びかける。しかし、その呼びかけが終わるよりも先に。

「大主教令、発令。1ヶ月使用、動くな、下郎」

冷たい声だ。少なくとも人に向ける声と目つきではなかった。

「あ?!」「が!?!」「ぎ?!?!」「ぶえ?!?!」

がしゃん、がしゃん、がしゃん。

短い悲鳴とともに、騎士たちが倒れていく。

教会最高指導者にのみ、継がれるそのおぞましい令が不屈き者に命令を遵守させる。

「な?! なんのつもりであるか! 主教! 我ら騎士団の榮譽ある剣に向けてその忌々しい令を使うとは!」

まさかそんな事が起きるとは思わなかった、本気でそう思ったような口ぶりで筋肉ダルマが吠える。

「チツ、やっぱ効かないか…… いえいえ、男爵殿、ごめんなさい、急に部屋に押し入り、私のお客人に乱暴なことなさるので、つい驚いてしまつて。オホホホ……」

主教が張り付けた笑みで筋肉に応えた。10剣以上の存在には主教令に捧げる寿命は1ヶ月では足りないようだ。

「ええい、女狐めが！ 何が客人だ！ 彼奴らは我ら騎士派の門兵を殺し、あまつさえ10剣の裁きに逆らつた教会の敵ぞ！ 我輩の邪魔をするということはすなわち、教会の邪魔をすることにほかならぬ！」

「まあ、主語がお強いことで。男爵殿は少し騎士団に長く浸かりすぎでは？ 1つの派閥での意思決定を教会全体の意思とすること、横暴ではありませんか？」

「な、なにを?! 賢しらなことを抜かしおつて! 銭ゲバ狐めが! 少し竜の覚えがいいからといって気に合わぬ! 女なら女らし

く身の程を知れ……！ ツ……」

喚き続ける筋肉ダルマが、声を止めた。

遠山だ。

「汗くせーんだよ、筋肉タコ。結局何しに来たんだお前」

筋肉鎧の喉元に、添えられたのは欠けたヤイバ。

なんか急に無視され始めたので、試しにキリヤイバを身体から引き抜き、女主教に剣を抜いた筋肉の動きにカウンター気味に合わせる。

臭い汗が、ぽたり。垂れた。

「う、うぬ?! 罪人! 貴様、誰に何をしてるのかわかってるのか!?!」

筋肉が喚く。声がでかい。遠山が顔を顰める。

「うわ、口も臭え。風呂上がり以最悪だ。……やめとけよ、筋肉タコ。みる、そこの性悪女の隣に侍るニヤンコさんと、ちびっ子シスターを。お前、殺されるぞ?」

「……………」

顎で示した先、主教の両脇に控える2人は無表情で筋肉を見つめる。

「ふん、何を言い出すかと思えば。出自のわからぬ卑しい生まれの猫畜生に、女狐の愛人の穢れた聖女！ 天使の光に愛されたこの我輩の敵ではないわ！」

喉元に刃が向けられているというのに、筋肉はそれを一切気にした様子もない。

喚き立て続けるのみ。

「うわ、まじの脳筋かよ。ポリコレに消されるぞ、お前」

「罪人！ 我輩への侮辱、許さぬぞ！ 竜殺しを騙る愚か者め！ 貴様のような下賤なものが竜を殺せるわけなかるうが！ どのようにあのお方へ取り合ったのだ！」

筋肉が喚く。しかしその声の響きには少しの湿度を伴って。

「……男爵、今の言葉は聞き捨てなりません。それは竜の巫女への侮辱にも繋がりますよ」

「黙れ女狐！ 我輩は認めぬ！ 貴様もそうだ！ なぜ貴様のような下賤な生まれの平民上がりばかりが竜大使館へ呼ばれるのだ！ 本来ならばそれは我ら騎士団の役割であろうが！」

「明らかな嫉妬を含んだ声だ。」

「遠山は怖気を感じた。ドラ子、お前どんな奴に好かれてんのよ。」

「……てめーらにその価値がねえから私が呼ばれてんだろっが」

「筋肉の言葉に主教が額に手をやり唸る。知性に差があると会話が苦痛という話は本当らしい。」

「ぬ？」

知性28と知性0には悲しいほどの差が存在していた。

「あら、失礼。独り言です。……どうでしょう、騎士団長、ここらで一度互いに刃を納めませんか？ 貴方と言えど首を裂かれては死ぬでしょうに」

「ふん。女狐め。そんな脅しにこの我輩が屈するとても！」

「脅しかどうか判断出来る頭ねえだろ、お前」

自分より頭1つでかい筋肉デブの首筋、薄皮1枚をキリヤイバの欠けた刃を当てる。



僅かな血が流れる、しかし、筋肉ダルマは唾うだけ。

「貴様ら、正気であるか？ 我輩を誰と心得る？！ 栄えある天使教会騎士団、団長——」

「馬鹿の団長、だろ？」

筋肉の言葉が、少し止まり——

「こ、こわっぱがああ！！ よかろう！ 試してみるがいい！ 我が天使からの秘蹟、”戦車”の頑丈さをな！」

怒号。ビリビリと響く音量により、テーブルの上に置いてある水差しが絨毯に落ちた。

「……直を使うのは久しぶりだな」

遠山が、キリヤイバに力を込め――

「む？ ふっ、罪人、警告だ。その腕、下げたほうがいいぞ？」

「あ？」

フツと、筋肉ダルマが何かに気づいたかのように笑った。

「っ！？ だめ！ 竜殺しの人！ 下がって！」

聖女、ちびっ子シスターが目を見開き叫んだ。強者の判断に、遠山は素直に従って

「にはは、一手遅かったねー」

ずぶん。

「は？」

右手、肘から先の感覚が消えた。

唐突に右手が軽くなる、そのあとようやく気づく。

右肘から先が、ないー

キリヤイバも、消えて。

「あっっ  
」

くる、くる。

ぱしり。

斬り飛ばされた肘から先をキャッチしたのは、薄い銀鎧に、仮面、  
ふざけた泣き顔の仮面をつけた騎士だ。

「へー、よく鍛えられてる右腕だあ。にやはー、美味しそー」

仮面に腕を押し付けながら、悦に浸った声で仮面騎士がつぶやいた。くぐもっているが、女の声だ。

「ナルヒト?!?!」

「ぐっ、う、!! ま、て、ラザール、動くな！」

バランスを崩した遠山があとずさる。

腕を、斬られた、でも痛みも、血も出ない。明らかかな異常。

駆け寄るラザールを制して、仮面を睨んだ。

ラザールの動きに、仮面の騎士が意識を向けていたからだ。

「にゃは、気付いた？ いい目もしてるねー。これは竜殺しも案外眉唾じゃないかもよー、団長さん？」

ふっと、殺気を緩ませる仮面女。

「ぐわはははははは！ 抜かせ！ いやしかし、よくやった！ 我が第2の剣、”殺害”のブレナ！ 素晴らしき剣技よ！」

高らかに唾う筋肉ダルマが忌々しい。

「にゃはは、暑苦しい。副団長に乗せられて先走りすぎっすよ、団長」

仲良さげに仮面女が答える。

呼び名や言葉の交わり方から、理解した。

こいつも、あの正義女、ストルと同類の化け物騎士の1人だ、と。

「まあ、な！」

突如、振われた大きな拳、視界が拳一杯に広がって、

「つぶ！！！」

殴り飛ばされたことに少し遅れて気づく。クラクラと世界が揺れる、まるで怪物種の突進をそのまま食らったような感覚。

馬鹿力め。

「ほう……？ 咄嗟に頭突きしてきおったわ。生意気にも我が拳の威力がぶれた、か」

「ナルヒト?! 貴様っ?!ー」

ラザールが今度こそ、動いた、しかし

「にゃは、すうーっ、んん、いい匂いだねえ、リザドニアン。血と怨嗟が程よくかぐわしい。ねえ、今まで何人殺してきたのお、教えてほしいなー」

滑らかに、すべらかに、そして巧みに。

仮面騎士がラザールの背後を取る。首に手をやり、羽交い締めにされた。



「く、くそ、その腕……」

「ああ、キミのご主人のだよ。いやあ、でも、見れば見るほどいい筋肉だね。レベル3の人間並みに良い肉付きだ。ううーん、高ぶるにゃー」

ラザールが背後を睨みつけるもどこ吹く風。

「こ、この野郎……」

「いい、ラザール、動くな。動くなよ」

「にゃは、いい顔だね、竜殺し。腕切られたっていうのにショックがあまりない、恐怖より先に怒りが勝るタイプかあ。いいじゃん、いいじゃん。やりがいがある。あ、安心してよ、血はまだ出ないから」

「野郎……」

「おっーと、いい目だねー。ゾクゾクしちゃうにゃー！……痛めつけたくなるじゃ、ん」

ぱちり。

仮面の女が指を鳴らす、

同時に

「ツツツツツツツが！??？」

視界が歪む、激痛。

「じゃはははははは！ どう？ どう？ どう？ ”殺害”の眷属、  
エニユーの7つ道具”！ キミに使ったのはこれ、糸切りの剣！  
血とか、痛みとか出すタイミング、全部こっちで決められるんだ。  
どう？ じゃはは？ 意味わかるよね？ 出血、させちゃうかじゃ  
ー」

「…………絶対、殺す」

「じゃは」

「まだよせい、ブレナ。その罪人は天使裁判にかけたのちに処する。  
今はまだ、始末するには早い！」

「チエツ、はい、団長さん」

遠山とラザールは瞬く間に制圧された。

部屋に剣呑な雰囲気満ちてい崩した中、口を開いたのは彼女だ。

「騎士団長、これはどういふつもりですか？ 彼らは私の客人、そして竜の友人、ご自分が何をされてるかご理解しておいでで？」

事態を静観していた主教が静かに言葉を紡ぐ。

「ふん！ 腰抜けの女狐よ！ 貴様こそ正気か?! 客だと？ 此奴らは我ら騎士に刃を向けた逆賊、帝国法においても騎士への反逆は重罪とされておるだろうが！」

「……………」

「どうした?! 何も言えんか? ぐわははははは!! 少々口が立つとはいえ、所詮行き遅れの小娘風情! 我輩の威光に怯えとると見えたぞ!」

「……それ以上の主教サマへの無礼、許さない」

「主殿、ご命令を。毛が逆立って我慢できません」

筋肉ダルマに殺気づく2人。

「にはは、聖女に隠密猫。いいねえ、主教派の最大戦力揃い踏みじゃないのよ。……聖女の身体、バラしてみてえー」

それに触発される仮面女。

互いの殺気が膨らんで。

「ステイよ、2人とも」

しかし、主教の声はそれを制した。

「しかし！」

「主席聖女スヴィ、貴女まで私の言葉を聞かないというのか」

「ッ、行きすぎた真似を。処罰はいかようにも」

「控えてなさい。すぐに出番は来るわ。さて、騎士団長に、第2騎士、あと2回だけ言うわ。私の客人を離しなさい」

食いつく聖女を言葉のみで御す主教、その糸目が開かれ無礼な騎士へ向けられる。

「同じことを何度も！！此奴らは罪人！ 我ら騎士派の門兵を！」

筋肉ダルマが怒号を叫ぶ。

だがそれは真実だ。遠山たちが門兵を始末したのは事実。

体制側の人間を私情で殺したのは事実だ。

筋肉ダルマの言い分に間違いはなく、故に遠山を庇うのは主教にとっても矛盾していて――

「 8人」

告げられる人数。それは強欲冒険者が欲望のままに始末したあの門兵の数。

手に顎を乗せ、不遜な態度で主教、カノサが静かに告げた。

「む？」

筋肉ダルマはもちろん何が言いたいか理解できるわけはなく。

主教が、薄い唇を半月に歪めた。



「ええ、完璧な仕事だったわ。迅速に、容赦なく、冷徹に、そしてなるべく苦しめて殺してくれたわね」

「……なんだと？」

いよいよ、筋肉ダルマが目を見開いて。

「素晴らしい仕事でした。トオヤマ異端審問官、ラザール異端審問官補佐。私の指示通り、天使教会の法に逆らう愚か者に、見事な光の裁きを下してくれた」

覚悟は済ませていた。筋道も立てていた。

竜殺しとの交渉の切り札として用意していたカードを主教はここでオープンする。

即ち、それはトオヤマナルヒトとラザールを審問会のメンバーとして迎え入れる鬼札。

「何を、貴様、言っておる？」

「あら、ご理解できませんか？ ではさらにわかりやすく。東門の門兵たちには教会法で禁じられている弱者からの搾取、および合意なき姦通の罪禍が認められておりました。天使の威光を世に知らしめる教会の一員としてあるまじき行為です」

それはまさしく毒を皿ごと平らげる行為、しかし仕方ないのだ。

テーブルを共に囲む竜がそれを望んでいる。

毒を喰らうか、火を浴びるか、どちらがいいか、と。

「ばかな！ いや、さて！ 仮にそうだとしても！ この者らが、  
罪人……………あ」

珍しく、筋肉ダルマが主教の言わんとすることに気づいた。わな  
わなと身体を震わせ、首を静かに振り始める。

「気づかれましたか？ 罪？ はて、何が、でございますか？ 彼  
らは私、天使教会主教、カノサ・ティエル・フィルドの命に従い、  
裁きを下したまで。なにかおかしいことでも？」

筋道は通る。これで門兵殺しは教会内の肅正として処理することが可能となる。

「にはは、流石にそれは苦しいよ、主教。そんなの出まかせだ。いくらアンタでもそんな契約はー」

当たり前前の反論。言うだけならいくらでも言える。

第2騎士がヘラヘラと身体を揺らして笑う。

「スヴィ、あれを」

「はい、主教さま」

「は？」

聖女が懐から取り出した古い羊皮紙。

それを見て、今度こそ騎士2人は動きを止めた。

「あら、腐っても、いえ失礼。教会騎士ですものね、これにはお詳しいはず。”教会誓約書”、見えますか？ 彼の名前が紙面に踊っていることを」

それはあのスラム街での出来事を経て、偶然繋がった点。

教会誓約書には、トオヤマナルヒトの名前が統一言語で記されている。

孤児たちを救うために結んだ不平等な契約はしかし、この場においては最強のハッタリの道具になる。

「ぶ、プリジ・スクロール。な、で、では、この者らは本当に……」

副葬品 教会誓約書。その絶対命令遵守の効果は広く知られている。

筋肉ダルマさえ、その意味することは理解しており。

「おっと、うっそーん。団長さん、これ、やばくね」

教会誓約書により、トオヤマナルヒトが審問会に加入することが

記録されている。

完全にそう受け取った騎士たちが目に見えて、狼狽した。

この時点で、これは単なる罪人の取り締まりではなくなる。

主教派と騎士団。教会の派閥同士の潰し合いに変わるのだ。

「やばくね、じゃねえんだよ。快樂殺人者。私の部下の腕落としていて無事で帰れるとでも？」

主教が言葉を崩した。その目には明らかな侮蔑の色が宿る。

「主教サマ、指示を。……なまくらな剣の一本や二本、すぐに手折つてさしあげます」

それに反応するよつに、聖女が一步踏み出る。

その圧に、部屋の空気が重たく、生ぬるく。

「あらららら、団長さーん、どうするー？ 流石に私1人で”主席聖女”はきついよー」

「む、むっ……」

「むっ、じゃねーよ、クソダルマ。あなたのその小さじ一杯もない脳みそでも理解できますよね？ これは騎士派による、主教派への攻撃。先に手を出したのはお前らだよ」



言い訳と大義を得た主教派。

全てお膳立てされたまま、予定通りにことは進んで。

「チツ、にゃ、にゃはは、でもさ、ほら、いいの？ 私殺したらそこの人の腕も戻らないし、トカゲさんも死んじゃうかも」

「…………お前が、死ね」

遠山とラザールが同時に吐き捨てる。

第2騎士が仮面越しでも狼狽えたのがわかる。

あ、こいつら、脅しきかねー、それだけは理解出来たようだ。

「や、やべー。にやはは…… 覚悟ガンギマリすぎじゃない?」

「……試してみればいい。トカゲさんを殺すのが先か、私が貴女の首をその仮面ごと引っこ抜くのが先か」

「に、にやは」

「キメーんだよ、その笑い方。主教派は降りかかる火の粉を許しはしない。教会法に則り、相応しい報復を」

主教がひゅばり、指を向けた。

それは最後通告。主教の戦力行使の合図。

「ぬ、ぬう！ ”戦車”！！」

「エニユーの7つ道具！」

騎士たちが迎え撃つ、主教派最強戦力、いや、教会最高戦力たる  
”主席聖女”を。

「……遅い」

癒しの力が牙を剥き――

「いいや、どうやら間に合ったみたいだよ」

花が舞う、そんな香りが部屋に立ち込めた。

ふらり、まるで友人の部屋に現れた朋友のごとく、その女は当たり前に来賓室のドアを開けた。

「……………」

聖女の動きが止まる。

「それ以上動かないでください、主席聖女殿。いくらあなたとて、我らから、主教様をお守り出来ますか？」

「残念ながら下位数字だけだけど。ああ、その殺人バカは除いてね」

「ワロス。クランの奴ここ3日か、2日で死にかけすぎじゃね」

同時に、部屋に現れる新たな騎士。

ブレナと同じく、奇妙な仮面でその顔を隠した10剣のメンバー、そのうちの3人が主教の背後を取っていた。

剣を、主教に全員向けて。

「チツ、10、8、5。そろそろと連れてきたものですね」

恐るでもなく、傲岸に舌打ちをする主教。

「あはは、そんな顔しないでくださいよ、カノサ様。貴女のもとに向かうのです。お気に入りのお剣は揃えていくのが礼儀でしょう」

その女は一人、場違いな格好をしていた。

儀礼用の服装はまるで現代のレディーススーツに似ている。

服と同じ色の髪の毛は黒曜石のように艶めき、女性にしては珍しいジャガーヘアにまとめられていて。

「それを簡単に突き付けるのはやめて欲しいものですね、副団長殿？ 相変わらず顔だけはよろしいようで」

「人間性は顔に出るものですよ、カノサ様」

天使教会副団長、男装の麗人と言うべきいでたちの女が桜色の瞳を潤わせ、主教と向かい合う。

「そうですか、ならよほど面の皮の厚い人間性のようですね」

「あはは、相変わらずひどいなあ。……寝所ではあれほど素直だったのに」

麗人、副団長がいたずらげにクスリ、微笑む。

「あら、過去のことを今の自分の成果のように語るんですね。ふふ、今も素直かどうか試してみますか？」

主教もまた同じく、糸目をわずかに開き、その紫の瞳を覗かせていた。

「あは、よしておきますよ。今日はカノサ様に用があるわけではありませんかから」

言って、ぷいとそっぽを向く副団長。

しなやかな脚をするりと伸ばして向かうのは筋肉ダルマ。

「む、むっ、メッサ副団長……」

いたずらがバレた子ども、罰の悪そうに筋肉ダルマがたじろぐ。

「はあ、怒られる自覚あるのなら暴走はよしてくださいよ、団長。……嫌いになっちゃいますよ」



腰に手をやり、演技じみたため息を副団長がつく。

筋肉ダルマがその態度に明らかに狼狽した。

「な?! す、すまぬ!! 我輩、お主を困らせたいわけではないのだ。むしろ、騎士の栄光をなんたらか知る貴殿が喜ぶであろうとおもって……!」

異様な様子だ。

少なくとも2人の立場は逆に見えた。

「チツ、どつちが女狐だか…… へいへーい、副団長、少し来るの遅いんじゃないのー。てか、話違うんだけど、この罪人2人、罪人じゃなくて主教サマの部下らしいんだけど」

幾分低くなった仮面の女の声。

苛立ちを隠そうともせず、その声を向ける。

「あは、ブレナ、君らしくないね。嫌に焦るじゃないか」

どこ吹く風、副団長がその声に宿る棘を笑ってかわす。

「聖女の本気の殺意ぶつけられて平気なのはうちのバカくらいだよ。つと。まあ、そのバカももう、只のバカになっちまったけどね」

少し寂しげな声を仮面の女がつぶやいて。

「……で、何をしにきたのですか？ 副団長殿、貴女までその2

人を罰しようとしても?」

主教がそのやりとりを止める。

くると、副団長が振り向いて、視線をふらふらと動かした。

「ああ、そうだった、ふふ、カノサ様と久しぶりに話せてつい高揚していたようだ。……ああ、彼が噂の竜殺しクンかい?」

桜色の瞳が、お目当ての人物で動きを止めた。

瞳孔がわずかに開き、虹彩に光が灯る。

その目は、遠山鳴人へ注がれて。

「……………誰だ？」

「天使教会騎士団 副団長、メツサ・スフォイア。はじめまして、  
我らの竜を殺しせしめた強き奴隸さん」

尻餅ついたままの遠山へ、副団長が腰を折って騎士礼を向ける。

「む！ 副団長、そんな男に貴殿の名前な、ど……………」

その態度にいきりたつ筋肉ダルマ、しかし  
すぐにその声は止められた。

「やきもち妬かないの。少し、彼と話したいんだ。団長」

ひとり。しなだれかかる麗人、妖しい美を持つ彼女が筋肉ダルマの唇にそっと、長い指を当てた。

「む、むむ、貴殿が、そういうのなら」

懐柔されている、明らかにそれがわかる2人の関係性。

「……………悪女め」

仮面の女がそれを忌々しげに見つめていた。

「あはは、ブレナ。そう睨まないでよ。おっと、仮面越したと睨まれているかどうかかわかないか」

それをかわし、再び副団長が遠山へ視線を向けた。

「何をしに来たかはわかりませんが、副団長殿。そちらの2人は私の部下です。これ以上、騎士団が2人に危害を加えることは」

主教がその視線から遠山を庇うように言葉を向ける。

「主教派への攻撃とみなす、かい？ あはは、カノサ様にしては大胆な策だね。いや、違うね、本来ならもっと根回しして、交渉のダメ押しとして使うべきカードだ。……おおかた団長とブレナを止めるために無理矢理に切らされた感じかい？」

だが、副団長もまた主教の言葉をさらりと受け止める。

微笑みは崩さず、会話に絡め取られず。

「さて、なんのことでしょう。そのトオヤマ審問官とはプリジ・スクロールの契約も終わっておりますが」

「あはは、ぬけぬけとよく言うよ。プリジ・スクロールの契約内容は契約者同士でしか確認出来ないだろう？ ……風の噂だけど、昨日、スラム街で聖女様が孤児を助けたそうだね。そこに居合わせたのはリザドニアンの男性と、黒髪の男性だとか？ おや？ 不思議だなあ。竜殺し達ととても似ている容姿だ」

平然。副団長はプリジ・スクロールを持ち出されてもなんら狼狽えることはない。

むしろ、真実に近い情報をさらりと舌に乗せて。

「……………偶然でしょう。憶測の話を中心に持ち込まれても困りませんわ」

主教の声に乱れない。

だが、遠山だけはその声がわずかに硬くなっていることに気づいた。

「あは、やっぱり口では敵わないかー。まあ、別にいいんだけど。まあ、風の噂だからね、風、の」

意外なことにこれ以上の追求はなく。

場の空気をさらった女は言葉を濁した。



「……………何が言いたいんですか？」

「まだ、私たちにもチャンスがあるってこと。団長、主教様のお言葉にはまだ嘘がある。彼ら竜殺しを抱き込むというのは本音だけど、まだそれは完了していないんだ、プリジ・スクロールの契約内容は本当に審問会への加入の誓いなのかな？」

「……………顔だけは良い女ね」

「あはは、好きでしょ、私の顔」

女の会話は冷たく、しかし小気味良く。

互いをよく知り、今は道を違う2人は一歩も引かず。

「む。む？ つまり、彼奴等は審問会のメンバーではないというこ  
とか？ む、はははは！ んならあば！ よし！ なんの問題もな  
く、裁きを」

筋肉が急に元気になりかける。

のっし、のっしと遠山へ歩みを進めようとしたところを

「違う、違うよ、団長。第一騎士が使いものにならなくなったんだ。  
補充要員は必要でしょ？」

「なぬ？」

また副団長に止められた。

そして、彼女はにこりと笑い、部屋の空気を一気に冷たくさせた。

「彼らを騎士団に迎え入れよう。呪われた魂はしかし、我ら騎士の誇りで清浄され、新たな剣となってくれるはずだよ」

「「は？」」

呆気に取られた騎士2人。

「何を言っている?! いくら貴殿といえど、このような下賤なものを達を騎士団に入れるなど――」

筋肉ダルマが副団長につめよって。

「お、ね、が、い」

その言葉を、副団長、メッサが告げた。

「……………ああ、そうだな。貴殿の言葉に……………間違いはない、か」

それだけで、たったそれだけで騎士団の意向は固まった。

歪でおぞましい光景だ。

酷く美しいが、その中身は腐っている。

「……には、副団長、頼むから、その眼を私には向けんなよ。……差し違えても決り取ってやるから」

「あはは、大丈夫だよ。同性には効きづらいんだ。おっと、今は内緒にしてくれ。スキルも秘蹟も私は持っていないんだからね、まだ君に殺されたくはないし」

「副団長、貴女自分が何を言ってるか理解しているのかしら？」

主教が硬い声を。

「あはは、もちろん。でも、カノサ様、これでさ、よくわかるよ。ブリジ・スクロールの契約内容が本当に審問会関係の内容なのか、それともカノサ様のハツタリなのか」

「やめなさい、副団長。知ってるはずよ、ブリジ・スクロールの契約を破れば」

「契約者は契約を守るためだけに生きる人形に変わる、でしょ？  
あはは、カノサ様、面白いこと言うね」

「なにを」

「それ、なにか問題あるの？」

変わらず、美しく、ただ綺麗に女は笑う。

「……クズ女」

「顔のいい、を忘れてるよ、カノサ様」

クスリ、喉を鳴らして猫のように微笑む女、副団長がしなやかな脚を運び、するりとラザールの元へ。

「アンタ、その眼……」

「ああ、君は確か、ラザールくんだね。ふふ、じゃあまずは君から始めよう。ほら、眼、見てよ」

「っ、だめ！ ラザール様、彼女の眼をみてはー」

主教が声を張り上げた。

「悪いね、リザドニアン、よっと」

目を背けようとしたレーザーをブレナが無理やり押さえ込む。

ああ、桜色の瞳が、縦に裂けた瞳孔に映り込んでしまっ、それが始まった。

「ぐ、っ、む…………… あ……………」

レーザーの動きが、止まる。

手は震え、しかし、縫い付けられたようにメッサの目をじっと見つめて動かない。

「綺麗な眼だね、レーザーくん。寂しさと静かな暗い沈むような怒りをもした眼だ。ほら、もっと、眼を見て……………」



「あ…………あ」

「おい、ラザール？」

遠山の呼びかけにもラザールは答えない。

「さあ、聞かせてよ。ねえ、ラザールくん。君が欲しいな。私の……おっと、間違えた。天使教会騎士団に入らない？ 君の力が必要なんだ」

「てめ、何言ってるやがる」

遠山が声を荒げた。

いやな、嫌な予感がしていた。

「ああ……」

そしてそれはいつも当たるのだ。

あり得ない問いかけに、あり得ない返答をラザールが返した。

「は？　おい、ラザール?!」

「ふふ、ありがとう。嬉しいな、かの強き齒の子らの血を騎士団に取り込めるのは。光栄だよ」

「……お前、ラザールに何した」

既に遠山は目の前の女を始末する算段をつけ始める。

腕の痛みも、慣れたのか、それとも怒りのせいか、気にならなくなっている。

「あはは、やだな、そんな怖い顔しないでよ、竜殺しクン。そんな顔されたら、君とも、仲良くなりたくなくなるじゃないか」

「トオヤマ様っ!!」

「おっと、カノサ様はそこでストップ。状況は理解できるよね？ 聖女、隠密、2人で私の剣4本と、団長を抑えるかな？ 聖女ちゃんと猫ちゃんといえども、君を守り切れることができるかな？」

「……脅しですか？」

「まさか、カノサ様に手を出すわけじゃないですか。ああ、でも、うん？ ラザールくんが騎士団への加入に頷いた、そして廃人化していないということは？ おやおや？ プリジ・スクロールの絶対遵守が発動していないということですね、カノサ様」

「……………っ」

「つまり、プリジ・スクロールによる契約内容は少なくとも、竜殺しくんとラザールくんを審問会に入れる内容じゃなかったことですね。あらら、あはは、いや、別に私はどうでもいいんです、私は、ね」

「む、むむむむむむむ？！ 女主教！！！ 貴様ア！ であるならばあ、我輩を騙したというのか？！ ゆ、許せん！ 許せんぞ！ これだから女が権力を握るとロクなことが起きんだ！ その張りついた狐のごとき笑顔、2度と出来ぬように砕いてくれる！！」

「……………動かないで、もし、主教サマに指一本触れてみる。……………騎士団は今日滅びる」

「ん何ウオウ?! 小娘、いや、小童が! 少しばかり天使からの祝福を色濃く受けている程度で調子に乗るなアイ!! 我輩の戦車”はたとえ聖女とて引き潰す!」

「じじじら、団長、もうすぐに怒らないの、ね」

「……………む、そうだったな。すまぬ、つい」

「あはは、いいよ、私はあなたのそういうところが好きなんだからね」

「副団長……」

「ふふ、まだ日が高いよ。言うこと聞けたご褒美は、後で2人きりで、ね」

筋肉ダルマにしなだれかかる麗人。長い脚を鎧の下肢に絡める。

蜘蛛が獲物を捕らえる光景に似ていた。

「わ、わかった」

それだけで筋肉ダルマはまた大人しくなる。

「いい子」

微笑む副団長。

「チッ」

「筋肉が」

「私の副団長……」

「くそ……」

騎士団長、そして副団長にそれぞれ向けられる舌打ちと怨嗟の声。

なんだこいつら、関係性気持ち悪い。

遠山は目の前の連中の歪さに吐き気を催す。

「はいはい、ほら、みんなもやきもち妬かないの。ブレナ、そんなに睨まれたら怖いなあ」

「……には、なんのことだか」

「ふふ、目が笑ってないよ。さて、カノサ様、こういうとき。かの女主教に煮湯を飲まされてきた教会の古株は貴女が、プリジ・スクロールを偽ったことを許さない。団長でこれなんだ。あの次席聖女、原理主義派がこれを知れば、あはは、どうなるかな？」

「下手な脅しですね、貴女らしく無い、どこの誰が背後にいるのです？」

「……うん？」

「言い方が悪かったですか？ ならもつと、シンプルに。……この状況はてめー程度の脳みそで描ける絵じゃねーだろ。どこの誰に指



示された？ 何考えてやがる、色情魔」

「あは、やっぱりカノサ様、そつちの雰囲気の方がいいよ、ゾクゾクしちゃう。……誰もいませんよ、いるわけないです。私が、ただ、竜殺しが欲しいだけ」

「正気？ 竜の巫女、”蒐集竜”は彼にこだわっている。その彼に下手に触れれば」

「竜の怒りを買いかねない、あはは、いいじゃないですか、それ」

「は？」

「大戦が終わって200年。人の世界は縮小し、しかしなお繁栄する我らが帝国。天使様は人を選んだ。私達こそがこの世界において最も強く大きく広く拡がることをお許しにられた」

芝居がかった仕草だ。

しかし、その容姿がそれを行えばそれはそれだけで絵になってしまふ。

「竜とは、柱であるとともに楔なのです。我ら人の成長を抑える楔。あはは、それに挑戦するのもまた人としての宿命と思いませんか？」

「思わない。らしい言葉で飾るな、自殺ならばお前1人でやれ。少なくとも、今の人では竜には及ばない」

「いやあ、どうでしょうか？ 竜も完璧ではない、竜もまた殺せば死ぬ生き物である。他ならぬ彼、竜殺しがそれを証明してくれまして、ね」

「……愚かね。歴史は愚か、経験からも学べない、いえ、学ぼうともしない愚者は害悪以外の何者でもないわ」

それに惑わされない知性。主教が淡々と言葉を返す。

「歴史は常に、その愚者が進めてきたのですよ、カノサ様」

しかし副団長もまた言葉を止めることはなく。

「馬鹿ね、そしてその愚者がもたらすものはえてしてロクなものじゃなかったじゃないの」

「あはは、やっぱ口では敵わないなあ。まあ、いいや。……そこで

見ててくださいよ。カノサ様」

「……………」

封じ込められた主教が忌々しげに自らに向けられた剣を睨みつけ、押し黙った。

じつ、と。機会を待つように、静かに息を殺して。

「さて、待たせたね、竜殺しくん。私は今日、どうしても君と会って話がしたかった。ごめんよ、腕、痛むだろう?。」

ニコニコと、桜色の瞳を笑顔に歪めて副団長が遠山の元へ。

「……ラザールになにした？」

「何も。ただ私は彼にお願いをした。私の事が好きになった彼は私の仲間になることに頷いた。全て彼の自由意思で決めたことだ。だから私は何も、してないよ」

「……ラザール、聞こえるか」

副団長の言葉を見殺し、ぼーっと立つままの相棒へ声を向けた。

「……ナルヒト？ どうしたんだい」

寝ぼけたような声、焦点の合っていない目。

明らかに様子がおかしい。

「お前、こじでいいのか。それで、いいんだな」

「こじ…… それ……？」

呼びかけも無意味。

はあ、ほんとこじいつのに弱いなこじつ。

遠山は頭を無事な方の左手で搔きながらため息をつく。

「はあ、純粹トカゲめ。わかった、なんとかしてやる。そこで大人しくポケーっとしてろ」

「あはは、意外。もっと怒るのかと思ったんだけど。俺の友達にな

にしゃがったーって」

「人には得意不得意があるからな。こーゆー絡め手に俺の相棒は弱い、甘い飲み物と温泉だけでポワポワにされちまう程度にはな。こーゆーのは逆に俺の得意分野だ」

「こーゆーのって？」

「お前みたいなクソの始末だ」

見上げて睨む。

考える、どうやって仕留める。

じっと、遠山が女を観察する。

その視線をうけて、しかし女は臆することはなかった。

むしろその長くしなやかなで、肉感的な身体を抱いて、微笑んだ。

「あは、あはははは、欲しい、欲しいな、君が。痛いだろう？ その右腕。痛いに決まってる。殺害の眷属の力で断ち切られたんだ。なのに、君は今私を殺すことしか考えていない。ご覧よ、ブレナ！彼の眼、とてもいいとは思わないかい？」

「……にはは、知らねーよ。てか、クソおーー 副団長、やるならさっさとして。なんか、私気分悪くなってきた」

仮面の女の声は少し、弱々しく。

「おや、どうしたんだい？」



「……これ、返す。なんか、見てたら気分悪くなってきた……」

どちゃり。

ゴミを放り投げるように捨てられたのは、斬り取られた右腕だ。

「おいこら、仮面女。それが人にも返す態度か？　せめて手渡しなさい。どちゃりじゃねーんだよ」

遠山が尖った声を向ける。

「……君、ほんとに面白いね。普通自分の腕を目の前に放られてそんな態度になる？」

「どんな態度なら満足なんだよ。普通はそもそも自分の腕を目の前に放られたりしねーよ」

「ふ、あはは。いい、とてもいい。平常心、日常の心。君はそのままで、人を殺せる。今も私をどう殺すか、その平然とした顔のままで考えてるんだね」

「逆に俺がお前を生かしたままでいると思うか？ ……ラザールに手を出したんだ。その時点でお前は敵だ」

「あはは、敵かどうかは私が決めるよ、竜殺し」

副団長、メッサ・スウォイアの瞳が、遠山を写す。

桜色の虹彩が妖しく揺れている。

唐突に、それは始まった。

あまりにも自然に始められて、対抗も何も出来ず。

「……………え」

力が、抜けた。左腕がぺたりと絨毯に倒れ、身体が弛緩していく。

「あは、かわいい」

それは、げに恐ろしき”魅了の魔眼”

空席であるはずの”美と女”の眷属の権能。席から降り、人界に生まれた眷属は、美しい女に身を襲し、その権能を世界に刻む。

「私の眼を、見てよ」

「あ、が」

男、である以上、その権能から逃れられない。遺伝子にまで作用するその力が人間の男の人格を操作する。

同じ女であるものには効きにくいその力はしかし、スキルや秘蹟にも当てはまらない、メッサ本人に元々備わる力。

人が誰に教えられずともまばたき出来るように、メッサもまたその眼の力の使い方を生まれた瞬間から知っていた。

「きみがほしい、竜殺し。竜を殺すその異才、竜と並び立てるその精神性、きみは私にとって必要な人だ」

「おれ、がひつ、ようっ？」

「なんのことはない。遠山鳴人もまた、人間の男。例外なく”美と女”にひれ伏すのみ。」

蕩ける。

「はい、私がかよわく、何も足りない。もともにもどるためにはもっと、もっとつよくおおきくうつくしくならないとならない。人は変化できるんだ。みずからよりもうつくしいそんざいをたべてかわることが出来る。……私に君の力を貸しておくれよ」

「おれの、ちから」

「ああ、強い君が好きなんだ。ねえ、お願い。私と一緒に来て」

その力は自我を侵す。男である以上その力からは逃れることは出来ない。

おおよその愛と呼ばれるコミュニケーションは欠損を補完するために人類が生み出したものだ。

「私には君が足りない。きみに足りないものはなに？ 私が埋めてあげる。私が君の空っぽを埋めよう」

人に必ずある欠損。1人では満たされない生物としての在り方。女の力はそれを歪に満たしていく。

女の力が遠山鳴人の自我に染み渡る。

女の声が、とろけた遠山の脳に染み込んでいく。

「あ……」

満たされていく。自分が求めていたもの、辿り着きたい場面、それが遠く。

「ああ、綺麗な光景。君はとても欲望に素直な人だ。いいよ、全部、これからは私がそれを満たしてあげる。私が君の欲望になるう、だから、ね」

女が覗き見るのは遠山の夢の光景。そこにはただ穏やかな光景のみがある。女の能力ではそこまでしか見えない。それは女にとっては幸運なことであった。

「おれ、は」

「君はもう1人じゃ無い、私がいるよ…… んっ」

ほづけた遠山の半開きの口に、メッサの桜色の唇が触れた。

ゼロ距離、互いの息がかかる距離でメッサの瞳が茶色の瞳を捉えて離さない。

美と女が強欲を貪る。メッサの白い頬が興奮で紅潮していた。

遠山は花の香りと、口内をめちやくちやに掻き回すぬるぬるして暖かい何かの感覚に酔いしれるだけ。

その場にいたもので、動くのは女だけだ。遠山にしなだれかかる



細い腰が揺れた。

主教も騎士団もみんなが固まり、吐息混じりの捕食にも似たその行為を固まって見ているのみ。

「あ、は、おい、し…… もっと、みて、私を」

「……………あ、あ」

遠山の茶色の眼から光が消えていく。なすすべもなくただ、美と女の眷属に存在を穢されていく。

「ぶは、…………… あは。それにもう一つ。君の欲しいものをあげるよ。…………… ストルだ」

「すと、る？」

「彼女への怒りもわかるよ。いいところでカノサ様に邪魔されたの  
だろう。……あれはもういらぬ。正義も機能していないみたいだ  
しね。彼女への復讐の機会も与えよう。どんな目に合わせても構わ  
ないよ」

「あいつ……」

ラザールを殺しかけた正義女。首の痛みはまだ覚えている。

桜色の瞳が、その欲望の萌芽をにこやかに見つめていた。

「ね、私は君に全てをあげる。だから、君も私にちょうだい。キミ  
が、好きだほら、口、開けて」

「……………あ、す、き……………」

「うん、すきだよ、あーん」

哀れな男はもう、それに抗うことすら出来ない。ただ間拔けに口を開いてそれを受け入れるだけ。

欲望を、美と女に満たされてここで終わり。女が闇底のような深い笑みを浮かべてそのしなやかな身体を男に預ける。

女が笑う、嗤う。これで必要なものが手に入った、竜殺しといえど男である以上自分の思い通りにならないはずがない。

甘い吐息を、吐きかけて。

「……………す、き？」

ピコン

女は知らない。女は想像もしていない。

現代。ニホン。遠山鳴人が冒険者になる前の探索の日々を、出会いを知らない。

自分の悪性を遙かに超える、真の女のドス黒さもまた、知ることはなく。

上級探索者、遠山鳴人は既に出会ってしまったのだ、はるかにヤバイそれに。

”女運：hopeless”

それは決して”竜”の助けではない。女から救ってくれるのは、やはりまた、”女”だった。

がり

「シッシシイッ!?!?!」

メッサが眼をぐるぐる回し、飛びのいた。

抑えた口元からは、赤い血がぽたり。

「……………テキ」

プツ。遠山が虚ろな瞳のまま、ぶつぶつと呟き続ける。絨毯に吐き捨てた唾には、赤い血が混じり。

「は？ わ、私の舌を、噛んだ……………？」

信じられない、と言っばかりに初めてこの日、副団長が怯えたよ  
うな声を出す。

言葉の通り、遠山鳴人は、がりつと、いった。

「テキが、俺に、触んな」

「は？」

「ーテキだよ。鳴人くん

遠山鳴人の頭はハッピーだ。残念ながら普通の人間の脳みそとは変わってしまった。

それはダンジョン酔いによる影響、それは組合に施された記憶洗浄や自白剤の過剰投与が原因ー

いや、それだけではなかった。

「テキ、そう、だよな。日下部くさかべ」

遠山鳴人本人も知らない真実がある。それは彼の絶望的な女運の悪さが引き寄せたある人物の仕業。

「は？ 何、言って……」

「――あなたに言いよる綺麗な女の人はみーんなテキ。鳴人くんにキスしたり愛を囁いたりする女はみんなテキ、全員、キミを騙そうとしてるから、キミから奪おうとしてるから」

頭に響く催眠誘導によって植えられた声。



それは冒険者ゆえの抵抗ではない。身に宿した遺物の力でもなく、遠山自身の力でもない。

「ーねんねんころり、鳴人くん。私の声があなただのずっとずっと深い所へいきますように」

「日下部…… テキ」

「ば、かな、完全に墮としたはず、なのに」

男の脳を破壊する美と女の権能は、遠山鳴人の脳には届かない。

簡単な理由だ、すでに

「ー鳴人くんは私のことを忘れない。あなたは、ずっと、そのままで。強くて冷たくてずっと何かを追いかける。あなたに女は必要ないよ」

既に遠山鳴人の脳みそは破壊されていた。元チームメンバー、日下部瀬奈の催眠誘導によって。

「俺は、モテない。俺は好かれない、だから、俺を好きという女はみんな嘘だ、テキだ」

遠山鳴人が夜な夜な受けていた、日下部からの施術。

本人からは心理カウンセラーがどうたらこうたらと説明されていたが、その実は記憶洗浄にてダメージを受けていた脳への更なる催眠誘導にほかならない。

自分はモテない、＝自分に言い寄る女は全て怪しい存在である。  
そんな呪われた童貞一直線の思考になるように、脳が、壊されてい  
た。

「……………は？」

類稀な女運の悪さは、この異世界にたどり着く前に遠山へやばい  
女を引き寄せたのだ。

「あー、だんだん頭がはつきりしてきたぞ。くそ、組合の記憶洗浄  
受けてた時みてえだ。タコ女、てめえなんか厄介な技術持ってんな」

「日下部 瀬奈」。

上級探索者、遠山鳴人所属、ファイアチームの紅一点。

元、遠山鳴人の仲間にして、遠山鳴人へエロ漫画の催眠アプリみたいな真似を本気でかました”本物”

「ヤベエ女の情念と歪んだ独占欲が、ヤベエ女の権能から遠山を救った。」

「ばか、な。私の眼が、効かない？ うそでしょ……、あなた不能なの？」

「ほかん、ほんとに呆気にとられた様子で女がつぶやく。そしてそれは当然、遠山の琴線に触れた！」

「逆でもなんでもなく。」

「はい、戦争決定。ラザール、おい、いつまで惚けてやがる」

「……ああ」

色仕掛けに弱いトカゲめ。遠山がぼかんと立ったままのレーザーの顎をぺしぺしと叩いて。

「こつこつ女はやめとけ。絶対早起とかしないからパン屋業の邪魔になんぞ」

一言、伝えた。

「パン屋…… そうだ、俺は、女がほしいわけじゃない…… 誰かに、誰かの空腹を、ああ、そうだ……！」

それだけで、レーザーの目に光が戻り始める。

「は？ ツイ、ター？ 眼、が…… お、ああああああアアアアアアアア！？」

メッサが急に眼を抑えて、膝をつく。かと思えばドロドロとその眼から黒い涙、いや、”黒い影”が漏れ始めて。

「ぬお?! 副団長?!」

「メッサ様!!」

騎士サーのオタ達が、姫の様子に浮き足立つ。

それはカノサヤスヴィの動きを牽制している10剣達も例外ではない。

そしてその隙を見逃す主教と、主席聖女でもなかった。

「スヴィ」

「……隙あり」

「「「あ」」」

剣よりも鋭く、主教最強の道具が機能を果たす。

騎士の剣を叩き落とし、3人を瞬く間に蹴飛ばして壁にめり込ませた。

「あーあ、お気に入りの来賓室が…… てめーらの今期の予算から修理代は貰うわ」

冷たく、脚を組み替えながら主教が嗤う。

両脇に、隠密と聖女を侍らし微笑む有様はまさに教会の支配者。

場の均衡が崩れた。抑えられていた主教は聖女と隠密が場を固め、騎士のほとんどは戦闘不能。

そして、女は未だ眼から影を流し、這いつくばり続ける。

「あ、ははは、”悪事のフロリア”！！ 陰気女め！ そんなにこのリザドニアンに手を出されたのが気に入らないわけか！？ あ、はは、いい、欲しい！」

ふらつき、眼から影を垂れ流しつつも副団長が立つ。

ぎらついた桜色の瞳、澱みを孕むそれが遠山とラザールを舐め回すように見つめる。



「私の眼に抗う竜殺し、”悪事”にこれほどまで愛される亜竜の末  
！ としても、とてもほしーいーいー」

「うわ、ラザール、呼ばれてるぞ。いいなモテモテだ」

「いや遠慮しておこう。俺は貞淑なのがタイプだね。お前こそ呼ば  
れてるぞ」

「悪い、オタサーの姫みたいなのはいいや」

「ぬづづづ！？ 貴様ら！ よくわからぬが罪人の分際で我が副団  
長を侮辱したな！？」

「あ、騎士サーのリーダーがキレた。やめとけよ、筋肉おっさん。  
そーゆー女はよ、サークラかました上で結局、他の飲みサーの男と

付き合うことになるぞ」

「サーとはなんぞや?! ええい! もうまどろっこしいわ! ブレナ! それに壁にめり込んだる貴様ら! 剣としての使命を果たせい!

「にはは、団長、あんたはそれでいいんだよ。おい、クソ女。もう私達のやり方でやるよ。あんたは失敗したんだし」

「あはは、ブレナ。可愛いわね、団長を取られたヤキモチ……?」

「……にはは、いつか殺すから」

「いてえ…… くび、とれた? 取れてない?」

「いや、ギリとれてないっしょー、聖女やばいわ」

「あーくそ、やられた、油断してた」

仲良くスヴィに壁の飾りにされていた騎士たちもまた、ずぼりと壁から自分で復帰し、ふらふらと筋肉ダルマの元へ集まる。

「……………あり、これ結構人数差あるな？」

「ふむ、だな。……主教殿、申し訳ない。俺の相棒が好戦的なせいでもう一悶着ありそうだ」

「あ、てめー、ラザール。人のせいにするなよ、チクリヤローが」

遠山とラザールは無意識に、先程まで対面していた主教達の側に移動していた。

主教の前に立ちほだかり、軽口を交わす。

「ああ、頭が痛い…… こんなのを取り込まないといけないのよね。でも、もう毒を皿半分まで飲み込んでる……」

完全に自分の目論見とは2光年くらい離れた展開になってしまったカノサが忌々しさを隠そうともせず、頭に抱えた。

「おいおい、ボス。毒はねーでしょ、毒は」

「そうだぞ、ボス。俺たちは貴女の異端審問官なのだろう？」

「……主教サマ、この人たち、凶々しい？」

「その通りよ、スヴィ、貴女、こんな大人になっちゃダメよ」

「主殿、本当にこの方たちを審問会へ？」

「わかってる、わかってるわ、トッスル、貴女が言いたいことはわかるわ。でも、もうこれしかないの。ほんと、ほんつと業腹だけど、苦渋しかないのだけど」

スヴィとトッスルの心配げな声に、主教がソファに座ったままうずくまる。

「ラザール、お前なんか嫌われてんじゃね、ボーナスとか低いぜきつと」

「ナルヒトだろ。いつもすぐに誰かと揉めるしな。経費落ちればいいが」

呑気な2人がこそこそと。

「両方出るわけねえでしょうが、バカ共」

主教がぴしゃり。言葉を放った。

「あはは、欲しい。みんな、私の元へあの2人を連れてきて」

「メッサ、貴殿が言うのなら我輩はそれを叶えようぞ」

「副団長の御心のままに」

「にはは、クソ女に従うのはやだけど、団長と一緒に戦えるんなら

なんでもいっかー」

桜色の瞳。美と女に支配されていた天使の剣達がその鋒を遠山たち、異端審問会へ向ける。

「はあ、最低限の言い訳はできたか…… 筋書きはこうよ。審問会メンバーによる粛清についていちゃもんつけてきた騎士団の主要メンバー。逆上して襲いかかってきたため、やむなくこれを実力で排除、ってとこね」

「あはは、主教派は竜の圧に屈し、詭弁にて罪人を庇った。騎士団はこれを法の執行のもとに裁く。主教派を実力で処断、罪人2人の身柄は騎士団の預かりに、ってどこかな」

女2人が嗤う。歪んだ糸目が桜色の瞳を笑いつけ、桜色の瞳は爛

々と輝き、影を漏らし続ける。

「審問会に次ぐ。教会の敵を滅ぼしなさい」

「騎士団、抜剣。天使の法を剣にて示せ」

広い来賓室で始まるのは殺し合い。

結局、人が優劣を、善悪を、正義を決めるのはこれしかなく。

互いに人の領域にいるがゆえ、争いの連鎖は免れない。

争いとは、実力の同じもの同士でしか発生しないのだから。



ああ、ならば――

「にはは、盛り上がってるよこ悪いけど、結局そっちの要って竜殺しだよな？ なにか、忘れてない？」

騎士団にて、2番目に、正義の次に優れた剣が肉食の獣の笑顔を浮かべた。

その笑顔は、絨毯のうえにぽつんと置かれたそれ。

遠山鳴人の斬り飛ばされた腕に向けられていて。

「あ、忘れてー」

「”エニユーの7つ道具”」

「あ」

どぼり、どばばばばば。ぼん、どんぞん。

遠山鳴人の傷口が解放された。今度は先ほどと違い、痛みだけでなく、出血も解放されて

「っ、そ………！」

「ナルヒト?!」

尋常じゃない痛みと、笑えない出血量。殺害の眷属の力がついに遠山の生命へ王手をかけた。

「スヴィー!!」

「はい!!」

誰よりも早く動いたのは聖女、その与えられた秘蹟、癒しの力を竜殺しへと施すべく――

「我輩が今度は高らかに叫ぼう!

隙ありだ! 聖女!!」

それを見逃す騎士団長ではない。愚かなこの男がなぜ、天使教会騎士の頂点につけたのか。

答えは簡単。

「秘蹟 爆進！！」  
”チャリオッツ戦車”！！」

正義すら押し潰す戦車、膨れ上がる筋肉、それに裏付けされたスピード。シンプルに竜とすら噛み合えるその膂力が、聖女の小さな身体を弾き飛ばす。

「は？」

主教が眼を剥く。

「116」

一手で崩された。聖女の小さな体がゴム球のように跳ね飛んだ。

「ぬ?!」

しかし、聖女もただではやられぬ。殴られたと同時にその恐るべき癒しを戦車に施す。

過剰な癒しが、戦車の身体を侵しその動きを止めた。

殺し合い、泥沼の殺し合いだ。

殺害の目が大きく見開かれ、熱を持つ。竜殺しは虫の息、次は聖

女。この場にて最も厄介だと本能で感じた相手から順に無力化していく。

騎士団、教会の剣。戦うための存在。

急増の、汚れ仕事専門の審問会は瞬く間に追い詰められ。

その中で、桜色の瞳だけがそれを愉快げに見つめていた。

「くそ、これ、やばー」

めまいがする、力が抜ける。キリヤイバを出す余裕もない。

ただ、なくなった右腕の先から流れる血がどばり、どばり。

絨毯に垂れ続けて

「ふふふ」

「ふふふ」。「ふふふ」。「ふふふ」。「ふふふ」。

「ふふふ」。

ソレは、突然現れた。誰も、何も気付かない。

人域にて、最高峰の実力者が揃うこの場で、誰一人それが紛れ込んでいたことに気づかなかつた。

いつのまにか、絨毯に仰向けに寝そべり、上から垂れているそれ、遠山の血を口を開いて受け止めていた。

「……………え」

眼と目が合う。

見下ろす遠山、仰向けのまま真顔で見上げるソレの真っ黒な光を写さぬ瞳。



「は  
」

誰もが、動きを止めた。

今まさに、聖女へとどめを刺そうとしていた団長と、第2騎士が大汗を流し、ピクリとも動かない。

強者から順に石になったかのように自ら動きを止めたのだ。

ある種類の虫が、外敵に遭遇した途端に死んだふりをするとときに似ていた。

それは人間に備わる防衛機構。

せめて、せめて、その目に映らぬように、せめて、その興味を引かないように。

上位生物への人間としての当然の反応――

「ん、んん、健康的だねい、すぶぶ。A B型、R H + ううーん、アルブミン、タンパクも基準値通り、相変わらず素晴らしい健康管理だよお、惚れ惚れしちゆうなあ、すぶぶぶ」

じくじく、じくじく。

遠山から垂れてる血は、絨毯を汚さない。

遠山の足元、仰向けに寝そべる黒い宇宙のような女がそれを垂れる血を全部飲み干すからだ。

「…………まじかよ」

真っ白な肌、赤い舌がそう言う生き物のように、血を嚙下しつづけた。

「すぶぶ、やあ、トオヤマくん。久しぶり、助けに来たよう。ごくり、ああ、美味しい。吸血鬼がいたら、キミを捕らえて離さないだろっねえい」

とくり、とくり。

女の細い喉が、動き続ける。遠山の血をそれが取り込み続ける。

くろづくめの女だ。

身に纏うドレスローブは決して光を映さない。

宇宙の奥の更なる奥。星の光すら届かない闇色の眼、夜の帷よりも、夜の海底よりも暗い髪の毛が絨毯に広がって。

「……………だ、れ？」

それしか、言えない。

にこり。

ほんとうに、ほんとうに嬉しそうに女がその暗い眼を細めた。

「ボクの名前は人知竜」

それは、上位の生物。この星の概念を司る柱。

人に近い柱、人の概念たる”知”を司る貪欲な竜。

「キミを幸せにするキミだけのさいきょーに賢いドラゴンさ、ただし火と河童と鬼とバカだけは勘弁な」

ぐつと、寝転んだままサムズアップする女。

とくり、また喉が上下して。

「今度こそ一緒にハッピーエンドに向かおうじゃあないかい」

にこりと微笑んだ。口の周りを赤く染めながら。



42話 キミを幸せにするキミだけのさいきょーに賢いドラゴン  
さ、ただし火と河童と鬼とバカだけは勘弁な（後書き）

TIPS € たのしい人物紹介

” 日下部 日菜 ”

遠山鳴人と新人時代からチームを組んでいた女性探索者。

ポワポワした雰囲気や小動物じみたかわいらしい外見とは裏腹に探索においては所持許可者の少ない銃器を用いて数多の怪物種に風穴を開ける。

また銃所持許可者の中でもさらに珍しいライフル銃使用免許も所持しているので遠距離からの狙撃もお手のもの。

チームの紅一点として遠山や鳩村の仲をとりもったり、そのお日様のような雰囲気でチームを和ませてくれるムードメーカー。

同じチームメイトの鳩村 翔とは恋人関係であり近々結婚する予定。

………というのは全て表の顔。遠山鳴人に見せていた設定された人物像に過ぎない。

本名、日下部 日菜、改め”名瀬 瀬奈”

二ホン国公安組織構成員で、幼少期の異常殺人事件への関与の疑いにより公安の監視対象となっていた遠山鳴人の監視任務のためチームに組み込まれた国側の人員。また鳩村との恋人関係にあるというのも設定であり、本当は同じ施設出身の幼馴染に過ぎない。

本来の性格は冷静沈着、無感情かつ厭世的な態度が度々組織活動には向いていないと評価されてきていた。

高校生の時より、遠山鳴人の監視任務に従事、その際の名前は、藤堂 未来。こちらは名瀬本来の性格寄りの人物像だった。

高校時代、遠山鳴人と奇妙な関係にあつた人物を真似し、卒業後、探索者となって再び遠山と出会った時の人物像、日下部日菜は、彼女の憧れた少女を彼女なりに解釈し、模倣して作られた人物である。

彼女は遠山鳴人に魅せられている。



その歪な在り方を愛し、神格化しているのだ。

故に彼女は決して遠山鳴人が変わること許さないだろう。

女運：hopeless、遠山の受難はここから本格化していくのだ。

#### 43話 人を知る竜、蒐め集う竜

「ごくり。ああ、うづうん。とてもとても古い人の香りと味……とてもとても古くて、醸されてる。……ああ、なんでも食べるホモ・サピエンス、これほどの悪食を得るまでにどんな歴史を紡いだんだろっ……匂い立つなあ」

女の病的なまでに白い肌に朱が差していく。

陶磁器のような喉が、ごくり。

「>」

遠山はその光景から目を離せず。一言、漏らした。

「へ？」

こてんと、仰向けになったまま女が首を傾げて。

「変態だああああああアアアアア！？　ラザーアアアアア  
ル！！　変態だあ！　絨毯から変態はえたぞ！？」

絨毯に寝そべって、変な笑い方のやばい女に血を飲まれ続けている。

変態以外の何者でもない。真夜中に不審者に遭遇した一般人のように遠山は、腕がぶった斬られていることも忘れて喚き出す。

「落ち着け、ナルヒト、まだそう決まったわけでは……」

ラザールが音もなく、遠山から5歩くらい離れた後両手を突き出して頷く。きつちり安全な距離を確保しているところからしい動きだった。

「すぶぶ、美味しい…… トオヤマくとボクが1つになっていく感覚がする…… なんて素晴らしいインスピレーション!! ああ、今なら最高の人形を作れそうだ」

そんな男2人のやりとりもなんのその。

滴る遠山の血に女がまたうっとり、嬌声をあげて。

「変態だった、お知らせだ（変態の） たしかにそれもあり得る）  
変態の可能性が（）」

レーザーが諦めたように頷く。奇妙な電波から受け取った言葉を紡ぎつつ、その目は優しかった。

「なにが?! どういう文脈?!」

早くも他人事モードに入ってしまったレーザーに遠山が叫ぶ。

「ナルヒト、大丈夫、腕を斬られてそこから滴る血を、寝そべる女が飲んでるだけだ! ……フォーレンの釜の底かな?」

「地獄って言いたいのか?」

それきり遠山とレーザーの間に微妙な沈黙が流れる。

互いにこれの処遇を押し付け合う視線のやりとり、しかし残念な

がらこれはどう考えても遠山関係の案件で。

「ち、ちょっと酷くないかい？ ボクはこうして、ごくん。中央仕立ての絨毯が汚れないようにだねえい、ごくん」

迷惑がられてることに気付いたらしい女が何か言い訳をならべはじめる。しかし垂れた血を飲むのはやめない、ごくり、とくり、うっとりど。

「血イ飲むのやめろや！      なんだ、お前、吸血鬼？！」

「む、失礼な。あんな闇夜と世界の裏、ヒトの内側だけでしか生きてくことのできない化け物と一緒にされると困るねい、ごくん」

「だから、血飲むな！      ……あ、やばい、流しすぎて、大声出したから……」

暖簾に腕押し、何を言っても独特な間と雰囲気で流される。

だが何故だろう、初対面のはずなのにやけに遠山はその女に遠慮なく大声をぶつけてしまっていた。

腕を斬られ、血を流してる状態で元気に喚き続けた為、立ちくらみ、そのまま脚がもつれて。

「おっと、危ない」

ぱしり。

誰にも認識出来なかった。気付いた時にはその女が倒れる遠山の背後に周り、優しく背後から抱きしめて。

「うっ、うっ」

お前今どうやって動いた？ そんなことを聞く元気すら今の遠山にはない。

血と共に、焼けるような痛みが腕から全身に登るようだ。傷口は熱いのに、体はどんどん冷えてきて

「……わあ？！ トオヤマくん？！ しまった！？ つい君の人体情報に気を取られすぎちゃった！！ よいしょ、これで大丈夫かい？」

女があわあわと慌て始める。いつのまにか手に持っているのは遠山の斬られていた遠山の右腕、それをふと、傷口にあてがって。

「は？ よいしょ、っ……」

「うそっ」



わけが分からない。気付いた時にはあれだけ全身を駆け巡っていた痛みが消えていた。

どくり、どくり、鼓動と共に指先の感覚が戻っていく。

血が止まり、あるべきはずのものがあるべき場所にきちんと生えている。

斬られた右腕が、元通り。

女が、人知竜が遠山の右腕を繋いでいた。

「大丈夫？ 痛くないかい？ 筋肉と神経と骨、全部同時に繋いだからすぐに動くと思うのだけれど。すぶぶ、なに、勝手知ったる君の身体だ。これくらい余裕だよ」

べとりと口の周りについた血を黒いローブの裾で拭う女。

病的なまでに白い肌、光を写さぬ肩までの髪の毛。夜の湖の底よりも昏く黒い瞳。

拭われた血が、ルージュのように。唇を艶かしく映す。

「……………あ、はい」

後ろから抱きしめられたまま、浴びせられる言葉のシャワー。遠山はただ、頷くだけ。

え、いや、なんだこれ？ 血も、痛みもほんとになんにもねえ。傷ってこんな簡単に治るもん？

え？

右腕に異常はない。だが未だ信じられないその現象に遠山はしばらく自分の右腕を見つめ続ける。

「……なに、勝手知ったる君の身体だ、私は超かしいドラゴンだからね、人体に、こと君の身体に関してはこれくらい余裕だよ」

「え、なんで2回も同じ内容言った？」

女の香り、至近距離。

石けんの匂いと、微かに薫る血の匂い。

「……………何、勝手知ったるー」

「3回目?! なに、こいつ、こえーんだけど!? ラザール、これなんだ?!」

同じ言葉を繰り返す女が気味悪い。遠山はラザールに助けを求めてー

「いやもう知らん、やめてくれ。もう俺もしばらくそついつのはいい、うむ、美味しい、もう一杯」

ぐびり、現実を見ることをやめたいラザールは腰に手を当てて銀の水差しを直で煽る。

「ハチミツ水飲んでんじゃねえよ! 薄情トカゲ!」

見捨てられていた。レーザーはもう全てを忘れて八チミツ水をごくごくいつている。

「すぶぶ、リザドニアンか。へえ、噂は本当なんだねえ。竜殺しはリザドニアンを仲間としているというのは。……ふうん、懐かしい香りがする……なるほど、移行が完全でなくても五感に残るなにかもあるわけかい」

「うわ、独り言まで……」

「んんー？ トオヤマくん、少しばかり塩対応じゃないかい？ ……あれ、なんだろう、でもボク、あまりこんな感じも嫌いじゃない、その君の目、怯えてるのかい？ ……すぶぶ、あは、悪くないなあ……」

病的に白い肌、頬に人差し指を当てながらレーザーを見てつぶやく女。

美しいよりも恐ろしい、恐ろしいよりもおぞましい。

遠山の女への印象はそれだ。おののきつつ、遠山が言葉を紡ぐ。

「ひえ、本物のお方…… あ、腕あざした。なんかマジで平気っすわ」

だが。

たとえおぞましがろうが、恐ろしかろうが事実是不変だ。女が遠山の腕を治してくれた事実だけは変わらないのだ。

殺意には殺意を、敵意には敵意を。そして恩には礼儀を。

遠山が素直にその女へ感謝を伝えて。

女が、ぱつと驚いたように目を大きく見開き、遠山を見つめた。

「！ もう、君はそういうのがずるいんだよなあ、恐れと平常を同時にあり合わせて物おじしないってさあ、竜の琴線を1番そういう態度がくすぐるってそれ1番言われてるんだよねえ、えい」

石けんの香りがさらに強く。

ぎゅむぎゅむと遠山の顔に女の頭が押しつけられる。

めちやくちやいい匂いがするのにな、しっかり血の匂いもするのが怖かった。

「むぶ?!」ら、レーザー、頭押し付けてきたんだけど、これ、なに? 腕から流れる血をごくごく仰向けで寝そべる女に飲まれて、そいつに腕くつつけて貰ったあとに羽交い締め<sup>マタメ</sup>にされめ頭を押し付けられるって、なに? ゆめ?」

「ああ、ひどい悪夢であることに間違いはないぞ、ナルヒト、喉越し爽やか」

「てめー、完全に他人事モードだな、だから八チミツ水飲んでんじやねえよ!」

「……むう、君、やけにリザドニアンと仲がいいんだねえ、すぶぶ、少し妬ける、なあ」



遠山とラザールのやりとりを見ていた女、人知竜が目を細める。

闇色の瞳が、ハチミツトカゲをスツと見つめて。

「ヒッ」

よつやくラザールが小さな悲鳴とともにハチミツ水を飲むのをやめた。

「すぶぶ、そんなに怯えるなよう、ああ、でもリザドニアンの人体も気になるなあ、今になって思えばあの”歯”が遺した生命だ。すぶぶ、果たして約定の対象になるものか……」

ずるり。

女の黒い瞳がさらに暗く、昏く。

深い業をすら覆い隠す漆黒の闇がレーザーを、興味深げに見つめて。

「おい、黒髪女」

「んん？」

遠山のスイッチが切り替わる。

探索者として茹だる脳は他人の悪意にとても敏感だった。

「俺の仲間に手を出すなよ、腕治してくれたのは感謝するけど、そこだけには触れるな」

遠山がまっすぐ女を睨む。

遠山の茶色の瞳は、黒い瞳には映らない。しかし、すっかり人知竜は遠山鳴人の顔を見ていた。

「すぶ、……ああ、ゾクゾクするなあ…… えいえい」

ぶるり、身体を震わせ、華奢なのにやけに肉感的なそれを人知竜が自分で抱く。

それからまた遠山の顔に頭をぐいぐい、押し付けて。

「うぶうぶ、こいつまた頭を!？ なんなのほんと!？」

ほっぺたにぐいぐいくる髪の毛、少し口の中に髪の毛が入ったりするも遠山は抵抗をやめない。

だがやはり竜。押しつけようとしてもぴくりともしない、力つっ  
よ。

「……勝手知ったる君の身体、治したのはボクなんだけどなあ」

また竜が同じ言葉を繰り返す。

なんだ、こいつ、何が言いたい？ 何がしたい？

遠山は本気でその竜の行動が理解できずにいて

「……あ、まさか。ナルヒト、そいつ、いや、そのお方お前に褒め  
て貰いたいんじゃない……」

ラザールがおそるおそる、つぶやいた。

部屋に、沈黙がつゆる。誰も動かない。遠山以外の人間は竜の圧に押されて呼吸するのに精一杯。

遠山はシンプルに羽交い締めになんて動けない、竜はなんで動かない。

「は？」

「……………つぶぶ」

竜の顔は伏せられている。しかし、黒い髪からちらりと覗く白い耳、それが少し朱く染まって。

「……………まじっ？」

「すぶ……………　　リザドニアンはかしこいねえい」

ぐりぐりと遠山の首や顔に頭をおしつけ、顔を伏せたまま竜がぼそりとつぶやく。

マジか、こいつ。

遠山がラザールや審問会のメンバーに助けを求める視線を送る、誰も目を合わせてはくれない。

少し考えて、それから遠山はおそろおそろ、腕を回してその竜の頭を撫でた。

「あ、じゃあ、そのありがとございました…… わ、ちらちら…  
…」

透き通るような髪だ、まるで流れる清水に手を曝しているような  
感覚。

指通りが良いなんてもんじゃないほどのサラサラの髪を遠山が撫  
でる。

「……………ア……………ふう……………  
なよう、ボクと君の仲だろうか？ 急いで来た甲斐があったなあ」

びくり、びくり、何故か竜が身体を大きく何度か震わした。

かと思えば顔を上げて、ニコリと微笑む。頬には朱が僅かにまじ

り、陶磁器のような肌には薄い汗が滲んでいて。

その顔が遠山にふと、近づいて――

「ありえない！？ 全知竜が、なぜ、教会に踏み入ることが？！」

1943

響いた声は、副団長、メッサの声。

竜の圧が弱くなった瞬間、彼女が大きく悲鳴にも似た声をあげた。

「……ふうん、君は…… へえ、”転生体”か。珍しいねえい、



空席の眷属のカケラ。桜色の瞳にその美貌…… ああ、”美と女のディーテ” 辺りかな？ まあ、教会にとってはありがたい人材かあ

心底、気だるそうに竜が、人知竜がその声を見る。

「き、きさま、どうやって”魔術師殺し”を抜けた？！ 結界網に  
なんの反応も！！」

周りの10剣の1人もまた同じく竜の圧から逃れたらしい。剣を  
ふりかざし、メツサを庇える位置に立ちつつ言葉を荒げた。

「すぶぶ、ああ、あれかい？ 君たちが法術とか嘯いて扱う”魔術式”。まあ、それはあれだよ君い、魔術の祖だからねえい。2歳児が作った積み木を本人が気づかぬうちに作り替えることくらい、大人なら出来て当然だろう？」

ふうーとため息つきつつ、立ち上がる人知竜。デタラメな行動、竜としての規格外の力に騎士はみんな言葉を失う。

「まあ、でも発想は悪くないかなあ。眷属憑きを潰してその権能だけを抽出してたんだろう？ 魂喰らいが出来る類の副葬品でも利用したのかねえい？ ああ、そういえば君たちも眷属憑きから副葬品モドキを作ろうとしてたね、その応用かなあ？」

「……あ、はは、ありえない……」

メッサが力なくつぶやく。半分笑いかけの顔にもうあの時の余裕や妖艶さはなく。

自分たちが歴史と犠牲を掛けて編み出した結果。

敵対勢力たる”学院”への対抗手段として絶対の自信があった防衛機構はしかし、なんの役にも立たなかったことになる。

それを受け入れるには時間が足らなすぎて。

「あ、あれが全知竜…… に、には、は、ば、化け物じゃん」

第2騎士ブレナ。10剣最強格の騎士すらたじろぐしかない。

半ば腕が立つ分、理解してしまう。生物としての圧倒的な性能の差を。

「ぐすん。ひどい、聞いたかい？ トオヤマくん！ あの仮面の子、ボクのことを化け物だって！ 何か言っちゃってくれよう！！」

「ぐえ！？ 首、くびり！ 力つっよ！ 俺腕斬られた直後でやべえんだからやめて！」

ブレナの言葉を受けて、人知竜が遠山にじゃれつく。

誰一人それを微笑ましいものとは見ることはできない。

恐ろしい化け物が獲物に対してふざけて遊んでいる、どう好意的に解釈してもそれが限界だった。

「おっと、そうだったそうだったねえい…… うん？ つい君の血を見て我を失っていたけど、そういえばなんで、君、なんで怪我してたんだい？」

「あ、そりゃ、そこの仮面女に斬られてー」

あまりにも、あまりにもその女がフランクであった為、遠山は忘れていた。

あまりにも、その女が仲間と馴染んでいたのでラザールも忘れていた。

その女は自らを、”竜”と名乗っていたことに。

上位生物――

「はあ？」

竜が、首を傾げ、目を片目だけ見開いて、

「「ッ……?!」「」

— その殺意を向けられたわけでもない遠山とラザールはしかし、—  
瞬、本気で呼吸の仕方を忘れた。

横隔膜が痙攣し、鼻がびくびくと震える。空気を吸おうと下手く  
そに口を開くけども、ああ、どうやって息を吸うかすら、思い出せ  
ない――

「はっ――」

「ひ」

「……………あは、は、これは」

そしてそれを向けられた騎士たちは誰一人例外なく、顔を真っ青  
か真っ白に変えていく。

竜の目、夜闇をかきまぜ、その最も暗い所だけを掬い取って流し  
込んだような目がただ、騎士たちを眺めていた。

「おちついて、トオヤマくん」

「は、っ、はっ」

「そう、ゆっくり、ボクを見て。ひっ、ひっ、ふー、ひっ、ひっ、ひっ。ほら、真似して」

「っら、は、そ、それ、ラマーズ法!!」

「すぶぶ、よしよし、ツッコミが出るんならよし。さて、さて」

そして、何も忘れていない主教と聖女と隠密の3人は、互いに手を握って必死に、必死に耐えていた。



その女、いや、”竜”の放つ呼吸することすら苦しくなるような  
べちよりとした威圧に。

「……あ、貴女は」

「だめ、主教さま、話しかけたらだめ」

思わず。声を出したカノサを筋肉に吹き飛ばされてもケロリと  
していたスヴィが止める。カノサを庇うように一歩スヴィが前へ。

「すぶぶ。へえ、君が当代の主教かあ。初代と同じ女の子なんだねえ。君のことは知ってるよ、カノサ・テイエル・フィルド。君のその知性、どんな脳構造をして、どんなシナプス回路を構成してるのか、ぜひ、見たいなあ」

「ひ、ひえ、お、お戯れを……　遠き、伝説の竜。まさか貴女さまが、実在されているとは……」

「すぶぶ、学院でもボクを知る人間はもう数少ないよ、そんな怯えることはないさあ。……へえ、君、今気付いた。大主教令の持ち主だけでなくて、”預言者”でもあるんだねえい……　君のことを覚えてないということは、ふーむ、やはり記憶の移行はトオヤマ君のことだけみたいだねえい……」

怯える主教をまじまじ見つめる人知竜。

お気に入りのおもちゃを見つけた猫のようにも見えて。

「……主教サマに少しでも触れてみる、差し違えても、貴女を殺す」

笑う人知竜を聖女が睨む。

主人を守ろうと、その小さな身体に殺意を滲ませて。

同じく、震えつつトツスルもまた毛を逆立てる、尻尾を立てつつも同じく主教の前へ。

「すぶぶ。聖女かあ。安心しなよう、君とやり合う気はないよ。君に本気を出されて、免疫システムになられても面倒だしねえい……」

ちえつ、ざーんねん。で、トオヤマくん、聖女と主教は君の敵かい？」

「……違う、俺の、味方だ」

竜の言葉に遠山が短く、正確に。

「すぶぶ、立ち位置からなんとなくそんな気はしてた。君はいつも味方の前に無意識に立つからねえい。損な役回りをする君も素敵だよ」

その言葉を受けて、人知竜が主教たちから視線を外した。どこか嬉しそうに返事をして。

「お前、マジで誰なんだ？」

「むー、人知竜だつて言ってるだろー？ あ、そっか、名前かい？  
名前を聞きたいのかい？」

「……………」

もつめんどくせえ、という顔をしながらラザールを見る遠山。

「……………っ！！」

頼むからこつちを見ないでくれ、と首を横に振りまくるラザール。

「……………！！！！」

そのまま素直に頷け、と首を縦に振るジェスチャーを繰り返す主

教たち。

審問会メンバーの心は1つ。

お前がなんとかしろ、という暖かいものだった。

「……あ、はい。聞きたいです」

心暖かい仲間たちからの指示を受けて、遠山が渋々頷く。

「……すぶぶ、ああ、いいとも」

たん、たん。

呆気に取られる騎士たちを尻目に、黒いローブにみを包んだ黒髪黒目の女が、一步、二歩。

「ボクは人知竜、人を知る竜、この世の未知を解き明かし、未知を嗤い、悲劇を蹴破り、進み続ける者たちの庇護者にして永遠の探究者」

一步、二歩。理屈はわからぬ、まるで透明な階段を登るかのよう  
に人知竜は跳ねるように、宙へ浮かぶ。

「名前は、アイ。”アイ・ケルブレム・ドクトウスタイル”」

満面の笑顔を、遠山鳴人ただひとりに向けて、舞うように宙を歩  
く。

「よろしくね、上級タンサクシャ、トオヤマナルヒトくん」

これ以上幸せなことはない、これ以上嬉しいことはない。

永遠探究者はついに、この場にたどり着いた。己を人知の竜へと変えたヒトへ溢れんばかりの微笑みを向けて。

「は？ お前、なんで探索者のことを……」

タンサクシャ。その竜は確かに遠山鳴人を探索者と呼んだのだ。



「ふふん、ミステリアスな女が好きなんだろう？ それはまだ秘密だよ。……さて、トオヤマくん、君の腕を斬ったのって、どいつなんだい？」

ふわり、遠山の元へ舞い降りる女。

竜、歪んだ知性と恐るべし探究者の瞳が獲物を探る。

「う、あ  
」

ブレナ、第2騎士が思わず、あとずさる。

人知竜が獲物を見つけた。

「へえ、アイツかあ…… なるほどなるほど。状況が読めてきたぞお。教会の内輪揉めにでも巻き込まれたのかな？ それとも君が内輪揉めの原因？ まあ、どちらでもいいかあ」

この世を歪ませる秘蹟ならざる奇蹟。

魔術の祖、人が世界を騙し、誤魔化す業を人知竜はこの世にもたらした。

「お、おい、アンタ」

遠山が狼狽え、

「君の敵なら、それはボクの敵さ」

人知竜が笑い、目を細める。

口を半月のように歪めて

「おまえ、右利き、だねえい」

それで、もう”殺害”に選ばれた騎士の命運は決まった。

「……にゃ、は。ぜ、全知竜……ほんものの、魔術の祖、教会の宿敵……はは、……た、ただでやられてたまー」

ぼとん。

腕。第2騎士がいた場所に、間抜けな音をたてて人の腕が転がっていた。

「人知竜だよ、間違えないで貰いたいものだねえい」

「は？ は？ ぶ、ブレナ？」

筋肉ダルマが目を白黒させる。いや、筋肉ダルマだけじゃない。

誰も何が起きたか理解すら、認識すら届かない。

「すぶぶ、ああ、安心しなよ。ボクはアリスちゃんと違って穩健派の竜だからねえい。少しばかりムカついても黒焦げにしたりはしないよう……」

わかるのは、もう第2の騎士はこの部屋にはいない。

残された腕、銀色の騎士鎧に包まれた右腕、その腕章は不思議なことに、ブレナがつけていたものと全く同じで。

「ぶ、ブレナに何をしたのだ!? こ、答えよ! 全知っー!」

「だーから、人知竜だつて言ってるだろー? それはもう昔の名前。仮面の子はねー、右腕以外を”ヘレルの塔”へ転移させたよ  
優しいよねー、ボク、生き残る可能性がまだあるんだからさー!」

こともなげに人知竜が嗤う。

右腕だけをここへ残し、人間を異なる場所へ強制的に転移させる。

聞くだけで頭が痛くなるような所業。

「て、転移……？ バカな…… 法術師100人以上で行う大法術か、副葬品でもない限り、転移など……」

転移という事象自体は不可能ではない。教会が発行している帰還印など、ごく限られたものではあるがそれは人類の技術の範囲内だ。

しかし、それにかかるコストがまるで違う。

「すぶぶ、まあ、昨日思いついてさっき完成させた術式だから安定

性は保障できないんだけどねえい。あ、すごい、ようやく血が出始めた。10剣、それも殺害の眷属憑きのパーツかあ。面白そうだからもらうとこーっと」

ひょいっと、遺された右腕を拾いどこから出したか、腰につけるポシエットにそれを人知竜が仕舞い込む。

人体を扱う彼女の姿は、まるでおぞましい悪魔崇拝の宗教画のよ  
うな光景でもあった。

「ぬ、ぬうー？ ブレナを塔へ、だと？！ 馬鹿な！？」

「ん？ んん？ トオヤマくんの顔、殴られた跡がある。お前の拳の大きさと一致するね。……ああ、そういうこと」

喚く筋肉ダルマの言葉を無視し、しかし竜があることに気づいた。

遠山鳴人の顔の傷、打撲跡、そして筋肉ダルマの拳の大きさや形、それらが完全に一致したことを。

次の獲物が決まる。

「ん、舐めるなあ！？ 魔術の祖！ 天使の作りたもつた世界をねじ曲げる外法の親玉！ ここで我が戦車にて轢き潰してくれるわ！」

「よく動く口だねえい…… よっと」

膨れる筋肉、”戦車”の秘蹟。天使に祝福されたその男は時に、



個人にして帝国の軍事力の一単位として扱われるほどの強さであり

――

「ふあ、ふお?!」

しかし、竜には関係ない。

竜が、筋肉ダルマを見る、それだけで竜の魔術式が世界を侵す。

魔術式、術者の興した仮説を世界に張り付け、ルールを捻じ曲げる外法。

竜の外法が、戦車を侵す。

「は、ががが、な、にををん」

顔がおかしい。本来目がある場所には耳が生え、口のある場所に鼻が生え、側頭部に目が生えた。

めちやくちやに筋肉ダルマの顔のパーツの位置だけが書き換えられて。

「福笑い。古代ニホンの子供向けのおもちやさ。うーん、ボクには福笑いの才能はないなあ、じゃあ、ばいびー」

「きゅーー」

ばちん。

女がまた指を鳴らす。それだけで嘘のように、何かの間違いのように福笑いと化した筋肉ダルマが消えた。

「まあ、フエアじゃあないからねえい。さっきの仮面さんと同じ場所に飛ばしてあげたよう、まあ10剣なら頑張れば生きて帰るんじゃないかねえ」

「あ、はは、……化け物だね、全知…… いや、人知竜」

残されたのは、副団長。

あっという間に全ての盤面はひっくり返された。

準備し、対策していた。だがこれは話が違つ、予想も出来ない。

半分御伽噺の存在と言われていた、歴史の闇がいま、確かにここに。

魔術式の祖、学院の後見人、教会の大敵。

人知の竜を前にして、天使の剣たちはなすすべなく壊滅寸前。

「すぶぶ、転生体にそう言われるのは心外だねえい。人にも眷属でもない、何にも属さないイレギュラー。さて、君はどうしてくれようか」

ぺろり。病的な白さの肌とは対照的な、真っ赤な血を思わせる鮮烈な赤の舌を人知竜がのぞかせる。

竜、最強の捕食生物が次の獲物を見定めていた。

「……見逃してもらえない方法はないかな。貴女が現れた時点で、私たちは負けたようなものだ。望むものを教えてくれれば」

副団長は、この瞬間全てのプランを捨てた。それでも生存を諦めず、目の前の存在と交渉しようとして――

「こんなのはどうかな？ 余裕ぶって命乞いの時すらプライドを捨

てられない間抜け女のオブジェ。それなら欲しいけどなあ」

どつやら竜はそれには興味がないらしい。

「……あはは、貴女に嫌われるようなこと、しましたか？」

もう笑うしかないメツサは、それでも取り乱すことなく会話を続ける。

メツサは知らなかった。

自分が誰のどんな男に手を出したのか。

どんな男に己の匂いをつけてしまったのか――

「隠せると思ったのかい？ 発情したメスの濃い匂いをそんなにぶんぶんと漂わせてさあ…… ねえ、聞くけど、なんでえ、ナルヒトくんのお口から、お前のメス臭がするのかねえい……」

幽玄から響く死者の声が子守唄に聞こえるほどに、昏く冷たく、そして恐ろしい声だった。

ぼたり。メッサが知らず流していたのは恐怖の涙。

だが彼女はそれでも、不敵に、その美と女の眷属、転生体に相応しい微笑みを必死に浮かべた。

「……………あはは、うちそじゆん」

「くるこぞ」

「アッー」

ギーーイーイーアー

人がこのような声を出せるのか、そんな悲鳴と苦悶の叫び。

可憐な姿はどこにもない、涙と鼻水とさまざま液体を撒き散らし、メッサガのたうち回る。



「ばいばい」

パチン、鳴らされた指。

い。  
苦悶の叫びも、怨嗟の言葉も、のたうつ女も、もつどこにもいな

ついでにまた鳴らされる指の音。教会令により倒れていた騎士たちも同じように消えていく。

「き、消えた…… また」

「すぶぶ。まあ、ボクは優しいからね。殺してはないよ、殺してはね。全身の臓器の位置を入れ替えて、痛覚神経に色々したあとに、塔に送っただけさ」

「えげつな」

「すぶぶ、でも、嫌いじゃあないだろうっ?」

まあ確かに。思わず人知竜の言葉に頷きかけたその時

「「「う、ウオオオオオオオオオ!」」」

「「「せへ!」」」

残された3人の剣、ストルやブレナ、団長には及ばずとも皆、1  
0 剣に数えられる実力者。

人知竜へ、一斉に飛びかかり

「心配するなよ、ナルヒトくん」

「「「「「」」」」」」

からさん。

びぬり、ひくう。

ああ、やはり届かない。なんの拳動見せることなく、騎士たちもまたその人体を侵される。

もう彼らには足も腕もなにもない。

剣だ。

どくどくと赤黒く脈打ち、柄には人間の目玉が飾られギョロギョロ蠢く。

その剣たちの材料はもちろんー

「君たち、10剣とか呼ばれてるんだろ？　すぶぶ、名は体を表す、古いニホンの言葉さ、まさに、だねえい」

冷酷に竜は笑う。見ればわかる、少し時を同じくしただけでわかる。

悪だ。まごつことなき、悪の存在。自らの業を振り撒くことを愉しみ、他者を害する悪そのもの。

邪悪――

「グロすぎんか？」

遠山はぼそり。怯えることも怒ることもせず、愉快なオブジェと化した剣たちを眺めるだけ。

「ボクの趣味なんだよう。まあ、君が嫌がるなら、ほい、ほい、ほいと」

ほい、ほい、ほい。

小気味良く鳴らされる指ばっちゃん。同時に鳴り響いた3つのそれが鳴り終わる頃には、肉の剣に変えられた騎士たちもまた、嘘のように消えていて。

「すぶぶ、良き冒険を。教会の剣たち」

全て終わった。

あれほどに遠山たちを追い詰めた騎士たちがまるで相手にならな  
い。

「まじかよ」

本当に大人と2歳児だ。あれだけ厄介で、本気で追い詰められていたはずの騎士連中がもう、どこにもいない。

仕組みも、法則も何一つとしてまるで分からない力によりこの場は全て収まった。

「んー？ すぶぶ、そんな見つめないでおくれよう、照れるじゃないかい」

頬に手をあて、ニヨニヨと相好を崩す女。

人知竜。つまり、竜。これが、竜。

人同士の争いなど、それらにとってはまさしく見戯。

指を鳴らし、見つめるだけで下等生物たる人間は法則外の力によりその命運を散らされる。

「……人知竜」

「すぶぶ、はい」

理外、かつ邪悪、しかし彼女は可憐に笑う。

遠山へニコニコしながら駆け寄り、その手を握る。

「すぶぶ、その名前、君が私を人知竜にしてくれたんだ。でも、君は何も知らないだろう？ でも、いいんだ、それで。君が知らなくてもボクは知っているからね」

黒い目だ、暗い眼だ。

それが遠山を見つめる。



「何言って……」

「アイ」

遠山の言葉を、人知竜が遮る。

「は？」

「名前で呼んでよ、トオヤマくん。もう勿体ぶったりしない、出し惜しみもなにもしない。はじめからボクの好感度はマックスさ。だから、名前で呼んでよ。お願いだから」

少し、人知竜は震えていた。ぴくり、ぴくり。幼子が怒られるのは怯えるように。

「……………」

「「「「……………！！！！」」」」

審問会メンバーにげんなりした目線を送る、しかし全員が目だけでこつ答えた。

「こつち見んな！と。」

だめだ、奴ら頼りにならない。

遠山は諦めて、目の前で身体を小さくしながらこちらをちらり、ちらりと見つめる女へ向き合う。

「お前は、俺を知ってるのか？」

「……残念ながら、全ては知らない。君の好きな物語も好きな歌も、好きな景色も知らないんだ、だから教えてほしい、だから伝えてほしい。話をしようよ、同じ時間を過ごそうよ。ボクはきっと、そのために生まれてきたんだから」

「……わけ、わかんね」

「それでいいよ、今は、ね」

少し笑う竜。

その笑顔はどこか寂しげで。

「さあ、ボクの名前を呼んでよ、トオヤマナルヒト。強くて怖くて、そして愛しいヒト」

だが次の瞬間にはその儚さも消え失せた。代わりに映るのは狂気。

絶対的な存在に向けられる偏執と執着。

遠山は考える、さてどう答えれば全ていい感じになるだろうか、  
と。

「お、ねは」

その答えで、全てが決まる。

その強欲すら絡める永遠探究者の情念に吞まれるか、それともまた強欲が探究者の情念を飲み込むか。

互いに進むのなら、その道は相容れぬ。しかし共に歩むのならば人知の竜は人を庇護する。

時に、超えるべき残酷な試練として、時に心強い味方として。人知竜は人に深く関わってきた。

人と、人知竜。歩み寄るか、殺し合うか、2つに一つ。

「俺は」

「トオヤマくん、ああ、すぶぶ。皮肉だね、君はやはり少し、アレとも似ているんだから」

人知竜が、少し目を伏せる。わずかに低くなる声、何かを思い出して、それに怯えているようない

遠山が、人知竜へ答えを返そうとした。でも。

人知竜の香り、せつげんと血の匂い、それを上書きする香りが。

柑橘、きんもくせいの香りー

「ねとられは、ゆるさぬ、特に貴様だけには絶対にな」

部屋に、金色の焰が顕れた。

空間を引き裂き、メラメラと燃え盛る金の焰。

ぬるり、そこから彼女が現れた。

竜はいつも唐突に現れるのだ。

「は？」

「あらら」

ぼしゅう。焔がゆらめく音、同時に人知竜が遠山へ向けていた左手、その手首がぼろりと落ちた。

みるみる間に燃えて、灰と化する人知竜の手首。

しかし、彼女は何も取り乱すことはない。

「ナルヒトから、離れよ。奴に槍が当たるであろつが」



焰の揺れ間、部屋には現れた陽炎の中から現れるのは金髪長身の女。

「う、あ、りり、りうのみ…… オワタ」

「主教さま！ お気をたしかに！」

燃え盛る太陽フレアの如き金のお髪、深海の澄んだ場所を映すような深い蒼色の隻眼。大きく垂れた前髪が彼に抉られた瞳を隠す。

「ど、ドラ子……」

その手に握る大槍には、既に金色の焰が揺らめき、身体の至るところには黒いドロドロした粘液がこびりつく。

それでもなお、陰ることなき輝きの美。

「これはこれは、これはこれはこれはこれは。古臭いカビた陰気な匂いがすると思うたものよ。全知の竜、その焼け立たれた腐臭は、どんな香水でも隠せないものよな」

蒐集竜、アリス・ドラル・フレアテイルが焰の揺れ間より顕れる。

「すぶぶ。いやいやいやいやいやいや、乳臭くて炎臭く煙臭いと思えば。思ったよりも早い到着だねえい、アリスちゃん、少しは成長したんじゃないかあ、ないのかなあ？ボクのもドキとはいえ、異界をこんな短時間で抜けるとはねえい…… 50年と少し前はけーきよく、大好きなおじいちゃんに助けてもらったんでちゅものねえええ」

対するは闇色の美。蒐集の竜の煌めきすらその黒い瞳を照らすこ

とはない。

人知竜、アイ・ケルブレム・ドクトウステイルが、斬られた手首を見つめ、それを瞬時に再生させていく。

黒い触手が傷口から生え、瞬く間に人間の手を象る。

「え」

遠山鳴人のやばいよセンサーが一気にレッドゾーンへ振り切った。

「ふ、かかか！　よい、もう一度轉れ、本当に全てを知る竜なのか、その頭解頭して調べてやるっ」

金の焔が、笑う。

「すぶぶ、いやあ、無理じゃないかい？ 多分ボクの頭の中身を見ても、アリスお嬢ちゃんには理解できないんじゃないかなあ」

黒い水が同じく、嗤う。

「なに、心配するな、試してみればわかるさ」

「試してみないと分からない時点で、バカなんだけどなあ。まあ、バカだからわかんないか」

竜と竜。

互いに何故か、笑顔だ。

だが笑顔とは本来、生き物にとっての示威行為に他ならない。

竜という存在が浮かべるそれは、造形美に溢れて、自然の見せる雄大な美と同等、なのに、見ていて震えが止まらなくなるのは何故だろう。

「……ねえ、みんなー、おーい……」

それに挟まれた遠山が、2歳児くらいのテンションで審問会に、新しい仲間に助けを求めた。

2歳児だから助けてくれると思ってー

「「「「もっ知らん「「「「

大人達は27歳を助けてはくれなかった。

43話 人を知る竜、蒐め集う竜（後書き）

TIPS € 永遠の探究の果てたどり着いた奴を知れ

NAME 人知竜 アイ・ケルブレム・ドクトウスタイル

アレンジメント 混沌：悪

#### 44話 竜、強欲、竜

「見る、貴様の作り出した汚物の粘液、オレの髪が汚れた」

ドラ子は笑顔のまま、外跳ねしている長い金髪を指差してつぶやく、その眼は笑っていない。

「すぶぶ、いいヘアアレンジじゃあないかい？ 金色に黒いブヨブヨのアクセントがよくお似合いで」

人知竜の声にドラ子の眼がさらに、すつつと細まる。

ぼおっ。

ひとりでに灯る金色の焔、ドラ子の身体や髪にこびりついている粘液を焼き尽くす。



「……だが、それよりも気に入らんことがあるのだ。貴様、誰の友に馴れ馴れしく触れておる？ ナルヒトから離れよ」

「断らせてもらつねえい…… 彼の隣にいるのがボクの願いなんだから」

互いに額に青筋立てながら朗らかに笑いあふ美人、いや、美竜たち。

その間に挟まれたチベットスナギツネのような男はただ、固まるだけ。

「は？ なんだそれは。そもそも貴様、なんだその一人称は？ 50年前は一人称違つてたであろうが、もっと硬っ苦しい言葉であつたろうが」

「すぶぶ、ああ、キミはそんなことも知らないだねえい、トオヤマ君はね、ボクっ娘というのが好きなんだよ？ 性癖というやつだねえい。気に入ったオスの嗜好に合わせるのは生物のメスなら誰でも行うことだろおう？」

「は?! お前、なんで!？」

まさかの飛び火、己の隠していた性癖を当たり前のように言い当てられた遠山が目を剥いた。

「……そうなのか、ナルヒト？」

どこか、悲しげにこちらを見てくるドラ子。ドラ子の一人称は”オレ”だ、”ボク”ではない。

「……なんの話だよ」

遠山は思わずドラ子から目を逸らす。あの威圧するような視線ではないのに、今までで1番キツイ視線だった。

「すぶぶ、”ボク”」

にやり、チエシャ猫のように唇を歪めた人知竜が遠山の耳元で、ぼそり。

「……………」

びく、身体の芯が跳ねた。

その通りだ、遠山鳴人はボクっ娘に弱い。

だが、だがこの世に果たして、ボクっ娘に、顔の良い黒髪不思議系美人のボクっ娘に弱くない男などいるものなのだろうか。

いるならでてこいや、よいさ、ソイヤっ。遠山は軽いパニックの中に放り込まれてー

「体温が0・1度上がったねえい。心拍も59から68に……すぶぶ」

嬉しげに囁く人知竜、顔がいいのでなるべく遠山は人知竜から目を逸らす。

あ、この絨毯、上品でいいな……色も落ち着いてるし、ふわふわ。

「ナルヒト……お前……」

ラザールの心底呆れたような声、鼻にギュッとシワを寄せたそのトカゲ面からは確かに、お前、正気か？ というメッセージが伝わって。

「すまん、ラザール…… 好きなんだ…… ボクっ娘……」

絨毯に手をつき、苦々しげに漏らす遠山。人はフェチだけは裏切れぬ。

ふふんと得意げに鼻息をふかす人知竜、目を見開き表情を固める  
蒐集竜。

上位生物同士のマウント合戦は続く。

「あ、オワタ」

蒐集竜のキレイな感じに主教の胃袋が終わった。言葉の通りに。

「主教サマがまた偉い感じに?!」

「主殿、お水を！」

主教たちが愉快なことになっている間にも人知竜と蒐集竜、人界に深く関係する竜たちのメンチは続く。

「っ!?!? 気に入らん、気に入らんぞ、全知竜!! なんとという邪智暴虐! オレの友を惑わすその舌、焼き割いてくれよう!」

「友! すぷぷ! トオヤマくん、キミもまあ、ほんと竜たらしだねえい…… このじゃじゃ馬がヒトを対等に見るなんて…… まあ、それでこそボクの理想個体に相應しい…… やはり、ボクとキミは運命的な何かでつながっているわけだ」

「……………運命？」

人知竜のことはに、蒐集竜が反応して。

「すぶぶ、ああ、そうだとも。蒐集竜、キミが知らない物語でー」

「ふかか」

「……………なんだい？」

アリスの笑いが、アイの言葉を遮った。訝しげに人知竜が目の前の竜を見つめて

「……………いや、なに、かの全知の竜ともあるう竜が運命などと言いだしたのがおかしくてのう。……………竜と人の運命、なるほど、なるほど。と、言うのなら俺とナルヒトこそ、まさしく運命、いや、宿命の存

在同士と言える」

蒼い瞳が愉快げに歪んだ。竜としての残忍さ、そして少女の残酷さ、両方の色を孕んだ眼がニヤニヤと。

「何を……」

人知竜がその目に僅かにたじろいで

「竜殺し」

蒐集竜の桜色の唇が、その単語を紡いだ。

「……ちっ」

「ナルヒトはオレを一度殺した竜殺し、いや、オレの竜殺しだ。おや？ おやおやおやおやおや？ 竜にとって強者に挑まれ、打倒されるのはこの上ない名誉であり、互いの魂に因果をもたらす行為で



あるが……　　かか、貴様、なんのかんの言いながらナルヒトに殺されたことはないと見えるなあ……　　おやあ？　運命？　不思議なものだ。互いに殺し殺されの関係でもないのに？」

「……何が言いたいんだい？」

「年増処女め」

「……ガキが」

「ふかか、ガキだろうとんだりうと忘れるな、ナルヒトのはじめでの（竜殺しの）相手は全知竜ではない、このオレ、蒐集竜なのだ」

「……その眼、あの炎バカをおもいだすねえい、思わず、潰してしまいたくなるよ」

「ふかか、よい眼だろう？ …… ナルヒトの嗜好とやらに自らを合わせるその涙ぐましい努力には敬意を表するが。ふ、かか、貴様がどれだけ努力しようとも、オレとナルヒトの関係は竜と竜殺し。貴様の入る余地などないことに気づかぬか？」

「……幼竜が。しばらくみないうちに口ばかり達者になったようだねえい」

「老竜め。若いヒトの雄に発情するのは見るに耐えんよ。ナルヒトには介護でも頼むつもりなのか？」

「……すぶぶ、守ってくれる炎竜はここにはいない。口の利き方を知らない幼竜に、分別を教えてやるうかねえい」

「ふかか、お爺さまの名前をここで出すとは、よほどの炎に焼かれたことを根に持っているに見える。年寄りも過去のことを引きずっていかん」

互いに一步も引かぬ、金と黒。

巻き込まれる方はたまったものではない。

「……………わお」

ラザールが6杯目のハチミツ水を飲み干す。

「ウフフ、全知竜とお、蒐集竜があ、私の教会の中でメンチ切り合  
ってるう…………… ウフフ、終わったー、天使教会終わりましたー、  
カノサ・テイエル・フィルドはー、天使教会を終わらせた主教とし  
て帝国史に歴史に名を刻みましたー、おそら、きれい」

「主教サマ?! ここからお空は見えませんか!」

「主殿！？ どのお空をご覧になられて?! それは見えてはいけないお空です！」

主教はお空を眺め、聖女や隠密がそれを呼び戻そうと騒ぎ出す。

「ナルヒト、ナルヒトナルヒト……！ 俺たちの新たなボスが失神しかけてる……！ このままじゃすぐ失業だぞ！ 頼む、なんとかしてくれ！」

「おまえ、なにかかって……」

遠山とラザールが小声とジェスチャーを交えてやりとりする間も、竜のメンチは続いている。

「その眼…… 昔から気に入らなかったんだよねえ…… はじめりの竜と同じ、蒼い瞳とかさあ、炎竜のクソ野郎とも似てるしねえ

い  
「

「生まれも育ちも良くてすまん、なにせオレのお母様は炎と水から生み出されし花の竜、お父様は炎と石から生み出された鉄の竜、血統は折り紙つきなものでなあ。おっと、貴様は…… ふうん、泥かなにかから産まれたのか？ どうりで陰気な眼をしとるものよなあ」

「はあ？」

「ふん」

竜、強欲、竜。

美しい2人の竜に体力もそろそろ限界のチベットスナギツネ男が挟まれる。

トカゲは八チミツ水を逃避するように煽り続け、銭ゲバは見えてはいけない空を見上げ続ける。

「……………あ」

ふと、チベスナが気付いた。恐ろしい美竜2人はしかし、未だメ  
ンチ切り合うだけで互いに手は出していないのだ。

「こいつら……………」

ドラ子にしろ、人知竜にしろ、凶暴さと手の早さは折り紙つきだ。  
片方は奴隷に殺し合いをさせて愉しむ外道、もう片方は人の血を飲  
んで人間を愉快なオブジェに変える変態。

にもかかわらず、互いに未だ直接的な攻撃に出ていない。という

ことは――

加速した思考は、その眩きをもたらしてしまった。

「……おまえら、どっちが強いんだ？」

爆弾。

言うてからではもう遅い。遠山はそういうのが気になるタイプだ。ゴジラとガメラ戦うとどっちが強いのか、キングギドラもイリス、どちらが強いのか、とか。

「オレだが？」

「ボクだけど？」

「「は？」」

ゴジラとガメラ、あるいはキングギドラとイリス、2人の殺気の粘度が上がっていく。

「……………」

今のやりとりで確信した。

こいつら互いに互いの力を理解してるんだ。お遊びで始末出来る者同士ではない。核兵器を持つてる国が核兵器を持つてる国に簡単に攻撃しないのと同じだ。

「ナルヒト…お前なんてことを」

ラザールの眼は完全に泳いでいる。同じく主教たちもお空を見上げて動かない。



「あ？」

思考の海に沈んでいた遠山はラザールの言葉で我に帰る、部屋の空気、その粘度がさらに上がっていて。

「そもそも貴様、なんなのだ。ボクとやらの一人称はもちろん、数ヶ月前に急に名前を変えたり、やることなすこと、まこと、気に入らんのをう」

「すぶぶ、これだからガキ竜はわがままで困るねえい。ボクがボクの名前をどう扱おうとボクの勝手、そう、このボク人知竜のね」

「むげ」

すつ、と、人知竜が遠山の頭を自らの胸に抱き寄せる。慎まじやかだが、すべすべのローブ越しに感じる確かな柔らかさを後頭部に感じて。

「人知竜は、トオヤマナルヒトと共にある。それもボクの自由さ。ああ、安心しなよ、トオヤマくん。ボクは蒐集竜よりも強い。キミの隣に相応しいのはより強く賢い竜だろう?」

黒髪が遠山の首に触ってくすぐりたい、人知竜の吐息すら感じる距離の囁き。

「……………2度は言わん、ナルヒトに触れるな」

せびい。

その声を聞いた途端、どこかぼんやりしていた体に寒気と痺れが走った。

ドラ子が完全にキレた。あの塔での最悪の出会いの時と同じ気配、残酷な竜としての雰囲気纏って。

ピコン。

最悪のタイミングでもたらされるのはクエストの知らせ<sup>使命</sup>。

どくん。強制的な衝動、身体がそれに従えと反応してしまう。

世界の奥深く、底の底、あるいは天上の天井より出力される情報が文字となり、遠山の視界に流れた。

【メインクエスト ” 我、人を知り、汝、竜を殺す者なり”】

【クエスト目標、人知竜と協力して、蒐集竜の命を2つ奪い” 技能『頭ハッピーセット』発動、” 秘蹟” 『クエスト・マーカー』への対抗ロール発生” ちよ、うるっさい”

唐突に現れる矢印、クエストマーカー。

使命に従う衝動をもたらすそれはしかし、遠山鳴人の酔いに茹だり、ヤンデレの催眠により壊れたハッピーな頭に遮られる。

「頭、いてー…… くそ、なんだその地雷選択肢」

遠山鳴人は使命には従わない、従うものは唯一、己から湧き出る欲望のみ。

案の定口くなものではないその矢印、ドラ子に向かおうとする矢印を遠山が握ってそのまま雑巾絞りのように捻ってちぎる。

明らかに事態を悪い方向に誘導してくるその矢印をギタギタにするのに少し慣れはじめていた。

「むお？」

「え、ええ……」

殺気立っていた竜2人が戸惑いの声を上げる。

2竜からすればいきなり遠山が虚空に手を伸ばし、何かを捻じ曲げるようなジェスチャーをとったように仕方見えない。

突然の遠山の奇行に毒気を僅かに抜かれていて。

ピコン。

【メインクエスト放棄 スピーチチャレンジ発生】

バラバラに千切った矢印の代わりにまた新たな矢印が人知竜と蒐集竜を指す。

【2人の竜の争いを止める】

「またてめえ、くそ難しそうなことを」

口の中だけでその無茶振りな指示に文句を垂れて

【難易度 *very easy*】

「え?」

【コメント 竜の名前】

「え?」

難易度、ベリーイージー?

「おい、貴様、痴れ者が。腐臭の漂う身体で近づくものだからナルヒトが怯えておるだろうが、何度言えばいい？ 離れる」

「怯えてる？ まさか、トオヤマくんがボクに怯えるわけではないだろう。悔しかったらキミもこうして彼に触れればいいのさ。あ！ ごめんごめん、うぶな幼童はそんなことできないよねえい」

「はっ、人と見れば節操なしのアバズレめ。魔術式とやらの見戯を見出した小娘だけでは飽き足らんと見える。いい加減、オレの友に腐臭が移ると敵わん。……どけよ、もう言わぬぞ」

「い、や、だ、ね。ようやく必要なものを揃えてここにたどり着いたんだ。もう2度と離れたりしない。古代ニホン曰く、人の恋路を邪魔するものは蹴られて死ぬらしいけど、竜はどうなるんだろうねえい」



どこが簡単なんだよ、おまえ。こんなんキングオブモンスターと  
モンスターゼロの争いを止めるようなもんだぞ。

遠山が美竜2人の合間で呆気にとられて

ピロン、ピロン、ピロン

【2人の竜の名前】

【very easy】

しつこく流れるメッセージ。

竜の名前、ベリーイージー、竜の名前、とても簡単。

まさかー

知性満ちる遠山の脳に舞い降りるアイデア。それはどこまでも荒唐無稽、どこまでも都合が良すぎることを前提にしたもの。

だが、もうそれに賭けるしかない。

頭を働かせ、舌を回すべきスピーチの場、しかし遠山の選んだ選択場とてもシンプルなもので。

「……………なあ、アリス、アイ」

竜の名前、それを呼んだ。

「ギヤウ?!」

「スピツ!?!」

そして、それは正解だった。一瞬で、美竜たちの殺気が凧いだ。

2人の竜、一瞬互いに尻尾を踏し、身体を固める。

冷水でも浴びせられたように、2人の竜が動きを止めた。

ここだ。

狡知に長けた遠山の脳と舌が廻り始める。スピーチ・チャレンジ、世界を誤魔化す欺瞞の業が竜を絡める。

「……お前ら2人がどんな関係かは知らないし、喧嘩すんとも言わない。でも、頼む。ここではやるな。やるならよそでやってくれ」

「な、ナルヒト？ ど、どうしたのだ？」

「と、トオヤマくん？ お、怒ってるのかい？」

「怒ってねえ、アリス、友人としての頼みだ。ここではやるな」

「ギャ？！ また、名前…… わ、わかった、わかったのだ」

アリスが目を白黒させながら、短い悲鳴をあげる。いつもは遠山をまっすぐ見通すその視線は、今やバラバラ、忙しなく泳ぎ続ける。

「……アイ、アンタが誰か俺にはわからん。でも腕を治して、結果的には助けて貰った。ありがとう。でも、ここでは暴れないでくれ」

「スピっ！ ハ、ハイ、わ、ワカリマシタ……」

ぴしり、背筋をただした黒いローブを纏う竜はそれから身動きをとらなくなる。

「「……………」」

ぱた、ぱた。

金色の鱗に覆われた太い尻尾、黒い粘液に覆われた細い尻尾。それだけが左右に揺れていて。

ピコン

”スピーチ・チャレンジ 成功”

驚くほどあっけなく、竜たちが、あれほど互いに瞳を殺気や怒りで歪ませて、空間を澱ませていた彼女たちがただのモジモジドラゴンに変わっていた。

「……場所を変えようか、蒐集竜、アリス・ドルル・フレアテイル」

しばらくの沈黙のあと、人知竜が尻尾を納め、声色をもとに戻し静かに蒐集竜へ声を向ける。

「望むところだ、全知竜、アイ・ケルブレム・ドクトウステイル」

泳いでいた視線を一瞬で戻し、深い蒼色の瞳で応える蒐集家。

「人知竜、なんだけど」

「ふん、どちらでもよいわ …… ナルヒトはオレの名前を先に呼んだが？」

ふと、ニヤリ。ドラ子が勝ち誇るように嗤う。

「はあ？ ボクの名前を呼ぶ時の方が声色が暖かったが？」

すかさず負けじと人知竜が首を傾げて。

「は？」

モジモジドラゴンからマウンﾄﾞドラゴンへ。

再び彼女たちは至近距離でメンチ切り合いつつ、互いに手を振りかざし、当たり前のように空間に歪みをもたらす。

かと思えば2人ともその歪みをぐぐり抜けて、すっと部屋から消えていった。

ピコン

【スピーチチャレンジ成功 ”竜”への説得が成功しましたので報酬として”竜特攻”技能の補正值が上昇しました】

【隠し技能に新たな技能が追加されました。



新技能 ” 竜殺し（意味深） ”

具体的な効果は の公書 で確認できます【

「……………一件落着、か？」

少なくともこの部屋の中でドラゴンバトルの勃発は防ぐことができた。

2032

自分の仕事はしただろう、遠山は自分の同僚たちの方へ振り向いて。

「主教……………さま、あの人……………たらし……………」

「ナルヒト……ああいうところ、……あるんだ」

「女……敵……　口説いて……　竜を……コマシ……」

「スヴィ、トッスル……ああいう男……　信じ……　ダメ……」

ひそ、ヒソ、ヒッソオ。

肝心なところだけ聞こえるヒソヒソ話。

「おっと、風評被害発生の瞬間を目の当たりにしたぞ」

遠山が頼れる役に立たない仲間たちを眺めて思わずぼやいた。

44話 竜、強欲、竜（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを「こ」覧ください！

< 苦しいです、評価してください > デモンス感

## 45話 主教サマと話そう！

「さて、ごほん。ではそのコマシ、いえ、我らが竜殺し。よくぞ貴き我らの竜を鎮めてくださいました。異端審問官に相応しい仕事と言えますね」

「ええ…… なんのこともなしに話し始めたぞ。面の皮厚すぎない？」

竜が消えた瞬間、さきほどまでオソラ、キレイ、ミヨ！ アオザメテル！ とぶつぶつウツロだった主教が復活した。

「……まあ、なんのことうでしょうか？」

キョトンと首を傾げ、糸目をつこり笑顔に変える女主教。スイ  
ツチの切り替えが異常に早い。権力者としての才能だろうか。

「いや、まああなたがそれで行くならいいけど」

遠山がその辺のツッコミを諦めて、ソファに座り直す。

「ナルヒト、これほんとに美味いぞ」

「てめえ、ラザール。それ何杯めだ。蜂蜜トカゲめ」

銀の水差しをもったまま、ラザールもまた自然に再び遠山の隣へ。

「ごくりと、ハチミツ水を傾けることだけはやめない。」

「……竜たちは帰ってくるでしょうか」

ぼそり、主教が呟く。

「知らん、だがあの2人は完全に実力似たような感じだろ。喧嘩でも時間かかるんじゃないの？」

「はあ、蒐集竜、竜の巫女だけならまだしも、かの全知竜、いえ、今は人知竜でしたか。魔術式の祖、学院の護り竜まで引つ張り出してくるとは…… ああ、予想の3倍重いわ」

主教の慇懃無礼な喋り方が少し崩れ始めていた。

大きなため息とともにソファの上で頭に手をやり唸る。

「ナルヒト、お前のせいでボスが頭を抱えてるぞ」

「ラザール、お前が蜂蜜水飲みすぎるからじゃね」

2人のトラブルメーカーが目を合わさずに互いに色々押し付けて

「……………どっちもよ。竜殺しは言わずもがな、まさかリザドニアンの奴隷があつた”影の牙”とはね。王国の暗部組織の中でも名前が知れ渡るほどの存在である貴方がここまで流れ着くのは…………… 王国もいよいよよってことね」

主教の言葉にリザドニアンという種族への差別の色はなかった。シャンデリアの蝋燭がわずかに揺れる。

「まあ、それはともかく。えっと、主教様、でいいのかな？」

遠山が居住まいただししながら、目の前の苦勞人っぽい女に声を向

けた。

「主教でいいわ。貴方たちに様づけされるの、特に竜殺しには様つけないでされたら竜を差し置いて、様付けってことになるでしょ」

それはまずいわよ、胃が死ぬわ、胃が。

ぼやく主教はまた大きなため息をついた。

「あー、ドラ子あいつ社会的ステータスすげえな」

「……この際、貴方と私たちにある認識の差は諦めるわ。……さて、色々ありすぎて話がほんと飛びまくってるけど、自分たちの状況は理解できたかしら？」

遠山の暢気な声に顔を見て歪めつつ、主教の聲がわずかに低くな



って。

「ああ、まあだいたい。それと、主教。助かった、ありがとう」

「まあ、なんのことかしら」

頭を下げた遠山を主教が糸のような細い目で見つめる。よく見るとその目は笑っていない。うつすら開いた瞼から紫の瞳が覗いていた。

「意地悪いこと言うなよ、異端審問官とやらのことさ。大方、本来ならあれはあなたの交渉のカードの1つだったんだろ？ 俺とラザールを庇うためにそれを使わせちゃった」

「ふうん…… 貴方、ほんと不思議、いえ、不気味な男ね。驚くほど冷たいかと思えば礼儀を重んじて、でもその舌の根では私、いえ、天使教会へいまだに自分たちを高く売りつけようとしている…」

…」

遠山の言葉を受けて値踏みする目を続ける主教。

竜や騎士と相對している時とはまた別の嫌な感覺。自分よりも遙かに頭の良い人間と向かい合う時特有の嫌な感覺に遠山は包まれる。

「そこまでお見通しかよ。あんたすげえな」

素直に感嘆の言葉を遠山が漏らして。

「ふん、お礼を言うような良識があればこれ以上の交渉、やめてくれないかしら？　ひとまず、貴方たちの行った犯罪行為については、ほら、私たち主教派が庇うってことで」

「ああ、もちろん。大きな爆弾抱えてもらった恩は忘れない。俺の地元にはこんな言葉があつてな。犬は三日飼えば恩を忘れぬ、俺に

関してはさつき庇って貰っただけであんたに助けて貰ったことは忘れないさ」

チベスナのような無感情な目と、笑顔を保つ糸目が無理矢理に笑顔を象り、互いを見つめる。

「ふふ、なら話はこれで終わりかしら？ 異端審問官の仕事に関してはまた、日を改めてー」

「だが同時に、こんな言葉もある。 ”それはそれ、これはこれ”、んっんー、名言だなあ」

話を終わらせようとする主教、しかし遠山の仕事はこれからだ。

鉄は熱いうちに打て、交渉ごとにも同じことが言える。決めなければならぬことはその日のうちに。

「なにが、言いたいのかしら」

遠山の言葉に、主教の平坦な返事が返ってきた。

わずかに、ピリ、と。主教の側、猫獣人とちびっ子シスターの纏う空気が変わりつつある。

「俺とあんたにはまだ話し合うことがあるってことさ、ボス。なに、ただもう一蓮托生であることに変わりはない。値段だよ、主教。あんたらは俺とラザールを一体いくらで買ってくれるんだ？」

身の振り方は大抵固まった。騎士団という公的権力に抗うために審問会に籍を置くのは遠山にとってもありがたい話だ。

だが、肝心の待遇や関係が不透明なまま。それをないがしろにするほど遠山はのほほんともしていないし、この主教相手に話をしないという選択肢もまたなかった。

「……竜殺し、貴方を我ら主教派に入れることがどれだけリスクになるかをご理解しておいででの発言ですか？」

遠山の言葉に真っ先に反応したのはシスター服の猫獣人だ。真っ白な毛皮に、宝石のような黄色の瞳。

しかし鼻に寄せられたシワが、ご機嫌ななめだと伝えてくる。

「ニヤンコ先輩、あんたがいい人なのはよくわかる。だがそれを言われたら、俺とラザールにも色々言い分が出てくるぜ？ まあ門番のクズを殺したのは少し俺がノリでやりすぎかもしれないけど、それ以外はどうぞよ」

ニヤンコの威嚇をさらりと交わし、遠山が言葉を煙に巻く。

「どう、とは」

あまりにもまっすぐ返された言葉に、猫獣人、トツスルは言葉を詰まらせて。

「トツスル、黙っていなさい。スヴィもよ、今から私以外にこの男と一言でも会話をすることを禁じます。……私に寿命を使わせなくても貴女達なら聞いてくれるでしょう?」

主教の一言。なんのことはない一言だが

「っ、失礼を、竜殺し。承知しました、主殿」

「……わかりました、主教サマ」

しかし、令を使わずともその言葉は彼女に心酔する部下によく届く。

洗練されている、やはり一番厄介なのは糸目女だ。遠山は改めて目の前の女の脅威を理解した。

言葉だけで己より強い存在を言うことを聞かせる。その難しさは想像に難くなく。

ここから先は、言葉一つで全てが決まる舌の戦い。ならば――

「ちえっ、締め付けも早いな。ラザール？」

友人の名前を一言。

「じくり、うむ、心得ている。俺は黙ってるよ、ナルヒト」

遠山も同じく、ラザールに一言。ハチミットカゲは素直にその意

を理解して口をつぐんだ。

「締め付けが早いのは貴方も、でしょ。人のことは言えないでしょうに。仲間のことを信頼してないのかしら」

からかうような主教。白い手袋に包まれた長い手指に顔を傾ける。

「見え見えの口上は互いにやめよーぜ。人にはそれぞれ得意分野がある。ハチミツ水飲みながらパン作るのが得意なやつもいれば、竜を殺すのと交渉ごとが得意な奴もいる。自分の苦手な領域に対しては時に、沈黙が1番正しい場合もあるだろーがよ」

「……言ってるわ、世の中みんなあなたみたいに弁えている連中ばかりなら私の仕事も楽になるのだけれど」

女狐とチベットスナギツネが2人。唇に薄い笑みを浮かべた。

「そりゃどうも。さて、じゃあ肝心の仕事の内容だ。そもそも、異



端審問官ってなんだよ。いや、響きの想像はつくけど」

「簡単よ、教会創成の際に、初代主教が用意した教会組織。その名の通り、教会にとつての異端を取り締まるための存在」

「別の宗教とかへの弾圧か？」

現代人としての当たり前の教養、異端審問という概念への知識から遠山が予想を呟く。

「……………妙ね、あなた」

「あ？」

主教が身体の動き、一切を止めてぼそり。

「異端と聞いて、まず出てくる言葉が別のシユウキヨウ？ シユウキヨウって言葉に心当たりはないけど、別のって文脈を理解するに、天使教と似たような概念の話よね」

「……さて、宗教って言葉自体ないのか？」

少し考えて、遠山はわずかに焦る。宗教という言葉への反応が明らかにおかしい。

主教のその言い方はまるで、この世に宗教という概念自体が、天使教しかないように聴こえて。

「少なくとも私は聞いたことないわね。もしかしたら古代ニホン語にはそんなのあったかもしれないけど。この世界においては少なくとも天使教のごとく人々に広まる教えはせいぜい竜信仰くらいだわ」

「……キリストサマもびっくりだな、あんなに十字軍で大暴れして

も出来なかったことをここじゃ完成させてやがるわけだ」

その通りらしい。遠山は同時にこの世界に底知れない不気味さを感じる。竜やモンスターがいること以上に恐ろしい。

異なる世界とはいえ、同じ人間が住むこの世界。なのに、天使教と竜信仰とやら以外、他の信仰が存在していない？

人間が社会を構築する上で、そんなことありえるのか？ 遠山の思考がぶれ始めて――

「キリスト？ 何言ってるかわかんないけど。まあいい、話を戻すわよ？ ここでいう異端はつまり教会の敵、天使様に敵対する存在はもちろん、教会の運営や教会が維持するべき治安を脅かすもの、教会の信徒を害するもの。要は邪魔な奴のお掃除部隊よ」

「だいぶぶつちゃけるな」

宗教についての思考を一度やめて、遠山は主教に向かい合う。まあ、異端審問官なんて名前からしてだいたいそっち系の仕事なのは予想がついていた。

「ふふ、剣のことを人殺しの道具ではなく、野菜を斬る道具ですなんて紹介しても事実は変わらないでしょ？ 剣が肉を裂き、骨を断ち、命を奪う道具と同じように、審問会は教会の敵を闇に葬るために存在するのです」

「なるほど、必要悪なウェットワーカーね。まあ、特にその辺に思うことはないな」

「あら、そう？ 普通の人間はその辺が抵抗あると思ったけど」

「いや元々あれだ、化け物殺して生計立ててきたし、これからもそのつもりだったからな。狩るべき化け物が人間の見た目してる奴も

追加されるだけだろ」

けろりと宣う遠山を、愉快そうに主教が眺めて。

「ハツタリで言ってるならいい度胸、本気で言ってるならイカれるわ。でも、審問会なんてイカしてでもない限りまず無理か」

「まあ半々ってとこさ。それで仕事内容の希望なんだけど」

「希望？」

「ああ、希望さ。ぶっちゃけ俺とラザールにはこれからやるべき本業があつてな。冒険者とその本業で兼業して金を稼いでいこうと思つてる。審問会はつまり、バイト感覚でやっていきたいんだ」

「バイト、感覚ねえ」

遠山の言葉に、主教の声がまた少し低くなる。

「希望はシンプル。まず出勤はしない、基本的に立場は対等、仕事を受けるかどうかはこちらが決める。理想なのはギルドと冒険者みたいな感覚だ」

低くなる声もなんのその、遠山はストレートに割と舐めた条件を叩きつけた。

「な、ナルヒト、それは」

ラザールが思わず、言葉を漏らして。

「私の下につく気はないってことかしら？」

からん。主教の銀の杯、氷が溶けて音を鳴らす。

「勘違いしないでくれよ、ボス。俺とラザールの審問会におけるボスはあんただ。そこは尊重する、ただ、俺らは深入りしたくねえ。他にやりたいことがたくさんあるからな」

遠山は譲らない。ある意味こちらに恩情をかけてくれていた主教派をないがしろにするような言葉。

ラザールはアワアワと遠山と主教を交互に見つめて慌てふためき始めている。

遠山はそれを無視して、主教だけをじっと見つめる。

「……そんな都合の良いことが通るとでも？」

主教が笑うとも、呆れるともつかない声をため息混じりに放り投げ、

「通る」

それを完全に言い切る形で遠山が打ち返した。

「へえ」

主教の声がわずかに高く。

「あんたも人が悪いな。いやむしろ、あんたこそ通したくて仕方ない筈だ。ドラ子やあのやべえ変態へのおんたらの反応で理解した。俺とラザールは明らかに異物だ。本来なら、そう、正しい道筋ならメインクエスト



ば、あんたは絶対に俺に関わることはなかった筈だ」

主教の反応で理解した。

自分の意図と、目の前の女の意図は同じ。あとは条件のすり合わせだけだ。

遠山は言葉を続ける。

「そんなアンタが結果的に俺たちを助けてくれた。感謝はする、感謝はするが理由がわかんねー。騎士と揉めた俺たちをアンタが助ける理由、これがどうにもわからなかった、……ついさっきまではな」

そう、ここが1番ひっかかっていた。目の前の女は確かに傑物だ。頭が回り、権力もあり、武力も兼ね備えている。

そして何より立ち回りが上手い。故に今までは理解出来なかった。

この主教とやらが、自分とラザールを庇う理由がわからなかった。

だが、答えはあの金ピカドラゴンが教えてくれた。

「ついさっき？」

主教が興味深そうに言葉を繰り返して。

「ドラ子だ。アンタみたいな合理の塊が理屈に合わない行動を取った。俺とラザールを身内に抱き込むなんてリスクを取らざるを得ない状況、そんな盤面、あのわがままドラゴンくらいしか作れねーだろ」

ワガママドラゴン。そのワードで思い浮かべる存在は1つしかない

い。この部屋にいる誰もが同じ存在を思い浮かべていて。

「……竜の巫女に対してそんな口聞けるのはあなたくらいでしょうね」

「友人だからな。だがここの常識じゃあそんなことはありえないんだろ？ ドラ子っついレギュラーの存在を頭に入れたら答えは簡単。……プリジ・スクロールとやらのリスク、あんたらへの借金を返せなかった場合、俺は廃人になる。ほら、全部繋がったぜ」

欠けたピースは、あのドラゴンの存在一つで全て説明出来る。

あのドラゴンにとって、合理に長けた人間に不合理を強いることなど造作もない。

自惚れかも知れないが、ドラ子なりにきつと自分を助けてくれようとしていたのだらう。シンプルに遠山にはそれが嬉しくて、少し

笑った。

「……………」

スヴィが、目を見開き唇を噛んだ。ある意味、自分のやらかした悪手が主人を追い込んでいると自覚したのだろう。

「そんな顔すんなよ、先輩。あんたには実際感謝してる。アンタがあの時手を貸してくれなかったら、うちんとこのガキは死んでたからな」

「……………ほんと、顔も性格もなにもかも好みじゃないわ。何も可愛くないし、綺麗でもない」

遠山の言葉に返したのは主教だ。

笑顔はもはやなく、わずかに覗く紫の瞳が無機質に遠山を見つめる。

手袋に包まれた形の良い手指が、ぱた、ぱた、膝を叩いていた。

「お互い様だろ、ボス。自惚れるわけじゃないが、俺が仮に廃人になった時の竜の反応、それをアンタらは恐れてるんだ。予想出来ないその反応を」

「遠山がその言葉を紡いで。」

「プッ」

吹き出したのは、主教だ。



腹を抱えて、涙を滲ませ、主教が大笑い。

女狐、銭ゲバ。

知性が高すぎる故に、世の中を斜めにしか見れない女はしかし、  
久しぶりに心の底、腹の底から笑っていた。

「主教サマ？」

「あ、主殿？」

そのあまりの変わりぶり、笑いぶりは側近たる彼女たちすら心配  
になるほどで。

「ッアハー、あー、おもろ。笑ったわー、っはは。予想できないわけないでしょ、あなた、頭は回るけどやっぱバカね」

ひとしきり大笑いした主教が涙をレース仕様のハンカチで拭い、つ言葉を手繰る。

「は？」

バカ、という言葉に遠山が何かを言い返す、その前に。

「全部終わりよ」

主教の声が、遠山の動きを止めた。



「ぜんぶ？」

「そ、全部。竜殺し、トオヤマナルヒト、これだけは断言出来る、もしあなたに何かあって、それに教会が少しでも絡んでいた場合、私たち天使教会は確実に滅びるわ」

「い、いや、なんだそりゃ」

「教会が滅びる。いくらなんでも大袈裟なその物言いに遠山が固ま  
って。」

「あー、本気でわかってないのね。簡単よ、竜の怒りによって滅ぼ  
されるっつてんの」

「は？ いや、流石にそこまでのことはないだろ」

ドラ子の気性は大体わかる。でも、まさかそこまでとは思えない。

「そこまでのことがあるからアンタらみたいな劇薬を飲み干すつてんのよ、こっちは。トオヤマナルヒト、あなた本当、自分への評価が低すぎるわ。あの竜はあなたにそれほどまでの”価値”を認めてる。単純な蒐集品としてでなく、あなたという個人を好み、その在り方を尊重してる。……. . . . . どんだけこれが恐ろしいことか、理解してもらえないかしら」

その考えを主教が真正面から否定する、今度は一才笑っていない。

「……. . . . . ドラ子は俺が死んだらそこまですんのか？」

想像する。自分が死んだ後のあのワガママドラゴンを。

多分、悲しんでくれるとは思いますが、そこまで怒るー

……いや、あいつ変なところにキチガイスイッチ持ってそうだな。

遠山は今までの短い付き合いの中でたまに踏んでいたドラ子の地雷を思い出した。

「ああ、伝わった？ 理解の早い人間との会話はストレスなくて助かるわ。そこまですんのよ、竜という生き物はね。そんでさっきの答え、あなた達の待遇についてだけど、答えはイエスよ。その通り、正直あなたからその関係性を言い出して助かったわ。まあ、そもそも異端審問官っつー職業自体、外様向けの称号ではあるんだけどね」

「試してたのか？」

主教はつまり、最初から自分たちとの関係をズブズブにするつも

りはなかったというのだ。

遠山はその変わり身、いや、本心の隠し方と鎌掛けのタイミングにヒヤリと背筋を冷やした。

「当たり前でしょ。私、バカは好きだけど、頭の悪いのは嫌いなもの。いくら竜が貴方を気に入ってるとは言えそれは私の好悪とは関係ないわ」

こともなげに、主教が吐き捨てる。

人間の極地、竜やらなんやら、恐るべきものを正しく恐れ、しかし抜け目なく自らの利を模索する。

人という種のいやらしさや強かさを全て兼ね備えたような女だ。

遠山は目の前の人物への警戒をさらに引き上げて。

「……いー性格してんな、アンタ」

「あなた達相手に取り繕う必要ももつないでしょうからね。さて、じゃあ次、私からの提案ね」

「提案？」

「そ。提案、本当は審問会入りをエサにこのお願いしようとしてたんだけど…… まあ、必要経費ね」

「何の話だ？」

「簡単な話よ。誓ってほしいの、竜殺し」

話が読めない。

主教が何を望んでいるか、話の流れが急に変わり始めている。

「あ？」

「これから先、この街、いえ、この国にひどいことが起きるわ。それが何か、誰が起こすのか、どうなるのかはわからない。でもね、酷いことが起きるの」

「……何の話だよ」

唐突に始まる抽象的な会話、なにかのひっかけか、誘導尋問か？  
遠山が静かに思考を沈めて。

「……あの話は本当だったのか？」

「知ってるのか、ラザール」

何故か色々知っているラザールが知ってそうな雰囲気だった。

今度から雷電と呼んだ方がいいのだろうか。遠山はラザールの言葉に耳を傾ける。

「ああ、今代の天使教会主教は預言者である、王国でも流れている噂話だ」

「預言者……？　また新しい設定をいきなり……　いや、ドラ子が

そついやそんなことを……」

急に現れるファンタジー色、そついえばここ異世界ファンタジー的な世界だったわ。

遠山はしかし、その預言者という言葉に心当たりがある。竜大使館でも確か、ドラ子が主教に対して預言がどうたらこうたら言っていたような。

「ーりゅうがきりとひとといぬにころされてつきがひとつおわったころ、あらくれものすみかにりゅうころしがたどりつく。ぎんいろのかぜにながされて」

突然、紡がれる主教の言葉。

部屋の誰もが押し黙る不思議な空気。



「とかげのぱんやとりゅうごろし、あおぞらのもとであじ。りゅうごろし、いちどうかもなし、とかげのぱんやこまる。さわぎをききつけ、りゅうとおにいりにりゅうごろしをみつけるも、とかげのぱんやとりゅうごろし、ぎんいろのかぜにかくまわれ、うみのむこう」

「……なんだ、そりゃ」

「秘蹟の名前は、”ザ・スター十字星” 不確定な未来の不確定な情報を掴める。まあ、私の能力不足で預言の精度は高くないんだけどね」

さらりと告げられた主教の才能の名前。

秘蹟、遠山の認識では現代ダンジョンにおける”遺物”と同等、いやそれ以上の力を持つ力の名前。

「レーザー、秘蹟とやらのスーパーパワー、こんなにみんな持つてるもんなのか」

「なわけあるか、個人の特異な才能を示すスキルですら数千人に一人に備わるものだ。ましてやその上位互換の秘蹟など…… 秘蹟  
持ちに出会うことなんか普通、一生に一回あるかないかだぞ」

「……指定探索者の號級遺物みたいなもんか。そのうち嵐を呼ぶ秘蹟とやらが出てきたりしてな」

脳裏に浮かぶのは2028年に生きるものなら誰でも知っているある指定探索者。

データを見るだけでもデータラメなその遺物のことを、ふと思い出した。

「はいはい、そこ2人でコソコソ話しないの。今の預言を聞いてわかる通り、まあ大体半分は当たってるわよね」

「トカゲのパン屋やら、竜殺しの部分か？」

「ええ、でもそのトカゲさんはパン屋ではないし、竜殺しであるあなたは海の方には行っていない。わたしの預言はあくまで、かもしれない未来を伝える程度のものでしかない」

「で、そのかもしれない預言者のアンタは何に怯えてるんだ？」

遠山がおじけず問いかける。

ふっ、と。主教の顔から表情が消えた。蠟燭の火が風に攫われるかのようじ。

「おわり、おわり、ぜーんぶおわり」

預言。

主教が胸元に手を当てて、言葉を紡ぎ続ける。

「……」

「ほのおがだまされる、おんながぜんぶめちやくちやにする。ほのおがきんをのみこみ、くろをとかす。ひかりもつるぎもいみはなし、ぼうけんしゃのまち、ほのおにつつまれる、おおきなとうはこともし、なにもかわらずたどりつくものをまつだけ。ほのおにのまれたたましたちみんなとうにのぼる、おわり、おわり」

「まちびとはこず、すくいはあらわれない。せかいにぜんぶおいて

かたおんながぜんぶのおわりをよびさます。きんもくろもみんなほのおにやかれてしにたえる。ひともみんなたましいとなりおんなにたべられる」

「おんなはもうしっぱいしない、いちどめはだめだった、ありえないにどめもだめだった、こんどはさんかい、なきのさんかい。めいんくえすとをおわらせるためおんなはぜんぶをつれてぜんぶをこわす」

「たましいくらいはおおきく、おおきく。ぜーんぶたべられて、おそらのうえ、さらにつえのうえをめがす、はい、さようなら」

部屋に、じめっとした空気が広がる。

要点を得ない言葉、しかし、内容はとても気味が悪い。

「……夕子の悪い三流の絵本？」

「いいえ、タチの悪い三流の預言」

「なにひとつ要領でないんだけど」

「預言とは得てしてそういうものでしょ？ ただね、私の預言は確実に当たることもないし、詳しいことはわからない、でもね、必ず起きることなの。いつかはわからないけど、必ず起きる。それは今までのわたしの人生が証明してる」

「……その自信を信じるとして、俺とラザールに何を誓えっつて？ その預言を覆す手伝いか？」

「あら、話が早くて助かるわ。その通りよ」

けろりと呟く女主教。

遠山はしばし、言葉を失う。

「……アンタそういう、その、世界の平和とか気にするタイプに見えるけど」

かろうじて捻り出した言葉はぼやきの「とく。

「あら、よくわかってるじゃない。当たり前でしょ、世界なんて大それたものを守るつもりなんてさらさらないわ」

「じゃあ、なにがしたいんだ？」

意図がわからない、遠山はシンプルに問いかけて。

「決まってるわ、”今”よ」

帰ってきた答えもまた、シンプルなものだった。

「わたしはね、この今が好きなの。お金を好きなかだけ集めて、好きなように使える地位、大多数の人間を見下ろせるこの立ち位置、可愛い部下に、ピカピカの金貨ちゃんに囲まれた生活、これを守りたいの」

それは欲望だ。それは強欲だ。世界のことなど知らぬ、ただ、ただ自分の為に、自分の住み良い環境のために女はそれを覆す。

「お金も綺麗なものも、可愛いものも、全ては世界が正常だからこそ輝くもの、永遠はないわ、でも、長く続けることは出来る、わたしはね、今の生活を守るためなら、世界の滅亡だって覆してみせる」



紫の瞳に灯る光、自己愛に満ちた独善的な光。

しかし、それにどうしようもなく惹き寄せられるものも、また存在するのだ。

「主教さま、かっこいい……」

「主殿……」

うつとりと主教を見つめる聖女とニヤン」。

「リザール、あの子が目悪いのか？」

遠山は思わず指を指して、ラザールに問いかけた。

「ふっ、どうだかな。俺には彼女が誰かさんとそっくりに見えて仕方ないが」

「世も末だな、あんなのが他にもいんのか？」

「ああ、うん、きっとアンタの思ったより近くな」

「マジかよ、こわ。戸締りすとこ」

返ってきたラザールの答え、その声はどこか愉快そうで。

「まあそんなこんなで、誓って欲しいことはシンプル。本当にやばくなった時はわたしの味方をしてほしい、それだけよ」

主教が手を振りながら軽く言葉を締めた。

「味方って何するんだ？」

「決まってるわ。わたしは今を続けるためにこの馬鹿らしい預言を起こそうとしてる奴を始末する。その手伝いしてってこと」

「誰がこんなことしようとしてるんだ？」

「それがわかっただら苦労しないわよ、1つわかっているのはそれが女だっただけ。やったわね、犯人が人類の半分に絞れたわ」

おちよくるような主教の言葉、遠山はため息で返事をした。

「そりゃ気の長い話で」

「ああ、もちろん。タダでは言わないわ。この話はあくまで審問会入りとは別の話だから」

「へえ、ボーナスでも貰えんのか？」

「ええ、もちろん。正当な働きには正当な報酬を。わたしの信条なの。まあ無駄金はビタイチ銅貨払わないけど」

そう言って、主教が笑顔をつくり、

「トツスル？」

己の部下、猫獣人の隠密に何かしらの合図を送った。

「は、主殿」

ピューイ、部屋に響く猫獣人、トッスルの指笛。

「失礼を」

部屋の扉が開かれ、現れたのは同じく二足歩行の猫獣人たち。皆、顔を前布で隠し、黒い修道服に身を包んでいて。

「うお、なに？ 猫の恩返し？」

遠山が突如部屋に続々入ってくる猫たちを見て、呟く。

「いや、違う、あれは……」

ラザールが目を細め、首を振った。

猫獣人たちのうち、数人が台座のようなものを4人で運んでいる。

2085

棺？ 台座？ 金色の装飾に赤色の素材。長方形のそのの四隅を肩に乗せて、恭しくそれを部屋に運び入れて。

「しこ苦労」

「にゃお」

トツスルの言葉に棺を運ぶ猫獣人たちがそれを絨毯の上に置く。

「開けなさい、お客人に見えるように」

ゆっくりと、その棺の蓋が開けられた。

「……あ」

棺に納められた色とりどりの花。

そこに手を組んで仰向けに眠る人物、遠山ははっきり見覚えがあった。

「生きてるわ、大主教令によって意識は失ってるけどね。この騒動の中心、貴方がケジメをつけさせたい人物でしょ？」

主教が冷たく、彼女を見下ろす。

「……」

少女は眠っていた。

水色の髪に、水色の瞳。白い肌は今やまるで死人のごとく。白い肌着、胸のあたりがわずかに上下していることだけが彼女の生存を伝えていて。

幼い顔立ちは、目を瞑り沙汰を待つ。



「そ、第一の騎士。天使教会騎士団、最優にして最強の騎士。」正  
義”のストル」

あいつだ。ストル・プーラ。遠山にとっては敵、自分を殺しかけた厄介な相手。

「騎士団の首脳陣がほら、今はいないでしょ？ 彼女の身柄は今や  
主教派の手の中。トオヤマナルヒト、私の味方をするのならあなた  
にはこれからこういう機会をたくさん与えてあげる」

「機会？」

主教の言葉が、遠山を絡める。

それは甘い甘い取引の蜜。

「復讐、いえ、違うわね、あなたの場合、うーん、そう。好き勝手にやるってことかしら」

「そりゃどついつ……」

遠山は飲まれ始めていた。主教の舌、用意していた策。

「この短時間で、主教は遠山鳴人という人間の見積もりを終えていた。これはその最終確認だ。」

「今回の騒動、そもそもあのクズどもをあなたが始末したことが全ての発端よ。普通の人間はね、そういうの諦めるの。アイツが気に入らない、許せない。でも何もできない、ルールだから、方法がないから。みんな心に溢れる”欲望”と折り合いをつけて諦めながら日々を生きてる」

主教は知っている、この男にはそれが無いことを。

抜き身の刃よりも厄介な、ほんとに厄介な人間であることを。

「でも、あなたは違う。あなたにはその歯止めがない。……工場の連中が開発した自動馬車とやらの部品に擬えていうのなら、そう、ブレーキがないのよ」

「……ブレーキって言葉がここにあるのに驚くよ」

遠山は乾いた口で軽口を返すことしかできない。

「あら、あなたもブレーキを知ってるのね。まあいいわ」

微笑む主教が、銀の杯を傾ける、薄い唇を八チミツ水が湿らせた。

「……あなたが生きてく上でこれから同じようなことがたくさんある、あなたは自分の欲望として必ず自らを害するものを始末したくなる、そしてそれを止めることはない。……その手助けをしてあげる。お膳立てもするわ、道筋も立てる、法の裁きも捻じ曲げてあげる」

紫の瞳、開かれる。

遠山の茶色の瞳を捉えて離さない。

スピーチ・チャレンジ。それを仕掛けるのが常に遠山鳴人とは限らない。

「欲望のままに、あなたが生きやすいように手助けしてあげる。だから、私の味方になって。これは、取引よ。対等かつ、有益な取引」

「取引……」

「これはほんの手始め。あなたの敵をあなたに捧げましょう。好きにするといいわ、天使教会は、わたしはその欲望を肯定します」

主教が微笑む。完全に遠山鳴人を狙った懐柔策。

懐に入れるのは決めた、立ち位置としては対等かつ、ドライな関係 positioning を付けた。

あと必要なものは、把握だ。

遠山鳴人という人間の器を、主教はここで完全に把握するつもりだった。

「……………なるほど」

目の前の眠る少女を見つめる。

正義に選ばれた第一騎士。誇張なく、遠山は一度彼女に殺されかけた、いや、殺されたと言ってもいいかもしれない。

正義という曖昧なそれを振りかざし、自分とラザールの前に立ちはだかった敵、脅威だ、それは間違いない。

「……………つまり、こいつを仕返しにぶっ殺してもいいって言いたいわけか？」

「そういうこと。罪に囚われず、あなたはあなたのなすがままに。ああ、ふふ、その在り方は少し、竜に似てるわね」

細い目、糸目の隙間から覗く紫の瞳が遠山を見透かすように。

ロクでもない人間だ、間違いなくまともな人間ではない。だが、その言葉は甘露のごとく遠山の心に染み渡る。

この上ない報酬だ、自分の欲望と社会のルールのすり合わせを全て相手がしてくれるのだという。

気に入らない奴は全て始末出来る、少しでもムカついた奴も同じく。欲望のままに振る舞う許可を天使教会という組織の長が肯定してくれるのだ。

「俺は……」

遠山が言い淀む。

スピーチチャレンジ。

舌と頭で世界を騙し、理不尽に挑む人の業。いつのまにか、遠山鳴人はカノサ・テイエル・フィールドの舌の上に転がされていた。

それに気付いた時にはもう遅い。目の前には復讐の対象、しかも権力のお墨付き。

遠山鳴人はなにより欲望に弱い。

まだ首を搔きむしった跡が痛む、まだあの首を絞められた恐怖も残る。



目に焼きついた、あの鮮烈な正義の騎士の強さが恐ろしくてたまらない。

こいつはいつか必ず、また自分に牙を剥く。遠山鳴人は知っている、自分の道が、自分の生き方が、正義とはかけ離れていることを。

そして、正義とは自らよりかけ離れているものを許さないということも知っている。

「許すわ、遠山鳴人、あなたはあなたの欲望のままに。わたしはわたしの願いのままに。このクソみたいな世界で手を組みましょうよ」

甘いスピーチ、甘い言葉。今、それは遠山が欲しくてたまらない言葉だ。

知性28。考える力はこうも恐ろしく人を絡めとる。そこに美と女の妖しい魅力も、竜のごとき圧も必要ない。

人を動かすのに必要なものなど、よく回る舌と道理を弁える脳みそさえあれば事足りる。

「……………こいつをどうしようとも俺の自由なんだな」

「ええ、不幸な事故で彼女の命が終わってもそれは事故よ。あなたが罪に問われることはないわ」

「そっか……………」

ピロン

【メインクエスト ”正義の最期”】

【クエスト目標、天使教会第一騎士 ストルへ借りを返す オプシ  
ョン目標 ”キリヤイバ”でストルを始末する】

【クエスト報酬 POW+1 技能 ”冷徹”の獲得 オプシ  
ョン目標達成報酬 ”正義”の引き継ぎ】

「……………処断か」

流れる多数のメッセージ。オタク知識によりそれらを反芻すると  
なかなか沢山の報酬が得られそうだ。

どれもきな臭い感じはするが。

「もちろん、あなた自身の手でやっても構わない、主教派で始末し  
ても構わないわ。あなたが決めていい。私からの報酬は決定権をあ

あなたに譲ることなのだから」

主教が笑う、慈悲と寛大で本心を覆い隠す稀代の傑物が冒険者を試す。

ピコン、ピコン、ピコン。

クエストの知らせ、矢印が台座の上で眠り続けるストルを指し示す。

滅ぼせ、滅ぼせ、滅ぼせ。

遠山の内なる声、その欲望もそう告げている。生かしておく理由はない、始末をためらう理由もない。

全てのお膳立ては出来ている。自分を、そしてラザールを窮地に  
追い込んだ厄介者。

正義、正義と囁る愚か者だ。必ずこの先邪魔になる。

「……………ナルヒト」

友人の声が少し低く。遠山の蠢く思考に声が届く。

滅ぼせ、始末しろ、消せ。

メインクエストの衝動はたしかに今度ばかりは正しいだろう。

メインクエストの囁きはたしかに間違いはないだろう。

正しき遠山鳴人のクエストならば、正義をここで滅ぼすべきだ。  
運命

「さあ、決めて。決定権はあなたにあるわ。それがあなたへの報酬なのだから」

未来を告げる女主教、紫色の瞳がその選択を見届けて――

――わたし、わからない

その強さと同じく、焼き付いて離れない声。

それを遠山は聞いていた。

「……………家が欲しい」

「……………ん？」

遠山の眩き。主教が笑顔のまま、固まる。今の状況と全く関係ないその言葉だ。無理もない。

メインクエスト  
正しき運命ならば――

ああ、しかし、残念ながら。この遠山鳴人の脳みそは、頭は、狂わされている。やべえ女の情念は遠山鳴人の歪んだ在り方を尊重し

た。

頭ハッピーセットの人間が、正しい道など歩めるとでも？

「ダセエ、いや、普通にダセエわ」

ー離れない。あの泣き顔、こどものように戸惑い続ける泣き顔を忘れることが出来ず、思い出してしまった。

『ああ、違う！ 違うのデイス！ わたし、こんなことしたいんじゃないのに！ わたし、正義、わからない！！？』

声を聞いた。泣き歪む水色の瞳を見た。



何もわからない、たどり着くべき場所も、あるべき自分もわからない迷子。

それが遠山鳴人にとっての、ストル・プーラという少女だ。

「家が欲しい、いや、店でもある。庭付き一戸建ての2階。一階はラザールのパン屋、2階はリビングに複数の寝室、庭は小屋が建てられるくらいの広さ、そこに、サウナを作る」

「は？」

立ち上がる遠山を誰もが呆気に取られて眺める。

台座に眠る少女のもと、ゆっくり遠山が歩み寄る。

伸ばす手は少女ではなく、少女を指差す矢印へ、  
遠山鳴人にだけ見えるクエストの知らせ<sup>使命</sup>。逆らえるわけもないそ  
れを、いつも通りに握りしめて。

「ハウスキーパー兼、ガードマンが欲しい」

握りしめた矢印、びくり、びくり。ストルを示し続ける。

知るか、俺は俺の好きなようにさせてもらう。ハッピーな頭は、  
その指示を受け付けない。

「よっ、と」

メインクエストをぶん投げる。壁に叩きつけられた矢印はびくり、  
つづめき、そして消えていった。

ピコン

【メインクエスト失敗 オプション目標失敗 正義の引き継ぎに失敗】

ピコン

【隠しクエスト発生

Whereabouts of Justice 正義のゆくえ

クエスト目標 ” 第一騎士 ” ストルを成長させる

報酬 ？？？？】

「こいつは俺が貰う。殺されかけた賠償は働きで返してもらおう。命はいらねー、家と金と労働力が欲しい」

決めた。遠山鳴人はその寄り道を決めた。

メインクエストなど、そもそも初めから、ラザールを逃し、蒐集竜との戦いを選んだ時点で捨てている。

「……正気？ それをあなたが御せるとでも？ 騎士団ですらあえて教育を施さないことでコントロールしていた化け物よ？」

「化け物、ね」

離れない。消えない。

正義の異界、あの暗い夢。夏の日の午睡の如くかすみ始めた記憶の中。

懐かしさに助けられたあの場所であ会った、小さな少女、己の成りたいことに戸惑い、泣き喚いていた水色の瞳。

あれは昔の自分だ。孤児達に感じたシンパシーをまたストルにも今、遠山は抱いていた。

「知らねー、それよりアレだ。こんなガキ、自分が何してるのかわかんなくて泣き叫ぶガキ殺して、一安心、そんなダセエ真似したくねえ。必ずこいつには役立ってもらおう。それだけだ」

「……はあ、なるほど。そうなるわけね。ほんと、男って変にカッ

「こつけるわよね」

事態を理解したらしい主教がおおきなため息をついた。

「どんだけダセエ奴でもカツコつけないといけない時はあるんだよ、そこで意地張れない奴はその先ずっと、そのまんまだ」

遠山は気にせず、自分の決めたことをやり通す。

しばらくの間、遠山と主教が互に見つめ合う。

互いにピクリとも動かず、ミリたりとも視線をずらさない。

沈黙が膨れあがる部屋の中、最初に根を上げたのは主教の方だった。

「……はいはい、わかったわ。決定権は貴方にある。彼女が動けるようになった後、手続きはこちらでしておくわ」

手を組みながらさらりと告げる主教。

どこか、その声は弾んでるようにも聞こえて。

「手続き？」

「第一騎士ストルは今日より、天使教会を破門。同日より異端審問官トオヤマナルヒトの側仕えとして奉仕活動に従事、その働きを以て天使教会への忠誠を示す、こんなところから、聖女派の連中も黙らせて、騎士派の連中にも文句言わせない詭弁としては」

「あのバカどもそれで納得するか？」

「しないわね、だから今日中でケリをつけるの。相手が全知竜って

のが少しめんどくさいけど。竜に立ち向かった騎士団上層部は現在行方不明、第一騎士もまた上層部に唆され、主教派である異端審問官を襲撃、その責任を取って…… てどこかしら。まああのバカどもにはいい薬だわ」

「その言い方だと、アイツらがまた帰ってくるみたいだな」

「はあ…… トオヤマ異端審問官。あの程度で死ぬんなら奴らは10剣なんて呼ばれてないわ。副団長とお肉の剣にされた連中は微妙だけど、それ以外は必ず生きて塔を脱出するでしょうね」

「マジかよ」

「そ、だから、全知竜は優しいのよ。あれは人間にほんと甘いタイプの竜だから」



どこか、どこかほっとしたような優しい声。

そしてあまりにもすんなり受け入れられた第一騎士の助命。

遠山は目の前の偽悪を目を細めて見つめた。

「あんだ、まさか……俺を試したのか？」

「何の話かしら、ま、あれよ。異端審問官、あなたのひととなり、だいぶ理解出来たわ。ガキをガキとして扱う程度の度量もあるみただし、身内として扱うのに異議はない。さ、話は終わりよね」

とんだためき、いやきつねだ。遠山の選択に満足したのか、もうこれ以上はないと言わんばかりに主教が話をたたみ始めて。

「……いや、待てよ。まだ終わってない」

「へえ、まさか、さっき家がどこのどこの言ってたけど、それに関係あるのかしら」

主教から試されていたのは理解した。

じゃあ、次はこちらの番だ。

口車で負けっぱなしは、性に合わない。

「ある。家が欲しい。アンタの力を貸してほしい」

恥ずかしげもなく、遠山は傲慢に、強欲に己の願いを口にする。

「フフ、笑えないわね。わたし、これでも貴方を買ってかなり譲歩してるつもりだけど？ それ以上は強欲つてもんじゃないかしら」

本当に主教は笑っていない。

周りにいる主教派のメンバーたちも黙って遠山を見つめる、その視線に敵意を込めて。

「必要なんだ。宿暮らしも悪くないが、カラスとかいう連中の存在や、俺とラザールの目的のためにも自宅が欲しい。……あんま時間かけるわけにはいかねえからな。アンタ、かなりの権力者なんだろ？ 協力してくれよ」

空気を読まず、遠山は言葉を手繰る。静かに自分の土俵に誘い込む。

「……黙っていれば、調子に乗るなよ、ヒューム」

引っかかったのはニャンコ先輩たちだ。違う、こいつらじゃない。

必要なのは、糸目女。主教の関心、もしくは敵意や怒りを引き出しペースを乱すこと。

遠山は今までのやりとりから理解していた。自分と主教ではモノが違う。まともなやり方では取引なんぞ成立するわけがないと結論づけた。

「おっと、お嬢さん方、俺の相棒に気軽に殺意を向けない方がいい、火傷では済まないぞ」

ニャンコ先輩たちの圧にラザールが反応する。声色こぼ穏やかだ

が、トカゲ面の口からわずかに牙が見え隠れしていた。

「やめなさい、トッスル、みんな」

「ラザール、大丈夫だ」

主教と遠山、互いに仲間を制する。ここで必要なのは武力ではない。  
い。

「……論外ね。悪いけど、これ以上あなたに譲るつもりはないわ、ストルの身柄は明日にでも貴方の元へ届ける、話はこれで終わり。これから宜しくね、竜殺しさん」

話を終わらせようとする主教。

「待てよ、待て待て。ここからが交渉だろ？ 俺とラザールはここに戸籍がない。家を買うのなんざなんかのコネでもない限り無理だ

る？ アンタの力が必要なんだ」

遠山は焦らない。

考える、考える。なにかあるはずだ。この女のペースを乱すことの出来るカードが。

「あはは、トオヤマナルヒト。交渉にならないわ。審問会にてあなたを庇うことを決めた、ストルの処遇もあなたの希望次第にした。あなたに譲りっぱなしなのはこちらの方よ？」

ここまでの会話で理解した主教という人物、それがこだわるものはなんだ。

コイツの余裕を崩せるカード、それが必要だ。

「そうか？ たしかに感謝はしてるさ。だがな、アンタは嘘は言っていないが真実も言っていない。全てがやばくなった時、味方をしろと

「いつのなら、もう少し俺らに投資してくれてもいいんじゃないか？」

「フフ、残念ね。カードが足りてないわ、トオヤマナルヒト。自分でもわかってるでしょ？ これ以上の交渉は無理よ。まあ、あなたが竜を脅しに使うようなバカであれば話は別だけど」

「アホ言うな、俺のこととドラ子のこととは関係ない。ダチの威を借りて人を脅すなんざダサイ真似出来るかよ」

「ふふ、でしょうね。そんな人間だからこそわたしはあなたという毒を飲むことを受け入れた、でもこれ以上はナンセンス。スヴィ、お客様、いえ、あなたの後輩がお帰りよ、送ってあげなさい」

にべもなく、主教が笑う。

結果としては何も問題ないはずだ。争いは収まり、身の振り方も決まった。出来過ぎなほどの好結果。

だが、まだ足りない。

「はい、……こうはい、せんぱいの言うことは絶対、だよ？」

スヴィが無無を言わず、遠山とラザールに言葉を向ける。

「うわ、今ここで体育会系出してくんのかよ」

「ナルヒト、流石にこれ以上は……」

「トカゲさんの方は良識があっていいわね。協力体制に変わりはないわ、欲張りさん。もうすこしカードを揃えて出直しなさいな」



主教が笑い、遠山は考える。

考え続けるのならば、遠山が諦めないのならばそのお知らせはど  
クエスト・メーカー  
こにでも現れる。

こんなふうに。

ピロン

【スピーチ・チャレンジ発動 難易度 impossible 竜の  
介入により、very hardへ低下

主教 カノサ・ティエル・フィルドから家の権利を引き出す】

【ヒント、天使教会 収益、天使の祝福、祝福税】

【失敗した場合、天使教会と敵対します】

それは遠山にのみもたらされる挑戦の知らせ。

言葉と舌、頭と脳みそ、それらを駆使し、本来ならばもたらされない結果を引き寄せる寄り道。

正しい道にはない報酬への唯一の遠回り。

「……………」

「どづしたのかしら？」

黙り込む遠山を、主教が訝しげに見つめて――

――天使粉が祝福によって、パンの種になるんだ。

――今期の祝福税の減税をもって。

これまでの冒険、寄り道の中で得た知識がこの場においての武器になる。

ここからが、遠山鳴人の挑戦。使命メインクエストをぶん投げて行く大なるサイドクエストの始まり。寄り道

あつたわ、カード。

嗤え、不敵に。

見つめる、不遜に。

サイドクエストの向こう側にこそ、素晴らしい報酬がある。そういうふうに出てくるのだから。

遠山はカードを切る。

現代人ならば大抵の人間は知っている、その”祝福”とやの別の名前を――

「発酵」

「  
は？」

」

V S カノサ・テイエル・フィールド。

スピーチ・チャレンジ、開始。



#### 45話 主教サマと話そうー！(後書き)

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを「」覧くださいー！

< 苦しいです、評価してください > デモンス感

下にTwitterアカウント貼っています、更新通知などして頂いてもしよければフォローしてやってください。

ド 46話 スピーチ・チャレンジ VS カノサ・ティエル・ファイル

「 は？ 」

紫色の瞳、白目のあたりが一気に血走る。

血染めの紫水晶に睨まれているような感覚。

「おっと、どうしたよ、そんな怖い顔して。主教さま」

不遜に、遠山はソファの背もたれに深く体を預けた。

想像以上に相手の反応が強い。戸惑いをチラリとも見せず遠山はいやらしくニタリと笑ってみせる。



「……あなた、その言葉をど」で……」

「義務教育さ、理科の授業で習った」

手をひらひら振りながら、端的に。

その言葉の意味が相手に伝わるとは思っていない。

「……トツスル、ほかのみんな、ごめんなさい」

主教の判断は早い。

ぼそり、隣にいる猫獣人や、ストルを運んできた猫獣人たちに向けて呟く。

「！ 承知。皆のもの、床に伏せ、耳を塞いで、目を瞑れ！」

「『『『『はっ！』』』』」

猫獣人たちもまた従順に、そして賢明に。

三角の耳を手で塞ぎ、皆一様にしゃがみ込んでネコ寝モードに。

「あ？」

「なんだ？」

遠山とラザール、2人はその動作の意味を理解出来なかった。

「大主教令 寿命 3ヶ月使用」 主席聖女スヴィ以外の教会に属する存在は全て”発酵”という言葉忘れてしばしの間眠りにつけ”

「は？」

感慨も、なにもない。

当たり前のように、容赦なく発動する主教の令。

教会に所属する存在に対しての絶対命令権は、その場にいる主教と聖女以外の意識を瞬く間に奪いとってー

【スピーチ・チャレンジ 大主教令による命令への抵抗ロール 技能 ”頭ハッピーセット” 適用 判定なしで無効化に成功】

流れるメッセージ。

それを目で追いかけるよりも先に、隣のラザールが。

「しまっー ぐっ……」

すやすやトカゲに変わる。こくりと首を折り曲げ、尻尾がだらりと垂れ下がる。

「おい?! ラザール?!」

ラザールは眠った、しかし遠山鳴人は眠らない。

その脳みそは現代ダンジョンに満ちる酔いと、やべえ女の凶行により変質しきっている。

教会が200年に渡り保存、継承してきたその秘蹟もハッピーな

頭には届かない。

「……やはり、あなたには効かないか」

「主教サマ、どうなされますか」

この部屋に、意識あるのは3人のみ。

主教と聖女、2人から冷たい空気―― 殺気が漏れ始めていた。

「おっと、地雷踏んだわ、これ」

遠山がおどけつつ、静かに準備を始めた。

薄く、うすく、見えないようにそれを部屋に広げはじめる。

「待て、よ。スヴィ。……発酵、知らないわ、そんな言葉。なーんて言って誤魔化されてはくれないわよね」

「ま、その反応見ちまったらな。ご丁寧にうちのパン職人まで眠らせてくれちまって……　ていうか、あんたのそれ、俺らにまで効くのかよ」

「むにゃ、天使粉……　水……　石窯……むにゃ、ほしい……」

主教令とやらで眠らされたラザールがなにやら寝言を呟いている。

「ええ、例え口約束であっても天使教会に属すると意思表示した段階で私の令は適用される……　そのはずなのだけれど、何事にも例外はあるみたいね」

「驚いたよ。まさかノータイムで眠らせにくるとは思ってなかった」

「トツスルたちを巻き込みたくないのよ。さて、トオヤマナルヒト。質問に答えてもらっわ。その言葉、どこで知ったのかしら」

主教の言葉はどこまでも冷たい。

「常識だろ、義務教育で誰でもー」

遠山はその言葉をはぐらかして

「スヴィ」

「はい」

超越者の姿がふつと、消えた。

かと思えば背中だけにゲリラ豪雨が降りつけた湿り気。

首元に、肉厚のナイフが突きつけられていた。

いつ背後を取られたかも認知できない。聖女スヴィが遠山鳴人の命に王手をかけていて。

「わお…… あんたは、そういう手段に出ないタイプだと思ってたが、見込み違いかな」

焦るな、怯えるな。遠山は一切の動揺を押さえつけ、平然なフリをする。

「それだけやばい言葉って理解してもらえたら嬉しいわ。スヴィ、そのままをお願いね。……ねえ、トオヤマナルヒト。たしかに私たちがそう簡単にあなたを殺すことは出来ないわ、何故かわかる？」



それを命じた主教の顔色は変わらない。ただ、淡々と遠山に語りかける。

「ドラ子がキレて教会を滅ぼすから？」

あくまでケロツとしたふりを遠山は続ける。これは命を削る戦いではなく、精神を削る戦いだ。

「ええ、その通り。単純な損得の問題ね、でも今、私は悩んでるわ」

主教が片手で顔を覆い、項垂れる。

指の隙間から覗く紫色の瞳、それはしっかりと遠山を捉えていて。

「あ？」

「教会の滅亡と引き換えにしても、あなたをここで始末した方がいいんじゃないかと考え始めてる。その発酵という言葉はね、それだけ重い言葉なの」

「お、おいおい、待て待て。発酵だぜ？ …… あんたの小遣い稼ぎの邪魔になる人間に対しては大げさすぎないか？」

主教の言葉は脅しか、本気が。

いや、本気だ。本気でこの女は今自分を殺すかどうかを悩んでいる。

遠山はそう判断した。

「……………奇妙ね、ほんとに解せないわ、トオヤマナルヒト。読めない、何も考察の余地がない。発酵を知ってるのに、発酵に対する認識がその程度……………まるで、あなた別の世界の人間みたい」

遠山の態度を眺める主教が言葉を回す。

「おっと」

さりげなく当てられた真実に、心臓が少し跳ねた。

「主教さま、彼のしんぞう、うるさくなつた。べつのせかといって言葉をきいた瞬間に」

聖女がぼそり、つぶやく。マジかよ、首に当てたナイフの振動から読まれたのか？ 化け物め。

遠山が顔色を変えずに、黙って動かない。

あと、もう少し。満ちるまであとすこし。

うすく、薄く。

「……まさか、ね」

主教が片目だけを開いて遠山を見つめる、しばしの沈黙のあと大きくため息をついた。

「……トオヤマナルヒト、あなたは本気で死にかけてる。私は今半分近く、教会の滅亡と引き換えにあなたを殺すことも選択肢に入れている。それは理解できるかしら？」

「ああ、脅されてるのはよく理解出来てるよ」

「そ、ならいいわ、じゃあ自分の立ち位置を理解したうえで、こちらの質問に応えてちょうだいな。どこで、誰から発酵という言葉を教わった？」

「せっかくできたころはいをころしたくない、こたえて、こつはい」

有無を言わせる気はない2人の言葉。まさか発酵という言葉でここまで追い詰められるとは思っても見なかった。

正直に話すのだけが正解だろう。

「あー…… その前に、だ。どうだろうな、主教。あんた言ったよな。俺たちの立場は対等だって。でも今のこの状況、これはどう見ても対等じゃあ、ねーよなあ？」

だが、しかしそれはあくまで対等な状況で、自分の意思で話さなければならぬ。脅しに屈して話すのと、自分の意思で選んで話すのは意味がちがう。

「何が言いたいのかしら」

主教の言葉、遠山は笑う。

「脅すんなら、脅される覚悟もしろってことぢや」

「状況を理解してくれたものだと思ってたけど？」

既に準備は完了した。

結局、人と人が対等に話すのに必要なのは相互理解や思いやりではない。

自らの安全を担保できる力、暴力だ。

「理解した上での行動さ。んで、それはもう終わってる」

突きつけられている聖女という名の暴力。それに対抗しうる暴力をまた、遠山鳴人も兼ね備えていた。

「じつはいっ。」

「悪いな、先輩。準備完了だ。」

「――遺物、霧散」

探索者組合未登録遺物。

それは、遠山鳴人の報酬。最強の兵器。

現代科学において、説明のつかない事象を引き起こす現代ダンジョンが孕む理外の力。

遺物。

「は？」



「ッ主教サマ?!」

聖女が気付いた時にはもう遅い。

部屋に、キリが立ち込める。無色透明のまま静かに広げられていたキリは、白い霧となり実体化する。

「動くな、聖女先輩。既に、アンタの大事な主教サマや、同僚のニヤンコ達は”キリヤイバ”の射程に入っている」

部屋に満ちるは、キリ。目に見えない微細なヤイバが仕込まれた恐ろしき殺しの道具。

「これは、霧…… いえ、その雰囲気、まさか」

「……副葬品グッズ?!」

2人が状況を理解する。たった一手で流れが変わっていたことに。

「ドラ子もそんなこと言ってたな、そーいや。説明はシンプルだ。あの竜、蒐集竜、アリス・ドルル・フレアテイルも殺せる俺の最強の兵器。効果は簡単、その霧の中にいる人間を斬り刻む。もしくはキリを吸い込んだ人間を中から斬り刻む」

既にこの場において、主教、カノサ・ティエル・フィールドの命は遠山鳴人の手の中に堕ちた。

「遺物の名前はキリヤイバ。竜を殺した力の名前だ」

【スピーチ・チャレンジ ” 威圧 ” 開始

”竜殺し”の異名、また竜大使館からの勢力評価が”友人”のため、成功率がアップします】

「え……」

「わかるか？ 主教、たしかに俺は先輩にナイフを突きつけられていつ喉笛掻き切られてもおかしくない状況だ。でも、それはアンタも同じ、寝てるニヤンコ先輩や、聖女先輩もみんな同じ。身体ん中に見えない小さな刃が舞っている。ここで仲良く血塗れバトルがいつでもできるわけだな」

はったりをかます遠山。首に押し付けられているナイフが僅かに揺れている。

聖女は明らかに動揺していた。自分の命ではなく、自分の主人が命の危険の中にあることを理解したのだろう。

「……そんな脅しを信じてても？」

声は平坦、しかし遠山は主教が額から汗を流していることを見逃さない。

「試してみればいいさ。聖女先輩なら治してくれるかもな。ああ、でも、死んだ人間は治せるのか？ 竜すら殺すヤイバだ。果たしてアンタは即死しなくて済むかな？」

「主教サマ……」

聖女の反応から理解する、あの治癒の力は死者を蘇らせることは出来ないようだ。

「シンプルに行こうぜ。仲良しこよしで話し合いを続けるんならキ

リヤイバは解除する。このまま俺の喉笛にナイフつきつけたままならアンタらにもヤイバを飲んだままお話ししてもらおう、簡単な話だろ？」

「……霧を吸い込むというなら、あなたやレーザーも同じなはずだけど」

「ヒヒヒヒヒヒ、おいおい、勘弁してくれよ。自分の毒で死ぬ間抜けな毒虫がいるか？ キリヤイバは範囲内の獲物を選ぶことが出来る、ヤイバが殺すのはアンタらだけさ」

嘘だ、ハツタリだ。キリヤイバにそんな器用なこととはできない。この密室で発動したが最期、最高に間抜けな自殺を遂げることだろう。

そんなことおくびにも出さず、間抜けな毒虫が笑う。

背後を取られ、首にナイフを突きつけられてなおこの場を支配しているのは遠山鳴人だ。

主教と遠山が黙って互いを見つめる。どちらも動かない。

永遠にも感じる長い時間はしかし1分にも満たない時だった。

【スピーチ・チャレンジ”ハツタリ”

技能”頭ハツピーセット”の補正、

教会からの勢力評価”要注意人物”のため補正、

ハツタリ成功 スピーチ・チャレンジ進行】

ふと流れるメッセージ、同時に主教が思い切りのけぞり、ソファに深々と体を沈めた。

「……はあああ、イカれてるわね、あなた。竜と同じ、理解出来ない異質な存在だわ」

首をふり、天井を眺めながらぼやく主教。もうその雰囲気には殺伐としたものはなく。

「あれと一緒にされんのは困るな、ボス」

「うるせーわよ。似たようなもんじゃない。……スヴィ、私たちの負け。この男相手に下手な脅しは割に合わないわ。戻りなさい」

「……はい、主教さま」

すつと、離れるナイフ。

ゆっくりとスヴィが主教の元へ戻っていく。

「おつと、やけに聞き分けの良いことで」

「悪いけど、あなたほどイカれてないの。キチガイバトルはごめん  
だわ。さて、こちらは武装を解いたけどあなたは？ 騙して悪いが  
…… なんてことしないわよね？」

「……勿論さ、ボス」

遠山が自分の首に手を当てて、そこからずるりとキリヤイバを取り出す。

欠けた剣を軽く振るうと同時に部屋に満ちていた霧が嘘のように晴れていった。



「主教サマ、副葬品の気配が消えました」

「ええ、みたいね。教会の認知していない副葬品とか色々聞きたいことあるけど今日はもういいわ…… ふう、ほんと、私の胃が壊れる寸前なのはどう考えてもアンタらが悪い。……わかったわよ、トオヤマナルヒト、あなたとの取引に応じるわ。あなたのその度胸と力に敬意を表して改めて話がしたい」

「そりゃありがたい。涙が出るよ、ボス。ここにきてから話の通じない人間の姿をした化け物が多くて困ってたところなんだ」

自分の身体にキリヤイバを収納しつつ、遠山が答える。

どくん、どくん。賭けの高揚が未だ心臓を熱くさせる。

「うへえ、竜が気に入る訳だわほんと。……一問一答で行きましょう。あなたの知りたいことに私は答える、あなたは私の知りたいことを答える、それでいいかしら？」

「OK、暴力とかそういうのはなしにしようや。じゃあ俺から。家が欲しい、アンタはそれに手を貸すことができるか？」

「NO、と言いたいんだけど、YESね。私が節税対策で持っている物件はいくつかあるわ。でもあなたには貸したくない」

シンプルな問いにシンプルな答え。

遠山は軽く笑う。

「正直にどうも。交渉の余地がありそうで助かるよ、じゃ、次はアンタの番」

「発酵、あなたの言う発酵の仕組みを説明なさい。知ってることだけで構わないけど、知ってることは全て話してもらおうわ」

主教が懐から葉巻を取り出した。スヴィが音もなくナイフでその火口を切り落とし、マッチで火をつける。

紫煙が部屋にぼわり、広がる。

【スピーチ・チャレンジ】

発酵について INT値が6以上なので判定ロールなしで発酵を説明することが出来ます】

「あー、要は人間にとって都合の良い腐敗のことだ。微生物が有機物を分解して代謝する一連の行動。パンやら酒やらもこれを利用して作られるはずだ」

遠山は素直に自分の知ることを簡潔に話す。

「……驚いた、心底驚いた。今というほどあなたを気味悪く感じたことはないわ。発酵だけならず、微生物の存在も知ってるのね……」

「待て、その反応…… アンタはやっぱり発酵っつー仕組みを完全に理解してるよな」

主教の反応から、発酵に関する認知はおそらく同じのようだ。つまり、それを理解した上で”天使の祝福”とやらを騙っているのだらう。

遠山は強請るポイントを絞り始める。

「それこちらのセリフね。帝都の大学連中はもちろんのこと魔術学院の連中ですら知らないことよ。全知竜なら、まあ知っててもおかしくはない、か」

「言っとくけど、あの変態ドラゴンとは初対面だぞ」

人知竜と名乗った女を思い浮かべて遠山は言葉を紡ぐ。

「とてもそうは見えなかったけど？ 生き別れた恋人に再会したよ  
うな熱の入りようだったわよ、彼女」

「だからビビってるんだろうが。初対面の初コミュニケーションが  
飲血だぞ。しかも絨毯に寝そべりながら」

「……まあ、竜だし仕方ないわ。うん、愛情表現よ、愛情表現。話  
が逸れたわね。はー、ほんと厄介だわ、微生物も発酵も知ってるわ  
けか…… どうしたものかしら」

「……その反応、アンタの小遣い稼ぎの仕組みを暴いただけにしては大袈裟すぎないか？」

だが違和感が拭えない。

たしかに主教からすれば自分が秘匿して利益を生んでいる仕組みを知っている人間は邪魔だろう。

だがそれだけで、それだけで竜と争ってもいいとまで言わすようなことだろうか？

「おばか、そつちも大問題。だけどあなた、そんなことで私を強請れると思うほどバカでもないでしょ？ ま、動揺させることに関しては大成功よ、正直、心のどこかでまだあなたを舐めてたんだと思う。これは反省して教訓にさせてもらおうわ」

「それはよかった。……待て、今、そっちも、って言ったか？」

「……………」

主教は答えない。ぼくと揺れる葉巻の火の向こうに紫色の瞳が薄く覗くだけ。

「……………教会が発酵とやらを天使の祝福って嘘ついてんのって、金の為以外にも理由があるのか？」

違和感を口にする。

何か自分は思い違いをしているのかもしれない。つい現代知識無双できそうで少しテンション上がりすぎていたことにようやく気づく。

「…………ほんつと、可愛くないわね。でも待つて。次は私の質問に答えてもらつわ。はー、ほんとこんなこと聞くのはバカらしいんだけど…………」

「…………どうぞ。こっちからしたら今の状況すらジョークみたいなものだ。ファンタジー世界で冒険してるんだからな」

「…………それよ。さっき言ったそれ」

苦々しく、葉巻を構えたまま主教が顔を伏せ言葉を漏らした。

「あ？」

「りかのじゅぎょう……………じゅぎょうつて、授業のことよね。帝都の教育機関、幼年学校、中等学校、高等学院、大学で行う教育の場のことだわ」



「あー、こっちもそういつのあるんか。地理とかもそのうち勉強しないとなー」

「……何言ってるかわかんないけど、あなたが理科の授業とやらを受けているはずはないのよ」

「……ん？」

何が言いたいんだ？ 遠山は主教の言おうとすることをいまいち咀嚼できない。

遠山の言っている理科の授業とは勿論、現代の話である。その嘘かほんとの判別なんて主教につくはずがなくてー

違和感、もやもやしたそれが次第にしっかり形を帯びていく。

「少なくとも、私が主教となった期間、そしてここ100年の歴史において、トオヤマナルヒトという名前の人物が帝都の教育機関に入学した記録は残っていないわ」

紫煙に混じるその声の内容を遠山は聞いた。

「うん、……うん？」

最初その言葉の意味を理解出来なかった。

「……いや、ないない、それはない。いや、アンタそれマジで言うてるなら、まさか」

今、目の前の女はなんて言った？

それが本当のことならつまり、この女は――

いや、そんなのありえない。遠山は香ばしい煙の匂いの向こう、その細い糸目から目が離せない。

「私はここ100年間、帝国において”教育”を受けている人間の記録と記憶を全て頭に入れてるわ。私が主教になった後は勿論、私が生まれる前の記録もね。その中に、トオヤマナルヒトなんて名前は見たことない」

予想通り、ありえないことを女がいいのけた。なんじゃそれ。

「うそん、だって、お前学校なんてどこにでも、あ……」

言いながら、気付いた。帝都の教育機関、帝都の大学。

そつだ、ここは現代じゃなくてファンタジーの世界。

時代もいいとこ大航海時代真ん中くらいの生活様式、ということ  
は、教育機関の存在自体が、現代と大きく異なっているはずだ。

「……まるで、帝国において教育機関は帝都だけにあることを今初  
めて知った、いえ会話から気づいたって感じね。トオヤマナルヒト」

主教の声に疲れが見えた。

だがそれは遠山も同じだ。

「あー、なるほど、そついうことが。……いやでも、それでもやば  
くね?」

つまり、この女は限られた地域にしか存在しないとは言え教育機関の全ての情報を握り、それを全て覚えて認知していると言う。

それはもう人の領域ではなく、パソコンか何かの仕事だ。

「それくらい出来て当然でしょ。私の商売の仕組みに気付いて邪魔するような存在なんて教育を受けた人間以外にありえないんだからまあ、そんなこと今はどうでもいいわ」

遠山の動揺をよそに主教がそうなんのこともないように言い捨てた。

「肝心なのは、教育機関にいたことがないはずの人物が、少なくとも大学卒業者と同じ程度の教養をもってこの場に存在することよ。おまけに教会が3紀に渡って秘匿しているものまで知っている。…ありえないのはあなたのほうだわ」

葉巻の灰を崩し、深く吸う。

主教のその姿は絵になりすぎる。

「……なるほど、帝都にしか大学がないのは、知識層を庶民にまで広げさせないためか？」

帝都、この国が帝国と呼ばれてるのならそこはおそらく首都なのだろう。

そこにしか教育機関がないということはつまり、そこに住める力のある富裕層や特権階級にしか教育を施す気がないということになる。

「それ、その考え方。大学において国富論を学ばないとその視野は持てないはず。奴隷上がりの冒険者として考えられない思考と教養、あなたほんとに何者なの？」

「冒険者だよ、パン屋を開業しようとしてるただの冒険者さ」

言いながらなんとか平静を取り戻そうとする遠山。しかし未だ混乱の中。

主教が何を言いたいのかわからない。

自分が感じている違和感があともう少しのところではっきりしない。

「不可解な言葉、深い教養を持つ癖に時たま散見される常識知らずな行動、発言。……本当に頭が痛いけど、私は今、あなたの正体に對して1つの仮説を作れた。答え合わせ、してもいいかしら」

「答え合わせ？」

「あなたは、少なくとも人類大陸の人間ではない。未知大陸、もしくはそう、もっとずっと遠い所からやってきた異分子そのもの……  
違うかしら」

「あー…… どうしてそう思う？」

「ちくはぐなのよ。あなたという人間を説明しようとしても何も理屈が通らない。庶民階層ではありえない教養を持つくせに帝国の常識を知らない。ああ、でもそうね、皇帝の名前。今ここでそれを言えれば話は変わるわ。言えるかしら……」

「……………」

固まる。知らない、そんなの知るわけがない。遠山はまだこの世界に来て2日目だ。



「……言えないわけね。はあ、最悪。全部筋道が通んのよ。あなたが帝国でも王国でもない、私たちが認知していない所から迷い込んだ存在だとしたら、竜への認識がずれすぎているのも説明がつく」

固まる遠山を見て、一際大きなため息を主教がつく。

葉巻を一本吸いきり、吸い殻をスヴィの差し出した灰皿へと捨てる。

俯き、少し黙ったあと主教がボソボソと呟き始めた。

「……いや、待てよ、確か学院の初代学長が書いた論文…… 帝  
国のヘレルの塔の天辺、王国はマーヤジーア樹海の奥底…… それ  
はどれもその入り口であるという」



「異世界」

「っ……」

理解出来なかった。遠山にはなぜ今その言葉が主教から放たれるのか。

隔絶した知性が導いた結論はしかし、的中していた。

「思い出したわ。晩年狂ったとされている彼女の認知されなかった論文。”天辺と穴の底への考察” 魔術学院、初代学長 ウィルラネス・ミッド・ラークの遺した論文にて登場した言葉よ」

淡々とつぶやく主教はそこで言葉を区切る。

遠山の顔を見つめて、また息を吐いた。

「やめてよ、トオヤマナルヒト、そんな真顔になるのは…… あ  
あ、頭痛いわ、ほんと」

「……驚いた。シャーロックホームズと喋る人間の気持ちがあつた気分だよ」

マジかよ。こいつ。

もうそれしかなかった。

本当の天才、ほんとうに頭が良い人間というのはこういう女のことなのだろうか。

遠山は駆け引きとかなんやらかんやらを全て忘れて、目の前の女の知性に感服していた。

「誰よ、それ」

「イギリス、コナン・ドイルの作品の登場人物さ。アンタみたいな化け物並みの頭を持つ人間の名前」

「イギリス…… どういう意味の言葉？」

「国名。国の名前だ。俺のいた世界にはそれこそ数えきれないほどの国があった」

「もう否定する気もないってこと？ あなたは、その、イカれた結論だけど、異世界人ってことでいいのかしら」

「俺から見たらアンタらが異世界人なんだけどな。まあ、その認識で間違いないと思う。俺は俺のいた世界で死んだ。たしかにそれは覚えてる。でも、なんか妙な声が聞こえて、気付けば馬車の中、そこでラザールと出会ってなんやかんや、ったわけだ」

「自分で言ってるてなんだけど、ほんと頭痛くなるわね。うん、でも、今はそういうことにしましょう。ていうかあなたという人間を理解しようとした時、異世界？ 私たちとは異なる歴史を歩んだ世界の人間って認識すれば全て説明つくのよね」

「アンタほど頭がキレるのも考えもんだな。色々苦労しそうだ」

「ええ、今まさに苦勞の種がドヤ顔でふんぞり返ってるしね」

主教がふっと、力を抜いて笑う。

「ラザールはこう見えて腰が低いぞ？」

遠山は隣で眠り続けるトカゲを見て、答えた。

「アンタのことよ、竜殺し。……………一つ、聞いていいかしら」

「答えられることなら」

何を聞かれるか、そう身構えた遠山にかけられた質問は意外なも

ので。

「……あなた、死んだって言ったわよね。怖く、なかったの？」

その言葉を主教が口にした時、スヴィが一瞬、唇を噛んだ。

「意外だな、もっと別の、俺のいた世界のこと聞かれるかと思ったよ」

「あー、正直、あんま興味ないのよその辺は。私は学者や探検者でもないしね。あなたがこことは異なる世界から来たっていう認識さえあれば交渉には充分。異世界とやらが実在しようとしまいとどちらでもいいの。それで、答えてもらえたら嬉しいのだけど。死ぬって、どんな感じなの？」

さらさら答える主教、しかしその質問は変わらない。



死とは、どんなものだったか。

それを主教が遠山へ問う。

「……冷たくて、重くて、眠たい感じだ。ゆっくり、それでも確実に自分が自分の身体を動かせなくなる感じ」

正直に答えた。

あの時、ダンジョンの中で死ぬ間際に感じていた全てのことをそのまま言葉にする。

「……怖かった？」

「っ」

主教の呟きは、今までにないほど頼りなく、か細い声だ。スヴィがその声を聞いた瞬間、目を逸らしたのを遠山は見逃さなかった。

「……いや思ったよりも怖いとかはなかったな。ダンジョンに酔ってたのもあるけど」

「誤魔化すことはせずに全て正直に遠山は答える。」

「なぜかそうするべきだと感じた。」

「そ……冷たくて、重くて、眠い、か」

「ああ、でも、最後の最期には確か、たのしかった、って感じだったけどな」

何気なく、遠山はそれをつぶやいた。

たしかそんな感じだったはずだ。

ふと、主教を見ると、ぽけっと口を開いて固まっ

「……ふふ、なにそれ。うん、そう、あなたいい人生を送ってたのね。最期にそう思えるんなら上出来なんじゃないの」

脱力して、主教が笑う。

「ま、ありがとう、正直に答えてくれて。参考になったわ」

「ああ、どうも。話がだいぶ逸れたな。ま、そんなこんなというわけだ。俺は本当にこの国どころかこの世界に戸籍やら足掛かりがない。でも早めに拠点が欲しいわけよ。オープンワールドゲームでも家とかすぐ買うタイプだから、俺」

「所々話を通じないのはもう異世界人だからって理由で納得してあげるわ。……あるにはあるんだけどねえ…… 立地がいいのよ、商業区にも近くて面積も広い、工房の職人が設計、制作全てやってくれて、おまけに家の骨組みは全て王国産の木材を使ってるし」

指を揺らしながら主教が言葉を続ける。

緩慢な物言い、どこか勿体ぶった喋り方だ。

「回りくどいな、何が言いたい？」

「お、か、ね。少なくとも頭金で…… そうね。白金貨5枚は欲し

いところなの。払えないでしょ？」

ふふ、と笑う主教に遠山が目を細め、声を低くした。

「……がめつさも過ぎると毒だぜ、主教さま。何も家賃を払わないって言ってるんじゃない。お互い少し歩み寄れねえかって話だ」

ふっかけられている。遠山はその鋭い目で主教を睨む。

「あなたが異世界人だろうとなんだろうと、お金をまけることはいわ。誠意とは金よ、冒険者」

平行線は変わらないらしい。

埒が開かない。

遠山は違和感を押し込み、自分のカードを切った。

「……発酵のことを隠して大儲けしてんだろ？ 祝福税とは考えたな。この世界の風俗についてまだ理解と勉強足りてねえが、ギルドで振る舞われてた料理、主食はおおかたパン、麦酒。全部発酵が絡んでるもんだ。さぞ大儲けしてることだろうよ」

言外に、その秘密をバラす。と脅してみる。

ちて、どじ出る？

違和感は、やはりまだ消えない。

「……あら、あらあら。あなたどうやら1つ勘違いしてるわね、その言い方だとまるで発酵を天使の祝福だと嘘をつけて世に広めるみたいじゃないの」

「いや、その通りだろうが。微生物の代謝活動こそが発酵ってアンタも理解してるんだろ？」

「は、はは、なる、ほ、ほど。なるほどなるほど。そういうこと。トオヤマナルヒト、やはり私の理解とあなたの理解には大きな隔たりが存在してる」

「なんだと」

「その話だと、あなたの世界の発酵ってほとんど仕組みが解明されてるみたいね。微生物を認知出来るってことは学院のような魔術式を扱える勢力もいるのかしら」

「……俺らの世界では魔術やらなんやらは実在しない、空想だ。ま、ダンジョンやら怪物種やら遺物やらが存在したんだ。秘匿されてるだけかもしれねえけど」

「OK、魔術式ではなくそれに類似するなんらかの方法で発酵の仕組みを理解したわけね。ふ、む。ギムキョウイク……もしかして義務教育？……え、なに、教育を義務づけてるとかさそんなこと言わないわよね？」

「悪いがその通り。中学生……15歳まではみんな一律で学校に通うことになるな」

「ワオ、イカれてるわね。王族や皇族や貴族の権威は？ どうやって社会態勢を維持して……っとまた話が逸れたわ。私のいけない癖ね」

「何を言おうとしてる？」



「認識のすり合わせよ。あなたの言う発酵の仕組み、たしかに正解、その通り。でも、それは半分だけ、教会はね、何も祝福税のためだけに真実を隠しているわけじゃないの」

「は？ 嫌気性とか細かい話しようとしてんのか？」

違和感がいよいよ形になってくる。

自分はやはり、何かを見落としていたのだ。

遠山は気づかずうちに唾を飲み込んでいた。

「違うわ、そういう小手先の話じゃなくてもっと根っこの話。……  
天使は存在するわ、そして彼女の祝福もまた存在する」

「あー、教会の教えの話か？」

「いいえ、シンプルな話よ。だいたい100か、150くらいかしら？」

「なんの数字だ？」

唐突に言い表された数字。なんの数字か予想もできない。

「帝国暦前、第三文明の紀元前に存在していた人類国家の数。どのくらい続いたかも定かでない、なんで始まったかも定かでない戦乱の時代。数々の国が生まれて滅んでいったわ」

「大戦…… 世界大戦？」

「あら、センスの良い名前ねそれ。ええ、数多の英雄、数多の伝説が争い殺し合った時代、最終的に残った2つの人類国家、それが帝国と王国」

「帝国と王国がほかの国を滅ぼしたのか？」

「まあ何個かはね。勇者もいくつか国を滅ぼしてたし。そもそも帝国も王国も大戦期に存在した複数の小国が合併してできた新興の国だからね。まあ、帝国には竜が、そして王国には勇者がいたのも生き残れた要因でしょうね」

「それが発酵となんの関係があるんだ？」

嫌な予感がする。しかし、遠山が質問をやめることもなく。

「紀元前末期、帝国と王国以外にもそこまで生き延びた人類国家はあったの。光の国ソーアマル、最初の聖女の生まれ故郷、ラーナ公国、勇者パーティ”斥候”を生んだ国、フォール。ねえ、トオヤマナルヒト、これらの国がどうやって滅んだのか想像出来るかしら？」

「戦争だろ？ 帝国と王国しか生き残らなかったんならそう言つてとじゃねえの？」

「いえ、答えは簡単。帝国と王国以外の国で全ての”発酵”、いえ、微生物の活動が停止したから滅んだの」

「……………ひん？」

さりげなく言われた言葉に、遠山は首を傾げた。

活動が停止？

何を言って……

遠山の困惑をよそに主教の話は続く。

「あら、聞こえなかったの？ ある日、麦酒が作れなくなった。パンも膨らまない、チーズも固まらない。そして次に家畜が死んだ。牛や馬や羊、草を食んで生きる牧畜が死んだ」

淡々と、物語を読み聞かせるかのように主教が唇を動かす。

「次に、食べ物が腐らなくなった。初めはみんなそれを喜んだ。でもすぐに異変が起きた。赤子がみな、生まれてすぐに死ぬようにな

った。次は大人も。誰も病にかからなかったのに、急に倒れてそのまま死ぬようになった」

「お、おい」

なんだ、それ。遠山の違和感が一気に襲いかかってくる。

予想だにしない話はそれでも続く。

「そして決定的なことが起きる。死人が土に帰らない。死んだ家畜も人も死骸が土に還らない。埋めても埋めても肉のまま、死んでも死んでも、人のまま。廻り巡り続けるはずの仕組みがいつのまにかなくなつて」

主教の言葉は事実だけを伝える。

教会が保存した世界の秘密を惜しげなく。

「火葬しても、火葬しても、灰や骨が土に帰らない。天使の祝福が消えたから、天使がそれに飽きたから、天使がそれらを選ばなかったから」

「いや、それ、微生物が死骸を分解しなかったのか？ 待て、それがほんとだとしたらその国には今でも死骸の山が……」

遠山の言葉に主教が首を横に振る。

「天使に見捨てられた哀れな国と人間たち。しかし、誰よりもなによりも優しい竜たちは天使の行いを酷く罵った。見捨てられた死骸は炎の竜が焼き尽くした。見捨てられた国土は水の竜が世界の隅に押し流した。もとより竜たちはそのバランスを保つために存在するのだから」

主教が告げる話のスケールがいまいち掴めない。

遠山は黙って話を聞くだけ。

「……天使教会に遺された歴史書の一文よ。発酵やら微生物の仕組みも全て教会は把握してる。でもそれは天使様の意向によって左右される仕組みってこと」

主教がまっすぐ、異世界人が遠山鳴人を見つめて。

「祝福つてのは嘘でもなんでもないのよ」

「……いや、なんだそりゃ、発酵にそんな何かの存在が介入するなんて」

違和感の正体はこれだ。



発酵の裏側に何かが気持ち悪く関与している。

「ここではそれが普通なの。たしかに発酵は微生物の働きによるもの。パンや酒もそれで作られる、ええ、正解よ。でもね、その仕組みを回してるのは私たちが天使様と呼ぶ得体の知れない何かのおかげなの」

「待て、その話がほんとなら微生物の働きをその天使とやらが操作できるわけか？ いや、そんなもんいるわけ……」

「いるのよ、姿も声も誰も認知出来ていないけどたしかにそれはいる。私たちの世界はね、たまたまそういう理解を超えた存在のきまぐれで成り立ってるの」

2本目の葉巻を啜えた主教が天井を仰ぐ。

「天使教会の責務はシンプル。天使様の威光を世に広めることで誰

もそれに疑念を抱かないようにすること」

その教会はもとより、それに触れる人間を少なくするために。

愚かなヒトが天使を探し求めることがないようにするために作られた組織。

「愚かな好奇を天使様から遠ざけて、世界の安定を図るのが我らの使命ってわけ。下手にアレをいじくって世界が滅びましたなんて笑えないでしょ？」

訳の分からないモノが確かにいて、訳のわからない理由で、気まぐれに自分たちを滅ぼす力を持っている。

そんな事実を世界から隠すのが彼女らの真の使命。

「いや待て、おかしいだろ。天使とやらの存在を認知出来ないのに、なんでそれがここまで強い宗教、いや統一宗教になつてんだ？　そもそもその微生物の死滅が天使とやらの仕業つてどうやってわかるんだよ」

「そこよ、トオヤマナルヒト。それが答え」

「あ？」

「その存在が定かでないのに、帝国に生まれた全ての人類種は天使様の存在を信じてしまう。理屈ではなく魂の部分でわからせられる。それはたしかに存在する、それはたしかにどこかにいるつてね」

「そんなアホな……」

気味が悪い。

そんなことありえない、と言いたいところだが、遠山自身の存在もまたありえないものなのだ。

終わったと思った人生の続きがあった。異世界で確かに始まっている欲望の続きがあった。

そんなことがあったのだ、天使という存在をまた強く否定出来ない。

「信じざるを得ないのよ、私達は生まれた時から天使様の枷をはめられてる。信仰を彼女へ向けるように出来てるの」

「……なんだ、そりゃ」

どこか諦めを含んだ物言いだ。

遠山はそうつぶやくしかない。

「ふふ、知りたくなかったでしょ？ そう言うことが出来る存在がいる、言えるのはそれだけだけど、天使様の証明をするにはそれで充分。それが初代主教の考え方。世は全てこともなし。私たちの理解を超えた存在が気まぐれを起こさないことを祈るしかないのよ、私たちはね」

「……………キリストもびつくり、だな。きな臭いことこの上ねえよ。俺の世界にもそりゃエキセントリックな神様はたくさんいたが、そこまで気味悪いのはなかないないぜ」

「うん？ カミってなに？」

「oh……マジかよ。まさか、神様っていう言葉、いや、概念がない感じ?」

きな臭い、明らかにこの辺は異常だ。

そもそも突っ込めば、”天使”という名称すらおかしいことになる。

神がないのだ。ならば天使とは、いったいなんの使いのつもりなのだろうか。

「どこかで聞いたことがあるような…… ニュアンス的に天使様のことを言ってるのかしら」

「……ああ、ここまで気味悪い存在じゃないけどな」

「どこにでも似たような存在はいるものね。さて、それで？ トオヤマナルヒト。発酵の事実を知ったあなたはそれで私を脅すのかしらっ」

「……いや、やめとくよ。想像の10倍キモい話だったんでこれ以上深入りしたくない」

藪をつついたら蛇どころか、バズーカが飛んできたようなものだ。

遠山は早々に現代知識無双を諦めて、発酵での脅迫を諦める。

どう考えても厄ネタ。気軽に近づいていいものではない。

「懸命かつ聡明ね。仕事が少なくなっただけ助かるわ」

「そりゃ何より」

【スピーチ・チャレンジ終了】

一部成功につき教会との関係が”共同歩調”に変更

”発酵”に関する最深度情報を取得

”大戦”に関する非公開情報を取得

隠しクエスト

”彼女はだあれWho is she”発生

クエスト目標

”天使”についての情報を集める

非常に危険なクエストです。進行非推奨】



流れるメッセージに目を向け、うへえ、やべえと焦りつつも遠山は考える。

さて、どうしたものか。

ダメもとで切ったカードは予想よりやばい代物だった。

手札にあったのはトランプに勝てるワイルドカードではなくて、初版の傷なしブラックロータスだった。正直扱いに困る。

「まあ、そうね。口止め料も兼ねて頭金は白金貨4枚……いえ、4枚と金貨50枚にまけてあげていいわ。これ、すごいことなのよ？」

主教が少し態度を和らげたのか。値段が少し下がった。

それでもまだ高すぎる金額のはずだ。

「うそ…… 主教さまがお金をまけた……」

「ええ…… 焼石に水う……」

目を丸くするスヴィとは裏腹に遠山はそれがめつさにうんざりする。

「ちょっと、ちょっとなにその反応。感謝して欲しいのだけれど。竜を脅しに使わなかったこと、発酵の真実を脅しに使わなかったことを評価した上での判断なんですけど」

「いせしよっぴは過かぬ」

「破格の値段よ。そもそもあの辺の土地はこれから”竜祭”で必ず値上がりするんだから。それを貸してあげるって言うだけでもどれだけ…… どれだけ私と出会える金貸ちゃんを逃すことかって……」

「え、うそ、泣いてる？ 泣いてんの？ マジ？」

言いながらえづき始めた主教を見て遠山がドン引きする。

やべえこの女、はやくなんとかしないと。

話し合いが行き詰まり始めた、そんな時だった。

「ふむ、なるほどなあ。だがの、銭ゲバ。そもそも、その竜祭もナルヒトがオレを殺したおかげで開けるものよな。それを考えればもうちこっ」と値段の方は考えてもいいのではないか？」

威厳と幼さが同居してる不思議な声だ。

その声を遠山は知っている。

「あーに、言ってるのよ。竜関係でうちの教会がどれだけ困らされてるか。そもそも教会騎士だって竜の影響でバカになってるし、あのワガママドラゴンに私の寿命がどれだけちぢ……ち、ち、……地上におわしめしいかなる生物よりも美しく偉大な、竜の巫女とお話しできるだけでもこの卑小な身には過ぎた栄光です」

そのままその声の流れで適当に答えていた女主教はしかし、言葉の途中で顔を真っ青にして無理矢理な軌道修正をかました。

ついでに葉巻を手で握りつぶし、誰に言われるまもなくソファから降りて片膝をつき始める。聖女も慌ててそれに倣ってその場に片

膝をついて。

清々しいほどの手のひら返し。

主教にそこまでさせることが出来る存在は、帝国広しといえど彼女くらいのもだろう。

「ふかか、貴様、よくあそこから軌道修正できたの」

「あ、ドラ子、おかえり」

炎で蓋作られたゲートが部屋に開く。

そこからすっと現れたのは長身かつ、黄金比の肉体を持つ金髪の美女。

隻眼の蒼い眼に、外ハネした豊かな金髪。

遠山の言葉に、ニカリと太陽の笑みを返すその女。

「うむ、ただいま、ナルヒト」

蒐集竜、アリス・ドルル・フレアテイルが帰還した

「おっふ、オワタ」

主教が天につぶやく。誰も聞いてはくれない嘆きを。

「ふむ、先程なんぞや、ワガママドラゴンなる言葉が聞こえたが…  
… 主教、それは誰のことかや」

遠山の背後に現れたドラ子が、首をかしげる。声色は穏やか、そ

れどころか美貌はたしかに笑顔を象る。

しかし、その目は笑っていない。縦に裂けた美しい海溝を思わせる瞳孔が主教を捉えていた。

「え、お前のことじゃー」

「我が君ドラゴン！！ 我が君、ドラゴン、そう！ 蒐集竜！ あなた様のごとにございますれば！ ね！！ ね！！ トオヤマ異端審問官！」

遠山の言葉に上乘せされる主教の大声。先程までの雰囲気全てかなぐり捨て叫ぶ彼女は、生きる力に満ち溢れていた。

「あ、はい」

遠山は完全に勢い負けする。すげえ軌道修正かましたなこいつ。

「ふうむ、なるほど、知らなんだ。貴様がそれほどまでにオレのことを崇拜していようとは。凡百のヒトにそんなことされてもなんとも思わんが、貴様から拝されるのは悪くないぞ、銭ゲバ」

「は、も、もったいなきお言葉で」

「時に銭ゲバよ。まあ、なんだ、そのトオヤマナルヒトはオレの友人でな。家もなく身元も定かではない。だがオレが保護しようとする手元からするりと抜け出してしまう困った奴なのだ」

「うなぎみたいな扱いやめてくれる？」

すぴーとため息をつくトリア子に遠山がぼやく。



「は、は、蒐集竜様のご苦心、お察し致します……」

主教が恐る恐る言葉を漏らして。

「ほう！ そうか！ 察してくれるか！ かか！ 良い良い、くるしゅうない。まあ、そこでだな、まあ友としてやはりナルヒトにはせめて家くらい早々に持って欲しいのだ。住所が定かでないとおちおち文通も出来んな」

「は、文通…… ですか？」

「なにか問題でも？」

ドラ子が主教へ向けたその声は、遠山に向ける高いものとは違い、どこまでも低い竜としての声色で。

「いいいいえええ!! あるわけない! あるわけございませんともー!」

床焦げるんじゃない? と言いたくなる勢いで主教が絨毯に額をこすりつけて首を振る。

「なら良い。のう、銭ゲバ。無論タダとは言わん、家賃もきちんと正規の金額を支払わせてかまわん。オレの友の自宅を都合してくれるか? ん?」

「……ドラ子」

思わぬ竜の気遣いと手助けに遠山は少し感動していた。ティラノサウルスが友達になってくれたような気分だ。

「あ、が、ぎ、わ、ぐ、た、も、もちろんに、しごきますねば……」

「すげえ、今までで1番苦しそうな顔してる」

遠山がどれほど揺さぶっても吐き出せなかったぐきぎ顔で、主教が確かに了承した。

「……トオヤマ異端審問官、竜の巫女のありがたいお言葉と、教会の竜への敬意を表す印として、あなたに、商業区の丘にある住宅を貸し与えます…… 頭金は……」

ぐきぎ、主教が顔中に血管をうかばせて遠山をみる。

なんか、ごめん、すまん。

遠山はもう何も言えなかった。

「頭金？」

ドラ子がまた首をかしげる。

やはりその目は笑っていない。

ジュラシックパークの恐竜が人間をみるような目で主教を眺めていた。

「ひびいー！？ 頭金は、いらな……いらな、い、いいいいいい  
…… キギキギキギキギ」

ぐぎぎマシンと化した主教が、言葉を引き絞る。

「ドラ子、うちのボスが憤死しそうなんだが」

遠山が思わずつぶやいた。

「ふかか、ここだけの話、オレはあやつがああいう風に苦悩する姿を見るのが嫌いではないのだ」

そつと、耳元に寄せられたドラ子の顔。

綺麗な声には確かな愉悦が。

「トストドラゴン……」

「ドラ子と呼べ、ナルヒト」

「アリス、じゃだめなのか？」

ピロン

【技能 竜殺し（意味深）発動】

「ぎゃう…… ナルヒトはイジワルだ」

ドラ子がぱつと、顔を逸らし、一瞬顕した尻尾をくゆらせあどず  
なる。

竜と、その竜殺しがぶざけ合つ。

「ヤチンー!!」

「うん？」

ヤチン！

引き絞られた言葉が部屋に響いた。

竜と竜殺しが互いに首を傾げて。

「た、だし、家賃、家賃だけは正規の金額を、w o w 支払ってもら  
うわ、もらいますわよ、ひと月、金貨4枚、いや、5枚…… 例え、  
我らが竜の炎に焼かれようとも、これだけは譲らないiiiiiiii」

片膝のまま、血涙と鼻水を垂れ流しながら言葉を絞り出す主教。  
なんか1人だけクライマックスになっていた。

「……………ふかか、払ってやれよ、ナルヒト。あやつに金を払わんと竜大使館の宝すら徴収されそうだ」

その異様は竜からすら譲歩を引き出し。

「あ、うん。すげえな、血の涙流しながら家賃請求する人初めてみたわ」

遠山は、あ、こいつやっぱやべえやつだね。と主教の人物像を定めていた。

【スピーチ・チャレンジ（竜） 成功！

自宅を借りる権利を手に入れました。

拠点を手に入れたので新たなるクエストが開始できます。



サイドクエスト ” 石窯に火を灯せ ” 発生

クエスト目標 パン屋を開業する【

46話 スピーチ・チャレンジ VS カノサ・ティエル・ファイル  
ド（後書き）

TIPSE スピーチチャレンジには複数のアプローチがある。

STR値による補正の強い”威圧”など

POW値による補正の強い”ハツタリ”など

INT値による補正の強い”説得”など

噂ではモラグ・バルという言葉には強い威圧の呪いが込められているとか。

モラグ・バル（威圧）

なんて、恐ろしい言葉だろうか。

## 47話 オタクと竜

…  
…

「教会でのあれやこれやが終わったのち、帰路。」

天使教会送迎馬車の中にて

「む、このナババ、なかなかの滋味よな。ナルヒト、これ食ってみよ、美味いぞ、オレの口に合うほどにな」

一口でドラ子はその湾曲した棒状の果肉を頬張る。

馬車の客室に備えられたカゴには遠山にも見覚えのある果物がたくさん飾り付けられていた。

「ナババ？ え、バナナじゃん」

差し出されたそれ、黄色い皮につつまれた見覚えのある南国の果物。栄養豊富かつ、安くて美味しい、みんな大好きなバナナだ。

「む？ ナババだ」

ドラ子がキョトンと遠山の呟いた名前を訂正する。

色々聞きたいことはあったが、キリヤイバの使用などで身体には地味に限界が来ていた。遠山は差し出されたバナナ、ナババを素直に受け取る。

「……まあいいや、そんじゃ遠慮なく……」  
「うっま」

ほわり。皮をむいた瞬間、熟した甘い香りが遠山の鼻を直撃した。口に含む。

滋味だ。まろやかに広がる甘味、口から鼻に満ちる豊か、そしてフルーティな香り。

噛み締めるたびにエネルギーが体に満ちていくような感覚を覚える。

あつというまに果肉を食べ終えて一息つく。

すげえ美味しかった。この世界の料理の味付けはあまり合わないが、素材はむしろいいのかもしれない。

「帝国の南部領の離島でしか採れぬ貴重な果物だ。銭ゲバめ、なかなか稼いでおるのう」

皮ごと食べるドラゴンスタイルで、ドラ子が大口を開いてバナナを飲み込むように食べる。

金髪の映える長身の美女だ、普段は鋭い眼をにんまりと綻ばせて果物を食べる姿は不思議な可憐さを醸し出していた。

「ふかか、それにしてもあの銭ゲバの顔、今思い出しても愉快なものよな！ ナルヒト、貴様相当にアレとやり合っておったの」

「やり合ったつっても、終始一歩先行かれてた感じだったよ」

ゴロゴロ、ガラガラ。

硬い座席は時折、石畳からの衝撃をもろに伝えてくる。

遠山鳴人は乗り心地の決して良いとは思えない馬車の中、隣に座る竜の言葉に返事をした。

「ふかか、そう拗ねるでない。なに、あの銭ゲバは銭ゲバだが、能力を見ればあの女に勝るものなどそうそうおらんよ」

「やけに高評価だな」

「当然だ、オレのいる街であやつは教会のトップとして存在し続けているのだぞ？ 優れた人間でなければとうにオレの逆鱗に触れておるわ」

ふふん、となぜか得意げに鼻息を吐く金髪美人。

「寛容なんだか不寛容なんだか微妙にわかんねーなほんと」

「ふん、オレほどに寛容な竜がいるものかよ。む、其奴はまだ眠っておるのか？」

遠山の言葉にコロコロ表情を変えながら反応するドラ子。ふと、対面に座りながら眠り続けるラザールを見つめた。

「あ？ ああ、さっき馬車に乗せた時一瞬目を覚ましたけど、お前の顔みた瞬間、夢だ夢夢、とか言いながらまた寝たぞ」

あれは面白かった。目が覚めたと思ったら、ドラ子をみた瞬間、ふっと笑い崩れ落ちたラザールの姿を思い出す。



自分で自分の首を絞めて落ちたようにも見えたがきつと気のせい  
だろう。

「ふかか、リザドニアンは飛竜とも同じく我らの存在にすこし近  
い存在だから。他の種族よりもオレへの理解が早くて助かる」

「どづいつ意味だ？」

ドラ子の言葉に遠山が首を傾げた。そういえばさっきから徐々に  
ドラ子のいい香りが強くなってきている。

ジリジリとこちらに近づいているよつな。

「じつじつとだ」

柑橘の香り、さらけつゆく。

「むぶじ」

頭を顔に押し付けられた。ドラ子の方が身長が高いため上から金の髪に埋もれるような感覚だ。

「……聞いたぞ、あの老竜から。貴様、あの女の頭を撫でたそうだな」

「べ、ドラ子、さん。お声がとっても怖いのですが」

金の海から抜け出し、頭をぐりぐり押し付けてくるドラ子へ遠山が言葉を返す。

「貴様とあの老竜にどんな因果があるかは知らぬ。だがな、あやつすんごいマウント取ってくるのだ。おじいさまと同じ始祖とは思えぬ幼稚な奴なのだ」

「いや、さて、因果とか言われてもあいつのことマジで知らんぞ」

「……不思議だ、貴様の言葉に嘘はない。だが、あやつからは濃い貴様の匂いがしたのだ。まあ、よい。今は、よいのだ。……ん」

おらにぐりぐり。まるで己の香りを遠山に擦り付けるように、ドラ子は自分の頭を遠山に押し付ける。

「むぶ、なんすか、ドラ子さん。やけにキューティクルのある髪の毛に埋もれるんですが」

「……奴にもしたのだろう。なぜ、オレにはせぬのだ」

「は？」

奴にもしたって、なんだ。ドラ子は何をしたいのかわからない。

遠山が対処に困っていると、

「む、むにゃ、ナルヒト、全知竜、頭撫でた、むにゃむにゃ」

ラザールだ。うつむいて眠り続けるラザールが、何かをモゴモゴ  
呟いた。

「え、ラザール？ 今喋った？」

起きているのかい？ なんかよく見れば顔は汗まみれになっ  
て、瞼はピクピク動いてるような。

……起きてるのかい？

「……」

「……」 まさかばねてないよでも、むへむへ」

明らかな寝たふりをかますラザール、それに文句を言おうとした瞬間、さらに顔に押し付けられるいい香りの頭。

「……いや、なのか？」

ドラ子の表情は見えない、しかし髪の間隙から覗く耳は赤く染まり、その声は少し震えていた。

「いや、そうじゃなくて、……頭撫でればいいのか？」

根負けした遠山はラザールへの追及を諦める。あの野郎、全部こっちに押し付けて寝たふりで行く気だ。

「……………そうだ」

だが寝たふりトカゲの言葉は正しかったようだ。コクリ、頷くドラ子。

遠山はそのまま、押し付けられた頭を撫でる。

ふわり、弾力のある髪の毛を押すとポヨンと跳ねる。

指を髪の毛の合間に、梳くように動かした。

「……ふかか」

正解だったらしい。ドラ子が満足そうに笑う。

頭を撫でるたびに、奇妙な笑い声と柑橘の爽やかな香りが強くなっていく。

「そういや、あの変態ドラゴン、人知竜だっけ？ アイツは？」

「む」

「なんだよ」

「なぜあやつのことを気にするのだ」

じとーっ、と細められた眼で見つめられる。

深い蒼色の瞳に、縦に裂けた瞳孔、まるで底の見えない海溝に覗かれているような感覚だ。

「いやタイムン張ってくるわつつって2人で消えて1人が帰ってきたら残りのやつどうなったかは普通に気になるだろ」



「む、そういうものなのか。……忌々しいことにオレは奴の命の1つも奪えなかった。決闘用の異界の中でのらりくらり千日手を食らってな。つかつとなつたので竜に変わり、焼き尽くしてきたのだ」

「え、焼き尽くしてきたのだってあんたそんな」

そんなテンションで言うのか？

竜の価値観にびびりつつ遠山は話を聞き続ける。

「ふん、言つたらう。死んではおらぬどころか命の1つも奪えなかった。オレの焰で溶けておるだらうが、すぐにもとの形に戻るだらうさ。あやつはオレの…… いや、なんでもない」

「……どっちもやばいってのだけはわかったよ」

「ふかか」

ドラ子が小さく身体を震わせた。

「なんだよ」

「いや、少し面白くてな。貴様がそれをいうか、ナルヒトよ」

馬車の中、遠山とドラ子が言葉を交わし続ける。狸寝入りを続けるラザールはさらに汗をダラダラ流す。

そして、馬車の御者台に座る彼女たち。

天使教会最高指導者とその側近も、馬車内の竜と竜殺しのどろろがズレたやりとりを盗み聞きしていた。

「あー…… ツッコミてえ」

「主教サマ、よそ見するとあぶない、よ？」

ドラ子に御者として見送るように圧力をかけられた主教と聖女、彼女たちの駆る馬車が冒険都市を進んでいく。

……  
……

「ほう、ここがナルヒトの仮の宿か！　かか！　予想通りのボロ宿よな！」

「なんでテンション高いんだよ。おい、ラザール、起きろ、ついたぞ」

馬車の窓から外を見る、バナナ食べたりドラ子を撫でたりしてるうちにどうやら宿屋までついたようだ。

「……あ、ああ、おっと、すまない眠っていたよ。蒐集竜殿は……  
オウ……　夢じゃないわけだ」

遠山の呼びかけに白々しい反応しつつ、ラザールが目を覚ます。  
ドラ子を見た瞬間、額に手をやり俯いた。

「かか、リザドニアン。久しいな。帝国の総力をかけた追跡を躲し

きつたその隠密の腕、褒めてつかわす」

「こ、光栄だ、竜の巫女殿。あなたの名前は俺の故郷でも知らぬものはない」

竜の言葉に、トカゲ男が居住まいを正す。

恐怖こそしていないが、その声色は硬い。

「かか、よいよい。……貴様、やはり中々に賢いのう。……よくあの馬車の中で狸寝入りを続けてくれた。だが、貴様は何も見えていないし、聞いてもない、よいな？」

遠山に聞こえないよう、ドラ子がラザールに近づき囁いた。

穏やかな声だった、なのに有無を言わさぬ迫力がそこにはあって。

「は、はは。御身の言つ通り、そ、そもそも俺は眠っていましたしね、何も知らないし、何も聞いちゃいない」

ぶんぶんぶん、首を縦に振りまくるラザール。その反応を見て満足したらしいドラ子はにっこり微笑んだ。

「ドラ子、ラザール、何話してんだ？」

「いや、なんでもないさ、なあ、リザドニアン、いや、ラザール」

遠山の呼びかけにドラ子が答えた。

嗜虐心、猫のように歪められた瞳がラザールを見つめて。

「あ、ああ！ その通り！ その通りだとも！ さ、さあ、ナルヒト、蒐集竜殿を馬車の外へエスコートして差し上げなさいよあんな！」

ラザールはきちんと100点の対応をとっていた。

「息子の彼女を始めて見た母親かお前は」

またしても何も知らない遠山はラザールの苦勞など知らず、先に馬車から降りて、ドラ子を先導する。

「錢ゲバ、聖女、ご苦勞であった。そう悪くない手綱捌きであったぞ」

遠山に先導され、手を取って馬車を降りるドラ子、割とご満悦のようだ。機嫌良く主教に声をかける。

「は、もったいなきお言葉に」

主教の声にドラ子はニンヤリ笑い、軽やかな足取りでお世辞にも豪華とは言えない木造の宿屋へ向かって行く。

取り残された遠山、ふと主教が御者台からこちらをじっと見下ろしていることに気付いた。

「なんです？」

視線に答えて主教の元へ遠山が向かう。

「……ストルは3日以内にはあなたの元へ届けるわ。それと仕事を



頼みたい時はまた連絡するから」

「了解、ボス。家の件は……」

「一度言ったことは曲げないわよ。契約書が出来上がったらまた呼ぶわ。竜の巫女にきちんと私の献身を伝えるように」

ため息混じりに主教が呟いて。

「承知いたしました、我らが主教さま」

「うつせーわよ。竜たらし。はあ、頭痛いわ、ほんと。スヴィ、出してちょうだい」

戯ける遠山に、うへえっと舌を出し主教が顔をしかめた。

「……あなたたちにてんしさまのご加護がありますように。トオヤ  
マ異端審問官、ラザール審問官補佐」

「それ、笑えねえ言葉だな」

「……ふふ、ひにく、だから。またね、こっちはい」

「ああ、お気をつけて聖女先輩」

不思議な雰囲気聖女の聖女が手綱を握り、馬車が去り始める。

「嵐のようなひと時だったな、ナルヒト」

「残念、ラザール。嵐はまだ立ち去ってねえ。てかなんでアイツここまでついてきてんの？ もう俺風呂入って寝たいんだけど、あ、風呂とかなかったわ」

馬車を見送っているとラザールが声をかけてきた。

「いやもうあれだ。蒐集童様関係は全てナルヒト、アンタのアレだから。俺はほら、もういいから」

ラザールがどこか投げやりにつぶやいて。

「いや遠慮するなよ、ラザール。ほら、お前なんか本気出したらドラゴラムみたいなんするじゃん。仲良くしてこいよ」

「ナルヒト、ラザール、何をしておる？ はよう、こっちに来ぬか。貴様達の部屋が見てみたい。ああ、ファランの走り狗いわくのスラム街の童たちも見てみたいのだ」

2人で色々面倒ごとを譲り合っていると、無邪気にも面倒ごとからこちらへ近づいてきた。

寂れたひと通りの少ない路地に、年季の入ったボロ宿を背景にブーツとシャツのシンプルな服装とは言え、金髪の美人はやけに目立つ。異物感が半端ない。

「……ドラ子、お前超有名なんだろ？ そーゆーやつがあんまりこんなボロ宿に来たら悪目立ちしてしまうだろ」

「む？ 何か問題があるのか？ ふむ、まあ確かにオレは意図せず衆目を集めるな。よいよい、ナルヒトがそれを嫌がるのも理解できろぞ」

「あれ、聞き分け良いな」

うんうんと頷くドラ子。あまりの素直さに少し遠山は驚く。

「ナルヒト、余計なことを言うな。竜よ、御身の寛大な言葉に敬意を」

ラザールが遠山をいさめて、ドラ子に向けて膝をついた。

「かか、リザドニアンのラザール。そう怯えるなよ。まあ、出会い方がちと過激だったのは認めるがな。さて、オレの姿のままだと目立ちすぎるといわけか、そーかそーか」

「すげえ、ドラ子がなんか俺らに気を遣ってくれてるぞ」

「普通ならありえないことだが……」

遠山とラザールはいままでにならないドラ子の反応に戸惑いを隠さず  
にいた。

「ふむ、ファランが言うには確かこうだったな…… えーと、魔  
術式仮設証明開始ー」

「うん？」

突如、平坦な声をドラ子が紡いだ。

「変質” 魔術式仮説構成、外見、声色、年齢を変質開始」

それはこの世の理を誤魔化し、侵す技術。

”魔術式”――

「おっと」

素養と特殊なエネルギー源、それだけあれば使える本物に迫る為の偽物の技術。

「世界法則への侵食開始、式名完成、  
”デイスガイズ変装」

ドラ子の紡ぐ言葉が世界を誤魔化す。

竜という存在自体が多大な魔力炉であるその性質を利用しての魔術式行使。

ある器用なメイドに手慰みに習ったそれを初めてドラ子は使用する。

それは、人と共に歩むため。それは人に配慮したため。

ドラ子自身も気づかない、竜が人に合わせた、その行為の意味を。

魔力が世界を歪ませる、竜の姿を変質させていく。光が屈折するように、ドラ子の姿が歪んでいって。

「うむ、初めてやって見たが、このようなものか？ どうだ？ ナルヒト、中々にうまいものだろう？ あの老竜の広めた技術というのが気に入らんが、まあ仕方あるまいて」

くるり、そこにはあの長身の豪華な美女はいない。



癖っ毛が目立つ金の長髪はそのままに、ちんまり小さく変わったその姿。

豊かな胸は存在を控えめに、くびれた腰はそのしなやかさをそのままに。上背は縮むも、その気品は変わらない。

深い蒼色の瞳はそのままに、クリクリしたアーモンド型の目がニヤリと笑う。美女ではなく、美少女。歳の頃は中学生か、それ以下か。

太陽の如き美女が、ひまわりのような美少女に変化していた。

「お、驚いた…… 魔術式…… 蒐集竜が、魔術式を…… それも服装も込みでの行使となるのかなり複雑な…… うん、ナルヒト？」



【技能 ” オタク” 発動】

「魔術だああああああアアアアアアアアアア、ウワアアアアアアアアア！　なんか、なんか詠唱みたいなんあったああああ！　すげええええええええええ、ドラ子、スゲエエエエエエエエエエエエ！」

ダメだ、遠山はそういうのにとてもテンションが上がるタイプだった。

友達のいなかった中学生時代は図書室の本を全てコンプリートしたほどのガチ勢だ。もちろんその中には魔法を扱うファンタジーモノも網羅されていて。

「ふふん、よい、くるしゅうない、もそつと褒めよ、我が竜殺しよ」

「いや、ナルヒトお前、副葬品を持っているのになんだその魔術への反応は」

遠山が落ち着くまでかなり時間がかかった。

……  
……

ばかり、ばかりこ。

馬の蹄が石畳を叩く。街の喧騒の中を風を運びきった教会の馬車がゆっくり進む。

「天使教会の馬車だ……」

「見て、聖女様よ、なんてお麗しいお姿……」

「主教様が御者台に座ってる、なんでだ？ 普通馬車の中だろ？」

「馬鹿、主教様はきつと聖女様に手綱を握らせてるのが心苦しいんだよ、見る、あの慈愛に満ちた表情をよ」

遠巻きに馬車を見つめる信心深い民衆は思わずその姿に祈りを捧げる。

「……主教サマ、みんなこっち、見てるね」

「そつね……ま、聖女と主教が馬車の御者台に座ってたらそりゃそつよ」

時折、民衆たちに完璧な作り笑いを浮かべて愛想を振りまきながら、スヴィに返事をする主教。

その外面は全て計算され尽くしている、自分が周りにどのような見られればいいのか、全て把握した上での行動だ。

「ふふ」

「どしたの、スヴィ」

一通り愛想を振り撒き終わった後、ケープから面隠しの薄い黒色のヴェールを取り出し表情を隠す。

遠巻きに見つめる民衆からはもう、主教の表情は見えない。そのヴェールの内側でどれだけ疲れた顔をしていても、見えないのだ。

「いえ、主教さま、たのしそうだったな、て」

「はあ？」

ヴェールの奥から素っ頓狂な声が響いた。

馬が少しその声に驚き、ヒヒンといもなく。

「ふふ、あの人。竜殺しの人とかけひきしてる主教様、まるで昔の主教様みたいだった、よ」

ニコニコ笑う聖女スヴィは温かな視線を己の主人に向けるだけ。

「……勘弁しなさいよ、スヴィ。あんなイカレポンチの業突く張りの相手してて楽しいわけないでしょ？ ああ、ほんと、今思い出し

ただけて頭痛がするわ。……家の権利まで持っていていかれるとは、ほんと、大損よ、大損」

「ふふふ、やつぱり、たのしそう…… よかったね、気の合いそうな人が味方になってくれて」

「うへえ、やめなさいよスヴィ。竜に気に入られるようなイカレ野郎よ、人畜無害の私とはとても合っわけないじゃないの」

「じんちくむがいな人は聖賢室のなかで金貨をみがいたりしないと、おもっな」

「……なんで？ 楽しいでしょ？ 金貨磨き」

キョトン、主教が首を傾げた。自分の特殊な嗜好をさも世の中の



当たり前として考えるその在り方はたしかに、誰かによく似ていて。

「うん、そういっじぶんのごとに無頓着なところすきだよ、主教サ  
マ」

「はいはい、そりゃどうも…… スヴィ、竜を実際に見たところ  
の感想なんだけど、どうかしら」

主教の声のトーンが少し低くなる。カポカポ、ゆっくり歩く馬車  
馬達の蹄の音が心地よい。

「……うん、今は無理、だと思う。でも、もしその時が来たらある  
ていどは戦えるかな？ なんとなくそんな気がする」

同じく聖女の声もまた低く。

語る内容は、天使教会の裏の使命。人類の存続、そしてこの世界  
の支配権の継続を狙うもの。

天使という超常かつ、理解不能の存在を秘匿すること、そして”竜”という理外の存在が人類に牙を剥いたときの対抗手段である。

「ふうん、竜のカウンターであるあなたがそういふんならそうなんでしょうね。ま、そんなことが起きないようにするのが私の仕事だけだ」

「しょうじき、蒐集竜さまなら時間かせぎはできると思う、よ？でも、もう一人、全知竜は難しい……」

スヴィがつぶやく。2人の竜を見定めた彼女がぼそりとつぶやく。

「相性の問題ね。あのバカ、正義のストルなら全知竜とは相性いいでしょうけど。竜殺しに持っていかれちゃったしねー」

騎士団もまた同じ。その本来の使命を覚えているものはすでにいないが、初代主教が創り上げた仕組みは今も、対竜を見越して機能している。

竜に挑むことは誉である。

平時の折も騎士達は竜に挑むのだ、その戦果は全て教会に保存され、  
れ当代の主教の竜への戦力評価に活用される。

刻まれたその概念は2000年にも渡る初代主教の令の通り騎士達  
に染み込んでいる。

それはもはや、呪いの如く――

「うそ、主教さま。わざとでしょ」

「なにが、かしら」

ヴェールの奥で悪い微笑みを浮かべていた主教が、聖女の言葉に反応した。

視線を向けることはない。カノサ・ティエル・フィールドは目の前に広がる街並みをただ、見つめたまま。

「主教さま、こうはいがストルを引き取ることを知ってた。へたなお芝居、確信してたでしょ、こうはいがストルを殺さないって」

「……どうしてそう思うのかしら」

主教は決して聖女の顔を見ない。そこには答えがあったから。

「だって、あなたもこうはいと同じ立場ならそうするから。言ったでしょ、主教さまとこうはいは似てるって」

「勘弁してよ、スヴィ。私があんなのと一緒になんて」

「同じだよ、だってあなたは私を助けてくれたんだもん」

偽悪的な言葉を、スヴィはたった一言で否定する。

銭ゲバ、守銭奴、女狐。数多の蔑称で呼ばれるカノサ、しかし彼女の行いの全てを聖女スヴィは知っている。

「……昔の話よ」

「わたしにとってはきのうのことのようなもの」

「……そ」

主従2人の間に沈黙が積もる。気まずいものではなく、ごく自然に、そしてどこか心地よい沈黙だ。

冒険都市の喧騒の中を、教会の馬車が進んでいく。

穏やかなこの時間が永遠に続かないことを彼女たちは知っている。だがそれを少しでも長くすることが使命だ。

主教が、ふと、ヴェールをまくって空を見上げた。

長い1日だった、日の傾き始めた空、あと数時間で茜色に染まるのだらう。

息を吐くカノサ。

束の間の休憩、起きている時は常に無意識を含めて金と教会のことだけを考えている彼女の数少ない何も考えないほんの少しの時間が訪れる。

「そして大抵、そんな瞬間に彼女の才は蠢くのだ。」

十字星、その秘蹟が彼女に新たな預言を示す。

ありえざる出会い、ありえざる選択、ありえざる可能性、それが生まれたことを彼女だけが今。

「ーッ、ア」

流れ込んだ情報は、光の如くカノサの血管、神経を駆け巡る。

身体の痺れとともに、小さな悲鳴をあげた。

「主教サマ！？ まさか、大主教令の時間がー」

馬車を止めたスヴィイが悲鳴に近い声をあげた。己の主人の運命を彼女もまた知っていて。

「……いえ、違うわ。もう一つの方、十字星の方よ…… かつー、ツレー、秘蹟を2つも持つてる天才はツレーわー…… ひどい預言ね、我ながら、意味わからないわ」

脂汗を浮かべながら、主教がごちる。

新たに得た預言、そのあまりの荒唐無稽さに頭痛を抱えて。



「……なにが、聞こえたの？」

「ここじゃ、だめ。戻りましょ、私たちの家に」

スヴィの問いかけに主教が首を振る、あまりにも、あまりにもその内容は馬鹿げていて。

「……はい」

「ぶちけてんのかしら、なによ、この預言……」

ぶつぶつぶやく主教、彼女の気苦労はまだまだ終わりそうになかった。

……  
……  
……

「あ！ お帰り！ おかえりなさい！ アニキさんに、トカゲさん  
！」

「アニキ！！ 無事だったか、信じてたぜ！」

「……おかえり。きちんと言いつけ通り、どこにも出ずに宿屋にい  
たよ」

ボロ宿の部屋、扉を開けた途端にやいのやいのと声が広がる。

お世辞にも広いとは言えないベッドとボロい椅子だけの簡素な部  
屋、随分長いところを空けていたような気がした。

「おう、がきんちよども、元気で何より。言いつけまで守ってる  
とほいい子すぎて言うことなした」

この宿から出るな、ラザールと共に冒険者ギルドへ出かけた時に  
彼らにお願いした内容だ。

カラスという連中と揉めた上で連れ出した子どもたち、どこで報  
復の手が回るかわからない。言いつけ通り宿屋から動かなかったお  
かげでトラブルは無さそうだ。

「ただいま、みんな。変わりはなかったか？」

ラザールの声色も少し優しい。

子供たちは3人同時に頷いた。

「ええ！ あ、そうだね、おばさま、すごく沢山のお料理を分けてくださったのよ！ 余ったからいらないって！」

「マジかよ、あのばあさん完全にいいババアじゃん」

嬉しそうに身を寄せてくるニコに遠山が答える。空賊の主やってそんな風貌なのにガキには甘いのか。もう少し宿代まけてくれたらもっと良かったのに。

割と図々しいことを考える遠山。ニコがその様子を見て、ふふふと笑った。

「ええ、ほんとうに、ってあら？ アニキさんの後ろ、誰かいるのかしら？」

ふと、ニコが出入り口と部屋の境目に立ったままの遠山を見つめた。

「あ、あー、まあ、な。……おい、お前がこいつら見てみたいって着いてきたんだろうが。何してんだよ」

遠山は、さっきからずっと自分の背中に隠れているそいつへ声をかけた。

「な、ナルヒト、彼女は、そのいま、あれだろう」

ラザールがしどろもどろつぶやく。

妙な様子を感じ取ったこともたちがぞろぞろとこちらへ歩いてきた。

「ほんとだ、アニキ、後ろにだれがいるんだ？ ん？ ルカ、どうした、いきなり座り込んで」

「……………うそ、だろ」

のんびり遠山の背後にいる誰かを覗き込むリダ、何故か尻餅ついて顔を青くしているルカ。きよとんと首を傾げるニコ。

「おい、いい加減お前出てこいって！ なんで急にそんななるんだよ、ドラー！ じゃない。アラー！」

遠山が、彼女の名前を呼んだ。

背中に隠れるその小さな身体を掴んで、部屋に押し込んで。

「……ぶ、かか。こ、こんにちは、なのだ。お、おろかな下等生物、  
じゃなくて、ナルヒトのごじたちよ」

少女が、頬を掻きながら愛想笑いを浮かべる。

カールした肩までの金髪をイジリイジリ、視線は泳ぎおぼつかない。  
い。

魔術式であつらえた白いワンピースが余計に儚さを強調している。

2270

ただの人見知りドラゴンと化したドラ子（少女バージョン）がそこにいた。

「え？」

「おお」

「うわ」

ニコが目を丸くする。リダが感嘆の声をあげる。ルカは思い切り顔を顰めて。

「……アリー・フレールだ。その、なる、ナルヒトのともだち、だ。……やっぱむり、かえる」

ついさっき遠山が思い付いた偽名をそのままに、ドラ子が名乗るかと思えば踵を返して部屋から出て行くこうとして。

「待て待て待て待て、お前ほんとなんなんだよ、ちびっこ化した瞬間、情緒不安定になりやがって。そんな状態でそと歩かせられるか」

「はーなーせー！ 知らんのだ、姿を変えた瞬間、なんかもうたま



らなく色々恥ずかしいのだ！」

捕まえた遠山から逃れようともがくドラ子、だが力から本気の抵抗ではない、ただ単純に、信じられないが照れているだけらしい。

竜が子供たちに人見知りしているのだ。

「魔術式で変えた姿に精神が引つ張られているのだろうか？ 一族の教えでは竜は人の形の時と竜の形の時に気性が違うと言いが……」

「おっと、新情報。待て、ドラ子じゃなくて、アリー、あとで家まで送るから今は少し休ませてくれ」

「む、ひひひひ」

遠山の引き留めにドラ子が諦めたのか、その場で動かなくなった。

さて、どうしたものか。ドラ子のまさかの反応に遠山が子どもたちはどうやって説明しようか考えていると

「か、可愛い……！ アニキさん！ だ、だれなの？ 紹介して！  
わたし、こんな綺麗な女の子初めて見たわ！」

「お、俺も、なんだ。すげえな……」

「……待てよ、ニコ、リダ。この子、なんか、変だ」

三者三様の反応だが、みんなドラ子に興味を持っているようだ。

よしよし、いいぞ、この感じで上手いこと打ち解けることができ  
るだろう。

さあ、ドラ子、お前も普段あんな感じのやつなんだからきちんと自信を持ってー

「うっ、うっ、ナルヒトオ……」

「なんでお前そんな感じなん」

ダメだった。

遠山のローブの裾を握って、ドラ子は俯いたまま動かない。

「まあ！ アニキさん、さっきからその子に対して言葉が強いわ！  
紳士らしくないわよ」

「あ、すまんつい。ほら、アリー。いつまでもくっついてないで、お前が会ってみたいとか言ってたんだろっが」

腰に手をやり、プリプリ怒るニコ。

なんかコミュ力高そうなので遠山はドラ子を彼女に突き出した。

2275

「む、むむ…… き、きさま、名はなんという」

未だローブの裾は握ったまま、しかしドラ子がおずおず言葉を返して。

「わたし？ わたしはニコ！ あなたアリーっていつの？ 綺麗な金髪ね！ おめめも青くて宝石みたいだわ」

「か、かか。お、おかさまと同じ髪で、めはお父様と同じ色なのだ」

「あ、心を許し始めたぞ」

なんと割と早くドラ子はニコと会話を始めた。親の話で反応するなんて不思議だなと遠山は思いながらその様子を見守る。

「まあ！ とても素敵なお父様とお母様なのね！ 私は両親の顔を知らないからとても新鮮！ ねえ、こつちに来て色々お話ししない？ 女の子のお友達は初めてだから仲良くしてくれたら嬉しいな」

「か、かか、……い、いいだろう。ニコ、よい、ゆるす」

「すげえ、圧倒的なコミュ力。これが陽キャか」

陽の化身とも言えるその明るさで、ニコがぐいぐいドラ子と距離を詰めていく。

遠山は自分には絶対出来ないその対応に本気で感嘆していた。

「……ニコは昔からこんな感じ。誰とでもあんな風に仲良くなるんだよ。……おかえり、兄貴。首に包帯巻いてるけど、どうしたの」

きゃいきゃい始めたニコドラから少し距離を置いた遠山、帽子を被った中性的な少年、ルカが静かに話しかけてきた。

「あー、怪我した。少してこずつてな。あれ、あの鼻水ボーイのほほんちびっこの二人組はどこだ？」

なかなか鋭いルカの指摘に頷き、首の包帯を指差しつつ、そっ

えはペロとシロがないことに遠山は気づいた。

「ああ、あの2人なら庭で水桶の掃除してるぜ。俺たちは今ちょうど部屋の掃除の手伝いが終わったところだ」

「あのババア、うちの従業員ただでこき使ってやがるな、いや、飯をサービスしてくれてんならトントンか？」

よかった、宿の外には出てないみたいだ。遠山はふっと息を吐く。

「アニキ達の分も残してるぜ、先に食って悪かった」

「いや、むしろ成長期のお前らに一日飯を我慢させたのは悪かったな。甲斐性なくてすまん」

「一日？ はは、冗談よしてくれよ、アニキ。飯ってそもそも3日にいっぺん食べるようなもんだろ？ 昨日も食べたのに今日も食べたから、なんか動きにくくてよ」

朗らかに笑うリダ、おそらく悪気や嫌味は一切ない。

改めてスラムで彼らがどのような生活を送ってきたのかよくわかる。よくぞここまで捻くれることなく育ったものだ。

「……………俺が稼がねば」

「その通りだ、ナルヒト。無性に俺も勤労意欲が高まってきた」

「え、え？ ど、どうしたんだアニキ、それにラザールさんも」



戸惑うリダ、アラサー2人が妙なところで父性を刺激されていて。

「ね、ね、ね！ アリーはアニキさんとどうやって知り合ったの？  
どんな関係なの？」

「か、かか。む、そうだな、どこから話したらいいものか。そもそも俺が狩りをしていたところだなー」

「……ねえ、アニキ」

「ん、どした、ルカ」

「……あの子、多分普通のやつじゃないよね。連れてきて大丈夫？  
わぶっ」

勘が鋭いらしい。何か気づいているらしいルカの頭を帽子ごと  
撫でつける。

「ルカ、お前すげえな。実働部隊ただけはあるぜ。まあ、普通  
のやつじゃないが、その、あれだ。悪い奴じゃねえよ」

「……アンタがいうなら」

ルカはそれで納得することにしたらしい、しかしどこかハラハラ  
した様子でニコとドラ子の様子をチラチラ確認している。

「あー、アニキだー。おかえりー」

「だーっ！」

「おー、ペロ、シロ。なんかババアに勤務させられてたんだってな、おつかれさん」

明るい声が2つ、ペロとそれに負ぶわれたシロが現れる。

「へへー、たくさん褒めてもらって、パンも分けて貰ったからラッキー」

「だう！」

「へえ、あのババアやっぱなかなかいい奴だな」

遠山がまた憎まれ口叩きつつ、全員無事に揃ったことに密かに安堵したその時だった。

「ああ、そうだよ、ババアは基本ガキには優しいんだ。口の悪い大人の男には厳しいけどね」

「……………いつからそこにいた」

ぬっと、現れたでかいババア。

マジで何も気付かなかった。レーザーの様子を見ると口を開いてあんぐりしていたので同じようだ。

「この子らと一緒にいたよ、どうも、なかなかいい奴のババアです」

上級探索者と王の隠密にすら気配を気取らせぬババアが慇懃無礼に頭を下げる。

「……やだな、まだまだいけますよ、レディ」

「ああ、その通り、それはありうる」

遠山とラザールが震える声で返事をして。

「あともう少し早くそのセリフを思いついてりゃよかったね、って、ん?! あんた、また新しい子を持ち帰ってきたんか!？」

奥にあるドラ子に気付いたようだ。ババアがかしましい声をあげた。

「あ、やべ、説明がめんどそう」

「……まったく、退屈しないよ、ナルビト」

やいのやいの。

帰宅を叶えた遠山たちの部屋は騒がしく、しかしどこかたのしい  
声に満ち溢れ。

確実なことはひとつ、遠山鳴人は誰一人を失わず異世界での生活  
2日目を無事に終えようとしていた

……

……

…

水は冷たく、心地よい。

遠山鳴人はまろやかな水の中にいる。身体を沈める水面に傾き、

茜色に染まる陽の光がきらきらと反射していて。

「あー、生き返る…… ある意味壺風呂みてえなもんかー」

中庭、遠山は水に浸かってぼやいた。

でかい水桶を井戸水で満たした即席の水風呂。

ペロとシロが洗って乾かしていたそれを引っ張り出したのは正解だった。

足こそ伸ばせないものの、身体全体をきちんと沈められるそれはこの状況ではとても得難いものだ。

「ナルヒト、俺は部屋に戻っておくぞ。それとあまり水に浸かりす

ぎるなよ。身体がひえる」

身体を拭いて簡素な肌着に着替えたラザールが肩関節を回しながら遠山へと声を向ける。

「おー、わかってる、わかってる。ぬるめの水風呂が実は1番危ないんだよな」

だいたい19度か20度、井戸水の割に少しぬるめだ。

「ふ、水風呂ね、奇妙なものが好きなものだ。ほどほどにしとけよ」

「うー」

その場から去るラザールに間延びした返事を送りながら遠山は水



に身体をつけたまま。

疲れて発熱しているだろう身体をゆっくりとぬるい水が冷やしていく。

「……はあ、なんか濃い一日だったなあ」

ぶった斬られた腕、その後に繋がられた腕に今のところ違和感はない。

手のひらを見つめ、開いたら、閉じたり。動作にも問題なし。

死ななかった、誰も死なせなかった。

その事実だけを握りしめて、遠山は冷水の中まどろむ。

気付けば、吐く吐息が喉を通るたびにすーっと冷えていつていることに気付く。

水の冷たさもほとんど感じない、そろそろ出る時だ。

「よつと、あー…… 疲れた」

ちゃぼり、水桶から立ち上がりババアが用意してくれていたゴワゴワしたタオルで身体を拭う。

あらかじめ洗濯していたトランクスを履いて、中庭の石畳に寝転んだ。

1日かけて日光により暖められた地面が、冷えた肌に心地よい。

あ、すっごい、これ。寝れる。

地面の暖かさが肌を通して遠山に伝わる、あまりにも心地よいこの感覚。

目を瞑ると瞼を通して夕焼けが暗い視界に染みわたる。茜、オレンジ、赤。闇の中、瞼の裏でその色を数えていると、ぐるぐると世界が回り始めていた。

得難い。

遠山があまりの心地よさにトビかけていると。

「ふと、人の気配を感じた。」

「ん？ ラザールか？　なんか忘れもん？」

ちゃぽり。水に浸かる音。なんだよ、なんだかんだ言いながら水風呂興味あつたんかよ。

遠山が寝転んだまま転がり、目を開けて振り返るとー

「すぶぶ、……昔会ったことのある奇妙な男も、水に浸かるのが好きだったねえい、名前はたしか、ダイミヨウ、だったかなあ」

「……………お、マジか」

奴がいた。変態ドラゴン人知竜。

息を吐きながら遠山がさっきまで浸かっていた水桶に入っている。

白い、あまりにも白い肩が見えた、全裸だ。

「やあ、トオヤマくん、君の人知竜だよ。ふう、だがこれがなかなか水に浸かるというのも悪くないねえ……」

「……色々聞きたいことあるけど、まずひとつ。生きてたんだな。ドラ子も仕留めてないとか言ってたけど」

遠山はごろりとその場に座り込んで人知竜に問いかける。なるべく肌を視界に入れないように眼を晒しながら。

「すぶぶ、あんなもの、竜同士のじゃれあいだよ。ま、あの幼竜はなかなかやるからねえい、いい準備運動、身体の慣らしにはなつたかな」

「慣らしっ？」

「すぶ、いやなに、随分長い間身体を動かしてなかったものでねえ  
い……んん？ トオヤマくん、どうして目を逸らすんだい？」

人知竜は遠山の視線に気付いたらしい。自分から目を逸らすのが  
気に入らないとばかりに口を尖らせた。

「いや普通の反応だろ」

「すぶぶ、かわいいなあ。……ちょっと、いじわるしちゃお。えい  
「！」

「じゅおっとおっ！ っぞおーっ？」

ちちんぷいぷい。

人知竜が指を振る、それは理外の技術、魔術式の行使。

本来ならば詠唱による仮説構成を経ないと成立しないその技術も人知竜にかかれば、これこの通り。

遠山鳴人はまるで操り人形のように立ち上がり、その水桶のもとまで歩かされる。もちろん己の意に反してだ。

「ちよ、お前、これ、どうなってんのよ！」

「すぶぶ、怪我はしないさ、させるわけないだろー？」

ニヤニヤ笑う水に浸かる女の眼前に、引き摺り出されて。

「すぶぶ、ほら、きちんと見て。キミ、じついつの好きだったろっ。」

「ーあ  
」

夕日が、女を照らしていた。

水桶の淵に引き寄せられ、いやがおうにも、女の姿を見せつけられる。

銀の髪ー

あれだけ真っ暗だった女の髪はいつのまにか色を変えていた。

「なぜ、までは覚えていないけど、君に関する記憶ならそのほとんどの引き継ぎは完了してる。銀髪、好きなんだろう？ すぶぶ、似合ってるかな？」



「…………マジかよ」

女が水に浸かったまま、その髪を弄ぶ。水滴が垂れ、水に広がる銀髪を夕日が透かしていた。

女の暗い目に、夕日が沈み込んでいく。その目はただひとり。遠山鳴人だけをじっと、見つめていて。

「その反応、正解みたいだねえい」

満足げに、女、人知竜が笑う。目を和らげ遠山を見つめ続ける。

「…………あの身体を動かそうとしても言うこと聞かないんだけど」

「すぶぶ、トオヤマくんがボクの身体を見ていたいからじゃないのかい？ キミの好み通りに作り替えてるから、自信はあるよ？」

艶かしく。

夕日を反射する冷水の中、女のしなやかな手が彼女自身の白い陶磁器を思わせる身体を這う。

水の屈折ではっきりとは見えない、しかしあまりにも美しく、しなやかなその身体のシルエットはわかる。

2297

「う、あ」

くびれた腰、長くて細い脚。

ドラ子の太陽のような他を威圧するような美とはまたちがう美しい。

月、いつまでも眺めていたく、それでいて気づかないうちに虜にされてそんな妖しい美を人知竜は兼ね備えていて。

「すぶぶ、君が望むなら、触れてもいいんだよ？」

狼狽えるトオヤマを見透かすように、細められる目。

常人であれば、魅せられ、頭を犯されてもおかしくない危うい魅力。

上位生物、竜の美にたいいていの下等生物は魅入られる。

だが、遠山鳴人の脳は壊れているのだ。

「……いや、やめとく。よいしょ」

魅力を振り切る。力の抜けていく身体を鞭打ち、体勢を入れ替えて水桶に背を向けて背中を預けた。

いつのまにか身体の拘束は解かれていたらしい。どこからかはわからないけど。

「……ぶー、ちえっ、どうして目を逸らすのさー」

「いや捕まるわ普通に」

頬を膨らませる人知竜に遠山が吐き捨てる。

水桶に背を預けて、背中越しに会話を続けた。

「えー、教会騎士の連中にかい？ 大丈夫だよ、もし君が覗きの罪で捕まってもボクが助けにいくからさ」

「いやどう言つマツチポンプだよ」

人知竜の軽口に遠山も軽口で返す。妙に息の会う会話に少し遠山は戸惑って。

「っ、っ、すぶぶ」

「なんだ？」

どもりながら、笑い声が乱れた。

「すぶ、ぶぶぶ、う、ううん、なんでも、ないんだ。……ず、ず、今のやりとりが、たのしいなあって…… 私は間違っていないかった」

「は？ 何言ってる…… え、まで、なんでお前、泣いてって」

裏返った声、囁られる嗚咽、振り返りことしないがその声は明らかに――

「すぶ、ないで、ないよ。童が泣くわけないじゃん。すぶ、しゅぶ。すび」

「ええ…… どう言う状況……」

鼻水を囁る音を背に遠山がつぶやく。

「ああ、たのしい、たのしいなあ。君とずっとこんなくたらない会話がしたかった。なんのこともない会話を、なんの知見もえられないはずの無駄な会話を、ずっと。……そのためにぼくは……」

「……あんま、長く水風呂浸かるなよ。風邪ひくぞ」

何言ってるかよくわからないが、遠山はとりあえず伝えておいた。

「そしたら君に看病してもらうからいいよ」

「何もよくねえよ、……なあ、人知竜」

「なんだい、トオヤマくん。一緒に浸かるかい？」

「2人も入ったら桶が壊れるわ。そうじゃない、お前マジで何者だ？　なんで俺のことを知ってる？」

そう、この竜はそもそも何者だ？

なんか距離感がおかしい。それを遠山は素直に問いかける。

「すぐ。教えない。言いたくもない。重い女にはなりたくないからねえい」

「うわ、めんど」

既に重い感じを出してきた女に遠山はそのままの感想を漏らした。

「あ！ ひどい、ひどいことゆったねえい、いま！ 罰として僕の番になってもらいますー！」

「どっいっ罰？ ドラ子といいアンタといい、竜はやたら番が好きだな」



「まあ、そりゃ、竜にとって番ってほんと特別な存在だからねえい  
…… 今回の幼竜があれだけ君に執着してるのは驚いたけど」

ちやぷり。人知竜が水桶の中で身体をくねらせるたびに惱ましい  
水の音が夕焼けに響く。

「君にとって、あの幼竜はなんなんだい？」

「友人だ。俺がそう決めた」

人知竜から、ふと、問いかけ。

やけに低い声のその問いにノータイムで遠山は答えた。

「ふふ！ 決めた、そうか、あはは！ 竜を友にすると、決めた、ね。ああ、やはり君は新しいねえい。愛すべき、未知、だよ」

「なんだそりゃ」

「……ふふ」

「どした」

「いや、なに、ほんと、たのしいなって。これからよろしくね、トオヤマくん」

「いや何一つまだ状況がわかんないんだけど」

人知竜だけが理解している会話に遠山は眉間へ皺寄せつつぼやい

た。

「シンプルな話さ。ボクと君はこれから沢山の時間を共に過ごすんだ。だから、よろしく」

「……意味わかんね」

割とすぐに理解をほっぽりだす。まあとりあえず敵ではなさそうだ。また今度元気のある時に問い詰めよう。

遠山はそれ以上の追求を諦めて。

「いいよ、それで。あ、でも、そうだ。トオヤマくん、君がボクと仲良くしてくれたらいいものをあげれるんだけどねえい……」

遠山の投げやりな態度に気づいたのだろう。人知竜が水桶の淵から身体を乗り出して、遠山に声をかけた。

彼女の銀髪から垂れる水の雫が遠山の肩を濡らしていた。

「いいもの？　悪いけど物に釣られて誰かと仲良くするなんざー

」

人と仲良くするのに割と理由を求めるタイプの遠山は、ふんと鼻を鳴らす。

友達を選ぶタイプなのだ、この男は。

「ほら、これさ。実験の副産物なんだけど、君はきつと欲しがると思っただけだな」

「石ころ？ カスカベ防衛隊の1人にあげてこいよ」

遠山に差し出された小粒の小石たち。それらにはよく見ると奇妙な紋様が刻まれており。

小石程度で何言っただこいつ、遠山が怪訝な表情で水桶の淵からこちらを見下ろす美顔を睨むと。

「私の技術を応用して完成させた魔術石、これを利用したら、あれが作れるよ。サウナストーブ」

「俺の名前は遠山鳴人、これから宜しくな！」

がっしりと人知竜の手のひらを掴んで握手をかますチベットスナギツネがそこにいた。

ここに、遠山鳴人と人知竜の友情が成立した。ユウジヨウ！

「すぶ、わ、きみほんとに欲望に素直だねえい、その現金ぶりは類を見ないよ、でも、そういつところも好き……」

「サ、ウナ、イキタイ」

うつとりとした目で互に見つめ合う二人。

銀髪の女は目を輝かせる男の顔を、焼き付けるように見つめる。

黒髪の男は女が手に握る奇妙な石をよだれを垂らしながら見つめる。もう遠山にはそれがサウナストーンにしかみえていなかった。

明らかにすれ違っている2人、だが――

「な、なるひと？」

だが、それは他人から見ると、沐浴をする美女を涎垂らしてガン見している男にしか見えなかった。

どれり。

カゴにたくさん入れられていたパンが、その小さな手から落ちた。

「ん？ あ」

「おや…… すぶぶ。あらまあ、可愛い姿になって」

遠山が声を漏らした。

人知竜はニヤリと笑った。

「なにを、なにを、しているのだ……」

「ドラ子？」

ドラ子だ。カゴにたくさん詰められたパンはきつと遠山と一緒に食べようとわけてもらったものだろう。



「ナルヒト、キサマ、キサマ、さっきあまり、食べてなかったから、お腹すいてると、らざーるがゆってたから……」

「あ、やべ」

事態を理解した遠山が、短くぼやいた。

「トオヤマくん、どう見てもあの幼竜、見た目が幼くなってるんだけど。蒐集竜は竜化以外の変化は出来なかったはず…… 魔術式を誰か教えたりしたのかな」

人知竜が遠山へ声をなげかけて。

「……やめろ、キサマがナルヒトと仲良さそうに話すな」

腹の底から背筋の裏側を震え上がらせる、そんなドスの効いた声だった。

「すぶぶ、幼竜、落ち着きなよ、きみらしくもない。ああ、なるほど、君だいが人間に近づきつつある訳だ。ナルヒトくんも罪な男だねえい」

それを向けられた当の本人はどこ吹く風、水に浸かったまま、遠山をうつつとり見つめる。

「え、なに」

遠山は嫌な予感でいっぱいだ。なんとなくまずい気がする。

「なぜだ、自分でもわからぬ、なぜ、オレはここまで…… わか  
らぬ……」

ドラ子が自分の頭を抑えて、ふらつき始めた。

ぼっ、ぼおおう。

彼女の周りの空気が燃え始める。金色の焔が花開いた。

「おっと、今日1番のやばい雰囲気。やめてよね、俺パンイチなんだけど」

「そんな君も素敵だねえい」

「ちよ、お前静かにしてろほんと」

そのやりとりが、最後の引き金だった。

「いやだ」

「「うん？」」

ドラ子の眩き、短く。

「なが、よさそうなのだ。オレより、キサマの方がナルヒトと仲良さげなのだ…… いやだ、いやだ…… ナルヒトはオレの竜殺し……」

ぶちり、ドラ子の背中からそれが飛び出した。

夕焼けを眩しく受け、輝くのは金色の翼。

世界を駆け、大空を支配する竜の証左。

「おいおいおい、ドラ子、落ち着け、翼、翼翼！ 翼出てるから！  
！ おい、銀髪ドラゴン！ ドラ子どうしたのアレマジで」

「すぶぶ。うーん、幼児退行……？ 姿形を幼くした弊害だろうね  
えい。我々竜は外見に魂が引っ張られる性質があるからねえい」

遠山の焦りと裏腹に、人知竜は珍しいものを観察するようになん  
びり声を返す。

「また、オレをのけものにして、はなししてる」

2人のそのやりとりが蒐集竜をさらにおかしくさせていく。脳が、  
はかいされていく。

ぶちり、次は尻尾。

敵を薙ぎ倒す、それはかつて大いなる者から受け継いだ己より大きな者を喰らう存在の名残り。

「うお、待て待て待て待て、ドラ子、その翼と尻尾を引っ込めろほんとに」

竜が、いた。未だ人の形を多く残すが明らかにあれは人ではない。

翼に、尻尾、縦に大きく裂けた瞳孔に、長い爪。

頂点捕食者の姿が、夕焼けのもとに現れる。

「トオヤマくん、アレをみてどう思う？」

「あ？」

ふと、なんの遊びもない人知竜の声が背後から。

「あの幼竜は今、君との交流の中で変わり始めている。ああ、確かにアレは人間寄りの竜だろう。だが、見たまえよ、あの翼を、あの威を、あの瞳を」

「ッ……」

その声は遠山に現実を直視させる。短い付き合い、しかし濃い付き合い。ドラ子の態度に少し忘れていたのだ。

あれが人ではないことに。

「問題だ。竜と人は本当に対等かな？ 答えは単純、否、だよ」

人知の竜が問いかける、その問いは事実から目を逸らすことを許さない。

「いくら見た目が可憐でも、いくら君に友好的でも、我ら竜は君たちとは違う存在だ。我やあれの少しの気まぐれで君は命を落とすかもしれない。ねえ、トオヤマナルヒト、己よりも遙かに強くそして理解の及ばぬ存在、



それでも君は、アレを友だと言っのかい？」

その問いはきつと、蒐集竜と遠山だけの関係へのものではないだろう。

ちゃぽり。水桶の淵に顎を乗せ、うすら笑いを浮かべる人知竜。

銀色の髪が濡れて、肌に張り付いている。

「見なよ、あの姿を。わかるだろう、あの力を。我らは気分で人を殺す。我らは己の快と不快で人を選ぶ。ほんの少し自分の気に入らぬことがあつただけで、ああなる。それが我ら竜。星々に人が手を伸ばしていた時代より生まれた上位の生き物」

そこから覗く瞳のなんと暗いことか。遠山を覗き見るような目つきは深淵を映すだけ。

竜が、人に問う。

「君は竜を理解していない。たまたまアレの興味を買っただけ、たまたまアレに気に入られただけ。物珍しいだけさ。飽きれば君も、あの金色の焰に焼かれて終わる。それでも君はー」

人知竜の銀色の髪、そこから垂れる雫がぼたり。

昏い瞳はただ、立ち尽くす強欲な男を見るだけ。

その目は、何かに期待するようにも、そして失望を覚悟しているようにも見えた。

「あれと対等で在り続けることが出来るのかな、強欲冒険者」

人知竜は笑う、その問いかけは自分の願いと期待をも含んだ歪なものだった。

人知竜は試す、祈り願ったそれが本当に自分の求める者のままでいてくれたのかを。

遠山鳴人への理不尽で身勝手な期待を、人知の竜は抱き続けて――

ピコン

【技能 オタク 発動】

その技能は、誰にでも発現する現代人の可能性。

数多の歴史を積み重ね、なお繁栄するその世界。人類の欲望は常に良質のエンターテインメントを創り上げてきた。

たかが娯楽、たかが息抜き、たかが妄想の産物。

しかし、それは消費者というフィルターを通していつか、どこかで誰かの答えとなるのだろうか。

竜からの問い。

だがそんなもの関係ない。

間違えれば命にかかわるその問答の答えを、遠山鳴人は既にそれから得ていたのだ。

「――俺の知る偉大な老竜はこういった。ドヴァは元々邪悪な存在だと。だがその自らの邪悪さと向き合い続けることこそが大事だな」

それはオタクとしての人生、創作物ゲームを通して遠山にもたらした知見。

その知見が言葉となる。

その言葉は毒となる。

どこかの誰かが考えた創作物は、今こうして遠山鳴人の力となる。

竜という存在への遠山鳴人が出す答えへの希望となって届くのだ。

「そうか、ドラ子。お前もドラゴンなんだな」

遠山がつぶやく。その目は今にもこちらに襲いかかりそうなドラ子を見つめる。

「うん、なんて？」

人知竜が、間抜けな声を上げた。だが、その表情はどこか高揚している。

「大丈夫だ、俺ドラゴンのそういうの詳しいから。てか、待って、ドラ子、お前、その翼とかめちゃくちゃかつこよくない？」

「え」

「うん、だから、なんて？」

遠山の言葉に、竜達が狼狽え始める。

己に惑つ竜、力を抑えきれず竜としての破壊衝動に駆られる蒐集竜。

本来ならば恐れるべきだ、逃げるべきだ。

だが、遠山はどれもしない。酔いに茹だるその鋭い目にどこか気持ち悪い熱を浮かべて、竜の翼や尻尾を見つめた。

「ふ、ひひ、いや、あん時も思ったけどその翼爪ついた翼かっこよすぎだろ、キングギドラ？」

「トオヤマくん、君状況理解してるのかい？ 今、蒐集竜は自分を制御出来なくなってるー」

「うるせえ！ いちいちドラゴン程度にびびってニホンのオタクが務まるか！」

「すぶ」

人知竜が、オタクの恫喝に鳴き声をあげて固まった。

「ステイダウン！ ブルー…… じゃないや、ドラ子、ステイダウン！」



パンツ一丁で両手を水平に広げ、その場で仁王立ち。

ドラ子を諫めるその姿に、怯えや恐怖は微塵も感じられない。

「え」

己の中のぐちゃぐちゃした心に支配され、歪に竜化を遂げようとしていたドラ子が止まった。

「おいこら、ドラ子！　そういうノリはわかる、ジユラシックパークの恐竜も嵐が来たただけですぐ凶暴化したりするからな、けどな、はつきり言うぞ、お前なんかなんも怖くねえ！　今更俺が、お前如きにビビると思うなよ！」

「ごとき、だと？ ナルヒト、いまのはどう言う意味だ？ いかにか  
貴様とて、言葉次第では、許さぬ」

膨らむ威圧。

あの時と同じ、ドラ子を仕留めた竜狩りの時と同じ背筋を焦がす  
ような殺意が遠山を襲う。

ギルドでも見せたあの威圧だ。選ばれし存在や、心の強いもの以外を  
問答無用で行動不能にする竜の特権――

ピコン

【”上位生物（竜）”により”人間種”への絶対優位発動 判定に  
失敗した場合、気絶する。……技能”頭ハッピーセット” 隠し  
技能”ホモ・サピエンス”により、精神対抗ロール発生、”竜特

効”により判定に多大な補正、精神対抗ロール成功】

だが、竜の特権は遠山鳴人には関係ない。

竜殺しは、竜を恐れない。

不敵な笑みを遠山が浮かべる。パンツ一丁で笑うその姿は不審者そのもの。

遠山鳴人は、アリス・ドラル・フレアテイルを恐れない。

友達だからー とか言った真つ当な理由ではなくて

「だって、俺、お前に一度勝ってるし」

それはどこまでも、愚かで、しかし本質を突いた理由だった。

「……………すぶぶ、わーお」

「な、んだと」

竜達が言葉を失う。

ちっぽけな人間の言葉に。

菟集竜は表情を固め、人知竜は形の良い口を三日月のように吊り上げていて。

「格付けは済んでるぜ、金ピカドラゴン。お前は一度俺に負けた。たまたまお前が命をいくつも持つデタラメドラゴンだったせいでもだ生きてるだけだ。本来ならお前は俺に殺されて終わってたんだよ」

一歩。

遠山が前に進む。

一歩、ドラ子、菟集竜、アリス・ドルル・フレアテイルが退がった。

ああ、たしかに格付けはすでに完了している。

前を真っ直ぐ見つめる遠山、それから目を逸らし視線を泳がせる

竜。

「う、あ  
「あ

「ドラ子、落ち着けよ。落ち着くんだ、お前ほんと急にどうしたんだよ?」「

「オレ、オレは…… ああ、わからぬ、オレは貴様をどうしたいのか、それがわからぬ…… その老竜の言う通りだ、オレはいつか、貴様を――」

「ジュジュジュ」

惑う竜、嗤うパンツ一丁男。

「俺はこれまでに数多くのドラゴンを超えてきた。世界を喰らいし者と呼ばれたドラゴンも、運命の戦争と呼ばれたドラゴンも。全て、俺は超えてきた(ゲームの中で)」

「え、トオヤマくん、それって、ゲームの……」

人知竜が遠山の言葉に戸惑う、しかしもちろん遠山はそれを完全に無視している。

「今更その俺が、ドラゴンが少しキれたくらいでびびるとでも？ 舐めんなよ、アリス・ドルル・フレアテイル」

「あ、う」

「無意味にキれるな、無闇に恐れるな。安心しろよ、俺の方が強いんだから。だから、俺はお前が怒っても殺されたりしねーからよ」

「……竜が怖くないのか？」

「大丈夫、俺の方が強い」

「オレは、竜の姿になったら今よりも強いぞ」

「大丈夫、竜とかすごい好きだから。ちなみに四つ足？ それとも翼脚？」

「……四つ足だ」

「めちゃくちゃ強い本物のドラゴンじゃん、ワイバーンじゃないタイプじゃん。かっこよ」



流れる会話、竜の問いに何一つともることなく遠山が言葉を返す。

「ふ、かか、ふかかか、ナルヒト、貴様、ほんとに、バカだのう」

「お前よりはマシさ。……ドラ子、お前は竜で、俺は人だ。俺はお前を完全には理解することは出来ない。同じ生き物じゃないからな」

「……………同じ、じゃなくてもいいのか？」

「お前、その姿になってくれたりしたのは俺らに合わせようとしてくれたのか？ 気遣いは嬉しい。けどな、俺はティラノサウルスをペットにしたいとは思わない」

「て、ていらの？」

「ああ、最強にかっこよくて恐い竜だ。ティラノサウルスは残虐で強くて恐ろしい、だからこそティラノサウルスなんだ。お前と同じだよ、ドラ子」

「もともとそういう存在なんだ。人とは違う生き物なんだ。竜もそうなんだろ？ お前らはかっこよくて強くてそして、自分勝手にわがままだ。そんなお前が何をそんなに悩んで苦しんでんだよ？」

ドラ子の動きが、止まる。

陽炎のごとく空気に纏う金の焔、ゆらめく尻尾が垂れ下がる。

苦しそうに、目を歪め、自分の頭を抑えてうずくまった。その見た目はもう、迷子になって泣き叫ぶ幼子と何も変わりなく。

「オレは…… ナルヒトともっと、仲良くなりたいのだ、貴様のことがしりたい、なのに、そやつと話してるお前をみると、くるしい…… オレ以外の竜と話すナルヒトを見ると、おかしくなりそうで」

助けを求めるように、竜が遠山に手を伸ばす。己に初めて浮かんだ感情。

本質的に孤独な存在である竜は、初めて得た真の意味での対等な存在の熱を求める。それを一度でも得たモノは、それを失うことをひどく恐れるのだ。

差し伸ばされた手、遠山はそれを見つめて。

「そうか、ならかかってこいよ」

「え」

「え」

竜2人が、声を漏らした。戸惑いの声。

人は惑わず、竜だけが惑う。

ドラ子、いや、アリスの苦悩へ遠山が導き出した答えは、それだ。

助けを求める手は取らない。己と竜の関係はそうではない。

それは解釈違いだ。

困惑の声、竜をすら戸惑わせる頭の壊れた男の言葉。

しかし、2人の上位生物。人知竜と蒐集竜はその男の姿から目を離せぬ、その男の言葉から耳を離せず。

竜が人の言葉を黙って聞いていた。

「俺はお前の竜としての在り方を理解することも、共感も出来ん、俺は竜じゃないからな」

人として、竜への敬意から遠山はその差をはっきり言葉にする。

人知竜と蒐集竜、寂しい顔をした、悲しそうな顔をした。

「だが認めることはできる。想像することはできる。その凶暴、その攻撃性、その傲慢、それもまたお前の欲望だ。なら、俺はそれを否定しない」

遠山鳴人が、己の首に手を当てる。そこから引き摺り出すのはキリヤイバ。

「否定しない上で、俺は俺なりにお前と対等でいてやるよ。お前には意地でもビビらない、お前には絶対に屈しない」

悲しそうな顔をしたドラ子が、はっと前を見る。

己の前に立ちはだかるヒトを、まっすぐ目に捉えた。

竜を殺し、教会を脅したキリの力。それは上位生物の命すら奪うこの世の法則外の力。

遠山鳴人以外には決して従わぬソレはぼっけんと欲望を叶えるためにただ従うのみ。

「だから、お前がとち狂うそのたび、俺がまたぶっ殺してやる」

それが答えだ。

「あ……………」

「だから、お前はお前のままでいい」

竜が、破壊衝動とともに在る生き物ならば、それに立ち向かおう。同じ時間を過ごす中で命の危機があるのなら逆に息の根を止めてやるう。

「俺とお前は対等だ、殺すのはお前だけじゃない、俺も殺そう」

【技能 竜殺し（意味深） 発動】

「あ、ああ……」

「す、ぷぷ、ああ、やはり、いい……」

狂った言葉のやりとりだ。それこそ理解のできぬ言葉の数々だ。



「ただ、その言葉で人知竜はうっとり顔を崩した。

「ただ、その言葉で蒐集竜はその姿を元に戻した。

「雄々しく開かれた翼も萎え、背中に戻る。

「太い尻尾も縮み消える。

「開ききった瞳孔も本来の大きさに戻り、その身に舞い踊る金色の  
焰も止んだ。

「オレは…… またこうなるかも知れないぞ」

「そんな時はまたキリヤイバでズタズタにしてやるよ、鎧ヤロー」

「……ふ、かか。ああ、そうか…… これが……」

ドラ子の姿が変わっていく。本来の人としての姿。

長い金髪、豊かな長躯、鋭い竜眼に伶俐な顔立ち。

「ナルヒト、貴様、ほんに大バカだの」

吹っ切れたように微笑むドラ子。人跡未踏の地に咲く花が開くよ  
うな、そんな微笑みだった。

「いや、それはおかしい」

一瞬それに遠山は見惚れたが改変されている脳はそのときめきを  
すぐに打ち消した。

「ふかか、のう、ナルヒト。少し近く寄れ。なんか、オレもう今た  
まらなく貴様を抱きしめたいのだ」

「いやパス。なんか目が怖いからやだ」

「ふかか、ならば、貴様が言ったのだぞ。竜らしく、俺は俺のまま  
で良いと、竜は自分の欲しいものを得るためには、暴れるぞ」

ドラ子がイタズラげに目を細める。悪竜が宝を前にヨダレを垂ら  
しているような目つきだ。

「それに抵抗するのが人間の権利だよな」

ふざけ半分、半分本気でジリジリと距離を測る2人。

そんな2人をつまらなさそうに、しかし、どこか眩しげに見つめる人知竜。

「……すぶ。妬ける、なあ…… だけど、トオヤマくん、今回はキミがその幼竜と戦う必要はなさそうだよ」

竜と人。竜殺しの選択を見届けた人知の竜がぼそりとつぶやく。その声色はどこか、ホツとしているようでもあって。

「あ？」

遠山がその声に首を傾げた。

「お、嬢さまあああああー!!」

「わー、おじょうさまー、ごぶじー? ごめんねー、中途半端な式をおしえてしまいましたー」

「保護者たちのお目見えだよ、トオヤマくん」

クスクスと人知竜が笑う。

「え?」

ふわり。

光の輪っかが、現れる。

空間に穴が広がり、そこから現れた保護者たち。

白髪丈夫の燕尾服をバツチリ決めたナイスシルバーと、どこかぼんやりした雰囲気メイドさんが現れて。

超越者はいつも、突然こんな感じで現れるのだ。

「……………不審者？」

「友人殿、まさか、お嬢様を手込めに……………？」

メイドとシルバーがじつとり、遠山を見つめた。

残念ながら、はたから見ればパンツ丁の男がへらへら笑いを浮かべながら刃物を握っている絵面だ。

「おっと、待て、話せばわかるぞ」

遠山はパンイチのまま、もう一度両手を広げてジュラシックポーズをかましていた。

47話 オタクと竜（後書き）

3章終わり！

次からは4章！

よろしければブックマして是非続きをご覧ください！

< 苦しいです、評価してください > デモンズ感



## ある竜の独白

間違いじゃあ、なかった。

私の永遠にも及ぶ探究は、あの苦行は間違いではなかった。

彼の背中を見つめて、溢れる吐息を抑える、彼の言葉を聞いて火照る身体を沈める。

その姿は私に未知をもたらしてくれる、その言葉は私に新たなる知見をもたらしてくれる。

理性はそう告げる、お前が彼を好むのは、彼に執着するのはその為だと。

全知竜、空席となっていた知識の眷属を継ぐ為に産み落とされた

”未知”を担当する存在、それが私。

この世の未知を全て解き明かし、全てを知る。それが私の竜としての本質。人が食って、寝て、犯すのと同じ。私は食べて殺して知るのが本質の存在。

だからだ。彼、遠山鳴人が私にとっての未知だから惹かれている、興味を持っている。

理性は、そう告げている。

な、わけないじゃあないかい。

すぶぶ、違う、違うよ。この身を蕩けさせるような感覚はそんな

ものでは決してない。

継承した歯抜けの記憶、私じゃないボク、ボクでもない我、我でもない彼女の記憶が、この身体に熱を灯らせる。

全知の竜を、人知の竜に変えた彼への記憶は瞬く間にこの身をおかしくした。

ああ、これまで散っていった多くの全知の竜たちよ、安心しなよ、君たちの妄執は私が引き継ごう。

ああ、これまで滅んでいった多くの人知の竜たちよ、喜ぶといい。君たちの願いは私が叶えよう。

そして、あの恐ろしき人間と相対し、全てを揃えてくれた最後の人知竜よ。

永遠の探究者として外道に身を墮としてなお、この時のために最善にして最前の男を”前進”させた最も強き人知の竜よ。

君に敬意を。

例え全ての世界で君のことを覚えているものがいなくても、この私だけは君を讃えよう。

よくぞ、この力とこの記憶を私へと届けてくれた。

よくぞ、彼の存在を私に教えてくれた。

安心するといい、安心して消えるといい。

今回の人知竜、つまりこの私が全てを引き継ごう。君たちが存在

を歪め、個を捨ててまでもたどり着きたかった光景へ、今度こそたどり着こう。

すぶぶ、私はただ、冷たい水の中、竜と対等であるうとする彼の背中を見つめる。

恐れてもいる、強がってもいる。膝は笑いかげ、心臓は高鳴っている。

ああ、でも、なんと美しい姿だろう。恐れていてなお揺らがぬその心から生まれる衝動に従うその姿勢。

欲望のままに、彼は恐怖すらも踏み越える。

その身に抱くちっぽけな夢ととめどなき欲望を抱えて遠山鳴人は進むのだ。竜が怒ろうと、人が立ち塞がろうと、悪意が迫ろうと。

彼はきつと、殺すだろう。その欲望の邪魔になるもの全てを滅ぼし前へ進むのだ。

ああ、ああ、良い、とても良い。ずっと見ていたい、推せる、ああ、目の前の竜の巫女に怯えているのにしかし、その聡明な頭脳はそれが悪手であると理解している、その壊れた心はそれを許さない。

なんて、よわくて、なんておろかで、なんといじらしいんだろう。

すぶぶ、身体の奥、下腹が熱い。彼を見てるだけで自分が雌の竜であることを認識させられる。

その愚かさも、その歪さも全てが愛おしく、耐え難い。

欲望のままに進むその姿、欠けた心に穴の空いた人格。欠陥だらけで満たされない哀れなその姿。

なんて痛ましく、なんて尊い……

すび、すび。

「この身に宿る悪性が囁く。その力をもって彼を手に入れると。その知を用いて彼を虜にせよと。」

「この身に宿る竜としての本質がささやく。孤独を埋める存在がいる、魂を奪ってでも番とせよ、と。」

護ってあげなくちゃ、永遠にしてあげなくちゃ、ああ、私の力を使えば彼を永遠にしてあげられる。肉の人形、魂だけは私のものに。」

これがわたし、私達人知竜の本質――

ああ、すび、すび。

うるさい、うるさい、馬鹿が。

こんなうつくしくて、きれいで、かわいいものに誰がそんなことするもんか。

ほしい、ほしい、とおやまなるひとがほしい。全ての人知竜の願いが私をおかしくさせていく。

でもね、でもね、意味がないんだ。無理矢理に彼を手に入れてもいみはない。そんなのいやだ。

わたしが彼を選ぶんじゃない、わたしが彼に選んでほしいんだ。

どいつもこいつも全ての人知竜め、処女を拗らせすぎた、だからいつもしくじるんだよ。



わたしは違う、純情だから、これは拗らせているわけではないだ。

私は彼に好かれない、彼に見つめられたい、彼に褒めてもらいたい。

遠山鳴人に好きだといってほしいんだ。それがわたしにとっての彼を手に入れると言う答えなんだ。

ありがとう、全ての全知の竜たちよ。

さようなら、全ての人知の竜たちよ。

今ここに、このわたし、この全知竜が人知竜に変わった時点で君たちは全て報われる。

私がこの永遠の探究を終わらせよう。私がハッピーエンド、いいや、ありふれたご都合主義最高の、トゥルーハッピーグランドエンドルートを目指そうじゃあないかい。

問題だ、欲しいものが目の前にあるとしてそれを手に入れるためにはどうすればいいと思う？

答えは簡単――

努力だよ。

さあ、IQ3000、いいや、IQ30000の超天才的な脳み  
そによる最高に無敵の計画――

プランニング……の始まりだ。

ある竜の独白（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを！ご覧くだ  
さい！

< 苦しいです、評価してください > デモンズ感

## 48話 狭い部屋の中で

「あー…… マジで、疲れた……」

疲れ切った顔で遠山が、宿屋の部屋に戻る。

まだ2日もいないはずのその部屋は妙にほっとする感じすらあつて。

あの後のもうてんやわんやだった。

ジジイとメイドには変質者扱いされるわ、ドラ子なんかくねくねモジモジして全然話にならないわ、変態ドラゴンの方はこっちを黙って見つめるだけで完全無視だったし。

「おつかれ、ナルヒト、なにがあった、とは聞かない方がいいかな」

椅子に腰掛けたレーザーが声をかける、表情からして外で何があったか勘づいているようだ。

「そーしてくれると助かる、一応ドラ子は保護者に引き取られて変態ドラゴンもなんか一緒に帰っていったよ」

ラッキーだったのは手に負えない存在達が割と素直に帰ってくれたことだろう。

変態ドラゴンが爺さんと何か話していた、かと思えばこの世の終わりのような表情をした爺さんが頷き、変態ドラゴンはニコニコとしているような奇妙な光景のあと、みんな仲良く帰宅していった。

あの竜大使館には今頃、竜が2人同じ屋根の下で過ごしているのだろう。強く生きてくれ、竜大使館の人たち。

遠山は投げやりに祈りを終えて、椅子に座り込む。どつと一気に疲れが噴き出てきた。

「そ、そうか、中庭の方からとんでもない威圧感が膨れてると思っ  
たが…… まあ、無事で何よりだ、ん？ まさか、全知竜、いや人  
知竜まで来てたのか？」

「ああ、気づいたら水桶に入ってた」

「頭が痛くなってくるな、もうその辺は竜殺し殿にお任せするよ」

ラザールが戯け手を振る、遠山は薄目をあけて軽口を返す。

「アホ言うな、俺のものは俺のもの、俺の苦労はお前の苦労、だろ  
？」

「そんな不平等な約束をした覚えはない」

ラザールがしらーっと目を細めてにべもなくつぶやいた。剛田商店の倅のようにはいかないようだ。

「に、兄さん、も、もうアレ、いない？」

「お、ルカ、どした、お前」

おどおど。帽子を被った中世的な少年、ルカが涙目になりながら遠山へ声をかける。

ベッドのシーツをかぶり、くるまって顔だけ出しているその姿はなんかそういう生き物のようだった。

「い、いや、だって、そと、そとに、さあ」

「さっきからこの調子なんだよ、ラザールの旦那が顔色悪くしてるのと同じタイミングでルカまでこうなっちまった。おい、ルカ、兄



貴も無事戻ったんだ、もう落ち着けて」

「り、リダ、リダはわからなかったの？ 外になんか、ヤバいのがいたのに……」

「え？ 何のことだ？」

竜の気配を感じていたらしいルカと正反対に何も気づいてないリダ。

遠山は対照的な2人を眺めてつぶやく。

「ほーん、ルカ、お前やつぱ色々鋭いんだな」

「もう。どつしたのよ、ルカ。ペロとシロたちを見なさいな。すやすやよ、すやすや。あなたも疲れてるのならすぐ寝なさい」

同じくニコやペロシロもその辺の気配は感じ取れなかったらしい。  
この辺は素質や適性の問題なのだろう。

遠山は子供達の適性を無意識に振り分けていく。

「そうか、電気ねえから日が落ちたら寝る感じになるわけだ」

気付けば窓の外には闇が降りている。部屋の灯りは潰れかけの蠟燭と、それを光源にしたカンテラだけだ。

2369

「でんき？」

遠山の言葉にニコが首を傾げた、電気という概念はやはりないようだ。

「なんでもねえ、こつちの話だ。まだ起きてる連中だけでいい、少し色々話がしたい、今日あったことをな」

遠山は硬めの椅子に腰掛けて、ゆっくり話を始める。長い1日となつた今日の話を。

ギルドでの一悶着、門番とのいざこざ、切れ物の商人との出会い、大蛇の狩り、騎士たちとの争い、がめつい主教との取引、そして竜たちの話を。

こどもたちは時に目を輝かせ、時に慄き、時に怯えながらも遠山とラザールの話に耳を傾かせ続ける。

日が傾き、夜の闇が訪れてもその日その部屋には話し声が続く。

遠山とラザールの冒険の話、それはスラムに生きる彼らにとって信じられないほどのしく、心躍らせるお話だった。

「ほへー、すごい、それで、それで?! おにーさん首絞められて死んじゃったのー?」

いつのまにか目を覚まし、ベッドから這い出て起きていたペロが目を輝かせて物騒な話をせがむ。

「おばか、ペロ。そしたら兄貴さんはここにはいないわ、そうでしょう?」

ニコが笑いながらペロを嗜める、しかしその声色も明るく。

「あ、アニキ、続きを、続きを聞かせてくれ! その、ストルって奴、どうやって倒したんだ?」

リダはわかりやすく興奮した様子で遠山に続きを求め、

「いや、それよりラザールさんの骨の竜が気になる……」

ルカもじつくりと話を聞いていた。

冒険の話、ここではない、自分ではない誰かの冒険譚がなぜ人をここまで惹きつけるのだろうか。

それは多分、誰しもがそれを心のどこかで望んでるからだ。

自分にも別の生き方があったのではないか、自分だったらどうするか。己の常識の外、安全ではない時間を過ごすこと。その昏い愉しみを人間は多かれ少なかれ心のどこかで望んでる。

「あー、ラザールのアレはビビった。目覚ますとよー、なんか馬鹿でかい骨のトカゲみたいなんがいてよ」

「驚いたのはこっちのほうだよ、あれだけ泡を吹いて顔も真っ青、死人の顔だった男が笑いながら起き上がるんだからな。マーヤジーアの奥底にいる死人かと思ったださ」

「地獄の底的な表現か？ 何言いたいのかだけはわかるよ」

そして、遠山とラザール。2人の冒険者もまたたのしげに、まんならでもなさそうに死にかけた出来事を話す。

人は冒険譚を聴くのも好きだし、話すのも好きだ。

それはやはりその本質が、危険を冒すことにより繁栄してきた種族、その所以なのかもしれない。

「すげえ…… でも、待てよ、兄貴たち、たった1日でかなりヤバい目に遭ってるんじゃない……」

「……たしかに。普通の人間なら確実に午前中で死んでる気がするけど」

「まあ、ほんとだわ！　だ、だめよ！　アニキさん。レーザーさん！　あなた達が死んだらとても悲しいもの！　私、きっと泣くわよ！」

「そーだねー、やだなー、2人がいなくなるのはさー」

子供たちは冒険譚に目を輝かせながらも、彼らにすらわかるその綱渡りの1日に慄く。

遠山も今更ながら、長い1日を振り返りかなりやばかったことを改めて自覚した。

「あー……　わり、少しはしゃぎすぎた。その、すまん、レーザー。俺がもう少し考えてりゃ、ここまでヤバい目に遭ってなかったかもしれん」

死んでもおかしくなかった。それは自分もレーザーも同じだ。

あの時、あの門番を始末したのは完全に自分の独断、後先をあまり考えず、誰にも目撃されずに殺せるという判断だけで始末した。

その結果が今日という1日だ。何かを間違えていればここにラザールも自分もいなかったかもしれない。

この子供たちはいつ戻るかもわからない自分達をずっと、この狭い部屋の中で――

「ふ、ふふふ、ははははは」

遠山の思考を止めたのは、ラザールの笑い声だった。低く、しかし大きなその声。面白くて仕方がないというような。



「わ。お口すごいわ、ラザールさん」

「カッケエ、牙すげえな」

トカゲスマイルに何故か子供たちが目を輝かせる。

まあ、わからないでもない、かつこいいよね、牙とか。遠山はラザールの笑い顔を見てぼんやり考えた。

「おっと失礼、ぶ、らしくないな、トオヤマナルヒト、アンタは何に謝ってるんだ」

笑いを収めたラザールが改めて遠山に問う。

「いやだから、あれだよ。そもそもあの門番どもを俺がその、ほっ

とけばここまでヤバい目に遭わなかったよな、て話で」

遠山が、今実感となって自らを覆う不安を口にして。

「問題ない」

その言葉をラザールが遮った。

「問題ないさ、ナルヒト。俺たちは、いや少なくとも俺は今日、痛快だった。たしかに死にかけたし、今日で全てが台無しになってもおかしくはなかった」

ラザールが深く椅子に腰掛ける、しっかりとしたガタイを年季の入った背もたれが受け止めて、小さく悲鳴をあげた。

遠山は黙る、何故か口を挟めずにいて。

「だが、痛快だった。ああ、生まれてきて今日ほど痛快だった日はなかった」

まっすぐ、その爬虫類の瞳、縦に裂けた瞳孔が遠山を見る。

「え？」

レーザーの低く、しかし弾むような声。

遠山は戸惑いの声を上げる。

「考えてみるよ、ナルヒト。俺たちはこうして生きている、我ら小さく幼くも聡明で賢い仲間達のいるこの小さな部屋に、生きて戻れたんだ。はは、しかもだぞ、あれだけ好き放題に、欲望のままに暴れたうえで、だ」

深く椅子に腰掛けたレーザー、腕を組んだまま言葉を続ける。

瞳は爛々と輝き、その声は勢いを増していく。

「俺たちは気に入らないものを始末し、邪魔者を蹴散らし、危機を乗り越えて、この日を終えた。間違はなく俺たちは今日、この冒険都市、いいや、帝国、いや！ 世界で誰よりも自由な存在だった」

その男の半生に自由はなかった。戒律の厳しい部族に生まれたその男はすぐ影に愛されたことにより、王国の暗部に取り込まれる。

「お、おお」

遠山は知らない、闇と影と義務の中生きてきたその男にとってどれだけ今日という1日が喜びで溢れていたのかを。

殺す相手を己で決める自由、信頼出来る相手に己の命を託す自由、己の道を己で決めることの出来る自由。

「痛快じゃないか！ あの教会が俺たちを認めて譲歩した。あの騎士の連中すら俺たちの命には届かなかった！ そして竜達ですら、俺たちの道を阻むことはなかったんだ」

自由に、己の死に方を決めれる自由。

そのどれもが、影の牙、ラ・ザールにとって喉から手が出るほどに欲しいものでー

「だから、ナルヒト。アンタが言うべき言葉はそれじゃない。謝るなよ。胸を張ってくれ。俺たちは帝国の誰よりも上手くやった2人組なんだ。俺は楽しかったさ。ありがとう、ナルヒト」

だからこそラザールは礼を言う。己にそれをもたらしてくれた友人へ。

強く賢く、しかしどこか危なっかしい友人へまっすぐな言葉を送る。

「お、おお、そうか……」

思わぬ言葉に遠山は固まる。

何を言っていていいか、何を言われたのかいまいち飲み込めないほど、ラザールの言葉に驚いていて。

「わあ…… 私も！ 私もよ！ 兄貴さん！ 初めて何もしない1日を過ごしたの。お洗濯のお手伝いしたり、お皿洗ったりってとてもたのしいのよ！ だって失敗しても誰も死なないんだもの」

ニコが朗らかに、固まっている遠山に身を寄せてぎゅっと抱きつく。

暖かく、柔らかい。遠山はまた固まる。

「お、俺もだ、アニキ。周りを気にせず寝れる場所なんて、ほんとに生まれて初めてで…… 体を洗ったり飯を食うのって、こんなにたのしかったんだって…… それはアニキが俺たちを見つけて

くれたからだ」

まっすぐ見つめてくるリダ、その視線から思わず目を逸らしてしまっ  
まじ。

「……俺も、だよ。ほんと、あの時はサイフ盗んでごめん」

ルカが目を逸らしつつもまた、頭を下げる。遠山がおずおずと手を伸ばし帽子越しに頭を撫でると、にへらと年相応の笑顔をこぼした。

「ふふふー、みんながねー、こんなに穏やかなのは初めてだよー、ありがとねー、アニキー」

座っている遠山の背後からペロが首に抱きつく。

「……………おお」

子供たちに囲まれて団子のようになり、上手く話せなくなっている遠山を見て、ラザールが少し笑った。

「ふ、みんな、我らが竜殺しはどうやら照れてしまったらしい」

「うつせ、タコ。……………あー、ガキども、そろそろ寝とけ。明日からまた色々これからのこと話したりするからな。俺は疲れたからもー寝る」

纏わりつく子供たちをゆっくりと離して、遠山がぼやく。らしくなく無駄にその言葉はどこか刺々しく。

「まあ、照れてるわ！ 照れてるのね、ふふ、どうしようかしら、兄貴さん、普段はあんなにかっこいいのに、今はとてもかわいいわ……………あれ、ほんとにどうしたんだろ、私……………」

「おい、お前ら、兄貴はお疲れだ！ 寝させてやるうぜ、アニキ、



もし子守唄が必要な言ってくれ、ペロやシロを寝かしつけるのによく歌ってたから得意なんだ」

「気持ちだけもらっとく。このベッド貰うぞ」

ニコとリダの言葉に手を挙げて、遠山は空いてるベッドに座り込む。藁を敷き詰めて上からシーツを被せただけのポロベッド、しかし今はこれでいい。

「……兄さん、一緒に寝てあげようか？ おれ、体温高いから暖かいよっ。」

何故か顔を赤くしたルカが指先をモジモジしながら俯いてつぶやく。

「それも気持ちだけ貰っとく、寒くなってきたらまた頼むかもな」

「……そっか、わかったよ」

少ししょんぼりしているルカ、こう見ると本当に男か女かわからない。将来はイケメンに育つことだろう。憎たらしい。

「おう、おやすみ、ルカ」

遠山はゴロリとベッドに横たわる。身体を横向きにこどもたちやラザールに背を向けて、窓に映るぼんやりとしたカンテラの火を薄目で捉えた。

「そっか…… そっちな」

そっだ、ラザールの言う通りだ。

欲望のままに。

全てを自由に生きる権利。もともと人間はみんな自由だ。忘れて

いるだけで自分がどう生きようと、どう死のうと全てを自分で決めることができるのだ。

生きることとは、つまりそういうことだ。選択の連続で、未来が分からずとも人は選び進み続けなければならない。

たどりつくべきところに辿り着くようにできている。

そして、今日、遠山はたどり着いたのだ。全員を生かし、1日を終わるといふゴールに。

それで充分だ。恐れるなどない。

「タロウ……」

冒険がここにある。かつて己と小さなもふもふの友が夢描いたぼっけんのつづきがたしかにここにある。

何故か、遠山は自分の手のひらにその感触が残っていることに気が付いた。

そこにいないはずの彼のぬくもりが何故か、近くにあるような――

「……ま。その、なんだ。よかったよ、お前らがいい奴らで」

ふっと、遠山は言葉を漏らした。聞こえるかどうかは二の次、ただ伝えたかっただけだ。

「ん？ ナルヒト、なんか言ったか？」

「いや、何にも。じゃあ、寝るわ、お疲れさん」

考えないといけないことはたくさんある。新しい家のこと、この町での立ち回り、そしてパン屋のこと。

あの商人ともまた話し合わないといけないだろう。冒険者としての稼ぎもまだまだ必要だ。

日々のルーティン化と、新しい家の家賃の確保、やることはたくさんある。

それに今考えているパン屋の計画、ラザールの腕前と自分の知識を合わせたの作戦、だがいまいち自分のパンに対する知識が足りない。

「……………」

知識と力、それがほしい。得るために、失わないために、辿り着くために。

今よりもっと、強くなる必要がある。欲望のままに振る舞うのなら、今のままでは必ず限界がくるだろう。

重くなる頭、目を瞑った瞬間、脳みそにじわりと広がるような眠気。

幼い頃、学校のプール後の昼下がりの授業と同じような眠気に襲われた遠山はすぐにその意識を手放す。

より良い生活を求めるために、力と知識への渴望を思い描きながら――

遠山鳴人の異世界生活、2日目が終わろうとしていた。

.....  
.....  
.....

TIPS? 夢とは人の脳が睡眠中に、記憶の処理を行う過程で過去の記憶や直近の記憶を映像化されるものである。心身の状態が反映される内的なものである。

だが夢には本来その存在が知り得ない情報や、存在しない記憶の映像が流れることもよくある。

果たして夢を見る人間の内側には一体何が棲むのだろうか。

ぱち、ぱち。

「んあ？」

何かが、弾ける音。遠山鳴人は目を覚ました。視界に飛び込んでくるのは光。

ああ、もう朝か？ どれくらい寝ていたのだろうかと身体を起す。

レーザーや子供達の様子を確認しようと辺りを見回すと。



「……………あ？」

間抜けな声が漏れる。

誰もいない、いや、それどころかー

「どっだ。こっ」

ぱち、ぱち。弾けるのは火の音、暖炉だ。レンガで作られた暖炉の中、赤々と激る薪が炎に舐められながら弾ける。

暖炉の灯りが照らすのは、無数の本棚。それが何列にも並び、見通せる範囲全てに広がっている。

遠山が寝ていたのは安くて硬い藁を敷き詰めたベッドのはず、なのに今はフカフカの絨毯の上に座り込んでいて。

「ああ、ようやく目を覚まされましたか。 上級探索者殿」

ぬつと、闇から声が響いた。

「っ、誰だ」

「誰だと思えますか？」

鈴を鳴らすような笑い混じりの声。

女だ。

暖炉とランタンの灯りが、彼女を照らしている。

赤ブチ眼鏡に、羽飾りのついた帽子、どこかで見たことのある制

服に似た服装。

目を引くのは灰色の髪、てらてらと暖炉の火に映されるそれは奇妙な美しさを併せ持つ。

「……質問に答える、トカゲ男とガキンチョどもはどこにいった」

怪しさ全開の登場に、遠山の言葉も鋭く。

「ああ、その点ならばご心配なく。彼らはどこにも行っておりません。アガトラの安宿の一部屋でぐっすりご安全に夢の世界でございませう。ええ、あなたと同じように」

「同じ?」

「はい、あなたがたはどこにも行っておりません、あなたもね。ここは、あなたの夢の中、起きている時に見る夢ではなく、眠っている時にしか訪れることの出来ないあなた自身の心の中にございます」

れば  
「

女が笑う、女が囁く。

遠山鳴人の夢の中の住人が主人に向けて微笑みを向ける。

空席は複数、その1つを埋めた存在。

天使に侍りし複数の力たち。その中で1つを担当するその女。

2395

「……疲れてんな、妙な明晰夢まで見ちまってる」

「ふふ、ええ、その通り。ここはあなたの夢。現実ではない空間。  
どうぞお気楽に、無警戒に、無思考に、愚昧に振る舞って頂ければ  
幸いです」

眼鏡の奥、ガラス玉のような瞳、髪の毛と同じ灰色の瞳がチエシヤ猫のように歪んで。

「……………お前。誰だ」

遠山は問う、己の夢の住人へ。

これが、遠山鳴人にとってはじめての夢の住人との邂逅。

試練に挑む者、試練に魅入られた者の夢には常に奴らが棲まうのだ。

ゆめを、みる。それは人類、ホモ・サピエンスが遙か昔から外界へ立ち向かうために備えた防衛機構。

人は、夢の中、試練に備えるのだ。

夢の住人が腰を折る、薄い胸に手をあて90度腰を折り曲げる儀式礼のような姿。

「私は…… ハイヴイー。知識の眷属、ハイヴイーと申します」

その空席は埋まった。女には資格があった。かつて化け物と揶揄された女には空席を埋めるにふさわしき才能と、力があった。

「どつぞよしなに、我らが夢の主人殿<sup>あるじ</sup>」

ばかり、一際強く暖炉の薪が弾けた。

48話 狭い部屋の中で（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを「」覧くださいー！

＜ 苦しいです、評価してください ＞      デモンズ感

49話 はじめれ！ とおやまのゆめ！

「知識の眷属？」

目の前でそう名乗る女を見て、遠山は奇妙な既視感を覚えていた。

どこかで、見たことのあるようなー

「はい、この度あるご縁により、あなたの心の中に私の公文書館を建てさせて頂きました。立地は最悪、隣人は極悪の不良土地ですが、まあ、背に腹は、といったところですか」

「……要領は得ないが、嫌味言ってるのはわかるぞ」

しかし、その既視感はすぐに霧散して消える。



「あら、これは失礼。ですが私、こう見えてあなたのことは高く評価しているつもりですよ」

「夢に出てくるやつに何言われても嬉しくねえよ」

小さな顔に、人形のように整ったパーツ。羽飾りのついた帽子から覗く灰色の髪を耳にかけながら女が笑う。

「まあ、これは手厳しい。夢の住人とはいえ私も意思ある存在、かなしゅうございますね」

「意思ある存在……？」

「おっと、近頃流行りの難聴系主人公ではありませんでしたか。言葉には気をつけないといけませんね」

「……きなくせえ、なんかこの感じ覚えがあるぞ」

怪しさ満点だ。このこちらの神経を逆撫でしつつ、あちらだけ全てを知っている嫌な感じ。

「あら、それはもしかして」

眼鏡の奥の灰の瞳が、心底愉快とばかりに歪んで。

ムッ

【ムッムッ感じてくれないですか？】

メッセージが流れる、目の前の女の口の動きに合わせて。

「てめえ」

コイツなのか、あの夕子の悪いメッセージを流し続けていたやつは。

遠山は目の前の人物への警戒を一気に最大限にまであげた。

「ふふふ、まあ、怖い顔。今にも殺されてしまいそうですね、私」

慇懃無礼な口調はそのまま、目の前の女の余裕の現れだろう。

「余裕綽々のツラでうるせえよ、あのメッセージはお前か」

「うーん、その辺は少し話がややこしくなってます、一部はY E S、一部はN O、とお答えしましょうか」

くしゃりと苦笑しつつ、ふと、目の前の女がいつのまにか現れていた椅子に腰掛ける。

奇妙なデザインの椅子だ。角張っているところが一切ない。せもたれ、足に至るまで全て丸っこくて。

「……単なる夢、じゃなさそうだな」

遠山の隣にも同じ椅子が現れる、促されるまま遠山もその丸っこい椅子に腰掛ける。

もう一度あたりを確認すると、本棚や、暖炉、全ての調度品に至るまで丸いデザインをしていた。

「ふふ、それはあなたの判断にお任せします。まあ、出来ることならば私としてはあなたが油断し、この会話をただの夢だと軽視してくれる方が楽ではありませんが」

「……その夢の住人が俺になんの用だ。あのメッセージのことか色々教えてくれる訳か？」

思考を切り替える。夢という割には様子がおかしい。何かまた自分の常識の外にいる存在にちよっかいをかけられている、遠山は認識を改めた。

「まあ、そう答えを急がずに。久しぶりのお客人なのです、どうですか、一杯」

「……貰う」

椅子の次はティーテーブルに、今淹れたばかりかと思う湯気の立つ紅茶が現れる。

これも全て丸いデザインで。

遠山はティーカップを手に取り、そのままそれをゆっくり口に含む。

芳醇な茶葉の香り。まろやかさと僅かな酸味が心地よい。

適温の紅茶は舌に乗せた瞬間に香りを鼻の奥まで届ける、温度管理から入れ方まで全て完璧なものだ。

その味覚や温感は一瞬となんら変わらない。

「おや、少し意外です。あなたは警戒するかと思いましたが」

遠山が飲み物に口をつける様子をメガネの奥から覗いていた彼女が意外そうな声を上げた。

「……知識の眷属とか言ったな、聞き覚えがあるぞ、その名前」

それを無視して遠山は話を進め始める。会話の中で何か情報を掴む必要がある、そして知識の眷属という言葉はこの世界に来てから何度か目にしたり、耳にしたりしていた。

「ああ、今日の午前中、冒険者ギルドで私の水晶を使った話ですか？ あれは申し訳ありません、この世界の存在ではない貴方を認識するのは中々難しくくてですね」

「その辺も理解してる訳か。ますます怪しいな…… ん？」

自分の行動を監視されていたのか。遠山はそこでふと、また、女に既視感を感じる。

「おや、どこかしましたか？ お口に合わない？」

知識の眷属と名乗った灰色の髪の女が首を傾げて。

「いや、紅茶は激うまだ。……アンタ、昔どっかで会ったことあるか？　なんか、見覚えがあるような」

既視感は、その女の服装だ。どこかで、見たことのある服装、制服のような。

「……さあ、どうですかね」

薄く笑う女はそれ以上そのことについて喋る気は無さそうだ。遠山は小さく息を吐く。

「あー、まあいいや、もう考えるのめんどくせえ。単刀直入に聞くぞ、俺になんの用だ」

「はは、話が早いのは探索者の美德ですね。ええ、あなたに良い話をご用意したのです。ちょうど条件も整いましたしね」



「良い話？」

怪しい話に決まってる、遠山が当たり前のように身構える。

「ええ、あなたそろそろ知りたくありませんか？　今の自分の状況を」

「お前……」

遠山の目が細くなる。コイツは何かを知っている。

「おっと、私は何もあなたと争う気はありません、そうですね、お近づきの印に、あなたただけに見えるこのメッセージについて、私の知ることを代価なしでお教えします。ふふ、それが命乞いの証となりませんか？」

剣呑な遠山の雰囲気を感じ取ったのだろう。両手を挙げて降参のポーズをとりながら女が笑った。命乞いと言いつつ、その姿からは何の怯えも見えない。

「……言ってみろ」

「メッセージ、いえ、秘蹟、”クエスト・マーカー” 恐ろしき力ですね。もともとあらゆる人に定められている運命、使命、宿命。それらの知らせをあなただけは可視化出来るわけですが……」

「定められた？」

女の言葉に遠山が口を挟んだ。

「ええ、そうです。人は皆生まれた瞬間に運命を定められています。その人生でどこに行き着くか。何をすべき人間なのかを。あなたのそのクエスト・マーカーは己の運命を可視化し、その使命を果たす手助けになるもの」

紅茶を口に含みながら女が話し続ける。

その言葉が本当なら、あの時レーザーを見捨てることが本来の――

「あの矢印とメッセージロクなこと指示して来なかったんだけど」

だが、遠山はそれをぶん投げた。

あの時だけでなく割とかなりの回数、気に入らないメッセージに逆らい、矢印をギタギタにしてきたわけだが。

「……ええ、あなたはなぜかそれを放棄した。あなたは辿るべき使命を放り投げ、握り潰し、それに唾を吐くことで運命の螺旋から抜け出した存在になりました。……ほんと、ありえないっしょ」

「あ。なんか言った？」

女の最後の言葉が妙に、刺々しいものだったような。

「いえ、別に。要は貴方は今、真の意味で自由な存在というわけです。本来生まれ持って与えられた使命を放棄し、何者にも縛られぬしかし、何者にも守られぬ道を歩んでいる」

女は口調を取り繕い、言葉を続ける。

丸い暖炉に置いてある薪がごとりと崩れた。

「あなたはこの世界の誰もたどり着けない場所に辿り着くかも知れない、あなたはこの世界の決まった行く末すら変えてしまうかもしれない、しかし同時に、いつ死んでもおかしくない。メイソックエスト運命をぶん投げたその瞬間から、あなたは荒野に投げ出されたのです。誰にも守られぬ理不尽な死と隣り合わせの世界に」

「その言い方だと他の連中は違うみたいだな」

遠山は言葉を咀嚼し、考える。決められた運命、メインクエスト。

帰還、と題されたあのメッセージのことを。

「ええ、運命に縛られた人間はしかし同時に運命によって護られています。死すべきその時が来ない限り、絶対に死ぬことはない。あなたにその加護はない」

「じゃあ逆に言えば俺は死すべき時にすら死なない可能性があるわけだ」

軽く笑いながら遠山は言葉を返す。思考を回しつつ、女の言葉は聞き逃さない。

「ええ、詭弁ですがその通りです。それは果てしなく困難でしょうけど」

ティーカップを傾ける女、ふうと小さなため息は果たして誰に対してのものなのだろうか。

「で、そのクエストメーカーとやらを俺に与えたのはお前ってわけだ。なんのためにそんなもん俺に寄越した？」

あのメッセージに干渉した女、つまり、自分の運命とやらを握っている存在に遠山は問いかける。

鋭い視線が、女を捉えて。

「……いつ。私がおの力を与えたと言いましたか？」

ぼそり、女の呟きに遠山の視線が少し緩んだ。

「あ？ だってそんなに詳しいんなら」

「私ではありません、その力をあなたに与えた存在は別にいますよ」

女がため息混じりの声でつぶやく。

「……ややこしい話を夢で聞くのはなんか頭おかしくなりそうで面倒なんだけど」

こんがらがり始めた会話に遠山はうへえと舌を出しながらぼやく。

「それでも聞くのをお勧めします。あなたはただでさえ死にやすい。不確定事項や不明なことは少しでも潰しておきたいのでは？」

「嫌な言い方するな、あんた」

「ふふ、性分でございますれば。……あなたにその力を与えたのは我らではない」

わずかな軽口の後訪れた、短い沈黙。

そういえばこの建物には窓がない。遠山はふとそんな関係ないことが気になって――

「あなたに秘蹟を与えたのは”天使”です」

「あー……、なんか最近聞いた名前だな」



意外かどうか微妙な感じの存在の名前を女がつぶやいた。

「はい、この世界のどこかに存在すると言われていたナニカ。誰もその正体を知らぬはずなのに、確実に世界に影響を及ぼしている我ら眷属を侍らせし者」

教会で聞いた主教の言葉を思い出す。誰も何もわからないナニカ、この世界のどこかに存在して蠢くように影響を与えているナニカ。

そんな訳の分からない存在が、自分にあのメッセージを与えた存在だと女は言う。

「そいつは何者なんだ？」

知識の眷属と名乗るくらいなのだ。ならば、この女が天使とやらを知っているに違いない、遠山は当たり前前の疑問を彼女にぶつけて。

「まったくわかりません」

「え」

帰ってきた答えは拍子抜けするものだった。

「何もわからないのです。我ら眷属の誰一人としてその正体を知る者はいません」

「いや、お前、それはおかしくないか？」

「ええ、その通り。我々眷属は確かに天使に従属する力そのもの。本来であれば自らを創り出した者なのですから認知していて当然なのですが、”天使”、この呼称ですら、誰が呼び始めたかもわからないのです」

「キッシヨ」

思わずつぶやく。

なんだそれ。言いようのない不安と、嫌悪感にも似た困惑に遠山は顔を歪めた。

「ええ、まったく、まったくもってその通り。”知識”の眷属として由々しき事態でございます。この私すら知らないものというのは真不愉快でございます、ですが、それももう終わる。手がかりが現れたのですから」

同じく嫌悪感に顔を曇らせる女はしかし、ふと顔を上げる。

その目は遠山をじっと見つめていた。

「手がかり？」

「あなた様、ですよ。強欲なる人、運命をぶん投げ、竜を殺した我らが夢の主人よ」

ことり、女がその細い指で机を叩いた。

ふわり、ふわり、それを合図に本棚から丸い本がまるで蝶々のように空を舞い、女の手元に収まる。

メガネのずれを直しつつ、女がその本のページをめくりながら言葉を重ねた。

「あの天使があなたに干渉したのです、己の運命を知る力をあなたに与え、あなたに介入しようとした。あなたは天使の興味を引いた人間というわけですよ」

「……クエスト・マーカー、あの矢印やらメッセージやらは天使とかいづのが俺に見せてるからか？」

会話から得た情報を整理しつつ、遠山が言葉を紡ぐ。

「はい、その通り。あなたが運命の隷属から逃れることが天使の思惑通りかまではわかりませんが、確実にあなた様と天使には何か、何かの接点があるでしょう」

女は愉快げに笑いながら返事をする。

ガラス玉のようは瞳はしかし、明らかな熱を帯びていた。

「いや、まで。それはおかしい。そこまで正体わからねー存在なのに、なんであのメッセージやら矢印を与えたのが天使だと言い切れるんだ」

当たり前前の疑問を遠山が口にする。目の前の女の言葉は矛盾している。

天使の正体が分からないのに、あのメッセージが天使由来という

結論に繋がるロジックがまるで理解できない。

「ああ、なかなかお鋭い。頭の回転の早い定命の者との会話は嫌いではありません。シンプルな答えですよ、この私をあなたの夢に植え付けたのが天使だからです」

「……植え付けた？」

嫌な響きの言葉、遠山が思わず聞き返す。

「はい。気付けば私はあなたの夢の中にいた。眷属である私にそんなことを強制させる存在など、天使以外に存在しません。そしてそもそも運命や宿命、使命に関与出来る存在など”天使”を除いて存在しない。簡単なロジックですよ」

「おまえの希望的観測なだけの気もするけどな。状況証拠だけだろ」

「あら、これは手厳しい。ですが、仮説を立てるには充分すぎる証拠です」

割とコイツノリで話してるな。遠山はそいつの話の話半分に関心方向へと切り替える。

手がかりに希望的観測を盛り込むのは人であれ、それ以外の存在であれ変わらないらしい。

「……お前がああメッセージに干渉出来る理由は？」

先程の現象、メッセージを通じて話しかけられたことの仕組みを遠山が問う。

「ああ、それは私の権能の応用です。あなたの夢を通してメッセージを届けているだけ。ほんの少しの手助けですよ」

「じゃあそれ以外の、そのあのふざけたクエストとやらは……」

「クエスト」と銘打たれたそれは紛れもなく、この世のどこから鳴り響き続ける運命の声に他なりません、あなたに与えられた秘蹟はそれを可視化し、あなたに届けているわけですね」

「……気味悪いな」

メインクエスト、サイドクエスト、そして隠しクエスト。あれは自分のオタクとしての脳が見せる幻覚かと思っていたが、そうではないらしい。

ただただ、訳がわからなすぎて気味が悪かった。

「ええ、まったく。ですが、正直、ふふ、私が一番気味悪いのはあ



なた様でございますが」

「あ？」

唐突に放られた言葉の棘に、遠山が声を低くした。

「だってそうでしょう？ あなたは元々持っている側の人間だった。運命を定められ、成すべきことを決められ、それに辿り着くためのクレスト・マーク補助輪まで与えられていた。なのに、あなたはそれを全てぶん投げた」

愉快げに、女が笑う。メガネに映るのは遠山と暖炉揺らめく火。

「フ、フフフ。あなたは奪われたが故に与えられた存在だった、なのにそれを全て捨てた。それはある意味、何も持たずに生まれたモノよりも、歪んでいると思いませんか」

「何が言いたいかわかんねえんだよ、回りくどい言い方するな」

「あら。ではシンプルに。あなたと取引がしたいのです。我らが夢の主人よ、天使の枷を外した強欲なる人間のあなたと」

「怪しい奴とはしたくねえ」

きつぱりと遠山が言い切る、きな臭いことこの上ない。

「あら、フッフ、用心深いですね。では相互理解の為に私の目的を包み隠さずお話ししましょう」

「微妙に話噛み合わねえな、まあいいや、目的ってのは？」

夢の中の住人との会話、怪しいし信用することは出来ないが、シンプルな好奇心で遠山は返事をして。

「私はどこから来て、どこにゆくのか」

遠山は、少しその言葉に固まった。

女の表情はまっすぐ、遠山に向けられていて。

「知りたいのはそれでございます。全ての知識を持つ存在となつて  
なお知り得ぬ課題。知識の眷属すら届かない天使の隠した秘密、そ  
れが知りたい」

「……へえ」

少し、遠山はその女へ興味を抱く。

知識とは、いつもそんなふうの人に忍び寄ることを遠山は忘れていた。

「眷属とは交代制で廻ってくる役割のようなものです。天使によって決められるロールプレイとでも言いましょうか。私は知識の眷属、ハーヴィーですがそれはあくまで役割の名前。私は私の、本当の正体が”知りたい”のです」

「あー、自分探しの旅に付き合えてか？」

軽口を返す遠山、ハーヴィー、そう名乗る女は頷く。

「そう言うことになります、ああ、もちろんただとは言いません。これは取引です。あなたに沢山のメリットをご用意しております」

ハーヴィーがにやり、笑った。

「私の公文書館、この中にある書籍の権利をあなたに与えましょう」

ひよい、によい。

細長い指をタクトのごとく振るうハーヴィー、それに従うように一冊の分厚い本がまた本棚から舞う。

それは静かに音も立たず、遠山の元へたどり着いた。

「うお、なんだ、この丸っこいの…… 本……？」

円形の本、装丁もページも全て円形。角がない。

「はい、本にございますれば。開いてみてください」

「……真っ白なんだけど」

言われたまま開くと、しっとりした羊皮紙のページには何も書かれていない。空白が広がるだけ。

「その本の空白はあなた様の望む知識によって埋められるのです」

「……どういふことだ」

怪しい言葉、しかし、どういふわけか遠山はその空白の本から目を離せない。

「言葉のまま。権利を持つ者が必要とする知識を公文書館は与えます。あなたが勝利を願うのならば、この館には敵を殺し、報酬を得るための知識が」

女が指を一本立てる。その言葉はこの世界の攻略するためのチートを指さす。

「あなたがもし生存を望むのならばこの館にはどんな方法でもあなたを生き残らせる知識が」

女が指を二本立てる、その言葉はこの世界を生き残るチートを指さす。

「あなたがもし、帰還を望むのならば、元の世界に戻るための知識が――」

女が指を二本立てる、その言葉は遠山鳴人の冒険の――

「てめえ……」

女の言葉を遮り、遠山が視線を鋭く。

コイツは、知っている、遠山鳴人がどこからきたのかを、少なくともこの世界の存在ではないことを知っているのだ。

「夢の中に住まわせてもらっておりませぬ、色々と拝見させて頂きました。遠山鳴人、上級探索者、性別は男、使用武装は主に鈍器、拳銃。性格は自己中心のかつ、慎重で狡猾、好きな食べ物は蜂蜜、パン、お菓子、野菜全般。……個人的には探索者となった後よりも、学生時代のあなたの物語が好みでした。敵を許さず、欲望に忠実、冷酷で独善的、かつ、身内に甘い穴だらけの自我。大人にならざるを得なかった孤独な人、そしてー」

灰色の瞳、その瞳孔が四角に歪む。人をたぶらかし、誘惑する存在、西洋において悪魔の似姿とも呼ばれる羊のような瞳が、遠山を見つめていて。

「そして、この世界の人間ではない異物そのもの」



「その辺の事情も全部ご存知なわけか」

手札はだいたい理解できた。こちらのごとは全て知られていると認識した方が良さそうだ。

遠山はじつと、その四角の瞳孔を見つめ返す。

「ええ、あなたの夢に植え付けられた時から既に、シートは完成しております故。……異なる世界の異物よ、あなたを護る運命は既に消えました。あなたには今、知識が、力が必要なのでは？」

ピコン

【メインクエスト 発生】

【知識の従者】

【クエスト目標、知識の眷属、ハーヴィーの取引に乗る】

響くのは、皆に定められた運命の音。遠山鳴人には選択肢がある、それを受け入れるか、拒否するか。

矢印が灰色の髪悪魔の女を指していた。

「ほら、運命の音が届きましたね。まあ、正直なところあなたはそれに従ってもいいし、拒んでもいい。ただ、逆張りだけが正しいとは限らないとだけお伝えします」

「……………説明が足りなくねえか？」

「はて？」

「取引、とお前は言ったな。お前は俺へのメリットだけしか話してない」

悪魔との取引だ。

遠山は静かに言葉を紡ぐ。

「はて、目的はお話ししたつもりでしたが」

ゆかいげに微笑む女、ハーヴィーの表情は妖艶とも言える色を浮かべている。

「とぼけんな、タコメガネ、この取引でお前は俺に何を望む？俺に何をさせる気だ」

取引の内容を理解しようと遠山は進む。

誰もがそうだ、悪魔との取引を自分だけは上手くやれると勘違いするのだ。

「ふむ、ふむふむ。なるほどなるほど、あの主教とまともに交渉できるだけはございますね。さすがは夢の主人、フッフ、人知竜もなかなかどうして節穴ではございませんね」

「うわ、お前、あの変態ドラゴンの関係者がよ」

聞き覚えのあるキャラの強い名前に遠山が反応する。

「……こつちのセリフだしマジで。ーコホン。ええ、主教、カノサ・ティエル・フィールドには私も目をつけておりました。しかし、彼女はどこまで優れていても運命と宿命に愛されすぎている。私の目的にはそぐわない」

また聞き覚えのある名前だ、世の中狭いなと呑気なことを考えつつ、遠山は話を聞き続ける。

「そして、人知竜、アイ・ケルブレム・ドクトウステイル…… 彼女は…… ほんと。なんであんな風になってしまったのでしょうか。いくらなんでも絆されすぎでしょ……」

「いや、どう言う関係？」

「彼女とは…… つい最近まで同盟のような関係でした。全知の竜と知識の眷属ですから、互いに求めるモノは似ておりました…… ただ、その1ヶ月前、急に人知竜と名乗り始めてからはもう…… ただただあんな感じの愉快的存在に……」

「ああ、そう……」

聞かなくてもなんとなくわかった。ほんの少し遠山は目の前の女に親近感と同情を覚えて。

「くそ、マジで何が人を知る竜だし…… 永遠探究者とか名付けてあげたのバカみたいじゃん……」

「今なんか言ったか？」

ボソボソとしたばやき、何を言ってるか分からない言葉を聞き返す。

「いえ、別に。主人殿、ええ、あなたの言う通り。私、つい取引の詳細を伝え忘れておりました、ご容赦頂ければ嬉しいのですが」

取り繕うに咳払いしつつ、ケロリとした顔でハーヴィーが言葉を放つ。

「タヌキ。いいから早く教えろ、お前のメリットを。俺が払うべき代償を」

遠山がそれを流しながら先を促して。

「ええ、簡単な、ほんとうに簡単でシンプルなことです。公文書館で得た知識を使い続けること、それだけにございますれば」

「ふーん」

その条件を、遠山は反芻する。

なんとなく嫌な予感はある。その代償が聞いた感じでは軽すぎるからだ。

「ええ、ええ、あなたはあなたの為に私の知識を使い続ける、ただそれだけでこの公文書館はあなたのもの」

「勝つための知識を得たならあなたは勝利し続けなければならない。生きるための知識を得たならばあなたは生き続けなければならない。ただ、それだけのこと。それだけのことでああなたは新たなる知識を得ることが出来るのです」

「我らが夢の主人、あなたは知識の価値を知るお人のはず。失わな  
い為に、手に入れる為にあなたには力が必要なはずです」

「力、ねえ……」

それはたしかに今日一日強く感じていたことだ。

自分の力だけではいつかどこかで限界が来る。遠山は自分の生き  
方を変えるつもりはないし、そのために死ぬのなら、それはそれ  
で構わないと本気で考えている。

だが、自分が死ねば――

「はい、あなたがここの知識を使い続け人生を進めていく。私の願  
いはそれです。天使の関心を惹くあなたが暴れれば暴れるほど、こ



の世界に影響を与えれば与えるほど、必ずほつれが現れる。私の求める答えの手がかりにはなるでしょう」

ハーヴィーの説明は理解出来るものだ。遠山は頷く。

「なるほど、要は俺はなんかの罠か撒き餌ってわけか。天使とやらがちよつかいかけてくるのを期待してるわけだな」

「フフ、いえ、そんな。これはもつとwin-winな取引のはずです。どのみちあなたには敵が多い。この先もこの世界で生きていくのならば争いは避けられないでしょう？ 私はそれを見守るだけにございますれば」

「それを困っていうんだよ」

きなくせー。

遠山は白紙の本を開きながら目を細める。古今東西、何かを与え

る代わりに何かをしるとか言う奴にいい奴はいない。

得られるメリットと、予想しうるデメリット。

知識を得る代わりにそれを使い続けるのが条件。ぱっと聴くと大したことはない気がするが、それは間違いだ。

おそらくそれは本当に使い続けなければならない。勝利のための知識を求めたのなら、その存在は勝利し続けねばならない、常に闘争に身を置かなければならないはずだ。

そんな歪んだデメリットをハーヴィーは隠している、しかもそれを破ったとき、どうなるかも説明していない。

悪魔との取引は、現代での契約書を交えての大きな買い物にも似ている。

聞かなかった方が悪い、とか平気で言うのだ連中は。

遠山はそういつお約束を理解している人間だった。

よし、断るじ。

遠山は口を開くじつとじて。

んんん。

【いいんだ、……これでいい。あとは、頼む。お前は自由に……  
そのままです…… ああ、本当に夢のような数日間だった】

頭に、流れ込んでくるイメージ。

レーザーが血まみれで倒れている。仰向けに倒れている彼の周りから影が染み出し、その身体を地面に引き摺り込んでゆく。

「あ………？」

頭を抑える、しかし、そのイメージは止まらず。

【あに、き……… ごめん、足手まといに………】

イメージ。

みんな、死んでいる。見たことない部屋の中、子供達が死んでいる。頭から血を流し虚な死に顔を晒すルカ、真っ二つになっているニコ、血溜まりに沈むリダ。ペロとシロはその血まみれの服だけが

残されて――

「まて、まて」

椅子から、崩れ落ちる。

身体力が抜ける代わりに、また頭に新たなるイメージが。

映像と声が――

【ならば、オレは、ヒトの世界を選ぶ、貴様が価値なきと叫ぶこの世界に、オレは価値を見出そう！ ヒトの営みが貴きモノだと思っ  
ゆえに、オレの蒐集品たる価値がある故に！！】

金色の竜が暗雲たれこめる空に叫ぶ。渦巻く炎そのものに向かつて心を叫ぶ。美しき絢爛な金色はしかし、天より放たれた炎に包まれる。

その最期まで、金色の竜はヒトの世の価値を尊び続けた。炎の中から6回の咆哮が轟き、そして金色の竜は溶けて消えた。

「なん、なんだ、これ……」

吐き気と寒気が身体の中で大暴れしている。遠山はたまらずその場に手をつき、うずくまる。

その様子を、灰色の瞳はただ、見つめるだけ。

【冒険都市を人類世界として詐称認識開始、現況を”人類”の危機として仮定認識、魔術炉心にボクの全存在を選択…… 条件達成  
さあ、出番だよ、行こう。ヒトの生きた軌、ヒトの残した跡。今回は正しい役割をあなたたちへ。うん。満足さ、さよなら、ボクの、  
ううん、私のー】

銀色の髪が、黒色に戻っていく。暗雲たれこめる空を見上げた彼

女は溶けゆく金色の竜を優しく見つめ、天にまどろむ炎を睨みつけた。

その存在を焚べていく。全知の力を人知の理でもって使用する。彼女は消えゆく、それを代償として存在を捧げて喚び起こすのは、天より顕し、大きなヒトー

それが6体、人類を滅ぼさんとする炎に大きなヒトが相対して。

「……はあ、はあ、これ、アイツら……」

流れ込む映像、今自分がどこにいるのかすらわからなくなるリアル。夢の中で見る夢は遠山の意識を犯していく。

現実も夢の区別がつかなくなっていく。公文書館が見せるイメージはそれほどまでに鮮明で、残酷でー

「何が見えましたか？ いいえ、公文書館は果たしてあなたに何を

見せたのでしょうか？」

ハーヴィーは、笑っていた。

遠山を見下ろすその眼はどこまでも愉快げに。

「て、めえ……　　今のは、お前が」

「私ではございません、それは公文書館の知識があなたに見せたもの。ご存知ですか？　知識とは見つけられるのを待っています、使われるのを待っているんです」

見上げる遠山、ハーヴィーとは違いその表情に余裕は微塵もない。

「知識があなたに見せたのは不足したまま歩むあなたの終わり。知識はあなたにこう囁きました。守る為に、手に入れる為に、覆す為に、力が必要でしょうか？」



「う、あ……」

脂汗を浮かべたまま、遠山は顔を覆う。

映像が、声が、正常な判断を失わせる、絶望と悲劇が遠山鳴人の自我を蝕んでいく。

「さあ、あなたはどの知識をお選びに？ 敵を殺す為の知識？ いいでしょう、あなたの敵があなたの大切な者を殺す前に殺しましょう。それが1番早い」

弾む声、どこまでも愉快げに。

「それとも生き残る為の知識？ いいでしょう。人の別れ、喪失とはつまるところ死が原因です。ならば失いたくないのならあなたと大切なものが永遠に生き続ければいい。それが1番効率的です」

楽しくて仕方ない、言葉にせずともその声は騙る。

「うつせ、うるせえ……　　こんなん明らかにてめえ、怪しすぎんだろ」

本能的に遠山は判断を拒む。

しかし、それすら公文書館、知識そのものが認識を歪ませていく。

「ああ、フフ、我らが夢の主人、あなたは大人にならざるを得なかった人間です。誰も守ってくれず、誰も救ってくれず、全てを諦め、しかしそれでもと立ち上がった人間。……だから、ほら、後ろをこ  
覧ください。あなたが捨てた彼は今でもそこでひとりぼっち」

遠山の背後を、ハーヴェイが指さした。

それは、この空間。

とおやまのゆめだからこそ、可能であるおぞまじい世界。

眷属が、そこに呼び寄せたのは。

「は？」

指を刺された背後を振り向く、振り向いてしまう。

そこにいたのは。

「お、俺……？」

遠山だ。

遠山の背後に、遠山がいた。

目をくり抜かれ、口を縫われ、耳をそぎ落とされた遠山が――

フツ、と。

その姿が消えて。

次の瞬間には、遠山とその遠山の身体が重なっていた。

「マジかよ……」

異変が起きる。

身体が縮んでいく。鍛えた肉も、馴染んだ血も、洗練されていっ

た頭脳も。

遠山の存在の時間が、意識の中で巻き戻り始める。

遠山鳴人が人生という時間をかけて得た武器が全てなくなる。

夢の世界、己の深層に深いその場所に押し込めていたモノを知識の眷属が引っ張り出した。

「ほら、これで元通り。完成していないあなたは今、幼少の頃に戻りました。人は成長していけばいくほどに己の心の声を無視するようになっていく」

ハーヴィーが笑う。

彼女は定命の存在の脆さをよく知っている。1人では決して完成せぬ存在、本質としてか弱い存在である人間の墮とし方をよく知っていた。

「あ……」

気付けば、遠山鳴人はこどもの姿に変わっていた。

手入れのされていないぼさぼさの髪、細い手足に華奢な身体、目つきだけはわからない、ぼさぼさの前髪は彼の目を隠していた。

「ですが、その姿ならばあなたは本当の心の声に従える筈です、フフ、とても美味しそうですねえ」

困難に立ち向かうことも、危機を乗り越えることも、そして理不尽を殺すことの出来ないこどもに、知識の眷属は笑いかける。

ぺろりと、赤い舌が唇を拭っていた。

「ほら、おいでくださいませ。私の公文書館をご案内いたします故  
……」

「……うん」

手を引かれるまま、灰色の髪の女、ハーヴィーと共に本棚を巡り始める。姿に精神が引つ張られ、遠山の思考が臃げになってゆく。

「あなたは何が怖いのですか？」

知識の眷属が、子どもに問いかける。小学生に戻った遠山はころのままに問いに答える。

「……よわいのはこわい、ぜんぶ、うばわれるから」

剥き出しの心、子どもの姿の遠山が本人ですら自覚していない心の1番無防備な部分をハーヴィーに曝け出す。

「ああ、たしかに。それは恐ろしいですね。でしたらこの知識なんていかがですか？ 強さの知識、この世界に眠る強さへ至る秘密があなたのものになります、誰もあなたに比肩するものはなく、あなたはあなたの思うがままに力を振るうことができるのです」

「……………」

「おや、お気に召しませんか。いいのです、時間はたっぷりありますから。あなたは何が欲しいのですか？」

「……………ともだち、いつもひとりなんだ。だからさびしい……………」

「ああ、でしたらこれはどうでしょうか？ 人に愛される為の知識、これを使えばどんな人間だろうとも無条件であなたを愛してくれます。あなたは数多の愛に包まれて2度と孤独を感じることもなくなります」



別の丸い本をハーヴィーが差し出す。その本に記されるのは愛欲の知識。どんな存在にも愛される為の力と知識。

「……………いい」

しかし、こどもはそれにも首を振る。ひとりぼっちをいやがり、孤独を恐れているはずの彼は愛を拒む。

「うん？ おかしいですね、あなたは人一倍欲望に素直な方の筈…」

ハーヴィーが少し、戸惑う。今顕れているのは遠山鳴人という人間の最も弱くて最も正直な部分の筈。

故に偽りはできない、故に我慢も出来ない。渴望を誤魔化すことはできないはずなのに、力も愛も遠山の興味を惹くことは出来なかった。

「ま、まあ、まだまだ知識はありますから、さあ、教えてくださいな、あなたの欲しいものを」

「欲しい、もの……」

「え、ええ、そうです。私はあなたに与えます、私はあなたに捧げます。この世界を攻略する為の力を、この世界を攻略する為の知識を。欲しいでしょう？ 見たでしょう？ 弱いままのあなたがこれから何を失うのか、嫌でしょう？ 奪われるのはー」

膝をつき、こどもの遠山と視線を合わせながらハーヴェイが灰色の瞳を澱ませる。

手がかかりとして遠山鳴人を利用するのは別に、彼女はその役割の本能として、人に与え、その顛末を見届けることが生き甲斐でもある。

「ぼくの、ほしいもの……」

「ええ！ ええ！ ここには全てがあります。知識とはたどり着く為の力でございますれば。我が夢の主人、貴方にはこの知識の眷属がそこに至る全てを、いえ、貴方が望む全てをお与えしましょう！」

「さあ、定命の者よ、欲しがりなさい、手に入れなさい。限りある命の中で溢れかえるばかりの、その身に宿る欲望のままに——」

眷属、この世界より外れし力の塊。この世界には存在しない”神”と呼ばれる高次元情報体に等しいその存在が、遠山鳴人に待る。

チートを与えようとする

「  
いない」

「……うん？」

「  
いない、なにも」

「  
え？」

灰色の瞳が揺れる、茶色の瞳は全く動かず。

陰鬱な表情の少年はぼそり、ぼそり、呟き始める。

「いらない、ぼくがよわくてうばわれるのも、ぼくがひとりでさびしいのも、それもぜんぶぼくのものだ」

「え、いや、いやいや、何をおっしゃって」

「たとえ、たどり着けないとしても、例え奪われて、孤独で、死にそうなほど苦しくても、それは全部、その感情すら全てぼくのものだ」

2460

本質。

遠山鳴人の本質を、ハーヴィーは見誤った。

数多の存在を見てきた知識の眷属、一時期はあの”全知の竜”すらを従者にせしめた彼女はしかし、ちつぽけなその人間を初めから見誤っていた。

「その終わり、結末から過程、その選択の全てはぼくだけの物だ。他人に誘導されることも、他人に指図されることも、他人に任せられることも、他人に与えられることも、あつてはならない」

「あ、がつ!?!」

少年が、呆然としているハーヴィーの細い首を小さな手で掴んだ。

弱い力、細い腕。

ふと、前髪に隠れていた目が、髪の間隙から覗いた。

その目つきは変わっていない。敵を殺すことに一切の躊躇がない、探索者の目つきだけは。

いや、違う、探索者だからではなく、遠山鳴人は最初からこうだ

ったのだ。

「あ、が、な、なに、を……」

「お前が与えるんじゃない、お前が導くんじゃない、お前が選ぶんじゃない。ぼくだ、ぼくのは全てぼくが決めるんだ」

暗い声、少年の高くて可愛いらしい声はしかしどこまでも深く、昏く。

「タロウはいない、だけど、ぼくは”ぼうけん”をする、邪魔するな。彼とぼくのぼうけんはぼくらだけのものなんだ」

「ごどもの姿の彼の言葉こそ、遠山という人間の剥き出しの全て。

真なる強欲は、その欲望が叶えられなかった苦しみすらも己がものとして欲するのだ。

故に許さない、他人の介入を果たした時点でその欲望は自分のものではなくなる、それを遠山は知っている。

「あ、ぎ、た、タロウ……？ ま、まさか、あの湖の底にいるのは  
ー」

「お前が与えるんじゃない、ぼくが、お前から奪うんだ」

「ひ、も、戻れ……！」

バサササ、ハーヴィーの輪郭がぼやける、かと思えばその姿が無数のコウモリに変化し、こどもの遠山の首締めから抜け出した。

「……にげるの？」



「ひ、もどれ、もどれ、もどれ、もどれもどれ！」

ゆらり、後方に引いたハーヴェーに少年が歩み寄る。彼が一步進むたび、知識の眷属が慌てて指を何度も振るい始めた。

土俵を間違えた。ハーヴェーの公文書館であると同時に、ここは遠山鳴人の夢の中。

狂った人間のありのままの本質、幼い少年の姿。Ｔシャツ短パンのこどもに、知識の眷属は本気で怯えていた。

「うるす、おまえ、ぼくの、ぼっけんの邪魔をしようとした、敵…」

ふらり、ふらり、幽鬼のごとき足取りで、とおやまなるひとが、

獲物を見つめた。

「ひ、やだ、やだやだ！！ も、ど、れ！」

ハーヴィーは既に取り繕う暇もない、何度も何度も指を振って、  
そして。

「あ  
」

ぽんっ。

シャンパンの栓が抜けたような間抜けな音。同時に遠山鳴人の姿  
が元に戻っていく。

「はあ、はあ、はあ、よかった……」

「いててて、頭いてー。クソ、なんだ、今の…… 身体がガキみて

えになって……」

その場に座り込み頭を抑える遠山、不思議な感覚に戸惑う。

しかし、なぜかかなり、すっかり爽快な気持ちに変わっていた。

「よかった、戻った、もどってる……　　フフ、フフフ、さ、さすがは我らが夢の主人、ただものではないようで」

「うるせーよ、てめえやっぱ信用できねー。人をシヨタ化させてイタズラしようとしてくるとはよー、薄い本みたいなことしやがって」

あの映像でまわりついた絶望感も今はなく。

ただ、フラットな感覚で遠山は立ち上がる。

「な、なんて図々しい言葉……　　あ、あんな恐ろしいこともがシヨタのわけないでしょうに……」

「あ、愛くるしい感じだろーがよ」

「いえ！ 確実にアレは何人が既に殺してるような…… あ、殺してましたね、そういえば……」

「なんの話だ？ はー、だが、なんとなくこの仕組みが理解できたぜ。知識、成る程、お前は俺にここの知識を嫌でも使わせたいらしいな」

「え、ええ、それが私の目的へと、そしてあなたに迫る試練を乗り越える為のー」

「決めたぜ、知識だ。俺に今必要な知識をよー。」

ハーヴィーの言葉を遮り、遠山が言葉を紡ぐ。

遠山鳴人は決めた、知識の眷属の手を取ることを、

ピコン

【メインクエスト ” 知識の従者 ” 達成】

【報酬 公文書館の権利、注意、取引の履行を行えなかった場合、知識の眷属に存在を奪われます】

予想通りのクソデメリットが露わになる。

遠山はしかし、それを笑う。

使い続ける知識は既に決めていた。

「ふ、フフ、よかった、それは、よかった、な、何をお選びに？」

力の知識？ それとも愛の知識？ 生の知識？ 死の知識なんてのも…… あ、あ、ああそうだ、竜、竜の力を得る為の知識、竜の知識こそ、竜殺したるあなたに相応しいのでは？！ そう、天使に対する唯一のカウンター……」

「パンの知識」

遠山が、求める知識を口にした。

それが合図となる。

「……………うん？」

「パンの知識が欲しい」

「……………は？ パン？」

「うん。」

それは遠山鳴人の願いを聞き入れた。

取引は、為された。公文書館はその権利を持つ者が願う知識へと最適化されていく。

「あ、うそ、ちょ、まって、待ちなさい！ 公文書館！！ 今のは、ナシ、ナシよ！ パンの知識なんて、そんな！？」

「おお、すげえ、本が飛んでる」

「あああああ！？ うそうそうそうそ！？！ 嘘でしょ？！  
なんで、なんで、公文書館が全部塗り潰されてるの？！」

「俺の夢の中だからじゃね？ ほら、土地代的な」

「あ、あああ、だめ、だめだめ、止まって、止まれ…あ、ああ、私の、公文書館が、全部……」

がこん、がこん。

本棚がパズルを組まれるように変わっていく。匠感のある公文書



館はおのれの雰囲気やデザインに拘るのだ。

「うわ、すげえいい匂い。パンの匂いするんだけど、この本」

パン屋の石窯のようなデザインの本棚、バケットの形をした本棚、カゴのような形をした本棚。

おまけに何故か漂う焼き立てのパンの香りもきちんと添えて。

既に知識の眷属の隷属から離れた公文書館は新たな権利者を歓迎する。

「あ、ああああ……」

「へえー、全部ニホン語で書いてあんじゃーん。あ、あんぱんの作り方もある。お、こっちの本はクロワッサンの歴史……　へえー」

絶望の声を上げるハーヴェイを尻目に遠山が早速本を物色し始めた。

気付けば本のデザインも変わっている、あの円形ではない。

きちんと角のある通常のデザインに戻っていた。

「あ、あああ、力も愛も生も死も正義も契約も悪事も…… ぜんぶ、パンになっちゃった……」

「おい、お前、お前との取引内容は確か、その知識を使い続けることだったよなー。安心しろ、ゼーんぶ、使い切ってやるからよー」

香ばしいパンの香りがする丸い本を持った遠山が、嗤う。

「貴方、狂ってる…… ああ、あの悲劇を見て、なんで、パンを…… 選べるの？」

心底、理解できない、嫌悪感を隠そうともせずハーヴィーが遠山に問いかけて。

「あー？ んなもんでめえが見せた幻覚かもしれないねえだろうが。起ころうかどうかもわかんねーものの為に、訳わかんねーヤバイモンに手え出すのはアホのやることだぜ」

「失っても、いいと、いうの？」

その問いにもはや力はない、しかしそれは当たり前前の疑問で。

「ヒヒヒヒヒ、そうはならねえ。失っても取り戻す、邪魔者は始末する、俺は今度こそ湖のほとりに家を建てる」

嗤う、絶望を、悲劇を。

「全部だ、今回俺は全てをやる。何も諦めないし、何も妥協しない。その為に必要なモンがなにかわかるか？」

いつだって、探索者は絶望と悲劇を嗤い飛ばすのだ。どこの世界にいてもその事実だけは変わらない。

「……あ、ああ、その、め、そのめ、こわい……」

酔いにまみれたハッピーな目、ハーヴィーがそれを見て慄く。

「美味しい食いもん、温かい寝床！ 満ち足りた生活！！ 試練に挑むには、欲望のままに全てをぶちのめすにはそれが必要だ。だからこの知識はありがたく使わせてもらっせ、知識の眷属」

ふんぞり返りドヤ顔をかます遠山、尻餅ついたまま、怯えるハーヴィー。

格付けは、終わった。

「取引成立、だな」

これでもかというほどの、遠山史上最強のドヤ顔をかます。

強欲なる男は全てを噛い、知識の眷属からパンの知識を篡奪した。  
力でも、生でも、死でもなく。

故に、欲望のままに遠山鳴人が生き続ける、自分らしく生きるだけ  
でその取引は履行される。

「あ、ああ……」

知識の眷属はようやく気付いた。

これは、関わってはいけないタイプの人間だった。

永い時をかけて創り上げたその公文書館は今や、世界の全ての知識を保存する館ではなく、あらゆる世界の美味しいパンの全てを保存する館に。

神の如き存在の領域を、強欲冒険者の欲望が侵しつくした。

「ああ、うそ、嘘でしょ……　力の知識も、生の知識も、私の中にしか、ない。本が全部、消えちゃった……」

「あ、ホットドッグの本めっけ。これ好きなんだよなあ」

呆然と膝をついて、固まるハーヴィー。彼女の公文書館に存在していた知識はそのほとんどが、パンに侵されて。

「へー、ソーセージの作り方も載ってんじゃん。でも、あれ冷やしたりしねえとまずいって聞くしなー」

どこまでも呑気に、本棚を見回る遠山。

ぱち、暖炉の薪がまた弾けて。

「  
プエ  
」

「  
あ？  
」

ハーヴェイの方から変な声が聞こえて。

「プエ、ワ、……プア、プエ……」

メガネの奥、灰色の瞳にみるみる涙が溜まって。すぐにそれは決壊した。

「わア、ウワアアアアアアアン！！ プエン、プエエエエエエエエエエ、ヤダあああ、私の、ハーヴェイのお本が…… わああああああああん！！」



大泣き。滝のように涙を流し、仰向けになったハーヴェイの泣き声が公文書館を揺らした。

遠山鳴人は本を小脇に抱えたまま、呆然と立ち尽くし

「……………泣いちゃった!!!」

急に泣き出した眷属の前に、割とパニックになっていた。

49話 はじめれ！ とおやまのゆめ！（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを！ご覧くだ  
さい！

< 苦しいです、評価してください > デモンズ感



ギャン泣き、メガネをびしょびしょにしながらハーヴィーが泣き続ける。遠山は過去の苦しい経験を思い出す。学校で女子を泣かせてしまった時のアレと同じだ。

「え、ええ…… お、落ち着けよ、ほら、パンの歴史の本とかかすげえ分厚いぜ？ ほらみてみ、シュメール文明の頃から…… うん？」

なんとか落ち着けようと、あやしてみる。コイツ本好きそうだし、パン分書館も悪くねーでしょ的なニュアンスで説得しようとしてー「いや…… まで、待てよ。……なんで、シュメール文明やら肥ような三日月地帯とかの記述があるんだ……？」

違和感につまずく。

パンの歴史、そう題された本には確かに遠山が知識として知る現代の歴史におけるパンの歩みが描かれている。

「おかしくないか？ 普通、こういつの…… この世界のパンの歴史が記されてるんじゃないか……」

てつきりこの世界、異世界の歴史に基づいてパンの成り立ちが残されているのではないかと予想していた遠山。

なんの気無しに気付いてしまった違和感は気持ち悪さにも似ていて。

「ウワアアアアアアン、アアアアアアアアン、プエ、プアン  
エエエエエエエ」

その思考をハーヴィーのガン泣きが邪魔した。

「ああもう！　うるっせえ！　泣くな、今ちよっと考えごととしてんだからさー！」

「ワッ……だ。怒鳴った……　ヤダ、ヤダ……　怖い、コワイ  
イイイイイ……」

思わず怒鳴る、もちろん泣き喚く女の子に怒鳴るとさらに泣き喚くのは当然のこと。

ハーヴィーは涙をさらに強く。

「嘘だろ、なんだこのクソザコメンタルメガネ。おい、雑魚メガネ、泣くなつて、悪かったから。ほら、ゆっくり深呼吸してみろ、深呼吸  
吸」

先ほどまでの悪役ヅラした慥無礼な大人の態度や底知れなさにはもはやなく。遠山は幼児をあやす気分で、ハーヴィーに接する。

「ふ、ぴ、プえ…… す、す、すっ」

しゃがみ込み、ハーヴィーと視線を合わしながら深呼吸を促す。

「そっそっその調子、その調子。吸ってー、吐いてー、吸ってー」

「すっ、すっ…… あ、いい匂い……」

遠山がハーヴィーをあやす。なんとなくまくいきそっだ。いつのまにか泣き止んで、ハーヴィーが少し顔を綻ばせた。

「だろ？ ほら、パンのいい匂いするんだよこの本。絶対いいって、焼き立てのパンの香りする図書館とかバズるって」

遠山がもしかしたら自分には意外と保育士とか向いてるんじゃないかと明らかに間違いである思い込みをかましていた、その時。

「……じつは、違う」

「あ？」

ハーヴィーが静かに、首を横にふった。

「あなた、あなたから、とても、とても、いい匂いがする」

「おっと、なんか流れ変わったな」

先ほどまで小さくて可愛い生き物のように大泣きしていたハーヴィーが、すんつと表情を落として立ち上がる。



「香ばしい匂い、芳醇な香り…… 醸されて煮詰まれて、匂い立つ……」

明らかに、その眼がおかしい。

ガラス玉のような精密な美しさを孕んでいた瞳は今や熱に浮かされ、失敗した目玉焼きのように歪んでいて。

「へい、へい、へいへい、ハーヴィー、おめめがなーんかよくないぜ。その顔はとても良くない顔だ。……まるで獲物を見つけた怪物種みてーな目だぜ、そりゃ」

見たことのある眼だ。怪物種、そう、捕食者が好物を見つけた時のようなー

「……D·où venons·nous ? Que sommes·nous ? Où allons·nous ?」

「……は？」

「あ、あア、この感覚を私は知ってる、知識の眷属、ハーヴィーとしての感覚じゃない。もっと、もっと昔、むかし、むかしの感覚。わたしが私、アタシである時の感覚」

顔を抑えて身体を折るハーヴィー、ぶるり、ぶるり、痙攣するように小さな体躯が震えている。

遠山は思わず、一歩、二歩あとずさり。絨毯の感触がやけに重たく。

「おい、待て、まで、だ。それ以上動くな。俺に近づくな」

「香ばしい、その体に流れるモノは何？ てか、まじでいい匂いするんだけど？ なに？ 誘ってんの？」

ばささささ。ハーヴィーが顔を上げる。涙の跡ははっきり残っている、しかもうその顔に嘆きや焦りは一切ない。

頬を紅潮させ、目を見開き身体を逸るように立つハーヴィー。彼女の周りにはどこから現れたのか無数の黒い羽を持つコウモリが飛び回る。

「おい、コウモリ漏れてるんですけど」

「ああ…… 今、とても気分がいい。アンタがハーヴィーの公文書館をめちゃくちゃにしたからかな…… ハーヴィーである私と、ハーヴィーになる前のアタシがごちゃ混ぜになってくる……」

ペろり、ハーヴェーが己の薄い色の唇を舐める、血に染まっているかのような赤い舌が艶かしく蠢いて。

「ねえ、アンタ、よく見たらさ、めちゃくちゃ美味しそうなんだけど」

ニヤリと笑うその口元からは、明らかに人よりも長く太い犬歯、牙が見え隠れしていた。

「わあ、立派な犬歯」

ダッシュ。遠山は珍しく速攻で逃走を選んだ。脇目も振らず公文書館のでかい本棚の並ぶ隙間を走り抜ける。

「待て！　なんで、逃げるの！？」

「うるせえええ！！　そんな大量のコウモリ従えて涎垂らしてるでかい牙の女なんざ逃げるに決まってるだろうが！」

速い、ハーヴィーがコウモリの大群とともに地面を滑るように遠山を追う。

「フッフ、待って、待ってよ！　乱暴なことしないからさあ、マジで！」

ぶわり、ハーヴィーの背中から闇と夜が形を成した。翼、薄い翼膜は夜を張り付けたように暗く、鉤爪は闇の色をしていて。

「翼ア？！　ドラ子と聞いてめえといいカツコいいなクソ！　なにその黒い羽！　コウモリ？！」

遠山が目を剥く。公文書館の高い天井までのスペースをふわふわと飛ぶハーヴェイに唾を飛ばす。

やばい逃げられない。

「フ、フフ、ああ、なんたる、これマジで何たる！？  
逃げるアンタを見てると何か思い出せそう！ アタシ、アタシ、アタシ、アタシアタシ！ 今、最高にアタシな気がする！」

「クソ、余裕ぶつたり泣き喚いたりノリノリになったり忙しい奴だな！ おい、警告だ！ 俺を追うな！」

パンの香ばしい香りの中をつつきり遠山が走り続ける。本棚を右に、左に曲がりながら少しでもハーヴェイから遠くへ。

しかし、翼を持つ存在と持たない存在には悲しくなるほどの性能の差が存在した。

「フフフ、定命の者！ いい、いいよ！ その必死な顔！ アンタの汗、アンタの吐息、ああ、なんて、なんって香ばしいの！？ たまらない顔で誘っじゃん！ このスケベ」

「誰がスケベだ！！ このドスケベ雑魚メガネ！」

必死に逃げる遠山を空中から見下ろし、熱い吐息を吐くハーヴィー。その表情は蕩け、惚けている。

遠山は遊ばれていることに気づくも逃げることはやめない、叫びつつ少しでも遠くへ。

「フフ、フフフフビ、フビビビビ、たのしい…… たのしいなあ……！！！」

「うお！？ 嘘お！？」

瀑布のごとき、黒い奔流。コウモリだ。ふよふよくるくる空を舞うハーヴィーが指を振る。

それだけでコウモリの大群はあつという間に遠山を包み込み、その身体を拘束した。

「つーかまーえた」

ふわり、ふわり。コウモリの大群に捕らえられ、吊り下げられたように宙に浮かぶ遠山。

後ろ手を縛られたような姿になり、粗末な寝巻から首元が覗く。その様子を見たハーヴィーはごくり、喉を鳴らした。



「ああ、だめ、ダメダメダメじゃん！ 鎖骨、首筋！ そんなに曝け出してさあ！ やっぱり、誘ってんじゃん！」

高揚している、ハーヴィーは自分で自分の肩を抱き締めながらくるくると空を舞う。

「くそ、おまえ、これ、コウモリで束縛プレイとは上級者すぎるだろ」

「フヒ、ねえ、いいでしょ、アタシの目え、見てよ」

遠山が苦しげに吐き捨てる、そんなこと意も介さずハーヴィーが翼をはためかせ遠山に肉薄した。

ブルブルと震えるガラス玉の瞳が遠山鳴人を捉えて。

「は？ ツーニー」

遠山の身体に痺れが走る。甘い感覚にも似た妙な痺れ。自分の意思とは関係なく、身体が硬直し動かない。寝起きの動きづらさを大袈裟にしたようなー

「フヒ、ああ、この目、こっやって、使うんだ…… 獲物を魅了しちゃうば簡単なんだ……」

「ッ、あ」

己の目の周りを撫でながら悦に浸るハーヴィー。新しいおもちゃを見つけた幼児のように愉快そうに笑う。

「フフフ、フヒヒヒヒ。ああ、あなたの肉と皮の内側、赤くて暖かいのが見える…… 綺麗……」

「ッくそ、おまえ、何した……」

ハーヴィーが遠山の頬を撫でる、死人のように白く長い陶磁器のような指先、その指使いは優しい。

愛しい恋人の髪でも梳くかのような手つきでハーヴィーが遠山の顔をいじくりつづけた。

「フヒ、人、人、人、ああ、我らは夜の貴族、惑星の精、星により生まれた人のありえざる可能性……　ねえ、アンタ、贄の自覚を  
持つてよ。もっと、もっとと怯えて。もっとその目で見て。あともう  
少しで、アタシはアタシを思い出せそう……」

「クソ……」

「ああ、フヒ、可愛い……　怖いのに、体の力、抜けるっしょ？  
アタシ達とアンタ達はそうできてんの。捕食者と被食者、……で  
も、安心しなよ。大事に、大事に、少しずつ飲んであげるからさあ」

「何も安心できねえ……」

まずい。

遠山は本気で焦っていた。身体の痺れが抜けないのもそうだが何より本気でまずいのは抵抗する気がどんどんなくなっていることだ。

あの目に何か仕掛けがある。

普段なら湧き出てくるはずの闘志、遠山は怒りや憎しみでその闘志を湧かせるタイプの人間だが、目の前の女にどうもそれが働かない。

「ああ、アタシ、今最高にアタシをしてる……　嘘でしょ、天使とかそんな関係なく今、アタシは自分の正体に近づいてる……　名前とかそんな思い出せないけど、でも、アタシがどういう存在なのか、あともうすこしでわかる……」

「自分探しが物騒すぎるだろ、おい、離せ、それ以上マジで近づくな」

うつとりと悦に浸り続けるハーヴィー、それとは対照的に冷静にぼやく遠山。

「へえ、……思ったよりさあ、頑固なんだね。定命のものは夜の貴族たるアタシらの目に逆らえないはずだけど。探索者適性…… ダンジョン酔いの影響かな」

遠山の様子にハーヴィーが目を少し大きく広げて、下から舐めつけるように見つめる。知識の眷属としての性が珍しきものへの興味を更に強くさせていて。

「訳わかんねえ事ばっか言いやがって……」

「フヒ、その目、最初は怖かったけど、今はいいね、とてもいい。そういう目をさ、ドロドロにするのって高ぶるじゃん。……ああ、いいこと思いついた、アタシはハーヴィーでもあるんだから、知識の眷属でもあるんだから、さあ」

「待て、何を」

嫌な予感、加速。

「アタシ、らぶらぶプレイの方が好きなんだよね、ゴーンにやる  
よらね」

「あ」

目が、遠山を捉える。

短い悲鳴のような遠山の眩き。

ハーヴィーの瞳、そのガラス玉のような虹彩が蠢き、まるで万華鏡を覗いているようなー

「知識領域への接続開始 異界、公文書館は侵食、検索、パンの知識のみ、接続を公文書館から知識の眷属ハーヴィーへと変更、他眷属の存在情報取得、”美と女”の眷属の権能情報を認識…… ねえ、アタシの目え、見てよ」

知識の眷属ハーヴィーは、あまねく世界、全ての知識を保有する力そのもの。

故にそれは自らと同格の存在たる眷属の知識すらも保有する。目の前の男のそそる反抗的な目つきにハーヴィーはついに昂りを抑えきれなくなる。

鍛えられた身体、ストレスから香る汗、その内側にたぎる血潮。

それらがほしくてたまらない。それらが自分に捧げられる瞬間をもう、まてない。

「あ  
」

遠山の動きが今度こそ完全に止まる。コウモリの群れにそのまま捕らえられ、力を抜いたまま動かなくなる。

「それでいいの。ほら、もっと目見て」

己の知らない夜の力と、”美と女”の眷属の力の併用、それはある意味において神でさえ墮落させることが出来る魅了に等しい。

夜の貴族、捕食者としての興奮が抑えきれない。極上のエサを目にした彼女は忘れているはずの本当の己を取り戻しつつある。

「フヒ、フフフ、フヒヒヒヒ」



その興奮に、酔う。

聡明なはずの頭脳も知っていたはずの知識も、遠山鳴人という男に酔っているハーヴェイは全て臙げになっていた。

コウモリの群れに捕らえられ、だらりと弛緩した身体を晒す遠山を見て、ハーヴェイがたまらず、ごくり、喉を鳴らした。

「大丈夫、大丈夫だから、優しく、するから、さあ」

ぼたり、ぼたり。

気づかないハーヴェイ。伸びに伸びた犬歯、いや、牙を晒しつつ、口からは大量の涎を垂らし続ける。宙から落ちる涎が舞って、遠い地面に落ちていく。

答えがある。己が何者なのか。ハーヴィーとなる前の自分がどんな存在で、どこからきたのか。

「ああ、たまんない……　大丈夫、きっと、アンタも気持ちいいから、さ」

「……………」

「アタシはおいしくてきもちよくて、アンタはただ気持ちいいから、きつと。大丈夫、大事にするから、先っちょだけだから」

そつと、ハーヴィーが指を振る。遠山を空中に捕らえていたコウモリの群れがその動きに従い、遠山を絨毯の上に降ろした。

ハーヴィーが夜闇に溶ける羽をはためかせ、音もなく遠山鳴人の元に。

その目を欲望で歪ませて、溢れる涎を抑えずに。

美と女の知識をもって、さらに強い魅了の言葉を使う。

その、言葉を――

「好き…… 大好き…… だから、ちよっだい」

その言葉を、言ってしまった。

童貞全開で盲と化した眷属は完全に忘れていた。己の夢の主人が  
どんな人間なのか。

先程見たはずの本質的な恐怖も、それに対するある女の崇拜めい  
た狂信が産み出したおぞましい傷跡も。

全部、知っていたはずなのに――

「好き、じゃあ、敵だ」

パチリ。

遠山鳴人のスイッチが入った。

闘志が、舞い戻る。

全ての精神的な汚染は、もう遠山鳴人には届かない。

もとより擦り切り、もとより壊れ、もとより歪められているその  
自我は、完成せずともこれ以上壊れることはない。

「え」

夢の中でも遠山は探索者であり、冒険者だ。故にそのぼっけんを  
彼はどこまでも見つめ続けている。

「来い、キリヤイバ」

遠山の首元から顕れるキリと、それにまみれて首からはえるように  
現れる欠けたヤイバ。

「ビエッ」

瞬く間に、遠山鳴人を拘束していたコウモリ達が小さな悲鳴を上げたあと、粉々に切り刻まれ、血の煙に変わった。

――私はこの国を選ぶ。あの人の理想と共に死ぬ。あなたと共にはいられない、それが苦しくて、悔しくて仕方ない。だからね、遠山くん。

遠山鳴人に施された催眠が、刻まれた言葉に過剰反応を起こす。

――普通の人にならないで。あなたは誰にも靡かない、あなたは絶対歩みを止めない。私も同じ、あなたと同じ。愛とか恋とか、それはあなたの歩みを止める邪魔なもの

――普通の人にならないで。誰かと遂げるあなたなんて、解釈違

いもはなはだしい。だってはあなたは……

「俺が愛されるわけが、ない。俺が誰かに好かれるわけがない。……だから、敵だ」

頭の中に焼き刻まれた催眠が遠山の脳みそを破壊する。瞬時に切り替わるスイッチが遠山鳴人の選択をシンプルに変えていく。

「ふ、フヒ、ああ、イカレた女、薄汚い女……　　そういうこと、マジでありえねえし、ガチでキモいんだけど、強火すぎるっしょ」

ハーヴィーが夜の帷を身に纏い笑う。眷属の目にはっきり映るのは遠山鳴人にまわりつく生き霊にも等しい妄念。

「俺は……　　誰にも愛されない……　　だから」

フラつきながら、遠山が立ち上がる。

武器はその手に、理由は胸に。

呪いにも等しいその暗示は、遠山鳴人が歩みを止まることを許さない。

安易な安寧も、異性の愛による満ち足りた幸福も、それら全てを解釈違いと切り捨てる異常者の傷跡は、遠山にしかと刻まれている。

「フヒ、ああ、かわいい…… どうしようもなく歪んで捻じ曲げられて、それでも折れることなく生きている…… ああ、定命の者  
つてホント、サイコー」

超越者たる彼女はしかし、その傷も受け入れる。壊れてもそれに絶望せず進み続けるその姿に熱いため息をこぼして。



「キリヤイバ」

遠山鳴人の選択はシンプルだ。敵は始末する。

首から生えているヤイバの柄を握りしめ、引き抜く。

欠けたヤイバの鋒をコウモリを纏わせる女に向ける。

「ああ、その剣、やっぱりそういことなのね。あのクソジジイ…  
…どこから仕組んで………」

キリヤイバ、遠山鳴人の身体から引き抜かれたその欠けたヤイバを見てハーヴェイが目を細めて、舌打ちをした。

「警告だ、これ以上俺に近づくんなら始末する。図書館をパンだらけにした負い目もある。出来れば穏便にすませたい」

退くならよし、退かないなら始末する。

判断はシンプルこの上ない。

「……いや、いやいや、逆効果っしょ。そーゆーの燃えるんだよね。アンタを歪めたその女、マジで気に入らないからさ、寝取ってあげるよ、トオヤマナルヒト」

遠山の様子に、深い笑みを湛える超越者。

「警告はした」

視線、鋭く。

「フヒ、きーてあげない」

眷属はしかし、どこまでも妖艶に微笑み。

遠山がキリをさしむけた。

「え？」

ばしゅん。

キリが広がらない。萎むような音、キリは濃く、広がり続けるものの、それは遠山の意味通りの動きではない。

ー我が勇者よ、こちらへ

がたがた、公文書館中の本棚が大きく揺れる、地鳴りをもって響く何かの声だ。

「ちえ、時間切れ……か」

ハーヴィーがため息をつき、パチリと指を鳴らす。現れたイスに深く座りこみ、つまらなそうに唇を尖らせた。

ーその通りだ、知織の眷属、北欧の知識神のカケラよ。貴様の卑しい欲望で我が勇者を穢すこと、能わず

声が響く。同時にどんどん霧が濃く、重たく。

「ちよ、なんだこれ、前が見えない……　　キリヤイバが、言うことを」

遠山がいくら抑えようとしても、キリヤイバが制御出来ない。遺物を手に入れてからこんなこと初めてでー

「はあ、まあ、いいや。なーんか白けた。我が夢の主人。また次の夢で会お。アタシ、アンタに興味湧いたし」

「お前、キャラ全然……」

ハーヴィーの姿すら、霧に紛れてもうはつきりとは見えない。重い霧は遠山の身体を濡らしつつ、まとわりついて。

「そ、これがアタシ。アンタが思い出させてくれたホントのアタシの残り香。またね、上級探索者。そのモーロクジジイにいやらしいことされそうになったらすぐにアタシの名前、呼んでね」

――貴様と一緒にするな、卑しき血の化け物、夜の貴族を騙る寄生虫め

「ええ……もう、状況がわからん」

――我が勇者、公文書館を出よ

声が響く。同時に、遠山の足がまた浮いた。ふわふわの霧がついに実体となって遠山の身体をベルトコンベアのように運び始める。

「うお!?! 霧が、くそ! 今日こんなばっか!」

霧に足を掬われ尻餅ついた遠山はそのままスイツと運ばれていく。

抵抗も、なにも。状況に流されるままに運ばれてい

「フフ、またね。トオヤマナルヒト。大丈夫、ここにアンタの敵はいないから、さ」

「お前何言ってるー うわぶら!?!」

ハーヴィーが、小さな手をひらひら振って。すぐにその姿は見えなくなった。

「ハア…… 一口、飲みたかったナア……」

漏れた眩きはしかし、重たい霧とパンの香りがする本棚に遮られ  
遠山に届くことはなかった。



50話 ギャンナキ、キューケツ、キリ（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください  
さいー！

< 苦しいです、評価してください >      デモンズ感

51話 キリ、カミ、トオヤマ

…  
…

「うおっ、と、あ？！ 扉、扉扉！？ ぶつかっての！！ ああ、  
もう、開け！」

キリに身体を捕らえられ、ベルトコンベアで流れるドーナツのよ  
うに運ばれていく遠山。

目の前に迫るドア、目を剥いてそれに叫ぶ。

がたん。観音開きの大きな門とみまごう豪華な木の扉が、公文書  
館の主人の命により開いてそのまま外へー

「うおっとお？！ イダッ」

ペしり、強引に運ばれてついに公文書館の外へ投げ出される。顎を絞めて上手いこと受け身を取り、その場に座り込んだ。

「いてー…… キリヤイバ、てめ、えらく荒々しいじゃねえか」

こんなのは初めてだ。キリヤイバが遠山の制御を離れて濃い霧を操り遠山を運んだ。

欠けた刃を見つめてもなんの返事も返ってこない。

「ん？ お前、なんか少し長くなってね？」

ふと、先程も感じた違和感、改めてキリヤイバの刀身を眺める。座り込んだまま軽く振ってみたり、上に持ち上げて下から覗き込んでみたり、いつもより刀身が長くなっているような。

――我が勇者、よくぞ公文書館を抜け出した。前へ。湖へ

「うわ、また声が…… 湖……？ あ………」

響く声に顔を顰め、遠山が前を見る。キリヤイバを己の首に収めながら、ぽかんと口を開ける。

そして、言葉を失った。

静謐な空気に、ようやく気付く。

太陽が僅かに顔を出し、遠くの空が白み始めている。

薄闇の中に曙の光が僅かに混じる、暗いのと明るいとの狭間。

「すげえ……」

薄い霧が辺りに。絹のように空中に揺蕩う霧はしかし、視界を覆うこともなくただ、辺りを浮かぶだけ。

空気は冷たく、心地よい。息を吸うたびに冷たさが熱った身体を内側から覚ましていく。

冷たい朝、夜明けの中に遠山はいた。目の前に広がるのは絹のような霧を湛える大きな湖。

「湖…… いかん、頭おかしくなりそう」

無意識に歩む。朝露で濡れた芝生を踏みしめて、一歩、一歩。

ようよう白くなる山に囲まれ、遠くには細い紫色に染まる雲がの

んびりとたなびいている。

夜明け、早朝。ただ、吹き抜ける風が心地よく。

さああっと、風が舞うたびに湖の水面がざわめく。見えない大きな何かが湖の上で踊っているように、風が吹くたびに湖面にたゆたう霧も舞い踊る。

「……ふう」

気付けば遠山は湖のほとりに腰を下ろす。朝露が身体を濡らすことすら気持ちよかった。

清廉な空気の中でぼーっと、湖に見惚れて。ただ、ただ、その空間は美しく、そして心地よい。

「これでサウナあったら完璧だな」

ぼんやり、遠山はつぶやいた。自分が思い描く辿り着くべき光景

の理想的な立地だ。

「美しき光景だ、ヒトの子の心の中とは思えぬほどにな」

「まあ、そりゃ俺は心が綺麗………　　うそだろ」

思わず顔を抑える。

気配も何も気付かせず、それは当たり前のように遠山鳴人の隣に現れた。

「ふむ、少し静かに。仕掛けが悪いのか？　ふんむ、太公望のようにはいかぬものだ」

「え、ええ………」

釣りを、している。

その盛り上がった太い腕で振るわれる物干し竿のような釣竿を振り、そいつは釣りをしていた。

傷だらけの身体、見上げるような巨躯。そう、でかい。遠山3人分くらいにはでかい身体のそいつ。

正気のない肌色はまるで死人のごとく煤けている、袖の短い神主が着るような装束から覗く身体は抉られたような傷跡が目立つ。

そして、何よりその見上げる位置にある顔は――

「む、きたー!! 我が勇者よ! そのタモアミを待てえい! し  
くじるでないぞー!」

「あ、はい」



いつのまにか遠山の側に現れていたアホみたいに大きなタモアミ。もちろんこんなもの今の今まで存在していなかった。

「ほ、ほほほほほ！　これはよい引きじゃあ！！　でかい、でかいぞおー！」

「ええ……」

ぐぐぐと、波打つ筋肉を振るい、大男が釣竿を持ち上げる、くの字にしなる釣竿、波打つ水面、完全に釣りだ。

遠山は流れに飲まれて言われるがままに、両手でタモアミを持ち上げる、人ひとり掬えそうなタモアミはもちろん重たい。

「おんどりゃああああー！！」

「あの、これタモアミデカすぎなんすけど」

格闘する大男にぼやく。

「気合いじゃ！ ヤマトの国の男じゃろて！ 気合いで待てえい！」

「ああもう、なんでもいいや。どっ、こいしょ！」

聞いても無駄そうなので、気合いでタモアミを身体ごと持ち上げる勢いで振るう。

そのまま水面にタモアミを差し入れて。

「フン！ よし、よくやった！ こちらにもてえい！……」

「ふんぎ、ぎぎぎぎぎ、オラァ!!」

水しぶきが近い、静謐を破るその騒がしさ、野太い2人の掛け声が湖に響く。

遠山の持ち上げるタモアミに一気に重さがかかる、引きずり込まれるかと思った瞬間、でかい手のひらがタモアミを握り、一気に引き上げた。

飛沫、水。

人間を丸呑みに出来そうな大きく真っ黒でツヤツヤした魚体。

ふよふよ動くひげに、大きな口。

ナマズだ。ナマズが、釣れた。

「よっしゃ、よっしゃ、くるしゅうない、おお、これは立派なナマズじゃ、我が勇者よ、よお頑張ったのお」

「お、も…… てか、でかいな。丸呑みにされそうだ」

ばちやばちやとタモアミの中で暴れる大ナマズ。怪物種かともまごうほどの見事な魚体に遠山がため息をつく。

男は常にでかい魚に惹かれるものだ。

「しかし此奴は我らに釣られた。お主を喰らうことは出来ん、此奴を喰らうのは我らよ。よっと」

大男が、ナマズの魚体に触れる。

次の瞬間にはなんの脈絡もなく、遠山の背後に大きな焚き火が熾り、そこで大男がいつのまにか捌いていたナマズを炙っている。

「マジかよ、もうなんでもありだな」

夢独特の展開の速さと意味の不明さに遠山が力を抜いた。パン文書館の次はナマズ炙りの夢だ、疲れているのは間違いない。

「ふむ、人の子の大きさだとこのくらいか？ ほれ、ナマズの白焼きじゃ。塩と山椒かけて食べると優勝出来るぞい」

すつと、差し出されるのは見事なナマズの開きの白焼き。

綺麗に串打ちされ、雅な漆塗りの皿に盛られたそれはまるで料亭で出される上品さを醸し出す。

「優勝てなんだよ、……いただきます」

綺麗な焦げ目に、ほくほくとこのぼる湯気と魚のいい匂い。ニホン人である以上これには逆らえない。

いつのまにか用意されていた丸太の椅子に腰掛け、遠山が勧められるままに食事を始める。

「ほほほ、その食へのこだわりと胆力、誠に結構、たとえ」

上機嫌そうに、大男が笑う。

その顔には濃い霧がまとわりつき、首から上が見えない。

「うわ、いつのまに串打ちしてんだよ。あ、めっちゃ美味い……」

ほわり。

口に運んだ途端、舌の上で白身がほどける。魚臭さは全くなく、ほくほくと暖かい。

葉っぱの上に盛られている塩と山椒を指でつまみ、もう一つぱりとかけた後に、また頬張る。

美味しい、魚の油と塩辛さ、そしてピリリと効く山椒の刺激、鼻を抜ける香り高さ。

「これ、マジで美味え……」

この世界に来てからラザールのパンとドラ子の家のステーキ以外は食事に満足していなかった遠山にその料理はがつんと響いた。

気付けば夢中で、塩や山椒での味変カンフージェネレーションを繰り返してしまっていた。

「ほほほ、やはりヤマトの国のヒトは魚じゃろつて。ホントなら稲や粟も欲しいところじゃが、あいにくまだそこまで開墾できおらぬ。そついうのは瓊瓊の領分でのう」

「人の夢の中でダツシユ島するのやめてくれ。……美味かった。ア  
ンタは食わなくていいのか？」

「ああ、もう食ったさ、我が勇者、貴様が沢山の贄を運んでくれた  
からのじ……」

遠山の問いに、大男がその場に座り込み胡乱とした返事を返す。

「贄……？」



物騒なワードに遠山は嫌な予感を覚えて。

「ほほ、そう警戒するでない。我が勇者よ。わぬしを脅かすことは  
せんでな」

「……美味しい飯の礼はする。だが、答えてもらう。何者だ、お前」

改めて遠山はそいつを見上げる。

でかい、筋骨隆々の巨人だ。あの時出会ったサイクロプスよりか  
は小さいがそれでも4メートルほどはありそうだ。

神社の神主のような服装はしかし、あまりにもマツシブな身体を  
抑えきれない。

マツシブ神主、それだけでもインパクトある姿だがさらに輪をか

けて印象に残るのが――

「ほほほ、そう警戒するでない。僕はそうさな、少なくとも怪しいものではないぞ」

「うるせえ！ どう見てもめえなんかやばい奴だろうが！ 顔にそんなでかいお札貼られてる奴が怪しくないわけあるか！」

霧が、晴れた。そう、その顔だ。

見上げる位置にある顔、表情は見えない。なぜか。

お札だ。ソイツの顔にはまるでキョンシーかなにかのようにか  
いお札が貼られ隠されている。

梵字のようなものが描かれているでかいお札がそいつの顔面を覆っていた。

頭に抱いた烏帽子に、顔面お札のマッチョ巨人神主。

怪しい以外に言葉がなかった。

「ほほほ、ヤマトの国の巫女、名前をなんちゅーたかいの。ヒミコ、とか。小娘がぺちーっと貼りおって剥がれんのよ。そのあとまあべのはるあきらとかいう小僧に貼り直されたり、おまけに腕も足も一度、厄介な鬼に斬られてのう……昔のように動かんから剥がれんのよ」

訥々とつぶやくその姿、生物的な嫌悪が遠山の身体を震わした。

しゃべってはいけないものとしゃべっている、確信めいた警告を身体が発している。

「うわ……　　うわ……」

「ほほほ、恐れを口に出来る者は恐れに惑わんものよ。わぬしは特に恐れ知らずであろう、酔いにまみれた探索者だものなあ」

「……いや、マジでお前なにもんだ？」

「こちらを知っている口ぶりに、遠山が静かに立ち上がる。いつでも何が起きても対応できるように周囲の地形を把握して。」

「ほほほ、我が勇者、貴様のことをずっと見ておった。始めて人を手にかけて瞬間、初めて人の枷を踏み越え化け物を殺した瞬間、貴様の克己のその時をずっと見ておった。……なかなかのものだった」

「名を名乗れって言うてるんだ、何者だ」

遠回しな口ぶりに、遠山は苛立ちを隠さない、端的に相手に問う。

「……ふむ、なにぶん儂には名や銘が多くてのう。まつろわぬもの、界を隔てる者、上空に広がる霧、あるいは平原に溜まる霧でもある、が、そうさな、わぬしにはこう名乗るのがよからうて」

顎を撫でながらも大男は呑気だ。その場にあぐらをかき首をひねりつつ、そして答えた。

「儂の名は、キリ。キリヤイバ、ワヌシに名乗るにはこの名前がふさわしかるうて」

「はっ」

その名前は、遠山鳴人最強の兵器の名前と同じで。

ピロン　運命の知らせは夢の中でも。

【条件が達成されました。

隠しクエスト：F O G　D r e a m　：が開始されます】

【クエスト目標　キリヤイバ？と会話し、理解を深める。互いの存在を認め合う】

【クエスト報酬　未登録遺物　キリヤイバの拡大解釈オーバーロード使用解放】

【注意　非常に危険なクエストです。失敗した場合、キリヤイバに自我を乗っ取られます】

「うへえ……」

注意で済ますなど突っ込みたくなるメッセージを横目に遠山は舌を出してうめいた。

目の前の存在が少なくとも厄い存在であることだけは理解できて。

「ほう、わぬし、やはり何か見えておるのう？ 命運か、天運か、  
少なくともそれが見えるように弄られておるわ」

「……てめえみたいな怪しい奴と縁があつてな。天使とやらとお前、  
うさんくささだと同じくらいだぜ」

「ほほほ、抜かすでないか小童。まあ、安心せい、今すぐ取って食  
おうなどというつもりもない故に」

「お札貼られてる奴なんざ信用できるか」

人は見た目が9割、多分人以外も見た目は大事だ。少なくとも無  
害な奴にはお札は貼られないだろう。

「手厳しいものよ、儂、昔から勘違いされやすいタチでのう。ヤマ

トのムラを霧で覆い隠して我が界に保存しようとしただけで、ヒミコとやらの小娘に封印されたり、京の都に同じことをしたらまたおんみょうでらの連中にいじめられたりする不幸系の存在なんじゃ」

「いや聞いた限り悪玉じゃねえか。劇場版の敵じゃん」

邪悪極まりない前科を、よよよと泣き真似しながら話す大男に遠山が口を尖らす。

「よよよよ、ヒトの子は老骨に当たりが強いわい。まあ、わぬしにはお似合いの力じゃろつて」

「ヒミコにあべのはるあきらつて…… いかん、考えるとキリがねえな」

「霧だけにか？」



「うるせえ、お札マツチヨ。そんな凶体のくせにフランクに絡んでくるんじゃねえ。テンションのもちどころが難しくなるだろうが」

浮ついた口調で急にちよけてくる大男、得体の知れない存在が戯けてもなんらリラックスはできない。

「ほほ、わぬし、やはり良いのう。この状況、怯えておらぬ。軽口交わしながらも儂という存在を冷静に見極めようとするのはさすがじゃろうてや」

「お前みたいなイロモノによく会うからな。まさか眠ってる時にまで夢見るとは思ってたけど」

軽口かえしながら遠山はソイツを観察する。ぼーっとあぐらをかいて隙だらけに見えるが、殺せるイメージがなかなか湧かない。

経験から理解する、目の前の存在は簡単に始末できる存在ではなさそうだ。

「ほほ、試練に挑む者は夢の中に光景を持つものよ。ヒトは夢の中でそれに備える準備をする。別にこれはわぬしだけの話ではない。みな、起きた時に忘れていられるだけよな」

「お前みたいなのがたくさんいるのか？ あのコウモリメンタル雑魚メガネみたいなのも？」

「いるさ、それが先祖の霊であるか、儂のような存在であるかの違いゆえに。まあ、他の連中のことはよい。一度、こうしてわぬしとは話してみたかったのだ。儂に供物をよく捧げる、我が勇者への」

「供物……？ さつきもそんなこと言ってたな。あいにくてめえにくれてやるもんはねえ」

「いいや、わぬしは勤勉よ。たくさん供物を儂に捧げたではないか。故にこうして儂はたらふく腹を満たしてある故に」

「あ？」

邪悪さを滲ませる声だ。己を捕食者であると、強者であると理解している傲慢なものの特有の声だった。

「今日だけでも、ほれ。愚かなる小物、己の責務を忘れ弱者から搾取る薄汚い人間、立ち向かうことを諦め、狡猾に他者から奪うことで生きることを選んだ痴れ者、そして強き自然の芸術品をわぬしは儂に捧げてくれた」

「……まさか」

愉快げに、太い指を折りながら数えるその姿は邪悪。その言葉に遠山は今日始末した連中のことを思い出した。

「その通り、キリヤイバ、我が力を用いてわぬしが殺めた者の魂、それこそが我が贄。我が勇者よ、その献身、評価に値する。誇れ」

お札マツチヨの大きな手のひら、そこから霧が漏れ出す。遠山はたしかに見た、霧の中に無数の蠢く何かがいる。人の顔、苦悶の表情を浮かべて叫び続ける人の顔が、霧の中に――

それを、もぐり。

お札マツチヨがお札の隙間に手を差し込み、それを霧ごと咀嚼した。

キリヤイバが始末した怨嗟の声も、苦しみの声も、その全て大男が喰らう。

魂、それを食料とするおぞましい何かと遠山は相対していて。

「うむ、美味しい。人の痛みを知らん獣にも劣るヒトの魂はこの軽薄な味がたまらんのよ」

ゲフツと、お札の裏側でゲップをかますお札マツチヨ。遠山は目の前の存在への警戒をさらに引き上げる。

「……胡散臭さが倍増したな。生き物の魂を喰らう奴なんぞロクな奴じゃねえって6000年前から決まってるんだぜ」

「ほほほ、ふんむ、儂がこの星にて意識を持ったのはだいたい2628年前じゃからのう。えらく昔からある決まりことよな」

なんのこともなし、と言ったようにキリヤイバと己を名乗るナニカはどこまでも余裕げに遠山を見下ろす。

「……………お前、マジで、なんなんだ」

おかしい、そいつを見ていると何か心がざわつく。

それは遠くの記憶、施設を抜け出して見に行った神社で開かれていた縁日のざわめき、祭囃子の音、太鼓の音、笛の音、目眩とともにそれが一気に遠山へ。

思わず、膝を折って、そいつに跪きたくなる奇妙な衝動、祈りを捧げたくなるようなー

「キリヤイバ、わぬしの力にして、わぬしを見守る存在よ。ほほ、ヤマト、いやニホンか。ニホン人たるわぬしが儂に対して畏れを抱くのは自然なこと故。いやなに、わぬしのような男に畏れられるのは悪い気分ではないのう」

「……お前がキリヤイバという証拠は」

恐れ、大男が言う言葉はまさしく的を得たものだ。ニホン人ならば誰もが抱く超越的な何かへの奇妙な感覚。

鳥居や、地蔵、道端にあるそれらを不思議と避けてしまふ、少なくともそこには粗相をしないでおこうという感覚を更に強くした感覚が遠山を襲う。

「ほほ、わぬしはもう理解しておろう。わぬしが生きるたび、わぬしが殺すたびに儂は共におったのだ。良いものを見せてもらうたわ」

キリヤイバを名乗るそれは笑う。遠山のこれまでを称賛するその言葉には軽薄さはなく。

「……なんで、今更姿を現した。それともこれは俺の見ている夢か？ 都合の良いキリヤイバという存在を夢見て……」

「そうでないことも、わぬしは既に知ってある。つまりぬ逃避など意味もないぞ。なぜ、と問われればそうさな。儂の方も覚悟が決まったわけよ」

「覚悟……?」

「我が勇者、わぬしはこの儂の力の振るい手として十分に価値を示した。わぬしは人の身でありながらこのわぬしを感嘆させ続けた。故に、わぬしとこうして話したくなってなあ」

「なにが言いたい?」

嫌な予感しかしないが、状況はもう進むことしか許されない。遠山は問う。

「まあ、よくある話よ。儂はそのうちわぬしを殺してその骸を乗っ



取るつもりでおったのよ」

「……………そうか」

少なくとも心を許していい存在ではなさそうだ。物騒な言葉に遠山は静かに心を冷たく沈めていく。

「まあ、待て待て、そうすぐ殺気だつでない。ほれ、我が剣はしばしの間お預けじゃ」

「は？ つぐ、あ、……………?!」

熱、遠山は思わずその場に膝をつく。首が、熱い。抑えても抑えてもそこから熱と、キリが漏れ続ける。

ずるり、遠山の意味を無視してキリヤイバが引き出される、それはすぽんと抜け落ちて、大男の手のひらに収まった。

「ふんむ、素晴らしい、ようけ殺したの。徐々にじゃが長さが戻っていきよるわ」

キリヤイバの刀身を眺めた大男が感心の声をあげる。

「て、めえ……」

痛みはない、奇妙な脱力感だけ。遠山は歯を食いしばり、膝をつくことを拒否した。

「これで儂がキリヤイバじゃと信じてくれたかいの。ほほ、安心せい、夢から覚めればきちんとわぬしの言うことは聞くからの。ま、儂が抵抗してもアレはわぬしに服従しとるし」

「アレ、だと……？」

「おっと、口が滑ったわい。ほほ、まあ、気にするな、気にするな」

大男がチラリと、湖の方へ顔を向けた。軽い口調、しかしそれは今までの口ぶりと比べると明らかに早口で。

遠山鳴人はそれを見逃さない、言葉の端にうくソイツの焦りに気が付いた。

「待てよ、お前、今湖の方を見たな？ ノリで流せると思うなよ。俺に服従してるアレってなんだ？ 湖に何かいるな」

遠山の言葉にすぐに返事はなかった。

ようようのぼりゆく山際、遠い空に群れを為して飛ぶ鳥の高い鳴き声が響いて。

風が、さああと吹いた。

湖面に満ちる霧が一瞬それに流されるも、また重たく化粧をするように水面に張り巡る。

「……ああ、まことに、わぬしは恐ろしい男よ。儂の考えは間違  
いなかったわい。アレがわぬしに懐く理由もわかる気がするの」

2555

じつくり、時間をかけて大男が口を開く。

あぐらをかいたまま、膝を膝に乗せて顔を傾けた。

「お前は脅威だ。やばい奴ってことだけはわかる。だけど、お前、  
湖にいる何かにビビってるな」

「ほほほ、これは手痛いところをつくものよ。ああ、その通り、僕は恐れとる。あの広き水面の奥の奥、その底に沈んじよるアレを恐れとるよ」

大男がその太い腕、肩から手首にかけて刻まれている傷跡へ顔を向けてつぶやく。

「……やりにくいな。お前、底が見えん」

「わぬしに言われとうないわい。あんなものを抱えて、あんなものを孕んで、あんなものを懐かせておるわぬしだけにはの。底が見えんのはどっちじゃい」

ため息混じりにつぶやく大男、その言葉は重たく、それでいて確かな遠山への畏れを含んでいた。

「何言ってるかよくわからねえが…… お前が本当にキリヤイバナら俺が素直に殺されるような奴かどうか、わかるよな」

殺される、乗っ取られる。

単なる夢と切り捨てるのはリスクが高すぎる。

遠山は目の前に迫る不明な存在を見つめる。こづいづのはびびつたら負けだ。

「ほほ、ああ、分かるともよ、我が勇者。わぬしが厄介なのはいやつちゅーほどに理解しとるわい。何度指を折って数えたものか。わぬしは本当ならとっくの昔にくたばっておる筈じゃった」

傷を撫でながら、キリヤイバと名乗るその巨人がつぶやいた。

「あの日、あの時わぬしは死なんかった。友を失い、儂の力を暴走させ、霧に吞まれてもなおわぬしだけは死なんかった」

物々しい梵字だらけのお札が揺れる。視線すらわからぬその表情はしかし、遠山鳴人をじっと見下ろす。

「あの日もわぬしは死なんかかった。手作りの武器だけで己の気に入らぬ者たちの盛り場に乗り込んだわぬし。一宿一飯の恩だけで暴力を生業とする者たちの根城へ乗り込んだ時もわぬしは死なんかかった」

ずっと、見ていた。

キリヤイバは、語る。彼が見てきた遠山鳴人という人間の半生を。

「あの時もわぬしは死なんかかった。探し索める者となり、己の限界を超えて土蜘蛛のごとき化け物と相対した時も、なお、わぬしは死なんかかった。そしてついに、探索の中力尽きてもなお、死んでもなお、わぬしは死なんかかった」

思々しきと、ほんのわずかな感嘆の響きで言葉は続く。

早朝、草むらから虫たちの鳴き声が、凜と響き続ける。

「わぬしの歩みは止まらない。ついには死んでもなお、その続きの中を歩んじよる。ああ、死ですら結局わぬしを止めることは出来なかった」

その封印の枷の内側に隠れる顔は、いったいどのような表情を向けているのだろうか。

巨人がただ、己の繰り手を見て話す。

「じゃから、儂はわぬしが恐ろしい。殺せる気がせん、殺される気しかせん。人の子の範疇におりながらそれを為すわぬしを心底恐れちよる」

「…………お前、まさか本当に」



遠山がつぶやく。抽象的なその言葉はしかし遠山には何を言っているか全て分かる、覚えているのだ。

ガキの頃、タロウを喪ったあの河原で全身大怪我してなお生き残ったときのこと。

高校の頃、ある目的から半グレ集団の駆るハイエースに当たり屋かましてそれを理由に全員釘バットで半殺しにした時のこと、ケツモチのヤクザと揉めたこと。

そして、探索者。ソウゲンオオジグモとのタイマンや、最後の殿での大乱闘。

死にかけて、そして、死んだ全ての出来事を巨人は語っていた。遠山しか知らないはずの過去を。

遠山は口を挟まない、大男の拳動から目を離さずその場で立ち続ける。

大男が手のひらを広げ、こちらに差し出すようなポーズを取りつぶやいた。

「僕の目的はただ1つ。復活」

一度、滅びた、そして封じられた。しかし、続きがあった。

遠山鳴人とどこか似ているその境遇、ありつべからざる機会を得たソレは己が最も畏れる小さきモノへ偽らざる本心を語る。

「もう一度現世にて僕は儂らしく在りたい。拜まれ、畏れられ、憎まれ、感謝され、蔑まれ、褒められ。ああ、ただ、僕は儂として在りたいのだ」

その願いは、小さき者とよく似ていた。

「わぬしは、儂にとっての僥倖、儂の依代、儂の未来、儂の肉体。本来なら、ふむ、すぐにでも内側から呪い殺し、全てを貰うはずじゃった」

「極悪の邪悪じゃねえか」

思った以上にやばい奴だ。だが遠山は不思議に思う。はずという言葉はつまりー

「ほほ、儂らはもとよりそう言う存在故に。意識をもった天体の現象、善も悪もまた人の概念ならば儂らを縛ることはできんでな」

「なるほど、じゃあついにてめえは俺をぶっ殺そうと正体を現したわけだ。やるじゃないか、道具の分際で。遺物、わけわからねえモ

んだとは思ってたがとんだ呪われた装備だったわけだ」

「ほほ、そう、その通り……　　と言いたいところなんじゃがなあ。  
言ったらろう、我が勇者よ。僕は貴様を恐れちよる、と」

「何が言いたい」

「色々考えたのよ。本気で呪い殺すことや、貴様の味方のフリをして騙すこととかの。じゃが。うん、どれもうまくいく気がせん。味方のフリをしてもそのうち見破られそうじゃし、騙すにも貴様は聡い、必ず僕の思惑に辿り着く。貴様、いや、わぬしはそういう男じゃて」

「……………」

返事はしない、遠山は言葉を待つ。

「そこで僕は思った。もう考えても無駄じゃとな。じゃが僕は僕の夢、ほほ、この僕が夢というのも笑えるが、それを諦めたくない。わぬしを見ていると余計に強く思えての。僕はどうあっても、わぬしを殺してわぬしを奪いたい」

「たちわるいな、お前」

「じゃから、正々堂々と真正面からわぬしを乗り越えることにした。正々堂々、王道で、わぬしに挑むことにした」

「おっと、タイムマンか？ キリヤイバナシでやるのは少し勘弁したいんだけど」

遠山はソイツの言葉に構える、さてどうなるか。まだ殺し方が完全に整理できてなくて。

「違う、儂は待つことにした」

「ん？」

しかし、その大男のものしい言葉と裏腹に殺気や敵意はいつまでたつても感じられない。

「わぬしは強い、わぬしは恐ろしい。わぬしは必ず敵を滅ぼす。わぬしは必ず辿り着く。他の誰がそれを信じんでも、儂はそれを信じる。運命を放り捨て、なお変わらぬその強靱さたるや、国津はおろか天原でさえおらん。故に、待つ」

穏やかさと、力強さだけの言葉だ。

捧げるように告げられるのは、高きモノから小さきモノへとくべられる最大限の賞賛。

「待つ？」

「僕とわぬしの最大の違い、それは定命の存在であるかないか故に。僕の時間は永遠なれど、貴様の時間は有限である故に。じゃから、待つ。貴様が死ぬその時を。貴様が諦めるその時を、僕は待つことにした、時が来るまで僕は貴様には刃向かわんことにしたのよ」

「……ええ、新しいパターン。てか、ガチすぎない？」

つまり、寿命まで待つということだろうか。遠山はオタク知識によるお約束から外れたその言葉に少し戸惑う。

こういつ何かに取り憑く系の奴ってそんなガチな感じで身体を奪おうとする奴いるっけ、違う方向で遠山は焦り始めた。

「わぬし相手には一切の遊びも、一切の油断もいらん。わぬしの生き様を見ていて、強く思ったのだ。僕もわぬしのように生きたい。」

それにはわぬしを殺さなくてはならんが、儂にはわぬしを殺せる気がせん」

どこまでもその言葉は真摯だ。誰よりも近くで遠山鳴人の拡大する自我に触れていたその存在は、誰よりも遠山鳴人の本質を理解していた。

「故に、待つのだ。遠山鳴人。貴様はこの儂を感嘆させ続けた。貴様は戦わずしてこの儂を超えたのだ。故に、貴様が生きている間は儂の力を貸そう。貴様が死んだのちにその身体を貰う代わりにな」

遠山鳴人は、知らぬ間にそれを調伏せしめていた。拡大する自我に魅せられた存在は、虎視眈々とその身体を狙っている、しかし、争う気すら遠山に奪われていて。

「ん、んん？　まで、つまり、お前は……  
身体を乗っ取るって言いたいわけな？」

俺が死んだ後に俺の



「その通り」

「……つまり、生きてる俺をぶっ殺して乗っ取る、とかじゃないわけ？ 身体を寄越せみたいなのリとかは」

「諦めた。怖いもん、勝てる気せえへん、地元じゃないし」

「ええ……」

邪悪な存在であることは間違いないが、脅威度が微妙に理解できないそいつに遠山が戸惑う。

「遠山鳴人、わぬしは儂にとっての超えるべき試練。人でありながら、儂を驚嘆させ、感嘆させ続けた憧れにも似た存在。誇るといい、我が勇者よ。儂の力は生きている間は貴様のものだ」

ぐぐぐ、巨人が身を屈める、片膝をつき、頭を下げて、大きな腕を遠山に差し出した。

「あ？」

「我が勇者よ、序列はここに定まった。儂が下、貴様が上。儂は貴様が生きている間は、ただ忠実な力として共にあるう」

ソレは明らかに、遠山鳴人に首を垂れた。

強大なる力、そのもの。己の快と不快のみで行動すべきその存在はその小さきモノの生き様に魅せられ、畏れていたのだ。

「……てめえみたいな胡散臭い力に俺が今後頼るとでも？」

「頼る、そして使う。人は一度覚えた力を手放すことは出来ん。わぬしも例外ではない。わぬしが、わぬしらしく生きるのに力は必ず必要だ。敵が、多いだろう?」

言い切る。

そしてその言葉は的を射ている。遠山鳴人は力を手放すことは決してない。

「嫌な野郎だな。たしかにキリヤイバ無しの縛りプレイはやりたくねえ。おい、お前が本当にキリヤイバで、俺を殺したいんなら、正直いつだって出来るはずだろ?」

「ああ、その通り、その通り。じゃが儂はそのやり方は選ばん。言うたろう、想像できんのだ。貴様が死ぬところが、貴様に勝利する儂の姿が想像出来ん。仮にキリヤイバを奪ったとて、貴様は必ずそれを取り返しにやってくる。貴様の味方のフリをして裏切ったとて、貴様を仕留めきることが出来ずに、必ず儂は殺される。そんな気がしてならんのだ」

最大限の賛辞だろう。

最大限の評価だろう。

誰よりも近くで強欲なる自我に触れすぎたその存在は、在り方すら拡大するその自我に侵され始めていて。

「儂は、儂は、わぬしに殺されとうない。あんな、恐ろしき畜生を愛し、愛されるような化け物に勝てる気がせんのだよ」

「お前、震えて……」

「じゃから、これは宣戦布告と、命乞いじゃ。儂を殺すな、代わりに力をくれてやる。儂を殺すな、貴様の邪魔はせん故に」

これはつまり、そういうことだ。

己の中にある力、キリヤイバ、を名乗るソイツを受け入れるか、  
どうか。

「……後顧の憂いを消すために、ここで俺がお前を始末すると言っ  
たら」

「ふ、抵抗するさ。俺の全性能をかけて、貴様に挑む。俺は死にと  
うない、俺はいやじゃ、もう2度とあの闇に還りたくない。ここに  
いたい、生きていたい、俺はー」

大男、高原に広がる霧、平原に溜まる霧にして界をわけろ高きモ  
ノは既にー

「俺の欲望のままに、存在し続けたい、ただ、それだけじゃ」

既に、遠山鳴人に魅せられて、侵されていた。

その言葉に、遠山の動きが止まる。

判断、目の前の存在を受け入れるか、否か。

目の前のこれは毒だ。それは間違いない、意思をもった毒、いずれ己を必ず蝕むであろう毒。

切り離すべきだ、ここで始末するべきだ。理性は曹結論づける。

しかし

「……………俺が死んだ後、お前はまず何をするんだ？」

興味を持ってしまった。目の前の毒のことが気になってしまっ

「……旅がしたい。僕はこの目で世界を見て、行って、体験して、僕は僕のやりたいように生きたい」

「そうか、そりゃ…… 悪くねえな」

遠山鳴人の自我は完成していない、ゆえに他人に深く影響を与える。

故に、他人からも強く影響をつける。

遠山鳴人はこういうのに弱かった。目の前の存在の怪しさや、底の知れなさや、そのちっぽけな願いを天秤にかける。

すると、興味の方が重くなってしまった。

「……俺が死んだ後、気になるのはお前が俺の周りの人間に余計なことしないかどうか、それが気になる」

「要らん心配さ、わぬしは最後まで生き残る。わぬしが死ぬ時はわぬしにとって大事な存在を全て見送ったあと故に」

「お前の存在を許す理由が欲しい」

短く、問う。その問いにうまく答えてくれることを遠山は願う。

「力を。わぬしが生きている間、わぬしの欲望を叶える力を。儂は力そのもの故に」



「お前の言葉を信用する理由が欲しい」

短く、問う。信用する建前でもいい、それを遠山は願う。

「…………… 儂の殺し方はシンプル故。我が遺物、我が楔たる刀身を折れば良い。そうすれば儂はおそらく死ぬだろう。天秤のバランスは崩れ、儂は湖に引きずり込まれて消える」

「なに？」

「わぬしよ、今のこの状況こそ、儂が貴様をもつとも恐れる理由なのだ。わぬしの中に居るのが儂だけなら儂はすぐにでも貴様を殺せただはず、わぬしの中にいるのがアレだけなら、わぬしはすでに人ではおらんのだ」

「何を、言ってる？」

「ヒトと獣、儂とアレ。貴様は両方を受け入れて、両方を飲み込んだ。人間という存在のなんと恐るべき、おぞましいほどの強欲。力であるならばその全てを受け入れる本質のなんと強く、逞しく、しぶといことか」

震える声で、巨人が囁く。

遠山鳴人に慄く姿を晒し続けて。

「キリヤイバを捨てれば良い。儂が信用できぬのであれば刀身を折れ。さすればアレは己の好きなように貴様を変えるだろうさ。」

わぬしに永遠のぼっけんをさせよつと。その無邪気な本質のまま  
にの「

ぼそりとつぶやくその声は重たく。

霧が濃くなってゆく。

「待て、あの湖の中に何がいる？」

「さてな。それはわぬし自身で確かめるといい。儂の言いたいことはこれが全てだ。ここでキリヤイバを捨てるような人間であれば、儂もここまで苦勞はしておらぬ。……ではな、我が勇者。ああ、そうだ。早速だが我が力の一端を貸してやろう。キリの持つ”保存”の力を役立てるといいさ」

「保存？」

「たくさん殺すといい。たくさん蒐めるといい。それは全て貴様のキリとなるのだから」

「いや、説明する気ゼロかよ」

眩きながら、遠山は思う。キリヤイバを捨てることはないだろう。

自分が死ぬその時に、終活が少し面倒になるだけだ。そう結論づけた。

「要らんだろうさ。人は危険とともに強くなる存在じゃろうて。危機が迫れば自ずと使い方はわかる筈。そういつぶつに貴様らはできであるのじゃろう」

ぼのり。

大男、キリヤイバを名乗る何かの言葉が終わると、同時に湖が揺れた。

湖面に波紋がいくつも沸き起こる。

「ぼのり、ぼのり。まるで湖の底にいる何かの呼吸を始めたような

「なんだ？ 湖が……」

「……長くここにおりすぎたの。アレがまどろみから覚めようとしてちよる。懐かしい、わぬしの匂いに興奮してるわ」

「湖が、揺れて……」

「はよいけ、アレはわぬしに悪意はないが存在が強すぎる。じゃれ殺されるぞ、貴様」

「俺が殺される方がお前にとって都合良いんじゃないかねえの」

「ふん、アレは例外じゃ。ではの、また次の夢で。湖とは反対側に進め。あの血吸いの寄生虫の公文書館の向こう側を目指すといい」

大男が指さす方向、わかりやすくそちらは光に満ちている。本能的に理解した、あちらが出口、夢の終わりにして、目覚めへの入り口だと。

「……夢にしちゃ楽しめたよ。じゃあな、お札マツチヨ」

「キリヤイバじゃと言うとるに。またの、我が勇者、我が宿敵、我が肉体よ」

遠山が、言われた通りに光に向かって歩き始める。何度か湖の方を振り返るも、次第に湖の揺れは収まりつつあるようだ。

不思議な、懐かしさ。でもなんとなく今の自分では湖に近づくべきでないと感じた。

光が更に強くなる、眩しさに目を瞑ると、すぐに遠山鳴人の意識は消えて――

「さてさて、どうなるものか。遠山鳴人よ。欲望のままに生きる強欲なる人間よ。貴様はその欲望により身を立て、試練を乗り越えてきた」

光に吞まれ、夢から消えた主人を見送るソレはつばやく。

彼は何一つ嘘は言っていない。遠山鳴人という人間に畏れを抱き、支配ではなく共生を選んだ姿勢に間違いはない。

「だが、気付いておるか？ その在り方の歪さを。貴様は危うい。もし、その欲望が”怒り”に変わったその時、果たして貴様は人のままでおられるのかのう」

だが、諦めてもいない。主人に影響されたその性質、強欲――

遠山鳴人が、遠山鳴人のまま居続けるのであれば、彼は力になり続ける。

だが、もしも道の最中、遠山鳴人がそうでなくなったのなら、その時は――

全てが霧に包まれていく。

揺れる水面も、上りかけの朝日もまた濃い霧に。

遠山鳴人の行先を見つめるこの世ならざる存在、界を分け隔てし霧の概念もまた、揺れ動く湖から目をそらさない。

「まあ、どちらでもよいか。貴様はどうせ進むのだろう、それだけは知っておる故に」



やがてまた静かに釣糸を垂らし始めて。

夢は、つづく。

……  
……

「起きろ、ナルヒト。朝だ」

「アニキ！ 朝だぜ」

「……おはよ、兄さん」

「はい、アニキさん、お水！」

「すびー、しぴー」

「ぶすー、ぶすー」

みんながいた。

遠山鳴人は目を覚ます。

「……おお、おはよ」

藁のベッドを取り囲む声、まどろむ体を引きずるように体を起こす。

開かれた窓から差し込む陽光が瞼を通じて脳に染みる、いくらでも吸い込める心地よい明るい朝の空気の中に遠山はいた。

「やけにうなされてたな。悪い夢でも見たたのか？」

ラザールが水差しからコップに水を注ぎながらつぶやく。

「……おお、ラザール。公文書館がパン文書館になって、メガネがヴァンパイアで、湖でお札マツチヨにナマズの白焼きご馳走になっただけだ、これ、夢？」

「高熱の時に見る悪夢かな？」

ラザールの容赦ない一言。

夢は、はっきりと残っていた。知識の眷属との出会い、キリヤイバを名乗る何かとの邂逅。

現実か夢か判断できないほどの奇妙な体験。思い返せば、あのナマズの白焼きの味すらまだ舌の根に残っているんじゃないかというほどに。

遠山はしかし、その夢の全てを覚えていた。そして確かに成果を持ち帰っていて。

ピロン

【パンの知識、きちんと使ってもらうから。よろしくby ハーグ  
イー】

「……マジかよ」

遠山鳴人の新しい1日がまた始まった。

【隠しクエスト : FOG・DREAM 達成！

報酬 未登録遺物 ”キリヤイバ”への拡大解釈が可能になりました。

遺物使用の新たなるステージです。危機が訪れる前に使いこなせるようになることをお勧めします】

51話 キリ、カミ、トオヤマ（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを「こ覧くだ  
さい！

< 苦しいです、評価してください > デモンズ感

52話 ストル・プーラの憂鬱、異世界生活7日目の昼

「異世界生活7日目昼ごろ。冒険都市近郊 平原地帯の北部、  
森林”の奥深くにて」

どうして、こうなったのでしょうか？

「イヤアアアアアアアアア！ ミス、ミスった！ キリヤイバ  
の出力ケチりすぎたあ！！ ラザアアル！ すぐえ元気なのが  
くぞー！」

「ば、馬鹿野郎！！ 元気満々のティタノスメヤだと？！ ああ、  
偉大なる歯よ！ どうか愚かな我らにご加護を！」

私は樹上、太い木の枝から彼を見下ろしています。

眼下では、ティタノスメヤの巣穴に腕を突っ込んでいたあの人が鼻水垂らし向こう側から猛ダッシュで森を駆けています。

身を振りながら、大口を開き地面を這う丸太よりも太い身体。

大蛇の化け物。騎士団でもアレを無傷で狩れるのは上位の騎士か、10騎士くらいのものでしょうか。

「ああ、もう！ ナルヒト、早くこの位置まで逃げてこい！ 気合いで駆け抜ける！」

「ひ、ヒヒヒヒ！ 死ぬ！ 死ぬう！ マジで喰われる！ ヒヒヒヒ！」

私の隣で、トカゲさんが表情をくるくる変えながら叫んでいます。これではもう待ち伏せの意味がありません。





恐怖と絶望だけが満ちるはずのその空間、ああ、でもどうして、  
こんなに、彼らは――

「ヒ、ヒヒヒヒヒヒ、ンヒ、ヒヒヒヒヒヤアハハハハハハ」

「ハ、はは、ばかやろうめ、は、ハハハハハハハハ！」

どうして、こんなにたのしそうなんでしょう。

どうして、こんなに笑っているのでしょうか。

理解できませんでした、彼らが笑っている理由が。

ああ、そして、なんででしょうか。あの人とトカゲさん。怪物を

前に笑っている2人を見てみると胸の中がすこし、痒くなります。

笑い合う2人が、何故かとてもまぶしくて、なぜかそれが寂しくて。

「ストル!!! 出番だ、バカガキ!」

あの人が、私の名前を呼びました。

私を見上げて、走りながら、汗をかきながら、鼻水を垂らしながら。

私を呼んでくれました。

なぜでしょう、それだけでもう寂しいのはなくなりました。

「ーじゃないーイス」

胸がざわつきます。

身体が熱いです。

「……仕方ない、腹を括ろつか。ストル、出番だ。バカを助けにい

「う。第一の騎士の力を貸してくれ。準備はいいかい」

トカゲさんが低い声で、あの人を見下ろしながらとても優しい顔つきでつぶやきます。

大蛇が、あの人を追い続けて。

「シャアアアアア蛇ジャ！」

「うわばら！ やべえ！！ 追いつかれる！？！ 喰われる、マジで喰われるって！ おい！ ストル！」

あの人を私を呼びます。

価値がない私を、正義を失くして役立たずになった私を。

役に立たないから、生きる価値もない私を――

「バカ騎士！！ 俺の、役に立て！！」

声が響きました。

同時に私の身体は弾けて、信じられないほどの力が湧いて――

「私は、バカじゃないデイス！！ トオヤマナルヒト！！」

浮遊、私は気付けば飛び降りて。

「――蛇ジャ?!ブ?!」

衝撃、彼を追って真下の位置まで迫っていた大蛇の脳天に剣を叩き込みました。

ぐにりとした反動、市場で買った安物の剣はぐねりと折れ曲がります。

暴れる大蛇、粗末な武器では仕留めきれなかったそいつに振り落とされ、地面に転がります。あ、私、弱いな。

「――でも、私は」

あの時、一度は死ぬことを受け入れたのに、なぜでしょう。身体は勝手に動きます。鼻血が垂れて唇を濡らす不快な感覚、それを拭い立ち上がります。

あの人とトカゲさんの声が、また聞きたかったからです。

たのしそうに笑う彼らに置いていかれるのがいやだったから、立ち上がって、動いて、生きようとして。

「じゃ蛇」

あ、蛇、化け物が目の前に。

食べられるー

「よくやった」



私に向けて大きな口がぱかりと開いた瞬間でした。

影が。蛇に落ちて。

首をもたげた大蛇の化け物の頭の上、トカゲさんが音もなく飛び移っていたのです。

惚れ惚れするようなみのこなし、音もなく、気づくのが遅れるほどでした。

十騎士2人を相手にして、生き残った理由がわかった気がします。

「フッ！」

「じゃ?! じゃアアアアアアアアアア?!?」

両手で力強く振り下ろされるナイフが蛇の化け物の頭を抉りました。しかしそれで死ぬような生命ではありません。

化け物、大蛇はその黒い鱗に包まれた身体をめちゃくちゃに動かします。木々を薙ぎ倒し、藪を裂きながら化け物が大暴れしています。

「じゃアー!!」

「むっ?!」

化け物が木々に頭突きをはじめました。トカゲさんは木々にペシヤンコにされる直前、間一髪で飛び降りて

「あ、危ない!!」

「むお?!」

しかし着地の瞬間に待っていたの尾の一撃、トカゲさんはぺしんと吹き飛びます。

地面にゴロゴロ転がって、すぐに立ちあがろうとします、でも、もう大蛇、テイタノスメヤが大口を開いてトカゲさんに迫って。

間に合わない、そのはずなのに。

トカゲさんは傷だらけの顔で、笑って。

「ナルビト」

「おつよ、ラザール」

パチン。

トカゲさんが指を鳴らしました。鬱蒼と広がる森の中響くその指音は心地よく。

影。

大木が日差しを遮ることによって生まれる影、それがどろりと歪みました。

大蛇がその影に触れた途端、体勢を崩します。沼にでもハマったかのように。

「シャ?!」

「よう、蛇野郎」

どろり、影にはまってもがく大蛇、そのすぐ隣から彼が現れました。影の沼の中からどろりと現れた彼が蛇の巨大に再び取りつきま

す。  
トカゲさんと比べると全く洗練されていない動き、しかし力強く、確実に化け物の体をよじ登っていきます。

ナイフを2本手に構え、それを突き刺しながら支えにして登る彼、化け物は身を擦るも、影の沼にハマってあまり動いていません。

トカゲさんより時間をかけて、不恰好に、しかし彼もまた蛇の頭の上までたどりつきました。

「よいしょっと。未恐ろしい力だよなあ、レーザーの影。影ん中で自由に動ける対象まで選べるとは。チートか？」

「いいから、さっさと終わらせてくれ」

その場に座り込みながら口を尖らせるトカゲさん、その声は言葉と裏腹にとっても優しいものでした。

「了解、殺すぞ、キリヤイバ」

「蛇蛇蛇蛇蛇蛇?!」

そこからは一瞬でした。

彼の首から噴き出るのは白い霧、霧。霧に紛れて現れたのは欠けた、刃？

何故彼の首から出てくるのか、何故彼の身体からは血が出ないの

か。色々なことを考えました。

でも、それよりも早くに。

「傷口、そこだ」

ぶじゅる。

「じー」

化け物の頭の傷、私やトカゲさんが付けた傷口に彼がその刃を突き入れました。

「直が1番効くんだけ」

霧、また彼の持つ欠けた刃から霧が漏れて、それが突き刺した刃から直接化け物の中へ。

「じゃア……………」

それで全部終わりました。蛇の化け物は目を大きく見開き、その長くしなやかな身体をぶるりと震わせて、それでおしまい。

目から青い血を流し、ゆっくり身体を地面に伏せ、もう2度と動きません。

「探索完了」

ずるり、傷口から引き出される欠けた刃。青い血を引きながら現れたそれは瞬きするうちに霧となって消えていきました。

彼が、化け物を仕留めたのです。



「お見事、あのまま食われるかと思ったよ、ナルヒト」

「いやー、マジで悪い。慣れが出ちゃった。すこしコスト節約したら巢穴の中で殺し切れなかったわ」

力なく横たわる化け物の上から降りてきた彼、立ち上がったトカゲさん。

生死の淵の綱渡りを終えた直後だというのに、2人の様子はいつも通りです。

教会騎士ですら、化け物狩りの直後は高揚や安堵で心を乱すものがほとんどの中、彼らはあまりにも平然としていました。

「まあ、次から気をつけてくれ。しかし、これでテイタノスメヤも12頭目か。また今日も市場が荒れるだろうな」

「ま、その辺の面倒な所はおっさんの商会に任せるぞ。俺らは早く家賃とパン屋の開業資金貯めないと。さて、まだまだ働くぞ、明日の労働英雄は俺たちだ」

「何を言っているかはわからないが、不穏な言葉な気がするな。おっと、すまない、ストル怪我はないかい？」

「お、バカガキ。じゃない、ストル。ナイスキルだ。お前の一撃恐ろしいな。あの蛇の頭骨まで抉れてたぜ」

2人が、私に笑いかけました。

「ーわたし、役に立っていましたか？」

声が震えます。恐る、恐る声を絞り出して。

2人が顔を見合わせて、それから無表情で親指を立てました。

ああ、何故でしょう、なぜでしょうか。

胸が熱い、こんな気持ちに私はなっではいけないはずなのに。

騎士団の役に立てなかった私に、もう価値なんてないはずなのに。

私は今どうしようもなく緩み始める頬を押さえて。

ふと、あの日主教様の言っていたことを思い出しました。

.....

.....

…

「3日前、昼頃。天使教会、審問室にて」

「ひざまずいて、第一の騎士。天使教会、最高のお人。主教様の御前です」

聖女、いえ、聖女様の言葉が私に向けられました。お花のような香り、とてもいい匂いがしました。

そこは綺麗なお部屋です。

色とりどりのガラスで作られ、天井一面に広がる絵は誰も見たことのない天使様のお姿を描かれているものだと副団長に聞いたことがあります。

あれ、誰もみたことないのに、絵があるんだ。不思議だなと思っ

ていました。

「貴女の処罰が決まりました、第一の騎士」

ああ、これで終わりか。

主教様、天使教会で最もえらい女の人の声は冷たく、その細い目は私を睨んでいました。

真っ白のお部屋、大きな椅子に深く座る主教様、その周りにはへんなお面をつけた猫の獣人たち。

私は両手を縛られて、ひざまずいています。

私の隣には、聖女様。多分、私が暴れたりしたら彼女に殺されるのでしよう。

意外にも私は冷静でした。よく分からないけど、自分が何か大変なことをしてかしてしまった、そんなことだけは分かっていました。でも、なにがダメだったのか全く分かりません。

「第一の騎士という重責にありながら、思い込みと安易な決断で貴女は教会の仲間を、この私直下の組織たる審問会の信徒を手にかけてようとしました。それは教会の教義と反する忌むべき蛮行です」

主教様の言葉は冷たく、ほとんどなにを言っているかはわかりません。

私は剣だから、なにも考えなくていいと育てられて来ました。私はただ、教会の決めた正義を守ればいいとそう教えられて育ててきました。

教会の正義、天使様の教えにしたがうこと、教会に従うこと。

つまり、騎士団に従うこと。騎士団に捧げること。

それが正義だと教えられてきました。

「貴女は天使教会をおびやかしたのです。その無知と愚かさによって」

よくわからないけど、多分、私は教会の正義を守れなかった。騎士団の命令を果たせなかった。

つまり、私は正義ではなくなったのです。

こじいんでは、私の他にもたくさんの子供たちがいました。でも、彼らの半分は14歳の卒院を迎える前にいなくなりませう。

「ごじいんのせんせいは言うのです、あの子達は役目を果たせなくなった。教会の正義、教会の力にはなれないとわかった、だからいなくなっただよ。」

人にはみんなやらなければならない使命がある。それが出来ない子や、やろうとしない子は生きていたら、だめなんだ。遠い場所にいくことになるんだよ、と。

みんなの役に立たない、役立たずの人間はね、生きてる意味はないんだよ、と。

「……私の番、デイスね」

たくさん、殺してきました。たくさん、裁いてきました。教会の正義に反する物を、教会の敵になるものを、騎士団にあだなすものを。

ありとあらゆる、私たちの役に立たないものを。



こじいんでも、そうでした。教会に拾ってもらっておきながら教会の役に立たない子供たちを私は訓練として殺していました。

役に立たないものは殺される、つまり私の番が来たということですよ。

「発言は許可していません、静粛に」

私の呟きを主教様が遮ります。

ええ、つまりそういうことです。

正義を果たせなかった私にはもう価値がありません。正義を間違えて教会の役に立てなかった私にはもう価値がありません。

生きてる価値がなくなってしまう。ここに理由もなく  
なってしまう。

私の”正義”も呼んでも答えはありません。

私の剣は砕けて折れてしまいました。

騎士団のみんなも、誰も助けてくれません。

でも、それでいいのです。それが当たり前なのです。

役立たずの人間は生きる必要すらない。それがこじいで私が教  
えられてきた全てです。

私も、ソレに納得してます。よく分からないけど、正義も使えない私はもう、なんの価値もないのでしょうか。

「第一騎士ストル、貴女には本来騎士団による教会裁判を受ける権利があります。しかし、現在、不慮の事故により裁判の開廷権を持つ、騎士団長、及び騎士副団長は行方不明。よって、教会法によりあなたの処断は最高指導者たるこの私、カノサ・テイエル・ファイルの名の下に行います」

なにを言ってるかよくわかりません。主教様は難しい言葉をたくさん知っていて、偉いなと思いました。

「異論があるなら首をあげなさい、ないのならば沈黙にて答えなさい」

あるわけがありません、これは順番なのです。人は皆生きて殺して殺される、役に立たなくなった者から順番に殺される。だっていないから、そーゆーふうに出てくるのです。

殺し殺され、生きて死んで。

いらなくなったものから舞台を降りる、世界はそついつつふつと回っている。

頭のいい私はソレを知っていました。

「よろしい、異論はないと受け取りました。教会裁判の略式手続きにより、貴女には教会に対する反逆罪が適用されます。罪には罰を。貴女ならこの仕組みはよく理解しているでしょう」

「はい」

死ぬ、死ぬ、終わる。

特に考えたことはありませんでしたが、死ぬとどうなるのでしょうか。

私が今まで正義の元に殺してきた人たちはどうなったのでしょうか。

ふと思い出します。こじいで私が訓練として殺した沢山の人のことを。

彼らはなんで、あの時あんなに泣いていたんでしょう。

あの子はなんで、笑っていたんでしょうか。

あの子は、なんで、私に殺される直前に私へ手を伸ばしていたの

でしょうか。

「第一騎士ストル、教会への反逆罪により貴女には死罪が適用されます。何か言い残すことはありませんか？」

「……いえ、ありません」

どこで間違えたのでしょうか、なにがいけなかったのでしょうか。

言われたとおりになっていました、教えられたとおりになってました。

でも、だめでした。まあ、仕方ありません。私にはもう価値がないのだから。

「……よろしい。ですが1つ聞かせなさい。なぜ貴女はなにも言わないのですか？ 理解していますか？ これから貴女は死ぬのですよ？」

「はい、わかっていますデイ……です。教会の決定に私は従います。異論はありません」

「……チツ、ほんと、気に入らないわ」

つぶやく声、その苛立ちを込めた声は驚くことに主教様から漏れたものでした。

私は、思わず顔を上げてしまいました。

教会という存在そのものといってもいい偉いお方、普段はお人形のように静かで、団長や副団長も一目置いている人完璧な人が浮か

べるその顔が、不思議なお顔になっていました。

怒ってるような、

ー泣いているような。

「貴女は、貴女たちはなぜそんな風なのですか？ 貴女のような子どもが、どうして簡単に死を受け入れることが出来るのです?!」

「……主教様の言っていることがわかりません。わたしにはもう価値がありません、私にはもう生きてる意味がありません」

「……ッ、貴女たちはなぜ、そんなふうに」



「怒っておられるのですか？ 私には主教様がお怒りになる理由がわかりません。迷惑をかけてごめんなさい、役立たずが生きていてごめんなさい。教会の裁きによりせめて、私の無能が濯がられることを祈ります」

「……っ」 分かりました、よくわかりましたとも。貴女が心の底から死を恐れていない理由が。つまり、貴女は自分が死んでもいい存在だと、生きることになんの未練もないのだと、そういうことを言いたいわけですね」

「……主教様がおっしゃる意味が私にはよくわかりません、私には価値がないという」

「黙りなさい、愚物め」

「……………」

「よく考えもせずに分からないと言つな。ろくに思考を回すこともせずに考えることを放棄するな。無知を言い訳に私の前で囀るな」

どうしてでしょう。主教様のお声はとても冷たくて尖っているのに私にはどうしてもそれが怖いものとは思えませんでした。

どうして、主教様がそんなに泣きそうなお顔をしているのでしょうか。

「わかりません、主教様がそんな顔をしている理由も、隣にいる聖女が私を睨んでいる理由も。」

私にはなにもわかりませんでした。

「よく、よくわかりました。貴女がどんな人間か、どういふ風に育てられて、何に成るように仕組まれていたか、よく、ね」

主教様は全部わかっているようです。私にわからないことをわかるのは頭がいいんだなと感心しました。

「今の貴女に死は罰たりえない、貴女は本気で自らに生きる価値がないと信じている、本気で価値なき者は生きる意味がないと心の底から考えている」

「……だって、それがルールなのでは？」

「……違うわ。そんなクソみたいなルールなんざあってたまるものですか。第一騎士ストル、貴女には死罪すら相応しくありません。今の貴女には死罪は罪足り得ない。死を恐れていない人間を殺してやるほど私は優しくありません」

主教様の言葉が、サラサラと。

でも。私は何を言っているかわからなくて。

「なにを」

「あなたへの刑罰を決めました」

主教様の長い脚が組み直されます。黒い修道服に広がる、白い髪の毛がとても綺麗でした。

「死を恐れない者に死罪は罪たりえない。ならば、あなたにはまず死を恐れるようになってもらいます」

「え？」

「役に立たたないのなら、生きる価値なし。あなたのその歪んだ価

価値観を直してやる気などありません。ならばあなたに価値を与えましょう。そして生きるのです、生きて、その生が惜しくなった時に、あなたへ相応しい罰を与えます」

「……主教サマが何をおっしゃっているのか、わかりませんデイス」

「第一の騎士。あなたには竜殺し、いえ、天使教会異端審問官、トオヤマナルヒトの元での無期限の奉仕活動を命じます。これは命令です」

「本日を以てストル・プーラ。貴女を天使教会騎士団から除名。騎士団の自治権による主教からの命令を拒否する権利は、騎士団長、及び騎士副団長の不在により認められません。第一騎士の座は空席として扱います。あなたは今日より”異端審問官側仕え見習い”として扱われます」

「……………え」

「価値がないと決めるのは貴女ではない。あなたの命の処遇を決めるのは私です。この命令は本日より発動。なお、異端審問官の命令はすなわち、教会からの命令と同じと考えなさい」

「わ、私に何をさせようと言うつのディスプレイか？ わ、私は何がなんだか」

「役に立ちなさい。貴女がその生の意味を他者の役に立つことと言うのならば、私たちの役に立てばいい」

「騎士団への忠誠はつまり、教会への忠誠に他なりません。貴女が未だに教会の剣、いえ、天使の教えを胸に生きる者としての自覚があるのなら不服はありませんね」

「でも。私は、私にはもう、正義も、ない……」

「おバカ。誰しもが、騎士団のように貴女へ剣となることを強要するわけではありません。……貴女への助命は、審問官たつての希望です」

「は？ 審問官とは、まさか」

「ええ、トオヤマナルヒト。貴女が殺しかけたあの男です。彼は私とのある取引の中で、貴女の助命を選びました。正直、私はこの機会に騎士団の最強戦力たる貴女を消しておきたかったのですが……」

「まあ、竜殺しの言葉です。無下にできるものでもありませんしね」

「あのひと、なんで……」

「貴女の罪は無知なことではない。無知と蒙昧を許していることです。知らないことは罪ではなく、知らないままであることが罪なのです」

「ストル・プーラ。貴女が未だ教会の信徒なればどうすればいいかわかりますね？」

主教様の言葉で、わかりました。

私は頭が良いので、わかりました。

「……………ご寛大な処置、ありがたく。教会と天使の光の名の下に、課せられた使命を果たします」

審問官、あの人はきつと自分の手で私を殺すために呼んだのでしよう。

刃を交えて、殺し合ったからわかります。

あの人はそういう人間です。



「騎士団の剣としての役割を放棄し、教会の徒として命に従いますか？ 異議あるならば顔をあげよ、了承するのなら沈黙をもって答えなさい」

「……………」

悪くない気分でした。

どのみち殺されるのは変わりないでしょう。私の正義でも殺せなかったあの人、審問官、いえ、竜殺し。

あの人に殺されるのなら、まあ、それなりの終わりでしょうから。

「よろしい、ただ今をもって教会騎士ストル・プーラは死にました。今この瞬間よりは、ただの信徒のストルとして教会に殉じなさい。話は以上です。細かいことはまた後ほど。下がらせなさい」

「「「はっ  
「「「

「……主教様、感謝を。きちんと役目を終えて参ります」

「……貴女、何かつまらない勘違いしてそうね。ま、どうでもいいわ。バカの考えることなんて、理解したくないし」

主教様はそう言って、立ち上がり広間から出て行ってしまいました。

「え？」

主教様の言葉。何かおかしかったような。でももうその意味を聞くことはできません。

「ストル・プーラ殿、お部屋へご案内いたします。こちらへ」

「……わからない」

猫さんたちに連れられて、広間を出ます。見慣れた教会の建物の中のはずなのに、知らない場所のような気がしました。

私は、ほんとうに何もわかりませんでした。

それから新しい服を買って、気付けば馬車に乗せられ、冒険都市へ降り立ち、そこに連れて行かれました。

やすそうな場末の宿屋。

商業区から外れたお金のない旅人用のボロ宿が彼らの棲家でした。

その部屋、朝日に照らされる埃っぽい部屋の中に彼はいました。

「よう、クソガキ。いや、バカガキ。昨日ぶりだな」

その人の笑みに敵意はなく、そして

「わあ、この人が新しい店員さんのね！ はじめまして！」

「俺らとあんま歳変わらねえんじゃないか？ よろしくな、俺はリ  
ダ」

「……よろしく」

「よろしくねー、ストルおねーさん」

「あーうー」

彼の周りには子供たちがいました。私とあまり歳の変わらない子  
や、それよりも小さな子。

報告にあったスラム街の子供たち。

違う、私の知ってるスラムの住人と彼らの目は明らかに違いまし  
た。

宝石のような輝きで私を見つめる彼ら。

その中にいるトカゲさんと彼の姿、私が正義の元に奪おうとした、知りもせずには奪おうとした彼らの姿がそこにありました。

「う……………」

その瞬間、ありとあらゆるわからないものが私の口から吐きこぼれそうになったのです。

それは、気付きでした。

私が今まで教会騎士として、正義の元に裁いて、いえ、殺してきた人々。よくわかりもせずにはふるった力が奪ったものの中にも、このような光景があったのだろうか、と。

わからない、わかつうとしなかったことが今更膨れ上がり、私を押しつぶそうとしたその時でした。

「バカガキ、うるたえんな」

彼が、私の新たなる主、トオヤマナルヒトが声を紡いで。

「今まで無自覚だろうが、自覚ありだろうが関係ない。お前はたくさん殺してきたんだろ？ お前が定めたルールの元にお前は自分の意思で他人を殺してきたんだ」

「わ、私、私……」

「おい、ナルヒト」

「いや、ラザールここは任せてくれ。ガキ、いいか、よく聞け。お前は邪悪だ。正義っつー耳心地の良いことを盾に、それを言い訳にして他人を害してきた邪悪な奴だ」

彼の言葉に、吐き気がさらに強くなります。

「だ、だって、私には価値がそれしか……」

剣として、殺してきました。たくさん、殺してきました。

「ああ、そう教えられでもしたのか？　どこの世の中でもガキを使って悪さするやつの言葉は同じだな。だがどんな理由があっても、お前がしてきた事は変わらないし、殺した奴が生き返ることもない」

彼の言葉は鋭く、正しいことです。

私は今更、騎士団から離れたことでそれに気付きました。自分が今までやってきたことがどんな事だったのかを。



正義の為に殺すことは間違っていないはずなのに、もしかしたら自分は目の前にあるこんな光景を奪ってきたのかもしれないと気づくと、私の心はとても脆くて。

「あ、は…… は、わ、私が今まで、やってきたことって……」

全部、分からなくて。

「今更びびったか？ でももう遅い、死んだ奴は生き返らないし、罪を償うなんて都合の良いことなんざほんとの意味で出来るやつなんかいない」

「わ、私、やっぱり、死んだ方が、いいのデイスか」

慰めを求めるわけではありませんでした。彼の言葉に甘さはありません

ません。

当たり前です、そして私は私のやるべきことを行いました。

「あ、あなたが、あなたが望むのなら、今すぐにも、死にます……  
… 教会の、信徒として、あなたの言葉は主教様の言葉と同じと  
伺っていますから、じ、じ、自害の許可を……」

そう言って、私は無意識に帽子の男の子から盗み取っていた小さなナイフを自分の喉にあてがっていました。

「え、うそ、ナイフ……」

「お、おい、ルカ！ お前のナイフじゃねえか！ いつのまに…！」

子どもたちが騒ぎはじめます。帽子の子はそれなりに腕が立つの

でしょうが、わたしから見ればまだまだでした。

「……………俺が死ねって言ったら死ぬのか？」

子どもたちとは裏腹に彼とトカゲさんは冷静でした。

トカゲさんの目配せに、彼が視線だけで答えています。私には、そんなやりとりだけで分かり合える相手はいないから少し不思議でした。

「はい、それが私に残された唯一の価値ですから」

第一の騎士、剣としての価値がないのなら、もう私にはそれしかありません。

せめて、教会の教えを守る信徒として、主教様のお言葉に、教会に従うものとして。

彼に従い、死にましよう。

直接彼に手を下されるのなら、それもいいでしょう。

「そうか、なら、だめだ。死ぬのは許可しない」

彼はなんのこともないように言い放ちます。

私から目を離さず、しかし落ち着いた様子でテーブルに置いてある水差しから直接、水まで飲んでいました。

「……………なぜディ……………ですか」

「ウップ。逃げるなよ。そんな勝手な真似は許さん。耳を澄ませ、

目を瞑れ、思い出せよ、お前が今まで殺してきた人間の顔を」

彼の言葉は、不思議です。

似てもつかないはずなのに、どこかで聞いたことのあるような言葉。

そう、主教様のお言葉と似ていたのです。

「奴らはお前をずっと見ている。お前の魂はもう奴らに呪われていく。だからお前がそんな簡単に楽になることは許されない」

午前の日差しが差す部屋、ベッドの影、テーブルの影に、人の姿が蠢いた、そんな気がしました。

「奴らを捨てるのは許さん、全て連れて行け。恨みも憎しみも呪いも。全て連れて生きていくことだけが、何かを殺した人間が出来る唯一の生き方だ」

その影たちは私を見ています。

その影は彼を見ています。

私は知っています。見ています。彼もまた殺せる側の人間です。私は正義のままに殺しました。彼は何の為に人を殺したのでしょうか。

「あなたも、同じじゃないですか」

思わず、言ってしまいました。

知りたかった、私は今、自分のしたことが少し怖くなり始めている、なのに何故あなたはそんなに平気なのか、知りたくなったのです。

「ああ、そうだ。俺も殺す、殺した。俺は、生かす奴と殺す奴を自分で選んだ、自分で決めた」

彼が言い放ちます。トカゲさんと子どもたちへ視線を向けて。

影たちは恨めしそうに彼を見ています。でも。誰一人彼に近づぐこともできません。

なんて、強くて、なんて、傲慢で。なんて――

「わ、たしは……」

それに比べて私は――

「奴らはみんなお前を見てる。だから、お前も奴らを忘れるな。まあ、あれだ。お互い呪われた人間同士、仲良くしてこうぜ」

「あ……」

ぼうつとしていたから、彼にいと簡単にナイフを取り上げられました。

小さくて、しかし鋭い、子どもにも扱いやすそうなナイフ。

「ほら、ルカ。お前もスられることとかあるんだな」

「……ごめん、もう2度と盗られないようにする」

彼が差し出したナイフを帽子の子が受け取ります。心底安堵したように。大事にその小さなナイフを抱きしめていました。



「よし、頼んだぞ。さて、バカガキ。残念だがお前に死んでる暇はない。あの銭ゲバ女から話は聞いてるな？ 役に立てないから死ぬだとかどーだとか、バカのくせに色々考えすぎなんだよ」

「わ、私は、バカじゃ」

「バカだ。考えなくてもいいーこと、考えてもどうしようもないこと、答えないことを考えるのはバカのことだ。価値がどーとか、生きる理由がどーたらとかはな、時間を持って余した暇人がすることだ。そして、俺たちにその暇はない」

「私に、何をさせようと言うのですか」

「ん？ 雑用係とボディガード。がきんちよどもが街に出る時はそいつらの護衛、後はラザールと俺とお前の3人でたのしいモンスター狩りだ。お前の強さはよく知ってるしな」

「……………はい？ な、んで？」

「あ？ なんだよ」

「いや、だって、あなた、私に、私を痛めつけるために、私に復讐するために、自分の元へ呼びつけたんじゃない……………」

「復讐……………？ 誰が、誰に？」

「いや、だって、私、あなたを」

「あ？ なんでよ？ 俺、お前に勝ったじゃん」

「え？」

「いやいやいや、え？ なに？ まさかお前、なに？ 自分が勝つ  
たと思ってる？」

「……決着はついてませんが、あなたが勝つたとは思ってませんデ、  
……です」

「は？」

彼と私の会話は噛み合っておりません。

「ふ、フハハハハハ！ ナルヒト、これは一本取られたな！ た  
しかにあの時、俺たちは彼女と決着をつけていないぞ」

トカゲさんが笑いはじめました。牙をぎらつかせ、顔を覆ってお  
腹を抱えて。

「はー?! いやいやいやいや、レーザーレーザーレーザーくん、あれはノリ的にどう考えても俺らの勝ちだろ?」

わいわいと彼ら2人が騒いでいます。

大人もこんなふうには笑って、こんな風に騒ぐなんて初めて知りました。

「ふふ、面白い人たちでしょ? お兄さんとトカゲさん」

「貴女は……」

あの人とトカゲさんの側からずっと、可愛らしい女の子が私に近づいてきました。

「はじめまして、私、ニコ! 貴女は?」

そのおひさまみたいなお顔に、ついほだされて。

「……ストル、ストル・プーラ、デイ……です」

「そう！ 素敵なお名前ね！ ストルって呼んでもいいかしら？ ふふ、お兄さんからあなたのことは聞いているわ。とても強くて頼りになる人だって」

「あの人が、私を？」

「ええ、ふふ、お兄さん、面白い人だから。とても冷たくて怖いのに、暖かくて優しいの。楽しくて寂しい人だからたまに勘違いされちゃうけど……でも、私たちはみんなあの人が好きよ」

おひさまのような女の子が、おひさまを見るような目であの人を眺めていました。

「いやいやいやレーザー、あのガキとよー、俺ならぜってー俺の方が強いって！ その認識はプライドがあれなんだけど！」

「ナルヒト、お前、彼女に影響されたか？ 蒐集竜様みたいなこと言ってるぞ」

「げ、マジかよ。……わかった、引き分けて手を打とう」

「わちゃわちゃと言い合う二人、しかしトカゲさんの方が彼をあしらうように会話は終わったようです。」

「おい、バカガキ。ナルヒトだ」

「彼が、ぬっと近づいて自分を指差しています。」

「え？」

「え、じゃねえよ。名前だ、名前。改めて自己紹介。俺は遠山鳴人、お前は？」

「わ、私、ですか？」

「お前。今ニコには自己紹介してたろ？俺にもしろ。一応俺今からお前の上司だからな。俺の名前は遠山鳴人、こっちのトカゲ男はラザール。で、お前は？」

名前を、聞かれました。

彼らと初めて出会った時も名乗ったはずですが。でも、何故かその言葉がとて、遠くて。

「ハイハイハイ、もったいぶんなよ。これから忙しいんだからよー。」

リダ、ルカ、ニコ、ペロ、シロ。今日の仕事は？」

「おう！ 俺とルカは宿屋の掃除の手伝いで銅貨1枚稼ぐぞ！」

「……リダと同じ」

「はい、私はペロとシロの面倒見ながらおばさまのお台所のお手伝いします！ 銅貨1枚頑張って稼ぐわ！」

「はいはい、僕とシロは…… つまみ食いしないようにします！」

「だーう！ だう！」

彼の声に、子供たちはみんな楽しそうに答えました。私の知る大人と子どもの関係ではありません、私の知る大人と子どもの光景で



はありません。

そこには、私の見たことのない世界がありました。

こんなにも狭い部屋なのに、私はこんなのを知りませんでした。

ずきり。

何故だか、わかりません。なんで、今、こじいんでの卒業出来なかった子たちのことを思い出したのでしょうか。

「お？」

「あ……」

私が、無意識に彼らへ向けて伸ばしていたのは手。

ああ、わかりません。けれども私は気づいてしまいました。こじいんでの卒業試験、私があの子を殺したあの日。

あの子も、今の私と同じように手を伸ばしていて。

「ほい、握手」

「……………?」

手を握られました。

あっけにと取られて、動けません。喉が、急に乾いて。ああ、でも。なんて、大きな手——

「いよし、じゃあ新入りもやる気を見せてきたことだし、仮称ラザール・ベーカー全員で今日の仕事を始めるぞ。ちみっこともは、宿屋ん中での仕事、俺とラザール、んで、バカガキは冒険者ギルドにいつて肉体労働の時間だ」

彼らが動きはじめます。日の光の指す狭い部屋の中、子どもたちの目はキラキラと輝いて、大人たちもまたしっかりと前を向いていました。

「……じゃない、です」

「あ？」

「私は」

何故でしょう、今でもわかりません。

でも、きっと、この瞬間から私の何かが変わりはじめる、そんな気がしました。

「私は、バカガキじゃないです、違います、私の名前は」

乾いた喉を震わせて、震える胸を握りしめて。

「私は、ストル。ストル・プーラ、デイスー！」

叫ぶように、名前を。

彼らは、少しポカンとした後、大声で笑いはじめました。

わたしだけ、置いてけぼり。でも、少し、ほんの少しわたしも釣られて笑ってしまい。

ああ、この日、この瞬間から私の何かが始まったのです。

私は、賢くて、頭が良いのでそれがわかりました。

デイス。

52話 ストル・プーラの憂鬱、異世界生活7日目の昼（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください  
さいー！

< 苦しいです、評価してください > デモンズ感

### 53話 パン屋への試練

「おお！ 友よ、契約の眷属、コトシロにかけて！ 今日もまた太陽が西から東へ進むように我が商会に素晴らしい品をおろしてくれ  
たな！」

「よう、オッサン。景気はどうよ」

活気あふれる冒険都市、門を抜け街中を貫き、今日も今日とて数  
多の出店がひしめく青空市場に遠山鳴人は帰ってきた。

「ああ、上々だとも。おかげさまでな。テイタノスメヤという需要  
の割には供給が異様に少なかった商品の登場に、貴族を中心とした  
上流階級層の市場は沸きはじめているところだ」

「そりゃ何より。んで、これが今日の分だ。査定宜しく」

出店の前に置かれた大きな荷車、遠山とラザールとストル、3人がかりで仲良く引いてきたそれには合計3頭の大蛇、2級モンスター、テイタノスメヤの亡骸が積まれている。

「おい、見ろよ、またアイツらだ。4級の冒険者のくせにあの大蛇を狩りまくっている連中の……」

「この前、ギルドの奴に聞いたんだけど、なんでもあの竜殺しの奴隷なんじゃないかって噂だぜ」

「ケツ、まぐれだろ、まぐれ。そのうち見なくなるぞ」

「バカ、まぐれで1週間も続けて大蛇を狩れるかよ。この前も別の3級の冒険者パーティーが同じことしようとして、森林に入ってから2度と帰ってこなかったら？」

「噂じゃ、教会騎士を脅して小間使いにしてるとか……」



「竜のコネがあるらしいぞ。竜大使館の馬車がアイツらの住んでる宿屋に駐まっていたことがあるって」

異質な光景。遠巻きに眺める人間たちが口々に冒険都市の間を駆け巡る噂話を口にする。

同業者である冒険者たちの驚嘆と、嫉妬が入り混じった言葉やざわめきを聞き流しつつ、遠山は店先のカウンターに陣取る。

「おお！ いつもながら素晴らしい仕事だな。こうして見ただけでも外傷が少なく、素材の状態として文句はない。ビスエ！ お得意様のご来店だ、素材の査定を始めろ」

それを快く受け入れる髭の壮年男性、ドロモラ商会店長、ドロモラは遠山たちの持ち込んだ商品に目を光らせながら露店の奥へ声をかけた。

「うーす、あ、トオヤマさんに、ラザールさんおつかれーっす。あ、ストールちゃんもこんにちは」

軽薄そつな青年、天然のパーマがかかった優男がへらへらしながら現れる。

「ああ、ビスエ。元気そうで何より。なるべく高音をつけてくれるとありがたいのだが」

「こんにちはデイス、ビスエ。私、1匹頭を強く傷つけてしまったのデイスが、まずかったデイスか？」

レーザーやストルともすっかり打ち解けた様子で青年が荷車の状態を確認し始める。

査定の立ち合いをレーザーとストルに任せていた遠山はカウンターに陣取り、店の奥を見つめた。

「……まあ、なんだ。友よ。君には色々驚かされてばかりだな、まさかあの場面から生き残るところか天使教会をやり込めてくるとはな」

カウンターを挟んでドロモラが膝をつきながら体を傾けた。低い声、呆れたような、しかしどこか愉快そうな声だった。

「全部ギリギリの綱渡りだよ。ストルにや殺されかけてるしな。あ、ドロモラのおっさん、八チミツ水、3本貰っていいか？ 査定金額から料金抜いといてくれよ」

遠山はカウンターの側に置いてある水桶を指さす。透明な瓶の中に八チミツを溶かして冷やした飲料が備わる。

帝国でもポピュラーな商品だ。もちろん養蜂にも教会が絡んでいるのだが。

「ああ、わかった。ほら。残念だが最近氷が値上がりしていてね。あまり冷えていないが」

「問題ねえよ。ラザール、ストル！ ほらよっ！」

水滴のしたたる瓶、山羊の皮を蓋にしたどこか牛乳瓶にも似たそれを遠山は受け取り、背後で荷車の査定に立ち合っている2人に放り投げた。

「む、いただきこう」

「デイス！」

ぱし、ぱし。それぞれ瓶を小気味良くキャッチした2人は瓶の蓋を外し、腰に手を当ててぐいっと飲み干した。

「ビスエの査定をちゃんどチェックしといてくれよ。ちよろまかされないようになー」

「ああ、了解した」

「はい、デイス」

「げー、感じワリー。まあ、せいぜいこわーいリザドニアンと教会騎士にとっちめられないようにしますよー」

呑気なやりとり、1週間そこらの関係だが遠山の冒険者業においてドロモラ商会との関係性は悪くなかった。

「おっと、悪い。話の腰折ったな。で、なんだっけ」

遠山が再び、ドロモラの方へ向き直り会話を再開させる。こじんまりしている店内はきちんと整理されており、一度半壊しかけた店とは思えない。

「はあ、これときたものだ。なに、少し感慨深くてね。正直、あの日。もう5日ほど前になるのか？ 君とラザール君が初めてうちの大蛇を持ち込んだアレが、君らとの取引の最後になると思っていたものだが…… 人生とは面白いものだな」

呑気な遠山の様子に、ドロモラがため息混じりにぼやいた。

「あー？ あー…… もう5日前か。アレだろ、ストルと騎士どもと色々やらかしたあの日か。今更ながらあん時は悪かったな。勝手に店の商品使ったりしてよ」

「なに、気にするな。騎士との戦闘により荒れたこの出店の損害よりも君たちとのテイタノスメヤの取引で得た利益の方が遥かに高い、

それに商人ギルドの保険制度で店の損害も補填されているしな」

「抜け目ないことで、儲かってるようで何よりだ。なあ、おっさん。俺たちは今んとこ上手くやってる、そうだよな？」

会話の継ぎ目、遠山は少し声を潜めてドロモラを見た。今日の本題。2級モンスター、大蛇、”テイタノスメヤ”を通しての取引でドロモラ商会との関係性がかなり良くなってきた故のタイミング。

「おっと、友よ。悪い顔だ。お前は筋はいいが顔に出やすいのが珠に瑕だな。……当ててやろうか？ 何か無茶なことを頼むつもりだな？ それも絶妙なラインでの無茶を」

ここからが、今日の本番だ。

遠山は口元を歪める。

「話が早くて助かる。実はな、俺らも1つ商売を始めたいと思ってるんだ」

「ほっ？」

ドロモラが身体の向きを遠山へ向ける。

喧騒の中、互いに言葉と会話に長けたもの同士が向かい合う。

「業種はパン屋、店舗は今んとこ新しく借りる予定の家が、アンタみたいにこの市場で屋台形式で考えてる」

今日の本題、いよいよパン屋開業に向けての一步を進める時が来たのだ。

遠山はこの日のためにドロモラ商会との専属契約を結んでいたと言っても過言ではない。



「パン屋、ねえ。なるほど、なるほど、だがパン屋というんだ。肝心のパン職人はどこにいるんだ？」

「そこに」

遠山は振り向かず、親指だけで後ろを指す。指先の指す先には、テイタノスメヤの取引価格を交渉するラザールの姿があった。

「……コトシロにかけて。その、本気なのか？ リザドニアンのパン屋など聞いたことがないが」

ドロモラの顔に嫌悪や、侮蔑はない。あるのはただ、ただ困惑、それに尽きる。

王国においても、帝国においてもリザドニアンという種族へのイメージは大して違うものでもなかった。

「これから嫌でも聞くことになるさ。ドロモラ、あなたに頼みたいのは商売の準備を手伝って欲しいんだ。真つ当な手段で俺たちはパン屋を始めたい。いや、というよりも、だ」

遠山の計画はシンプル。

「ああ、まて、待ってくれ、だいたい予想がつき始めたぞ。お前は次にこういうんだ。我がドロモラ商会にパン屋事業の手伝いをしろ、とな」

「あなたの商会で、っと。話が早くて助かるよ。まあ、そういうことだ」

ドロモラ商会に自分たちのパン屋開業を手伝わせる、言ってしまう  
えばただそれだけのことだ。

「……ふむ。事業提携ということか？ その場合は俺も君たちのパン屋に口出しさせてもらおうことになるが？」

「ああ、もちろん。商売の形式や利益分配の部分はあなたにも相談する。短い付き合いだがあなたは商売に関しては嘘はつかないことはわかった。俺なりにアンタの腕は見させてもらったつもりだ。その、正直なところ、俺とラザールは経営者向きじゃなくてな」

「なるほど、読めたぞ。面倒な部分をこちらにやらせようとしているな?」

ドロモラがにやりと笑う。思ったよりも反応が悪くない。

遠山も同じく薄い笑みを浮かべたまま、軽く言葉を交える。

「おっと、言い方が悪いな。むしろ美味しい所に噛ませてやるうとしてるんだぜ。俺の見立てではラザールの作るパンは、確実にウケる。帝国の、いやこの世界の人間が見たことないパンだ。」

「……嫌な目だな、全く。何一つ信じるに値する情報がないのに、

お前の目は何一つ嘘をついていない。ああ、なるほど、これはやられたな。友よ、お前、俺にこの話をするタイミングを狙っていたな？」

やはり悪くない。遠山は自分の見込みが間違えていないことを確信する。

こちらの思惑をドロモラはすでに理解している。ならば話は早い。

「まあ、アンタとの信頼関係ができてないタイミングでこんな話しても、アンタは乗らないだろ？　そして俺たちとアンタらの信頼とはつまるところ利益だ。アンタはもう知ってしまった、俺とレーザーが利益をもたらすことをな」

人差し指同士を絡ませながら、遠山がじつとドロモラを見る。

仕込みはすでに終わっている。キリヤイバを使う時と同じだ。目標を仕留める時は気付かれず、静かに、そしてすばやく。

遠山鳴人とレーザーのもたらす利益はすでに、ドロモラ商会の経

嘗になくはならないモノとなっているのだ。

「……愚問だろうが聞かせてくれ。俺がもし、ドロモラ商会がそのパン屋事業への協力を断った場合はー」

「残念だが、今査定してもらっている蛇たちはそのままギルド、もしくは今俺たちを遠巻きに見ている他の商人のところに持ち込まれる。ついでに言う tomorrow以降はアンタ以外の商人が貴族へこの蛇どもを卸すことになる」

遠山鳴人の仕込みはこの数日で完了していた。ドロモラという利益に聡い人間をたらし込むために徹底的に彼に利益を与え続けた。

テイタノスメヤという商品の価値を把握するため、他の商人との会話や市場での商品の流れを学習し、ドラ子に頼んで貴族区の上流階級の生態を教えるもらった。

たった4日。

たった4日で、今やドロモラ商会はテイタノスメヤの素材を安定して供給できる特異な存在として上流階級市場に認知されていたのだ。

これはもちろんドロモラの商人としての卓越した腕前も大きな要因だろう。しかし、1番の理由はやはり、遠山鳴人とラザール、そして最近はストルの異質な3人による大蛇狩りの存在だ。

ドロモラ商会の発展に、もはや遠山鳴人とラザールはなくてはならない存在となっていた。

「……痛い所をついてくるな。予想していたとは言え恐ろしい言葉だ」

「別の冒険者に頼むんなら頼んでもいいぜ？ 採算が取れるかどうかは知らないけどな」

「わかりきった事を言うのはよせ、我が舌の踊る友よ。お前たちと同じ階級でテイタノスメヤをこんなに狩れる冒険者などいない。本来、ここまで安定して大蛇を狩れるのは一級冒険者以上の存在だけだ」

ドロモラの言葉に、遠山は笑う。

自分たちに代えがないことも把握済み。

遠山たちに触発されて一発逆転を狙い、格上のモンスターに挑んで全滅する低級の冒険者が増えていることをギルドで確認している。

お陰で遠山たちの低級冒険者からの評判はすこぶる悪い。だが、格下の評価よりも遠山たちは自分たちの利益を優先していた。

「だが、連中はそもそもテイタノスメヤに興味を示さない。一級になればギルドからの俸給や、塔とやらで行う狩り、そして貴族からの依頼で金には困らないからな。いちいち見つけにくくて戦いにくい、一級冒険者からすれば美味しくない獲物であるコイツらを狙う

理由はないわけだ」

目標を叶える、夢に近づくためにはコツがいる。

まずは認識、世の中は基本的に優しくない。大切なのはそれを正しく理解し、自らの立ち位置をきちんと把握しておくことだ。

その上で考える、手に入れたいもの、犠牲にするものの取捨選択を決断し、行動する。

遠山は、顔も知らない低級冒険者たちよりも自分たち仲間との生活と未来を選択した。自分たちの行動が、他人の安易な死を呼び込むと理解していながらそれを選んでいた。

「その通り、ティタノスメヤはそういう意味で需要と供給の間にいる存在だった。そしてそれをその間を埋めることで私の商会は今やこの短期間で商人ギルドでも一目置かれる存在となりつつあるわけだが……」



「理解が早くて助かるよ。さて、ドロモラ商会。答えを聞かせてくれ。これからも俺たちと仲良しこよしでいてくれるのか、どうか」

市場の喧騒が響く。

特にドロモラのまだ小さな出店には見物人が多い。荷車に乗せられた大蛇を物珍しそうに眺める冒険者や、チラチラと盗み見しながら様子を伺う同業者である商人たち。

周りの店も元気の良い呼声や、値引き交渉の掛け声など今日も冒険都市の経済は順調に回っている。

そんな中、しかし、出店のカウンターを隔てて互いに視線を交わす遠山とドロモラ。2人の間だけ真空の如く音は存在していなかった。

遠山とドロモラは口を開かない。互いに口をつぐみ、街の喧騒を浴び続ける。

ともすれば口を開きたくなる辛い沈黙、しかし遠山は知っている、  
ここが詰め、だ。

先に口を開いた方の負け。そのことをよく理解していた。

「……はあ、負けたよ。お前の申し出を断れる材料がない。詐欺に  
遭った気分だ」

予定通り、先に折れたのはドロモラだ。

ドロモラという男は遠山たちのもたらず利益の価値を理解出来ない  
ほど愚かではなく、しかしそれを覆して交渉出来るほど異質でも  
なかった。

「よし！ 契約成立！ 安心しろよ、おっさん、アンタに損はさせ

ないさ」

「はあ、言っておくが俺はまだラザール君にパン職人としての価値を見出してはいない。俺が買ったのはあくまで君たちの冒険者としての腕だという事を忘れるなよ」

「ああ、大丈夫さ。そう言ってもらえんのも今のうちだ、数ヶ月しないうちにアンタは多分、ラザールを狩りに出すなって言い始めるに決まってる」

「……その自信がどこから来るのか気になるものだ。」

ああ、わかった。君たちと手を組もう。ドロモラ商会はトオヤマナルヒトとラザールのパン屋事業に手を貸すことを誓つさ、眷属の名の下にな」

「……眷属、それ、誰だ」

眷属という言葉に少し寒気を感じる。遠山は夢の中のパン文書館に住み着いた彼女の事を忘れていない。

「決まってる、商売の権化。契約と商売の眷属、コトシロの名前の下にな」

「……OK、俺も、そうだな。恵比寿さんに誓つよ」

ひとまず眷属のことを頭の片隅に押しやり、遠山は自分の知る限りもつとも有名な商売の神様の名前をつぶやいた。

「なんだ、それは？ まあいい、だがな、友よ。実を言うとこの街で新たな商売、特にパン屋を始めるのはなかなか難しいと言う事を知っているかな？」

「ん？ どういう意味だ？」

ドロモラの言葉に遠山は耳を傾ける。

商会への協力取り付けの段取りは組んでいたが、ぶっっちゃけそこから先のことはほとんど見切り発車だ。

「商人ギルドだ。ギルドは市場の管理と経済のバランスの調停を謳って冒険都市内で営業出来る店舗を制限しているんだ」

「ふーん。でも、制限っていつても、こんだけこの青空市場には店が出てるけど……」

遠山は市場にひしめく露店の数々を見回す、現代でいうところの大規模都市で行なわれるイベント並みの数と密度だ。

制限されているようには見えない。

「その通り、だがよく見てみる。たしかに彼らは商人ギルドに所属している商人だ。だがみんな、店を持っているわけではない。あくまで屋台止まりの簡素なものだけだろう？」

「あー…… 店舗ってそういうことか」

ドロモラの言葉に遠山は頷いた。

「そう、商人ギルドはいわゆる住居、箱もの、とでもいうか。店舗を構えての商売に関して強い規制を敷いている。彼らは土地と建物の生み出す利益の価値を知っているわけだ。新参者にパイを簡単に渡してくれるほど優しくないわけだな」

「なるほど。まあ、ネット通販もないんじゃないや店を構えるってこと価値も上がるわけか。えー、じゃあどうすんだよ」

「落ち着け、友よ。俺とてやはり一国一城の主人になりたいがために色々手回ししている。この街で貴族向けの市場を重視しているのもそのためだ。要はコネと金で商人ギルドから店舗経営の権利を手に入れればいいだけの話さ」

「それが難しいって話なんだろう？」

「ああ、今のところまだまだ遠いだろうな。パン屋を始めるのにはやはり、専用の設備があるだろう？ 調理場、竈、売り場、薪小屋、およそ飲食にかかわる商売は必然的に店舗経営が必須になるのが課題だな」

「んー、なるほど。ぶっちやけこれから手に入る家を店にしようかと思ってたが、あんま甘くねーな。箱があっても許可と権利が簡単には手に入らねーわけだ」

利権。

「どの世界、どの時代でも利益を求める人間が考えることはあまり変わらないらしい。」

「ため息つきつつ、その人の変わらない営みに遠山は少し安心した。人はどんな場所、どんな世界においても、人なのだ、と。」

「くく、結論を急ぐな。友よ、俺は簡単な話ではないと言ったが一言でも無理と言ったか？」

「おっと、もったいぶらないでくれ。あまり気が長い方でもなくてな」

「そう急ぐなよ。トオヤマナルヒト。俺はこの国に友人が少なく  
な。それなりに会話の通じる人間との交流に飢えているのさ」

「へーへー、んで、何が言いたいんだ、ドロモラ」

ドロモラの軽口に遠山が短く返す。2人の関係は個人としてもあ  
まり悪いものではなかった。

「もしも、運命というものがあるとするならばお前はそれを自分で  
切り開いているんだろっな。トオヤマナルヒト、お前を見てるとそ  
う思っよ」

「あ？」

「今、このタイミング、今、この状況でのみ、パン屋を開業するに  
あたって最短最速のルートを選ぶことが出来ると言ったら、興味は  
あるか？」



「ないわけないだろ。教えてくれ、モチベーションあるうちに動きたいからな」

カーニバル  
「竜祭」

「竜祭？」

「ああ、お前がいなければ、お前が為さなければ本来起きえなかった状況だよ、竜殺し殿」

くっくっく、喉を鳴らしながらドロモラが自分の髭を撫でる。

「10日後に開催予定の竜祭を利用しての陳情権の獲得。それが君たちのパン屋開業にあたっての最速ルートだ」

ドロモラのドヤ顔、これ以上ないドヤ顔だ。

「いや、竜祭ってなんだよ。なんか聞いたことあるような、ないような」

首を傾げる遠山。なんかよくよく考えても見れば今までの会話の中、ちょこちょこ聞いていたような言葉のような。

「おい、まで、まさかお前が知らないなどと…… 言いそうな顔だな、それは」

決め顔を崩し、ドロモラが大きなため息をついた。

「ああ、常識ないんだ。俺」

「真顔で言わないでくれ。お前は当事者なんだぞ。竜殺し。お前が蒐集竜を殺したからこそ、この祭りは開かれるのだからな」

「あー、なるほど。なんか聞き覚えあるな、それ」

「竜祭、または竜祭り。帝国の法で定められた国を挙げての祭り事だ。竜が死に、そして復活するとこれが開かれる。帝国を挙げての催しさ」

「ほんほん」

なるほど読めてきた。ドラ子だ。自分がドラ子をぶちのめして、アイツが当たり前のやうにリスポンした。

それで開かれる祭り。うん、考えれば考えるほど頭が痛くなる。遠山はツッコミ処満載のイベントに対して考える事をやめた。

「先月、蒐集竜の死とその再生により竜祭が催されることが決まっ  
てから帝国の経済は加熱し続けている」

「加熱？」

「ああ、加熱、だ。竜祭に伴い、関所の通行税の免除。それにより  
各地の人流、物流を活発化。その動きは冒険者ギルドへの物流網護  
衛の依頼増加に繋がり、冒険者の財布が膨らんだ。まあ、当然彼ら  
の財布は緩むだろう。帝国全体に金が廻り続けている状況だ。好景  
気が好景気を生む、まさに、竜のみわざというやつだな」

帝国の経済、金の周りには冒険者という存在が深く絡んでいる。  
各地に差はあるものの、帝国領土内には人類を捕食対象とする”モ  
ンスター”が存在する。

それへの対抗存在たる冒険者、軍とは違う小回りの効く遊撃手の  
役割を果たす彼らの存在は国家経営において替えの効かないものだ。

経済が活性化すれば、冒険者の活動も活性化する。そして冒険者の活動が活性化すればさらに帝国の経済は活性化する。

竜祭の開催は、その正の循環を帝国にもたらしていた。

「へえ、で、その竜祭りとパン屋のことどんな関係あるんだよ」

「簡単な話さ、10日後、この街はお祭り騒ぎになる。帝都と並ぶ大都市であり、竜大使館の所在地でもあるここでは様々な催しが開かれる。その催しの一つ、<sup>フリーマーケット</sup>自由市。これこそ君たちの目標への最短の近道だ」

ドロモラの言葉に遠山は固まった。

「フリマ？ 今、フリマって言った？」

えらく聞き覚えのある言葉だ。

「フリーマーケット  
自由市だ。フリマではない」

しかし、ドロモラは遠山の言葉を認めない。

「いや、だからフリマじゃん。ああ、悪い、続けてくれ。えっと、そのフリマでー 自由市で何をどうしたらいい？」

追求を諦めて遠山はその先の答えを求めた。

「1番だ。自由市、つまりどんな業態、何を売ってもいいこの催しで、竜祭の期間中最も素晴らしい店、自由市の中の自由市、その名も、”最強の市場王”に認められた店には冒険都市への陳情権が与えられる」

「メルカー」

「最強スーパーの市場王だ、友よ。それ以上でもそれ以下でもない」

全ての疑問をドロモラは聞いてくれない。そっとしておこう。

「あ、はい……なるほど、その、まあ、市場王になればパン屋を最速で開けるわけか？」

「その通り、陳情権、つまりは都市へなにかを求める権利と言うがその実、帝国法において犯罪と認められることや、現実的でないもの以外はほとんどが受理される。大戦末期の炎竜の死亡、そして復活の際に行われた竜祭における市場王は、爵位を要求しそれが通ったほどだ」

「へえ、貴族にすらなれるほどの強い権利が手に入るわけか。パン屋の開業も……」

「わけではないだろう。商人ギルドと言えども竜祭や冒険都市に逆ら

えるほどの力も気概もないしな、だがこれは困難な道だ。帝国中から市場王の称号を求めて商売人が集まる、それにもちろん冒険都市の商人ギルドも総力を挙げて市場王を狙ってくるぞ」

「その中で、君たちが市場王を取ることが出来るか否か。ちなみに君たちが自由市に参加するとなると……」

「もちろんパン屋さ。ラザール・ベーカリーのお披露目は竜祭のフリマに決定だな」

ドロモラの問いに、遠山はニヤリと答えた。

「……市場王を取れるほどのパン屋ならば、リザドニアンのパン職人でも通用するのかもな。だが友よ、現実を伝えておく。彼らリザドニアンという種族への差別は根強い。簡単に帝国の民がそれを受け入れるとは思わない方がいい」

ドロモラの声は切実な響きだ。ただ現実を冷たく見つめる商人の声だった。



「ああ、ここ数日でよく分かったよ、だが問題ない。人間ってのは現金なもんだからな。そこら辺は色々考えてるさ」

しかし、現実が厳しく残酷なものだということなどどうの昔に思  
い知らされている。

遠山鳴人はそれをねじ伏せるためにあらゆる努力を惜しまない。

「……わかった、ならば何も言うまい。ドロモラ商会として出来る  
だけの手伝いはしよう。お前たちの野望に一枚噛ませてもらうぞ、  
強欲な友よ」

カウンター越しに差し出された手。遠山はそれを握り返す。ゴツ  
ゴツした手だ。苦勞している人間は信用出来る、遠山は手に力を込  
めた。

「ああ、お財布握りしめて楽しみにしてな。おい！ ラザール！  
こっちゃんこい、こっちゃん。パン屋の交渉うまく行ったぞー」

「偉大なる歯にかけて！ 本当か、ナルヒト！ お前の舌はきつと何かの眷属が呪いでもかけてるんじゃないか、こいつめ！」

「おっと、想像以上にはしゃぎトカゲになってんな」

ぴょんこ、ぴょんこ荷車の上から身軽にラザールが店舗に駆け寄ってくる。

尻尾がピンとたち、縦に裂けた眼を爛々と輝かせたその姿はまさに「陽気マンボだ。」

「ドロモラ、感謝する。俺の友と、俺の夢に協力する決断に敬意を」

カウンターに身を乗り出したラザールが、ドロモラに向かって頭を下げた。普段あまり感情を出さない男のその喜びように遠山は少し笑った。

「あー、ラザール君。君の人格にもはや疑いはない。トオヤマナルヒトと比べれば君のその純粋な言葉はなんと心地よいものか」

「ドロモラ、それだと俺の人格になんか問題があるように聞こえるぞ」

遠山は軽口のもりで軽く返して。

「……………?」

しかし、ドロモラは無言で、真顔で遠山を見つめていた。

「嘘だろ、コイツ、なんて目で見てきやがる……………」

「まあ、冗談はさておき、だ。トオヤマ、ラザール君。認識のすり

合わせは出来ているかな？ 君たちのパン屋開業には自由市での活躍が必要だと」

本当に冗談かどうか分からない態度でドロモラがパン、と手を叩いた。

「ああ、理解してる」

「全力を尽くそう」

遠山とラザール、2人が頷く。

「よし、ならばいい。まあ、実を言うとだな。話の厄介なのはここからだ。自由市でリザドニアンがパン屋をやることの難しさよりも厄介なことを君たちはクリアしなければならない」

「あ、なんじゃそりゃ」

「むむ？」

ふと振り下ろされた言葉、まだ何かあるらしい。遠山とラザールは揃って目を細める。

「簡単な話だ。この街では自由にもまず金とコネがいる。実は、その、数日前、今から1週間ほど前に締め切られているんだ」

「……………うん？」

遠山が聞き返す。シメキラレテイル？ なんの話だろうか。

「締め切られているんだ。自由市への参加期限は2週間前に終わっている」

「……………ナルヒト」

その言葉を理解したらしいラザールが悲しそうに呟く。

「……さて、ラザール。この店長の髭を全て抜くのはまだ早い」

遠山は表情を固めたまま、手をワキワキと動かす。残念だ、からかってくる奴にはそれ相応の仕返しをしよう。

「おい、物騒なことを言うな。落ち着け、荒くれ者ども」

「へい、へいへいへい、ドロモラのおっさんよー。すこーし意地が悪いんじゃないのか？ てめー、そういうのは先に言えよ、先にラザールなんかあんなにご陽気トカゲだったのに、ほらみる、お前が期待だけさせて落とすから陰鬱トカゲになっちまったるーがよー」

気付けばしょんぼり、しゃがみ込んで尻尾を畳んで地面に向かって頂垂れるラザールを指差しながら遠山が凄んだ。

言いがかりをつけるチンピラに見えないこともない。

「……いいんだ、ナルヒト。こいつのには慣れてるぞ」

「ご陽気マンボから一転、ご陰気トカゲに変わってしまったラザールがいじけている。」

「待て、話は最後まで聞くものだ。普通の方法では無理と言う事だ。だが何事にも抜け穴があり、この世のほとんどは金とコネでなんとなかる。今回もまた同じだとも」

「お？」

「む？」

「童祭を取り仕切っているのはこの街の権力者たちだ。彼らの一声で自由市への参加などどうとでもなる。そして、君たちはその普通

でない方法を取る手段とコネがあるだろうか？」

「権力者ア？ この街に来てから1週間の俺たちにそんな連中とのコネなんてねえだろ」

「何を言ってるんだか。審問官殿」

ドロモラが人の悪い笑みを浮かべて、遠山とラザールを舐めるように見つめた。

「あー…… あー、そついや、アイツ、偉い奴だったな」

悪い人間である遠山はそれだけで、今から誰をどのようにすればいいのかを瞬間的に理解した。



「なるほど、汝、困りし者へ手を差し伸べるべし。というやつだな」

最近毒されてきているラザールもまた、大きな口をにやりと歪める。鋭い牙が見え隠れしていて。

「ああ、持つべき者はたんまり溜め込んでなおかつ権力のある友人だなあ」

悪巧みの算段を大人が始める。汚い3つの笑顔が、荷車の上で八チミツ水を飲んでいる水色の髪の少女を見つめていた。

「デイス？」

天使教会騎士団、第一の騎士、改め異端審問官側仕え、ストル・ブーラが首を、傾げて。

.....  
.....  
.....

〜同時刻、天使教会大聖堂、主教室にて〜

「へーつぶつつしよおい！！ おんどりゃ！！ スズビ」

厳かな大理石仕様の広い部屋。

王国製の最上質木材、マヤ木で作られた椅子に深く腰掛けていた  
白髪の美女が大きなくしゃみをかました。

「主教サマ、お風邪ですか？ お鼻、拭きますね」

「うー、ありがと、スヴィ。どこかで誰かが私を噂してるのかしら。  
すんっ」

書類が山のように積み重ねられた机、書類仕事を見守っていたスヴィの差し出したちり紙で鼻を噛む主教。

普段の威厳は今や見る影もない。

「……きつと、いいお噂ですよ」

「うふふ、そうよね。スヴィはわかってるじゃない。さてと、一連の竜と竜殺し関係で溜め込んでた書類も全部片したし、竜祭まであと、10日間、どうせまた休めなくなるから、明日くらいは少しお休みしようかしら」

うーんと、背伸びしつつ主教が椅子に背中を預ける。

「……問題ないかと。ここ最近、主教サマはお忙しくなさりすぎでしたので」

その様子を優しい目つきで見守る聖女、ここには今穏やかな時間が流れている。

「ふふ、ありがと。あなたもたまには休みなさい。護衛は羽の数人に任せるから、あ、そうだ、スヴィ、これ」

「え？」

背伸びしたまま、主教がおもむろにスヴィへなにかを差し出した。

美しい花の模様が施された香り紙。蠟印のついたそれは冒険都市において最も入手が困難な紙の一つだ。

「貴女が行ってみたいって言った、貴族区にあるテルマエ、姪御殿御用達、星の砂館のチケット。明日のお休みで行ってきなさいな」

「え、ええ…… うそ、だって、あそこ、一年も、予約待ちのどこ

ろじゃ……」

差し出されたそれを見つめて、大きな飴玉のような目をスヴィが見開く。

信じられない、といった様子だ。

「もう、スヴィ。私を誰だと思ってるの？ 天使教会、最高の人、  
なんでしょ？」

にっこり。主教が花のように微笑み、

「しゅ、主教サマ……」

聖女が春のように頬を赤く染める。

完全なるニコポがそこにあつた。

「ほら、遠慮しないで受け取って。聖女だ、主教だ言われても私たちは人間なの。たまには生命の洗濯ってやつも必要だわ」

「だ、だったら主教サマも一緒に！」

ぼーっとしていたスヴィが首を振って、主教に詰め寄る。声は明らかにうわずり、ソワソワと落ち着きがない。

「あ、たはー、ごめんね、まあ、なんのかんのかっこつけてアレなんだけど、一枚しか取れなかったのよ。いいから気兼ねなく行ってきなさいな、私のスヴィ」

「……い、行かれませんが、主教サマを置いてそんな……」

「もう、強引ね。そんな強引で強情な子には、そうね、こうしましょう？ 聖女スヴィ、主教、カノサ・ティエル・フィールドの名において命じます。明日は全て仕事のことを忘れてオフを満喫すること。わかった？」

スヴィとは対照的に、主教は余裕を崩さない。クスッと笑い、綺麗で形の良い指で、ツンッとスヴィの鼻を押した。

「あ、う……………」

「……………それとも、スヴィも、やっぱりコレを使わないと私の言う」と聞いてくれないのかな？」

それでも招待券を受け取らないスヴィ。主教は、わざと声を低くして、目を伏せた。なるべく悲しそうに見えるように。

ちらりと、右手の甲に刻まれている令呪いを見せながら。

「そ、そんな！ ず、ずるいです、主教さま、そんな言い方」

「ふふん、大人はずるいものです。ほーら、スヴィ。そのチケット、

今日の夜から使えるから、もう準備して行っちゃいなさいな。ゴ—  
ゴ—!

「うう、ほ、ほんとに、ほんとにほんとに、私がいなくてだいじょうぶですか?」

後もう少し。

主教は確かな手応えを感じつつ、言葉を告げる。

「聖女という”竜”へのカウンターにすらなり得る存在を言葉だけで誘導していく。」

「大丈夫よ。羽たちもいるし、それに本当に大事な時は必ず貴女は私の元にいるわ。貴女を手放す気はないの、私」

流し目、細い糸のような目を僅かに開き紫色の瞳をスヴィに向けた。



主教は自分の顔がいいことをよく理解していた。

「あう…… わ、わかりました。聖女スヴィ、いと貴き御身の」  
命令に従い、明日は休養致します」

片膝をついたスヴィが、ようやく差し出していた招待券を受け取る。

「ん、よろしい。私は少し机の整理してるから、あにたはもう下が  
りなさいな。楽しんできてね、スヴィ」

湧き上がる笑みを必死に抑え、上品な微笑みを浮かべる主教。ま  
だだ、まだ、笑うな、しかし…… その内心の激情を彼女は微  
塵も見せない。

「は、はい。では、失礼します…… ほ、ほんとにいいの？」

「もう、心配しないの。お休み、スヴィ」

「お、おやすみなさい、主教さま」

ぱたん。小さな音を立ててスヴィが聖賢室を後にする。残るのは書類仕事のために椅子に座ったままの主教だけ。

ろろそくの揺らめく部屋で、カノサはニコニコと閉じられた扉に笑顔を浮かべたまま――

「スヴィは行ったかしら」

誰もいないはずの部屋に、主教の言葉だけが響いた。

「は、主様。羽からのご報告ですと既に自室へ向かっておられます」

天井から、音もなく床に降り立つのは真っ白の修道服に身を包んだ猫の獣人、トッスル。

「教会が保有する副葬品の一つ、”羽隠しの髪飾り”、所有者の気配を羽毛一枚分のものとするそれを身につけていた彼女が、主人の号令に馳せ参じる。」

「グッド、良い仕事ね。そのまま聖女スヴィへの監視を続けなさい。彼女の動向は逐一私に報告すること」

「聖女にすら気取られぬその隠密、副葬品の補助はあれど、かの王国の”影の牙”と比べても遜色ないものだろう。」

「は、主殿」

「監視に使う人数は必要最低限、距離に気をつけなさいな。敵意はないとは言えあの子は聖女。隠密に長けたあなたたちでも気取られる可能性は充分に有るのだからね」

「心得ております。羽の中でも選りすぐりの腕利きを2名監視につけます故」

淡々と下される指示、それは審問会の隠密による聖女スヴィの監視命令。

「あら、トッスル。貴女は？」

「御身の護衛です。聖女様なしで羽だけには任せることはできません」

「ふふ、そ。頼りにしてるわ」

「は、ご期待に添えるように努めます。して、計画は本日より？」

トツスルの言葉に、主教が立ち上がる。窓辺により、街を見下ろした。

冒険都市を一望出来る場所に建てられている大聖堂、まだ日は高く、人々は精を出して働いている頃合いだろう。

計画の時は近い、しかし、まだだ。主教は少し恨めしげに太陽を見つめた。

「ええ、日が落ちて、スヴィが湯治に到着したと同時に私も行動します。化粧をお願いしますね、トツスル」

「は、準備が完了しましたらお呼びいたします。それまでごゆるりと」

「ええ、ありがとう」

その言葉を最後に、トッスルは姿を消す。本当に薄い羽が1枚、風に流されて消えゆくようにその気配はもう見つからない。

「ふ、ふふふ」

主教が喉を鳴らした。

大きな窓辺に腰掛けて、首を傾けつつ、その明晰な頭脳が詰まった小さな頭に人差し指をぐりぐり押しつけて。

「近頃は竜と竜殺しの周りに大きな動きもなし、スヴィイは温泉に送

り込んだ。悩みの種の騎士団はトップの不在で機能してない、原理主義者の第二聖女派も監視において活動の予兆なし、と」

整理する。今、己のやるべきタスクを。

「竜祭の準備も問題なく、王国からの国賓の来訪も貴族院が調整中、今すぐに対応することもなしと来れば」

そして、そのタスク。己を縛る仕事は今奇跡的な状況、多忙な主教という立場としては本当に珍しい余裕がある状況、風の中にいた。

つまり、今、この瞬間。

主教、カノサ・テイエル・フィールドは休暇を取れる状態になったのだ。

「フ」

形の良い薄い唇が、つり上がって。

「キターーーーーーッッッッッッッアアアアアア、キタキタ  
キタキタキタアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアア、コツチコツチオアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアア！！！」

「主教、吠える。圧倒的、華金状態。」

「チャアアアアンス！！ シャーオラアアアア！！ あっそっ  
ぶ！ 遊ぶ！ 遊ぶわよー！！ ムホホホホホホ！！」



そう、この女、そう！ つまり、そういうことである！

「<sup>ラウンジ</sup>夜亭、”レイン・イン”の予約は完了したい！ 変装もトツスルに任せれば問題ないしい！ うるさいスヴィも温泉で茹で聖女になるように手筈したしい！ トラブルも乗り越えた！」

先程の聖女へのあの態度、羽たち隠密への指示、全てはこの時のため！

「あー、たんのしみいいい！ 教会のお金使ってー、可愛い子はべらしてー！ あー、今日は賭け事もしちゃおーっ！ ムホホホホホホ、人生楽しすぎてワロタ」

この女、遊ぶつもりである！

天使教会最高指導者という立場でありながら、金と俗なことが大好きな平民上がりの女は、今夜、豪遊するつもりなのだ。



彼女は何も知らない。

最近大人しく（おおらかに見て）していた竜殺しとその一味が今まさにこの瞬間、自分に対して悪巧みを考えていることなど露も知らないのだ。

「ムホホホホホ、今、この私を止める存在など、この世界にはいない！ 主教！ 秘蹟！ 権力パワー！！ アハハハハハ、支配してやるわ！ 取るにたりまくるレイン・インの美少女に美少年たち！ 我が知と！ 金！ の前に平伏しなさい！」

今、冒険都市で最も幸せな女のダンスは続く。

日はまだ、高く冒険都市は光の中にある。だが、ゆっくりりゆっくりそれは傾く。日はいずれ傾き、夜がやってくる。

月と星と、人の欲望が闇を照らすその時間。

冒険都市の夜はもうすぐそこにあつた。

### 53話 パン屋への試練（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを「こ覧くだ  
さい！

＜ 苦しいです、評価してください ＞ デモンズ感

## 54話 夜の街へ繰り出そう！

冒険都市、アガトラ。

帝国において首都である帝都に並ぶ規模の人口と、経済力を誇る南部領の要所。

冒険者ギルドをはじめとする帝国の産業においても重要な都市。

人が多く、多くの金生まれ、それ以上に消費されていく大都市ならば、人の街である以上そこには数々の欲望が蠢く。

「こちらファイア1、目標を視認した。各分隊、状況報告せよ」

「こちらファイア3、同じく目標を視認デイス、髪の毛の色やメイクをしているが間違いなく目標デイス、歩き方や所作の癖まではい

まかせていませんデイスね。私は賢いのでわかるのデイス」

「……こちらファイア2…… なあ、ナルヒト。今俺たちは何をやっているんだ？」

夜の欲望蠢くその地区の名前は、カラータウン”色街。夜を膿ませるような熱と、男と女の愛と欺瞞と金が渦巻く一大歓楽街。

扇情的な姿の女性、鼻の下伸ばした酔っ払い、いかめしい用心棒がひしめくその街に影が蠢いていた。

街を照らすカンテラや、たいまつも、その影を照らすことは出来ない。

「おい、ラザール、作戦行動中はコールサインを使え」

「トオヤマ、あなたもデイス。ラザールは今ラザールではなくファイア2デイスよ」

「おっと、悪いストル、じゃないファイア3」

「いやもうお前らも徹しきれてないじゃないか」

その影は悪事を包み込む。遠山とその一味はある人物の尾行のため、日が落ちると同時に、色街に繰り出していた。

ラザールの眷属スキル、”影の導き”によりその身を影に紛れさせている3人は、どこかウキウキとした足取りで街をゆく1人の女を尾ける。

堂々と色街のメイン通りを歩く3人はしかし、誰にも認識されていない。めざとい客引きや、呼び込みも遠山達の存在を知ることができない。



もちろん、変装してお忍びでルンルン気分の女も彼らに気づくこととはない。かわいそうに。

「んだよ。ラザール、ノリ悪いな。かつこよくないか？ コールサイン」

「私はなかなかこの、ロールスライス？ 気に入りましたデイス」

「コールサインな、うーん、覚える気がないのかな？」

尾行しているとは思えない緊張感のなさ。しかし、いくら無駄話を繰り返そうとも、その影は彼らを包み隠す。

悪事の眷属に愛されたトカゲ男の意のままに彼の友人達を影は覆い隠すのだ。

「いや、そもそもなんで俺たちはこの時間にこんな街で尾行なぞし

てるんだ」

ラザールがため息つきながら、ぼやいた。どこか色街の様子に疲れているようにも見える。

「忘れたのか？ パン屋の開業のためだ。俺たちがこの街で真っ当にそして素早く商売を始めるには竜祭への参加が条件だ、ここまではないな」

「ああ」

「はいデイス」

遠山の言葉に2人が頷く。

ゆらゆら揺れるカンテラで作られた街灯の下、男を誘う女の香水の香りが鼻につく。

「んで、間が悪いことに竜祭への出店参加はもう締め切りが終わってる。普通に参加するにはちと遅すぎたわけだ。俺たちは普通とは違う特別な参加方法を取る必要がある。OK?」

「ああ」

「デイスデイスのデイス」

昼間にドロモラ商会から得た情報を基に、日が落ちると同時に遠山達は活動を開始していた。

パン屋開業のための、竜祭への参加の権利を手に入れるため、遠山はすでに悪巧みを計画し終えていた。

「特別な方法」この街の権力者の力を借りて参加者としてねじ込んでもらうこと。ラザール君、ここまで言えばわかるわね」

「いや、まるでわからん」

レーザーに向けて指を指す遠山、しかしにべもなくレーザーが首を振る。

「なんでトオヤマ、急に女の人の喋り方になりやがるデイス？」

「まあ、つまりだな。俺たちは今からあの銭ゲバ女の弱みを握り、それをネタにして竜祭への参加権を手に入れる必要があるわけだ。はい、論破」

ストルの純粋なツッコミを無視して遠山が少し早口に計画を口にする。その計画はシンプルかつ、ゲスい計画だった。

「いや何も論破できていないぞ。俺にいい考えがあるとか言ってたからここまでついてきたが、そもそもなぜ彼女の弱みを握る必要があるんだ、ナルヒト」

ラザールが至極当然な疑問を口にする。その問いに遠山は少し言葉を考えながら口を開いた。

「ラザール、よく考えてみる。あの女と俺らは確かに敵対はしていない。だが残念ながら仲良しこよしでもないんだ。この前の騎士団とのあれこれであの女には借りがある。これ以上アイツに借りを作るのは避けたい」

「……待て、ナルヒト。俺はどうしてもそこがつかない。ただでさえ借りがある人間の弱みを握るのはその、人道的にどうなんだ？」

「んー、まあ人道を言われるとぐうの音も出なくなるんだがよ。あの女はやり手だ。残念ながら正攻法じゃ取引出来る気がしない。借りを増やすだけになっちまう、ここまではいいか？ ラザール」

「む、ま、まあ言いたいことはわかる。あまり借りを作らない方がいい人種というのも納得はできるのだが……」

「だろ？ あの女に必要以上借りは作りたくねえ。だけどあの女の協力が要だ。うーん、どうしようか？ 俺はそこで考えた。でもどうしたらいいかわからない、そこで、逆だ。逆に考えてみた。借りを作る以外の方法をな。そして、思いついた」

逆に考えるという思考は大切だ。あげちゃってもいいんだ。人生とはそういうものだ。

遠山は色街の雰囲気酔いつつ、ニヤリと笑い、

「そうだ、借りを増やすんじゃない、銭ゲバの弱みを握ってそれをネタに脅して協力させたらいいや、と」

本人は精一杯にさわやかに言っ たつもりで言葉を放つ。

ラザールは無言で眉間を抑えて、ストルは丸い目をぱちぱち閉じたり開いたりした。

「おおう、さすがはトオヤマ。血も涙もないゲスデイス。教会の命令じゃなければ、騎士団の肅清対象デイスね」

早くも慣れてきたらしいストルが冗談だか本気だかわからないことをいう。

遠山は割と倫理観や常識が壊れているので、第一の騎士の正義スイッチギリギリのところをかすめていることを自覚しつつ、それでも淀みなく話し続けた。

「だがストル、今回脅す相手はあの主教だ。見たくないか？ お前から騎士団の目の上のたんこぶの女が慌てふためく姿をよ」

「……………デイス」

遠山の言葉にストルが口をつぐんだ。遠山がまた、にいいっと、年下の少女に向けてはいけない微笑みを口に浮かべる。

「今更いい子ぶつても遅いぜえー、ストルちゃんよー。そもそもあの銭ゲバ女が、側近の聖女に隠れて夜遊びしてるっつー噂もお前が教えてくれたんだ。自分に正直になれよ」

絡む遠山。

そう、そもそも遠山の作戦は銭ゲバ女、主教カノサ・ティエル・フィルドの弱みやスキャンダルに目星がなければどうしようもない作戦だ。

そこを、彼女がクリアしてくれたのだ。主教派と敵対していた騎士団のメンバー、ストルはその”弱み”の目星を知っていた。

「む。むむむ、でも、本当にあの主教様がこんな場所にお忍びで来ているとは思いませんでしたデイス。騎士団の間諜の調べで報告は



上がっていました。誰もとにも取り合いませんでした。あの主教がそんなはずはない、と」

「よつぱど素敵な面のお持ちあそばせておられるわけだ。その夜遊び風景をばっちり抑えて、お願い事を聞いてもらうのが今回の目的な」

ストルから得た主教のスクヤンドルのタレコミを元に遠山は悪だくみの絵を描いた。

古今東西、民衆は権力者に対して潔癖だ。それをあの主教は理解している、ならばこのYOASOBIは確実に奴にとっての弱みとなりえる。

わざわざ入念に変装までしていることからそれは明白だ。

「……願いを叶えるために努力せよ、か。今宵ばかりは天使教会の

教えを都合よく解釈させてもらおう。ナルヒト、ストル。周囲に俺たちと同じように潜んでいる連中が何名かいる。主教殿を囲む……この動きは護衛だな」

自分の中で納得が終わったらしいラザールが、歩きながら、メイン通りに並び立つ建物をいくつか指さす。

「どうやら、自分達以外にも身を潜めている連中がいるようだ。」

「お、ラザール、やる気出てきたな」

「ふん、お前とつるむようになってこの方どんどん悪徳を積んでいく気がするが、まあ、嫌いじゃないよ。だがナルヒト、彼女の弱みつまりは身分を隠して夜遊びしているとこの現場だが、どういう風に抑えるつもりだ？」

「おん？」

「正直、この街、いや、帝国に彼女の名前は知れ渡っている。金に汚いというイメージすらあくまで彼女の反対派が流している風説程度にしか浸透していない。基本的に帝国民の多数は主教、カノサ・テイエル・フイルドは清廉潔白な人物と思っているんだぞ」

「うん」

「いや、うんじゃなくてだな。いくら俺たちが彼女がこの色街で豪遊するところを確認しても、しらばっくられたらもうそれで終わりだ。どう考えても信用や発言力は彼女の方が高い」

ラザールの問いは正しい。たしかにその通りだ。主教と自分達の世間からの評価は比べ物にならない。

人が重視するのは真実や言葉の真偽ではない、誰が何を言うか、これに尽きる。

自分達が今の状況で、主教の夜遊びを周りに吹聴したところでそれを信じる者はいないだろう。あの女には痛くも痒くもないはずだ。

「お、おお！ ラザールの言う通りデイス！ わたし、私もそれを言おうと思っっていましたのデイス！ 騎士団でも結局、そういう結論になっていましたデイスよ」

「この世界ではやはり立場が全てだ。弱い者が強い者を脅かすことが非常に難しい。」

「この世界では。」

「はははは、なんだ、そんなことか。ヒヒヒヒ、久しぶりの現代技術無双の時間が来たな」

だが、遠山のいた現代は違う。

例え、生まれや立場が弱くても弱者が強者を追い詰めることは必

ずしも夢物語ではない。

技術、人の重ねた執念と妄執により生み出されたそれは弱者と強者のパワーバランスを捻じ曲げた。

誰しもが発信者となれる、誰しもが情報を得ることが出来る、誰しもが誰かに影響を与えることが出来るようになる。

本来、強者ゆえに許されていたはずのそれを、遠山のいた現代の世界ではまさしく誰しもが行えるようになっていた。

それを可能たらしめる技術が生み出したアイテム、それは――

「む？」

「デイス？」

「じゃじゃじゃーん！ 探索者端末ー！ 2028年の最新型、太陽光電池付きー！」

ローブの懐から満面の笑みで遠山が取り出したのは、現代人にとっての必需品。

薄く四角い小さな板。多機能通信端末、いわゆるスマホだ。探索者に支給されるそれは民間用のものと比べて非常に多くの機能が備わっている。

「それは…… たしか一昨日、工房の連中から取り返したナルヒトの私物か？」

現代ダンジョンで死んだあの時から気づけばなくなっていた探索者端末は奇跡的に、塔内であるとある冒険者により見つけられていた。

ギルドやらオークションやら回り回って、最終的には”工房”と

呼ばれるドワーフを中心とした組織の元に流れ着いていた遠山の端末は、ドラ子の協力やら工房と遠山の全力の取引の末、再び主人の元に戻っていたのだ。

「なんなんディスプレイか？ 小さな手鏡？」

「ふ、ふふふ。未開な非文明人もよ。2028年の技術における。レーザー、ほい、こっち向いて」

純粹無垢な異世界人にウキウキで端末を見せつける遠山。

通信技術のないこの世界においても、その端末には使える機能がいくつかある。

遠山はその端末の小型カメラを向けて、画面をタップ。

「む？」

「ん、見てみ」

差し出した画面には、しっかりとラザールの写真が記録されている。影の中でもはっきりと怪訝な表情のトカゲヅラが映っていた。

「……歯にかけて。ナルヒト、今度はどんなインチキを使ったんだ？」

遠山のデタラメに変に慣れていたらしいラザールは驚くというよりもゲンナリした様子で答える。

「あ、私も見たいデイス。……え、エエエエエエ？！ら、ら、らららラザールが！ラザールの絵、が一瞬、え、す、すごいデイス！いつのまに書いたんデイスか？！」

飛び上がって驚くのはストルだ。目を輝かせて遠山の端末を覗き込む。水色のアホ毛がびこんびこんと揺れていた。

「ストル、少し声を抑えてくれ。影の中とはいえ気付かれる可能性



もあるんだ」

「むふふふ、いやあ、いい反応だな。説明めんどいから省くけどこれはまあ、要は周囲の様子を一瞬で画として記録出来る機能でな。写真、つつー機能だ」

それなりの反応に遠山は少しいい気分になりつつ、簡単にスマホの機能を説明する。

「じゃ、シャシン？」

「……聞いたことのない言葉だ。ナルヒト、お前は一体……」

「まあ、興味があるんならまた今度時間ある時に説明すんよ。要はこれで奴の夜遊び姿をぱしゃりと決めたらそれで作戦成功だ。言い逃れはできないだろ？」

遠山の作戦は極めてシンプル、しかし、この世界の人間ではまだ

行えない仕込みだ。

「スマホの写真を使ってのこの作戦、”オペレーション・ブンシュンキャンオン”と名付けよう」

ここに、この世界においてはじめてのパパラッチが誕生した。

影を使つての隠密と、キリを用いての攪乱が可能な現代においても非常にタチの悪いパパラッチが。

「おおつ…… なんとという邪悪な顔デイスか。トオヤマ、あなたに持たせたらきつと花束でさえ何か悪どい使い道を思いつくのでしょうね」

「お前人のことデイスる時だけ、IQ上がるよな。おっと、ファイアチーム、見る。奴が止まったぞ」

おしゃべりに興じていると、目標である主教がある建物の前で立ち止まった。

遠山は目を見張る。

大きな屋敷だ。

雑多な店が居並ぶ色街の中でその建物は異質そのもの。

正面は大きな門、おまけにいかつい門番。周りは高い塀に囲まれている。にもかかわらずその敷地内に映える建物の存在感は損なわれない。

ぼんやり照らされるカンテラの街灯がその建物を幻想的に仕立て上げている。熱に浮かされたようなその街の中においても、なおその店は際立っていた。

昔、教科書で読んだことのある社交場、“鹿鳴館”に似ているよ  
うな。

「御目当ての場所に着いたようだな。どうする、ナルヒト。店に忍び込むか？ それともまともに入店するか？」

「理想を言えば忍びこみたいが、ラザール、お前の影、あとどれくらい維持出来る？」

「連続してこのまま使い続けるのなら10分と言ったところだ」

「うーん、出来ればお前の力はもう少し温存したいな。アイツと時間をずらして俺らも普通に入店するか？」

「む。出来ればそちらの方がありがたいが…… まさか、夜亭、レイン・インとはな。さすが主教殿はお遊びされる場所も違う、少し面倒だな」

「レイン・イン？」

「冒険都市の色街でも屈指の人気を誇る夜亭だ。上流階級御用達の店だな。前の仕事の時に忍び込んだことがある、おそらく俺たちの稼ぎだここに一晩いただけで破産するだろうな」

「なるほど、セレブ御用達のお店ってわけだ。で、なにが面倒なんだ？」

「簡単なことだ。あの店は会員制だな。普通の客は入ることは出来ないんだ。会員からの招待でも有れば話は別だが」

「なるほど、高級ラウンジやお座敷遊びみたいなもんか。となると、潜入一択か、確かにめんどいな」

遠巻きにその屋敷を眺める遠山とラザール。この影を使えば潜入出来ないことはないだろうが、バレた時が面倒だ。

今のこの状況で犯罪は犯したくないものだが。遠山が少し頭を捻ってやり方を考えていると、

「ムッフッフッフ、デイス」

「……なんだよ、ストール」

バカがにんまり、笑い始めた。少し頭が痛くなる、これはそう、嫌な予感というやつだ。

「またまたこの私が役に立ってしまっ時が来てしまったのデイス。トオヤマ、ラザール。私、賢いのでわかりますデイス。あなた達は今からストール様すごいと言います」

「……ラザール、やっぱりこいつ部屋に置いてきた方が良かったかな」

「ふむ、子供たちへ人見知りしているチキンだからな。無理矢理でも馴染ませるために置いてきた方が良かったかもしれん」

ストルの言葉に遠山とラザールが淡々とした言葉を突き刺していく。

「な、ちょ！ そ、そういう認識は心外なのデイス！ 決して今まで同年代の友達いないから彼らと話すのが恥ずかしいとかではないんデイスからね！」

「自己紹介ありがとう。で、ストル、役に立ってるってのはどういう意味だ？」

「コミュ障バカに遠山は問いかける。早く子供たちとも慣れてもらわないと困るのだが、なかなか人間関係はそう簡単にはいかないものだ。」

「ムフフ、トオヤマ、お忘れデイスか？ 私、こつ見えて、少し有名な人のデイスよ？」

「「あ？」「」

水色の髪をくるくると指先で弄びながら、ストルがフフンとドヤ顔をかました。

「ムフフ、勉強させてあげますデイス。騎士の交渉というものを」

そう言った瞬間、ストルが一気に駆け出した。

「あ、おい！ バカ、待て、バカ、頼むから勝手なことするなつて！」

「だめだ、ナルヒト。影の範囲外だ。ストルが出るぞ」

「ああもう！ ラザール、俺らも行くぞ。あのバカ1人に任せてたらどうなるかわかったもんじゃない」

「了解、ナルヒト」



人混みに一度紛れて、それからレーザーが影を解除する。突然現れる形になった2人を見て、酔っ払いが何人かへらへら笑っていた。

この色街ではそれだけ。熱に浮かされた人々は何にも気付かない。

「こんばんはデイス、お勤めご苦労様」

ストルが門番に向けてひらひら手を振る。体格が違いすぎた。ゴツめの革と鉄が入り混じった鎧を着た大男が、ストルをジロリと見下ろして。

そんな視線を流して、ストルが門へ近づく。ざっと、大男がその行手を阻んだ。

「……お待ちください。本日はご予約されていらっしやいますでしょうか？ あいにく当店は完全予約制と会員制を取っております

……」

「ふん？ ああ、あなた最近入った人デイスか？ 私の顔を知らないのは、へえ、教育が行き届いていないのデイスね。レイン・インも」

「なに？」

「あなたでは話になりませんデイス。用心棒統括のホーライはどこデイスか？ 新人教育がなっていないことを叱りつけるのデイス」

めっちゃ喧嘩売っとるうつつうつ！

駆け寄った遠山とラザールは同時に頭を抱えた。やはり、ストルはストルだ。交渉（INTI）だ。

「……おい、嬢ちゃん、悪いがママごとにつき合ってる暇はねえんだ。その兄ちゃんたち、連れかい？ 早いとこ連れて帰ってくれ。怪我したくなかったらな」

「ストルさん、ストルちゃん？ 嘘でしょ？ なに？ どういうつもり？ ほら、一回、一回ここから離れよ？ ね？」

遠山がストルの肩を掴んで何度も揺らす、しかしストルはどこ吹く風。挑戦的に両手を後頭部に構えて、口笛を吹いている。

「ここで騒ぎは起こしたくないな…… 主教を監視している連中にも気取られてしまつぞ」

ラザールがそんな様子を見て、ぼやいていると。

「おう、どうした、ニコライ。なんかトラブルか？」

ざつ、門の奥からまた1人大男が現れた。顔に大きな斜め傷、筋肉のつき方も悪くない。

遠山は少し顔を顰める。

「あ、ホーライさん。いやなにすいやせん。このお嬢ちゃんとお兄さん方が少し無茶言ってるもんで。

「……ナルヒト」

「囲まれちった……どないしよ。INT1連れてくるんじゃないか  
たわ」

レーザーの警告、気づけば遠山たちは周囲をこつい男たちに囲まれている。こう言う街にお約束の用心棒達だろう。中にはなんかでかい棒みたいなものを構えている奴もいて。

「おっと、お兄さん方、困るなあ。こんなお嬢さん連れてこの店の前にいられたよ………ん？」

彼らの取りまとめ役らしい顔に傷のある男がふと、言葉を止めた。

彼の目がストルを捉えて、揺れ始めて。

「……ああ、ちょうどよかったデイス。ホーライ、久しぶりデイスね。私のこと、もう忘れてしまいましたデイスか？」

ストルが片目を歪に見開き、にいつと笑った。バカさと残酷さを併せ持つ危うい人間。

「……あ？　ーあ、ヒ？！　あ、アンタ、まさか、あの時のバーキー、騎士？！？」　な、なんでアンタがまたこんなところに？！」

「よかったデイス、覚えてくれていたようで。2ヶ月前の”連合会”以来デイスね。腕はもう治ってるようで」

「ひ、ま、待て！ あ、あの時は俺たちが悪かった！ だ、だがあの時のことは騎士団と連合会で話についてるよな?!」

「おっと、雰囲気変わってきたな」

傷の男の余裕が消えていく。辺りの男たちにも動揺が広がっていった。

「ええ、もちろん。相変わらず図体の割には小鹿のように怯える男デイスね。安心しなさい、今の私はもうあなたの恐れる騎士ではないのデイスから」

「おい、ガキ、いい加減にしろよ。ホーライさん、叩き出して構いませんね?」

男たちの中から1人、勇敢な奴が現れた。周りの静止を振り切り、憤慨を露わにしてストルに詰め寄る。

「……部下の教育が行き届いているようデイスね、ホーライ?」

その男には目もくれず、ただストルはリーダー格の傷の男を舐めるように見つめて。

「おい、だからガキ！！ てめえ、さつきから口の利き、カバラっ  
?!?!」

「うるせえエエエエエエ！！ この人にナマ言ってるじゃねええ  
え！！ す、ストルさん！！ たいっへん失礼しましたああ！！」

殴り飛ばされる若い男、ストルではない傷の男が自分の部下をぶん殴り、その後見事な最敬礼をストルに向ける。

「「「「え?」」」」

男たちが、目を剥いて。

「お、おい、今、ホーライさん、ストルって……」

「あの、連合会を一人で叩きのめしたっていう騎士……」

ざわざわと、辺りを囲んでいた男たちが明らかにざわめき出す。ストルの名前はこの街に知れ渡っているらしい。あまり良くない方向で。

「お、おおおお、お前ら！！ 何してやがる！ 全員礼だ！！ ストルさんはもちろん、そのお連れ方にも敬意を示せええええ！！」

「『『『『う、ウス！！』』』」

ざつ、と全員で頭を下げる男たち。遠山とラザールは真顔でストルを眺めていて。



「よかったデイス、ホーライ。あなたが色々覚えててくれて。さて、そして一つ相談なのデイスが……」

「は、はい!! す、ストールさんが言うんですけどらこのホーレン、出来る限りのことはやらせていただきます!!」

「フフ、でしたら少し私の友人がレイン・インに興味があるようですね。特に予約などはしていませんし、招待も受けていませんが、入っても良いデイスね？」

「そ、それは……」

「それは？」

ストールが小首を傾げた。可愛らしい所作だが、傷の男にはそうは見えなかったらしい。

「いえ！！ なんでもないです！ お、おい、お前、マダム・ハロトに3名様を門番推薦で入れると伝えてこい！ お前の人生で1番本気で走れ！！」

「へ、へい！！」

「お、お待たせしました、ストルさん。ど、どうぞ、メインホールにご案内させて頂きます！ お、お連れ様もどうぞ、大変失礼しました！」

「「「「「し、失礼しました！！」「」「」「」

再びの最敬礼。

男たちは頭を下げ、道を開ける。

レイン・インの重たい門が開いた。

「ーフフン？」

ぱちり、遠山とラザールへ振り返り、ストールが下手くそなウインクをかます。下手すぎて、両眼を閉じていた。

「「「わー」」」

……  
……  
……

「君に紹介したくてね、西領で今一番勢いのあるメロウ商会の一人息子でー」

「へえ！ すごい方なのですね。貴方の人脈にはいつも驚かされま  
す」

「なあ、そろそろ逆指名してくれよ。俺の気持ちわかってるんだろ？」

「あら、ふふ。じゃあ、喉乾いたから、フィーネワインの30年モノで乾杯してくれるんなら、少しお話してもいいわよ？」

煌びやか。

電気のない世界とは思えない夜の街に煌めく輝きがそこにあつた。

大人数でも全く息苦しさを感じない大広間、テカテカの大理石は覗き込めば顔が映り込んでしまうほど、要所に敷き詰められた赤い絨毯は、踏み込めば靴がゆっくり沈んでいってしまう。

高い天井に配置されたシャンデリア、灯火がゆらゆらとガラス細

工を通して光をさらに強くさせる。

男女の夜の欲望、その醜さすら、ただただ輝きの中に溶かしてしまっそんな空間に彼らはいた。

「はえー、すっごい」

「相変わらずだな、この店は」

「おー、男と女が盛りやがってるデイスね。トオヤマ、口説くのが下手な男を肴にしてお酒でも飲みますデイスか？ ここのお店はラック・シャインというお酒が有名デイス。ワイルドミントのフレバーが喉から頭をぶん殴ってきますデイスよ」

「おまえロクな大人になんねーぞ、ストル」

広間の中心、屋内に用意された噴水、その側に置かれたソファ席に少し場違いな雰囲気、遠山たちは座っていた。

「ああ、確か帝国では13歳から飲酒が認められていたな。あまり飲みすぎるなよ」

「てか、今は飲むなよ、仕事だ、仕事だ。でもあれだな。上流階級御用達のラウンジって聞いてたけど、これじゃまるで王族のパイテイだ」

遠山は辺りをキョロキョロ見回す、言ってしまったええまるでお城で開かれる舞踏会の中に迷い込んでしまったみたいだ。

胸の空いた煌びやかなドレスに、のりの効いたテカテカのタキシード姿の男女が入り混じる。

バベル島で年に一度行われていた探索者表彰会の雰囲気によく似ている。

「それがこの店の売りさ。客層は基本的に金持ちの上流階級の連中、豪商、地主、爵位持ちなんかもいるだろうな。そして面白い仕組みなのが……」

ラザールが言葉を途中で止めた、ジロリ。自分たちのソファに近づいてきた気配に遠山も視線を向けた。

「こんにちは、可愛いお嬢さん。今日はご友人といらしたんですか？」

「あ？」

遠山がポカンとつぶやく。

ものすごいイケメンだ。身長は180センチ、白いタキシードに身を包んだ姿はまさに美男。

生まれて始めて白いタキシードが似合う男を見た遠山はあまりのイケメンレベルに固まってしまふ。

卵型の顔に、女とみまごうほどの美しいパーツが配置され、おまけに顔も小さい。下手したら8頭身はありそうだ。

「これぞ」

ラザールが肩をすくめて、ストルに視線を流した。

「あー、お兄さん、ごめんなさいデイス。今はまだ友人と楽しみたいので……」

話しかけてきたイケメンに苦笑いしながら首を横に振るストル。こいつ苦笑いとかそういうコミュニケーションできたのか。遠山は素直に感心する。



「おっと、これは失礼を。リザドニアンさんに、黒髪さん。なかなか隅におけませんね。お嬢さん、また気が変わったらいつでもお声がけを」

イケメンは心までイケメンらしい。にべもなく振られたというのに全く苛立つ様子もなく、ただ穏やかに微笑む。

「はいデイス、あ、その飲み物だけ貰ってもいいデイスか？」

ストールがイケメンの持っている小さな銀色のボード、それに乗っているシャンパングラスを指さした。

そのクソガキムーブに遠山が、目を見開いて口を歪めた。

「美しい貴女のお名前と引き換えでもよろしいのなら」

「ハッ、私と少しの時間を共有した代金として貰うデイス。何か問題がありますか？」

「はは、これは敵わないな。どうぞ、水色の瞳のレディ。貴女の眼と同じ色のスコールフィズです。お味がお気に召したら、僕を思い出してくれば嬉しいな」

「ええ、覚えておきますよ。忘れるまでは、デイスけど」

完璧なイケメンだった。登場から退場まで全て完璧だ。

「……なんだ、今のイケメン」

遠山はぼやんと、去りゆくイケメンの背中をソファの背もたれ越しに眺めながら呟く。

「ああ、あれはキャストがストルを”逆指名”したのさ。これがこの店の面白いところだな。客がキャストを指名するのではなく、キャストが客を選んで指名するんだ」

ラザールが、くくくと喉を鳴らしながらつぶやく。

「えーと、つまり、あれか？ 選ぶのは客じゃなくて……」

「店側、ということだな。まあ、正確にはキャスト個人が好みの客を選ぶわけだ」

「ええ…… それ、商売になんのかよ？」

「なるのさ。見てみる、ナルヒト。胸に銀色のブローチをつけている男女がいるだろう？ あれがこの店、レイン・インの店員なんだが、どう思う？」

ラザールの視線を追って、遠山が煌びやかなメインホールを歩き交う人々を眺める。

小さな顔、均整の取れたスタイル、みんな脚が長く、目は大きい。  
見ているだけで恋をしてしまいそうな外見の良さだ。

「あー、みんなアホみたいに顔がいいな。ツラの良さ、ビジュアル  
だけで飯食っていけそうだ」

「そういうことさ。人はみんな誰かに好かれない、認められたいと  
思うものだろう？ 特にその誰かが美男美女で有ればなおさらだ。  
この店が上流階級に贖罪にされているのはな、人の自尊心を満たし  
てくれるからなのさ」

ラザールの目がわずかに細くなる。低く、しかしよく通る声はメ  
インホールの賑やかな声の中でもしっかり聞こえる。

「レイン・インのキャストに逆指名されるのはいわゆる一種の勲章、  
まあ、ステータスのようなものさ。お気に入りのキャストに逆指名  
されるためにみんなじゃぶじゃぶ金を使いまくるわけだな」

ふっと、ラザールが笑った。

愉快そうに目をくゆりと傾けて、静かに周囲を指差していく。

「フルマリア！！ 貴女の為に王国から仕入れたプレゼントがございます！ ヒトダの木で作らせた細工です！」

「まあ、とても綺麗だわ。フフ、でも、こんなもの貰っていいのかしら？」

「ジエイ！ これ、貴方の瞳と同じ色のフレア石のアンクレットなの、つけてもらえないかしら」

「わあ、奥様！ こんなもの頂いていいんですか？」

「おつ……マジか。美女やイケメンがめちゃくちゃ買がれてる……」

「……」

ラザールの指さした場所に順番に視線を向けると、そこには客とキャストの一夜の戯れのシーンがあった。

たしかに、客の方が店員、キャスト側に気に入れようとしていくように見える。

「あそこまでしても彼らが報われるかどうかはわからない。しかし、一度この店に魅せられた者達はあるとどんどんハマっていくのさ。憧れのキャストから逆指名される日を夢見てな」

「なるほど、よく出来た、いやほんとに恐ろしいシステムだな。アイドルビジネスやらホストやらキャストやらキャストを魔改造したような……  
そういえば、バベル島にも似たような夜の店があったような」

以前、同業者から似たような話を聞いた記憶が遠山の頭をかすめる。確か、“あめりや”とかいう料亭まがいのお座敷遊びが出来る店だったような。

何人もの探索者や島の関係者がその店の沼につきり、破産したとかしないとか。

どちらにせよ恐ろしい仕組みの店だ。どんな世界でも同じようなことを思いつく人間はいるらしい。

「そういうことデイス。彼ら彼女らは夢を見せるのが仕事デイスからね。人はみんな、夢のためなら簡単にお金を投げ捨てるものデイスよ」

「どーしたんだ、ストル？ 何か悪いもの食べたか？ お腹痛いんならすぐトイレいけよ？」

「……どうやらトオヤマは私に対する認識が少しズレているようデイスね。ラザール、貴方の友達どうなってるんデイスか？」

「大丈夫、ナルヒトのいい加減さは君もそのうち慣れるぞ」

ラザールが疲れたように息を吐く。

「あ、てか、ストル、それ一口くれよ。喉乾いた」

そんな評価を無視して、遠山が呑気に自分の欲求に従った。

水滴のしたたるグラス、水色のしゅわしゅわを見ていると無性に喉が乾いてしまった。

「え」

「なんだよ、固まって。一口だけだつてば。全部は飲まねーからよ」

「……いや、それは別にいいのデイスが……　その、それをすると……  
か、か……」



既にストルはそれに口をつけていた。

「あ？ だめ？」

「…………… でいす……………」

目を白黒させるストル、しかし思い立ったかのように両手で勢いよくグラスを遠山に差し出す。

水滴の垂れるグラスの中には水色のしゅわしゅわした飲み物が氷をなめている。

確かに、ストルの目の色と似ていた。

「お、いーのか。サンキュー、一口いただきますっつと。……………おお、美味え……………」

なんという清涼感。喉から鼻に突き抜ける爽やかな香り、ミントのようなそうでないような。

もう一口飲んで舌の上で転がすとピリリとした辛口の中にわずかな甘みを見つけた。乾いた喉が一気に潤った気になる。

「もう！ 飲み過ぎデイス！ 私のなんデイスから！」

「あ、わり」

ぱしり、ストルが素早い動きで遠山の手からグラスを取り戻す。

目を泳がせながら、何回か視線をいつたりきたり。

遠山を見て、グラスを見て、また遠山を見てー

「……………ディスプレイ！」

何度目かの逡巡のあと、ぐいっとグラスを傾ける。

ストルの細く白い喉がごくり、ごくりと動いて、水色の液体が一気に消えていった。

「あ、おいおい、一気飲みは危ねえぞ。なんだよ、そんなに喉乾いてたんかよ」

ストルの顔が、わずかに赤い。ガラス玉のような目、星の形をした虹彩が歪んでいる。アルコールを一気にとったせいだろうと遠山は推測した。

「……………う。うー、私だけ、バカみたいじゃないディスプレイか」

遠山の態度を見て、ストルが恨めしそうに唸って。

「ナルヒト……」

ラザールが静かに、遠山を見つめていた。

「え、なんだよ、ラザール。その目は。ハエかなにかを見る目？」

「いや、なんとというか、その…… いや、なんでもないよ」

口をモゴモゴさせながら、最終的には沈黙を選んだラザール。遠山は友人の奇妙な態度に首を傾げた。

「はあ……まあ、リザドニアンのラザールにここまで信頼されるのデイス。悪人ではないのでしょうか」

ストルがため息つきながらぼやく。

「俺みたいな素直な悪人がいてたまるかよ。……さて、休憩はここまでにしてそろそろ目的のアイツを探さなきゃだが」

遠山が背伸びしながら、辺りを見回す。1日動きっぱなしで疲れが出てきているがふかふかのソファのお陰で少し楽になってきた。

「いかんせん広いな。このメインホールだけでもかなりの人数だ。主教殿の姿はぱっとは見当たらないな」

「うーん、やはり、主教様ほどのVIPは個室に案内されているのかもしれないデイスね」

メインホールをあらかた見回しても、当初尾行していた主教の姿は見当たらない。そんな中、ぽつりとストルが言葉を漏らした。

「個室？」

「ええ、キャストに逆指名された客はそれぞれのキャストにあてが

われている個室、まあ要は部屋デイスね。そこに入ることが出来るのデイス。主教様でしたら、レイン・インのキャストを既に何人が口説き落としていても不思議ではありませんデイス」

「なるほど、姿が見えないのはそういうことか。さて、どうする？  
ナルヒト」

「どつするつてもなー。ラザールの影で個室のあるところに忍び込もうとしても、場所の見当がついてねーだろ？ ストル、その個室とやらはだいたいいくつあるんだ？」

「このレイン・インの屋敷の3階部分デイスね。数までは把握しておりませんが、かなりの数もあり、警備も厳重デイス」

「うーん、忍びこむのはリスクが高えな。今回の件でしくじると悪いのは完全にこっちになっちゃう。……ん？ ストル、つまりあれか？ 逆に言えばよ、キャストに逆指名されることが出来れば、俺らもその3階、個室とやらの建物に入れるわけか？」

「そうなりますデイスね。まあ私たちはみんな言うなれば一見客デイス。私のような超絶賢くて可愛い女の子なら、一見でも逆指名は余裕でしょうけど……」

ストルが、じつと遠山の顔を見つめる。ぼんやりとろけたような顔。

こうしてみるとストルもあのキャスト連中に負けず劣らず綺麗な顔をしている。

小さな顔に、ガラス玉のような綺麗な瞳。何故か星の形をしている虹彩に、薄く桜色のぷるぷるしてそうな唇。

水色の髪はポニテにまとめられて、サラサラと彼女が動くたびになびいていく。あのイケメンが声をかけてきたのも納得だ。

出会い方が最悪だったことや、普段のINT1ムーブを見ていなければ遠山もまっとうに美少女扱いをしていただろう。

「ふっ……」

そんな美少女（知性1）が、遠山の顔を見て笑った。

ふっと、歪められた唇と瞳はからかうように遠山を見つめていて。

「おいラザール、このガキ、今俺の顔見て笑ったんだが」

「落ち着けナルヒト。瞳孔が開いてるぞ」

珍しく目を大きく見開いた遠山は怒りを鎮める為にラザールへ話しかける。このクソガキはいつか泣かす。沸点の低い遠山は、大人げなく子供に向かい合う。

「まあまあ、そんな怒らずに。なるほど。読めてきましたデイスよ。トオヤマ、あなた、キャストを口説こうとしてますデイスね」



「……今日はやけに頭が回るじゃねえか。その調子で頼むわ、スト  
ル」

顔をバカにされたことは忘れずにひとまず置いておいて、遠山は  
ストルの指摘に頷いた。

主教を闇雲に探すより、この店の流儀に則る方が早そうだ。

「ふむ、キャストを口説き、個室エリアに合法的に入るのか。案外  
悪くないかもしれないな。ついでに聞き込みも出来る。もし主教が  
この店の常連ならば、今まで遊んでいる様子や、お気に入りのキャ  
ストのを知っている人間もこのメインホールにいるかもしれないな  
いぞ」

「こつこつ言う店の店員ってのはその辺口が固いもんじゃないのか  
？」

ラザールの言葉に遠山が口を挟んだ。

「普通の売春宿ならお偉いさんは身分を隠したがるんだがな。この店、レイン・インは別なんだよ、ナルヒト。この店に来て、豪遊すること自体が上流階級の連中にはステータスとなっている、さっきの言葉を覚えているか？」

ラザールの言葉に遠山はぼん、と膝を叩いた。

「あー、後ろめたくないわけだな。なるほど、なら店員、いや、キャストの連中の口もそこまで固くねえわけか。いやー情報リテラシーってのは難しいもんだなあ」

要は認識の違いだ。

「まあ、それでも会って間もない人間に色々ペラペラ喋ってくれる人間は少ないだろう、そこはー」

「どれだけ彼ら彼女たちの警戒を解けるか、まあ、要はその人間の魅力次第ってわけデイスよ、トオヤマ」

「なるほど、あんの糸目女にたどり着くにはこの美男美女どもを口説き落とす必要があるわけかあ」

「そーいうことデイス。ふむ、集団で廻るよりもバラバラになってそれぞれで動いた方が、やりやすい気がします、どうしますデイスか？ トオヤマ」

「おっと、意外だな。いちいち俺に確認とつてくれるとは」

「ふ、ふん、まあ、これでも、その…… らしくなるように努力してるのデイスよ。……早く馴染みたいデイスし」

「すまん、デイスしか聞こえん」

「ナルヒト……」

「……なんでもないデイス。では、異端審問官殿。天使教会第一騎士、ストル・プーラ改め、異端審問官側仕えとして、貴方のご命令をば」

はあ、とため息をついた後、ストルがうやうやしく遠山に向けて頭を下げる。所作こそが優雅だが、その顔には、にへらと笑顔が浮かんでいて。

「ナルヒト、いっちょやってやるか」

ラザールが肩を回しながら、目をぱちくり。トカゲ特有の気合の入れ方らしい。

「おお、やるかー。パン屋創業の為に美人を口説くぞ。誰が銭ゲバ女に近づけるか、これもパン屋のため、卑怯とは言つまいな、主教殿」

遠山が立ち上がり、ゆっくり背伸びをして。

目の前に広がるラグジュアリーな光景、セレブ感あふれる美男美女に向けて、そのチベツトスナギツネのような細い目をにたりと、歪ませた。

「ラザール・ベーカー、ファイアチーム。モテモテ大作戦、開始だ」

54話 夜の街へ繰り出そう！（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください  
さー！

< 苦しいです、評価してください >      デモンス感

55話 たのしい夜遊び、ラン・RUN・竜

「とは言ったものな、ナルヒト、ストル。一つ言っておかなければならないことがある」

「んあ？」

「デイス？」

ラザールの言葉。モテモテ大作戦（各個に別れて手当たり次第にナンパしまくる）を始めた矢先のことだ。

「正直、このやり方だと、あまり俺は役に立てそうにない。悔しい話だが、リザドニアンという種族はやはり、嫌われ者だね」

少し悲しそうなラザールの声。尻尾がへにょんと萎んでいる。

「デイス…… たしかにラザールの人柄を知らない人間からすれば、リザドニアンというのはあまりみんなに受け入れられる種族ではないデイスね」

ストルの言葉も、今の遠山にはよく理解出来る。この1週間、冒険都市で過ごしていて肌身で感じていた”リザドニアン”という種族への差別や偏見は根深い。

今でもチラチラと上等な服に身を包んだ客からは不躰な目線を感じる。

「心配すんなよ、ラザール。何も問題ねえ」

チラチラ見てくる視線を睨み返して追い払いつつ、遠山は、言い切った。



「ナルヒト？」

「お前の種族と、お前個人のことはなんも関係ない。少なくともここに2人、お前がいい奴だって知ってる人間がいるだろ？」

遠山が自分と、それからストルを交互に指さす。ストルもまた顔色を変えずに小さくピースサインで答えた。

「ナルヒト…… ストル……」

「お前の出番はここより次。パン屋を開業した後だ。人には向き、不向きがあるからよ。美男美女を口説くのは俺とストルに任せてどつしり構えといてくれよ、店長」

「ナルヒト……！」

ラザールの肩をたたき、精一杯に爽やかな顔を作る遠山。本人的には完全に決まっていた。

「なあ、ストル」

そう、適材適所というものがある。ラザールがこの作戦で結果を出さなくても、彼の本番はここより先、パン屋を開業してからの話だ。

遠山はストルに同意を求めて――

「……う、うーん、まあ、うん、そう、デイスね。……うーん……」

「あ、どうした？」

「いや、なんというのデイスか。私、賢いのでこの先の未来がわかっってしまったというか、なんというか」

何故かしよっぱいものを口にして、飲み込むかどうか迷ってるよ  
うな愉快的顔をしたストルが口をモゴモゴさせていた。

「何言ってるんだ、お前。よし、それじゃ、1時間後、またこの噴  
水で。いいか、これはお遊びじゃない。仕事だ。必要経費として1  
人金貨5枚渡しとくから各自の判断で使うこと。領収書もらえたら  
もらっといってくれ」

遠山が懐から小袋を取り出して、それぞれにちやりんちやりの  
ぴかぴかの金貨を渡していく。

テイタノスメヤ狩りであぶく銭を得ていたので今のところまだ余  
裕はある。ただ、この冬までに教会との契約、白金貨50枚を払わ  
なければ全て終わりなのだ。

「ああ、了解だ」

「デイス」

「よし、行くか……！」

ストルはあの顔面偏差値だが、バカだ。あのイケメンに口説かれてたのは多分ラッキーパンチだろう。

そしてラザール。いい奴だが、差別や偏見てのはどこの世界でもあるものだ。気に入らないが、それを覆す為にも、この店でモテる必要がある。

「俺が要だ。俺が頑張らねえとな」

静かに1人、闘志を燃やす遠山。

そんな遠山を頼もしそうに見るラザールと、どこかしらっーとした目で見つめるストル。

それぞれの熱意を胸に、3人が噴水広場を後にした。

……

……

……

（1時間後）

「……わたし、貴方たちのこと、リザドニアンのこと誤解してたみたい。貴方のような方もいらっしゃるのね……」

絶世の美女。

女性らしい膨らみ、括れた腰。完成された身体を黒いドレスで包

んだ黒髪の美女が、瞳に熱を灯す。

「過分な言葉さ、ミス・ハロト。ああ、でも貴女にそう理解してもらえたのならこれほど光栄なことはないかな」

その瞳をまっすぐ見つめ返し、パチリとウインクをする男。その爬虫類の顔には穏やかな表情が浮かんでいる。

「ふふ、謙虚なのね。貴方みたいなヒトは始めて……　　ねえ、私、今、貴方のことが気になってるわ」

「俺は初めから貴女のことを知りたかったよ」

さらりと良いのける色男、いや、色トカゲ。齒の浮くようなセリフもしかし、完全に自分のものとしている。

「あら！　もう、ふふ、イケナイ人ね」

「あ、ちょっと、ちょっと！ 抜け駆け禁止！ ラザールさんにはじめに声かけたのウチなんですけど！ ねーさん、最初はリザドニアンは怖いとか言ってたじゃん！」

暗い雰囲気的美女と対照的な明るくて元気な声。肩までのショートボブ、少し癖っ毛気味の茶髪の美少女が2人の世界に割って入る。

見ていると存在しないこの子との幼馴染としての記憶が湧いてくるそんな美少女だった。

「ふふ、なんのことかしら。ごめんなさい、ラザール様。あの子、まだ子どもだから」

「そんなことはないさ。ハイネ、君のその純粋な心はとても綺麗だ。君から話しかけてくれた時、俺は嬉しかったよ」

「あ、う…… あ、ははー！ いやいやいやー、そんなウチなんか真っ直ぐ見つめちゃってー！ てか、ごめんね、ハロトねーさんと2人きりの方がいいよねー」

快活な少女だ。コロコロと表情を変えながら明るく少し、自信な  
さげな雰囲気。自虐めいたことをモジモジとつぶやいて。

「ふ、気を惹くのが上手いんだな、ハイネ。俺は君とも一緒にいた  
い。嫌かい？」

「あ、う、ううん、そんなわけ、ないじゃん…… はい…… 私  
なんかで、よろしければ…… おそばに……」

色トカゲの声に、声を小さくしながら頷く。その顔は食べごろの  
りんごよりも赤く。

「あら、ハイネが本気で照れる姿なんか久しぶりに見たわ。ふふ、  
ラザール様、罪なお方ですね」

「2人の花に囲まれるのなら、罪人と誹られようとも構わないさ。  
つい最近まで、冒険奴隷だったと言えば君たちの気を惹けるかな？」



「まあ、面白いお話！　ねえ、ラザール様、聞かせてくれないかしら」

「あ、ウチも、ウチも聞きたい！　ラザールさん、お話しよ！」

1人のトカゲに、美女がしなだれ微笑む。美少女が声を更に高くしてキラキラした瞳を1人のトカゲに向けている。

「……………うそやん」

遠山鳴人は、今深い絶望の中にいた。海よりも深く、マグマよりも濃い絶望の中に。

そのソファ席の周りには人だかりが出来ていた。

「お、おい、見るよ。リザドニアンが、あのアイザール姉妹を口説いてる……　なんか、いい雰囲気だぞ」

「嘘だろ？　さっきメロウ商会の倅と帝都の貴族が口説いても相手にされなかったの見たぜ？」

「マダム・ハロトが女の顔してるぜ。あのリザドニアン、レイン・インの女主人を墮としやがった……」

「ああ、ハイネ……　俺には見せたことのない雌の顔をしてる……  
脳が……」

「あのリザドニアン、凄え」

「声かっこいい……」

モテにモテている伊達男、伊達トカゲを一目見ようと集まる男たち、ある者はおののき、ある者は失恋し、ある者は脳を破壊されていく。

圧倒的なモテ力の前に、モテない男たちはただ、ざわざわするしかない。

遠山もざわざわする人間の中の1人だ。恐怖と絶望のあまりにガチガチと歯を噛み合わせていた。

「ま、まずい、このままじゃ、俺がまるで自分がモテないことを自覚すら出来ていなかったすごく痛い奴になってしまっ…… はやくー」

この1時間、遠山とて遊んでいたわけではない。好みの女の子に声をかけて話をしようとしたが、全敗、全て敗北だ。

一言、二言、言葉を交わした途端にみんな目を伏せてそそくさと去ってしまうのだ。初めはみんな恥ずかしがり屋なのかな？ と、おおらかな感じだった遠山も、5人目くらいから焦り初めていた。

15人目に振られた辺りで、時間が近かったので待ち合わせの噴水の近くに帰ってみれば、これだ。

「ふふ、もう、ラザール様ったら、ほんとなんでしょうか？」

「あはは、ラザールさんおもしろーい！ 私、もっとお話ししたいな！」

「光栄だ。君たちのような美しい花と語れる時が俺の人生に訪れるとは。例えこの時間が一夜の夢に過ぎないとしても、俺はこの時を決して忘れないだろう」

「ふふ、キザな方……」

「あ、はは。やだ、もう、えと、そんな目で見つめられますと、その……」

ラザールが、モテにモテていた。

しょんぼりトカゲではなく、モテトカゲだ。これでは。

「やべえ」

モテにモテている友達への殺意を押しつぶし遠山が、見られないようにその場を離れようとして。

「あー…… やっぱりこうなったデイスか。ラザールはそりゃこう  
いう店の女の子にモテますデイスよねー」

「ゲ」

ストルの声が背後から。

まずい、まだ収穫ゼロなのがバレてしまった。いや、待て待て待て、レーザーはなんかラツキーパンチが炸裂してあんな感じになったのだろう。

だが、ストル、ストルは大丈夫だ。だってガキだ。まだ14歳、いわば中2。人生で1番モテない年齢の筈（遠山体験談）

大丈夫、はい、絶対ストルも収穫ゼロ。中2のガキに靡く男なんざいるわけがー

遠山が恐る恐る後ろを振り向いて。

「デイス？」

ストルが、いた。

4人のイケメンが担ぐ神輿みたいな台座の上に寝転がっていた。

「どついつモテ方???!?!」

1番モテなかった悲しい男を眺めてストルがすぴーとため息をついた。

「はあ、やーっぱりトオヤマは収穫無しデイスか。なんとなくーくそんな気はしてましたデイスけど」

「いやまで、もうお前は何をどつしたらそつなるの?」

遠山が恐る恐る台座に寝そべったままのストールへ声を向ける。

イケメンに担がれている顔だけはいい美少女、見ているだけでバカになりそうな光景だ。

「うん？　なんか普通にしてたらこうなってたデイス。貴方達、嫌デイスか？」

ストールがあくびをしながら気怠げにイケメン達に声を向けて。

「いえ、控えめに言って最高です……」

「小さくて可愛くてバカ強い少女騎士とかご褒美です」

「ナチュラルに無神経で傲慢なところも可愛い」



「存在が性癖です」

ぽつと頬を赤く染めて、うつとりとした顔つきでストルを担ぐイケメンたち。

「おいたわしや、イケメン達……」

一体バカ騎士に何をされてしまったのだろうか。遠山は静かに口元を覆って彼らを憐れむ。

「少し調子に乗ってそうなイケメン達でしたので少し躩したらこんな感じになりましたデイス。私の取り柄は顔が良くて強いだけデイスが、今回は役に立てたましたか？」

にへーっと、うつ伏せになり頬杖をついて足をぶらぶらさせるストルが遠山に意地の悪い笑みを向けた。

「うん、誰が1番調子に乗ってるんだろうね。それはそれとしてお前またなんか意味わからん方向にこじらせ始めてる？」

遠山が重くなる頭を揉みながら答えると。

「あ、ナルヒト、ストル！　おい、こっちだ、こっち」

こちらに気づいたらしいラザールが手を振っている。ラザールにまでバレてしまった。

「あ、モテトカゲが呼んでますデイスよ。モテない男」

「お前やっぱり今からでもあの時の決着つけるか？　ん？　中2でも容赦しないよマジで」

イケメン達に担がれた美少女とメンチを切りながら遠山がラザールの席へと足を運ぶ。

周りの人ばかりも、遠山達からすつと離れていく。天敵に散らされる小魚の群れみたいだ。

「ストル、君はまた、その……　すごいな。なぜそうなるんだ？  
おや、ナルヒトは1人かい？」

ラザールが苦笑いを浮かべて、キョトンと。本当に不思議そうな顔で遠山を見た。

「ラザール、ちょっとこっちへ」

「うん？」

「お前とのこれからの付き合いを続けるために一つ言っておきたい

ことがある。恥を承知で友人としての忠告を伝えたい」

素直に立ち上がり側に来たラザールの両肩を遠山ががっしり、正面から掴む。

じっと、そのトカゲヅラを正面から見つめて。

「あ、ああ。ど、どうしたんだナルヒト。顔が怖いんだが」

戸惑うラザール、何故かストルがゴクリと喉を鳴らしていた。

遠山が、口を開く――

「ラザール、俺より安易にモテるな。頼むから」

「ほんとに恥を承知してるか？」

史上最強に恥まみれの発言をかました遠山に、淡々としたラザールの声突き刺さる。

「ラザール、しかたねーのデイス。もう遠山は人間性が変わる歳を過ぎていますデイス。このままモテない悲しいモンスターとして生き続けるんデイスよ」

「言い過ぎじゃない?! たまたまだからア! 俺だってモテる時あったからさあ! 高校の時、2、3回告られたことあるしい!」

「ナルヒト……」

中2、14歳の少女の言葉に本気で言い返す成人男性、残念ながら年を重ねただけでは大人にはなれないらしい。

「……………フン、物好きもいたものデイスね。……………なんデイスか  
それ、つまんない。……………その女達とは交尾したのデイスか？」

すんつと、ストールが表情を失くした。顔の造形がいいぶん無表情  
がとても、冷たく、怖い。

「いや、その時の俺はそういうの断るのがかっこいいと思ってたか  
ら全部断った、てか交尾とか言うのやめてくんない？ 犬かなにか  
？」

遠山は少しビビったことを押し隠し、平然とした素振り続ける。

「……………！ フフーン。そうデイスか。プププ、トオヤマは残念な男  
デイスね」

「てめえ降りてこいや。イケメン達の上からのメスガキムーブはマ  
ジでやめろ」

ぱあっと、朝日が差すように笑うストル。

「ストルさんが生き生きしてる……」

「推せる……」

「俺たちへの態度と違う……これがBSS……」

何故かストルを担いでいるイケメン達が涙ぐんでいて。

「まあいいデイス。貴方達、ご苦労様デイス。もう降ろしてくれて結構デイスよ、ご褒美に後で貴方達のうちの誰かのお部屋に遊びに行つてあげますから、誰のお部屋に行けばいいか、決めておいてくださいね」

「「「「……！はい！」「」」」」

音もなくストルを降ろしたイケメン達。ストルの言葉に喜色満面。犬耳のイケメンは耳を平たくして、人のイケメンは顔を赤くする。

しかし、次の瞬間には4人全員で睨み合いが始まり、ホールの隅に睨み合ったまま消えていく。

遠山をして関わりたくないと思わせるほどの殺気が4人の中に満ちていた。

「おい、ストル、アイツら大丈夫か？ 4人のうち1人が生き残るまで殺し合うみたいだな顔してたけど」

「大丈夫デイスよ。レイン・インのキャスト達デイス。下手なことはいないでしょう、さて、私の方はこれで個室のあるエリアに入る段取りはつきましたデイスが……」



ふふんと、ストールが唇を曲げて遠山に流し目を向けていた。

このガキ、一度やっぱりどちらが上かわからせる必要があるな。精神年齢低めの遠山が本気でイラつき始めていると。

「あら、ラザール様。お友達の方ですか？ ふふ、ご紹介して頂けまして？」

よく通る声だ。しつとりと、決して目立つ声ではないのによく届く声だった。

「ああ、ミス・ハロト。すまないね、見ての通り騒がしい連中で」

「あら、そんなことないですよ。彼らを見つめる貴方の目はとても、優しいものでした。ふふ、少し妬けちゃっわ」

ラザールに熱い視線を向ける女、遠山は友人のモテる様をしら—  
っと見つめる。

「そう見えたかい？ だとしたら君を見つめる俺の目は、君にはど  
う見えているのかな？」

「……いじわるなお方。はじめまして、友人様たち。レイン・イン  
によろこそおいでくださいました。お楽しみ頂けていますか？」

ラザールに寄り添い、いちやつき始めた美女。

紫色のルージュが、妖しい魅力を醸し出す。カラスの羽に似た装  
飾、真っ黒なドレス。

魔女みただ、遠山はぼんやりと女を眺める。

「デイス、おかげさまで。約1名を除いてはそれなりに満喫させて

もらっていますデイスよ」

「まあ、可愛いらしいお嬢様…… 不思議な方ですね。とても幼いのにとても遅いお方のようで」

不思議なものを見るかのように、女がストールを見つめる。黒曜石のようなテラテラとした黒い瞳と、ストールの水色の目が互いを映していた。

「デイス、マダム・ハロト。もう忘れてしまいましたか？ お久しぶりデイスね。先日はどうも」

「あら！ あらあらあらまあまあ！ ふふ、もしかして、騎士ストール？ 貴女なの？ ふふふふ、嘘でしょう？ すっかり変わっているものだから気付きませんでした」

ストールが腕組みしながらぶっきらぼうに答える。女が眼をパチクリと見開いたのち、口元を押さえて驚きを見せた。

「変わった、デイスか？」

「ええ、憑き物が落ちた、と言うのかしら。貴女、以前はとても難しそうな顔してらしたから。今はすごく、たのしそうね」

「……貴女には何が見えてるのデイス？」

ニコニコと微笑ましいものを見つめる顔の女と、ぶすつとした顔のストル。

第一の騎士として威圧を含む少女の言葉にも女は動じない。

「おっと、ストルとミス・ハロトは顔見知りだったのか。なら話が早いな。紹介するのは1人で良さそうだ、彼が俺の友人、トオヤマナルヒトだ。ナルヒト、こちらはー」

「ーふふ」

「ミス・ハロト？」

ラザールの言葉を遮り、女が笑いをこぼした。ついうっかりコップからほんの少しの水を溢してしまった、そんな笑い方。

「ふふふふ、ごめんなさい。ラザール様。トオヤマナルヒト？ 貴方が、もしかしてあの竜殺しなの？」

「知ってるのか？」

遠山が問いかける。美人だが、どこかきな臭い雰囲気を感じたせいか。その言葉に愛想はもうなかった。

「ふふふ、ええ、貴方は有名人ですもの。……まあ！ もしかしてラザール様があの”リザドニアン”の奴隷”なのでしょうか？」

「あ、ああ。その通りだ。ナルヒトの名前はそんなに広がっているのか？」

「ふふ、ええ、お噂はかねがね。眉唾じゃないのかと疑いたくなるお話も。……ああ、なるほど」

女の黒曜石のような黒い瞳が、遠山を見つめる。鏡のような眼だ。覗きこんでいるとそのうち見えてはいけないものが見えてしまうようないー

「なにか？」

遠山がその視線を遮るようにつぶやく。

「ふふ、竜殺し様、大変失礼なことを申し上げますが、貴方、この女の子に相手にされなかったでしょう？」

「……………ッス」

言葉のナイフをドタマに突き刺された。

お前、モテないだろ。その言葉はつまり宣戦布告、殺し合いが始まってもおかしくない言葉だ。遠山は固まる。

「ふふ、ごめんなさいね。貴方のことをバカにしてるわけじゃないんです。ただ、色々納得したというか、ええ、私にとってはとても面白い謎々の答え合わせをしているというべきでしょうか？」

「……ミス・ハロト。貴女は素敵な女性だが、俺の友を無闇にかうのはよしてくれないか？」

「ラザール……」

やだ…… かつこいい。遠山はラザールに頼もしさを覚えていた。

「ふふ、相当に竜殺し様に入れ込んでらっしゃるのね。ああ、素敵。貴方達、同じ光景を共有していらっしゃるのね。ふふ、魅せられてしまっていますわね、ラザール様」

「……マダム・ハロト。私もあまり気が長い方でもないデイス。トオヤマがモテないのは周知の事実デイスが、他人である貴女がしたり顔で語る内容でもない気がしますデイスが？」

ラザールに言葉を向けた女。諫められてなお、どこ吹く風で遠山とラザールを交互に、黒曜石で出来た鏡のような目で見つめる。

そんな彼女に鋭い言葉を向けたのはストルだ。そして向けたのは声だけではない。苛立ちを含んだ怒気も孕んでいて。

「……姉さん」

「大丈夫よ、ハイネ。座ってなさいな。ストル様はもう変わってら



っしゃるわ。あの時みたいなことにはならないですから」

ストルの怒気に反応した連れの女がゆっくり立ち上がる。遠山がちらりと辺りを確認すると、数人のキャストが音もなく、辺りを取り囲み始めていることに気づいた。

「…………お姉さん、何が言いたいんでしょうか？」

遠山が警戒を深めつつ、小さく問う。

「怖い目ですね、竜殺し様。人を敵か、味方かだけで判断してしまえる人間の目です」

「あ？」

「貴方が、このお店の子に相手にされない理由は簡単です。うちの子達はみんな鋭くて、賢くて、そして寂しがりでございますから。自分を相手にしてくれない男の方に靡くことはないでしょう」

「いや、相手にされていないのはこっちなんですが」

「いいえ、竜殺し様。男と女とは互いに足りないものを補うものです。でも、貴方を補える女の子は、ここにはいなかったようですね。……貴方は誰も見ていませんもの」

くすくすと喉を鳴らして笑う女。レーザーに向けていた熱っぽい視線とは違う、もっと何か粘度の高いものを込めた目で遠山を見つめ続ける。

「貴方は欠けています、歪でねじ曲がり、決して完成しえない器。大凡の人はその足りない部分を他者によって埋めていくものです。それを恋や、愛と呼びます、でも貴方の欠落は愛では埋まらない。貴方がそれをよしとしないから」

「……酷い言いようだな」

社会不適合者と言われているのと変わらない。だが遠山には女の言葉が響かない。

「ふふふ、ごめんなさい。でも、貴方はまるで傷ついていないでしょう？ 貴方にとって私はどうでもいい存在だから。貴方はとても残酷で、とても温かい人なのですね」

「それ両立するもんですかね」

軽く問い返す遠山。女の言葉は当たっている。遠山にとってどうでもいい存在からの言葉は、モンスターのわめき声と大して変わらない。

「ええ、普通はしませんとも。でも、貴方は違う。貴方は決して満たされぬ器をそれでも1人で求め続ける人。他者によってしか埋めることの出来ないそれを、1人で埋めてしまいかもしれない人」

遠山の視線が少しずつ険しくなる。しかし女はそれを愉快そうに見つめ返して唇を紡ぐ。

珍しい絵画や彫刻を目の当たりにして興奮しているかのように、遠山を見つめ続ける。

「本当なら他者が必要なのはなのに、貴方はそれを自分で埋めてしまふ。そして気付かぬうちにその在り方は他者へ影響を与えていく。貴方の空っぽを埋めるのは夢……いいえ、これは、欲望、でございますね」

「アンタ、おかしいこと言うな」

遠山はこの女の目が、嫌になってきた。

「ふふ、人を観察するのが仕事なもので。でも貴方のような人は……初めて見たかも知れませんが。歪で欠けてボロボロなのに、それでも光景を持ち続けている。それでも誰に依ることもなく前へ進み続ける。ああ、ラザール様や、ストル様を魅せたのはその目でしょうか？ その舌でしょうか？」

「レイン・インの子はみな、自分を必要としてくれる方を好みます。竜殺し様、シンプルな答えです。貴方がうちの子達を最初から相手にしていないのですよ」

「ひでえな、これでも真剣に緊張して声かけたりしたんだけど」

「ふふ、嘘ですね。貴方はなんの緊張も迷いもしていない。なぜならどうでもいいから。貴方は他人を必要としなければいけない人間のはずなのに、そうなってしまった。貴方を満たせるのは貴方の追う欲望だけ。ああー」

「貴方に愛は必要ないのですね」

ー消毒液の香り、加湿器の音、点滴が垂れ続けるビョウシツ。

遠山は覚えていないはずの光景を見た。

——貴方に愛は必要ないよ

いつかどこか、誰かに似たようなことを言われたことがあるような。

「……そこまでだ、ミス・ハロト。アンタに俺の友を批評する権利はない」

「あら、ふふ、ラザール様、嫌だわ。そんな怒らないでくださいまし。……その目も素敵ですね。でも、いいのですか？ 本当に彼についていつても」

「なんだと？」

「彼は辿り着いた後、また次の欲望を追いかけます。なぜなら彼は決して完成しないから。自分の中の空白を、欠けたものを埋めよう

として、次へ、さらに次へ。貴方は竜殺し様についていけるのかしら？」

ラザールを試す言葉、それは決して今日出会った人間が口にしていいようなことではない。

「おい、あんた」

遠山が口の過ぎる女に分かりやすく敵意を向けて。

「無論だ」

「あら？」

遠山が女に詰め寄るよりも先にラザールが答えた。

「無論だ、ミス・ハクト。この男に俺はついていくと決めた。場所はもう関係ない。”竜殺し”がいる所が、”リザドニアンの奴隷”がいる所だ」

遠山がラザールを助けることを決めたのと同じだ。

ラザールもまた自分で決めていた。遠山鳴人の欲望、その軌跡を共に追いかけることを。

その決意は他人の言葉程度で揺らぐようなものではない。

「……まあ、ふふ、本気で妬けそうです。竜殺し様に。貴方の歪な在り方は、とても温かいのですね。愛がなくとも、理解してくれる、埋めてくれる人がいなくても、それでも良いと他者を錯覚させてしまふ。優しくして、危険でー」

「話が長いのデイスよ、ハクト。いい加減飽きてきましたデイス」



女の言葉をストルが遮る。投げやりで、ため息まじりのだるそうな声、だが有無を言わさぬ迫力があつた。

「あら、ストル様。いやですわ、怒らせてしまったかしら」

「別に。トオヤマがイカれてて女の子にモテない男というのはわかつてることデイスし。私にとってどうでもいいことデイス」

「ならー」

髪の毛をいじりながら、よそ見しつつボヤクストル。女が更に遠山へ視線を向けて。

「部外者のお前がそれ以上、この人を語るな。殺すぞ」

天使教会騎士団、最優にして”正義”に選ばれた序列第一の騎士。  
その言葉は重たく。

「ーッ」

「姉さん!!」

「マダム!!!」

わかりやすくストルが女に向けた殺意に、様子を伺っていたキャ  
ストの数人が飛び出してくる。

女を庇うように立ちはだかる美男美女たち。それを見たストルは、  
その年齢からは考えられないほどの酷薄な笑みを口元に。

「おっと、何人が勘のいい奴がいるんデイスね。ウィーフック、腑抜けたと思われたままでいるのも糞デイスし、少し遊んでやりましようか？」

その威圧は変わらない。少し慣れてきたせいで遠山は忘れかけていたが、ストルもまた規格外の存在。

竜にも似た、超越者独特の傲慢な顔を浮かべる。

「……いい、ストル。ありがとう」

「……チッ、お心のままに。審問官殿」

遠山の制止にストルが舌打ちしつつ従う。バカだが最近少しずつ話が通じるようになっていた。いい傾向だ。

「……恐ろしい人。ストル様ではありませんよ。貴方です、竜殺し

様。知らずのうちには貴方は他者を侵していく。他者を魅せて、他者を歪ませて、変えてしまう。ああ、でも、だからこそ、あのお方も貴方を気にかけるのでしょよね」

遠山の指示に従うストルを見た後、女がしみじみと言葉を紡いだ。

「……………誰のことを言ってる？」

「ふふ、すぐにわかります。ねえ、竜殺し様、レイン・インを楽しんで頂けておりますか？」

「頼んでもねえ人格診断されて不愉快な気分にはなってるな。さて、どうしたもんか」

「あら、それは困りました。ここはレイン・イン。門をくぐったお

お客様に夢を見せる冒険都市に咲く花園。その中であって1人たりとも、夢を見ることも、花を愛でることも、花に愛でられることもないなど、許されるはずもありません」

「……えっと？」

「ミス・ハロト、何を？」

「ラザール様、貴方のご友人を語ったことお詫び申し上げます。ストル様、貴方の、大切な方を覗き見たことお詫び申し上げます」

女が、微笑みを消し、一転神妙な顔つきで深く腰を曲げる。

ドレスの裾をつまみ、首を垂れた。

「……なんのつもりデイスか？」

「ここ、レイン・インにおいて竜殺し様を満たせる人間種はおりません。ですが、だからと言って、竜殺し様お一人だけ、楽しめないとなるとレイン・インの名折れです。女主人、ハロト・アイザールの名にかけてそんなことは認められません」

「なんだよ、お似合いな女の子でも紹介してくれるのか？」

遠山は軽口を叩いた。叩かなければよかったのに。ハロトがその軽口にさわやかな微笑みで答える。

「……ああ、そろそろ時間です、お二人のお色直しが済んだようです。」

「..?」

遠山がその言葉に固まった。どくん、心臓が跳ねた。

「明かりが……?!」

ぱつと。暗闇。

広間の明かりが一気に消えた。一瞬の静寂、広がる暗闇。火が燃え移るように大きくなる人々のざわめき。

「お集まりの皆様！ お騒がせして申し訳ございません！！ 数多の花が集う一夜の夢の場。楽しんでおられますでしょうか？」

壇上に光が。

背の高い獣耳のイケメンが、1人その光を浴びている。

「……ナルヒト、なぜかな。少し、嫌な予感が」

「奇遇だな、ラザール。俺もだよ」

「デイス、この感じ…… まさか……」

3人がそれぞれボヤク。だいたい嫌な予感というのはあたるものだ。今夜もそれは例外ではない。

「本日は皆さまに良いお知らせがあります。どうか、お耳を貸して頂ければ幸いです。お客様のお心を乱したこと深くお詫び申し上げます」

「我がレイン・インにおいて咲き誇る数々の花。今宵その花園に、いと尊き二輪の花が、咲くことになりました。それを皆様に分かち合いたく発表させて頂きます」

「竜殺し様、このお店は一夜の夢。辛く悲しい現実に向かうため、人は甘い夢を見る権利がございます、それはお客様もそうですが、何よりレイン・インの可愛い子達も同じです」



人々の注目を浴びつつ、生き生きと身振り手振りで場を落ち着かせていく獣耳のイケメン。

彼のステージを眺めながら、ハロトと呼ばれる女の声が暗闇の中から届いた。

「これだけツラがいい奴らだったら苦勞しない気がしますけど」

息遣いすら感じる至近の距離、甘すぎる花の香りが遠山に届く。

「あら、そんなことはありません。いくら見目が良くて生まれに恵まれていても満たされない人なんていくらでもありますもの。……誰しもが貴方のように1人で欠落を埋めることが出来る人ばかりではありません」

「竜殺し様、誰もが貴方のように欲望を、夢を持ち続けることが出来るわけではないんです。だから、人は他人を求め、自分だけでは見れない、追えないそれを、他人に埋めてもらおうとするのです」

「……なんとも都合のいい話ですね。人に期待しすぎな気がしますけど」

「それでも人は、人に依ってしまふものですよ、誰しもね。貴方のような人は、本当に珍しい。己の欠損を己だけで満たそうと進み続ける姿。同じ人間からすれば異端としか言えませんが、ふふ、あの方達から見ればその有り様はきつと、とても愛おしいものなのでしようね」

「……………なんて？」

女の言葉に、遠山がキョトンと聞き返す。

「2輪の花を、貴方に。いいえ、逆、でしょうか。2輪の花に貴方を、ですかね。どうぞ、ゆるりと。レイン・インでのたのしい夜遊びを」

「え、ちょ、おい!?!?」

消えた。気配も、声も。

テレビの電源が消えると同時に、画面が暗くなるように。

「ミス・ハロト？ ……いない、完全に見失なった」

「……レーザーが見失なった？ あの女何者だよ」

「と、トオヤマ、レーザー。前をみて、あのステージ……」

ストルの言葉に遠山とレーザーがメインホールの前方、明かりに照らされる壇上を見つめる。

「あの女、いつのまに……」

さつきまで隣にいたはずのマダム・ハロトが気付けば前方、ホルを見渡す位置にある壇上に立つ。どうやってあそこまで移動したのか。種や仕掛けがわからない。

「皆さま、こんばんは。良い夜ですね。当館の主人、ハロト・アイザールと申します。良い夢を皆さま見れておりますでしょうか？」

「ハロトー！ 俺だ！ 結婚してくれー！」

「マダム！ いつになったら逆指名してくれるんだ？」

一気に湧く会場。暗闇から光のある場所へハロトへ向けて男たちが騒ぐ。

「ふふ、皆様お元気そうで何よりでございます。ですが今から少しだけお静かに。ええ、後悔はさせません。今日、この場にいらっしゃる方々は幸運です。お伽話ですら記されることのない光景を目の当たりに出来るのですから」

ハロトの声に、観衆は一気に静まり返る。特異な能力ではない、立ち振る舞いだけでそれを可能せしめている。

「彼女たちは、まさしく我々人間種よりも遙か上位の存在。何よりも美しく、何よりも気高く、並び立つ者なき孤高の存在。大空の支配者、世界の調停者にして、生ける伝説」

あ、ヤバい。

遠山は目をぱちくり。細いチベスナのような目が何度もぱちぱち開いたら、閉じたり。

遠山鳴人は忘れていた。主教のスキヤンダルを狙いすぎて、そして久々の悪巧みにテンションが上がって忘れていたのだ。

監視され、見られているのは主教だけではなかったことに。

狩るものは常に、いつでも狩られる者になるといふこと、はしやぎすぎて忘れていた。

でも、もう遅い。

「それでは本日、とある理由からこの一夜のみの極上の花となって頂ける方々をご紹介致します。それは帝国、いえ、この世界にて全ての羨望と尊敬を集める至高の存在」

灯りが差す。

暗いホール、壇上だけをシャンデリアの光が明るく照らす。

「竜”のお2人にございますれば」

光、暗闇、煌めき。

壇上の光が一瞬消えたと思えば次の瞬間にはまた光が戻る。

ハロトがこれまでにないほど深く頭を下げて、一歩、二歩と下がっていく。

彼女の両脇に、太陽と月が鎮座していた。

誰しもが、この会場にいる誰しもが、一瞬、まばたきの方法を忘れた、声の出し方を忘れた、呼吸の方法を、忘れた。

「 ..... 」

静寂。

誰も気づかないうちに、そこには金と銀。

目隠しの面をつけた長い金髪の女、同じく目隠しの面をつけた銀髪の女が玉座にも似た椅子に座っている。

太陽はふんぞり返って椅子に腰掛ける。豊かな金髪を結いあげ、脚を組んで観衆を見下すように背もたれに体を預ける。

「綺麗だ…… まさか、あれは……」

「なんと堂々たる姿、おお、まさか、この目で拝見出来る時がくるなんて」

その太陽、尊大さですら人を魅せる。下位生物は理解させられる自分たちよりも上に存在する生き物の格を。近づくことすら畏れ多い粹外の生命。



その太陽に今すぐひれ伏し、恭順の意を示したい衝動がヒトの心に。

「.....」

月が静かに、膝に手を置いて首をかしげた。

誰しもが錯覚した、その銀の髪が彼女の静かな動作によって揺れるたび、美しい音色が聴こえたかのように。

その月、存在しているだけで人を惑わせる、下位生物は理解させられる、自分たちはかのモノのおもちゃに過ぎないということ。

その月に今すぐ自分を捧げなくなる。一時でもその興味を向けてほしいと、その為なら己の命すら献上しても構わない、被虐の意がヒトの心。

「おお……………」

「なんと、美しい……………」

「綺麗だ……………」

「宝石みたい……………」

「生き物……………なのか？」

そして、何よりその太陽と月は美しかった。

彼女たちを照らす光そのものよりも、眩く、儂く、強く――

ヒトが、竜の美しさに惚ける。

「ではお2人に早速、この夢の花園の流儀に従い、ええ、”逆指名”を行って頂きましょう。御二方、ご指名をば」

「……………」

「……………」

これは、夜遊び。

そしてここは、レイン・イン。

一夜の夢を望む客は選ぶ側ではない。一夜に昇る夢が客を選ぶ社交の場。

たのしい夜遊びの場所。竜たちは遊ぶのが好きだ。

ああ、金の細く長い指が彼を指す。

ああ、銀のしなやかで白い指も彼を指す。

その指の行先は同じ。誰しもが振り返る、誰しもがその指先を探す。

奇妙な3人組、リザドニアンと水色の髪の少女、その真ん中にいる顔を現在進行形で悪くし続ける黒髪の男。

2人が、黒髪の男を指差して。

2人が、遠山鳴人を逆指名して。

「……………ヤバイ」

「な、ナルヒト」

「あ、あー…… 私、全部わかつちまったデイス」

「ふふ、ではお2人に指された貴方、竜殺し、トオヤマナルヒト様、  
どうか、壇上へ」

ハロトの声はたのしげに。

彼女はこの館の女主人、夜の夢が好きで、そして夢を魅せる花を  
何よりも愛している。

「レイン・インの今宵だけの花から貴方様へ」

「逆指名”に”ごいますれば」

愛と恋が好物の女、それはもう、いい笑顔。

「「「「」」」」

太陽と月が、わらう。

目隠しの面をつけていようと、その笑い声は間違いもなく――

「……………ラザッー」

遠山が仲間に助けを求め――

「シャドウ・ハイチュー影の導き」、幸運を、竜殺し殿」

「貴方の出番デイスよ、竜殺し殿」

どろり。ラザールとストルを影が包んだ。ラザールとストルだけを影が包んだ。

「ー竜殺し」がいる所が、「リザドニアンの奴隷」がいる所だ。

「ー部外者がそれ以上、この人を語るな、殺すぞ。」

頼れる仲間の温かい言葉が脳裏に浮かぶ。

自分のために怒ってくれた2人は、ものすごくいい笑顔でぐっと、親指を立て、影に消えた。

「良い旅を」「ナルヒト」「トオヤマ」

ラザールとストルが逃げた。普通に置いていかれた。

「……………判断が早い!!」

遠山の叫びが虚しく、明かりの消えたホールに響き渡る。

「さあ、たのしい夜をお楽しみくださいまし」

よく通る女の声が、暗闇に広がって。

「ふかか」



「すぷぷ」

すつと、2人の美竜が目元だけの仮面を取り去る。

美しい宝珠の如く瞳、深い海溝の蒼い瞳、底の見えない幽谷の底を移した暗い瞳。

竜の瞳が顕になる。人を魅せる、下位の生物を遍く慄かせるその瞳が。

この会場の誰しもが、上位生物の美に息を漏らした。遠山を除いて。

「……………WOW」

よく見知った2人の美竜。

蒐集竜と、人知竜がにこり、微笑んだ。

でも、何故か目だけ笑っていない。すうっと、薄く開かれた眼から、青と暗が覗いていて。

ああ、やっぱり、目が笑っていない。薄目がすっかり開いている。

おめめが、とても怖かった。

ポロン

【サイドクエスト発生

クエスト名 ” たのしい夜遊び、ラン・RUN・竜 ”

クエスト目標 不機嫌な”竜” 2人のご機嫌を取れ【

「どうして……」

遠山の呟きを拾ってくれる者は、誰一人いなかった。

55話 たのしい夜遊び、ラン・RUN・竜（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください  
さー！

< 苦しいです、評価してください > デモンズ感

56話 言葉に気を付けなさい、それはいつも竜に聞かれているから(前書き)

主人公に戻ります。

56話 言葉に気をつけなさい、それはいつも竜に聞かれているから

……  
……  
……

少し前、遠山がウキウキで色街に向かっている頃。

竜大使館にて

「すぶぶ、おやおや、蒐集竜。君い、なかなか面白い趣味してるねえい。しばらく見ないうちにまあ、また丸くなっておいで」

「……貴様、よほどオレの焔に焼かれないようだな」

広い部屋。オーケストラがそのまま入っても不足はない部屋とい  
うにはあまりにも広大な空間。

独特な笑い声が、愉快げに響く。

蒐集竜の寝室、人知竜が化粧台に腰掛けて微笑む。蒐集竜がその様子を見て、青い瞳を細く、細く。

「いやいやいや、今のキミでは私を焼くことは無理だろうねえい。せめてあの忌々しい炎竜の三分の一、いや、五分の1の熱がなければねえい……」

「ふかか、ロートルは過去の事しか自慢するものがなくて困るな。……老竜、それを今すぐ、閉じる。そして、それを今すぐ返せ」

それ。アリスが指さしたそれは人知竜が親指と人差し指で挟むように持っている一冊のノートだ。

「1級モンスター、”エスキモカリブー”と呼ばれる大型の鹿の化け物。その老成した個体から剥いだ皮をなめして作られた装丁を人知竜が撫でる。」

ぺらり。そのまま人知竜が、アリスの言葉を無視してノートを開いた。

「すぶぶ、何々、”あやつともっと仲良くなりたい、奴のことをもっと理解したい。だがオレは竜で、奴はヒトだ。同じ存在ではない。だからこそ、奴を理解するには努力が必要だ。このオレが、努力。うむ、悪くない。なので、ヒトが己を顧みるために綴るといっ—」

「やめろお！！ オレの”日記”を読むな！！ この痴れ者が！！」

アリスの大声が響く。少し涙声混じりのそれは怒りか、それとも羞恥か。竜が、羞恥。それは本来であればありえない感情ではあった。

「すーぶぶ！ いやいやいやいやいや！ 蒐集竜、アリスウウウ



「！！キミ、ほんと面白くなってるじゃあないかい！ 日記?!  
日記だって?!? 竜が日記?!? いやー、やられた、やられたもの  
だよ全く!」

「う、うううう、返せ！ 貴様、おとなげないとは思わんのか?!  
お祖父様や、お婆さまと同じ古き竜のくせになんなんだ、ほん  
とこー!」

「私は探査者だからねえい、気になるものは気になるのさ、あはは  
は！ キミもまあ、可愛くなっちゃってほんと!」

迸る金色の焰、空気を焼く。

ひよひよひよと振るわれる人知竜の人差し指、金色の焰がその  
指の動きに合わせて蒸気が変わってゆく。

金色の焰は銀色には届かない。

「き、さま…… 気に入らぬ、そもそもなんのだ！ ナルヒトの前と今とでは立居振る舞いから一人称まで違うではないか！」

「すぶすぶ、あれは彼の性癖さ。キミと同じだよ、私も彼を理解したい、彼に近づきたい。彼に選んで欲しい。となるとだね、彼の好みに合わせるのは至極当然の戦略だろう？」

竜と竜。アリスが怒鳴る。しかし、銀髪的美竜、人知竜はどこ吹く風。

ぶひーつとため息をつきながら、己のお気に入りの為に色を変えた白銀色の髪を指で梳いてゆく。

まるで流れゆく水に指を差した如くゆらめく銀の髪。下位の生物であれば目にしただけで魅了されてしまう所作。

「……老竜、貴様、なぜナルヒトにこだわる？ 貴様が人を好んでおるのは知っている、だが、なぜ今更に1人にこだわり始めた？」

しかし、アリスにはなんの影響も及ぼさない。太陽は月に嫉妬はしないし、見惚れることもない。

「ふうん？」

人知竜が、アリスの問いにわざとらしく首をかしげた。

「ふうんではないわ、誤魔化すなよ、貴様にとってヒトはオモチャだったはず。愛でることはあっても、求めることはなかった。それがここ最近、どういうことだ？」

「へえ…… 幼竜、アリスちゃん、キミ、ほんの少しだけ成長したかい？ 疑問を持って、それを問いかけることを覚えたわけだ。ナルヒトくんもなかなかどうして……」

「今、ナルヒトは関係ない。これはオレの疑問だ」

ぴしゃりと言い放つ金髪の美竜。深い蒼の瞳はしっかりと見開かれ、黄金比の肉体で姿勢良く立つ。

暴力的と言ってもいい美しさが凜と言葉を言い切った。

「すぶぶ、関係ないわけないと思うけどねえい。……ほら、返すよ、勝手に覗いて悪かったさ。まあ、また気が向いたら読むけどねえい」

「……悪趣味な奴め。悪かったという者の顔かよ。それで、どうなのだ」

「どぶぶ、とは？」

「はぐらかすな、陰険な女め。貴様がナルヒトにこだわる理由を教えろ。拒否権はないぞ」

「おやおや、私たち竜の間で権利の話をするのかい？ 竜の権利を奪えるのは竜を下した者のみ、すぶぶ、君に負けた覚えはないけど

ねえい」

「いや貴様、普通に居候の分際で何を言つておる。追い出さずぞ」

「……………言われてみれば私、かなり馴染んでるね、ここに」

「いや馴染んではおらん。ベルナルやフランや他の者がそれとなく追い出そうとして色々嫌がらせを貴様にしておるが、貴様が全く気にしておらんだだけだ」

アリスがしらっーとした目でしたり顔の人知竜を眺める。

メイド達がそれとなく人知竜を追い出そうと、寝室にナイフを意味深に置いたり、勝手に占拠している来賓室のイスを全て逆さまにしたりの嫌がらせも、しかしアイ・ケルブレム・ドクトウステイルにはまるで効いていなかった。

「よよよ、冷たい、冷たいねえ、私からすれば友人の孫娘であるキミと朗らかに交流しているつもりなだけなのだけれど」

「孫娘からしたら祖父の友人と居候など普通に居心地悪いわ。全知の竜よ、家主命令だ。貴様がオレの竜殺しにこだわる理由を教えよ」

「すぶぶ、傲慢な家主なこと。おっと、アリス。私の名前は全知竜ではない、人知竜だ。間違えないように」

「……………それも、ナルヒトが関係しておるのか」

なんの前触れもなく、己の名前を変えた古い竜に新しい竜が言葉を向ける。

誤魔化すことは許さない、アリスの視線に人知竜が目を細めてため息をついた。

「……ああ、してるとも。家主殿。すぶぶ、全てを話す気はないが、まあそうだねえい。1つ言つとするのであれば……」

長い指を、ぴんと人知竜が立てる。

黒いロングのスカートに、同じ夜の色をしたベスト。

銀色の髪が彼女の服に垂れて、夜に浮かぶ星の光のように煌めいた。

「彼がキミだけの”竜殺し”であるとは限らない、かな」

「………冗談のつもりか？　だとしたら貴様にユーモアのセンスはないな」

空気が、冷えていく。この空間に竜以外の生き物がいなくて良か

った。さもなければその圧力を増す空気に耐えきれず死んでいたかもしれない。

「なに、冗談でもないさ。竜と竜殺しは深く結びつく。この世にこれほど強い因縁はないだろう。殺せないはずの存在を殺す存在、法則を乗り越える異物、ああ、竜はみんな面白いものが好きだろう？」

「何が言いたい？」

「彼がキミの”退屈”を殺したように、彼は私の”絶望”を殺したのさ。アリス、この際だ。ちょうどいい、はっきり言っておくけども」

人知竜はアリスに背を向けて化粧台に座ったまま、鏡越しに微笑む。

「彼は、私のだよ」



それは竜の微笑み。同族であるアリスすら背筋に僅かな怖気を走らせる古い竜の歪んだ欲望。

ヒトを己のモノと定義する傲慢、しかして竜には許される超越者としての言葉。

支配する、痛めつける、試す、闘う、苦しめる。

人が寝て食って犯すのと同じ、本能として竜にはそんな機能が備わっているー

「黙れ、奴は誰のものでもない。誰かの所有物ではない」

だが、彼女。ドラ子、アリス・ドラル・フレアテイル。

彼女だけはその言葉を認めない。

遠山鳴人の存在を尊ぶ彼女、その在り方を認めて、理解を深めていく方法を選んだアリスはその意見を決して認めない。

彼は誰のモノでもない、自分のモノでもない、だからこそ尊く、  
だからこそー

「……すぶぶ。ほんとに、大きくなったねえい。蒐集の竜が、己の  
竜殺しを己が蒐集物にはしないと？」

「素人はこれだから困るものだ。モノにはそれに相応しい尊び方がある。あれはオレの手元に置いていてもその価値を十全に発揮はしない」

アリスは目を瞑る。

「あれは自由だからこそ、あれは追い求めるからこそ、そう、あれは――」

目を瞑れば容易に思い出せる、彼の姿、彼の言葉、彼の眼。

それはアリスから見た竜殺しのありのままの姿。

何一つ思い通りにならぬ、生意気で、不思議で、ずっと見ていた  
必ず面白い存在。

「――オレのモノではないが故に、美しいのだ」

静かに、蒐集の竜は言葉を紡ぐ。

蒼い瞳が、優しい色を灯していた。夢を、見守るような。

「……なんか、悔しいな。キミの方が彼に近いようだね、まだ」

化粧台イスの背もたれに深く体を預けて、人知竜がため息混じり。

「フン、オレは奴の友人だからな。おや？ おやおやおやおやおや？ 人知の竜、そういえば貴様は奴のなんなのだ？ ンー？ オレの知るところによれば、ナルヒトは貴様のことを不気味な存在だと感じているはずだぞ？」

「へえ、言っじゃあないかい。でもお、キミい、すぶぶ、知らないだねえい…… 友人枠に収まることが何を意味するかを」

「なんだと？」

きよとんと、アリスが言葉を止める。人知竜が目をニヨニヨと細めて、幼い竜を見つめた。

「ああ、幼き哀れな竜よ。キミは彼とどうなりたいんだい？ いや、いい。答えなくていい。そのままどうぞ、友人で満足してくれたいと助かるよ」

「な、なんだ、なんなのだ、貴様、その余裕は…… お、オレは奴の友達で」

「私は別に彼の友人になりたいわけじゃないんだ」

「な、んだと……」

アリスが今度は言い淀む。己の感性から外れた言葉、なぜだ、此奴もナルヒトを気に入っているはず、なのに友人になりたくないとはどういうことなのだ。

気に入った人間に対してのアプローチは友人という図式しかないアリスにとって、人知竜の言葉は理解が及ばぬものだった。

「私はね、彼に私を見てほしい、彼に私だけに囁いてほしい、彼に私だけに彼の人生を教えて欲しいんだ。それは友人という関係ではない、もっと違う形を私は求めているんだよ」

人知竜は知っている。己の感情の名前を。

闇よりも深く、炎よりも熱く、病よりも厄介なソレの名前を。

己の脳と心臓を狂わせ、喉を焦がすその感情の正体を。

「キミは、どうだい？ アリス・ドラル・フレアテイル。キミはキミの竜殺しに何を求めるのかな？」

人知竜は知っている、アリスが知らないヒトの心の名前を。

「……………貴様には言いたくない」

「おや、すぶぶ。振られてしまったねえい。まあ、なんだ」

コホン、人知竜が咳払い、背もたれにだらりと体を預けて首を後ろに弓なりに逸らしてアリスを見た。

「アリス、キミには負けないよ。それだけは言うておくから」

「フン、……………なんの勝負かは知らぬ。だが、奴の在り方を、奴の歩みの邪魔をするのなら、その時は必ず貴様を焼き滅ぼす」

「すぶぶ、ああ、キミ、本当に変わった。いや、冒されたのか。彼はキミにとってどんな存在なのかな」

「決まっておる、奴はオレの竜殺しで、友人だ」

アリスは知っている、ヒトと仲良くなるためには友人になる必要があることを。

アリスは知らない、自分の本当の心の意味を。今はまだ。

「頑なだねえい、キミも。まあ、いいさ。そうやって友情ルートを進んでくれた方が私も助かるというものだよ、すぶぶ。さて、どうやってトオヤマくんを遊びに誘おうかなあ。やっぱりサウナかなふむ…… ダイミヨウの残した文献が確か学院に残っていたような……」

「ふか」

人知竜がモゴモゴ呟き始めたと同時に、アリスがニンマリと唇を歪めた。

凶暴な表情、しかしそれは笑みであった。



「……なんだい、蒐集竜。そのいやらしい笑い方は。嫌な竜の顔だよ。相手よりも自分が上だと確信した傲慢な微笑み。……キミの祖父そっくりだねえい、忌々しい」

「ふかか、いや、なに。なんだ。今、オレは気分が良い」

「なんだってえ？」

「いや、なに、やはりオレもつくづく竜だな、竜という生き物の本能を思い知らされる。競い、勝利し、見下す。我ら竜に備わる闘争の本能。それも同じ竜に対するモノは格別よのう」

「その遠回しな言い方はあの子そっくりだねえい、水竜を思い出すなあ。……何が言いたい、小娘」

「ふ、か、か。これを見よ」

にまにましながら、アリスが人知竜に近づき懐から大事そうに羊皮紙を取り出した。

製紙技術が進んでいる帝国において、羊皮紙は格別の贅沢品とされている。

怪訝な表情の人知竜は突きつけられた羊皮紙を眺めた。

「うん？ 紙？ 保存蠟で固められてる…… おや、”第一文明語”…… なになに、”私、遠山鳴人は、この度の”工房”とのスマホ奪還交渉に於いて貴殿の協力に感謝の意を表します。したがって契約に従い、私、遠山鳴人は、貴殿、アリス・ドラル・フレアテイル様をご希望の日に友人としてお食事、もしくはそれを含めた冒険都市近郊での交遊に必ず可及的速やかにお誘いすることを誓います。また貴殿との約束の日までは身を清めることとして、他の存在、特に雌とは交わらないことを固く誓い――」

こ、れは「

人知竜が、くわっと目を見開く。

ふぴーっと、蒐集竜が得意げに鼻息を長く。

「ふかか、そういうことだ。ンツンー、ああ、悪いなあ。鳴人と遊ぶのは貴様ではない、このオレだ。既に、奴の予定は友人たるこのオレと遊ぶことで埋まっておる、ふかか、んん？ なんだったかなあ？ 遊びへの誘い方を考えるう？ ふかか！ よいよい、せいぜいそのご自慢の頭脳で考えると良いさ」

くるり、くるくる。人知竜の周りを舞うように歩き回るアリス。部屋着であるシンプルなワンピースのスカートが華が咲くようにふわりと広がる。

「ああ、気分が良いのう！ あの古き竜、全知、いや、人知竜が欲するものをオレは既に持つておるのだから。ふかか、ナルヒトの初めての相手は貴様ではない、このオレだあ！」

指を突き出し、竜的ドヤ顔をかますアリス。喜色満面、精神年齢

思春期前のアリスらしい顔だった。

「ぐ、ぐぐぐ…… くそう…… 何も言い返せない…… なんでも今  
回キミそんなにナルヒト君に好意を持つのが早いんだい……」

人知竜のぼそりとした呟き、本気で悔しそうにその美貌が歪んで  
いて。

「じじ、い？」

だが、その一言がアリスに突き刺さった。ぴたりと、喜びと勝利  
の舞が止まった。

「え、なにその反応。……まさか、キミ、自分の感情に気づいてな  
いのかい？」

「好意……？ この、オレが？ これは、好意……？ ナルヒトに」

目を、ぱちくり、ぱぱぱちくり。

何度も何度も忙しなく。

「うわあ、キミ、ほんと色々歪だねえい…… 理解したい、近づきたい、側にいたい。性別関係なく他者に対して抱くその感情の名前が好意でなければなんなんだい。鉄竜と花竜め、どれだけ箱入りで育てたんだか」

「う、あ……オレ、オレは…… 違う、オレはナルヒトを、ただ……」

「友人とか歩み寄るとか、まあ表現やアプローチはキミの自由さ。ただ、まあ、同じ雄を気に入った竜同士、”敵に塩を送る”という奴で言えば、目的だけは誤魔化さない方がいいよ、蒐集竜。年上からのアドバイスさ」

「オレが、好意…… ナルヒトに、好意…… で、では、この気持ちには…… いや、あり得ぬ、オレは、竜で、あやつはヒトなのに、」

好意……」

人知竜からの言葉を無視して、完全に呆けているアリス。宇宙ド  
ラゴン。

「おい、アリス？ アリスちゃん。……すぶぶ。ダメだねえい、  
こりゃ。完全に自分の世界に入っちゃってまあ……」

人知竜がため息をついて、化粧台に座り直す。まさか、あの蒐集  
竜のこんな一面を見ることになるうとは。込み上げる笑みを抑えた。

「さてと、そんな子は置いといて。日課のトオヤマナルヒト鑑賞で  
もするかあ。……人知竜魔術式、仮説提唱開始、”水眼鏡” 世界  
構成への侵食完了、つと」

紡がれるは、魔術式。

世界を侵す誤魔化しの技術。世界の法則に自分の構成した先を混

ぜ込み、法則を狂わすヒトと竜の見出した抜け道。

「む、貴様、何を」

「いや何、ライフワーク、趣味さ。朝、昼、夕方。1日最低3回は彼の顔を見ないと落ち着かないものでねえい。さてさて今回は何をしてるやら。この前は少し見過ごしただけでドワーフどもと一悶着起こしたり、密造酒作ろうとしてカラスの連中と揉めたりなんだから。彼は何をやらかすかわからないからねえい……」

「なぜオレの部屋でやるのだ…… と、というか、それ」

「すぷぷ。水眼鏡、私が作った新しい式さ。便利だろ？ キミの部屋でやるのはむしろ親切だよ、彼はあまり筆まめな方じゃないだろ？ 気にならないかい？ キミといた時、彼が、トオヤマナルヒトが何をして、何を考えて、何を話しているのか、さ」

ふわり、ふわり。何も無い空間に水の泡が現れた。かと思えば急

にそれは広がり、薄く平べったく変わっていく。

あつという間に、部屋に水で出来た皮膜、鏡が出来上がって。

「……これは友人として、友が危ない目に遭っていないかどうかを確認したいという気持ちだ。よい、……許す。代わりにオレにもナルヒトの様子を見せるといい」

「すぷぷ、はいはい、”水眼鏡”を確認してっと。さてさて、我らの竜殺し殿はいい子にしてるかなあ？」

《だからー俺に、いい考えがあるぜ。レーザー、ストル》

ふわり。空中に薄く皮膜のごとく広がる水が遠見の眼鏡となる。

現代におけるテレビのように、式により張り出された空中に浮く水面。それに遠山鳴人の姿が映された。



「む……ナルヒトだ」

「相変わらず悪い笑い方だねえい、まあ、そこが可愛いんだけど」

2人の美竜の言葉は違えど、表情は同じ。嬉しそうに各々の竜殺しを見つめて。

ちょうど、時刻は昼下がりに。

《あの女を見つけ出す、今やるべきはそれだ》

《そんなにあの女が必要なのか？ ナルヒト》

《ああ、必要だ。俺にはもうそれしか方法が思いつかん。あの女以外に考えられねえ》

「ふか？」

「すぶ？」

だが、それも一瞬。

この世はいつも間が悪い。

2人の美竜は、遠山鳴人にとって最悪のタイミングで彼を観てしまった。

2人の美竜は知らない、遠山鳴人は己の悪だくみの為に色街に向かおうとしていることを。

2人の美竜は知らない、その女が天使教会の主教であること。

水眼鏡の向こうの遠山も知らない。自分が狩る側だと思い込んで  
いる男は、今まさに自分が死刑台に向かって、ホップステップ―

《さあて、色街に突撃だ。欲望のままに、やりたいことをやり  
いくぞ》

ジャンプしてしまったことを。

「色街に突撃？ あの女以外に考えられない？」

「欲望のままに、やりたいことをやりに行く？」

竜が、遠山の言葉を無表情で復唱していく。

いつもの決め台詞が今回に限っては最悪の働きをかましてしまったことを。

嗚呼、遠山鳴人は何も、知らないのだ。

「は？」

都合悪く都合の良いところだけ聴こえてしまった。

2人の美竜から表情が漂白される。

蒐集の竜は、蠟で固められた約束状、遠山鳴人からの約束が書かれたそれをぎゅっと握りしめ。

人知の竜は、ぱちりと指を鳴らし水眼鏡をかき消す。

ただ、無言。だが広がる竜の威圧。そしてどちらからともなく。

「アリス・ドラル・フレアテイル」

「アイ・ケルブレム・ドクトウステイル」

互いに同時、名を呼ぶ。その視線は交差せずとも2人が見ているものは同じだ。

「少し、出かけてくるねえい」

「オレもだ。出かける」

「……行き先は？」

「色街だ」

「奇遇だねえい……」

蒼眼、瞳孔縦に裂ける。ゆらめく金色の煌めきが虹彩を泳ぐ。

暗眼、瞳孔、縦に裂ける。暗い瞳の中、もはやその激情は抑えきれない。

誰も、笑っていないかった。

「いぐぞ」

「いぐぞ」

そういつことになつた。

なつちやつた。

56話 言葉に気をつけなさい、それはいつも竜に聞かれているから(後書き)

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さい！

< 苦しいです、評価してください > デモンズ感



57話 がんばれ遠山、やっぱりダメだわこいつ。次回、遠山、死す。

ピロン

【スピーチ・チャレンジ発生。竜をなだめろ】

遠山鳴人はオタクである。

数々のファンタジー、創作物に触れ、ソレを通して数多の擬似体験を決めてきたオタクである。

なので、こういう状況のお約束も知っている。

美人だが気の強いヒロインをその主人公にのみ許される鈍感さでヤキモキさせて怒られる。

娯楽として楽しんでいた状況はしかし、いざ自分の身に現実として降りかかってみるとどうだろう。

「ふかか」

「すぶぶ」

ストレス以外の何者でもなかった。

せせらぎのような笑い声が、交互に響く。

メイクアップされたどえらい美人、いや、美竜が2人、遠山鳴人を壇上から見下ろしている。

いや、こっちはならんやろ。

遠山の中でシンプルな疑問と、パニックが踊り出す。

頼れる仲間みんな目が死んでいるどころか、その能力を遺憾なく発揮して逃走に成功している。

「ば、かな……」

追い詰められた悪役のような台詞が口から漏れた。なんでだ、どうして、何がどうして。

数多の疑問が脳裏を廻る、だが何一つ答えは出てこない。

唯一、わかることは――

「ふかか」

「すぶい」

童の機嫌がよろしくないことだ。

「さあ、逆指名を受けられたトオヤマナルヒト、トオヤマナルヒト様。おいでくださいまし」

「あのクソアマ、グルかよ」

ピコン

【最近の行動により、各勢力からの評価が変化しています。

天使教会： 評価 使える奴、でもやばい奴だろお前。

商人ギルド： 評価 ドロモラ商会やばくね？ 貴族からの評価

やべーんだけど。

冒険者ギルド： 評価 あの、テイタノスメヤを出来ればこちらにも…… それとたまには依頼も受けてね……

竜大使館：評価 ナルヒト！

工房： 評価 油断ならねえクソヒューマン、でも新しい商売のアイデアはサンキューな。

貴族、上流階級： 評価 珍しい蛇の高級素材美味しいです。

????： 評価ー

【冒険都市からの勢力評価が一定値を超えています。名声： ”黒髪の奴隷” 名声： ”名前をたまに聞く” に上昇しています、……やるじゃん。ほら、周りの連中もアンタの噂してるよ。がんばれ】

目の前に一気に広がるメッセージ。クエストの知らせと夢の中の

パン文書館に棲みつく者からの暖かい言葉。

「トオヤマナルヒト、トオヤマナルヒトってどこかで聞いたことがあるぞ」

「商人ギルドの会合でその名前が上がっていたはずだ。たしか、ドロモラ商會にテイタノスメヤの素材を卸している冒険者……」

「私は、教会の人間と聞きましたよ。なんでもあの主教殿の隠しナイフだとか」

「黒髪の奴隷とトオヤマナルヒトが同一人物というのはまさか、噂ではなくー」

「竜殺しだ、黒髪の奴隷…… 先月、蒐集竜様を殺したという」

ざわざわと、会場が人々の声で満ちていく。ここ数日の遠山鳴人

の行動は少しずつ、しかし確実にこの街に広がっていたのだ。

「くそ……」

周りの注目が全て遠山に注がれている、レーザーの影なしにはどう考えてもここから気付かれず逃げ出すことはできないだろう。

そしてあの薄情トカゲは判断が早かった。

遠山が、諦めて、ゆっくりホールを進んでいく。どかす必要もなく遠山の歩みに従うように人の波が避けていく。

あっという間にステージに辿り着いてしまった。

「ようこそ、おいでくださいました。あら、レーザー様やストル様は……」

ハロトがこちらを見つめて微笑む、おそらく全てわかっているの  
だろう。

「ウンコしに帰ったよ、奴らは」

遠山は精一杯考えて、なるべくあの2人がかっこ悪く聞こえるよ  
うにぼやいた。

「あら、まあ…… ふふ、信頼されていますのね」

「どごがだよ」

「だってー」



ハロトが、頬に指を当てて言葉を紡ぐとして。

「女」

「キミ」

竜の声、静かに、重たく。

「……大変失礼を。我らが竜様。改めて、いと尊き貴女方のお戯れに当館をお選び頂きましたこと、恐悦至極にございます」

「よい、気にするな」

「うん、そうだねえい、騒がせて申し訳ないね、マダム・ハロト」

「生ける伝説たる貴女様からのお言葉、一生忘れません、全知、いえ、人知竜様」

底冷えする竜の声をしつとりと受け止め、深々と八口トが礼を示す。竜との理想的な接し方だった。

「お前ら、どうして……」

「ふかか、ナルヒト、こんばんは。良い、夜だな」

「やあ、トオヤマくん。良い夜だねえい」

遠山の疑問に竜は答えてくれない。

「あの、その細目で笑うのやめない？ 怖いんだけど」

「ふか」

「すぷい」

ダメだ、また微笑みが深くなる。なればなるほど薄く開いた瞳、縦に裂けた瞳孔がより目立つ。

笑顔が、こわい。

「尊き竜様、高き竜様、このまま我らヒトに貴女達の戯れを拝謁させて頂きましてもよろしいのでしょうか？ お望みならずぐにでも衆目をちらしますが」

ハロトが観衆に流し目を向けながら、竜にこのシヨウを続けてもいいかを問うた。

「……ああ、許すさ。オレの街の住人だ。ここは一つ、オレと此奴についての認識をはっきりさせてやるのも悪くない」

「構わないよ、ボクはヒトが好きだからねえい。一夜の夢、一夜の

余興として、貪欲なキミ達が満足するかどうかはわからないが……  
すぶぶ、ヒトに懸想する竜を観てキミ達は何を思っただろうっねえ」

竜は快く、その姿を衆目に晒すことを許した。元来彼女達は注目を浴びることが嫌いではない。

竜界を出て、人界に住まうことを選んだ竜ならばなおさらに。

「ああ…… 顔が良い……」

「蒐集竜様、気高い……」

たまたま竜と目が合ったらしい人間が、ばたり、またばたりと気絶していく。

「嘘だろ、人が、倒れてる……」

顔が良すぎて人が気絶した。遠山は信じられない光景に割と引いた。いや、もう今更こいつらに関しては何んでもありか。

「ナルヒト、まあ、座れよ。力を抜いてな」

「ドラ子…… 待て、説明しろ。なんでお前ここにいるんだよ」

ドラ子の言葉に、遠山は疑問を問いかける。必死に思考を巡らせ続けるも答えが出ない、なんで、ここに、このタイミングで竜が現れるのか、予想すら立てれない。

「んん？ な、ん、で？ ふかか、なんでかなあ、ナルヒト」

「ひえ」

凶悪、いや、暴力的な美がそこにある、長い金の髪は1束に結い

上げられ、髪形も編み込まれている。芸術品と言われても納得する造形。

瞳の色と同じ、蒼いドレスに白い手袋、そしてそれよりも眩い白い肌。

メイクされているのか、普段からバカみたいな美人のドラ子が、今はさらにバカやばい魅力を放っている。

だが、目は笑っていない。

「ずぶぶ、こらこら、ダメだろう？ 蒐集竜。トオヤマくんが怯えているじゃあないかい、んー？ でもキミはなんの理由もなしに我ら竜に怯えるような人間ではないよねえい」

「ええ……」

なんだ、この針の筵感は。まるで浮気がバレたお父さんのような気持ちだ。いや、お父さんもいないし、恋人出来たことないから浮気なんて出来ようもないのだけれど。

遠山は居心地が悪すぎるソファに浅く座る。2人の美竜はニコニコと微笑むままだ。でも、やはり目は笑っていない。

「……マジでなんなん…… なんてこんな……」

「トオヤマくん、分かるよ、分かるとも。キミからしてみれば意味がわからないだろう？ 私たちがここにいるのも、アリスがこんな不機嫌なもの。ああ、その混乱、分かるとも」

銀髪のどえらい美人、人知の竜が首を傾げ、手を組みながら微笑む。

遠山を見つめる目は目尻が下り、頬は緩んでいる。

しかし、やはり目は笑わない。

「げえ、変態ドラゴン、アンタもかよ…… あの、出来ればね、

説明をね、してほしいのよ」

黒いレース編みされたドレスに銀色の髪、黒い手袋で髪を漉くその姿は見ているだけで金を払いたくなる光景だった。

遠山はサイフを取り出ししてしまいたい衝動を抑えてゆっくり言葉を選ぶ。

「……ナルヒト、女を、探しているらしいな」

「女……？」

ドラ子のボソリとした呟き。竜の威圧や衆目からの注目、極度のストレス状態に陥った遠山。

身体はその状態を生命の危機だと認識した、幾度も危機に遭遇した遠山の肉体は反射的に活動を始める。



数多のホルモン活動、急上昇する血圧、増える血流。この状況を回避しようと、遠山鳴人の脳みそがフル回転を始めて。

「ま、さか……」

結論、全てバれている。竜達にあの女主教を脅そうとしたことがバれているのか。

遠山はそう判断した。

「ふん、……その反応、やはり…… お前はここに気になる女を探しにきたのだな」

気になる女、だと？

こいつ、どんなカマをかけてきやがる…… なんだ、何を間違え

た？　なんで俺が主教を脅そうとしてるのがわかったんだ？

繰り返すが、遠山鳴人はオタクである。

今まで触れてきた創作物の中でこういうシチュエーションは何度も疑似体験してきている。

だが悲しいことに遠山は自己評価の低さと探索者時代にやべえ女から受けた洗脳により他人からの好意に気付くことが出来ない。

鈍感ではなく不感症だ。

故に遠山は理解ができない、考察にも至れない。2人の竜が不機嫌な理由に自分が大きく関わっていることなど想像も出来ないのだ。

「……………それがお前たちになんの関係があるんだよ」

だから、平気でこういうことが言えてしまうのだ。

ぴくり。人知竜の呼吸が止まった。蒐集竜の微笑みが固まった。

遠山鳴人の勘違いは続く。

「……………悪いが、俺にはお前らが不機嫌な理由が分からん。いきなりよー、現れてそんなイライラぶつけられると気分悪いんだけど」

「おおー！」

「あの男、竜に口答えを……………」

「正気じゃないぞ……………」

遠山の竜に対しての口ぶりにどよめきが上がる。この世界の常識からは考えられぬ竜への不遜。

「……オレには言えぬことなのか？（気になる女がいるということ  
は）」

「いちいち何するにもお前の許可がいるのかよ、ドラ子。お前はダ  
チだけど、そこまで干渉される覚えはねー（パン屋建てる為にこの  
街に来たことか）」

絶望的な勘違いは続く。

お約束のシチュエーション、ヒロインに取り合いされたりヤキモ  
チされる状況ではあるのだが、残念ながら遠山鳴人はイカれている  
し、性格も基本的にはよろしくない。

敵意には敵意で返してしまふタイプの人間だ。いつしか竜達の不  
機嫌に当てられて、遠山までもが不機嫌になっていた。

「そう、か……　もう心に決めているのか？（気になる女のことを）」

「ああ、これしか方法はないし、やめるつもりもない。例えお前に止められようともな（パン屋を作ることを）」

「……なるほどねえい、トオヤマくん、そんなにも魅せられているのかい？　……参考にしたいんだけど、（女の）何がキミをそこまで駆り立てたのかな？」

「あ？　何が……か。まあ元々割と好きだしな（パン）　それに俺はあいつに賭けた（ラザールのパン作りの才能）　俺は、自分のやりたいことをやるって決めてるんだよ（パン屋の話）」

「そっか……　すぶぶ、これは、少し予定外だねえい、まさか、キミがそんな想いを抱くことがあるなんて……」

「そんな想いつて……　なんか変な言い方だな。男なら一度はやってみたくなるもんなんだよ（自分の商売）。だからそれについてお前らにいちいちこんなふうなふうにプレッシャーかけられる意味がわかんねえ（パン屋の話し）」

すれ違い、ニアミス。決して交わらない話はしかし、一切の澱みなく続いてしまう。

「ナルヒト」

「なんだよ、ドラ子」

ドラ子の微笑みが止まった。

まっすぐ、遠山を見て。

「オレは……　嫌だ」

「は？」

「嫌だ、嫌だ。いやなのだ、オレに、オレに相談もなく、ああ、いや、わかっておる、貴様がこういうのは好きじゃないということも、知っている、だが、なぜだ、オレよりも魅力的なのか？（その女は）」

ドラ子の蒼い瞳が明滅している。深い激情が、縦の瞳孔から溢れて、目からこぼれ落ちるかのような様子。

「は？ いや、魅力って、なんの話してんだよ。比べるもんでもないだろ、それにドラ子、お前とこれ（パン屋）は別物っていうか……」

だが、その激情も遠山鳴人には届かない、理解出来ない、響かない。

「ふたまたせんげん?!？」

興奮したドラ子もまた、目を剥き出して叫ぶ。絶望的に話は噛み合っていないのに誰もそれに気づかない。

「すぶぶ、……トオヤマくん、流石にそれは、僕もあんまり賛成出来ないなあ……」

人知竜までもが、遠山の言葉に冷たい言葉をぼそりと。

なんだ、こいつら、何を言っている？

ふたまた？ 賛成出来ない？

遠山鳴人はさらに思考を深める。脳に腫が生えるのではないほどに頭をしぼる。意味のわからないことを言う美竜2人、彼女たちの言葉からその真意を探る。



やけに熱の入った言葉のドラ子、何故か遠い目でこちらを見つめる変態ドラゴン。

追い詰められた遠山は驚異的な速度で頭を廻す。ストレス、ストレス、ストレス。過度にかかるストレスが肉体の機能をさらに加速させた。

ピコン

【過度なストレスがかかった状態で、思考を続けました。条件達成、技能獲得：”ラン・ホース・ライト”

技能効果 スピーチ・チャレンジの土壇場において今までの人生で得た経験、記憶から活路を見出すことができる。INT値による補正が発生する。”頭ハッピーセット”との相乗効果により、冷静さを失う】

それは進歩。

遠山鳴人にこの世界の法則は適用されない。怪物を殺すことでレ

ベルアップすることは出来ない。

だが、遠山鳴人は別の法則で成長する、変化する。現代に生きる誰もが持つ可能性。

試練の中、立ち向かうことでソレを得るのだ。

技能。

ホモ・サピエンスの進化には常にそれが共にあった。

「遠山鳴人もまた同じくー」

「ナルヒト？」

「トオヤマくん？」

「なぞは全て解けた」

ぱちん、遠山が指を鳴らす。浅く腰掛けていたソファに、深く身体を沈めて脚を組んだ。

「む？」

「ぶ？」

ラン・ホース・ライト。危機を前に、遠山鳴人の脳細胞は加速し、答えを導いた。

2人の美竜の不機嫌の理由を――

「お前ら、（パン屋の）仲間外れにされたから拗ねてるんだな」

ははーん、ドヤ顔がましなから遠山が再び指を、パチンと。虚しく、ホールに乾いた音が響いた。

「……………言いようにってはそうなる、のか？」

「ふーん、まあ、その表現はユニークだけどねえい……………」

竜がかなり微妙な顔をした。遠山はその様子を凶星を当てられた気まずさからくるものと判断して言葉を続ける。

「まあ確かに、ドラ子。友達のお前に何も言わずにこんなことしてんのは少し不義理だったと思う。それはすまん」

「む、少し、……………少し、なのか？」

竜達が少し落ち着いた様子、遠山はソレを見てたたみかける。決し

て言うてはならない一言を。

「だが、悪いがはっきり言わせてもらおうぞ、ドラ子に変態。これは、  
（パン屋ね）お前らには関係ないことだろ（パン屋のこと）」

「え」

「――」

竜の2人の顔が、固まった。

遠山は止まらない、あーあ、止まらない。

パン屋を作り、金を稼いで、ブリッジ・スクロール副葬品、教会誓約書の誓約を乗り越える。これは遠山鳴人の決断で負ったりリスクだ。

友達であるドラ子や、よくわからない竜を巻き込むことではない。

遠山は、遠山なりの筋を通して、本人なりに思いやりを込めた言葉を最悪のタイミングで、最高に熱の入った言葉で――

「でも、安心しろよ。きちんと全部上手くいったらお前らにも紹介するからさ（パン屋をね）」

言いきった。

決まった、遠山鳴人は会心の一言に思わず自画自賛してしまう。

これだよこれ、リアル異世界転移の最中なんだからこういうなんか良いこと言っただけ良い感じになってもいいだろ。

止まらない自画自賛の中、ふと、目の前に矢印が浮いていて。

「うん？」

ピコン

【スピーチ・チャレンジ、失敗。サイドクエストに失敗しました…  
…うわ、マジでありえないんだけど。サイアク】

メッセージが、流れて。

「ひゅか」

「しゅぷ」

ツーツと、2筋。

蒼と暗。

竜の瞳、縦に裂けた瞳孔から煌めく雫が垂れ落ちた。

「.....工？」

遠山が、竜を泣かせた。



57話 がんばれ遠山、やっぱりダメだわこいつ。次回、遠山、死す。(後書き)

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧くださいー！

< 苦しいです、評価してください > デモンズ感

58話 泥沼・キラキラ・しご指名サンキュー (前書き)

58話 泥沼・キラキラ・こ指名サンキュー

「……………あ、泣かした」

誰の呟きだっただろう。

遠山と竜たちの問答をハラハラしながら見守っていた観衆たち、  
誰かの言葉が広間に響いた。

「え、なんで」

遠山鳴人は焦る。

おかしい、明らかにドラ子や変態ドラゴンの反応がおかしい。

「……………ひゅか、ひゅ、ひゅ」

「しゅぶ、しゅ、しゅす」

引き攣るような喉の音、嗚咽。

表情の固まった美貌から音なく滴る涙、竜の涙は外気に触れ、しばらくするとガラス細工のように固まっていく。

ぼっ、っっ。

彼女達の足元に、竜の涙が落ちていく。

おかしい。

遠山は一気に青ざめる。お腹は痛くなって、心臓は不規則に鼓動を強めていく。

「お、おい、2人とも？ え、意味わからんだけれど。なんで？  
なんで泣く？」

竜は無表情のまま、ただ静かに涙を流し続けるだけ。

ざわり、空気が変わる。

ステージの下、集まった客達が”竜”の落涙に息を飲み、口々に囁き始める。

「竜が、泣いてる……」

「あの男、言い切ったぞ。お前らは関係ないとかなんとか。痴話喧嘩か？」

「見たかよ、竜に対して、あの態度。あれが竜殺し…… 恐ろしい人間だ」

「例の商会に対する警戒を引き上げる必要がありそうですね。竜にあんな冷淡な態度を取る男を御しているとは…… ドロモラ商会、恐るべし」

「噂では2日前の東区での密造酒業者の壊滅、あの隠し醸造所の火災現場でも、黒髪とリザドニアンの男がいたとか」

「天使教会最強の騎士を手込めにしたって聞いたわ。あの水色の髪の少女騎士。公爵の御子息が懸想していた騎士よ」

「ドワーフの工房から貴重なアイテムを齎し取ったというのも眉唾じゃないのか？」

「カラスの連中に手を出したのも噂じゃないのかしら。連中も尻込みして未だに報復できてないとか」

「アレが、トオヤマナルヒト…… 人知竜様を惑わすチャラ男…… 寝取られ……」

「我ら、魔術師のアイドル…… 人知竜様をよくも……」

ひそ、ひそ、ヒッソオオオ。もはや隠すつもりのないヒソヒソ話がホールに満ちていく。

出るわ出るわ、この1週間で遠山が冒険都市で行った数々の行動が噂となり、そして今実話として人々に認識されつつある。

「や、やばい……」

なんだか知らんがやばい。パン屋を創る、店を始めるにあたってこの評判はまずい。

なんでだ、どうして、どうしてこうなった。俺は何を、どこで間違えた。

遠山鳴人が本気で焦り始める、ぼん、と肩に手が。

「トオヤマ様……」

「え」

「あなた様、まさか、本気であのお方達が涙を流す理由がわかっておいでではない？」

とても冷たい声だった。マダムハロトが汚物を見るような目を遠山に向けていた。

「おいでのわけないでしょうが。え、まってまって、ほんと泣くのやめて。無表情で涙だけ流さんという。そして何か喋って」

遠山が慌てて、2人の美竜を宥める。



しかし、ダメだ。2人ともその美しい顔をまっさらな無表情にして涙を流し続けるだけ。

「……はあ、まさか、これほどとは。他者を冒すその在り方、前だ  
け見ない男とはここまで女心を理解できないものなのですね」

「悪口言われてる？」

「ええ、悪口にございます。ご覧なさいな、あのような可憐な方たち  
に涙を流させる男に、悪口以外の言葉を向ける必要がありますまして  
？」

「あれれ、お姉さんの目が鋭いぞ。ゴミを見るような目だぞ」

「……はあ、トオヤマ様。お耳をこちらに」

「はい」

ため息をついたマダム・ハロトが遠山を手招きする。濃い花の香油の香りが届いた。

「あのお方達は、嫉妬なさっていらつしやいます。いま、貴方に意中の女性がいて、それに自分達は関係ないから引っ込んでると言われてショックを受けているのですよ」

「……………は？」

遠山は、目をパチクリ。

何故そうなるのか、何も分からない。パン屋一切関係なかったってことなのだろうか。頭が混乱してそんな思考しか浮かんでこないのだ。

「いや、は、じゃないでしょうに」

「え、パン屋関係のことで不貞腐れてるんじゃない？」

「……………うわ」

遠山の言葉に、ハロトは不快感を隠さずに唇を歪めて、目をくわりと見開いた。

「待て、でもなんで仮に、俺が本当に女目当てでこの店に来て、ドラ子がキレル意味がー」

あ。

遠山の脳裏に巡るのは、数日前の記憶。

スマホを取り戻す際に、ドラ子と交わした約束。

ドワーフの畜生ジジイからスマホを買い戻す際、ドラ子に協力して貰った代わりに、遊びに連れて行く約束書を交わしていた。

なんか色々書かされた覚えがある、確かその中の条文に他の女を誘わないこととか、ドラ子よりも先に他の女と遊ばないとかなんとかあったような。

よく考えてみればこの状況、ドラ子から見れば女遊びに来たとかみえない。

「わ、やべ。約束、破ったことになるじゃん……」

遠山は今更、血の気の失せた感覚を覚える。約束を破る、それは遠山にとってかなりまずいことだ。非常にダサイ。

「いや、まあその、約束とやらもそうなのですが、その前にもっとあるでしょうに…… トオヤマ様、貴方、ほんとに他者と接する

の下手なのですね……」

「いや、約束を破ったこと以外にドラ子が俺にキレる理由ってなに  
よ」

「……さて、本当に気づいていないのか、それとも気づかないフリ、  
いや、気付かないようにしてるのか、はたまた、あなたは壊れてい  
るのか。ご自身でお考えくださいませ、竜殺し殿」

ハロトが冷たい目で遠山を、眺める。助けられそうにはない。

「いい…… もう、いいのだ……」

「しゅぷ、ごめん、ごめんねえい…… 怒らすつもりなんてないん  
だよ」

静かに真顔で涙を流し続けるドラゴンたち。彼女達がぼつりと咳  
いた。

泣き顔ではない、まっすぐ、美しい顔はそのままに一才の歪みなくただ、涙だけが静かに。

「待つてまって、違う、違うからマジで。パン屋なの、俺がね、言つてたのはね、パン屋のことなの」

「かんけいないって、ゆわれた。……やくそく、してたのに、お前は関係ないって」

ぐさり。ドラ子の眩きが遠山に突き刺さる。

「ドラ子、ドラ子さん。違うの、ほんとに。聞いてマジで」

「しゅぶ、トオヤマくんは、やさしいねえい…… 良いんだよ、今

更、ボク達に気なんて遣わなくても……」

人知竜も同じく。

闇色の目から透明な雫を流して、震える声でつぶやいた。

「いや、違う違う。気を遣うとかじゃなくてね。ここに来たのは女を探しにきただけで、いや！ 女を探すというのね！ そういう探すではなくて！」

「女…… やっぱり…… ひゅか、やくそく、してたのに……」

「……ボクの何がダメだったんだろう、髪も言葉も変えたのに、悔しいなあ」

らん、からん、からん。足元で固い音が響く。竜の涙は外気に触れるとゆっくり結晶となっていく。泣き続ける彼女達の足元に、光煌めく涙石が転がった。

「いや、だから！ 聞いて！聞いて聞いて！ ここにはね、俺パン屋創りの為にきたの！ あの銭ー」

遠山は言いかけた言葉を済んでのところで飲み込んだ。

いやまで、ここでそんなこと、銭ゲバを脅そうとしたことなんか言い訳にしてみる。トオヤマナルヒトの評判はそれこそ地に墮ちるぞ。パン屋の開業にも影響が出たら本末転倒だ。

喉が、カラカラに乾いていた。遠山は今更ながらに気付いた。自分が詰みかけていることに。

「……いや、ドラ子、ほんとにここには女遊びとかそういうのできたんじゃなくてだな」

ダメだ、言い訳が思いつかない。



正直に銭ゲバを脅しに来ましたというのも人としてどうかと思う。後ろめたいことを後ろめたいと感じなくなった瞬間が、品性の死ぬ時だ。

「……いい、ナルヒト、いくらオレでもわかるぞ。こんなところに盛ること以外どんな理由があつてくるというのだ」

「いやー、あるんだよ、それが……」

「じゃあ、言ってみる。ぐす、オレとの約束…… オレが最初に、貴様と遊びたかったのに、貴様は……」

「んぐ…… いや、ドラ子、マジで、マジで……には女遊びとかじやなくてなあ」

ものすごく頭が痛い。たしかにドラ子の言う通りのクソ野郎状態だ。

どんな存在との約束であれ、約束は約束。破っていいものではないし、ないがしろにしていいものでもない。

完全にこれは遠山鳴人の意識不足、計画を立てる時点で考慮しなければならぬことを見過ごしたミスだった。

「すぶ。蒐集竜、もうやめよう。見苦しいだけだよ。ボク達は、彼に選ばれなかった、ただ、それだけのことなんだから」

「……うるさい、貴様は黙っている。オレはナルヒトと話をしているのだ」

「まって、ほんと俺が悪かったから。約束のこと忘れてたとかじゃなしに、ここにはマジで俺は」

遠山がそれでも、言葉を弄して――

「老竜」

竜はそれに取り合わない。

今や、遠山の言葉に竜を動かす力はなかった。

「すぷぷ。――魔術式、仮説定理開始、式別種類”探知式”、”望郷の丘” 世界法則への侵食完了…… トオヤマくんが探している人は…… ふむふむ、おや、あまり良く見えないな…… 茶髪で、長髪の女、この店の個室にいるね。かなりの得意様みたいだよ、まあえらく遊び惚けてるねえい」

人知竜が指を振る。それだけで簡単に、おぞましく世界の法則が侵される。

人知竜の片目に、金色に光る片眼鏡のような輪郭が浮かび上がる。

闇色の目は、金色の枠を通して、遠山鳴人の探し人を瞬時に探し

当てた。

遠山達があればほど探したとある権力者は、呆気なく見つかった。

「やはり、女か。店主」

「は、ここに」

指を鳴らしたドラ子に向けて、マダムハロトが膝をつき頭を垂れる。

「この店の3階、個室における茶髪の女をここに連れてこい。頼めるな？」

「……………ええ、竜からの招聘、帝国民の中で断るものがあるものでしょうか。ハイネ？」

「はい、マダム・ハロト」

ハロトの言葉、癩っ毛のハイネが腰を折って同じく竜に首を垂れた。

「3F ステルノ、ルンホニアの部屋で遊んでらっしゃるお客様をお呼びなさい。蒐集竜様、人知竜様からの招聘であると、お伝えして」

「承知いたしました、マダム。いと尊き竜様、御身のお名前を口にし、使用することをお許しくださいませ」

「よい、くるしゅうない」

「ああ、構わないともさ」

竜が、ハイネの言葉に答える。もう2人の美竜の目に涙はない。

残るのは、背筋のひりつく無表情で飾られた美貌のみ。

「え？」

もう遠山にはどうしようもない。

「……見定める」

「なんて？」

遠山の言葉にはなんの価値もなく。

「オレが見定める。ナルヒト。貴様が執着するに値する雌かどうか」

「はたして、ボクよりもキミに相応しいかどうか」

竜の言葉が、無慈悲に続く。

「オレが」

「ボクが」

「「その女と話す」

「あー……」

遠山は少し、目を瞑り、息を吐いた。

完全にやらかしたな！。

無力な男は未だ煮え切らず、心の中である女に小さく謝った。

今回はマジでじゅんと。

……

……

…

「同時刻、夜店”レイン・イン” 3F 逆指名客用、キャストの個室エリア。」

ルンホニアとステルノの個室にて

その女は、人生において今、絶頂の中にいた。

「ウツヒョヒョー！！ そらそらー、逃げなさい、かわしなさい」

「わ！ もう！ お姉様のえっち！」



「テルドさまー、僕の方はいいのー？」

そこには笑顔しかない。喜色満面、ほくほくのニコニコ顔のそばかす茶髪の女が笑う。

「うっぴよぴよ！ ルンくんもよー！ そーれそれそれ！ ほらほら、お水を避けないとお、その可愛い紙で出来た服が透けちゃうわよーん！ おっぴよっぴよ！」

部屋の中央に位置する浴槽、地下から湧き出る源泉を利用したテルマエに肩まできちんと、つかる女。

テルド・サーカス、仮名。

本名、カノサ・ティエル・フィールド、帝国にその名を轟かせる天使教会の主教その人である。

普段の白髪は、今や色の濃い茶髪に。

伶俐な美貌もそばかすのついた牧歌的なものになっている。欲望と野望の紫瞳を隠す糸目は今や、くりくりとしたアーモンド型に。

「わわ、テルド様に濡らされちゃった」

「おっふ、美少年の脇を濡らしちゃった、かーっ、捕まる、教会騎士に捕まっちゃうわー、かーっ、どうしょー」

教会に伝わる継承秘蹟、”大主教令”と同じ歴史の深さを持つ変装の業により姿を変えた彼女は夜の街を遊び倒していた。

「うぴよぴよぴよ！ あー、可愛い。ほんと美少年と美少女は白金貨の次にこの世で尊いものだわ。良い温泉に、美味しい酒、そして麗しい妖精たち、生きるってスンバラシイわー」

手に持った工房謹製のおもちゃ、水吹き矢と呼ばれる筒を両手に

持って、ニッヨニヨ。

レイン・インにおいて、キャストに選ばれた一部の賓客にのみ許されるゲーム。その名も”水遊び”。

ルールは単純。水の噴き出るそのおもちゃをつかって、浴槽の中からキャストに向けて水を掛けるだけ、だけなのたがー

「えいえーい！」

「きゃー！」

「そいそーい！」

「わー！」

ぴゅっと、カノサが構えた筒から水が噴き出る。それが浴槽の淵に立つ美少女と美少年の服を濡らした。

「あはあ、当たっちゃった」

「ふふ、お姉様に見られちゃう」

紙だ。

キャストの服、簡素な白いバスローブのような服は紙で出来ている。

水吹き矢を当てるたびにキャストの紙で出来た服が水で透けていく、帝国が誇る由緒正しい遊びの風景がそこにあった。

「ブヒヒヒヒヒ、ルンちゃん、ステちゃん。ほらほら、もう少し、もう少しお風呂に近づいてよー、上手く当てられないわーん」

所々が透けていく紙の服に身を包んだ美少女と美少年に向けて鼻の下を永遠に伸ばした主教が笑い続ける。

「えー、どうする？ ステルノ」

「んー、どうしようかしら、ルン」

「近づいてくれたらー、お姉さん、お小遣い奮発しちゃうよー！」

「きゃは、お姉様だいすき」

「いいよー、お姉様ー。僕、次はどこを当てられちゃうのかな」

「ムッホッホホホホ、くるしゅうない、くるしゅうないわー。  
あー、たのしー」

水吹き矢の先端を浴槽につけて、お湯を補充していく。

ジャグジーに浸るカノサが狙いをつける。

浴槽の淵に腰掛けて、胸を張ったり、笑いかけてくる妖精のよう  
な美少女、美少年の服を再び濡らそうとして。

「ほーれほれほれ、お姉さん当てちゃっぞー」

「きゃー、もう、お姉様のエッチ」

筒から噴き出る水飛沫が、少女達を濡らしていく。主教は今確実に、人生の絶頂の中にいた。

「お姉様、僕もおそばでお風呂入ってもいい？ お服びしょびしよなんだー」

「あら、お姉様、私もいい？ とてもいい東領のグレプの実があるの。一緒に食べよ？」

「うっひょひよ、美少年と美少女に挟まれてのご入浴！！ 来なさい来なさい、ぐーっ、と来なさいな」

美少女と美少年を侍らせての酒池肉林。

カノサは差し出された丸く紫色でぶにぶにした果実をあーんと食べさせてもらいながら、思う。

「ああ、生きてるって素晴らしいわ……」

「ぶぶ、よかった。お姉様、リラックスできてますか？」

「あーん、もう、ステちゃんはほんとイイコね。リラックスしまくりよ、しまくり。最近、ほんと仕事がやばくてね」

「お姉様、お仕事お疲れ様ー、はい、ラドンシエリーだよー」

「ルンくんもありがとねー。かーっ、あー、沁みる、喉が暖かくてきもちいー」

左側に侍る少年から差し出された琥珀色の液体を小さなコップで一気に煽る。

酒精を強化された強い酒、辛口のそれを舌で転がすと先に口に入っていた果実の甘味と絡み合いとろけ合う。

喉を通る熱さはカノサに、生の実感を与えて。



「いーお酒ねえ。さすがはレイン・イン」

「ふふ、ありがとー。マダム・ハロトがお酒にはうるさいからねー。天使教会の定めている醸造所からしか絶対買わないって決めてるんだって」

「へえ、さすがはレイン・イン。間違いないわね」

「うん、マダムがその辺は厳しいんだー。この前もー、南区にあった密造酒の醸造所が火事で燃えた時、ウチには一切影響なかったしねー。他の店では安い密造酒を使ってるところもあったからそういうところは大変だったみたいだよー」

レイン・インのキャストはみな情報通だ。夜の街に造作深く、また上流階級の相手をすることから地頭もいい。

幼げに見えるこの2人もしつかりと、専門の教育と教養を施されていた。

「…………へえ、そんなことがあったのねえ」

蜜のような濃い酒を舐めながらカノサがふと、主教の顔に戻る。

そんなこと、と言いつつその密造酒の醸造所が火事になることを決めたのは他でもない彼女だ。

竜殺し、異端審問官、トオヤマナルヒトに命じたその粛清は彼女の想像よりも遥かにスマート、かつ徹底的に行なわれた。

醸造所の人間、”カラス”構成員はもちろん、その醸造所に来ていたカラス幹部も含めて30人以上を処理、密造酒のレシピや取引業者の書面はきちんと回収した上で、夜が明けるまでには全てを消し炭に変えた。

”影の牙”、そして”第一の騎士”の力もあるだろうが、その仕事ぶりは驚嘆に値する。

遠山鳴人の仕事は、カノサが今まで見てきたどんな人間、どんな冒険者の狩りよりも周到で狡猾で、確實だった。

違う世界の男、そう結論したのは自分だが、あのような仕事が出る人間を生み出す社会とは果たしてどれほどの骸を生み出すものか。

怖気すら、感じる。

「……でも思ったより遙かに、いい買い物だったかもしれないわね」

まあ、それはそれ。これはこれ。遠山鳴人の異質さの考察はほどほどに。

そんなこんなで、結果的に主教は大儲け。

滅した密造酒醸造所のレシピは手に入る、目障りな酒事業のライ

バルが1つこの世から消え去るなど懐が大いに潤っていたのだ。

「あ、お姉様。今僕たち以外のひとのこと考えてた」

「えー、シヨックね。お姉様、誰のこと考えてたの？」

「んー？ なんのことかしら？」

美少女と美少年がしなだれかかってくるのを流しつつ、つい仕事モードに入ってしまったカノサは思う。

異端審問官、トオヤマナルヒト。あれへの認識をどう決めるか。アレはおそらくそう簡単に御せるものではない。

しかし手放すのには惜しいし、恐ろしい。

竜関連の厄介ごとに巻き込まれてでも、手元に置いておきたい人材だ。冷酷で残酷で、しかし人情と常識が両立している頭のキレるおかしい男。それがカノサのトオヤマナルヒトへの認識だった。

「さて、次はどんなふうに働いてもらおうかしら」

トオヤマナルヒトが天使教会に庇護と後ろ盾の役割を求めていることには気づいている、ならばそれを与えてやろう。そのかわり、もっともっと働いてもらおう。

1日24時間働いてほしい。アレの労働には価値がある。

打算と打算。ある意味最も信頼出来る関係性だ。天使教会最高指導者は、新たに手に入った手駒の性能を割と気に入っている――

「お楽しみ在所大変申し訳ございません、テルド・サーカス様、少しよろしいでしょうか？」

「あれ、ハイネの声だー。お姉様、お部屋の扉開けてもいーい？」

「うん？ え、ええ。あれ、まだ夜明けじゃないわよね？ うそ、  
楽しすぎて時間の感覚なくしてたかしら」

「失礼致します、テルド様。いつも当店をご利用頂き誠にありがとうございます。  
うございます。ステルノ、ルンホニアを可愛がって頂き何よりです」

「ええ、私、可愛いものと美しいものが好きだから問題ないわ。え  
っと、それで何か御用かしら？ ……貴女も可愛いわね、一緒に遊  
んでくれるの？」

「お戯れを、テルド様。ルンホニアとステルノが妬いてしまいます  
よ。……当館主人、マダム・ハロトより伝言をお伝えしに参りまし  
た」

「あら、マダム・ハロト？ 気になるわね、何かしら」

「テルド様がえっちすぎるから怒られるんじゃないかしら？」

「怒られたら僕が庇ってあげるからね」

「ムホホホホホホ、えっちでごめんね、ごめんねー。ステちゃんのおへそ触っちゃおー！んもう、ルンくんたら、マジ妖精だわ。課金させて」

「マダム・ハロトからの伝言です。蒐集竜、アリス・ドラル・フレ

アテイル様、並びに人知竜、アイ・ケルブレム・ドクトウスティル様。2竜は貴女様の招聘をご希望されています。至急、1F、メイソホールまでお越しくださいませ、と」

ハインの声が淡々と部屋に響いた。

豊かな湯が湧き出る音、砕けて、こぼれて、溢れる。その音だけがただ、部屋にあった。

「……………ナ、ンテ？」

「竜が貴女様をお呼びにございます。光栄です、テルド・サーカス様」

「……………ナ、んで？」



「……………なんでも竜殺し様が貴女様にご執心だとか。2竜はその件で貴女様からお話しを聞きたいとのことですよ」

「り、う、ごろし…………… トオヤマナルヒト……………」

「はい、メインホールにて現在、竜と朗らかにお話し中にございますれば」

現実がやってきた。

夢の時間は終わり、主教カノサ・テイエル・ファイルドの元へ特に意味のない試練がやってきたのだ。



「ならん、貴様は口が立つ。その茶髪の女が来てから話す」

「あの、えっと……」

「アイ、だよ、トオヤマくん。キミがつけてくれた…… いや、この話も最早虚しいな。人知竜、そう呼んでくれ」

「えっと、人知竜さん」

「ボクをさん付け？ キミが。ふ、寂しいな……」

「ええ…… じゃあ、人知竜、その少しね、俺らの間には勘違いがあつてね」

「アイって、呼んでくれないの？」

「え、いや、……めんどくね……」

「しゅぶ」

「あ、ああああ？！ な、泣くな、泣くなって、アイ！ 悪かったから」

「……ほう、ずいぶん、ずーいぶん、この老竜と仲が良いのだな。ナルヒト。ああ、別に気にしてはおらんが。どうぞ、続けて？」

「ええ、コワー……」

地獄だ。テイラノサウルスとヴェロキラプトルのご機嫌を同時に取るよりも難しい地獄に遠山はいた。

まずい、勘違い主人公ムーブをかましてしまったせいで状況が非常にまずい。

「あ、あの、ドラ子さん……」

「っーん」

このままではこの街からの評判が悪くなりパン屋の開業にも影響が出てしまう。

それに約束。ドラ子との約束を破ったことになる。それもまずい、ダサすぎる。少ない友人をまた無くしてしまう。

遠山はそれも、怖かった。違う生き物でも友達になれる。幼い頃、別れたモフモフの友に教わったことを裏切る。それだけは嫌だ。

「なあー」

遠山が口を開きかけたその時だった。

「お待ちいたしました、蒐集竜様、人知竜様。お探しの方、テルド・サーカス様をお呼びいたしました」

「……………いと尊き2柱の竜様、この度はお呼び立て頂き恐悦至極に」

「あ、銭ー」

「……………」

「あ、ハイ」

「ほう、貴様が……」

「へえ、うん？ ……気のせい、か」

「尊き竜様、テルド・サーカス。此度の招聘、誠に光栄にございます。御身の眼前にこの卑しき身を晒すこと、どうかご容赦を」

「よい、女、いくつか聞きたい。かんけつに、嘘をつかずに答えよ。老竜？」

「ああ、もちろん。術式構成、侵食完了。秘蹟やスキルほどの厳密さはないが、大抵の”嘘”なら全てわかるよ」

「よい、女。まずは一つ、この男のことを知っておるか？」

「はい、存じております」

「……」

「よい、その調子だ。心せよ、オレ達竜は、存外貴様ら人間に優しくないのだ」

「竜の御心のままに」

「ふむ、この男と貴様は想い合う関係か？」

「いえ、それだけは天地竜明にかけてあり得ません。例え天地に於いて男と女が彼と私だけになろうとも、私が彼に懸想することはございません」

「これも、本当。嘘じゃあないねえい」

「……貴様、この男のことをよく知らないのに言うではないか」



「ギーー 申し訳ございません。詭弁なく申せとのことでしたので」

「ほう？ 貴様、なかなか面白い女よな。よい、許す。名を名乗れ。始めて会うはずなのに、どうしてかな。オレの知る賢しい女と少し似ておる」

「……今の私はテルド、テルド・サーカス。北領の寂れた炭鉱街から冒険都市に出てきたしがない商人にございますれば」

「……これも、嘘じゃあないねえい。……ふむ、ただ、でも、やはり、何かが」

「ふむ、では貴様。この男、トオヤマナルヒトとはどういう関係だ？ 雌と雄の関係ではないと言うのなら、ナルヒトが貴様を探しにここまで来た理由が知りたい」

「いや、ドラ子、だからっ……」

遠山が口を開いた瞬間だった、テルド、いや主教からの視線を感じる。

怒りと焦りと苛立ちと、そして、何かを託すような視線。

主教の唇が、ぱくぱく動いた。遠山はそれを見逃さない。

だ、ま、っ、て、る。

「……仕事の関係にございます。私の事業に彼の力を借りたりしております」

「その仕事とは、なんだ」

「世直し、にございますれば」

「ほう、ほうほうほう、よい。貴様、なかなか肝が据わっておりますではないか。オレを正しく恐れ、正しく敬うその姿。ますますあやつに似ておるわ、あの銭ゲバ女にのう……」

「彼女の言葉。嘘じゃないね、これも」

ほんの少し気を良くしたと見える竜2人が声色をわずかに明るくする。

ちらりと、頭を下げ続ける女と遠山の目が合った。

(てめえ何してんのマジで)

(いや、まじ、ほんまにめんなれマジで)

アイコンタクト交わしながら遠山は頭をフル回転させていく。

まずい、今のところマジでいいところナシだ。モテモテ作戦では役立たず、ドラ子と人知竜はキレさせる。スキャンダル狙ってた相手に庇われる。

いくらなんでも、ダサすぎる。

「ふむ、ふむふむ。さて、今のところ聞いた話によると、ナルヒトは仕事の用事で貴様を探していたわけ、か。ふーむ」

「いや、待ちなよ。幼竜」

「なんだ、老竜」

「その彼女、さっきから嘘は言っていない。嘘は言っていないんだけどねえい……何かがおかしい。奇妙だよ。蜃気楼を見ているような気分だ。私達は彼女に何かを誤魔化されている」

「ほ、う」

「すすん、香りも顔も魂も全て何かがおかしい。魔術式での変性でもない。これは…… とてもとても、古い力の香りだ。すぶぶ、奇遇だねえい。これと同じ香りのする女をボクも知ってるよ。……  
… 天使教会の歴代主教に継承されるあの令。アレと似てるよつな」

「ひびく」

主教、悲鳴。

「ひびく？」

「い、いえ、ひじ、肘がその、あは、あははは………」

(あばばばば、しぬ、マジで死ぬ。竜殺しあんたのこと私絶対絶対許さないから！ほんとマジで反省して)

(ごめんごめんごめんって、今考えてるからマジで、今回は本当俺が悪いです)

ダラダラと脂汗を浮かべまくる主教、もうアイコンタクトも限界だ。

「……女」

ドラ子の声、恐竜の足音のごとく腹に響く声だ。

「は、は、はははい」

主教も思わず、声を震わせてしまった。上位生物の圧は例外鳴く人を震わせる。

「答えよ。偽証はまからん。虚偽も許さぬ、真実以外に貴様が答える言葉はない。心せよ、竜の、言である」

「……あ、は、御意に」

「オレに隠していることは、ないか？」

やられた。

先ほどまでは、のらりくらり。真実でもないが、嘘でもない答えで交わしていたが今回は無理だ。

隠していることはないか？ に対する答えなんて、はいか、いいえしかない。

その証拠に先ほどまで割とすらすら竜の問いに応えていた主教が

黙りこくる。

「……………」

いや、でもあの銭ゲバ女は気持ち悪いほどに頭がキレる、この場面も、もしかしたら自力でなんとかしてしまっても。

遠山がそんな希望を抱いて、主教を見ると

お、わ、た。

口が、ぱくぱく。遠山にしかみえぬ角度で涙目の主教が死にかけの金魚みたいな口をこちらに向けてきた。だめっばい。

「どつした？ 答えられぬか？ ん？」



「……あまり、ボク達も気が長いほどではないんだ。いやなに、別に、キミに対して怒ってるわけじゃあないんだ。ただねえい、隠していることは気になるのさ。ねえ」

ひとつ、主教が息を飲む気配、音なき悲鳴が聞こえた。

ステージを照らすシャンデリアの明かり、竜達を照らすそれが映す影が、一瞬、人の形ではなくなる。

翼、尻尾、牙、舌。

およそ人には決して届かぬ高き存在、その片鱗を光が暴いていく。

彼女たちは竜。決して交わらぬ、決して理解できぬ、決して並び立たぬ。

ヒトと違う、上位の生物。世界の柱、惑星の概念。選り抜かれ、

そうありかすと定められた存在。

「あー」

遠山は、主教の小さな悲鳴を聞いた。

詰んだ、そんな人間の声だった。

遠山は、竜たちの涙を見た。

静かに、しかし深い無表情の絶望がそこにあった。

「馬鹿か、俺は」

何が、パン屋だ。

——怪我はないか、ナルヒト。

出会いは最悪だった。でも、そいつには何度も助けられた。高潔で、高慢で、傲慢で、なによりも自由で、そしてひとりぼっちの竜。

彼女の友になると決めたのは誰だ。

何が、関係ないだ。

ーキミを幸せにする、キミだけのさいきょーに賢いドラゴンさ

出会いは意味不明だ。でも確かにそいつに命を救われている。意味不明、理解不能、でも何故か嫌いになれない、不思議な感覚をもたらす、奇妙な竜。

彼女に助けられたのは、誰だ。

「俺……」

この状況を作り出したのも、しくじったのも、やらかしたのも全て。

「俺じゃん」

眩き、気づき。

「恩知らずのクソ野郎じゃん」

遠山が立ち上がる、主教が睨みつけるも止まらない。

竜がみじろぎしても、圧されない。

おじけても、退いても多分ダメだ。遠山鳴人がじっと、2人の竜を見つめて。

「ナルー」

「ここへは、パン屋の為に来た。誓って、女遊びに来たんじゃない」

「そんなことを言っつて、オレが信じるんでも」

「嘘かどうかわかるんだろ？」

「……………」

「嘘、ではないねえい……………」

「だ、だが、ナルヒト、お前がオレとの約束を関係ないとか」

「悪かった、ドラ子。人知竜。さっきのはどう考えても俺の言い方

が悪かった。例え女がどうかじゃなくても、お前らが関係ないとか言うのがおかしい」

頭を回せ、舌よ、跳ねろ。

どれだけ真摯に思っても伝わらなければ意味がない。2人の女は怒っている。そして同時に悲しんでいる。

遠山鳴人は脳を壊されている。ある女の妄執は未だに遠山を縛りつける。

1人で生きる、1人でたどり着け、1人で行け。

ある女はそこに、美しさを見出した。遠山鳴人が変わらぬように、歪なまま、欠けたまま、自分と同じ存在のまま居てくれるようにと願いを込めた。

女の呪いは遠山を鈍く、愚鈍に変えている。

「ただ、それとこれとは関係ない。そんなこと言い訳にはならない。」

「お前らは、俺の友達で、恩人だ。だからあんなこと言うべきじゃなかった、ごめん。本当にごめん」

「……………」

ピコン。

【スピーチ・チャレンジ再開】

今まで、何度も女を怒らせてきたことがある。高校の時も、フリーターの時も、そして探索者になった時も。

考えてみれば今まで自分が関わってきた女はみんな、怒りやすく、比較的怖かった連中が多い気がする。

その中でも、怒らせたなら一番怖かった女、日下部日菜との記憶。

遠山鳴人はレベルアップしない、だが経験により成長することが出来る、対応することが出来る。

多くの人と同じように。

「……思い出せ、大丈夫、俺なら出来る」

名瀬を宥めた記憶。レイン・イン、逆指名、夜遊び。傷ついた女。

【スピーチ・チャレンジ ヒント。】 20歳時、ハイ・ランウェイ  
ロップンギ店での記憶【

遠山鳴人の答えは経験の中にある。



怒った女を鎮める方法、高校を卒業して探索者になるまでのフリーター期間。無駄と思えた時間はしかし、たしかに土壌となっていて。

「竜殺し様？」

「……お姉さん。俺は今、逆指名されてるんだよな」

「え、ええ、おっしゃる通りです」

「OK。目には目を。夜遊びには夜遊びを。見せてやるよ。ニホンの由緒正しい夜遊びの力を」

丸テーブルに置いてある銀の水差し。それを掴んだ遠山は、ぱしやり。

自分の頭に水をかける。冷たい水を顔に感じる。

目を見開き、濡れた癖っ毛のある髪をかきあげて、デコを丸出しにした。

「「え？」」

「ちょ、マジで、マジでやめてよ、これ以上アホなことしないでよ、聞いてる？」

びしょ濡れの遠山。誰しもが動きを止めた。

客達のざわめきも大きく。竜殺しがイカれたとつぶやく。それは間違いだ、遠山鳴人は既に――

「安心しろよ、テルド殿。俺の間抜けの不始末は、俺が責任を取る」

「いや、ほんと待って。そのガンギマリの目でこっち見るのやめて

くれる？」

主教の言葉を無視して遠山は、竜たちに近づく。

無表情の2人の美竜、黙っている彼女たちは余計に怖く、しかし美しかった。

【スピーチ・チャレンジ ヒント。補正発生

技能 ” 竜殺し（意味深） ” により雌の竜との交渉にプラスの補正が発生します。

技能 走馬灯 ラン・ホース・ライトにより、生命の危機状態においたのスピーチ・チャレンジ中に記憶や経験から活路を見出しやすくなります】

「ドラ子」

「っーん」

「人知竜」

「……………」

問いかけるも、2人の竜は顔を背ける。

マイナスからのスタート。おじけることは許されない、誤魔化すことも許されない。

己の間抜けを濯げるのは、己の挑戦だけだ。

息を、吸って。

【スピーチ・チャレンジ目標】 “不機嫌な2人の竜を

【マセ】

すつ、遠山が息を吸って。

「ラザあアアアル！！ ストオオオオオオ！！ 1番テーブル  
ご指名入りましたああああ！！！」

男の叫び声が、ホールに響く。

二ホンの夜に彼らは生きる、夜と欲望の街に咲くのは美しい華だ  
けとは限らない。

その国の夜の街には彼らがいる。遠山鳴人の探索者になるまでのほんの少しの冒険譚。

その経験、職歴が今ここに活かされる。

「うん？」

ハロトが目丸くする。

「え？」

人々が耳を疑う。

「なに？」

ドラ子は眉を上げて。

「すぶ？」

人知竜は首を傾げた。

「おかしくなつたかな？」

主教が淡々と短くぼやいた。

「ようこそ、お嬢様方、今宵はここ、クラブ、レイン・インでの特別開店。ドロモラ商会パン事業部、ラザール・ベーカーリーホストクラブにお越し頂き、誠に、誠にありがとうございます」

言葉とノリと誇りを武器に、二ホンの夜を生き抜く彼ら。

「な、ナルヒト？」

「お嬢様、良ければ私のことはこの一夜だけ、ナル、いえ、NALとお呼び頂ければ」

ホスト。

遠山鳴人の答えだ。竜を怒らせたからホストになろう。

頭の良い人間を追い詰めると、こうなるのだ。

遠山がドラ子に向けて腰を折り、パチリとウインクをかました。

「狂ったの？ トオヤマナルヒト」

「静かにしてろ、ZENi」



「誰がZeniyō」

パチリ、髪をかきあげ指を鳴らして主教を黙らせる遠山。

本当に疲れた顔で主教が口をつぐんだ。関わったらダメだ、本能で彼女はそう判断した。

「な、ナル？」

「いいえ、お嬢様、ナルではなく、NALと。発音にお気をつけて」

「え、え？」

無表情だったアリスの顔には、いまやはっきりと困惑の色が灯る。

餌箱に、大量のカリカリを溢れてもなお、ぶちこむ続ける飼い主を不安げに見つめる猫みたいな顔だ。

「アリスお嬢様、どうなされたのですか？　いつもの灼けつく太陽の如き威光も素晴らしいですけど、戸惑う貴女もとても新鮮ですね」

「アリ、な、名前、ギャウ……　で、ではなくてだな、ナ、ナルー」

「NAL」

思わず鳴いてしまうアリスの言葉を遠山<sup>ホスト</sup>が短く訂正した。

今の遠山鳴人は遠山鳴人ではない、昔取った杵柄、ホストクラブ”ラン・ウェイ”のキャスト、NALだ。

あるトラブルのおかげで1週間でクビになったが、その時の職業の記憶は今も遠山の中にある。

ヒトの経験とは、そう簡単には風化しないものだ。そしていつも経験はヒトを助ける。

「……ど、どうしてしまったのだ？ お、オレが責めすぎたか？  
ろ、老竜、どうしよう、ナルヒトがおかしくなってしまった」

「す、ぷぷ。あー、そういえばトオヤマくん、ヤケクソになったらバカになるんだったねえい……」

遠山鳴人の突然の奇行に、ソワソワし始める美竜2人。

大いなる生物特有の大雑把さ、2人の美竜の頭の中からもはや、茶髪チカマの女メのことは消えかけていた。



「LAZ！ ST！ いい仕事だ、さつ、アリスお嬢様に、アイお嬢様、どうぞこちらにおかけ下さいませ。お飲み物は……」

そのソファに2人の美童を誘い込む遠山こと、体験ホスト歴1週間のNAL。得意なことはトイレ掃除だ。

「な、ナルヒト、だ、大丈夫か？ 大丈夫なのか?!」

「すぶぶ、じゃあ、そうだねえい…… NALくんの、おすすめが飲みたいなあ」

なんやかんや童はNALが用意したソファに腰掛ける。

4人がけの大きなソファ、NALを挟み込む形でドラ子と人知竜が位置する。

「承知いたしました、アイお嬢様。HEY！ LAZ！！ 塩とグラスと蒸留酒と柑橘系の果物とそのジュースを頼むぜ、オーウラアイ」

「ナルヒト、お前、頭が……」「NAL」「……了解、NAL」

ラザールは遠山の様子に全てを諦めたようだ。マダム・ハロトと一言二言話した後、銀のお盆に遠山の注文した食材を用意してくれた。

さすラズ。

「ほいほい、ほいっや」

慣れた手つきで遠山が酒をこしらえる。

グレープフルーツに似た果実を切り分け、果汁で飲口を濡らす。

濡れた淵に塩を塗して、ゆっくりと蒸留酒を注ぐ。コップの6分の1ほどの蒸留酒、そして上から跳ねないように果汁のジューズを入れて、完成だ。

「あら、どうして、なかなか……」

その手つきを見ていたマダムハロトがつぶやいた。彼女も知らない不思議な酒の割り方。

少なくとも、コップにまぶされた塩や、蒸留酒と果汁を混ぜるその飲み方は帝国には存在しない。

カクテル、現代においてそう呼ばれる酒は、この世界には宗教的な理由からまだ認知されていない方法で。

「ソルティ・ドッグです。スノースタイルの塩の舌触りと、なんかいい感じのフルーツのさわやかな香りをお楽しみください」

「すぶ。トオヤマくんが、ボクのために作ってくれたお酒……」

うつとりとした顔で、人知竜がストローグラスを受け取る。すつと、男から渡されたグラスを傾ける人知竜のその姿はホストクラブに通い詰める地雷系美人そのまんまだ。

「な、老竜、貴様……」

「すぶ。なんだい？ 幼竜、ああ、美味しいなあ。舌を触る塩辛さはしかし、フルーツの甘酸っぱさとウィカ酒の香りと混ざり合い心地よい。んん…… 竜殺しから渡される酒のなんと芳醇なことだろうかねえい」



一瞬で機嫌を良くしたらしい人知竜に向けて、ドラ子がわなわなと身体を震わせる。

彼女はどうかやらまだ事態を飲み込めていないようだ。

「い、いや、これ、これは、これは明らかにおかしいのだ！ な、ナルヒトはこんな感じの奴ではないだろう？ 吹っ切れるにしても前の時はもっと真面目な感じでー」

「アリスお嬢様、いかがなされましたか？ ……こつこついう俺は嫌いですか？」

喚くドラ子に、遠山がすつと身体を寄せる。びくり、ドラ子がソファに預けていた身体を浮かせた。

「ギヤ、ウ………… や、やめよ、ナルヒト、そんな目でオレを見るな…………」

ドラ子が顔をそらす、そらしたかと思えばちらりと遠山、いや、NALの顔を見てまた、目を逸らす。

その類はゆっくり、赤くなっていく。怒り、戸惑い、それとも。

ピコン

【竜殺し（意味深） 発動】

流れるメッセージ。しかし、遠山はそれを見ていない。

ただ、自分の伝えなければいけないことをまっすぐ、友人に届ける。

「アリスお嬢様、いや、アリス、聞いてくれ。さっきは本当に悪かった。オレ、実はバカだからさ、そういうのわからないんだ」

「な、なにを」

NALとして、遠山鳴人の言葉を伝える。

「お前がなんで怒ったのか、泣いたのか、本当にわからないんだ。でも、嫌だ。友達が泣くのが、嫌われるのは嫌だ。だから、アリス。教えてくれよ。何でお前はそんなに怒ったんだ？」

遠山は嫌だった。パン屋の評判もちろん理由だが、それよりもドラ子を泣かせたままなのが嫌だった。

「は、は、は？ お、怒って、なぞ、いや、そもそも、貴様、なん、なんなのだ！？ 冷たいかと思えばふざけて、ふざけたと思えば真面目にな、なりおって、オレは、オレは、……なんで、怒って……」

膝をついたまま、遠山はドラ子を見つめる。

互いに無意識、しかしゆっくりとドラ子の手、遠山の手、ソファに置かれた2人の手がゆっくり互いを探すように、近くー

「ねええい、NALくううん、すぶぶ、寂しいなあ。ボクのお酒を作ってくれるはずなのに、幼竜にかまいすぎじゃあないかい？」

ぎゅっと、首に感じる暖かさ。そして背中に感じるこつの膨らみ、柔らかさ。

人知竜が、遠山鳴人の背中に抱きついた。やばい、すごくいい香りがある。

それは、上座の生物の魅力。人より優れた遺伝子は呪いにも似た魅了と変わる。人知竜にその気はなくとも、人は皆彼女に魅せられる。

人の枠を超えた古い魔術師達とて抗えうことの出来ないそれが遠山に向けられて。

ピコン

メッセージが、遠山の視界に流れる。

【上位生物（竜） による”魅了” による影響、精神対抗ロール開始、対抗技能”頭ハツピーセット” により魅了を判定なしで対抗成功、やるじゃん。竜の色に惑わされて鼻の下伸ばすのとか、見たくないし】

だが、ホストには効かない。

ピンチになったからホストになろうと判断するような人間に色も魅了もへったくれもなかった。

ホストはコマされるのではない、コマすのだ。

「おっと、アイお嬢様。これは大変失礼を。貴女の髪、本当に美しい。月の光をまぶしてるかのようだ」

遠山が反転、背中に抱きつく人知竜にあえて体重を預けて彼女と至近距離で向き合って。

「……！ すぶぶ。ああ、キミはやはりいいなあ。キミの言葉はとても心地よいよ、トオヤマナルヒトくん。でも、その月の光が偽物だと知ったらキミはどう思うかな」

人知竜が、ぱあつと顔を輝かせ、しかし次には妖しく微笑む。月蝕の如き笑顔にもしかし、NALは怯まない。

完全にここはもうホストクラブ、レイン・インだ。

「俺が美しいと、俺が綺麗だと感じたんだ。そこに偽物も本物もない。何度でも言う、本当に綺麗だ」

便所掃除ナンバーワンホスト、NALが竜をコマす。

「すぶ。推しの口が上手い。すぶすぶ、聞いた？　ねえ、蒐集の竜、聞いたかあい？」

嬉しくてたまらない、そんなふうにはおを緩めた銀髪美女が、遠山の向こう側のドラ子に鼻息をむふーっと向けて。

「……………ナルヒトは、NALだった……………？」

だが、ドラ子は混乱している。

ホストに対応できてない、ホストは竜すら惑わすのだ。

「ああ、こりゃだめだねえい。シンプルドラゴンめ、あれだけ機嫌悪かったのもう、飲まれちゃってまあ」

すぶぶと人知竜が笑う。微笑ましいものを見るように、幼き竜に目を細めて。

「アイお嬢様」

「う、うん？ な、なんだい、トオヤマくん。その、すぶぶ、そんな見つめられると嬉しいんだけど、少しボクでも照れるんだけど」

人知竜が僅かに、身を引いた。しかし、NALはその距離を詰める。

彼女にも、きちんと伝えなければいけない言葉がある。その涙を遠山は見えていたから。

「言つのが遅くなって申し訳ございません。あの時、助けてくれてありがとうございますございました。貴女も俺に関係ないことなんてない。俺の言葉が間違っていました」



そう、シンプルな答えだ。人知竜には救われている。教会騎士とのトラブルは彼女の介入なしには全く違う方向に終わったかもしれないのだ。

恩知らずほど、この世で醜いものはない。遠山はそれにはなりたくなかった。

「あ、ははは。嘘、じゃない。ああ、嘘じゃないねえい。キミが、ボクを見てくれている。……うん、トオヤマナルヒトくん。いいよ、何度だって、いつだって、ボクはキミを助けるから。お安いご用さ」

流れる月灯りのような銀の髪。それを何度も何度も手で梳きながら人知竜が俯いてつぶやいた。

「……貴女が何を言っているのか、やはりよく分かりません。それでも」

この竜の言葉は不思議だ。何を言ってるのかよくわからないのがほとんどだ。

だが、それでも遠山はこの言葉を言わないといけない。

「あ、りがとうアイお嬢様、それと今の俺はNAL、です」

ぱちり、ホストウィンク、悲しいことに竜のみしか効かないであろうそれをNALがかます。

「しゃぶ」

しゃっくりのような小さな悲鳴を人知竜が。

「も、もっかい、もっかい名前呼んでくれない？ あ、ああ、今度はもっと、剣呑な感じ。こっ、なんて言うんだろ、愛憎まみれて殺さないといけないけど愛した相手を呼ぶ感じで、呼んでくれない？ あ、ああ、ホスト、ホストだもんね、お酒？ お酒頼んだらいいの？ 高いの頼むから、1番高いの頼むからさあ」

次の瞬間には鼻息を荒くして、すごい早口の彼女が興奮した様子で詰め寄ってきた。

人知竜はホスト遊びには向かない竜だった。

「……ずいぶん愛想を振る舞うではないか。ナル「NAL」……NALとやら。竜にそのような戯れ事が通じるとでも？」

冷静さを取り戻したらしいドラ子の声に、NALがまたもや反転構成。出来るホストにとって同時攻略など当たり前の戦略なのだ。

「……アリスお嬢様」

「む、ぐふう。……なんだ」

竜殺し（意味深）が満遍なく、竜達に刺さる。冷淡ない言葉と裏腹に、ドラ子からのプレッシャーはどんどん穏やかなものに変わってゆく。

「竜に通じなくても、貴女に届けばいい。どれだけ言葉を尽くして

も足りんないのなら態度と振る舞いで。アリスお嬢様、先ほどの答え、俺はまだ聞いていませんよ」

「だ、だから、近い！ 近いのだ！ 今の貴様はやはりおかしいぞ！」

「教えてほしいんだ、アリス、友達だろ」

上回っている。

遠山鳴人はいま、2人の竜を前に完全に上回っている。

観客の誰しも、百戦錬磨の夜の住人たるキャスト達も皆、その立ち回りに啞然としていた。

彼らの想いは一つ。

(ラザール・ベーカーホストクラブってなに?)

だが、誰しもが竜をコマすホストに畏敬を抱きつつあったのだ。

「ギャ……ウ。う…… ってこい……」

そして、ドラ子に限界が訪れる。1000年生きた幼竜にもしかし、ホストはまだ早かった。

「うん？」

「酒だ！ 酒を持ってこい！ いや、オレだけではない！ ここにおる全てのこの街の人に酒を振る舞え！ 皆の者、歡喜にむせべ、このオレ、蒐集竜が貴様らに酒を奢ろうぞ！」

ドラ子を選んだ道は単純、もうシラフではホストと化した遠山とまともに話せなくなっていた。

竜はみんな、ホストクラブの遊び方が下手だった。

「ハイ！ アリスお嬢様から注文入りましたア！ LAZ！！  
ST！！ お客様のお言葉通り、会場の皆様へお酒の用意をお願い  
シヤスシヤスのシヤース！」

ノリノリのNAL、ダンジョン酔いと場酔いと覚悟を決めた男に  
もはや退路も、理性もなかった。羞恥心すら。

「……LAZ、あれ、どうすんデイス」

「ST、慣れるしかないさ。アイツは追い詰められるとあんな感じ  
になる、頭が痛いな」

「……その割には楽しそうな顔デイスね。牙が見えてますデイス」

「君もな。口角が上がってるぞ」

ヘルプのホスト2人、いつのまにかタキシードに着替えている2人もなかなかノリが良い。

騒ぐナンバーワンホスト、NALに向けてそれぞれ互いだけの思いを込めた笑みを浮かべている。

「ふん、アレに負けたのがアホらしいだけデイスよ。さて、マダムうちの、……ボスが言うには竜の奢りらしいデイスが。どうしますデイスか？」

ストルがため息混じりに、この店の主人に声をかける。

「……困りましたわ。まさか、こんなことになるとは。ラザール様、ストル様、あなた達のご友人はとんでもないお方ですね、レイン・インが乗っ取られてしまいましたわ」

NALに店を奪われた夜の女帝はしかし、どこか愉快そうにため息をついて。

「姉さん……」

「ハイネ、全キャストに伝えなさい。メインホールに全員集合、いと尊き竜がこの店で酒盛りを始めてくださるわ。竜のお言葉、竜の望み通り、酒樽を空にする勢いでお配りなさいな」

「……はい！」

キャスト達が、その号令のもと一気に動く。

会場に集まる人々に、レイン・イン秘蔵の銘酒、美酒が振る舞われる。

それは、紛れもなく竜の奢り、振る舞い酒。



建国伝説と同じ光景が、ホストによってもたらされたのだ。

「よい！ くるしゅうない、遍く広がるヒトよ！ 今宵は竜の奢りぞ！ 飲めぬなどと言うものはおるまいな！」

竜は騒ぐのが好き、お酒も好きで、お祭りも好きだ。

ドラ子も寸分変わらず、竜である。

「り、竜の奢り？！……」

「帝国の建国伝説と同じじゃないの……」

「レイン・イン、来てよかった……」

「あの男、何者だ……」

「ドロモラ商会と懇意にしてる冒険者だとか」

「あの銀髪の女、人知竜……？ 全知竜という魔術師の護り竜の話は聞いたことがあるぞ」

「じ、人知竜さま…… なん、で、そんな人間種の男なんか……  
ね、寝取られた……」

「竜の奢り！ 竜から振舞われた酒だ！ 伝説の建国当代の貴族の連中や初代皇帝と同じだぞ！」

「蒐集竜様に感謝を！ 貴女の金色の光が帝国を照らさんことを！」

「全知の竜に、叡智の願いを！ 貴女の探究が我らと永遠に共にありますように！」

「『『『『』』』』』 竜万歳！ 竜万歳！ 竜万歳！ 我らが偉大なり、尊き竜！ 世界の柱にして、護り竜！』』』』」

「ホストもいいぞー！！ もっと頑張れ！」

「あわわわ、人知竜様が、雌の顔に…… かわよ……」

一気に湧くホール。

熱狂、帝国民にとって特別な存在たる竜からの施しなど貴族や皇帝一族であってもそうそう与えられるものではない。

ホールに集まって、竜と竜殺しの痴話喧嘩を見せつけられていた

人々は今、歓喜と熱狂の渦に包まれていた。

「蒐集竜さま、よろしければこちらを。王国の樹海の深奥、千年樹のウロで発酵された”樹酒”にございます。当店で最も価値ある酒にて」

熱がその場を上げていく。

人の熱狂に酔いそうなその空間に、一際強い酒精の香りが広がった。

マダム・ハロトとキャストが押し車で竜に差し出すのは、奇妙な酒樽だった。

それは普通の酒樽ではない。歪にねじ曲がり、欠けている。

木だ。

切り株をそのまま樽に流用した、知る人ぞ知る秘密の酒。” 副葬品”と希少性を同じくする王国産の秘酒。

木のウロに溜まるのは、金色の酒。

ドラ子が、目を輝かせた。ぺろり、赤く長い舌が唇を舐める。

その瞳は、縦に裂けて瞳孔が開いていた。

「ほう、女。なかなか良い趣味だ。良い色だ、美しい琥珀の色がオレ達、竜よりも古い歴史を感じさせるではないか、くるしゅうない、請求は竜大使館へ送れ」

「はは……」

街単位の予算、冒険都市並みの巨大都市ならば払えるだろうその金額の酒。

マダムハロトが、ドラ子に角で出来た酒杯を差し出す。

満足そうにそれを受け取ったドラ子が、角杯木のウロに突っ込み、酒を掬い取って。

「む、良いな。強い酒精、火を吹きたくなるほどの辛口であるが舌に転がしていくうちに温かな甘さが生まれる。良い酒だ」

「ごくり、ごくり、ごくり。角笛みたいな杯をドラ子が何度も煽っていく。」

酒樽に並々注がれているはずの琥珀色の酒はみるみる間に少なくなっていた。

「あ、アリスお嬢様、その、そんなに飲んで大丈夫ですか？」

「くんむ、うるひゃい、貴様のペースに乗せられんためには、オレも酔わねばやってられぬ。ニヤルヒト、きしゃま、まだオレはきさまときちんと話さねばならぬのだ」

「人知竜様も宜しければ……」

「すぶぶ、ああ、ありがとう。後で頂くからそこに置いてくれ。竜ですら酔わせる”樹酒”、マダム、なかなか恐ろしいねえ、世界に少ない”漂竜物”アンチ・ドラゴン・ウエポンの名を冠する品の1つじゃあないかい。……どこから仕入れたのかなあ？」

人知竜はその酒を口にはしなかった。目を細めて、静かに、しかし有無を言わさぬ威圧をもって、ヒトに問う。

「ええ、あるお方と親交がございました。特別に手に入れることが出来ました」

果たして、マダムハロトのその冷静さはどこから来るのか。

「へえ……」

人知竜はそれ以上の追求を止めた。

「うまい、もういっぱい！ にやる！ ふ、ふかか！ ニヤルヒトが近くにいてももうおかしくならんぞ！ よい、許す、もちつとちこつよれ！」

すっかりご陽気ドラゴンと化したドラ子が、遠山に迫る。

顔は耳まで真っ赤だ。

「OH・お嬢様、いけないな。あまり飲み過ぎはお体に触る……」

「オレの言が聞けぬのか、生意気で、ああ、ほんとに面白き生き物よ。じゃあ、オレが近寄ろう」

NALのホストムーブもしかし、酔っ払いの竜には効かない。ぎゅーと、竜の力で身を寄せられるNAL。ものすごい力強かった。

「あれ、やべ。ホストがきかねー、LAZ！ どうしたらいい？！  
LAZ！ ヘルプ！！」



「NAL、お前がナンバーワンだ」

「お前、助ける気ねえな！」

L A ZがNALをあしらう。助けは期待しない方が良さそうだ。

「ナル、ニヤル、オレ、オレの話を聞け、なんで、貴様はオレにそんな意地悪なのだ」

ふっと、ドラ子の勢いがしゅんとしぼんだ。

それから、ぼたり、かちり。

また、涙。ドラ子の蒼い瞳に珠のような涙が浮かんでいて。

「待って待って、ドラ子、お前泣き上戸なの？ あ、やべ。素に戻った。あー、えー、アリスお嬢様、貴方の話ならいくらでも」

ホストもそろそろ時間が近い。ラザール・ベーカーリーホストクラブは1部営業のみなのだ。

「う、ううう、わからぬ、わからぬわからぬ。ナル、貴様はオレの友人だ。友人とは理解し合うものだ和本に書いてある、でも、オレには貴様がわからぬ、それがとても苦しいけど、理由もわからぬ、オレは……」

目に涙を溜めながらつぶやくドラ子。力なく、その顔を遠山の肩に預けた。遠山も、それを拒むことはない。

「……貴様は、今はナルヒトではないんだな」

ふと、アリスが小さく。喧騒の中、遠山だけにしか聞こえぬ声量でつぶやいた。

「NAL、とお呼び下さい。アリスお嬢様」

ホストも正念場、NALが頷きながら言葉を返す。

「ふん、バカめ。……では、NAL、オレには友人がいる。オレの退屈を殺してくれた大切な友人だ。だがな、其奴は意地が悪いのだ。其奴はよくわからぬ奴なのだ。其奴はたまにとても腹が立つのだ。でも、どうしてかな。気になって仕方がない」

ぼつり、アリスが語るのは友の話。彼女にとっての初めての対等な友人で、彼女を殺したある男の話だ。

「其奴をずっと見ていたい、近くにいるようで、とても遠い場所にいる其奴を理解したい。それだけのはずなのに、なんでかな。……奴がオレに興味がなさそうなのが、とても、辛い……」

「ゆっくりで結構です、続けて」

「……オレはどんどんおかしくなっていく。でもそれが悪くないと思う自分もいる。……其奴に聞かれたのだ、何で怒るのか、悲しむのかって。……オレには、わからない。この気持ちがなんなのか、オレは奴にどうしてほしいのか。わからないから、答えられないのだ」

竜は、冒され、変わり始めている。決して完成せぬ自我はしかし、進み続ける。その身に灯る欲望を直指して。

その有様は、竜をすらいー

「アリスお嬢様、大丈夫です。その友人も貴女と同じですから」

「む？」

「そいつも多分何も分かっていません。同じですよ。ただ1つ確かなのはそいつもきつと、貴方には嫌われたくない。……友達少ない

ですから」

NALが小さく、誰かのことをつぶやいた。

「く、か。ふ、かか。……なんだそれは。ふん、バカめ…… いや、オレも同じか」

「ええ、同じですよ、きっと」

2人が身を寄せ合いながら、酒宴の中2人だけの会話を交わす。

これは、ある竜と、その竜殺しの一夜の会話、ただの戯言に過ぎないのかもしれない。

「む、オレが馬鹿と言っのか。ふん、まあ良い。今は、酔ってるから許す」

「アリスお嬢様、改めて今度、遠山鳴人がきちんと約束を果たします。どうか、それをお待ち頂ければ」

「……ああ、分かった」

だけど、2人にはきつとそれが必要だった。

友達の少ないもの同士、ただゆっくり言葉を交換した。

「すぶぶ。お子ちゃまだねえい、蒐集の竜よ、少しは成長したかと思えばやはりキミはまだまだ子供だ」

その世界に気にせず割り入るものがある。竜と竜殺しの空間に入るのなんて、竜しかないだろう。

「貴様、大人しく酒でも飲んで寝ているよ」

ドラ子がムツとしながら、ぼやく。竜以外の存在ならば震え上がるその威圧も、古い竜にはなんのその。

「そう邪険にするなよ。ねえい、NALくん、ボクはね、その竜とは違うよ」

ぎゅっと、人知竜が遠山に身体を寄せる。華奢なのに、妙に肉感的で柔らかな感覚が遠山の頭をパチパチさせた。

「おっ、と」

「ああ、その目、何も変わらない、自分の夢しか見ていない、自分のたどり着く場所にしか向いていないその目。……とても、素敵だ」

うつとり、人知竜がその男の顔を、目を見つめる。

夜の闇よりも深い色の瞳を遠山もまた見つめる。何故だろうか、

とても綺麗だと思ってしまった。

「あ、アイお嬢様、どうしたんですか。困るな、貴方に見つめられると俺のライオンハートがトウギャザーしてしまいそうです」

色香に負けないために、なんとかホストを保つ。

「LAZ、NALもそろそろ限界に見えるのデイスが」

「ST、そつとしておこう、俺たちがアレに関わるべきではない」

その様子を眺める竜殺しの愉快な仲間たちは目線を外すことを選んでいて。

「すぶぶ。完成せぬ自我はしかし、周りをどんどん侵していく。キミの在り方は多くの人を魅せていく。キミの欲望は多くの人の願いの呼び水となっていく。いいじゃないか、歪に完成した人よりもキミのような決して完成しないものの方がボクの好みだ」



「なにを」

「ボクは、幼竜とは違う、ボクはボクの心を知っている、この感情の名前を知っているんだ」

「トオヤマナルヒト、貴方を愛している」

「……………あ、え？」

「ずっと、ずっと、ずーっと前。ボクも知らぬ、キミも知らぬ、誰も知らない物語の中でキミとボクは出逢い、時を過ごした。ああ、いいんだ、キミが何も知らなくても、ボクが知っている必要さえない。あるのは記憶、温かな記憶。ボクであり、ボクではないある竜の思い出。ああ、でもね、このボクがキミに惹かれる理由はそれだけで十分だ。キミのためならあらゆる悪虐をなそう。ヒトの営み、当たり前の明日、笑い合う自由、心待ちにする未来、そういうのも全て踏み躪ろう。ああ、これこそ愛なんだ。ボクはね、キミが大好きなんだよ」

「お前、なんで」

「キミが全知の竜を人知の竜に変えたんだ。すぶぶ、その責任は取ってもらっからねえい……」

「好きだよ、トオヤマくん」

「……あ」

「――敵だよ、貴方を好きと囁く女。」

「――貴方は決して靡かない、貴方は決して満足しない。だって、貴方は私と同じ。必ず1人で辿り着く」

ある女に施された機能が、発動する。その女の願望はただ一つ。

己の理想、己の解釈通りの遠山鳴人の維持。

狂った女の妄執は、遠山をたとえ世界を隔てたとしても離さない。

遠山鳴人は、己へ向けられるあからさまな好意を受け取ることが出来ない。

「て、き」

目の前の恩人、恩竜に対して自分の中のどこから湧き出るかも分からない嫌悪感が滲み出――

「敵じゃないよ」

人知竜の声は、穏やか。

ゆったりとした風でさざめく湖の岸边、そんな声。

「ああ、キミの中には色々なモノが入っているんだね。血生臭い知識の眷属、胡散臭い異境の化け物達、そして、本当に女臭い妄執」

そんな声と裏腹に、がしりとその華奢な身体からは想像出来ない強い力。

人知竜が遠山のほおを両手で挟み込み、がっちりとホールドする。

「これは宣戦布告だ」

遠山と人知竜の顔の距離は近い。その闇色の瞳、底知らぬ仄暗い水底、その最奥に溜まる泥よりも暗く、見えぬ瞳の色。

「キミを捉える妄執など知ったことかよ。覚悟しておけよ、くそアマ。このボク、人知竜の男に余計なことしやがって。どんな場所にいても必ず追いつめて、滅ぼしてやるからな」

その言葉は遠山に向けられたものではない。遠山を通して、ここではない別の場所で生きる狂った女へ向けられた呪詛の言葉。

大いなる存在、世界の柱、古い竜からの言葉。

多くの人は知らない物語、ここではない世界、今ではない時間。

人知竜の悪行、ある島への攻撃の苛烈の理由――

これが全てではないにしろ、きっと、大きな要因の一つだろうか。

「アンタ、何を、言って」

「教えない、重い女だと思われたくはないからねえい」

今更感がものすごいことをさらりと、人知竜がつぶやく。いたずらげに微笑むその顔は、少女のようでもあり。

「おい、老竜、きしゃま、オレの友に、近いのだ。はようそのきしやない手をはにやせ……………」

竜すら酔わす古い樹に宿る酒精。それに酔って、ふにゃふにゃになりつつあるドラ子がふらりと立ち上がる。

「おっと、静かにしてると思ったらまんまと樹酒をたらふく飲んでるねえい…………… NALくん？ 申し訳ないけど、そろそろお暇させてもらおうかな。…………… まあ、今回はボク達の早とちりだったみたいだし、キミの心からの言葉も聞けたしねえい」

「いやだ、まだ、オレは帰らぬぞ。酒だ、さけを、もっへえ、こい。この、オレ、しゅーしゅーりゅーの「ごんなるぞー！」

「恐ろしい酒だねえい…………… 幼竜をここまで酔わすとはさ。NALくん、彼女に言い聞かせてくれないかい？ お客様をきちんと家に帰すのも、ホストの仕事だろう？」

「……………ええ。LAZ！ 1番テーブルのお客様お帰りになられま  
ーす！ お見送りの準備をシャシャースー！！」

「むー、やだ。まだ帰らん。どうしても帰らせたいなら、ニヤル、  
貴様もこい、一緒に帰るぞ」

「まだ営業中なので無理でーす！ ……ドラ子、今日はありがとう。  
……………また遊ぼう。今度は俺が誘うからよ」

「……………やくそくだぞ。やぶったら、こんどこそゆるさん」

「ああ、分かってる。竜とピトとかじゃなくて、俺とお前の約束だ」

遠山がドラ子をまっすぐみつめる。今度は誤魔化しもなにもない。  
ただ、言葉だけがそこに。

「分かった…… 帰る……」

「あれね、NALくん、ボクには何かないのお？ なーんか幼竜にだけ優しくないかい？」

「あー、アイ。正直やっぱアンタが何言ってるのかほとんどわからないんだけど、でも、アンタ良い奴だな」

「すぶ？」

「いや、なんののかんのドラ子の面倒見てくれてるし。言ってることはマジでわかんねえんだけど」

「……キミの前だけさ、ボクが良いことをするのはね。おや、トオヤマくん。おでこに虫が留まっているよ」



「え？」

柔らかなせつけんのかおり。

遠山が竜の言葉に釣られて自然と顎を上げるような体勢に。瞬間、その香りに包まれた。

手。

首元に、温かく、柔らかく、そして濡れたような感触。

人知竜が、遠山の首、喉にに口付けを。

「え」

「あ、あー！ あー！ この、老竜、貴様……！ 貴様貴様貴様貴様  
……！」

ドラ子がわめく、金色の焰が彼女の身体にまとわりついて。

「すぶぶ、じゃあね、ナルヒトくん。たのしい夜だったよ。……今度は2人きりで、会いたいな」

しかし、ぱちん。人知竜が薄く笑い指を鳴らすそれだけで、2人の美竜は夢のごとくその場から去っていった。

「……消えた」

ラザールが、ほっと息をつく。

「アレが、竜。自由すぎませんかディスプレイか？」

言葉の割にケロっと、そして途中から少し不機嫌気味だってスト

ルがぼやいた。

「ああ、我らがボスと同じくらい、傍若無人で厄介な方々さ」

ラザールの言葉に、ストールが鼻を鳴らして答えた。

何故ストールが不機嫌なのか、ラザールはもうあまり考えないようにして、この場を乗り切ったアホに声をかける。

「ナルヒト、なんとかあったな。さて、この惨状をどうするべきか……ナルヒト？」

ぼんわり立ち尽くす遠山に向けて、ラザールが声を何度かかけて。

そして、しばらくして遠山がぼんやりした顔で、答えた。

「や、やべえ。顔のいい女にキスされた…… ラザール、俺、も  
しかして今モテてたのか？」

間拔けな言葉、酒宴はさらに盛り上がり、レイン・インの夜は続  
く。

「……ああ、モテモテさ。羨ましいことだよ、ほんとに」

ラザールは、モテモテ大作戦を完遂した友人の肩を優しく叩いた。

58話 泥沼・キラキラ・ご指名サンキュー（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを！ご覧ください！

＜ 苦しいです、評価してください ＞ デモンズ感

59話 そして書く者たちよ

「あらあら、流石です！ 兄上」

豪著な空間だった。

王城の最上階、王都を一望出来るパノラマ広がる大広間。

真面目な平民が一生働いても買うことの出来ないだろう高価な絨毯が敷き詰められた広間。

その国の歴史を語る様々な調度品が並び、部屋の中には大きな椅子。

国の全てを決める者の椅子だ。国を統べ、民を導く、その責務に選ばれし者の名前は”王”。

この国は、”王”の国。

「上姉様も、お父様もお母様も2回目でダメでしたのよ。なのに、兄上ときたらもうこれで6度目の成功！ ふふ、流石は王位継承者第一位、豪運もまた王の器の一つですね」

明るい女の声が響いた。

どこまでも明るく、明るく、明るく、この世の全てを照らし出す光の如き声。愉快げに、心底たのしくて仕方ないと子どもが笑うような声だ。

「女狐が……………」

対照的に漏らされるのは悲痛な声。

怒り、憎しみ、しかしそれを決して晴らすことは出来ぬと理解し

てしまった絶望の声。

「まあ、ふふ。傷ついてしまいます。兄上は昔からからお口が悪いのですから」

女と男が、いた。

銀のテーブルを囲んで対面に座る両者の顔色はしかし、対照的。

片や女、愉快そうに。片や男、憎々しげに。

美しい顔をした2人、ゆったりとした女の垂れ目と、すこし垂れ目気味の男の目は血の繋がりを表す。

「……貴様が、僕を兄と呼ぶな」



「あらあら、怒られてしまいましたね。ふふ、ああ、懐かしいです。覚えていますか？ そろそろこの季節は中庭にラモエバの花が咲く頃です。兄妹皆でよく乳母の言いつけを破ってお花遊びをしたものですよね」

テーブルの上、用意されている茶に女が手を伸ばす。銀のティーカップはしかし、一切の音を立てることなくすと、女の口元に運ばれる。

「……………お前と思い出話をするつもりはない。早く食べる、貴様の番だ。」

男が、薄い金色の鎧とマントを身につけた凡そ茶会にはそぐわない戦装束に身を包んだ美男が、つぶやく。

「ふふ、どれにしましょうか。あーん。ああ、美味しい。宮廷料理人のフラットのことは覚えていますか？ 彼のレシピで作らせた砂糖菓子、全部綺麗で美しいですよね」

躊躇いもなく、女がフォークを広げられた色とりどりの茶菓子、砂糖で象られた花のようなお菓子へ。

ぱくり。頬を緩ませ、ニコニコ笑うその顔は食を心からたのしんでいる者の顔だ。

「……………気狂いめ、お前が手慰みに殺した者の名前をよくもそんな顔で」

女が躊躇いもなく茶菓子に手を伸ばしたことに對して、男は心底侮蔑の目を向ける。

いや、それは侮蔑というよりもむしろ……………

「あは。まあ、人聞きの悪い言い方。だって傷ついたんですもの。わたくし、彼のこと気に入っておりましたのに。トレナの件でフラットしたらすごく怒るんですもの。……………怒られるのは嫌なんです」

「……呪われたクズめ。死に腐れ」

「あは、それはわたくしとお兄様どちらのお話でしょうか？ ふ、ふふふ、さあ、次はお兄様の番ですよ。大丈夫、毒入りはたったの1つだけ」

ぴくり。女の言葉に、男が身体を僅かに揺らした。

彼らのお茶会は、つまりそういうことなのだ。

「……貴様の言葉に嘘はないな？ この悪趣味な遊戯、僕が勝てば、我が臣下、そして我が家族の安全を約束出来るという言葉に」

「ええ、古い血にかけて。そして同時に兄上の勝利はわたくしの死を意味します。竜教団を率いて、今まさに、王国という1つの国を終わらせようとする悪逆の徒の死を」

国の命運を決めるお茶会だ。

王国において静かに、夙く、そして容赦なく起こった”竜教団”によるクーデター。

今、それは佳境の時を迎えていた。

「お茶会を続けましょう、兄上。大丈夫です、貴方が真に王の器ならば、王の国の長に相応しい人ならば、わたくしの浅ましい”幸運にも負けることはございませんから!”」

「……………はっ、は」

王子の手が、止まる。脂汗が、その端正な顔つきをゆっくり滴り落ちた。

そのゲームのルールは至って、単純。互いにお茶とお菓子をつまみながら談笑する。

お菓子を食べるのは必ず交互、そしてお盆に広げられた様々な茶菓子、クッキー、砂糖菓子、スフレ、パンケーキ。

それらのなかにはたった一つ猛毒入りのアタリが紛れ込んでいて。

運が悪いほうが、いつか死ぬ。そういうゲームだ、王子の手が止まるのも無理はない。

「あらあら、兄上、手が止まっていらいっしょいますね。うーん、どうしたことでしょうか？ また何人かウイスにシめて貰えばわたくしのお茶会を続けてくださいますか？」

女、緑髪の女がサイドにまとめた髪の毛をいじりながら椅子に深く背中を預けた。

町娘の奔放さと、王に連なる者としての上品さが所作に滲み出る。

だが、その言葉の邪悪さは隠しきれない。

「次はどいつをやるよ、親戚のガキ連中か、有能な宰相殿か、それとも最愛の奥方か？」

彼女のそばに立つ長身の男、真っ赤な短髪に黒い革鎧の男が、ちらりと視線を向ける。

広間に敷き詰められた捕虜たち。後ろ手を縛られて虜囚と化した王子の臣下や、家族たちだ。

「ま、待て！！ 続ける、続けるから！ 僕の臣下に、大切な人たちに手を出すな！」

男がこのふざけたゲームを降りない理由として、捕虜達は生かされていくに過ぎない。

玉座の間には数多くの死骸が転がる。騎士鎧に身を包んだ死骸が畳まれるように潰れていたり、壁にめり込んでオブジェとなつて死んでいたり。

「まあ、勇ましい。大丈夫ですよ、兄上がわたくしとお茶会を続けてくださる限り、わたくしからこれ以上兄上の大切な方々に手を出す気はありません」

「ぬけぬけと、どの口が……」

「いやほんとにな。王子さまとのゲームのために何人見せしめに殺させたことかよ」

「……狂人どもめ」

「殿下、どうか、どうかご無事で。私は、リズはあなた様のことを信じています！」

苦々しくつぶやく男に囚われた捕虜の1人、花のような美しい美人が繋がれたまま声を上げた。

「うう、わたくし、涙ぐんでしまいます。義姉上。なんて健気な。あんなに震えてなお、愛しい人のために声を上げる。人が恐怖に抗う姿のなんと美しいことでしょうか」

緑髪の女が涙を拭うような仕草をみせる、ふざけているように見えて女は割と本気で感動していた。

「殿下！！ オルト王子！！ どうか、どうか、我らのことはお気になさらず！ 逆臣フォルトナをお討ちください！ 殿下、貴方様ならば、いや、貴方にしかその狂女は打ち倒せませぬ！」



同じく初老の鋭い目をした捕虜も叫ぶ。青あざを身体中に作りながらも王家への忠誠を胸に、その捕虜は自らの主人へと鼓舞を向けた。

「……リントナ宰相殿、狂女なんて、傷つきます。そんなにわたくし、変かしら？　ねえ、どう思う？　ウイス？」

「あー？　まあ狂ってることには間違いないねーだろ。お前以上のイカレ女がいたら見てみたいもんだ」

「よよよ、私の英雄まで冷たくて悲しいです。ウイス、傷ついたので、死んでくださったらいいなあ」

ばしゃん。

ガラスが、割れる音。玉座の間を覆う星見の天窓。そらを突き破る何か――

「あ、ちょ、おまー」

ぶちゅ。

赤い華が、咲いた。なんの脈絡もなく、なんの予兆もなく、なんの理由もなく。

たまたま、男の頭に空から天窓を突き破って、岩が降った。

「あらあら、たまたまです。運が悪いことですね、私の英雄」

くすくす、頭を岩で潰された赤髪の男を見下ろし、緑髪の女が喉を鳴らす。

「な、なにを、貴様、本当にイカれているのか?!」

「あら、兄上。どうなされたのです？ 顔色が悪いじゃないですかよ」

「お前、お前、何を、何をしたんだ?! 何故、自分の臣下を?!」

「え?」

「その男は貴様の臣下だろう?! 僕の騎士や、王国の軍を滅ぼした怪物だ、だが、貴様にとっては臣下だろう?! それを、そのおぞましい力で……!?!」

「アハ」

王子の声を、女の笑いが遮って。

「……なにが、おかしい、何を笑って」

「いえ、ごめんなさい。兄上も間違うことがあるのだと可笑しくて……  
今、こうして目を瞑っても昨日のことのように思い出せません。王族として仲睦まじく過ごしたあの幼少期、ええ、わたくしの人生においてもあれほど、たのしかった時代はございませんでした、

思えば兄上、あの時から貴方は完璧な存在でした、何も間違えず、ただ、ただ、完璧だった」

「だ、だから、だからお前はなんの話をして」

「ふたつ」

「は？」

「ふたつほど、兄上のお言葉に間違いがございます」

「まず一つ、その頭の碎けた脳みその風通しが良い男はわたくしの臣下ではございません。そうですね、ウイス・ポステタス・ヘロスは、わたくしの英雄にございます。わたくしに従う者ではございません」

「ヘロス…… まさか、ヘロス家の生き残り？ 大戦の終わりに勇者によってあの忌まわしい血統は絶たれた筈だ！」

「生命とは道を見つけるものですよ、兄上。ああ、そして2つ目の兄上の間違いはー」

「いってー、くそアマ、屁をこく感覚でよー、てめーの”幸運”振り回してんじゃあねえよ、死ぬかと思ったわ」

呑気な声が響く。

潰れたトマトのように赤い血を絨毯に染み込ませていた男の身体がゆっくり起き上がる。

がらり、岩が転がる。その下に潰れていたはずの頭はたしかに傷だらけ、砕けていた。

でも。

「……………な、に？」

「わたくしの英雄はこの程度では死にません」

死んで、いない。

頭が碎けて、血塗れでなお赤髪の男はなんのこともなしに立ち上がった。

「おお、王子さま。どした、そんな顔してよ。俺さまがアンタの騎士皆殺しにした時みたいな顔してんぞ」

「なんで、死んで、いないんだ？ 頭が碎けて、岩に潰されていたのに」

王子の口が塞がらない。目を見開き、死んでいた筈なのにペラペラ喋る男を見つめて。

「あ？ 頭が砕けたくらいじゃ人は死なねえだろ？ あ、やべ、脳みそこぼれてるわ。汚ねえ」

絨毯をくつぞこでなじりつつ、赤髪の男が首をゴキゴキと鳴らした。

「あら、ウイス、メイド長が苦勞するからきちんと自分がぶちまけたものは自分で掃除しなさいよ」

「メイド長はもういねえよ。昨日お前が殺しただろうが。せっかく俺サマが気を遣ってお前がガキの頃に世話なつてた奴は生かしておいたのによー」

「あら？ そうだったかしら。もう、ウイスのせいで人が何をしたら死ぬのがよくわからないじゃないの。エマも殺したら死ぬものなのね。小さい頃はあんなに怖かったものだけど」

「うっへー、コワー」

「ヘロス家…… ”勇者” を裏切った英雄の家系…… どうして、歴史書では貴様らは滅びた筈だ」

「あー、そりゃアレだ。能無しの歴史学者の怠慢だな。たしかにヘロス家は勇者を裏切ったことの報復を受けた、まあ、でもついついガキ1匹逃したんじゃないかね？ どんだけ人間離れしてるやつでも情の一つはあるもんさ。その女と違ってな」

「えー、ウイス。それでは私が情も涙もない女に聞こえるんですが」

「うるせーよ、その通りだろうが。殺しも殺したりよ。王都の城下町、王城にあれだけいた侍従やメイド、騎士、貴族…… もう息をしてるのはこの広間にいる数十人だけだぜ？」



「えー、わたくしが手を下したわけじゃないでしょうに。貴方がほとんど殺したんじゃないですか」

「お前に命令されたからだろうが。戦争中の兵隊の行動は全て上の責任って王国法で決まってるんだぜ」

朗らかな声のやりとり。だが内容はどこまでも痛ましく、血生臭く、そして残酷なことに、全て真実。

王国。

この世界において、唯二の人類国家。大戦により歪んだ世界の中、帝国と並び立ち人類が生きることが許された国家。

その国は今、存亡の危機にある。たった二人の女と男により古い歴史を持つ国は終わろうとしていた。

「あら、知りませんでした。じゃあ、はい。わたくし、なかなかの悪党ですね、アハ、どうしましょ」

「まあ、アレさ。悪か正義かは後年の歴史が決めるもんだ。勝てばいいんじゃない？ てか、我が主サマよ、俺だけなんか不公平だろ。宰相殿だってさっきお前になんかごちゃごちゃ言ってたぞ」

赤髪の男が指差した先は捕虜たちのいる場所、先程声を荒げた宰相を指している。

「あら？」

女が、目を彼に向けた。

「ヒッ?!」

ある女と、男により存亡の危機にあった。

「たしかに、わたくし、傷つきましたね。酷い人です、リント宰相、人を狂女なんて」

「よ、よせ！！ フォルト、ナ”ッ？！ グハ！！」

テーブル席から立ち上がるうとした王子が、テーブルに叩きつけられる。

「おっと、王子さま。悪いが今はウチのイカれお姫様とのゲームの最中だろ？ この女に勝つにはゲームで勝つしかない、それがルールだ。暴力は、禁止だぜ？」

いつ動いたか誰にも理解できない。赤髪の男が王子の背後に周り、身体を抑えていて。

「リント宰相」

「ひ、フ、フォルトナ様！！ フォルトナ第二王女様、どうか、どうかお情けをー」

宰相が、命乞いを。

その女の力を彼は思い知らされていた。

「死んでくださったらいいなあ」

女の言葉が、終わる。

この世界に歪に、不公平に愛された過ぎた女の言葉に世界はいつも答えるのだ。

ピョー、ピョーオオオオオオ

呑気な鳥の音が、割れた天窓から響く。ある者は青ざめた顔で、ある者はぼーっとした顔で、ある者は絶望の顔で上を見上げた。

ばさり。

ぱしゃん。

翼のはためく音、同時に、割れかけの天窓、その全てが割れた。

碎けるガラス片、王国の職人が白星浜から砂を集め、特殊な技法で作った”星ガラス”が光の粉のように割れ散らばる。

まるで光のシャワー。光々しさすら感じるその景色の中に、青い羽毛が混じっていて。

「ピ」

「あ」

降り立つのは、モンスター。この世界に存在する生態系の上位の存在。人を襲い、人を喰らう生き物。

長い嘴、青色に染められた見事な羽毛、空を掴み、風に乗る大きな翼。そして捕食者の証、鉤爪。

山嶺に住み、滅多に人前に姿を現すことはないはずのモンスター。

巨大、小屋ほどのサイズの翼が、はためく。

玉座の間はしかし、その怪物が侵入できるほどには広く、

帝国の冒険者ギルドにおいてその生き物はこう定義されている。

1級モンスター”谷間の怪鳥マチリクバード”。

それが、王城に降り立ち。

「ピューー」

「あ、アアアアアア嘘?! 嘘嘘嘘?!?! 嫌だ、ヤダ、ヤダヤダー!! 殿下!? 殿下アアアアアア、助けて、助けー」

「ピュー」

バサリ。

そのサイズの生き物からすれば人など本当に餌にしか見えないの  
だろう。

おもちゃをつまむように、その大きなかぎ爪の足が後ろ手を縛ら  
れたままの宰相を掴んだ。

「あ、アアアアアアアア、嫌だアアアア、やめてええええええええ





よ、よくも!」

「あらあら、兄上。ウイスに押さえつけられた状態でそんなに力むと血管が切れてしまいますよ。ウイス、離して差し上げて」

「いいのか？ この王子さま、今にもアンタをひねり殺しかねないぞ」

「アハ、素敵なお話じゃあないですか。正当な王位継承者である兄上が、篡奪者を打ち倒し、王家と王国を救う。ああ、なんと人間らしく、高潔な物語でしょう。それが見れるのなら大歓迎です」

「へいへい」

「っ!?! 覚悟!! 逆賊! ”秘蹟、承認”!!」

金髪的美男、王国第一王位継承者、オルトドクス・ロイド・アイムストロング第一王子は間違いなく、選ばれた側の人間だ。

高潔なる血に、深い歴史。

人類の免疫機構、勇者を生み出す国の長、その始祖たる血を受け継ぐ選ばれし者。

何かに選ばれし者、何かの使命を持つ者、そうあれかしと生まれ  
た者、役割を持つ者、それらみんな天使の残り香たる”秘蹟”の苗  
床に相應しい。

世界の法則として存在する、人外の力がまた当たり前前に王子にも  
備わっていた。

幼い頃より、聡く、賢い彼はそれを親、兄妹にも秘匿していて。

「おっと」

「あら」

王子の両腕が、煌めく。それは光の剣。魔術式のように仕組みを持って世界を侵す力ではない。

世界に元より設定されている現象、王子の両腕が熱量を持った光の奔流へ変わる、そして光の奔流は収束し、剣の形へと。

「<sup>ハイン・ライト</sup>王の光剣！！　その蛮行、命をもって償え！」

光々しい剣は間違いなく悪を貫き、王家の敵を滅ぼすだろう。

剣が、王子の対面に座る女へと向けられた。

「アハ」

ぼじゅう。たしかな手応え。

蒸発だ。水が熱せられた石の上に落とされて瞬く間に沸騰して蒸発するような音だった。

光の剣、オルトドクス第一王子の秘蹟が人の身体を溶かしたのだ。剣が振われる時いつもこんな音がする。秘蹟の力の前には人体など鉛細工よりも脆く。

「あーあ、可哀想に。ほとんど跡形もなく溶けちまってるよ」

頭が碎けた男が、のんびりした口調でぼやいた。その光の剣により肉体を溶かされ、死んだ者たちの方を眺めて。

「あらあら、流石は兄上。まさか秘蹟までお隠しになられたとは。わたくし、心底敬服致します」

「へ？ な、んで？」

王子が、呆然と呟いた。その目は泳ぎ、手が震え始める。

たしかに向けた筈だ、たしかに振り下ろした筈だ。

目の前の女、今や血の繋がりすらおぞましい叛逆者に。己の妹、姉ばかりか親、はたまた国をすら笑いながら冒し尽くしたその敵へ。

オルトドクス第一王子は、叛逆者フォルトナ第二王女を本気で殺そうと秘蹟を振り下ろした。

なのに。

「ねえ、ウイス。今の兄上の攻撃ならあなたを殺せるかしら？」

「あー？ 当たりどころによるんじゃない？ 上半身全部消しとばされたら俺でも流石に死ぬだろ」

「ほー」

「あ、悪い顔しやがる。てめー隙あらば俺を殺す算段立ててんじゃないよ」

「あら、仮想敵への対策は必要でしょう？」

なのに、健在。

王子が滅ぼそうと力を向けた相手は、リラックスした様子で己の臣下、頭の碎けた男と言葉をかわしている。気軽な友人同士の茶飲み話かのごとく。

王子の頭が混乱する。なんで、どうして。

何が、起きてー

「あらあら、偶然にも、いえ、”幸運”にも兄上の秘蹟はわたくしから外れたみたいですね」

女が、クスツと笑った。

王国がその歴史の中で保ってきた高貴な血。美しいものを絶えずその血筋に取り入れてきた家系の終着点。

兄から見ても、その女の笑みは美しく、故にどこまでもおぞましく。

「で、んか、ど……… して」

「あ

あ

掠れた声に王子が反応する。

手応えが、あったのだ。たしかに人の肉を焼き潰す手応えが。

「あら、義姉上にも当たってしまいましたか」

「は？」

王子の身体が震える。恐怖にもいくつか種類がある。

己の生命の危機に対する恐怖、理解出来ない者に抱く根源的な恐怖、そしてそれらと同じくらいに巨大で強い恐怖。



自らの致命的な失敗に対する恐怖。

「う、そだ」

いない。

広間に捕縛されていた捕虜たち。第一王子に付き従い、竜教団を迎え撃った彼ら、彼女ら。

抵抗虚しく、捕虜として捉えられていた皆が部屋から消えている。

彼らがいた場所の床は、どろりと溶けていた。まるで高熱に晒された蛹のごとく。

かろうじて、一人の半分だけが残る。

ああ、そう、一人の半分。

上半身だけの人間の身体がそこに溶け残っていて。

「で…………… か…………… おう、じ……………」

「り、ず？」

それは、囚われていた王子の婚約者だった。美しいブロンドの髪は焼け爛れ、華美なドレスも今や焦げ布と化している、何故か。

王の光剣の熱量が彼女の全てを焼け溶かしていた。

王の光剣の光が王子の臣下を舐め溶かしたのだ。

たまたま、王子の攻撃は捕虜たちに当たった。

「ああ、不運にも。クス、兄上の手元が狂ってしまったのでしょう。アハ、たまたまですよ。お気を病まないで」

「え、え、あ、え、あ、へ」

王子の呼吸が不規則に。

失敗が、形となる。仄暗い谷底から、真つ黒な手が伸びてくるよ  
うな焦燥感。

違う、違う、ありえない、僕はこの女に光を向けてー

「どんまい王子さま。アンタの部下やら奥さん、みーんなアンタが  
始末しちまったなあ」

男がぼそり。

たった1人で王家の軍事力を壊滅せしめた英雄が化け物呑気に、物見遊

山でもしてるかのようにぼやいた。

始末――

溶けた地面。消えた捕虜となりし己の臣下。上半身だけの焼け爛れた女の死骸。

腹が、ない。そうだ、自分の婚約者はどこだろう？ 上半身だけの女の死骸自分の婚約者、幼少の頃から共に育ち、ともに成長し上半身だけでもに愛を誓い合い、互いの腹がない上半身、胸の辺りしか残っていない、己の子どもを、愛すべき子宝を宿していたはずの、未来を共に歩む筈だった――

「義姉上は”運が悪かった”ようですね、残念です」

女が笑う。



「うそだ、うそだ、嘘だ嘘だ嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘だああ  
アアアアアア…… アアアアアア」

もうそこに、王族としての威厳や華美さもなく。全てを奪われた、  
いや、致命的な失敗により己で大切なものを失った男の姿があった。

「壊れたな。ありや。どーすんだ？ お父様やお母様やらと同じ  
く廃人にして利用すんのか？」

「ん？ いえ、兄上には利用する用途はないのできちんと始末いた  
しますよ？」

「了解、あんまあれ以上生かしてやるのも可哀想だ。一思いにやつ  
てくるわ」

「いえいえ、ウイス何を言ってるのですか。まだ、わたくしと兄上のゲームは、王国の未来を決める運試しは終わっていません」

「あ、おい。……つとに趣味ワリいな」

「ア、アアアアア……」

「兄上、泣かないでくださいな。皆、運が悪かっただけです。ほら、立って。人の価値とは窮地にこそその真価を発揮するものです。人生においてその障害に対してどのように立ち向かうか。そこに人間の価値は現れるものですよ」

「……き、さま、アア……」

「ふう…… 残念です。ここでもう一発わたくしをころすような気概を見せてほしかったのですが…… うーん。試練に対して怒りや憎しみでなく悲嘆で応える人間のなんと哀れなことでしょう……」

さ、兄上」

「……え」

「兄上の番です。わたくしたちの運試し。お茶会はまだ終わっていません。さあ、選んで。お菓子を選んで、食べてくださいな……」  
さあ、 選べ、 負け犬」

「……お、まえは、何を、なにが、したいんだ…… 国を滅ぼし、  
家族を殺して、なにが……」

「運試し」

「は」



「試してみたいのですよ、わたくしの運を。このクソツタレの世界にどれだけわたくしの運が通用するのか試してみたい、ただ、それだけです」

その目は朗らかに。

しかし、異形の瞳、星形の虹彩に爛々とした野望の火が覗く。

全てを無くして、敗北した王子は悟る。

勝てるはずがなかった。こんな目をした人間に、まともなままで勝てるわけ、相手になるわけもなかったのだ。

初めから負けていた。いや、ともすればこの女と血を分けた時点で負けていたのだ。

親が子を選べぬように、子もまた生まれる親を選ぶことは出来ない、どんな存在と血をわけられるかも、全ては天使のみが知ること。

すなわち、運――

つまり、自分は

「ああ……… 僕は」

「ええ、兄上、貴方は」

王子が、手を伸ばす。

幸運に愛されし人間主義者、かつては妹であり、今や竜教団を率いる巫女であり、王国を滅ぼさんとする篡奪者。

フォルトナ・ロイド・アームストロング、第二王女が差し出すお盆に手を伸ばして――

「運が、悪かった」

お菓子を、口に入れた。

たのしいお茶会、兄妹水入らずのそれが終わる。

「ウ、ア」

それを口にした途端、始まった。

当たりだ。その呪われた茶会、どちらが先にそれを口に  
するかの  
運試し。

毒入りの菓子を、とうとう王子は選んでしまった。

猛毒、この世界の人間に、その毒性に対する耐性はない。

「あ、うぼえ、あああええ」

吐瀉、吐瀉、吐瀉。口から、鼻穴から。胃の中に入った毒物が一  
気に排出される。

毒に侵された身体の防衛反応、懸命に生きようと肉体はもがく、  
だが、もう王子の心はすでに。

「あ、ひ、ヒッ、ヒッ、ヒッ、ひふ」

身体中から垂れる汚液に、血が混じり始める。呼吸も引き攣り、王子が溶けた床の上をのたうち回る。

陸に揚げられた魚よりも、醜く、苦しそうに暴れ続ける。

ばた、ばた、ばた。手が床を叩く、足が床を蹴り続ける。華美な鎧とマントは吐瀉物まみれ、血塗れ。

美しかった顔にもう、そのおもかげもなく。

「アアアボボボボボボ、ブールドナアアアアアアアアアアアボボボボボボアアアア……」

「はい、兄上。さようなら」

怨嗟の声も、その女には、幸運に愛されし女には届かない。

一際大量の血をこぼりとこぼした後、壮絶な表情で王子はもう動かなくなった。

あれほどのたうつっていた手足はぱたりと止まり、虫の死骸のよう  
に折り畳まれて。

ここに、王国、第一王位継承者、オルトドクス・ロイド・アーム  
ストロングは敗死した。

「あら、死んでしまいましたか。うーん、兄上は昔から少しメンタ  
ル面が弱かったですから。仕方ないですね」

クーデターは、成った。

最後に残った王家の血を継ぐものは、ただ静かに己の兄の亡骸を  
見下ろすのみ。

「チェックメイト、だな。これで王家の後継者はアンタだけだ。歴  
史上稀に見るクーデター大成功なわけだ」

「チェックメイトってなんですか？」

「ええ、知らねーの？ 今帝国で流行り出したる盤上遊びの用語よ。ほんとアンタ育ちいいせいか世の中のこと知らねーよな」

「よよよ、じゃあウイス今度教えてくださいよ。友達でしょ？」

「へいへい、我がお姫様」

死臭ただようその玉座の間に、篡奪者たちが呑気な会話を繰り返す。

豊かなミディアムの緑髪をサイドでまとめてテールにした町娘とも見える髪型。しかし一つ一つの所作から生み出される気品が彼女の生まれを保証する。

丸く大きな垂れ目に星形の虹彩を持つ”幸運”に愛された女。

「あー、またそうやって。わたくしと貴方は対等です。お姫様とか言わないでください！」

フォルトナ・ロイド・アームストロング第二王女。

竜教団を巫女として率い、国を乱し、ついには玉座を運だけで冒し尽くした女。

「へーへー、じゃあ巫女様、とでもお呼びしたらよろしいかな？」

ウイス・ポステタス・ヘロス。燃えるような赤髪に、日焼けした筋骨隆々の男。

第二王女の最強にして最大の戦力、事実上、王国の軍事力はこの男という戦力にその機能を壊滅させられた。

かつて、”勇者”を裏切ったある英雄の子孫、本来ならば途絶えたはずの血筋はしかし、今ここに先祖返りした暴力とともに歴史の



表舞台に現れた。

その血は愛され、英雄としての使命と実力をもって生まれた異物と成り果てている。

「うーん、まあそれならギリ許します。教団の皆様はそろそろ終わった頃でしょうか？」

「あー？ ぼちぼちじゃねえの？ 王国の要所の同時攻略。まあ、今更各地の軍勢力が王都にかけつけようと遅いけどな」

ウイスがつぶやいた、その時。

「お待たせしました。巫女様」

ふっと、5つの怪しい光が玉座の間に灯る。

「あらあら、皆さん、お揃いで」

緑髪の女、竜教団の巫女にして篡奪者フォルトナが己の臣下へ声をかけた。

「竜教団、五本爪、我らが巫女のご命令通り。王国、各地の要所の攻略に成功いたしました」

光の中から現れたそれは奇妙な騎士鎧。

錆色のプレートメイル、細やかな意匠は鱗を思わせるデザイン。

そして兜、竜の顔を模した造形は5つ全て同じものだ。

「ご苦労様です、首尾は上々ですね。あ、ナルク司教、帝国からの商人たちには手を出していませんね？」

「は、ご命令通り、彼の国からの商人には手を出しておりません。

経済特区である北部の港町もまた穏便な方法で我ら教団のものと化しております」

マントを翻し、竜鎧の男の1人が野太い声を響かせる。

「うんうん、よろしい。さて、では西部のハバキ殿は？」

「は、我らが巫女のお言葉通り！ 王国食料生産の要！ 西部の農村部全ては焼き尽くして参りました！」

「上々、ふふ、空腹という試練、寒さという試練のもと、人は果たしてどのような姿を見せてくれるものでしょうか」

「は、私も楽しみです！ いや！ それにしても我らが巫女にもお見せしたかった！ 何もわからずに自らの畑を、家畜を焼き尽くされる弱者の姿を！ 弱肉強食！ 我ら竜教団の教義そのまま！ 伝説の再現でしたぞ！」

強く、大きな声だ。

彼らは皆生まれながらの強者。

天使教会と対をなす、この世界においての二大宗教組織が一つ。

竜教団。王国を滅ぼした者達、竜を崇め、竜になろうとする求道者の集団。

今やしかし、彼らはその教義を曲げて都合の良い弱肉強食の言葉に踊らされている。

「あらあら、次の機会を楽しみにしていますね。では次ー」

「おっと、待てよ、巫女サマよ。俺サマアよ、少し気になることあるぜ」

「ん？ なんですか？」

ウイスの鋭い声にフォルトナが首を傾げた。

「おい、ハバキ。てめえ、随分、愉しんだみてえだなあ。プンプン  
香るぜ、女の香りだ、灰や血の匂いに混じってるが、余裕でわかる」

玉座の置いてある一際高い場所からウイスが竜鎧達を見下ろす。

「……あまり調子に乗らない方がいいぞ、巫女守り。貴様は巫女様の強い希望で我らの末席を汚しているに過ぎん。口の利き方には気をつける」

「あ？ 軍事作戦はその巫女様から俺に全権を委任されているよな？  
？ ならてめえは俺の決めた事を守る道理があるとは思わねえか？  
？」

「何が言いたい？」

「とぼけんな、下衆が。てめえから女の臭いがするんだよ。戦場で盛ってんじゃねえ、下士官ならまだしも、将であるてめえが何してやがんだって聞いてるんだ」

「ははは！ 野良犬が。私は戦利品を頂いただけだ。ああ、安心して、きちんと処理はしている、使い終わったものは片付けるものだからな、おっと、貴様見た目によらず潔癖症か？」

くくくと笑う竜鏡。彼の目は曇っている。不相応に、幸運にも与えられた力に酔い、弱者にそれを振りかざす快楽に溺れている。

だから、気が付かないのだ。

だから、思いもしないのだ。

弱肉強食という言葉は、己にも振りかかるものという当たり前の結論に。

「……………ああ、もういいや。フォルトナ、いいか？」

「うーん、ハバキはそれなりに優秀な方なのですが、まあ、ウイス、貴方に任せますよ」

簡単な会話の後。

ふっ。と。

ウイスが一步進んで。

「ははは！ 巫女様、何を仰られるのですか！ 弱肉強食は貴女も知る竜教団の教えそのもの！ 弱きものは強きものに全てを奪われるのが世のつ

ね？」

ぼりん。

次の瞬間にはもう、竜鎧の男の身体と首は繋がっていないかった。

「お前、いらねえわ」

「て、へ？」

英雄、ウイスが鎧の男から首をもぎ取っていた。果実を収穫する  
ように、素手でぎゅっと。

「え、え、え」

首だけの兜から、くぐもった声が漏れて、それからそのぐじゃぐ  
じゃの断面からふと思い出したように血が垂れ落ちる。



ばたり。

ぽいつ。

首を失った鎧の身体が仰向けに倒れるのと、ウイスの手から生首が放り捨てられるのは同時だった。

「貴様!!」

「何を?!」

鎧の男、竜教団の5本爪、今や4本爪になった教団の幹部が次々に怒気を露にする。

「フォルトナ、こいつら、これから必要か？」

「ええー…… 仲良くしてくださいよー。まあ、ウイスに任せますけど」

「だとよ、来いよ、竜フェチ。どうせ最後は誰が竜になるかで殺し合うんだ。タイミングが早いか遅いかの違いだろ」

赤髪の男、ウイスが砕けた頭から垂れる血を舐めながら手のひらを上に向けて指を折る。

くいつ、くいつ。わかりやすい挑発の意味はシンプル。

かかってこいよ、だ。

「巫女様、やはりこの男、捨ておけませぬ！」

「恐縮だが、巫女様、この男にもはや用無し！」

「王国の騎士や兵を平らげたのがなんだ！ 我ら竜になるべく修練を積んだ信徒も同じことは出来る！この巫女様からの賜り物！ 竜にすら届く力に選ばれた我らと貴様に力の差はないのだ！」

「竜になるのは我々、正当な竜教団の信徒。貴様が如き不信心ものが竜に近づけると思っなよ！」

残った竜鎧、教団の武闘派、王国の主要部を攻め滅ぼした強者達がウイスに殺意を向ける。

「あらあら、血の気の多いことです。まあ、うん。どうぞお好きにそれもまた人の業ですよね」

緑髪の女はよっこいしょと玉座に腰掛け、肘を立ててその様子を見守るだけ。

「英雄の出廻らし風情が調子に乗るなよ」

「ここぞ根絶やしにしてくれる、へロスの生き残り！！」

「前から貴様が気に食わなかったのだ」

「我ら竜教団、竜を超え、竜になる資格を持つ者！ その高潔な誇りの中に貴様のような野良犬はいらぬ！！」

「ぐだぐだうっせえな。いいなら、ほら、来いよ。巫女様からのプレゼント、どんなもんか見せてみるよ。弱い者いじめ以外に役立つたいいよなあ」

「「「「漂竜物 起動」」」」

彼らのことばに、その力は反応する。

それは絶望のなか見出されるもの、それは危機の中現れるもの。しかし時にあっけなく見つかる、この世界が隠す力の物品。

竜にすら届きつるかもしれないそれは、竜に抗う兵器として銘打たれる。

「竜麟砕き！」

「竜殺の刃」

「竜炎の槍」

「竜呑み！！」

巨大な槌。竜の鱗すら叩き潰せるかもしれない。

血の滴る刃、竜をすら殺せるかも知れない。

燦る炎を宿す槍先、それは竜をすら焼き滅ぼす炎竜の吐息を保ち。

竜のアギトと化す頭部、この世にその顎から逃れられるものなど  
いるわけもなく。

竜教団が、最高戦力、五本爪。

竜をすら、殺せる力を高らかに英雄へと向けた。

「死ねい！！ 英雄！ ぽび」

「竜を殺す力の前にひねぶぺ」

「炎竜の炎を残すこの槍先をミヨヨヨワワ」

「竜の顎に耐えられるか、その脆弱な身パパン」

1、2、3、4。

1人目は、その巨大な槌を振り上げた瞬間、首を180度に捻じ曲げられた。

2人目は、剣を構えた瞬間、腕を折られそのまま奪われた剣で顔面の真ん中を貫かれた。

3人目は、槍を突き出した瞬間、それを踏みつけられ喉に手を突っ込まれて舌を抜かれて、ついでに臓物を抜かれた。

4人目は、竜の顎と化した顔面を蹴り抜かれて破裂した。

五本爪は、もう何本でもない。爪ですらなくなった。

瞬きの間に、英雄が皆殺しにした。

「竜殺しの為の武器が人間に役立つかよ」

ばたり、悲鳴もなく竜鎧が全員絶命して、倒れる。

「いや、漂竜物つて竜にしか効かないじゃなくて竜にすら届きうる兵器のことですから普通は人間にも効くんですよって」

フォルトナが呆れた声で手加減の出来ない己の英雄へとぼやいて。

「あー、まあ、いいだろ。コイツらにや過ぎたおもちゃだったってわけだ」

「えー、せつかく竜教団を乗っ取った時から懐柔して育ててた人たちだったのにー。五本爪って名前徹夜して考えたんですからね」

「嘘だろ、俺のお姫様ネーミングセンスなさすぎ」



「はあ、まあいいです。彼らも運が悪かったのでしょう。私の英雄を敵に回すとは、ホントに不運な人たちです」

「まあ、まだ戦力としては竜教団の信者もわんさかいるだろ。祭りに参加して賑やかすくらいは問題ねえよ」

「もー、英雄独特の適当な計算やめてくださいよね。わたくしの幸運にも限界はきつとあるんですから。えーつと、まあほかの信徒にもこの前冒険者を使って集めた漂竜物を配れば、何人かは適合するでしょう」

「え、待て。おいおい、まだアレ数あんのか？ 普通お前、漂竜物って要は帝国の”副葬品”と同じもんだろ？ 一生に一度お目にかかれるかどうかのシロモノだろうが」

「えへへ、わたくし、運が良いので」

「うっわ」

フォルトナの微笑みに、ウイスが苦虫を嚙んだ顔を見せた。

「まあまあいいじゃないですか。貴方にはとっておきの”漂竜物”があるんですから。とてもお似合いですよ？ そのバケツみたいなヘルム」

「あー、これな。腰にくくりつけてるだけで身体が軽くなるのはいけど、これ明らかにヤバイもんだよな。だって被れねえんだぜ？」

フォルトナの指差した先、ウイスの腰には薄汚れた兜がアクセサリーのごとくぶら下げられていた。

バケツみたいな形をした兜だ。

「アハ、英雄ですら御せない力というのも乙なものじゃないですか。まあまあ、ウイスには他にも沢山の漂竜物を用意してますからそん

なに拗ねないの」

「ケツ、そもそもこの飾り物のヘルムはうちのご先祖様が使ってた家宝だっつーの。福利厚生は厚くしてくれよ、お姫様」

「はいはい。さて、うーん。五本爪もいなくなっちゃいましたし。これからの予定はもうわたくし達だけで決めてしましましょうか」

2人、死骸だらけの玉座の周りで軽口を繰り広げ。

「だな。予定通り、これで王国はアンタのもんだ。さて、我らがお姫様。次はどいつでアンタは運を試すんだ？」

男は自分に黒い革鎧にこびりついた返り血をぬぐいながら問いかける。

「だいたい問いへの答えは分かっていたが。」

「はい、予定通り、”王国”の次は”竜”にします！ 帝国は護り竜、蒐集竜、アリス・ドルル・フレアテイル様！ 彼女を殺そうとしてみましようよ」

手を合わせ、朗らかに、楽しくて仕方ないイベントを語るが如く。

フォルトナは、この世界においては許されざる言葉を紡いだ。

「あー、やっぱりそうなるかあ。ま、遅かれ早かれだな、これも。竜になるにゃ”竜の心臓”はどのみち必要になるわけだ。やるしかねえか」

「勝てますか？ わたくしの英雄」

フォルトナが小さく問いかける。己の武器、己の友、王国をすら滅ぼしたのはその英雄という名前の暴力のお陰であることを彼女は理解している。

「あー、まあ、竜教団を使い潰して、俺サマも命かけて、漂竜物フルで運用して、アンタの”幸運”がハマれば五分五分じゃね？なにせ竜だ。生きる伝説だ、そこまで詰めてようやく手が届くかも知れない、だろ」

「あら、ふふ、意外と見込みがあるんですね。わたくし、もっと難しいかと思ってました」

「まあ、最近、竜も殺したら死ぬってのが分かったしなあ。一度死んだ奴は2度目も割と簡単に死ぬだろ」

「ああ！ 帝国の”竜殺し”！ アハ、彼のことはわたくしも存じております。竜教団の暗殺リストに入っていましたもの」

「まあ、そういうことだ。竜殺しサマが証明してくれた。やっぱり、竜も死ぬってことをな。まあけどな、フォルトナ。この五分五分ってのは全てが本気で理想通り行った状態だ、実際はそう上手くは――」

ウイスが戦闘思考を回しながら言葉を選ぶ。

ニコニコそれを微笑みながら聞き続けるフォルトナの笑みが深くなり。

「アハ」

「なんだよ」

ウイスが怪訝な顔を浮かべた。

「いえ、少し面白くて。全て上手くいきますよ。幸運にも、きっと、ね」

「……ああ、そついやそうだった。恐ろしい女だよ、アンタは。だけどな、フォルトナ、1つアレだ。竜にちょっかいかけるんなら提案したいことがある」

己の主人の言葉に、英雄は頷く。確かにそうだ。その呪いにも等しい幸運の前に、予想も馬鹿らしい。

全ては運。彼女の思うまま、彼女の都合の良いように物事は進んでいくのだろう、と。

だが、英雄には1つだけ、その幸運を理解しつつも避けたいことがあった。

「あら、なんですか？」

「今回、”竜殺し”には俺サマ関わりたくねえ、嫌な予感がする」

「へえ、というと？」

フォルトナが興味深そうに、瞼を大きく持ち上げる。垂れ目の奥、星形の異質な虹彩が爛々と輝いていた。

「簡単さ。竜を殺すようなイカれ野郎だ。きっとアンタと同じ種類さ」

「それが何か問題ですか？」

「あー、わかんねえのか？ イカれ野郎とイカれ野郎が殺し合うとそれはもう戦いじゃなくてギャグになるんだわ。イカれバトルに巻き込まれたくねえの、俺サマは」

竜殺しと幸運。

英雄はその超人的な勘から、己の主人とそれを会わせたくなかった。

理屈も根拠もなく、ただ、予感のみのそれはしかし彼の人生において間違えたことはなく。

「えー、わたくし、今回の竜祭りです”竜殺し”とも会って見たかったです！”運試し”、してみたいなあ」



「うわー、俺サマの提案聞く気ねー。はあ、わかった。もうアంతの好きにして。幸運を祈るさ」

だが、だめだ。英雄の言葉ではこの女は止まらない。

ウイスはフォルトナのどこまでもたのしそうな顔に弱かった。

「ああああ、わたくしに何を言いますか、英雄。まあいいです、それに、帝国には何人かこれからの戦い、竜を殺してその後に来る存在との運試しのために集めておきたい人材もいますしね」

「人材？」

「はい！ やはり人とは宝です。今回の内乱で探し出せなかった王家の影たち、その長、”影の牙”こと、ラ・ザールでしょ？ それにわたくしが竜教団と接触した瞬間に全てを予見して王国を離れ

た宮廷商人のドロモラ！ 帝国からは返してもらわなければならぬ人材が沢山いますのよ」

「いやいや、そいつらそもそも帝国に、しかも都合よく冒険都市にいるわけー」

「いますよ」

「ーあ」

ウイスが言葉を失う。

フォルトナのその短い言葉、傲慢でしかだからこそ混じり気なく美しいその姿に、言葉をー

「たまたま、いますよ。わたくし、運が良いので」

「……ああ、そうだった。アンタはたしかに幸運な女だったわ」

ウイスが噛み締めるようにつぶやく。

「アハ、ねえ、ウイス。これからもっともっと人生を楽しみましょう、人間の生きる楽しみとはつまるところ、己の力を世界に振るうことに尽きます」

フォルトナ、”幸運”な女は思い描く。

追い求める、己の運が果たしてどこに辿り着くのか。それを夢見し、ウイスを見つめた。

「わたくしはわたくしの”運試し”を、貴方は貴方の”力試し”を」

「……ああ、だな。国盗りの次は、竜殺しときたもんだ、んで、その次は？」

「たくさんありますよ、竜を殺し、帝国を飲み込み、ついでに魔術師や教会も滅ぼしてみましよう！ ああ、そうだ、帝国にはトレナのお墓でも作ってあげましよう。あの世間知らずの甘ちゃんも多分もう死んでるでしょうから」

「アンタ、ほんとたのしそうだなあ」

「楽しまないとしたのしくありませんよ？ さて、では準備しないと。 ”竜祭り”、王国からの賓客として向かう段取りを幽閉しているお父様をお願いしてきますね！」

玉座から立ち上がったフォルトナが、駆ける。

死骸だらけの玉座の間、しかし彼女の様子はまるで花畑でも走り回る少女のそれで。

「コワー」

男が死人だらけのその広間、空っぽになった玉座に座る。そこから見る光景は国から捨てられ、歴史に葬られた彼の一族の悲願でもあった。

だが

「思ったより大したことねえや」

その悲願はすでに、男の1番の願いではなくなっていた。

眩しいものを見るかのように、男が呪われた女の後ろ姿へ目を細めて。

「おい、待てよ、フォルトナ。俺サマも一緒に行く！」

「アハ」

嬉しそうに振り向いた緑髪の女、おぞましくただ、ただ、” 幸運  
” な女。

英雄が、己の定めた主人の元へ一歩で駆け寄る。

腰に縛り付けていたその漂竜物。

彼の先祖が” 遺した物品”。

かしやりと揺れた。

錆びたバケツヘルムには、この世界の人間には読むことも、いや、  
文字とすら判断出来ないあるメッセージが書き殴られて。

” Slap!fucking arm Man ”

そして、蠢くもの達よ。役者は揃い、舞台は整った。

竜祭が、はじまる。

59話 そして書く者たちよ（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを「こ」覧くださいー！

＜ 苦しいです、評価してください ＞ デモンズ感



## 60話 パン文書館

「はい、それでは第1回パン文書館脳内会議を始めたいと思います。拍手ー」

「パン文書館言っなし」

パチリ。

暖炉で赤々と燃える焚き火、火の粉が炉の中でゆっくりと舞う。

高い天井にゆらめく蠟燭のシャンデリア、壁にいくつかが引っかかりられたカンテラの暖かく、しかし僅かな光だけが、壁のように聳え立つ本棚たちを照らしていく。

ここは、遠山鳴人の夢。冒険者の夢にして、知識の眷属、ハーヴ

イーの公文書館。

いや、今はもうパン文書館だ。

「うるせえ、拍手はどうした根暗吸血鬼モドキ」

遠山は、安楽椅子に深く背中を預ける灰色髪の女へ刺々しい声を向けた。

赤ブチメガネに、羽飾りのついたベレー帽。

白い肌小さな顔。幼さと妖艶さが同居する美女が気怠げにため息をつく。

「はあ、意味わかんない。あたしのどこが根暗なのよ。てか、アンタなんで何食わぬ顔でここに顔出してるわけ？」

ハーヴィーの言葉はもつともだ。最後の接触の記憶は確か、血を吸われそうになって逃げて有耶無耶になった筈。

「いや、知るかよ。寝たらここに来てたんだよ。こちとらさっきまでホストとしてドラゴonzの接客したり、銭ゲバ女と取引したり大変だったのよー。睡眠障害になったら責任とれよマジで」

だが、ついさっきまでホストになっていた遠山鳴人に今やもう恐れるものはない。

吸血鬼が夜の生き物ならば、ホストは夜の王。つまり、自分の方が強い。

竜の気に当てられ、アルコールに酔わされ、そして興奮によるダンジョン酔いの併発、頭がいい感じになったまま眠りについた遠山は夢の中でもキマッていた。

「なるわけないじゃん。きちんとアンタの肉体と脳は休んでるんだからさ。てか、アンタも大概凶太いよね。……あんな別れ方した女の前でずいぶん余裕じゃん」

にいと、笑う女の唇。そこから覗く犬歯というにはあまりにも

鋭い牙。

遠山鳴人は、あのレイン・インでのパーティーナイトを乗り越え、事後処理を全て終わらせたのちシートと藁だけのオフトウンによって、また夢のパン文書館にやってきていた。

「まあな、お前なんだかんだ味方っばいし」

「へ？」

脅すようなハーヴィーに対して、遠山がこともなげに言葉を返す。

断りも入れずに、暖炉の側に置いてある薪を拾って炉の中へ差し込んだ。瞬く間に乾いた薪の表面を炎が舐めていく。

ささくれたった木の繊維が赤熱する様子が遠山の栗色の瞳に朧げに映って。

「あー、暖炉、いいな……」

「呑気にしてるとこ悪いけど、聞かせてよ。どういつ風の吹き回し？」

暖炉の前であぐらをかく遠山にハーヴィーが声を向ける。浅く腰掛ける安楽椅子が、きいっと静かに音を鳴らした。

「ヒントだよ、ヒント。なんだ、あれ。ほら、スピーチ・チャレンジ。なんかあの妙にテンション上がって口が回り出すタイミングあるじゃん。今晚のドラ子やら人知竜やらの時も、お前多分手伝ってくれたろ？」

暖炉に向かってチルしている遠山が、ハーヴィーの方へ振り返る。

「……別に、アンタの為じゃないし。同じ女としてあの子たちに少し同情しただけっていうか」

灰色の髪、ベレー帽から垂れている三つ編みをいじりながらハー

ヴィーが目を逸らした。

「あっそ、まあ、それでもありがとな」

「は？」

知識の眷属が、ぼかんと口を開けて。

「なんだよ、その反応」

「いや、少し驚いて。アンタ、そんな人間だったけ？ 人間関係不感症じゃなかった？」

「てめえ人のことをなんだと…… まあいい。あー、少し、反省したんだよ。最近、周りの人間に恵まれすぎて調子に乗ってた。世の中にはクソ野郎が多いからな、数少ない自分の周りのいい奴らにはきちんと感謝しておきたいんだわ」

ホストになる直前の自分のミスを遠山は振り返る。ドラ子や人知竜、違う生き物に対して少し思いやりがなさすぎた。

感情を寄せすぎてもダメだし、突き放しすぎてもダメだ。例え違う生き物であっても、恩には礼を。遠山の得た教訓はともシンプルなものだった。

「へえ、あたしが、良い奴ねえ」

「あの人知竜とかいう奴と同じで意味わかんねえけどな。でも、今までも何度かお前は俺にヒントをくれたりしてるだろ。だから、えーと、名前なんだっけ」

「……ハーヴィー。いまはそう呼んで」

「ああ、ハーヴィー。ありがとな。これからも宜しく」

その教訓は忘れない。遠山が再び暖炉に向かってチルし始めて。

「……ねえ、やっぱさあ、一口でいいから吸わせてくんない？ 先っぽだけでいいから」

すつと、背中に人の肌の暖かみを感じた。音もなく、気配もなく。

知識の眷属が、遠山の背中にしなだれかかっている。

細い腕が首に回される。長い指が遠山の首をそつと抱きしめて、触れるか、触れないかの強さでその頬を撫でた。

艶々の爪に、暖炉の火が映っている。

「古今東西、人類史が始まって以降、先っぽだけでいいからと言う奴が、先っぽだけで済んだ試しはねえ」

吸血鬼。



人を獲物にする上位の生物。生き物の機能として人類を魅了するその機能はしかし、頭の壊れた男にはあまり効果がない。

遠山がその手にデコピンかましながら、吸血鬼の申し出を断る。

「我吸血可？」

くすくす、からかうような声色でハーヴェイが耳元で囁いた。

「ほら！ そついうのだよ！ どうせお前は最後に、嗚呼…… 全体吸血完了…… とか言うに決まってるだよ！」

唾を飛ばしながら遠山が声を荒げた。

「ちえつ、ケチ」

いじけた様子、しかし愉快そうにハーヴェイは遠山に背後から抱きついたまま離れない。

「油断も隙もねえ。てかなんで俺の夢の中に吸血鬼住んでんだよ……  
いや、待て、なんで、お前、そのノリを知ってる？」

軽口言いながら、ふと、遠山は背筋に寒気を感じた。明らかに今のハーヴェイの言葉はおかしい。

「んー？」

「とぼけんな。今のお前のしょうもない冗談、お前全部理解して使ってたよな。それはネットのスラングだ。お前が知ってる訳、ない」  
たわいもない会話だ。ネットのスラングをアレンジして軽口にはぼつりと出す。それだけの話のはずだ。

ここが異世界で、それを口にしたのがその世界の存在でなければ。

「ふひ、あたしは知識の眷属って言った筈だけど」

ハーヴェイが笑いながら、しかし、しっかり遠山の身体に密着したまま声を返す。

「誤魔化すな。それをどこで知った？」

自分の夢に住む奇妙な存在。完全な理解は得られないにしてもある程度どういふ存在かは絞っておきたい。

遠山は低い声で問いかける。

「……ふーん、この知識は、じゃあやっぱりこの世界のものじゃないのか」

「あ？」

「この前した話、覚えてる？ あたしの目的」

ハーヴィーの、問いかけ。

遠山は、目を瞑った。ハーヴィーの冷たい手が自分の頬を撫でる感覚と、暖炉の火がそれをゆっくり暖める感覚。

世界にそれしかなかった後、遠山の脳はきちんと記憶を取り出して。

「…… D · o ù v e n n o n s · n o u s — ？ 《我々はどこから来たのか》 Q u e s o m m e s · n o u s ？ O ù a l l o n s · n o u s — ？ 《我々はどこへ向かうのか》」

我々は何者か

それは彼女との初対面の時に聞いた言葉。

知識の眷属はそれを知らない。故にそれを求める、と。

「そ、よく覚えてんじゃん。流石、無駄に頭が回るだけはあるよね」

「無駄は余計だ」

「ふひ、ま、そゆこと。あたしは、ハーヴェイ、知識の眷属。この世界において”天使”によって役割を持って存在を決められた存在。あまねく知識の象徴にして、世界の裏側に住む者…… だけはずなんだけどね」

「はず?」

「そ、筈だよ。でも、あたしの中にはあたしの知らない知識と記憶が残ってる。まるでいつ書いていたのか、何のために書いたのかもわからないメモだけがカレンダーに殴り書きされてる感じ?」

「でも、そのカレンダーに書いてある字は間違いなくあたしのもので、きつと忘れなくなかったものなんだと思う」

ピロン

【INT 6 会話に必要な知性を満たしています】

メッセージが流れる。夢の世界でも遠山に秘された蹟はその冒険の標となって。

「……ゴーギャンだ」

遠山がつぶやく。

友達のいない学生生活、金もないので教科書と図書室が絶好の遊び場だった。途中から何人が邪魔してくる奴らも現れたが、それでもその頃の記憶は今もしっかり、遠山の血肉となっていて。

「ん？」

「フランスの画家。お前の言葉は彼の作品のタイトルなんだよ。高校の時に読んだ美術の教科書に載ってた」

まただ。

ハーヴィーの言葉は、異世界にいる者が知っているはずのものではない。

彼女は、遠山のいた現代の知識を保有している。そう考えて間違いないだろう。

「へえ、じゃあこの言葉もまたハーヴィーであるあたしが知らないはずの知識なわけか。ふひ、人知竜に振られたのは痛いわけね。あの探査者なら何か知ってそうだけど、まあ、もう遅いか」

それが自覚あるのかないのかはわからないが、この女は何かおかしい。

ドラ子や人知竜とも違う、別の種類の異質さだ。

遠山は少し頭を回し、初対面の時のハーヴィーの言葉を思い出す。

「……お前、あの時、ここで初めて会った時に、俺を”上級探索者”と呼んだよな。なんで、それを知ってる？」

”上級探索者”

それは現代に生きるものしか知らないはずの言葉。

現代ダンジョン、バベルの大穴が存在する世界の常識を知るものの言葉のほずだ。

「……アンタが探索者だって知ってたのはさ」



ハーヴィーが、ごくくと、唾を飲んだのがわかった。冷たい指先が頬から首筋に。

動脈を探すかのようにハーヴィーの指先が遠山の身体を這う。

「アンタの記憶をある程度読んでたから。……まあ、今はもうパンの本しか残ってないから読めないけど。遠山鳴人、アンタ、なかなか面白い人生を歩んできたのね。珍しく退屈しない読み物だったわ」

「趣味フリー、人間観察が趣味ですってか。それあんま人前で言わない方がいいぞ」

「夢の中だからノーカンっしょ。まあ、それとは別に理由もあるんだけどね」

「あ？」

「不思議なんだけど、アンタを見た瞬間、探索者って言葉が出てた。

手に入るかどうかも分からない何かに魅せられてる目、心の底では自分しか信用していない昏い目、そのくせ、誰かの心を引く搔き回して変えていくような傲慢で身勝手そうな目。どこかで見たことある奴と似た感じがしたのかな」

何かを、いや、誰かを思い出すような口ぶりのハーヴェイが動きを止めた。

ぱちり、暖炉の薪の表面が少し割れて。

「うわ、ソイツ絶対ロクな奴じゃないだろ。自己中の化身じゃん」

「……………」

遠山の言葉に、ハーヴェイが押し黙る。なんとも言えない顔を向けてきて。

「なんだよ、急に黙りこくって」

「いや鏡とか見たことないのになって。蒐集竜の家とかには姿見あったでしょ？」

「え、なんで？」

「……ごめん、疲れたから少し休むわ、あたし。どうぞ、パン文書館の本はご自由に。あ、でも本開いたまま机にうつ伏せに置いてたら殺すから。ごゆっくり、我らが夢の主人殿」

すつと、遠山の背中から離れるハーヴィー。飼い主に構うのが飽きた猫のように本棚の向こう側に歩いて、それからもう見えなくなつた。

「変な奴。あーゆーのが哲学キメることになるんだろーな。さて、それじゃ仕事を始めますか」

ぱちり。燃える炎と、赤い薪。暖炉は良い。永遠に眺めていられ

る。

自分の家に作るサウナはやはり、薪サウナにしようと遠山がモチベーションを新たにして立ち上がる。

ついでに暖炉も居間に欲しい。木を割ってゆっくり火を育てて、それを眺めながら飯を食う。良い、良さがすぎる。

欲望の光景、辿り着く場所を思い描き立つ遠山は幾重にも重なる本棚に近づく。

「えーと。これと、これと、これ。うーん、やっぱり図書館っていいな、テーマパークに来たみたいだぜ」

すーっと、息を吸うと何故かわずかに香ばしいパンの香りが鼻をくすぐる。

もうこの書館の本のデザインは普通の本のもに変わっている。始めて訪れた時のような丸い円形のデザインでもない。

パンの絵が描かれた分厚い装丁の本を何個か脇に抱えて、遠山は己のパン文書館を物色し続けて。

びゅう。

ふと、隙間風。

空気の流れを感じて。

「ん、なんだ。まだ奥があんのか？ はえー、でっけえ扉……」

本棚の谷を行くと、部屋の隅、半ば本棚に隠されるように大きな扉が現れる。

観音開きのドアだ。だが、不思議なことにそのドアには鋭角がなかった。

丸い形、ドアノブも丸く変なデザインだ。

何故だろうか、遠山はそれから目が離せない。本を近くのテーブルに置いて、その扉の方にふらふらと近づく。

無意識に、自分の胸の辺りをぎゅっと抑える。

懐かしい、そう思えた。

その扉に手を伸ばして――

「わぬし、それはまだ開けん方がええぞ」

背後から、伸びた声にはっと、遠山は動きを止める。同時に思考が戻った。

足元にはいつのまにか、霧が満ちている。白いモヤの溜まる足元を見た後、遠山はため息をついた。

「……よう、お札マッチョ。ヤダ、俺の夢、変な奴多すぎ」

「まあ、夢の主人がわぬしじゃからのう……　しゃーなかる」

ぼり、ぼり。

顔にお札を貼った半裸和服マッチョが自分の顔を人差し指で掻きながら遠山を見下ろし、呟いた。

60話 パン文書館（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを「こ覧くだ  
さい！

＜ 苦しいです、評価してください ＞ デモンズ感



61話 汝、その強欲を以ってゆめを率いよ

「あー？ なんだ、その言い方。まるで俺が変なやつの親玉みたい  
に聞こえるぜ」

遠山はその奇妙な大扉から手を離し、上を見上げた。

神主が着るような白い狩布に、紫の袴。しかしそのムキムキマツ  
チヨの身体は薄い布では隠せていない。

見上げるような神主姿の大男、遠山の夢の住人その2、お札マツ  
チヨがそこにいた。

「うーむ、間違っちょらんじゃろて。わぬし、こんなとこで何しと  
るんじゃ」

お札マツチヨが首を傾げる。その顔色は見えない。梵字が流れる

お札がピッタリと顔全体を覆っている。

「調べ物だ、調べ物。そろそろ本気でパン屋作るところまで来たからな。竜祭で現代パン文化無双かましてやる下準備さ」

「ほう、また手広くやつちよるの。まさかあの知識の女の文書館を乗っ取るとは……　　良い良い、わぬしはそうして色々なことをやっておるのが似合っとるわ」

「誰目線の言葉だよ。お札マッチョ、この扉、開けるなって言ったよな、なんでだ？」

遠山は扉を親指で差しながら、お札マッチョに問いかける。不思議なことに先ほどまで感じていた大扉の向こう側への焦がれるような興味はいつのまにか薄くなっている。

「ふむ……　　まあ、なんじゃ。わぬし、そもそもここがどんな場所か理解しておるか？」

「夢の中のパン文書館」

遠山が近くの椅子を引いて、そこに腰掛ける。カンテラの光がお札マツチヨの血の気のない薄紫の肌をしっとり照らしている。

「そう、夢。つまりはわぬしの心や記憶を元にして、儂やあの吸血鬼、そしてあやつの力や存在により定義されとる場所じゃ。見てみい、こんな辺鄙な所に隠すように位置しといて、しかもこの妙な形わぬしの心が隠すことを選んだものがあるんじゃないか？」

「なんだそりゃ」

お札マツチヨの言葉に遠山は鼻の先に皺を寄せる。いまいち要領が掴めない言葉だ。

「この夢のなかには儂やあの吸血鬼でも触らぬものがたくさんある。あの大きな湖の底と、この扉の奥は多分同じものじゃ。悪いことは言わん、あまりアレに触れん方がええぞ」

「お前に言われてもなあ……」

怪しい奴に怪しい場所に近づくなと言われても説得力はない。そもそもコイツはキリヤイバを名乗る存在だが、なぜここにいるのかとか、その正体だとかはまだ何もわかっていない状態だ。

「僕はわかりやすいじゃろうが。わぬしを見ちよるのは面白い。じやから、僕やわぬしがくたばるまでは、わぬしの力として振る舞おう。死んだ後は身体を貰う。ほら、簡単じゃろ」

太い腕を広げながら、戯けるお札マツチヨ。しかし遠山の警戒は薄まらない。

道化じみた言葉だが、相対していると分かるこの異様な感覚。

じつと、お札マツチヨを見ていると、不思議な感覚に襲われるのだ。それはまるで、海辺に立つ鳥居、ふと立ち寄った雑木林の中にある寂れた神社。それらが視界に入った時のようなおかしな感覚。

「いやー、ナチュラルに倫理観ねえのがやっぱ怖いわ、ちょっと待ってる。お札マツチヨ」

遠山はその感覚を振り払い、本棚のそばにあるローテーブルを漁る。

「む？」

「お、紙と鉛筆みつけ。んーと、どうしようかなあ…… よいよい、ほいっと。ほい、これでよし。お札マツチヨ、これ」

サラサラと、鉛筆を動かして遠山がその古ぼけた紙に文字を走らせた。

かり、かり。鉛筆の流れる音だけがしばらくの間響いて。

全てを書き終えた後、遠山は紙をつかんでお札マツチヨに突きつける。

「なんじゃこら」

「誓約書だ。形だけでもこういうのはきちんとしとかないとな」

誓約書。遠山鳴人はこのお札マツチヨとの初対面の記憶を思い出す。

力を貸す代わりに、死んだ後は体を寄越せ。

大雑把すぎるそのやり取りにはしかし、保証するものが何一つない。

夢の中のやりとりとはいえ、ここに来るのは2回目。たかが夢とはもう思えない。

「ほう、誓約書…… 盟状のようなものか。ふむふむ、”お札マツチヨ、”以降甲と記載」は、遠山鳴人、「以降乙と記載」の存命している限り、乙への協力を惜しまない。また遠回しな方法や乙の認知出来ない如何なる方法を用いての乙に対しての不利益となる行動を起こさない。これに反した場合、甲は速やかに乙への報告後、乙が指定するペナルティを受けなければならない。そして乙の死亡「死亡の定義は乙の心臓が完全に停止し、いかなる方法を持っても蘇生が叶わないと資格を持った医師の判断、もしくはそれに準ずる人物の死亡判断が降りた時のことを言う、脳死状態や、乙が意思表示

能力や責任能力を失った場合は死亡とは扱わない』後は、甲は乙に代わり乙の肉体を使用する権限を得る……。」

お札マツチヨが受け取った書面を諳んじる。遠山が短時間で簡潔にまとめた誓約書の内容はつまるところ、勝手なことはするな、という内容だった。

「誰も担保しない形だけの誓約だ。だが、どんな存在との約束であれ筋を通しておくのは大事だろ？ 内容に納得したらサインしてもらおうか」

「ふんむ、よかる。キリヤイバっと」

「待て、きちんと本名、いいや、違うな。お札マツチヨって書けよ」

「……………まあ、良かる。ほれ、これでいいか？」

でかい指で器用に鉛筆をつまみ、サラサラと一筆を施すお札マツ

チヨ。

サインした紙を遠山に差し出そうとして、ぴくりと動きを止めた。

「ああ、問題ない。……どうした？ 早く渡してくれないか？」

遠山が、目を細めて紙を受け取ろうと手を伸ばす。しかし、お札マツチヨは自分の手元に誓約書を引き戻して。

「む、むむむ？ ……わぬし、右隅の方にすごい小さな字で色々書いてあるんじゃないか？」

「あー、但し書きの部分だな。いや、でももうお前サインしてるから今更無しかは出来ねーぞ。はい、これは回収させて頂きまーす」

ぱしり、遠山がひらひらした誓約書をひったくる。既に、署名は為された。形だけでも、遠山とこの異様な存在は紙を交わした形で互いの利益を定めたのだ。



「あ！ ちょ！ 待たんか！ なんと抜け目のない奴…… せめて内容の説明くらいせえよ」

「なに、シンプルな条文だよ。ほれ」

遠山がぱしりと紙を叩いて伸ばし、お札マツチヨに見えるように掲げる。

巨体がしゃがみ込む。じっと、見えているか見えていないのか分からないが、お札マツチヨがその紙を凝視して。

「むむ、ほんに人の子というのは可愛げのある奴とない奴の差が激しいわい。わぬしのような子がムラを立て、儂らを利用し民を扇動していくのじゃろうなあ…… なになに、甲は乙の死亡によりその肉体の操作権を得た後は以下の約定を守る必要がある。これに反した場合、速やかに甲は肉体の操作権を手放すこととなる。」

その一、乙の死亡理由が他殺の場合、どんな方法を使っても乙を

死亡せしめた原因を滅ぼすこと

その二、乙が生前構築していた友人関係、または利害関係においての味方、友軍勢力に対してのいかなる敵対行為も認めない、どんな形での不利益も与えることを厳禁とする

その三、上記の2つを守るのなら後は自由。お前の好きなように生きればいい

……なる、ほど。貴様、やはり抜け目ない、のう

その紙、遠山があえて右隅に小さく書いていた細かい約定をお札マツチヨが読み上げた。

しん、とお札ヅラが遠山を見下ろす。

遠山は静かに汗を流した。耳の奥、音が聞こえる。お雛子の音、誰かが囁く音。

遠山鳴人の人間としての機能が、悲鳴をあげ始める。這いつくばれ、膝を折れ、首を垂れる。

畏れ。

ドラ子たち、竜を感じるそれや、本気になったストルや執事の爺さんと相對した時に感じたものとも違う。

祭囃子の音が、どんどん大きくなる。見たこともないはずの光景がまぶたの裏で踊り出す。

「……お前がなんか得体の知れない奴というのはよくわかるよ、仮称キリヤイバ。お前は決して善意だけでは動かない。お前はどちらかと言えば悪玉の方だ。勘だけどな」

痛む頭、響くお囃子に耐えながら遠山はただ、前を見る。わかっている、目の前のコレはあまり良いものではないということくらい。

「ほう……？ 我が夢の主人にして、我が刀剣の繰り手よ。聞いた  
い。それを理解していながら、儂をそこまで警戒しておきながら何  
故、今この場で対策を取らん？」

「何が、言いたい」

お札マツチヨの言葉一つ一つが耳鳴りとなる。お雛子の音は更に  
強く、鈴の音まで聞こえてきた。

「怖くないのか、と聞いてあるのよ。定命の者よ。貴様らは死を恐  
れるだろう？ それはすなわち己が消えることを恐れるわけだ」

お札がざわめく。

それは、ソレを押しとどめる。その荒御魂を鎮めるためにその国  
の歴代最強の霊的防御機構の力を込めて作られた対怨霊兵器。

卑弥呼の時より継ぎ足し、継ぎ足し編まれてきたソレの動きを止めるための機構。

だが、しかし世界を渡り磨耗したことによりソレを完全に抑える力はなく。

お札マツチヨ、ソレが嗤う。腹の底が震えるような超越者の嗤いだ。

「怖くないのか？ 貴様が死したのちは、この儂が即ち貴様となるのだ。遠山鳴人、ソレはつまり貴様という個の尊厳の冒涇よ。我はまつろわぬ者、我は境界を隔てる者、平原に溜まる霧、山間に広がる霧。貴様は死した後、我に尊厳を奪われるのだ。個人の定義、遠山鳴人という個の絶対性を我は貴様から奪うのだ」

お札マツチヨ、キリヤイバの声が続くと共に足元に溜まる霧が更に濃くなってゆく、

紫色の肌、血の気の失せた肌、筋骨隆々のそれが霧の海にばかりと浮いていた。

「定命の者よ、答えよ。怖くはないのか？」

それは大いなる者から小さき者への問いかけ。本来であるならば、相応しい血を持ち、特別な力を持つ人間のみが聞こえるはずの声。

神職、神事、巫女。古来よりニホン人は、自分たちの力ではどうしようもない世界の力に神を見出した。

それを崇め、それを畏れ、敬い、共に生きてきた。

「怖いな。自分が死んだ後に、他人が自分の身体を使って動くのなんて想像しただけでキシヨイわ」

畏れ。二ホン人、民族として遠山の中に備わるその概念が身体に異常をもたらす。

正直に、遠山は意識を気合いで保ちつつ、嘘をつかずに答えた。

「ならば」

お札マツチヨ、まつろわぬ者、天原に棲まう大いなる者が小さき者の言葉を聞いた。

恐怖を口にするのならば、恐れを理解しているのならば。

ソレは小さき者の恐怖に忍び込む。

遠山鳴人の言う通り、ソレは善玉の存在ではない。隙あらば、遠山鳴人という依代を今すぐにでも乗っ取りたい。

だが、ソレは同時に遠山鳴人を本気で恐れていた。遠山鳴人の冒

険を、人生を間近で見てきたそれは本気でその小さき者を恐れていた。

だから今は待つ、余計なことはいない。

まあ、それはそれとしてちょっとかいはかけてやる。いつかその時の為に少しずつ、少しずつ、準備をしておく。

大いなる者が更なる言葉を紡ごうとして。

「だがそれはリスクの話だ。お前という存在がもたらすリスク、いや、デメリットの話だろ」

「……でめりつとっ」



遠山の言葉が、お札マツチヨの言葉を遮る。

お札マツチヨが言葉を紡ごうとした途端、動きを止めた。

遠山鳴人の目を、見たから。

「ああ、お札マツチヨ。お前が本当にキリヤイバなら、お前は力だ。お前は素晴らしい力だ」

その男は酔っている。その男は酔いながらも知っている。

力。

人生を生き抜くために、己の欲望のままに進むために、手に入れるために、奪われない為に必ず必要はその名前を知っている。

「ちから、だと？」

「ああ、何度でも言おう。死後、お前に俺の死体に乗っ取られるなんて胸糞悪い。得体の知れないお前が何を狙っているのかはつきりしないのも怖い。お前が俺の死体を使って、俺の知ってる人間に近づくのも吐き気がするよ」

「それを理解していながら、なぜ儂を受け入れる？」

「簡単な話だ。それを補って余るほどに、そのデメリットを飲み込んでなお、キリヤイバ。お前が俺には必要だ」

霧が、歪む。

お札マツチヨを包み、まとわりついていた霧が、キリがゆっくりと遠山鳴人の方へ流れ込む。

「――」

その様子をただ、お札マツチヨは黙って見つめるだけ。

キリは知っている、己の主人がどちらであるのかを。

キリは知っている、大いなる者をすら飲み込むその男の強欲を。

「お前は力だ。ちっぽけで何も無い俺が欲望のままに生きるためにはお前という力がある。……冒険の続きがあった。あそこで終わリじゃなかった。俺の現代ダンジョンライフに続きがあったんだ」

力が必要だ。この世界は気を抜けばすぱりと死ぬ。もう多分次はない。死んでも死なない、そんな力が欲しい。

遠山は、その歪みを自覚してなお求める。知っているのだ。力がない者の末路を、無力の惨めさを。

全部奪われる、弱いままだと全てなくなる。その喪失の恐怖を知っている。

「この異世界で、俺は今度こそ必ず辿り着く。俺の夢、俺の欲望、そこに必ずたどり着く。そこに必要な奴らを連れて、どんな方法を取っても必ず」

栗色の瞳に、お札マッチョがはっきりと映る。それを見ても目は潰れない。

人は、自然を恐れる、人はソレを敬う。

しかし、時に人はそれすらも利用し、己がものとする。

この異世界には存在しない概念。人を造りたもつたもの、あるいは人が作りしモノ。

これは再現だ。過去、どこかの誰かが踏破した瞬間の焼き直し。

人の中には必ずそれが現れる。今の遠山のように其れを嗤い、ソレを乗り越え、踏み越える者が必ず現れてきた。

「俺はこの世界で欲望のままに生きていく」

遠山の理由なんて、それだけだ。

全ての問いに対してこの男はこのたった1つの答えしか持っていないのだ。

「ほ、う」

「だがな、これは現代でも同じだが残念ながらこの世界にもクソ野郎が多い。どこもかしこも獣ばかり、うざってえ人間、恐ろしい化け物、生かす価値もない悪党ども。ああ、全部目障りなんだよ。そいつらは想像力のない頭で俺を殺そうとしてくる、俺の邪魔をしてくるだろ」

遠山鳴人の人生は、常に奪われ続けてきた人生だ。選ばれた者でない、しかし、持たざる者でもない。

ただ、奪われた者。故にどこまでも欠落を埋めるものを求めるのだ。

欲望。それを叶える為に必要なものを遠山鳴人は幼い頃から知っていた。

「力が欲しい。金、人脈、権力、物資。この世を愉快に生きていく為に力はどれだけあっても足りやしない。そして、キリヤイバ。お前はその力の中で最も大事な存在だ」

キリが、遠山に集う。

白いモヤの中、血の気のない肌をもつ巨人と、目つきの悪い男だけが相對する。

「言ってみい、くくく、少し、いやかなり、気になるぞ。定命の者よ」

お札マツチヨは、愉快げに喉を鳴らした。何かを期待するように、言葉を待つ。

「暴力だ」

にいつと、遠山が嗤う。

汚い笑みで、醜い顔だ。取り繕うこともなく、その力を振るう時と同じ顔で嗤う。

「お前は、俺の力。俺の暴力。この世界を生き抜く為に絶対に必要なものだ。お前を運用するためならば、飲んでやるさ、薄気味悪い契約も、死んだ後でめえに好き勝手使われる屈辱も、全て飲み込もう」

冒険者、遠山鳴人の行動倫理はただ一つ。

欲望のままに。

「だから、今は俺に従え、俺キリヤイバの為の道具として」

遠山はその力の運用を既に決めていた。

未登録遺物キリヤイバ、それはもう遠山鳴人の欲望を叶える為の道具なのだ。それ以上でも、以下でもない。

もう、お囃子の音は聞こえない。

霧が、ゆっくりと薄くなる。見上げる遠山、見下ろすソレ。

互いに互いを恐れ合う奇妙な関係。



コイツは自分を害することが出来る存在だ。遠山とお札マツチヨは互いに、同時に、同じ認識を得ていた。

沈黙、霧に揺蕩う。

「……は、はは。ああ、良い」

最初に口を開いたのはお札マツチヨだ。

「ああ、なるほど。”鹿島の”が言つてたことはほんとじゃったか。”道敷の”にその生を定められ、いずれ必ず滅ぶ小さき存在、しかしその生の儂さゆえに生まれる歪さから我らをも魅せるものがたまに現れる……」

お札に覆われた顎を撫でながら、遠山を見つめてつぶやく。

「く、ははは、ああ、良い、よいよいよい。ああ、アレがわぬしを主人として認めちよる理由がよくわかったわ」

ちらり、丸い扉の方を一瞥し、その笑い声響く、響く。

「くはは。改めて誓おう、遠山鳴人。我が最大の天敵にして、我が勇者よ。儂を何度も恐れさせ、幾度も感嘆させた褒美ぞ。我が霧、存分に使うといい。そして、1つ教えよう」

「あ？」

遠山が目線を向ける。

「どうしても、勝てぬ敵。どうしても勝たねばならぬ敵。それが現れた時、一度だけわぬしに無条件で手を貸してやる。……人間を辞める覚悟が出来た時、絶望と殺し合うその時に、我が名を呼べ、我が剣を心の臓に突き立てよ」

ピロン

【条件達成】

「こえーって。死ぬじゃん」

「死なぬように突き立てよ。く、ははは。ああ、今日は愉快よな。なるほど、道敷に伊弉諾め、ほんに面白いものをよくもまあ、くははは」

霧がふと、濃くなる。お札マツチヨは満足そうに笑いながら遠山へ背を向けた。

遠山鳴人は勝手に現れて、勝手に去りゆくその背中に向けてため息をついて。

「おい、お札マツチヨ。今回は見逃してやる。次、しょうもないことで俺を揺さぶろうとしてみる。契約違反だ。ペナルティを受けてもらっぞぞ」

「ああ……それは、恐ろしい、ほんに、恐ろしいのう……く  
わばらくわばら。我が勇者の望みのままに」

ひらひらと手を振り、のっしのっしと去っていく。本棚の向こう  
側に霧を連れてお札マツチヨの足音はいつのまにか聞こえなくな  
った。

「……消えた。エンジョイ勢かよ。てか、あいつ普通にパン文書館  
出入りしてんのな」

どっと、疲れた。夢の中でも色々あるのは油断出来ない。やたら  
血を吸いたがるメガネに、お札を顔面に貼り付けた怪しいデカマツ  
チヨ。

ヤダ、俺の夢、クセ強すぎ。

遠山が眉間を揉みつつ、薄くなっていく霧を払う。

少し、湿っぽくなってしまった本を抱えて、適当な椅子とサイドテーブルの置いてある場所に腰掛けた。

本来の目的、竜祭についての準備を進める。

今夜のホストバトルを制したおかげで、出店参加の目処はついた。

Zenniからの妥協を引き出せたのもデカイが、ホスト騒動を見ていた上流階級の連中の何人が口利きもしてくれるらしい。

後は、その出店を成功に導き、竜祭の栄光、市場王メルカリーの称号を手に入れるだけだ。

「あつた…… 1860年、アメリカ、ドイツ系移民の屋台…… 1916年、ニューヨーク、ブルックリン、ネイサンズチエーン」

本を読み進める。それは知識の眷属との取引により手に入れた遠山鳴人の力の一つ。

「18世紀後半…… トマト、ナポリ、マルゲリータ王妃」

この世の全てをすら知り尽くせたかもしれないその可能性は今や、“パン”の知識だけに絞られた。

「ピタパン、貧民街、18世紀、ジョン・モンタギュー諸説あり……」

この異世界の歴史ではない。知識の眷属の公文書館にはより優れた知識だけが収束していく。

ありとあらゆる歴史、世界の優れたパンの知識だけがパン文書館に集う。

この世界では生まれなかった文化。天使により剪定されたヒトではたどり着けなかった可能性が、今ここに。

何に庇護されることなく、殺し合い、食べて、犯して、寝て、そしてまた殺し合う。そうして世界を生きてきた人類ホモ・サピエンスだからこそ得ることの出来た文化が、今ここに。

「必要なのは、肉と野菜と…… 竈か。 ラザールなら作り方を知ってるか？ いや、最悪あのドワーフたちを雇ってもいい。だがそうになると家賃やらなんやら考えてもう少し金がいるな……」

ゆっくり世界は変わり出す。

だがそれはやはり焼き直しに過ぎない。遠山鳴人が生きた自由な世界も同じように変わってきたのだ。

「……欲しいな。もっと、もっと必要だ。小麦粉、乳、そうだ、たしかここに来てからチーズを見たことないな…… 銭ゲバをもう一度揺すってみるか？ いや、でもな」

世界をゆっくり変えるのはいつだって、ちっぽけな人間の欲望だ。

遠山鳴人が、本をめくりながら小さく嗤う。

知識もまた、力なれば。

それは遠山鳴人の冒険を助けることになるだろう。

知識の眷属には歩み寄りを。

霧の悪魔には契約を。

汝、その強欲を以ってゆめを率いよ。

「さーて、現代グルメ無双の始まりだ」

たのしい夢は続く。ぺらり、ぺらり、一枚ページを捲るたびに香



る焼き立てのパンの香り。

遠山鳴人は、ひたすらにページをめくりつつける。

ぱちり、遠くの暖炉から火の爆ぜる音がして。

夢から覚めるその瞬間まで、パン文書館にはページを捲る音だけが静かに、静かに。

……  
……

「で、結果は？ 彼を脅かすことくらいは出来たわけま、聞く必要もないだろーけど」

知識の眷属が、ティーカップを傾ける。床に垂らしたお茶の液はしかし、カーペットに落ちる直前、くるくる廻ってハーヴェイの力

ツプに戻っていく。

「ふん、何を偉そうに。貴様もその様子だとえらく絆されておるではないか。あの忌まわしい書だらけのこの場所もえらく香ばしいものになったものよ」

霧を従わせ、ぬうつと現れたお札の巨人。その場にあぐらをかいて気怠げにあくびしつつ答える。

遠山鳴人がひとしきり本を読み、夢から去ったのち主人なきゆめの世界で彼らは語る。

「はっ、この世の全てを支配出来る知識よりも、パンの知識を選ぶなんてどんな頭してたら予想出来るのよ」

「ああ、うん、それはまあ、貴様に少しばかり同情せんでもないの。まあ少しばかり肝が冷えた。やはりあやつ、アレの飼い主だけあるわ。文句なくイカレとる。……あの扉に近付いたのはやはり、よばれたんかの」

「でしようね。アレって元々は群れを作る生き物でしょ。彼のことを仲間か、家族か、少なくとも群れの一員だと今でも信じてるのよ」

「ふむ、じゃからあやつが死にかけたあの時現れた訳か。うーむ、湖の底に沈めたが、この調子じゃとまた出てきそうじゃの。次はもう無理ぞ、儂。同じことが出来るとは思えん」

「出来ないんならあたし達は滅ぶだけよ。でも、アンタその割になんか嬉しそうね。キモいんだけど」

「やかましいわ、貴様に言われとうない。……儂や、やはり決めたぞ。此奴が欲しい。死んだ後は、此奴の身体で旅がしたいわ」

「は？ 何言ってるの。彼が死んだ後はあたしのだから。彼はきつと、あたしがどこから来てどこからきたのか。それに近い場所にいる。死如きで、あたしの探究から降りさせるわけないじゃん」

「知ったものかよ。と、言いたい所じゃが、アレがまだある以上貴

様と争うのもバカらしい」

「……そこだけは同感。少なくとも、アレと比べたらアンタが彼の死体を動かす方がマシね。アンタはまだ考え方が人寄りなもの」

「……げに恐ろしきは、獣の法か。いくら懐いても、いくら近くても、ああ、無邪気ゆえにほんに、恐ろしいものよのう」

「ま、アンタがいなければあたしも今頃消えてるだろうし。手を組む気はないけど、話を通じることだけは評価してあげるわ」

「ほほ、アレと比べられるのも気に入らんが、まあ良かる。……仮にじゃが、今、儂の勇者が死んだらアレは何をするかの」

「さあ。分かるわけないでしょ。でも、予想は出来る。あたしらの最悪の予想の下を行って、それを突き抜けるくらいのことにはするんじゃない？ 飼い主が飼い主なら、アレもアレよ。……ま、別に彼のそーゆー所嫌いじゃないけど、てかアンタの勇者じゃなくてあたしのなんだけど」

「うわー、ちよろー。オボコか？ 貴様」

「黙れ、肉ダルマ」

「ほほ、怒るな怒るな。まあ、そういうわけじゃ。また我が勇者がここに来た時は遊びにくるわ」

「ざけんな、ボケ老人。……ねえ、アンタさ、もう一度アレが目を覚ましたらどうなる？」

「わからん。アレの機嫌しだいじゃろ。まあ、間違いなく言えるのは」

「儂ら2人とも殺されるじゃろ。アレがその気になればの。まあ、そうならんように、我が勇者が死なんように祈っておこうぞ。あー、でも死なんかつたら肉体を貰えんの。やや、ほんにこの世は思い通りにならぬなあ」

「……これだから死生観狂ってる連中って嫌いなよね」

ゆめの住人の会話、霧の中で続く会話はひとしきり。

その声の届かぬ場所、パン文書館のまん丸扉、パン文書館の外、まん丸のみずうみ。

遠山鳴人のゆめの中、愉快的住人たちはひっそりとそれぞれの思いを主人に預けて、動き出す。

ゆっくり、ゆっくり、動きだす。

61話 汝、その強欲を以ってゆめを率いよ（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを「」覧くださいー！

< 苦しいです、評価してください > デモンス感

## 62話 祭りのまえに

くある深夜、本来なら人のいないはずの冒険都市門外、平原地帯にて

私の人生ってなんだったのだろうか。

私って、生きてる意味があったのだろうか。

身体が、痛い。息が出来なくて苦しい。熱い、溶ける、肌が溶けて、肉が溶けて、血が溶けて、骨が溶けていく。

とても、痛くて熱くて。



泣きそうだ。ああでも、涙も、胃液で溶けていく。

「じゃア、シャアア」

面白い。私を丸呑みにした大蛇が鳴いている。哭いている。私が思ったより美味しくなかったからだろうか。

「ごめんね、餌としても私は無能みたい。

無能が人の形をしたもの、それが私だったみたい。

王族としてもダメだった。上姉様や、兄上のようにはなれなかった。

冒険者としてもダメだった。唯一あの国から共に逃げ延びてくれた従者のウオレスも死んだ。本当にあっけなく、別の冒険者の男に絡まれて、そのまま路地裏で首を折られてゴミ箱に捨てられた。

女としてもダメだった。冒険者の男に命乞いして遊ばれて、その後街の外に逃げようとしたら門番たちに髑られて、色街に落ちて、そこでもたくさん髑られて、消費されて、奪われ尽くした。

姉としてもダメだった。結局、あの子を理解することは出来なかった。最期まであの子が何を考えているかもわからなかった。どうして、あの子が私だけを帝国に逃したのか、わからなかった。

「あー」

私は死ぬ。ここで、何も為せず、命すら賭けることなく死んでいく。

なんて、間抜けな終わり方。逃げて、逃げて、街の外に逃げた後、大蛇に丸呑みにされて終わるなんて。

嫌い。

全部、嫌い。この街、冒険者、私。全部全部嫌いだ。

私を黽つた男たちが憎い。

私を守ってくれなかった弱い幼馴染、好きな人すら憎い。

私を追放した妹が、私を見捨てたあの国が、私を、私を私を私私私私私私私。

ああ、全部、憎い。

でも何よりも、私は私が1番嫌いで、1番憎い。

「シャアアアアジ、ア、アアアアアア」

私を丸呑みにした化け物が哭いている。

今夜はとても、月が綺麗。

あれ、なんで、私、月が見えるんだろう。混じっていく、混ざっていく。

私が、化け物の胃で溶けていく。

私が、化け物の体に取り込まれていく。

憎い、憎い。全部憎い。

私、私って、なんだっけ。溢れてこぼれて溶けていく。

化け物と私の境界が消えていく。

ああ、ああアア。

私、今更、アハウフフ。

兄上の隠していた才能、上姉様の持っていた才能、そしてあの子の持っていた才能。

私にも、あつたみたい。本当に今更遅いけど。

大蛇の化け物の心が流れてくる。

私は彼女に食べられて、消化され、彼女となる。

この化け物は悲しんでいる、恐れている。

ある日を境に急激に数を少なくしていく同族のことを。

ある日急に、空っぽになる同族の巣穴を。

強く香る同族の死臭を。

「あ、アアアアし、アあ」

肉が、混ざる。溶けて消化される私の肉と彼女の肉が混じって  
く。

「う、シャア、アあ、う、フッフ」

私は死ぬ、私は死ぬ。

蛇の化け物に絞め殺され、飲み込みやすいように全身の骨を折ら  
れた後、丸呑みにされてゆっくり消化されている。

国を追われ、大切な人を無くし、体を冒されて、尊厳も奪われた。

私はしぬ、私はしぬ。

暴力だ。

彼女もまた暴力によって奪われる側の存在となっている。本来彼女の同族、この大蛇たちは強者だった。捕食者だった、世界にその役割を課せられていた筈だ。

平原にイノシシやシカ、うさぎの化け物が増え過ぎないように。彼らが森を全て喰らい尽くさない為の存在だった。

奪う側だった。恐れられる側だった。なのに。

「シャア、ア、う、あ、ひ、と」

彼女の記憶が、彼女の想いが私に流れ込む。溶けていく身体、心や魂が彼女のそれと絡みつく。

モンスター。人を喰らうモノたちと私たちの間に垣根はあまりないのかもしれない。

モンスター。化け物の記憶と思いが私に流れ込んでくる。

彼女は、受け継いだのだ。数を少なくしていく同族の嘆きを聞いた。その死臭に残る想いを継いだ。

敵が、いる。

恐るべき敵が顕れた。

ヒトとは違う人だ。

甘い血の匂いがする男、黒い髪に、茶色の瞳。

「ジ、ア……と」

仲間もいる。最初はソイツと2人だけ。竜の眷属、なり損ないのトカゲ。最近増えて、もう1人。深い血と、不思議な匂いのことも



の女。

私、私、私。

私は貴女、貴女は私。

私は今、貴女に食べられて、貴女になる。

大蛇の彼女の記憶が、私に。彼女の苦しみ、悲しみも私に。

私の憎しみと彼女のそれはとても似ていた。

嫌い、キライ、きらいだ。

私だけ、なんでこんな目に遭わないといけないの。どこで間違えたの、どこでしくじったの。

せっかく王国から逃げて、ウオレスと一緒に新しい人生を歩める

って思ったのに。

この街は、私たちを受け入れてはくれなかった。

私たちはこの街で生きていくことが出来なかった。

――あ。首折れてるな。死んじまったわ。ぎゃははは、ビクビク動いてきもちわりー

なんで、ウオレスが殺されないといけなかったの。ギルドの酒場でぶつかってきたのはあなた達の方じゃない。

――なあ？ ここを通るには通行料があるよなあ？ なに？ 金がない？ ……ふーん、ならさあ、お姉さん、ちよつと、こつち来いよ、オラ！ 逃げようとしてんじゃねえ！ お前ら！ 鍵閉めろ！

なんで、こんなことするの？ あなた達、教会の人でしょ？ な

んで、大人数で、いや、こないで、触らないで…… いや、イヤ、イヤアアアアアア！？

ーだめだや、お前、ビョーキ移されてるや。おい、今晚中に荷物まとめて出て行け。朝までまだこの馬小屋にいたら、カラスの連中にバラしてもらっや。全く醸造所の下働きのガス抜きにも使えん  
だがや

あれだけ、働いたのに。あんなにいやだったのに、気持ち悪かったのに。捨てられた。ビョーキでもう助けられないからって、捨てられた。

「きら、い。ぜんぶ、こくい、きらい」

ぼっけんとし、ぼっけんしゃ。

こいつらが、私をめちゃくちゃにした。

ウォレスを殺して、私を奪った。

ぼっけんしゃ。奪つもの。私は奪われた。彼女も奪われた。

「じゃア、ア、アア」

「ーうーん、決めました。トレナ。貴女は生かしてあげます。わたくし、これからこの国を殺しますけど、貴女は特別。逃がしてさしあげますね」

きおく、思い出すのはあの子との最後の会話。

あの国を出る為に港へ向かって、そこで彼女だけが私を見送った。

フォルトナ。私の双子の妹。顔や身体は全て同じなのに、あの子と私は全部違う。

「ーこれからわたくし。たくさん殺しますこれから。上姉様も、兄上も義姉上もその子も、臣下も民もたくさん殺しますの。それが出来るかどうか試したみたいんです。ええ、わたくし、運が良いですから」

イカれた私の妹は、多分本当に王の国を殺すのだろう。その”幸運”はきつと誰も止めることなどできやしない。

誰も彼女を理解出来なかった。親も私たち姉妹兄妹も。

「ーでも、トレナ。貴女には殺す価値もありませんから見逃してあげるのです。逃げなさいな。ウォレスを連れて帝国に延びなさい。まあ、そこで今度こそ自由に生きればいいんじゃないですか？ ひとつも見てて思いました。窮屈そうだなって」

でも、彼女は私を理解していた。彼女だけが私の理解者だった。私はカケラも彼女を理解出来なかったけど。

自由に、生きれば。

「ア、ア、そ、うね」

キライ、にくい。

殺したい。

化け物である大蛇と私の境界が完全に消えた。

これは、復讐だ。私たちは共にぼっけんしゃに奪われ続けたもの。

奴らが私たちから奪うのなら、私たちが奴らから奪ってもいいだ  
ろっ。

蛇は、私。

私は、蛇。

食べられたのは私。たべたのも私。

ぜーんぶ、私。

ぼっけんしゃ、だいきらい。みんなしんじゃえ。

人の私をいじめた奴らも死んじゃえ。

ぼっけんしゃ、血の匂いのする薄汚い連中はみんな殺す。

蛇の私をいじめる奴らもしんじゃえ。死臭の記憶を辿る。奴らに殺された私たちの同胞の最期の声、託された匂いを私たちは継ぐ。

トカゲの匂い、こどもの女の匂い。

声、鳴き声。

黒い髪、茶色の瞳。

そのぼづけんしゃを、トカゲが、こどもの女がこづ呼んでいた。

ーナルヒト<sup>トオヤマ</sup>

殺された大蛇、同胞の遺言が私が殺すべきぼづけんしゃの名前を告げた。

私と蛇が混じり合う。私の怒りと蛇の嘆きが混じり合う。

てき、てき、てき。



「と、お、ヤマ、な、ルビト」

ぼこり、ぼこぼこ。

溶けて崩れたはずの私の身体が、蛇の口から生え出る。

新しい私。私の身体はもうあの時みたいに弱くて脆いものじゃない。  
い。

蛇の体に人の身体。新しい私にこんばんは。

私はもう人じゃない。

私はもう蛇じゃない。

「ぼっけんしゃ」

私は、復讐者。

ぼっけんしゃを、殺すもの。

私は敗北者。

ぼっけんとしを、そこで生きる人を、そこで笑うモノを妬むもの。

私はしっぱいした。誰も助けられなかった。

もういいや、フォルトナ、貴女の言う通り私、好きに生きることにするわ。

まずは何から始めよう。ああ、そうだ。敵、敵を殺さないで。前の私は、ぼっけんとしに広がる敵に勝てなかったから、ダメだった。

蛇としての私を脅かすもの、ぼうけんしゃ。

へびである私達を狩り尽くすてんてき。

ぜんぶ、ころしてやる。

「トオヤマナルヒト」

ああ、月が綺麗。

私は、私の新しい身体をゆっくり伸ばして、それに手を。

私は手に入れることが出来なかった。私は冒険都市で生きていけなかった。異物として弾かれ、淘汰された。

ああ、もういいや。何もかも全てどつでもいい。

——自由にすればいいんじゃないですか？ トレナ、貴女になんて誰も期待していませんのですし。

ええそうね、フォルトナ。私の可愛くない双子の妹よ。

貴女の言う通り、自由にしてみよう。

「よる、きれい」

新しく生えた瞳で、私は冒険都市の月を見上げて——

……

……

…

レイン・インでのホストバトルから2日後、冒険都市アガトラ、  
青空市場にて

「いや、だからよー。このトマト、もう少し値段どうにか出来んかね。めっちゃ買うからマジで」

「だーから、兄ちゃんよ、これはトマトじゃなくね、”ポモドロ”だって言ってるだろうがよー。ああん？ 野菜の名前もまともに覚えねーやつがなに値段に文句つけてんだコラ」

「あ？ だからポモドロって要はイタリア語でトマトだろうが。なんだこら、イタ公気取りか？ 似合ってるねーんだよ、髪を生やせタコ」

「髪は関係ねーだろうが、胸糞わりー目つきしやがって。目開いてから文句言わんかい」

「開いてんだよ最初から。人の身体的特徴を悪口にするたあ、人間性を疑うなあ？」

「なんだあ？ さっきからイタリアだとかトマトとかピザとかわけ  
わかんねえこと言いやがって、若造が」

真昼間から、そこには青果店の店主とメンチ切り合うガラの悪い  
男がいた。

遠山鳴人だ。

「すげえや、兄貴。あの恐ろしい青果店の親父に真っ向から一步も  
ひいてねえ…… あれが、竜殺し……」

「いや、リダ、アレはただのヤカラだ。君たち未来ある子ども達が  
真似するべき姿ではないぞ」

青果店の店主と正面からメンチ切り合う遠山の背後、刈り上げの  
日焼けした少年、リダとリザドニアンの青年、ラザールが。

きらきらした目で遠山を見つめるリダをラザールが嗜める。

天気は晴天、往来には人々が行き来し、市場は活気にあふれる。

多くの人を抱えるこの冒険都市経済のバロメーターたる青空市場。

そこは今日も威勢のいい呼び込みの声や、値引き交渉の声に満ち満ちていた。

「けっ！！ けったくそ悪い！ ウチの商品の値段が気に入らんから他の店を当たりな！ 他の屋台にもポモドロ置いてるところはあるだろが！」

遠山のしつこい値引き交渉に、とうとう店主がキれた。たしかに30分は粘り過ぎだろう。それに店主も口が悪いが遠山も口が悪い。

目つきの悪い男といかめしいハゲヅラのメンチ合戦は他の客を完

全に遠ざけていて。

「いや、俺は決めた。トマトは必ずアンタの店から買いたい」

「あ？」

「他の露店で置いてある奴とは色が違う。真っ赤でツヤツヤ。おまけにヘタも濃い真緑、そしてなによりこの果実の底の尖り具合。見事な出来だ。この店に置いてあるトマトはどこかの農場と契約しているのか？」

遠山が八百屋じみた露店の台に置かれているトマトを指さす。

赤々とした皮が、冒険都市を照りつける太陽の光を、てかりと映している。良いトマトの証拠だ。

「……………わかるのか、若造」



「わかる。この出来はただの運だけじゃたどり着けない境地だ。土、草取り、剪定、いや、それだけじゃないな。そもその農場の場所、日当たりから計算し尽くして精魂込めないとこれは作れねえ。ましてや科学由来の農薬無しでこの出来栄え。この街でアンタのこの店ほど良いトマトは見たことがない、果たしてこれを作るのに何をどれだけ犠牲にしたのか、想像すら難しいよ」

遠山は店棚に積まれているトマト、この世界ではポモドロと呼ばれる赤い果肉野菜を手に乗せて言い切る。

ずっしりと、重たい。程よい水分をしっかり蓄えていることだろう。

いかめしい面のハゲ店主がごくりと息を呑んだ。

しわらだけらの顔が目を細めて、遠山を見つめる。

「……若造、名前は」

店主の声。喉から搾り出されるような声だ。

「トオヤマナルヒト、冒険者だ」

すらり、遠山が答える。

「へっ、冒険者がなんでそこまでたかが野菜一つにそこまで本気になるんだよ」

「良いものだからだ。たかが、なんてアンタは微塵も思っていないだろ」

「じゃあ値引きなんて言わずに買えばいいだろ」

「ただ食っただけなら言い値で買っさ。でもな、今回は事情がちがう。この買い付け一つで俺の未来が決まるんでな。交渉はシンプルだ。トマト500個、銀貨9枚を銀貨7枚にしてくれ」

遠山がすらすらとよどみなく言い放つ。その言葉に負い目も何もない。

それ以上は何も言わない。ただ、射抜くような店主の眼差しから目を逸らさないだけだ。

「……………」

「あ？」

「うちにトマトなんて野菜はねえ！ あるのはポモドロだ！ ポモドロ……！」

店主が遠山にずっと身を乗り出し叫ぶ。

「へえ、つまり？」

「けっ！ トマトなんざ知らねえが、ポモドロならあらあ。しづつくばりめ、気が変わった！ てめえの言い値で売ってやるよ！ みようちくりんの冒険者野郎が！」

「イエス！ 交渉成立！」

無表情から一転、遠山がにいつと口を吊り上げて手をぐっと握りしめる。

「ああ、やっと終わった？ もう、アンタも強情ねえ。お客さん、この人ね、ポモドロの出来を褒められて嬉しいのよ。ごめんなさいねえ、何分も付き合わせて。この人なんだかんだお客さんと値引き交渉するの好きだからさあ」

露店の奥から恰幅のいい女性、猫耳の生えたおばちゃんが現れた。遠山と店主の値引き交渉をずっと眺めていたらしい。

「な?! か、かあちゃん、そういうのはやめろいや! 俺ア、ただほんと気が変わったただけだよ!」

「はいはい、で、お客さん、いつまでにポモドロは必要なんだい?」

わきやわきやと騒ぐハゲ店主を流しつつ、恰幅の良いネコミミのおばちゃんが遠山に問いかける。

前掛けに、どっしりした態度、恐らくこの店の本当の権力者は彼女なのだろう。

遠山はびしりと居住まいを正して、

「1週間後でおねがいします! ラザール、リダ! こちらの紳士とご夫人が俺たちにトマ、いやポモドロを売ってくれるってよ!」

「すげえや兄貴、店主さん、ありがとっ!」

「まあ、ナルヒトにしてはたしかに平和的、だったな。ご主人、ご婦人、こちらの連れがしつこくして済まない。貴方が丹精込めて作った野菜のおかげで腕が奮えそうだ」

リダとラザールがそれぞれ頭を軽く下げつつ近づいてくる。

「あ？ リザドニアン？ ……リザドニアンに、黒い髪の冒険者…  
… どうかで聞いたような……」

「あらやだ、ご婦人なんて。ふふ、冒険者のお兄さんも素敵だけど、リザドニアンのアンタも良い声だね。モテるでしょ？」

ラザールを見た店主とおばちゃん、それぞれ何か思うことがあるらしい。

「いやなに、ウチの連れほどではないさ、何せコイツはレイン・インのナンバーワンホストだからな」

ラザールがその言葉をいなしつつ、遠山を手で指し示す。爬虫類特有の縦に裂けた瞳がにやりと、歪んでいた。

「……おっと、こんな時間だ！ おっさん、ほら、先払いだ。帝国銀貨7枚。きちーんと数えてくれよ」

「お、おう。……ああ、確かに7枚だ。1週間後にまたこの店に来てくれ。用意しておくからよ」

遠山がさつと、懐から財布がわりの革服を取り出して、中から銀貨を取り出す。7枚、支払いに誤魔化しも交渉もいらぬ。

「あ、いくつか包みで今貰っていいか？ 試作品の為に必要でな」

「試作品、1週間後？ ……まさか、アンタら、竜祭に出るのか？」

店主がぼかんと口を開けつつ、おばちゃんがさつと真っ赤なトマトによく似た野菜、ポモドロを包んでくれた。

「ああ、おっさん、アンタは運がいいぜ。1週間後、冒険都市は、いや、帝国に最強に美味しいパンがたくさん生まれる。ラザールベーカリー、アンタが来たなら少しおまけしてやるよ」

「ら、らぎーるベーカリー？　なんだそりゃ」

「あら、たのしみにしておくよ。珍しいねえ、冒険者なのに竜祭でお店を出すなんて」

「そのうち嫌でも聞くことになるさ。ありがと、おばちゃん。ラザール、リダ、トマトは確保！　次の店に買い付けん行くぞ！」

ポモドロの包みを受け取った遠山が、店を後にする。

「おう！　兄貴」



「了解だ、ナルヒト、ではご婦人。最近は暖かいが夜は冷えます。お体にお気をつけて」

「まあ、どうも、素敵な冒険者さんに、可愛いぼっちゃんに、リザドニアンさん。アンタらの今日という一日に天使様の口付けがあらんことを！」

ラザールやリダが店に会釈して、遠山を追う。

ホストバトルから2日経ったある日のこと。遠山達は本格的に竜祭に向けての準備を進めていた。

昨日と今日はいわゆるオフだ。街の外に出たの狩猟は2日ほど行っていない。

それと言うのも、ドロモラから市場に必要な以上のテイタノスメヤの素材を卸した為、価格の高止まりが起きているのを聞いたこと、そして異端審問会としての仕事、密造酒醸造所の破壊の報酬などで

割と金銭的にも余裕ができていたのだ。

なので、今日も今日とて竜祭の露店の準備。遠山の一味全員で青空市場に繰り出していた。

「さて、とりあえず、ストールやニコ達と合流するか。そのあと、卵の買い付けな。リダ、この前ストールと一緒に市場に行かせた時のメモ覚えてるか？」

雑踏の中を遠山達は進む。時折、拳動の怪しい者がこちらをチラチラ盗み見してくる、じろりと睨めば消えていく、恐らくスリか何かだろう。

遠山は周囲に気を使いつつ、リダに話しかける。

「ああ、もちろんだぜ、アニキ。卵は大体1つが銅貨3枚、普通だと6つ1セットで布に包まれてるからそれで大銅貨1枚から2枚が相場の筈だぜ」

指を折るのもすぐに、リダが答えを導き出した。

ラザールがそっと、歩幅を大きくしてリダを遠山と挟み込むような形で歩調を合わせる。

「OK、頭の回転早い奴は頼りになるよ、リダ、問題だ。大銅貨5枚は銀貨1枚の何枚分だ？」

「えーと、大銅貨が10枚で銀貨1枚分だから…… 半分、いちの半分だから、0.5枚もしくは2分の1枚ってやつのはずだ。この前教えてくれたから覚えてるぜ」

「素晴らしい。それじゃ計算だ。さっき買い付けしたトマト、いや、ポモドロ500個。俺は銀貨7枚で購入した。んで、問題だ。もし、必要な個数が半分の250個になったら、必要な銀貨は何枚になる？」

子供たちの中でもずば抜けて頭が冴えるのがこのリダという日焼けした少年だ。スラムでもあのグループたちを率いるリーダー的な立ち位置だったのも理解出来る。

あの生活環境で、幼い彼らだけで生き抜けたのもリダの手腕によるものが大きいだらう。

「えっと、……わかった。だいたい銀貨3枚…… いや、割り切れないから、3・5枚…… あ！ 銀貨3枚と大銅貨5枚でちょうど払えるぞ！」

「お、気づいたか。計算はえーな。教えがいがあるよ。お前にそのうち仕入れやら頼むのもいいかもな」

「う、お、おれが？」

ぱちくり、リダが遠山の言葉に目を瞬かせた。

「ああ、リダ。お前は地頭がいい。ルカみたいにすばしこくなくてもニコみたいに愛想がなくても、ペロシロみたいに幼くなくても、お前にはきちんと力がある。期待してるぜ、リダ」

「う、おおおお……ま、任せてくれ、アニキ！あ、部屋に戻って時間あったらまたこの前教えてくれたかけ算や、九九について聞いてもいいか？！」

「おう、ルカやらニコやらはまだ引き算がダメだからな。ストルに至っては100まで数が数えれない残念仕様だ、望むところだ、リダ」

遠山の言葉にリダが目を輝かせる。

そこにはまるで仲の良い兄弟のような光景があった。

遠山鳴人が自分で選んで救った光景の一つだ。

「……………」

「どした？」

「ラザール」

2人のやりとりを黙って見つめていたラザール、彼の視線に気づいた遠山が首を傾げる。

「いや、なに。戦闘の時と普段の時に本当に人間が違ふなと思って、感嘆していたわけだ。ナルヒト、アンタ、今更だが算術やら古代二ホン語やらはどこで学んだんだ？」

リダを挟んで隣で歩くラザールが声を向けてきた。

遠山は少し、道脇の露店を眺めてそれから

「前にも言ったけど、義務教育だってば。ラザール、この辺説明すると長くなるんだ。パン屋作って落ち着いたらきちんと話ささ」

「……まあ、今更アンタが何を言っても驚けない気がするよ。だが、ククク」

遠山との付き合いに慣れ始めたラザールが、早々に追及を諦める、そしてリダにちらりと視線をやったあと、口元に手を当てて笑い出した。

「なんだよ、気味悪いな」

「いやなに、案外子どもの面倒見がいいと思ってな。意外だっただけだ」

ふ、と笑うラザール。誰目線のセリフだよ、と遠山が目を細める。

「ラザールの旦那！ アニキはすげえんだぜ！ 頭が良いし、俺の知らないことをたくさん知ってる！」

ぴょんこ、ぴょんこことリダが、その年頃の少年に相應しい振る舞いでラザールへ明るい声を向けた。

あのスラム街で出会った時より、最近はかなり顔色もよく、そして何やらよく笑うようになっていた。

「おーおー、その調子で褒め称えてくれりダ。 ラザール、案外と意外は余計だぜ。俺は元々こんなふうに優しい心の博愛主義者なんだからよー」

「は、くあい？」

「うわ、なんつー顔してんのよお前。 っと、 ラザールのたわごとにつき合ってる場合じゃねえや。 ニコとルカを探さねえと。 ペロシロのお守りに加えてストルのお守りも頼んでるからよー」

「ストルがお守りされる側なのか。 彼女はしかし、あの天使教会騎士団の最優の騎士だぞ。 ナルヒト、彼女への評価がいささか過小評価に過ぎないか？」

「……んー、 ラザール。 言っとくけど、 あいつはよー」

ラザールのストルへの認識は、遠山のソレとは違うらしい。



「やんわりと、遠山が言葉を選んでー」

「だーかーらアア！　たくさんって言ってるじゃないデイスか！  
ん？！　個数？！　だからたくさんデイスって！　あのーあれデイスよ、アレ。きゅーと10よりも多いアレデイス！　こう良い感じにたくさんいるのデイスよ！」

市場の活気の中においてなお、その声はでかかった。

水色の髪を一束に。妖精かと思わんばかりの愛くるしい容姿、卵型の小さな顔。

それらは全て台無しにする、その表情。鼻の穴を開いて、額に青筋を立てて、露店に向けて、吠え散らかす残念な美少女がそこにいた。

「だ、だめよ、ストルちゃん！ 店員さんが口をぽかーんと開けちゃってるわ！ お兄さんの言う通り、市場では静かにしてましょよ。かいつけ？ とかはお兄さんやリダがやるのだから！」

そばかすの可愛らしい少女が残念な少女を嗜める。しかし、止まらない。散歩中の大型犬にひきずられる無力な飼い主みたいだ。

「ノン！ いくらニコちゃん言葉でもそれは聞けないのデイス！ 思えばトオヤマのあんちくしょうはこの私を舐めてるのデイス！ 昨日だって、リダやルカやニコに教えていた足し算？ なるもの！ 私にだけアイツ教えなかったのデイスよ！」

大型犬は止まらない。ふんふんふんと鼻息荒く。昨日、遠山が子供たちに算数の授業を施した時のことがよほど気に入らないらしい。

「え、えっと、ストルちゃん、それはだって、あなたが足し算の前に数字が……」

そばかすの少女、ニコが何かをいいたげに、しかし聡い彼女は言葉を濁した。

「ニコちゃん！ 人間の手足の指は20本デイス！ 天使様がそうあれかしとつくった身体では20本なのデイス！ つまり、人間はそもそも20本以上のものを数える必要なんてないのデイス！ よって、私が50から先の数を数えるのが遅いのも何も、おかしいことなど、ないのデイス！ デイスデイスのデイス！」

全く聴くない大型犬はやはり、止まらない。顔と腕力だけに才能を振りすぎたのだろう。

「え、ええ……」

「……やめておこうよ、ニコ。ストル姉ちゃんはほら、アレな人だから」

隣にいた少女とみまごう中性的な少年、ルカがペロとシロをあや

しながらぼそり、つぶやいた。

「デイス?! ルカ!? 貴方のその今のセリフ聞き流せませんデイス! トオヤマのあんちくしょうみたいなこと言わないでくださいデイス!」

「……ああ、もうだめだ。兄さんが、レーザーさんじゃないと止まらないや」

ほふう、ルカがため息をついて。

「とゆうわけで、この賢い私の凄さをトオヤマのアンチクシヨイに教えてやるべくアイツがやろうもしてる買い付け? を私達で終わらせておくのデイスよ! 店員さん! だからこのポモドロをたくさん欲しいのデイス! おかね?! たくさん払えばいいのデイスよね?!」

ストル・プーラ、14歳。今日もとても、元気らしい。

「ラザールくん。俺のストルへの評価がなんだって？」

その様子を目の当たりにした遠山がぼやく。

「ナルヒト、正直すまんかったデイス」

その淡々とした問いかけに、ラザールが目を覆って天を仰いでつぶやいた。

「ストルのアネゴ、ヤベー」

リダの言葉が全てだった。

今日も、彼らは冒険都市で生き残り、生活を続けていた。

「……良い天気だなあ」

遠山が、ぼそり。目の前の大型犬のハッスルぶりから目を逸らし  
て。

冒険都市に昇る太陽をぼんやり見上げた。

62話 祭りのまえに（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを！ご覧くだ  
さいー！

< 苦しいです、評価してください >      デモンズ感

## 63話 ドクター・ベーカーリー

「おいしー！！ これ、お兄さん、なんていう食べ物だっけ？」

「ソーセージだ、ペロ。よく噛んで食べよ。もぐ、……うーん、すこしパサパサしてんな。もうすこし肉汁が欲しい」

ニコニコとほっぺたを膨らませてソーセージを頬張るペロの癖っ毛を撫でながら、遠山が皿に盛られたソーセージを口に運ぶ。

肉の香りが強い。

よく言えば野生みのある味、悪くいえば肉の臭みが強い。香辛料の風味もほとんど感じない。

この世界の食べもの、とりわけ庶民向けのものはやはりニホン人である遠山の口に合うものが少なかった。



「ふん、トオヤマは妙に舌が肥えた所がありますね。あまり裕福な出とは見えませんデイスが」

INT1の水色の髪的大型犬、ストルがソーセージを噛みちぎりながらぼやく。

屋台にて非常に恥ずかしいことをかましていたストルをラザールと2人でひきずり、今は昼食の時間だ。

青空市場の中でも飲食系の露店が集まるこの場所には、椅子とテーブルが集めて置かれている。

屋台で買ったものをそのまま食べれるフードコートのような場所で、遠山達はたむろしていた。

「まあな。ウチの地元は飯だけには本当うるさい国でな。自国の領

海にミサイル撃ち込まれたくらいでは戦争しねえけど、食に関わることに首を突っ込まれた瞬間にはその首をもぎ取るような民族だし」

「み、みさいる？ なんデイス？ それ」

「……100をたくさん数えれて、それを足したり割ったり引いたりかけたりして、ようやく作れるものだな」

「……ヒトの所業ではありませんデイス」

しみじみとストルが額に皺をよせて、うーむとつぶやく。大型犬がたまに見せる、私もう何もわかりませんと言う顔に似ている。

「あながち間違いでもないな、ストル、そのパン一口もらうぞ……うーん、なんか妙な酸っぱさあるんだよな！。ラザールのパンはこんなモンなかつた筈だが」

もしやり。遠山がストルの前に置かれた黒い丸パンに手を伸ばす。

噛み締めるたびに感じる妙な酸っぱさ。ここにきてから口にしたパンのほとんどにこの酸味はついて回る。どうも遠山はこれがあまり口に合わなかった。

「……ナルヒト、この後はどうする？ たしか買い付けにはソーセージも必要と言ってなかったか？」

「あー、この辺はドロモラのおっさんに話を回してある。精肉系は数用意してもらうのに時間もかかるし、コネもいるだろうからな。ここでやりたかったのは味見だ。……ラザール、ここのソーセージ。お前はどう思う？」

「ふむ、別段文句はない。肉の風味も悪くないし、腐っている様子もないからな」

「うーん……なるほどな。ニホン人は舌が肥えすぎていけねえや」

「お前の口には合わないのか？」

「食べねえわけじゃないが、肉はパサパサ、味も薄い、肉の臭みも気になるから香辛料あんま使ってないなこれは」

言いながら飯に文句言うなんてかなり嫌な奴だな、遠山は自嘲気味に少し笑った。

「ふむ、香辛料、特に黒胡椒などは基本的に王国からの輸入だからな。なかなか冒険都市といえど屋台まで出回るものでもないのだから」

「あー、なるほど。ドラ子んところは金持ちだからか」

話しながら、遠山は以前ドラ子の竜大使館で食べたステーキの味を思い出す。

あれは美味しかった。

ふんだんに使われた黒胡椒は肉の臭みを旨味へと昇華させ、グレイビーソースには程よい甘み。

付け合わせのポテトにソースを絡めて食べるとホクホクがじゅわじゅわになり、最強だった。

たしかあれはモンスター肉だった筈だ。脂がたっぷり乗っているにもかかわらずどさがまるでない。現代では食べたことのないような肉。

遠山が、さて何の肉だったかと会話を思い出している。

「……それで、そろそろ教えろよ、ナルヒト。アンタ、一体竜祭で何をやるうとしてるんだ？ ポモドロ、ソーセージ、それにいくつかの野菜の買い付け。今のところパンの材料と関係ないように思えるが」

ラザールがソーセージをかじり、水を飲み干した後ゆっくりつぶやく。

鋭い瞳が遠山を見つめていて。

「おー、そういやあ、まだきちんと行ってなかったな。よし、全員注目。これから俺たちの目指すモンの説明するぞ」

活気あふれるその飲食スペースの中では多少声を張ったり動いたりしても目立つことはない。

遠山が立ち上がり、腕を組んでニヤリと笑う。

「アニキ、アンタが目指すモンはつまり俺たちが目指すもんだ。何を言われようと異論はねえよ」

「……リダがそういうんなら、こっちも同じ」

「みんながたのしいのなら私はそれでいいわ！」

「んーとねー、僕も美味しいものがたくさん食べれたらそれでいいよ。ねー、シロ」

「だう!」

遠山が選んで救った彼らがニコニコと笑う。

冒険都市の暗い場所、打ち捨てられ拾われなかった彼ら、捨てられた者だったはずの孤児達はしかし、今太陽の下で己の未来を眺めることが出来る。

「らしいぞ、ナルヒト。もちろん俺もだ。ついていこう、友よ。と、  
いうやつさ」

一蓮托生、奴隷スタートを生き抜いた戦友、付き合いは短いが遠山の人生の中で数少ないはつきりと友人と呼べるトカゲ男が肩をすくめた。

「ふん、ま 貴方は私の審問官デイス。どうぞ、ご命令を、なんな

りと」

ついこの間までは厄介な敵、しかしその歪さに遠山は昔の自分を  
見た。歪んだ正義の剣はいまや、強欲の鞘に収められ。

「ひひ、友達がいがある奴らばかりでありがたいよ」

ラザール・ベーカー。

遠山鳴人が、この冒険都市を共に生き抜いていく為に集めた仲間  
たちがここにいる。

この昼食を囲む仲間達の顔を順番に眺めて、ごほんと咳払いをし  
た。

頭に浮かべるは、己の夢。知識の眷属の領域、”公文書館”から  
得た知識。

だが世界を支配する知識よりも、遠山鳴人は己の欲望に役立つ知  
識を選んだ。



公文書館、いや、パン文書館の叡智は今や、遠山鳴人のものだ。

それは、より優れた世界のパンの知識。

欲望により進化する世界の歩んだ道のり。

「ある1人の人間がふと思いついた。平たいパンの上にトマト潰して塗りたくって食べたら美味いんじゃないかと」

18世紀、スペイン領、ナポリ。

「ある1人の人間がふと願った。トランプしながら食べれる美味いモンが欲しいと」

16世紀、イングランド南東部。

「ある1人の人間が気付いた。熱々のソーセージを持ち運びやすくするためにパンに挟んだら楽じゃね、と」

20世紀、アメリカ。ニューヨーク、ブルックリン。

遠山鳴人が語るは、現代において歩んだ発見の歴史。

人類はどんな時代、どんな環境においても必ず食を進化させ続けて来た。

「俺たちはこれからまだこの世界の人間が気付いていないことに先乗りする！ いずれ必ず誰かがいづくことだ。だが、今回は俺たちが先だ。俺たちが1番ノリだ」

指を空に。

真上にあがった太陽へ、遠山が指を指す。

この世界で唯一、それを知る人間。飽食の時代に生きた現代人が、ついに行動を開始する。

「何を始めるつもりだ？ ナルヒト」

ラザールの問いかけに、遠山がその細い目をぐわりと見開く。

唇を歪ませて。

「ヒト、この異世界、いや、帝国に新しい食文化をぶちかます。この世界のマルゲリータ王妃、ジョン・モンタギュー、ネイサンズになってやるうじゃねえか」

「遠山が言い切った。」

「この世界に彼らがいなければ、自分がそうなるだけだ。」

遠山鳴人はこれから、帝国に新たなパンの歴史を打ち立てるつもりだった。

「……ニコ、貴女、この男が何言ってるかわかるデイス？」

「ううん！ わからないわ！ でも、きっと楽しそうなことよ。アニキさんはすごいんだから！」

「よくわかんねえが、アニキ！ 指示をくれ。アンタについてい  
「ぜ」

「……ぼくも」

「僕とシロもです！」

「士気は問題なさそうだな、我らが竜殺し殿？」

ラザールが首を傾けて、流し目を遠山に送る。しっほがくるりと、

愉快げに揺れていて。

「大変結構、俺たちラザール・ベーカリーはこの世界に、”ピザ”、”サンドウィッチ”、”ホットドッグ”を流行らせる！ 欲望のままにな」

「ピザ？」

「サンドウィッチ？」

「……ホットドッグ？」

遠山の言葉に、遠山以外の全員が首を傾げた。聞いたこともない、という様子だ。

「やっぱり知らねえか。ここへ来てからの食事内容、酒場のメニュー、市場の店。ひとつたりともこいつらを売ってる店はなかったからなあ」

遠山の予想は当たっていた。

この世界、少なくとも帝国はパン食文化の地域なのにそれらがまだ存在していない。

「ナルヒト、その言い方だと、そのピザやサンド……」

「サンドウィッチに、ホットドッグな」

「ああ、それ。それはまさかパンの名前かい？」

「おお、そうさ。俺の地元では誰もが知ってる美味しいパンだ。この3つを嫌いな人間なんかいるのかつーレベルでな」

「……聞いたことがないな。それなりに俺もパンには詳しいつもりだったが。ストル、君はどうだい？」

「んー？ 私も聞いたことがないデイスね。まあ、そもそもパンと  
いうのは天使様のお恵みによって我々に与えられたものデイス。教  
会が作成を許しているものなのデイスか？」

ラザールに話を振られたストールが自分の顎に指を当てて首を捻る。

静かにしておけば文句なしの美少女なのだが、INT1だともう  
大型犬にしか見えない。

「……………うん？」

教会、作成を許す。

嫌な響きの言葉に遠山が動きを止めた。

「お、や。まさか、まさかまさかトオヤマさん？ ご存知なかつ  
たのデイス？」

によーっと、ストールが表情を崩す。目をパチパチ瞬かせて、むふーっと鼻息を吐いていた。

「くそ、愉快的な顔しやがって。……教えてくれ、ストール。その教会が作成を許してるってのはどういうことだ」

「ウィーフック、ふふーん。仕方ないデイス。無知で無勉強なトオヤマに説明してあげますデイス」

遠山が知らなくて、自分が知っていることがあるのが嬉しくて仕方ないらしい大型犬が腕を組んでデイスデイス言い始めた。

「ああ、はいはい。宜しくお願いします」

「ふふん、そもそもパンというのはデイスね。天使様の祝福を宿す天使粉という食材から作られるものデイス。小麦をすり潰し粉にすると天使様の祝福が宿ると言われています」



「ほーん」

「そしてその天使粉に教会が指定した分量で水、卵を練り混ぜよくこねて置いておくのデイス。そうするとあら不思議！ 天使様の祝福によりただの粉だった筈のものが、焼けば膨らみ、パンになるということデイスよ！」

「ふーん。ドライイーストやら酵母を混ぜる工程はないのか？」

「へ？ ドラゴン？」

「どうやら聞き慣れない文字以上の言葉を聴くとストルはもうバグるらしい。」

「話が進まないの、遠山は温かい目をストルに向けて頷く。」

「ああ、大丈夫。気にしないでくれ。で、その辺りの話がどうして教会の許可がどうたらこうたらに繋がるんだ？」

「む。何かひっかかる態度デイスがまあ良いでしょう。簡単デイス、パンとはつまり天使様のお恵みそのもの、ならば当然その製法や、種類は全て教会が管理するというのが帝国建国当時から続く習わしなのデイス」

教会が管理。

なるほど、”発酵”の存在の扱い方や、祝福税の導入から嫌な予感はしていたがやはり、パンにも教会の手が回っているらしい。

遠山の脳裏にあの糸目と、そこからたまに覗く金の亡者の紫瞳が浮かんだ。

「……ふーん。ラザールくん、なにか補足は？」

「博識な我らが騎士の言う通り、だな。帝国において販売が認めら

れているのは教会が指定した製法で作られた数種類のパンだけだ」

「どんなものがあるんだ？」

「そうだな、民衆にも広く普及しているものと言えば、代表的なもので言えば貧者のパンと呼ばれるホスブレド。まぜものが多いことからふすまパンとも呼ばれるな。他にも天使粉に乾燥した豆の粉を混ぜたブラウンブレド。いわゆる黒パンだ。あとは貴族や金持ち向けの白パン、上等な天使粉だけで作られたローフブレド切り分けられたパンといった所か？」

「ラザール、庶民向けのパンの中にピタパン。いや、なんていうんだ、こう平たいパンとかはあるか？」

遠山が、パン文書館で得た知識を言葉にする。それがあるかないかを確認しておきたかったのだ。

「平たいパン？ ふむ、聞いたことがないな。基本的に、天使粉で作られたパンは焼き上げると丸く膨らむんだ」

「……へえ」

遠山はラザールの言葉に目を細める。それは違和感を考察する時の遠山の癖のようなものだ。

というのも、パン文書館で手に入れた知識と、ラザールの今の説明が若干ズレるのだ。

遠山のいた世界の歴史において、中世から近世、いや下手したら近代までのパン食文化のある地域において”平たいパン”というのは割と主流のパンのタイプだった筈だ。

「ラザール、パン種の中に酵母、いや、例えばだがビールの搾りかす混ぜたりする方法は一般的なのか？」

「……っ、いや、基本的に教会が交付しているパンの作成法にそのようなやり方はないな」

一瞬、ラザールの瞳が揺れた。喉につっかえるような物言い。

「ふうん…… なーんかひっかかるな」

今のラザールの言葉や、先程のストルの言葉もそうだ。

帝国ではパンの発酵にいわゆるドライイーストや酵母は利用しない。正確に言えば人為的に発酵を後押しするものを入れる文化はないらしい。

だとすると、やはり先程の平たいパンについてのつじつまが、パン文書館の知識と合わない。

「確認するが、天使粉で作ったパンは焼き上げると丸く膨らむのか？ 特別なことを何もせずとも？」

「くどいデイスね、トオヤマ。その通りデイス、ソレこそが天使様のみわざなのデイスから！」

大型犬ストルの言葉を聞いたあと、遠山が目を瞑る。パン文書館の叡智を思い起こす。

パンを膨らませる方法は大きく分けて2つ。

ドライイーストや酵母を加えて発酵させるか、もしくは乳酸菌など、生地元々存在する常在菌のみで自然発酵させるかの2つだ。

この帝国のやり方はストルやラザールの言葉通りならば自然発酵の方法、遠山のいた世界では”サワードウ生地”と呼ばれる製法だ。

そして。

「すっぺえ」

遠山が手に持っていた黒パンをまた一口かじる。

もさりとした乾燥した生地からほんのわずかに残るパンの香ばしさ、そしてすぐに現れる酸っぱさ。

サワードウ酸っぱい生地と呼ばれる所以だ。イースト酵母に依らず、乳酸菌の発酵が進んだ生地は総じてこのような独特な酸っぱさを表す。

このパンは間違いなくサワードウ生地で作られたものだろう。

「おかしい」

遠山がつぶやく。

だからこそ、おかしい。

パン文書館の知識には、こう残されている。

”中世から近世、庶民の間で広がっていたサワードウ生地により作られたパンは酵母を加えられて作られたパンに比べて、膨らみにくく、平たい形をしていることが多かった”

遠山の知識通りでは、ベーキングパウダーなどの膨張剤なしのサードウ生地は、基本的にはあまり膨らまないパンになる筈だ。

なのに、この黒パンは味こそ現代のパンに遠く及ばないものの、その膨らみたるやイースト酵母で作られたパンと遜色はない。

つまり、この世界では酵母を人為的に利用しなくても、”天使粉”とやらを捏ねるだけでパンが簡単に膨らむということになる。

「……ピザが生まれてないのも、そもそも平焼きのパンがないのが原因か。教会の規制もあるだろうけど」

ぼそりと呟き、遠山が自分の中にあつた疑問に答えを見つける。

不思議だったのだ。パン食文化の地域で果たして、ピザが生まれないことなんかあるのだろうか、と。



だが、これなら納得がいく。

遠山のいた世界でもあったように、宗教はときに文化の暗黒時代を招くことがある。

教会によるパンの造成に対しての規制。

そしてこの世界の特異な”発酵”の仕組み。

「そもそも、ピザが生まれる土壌がなかったわけか」

この2つが、つまり帝国というパン食文化の国においてある意味、パンの上にトマトペースト塗って焼いて食べようというきっかけさえ有れば誰でも思いつくことが未だ実現していない理由なのだろう。

ホットドッグや、サンドウィッチも同じ理屈だ。

「なるほど、あの銭ゲバ。いや、天使教会の舌バカどもが。ひひひ、  
運が悪かったな。ニホン人を荒野にほっぽり出すと、どういうこと  
になるのか思い知らせてやる」

遠山が笑う。

ニホン人を荒野にほっぽり出すとどうなるか、そんなもの答えは  
決まっている。

「どんな手段、どんな方法をもってしても、荒野でかならず”美味  
しいもの”を食べようとするのだ。」

遠山も例に漏れない。この異世界はまだその国の人間の食に對す  
る呪いにも近い欲望を知らない。

ホモ・サピエンスの中でも、格別に食にだけは本気でうるさい彼<sup>ニホ</sup>  
らのことをまだ知らないのだ。

「ごほん、まあ、そういうことだ。ナルヒト、アンタのいうピザやホットドッグ、それにサンドウィッチ、興味はあるが、教会が許可していないパンを販売することは中々……」

ラザールの言葉に、一つ遠山はあることを思い出した。

それはあの時の味だ。

奴隷、馬車、異世界転移直後の――

――食つかい？

「待て、ラザール。お前のパン。あれ、どうやって作った？」

「ぎくじり」

ラザールの尻尾が、わかりやすくピーンと立ち上がっていて。

「こら、パントカゲ。顔背けるな。あの時、俺とお前が初めて出会った時のパン、お前あれ、なんか酵母使ってるだろ？」

「な、なんのことだか、わからないな。何も生地に混ぜてなんかいないぞ」

「へえ、その割にはさつき、ビールの搾りかすとかの話した時にはお前、らしくなく目が泳いでたぜ。ラザールくん」

遠山がじいっと、ラザールを見つめる。基本的に戦闘中も含めて普段は落ち着いているトカゲの友人の様子は明らかに変だ。

だらだらと汗をかいているラザールを、ただ、しばらく遠山は黙って見つめて。

「……はあ、降参だ。アンタに腹の探り合いで勝てる気はしないよ。ナルヒトの言う通り、俺が作っていたパンは帝国では馴染みのない作り方で焼成されている」

ぐだり、ラザールがテーブルに突っ伏して、それから降参するよ  
うに尻尾をフリフリ。

「へえ、酵母は何使ってるんだ？」

にいつと、遠山は笑う。

「そのコウボ、とやらがなんなのかはわからないが、俺が生地に混ぜているのは酒の醸造所が捨てる搾りかすだ。廃棄物だからな、手に入れるのはそう苦労するものでもなかった」

「そのやり方はどこで？」

「……俺の部族にいたへんくつな爺さんのやり方だな。故郷を出る

前に一度教えてもらったことがある。大戦期から生きているポケ老人さ。戦争中、あるリザドニアンに教えてもらったのかな。試しに言われた通り作ってみたら、帝国パンよりも柔らかく、そして酸っぱさのないものができたわけだ」

「ビンゴ、酵母パンだ。なるほど、だからあん時のアレは普通に美味かったわけだ。ラザール、また作ってくれよ。そろそろ家も手に入る。石窯も用意するからさ」

「……ああ、喜んで」

遠山の言葉に、ふっと、ラザールが目を瞑る。大切な何かを思い起こす、あるいは抱きしめるように瞼が閉じられて。

「デイス？ ラザーアアアル??」

大型犬が、ワンと鳴いた。

気付けば、ストルがレーザーに至近距離でメンチを切っている。

「あ、やべ、コイツのこと忘れてたわ」

しまった、遠山が眉間に指を当てた。

正義バカの前で普通に教会のルール外の話をしてしまったミスに  
気づく。

「トオヤマ、あなたもデイス。今の言葉は聞き捨てなりませんデイスねえ……私の耳にはどうも、あなたたちが教会の指定している方法以外のパンを作っていると風に聞こえたんデイスけどお？」

レーザーへゼロ距離で顔をぶつけ続けるストル、レーザーは机に顔を突っ伏して無視を決め込んだらしい。

「うわ、ガラ悪」

教室で寝てるやつにちょっかいかけてる奴みたいだ。許されない。

遠山が少し呑気なことを考えていると。

「……トオヤマ、あなた、主教様に異端審問会のメンバーとして認められておりながら教会の法に逆らうつもりデイスか？」

すんつと。ストルの顔から表情が消えた。

ああ。遠山は少しいらつく。

あの顔だ。ストルと殺し合った時に彼女が見せていた顔。

”第一の騎士”、天使教会の剣としてのストルの顔だ。

「……」



ルカがひきつるような小さな悲鳴をあげる。しかしそれでもリダを庇うような位置へ移動する。

「す、ストルちゃん、お、落ち着いて、ね？　喧嘩はダメよ」

ニコが恐る恐る、ストルへ声をかける。

しかし、ストルはその声を一瞥するだけで何も返事をする事もなく。

「……トオヤマ、私は私の正義を、教会の正義のためにここにいます。あなたがそれに反するというのがなら」

「これはもはや、呪いだ。」

ストル・プーラはやはりまだそれに囚われている。

教会の剣、そうあれかしと育てられ、剪定されて生まれた歪みはもはや直るものでもない。

「教会の正義、ねえ」

遠山が、じつとストルを見つめる。

襲いかかってくれば多分負けるだろう。小細工なし、正面からの殺し合いではこの騎士に勝てる方法はない。

「ええ、それが私の役割デイスから、あなたがもし、それに反する、いえ、守る気すらないというなら」

水色の瞳から既に光は失われている。人殺し、いや、剣の目だ。道具には知性も心もないだろうから。

「どうなるんだ、ストル」

だが、今更そんなものに怯える遠山ではない。

刃を必要以上に恐れるものへ、剣を振るう資格もなし。

「……………ッ、言いたく、ありません」

わずかに剣が揺らいたのは多分、この数日は記憶だろう。

殺して、食べて、寝て。騎士の頃のストルと変わらない生活はし  
かしそれでもどこか違ったもののはず。

殺して、食べて、寝て、笑って、怒って、そして笑って。

異端審問官側仕えとしての生活の中にはしかし、そのようは色が  
あった。それが剣を僅かに歪ませる錆となっていた。

遠山はそれを見逃さない。

「バカガキ。お前は一つ勘違いをしている」

「……………デイス？」

「ストル・プーラ、お前は今、教会の剣じゃない。お前が守るべきは教会の正義ではないはずだ。今のお前はそもそも、天使教会騎士団、第一の騎士、ストル・プーラじゃないだろうが」

恐れも、動揺も決して見せずに、遠山がストルへ言葉を。

「……………え？」

「はあ、本気で忘れてるのか。それとも洗脳でもされてんのか？  
いや、バカなだけか。ストル、いいか、よく聞け、お前は教会の剣  
じゃない。お前は剣としての役割を果たせずに、あの主教から刑罰  
を言い渡された筈だ」

「あ  
」

ストルが口をポカンと開いて。

遠山は言葉を巧みに。

武器を上手く活用するコツは一つ。その特性を理解し、それを尊  
重することだ。

「その小さじ1しかない脳みそをよく回せ。あの銭ゲバ、天使教会  
最高指導者からお前に言い渡された罰はなんだよ」

「……騎士団からの追放、そして、異端審問官、トオヤマナルヒト  
への無期限の奉仕活動……」

ぽーっと、ストールが喉から言葉を。か細い言葉だ。

「そういうことだ。ストール、何度でもいっぞ。お前は教会の剣でも、第一の騎士でもない」

ずいっと、遠山が席から身を乗り出し、机に置いてあるパンを掴んだ。

「もじっ?!!」

ぼかんと開いたストールの口にパンを突っ込んで、胸ぐらを掴む。強引にその小さな体を引き寄せた。

がちんと、額と額を突き合わせて、ゼロ距離に近いその、鼻先へ言葉をぶつける。

「お前は俺の剣だ。お前の主人は俺だ、お前の正義は教会じゃない。俺だ」

それはどこまでも、強欲な言葉。

人の抛り所を塗りつぶし、すぐ替える欲深い業罪そのもの。

「ーあ」

ストル・プーラの歪みを治すだとか、そのあり方が哀れだとか、そんなもの遠山にはどうでもよかった。

ただ、一つだけ。遠山の欲望はストル教会の剣に新たな役割を求める。

「お前は俺の役に立て、騎士ストル」

「ーっ?! もぐ、もぐぐぐぐ! ごくん! わ、あ、あ」

顔を突き合わせて、遠山が叫ぶ。ストルは目をぐるぐる回しながらなんとかパンを飲み込む。

水色の瞳の中に、チベットスナギツネ顔が入り込むような大きさに映り込んでいる。

少女のたまごのような肌、ほっぺたが赤くー

「返事は?! 見てみる、ニコとルカとリダの顔を。お前が無駄に殺気を出すから3人とも怯えてるじゃねえか! 正義スイッチを気軽に押してんじゃねえ!」



当たり前のように、遠山はストルの変化に気付かない。胸ぐら掴んだまま、ぐらぐらストルを揺らしながら怒鳴りつける。

「あ、う、うう、わ、か、した」

「ああ?! よく聞こえねんですが! いつもみたいにアホみたいな声ではつきりと!」

「あ、! わ、わかりました! わかりましたから! 顔、かおが、ちかいです!」

ばたん!

ストルが両手を突き出し、遠山の胸を押した。

力がやはり強い。遠山はジェットコースターの落下の瞬間に似た感覚と同時に後ろに吹き飛ぶ。

「ぐえ!! ……このガキ、大人を突き飛ばしやがった。本当にわかったのか？」

しっかりと受け身を取れるのは探索者、今は冒険者として日常の賜物だろう。ロープについた埃を払いながら遠山がストルを睨む。

「は、はい、わかりました、デイス。……私は、貴方の剣、それでいいんでしょう……」

しおしおと、ストルから殺気が消えているのがわかった。

内心少し焦っていた遠山は、冷や汗を背中にかきつつもそれをおくびにも出さない。

「わかれば宜しい。ただ、お前の言う通り真っ向から教会の決まり

を破るなんて真似は俺もしたくない。この国において天使教会つづ  
ーのは権力と影響力がデカすぎるからな」

「……………デイス？」

「あー、だから、お前が心配するようなことにはなんねえよ。お前  
の正義を否定するつもりもないし、お前の価値観を笑うこともねえ。  
剣の機嫌を損ねることにはならねえってことだ」

「……………貴方のいうことはよく、わかりません……………デイス」

「そのうちわかるさ。ニコ、大丈夫か？ こわくなかったか？」

遠山が子供達のケアに走る。

ストルもかなり馴染んでいて、それを受け入れてくれた子達だが  
やはり今のはこたえただろう。

「……ううん、ありがとうお兄さん。大丈夫よ。ストルちゃんは友達なもの。すこし元気が良すぎる所があるだけ」

しかし、遠山の心配をよそに、ニコが微笑む。それは心配かけさせまいという大人の顔だ。

「やだ、器すいこ……」

思わず遠山が口に手を当てて感動して。

「に、ニコちゃん……」

ストルが今更、あわわと慌て始める。やらかした後の大型犬が、あのこれは違うんです、違うんですとくるくる回っている時の顔だ。

「ストルちゃん」

「ハイ……デイス」

「私、さっき傷ついたわ。お友達であるあなたに無視されたんだもん。……ストルちゃんは私のこと嫌い？」

「な?! そ、そんなわけがありませんデイス! ニコちゃんは、私のはじめての友達で! あ、いや、その、今のは」

「ふふ! ストルちゃん、嬉しいわ! 私も貴女は大切な友達だと思ってるわ! でもね、さっきみたいによく話を聞かないうちから喧嘩越しになるのはよくないわ。貴女はとても真面目で正しい人だけど、そういうのはダメよ」

「……はい、デイス」

「いけないことってわかったらどうすればいいと思っつ…」

「う、ごめんなさい、ごめんなさいデイス…… 無視して、ごめんデイス」

「ん！ なら私も！ 偉そうに貴女にこんなこと言っでごめんなさい。えへ、これでおあいこね！ ストルちゃん」

ぎゅっと、ニコがストルの手を握る。

どこかの誰かが胸ぐら掴んで、揺らしまくっていた姿とは大違いだ。

「に、ニコちゃあああん！！」

ぶわわと涙を流してストルがニコに抱きつく。

「きゃ！？ うふふ、もう、ストルちゃん、私より年上でしょ？ 泣いちゃダメよ」

一瞬ニコは驚いてびくりと体を揺らしたが、ゆっくりとニコもまたストルを抱きしめた。

「ねえ、見てラザールくん。うちのニコちゃん人間性がやばいんだけど」

「ああ、そうだな。学ぶべきところがあるよ」

「お兄さん、ちょっと、座ってもらえるかしら？」

「ん？ 俺？」

ストルをあやし終えたニコが、そっと遠山に近づく。

遠山はしゃがみこみ、ニコと視線を合わせた。

「お兄さんもです。真っ直ぐ私たちに向き合ってもらえるのはとても嬉しいわ。あなたは私やリダ、ルカやペロシロにもきちんと1人の人間として向き合ってくれる。それはね、私たち、とてもとても嬉しいの」

「あ、はい」

ぼかんと遠山が頷く。

ニコがふっと、微笑み、遠山の耳に唇を近づけて。

ささやく。遠山とニコにだけしか伝わらないように。

「でもね、お兄さんはもう少し、女心を勉強したほうがいいわ。でないといつか大変なことになるかもよ」

桜色の唇、静かな囁きを紡いで。



「え？ ニコ？ いや、ニコさん？ どういづニコと？！」

思わずさん付けしてしまう遠山に、ニコは手を後ろに組んでいた  
すらげに笑うだけ。

「それは自分で考えましょう。はい！ 喧嘩は終わり！ それでこ  
の後の予定はどうするのかしら？ みんなでお出かけの続きだと私、  
とても嬉しいのだけれど！」

ニコが笑う。とて、と自分の席の近くに戻っていく。

完全に上をいかれていた。人間性という面で遠山はニコに敗北感  
を覚えて。

「ラザール、もしかして、これ保護者枠のピンチ？」

「……適材適所、というやつかな？」

ラザールのにべもない言葉。しかし、真実だ。

はあ、とため息ついた遠山。ニコがその視線に気づいてパチリとウインク。

あれは将来男泣かせになるな。遠山はうんうんと保護者ヅラを全開に。

「おいおいおい！ さっきからよお、その席！ リザドニアンとガキばかりのてめえら！ こちやこちや、うるせーんだけど？」

ガシヤアン！

無粋な音、下卑た怒鳴り声。

飛んできたのはまだ、食べ物が入ったままの皿。

「キヤっ!？」

ニコの足元に、それが投げつけられた。

遠山とラザールが買い与えたロングのスカートの裾が汚い残飯で汚れる。

「飯がまずくなんだよ!　ここは冒険都市だ、ガキがキヤツキヤ騒いでいい場所じゃねーんだよ、黙ってるや!」

「薄汚ねえリザドニアンまでいやがる!　マジで飯マズだぜ。おい、

てめえらのせいでもう俺今日飯食えなくなっちゃったよ、どうしてくれんの?」

「いやー、これはもう慰謝料っしょ? はい、金、金だせ、金。嫌だっつてんならそのガキ達寄せ、ちよっどイキのいい冒険奴隷欲しかったんだよ」

「おい、ツラ貸せや、お前ら。ガキは置いていけよ」

ぞろぞろと、それらが遠山たちに因縁をつけてきた。

リザドニアンと、よく笑う子供達。ああ、それだけで悪目立ちしてしまったようだ。

そいつらはいつも、自分より弱そうな奴等を探しているのだから。

ギャハハハハ。

下卑た笑い、武器をチラつかせた武装した人間、多人数の冒険者達が笑う。

ぞろぞろと、無粋に。遠山たちの席を囲むように近づいてくる。似たような顔に、似たような笑いを浮かべて。

「おい、無視してんじゃねえぞ。あ？それとも怖くて声も出せねえってか？」

「お、あのそばかすのガキ。身体付きがいいな……」

「ぎゃはは！お前その趣味ほんと変わんねーなー！この前も色街でボロクソ遊んで捨ててたじゃん」

これが、冒険都市の理不尽。冒険者という必要悪の存在。

社会にとって必要な暴力機構である”冒険者”彼らはやはり職業

柄血の気が多く、そして人格的に問題があるものが多い。

低級から中堅にその傾向は強い。

中途半端な連中が、中途半端な力を手にするとどうなるか、決まっている。そしてギルドは未だ組織改革の途中、冒険者の素行を取り締まる機構が機能していない。

だから、こんなことになるのだ。彼らにとっては遊び半分の暴力、だがそれを向けられた者に待つのは苦しみと、悲劇だけ。

3301

この都市には理不尽が当たり前のように存在している。

それは時に人の人生を簡単に歪めてしまうだろう。

ただ明日を願ったちっぴけな希望も、ただ緩やかな日常を望んだささやかな夢も、等しく暴力により奪われる。

そんな理不尽はこの都市のどこにも転がっている。同じ数の悲劇も等しく存在していて。

力なき人は理不尽に見舞われた時、それに耐えるか、受け入れるかしかない。

それが現実、どんな世界にもある残酷な真実。

力なき人は、理不尽に対して何も出来ないのだ。

だが、彼らは。

「「「は？」」」

元、天使教会騎士団、最優の騎士。” 第一の騎士”

元、王の隠密、” 影の牙”

元、上級探索者、” 竜殺し”

身内に手を出された時、彼らの沸点は非常に低く、そして理不尽に対して彼らが何をするか、そんな答えなど決まりきっていた。



63話 ドクター・ペーカリー（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！

< 苦しいです、評価してください > デモンズ感

64話 冒険都市の日常

「お？ なんだ？ その目、やんのか？」

「ぎゃはは、いいぜ別に。リザドニアン1人に男1人。モンスター狩りの前のウォーミングアップにやちょうどいい」

「男の方は足の腱でも切って路地裏に置いてやるよ、スラム街で物乞いしてりゃ生きていけるさ」

「おれ、おれよ、あのそばかすの子良くな？」

「いや、それよりあの水色の髪の毛のメスガキだろ。ああいう気の強そうなのを言いなりにさせるのがたのしいんだよ」

「男のガキは冒険奴隷だな。お、あの帽子の女のガキ可愛いな」

見るからに全員頭が悪そうだ。薄い革鎧に腰に差した剣、背中に垂らした槌。

冒険者。その顔は自信に満ち溢れている。その顔は獲物を見つけたという興奮の色に染まっている。

「お、喧嘩か？」

「冒険者同士の喧嘩だ！ 冒険都市の名物が始まったぞー！」

「おい、あの冒険者達、最近3級で鳴らしてる連中じゃないか？ あの女の子、大丈夫か？」

「なあ、リザドニアンと黒髪の冒険者って、聞き覚えねえか？」

争いの気配に人々は逃げるばかりか、続々と集まってくる。この

都市では冒険者同士の諍いなど日常茶飯事、むしろ住民達の娯楽の1つとしても捉えられていて。

ざわざわと野次馬達が喜色めいた声をあげる。

にたりと、1人の冒険者が笑う。野次馬の安い声に押されて、その顔には嗜虐の色が浮かんでいた。

「お、俺は断然あのそばかすの女の子がいい、ほ、母性を感じる…  
… ママ………」

「ひっ」

「へへ、かわいい」

冒険者の1人、連中の中で1番の巨漢。2メートルはありそうな腹の膨れたデブが怯えるニコを嬉しそうに見つめる。

ニキビツラのデブが、べろりと自分の唇を舐めた。

ニコに、皿を投げつけたのもコイツでー

」  
トオヤマ  
「

当たり前のように限界が来たのはストルだ。

わずかに残った理性は、己の鞘へ問いかける、

求めるのはー

「ストル、許可」

抜剣許可。

遠山鳴人  
剣の鞘もすでにブチ切れていた。

「デイス」

剣が、抜かれた。

教会の、いや、審問官の愚かで、しかしなによりも純粋なそれ。

獣よりも疾く、化け物よりも強く。

「は？　ぐぼ？！」

水色の風が、土煙を置き去りにして舞う。ひとまとめにしたポーターールがなびいて。

びたんと、大きな水風船が割れるような音ともに、ニキビづらの冒険者が地面に叩きつけられた。

誰もストルの動きを目で追うことすら出来ない、野次馬達も、当事者である冒険者たちも何が起きたか理解できていない。

「「「「え？」「」「」」

この場において第一の騎士は別格の存在で。

「汚い息をニコちゃんに向けるな、殺すぞ」

「が、ぼ」

豚が、タンを吐き出した。

身体が逆くの字に折れて、そのまま石畳に叩きつけられる。

ストルがその背中を足蹴に踏み潰す。水色の瞳は爛々と輝き、その声は対照的にどこまでも静かなものだった。

「え？」

「なん、で？」

「な、なんだ?! このガキ?!」



遅れて、ようやく冒険者たちが事態を飲み込む。認識が追いつかない。

あんな小柄な少女が、装備を固めているパーティの肉壁役を一瞬で押し倒した。

目の前で起きたことすら受け入れがたく。

彼らは、まだ知らない。中途半端な力では決して手を出していけないものに触れてしまったことに。

「てめ、ガキ!!! なにもんだ!?!」

リーダー格の男の注目は完全にストルに向いている。

声をかけられたストルが、水色の長いポニーテールを肩にかけて、ニイツと笑う。

飢えた、いや、狩りの悦びを知る狼の嗥いー

「ウチのパン屋の警備部門だ」

短い声、そして躊躇いなく振るわれる拳。

「あ、ぶべら?!?」

その隙を見逃す遠山ではない。完全に相手の注目がストルに向いたのをきっかけに挨拶と同時に、拳を振り抜く。

現代の洗練されたスポーツ科学、正しいトレーニングと確かな食生活、そして、探索者としての日常は遠山鳴人の肉体をきちんと強くしている。

振り抜いた拳のクリーンヒット、冒険者のリーダー格の男が地面

に倒れる。

「よいしょつと」

「ぎつ?! あ」

振り向きざま、近くにいた男に金的をかます。遠山もまたその暴力的な過去の経験から喧嘩のコツを知っている。

結局勝つのは、先に手を出す方なのだ。

「悪いな、俺も彼らに毒されてね。最近は気が短くなってるんだ」

「つぐ、あ?! うで、があああ」

「あ、あ」

レーザーがいつの間にか残りの2人を制圧している。倒れ伏した男に腰を下ろして、太い腕でもう1人を首ごと羽交い締め。

「ひ、な、なんだコイツら?! つ、つええ?!」

残った1人があとずさり、気づけば完全に数で優位だったはずなのに、まともに動けるのは自分だけになっていた。

ばたりと、尻餅をつく残り1人を遠山、ストル、レーザーがじつと見つめる。

3人の目に光はない。

ハイライトの消えた目は即ち示している。

3人ともそちら側の人間。呪われた、人殺しが出来る人間なのだ

と言いつとを。

「お前、さっきニコちゃんに皿を投げつけた奴デイスね？」

「ブヒ、あ、ああ、いてえ、背中いてえ…… 離してくれええ、ゲバ」

「動くな、豚め。このまま踏み殺してもいいデイスが……」

1番の巨漢を足蹴にしたまま、ストルがだらりと体を折り曲げてそいつを見下ろす。

デブがその場を離れようと力を入れるも微動だにしない。ストルの細い脚がぐいっと力を入れてさらにそいつを強く石畳に押し付ける。

「……トオヤマ、いいデイスか？」

「ああ、ニコに皿投げたのはそのブタか。だな、2度と人様に物を投げねえようにしてやりなさい」

く。  
ストルの問いかけに遠山が頷く。そこになんの躊躇いも迷いもな

「ウイー、フック」

大型犬が、涎を垂らした。

細い手が、豚の太くて短い指を掴んで。

「は？ おい、まで、までまで、何をするつもりだ？！ おい、指  
！ 指？！ 待て、それはそっちには曲がらっ、あ？！ アアアア  
アアアアアアアアアア？！？」

一気に、捻り折る。

「うるさいデイスね。ほら、まだあと9本も残ってるんデイスよ。ああ、良かった。9本なら数えられますね」

ストルが嗤う。

生まれや育ちも関係なく、彼女はこういふことができる側の人間だ。

「にー、さん、しー、にー、にー、にー、にー？」

ほきり、ねじり。ほきん、ぼろ。

ぶ、ひ、謂イイイイイイイイイ

去勢された豚のような悲鳴をあげる冒険者、ばたんばたんともがくもしかし、第一の騎士の膂力に逆らうことは出来ない。

活気溢れる市場の一角、男の悲鳴が響き渡る。

「真っ直ぐ折るだけではそのうち繋がりますからね。コシは捻りながら肉と骨をねじることデイス」

「闇を感じるから解説しなくてヨシ。さて、お前ら、どうする？続けるか？」

豚の全ての指を捻り折ったストルが、ふつと、息を吐く。

遠山がすでに完全に戦意喪失している冒険者たちを眺めてつぶやいた。



「ひ、な、なんだ、お前ら。急に、いきなり、こんな……イカレてんのか?!」

尻餅をついていた冒険者の1人が喚き出す。目は血走り、声を荒げる。震える指先を遠山に向けて。

「や。やりすぎだろうが！ おれ、俺たち、まだ何もお前らにしてなかったのに！ な、なんなんだよ！！ くそ、教会騎士！ だ、誰か、見てたる?! 教会騎士を呼んでくれ！」

恥も外聞もないのだろう。驚くことに、冒険者は野次馬たちに助けを求めはじめた。

まるで、遠山たちに襲われたかのような態度だ。

「お、おいおい、あいつ泣きそうじゃん」

「てか、見たかよ、あの子、なんの躊躇いもなく指を折ってたぞ…」

「な、なあ、あの黒髪って、もしかして、てか、リザドニアンも…」

「水色の髪に、あの喋り方… 教会の式典であんな騎士いなかったか？」

「で、でも、確かに少し、やり過ぎじゃないか？ き、騎士を呼ぶか？ 巡回してるはずだよ、この辺を」

野次馬達の空気も変わる。

彼らが求めていた娯楽とは少し方向性が違ったのだろうか。

どわどわわと、どちらと言つと冒険者達に同情的にどわめき続けて。

「ひ、ひいい、騎士だ！ お、襲われたあ！！ け、怪我也負わされてる！ 騎士を、誰か、騎士を呼んでくれよおおお」

喚く冒険者、野次馬たちの空気の変化を感じたのだろう。同情を誘うような情けない声だ。

「……シャアア」

ラザールが不快そうに歯を剥き出しにする。

「ゴミニ、デイスね」

ストルが苛立ちを隠さず、さらに強く冒険者を踏み潰している足に力を入れた。

「……お前らみたいな奴らっていつも同じこと言つよな」

「は？」

そして、遠山が静かな口調で言葉を紡ぐ。この時点で遠山は彼らのこの後の処遇を9割決めていた。

「中途半端な暴力と粗末な想像力。わかるよ、遊び半分だったんだろ？ 目についた奴らが自分達より弱そうで、なんか気に入らないから絡んできたんだろ？ 知ってるよ、お前らみたいな奴のことを」

「な、なんだ、なんなんだよ！ が、ガチになりやがって！ そ、そうだよ！ こっちは遊びのつもりなんだ！ す、少し脅しただけでやりすぎだろうが！ フラットの指をあんな風に！」

「やっぱそんな感じか。脅しただけ、ね。ならこっちも少しボコつたくらいで騒ぐなよって言いたんだけど、さて、どうしたもんかね」

どうしたもこうしたもないが、ここだと目立ちすぎる。

少し泳がせてから始めるか。

遠山がため息をつきながら、なおも喚き続けるそいつを眺めた。  
一体どういう脳みそをしたら、ここまで都合のいいことを口にするのだろうか。

不思議で仕方なかったが、知りたくもなかったので割とどうでもよく。

「ふ、ぐく、このイカレ野郎どもが！」

しゃらん。気合いの入った一声。

鉄のすれる音は、つまり剣が抜かれたことを示した。

遠山に金的を入れられて悶絶していた男が、立ち上がり、腰の鞘から幅広のシヨートソードを引き抜いて。

「きゃっ!?!」

ニコが悲鳴をあげる。

「くそ、黙って聞いてりゃ調子に乗りやがって! うぜえんだよ! 黙ってそのガキども渡してりゃ良いんだ! くそ! くそくそ! 動くな! 黒髪野郎!」

「……これでいいか?」

遠山が手を挙げて、その場に立ち止まる。

眼前に突き出されたショートソード、手入れも荒く、刃も汚れている。油を塗ったりすらしてないのだろう。

「それとそこのガキ！ くそ！ フレッドの指をそんなふうに……  
もう我慢ならねえ！ くそ、くそくそ！ なんでこんなことに」

「お前、状況理解してるのか？ 武器抜いた時点でもうこれはただの喧嘩じゃなくなるぞ」

興奮した様子の男が遠山に剣を突き付けながら喚く。剣を構える手は震えて、声も呂律が回っていない。

剣をつけられているはずの遠山の方がよほど落ち着いていた。

「は？ わかんねえ、わかんねえ！ てめえがなにを言ってるかわ

からねえ！ クソ！ 動くな！ ガキどもだ！」

フラつきながら男が子供たちにも剣を向ける。

遠山が小さく、子どもたちの中で最も鉄火場に強いだろう者に視線を向けた。

「ルカ」

「……うん」

帽子の少年、ルカがそつとニコや、未だにソーセージを頬張っているペロシロを庇うように移動する。

その様子に、男は目を剥いた。

ガキにすら、自分の脅しが効いていない。目の前の男は剣を突きつけても微動だにせず。



それが男のちっばけなプライドを傷付けたのだろう。身体をぶるりと震わせ、脂汗を垂らして、その剣を振りかぶりー

「まどろっこしい、デイス」

「え？」

だが、そんな動きすら彼女にとっては遅すぎる。

第一の騎士。これまで教会の剣として数々の”正義”を執行してきたストルにとっては本当にまどろっこしくて。

水色の風が、一瞬で剣を振り上げた男に肉薄した。

「安物」

ばきん。

ストルが腰から引き抜いたのも、また男と同じショートソード。奇しくも市場で安物売りしていた量産品。

それを振り上げて、冒険者の剣を打ち上げる。それだけでその手入れされていない冒険者の安物の剣が砕け散る。

「は？」

「遅いし、弱い、最低デイスね」

また、ばきん。何かが折れる音。

今度は剣ではなく、ストルに蹴り抜かれた男の膝が折れた音。

「っ、ア?! ギャアアアアア?! あし、脚が、ああああ……」

時間差もなくその場に男が倒れ伏す。ぷらぷらと揺れる脚はそれが肉も骨も臆もすらも蹴り折られたことを示していた。

「ひ、ひい、ば、化け物……」

「ナイス、ストル」

改めて、遠山はストル・プーラという戦力を認識する。明らかに規格外、冷静に考えるとこの冒険者共と自分の実力はおそらく大した違いはない。

自分1人なら、殺す気でいかない限り3人を相手にするとほぼ負けるだろう。

だが、ストルは違う。この程度の連中だと、1000人いても打ちのめしてしまえそう――

遠山が、思考に沈んだその時。

「っ！？ バカ！ トオヤマ、よそ見！！」

ストルが目をむいて叫んだ。

しまった、と自覚した時にはもう遅い。

「この、イカレ野郎どもがああああああ」

遠山が最初に殴り倒した冒険者、気絶したフリだったのだろう。追い詰められたソイツは、すでに剣を振り抜いていて。

「あ、やべ」

「ナルヒト!？」

ラザールの悲鳴。

やべ、もう避けられねえ。死にはしないけど、大怪我は――

反射的に、少しでも軌道を逸らすために遠山が腕を掲げて肉を固めた。

バシッ。

「はー」

布団を思い切り、たたき伸ばしたような。

そんな少し心地よい音だった。

「いや、これは流石にね」

軽薄な声はたのしげに。

「けぶらー!?!」

遠山に奇襲をしかけた冒険者が、音と同時に吹き飛ぶ。

周りのテーブルイスに突っ込んで、そこに埋もれたまま動かない。

周りの席から悲鳴が広がる、野次馬たちが蜘蛛の子を散らしたように騒ぎ立て、そこから離れてまた、別の箇所固まる。

「これは流石に、そっちが悪いでしょ。どう考えても助けるのはこっちじゃん」

ソイツは、妙な姿をしていた。

幅広のつばのついた帽子を目深に被り、イスに背中を深く預けるソイツ。

くたびれたレザーのベストに、黒いシャツ。どこかウエスタン、遠山から見れば西部劇に出てきそうな服装の男だ。

「この男が、あの冒険者に何かをしたのだ。それだけは誰の目にもはつきりしていた。」

「な、なんだ、お前?!」

キンタマを抑えながら、まだ意識のある冒険者の1人が叫ぶ。

「あー、知名度低いのは悲しいわー、ほんと。はい、冒険者章。これでわかってくれる?」

テーブルからのんびりした動きで立ち上がり、西部劇のカウボーイみたいな姿の男が懐からあるものを取り出した。

真昼の太陽を受けて、金色に輝く首飾り。ドッグタグのようなそれは危険を冒す物の証。

そしてその色は、その中でも精鋭中の精鋭、その中から規格外と



認定された者の証明。

帝国の軍隊、それに並ぶ有事の戦力としても数えられる冒険者の  
中の最上位。

「き、金色の冒険者章、ってことはまさか……」

「そ、お前らの先達、って言うのは言い過ぎかな？ ま、そゆこと  
さ。……出来ればこちらの顔を立ててくれたら助かるんだけどって」

この世界のアンタッチャブル。

”ヘレルの塔”に、己の意思で、自由に挑むことを許された、塔  
に挑戦する資格ある者がニカリと笑った。

明るい、しかし、有無を言わさぬ笑顔。

ただ、ただ、人好きのする笑顔はしかし、その男の持つ威圧感と  
合わさり得体のしれないものになっていて。

「あ、く、くそ…… 行くぞ……」

「ひ、ひ……」

冒険者達はその圧を理解したのだろう、その場を去ろうとして。

「……待ちなさいデイス。なに勝手に仕切ってるのデイス。ソイツ  
らを許すか、許さないか、いえ、生かして返すかは、私達が決める  
ことデイス」

収まりそうな事態に水を差すストルの声。

その声にはわかりやすい苛立ちが滲み出ていた。

「たは、血の気が多いな。お嬢さん、そののデブ離してやれよ。そろそろ死んじまう」

しかし、男は飄々と笑うだけ。

「……知ったことが、とえば？」

「……たは」

男が笑う。じゃり、踏みしめた石畳から音が鳴った。

どちらが動くか、どちらが仕掛けるか。大型犬が次の獲物に視線を向けて。

「いい、よせ、ストル。離してやれ」

しかし、ここまでだ。飼い主の待て、の声にストルの殺気が凪いだ。

「っ、でも！」

「俺の、命令だ」

遠山は冒険者たちの顔を、目に焼き付けながらストルに命令する。

この後の始末は、自分がつける。

遠山はすでにそう決めていた。

「……デイス」

「うつつ、指、俺の指がよお……」

冒険者達が、ぞろぞろと、しかし素直にその場を去っていく。遠山達に恨めしそうな視線を送るが、それだけだ。

そのカウボーイみたいな男の一言で、トラブルは終わりを迎えた。

「おー、満身創痍。ま、人死が出てない分あんたらは優しい方だね」

「えーと、もしかして、助けてくれた？」

フラつきながら去っていく冒険者を尻目に遠山が男に話しかける。

連中より、まずはこの目先の得体の知れない男に対処するべきだろつ。

「ん？ そだよ。正義のヒーロー、ってわけじゃないけど。まあ普通に常識的に考えて今のはアンタらに味方するべきっしょ」

「……おお、まじか。なんか、この街ん来てはじめてまともな冒険者に会えた気がするぜ、で、アンタ、誰だ？」

「たは！ ああ、悪い悪い。自己紹介がまだだったな」

遠山の問いに、ウエスタンハットによく似た帽子をとった男、灰色の髪を持つ目鼻の通った男が軽く頭を下げた。

「“塔級冒険者”、ユト・ウエトラルだ。ユトで、いいよ」

ぱちり、男なのにウインクがムカつくくらいサマになっていて。

「よろしくな、4級冒険者、竜殺し殿」

にこり。

その笑顔はしかし、遠山を安心させるようなものとは程遠い、爽やかなのに底の見えない笑みだった。

64話 冒険都市の日常（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを！ご覧くだ  
さいー！

評価してくれたら嬉しいです。宜しく願います。



## 65話 冒険の足音

「……………知ってたのか？」

遠山は目の前の男、塔級冒険者を名乗るカウボーイを見つめる。

身長は高く、ジャケットのような革鎧の盛り上がり具合、体つきも良い。

強い。遠山は目の前の男をそう評価する。

「いやそりゃそうだろ。少しでもこの街の情報に耳を傾けりゃアンタの噂はどこでも入ってくるぜ。まあ、眉唾みたいな噂も多いけどな」

ふにやりと笑うその顔は、どこか警戒心をほぐすようなものでも

あり、それが余計、遠山には気色悪かった。

「……………そつすね」

「だがまあ、あれだな。スラム街の子ども連中を攫ったとか聞いたけど、攫うというよりきちんと保護した感じが。その子らとアンタが喋ってるの見てたけど、ほんとの家族みたいだったよ」

「……………冒険者殿、ご助力感謝する。改めてお礼を」

ラザールが話に入る、律儀な性格ゆえか、それともラザールもこの男をはかりかねているのか。

「おっと、アンタが噂のリザドニアンの奴隷、つとこの言い方は失礼だな。帝国の国家がかりの追跡をかわしたとか、天使教会の十騎士をぶちのめしたとかお噂はかねがね」

男は差別種族であるリザドニアンを見ても声色や顔色を変えずに、笑ってまた頭を下げた。

「ニコちゃん！ 怪我はないディスプレイか?!」

「え、ええ、大丈夫よ。それより！ ストルちゃんも怪我はないの？！ 心配だわ、あんな風に怖そうな人たちに立ち向かうんだもの」

「あんなのトオヤマやラザールに比べたらカスみたいなものディスプレイ！」

「へ？ お兄さんと、ラザールさん？」

「あ、……ピューピュー、ピュー」

そんな会話の横でストルがニコの元へ飛んでいき、わちゃわちゃしている。

そういえば、ストルとは元々殺し合った仲だということを知り子供達は知らない筈だ。

ストルもストルでそれに負い目を感じているらしく、バカなりに誤魔化そうとしていた。

「えーと、もしかしてあの水色の髪の女の子って。天使教会の第一騎士？ 塔級冒険者の上澄みと同格とか聞いてるけど……」

「どうやらこの、ユトという冒険者はストルのことも知っているらしい。バカではなく、教会の剣としてのストルのことを。」

「ああ、うん。はい。まあ、あれだ。ありがとう、冒険者さん。助かったよ」

「たは！ 気にすんなよ。まあ、あれだ。ちょうどよかった。仕事の前の験担ぎになったようなもんだ」

遠山の雑な誤魔化しに乗ってくれたのだろう、カウボーイ風の男がケラケラと笑った。

「げんかつぎ？」

遠山が、男の言葉に首を傾げた。

「まあな。んーと、まだ時間あるな。なあ、竜殺し、ここ座ってもいいか？ まあ助けた恩をどうのこうの言うつもりはねえんだが、アンタと一度会えたら色々話をして見たかったんだ」

男が、元々遠山たちの座っていた席を指差し、人好きのする笑顔のまま問いかける。

「あー……」

さて、どうしたものか。どことなく胡散臭いが、一応は助けてもらった相手だ。あまり無下にするのも良くないだろう。

「問題ないだろ。ナルヒト。子供達は俺とストルで見とくさ。それー」

対応に迷う遠山にラザールの助言が届く。

ラザールがふと、ある方向、正確にはあの絡んできた冒険者達が去っていった方向に目配せした。

「ーああ、だな。ラザール、見つけたら教えてくれ、《・》すぐに行く」

遠山の言葉にラザールが頷き、子供達を別の席に移動するように促す。

その席には遠山とその男、2人だけが残った。

「お、悪いね。なーんか恩着せがましかった？」

「いや、いい。久しぶりに身内以外でまともな人間と会えた気がするよ」

「たは、言うねえ。まあ、噂通りならアンタもなかなか激動の数週間じゃねえか」

「まあな。あー、場所変えるか？ その、かなり周りの視線が……」

ジロジロ、ザワザワ。野次馬はまだ消えない。

市場に集まった人間の多くの視線が遠山達に注がれていた。

「いや、ここでいいさ。視線なんざそのうち慣れるさ。にしても面白いな。竜を殺した男が、いまさら有象無象の視線を気にするなんて」

だが、その男はそんなもの気にしないらしい。イスにどかりと座って、遠山の顔をじっと見つめる。

この世界の人間に多い、青と緑が混じった碧眼に近い色。遠山の世界で言う西洋人風の顔つきは、わかりやすい美形だった。

「……そーゆー民族だな。人様の視線が気になるんだよ。で、あんな、えーと……」

遠山も観念して席につく。この奇妙で、妙に人懐こい男は放っておくには不気味だし、邪険にするのも難しい存在だ。

「ユト・ウエトラル、な」

「ユト、ああ、こりゃどうも俺は遠山鳴人。遠山でも鳴人でも呼びやすい方で」

「お、悪いね、気を遣ってもらって。じゃあナルヒトで。いやなに、ずっと気になってたんだよ。竜殺しの話題は俺らの間でも噂になっ



ててね」

「俺ら？」

「これ、似たようなモンあんたも持ってるだろ？ ナルヒト」

ちゃらり、ユトが取り出したのはあのドッグタグ、金色に輝く冒険者章だ。

「それ、ドラ子のタグ…… 冒険者章。じゃあやっぱり、ユト、ア  
ンタ……」

「そ、一応正式な身分照会な。塔級冒険者、ユト・ウエトラルって  
ね。まあ、固くなるなよ。いや、竜殺し殿だ。その心配もねえか」

へらへら笑うユトからは、ドラ子や、あの時ギルドで出会った銀  
髪エルフのような威圧は感じられない。

「……ドラ、いや、蒐集竜と同じ、冒険者の最高峰……」

だが、塔級。

つまり、あの人外2人と同じ位に位置する人間だ。手放して警戒を緩められるほど遠山は呑気な男でもなかった。

「あー、まあ、あのお方はなー。化け物揃いの塔級の中でも更なる上澄みつつーか、ぶっちゃけ塔級も戦闘力に関してはピンキリなのよ。俺はキリの方ね」

たははと笑うユト。自虐的なセリフを吐きつつ机に頂垂れる仕草。

人が無意識に警戒を緩めてしまうような所作だ。

さて、話が見えない。せめてコイツがどういう人間かだけは知りたいところだがー

ピコン。

その音が鳴り、遠山の視界にメッセージが流れる。

【知識の眷属 ハーヴィーとの友好度が”D 夢の主人”になりました。スピーチ・チャレンジや、会話の中で彼女がたまに力を貸してくれるようになりました】

あの夢での一件は、現実に影響を及ぼす。

遠山鳴人はゆっくりと世界に影響を与えて、他者を変えていく。

【塔級冒険者 ユト・ウエトラル。へえ、やるじゃん。さっきの攻撃、ポケットに忍ばせてた小石を指で弾いたっぽいよ。今のアンタじゃ、敵に回さない方がいいんじゃない？】

夢の中のよくわからないメガネの口調と似たメッセージ。

知識の眷属、ハーヴィーからの手助けだ。

「……よく言うよ。そんな奴が指で弾いた小石で人間1人吹き飛ばせるかよ」

把握すら出来なかった攻撃はまさかの指で石を弾いただけという。

遠山が、夢を共にする眷属の知識をもとにカマをかけて。

「たは」

ユトが笑った。

ぞくり、遠山の背筋に冷や汗が流れる。

ああ、やはりだ、コイツもまた、多くの人間を超えている超越者の1人なのだろう。

「よく見てんなあ…… 正直、気づかれるとは思ってななかつたよ。流石、竜を殺すだけはあるわけだ。まあ、レベル差もあるしな。連中どう見ても2レベルがいいところだろ」

遠山の言葉に一瞬、素を出したらしいユトが頭をかきながらぼやく。

びりりとした威圧はしかし、もう消えていた。

「ああ、そついやそんなもんあつたな……」

とりあえず敵対すると厄介なのは理解できた。その上でユトが何を目的でこんなにフレンドリーなのか。

遠山は少し身構える。

「なあ、それよりよ、ナルヒト。聞かせてくれよ。お前の噂なんだけどよ、レイン・インで竜を口説いてたっての、あれは流石に眉唾だよな？」

「……ソウワヨ」

身構えていたところに気の抜けるような話。眉唾ではやくマジなのだが、説明が面倒なので遠山は目を逸らしてつぶやく。

「ったは！！ お前、まじかよ！ その反応！ マジ話かよ！ 馬鹿や！ 馬鹿がおる！」

「うつせ、こっちはあん時、大マジだったんだよ、生きるか死ぬかに近い状況でな」

「たはははは！ いやだからってよ！ 竜を、しかも2人同時に口説くってのはわけわかんねーよ！ なんでそうなるんだよ」

腹を押さえて笑い始めるユト。

「それは…… いや。なんでだ？ほんと。なんでホストなんだよ」

改めて言われると確かに意味がわからない。更に意味がわからないのはなんだかんだ竜とのトラブルはホストでクリア出来てしまったことだ。

「たはははは！ ナルヒト、お前面白いな！ いや、あの人が気になるのもわかるよ」

「あの人？」

何故か、ユトの言葉。あの人というワードが気になって。

「ああ、お前も知ってるだろ？ 塔級冒険者、そして大戦の英雄、元勇者パーティ、射手。ウエンフィルバーナ。俺、あの人に憧れて冒険者になったんだ。聞いたぜ？ なんか初対面であの人にぶち殺されそうになったって」

「あー……」

思い出すのは、あの奇妙なエルフだ。

最初に塔で出会い、それからギルドで出会ったあの女。

なんかまるで別人のような反応をされて、怖かったのを覚えてい  
る。あれ以降、ギルドでも見かけないし、どことなく厄介そうなの  
で記憶の隅に追いやっていた存在だ。

「警戒すんなよ、ナルヒト。俺はあの人に憧れてるが妄信してるわけじゃない。別にあんたに対して思うことは…… まあ、ねえって  
言つと嘘になるけど、敵意とかじゃない」



「そりゃ安心した。で、俺と話したいことってなんだ。助太刀の恩もある。聞かせてくれよ」

「んー？ まあ、1番は直接あんたを見てみたかった。ウエンフィ  
ルバーナ。あの人が敵意であれなんであれ、他人に関心持つのをは  
じめて見たからな」

「……俺、そんなに嫌われてんの」

「ああ、もうおっかねえほどにな。竜殺しの噂が広がるたび、ギル  
ドの地下の空気が悪くなるのよ」

「ギルドの地下？」

「お？ なんだ、知らないのか？ 俺たち塔級冒険者は基本的に、  
地下当番って言うてな。持ち回りでギルドの地下で待機義務がある  
んだよ。まあお勤めみたいなもんさ」

「へえ、知らなかった。塔級冒険者って、たしか冒険者の最上位だ

よな？」

「お、そうだけー。俺もその末席、ま、少しはすごい奴なのさ。だが、それはあんたも同じだ」

指をぷらぷらしながらユトがじっと、こちらを見た。

「どづいづことだ？」

「アンタ、蒐集竜の冒険者章持つてるんだろ？ 古い慣わしでな。冒険者章ってのは奪つことをよしとされてんのさ。例えギルドで認定されている階級が下のものでも、上の冒険者からそれを奪えば、その冒険者章と同じくらいの実力があるとみなされる。まあ、御伽噺の”狩人”のレガシーって奴だな」

「ん？ つまり、それは」

「あー、そゆこと。さっきの論外の連中はいざ知らず。真つ当な冒

「 険者ならみんなこう思ってる、 ” 竜殺し ” は塔級に相当するクラス  
の冒険者ってな」

「 そりゃ、ご多分な評価どうも、だな」

「 謙遜すんなよ。最初は誰もが信じてなかったんだ。竜殺しって  
のもなんか間違い。またあの竜の巫女様が暇潰しになんか始めた  
くらいだったんだけどな」

「 ドラ子、他の奴らからもそんな評価なのか……」

「 ……ドラ、子？ へい、へいへいへい、竜殺しのナルヒトくん。  
もしかして、もしかするけど、そのドラ子ってのはよ、あの、蒐集  
竜のことを言ってるのか？」

遠山の何気ない言葉は、しかしこの世界に住まうものからすれば  
信じられないものだったのだろう。

終始ニコニコしていたはずのユトが、ぽかんと口を開けた。

「あー、まずい感じか？」

遠山が、おずおずと問いかけて。

「たは！」

ユトの笑いが、響いた。

「たは、たははははははは！ おい、おいおいおい、やべーって！  
やべーってそれはマジで！ 竜だぞ？！ 塔級冒険者の大半を赤  
子扱いするような化け物だぜ？ それを、あだ名呼びって、しかも  
ドラ子って、お前、たははははははは！！」

「ふーん、やっぱり誰から見てもそんな感じの扱いなのか。アイツ」

「いやー、やべー、笑うわ、ほんと。でも、やっぱりお前、本物だな」

ユトは笑いすぎて溜めていた涙を拭い、遠山に向き合う。

「あ？」

「たは、誰もがよ。竜殺しなんざ噂だけの存在だと思ってた。それがどうよ、あれよあれよと言う間にこの街にはお前の足跡がどんどん刻まれていってる」

ユトが語るのは、遠山がこの街で起こした数々の冒険譚。

「竜が、正式に帝国へお前を探せと命令したり、番にするだなんだの話が出て、かと思えばそれが取り消されたりよ。この辺で一部の人間はお前の存在を信じ始めた」

指折り数えられていく話は、眉唾にも近いもの。しかし、全て事実だ。

「んで次は、あの生きる伝説、勇者パーティの生き残りとかギルドで大揉め。おまけにそこに竜が出てくるってな。はは、聞いただけで面白いわ。まあ、あとは出るわ出るわ、気に入らねえ門番を皆殺しにしたとかなんとか。ああ、スラム街から子どもを攫ったってのは半分本当だったな」

「うへ、そんな噂になってんのかよ」

「まだまだあるぜ？ 教会の麗しの主教様の愛人だとか、魔術師の祖、全知竜がお前のパトロンだとか。ああ、これは塔級冒険者で、学院出身の奴に聞いたんだけどな。アイツ、目から血の涙流しながらお前の話してたよ、なんか脳が破壊されたとかなんとか言ってたな」

「その人、大丈夫か？」

脳が破壊されたという概念はこちらにもあるのか。遠山は歴史の収斂制に思いを馳せる。

「まあ、生きてるから大丈夫だろ。あとはなんだ、この前の街の南部。教会の認可を受けていないスラム街の近くにあった密造酒醸造所の火災、あれも竜殺しの仕業だとかな」

少し、ユトの声が低くなる。

じつと、見つめるその視線はなにかを探るようなものだ。

「さて、なんのことやら」

遠山はその仕事のことをとぼける。教会からの依頼は基本的に秘密のことが多い。

審問会は言うなれば天使教会の汚れ仕事担当だ。その辺の機微を遠山は理解している。

「おっと、藪蛇か？ あんまり聞かないことにするよ。……まあ、あとはあれだな、カラスがアンタを探してる、とか」

ぼそり。

何気なく呟かれた言葉は、水に浮かぶ油のようにはっきりと、その会話の中で異物だった。

「……へえ、カラス、ねえ」

これも、まだ解決していない問題だ。

スラムでの一件は皆殺しにしたお陰のせい、追手はまだ現れない。

だが噂にはなってしまうているようだ。

「んな怖い目するなよ、竜殺し。俺は少なくとも連中と仲良しこよしじゃない。ただ、奴らにはあんまり手を出さない方がいい。カラスの連中は”塩漬け依頼”になるほどの奴らだからな」



「塩漬け？」

「これも知らないのか？ アンタ、さてはあんまりギルドに顔を出してねえな？ 塩漬けっつーのはアレだ。誰も手を出さないから永遠に、ギルドの依頼板に張り付いたままになってる依頼のことさ」

「……あの取り合いになってる依頼で残るってことは」

遠山はギルドの早朝の様子を思い出す。

冒険者の主な仕事、”依頼”と”狩猟”。

どちらかと言えば、目的がはっきり示され、自分の実力に合ったものを選ぶ方から依頼の方が人気らしく、いつも依頼状を冒険者たちは取り合いしていた筈だ。

「そーゆこと。」割に合わねえ”、塩漬け依頼ってのは金に目がない冒険者ですら誰もやりたがらねえめんどくさい依頼のことさ。まあ、”カラス”討伐依頼が塩漬けになってるのはもう少しややこしい理由なんだけどな」

「ややこしい理由ねえ…… で、親切なユトさんは俺に警告してくれたってわけか？」

「そゆこと。アンタは運が良い。カラスと揉めた、なんて噂が出ること自体本当は珍しいんだ。奴らと揉めた奴なんて、すぐに報復されて殺されちまうからな。まあ、噂がどうあれ奴らには関わんねえ方がいいってこと」

「ご忠告どうも。俺も好き好んでやばい奴らと関わりたいわけじゃない」

「そりゃよかった。常識があるようで助かるわ。なんせこの街はアクの強い奴らが多いからな。あ、そうだ、ナルヒト、アンタそーいやギルドにも目をつけられてるのは知ってんのか？」

「ギルドに？」

「おう、あれだよ。アンタがほら、テイタノスメヤ。あの狩りにくい爬虫類種のモンスターを山ほど商人に卸してるだろ？ あれ、ギルドでかなり話題になってんだぜ」

「あー…… あれな。なんか問題があつたか？」

「たは！ よく言うぜ。全部わかってるだろ？ ギルドからしたら金のなる木をずっと逃し続けてるわけだ。テイタノスメヤをあんな数狩る奴つてのは絶妙にいないわけだからな。一級冒険者以上からしたら苦勞の割に美味くねえし、2級以下の冒険者だと犠牲者なしで狩ることも難しいだろうしな」

「へえ、それでギルドはなんて言ってるんだ？ まさかそのうち、獲物をよこせなんて言うてくるのか？」

「たはは！ そうあんまり殺気立つなよ、竜殺し。冒険者にバカは多いが、ギルドは、少なくともあのギルドマスターはバカじゃない。何人かの幹部連中はアンタに対して出頭を命じようとしてたらしい

が、あのいいところ出身のギルドマスターが全部止めてるんだよ。竜殺しとはどうあっても敵対したくないんじゃないかねえの？」

「ああ、あの頭良さそうな人か。んーむ、苦労かけてんな。顔でも出してみるか？」

「たは、まあいいんじゃないかねえの。ただ、さっきのバカみたいなのは絡まれるかもな」

「あ？」

「いやなんだよ、竜殺し。微妙なのさ、この街のアンタに対する評価はな」

「どういうことだ？」

「それなりに道理をわかって、ある態度の教養と、自分を見つめる冷静さがある人間なら、アンタの力はよく分かる、アンタがどれだ

け綱渡りの立ち回りでこの街を生き抜いているかわかるだろうよ。ただ、それがわからねえ、アンタの苦労や力がわからねえ奴らからしたら、まあ、悪目立ちしてるんだよ、ナルヒト」

「悪目立ち」

「そ、まあ、冒険都市っていうほどだ。血の気が多くて夢見がち、おまけに自信過剰のバカは履いて捨てるほどいる。そう言う奴らからしたら、ナルヒト、アンタはとても鼻につくのさ。”竜殺しなんて大層なあだ名がなんだ、実物見たら大したことねえ、俺だって”  
こういう風に考えるバカの方がこの街には多い」

「うへえ、じゃあ、ギルドに行くと絡まれるってのは」

「そゆこと。冒険者はバカが多い。ま、俺たち塔級冒険者もみんな新人時代はそーゆーバカに絡まれてきたもんさ。むしろその多数のバカに磨かれて冒険者は大きくなるもんってね」

「バカがバカを磨いても、さらなる大バカが生まれるだけじゃね」

「たは！ 冒険者つてのはそう言うもんだろ？ バカの王だよ、俺も、アンタも」

「……変なやつだな、ユト」

ふと、遠山は気づいた。

自分はこんなに他人とペラペラ話すタイプだっただろうか。

高校生の時ならいざ知らず、最近はあまり身内以外とはここまで喋る人間じゃなかった筈。

「ナルヒト、会って間もないけど、アンタにだけは言われたくねえ。おっと、もうこんな時間か。ワリ、偉く長く話しちまったな。実はこれから仕事なんだ。偉大なる竜殺し殿にもまつわる、な」

ひひ、と喋るユトの声が平面に、平になっていく。

いつの間にか、野次馬達の数が少なくなっていることに今更気付いた。

そして、野次馬とはまた別の種類の視線がこちらを見つめていることにも。

「なんだって？」

「……ここ最近、平原地帯と森林で冒険者の行方不明数が激増している話知ってるか？ いや、知らないわな」

「知らねえ。塔級冒険者のユトさんよ。なんでそれが俺に関係ある？」

嫌な予感がする。

ストルと子供達の方に視線を動かす。きちんといる。だが、ストルも異変を感じとっているらしい。無表情のまま、それとなく辺りを警戒している。

「関係あるのさ、竜殺しのナルヒトくん。言っただっしょ。冒険者はバカ揃い。最近街に現れた新参者が、ティタノスメヤ狩りで大儲けしているらしい、奴に出来るのなら俺たちにだって出来るはず、つてな。……アンタの力を理解出来ねえバカどもはこう考えた訳だ」

「ああ……なるほど。自己責任の”狩猟”に行く冒険者が増えたわけか」

「そゆこと。哀れ勘違いしちまった冒険者が自分のミスとアンタの実力に気づくのは蛇の胃の中に収まった後ってわけよ。まあ、それだけならこの都市じゃよくある話さ。バカが自分の実力を過信してモンスターの餌になるなんざ季節が巡り回ると同じようなもんだ、だが今回の話はそう簡単には終わらなかつた」

「あ?」



「最近、4級や3級の低位の冒険者だけじゃない。それなりに実績を積んで、地に足つけてるはずの2級の連中、そして昨日はついに一級の冒険者まで、森林から帰ってこなかった」

「……仕事に絶対はねえ。どれだけ実力あっても、この仕事はワンスミスで死ぬのはおかしい話じゃないだろ」

「ああ、ナルヒト、アンタの言う通りさ。だが、昨日いなくなったのは18人。それも2級冒険者の徒党が2つ、一級冒険者のコンビが一つ、2級と一級の混成パーティーが一つ、同じ日に、同じ場所で消息を絶った」

とん、とん、とん。

辺りの席は人で埋まっている。

なのに、静かだ。ユトが木製のテーブルを指で叩く音が聞こえるほどだ。

「……………それは」

「場所はもちろん森林。アンタら竜殺しの一味が荒稼ぎしてた場所だ。そしてどういいうわけか、つい最近まで元気よく蛇狩りに勤しんでた竜殺しさんたちは、近頃めつきり狩りに出掛けていない、ってな」

じつと。ユトが遠山を見つめる。

もう、その顔にはあの人好きのする笑顔は微塵も浮かんでいない。

あるのは、人類の中の上澄、冒険者の中の最上位。

塔級冒険者としての、獲物を見る冷たい瞳。

「……………何が、言いたい」

遠山はゆっくり、つぶやく。獣を刺激しないように、そんな思いが込められたかのような小さな声だ。

「いやなに、人間、色々考えるわけさ。普段なら起きるわけのない異変、その原因を探るとなると一つ一つ色々な要因を考えて、潰していく必要がある。……そう、可能性の一つにはこんなもんがある。”竜殺し”が自分の狩場を荒らす他の冒険者を疎んでそれを始末しちまった、とかな」

とん……

ユトが机を叩くのをやめた。

おそらくこれが、本当に、ユト・ウエトラルが遠山鳴人と話しかかった内容なのだろう。

「……ユト、アンタにはユーモアのセンスはないみたいだ。回りくどい話しやがって。結局聞きたかったのはそれか？ わけわかんねー疑いだぜ、それは」

「焦んなよ、トオヤマナルヒト。可能性の一つ、と言ったはずだぜ。まだそうと決まったわけじゃない」

疑われている。

森林で起きているらしい異変、その原因として。

塔級冒険者、あのドラ子と同じ階級の人間が動くような事態らしい。

そして。

「……トオヤマー！」

近くの席で待機しているストルがたまらず、声を上げた。

遠山は冷や汗をかきながら答える。

「ああ、わかってる、ストル。は、ユト、アンタもなかなか悪党だな。人懐っこい演技しやがって。ずいぶんお友達が多いようだ」

辺りを見回す。

ああ、くそ、やられた。畜生、大バカめ。遠山は自分を呪う。自分がキリヤイバを仕込むときと同じ手口をそのまま、目の前の塔級冒険者にやられている。

困まれている。

辺りにいた野次馬や、周りの席に座っていた人間、それが丸々、市民に扮した冒険者と入れ替わっていた。

おまけに、全員、さっきの連中より格上。

「たは、やっぱ気づくか。ああ、すでに俺の仲間がアンタらを囲んでる。全員2級以上の冒険者だ。あんまこついつやり方は好きじゃねんだけど、まあ、”竜殺し”に”第一の騎士”相手だ。敬意と思想ってくれ」

悪びれることもなく、ユト・ウエトラルが塔級冒険者として言葉を紡ぐ。

自身と、わずかばかりの緊張があふれる視線。

プロの顔だ。

その男の厄介さが、顔付きでわかる。

「チッ、トオヤマ、コイツ……」

ストルだ。

おそらくこの場をひっくり返せる鬼札、それがたまたま動き出そうとして。

「はい、ストップ、お嬢さん」

「動かんでくれよ、あんまこついうのは俺も好きじゃない」

ギリギリのタイミング。

呼吸の隙間を縫うような動きで2人の冒険者が、ストルの背後を取った。

突きつけられた細い剣を握る大柄の男と、バカでかい弓を既に引き絞り終えている細身の男だ。

剣先と、矢尻はストルを捉えていて。

「……チツ、手練、デイスね」

「……あ、アネゴ」

「ストルちゃん……」

怯えた声を漏らす子どもたち、その声に答えるようにストルが、ふっと笑い、ゆっくりと両手を挙げた。

良い判断だ、ストル。

遠山はひとまず、ストルの暴走は起こらないと判断する。



「おう、リバーにスモール、良いタイミング。ナイス」

呑気なユトの声、遠山と話していたときよりももっと砕けた言い方。

おそろくこちらが、ユト・ウエトラルが本来の友人に向ける声なのだろう。

「うっせ、いつもやばいことにだけ巻き込みやがって」

「ほんまそれ。ユト、きちんと報酬払えよ」

ユトに声を向けられて、答える2人の冒険者。ストルを抑えた2人だ。

殺伐とした中でもリラックスした様子なのはつまり、歴戦の証。

一筋縄ではいかないだろう。

「はいはいはい、お二人さん、俺が約束破ったことあるかよ」

「「なんつどもあるわ」」

目の前で繰り広げられる呑気なやりとり。一歩間違えれば人死が出る状況でのこの会話。

まともな冒険者とはこういうものか、と遠山は少し彼らに対する認識を改めた。

「……仲が良さそうだな」

ふじつと、息を吐きながら遠山がじぶぞく。

舐めすぎていた。

これは反省だ。

遠山鳴人は視線を空に向ける。まさに、してやられたという事だろつ。

どこか、自分自身、今までのやりとりから”冒険者”を”探索者”と比べて舐めていたのかもしれない。

「あ？ わかる、コイツらとは幼馴染だよ」

「へえ、いいな。ユト、俺実は今まで友達少なくてな。あんまり他人に頼るとか、そういうのしてこなかったんだよ」

遠山鳴人は奪われた側の存在だ。

思春期の頃は人との繋がりを求めて、友達作りに奔走したこともあるが、結局遠山は他者よりも己の欲望に向かい合う生き方を選ん

だ。

「高校の頃、それが欲しくて色々やってたことがある。人助けしたり、目立ったりしてりゃ、そのうちそれが出来るんじゃないかってさ。あん時はなかなかバカだったな、ほんと」

「コーコー？」

一人で生きていこうとした、それでいいと一度は結論づけた。

でも、人は変わる。

遠山の欲望は、決して完成しない。

” 拡大していく自我；は時に他人を冒し変えていく、そして同じくその自我は他人によって姿を変えながら拡がっていく。

「やっぱりいいもんだよな。いるといたないとじゃ自分の人生に置ける選択肢が違ってくる。そう考えると高校生の頃もがいたのは間違い

じゃなかったって思えるよ」

ユト・ウエトラルには頼りになる冒険者の友がいる。1人で生きていくだけの遠山鳴人だと、太刀打ちは出来なかっただろう。

だが、今は――

「竜殺し、何の話だ？」

「友達”の話さ、塔級冒険者」

遠山鳴人にもまた、頼りになる冒険者の友がいるのだ。

「っ?! ヌトー!」

リバーと呼ばれていた大柄の男が唾を飛ばした。

い。  
1番早く、その存在に気付いたのはリバーだが、それでももう遅い。

「っ、おっと、マジ、かー……」

ユトの顔にぽつり、一雫の汗が浮かんだ。

その喉仏に、肉厚のナイフの刃が添えられて。

「どうも、塔級冒険者さん。ご紹介に預かった竜殺しの”友達”だ」

だが、今は遠山鳴人にも”友達”がいる。

影の牙、ラ・ザールが、塔級冒険者、ユト・ウエトラルの背後を取っていた。

誰も気づかなかったのだ。誰も知らなかったのだ。

冒険者達が遠山達への包囲網を広げるその前の段階で、ある野暮用で姿を消していたリザドニアンを誰も把握出来ていなかった。

「1」の「1」

細身の男が弓矢の狙いを変えようとして――

「動くな、スモール。このお嬢さんに剣を抜かせちゃってる」

「デイス」

一瞬の隙をつき、ストルが鞘から剣を抜き、大柄の男の喉元に向けている。

互いが互いに剣を突きつける小康状態。

戦況は、影に愛された1人の男によって再び、イーブンに傾いた。

「……いや、マジか。いやいや、驚いた。え？ あれ？ 俺、マジで気づかなかった。リザドニアンのアンタ、どこから、いや、いつから消えていた？ スキル、か？」

「なに、昔から影が薄くてね。集団の中から消えても誰も気づいてくれないのさ。まあ、うちのボスから言われていた仕事が終わって戻ってみれば、なにやら険悪な雰囲気だったようだから、つい、ね」

ラザールの目はニコリともせず、ユトを見下ろしている。



「ビュー、声泣。つい、で喉笛にナイフ当てられたらたまったもん  
じゃないよ、ほんと」

戯けるコト。

空気がさらに重くなる。沈黙が痛いほどに積もっていき。

「コト」

「なんだ、ナルヒト」

遠山の声が、それを破った。

「俺たちは、違う」

その言葉は、シンプルなものだ。単純で言葉足らずにも近いそれ。

「……………たは」

ユトが自分の顎を撫でようとして、喉元に添えられたナイフに氣付いて苦笑した。

「疑うのは勝手だ。論理的に考えて確かに状況からすると俺たちは怪しい。だが、俺たちは何もしていない」

「たは…… それを信じられる証拠は？ 竜殺し、アンタはここ数日、暴れ過ぎた。アンタが動くたびこの街には大きな波紋が起きている。冒険者ギルドの忠実なワンワンの俺としたらさ、アンタのことが気になるのは仕方ないっしょ」

とん、とん、とん。

ユトの指がまた、テーブルを叩き始めた。

「その冒険者が消えた日の俺たちの目撃証言を集めてみればいい。えらくたくさんお友達がいるみたいだし、簡単だろ」

「ふーん、アンタ、肝が恐ろしいくらいに座ってるな。これでも俺、一応塔級冒険者なんだけど」

「お前こそ、首元にナイフ突きつけられてるのに中々度胸があるじゃないか」

短い言葉を交わす2人。

どちらかの号令でこの場は血に染まることになる。

「……………さて、どっしたものが」

とん、とん、とん。

「コト」

面倒だ。もう。

遠山は短く、呼びかける。

「うん？」

コトの指の動きが、止まった。

「ーーどつでもいいんだ」

「うん？」

遠山の口から漏れたのは紛れもない本音。

「正直言つと。俺は、俺自身と俺の周りの人間のこと以外心底どうでもいい」

自分達が、他の冒険者に何かをした？

その疑いをかけられている？

バカバカしさで込み上げる笑いを押し込めながら、遠山はユトを見る。

「誰が成功しようつと、失敗しようつと。誰が生きようつとが死のうが本当にどうでもいい」

「……………あ？」

「知ったことかよ。なんで俺がいちいち他人の邪魔したりする必要があるんだ。心底、どうでもいいぜ。いいかよく聞け、塔級冒険者」

がたん。

椅子から立ち上がり、遠山がウト・ウエトラル。塔級冒険者を見下ろして。

「こっちはそもそも、お前冒険者らなんぞ、眼中にねえんだよ」

その言葉を放つ。

ぶわり、辺りを囲んでいるやつしの冒険者達の殺気が膨らんでいくのが分かった。

目を丸くして、固まっている塔級冒険者は

「……………たは」

ゆっくり、口元に笑みを浮かべて。

「たははははは！　へい、へいへいへい、聞ーたかよ！　スモー  
ル、パイン！　たはは！　こりゃいいや、確かにそう言われちまっ  
たら納得するしかねえわな！」

破顔一笑。

目の端に涙を溜めながら、腹を押さえて塔級冒険者が大笑いし始  
める。

威圧はもう、消えていた。

「……………てめえ、試したな？」

遠山が、深く息を吐く。

再び、ガタンと音を立てて椅子に座り直した。

「たは、いや、いやいや、悪い！ マジで今のはこっちが悪かった。アンタにぶっ殺されても文句は言えねえよ。真面目な夕チでな、仕事で手抜きがでかねーのよ」

手をぶらぶら振りながら、ユトが笑う。

「スモール、リバー、お疲れさん。もういいぜ」

ユトの合図で、ストルを抑えていた冒険者達が武器をゆっくり収める。周りの野次馬たちの敵意も少しずつ静かになった。

「ストル、ラザール、サンキュー。もう大丈夫だ」

遠山の合図でストルが剣呑な雰囲気のまま、しびしび剣を納める。

ラザールの、いいのか、という視線に頷くことで肉厚のナイフをユトの首から下げられた。



「いやー、申し訳ねえことしたな。ナルヒト。いやいや、久しぶりに肝が冷えたっつーのか、確かに竜殺しには今更他の冒険者なんぞのことなんか関係ないわな」

にっこにっこしながらユトが笑う。その顔に先程の暗さはない。

おそらく、初めから全てがブラフだったのだろう。

「ユト、アンタの仕事ってのは……」

「ああ、お察しの通り。」 森林地帯での異変の調査、もしくはそれの解決”、だな。まあ、あれだよ、塔級冒険者つつても一部のイカレを除けばギルドの使いっ走りみたいなもんさ。幹部連中への報告書にきちんと書いとくよ、竜殺しは無関係だってな」

「それはありがたいんだが、どうして急に疑いが晴れたんだ？」

「え、だって、もう大体この異変の原因、俺わかってるし」

「は？」

ケロッと言いつつユトに、遠山が口をポカンと開ける。

「……竜殺しさん、気持ちはわかるぜ。コイツはこつこつ奴なんだ」

「なんか、ほんと、すまん…… 竜殺し殿」

ストルを抑えていた手練れ2人が、疲れた顔で呟く。おそらくユトの芝居に付き合わされたのだろう。

「あー？ なんだよ、スモールにリバー。禿げそうな顔してよー、ああ、そうだ。俺は大体この事態に目星をつけてんのよ。腕利きの冒険者の行方不明、本来ならば起きえない狩場での異変、まあ、<sup>エルダー</sup>古代種”の仕業だろ」

「エルダー？」

「あ？ おいおい、ナルヒト、いくらアンタが冒険者ギルドに顔出してないからって、冒険都市にいてエルダーを知らねえってことは……  
ああ、ありそうだな、確か冒険奴隷だったか」

「ああ、無知なもんでね。ユト、下手に疑いをかけられて仲間達には苦労させてるんだ。それくらい教えてくれてもいいんじゃないかねえの」

「うーん、まあ、そりゃそうだ。エルダーってのはまあ、なんだ。冒険者という塔級冒険者みたいなもんさ、要はモンスターの<sup>エルダー</sup>中の規格外の存在を、ギルドでは”古代種”って呼んでんのだよ」

「エルダー…… 古い時代からいるってことか？」

「んー、まあ大方その通りだ。大戦の時代から存在が確認されている種、ヘレルの塔にしか存在しない種類、あとは今回の奴みたいな例外、まあ、一言で言えば分類するのが面倒くさい常識外のモンスターを指す名前だな」

「今回の奴みたいな例外……？」

「ああ、たいてい、エルダーってのはまあサイズがでかかったり、気配が出たかったりしてすぐに見つかるもんさ。でも、今回ののは狡猾だ。今んとこまだみつけることもできてねえ。まあ、だからこそアンタにも疑いがかかっているんだけどな、……長く生きたモンスターの中には人と同じくらい頭の良い奴もいやがる。人の頭脳に、モンスターの力、そんなエルダーも過去には確認されててな」

「今回の異変はソイツの仕業だと？」

「まあ、可能性はそれが1番だな。冒険者の勘って奴さ。竜殺しが自分の商売敵を始末していたとかいうアホみたいな予測よりは、だいぶ現実よりだろ」

「ほんと、てめえいい性格してるな」

「褒めるなよ。まあでも、アンタと話せてよかった。今度はゆっくり

り飲みにも行くこつや。竜を落とした男の話とか超聞いてみてーし」

「お前のペース苦手だからやだ」

「たは！ そんなつねねえこと言うなよ、竜殺し。さて、そろそろ仕事に戻るか。いや、今も仕事なんだけどさ」

ユトが立ち上がる。その所作には隙はない。

「……ユト・ウエトラル」

「なんだ？ トオヤマナルヒト」

色々言いたいことはあるが、一つの事実を遠山は思う。

塔級冒険者の仕事に絡まれたのはムカつくが、一つ、意趣返しを。

「手助けありがとう。助かったよ」

嫌味のつもりだ。

にいつと笑って、礼を呟く。

「ーたは！ほんとアンタ、面白いな！あ、そーだ、ナルヒト。迷惑料代わりだ、アンタらがさっき話して内容に役立ちそうなこと教えてやるよ」

同じく、にいつとユトが笑った。

「あ？」

「俺の出身は西領の田舎街んだけどよ、唯一自慢出来るのが肉料理なんだ。ソーセージがなんとか話してたよな？」

「どこから聞いてたんだよ、てめー」

「たは！ あー、ナルヒト。平原地帯にいる獣毛種、ジャイアント・ボアと、ホーンラビット、この2種類の肉でソーセージ作ってみな。割合は確か、ジャイアントボアが7割、ホーンラビットが3割、だったか。多分、冒険都市で売ってるどのソーセージよりも美味しいものに仕上がる筈だ」

「モンスターの肉でソーセージ？」

「そ、獣毛種は野生の獣や家畜に味が似てるし、食いやすい種族だ。奴らの肉はとにかく脂が乗ってて美味い。ま、味のばらつきはあるかもだがその辺は愛嬌だろ？」

「……そうか、だからドラ子のとこで食べた肉も……」

話をどこから聞かれていたのか。気になることはあるがひょんなことからパン屋事業に役立つことを聞いた。

真偽はともかく、試してみるのもいいだろう。

「ま、そゆことさ。竜祭、アンタらも何かするんだろ？ 楽しみにしてるぜ、ナルヒト。スモール、リバー、次は平原地帯と森林だ。ギルドからお小遣いもらうために働くぞ」

「ていうか危険手当欲しいんだけど」

「お嬢さん、失礼。またな」

「チツ、次はねーデイス。優男に大男」

「おー、こえー」

「じゃーなー、竜殺しと愉快的な仲間たち、お互いこの素晴らしき街の住人だ、これからも仲良くしよーぜー」



手を振りながら去っていくユト・ウエトラル。配下の冒険者達もそれに倣って散らばっていく。

「……つかみどころのない奴だったな、ナルヒト」

去っていく塔級冒険者の背中を眺めながら、ラザールがため息をついた。

「だな、厄介な連中が多くて嫌になるよ。だが、ラザール助かった。これ以上ないタイミングでの登場だったぜ」

「ふ、まあな。と、言いたいところだが、冷や汗がびっしょりでね。ナイフを突きつけていたのは俺だったが、生きた心地がしなかったよ。あれが人類の臨界点、レベル5以上の人間というわけだ」

「あー、レベル制あったな、そーいや。ストルもおつかれさん。お前がいて助かったよ」

どっと、疲れた。

思ったより、冷静だったストルにも助かった。

「ふん、トオヤマ、らしくないデイスね。あのいけすかない塔級冒険者は、まあ、敵ではないのでいいでしょうけど、ニコちゃんに乱暴しようとした奴ら、あのゴミ共を逃すなんて」

ストルはしかし、少し不機嫌そうに口を尖らせた。

どうやら、連中、あの最初に絡んできた冒険者を逃したのが第一の騎士は気に入らないらしい。

その様子に、ラザールは少し笑って。

「逃す？」

遠山は、無表情のまま、首を傾げた。

「そうでしょう、私ならあの場で全員始末出来ました。冒険者同士の争いデイス、たとえ騎士であろうとも、いえ、この状況なら間違はなく私たちが罰せられることなどなかった筈デイス」

「ああ、なるほど、ストル、君は1つ誤解をしているな」

「……どういう意味デイスか、ラザール」

「簡単さ、我らが竜殺しは非常に残念なことに、そこまで優しい人間ではないということさ」

「え？」

ぽかんと、ストルが首を傾げて。

「ストル」

「……デイス？」

遠山が立ち上がり、ストルの水色の髪にぼんと手を置いた。

ストルが嫌がる様子はなく。

塔級冒険者とのやりとりは疲れた。

だが、まだ仕事は残っている。

「ニコ達を頼む。今日はみんな疲れたる。宿に帰って休もう、俺とラザールは、少し野暮用を片付けてくる、行こう、ラザール」

「ああ、ナルヒト、ついていくよ」

ぼんぼんと、ストルに続き、子ども達全員の頭を撫でた後、遠山がある方向に向かって歩き出す。

その目はまっすぐ、ある奴らが去っていった方角を見ていた。

「あ、待って、トオー」

水色の髪の子どもが、歩いていく大人達の背中を眺める。ついでにこうと、前に動きかけた足はしかし、背後にいるスラムの子ども達の方を向いた。

「……ああ、なるほど。フン…… 私は、あなたにとって、こども、というのですか……」

ストルの弦きが、遠山を追いかけることも、届くこともなかった。

ピロピ

【サイドクエスト ” 石窯に火を灯せ” のオプション目標を達成しました。塔級冒険者ユト・ウエトラルとの和解に成功したため、” 美味しいソーセージ” の製法を学びました】

ピコン

【カルマクエストが発生します】

【条件達成 属性が中立・悪】

【カルマクエスト ” ゴミ掃除” を開始します】

【クエスト目標 ゴミを全て始末する】

65話 冒険の足音（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを「こ覧くだ  
さい！

感想お待ちしてます。

66話 中立・悪（前書き）

パワーアップ回です。



## 66話 中立・悪

「なあ、ユト。実際のところどうだったんよ」

「んあー。なんだよ、リバー」

一仕事終えた塔級冒険者とその友人達が、冒険都市の道をゆく。

自然と道の真ん中を歩くその姿、無意識の動きに強者としての自負が見え隠れする。

「とぼけんな、スキルだよ。お前のスキルでトオヤマナルヒトを見ただろ？ アイツの言ってたことは本当だったか？」

リバー。ユトの昔からの友人で、2級冒険者の大男が粗野な動作で頭を掻きつつ、隣のユトへ声をかける。

「……たは。ああ、奴は嘘をついてない。俺の”キャッチ・インザ・ライ”の結論だ」

ユト・ウエトラル。塔級冒険者というある種の到達点に至った冒険者。彼は個性派揃いの塔級冒険者の中でも異質な存在だった。

その才能は決して戦闘向けのものではない。

スキル、”キャッチ・インザ・ライ”

効果はシンプル、他人の嘘が分かる、ただ、それだけのスキル。かの”正義”にも似た、それでいて決して届くことのできないユトの才能の限界。

その機能は、確かにトオヤマナルヒトが全てにおいて嘘をついていないことを示した。

全ての言葉に、おいて、だ。

面白い奴だった。塔級冒険者を相手に、まさか眼中にないと本気で言う同業者がいるとは思わなかった。

ユトの口元が僅かに緩む。

「はー、天然の嘘発見機のお前がそういうんなら、やっぱりあれか。古代種”の方がー。めんどー、こわ」

細身の男、少し癖のかかった金髪、女ウケしそうな鋭い顔が特徴の細身の男、スマールがため息をつく。

「トオヤマナルヒトの仕業じゃないんなら、”古代種”か。ハズレの方じゃん」

3人の仕事は固まった。

森林の異変は竜殺しの仕業ではない、となれば残る可能性は”古代種”、モンスターの中の異常存在。

リバーとスモールは仕事の目標が厄介なものになってしまったと嘆いた。

「いや、リバー、スモール。逆だぜ、それ」

「「あ?」「」

嘆く2人に、ニカリとユトが笑う。

ポケットに忍ばせていた噛みタバコを口に放り込み、モゴモゴさせる。

「俺らは、ラッキーだ。今回の仕事の目標が”古代種”の方でよかったよ。ほんと」

「ユト、どつという意味だよ」

「たは、決まってる。俺にや、あの男の方が古代種よりも恐ろしく見えたってことさ」

べ、と舌を出して噛みタバコを弄ぶ。下品な仕草だが、外見の良  
い男がそれをするとは奇妙にも絵になった。

「……まあ、竜を殺したつっー話はあれだが、ユト、俺には正直、  
あの水色の髪の子の方がよほど化け物に見えたぞ」

「スモールの言う通りだ。それにあのリザドニアン、ユトの背後を  
取った奴、俺たち誰一人にも気付かせずに、消えて、現れた。あり  
や、秘蹟かなにかじゃね？」

「たは、わかってねーな、お前らも」

味わい尽くした噛みタバコを、口から取り出し、手のひらで握りしめる。

「スモール、リバー。1つ賭けをせん？」

パラパラとユトの拳で粉々にされたそれらが、ふりかけのように散らばって。

「賭け？ なんの？」

ユトの言葉に、彼の常識的な友人2人が首を傾げた。

「さっきの童殺しに絡んだ冒険者。アイツら、明日の朝まで生きるかどうか、ってのはどうよっ。」

愉快げに、塔級冒険者が笑う。その顔は賭けの結果を確信している顔だった。

……

……

…

遠山鳴人は、考える。

さて、彼らと自分達、いったい何が違ったのだろうか、と。

遠山鳴人は、考える。

これから自分は人間を殺す。この世界に来てから、カンタンに自分の選択に入ってしまったその行為を思う。

遠山鳴人は、耳を澄ます。

影に愛された友の力に包まれて、彼らの拠点の屋根裏に潜んだまま、そつと、これから自分が殺す人間の声を聞いた。

「ああ、畜生、いてえ、いてええよお」

野太い声、うめく。

「くそ、フラッド、指はどつだ？」

「ぶ、ひひ、いでえ、いでええよ……なあ、薬、薬くれえよ」



「ザバス、骨継ぎ薬をフレッドに使っぞ。いいよな」

屋根裏に耳を当てて、澄ます。

そこには生活の音があった。レーザーの調べによると冒険者向けに貸し出されている借家らしい。

きっと、彼らがここを借りるまで、彼らなりの物語があったのだらう。

遠山は、屋根裏、薄い建材に寝転んで階下、彼ら冒険者が集うリビングの声をじっと聴き続ける。

「ああ、使え、こんな時の為の備蓄だ！ くそ、俺の足もようやく繋がってきた…… 大赤字だ、クソ、クソクソ！」

「おい、ザバス、どうする？ あいつら、まさかこのまま黙ってるわけじゃねえよな？」

「ああ、当たり前だ！ あの水色の髪の女も、あのリザドニアンも、そしてあの黒髪の男も！！ 俺らを舐めたまま、この街を歩かせてやるわけねえだろ」

「だよな！ だが、どうする？ アイツら、予想以上に強かった、真正面からは無理だろ」

「……………この前のあの女、アイツに連絡するか？」

「カラス、か」

「そ、それは流石に……………」

「いや、この際だ。それに俺たちは冒険者だ、使えるものはなんでも使う、役に立つもんはなんでも使うんだ、アイツら、許さねえ」

「ああ、そうだ、その通りだ。狙いはあのガキどもだ。アイツらを攫って、人質にしよう、それがいい。なあ？ フラッド」

「ぶひ、ひひひ、指、指、まだ動かねえ、けど。奴ら、ひひ、あのそばかすの女の子の指も同じにして、水色の髪の毛のメスガキの目の前で、折ってやる……」

聞こえる声は、怨嗟の声。

やったら、やり返される。人の営みと報復の連鎖は決して切り離すことは出来ないものなのだろう。

遠山鳴人は、考える。

危険だ。放っておくには怖すぎる。

いまの遠山には、人殺しの理由なんてそれだけで十分だった。

ゆっくり、自分の首元に手を当てる。

それは、遠山鳴人の最強の兵器。

それは、遠山鳴人が自ら保有し続けることを選んだ力。

夢の中の、お札の巨人。正体不明のその存在と深く関わる遺物。

満せ、キリヤイバ。

欠けた刃が、遠山の首元から引き抜かれる。膝をつき己の首から生えた刃をゆっくりと構える。

殺意をそのまま武器にしたその機能は、例え世界を渡ろうとも遠山の意に従い続ける。

がり、がり、がり。

建材の隙間に、欠けた刃をゆっくり、ゆっくり差し込んでいく。木の繊維を、刃が食い進む。

がり。

「その意気だ、よし、よし、とりあえず、今日のところはゆっくり休んで……………」  
「なんだ？ これ」

「お、おい、誰かなんか燃やしてんのか？ 煙？」

目を瞑る。

亡くしたふわふわの黒毛の友を思い出す。

あの時の自分は弱くて、愚かで、何も出来ない存在だった。力も、覚悟も、意思もなく。

だから、奪われた。だから、いなくなった。

遠山鳴人は知っている、大切なものはある日急に、呆気ないほど簡単に奪われることを。

「もう2度とあんなのは、ゴメンだ」

ゴメン、ゴメン、ゴメン。

【複数の技能発動 ” 頭ハッピーセット”、” 殺人適性”、” キリの主人”、” カラス殺し”、” 拡大する自我” により、行動に補正がかかります。判定なしで、キリヤイバによる殺害に成功します】

影の中、遠山が目を見開いた。

茶色の瞳に映る光はなく。

部屋に、キリが満ちてー

「お、おい、外、外に出ようぜっ！！ な、なんか、なんかおかしいぞ！ この煙！？」

「いや、違う、これ、霧ー」

もう、遅い、何もかも。

彼らも、遠山も。

「殺せ、キリヤイバ」

あまりにも、その引き金は軽くて。

「ア？」

たらーっ、最初に1人、冒険者の男が鼻から血を流した。その血を止めようと鼻に手をやった瞬間、手の皮膚が破けて、血が弾けた。



「ッあ???'」

ぐるり、目から血を流し、ひきつるような声を上げた瞬間、一目で致死量とわかる血を吐いて、倒れる。

時間差で、その身体がびくり、びくりと震える。内側に入り込んだキリが冒険者の命を斬り刻んでいく。

「ザバス?!?」

なん、で、エエエエエアアア」

仲間の異変に気付いた男、立ち上がった瞬間に頭を押えて倒れ込む、ざき、ざき、ざき。皮膚が割れて、指の爪が裂かれて、身体中から血を流して、動かなくなる。

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

霧の中に血が舞う。

真っ白に赤が混じる。

静かの中に叫びが響く。

遠山鳴人は許さない。自分達に害を及ぼす存在を。

遠山鳴人は忘れない。世界は常に、自分から何かを奪おうとすること。  
ことを。

遠山鳴人は、決めている。

もう2度と、自分の周りの存在を、失いたくないと思う存在を、  
世界に奪わせることなど決して。

ピロン。

【キリヤイバによる殺傷数が一定以上になりました。隠しクエスト  
” FOG : Dream ” をクリアしているので、 ” キリヤイバ ” に  
よる魂喰らいが始まります】

「ッー」

それは唐突に始まった、屋根裏から聞こえる苦悶と悲鳴がさらに  
大きく、叫びが形となって浮かび上がる。

いたい、苦しい、たすけて、おかあさんー

「ッな、んだ、これ」

思わず片手で頭を抑える遠山。そのまま力なく、うつ伏せに倒れる。

耳元に届くのは声だ。拡声器を直接鼓膜にぶつけられているかのような圧で、苦しみに塗れる悲鳴が届く。

ピコン、ピコン、ピコン

影の中、わざわざ見えやすいように白い文字でメッセージ。

【キリヤイバによる”魂喰らい”が発動しています。筋力値と精神値による判定を行います】

【判定に失敗した場合、あなたの自我と喰われた魂が混ざり始めます。気をつけてくださー！ ざ、ザザザザちよ、ちよっと！！  
遠山鳴人！ アンタ、何したの?!】

「ハーヴィーか……！ なん、だ、これ」

【クソ！ あの糞碌ジジイ！ これだから、ああいう存在は！ 少し面白そうな人間見つけるとすぐにこういうこと仕掛けやがる！！  
遠山鳴人！ よく聞いて！ 細かいことは省くけど、今アンタマジでヤバい感じだから！】

「知識の眷属、の割に説明が、雑う…… なん、だ、これ、マジで……」

【あ、クソ…… だめ、干渉できない…… 霧が…… 遠山鳴人  
！！ 気合い！！ 気合い見せなさい！ アンタは今、試されてる！  
！ あのジジイはアンタの契約に縛られてる！！ だから！ 気合  
いと根性であるジジイをー じゃないと、アンターー】

ぶつり、ハーヴェイからのメッセージが途絶えて。

目がチカチカする。

【汝の奪った景色を見よ】

メッセージ。

景色が見えた。

その男は、農村の次男坊。

朝から夜まで働いて、また次の日がやってくる。己で流した汗水は、己を決して豊かにはしてくれない。

そんな毎日にもあの子がいたから耐えることが出来た、素朴だけどよく笑うおさげの女の子。

仕事の合間、ほんの少しだけ2人で畑のすみっこに腰掛けて空を眺めて話す時間、男はその時間の為だけに生きていた。

でも、男はその子を奪われた。己の兄、農家においてその家の全

てを継ぐことを許された存在。

膝を抱えた夜。

聞こえるのは、寝屋から響くその子の、鳴き声。

同じ場所から聞こえる、兄の悦びに満ちたうめき声――

男は全てを奪われた、だから、奪う側に回った。

【汝の奪った景色を見よ】

その男には夢があった、幼い兄弟、老いた両親に少しでも楽をさせてあげるといふ夢が。

その男は知っていた、世界はしかし残酷で誰しもが幸せにはなれないことを。

幸せの総量は初めから決まっっていて、世界はそれを奪い合うように出来ていると。

【汝の奪った景色を見よ】 【汝の奪った景色を見よ】 【汝の奪った景色を見よ】  
【汝の奪った景色を見よ】 【汝の奪った景色を見よ】 【汝の奪った景色を見よ】  
【汝の奪った景色を見よ】 【汝の奪った景色を見よ】 【汝の奪った景色を見よ】  
【汝の奪った景色を見よ】 【汝の奪った景色を見よ】 【汝の奪った景色を見よ】

キリヤイバが、人を殺す。

遠山鳴人が、敵を始末するそのたびに、流れ込むのは人の想い、人の記憶、人の光景。

それを全て喰らってゆく。想いも夢も願いも絶望も悲しみも、等しく。

「うええ…… うおええ……」



輪廻の仕組みに反する暴虐。

この世界の歴史において、僅かに確認されている存在。

魂喰らい。

他を殺し、その全てを取り込み、己が贄とする存在。

キリヤイバにも同じ機能が備わっていた。

枷が外れかけの”霧”の力。全てを保存するその力が遠山の意思に反して働く。

殺しすぎた、血を吸わせすぎたのだ。

「キリ、ヤイバ…… てめ、なにしてやがる……っ」

混ざる、自分の中に怨嗟の声と他人の記憶が入ってくる。キリに刻まれる痛みや恐怖が、遠山にも染み込んで。

【魂喰らい 続行】

古い封印により、忘れていたはずの人の血の匂い、人の魂の味をキリヤイバは思い出してしまっていた。

【合一 天之霧・国霧 に他者の魂を供物として捧げています。冒険者 フレッド・バーキン、ザバス・サヤス、他数名を”保存”しました】

平原に溜まり、山野に広がる”霧”が、その業を世界に刻む。

【警告 あなたに”魂喰らい”の適性がありません。警告 あなた  
の自我は完成していません。魂喰らいによる自我汚染が始まります】

なんで、どうして、俺、もっと、生きたくて、幸せに、なりたか  
った、見返してやりたくて、家族幸せに。

「あ、アアア……」

まずい、まずい。

身体がとても寒い、頭の中に声が響き続ける。自分の家の中に気  
付けば複数の他人がいるような居心地の悪さ。

遠山が、レーザーに助けを求めようとすも、声が出せない。い  
や、正確には自分が声を出しているかがわからない。聞こえないの  
だ。他人の叫びと嘆きだけが、耳の中に。

「くそ、くそ！ キリヤイバ、戻れ、戻れ……」

かた、カタカタ。

屋根裏に突き刺したままの欠けた刃を引き抜き、普段通りに命令するもキリヤイバは応えない。

わずかに揺れるばかりだ。

「何が、何が起きてる……？ 魂喰らい？ てめ、キリヤイバ、説明書に書いてないような仕様を今更後出しー」

ーあ。

言いかけて気付いた。

あの夢の中に存在する、あの怪しい存在。

筋骨隆々、梵字みたいな字で埋め尽くされたお札。烏帽子と神主みたいな装束に身を包んだあのマツチヨ巨人。

「……てめえの仕業か、お札マツチヨオオオオオ……」

キリヤイバと名乗るあの不審人物との会話を端的に思い出す。

キリヤイバ、供物、魂、自我、隠しクエスト、霧の夢。

「あの、クソ野郎…… 契約ガン無視か、よっ」

夢の中で交わしたあの存在との、担保のない取り決め。

いかなる方法をもっても、こちらに不利益を与えない。

先日交わした約束はしかし、なんの意味もなかったようだ。現に

今、キリヤイバによって異常が発生している。

このままでは、まずい。生き物としての本能が告げている、このままでは、自分が自分ではなくなる。それはある意味、死よりも恐ろしい事態で。

ピコン

【技能 ” 戦闘思考 ” 知性値によるボーナスが発生します】

「いや、まだ、だ。考えろ、考えろ、考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ」

パニックに陥る遠山をとどまらせるのはそれまでの人生で身につけた技能、スキルや魔術のような特別なものではない、人間がその人生の中で得ることのできる生きる為の力。

それが遠山の思考を止めない。

今わかる材料だけで、この事態に対応するしかない。お笑い草だ、自分の扱う武器によってこんな窮地に陥ることなど。

【警告 ”魂喰らい”により、あなたの魂と他者の魂が同化していきます。肉体値による対抗ロール…… 失敗、同化が進みます】

農村の匂いがする。餓えた堆肥の臭いだ。遠山の記憶と、彼が今殺した男の記憶が混ざり始める。

「おれ、兄貴に、何ひとつ勝てなくて…… だから…… いや、いやいや、違う、俺はそんなの知らねえ、俺はお前じゃない…… やめろ、入ってくるな……」

【警告 ”魂喰らい”により、あなたの自我と他者の自我が混じり合います。技能 ”拡大する自我”により、更に他者の自我との同化が進行しています。精神値による抵抗…… 失敗】

「おれ、痛い、霧に、全部刻まれて、ここで、死ぬんだ…… 違う！ うー！！ 殺してんのは俺だ！！ 死ぬのはあいつらだ！ …… アイ

ッら、って、俺……?」

混ざり合う、混じりあう。

魂を喰らう者は、他者の魂に侵される。多くの人が他人に影響を受けるように。

遠山鳴人という個人を、他者の魂が侵していく。

己のあり様を無理矢理に歪められる感覚、常人であれば既に人格を壊されている状況。

しかし、遠山鳴人はやめない。

「考える…… 考える、考える考える……」

肉体は他者の魂を受け入れきれず痺れたまま。

精神は他者の魂に浮かされ溶け始める。



だが、その知性だけは、遠山鳴人を遠山鳴人たらしめる知性だけはまだ諦めていない。

「考える、メッセージ、知識がある、まだ、考察出来る…… 知識、…… ハーヴィー……」

動き続ける脳みそが、少しづつ、少しづつ糸口を手繰る。

知識の眷属、ハーヴィー。彼女が残したメッセージ。思い出せ、さっき、つい、さっきまで

ピロン

【魂喰らいによる自我侵食に対して、知性値で抵抗開始……  
INT6 …… 部分的成功】

肉体も、精神もだめだった。

だが、遠山鳴人にはまだそれがある。たった1人の人生、考えることだけはやめなかった男に宿るのは確かな知性。

「契約……！」

あ・の・ジ・ジ・イ・は・ア・ン・タ・の・契・約・に・縛・ら・れ・て・る・！

高い知性が、たどり着くのは知識の眷属が遠山に残したメッセー  
ジ。

「縛られてるんなら、これは、おれにとっての不利益じゃ、ない？」

前提が違ったのだ。

この事態は、あのお札マツチヨが己に叛意を翻したのではない。

その前提のもと、頭を回す。

魂喰らい、自我、同化、キリヤイバ、拡大解釈、適性、霧、奪つた景色。

自分の認識している情報を整理し、ゆっくり息を整える。

「……魂……これが、俺を……」

仮説が出来た。

オカルトじみた話だが、異世界転移の時点で今更だ。

今、自分は、自分が殺した”魂”とやらに苦しめられている。キリヤイバの機能には魂と関わる力があつた。今、それが初めて機能しているのだ。

それにより、今自分は危険な目に遭っている。便利だから、使えるから、必要だからとよく考えもせず、”遺物”を使い続けたりスクがここで爆発したのだろう。

「……ヒヒ、今更か」

少し考えて、笑う。

夢のなかで、それは承知していたはずだ。キリヤイバとそれにまつわる存在のリスクを承知した上で運用を決めた筈だ。

成人した大人の判断。ならば、責任を取るのも自分で無ければならない。

「……これは、反省だ。次回に活かすよ、だから、今は」

考える、考える、考える考える。

じゃあ、どうする。”魂”とやらが今、俺をこんなになっているのなら、どうすればー

『なんで、俺たちがこんな目に』

『なんで、俺、死なないと』

『よくも、殺してくれたな、ぜったい許さない』

キリヤイバが、いつのまにか全ての冒険者を始末し終えたらしい。

魂を喰らう、魂を保存するそのヤイバが遠山鳴人に死者の声を届けたー

「は？」

ピコンー

溶け合う自我の中で届いた魂の声。

遠山鳴人が始末した冒険者たちの魂の声。

「なんで、お前らが被害者ヅラしてんの？」

シンプルに、それがムカついた。

【技能　　――発動】

色々考えたが、今の魂の一言でそのスイッチが入った。

探索者の脳はダンジョンに満ちる酔いで壊される。

その中でも遠山鳴人の脳は格別に壊れている。酔いの呼び水となるのは、恐怖、興奮、そして――

「殺しても、殺したりねえな、マジでムカつくぜ、お前ら

怒り、だ。

ゴミ掃除は、徹底的にしなければならぬ。

その薄汚れた魂ごと。

【技能】  
” 頭ハッピーセット”  
発動【

「死、諸共に殺す、死ね」

その”魂”ごとー

「皆殺せ、キリヤイバ」

かた、かた、かた。

欠けた刃の震えが止まって。

ああ、最初からその力はすでに遠山鳴人のモノだった。



『アー』

キリが、主人の命令通り、更に消化しやすいようにその魂を真白の霧で包んだ。

ピコン。

【目撃者、全員死亡。勢力評価変化なし。犯罪歴、無し】

66話 中立・悪（後書き）

……  
……  
……

「冒険都市アガトラ人気No.1新聞社」 赤馬新聞 二面記事  
より」

朝靄に香るはずのその街角はその日だけは様子が違った。冒険者向けの賃貸住居の近所に住むオサナ・ホンジン氏はその日、日課の散歩中にある異臭に気づき、すぐさま近くを巡回中の教会の警ら隊に通報。

複数の騎士が、現場に駆けつけるとそこには身体を全てズタズタに裂かれた死骸の山が発見された。

しかし、奇妙なことに教会による調査は死骸を埋葬した時点で打ち切られる。

なんと驚くことに警羅隊の出した結論は”事件性なし”

赤馬新聞はこの教会の不可解とも言える対応に、巷で噂の”審問会”、教会に仇なす者を秘密裏に処理する組織の实在の確信を更に深めることとなる！

親愛なる冒険都市に住まう読者諸兄の知識欲、帝国を照らす真実を求めため、赤馬新聞はこの事件を追い、さらなる真相究明に努める決意を固めるのであった！

## 67話 ある日

↳ 遠山鳴人が野暮用を片付けた2日後↳

「主教さま、こちら次の書類です」

「はいはいはいつと、ねーえ、スヴィー、もう疲れた、ほんと疲れた。お願いだからそろそろ休みくれないかしら」

ぼん、ぼん、ぼん。

日の差す執務室に小気味良い大判を押す音が鳴る。

ガラス越しに注ぐうらかな光の下、天使教会主教、カノサ・テ  
イエルフィルドは山のように積み重ねられた書類と呑気に格闘していた。

「っーん」

彼女の右腕とも呼ぶべき部下、教会最高戦力の1人、主席聖女、スヴィ・ダクマーシャル。

シスター服に身を包んだ小柄な少女は主教の言葉に目を瞑って口を膨らます。

「よよよ、私の聖女がまだおへそ曲げちゃってる」

あまり傷ついた様子もなく、主教がおどける。山のような書類もしかし、この女のスペックからしたら大した仕事ではなかった。

「……知りません、私を誤魔化して夜のお店に遊びに行くような人はそのまま忙殺されてしまえばいいんです」

「ぐえ、もう、スヴィスヴィスヴィスヴィ、あれはほんと悪かったって言ってるじゃない。でも安心して、あの子達はほら、遊び、遊びの関係だからさー」

「……夜遊びなんてするから、こうはいに弱みをつつかれるんです  
「よ

「あ、うん。あれはね、ほんと反省します。油断も隙もねえよ、あの黒髪イカれ男。すごかったわよ、自分で自分の首を真顔で締め上げてるようなサマだったもの」

「……でも、最終的には彼はまた、乗り越えたんでしょ？」

「そーなのよー、なんかよくわかんないけど、ほすと？ とか言い始めたと思ったらキレ気味の竜2人を口説き始めてさー。流石の私も、もう考えるのが嫌になってたからお酒飲んでたわ」

「……そこでお酒を飲むという選択肢を取れる主教サマ、やっぱりあのこうはいと似た物同士では？」

じとーっとした目で、スヴィが主教を見つめる。

「げ、やめてよ、スヴィ。あんなギリギリの綱渡りを趣味でしてるような変なのと一緒にするのは。あー、疲れた…… そういえばスヴィ、今日の竜殺しの動向は？ もうあいつ少し目を離すと、わけわかんないこと始めるからほんと嫌い」

同族嫌悪、という言葉のスヴィは思い浮かべたが何も言わないことにした。己の主にも口と頭では勝ち目がないことを彼女はよく知っていたから。

「……今日の所は冒険者ギルドに”狩獵”の手続きが提出されています。ここ3日ほどは主にテイタノスメヤではなく、平原地帯に住まうモンスター、獣毛種を狙っているようです」

「……ふーん？ 今更獣毛種？ 都市付近の平原にいる獣毛種は3級か4級のモンスターがほとんどなのに？ いや、いかんいかん、もうあんまり考えないでおくわ」

「……あ、主教サマ」

ぼそり。

スヴィがつぶやく。

「なにかしら、スヴィ」

ぼんぼんぼん。ハンコが重なり、書類が踊る。会話をしつつも主  
教の仕事は何一つ遅れることはなく。

「いえ…… やっぱりなんでも……」

「スヴィ、お願い、そこまで言ったらもう言って。気になるじゃない」

「……いえ、その、そういえば最近、平原地帯の北部、森林で行方  
不明の冒険者が増えてた話を思い出しまして…… 昨日はついに  
塔級冒険者まで帰ってこなかったって、ただ、副葬品、”命の灯”  
はまだ消えてないようですが……」



教会と冒険者ギルドの関係は悪くない。なんでもかんでも共有するわけではないが、重大なことはきちんと互いに把握出来る程度には、良い関係が築けていた。

「スヴィちゃん、スヴィちゃん。いま、竜殺したちはどこで狩りをしてたっけ？」

びたり。主教の仕事の手が止まった。

「平原地帯で、獣毛種を目標に。ただ、獣毛種は割と平原北部の森林帯に近い場所にたくさん出てくるので……」

スヴィの声に、主教はゆっくり微笑み、椅子に深く腰掛ける。

「なんかありそ〜」

主教の気の抜けたうめき声。ぎゅぎゅっと彼女の胃も同じく呻いた。

……  
……  
……

（同時刻）

ミスは、なかった。何もしくじっていなかった。

今回は、前回の反省を活かしたつもりだ。

キリヤイバの出し惜しみもなかった。初めから全力で戦った。

それで、このざま。

「……げほ」

血の混じった唾を咳と共に吐き出す。口の中を切っただけ、そういうことにはしておこう。

身体を預ける木の幹の感触、喉から込み上げる血の匂い、まだ生きています。身体は動く。

でも、立ち上がれない。怪物のよく延びるしなやかな体に叩きつけられた痺れが消えない。

やばい。今回は、マジでやばい。

『ア、ア、ア、ワタシ、最高にワタシ。ぷよぷよ、ふよふよ浮かんで、ヒナドリにナルノ。ワタシはヒナドリ』

怪物。

そいつが、とぐるを巻きながら、長い舌をチロチロ出しながら笑

う。

化け物狩りに慣れていたつもりだった、本当にもりだったのだ。

身体の芯が冷たい。俺は、この感覚を知っている。現代ダンジョンの中で1人で迎えたあの瞬間と同じ感覚。

ストルは、ラザールを連れて離脱出来たのか？

ラザールは生きているのか？

あとどれくらい時間を稼げばいい？

助けは、くるのか？

「……この前は、来なかった……」

いやだ、思い出すな、思い出すな。

なんで、今、あの時のことを。

「バベルの大穴ん時は、来なかった……」

俺は、死んだ。

現代ダンジョンで、死んだ、化け物に殺された。

そして、今、異世界でも、化け物に。

まずい、まずい、嫌だ、こんなところで、いやだ、また、またー

「……死にたくねえ」

かち、かち。なんの音だと思ったら、自分の歯が噛み合う音だ。  
震えが止まらない。

怖い。

死ぬのが、怖くてたまらない。

ここで、一人で――

『ワタシモソウダッタ』

怪物が、咲った。

67話 ある日（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを「こ覧くだ  
さい！

< 苦しいです、評価してください > デモンズ感

68話 善きものよ、我が悲劇を想え

数時間前、冒険都市アガトラ近郊、平原地帯、北部

「ブモオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

平原を駆ける四つ足。

蹄は茂みを裂き、泥を駆ける。

「ハッ、ハッ！ よっし、よしよし、こっちだ、こっち！ 化け物め、追いかけてこい！」

平原を跳ねる二つ足。

米軍の払い下げオークションで手に入れた合成素材のコンバット



ブーツの靴底が、地面を踏みしめる。

「ブモオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

「ヒイ！？ 牙デカ！ ひ、ヒヒヒヒヒヒ、下手しなくても死ぬな、これは！」

大型のSUV乗用車ほどのサイズのイノシシのモンスターに追いかけて、その男は笑う。

猛り狂う化け物、その牙は太く、人の身体など容易に貫いてしまっただろうそれが迫るも、男は嗤う。

脳が、歪んでいるのだ。歪んだそれは恐怖を怒りに、危機を愉悦に変えてしまう。

「ブモ！ モモモ！」

「ひ、ヒビヒ、ラザール!!」

半笑いで、イノシシから逃げ続ける男、遠山鳴人が仲間の名前を呼んだ。ここだ、作戦通りに遠山は化け物を目的の場所まで誘き寄せていた。

「ああ、充分だ」

茂みの中から、声。聴き慣れたトカゲの友人の声に遠山は笑みを深めた。

ずむん。

「ブモ!？」

イノシシの体勢が崩れた。突如、現れた闇、いや、影が粘性の沼

となって地面に広がる。

レーザーのスキル、その応用。影を利用した落とし穴に大イノシシがハマった。

「ストル！」

「デイス」

遠山鳴人の剣が、レーザーと反対側の茂みから飛び出る。モンスターの速度、ただ、ただ、疾い。

影に足を取られることなく現れた水色の風が舞う。

「モモモ?!?!」

深い切り傷、厚い毛皮、強い肉を鈍い刃が叩き裂く。

びきり、その傷跡が出来ると同時に、ジャイアントボアの鼻に備える大牙に亀裂が。

いや、完全に根本からその牙が折れた。

市場で売られていた鑄造製の量産剣でも、ストル・プーラが扱えば、それはモンスターの牙をすら容易く断つ兵器となる。

「悪いな、モンスター。これな、殺し合いじゃなくて、狩りなんだ、よっー！」

手筈通り。

この狩りの為に、遠山が用意した槍を構える。シンプルな作りの木と鉄を材料にした槍。

「ピギユエエエ、ブモオオオオオオー！」

猛る化け物。賢いそのモンスターは己の危機を理解した。故に吠える。近づくな、近づくな、殺すぞ、と。

「ヒヒ、お前、びびったな？」

だがその虚勢は逆効果だ。

その男には怯えも、躊躇いもない。

影に足を取られ、剣に牙と肉皮を断たれた獲物に、狩人が襲いかかる。

ずぐん。遠山がイノシシの眼を槍で突く。あまり深く刺さず、しかししっかりと体重を乗せて。

「ピギューエエエエエエエ！?! エ……」

「そこ、デイス！」

暴れようともがき始めた化け物の四肢を、ストルが狙う。正確に足の腱を断たれたモンスターはもう歩くことも出来ない。

崩れた体勢、腹、胸、生き物の急所がから空きた。

「お、いしょっと…」

ぞぶん。遠山の槍が今度はジャイアントボアの胸の真ん中を。今度は深く、えぐるように。

「お、オオオオオオオオオオ…」

「ピギイイイイイイイイ？！？ ギュ、ギュギュイイ！？」

槍先を捻り、更に傷を広げる。肉の中で骨を掠め、血管を破る感覚が槍を通して遠山に伝わる。

「びぎ」

「ひひ」

ああ、良い…… 命を奪う感覚、はっきりとモンスターと自分が対等に生きている実感がそこにはあって。

遠山鳴人はその感覚が、嫌いではなかった。

ずうん。心臓を貫かれた巨体が沈む。びくり、びくり何度か大きく、体を震わせた後はもう2度と動くことはなかった。

平原の草花がまた、新しい血を吸っていく。冒険者とモンスターの営みはこうして続いていくのだ。

「よし、3匹目！ なかなかコツが掴めたきたな」

「ふう、こちらとしてはヒヤヒヤするな。ナルヒトがいつあのモンスターの牙に貫かれるか、気が気ではないな」

「デイス、トオヤマ。貴方は私より足が遅い。囿役は貴方より、私の方が適任では？」

手筈通り。

先日の塔級冒険者から得た情報、遠山の求める質の良いソーセージのレシピのため彼らは本日から、狩りの獲物をこのイノシシのモンスターに切り替えていた。

「あー、まあそうなんだけどよ、ストル、お前の足の速さだとあの化け物振り切っちゃうだろ？ この狩りはいかに奴らに気付かれずにラザールの影の落とし穴にぶちこむのがキモだからなあ……」



イノシシのモンスター、冒険者ギルドでの分類は”3級モンスター、獣毛種、ジャイアント・ボア”、遠山とラザール2人組の時は、相性の関係から安全に狩れないと遠山が判断して、狩猟の対象には入れなかったモンスターだ。

だが、今は違う。

「まどろっこしいやり方デイス。ジャイアン・ボア程度なら、私が正面から斬り殺しますデイス」

びっ。

水色髪の少女騎士が、安物の剣にべっとりこびりついた血糊を一振りで振り払う。

ストル・プーラの加入は、遠山たちの戦術の幅を一気に広げた。秘蹟や副葬品なしでも、足がモンスターよりも速く、膂力も化け物並みのチート騎士。

遠山が囿、ラザールが足止め、ストルが遊撃。遠山の手筈通りに

怪我もなく、トラブルもなく、狩りは狩りのまま、殺し合いにはならず冒険者が勝利していた。

だが、ストルはイマイチそのやり方が気に入らないらしい。

「キャラ性能でのゴリ押しは趣味じゃないんだよ、ストル。お前のそのスピードとパワーを正面からぶつけるよりも、落とし穴にかかったイノシシに喰らわせる方が効率がいいの」

「む、むむむむむ」

ぶひーとため息をつく遠山に、ストルがほつぺたを膨らませる。しかし、言葉が見つからないのだろう。文句があるのを態度で示すことしか彼女には出来なくて。

「ストル、少しいかい？」

「なんデイス、ラザール」

ラザールがちょいちょいとストルを手招き。素直にストルが駆け寄る。

「ナルヒトはつまるところ君に囿役をさせたくないわけさ。君を戦力として扱う割に、子どもとして扱うひねくれ者の意地みたいなものだ。譲ってやっってはくれないか？」

「どついう意味デイス？」

「君が心配なんだよ、我らが竜殺しはな」

ニツと笑うリザドニアン、彼の視線はストルへ微笑みかけた後、遠山に注がれた。

「あ、おい！ ラザール、てめ、何言って」

「デーーーース？」

「げ」

最高に調子に乗ってます、そんなストルの声に遠山が思わずうめいた。

「ウイーフック、む、ふふふふ、ト、オ、ヤ、マ。なんデイスなんデイス、そんな嫌そうな顔をして。ふーん、心配なら初めからそう言えばいいのに、むふふふふ」

「うっぜー、わかりやすく調子に乗りやがってからに……」

「むふふ、大人の男のくせに照れるなんて、可愛いところもあるじゃないデイスかー？ 言っていいんデイスよー？ 私のが心配だから困をさせたくなかったからってー？ んー？」

ニヨニヨと唇を緩ませて、どうやってかその水色のポニーテールをぷらぷら揺らしながらストルが遠山を突き回す。

「このバカガキ……」

明らかに調子に乗っているストル、流せばいいものの、あまりにもその顔が腹立たしい。

なので、遠山は決めた。ここ数日、ストルとの付き合いで気付いたことがあるのだ。

「んー？ どうしましたディ」そうだよ、ストル。お前にあんまあぶねー真似させたくないんだ」

「ディっ？！」

安い挑発に乗った遠山が、ぐいっとストルに顔を近づける。

「お前は強い、まともにやり合ったら俺もレーザーもお前には勝てないだろ、けどどな、俺にも意地があるんだ」

「い、意地？ て、と、というか、ち、近いのデイス……」

ストルのポニテはもう揺れていない。

ずいっと、迫る遠山から眼を逸らす。何度も何度も、その水色の髪を手で梳きはじめて。

「意地さ。女を囿になんか出来るか。ましてや自分より年下の女をよ、なあ？ ストル・プーラ」

「わ、わわわ、わかった！ わかったのデイス……！ だ、だから、少し離れて…… わ、私、今、汗とかかいてるから……」

そう、このストル・プーラというガキンチョ。自分からぐいぐい絡むのは得意らしいが、絡まれると弱いのだ。

遠山は真っ直ぐストルを見つめる。ストルは水色の眼を泳がせ続ける。白いモチモチのほっぺたがみるみる間に赤くなりー

「と、トオヤマ、ほ、ほんとに近い、から」

ぎゅっと、ストルが目を瞑った。

「プヒ」

「え？」

ストルが眼を開く。

遠山鳴人の我慢の限界が来た。

「プフ！ ひ、ひひひ、あは！ はははははは！ スウトルちゃああん？ お顔が真っ赤でちゅわよ！ あははははは！ てめー、人をからかう時はあんなクソガキなのに、あれれー？ 揶揄われた時よっわ！ 汗臭いどころか、なんかいい匂い、アロマみたいな香りがしますけどー？」

腹を抱えて笑う遠山。先程までクソガキムーブをかましていたス

トルが、ぷるぷるしている姿はとても面白かった。

「ッッ……」

遠山がストルの匂いに言及した辺りで、彼女の動きが止まった。

それは遠山の思った反応とは違った。いつもならぎゃーぎゃー騒ぎ始めるのだがー

「あれ？ 動かなくなった。ラザールくん、これは？」

「はあ……」

遠山の言葉に、ラザールが眉間に手を当ててため息をついた。

「ッバカー！！」



パツシイイイン！

良い音だ。ストルの鋭いきックが遠山の尻を叩いた。

「ギャア?!? イツタアア?! ら、ラザール！ ラザールラザールラザール！ 今の見た?! このガキすげえ鋭いきックかましてきたんだけども?!」

「ナルヒト、今回はあんたが悪い」

ラザールは首を振る。助けしてくれる気はないらしい。

「デイス！ デイス！ デイス！」

パアン、パアン、パアン！！ 小気味良く乾いた音を遠山の尻が奏でる。

少し涙目になってる第一の騎士、リズミカルにキックが続く。

「イタ！ 痛い！ こいつ、的確に穴をつー！？」

「ふん！ ニコちゃんの言う通りデイス、トオヤマは女の子の扱いが雑なのデイス！」

一通り蹴り倒した後、ストルがほつぺたを膨らませてつーんとそっぽを向く。

あれだけ蹴られて、痛みが残らないので手加減はしているみたいだ。

「……………女？」

あまり懲りてない遠山がストルの言葉に首を傾げて。

「ナルヒト、お前さっき自分でストルに言っただこと忘れたのか」

「人のケツ蹴る時に的確に穴を狙ってくる奴は女じゃなくてクソガキ分類だろ。痔になったらマジで許さんぞ」

「……まだ足りないようデイスね」

「あー！ うそうそうそ！ レディストル、私めが間違っておりました」

シッ、シッ、とストルがキツクの素振りを始めた所でようやく遠山が慌て始めた。

「うそ？」

「うわ、めんど。正義スイッチ入れちったよ」

「まったく、ほんと、退屈しないよ、ナルヒト、ストルー」

狩りの合間の呑気なひととき。

広がる緑色の絨毯、辺りに生える低木がちらほらと。所々に小川や、小さな池もあることから多様な生命を育むのだろう。

ここは、森林にも近い、眼を凝らせば平原の奥には木が生い茂っている場所が見える。

今のところ、平地地帯での狩りは、極めて順調。

「ん？」

その、はずだった。

だが、それはもう始まっていた。

レーザーが、ぴたり。動きを止めて。

「デイス？ どうしました、レーザー？」

「ー今、何か聞こえなかったか？」

びゅおおおおおつ。

風の音だけ。

平原の種々が踊るように、風に。

風は前方、森林の方から吹いている。

遠山たちが以前、2級モンスター、ティタノスメヤを狩りまくっていた場所の方向だ。

ただ、風の音だけ。少なくとも遠山にはそれしか聞こえない。

「いや？ なんも。なあ、ストル」

「デイス、周囲にモンスターの気配もありませんデイス。今のうちに、ジャイアント・ボアの血抜きをして荷車に乗せた方がいいデイス」

「ーいや、たしかに聞こえる…… これは、なんだ。唄？ いや、泣き声……」

「お、おい、ラザール？ どしたんだ、お前。なんか、大丈夫か？」

何か、おかしい。

嫌な予感だ。

「呼んでる……俺を、なんて、哀しい声……」

「……トオヤマ、ラザールの様子がおかしいデイス」

ストルも遠山と同じく、何かまずいを感じとったらしい。低い声で警告を発する。

「だな。おい、ラザール、落ち着け、一体どうし

遠山が、ラザールに手を伸ばした。

ぱんっ。

遠山の言葉が途切れるのと、乾いた音が鳴るのは同時だった。

「呼んでる……」

惚けたラザールが、遠山の差し出した手を、払い叩いたのだ。

蠅でも叩くかのように。ラザールが行ったのは明らか拒絶。

「あ………?」

「ラザール?!」

遠山の身体が硬直する。ストルが悲鳴じみた声をあげた。

「俺を、あの子が呼んでる……… ひとりぼっちのあの子が、俺を、  
なんて、悲しい歌……… 善き者を、呼んでる………」

ぱちり。



レーザーの眼、そこにはもう虹彩はない。白目を剥いて何かをつぶさく。

ふらふらと、どこかへ歩き始めた。

「っ！ おい、レーザー！ お前、いきなりどうしたんだよー！」

遠山が、ハッと動き出す。どこかへ向かうレーザーを引き止めようとその肩に手を再び。

「シャドウ・ハイチュー影の導き」

「は？」「デイス？」

どぼん。

トカゲ男、影の牙の足元に影が溜まる。それが何か、遠山もスト  
ルも知っている。

影の導き、この世の外にいる大いなる存在、”眷属”によりもた  
らされたラザールの才能。

己の姿を覆い隠し、存在を、悪事を包み隠す隠形の技。夜の街で  
は、ストルや遠山、仲間たちと共に被った影の帷。

でも、今回、その影の帳が包むのはラザール1人だけだった。

「……いま、ゆくよ、だから泣かないでくれ」

とびん。

ラザールが、影に沈んだ。唐突に、遠山たちの目の前から消えた。

遠山と、ストル。2人だけが、残された。

「は？」

「ハア？」

「「はああああああ？！」」

人はわけわからない事態に陥った時、元気があれば叫ぶらしい。

レーザーが、どこかへ消えた。

「ちょ、ラザ、レーザー？！ おい！ どこ行った？！」

「か、影、トオヤマ、あれって、レーザーのスキル……」

「んなこたあ、一目見たら分かる！ いや、待て、落ち着け、落ち着け、落ち着け…… ストル」

遠山が、すぐさま切り替える。非常事態に肝要なのは焦らないことだ。

「な、なんデイス?! トオヤマ、ラザールはどうして…… 自分で消えて……」

しかし、ストルは未だ浮き足たつたまま、遠山の呼びかけも聴こえていないようだ。

「ストル・プーラ」

「っ、はい、デイス」

低く、しっかりと遠山が彼女の名前を呼ぶ。

びしり、ストルがワタワタ動くのをやめて直立になった。

「周辺警戒、お前の感覚で周りにモンスターの存在は確認出来るか？」

「……いません、視界に入る範囲、茂みの中、今、私たちを見ているモンスターはいないのデイス」

「そうか。さて、考えよう。ラザールはどこに行った？」

頭を回せ、探索でも冒険でも考えることをやめた奴から死んでいくのは同じことだ。

「……様子がおかしかったデイス。あれは、まるで」

「言ってくれ。今は状況を理解する為にどんなヒントでも欲しい」

言い淀むストルに、遠山が先を促す。

「……私の、以前の力と装備。”正義”や”首吊りの剣”の影響下にある人間がする表情と似ていましたデイス……」

一瞬、ストルが遠山を、その首の辺りに視線を向けて、少しバツが悪そうに俯いた。

「正義…… 秘蹟とかいうインチキパワーか。いや、スキルやらなんやらもそうだけでも」

その辺の機微、というか過去のなんやかんやを割と忘れつつある遠山は、あの時自分を殺しかけた力のことを思い出す。

秘蹟、スキル、あとは魔術式。

この世界には遠山の経験ではすぐには対処しえない力もある。

「秘蹟”には他者の心に強い影響を与えるものも確認されていますデイス。ラザールのあの顔は、普通ではありませんデイス」

「……なるほど、だとしたらラザールは、いや、俺たちは今何者かに攻撃を受けてるってことか。じゃあ、なんでラザールだけがその影響を受けちまったんだ？」

「わかりませんデイス、これが秘蹟やスキルによる影響だった場合、それを我々がすぐに理解する方法はありません」

ストルは、既に戦闘モードに切り替わっているらしい。普段よりも頭が良さそうなことを言っている。

良い傾向だ。遠山は最悪の事態の中で少しずつプラスを見つけていく。

「トオヤマ、指示を。これから、どうしますか？」

ストルが、遠山の剣が己の主人に切先を委ねる。

「ラザールを探す」

なんの迷いもなく言い切る。異質な状況、足りない情報、正体の見えない力。

それでも、遠山にラザールを置いて撤退するという選択肢など存在しない。

「ストル、狩りは中止だ。荷車のこと、獲物のことも今は頭から消せ。切り替えるぞ」



「ウイーフック、審問官殿」

2人の顔つきが切り替わる。

混乱も、戸惑いもまだ心に燻る、しかしそれはもう面ごでることはない。

目的だけを絞り、集中して。

「どこから始めますデイス、トオヤマ」

「闇雲に動いてもダメだ。ラザールの痕跡を探す。考えるのは俺の仕事、感じるのはお前の仕事だ」

「了解デイス」

落ち着け、焦らず急げ。

遠山が、レーザーが消えたこの事態を見つめて。

ピコン

遠山の冒険には常にそれがつきまとう。

運命を知らせる悪趣味な力はしかし、遠山鳴人の選択により少しづつ、その在り方を変え始めていた。

【警告 スキルの影響下にあります ” 知識の眷属、ハーヴィー”  
の手助けによりスキル名判明

スキル名 ” 善ケッドマン・ハローき者よ、我が悲劇を想え”・グリーディング

半径500メートル半位内の”善”属性を持つものの精神に感応する精神系のスキル。”善”属性の存在の良識、同情、心に己の悲劇を魅せることで、自我を犯し支配することが出来る。

善き者とはつまり、寄り添うことが出来るものだ。それが例え喜びでも悲しみであれ、善き者にとっては寄り添い、理解し、分かち合うことこそに価値がある。時にそれが己の身を滅ぼすことになるうとも。

それは”悪”には決して理解できぬ在り方であるが】

ピコン。

矢印が現れる、レーザーが消えた地面、そこに残る黒いシミを指していた。

68話 善きものよ、我が悲劇を想え（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを「こ覧くだ  
さい！

面白かったら評価お願いします！

69話 悪しき者たち、その悲劇を笑え

【知識の眷属 ハーヴィーからの手助け…… あちゃー。ちょっと聞いてよ、遠山鳴人。フロリアの奴、マジでキレててウケるんだけど。自分の男がまた女に取られかけてるから暴れてるww 根暗なやつがキレるとき、キレ方知らないから怖いよね】

「ハーヴィー?! フロリアって確か、ラザールの影に関係してる奴だよな? 頼む、今は時間がおしい。ラザールを追いかけろ、手伝え」

視界に流れるメッセージに、遠山が言葉を荒げる。

「と、トオヤマ? 急に、1人で何を?」

ストルからしてみれば、急に遠山が1人で話し始めたようにしか見えない。

【アハツ、イーよ、我が主人。ま、つーかそれ。フロリアの片想いの相手が消えたところに多分、影が残ってるっしょ。それを追いかけなよ、フロリアがあのリザドニアンの力に干渉してるから見つけるのは簡単な筈だからさ】

「影、このシミか。ナイス、ハーヴィー。助かる」

【別に、単なる気まぐれだし。また、公文書館で】

「パン文書館な」

【うるせーし、マジで】

それきり、メッセージは消える。だが、あの灰色髪のメガネ女言う通り、レーザーが消えた場所には未だモヤモヤした黒。シミが残っている。

「トオヤマ…… その、レーザーが消えてショックなのはわかりませんが、あまり現実逃避するのは」

「違う、そういんじゃないからねーから。レーザーの痕跡を追う。行くぞ、ストル」

「行ってくて、彼の行方がわかったのデイスか？」

「レーザーのストーカーがブチ切れてるんだってよ」

地面に点々と残る黒い影のシミを指差して遠山が笑った。

シミの続く先には、森林地帯への入り口、鬱蒼とした木々が広がり始めていた。

…  
…

「ストル、こっちだ。また影のシミを見つけた」

「了解デイス。想像以上に追跡は容易デイスね」

森の匂いが濃い。土を踏みしめるたびに緑の香りが鼻に届く。

鬱蒼とした、森。

普段であればこの時間帯はまだ日の光が強いため、そんなに暗くはない。

だが、この日は日が弱く、森を深く感じた。

それでも遠山達は着実にラザールに近づいている。彼の通り道に



は道標のように、影のシミがこびりついていた。

「ああ、レーザーが本調子であるのスキルを使つてたらこつは簡単に追いかけてねえな。フロリアとやらに感謝しないと…… 待った、ストル」

「デイス？」

遠山が手を挙げて、ストルを制す。指を差した先には大きな

「見ろ、この辺りの木、木の皮が剥げてるものが多い…… 見たところまだ死んでる木じゃないのに、これはなんだ……？」

森を進むたび、木々が大きく太いものへと変わっていく。遠山の記憶にある高校生の時の修学旅行で向かったヤクシマの森を思い出す。

太い幹、奇妙な形に皮が剥げているものがいくつか。

「今、レーザーの追跡に関係あることデイスか？」

「ある。レーザーに悪さしたやつは正体がなんであれ、ここは怪物の領域だ。警戒するに越したことはない。……なんでとぐるの形なんだ？」

それはまるで、何かの木に巻きつき、這いずり回ったかのような。

「デイス…… トオヤマ、何か、変デイス」

「変、とは？」

「心配が、しません。いつもはこの森、入った瞬間に身を潜めているモンスターどもの心配や視線を感じるのデイスが、今日はそれが一切ありません」

「良くねえな。ストール警戒を引き上げる」

「モンスターがいない方が楽なのでは？ おそらく、横槍もないかと」

「逆だ、モンスターの住処でモンスターの気配がしないのは異常事態だろ。認識を共有するぞ。今、この森林で何かが起きている」

「了解デイス、トオヤマ、皮の剥げた木が増えていますデイス。そして、影のシミもあちらに」

「だな。そして気になるのがまた1つ。周りの茂みを見ても、ストール」

「茂み？ 特になにもないようデイスけど」

遠山が指さした茂みを見て、ストルが首を傾げる。

「よくみる、小枝が折れている位置や、茂みが割れている位置。ちよつど人間の身長の平均辺りの場所と同じだ。つい最近にここを人が通つてる」

「……トオヤマ、あなた斥候の経験があるのデイスか？」

「色々目配せしないと探索者はすぐ死ぬからな。だが、この痕跡はラザールの残したものではないな」

「なんでそれがわかるのデイス？」

「いくら呆けていてもラザールがこんな雑な痕跡残すわけないだろ」

しゃがみ込み、注意深く茂みや木の枝の様子を遠山は確認する。

「ああ、なるほど、たしかに」

「歩きながら情報を整理するぞ。この森は今様子がおかしい、そして、最近何人かの人が俺たちと同じ道を歩いている。………あ」

「トオヤマ、どうしましたデイス？」

「バカか、俺は…… やべえな。普通にパニックってるわ。昨日会った奴、塔級冒険者のユト・ウエトラルが森林がどうのこうの言ってたわ」

「……あなた、抜け目ないのかアホなのかよくわかりませんデイス」

「いや完全にこれは俺がアホだわ。たしか、森林に行っただけ帰ってこない冒険者がわんさかいるみたいな…… 嫌な予感しかしね

「」

「森林に存在する何かが平地帯にいたラザールに影響を及ぼす…  
… 笑えない話デイスね」

「ああ、ほんとに笑えねえ。ストル、お前の言う通りやっぱこの森  
おかしいわ。鳥の音が全くしねえ」

「……ラザールは大丈夫でしょうか」

「急ぐぞ、また影のシミだ。おっと、マジか」

「足跡…… デイスね。地面がここからぬかるんでるのデイスか」

「ああ、雨でも降ったわけでもないのにな。気を引き締めるぞ」

「っ、トオヤマ、ストップ、デイス」

「……どうした？」

「何か、いますデイス」

『近づくな、近づくな、近づくな。それ以上我らが域に近づくな』

「……マジかよ」

「うげ……」

遠山がぼやいて、ストルがうへえと舌を出す。

わら、わら、わら。

柔らかく湿った土から、それらは這い出始めた。人であるならば大抵の人間はその形に生物的嫌悪を感じる。

蛇だ。化け物ではない、普通の蛇。

それだけならば良いのだが。

「ストル、何匹いる？」

「……地面の下にいる奴も数えた方がいいディスプレイか？」

数。

それが尋常ではない。道を全て覆い尽くさんとするばかりの数の蛇が湿った土から這い出てきた。

ニヨロニヨロニヨロニヨロ。

黒い様縞模様、緑色、赤色。色とりどりの蛇が、たあくさん。

蛇嫌いの人間が見ればそれだけで卒倒しかねない光景がそこに。



『近づくな、近づくな。彼女の嘆きが聞こえぬか、彼女の唄が聞こえぬか。我らの彼女に近づくな』

「ストル、この辺だと蛇が喋るのは普通のことか？」

「御伽噺なら。あとは、”古代種”、エルダーにまつわるお話の中でならいくつか」

「もうそれ答えじゃん」

『近づくな、悪しき者よ。彼女の声が届かぬ悪しき者よ。ここより先は善き者しか踏み入れぬ、ここより先は彼女を慰める者しか入れさせぬ』

「と言われてもな。蛇さん達や、アンタらの縄張りに入ったのは謝

るよ。すまんかった、でも俺たちにも事情があったな」

『知らぬ、知らぬ、悪しき者の事情など知らぬ。立ち去れ、立ち去れ。さもなければ、我ら群体が貴様を滅ぼす』

蛇たちが口々に言葉を操る。遠山はそれを眺める。小さな爬虫類脳でずいぶんよく喋るものだ。

そして、静かに準備を始める。

「害虫どもめ……よく回る舌ティスね」

「待て、ストル」

早くもピキリ始めたストルに待てをかけて、遠山が一步踏み出した。

『近づくな、近づくな。我らの彼女は哭いている、我らと共に哭いている。善き者にしか聞こえぬ声で泣いている。それを聞けぬ貴様らにこの先へ立ち入る資格なし』

「……そう言うなよ、蛇さんたち。友達を探してるんだ。トカゲの妙にモテるオッサンだ。白と緑の鱗に鋭い目、声は低めのうちの斥候だ。見かけなかったかね」

『善き者、善き者、影の男は招かれた。我らの彼女に招かれた』

「トオヤマ！ 影ってー」

「ああ、そいつだ、蛇さんたち。そいつさ、俺たちの仲間なんだ。この先にいるんだな」

興奮するストルと対照的に遠山は友好的な態度で彼らに接する。

じつくり、観察。

蛇達は、その純粹さゆえに気付かない。目の前の男は決して話に耳を傾けているわけではないということ。

遠山が、蛇達に向けて浮かべた微笑みは、しかし、目だけはちつとも笑っていないかった。

『善き者は分かち合う、善き者は聴いてくれる、善き者は悲しむのだ、我らと共に彼女の悲劇を分かち合う』

『立ち去れ、立ち去れ。すでに影の男は彼女のもの。影の男は聞かねばならぬ、影の男は啼かねばならぬ、彼女の悲劇に寄り添うために』

「あー、あのお人好しトカゲ、ほんとなんか厄介なのに眼をつけられてからに。まあ、だいたい状況は理解出来た。ラザールはこの先にいる、そして、ラザールを呼んだ奴もこの先にいるわけってことか」

充分な情報。影のシミを追いかける先にレーザーがいることの裏取りが出来た。

『最後の警告だ、最後の警告だ。立ち去れ、立ち去れ、立ち去れ。影の男はこれより彼女と1つになる。他の者と同じように、彼女の物語を聴き終えたのち、1つとなるのだ』

『善き者を彼女に、善き出会いを今度こそ彼女に。ああ、泣いてくれ、啼いてくれ、哭いてくれ、善き者よ、我らと共に泣いてくれ』

蛇達が、感極まり口々に言葉を紡ぐ。善き者に慈悲を求めて、悲しい彼女に哀れみを込めて――

「ストル、10秒後、撃ち漏らしを頼んだ」

だが、その声は決してこの男には届かない。

「ああ、もう準備はいいのデイスね」

『哀れな子、愛しく哀れで悲しい子。誰も彼女を救いはしなかった、誰も彼女を愛さなかった。悪しき者は必要ない、彼女はこれから幸せに――』

「蛇さんたち」

『立ち去れ』

「ありがとう、色々聞かせてくれて。ありがとう、ずっと警告で止まってくれて。ああ、お前らはたしかに善い奴ら、だったよ」

ピロン

【スピーチチャレンジ、発音】

「でも、もうお前らと話す必要は、ないな」

【属性 中立・悪のためスピーチチャレンジが中断されました】

『なにを』

「既に、仕込みは終わっている。俺より標高が低くて助かったよ」

数、多。

大きさ、小。

動き、鈍。

その蛇の大群たちは、遠山と、とても相性が良かった。

蛇たちは、遠山に時間を与えすぎた。そのヤイバを仕込む時間を。

「やれ、キリヤイバ」

『ギー？！』

会話の途中、遠山が静かに仕込んでいたキリが牙を、爪を剥く。  
遠山鳴人の喉元から、欠けた刃と柄が抜け落ちる。

『ギ、アアアアアアアアアア？！？』

くねる、くねる、くねる。



湿った土から這い出た蛇の大群達が、体から血を流し悶え始める。

欠けた刃から漏れ出るのは、空気に散らばる小さなヤイバ。

遠山の遺物が、善き者を守ろうとする番人たちを、斬り刻む。身体の小さな彼らにはそれは容易に致命傷となつて。

『あ、アアアアアア？！ 悪しき者、悪しき者、ああ、知っている、知っている、知っている！！ 毒を持つ者、殺す者、我らを悉く滅ばさんとする力と同じ！！』

『甘い血の匂い！ 黒い髪の毛の悪しき者がやってきた！ 彼女から奪おうとやってきたアアアアア！！』

『一族を殺す者！ 欲望と嗤いと共に死を運ぶ者だ！ 知らせろ、知らせろ知らせろ！ 我らの冬がやってきた！！』

極小のヤイバに身体を刻まれ、細切れになりつつも蛇達が喚き散らす。

地獄のような光景だ、身体をのたうち、牙を剥き出し、血を流しながら蛇達が叫び続ける。

彼らは知っている、この力を。彼らは知っている、この身を斬り刻む白いキリのことを。

『近づくな、近づくな、彼女にイイイイ、コレだけは近づけるナ  
アアアアアア』

コレ。この力、このキリ、この痛み、この男。

これだけはダメだ。これだけは彼女に近づけてはならない。

小さき蛇達は、ボロボロになりながら最期の力を振り絞り、群体となりて、森に冬をもたらすキリの敵へ襲い掛かろうと。寄せ集ま

る彼らはまるで、怒涛のごとく固まって。

「じゅーっ、びょっ、デイス」

『ペヤーー』

ザン。

水色の風が吹く。ストル・プーラだ。

今か今かと、力を溜めに溜めていた彼女の肉体が躍動する。安物の剣を肩に乗せて、身体ごとぶつけるようにそれを振るう独特の剣技。

「ふ、ふ、ウイイイイイイイイイフウウウウウウウー！！  
むふ、あは、アハハハハハハハ！！」

そうあれかし、”正義”の器たり得るその身体の膂力たるや。ぬかるんだ土を蹴り飛ばし、蛇の大群を踏み潰し、剣で斬り飛ばし、獣が暴れる。

『あ、アアアアアア』

蛇達の悲鳴すら置き去りに、ストルが蛇の大群を蹂躞する。個にして、群れを滅ぼすその力は化け物と比べても見劣りすることはない。

「お見事、ストル・プーラ」

「ウイーフックー！ 全て蹴散らしますデイス！ トオヤマ、行きますよ！ ラザールの影のシミはこの道に続いていますデイス！」

「おう、行くところか。邪魔する奴は全部蹴散らすぞ」

「了解、デイス！」

一気呵成。

悪しき者たちが、闘争の興奮に目を見開き、口角を上げて駆け出す。

『アアアアアアア、近づくな、寄るな。軽薄な意思、残酷な魂を彼女に近づけるナア！！』

一斉に、湿った土から這い出る蛇の群れ。

「うるせええ！！　ウチのパン職人攫おうとしてタダで済むと思うなよ、害虫ども！！　森ごと皆殺しにしてやらあ！！」

「ハハハハハ！　トオヤマ！　悪い男デイス！　ああ、あんなにも健気に迫る虫たちを、ハハハハハ！」

蛆虫を潰すかのごとく、遠山が安物の槍を振り回してへびを刻んでいく。

『アキヤアキヤアアアアアア！　奴だ、奴だ！　奴が来た！　白い死を運ぶ黒髪のニンゲン！　森に冬をもたらすもの！　汚い声で囁く者！　名を、名を名を名乗れエエエエエエ！』

「ひ、ヒヒヒヒヒ！！　虫けらのくせによく喋る！！　ああ、決めたぞ、俺の仲間に触れたお前らは皆殺しだ。よく覚えとけ、お前らをこれから殺す俺の名前は――」

酔いが回る、ノリノリになり始めた遠山が名乗りを上げようとす

て。

「天使教会審問会、審問官補佐、ストル・プーラ！！ 押し通るデイス！！！」

それよりも素でバカな騎士が、身体を回転させながら蛇を刻み、雄叫びをあげた。

『ストル、ストル、ストル！！ ストルが来るぞ！ 彼女に近づけるナア！』

「マジかコイツ」

蛇たちが口々にストルの名前を恐れる。少しぼつんと取り残された遠山がぼそり。

「何をポケットとしてるのデイス！ トオヤマ、行きますデイスよ！」

「あ、はい。もついいや」

走る、走る、走る、走る、走る！！

ワラワラ、ワラワラ。何故かぬかるんだ土の上、冒険者が2人、押し寄せる蛇を蹴散らし、進む。

「オラア！！ 邪魔だ！ 虫けら！ どけ！」

ぶおん。安物とはいえ、鉄の穂先。バラバラとへびを真つ二つ、時には叩きつけて潰していく。

『アアア?!』



『知っている、知っている、知っている！ 我らを滅ぼす甘い血の匂い！ 白い霧と共に来る冬だ！』

『我ら大いなる蛇を狩る者、皮を剥ぎ、目玉を抉る者！ トオヤマナルヒト！』

『森に知らせろ！ 一族に知らせろ、彼女に知らせろ！ トオヤマ、トオヤマ、トオヤマ、ナルヒト、ナルヒト、ナルヒト！ 我らを滅ぼす冒険者がやってきた！』

「うるせえエエエエエエ！ そこどけ！ てかなんで俺の名前知ってたんだ、気色悪い！」

「ッ、トオヤマ！ 空気が変わりました！ 何か、奥に、この先に何かいますデイス！」

「どー考えてもソイツだ、悪玉は！ 殺せそうならぶっ殺す！ 無理そうならラザール連れて速攻撤退！」

「了解デイス！」

「蛇どもの追跡もない！ 急げ！ ストル！」

「デイーー 止まって！ トオヤマ！」

「どした?!」

ストルの警告、遠山は素直に立ち止まり問いかける。

「……近い、います、何かとても、大きなのが」

「了解、様子を確認する」

辺りを見回すストル、遠山はしゃがみ込み茂みや木に沿ってゆっくり移動し始める。

影のシミを追い続けると、ふと開いた場所にたどり着いた。

そこだけぽっかり、木々が生えていない。広場のようになっている。

ぽつんと、広場の中央に大木が1つだけ聳えていて。

「トオヤマ、あれ……」

「……………」

その大木の下、見慣れたマントに白い鱗と緑の模様。レーザーが木を背に1人立っていた。

「ラザール、見つけた。なんでアイツ棒立ちしてんだ？」

「……どうします？ トオヤマ」

【技能”オタク”発動 目星ロールに無条件で成功します】

「いや、どう見ても怪しいだろ。こういうのはお約束だ。化け物に攫われた奴が開けた場所に1人でいたらそれは大抵釣り餌なんだよ」

数々の創作物、パニック物やホラー物でお馴染みのアレだ。茂みに姿を隠したまま、遠山とストルがラザールを観察する。

「……悲しき子よ、悲しき子よ。貴女の声聞いた。貴女の悲劇を知った。だからどうか泣かないでくれ、君はもう1人ではないから」

「なんか一人で喋りはじめたデイスよ」

「静かに。ストル。周辺警戒」

「デイス……ん？何か、音がします」

ポタ、ポタ、ポタ……

雫が、垂れる。そんな水音。

今、雨は降っていない。

「……ストル、最近、雨って降ったっけ？」

「ここ1週間は、晴れデイス」

「だよ、そしたらなんで地面、こんなに濡れて……」

『アア…… 止まらない、トメラナイの。涙…… フフ』

「「ツツ?!」「」

それは、そこにいた。

いつからいたのか、遠山にもストルにも認識されずに。

巨体が、大木に絡み付いている。

くねる肢体、大きな鱗、長い身体。

大蛇。それも、今まで遠山達が狩っていたティタノスメヤを遙か

に上回るサイズ。

目を惹き寄せる、白い鱗。曇り空の中でも鈍く輝くかのような躰。

「ああ、悲しき子よ、泣いているのか……」

レーザーが虚な表情で、木に巻き付き、逆さまにぶら下がる蛇の化け物に言葉を向けていた。

ぼた、ぼた、ポタ。

蛇の目から、涙が、ずっと。

『ワタシ、ワタシワタシワタシ。ゆるゆる絡まって溶け合うの。ぶぶぶよ、ぶぶぶよ、響いてる。ああ、海はとてもヒロイノネ』

ふるふる体を震わせた白いティタノスメヤがレーザーになにかを語りかけている。

喋る蛇の次は、喋る蛇のモンスター。テイタノスメヤ

「マジか」

『あら？ フフ、甘い匂い。 ああ、私たちが殺す冬がチカイわ。小  
さなお友達の血の匂い…… ああ、彼らは約束を守ってくれたのね』

蛇が、急に体をもたげた。ぶらぶらと身体を揺らし始めて笑い出す。

「……トオヤマ、アイツ、私たちを見ている、デイス」

「いや、見てるって、なんだよ。ぶら下がってるだけじゃ……」



「違う！ トオヤマ、アイツ、あの中に、蛇の体の中にー」

ストールが自分の肩を抱いて、心底おぞましいものを見る目をした。

『アア、涙の海、冷たい冬の人、ヨウコソ、ウフフ』

でろり。

白蛇の口が上下に裂けた。

目は三つある目は全て白目を剥き、口からポタポタ、血を流す。

「なんだありゃ」

空いた口が塞がらない。

蛇の口から現れたのは、人間、その上半身。白い鱗に包まれた白い髪の女体。

蛇の口から女が生えた。粘液に塗れたその姿。一瞬、遠山は目を奪われる。

何かを超越して、振り切ったその姿。神々しさ、それが見えてしまった。

『ねえ、影の人、優しい優しい影の人。アナタのオトモタチを紹介して、みんなで仲良くお話しシマシヨ』

「……ああ、悲しい君よ、それで君の悲しみが癒えるなら」

蛇女が、ラザールに語りかける。

虚な表情のリザドニアンが、腰からナイフを引き抜き遠山とストルの隠れている茂みに向き直った。

「なるほどそのパターンね」

「トオヤマ、どうしますか？ 指示を」

「ストル、2人であの操りトカゲをボコボコにして速攻で撤退するぞ」

「ああ、シンプルでいいデイスね。ところであなた、心とかないんデイスか？」

「褒めるな、照れるだろうが」

状況は、理解した。レーザーは今あの化け物の支配下にある。

遠山とストルはゆっくり茂みから抜け出して、化け物とレーザーの前に姿を表す。

「……悲しい子、悲しい子。君の嘆きが聞こえる、誰にも救われぬ悲しい子。せめて、俺が」

「ラザール、お人好しもいい加減にしとけよ。悪いが、荒療治だ。目覚まさせてやる」

『アア、冬の香り、フッフ、私たちを滅ぼす冬がオトモタチを殺そうとしてるのね、アア、私もそうだった。とてもとても大切な人だった。フフ、ウッフ、いいなあ、あなたは救おうとしてくれる人がいるのね、フフ、わたしにはいなかった、ワタシ、ワタシワタシワタシ』

ぼた。ぼた。

蛇の口から生えている女体が泣く。音もなく嗚咽もなく、ただ涙だけを流し続ける。

白い蛇の身体をつたい、涙はずっと注がれる。

土がまた、湿った。

「……………ああ、そうきましたディスか。トオヤマ、作戦は変更ディスね」

ぴくん、ストールが何かに気付いたようにしゅっいを見回して。

「あ？」

『でも、今は、ワタシにも沢山のオトモタチがいるの、フフ、善い人、達、ウフフ』

「ア、アアあ、悲しき人、悲しき人よ……」

「泣かないで、泣かないで、泣かないで」

「嘆きの歌を響かせて」

女の声、それに反応するように森の奥からうごうごと。

黒い鱗に波打つ長い身体。2級モンスター・ティタノスメヤが現れる。

群れ。森を埋め尽くさんとする大波にも見えて。

「マジかよ」

あまりにも。見上げるような蛇の化け物に囲まれて、おまけに仲間  
は1人洗脳状態。

やばい。焦りが、遠山の脳をぼやかせる。

「トオヤマ」

隣から聞こえる透き通った声。

水色。誰も触れることのない春にだけ湧く泉の水底のような瞳が遠山を見上げて。

「私は教会の、異端審問官の剣です。命令を。剣にその役目を果たせと、命令を」

その目が綺麗だった。

少し呆けて、それから遠山は息を吸う。ストルは何も迷っていない。ならば自分がここで迷うわけにはいかない。

覚悟をしてる時間はない。実行するだけだ。

「ー悪い、ストル。化け物どもを頼む。ラザールは俺がボコす」

「ウーフック」

『アハ、悪い人たち、それでも諦めない、綺麗な心。アア、どうして』

「悲しき子に、別れの歌を」

「我らに、冬をもたらす甘い匂いに死を」



「我らを滅ぼす冬、トオヤマナルヒトに、死をー」

黒い蛇、ティタノスメヤの1匹が駆け出した遠山に迫るごと

「させません」

水色の風。

1房にまとめられた髪がなびき、血が飛び散る。

顔をギザギザに刻まれた蛇の化け物が悲鳴を上げて。

「天使教会審問官側仕え、ストル・プーラ。教会の、いえ、審問官の正義のため、貴方達を斬ります」

遠山の背を守るは、第一の騎士、ストル・プーラ。

「アー」

「行け！ トオヤマ！」

「頼んだ、ストル！」

背中を仲間に任せる。武器も構えず、遠山鳴人はぬかるんだ地面を蹴る。

背後には迫る大蛇の大群、振り返らずとも感じる化け物の威圧、生物として持つ感覚が危機と恐怖を伝える。

だが、遠山は決して振り返らない。その背を護る第一の騎士の性能を身をもって知っているから。

「私の審問官に触れさせはしない」

『あは、すテキ』

蛇が濁流のごとく迫る、それよりも早く濁流を駆け上るストル。安物の鉄の剣が蛇の鱗を裂いた。

「レーザーアアル！！ 帰るぞ！」

視線は前に。横も後ろも何もかも、全てをストルに任せて遠山が走る。

「悲しき子に哀れみを。救われぬ人生に、憐れみを。俺はここで彼女の喪に服すのだ」

「知ったことか！ アホトカゲ！」

虚な目で、ナイフを構えるラザールに一喝。

ぶちのめして、連れて帰る。それしか考えていない。

「影の導き」

ラザールの身体が、影に包まれる。それは一瞬で、影に愛された男の姿を隠し――

ピロン

【知識の眷属ハーヴィーの手助けが発生します】

【HEY！ listen！！ 遠山鳴人。悪事の眷属、フロリアがアンタの手助けしてくれる、フロリアの影は今だけ、アンタを受け入れる。そのリザドニアンを必ず連れ戻せってさ】

「ナイス！ ストーカー女にありがとうって伝えてくれ！」

「?!」

どぼん。遠山がそのまま、ラザールの消えた影の沼に飛び込む。

何の躊躇いもなく、遠山とラザール2人が地上から消えた。

「行きましたデイスか。眷属スキルの権能にあたりまえに干渉してあの男、なんか考えるのがバカらしくなりましたデイスね」

それを見送るのは騎士ストル。

化け物に囲まれながらも、どこか緩い顔つきで影の沼を見つめて。

『アは、みんな、みんな、影の人が好きなのね。アハ、ウフフ、で

も、貴女、は違う。貴女、ふふ、空っぽだわ、あゝ、その目、上姉様や、あの子に似てる…… 空虚で、でも、持って生まれた側の存在』

化け物が、ストールを見下ろす。辺りに蠢く大蛇の群れが、うぞろ、うぞろ。

1人の少女を取り囲む。

「……ムカつきますデイス」

『うん？ 何か言ったかしら？』

「お前、妙な香りがしますね。人と化け物、その両方の匂い……醜い化け物め。古代種、教会は貴様のような存在を許しはしないデイス、でもなによりもムカつくのは」

小さな顔、妖精のような美貌が鋭く。

”正義”の繰り手、その正義のためならば人を殺すことも厭わな  
い悪しき者としての顔、呪われた殺人者の顔に変わる。

「あの男とラザールは呑気にヘラヘラ笑っているのがお似合いデ  
ス。私の……、私の世界に傷を付けようとするお前は決して生か  
てはおかない」

『アハ、コワイ顔……』

騎士が1人、化け物の群れと相對する。

影の沼にちらりと視線をやった後、己の世界を壊そうとする外敵  
にその劍の先を向けた。

.....

...

ラザールが沈んだ影、そこに遠山鳴人も踏み入る。そこは物理法則の存在しない眷属の領域。

ふわり、体が浮く。まるで水中に突如放り込まれたような感覚。色のない世界、白黒の世界。

悪事の眷属が、ラザールにだけ許した場所に今。

「よう、ラザール。悪いが、お前とまともにやり合っ気はねえ」

悪しき者が踏み込んだ。



「その、笑い……」

虚な表情のまま、僅かにレーザーが言葉を詰まらせる。何かに迷うように泳ぐ手、しかし次の瞬間には腰に備えたナイフを突き出して

「遅い!!」

その攻撃は、あまりにも遅い。影の男の本領を知っている遠山からすればふざけているのかと言いたくなるようなトロさ。

突き出されたナイフを交わし、それを握る手を上から荒々しく殴る。

「がつ!?!」

ふわり、持ち手も緩く、ナイフが手からこぼれ落ち、影の世界に浮かぶ。

上も下もわからない影の世界。友が2人、向かい合う。

善き者は、その悲劇を憂い虚にそれを背負う。

悪しき者は、その悲劇を踏み躪り己の思うままに振る舞う。

「目え、覚ませ、ラザール。俺たちにはそんな暇はねえ！」

遠山鳴人がラザールの胸ぐらを掴んで、頭突きをかます。

「あ、が！？ 悲しい、ものを、見た」

遠山の頭突きを食らったラザールが、うめく。

影の世界。それは悪事の眷属の力とラザールの意識が混じり合う  
異界。

「――！」

遠山は見た。

新月の日に生まれた忌み子を。古い部族の習わし。月の出ない夜に生まれた子は災いをもたらすものとして扱われる。

「悲しい唄を、聞いたんだ……」

虚なラザールの手のひらに影が集まる、湾曲した刃の形となったそれが遠山に振り下ろされる。

「遅い」

先ほど叩き落とし、ふわふわ浮いていたラザールのナイフを遠山が掴み取り、影の刃を受け止める。

ぎり、りりり、

鉄と影。凌ぎ合つ。

遠山に流れ込む、影の男の記憶――

彼は遠山鳴人とは違つ。

彼は愛を知らないわけではない。

彼の両親は忌み子として生まれた彼を決して見捨てることはしなかつた。

部族の習わしよりも、己の血を分けた家族を選んだ。生まれた瞬間に、マイナスの立場を決めつけられた我が子にしかし、付けられた名前は――

「ラザール!!」

「あ、俺、は――」

再び、立ち上がる者。

母と父は彼に、願いを込めてその名前をつけた。踏み躪られる定めにある我が子に、それでも儂き願いを込めて、愛と共にその名をつけた。

「悲しい、生を見た、あの子は俺と同じだ、全部奪われた……！」

「く、そ」

ぎりり、強い力。影の刃が鉄のナイフを押し込み始める。

それを通じて、ラザールの悲しみが影の世界に、遠山鳴人に共鳴する。

——忌み子を探せ。忌み子を探せ。日照りが続くのも、畑が育たぬのも、あの忌み子が生まれてからだ。

――忌み子の親の骸を晒せ、部族の掟に逆らった愚か者に思い知らせろ

――忌み子を庇ったあの老人も殺せ、どうせ独り身の変わり者、いなくなっても俺たちには関係ない

――最後まで子を庇った薄汚い親、部族に二度と生まれぬように血を絶やせ。

燃え盛る己の家、目の前でバラバラに殺される己の親。幼き忌み子は、父と母に庇われて、隠された。

力なき忌み子はただ、眺めるしかない。

己を愛してくれた父と母が、多数の大人になぶられて、殴られて、斬られて、汚されて、殺されていくのを眺めるしかなかった。

「この世は悲劇ばかり、誰も悲劇を振り返らない、だれもあの子の嘆きを、聞いてはくれない。ああ、あの時の俺と同じ、あの子は、俺だ。だから、俺が、俺だけはせめて、あの子の悲劇を――」

善き者は、寄り添う。善き者は想う。悲劇にすら、悲劇をすら理解してしまうのだ。

父と母が殺され、家を燃やされたあの日、忌み子は結局見つからなかった。

影に、見出されたのだ。

悪事の眷属に、その忌み子は愛された。理由もなく、きっかけも些細。超越者の愛とは常に一方的なのだ。

忌み子は影に生かされた。

そして、成長し、力をつける。

悪事を繰り返し、その力を王家に認められた忌み子はやがて王家の隠密となる。

彼の初めての仕事は、ある亜人の部落の焼き討ち。

王家の隠密となった忌み子はその手で己の故郷を一夜にして滅ぼし、”影の牙”となったのだ。

「――俺は、奪われた、俺は奪った、俺は、自分の手で、故郷を、誰も、誰も、誰も誰も、助けてくれなかった。だから、俺が、せめて、あの子の悲劇を」

己の時にはなかった救い。善き者は、それになろうとしていた。

善き者は悲劇を想う、善き者は悲しく泣き続ける彼女の救いになろうと心を虚にさせて――



ぎりり、せめぎ合うナイフの刃。影の中で鳴いた。

「トトトトトト」

男は、わらった。

影の世界が見せた忌み子の過去を。影の世界が教えた善き者の人生を。

ラザールの悲劇を、遠山は笑う。

「ラザール、お前は勘違いをしている」

ぎり、躍動する肉体、鉄の刃がじわり、じわりと影のナイフを押し上げていく。

「なん、だ…… なぜ」

戸惑うラザール。

「お前は間違っている、お前のそれは悲劇じゃねえ」

戸惑わない遠山。

「ラザール、お前の親は、滅んだ。だがそれは決して悲劇ではない」

どこまでも傲慢に、どこまでも身勝手に、どこまでも不遜に。

遠山鳴人が、ラザールの傷に踏み込む。

「お前はその名の通り、再び立ち上がった、お前はその名前の示す通りに生きた」

「……なにを、言っているんだ。……悲劇だ、悲劇を、俺は、己の手で、故郷を」

「それだよ、そこが大事だ。いいか、ラザール。よく聞け、それは悲劇ではない」

それがたとえ万人には受け入れられない考えであろうとも。

それがたとえ、万人に非難される答えでも。

遠山鳴人には関係ない。

「お前はお前の両親の無念を、借りをきちんと精算した。報いを受けるべきクソどもを、己の手で滅ぼした。何度でも言うぞ、それは悲劇ではない。俺はそれを悲劇とは思わない」

欲望のままに、彼は彼の思うがままに答えを出す。

「胸を張れ、誇れ。ラザール、見事だ。お前は見事に復讐を果たし、悲劇を殺したんだ」

ぎ、ぎぎ。

分厚いナイフの刃が影の刃を押し出し始める。

鏝迫り合う2人、遠山がラザールの虚な瞳を見る。

「こ、ろした？」

「そうだ。いいか！ お前は悲劇に負けなかった。再び立ち上がり、その手で悲劇を殺した。それはもう悲劇ではない 喜劇だ！」

「あ、俺、は、悲劇、父さん、母さんを、目の前でー」

「そいつらは全て報いを受けた。お前がその手で借りを返した。その手の汚れを、その血の香りを、お前は恐れてはいけない、お前は後悔してはいけない」

「ー俺は、じゃあ、どうすれば」

「笑え」

ラザールの問いかけに、迷いなく。

悪しき者の自我は答えを迷わない。

「笑え、お前が始末した敵の断末魔を思い出せ、それを笑え、ざまあみろと、笑い飛ばせ」

「わら、う」

「ああ、クソ野郎どもが死んだだけだ。滅ぶべきものが滅んだだけ

だ。そして、お前にはもう2度と悲劇は訪れない」

「どうして、そんなことが言える……？ 彼女の悲劇を、俺は見  
た。この世界は悲劇に満ちてー」

ラザールの目が泳ぐ。傷つき、かすれて、なおも他者に対する憐  
れみを忘れぬリザドニアンは、その化け物の影響にあった。

悲劇、悲しみ、それはラザールの自我を侵していて。

「お前は、俺と出会ったからだ」

「ーあ？」

ラザールの動きが止まる。

「思い出せ、俺らの目的を。思い出せ、俺とお前のたどり着くべき場所を。俺の欲望を、お前の夢を」

それは遠山とラザールの楔。あの日、あの時、あの場所で。

竜を前に、<sup>試練</sup>彼らは光景を共有していた。

【技能発動 ” 拡大する自我 ” により、仲間の精神汚染に対して干渉することが可能です】

「ラ・ザール！ こんなところで躓いてる場合じゃねえ！ こんな所で他人に同情してる暇はねえ！ 他人の悲劇を踏み潰せ！ 他人の悲劇を踏みにじれ！ 悲劇を笑え！ ラザール！」

拡大する自我が、善き者を冒していく。

悪しき者よ、その悲劇を笑え。

他者の悲劇への憐憫など、悪しき者には関係ない。

「あ、ああ…… 知っている、俺は、お前を、知ってー」

ラザールは知ってる、例え古代種のスキルにより虚になっていようとも、彼の心に、魂に、あの時のことは刻まれている。

己と夢を共有する、残酷で悪辣で狡賢くて冷酷でー

でも、暖かいその声を。

「名前、知っている、パン、竜、俺は、アンタは」

ぼろり。ラザールの手からナイフがこぼれ落ちて。



「あ」

「隙有りイイイイイイ!!」

反射的に、遠山はナイフを投げ捨てレーザーの顔を思い切りぶん殴った。

「アガ?!」

目を白黒させるレーザー、その縦に裂けた瞳にはいつしか光が戻ってきて。

「帰るぞ! レーザー!」

「ぐぶ…… ああ、分かったよ、ナルヒト。」

ラザールの胸元をつかみ、なんにも悪びれることなく遠山が大声を張った。

ラザールが、顔を腫らして力なく、眩しいものを見るように目を細めて笑った。

どぼん。

上がっていく、上がっていく。

影の帷、影の世界から2人が一気に浮上して。

「お早いお帰りで、おふたりとも」

気付けば地上。

ラザールと遠山は取っ組み合った状態で帰還した。

そこにはストルが、立っていて。

「ああ、ただいま」

死屍累々。

遠山が影の世界でラザールとせめぎ合っている間に、既に奇妙なテイタノスメヤの群れは、全滅していた。

首を落とされた蛇の死骸、その中に1人可憐な少女が返り血を浴びて1人立つ。

「まあ、久しぶりにスリリングな時間でした。冒険者、私そこそこ向いてるかもしれませんがデイスね」

くるくるくるくる。

ペン回しでもしているかのようにストルが剣を器用に指先でスピ  
ンさせる。

べっとりついた血糊は、ぶんと大きな風音ともに振り払われた。

「はは、ストル、世話をかけたね」

力なく、正気に戻ったラザールがストルへ微笑む。

「まったくデイス。ラザール、貴方は良い人デイスが、その優しさを向ける相手は選ぶべきデイス」

「ストル、お前、頭でもぶつけたか？ おぶって帰ろつか？」

いつになく賢いことを言うストルに遠山が首を傾げる。

「うるさいデイス、悪人。……まあ、良かったデイス、2人とも無事で」

ぷいっと、そっぽを向くストル。しかし、遠山とラザールを見た。彼女の小さな耳たぶが少し赤くなっているのを。

「はは」

「ひひ、ああ。さて、それじゃ帰ろつか」

『あゝ、みんな貴方が好きなんだ。トオヤマナルヒト』

ぬるり。音もなく、それはいつのまにか傷を治し、体をもたげて  
遠山を見下ろしていた。

歪にねじ曲がった躰、蛇の身体から大きな腕を生やして。

「ーは

「ーウン」

その腕、大きな拳を遠山に。

「ナルヒト?! ツク!」

押された。レーザーが、遠山を突き飛ばした。次の瞬間、レーザーは見えなくなつて。

ばき。

壊れてはいけない何か壊れたような音。

一回転、二回転、三回転――

錐揉みながら、血を散らし、よく見知った奴の身体が吹き飛ばぶのを、遠山は見た。

「ツガ」

一回、二回、三回、地面に頭から落ちたソイツの身体がゴミのよう  
に転がる。

四肢をぐったりと投げ出し、首をぐねりと曲げて、舌を溢してピ  
クリとも動かない。

『ア、間違えちゃった。さよなら、影の人』

動かない、動かない、動かない。

ラザールが――

「ラザール?!?!?!」

「ッ、危ない!?! トオヤマー!?!」



化け物が、蛇の口から生える女体が大笑い。

『アあ、良い声、イイイイイイイイイ声。悲しい声が聞こえるの、悲しい歌が聞こえるの。私だけでは寂しいわ、トオヤマナルヒト』

化け物が、嗤う。遠山たちの悲劇を嗤う。

悪しき者が、悲劇を嗤った。

『謳いましょう、歌いましょう、悲しい終わりを歌いましょう。ふわすわふわふわ、広がるの。海はとってもフカイから。ぷよぷよぷよぷよ、私たちは、広がるの。さあ、起きて、みんな』

「ワー、ウロロロロ、シュロ、ア、ア、我らの彼女…… の言葉のままに」

「ウイー、イタイ、イタイイタイイタイ、シュラララロロ」

どろり、でろでろ。

ストルによって死骸の群れに変えられていた筈のモンスター達が起き上がる。

身体についた大きな傷、絶たれた首や砕けた頭蓋がじゅわじゅわ泡立ち、次第に治っていく。

『アは。ティタノスメヤ・種族スキルフィードスキル”ウロボロス不死の蛇』

それはもう、ただのモンスターではない。

人とモンスターの同化、彼女の特別な血と才能、危機に陥ったモンスターの血は進化をもたらした。

『あなた達が彼女達を追い詰めた、ウフフ、みんな、みんなこの森のテイタノスメヤ達はあなた達のことを覚えてる、あは、うふふ』

”古代種”、モンスターの中的特異点が騎士の殺戮を乗り越えてしまった。

「うそ、ありえない、私、私、私が仕留め損なつた…… 首を落としたのに、どうして…… 私のせいで、ラザールが……、ア、アアアア」

震えるストル、力なく剣を落としてその場に膝をつく。顔を真っ青にして齒をガチガチ鳴らしながら手を口元に当てて震え続ける。

ラザールは、動かない。

遠山を庇って、化け物の一撃をモロに受けたラザールは動かない。

「ツーー ハア」

心が、冷たくなっていく。頭がグツグツと煮えたぎり、視界の端が赤くなり始める。

状況は最悪。手札も一気になくなった。

人間の本质は、窮地にこそ浮かび上がる。嗚呼、遠山鳴人の本质が今、浮かび上がる。

「トオヤマ、トオヤマ、どこまでいっていいの、どこまでいっていいの、どこまでいっていいの、どこまでいっていいの、私のせいではー」

「ストルー!」

「フツ?!」

ばちん！！

縋るように手を伸ばしたストルの小さな背中を遠山が叩いた。マントの下に着込んでいる帷子で手のひらが痛む。

「ー命令だ。俺が時間を稼ぐ。レーザーを連れて森を出ろ」

静かに、告げる。

遠山は知っている、今自分達にはもう選ぶことの出来る選択肢が少ないことを。

レーザーを生かす方法は、もうこれしかない。彼がまだ死んでいない、その可能性に賭けて、もうこれしかないのだ。

「なにを、だ、ダメデイス！ 貴方1人でこの数を、し、殿なら私が！ 私が適任デイス！ 私は強いから！！」

「俺にラザールを抱えて化け物を振り切る脚はない。でも、お前なら逃げ切れる」

「あ、でも、でもー」

ストルがワナワナ口を動かす。戦闘にかけては頭の回る彼女は、すでに理解している。

この場において、賭けに等しいその選択。遠山鳴人を殿として自分がラザールを連れて帰る、それが1番可能性があることを理解してしまう。

「ストル・プーラ異端審問官側仕え」

「……ハイ」

「お前に任せる。だから、俺に任せる。返事を」

「……………っ、ご命令の、ま、まに。審問官」

拳を握りしめたストルが目の端に涙を溜めて、それでも前を向き、弾けるように駆け出した。

倒れて動かぬ仲間の元へ騎士が駆ける。

『アハ、行かせない』

化け物、蛇の口からはみ出た女体、人間部分の顔がにいつと笑う。

彼女の意図に従うようにストルの行方を取り巻きの大蛇が塞いで。

「よそ見してんじゃねえよ」

キュポン。

遠山鳴人の首元から栓を抜くような音。それは楔、それは栓、それは力、それは刃。

「ジャ???!!」

「刻め、キリヤイバ」

透明に薄く伸ばされたキリが道を塞ごうとする大蛇の体を刻む。

「デイス!!!」

キリを、水色の風が突っ切る。

声も、目線もなく。



遠山の経験と、ストルの感覚による連携。

キリヤイバの発動の隙間をついてストルがデッドラインを超えた。

『アラ、スゴイ』

「トオヤマ！！ 必ず、必ず助けに戻りますデイス！ 死ぬな、死ぬな！ 死んだら、ほんとに、許さないからっ」

泣きそうな声、いや、泣きながらストルがレーザーを抱える。そしてもう2度と振り返らずに、大蛇たちなど追いつけるはずもない速度で、森を突っ切っていく。

「ひひ、速。お前やっぱすげえよ、ストル」

本物だ。ストル・プーラは自分とは違う、本物の選ばれた者だ。

きつと、アイツにとってはラザールや自分がいなければこんな状況、ピンチにもならないのだろう。

ドラ子や人知竜でも同じだ。彼女達も同様だろう。

だが、自分は違う。彼女たちと同じ存在ではない。

『アハ、うふふ、ふよふわ、ふわふわ近づくの。アア、へびをたくさん殺した者、冬の名前はトオヤマナルヒト。1人に、なってしまいましたね』

「シャロロロ」

「おお、冬だ。我らの一族を滅ぼす冬だ。喰らえ、喰らえ、喰らえ。滅ぼせ、でないと我らが滅ぼされる」

化け物化け物化け物。

どこを見回しても、化け物だらけ。

「あー、死ぬかもな、これ」

遠山は自分の実力を正確に理解している。大物食いに特化し、不意打ちを根幹とした戦い方。この世界に来てからはそれが大抵ハマっていた。

だが、今は違う。他勢に無勢。言葉も、思考もはやここでは役に立たない。

『アハ、あなたの骸を飾りましょう。いえ、あなたも私たちと同じになりましょう。あの水色の子、良い顔をしていたもの、ウッフ。きっとたくさん泣いてくれる、ああ、一緒に泣きましょう』

「うぼ、ロロロラロ」

「ウエバロロロロ」

一斉に、取り巻きの大蛇達が口を裂けんばかりに広げて、えづき出す。

びしゃ、びしゃ。嘔吐。吐き出すのは胃液と、ばらばら、骨、人骨。

「ウエバロロ、あ、あ、あ、冒険者、の力」

「じゅろろろ、人の力、人を喰らう、我らの力」

ぶちゅ、ぶちゅ、びひゅ。

それは不完全な人の形。蛇の化け物達が彼女に倣い人を食って人になろうとした歪な姿。

大蛇達の開かれた口から、鱗の生えた腕が伸びた。それはそれぞれ

れ異なる武器を握っている。

この森に食われた冒険者達を材料に、彼らが選んだ進化の形。しかし、食われたのは特別ではない者たちばかり。

故にその進化はあまりにも醜く、中途半端で。

『みんな、貴方が死んだら悲しむわ。私と違って、ネ』

「……趣味ワリー」

口から武器を握る腕を生やした大蛇の群れ。

口から、女体を生やした大きな白蛇。

化け物の中、遠山は1人。

ああ、知っている、遠山鳴人は知っている。

もしも、運命というものが、もしも宿命というものがあるのならば、それはこういう風に決めたのだろう。

「さて、バベルの大穴以来、2回目だ。あの日と、同じだな」

遠山鳴人の現代ダンジョンライフの終わりの再現。異世界でも遠山は、同じ選択をする。

ピコン

運命は遠山に告げるのだ。

もう一度、アレをやれど。

【警告 危険なクエストが開始されます。失敗した場合死亡します】

運命が、クエストを発行する。数多の矢印が、化け物全てを指し示して。

【DEADクエスト 発生】

【クエスト名 答え合わせ Time for の時間 answering】

【クエスト目標 ”あの日”を超える】

69話 悪しき者たち、その悲劇を笑え（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを「こ」覧くだ  
さい！

面白かったら評価お願いします！



70話 DEADクエスト……………

「多いな……………」

うごろ、うごろぞ。

森の隙間を埋めんばかりに、ティタノスメヤが群れる。

黒い鱗の蛇の大群、その中に鈍く輝く白い鱗の蛇、女。

『1人、うふふ、どんな気持ちなのかしら。私はそう、とてもとても冷たくて惨めで、カナシカッタ。ふわふわ、海はとても広いから、私は水底で一人きり、ふふふ』

くねくね、濡れた身体を揺らしながら蛇女が嗤う。

戦術はもう固めている。仲間がいない状況だからこそ出来るやり方。

出し惜しみはしない。この前の轍は踏まない。自分の最強の切り札を使い倒す。

「ッ……」

急激な吐き気と、目眩。ぶり返した。ここに来るまでに数回使った遺物の反動はもうすぐそこまで来ている。

「ヒヒ、もう少しおしゃべりしてくれていいんだぜ。お前、レーザーに話を聞いてほしくて呼んだんだろ？ ほら、俺が代わりに聞いてやるよ」

『……うふふ、そういうこと。ごめんネ、トオヤマナルヒト。私たちには、アナタを決して見くびったりしないカラ』

「あつそ。じゃ、行こうか」

化け物との戦い方。遠山鳴人はこの課題に対して一つの持論を持っている。

遠山が駆け出す。

「ッラア!!」

攻め続けること。人と化け物。冷静になれば人間側に勝ち目などあるはずがない。森の中で人食い熊に出会うよりも分の悪い戦いなのだから。

「シャロ!!」

「でけえな、嫌になるよ、ほんと」

躊躇うことなく、怖じけることなく、悲嘆することもなく。背中に備えた安物の槍を両手で握り、手近な蛇の化け物の身体に突き刺

す。

自分を騙せ、化け物を騙せ。自分は化け物と戦うことが出来るの  
だと思い込め。

正気になれば、気付いてしまう。

人間など、化け物の餌に過ぎないことに。故に人間がモンスター  
と戦う方法は一つしかない。

「シャロロロ!!」

「オオオオラアあ!!」

「――戦え」

「殺す、絶対に、殺す」

槍先を捻る、悲鳴をあげる化け物の身体に取り付き、頭を狙う。

餌ではない、自分は決して餌ではない。不意打ちも、段取りを踏んだ狩りももう出来ない。

「ハホホハシャ□□□□□!」

「っ、くそが!!」

身体に取り付き、頭を狙う遠山。それを狙い別のティタノスメヤが口から生やした腕と武器を振るってくる。

「ジャ?! あ、アア?!」

すぐさまとびのき、地面に転がる。遠山を狙って払われた斧の衝撃はさつきまで遠山が取り付いていたティタノスメヤの胴を真っ二つにしていた。

びくん、びくん。のたうつティタノスメヤがすぐに動かなくなる。

「遠慮ねーな、ほんと。反則だろ、タコ蛇どもが」

タイムンではない。多対1、多勢に無勢。1匹のティタノスメヤに注力していると、周りのティタノスメヤからの攻撃を受ける。

頬にこびりついた泥をぬぐい、槍を構える。

笑え、嗤え、戦え、殺せ。

少しでも怖ければ、奴らにバレる。これはもう人間が知識と意志で行う”狩り”ではない。

『アハ、トオヤマナルヒト。手、震えテルよ』

「武者震いっつていうんだよ」

狂気と殺意、己の全てを懸けて行っー

「ー皆殺せ、キリヤイバ」

”殺し合い”だ。

「ジャ?!」

「オオオオ?! 冬、我らを殺す冬の痛みイイイイ?!」

遠山から広がり続ける真白のキリ。それが蛇の化け物を蝕む。

ざくり、ざくり。遠山から距離の近い化け物から順番に身体から血を流して悶え始める。

『アあ、よく頑張るね、ふふ、ウフフ』

「そのニタニタ顔をよー、必ずぐちゃぐちゃにしてや、うわらば！  
！」

群れの奥に鎮座する、白いテイタノスメヤに槍先を向ける。そんなことをしていると瀕死の1匹が遠山に倒れ込むように大口を向けてきた。

間一髪、それを避け、

『へえ、慣れてる……　　ウフフ、アナタ、アナタ、ひとりぼっちに  
慣れてるのね』

「友達いねえみたいなこと言つのやめてくれる？傷ついたから殺す  
ね」



「蛇ッ、ジャア……」

地面に噛みついた大蛇、キリヤイバに刻まれたその巨体には既に体勢を戻す体力もないらしい。

「2匹目」

槍を思い切り、蛇の頭に突き刺す。ぐるぐるかき混ぜるように抉って、トドメを刺した。

『あは、でもまだまだたくさんのお友達が』

「しんどかったが、十分に広げた。お前ら全員、射程距離圏内だ」

「キリヤイバ、出力増加」

刻む、刻む。刻む。

自爆覚悟の遺物使用。本来の運用ならばキリヤイバはもっと慎重に入念に場を整えた状態で使用するべき兵器だ。

「ジャ、アアア」

「イタイイイイイイ、アアアハ」

その性質上、キリのヤイバは遠山自身をも傷つける。自分が巻き込まれないキリの濃度、だいたいの範囲を設定し、その中で動き回るのは精神と体力、その両方を削り続ける。

「まだ、だ。もっと、もっともつとギリギリを……！」

乱戦の中での、キリヤイバの使用。それは悪手に違いない。

だが、今の遠山は知っている。それをしなかった場合の未来を。  
あの時、現代ダンジョン最後の戦い、多数の怪物種を前にキリヤイバの使用を躊躇った。

「もう2度と、出し惜しみで死んでたまるか!!」

キリを、広げる。左手に欠けた刃を。右手に安物の槍を。

「ア、アアああああ!! オラアア!! 死ねええええ!!」

「じ、じゃ、シャアアアアア……」

キリヤイバによって動きを止めて、瀕死になった大蛇から狙って殺していく。

「さん、びき、めええええ!!」

キリヤイバにより刻まれた傷口に槍を突き刺し、血を流させ、動きが鈍ったところを駆け登り、頭に槍を滅多刺し。

返り血に顔を染め、気炎万丈雄叫びを。

奮い立たせろ、狂え、嗤え、殺せ。一步でも足を止めれば、怖ければその瞬間に狩り殺される。

「つぎ、つぎ、つぎいいい……」

地面に倒れ伏した大蛇の死骸の上、冒険者が立つ。

白いキリを纏う欠けた刃、血糊で固まる槍を構えて、死地に立つ。

遠山が選んだ戦術はシンプル、そこにはもう知略も駆け引きもない。

キリヤイバの全力使用。

遠山が未だに、テイタノスメヤの群れに押し潰されてないのは一重にキリヤイバの使用により多数の化け物を常に切り刻み続けているからだ。

『アハ…… ふふ、いいえ、いいえ。我らはそれでも滅ばない。我らの鱗は死なずの鱗。ずうーっと、ずっと廻り巡るの』

『フィードスキル”死なずの鱗”』

「ヒビ…… ギミックボスかよ。ハーヴィー！ なんじゃありゃあ！？」

【知識の眷属 ハーヴィーからの手助け： アンタがテイタノスメヤを追い詰めすぎたわけよ。フィードスキルつてのは絶滅の危機に瀕した種族に発現する力。あの白いテイタノスメヤ、アレはテイタノスメヤという種の到達点なわけ】

「要点を！」

【あの白いの。あれはモンスターの中の異常存在。”爬虫類種”から”古代種”に移行した特異点つてこと。種の願い、想い、意志を受け継いだ存在。アレを殺さない限り、この群れは永遠に死に切らない】

「はい理解、クソゲーがよ」

『ふふ、絶望の中、プワプワ綻ぶの。寒い朝、茹だる昼、深い夜、アナタはどうなるのかしら』

「化け物が」

遠山鳴人は、決して超人ではない。

ストル・プーラのように風や獣かと思紛うばかりの高速戦闘も、ラザールのように影を利用しての三次元戦闘もできない。

そして、あの竜達のような力で全てを圧倒することも出来ない。

「……拳銃の一つでもあればな」

見上げるような口から武器を生やした巨大な蛇のモンスター。おまけに殺しても死なない。その群れ。

得体の知れないその親玉。

自動小銃の一つや二つ持っていてもハンデにはならないだろう。  
だが、遠山の手にはその兵器はない。

『アアフフ、悲しいネ、フフ、アナタを置いて、逃げたあの子達、  
あの子達は生きる、アナタは死ヌ』

怪物が囁く。当たり前前の死を。当たり前前の末路を。

「……嫌なこと言うね、お前」

だが、それでもやるしかない。人の運動能力の範囲で、飛んで転んで跳ねて、振るって、突き刺して、叫んで。

即ち、いつも通り。全部賭けて、足掻くだけだ。



『ふわふわ、アナタはもう輝くことは、ない。フフ。水色の子は泣くでしょう、影の人は生きていれば苦しむでしょう。アナタの死は、そうした当たり前の悲しみになるのね』

「さあ、案外ケロツとしてるかもな」

白いティタノスメヤ、その口から生えた女がニヤリと嗤う

もう、言葉はいらない。

キリヤイバ、全力使用。乱戦、駆け抜け、皆敵全殺。

「あ、アアアアアアアアアアアア！！」

刻め、斬れ、死ね。

全ての力を使って、全て滅ぼす。

身体の中から何か消費して、代わりに何かを埋めていく  
感覚。

『アハ、無理しちゃって』

「余裕だ、化け物」

遠山鳴人を中心に、キリが広がっていく。

世界を冒す真白のキリが、大蛇の群れを包み、広がり、化け物たちを斬り刻む。

「シャアアアア……」

「い、びゃ、じゃあアアアア」

遠山を襲おうとしたティタノスメヤが悲鳴を上げて、のたうつ。

「行く！！ 今度こそ、今回こそ！ お前ら全て滅ぼして、俺が生化け物きる！！」

右手に握りしめた鉄槍、のたうち苦しむ大蛇を1匹ずつ容赦なく呵責なく始末していく。

「は、は、ひ、ヒヒ、ハア……！！」

のたうつ蛇の巨体にとりつく、キリヤイバにより身体を刻まれ、血を流す大蛇の動きは鈍い。的確、頭に槍をねじ込む。

ぶ、つぴ。

額についた宝石の如き瞳を貫き、槍先が何かを潰す。

殺しても死なぬ不死の蛇たちが蠢く死地。遠山鳴人の生存が未だ

に許されているのは一重に、由来のわからぬキリの力。

「う、おえええ」

吐瀉物。今殺した蛇の骸に身体を預け、胃の中を吐き出す。キリヤイバを使えば使うほど、

体は消耗していく。生きるための力、熱量、その全てを使用して

「行く」

顔を真っ青にしつつ、口元を拭い前を見る。吐き気が頭をぼやかせる。ふらつき、膝をつく。

『……嫌な目、ほんとに嫌な目…… 違うでしょ？ 間違ってるよ？ 絶望を見る目はそんな目じゃないでしょ』

それでもなお、遠山は目を爛々と輝かせる。絶望に見つめられよ  
うともこの男は――

「よん、ひきめ」

決して、目を逸らさない。

進む、進む、進め。あの時は、ダメだった。足りなかった、間違  
えた。

「鳩村、日下部…… 今度こそ、俺は……！」

槍を振るう、怪物の肉を抉り、穿つ。肉を貫く重い感触、ドロド  
ロの粘土に棒を刺しているような感触だ。

昔の仲間を想う。

置いてきたしまった奴らのことを。遠山鳴人を人間にしてくれた

探索者時代の仲間のことを思い出す。

もう会えない、もう話せない。負けたから、あの時、失敗したから。

「ジャ、シャアアアアア」

遠山が、進む。大蛇の骸を足蹴に、群れの真ん中、敵中に1人孤立する。死地をさらに奥へ、奥へ。

2匹の傷だらけの大蛇が、体をもたげ遠山に迫る。群れの奥、鎮座する彼らテイタノスメヤの最後の希望を守るため、彼らも生きよと彼ら最大の敵を殺そうとして。

「邪魔、だ。キリヤイバ、どかせ」

左に握る、欠けたヤイバ。指揮棒をふるうようにその切先を前に。

「ッ！ ジャ…… ア」

びくん。身体を震わせ、大蛇2匹が動きを止める。そしてすぐ力なく地面に沈み込む。

ズタズタ。目にも見えぬ微細なキリが、空気に混じり大蛇を身体の中から斬り刻んだ。

「5と、6ひき」

これが、遺物所有者。

現代ダンジョンが孕む科学では説明出来ない超常の力の物品。それを扱う資格を持つもの。

それは序列を壊す者だ。怪物と人間の決まりきっている序列、被食者と捕食者の序列。

「さあ、お前、お前の番だ」

遺物所有者  
遠山鳴人は、それを壊す。生物としての位階を一つあげてしまう  
補助輪――

「アハ、すごいね、冬、へえ、みんなをたくさん殺したのはソレなのね。フフ、貴方にぴったり、とても強くてとても冷たい牙と爪……」

「余裕だな、でももう終わりだ」

射程距離だ。

大幅な群れをかき分け、化け物を殺し、死骸を乗り越えて遠山はたどり着いた。



『アハ、コンニチは』

「ああ、さようなら」

前方、標的。

真白の鱗に、くねる蛇躰、大きく開いた口から立つ人間の身体。

白蛇女、既に遠山は彼女をキリヤイバの射程に捉えていた。

「死ね」

欠けたヤイバを向けて、振るう。必要なのはそれだけ。ただ殺すと願って振るうだけ。

それだけで、白蛇の身体はズタズタに

『コワイ』

ぎゅじゅぽ。

「え」

一瞬の出来事。白蛇女が、消えた。

いや、違う、消えたのではない。遠山は見る、えぐれた地面を。濡れて柔らかい地面、白蛇女はそれに一瞬で潜ったのだ。

『アハ、私、シアワセになるの』

足元から声が響くのと、遠山の身体がぽーんと吹き飛ぶのは同時だった。

「やば」

おもちゃのように吹き飛ばす遠山、くるりくるくる。浮かびながら遅れて自分の状況を理解する。

ぶっ飛ばされた。

地面を掘り進み飛び出てきた白蛇女に下から突き上げられたのだ。

耳の奥、耳鳴りだけが響く、身体が痛いのか熱いのかわからない。

「が、はー」

『アア、イタそうね』

目を奪われた。

蛇の方から生えたその女体、白い鱗と皮で形成された、両腕のない女。

ミロのヴィーナスみたいだ。

そんな場合じゃないだろうに、思考がぼんやりして

『アハ』

地面から飛び出た白蛇女、ぶちゆり。生え出すのは腕。女体部分からではなく、蛇の身体から生やした腕を振りかぶり

「待っー」

『すまーっしゅ』

宙に浮かぶ遠山をはたき落とす。

回転、衝撃、痛み。

世界が割れて、粉々になった感覚。

「ゲホッ」

まず、土の匂い。

それからゆっくり聞こえるのはきーんとした耳鳴り。

「まだよ、みんな。うふふ、ふわふわ、ふわふわ、揺蕩うの。”死  
なずの鱗”」

ぶちゅる、じゅる、じゅる。

肉が沸いて、血が膨らむ音がした。

「シユ、□□□□□□」

「ララロロ、オオオオ、我らが貴女、我らが到達点よ」

「…………クソ」

最後に視界が戻ってきた。ぼやけたそれがゆっくり焦点を取り戻していく。頭を打つたらしい、ずきずき痛むと同時に、視界が元に戻っていく。

背中に硬い感触、殴り飛ばされた後にどうやら木に叩きつけられていたらしい。

『アハ、あなただけ、ひとりぼっち、ね』

「…………マジクソゲー」

蛇の大群、健在。切り刻んだ蛇も、頭に槍を突き刺して殺した蛇も、その傷をあぶくたたせて、起き上がる。

「シャ□□□□□□」

「□□□□□□□□□□」

「ジャ□□□□□□□□□□□□□□」

殺しても死なぬ化け物の中、遠山は1人。

「ははっ  
」

意識せずに乾いた笑いが溢れた。もう笑うしかない。

武装を確認、キリヤイバは一瞬意識を失ったせいかな身体のなかに収納された。安物の槍は、咄嗟に盾として使ったせいだ、もはや手の中にはない。

【……アハ、どうしたの？　ねえ、痛い？　イタイ？　フフ】

くねくねと身体をゆらめかせる白蛇女、遠山はその戦力を見誤った。

瞬時にキリヤイバの特性を理解したのだろう。

自分の手勢でこちらのやり方を測り、キリヤイバへの対策を敢行。たしかに地中に逃げられたら、空中に漂うキリヤイバから逃れることはできるわけだ。

「かしこいな、お前」

木のウロに背中を預けたまま、遠山はぼそりつつぶやいた。

まずい、勝てないかもしれない。酔いで誤魔化されていたその感覚が痛みで少しずつ戻ってくる。

「うえっ」



胃液が溢れる。キリヤイバの全力使用の代償は確実に身体を消耗させていた。

状況が、まずい。これ、ほんとにまずい。

身体がまだ痺れている、化け物の攻撃をまともに食らったのだ、死んでないだけマシかもしれない。

『ふふ、手加減したから、まだ死なないデシヨ？ ねえ、冒険者さん、私たちをたくさん殺す冬の冒険者さん、今、どんな気分？』

「キリヤイバ……」

化け物と会話するつもりはなかった、遠山は満身創痍のなか、それでもその名を喚ぶ。

『あは…… どうしたの？ 何も無いよ？』

白蛇女が笑う。周りにたかる黒蛇の化け物たちもジロジロとその感情の見えない爬虫類の目を遠山に向け続ける。

「くそ……」

ついに、キリヤイバを使用する体力もなくなった。身体の中に眠る遺物と自分の感覚がうまく合わない。

「くそ……！！」

ミスは、なかった。何もしくじっていなかった。

今回は、前回の反省を活かしたつもりだ。

キリヤイバの出し惜しみもなかった。初めから全力で戦った。

それで、このザマ。単純にこの化け物の方が強かった。

「…………げほ」

血の混じった唾を咳と共に吐き出す。口の中を切っただけ、そういうことにしておこう。

身体を預ける木の幹の感触、喉から込み上げる血の匂い、まだ生きている。身体は動く。

でも、立ち上がれない。怪物のよく延びるしなやかな体に叩きつけられた痺れが消えない。

やばい。今回は、マジでやばい。

『ア、ア、ア、ワタシ、最高にワタシ。ぶよぶよ、ふよふよ浮かんで、ヒナドリにナルノ。ワタシはヒナドリ』

怪物。

そいつが、とぐろを巻きながら、長い舌をチロチロ出しながら笑う。

白い女体が蠢き、腕のない肩口がびくびくと震えている。

化け物狩りに慣れていたつもりだった、だがそれは本当にもつもりだったのだ。

身体の芯が冷たい。遠山はこの感覚を知っている。現代ダンジョンの中で1人で迎えたあの瞬間と同じ感覚。

自分の敗北、死が現実感をもって現れる。だがそれよりも遠山には気になることがあった。

ストルは、ラザールを連れて離脱出来たのか？

ラザールは生きているのだろうか。

あとどれくらい時間を稼げばいい？

ストルの助けは、くるのか？

「……この前は、来なかった……」

いやだ、思い出すな、思い出すな。

なんで、今、あの時のことを。

「バベルの大穴ん時は、来なかった……」

遠山は、死んだ。

現代ダンジョンで、死んだ、化け物に殺された。

そして、今、異世界でも、化け物に。

「あっ  
」

気付けば、手が震えている。唇もわなわな震えて、かちかち、かちかち、なんの音だろう。

「…………い、やだ  
」

かち、かち。なんの音だと思ったら、自分の歯が噛み合う音だ。震えが止まらない。

「死にたくねえ…………」

怖い。

ついに、遠山はその感情に追いつかれてしまった。化け物を殺す

興奮も、己の力を振り回す熱狂も冷めた。

冷めて、覚めてしまった。

ああ、死ぬのが、怖くてたまらない。

「くさかべ、はとむら、おれ、また……」

ここで、一人で――

『ーワタシモソウダツた』

怪物が、咲った。

『その顔』

うごろ、うごろ。

蛇の群れの中を白蛇女が進む。周りのティタノスメヤは皆平伏し、彼女に道を譲る。

『その顔、エエ、ソウ、ソノ顔が見たかった』

力なく木にもたれる遠山を覗き込む白蛇女。黒目だけの目を見開き、ただ、遠山を見つめる。

『わかるよ、ワカルヨ。冷たくて悲しくてコワクテ、ダアレモタスケテくれない恐怖、ほら、ミツメテ。水の底からもつ出れない怖さをゆっくりと。ちゃぶちゃぶ、ちゃぶ』

女が口を開く。白い白磁の体とは対照的な真っ赤な長い舌。ぬらぬらと妖しく光る。

『ねえ、見て、ミテ、みて。私、ワタシ、わたし、こんなものになっちゃった。ねえ、ワタシをミテ』



ねとり。

濡れていて、暖かい。女の赤い舌が遠山の頬をねぶりつける。

濃い血と、花の香りがした。

『ミテ、見て、ワタシを見て』

「がつ、あ……」

粘りつけた赤い舌、それから小さな針が生えて遠山の頬に突き刺さる。

化け物としての機能と、人間としての才能の融合。白蛇女の”スキル”が発動する。

『善き者よ、我が悲劇を想え』

びき。

流れ込むのは映像と声。直接、肉と肉を伝い、白蛇女と遠山がっ  
ながって。

記憶。

視界の中に、緑髪の女性の顔が広がる。高貴さと伶俐さが同居し  
ていて。

【上姉様、上姉様はどうして、オルとは遊ばないの？ フ  
ト は上姉様と遊びたいってゆってたよ？】

【トレナ、あの子はね、違うの。もうすこし貴女もお大きくなれば  
わかるわ。あの子はいずれ必ず私達に災いをもたらすわ。お父様と  
お母様もまだ気づいてはいないけど】

【わざ、わい？】

【トレナ、よく聞きなさい。 トナにあまり関わるのはよしなさい。 あの子は、壊れているから】

ばち。

映像が、切り替わる。

【あ、ああ、ああああああ！？ うそ、うそ、うそ、うそ！ ウオレス、ウオレス！ ウオレス！？ 起きて、起きてよおおお、首が、いや、なんで、目を覚ましてっ、一緒！ ずっと一緒って言ったじゃない！ どうして……！！】

視界の中、男が死んでいた。白目を剥いて、体をびくん、びくんと痙攣させる。舌が口からべろりとこぼれ落ちていた。

首はぐるりと一回転、へし折られていて。

【あ。首折れてるな。死んじまったわ。ぎゃははは、ビクビク動いてきもちわりー】

【ぎゃははははは！ やべ！ 勢い余って殺しちゃった！】

【おいおい、お前また新人殺しちゃってんじゃん。流石にバレたらやべーだろ】

【ま、しゃーねー、このゴミ箱、誰も回収なんかしてねーし、ここに捨てとこつぜ】

【よし、じゃあ、お姉ちゃん、これでツレはいなくなったな。俺たちと遊ぼーぜ】

視界、ゴミ箱に捨てられる死骸の目がこちらを見ている。責めるような目、暗くもう何も移さないはずの目がずっと、こちらを。

ばたん。ゴミ箱の蓋が閉められて。

ばち。

映像が切り替わる。

どこかで見たことのある気がする男たちが服を着ながらヘラヘラと笑いを浮かべている。

どいつもこいつも何か満足して、やりきったような顔をしていた。

【あー、中々上玉だった！。なあ、お姉さんも楽しかったろ？ 天使教会の愛ってやつさ。ほら、通行許可証だ、愉しませてくれた礼に特別に渡してやるよ】

【いやーでも、アンタ、冒険者なんぞ向いてねえって。その器量だ、花街の娼館に行きゃ一儲けできるぜ？】

【まあ、冒険者として大怪我したくなきゃいつでも言ってくれ。良  
いところ紹介す、る、ぜ】

視界の中、震える手で差し出された許可証を受け取っ

【……へへ、その顔見てたら、また催してきたぜ】

男に腕を捕まれる。汚い顔が視界一杯に広がって。獣の臭いが  
一気に。

ばち、映像が切り替わる。

ばち、映像が切り替わる。

ばち、映像が。

遠山は理解した。これはこの化け物の記憶。この化け物はヒトだ  
った。全てをしくじり、全てに失敗したヒトだった。

ばち。

また、映像が切り替わる。

【ああ、よかった、これで終われる、ようやく……】

真っ暗の中、声だけが聞こえた。

【わたしの人生って、なんだったんだろう】

それはこの白蛇女のヒトとしての最期。誰にも聞かれることのない  
かったそれが遠山に届く。

【わたしって、生きる意味があったんだらうか】

善き者、ラザールも見た女の記憶。

世界に、冒険都市の全てに奪われた女の最期は、蛇に丸呑みにされて溶かされることだった。

【ああ、もういや、でも、これでようやく終われる】

女の記憶、想いが流れ込む。諦めと疲れ。ただそれだけがそこにあって。

《ー自由にすればいいんじゃないですか？ トレナ、貴女になんて誰も期待していないのですし》

女の声ではなかった。



誰かが、いつかこの女に向けた声。暗闇の中その声だけが、諦め、絶望の闇の中、女に届いた一つの言葉があった。

【あ、フルナ】

女が、つぶやく。その名前を。

暗闇が晴れていく。

映像、景色が流れる。

美しい月の夜。ああ、蛇の腹の中に収まっていた身体が一度全て溶ける。でも女は死ななかった。

じゅるり、じゅるじゅる。

生まれ変わる。一つの種として危機に瀕していた”ティタノスメヤ”と、絶望の中、昏い願いに気付いた尊き選ばれた血のヒト。

それが混じり、ねじれ、歪んで溶けて一つになった。

白い腕が、月を掬おうと伸びた。

【自由にしてしまおう】

昏い願いから、それは生まれた。

それは冒険都市と冒険者が産んだ復讐者。

【よる、きれい】

星月夜の下で、女の呟きがぼつり。

ばち。

映像が、途切れて。

「っはあ、はあ、はあ…… 今、のは……」

べとり。頬に感じた艶かしい感触が離れる。白蛇女が遠山の頬から舌を離した。

『影の人にも見せたワタシの思い出、ふふふ、フフフ。ねえ、どうだった？ ふふ、ああ、でもあなたにはきつと響かないノネ』

白蛇女は、ヒトが化け物に変わった存在だ。

遠山は考える、信じられない話だがこの世界ではそういうことが起きるのだろう、今はそう結論づけるしかない。

頭が痛い、身体も痺れたまま。

満身創痍の遠山はまともな思考を回せる状態ではない。だからだろつか、ぼそりと考えもせず言葉が漏れた。

「……いや、そうでもないさ」

『クスクス、本当に？』

白蛇女は、ヒトから生まれた化け物ゆえに遠山鳴人をここまで追い詰めることが出来た。

そのヒト由来の知能から遠山を出し抜き、いつでも殺せる状況を作り出した。

「……ああ、見たよ。全部。中々キツイ感じだったな」

『へエ、あなたの目、本気でそう言ってるのね……』

そして、白蛇女はヒトから生まれた化け物ゆえに、未だに遠山鳴人にトドメを刺さないでいた。

本能のみで生きる化け物ならば決して獲物に持ち得ない感情。

興味。

それを遠山に抱き始めたゆえにまだ、トドメを。

『ねえ、ねえ、ほんとに、本当にわかってクレル？ 辛かったの、悲しくて、コワクテ、寒かった』

白蛇女が遠山に迫る。

疲労と消耗で遠山はただそれを眺めることしかできない。スピーチ・チャレンジもメッセージも、何も出ない。

だから、ぼんやり。遠山はありのまま、心そのままに言葉を紡ぐ。

一つの感想があった。白蛇女に見せられた彼女の悲劇を見て。

ラザールはそれを見て、おそらく本気で同情したのだろう。彼女の痛みに寄り添おうとしたことで彼女の力に捕らえられた。

では、遠山は――

「……お前は、俺だ」

『……………え？』

「お前は、全部しくじった。全て奪われて、いくところまで行った」

遠山に同情はない、それに寄り添うような人間ではない。しかしこれまでの敵に向けていた強い殺意や害意もまた、なく。

ただ、白蛇女を見つめて、つぶやく。

「お前は全部しくじった俺そのものだ。この世界に来て、レーザーを、ドラ子を、ガキどもを、ストルを、あともしかしたら人知竜も。そいつら全部を失った俺だ」

『え、え』

「分かるよ、俺も、もしかしたらそうなるかもしれない。分かるよ、お前がおかしくなるのも理解出来る」

崩れそうになる身体を必死に木の幹へ押し付けて体勢を維持する。

周りの黒蛇達が襲ってくる様子はない。

『あ、ハ、ウフフ、分かるの？ わかってくれるの？ フフ、そうしたらとても嬉しいワ、フフ、なら仕方ないでしょ？ ワタシだけ悲しいのは嫌なもの。みんなみんな悲しくなってほしいな』

「……………違うな」

『何が？』

「お前が、やるべきことさ。お前は今すぐにもお前をそんなにして全部にやり返すべきだ。少なくともラザールとかああいう善い奴にちよっかい出してる暇はない筈だ」



『あら、フフ。クスクス、そうね、そうかも。でも、あなたは違うでしょ？ みんなみんな、この森の彼らはあなたを殺したがってる、笑いと共に私達に冬を運んでくる貴方をね』

「ああ、だろうな。殺して生きて、殺される。生き物ってのはみんなそうやって生きてるもんだ、なあ、お前さ、俺を殺した後はどうするんだ？」

『ふふ、貴方もね、ワタシみたいになつてよ！ 変わり果てた貴方を見た影の人や、不思議な香りの水色髪の子、貴方を置いて逃げてイッタアノヒトたちの顔がミタイの、それはきつととてもふわふわしてぶかぶかなのよ』

黒目だけの瞳が嗤う。悲劇の中に沈んだ白蛇女。ヒトであった頃の人間性などとうの昔に消えているらしい。

遠山は、深い深いため息をついた。

その答えが聞けた。ああ、ならもう良い。

『ふふ、イイ。あなたをスコシ知りたくナツテきた。きっと、貴方なら私のようになれるワ』

こいつが生きていたといつか必ず、レーザーやストル、遠山の身内に被害がいく。

理由はそれで充分だった。

遠山は答えを出す。それが正しいか正しくないかなんてどうでもよかった。

「ダメだな、それ。絶対させねー、絶対見せねーよ、そんなダサイ姿なんぞ」

『ダサイ？』

怖気がした。自分が、負けて死んでそのあとラザールやストルがその負けた自分を見るのを。

ああ、どんな気持ちなんだろうか。死地に残った仲間が死んだ人間の気持ちは。

あの時、鳩村や日下部はどんな気持ちだったんだろうか。申し訳ないことをした。

ラザールやストルはもし、負けて死んだ自分を見たらどんな気持ちになるんだろうか。

あまつさえ、この白蛇女のようになってしまったら、ラザールやストルは、ドラ子はなんて思うんだろうか。

「ありえねー、そんなダサイところ絶対見せるもんかよ」

それもまた、欲望だ。

遠山鳴人には意地がある。仲間や友達に化け物になった自分を見せることなど、あまつさえ負けた姿を見せるなど。

「死ぬしかねえな」

同じ答えを何度でも。

あの時、現代ダンジョンでの最期と同じだ。例え死んでも、仲間  
にダサイところは見せない。

たどり着く欲望に、手が届かなくても、せめて前のめりに全てを  
終わらせる。

「キリヤイバ、全部、全部、ぜんぶ」

首元に手を当てる。

『ッ!?!? まさか』

遠山が何をするか、白蛇女はすぐに気付いたらしい。

その場を離れ、逃げようとする。でも、もう遅い。

あの時、遠山は選んだ。探索者の仲間を逃す時、自分がしんがり  
を申し出たその瞬間、全てを諦めた。

遠山は知っていた。自分の死と引き換えにしないと仲間を逃すこ  
とはできないことを。

だから

「死ぬのは怖いけど、もう死ぬしかねえ」

キリヤイバの超広範囲発動。どれだけ化け物がたくさんいようと関係ない。

自分を起点に致死の最高濃度のキリを可能な限り広げて、全部全部始末する。

自死前提の自爆技。

「あなた、死ぬ気…… フフ、あーあ、ワタシにもあなたみたいな度胸があればなあ」

「キリヤイバ、全てー」

殺せ。

あとはそれを言葉にするだけ。あともう一回キリヤイバを発動するだけの気力は取り戻した。

覚悟は決めた、後は実行するだけだ。

死にたくないが、こいつだけは死んで殺す。

だから、それを言うだけ。言うだけ、言うだけ、言うだけ、言うだけ。

『なんちゃって。アナザースキル発動。』  
” 汝、その日々を想え ”  
『

「あー」

遠山の動きが止まった。

この土壇場においても、白蛇女は遠山を上回った。既にその女は己の才能をさらに進歩させ、次の段階に踏み入れていた。

「ーナルヒト、あまり水に浸かりすぎるなよ、風邪をひくぞ。」

「ートオヤマ！ 今のは納得いきませんデイス！ 2から3を引いてもマイナス1とやらにはなりません！ ほら！ ここにある石ころだってマイナスとやらにはなりませんよ！」

「ーお兄さん、私たちを見つけてくれてありがとうございます。」



「アニキ、指示をくれ。アンタについていくよ。」

「……あの時、財布、ごめんなさい。」

そのスキルはなんてことのないものだ。

ただ、その力を向けた者の脳裏に、当たり前の日々を思い出させるだけの力。

”王国”の王家に連なる彼女の血に、何故そんな力が芽生えたのか、今のなっでは分かるはずもない。

だが。

「キミを幸せにするキミだけのさいきょーに賢いドラゴンさ」

「ナルヒト、貴様、ほんに大バカだの」

だが、今、この瞬間。

全部を選ぶ為に、全部を捨てた遠山鳴人にとって、これは、”その日々”はあまりにも重く、残酷で。

「あ、あ、ああ……」

身体からキリヤイバが出てこない。

殺せ、殺せ、その言葉も出てこない。

『フフ、ダサイ、か。ネエ、どんな気持ち？　ねえ、死ぬ覚悟をしていたのに、思い出しチャッタねえ……　ふふ、あなたは私と言っただけど、本当にそうかな？』

くねくね、愉快そうに、固まる遠山を見下ろす白蛇女。

ふっと、彼女が表情を、消して。

『私には、そんな”日々”はなかったよ』

「あ、あ……」

ダメだ。

手が震える。死、死、死。一度は決めたのに、現代ダンジョンあの時は出来たのに。

遠山鳴人は、思い出してしまった。そのたのしい日々を。短くとも、温かさ喜びに溢れていたたのしい異世界での日々を。



『ようやく、笑わなくなったね』

「ジャロ、じゃロロロロロロロロロ」「」「」「」

「あ」

『これから、あなたは死ぬの』

白蛇女が、嗤う。

大蛇たちが、ゆっくり、ゆっくり、木に体を預けたままの遠山に近づき始める。

「い、やだ」

『嫌じゃないの。ふふ、どうしたの？ ほら、早く、さっき自分ごと全部殺そうとしたんでしょ？ どうせ死ぬなら道連れにしようとしたんでしょ？ ほら、もう一回やりなよ』

それがもう出来ないことを白蛇女は知っている。

「は、はあ、はあ、いやだ、来るな」

身体が痺れている。動かない。

日々。遠山が積み重ねたものが、遠山の選択肢を奪ってしまった。

逆転のチャンス、遠山の出した自己犠牲という答えはもはや踏み躪られた。

「ジャロロロロロロロロロ、シュロロロロ」

『怯えて、絶望して、想像して。これからあなたはどうしようもない苦しみに殺されるの。何も守れず、何も得ず、全てを奪われて踏み躪られる。アア、海はとても深いから、仕方ないノヨ、これは順番なのダカラ』

答え合わせの時間が、終わる。

あの日を超えるどころか、あの日出来たことすら出来ずに、終わる。

「いやだ、いやだ！　せつかく友達ができたのに！　また、また死ぬのは嫌だ！　まだ、やりたいことがたくさんあるんだ！」

『私もそうだったヨ』

剥き出しの本音。酔いもなく、ただ、剥き出しのちっぽけな生き物としての遠山の嘆きを白蛇女がぼそりと返した。

怖い、怖い、怖い。

全部怖い、なんだよ、蛇デカすぎだろ、どうやって殺される？  
絞め殺されるのか？ 食い殺されるのか？ いやだ、全部、嫌だ。

恐怖が、完全に遠山に追いついた。

遠山の変質した脳は、遺物の連続使用により消耗し、”酔い”を  
もたらすことはない。

「ジャロ、ジャロジャロ」

「ひ、ひ、いい。やだ、まじで、やめて、死にたく、ねえ、死にた  
くねえよー!」

ばちや。



痺れの取れない体で、ついに遠山は逃げ出す。背中を見せて、立ち向かうこともできずに。

『ウフフ、あらあら、エモノに、なっちゃった』

もうそこに、先ほどまでの冒険者としての遠山はいない。

惨めに濡れた地面を這いつくばり、逃げ出す獲物に成り下がった。

「シャロ」

「あ……」

逃げれる訳はない。這って逃げる遠山に小さめの大蛇が追いついた。

まだ、若い個体なのだろう。遠山2人分程度の大きさだ。

『想像して、今からあなたはその子に巻き付けられるの』

白蛇女の言葉に反応するように、ティタノスメヤがゆっくり、遠山の周りを囲むようにとぐらを巻き始める。

遠山の視界にはもう、蛇の身体しか映らない。

『想像して。その子に巻き付かれたあなたはゆっくりゆっくり締め付けられるの。骨、筋肉、内臓、ゆっくりゆっくりゼーンぶ絞り出すように潰されるの』

それは白蛇女の記憶にもある話だ。これから遠山に起こることを楽しそうに話す。

徐々に、徐々に、遠山の身体にティタノスメヤの身体が絡み付いてくる。ひんやりとしていた。

『それから、それからね、フフ。全身を潰されても、まだ意外と意識はあるの。そこからゆっくりゆっくり飲み込まれていくから。フフ、窒息できたらいいけど、今回はそうしないように食べてもらうから、ゆっくり楽しんでね』

ぎゅち。

ああ、気付けば、遠山の身体は完全に蛇の身体に巻きつかれていた。

死ぬ、死ぬ、喰われる。リアルが遠山に追いついて。

「あ、あ、ああアアア！？ いやだ、嫌だ！ 嫌だ嫌だ！ 離せ、離せええええ！！」

めちやくちやに暴れる、しかしなんと弱い動きだろう。

もう身体の半分以上に巻きつかれてしまっている。ピクリともしない。

『あは、げんき、元気、ゲンキ』

「ジャロ」

「ギヤっ?! げ、フ」

きゅつと、テイタノスメヤがその体を締め付ける。それだけで遠山は短い悲鳴をあげてぐったりと動きを止めた。

3675

激痛と、圧迫感。

脳が、破裂しそうだ。

今、死がすぐそこにあつた。

後悔や反省、ソレらは今回の”死”の前になく。

「く、そ……」

ああ、遠山は気付いた。

前回と今回は違う。

現代ダンジョンの死、あれはしかし、遠山は勝ったのだ。化け物の群れを引きつけ、親玉を撃退し、仲間を逃した。それは遠山の勝利だ。

でも、今回は違う。

負けだ。全て上回られた。

ラザールやストルはきつと、この森に戻ってくるのだろう。他でもない自分を探して。

それは負けだ。コイツと仲間を会わせてはいけない。化け物の中

の化け物だ。

これは、ダメだ。

でも、もう遠山にはどうしようもない。

ピロン

【DEADクエスト】 答え合わせの時間” このままでは失敗します。よろしいですか?】

「……クソが、宜しいわけねえだろうが」

鬱血して赤く染まり始めた視界の隅で、メッセージが流れる。

あの日を超える。そんなメッセージどころの話ではない、しくじ

った。

負けたのだ。それだけはわかって。

『フフ、もう話もできないか。……ジャアネ、たのしかったよ。もしまた会えたら、貴方が私のように慣れたら、またお話ししよう』

白蛇女が、群れの中に消えていく。

大蛇達が歌うように、空に体をもたげて揺れ始める。

「ジャロ」

ギユギユツ。

遠山にトドメを刺そうと若いテイタノスメヤが、その筋肉だらけ

の身体に力を込めた。

ぼきん、ぼきん。

身体の中、何本も何か折れ始める。それだけがわかった。

「あ、これ、死んだわ」

生き物として、遠山は、遠山の身体はそれを理解した――



ピロン。

【食べられるってのはさ、生き物にとって最大の恐怖なわけよ、それはどの生き物も1番恐れる死に方なの】

ぺらり。本を捲る音がした。

【鳥が空を飛ぶのは地上にいたままでは、捕食者に食べられるから、魚が速く泳げるのはトロイ奴はみーんな食べられるから】

【生物の進化はいつも”死”をきっかけにしてきたわけ】

香ばしいパンの香りと本のいい匂いが混じった香りがする。

【遠山鳴人。よかったじゃん。アンタはきちんと”巡り会っていた”、そして少なくともアレに、”遺物”に選ばれてるわけ。そして幸運なことに、アンタはきちんと、”準備していた”わけよ】

それは、メッセージではない。

【アンタには悪癖があった。その力を使って最悪、自分ごと死ねばどんな敵も殺せると思ひ込む悪癖が。それはね、人間としては良い選択だけど、”生物”としては良くないのよ。純粹な進化の可能性を、自分から諦めているようなモンだからさ】

声だ。

【アンタは、”遺物キリヤイバに選ばれている”、アンタが遺物を扱うのは鳥が空を飛ぶことや、魚が海を泳ぐのと同じ。生きる上で出来て当たり前のこと。息を吸って吐くのと同然なほど、出来て当たり前のこと。

と、つまりそれはアンタの生物としての機能に等しいわけよ【】

その声を知っている。

【知識の眷属、ハーヴィーの名において】

それは、遠山の夢に住む灰色髪の女の声だ。自らを知識の眷属と呼ぶ奇妙な存在――

3682

【祝福するわ、この世界では最早あり得ない筈だった”ホモ・サピエンス 本当の人間”の進化を】

【感謝するわ、新たな知識の誕生の瞬間に出会えたこの巡り合わせに】

気付けば、世界が止まっている。

恐怖のあまり頭がおかしくなったのか、それともこれが走馬灯という奴なのか。

そんな疑問もお構いなしに、頭の中でハーヴェイのどこか興奮したような跳ねる声が響いて。

【き<sup>死</sup>っかけはここにある】

【さあ、思い出さない、遠山鳴人。”霧の夢”で貴方が得た可能性を。あのおぞましい存在、それをすら封印する古い霧の神の権能を、アンタは既に機能として扱える筈】

ああでも、何故か。遠山はすごく、すごく。

【さあ、進化の時よ。遠山鳴人<sup>冒険者</sup>】

安心した。

どくん。

心臓が鳴った。

血が巡り始める。

「ジャロ？」

ティタノスメヤが、獲物の異変に気付いたらしい。さらに締め付ける力を強くしようとした瞬間。

「……ゲホ。パワーアップイベントが、わかりづらいんだよ」

ばしゃり。

バケツから水が溢れるような勢いで、テイタノスメヤの身体が弾けた。

血が飛び散り、どさりとその身体に包まれていた遠山が解放される。

「ジャ……ア」

「ゲホ、ゲホ。……あー、くそ、頭痛えし、怖いし、本当に最悪だ」

べちゅ。

それでも立ち上がる。身体は満身創痍。だが、今遠山には先ほど

まではなかったものがある。

『あら？ フフ、すごい、まだ立つの？ もう諦めたと思って「少し、ほんの少しだが、お前に感謝してる」

白蛇女の言葉を遮り、遠山が言葉を連ねた。

『……………なんのこと？』

「お約束だよ。ああ、お前は本気で俺を追い詰めてくれた。本気で俺に恐怖を植え付けてくれた」

『追い詰めた？ ねえ、本気で言ってる？ それどころじゃないよ？ 貴方のキリでは私たちを完全に滅ぼすことは出来ないじゃない。それとも他に何かあるの？』

「さあ、ある、らしいぞ。……もつごちやごちや考えるのはやめに  
するわ」

濡れた土を遠山が掬いとり、髪になすりつける。ワックス代わりに  
にしたそれで髪をかきあげて、その鋭い目を露にした。

『……みな、疾く殺せ。何か、おかしい』

白蛇女が、今までにない低い声でティタノスメヤ、彼女の種族に  
令を出す。

一斉に、大蛇達が遠山鳴人に濁流のごとく押し寄せて。

しゅしゅしゅしゅ。

それは、平野に溜まる霧なれば。



瞬く間に、周囲を真白に染め上げる。

濃すぎる白は、濃い黒と何も変わらない。全てを塗りつぶし、閉じるのだ。

『どっ！どっ！……?!』

「ジャロロロロロロロロロロロ?!」

「シユラ?!」

優れた感覚器官と、熱源を探る器官を持つ大蛇、そして白蛇女が同時に、遠山の姿を見失なった。

『これは……何かおかしい』

とぶ。

触れればそんな音がする、それほどに濃い霧だった。それが大蛇の群れ、全てを飲み込んでいて。

白蛇女はすぐその場で、地中への避難を試みる。自分さえ生き残れば大蛇達はまた再生する。

この霧の力を把握している彼女にとって、それは当たり前前の選択で。

「あー、えつと。なんだっけ。くそ、痛みで頭が回んねー。待てよー、整理する。要はアレだ、遺物だ。キリヤイバが進化にどーたらこーたらってことだよな」

白い霧、濃いキリの中から遠山の声だけが響く。

どこにいるかもわからぬキリの主人、しかし、キリの向こう側から確かに響く。

「あー、うん、進化、進化、進化。あー、待てよ、そういえばあのお札マツチヨがキリヤイバの真の力がどうのこうの言ってたよな」

「あ、そうだ。思い出した、なんか夢で遺物のなんたらかんたらが、どうのこうの言ってたな」

それは化け物からしても、不気味な時間だった。

独り言だ。完全に誰かに聞かせるつもりはない心の声だもれのセリフがただ、キリの中から響き続けるのだ。

まるで、その霧、そのキリ全てが――

『なんの、ッモリ？ どこに、隠れたの？！』

白蛇女が叫んで。

「よし、わかった。多分、これだな。ハーヴェイが言っていたのは」

と。

ゆっくり、ゆっくり。

濃い、液体のごとき霧に人の形が浮いてくる。

どこかに”溶け込む”ように消えていた遠山鳴人が再び現れて。

『あなたっ、どこから？！』

【それでいってこと。 やっちゃんよ、 そんな化け物なんかさ】

遠山鳴人はいくつもの、クエスト・BADエンド好きマーカーからの試練を乗り越えてきた。

遠山鳴人は既に、その報酬を”霧の夢”から受け取っていたのだ。

ぶしつ、首元から欠けたヤイバを引き抜いて。

「遺物」

”遺物” 人の可能性、人の位階を上げる力。遠山もまたそれに選ばれている。

「霧散」

それは、現代において、いずれある星の如く輝く”英雄”がたどり着く領域。

遺物への理解、いや、”遺物への侵食”

「キリヤイバ」

出来ると思えば、出来る。行くところまで行かなければ得られない力もあるのならば、遠山は欲望のままに、進むだけ。

「  
”オーバーロード  
拡大解釈」

70話 DEADクエスト・・・・・・・・（後書き）

お待たせして申し訳ありませんでした！

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください  
さい！

感想お待ちしてまーす。



71話 かしこみ、かしこみ、奉る

「拡大解釈ー」

それは、遠山鳴人の報酬の一つ。

夢の中に住まつきみのような存在、顔に梵字だらけのお札を貼られた巨漢。

お札マツチヨ。その権能が今ここに。

ああ、頭に響くのはお囃子の音。夏祭り、秋祭り、遠い昔より二ホンに住む人々は、自然の中に”それら”を見出し、恐れ畏れて敬った。

お囃子お囃子お囃子お囃子お囃子お囃子お囃子お囃子お囃子お囃子お囃子お囃子お囃子お囃子お囃子お囃子

子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子  
子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子  
子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子  
子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子  
子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子  
子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子お囉子  
子お囉子お囉子お囉子お囉子。

「ああ、なんか聞こえる」

探索者の”酔い”には大きく分けて2種類の酔い方がある。酒と同じ、どんどんテンションが上がり続けるアップ系と、自分の世界に沈み込んでいくダウン系。

遠山鳴人は後者のタイプだ。今、己に起きつつある異変を、ただ、静かに受け入れる。

お囉子に混じり、届く言葉があった。祝いの言葉。

あとはただ、それを紡ぐだけ。引き金に指はかけられて、安全装置などとうの昔に消えていた。

世界のどこかで、お札を貼り付けられ戒められ、縛られたソレがニヤリと嗤う。

ーっ、か、え

遠山が、頭に届く言葉を、声に。

「かしこみ、かしこみ、奉るー」

しゃらん、鈴が鳴る音がした。

遠山の背後に広がる乳白色の濃いキリが蠢く。

「たかあまはらよりかみづまり墮ちし、山野と平野にたまる霧。彼方と此方を隔てる霧よ、御宝を己が姿と変じたまいて今ここに」

頭に響く祝いのことば。誰に教えられることもなく己の内側から湧いてくるそれを遠山は紡ぎ続ける。

ぐねり、ぐねり。霧の向こうに何か蠢く。遠山が一步進むそのたびに、その霧が世界の決まりを歪めていく。

「一切衆生、つみけがれ。よろづ世界のその全て。あまねく揺蕩う魂すらも、喰らい尽くして霧の中」

キリヤイバ、魂喰らい、お札マツチヨ。

必要なピースは全て揃っている。遺物所有者、遠山鳴人にと必

要なものは、イメージときっかけだけで。

「神”のますます此の夢よ、今、うつしよに疾く参れ」

湧き上がる言葉を、止めて。

「汝が、”主人”の命以って荒振神等の業により安国すらも最早無し」

にいいいと、口を吊り上げた。

「かしこみ、かしこみ、奉れ。一切全て、たてまつれー」

『……な、に、それ』

オオオオオオオオオオオ、オオオオオオオオオオオ、オオオオオオオオオオオ  
オオオ。

吹き荒ぶ風の冷たいことよ。その嘆きのなんと、深く哀れなこと  
だろう。

ああ、霧の中に、霧の中に。

《ア、ア》

《オレ、シンデ、ナイ》

《ア、アア、ナニ、コノ、キリ…… アア》

《チクシヨウ、コノオレガ、チクシヨウ…… セツカクサンカイメ  
ノチャンスガ……》

《ジュロロロロロロロ》

《シャロロロ》

キリの中、遠山の背後に広がる濃いキリの中に蠢く。それら全て、  
遠山鳴人の殺意の前に散り、そのキリに魂を喰らわれた者たちが。

人、人、人、蛇の化け物。キリの中に彼らは、いた。

キリが、彼らの形を象って。遠山鳴人の背後に侍る。

プシッ。遠山が、首から欠けたヤイバを引き抜いて。キリを纏う  
それを逆手に構えた。

「キリヤイバ・拡大解釈・オバーロード 魍魅魍魎狭霧山野絵巻物語”ちみもつりょう なぎりさんやえまき ものがたり」

《「「「オオオオオオオオオ」」」》

これが、遠山鳴人の進化。行くところまで行った遺物の真の力。

どこにもゆくことのない、輪廻に交わることも最早叶わぬ”魂”  
達。

平原に溜まる霧、山に広がる霧。その中に混じるのはキリヤイバ  
が殺した者の魂そのもの。

キリが魂にまとわりつく、キリが魂より肉を象る。



「ああ、今わかった。キリヤイバ。ぜんぶ、わかったよ」

遠山が目を見開き、手で顔を覆う。溢れる笑いが抑えきれない。

「ぜんぶ、ぜんぶ。ああ、全て、連れて行く」

身体が痛くない、吸い込む空気が冷たく、息をするたびに火照った身体が青色になっていくような感覚。

「サウナ、入った後みてえだ……」

空気が冷たく、心地よい。

酔いが、戻る。もう恐怖も、苦しみもない。今この瞬間、ナニも不安もナイ。

仲間のことも、自分の命のことも、全て思考から消えていく。

今はただ、全てが。

「気持ちいい」

両手を開いて、空を見上げる。乳白色の帷が辺りを包む。その全てが遠山鳴人の力の下に。

遠山は力の使い方を理解した。

鳥が空の飛び方を知るように、魚が水の流れに乗るように、人が誰に教わることなく二本の足で立とうとするように。

『  
気に入らない、気に入らない、気に入らない。  
ナニ、コレ。ナニ、  
ソレ』

白い蛇の女、黒目しかない瞳で、霧の幽鬼を従える男を睨む。

彼女の怒りと恐れに呼応し、大蛇たちが体を震わせる。

遠山めがけて、同時に5匹の化け物が襲いかかって。

「さあ、行くつや」

「シャロ?!?!」

「ジャ……?!」

遠山は、一歩たりとも動いていない。ただ、静かにその細い目を歪めて笑うだけ。

なのに、大蛇たち、そのどれもが遠山に触ることすら叶わず。

「アアア」

「オオオオ」

「シャロロロ」

キリの人、大蛇の目を射抜いていた。

キリの大蛇が、大蛇の首元に噛み付いていた。

キリヤイバ・拡大解釈・魑魅魍魎狭霧山野絵巻物語

その遺物現象、

「ヒヒヒヒヒ」

「キリヤイバにより蒐集した魂、その支配と使役”

『ナニ、ソレ……』

「覚醒イベントだ」

おぞろ、おぞろ。

うぞろ。

もう1人ではない、もう多勢に無勢ではない。遠山の背後の霧からキリから、蠢く人影、化け物影。

真白の仮初の肉体を纏いて、霧の中から次々に現れる。今にも解けそうなキリの肉体はしかし、確かにその魂達の生前の姿を象る。

「今思えば、この世界にきてまあ、殺しも殺したり。現代だと確実に過剰防衛で、有罪判決だわこれ」

遠山にひざまずく、キリの人間たち。彼らを見下ろすとその顔に見覚えがある者もいる。

あのスラム街で、皆殺しにした”カラス”の連中、西門で始末した門番達、絡んできたので処理した冒険者たち。

「アアアア……」

「ウウウウウ」

死してなお、キリヤイバに殺され喰われた彼らはどこにも行くことはなく。幽谷に吹き荒ぶ風のようなうめき声をあげるだけ。

「よお、久しぶり。早速で悪いが仕事の時間だ。クソ野郎ども」

今こうして、遠山の道具と成り果てた。

遠山が欲望のままに邪魔者を始末すればするほど、その霧に潜む

魑魅魍魎は増え続けるのだろう。コレはそついう業であり。

『ア、アア…… そ、そいつ、ソイツ、ヒ、イヤ、なんで、ヤダ……  
… なんて』

白蛇女が突如、怯え始めた。

遠山の周りに侍る何人かのキリの男を見て体を震わせる。

「あー？ まあいいや、チャンスだな。さて、魑魅魍魎ども、全武装制限解除、殺してこい」

特に白蛇女が怯え始めた理由を考えることもなく、あっけなく遠山は始めた。

「オオオオオ！！」

「アアアアア」

キリが広がる、霧もやのヒト影がそれぞれ武器を握り、大蛇達の群れに襲いかかる。

「シャロロロ!!」

「ルルルルル!!」

統率者たる白蛇女は精彩を欠き、何かをぶつぶつ呟き続けるだけ。

大蛇たちはそれぞれ、キリの魑魅魍魎たちを迎え撃つ。

「蛇ども、ニンゲンたちを乗せる」

欠けたヤイバをひゅぱり、遠山が指揮棒のように振るう。幽鬼の如く虚な彼らはその主人の指示に従順に従う。

「アア……」





虚な眼窩のキリのヒト。各々が握りしめるのは生前から愛用していた武装達。文字通り、魂に焼け付いたそれは、肉体が減び、魂を喰らわれてなおこびりついて離れない。

それらが、剣で、弓で、槍で、大蛇を囲み、その肉を抉り続ける。大きな尾で潰されようが、締め潰されようが関係ない。

霧が身体にまとわりつき、潰れた部分を直していく。既に彼らには、”死”すら終わりたりえない。

「良い、そのまま殺し続ける。死んでも動け。動き続ける」

遺物への解釈。遠山は使用を続けると同時にそれを更に深めて噛み砕いていく。

キリヤイバ、それを手に入れた瞬間、名前が頭に響いた。

キリヤイバ、霧を生み出し、その霧を極小の刃に変えて敵を外側と内側から切り刻む兵器。

今まで、遠山がキリヤイバへ向けていた認識はそれで終わりだった。だが、

「続きがあった、もっと、もっと見せるキリヤイバ。お前はナニができる、深める、見つめる、遺物への理解を、解釈を」

解釈を、拡大していく。

——美味しい。人の痛みを知らん獣にも劣るヒトの魂はこの軽薄な味がたまらんのよ

霧、キリ。あの夢の中、お札マッチョは”魂”を食っていた。

——【キリヤイバによる”魂喰らい”が発動しています】

あの時、市場で絡んできた奴らを始末した時も。キリヤイバで殺したヒトの魂が流れ込んできた。

霧、キリ。ああ、そうだ、そういえばあの時も、タロウがいなくなつたあの日も、霧が目の前に広がって。

「……そうだ、霧は全部覆い隠す。その中に閉じ込めて、外からなんも見えなくなるんだ」

これまでの全ての冒険、それは全てこの解釈に繋がる。

己の霧に対する解釈がどんどん深くなっていく。

真っ白に澱み、そこに溜まる。その中に潜むものを覆い隠す霧。

霧と魂。

遠山鳴人が、キリヤイバへ向けた新たななる解釈。

「霧は、”全部保存する” ああ、全て俺のもんだ」

【解釈確定 未登録遺物”キリヤイバ”による事象改変が確定しました】

メッセージが少し流れて、すぐ消える。

解釈を一致させ、それを認識した遠山は更に遺物の使用精度を上げていく。

『あ、あああ、やだ、そいつら、こないで、そいつらを近づけさせないで、お願い……っ』

「おっと、自分の世界に入り込みすぎてたわ。続けようか」

白蛇女の金切声に、遠山は前を見る。

魑魅魍魎が、蛇の大群と分け入り交わり、おおいくさ。

数に勝る不死の大蛇たちも、しかし、不滅の霧の魑魅魍魎に徐々に押され始めている。

「ひ、ヒヒヒヒヒヒ、そうら、そうら。死なないんだろ？ 滅ばないんだろ？ ああ、いいじゃねえか。再現してやるよ、地獄の釜底の光景をよ」

槍はなく。しかし、遠山の腰のベルトにそれはある。

無骨、鈍重。それに刃はなく、鋭くもない。

されど、確実に、何度も何度も振り下ろせば敵の生命を奪うことのできるもの。

おそらく、”ニンゲン”が初めて手にした他者の生命を奪う道具。

鈍器。柄の先には刃ではなく、棘の生えた球根のような鉄の塊が。

変哲もない、ドワーフの”工房”で安売りされていたメイスを構えて。  
鉄の棍棒

左手に、欠けたヤイバを。右手には片手槌を。

「遠山鳴人、探索、いやー」

どうしようもなく、唇が吊り上がる。”死”の危険を乗り越え、進化した人間が闘争の予感、それでもどちらが生き残るかわからない挑戦に、笑う。

それは幼い頃にもふもふの友と夢見た瞬間。

「ぼっけん」 開始

『ア、アアア！！ 笑うな、笑うなあ！！ みんな、アレを、アイツらを、皆殺せっ！！』

「ジュジュジュ」

込み上げる笑みを抑えることもなく。そのり、遠山が姿勢低く駆けける。

「シャロロロロロ！！」



大蛇が、遠山に気付く。口から生えた腕を叩きつけようとして

「今、やれ」

《ジャ□□□□□□□□□□》

ぬめり、遠山と大蛇、その間を隔てるようにキリが渦巻き、蛇の形となる。

魑魅魍魎、その全ては主人たる遠山の意味で出現させることが出来る。

大蛇とキリの蛇、互いに巨体を絡ませ合い、殺し合う。血が飛び散り、キリが碎ける。互いに不死、不滅。ならば争いは止まることはなく。

《ア、ア、オオ》

《ひ、ひ、ヒ》

虚なキリの人が、キリの蛇の頭に乗っかり、手近な大蛇を襲っていく。

どの大蛇も遠山鳴人に構っている暇がない。霧が、大蛇を殺し続ける。

ティタノスメヤの大群、本来であれば生まれるはずのないこの群れはもはや一介の冒険者の手には余る存在。

帝国の軍隊か、塔級冒険者のチームで対応すべき、”モンスターハザード”に数えられるだろう。

『あ、ア、嘘、うそ、なに、この数………』

だが、今やその”災害”が”霧”に飲まれつつある。

《ヒヒヒヒヒ》

《~~~~~》

《~~~~~》

《~~~~~》

お雛子の音と共に鳴り響く、笑い声。主人のそれが魑魅魍魎達に広がっていく。

キリに切り刻まれ喰われたヒトも、蛇もみーんな笑う。

笑いながら、殺していく。

『あ、やだ、ヤダ。やめて、皆を…… あああ、なんで、笑って…

…』

「たのしいからに決まってんだろ。そして、ようやくたどり着いたぜ。今回は、さっきと比べてだいぶ簡単だった」

『あ、うそ、もつ……?』

彼我の距離は、もはやない。大蛇の群れは魑魅魍魎のキリの群れと食らい合う、故に遠山鳴人を遮るものもなく。

眼前、白蛇の女。その緑髪、白い鱗、しなやかな身に、蛇の体躯。

その全て、冒険者の獲物にて。

『……』

白蛇女が、黒目しかない目を見開く。生命はみな、理解できない存在を恐れるものだ。

先ほどまで、その男は獲物だった。髀って、尊厳を奪い尽くして、その骸をさらしてやるうとしていた。

なのに、今は、今や、もう。

「ヒビヒビ、タイムンいいか？」

獲物ではない、天敵でもない。捕食者でもない。

ただ、恐ろしい。他者を害すことに笑顔を浮かべるその男は――

『ぼっけん、しゃ……』

「キリヤイバ」

ひゅば。欠けたヤイバが振られる。目に見えぬ斬撃効果も健在。薄く速く、真白のキリが白蛇女の鱗を捕らえた。

『アッ?! イヤ、ア!?!』

血が、流れる。赤い血だ。ぼた、ぼた。ぐちゃぐちゃの泥の地面に血が混じる。

ヒトの身体の胸から腹にかけて、キリのヤイバが突き立った。

『イタイ、イタイいいい?! あ、アアアアア』

白蛇女が、身を悶えさせ地面に潜ろうとして――

「かしこみ、かしこみ。疾く参れ。汝が主人の令である」

キリヤイバ・拡大解釈・魑魅魍魎狭霧山野絵巻物語。

使ったびに、洗練されていく。イメージ、解釈。遠山の中で己の”霧”に対する解釈が更に広がる。

それは、気付けば満ちているものだ。予兆もなく、山野に霧は満ちていく。

《ジャ□□□□□□□□》

《ジュ□□□□□□□□》

『あ、ガ?! あ、アアアア?! なん、で、どこから?!』

地面に潜ろうとした白蛇女の動きを、2匹の霧の蛇が絡み付いて止めた。そのキリの蛇たちは地面から生えるように現れた。

「霧だ。どこにでも現れる。もう、地下だろつとなんだろつとお前を逃したりはしねえ」

『え』

遠山鳴人の足元から、キリの蛇が現れる。その頭上に飛び乗り、ひとつ飛び。

キリの蛇に絡まれた白蛇女と、遠山鳴人の視線が同じ高さに揃って。

「ぶん殴って、殺す」

がつ。跳ぶ。振り上げるのはメイス。大上段に構えたそれを落下の勢いで振り下ろす。

「アアアアアアアアアア！！！！ 死ねエエエエエエエエ！！！！」



『あ、あ？？？』

ほぎゅ。

白蛇女がすんでのところ、蛇の身体から腕を生やす。あまりにも細いそれがメイスの一撃を受け止めて、枯れ木のように折れた。

「もういっちょよ！」

メイスで殴った反動、一瞬、遠山の落下のエネルギーと反動のエネルギーが等価になる。

ふわりと生まれた一瞬の浮遊、それを遠山は見逃さない。

左手に持った欠けたヤイバ、キリヤイバを白蛇女の肩口に突き立てる。霧に響く金切声に笑いを向けて、かけたヤイバをそのまま支えに、落下する。

ぞり、ぞりりりり。

えぐれるえぐれる、白蛇女の鱗がめくれて、皮が破けて肉がえぐれる。

『あ、が、かふ……』

血を吐いた。

読み通り。やはりこの白蛇女、弱点は人間部分だ。

白蛇女の腹のあたりでキリヤイバのヤイバが食い込み落下が止まる。

遠山が腹に力を入れて、キリヤイバを握る手に力を込める。

「終わりだ」

必殺の条件が揃った。キリは充分に広がり、ヤイバはその肉に突き刺さった。

キリヤイバの直刺し。身体を中身からどつしよつもないほどにぐちゃぐちゃにする使い方。

それを敢行しようとして。

ぞわり。

気付いたのは、たまたま。酔いで感覚、とりわけ殺意に敏感になつてたおかげか、はたまたまた新たな力を使うことにより、一種のゾーンに入っていたおかげか。

3730

【知識の眷属・ハーヴィーからの手助け】

【ちょ?! 嘘でしょ?! ヤバ! ”秘蹟の継承”が起きてるじやん! アンタホモ・サビエンス

が進化したから、あの化け物ヒトも当てられてる感じ!? てか、アレ、苗床の血族じゃん!! ヤバいのくるからなんとかして!!】

「ッ！？ キリヤイバ！！！！ 集まれ！ 固まれ、壁になれー」

『秘蹟・継承』

白蛇女の傷口から、青い光が漏れる。その光が全てを塗りつぶしていく。

それは指向性を持ち、一気に遠山鳴人へ向けて放たれ、霧に沈む森に、青い光が迸った。

「ぐえっ、うお、ギャッ」

「ごろんごろんごろん。ぐちゃぐちゃの泥の地面を遠山が転がる。光の奔流に吹き飛ばされたのだ。」

反射的に、そしてハーヴィーの警告通りに瞬時に防御体勢を取った遠山、一瞬で霧の魑魅魍魎を自分の前に盾として集めたおかげで、身体のところにも傷はない。

『ア、ア、アア、今の、光……』

「おいおいおい、マジかよ」

【警告 秘蹟・”王の光剣”により、キリヤイバが蒐集していた”魂”達が消滅しました】

だが、今の一撃。青い光はその一瞬で、霧の魑魅魍魎達を消し飛ばした。白蛇女の動きを止めていたキリの蛇も消え去っている。

青い光、特別な血筋の者、王の血に連なるものに連綿と受け継がれ発現するその才能は、魂すらも消し飛ばす光。

遠山鳴人は、知らない、知る由もない。海を隔てた異なる国、王の国で何が起こったのかを。

”幸運”と”英雄”により、王の国は堕ちた。王家に連なる血もそのほとんどが始末された。その中には王の光剣の正当保持者も含まれる。

『ああ、青い、光。なんでだろう、とても懐かしい……』

今、その秘蹟の保持者は空席だ。追い詰められた白蛇女の”血”

が、王家の青い光の苗床となる。

「この世界の”ヒト”に備わる機能、秘蹟・”王の光剣”は新たな苗床を見つけた。

『兄上、上姉様、ああ、みんな、そこにいるのね…… フフ、ああ、そうなんだ。ずっと、ずっと、最初から、私の中に皆いたのね……』

ずっ。

白蛇女の蛇躰から、腕が生える。4本の腕、端くれたつそれが遠山のつけた傷口をまさぐる。

血の代わりに、青い光が漏れ続ける。4本の腕が傷口の中から何かを引きずりだして。

『生きる意味、私が生きる意味なんて、ずっとずっと、私の中にあったんだ』

青い光の剣。白蛇女の腹の中からそれが引き抜かれた。

王の光剣は、今確かに貴き血から、貴き血へと継承されて。

「いや、そういうセリフって気持ちの問題であって、ほんとに自分の中からなんか引きずり出す奴があるかね」

冷静にツツコミしつつ、遠山は周囲を確認する。蛇の群れはそのほとんどが魑魅魍魎達により殺し尽くされた。そして、霧の魑魅魍魎達も、青い光によって消滅させられている。

依然、タイムマン。

青い光剣の戦力未知数、しかしたしかに感じる圧力。これと似たものを遠山は知っている。



ドラ子、人知竜、執事のジジイに、あのエルフ。

遠山が今まで出会った超越者達から感じていた圧力ととても似ていて。

大きな剣の形をした、青い光、白蛇女がそれを構える。

「ジュロ」

「ジャロロロロ」

そして、当たり前のごとく、蛇の群れが再び再生し始める。不死の鱗を持つ彼ら、種の到達点である白蛇女が滅ばぬ限り、その群れにも終わりなく。

『ぼづけんしゃ…… あなたを、殺します』

「ヒビヒビ、今更だな。だが、どうした？ 急にヒトの顔に戻ったな」

青い光剣を手にした途端、白蛇女の様子は変わっていた。悲劇と怪物の血により失っていた人間性、佇まいでわかる、それを取り戻し始めていることが。

『……やらなければならぬことに気付きました。自由にすると決めたのです。あなたの霧も、もはや全て晴れました。光は、深い霧を払うのです。私は私のなすべきことをー』

「違うな」

はっきりした言葉で喋る白蛇女、彼女の声を遮って、遠山が言い切った。

「解釈違いだ、白蛇女。霧は、何度でも、現れる」

キリヤイバにより現出していた魂達、そのほとんどは青い光によって焼き払われた。

遠山に侍る魑魅魍魎達は、現れることがなく。

『であるならば！ 何度でも！ 王家の光があなたの霧を払うまで！ そこをどきなさい！ 冒険者！』

構えるは、光。魂すらも焼き滅ぼす王家の光。

白蛇女も、またその特別な血の運び手、ならば光の繰り手としての資格は充分にあった。

『秘蹟・継承！』

”イン・ライト 王の光剣』

秘蹟の最大開放、再びその光が放たれようとして。

「厄介な奴がいた。ソイツは特別な才能を持っていた。自分の近くに、自分と同じ分身を生み出して、替え玉にする、ほんと厄介な力だな」

ふわりと、白蛇女の頭上でキリが舞った。

それは瞬く間に、ヒトの形を象る。

青い光によつて、消し飛ばされたはずのキリのヒト。ソイツだけは例え”一度死んでも、次がある”

なぜなら、生前のソイツには2回のチャンスが許されていたから。

「ソイツ・チャンス双子達のチャンス」

《ツインズ・チャンス双子達のチャンス》

遠山と、霧のヒト、同時に同じ才能の名前を呟く。

わぐ。

『アッ?! なんて、全部、消しとばして……』

頭上からの不意打ち、キリのヒトが振り下ろしたナイフが白蛇女の首後ろを抉った。

「カラスのクソ野郎。名前も知らない胸糞悪い奴だった。だが、もう、俺の道具の一つだ」

彼は、遠山鳴人に討伐された者の1人。スラム街で人知れずキリにより切り刻まれ、その魂を貪られた被害者の1人。

遠山は彼の名前を、ワイズマン・ボラーの名前すら知らない。

だが、それでも、その霧が”保存”するのは殺害したものの魂。そしてそれにこびりついた才能、

”スキル”さえも支配と使役の対象ゆえに。

『ぐ、ア、なめ、るな!!』

《アー》

ぼしゅ。

白蛇女が、肩に取り付きナイフを滅多刺しにしていた霧のヒトを青い光剣で貫いた。

小さな悲鳴をあげて、その魂が消滅していく。

『あは、アハハ、少し驚いたけど、コレで終わり』

青い光が、天を貫く。掲げるは、王家の光、高貴なる選別された血にいつく秘蹟。

かつて、英雄や勇者の力とも比べられた王家の敵を魂ごと滅ぼす光が霧に澱む空を貫いた。

それを向けられれば今度こそ、遠山に防ぐ手段はないだろう。魂ごと、焼き滅ぼされて。

「いや、だから、言ってるだろうが。違ってるよ。」

双子達のチャンス。それでもう時間は十分に稼げた。

『…………え？』

青い光を掲げたまま、白蛇女が動きを止めた。

「これは、俺の覚醒イベントだ。お前の番じゃねえんだよ。」

見れば、大蛇たちも皆一様に動きを止めている。



動けない理由を白蛇女はすぐに理解する。

びく、びく、びく。

身体に至るところが震えているのだ。あとは、その青い光の剣を振り下ろすだけ、なのに、それが出来ずに。

ピコン。

【DEADクエスト 答え合わせの Time for 時間 answering  
あの日、仲間たちの為にお前が選んだ自己犠牲。その正誤を確かめる時がきた。”あの日を超——】

【DEADクエスト 更新。 証明しろ、お前の答えが間違いではないことを】

【DEADクエスト目標 ” 今度こそ、仲間の元へ生きて帰れ”】

「かしこみ、かしこみ、奉る」

遠山は、青い光に目もくれず、ただ己の力と向かい合う。帰る時  
がきた、あの日を超える時が来た。

現代ダンジョンの上級探索者、遠山鳴人ではダメだった。だが、  
今の遠山はそうではない。

白蛇女は、知らない。知る余裕などなかった。

その男が、”魂”を喰らうキリの主人たるその男が、”帝国”において、嫉妬と、侮蔑、そしてある種の憧憬をもって呼ばれる名前のことを。

遠山鳴人は、それを”殺している”

この世界に来て、初めてキリヤイバでそれを、始末していた。

「よろづ世界のその全て、喰らい尽くして霧の中」

「とうとうとき金色、ななつのひとつ、腹の中」

「かしこみ、かしこみ、奉ね。畏れ申すは、我が友人」

その男は、こう呼ばれていた。

「じゅじゅじゅじゅじゅじゅ”よ、いぞまいね」

——竜殺し、と。

「魑魅魍魎狭霧山野絵巻物語・アリス・ドラル・フレアテイル」

『はっ』

きんいろ、が現れた。

金色の、それは尾だ。

尾骨にそって、剣山のごとき棘が生え揃い、太陽のような鱗に覆われた分厚い尻尾。

うずまく、霧の向こう側からどろり、と金色の尾が出る。誰のものかなど説明する必要もない。

『それ、うそ、まさか、まさか、うそ、うそそつそつさ、それ、竜  
ー』

「試してみようぜ。不死の蛇、魂すら消す青い光、そして、ドラゴン、どいつが最強なのかをよー」

欠けたヤイバを前に。それに倣い、霧の帷から生えた金色の尾が遠山を庇うように前へ。

『あ、アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！』 王の光ツー！』

半狂乱、恐怖と焦りにより白蛇女の腕は振り下ろされる。王の光剣、抜剣。

青い光、奔流となりて、霧を裂き、その主人へと迫ー

「まあ、俺のドラゴンに決まっただけど」

ボ

オ

ウ。

金色の尾が、膨らみ、その尻尾の先から、金色が吐き出された。

金色、焰。

上位の生物、竜。7つのいのちのその一つ。

その焰すら、キリヤイバは保存していた。

『ーあ、きねい』

ほおひ。

青い光の奔流が、金色の焔に飲み込まれる。白蛇女の黒目に、金色が瞬いて。

一瞬で、青い光ごと、白蛇女は焔に呑まれた。

竜の焔は、選んで、焼く。

森の木々や、土、微生物。それら、遠山の敵ではないものを焼くことは決してない。

だが、逆を言えば。

「じゃアあああああ？！？」

「じゅろおおおおおおお？！？」



白蛇女を燃やした瞬間に、その焔は触れもせず、蛇の大群へと燃え広がった。

金色の焔が、不死の鱗を焼け溶かす。蛇の大群が金色の焔に舐められ、焼け滅んでいく。

『アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア、なんで、何でエエエエエエ！！ わたし、わたしばっか、わたしばかり！ アアアアア！！ うえねえさま！ あにうえ、うおれす！ だれか、だれか、フォルトー！』

「お前にも、事情があるんだろ。お前にも理由があるんだろ。だが、その一切全てを俺は踏み躪る」

男が進む。

金色の焔に今、まさに焼かれる白蛇女に近づく。

「お前の悲劇、苦しみ、想像するよ。わからないとは言わない。だが、それだけだ。想像したうえでこう言わしてもらおうよ」

『つらいこと、ばかりだっだ！ ようやく、ようやくようやくとくべつになれたのに！ みて、これ！ あにつえ、うえねえさまの、ちから！ 青い光も、やっとー』

燃えながらも、白蛇女が嘆く。

悲劇があつたのだろう。嘆きがあつたのだろう。その果てに彼女は行くところまで行った。そして、彼女の道は遠山鳴人と出会ってしまった。

その嘆きを、もしかしたらの自分の姿を、遠山は見つめて。

「ー知ったことかよ」

吐き捨てる。遠山は彼女を救うことを選ばない。選んで殺す。

「俺は必ず、たどり着く。欲望のままに、俺の行くべきところへたどり着く。それを邪魔するてめえは」

遠山が、駆け出す。

『あ、ああああ!?!』

ぼとり。焔、勢い増して。

白蛇女が、焼け落ちる。蛇の身体から、ヒトの躰が溢れるように崩れ落ちて。

「死・ぬ・し・か・ね・え・な」

敵、至近。

今度はもう逃すことはない。逃れることは出来ない。

「オラア！！！」

崩れ落ちた白蛇女、それに目掛けて振り下ろされるメイス、頭蓋を砕く、そのためだけに。

『いや、だ、イヤアアア！！！！』

ぶちゅるる。

白蛇女の肩口。腕のないミロのヴィーナスのような身体。

この場にて、その生への執着に身体が反応する。メイスの一撃から逃れようと生えた白い腕を頭のうえで交差して。

ガッ、き。

かち合つ、振り下ろされるメイス、女の腕に食い込む。

『アッ?!』

い。ぼきり。呆気なく、女の腕はへし折れる。遠山の勢いは止まらな

誰かから手を差し伸べられるのだけを待つて腕を生やすことすらしなかつたヒト。

片や、己の腕で救う者、そして殺す者を選んできた人間。

その腕力の差は必然。

「オオオオオオラアアア!」

大上段から、更に一撃。鉄の棍棒、わかりやすい殺意の塊が女のへしやげた腕にもう一発。

ほぎ、ぐしゃ。

『アッ』

枯れ木が折れるような短い音のすぐ後に、白蛇女の小さな悲鳴。

へしゃげた腕ごと、メイスが白蛇女の頭をかち割った。

ぷらん、ぷらん。真上から振り下ろされたメイスの威力に白蛇女の首が折れ、振り子のように揺れている。

『ま、ダ、死に、タクない』

「いや、お前は死ぬ」

ぼがん。

もう一撃、メイスが餅つきでもするようになり白蛇女の頭に下される。首が取れていないのが不思議なほどに、白蛇女の頭がへしゃげた。

『ああ』

ぐるり、目から血を流して、白蛇女が空を仰ぐ。首の骨が折れようと、頭蓋が砕けようと、化け物の生命は終わらない。

だが、もう、彼女に力は残っていない。

「お前の名前、聞いとくよ」

『……と、れナ。トレナ・ロイド・アームストロング』

「そうか。じゃあな、トレナ」

『あ、アアアアア！！』

最後の交差。へしゃげた腕をトレナが振り下ろす。遠山が振るうは、欠けたヤイバ。

ずんばらり。キリのヤイバがその腕を斬り飛ばし間合いを一気に詰める。息遣い、体温すら分かる距離に触れ合って。

「お前は俺が連れて行く」

ガラ空きの、心臓に欠けたヤイバ、キリヤイバを突き入れた。

『あーー フフ、負け、ちゃった。フォルー』

ふっと、緑髪の女。白蛇女、いや、トレナ・ロイド・アームストロングは目を瞑った。



「喰え、キリヤイバ」

お雛子の音が、響いた。

極小のヤイバが、空気を介さず、直に白蛇女の身体を駆け巡る。

一瞬で、体のありとあらゆる所から血を噴き出し、白蛇女が地面に倒れた。

金色の焰に焼かれ、鉄の塊で碎かれ、キリに刻まれた彼女。もう、2度と起き上がることはなかった。

ずり。

化け物の、亡骸から遠山が欠けたヤイバを引き抜く。無意識に、メイスを投げ出し、空いた手のひらを立て親指を曲げる。

片手合掌。

その場に、思わずへたり込む。身体は痺れ、息は大荒れ。痛まな  
い所の方が少ない。

「……はあ、はあ、はは。ひ、ひひ、ヒヒヒヒヒ」

それでも、遠山は生きていた。大蛇の焼け崩れた亡骸と、息絶え  
た特別な化け物の亡骸の中、たった1人の勝者であり、生者であっ  
た。

3761

「い、よっしゃアアアアアアアアアアアア、生存ンンンンンン  
ンンンンンン！」

ばかり。遠山はそのまま倒れる。すぐに、寝息が響いて。

ピコン。

気絶するように眠った遠山は、流れるメッセージの全てを見ることがなかった。

【DEADクエスト 目標達成 ”知識の眷属、ハーヴェイのパン文書館” で特別な報酬を得ることが出来ます】

【<sup>エルダー</sup>古代種 ”トレナ・ロイド・アームストロング” の魂を保存しました】

【”遺物”の<sup>オーバーロード</sup>拡大解釈に辿り着きました、貴方は 番 の遺物となりました】

【古代種の討伐により、レベルが上昇します。……verエラー。レベルアップは発生しません】

【<sup>人間</sup>古代種の討伐により、貴方の隠し技能が進化します ”<sup>本</sup>ホモ・サ

【警告】が、ホモ・サピエンスに進化しました、この星の生命の中で貴方に滅ぼせないものなど、もはや存在しないでしょう】

【警告】 遺物・拡大解釈により 零 ” 天之 神・国  
狭 との習合が進行。身体の血  
プチ

よらよら、今はよかるつてち【】

【】ーー遺物による身体への影響無し【】

71話 かしこみ、かしこみ、奉る（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください  
さいー！

下の星、良ければ評価お願いします。励みになります！

72話 霧が溜まり、風が吹き、竜来たりて、すぶぶと咲う。

「ぐ、すーう、すー、う」

寢息。

死臭満ちるキルゾーンに、キリの主人は全ての力を使い果たして眠る。

びゅおつ。霧が、晴れていく。風が吹いた。木々の間に溜まった霧をアクでも掬い取るように、吹き上がってそれらを攫う。

ビュオオオオオオオオオオオオオウ。

ひときわ、強い風が霧を吹き飛ばした。

「……………彼のお守りが反応したからきたものの。さて、どうしたも  
のか」

女が、いた。

霧を攫い、森を駆け巡る風に乗って、なんの前触れもなくその場  
に女が現れた。

彼女は風、世界を渡り、世界を動かす風と同じ。気の向くまま、  
風の吹くままにどこにでも現れる。

「まさか、こんなところで会うとはね。」 竜殺し…………… キミとは  
奇縁でもあるのかな」

眠りこける遠山を見下ろす女。

銀色。腰まで伸びた長髪に、一房結ばれた三つ編み。



本物の銀を溶かし込み、梳いたような銀髪を持つ女だ。

「まあいいか。まずは……」

切長の瞳、銀色の虹彩にグリーン混じりの目を細める。

「簡素な革鎧はしかし、”古代種”の素材で作られたこの世に一つしかない一品。羽織っているマントもまた同じく彼女が刈り取った古代種の素材から織られている。」

「しなやかな肉体。無駄なものが一つとしてない完成された肉体はしかし、胸部は女性的な膨らみがぱつんと張った革鎧から見取れる。」

「黒いインナーに覆われた腹部と腰は、芸術品かともまごうばかりにくびれていた。男なら誰しもその腰を掴むことが出来るのならば、命すら投げ出しても惜しくないほどの完璧な女体。」

「ユト、ユト・ウエトラル？ 聞こえるだろうか？ 助けに来た、まあ、もうその必要は無さそうだけど」

銀髪の女が、眠りこける遠山から視線を移し、近くに斃れている大蛇の黒焦げの死骸に声を掛けた。

ずぐ。ずぐ。くぐ。

黒こげの死骸、その一部が盛り上がる。そして、ペリりと破けて

「つぶはあ！！ 死ぬ！ 死ぬかと思っただって、マジで！」

蛇の腹の中から、男が這い出てきた。化け物の腹から出てきた割には妙に小綺麗な姿だ。

ひゆるひゆるひゆる。男の服装の装飾品や服の裾が舞っている。彼の体には、つむじ風がまわりついていていた。

彼女が、愛弟子に施していた御守りは化け物の腹の中に収められた冒険者の身をきちんと守り切っていて。

「おお、生きてた。私の風に守られているとは言え、化け物に食われてなお健在とは。クク、やるじゃないか」

「師匠…… あー、そういうことか。アンタの風が発動したから……」

「そういうときは、可愛い弟子の身に何かがあったときにすぐわかるようにしておいて正解だったよ、お守り、きちんと持っていてくれたようだね」

「はあ…… くそ、アンタからしたらまだ俺もガキ扱いってことっすね」

「いいよ、ユト。気にすることはない。塔級冒険者であれ、今回のモンスター、古代種は手に余る奴だった、それだけの話さ。さて、君の仲間たちも、助けないとね」

ふっ。

女が長い指を揃えて手のひらを差し出すように構える。それから唇を添えてふっと、息を吹きかけた。

ぱん、ぱん。

グズグズにやけ滅んだ蛇の死骸、そのいくつかの腹が破裂して裂けて行く。

「ぐえ」

「うっ……」

風に包まれて、腹から取り出されるのは2人の冒険者。リバーとスモール。ユトの仲間たちだ。

「あー、師匠。マジで助かった。リバーとスモールにや悪いことしちまったな」

「くく、それでも頑丈な2人だ。きちんと息をしてるしね」

「……そうか、よかった、生きてるか」

「ユト、君らしくもない。生き残ることにかけては君はあの”不死”と見比べても見劣りしないものだと思ってはいたが……」

「はは、いや、マジで言い訳もないっすよ。師匠……って、うそ！  
？ し、師匠、あそこで倒れてるのってまさか、竜殺し?!」

男、塔級冒険者、ユト・ウエトラルが目を開く。

「知り合いかい？」

「昨日、市場で会ったんすよ。この森の異変に関係あるかもしれな  
いってギルドの読みは大外れでしたけど。それに、アンタも奴のこ  
とを気にかけてたでしょ」

「ああ、まあね。私しか知らないことを知っていたから、問い詰め  
ようとしただけ。竜に邪魔をされて有耶無耶にはなっただけど」

「……細かくは、聞いたらダメな奴？ 師匠」

「せつかく拾った命だ、大事にしなよ、ユト」

「おっおー、ガチなやつじゃん。……はあ、しんど。なあ、師匠…  
…」

「なんだい？」

「世界は、広いな。塔級冒険者になって、大抵のことは出来るようになったと思ってた。上はたしかに存在するけど、それでも俺もかなり上澄みの方だと思ってた、けどよ。……はは、トオヤマナルヒト、マジかよ。……1人であの化け物を殺したわけか」

「……化け物の死骸の山の中に、傷だらけの冒険者が1人。ユト、キミの言う通り。竜殺しは塔級冒険者と一級冒険者を返り討ちにするモンスターをも、1人で斃したらしいよ」

「はは、すげえや」

「……さて、状況を整理したいものだけど、どうしたものかな、ユト、どこまで覚えてる?」

「……正直、わからねっす。でも、なんか、夢、夢を見てたような気がする。すげー可哀想な女の子がいて、その子をずっと、慰めたよっな。……気付いたら辺りが蛇だらけになって、それで……」

「続けて？」

「……霧、そうだ。霧……霧が出てきたんだ。霧と、笑い声が、女の子を攫って、どっかに連れて行って……」

その場に腰掛けたまま、ぼーっと言葉を手繰る男。まだ、夢見心地のようにも見える。

「へえ、なるほど。OK、だいたい見えてきた。おそらく君は、あの古代種の精神に感応する種類のスキル、もしくは秘蹟の影響下にあったわけだ。クク、やるじゃないか、化け物。ヒトの殺し方をよく熟知しているようで」

「すまねえ、師匠。まだ、頭がぼーっとしてるわ。……情けねえ話だ」

「いや、充分だ。だいたい状況は理解出来た。キミから聞く話はそれくらいで構わないさ」



「いや、今の話じゃ状況なんて、なにもー」

「後は、風に聞くことにするよ」

それは、その生き物に元々備わっている機能だった。ヒトでも、化け物でもない、人間ではない存在。

まつろわぬ民、彼女の民族の中でもその歴史の中で数人しか現れぬ特異な存在。

「渡れ」

それは、スキル才能でも、秘蹟天使からの贈り物でもない、この世界で唯一無二の機能。

「風」

彼女は風を司る存在だ。この世界を吹き渡り、広がる風は全て彼女と繋がっている。

有機体でありながら、惑星の天体現象そのものと直結している存在。

「集え」

大陸をそのまま兵器に変換した”魔術学院”、天を突く喋るそら豆の木を王とした植物大国”百葉の国”、竜をすら獲物とする”狩人”の国、それと敵対していた竜を友とし、それらを制覇した”古い国”。

「風」

なんでもありの勢力が互いを滅ぼし合った地獄絵図、いつから始まったのかすら誰も知らない”大戦”の時代。

「いぶき、吹け」

”勇者・パーティ・射手”、ウエンフィルバーナはそれを終わら  
させた者たちの1人だ。

風が吹く。集まってゆく、ウエンフィルバーナに向かって森を渡  
る風たちが収束していく。

風は世界を渡る、故に風は、全てを見て、知っている。

この森で起きたこと、ある1人の不運な女が力尽きたこと、追い  
詰められたモンスターとその女の特別な血が結びつき、古い怪物と  
なって生まれ変わったこと。

風は全てを知っている、それをしっかりと風の主人に伝えるのだ。

ウエンフィルバーナの銀の髪が風に揺れる。銀の瞳が白く輝いて  
いく。彼女に向けて吹く風はやがて徐々に消えていった。

「……………へえ」

目を、見開き。

風が、止んだ。

しばらくの間、ウェンフィルバーナはピクリとも動かなかった。ただ、風が舞うのみ。彼女だけは動かない。

「師匠？」

ユトが、声をかける。それからようやく、ウェンフィルバーナは反応して。

ウェンフィルバーナの銀の瞳。この世のどんな宝飾品よりもヒトの心を虜にするだろう。その輝きが、目の中でぐるぐる廻る。

「……なに、これ、く、クククク、なにかな、これ」

彼女の、白い肌。頬が紅く。瞳の銀色が揺れる。わかりやすく興奮していた。

「ハハ、ハハハハハハハハハハ！」

風に混じるは、白銀の嗤い。天然の宝石の如き美貌が嗤いに歪む。

「保存、”魂の保存”だった?! おい、おいおいおいおいおいおいおい、嘘だろう? く、ククククク、ああ、なんて、なんてことだろう…… クク、本当に、人生、人生人生人生、生きるってやつはさア……」

彼女が、両手で顔を覆い、ふらつきはじめる。何かに酔っているような足取りで、眠りこける遠山に近づいていく。

「……竜殺し、竜殺し、なるほど、魂の蒐集……保存……キリヤイバ……保存と使役と支配……ハハハハ、それは、それはそれはそれはそれはそれは、さア……」

風が伝えたこの森の出来事、風が見ていたある男の進化、そしてその力をウエンフィルバーナは一部始終見たのだ。

その力、竜をも殺し、キリの中にて全てを保存するその力を彼女は見た。

「竜殺し、あの時と言い、今回といい、君は何者だい？」

地面に四つん這いになり、ウエンフィルバーナは遠山鳴人の寝顔を覗き込む。

「なんて、こと、ああ、なんてことなんだ。クク、”魂喰らい”どころじゃない。魂を保存する力、なんだ、なんだいそれは」

今はもう、古い物語だ。誰も知らない物語は終わった。ウェンフイルバーナは、その物語の人物で、それが終わった後も生き残ってしまった存在だ。

「し、師匠？」

明らかに、様子のおかしいその女に向けてユトが困惑した声を向ける。

「ユト、悪いけど少し急用が出来た。君、一人で帰れるね？ あそこの仲間も連れて行ってやりなよ。この森は未だ、モンスターの生息域だ」

たった今、自分が救い出した男からの呼びかけに彼女は答える。振り返りもしなかった。

「い、いやそれはいいけど、どしたんだよ、急に」

「……彼は、私が連れて帰ろう。ギルドでも手を焼いた森の異変を解決した功労者だ。私がきちんと届けるよ」

にこり。笑う。ウエンフィルバーナが今度は振り返って、ユトへ微笑みかけた。

――ユトの顔が、歪む。驚愕、失望。

塔級冒険者、ユト・ウエトラルのスキルがその笑顔の正体を暴いてしまった。

「……師匠」

そして、ユトがゆっくり立ち上がる。

「うん？ ああ、そうか。君のスキル、嘘を見抜く才能だったか。くくく、ユト、よしてくれ、見逃してくれよ。別に、彼と君は特に関係ない人間だろ？」



「師匠、よくねえぜ。それは、よくねえ顔だ。畜生の顔だぜ。なしにしよっや、そっいつのはよ」

すつと、音もなく。

塔級冒険者、ユト・ウエトラルが腰から大振りの刃物、鉈を引き抜く。かと思えば左手には腰に備えていた片手で扱える小型のボウガンを構えて。

「嘘、だね。アンタは嘘をついた。その男をギルドに無事に連れて帰るなんてのは、嘘だ。師匠、なんでそんな嘘をつく？ ソイツを、どうするつもりだ」

戦闘態勢、鋭い目で、ユトがウェンフィルバーナに狙いをつけた。

「……やめておけよ、ユト。別に彼とはお友達でもなんでもないだろっつ、」

ウエンフィルバーナは顔を伏せたまま、背中をユトに晒したまま振り返ることはしない。

「ケツ、育ちがよくてな。仇には仇を、そして恩には恩を。竜殺しには借りがある。俺たちのへマをきつちり片付けてくれた借りがな。冒険者なんて商売、その辺の線引きを引かないと俺らはモンスターと変わらないでしょうがよ」

「へえ？ 言うね、ユト」

「師匠、その男は置いていけ、そいつは俺と仲間達の恩人だ。塔級冒険者の名に賭けて、俺達の仕事を完遂してくれた奴に余計なことはさせねえ」

「よしてよ、ユト。キミのこと、割と本気で気に入ってるんだ。でも、今、私は冷静じゃない。……数百年探して、見つからなくて、諦めた、諦めたと言い聞かせた存在が、目の前に、いるんだよ」

絶るような声だ。ウエンフィルバーナがユトに背中を向けたまま、肩を震わして言葉を漏らす。

でも、その視線はずっと、眠り続ける遠山に向けられている。

「知らねえ。師匠、アンタのことは好きだし、尊敬してる。だが、今のアンタは信用ならねえ。俺の冒険者としてのルールには貸し借りをほったらかして見て見ぬフリするなんてモンはねえ」

「ユト、キミの言う借りってさ、キミの命より、重いのかな？」

風が、止んだ。

ユトは、ウエンフィルバーナを見つめる。

ウエンフィルバーナは、ただ、遠山を見つめる。

「それが、冒険者つてもんだろ」

両者の視線は決して交わることがなく。結論が出た。

「……ユト、キミと出会ってから、何年経つかな？」

「……… 12年だ。俺がガキの頃、野盗に攫われて変態どもに売られそうになったその時、アンタが来てくれた日を忘れたことはねえよ」

「うん、懐かしい。……いや、早すぎるな。ほんとに。あれだけ小さく弱かった君は、瞬くような時間で気づけば立派に成長している。くく、誇らしいよ。ユト」

「その小さくて弱いガキに生き方を教えてくれたのはアンタだ。アンタにだって、俺は借りがあるんだぜ。なあ、師匠、マジでどうし

「ただよ、アンタ、そんな顔する人じゃねえだろ」

「クク、君が知ってるのは、私という存在のほんの側面だけだった、という奴さ。そうか、12年か」

ウェンフィルバーナ、彼女が振り返る。ユトをしばらく、じっと見つめ続けて。

「薄い、時間だね」

それを切り捨てた。欲望とは恐ろしいものだ。ウェンフィルバーナ、彼女はとつくに忘れていた。ここにはそもそもユトを助けに来たのだということ。

だが、結局、ウェンフィルバーナは、ユト・ウエトラルを選ばなかった。それよりも優先すべきものを遠山鳴人の中に見つけた。

これは、それだけの話だ。

「ツツ!? ウェンフィルバーナ!」

「本当に、残念だよ、ユト。ああ、きつと私はキミのことを後悔するだろう。でも、でもね、今、私は本当に冷静じゃないんだよ」

強、ゴウ、ゴウ。

風が、つねり、固まる。なんの法則にも従わず、世界に風が現れる。

それは圧倒的な質量を持ち、ユトの頭上に溜まっ

森が、それに吸い込まれるように葉を散らし、根を軋ませて悲鳴をあげていた。

「――風や、廻りて」

塔級冒険者と塔級冒険者。位階は同じ、されどその生き物としての格は絶望的。

伝説に語られる大戦の英雄。おとぎ話の人物の暴威が、冒険者に向けられて。

「うん、なんていうかさあ、キミ、ボクと喋り方、かぶってるよねえい」

風が、ねじ曲げられた。ユトに向かって吹き落ちようとしていた風はしかし、全く見当違いの方向に落ちて、木々を文字通り消し飛ばす。

「?!」

「ーこの風の香り…… ああ、またか。蒐集竜といい、ほんとに君たちはいつもいいところで邪魔をするね」

ウエンフィルバーナが、表情を消した。獣が、外敵と向き合った時と同じように。

「すぶぶ」

外敵。

大戦、古い時代の英雄、ウエンフィルバーナ。この世全ての風の概念を司る伝説の生物。



それが、”外敵”として認定する者など、極小数に限られる。

「ヒト、生命の枠を超えた超越者か、最初から世界の枠組みから外れた眷属か。」

あるいは、この星の上位の生物――

「あ、アンタ、だ、誰？」

「すぶぶ、通りすがりのちょーかしこいドラゴン<sup>竜</sup>だよ、塔級冒険者さん」

女がいた、女が唾つた。森のどこから、現れた女。

皮のブーツにダークブラウンのセーター、黒いロングスカートに、腰まで伸びた銀髪を翻して。

新雪よりも白い肌に、どこか病的な美を讃えて。

己で編んだ魔術式により、化け物と命懸けで戦う自分の推しの姿を鼻血垂らしながら眺め続けていたガチ勢が、空間も、距離も、そういうの全部無視して。

徒歩で、来た。

人知の竜が、やってきた。

「ーは？」

伝説と竜。

それは互いに美しい銀髪を備えていた。

木々の合間から、まるで初めからそこにいたように現れた銀髪、黒服の女。そのいでたちから彼女の周りにだけ夜が来て、月の光が

差しているような。

「冒険者君、キミは間違いなく、間違いのない選択をしたよ。よくぞ、彼を守ろうとしてくれたねえい。今、キミが生きているのは単にその選択の結果さ」

「あ、はい、どうも」

毒気を抜かれた、いや、本能でそれに反論してはならないことを理解したユトが押し黙る。

黒服銀髪の女がその様子に満足げに頷いた。

「……数百年前とは、ずいぶん印象が違うけど。そのおぞましい風の香りは変わらないね、全知竜」

「あー、違う、違うよ。射手さん。今のボクの名前は、全知竜じゃあないんだよ」

長い銀髪を揺らし、首を横に振る美竜。暗黒よりも昏く、光すら飲み込む真つ暗な目が、ウエンフィルバーナをどろりと見つめて。

「人知竜」、今はそう呼んでもらえるかなあ？ それでさあ、キ

「三」

銀髪の女が、銀髪の女を指さす。

指を指す、上位生物が、古い生き物へ。

「何かな、古き竜よ」

銀と、銀。

あいまみえる。

すぶぶ、咲く黒銀の女の目はしかし、全く笑っていないくて。

「キミ、私の推しトオヤマくんに近いんだけど？　メス臭い匂いが移るから  
離れてくれないかなあ」

霧が溜まり、風が吹き、スニーカー竜がやってきた。

72話 霧が溜まり、風が吹き、竜来たりて、すぶぶと咲う。  
後書き)

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください  
さい！

評価頂ければありがたいです！ 下の星をお願いします！

73話 すいみんすいみんすいみんブソク

「匂い、わかるかなあ。それ、すごくすごく大事なんだよ。生き物の中身が揮発して醸し出すそれは個体の情報そのもの、その生き物の生そのものと言ってもいいと思うんだよねえい」

蠢くものがある。

姿形は、清廉なれど。その美貌は月の光で編まれた芸術如きものなれど。

「そしてボクはなによりも彼の香りを好ましく思っているんだ。夏の夜の匂い、濃い血と悲しみの匂い、しんとした山の空気のような匂い、どの匂いも大好きなんだ、それを汚されるのは本当に、はらわたが煮えくりそうだよ」

彼女が喋るそのたびに、空気が澱んで蠢いて。

真っ黒な瞳の奥には世界の澱が吹き溜まっている。

「ああ、ダメ、ダメダメダメダメ。トオヤマくんにはただでさえ、いろんな女が匂いをつけようとしてるんだ。呪いにも似た暗示で彼を独占しようとした女、自殺、己の死をひけらかし彼の青い春を独占した女、あの能天気お子さま竜もそうだし、最近では正義の繰り手もたまにメスの顔を見せるようになってる…… 香り、かおり、香りを、さあ、ボクのトオヤマくんにつけようとしてるんだよう」

ぎりり、人知竜が銀色の髪をくしゃりと握りしめ、片方の手の親指の爪を、噛み続ける。にちにち、にちにち。血、竜の血が垂れた。

古い竜が、爪を噛みながら己の性癖をつらつら語る。誰もそこに口を挟むことなど出来ない。

今にもその黒い瞳から、タールのようなドロドロが溢れてもおかしくない。そんな目を眠る遠山に向けながら、彼女はひたすら爪を噛む。

「彼の匂いが変わるってのは、彼の生き方が変わるということだ。ボクはそれを認めない、彼が行き着くところまで行き着き、彼の意思でその生き方を変えるのならばそれを喜ばう、でもね、他人によ



って彼の生き方が変えられるのだけは我慢出来ないんだよ、ボクが何を言ってるかわかるかなあ」

その美竜は、ただ、ただ、己のオモイヒトに対して言葉を重ねる。

人知竜が、性癖を、想いを、語る。

風が吹かない。森の木々の向こう側、光の届かぬ場所にある暗闇全てが、人知竜に従うかのごとく、ざわざわ、ざわざわ、蠢いて。

闇ですら、その竜を畏れて平伏するのだろうか。昏い瞳が、伝説の風を舐めつけるように見つめていた。

「……昔からおかしな奴だったけど、今の貴女はもっと意味不明ね」

「すぶぶ、おやおや、意外だ。数百年前のキミはもう少し礼儀を知った奴だと思ってたけど。勇者がキミを変えたのかな？」

くしゃくしゃの髪を整えながら、人知竜が目をチエシヤ猫のように歪ませてウエンフィルバーナに戯けてみせた。

「……部外者が勇者の話を、しないでもらえるかな？」

上空で、バンっと、音が鳴る。風だ、風が遙か高い空の上で爆ぜた音。

「ん〜？ あれ、もしかして怒ってる？ すぶぶ、不快そうな顔をしたね。射手」

そんな異常をも意に介さず、にんまり笑う銀髪的美竜。ヒトの心を掻き乱し、泥沼に引き摺りこむ美貌が嘲笑う。

「……だいたい、なにかな、その喋り方に、一人称。キミ、かなりキヤラ変わりすぎてない？ 気持ち悪いな、普通に」

ウェンフィルバーナの凜とした顔が不快感を露わに鋭くなる。

互いに互いの力を充分に理解している、故にこの2人の古い大戦から生きる生き物たちは未だに殺し合いには至っていないのだ。

「すぶ、ああ、気にしないでくれたまえよ。別にキミに好かれなくてこんな感じにしてるんじゃないのさ。ボクはボクが気に入った人に好かれたい為にこうしてるだけ。ごめんね、キミは眼中にないんだ」

肩に垂れる銀色の髪。水銀を溶かして夜に光る星々を混ぜ込んだ銀色を人知竜が弄びながら、すぴーっとため息をつく。

「好かれない……へえ、蒐集竜だけではなく、貴女もってこと？ トオヤマナルヒト、彼って何者なのかな」

「それをキミに教えることはないかなあ。射手、彼はボクが連れて帰る、メス臭いからそこどいてくれない？」

「ククク、全知竜、いや、人知竜。愉快だね、ほんと変わった。ヒトなんて路傍の石ころ程度にしか思っていなかった貴女が、さあ」

「ボクは元々ヒトには優しい竜だよ」

互いに、朗らかな表情は変わらない。

だが、昏い瞳に、銀の瞳、互い、宝石のような眼は何一つ笑っていない。

「それは、愛玩動物として、でしょ。魔術式を見出し、ヒトに広めた貴女は、飼い犬を飼うようにヒトを飼い集め学院を創った。大戦の時の貴女は、ヒトを好んでいたけど、決して愛してはなかった。……俄然、興味が湧いてきたな、彼にさ」

ウエンフィルバーナが、足元を眺める。長いまつ毛に白銀の目が遠山鳴人に向けられて。

「警告だけど、ウエンフィルバーナ」

人知竜が、名前を呼んだ。もう、空気の流れる音すらも完全に止まっている。

「……………?」

「彼に、指一本でも触れてみなよ。竜よりも古いキミという存在、キミの力、それ全てを理解した上で、キミを殺すから」

一切の表情を失くした顔。それは人知竜の生き物としての顔、竜というヒトを超えた生き物特有の無機質な顔だった。

「……………怖いな、いや、貴女もそうだが、私は、今この彼に恐怖を感じるよ。数百年という短い時間で竜を、ここまで変えてしまう人間が現れるなんてね」

ウエンフィルバーナは、知らずに流してこめかみを流れた汗を人

差し指で拭う。

心底、気持ち悪いものを見る顔で、眠りかける遠山を見て。

「キミが勇者によつて変えられたのと同じだよ。数千年を生きるキミですら、たった数年の旅でずいぶんと、ヒト臭くなってるじゃないかい。……ウエンフィルバーナ、最後の忠告だ。今すぐ目の前から消えてくれないかなあ。……死んだら、もう2度と勇者のことを思い出すことも出来ないよ、これからの人生も永いものになるんだ、思い出は大事にしなよ」

すぶぶぶ。

竜の笑い声、それだけが響いた。

「……………うーふう、そう、だね。……………くく、ああ、悔しいな。まだ、まだ足りないな、やはり。私は弱い、弱いつてのはほんとに苦しいことだ」

大きなため息と、硬直の後、ウェンフィルバーナが自分の顔を手で覆って笑い出す。

「私の前で、2度も貴女は”勇者”を引き合いにした。本当なら許せない、私以外の存在が、アレの名前を口にするのほんと不愉快なのに、貴女が強いから黙らせることが出来ない…… くく、この激情は、教訓にさせてもらおうよ」

風そのものが荒れ狂う。上空では雲が信じられない速度で流れて、砕けて、ぐちゃぐちゃにかき混ぜられていた。

森は、それとは対照的に息を潜めるように静かで。

「好きにしたらいいんじゃないかなあ。ああ、そつだ、ウェンフィルバーナ」

「何かな、アイ」

古い知己が、互いに名を呼び合う。

人知竜が静かに指をまつすぐ掲げて、微笑んだ。

「キミの願いはどんな方法でも叶うことはない。トオヤマくんに何を見たのかは知らないが、失ったモノが元に戻る事など決してありえない。ましてやー」

人知竜、アイが一瞬目を瞑る。

何かを思い出す、何かを懐かしむ、次に浮かべた表情はそんな郷愁をもった笑みで。

「終わった物語のはじまりに戻ることも、ねえい」

「ー」

ウェンフィルバーナの顔。視線だけで生命を奪いそうな、そんな



目だ。

「……私は、そう思わない」

力ない言葉だ。それきり、ウエンフィルバーナは人知竜から顔を背ける、呆然と立っているユトに顔を向けて。

「悪いことをしたね、ユト。じゃあ、元気で」

短い言葉、確かに存在した物語、師と弟子の出会いの物語はしかし、青い春の記憶に勝ることはなかった。

「師匠、あんた……」

「キミのこと、本気で嫌いではなかったよ、でも、今日思い知らされた。私は結局、変わることも出来なかった、結果、私はそういう生き物だった」

ウエンフィルバーナがユトから視線を切り離す。

背中を向けて、手を挙げて溢すようにつぶやいて。

「私との時間は、そうだね、悪い夢だった、とっておくれよ。…  
…さようなら、良い人生を。ユト・ウエトラル」

「…また、逢いにいくぞ、アンタを独りにはさせない」

ユトの言葉に、ウエンフィルバーナは返事をする事はない。

一際大きな風が、森を吹き抜けて。

ウエンフィルバーナの姿は消えていた。

「…行ったか。やれやれ、間一髪、といった所だねえい。愛や恋  
を知らない処女を拗らせた長命はほんとにめんどくさいものだよ。  
さて、さて」

「えっと、なあ、もしかして、あんた、竜とか言われてたけど……」

ユトが恐る恐る、人知竜に問いかける。

人知竜は自分の顎に手をやりながら、真っ黒の瞳で冒険者を見つめた後。

「ふむ、塔級冒険者くん。キミと、キミの仲間は取り敢えずギルドにおかえりなさいな。魔術式、仮説構築―― 定理証明完了」

「え？」

ばしゅ。

人知竜が指を鳴らす、それだけでユト・ウエトラルと、彼の仲間達3人の姿は消えた。

彼女の魔術式は確実に、3人をギルドまで送り届けたことだろう。

「キミのように、トオヤマくんの味方をしてくれる人は貴重だからねえい。願わくばこの先も生き残ってほしいものだよ」

満足げに、むふーと鼻息を吐いて人知竜が笑う。本人的には最上級の敬意を払った行動のつもりらしいが、ナチュラルに不遜で失礼な行動だった。

「ぐ、す、ー、すぴょー、じゅー」

「さてさて、風は吹き去り、冒険者は生還した。後に残るは化け物の死骸と、眠りこけるキミだけ、か」

もう、誰も居なくなった森の中、その男の寝息だけが呑気に響く。

「ぐー、しー、ぴょー、すー」

呑気に眠る遠山鳴人に目を細め、人知竜がゆっくり歩み寄る。

「……………良かった、間に合って、よかった」

人知竜が、崩れ落ちるようにその場に座り込む。先ほどまでは決して見せなかった玉のような汗が顔を伝っている。

その言葉と消耗の理由は、遠山鳴人と化け物との戦いの結末に対してのものではない。

勇者パーティー、射手。ウェンフィルバーナ。それと相対したという事実は、人知竜にとっても紙一重のトラブルだった。

それがもし、本気で遠山鳴人を奪おうとすれば守りきれたかどうかわからなかった。

「数千年を生きる化け物の癖に、遠山くんに目をつけるなんて、なんてめんどくさい女なんだ……」

己と同じ、古い大戦を駆け抜けた生命、その風の力を人知竜、アイ・ケルブレム・ドクトウステイルは痛いほど理解していた。

故に、彼女は、今心の底から安堵していた。永い生命の中でこれほど気を抜いたことはないというほどに。

「……全く、こんなところでよく眠れるものだ。ああ、でも、ホモ・サピエンスならそれが出来て当たり前か…… すぶぶ、変な顔。よ、いしょっつ」と

そんな彼女の苦勞も知らずに眠りこける男。彼の顔を見て、人知竜はくすりと笑う。

その場にくにやりと膝を折って座りこむ人知竜。仰向けに眠りこける遠山の首と頭を優しく持ち上げ、自分の太ももの上に、そっと置いた。

母が、赤子を抱き上げる、そんな繊細さに満ちていた。

「いい匂い…… す、ぷぷ、うふ、ひひひ」

遠山の顔を見下ろす人知竜。耐えきれないとばかりに喉を鳴らして笑い出す。

「ああ、いい匂いだ、たくさんたくさん殺したねえい、たくさんたくさん踏み躪り、進み続けたんだねえい。すぷぷ、ああ、良い……」

深呼吸、膝枕をして抱えた遠山の身体に覆い被さり、その胸板で大きく息を吸う竜。その弛緩して、紅潮した顔には、もはや威厳も慈愛もない。

「キミの心臓の音が聞こえる……キミの体の匂いに包まれて、ああ、ごめんね、でも、これくらいの役得はいいだろう？ あんな厄介なのに目をつけられたキミを守ったんだからさ」

その姿は、ただの変態に近かった。

「ぐ、すー、すぴー」

「キミは、変なものばかり引き寄せるねえい。こっちの気も知らないでさ。……中に、たくさんいるね。ハーヴィー、キミもいるんだろう？ ふん、節操なしめ」

遠山の濃い香りを思い切り味わいながら、人知竜は遠山の中に潜む者の中に懐かしい気配を感じとる。

古臭い本の匂いは、人知竜もよく知るこの世の理から外れた者の匂いだ。



「トオヤマくん、キミはきつと進むだろう。欲しいものを諦めることなく、どれだけ辛く、暗い嵐の中でもキミはたどり着くことだけはやめないんだろう、良い、とても、良い……、あ、鎖骨、触り心地いいなあ」

熱を孕んだ視線。時折、そのしなやかな身体をぴくり、ぴくりと痙攣させながら人知竜が眠る遠山の身体をまさぐりつづける。

紛うことない変態だ。

満足げに、遠山の体を撫でまくる手はしかし、ぴたりと動きを止めて。

「でも、妬けるなあ」

冷たい声だ、ねんどろりとした湿っぽさもある。

「ねえ、なにアレ。ボク、知らないよ？ 蒐集竜の焰なんて、いつから使えるようになってたのさ…… どうすればいいかなあ、ああ、キミの香りに、はっきりと金色の焰の香りが混じってる…… すぶぶ、ああ、苛立つなあ」

彼女は、全てを見ていた。遠山の戦いを自室から全て見ていたのだ。

彼の自己犠牲も、命乞いも、克己の瞬間も。

その無謀さに興奮し、その命乞いの惨めさに欲情し、その克己の勇ましさに絶頂していた。

この竜は、救いようがなかった。

「ぐ、すー」

「ああ、でも、これも新たなる知見だよ、身を焦がすこの激情、キ

ミを知りたいが故に、キミの全てを奪いたくなるこの竜の暴虐の本能、それを抑えようとするボクの理性…… ああ、気持ちいい……キミの香りを嗅ぎながらさあ、想像するんだ…… ボクがもし、竜としての本能に負け、キミを力づくで己のものとしようとした時、キミはどんな顔をするんだろう」

ざわり。

森の木々、木の葉が音もなく散っていく。竜の昏い心に自然が怖じ気たのだ。

木が身を震わすように、音もなく緑の葉を散らし始める。

「すぶ。その目がボクを射抜くんだ、その口がボクを殺すと喚くんだ。キミが、ボクだけを想うんだ。殺意でも悪意でも敵意でも、キミの全てがボクに注がれる、ああ、やばい、すごい、すごい、すごい、想像するだけで、おかしくなりそう」

吐息、熱く、熱く。昏い瞳は熱につかされ、ぼつと、遠山を見つめる。

「この世の命を、善と悪に分けるなどあれば間違いなく、彼女は悪だ。」

己の弱さを、己の願いを、己の性を他者にぶつけることができる存在だ。たまたま、だ。未だ彼女と遠山鳴人が殺し合う存在になっていないのはたまたまだ。

人知竜がもしも、遠山鳴人の欲望の前に立ち塞がればたちまちにそれは殺し合いになるだろう。なぜなら遠山もまた、人知竜と同じ”悪”故に。

「ぐ、ぐー、すー。ぴー」

性に、身を震わせる竜のなんと美しく、おぞましい姿だろうか。

「……もう、呑気に眠ってさ。キミ、ほんと図太いね」

くす、人知竜が吹き出す。

呑気な寝息に、毒気を、一気に抜かれ、その瞳から漏れていた湿っぽい熱が消えていく。

「……遠い所、ここではないどこかをずっと、見続けるキミの目が好きだよ。でも。少しくらいボクのことも見たいなあ……じゃないと、イタズラしちゃいそうだよ」

定命のちっぽけな存在へ、竜が語りかける。その顔は数百年を生きた古い生き物とは思えないほど、ちっぽけで、ごく当たり前の顔だ。

隣人が隣人へと向ける暖かなものを、ただ、人知竜は遠山へと捧げる。

「……なんてね。すぶぶ。キミに嫌われたくないもん。そんなことしない、しない、しないよ。……ああ、心臓の音、落ち着くな……」

「コレ、やっぱりボクのと交換しちゃおうかな……」

しなやか、しかし女性的なやわらかさを併せ持つ白魚のような手のひらが遠山の胸をまさぐる。

くるり、くるくる。胸の真ん中、ちょうど心臓の位置、そこをつつとりとした目つきで人知竜が撫で回す。

「……よし、帰ろう。今日はお疲れ様。よく頑張ったね。そのまま、キミはキミのまま、ありのままに、うっん、欲望のままに進んでよ。ボクはずっと、それを近くで見てるから」

「がー、く、すー、ぴよー」

「すぶぶ、変な顔。……匂い、つけちゃおこねくらいはいいでしょ。トオヤマくん」

きつと、彼女は答えなど求めていないだろう。ぐずぐずと遠山の頭を膝枕したまま抱きかかえ自分の頭をこすりつけた。

長い時間、そうしていた。

ふと、人知竜が顔を上げて、ぼそり。

「……俺のドラゴン、かあ」

彼女は全部、聴いていた。そして彼女は知っていた。遠山鳴人の底の底には確かに、金色の竜の強さへの信頼があるということに。

友人。遠山鳴人にとってその役割はとても特別なものであるというふうに。

「いいなあ」

すぶぶ、愉快げにも聴こえて、どこか寂しげにも。

ーいいや、違う。

幼いこどもが、やきもちを妬いた。そんな声だった。

……

……

…

く帝国北部、前人未到の山嶺の頂上にてく

風が、強く吹いている。

その音がうるさくて、私は眠れない。もっずと、ずずと眠れない。



勇者がいなくなったあの日から、私はもう数百年、眠っていない。

「どっ、しよっ」

帝国領、最北部。未だこの時代のヒトが至れぬ最も空に近い領域。

ある山の頂上に、私はいた。

気付けばここに、逃げていた。

雲の海を見下ろしながら、冷たい空気を頬に感じる。

「どっしよっ、か」

私は誰に語りかけるべくもなく、言葉を紡ぐ。

諦めた、諦めた、ケリをつけたはずだった。あの時代は終わり、それぞれの結末を迎えた。

大団円だ、ハッピーエンドなのだ。私たちは旅の目的を完遂した。

だが、どうしたものか。

「くく、あは、アハハ。みつけ、ちゃった」

その男を、見つけてしまった。運命でも宿命でもなく、劇的なものなどなく、淡々とその力を見つけてしまったのだ。

「……魂の、保存…… それはつまり、世界の保存……、ああ、なるほど。”魔の王”、貴様がやろうとしていたことは、そういうことね」

あの日々の記憶を手繰る。

駆け抜けた日々、あなたたちがいた日々を、私だけが想う。

気付けば私は、そのやり方を考え始めていた。

「王国の、幸運と英雄は動き出した…… 塔は未だ健在、踏破する者もなし。天使教会の長は賢明で、竜教団の秘宝のことごとくは英雄の武装に成り果てた……」

「そして、アレ。あの力、トオヤマナルヒト…… ”霧”、保存の力…… 興味が尽きないな。トオヤマナルヒト。キミは、何者だ？」

「なぜ、あの時、私の名前を知っていた？ この私の、呪われた民の名前を。誰も覚えていないはずの民の名前を、さ」

「キリヤイバ…… アレ、アレさえあれば、勇者を…… みんなを、あの時を、また」

私の中で、一度は諦めたものに火が付き始める。それは決して求めてはいけないもの、決して願ってはならないもの。

私だけは、それを望んではいけないもの。

だって、それはみんなとのあの時間を、あの物語を否定することになる。

めでたし、めでたし。それで私たちは完結した。だから――

――ウエン！ 見てみて！　すごい景色！　ワタシ、貴女と旅に出て本当によかったわ！

――ウエン姉ちゃんが寂しくならないようにさ、俺が

――ウエン、オレと結婚しようぜ、大丈夫、オレの方が先に死ぬけど、でも、おまえは――

ーウエン、僕と君だけ、この先ずっと、生きてて何になるのかな

ーウエン、ここじゃない場所で、いつか、今じゃない場所でー

みんなの声が聞こえる。熱に浮かされたように駆け抜けた日々の記憶。

ーいつか

ーいつか、また会えるよ、ウエン

温かな言葉の数々。勇者パーティー。大戦を駆け抜けた私の大切な仲間たちとの思い出。

それを、私は。

「嘘だ」

また会えるなんて、嘘だ。

いつか、また、なんて、嘘だ。

いつか、なんて日はずっとやってこなかった。

風が強く吹いている、だから私は眠れない。

「ヒトの時間と、私の時間は違う。みんな私を置いていった」

「いつか、また。いつかって、いつなの？ もう充分待ったよ、私」

ダメだった。みんながいなくなった後、私も一人で頑張った。

「みんなと出会う前の数千年はすぐだったのに、みんながいなくなつてからの数百年が、とても永い…… 暗くて、寒くて、たのしくないの」

弟子を取ったり、世界を救ってみたり、この世の嫌なことを色々なくしてしようとみたり。

でも、ダメだ。ふとした時に理解する。

私の時間はあの時から止まっていることに。みんなと、勇者と駆け抜けたあの日々は私とい存在に焼けつき、離れない。

「昔の私のままでいたらなら、平気だった。私はこういう生き物で、ヒトとは違っていて理解していた」

まばゆく輝く一時、みんなと一緒にだったあの時間。かけがえのないものと私は知らずに過ごした。

「でも、もう違う。みんなが、勇者が私を、ヒトにした。してしまっただ」

めでたし、めでたし。勇者とその仲間の英雄譚の結末はきつと、ハッピーエンドで幕を閉じた。

世界は救われ時は巡り、新たな文明を迎えた。それでよかったはずなのに。

私達はやるべきことをやり、成すべきことを為した。それでよかったはずなのに。



ああ、どっしょに。

「……会いたい」

あの時を想う。

「……さみしい」

あの温もりを想う。

「戻りたい、みんなが、勇者が、いたあの時に」

「永遠に、あそこにいたい」

それは、決して私が願ってはならない。

だって、そうでしょ。そんなのバカみたいじゃないか。勇者もみんなも、世界のために、世界を次に進めるために全てを賭けた。

不滅の私がやるべきことは、その素晴らしいみんながもたらした世界を愛して、それを見守ることだ。

そう、そう、そう。それが私にしか出来ないことのはずだ。

そうやって、言い聞かせた。みんながいなくなってもう数百年が経つ。私にとっては本来短い時はずなのに、それはあまりにも永くて。

「……勇者、また、話が見たいよ」

風が強く吹いている。たった数年の思い出と、たった数百年の孤独は私を壊していたらしい。

尊さも、誇りも、意義も。私にはもう価値が感じられない。

「く、クククククククク」

ああ、笑えてきちゃった。だって、そうでしょ。あれだけ取り繕っていたのに。みんながいなくても生きていけると思い込んでいたのに。

「見つけた、みつけちゃったよう、みんなにまた会える方法。勇者とまた出会う方法。見つけてしまった、よう」

ーキリヤイバ。

彼、竜殺しのあの力。勇者や私の”魂喰らい”とは似て異なるあの力。

「魂を保存する力」

ああ、ダメ、ダメなのに。

あつけないものだった、私はみんなとの別れを受け入れていたわけじゃなくて、ただ、ずっと一緒にいれる方法がなかったから、諦めただけだったんだ。

「あの力さえ、あれば」

やり方を、見つけた。無意識に探していたその最後のピース。

出来る、そう思ってしまった。

「……」王国”は既に幸運と英雄の手の中。あれらが権力を握った以上、あの国はこれからひどいことになる」

気まぐれで少し手を貸していたとある国の出来事。”勇者”の香りを纏う緑髪のおぞましい幸運はきつと、これから世界に牙を剥く。

3836

「となれば、残るは帝国。ああ、なんてことだろう。出来てしまう、帝国さえ乱れ、ヒトという種に全滅の可能性さえ生まれれば」

揃った、揃ってしまった。

条件も、時勢も、理由も。

そして、実現可能な方法も。

ビュオオオオオウ。

風が、また強く吹いた。

私の背中を押すように。

そして、ぷちんと。

何か、私の中で留金がちぎれる音がした。

ーウエン、また、会えるよ、またいつか。きっと。

「く、く、く、そうだ、そうだね、勇者。ああ、でもね、いつか、なんて日はこないのさ。……それを本気で望み、それを実現するよう  
に動かない限りは」

決めた。よし、しよう。

「やっぱりダメだよ、私。みんながいないと、キミがいないとつま  
らなかったよ、勇者」

胸が、暖かい。

ああ、数百年ぶりの感覚。この名前はなんだっけ。

「勇者、キミがまた生まれるように努力するよ」

それはつまり。私はこれからみんなが愛し、守り通したこの世界を壊すということだ。

「そして、今度こそキミを失わないようにするよ、キミをずっと、ずっと、保存して、もつどこにもいかないようにするんだ」

それはつまり、勇者が生まれる世界を望むということだ。

「何人殺せばいいかな、何を壊せばいいかな。キミはきつと怒るだらうね、勇者。ああ、でも、キミがないこの世界よりは、キミが私を殺そうとして怒る世界の方がいい」

手が震えている。



ああ、出来る、私にはそれが出来てしまう。

「竜も、超越者も、軌跡も。全て、全て。乗り越えよう。大丈夫さ、あの時は出来た。ならこれは、そう、前人未到の物語じゃない、ククク、ああ、そうだ。物語はまだ終わっていなかったんだ」

思い出した。これは高揚だ。

「私の血、私の元。ああ、ククク、そうだ、決めたよ、そもそも私は何も我慢する必要なんかなかった」

風が、風が、止まらない。

大戦よりも、前の時代。ヒトとは別の人が星々に手を伸ばしていた時代の末。

私達は産まれた。この星の機能を司る存在として。竜とはまた別の惑星の概念体として。

「決めた、やろう。勇者パーティ射手のウェンフィルバーナじゃなくて、私自身として。古い星の機能として、私は私のやりたいことをしよう」

そうだ、方法があるのなら我慢なんてもつする必要はなくなった。

私は、いや、私の種族はそついう生き物だ。

「くくく、ああ、私、どうしようもなく、トウスクの民だったのね。世界の深層、真理を求めて最も古い時代に消えた民。あの時、一緒にいかなくて、本当によかった」

まずはどこから始めようか。効率よく、誰に気づかれることもなく、始めよう。

ーウエン、あたし、少し心配。あたし達の時間と貴女の時間は違うから。貴女を独りにしてしまうのが、とても怖い。貴女のよ  
うな良い人を独りにしてしまうのがとても。

「……ッ」

声が、リフレインする。

勇者は、もしかしたら私がいつかこうなることに気づいていたの  
かもしれない。

ーウエン、世界をたのしんでね、心ゆくまで。あなたのー

「勇者……」

水が、溢れるように、もう限界は来ていた。

キミはとていいやつだ、でもね、私は

「私は、キミが思ってるほど良い人じゃなかったよ」

手の震えが、ゆっくり収まりはじめる。

その震えは、きつと、私に残された最後の良心。最後の夕ガ、最後の分岐点。

ここで諦めれば、世界は安寧。”幸運”と”英雄”がやろうとしていることはおそらくこの世界の免疫機構によって修正される。

竜か、超越者が、あるいは別の何かが、彼らの前に立ち塞がるだろつ。

そこに横槍さえなければ、そこに大きな風が吹くことがなければ。

「なんだっけ」

でも、もう私は止まらない。諦めることはない。勇者の守った世界に、勇者はいないから、もういいんだ。

「勇者の口ぐせ、難しいこととか、試練とか、ピンチの時によく言ってた言葉なんだっけ」

私もそうするよ、勇者が生きていたように、貴女はいつも笑って、心の底からたのしそうに、世界に挑戦していたね。

いつも、あの言葉とともに。

「……の、……」

ゆっくり、目を瞑る。

「……う……のまま……」

貴女を思い出す。思い出せなくなる前に。

貴女の手が、私に勇気をくれる。この世界をぶち壊すための勇気を。

ああ、そうだ。貴女は世界と闘うとき、いつも、こう言っていたね。

「欲望のままに――」

私は、勇者を取り戻す。

私のたどり着くべき場所は、過去にしかないのだから。

「さて、どこから始めようかなー」

手の震えは、完全に消えて、私のタガは無くなった。

やることはたくさんある。世界のこと、あの塔のこと。そして、キリヤイバと竜殺し。

「たのしくなってきた」

たのしい世界のはじまりだ。勇者、貴女に会えたらまずは、うん。お昼寝がしたいな。もう数百年は寝てないから。



ぴん。

「えっ？」

気づくと、目の前に何かの矢印が。

【メインクエストが発生しました】

73話 すいみんすいみんすいみんブック（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください  
さいー！

よければ下の評価宜しくお願いします！ 励みになります。

74話 家に、帰ろう

「うーさぎ、おーいしーふんふーん」

ボクの終わりは決まっている。

その道のりは知らずとも、終わりだけはもう知っているんだ。

「うーぶなーつーりしふんふーん」

最期はきつと、暖かい火によって送られる。

人を試し、人に試され、人を貶め、人を殺して、人に滅ぼされる。

「くー、かー」

背中におぶる君の体温と、君の寝息がただ心地いい。この思い出と、この感覚だけで、ボクはきつと永遠の孤独にも耐える事ができるだろう。

ボクではない人知竜、全知竜が編み出した、記憶を繋げる魔術式。

卵が先か、鶏が先か。それが生み出された瞬間に、人知竜は皆、キミの事が大好きになってしまった。

ボクはボクであつて、ボクだけではない。ありとあらゆる選択肢、あらゆる歴史の人知竜の記憶を継いだ存在。

「トオヤマくん、トオヤマナルヒトくん」

キミの名前を呼ぶたびに、胸の奥からぽかぽかとあるはずのない熱を感じてしまう。

自己の同一性すらあやふやなボクだけど、この瞬間だけ、この感覚だけは紛れもなく、ボクだけのものだ。

「我ながら、不思議な魔術式を編み出したものだねえい」

知らず込み上げる笑いすらも心地よい。

連綿と引き継がれる記憶は、僕という個体をぐちゃぐちゃに掻き乱す。

今の自分はいつたいなんなんだろうか、僕ではない人知竜の記憶を持つ僕。その記憶により、トオヤマナルヒトへこんな気持ちを抱く僕。

「ボクのこの気持ちは、本当にボク自身のものなのかな」

知を求めるこの本質が、ゆっくりゆっくり考察を深めていく。

魔術式により、同位した存在となった僕。この気持ちも、想いも、記憶も、本来であれば、僕ではない人知竜のものなのだろう。

だとしたら、それは、それは――

「なんて、素晴らしいんだろう。ああ、益々キミの事が気になるよ、トオヤマくん」

あの僕。あの私、あの我が。

記憶の共有などという自己の確立を脅かしかねない危険で愚かな選択を選んだという事実。

「こんな、未完成、いや、完成するはずのない杜撰な魔術式を創り出してさあ。すぷぷ、ああ、理解できないよ、人知竜」

この、全知の竜がそれをしてまで再会を望んだ人間、それをしてまでそばにいたいことを選ばせた人間。

それが君だ。

理解できない、はずなのに。僕はもう君にどうしようもなく惹かれ始めている。僕のこの引き継いだ記憶と、実際に触れ合う君が、あまりにもそっくりで、何一つの解釈違いもないせいだ。

君は、竜を畏れる。

君は、竜を恐れない。

君は、竜と並び立ってくれる。

君は、竜に寄りかかることはない。



「すぶぶ、アリスが気に入るのも無理はないねえい。あ、そうだ」

ぱちり。指を鳴らす。魔術式の起動動作。

森の中、こうして君をおぶさって歩くのも悪くないけど、一ついいこと思いついた。

「仮説構築、定理説明」

ふっ、と景色が変わる。

魔術式による転移、森の荒れた道から、白い大理石で埋められた屋敷へと。

「ふむ…… 帝国のジジイめ。やはり侮れんわけだ。小憎らしい審美眼をしておつてからに。ゲルーン銀を惜しみなく使ったこのボディに、職人技としか言いようのないこの意匠。ふかか、悪くない」

尻尾をゆらゆら揺らしながら、大きなベッドの上で銀色の盃を眺める女がいた。

「む？ 老竜か。貴様、誰の許可を得てオレの部屋に入っておる。それにベルナルが探していたぞ。いい加減に居候の身分でいい気なもの……………は？」

僕の選んだ場所は、ある幼い竜の部屋。

そこでは人の形には広すぎるベッドの上に、だらしない姿で寝転がる金色の女が1人。

アリス・ドラル・フレアテイル。最も新しい竜にして、あの忌々しい炎の化身の血を引く竜。

最もヒトに近く、あらゆる可能性を許された竜。

呑気にまあ、下着だけでごろごろしちやつて。まあ、でも、ドラゴンほだらけるのが好きだから仕方ないかあ。

「は？ ナル、ヒト？ は？ え？」

バタバタと、あたりのシーツを手あたりに掴んで自分に巻きつける金色ドラゴン。

そのだらしない姿をトオヤマくんに見せるのがいやなのだろう。まあ、わからないでもないよ。

「すぶぶ、可愛い寝顔だろう？ あ、ただの、自慢だから。ばいびー」

「貴さつーー 待つ」

「待たないよ、いいじゃないか、少しくらい。キミばかりずるいよ」

パチん。

怒りか、羞恥か。おそらくはその両方で耳まで真っ赤にした金色の竜。

彼女に、背負ったトオヤマくんを見せびからしてそのまままた転移。ついでに竜大使館に簡易的な封印も施したのですぐには追いかけても来ないだろう。

竜は封印という概念に弱いからねえい。

まあ、時間をかければあの奉仕の眷属が解除することだろう。と  
いうかなんでアレが普通に人界にいるんだろう。

「あ、わ、わわわ」

「へ、へ、へ？」

「な、なんだ?! 何が起きた?」

「え、うそ、あれって」

喧騒に、包まれる。

荒くれ者たちの本拠地、冒険者ギルドの酒場だ。

次の転移の場所はここ。トオヤマくんはきちんと、冒険者としての役割を果たした。ならばそれには報酬が必要だよねえい。

「へ、そ、その魔力の色……ぜ、いえ、人知竜、様……?」

突如現れたボクに気づいたヒト達が一斉にざわめき立つ。

その中の1人、ボクを見て口を開けている美しい亜麻色の長髪の女性。その茶色のローブに、身長ほどある杖に見覚えがあった。

魔術学院の外出装衣だ。

「ん？ キミは…… ああ、レドナ。レドナ・スパーク・ラカ君かい？ すぶぶ、ああ、そういえばキミは冒険者もやっていたねえい、確か魔術階級は中級…… オーダー級クラスだったかな。その年で大したものだよ」

「……え、な、なんで、私の名前、知って」

「すぶぶ、当たり前だろう？ 学院に学ぶモノはみんな、ボクのヒト達だ。ぜんぶ覚えてるに決まってるじゃあないかい。レドナ・スパーク・ラカ君。キミの論文は以前読ませてもらったよ。魔力を色という認識で段階分けするその視点は中々に、興味深かった。式構築の練度に差があるのはその色と、式の特性に相性があるという考えは面白いねえい」

ボクは魔術学院にこれまで在籍している生徒の顔と名前を全て知っている、彼女はなかなか優秀な生徒の1人のはずだ。

「は…… う…… ああ、ああ…… 我らが、始祖、魔術師の護り竜、光栄、光栄の極みです…… 私の名前を覚えて頂いているばかりか、論文の内容まで」

レドナ君がその場に這いつくばるような勢いで、膝をつく。

「お、おい、あれ、一級冒険者だよな、魔術師の女だ」

「あの銀髪の女、どうやって現れた？」

「え、てか、あのおんぶされてる男、もしかして……」

ふむ、彼女は元々人目を引く存在だったようだ。そんな彼女がボクに対して首を垂れていることに余計に注目を集めてしまった。

「すぶぶ、ああ、君、確か一級冒険者だったねえい。済まないが、ギルドの職員を呼んできてもらえるかい？」

「は、ははははい！！　すぐに、ただいま！　人知竜様、よければその間こちらの席にお座りくださいませ！」

「え、レド、今ここ、俺たちが座って……」

「今私の言うことに少しでも文句言ったらこのパーティから抜けて貴方達を殺して私も死にます」

「」「」「……ういっす」「」「」

「すぶ、済まないね、冒険者くんたち。このことは覚えておくよ」

「え？　い、いえいえ！　全然……　やべー、なんだあの美人……  
エルフか、何かか？」



「お、俺、胸がなんかドキドキして」

「凡骨ども！ スタンドアップ！ 人知竜様に早くお席をお譲りして！ あ、じ、人知竜様、お、お背中に負われている方は、お眠りに？」

「ああ、彼のことは気にしないでいいよ、ありがとうね、レドナ君」

「ギャツツ…… うふ、ふふふふ。歴代学長達でしか会えない始祖に、微笑まれた。もう、ここで終わってもいい」

「レドナが倒れた！？ 鼻血がつ……」

「ら、いひょうふ…… ギルド、ギルドの職員を呼ぶわ、人知竜様のお言葉通りにするのー！」

バタバタしながら、レドナ君達がギルドの奥に消えていく。うん、しばらく待つていればギルドの人間と話が出るだろう、持つべきものは可愛い教え子たちだ。

「な、なんなんだ、何が起きてるんだ……」

「お、おい、あそこの騒いでる一級パーティー、”魔術師”持ちの連中だよな。何してるんだ？」

「ケツ、羨ましいよな、魔術師の加入なんてもう冒険者として成功が許されたようなもんじゃん」

「なんか慌てて、窓口の方に向かっていったぞ」

「あの銀髪のお姉さま、美しすぎるわ」

「お、俺、声かけてみようかな」

ヒトの声がうずまいている。あの大战を生き抜いたヒトの子孫と  
思うと感慨深いものだ。

ボクは、自分の心が少し高揚していることに気づいた。

「ここは、たのしい場所だねえい」

私は、学院の生徒が空けてくれた席にトオヤマくんを座らせて、  
それから隣に腰掛ける。

喧騒に満ち、ヒトの活気に溢れるこの場所、嫌いじゃないなあ。

「キミにはピッタリの場所だね、トオヤマくん」

「すー、ぴー、すぴょー」

背もたれに体を預けたまま、トオヤマ君はまだ目を覚さない。私  
が、深く眠るように魔術式を施したのとは別にそれだけ消耗してい  
るんだろう。

遠巻きに見つめてくるヒト達の視線、そのいくつかに微笑み返す、  
反応はさまざまだ。

顔を赤らめて目を背けるもの、分かりやすく魅了されてくれるも  
の、逆にこちらに怯えるもの。

「すぶぶ、ヒトはほんとに可愛いねえい」

ボクはヒトが好きだ。可能性に満ち、そして確かに”奴ら”の形

質を継いだヒトは面白い。

彼らを、見ていると自然と微笑みが溢れる。もしも、ボクに子が  
いれば、それらにも同じような感情を抱くのかも知れない。

「すぴよー、ぐ、ぐむむぐ」

「……すぷぷ」

目の前にいる人と、周りのヒトを見比べる。

面白いな、ああ、面白い。やはり君に抱くこの気持ちと、ヒト達  
に抱く気持ちは似ているけど違うなあ。

君を見ていると、胸の奥が暖かくなる。けどね、それをずっと感  
じているとその熱はいつのまにかドロドロと溶けて全身に広がって  
いくんだ。

そのドロドロはどんどん膨らんで、ボクの脳みそをおかしくさせていく。

「……この気持ち、ああ、私も、やはり、竜だねえい」

自分もまた、どこまでも竜。ヒトが寝て食べて犯すのと同じように、この身体には暴力と支配に対する本能的な欲求が備わっている。

己の焦がれるモノに対しての、この昏い気持ちは性分なのだろうね。

「すぶ、ああ、たのしいな。キミを見るのはほんとに楽しいよ、トオヤマくん」

未知、未だ知らぬこの感情はしかし、連綿と継がれる記憶の中にもあったもの。

トオヤマナルヒトを支配したい、その夢、その欲望、全てを踏み

躓って、自分しか見えないように、自分しか頼れないようにしてやりたい。

ボクの心の中にはその悪性が本音としてきつちりある。

「ああ、いい……」

そんな気持ちを抑えつけながら、キミを見る。ダメだ、ダメダメ、そんなことしたら嫌われてしまうもの。

竜としての本能を、ゆっくり、じわじわ抑え込む。ボクをこんな気分させるキミは、ほんとに愉快な存在だよ。

「アリス…… やはり、ボクはキミが羨ましい。ずるいよ、君だけ、トオヤマナルヒトの敵も、味方も両方体験しちゃってさあ」

あの金色ドラゴンに、眠るトオヤマ君を見せつけることくらいは、そして自分の匂いをつけるくらいは許されるだろうね、でない和不

公平じゃあないか。

こつ、こつ、こつ。

知らず、リズムを刻む指先、簡素な木のテーブルの上で指を踊らせる。

トオヤマ君の寝顔を見ながら物思いに耽る、ああ、なんて贅沢な時間なのだろうねえ。

「し、しし、失礼、致します、全知竜」

震えた声、しかしどこか胆力を感じさせる声だ。ボクがそれに視線を向けると、わかりやすく表情を固まる小太りのわかりやすい力ツラの男。

おやおや、ギルドの職員どころか、この街の主のおでした。

「辺境伯！今の全知竜様は、全知竜様ではなく、人知竜様です！



名前をお間違えになるとは、王国は、魔術学院を愚弄するつもりなのですかああああ？！」

ボクの名前を呼び間違えた辺境伯殿に、レドナ君が毛を逆立たせた猫のように食ってかかる。すぷぷ、魔術師はみな、社会常識が薄いからねえい。

「レドナ、レドナさん、領主様だから、本当やめて、縛り首になるから、魔術師のお前は大丈夫でも、俺らは死ぬから」

「ほんとやめて、その人辺境伯、領主様だから」

「領主がなんだってンのよ！ 人知竜様よ！ 人知竜様、我ら魔術師、いや、人類種ヒューマンに知恵と魔術式を授けた伝説のお方！ 敬意が足りてないのはどっちなのよ！ このお方がいなければ、大戦の時に人類種はー」

レドナ君が唾を飛び散らしながら叫ぶ。うん、悪い気はしないけど、今は落ち着いてもらおうかな。

「……すぶ。ああ、構わないよ、まだまだ名前を変えてから時間も経っていないしね。それにしても、ここは少し乾燥してるねえい」

「……っ！！ 人知竜様、どうぞ、粗茶ですが……」

落ち着きを取り戻したレドナ君、うん、魔術師はそうでないとな。自らを滅ぼすほどの熱と、それをコントロールできる冷たさを兼ねるのがいい魔術師の条件だ。

「ああ、ありがとう、レドナ君。へえ、面白い仮説構築式だねえい。今度また教えておくれよ」

差し出された紅茶、カップを揺らすと湯気が揺れる、うん、良い香りだ。胸に満ちるような豊かな芳香、丁寧に焙煎されているんだね。

すつと、口に含むと仄かな苦み、しかしそのすぐ後に舌触りのいい淡い味が広がる。

「美味しいよ、レドナ君」

トオヤマ君にも飲ませてあげたいな。ボクは知らずに微笑んでいた。

「ア」

「レドナが倒れたアアアアア！ あんの血も涙もない冷血女が、銀髪の超絶美人の笑顔で倒れたアアアアア」

何故か、レドナ君が倒れてしまった。でも彼女の体に異常はない。問題はないだろう。

「人知竜様、人界の知識と、ヒトが魔へと抗う術を広めた知識と開拓の徒よ。お会いできて光栄です、私はー」

辺境伯殿が、その騒ぎを尻目に首を垂れる。

ボクは彼のことを、この冒険都市の主のことを知っていた。

「サパン・フォン・ティーチ辺境伯だろう？ 知ってるよ、お噂はかねがね。あの帝都の皇帝が恐れる大貴族様だ。すぶぶ、キミは、そうだなあ。ティーチ家の初代に雰囲気似てるよ。シピンのおぼっちゃんを思い出す」

「……シピンとは、まさか、シピン・ティーチ…… 我がティーチ家がフォンの名を頂く前の、先祖でしょうか？」

「ああ、そうさ。あの獣どもの国を焼き滅ぼした時に、シピンは魔術学院に協力してくれてね。腕も良く、何より頭の回る良い傭兵の鏡だった。すぶぶ、きちんと身を立てたようで安心したよ」

「……我が先祖の歴史を貴方様という生ける伝説から直接お聞きできたこと、誉めたいします。して、その、人知竜様、大変恐れながらお伺いしても？」

「うん、構わないよ、冒険都市の長よ。キミの仕事ぶりに敬意を表して、拝謁を許す、……なんてね」

やはり、ヒトは面白い。ボクにとっては瞬きのような時間の中で信じられないほどの変化と、終わりと継承を繰り返していく。

シピンが目に住していた知性は、数百年の時の中失われずヒトの血の業によりきちんと受け継がれているようだ。

「……そ、そこでお眠りになられている方、も、もしかして、その黒髪の男、いえ、そのお方は……」

「ああ、そうか、冒険都市の長だ、知っていて当然だよなえい。そう、君の思う通り、”竜殺し”の、トオヤマナルヒト君だよ」

「……………あー」

辺境伯が目をパチクリした後に、間延びした声を出す。

トオヤマくんにだいぶ苦勞させられてるようだねえ。面白。

「すぶぶ、辺境伯さん。察しがいいのは構わないけど、ほら、頑張って。放心しちゃってるよ」

「……大変失礼いたしました、偉大なる古き竜よ、ここは御身と、そのお連れ様にとっても騒がしい場所で良ければご足勞を……」

「ううん、それには及ばないよ、辺境伯さん。ボクはこの喧騒が嫌いじゃない。竜は衆目を浴びるのも大好きさ、みんな自立ちたがりだからね。それにー」

ボクはチラリと周囲を確認する。ああ、ギルド中のヒトの視線がこちらに集まっている。

塔級はどうやら近くにはいないらしい。いや、下、地下か。良い

スキルや、天使の残り香が強く薫っている。

まあいいや、少しアピールしておこうか、ごめんね、トオヤマくん。

「彼が人知竜と一緒にいる姿を、きちんとみんなに見せつけておかないとね。ああ、噂話を流しても構わないよ。トオヤマナルヒト、竜殺しは、魔術学院の始祖、人知竜とも大の仲良しだってね」

机に寝そべる彼に寄り添い、同じように机に頭を預ける。彼の寝息を感じるような距離だ。

「……………」

「すぶ、安心しなよう。キミ達が崇めるべき存在、あのごうつくばりの金色ドラゴンはここには来ないさ。まあ、君からしたら頭の痛い問題かな？」

「わ、私は、そんな」

「構わないさ。私は、あのお子様と違って気分です人を焼くことはないからさあ」

「は、はは、ご冗談を。……では、人知竜様、ほ、本日はどのような御用向きでギルドへお越し頂きましたのでしょうか？」

「ああ、彼がご覧の通りお眠だからね。代わりにギルドに報告に来たのさ」

「ほ、うごく……」

あ、嫌そうな顔をしたけど一瞬で表情を戻した。やるー！。



「ああ、森林地帯に出現した古代種、ティタノスメヤの種としての到達点、そうだね、古い物語から名前をとるとすれば、ラミア、とでも名付けようか。それを彼が殺した、冒険者としてね」

「……………古代種？」

「おや？ まだ、話がキミのどこまで来てないのかい？ ふむ。面倒ごとを少なくするためにあの塔級冒険者君を先に送還していたのだが……………」

……………もしも、あの先に送還した塔級冒険者くんがトオヤマ君の手柄を横取りするような真似をしていたとしたら、残念だが彼にはミズにでもなってもらおうかな。

「ヒッ……………す、すぐに確認を」

辺境伯殿の顔が真っ青になっていく。ああ、悪いことをしたね。でも、トオヤマ君の報酬は誰にも手出しさせないよ。

「お、お待ちください！ し、失礼いたします、領主様、ただいま先程帰還した、塔級冒険者、ユト・ウエトラルからの聴取が完了しました。森林での行方不明者発生の原因は、古代種に相当するモンスターが原因と。そして、ユト・ウエトラルの証言から、それを討伐したのはトオヤマナルヒトだということも確認取れました！」

窓口の奥から、目鏡をつけた利発そうな女性が飛び出してくる。いいタイミングだ、冒険者ギルドには優秀な人材が多いね。

「……すぶ、ああ、彼が正直者で良かったよ。ほんとにねえい」

「た、た、大変失礼いたしました。人知竜様、お、御身の手を煩わせてしまい、誠に」

へえ、このメガネの子、いい脳みそをしているなあ。魔術師の脳みそのつくりをしていないのが残念だ。魔力器官もないかあ。うーむ。惜しいなあ。

「んーん、大丈夫、その辺りの確認だけしておきたかったのさ。あ、そうだ、ほら、ダメ押しの証拠も、ここに」

「これ、は」

「怪物の鱗と、髪の毛。他にも証拠として必要な部位があれば、気兼ねなく、竜大使館を訪れてくれたまえよう」

まあ、これだけギルドに手を回しておけばトオヤマ君の報酬は硬いだろう。釘を刺すのはこれくらいでいいかな。

「じ、人知竜様？」

「うん、ここでの用事は済んだ。レドナのお仲間たち、その子が目を覚ましたら、ありがとうと伝えておいておくれ。ボクの生徒が楽しそうに生きる様子が見れて満足だったとねえい。それと、君たちも、彼女と仲良くしてくれて、ありがとうねえ」

「あ、え、は、は、はい!!」

「あ、お待ちを、人知竜さー」

「すぶぶ、じゃあねえい」

パチリ。魔術式、仮説構築、定理証明終了。

トオヤマ君を持ち上げて、また背中に背負う。筋肉がしっかりと  
いた細身の身体の感触が心地いいなあ。

……噛みごたえ、ありそうだなあ。

なんてことを思っているとすぐに転移が完了する。ぱあっと、開け

た視界の目の前には、古寂れたドア、食べ物匂いと、埃の香りが  
いりまじった貧しい建物の中。

おや、扉の奥、部屋の向こうから声が聞こえるなあ。すぷぷ、な  
んか、うん、人間讃歌の予感がする。

気配を消して、聞き耳たてちゃお。

私は、式を走らせてトオヤマくんごと、透明化。人差し指でドア  
に触れる。

部屋の奥から、声が。

「ま、待て、ストル…… き、危険すぎる…… いくら君でも、再  
びあそこに1人で行かせるわけには」

「ラザール、貴方の身体は貴方が思うよりもひどい状態デイス。今、

貴方に飲ませたのは、天使の涙と呼ばれる教会の秘薬、私が持っていたものの最後の一滴デイス。ゆっくり寝てれば、身体も治る筈デイス。安静にしてなさい」

「ストル！ あの化け物は、君が思う以上に恐ろしい存在だ、1人では、ぐ、うう……、どうしても行くのなら、俺も、連れていけ」

「バカデイスか、ラザール。いえ、バカデイスね。今の貴方はお荷物デイス。ニコちゃん、みんな、そこのおバカなりザドニアンをよろしく頼みましたデイスよ」

「す、ストルちゃん、ほ、ほんとにだいじょうぶなの？ わ、わたし……、心配よ、とても、とても嫌な感じ、こわいの。お兄さんもストルちゃんも帰ってきてくれるのよね？」

「大丈夫デイス、何も問題ありません。そのラザールよりもバカな奴を助けにいくだけデイスから。私、強いので」

「ストル……濟まない…… ナルヒトを」

「ふん、わかつたらよく寝ておくのデイス。……どいつもこいつも、カッコつけやがって、デイス。一人で死なせてなるもんか」

ああ、トオヤマくん。良い仲間、良いヒト達を選んで救ったね。

皆本気でキミを心配してる、故に彼らはとても危うい。キミ一人かければこの集団はそれだけで容易に崩れるね。

「……んー？」

扉の向こうから、のんびりした声が聞こえた。

おや、気付かれちゃった。こどもとは鋭いものだねえい。

「シロ、どつし、ッー！！ 誰だ！？」

扉が開く。

鋭い剣尖が閃き、ボクの首元にそれが向けられている。ロクに目で追うことが出来なかった。

「おおっと、おう。　すぶぶ、やるねえい、正義の繰り手。へえ、正義が眠っているにもかかわらず、そこまで動けるんだねえい」

「誰デイスー！　名乗りなさい！　……この感じ、竜……？！」

水色の髪に、水色の瞳。へえ、大戦の時に滅んだ妖精種みたいな容姿だねえい、先祖返りでもしたのかな。

……可愛い女の子だ。ふーん。

「鼻もよく効くんだねえい。ああ、いい香り。この部屋トオヤマクんの残り香に満ちている……」



うん、トオヤマくんの残り香で落ち着こう。でも、この子にもトオヤマくんの匂いが移ってる、ムカつくな。

「は？ トオヤマ？ って、え？ その背中におぶっているのは…」

「すぴょー、すくー、ズズズ」

「ああ、なんてことだ、偉大なる歯にかけて…… ナルヒト……」

奥のベッドから渋い声、心底安心してゆるみきった声が聞こえた。

「やあ、リザドニアンのラザールくん。安心しなよ、キミの友達は無事さ。おっと、可愛らしいちびっこ達、そのベッド失礼するよ。彼を眠らせてあげるからさ」

「な、な、お前、ま、さか」

突きつけられた剣をかわして、部屋に踏み入る。安っぽい部屋だ。宿、だね。多分。

空いたベッドに、トオヤマくんを寝かせる。

「やあ、天使教会最優の騎士、”正義”を宿す免疫機構さん。今代の正義と会うのは初めてだねえい」

「ッー」

「おや、驚いた。斬りかかってこないのかい？ キミの前と、前と前と前の正義の繰り手はボクの顔を見ただけで襲いかかってきたモノだけだ」

意外だ。教会の騎士というだけで、このボクを討つ理由は1000はあるだろう。

そして加えて、彼女は”正義”の幼体でもある。本能としてボクに反応しそうだけど。

「……私の中の全てが、貴女を斬れと囁いています、しかし、私はその前に貴女に聞かなければならないことがあります」

「……聞いてもいいよ、正義の幼体」

身体のコわばり、発汗、震え。身体の反射活動を理性で抑えている？ ふむ、興味深い。

「竜よ、貴女は、トオヤマナルヒトの敵ですか？ それとも味方、ですか？」

「……驚いた。コイツ、我慢できるんだ。」

「す、ぷ。ぷ。ぷ。ぷ。あ、なるほど、なる、ほ、ど。トオヤマ  
くん、キミはほんとに…… やってくれたあものだねえい……」

またキミか、すぷぷ。星の免疫機構をすら冒したわけだ。

「質問に答える気が、ないのデイスか？」

「……味方だよ、例えば彼がこの世界の全てを敵に回しても、ボクだ  
けは彼の味方さ」

彼女がボクをじっと、見つめる。湖の水面のような瞳だ。決して揺  
れることのない水面、ヒトのしている目ではないねえい。

「嘘、ではない、デイス」

「わかりました、それじゃ、貴女は私が斬るべき存在ではありません  
んデイス」

「いいのかい？ キミ、ボクがなんの竜なのか気付いてるだろう？  
教会にとつては不倶戴天、その歴史の全てを賭けて討つべき敵じ  
やあないのかな」

彼女の身体の揺れが消えていく。おいおい、ホントに正義の本能を  
抑えちゃったよ。トオヤマくん、キミ、この子に何をしたー

「……………私は、今、教会の剣であると同時に、彼の剣デイス」

……………おんなたらしめ。トオヤマくんのバカ。

「……………へえ、ふうーん。へえ。すぶぶ、キミ、名前  
はっ」

「ストル・プーラ。栄えある教会の騎士にして、異端審問官、トオヤマナルヒトの剣デイス」

「……………それ、誰が言ったの？」

「トオヤマナルヒト本人が。お前は俺の剣だ、と」

「……………ふうん」

バカ、ばかばかのばか。トオヤマくん、きみさあ。ほんとさあ。

なんだい、なんだいなんなんだい。トオヤマくん、キミさあ、ほんとさあ、なんかノッてるねえ、ノリノリになるキミは好きだけどさあ、誰にもかれも口説いてるんじゃないよ、全く。

ボクは目の前の、変わり始めている世界の免疫機構の幼体を眺める。

それは明らかに、おかしい。7つの星の免疫機構、そのうちの一つ、”正義”。その駆り手はみな、盲目的に己の正義のみに従い続ける人形の筈だ。

なのに、今この目の前の水色髪のメス猫は違う。

「……蒙を啓く、か。トオヤマくん、さすがだよ、人知竜であるこのボク、キミのことが大好きなボクでも正直少し引く」

「何を、言ってるのデイスか」

「……キミは、歴代の”正義”の中で一番恐ろしい存在になったというとき。すぶ。おや、子供たちか。子どもは好きだよ、可能性と未知の象徴だからねえい」

正義の幼体は、正義に侵されてただそれを為す人形になっていくはず。歳を経れば歳をへるほどに。

彼女の年頃から、とうに人間性を失くし正義を為すだけの人形に成り果ててもおかしくないんだけどねえ。

「あ、あなた、お兄さんのおともだちなの？」

足元から、小さな声。

おそろおそろ。興味と、恐れと、決意を感じる。

小さな女の子がボクを見上げていた。

「おや、三つ編みがかわいいねえい。くんくん、おや、おやおやおや、すぶぶ。キミ、名前は？」



「じ、二」

「へえ、いい名前じゃあないかい。なるほど、珍しいヒトだねえい。それに、その帽子の子、キミだよ、一番ボクを警戒してるキミ」

ああ、いい。

この子達、今この正義の幼体を心配してボクに話しかけてきたんだ。

すぶぶ、いい。小さき君たちからしたら、ボクはたしかにこわい存在だよ。

「……………なん、ですか」

へえ、いいね。この部屋の中で一番正しく、ボクを恐れている。感覚だけで言えば、この正義よりもこの子の方が鋭いね。

「キミ、名前は？」

「る、ルカ」

「ルカ、家名がないかい？ 黒い髪だ、もしかして出身は王国なんじゃないのかな」

「し、知らない……」

「ふーん、トオヤマくんめ、なかなかどうして。面白い子たちと一緒にいるものだねえい。残りの子たちは普通だねえい。でも、普通故に、素晴らしい。ボクは、すぷぷ、どうしようか、既に少しキミ達のが好き、だなあ」

「っ、竜。この子たちに近寄らないでもらえますデイスか」

「おや、つれないねえい。ふんだ、いいさ、いいさ。竜は小さい子には嫌われて……」

「ありがとうございます!」

大きな元気な声。

日焼けしたこの中では最年長だろう少年が、気づけば腰を畳んで

「ん?」

「あ、アンタが誰だかはわからねえ! で、でも、アニキを、トオヤマルヒトを連れて帰ってきてくれた、だから、ありがとうございます! ニコ、ルカ、シロにペロ! お前らも頭下げねえか! アニキを生きて連れ帰ってくれた恩人だぞ!」

恐怖、しかしそれよりも強い決意と覚悟。

ああ、いい。きちんとヒトをしている。

「……ああ、キミ。すぶ、なるほど、キミが1番トオヤマ君に似ているねえい。トオヤマ君がキミ達を助けた理由がなんとなくわかる

気がするよ」

それぞれが、それぞれ出来ることをやるうとしている。

トオヤマくんと同じだ。

「うん、キミたちとは仲良くしたいな。ボクのことには気軽にアイお姉ちゃんとも呼んでくれたまえよ。トオヤマ君が選んで共にいるのなら、それはもうボクにとっても重要な存在だ」

仲良くしないとね、外堀から埋めていこうか。

「竜よ、貴女はなぜ、ナルヒトに……」

「おやおや、ラザールくん。これは、こっぴどくやられたねえい。右肩関節粉碎、肋骨粉碎骨折、おまけに折れた骨が臓器を傷つけている。天使の涙の薬効で無理やり身体を賦活させて凌いでるわけかい」

「ラザール!!」

正義の子が声をあげる、うーん警戒されてるなあ。

「心配するなよう、正義。ボクはトオヤマ君の敵じゃあない、それはつまり」

魔術式、仮説構築開始。

視界情報より、世界法則を認識。

対象、有機物、肉体。

仮説定礎、”血腫凝固を起因とする骨癒合法則”、及び”細胞活動による組織再生”

疑似事象検索、”聖女の権能、”治癒の光”

仮説”それらはそして、私の目の前で瞬時に行われるべき”

魔術式仮説構築完了、世界法則への――

「侵食開始、変質系魔術式構成完了、”癒しの手”」

「え？」

「すぶぶ、ラザールくん、身体に痛みは残るかい？」

魔術式は問題なく作動し、世界の法則を侵した。

キミに死なれるわけにはいかないから。

「な、い…… 傷が、骨が治った……」

「なら良かった。さて、やるべきことは全てやったし、そろそろボクは帰るねえい。トオヤマ君が目を覚ましたらよろしく言っておい

ておくれよ」

「ま、待て、人知竜、殿。な、なんで」

「キミを治した理由かい？ そんなもの一つしかたいたらう？」

「……………」

「ポイント稼ぎ、さ。ボクはね、剣呑で容赦なく残酷に進み続ける彼も好きだけど、それと同じくらい呑気に好きなこととして笑ってるトオヤマくんも好きなんだ」

呑気に眠るトオヤマくんを眺める。

いい眠りっぷりだ。

「キミたちは、トオヤマナルヒトが選んだヒト達だ。彼のたどり着

くべき光景にはもつすでにキミ達がいるんだろう。ボクはね、今度こそ彼と最後まで共にいたい、だからさ、ボクはキミ達ごと、彼をオトすつもりだから、そのところよろしくねえい」

「な、なにを」

「言ってることはシンプルなはずだよ。正義、キミとも、まあ、頑張ってるまくやってやるよ、なるべく仲良くしたいねえ」

「意味が、わかりませんデイス」

「わかるうとしてないだけさ、まあ、ボクとしてはキミがそのままできてくれた方が楽なんだけど……」

キミは、確実にボク達側の存在だ。

他を超え、ヒトの枠から外れる存在。世界から役割を与えられている存在。



故に、厄介だ。トオヤマ君と近すぎる、既に正義は変わりつつある、彼の自我は、ヒトに拡がり大きくなっていく。

トオヤマナルヒトの自我に、いつかきつとキミも魅せられるのだろっね。

「う、うーん、むにゃ、むにゃ」

「おっと、トオヤマ君が起きちゃっね、じゃあ、これで。また近いうちに」

「ま、待ってくれ、人知竜殿！」

ラザールくんの声に振り返る。トオヤマ君がこの世界で初めて選んだ仲間、友人。

キミはとても運が良い。

「感謝を……ナルヒトを、無事に連れて帰ってきてくれて、ありがと」

「……すぶぶ、お安い御用さ」

ああ、トオヤマくん、そしてラザールくんをえらんだキミも正しい。

パチリ。指を鳴らす、瞬時に景色が切り替わり、ボクは1人森の中。

再び、トオヤマ君を拾った場所に戻っていた。

うん、気分が良いな。トオヤマ君が始末した化け物の群れ、それを眺める。

大きな白い蛇、古代種、ラミア、とボクが名付けたその亡骸に触れる、ひんやりとした鱗の感触には、もう生の気配は感じずに。

「少し、キミが羨ましいよ。強かっただろう？ トオヤマナルヒトは」

ボクの、私の終わりは決まっている。

最後の最期にはあの暖かい火に送られる。

永遠の探究の果て、私は恐るべき只の人に敗れる、そういうふう  
に決まっている。

ボクは今、始まりであり、途中であり、終わりでもある。

「だから、これは全部ボクのがまま、気休めにしかならないこと。  
トオヤマくん、君との時間は決して永いものではないけどさ」

ずっと一緒にはいられない、けど。許してよ。

「キミとの思い出をせめて、持っていていきたいな。……努力するよ、ボクがいなくなったとき、キミが悲しんでくれるように」

想像する、その最後の時を。

トオヤマ君を思い出すことも、触れることも、話すことも、想うことも出来なくなるだろうその時を。

胸がきゅっとして、呼吸が浅くなる。

「問題だ、この気持ちは、いったいなんなんだろうっえねえい」

「答えは簡単」

「ああ、なんて心地よい、未知、なんだろう」

知りたい、知りたい、もっともっとキミを知りたい。もっともっとキミとの時間が欲しいよ。

竜祭り、どうやって誘おうかなあ。

………そういえばあの部屋にいた子供たち。1人、どこかで見た事があったような。

………

………

…

トオヤマナルヒトのゆめ、あるいはどこでもないせかい、香ば

しい香りの漂うパン文書館にて

ぺらり。

ゆっくりと、ページをめくる音が橙色の灯に溶けるように響く。

ぱちっ。

焚べられた暖炉の薪が火に舐められている。

「ハッ、マジバカね、アイ」

その場所で、彼女は1人。今の己の主人と、過去の己の従者の奇妙な時間を眺めていた。

決して彼女は認めないだろう、その有様はまるで2人を見守っているように見えていたことなど。

「アンタが、トオヤマナルヒトに懸想するのは仕方ないわ。私の夢の主人だもの、竜くらい魅せてもらわないと困るっつーの、でもさ」

決して彼女は認めないだろう、その有様はまるで2人を見守っているように見えていたことなど。

「あれだけ身体に触れてたアンタがこの変化に気づいてあげなきゃ。……マジないわー。キリのクソジジイの思う壺、面白くないわー」

大きなため息をつき、口を尖らせる。

「今はもうない概念、星の共生体にして高度情報概念体、神。その力を扱うとか、代償があるに決まってんじゃない。トオヤマナルヒトは選ばれた英雄じゃないんだしさ」

住処を同じとするその存在。トオヤマナルヒトへ力を貸し与えたキリをハーヴィーは信用していない。

狡猾で老獪、しかし同時に人間臭さを併せ持つ厄介な存在。ア

レは正しく、トオヤマナルヒトの恐ろしさを理解している、それもまた厄介で。

「ほんと、バカ。これだから処女拗らせた大いなるものは間抜けなのよ」

一時期は、己の席の後継を担わせようとしていたその竜の変わりようをハーヴェイは思う。

「その気持ちかわからない？ その感情を知りたい？ トオヤマナルヒトをずっと見ていたい？ フン、アンタの気持ちの名前なんてもう決まってるし」

灰色髪の少女は、どこか面白くないように、頬杖をついてやれやれと首を振る。

安楽椅子の背もたれ、深く背中を沈める。きいっと椅子の足が鳴いた。



「なんとかは盲目って、よく言ったもんだわー」

ハーヴィーが天井を見上げる。

自らをここに配置した存在、この世界では天使と呼ばれるハーヴィーですら理解の及ばぬ何かに由来するその、クエスト・メーカー運命の知らせからのメッセージが、呑気にぶかぶか浮かんでいた。

【遺物による影響

ー ー 無し、ナシ、  
梨梨梨梨梨梨梨梨

【嘘】

74話 家に、帰ろう(後書き)

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください  
さいー！

下の星のボタンで評価頂ければ幸いです！

75話 リザドニアンのパン屋さん(前書き)

コッペパンとソーセージと冷たい水のダイマ。

## 75話 リザドニアンのパン屋さん

……  
……  
……

「童祭まで残り7日、冒険都市アガトラ、貴族区。貴族両院アガトラ分院にて」

「さて、それでは次の議題に移ります。冒険都市近郊、平原の北部”ミトラ森林”で起きていた複数の冒険者の行方不明事件の報告です」

豪著な部屋。真鍮で出来たシャンデリアに蝋燭が静かに揺れる。ふかふかの絨毯に、一流の職人に作らせた調度品の数々は帝都の本院と比べても見劣りは決してしない。

円卓を囲むメンバー全員、しつらえの燕尾服、貴族の正装姿を揃える。

ここは、冒険都市アガトラにおいて政の多くを決める貴族の会合の場。

貴族区に設けられた貴族両院の分院にて、今この都市で起こっている彼ら上に立つ者が把握しておかねばならないことを話し合っていた。

「……oh」

「……む、どうされましたかな、領主殿」

お付きの進行役、冒険者ギルドマスター、ハイデマリー・スナベリアが新たな議題を提示した瞬間、顔色を悪くして俯いた小太りの男が冒険都市境界伯、サパン・フォン・ティーチである。

サパンの隣に座る貴族が心配そうに声を掛ける。

「いや、なんでもないよ。ギルドマスター、続けてくれ」

「はい、領主様。ここにお集まりのギルド幹部の皆様も何名かは既にコトの顛末をご存知の方もいらっしゃるでしょう。結論から言うと、この行方不明事件の原因は、”古代種”によるモンスター被害でした」

「なっ……?! ギルドマスター、それは事実でしょうか!?! ”古代種”の偶発的発生は、ヘレルの塔内部でのみ起きるものはず! それ以外の古代種は、塔級冒険者により監視されているのでは」

貴族両院のメンバーの1人が声を上げる。古代種、その脅威を理解していない人間はここにはいない。

モンスターの特異点、”大戦”よりも前から存在していた、あるいはそれら古い怪物に匹敵する力を持つ化け物の中の化け物に与えられる名称。

それは畏怖の対象となっている。

「残念ながら事実です。この帝国領において、未確認の”古代種”が、塔以外で発生していたということですね」

「……由々しき事態じゃないか？ ギルドはその発生を予見出来なかったというのは。”古代種”はそれ単体で都市をも滅ぼしかねん化け物と聞く。事実、これまでも怪物災害の呼び水となった前例もある、ギルドはこの件に関してどのような責任を持つつもりか？」

辺境伯の向いに座る初老の男。整髪油で整えられたオールバックに鷹のように鋭い目。突き出た眉頭は太く、武人の顔付きを思わせる。

貴族両院分院において、辺境伯と対になる権力者、ジスイ・メロ・ヴァンガデイ伯爵。武門であるティーチ家と並び称される帝都の武門派有力貴族。

貴族院から遣わされた辺境伯へのカウンターたる人物だ。



「……お言葉ですが、ジスイ伯爵。この件に関してはギルドはその役割、つまり、モンスターを討伐しての帝国民の生存域の確保、その使命を果たすことが出来ていると認識しております」

ジスイの言葉へ返答したのは、ギルドマスター。静かに顔色ひとつ変えずに貴い血の人間に意見を伝える。

「……どういうことだ？ 貴族院に届いた情報では、塔級冒険者、ユト・ウエトラルは生存し帰還したものの、未だ”古代種”は健在。ミトラ森林は現在も立ち入り禁止措置が取られているはずだが……」

「ええ、その通り。ですが…… 領主様？」

ギルドマスターが領主へと視線を。それは許可を求めるアイコンタクト。

「ああ、ここからは私が。済まないね、親愛なる貴族院の皆様。実は、先日の速報、ギルドから貴族院へ通達した内容には、誤り。いや、誤りというのは不誠実だね。……ギルドへは私の方からある情報の隠匿を命じていてね。君たちに伝わった情報は全てが真実ではないんだ」

「「「「つ?!」「」」

会議場に集まる貴族たちに衝撃が走る。

辺境伯が冒険者ギルドへ貴族区への報告をねじ曲げた、それを吐露したのだ。彼らの衝撃も当たり前のことだ。

「……サパン辺境伯。貴公が皇帝閣下の肝煎りであること、そしてあの武門、ティーチ家において歴代最優の当主であることを我々も深く理解して、敬意を払っている。それでいながら、貴公は我々に対して偽証報告をしたと？」

ジスイ伯爵の鋭い目と低い声が、沸騰しかけた会議をわずかに収めた。誰もが気づいていたからだ、ジスイ伯爵の静かに円卓の上に置かれた手のひらに青筋が何本も浮き出ていたことに。

「そ、そうだ！ 辺境伯殿！ どういうおつもりですか！ わ、我々が帝都の貴族院から派遣された分院と侮っていらっしやるのか！？」

がやがや、わいわい。

口々に貴族たちが文句を言い出す、ここで発言しておかなければ自分の立ち位置が危ない。それを全員理解していた。

「その件に関しては深く、深くお詫びを。ですが、聡明なる貴族院、冒険都市分院のお歴々であれば、全てお気づきになられているはずかと」

辺境伯が静かに言葉を挟む。

ジスイ伯爵のみが、その言葉に動きを止めて。

「何を言っているらっしやる！ 今は辺境伯殿、貴公が我々をつー」

「……」 竜大使館” 関係ですか？ サパン公」

静かに伯爵がぼそり。シーンと、静まる会議。先ほどまで喚いていた貴族たちが押し黙る。

「御明察にて。さすがはジスイ伯爵。全てお見通しでしたか」

にこり、辺境伯が笑う。その笑顔を見て彼を侮る貴族が数人、その数人はそう遠くないうちにこの場からいなくなるだろう。

毒虫の擬態、この笑顔はそれにとても近いものだ。

「……先ほどの発言を訂正致します。竜大使館に関して、我々貴族院は関与する権限を皇帝陛下からいただいております。こちらこそ、辺境伯の思慮や配慮を考慮できず申し訳ございません」

ジスイ伯爵が、席をたち、胸に手を当てて腰を折る。頭を辺境伯に向けて下げる。

「いえ、伯爵殿。あなたが不快に思うのも無理はない。私としては、正直、かの大使館との折衝は、貴族院の方々にお任せした方がよろしいと、兼ねて皇帝陛下に直訴しようかと考えている次第です」

「……っ?!」

辺境伯の言葉に、貴族たちが息を呑む。竜大使館、冒険都市、いや、帝国にとっては魔境の中の魔境。

彼らにとっての護り竜、蒐集竜の領域にして、竜界との繋がりたるかの場所との交渉や交流は現在、貴族においてはサパンが主に矢面に立っている。

貴族院のメンバーはみな知っている、竜との関わりがどれほど難しいか、そして、帝国にとってその竜との関わりがどれほど重要なことか。

サパンという皇帝からの信が厚い大貴族は、他の貴族にとって利権を奪っていく目の上のたんこぶだ。

しかし、現状、竜大使館に、いや、蒐集竜に、個体として認識されている貴族はサパン以外には皇帝以外に存在しないということ。貴族たちは理解していた。

「フツ、意地の悪いお方だ。して、辺境伯殿、竜大使館が関与しているということは、まさか、古代種は既に、蒐集竜様が？」

「おお、さすがは帝国の護り竜！」

「伝説通り、やはりあのお方は苛烈ながら、慈悲深い！」

額に汗を流しつつ、竜を讃える貴族たち。竜大使館との折衝役の交代などという無茶なことから話題を逸らすために、彼らはその流れに乗らざるを得ない。

その中、一人ニヤリ。

薄く微笑むサパンの表情に、やはりジスイだけが気付いていた。

「いえ、残念ながら此度、蒐集竜様はお動きになられておりません。皆様、今一度ギルドマスターの言葉を思い出してください。今回の件、冒険者ギルドは、確かにその機能を発揮した、というね」

「は？ な、なにを」

ぼかんと、首を傾げる貴族たち。

「……まさか」

ジスイが、細い目を見開く。ある可能性に気づいた。

「マリー君」

「はい、領主様。貴族院の皆様。この場を借りて謝罪を。この都市の運営に深く寄与いただいたおります皆様の虚偽の報告を行ったこと。そして、併せてご報告させていただきます」

ギルドマスター、才媛と称される眼鏡美女が頭を下げる。その長い脚と細い腰に何人かの貴族が見惚れて。

すつと、顔を上げたマリーが眼鏡をくいつと持ち上げて、淡々と告げる。

その、事実を。

「件の古代種、暫定名称”ラミア”につきましては、既に当冒険者ギルド所属の4級冒険者により討伐が完了しております」

会議場に、沈黙が募った。



ギルドマスターの言葉をみんなが咀嚼するのに時間がかかったのだ。

「……………失礼、今、なんと？ 4級……………」

「と、討伐が完了しているだと？ バカな！？ 古代種だぞ！ それも塔級冒険者でさえ生きて帰るのが精一杯だった化け物だ！ それを、4級冒険者、そこらならごろつきより少しばかりマシなだけの存在が?!」

ざわざわ。再びざわめく会議場。4級冒険者が、「古代種」を葬った。お伽話ですらありえないそんな話、酒場の飲んだくれでさえ話さないような荒唐無稽な話だ。

それをこの場にて、真面目な顔で告げたギルドマスターへ向けて貴族たちが言葉を荒げてー

「……………なるほど、”竜殺し”、ですか」

その中で唯一、黙考していたジスイ伯爵がつぶやく、その一言で喚いていた貴族たちは一気に大人しくなった。

「はい、子爵様のおっしゃる通りです。古代種を討伐したのは4級冒険者、トオヤマナルヒトにございます」

聞く人が聞けばわかるだろう、僅かな声の高揚。ギルドマスターのその声色は何かを誇るようなものであって。

「トオヤマナルヒト……………?」

「まで、聞いたことがある、蒐集竜様が以前お探しになっていた冒険奴隷の名前が確か……………」

「情報が錯綜して確かではないが、昨今、貴族区のオークションで、テイタノスメヤの素材を多数卸していた商会、その関係者リストに、その名前を見たような」

「私は、天使教会の異端審問会のリストにその名前を見ましたぞ」

「まさか、それではあまりにも……」

今度は別の意味でざわめき始める貴族たち。

トオヤマナルヒト、その人物が冒険都市に起こした余波は噂や、報告といった形でゆっくりと拡がりつつある。

曰く、竜を殺したただの、“カラス”に手を出したただの、天使教会の騎士と殺し合ったただの、色街で竜をコマしていたただの、荒唐無稽な話が会議の場で噴出する。

何より荒唐無稽なのは。

「貴族院の皆様、信じがたい話ではありますが、今あなた方がトオヤマナルヒトという人物名を聞いて連想したもの、それは全て同一人物です」

その噂話、トオヤマナルヒトに関するめちやくちやな話のほとんどが事実であることだろう。

「ば、ばかな。それではその者は、奴隷の身で竜を殺し、冒険者でありながら、名うての商会にも関わり、更に天使教会の異端審問会にも所属している?」

「あまりにも節操がなさすぎる、風説では?」

「そんな人物がいたとして、まともじゃない、何を考えているのか理解不能だ」

「残念ながら、事実です。更に頭の痛い問題もございます、マリー君?」

貴族たちの疑問の声に、サパンがぴしゃりと言い放つ、そしてさらにダメ押しが。

「はい、皆さま、お手元の資料をご覧下さい。昨日、冒険者ギルドに伝書鷹を用いられて届いた文の写しです」

それぞれの手元に配られていた紙。

それを見た貴族たちが、みな息を呑む。

「これは……っ!? この蠟印、まさか」

「魔術学院」の……」

複雑な星に、それを飲み込まんとする大蛇の印章。空に浮かぶ島に存在する魔術師たちの庇護者にして、故郷。

「はい、差し出し人は”魔術学院”当代学院長。内容はー」

「魔術学院による4級冒険者、トオヤマナルヒトへの、魔術師認定、及びギルドへの等級昇格の要請……」

震える声で、紙を握った貴族がその書状を読み上げる。

「ば、バカな……あの学院が、ただの4級冒険者にこれほど干渉するわけが」

「……そして、これは最近確認が取れたことなのですが、現在、この冒険都市に、かの学院の開祖、”全知竜”が逗留していることをご報告いたします」

「「「「は？」「」」」」

あまりに唐突に投げられた爆弾に、貴族たちが同時に声を上げる。

「加えて申し上げると、4級冒険者、トオヤマナルヒトを森林から連れて帰ってきたのは、全知竜です。当時、現場にいたものの証言によると、なんの前触れもなく、突如、意識のないトオヤマナルヒトを担いで現れて、古代種の討伐を報告、そのあと、再びトオヤマナルヒトとともにその場から忽然と姿を消した、と」

「「「「なんて?」「」「」」

情報の暴力。貴族たちの語彙はもうボロボロ。

「……待て、その者があの伝説の存在だという証拠は?」

ジスイですら、頭痛を抑えるように自らの頭を揉みながら苦々しく声をあげる。

「先日、人知竜、様がギルドに顕現された時、私もギルドマスターもその現場に居合せました。ギルドへ現れた理由は、トオヤマナル

ヒトの冒険の成果の確認、まあ、ギルドが彼の成果をネコババしないように、釘を刺しに来たということですか」

「な、なぜ、かの竜が、魔術師の祖がトオヤマナルヒトのためにそんなことを……」

「わかりませぬ、ですが、その手がかりは……それはそこにいらっしやる”教会”の代理出席者、第二聖女さまからお聞きになるのがよろしいかと」

会議のメンバー全員の視線が、円卓の1人。普段であれば、教会の長が収まるべき席に向けられて。

アホ毛。茶色のハテナマークの形をしたそのアホ毛がぴよこんと揺れた。



「ぴゅ、ぴゅいー！　へ、へふえええ、あの、その、そのその、わたし、わたしいい」

黒いフードなしの修道服に包まれた小柄な身体、小動物を思わせる少女が涙目で、悲鳴じみた声をあげる。

天使教会、第二聖女。聖女派、と呼ばれる主教派と騎士派と教会の勢力を三分する派閥の長。

ノルン・ベイ・ラティーナ。突然話を振られた彼女が、びくりと身体を縮こませる。先ほどまでずっと話に入って行けず、ポテイトのお菓子のことしか考えていなかったのだ、仕方ないのだ。

「ノルン様、落ち着いてください。ギルドマスター殿、ここは私、第二聖女側仕えのシッフからご説明させて頂きましても？」

小さなリスのように震える第二聖女の背後に立ちすくむ教会服の大男が、発言を求める。第二聖女の側仕え、シッフ・コイン神父だ。

「構いません」

ギルドマスターが頷く。

「では。まずはお集まりの皆様には謝罪を。本来であればこの場には、天使教会最高指導者、カノサ・ティエルフィールド主教が参る予定でしたが、彼女は急用にて顔を出すことができませんでした、代わりに出席として、我々は主教より天使教会の名代としての発言を許されております。平にご容赦を」

「……シップ殿、なぜ教会が全知竜についての発言を託される？  
かの者と貴方達は不俱戴天の間柄と記憶しているが」

ジスイ伯爵がその鋭い目を、トランジスタグラマーな体を震わせる聖女と、微動だにしない教父へと向けて。

「ピイ!?!」

「ノルン様、落ち着いて。……ごほん、伯爵様のおっしゃるとおりです。ええ、まあ、単刀直入に申し上げると、先日、全知竜、いや、今は人知竜、かの竜の手により、天使教会の騎士派上層部が文字通

り、壊滅致しました」

「……な、んと？」

あまりにも衝撃的な一言。

ジスイ伯爵が今度こそ固まる。

「頭が痛い限りです。理由はシンプル、騎士団がかの”竜殺し”に手を出したから。これに尽きます。詳しいことは不明ですが、竜殺しは全知、失礼、人知竜とも何かしらの繋がりがあるようですね」

「……では、こういうことか？ 竜殺しにまつわるこの都市に広がっている噂話、竜を二股にかけてることや、最優の騎士、ストル・プーラを己の小間使いにしていること、商人ギルドを裏から乗っ取るうとしていること、カラスに手を出したこと、彼と揉めた冒険者は数日後皆、不可解な死を遂げていること、これら荒唐無稽の話が真実であるか？」

「まあ、全て真実かどうかは分かりませんが、少なくとも、かの竜殺しが人知竜の庇護下であり、なおかつ我々天使教会の審問官であることに間違いはありません。……少なくとも主教の人を見る目は間違いではなかったということかと」

残念ながら全て真実である、だが彼らからすれば酒場の酒呑み話よりもめっちゃくちゃな話だ。

「……それが本当なら、天使教会に名を連ねる者でありながら、魔術学院にも選抜されたことになる。帝国の歴史上、そんな存在は今まで確認されていない」

「はい、そして、なおかつ彼は、我々冒険者ギルドにとっても有益な人材となります。古代種の単独討伐、戦果だけを見れば、一級、いえ、“塔級”冒険者と比べても遜色はありません」

「な?! ぎ、ギルドはまさかかの者を塔級冒険者に認定するつもりか? い、いくらアガトラの冒険者ギルドとはいえ、塔級冒険者の保有の割合が偏りすぎるぞ!」

「……今のところ、冒険者ギルドではトオヤマナルヒトの昇格には慎重の構えを取るつもりです。魔術学院からの推薦を蔑ろにするつもりではありませんが、あくまでギルドの人事はギルドが決めること。今のところ、冒険者ギルドとしての判断は様子見、でございますれば」

「……一度、トオヤマナルヒトを貴族院の監査に召還したいと思うが、サパン公はどう見られるか?」

「悪手ですなあ。後ろ盾、いや、本人には自覚がないと思われませんが、アレは竜に近すぎて。下手をすれば我々の行動は、蒐集竜さまの蒐集品に勝手に触るようなものと受け取られかねません。それに人知竜の動向も、読めない」

「この魔術学院、学院長名義の手紙ですら、おそらく人知竜が関わっていることでしょう。故に、今我々に出来ることは、特大の火薬に火が付かないように祈ることだけかと」

「……………天使教会の異端審問会所属ということなら、主教殿であれば、筋を通して本人、竜殺しの召喚が可能では？ 主教殿は今日どこらに？」

「ふむ…………… ノルン様？」

「あ、へふゆい、へい、ちん、ひん、」

「……………？」

「ち、ちんたいぶっけんの引き渡しで、今日ここには来ていませんですっつっつっつ」

第二聖女は頑張った。教父だけに仕事させるのは申し訳ないと思っただけから頑張った。

「「「「「は？」「」「」

だが彼女の精一杯の言葉に、貴族のおじさんたちはただ、首を傾げるだけだった。

……

……

…

〈領主会議の3日前〉

ぶちっ。

噛みちぎる。ホクホクの熱と肉汁が口の中に広がる。

肉汁は火傷しそうなほど熱く、しっかり肉の野性味溢れる味をたっぷりと含んでいる。舌が火傷しそうなくらい熱いそれを噛み潰して飲みこむ。

鼻の奥に肉の強い匂いがガツンとぶつかってきた。

肉だ、肉を食べている。

「おほっ、おい、おいおいおいおい、これ、当たりなんじゃねえの？ ジャイアントボアの肉で作ったソーセージちゃん」

中庭で熾した焚き火に、くるくると棒に突き刺したソーセージを炙る。ぷち、ぷちつと皮が弾けて亀裂が、入る。肉汁のしたたるそれを熱々のうちに頬張って。

「あち、あつ、ほふ、ほほ！ ひひ！ 美味え！ 肉だ！」

遠山鳴人が口の中を火傷しつつ、それを二口で食べ終えた。

新たにまた、カゴの中のソーセージに手を伸ばし、串に刺して、焚き火で炙り始める。くるくる回していると、ぷちつと皮が弾け出



した。

「……驚いた、ここまで肉汁の滴るソーセージは初めてだ」

同じく目を丸くしているトカゲ男の、ラザール。彼もまた口の中を火傷しつつ、頬張ったそのソーセージの味に驚いて。

「ほお、これがモンスターの肉か。ふむ、モンスターの食材当たり外れがあるが、ジャイアント・ボアのソーセージは大当たりのようだな」

お上品に、フォークとナイフで切り分けたそれを口に含んでいたのは、口髭の壮年男性、ドロモラ。遠山鳴人と協力関係にある商人だ。

「ユト・ウエトラルのレシピ様々だな。いやー、これにたどり着くまで苦労したなオイ。なんでソーセージ作るための食材狩ってたらワケわかんねー白蛇女と殺し合うことになるんだか」

「……その節はすまない、ナルヒト」

「あー、いい、いい。あの白蛇女、あれはあれだ、良いやつ特攻の害獣だったからな。ラザールが惑わされんのも無理ねえ。早めに厄介な化け物を始末出来たと思っとくさ、それに、収穫もあったしな」

遠山は、この肉以外の報酬のことをラザールやストルにはまだ説明していなかった。

遺物、キリヤイバの新たなステージ。恐らくあの化け物との戦いがなければ辿り着けなかった力だ。

全員生還、そして新たな力も手に入れた、結果だけ見れば大勝利に近い出来事だ。

「収穫？」

「こっちの話さ、プラス思考で考えよーぜ。美味しいソーセージのレ

シピも完成した、全員生きてる、それによ、ラザールのパンも試作品が完成したしな。……仕込みは？」

ラザールの言葉に曖昧に返事をして、遠山は話題を変える。

あの化け物との死闘以降、割とガン泣きしてガンギレしたストルにより、遠山とラザールは2日ほどの外出禁止令を出されていた。

ストル曰く、”あなたが街に出ると何かのトラブルを拾ってくるに決まっています。最低2日は、宿屋から出ることを許しません”

デイス口調なしの言葉と、戦闘の時と同じ人形のような無表情で説教されて、普通にびびった遠山とラザールは素直に少女の言葉に従っていた。

だが、ただのんびりしていたわけではない。

宿屋の主人に頼み込み、厨房を借りてあるパンの開発を行なって

いたのだ。

ラザールの天才的なパン職人としての能力。

そして、本来であれば、この世の全ての知識を得られたはずの知識の着属の領域を、丸ごとパン特化にして作り出した”パン文書館”の知識。

これらにより、たった2日で遠山とラザールは、この世界には存在していないあるパンの開発に成功していた。

「すでに。先ほど石窯に入れたところだ。ゆっくり火入れしてるから、あともう少し焼き上がるまで時間はかかるだろうが。だが、ナルヒト、本当に大丈夫だろうか？」

「問題ないさ」

「なんの話をしている？ トオヤマナルヒト、金儲けの話か？」

「まあ、似たようなもんさ」

ドロモラの言葉にニヤリと笑う遠山。

ソーセージの試食会のほかにも、ドロモラを呼んだ理由はある。  
そして、それはまもなく焼き上がるのだ。

「……はあ」

「……ぶえ」

「ぶほ」

「ダウ」

先ほど、ソーセージを頬張ったガキンちよ4人、リダとニコとシロとペロは目をキラキラさせて固まっている。

スラム暮らしの長かった彼らにとって、このソーセージはあまりにも強かつたらしい。言葉すらも忘れていた。

「ルカ、リダ、シロ、ペロ。お前らそれどついう表情？」

遠山は固まった彼らの手に、それぞれまた新しく焼き上がったソーセージ棒を持たせる。

黙って物凄い勢いで、咀嚼を始める彼らを見て思わず笑いを溢した。

なんか肉食のハムスターみたいだ。子供達を眺めたあと、視線をドロモラに移す。

「にしてもやるな、ドロモラのおっさんが口説いてきた肉屋。あっという間に注文通りのソーセージを完成させちまいがった」

「ふん、当然だ、友よ。と、言いたいところだが実際は、トオヤマ

ナルヒト。この味はジャイアントボアの肉質の素晴らしさもあるが、キミが肉屋に伝えたあの製法によるものが多いらしいぞ。ほら、あの氷で冷やしながら肉を成形するやり方だ」

「おー、あれな。昔、漫画で読んだんだよ、手作りソーセージは温度管理しねえからボソボソになるんだってさ、氷で冷やして10°ぐらいを保つと美味しいのが作れるんだって」

「ふむ、マンガというのはわからんが、肉屋のブッチャー精肉店はお前に強く感謝していたぞ。これからもご鼻屑に、とのことだ」

「ナルヒト、アンタやっぱり妙なことを知ってるものだな」

「まあ、俺んこの地元は飯だけにはマジでうるさいとこだからな。うーん、かみごたえもある、肉汁もたつぷり。ユト・ウエトラルの言った通り、あのイノシシの化け物の肉は当たりだったな」

厄介な化け物との戦いの報酬が美味しいソーセージ。

中々釣り合わない気もするが、この異世界生活の中で、少しでも口に合う美味しいものが増えていくのはかなりありがたいことだ。

「これなら、ナルヒト。アンタの言っていたホットドッグも作れるんじゃないか？」

「うーん、だな。そうなると後は、ケチャップがいるわ、ケチャップ」

「ケチャップ？」

「ああ、ほらこれ、このソーセージなんだけどよ、やっぱり香辛料がバカ高いから練り込めねえじゃん。となるとやっぱりどうしても肉の臭みが気になるわけよ」

「そんなに気になるか？」



「気になる。いや、これは肉の臭みを誤魔化す他にもケチャップが必要な理由はあるんだよ。あれ、どーやって作るんだっけ。レーザー、トマトって余ってるか？」

「ああ、昨日、ストールが買い出しに行っただぶんが残っていると思うが……」

「……あー、ストールか。やべえ、どうするよ、レーザーくん」

「ああ……まさか彼女があんなに心配性になるとは。外出が制限されてもつ2日だぞ」

「……泣かれながらキレられると、こっちの情緒がおかしくなるよな。つーか、レーザー、お前こそ身体はいいんかよ」

「おかげさま。いや、竜のおかげだ。ナルヒト、あんたの人脈ならぬ竜脈はいよいよといところまで来てるよ」

「……あの変態ドラゴン、ホント何考えてるかわかんねえな」

人知竜と名乗るあの銀髪のだ美人、いや、美竜はまた自分を助けてくれたらしい。

教会騎士の時を合わせてこれで2回目だ。

感謝はもちろんしている、だがそれ以上に遠山が彼女に抱いている感情は――

「いや、きつと人知竜の考えはシンプルさ」

「あー？」

「あんたのことが好きなんだ、あんたの役に立ちたいのさ、俺たちと同じでな」

「……なんだそりゃ」

遠山は目を瞑り、顔を背けた。

「フツ、ナルヒト、アンタ恥ずかしい時は目を瞑るんだな」

レーザーの少し弾んだ声が届いて。

「うっせ。……俺のやってることは、綱渡りだ。レーザー、考えてたことがある。」

「……なんだい、ナルヒト」

「……これからは狩りはもう最悪俺だけで行こうと思ってる。正直、今回全員生き残れたのはただの運だ。俺もおまえも、ストルも、ぶっちゃけ誰が死んでもおかしくなかった」

怖い。今更ながらに、遠山は恐れていた。

冒険のリスク、この世にはやはりまだまだ自分の力の及ばぬ化物がうじゃうじゃ存在している。

だから、それらからせめて仲間を遠ざけようとして――

「ナルヒト、アンタ、ストルが泣いた理由本気でわかってないんだな」

「あ？」

ラザールの声は、冷たい、いや、寂しそうな声で。

「たっだいまー、デイス。あ、やっぱり2人とも部屋から抜け出してたデイスね。む、ドロモラ商会の店主デイスか」

中庭に現れたのは、日用品の買い出しに出ていたストルとニコだ。

教会騎士の銀鎧の上からケープマントを羽織ったストルの姿は、遠山が指定していた。

「やあ、第一の騎士殿。貴君の審問官殿達をお借りしてすまないね」

「フン、むさい男連中が雁首揃えて楽しそうで何よりデイス。む、リダ達が食べているそれは……」

「わあ！ソーセージ、ソーセージだわ！もうお兄さんに、みんなに、ずるい！私とストルちゃんがお買い物してきてる間に隠れて食べてるなんて」

ストルとニコが、焚き火で炙るソーセージの存在に気付く。

肉が焼ける匂いはそれだけで人の欲を刺激するのだろう。

「まー、まー、怒んなよ、ニコ。ほら、お前の分もきちんと焼いてるからよー」

「わあ、美味しそう！ ありがとう、お兄さん！」

「ニコちゃん、食べ物にそんなに簡単に釣られては」

遠山から差し出されたソーセージに満面の笑みを浮かべるニコ、ストルが口を僅かに尖らせて。

「んー？ ストルはいらねえのかー？ 俺らが狩ったジャイアント・ボアから作ったソーセージ、焚き火で直火かましてるからよー、ほのかな木の香りと肉汁の旨みが口と鼻をぶっ壊すぞー」

「……………一つ貰いますデイス……………！！」

だがストルも、その匂いには逆らえなかったらしい。頬を膨らませながら遠山から差し出されたジュワジュワに焼かれた焚き火ソーセージを受け取って。

「ありがとうお兄さん！ ……ンエ！」

「え、美味し…… なん、デイス、この肉、教会で食べてたソーセージと全然違う……」

ストルとニコが、ソーセージを頬張る。

ニコが固まり、ストルが口を抑えて目をまん丸に見開いた。

「ンンンンンン！ あつあつで、ぷちぷちで、じゅわじゅわだわ！ お兄さんのソーセージ、とっても美味しい！」

ぴよこぴよこ飛び跳ねて喜ぶニコ。ここまで喜んでくれるとは振る舞う側としては嬉しい。

年寄りが周りの人間に飯を食わせたがる理由が

「イエーイ、ソーセージ爆弾喰らわせてやったぜー、あと、ニコ、お兄さんのソーセージはやめてくれ。条例に引っかかる」

「??？」

「ほ、ホントに美味しいデイス…… こ、これなら竜祭りに出しても……」

「ドロモラ、このソーセージ、竜祭までに何本仕入れることが出来る?」

「ふむ、保存は決して良いものではないからな。フロド山脈の氷を敷き詰めた氷箱に入れて保存すると考えても、だいたい100が限界だろう」

「……少ないな。金に糸目はつけねえと言ってもそれが限界か?」



「……今のところかかっている経費はすでに金貨17枚だ。これ以上かけるといくら竜祭の収益だけでは回収が難しいな」

「……ドロモラ商会的には、ペイバックが望めないかも、ってことか？」

「ああ、その通り。正直、竜祭への参加権を天使教会からもぎ取ってきたこと自体驚くべきことだが、それにしても経費をかけすぎだ。私はお前に利益的な価値を見込んで協力しているが、正直にいうとまだお前が信じるラザールの腕前をみたわけではない」

「へえ、まあ、たしかに」

「竜祭りまであと10日だ。そろそろお前の言う勝算、つまりはラザールの腕前を見せてもらってもいいと思うのだが」

「わかってるさ、ドロモラ。アンタは優秀な商人だ。テイタノスメヤの素材の件でアンタを引き込むことには成功した、そして次はアンタを引き留める、ラザールのパンでな」

「そうしてくれると助かる。お前達とはこれから良い関係でありたいというのは本音だ。……商品力を見たい、ラザールの腕前が、トオヤマの言う通りのものであるかどうかをな」

「……そう言つと思つたよ。ラザール」

「心得た」

遠山の言葉を受けて、ラザールがとぷりと当たり前のように影の中に消える。

アイツ緊張してるな、遠山はわざわざスキルを使って離席したことからラザールの緊張を察する。

「デイス？ トオヤマ、ラザールはどこに？」

「すぐにわかる、ストル」

「よつと、これでいいのかね。全く人使いが荒いっただらありゃないよ」

遠山の言葉の後、また中庭に新たな人物が現れた。

白髪の老婆、子供たちには優しいこのボロ宿の主人だ。

「あ！ おばあさま！ おはようございます！」

「あんら、ニコちゃん、今日も元気ね。この老人をこき使う男とは大違いだよ」

老婆が遠山に向けて口を尖らせる。

「そりゃ人聞きが悪いな、ばあちゃん。言う通りにしてくれたか？」

「フン、業腹だけどアンタらは金をきちんと払う上客だからね。たく、長生きはするもんだね、まさかりザドニアンに石窯を貸すことになるとは思わなかったよ」

「ヒヒ、信用ならねーか？」

悪態じみた言葉にはしかし、悪意はまるで感じられない。

「ふん、バカ言うんじゃないよ。ラザールみたいな良い子だったら文句はないさ」

既にこの宿屋に逗留している期間で、ラザールの人間性はこの主人の心を開いていた。

ぶつちやけ、態度が冷たいのは遠山に対してだけだ。

「えっと、アニキ、ラザールさんは何しにいったんだ？」

「それもすぐにわかるさ、リダ」

「えーと、すみません、あのー場所ってここで合ってますか？」

ゾロゾロと、人々が集まってきた。みんなそれなりに粗末な格好の市民たちだ。

「む？　なんだね、君たちは？」

ドロモラが眉を顰める、商人としてのサガだろうか、集まってきた人々があまり裕福でないことを嗅ぎとっている。

「ああ、アンタらかい。そうだよ、今日の昼食はここだ。その生意気ボウズの奢り、らしいよ」

老婆が集まってきた人々に答える、遠山を指さしてカラカラと笑った。

「なに？」

「よしよし、ばあさんきちんと知らせてくれたみたいだな。宿にお泊まりの方達だ。ドロモラ、アンタに面白いもんを見せてやるよ」

怪訝な表情のドロモラに、遠山が笑う。

本日のメインイベント。この2日間の努力を披露する時が来た。

「あ、良い匂い……」

「これ、パンの……」

誰しもが知る優しい匂いが風に乗って。

ボ口宿の煙突からはもくもくと昇る煙が少しづつ薄くなってゆく。

「この世界に来て、俺が初めて食べた美味いもん。食べ物にうるさい俺が言うんだ、ラザールの腕前に間違いはない」

遠山がニヤリと笑う。

そして続々と中庭に集まってきた人々に向けて、声を向けた。

「お待ちせいたしました、皆さん。天使教会が誇る、天使からヒトへの施し、ヒトの営みと天使の奇跡が生み出した良きモノ、つやつや、ほかほかの焼きたてのパンです」

「おおー、ノメ婆さんの言う通りか、みんなー、この兄さんがパンを奢ってくれるんだってよ」

ざわざわとギャラリーがひしめく。

人数は15、6人だろうか。

遠山が宿屋の老婆に頼んでいたのはこれだ。

中庭に、大きなカゴを抱えたラザールが現れる。

尻尾をピンと立てて、カチカチと今まで見たことのないような硬い動きで歩いてくる。

「……上質な天使粉を使用し、混ぜ物は使わずにただ純粹に天使粉の素材の味を追求、暖めた石窯で外はさくつと、中はふわりと、焼き上げた一品、名前はトオヤマナルヒトがつけた」

小さな声でボソボソとラザールがつぶやく。ギャラリーたちには聞こえていないだろう。それだけラザールは緊張していた。

「う、これ、パンの匂いだ。え？ これ、パン？」



「珍しい形だ……」

「これは、天使教会の指定するパンの形ではないな…… トオヤマナルヒト、このパンの名前は？」

ラザールのカゴを覗いたドロモラがつぶやく。

にいつと、遠山が笑う。カゴからひとつひとつ紙に包まれた小麦色に輝くそれを持って、言葉を紡ぐ。

「1919年、俺の地元では毎日食べられてなおかつ作り方は簡単、大量生産に向いているパンが必要とされた。田辺のおっさんが作り出したそのパン。天使粉と俺の知ってる小麦粉の性質が若干違うからな、ラザールにはなかなか無理を言ったが、ようやく完成した」

パン文書館の知識、それは遠山の故郷のパンをも記録していて。

そう、ニホンに生きる者ならばおそらく誰もが一度は口にしたことがあるだろうソレ。

遠山鳴人のパン計画の初めの一步にして、マスターピースとも呼べる”ニホン生まれのパン”

「名前は”コッペパン”。帝国のパンの歴史には存在しない、新しいパンだ」

「コッペ、パン……」

「う、うまそう…… な、なあ、アンタこれ、ほんとに食べてもいいのか？」

キラキラ輝くそのパンにギャラリーたちがざわめく。香りと見た目は容易に人の食欲を刺激する。

「おお、もちろん。今日は俺らの奢りだ」

遠山はそのパンを差し出して――

「でも、作ったのって、その、リザドニアンなんだよな」

その一言は、ぼそりと小さく。しかし速やかにギャラリー全員に毒のように染み込んだ。

3970

「リザドニアンが作ったのか？ 嘘だろ？」

「ど、どうする？ あのトカゲが捏ねたパンって」

「……………」

ざわ、ざわ。

ギャラリーが、一歩引く。二歩引く。

「……………」

ラザールが、目を一度瞬きさせて、それから少し俯いた。

「なるほど、こつこつ反応か」

リザドニアン、その種族への差別感情を改めて遠山は目の当たりにする。とりわけ飲食が絡むとその感情はさらに厄介なものになるのだらう。

「……………すまない、ナルヒト、やはり、俺だと……………」

ラザールがパンのカゴを抱えたまま、しょんぼりと下を向く。尻

尾も力なく、地面に入にょんと垂れていて。

「いや、問題ねえよ、ラザール」

「だが、やはり、リザドニアン、俺の作ったパンなんて…… 誰も」

しょんぼりトカゲになりつつあるラザール。朝早くから宿の石窯を借りて、仕込みを行っていた時の生き生きとした姿とは真逆の姿で。

「一つ貰うぞ、構わないな？」

不意に、ひとり。

ドロモラが、ラザールに近づきカゴに入った円錐形のパンを指さした。

「あ、ああ！ もちろんだ！」

ピアと顔を輝かせるラザール、それを見てニヤリと笑う遠山、少し緊張した顔でパンを見つめるドロモラ。

遠山は、ドロモラに仕込みはしていない。ラザールのパンの話も何もしていないのだ。

だから、これから先はもう、ラザールのパンの出来次第になる。竜祭の屋台の行く末を占う前哨戦、ひいてはパン屋開業のため。

ラザールの職人としての試金石が、今、ここで。

「お、おい、あのおっさん、受け取ったぞ」

「身内だろ？ 俺はそれよりあそこで焼いてるソーセージの方がー  
ー」

ラザール、リザドニアンのパンに懐疑的な連中がざわざわしつつもその様子を見守る。

「……ローフブレドをかなり小さくした形のパンだ。天使教会の指定する白パンの一種か？　これならまあ、教会のパン法に外れることはないだろうが……」

「まあ、いいからよ、ドロモラ。食ってみるよ、ウチのパン職人が日の出前から仕込んだ自信作をよ」

「………いただきます」

たらりと小さな汗をかいているドロモラ。

しばらくパンを見つめた後、意を決したように一気にがぶりと食らうしゅく。

まぐく。まぐく。しほびく無言で、咀嚼。

そのあと、ドロモラは動きを止めた。

「な、なんだ、これは」

ぼそり、低い声が、ドロモラの口から。

「あ……」

ラザールが視線を逸らす、何かを諦めるように項垂れて。

「ひひ」

だが、遠山だけはただ、小さく笑った。



「うまい」

「……………え？」

ドロモラの言葉だ、ラザールの尻尾がぴゅんと持ち上がる。

今、聞き間違いでなければ――

「うまい」

ドロモラが、しっかりとつぶやく。目を見開き、信じられないものを見る目で、その手に握ったコッペパンを見つめていた。

「それに、何という柔らかさ…… し、しかも、噛めば噛むほど優しい甘味が……!?!」

もぐり、あっという間にドロモラが残ったパンを飲むように頬張り終えた。

「ドロモラ、アンタが、いや、この世界でまだ誰も食べたことのない製法、恐らくこの世界では本来なら誰も思いつかなかったかも知らない製法で作られたパンだ」

「さ、砂糖を生地に練り込んでいるのか？ でないとこんな甘くならないはずだぞ！」

遠山に詰め寄るドロモラ、すごい剣幕だ。彼は本気で驚愕、いや半分パニックになりつつあった。



天使粉による自然発酵のみで作られているこの世界のパンは、ラザールのパンよりも圧倒的に堅く、そして酸っぱい。

天使粉の性質により、自然発酵でも膨らむパンが出来上がる、しかしそのパンはどれも硬く、ボソボソしていた。

もちろん、遠山の口にはこの世界のパンは合わなかった。

だが、ラザールのパンは違う。

「ドロモラ、うちのパン、柔らかいパンの味はどうよ」

柔らかいパン。それだけでこの世界では商品として武器になる。そして、その武器の効果は――

「……美味しい、今まで食べてきた全てのパン、教会の指定する最上質天使粉を使って作られた白パンよりも、このコツペパンは、美味しい……  
な、なんだこの柔らかさ、柔らかいのに噛めば噛むほど弾力まで」

「それはな、もちもちしてるって言うんだ」

効果は大、大なり。柔らかいパンはこの世界の人間の口にも合う。  
未知の味なれど、ウケる。

「わあ！ 美味しそう！ ラザールさん、私も頂くわ！ ……ッ  
ッ?!?! エン?!?!」

びよびよことニコが満面の笑みでラザールからパンを受け取り、  
頬張る。

身体をびくりと震わせて、跳ねた。

「ど、どっした、ニコ?!」

「お、おいしい…… リダ……、みんな、食べて……」

「「「……エン?!」」」

ラザールのパンを口にした子供たちが目を見開いて固まる。身動きは止まっているのに、モグモグ動く口だけは止まらない。

目をキラキラしながら黙ってパンを食べ続ける。

じくり。

リザドニアンのパンを受け入れられない連中も、その様子を見て喉を鳴らしていた。

彼らもまた決して裕福な層の人間ではない。家を持たず、この日雇いの仕事を繰り返すこのボロ宿に泊まっているものや、近隣の労働者達だ。

腹はいつも空いている。目の前の男や、子ども達が美味しそうにパンを頬張る様子に心を動かされつつある。

そして何よりそのパンの香り、見た目。

揺れている。リザドニアンが作ったパンへの抵抗と、そのわかりやすい美味しそうと言った感覚に。

「……う、まそう」

誰かが、ぼそりとつぶやいた。

香ばしい天使粉の優しい香り、てらてら、ふっくら焼き上がった薄い茶色のパン皮。湯気のたつ白い生地。

その全てが彼らの生き物としての本能に語りかけていく。そしてその本能と、リザドニアンへの偏見という理性が拮抗し始めて。

「ラザール、パン一個もらっせ」

「あ、ああ」

遠山がパンを一つ手に持って、ギャラリーの前に立つ。

「お集まりの皆様、わかるぜ、皆さんのその不安。リザドニアンが作ったパンに抵抗がある、そりゃわかる。うーん、残念だ。これをタダで食べるなんて今だけの期間限定大チャンスなんだけどなー」

ピコン。

矢印が生まれる。指さすのは、今まさに迷っているギャラリーたち。

遠山の話術ショーの始まりだ。

【スピーチ・チャレンジ発生】

【食レポ】

メッセージが告げる、今、この場に必要なこと。ラザールは美味しいパンを作るといふ仕事を当たり前前に行った。

それなら、ここから先は遠山鳴人の仕事であった。



「き、期間限定って、どついうことだ？」

ギャラリーの1人が言葉をあげる。

「言葉のままさ、俺たちは近い未来、パン屋を開く。ただのパン屋じゃない、この帝国には未だに存在していない、別の世界のパン、ありとあらゆる古今東西の美味しいパンを揃えた最強のパン屋だ。今、アンタらはそのパンの試食のチャンスを与えられているんだ」

遠山が手にしたホカホカのコッペパンから白い湯気がたちのぼる。

「「「「「「「「「「「」

「つやつやてらてら、ラザールのカゴからは変わらず香ばしい香りが辺りを包む。」

「この宿の使い込まれた石窯を森林地帯で採った薪でじっくり火入れする。遠赤外線効果で、暖められたパンの食感は、外はサクサク、中はモチモチのふわふわ。良い天使粉を使ってるから、熱も逃さねえ。ほら」

遠山が、手に持ったコッペパンを2つに割る。ぷちり、ぷちぷち。

ゆっくり裂けていく白い生地はモチモチと弾力を持っている、割れた断面からさらにホカホカの湯気が立ち上り、優しい甘味の香りが強くなって。

「もぐり」

それを遠山が一気に頬張る。

やはり美味しい。もちもちした生地は噛めば噛むほど甘くなる。

近くに置いてある井戸水の入った桶から水を掬い、それを一気に流し込む。

「美味しい！ 口の中に満ちる天使粉のもちもちした生地！ 香ばしい香り！ これを冷えた井戸水で流し込んで、ッあー、決まった」

暖かく、柔らかい後味が素晴らしい。

やはり、美味しい食べ物は豊かな人生に欠かすことは出来ないものだろう。

大袈裟な食レポだが、ギャラリーはその様子から目を離さない。

「すげえ」

「あの生地、とてもきれい」

「つまそつに食つなあ……」

「ねえ、おかあさん、ぼく、あれ食べてみたい」

「そ、そうね……で、でも、リザドニアンだし……」

後もう少し。

遠山は手応えのままに、最後のひとおしをかます。

「ちなみにこのパンを作ったうちの職人はリザドニアンだが、あの元は王国の王家御用達の仕事につき、今は天使教会の公務に就いている男だ、身分は保証するぜ」

「リザドニアンが、天使教会の？　そ、それは流石に無理が」

「ストル」

「デイス。皆様、こんにちは。私の名前はストル・プーラ。天使教会の人間デイス。こちらのリザドニアンの身分の証明は私が。この

教会章にかけて保証するとお約束致します、デイス」

「まあ！ あれ、天使様のおしるし！」

「教会の人間しか持てない印章だ！」

「で、でも、偽物とかじゃないのか？」

「バカ！ なんことしたら教会に処刑されるぞ！ それにみるよ、あの女の子のマントの下、銀の鎧！ あれは教会騎士の正装だろ！」

「じゃあ、ほんとに教会の人たちなの？」

「ねーえ！ パパ！ 私、あの美味しそうなパン食べたい！ 食べたい！ あの子達もさっきからすごく美味しそうに食べてるもん！」

「う、うーん、そうだなあ」

ぞわぞわ、ぞわぞわ。

「ひひ」

帝国の人間は、流行りと権威に弱い。いつかドロモラに聞いたことのあることだがそれはどうやら事実らしい。

天使教会という権威、つまりブランドが、リザドニアンという偏見を食い始めた。

狙い通りだ。風評や偏見が足を引っ張るのなら、それを薄めてぶちのめすほどのハツタリをぶつければいい。

遠山鳴人の大雑把な仕込みは、ほぼ完成した。あとは詰めだ。

人は感情と利益で動く。

リザドニアンへの偏見という感情は、天使教会というブランドで薄めた。

あとは、利益―！。それはとてもシンプルで、簡単なことだ。

「ちなみにこのコッペパン、パン屋開業後は最低でも銅貨2枚から3枚のお値段の所、今日だけはタダです。あ、数に限りがあるので、なくなり次第終了なのでお早めに」

「『コッペパン』

無料。その言葉にギャラリーが、動きを止めて。

【スピーチ・チャレンジ】

「あ、あの！ おひとついただいてもいいかしら？ 子どもに食べさせてあげたいの！」

【食レポ、成功】

「ひひ、ええ、もちろん。一つと言わずにもう一つ。お嬢さんとお母さんで召し上がりください。ラザール！ こちらの方へコッペパンを！」

「あ、ああ！」

「わあ！ トカゲさん、大きなお目目！ このパン、トカゲさんが作ったの？」

「じ、こら！ だめよ、失礼なことを！ じ、じめんなさいね、リザドニアンさん」



「い、いえ、あの、ご婦人、お、俺、私が怖くないのですか？ その、リザドニアンの作ったパンで本当に」

気付けばラザールの尻尾が震えていた。

遠山や孤児、そしてドロモラといった身内にパンを振る舞うのと、他人に振る舞うのではやはり違うのだろう。

ラザールの恐れを遠山は眺める、だが何もしない。

「ふふ」

「え？」

「あ、ごめんなさい、その、話に聞いていたりザドニアンと、あなたはまるで違うものですから。とても優しいお方なんです。天使様のお恵みと、それに仕える貴方の優しさ感謝を。パン、2つ頂けるでしょうか？」

「トカゲさん！ はーやーくー！」

「あ、ああ！ 喜んで！ どうぞ、お口に合えばいいんだが」

「わあ、ありがとう！ はむ…………… ぴ、ピヤアアア！ なにこれ、なにこれ！ さくさくのもちもち！ ふわふわして暖かい！ ママ！ これ、美味しい！」

「……………お、いしい。ほんとに、おいしい…………… よかったね、ふふふ、リザドニアンさん、ありがとうございます、ほんとに美味しいです、踊りたくなるほどに」

「ーあ」

ラザールの動きが止まる。ニコニコと微笑む親子を眺めて、カゴを抱えたまま動きを止めていた。

その男は、悪事に愛されていた。その運命は本来ならば、影を歩み、夜を駆け抜けて、闇に溶けゆく筈だった。

「お、おれも！ リザドニアンのパン屋さん！ 俺んこの子にもパンをわけてくれ！ 食べさせてやりてえ！」

「俺つちのここにも一つおくれよ！ すげえ美味そうなパンだ！ リザドニアンとかもうどうでもいいや！」

「あ、わ、私も！ 私も食べたい！」

「僕も！ パン食べたい！」

「パン屋さん！ こっちも！」

ギャラリーが、一気に湧く。リザドニアンの男は、自分の抱える籠、自分の作ったパンの前に人が集まるのを、呆然と眺めていた。

誰かから奪い、手を汚し、温もりを奪う、それがその男の業だった。

「ラザール、言ったろ？ アンタのパンは美味い、また作ってくれ  
ってさ」

だが、リザドニアンの男は、それと出会った。異物、この残酷な  
世界の中、笑いながら嗤いながら、欲望のままに進み続けるソレに  
出会って。

ー俺が作っておいた黒パンがある。食うかい？

ソレに関わった。その時すでに、リザドニアンの運命は冒された  
のだから。

拡大する自我、進み続け、辿り着こうとするその強欲の姿に、影  
と悪事に愛されたりザドニアンもまた、冒された。

「……ああ、作るさ、何度だって。作る、作り続けるよ、ナルヒト」

縦に裂けた瞳が、潤む。うるんで、前が見えない。

しかし、そのリザドニアンを目を拭ってすっかり目の前の光景を見つめる。

「うつまー！ なんだこのパン！ は、はははは、うめえ！」

「くくくく、ワシのパンが一番ぷっくり膨れておる！ つまり、これが石窯の中央に位置され焼き上がった逸品！ センター！ ……美味っ」

「お、いしー！！ パパ、ママ！ こんなパン、僕初めて食べたよ  
「！」

「ああ、よかったな、本当に美味しい…… パン屋さん！ ありがとう  
とっ  
「！」

「やるなあ！ リザドニアン！ アンタのパンまじで美味しいぜ！」

「トカゲさん！ ありがとう！ パン、すっごく美味しいよ！」

笑顔が、ただ、そこにはあった。

リザドニアンがかつて望み、しかし諦めたはずの光景がそこにはあった。

奪っただけの筈だった腕。殺しと悪事にのみ長けていた腕は今、しかし、誰かにぬくもりと笑顔を与えるものに変わっていて。

「ナルヒト、俺は、夢でも見ているのか？ 俺の作った、リザドニアンの作ったパンをみんなが、ありがとうって……」

「リザドニアンの作ったパン、じゃねー。ラザールが作ったパンだろ、そんでこれは夢じゃねー、現実だ、お前が望んで、努力してたどり着いた現実だ」

「そうか……ナルヒト、ありがとう」

「まだまだ、ラザール。ここじゃない、たどり着くべき場所はまだ、先だ」

ラザールの言葉を食い気味に遠山が遮る。

「え？」

「夢があるんだろ？ 湖のほとりで、だひひ、まだまだよ、ラザール。ここは始まりだ、俺たちは、必ずそこにたどり着く。だからまだ満足して貰つと困るんだよなあ」

「……たどりつく、か。それならナルヒト、先程の話だが、はつきりと答えておこうか」

「あ？ あー、狩りの話だろ？ 後でストルとも話そうと思ッー  
「答えはNO、クソ喰らえ、だ、トオヤマナルヒト」

「は？」

「アンタ1人危険な真似をさせて、それで俺は呑気にパン作りか？  
ふん、悪い冗談だな、到底そんな話には乗れないね」

「バカ、おまえ。見てみるよ、こいつらの顔。おまえは、パンでこ  
れだけ他人を笑顔に出来る、奴、で」

遠山が言葉に詰まる、ラザールの表情を見て、それ以上何も言え  
なくなつた。

「トオヤマナルヒト、これはアンタが俺をここまで連れて来てくれ  
たからだ。あの日、あの奴隷馬車の中で。アンタが俺をここまで迎  
り着かせてくれた」

「……この先もうまくいくかわかんねーぞ」



「だからこそ、協力するのさ。この話はこれで終わりだ。決してア  
ンタを1人にはさせない、もう2度と、アンタを死地に置いていく  
のはナシ、だ」

「バカトカゲが。……人の言うこと聞く気ねーな」

「大バカヒューマン。人のこと言えた口かよ」

互いに悪態をつく。でも、2人とも口元は綻んでいて。

「……どんなに現実がクソでもよー、それを願ひ、それに向かって  
進み、それにたどり着くことを目指すのは誰にでも許されている、  
か」

昔、学生の頃ある人物が言っていた言葉を、何故か今遠山は思い  
出す。

色々考えた。あの白蛇女は強く、本気で死を覚悟した。

あの強さが、仲間に向かうのが怖かった、だから遠ざければいい  
と想っていた。今更気づく、それは前と同じ選択だ。あの現代ダン  
ジョンで死んだ時と同じ選択だ。

ならば、今回は。

この現代ダンジョンライフの続きはー

「ーまあ、せつかく生きてんなら、好きにやるか、もう。わかっ  
たよ、ラザール。欲望のままに、”俺たち”、でたどりつくか」

もぐり、美味しいパンをほおばり、冷たい井戸水で流し込む。それ  
だけで何故だろう、生きてて良かった、そう思えて。

「ああ、ついでにこう、友よ」

「おう、相棒。これから忙しくなる。コンゴトモヨロシク」

2人がどちらともなく突き出した拳を突き合わせる。

ラザールが目を細めて、パンに綻ぶ人々の姿を眺める。

遠山もパンを頬張りつつ、確信を新たに頭を回す。

天使粉と、ドロモラから仕入れた麦酒の搾りかす、酵母を利用した生地の酵母パン。

現代では当たり前前の酵母によるパンの製造、しかしこの世界では歪な発酵の仕組みにより生み出されなかった製法だ。

「リザドニアンの旦那！ アンタすげえな！ このパンまじでうめえよー！」

「ちよいとアンタ、大したもんじゃない！ もう一つパン頂いてもいいかしら？」

「リザドニアンのパン屋さんよ、こっち来いよ！ 実はさっき普請の現場から貰った酒がある！ 一緒に一杯やるうぜ！」

ラザールに詰め寄るギャラリー、それは差別種族リザドニアンに向ける侮蔑や、嫌悪の視線ではない。

美味しいパンを作る腕の良い職人への賛美と尊敬の視線で。

「お、おっと、な、ナルヒト？」

「行ってこい、リザドニアンのパン屋さん。未来のお客様候補だ、味のアンケートでも取ってきてくれ」

ギャラリーに引き込まれるラザールを見送って、遠山は木の椅子に座り込む。

すっかり輪の中に入っているラザールを眺めながら、パンをもぐり。

「トオヤマナルヒト、ひとまず第一段階はクリア、と言ったところかな」

ずっと、現れたドロモラ。見ると顔が少し赤くなっている。その手にはワイン瓶が握られていた。

「だな、ドロモラ。ラザールのパンは本物だ。必ずこの帝国でもウケる」

「それは認めよう、彼のパンには力がある。全く帝国に来てから驚くことが多くて退屈しないよ。だが、トオヤマナルヒト、我々にはまだ課題が残っているぞ」

「へえ」

「……このパンには酒の搾りかすが必要だ。経費は普通の天使粉のみで作るパンよりも多くかかる。それに、教会が黙っていないだろうな。奴らはパンにはうるさいぞ」

木のコップに赤いワインを注ぎつつ、ドロモラが静かな視線を遠山に向ける。

それは遠山を試すような目でもあり、遠山に何かを期待しているような目でもある。

「ひひ、問題ねえよ、ドロモラ」

「とうとう？」

「いるじゃねえか、経費、金の問題と、教会の法。それらを全て一人で解決してくれるドラえもん見たいなら奴がさ」

「ど、ど、ど？」

「安心しろよ、ドロモラ。3日後、俺たちの引越しの日に全て解決する。いるじゃねえか。商人よりも強欲でお金大好きで教会への権力も握っている素敵なスポンサーがな」

「……ああ、たしかに。彼女が、いたな」

「ああ、ラザールベーカー創業のためだ。前は脅迫だったが、今回は違う」

パンの香りに包まれるお昼下がり。遠山鳴人だけはいつも通り健やかに、次のわるだくみを描いていた。

「ホームパーティー大作戦の始まりだ。天使教会の法を、ぶっ壊すアアす!!!」

化け物と戦い、死にかけ、遺物の新たなるステージに踏み入れようとも、その男は変わらない。

ただ、欲望のままに進み続ける。故に遠山は気付かない。

ゆっくり、ゆっくり始まっていた己の変化に気づくことは出来なかった。

飲み込んだ水が、やけに冷たい。胃の中に落ちた後も、その冷たさが体に染み込んでいく感覚を、今の遠山は気付くことが出来なかった。



75話 リザドニアンのパン屋さん（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さい！

コッペパン食べたくなったら下の星評価よろしくお願いします。

76話 サイドクエスト【石窯に火を灯せ】（前書き）

ホットドッグのシステム。

76話 サイドクエスト【石窯に火を灯せ】

……  
……  
……

「天使教会 聖別室にて」

「いいい？ スヴィ、確認しておくわ。私たちはこれからあの厄介者の所に行って賃貸物件の引き渡しを行う」

「はい、主教様」

大きな鏡台の前。美しい新雪を固めて透かしたような白髪が、少女の手のひらの中で梳かれていく。

「それ以上でもそれ以下でもない。鍵の引き渡しと今月分の日割り

家賃の金貨3枚を受け取ってそこでさようなら。ここまでいいわね？」

「はい、主教様」

天使教会最高指導者、主教、カノサ・ティエルフィールドと、主席聖女、スヴィ・ダクマーシャル。

天使教会の中でも最高位に存在する女2人が身支度を進めている。

「あんの欲深キツネ目野郎は必ず何か厄介ごとを持ち込んでくるわ、私の秘蹟がそう言ってるの。もうまじで速攻帰るからね」

「はい、主教様」

主教が糸のように細められた目を険しくしながら語るのは、これから向かう用事においての心構え。

謀つずまく貴族の連中よりも、交渉ごとにおいては厄介な、とある冒険者への賃貸物件貸付。

おおよそ聖職者とは思えない用事ではあるが、彼女はその用事にかなり力を入れていた。

「交渉ごとの全てはノー。もしも、私になんかお金とかお金とかお金とかお金儲けの話とかに惹きつけられてたら、スヴイ、力づくで私を持ち帰りなさい、いいわね」

「……いいんですか？」

パッチイイイン、指を鳴らしながらキメ顔で言い切る主教。表情の乏しい修道服の少女が小さく声を傾ける。

「いいわ、今の私が許可する。数十分あとの私が金貨に負けたらあなたしか頼りにできないから、頼むわよ」

「主様のお言葉のままに」

「シャア！ 行くわよ！ 貴族たちの会議はノルンが代わりに行ってくれたから問題なし！ ヨシ！ 今回こそ、あの畜生竜タラシが持ち込む厄介ごとをガン無視して、ティエルフィールドはクールに去るのよ！」

「……………それが出来ればいいんですけど」

鏡の前で座ったまま気合を入れる主教。そんな彼女を見ながら聖女は小さくつぶやいた。

多分、クールには去らないんだろうな。聖女の眩きはしかし舌に乗って声になることはなかった。

……………

……………

：

同時に、冒険都市アガトラ商業区、一等地に近い郊外の通りに  
て

奇妙な集団に、すれ違う誰もが視線を注いでいた。

黒髪の男に、リザドニアン、そしてはっとさせられるような美しい顔をした水色の髪の美少女。そして数人の子供たち。

なんの集まりなんだ？　と言わんばかりの視線が彼らに注がれる。

彼らはそんな視線を全く気にせず、整備された水路に沿った道を  
歩き続ける。

「いいか、レーザー、作戦を確認する。これから俺たちはあの曲者  
スポンサー様の所に言って新しい家を受け取りに行く」

「ああ、ナルヒト」

黒髪の男、遠山鳴人が、パッチイイインと指を鳴らして声を向ける。その言葉にトカゲ男、ラザールがテンションを平坦なままに頷いた。

「だがそれだけではダメだ、今日ここで、俺たちのパン屋事業にあの女を巻き込む、いいか、ストル」

「ぱちん、その指の音が次は銀鎧にマントを羽織った水色髪の少女に向けられる。」

「はあ、今の私は、異端審問官トオヤマナルヒトの命に従います、デイス……」

髪と同じ、水色の瞳をなんとか瞬きさせて少女がしびしび頷いた。



「OK。あんの銭ゲバ系目女は危険察知能力が高い。俺たちの動きを把握していた場合、すぐに逃走する可能性がある、それを俺たちは阻止しなければならぬ。鍵もらって、日割りの家賃渡して、はいさようなら、じゃあ、まずいんだ」

「……なあ、ナルヒト、だが、またか？ 前回の色街の件でも結果的にはうまくいったが、その…… また何か予定外のこと起きるんじゃない」

「ルアラザアル！ そういうことは口に出すな、いいか、余計なフラグを立てるんじゃない！ いいか？ 俺だって好きであの畜生ナマグサ銭ゲバにちよっかいかけてるわけじゃねえ。アイツがいつもいつも、金と権力を握ってるのが悪いんだ！」

ラザールの言葉に、遠山が大きな動きで腕を振り上げて声を荒げた。

「今、俺らのクリアすべき課題は2つ、竜祭でぶちかますパンの開発経費と材料費、そして天使教会のオカルトどもが設定している”パンに対しての法律”！ この2つの問題を一気に解決出来る立

場にあの愉快的な女がいるんだ！ 最悪の交渉相手だが、最速の近道なんだよ」

2日前、今はもう後にした宿屋でのパン試食会を終えて、今遠山たちはついに、天使教会主教から借りる家への引っ越しの日を迎えた。

そこに立ち合いに来る主教。

以前の夜遊び突撃の夜では半ば脅しに近い形で竜祭への参加を認めさせたわけだが、今回はついに、ラザールベーカーそのものに、教会を巻き込もうというトチ狂ったことを遠山は本気で考えている。

4017

「……トオヤマ、もういつそ、あなたのお友達の竜にお願いしてみてもどうデイス？ 教会に圧力をかけてくれと頼んだら、あの竜2人ならやってくれそうデイスけど」

ストルがすびーつとため息をつく。冗談のように軽く言っているが、その実、その方法は遠山鳴人にも可能で、そして恐らく成功の可能性も高い方法だ。

だが、遠山はノータイムで首を横に振る。

「……いや、なんか、それは違う。こつ、うまく言葉には出来ないけど、アイツらに頼りすぎるのは良くねえ。なんて言うんだろ、始めからアイツらありきで動くのは良くねえ気がする。悪い、論理的じゃねえんだけど」

「あの2人なら、友人の貴方の言う事のほとんどを聞き入れてくれそうデイスけどね」

「それでも、持ちつ持たれつ、だ。手全部任せるなんて、そんな友達でもなんでもねーだろ。まあ、手助けくらいはしてもらっただけ」

実際、あの竜達に頼めばおそらく遠山が頭を悩ましていることのほとんどは一気に解決するだろう。

だが最初からそれを前提とした関係は不健全だ。借りるばかりの対等でない関係は遠山の好みではなかった。

「……まあ、ここで簡単に竜の力を借りるような人間が、竜に認められるわけもなし、デイスか。発言を撤回しますデイス、騎士として竜を軽くみた発言でした」

「ストル、お前なんか今頭いい感じ？　　すげえじゃん」

「……ラザール、もしかして私今、バカにされてますデイス？」

「すまない、ナルヒトには多分悪気がない。許してやってくれ、ナルヒトはもう手遅れなんだ」

3人がいつものように呑気なやりとりを繰り返す。

元奴隷2人に、元教会騎士。しかも初めは本気で殺し合った仲。

「まあ、でも、あれだ。ドラ子の方はもう引越しの手紙送って招待しちまってるからな」

「え?! 蒐集竜様がいらっしやるのデイス!?ど、どうしよ、失礼のないようにしないとデイス」

「昨日ナルヒトが説明していたじゃあないか。あ、ストルはそういえば引き算の練習で話を聞いていなかったのか。……ううむ、俺のパンがかの竜のお口に合えばいいのだが。……燃やされたりしないよな」

「だがこの異世界で送る日々の中でそんなやりとりはもう日常になっ  
ついで。」

「ふふ、ふふふふ」

「どした? ニコ?」

「ごめんなさい、すぐたのしくて。なにか、本当に夢みたいなの。おうち、私たち、これから新しいおうちにいくのよね」

「ついこの間まで、路地裏の隅が俺たちの家だったからな。正直、アニキ、俺もまだ全然自覚がねえ、引越し、ていうのがよ」

「……まあ、夜の番せずにみんなが寝れるのはいいことじゃないかな」

「ペロも新しいおうち、たのしみだねー」

「ダウ」

孤児達、スラム育ちの子供たちが口々につぶやく。

「……あー、がきんちよども。なーにしみじみしてんだよ。お前らにも新居に入ったあと色々仕事してもらおうからな」

「はい！」

遠山が意識して、子供たちにぶっきらぼうな言葉をかける。彼らはニコリと笑って、彼らをスラム街から連れ出した1人の冒険者に返事をした。

「ついた、ここ、か。……マジ？」

立ち止まる。貰っていた地図と、物件のスケッチを見比べて遠山が口をぽかんと開いた。

「おっと、これは、……」

「さすがは主教様の資産デイス、これ、家というより……」

「「「お屋敷だああ！」「」」

子供たちが目をキラキラさせて声を上げた。

豪邸。

石と木で組まれたであろう大きな屋根が、周囲を囲む石の塀から突き出ている。おそらく3階建てはあるだろう。

「すげえな、マジで。えーと、確か表の門から入って中庭で待つとけつってたな、え、中庭あんの？」

ぼへーと、遠山一行が豪邸の門に近づく。

重たそうな木で出来た門戸の前には、フルフェイスの銀の鎧の大男が2人左右に構えていた。

どこかで見たとのことのある鎧の作りだ。



「お待ちしておりました、トオヤマ異端審問官さま、ラザール審問官補佐様、……ストル・プーラ審問官側仕え殿。主教、カノサ・テイエルフイルド様はまもなくご到着です。どうぞ、庭園でお待ちください」

「あ、どうも……」

「がちゃん、がちゃん。」

「ラザール、ラザールやべえ、アルソツ　ついてるんだけど」

「それが何かは知らないが、警備付きだとはな。……さすがは天使教会主教、生半可な貸家ではない」

「騎士派の無派閥の人間デイスね。まあ、私たちの監視もあるかもデイスけど」

「……ストルが頭良さそうな事言ってるってことは、あんま気を抜かない方が良さそうだな」

「どーゆう意味デイスか」

「わあ、すごい……」

「ひ、広い……こ、これがアニキのもんになんのかよ」

「……ぼ、僕たちほんとにここ住んでもいいの？」

「おいおいおい、カルイザワのセレブの家じゃん。あの銭ゲバやべえな」

中庭もすごい。天然の芝がはりめぐされた大きな庭はフットサル程

度なら余裕で出来そうな面積がある。

木のテーブルやイスも用意され、雨除けまで設置されている。ちょっとした公園にちかい。

「な、ナルヒト……」

「あ？ ……おい、マジか」

震えた声のラザール、遠山もまた言葉を詰まらせる。

公園の雨除けつきのベンチ、キャンプ場の炊事場のようなスペースには、ツルツルの石で象られたドーム型の釜が備わっていて。

「パン釜。ドワーフの工房に作らせた一点ものよ。石材はヒエノ山脈の石切場から良質なものだけを選んで使用、釜の底面にはワイバーンの皮膜を張ってるわ。屋敷の厨房にも一つあるわ。火を入れた

のは数回だけど、まあきちんと使えるものよ」

「……こうはい、久しぶり」

背後からかかってきた女の声。気怠げだが知性を感じさせる女の声と、静謐な森の奥から届いたような小さな少女の声。

「おお、どうもっす、センパイ。ーそれに我らが主教様」

遠山が振り向く。

修道服の2人。長い白髪を纏めた糸目の女と、身長の低い二つ編みの少女がそこにいた。

カノサ・ティエルフィールド、スヴィ・ダクマーシャル。

天使教会の最高位の2人。

「ふん、ここは公の場所じゃないわ、無理して形式ばらなくいいわよ。聞いたわ、ミトラ森林のこと。また死に損なったらしいじゃない、竜殺し殿？」

中庭の椅子に腰掛ける主教、裾の長い黒いスカートきら伸びる長い脚を組み、ぷらぷらと揺らす。自分の家のようにリラックスした様子だ。

「耳がはえーな、相変わらず。おかげさまでまだ生きてるよ。まあいい。わざわざ家主様にご足労頂いたんだ。手続きを始めようじゃないか」

遠山が同じく対面のイスに腰掛ける。木の触り心地もいい、かなり金をかけた調度品のようだ。

「そうね、と、言っても条件のすり合わせは済んでる。部屋の状態の確認は…… まあ、何か文句があったら後で言いなさいな。建てたのは半年前だし、特に傷もないはずだから」

「へえ……」

意外だ。遠山は主教のその言葉に目を細める。この女のことだから部屋の現状確認などを徹底的にやるものだと思っていた。

こちらが難癖つけたりはしないだろうという信頼の証かと一瞬考えたが、そんなわけではない。この女の優先するものなによりもカネと己の保身。

故に、その主教の言葉は遠山にとって違和感となる。

「さあ、トオヤマナルヒト。この書面にサインを。それでこの屋敷はアンタのものよ。とりあえず契約期間は半年。それ以降は更改していく形でいいわね」

聖女がすつと差し出した羊皮紙を主教が机に置いて指を指す。

遠山は未だこの世界の文字が読めない、だが様式を見ればサインの署名欄くらいはわかった。

ラザールに代読を頼もうとして――

「半年？」

主教の言葉に首を傾げた。

「ちよつと、嘘でしょ？ アンタもしかして忘れたとか言わないわよね？」

主教が呆れたような声を出す。

「ブリジ・スクロール  
教会誓約書……」

隣にいたラザールが渋い声で、苦々しげにつぶやいた。

「そ、私たちとアンタ達が交わした最初の契約。この冬までにアンタ達が規定の白金貨を払えなかった場合、ここに記載されてあるラザールとトオヤマナルヒトからは自由意思が剥奪され、教会の、そ

うね、奴隷となる。……本当に忘れてたの？」

「あ」

忘れてた。色々なことがありすぎて、パン屋やら化け物との死闘やら、そもそもそれを始めた理由が金策だったことを割と本気で遠山は忘れていて。

「ナルヒト、アンタ、本気か？」

ラザールも、マジか、とばかりに遠山を見つめる。

「……お、俺がしくじったから……」

いつのまにか近くにいたリダが、ぼそりとつぶやく。そもそも教会誓約書とかいう悪徳取り立て屋も真っ青な契約を取り交わしたのは、スラム街での一件、瀕死のリダを救うために、聖女と取引したことが原因だ。



「あー、あー、書いた、書いた書いた。いやー  
そうだった、そうだった。ここんとこ色々あったから少し忘れて  
たわ。なるほど、どちらにせよ下手したら冬には俺とラザールは金  
を返せなければ頭がパアになるわけね、家もクソもなくなるわけだ」

「そういうことよ。まあ、出来れば私個人の考えとしては、貴方が  
そうならない方がありがたいけど」

教会誓約書の効果は、債務不履行者から自由意志を奪うことにある。  
事実上の死刑のようなものだ。

どういった形で自由意志を奪われるのかはわからないが、この世界  
の不思議アイテムだ、どうせロクなことにならないだろうと遠山  
は予測している。

「ナルヒト、契約書をひととおり読んだが、特に変わったことはな  
い。意外なほどに良心的だ。退去のさいには日割りしてくれるよう  
だぞ」

「わお、優良大家じゃん。ひひ、安心しろよ。きちんと金は返す。そして家の契約もきちんとして更改させてもらうよ。はい、サイン」

羽パンでサラサラと名前を記入して紙を渡す。

それを受け取った主教が、古代二ホン語で名前空間書いてんじやないわよインテリ気取りが、とぶつぶつ呟きつつも、それを受け取った。

「ま、期待しておくわ。じゃ、私たちはこれで」「ん待てい、まあまあまあ、主教さまよー、なんかアンタ今日やけにすぐ帰ろうとしてるよな」

即座に立ちあがろうとした主教よりも先に遠山が席から立って機先を制する。

ぴくり、聖女がそれに反応するも、ストールがそれを牽制する形でも動かない。

「……こう見えても忙しいのよ、私たち。やることをやったから次の仕事に行かないといけないの」

主教が表情を変えずにつぶやく。

遠山は確信した。こいつ、長居する気がない。確実にこの前の夜遊びの一件で警戒されている、と。

だが、既にその対策も考えている。主教の性癖はあの夜店でリサーチ済みだ。

「……ルカ！ ペロ！」

パチリ、遠山が指を鳴らす。

「……おねえさん。少しだけお話できませんか？」

「わー、キレイな白い髪！ おねーさん、おしゃべりしよーよ」

遠山の指示、レーザーベーカーリーの誇る可愛い顔をしたシヨタ達が、  
主教の近くに、とてと駆け寄った。

ルカはあまり表情が豊かではないが、縋るように上目遣い、ペロは  
にっこりと無邪気な笑顔を向けて。

「ンガッ、さつきから思ってたけど、か、可愛い男の子…… 帽子  
中性美少年に、金髪くせっけ子犬系美少年…… おのれ、トオヤマ  
ナルヒト」

ぎぎぎ、主教が鼻息を荒くしながら遠山を睨む。本当に案件になり  
そうであれば止めるつもりだ。

「……主教さま？」

冷たい声、スヴィの声に主教がはっと顔をあげる。

「ハッ、そうよ、私、負けない。私好みの美少年達を使って誘惑し  
てくるなんて、なんてひれつなやつなの。そんな卑劣な男に負けな  
いわ。帰るわ、私、約束がー」

「商人ギルドと税金の会合だろ？ たしかそれは夕方からだ」

ドロモラ商会を通じて、情報もおさえている。

「……………ほんと、厄介ね、貴方。どこからその情報を？」

主教の声が低くなる。すつと、僅かに開かれた瞼の隙間には紫の色が染みていた。

「なに、親愛なる我ら天使教会の主教さまのご予定を把握しておくのも審問会の勤めさ。食えねえのはどっうちだよ、主教さま。心配するなよ、この前みたいにアンタの夜遊びを邪魔するつもりじゃないんだからよ」

そう、今回は脅迫ではない。必要以上に主教の弱みをつく気はあまりなくて。

「……………夜遊び？」

「あ、やべ」

遠山の言葉に、スヴィが反応。主教の顔が青ざめた。

「うん？ ……もしかして、主教様、あんた、センパイにあのこと」

夜遊びのこと、まさか主教は言っていない、つまり聖女に隠して、それがまだばれていないのか？

そしてその青ざめた顔から、それがバレたら主教的にはまずいことを状況から理解する。

「おほほほほほほ！ トオヤマナルヒト！ 気が変わったわ！  
まあ、可愛い部下のお話だもの。聞こうじゃないのよ！」

急にフレンドリーになった主教。判断がやはり早い。

「……だめ、さっき主教様、自分が何を言ってもすぐに連れ帰れ  
って」

「センパイ、そういえば知ってるか？ この前、俺らが色街でさあ」

「うそうそうそうそ！ほんとさあ！私ったらすーぐそういうこ  
と云うからさあ！ね、スヴィ、大切な審問会のメンバーのご厚意  
だもの、ね？」

「……主教様がそうおっしゃるなら」

主教に促され、聖女もまた同じく席につく。

「はい、一名様ご案内、アンタらの力関係愉快だな」

「ふん、煩いわよ、この人でなし。つまらない話なら許さないわよ」

「楽しい話さ、ぶっちゃけた話をすると、金の出資と教会のパンに対する縛りの話だ」

「は？ どういうこと？ あなた、今度は何しでかすつもりよ」

「竜祭を獲りにいく、ラザールのパンでな」

「……ラザールのパン？」

遠山の言葉に主教が首を傾げて。

「ああ、美味しいぞ」

「はあ、トオヤマナルヒト、正直、私、貴方は物の道理だけ、この世の仕組みだけは理解できてる人間だとは思ってたわ」



主教の言葉から、温度が消える。同時にそれはひどく乾いていて。

「あ？」

「ヒトには持つて生まれた才能と役割があるわ。ヒトはそれを振るう為に生きていると言っても過言ではない。才能を与えられた者はね、その才能を活用しなければならぬ義務がある」

背もたれに大きく体を預けて、組んだ脚の上に手を構える。

それは冷たいシステム、天使教会主教としての彼女の姿だ。

「ラザール異端審問官補佐の才能は、影と悪事に愛されたこと。彼の才能はね、他者から奪うためのもの、決して呑気にパン作りなんかする為の人材じゃないのよ」

この世界の宗教システムのトップ。人に役割を求めるのは彼女の役割でもある。

「…………… 主教様、あなた」

その言葉にピキッたらしいストルが一步前に。

「いい、ストル、待て」

遠山がそれを制す。素直にストルは表情を険しくしたまま、後ろに下がる。

くすっ、その様子を見ていた主教が満足そうに少し笑った。

「へえ、ストルの手綱をきちんと握ってるじゃない。トオヤマナルヒト、あなたのそれも役割よ。この街においての異物、あなたはきちんと、あなたとして役割を果たしている」

主教の手入れされた指が、遠山、ストルを順番に指差していく。

「ラザール異端審問官補佐の才能を腐らせるような真似に私が手を貸すとても？」

天使教会の主教として、彼女がラザールに見出した価値は、その隠形の業。帝国の総力をかけた追跡もかわし、彼女の手勢、審問会の羽よりも優れた闇に紛れる才能。

決して、パンなど作っている場合ではない。主教が言いたいのはそのうちのことだ。

ラザールの才能は、奪う者としてであり――

「なるほど、一理ある。だが、主教さまよ、アンタは一つ見落としがある点がある」

だが、遠山鳴人の見解は違う。彼が見出したラザールの才能は、役割は、

「ふっん？」

「ラザールの才能は、人から奪うためのもんじゃない、人に与えることが出来るものだ。俺や、アンタとはラザールの役割は違っんだよ」

「……その根拠は？」

「それをこれから見せてやる」

彼が見出したラザールの才能は、役割は決して奪う者としてのものではない。

「ラザール」

「ーああ」

リザドニアンの静かな返事、彼はもう知っている。彼の友人が見せてくれた、辿り着かせてくれた光景を。

自分のパンを美味しいと言って食べてもらうことが出来る事実を、既に。

遠山が、席を立ち、石窯の側に積んである薪を拾った。

「石窯に火を灯せ」

……  
……  
……

「美味しい……」

パチクリ。

聖女スヴィがエメラルド色の目を瞬きして、今自分が頬張ったもふもふのパンを見つめる。

コツペパン。たった今、庭園の石窯で焼き上げたそれを二口で聖女が食べ終わる。

そして、もう一人。先ほどまで冷たい目で才能がどうの、役割がどうの言っていた糸目の女。

天使教会主教、カノサ・ティエルフィルドもコツペパンを一口、小さく齧って固まっていた。

「……………オカネ」

ぼそり。小さな声、しかし普段は閉じられ感情の見えない紫瞳は今は開かれ心なしかキラキラしている。

それは果たして美味しい食べ物への感動か、それともそれで生まれるだろう利益を見越してのことか。

「すげえよ、この女。美味しいもん食っての一言目がカネだよ」

「ここまで徹底してるともう清々しいな」

遠山とラザールはもちよもちよとパンを齧っては、オカネ……とつぶやく金の赤ちゃんへ目を細める。

チベスナのような虚無の目と細められたトカゲの目は雰囲気が似ていた。

「ほんとに、美味しい…… ラザールこうはい、貴方、すごい」

「お褒めに預かり光荣だ、聖女殿、よかったらお代わりがある、いかがかな」

ラザールがカゴに固めたコッペパンを差し出す。ホカホカのサクサクのそれを見たスヴィが頬を少し赤く染めて、コクリと頷いた。

「聖女センパイはこんなに純粹なのに」

遠山がスヴィを見てから、主教に視線を向けて。



「……この味、外はサクサク、中は柔らかい、いえ、未知の食感のはずなのに本能に訴えてくる心地よさがあるわ…… 発酵、いえ、祝福の時に発生する酸味もほとんど感じられなく、あるのは口当たりのいい甘味だけ、でも、これは砂糖の甘みじゃないわね、どちらにせよ、これは、売れる……、通常のこれより大きいロフブレドが銅貨5〜8枚、でもこの味ならこの小さなサイズでも同じ金額、いえ、下手したら大銅貨1枚でも売れる…… すんすん、天使粉の香りの中に、混じるこれは…… 酒精？」

「マジかこの女」

当てやがった。発酵の知識はあれど、酒の搾りかすを利用した酵母生地 of 知識などあるはずなのに、ぶつぶつつぶやく主教はそれを言い当てた。

「……トオヤマナルヒト、このパンは確かに素晴らしいわ。ええ、発言を撤回します。ラザール異端審問官補佐の才能は、これです。彼にはパン作りの才能が与えられている。謝罪を」

「い、いえ、恐れ多いお言葉だ、主教様」

素直にラザールに向けて頭を下げるカノサ。この柔軟性が彼女を敵に回したときの厄介さだと遠山は知っている。

「ラザール、安心するのはまだ早え」

だから、まだはなしがこれで終わりだとも思っていなかった。

「ですが、天使教会主教として、このコッペパンの存在を許すことは出来ません」

主教が静かに告げる。有無を言わさぬ圧力がそこに。

「ほらせっほら」

「理由はわかっているのですね。このコッペパン、見た目こそ教会指定の白パンとあまり変わりませんが、製法に大きな違いがある。教会法ではパンは天使様からの贈り物、よって天使粉と水のみで作るように定められていますが、これは違う」

「……」

「おそらくは、酒の搾りかす、入手の容易さから考えれば麦酒でしょうか？ それを生地に混ぜて焼きあげている。……教会法で認められた作り方ではありません」

コッペパンをちやつかり全部食べ終えて、口をハンカチで拭いた主教が遠山を見つめる。

「異端審問官として教会に所属する人間でありながら遠山鳴人、なかなか大胆なものですね」

「ああ、そうだな。まあ、こっちも色々考えたんだ。いつそのこと

黙ってこの酵母パンを世の中に出してしまおうとか、ドラ子の竜としての名前を借りて強引にブランド化しまおうとか、色々さ」

その視線、糸目の圧力を真正面から受け止めて遠山が言葉を紡ぐ。

「でも、それはやめた。真正面、正々堂々大手を振って、アンタを説得する作戦に決めたよ」

「ハハ、説得も何も、このパンは教会の法に認められていません。この話はこれで終わりだと思っただけです」

「……………なあ、このパン美味かったか？」

「ええ、そこは偽りなく。ほのかな甘みにさくさく、あなた風に言えばもちもちしている生地はとても。しかしいくら美味しかろうと決まりは決まりー」

パンの味だけで、この女は崩せない。」

だが、それでもパンの味で、遠山は天使教会を動かすつもりだ。

「このパンは、はじまりに過ぎない」

「……………はい？」

「コッペパン。これは確かにいいパンだ。食べやすく何より簡単に作れる、いわば量をたくさん作るためのパンなんだ」

「……………何が言いたいわけ？」

主教の言葉遣いが崩れる、天使教会主教ではなく、銭ゲバとして遠山鳴人の言葉に疑問を抱いた証だ。

「コッペパンは、味を重視したパンじゃない」

「……………変な話ね、トオヤマナルヒト、それだとまるで、ラザールとあなたならー」

主教の淀みない言葉のリズム、それが僅かに揺れたのを遠山は見逃さない。

「俺たちにはもっともっと美味しいパンを作る準備がある」

「……………へ、え」

「俺の頭にあるレシピ、簡単に発酵する天使粉、そしてラザールのパン作りの才能。この世界に存在しえない、ああ、別の世界の古今東西ありとあらゆるパンを俺たちなら作ることが出来る」

「それは危険すぎるわ、だって」

「パンに自由さを許せば、誰かが”天使の祝福”の仕組みに疑問を持つ。そしてそれはアンタらが秘匿している発酵に誰かがいずれたどり着く。……そうなればあのキシヨク悪い天使とやらにどんな影響が出るかわからない、そんな所だろ？」

「なんだ、わかってるじゃない。そうよ、その通り。この世の真実、私たちヒトは、たまたま”天使様”という正体がカケラもわからない大いなる何かの気まぐれで生きているに過ぎない。そんなことが大衆にバレればどんなことになるかわかるでしょ」

そう、要はそういうことだ。教会が何より恐れるのは、パンの自由な制作を認めることにより、いずれ自力で”発酵”が発見されることにある。

そうすれば、正体不明の”天使”にどのような影響が出るかわからない。

「ああ、ロクなことになんねえだろうな。だからよ、主教様、ラザールの、このパン、教会御用達にしてくんね？」

「……………は？」

それを解決する方法はシンプル。

遠山鳴人は、決して善人ではない。多数に進歩を、利益を分け与えることを求めているわけではない。

優先するのは自分と身内。つまり。

「これから先、ラザールのパンが世に出た後、必ず後を追うもの、このパンの秘密を探る者が出てくるだろ？ だから、それを防ぐ為に教会に俺たちのパンを守って欲しいんだ」

酵母パンの独占。進歩を、発見を、大衆に行き渡らせる気など遠山には全くなかった。



「……教会のパンに対する法を捻じ曲げようというわけ？ あなた達の商売の為に？ はは、そんなこと罷り通るわけないじゃない」

主教は冷たく言い放つ。薄く開けられた紫瞳はわかりやすいように失望と侮蔑の色に染まっている。

だが、遠山はそれを見て確信する。

釣れた、と。

「主教様、よだれ、出てるぞ」

「……………失礼」

「アンタはもう気付いている、このパンの持つ途方もない価値に。そしてアンタは知っている、自分にはこのパンを好きに扱う権利があることを」

「……………」

「何事も大きな利益、利得ってのは物事の始まりに噛むか、噛めないか、乗るか、乗れないかで決まるもんだ」

「具体的に、あなたのその提案は？」

「俺たちラザールベーカリーのパンの売り上げの3割を直接アンタに分け与える、代わりにラザールベーカリーのパンには全て、”教会印”をつける許可が欲しい、このパンはそれで教会が認め、教会が背後についたパンとなれる」

「そうすりゃ、信心深い帝国の皆様はこう思う。このありえないほど美味しいパンの秘密は、作り方が違うとかではなくて、より天使様の祝福を強く受けているからだ、なにせー」

「教会の印が付いているパンだから、ね……」

遠山の言葉を補完する主教、身体がピクリとも動いていない。日向ぼっこをしている爬虫類のように指先から頭のとっぺんまで固まっている。

だが、唯一テーブルに置いた人差しだけは規則的に、曲がり、伸ばされ、曲がり。

「ご明察。主教様、俺たちは天使教会のブランドが欲しい」

「……………」

沈黙。

先ほどは拒絶のみだった主教の反応が明らかに変わっている。

最後の詰めだ。

人は理屈と感情で動く。

理屈はクリアした。あとは感情だけだ。

「レーザー、アレを頼む」

「承知した」

石窯から再びいくつかの焼き上がったコッペパンをレーザーが慎重に取り出す。

「何を？」

「売り込み、それと聖女センパイにはお礼、だな。ラザールのパンを美味しそうに食べてくれたし」

遠山もそう言って、運んできたカゴからソーセージを取り出す。パウチなんて便利なものはない為、軽く燻して保存出来るようにしているものだ。

「ほんとに何を？」

「ソーセージ焼くの。ちびっこ達、この前教えた要領で火を起こしてくれ。石窯の燃えてる薪を火種にしてな」

「任せてくれ！ アニキ」

「あ、俺もやる……」

「え、ええ……」

わたわたと子供たちが遠山の指示に従って動き出す。

遠山によって生きる術と目的を与えられた彼らはとても働き者であった。働けば認められる、それはスラムで生きる彼らにとっては夢のように遠いことでもあった。

「ニコ、トマト、あー違った、ポモドロを潰してペースト状にしておいてくれ。ペロはシロの面倒見ておくように。ストル、ちびっ子達の様子を見守ってくれ」

「はい、任せてよね、お兄さん！」

「りょーかーい、シロこっちだよー」

「だっ」

「承知しましたデイス、審問官」

テキパキとそれぞれが、それぞれの役割を果たす。

たしかに遠山たちがこの異世界の生活の中積み上げてきたものがここに。

「……すい」

聖女が子供たちの仕事ぶりに小さくつぶやいた。

「俺が選んだ優秀な従業員だ。ラザールベーカーリーはすでに開業の準備を終えている。ここまで来たんだ、主教さまよ、必ずアンタを堕としてみせるぞ」

「ほんと、厄介ね……」

流れる手つき、すでに膨らんでいたパン生地がラザールの手のひらの中で踊るように捏ねられる。

天使粉をまぶしつつ、まな板の上で転がされ、筒状に変わっていく。かと思えば、すとん、すとん、すとん、すとんと、小気味良い音共に切り分けられて。

「ナルヒト、生地が発酵、おっと、祝福の度合いもちょうどいい。焼成には20分もいらないうらう」

「OK、薪をもう少し足しとくわ。温度もきちんと上がってる。もう入れておいて大丈夫だ」

「アニキ！ 火を熾したぞ！」

「ナイス、リダ。ルカ、燻製ソーセージを2本、串に刺して遠火でじっくり焼いてくれ。あ、この前ドワーフのおっさんから貰った手袋使えよ、火傷するぞ」

「……了解だよ、アニキ」

役立たずなど1人もいない、みな仕事を果たしていく。



「この子達は、スラムの出身だったかしら、トオヤマナルヒト」

主教が静かに問いかける。

「……………！」

リダがびくりと、身体を震わせた。

「ああ」

「……………白金貨50枚の価値があったと思う？」

その問い。スラムでの選択を問いかけるそれ。

「ッ……………」

リダとルカ、聞き耳を立てていた彼らの手元で、彼らが熾した焚き火が少しづつ、少しづつ薪に燃え広がって。

炙られたソーセージのテラテラの皮に炎が映っていた。

「まあ、妥当な金額だろ」

遠山に迷いはない。それが答えだ。

「そ、ならいいわ」

ふっと、一瞬だけ、主教が微笑んだ。

ぱちっ、ソーセージの皮が炎に舐められて弾けた。

「……焼き上がったよ、アニキ」

「あら、美味しそう。ソーセージの付け合わせにさっきのパン？  
裕福なおうちのランチでもご馳走してくれるのかしら？」

「いや、この世界にない新しい娯楽の提供だ」

「お兄さん、ポモドロのペースト、刻み終えたわ」

「サンキュー、ニコ、ストル、なんか適当なサイズのレンガ2つ取  
つてくれない？」

「これでいいデイスか？」

「ギョウモギョウモ」

遠山がカゴから取り出した鉄の調理器具を焚き火の上に寄せる。ルカから防火手袋を受け取り、火でそれを炙り始める。

「それは……」

「ドワーフの工房で作らせたフライパン。なんでもつい最近、北領のある街で作られて最近流行り出した調理器具らしいな。……人間ってのはよ、ほつといてと必ず進み続けるものだ。より便利に、より豊かに。その為に必ず工夫して、発見して、進むんだ」

ざり、ざり、ざり。

小さなナイスで遠山がまず岩塩を削る。薄く薄く伸ばすようにフライパンの上に広げたトマト、ポモドロペーストに塩をまぶして。

「それを進歩、と呼ぶ。誰にも止められない、ひとが人である限り、その歩みは止まらない。だけど唯一、それを停滞させる方法がある」

続いて、先日果物を煮詰めて作った果糖もどき。瓶に入ったそれをスプーン2杯分掬ってフライパンに。

「方法……」

「宗教だよ、主教様」

商会から仕入れた虎の子の香辛料を少し、ふりかける。

「俺の知っている最も宗教の力が強かった時代。人の進歩はその絶大な力と支配、人の宗教を信じたいという思いが、人の進歩をはっきりと妨げた」

遠山は歴史を語る。遠山のいた現代においては中世と呼ばれた時代の話。

「その時代では、地球は宇宙の中心とされ、有能な女性は魔女と呼ばれ火炙りにされ、前の時代の叡智を悪魔の知識と呼んで焼き滅ぼし、先人が作れたものを理解出来ない故に悪魔が作ったとして滅ぼした、人類は間違いなくその時代、停滞していた」

星に手を伸ばした多くの人間は火炙りとなり、家族を思う女たちは魔女とされ水に沈められる。

宗教により起きた事実。

人の進歩を認めぬ時代。

「暗黒時代、宗教はそれを生み出す力がある。恐らく唯一、ヒトから進歩を奪うことが出来る存在だろう」

遠山の手元でぐつぐつとペーस्टが煮詰められていく。赤々と燃える焚き火の香りが心地いいが、火が少し強い。

熾火の偉大さがよくわかる。

「天使教会、お前らの力は絶大だ。俺は歴史に知っている、宗教を敵に回す恐ろしさを。だから、俺は選ばない、お前らを敵にはしな

い

「あなたの目的には、私たちが邪魔なんじゃないのかしら」

「ひひ、ああ、そうだな。でも勝ち目は薄そうだな。だからお前らには味方になってもらうよ。これは、この世界でもいずれ、どこかの誰かがたどり着くはずだったであろう可能性。宗教により停滞させられていた新たなる進歩」

ラザールのパンを受け取り、子供たちが焼いたソーセージを焚き火から遠ざける。

4070

人の進歩が許された時代、簡単な思いつきは時に世界を変えることもある。

それが、文化。

「ホット・ドッグ、竜祭でお披露目予定の帝国に存在しない新たなパン」

遠山がパンにナイフで側面に切れ目を入れる、ソーセージをすつと差し込み、ケチャップを垂らして。

「パンに、腸詰めを…… このソースは」

「ケチャップ。まあ、モドキだけどな。本当ならもっと精錬された砂糖と長い時間をかけて煮詰める必要がある」

遠山が慣れた手つきで二つ目を拵える。

ホカホカの石窯パンに、焚き火で焼かれた熱々のソーセージ。真っ赤なケチャップをそれに垂らせば出来上がり。

「主教様、センパイ。どうぞ、召し上がれ」



「「くり……」」

シンプルに本能を刺激するその香りに、2人が唾を飲み込んだ。

「し、主教さま…… これ」

「……落ち着きなさい、スヴィ、こんなのパンに腸詰めを挟んだだけじゃない、こどもにだって思いつくような」

「だがこの世界では誰も試したことの無い、試そうにも教会が禁止していたことだ。まだこの世界にないものだぞ」

「……舐めんじやないわよ、トオヤマナルヒト。それでも天使教会の法は法。そう簡単にアンタだけ特別扱いするなんて甘い話があるなんておもわないこと」「……ア」

「スヴィ？」

主教の言葉を聖女の掠れた声がさえぎった。

「……………主教、サマ」

「え、あなた、さっきのパンは？ どこかに置いたの？」

「……………」

フルフルと力なく首を横に振るスヴィ。

「え、てことは、まさかもう食べたの？」

「ううん、……………じゃった」

「はっ、」

「飲んじゃった……ほっと、どっぐ……のみの」

涙目で、スヴィが嘆いた。

一瞬で、彼女はその新しいパンを食らいつくして。

「ひひ」

遠山が笑う。

とつた、と。

「……天使様、貴女の忠実な信徒にご加護を」

ごくり。カノサも覚悟を決めて。

そのホカホカのホットドッグにかじりついた。

ぶちっ。ぬくっ。もぐぐぐ。もぐぐぐ。もぐぐ。

「――」

「ウ」

主教の口の動きが止まる。

「ナルー」

ラザールが不安げに、遠山の名前を呼んで。

「問題ない、ラザール」

遠山はただ、薄く笑うだけ。

「ウンまあアアアアアアアアアアアアアアアアアアあ〜い！……い！……」

「え？」「イエス」

キョトンとするラザール、ぐっと拳を固める遠山。

「は？ な、なに、なにこの、なに？ 噛み付いた瞬間、ぷちつと奏でられた小さな音、例えるなら、そう！ 金貨が金貨とぶつかり合って奏でられる音と同じくらいに、イイツ！！ そしてその音の後に口の中に流れ込んでするジューシーな肉汁！！ 普通の腸詰めからは考えられないほどの瑞々しさと滑らかさ！！ 私が今まで食べていたのは、紙かなにかを焼いてたんじゃないかと錯覚するほどの、衝撃ツツ！！」

主教が、ものすごい勢いで叫ぶ。目は完全に見開かれ、震える手で持つホットドッグを見つめて。

「え、ええ……」

「ふっふっ」

「それにこの腸詰めへの衝撃と余韻のあとに気付くつ！！ パン、このパンの旨さ！！ かじった所から溢れた肉汁が、パンの生地にも染み込んでツ！！ いや！それよりもこの皮！ 噛み締めるとザクつて言うわ！外はしつかりとした噛み答え！ 内側の生地はもちもちとして！肉汁と合わさる！ ハーモニー、ハーモニーだわ！そして、この腸詰めにかかっている赤いソースは…… ポモドロソース？ いえ、違う、塩と砂糖、香辛料に刻んだオニオで味付けされて、なんとも言えない味に……」

「語彙豊富なやつが食レポすると長くなるな」

ごく、もぐ。

そして主教もあつというまにそれを食べ終えた。

「と、トオヤマナルヒト、こ、これは、あつ、私のホット・ドッグが、どこかに……」

「主教様、もうアンタが全部食ったぞ」

「ーっあ」

「天使教会、お前らが止めていたこの世界の時代を、進める時が来た。俺たちラザール・ベーカーリーに乗るか、そるか、主教様よ、アスタが決めてくれ」

「……」発酵”の秘密に関しては、教会の焼印をパンにつけることを条件に、この新しいパンに関わることが出来るのを教会だけにすれば漏出は防げる……か」

「答えは」

「……この新しいパンの秘密は異端審問会が預かります。いいでしょう、教会は、ラザールのこのパンを庇護することを約束します」

「主教様……！」



「イエース、言質とったぜ！」

「は、はは、ほ、ほんとに、上手くいった。お、俺のパンが教会の公認に」

「く、や、やっぱり厄介なことになりました、でも、このパンを教会の祝福税の対象にして、異端審問会のみ取り扱いにしまえば、実質市場の独占が教会によって完成する…… ふ、ふふふふ、…… スゴイオカネ」

「主教様……」

「あら、ごめんなさい、スヴィ。こほん、トオヤマナルヒト。でしたらすぐに細かい条件の打ち合わせを。そしてこれからの事業計画を聞かせてもらってもいいですね？」

「ああ、勿論、実は、ホットドッグにはまだ仕掛けがある。竜祭の

よ・う・な・イ・ベ・ン・ト・だ・か・ら・こ・そ・効・く・仕・掛・け・が・あ・っ・て・だ・な

「主・教・様……、こ・う・は・い。わ・た・し、そ・の……」

遠山が色々話そうとしたところ、モジモジと聖女が呟いた。

「え？ ……ああ。そうね。こほん、あー、トオヤマナルヒト、それにラザール。その、私たちは貴方達のパンを認めます、ですので、その、先程のホット・ドッグ、おかわり、頂いてもよろしくて？」

「ーひひ」

ホットドッグすげえ。予想より遥かに、反応が良い。

「ああ！ 喜んで、我らが天使教会の知恵と誇りよ」

ラザールが嬉しそうに会釈して。

「「「「「ゆるいんでー」「」」」」」

子供たちも手をあげて答えた。

ホームパーティーで、天使教会の法はぶっ壊れた。

「ご歓談中大変失礼いたします、主教様、異端審問官様。正門に、お客様をお待たせしております。いかがなさいますか？」

がちや、がちや。重々しい足取りで門番が現れる。

きた、そろそろだと思っていた。遠山がうなずく。

「へ？ 客？」

主教がきょとんと首をかしげる。

「ああ、そろそろだろ。主教様、1人このホームパーティーに参加させてもいいか？ 大丈夫、俺とアンタの共通の知り合いだからよ」

「共通の知り合い、誰……ーあ、あなた、まさか」

主教が何かに気づいたように、わなわなと震えて。

「ああ、蒐集竜呼んでる。家が出来たら招待する約束しててさ。何度も助けて貰ってるからおもてなししないとな」

なんのこともなしに、ケロリと遠山が答えた。

「……ぬけぬけと。もし、私が貴方のパンの申し出を断っていたら」

「仮定の話だが、ラザールのパンを竜が気に入った場合は、手助けくらいしてもらったかもな。ドラ子と2人でアンタともう一度話してたかもしれない。俺と竜の、2人で」

ニヤリと笑う遠山。おんぶにだっこされるつもりはないが、竜と2人で主教とお話するのも、なんか友達みたいで楽しいかも、そのくらのテンションで色々考えていた。

「アンタ、ほんといつか燃やされる…… いえ、それはなさそうね」

「まあ、そうならなかったからセーフ。悪い、少し席外す。ラザール、我らが主教様とセンパイにとびきりのホットドッグを。あと金ピカドラゴンが小腹を空かせてやってくる、アイツの分も焼いといてくれ」

「承知した!」

遠山はラザールに声をかけて離席する。

ドラ子に会うのも久しぶりな気がする。

「こちらです、異端審問官殿」

「はい、すぐ行きますよつと」

門番に同行し、遠山が玄関に向かう。いつになく、上手くいった流れに少し気がつわついている。

これでパン屋開業のための大きな関門はクリアした。あの時、教会という権力に近付いた判断はやはり間違いではなかった。

異端審問会という組織に属していなければ、いくら主教へのメリツトを用意していてもこんなに上手く話は進まなかっただろう。

「門番さん、あんた達はずっとこの家の番を？」

ふと、遠山は高揚した気分のままに、先導する衛兵へと声をかける。

「はい、主教様のご指示です。異端審問会の皆様をご入居した後も、  
ここには衛兵が数人つくことになっております」

「へえ、そりゃありがたい」

「有料ですが。後ほど主教様からお話があるはずですよ」

「うわー、そついでとやるよねー」

まあいい、値段にもよるが子供たちを置いていく心配もある。  
門番はいた方がいいだろう。

「門の向こうにおられます。開門いたしますのでお待ちください」

「はい」

門番が門の開閉のために、そばを離れる。

遠山は門の前に立ち、ふと思う。

考えればここまで長かった。奴隷からスタートして、竜を殺して、他の邪魔者全て始末して、ここまでやってきた。

「異世界転移して、奴隷になって竜を殺して、竜と友達になって、屋敷に住む、か」

考えてみれば、割と、いやかなり上手くやってきたのかもしれない。

だが、何度も死にかけた。特に前回の白蛇女はやばかった。

これからも同じことがあるかもしれない、だから今よりもっと、もっと必要だ。

「金、力、たどり着くためにもっと、もっと」



そのために教会と手を組んで、そのために夢の中の奇妙な存在を受け入れた。

だがそれでも不安は残る。今まで生き残れた理由、それが

「ただ、俺は確実に運が良かった。でもそれじゃ限界が来るよな。もっと、もっと、確実に、この世界で生き残ってたどり着くためには」

力が欲しい。失わないために、進むために、奪われない為に。

遠山の欲望は、次の段階に進もうとして――

「開門、かいもーん！ お客様は門に触れないようにお気をつけください！」

門番の音が響く。

ふと、独り言と考えをやめて気を取り直す。まあ、今はいいか。

竜の友達が自分の屋敷に遊びにくる。冷静に考えたらファンタジーオタクとしてはめっちゃうくちゃアガるイベントだ。

俺は、一つ一つたどり着いた。また、一つ一つ積み重ねていこう。遠山は深い場所に潜るような思考を切り替える。

ドラ子の奴、ホットドッグ食べたらどんな反応するかな？

竜の食レポを少し思い浮かべて、遠山が笑う。

――門が、開いた。

「よう、ドラ子、よくきた

……あ？」

遠山の声がしりすぼみ。柔らかく砕けた笑顔が、真顔に変わる。

「あらあら、家主様直々にお出迎えなんて恐縮してしまいます！  
ふふ、初めまして、”竜殺し”さん」

「……………あ？ 誰、だ？」

門の前にいたのはドラ子ではなかった。

笑顔を、浮かべた、緑髪の女。見覚えがないのに、どこかで似た顔を見たことがある、そんな感覚。

「まあ、これは、失礼致しました。名乗りもせずに、ご自宅に訪れるなんて非常識ですよ、ふふ。あなたに一度お会いしたくて、この街を歩いていたら、偶然、ここを見つけましたの、ええ」

女は笑う、何がそんなに楽しいのか、何がそんな愉快なのか。固まる遠山と対象的に、コロコロと、何が起きてても楽しい年頃の少女のように、女が笑う。

「偶々目についたお屋敷に”竜殺し”様がいらっしやるなんて、驚きました。ふふ、本当にー」

ニコニコと浮かぶ笑顔。

それが一瞬、動きを澱ませた。春の麗らかな日差しの下に一瞬だけ、雪が降ったような感覚。

「”幸運”にも、ね」

どこまでも、どこまでも。その女は話を聞かずに、ただ笑っただけだった。

76話 サイドクエスト【石窯に火を灯せ】（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さいー！

来週はエルデの王となる旅に出ている可能性が非常に高いため更新  
なかったらすみません、狭間の地でお会いしましょう。

## 77話 ガバガバの分岐点

く少し前、竜大使館の一室にてく

ふふふか、ふかか、ふふか。

きづけば、鏡の向こうのオレが偉く上機嫌で鼻唄を歌っている。

ふむ、幼児だった頃はたしかお母様によく機嫌がいい時に歌う鼻唄が可愛いと言われていたな。我ながらたしかに可愛い、さすがオシだ。

「お嬢様、本日は特にご機嫌うるわしいようで何よりですな」

「む、わかるか？ ふかか、ナルヒトめ、ようやくだ。ようやくなのだ、見よ。じいや」



オレは、爺やに鏡台の上に置いていた便箋を見せつける。なかなか上質な紙に、生意気にも天使教会の蠟印で貼り付けられたものだ。

宛名はもちろんオレ宛。差出人はもちろんオレの竜殺し、ふかか、友達からの手紙というのは初めてだが、気分がいいものだ。

「ほう、これは…… 竜殺し殿からの手紙、ですか。この文字…… 古代語で書かれていますね」

「む、あやつめ、味な真似をするではないか。奴は常識がない割に妙なことを知っていることが多いからな、古代語で手紙を書いてくるとは、ふふん」

「しかし、古代語で手紙を書くとなると、帝都の大学を出て古代語の専攻でもない限りはなかなか」

爺やが髭を撫でつつ、目を細める。感心したのか何度もふむふむと唸っている。

「ふぶん、ナルヒトだぞ？ もう今更あやつが何をやらかそうとちよつとやそつとでは驚かぬわ」

なぜだろう、爺やがナルヒトを褒めると、オレも嬉しい。奴のことを自慢したくなってしまふ。胸がぼかぼかして悪くない気分だ。

「ふむ、かの全知、いえ、人知竜が買っているお方です。そんなこともありえましような」

「むぐ、あの老竜のことをオレの前で話すなよ。あやつ、この前、オレの寝室にナルヒトを連れてきて、好き勝手なこと言ったりしてきたりしたのだぞ。なんなのだ、アレは」

「アレはもう、アレでございます。お祖父様、炎竜と人界で争っていた頃から本質は何も変わっておりませぬ。ただ、己の面白そうな

ことの中に注力するそのありさま。竜の一つの形ともいえまじょうか

くくく、と笑う爺や。ふふん、オレは知っているぞ、爺や。貴様があの老竜の話をするとき、少し嬉しそうにしているのをな。

「…………だから昔、爺やも、あの老竜に惚れていたのか？」

オレのこれはほんの少しの意地悪だ。許せよ、爺や。竜は面白いことが好きなのだ。

「ブフオウ!!」

「ふふ、風邪か？」

爺やが急に大きく吹き出した。肩を震わせながら目を見開くその様子は長い付き合いの中でもそうそう見れたものではない。

「……………お嬢様、そのお話は、誰から」

「あの老竜から聞いたぞ。若い頃のイケイケの爺やから、何人もの竜の狩人の首と一緒に恋文が贈られてきた話とか、魔術学院の鐘楼の上で、世界がもし壊れても守るとかなんとか口説かれたとか」

「……………若気の至りにございます、お嬢様。どうかご容赦を」

ものすごく苦々しげに爺やが呟く。ふふ、爺や、貴様はたしかにヒトのままいることが出来ない踏み越えた者だが、きちんとまだヒトの頃の思い出が残っているじゃあないか。

「ふむ、あの老竜、中身は泥と企みと厭らしさを煮詰めたような存在ではあるが、見目だけは評価してやってもいい程度だからな。爺やが絆されるのも無理はないさ」

「寛容なお言葉…… 誠にありがたく、お嬢様」

「それにしてもあやつ、いきなり大使館に押しかけたと思えば、急に出て行くなど…… 竜とはわがままな奴が多くて困るものだ、なあ、爺や」

「……………その通りですね、お嬢様」

まったく。個としての存在が強いとはいえ自分勝手なやつもいたものだ。

まあ、思ったよりも、あの古い竜とのひとときは、言うほど悪いものではなかったかも知れない。オレの知らないことを知っている奴の話はほんの少し、面白かった。

だが、あの老竜め。

普段は、樹木が何かかかと言わんばかりに感情がないくせに、ナルヒトと一緒にいるときだけメス臭い発情の香りをこれでもかと思き散らすのは気に食わない。

いつか、焼き尽くしてくれろ。

「ふん、まあ良い。今日は待ちに待ったナルヒトとの約束の日だ。ふん、老竜め。あやつに自慢してやるのだ、ナルヒトのお家に呼ばれたのは貴様ではない、このオレだ、とな」

ふり、ふり。

おっと、いかん、思わず尻尾を出してしまった。ふむ、中々にまだ制御がうまくいかないものだな。

「……今更ですがお嬢様、竜殺しを本当に気に入っておいですな」

爺やが、オレの尻尾を眺めてつぶやいた。

「ふかか、あやつはオレの友人であるからな、それに、貴様や、フアランと違って、奴の心は読めるのだ、だから面白い。奴は決して嘘をつくことがないからな。まあ、だからこそ一度嫌いと言われた時は効いたものだが」

――嫌いだ

あの時のこと、あやつを初めて竜大使館に連れてきた時のことを思い出しただけでも、鱗がささくれそうな気分になるのだ。

あやつという言葉とあやつのは常と同じ。他のヒトとは違い、あやつは自分の言葉に決して嘘をつかない。

それが面白く、それが、少し怖い。だが、友人だから大丈夫なのだ。

「……お嬢様に心が伝わるといふことは、未だかの者が定命の域にあるということ、何よりではありませぬか、ヒトがヒトのままいるのはとてもよいことです」

「貴様が言つと重みが違うな、爺や。さて、ではそろそろ、俺は湯浴みに行く。モベーレムベンベの香油と出かけの装衣を用意しておいてくれ」

変化の申し子、決められた生命、定められた命しか持たぬ弱き定命の者。

ナルヒトは、オレとは違う。

ヒトと竜は決して同じ存在ではない。

本来であれば、並び立つ存在になるはずもなく、その関係は支配と従属、そうなるはずだ。



それがルール、絶対の律。

そのはずだった。

――殺せ、キリヤイバ。

だが、ナルヒトがそのルールを壊した。あの日たしかにこの世界のルールはトオヤマナルヒトによって塗り潰された。

変化の申し子。世界において弱く脆く儂く、だからこそ変わり続けるもの。

ヒューム。

オレはもっと彼奴のことを知りたいのだ。何を考えて、何が欲しくて、どうやって笑うのかとか、もっともっと色々なことを知りたくなる。

「はて、お出かけですか？」

「むふふ、ああ、友達の家遊びに行く。お呼ばれ、という奴だな」

「作用でございましたか。ふふ、それはよきことすな。ファランめに本日の衣装付けは普段より力を入れて行うように伝えておきま  
する」

「……む。そう言われると、まるでこのおれが少しはしゃいでるよ  
うではないか。子供扱いするでない」

「ほほ、これは失礼をば。ではお嬢様、ごゆっくり」

爺やが部屋から出て行く。相変わらずなんの物音も気配も出さず

に動くものだ。

オレはふと、窓の外を眺める。

雲ひとつなく揺蕩う青が、広がっている。

オレの知る空のてっぺんの深い蒼よりも薄い色、

最近、気づいた。己の翼で泳ぐ空もいいが、こうして、見上げて眺める空も悪くない。ナルヒトが見上げる空もきつとこんな風に映るのだらう。

「良い天気ではないか、ふふ」

こんなぼかぼかした天気の下、友達に、ナルヒトに会いに行けるのだ。

オレは湧き上がる喜びが胸の真ん中を揺らす感覚をただ、楽しんでいた。

……  
……

ああ、いい天気だ。

遠山鳴人は一度空を見上げて小さく息を吐く。視界一杯に広がる青を目に馴染ませ、少し現実逃避。

なんか変な人きちゃったなー、めんどくさー。

既にもう色々面倒くさくなり始めた遠山はしかし、ゆっくり視線を前に戻して現実と向き直る。

「……いや、マジで、なに？」

ゆっくり、言葉を選んで問いかける。突然の来訪者へ向けて。

「あらあら、ごめんなさい、わたくしったら、つい。名乗りもせず  
に大変御無礼をいたしました。どうも、はじめまして、かの偉大な  
者を殺したお方。数百年ぶりに現れた世界の段階を進めた者、  
竜殺し”さま」

美しい緑の髪。翡翠という宝石に、誰の手も入っていない美しい  
森の緑を混ぜ込んだような髪の色。

ニコニコと形を変える表情、小さな顔にくりくり舌腫。どことな  
くあどけない印象は少し垂れ目がちまぶたのせいだろうか。

「……………」

遠山はその突然の来訪者を観察する。

もつこの時点でコイツがあまりはとの話を聞くタイプではないことだけは理解出来ていた。

「わたくしはフォルトナ、と申します。冒険都市に来るのは初めてで、色々珍しいものが多く散策していたところ、たまたまこのお屋敷が目にとまって、ついお邪魔してしまいました」

「……あ、そうですか。すみません、えっと、知り合い、とかじゃないですよね」

「はい、今貴方とは初めてお会いしました。ふふ、お話を聞いていたよりも、普通のお方なんですネ」

やべえ、話が微妙に通じてない。

遠山は昔、道端で知らないおばさんに1000円貸してくれと声をかけられた時のことを思い出す。

やべえ人間に話しかけられた時のうんざり感、遠山はすぐに対応の方針を決める。

「すみません、今少し来客がありました。申し訳ないんですが、お引き取り頂いてもいいですか？」

「まあ、それはご迷惑を！ ごめんなさい、わたくしっしたら……すんすん、わあ、とても良い匂いがいたしますのね。何か、お庭でお食事、パンでも焼いていらっしやるの？」

「ええ、まあ、そんなところです。お引き取り頂けますか？」

目を輝かせる緑髪の女に塩対応を続ける。このタイプの人間には少しでも歩み寄りを見せてはいけないことを遠山は知っていた。

「審問官殿、お知り合いではなかったのです？」

案内してくれた門番問いかけてきた。雰囲気察してか、僅かに

その声は重たく。

「ええ。知り合いじゃないですね。フォルトナさん。邪険にするわけじゃないが、その、特に用事がなければ……」

あまりこの女を刺激したくない。初めて会ったはずなのに、既に嫌悪と言ってもいい違和感が、身体の奥から湧き上がる。

「ふふ、影の牙もここにいるんでしょうか。悪事に愛された彼がまた、逃げ出した先でうまくやっているようで何よりですね」

「――あ？」

その言葉だけは聞き逃すことは出来なかった。その言葉に反応しないわけにはいかなかった。



影の牙、それはラザールの過去に深く関わる名前で。

「あら、怖い顔……」

頬に手を当て、緑髪の女が首を傾げて笑う。愉快そうに薄く開いた目は笑っていなかった。

「誰だ、あんた」

改めて、遠山は女に問う。

単なる迷惑な変人と放っておくわけにはいかなかった。

「フォルトナ、フォルトナ・ロイド・アームストロング。以降お見知りおきを。竜殺し様」

長いロングスカートの両端を軽く持ち上げ、ウインクしながら女が頭をちょこんと下げる。

サイドテールにまとめられた緑髪が昼の陽を受けて複雑に輝いた。

美しい所作、嫌悪感あふれる遠山でさえその動きと見た目に一瞬目を奪われるほどの。

名前を聞いたことはないが過去のラザールの関係者であるならば、厄ネタだ。慎重に扱う必要があるだろう。

「……影の牙とやらは知らん。あんたが探してる奴はここにはいないよ」

「うふ、とても恐ろしい目です。わたくし、もしかしてもう既にあなたに嫌われてしまいましたか？」

「悪いな、人見知りなんだ。知らない人間がいきなり家に訪ねてこられたら怖くてな」

「まあ、ふふ、面白い人。初対面で嫌われたのは久しぶりです。基本的にはみんな最初はわたくしを好いてくださるのですが……さすがは竜殺し様、あなたはもうすでに目も眩まんとする何かをお持ちなのですね」

「フォルトナさん、悪いけど出直してくれ。ここにはアンタが探してる奴もいないし、正直知らない奴に家に来られるのは気味が悪いし迷惑だ」

この場を穏便に収めた上で、ラザールと相談。

なるべく不干涉、必要なら、再び探し出して始末しよう。遠山のプランはそんなところだ。

「くす、ほんとに良い目ですね。竜殺し様。ヒトをヒトとも思っていない。貴方にとって、自分の脅威や障害になる存在は、ヒトではなくなるんですね。ふふ。シンパシーを感じます。ええ、少しでも運が悪ければ、殺されてしまいそうな気さえしてしまいますわ、ふふ、ふふふふふ」

うつとり。

遠山の目を見つめて、僅かに頬を染めて笑い出す女。

なんだこいつ無敵か？ 遠山は想像していない反応に少し引いた。

「審問官殿、ここはもう我々が。申し訳ございません、不用意にお呼び立てするのではなかった」

様子がおかしいことを察した門番が遠山に頭を下げる。

「お嬢さん、申し訳ございませんがここは私有地です。家主のお知り合いでないのならどうか、お引き取りを」

もう片方の門番が、遠山と女の間を割って入る。威圧感を隠そうともせず、フォルトナへ退出を促した。

「あら、追い出されてしまいそうですね。ふふ、それは困ります。わたくし、竜殺し様とお話したいのですから」

「……警告です、これ以上ここに居座るおつもりなら我々も実力を持って貴女にお引き取り頂くほかありません。どうか、穏便に」

「職務に忠実ですね。うーん、でも嫌です。わたくしが今やりた  
いことは、竜殺し様のおうちにお邪魔して色々お話したり、ええ、  
遊んだりすることですもの。……あなた達は、それを邪魔するの  
ですね？」

「……あまり暴れないように。怪我までさせるつもりはありません」

門番が一步前に。フォルトナに向けて手を伸ばして――

「  
あらあら」

深く女が笑った。

――。

ぞく。

背筋に氷柱を差し込まれたような寒気。同時にビリビリと痺れる  
感覚が遠山を襲う。

無意識に、門番の肩を掴んで動きを止める。

「ーいや、門番さん、待て、コイツに触るな」

「……しかし」

「いい、だめだ、コイツは刺激したらダメだ」

理由は定かではない。あのメッセージも警告していない。

だが、遠山鳴人の体を構成する何かが、フォルトナに触れようと  
する門番を止めた。

ー脳裏を一瞬よぎるあの白蛇女。理由は分からなくて。

「……………」

微笑みを固めたまま、フォルトナは動かない。

だが薄く開いた目からは怯えも動揺もない。

その目は、猫だ。ネズミをいたぶるのを楽しむ猫のように楽しげにくりくりと輝いていた。

「あんた、いや、お前。嫌な目してるな。それ、ムカつく目だ」

「……あら？」

「さつきから、俺や門番さんを見るお前の目、笑顔だけど、違うな。俺はそういうのは敏感だよ。その目は人を見下してる目だ。何が起きようと、全てうまくいく、そんな目だぜ」

「ふふ、竜殺し様、あなた、やっぱり面白いですね」

「警告だ、出て行け。俺たちに関わるな」



「えー、わたくしはあなたに関わりたくなってきましたのよ、どうしましうか」

その目が愉快げに、動く。

強者の目。何にも怯えず、自分を脅かすものなど存在しない。

それは、あの竜の初めて出会った頃の目にも、どことなく似ていた。

「ほんと、ムカつく目だな」

「ふふ」

フォルトナは、遠山の言葉を受けてただ、笑うだけ。

どうしたものか、苛立ちつつも遠山がやり方を考えてー

「アアアア！！ てめえ、このアホバカノーテンキ女ア！ よーやくみつけたぜええ！」

大きな男の声が響いた、フォルトナの背後から。

かと思えば、ものすごい速さでこちらへ向かって爆走してくる男の姿。それは目視した瞬間にはもう、目の前まで迫っていて。

「あら、見つかってしまいましたか、思ったよりも早かったですね、ウイス」

「ふざけんな、ボケ女！ あのクソ女と一緒に俺様だけ置いていきやがって！ どんだけ長い船旅だったと思っただやがんだよ！」

燃えるような、赤い髪。対照的にその瞳は黒。綺麗に炭化した木のような濃い黒。左目に縦に入った傷が印象を強くする。

マントを羽織る旅装束の上からもわかるのは、その男の肉体の完成度。上背も高く、絞られてなお隆々の肉体は、見ただけでその男の生物としての強さを表す。

そして一つ、奇妙な装飾品が腰に。

兜。バケツみたいなヘルムをぶら下げて。

猛々しい獅子が人の姿に身をやつした、そんな男だった。

「まあまあ、そんなに怒らないでくださいな。だって貴方がいきなり彼女と喧嘩を始めるんですもの。きっと、嫌われてしまったんですよ、ウィス」

遠山をほっぴり出して目の前で言い合いを始める連中。

ただただ、そのやりとりは不快だった。

「なんなんだよ、お前ら…… 痴話喧嘩なら他所でやってくれないか？」

うんざりした声色で遠山がつぶやく。

「おっと、悪いな、兄ちゃん。ここアンタの家……」

割と素直に遠山へ向けて頭を下げた赤髪の男、しかし、遠山の顔を見た瞬間、口を半開きにして眉を顰めた。

「うわ、なんだ、お前…… それ、混ぜてんのか？ 気持ちわりい」

その表情は、虫嫌いの人間が家の中でムカデと出会ってしまったような嫌悪感剥き出しのもので。

「あ？」

なんだこいつ、遠山がその言葉の意味を問いただそうとして。

「トオヤママー!!」

聞き慣れた少女の声。

ストルの大きな声が響いた。

「ストルか。悪い、ちよつと今変わった人に絡まれてて」

「えー、悲しいですー。変わったヒトなんて言われてしまいました、

「三三三」

「いや、この兄ちゃんの言う通りだと思っけどよー。ん？ ガキ、お前もまたなんか変な奴だな。おい、バカ女、てめえいつたいたいどのどなたサマに絡んでんだよ」

「ああ、ウイス、こちらかの”蒐集竜”を落命させた方、竜殺し様ですよ」

「……………は？竜殺し？」

「はい」

赤髪の男が、目を点にして固まる。わなわなと両手のひらを震わせて緑髪の女に詰め寄る赤髪。

「ーお前バカじゃねえの?!? あー、バカだった、バカでしたよ、お前は。……なるほどなあ、まあ確かにこの兄ちゃんならー」

大声を出したすぐ後に、赤髪の男が遠山を見つめる。湿った空気に頬を撫でられるそんな不快感が募って。

「貴方！ 動くな、それ以上その人に近づくなディスプレイ！」

「……へえ」

ストルの声が響いた瞬間、嫌な感覚がすつと消えた。

「ストル、どうした」

「トオヤマ、ゆっくり、ゆっくりこちらへ。その男から、離れてく

「ださい、デイス」

様子を見に来てくれたらしいストルの声が背後から。いつもと変わらない声に聞こえるが、遠山は気づいた。

ストルの声が震えていることに。

「……了解」

素直に遠山がストルの言葉に従う。ゆっくり、あどずさなる。

「ははは、なんだ、がきんちよ、お前わかるのかよ」

そして、そのストルの怯えは赤髪の男にも伝わっていたらしい。感心したように、眉を上げて少し笑う。



「……化け物、警告はしました。その人から離れてくださいディスプレイ」

既にストルは剣を抜いている。

「嫌だと言ったら、どうすんよ？」

赤髪の男が、にいつと凶暴な笑みを浮かべる。獅子の笑み、緑髪の女とよく似た強者の笑みだ。

「ッー」

ストルが反射的に地面を蹴ろうと

「待て、ストル」

「ー」

遠山の声、それが届くと同時にストルが動きを止めた。

「ヒュー、へえ、驚いたぜ。兄ちゃん、アンタこのガキにきちんと手綱をつけれてるのか？俺サマにや及ばねえが、このガキも一線を超えてる奴だ。よくもまあ、手懐けたじゃねえか」

口笛を吹いて愉快そうにする男。

品性が低い、コイツとは仲良く出来ない、遠山は生理的に赤髪の男が無理だった。

「……俺たちは出会わなかった、もう2度と関わることもない、だからそのツレを連れて帰ってくれよ」

静かに赤髪の男に遠山が告げる。

「んー、そうだ、なあ。いや、悪くねえ、悪くねえぜ、兄ちゃん。アンタは、こっち側の人間じゃあねえ。だが、そこのガキの反応か

ら一気に俺への警戒を強めてる。悪くねえよ、凡愚の中ではその切り替えの速さは優れてる方だ」

うんうんと満足げに頷きながら、赤髪の男が遠山に歩み寄ってくる。

なんの気配も感じない、未だに遠山はなぜストルがこんなにもこの男に怯えている理由がわからない。

「聞こえなかったのデイスか！？ 動くな、デイス！！」

だが、ストルは違う。今までにないほど怯えている。その男の拳動に過剰なほどに反応して。

「黙っとけ、ひよっ」

赤髪の男の声。ストルに向けられて。

「ア……」

「ガキンチョ、てめえと俺サマア、同類だ。だが完成度が違う。赤ん坊と大人くらいにあ。自分じゃあ、どう逆立ちしても俺様に勝てるとは思えねえだろ？ だから、黙ってるや」

「わ、私は……」

赤髪の男が一言喋るたび、ストールが憔悴していく。カタカタと震える手、荒く上下する息、瞼も痙攣し、目を潤ませている。

だが、それでも決してその剣を握る手だけは離さない。

「おい」

遠山が声を静かに。

赤髪の男へ、一歩歩む。

「ああ、悪かったなあ、にいちゃん。話の続きだけどー」

赤髪の男が、ストルから遠山に視線を戻して。

カタ、カタタ。

何か揺れる音、それは赤髪の男の腰元、それに吊るされていたバケツヘルムがひとりだけで揺れる音。

「ーまじか」

赤髪の男が、腰元のバケツヘルムを見下ろす。信じられないものをみたばかりに目を丸くし、額に汗を浮かべて、遠山とバケツヘルムを交互に見比べて。

「お前も、ムカつくな」

遠山がぼそり。

ぞ、わ、り。

通り雨が降る瞬間。

黒い雲の中から雷が閃く瞬間。

どうしても起きたくない朝の目覚ましアラームが鳴る瞬間。

そんな何かが、切り替わる瞬間がそこにあった。

赤髪の男が瞳孔を開いて瞬時に、その場から一步離れる。当たり前  
前に緑髪の女をひょいっと、抱えて。

それはまるで被食者が、捕食者から逃れるような動きだ。

「ほへ？」

突然抱えられて何がなんだかわかっていない緑髪の女が目をぱち  
くりと。

「ギャ、ハハ。おい、おいおい、まじかよ竜殺し。お前、想像の何  
倍も気持ち悪い奴じゃねえか。どこから来たんだよ。俺の家系の奴

以外でこの呪いのクソバケツが反応するなんざ初めてだ」

「訳わかんねえことほざいてんじゃねえぞ、不法侵入者ども。その緑髪も、お前も常識知らずの迷惑者だ。頼むから、目の前から消えてくれ」

「あらあらー、ウイス、嫌われてしまったようですよ。ふふ、どうしましうか」

「いや、半分以上はお前のせいだろ、バカ姫サマよ。あーもうさー、ぐっちゃぐちゃだろ、マジで。色々考えてたのによー、なんで初手でオリチャー踏みはじめるかね、ガバガバじゃん」

「まあまあ、大丈夫ですよ、ウイス。諦めずに頑張りましょうよ」

「はー、どーしたもんかなー」



呑気な緑髪と赤髪。

遠山は目を逸らさない。

「話は終わりだよな。もう決めようぜ、穩便に全部終わらせるか、手荒な真似になるか」

肩をぐるぐると遠山が回し始める。穩便に済ませるもか、ラザールのことか。色々なものが薄れていく。

今、遠山にとって大事なものは、自分の身内であるストルへの赤髪  
の態度が気に食わない。それだけだ。

「ーギャハ」

好戦的。獣がもし、鬭争を好むのなら今の赤髪の男と同じ顔をす

るのではないか。

あまりにも力強く、眩しいと言えるほどに興奮に満ちた顔を赤髪が浮かべる。

潮時だ。

遠山が、呼吸を浅くする。男から発する威圧感がどんどん重たく、緑髪の女の口元が吊り上がって。

ガバガバの分岐点。

全てがめっちゃくちゃになり始め――

「――悪かった、悪かったよ、竜殺し」

「え？」

「あ？」

ぼんつと、炭酸の気がぬけるように男が発していた息苦しさが消える。

「いやなに、俺サマ達よお、観光でこの都市に来ててたなあ。王国の出なんだア、帝国に来るのは初めてだよ、少しはしゃぎすぎちまった、ほんとに悪かった」

赤髪の男が、くしゃくしゃに、言っ飛ばせば無邪気な顔を浮かべた。

「……………」

「ウイスー？」

「ウイス、じゃねえよ、バカ姫がよお、いやほんとに悪かった、この姫サマも世間知らずのバカだな。竜殺しのファンで、先走りまくっちゃまったようだよ、すぐに消えるからよ、穩便に済ましちゃあくんねえかなあ？」

ヘラヘラと笑う赤髪という言葉。遠山にしてみればこの上なくありがたい言葉だ。

「このまま帰って貰えばいい、穩便に済ませて、それで。」

「まず謝れ」

「あ？」

ダメだった。

無意識に口を割って出て来たのはそんな言葉。

「うちのストルにアンタが謝れ。ガキ脅してそのままにする気かよ」

やっちゃった。そのまますぐに終わらせれば良かったものを。

「謝れよ、今すぐ」

「……へえ。ぎゃはは、いい目え、してんなあ、竜殺し。ーああ、そうだなア。がきんちよ、いや、ストルっつーのか、悪かったな、少し熱くなっちまってよー。もうしねえから、許してくれ」

拍子抜けするほど簡単に、赤髪が頭を下げた。

「トオヤマ……」

困惑し、目をパチクリさせるストルが遠山へ力なく声を向けて。

「お前が納得したんならそれでいい」

静かに答える遠山、ぐつぐつと煮えたぎるものはある。だがそれは今解決するものではない。

コイツを心の底から謝らせるには別の方法を取る必要がある、それだけは遠山にもわかった。

「じゃあ、俺様達は、これで失礼するわ、いやほんとに悪かったなあ」

「むー、わたくし、まだ竜殺し様とおはなししたいんですがー」

赤髪の男が緑髪の女を抱えてその場から去ろうとくると、振り向いて。

「バカが、もう話しななんざまともに出来るわ、け……………おい、マジか」

「えー？」

立ち止まった。

「ほう、竜殺しと、話しか？ ふむ、ふむ、だが、奴はこのオレと先約があるのだが……なあ、ナルヒト」

金色が、来た。

魔術の式により、市井に紛れるための仮初の姿。

10代中盤くらいの容姿、普段はストレートに流している長髪は今やストルのように後ろで束ねられた金髪の少女。

少し短めの動きやすそうなパンツスタイル。軽そうなパーカーを羽織った姿、冒険都市では珍しい、むしろ現代の服装に似ている。

「あら……驚きました」

「バカ姫がよ……ガバガバチャート走りやがって」



その少女の目、それだけは、あの大きいなる者、竜の目のまま。

「ふかか、ナルヒト。困りごとか？」

少女の姿に身をやつし、誰よりも今日をたのしみに使っていたドラゴンがそこにいた。

「良い、言ってみよ、貴様の願いなら、叶えてやる、ぞ？」

ドラゴンが遠山に向け、にひひとイジワルげに笑いかけていた。

77話 ガバガバの分岐点（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さいー！

励みになるので下の星を押して評価お願いします！

78話 竜の眼、ヒトを見つめて

「気持ちだけでもらうとくよ、ドラ子。もう終わるところだ」

「む、そうか？」

キョトンと首を傾げるドラ子。遠山の言葉と同時に僅かに竜の威圧が柔らかく。

「……………ウイス、ウイス、ほんもの、ほんもの、竜様ですよ」

「ああ、だなア……………」

緑髪、フォルトナと赤髪の男、ウイス。

どこか超然とした態度の2人だったがドラ子の存在を認めた途端大人しくなる。

「ナルヒト、此奴ら誰ぞ？ 友人ではなさそうだな」

「俺のファンらしい。家に押しかけてきて困ってるどころだ」

「ほう！ ナルヒト、貴様、やるではないか。うむうむ。好きなようにやっているようで何よりだぞ」

ムフフとドラ子が笑う。遠山に向ける顔は本当に市井にいる町娘のそれと大差なく。

「ひひ、誰目線だよ、ドラ子。あー、おたくら、悪い、これから友人と約束がある。帰ってくれ」

「ふかか、友人。そう、友人なのだ、お呼ばれなのだ。ナルヒト、この装衣、変ではないか？ ファランめが、この姿の年頃の娘だとい

んなのをよく着るらしいが……」

ほんの少し、口をモゴモゴしつつドラ子が自分の服の端を摘んだ。

ひらひらしたフード付きの白いワンピースに、短めのホットパンツ。この世界の装衣と現代のカジュアルファッションが合わさったような格好。

ドラ子の素材が良すぎる為、ふつうにサマになっている。

「ああ、いんじゃないの。お前ツラがいいから何着ても似合ってるよ」

「ーふか。悪い気はしないな」

ニコニコ、満足そうにドラ子が薄くなっている胸を張って笑う。魔術式で変えているらしい見た目はいつもより更にドラ子を幼く見せている。

「む？ 貴様ら、何を見ておる？ ナルヒトの言葉が聞こえなかったのか？ オレの耳には、帰れ、そう言っていたように聞こえたのだが」

ふと竜が、目を細める。

遠山に向けていたコロコロと笑う春の幼子のような顔ではない。

己の快と不快で他者の運命を決める上位者の顔だ。

「……これは大変失礼を。冒険都市に向向いて早々に、御身に拝謁出来ること光栄の至り。蒐集の竜様」

「卑賤な身で、はなはだ恐縮でございます。帝国の護り竜。御身の輝きは、我が王国にも届いておりますねば」

竜に対し、突然の訪問者は意外にも素直に頭を垂れた。人の話は聞かないらしいが竜の話聞く程度にはまともらしい。

遠山は舌打ちをギリギリのところまで我慢した。

「む。姿を変えていたつもりだが……わかるものか」

「竜の輝きはその見目だけで判断するものではないので」

フォルトナが朗らかに微笑む。竜の圧の中にながらも比較的平然とした態度。

彼女もまた選りすぐられたヒト、特別な存在。

「ふかか、そうか。……だがオレがいつ、貴様らに発言を許したのだ？」

しかし、竜にはそんなこと関係ない。

賢しらにフォルトナが口にした返事は、竜をいらつかせたらしい。決して遠山には向けないだろう冷たい目でドラ子がフォルトナを見下ろす。

「っ」

ぞ、ぞぞぞぞ。

姿を幼くしていても、上位生物、竜。

視線を傾げるだけで、空気は怖気で、その苛立ちを向けられた生命は死を錯覚する。

脂汗を一気に噴き出すフォルトナ。笑顔の形をとっていた口角がびくく、痙攣していた。



「ーぎゃは、こりやすげえ」

ウイス、赤髪の男が目を見開く。冷や汗を流しつつもしかし、その表情は輝く。

その目を見開き、興奮して口を半開きに歪めた顔は、幼子が憧れのヒーローを目の前にしたような表情にも見えた。

「不愉快だ」

だが、その全て、竜はお気に召さなかったらしい。

パチ、空気が縮む。少女の姿にみつやつした竜の足元に金色の焰が待って。

「ドラ子」

その焔が、止まった。

遠山鳴人が竜につけたあだ名、彼だけに許されたその名前を呟くだけで。

「……………だめなのか？ ナルヒト」

首を傾げるドラ子。心底不思議そうな顔。

「それも気持ちだけ貰っとく。悪かったな、変なことに巻き込んで」

遠山はドラ子に軽く頭を下げる。それから息を吐いて、膝をついて呆然としたままの訪問者を見下ろした。

「そのこの2人。帰れよ、今から友達と約束があるんだ。邪魔だ」

その言葉にドラ子がニンマリと笑う。彼女の周りにゆらめいていた金色の陽炎が全て消えていく。

「……これは、大変失礼を。竜殺し様。ご迷惑をおかけして申し訳ございません、またいずれ、今度はきちんと形式を踏んでまたお会い致しますね」

「竜様、我が主人の無礼、そして竜殺し殿への無礼をお許しを。今日は尊き貴女の姿が見れて、身に余る光栄でした」

フォルトナとウイス。歓迎されぬ訪問者は己が命拾いしたことに気付いていた。

深々と頭を地面に擦り付け、言葉を紡ぐ。

「ふん、貴様らのことなど知らぬー」

ドラ子は彼女たちに興味を無くしたらしい。すぴーとため息をつき、しっしっしと手を振る。

「竜殺し様、いずれ、また」

緑髪の女は愛想笑いを口に浮かべたまま。

しかしその目は笑っていない。星型の虹彩に背を向ける竜の姿を映して。

「いや、もういい」

遠山はフォルトナの言葉に首を振る。

「アンタらへの印象は最悪だ。もう二度と会わないで済むことを祈るよ」

「あら、ふふ。では、失礼致します……」

呆気なく、緑髪と赤髪は一礼し、そのまま去っていく。

見送るのもバカらしいので遠山はすぐに彼らから視線を切った。気を遣ってくれた門番たちがすぐに正門を閉じ始める。

「ふう……悪かった、ドラ子。変なことに巻き込んだな……ドラ子？」

「……おっと、すまぬ。ナルヒト、貴様は目を離すとすぐに厄介な者目をつけられるものだ。そういう星の下に生まれたのではないか？」

ぼんやり、何故か、遠い何かを眼を細めて確認するようにドラ子が彼女達の去った方を見て固まっていた。だがすぐに遠山の呼びかけに応える。

遠山を見つめてニヤニヤ笑うドラ子、意外にも機嫌は悪くなさそうだ。

並び立って門を背に中庭へ向けて歩く2人。自然と歩幅は同じ。

「勘弁してくれ。ここんとこ死にかけたりなんだりしてんだ。そろそろ平穏な毎日が増えてもバチは当たらねえだろ」

「ふかか、平穏。貴様にはあまり、似合わぬ気もするがな」

「うっせーよ。……あー、ドラ子」

遠山が立ち止まる。

目を明後日の方角へ向けて頬を搔く。

「むっ」

「なんだ、その、……友達、家に招くのかあんな慣れてねえんだ。粗相があつたら悪い」

実は、遠山もすこしテンションが上がっていた。貨家とはいえよ  
うやく手に入れた自分の本拠地。

この世界になにも足掛かりのなかった遠山。

何度も死にかけ、ようやく自分の目指す場所への一歩目にたどり  
着いた。

「……ほほう。なんだなんだ、いつになくいじらしい態度ではな  
いか。……真面目に悪くないな、そういうのも」

そんな遠山に向けて、にやーっと目を半月のように歪める竜が1  
人。

しみじみと竜は友の珍しい一面を眺めて呟く。

大胆不敵、傲岸不遜をそのままにした男のちっぽけな一面。竜がニマニマと口元を緩める。

そつと、竜が遠山へと手を差し出す。本人も何故手を差し出したのかわかっていない。

ただ、蒐集の竜にとって遠山の言葉と姿はとても得難いものだった。

思わず、意味もなく、遠山鳴人に触れてみたくなるほどに――

「蒐集の竜様、おひさしゅうごぞいます。お手を煩わせ申し訳ありませんでした」



びくり。

竜の手が遠山に触れる寸前に止まった。

少女の声がぴしゃり、竜の手は行き場を失い、引っ込められて。

「……ふむ、確か、ナルヒトの…… 以前色街で見かけた顔よな」

ゆっくり、竜が、アリスがストールを見つめる。遠山に向けていたカラカラとした爽やかなものとはすこし、種類の違う声色。

「自己紹介が遅れて申し訳ございません、発言の許可を賜れば光栄です、我らが蒐集の竜様」

少女、ストールは普段の脳みその表面しか使っていない態度から程遠く。

水色の瞳をシント、竜には向かって完璧な所作で礼を向けた。

縦に裂けた竜眼が、じつと目の前の少女を見つめる。

「……ふかか、よいよい、ナルヒトの子飼いであるのならオレに遠慮する必要などない。名乗ってみよ、騎士」

騎士、竜は目の前の少女をそれと認めた。

「ありがたき。ストール・プーラと申します。天使教会異端審問会、審問官側仕えのストールにてございます」

第一の騎士としてではなく、審問官の剣としてストールが名乗る、静謐な湖の水面を思わせるそんな雰囲気。

「ほう……読めぬ、か。ということは貴様も奴らの同種。ふかか、ナルヒト、貴様面白い者を飼い慣らしておるものよな。……今代の

”正義”の幼体か。昔、お爺さまに聞いたことがある。ヒトの中の安全弁、だったかな」

新しき竜が、ヒトの特異点を眺めて評する。

その特異点の心は竜の眼をもつてしても読めず、即ちそれはストルがヒトの領域から既に外れていることを示す。

「……光栄です、竜様。貴女様とこうして言の葉を交わす機会に恵まれたことを、天使様と、我が剣の主に感謝を」

「剣の主人、ふかか、なるほど、なあ」

アリスが笑う、その視線は遠山へと流れる。

ストルも音もなく笑う、その眼は遠山へと向けられる。

蒐集竜と”正義”、両者の邂逅はどこかしつとりしていた。

「え、あ、おつ。……え？」

突如向けられた湿度の高い2人の視線。戸惑いながらもしかし、遠山はそれ以上に衝撃を受けて。

「いや、嘘だろ。明らかに、ストルが賢そうだ、人をデイスってるわけでもないのに……」

「……ああ、ストルとやら、貴様もなかなか苦労しそうだな」

アリスがため息をつき、ぼやく。

「……慣れてきました、デイス。私の審問官殿はいつもこうデイスから」

ストルもまた呆れた顔をしつつ、しかしすぐに表情を平坦にして

ぼそり、アリスに向けて呟いた。

「……ほう、私の、と来たか。ふ、ふふ、かかか」

「ええ、側仕え、デイスから。ふ、フフフフ」

たのしい笑い声。

陽炎のごとき輝きの美竜と、妖精の愛くるしさの少女が互いに微笑む。

上位生物と特異点。

それらは共に己の宿命を歪めた男へ流し目を向けてただ、静かに笑うだけ。

「……あれ、胃が、痛い、ぞ？　なんで？」

世界が異なろうと、特に意味もなく遠山鳴人の女運に希望が存在することはなかった。

78話 竜の眼、ヒトを見つめて（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さー！

## 79話 竜の訪問

……  
……  
……

「ほう！ なかなか悪くない家ではないか」

ドラ子、アリス・ドラル・フレアテイルが目を輝かせる。

魔術式により普段より幼い姿となった彼女は本当に街にあたりまえにいる育ちのよいお嬢様にも見える。

全体的に落ち着いた濃い茶色の木の壁や床は目に優しい。モンスターの脂を丁寧に濾して作られたワックスにより部屋の建材は全て黒く光っている。

しっかりした作りのテーブルに、椅子は帝都で人気の家具職人のオーダーメイド。



敷かれた絨毯は、西領にある帝国有数の芸術と水の都市、”ブルーリー”から取り寄せた一品物。

「なるほど、錢ゲバめ、中々に味な真似を。家の建材も、家具も悪くない。ふむふむ、この椅子は…… トラウリーの作品だな。ふむ、木目の綾を接合部分で重ねておる。奴の祖父と作品の癖が似ておるわ」

蒐集の竜。その名の通りアリスは人界にあまねく広がる価値ある物を集めるのが趣味だ。

その審美眼は一目でこの屋敷の価値を見抜く。

「わあ、アリー！ いらっしやい、久しぶり！ 元気にしてたかしら！」

一足先に屋敷内に入っていたニコが屈託のない笑顔をアリスへと

向ける。

「ふふ、久しいな、ニコ。うむ、良い良い、少女はこれくらい元気があるのが良い」

真っ直ぐな少女の笑顔は竜でさえ絆す

「まあ、少女なんて！ アリーとそんなに変わらないのに！ アリ  
ーって何歳なの？ 私は多分……12？」

「ふかか、その10倍くらいよな、ニコ。ふむ、ほかの子らも息災  
で何より。良くナルヒトの助けになっており感心、感心」

アリスがニコの頭を撫でながらムフーと満足げに鼻息を吐く。

「誰目線だよ」

遠山は短くぼやきながらも、アリスとニコが馴染んでいる姿を見

て少し安心する。

「竜にとって幼きヒトは面白うてな。みよ、こんなにも弱く儂くとも息をしてこの世界に根付いておる。よくぞ、ここまで生き抜いたものよ」「

「だから誰目線の感想だよ」「

どこか超越とした姿、ニコを見つめるドラ子の目はとても優しい、祖母が孫を見つめるそれに似ていた。

遠山の知らない目だ。

「竜目線だ。む、ほほう、面白いメンツを描えたものよな、ナルヒト」

竜眼。

深き海の底、高き空の境目の青色。

縦に裂けた竜の瞳が遠山の一味を一人一人見つめる。

上位の生き物の本質、他者を見定め、選ぶ。そんな自然な傲慢の表れ。

「ヒギッター コホン、……………トオヤマナルヒト、ちよつーと  
いいかしら」

その中で1人、とても素直な反応、正しく竜を恐れるヒトが悲鳴をあげる。

見事に逃げ時のタイミングを失い、流れのままに部屋の中にいた天使教会主教、カノサ・ティエルフィールドが遠山を呼ぶ。

「へい、主教サマ」

「へい、じゃねえのよ。ちよ、ねえ、ねえねえ、あのナチュラル上から目線の美少女ちゃん、私、どー見ても見覚えとなじみ深い冷や汗の感覚があるんですが！？も、ももも、もしかして、あの白いワンピースで海辺とか歩いてほしい金髪美少女って、蒐ー」

「ああ、うん、ドラ子。すごいよね、姿変えられるんあぜ。あれ、来るって言わなかったけ？」

「言わなかったけ、じゃねえんだよ、このすつとこどつこいがよおお……なあんで近所の友達が遊びに来る感覚で竜が遊びに、あー、そうでしたー、うちんとこの審問官と竜はオトモダチでしたー」

百面相。

冷や汗を見せたかと思えば、ドラ子の容姿を見て涎を垂らし、その直後には顔をピキらせ、最後には全てを諦めたようにタハっーと笑う。

おもしれー女がそこにいた。

「し、主教様、落ち着いて……」

スヴィが百面相を繰り返す主教を宥めようと。

「スヴィちゃああん？　これが落ち着いていられるかしら?!  
見なさいこの男の憎たらしい目を！　コイツ、全部計算！　私たちが  
がもしラザールのパンを認めなかった時の予備プランとして竜を！  
！ー」ふむ、憎たらしい目の男とは誰のことだろうか、銭ゲバよ」

差し込まれる竜の一言。

「ーこちらの麗しい目と清廉潔白な人物を教会の審問官に迎え入  
れられたのはほんとに光栄なことですね、そうですね、聖女スヴ  
イ」

「主教様のお言葉のままに」

すつと、対応を変える主教。朗らかな笑顔、宗教画に出てきそうな顔だ。

素晴らしき身の振り方、これこそが天使教会主教。カノサの才覚。

「ふかか、相変わらずよの、銭ゲバ。よいよい、ナルヒトともうまくやっているようで安心したよ」

その対応は正解。竜は特に機嫌を悪くした様子もなく笑う。

「は。かの者は本当に素直で清明かつ潔白で、ケツパクデ……我々としても心強い存在として頼らせて頂いております」

ギリつと、主教が口の中の肉を噛む音が遠山にも聞こえた。

「トオヤマ、主教様すごいデイスね」

ストルにもその音は聞こえたらしい。己の組織の最高指導者が思ったより愉快的な人間であったことを彼女なりに受け入れているらしい。

「ああ、大人には思ってもないことを真顔で言わないといけない時があるからな。アイツは相当な大人だ」

「誰のせいだと思ってるのよ、このすつとごどつこい……コホン、蒐集竜様、御身にたまさか拝謁出来るとは恐悦の極み、天使の導きに感謝を」

「退屈せんで済むよ、銭ゲバ。それにしても良い家を用意したではないか。うむ、ナルヒトやその一味の拠点だ。これくらいではないと務まらないよな」

「……と、当然にございます。蒐集竜様がお寄りになられる場所と思ひ、私、いえ、教会の用意できる最高峰の家を用意させて頂きまして」



「む？ オレが、寄る？」

何気なく呟かれた主教の言葉が――

「え？ …… 竜殺しと蒐集竜様はご友人拝しておりますので……  
え？」

「……………」

――竜の何かを傷つけた。

「……………うそ、スヴィ、スヴィ、私、やらかしたの、死ぬの？」

「大丈夫です、主教様が死ぬ時はわたしも死にますから」

「何も大丈夫じゃないのよ」

割と余裕がある主教と聖女が言葉を繰る。

「錢ゲバ」

「はいいいいい！！」

竜の一言に、主教がびしいいいいと直立不動。

「貴様から見て、オレとナルヒトは友人に見えるのか？ 普通のヒト同士の、友達に……」

アリスから表情が抜け落ちている。美しい顔はまるで造られた人形にも見えて。

「ッ、っはい、仰る通りに。約束を交わし、互いの住処を行き来

する。これが友人関係でなく、何とも言えますでしょうか。少なくとも、私の目には御身と、トオヤマナルヒトは良き友人として写っております」

刹那。

主教の灰色の脳みそに駆け巡るさまざまな問答。100は浮かんだ返答の中、しかし最後に選んだのは真実を語ることで。

「……………そうか」

「スヴィ、私の棺桶には帝国の貨幣をそれぞれ一種類ずつ入れてね、それだけでいいわ」

「そのように”羽”に伝えておきますね。わたしもおそばにいますから」

「……………む、こま、るな。うむ、困るぞ」

そして、主教のそれは正解だった。

「へ？」

「なんだ、その、銭ゲバよ。そのようにはつきり言われると、少しむず痒いではないか…… ふかか、そうか、トモダチに見えるのか、オレとナルヒトは……」

先ほどまで、無機物の如き静寂な美を備えていた彼女の顔が変わる。

赤く染まる頬、緩む口元。金の髪は細く白い指でくるくる弄ばれる。

二ヨ二ヨと柔らかな視線。

竜は明らかに照れていた。

「え、うそ、セーフ？」

主教、びっくり。まるでただの思春期の少女のようなその竜の姿に思わずタメ口。

「ふ、フフフフ、そうか、そうなのか、友達に見えちゃうのかあ……  
… そうだ、ふかか、オレとナルヒトは友達なのだ、あの老竜なんぞ、気にすることなどないのだ」

にへらーっと、相好を崩したまま竜が微笑む。

「……ナルヒト、蒐集竜殿がなんかナヨナヨしてるが、声をかけた方がいいんじゃないか？」

「なんか怖いからヤダ」

ラザールが、ボソリと口添え。遠山はそれを眺めて首を振る。

「ふふふ、む、おお。その黒髪の幼な子、確か、名前は……」

「る、ルカ、です」

機嫌を良くしたらしい童が部屋の隅で掃除をしていたハンチング帽の少年、ルカを見つけた。

びくり、声をかけられた瞬間、ルカの体が小動物のように震え上がる。

「ふかか、良い。怯える必要はない。貴様がナルヒトの一味である以上、オレが貴様を脅かすことはないのだ。だが、半ば鋭い故に貴様だけ必要以上にオレに怯えているなあ」

ニヨニヨ、歪む口角からアリスのギザ歯が見え隠れ。おもちゃを見つけた猫を思わせる表情だ。

「ひ、い、え、そんなこと」

「お、おい、ルカ、どうしたんだよ、アリーさん、そんなこえーひとなのか？」

様子のおかしいルカに対して隣のリダが声をかける。彼の声はあくまで呑気、少なくともリダにはアリスが恐ろしいものには思えないらしくて。

「リダには、……見えないの？」

「え？」

ぼそり。ルカの呟き。リダは眉を吊り上げて戸惑うだけ。

「ふかか、リダ。聡明な少年、貴様が普通なのだ。ルカのように見えずとも良い者が見えるものの方が少ない。のう、ルカ、貴様には、

オレがどのように見えているのだ？」

一歩、アリスがルカへ歩みを寄せる。

「あ、う……」

ルカは手に握っていた雑巾を取りこぼし、一歩退がる。

その様子を見て、竜がその瞳を歪ませて。

「コラ、ドラ子」

「イテッ」

コテッ。

竜の瞳が閉じられた。



遠山チヨップ。ルカを脅かしているドラ子に対して遠山がズバつと軽く手刀をかます。

主教や聖女はその様子を見て、机に頂垂れる。

「ナチュラルにドラゴンマウント取ってんじゃねえ。ルカが半泣きだろうが」

遠山が半泣きのルカを指差してドラ子にぼやく。手刀の素振りをしつつ、必要ならあと数発は食らわせる気だった。

「ふかか、見所ある定命の者を見つけるとちよっかいをかけたくなる竜のサガ」

キラんと目を輝かせて笑うアリス。遠山に頭へ一撃を食らわせられたことについては気にしていないらしい。

むしろ、その眼はどこかウキウキしていて。

「迷惑な生き物すぎるだろ。ルカいじめんならもうこの家には遊びに来させねーぞ」

「ふかつ、そ、それはやめよ。ルカ、すまぬ、許せ。暇を持て余した竜の戯れぞ」

少し真顔に戻ったアリスが、ルカに対してペコリと頭を下げる。

竜が、こどもに頭を下げた。遠山鳴人の言葉通りに。

その様子を見たラザールやストル、主教達。この世界の常識を知る者はみんな真昼に幽霊でも見つけたように、そつと目を逸らした。

「ルカ、驚かせて悪いな。この金ピカドラゴンは力は強いかもしれ

ねえが大丈夫、悪いやつじゃない、それにもしコイツがお前に悪さしようとも俺がいるから大丈夫だ」

「に、兄さんが？」

遠山の言葉にルカが信じられないものを見たように目を丸くする。

「ああ、俺の方がドラ子より強いからな。なんせ一度はもう完膚なきまでにぶちのめしてるから。一撃だ、一撃」

まあ、嘘は言ってねえだろ。もう一回戦えば多分余裕で負けるけども。

遠山はへらへらしつつ、ドラ子の様子を確認する。怒ってないよね？

「む、むむ、真実であるが故に微妙に言い返せぬのが歯痒いな。ナルヒト、リベンジマッチはどつだ？」

「残機有りはレギュ違反なのでNG」

大丈夫みたいだ。ニヤリと笑うドラ子から怒りは感じられない。

「ふ、ふふ、そうか、ならば仕方あるまいて」

その気安いやりとりを喜ぶようにドラ子が口に手を当てて笑う。  
高飛車な物言いとは裏腹に、やはりその所作には気品が常に。

「す、スヴィ、改めて思うんだけど、なんであのキツネ目野郎は竜  
に対してあの態度許されてるわけ？ お金？」

「お金という問いかけの意味は本気でわからないですけど、わたし、  
少し竜様の気持ちわかりますよ？」

「ヌ？」

「……はい、心地よい、ものですよ。自分の力とかそういうの無視して歩み寄ってもらうのは、存外に」

「え、ええ……なにそのふわふわした感じ、なんでスヴィ、共感してる感じになってるの？」

聖女の目つきは優しく、何か温かなものを眺めるような目で主教をじっと見つめていた。

「そついえばナルヒト、一つ聞いてもよいか？」

「なんだ？」

とさつ。ドラ子が椅子に座る。視線で遠山に席を促し、遠山もそ

れに従って対面に座る。

少しの沈黙。

それからにつきり、竜が笑う。

それはそれは、穏やかな微笑み。

「この前、オレの寝室に老竜と共に現れたな。アレは、なんだったのだ？ ああ、いや、別に責めているわけではないのだが」

ああ、でも、遠山は気づいてしまった。

細められた目はしかし薄目がちに開かれていて。

竜の目は笑ってはいなかった。

「……………?! あ、あんた何してんの？」

主教が取り繕うこともなく遠山へ呼びかける。もうなんかアレすぎて半笑いになっていた。

「おー、おー？ ……悪い、そんな意識失っててよー、あんま覚えてないんだわ」

ピリ。

肌を感じる威圧、毛穴がゆっくり、ゆっくり開き始めてチリチリと痒くなる。

竜の持つ威圧に身体が反応し始めていた。

「ふむ、そうか。いやなんだ、しかし、ずいぶんと貴様、あやつと仲が良いみたいだな」

「あー？ …… 考えてみたら確かに、人知竜には色々助けられてんな。今度きちんと礼をした方がいいか？」

遠山は頑張つて表情を変えずに対応する。

さっきまでほのぼのしてた感じなのにどうして……。

「な、ナルヒト、ナルヒトナルヒト、頼む、ここから先は言葉を選んでくれ」

ラザールがそっと、遠山の側に。潜めた声は重たく、僅かに震えている。

「どうした、ラザール、すげえ汗だぞ、……あれ？」

ラザールの言葉に返事をしつつ、遠山が細い目を自分なりに精一杯開く。



「……………どうした？ ナルヒト」

声は柔らかい。だが、目がやはり笑っていない。いや、きっと本人は笑っているつもりなのだ。

「い、や、別に。悪い、ドラ子、少しタイム！ ラザール、ストル集合！」

遠山が愉快的な仲間たちに集合をかける。

その裏でそそくさと、部屋から去ろうとする人影がー

「あ、そろそろ私達はこれで……………」

「待てい。家主殿、そんなすぐに帰ろうとすんなよ。おもてなしさせてくれ」

すーっと、去ろうとしていた主教の細い肩を遠山が雑な手つきでがっしりと掴む。

遠山と主教、互いにニコニコ笑顔のまま、固まる。

「いやいやいやいや、お構いなくお構いなく、ほら、アレだから、もうほんとお腹いっぱいだから」

「いやいやいやいや、そんなすぐに帰んなよ。ほら、せつかくドラ子まで遊びに来てくれたんだぜ。アンタら帝国の人間からしたら竜は縁起物なんだろ？」

「いやいやいやいやいやいや、竜殺しと竜様の間の邪魔になったらアレがアレで、あれでしょう？ ほら、言うじゃない、デーガメンの恋慕を邪魔する者は大空洞に落ちるって」

「諺は知らねえんだよ、学がねえから」

逃がさん、お前だけは。遠山は主教を引き留め続ける。

「銭ゲバ、帰りたいのか？」

ぼそり。竜の呟き一つ。

「いえ、我らが竜様。とんでもございませんわ。貴女様と同じ空間にいられること、この上なく光栄に」

主教が、切り替わる。遠山の手を掴んでニコニコと微笑む。

「うわ、すげえな。てか、なんかドラ子、あいつ角生えてきてんだけど。ドラゴンじゃん」

ふと、先程までは隠されていたドラ子の角がその髪の毛の隙間から覗き始めていた。

「今ほんとその感性捨ててくんない？ アンタのせいで竜が不安定になってるのにそのとぼけた感じマジでムカつくんだけど」

主教が真顔で遠山に詰め寄る。

「ナルヒト、いいか、頼む、あのお方はお前にとっては気安い友人かも知らないが、”竜”なんだ。慎重に言葉を選んでくれ」

ラザールまでもが真面目な顔で遠山に詰め寄る。この空間にいる大人の中にもう余裕がある人物はいなかった。

「なるほど、わかった。やい、ドミニ」

「む？」

「不機嫌になるのやめてくれ。周りの連中がビビってる。俺の言葉

「が気に入らなかつたら謝る、でも俺にはどこが悪いかわからんから教えてくれ」

ドストレートに遠山が、笑顔のままのドラ子へ。

「ああ…………… もうほんと嫌い……………」

「水、水が飲みたい……………」

主教とラザールが頭を抱える。常識がある人間ほど苦労するのはどの世界でも同じらしい。

「……………ふ、む」

ドラ子が宝石の如き竜眼で遠山を見つめる。

鏡のような目。遠山は一瞬気圧されるも目だけは決して逸らさない。

「ふむふむ、たし、かに。オレは今、確かにイライラしていた。ナルヒト、貴様があの老竜のことを話すのはやはり、妙な気持ちになるな」

ドラ子が、ゆっくり何かを確かめるように自分の顎を撫でる。

「なるほど。人知竜の話をするのが嫌なわけか。じゃあ、お前の前でアイツの話はしねー」

「む?」

遠山は知っている、思い知らされている。以前の夜遊び、あの夜にホストにならざるを得なくなった原因。

自分の他人に対する関心や理解度の乏しさ。それを反省していた。

故に歩み寄る、理解しようとする。理解できぬ存在、ヒトとは異なる生き物といえども話を聞くことだけはやめない。

「む、む、む？ いい、のだろうか。……やっぱりダメだな。この前と同じだ。ナルヒト、貴様と色々話したいことがたくさんあったのに、いざ顔を見るとあの老竜に抱えられていた貴様の姿ばかりが思い浮かんで仕方ない……」

「それが嫌なのか？」

聞く。聴く。竜の言葉を聞く。

「嫌だ」

竜がヒトに言葉を向ける。端的に溢れる言葉は竜の心そのもの。

「貴様の危機を、貴様の救いを、オレ以外の存在が果たしたのが気に食わぬ、聞いたぞ、ナルヒト。貴様、エルダーを滅ぼしたらしいな」

「ああ、強かった」

「アレは本来、ヒトが抗える存在ではない。塔級冒険者というヒトの枠から外れかけている者、ヒトを超えた存在でようやく戦えるという存在だ。だが、貴様のことだ、オレの友で、オレの竜殺した。エルダーを滅したとしても驚かぬ。だが、無事ではなかったのだろ  
う？」

「おお、普通に死にかけた」

「……だろうな。だが、それでもお前は生き延びたわけだ」

とん、とん、とん。

ドラ子の形の良い細い指、尖った爪の指がリズム良く机を鳴らす。

真っ直ぐ遠山を見つめる竜の巫女。あまりにも透明、あまりにも物質的な美しさに溢れる顔。



遠山は、それにあてられて。

「ド、ド、ド、ド……」

「う、うー」

竜が顔を伏せる。

空気が撓んで、張り詰める。

ルカの顔色がどんどん悪くなり、ストルが音もなく子ども達の前  
に盾になるように位置する。

確かにレーザーや、主教の言葉は正しいのかも知れない。いくら  
遠山にとっては気安い相手でも、ドラ子、アリス・ドラル・フレア  
テイルは”竜”。



「う、う、羨ましいイイイイ！ 羨ましいイイイイいよおお  
おお。あの老竜め、おのれ、おのれ、おのれおのれおのれ！ 定命  
の者であるナルヒトが己が命をかけた全てを出し尽くした戦い、その  
結末に立ち合ったのだろうか？！ ナルヒトが戦った戦場の空気、意  
識を失い倒れるナルヒト、う、ううう、嗅いだ！ 嗅いだに決まっ  
てる！ 絶対あの女、自分の匂いをナルヒトに擦り付けているうう  
うう！」

幼い子が他人を羨み駄々を捏ねる姿、そのもの。

だんだんと机を拳に叩きつける。

「え、あ、あの、ど、ドラ子？」

「ぬつづつづつ！ 美味すぎるシチュエーションではないか…  
…！ 定命の者が死力を尽くした戦いの結末を見守り、連れて帰る  
とか！ 竜的にはすごくすごい感じのやつなのだ！ おの、  
れ……………」

ドラ子が半泣きになりながら、唸る。

「……………あれえ？」

思った反応と違う。遠山が助けを求めて主教とラザールを見つめて。

「こっち見ないで」

「前向いて」

にべもない。2人とも助けてくれない。

「ナルヒト！ 聞いておるのか！？ きさまともあるつものが老竜に連れて帰られおつて！ 今度そついう感じになるとはゆえ！ オレにゆえ！ 友達だろう！？ オレたちは！」

むおーと騒ぐドラ子。

「待つて、ドラ子、待つて。価値観が違いすぎてお前の勢いについていけん」

「う、それはダメだ。価値観の相違はヒトと関係を築く上でとても大事だと本で読んだぞ。ナルヒト、いいか、竜的にはそういうのすごい好きなのだ。ああ、いい、脆弱な定命の者が自らよりも遙かに強い生命に挑み、打ち勝つ…… 良い……」

「何だこいつ」

「口には気をつけなさい、トオヤマナルヒト。今いい感じなんだから、このままなんとか話を落ち着けて！はやく！ やくめでしょ！」

「わかったよ、ゆった」

「ゆづたって誰よ」

「あ、あー、なんだ、ドラ子。悪かったよ、その、なんかそういう竜的なアレだったんだな、なんか、竜らしくていいな」

「どういうアプローチ？」

遠山のごちゃごちゃした物言いに対して主教とラザールが汗を浮かべる。

「そうなのだ！ むふふ、竜だからな。やはり定命の者の頑張る姿はとてもいいものなのだよ」

まさかの好感触、竜が纏っていた剣呑な雰囲気や和らいでいく。

主教とラザールはもうその2人について真剣に考えるのに疲れたので、2人音もなくコップに水を注いでくつろぎ始めた。

もう竜のことは竜殺しに任せておこう。

大人である2人は人生においては、時に諦めも正解だということを知っていた。

「へえ、なるほどなあ。ナチュラル上から目線なのは気になるが、まあ、竜だしいいかあ」

「ああ、見たかったなあ。ナルヒトが死力を振り絞り己の知恵と命を差し出し、エルダーに迫るところを…… ああ、きつと、きつと、それは美しい光景だったのだろう」

ドラ子が、うつとりと顔を赤らめる。

夢想するような焦がれるような、そんな美しさと同時に、決してヒトには理解出来ない上位生物の傲慢なおぞましさ、それが両立した顔。

熱に浮かされた青い瞳が、どろり、濁る。

それに見つめられる遠山、少しビビりつつも唇を歪める。

「うへえ、趣味悪い。そう何度も死にかけてたまるかよ」

あくまで軽口。言葉を紡ぐ。

「む、それもそつだ。こうして言葉を交わしているとつい忘れてしまふのだが、貴様もまた定命の者、か弱きヒト。ぱたりと死ぬ儂き存在であったな。……なあ、ナルヒト……」

「あ？」

急にか細くなるドラ子の言葉。

遠山はそれに耳を傾ける。



「そのな、こつこつことをな、言つと貴様は嫌がるのはわかつてるのだがな……ナルヒト、もう少しオレを頼つてくれないか？」

「ドラ子？」

その竜の言葉にあるのは戸惑いと、確かな歩み寄り。

変わりつつあるのは、遠山だけではない。どこまでも竜の法則で動いていた彼女が静かに、遠山のルールに歩み寄つて。

「嫌なのだ、貴様がなくなるのは。死んだらダメだ、ほんとうを言うなら、ナルヒトをオレの手元に置いておきたい、でも貴様はそれを嫌がるだろう？ だから、せめてオレを、竜であるオレを頼ってくれないか？ 心配なのだ、オレは、お前が」

話す、竜が心を。

真つ直ぐに遠山を見るドラ子。

口をモゴモゴして、目をキョロキョロ泳がせる。

それから目を瞑ってー 開く。

「ーオレ達は、友達だろうか？」

「う、お」

あまりにも当たり前で、まっすぐな言葉。

だから、だろうか。アレほどに言葉と舌に長ける遠山が言葉に詰まった。

「ナルヒト？」

「お、おお。いや、たしかに、そう……だな。お前からしたら、そうなるな」

ゆっくり噛み締める。

忘れていたし、気づかなかった。

自分の生き方は、冒険者になる前、探索者となる前からそうだった。

欲望のままに。

思春期の頃に得た答えのままに、彼は思うままに進んできた。

その在り方は遠山をここまで連れてきた、だが同時にそれは他人とは交わらぬ道だった。

探索者となって出来た仲間も、それを言葉にしてくれる者はいな

かった。

ドラ子は、単純に遠山を心配してくれていた。

「竜としてのオレは、貴様が試練に挑むのを嬉しく思う。定命の者が最も輝く瞬間はつまるところ、最期のその時だ、竜は、オレ達は生き物としてそれを見るのが好きなのだ」

竜がつぶやく。変わりつつある彼女は迷い戸惑いながらも、自分の心と向き合う。

「だが、最近、オレはおかしい。怖くなる、時がある。想像するのだ、ナルヒト、お前がー」

迷う竜、それを眺める遠山。

言う言葉は決まっていた。

「悪かった、ドラ子」

「……………」

「俺が少し、無神経だった。確かにそうだよな、俺だって、お前が死にかけてたりする話をきいたら気分は良くねえ。色々お前に偉そうなこと言ってたけど、俺の方が、何もわかってなかった」

「い、いや、良いのだ。すまぬ、変な話をした。忘れよ。まあお前がそう簡単に死ぬとは思っておらんよ」

「変な話じゃねえよ。ドラ子、心配してくれてありがとう。お前、いい奴だな」

友達。

それは遠山が昔、求めて結局得られないものだった。

遠山鳴人、そのめちゃくちな在り方に惹かれる者がいた、その欲望に救われた者、焦がれる者、目標とする者もいた。

でも、対等に当たり前に、ドラ子のような言葉を向ける者はいなかった。

「……………！ ふ、ふふ、かかか。そ、そうか？ そうであれば、いいな」

竜が笑う。ああ、当たり前の少女と同じ顔。ゆっくりゆっくり、他者との関わりによって成長していく思春期の少女と同じ。

「……………主教様」

「……マジ、って感じね。あれじゃ、まるでー」

その様子を眺める天使教会の2人。主教の目が、大人の眼が冷たい色を灯す。

「そ、そうだ、ナルヒト！ 話は変わるが聞いたぞ、貴様、竜祭りに出るそうだな。何をするのだ？」

「おお、そうそう。いやなに、今日ドラ子を呼んだのはそれもあってな。そのラザール、アイツが作ったパン屋の出店するんだ。めちゃくちゃ美味いからちよっと食べてけよ」

「な！？ ナルヒト、ま、待て！ 蒐集竜様に俺のパンを？ き、聞いていないぞ、そもそもお客様として呼ぶのなら事前に言っておいてくれ、お迎えの準備もまだロクに出来ていないのに」

急に話を向けられたラザールが言葉を荒げる。

「許せ、かーちゃん。その辺あんま考えてなかった」

「誰がかーちゃんだ」

遠山の雑な振りに、ラザールが真顔で返す。

「ナルヒト、かーちゃんとはなんだ？」

ドラ子、その言葉に興味を持ったらしい。

ラザールの尻尾がひゅんっと縮む。

「俺の地元ではやかましく世話を焼く母親のことを言う言葉だな、ま、俺親の顔知らねーからほんとにそういうもんかはわかんねーけど」



「なるほど、お母様のことか。……ラザールが、ナルヒトのカーチヤン……？ ……敵？」

どついつ計算かわからない過程で、ドラ子が答えを出す。ラザールに向けてシン、とした目を向ける。

「ドラ子、お前の頭の中でどついつ計算があったの？」

「ナルヒト、俺が死んだら死因はアンタだからな」

「む、すまぬすまぬ。本で読んだのだ。しうとめ、ヒトの婚姻関係において最終的に最大の敵となる可能性がある……… 違う！！ ナルヒトは友達だ！ オレは別にヒトの婚姻関係についての本など知らぬ！」

ガン！ ドラ子が急に机に顔を突っ伏す。感情が愉快だ。

「ええ……なんかコイツ会う度愉快になってくるな」

「ナルヒト、元凶がそんな他人事みたいに言うのは良くないぞ」

他人事みたいな遠山にラザールがぼそり。

「はあ、トオヤマに毒されたのは、私だけではないのディスね。まさか、竜様まで」

ストルの小さな咳きは、誰にも届いていない。

「よい、この話は終わりだ、リザドニアンのラザール」

「は、は！ 偉大なりし竜の巫女よ。なんなりと」

「堅苦しい礼儀はいらん。ナルヒトの友ならば既に貴様はこのオレ

の知己だ。パンを作るのだな？ 興味があるぞ」

ばちん。気を取り直したらしいドラ子が指を鳴らす。

「な、あ……」

ラザールが目をパチクリ。竜に名を覚えられたのがすごい衝撃ではあった。

「リザドニアン、古き種に連なる我が遠き傍流よ。良いではないか。貴様らの種としての記憶に戦や血それ以外の記憶が残るやも知れぬのだ。ラザール、貴様の業、このオレが評してやろう」

ふふんと、竜が笑う。

ラザールが目を瞬かせる。

しかし、すぐに視線を真っ直ぐ。

片膝をつき、胸の前に手を当てて一礼。

「ー偉大なりし、炎の竜と水の竜の末。人界を護りし貴女のお言葉なれば。ナルヒト、すまない、席を外す、厨房に向かうよ」

「おお、了解。お客様は俺の軽快なトークで引き止めておくわ」

「あまり軽快すぎるのはよしてくれよ。しばしお待ちを、蒐集竜様」

「うむ、楽しみにしておる」

「私たちもラザールさんのお手伝いにいくわ！　アリー、楽しみにしておいてね！」

ピコーんと、何かを閃いたように顔を明るくしたニコが笑いなが

ら、部屋を出ようとする？。

リダと、ルカを小さな身体で引っ張る。

「あ、おい、ニコ、なんで引っ張るんだよ？」

「ニコ、痛い……」

「あー、僕とシロもーお手伝いするー」

子供たちが部屋を去っていく。

「ほう？ ニコ、すまぬな」

「あら、なんのことかしら？ ストルちゃん、貴女もラザールさんのお手伝いに行かない？」

歳より大人びたニコが、艶やかに微笑む。

「いえ、ニコちゃん、私はここで」

ストルの顔には、笑顔はなかった。

「あら、そうなの？ フフ、わかったわ。ねえ、おにーさん」

「んあ？ どした、ニコ」

「んー、ふふ、なんでもないわ。頑張つてね、おにーさん」

ウィンクしながら、ニコが部屋からいなくなる。

そそくさと、主教と聖女もいつのまにか部屋から居なくなっている。

「なんだ、アイツ」

遠山がニコの思わせぶりな笑顔に首を傾げて。

「……………」

「……………」

気付けば、部屋には遠山、と2人。

竜と正義。

2人の青い瞳と、水色の瞳が静かに互いを写して。

「……………」

部屋の空気が、しっとりしてきた。



79話 竜の訪問（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください  
さいー！

下の星をクリックしてよければ評価お願いします！

## 80話 フォルトナ・エクスプローラー

……  
……  
同時刻、冒険都市アガトラ、商業地区、青空市場のテラス席にて

「あいよ、お姫様、お待たせ」

「わあ、ふふ、ありがとうございます、ウイス」

ウイスに差し出された水飲み用の革袋。

耐水性に優れた水棲のモンスターの皮から作られた茶色のそれを  
フォルトナが笑顔で受け取る。

どかり、青空市場の一角、開放されているテラス席にウイスが腰  
掛ける。

緑髪のどことなく高貴な雰囲気を持つ神秘性と、町娘の持つ無邪気な元気を併せ持つ不思議な美女と、荒々しく派手な様相の男の組み合わせは自然と周囲の注目を集めていた。

「ん、うめえな、このワイン。水で薄めてんのは王国と同じだが、それでも風味が全然違う」

「んー、鼻から喉にまわりつくこの芳醇なグレブの香り。それをここまで透明感ある味に仕上げてるのはきっと、帝国の水がとても美味しいからでしょうね。ヒナヤ山脈から流れる雪解け水、数千年をかけて複雑な地層で磨かれた水と、水竜の遺産、素晴らしいです」

フォルトナが細い喉をコクコクと鳴らす。頬に手を当てて星型の虹彩を輝かせながらそのワインを褒め称えた。

水飲み用の皮袋に屋台で注いでもらった水で薄めたワインを2人が呑気に楽しんで。

「ちそう？　なんだアそりゃ」

「あら、勉強不足ですね、ウイス。今度時間がある時にわたくしが授業して差し上げますよ」

「いらねー。美味いもんは美味いで終わりでいいさ、余計なこと考えるのァ、疲れる」

「あら、残念。貴方は地頭がいいからお勉強すればもっともっと伸びると思うのですけれどー」

「いらねえなあ。俺サマァ、自分に必要なものとそうじゃねえものの区別はつく。力に知恵は必要ねえ、……この世界の王の剣に、余計な知恵がついたら王様は剣を恐れるかもしれないねえだろ？」

チエアの背もたれに大きな背中を預けるウイス。赤い切れ長の瞳が正面に座るフォルトナの琥珀色の瞳を写す。

「あ、は。誰のことを言ってるのかわかりませんが、世界の王ならそんな小さなことは言いませんよ。ああ、でもこのワイン、本当に美味しいですね。あとでおかわりを所望致します」

「あんま路銀無駄遣いしてんなよ、まだ王国の傀儡どもの手続きは終わってねえんだから」

「んー、彼女からの贈り物に”魔術学院”からの流失したものがあつたのは望外の幸運でしたけど、まー、扱いにくいことですね。あのお父様とお母様を素材にしたお人形……とても扱いが難しいですもの」

純真。幼い子が何か楽しいことを語るような口ぶりでフォルトナは言葉を紡ぐ。

もはや彼女に善悪の基準は無い。自分でそれを手放し壊していたから。

「あー、費用対効果を考えても微妙だなあ。竜教団にいたはぐれの

魔術師30人と、素質のある信徒100人を魔力炉にしてようやく  
自由意思がある人形2人動かせるんだもんな。伝説の全知竜はそれ  
を1000は下らぬ数同時に動かせるらしいけどよー」

「まあ、でも使えるものは使わないと。ふふ、誇らしいです。お父  
様とお母様、さすがは王族、最期まで屈さずに王家の誇りを貫いた  
んですもの。これからはわたくしたちのお人形としてまだまだ働い  
て貰いましょう」

フォルトナ第二王女の国崩しはほぼ完全な形で成った。

表向きのカバーストーリーも流布は完了、王家は完全に彼女の手  
の中に堕ちて。

「相変わらずおっそろしい女だなあ。肉親を、文字通り自分の人形  
に変えちまうたあな」

言葉とは裏腹に感慨もなくウイスがつぶやく。

フォルトナの国崩しにおいて障害となった王国の戦力のほとんどを屠った個人は自分のことを棚上げし、己の主人に口笛を吹く。

「上兄様と義姉様の人形も欲しかったですよ？ でも損傷が酷すぎてやむなく火葬ですもの。天使様の元へきちんとたどり着けていればいいのですが」

「うへー、ドン引きだわ……」

「それに欲を言うならば上姉様も…… ああ、いや、あの人はやりいいいです。中途半端に利用なんかしようものなら、盤面をひっくり返されてもおかしくありませんもの、人形に成り果てても自我程度なら取り戻してもおかしくありません」

フォルトナがあははと小さく笑う。己の国崩しにおいて最大の障壁となっていた第一王女の長姉とのひと時を想う。

ああ、楽しかった。己の幼き黄金時代の象徴を乗り越え、その這いつくばる長姉の首に剣を振り下ろした瞬間をフォルトナは想う。

あの最期の瞬間まで、なにも諦めずに生きる力に溢れていた長姉の視線。身震いするほど恐ろしく、美しかった。

だが、その選ばれた強さも彼女の幸運にひれ伏したのだ。

「あー、あのおっかねえ姉ちゃん。確かにそれはわかるわア、あの爺さんも、強かったなあ」

ウイスもまた懐かしむ。長姉の配下の老騎士、アレは強かった。

大戦の頃より生きているという古い老騎士。なんでも過去は竜や鬼”を友として大戦期を駆け抜けたという老兵。

ジーヤマーヤ樹海の奥底から集められた数多の漂竜物に愛された強い騎士。王国の軍よりもあの老人の腕力は素晴らしいものだった。



王国を終わらせたた王女と英雄。互いに互いの試練を、強敵を想う。

それは勝者にだけ許された傲慢な、郷愁にも似た何か。

「……うーん、クーデターの噂や、内乱の噂は残念ながら耳ざとい帝国に伝わっているでしょうし。政も帝国は一筋縄では行きません、お父様とお母様のお人形がきちんと働いてくだされば、竜祭りの始まるギリギリまでには正式にわたくしたち、王国の使者として受け入れて貰えると思うのですが……」

感慨と同時に、彼女は策を巡らせる。

己の幸運を試す。ただ、それだけの為に彼女は世界を冒し続ける。

「ま、それまでは大人しくしておこうぜえ。おい、言うておくが、

それまで竜殺しやら、竜とやらにちよっかいかけんなよ」

ウイスが口を尖らせる。己の主人の奔放さに頭を悩ませるのは従者の本番と弁えつつもそれを諫めるのは諦めていないようだ。

「えー、ダメですか？ わたくし、もっともつとあの方とお話ししてみたいのですがー」

「だ、め、だ。てめえのイカレムーブに俺様付き合わすんじゃないやあねえ。クソ、今俺らが五体満足でこうして呑気に市場で買い食い出来てんのは、ただの竜の気まぐれってことよ、理解してんのかア？」

ワインで口を湿らせつつ、ウイスが視線を険しく。

並の兵士ならその視線だけで戦意を失いかねない目つき、だが彼の主君はどこ吹く風。

ぼわぼわと琥珀色の瞳を美しい二重瞼で隠して笑う。

「あは、もちろんもちろん。ねえ、ウイス」

「なんだよ、バカ姫」

「貴方の目から見て、彼女、蒐集竜はいかがでしたか？」

風が止んだ。

琥珀の瞳、狂気を孕みつつそれをあくびにも出さない人でなしの瞳が英雄を写す。

懐かしき過去、世界の王になろうとした英雄に覇道を諦めさせた女の目は昔からなにも変わっていない。

「――正直なこと、言っているかア？」

「ええ、忌憚なき意見を」

王女の言葉に、英雄が笑う。

「なんだ、ありゃ。」

呆れたような、そんな声だった。

「……………」

「聞いてた話と違うぜエ、この世界の人間なら誰しも知っている竜の逸話やら、我が家に伝わる竜の伝説。ヒトより上の位階の生き物、竜。あの蒐集の竜はそんな中でも伝説の中の伝説、あの炎竜や水竜の

未だろ？　なのに、なんだよ、あれ」

英雄が、竜を語る。

幼き頃より聞かされた規格外の生命。古い大戦よりももっと、もっと昔、人々が星に手を伸ばしていたとされる前の文明の頃よりこの世界に存在する者。

大空を支配する者、炎を操り、水を呼び、知をもたらし、世界のバランスを司る者。

竜。

それはどこまでも自由で、傲慢で、理不尽そのもの。そんな存在、はずだった。

「ーまるで、ただのヒトじゃねえか、びっくりしたぜ」

「へえ」

だが、英雄が先ほど垣間見た竜はそんな知識とは違ったものだった。

「たしかにその力やら存在感は別格だ。奴がその気になりやオレサマ達は死んでたかもしんねえ」

ウイスのごつごつした戦士の手がワインの入った皮袋を握りしめる。

「だが、そうはならなかった、わかるか？ 竜なのに奴は俺サマ達を見逃した、少なくとも奴にとってよ、不快な存在である俺らを見逃したんだぜえ？ この意味、わかるか？」

「くすくす、さあ、なんでしょ」

「まともだ。あの竜、俺らの常識の中にいる奴なのかもしれねえ」

ウイスがごくりごくり、大口でワインを飲み干さんばかりに一気に煽る。

「ゲフツ、まともなら、ただ強いだけの存在ならいくらでもやりようがある。お前の上兄様みたいになあ……」

ぐびり。

ただ、皮袋を傾けてその中に注がれたワインを飲む、荒々しく粗暴な所作が絵になる、そんな男だ。

「ああ、上兄様。たしかに彼は真っ向勝負であれば貴方ともまとも  
に戦えたでしょうね。ふふふ、今、思い出しても、楽しかったです、  
あれは」

フォルトナが顔を伏せ、肩を震わせる。その震えの理由は絶対に後悔や後悔などではない。

「てめえの趣味悪い思い出はどーでもいい。とにかくにも、竜が想像以上にまともだった。資料や見聞でまとめていた事前予想の蒐集竜だったら、多分俺たちはあそこで死んだ」

「へえ」

「へえ、じゃねえんだよ。お前、消し炭になってもおかしくなかったんだぞ」

呑気なフォルトナにウイスが口を尖らせて。

「でもそうはならなかった」



「フォルトナの言葉が染み入るように、市場の喧騒の中ウイスに届いた。」

「っ……………」

「わたくしも確信致しました。”幸運にも”竜は今、きっと変わりとつあるのですよ…………ええ、ほんと、昔と全然違う」

「あ？ 昔？ なんの話だあ？」

「え？ わたくし、今何か言いましたか？」

笑う、笑う、女が笑う。

楽しそうにニコニコ微笑むその顔は、市場で安売りされている食材を手に入れた町娘のそれ。

だが、片方だけ開かれた星型の虹彩に彩られる目は違つ。高貴さ

と狂気がどろりと煮詰められたおぞましい目で。

「変わる、だア？」

「あら、わからなかったんですか？ ウイス。ふふ、女心がわからないヒトですねえ、ほら、思い出してくださいよ、そもそも竜は何故、わたくし達を見逃したのでしょうか？」

「あ？ あー…… 野郎かア」

フォルトナのヒントを経て、ウイスが気づく。

竜が、自分達を見逃した理由を。

「クスクス、ええ、ええ、そうですね、ウイス。聞きましたか？  
聞きましたよね？」 やめろ、ドラ子” 彼が、竜を止めたのです、  
ふ、ふ、フフフフフ、なんなのでしょうね、あの男、彼！

「竜殺し」

「……確かに、アイツが竜を止めてたよなア。なんか衝撃すぎて頭から抜け落ちてたぜエ」

「ええ、驚きましたが、わたくし達はそれを目にしてしまった。竜は彼の言葉通りにわたくし達を見逃した。それはつまり、竜が彼を、たった1人のヒトを尊重したということです」

ふ、フフフフフフ。

フォルトナが笑う、愉快で仕方ない、そんな笑い方。

「ねえ、ウイス、わたくしの剣、わたくしの力、わたくしの英雄。貴方から見て、かの竜殺しはどんな存在でしたか？」

王女が英雄に問う。

竜を殺す、本来ならば英雄にのみ許されたその偉業を成した奴隷のことを。

竜のあり方を冒しつつあるその男を。

「正直なところ、言っていていいかア？」

「ええ」

「ーぎゃはは。なんだ、ありゃ、気色悪い」

言葉とは裏腹に、ウイスはニヤリと口元を吊り上げて凶暴な笑みを浮かべる。

「アレは良くない、良くない人種だぜ。俺サマの嫌な予感ほ正しかった。見て確信した。アレは関わったらいけない種類だ」

良くない、そう言いながらも燃える夕陽のような赤い瞳は爛々と輝く。

「ーへーえ、ウイス、貴方にそうまで言わせるヒトですか」

「……単純な強さという点なら正直、まあ、いいところ二流の上澄み、一流にや届かねえ程度のな。だが、気持ちワリー」

「気持ち悪いとは？」

「……アンタは何も感じなかったのか？ アイツと話してたらよオ、感じたんだ。まるで野郎の中に、なんかが……ああ、そうだ、奴に見られると同時に別のナニカにも覗かれてるような感覚を覚えた、ギャハハ、マジで、気持ち悪いぞ」

勇者を裏切った英雄の末裔、数多の戦の才能に愛された彼、超越者の1人たるウイスは竜殺しを評価する。

気持ち悪い。

彼がこう評した男は今までに竜殺しを除いて1人だけ。最もウイスに死をイメージさせた最強の敵、第一王女の老騎士のみ。

ありとあらゆる”漂竜物”に”副葬品”、本来であれば選ばれた者が1つだけ扱うのを許されたこの世ならざる力の物品。

それを使い捨てるあの規格外の古い超越者と同じ感覚をウイスは竜殺しから感じていた。

「あらあら、ウイス。オカルトスイッチでも入りましたかー？  
もしかして怖くなってきちゃいましたかねえ？」

「うつせ、タコ。真面目に聞け。……このクソヘルムが奴に反応したんだよ」

「あら、本当ですか？ その”呪いの品”は貴方の家の家系のヒトにしか反応しないはずでは？」

「ギヤハハ、ああ、その筈だった。でももしかしたら、もしかするかもなア」

ウイスが己のベルトに巻きつけているそれを眺める。

古く錆びたバケツ型の騎士兜。ぽっかり欠けた眼窩部分の穴には見通すことの出来ない小さな奈落が空いている。

ウイスの家に古くから伝わる「呪いの品」、歴代当主の腰に時代を超えてぶら下げられてきたそれは静かにそこに有る。

「あはは、いい顔になってきましたね、英雄。今回も手伝ってくださいますか？」

「ああ、いつも通りだア。てめえが壊して、俺も壊す。ほんのところなら、あの竜殺しにや関わりたくなかったけどよオ、このクソバケツヘルムを押し付ける事が出来る可能性があるなら話は別だ」

呪いの品、持っているだけで活力を吸い続ける厄介な品。

ウイスに問答無用の縛りを強制するそれ、捨てても、捨てても、気付けば目の前に現れる呪いの品。

それは、ウイスのからだからはずれない。

「あー？ ウイスー、少し乗り気になってませんか？」



「ギャハハ」

だが、その呪いは押し付けることが出来る。

英雄の血筋に取り憑き、その力を代々奪ってきた呪いが数百年ぶりに他人に反応したのだ。

ウイスが歯を剥き出して笑う。

「あー、本当にやっちゃまうか、竜での運試し。ぶっちゃけ最初は今度こそここで死ぬって思ってたが、案外勝ち目があるかもしれねえ」

不確定要素は多いがな、ウイスの眩きをフォルトナは張り付いた笑顔のままに聞き流す。

都合の悪い言葉など聞こえない、彼女はそういう人間だ。

「アハ、そうしましょう、ウイス。幸運にも、竜はその格を落とし、我らヒトの手が及ぶ存在であることを他ならぬ竜殺しが証明してくれています」

空は高く、青い。

愉快的な2人組が、楽しげに言葉を交える。

「試してみましよう、わたくしの幸運が、この幸運だけでどこまで行けるのか」

彼女の理由はシンプル。ただ、試したい、知りたい。己の幸運が本物なのか。

この世界に己の幸運よりも価値あるもの、本物があるのかどうか

「ああ、なんだかワクワクしてきました。あはは、竜様との運試し、さて此度こそ、今度こそ、今回こそ、わたくしは、負けてしまおうの

でしょうか」

「ああ、お前も気持ちワリー」

狂った瞳を、ウイスが眺める。愉快げにそれを眺めて。

同時に、明らかにこちらへ近づいてくる足音に耳を向けていた。

「おいおいおいおいおい、にーちゃんに、ねーちゃんよ、その席、誰の断りを得て座ってんだ？」

「あじ」

粗暴な声、飛び散る唾。

洗礼は誰にでも共通して現れる。

異なる世界からやってきた男にも、国を追われて弱き従者とともに希望を抱いてやってきた不幸な女にも、そして、王国を墮とした王女と英雄にも等しく。

冒険都市の洗礼はやってくるのだ。

「おお！ 超美人！ 緑の髪たあ、珍しいな！」

「よー、姉ちゃん、その席さあ、俺達がいつも使ってる席なんだよ、何勝手に使ってくれてんの？」

「えーやばくね？ え？ 何？ 喧嘩売ってくれてんの？」

ヘラヘラした顔、多人数でいることの優位から来る浅い余裕。

武装した5人の男、冒険者がニタニタした顔で王女と英雄に興味を示して。

「……………」

「……………」

ウイスとフォルトナ。視線だけで言葉を交わす。

………

わたくし、興味があります。

目だけで、その意思は交わされて。

「あら、ごめんなさい。冒険都市に来るのは初めてです。冒険者の方でしょうか？」

フォルトナがにこりと微笑む。高貴な血と美貌を惜しみなく冒険者に向ける。

「お？ 笑うとマジで美人だな。んん？ おい、この女、なーんか似てねえか？ なあ、ガルド！」

まるで、肉を目の前にぶら下げられた飢えた野犬。

下卑た欲望を隠そうともしない冒険者達が、フォルトナの顔から身体を舐め尽くすように見つめる。

彼らは味を占めていた。

見覚えのないおのぼり、人の集まるこの都市で弱者を、はぐれものを食い物にする快感を知っている。

つい、最近もー

「おお？ あー、あー！ 似てる、似てるなあ！ この前遊んだ緑髪の田舎女！」

一人の大男が、フォルトナの顔を覗き込み、醜く唇をめくって笑った。

「へえ」

琥珀色の星形をした虹彩は本当に一瞬、大きく揺れ動く。水面に大きな石が投げ入れられたように。

フォルトナの纏う空気の温度が下がった。そのことにウイスだけが気付いて。

「なんだ？ いいところのお嬢様にお付きの護衛か？ いい身分だな、オイ。その姉ちゃんに兄ちゃん、せつかく冒険都市に来たんだ、よかつたら案内してやるぜ？」

2メートル近い大男だ。酒臭い息を汚い胃の腑から湧き出して喋る。

「だとよ、お姫様」

ウイスが横目で冒険者の品定めを終えながら、フォルトナに問う。

いつでも、どうとでもなる、それが英雄の判断だ。



「んー、でしたらせっかくですしお願いしようかしら」

フォルトナが形の良い顎に指を当てて小首を傾げる。

ウイスだけだ、気づいたのは。その王女の目は獲物を見定める猫に似ていた。

「お、ノリがいいな、ひ、ひひひ。おい、そっちの男はお呼びびじやねえ、怪我したくなかったらこの姉ちゃん置いて失せな」

ガルドと呼ばれた大男が、ウイスに声を荒げる。

大きな身体に、小さな脳みそ。

相手の実力を見極めることなく、ただ自分よりも身体が小さいと  
いうことだけで相手を見下す。

つい先日、とある黒髪の冒険者トリザドニアンに絡んだ後、首を踏み折られかけたことなど色街で発散した後に、すっかり忘れていた。

彼の頭にはもう、数ヶ月前に同じ手口でおもちゃにした緑髪の田舎女の具合が良かったこと、お付きの男の首を捻り折ってゴミ箱に捨てた時の興奮しか、残っていないかった。

「らしいけど、どーするお姫様」

「ウイス、近くでも散歩してきてください。わたくし、この人たちに聞きたい事がありますので」

「へーへー」

ウイスがあっさりと席を外す。冒険者を一瞥したあと、その場か

ら離れていく。

「お？　へへ、賢いな、この前の緑髪女の男は、生意気にも逆らってきたのによー」

「ひやはは、今回は首を折られた男の死体の処理はしなくて済むな」

「処理つつつても、ゴミ箱に捨てただけじゃん。ゴミは、ゴミ箱に  
つてか？」

冒険者が腹の底から笑う。

周囲がざわざわと騒ぎ始める、だが誰も手を差し伸べることはない。

冒険都市、ここで生きていくには力が必要だ、他者ではなく己の力で火の粉を払える力が。

それがない者はみんな、悲惨な最期を迎えて。

「じゃあ、姉ちゃん、いいとこ案内してやるわ、男の方もいねえしよ、ひひひ、ついてくるよな？」

「ええ、もちろん」

ニヤニヤ、ヘラヘラヘラ。

欲望の視線の中、フォルトナが立ち上がり、冒険者に囲まれながら歩みを共にする。

向かう先は、暗がり、路地裏。

光も、助けも届かない、数々の冒険都市に呑まれた者たちの涙や血が滲んでいるこの都市の闇に、フォルトナも足を踏み入れて。

「冒険者様、先ほど仰ってた緑髪の田舎女とは？」

「ああ？ アンタとよく似た女だ、幸薄そうで陰気ない女でよ、生意気にも男連れで冒険者になりたーいってギルドに来てたバカ女さ」

「っっ、っっ、っっ。」

石畳を歩く音、フォルトナ言葉に冒険者の1人が答える。

「あはは、なるほど。その方達は今なにを？」

「アヒヤヒヤ！！ さあな？ 少なくとも連れの男の方は土ん中、無縁墓地でぐちゃぐちゃに溶けてんじゃねえーのか？ 女の方は…  
… まあ、適当におもちやにした後捨てたからわかんねーな」

「今頃生きてりゃ、スラム街で立ちんぼでもしてんじゃねーのか？  
余所者が簡単に生きていけるほどこの街は甘くねーからな」

「それか、口減らし同然の狩猟で、街の外で化け物の餌になってんよ、いや、惜しい事したな、あの女、かなり身体は良かったしよー」

暗がりの中、冒険者達が笑う。獲物を囲んで、これから先の悦びに身体を熱くする。

彼らは知っている、暴力で弱い者をなぶる昏い快感を。

「まあ、ひどい方たちですね。もしかして、これからわたくしもその田舎臭い不幸な女のように、貴方たちにおもちやにされてしまうのでしょうか？」

「ーヒヒっ、それはアンタの態度次第だ」

だんっ！

突如、ガルドと呼ばれていた大柄の男がフォルトナの細い肩を掴み、石壁に叩きつける。

背中を強く打ったフォルトナがけほつと、肺から息を絞り出す。

「ケホ、ーあら？ 案内してくれるのではなかったのですか？ ふふふ、騙されてしまいましたね」

背中痛みをおくびにも出さず、フォルトナが微笑む。

「うるせえ、わかってたくせによ。ノコノコついてきやがって、誘ってたのか？ ん？」

キラキラと、もう欲望を隠そうともしない目。

ガルドが興奮し、自分の分厚い唇を舐めまわしフォルトナに顔を近づける。

「まあ、愉しませてくれたらあんまひどいことにはなんねーよ」

「あの見た目だけ派手な護衛もとっと逃げちまうし、お嬢様にはふさわしくなかったなあ、なんだ、欲求不満だったのか？」

周りの冒険者たちも息を荒くし、軽鎧の留め金を外しつつ、フロトナに集う。

何度も、何度も繰り返された営み。

シンプルなルール、残酷な法則。

強い者が弱い者の運命を決める、ただ、その法則が淡々とここに  
あるだけー

だが。



「わたくし、昔からとてもとても、運が良かったんです」

「あ？」

生き残る冒険者には、共通点がある。

己を知ること、そして獲物の選定を誤らないこと。

ああ、今日、彼らにはそのどれもが欠けていた。

「でも、あの子はそうではなかった。不器用で愛想も悪くて要領も悪かった。だから、見逃したのに。わたくしの運試しに必要ななかったのに。ああ、トレナ、アナタは本当に運が悪いですね」

「なんだ、この女、頭おかしくなったか？」

「関係ねーよ、見た目は一級品だ、ひん剥いちまえ！」

「この前の緑髪を思い出すなあ！ あん時みたいに殴って泣かそうぜ！ そっちの方が具合いいからよ！」

冒険者達は、気づかない。

自分達は今日、決して強者の側ではなかったことを。

「そして、わたくしはやはり幸運、ですね」

「意味わかんねーんだーよ、？」

最期のときまで、気づかないのだ。

「は？」

「え？ ぶぴゃ」

赤い風。

それが上から吹きつけた。彼らとは違う、良く風呂に入り、香油を嗜む彼の香りが風に混じる。

同時に、血の香り。

さっきまで5人いたはずの冒険者は4人に減った。

「そりゃ、同感だ、冒険者共」

脳天から、踏み潰されていた。

赤い髪の男の足元に、潰れたトマトのようなくちやぐちやが一つ。  
その代わりに人が1人消えていて。

「え、え？ ペニー？ ペニーはどこ、だ？ え？」

「あ、ペニーとかいうのは、これかア？ 随分とまあ、柔らかくな  
つちまつたなあ」

空から降ってきた赤髪の男。

ブーツについたくちやぐちやを壁になすりつけてぼやく。

「は、は？ どこ、から？」

「上、屋根の上だ。気が変わったア。そのイカレ女の思い通りになるのは気に食わねーが他の男のクセー臭いがついた女の隣にはいたくねーからなア」

資格がいるのだ。

この冒険都市で生き抜くには資格がいる。

それは、力、残虐。それが無かった田舎女はこの街に呑まれた、そして王女と英雄にはそれが、過剰に備わって。

「あは、幸運にも、わたくしの英雄の気が変わったようで何よりです」

星型の虹彩が、ガルドを見つめる。

緑の髪は艶やかに、彼女の指がそれを梳かす。緑の髪は同じなのに、まるで違う。

冒険者、彼らが先日いたぶった田舎女と、その女はよく似ていて、

だがまるで違う存在だ。

ああ、今更気付いてしまった。

「あ、ヒ、イ」

ガルド。愚かな彼はふと、思い出した。その眼をどこかで見た。つい最近、見た。

あの、冒険者ギルドで出会った黒髪の冒険者。自分をたたきのめし、見下ろしてきたあの眼。

色街で、女を使って発散したのはそれが怖かった。こちらを生き物とすら見ていないようなあの眼。

黒髪の冒険者と、今こちらを見つめる緑髪の女は同じ眼をしていて。

「ひ、お、同じ、目…… う、動くな！ この女がー」

ガルドが、突如現れた赤髪の男に叫ぶ。そうだ、この女を人質に、人数はまだ、こちらの方が上で。

「悪いな。あんま騒ぎは起こしたくねー。目撃者も、生存者も必要ねえよなア」

「はい、誰にもバレないと思いますよ、幸運にも」

「え？」

もう、誰もいなかった。

数年行動を共にしたパーティメンバーは、首が枯れ木のように折れてたり、何故か真っ二つになっていたり、壁のシミになっていたり。

赤い髪の男が、手をパンパンとはたきながらこちらを向く。

「だとよ。うちの幸運の星がそう言った。まあ、なんだ、女の趣味が悪い者同士、同情はするぜ」

「は、え？ 死、しんで？ え？」

ガルドの頭の中から緑髪の女のことにはもう無い。何が起きたのか、何が起きようとしてるのか、それも理解出来ない。

「遅っ」

赤髪の男の腕が、ひゅっと振られて。

「ひゅっ」



何もわからないまま、ガルドの首から上は壁に叩きつけられてペー  
ーストの仲間入り。

冒険者の血肉が、路地裏に染み込んで、ひとつになった。

英雄の、圧倒的な暴力。

資格は充分。

「あーあー、やっちゃまったよ。目立つなとかいざこざはダメって言  
つてた瞬間にもう帝国初キルかましちまった。装備やら人相、身体  
つきから、まー、冒険者なのは間違いないなア」

返り血一つ浴びずに、彼らを始末したウイスが辛うじて残ってい  
る死体を足蹴にしながら眺める。

「ありがとうございます、ウイス。もう少しで手込めにされてしま  
うところでした」

「うるせー、バカ女。わざとてめー男を煽って誘ったろ？ こいつら、そんなに気に食わなかったのか？」

「いえ？ 特に」

王女は静かに笑う。

それは英雄にも触れざる彼女だけの郷愁。

「ーあつそ。あーあ、ぐちゃぐちゃじゃん。死体どーするよ」

「んー、どうせわたくしの幸運で、わたくし達に影響が及ぶ形でバシることはありませんけども、確かにいたずらに死者を野ざらしにするのはよくない…… あ、いいものを見つけました！」

とてとて、彼女が血溜まりを跳ねる。

おぞましい幸運は、血の飛び散り方も歪める、彼女のスカート、ローブ、血の一滴たりとも彼女に触れることはない。

大きな鉄の箱。

ゴミ箱、帝国が進める都市衛生計画により、各所に存在するそれには冒険都市の代謝物が集められる。

ならば、これも、その代謝の結果だろう。

「おー、都市運営のゴミ箱か。すげーよな、こつ言つの設置出来る所に国力の差を感じらァ」

「ええ！ 灰は灰に、ゴミはゴミ箱に。きちんと片付けておきましょー」

フォルトナがくるくる回りながら回る。

「え、誰がこのぐちゃぐちゃ触んの？」

「それはぐちゃぐちゃにした人でしょ？」

ゲーツと顔を歪めるウイス、それを見てフォルトナは笑っただけ。

しばしばウイスがため息をついて、死体を回収し始めて。

風が吹く。

フォルトナはふと上を見上げる、昏い路地裏でも視線を上に向ければ、あの市場から見えた青空が見える。

その青さは、彼女の幼い頃。生まれた時を全く同じにした双子の姉と眺めた空とも同じ色。

「さよなら、わたくしのー」

「……なんか言ったか？」

「いえ、きつと貴方の気のせいですよ、ウイス」

彼女はもう止まらない。

止まる理由など元からなく、そして今この瞬間に彼女を止める事が出来たであろう可能性も潰えた。

「ねえ、ウイス」

「あ？」

「ヒトは運命の外側に出ることは可能だと思いますか？ 課せられた使命、望まれた役割、その履行を投げ出す事が出来ると思います

か？」

それは彼女の宿痾。幼き頃に気付いた世界に対しての反骨心。

己の片割れは外側に、行けなかった。

その身に刻まれた凡庸、無能ゆえに世界に敗れたのだろう。

同情も憐憫もない、なのに空寒い虚しさがフォルトナの空っぽの胸の中を行き来する。

4277

「……知らねー、どーでもいいな」

「そうですね」

己の英雄の素っ気なさ、それはフォルトナにとって心地よいものだ。

「でもな」

英雄の言葉が続く。

「うん？」

王女が首をかしげて。

「俺サマア、今の状況が運命だってーんなら。お前のバカ霸道、イカレポンチに付き合っのが俺サマの運命だってんなら、まあ、あれだ。今んとこ悪くねえ、割と楽しんでっから」

「あは」

ぶっきらぼうな言葉、フォルトナは気付かない、自分が今、久しぶりに心の底から笑ったことを。

「もう、わたくしのこと好きすぎでしょう、ウイス」

「ウザ」

チヨンチヨンとウイスを肘でつつくフォルトナ。心底ごぞごぞな顔をウイスが浮かべて。

そんな己の英雄の服の裾を、フォルトナが掴む。

じつと、星型の瞳が赤い瞳を捉えて。

「ーわたくしは外側に行きます。運命を放り出し、わたくしを、この幸運を試し、この奈落のような世界で生きていく」

英雄の裾を離し、路地裏の外を眺めて、己の胸に手を合わせて目を瞑る。

脛の裏には、あの金色の美しい髪が靡いて。



「ああ、楽しみです。竜よ、偉大なりし蒐集の竜よ。待っていてください。試してくださいな、わたくしを。わたくしは挑みます、世界そのもの、この世を構成する概念の証である貴女へ」

「うわー、なーんかへんなスイッチ入ってんなア」

「うるせーですわ。さあ、狡猾に周到に臆病に冷静に傲慢に尊大に行きましょう。我ら、ヒトであるが故に」

にいつと、フォルトナが笑う。

空へ、細い手を伸ばし、手のひらを広げて。

「叶わぬ空へ中指を立てに行くのです」

一本指を、空へ。

「ついていくさ、王女サマ」

「よろしく頼みますね、英雄さん」

がたん、いつのまにかウイスがゴミ箱の蓋を閉める。赤いシミはそのままに、肉片は全てあるべき場所に。

「では、我が麗しの王女サマ、どこから始める？」

「アハ、そうですね、ではまずは願いましょう。んー、そうですねえ……」

人事を尽くして天命を待つ。フォルトナにそれは適用されない。人事こそが、天命となるから。

「竜、竜殺しによって変わりつつある彼女。ええ、ヒトに近くなっているのなら、そうですね、迷い、戸惑ってもらいましょう。ああ、きつと叶います、幸運にも」

竜を揺さぶる、ヒトに近くなっているのなら、竜殺しがその原因ならば、なんて簡単な隙なのだろう。

国を墮とした女は、竜をも墮とすのだろう。

「これから、竜と竜殺しはすれ違つ、なんてどうでしょうか？」

彼女が願うのなら、それはきつと叶うのだろう。

ああ、幸運にも。

「ねえ、ウイス」

「なんだよ、フォルトナ」

空高く、青く。

「たのしみですね、竜祭り」

フォルトナのぼっけんが始まる。

……

…

80話 フォルトナ・エクスプローラー（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを「こ覧くだ  
さい！

## 81話 竜と正義

……  
……

「……………時に、ナルヒト。貴様、この街に来てから何度死にかけたのだ？」

ドラ子が椅子に深く腰掛け、長い脚を組み替えながら呟く。

少女の姿に変わってはいるが、その目つきは普段の大人の姿と変わらない。尊大な態度が異様に似合う。

「え？ ああ、えーと……………」

遠山は指折り数え出す。

なんか考えてみるとここにきてから危ない目にしか遭っていないよ  
うな気がするも、死にかけたというところ――

「だいたい、3・4回か？」

直近の白蛇女との激闘、騎士団とのいざこざ、あとはストルとの戦  
闘、そして、ドラ子との出会い。

冷静に考えるとやべえな。遠山はふと振り返った自分の冒険を思う。

「ほう、なるほど。なる、ほ、ど。聞いた話だが、天使教会とも  
やり合っていたな。ファランに聞いたが、天使教会でも最優と呼ば  
れた剣の一振りとやり合った、とか」

蒼い瞳が、水色の髪の少女を映して。

「最優の……？ あー」

「……………トオヤマ、何か？」

じどりと、遠山の隣に立つストルが静かに視線を傾ける。

「いや、そういえばお前も結構すごい奴だったな」

「ふっ、そういえば、は余計デイスよ。私の審問官殿」

ストルがふにやりと笑う。身体の動きに合わせて彼女の流水のような水色のポニテが揺れた。

「……………」

ドラ子がじっと、遠山に笑いかけるストルを眺めて。



「んん？」

おかしい。今度はドラ子が黙ってしまった。さっきまでなんやかんやいい雰囲気だったのに今度はまた違う感じで雰囲気が悪くなり始めている。

もう、なんもわからん。遠山はアットホームな引越し初日という理想を諦めた。

「私の、審問官、か。騎士よ、随分と貴様、中々に面の皮が厚いと見える。ふかか、ヒトの業よなあ」

「お恐れながら、いと貴き蒐集の竜様、我ら騎士の憧憬の貴女に申し上げます。何が仰りたいのでしょうか？」

2人とも、声色は穏やかだ。

ドラ子の声は穏やかな海の底を思わせる雄大さを。

ストルの声は早朝にだけ現れる朝露が歌うような可憐さを。

「はっ、知れたことよ。オレの友を手にかかけようとして、まあ随分と馴染んでおるようだな。我がメイドに聞いた。貴様、ナルヒトを殺しかけたようじゃないか。小賢しい副葬品と、ちんけな秘蹟でな」

海は簡単に荒れ始める。

竜の声、口調こそ穏やか、しかし有無を言わせない迫力が込められて。

「あー……」

遠山は思い出す。なんやかんやで飲み込んだ事実。ストル・プーラ、彼女に殺されかけたということ。

まあ、確かに割とノリで受け入れていたものの、考えてみれば――

「そーいや、ストル、お前最初敵だったな」

おちつけ、冷静に対応しろ。

遠山はドラ子の声がどんどん低くなることに冷や汗をダラダラ流しつつ、表面上はなにも気にしてないように頑張っ  
て振る舞う。

「……悪いことをしたとは思っています  
デイス、あの時の私はあまりにも視野が狭かった、デイス」

「知性が……嘘だろ」

「怒りますデイス」

ストルが賢い。ということはつまりこの状況は危機に近いものだということだ。

「ふかか、随分とまあ、仲が良いのだな」

「ッ」

「うお」

その危機が、ふっと笑う。

それだけで、ストルと遠山を質量のある圧迫感が襲う。竜、上位生物にのみ許されたためちやくちな存在感。

縦に裂けた虹彩、蒼い竜眼がスウツと、細められていた。

「ああ、ナルヒト、楽にせよ。別にこれは貴様に向けたものではな

い。知っているさ、貴様がくだらぬ嫉妬などが嫌いということはない。

ふっと、遠山に対する圧が嘘のように消える。胸を抑えられたような圧迫感、手の痺れ、全て、なく。

コロコロとドラ子の顔は当たり前前の少女がわらうように朗らかだ。

「ーえらく、竜に気に入られておいでで、審問官殿？」

「うるせえよ」

冷や汗をかきつつも、ストールが戯けて視線を遠山へ。

竜に睨まれてなお、まだ割と余裕がある辺り大概な存在だ、遠山は改めて第一の騎士の格を理解する。

ストルもまた、特別な――

「騎士、単刀直入に言おう。貴様、よくもまあオレの友を殺しかけておいてぬけぬけと、其奴の近くにおるものよな」

手入れされた指の爪をいじりつつ、しかし、竜の瞳は騎士を捉えて離さない。

「いと尊き蒐集の竜よ、何がおっしゃりたいのです？」

騎士の澄んだ湖のような瞳もまた、竜を映して揺るがない。

「不愉快だ、そう言うておる。繰り返すがこれは嫉妬ではない、貴様が妙にナルヒトに近いのも、ナルヒトが妙な信頼を貴様に寄せていることも関係ない、嫉妬ではない、ないのだぞ」

「ええ……………」

ほんとにいい？ と聞きたくなるドラ子の言葉。だが秀困氣的に茶化せる感じではない。

「不愉快、ですか。であるならばお恐れながら竜よ、審問官の側仕えとして私も貴女に申し上げても？」

「ほう、いいだろう、オレの威圧を喰らうて平静を保つその意気に免じよう」

竜の静かな怒気を真正面から受け止めつつ、ストルは平静を保ったまま。

水色の瞳が、僅かに狭まめられた瞼によって薄く覗いて。

「竜よ、竜殺しに対する初見での対応がお気に召さないと云つならば、貴女はどうなのですか？」

「……………なに？」

ドラ子の怒気の濃度が、むわりと濃くなった。

「いえ、友人として、ええそう、ただの友人として貴女が私の審問官をご心配なさるのはよく理解しました、確かに貴女の言う通り、私は彼を一度は殺そうとしましたから」

ストルがブーツの靴底で磨かれた木のフローリングを叩きつつ、机の上にある小さな観葉植物の葉を撫でる。

細い指が、つーつと葉を抑え、その上を滑って先端を弾いた。

「ならばー」

「ですが、竜よ。それは貴女も同じでは？」



竜の言葉を、騎士が遮る。

首を傾げるストル、流水のように滑らかに動きに合わせて動くか彼女のポニーテールがしゃらんと揺れて。

「……………なんだと」

とん、とん、とん。とんとんー！。ドラ子の机を叩く人差し指の動きが、止まった。

「黒髪の冒険奴隷である彼を、貴女は殺そうとしたはずですよ。同じじゃないですか、私たち」

クスリ、ストルの喉が愉快げに鳴る。

水色の瞳はいつしか、濁っている。山奥の貯水池、その底に溜まり切った泥と藻を混ぜ込んだような、そんな目だ。

「あ、あの、ストル？ ストルさん？ お顔、お顔がね、なーんかとても怖ー」

なにか、まずい。遠山がストルに声をー

「審問官殿、今は私と竜様のお話ですので」

「あ、はい」

ニコリと微笑むストルの笑顔、いや、違う、笑っていない。ニコリと閉じられている瞼、それが僅かに開かれ、ドブのような瞳が覗いている。

ドラ子や人知竜がたまにする、笑顔なのによく見ると全く笑っていないあの顔だ。

遠山をしてもうなにも言えなくなる何かがあった。

怖いからもうしゃべるのをやめた。

「竜様、私と貴女は同じですよ。立場が少し異なるだけ。貴女は友人として、私は側仕えとして。互いに竜殺しのことを案じています」

愚かな少女は、生まれた時からある業を背負っていた。

連綿とヒト、人類種の中を渡り歩き時代の節目に顕現していた種のシステム。

7つあるシステムの内の一つ、苛烈で強力、故に狭量でもあるそれ、  
”正義”。

「私も、心配なのです。竜よ、貴女は私の審問官を一度は殺そうとした。元来、暴力と支配が欲求として存在する貴女が私の審問官に固執している。ええ、彼の護衛を仰せつかった身としては、貴女は立派な脅威です」

愚かな少女は、教会の中に己の正義を見出した。それを成すこと、それを守るこそが絶対不変、この残酷で曖昧な世界の中で唯一信じられることだと。

そして、少女はいつしか教会最優の剣となり、その正義は更に固く、そして歪んで形成されていた。

正義の依代、幼体は歴代皆、こうして内側から蝕まれ、システムに成り果てていく。

彼女はその愚かさゆえに、正義の侵食は比較的緩やかではあったが、いずれストル・プーラも完全に”正義”の容れ物に成り果てる――

――そのはずだった

「私には義務がありません、私は私の審問官を失うわけにはいかないのです」

真っ直ぐに、ああ、しかしその中にあるものが澱のように滲み出ている淀んだ瞳で騎士が竜を見つめる。

「……このオレが、ナルヒトを害すとも？」

「それが貴女様の、竜の本質であることは確かかと。貴女は決して……ヒトではないのですから」

ストルの言葉、僅かに言い淀んで放たれるそれが竜に届いた。

時間にしては数秒の沈黙、だが、遠山にとっては馬鹿みたいに長い静寂。

部屋の中を滞留する空気たちすら、この部屋にはいたくないと言わんばかりに彼らが流れる音が聞こえてきそうな、そんな静けさ――

「……………懐かしい香りだ。これは、どの竜の記憶だろうか」

穏やかな、声だ。

竜の柔らかな視線は、ストールを見ているようでその実、何かもっと遠いものを見つめているような。

悠久の時を生きる上位生物の眼差しは、ヒトのそれとは本質的に何かが違う。

「……何か？」

ストールが眉を吊りあげる、ドラ子の予想外に穏やかな反応に毒気を抜かれたようにその瞳から濁りが消えて。

「少女の騎士、よくぞ吠えた。ああ、貴様のことは知っている。オレの中に流れる竜の血がざわめくゆえにな。」正義”の器、幼体か」

竜は、その7個ある命の落命と復活を繰り返す生き物だ。

滅びと再生を繰り返す円環の中で、数多のものに触れる生き物だ。

その繰り返しの中、既に滅んだ竜の命と混ざり合うこともある。

古い大戦の時、竜をすら狩る集団の中にもまた当代の”正義”はいただろう。

その鮮烈な竜狩りの記憶は、最も新しき竜、蒐集竜、アリス・ドラ

ル・フレアテイルにも引き継がれていて。

「ヒトの安全弁、数多の時代とヒトを渡り歩き連綿と引き継がれてきた役割の象徴。ふかか、此度はずいぶんと、まあ、生意気にもまっとうに育っているではないか」

「なんの、話をしておいででしょう」

ストルの言葉に、ドラ子がふふんと笑う。

「貴様の話だ、正義の幼体。古い記憶、あ奴らは皆、盲目的で、愚かだった。だが、貴様は違うと言っておる、ああ、でも、昔も似たようなのが1人……」

「古き竜のお話を聞けるのは騎士としてこれ以上ない喜びです」



「ハツ、賢しらに喋るではないか。盲目的に正義を求め、それを為し、果ては正義の人形となり朽ちる、ああ、貴様の言う通り、オレはヒトではない、だがそれは貴様もだろう。ヒトを超えたナニカ、正義の容れ物よ」

竜の言葉に、ストルの一切の動きが止まった。

蒼い竜眼、深海の奥底にて湧く火山のように揺めき、蠢いて。

「貴様は、ヒトではない。定命の身体に、不滅の魂。数多の肉体を渡り歩き継がれたこの世界の法則そのもの。オレ達と起源を共にしたこの星のルールの一つ。そんなものがオレの友を殺しかけたのだ」

同じだ。

ストルの言う通り、彼女達2人は存在こそ異なるものの似ている。

この世界において、ロール・プレイ役割を担うもの、運命を定められた存在たち。

「不愉快だ、ああ、不愉快だ。貴様、どのツラ下げて我が友のそばにおるのだ。ここにナルヒトがいなければ、消し炭にしてやりたいものだ。よくもオレの友に手を出したな」

故にこそ、竜は怒る。

竜ですら制御できぬやも知れない大きな存在が己の友へその牙を向けたことを。

その場にいることが出来なかったこと。友が、己の手の届かぬ所で死んでしまつかも知れなかったこと。

執着。

竜は己の宝に触れられることを強く嫌がるものだ。

アリス・ドラル・フレアテイル。瞳の中で金色の焰が煌めく。蒼い瞳の中でちらつく闇夜に閃く火花に似ていた。

竜の意に従い、気に入らぬもの、下らぬものを焼きつくす金色の焔がアリスの金のお髪に纏いて。

「ドラ子！」

まずい、流石にそれはやばい。

遠山が竜を止めようとー

「ー確かに私は、一度は彼を殺そうとしました。教会の正義のもとに、それが正しいこととして」

その必要はなかった。

遠山の言葉より先に水色のそよ風が舞ったから。

ピコン

目を見開く遠山、視界にはいつものあのメッセージ、それとー

【 “竜災”の兆候を確認。人軌、”正義”の覚醒が進行しました】

竜、強大すぎるが故に世界はそれに対するカウンターをいくつか用意した。

王国において見出される竜を殺せる可能性があるアイテム、”漂竜<sup>アンチ・ド  
ラゴン</sup>物、そしてー

【 “人軌”正義”、起動ロール、失敗。遠山鳴人とキリヤイバ、  
テダダノタが付近にいる為”正義”の覚醒はこれ以上進  
行しません】

「――冒険者向けの安物市で大銅貨5枚で売っていた安物の剣で竜の焰を斬り払う騎士の姿。」

「私の中には、貴女の言う通り何かが棲んでいます。それは私の悪性、私は昔から善悪をそれに委ねて生きてきました。何も考えず、何も疑わず、たくさんのものを斬りました」

焦付き、先端が溶けた剣、しかし騎士の剣、は竜の焰すら捌き切る。

「教会が用意していた”竜”へのカウンター、そのひとつ、ストル・プーラの役割はそれだ。」

「その刃が、オレの友に向かわぬ保証がない。貴様は貴様を御すこととは出来ぬだろう。オレにはわかる、貴様は抜き身の刃、正義という法則そのもの。貴様はいつか必ず、正義に堕ちる」

竜の記憶は知っている。歴代の正義、その担い手は皆全て容れ物に

堕ちた。

何世代もの時を経て、歪みに歪んだ正義の醜さ、アリスはそれを竜の継がれた記憶の中で見た。

そんなものが己が友のそばにいる。焦燥、アリスを苛立たせるのはそんなあまりにもヒト臭い感情で。

「……竜である貴女の言葉はきつと、正しいのでしょうか。貴女から見て、私のことが気に入らないのも、信用出来ないのもわかり、ます。この身の奥底に、私自身分らないナニカがあるのも」

「――愚かな少女は生まれながらに業を背負っていた。いつか必ず自分は自分の中に業食う何かに成り代わることを。」

それが逆らえぬ己の運命だと知っていた、故に目を逸らした、愚かにまっすぐ他のことに目を逸らし、たま盲目に目の前の正義に従った。

彼女はゆっくりと、愚かなままに、目を逸らしたままに、”正義”に腐る。

それが本来のストル・プーラの運命だった。

そのはずだった。でも、もう違う。

「で、あるならば——」

「それでも」

遠山鳴人の自我、欲望のままに進むその欠けた自我、決して完成しないその自我は、多くから影響を受ける、故にその自我は多くのヒトを冒していくのだ。

「――それでも私は、”トオヤマナルヒトの剣”です。私がそう決めた、私の正義は今、彼の鞘の中にあります」

【”拡大する自我”により、”正義”からストル・プーラへの干渉は失敗しました】

「私は自分で決める、もう二度と他人に、自分以外の何者にも私の選択を委ねることはしません」

既に彼女は教会の正義の剣ではない。

遠山鳴人と同じ、我欲の塊、己で己の人生を切り取り、進み、冒していく者の1人だ。



竜にすら、もうストルの選択を変えることは出来ない。

「……………気に入らぬ、見えぬ者よ、竜の眼を以ってしても奥底を見通せぬその言葉。はあ、まったくどうして、あの老竜といい、貴様といい、面倒な者ばかりナルヒトに近づくのか……………」

目を細め、眉間に皺を寄せるドラ子。

悩む、悩む、竜は悩む。

ああ、退屈なままならば、彼女が彼女のままであるならば不変の生き物、竜そのものままであるならばこんな苦悩はきつとしなかつただろう。

奇しくも、この時、ある場所で蠢く”幸運”の言葉通りに、竜は変わりつつあったのだ。

拡大する自我は、竜をすらー

「騎士」

「は」

「ならばオレも同じことよ。オレは竜、どこまでもいこうと貴様ら  
定命の者と同じ存在ではない。この身には暴力と支配が宿業として  
渦巻く、だがー」

ドラ子。アリス、蒐集竜に与えられた遠山鳴人の友人としての名前。

ああ、それを受け入れた時点で、竜はおかしくなっていた。

「それでも、オレはナルヒトの友人だ。友達は支配するものではないのだ」

竜は己のルールのみに従う。いま、蒐集竜のルールは竜という生き物のルールをすら乗り越えた。

暴力と支配、それに依らぬ他者との理解が今ドラ子のルールだ。

「……………本当に、お変わりになりましたね。蒐集竜様」

「貴様が言うな、正義の幼体」

竜と正義、あいまみえる。

片や上位の生物。世界の概念そのものが生き物の形となった規格外の生命。

片やヒトの中より出し特異点。星が選んだヒトという生き物の生存を確立する為に生まれし免疫システム。

だが、どうしようもなくその両者は今、本来あるべき姿からかけ離れて。

「……貴様を変えたのは、オレの友か」

「貴女を変えたのも、私の審問官でしょう？」

蒼い瞳と、水色の瞳。

互いに移すのは癖つけの強い黒髪の男。さっきから何度も空っぽのコップに口をつけて水を飲むフリしながら場を誤魔化しているちっぽけな男。

「ふかか」

「ふふふ」

顔の良い竜と騎士が同時に笑った。互いに互いを視界に入れて。

「こわ」

え、なにこれ、2人笑って動かねえんだけども。

思わず漏れ出した声、遠山は水差しをようやく手元に引き寄せて水を注ぐ。

「良い、気に入らぬが、資格はある。名前を聞こう」

「ストル、ストル・プーラ。教会の第一の剣、いえ、今は審問官、トオヤマナルヒトの剣デイス」

険の取れた竜の言葉に、騎士が返す。

竜はしばらくの間、眉を顰めてふーっとため息をついた後、何回か小さく頷いた。

「ストル、しばしの間、沙汰を待とう。ナルヒトの剣として貴様がその本質を従えるというのなら、見逃してやらんこともない」

「慈悲深き竜に感謝を。ですが、ご安心を。私は私の審問官を傷付けはしませんので」

腰を折り、左胸に右手を添えて騎士礼。

ストルが視線を遠山に向けて。

「……その、私の審問官というのはやめよ」

竜が静かにつぶやく。

「ふふ、事実ですので」

騎士が、微笑む。

その様子が気に入らなかつたらしいドラ子が真顔になって。

「は？　なら、オレだってナルヒトはオレの竜殺しだが？」

「……………それは、ずるいデイスね」

「なんのマウント？」

遠山が思わず言葉を漏らす。

少し考えるとこの場にいる女、2人ともに一度は殺されかけている。

奇妙な縁だ。自分の目的、たどり着くべき場所に行く、それを邪魔

する者は全部全部始末してきたつもりだった。

例え1人でも、独りのままでもそこに行く決めていた。なのに、  
気づけばどうだ。

「ストル、貴様を下し、首輪をつけたナルヒトに免じてしばし見逃す。だが、距離感を弁えよ、貴様は友人ではなくナルヒトの剣ゆえにな、繰り返すが嫉妬ではない」

「ええ、剣として側に。そこを履き違えるつもりはありませんデイス、偉大なりし蒐集竜、フレアテイル様」

「名前を呼ぶことまで許したつもりはないぞ、ストル」

「失礼を、蒐集竜様」



目の前には、あの金ピカ鎧野郎とクソバカ騎士。最初の出会いは最悪で、でも話してみれば割と2人とも良い奴で。

そんな奴らが言葉こそ悪いものの、少なくとも互いに殺し合うことではなく目の前にいる。

「……間違いじゃ、なかったのか」

人生とは選択の連続だ、遠山は昔読んだ本の内容を思い出す。

自分が今まで下してきたたくさんの選択、そのどれもが100点満点の大正解である自信はない。

でも、きっと後悔はない。自分が選んだ、欲望のままに遠山は全ての判断を自分で下した。

自分で決めて、自分で選ぶ。人にはきつとそれが重要なことなのだ。

「ドラ子、悪い、心配してくれてありがとな。でも、ストルは俺が選んだうちの人間だ。大丈夫さ」

「む……………」

「んで、ストル、ドラ子は確かに俺とは違う生き物だ。でも、俺の友達だ。だから、大丈夫だ」

「デイス……………」

遠山の言葉に、竜と騎士が口を噤む。

「正義の幼体、騎士ストル、オレの友の言葉だ。友達の言葉をオレはよく聞く。なので貴様を認めよう」

「最も新しき竜様、感謝を。彼の剣として謝罪を。貴女が彼の良き友人であり続けてくれることを剣として願いますデイス」

彼の、という言葉を2回も。

ドラ子がまた嫌そうな、家の中でゴキブリを見つけたような顔になる。

「……………ふむ、ナルヒト、こやつやはり少し距離をおくべきではないか？ あの老竜と似たようなメスくさい香りがするぞ」

「メス？ なに言ってんだドラ子、ストールだぞ」

「トオヤマ、その認識はどういう意味デイス？」

神妙な顔でつぶやくドラ子、眉を傾ける遠山、静かに微笑むストール。

綱渡り、本来の運命ならばあり得ない光景がここにある。

既に、メインクエストは崩壊しているのだ。

「お待たせ！　アリー、ストールちゃん、お兄さん、　　レーザーさんのパンが焼き上がったわ！」

かちやり。

最高のタイミング、おそろく測っていたのだろう。ニコが、にぱーっと微笑んで部屋に現れる。

「ナイス、ニコ」

遠山はつぶやく。

ここまでできた。

だから、今は穏やかに。願わくばもう死にかけることなんてないよ  
うに。

心配性な竜の友も、バカの騎士の仲間も、こうしてただいのみあう  
程度ですみますように。

こころのすみっこで、遠山は少し祈る。

本気では祈らない。遠山は知っている、この世には神も仏もない  
ことを知っている、あるのはただ、ただ、クソのような現実だけ。

それはきつと、この異世界も同じだろう。

だから、少し、それでも、少しだけ祈る。

願わくばー、その程度の自由と救いがこの世界にどうかあります  
ように。

## 81話 竜と正義（後書き）

TIPS 装備品

〈ストルの剣〉

ストル・プーラが遠山の一味に加入したのち、遠山とラザールの共有資産からストルに買い与えられた安物の剣。

幅広の刃に持ち易い柄、持ち手を選ばぬそれは工房の新入り職人が数を打つ練習の際に産まれた簡素なものだ。

ストルはその剣を存外大事に扱っていた。

初めてだったのだ、市場に出かけて予算を考えながら屋台を巡る時間も、屈託ない笑顔を向ける同年代の友人も、そして自分を全く恐れない大人の存在も。

## 82話 アリス・イン・デート

「ふむ、やはり面白いな。あのリザドニアンがパン作り、か」

「あ、てめー、ドラ子、もしかして信じてねーのか？ お前、うちのラザールのパン舐めんなよ、起こしてやるよ、パン革命」

「場所を変えて、屋敷の中のダイニングルーム。」

優しく、それでいて重厚な濃い茶色の木材と同じ色で揃えられた調度品。

食卓、円形のテーブルをドラ子と遠山達が囲う。

「ふかか、ナルヒト、其方のやることだ、まあ、期待はしておるよ。だがなあ、オレ、かなり舌が肥えているからなあ。奉仕……いや、ファランの食事は竜であるこのオレの舌もシャッキリポンなのだ」



ふふんと得意げにつぶやくドラ子。

「その表現この世界にもあるのね」

聞いた覚えのある表現に、遠山がぼやく。

竜と竜殺しの呑気な時間、互いに表情を緩めてぼんやりとした時間が流れる。

「り、竜様、あ、貴方のお口に合うか、どうか…… その」

そこに登場する、緊張トカゲのラザール。尻尾はメトロノームの針のようにカチ、カチと直立したまま左右に揺れて、爬虫類の瞳は大きく開かれ強張って。

その手にはおぼんに乗せられた焼きたてのホットドッグが湯気を

立っていた。

「もう！ ラザールさん、さつきからずっとそんな感じなのだよ！  
大丈夫よ、あなたのパン、とても美味しいもの、私、こんなに美  
味しいもの初めて食べたのよ」

「そうだぜ、ラザールの旦那、ルカなんて、この前のホットドック  
食べた日の夜、泣いてたんだぞ！」

「あ、リダこそ泣いてたくせに……　なんか色々つぶやきながらさ」

「あ、てめ、ばらすなよ」

「おいしーよ？　ラザールさんのパン、ね、シロ」

「ぼーのぼーの」

やんややんやと、子供たちがラザールの背中を押ししたり、尻尾を  
撫でたり。彼らなりに励ましているのだろう。

最初の頃より、かなり打ち解けているのがわかる。

「ほう、えらくわらべどもの舌を掴んでいるようだ。のう、騎士ストルよ」

くすくすと、竜がその様子に微笑む。

口元に手をあてて喉を鳴らすその姿、道端で見つけた花に向けてふと微笑みかけるような視線。

だが、ストルの名前を呼ぶと同時に、傾けられる流し目にはもうそんな優しさはない。

ネズミを揶揄う猫のような意地の悪さが、竜の瞳に宿って。

「はい、蒐集竜アリス様」

だが、ストルはどこ吹く風。

上位生物の視線を受けてなお、その心と同じく水色ほ瞳にはなんの揺めきもなく。

「教会の騎士、いや、教会の人間としての貴様に問う。リザドニアンのラザールのパン、このオレが食すに相應しいと思うか？」

「……ラザール異端審問官補佐の腕は確かです。側仕えとして御身に捧げるものとして相應しいものかと」

「ほう、それはたのしみだ」

クスクスと喉を鳴らす竜。

どこかストルとのやりとりを楽しんでいるようにも見えた。

「ドラ子、マジのジャッジを頼む。忬度はいらねえ」

「な、ナルヒト、そんな言い方を、お前は」

遠山の不遜な物言いに、ラザールがワタワタと。

だいたいいつもの光景だ。

「ふかか、笑わせるな、我が友よ。オレは竜、よきものと悪きもの選別者、我が父祖の名に違っても断言しよう。オレはこの判別に貴様への配慮など一切しないことを」

「よしきた。かましてやるよ、ラザールが」

遠山が笑う。

「……ええい！ ” 齒 ” の煌めきにかけて！

ラザールも覚悟を決めたようだ。背筋を正し、蒐集竜の前に膝をつき、おぼんを差し出す。

「ホット・ドッグ、トオヤマナルヒトの知識と想像を、私の持てる技術を用いて再現した一品、天使粉はー」

ラザールの腕前と、遠山のパン文書館。

彼らの冒険の成果を竜に差し出す、ラザールがパンの説明をドラ子へとー

「北領の一級穀倉地帯、” ナミボブ丘陵 ” の畑の中でも上質な小麦から濾された天使粉か。ふむ、生産者はグラハム一家、ふむ、良い、悪くない香りだ。良い仕入れ業者を選んだな」

すん。

ドラ子の形の良い筋の通った鼻がぴくりと動いた。

ラザールの言葉に重なるように、竜の唇が言葉を積み重ねる。

「え、あ」

「おお、マジか」

ラザールと遠山、2人が目を丸くする。

今、ドラ子が口にした言葉、原料である小麦粉、もとい天使粉の産地、生産者、全て正解。

口にするより先に、香りで全てを見抜かれていた。

「それにこの艶、膨らみ、ふむ…… この香り、ほとんど熱によってわからないものになっているが、天使粉と水だけで作れる生地ではないな。天使粉のパンにありがちな酸っぱい香りが微塵もせぬ、くんくん、これは酒精か？ なるほど、麦酒の搾りかすを入れているな？」

「蒐集竜、あーね」

なるほど、蒐集竜。その名前の所以はこれか。遠山は静かに戦慄する。

美術品や収集品に限らず、その価値を見抜く審美眼がある。

香りだけで麦酒の酵母を使用した生地というところまでドラ子はたどり着いた。まだ、一口も食べてすらいないのに。

「初めて見る形のパンだ。ふかか、ナルヒト、貴様、銭ゲバをこの



場に呼んでいたのはそのためか。貴様のことだ、教会を言いくるめ、新しきパンを生み出そうとしていたな」

「お前すげーな」

「ふん、抜け目ない奴め。だが、見れば見るほど不思議なパンだ。これは腸詰めを挟んでいるのか……天使教会の教えが広がっている地域では考えられない発想……新しい」

「コロンプスの卵って奴だよな。言われてみれば簡単なことだけど、ゼロから思いつくのは難しい。パンの作り方まで公的な権力が抑制してんならなおさら、だ」

「ころん、ぶす？ 何かの比喩か？ ふむ、だがナルヒト、貴様の言う通りかも知れん。まあ、だからといって教会を抱き込んでおっぴらに自らの業を認めさせるやり方など、貴様くらいしか思いつくまいて」

「そう褒めんなよ、ドラ子。……うちのパン職人が本気で作った一

品だ。お前の舌にも合う、必ず」

「ふむ、ふむ、まあ、待て。オレは新しきものに目がない。もうちいと見させよ」

ドラ子の目は爛々と輝く。

ラザールは気が気ではないのだろう。

微動だにせず、その場で固まって動かない。

その様子をストルがため息をついて、せめて固まっている尻尾だけでもと、ほぐしてゆっくり床に降ろしてあげていた。

「なるほど、この赤いソースは完熟したポモドロの実か。ふむ、酸味気のある香りを煮詰めることで飛ばしたのか。あれは生食が主流だ、ソースにするのは初めて見たな」

「まだ試作段階だけど、それはケチャップって名前のソースだ。本当なら香辛料をもう少し加えたいんだが、まあ、原価がなあ……」

ケチャップの出来について、まだ遠山は納得出来ていない。

煮詰めることで酸味を飛ばすことは出来るのだが、現代で口にしていたコクとまるやかさがどうも足りない。

やはり、調味料である香辛料の入手が困難というのが響いていた。

「む、そういうことならナルヒト、我が館の備蓄を少し分けてやる  
うか？」

「備蓄？」

「ああ、ファランめが中々こだわる奴だな。地下の倉庫に王国の香  
辛料などがたくさん貯められておるぞ」

「マジ？ 本気で助かるんだけど。後で価格交渉させてくれ」

「ナルヒトなら好きなだけ持っていつでもよいぞ？」

「いや、金は払う。親しき仲にも礼儀ありつてな。俺なりの礼儀としてきちんと払わせてくれ」

「ふむ、ふかか、まあ、そなたがそう言うならこれ以上は言わぬ」

そう言いながらも、ドラ子の目は満足げににこりと傾く。

竜の性質、常に他者を選別、試し続けるのはもはや本能と言ってもいいのだろう。

竜は決して、寄り掛かり続けるだけの者には微笑まない。

「ま、とりあえずドラ子、遠慮せずそれ食べてみてくれ。お前の口に合うんなら、もうその竜祭りに出す商品としての力は間違いないねー」

遠山が、ホットドッグをドラ子に勧める。

「やめだ」

「は？」

「え？」

「ナルヒト、気が変わった。オレはここではコレを口にするのはやめたぞ」

返答は意外なものだった。

だが、ドラ子の表情は言葉と違い、決して険しいものではなかつ

た。

むしろ、満足げに、ニヤリと微笑んでいて。

「気付いたぞ、ナルヒト。貴様、これを竜祭りに出す、と言ったな」

「あ、うん」

「ふふん、読めたぞ、トオヤマナルヒト。貴様、このオレをも抱き込むつもりだな」

4341

「ありゃ、やつぱわかる？」

ドラ子の言葉に、遠山は目を歪めて笑った。

我ながら、悪い笑い方をしているのを自覚して。

「ふかか、わかるさ。貴様はそういう男だ。なるほど、そも今回の

竜祭りはこのオレ、蒐集竜、アリス・ドラル・フレアテイルの再生を祝うもの、であるならばオレはいわばこの祭りの主賓のようなものだ」

「ひひ、竜を始末した奴隷の方は祝ってくれないのは残念だがな」

「ああ、そうだな。その竜を殺した奴隷はそれはもう見事であった。容赦なく猶予なく呵責なく、見事な竜殺しを果たしたものだ。ふかか」

小気味の良い会話に、竜は気分良く舌を鳴らす。

とん、とん、細長い指がテーブルをリズムよく跳ねる。

「……………な、ナルヒト、あ、あまり刺激するようなことは」

「……………デイス」

アワアワするラザールと、ため息をつくストル。

遠山は2人に目配せして、ドラ子に向き合う。

「強欲な奴め、ナルヒト、はっきりいうがこのパンならば恐らく竜祭りでも注目を集めることが出来ると思うぞ。ああ、オレにはわかる、いちいちオレまで抱きこむ必要はないだろうな」

竜はそのパンの価値を既に理解しているようだ。

竜をして、ホットドッグは既にその領域の商品なのだろう。

ドラ子が目を細めて、遠山に言葉を。

「いいや、ある」

遠山はその言葉に首を横にふった。



「ドラ子、俺が欲しいのは完全な勝利だ。勝てると思うじゃ足りねえ、100%、完璧完全最強の勝利が必要なんだ」

まだ、足りない。

ラザールと共に開発し、教会をたらし込んだ。夜の街に出かけて、竜祭りへの参加権利を手に入れた。

遠山はこの場に来るまで、ありとあらゆる状況を積み重ねてきたのだ。

4344

「その勝利のために、このオレを利用すると」

蒼い瞳と、整った唇、愉快そうに歪む。

「ああ、利用する。お前をラザールのパンでねじ伏せる、ラザールのパンの美味さという”価値”、天使教会という”信頼と権力”、そして最後に必要なのがお前だ、アリス・ドルル・フレアティル」

だが、まだ足りない。

遠山にとって、このパン屋クエストの最後のピースはこの世界で出来た竜の友人だった。

「ほづ？」

「ドラ子、お前は広告塔だ。この世界の誰もがお前のことを知っている、みんなお前のが好きで、みんなお前のを畏れている」

それは、現代において生まれた概念。

憧れ、羨望、敬愛、畏怖。

それすらも、消費活動、経済活動として飲み込む巨大に発達した人類社会。

遠山鳴人は、それが生み出した概念を知っている。

「教会の権威、商品の質、竜という広告塔――俺たち、レーザールベーカーリーはこの世界に”ブランド”を立ち上げる」

「ブラ、ンド？」

異世界転移。間違いなく、この男はそれをしてはいけない側の人間だ。

異物として、遠山はこの世界に現代社会をもたらして。

「ああ、もう誰にもリザドニアンのことを馬鹿にはさせねー。ずっと目障りだった。一丁前に差別意識と偏見だけは立派なこのクソフ

アンタジー世界がよ」

欲望のままに。

自分がもたらす概念がこの世界に及ぼす影響なぞ知ったことではない。

ただ、気に入らないものをぶちのめす、その欲望から遠山は目を逸らさない。

「そいつら全部、俺たちのブランドでぶっ殺す。欲望のままに、俺らは気に入らねえもん全部ぶちのめして前に進む。蒐集竜、そのためにはてめーも仲間に必要なだ」

その強欲は竜にすら手を伸ばす。

「ーふかか、貴様の私利私欲にオレを付き合わせるか。定命の者  
「よ」

上位生物の静かな言葉。

ヒトの背筋を震わせ、細胞を硬らせる、そんな竜の言葉と視線。

「ああ、そうだ。付き合ってもらうぜ、アリス・ドラル・フレアテイル」

それをまっすぐ受け止めて、遠山は笑った。

「ン…… ごほん、み、みくびられたものよな、このオレも。ナルヒト、貴様ならば知っている筈だ、オレは竜。貴様はたしかに友だが、オレが貴様のそれに付き合う理由はどこにある？」

ドラ子が、少し目を逸らし、ごほんと咳払い。

こっからだ。

遠山鳴人は緊張を気合いと慣れで押し殺す。

修羅場に慣れた彼の身体はその不快感を無理矢理に、悦ぶべき快樂へと変換していく。

「ナルヒト、オレは竜。ヒトとは違う、自由を許された存在。答えよ、定命の小さき者よ。なぜ、其方の言う通りにオレが動かねばならないのだ」

当然の疑問。

竜を己の私欲に付き合わせる。誇り高く傲慢な彼女は、彼女のま  
まに遠山へと問いかける。

「取引だ、ドラ子」

「ほう」

「友達だから無条件でお前をお願いことができるなんざ思っちゃいねー。だが、交渉の場についてくれるくらいには俺たち”仲良し”だよな」

竜に対しての交渉。

手札は少ない、けれど遠山には確信があった。

「この竜はきつと、自分と同じだということ。」

「ン” ツーー まあ、そのくらいは良いだろう。友とは互いに歩み寄るものだと言うしな。本に書いてあった」

びたんびたん、ドラ子が急に尻尾を生やして床を叩く。

「ラザール、蒐集竜様、尻尾が……」

「頼む、ストル、俺たちは何も見ていない、見えていない。黙っておこう、な？」

尻尾を揺らす竜の姿に、騎士が目を丸くする。影の牙は自分で自分の目を抑えて、力なくつぶやいた。

「ありがとう、ドラ子。そう、取引だ、これはお前にもメリットがある申し出だ。互いにウィンウィンの関係が結べるんだよ、俺たちは」

「……ふかか、良い、ナルヒト。竜をたぶらかす舌を持つ男、聞かせてみよ、其方の謀りを」



竜が僅かに歩み寄る。

遠山はもう彼女の悩みを、彼女の持つ空白を知っている。

金ピカの鎧野郎として殺し合って、ツガイとして見出され、友人として関係を始めた。

彼女の言葉、彼女の態度。

遠山は、ドラ子がかたまに呟くその言葉をきちんと覚えていた。

「ドラ子、まだ”退屈”か？」

「――」

蒼い瞳が、固まって。

「思い返してみれば、お前はよく言っていた。退屈だって。なるほど、たしかにお前ほど強くて、なんでも好き放題に出来たら、そうなるのかもな」

「続けよ」

静かに響くは竜の声。

遠山は向き合ったまま、舌を回す。

「取引はシンプルだ。ラザールベーカーの広告塔をやってくれ。その代わりお前の退屈を俺たちが無くしてやる」

おじけず、不遜に、要求を。

「具体性に欠けるな、どうという方法で、どうという理屈で、その取引

は成立するのだ？ ナルヒト、心せよ、これは竜との問答ぞ」

固まっていた蒼い瞳に映るのは、僅かな怒り。

ああ、竜も嫌らしい。自分の柔らかいところを他人につつかれるのは不快らしい。

「ヒビヒビ、ゾクゾクする目つきしやがって。さっきのストルとの殊勝な態度はなんだったんだよ」

「ふかか、これも信頼よ、ナルヒト。俺と貴様は違う生き物だ。だが、それでもお前はオレを友として選んだのだろう？ ならばそれはオレも同じこと」

笑み。

ギザギザの歯が覗くその笑いは、ありありとひとつの事実を表している。

なんて、顔、なんて、顔で笑うのだろう。

アリスはきつと、遠山の友達だ。でも、決してヒトと並び立つ存在ではない。

遠山とアリスは、決して視野を同じく出来る生き物同士ではないのだ。

「言うてみよ、我が竜殺し。この退屈を、オレの感じる空っぽを貴様がどうしてくれるのだ？ ふかか、ああ、もしや、貴様、オレのモノになってくれるのかや？」

暴力と、支配。

なるほど、遠山は改めて目の前の友人、アリス・ドラル・フレアテイルについて考える。

竜という生き物は、そもそも他者と共存などする必要がない生き物だ。

故に、どこまで行ってもやはり脅威。

恐るべき存在だ。

「いちいち脅かすなよ、金ピカドラゴン」

ならば答えはシンプル。絶対に怖気ないこと、絶対に退かないこと。

怪物種と戦う時と似ている。絶対に心だけは怯えさせない。

竜との付き合いとはつまるところどれだけ虚勢を張り続けることが出来るかにつきるのだ。

「みくびんなよ、ドラ子。お前はもう俺にそんなことを本気で求めたりはしない。お前は嘘をつかない、お前は、竜は約束を違えないんだろ？」

「ほう？ よく覚えていたな」

「忘れるかよ、鎧よろいやロー。ドラ子、言葉遊びをするつもりはない。力を貸してもらおう、お前は俺たちの広告塔になるんだ」

「だから、それがオレの退屈とー」

ドラ子の声が、わかりやすく苛立ち始めて。

「……これは、失敗するかもしれない試練だ」

「……続けよ」

彼女の揺めき始めていた金の髪が、ふわりと垂れ萎んだ。

「俺はここまで揃えた。パン屋の為に出来ること、全てを揃えてここまで来た。そして今、この世界では誰もが知る存在、ハリウッドのスターなんて目じゃねえ本物であるお前を揃えるところまで来た、でも、それでも足りないかもしれないかもしれねえ」

本音を言葉に。

嘘はいらない。

遠山は竜へと必死に言葉を向ける。

ピロン。

【スピーチ・チャレンジ発生】

【”友達をきちんと仲間に誘え”】

昔、出来なかったことを。遠山は今、この世界で。



82話 アリス・イン・デート（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さい！

良ければ下の星で評価お願いします！いつもありがとうございます！  
さい！

83話 アリス・イン・デート その2

「竜が仲間でも、失敗するかもしれない。それほどに難しいんだ、今からやるつもりとしてはよ」

「ほっ」

短い言葉。

竜の興味を引きつつ、かといって嘘はつかず。

正直に、ありのままに、目の前の竜を言葉で口説き落とす。

「退屈だつて？ そりゃ当たり前だ。恵まれた生まれ、存在、力、財力、その他、ドラ子、てめえは持ちすぎている。レベル1000の奴が難易度イージーモードで攻略すればそりゃ退屈だろ」

「ふむ、言いたいことはなんとなくわかる、だが、オレは竜だ。持つモノ、選ばれて生まれし者、それが竜なのだ」

傲慢、尊大。

ヒトであればいつしか社会の中で削ぎ落とされているはずのその性質。

竜は傲慢、尊大であり続けることを許される、誰もそれを咎めることが出来ないからだ。

「アホ、それで退屈だっていつていじけたままなら世話ねえよ。工夫しろ、工夫。人生は少し難しいくらいの方が退屈しなくて済むもんだ」

だが、遠山はそれが出来る。

竜を殺した男、竜殺し。その言葉であれば竜は耳を傾ける。

この奇妙な関係は綱渡りのバランスの上にある。

「ふかか、ならば、オレにどうしろと言うのだ？ やり方を知っているなら教えてもらおうか。我が竜殺し」

愛とも呼べぬ、友情に近いけれども違う、異なる生き物との綱渡りの関係は、遠山鳴人の暴力が竜の生命を奪い取ったことから始まった。

時に相互理解の為には必要最低限の暴力が必要になる時もあるのだらう。

だからこそ、遠山は彼女へこの言葉が言えるのだ。

「俺たちに合わせろ、俺たちと視界を同じに、俺たちと歩みを同じ

に。ドラゴン、お前が人の所まで落ちろ」

ヒイツと、引き攣るような声はラザールのものだ。

ストールですら目を丸く見開いて硬直している。

子供たちは本能的に今は静かにしていようと黙ったまま。

遠山と竜は向き合ったまま、互いを視界に入れたまま動かない。

じっ、じっ、じっ。

彼女の長く整った指が、ただ静かにテーブルを叩く音だけがずつと聞こえた。

「…………貴様でなければこの場で焼き尽くされても文句は言えないな」

長いため息とともに、竜が机に身を預けてしなだれる。

柔らかそうな金の髪がふにやりとドラ子の動きに合わせて顔に被さる。その狭間から覗く瞳はしかし、しっかりと遠山を見据えて。

「だけど、お前はそれをしない、俺を焼いたりはしない」

「ふかか、なんと態度がでかいものよな。のう、ナルヒト、…………このオレに、竜をやめろ、と？」

「いや、違う。お前はお前のままでいい。竜のままで人に寄り添え」

竜よりも、遙か傲慢。

悪びれも、躊躇うこともせず遠山が言い切る。

「お前はこれから、俺たちと目的を共にする。竜祭りの主役であると共に、俺たちのパン屋の広告、CMになる。俺たちと一緒に、失敗する可能性のある試練へ挑戦するんだ」

冒険者の舌が回る。

嘘をつかずに、竜を口説く。

「……………試練」

「ああ、試練だ。退屈してる暇がなくなるぞ」

「……………それでも、オレが退屈したらどうする？」

「そんなときはそんな時だ。別の方法を考える。それにもし、お前が望むんならー」

遠山鳴人が、真っ直ぐに竜を見つめる。

結局のところ、遠山は昔から道の切り開き方をこれしか知らない男だった。

「やるか？ ラウンド2。言ったよな、お前がとち狂ったらいつでも相手してやるってよー」

暴力。いつだって、遠山鳴人の試練の末にはそれがある。この男はそれを振るうことを恐れない。



その素養は少なくともこの生き物、暴力と支配を欲求として備える上位生物、”竜”との付き合いには必要不可欠なものだった。

争いに備えることが出来ない者に、平和が訪れることはないのだから。

「ふかか」

竜が笑う。

縦に裂けた瞳の中に、歪に笑う狐目三白眼の男の顔がはっきりと映って。

「ナルヒト、貴様、やはりアホだな」

「どごがだよ」

ふふつと、笑うドラ子に遠山がぼやく。

ぼやいて、ハッと押し黙る。

蒼い瞳。

空の1番高く、宇宙と空の狭間のダークブルー。その光景をそのまま焼きつけたような瞳がこちらを見ていたから。

「ーああ、其方の言う通り。退屈だ、ほんに、本当に退屈だ。貴様と出会えたあの日から、少しはマシになった。だが、気付けばオレは退屈を患う。……貴様の謀に乗れば、これは治るのか？」

ぞわりとするほど、美しい声だった。

それはきつと、竜の知られざる本音、アリス・ドラル・フレアテイルの本質から湧き出した言葉なのだろう。

「ほんとうに、貴様はオレを退屈させないでくれるのか？ ……ト  
オヤマナルヒト」

竜からの問いかけ。

その瞳は、定命の存在の心を見透かす。

遠山は知らない、竜の性質、ヒトの心を見透かし、誠か嘘かを測る竜眼。

男の心を竜の眼が見つめる。

ほんの僅かにかかるモヤが気になるが、全く揺れずにただそこに在る男の心。

竜は、その揺れない心を眺めるのが好きだった。

「暇な奴ほど人生に絶望するもんだ。働け、ドラゴン。俺たちと一緒に」

その不遜な物言いに、一切の嘘なし。

ただ、ただ純粹に、欲望のままにでた言葉に、竜の瞳に映る嘘はなし。

「ーああ、其方はいつも、その眼をするのだな。前しか見ておらぬ子どものような眼。全くわがままな友人をもったものだ、このオレも」

深いため息。

アリスが遠山をちらりと眺めて、すっと目を逸らす。

そして口を開いた。

「だが、ナルヒト、条件がある。貴様の口車に乗ってやる条件がな」

「あー？ なんだよ、ぶつちゃけ大抵のことなら叶えるぞ」

「……………貴様、老竜と冒険者ギルドに出向いたそうだな」

ぼそりとつぶやいた声には、どこか棘があつて。

「え？」

「とぼけるでない、聞いたのだ。それに、そのストルとも冒険都市に共に出かけたりしているのだろう？」

「あ？ いや、人知竜のは俺、多分意識なかったし、ストルのは買

い出した。出かけるっていつもんでもないだろ」

ケロリと遠山が答える。なんの悪びれもなく。

「……………ラザール、この男」

「すまない、ストル、許してやってくれ。彼はナルヒトなんだ」

無表情のまま、ぼそりと呟くストル。しかしその右手は強く拳を握っていて。

ラザールが真顔のまま、ストルを宥める。もう慣れた、そんな顔だった。

「ラザール君、もしかして今の悪口？」

「…………自分で考えるといいさ」

「え、冷た…………」

遠山の言葉に、ラザールはとりつく島もない。

「…………関係ないが、この季節は良い。ヒナヤ山脈の雪解け水は透き通り、雨が少ないから大河も濁らん。…………中央区の川のせせらぎは美しく、心地よいのだろうな」

「ドラ子？」

ドラ子は目を合わさない。俯いて、机に視線を落としながらぼそり。

「…………それに、市場に出る生鮮食品も美しいものが多い。竜祭り

に出るのだ、このパンの完成のためにも、さまざまな食材を見ることも重要だろうな。……別に関係ないが、オレは食材の目利きもできるのだ」

「……………」

遠山は目をぱちくり。

なんだ、なんの話をしている？ 遠山には本気で竜が何を話しているのか理解出来なかった。

「……………」この季節の日差しは気持ちが良い……………」のだが

「ああ、たしかに気温がちょうどいいよな。暑くもねえし、寒くもねえ」

「……………」竜は、みんなひなたぼっこが好きなのだが」



「ああ、うん、口回ほっ」……」

「……ほっこなのだが」

「……………うん？」

沈黙。

ドラ子がそっと、こちらを見る。

らしくない視線、先ほどまでのドラゴンっぽさはなくこちらの様子を伺うその姿はまるで、友達の誘い方を知らない人見知りか反応を伺うかのような。

遠山の額から、顎を伝うのは雫のような汗。

なんだ？ 何が、何を言われてる？

いったい何が起きているんだ？

遠山は、何も分らない。

残念ながらこの男、人格形成に大事な10代の時期に友達がいな  
い為、こういう機微には呪われているのではないかというほど疎か  
った。

それに、遠山鳴人は自分に価値を微塵も感じていない。

少し考えれば分かること、ドラ子の言葉から自分と遊びたがって  
いる、誰でもわかるようなことが分らない。

そんな事をこれっぽっちも予想することすら出来ないのだ。

だって自分という人間自体には価値がないから。

自分という存在と打算なく一緒に居たいと願う存在などいるわけがないから。

無意識の中に刷り込まれている観念は、彼の思考を歪めていて。

「もう！ お兄さんのおバカさん！ 女の子にこれだけ言わせてるのになんなのかしら、そのお顔！」

「え、二〇？」

澱み始めた空気を、快活な少女の声が晴らしていく。

「え、じゃないの！ 私、難しいことはよくわからないけど、お兄さんはアリーと一緒にパン屋さんをしようとしてるのよね？」

「あ、はい」

ずいっと、遠山に詰め寄るニコ。

遠山は、かくりと頷くだけ。

「それで、アリーはね、それを手伝ってくれるってゆってるの！  
ここまではお兄さん、わかりますか?!」

「は……い」

え、手伝ってくれるの？　そういう流れになっていたのか？

誤魔化しつつ、頷く。遠山の油の切れた人形のようなぎこちない  
首の動きに、ニコが眉を吊り上げた。

「わかっていませんね！　そのお顔は！　もう、アリーもアリーよ

！ お兄さんの気を引きたいからって意地悪なこと言ったり、デートに行きたいからって条件とか難しいこと言ったり！ もっと素直になるべきなのだよ！」

「ふか？！ ま、待て、ニコよ！ お、オレはそんなこと一言たりとも！ そ、そもそも、でーとは！ あれだ、友達ではなく、こいびとがいくようなものだ和本でー」

しゅばつと、次はニコがアリスへと詰め寄る。

ニコにとって、アリスは竜ではなく、アリーという年の近い女の子のお友達だ。

生来の陽の気質に、陰湿な男と、めんどくさい竜は狼狽える。

「言いましたア！ 私、バカだからアリーが竜とかそういうの分らないけど、貴女はとてもいい人だよ、だから素直になればお兄さんは必ずあなたのお話を聞いてくれるのよ！」

「う、む、む」

「それと、お兄さん、やっぱりでも鈍すぎだわ！ お友達にお願い  
ごとをしてるなら相手がして欲しいと思ってることを考えて寄り添  
うことが大事だと私は思うのですが！」

「はい…… ぼくもそうだと思います」

正論の極み。

中学生以下の少女に人間関係でガチ正論を喰らうと成人している  
遠山からすると結構きつい。

「おお、さすがニコちゃん。あのトオヤマがシオシオに」

「あの歳である歳の女の子に説教されるのは成人男性としてキツいだろうな。だが、ナルヒトにはいい薬かもしれん」

「はい！　ということまで！　これからお兄さんとアリーはお出かけに行ってきてください！　これはジューギョーインからお兄さんへのお願いです！　聞いてくれますか！」

「はい……　バカで鈍くてすみません……」

「オレ、オレは、別に、そういうのでは……　ナルヒトに、そういうのは嫌われてしまう……　友達だから、その……」

しおしおしている根暗な男と、うじうじしている情緒不安定な竜、陽キヤには勝てない。

「いーから、いってらっしゃい！　お家のことは私たちでおそーじしておきます！」

ドアをがちやりと開いてニコが急かす。

「はい…… ドラ子、とりあえず行くわ。ニコが怖い…… ガキに怒られるのキツイわ」

「……定命の者の成長はほんとに早いものなのだな……」

一応は竜殺しと、上位生物がぽてぽてと促されるままにニコの言う通り立ち上がる。

「お夕飯までには帰ってきてね！ あ、お兄さん、アリーをきちんとお家まで送らなきゃダメよ」

「ウィツス」



「む、む、……邪魔をした。ナルヒトの一味よ。……それと、ニコ。手間をかけた」

「なんのことでしょうか！　アリー、少しいいかしら」

むふーっと、腰に手を当てて鼻息を吐くニコ。すすすつと、ドラ子の近くに歩み寄り、声を響める。

「ゆるす」

式により姿を変えていつもよりは幼くなっているとはいえ、アリスの方が身長が高い。

すつと、しゃがみ込み、アリスがニコに耳を寄せる。髪の毛のふさから斜め下に生えている角が当たたらぬように身を擦らせて。

「お兄さんね、悪気はないの。ああいうヒトだから、貴女のことを嫌いとかではないのよ。……少し目を離したら、どこかへ行ってしまういそうなヒトだから、貴女も、あの人の重しになってくれたら嬉

しいな」

それは、少女でありながらどこまでも現実を見据えている女の言葉だった。ある意味ニコ、彼女こそがこの連中の中でもっとも、遠山鳴人という男の本質に感じていたのかもしれない。

一瞬、ドラ子が、竜が、目を見開いて少女の顔をまじまじと見つめる。

クスリ。

桜色のツヤツヤの唇に細い指を立ててしーっと、ウィンクして微笑む少女。

それは、竜の眼を一瞬とはいえ奪うほど、女性的な魅力、可憐さと艶美さと、そしてスパイスとして打算的な色を持つもので。

「……ニコ、貴様…… ふかか、定命の者とは、ふ、ふふふ」

アリスが、口角を上げる。

定命の者。

死を定められ、生を制限された小さき存在。だが、それ故に竜からしてみればそれは信じられないほどの変化の可能性を秘めたものかも知れない。

呑気な奴が声を上げる。

アリスはニコを見つめた後、小さく頭を下げてその場を去る。

「ドラ子、先出てるぞー。すまん、ラザール、ストル、家のこと少し任せた。少し出てくるわ」

ある意味一番呑気な奴が、呑気な声をあげて。

「ああ、任せてくれ。ナルヒト」

彼のこの世界での最初の友がため息をつき。

「……お気をつけて、トオヤマ」

彼の騎士が、見送る。僅かな湿気を伴う声で。

「む、待て、ナルヒト、オレもすぐいくぞ」

アリスはニコを見つめた後、その場を去る。

彼女はわからなかった。自分の頬がなぜか、どうしても緩んでしまふ理由が。

「行ってらっしゃい、アリー」

少女は年上の金髪の友人を見送る。

願わくば、重しに、枷に。

あの遠い場所だけ見つめて、いつのまにか居なくなってしまいうな人。

物騒で、恐ろしくて、でもとても優しい男の人を少しでも繋ぎ止めるために。

自分ではきつとなれないそれに。

――貴女がなってねと願いながら。

……  
……

「終わった？ 終わったのよね？ 隣からさー、犬も食わないような痴話喧嘩聴こえてきてたけど、終わったのよね？」

「がちやりこ。」

遠山と竜が去ったのち、ダイニングルームからリビングへと繋がるドアが開く。

白髪糸目の主教と、金髪小柄の聖女。どさくさに紛れて身をひそめ、竜が帰るタイミングを見計らっていた彼女たちが疲れた様子で現れた。

「あ」

ラザールが声を漏らす。すっかり忘れていた。

「ラザール審問官補佐、私たちのこと忘れてた？」

じつり。

無表情の聖女の視線にラザールの尻尾がピンと立つ。

「い、いや、聖女殿！ そんなことはない、ないぞ！」

大きく首を振るラザール、聖女はふうつとため息をつき視線を逸らす。

そしてテーブルから椅子をひいて、主教が座りやすい位置に動かす。

「かーっ、ったく、とんだ面倒ごとに巻き込まれたものだわ。あんの狐目野郎、まんまと教会、そして竜まで抱き込んだわけね」

当たり前のように、聖女の動かした椅子にドカリと座り込む主教。

竜のいなくなった今、もう彼女に恐れる者はない。

猫をかぶるのを一切やめて背もたれに体を預けてのけぞる。

「失礼します、主教様、聖女殿、どうぞ、お口に合えば……」

気を利かせたラザールが、そっと沸かしていたお湯に茶葉を濾したものを差し出して。

「あらどうも、ラザール審問官補佐。貴方あの男の元で働くの勿体ないわね。教会の”羽”にはまだ空席があるわよ、影の牙さん」

ティーカップを差し出したラザールの手首を優しく巻き取るように掴む主教。



糸のような細い目から覗くアメジストのような紫瞳がラザールを見つめる。

彼女もまた、人たらし。沈黙と雄弁、そして所作でヒトをたぶらかす方法をよく知っている。

その才能と与えられた秘蹟により平民の出でありながら若くして権謀渦巻く教会の頂点に上り詰めた女だ。

「ごほん！ 主教様、既にラザールは審問会のメンバーデイス。貴女の指揮系統にあるのは変わらないはずデイス」

その手管を知っているストルがその場に割り込む。

天使教会の権力、主教派、騎士派、第二聖女派。分立しながらも絶妙なバランスで成り立つ彼女たちは互いに互いの手の内を知り尽くしていた。

「……1番の驚きね、ストル。貴女、考える頭が出来てるじゃないの」

「……主教様、勿体ないお言葉だが、影は既に溜まる場所を選んでる。我らが竜殺しと教会の蜜月が続くように努力させてもらおうよ」

調子を取り戻したラザールが、すっと主教の手を振り解き、己の胸に手を当てて腰を曲げる。

細められた糸目が静かにラザールを見つめて。

「かーっ、聞いた？ スヴィ、けったくそ悪いわー。ラザールもストルもあの男には勿体ない人材よねー」

「主教サマ、その割には嬉しそうですけど」

「はー？ どこがよ。……あら、美味しいわね、この紅茶」

スヴィの言葉を誤魔化すようにティーカップを傾ける。上品な香りと口当たりの良さに目を開く。

「ナルヒトが選んだ茶葉です、主教様」

「むかつくわー、その無駄にある教養マジでムカつくわー。なんなのあいつほんと」

げーっ、という顔をしつつも紅茶を飲む速度は変わらない。気に入らないが、基礎的な教養を持ち、嗜好品の選定もできる冒険者など、一級や塔級でない限りかなり珍しいものだ。

「あ、ほんと、美味しいですね、主教さま」

聖女スヴィも同じく、目を丸くしてばかり。遠山の選んだ茶葉

に舌鼓を打つ。

「すきしゃ……？　として当然のたしなみ……　とか言っていました  
たデイスね」

「すき、しゃ……？　どこかで聞いた言葉ね。はあ、まあいいわ。  
竜もいなくなったことだし、そろそろ私達もお暇しようかしら」

「あの……　今日はありがとうございました……　最初、騙すよう  
なこととしてごめんなさい」

「ごめんなさいー、おねーさん。おにーさんのお役に立ちたかった  
んだー」

そそそ、ルカとペロ。顔のいい少年2人が主教へ近寄り頭を下げる。  
ポイトラップを仕掛けたことを素直に謝る。

「天使教会、主教様。本来であれば、スラム出身の俺たちなんか

目にかかることも難しい彼方のお方。ご無礼を。ルカやペロをけしかけたのは俺だ。責任は俺にあります」

そんな2人を庇うように前に出たのは、日焼けした短髪の少年、リダ。

まっすぐ前を向き、深々と頭を下げる。

主教が、糸のような目で少年たちを見下ろして。

「あらー、素で可愛いわねこの子達。それにリダ君、ああ、スヴィが助けた子か。ふうん、スラム街の出身か。必要悪とは言え、貴方みたいな人材が埋もれている可能性もある、か」

「な、なにを？」

ぺたり。

手入れされ、紫のマニキュアで彩られた主教の白い手がリダの頬を挟んだ。

「いえなに、トオヤマナルヒトが教会と人生を賭けた契約をしたのは思ったより愚かな行為じゃなかったのかもね。礼儀を知り、責任を取ろうと前に出ることって意外と誰でもできることじゃないもの……でも」

主教が静かに言葉を。

その声に宿る確かなカリスマにリダが動きを止めていて。

「いつっ」

びっつや、どいびん。

主教が少年の額に軽く一撃。

「がきんちよ。責任を取る、なんて言葉はね、もう少し歳とってからでいいのよ。少なくともあなたを子ども扱いしてくれる大人が近くにいる間はね。大人になったらいやでも責任取らされてばかりなんだから」

ニツと笑う彼女の顔に、いつもの銭ゲバ感はない。

ただ、気の良い年長者、そんな姿だ。

「あ、はい……」

「さ、いくわよ、スヴィ。あのパンの法について一度見直し、竜祭り以降の利益計算、商人ギルドとの間に起きる予想出来るトラブル、それに、さっき門まで来てたあの二人組…… どうか見覚えあんのよね。トツスルに調べて貰わなきゃ」

「はい、主教さま」

教会の2人にはやることがたくさんある。だが、思わず舞い込んだ新たな金儲けの予感に主教が頬を緩めていたのをスヴィだけはしっかり見ていた。

「まったく、鍵渡したら速攻で帰ろうと思ってたのに。どーしていつもこうなるのかしー」

「しー」

主教の動きが、止まる。



いつだって、虫の知らせとは予告なく訪れるのだ。

それは彼女の、才能。

彼女自身、制御できぬ、与えられた祝福の発動。

「あ、が、よ……く、る」

「主教サマ……?」

未来を見通す予言の秘蹟。

主教の糸目が、大きく開かれ、紫色の瞳がじわりと歪む。

ああ、縦と横。重なり交わる十字。瞳の形が、十字星に変わってゆく。

未来を告げる十字星が、歪な”幸運”により歪められた未来を警告する。

「な。んで、またーーく、そ、スヴィ、書き写してー!!」

「ーー承知を」

「え、え」

「静かに、ラザール」

「な、なんだ、どう言うことだ？ 主教殿が急に……」

目をぱちくりさせるラザール、静かに、つぶやくストル。

「みな、静かに。主教様のお告げがまいります」

主教を守る教会最強の存在。

第一の聖女の言葉は、何人たりの発言を許さぬ、そんな威圧が込められて――

真上を向いてかたまり、動かない主教。

彼女の口が、ばかりこ、開いた。

「そしてりゅうのおまつりはだいせいこう。ヒトはあまねくひろがり、よろこびのこえがこだまします」

「あかいかみとみどりのかみはこんじきのりゅうにねがいをささげました、いのりとゆめとあこがれをそそぎました」

「こんじきのりゅうはそれをききとどけました、じぶんのやくわりをはたすため、ヒトヒトのこえをきいたのです」

「みどりのかみのおほしさま。にっこりわらってねがいをかなえましたが、ふたつでうまれたおほしさま、こうつんなおほしさまがねがいをかなえました」

「ああ、ここにヒトのやくそくははたされたのです。うばわれたちようつんをとりもどし、このせかいのしはいしやにかえりざきました」

「そして、」  
「んじきのりゅう」はしにました  
「

「ひとりぼっちの」りゅうの「」は、あかいかみのげっごうにやぶ  
れしにました。さいごまで、ずっと、ずっと、いなくなった」とも  
”のなをさげびながら、ひとりぼっちでしにました「

「りゅうのとも」もしにました  
「

「どくをくわさねてしにました。」  
「いっしょに」にきらゅうのよもは  
どくをたべてしまったのです「

「たそかれときにみちるしろいきりが、りゅうとりゅうのともをはなればなれにしたのです」

「りゅうはさいごまで、りゅうのともにあやまりたかったけども、もうそのこえはとどきません。どれほどさげんでも、どれほどひびかせても、とどきませんでした」

「ふたりがいなくなったので”ものしりなりゅう”もこれからします。とうのうえからやってくる、すべてをわらい、すべてをこわす、”ぜんぶをだいなしにするおそろしいばけもの”にやぶれてします、うんめいのせんそうにやぶれします」

「そして、かぜがふきわたります。りゅうがいなくなったのでもうかぜをとめることはできません」

「ああ、かぜがふるくてさびしいものをおこしています。かつてひかりにみせられたくろいとり。かつてひかりをしり、あいをうしな

「たまっかつか」

「もうだれも”かぜ”を、かのじょを、とめることはできません」

「だからきつと、かのじょのねがいがただがきつとかなうのでしょうか」

「かのじょはきつと、たどりつくのでしょうか。よくぼつのもままに、せんぶ、せんぶ——」

「はい、おしまい」

——主教の声が止まる。

それは彼女の喉を通して、世界のどこからから響く声が奏でた”未来”の話。

お告げー

「う、…… スヴィ……？」

「…………… かき、終わりました」

ふらつく主教を支えつつ、スヴィが皮の手帳を主教へと見せる。

「よろしい。……くそ、つタマ痛ッー」

頭を抑えながら主教が目を瞬かせる、ゆっくり、ゆっくり、十字に歪んだ紫瞳が元の形に戻ってゆく。



「主教様、今のは」

「ラザール…… ソファに座るのをお勧めしますデイス、ニコちゃん、みんなもソファに座って目を瞑ってくださいデイス」

ストルが子どもたちを促す。

「ストル？」

ラザールは訝しみながらも、ストルの言葉に従って。

「ストルはよく知ってるわね、……ごめんなさい、ラザール異端審問官補佐。”大主教令”3日使用ー この場にいる天使教会、異端審問会メンバーは5分間前の記憶を全て失え”」

「「「「「あ「「「「「

この場にいた皆が、ポカンと口を開けて虚空を見つめる。

天使教会に属する存在への絶対命令権。

「継承秘蹟、”大主教令”は、遠山の一味を教会の一員だとみなして  
いて。

「さて、これでよし……こどもたちにも適用出来たのはラッキー  
ね。……クソ、ほんとロクなもん見せないわ、この秘蹟」

「主教サマ、予言の他に何が見えましたか？」

目を瞑り、静かに息を立てる彼らの様子を確認したのち、聖女が  
主教へ語りかける。

「スヴィ、すぐに馬車を出しなさい」

「え？」

カノサはスヴィの問いには答えず、部屋の出口へと歩み出す。

その顔、薄く開いた糸目の隙間、紫の瞳は鋭く。

「竜殺しと蒐集竜様、すぐに探しにいくわ。手遅れになる前に」

「――主教サマのお言葉のままに」

彼女だけ、主教だけがわかる未来への焦燥を説明なくスヴィは受け入れる。彼女たちの関係は昔から決まっていた。

スヴィにとって、カノサの言葉に理由などいらず。

「ああ、もう、なによ、この未来…… ほんと、クソ……」

断片的な未来の光景。白昼夢にも近いあやふやなもの。今、この瞬間にも消え始めている秘蹟が見せた未来に、悪態を。

「トオヤマナルヒト、アンタほんとなんなのよ……」

そして、その最悪な未来に関わる厄介は男の名前を吐き捨て、主  
教は行く。

気に入らないし、納得もできないが、彼女は知っている。

自分はもう大人なのだ。

見たくもない未来が見える、見てしまったものの責任を果たすべく、大人である彼女はブツブツ呟きながら歩幅を少し広くした。

鴉  
カラス  
烏

ねえ、やっぱり邪魔だよ、あの秘蹟。



### 83話 アリス・イン・デート その2（後書き）

TIPS ”フレアテイルの大槍”

蒐集竜、アリス・ドラル・フレアテイルに彼女の家族が旅のお供にと送った大槍。武器の骨子は文字通り、彼女の祖父である炎竜の最も堅い脊髄から、十字に分かれた刃の部分は彼女の父である鉄血竜から、持ち手の装飾は彼女の母である花竜から見出されている。

父は言った、世界を知れ、世界はきつとお前を退屈させることはない。

母は言った、世界を愛せ、世界はきつと貴女を待っている。

祖父はなにも言わなかった。既に呆けて、言葉を失い、しかしその強さ故に滅ぶことすら出来ないでいた。



## 84話 アリス・イン・デート その3

所狭しと並ぶ数々の露店。

ヒトの熱量がむわりと溜まり、しかしそれが弾け続けて入れ替わり続ける、そんな空気。

「はいはいはい！ 寄ってらっしゃい見てらっしゃい！ 商人ギルド公認の宝飾品が多数揃ってるよ！ 数は少ないが、なんと今貴族様の中で人気沸騰中！ 宝石の眼を持つ大蛇、ティタノスメヤの蛇皮のサイフも用意してるよ！ ……うお」

「注目！ 竜祭りまであと少し！ ここで一つ振り返り、竜様の物語を聞いていきませんか！ うちの吟遊詩人の歌に感動したならば、この赤々と熟したアポルの実を買って行ってくださーい！ ……あ」

青空の下、帝国有数の経済規模を誇る冒険都市アガトラの市場は  
今日も隆盛。

「王国から家具をたくさん仕入れたよ！ なんでも輸送商人の話ではこれから少し海運の関係で値上がりするそうだ！ お得に買うなら今がチャンス！ ……わあ」

喧騒。

その街の新陳代謝の象徴、所狭しと並ぶ蚤の市。

黒髪の剣呑な目つきの男と麗しい金髪を輝かせ宝飾品のよつな美しい顔をした10代後半ほどの少女が並んで歩く。

威勢よく客を呼び込む商人たち、彼らの啖呵はしかし金髪の少女がその店の前を通るたびに、萎んでゆく。

みな、目を、耳を、口を、金髪の少女、姿を変えて市井に紛れる  
竜の美に奪われてー

「そこゆくお兄さん、少し寄っていかないか!? 冒険者ギルドから仕入れたばかりのエッグアントの蜜から作った霊薬が今ならなんと銀貨3枚であたのもの! 一滴飲むだけで化け物の群れにも突っ込める勇敢さが君のも、……の」

「あー、間に合ってます」

目つきの悪い黒髪の男、遠山鳴人が呼び込みを軽くいなす。バベル街の歓楽街のキャッチをかわすのと同じように頷き会釈しつつ通り過ぎる。

「そこのお嬢さん!! まあ! なんて綺麗な金色の髪なの!! きつと、天使様の祝福ね! そんな貴女にこのブレスレットはいかが? 貴女の金の髪ととてもよくお似合いですよ!」

ふくよかな女商人が差し出した金のブレスレット。やかましいほどに光るのは強い日差しのせいだろうか。

青空市場を訪れ、初めて竜が、ドラ子が足を止める

「ふむ、……贋金か。真鍮を上手く塗つておるではないか。なるほど、市井の者の知恵というわけか」

だが、それも一瞬。手に取ることすらせず、竜の瞳は容易に品の真贋を見極める。

「えっ、なんで」

「売り子よ。構わぬ、許すさ。貴様はこれを本当の金とは一言も言うておらなんだからの、励めよ」

ぼかんと口を開けて固まる女商人に、ニヤリと笑う竜。その荒々しさを内包する魅力に、ぺたんと腰砕けになる女商人。

それを振り返ることもせず、2人は進む。

「へえ、意外だな。ドラ子、お前ああいうの嫌いかと思ってたけど」

「ふん、オレの挙動を見て何かあれば止めようとしていたくせに良く言つな、ナルヒト。ああいうのをあしらうのも、この市場の楽しみ方ぞ。いちいち商人どもの言葉全てにめくじらを立てるほどオレは狭量ではない」

並んで歩く竜と遠山。

拳5つ分離れた肩の距離はたまに近づいたら、遠ざかったりしながらその距離に落ち着いた。

「へーへー、心優しいドラゴンで良かったよ」

「ああ、オレは慈悲深いのだ。ふふん」

「慈悲深い奴は冒険奴隷を殺し合わせたりしないんよ」

「む。それを言われると痛いな。許せ、ナルヒト。暇を持て余した竜の遊びだ」

「うわ、ナチュラルに邪悪」

「さて、本気にするなよ？ 竜ジョークのつもりだぞ？ オレ、きちんと反省してるのだぞ」

少し焦った様子でドラ子が口を尖らせる。

「えー、そうか？　なんか目がドラゴンみ強くてマジそうだったぞ」

遠山は自分でも気づかないほどに、小さく笑った。

「む、イジワルだ、ナルヒトは」

「バカ言うな、俺ほど優しい人間はいねーよ。あ、そろそろだ。うちの商會がやってる露店、この近くの筈なんだけど」

気付けば、噴水のある広場にまでたどり着く。

ニコに追い出された遠山とアリス、2人の目的地はもう近い。

「ふむ、ナルヒトの商売の取引相手か。どれ、どの程度のものか。このオレが評してやろう、ぞ」

ラザールベーカリーの親会社、ドロモラ商会との顔合わせの為に、遠山とドラ子は青空市場を突っ切ってきたのだ。

青い天幕の下、木のラックに所狭しと並べられた装飾品や、民芸品を飾る雑貨屋台。

天幕の外にも客が溢れて、

「……………ん？ すまない、ここは任せた。……………友よ！ 数日ぶりだな。確か宿屋から新しい住居への引っ越しは今日だったな。もう済んだのか？ ああ、そのテラス席にかけてくれ。うちのだ」

接客をしていた顎髭のしぐめの中年が接客を若い店員に任せてこちらへ歩いてくる。

促されるまま、パラソルのついた木のテラスに座る遠山とドラ子。



対面に、ドロモラが腰掛ける。きいっと、木の椅子が鳴いた。

「よう、ドロモラ。まあ、そんなとこ。家の連中に追い出されちまってな。近くに寄ったから、顔を見せに来た」

「ははは、一味の仲が良さそうで何よりだ。あの天使教会の騎士と君たちが私の露店の前で殺し合いを始めたのが夢かなにかだったよ。うな気さえするよ」

顔を綻ばせてドロモラが口走る。

天使教会の騎士との揉め事は、つい最近の出来事だがあれから随分経ったような気もする。

「悪かったよ、あの時は。今じゃストルもうちの優秀な警備員だ。もうあんなことはないさ」

「そう願っているよ。ん？ そちらのお美しいお嬢様は？ トオヤ

マナルヒト、君もすみに置けないものだな、ぜひとも紹介に預かりたいものだが……」

ドロモラが僅かに声色を優しくして遠山の側に座る竜へ視線を向ける。

遠山が、ドロモラにドラ子を紹介しようと。

「指輪」

「うん？」

それよりも先に、竜が唇を開いた。

頬杖をついた竜、その蒼い瞳はドロモラを、いや正確には彼の指に嵌められているソレを見つめていて。

「晩年に数年だけ活動していた宝飾職人”石灯りのエレーナの13作品”の一つ、”指繋ぎの指輪”か。7等級の至宝品だ。ふむ、なかなか珍しいものよ。オレはてつきりエレーナの作品は王国の王家が全て所有しているものと思っていたが」

「え？」

ドロモラが、その言葉に目を丸くする。

「素材は、ふむ。」エレーナの13作品”の基礎、純銀か。ふむふむ、王国の東部、カメオ山地の古いゴーレムから削り出したものだな。大戦期からある格式高い銀だが、その分加工が難しい。ふふん、エレーナめ。やはり良い仕事をする。銀職人の中でもあやつほど銀を慈しむ職人はいないな」

ドラ子の言葉はどこか、そう、何かを称賛するような。確かな敬

意が込められた声色で。

細やかな意匠の施された指輪。

「……………驚いた、トオヤマナルヒト、本当に次は誰を連れてきたんだ？」

ドロモラの額にはぷつりと汗が浮かんでいた。

「ドラゴン」

「……………なんだって？」

呑気に言い放たれた遠山の言葉に、ドロモラがわかりやすく戸惑う。

「良い、ナルヒト。審美眼を持つヒトにオレは寛容ぞ。良きものを

選んだな、店主よ。名を名乗ることを許す、ぞ」

「……おい、トオヤマナルヒト、ドラゴンだと？ ま、まて、君がドラゴンと呼び、この指輪の目利きを行える金髪の女性…… い、いや、だが、数年前に見た時と見た目がー」

うつたえるドロモラ、だいたいその金髪の少女が誰なのか、勘づいているらしい。

勘づいているからこそ、焦り出す。

「ほう？ オレを一度見たことがあるのか？ ふむ、小さき者よ。その審美眼ならば、見た目に惑わされず本質を見抜くことも出来ないはずではないが？」

パラソルが日差しを遮り、彼らに影を落とす。

喧騒の合間の僅かな涼しさの中、蒼い瞳が細められて。

「そ、その眼、まさか……………　――大變失礼を。帝国におわせられるは、金色の御方、貴女様とは夢にも……………」

ドロモラが席を立ち、片膝をついて一礼。

竜へ、首を垂れる。

「店主、貴様、王国の出身か？」

「はい、故あつて貴女の庇護するこの国で商売を行わせていただいております。蒐集竜様の怪物狩りの詩は、祖国の吟遊詩人もよく奏でておりました」

竜の言葉におじけることなく、淡々とドロモラは返事する。

「昔の話だ。店主、貴様オレを一度見かけたことがあると言ったな。

どこで出会った？」

「……エレーナ。彼女の葬儀に、貴方様がフェンネルの花を手向けて下さったあのお姿…… 忘れることはありませんとも」

「……あの時か。なるほど、エレーナの知己か。ならば奴の指輪をつけているのも納得だ。…… 良い職人だった。惜しいよ、良き腕の持ち主は、すぐに天使が連れていってしまふ」

ドロモラは見下ろしながら、その竜の顔に浮かんだ表情はとても穏やかなものだ。

何かを懐かしみ、思う。

偲ぶ、そんな顔。

「それでも彼女はきつと、満足して逝きましたのでしよう。芸術と美の護り竜。貴女様の蒐集品に選ばれた時のエレーナの喜びようと  
いっしょ」

「ふかか。良い、店主。立ち上がり、名を名乗れ」

その商人はすんなりと、竜に名乗りを許された。

それは中々に珍しいことで。

「ドロモラ・バギンズにございます。良きものの護り竜、選別を嗜む尊き竜よ。貴女様にお目通り叶うばかりか、名を名乗れる光栄、嘸み締めます」

「ふかか、ナルヒト。そなたやはり、鼻が効くな。この男ならば、そなたの商売の助けになるだろう」

満足そうに頷くドラ子が遠山に声を向ける。

わかりやすく機嫌が良い。



「おお、まさかの高評価。ドロモラすげえ」

遠山は思ったことをそのまま口にした。

「は、はは。トオヤマナルヒト、お連れがまさか竜様とは思わなかった。キミは全くいつもいつも、この老骨を驚かせてくれるものだ」

「悪気はねえよ。んで、ドロモラ。最後のピースが揃った。ドラ子にはうちのパン屋のCMやってもらおうからよ」

「……ん？」

ドロモラが、笑顔のままにピシリと固まる。

「計画はシンプル。ドラ子ほど素材がいい広告塔ならもうせせこましいことはいらねえ。竜がCMをやるパン屋、これは勝てる！」

「トオヤマナルヒト、少しいかな？」

力説する遠山へドロモラが静かに声を向ける。がしりと遠山の肩を掴み、それから愛想笑いを竜へ向けて。

「蒐集竜さま、ほんのしばしよろしいでしょうか？」

「ふかか、悪巧みか？ 良い、許す。我が友と貴様ならば、竜祭り  
は存外退屈せずにすみそうだな」

ドラ子の快諾を受けて、ドロモラに半ば引きずられるように露店の奥へ促される遠山。

また竜に対しての態度、不敬だとかめちゃくちゃだとか言われるの  
のだろうか――

「よくやった！ トオヤマナルヒト！！」

「おお」

分厚い興奮したおっさんの声を浴びて、遠山は少しのけぞる。

「うは、うはははは！！ 大いなるマーヤジーアの根にかけて！  
まさかあの蒐集の竜を商売に引き込んだか！ 友よ、君ほど罰当たりで大胆な商売人はいないぞ、こいつめ！」

「おお、アンタがその反応ってことは、割とドラ子を巻き込んだのは正解だったみたいだな」

ドロモラに肩をゆさぶられるのを耐えつつ、遠山が答える。

これまでの周囲の反応と違い、竜への大胆な策をドロモラはかなり好意的に評価している。

商人とはこのくらい凶太くないとやってられないのだろう。

「正解どころかワイルドカードさ！ 竜殺しにしか切れない手札、これがスワンプのゲームならイカサマもいいところだ！ 我らが商売と契約の眷属、コトシロですら君には一目置くに違いないぞ！ おっと、ごほん……」

髭をもひもひ揺らしながら、興奮しているダンディな中年はしかし、自分を取り戻したようだ。

咳払いしつつ、表情を控えめにして言葉を綴る。

「まあ、正直なところを言つとだな、君たちのパン屋の計画。少し心配だったのが本音ではある」

「へえ」

「ラザールのパン職人の腕は本物だ。帝都でなうての職人、いや、宮廷パン職人にも引けを取ることはないだろう。それは認めるよ、だがそれだけではやはり、足りなかった」

「……リザドニアンってのはそこまで評判悪いのかよ」

遠山がぼそりとつぶやく。

「気付いていたか。トオヤマナルヒト。君の予想は正しい。リザドニアンに対する帝国の偏見は根深い。これが単なる異種族への生理的嫌悪から来る差別ならまだいいのだが」

「それ以外に理由があるのか？」

遠山の問いに、ドロモラは言葉を澱ませて、そして一言。

「恐怖さ、トオヤマナルヒト」

商人の目、ただ、現実を脚色なく忌憚なく見つめて価値を測るものの目でドロモラがそれを語る。

大戦期にその業の限りをやり尽くした恐るべき種族のことを。

「単純な話だ。”侵略種族、リザドニアン”。記録も記憶も曖昧なかの大戦期に、それでも彼らの恐ろしさだけは鮮明に残っている。多くの国を攻め滅ぼした最恐の種族。種族単位では上位種にすら匹敵する存在だ」

ドロモラが露店の奥の椅子に腰掛け、帳簿に指を走らせながら言葉を紡ぐ。

「種族一人一人の死を、種の記憶として保持し、それを力に変える種族スキル、モンスターと遜色ない見た目に、身体の強さ。ヒュームよりもはつきりと生物的に上位の存在である彼らを帝国は恐れているんだよ」

種族スキル  
フィード。

その種にのみ許された種族単位での固有能力。

竜に近いとされる彼らは、死の記憶を共有し、それを力に変えら  
とされる。

ある者は、憧憬を。ある者は、郷愁を。ある者は、憎悪を。

リザドニアンの誰かが迎えた最期は連綿と受け継がれ拡がり、そ  
してまた別のリザドニアンの力となるのだ。

その恐るべき変容を、遠山はあの騎士たちとの戦いで目にして  
いる。

「帝国は、ってことは、別の国。アンタのいた”王国”では違っ  
か？」

遠山はしかし、ドロモラの言葉から見つけた違和感を口にして。

「ふむ、その辺りの話をしようとするると古い歴史の話になるな。まあ、かいつまんで話せば王国には古いお伽話がいくつかあってね、その中にはヒトとリザドニアンが協力して戦う物語もある。追い詰められたヒュームの国が、リザドニアンの傭兵達と手を結び国を守る話が人気だな」

少し、ドロモラの声色が明るくなる。

「そう、記録に残らぬ”ヒューム人類種の国”、国の名前も、王の名前も忘れられてしまった。わかるのは”勇者パーティ”を庇護し、やがて裏切った国。この帝国と王国の前身はずの国さ。その国の話はいくつかおとぎ話として王国に残っていてね。興味があるなら本を貸すよ」

「そりやどうも。また借りるさ。帝国と王国でリザドニアンへの認識が違うのは土壌の差もあるわけか、単純にリザドニアンを舐めるとか嫌悪してるだけじゃない、ね」

「ああ、その恐怖の深刻さは階層が上がれば上がるほど顕著だ。先



日のレーザーの Coppapan を受け入れたのは市民の中でも比較的貧しい者たちだろう。そういう階層の者は、まあ、正直飢えを満たしてくれるのならば…… という面があったのも確かだ」

ドロモラがちらりと遠山へ視線を向ける。

その意味がわかるか？ とでも言いたげに。

遠山にはその言わんとすることが分かっている。答えは簡単。

テイタノスメヤ。あの怪物の素材を、ドロモラ商会は貴族への商売の足掛かりとして使っていた事実から導かれる答えは――

「竜祭りの制覇には、上流階級からの評価が必要だから、か」

パチン。

遠山の言葉に、ドロモラが指を鳴らして返事する。

「その通り。君が狙う竜祭りでの頂点を目指すのならば、確実に貴族や、それに倣う権力者、有力者、いわゆる階級の高いヒトの層の心を掴む必要があるわけだ。彼ら貴族が、リザドニアンのパン屋など、受け入れるわけがない、そう思っていたのが正直なところ、だった。」

「だった、ね」

遠山は露店の奥の在庫を眺めながら次を促す。

木彫りの馬のおもちゃや、ペンダント。どれも細かい細工が丁寧に施されていた。

王国から持ち込んでいたものだろうか。わりかし繁盛しているところから見るに、露店では雑貨商として、商会ではオークションの取引などでドロモラ商会は運営されているのだろう。

「ああ、だった、だ。再び言おう、トオヤマナルヒト。でかした。」

竜を引き込んだのならば、かの竜が我々に力を貸してくれるのならば、全て解決だ。この国、いや、この世界で最も権威ある象徴が共にあるのならば、侵略種族への差別感情を考えても、お釣りが来るほどのプラス、く、ククククク、ウハハハ、面白い、これだから商売はやめられないな」

「悪い顔してるなー、ドロモラ」

「竜タラシの友よ、君だけには言われたくないものだ、ということ  
で商売仲間として君にはなんとしても竜との良好な関係を維持し  
てもらわなければならない。そこでだ、トオヤマナルヒト、竜様と  
散策を楽しむのなら中央区の大河に向かうといい。アガトラを貫く  
大きな河が流れている場所だ」

「こりゃ、地図か」

ドロモラが差し出した紙を広げる。文字はラザールに手習で少し  
づつ覚えてきてはいるがまだ読めない。

だが、その図面の様子からこの都市の地図というところまでは理  
解できる。

「ああ、赤い丸が付いてあるところだ。ビスエがそこで我が商会の新しい商売を初めている。友好を深めるにはもってこいの余興を用意している。それにあの辺りは街並みも美しく、景観も良い、散策にはぴったりだ」

茶色の紙には、たしかに赤く丸付けされた箇所がある。

現在地である青空市場から、あまり遠くはない、中央区の河川の付近だ。

「どうも、ドロモラ。じゃあ、まあ、竜様の接待は任せてくれ」

「くれぐれも頼むぞ、竜殺し殿。君に”商売と契約の眷属”、コトシロの押印がなされんことを」

ひらひらと呑気に手を振るドロモラに、遠山は少し笑いながら頷いた。

「独特な言い回しだな。あ、そうだ、ドロモラ」

露店から出ようとしたとき、ふと遠山は足を止めて振り返る。

「んん？」

「良い指輪だな、似合ってるよ、アンタに」

ドラ子が良いものとして評したその小さな銀色の指輪、それはとてもドロモラ・バギンズという商人に似合っていた。

「ーああ、ありがとう、トオヤマナルヒト」

ちらりと、指輪に視線を落とすドロモラの目。商人のそれではない。

優しい、ただ、ただ、優しい目で。

ドロモラの言葉を背に受けて、遠山は露店の入り口へ戻る。

するとすぐに、鼻唄を歌いながら露店を物色している竜を見つけた。

遠山の視線に気づいた竜が、ふっと笑って街の喧騒へ視線を傾ける。

「悪巧みは終わったか？ 小賢しいヒュームよ」

「ああ、おかげさまで。気難しいドラゴン」

軽口を叩き合い、2人はまた街の喧騒の中へ。並び合うその肩の距離はほんの少し――

竜とのデートはまだ続く。

## 84話 アリス・イン・デート その3（後書き）

### 指繋ぎの指輪

王国に名高き宝飾職人、”石灯りのエレーナ”が生涯において13個だけ作ったと言われる作品のうちの一つ。

至宝品の7等級に数えられる逸品。

柔らかな純銀を独自の製法で編み込むように繋いだその意匠は指に着けて注意深く覗き込むと、たくさんの指が繋がりに、大きな一つの指となり輪を為していることに気付けるだろう。

エレーナが宝飾職人として活動したのは病で亡くなる数年前、晩年のわずか3年という短い時間のみだった。

傍流ではあるが、その血統から王家の外戚の配偶者として選ばれた彼女はその宝飾職人としての才と業を振るうことを許されなかった。

血の薄い生意気な女に、才覚を許すのは王家の誇りが許さなかったのだ。

だがしかし、”幸運”にも、彼女の才を縛っていた家は、不慮の火事により焼け滅び、”幸運”なことにエレーナだけはその火を逃れ



た。

その指輪は石灯りのエレーナがある1人の男性に贈るために作ったものだ。

”幸運”にもそれは正しく、届けられた。

その指輪に込められた少女だった女性の小さな祈りとともに。

く例え貴方がどこにいても、例え貴方と寄り添えなくても、忘れることはありません。花の香りのする季節、貴方と繋いだ指の感触、その暖かさをく

今、その指輪は王国を出奔した野心あふれる元宮廷商人の指繫いでいる。

もう、2度と2人の指が離れることはないだろう。

85話 アリス・イン・デート その4

…  
…

「綺麗な街だ」

熱籠る喧騒、青空市場を抜けてしばらく、遠山がのんびりつぶやいた。

白塗りのレンガの家屋の並ぶ街の通り、竜と並び歩く。

本で読んだことのあるギリシャのある港町みたいだ。遠山は陽光を受けて輝く真っ白な街を眺めて思う。

「ふふん、で、あろう。アガトラの中央区の街並みはオレもお気に入りで。立地も良く、水と風もよく通る。美しいものは良い」

「へえ」

竜の横顔を見て遠山はつぶやく。穏やかな表情だ、普段のドラ子  
はあまりしない顔。

白い街並みを吹き抜ける涼しい風が、ドラ子の金髪をさらさらと  
梳いていく。

遠山の癖っ毛は剛毛のため、風などではびくりともせず太々しい。

「ねえ、見て、あの女の子……」

「綺麗…… 貴族さまかな」

「お付きの護衛もいるからきつとそうよ、ほら、見てあの目つき、

カタギじゃないわ」

「天使さまのご加護よ。目も蒼で、髪も金のお髪だもの。宝石みたい……」

「黒髪の護衛の方もさすがね。あの目つき。きつと気を張って集中してるのよ」

「やけにこの街は女性が多い。」

すれ違つたびに、ひそひそと声を通り過ぎていく。女性ですらみな、竜の美に足を止めてぼけーっと惚けている。

「ふかか、護衛とお嬢様、か。頼りにしてるぞ、ナルヒト」

「うるせーよ、これだから顔面偏差値高めの奴はよー。たちが悪いよ、たちが」

いたずらげにくすくす笑う竜に、遠山が軽口を返す。

あまりにも存在としての芸術点の違いに少し萎えつつも、遠山は地図につけられた印の場所を目指して、歩く。

「たしか、この辺だな」

「ふむ、ナカ大河の水路か。定命の者の治水の業、なかなかにか力にしたものではないな」

豊かに、流れ揺蕩う。

街並みを抜けるとそこは、大きな川の見える川沿いの通りに出る。

大きなレンガの橋が、いくつか川の流れ、土手に沿ってかけられている。

「すげえな。河川敷もあるんか」

「ほう？ 知っていたか。このアガトラの治水は帝国初期の一大事業でな。初代の皇帝もなかなか苦心していたものよ」

川沿いの通りを堤防とし、土とレンガできちんと河川敷が整備されているその光景に遠山は割と驚く。

「この世界の技術はちくはぐだ。」

遠山のイメージしていた異世界ファンタジーだとだいたい中世ヨーロッパぐらいの文化体系がそのままお約束としてきていたはず。

確かにアガトラの建築様式や街並みは、所々お約束の中世ファンタジーでそのまま説明できる。

だが、そのほか、今日の前にある治水技術や、もっと言うならこの街の地下にあるという下水道、水に関するこの技術の発展が著しい。

もっと、言うなら衛生観念。

ラザールはもちろん、スラムの子供たちですら宿での生活の際に水浴びすることを全く厭わなかった。

身体を清潔に保つ、ということが必要なことだとスラムという社会の最底辺の層にすら行き渡っているということだ。

違和感。

温泉がよく湧き、飲み水にも困らず、治水は行き届き、国民は綺麗好き。

いや、それは、まるでー

「なんとも、ニホン人に都合の良い世界だな。いや、ほんとにただ、都合が良かっただけか？」

古代ニホン語。

目を逸らし続けてきたその言葉に、そろそろ向き合う必要があるのかも知れない。

「……ナルヒト、考えごとか？」

「お、あ、いや、悪い、別に、なんでもないよ」

「ふむ」

ドラ子がゆっくり、目をぱちり、ぱちり。

どこか不機嫌そうだ。遠山がなんとか取り繕おうとして。

その時――



「お！ その美人のお嬢様に、お付きの……えーと、目つきの悪……鋭い御仁！ お散歩ツスかあ？」

カラカラした、どこか軽薄な若い男の声が向けられる。

「む？」

「目つきが悪くて悪かったな。久しぶり、ビスエさん」

ドラ子は目を細め、遠山は手をあげて答える。その声は知っている声だ。

「どつやら、目的地に無事到着していたらしい。」

「へっへっへ、いやあ、ご活躍の噂は聞いているっすよ、トオヤマさん。ありゃ、これまた美りーー いや、美人なお嬢様をお連れで。スミに置けないものツスねえ、まあ、良い顔してから」

ビスエ。

ドロモラ商会の手習で、ドロモラが王国から引き連れてきた右腕の青年だ。

人好きのする柔和で、ヘラヘラした優男。

短く揃えられた茶色の短髪頭に手をやりながらビスエがドラ子を眺めてつぶやいた。

「オレが？ ふむ、オレが美しいことに異論はないが、……良い顔とはどういうことだ？」

ドラ子が、ビスエの言葉に反応する。

「へへへ、すごい優しいお顔でさあ。おっと、これ以上言って逆鱗に触れるのも勘弁ツスね。あれ、そういえばトオヤマさんは今日、お引越しゃったんじゃないスか？」

軽くドラ子の言葉をいなし、ビスエがふにやりとした笑みを遠山に向けた。

「あー、色々あつて今は少し散策中なんだ。さっき、ドロモラのことにも顔出してよ。そしたら、なんか新しい商売始めたから暇だったら見に行ってみろって言われてな」

「ああ、店長から聞いているンスね！ いやいやいや、トオヤマさん、ある意味この商売始めたのはアンタのおかげでもあるんでさあ。テイタノスメヤの素材での上流階級への需要に見事応えていけたもんで、すこーし資本に余裕が出来ましてねえ」

パチンと指を鳴らし、そのあとゲッツ、とばかりに指遊びを遠山に向けながら、ピョウ、と笑うビスエ。

三下感がすごいのだが、不思議とこの青年がやると不快感がない。ドラ子も特に気に障った様子なく黙っている。

ビスエに促されるまま、川沿いの通りから、河川敷へ降りる階段に向かう。

大きな河だ。

流れは緩やかで、水は驚くほどに透明。この立地では生活排水も多少は混じるだろうに、まるで山奥の秘境に湧く水かというほどに、濁りもなく。

「商売の王道である仕入れ取引やらなんやら、有形物のやりとりは店長がほぼ仕切ってるし、自分は少し飛び道具的に新しい事業に手を伸ばしてみようと思いやしてね」

「ビスエさん、新しい商売ってのは、河の近くでやることなのか？」

「よくぞ聞いてくれやした！ ふっふっふ、徹夜して考えたまだ帝国には存在しない新たな商売！なんすよお腹も膨れて、楽しく、簡単、誰もが思いつくようすで、思いつかなかった商売、その名もー」

遠山の問いに、表情をからから変えて答えるビスエ。

河川敷の岸边まで歩くと、そこにはある光景があった。

木で出来た筏が何個も連なり、足場を為して川のある程度のところまで歩けるような堀。

その筏の上に何個か、椅子が並べられている。

ついでに言うと、釣り竿もその椅子にくくりつけられていて――

その光景を、遠山は知っていた。

「これ…… 釣り堀？」

「名付けて釣りぼり……へ？ な、なんでわかったンスか？」

遠山の呟きに、ビスエが目を白黒させる。ぽかんと空いた口は驚きによるものか。

「いや、なんでって。わざわざ河の中にあんな足場作ったり、生簀隔てたりしてるのはもう釣り堀しかねえでしょ」

「えー、なんすか。もうこの商売考えてる奴がいたンス？ クッソー、自分が一番ノリだと思ってたンスけどねー」

ビスエの言う新しい商売とはどうやら、釣り堀のことだったらしい。

ほんとに帝国にはないのだろうか？ 割と誰でも思いつきそうな

……

「む？ ナルヒトは知っているようだが、オレは知らん。少なくとも、つりぼりとやら、帝国ではまだ存在していない商いぞ。この店主、説明せよ、ここでは何をやるのだ？」

だが、ドラ子は知らないらしい。

筏をじっくり眺めながら、はつきりした口調でビスエに問いかける。

「おっと、やっぱりそうつスよね！ フフン、美しく聡明なお嬢様にご説明するとー、ここではなんと、冒険者都市アガトラ中央区を貫くナカ大河を利用した魚釣りをお楽しみいただけるッス！ 大物を釣れた人には景品も用意してるんすよ！」

「ほう？ 釣り、とな」

「ふっふっふ。そのトオヤマさんのおかげでうちの商会の大元の商売は安定し始めましたからね。これからは多角的に事業を増やし、試行錯誤する段階に来たんす！ 自分の商売勸的に、この治世の安定した帝国の世では商品より経験が売れるようになると思うんすよね！」

ビスエが鼻息荒く語る内容に、遠山が目を開く。

「コト消費？ えらくアンタ、なんか、先を行ってるな」

商品より経験。それは物質的な欲求が満たされていた現代の世界でよく謳われていたことだ。

レジャーや旅行、豊かで安定した社会で求められる少し高次元な欲求に答える無形の商品。

この異世界ファンタジーな世界の中で、ビスエの言葉はかなり先端な表現で。

「いやー、トオヤマさん。アンタに言われたくねえっスよ。自分ら商会どころか、教会まで抱きこんでパン屋始めるアンタには」



遠山の言葉にビスエが真顔で答える。

遠山は、まあ確かに冷静に考えると中々めちやくちなことをしているなと思いつつ、今更考えても仕方ないので気にしないことにした。

「でもよ、ここまで水に溢れた国と地域柄、釣りつて商売になるほど人を呼び込めんのか？ 経験を商売にするんなら真新しさとかいえると思うけどよ」

遠山は思ったことをそのまま口にする。

釣り堀がそもそも存在しないのも、これだけ河や水に恵まれた国だ。

いまさら釣りというものに対して、帝国の民は金を払う価値を見出すのだろうか？ 当たり前前の疑問を遠山は抱いていた。

「いやー、それがっスね。自分も驚いたけど、帝国、釣りする人全然いねーんスよ。こんだけ水量豊富な土地なのに、自分の下調べだ

と南領の港町で少しする人間がいるだけ。割と海やら河に近い冒険都市だと釣りっつていう概念知らない人もいるくらいなんすよねー」

帰ってきたのは意外な答えだ。

「そうなんか？ ドラ子」

「ふむ、オレも詳しくは知らんが言われてみれば釣りという言葉は知っついてもやっているものを見たことはないな。だが、少し考えれば帝国で釣りが広まっつていない理由はわかるぞ」

「んあ？」

ふふんと笑うドラ子に遠山が眉を顰める。

「簡単なことだ、ナルヒト。この帝国はそもそも釣りで魚を食糧として獲らなくても、肥沃な国土のおかげで食うには困らんのだろう、肉は牧畜、もしくは獣毛種を狩れば手に入る。パンに必要な天使粉の原料である小麦はよく育つ。貴様ら定命の者は必要ではないもの

にあまり興味を持つことはないではないか」

意外にも、ドラ子の言葉には理があった。

なるほど、帝国は牧畜や狩りで動物性タンパク質が採れる環境が整いすぎているのだ。

魚に食性があまり向かうことがなかった、ツッコミ所はいくつかあるが、理由としては成り立つのかも知れない。

「ほー、なるほど。ドラ子、お前なかなか賢いな」

「ふふん、もつと褒める。最近たくさん本を読んでいるのだ、結構面白いぞ、定命の者の歴史はな」

ふすーっと、腰に手を当てて鼻息を吐くドラゴン。機嫌が良いみたいで何よりだ。

「あー、それにあれなんすよ。王国だと釣りは、昔話によく出てくるんでみんな知ってるんすけど、帝国にはその昔話がなかったりとかっすかねー。」水竜の恩返し”つつー話なんすけど”

「ほう……？ おばーー いや、水竜の昔話とな？」

ビスエの思い出したような話に、ドラ子が食いつく。

水竜、確か、天使教会でその名前を聞いたような、聞いてないよ  
うな。

「あら、お嬢様もやはり知らないんすね。店長の国じゃあ有名な話  
すね。なんでも、大戦の古い時代、あるヒュームが村の日照りをな  
んとかするために水竜様へお願いしようとして、好物の魚を釣りに  
行く話なんすけど。ケツコー人気なんすよ、そのヒュームの男が昔  
話特有の盛りに盛られまくったためちゃくちゃな奴で」

ビスエが語るのは、この世界のおとぎはなし。

「めちやくちやなヒューム、とな？」

「ええ、最初は水竜様とお話しする為に魚を釣っていた筈なんですけど、途中からなんか水竜様自体を釣る話になっていくんすよ。気付いたら鬼を仲間にしてたり、樹海の創生樹を切り倒して竿にしたり、水竜様を釣ろうとするもんで怒った炎竜様を追い払ったり……」

「ああ、なるほど。あの話は王国ではそう伝わっておるのか」

「へ？」

ふふつと、笑うドラ子に、ビスエが首を傾げる。

「よい、気にするな、こちらの話だ。興味が出た。閑古鳥は鳴いておるが、まあ良い。釣り堀とやらの店主、2人分だ、案内せよ」

やはり割と機嫌の良いドラ子がビスエに案内を促す。遠山としても、異世界に来て純粋な余暇は久しぶりだ。

断る気もなかった。

「おっと！ へへ！ 毎度ありっすー、いやー、何処かの良家のお嬢様とお見受け致しましたが、楽しめることをお約束しますよー！」

揉み手しながら、ビスエが人好きのする笑顔を浮かべる。ドロモラとは違い、ドラ子の正体には気付かないようだ。

遠山が、2人から意識を逸らし、河をぼーっと眺める。綺麗な水面が、昼下がりの煌めきを反射して。

「ふん、貴様が約束、いや、”契約”と嘯くからには期待してやるう、ぞ」

「……ありゃ、もしかして、バレてるッス？」

ぱちくり。

ビスエが、目を丸くした後、にいつと唇を吊り上げた。

「ふかか、当家には貴様と同じような変わり者がある故にな。我が家の世話好きと、貴様は同じ香りがするよ」

「あはは、どうか、他の方にはご内密に。最新しき竜よ」

「さて、どうしたものかな」

ビスエの言葉に、ドラ子が薄く笑う。

独特な、空気の静寂。

川に見惚れていた遠山は、2人、ドラ子とビスエの鬨めた声によるやりとりを聞くことはなかった。

「ん、ビスエさんとドラ子は知り合いか？　なんだよ、紹介の必要なかった感じ？」

何やら見つめ合つたドラ子とビスエに気付いた遠山が声を掛ける。

ドラ子はほっておくとすぐ他人を威圧し始めるかも知れないから注意が必要だ。

「いやいやー、そんなことはないツスよ。てか、やっぱりこのお嬢様、竜様でしたか。いやー、トオヤマさんと一緒に歩いてるからもしゃとは思ったんすけど……　まままま、ここは一つ縁起物ということで！　トオヤマさんはうちの大事な取引相手にして我が商会の



運命共同体！ ドロモラフィッシュングリバーでのひと時をお楽しみくださいっす！ あ、竿はあそこにあるの使ってくださいね」

「じゃ！ 先行くぞ、ドラ子！」

けらけら笑うビスエに手をあげて、割とウキウキした様子で遠山が筏に飛び乗る。

流れがある割に、しっかりと川底に固定されているためきちんと足場となっている。びくともしない。

そんな遠山の背後で、竜と商人が静かに、互いに目を合わさず川を眺めて言葉を交わす。

「……貴様が契約もなしに夕ダとはな。いいのか？」

「古い友人の大切なお嬢様っすからね。それと自分のことを、内緒にしていたく代価ッスよ。……健闘を祈ります。トオヤマさんは少し、自分たちのような存在から見ても、危うい人ですから、お気をつけて。水竜殿のお孫様」

「貴様に言われずとも、奴のことはオレが一番よく知っておるわ」

「ありや、これは失礼をツス」

静かに交わされる2人の会話、ウキウキの遠山にはやはり届かない。

「ナルヒト、待て、オレもやるぞ。何、代金は心配するな。ビスエとやらと話についておる」

ドラ子もまた軽い足取りで岸から筏に飛び乗る。水面に波紋一つ起こさない体重を感じさせない足取りに、ドラ子の武人としての完成度が見て取れる。

「いやー、代金無料か。悪いことしたな。気を遣ってもらっちゃまった。ドラ子、釣りはしたことあるのか？」

言葉の割にあまり気にした様子もなく、遠山が壺に入れられている竿を何本か取り出し、状態を確認する。

「ないな。お父さ…… 父がたまに手慰みにしているのを眺めていたことがある程度だ」

「あー、なるほどな。まあ、俺も知り合いがたまにやってたのに付き合ったりしてただけなんだけどよ。おお、すげえシンプルな竿」

しなる木を削り、表面を磨いて持ち手には縄をくくりつけたシンプルな竿。

糸は半透明、触ってみると意外なほど頑丈そうだ。何かのモンスター素材だろうか。

壺の脇に置いてある餌箱を開いて、そこからパンクズを丸めて針につけていく。

「あいよ、ドラ子、お前のぶん。最初俺が投げるから真似してやっ

てみ」

「うむ、くるしゅうない」

テキパキと遠山が2本分、竿の準備を終えて、ドラ子に一本渡した。

すつと、糸を持ちながらしたてにふわりと糸を放り投げる。

リールがないため遠投は出来ないが、しなやかな竿は思った以上に振りやすく、遠くへと糸を運ぶ。

「おお、しっかり釣り竿じゃん。てか、地味にこの地区はあれだな、水の都みてえ」

「む、ナルヒトは中央区に来ることは珍しいのか？」

「どっこいしょと、遠山が竿を構えたまま筏に打ち付けられた椅子に腰掛ける。」

ドラ子もそれに倣い、隣の椅子に音もなく座った。

「商業区とギルドの行き来がほとんどだったな。パン屋の下見とか市場調査とか」

ながら話を続けつつ、ぷかぷか浮く赤い木のウキを眺める。

「ふふふ、そなた意外に勤勉よな。む、ナルヒト、これはどう使うのだ？」

釣り竿を首を傾げながら眺めるドラ子。

「ああ、それはなー」

遠山がそれを説明しようとしてドラ子のそばに身を乗り出して。

「ッ」

びくり。ドラ子が動きを止めた。

目を見開き、金の髪は僅かに逆立っている。

獣に似た姿の肉食の怪物種が似たような顔をたまにする、その感想を遠山は口には出さなかった。

「わり。近かった？」

「いや、違う。ナルヒト、むしろ少し近く寄れ」

表情を固めたまま、ドラ子が静かにつぶやく。その声に抑揚はない。

すつと、遠山の方へドラ子が身を寄せる。遠山の首元へ、小さな卵形の顔が埋まるほどに、近づいて。

「……人知竜の匂いがする」

平坦な声、ぼそり。

川の流れは止まらず、水の揺蕩う音に混じり、竜の小さな声が漏れた。

「あ、あの、ドラ子？」

すんすんすんすん。

首元で、静かに鼻を鳴らし続けるドラゴンに恐る恐る声を掛ける。

「……すまぬ。説明を続けてくれ」

遠山の声に、しびしびと言った様子でドラ子が離れる。

気を取り直し、釣り竿の仕組みや、持ち方、簡単な仕掛けの説明、そして餌であるパンクズを丸めたものなどを遠山がドラ子へ伝える。

ふむふむとドラ子は素直に頷いて。

「なるほど、これで待つのか。ふむ…… 定命の者め、よくぞこれでお婆様を釣り上げようなどと企むものだな」

「え？ それさっきのおときはなし？ 実話なのか？」

「ああ、古い話だ。お伽話に出てくる水竜と炎竜はオレの祖母と祖父さ。まあ、お婆さまはオレが生まれる前に亡くなっていたがな」

「へえ。なんかすげえな。自分の家族が昔話に出てくるとかスケールが違うわ」



さすがドラゴン。

家族のコミカルな話が、国規模の言い伝えになっているらしい。遠山が素直に感心する。

「ふふん。もっと驚いても良いのだぞ。ナルヒトが驚く姿はなかなかに興が湧く」

にいつと、笑うドラ子。

あまり教えてもないのに、会話の合間にヒュツと完璧な動作で静かに釣り竿を操り、キャストイングを終えていた。

「微妙に性格悪い言葉に聞こえるな……」

ギザ歯を見せて笑う竜に遠山がため息をつく。

視線を川に戻し、自分のウキを見つめる。

しばらく、互いに無言。

川が流れる音と、土手の上、街のにぎやかな喧騒が薄く、遠山たちを包む。

「フフ、たのしいな」

遠山の耳を打つのは、竜の、子犬が跳ねるような呟き声だった。

「なんか言ったか？」

「いや、別に。……ナルヒト、全然釣れないのだが、ほんとにこれでいいのか？」

遠山の問いに、しれっと表情を消して首を振るドラ子。かと思えばじっと顔を顰めてぶかぶか浮かぶウキを睨み始める。

せっかちドラゴンがイラつき始めたらしい。

「俺の知り合い曰く、釣りの楽しみのほとんどはこうして釣り糸を垂らしてぼーっとしている時間にあるらしいぞ」

ふと、昔のことを思った。

高校の頃、とある知人によく誘われて釣りに出かけていたのを思い出す。

釣れない癖に、何かあるたびに釣りに出掛けている、釣り人のふりをするのが好きな奴だった。

「知り合い、か。それは、冒険都市に来る前の、そなたの故郷での知り合いかな」

ふと、遠山がつぶやいた内容に、ドラ子の身体が僅かに震えた。目も、蒼く、しかしどこか影のあるものになって川を見つめている。

遠山はそれには気付かない。

「ーああ、そうだな」

ふんわり、風が吹いた。

筏が僅かに音を立てて軋む。

竜と遠山は互いに揺蕩う大河に身を委ね、釣り糸の行く末を眺めたまま。

「そうか。……ナルヒト、オレは先程自分の家族の話をしした。オレだけ話すのは不公平だと思わないか？」

竜がぼつりと口を開く。

貴様も話せ、竜はそれを望んでいるらしい。

「ドラ子、一理あるな、確かに」

「だろう？ こういうのはどうだ、魚が釣れるまで少し話をしようではないか。互いに互い、聞きたいことを問い、自分が相手に問うたことは相手にも答えねばならない。そんな、ルールだ」

4484

「へー、なんか合コンとかでありそうだな、いいぞ、別に」

のんびりした釣り時間、竜との問答が始まる。

空を見上げて、ふと思う。釣りをしながら竜と語り合っ、すじくフアンタジーっぽくていいな。

どこまでも遠山は、呑気なままだ。

竜が、ドラ子が、アリス・ドラル・フレアテイルの声に影が差し  
ていたことに気付かない。

「そうこなくては。ならば、ナルヒト。そなた、故郷に家族はいる  
のか？」

「いねえ。親の顔知らねえんだ、俺。物心ついた時には施設にいた」

まだ幼い頃は不思議だった。テレビで見るこどもたちには家族  
とやらがいて、一緒に暮らしていた。でも家族なんて存在、それは  
テレビだけの話だと、本気で信じていた。

「そうか。親に会いたいと思ったことはあるのか？」

「んー、昔、学生の頃は少し考えたこともあったな。まあ、なんか  
事情があったんだろ。今は別に、生んでくれてサンキューくらいだ

わ

本心からの言葉。今となってはもう、血縁者がどんな人間であるかも気にならない。

思春期の頃に少し悩んだ、親がいない、家族がいないことへの不安や、自分という存在の不安定さはしかし、遠山鳴人が過ごした高校生活の3年間で全て解消した。

欲望のままに。

己のアイデンティティに気づくことのできたあの時間は、きっと尊いものだったのかも知れない。

自分がいて、生きている、そのチャンスを与えたことだけには感謝して、それ以外はもう、どうでもよかった。

「……強いな、ナルヒト」

ドラ子が、目を細めてつぶやく。その顔は、ドロモラのつけていた銀の指輪に向けていた表情とよく似ていた。

「そうか？ 特別なことでもないような気がするけど、じゃあ、次はドラ子の番だな。でもお前、結構あれだよな。家族仲良さそうだ」

今度は遠山が問う番。ドラゴンの家庭環境を本人、本竜に聞ける日がくるとは思わなかった。

遠山はファンタジーイベントに、少しワクワクして。

「ふかか。竜は家族を大切に生き物ゆえな。おか、いや、母も父も祖父も竜界におるよ。みな元気なのだ」

「へー、竜の家族か。どんな人たちなんだ？」



「……興味があるのか？」

「いや、そりゃ竜の家族とかどんなにか聞きたいだろ」

「ふかか。そうか。ふむ、そうだな。まずは、母。花竜、アロマ・ドラル・フレアテイル。優しいお方だ。子どもの頃のオレにたくさんのお話しを聞かせてくれた」

ドラ子の表情がほどける。

家族の話をする時に、そんな顔になれるのならそれはきっと良い家庭なのだろう。

「へえ。子供の頃のドラ子か。なーんか予想つくな。どんなガキだったのか」

今の少女の姿よりもっと幼いドラ子を想像する。だが、きっと話し方や振る舞いは今の傲岸不遜なままなのだろう。

「む。ナルヒト、その言い方ひっかかるぞ。まあ良い、お母様は話

し上手でな。その美しさとその声色の清らかさ、それだけでこの世の美の半分を賄っておる感じだ」

「どんな感じだよ。父親の方は？」

「鉄竜、ボーン・ドラル・フレアテイル。強いお方だ。大戦の最も古き時代、お父様は恐るべき”狩人”達を幼竜にも関わらず何人も討ち果たした。お婆さまの水とお爺様の炎、その2つがその強き身体を産んだのだらうな」

「ドラ子とどっちが強いんだ？」

「む。あと100年すればわかんが、今の時点だとお父様の方がはるかに強いな。以前、オレの部屋に勝手に入っていた時に、焰で燃やしたのだが、びくりともせぬのだ」

「びくりともせぬのだ、じゃないんよ。デリカシーのない親父でも燃やしたらダメだろ」

ドラ子の焔でびくりとも、しない。

彼女の焔の力をよく知る遠山は呑気な返事をしつつ、静かに戦慄する。

この世界にはまだまだたくさんの自分にはどうにも出来ない化物が潜んでいるようだ。

「む、だって、オレの部屋に置いてあるコレクションの鎧を自分で着ていたのだぞ。しかも、大戦期の女しかおらぬヒュームの国の鎧だ。こっ、胸当てと腰部分しかないような奴だ」

「燃やしてよかったわ、その親父」

ぺしりと結論を出して、遠山が答える。ドラ子もうんうんと頷く。

流石に、どれだけ強くても親父が娘の部屋でビキニアーマー装着するのはダメだ。

「ふかか、だろ？ 他にはお爺様、祖父がいるが…… 彼は寝たきりになっているのだ、とてもとても強いお方なのだがな」

「へえ、竜も歳にや勝てねえわけか」

ドラ子の声が静かに色を失ったのがわかった。遠山はそれ以上聞くことはない。

今までの話から、おそらくその祖父とやらは炎の竜のことだろう。

あの日、遠山鳴人が蒐集竜の心臓を貫いたナイフも、炎竜の爪から切り出されたものはず。

なかなかハードなことをしたな、遠山は少し懐かしく思う。

「そういうことだ。それでは次はナルヒト、貴様が答える番……」

いや、だが、家族はいなかったな」

「だな。故郷では家族の代わりって言えるような人もいなかったし、友達も、多分少なかった、ていうかギリギリまで出来なかったていうか」

幼き日、もふもふの友は奪われた。

高校の頃のあの奇妙で、しかし、輝いていた時間での関係ははたして友情だったのか。

そして、探索者になってようやく、友か、仲間か。少なくとも命を懸けてもよい他人が出来た。

「しせつ、とやらで、貴様は育てられたのでは？」

「あー、まあ、うん。色々あってな。途中で追い出されたんだ。ああ、でも、ガキの頃、親身になってくれた人はいたな。変わった人だったけど」

遠山はふと、昔を振り返る。

タロウと別れたあと、自分の身体に奇妙なことが起き始め、それから施設を移された。

その時々色々世話になった人のことを思い出す。

「ほう…… 女か？」

「あー？ そう、だな…… キレイな人だったけど、あの人結局どっちだったんだ？ なんかよくわからねー人だった。何年経っても見た目変わってなかったし」

男か、女か、それもよくわからない。いつも不織布のマスクをして会ったばかり髪型も変わっている人だ。

ただ、綺麗な人だったことは覚えている。男でも、女でも。

「……なるほど、面白いな。では、ナルヒト、オレからの質問だ。……故郷に、友、もしくはそれ以上の関係のヒトは、……いる、のか？」

ぼちゃん。

魚が、川の流れから飛び跳ねた。てらてらした鱗が一瞬、陽の光を反射して煌めく。

それからまた、水音を立てて川の中に消えていく。釣るべき獲物はきちんといるらしい。

その光景を眺めつつ、遠山が口を開く。

「んー、鳩村や日下部は友達というより、仲間、チームメイトって感じだしな。友達かー、高校生の頃、頑張っつてそれを作ろうとしてただけだな。なんか色々変な奴らと知り合えたけど、それが友達かどうかはわかんねー」

ああ、奇妙な3年間だった。今考えれば恥ずかしくなるようなことをしたし、言ったり。

遠山は知らず。自分の表情が、その3年間を想う表情がとても穏やかなものになっていることを。

それは少なくとも、竜の前では見せたことのない顔で。

「……続けよ」

ドラ子が、遠山の方をチラリとも見ずにつぶやく。

「いや、続けろって言うてもなー」

「聞かせてくれ、ナルヒト。貴様の、そなたの思い出に残る者の話を」



話を切り上げようとした遠山はしかし、あっ、と息を呑む。

こちらを見つめる竜の瞳に気付いたからだ。

むっ、と窄められた口に、傾いた眉。非難するようなら顔だが、何かを我慢している顔にも見える。

竜の機嫌を損ねるわけにもいかない、遠山は一つ息を吐いてから、川へ視線を戻した。

「……そうだな。印象に残ってる奴だと、ああ、アイツ。すぐ死にたがるバカとかいたな。そいつとき、卒業までの3年で賭けをしたりしてたかな」

思い出すのは、そう、落書きされて読めなくなった教科書と、その落書きをしたバカどもを殴った拳の痛みと。

それを近くで眺める、クスクスという涼しい笑い方、気取った喋

り方。……きんもくせい匂い。

「賭けとは？」

「俺が卒業までに友達が出来るか、それともそいつが卒業までに自殺を成功させるかどうか。バカみたいな話だろ？」

遠山が語るのは、高校の3年間を過ごしたある人物の記憶。

恋人では決していない、友人でもないのだろう、知り合いというには過ぎた時が濃すぎる。

ただ、セーラー服が異常に似合う、異常なそいつのことを思う。

「なんだ、それは？」

「いや、笑うんだけどよ、そいつ自殺願望あるくせに何しても死なないんだよ。飛び降りしようとしたら屋上に行くまでに怪我したりとか、電車に飛び込もうとしてもその一駅前で電車が故障して止まったりとか」

”とーやま、聞いておくれよー”

いつも、そんな間延びした声と、常に虫を潰し続けているようなドス黒い目をした奴だった。

人に好かれるような人ではなくせに、無駄に造形が良すぎるから、そいつは人をどうしようもなく惹きつけていた。

カリスマとは呪いに近いもの、そう言ってよく笑っていた。

「……………」

竜はただ、遠山の言葉に耳を傾ける。

「ほんと、変な奴だったな。普段は猫かぶってお淑やかにしてる癖に、つるんでるといつもめちゃくちゃな奴でさ。確実に死ぬる自殺の方法探すために、みなみの島に行ったり、なんかペンションに殺人鬼と一緒に閉じ込められたりよー」

”とーやまとーやま、とーやま！ 僕さあ！ 南の島に旅行行って、そこで殺人事件に巻き込まれる予定なんだけど、夏休みの予定空いてるよね？ 君も一緒に行こーぜー！”

遠山が、ある夏の記憶を反芻する。

バイト代、南の島の別荘に旅行行くだけで貰えるそれ目当てにノコノコ着いていったのが懐かしい。

まさか本当に殺人事件に巻き込まれるとは思わなかった。

また、遠山は気付かない。文句を言いつつも、自分の顔が緩んでいることを。

川の流れを見つめるその目は、懐かしい思い出を見て、ただ優しく笑って――

「ナルヒト、そなた、そんな顔で笑うのだな」

竜が、ぼつりとつぶやく。

それは何故か、少し、寂しそうな声。

「あ？ あ！ ドラ子！ それ、アタリだ！ 合わせる！」

その寂しさを問う前に、釣り、当たり来たる。

遠山が身を乗り出し、ドラ子の沈むウキに目を剥く。

「合わせる？ ふむ」

遠山の言葉に僅かにドラ子が首を傾げたあと、

「こつか？」

ひゅぽ。

手首のスナップ素早く、ドラ子が釣り竿を巧みに操り、一瞬で魚を釣り上げた。

「おお、すげえ。釣り初めてなんだよな」

「ああ、初めてだ。ふむ、イキがいいな。ああ、なるほど、この生簀に放り込んでいたらしいのか。む、ぬるぬるしてるな……」

「器用かよ。なんでも出来るやつはすげーな」

釣り上げから、なんのよどももない動作でドラ子が魚を生簀に放る。釣り歴何十年のベテランと言われても納得する小慣れた感じ。

「……生臭いな」

ドラ子が、魚を握った手を嗅いで、顔を顰めた。

「まあ、魚だしな。気になるなら手洗ってこいよ、えー、てか立派な魚だな。なんていう名前なんだろ」

「いや、洗うのはいい。それよりも、ナルヒト、聴かせよ。ー賭け。貴様はその死にたがりの変わり者とした賭けはどうなったのだ？」

釣り上げられた魚にテンション上がっていた遠山とは違い、あま  
りドラ子は魚に興味がなさそうだ。

竜の興味は、遠山の過去の話へと未だ向けられていて。

「あー…… 悪い、秘密だ。言いたくねえ」

あの賭けの結末は、言えない。それはちっぽけな約束によるもの  
だが、遠山は破るつもりはなかった。

「そうか」

ぽそり。

竜が無表情で、少し頷く。



「ナルヒト」

それから、一度川に視線を向けて、遠山の名を呼んだ。

「ほいよ」

呑気に答える遠山。まだ、魚は釣れない。

「うん」

「そなたが先程してくれた話。家族の代わりに世話を焼いたと言っ  
者、死にたがりの変わり者、……そなたの青春とやらの話だが」

「メスか？」

その問いに、少し遠山が固まる。

「……………えーっと、そう、だな、メスっていう言い方はアレだ  
けど、女、だな」

事実をそのまま。

死にたがりのバカは、セーラー服が異常に似合う、異常に、綺麗な女だった。

「そうか」

そう言って、ドラ子はふと魚を掴んだせいでぬるぬるになっている自分の手に視線を落とす。

ざっと、手を見つめて。

「ナルヒト、近くに」

竜がやはり無表情のままぼつりと。

「え？」

「良い、オレが行く」

それは一瞬のことだ。

「うわぶ」

のしかかられ、抱きつかれる。

包み込まれるように、頭をぎゅっと。

「ぶかか」

竜の甘い、柑橘のような香りに包まれる。

竜の甘い、満足そうな笑い声だけしか聞こえない。

「……げほ。ドラ子くん。お前、何してんの？」

努めて冷静に。柔らかくて甘くて怖くて強いに包まれるという異常事態に、遠山は気合いで耐えて言葉を返す。

「ナルヒト」

名前を呼ばれた瞬間、ドラ子の意外なほどに柔らかく、そして冷たくしっとりした手のひらに顔を挟まれる。

もちろん、先程魚を掴んだばかりの手はひどく、生臭くて。

「んげ。魚臭いんだけど」

「ふかか、一緒、だな」

にまーっと、笑う竜の微笑み。牙の覗くそれは、ひどく恐ろしくて、しかし、自己の独占欲を満たす女の美しさが同居していた。

「ナルヒト、貴様が雌の竜の匂いをつけたまま、他のメスの話をするのはオレの心身に良くない」

「あの、女に羽交い締めにされて魚の生臭いのをなすりつけられるのも俺の心身に良くないんだけど」

「嫌か？」

「異文化すぎて混乱の方が強いな。なんか微妙に俺も生臭いんだけど」

「良い、オレと同じ匂いだぞ」

「こわー、なんかそういう竜っぽいところ急に出してくるのやめろよ、魚臭いことをお揃いにしてこようとすな」

「ふふ、それでもそなたはオレを受け入れてくれるだろう？ 友として。なあ、竜殺し殿、一つ聞かせてくれまいか」

力が、強い。

少し振り解こうと反抗しようとする、じつとりと優しく力を強められる。

ああ、やはり、こいつは竜。今は加減しているだけでその身には遠山には及ばぬ力を宿しているのだと否応なくわからされた。

「離してくれたらなんでも話すよ」

「む、このまま話せ。……貴様がその手で殺した女は、オレが最初ではないのか？」

縋るような声。

遠山を抱きしめる力が、僅かに強くなり。

「ーひひひ、初のキルスコアはお前だよ、鎧ヤロー」

遠山鳴人は欲望のままに、あの死にたがりの女を生かした。

遠山鳴人は、欲望のままに、金色の鎧に身を包んだ蒐集の竜を殺した。

それは全て、真実だ。

「！ 浮かか、なら良い。ああ、いいさ、オレは大人の竜だからな。別にそなたがオレと出会うまでどんなメスと過ごそうが、どんな思いで出を残していようが関係ないのだ」

「関係ねーなら、ドラ子さんや。力がね、少しね、強くてなってるのなんとかならないかなあ」

「いやか？」

「痛いんですけど」

「ふむ…… ヒトに合わせるの難しいな。くす、ああ、でも、やはり、ナルヒトは面白いな」

満足したのだろう。竜が遠山を解放する。

「ゲホ。竜パワーすげえ。何がだよ」



すごく力が強かった。感触は女の身体なのに、力が……

「そんなにもか弱いのに、そなたはオレの竜殺しとなったのだ。…  
…ヒトは、いいな」

ドラ子は自分の手を、遠山を抱きしめていた手を眺めてぼそりとうぶやく。

「……何目線の話、いや、竜目線か」

「ナルヒト、もう少し話を聞かせておくれや」

「お前が俺より魚を釣れたらな」

「む、今の時点でナルヒトは1匹も釣れてないではないか」

「うっせ。これからだっつの」

「ふかか、ナルヒト。貴様以外にわかりやすいな。ん？ 悔しいのか？ 釣りを始めてするオレの方が1番に魚を釣ったから悔しいのかな？」

「あー、てめ、そんなふうにな人を煽るわけねー、ふーん、OK OK。吠え面ドラゴンにしてやるよ」

「良い、定命のものよ、竜に挑むのを許す、ぞ」

人と竜。定命と永遠。

この世界では決して交わらぬ2人はしかし、白い羊雲がポカポカ泳ぐ青空の下、呑気に釣り糸を垂らす。

水が碎ける音、時折魚が跳ねる音。

そんな釣り堀の光景の中、人と竜の言葉は続く。

「ナルヒト、貴様の故郷の話だが帝国のどこ辺りなのだ？ 黒髪だ、やはり東部の出か？」

「あー？ まあ、そんなところ。ドラ子は、竜界だったか？ どこにあるんだ？」

「む？ 知らぬのか？ 帝国と王国を隔てるカドカ海。その中央、海のヘソの奥底だ。機会があれば、ナルヒトならば招待してやるぞ？」

「竜の住処かー、興味あるなー え？ 海底にあんの？」

当たり前前の友の会話。

ほんの少し、竜特有の支配欲から来る湿度は伴うが、その時間はとても穏やかなものだった。

「ナルヒト、そういえば貴様やけに教養が深い時があるな。古代ニホンにかなり詳しいものだ」

「あー…… 古代ニホンね。その辺すげー気にはなってるだよなー。……調べるのが怖くてあんま触れて無かったけど」

「む？」

これまで互いに知らなかったこと、話してなかったことを話す。

だが、遠山はその性質から自分の世界のことや、自分がなぜここにいるのかということとはやはり話題にはしなかった。

「ドラ子、そういうえば昔話にも竜が出るんだよな。なんかたまに聞く狩人ってのはどんな連中なんだ？」

「む。実はオレも狩人のことは本や話でしか聞いたことはないのだ。大戦末期の時代にはもうお伽話と化していた連中ゆえにな。だが、奴らは竜をその狩りの獲物にしていたらしいが」

「うへえ。どんな奴らだよ」

「どちらにせよ、あの時代は少しおかしくてな。大戦期から生き延びた竜はいるのだが、みんな記憶が定かではない。祖父もすでに言葉を失っておるしな。定命の者、ヒュームどもの記録も同じだと聞くぞ」

「記録？」

「歴史、というのか？ 貴様らは文字を扱い書き残すことができる種族だろう？ だが、それでもその記録は残っていないそうだ。大戦の歴史、最終的になぜ大戦は終わったのか。どのように終わったのか、そもそも世界を巻き込んだ大戦はどのようなものだったのか、

何もはつきりしたことはわからないそうだな」

「……そういえば主教も似たようなこと言ってたな」

「この帝国の成り立ちもそうだ。オレの家、フレアテイルが帝国を庇護するのは古い約定によるものだが、最早その約定をなぜ結んだのかは祖父しか知らないしな。……帝国の前身とも言われる人類国家と竜の間で何かがあったということくらいか」

「え、そんなあやふやな感じなのか？」

「ふかか、ああ、だが、それで充分だ。竜は約束を守る、それがオレたちの誇り故な」

「はえー、かつーよ」

「ナルヒト、もう一つ質問するぞ」

「おう。てか、マジで釣れねえな」

「そなたの好きなものは、なんだ？」

「好きなもの？」

「ああ、なんでもいい。好きなものだ。聞いてみたい」

聞いてみたい、そう語る竜の瞳に遠山は一瞬、見惚れる。

蒼く深く、その瞳はただ、美しかった。

雄大な自然、飛び散る瀑布や、朝焼けの中の草原、そんな何か大いなるものを目にした気分。

畏敬。

遠山は竜の瞳にそれを見つける。

気付けば、釣り糸を垂らしたまま、あまりにも無防備に唇を開いていて。

「……プール」

思い出を、記憶を。

遠山の生きた光景の中で一番綺麗なものを竜へと。

「続けよ」

竜は、それを聞くことを望む。己の竜殺しの過去。自分が決して触れることはできないそれにせめて、近づきたい、そんな小さな願



いを込めて。

「夏だ。高校ん時、体育のプールのあとにあつた国語の授業。開かれた窓の向こうによ、すげえでかい入道雲が山の向こうにあるんだ。その入道雲が山の緑に影を落として、それがゆーっくり動いていくのを見てた」

間延びした教師の声、数人がこくり、こくりと船を漕いでいる授業の風景。

国語の授業、内容は確か、古文に関わるつんちく。

そう、夕方の話。

夕方のことを呼び指す名前、黄昏時とも呼ばれるその名前の語源、夕方はあの世とこの世が結ばれる時とかどうとか。

そんなゆっくり進む時間、僅かに香るカルキの匂いと、夏の風の香り。

「窓を開けてるから、風が吹くんだ。暑い風なんだけど、プールの後だからやけにそれが涼しくてな。だれかの教科書のページが風にめくられてパラパラと鳴って…… うん、あれは、綺麗だった」

もう2度と、自分が体験することはないだろう時間をふと思い出す。

奇妙な賭け、厄介ごとだらけで敵の多い3年間だったが、たしかに遠山はその時間から大切なものを保存していた。

「なんか、そういう綺麗なもんは好きだな。自分にはない、綺麗で少し儂いもんとか」

「そうか」

きつと、竜は男が何を言っているのか半分も分かっていないだろう。

「それと、あれだな。ドラ子のその眼、こえーけど、綺麗だ」

「そーーーンン?!」

「夏の真昼、お盆の時期の雲ひとつない空の奥の奥、向こう側の向こう側、そんな色だな。それ、綺麗だと思っぞ」

「ふか……………そ、うか」

竜が、俯く。

金色の髪に僅かに覗く少しとがった耳は、真っ赤に染まっている。

だけど、それを遠山鳴人が目にすることはない。

「いや、ほんとそろそろ俺本気だすわ」

釣り竿を握り、未だ釣れない魚釣りに夢中だった。

昼下がり、太陽はどんどん傾いていく。夕方が、そろそろやってくる。

竜とのデートはあと、わずか。

## 85話 アリス・イン・デート その4（後書き）

TIPS 〓そして、ありし日のまどろみの中で 夏、プール、現  
代国語の授業にて〓

えーっ、皆さんプールの授業のあとでお疲れだと思つので〓〓は少  
し目覚ましになれるような話を〓〓。

では、今日の授業内容にも関わりがあることを〓〓。

夕方にはさまざまな呼び方があるのをご存知ですか？

有名なのは黄昏時、逢魔が時でしょうか？

この二つは同じ時間帯のことを呼びさしています。逢魔が時はその  
名前の通り、魔に逢いやすい時間というのが語源ですね。

では、黄昏は？

黄昏は、誰そ彼、という言葉遊びから名付けられたそんな話もあり  
ます。

誰そ彼」には元々「あなたは誰ですか？」という意味があるといひます。

また、その言葉が転じて「黄昏<sup>たそがれ</sup>」という言葉になつたと言われています。

薄く暗くなり始めた夕方時、今私の目の前にいるあなたは誰？ 誰そ彼、というわけですね。

また、黄昏時は、「この世」と「あの世」が交わる時であるとも言われるのです。昼との夜の狭間。本来、昼であれば姿を隠しているものが気を抜いてその擬態をほどこいてしまつたり為る瞬間でしょうか？

「あの世」は彼岸という呼ばれ方もします。あちら側の岸边。つまり今私たちがいるこちら側とは違う場所ですね。黄昏時はつまり、あちらとこちらが混じる瞬間でもあるわけです。

少しでも、あの世に、彼岸に触れ、魅入られたり、彼岸からなにかを持ち帰つたりした場合は、黄昏時に何か起きるのかもしれない。

彼岸を訪ねた者は、彼岸から何も持ち帰るべきではありません。

人には決して触れてはならない、たどり着いてはならない場所もあるという事です。

86話 アリス・イン・デート（失敗）

「カラコンとか無しでその色だもんなー、羨ましいぜ、ほんと」

遠山が、間延びした声を上げる。

顔の良い人間はみんな、目が綺麗だ。自分のチベツトスナギツネのような目には決して宿らない輝きを少し羨ましく思う。

4527

「オ、オレは！」

「うわ」

ドラ子が、がたんと立ち上がる。



その勢いと大きな声に遠山が小さくうめいた。

「いや、その、お、オレは、オレも、綺麗なものは好きだぞ、ナルヒト、そ、そなたもオレに聞け。同じ質問を繰り返すのがルールだろっ?。」

すぐに、ちよこんと座るドラ子。

「お、おつ。ドラ子は何が好きなんだ? やっぱ財宝?。」

「ふか! ああ、財宝は良い。特にヒトが作りだした美術品は良いぞ。先の商人の指輪しかり、優れた美術品には想いが込められているのだ。」

自分の好きなもの話になったからだろうか、ドラ子が調子を取り戻す。

「定命の者の生は、オレから見れば短く、脆すぎる。今まで、正直オレは不思議でならなかったよ。何故こんなにも弱い生き物がこん

なにも美しいものを生み出すことができるのか、とな」

その顔つきは、やはり優しい。

だが、同時に遠山は理解する、ドラ子、己の友はその名前の通り、ドラゴンなのだ。

人ではない。

「今までは、ね」

遠山はしかし、その自分とは違う存在である友の言葉を反芻する。

釣り竿はぴくりとも動かない。

「ふふん。ああ、今のオレは分かる、何故定命の者の作り出す作品に惹かれるのか。ナルヒト、貴様のおかげだ」

「俺なんかそんな啓蒙したか？」

「ふかか。ああ、そなたはオレに気づきをくれたよ。ナルヒト、そなたはこの街に来てから色々なことをやってのけた」

「色々なこと？」

隣り合うドラ子へ問いかける。

ふっと、竜は笑い、唇を開いた。

「奴隷の枷を自ら解き、リザドニアンを救い、竜を殺し、街にたどり着いた」

その男のはじまりは、冒険奴隷。

欲望のままに、ヘレルの塔で大暴れ。

「スラムから子どもを選び救い、教会と渡り合い、人知の竜と邂逅し、教会最優の剣を侍らせ、伝説の怪物をすら滅ぼした。ふかか、ああ、いいではないか、ナルヒト」

その男は冒険都市アガトラに降り立つ。そこでも好き放題にはあるがままに振る舞った。

救いたい者を選び、始末したいものを始末した。

竜が語るは、遠山鳴人の冒険譚、その一端。

遠山の冒険を、その竜は見て、聞いて、知っている。

「……改めて言われると結構綱渡りだな、俺」

「それが、そなたの言う”ぼっけん”なのだろう？」

遠山鳴人は確かに、冒険の続きをこの世界で謳歌していたのだ。

竜は、それを称賛する。あ のとき、冒険の邪魔をしようとした竜はしかし、今や、そのぼうけんの理解者として。

「お、おー……」

「オレはそなたのぼうけんを知った、オレはナルヒトを見て、聞いて、触れて、ヒトを知った。何故、そなたたち、定命の者が生み出すものがこんなにも美しいのか、何故オレが定命の者が生み出すものに、惹かれるのか」

ドラ子の言葉に、遠山も自然に笑っていた。

「聞かせてくれよ、ドラゴン。興味がある」

「ふふ、そなた達が美しいからだよ、ナルヒト」

なんと、穏やかな顔。

上位生物が浮かべるその顔。それはまさしく――

「定命の者、限られた儂き生を弱く脆いが故に懸命に生きる者、そなた達には確実なる終わりと滅びが待ち受けている。だが、だからこそ、終わってしまうからこそ、そなた達は今をこれほどまでに輝いて生きることが出来るのだ」

賞賛。

「ヒトは美しい、だからオレはヒトの創るものが好きだ。ああ、オレは、それなりに、退屈ばかりのこの世界が、愛おしいんだよ、ナルヒト」

「……………おお」

「ふふ、どうした、そんな顔して。見惚れたか？」

くすくすと笑う竜の顔は、綺麗だ。

「うるせーよ。……でも、なんかお前、変わったか？」

「さあな、だが、まあ、そうだとしても悪くない気分だよ、ナルヒト」

不変の存在、7つの生命を持つ上位の生き物、本来その本質や生き方が変わるはずもない彼女はしかし、その己の変化を愛おしく。

ぐぐつ。釣り竿がしなる。ウキが沈む。

ドラ子の釣り竿だ。

「む、また釣れた。おや、ナルヒト、餌をつけ忘れていたのではな  
いか？」

ひゅぽっ。

また1匹、竜の釣果が増えていく。

「……うるせー」

「ふかか」

友人、釣り竿をならべて。

時間は進む。

……

…

夕方、貴族街、中央、高級ヴィラ”星の砂亭、一等客室にて



「ヒトは弱くて惨めで大変ですよねえ、ウイス」

広い部屋。豪華な赤い絨毯に、宝石があしらわれた調度品の数々。

路銀で借りた貴族区の近く、帝国の上流階級向けのヴィラの一部屋に彼女たちはいた。

天蓋つきの大きなキングベッドに寝転ぶのは、滑らかな緑髪をサイドにまとめた気品と無邪気さを併せ持つ女、フォルトナ。

「なアンの話ですかア？ 今、俺様ア、本国から送られてきた道具の整理に忙しいのがわかりませんかあ？」

部屋に所狭しと並べられた木箱。密輸商人の手で運ばれたそれを開封し、中身を改める雑用に勤しむのは赤髪の偉丈夫、ウイス・ポステラス・ヘロス。

「クスクス、たくさん持ち込みましたからねえ。もうこれ、王国のこれまでの歴史の忌み物から至宝の品、漂竜物、揃えも揃えましたね。ふふ、この部屋だけで王国の歴史展覧会でも出来そうですね」

「その歴史に終止符かましたアンタが言っていると笑えねーなア」

「えー、ウイスだって王国の歴史と共に生きてきた古強者、あの“鬼人”と並び称された老兵を始末したじゃないですか。古くて貴重なもの壊したのは同罪でーす」

「あー、お前の姉ちゃんのお付きの爺さんな。アンタと違って、あの姉ちゃんは真つ当な霸王になつたろうな、その器だよ、あの女」

「あら、ふふ、でもあの恐ろしかった上姉様も、とてもご立派だった上兄様も、みーんな死んじやいましたから」

「てめえが殺したんだろーがよ」

物騒な軽口を叩く2人。王国を終わらせた最悪の2人は息のあったやりとりを繰り返す。

「ええ、わたくしが殺しました。幸運にも、わたくしが生き残った。知恵を巡らせ、策略を張り、謀略を持って挑み、幸運にも勝利したのですよ」

フォルトナが、ベッドに腰掛け、足をぶらぶら揺らす。

霸王と賢王、いずれそれになったであろう己の姉兄を滅ぼした彼女が言葉を紡ぐ。

フォルトナの好奇心を止めることは誰にも出来なかった。

「んで、次は、竜、か。ぎゃはは、いーねえ、イカレてて飽きることはねーよ」

ウイスが、凶暴な笑みを浮かべる。己の主人が己よりもイカれている、そのことに気分を良くして。

「ふふ、頼りにしてますよ、わたくしの英雄」

緑髪の女も静かに笑う。

ガサガサ、ゴソゴソ。ウイスは喋りつつも、木箱の見分を続けて

「ん。なんだあ、こりゃ？」

ウイスが木箱から取り出したそれ。ピクニック用のバスケットに卵型の装飾品が入れられている妙な物品を眺めて首を傾げる。

「ああ、それ。王家に伝わる漂竜物の一つです。”強奪の揺り籠”、わたくしのお気に入りです。すごいんですよ、ヒトをその中に収納して運ぶことが出来ます。ふふ、ウイス、竜を下した後は、わたくし、何人が欲しい人材がいますので、それで持ち帰りましょうね」

「あー、もしかしてこのリストってその持ち帰る奴らのリストか？ガキのお使いメモのノリで人攫いしようとするなよなア」

美しい文字で書かれたリスト、人名と物品。

ウイスが机に置いてあるそれに視線を落とすと、聞いたことのある名前がいくつか。

《ラ・ザール 影の牙、王家の影の長。やはり彼には王国の名の下に働いてもらうことにします。彼の生きる場所は暗く湿った影の帷の中ですから》

《ドロモラ・バギンズ 宮廷商人 彼には貸しているものがあります。あの綺麗な指輪は、彼の指と繋がれた、きつともつとあの時よりも綺麗な指輪になっているでしょうね》

人名の後に、続くメモを読んでウイスは眉を顰める。ナチュラルに性格の悪い主人に、うへえと視線を向けて。

「ふふ、竜を下した後はほら、あの方ともどうせ殺し合うことにな

るでしょうから。わたくしは所詮、か弱きヒトの身、竜や、あのお方みたいな上位の生き物と渡り合うにはもう色々しないと。惨めで、弱いヒトらしく、ね」

「……てめえが言うのと図々しいなア。だけどよ、マジで竜はどうすんだ？ アンタがやれって言うならダメ元で暗殺しにいくのはやぶさかじゃあねえけど」

「ウイス、ウイス、ウイス。わたくしがそんなガバガバオリチャー走るわけないでしょ？ あなたはわたくしの最強の駒なんですから、あなたが竜と戦うのは最低でも勝ちの目が5割以上あるときだけですよ」

フォルトナが立ち上がり、ウイスの近くにしゃがみ込む。

「暗殺、無理かなア」

「今の状況では。竜が万全である時には厳しいでしょう。実際にこの目にして思いましたけど、あの方はやはり特別です。ええ、この世界で確実にあの方は役割を持って生まれたお方でしょう。ウイス、貴方と同じ、選ばれた特別な存在ですよ」

「はー、それに冒険都市は竜だけじゃねえ。何か策があるんだろ？」

「ええ、もちろん。気にすべきこの街の要点。天使教会、魔術学院、冒険者ギルド。邪魔者はたくさんいますが、ええ、王国の、あの樹海から面白いものもたーくさん持ってきましたから」

星型の虹彩が、愉快そうに蠢く。

「王国パワー全開ですよ、全開。歴史の重みを思い知れーって奴です」

シュツシュツと、シャドウボクシングの真似しながらフォルトナが笑う。腰が入ってないヘナヘナパンチだ。

「あー、アレか。あの枝、なんか俺サマのクソバケツヘルムが反応する時点でクソ厄いものの気しかしねえんだけど」

ヘナヘナフォルトナパンチをデコピンで弾き止めて、ウイスがため息をつく。

デコピンに弾かれたフォルトナがそこそこの勢いでベッドに吹き飛ばす。

「キヤツ！ もう、痛いです、おバカ。あなたなら大丈夫ですよ、ウイス。世界を終わらせた力も、あなたなら、英雄ならばきつと。ええ、幸運にも、ね」

サイドテールを揺らしつつ、頬を膨らませてフォルトナが最後に笑う。

「もうすぐですよ、もうすぐ。これは勘ですけど、ふふ、ええ、これから面白いことが起きますよ」

「なんだそりゃ」

「さあ？ でも、わたくし、”幸運”ですから。あ、ウイス、見て」



「あ？」

「夕焼け、すごいです。ふふ、とても綺麗ですねえ」

フォルトナが、夕焼けを目を細めて眺める。

ウイスはただ、黙ってその背中を眺めて。

ああ、冒険都市に黄昏時がやってくる。誰にも等しく、その時間はやってくる。

……  
……

〜同時刻〜

「あ、ありえねえ」

遠山鳴人が、口をあんぐりあけてぼやく。

あれからしばらくの時間がたった。

日がゆっくり傾いていくたびに、ドラ子の生簀は魚でいっぱい。

「ふかか。おや、おやおやおやおやおや、ナルヒト？ どうした、そなたの生簀、ずいぶんとスッキリして…… おや？ 魚が1匹もいないなあ……」

遠山の生簀は空っぽ。

「こ、この俺が……ゴトウ列島で青物釣り上げたこともあるこの俺

が……」

「まあ、ナルヒト、気を落とすな。ほら、オレの釣り上げたのを数匹分けてやっても構わないぞ?」

ドヤー。ギザ歯をチラリと覗かせ、ドラ子がにまーっと笑う。

「く、くそ、なんちゅうドヤ顔しやがんだ、このドラゴン」

「ふかか、竜故なー、困ったものだ、初めてやったこともこんな感じですつなくやってしまっんだものなー」

「こ、ここまでコケにされたのは久しぶりだ、く、くそ」

「ふかか。ナルルーヒート、ん? どうした? 釣り方がわからないのか? 教えてやるうか? ん?」

「……お、おのれ」

おのれ、なんて素で言う時が来るとは夢にも思わなかった遠山。  
頂垂れた頭上からは、ドヤ顔ドラゴンの鼻歌が響く。

「ふ、ふふふ、たのしいな、ナルヒト」

「俺はたのしくねえ。ドラ子」

軽口を叩きつつ、ドラ子も遠山も笑う。

太陽はいよいよ傾きはじめ、透明だった陽光はいつしか、少しづつ、すこしづつ赤みを帯び始める。

川が反射する煌めきも、だいたい色にゆっくり染まる。

「ーおーん、ーおーおん。」

響くのは清らかな鐘の音。天使教会の大聖堂から日没を告げる大鐘楼の音色が都市に広がる。

「む、もう夕方か。今日は時間が早いな」

「あ？ほんとだ。いや、こっから！こっからが釣りの勝負だから！夕まずめだ、夕まずめ！お魚さんもここから本気出すからよー！」

「いや、本気を出すべきなのはナルヒトの方だぞ」

「ぎゃふん」

「ふかか、まあ良い。暗くなるまでは付き合っただらう。オレは竜だ、心が広いのだ」

「くそ…… 吠えツラかかせたる、いてっ」

雑に釣り竿を握ったせいで、釣り糸が絡まるように動いて。

つぶつ、遠山の手のひらに針が引っかかり突き刺さる。

「む、大丈夫か、ナルヒト。針が……見せてみよ、手を貸すぞ」

ドラ子がすこし心配げに、遠山へ手を差し伸べる。

「くっそー、なんで今日こんな俺だけ釣れねえし、針は刺さるし、不幸だ」

差し出された白い手のひら。遠山の筋ばった手のひらがそれに伸びる。

そこには確かに、気軽な、互いの尊重により成り立つ友情があつて。

「いてて、サンキュー、ドラ子」

だいたい色の光景の中、遠山が手を伸ばす。

ゆったりとした時間が流れていた。進む時間は1日を進め、世界はゆっくり、夜に向かっていた。

『カーア、カーア』

呑気にカラスが鳴いている。

夕方だ。

ぼんやり、ゆっくり沈んでいく太陽。

赤く、遠い夕焼けが広がっていく。

冒険都市を囲む高壁に影と、オレンジが焼き付けられていく。

夕方が、やってきた。逢魔が時がやってきた。

あの世とこの世が繋がる時間。彼岸に触れた者の正体が露わになるその時間。

それは、偶然だった。ああ、全ては偶然、運、ああ、これはきつと、誰かの”幸運”。

”この世にある幸せの総量は決まっている”



かつて、白い蛇に成った不幸な女の気づきはしかし、きっとこの世の真実で。

だからこそ、誰かの幸運は、容易に誰かの不運となるのだろう。

ああ。”不運”にも。

よりもよって、竜が、全てを見通す竜の眼が、この時間帯に、このタイミングで、遠山鳴人を見つめて。

「ふふ、ナルビト、くるしゅうなー」

.....え？」

竜の手が、男の手を握ることはなかった。

「あ？ どした、ドラ子」

「.....な、るひと、それは」

竜の瞳が揺れる。

その眼は、一点に集中。遠山のでのひら、針がつき刺さる傷に向  
けられて。

「ん？」

っー……。

つぷりと、肌に浮いた血の雫。筋となり、垂れる。

「なる、ひと、その血……」

竜の声は酷く乾いていた。

遠山もその傷を確認する。

「……っは？」

真っ赤な血を見て、息を呑む……  
の・で・は・な・い。

だいたい色の絵の中で、それは明らかな異常事態。

夕焼けの赤い光が、それを、遠山の血を照らしていた。

「これ、血が――」

――すーっと。垂れる。

遠山鳴人の血潮、そこから人の証、まっとうな生命の証である赤はなく。

真<sup>マシ</sup>白<sup>シロ</sup>の血。

「白、い？ なん、で」

その傷口から垂れるのは真白の血、白い絵の具をそのまま溶かしたような血が。

ああ、とっくにその身体は、とっくに。

「うっ……」

竜が目を見開く。全てを見通すその眼が、遠山を見て、固まる。

黄昏、誰そ彼、あの世とこの世が繋がる時間。

カラスが鳴いたら帰りましょう、黄昏、誰そ彼、帰れば良かった。

霧の神に魅入られた、霧の神を下ろした肉体を、黄昏時が露わにする。

「あ、りえない……」

竜の瞳が揺れる。

美しい唇が、震えて、尖った歯が頼りなく覗いて。

「その血、定命の者の、血では、ない……」

彼岸に触れた者がいた。

その男は恐るべき白蛇を滅ぼすために、この世ならざる霧の力を次の段階に進めてしまった。

触れざる場所から、持たらざる力を持ち帰ってしまった。

黄昏時は問いかける。お前はどっち、あなたはどっち？

遠山は気づくべきだった、もっと自分の力を見つめるべきだった。

遺物、その新たな領域、拡大解釈。

魂の保存と使役。それはまさしく、この世界では喪われた存在。

神の業にふさわしく。

そんなものに触れた人間が、竜が愛する定命の存在、真っ赤な血潮の通う只の人間のままでいれるとでも？

「そなた、いや、貴様——」

竜の瞳が、この世ならざる者を見つめていた。

ゆづやけ、こやけでひがくれて。

黄昏、たそがれ、誰そ彼。

赤き血潮をなくした男と、赤き血潮を愛する竜が2人。

竜は、問う。定命の者を、その必滅の存在を愛する女が、白い血を流す男を見つめて。

黄昏、たそがれ、誰そ彼。

「貴様は、だれだ」

あなたは、だあれ。



## 86話 アリス・イン・デート（失敗）（後書き）

TIPS 【未登録遺物”キリヤイバ”】情報レベル

↳ 遠山鳴人がある探索の際に見出した未登録遺物。体内に収納出来る無形の刃。体内から引き出すと何故か欠けた刃の形に変わる。それはおぞましい執念と、無垢な狂気が奇跡的に噛み合い産まれた遺物である。

遠山鳴人の意思に従い、半径50米範囲に不可視、もしくは可視のキリを広げることが出来る。

ましろのキリは、目に見えない小さなサイズのヤイバである。ひとたびそのキリに包まれれば最後、遠山鳴人の敵であるならば全ての血肉は内側と外側、両方から切り刻まれる。

キリヤイバは決して、遠山鳴人の敵に容赦することはないのだ。

さあ、ぼうけんのつづきだよ。

.....

.....

...

〔情報追加公開〕

TIPS 【未登録遺物”キリヤイバ”】情報

ついに、遠山鳴人は開いてしまった、たどり着いてしまった。

遺物の拡大解釈、本来であれば星と嵐の英雄が、全てを台無しにする恐るべき人間との死闘でたどり着いた領域に。

伝説の怪物との死闘の中、死と向き合い、死に飲まれるその瞬間、遠山の生物としての進化は訪れた。

真白の霧への解釈を、真白の霧からの侵食を受け入れた。

いざ見えん、山野と平野に溜まる霧、魑魅魍魎の主とならん。

まつろわぬ魂の使役、それはもはや人の業ではなく。

彼岸の向こうの業である。それは故に、黄昏時にその姿を露わにするだろう。

なぜ勘違いできたのか？ 未だ自分が人間のままいられるなどと。

87話 グダグダの分岐点

「いや、ドラ子、なんで」

「……貴様は、なにものだ」

「お、おい、ドラ子？ マジでどろした？ 顔色悪いぞ……」

「ナルビト……」

「おし」

「なにが、貴様、何があった!? 気づかぬかった、目の前にいたのに、話していたのに、オレは気づかなかった…… ナルヒト、そなた、何を、した?」

「ま、待て、ドラ子、話が見えない、落ち着いてー」

「質問に答える」

「ッー」

竜の威圧に、押される。

ドラ子の支配者としての側面、いくら仲良くなろうとも決して切り離せないその本質が垣間見える。

ああ、だが、竜の支配者としての本質、それが恐ろしいのと同じように。

「あ？　なんだ、その言い方」

遠山鳴人の本質もまた大概他人のことは言えない難儀なものだった。

「俺に命令すんなよ、ドラゴン」

苛立ち。

遠山鳴人は、己に向けられる理不尽な圧力に対し、真っ向から刃向かうタイプの人間だ。

例えば、この男は容易に牙を剥く。例えどれだけ距離の近い人物であれ、遠山の道理から外れるのであれば、この男は容易に牙を剥く。

「良いから答えよ！！ 貴様、何もしていないのに、定命の者がそんなふうになるわけがない！ ふざけるな、ふざけるなよ、ナルヒト、貴様、どうしたのだ……！！？」

「……どうしたはこっちのセリフだ。いや、違う違う、ダメだな、こんなことで頭にいちいち来てたらキリがない。話し合いが大事だ」

だが、遠山もガキではない。

高校の頃の尖ってるコイツならこの時点でもう話し合いは無理になっっているかも知れないが、今は違う。

すーっと、息を吸って、吐いて。

「ドラ子、落ち着いてくれ。俺、お前に何かしちまったのか？」

遠山が自分のイカれスイッチを制御する。ドラ子は敵ではない、味方で、友達だ。

「あ、う…… みえ、ない。ナルヒト、貴様がわからない……」

「は？」

一歩、ドラ子があとずさる。遠山を見て、はっきり混乱している。

「今までは見えていたのに、貴様の心が、言葉が、ほんとうが見えていたのに、急に、見えなくなったのだ」

きゅうつと、胸の前で組んだ手、その仕草にいつもの傲岸不遜、唯我独尊のドラゴンっぷりは全くなくて。

「見えない？ なんのことだ？」



「ナルヒト、教えて、教えてくれ。心配なのだ、貴様、何を抱えて  
いる？ 何を、したのだ……」

「いや、話が見えねえ」

だから、遠山鳴人は間違える。

今までの人生、本気で人を頼ることなく来てしまった彼は、ここ  
で致命的なミスを犯す。

「ナルヒト、頼む、教えてくれ。何があったのだ……」

バカだ。

友達が教えてくれ、何があった、そう聞かれれば素直に答えれば  
良かったのに。

遠山鳴人の過酷な人生は、彼からそんな当たり前の選択肢を自然に奪っていた。

ああ、”幸運”にも、このタイミングで、この場所で、この状況で、どこまでも、遠山鳴人は、遠山鳴人のままだった。

「あー、大丈夫、べつに、なんもねえよ」

人を頼れない男は、善意100パーセントで竜に何も言わなかった。

他人に心配をかけるのは迷惑なことだ。例え自分の身体に何が起こっつていようと、自分の問題はまずは、自分で解決しようとするべきだ。

シンプルに遠山はそういう人間だった。

「ーで」

夢の中のパン文書館、いつのまにか自分の夢に棲んでいた眷属と、怪しいお札のマッチョ男。

白蛇女との死闘、その中で自分がたどり着いた領域。その中で触れたある者、深い霧との死後の約束。

遠山が話すべきこと、ドラ子が聞きたかったこと、たくさんあった。

「ーんで」

だが、遠山は心の底ではまだ誰も信用することが出来ない。

進むのは自分だ、決めるのは自分だ。そして死ぬ時も自分を看取れるのは自分だけだ。

欲望のままに。

ただ前だけを見て、  
進み続ける男の人間性は時にヒトを魅せ、  
時にこらしてヒトを

「――なんで」

「――絶望させるのだ。」

「あ？」

「なんで、何も話してくれないのだ…… ナルヒト」

コロソ、カラソ。

ドラ子の足元に何かが転がる。透明な飴玉のようなそれ。

彼女の蒼玉の瞳から溢れ、筋となり頬を伝う液体。

外気に触れ、瞬く間に、夕焼けを映し照らす固形の雫と変わってころがり落ちる。

竜の涙は、美しい宝石となるのだ。

「あー」

「見えない、分からない、そなたが、わからない、遠い、近づけたと思ったのに、なんで……うう」

竜は、静かに泣いている。

遠山鳴人の言葉が、そうさせた。

「こわい、よお……」

しゃがみ込み、えずくドラゴン。

「ど、ドラ子、お前、泣いてー」

無意識、遠山はドラ子に向けて手を伸ばした。

ドラ子の眼が揺れる、揺れる。それはまるで夜闇の中に見てはならないものを見たことのように。

怯えた、瞳ー

「ービツ」

ばしん。

ドラ子が遠山の手を叩き払う。

「え？」

ぼきん。

折れた、枯れ木が何かのように。

遠山が、どたんと、座り込む。ぽーっと、それ、明らかに曲がってはいけない方向によれ折れた自分の腕を間抜けに眺めて。

「ま、じか」

竜に、竜が力の加減なく、恐れて振った手の一撃。それは人間の肉体が耐えられる膂力を軽く超えていた。

「あー」

ぶわり、ドラ子の顔から玉のような汗が一気に噴き出る。

「あ、ああ、ち、違う、違うのだ、オレ、今、ナルヒトー」

「い、てえ」

ぷらん、ぷらん。

まだ水分をたくさん孕んでいる生木が折れて、揺れているようにへし折れた。



鍛えられた筋肉も、発達した骨も、食に支えられた腱も。全てめちゃくちゃに壊されて。

「うそ、ナルヒト、ナルヒト?! 大丈夫か?! オレ、オレのせいで、オレがナルヒトの腕を、あ、ああ……」

「おちつ、け、ドラ子。落ちつけよ、大丈夫、大丈夫だから」

竜、すげえ。

ははは、と乾いた笑いが聞こえる。すぐにそれが自分の声だと遠山は気付いた。

「うで、うでええ…… ナルヒト、折れてる…… オレがはたいたから…… オレのせいで…… ごめん、ごめんねえ、ナルヒト」

「ドラ子、だいじょうぶ、大丈夫だから、俺は大丈夫だから、頼む、

泣き止んでくれよ……」

痛みにより、どろどろの脂汗をかきつつ、地面に座り込む遠山。

はっ、はっ、はっ。息が、おかしい。身体が芯の底から冷え始めている。腕だけ、焼けるように熱い。

「あああ…… なんて、どうしてこんなことに、オレ、ナルヒトとおはなし、してただけだったのに、なんて、こんなことに……」

竜は半狂乱。

ガリガリと自分の髪と頭を掻きむしり、瞳孔を開いて声を震わせる。

痛みに茹だり、息を切らしながらも、ここにきてようやく、遠山は自分がしでかしたことに気づく。

自分が、竜にこれをさせた。

何も話さなかった、その選択が今の状況を招いた。

「やっぱり、ダメだ、オレは、竜では、そなたと、こうして一緒にいることさえじょうずにできない…… ナルヒトはオレに大事なことを教えてくれない、オレはナルヒトを簡単に傷つけてしまう、オレが竜だから？ オレは……」

ああ、竜のなんと無力なことだろうか。

美しい容姿は、陰に曇り、声を震わして、手をこまねくその姿は無力の一言。

「ナル……ヒト…… ナルヒト、オレ、どうすれば……」

ヒトであれば、こんなことにはならなかった。少しの怯えで、遠山の肉体を破壊するようなことにはならない。

竜のままであれば、よかった。

いと貴き、高き上位の生物、他者への共感などなく、ただ支配と暴力だけを悦ぶ生き物のままであれば、こんな無様を晒すことなどなかった。

「やっぱり、間違いだった…… オレが、竜が、ヒトと共になど……」

だが、蒐集竜は今、変わっていた。変わろうとしていた。

遠山鳴人という人間に魅せられていた竜は定命の存在を、見て、聞いて、理解しようとしていた。

「オレとナルヒトは、一緒には」

だからこそ、苦しむ。

己の本質、邪悪なる竜としての自分、その現実を今叩きつけられる。

全てが、ままごとに過ぎなかった。ヒトと友になるなど、今日の穏やかな時間も全て、全て、ただの。

「友達なんてなれるわけー」

「待て、ドラー」

それだけは、遠山は、言わせてはならなかったのに。

夕焼けが、今まで誤魔化していたままごとを全て暴いてしまった。

「はい、お嬢様ー、ストップです」

パチン。

目が覚めるような、乾いた音。指鳴らしが、夕焼けの修羅場に響く。

「は？」

顕れるのは、白いカフスリボンに、ふわっとしたロングスカート、ツヤツヤのショートボブに、まさしく人形のような整った無表情。

夕焼けの光が注ぐのと同じように、彼女がその場に突然顕れる。

メイドさんはいつも、神出鬼没なのだ。

「ふあ、らん？」

竜大使館メイド長、ファラン。

「ダメですよー、お嬢様。一時のテンションでー、そういうことを言っちゃうのは大人になったあと恥ずかしくなったりするのでー」

奉仕の眷属が、ここに。

「はい、お嬢様。あなたの敏腕メイドのファランです。修羅場の雰囲気を感じ取り、お恐れながら参上いたしましたー……。まあ、様子がおかしいと知らせてくれたおせっかいのおかげでもあるんですがー」

いまいち表情の分からない彼女が、んーと唸りながら、小さな指を顎にあてつぶやく。

「ファラン、ファラン、ナルヒト、ナルヒトのうでを、オレ、オレが……」

ドラ子が、メイドさんの小さな胸に抱きつく。

子供と大人なほどの身長差、だがしかし、小柄なファランにするドラ子の姿はまさに幼な子。

狼狽した小さな子どもが、母親に泣き喚く姿にしか見えない。

「あらら、ぽつきり。さすがはお嬢様、つよい。友人殿、少し失礼をー」

ヨシヨシとドラ子の頭を無表情に撫でつつも、無の視線だけを遠山に。

「え？」

「ちちんぷいぷいっつと」



小さな指が、くるり、くるり。

すぐに、異変が起きる。

まず、痛みが消えた、その次に体の冷えも、震えも消えた。

ぐち、じぎぎ。変な音とともに、腕が、ぱきりと竜にへし折られた腕が元に戻っていく。

「ま、じか」

あつというまに、腕が治った。常識や、法則を無視した意味のわからない現象。

「はい、お嬢様、友人どの腕は繋がりましたよー。普通に動かせるはずです。心配なようならばらくは安静にしてくださいねー」

「ファラン、ファラン、ファラン！ ナルヒト、ナルヒト、ナルヒト、ナルヒトがー！！ ナルヒトがヒトじゃなくなってる！ どうしよう、どう

しよう!? オレの、私のせいなの?! ねえ、ファラー!」

ドラ子はしかし、パニックのまま。一気に喚き立て、声を荒げる。

夕焼けに、ぱちり、ぱちり、彼女の制御から外れた金色の焰がチラつき始めて。

「ちよつぷ、アンドゲッツ」

きっと、それは俺でなければ見逃してしまうほどのとんでもない速さの手刀。

メイドさんの無表情のまま繰り出された手刀が、ドラ子の首元に吸い込まれた。

「あ、う……ごめ……さい、ナル……」

が、くりと意識をうしなうドラ子。

その最後の咳きは、きっと自分が傷つけてしまったか弱きヒトへの謝意。

「ドラー」

なんで、お前が謝るんだよ、どう考えても、悪いの、俺じゃね？

遠山はあまりの事態の速さについていけない。

「友人殿ー、お嬢様は連れて帰ります。今は、おはなし出来る状態じゃないですからー」

動けない遠山を、メイドさんが無表情に眺める。気絶したドラ子を抱きしめて、ぼそり。

「友人殿、……しんじてますからね」

その目と言葉は、何かを期待、少なくとも失望を恐れているよう  
な。

「ちよ、待っー」

遠山の静止虚しく、メイドさんが消える、竜と共に景色に溶け込  
むように当たり前にその場から消えた。

遠山は、1人取り残される。友達に心を開けなかつた男は、また  
独りになった。

「……やら、かした」

間違えた、失敗した。

「……また、泣かせちゃった」

遠山鳴人は、遠山鳴人だからこそここまでたどり着いた。

そして、今、遠山鳴人だからこそ、大きな間違いを犯した。

ああ、それはきつと、どこかの誰かの幸運でー

「いたあああああああああああ！ スヴイ、確保！ 確保  
よ」

どんがらがっしゃあああん!!

河原に飛び込み、砂煙を上げて唸りをあげるそれは、馬車。

筋骨隆々の馬鎧をつけた二頭の馬車馬に引かれた馬車。

「はい、主教さま」

「んぐえ!? え、主教に、先輩? なんで」

そこから飛び出てきた長い白髪が、夕焼けに染まる。

「竜は?! 蒐集竜様はどこ!? トオヤマナルヒト!!」

カノサ、主教が腕を振り上げ、ものすごい良いフォームで猛ダッシュ。

ロングスカートなのになぜそこまで走れるのかというほどの速度で遠山に詰め寄り、その首元をがしりと掴み上げる。

「ぐえ。め、メイド、メイドさんが今、連れて帰った……」

ぐわんぐわんに頭を揺らされながら、しかし、遠山はなんとか問いに答えて。

「はあ?! メイド?! アンタ、なんか竜様となんかあったの?! 言いなさい、トオヤマナルヒト! 何があったの!? 何もなければ良いなあああ! そんなわけないけど!」

「……な、泣かせ、ちまった。アイツが俺のこと心配してくれてたのに、俺、また、なんでもない、関係ないって、大丈夫って、言うて」

「泣かせた……? なんで?」

「しれ……」

遠山が自分の手の甲を主教に見せる。

赤きを喪った白い血液が、すうつと小さな傷跡から流れ続ける。

メイドさんは、この傷だけは治してくれなかった。

「は???? なに、これ、キツツツショ!!! アンタ、なんで血が白いのよ!?!」

火の玉ストレートの返答と共に、カノサの遠山の胸ぐらを締め上げる力が増していく。

「わ、わかんねえよ!!! 俺だって、何がなんだか!!!」

「ハァー?! なによ、なによ、なんなのよ、このクソ状況は?! いや、カノサ、落ち着きなさい! クールに、クールになるの!



天使教会主教は取り乱さない！ すー、はー」

ばっ、と遠山の胸ぐらから手を放し、ウロウロウロウロ歩き出す  
主教。

形の良い顎に手をやり、ぶつくさ言葉を食みながら呟く姿、彼女の思考が周り続ける。

「く、そ。ほんと、なんだよ、これ」

白い血。見てると怖気が走るそれを眺める。なんだ、これは。

いったいいつからこうなった？ 最後に大量に血を流した時は、あの白蛇女との戦いの後、あの時は普通に赤かった筈だ。

なら、原因はー

「整いました！！ トオヤマナルヒト！ 竜様は、メイドが連れて帰ったのね！ メイド、なんか言っただけじゃなかった？！」

遠山が自分の白い血の心当たりにとどり着く、その瞬間に主教が再び遠山に詰め寄る。

「は？ メイドさん……？ いや、特に…… あ」

メイドさんは、確かに最後に、遠山に言葉を残している。

気を失った竜を抱きしめ、感情を移さない瞳を遠山に向けて、確かに、一言。

「言ってたの?! なんて言ってた?! 追いかけてとかそんな感じのこと言ってた?!」

「……信じてるって」

たしかに、そう言った。

ドラ子を泣かしたことを非難するわけでもなく、ただ、静かに一言告げて消えていった。

「シャ！ オラ！！ まだ勝つる！！ だいたいわかったわ！ アンタ、このキシヨイ血のこと、竜様に問い詰められて、心当たりあんのに誤魔化したでしょ？！」

「あ、はい」

「かーっ、ぺっ！！ このストコドッコイがよおお！！ なんだア？ かつこつげやがって、手前のことを心配してる女になんて弱みの一つも見せねえのよ！ フニヤチン野郎がよおお！！」

主教が糸のような細い目を彼女にしては開いて、遠山にドスの聞いた声を向けた。

紫色の瞳が、煌々と圧力を持っていて。

「う、ぐ。何も、言い返せねえ……」

主教のキレっぷりに、どんどん遠山は冷静になっていく。

自分のあまりのデリカシーのなさ、そして少なくとも、また自分の発言によって誰かを泣かせてしまったことを理解して。

「うむ！ 言い訳しないぶんまだ救いようあるわね！ スヴィ！」

「はい、いつでも」

「えっ？」

気付けば、馬車が近くに。

御者席に座る先輩、聖女スヴィは馬をあやして、準備万端。目覆いのついた馬鎧、ごつい馬たちもやる気まんまんで、蹄で土を掻いている。

「行くわよ！ トオヤマナルヒト！ こんなクソバカ展開、天が許してもこのわたし、カノサ・テイエルフィルドが絶対に許さない！  
こんなことであんな未来を呼んでたまるものですか！」

「いや、なにを？ 行っくつてどこに？」

「竜大使館に決まってるでしょ！」

ヒヒン。

馬車ウマもみんな、やる気満々にいなないていた。

「アンタが泣かした女子に土下座かましにいくのよ！ バカ男子！  
」！

がっど、遠山の胸ぐらを掴んで無理矢理に立たせる主教。

夕焼けの中、めちやくちやになりつつある運命はしかし、未来を夢見る銭ゲバがその崩壊に楔を打ち込む。

デリカシーゼロ、病気にみたくこっけで事態をめちやくちやにしかけた男も、しかし、少しずつ成長している。

似たような感じで、昔、何人も泣かせたことがある。だから、これは、そう、乗り越える時だ。

過去を、前の人生を、この続きの世界で乗り越える時がきたのだ。

「……ドラゴン、つえー」

遠山が、へし折れて、気付けば治っていた腕の動作を確認しつつ、自分の足に力を入れる、自分の足で立つ。

よつやくできた少ない友達を、こんな簡単に手放すわけにはいかない。

『心配なのだー』

ドラ子はそうだ、最初からそう言っていた。

「ばか、か。確かに、クソバカだ」

竜は、初めからなにも変わっていない。ただ、自分を心配して、寄り添ってくれようとしたただけだ。

「了解。ありがとう、委員長」

謝ろう、全部、話そう。

そう、決めた。

「誰がインチョウよ、主教様とお呼び！」

夕焼け小焼けでまた明日。でも、もう遠山鳴人は大人になっている。

「ああ、助かったよ、主教様」

家に帰るのはまだ、早い。



## 87話 グダグダの分岐点（後書き）

ある日 ニホンにて

「やーやー、久しぶり！ 元気にしてたかい？ 会うのはいつぶりだろうね、高校卒業以来かな」

「そうね、そのくらいだと思っ」

「アハ、君も変わらないねえ。その愛想のない感じ。とーってもらしくていいよ」

「貴女も。そのデリカシーのないところ変わらないわ。優砂さん」

「三つ子の魂100まで。僕たちの人格や人間性は一度固まれば変わることはないってね。特に僕は、高校の3年間で人間性が拗らされてしまったからね。今更変わることはないよ、これは、彼の残してくれたものだから」

「……………」

「おっと、怖い顔するね。なんだいなんだい。旧交を深めようとノコノコ出てきたのは僕だけってことかな。よよよ、悲しいなあ。僕にとつて、あの高校時代の友人はまさに、宝物と言ってもいいものなんだけど、それで用事とはなんだろうね」

「遠山鳴人が死んだの。それを貴女に伝えておきたくて、今日は呼んだの」

「……………とーやまが？」

「ええ」

「ぶっ」

「あつはははははははははははは！キミもジョークを言うつよつになつたんだね、ははははははははははははー！あまり、面白くはないけれど」

「私が冗談で、貴女にわざわざ連絡とって会おうと思う？」

「わお、確かに。たしかに、そうだね。私の、この海城 優紗の知るキミは、藤堂 未来はそんな下らないジョークを言う女ではないね」

「だったらー」

「んー、でもどうかなー。キミには色々な顔があるからねー。わっかないなー、こればかりは、ねえ？」

「なんの話かしら？」

「またまたとぼけちゃってさー。キミのたくさんあるお名前の話だよ、基特高校3年C組卒業生、彼とあの3年間を過ごした藤堂未来としてのキミのことはよく知ってるつもりだ、け、ど」

「……なんの話か、わからないわ」

「あつははは！ そんな怖い顔しないでよ！ あ、でも、その顔、昔もよくしてたよね？」と「やまが別の女の子と話してるのを見るキミはいつもそんな顔してたよ」

「貴女みたいな人、ほんと苦手」

「あつはははは！ 僕はキミみたいな人のこと好きだよ、いいじゃないか、欲しいもののためにそこまでするんだ、それはまさしく情熱、人が生きるために最も大事なことだよ」

「高校時代にあれだけ死にたがって自殺未遂繰り返してひとが言う」と説得力が違うものね、ああ、そう、あれ、遠山鳴人の気を惹きたくてやってたものね」

「おや、調子が戻ってきたね、未来ちゃん。ああ、僕の3年間はまさに、あの青春はまさにその為だけにあった。まあ、結局、彼をめちゃくちゃにしてやるうとして、僕の方が全部めちゃくちゃにされてしまったのだけねど」

「そ。悪いけど、貴女の惚気に付き合う気はないの。……彼のことを教えたのは、義理みたいなもの。言っておいてなんだけど、海城さん、昔の同じクラスのよしみで警告するけど、あまり”探索者組合”について調べない方がいい。海城家でも手に負えないー」

「生きてるよ」

「は？」

「生きてるよ、とーやまは」

その女の目は、暗く、昏く、輝いていた。

夜の闇の中、湿った熱を放つ炎のように。

「とーやまが、死ぬわけがない。この僕が死んでないんだ、あの男は、約束を守るやつだからね」

女の目の中、黒い炎が煌々と。

「キミだって、同じだろう？ あの男に人生を狂わせられた人だ。手放したくなくて、あれの脳みそを弄るほどなものね、藤堂 未来、ああ、それともこう呼んだ方がいいかな？」

「遠山鳴人の探索者仲間、ファイアチームの日下部日菜さん？ いや、公安部隊の名瀬 瀬奈さんの方がいいかい？」

「貴女……」

「とーやまは生きている、あれが僕より先に死ぬわけがない。もう彼と僕が交わらぬ運命だとしても、彼と僕の物語が結末を迎えているとしても」

賭けの結末、ある青い春の物語、その報酬はたしかに、その女――

「とーやまは、約束を違えない」

海城 優紗の手に。

「きつと、どこかでヘラヘラ生きてるに決まってる。あのデリカシーのなさで、人の人生にずけずけと踏み込んで、荒らして、狂わせで。それで、デリカシーないからまた女の子でも泣かしてるはずさ」

「それは………… たしかに、有り得そう」

なんのこともないある世界の話。

ある男が消えた後も、当たり前前に続く世界の話――

彼と彼女達の物語は終わっても、みんなまだ、生きていた。

88話 主教・the・Night

〽夜、冒険都市アガトラ 丘陵 竜大使館へのケヤキ林にて〽

パカラッ、かたら、ポカラ。

ドワーフ製の蹄鉄と馬鎧を身につけた強馬が、グイグイと蹄を鳴らして馬車をひっぱる。

「作戦を整理するわ、速攻で竜大使館に侵入！ どんな邪魔立てが入ろうと全部排除して、竜様に会おうの！ あ、でも殺しはなしよ！ いい？ トオヤマナルヒト！ そこんとこ分かってる？」

「なんか内容が謝罪に行く人間の行動じゃ無い気がするんだけど分かった！」



幌無しの速度重視の馬車、言うなればオープンカー状態の馬車の席、遠山は向かいに座る主教の言葉に真顔で強く頷いた。

「あーに、甘っちょろいこと言ってるのよ、トオヤマナルヒト！  
いい？ これはもうぶっっちゃけ戦争よ！ 竜大使館にノーアポで乗り込むんだもの、攻城戦と同じ気分で行きなさい！」

馬車が、夜風を切りながら進む、夜がその闇の帷をおろすと同時に、冷たい空気を世界にばら撒いていた。

「あー、まあ、謝るんなら早めがいいわな」

月明かり、明るく。

ライトに照らされているのではないかと錯覚するほど、今日は明るい夜だ。

明るい夜、流れる景色、馬車は街中を抜けて郊外へ。丘の上にある竜の住処を目指していく。

「今しかないのよ！ 男どもはさあ、これだからさあ！ いい？  
よく聞きなさい、このデリカシーレス男」

「あ、はい」

主教の言葉に遠山は素直に頷く。

「女舐めてんじゃないわよ、いい？ あのお方も女なの、竜であると同時に女なの。今はアンタに興味を持ち、アンタを尊重してくれる。でもね、それは永遠のものじゃないの」

「はい」

「冷めるのよ、女は」

それは、静かで冷たい声だった。この夜の暗さに溶けてしまいそ

うな密やかな声。

「抱いていた感情が、その人への認識が、ある時急に冷めてなくなるの。コイツは違ってる、なるとね、どうでもよくなるの」

「……………それは、やべえな」

キツイ。

遠山の感想はそれだけだ。

「そう、やばいのよ！　これが別に普通の女だったら、アンタがどうなるかと知ったこっちゃないけど、あのお方は竜なの。トオヤマナルヒト、アンタにはあのお方の興味でいてもらわなければいけないのよ」

「主教様の理由はなんだっていい。俺は、俺の友達にしてみましたいい加減なことを謝らねえと」

「それでいいの！ 女なんて一人で悩ましてたらロクな結論に至らないのよ、あのお方のことよ、このまま放っておけばもう2度と、アンタと関わらなくなってもおかしく無いわ」

「それは、やっぱりきつい」

「はっ、なによ、トオヤマナルヒト、アンタ以外とー」

主教が、キョトンとした、にまりと笑って

「ぶふおえー！」

「うおー！」

ガタン！

大きな音、馬のいななき。馬車席が大きく揺れる。

主教は大きく体を揺らして、大きな悲鳴。遠山はなんとか馬車の張りを掴んでそれに耐えた。

「いったああああい！ スヴィ、スヴィ、スヴィ、スヴィちゃああん、ちよーっと馬車の運転がワイルドすぎないかしら？」

頭を打つたらしい主教が、御者席のスヴィに声を向けて。

「主教様、ごめんなさい。お馬さんたちが……」

「ぶるるる」

「ユルル」

馬たちが、急停止したのだ。

スヴィの鞭にも反応しない。ぶるといなき、その場に足踏みして動かない。

「いてて、ど、どうして。止まるの？ 竜大使館にはこのケヤキの林道を越えたらすぐなのに スヴィ、スヴィ！ 状況を！」

「ダメです、主教様、動かないで」

声を上げる主教に、聖女がそれを制す。

スヴィ・ダクマーシャル。

主席聖女、教会の保有する戦力の中でも最上位に位置する彼女、ヒトを超えたヒト、超越者に類される彼女の小さなが、静かに震え始めていた。

馬たちと同じく、その存在に気付いて――

「ほほほほ、利口な馬たちですな。よく調教されており、忠誠心も強い」

「ッ」

「……げ、まじかよ」

主教が息を呑み、遠山は顔を顰める。

聞き覚えのある声が、カンテラの灯りとともにやってくる。

その男を、遠山は知っている。この世界にやってきて、竜を殺し、竜に持ち帰られたその先にいた男。

あの温泉で、遠山へ、竜の対等な友になってほしいと願った男。

「よい夜ですな、天使教会異端審問会のお歴々。竜大使館の中庭へようこそ」

いつからそこにいたのだろうか。

手に持った夜行用のカンテラの灯りがぼんやりとその男を照らす。



夜と同じ色の燕尾のタキシード、仕立ての良いシャツ、整えられたシルバーヘア。

片目につけられたモノクルを、柔和な微笑みが色めきたたせる。

整えられた執事服の上からもわかる、体格の良さ。

ごついナイスシルバーの執事が、そこにいた。

「ベルナル・オドニアス…… 大戦の鬼人……」

主教の声が、震えている。天使教会、古い歴史、忘れられた大戦の記録を一部保有するその組織。

カノサは、歴史が謳う鬼の強さをよく知っていた。

「あの爺さんか…… 主教様よ、ここは俺が」

遠山が席から立ち上がる、執事の爺さんに事情を話してここを通してもらわねばならない。

「ーいい、遠山鳴人、私が話す。アンタは私か、スヴィが許可を出すまでお口チャック、これ、命令だから」

そんな遠山の言葉に、主教が首を横に振る。

音もなく、しかし、微妙に膝を震わせながら立つ彼女の言葉。声も震え始めていたが、不思議なことに反論する気が湧かなかつた。

「……ウィルコ」

遠山は素直に、席に座る。

「お目にかかれて光栄ですわ、ベルナル・オドニアス様。大戦の英雄、炎竜に認められたお方」

馬車席かれ降りることなく、その場で立ち上がった主教が、ロングスカート両端を掴み、軽く一礼。

気付けばもう、その振る舞い、声から震えは消えていた。

「ほほ、今は、竜大使館執事長のただのベルナルにて。お久しゅうございますな、主教殿」

「お、おほほほほ。では、執事殿。いい夜ですね。………ごほん。夜廻りでしょうか？ ここの敷地は広いから中々に大変でしょう」

「いえいえ、主教様のご公務ほどではありませんせぬ。いや、気苦労も

多いことでしょう。天使教会の運営、帝国との折衝、各派閥の調停、それに加え今宵は、フッフ、男女の仲のもつれの仲裁ですか？」

「わーお、バレバレじゃない。おほほのほ。……ご理解頂けて何よりです。竜大使館の敷地内に許可なく馬車を走らせた無礼は謝罪致しますわ」

「いえいえ、貴女様はあのお方とうまくやっていらっしやる。竜大使館と天使教会が蜜月の関係を築けているのも、ひとえにカノサ主教様、貴女の辣腕で成り立つと言ってもおかしくありません」

「褒めすぎですわ、執事殿」

表面上は穏やかな会話。

互いにその張り付いたら笑顔さえなければの話ではあるが。

「事実を言ったままでです。故に、解せませんな。何故に貴女様がこ

のようなりスクの高いことを選んだ理由が」

「おほほ、……執事殿、無礼を承知でお伺いしますが、今宵、蒐集竜様への謁見は叶いました？ 天使教会として、どうしても今から竜様にお目通り願いたいのですが」

「ほほ、豪胆なお方ですな。敷地内への不法侵入がバレた途端、それを言えるのは貴女くらいでしょう。ですが誠に残念ながら、大使館の主、蒐集竜、アリス・ドラル・フレアティル様はおやすみになつておられます。何人たりともお会いすることはございません、例えそれが」

すつと、好々爺ヅラしていたベルナルの目が開かれる。

猛禽にも似た鋭いそれが、天使教会たちを見つめて。

「友人であつても」

超越者として、ベルナル・オドニアスが唇を開く。

「っっはあ、う」

どせり。

それだけで、主教の膝が崩れた。顔を真つ青にし、脂汗を吹き出しつつ、馬車席になんとかもたれて荒い息を繰り返す。

「……主教様！？ 大丈夫、大丈夫です。執事殿、我らの主教様に失礼です。不用意に脅してくるのはやめて」

遠山が動くよりもずっと早く、聖女が御者席から飛び移り、主教を介抱しはじめる。

「おや、聖女殿。これは失礼を。……主教様はご気分が優れない様

子。今宵、敷地内にいらつしやったこと、本来であれば正式に竜大使館から抗議を出すところではありますが、今素直にお帰りになるのならば、私は何も見なかった、ということにいたしますが？」

この男、面の皮が厚い。

自分で主教を乱しておいて平然と丁寧な言葉をそのままに。

優しい声色はしかし、はっきりした拒絶が見え隠れしている。

遠山は気付いた、この爺さん、割と本気でキレている、そして、割と大人気ない……！！

「うえ、おえっ、お、ほほ。ありがたい申し出だこと。……それは、蒐集竜様のご命令なのかしら」

溢した胃液を軽く拭いながら、主教がゆっくり立ち上がる。

「主教サマ、無理しちゃ、だめ……」

スヴィの言葉に、微笑むカノサ。それは己の右腕を安心させるための瘦せ我慢の成したものだ。だがそのちっばけな見栄は、彼女をここまで押し上げた。

「……………なにがでしょうか」

「何人たりとも会わない、友人であろうとも会わない。それは、アリス・ドラル・フレアテイル様のお言葉なのかって、聞いたのですよ……………」

「ーええ、もちろん」

圧、再び。



遠山ですら耳鳴りや悪寒を感じるその圧力。古い生き物がその圧倒的な存在力と魂をそのままに振る舞う傲慢な業。

それに耐えることの出来る存在は少ない、限界まで鍛えた凡人か、それとも元々素質のある人物か。

主教は、そのどちらでもない。だが――

「ダウト、嘘が下手ね、執事殿」

それでも、主教の震える細い指が超越者を指した。

「なんと？」

「貴女、とってもナイスシルバーないいおじさまだけど、あまり女

心について理解がないわね。モテそうだけど、……ふふ、本命には奥手だったか、それとも身を引いたのかしら？ 男女のことをども綺麗事にしそうな雰囲気してるわ」

「ほほ、おやおや」

びきり。

ベルナルの年季の入った皺の中、青筋が一つ浮かぶ。

「わたしの見立てでは、これ、貴方の判断ね、ベルナル・オドニアス。蒐集竜様がうちのバカのせいで、おやすみになってるのはほんとだろうけど、誰にも会わないとか、誰も通すなとか、それは明言してないはずだわ」

「なにを根拠にそんなことを仰っていられるの？」

ベルナルの声が、僅かに固くなった。それに気づけたのは遠山と、

主教だけ。

「女の勘と、簡単な推理よ。蒐集竜様はね、あの子は、まだうちのデリカシーゼロ男に、期待している。確かにこのバカはバカよ。どうしようもなくイカれてて、自己中で、何しでかすか分からない、バカのくせに頭と舌の回る厄介な男。……でもね」

威圧感で、バラバラに髪型の崩れた白髪を乱し、主教がふっと、笑った。

「でもね、一度のミスで全部がダメになるほどコイツは生温い生き方は、してないのよ」

同族嫌悪、だが、それと同時にカノサ・ティエルフィールドは知っている。

「何度もトオヤマナルヒトは私たちにその価値を示した。竜を殺し、竜と結び、教会に潜り込んだその能力に私は賭けてるのよ、アリス様は、まだ、トオヤマナルヒトに愛想を尽かしたわけじゃあない」

その男がこれまで繰り広げたぼうけんを。

竜を制し、騎士を蹴散らし、伝説の生物を下した。試練を乗り越えてきたそのぼうけんには、彼女は敬意を抱く。決して口にする事はないが。

「……………蒐集竜様のお言葉を疑うと。それは天使教会主教としての意見ですか」

ベルナルが静かに、主教へ問う。

天使教会、世界の安寧と平穩のために、天使教を広め大衆を導く宗教組織。

その長たる彼女が、竜を軽んじる発言をする、それが何を意味するか。

「汝、誰がためにことをなせ、例え己がなじられようと、止まる  
こと能わず」

「天使教聖典」ある昼下がりの銀の枝篇” 第六節 善い生き方の  
ためにより”の言葉」

紡ぐのは、彼女の掲げる宗教の言葉。得体の知れぬこの世界の最  
深部、天使を恐れながらもしかし、それと同じくらい彼女は正しく  
天使を崇めている。

彼女が残したとされる言葉、それはどれも受け入れるに等しいも  
ので。

「わたしには分かるの。ここは分岐点、ここがターニングポイント。  
今、ここで竜は独りになるべきじゃない。リスクは承知、馬鹿げた  
ことをしてんのも承知」

主教がゆっくり、立ち上がる。ベルナルの問いに天使の言葉を持  
って返事をする。

「主教、サマ……」

聖女の助けを制し、一人で立ち上がる。バサバサに乱れた白髪を、後ろ手に一つに縛り、糸目に隠された紫瞳を見開いて。

「このバカを、トオヤマナルヒトを天使教会に引き入れたそのときに！ このバカを審問官に選んだ時にすでに、決めた！ わたしはコイツにベットした！ 投資はもうすんでんのよ！ 必ず回収させる、捨てることはないわ」

「……竜は今、何人たりとも会いません。お帰りを、天使教会」

「いいえ、ダメね！ 聞かないわ！ 私たちはここでやらないといけないことがあんのよ、天使教会主教として、我が帝国と教会の良き隣人、アリス・ドラル・フレアテイルのより良き未来のために、

わたし達はここに来た！」

ずびし！

髪を振り乱し、主教が叫ぶ。膝は笑い、鼻水を垂らしつつも、もはや彼女は止まらない。

「……なにをしにおいでで？」

ベルナルの言葉に、主教の口がにんまりと。

半月の形に微笑んで。

「ふふ、聞いたかしら！ トオヤマナルヒト！ バカ男子！ お家の方が何しにきたかですってよ！ 答えてやりなさいな、”竜殺し”！！」

何をしにきたのか、この言葉を竜の従者から引き出した。ならば、あとは――

主教は呼ぶ、その男のあだ名を。彼女にとってようやく手に入れた必要な手駒につけられたその名前を。

パンッ。

合図だ。

スターターピストルが鳴らされた音がした。

主教、カノサ・テイエルフィールドは超越者の圧に胃液を吐きながら、役割を果たした。

そして彼女は認めてくれている、こんなバカをやらかした自分を正しく見つめ、それを信じてくれている。



ああ、ほんとに、バカか、俺は。

遠山が止まる理由なんてどこにもなかった。

「――謝りに来た！！！！！」

ここで、正直に言えなくて、何が男だ、何が友達だ。

遠山鳴人がまっすぐ叫ぶ。

「友達に、俺が言ってしまったこと、やってしまったことを謝りに来た！」

「ほう、そうですか、そうですか。……謝りに、ね」

だが、そんな勢いだけで動く老人ではない。

太く、静かで、おおらかな声。

そのはずなのに、まるで光届かぬ深海に叩き込まれたような威圧が、声と共に満ちる。

「「「」」」

「あ、無理無理、倒れる倒れる、もう無理よ、ほんと」

遠山とスヴィが体をびくりと大きく震わせ、主教がふらりとその場に崩れる。

「誰も彼も、勝手なことばかり。よりよい未来のために？ 謝りにきた？ 笑わせてくれますなあ」

「怖え顔しないでくれよ、爺さん」

「まだ軽口が叩けるのはさすが、と言っておこうか、小僧。私はたしかに、貴方に、お嬢様の対等な友人となるようにお願いをした身なれど…… ああ、あのような顔をさせるのは願っていなかったぞ」

シンプルだ。ベルナルがここに立つのはシンプルな怒り。

彼にとって、世界よりも大切な存在、その忘れ形見である幼童の、家に帰ってきた時の憔悴した顔。

鬼は、それを受け入れることは出来なかった。

「……う、お、ほんと、なにくってんだ、アンタ……」

「謝るなど、それは貴様の自己満足に過ぎん、それで解決するのは

貴様のちっぽけな罪悪感だけだ、トオヤマナルヒト」

「ーベルナル、テメー様さ、きつと執事服とか似合うわよ、間違  
いなく。」

鬼が想うのは、彼女の言葉。

偉大なりし水の竜。鬼は水の竜のおかげで、殺す以外の生を知る  
ことができた。

「今、お嬢様に必要なのは時間だ。わかるか？ 貴様の思いつきに  
も似た謝罪など、何も役に立たん。お嬢様はお前のその歪みを受け  
入れる為の受け皿でも、お前の欠けたものを赦す為の試金石ではな  
い」

「ーごめん、ベルナル。あたし、今から死ぬから。うちのひと、  
うちの子達、それとアリスのこと頼んだわね」

鬼が愛した水の竜。傷ついた世界を洗い癒すため、その命を懸けて運命の死に殉じた彼女の言葉。

それはきつと、竜が遺した愛の言葉。

それはきつと、竜が遺した呪いの言葉。

「トオヤマナルヒト、お前は俺の宝を傷つけた。貴様がアリスに謝るのは、彼女のことを想ってではない。打算や、保身ゆえだろうが。貴様の自己満足に、アリスを付き合わせるな」

遠山が、息を呑む。

その威圧感ではなく、その思いの分厚さに。

自己満足。

その通りだ。アリスに謝りたいというこの気持ちも、利己的、打算がないと言い切れない。

遠山鳴人は言い返せない。あまりにも、ベルナルの言葉は純粹で、その怒りは無垢で。

自分がひどく、汚いものように思えて――

「ふ、ふ、ふふふふふ、ふふふふふ、笑える」

それは夜に響く笑い声。女の笑い声。

主教に、強さはない。超越者の圧に耐えられる頑丈さなど併せ持っていない。腰は砕け、膝は笑い、顔は引き攣る。

だが、笑う、だが、笑え。

「ふふふふふ、まったく笑わせてくれるものね、ベルナル・オドニアス」

カノサ・ティエルフィールドは、試練に向けて笑顔を向けれる女だ。

「なに？」

「自己満足、よく言ったものね。でもそれを言っならあなたのそれだって、何も変わらないわ」

「……………」

「そもそも、利己的なこと、保身、打算が混じって何が悪いのよ、あなた達超越者とは違って、こちとら生きるだけで、どんどん薄汚れていくちっぽけな存在なのよ。はあ、男って意外と潔癖よね、純粹とか、無垢とか、そんなところに価値を見出すんだもの」

ある意味夢見がちな男の世界、そこに冷や水をかけるような女の言葉。

だが、それこそがきつと真実なのだろう。

「……………ほう」

「いいこと！ よくお聞き！ 竜殺しに、竜の従者！ その純情男バカども！ 女は正直、あんたらの美学とかは割と！ どーでもいいのよー！」



だが、それこそがきつと真実なのだろう。

「……ひひ」

「……………」

男は引き攣りながら笑い、もう一人の男は表情を動かさない。

「ベルナル・オドニアス！ あなたの行動が、竜のためを想う判断ならば、それはわたしたちとて同じこと、ここに本人もいないのに、その御心推し量ることなど全て兎戯に等しくてよ、そう、我らは皆同じ愚か者！ 大いなる竜のお気持ちを測ろうとすること自体、不遜なこと！」

「ならー」

執事、古い英雄、炎の竜の喧嘩相手となり得る超越者が唇を開いて。

「なればこそ！！　ちっばけな定命の者のみなればこそ、私達はただ、己が思う正しさを、己が思う義理と筋を、竜に対して示すのみ！　会いたくないだの、会うべきではないなど！　そのような沙汰を下すのはただひとり！　蒐集竜様をおいて！　ほかならない！」

その言葉を、白髪糸目の麗人が遮る。

言葉よ、舌よ、回れ、現実や、全てひれ伏せ。

権謀術数、話術、インチキ。

それだけで、平民という卑しき生まれからこの世界の宗教の頂点に上り詰めた女の言葉が、古い英雄に言葉を引っ込ませる。

「……言うじゃ無いか、天使教会主教。確かに、私情が過ぎましたな。である……ならば、俺は俺の、いえ、私の職務を果たすまで」

「いひ」

再び漏れる怒気に、しょぼんと縮こまる主教。身体中の水分が漏れ出しそう、いや、もう少し漏れている。

「不法侵入者ども、貴公らは当大使館の敷地を無断で踏み荒らしている。出て行かないのならば、実力で排除する」

それは最後通告。

竜の従者は、己が従者たるべく抑えて隠していた獣性を漏らしつつ、低い声で告げる。

鬼、おとぎ話の中の住人が、今を生きるヒトの前に立ち塞がるのだ。

「いいえ、いいえ！ NOと言いますわ、ベルナル・オドニアス！」

回れ回れ回れ。

主教の脳みそがフル回転、もう戻れない、ここまで来た、賭けてしまった、参加してしまった。踊り方を間違えれば即死のクソ舞台。

だが、上等、彼女にとってそれはある意味慣れっこの修羅場。

「竜の平穩、竜の無事、これすなわち世界の安寧、これ即ち、教会の主命！ 私たち、天使教会はこのクソ要素だらけの世界をなんとかしてでも延命させる！ そのために、蒐集竜様にはハッピーになってもらおう必要があるんだっぴー！！」

「え、いま、なんかカノピーいた？」

「後輩、今、主教サマノリノリだから邪魔しないの」

カノピーの原罪はきつと、強欲だろうか。だが、それは遠山鳴人の助けになるだろう。

「と、言うことで執事殿、全ての沙汰は、私たちのこの愚行の裁きは全て、蒐集竜様に委ねます！　なので、ここを通りますわよ」

もう戻れない、カノサは言いたいことを言いたいように全て言い切った。

「……ははは、主教様、貴女を我が主人が気に入る理由が分かるよ、ですがー」

ベルナルのモノクルの向こう側、穏やかな瞳が何か眩しいものを眺めるように細められ。

「いくら言葉を弄しても、いくら想いを吐いても、なんの意味もあ

りません。ここは私有地、そして今、私、竜大使館執事長のベルナルはお嬢様に誰にも会わせるつもりはございません。……それが聞けねえなら、もう俺たちの間に言葉なんざ、いらねえよな」

豹変、剥き出しになるのは鬼の瞳。

果たして、それに見つめられ平静でいれる生き物がこの世界にどれだけいるものだろうか。

「あばばば、漏れるって」

「……主教サマを怖がらせるのはやめて」

ぶくぶくとあぶくを吐き出す主教、彼女の腰にぎゅっと抱きつく聖女が、鬼の瞳を真っ向から睨み返す。

「おや、これは失敬。では、お帰りを願いますかな。それとも押して通りますか。いやはや、それもいいかも知れません。天使教会が最大戦力の一つ、主席聖女、そして竜を落命さししめ、伝説の生物

たる” 古代種” をも討ち取ってみせた冒険者。 試す価値はあるでしょう」

ぼきぼき。

ベルナルがその大きな手のひらを開いたら、閉じたり。 それだけで、腹に響く太い音が届く。

「……先輩。 あの爺さん、 言っとくけどマジでやばいぞ」

「……知ってる、 後輩。 前、 何も出来ずに負けたから、 どうしますか、 主教さま。 ご命令を頂ければ、 スヴィは命に代えても、 あなたの願いを叶えてご覧にいれますが」

ピロン。

矢印が、 浮き出す。

【警告 レベルが足りません、警告、非常にレベルの離れた相手です。勝てません。貴方が蟻だとすれば、相手は巨像です、踏み潰されて終わりでしょう】

久しぶりにまともなメッセージが流れる。

「いえ、大丈夫よ、スヴィ。……時間だわ」

「……貴女の先程の言葉、なかなか刺さるものがあつたのも事実です、が、いささか無理がありますな。あなたがたが、なんの権利も、道理もなく、竜の家に踏み込む下手人であることに代わりはないのですから」

来る、動け、初撃、初撃、初撃だけはなんとか絶対かわさないと。

「ここは我が主人の領域、何人たりとも通さぬ。道理もなく、通り



たくば、定命の者よ、強きものよ  
「

一歩、ベルナルが進む。

その度に呼吸すら、危うく。

「見事、鬼の首を取ってみよ  
「

鬼が、古兵が立ち塞がる。

「すぶぶ。鬼の首取り、ボクも混ぜてもらおうかなあ」

「……なに？」

鬼の動きが止まる。

「え？」

聞き覚えのある冷たい声に、遠山が声を上げ。

「間に合った、のね。ナイス、トッスル」

主教が、冷や汗を流しながらも、にやり、笑う。

コマは全て、カノサの描いた絵の通りに動いた。

「やあ、ベルナル。相変わらず、キミはなんというか、激情家なものだ。アリスを愛するのはいいけど、そろそろキミ、子離れする時なんじゃあないかい？」

月が、似合う。

一際高いケヤキの太枝の上に、彼女はソファにでも腰掛けるかのように呑気に座っていた。

大きな魔女帽子を被り、夜に指す月光を梳いたような銀髪を流して。

ぞっと、するほどの美。

夜とは彼女のためにある時間、彼女を引き立たせる為にある時なのかも知れない。

人知竜、アイ・ケルブレム・ドクトウステイルが、まん丸の月を背後にクスクス喉を鳴らしていた。

「全知、竜」

鬼が、銀髪的美竜を見上げてつぶやく。

「人知竜、だよ、鬼人。居候してた時に何度も訂正したはずだけだね」

「なぜ、お前がここに…… 屋敷から出ていったはずだ」

「野暮用、さ。ボクもこの街に根を下ろそうとしていてね。手始めに、商人ギルドに出かけていたら、面白い話を教会から聞かされてね。いてもたってもいられなくなったわけさ。……遠慮して監視の魔術式を休めていたのは、ミスだったねえい」

よよよ、大きな魔女帽子で口元を隠しながら泣き真似をする人知竜。

「厄介な…… 貴様の出る幕ではない。これは当家の問題だ。帰れ」

「いやいや、それがそうもいかないのさ。全くの無関係とはいかなくてね。そうだよねえい」

人知竜が目を細め、口元をにまりと歪める。

薄い色素の小さく潤う唇が、動いて。

「ストルちゃん」

「デイス」

物凄く聞き覚えのある声が、背後から。

遠山は目を丸く見開いて。

「ストル?!」

銀鎧の上からローブを羽織った水色髪のポニテ少女。

ストル・プーラがいつのまにかテクテクこちらに徒歩で来て。

「人知竜殿、途中で置いていくの、ヒトとしてどうかと思いますデイスけど」

「すぶぶ、ごめんねえい。ボク、竜だし。それに、こんな感じに

勿体ぶって登場した方が、こう、全員集合！  
みたいな感じで映えるかなあ、ってさ」

呑気な会話を繰り返す人知竜と少女騎士。

遠山は何がなんだかわからない。

「主教様？」

それは聖女も同じだったらしい。

唯一おそらく、この場で全ての盤面を理解しているだろう人物に  
声を。

「あー、よかった、間に合った」

幸運にも、遠山鳴人は竜とすれ違つ。

だが、しかし、ここにそんなものも寄せ付けぬ確かなものがあつた。運命、宿命、そんなもの一度も信じず、これまで己の才覚と頭脳だけで成り上がった女がいた。

「天使教会主教、貴公、なにを、考えておられるか」

「静かに、ベルナル。キミが喋ると主教サマが話せないだろう？  
お静かに頼むよ」

「ふ、ふふふふ。ベルナル・オドニアス。耳が痛かった、耳が痛かったわ。貴方、冷静なんですもの。たしかに貴方の言う通り、このままだと、私達は道理なく竜に無理矢理会おうとする愚か者、道理なき勇気は蛮行だものね」

全て、布石、全て時間稼ぎ。

鬼へ語った竜への想い、教会の責務、竜殺しに叫ばせた本音も。



全て、カノサ・ティエルフィルドのこの時のために。

その全ての言葉は本心なれど、その全ての言葉は誠なれど。

鬼を刺すための本当のナイフではなかった。主教は二度刺す。

「……その通り、貴公らには、竜に会うための権利などない。拝謁を許されるのは彼女が許した時と、古い約束の……」

4656

ベルナルの言葉が止まる。

そして、目を見開き、馬車の側に立つ水色髪の少女、その月の光を照り返す銀の鎧を見つめて。

「待て、その少女の銀鎧、まさか……」

主教が、にいつと、齒を剥き出して笑った。

「――天使教会主教の名により、今この時をもって、取り上げていた資格を返還します。ストル・プーラ。再び剣を構えなさい、再び銀色の輝きを纏いなさい。我らが剣、我らが正義」

竜に挑むのは、騎士の誉れ。

「汝、これより教会の剣となり、誰がための正義を為しなさい」

誉れある天使教会騎士には赦されている、その美しい生き物に、命を懸けて挑む権利を。

「天使教会騎士団、第一の騎士、ストル・プーラ、拝命いたします」

剣の鞘を立て、己の胸の前に掲げて答える。

いま、ここに剥奪された称号は返還された。天使教会騎士団のおぞましい血と選別の営み。

その最高傑作、”正義”の依代たる選ばれた少女は第一の騎士となる。

「お初にお目にかかります、竜の従者。早速デイスが、私に認められ、古い約束によって守られた権利を執行します」

騎士たちに赦された権利、竜を殺した冒険奴隷が未だ、アガトラに辿り着く前の空白の1ヶ月間。

幾人もの騎士が、その権利を行使し、死んでいった。誉れと共に竜へ挑み、無謀に死んだ。

だが、皆誰一人として後悔したものはいないという。

竜に謁することこそ、騎士の最大の栄誉であり、誇りであるのだ

から。

「天使教会騎士として。竜との古い約束により、これより竜に拝謁し、挑む権利。”竜謁”を申し出ます」

この場にて、唯一、”約束”により竜に謁することを赦された少女が告げる。

「や、られた……………」

ベルナルがぼそりとつぶやく、その口髭はしかし、どこか愉快そうに。

理由はつけた、体裁は整えた。見戯に等しい戯言なれど、天使教会にはこれで大義名分が揃った。

「全ては我らが、竜の為に。ええ、ここに天使教会に許された、天

使教会主教カノサの名により、「竜謁」を許可します」

教会と竜には古い盟約が存在する。

竜謁。

いついかなる時、どんな場合、状況においても、教会騎士は竜に挑むことが出来る、そして、竜は――

「竜の従者、知らないとは言わさないわよ、我らが誇り高き竜はいつ、いかなるときも、小さき者からの挑戦を断ることはない。……挑まれたら受けて立つのも、竜の誇り、よね？」

一手。

この瞬間、天使教会は、竜の敷地に無断で侵入した賊から、古い約束の元、竜へ謁見する教えに殉じるものへと様変わり。

もはや、誰に憚られることもなく。

「……………これは、見事だな」

「すぶ、ふ、ふふふふ。あははは、詭弁だねえい、でもよい。嫌いじゃないよ、主教殿？」

上位者たちすら、その手管に舌を巻く。

小さき者への感嘆を小さな微笑みとともに。

「主教様、ご命令通りに、人知の竜様とストル殿への工作完了して」

「ご苦労、お見事よ、トッスル、私の羽達」

猫獣人、面隠しと猫耳の黒装束の羽達が、主教の側に音もなく現れる。

天使教会、カノサはその性能をつかいこなし、幸運に歪められた盤面を取り戻す。

「アンタ、マジか、どこから準備して……」

遠山が一手で全てをひっくり返した女に驚愕を向ける。

得意げに、憔悴した顔でそれでもドヤ顔かました主教が口を開く。

「異端審問官、トオヤマナルヒト」

そして、最後のコマを前へ。

道理は揃えた。大義名分は教会に在り。

「天使教会主教、カノサ・ティエルフィールドの名において命ずる。  
異端審問官トオヤマナルヒト、全武装、全能力を懸けて、ストル・  
プーラの竜調を助けなさい」

はい、出来上がり。

「ーッ、ヒヒ。ご命令のままに、ボス」

初めてだ。

上司と、本気で言いたくなる人間に出会ったのは。

遠山が、主教からの指令を受け取る。

「誰がボスよ、誰が。この下っぱ」



涙目、半泣き、膀胱ギリギリ。

それでも、主教は遠山の軽口を打ち返し、腕組みしてフンと鼻息を、吐いた。

「主教様とお呼び」

88話 主教・the・Night（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください  
さいー！

面白かったら下の星で評価、いいねよろしくお願いします！



けで。響く笑いは怒りでも憎しみでもなく、ただ愉快。

見事なり、見事なりて定命の者、儂く弱く脆いその身の上でよくぞ、とばかり、鬼がそれを讃えて笑う。

「くはははは！！　　ーさて」

ふ、と。笑い声が止まり。

ーそして、鬼が、馬車を見た。

「おっと、まずいねえい」

反応出来たのは、彼女だけ。

ベルナルと同じ古い生き物にして、上位生物の竜が1人。

魔術の祖、人知の竜。

「え？」

「は？」

風が強く吹いた、遠山にはそうとしか感じられない。

だが、それは風ではない。実体を持った”暴”

「術式、仮説定理構築」

人知竜のまさに、神業と言っしかないその所業。既に、この世界を侵す式。

魔術式の起動準備は完了している。

「魔術式”モベーレムベンベ百葉の盾”」

ギユ、ジギイイイイ

捻り捻れる音が夜を震わせる。

「止めるか、全知竜」

眼前で起きたことを少し遅れて、視覚として認識。

殴りかかってきたベルナルの拳は、不思議な紋様の壁に阻まれて止まっていた。

「……人知竜って言うてるよね、いきなり殴りかかってくるんじゃないよ、全く」

ぴし、ぴし。

幾重にも重なった葉っぱのような紋様の壁盾に亀裂が走り始める。

恐るべきは、鬼の呂力。

人知竜が式で詠んだ盾は決して個人の膂力でどうにか出来るようなものではない。

古い大戦の時代、小国の民を最後まで護りきり、最期はその守った民にめった打ちにされて死んだ英雄の奇跡の再現。

それが、ただの拳の一撃でゆっくり、ゆっくりヒビが入り始めて。

「とりあえず、離れてもらおうよっ、えい」

「む！？」

壁に阻まれたベルナルに向けて、人知竜がその細い指を、ピンッと弾く。

ゴム毬のように、ベルナルの逞しい身体が後方へ跳ね飛ぶ。しかし、当たり前のようにバク転しながら受け身を取り、無傷で地面に着地して。

「くははははははは！！ 良い！ 愉快！ 見事なり、よもや天使教会主教！ 貴公のその舌の脂の乗りようときたら、貴公！ 何故大戦に生まれなんだ！」

満面の狂相。

己の初めの一撃を防いだ人知竜の魔術式ではなく、未だ主教の神算鬼謀を褒め称える。

鬼が湧く、わくわくわく。完全にその目は愉しみを見出していて。



「お、ほほほ。ヤベ、鬼のスイッチ入れちった」

たらーっと、主教がその整った顔に粘り気の強い汗を流す。薄く開かれた糸目、そこから覗く紫瞳はやつべーと泳いでいた。

「良い、認めよう。第一の騎士、ストル・プーラ。そして異端審問官、トオヤマナルヒトを竜謁に値する者たちだと」

執事服の埃を払いつつ、ベルナルが笑う。

「竜の従者として、選別させてもらう。それなら、筋が通っているだろう？」

「うわーお、ヤツベ。ああいうのは開き直られたら一番厄介なのよね。わたし、仕事したからもう帰っていいかしら」

「……俺がー」

責任がある。

ここを通らなければならないのは自分だ、なら、この爺さんは自分  
分がー

遠山が、馬車から降りようとした、その時。

「遠山くん、行っておいで。あの幼い竜を、ボクの友人の可愛い孫  
を頼んだよ」

大きな魔女帽子を被り直し、銀髪的美竜が振り向き微笑んだ。

「……いいのか？」

それは、あまりにも都合の良い言葉。今、遠山は自分がどんな顔をしているのかも分からなくて。

「なんでそんなことしてくれるのか、って聞きたい香りだねえい。やば、かわい。連れて帰ろうかな…… ああ、ダメダメ、そういうのはダメだ……、こほん、答えは簡単だよ、遠山くん」

「人知竜？」

遠山の問いかけに、何かやばい目つきの人知竜がふわり、音もなく、当たり前前の空中に浮いて、馬車のへりに立つ。

見下ろす人知竜、見上げる遠山。

古い魔術の祖、ヒトを知り、人を思い知った竜が口を綻ばせる。

そつと、腰を折り、遠山の頬をその柔らかな手で包み込んで。

「ご覧、みんな、君を見ている」

竜の言葉が、夜に染みる。

この場にいる全員が、その竜に、その竜が見つめる男に、魅入られていて。

闇色の瞳に映るのはただ1人、たどり着くべき所だけを見つめて進む欠けた人間、ただひとり。

「キミは今回、ミスを犯した。選択を誤り、道を見失いかけた。だが、それで終わりじゃあないんだよ」

人知の竜の薄い、桜色の唇が動く。

「カノサちゃん、良いことを言ったよ。彼女の言う通りだ。みんな、キミに賭けてるんだ、遠山くん」

人知竜の冷たい手のひらの感触が、夜風で、さらに冷たく。

「キミの冒険譚は皆を冒していたんだ。ボクも同じ、キミに期待している、キミに価値を感じているんだ、だからこそ、ボク達は知っている、ここで、こんなところで、この程度のこと、キミが止まるはずがないってさ。トオヤマナルヒトくん」

どれだけの想いが込められた言葉だろう。

遠山鳴人は分からない、この知人と呼ぶにはあまりにも近く、友人と呼ぶにはあまりにも理解不能な竜の言葉がわからない。

「だから、キミはそれを証明し続けなければならない。どれだけ苦しんでも、どれだけ辛くても、どれだけ失っても、キミは、前進し続けるんだ」

それは、はっきりとした上位生物からの、呪いの言葉。

「見せておくれよ、ヒトの、ううん、人間の可能性の証明を。キミならきつと出来る筈だ」

その期待を向けられる存在がこの世にどれだけいるか、その期待に応えられる人物がどれだけいるか。

「人知竜」

遠山が、己を試す上位の生き物の名前を呼ぶ。

「ありがとな」

短く、自分がきつと、人としてきちんと口にしないとならない言葉を口に。

「……………」

「お前、よくわかんない奴だけど、なんだかんだいつも助けて貰ってる。だから、ありがとう。今度家に遊びに来てくれ。歓迎するよ」

正直に、そのままを。

ああ、そうだ。変にカッコつけたりする必要なんて全くないんだ。あの時、ドラ子にも正直に言えばよかった。

遠山は同じ過ちを決して犯さない。人生はそれを許してくれるほど余裕があるものではないと知っていたから。

「  
.....え、プロポーズ？」

「いえ、そうは言っていませんデイス、人知竜」

ぱしっと、ほおを染めて自分の口を押さえてつぶやく人知竜。

無表情にその言葉をすかさず否定するストル。

「ずいぶん、変わったものだな、全知の竜。ヒトの庇護者、残酷な  
探究者よ」



じゃり。

休憩時間は終わりらしい。

ベルナルが一步を進みはじめる。

「行きなよ、遠山くん。ここはボクと、そうだな、聖女殿、一緒に踊ってもらえるかい？」

表情が切り替わる人知竜。

馬車のフチからふわり、ロングのスカートを翻し音もなく地に降りる。

「……主教サマの命令しか聞かない」

聖女スヴィはそう言いながらも、馬車の手綱を手放し、小さな肩をぐるぐる回しつつ、前に立つ。

「ふづん、ら、し、いけど？」

「ひえ。……いえ、貴女がいれば…… わかりました、聖女スヴィ、頼めますか？」

「全て貴女の御心のままに」

聖女が満足そうに、薄く笑う。

竜と聖女、鬼の前に並んで。

「全知竜、俺がそう簡単にここを通らせるとでも？」

びきき。ベルナルの白い手袋に包まれた拳が引き擦れるような音を響かせた。

ぐにやり。

彼の背中、夜の月光すらも歪ませる鬼の鬨気。

その背中を容易に抜けるとは――

「ストルちゃん、合図をする、それに合わせて何も考えずに馬車を走らせてもらえるかい？ 遠山さんと主教くんはそのまま席に座っていないよ」

「合図？」

「人知竜、あの爺さん、マジでやばいんだ、いくらアンタでも――」

「だいじょうぶさ、ボクにはあの男をここに釘付けにする必殺技があるからねえい」

ふわりと笑う人知の竜。夜に似合わぬ、にひひと彼女らしからぬ、そう、まるで幼児がいたずらを思いついたかのような。

「必殺技？」

見当がつかない。遠山が首を傾げて。

だが、ここに、古い人知竜の知己のみが、なにか心当たりがあったらしい。

「何をー ツまさか！！？！ 全知、おい、やめー！！」

嫌な予感に、ベルナルが本気で焦った声、悲鳴に近い声を上げて。

「ーああ、愛しのケルブレム、其方の暗黒よりも暗く、太陽すらも遠さぬ黒髪のなんと美しきことか」

「「「え」」」

人知竜が懐から取り出した古ぼけた便箋を読み上げた。

それは、昔、イケイケだった鬼が一番調子に乗っていた時期に贈った恋文。

美しい黒い竜、魔術師を魅了し、ヒトを愛し、眷属すらも惑わす美を持った女。

大戦の時代、全知の竜の美に狂い滅んだ国がいつたいくつあったことだろうか。

「あー」

ベルナルは間に合わなかった。己の黒歴史を握られていたことに  
気付くのが遅過ぎた。

「すぶぶ、彼が若い頃、水竜と出会っ前に贈られた恋文。ボクは物  
持ちがよくてねえい。さーて、音読会しちゃうぞー」

「!!!ケルブレムウウウウウウウ!!!」

鬼が、本気で焦って地面を蹴る。なんの罰ゲームだろうか、己の  
黒歴史の発表会（当事者による）を止めるべく。

あまりにも無策で。

「はい、隙あり」

神業。詠唱もなく既に、式の構成は完了している。

ベルナルの足元から、なんの脈絡もなく、水が沸いた。

夜を溶かし込み、月光が煌めく冷たい水。それは意思を持つように一瞬で、繭のように。

鬼を、その中に閉じ込めて。

「ガボボボボボボボ！！！！」

水の繭。鬼の慟哭はむなしく、水の中に大量の気泡を生むだけ。

水は冷たく、しかし、鬼にとって心地よいものではなかった。

「今だよ、お行き、遠山くん。お、言っておくけど、あの純情ナイ  
スシルバーとはボク何もないからね、腐れ縁が長いだけで、この恋  
文も全部無視してたから、あれに靡いた事ないからねえい。……あ、  
待って待って、でもでも、遠山くんに誤解されたら嫌だなあ……  
違うんだよ、遠山くん、遠山くん、ほんとにほんとに、なんでもな  
いんだ、でもこうでもしないとアレ相手に水牢なんて当たらないし  
……、わた、ぼく、ボクね、ほんとにほら、一途なほうだから、色  
々言い寄られてきたけど、ほんと全部どうでも良くてね、ね、ど、  
どうしよう、何を言っても言い訳みたいに…… そうだ、ベルナル  
を始末すれば、少なくともアイツに告られた事実が消せー」

躁鬱。

余裕そうな顔から、焦り始め、気付けば昏い表情に。

人知竜は決して、善なる存在ではー



「アイ」

関係ない。遠山にとって人知竜が邪悪な存在だろうとなんだろうとどうでもよかった。

「しゅぷ」

名前を、遠山がよぶ。

人知竜が鳴き声をあげて。

「アンタすげえ、マジでカッコいい！　ありがとな！」

今はただ、感謝を。遠山は知らない、無意識に浮かべた顔は普段の彼が決して浮かべない満面の笑顔。

夏休みにカブトムシを見つけたがきんちよが浮かべるような顔で

――

「……………しゅき」

その笑顔は、人知竜から理性を消しとばした。

「トオヤマ！！ 何してんデイス！ 竜を口説いてる暇あったら行きますデイスよ！ 主教様、お席に捕まって！！」

ストルのがなり声が唐突に。御者席に座る彼女はもう準備万端だ。

「え、私？ え、もう私の仕事終わったくない？ これで帰ろうかと思ってただけど」

当たり前前に同乗することが決まっている主教様がぼやく。

「行こう！ 主教様！ 竜の巢へ！」

「ちよ、待つ、トオヤマナルヒト、肩抱いてんじゃねえわよ！ なにその急にイキイキした顔！ 似合わねえからやめてくんないかしら！ さぶいぼ立つんだけど！」

満面の笑顔のテンションのまま、遠山が主教様に笑みを向けて。

「いや、この台詞言ってみたかったから！」

馬車が進む。第一の騎士が握るたづなが馬たちを鼓舞する。

宙に浮かぶ水の繭。

黒歴史をばらされてまんまと閉じ込められた鬼の背中を、抜いた。

馬車が進む。鬼が通せんぼしていた道を進む。

「意味わかんないですけどおおおおー!!」

夜闇、月明かりの中、主教の悲鳴が響いた。

「行ってらっしゃい、遠山くん」

人知竜が、それを見送る。騒ぎながら夜を駆ける定命の者を、どこか羨ましそうに見つめて。

「ガボボっ!!」

閃くのは蹴撃。

ベルナルのたくましく、長い足が水を掻くように。それで、ぱしやり。

水の繭が割れた。

「おや、さすがだねえい、鬼人。小さく若い鬼の娘はこの水繭で充分だったけど。キミは一筋縄ではいかないようだ」

「……はあ、はあ。小癩。良い、魔術の祖、古き友よ。してやられたのは認めよう。すぐに彼らを追いかけてい。ここで寝ておけ、全知の竜」

ピッ、と濡れたシルバーヘアをかきあげベルナルが地面を踏みしめる。

「主教サマの所へは、行かせません」

その庄におじけるものはもつけない。

教会の兵器にして主教の右腕たる彼女、一度主教の命令を受けたからには彼女は止まらない。

「というわけさ、ベルナル」

「上等、鬼の相手に不足なし」

互いに手の内を知り尽くした間柄。

互いに静かに笑い合う。ベルナルの頭にはしかし、黒歴史を処分することが占め始めていたが。

「ひとつ、聞いておこうかな、ベルナル」

「なんだ？ ケルブレム」

少し、小さな問いかけ。互いに会話の切れ間を伺い、仕掛ける時を待つ。

人知竜が、選んだ言葉は――

「キミ、大戦のことを覚えているかい？」

「どついつ意味だ？ 忘れるわけないだろう？」

「…………ふむ。では、あの大戦、どのように終わったかわかるのかな」

人知竜のその問いかけの意味。

それは彼女が抱いてる違和感。記憶を継承し、過去と未来を全て意味のないものにした筈の、彼女の違和感。

「知らない」

表情、無し。鬼はただ、決められたことのようにその言葉を返す。

「――」

ベルナルは何も思わないのだろうか。その返答のあやはやさを。

その返答の気味の悪さを。

「……………キミもか。すぶすぶ、気色悪いなあ」



「む？ 今、なんの話をしていた？」

「いや、いいよ、夜も深くなっている。そろそろおねむの時間だよ、おじいちゃん」

魔術式の複数展開、仕込みは既に完了している。

「抜かせ、若作り」

「……それ、遠山くんの前でほざいたら殺すからね」

「……ハードな仕事のよかん」

聖女のため息が、  
ふわり。  
夜に溶けた。

89話 アイ・愛・I（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さい！

書籍化、コミカライズの作業も進んでいます。また色々告知するの  
でTwitterの方も良ければ覗いて頂ければ幸いです。

90話 遠山・アウト・the・フォグ

「と、ほー！ と、ほー！ はいやー！ すごいデイス、このお馬さん達！ とても、強い！」

馬ウマウマ馬、さん、にー、いち。

ストルがたづなを握る馬車が夜を進んでいく。

立ちはだかる鬼を、人知竜と聖女のおかげでかいくぐり、彼らがけやきの林を駆ける。

「おほほほほ！ うちの審問会専用の調教お馬ちゃん達だもの！ そんじよそこらのお馬さんとは食べてるものと血統が違うのよ、血統が！ ……は！ 閃いた、軍馬の質向上を口実に、お馬さんを競走させる催し、いいんじゃないかしら！ その名も、ケイッー！」

ガタン！ がりっ！

主教官がなにか思いついてはいけない、少なくともこの女とコラボさせてはいけない催しを思いつきかけた瞬間、大きく馬車が跳ねた。

「主教官、その話はすげえ楽しそうだが後にしろ、舌嚙むぞ！」

「いひゃい……… ひゅこひ、おひょいわ」

案の定舌を嚙んだらしい主教官が口を押さえてうずくまる。

馬車は既に最高速、操馬に長ける騎士だからこそ出せる速度になっ  
つていて。

「っ！ 何かきますデイス！ トオヤマ！」

感知能力の高いストルが叫ぶ。それと同時に、月の光を遮り、何かが夜空に跳んだ。

「止まってもらいましょうか、竜殺し殿」

頭上、声。そして、

殺気――

「っあぶねー！！ ふんっおー！！」

反射的に、遠山が腰のベルトにひっかけていたメイスを振り上げる。

がきん！！ 重たい金属がぶつかり合う音が響くと同時に、腕に走る衝撃。

それわ押しのをけるように振り払う。夜に紛れて襲いかかってきた人影が、地面に着地した。

「誰デイス！ いきなり襲いくるとは、下郎！ 名乗れ」

ぎぎぎい！

馬車をカーブさせながら見事なたづな捌きでブレーキをかけたストルが叫んだ。

「ふん、威勢だけはいいようだな、天使教会。普段は我らが竜の威に怯え、お行儀よくしていると思えば」

月の光が、彼らを照らす。

夜半の襲撃者は1人ではなかった。

「あなた達は……」

「誰だ、このイケメン執事ども」

月夜に照らされたその道、竜大使館へのケヤキ林の一本道を、執事服のイケメン達が塞いでいた。

「ッ！ お初にお目にかかる、トオヤマナルヒト！ 竜殺し！ 貴殿とは顔を合わすのは初めてだな！」

「我ら！ ベルナル老の高弟にして竜大使館を支える執事見習い！」

「アリス様の側仕えを目指し、日夜研鑽に挑む誇り高き存在！」



「そう、人呼んで！」

「みんなそろって！」

「「「「「アリス親衛隊！！」「」「」」」」」

揃いの執事服に、鉄製の手甲をつけたイケメン達が首を抑えたイケメンポーズで声高らかに叫ぶ。

「執事要素はどこにいったよ」

「結果的に、蒐集竜様のファンってわけね」

遠山と主教。目つきのよろしくない2人がしらっーとそれを静かに眺めていた。

突っ込むのが面倒だ。

「我らを愚弄するか！ トオヤマナルヒト！」

イケメンの1人が、ずびしと遠山を指差して声を張る。鉄製の手甲が月の光を反射する、先ほどの頭上からの一撃はそれによる殴打だったらしい。

その威力は本物だった。

「おっと、なんか初対面から嫌われてるパターンだぞこれ」

「アンタ、初対面で好かれたことあるの？」

「言葉のナイフで後ろから刺すのやめてくれる？」

流れるような主教の悪口に、呑気に返事をする遠山。割とこの人、まだ余裕があった。

「トオヤマナルヒト！ 残念だが、貴公はこの先を通ることは能わず！」

イケメン執事の1人が、声を張り上げる。

「ベルナル老が言っていた通りだ！ 今宵、トオヤマナルヒトがこの敷地に侵入するかも知れぬ、と！」

「我ら！ アリス様親衛隊！ 貴公を通す道理なし！ 我らが竜のおやすみを邪魔すること、能わず！」

わかりやすい敵意が遠山に突き刺さる。どうやら遠山はかなり彼

らから嫌われているらしい。

「アリス様親衛隊か。アイツすげえな。ファンクラブいるのかよ」

みんな、竜に魅せられている。

確かにツラヤスタイルといった見た目はまさに、神がかっているし、なんといてもこの世界ではわかりやすい崇拜と信仰の対象になっっているのが竜だ。

天使教会の騎士以外にもこんな風なのがいってもおかしくはなかった。

「俗！ 我らが純粋なる崇拜を愚弄するか、竜殺し！」

「アイツ、などと気安い呼び方をするな！」

「……騎士といい、お前らといい、ドラ子に幻想抱いてるやつが多いな」

イケメン達の剣幕とは対象的に遠山のテンションは低い。

確かにドラ子がすごい奴なのは遠山も理解しているが、彼らの竜への姿勢は遠山の認識とは遠いもので。

「貴公がおかしいのだ！ はっきり言おう！ 我らは貴公を竜の友と認めてはいない！」

「……あ？」

そのイケメンの言葉に、遠山の声がわかりやすく低くなって。

「あのお方は、竜だ。決してヒトに染まるべきではない！」

「竜は孤高、竜は隔絶、故に竜。超越者たる上位の生物にヒトの真似事など似合わない」

「あのお方は、残酷で、傲慢で、嗜虐的で、故に美しいのだ、貴公はそれを歪めている」

「他者を廃絶し、只唯一尊い方として在る、その姿がお美しいのだ！」

「竜の美は不可侵。例えあのお方の怒りを買ったとしても、我らは貴公を否定する」

イケメン達はそれぞれがそれぞれの持つ竜への幻想を口にする。

顔がみないいで、言葉もどこか綺麗なもののように聞こえる。

だが、それは先程の老執事の言葉と違って、遠山鳴人には届かない。

「……ベルナルの爺さんとは違うな。あの爺さんはシンプルにドラ子<sup>こ</sup>を悲しませた俺にキレてた感じだが、お前らは、違う」

「なんだと？」

遠山のため息混じりの言葉に、イケメン執事の1人がぼそり、つぶやいた。

「お前らのそれは、自己満足だ。まあ、俺も人のことは言えないか」

遠山が馬車席から立ち上がる。

彼らを見下ろし、口を開く。

「ファンクラブ、お前らがドラ子に、いや、アリス・ドルル・フレアテイルをどれだけ崇拜しよう、幻想を、願いを込めていようと、俺には関係ない」

夜の中、遠山の言葉が静かに広がる。

「アイツはわがままで、高飛車で、めんどくさくて、地雷が多くて、宝飾品の話するときだけ早口になって、それでー」

ここに来てから、見た竜の姿。

いるだけで周囲を威圧する生き方、傲慢にもにた高貴さが溢れる所作、見た目。

ドロモラの指輪を眺める視線、そして、釣りをしながらこちらを



見つめる視線――何かを慈しむような蒼い目。

「俺みたいなバカを心配して、泣く奴なんだ。お前らが言うような、孤高とか、隔絶とか、似合う奴じゃねえんだよ」

――どうして、何も――

夕焼けの中、苦しそうに、そう、苦しそうに漏らした彼女の声が遠山の鼓膜から離れない。

「貴公とは、話が合わない」

「俺もそう思うよ」

遠山が息を吐く。

明るい夜、月を遮る雲はなく。

ふと、ベルナルに叩きつけられた言葉を思い出す。

「たしかに、あれだな。あの爺さんの言う通りだ。俺のコレは、自己満足だわ」

イケメン執事達の言葉を聞いて、理解した。

奴らは、遠山にとっての鏡だ。

「何を、言っている？」

「俺たちは同じって話さ、イケメンども。ドラ子の気持ちなんざ考えず、ただ己のエゴを貫こうとする、愚かな定命の者ってな」

声高らかに、己の願いと思いを叫ぶ。彼らのやっていることは、先ほど遠山自身がした事と同じ。

改めて他人のフリを見て、強くそれを自覚する。

「貴公と一緒にするな！」

「一緒に。俺はお前たちで、お前たちは、俺だ」

「ーなんて、間抜けな姿だろうか、と。」

「な……」

「ああ、全部、認めるよ。俺は大バカで、自己中で、かっこつけの  
アホだ」

夜の空気がひんやりと顔にまとわりついた。

さっきまで遮るものなどなかった白い月、いつのまにか薄い雲がかかる。

「トオヤマ、ここは、私がー」

ストルの申し出に、遠山は横に首を振る。

「ちょ、あんたー」

主教の制止も聞かず、遠山が馬車席を降りる。

夜半の、暗黒を溶かしたような真っ暗な地面をしっかりと踏みしめて。

「だが、もう止まる気はない。バカでもアホでも、俺は俺の決めた

ことから目を背けない。俺はこれからドラ子に会わないといけない」

このイケメン執事たちと遠山の違いは一つだけ、己の間抜けさを理解しているかどうか。

ただそれだけの違いで、あとは何も変わらない。

「それは無理だ、竜殺し！ これ以上、我が竜を貴公に穢させない！」

執事達は会話に応じる気はなさそうだ。

「ヒヒヒ、そうか、ならもう仕方ねえな。同じ自己満、自己中のバカ同士。互いに互いの話を聞く気も理解する気もないときたら、もう方法は一つしかねえ」

そして、遠山も、もう会話でどうにかする気もなかった。

「トオヤマ、彼ら、強いデイス。少なくとも全員、一級冒険者と同じか……」

「大丈夫さ、ストル。悪いな、アホなことに巻き込んで」

「……止めても無駄デイスね。……お手並み拝見させていただきませ、わたしの審問官殿」

ため息をついたあと、ストルが目を細めてつぶやく。

「おう、見せつけてくるさ。我が剣」

「……ばか」

か細い騎士の言葉に、手をひらひらと返して遠山が進む。

馬車の前、行手を阻む竜に魅入られた者たちの対面。

遠山鳴人、ただ1人で立つ。

「……警告だ、竜大使館。天使教会異端審問官としてお前達に告げる」

大きな声ではなかった。

だが、前を見て、はっきりと。夜、審問官の声が通る。

「お前たちは、天使教会の、第一の騎士、ストル・プーラの竜謁を邪魔している、そこをどけ。警告に従わない場合は、実力で排除する」

様式美。シンプルに伝えたその意味。

どけ、さもなければぶん殴る。

「貴公の言葉は我らには届かない！ 我ら親衛隊、ベルナル老の命令と竜の威厳のため、ここは何人たりとも通さない！」

かかってこい、やってみろ。

彼らの返事もまたシンプルで。

イケメン執事、親衛隊。

金色の竜、上位生物を正しく敬う彼らにとって、竜殺しは目障りな存在ゆえに、その言葉など聞く気はない。

「貴公は、相応しくない！ 本来ならば、我らこそが、天使教会騎士よりも、どのような存在よりもあのお方に相応しいのだ！」



「我ら、鬼の手解きを受けいつしかかのお方にみそめられる役割に選ばれた者！」

「横から出てきた貴公に、いや、貴様など認められるはずもない！」

彼らがどうしても認められない事実、竜殺し。

本来ならば騎士よりも、ベルナルに選ばれた彼ら戦士の末裔が受けるはずだった栄誉。

竜にみそめられ、竜に認められ、竜に選ばれる。この世の悦楽の全てを享受出来たであろうその誉はしかし、ぽっと出てきた野良犬以下の奴隷により奪われた。

彼らが欲しくて止まないそれを、その奴隷は簡単にてにいれ、あまつさえ竜のツガイを拒否した。

それで、竜が怒り、奴隷が焼き殺される、それであればまだ、鬼の高弟達は納得していたかもしれない。

だが、そうはならなかった。奴隷はいつしか、竜殺しと呼ばれ、竜は明らかにその男に魅せられていて。

鬼の高弟、竜のツガイの候補だった彼らは、日に日に、奴隷によって変わっていく竜を、ヒトに近づいていく竜を遠くから眺めるしか出来なかった。

その屈辱は、彼らの誇りをゆっくり歪ませて。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

その叫びには、きっと嫉妬の名前がつくだろう。

「それを決めるのはお前達じゃあない」

だが、そんな歪んだ想いはこの男にこれっぽっちも響かない。

「そして、俺の知ったことじゃねえ」

遠山の言葉のあと、周囲の環境が変わり始める。

執事達が遠山に敵意を向けるのと同じく、遠山もまたあまり気が長い方ではなく。

「コレは……」

「ちよ、なにこの霧……　　うわ、キシヨ」

満ちるのは白いキリ。月夜を覆う。

「――通しはしない！ 義は我らに！ 竜の美を、強さを、竜の価値を貶めんとする貴公に資格なし！」

「ここを通りたくば超えてみよ！ 鬼の高弟！ 竜のツガイにすら相応しい我らの力を！」

「上位の生物に届けるため、研鑽を積んだのはこの時なりて！」

「竜は、我らの尊きお方なのだ――」

「我らこそが、あのお方に相応しい！ 貴公にもう出番はない――！」

「貴公こそ、これ以上竜大使館に近づくといいのならば、排除する

「！」

「ヒヒ、ああ、そうだな。男が女のことと揉めたんなら、話し合いなんざ、意味がねえよな」

遠山が首、喉仏に手を当てる。

そこから漏れ出す真白の霧は、彼岸より広がるこの世ならざる力の具現。

「やれるもんなら、やってみな」

界を分け離す、山野と平野に溜まる霧。そこに潜むは爪と牙。

「霧の刃が、溢れ出す。」

「コレが、竜様を手にかけたキリとやら……」

「怯えるな！ ベルナル老のお話を思い出せ！ キリが満ちる前に  
全て吹き飛ばせば問題なし！」

遠山の霧、それをすでに彼らは知っている。竜を下した妖しい力。  
されどその種は割れていて。

「応、任せる！ スキル・セツト！ ”大風”！」

イケメンの1人が、地面を踏み鳴らす。それに呼応するように彼の  
足元から風が吹き登った。

「トオヤマナルヒト！ 貴公の力のタネは割れている！ 所詮はこ  
けおどしの絡め手！ 汚い手で、誉れなき戦いで竜の油断をついた  
まで！ 我らにそのような手が通用すると思うな！」

イケメン執事達の髪が風で暴れる。地面の柔かな土が風で巻き上

がる。

ケヤキの林が風に踊る。

「このキリが晴れたときが、貴公の醜い願いが終わるとき！」

「竜の元にはいかせぬ！　だが安心せよ、殺しはしない！　骨の数本だけで許してやろう！」

「竜と我らの慈悲に感謝せよ！！！」

彼らは、すでに知っている。竜殺しのその力はこけおどしと騙しの力。

不意を打つことで、竜に届いた下賤な力。所詮は小賢しい奴隷の力。

対策さえすれば恐るるに足らず、と。

「「「「「さあ、霧よ、晴れよ……!」」」」」

その霧が晴れた瞬間、彼らは示す。竜殺しを打ちのめし、竜に示すのだ。

こんな者、貴女が気にかける価値などなかった。貴女に相応しいのは自分達だと。

彼らがその時を待つ。

紛い物の卑賤な力を払い飛ばし、その高慢で下品な顔を実力により打ちのめす瞬間を――

霧が、風に。



「  
「  
「  
「  
.....  
あれ？」「  
「  
「  
「

「お前たちは何も知らない。俺たちのぼっけんを」

いつまでまっても、キリが、風に飛ばされることはなかった。

遺物、霧散。

満たせ、キリヤイバ。

遠山鳴人が、その”報酬”を解放する。

「これは、お前たちの義を示す戦いじゃあない、これはお前たちの高潔さを表す戦いじゃあない」

竜に魅せられた彼らは知らなかった。

その卑賤な奴隷が繰り広げてきた冒険を。

死を目前とし、それに抗うべく遠山がたどり着いた進化を。

「どいつもこいつもエゴイスト。等しく醜く、等しく愚か。……この戦いはどっちの自己満足がより強く、生き残るべきなのか、それを問う戦いだ」

「ば、ばかな、霧が晴れない?! ど、どこだ! どこにいる、ト  
オヤマナルヒト!」

キリは、吹き飛ぶことは愚かむしろどんどん濃くなっていく。

数歩先すら見通せぬほどに。

「ヒヒ。上等だ。もう知らねえ、どれだけ自己満だろうが、醜くか  
ろうが、俺は決して止まらない」

ず、ずず。

遠山が首元から、それを引き抜く。欠けたヤイバ。霧にまみれた  
ボロボロの刃。

それが露わになるたびに、その霧は重く、そのキリは濃く。

鬼の高弟のひとり、その才能により引き起こされる大風が吹き荒れる。ああ、しかし、遠山の自我のごとく、淀み、重たいマシロのキリはびくともしない。

ピロン。

そのメッセージが、遠山の霧に染まる視界の中、はっきりと浮かんだ。

### 【警告】

【遺物の拡大解釈により、あなたは遺物キリヤイバから侵食を受けています。肉体の変異が急激に進んでいます。警告、遺物使用を続けるたびに侵食がごこかー

HEY listen トオヤマナルヒト】

ざりざりとしたノイズの後、見覚えのある文体のメッセージが視界に浮かぶ。

「ハーヴィーか」

パン文書館の主。由来のわからぬ、しかし割と味方してくれている知識の眷属とやら。

【ごめん、手短に話す。こっちのミス。まさか、アレがあそこまで古い神話の存在だなんて思わなかった。私と湖の底のカレ、そして霧のアレ。あなたの身体に潜んでいる三つのバランスが崩れてる。アレは、今、調子に乗ってー アンタの死後じゃなく、今を

おっと。まだ残っておったか】

プチッ。

遠山の耳の中で何か、虫が潰れたような音が響いた。

メッセージの文体が、変わる。それが誰の言葉なのか、特徴的な喋り方を遠山は知っていた。

「お札マッチョ、てめえ……」

【良い良い、気にするな、わが主人。あるがままに振る舞うといい。わぬしの思うまま、わぬしの為すべきことをなしや】

「ーヒヒ、てめえ、やっぱりロクなもんじゃなかったな」

ハーヴィのほか、遠山のゆめにいつのまにか住み着いていた存在。己をキリヤイバだと嘯く怪しい存在に、遠山が笑う。

【警告】”未登録遺物、キリヤイバ”からの侵食進行、STRでの抵抗ロール……失敗。肉体の変異、さらに進行、特性”俺の血の色は白色だ”を獲得しました。キリヤイバの使用をー】

「続行だ」

あの血液の変異、己の身体に起きつつある異常。自分に起きる意味不明な事態。

キリヤイバへの恐れー

それを全て、遠山は無視する。

「この程度のことです、怯えるだけでも？ 今更、俺が止まると思った

かよ」

遠山鳴人は、欠けている。本心から他人に弱みを見せることを嫌がり、人の気持ちを考えることをしない。

「止まっていけない。怯えていけない。こんな所だけ都合よく真人間みたいな反応するわけねーだろうがよ」

だから、遠山鳴人は、遠山鳴人故にアリスの想いを無視して、選択を見誤った。

「キリヤイバ、使うのは俺だ、使われるのはテメーだ。覚悟しとけ、俺に黙ってなんか俺の身体にヤベーことしやがって、必ずギタギタにしてやる。だが、今は！！」

だが、今回は違う。



遠山鳴人は恐れない。たどり着くべき光景がある限り、己の目的が、欲望がその道を示す限り、止まることはない。

「俺に力を寄越せ、霧の化け物」

故に、遠山鳴人は、遠山鳴人だからこそ、今回の選択を見誤らなかつた。

大いなる存在と接する者は欠片とて弱みを見せるべきではないからだ。

【「ーああ、やはりわぬしは恐ろしい…… 少しでも儂の力に怯えようものなら、その器、今すぐにでも貰い受けたのにおう……」】

臆した瞬間、それは遠山鳴人に価値を感じなくなっていただろう。すぐにでもその器を奪い、念願の現界を、彼岸から此岸への帰還を

果たしていたたろう。

【キリヤイバからの侵食、P精神OWでの抵抗ロール…… 成功！！  
一時的に変異の進行が遅れます】

だが、それは遠山のぼうけんを知っている、遠山鳴人を恐れている。

この期に及んで未だ躊躇いを見せぬその精神と思考に、魂に価値を感じてー

【それでこそ我が主人、我が器。使うと良い、我が力、わぬしの本当の力を。世界を侵せ、己がままに振る舞うといい、わぬしにはその価値がある】

その力の源が、どれだけ邪悪で、共に歩むことなど出来ない者だとしても、遠山鳴人は躊躇わない。

「遺物、拡大解釈」

領域に、何度でも。

必要であれば、何度でも遠山は彼岸を渡るだろう。

「かしこみ、かしこみ、奉る」

思い起こすは、保存した恐怖たち。既に遠山鳴人が乗り越えた試練たち。

「な、これ、はー」

「霧が、どんどん深く……」

「どうなっている！？　なぜ風を吹かせているのに、霧が晴れないのだ！？」

執事見習い、鬼の高弟たちが喚き始める。夜を、霧が包み込む。

どろりと、まるで液体かと見紛うばかりの濃い霧は風に払われることはない。

「何をした！？　トオヤマナルヒト！！」

霧の中、高弟の1人の声が虚しく響いて。

「キリヤイバ・拡大解釈オバード」

キリの中で、何かが蠢いた。

海の底から姿も見えぬ生物がゆっくり揺蕩うように、キリがゆらめく。

「魑魅魍魎狭霧山野絵巻物語」

その強欲は、ついに己が体験した恐怖。試練の大敵すらも平らげていた。

『シャロooooooooo』

霧の中、その長い躰がよじれて、ねじれて顕れる。

その魂に、キリが肉付けされていく。

白い鱗、ねじれる巨大。

大蛇。キリに象られた白い大蛇が、霧の中から這いずり出て。

ー君は、証明し続けなければならない。

古い魔術の祖、上位の生物の中、竜の中でも最も恐ろしいとされた彼女の声を思い出す。

ここに来るまで、たくさんの助けがあった。

「ああ、証明してやるさ」

あとは、それに、期待に応えるだけ。それだけでよかった。

「俺の、価値を」

『……………アア』

「古代種”ラミア”——」

魂に刻まれた名前。遠山が殺し、遠山が保存したその情報が伝わる。

キリヤイバの真の力、魂の保存と――

「かしこみかしこみ、疾く参れ。汝が主人の命である」

その、使役。

それはまさに、人の粹を嘲笑う、みわざにて。

「白蛇女」

『ア、アアアアアアアアハハハハハハハハハハ！』

がぱり。キリの白蛇の大口が裂けるように開く。天を仰ぐ、白蛇の口の中から彼女が現れる。



悲劇に沈み、化け物に見出された女。彼女は死して、遠山の冒険の末席に加えられていた。

「ヒッ……」

「あ、どろ……」

「ば、かな……」

「古代種…… ラミア…… 伝承に残る伝説の生物…… なんて……」

鬼の高弟たちが、目を剥く。古代種。己の主人達、超越者たちの好敵手であるはずの枠外の生物。

それが、なぜか目の前に。

『あ、ハハハハハハハハ、う、フフ』

白蛇女、キリによって象られた魂だけの影法師が笑う。

ここにあるのはキリヤイバにより保存された魂というエネルギーのみ。

静かに、静かに笑い続けるキリの白蛇。

「白蛇女」

『アア、フフ』

遠山の言葉に、身体をもたげて白蛇女が笑う。主人の声を、命を待つ。

「ここは任せた。適当に遊んでやれ」

『アハあ』

その不死の蛇、種の見出した狂気存在。遠山に一度死を覚悟させた試練が嗤う。

今度は、遠山の力として。

ぼっけんには報酬が必要なのだ。

「なにを……した？」

「あ、ありえない！ 古代種の使役……?! どんな魔術式だろうと、副葬品、秘蹟だろうと、そんなもの!? あるわけが！」

「ーああ、安心しろ。親衛隊の皆様方」

おののく執事見習いたち、アリス親衛隊に遠山が唾う。

チベットスナギツネのようか目を醜く歪めて、口を片側だけ吊り上げて。

それはもう、ものすごく悪い顔で。

「安・心・し・ろ・、・殺・し・は・し・ね・え・。・骨・の・数・本・で・勘・弁・し・て・や・る・よ・」

遠山は根に持つタイプだった。

## 90話 遠山・アウト・the・フォグ（後書き）

TIPS ｝鉄のメイス｝

先端が菱形に膨らんだ片手槌、振り下ろせば遠心力により強い衝撃力で打撃を繰り出す。

遠山鳴人はその扱いの簡単さから、好んで探索者時代から鈍器を扱っていた。

この世界におけるメイスは古い大戦の時代、支配種エルフ族の堅い騎士鎧を崩す為にヒュームのとある軍事国家、後に帝国につながるその名前の忘れられた国より生み出された武器である。

永い大戦の結末や詳細が、例えばヒトビトの記憶から薄れようとも、ヒュームたちはこれだけ忘れない。

どのように壊し、どのように殺すか。

最早遙か遠く、彼らの忘れられた祖先と同じように、ヒュームはどの種族よりも殺すことに秀でているのだ。

91話 奉仕の眷属

『ふ、フッフ、シャ□□□□□□□□□□□□□□!』

「「「「「ぐ、う、おおおおおおおおおお?!!?!?!」「」「」

古代種、キリヤイバにより支配された魂がキリに肉付けされて暴れ出す。

5人の執事見習いたちがいた場所にその巨体を思い切り叩きつけるように突進して。

道が、開いた。

「今だ！ ストル！ 全速前進！ イケメンどもは抑えた。行くぞ！」

「は、はい！ と、ほー！」

「あ、あ、アババババ…… ひ、ヒトが、エルダーを、いや、なにそれ、副葬品……？ キシヨ……」

「また舌噛むぞ、主教様よ！」

遠山が馬車に飛び乗り、ストルが鞭を打つ。主教はぼそりと、キリの力を見て毒を吐いて。

「ま、待て、トオヤマナルヒト……！」

執事の1人が、白蛇女の巨体を跳ねるように乗り越え、馬車に近づくと――

「ヒビヒビヒ、待たねえ！ いいのか、よそ見しといて。その白蛇女には、仲間が多いぞ？」

遠山は奴らのそれに苦戦した。

『 『 『 『 シャ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ 『 『 『 『 』

群れ。

キリヤイバはその化け物の群れを全て食い滅ぼしている。

蒐集され、保存された魂がキリによってかりそめの肉体を得て顕れる。



「ま、また、また霧の中からモンスターが!?」

キリの肉体の蛇の化け物。その群れ。

いずれ超越者になることを鬼に見込まれた彼ら高弟はあつという間に化け物の群れに囲まれた。

「狼狽えるな！ 我らアリス親衛隊、この程度のモンスター如き！」

その拳、鬼にいたらずとも重く、早く強い。

キリのテイタノスメヤ、その1匹の頭を高弟の拳が砕く。

しかし

『アハ』

『シャロロロ』

蛇、死なず。

ぐじゅり。潰された頭はしかし、キリが集まり再び形を取り戻す。

「さい、生している……？」

「だめだ！？ 頭を潰しても、すぐに動き出すぞ！？」

イケメン達が慄き始める。そのキリが再現するのは、遠山鳴人の  
冒険。



彼らの声を背中に、どんどん距離が離れていく。もう、追いつかれることはない。

恐るべきは、キリヤイバのその力。

魂の使役、遠山鳴人のとりえる戦術の幅が一気に増えた。

すでに、遠山は現代で言えば上級探索者のトップ層、もしくは指定探索者の枠に手を掛けられるほどの戦闘効率にたどり着いていた。

「相変わらず、めっちゃくちゃな男デイスね！　あなた、あんなことも出来たんデイスか！？」

「ついこの前からな。パワーアップイベントクリアしたから」

たづなを握るストルに遠山が真顔で返事をする。

遠山の位置から騎士の顔は見えない。

「訳わからないデイス！ ……トオヤマ」

「あいよ、ストル」

ストルの小さな背中に声を返して。

「これが終わったら、その身体のこと説明してもらえるんデイスよね」

少女の声が震えて聞こえたのは馬車の揺れのせいではないだろう。

「……………おっ」

誤魔化さずに、短く応える。

「ーふうー。わかりました。……………今は私の仕事に集中しますデイス」

「……………悪い、ストル」

「ばかね、トオヤマナルヒト。そこはありがとう、でしょ。……………うわ、この霧、どこまで広がってるの？ キシヨ。こんなに濃いのに、目の前だけははっきりと見えるとかなんなのマジで」

主教に小突かれつつ、遠山はうなづく。

馬車の行先を、道を示し誘導するように道の脇には霧がまだ溜まっている。

霧に囲まれた一本道を、馬車が進んで。

「ヒヒイン」

「っ、見えました！ 竜大使館デイス！！ 正門が見えましたデイス！」

カラカラ、ゆっくり減速。

大きなぞびえる門。竜大使館の庭園の入り口が見えた。

「なんか正門を見たらいいよ家宅侵入の感じがすげえな。ま、行くけど」

「もう今更よ。つーかトオヤマナルヒト、アンタマジで頼むわよ！ ストルの騎士権の返還とかで言い訳は立つけど、これが許されるかどうかはマジでアンタ次第なんだからね！ ぶっちゃんけ竜様に許されない限り、私らマジで全員ヤバいんだからね！」

主教が元気に唾を飛ばす。

言ってる内容は保身に満ちているが、それでも彼女は遠山に賭けた。それを実行してくれた。

「わかってるよ、主教様。賭けの儲けを期待しててくれ」

千の言葉より、一の行動。遠山は彼女の期待にも応えなければならぬ。

「んがああ、腹立つ！ そのドヤ顔がムカつくけどもう、私もノリノリであそこまで啖呵切ったあとだから戻れない！ あーもおおお、マジである時すぐ帰ればよかったああ」

「釣れないこと言っなよ、ボス」



「やつかましい！ ボスとか言うな！ ん、あれ、ストル！ 前、前！ 門が……」

ゆっくり進む馬車の前方。

美しい花の細工が施された高そうな庭門がゆっくり、音もなく開かれる。

「開いた……？」

「うっわー、嫌な予感しかないんだけど……」

「と、ほー、ハイ！ ストップ、デイス！」

歓迎するように、ぽっかり開いた門。

その奥には月夜に照らされた庭園が広がる。

しゃわしゃわと湧く噴水の音だけが、夜に染み込んでいくようだった。

「……………なんか、入って言われてるみたいね」

「うう、急にウエルカムな感じ出されると少しビビるよな」

「トオヤマ、さっきまでの勢いはどうしましたディスか。ものすごいドヤ顔でしたよ」

「そんなに?」

「ヤバかったわよ。さぞ気持ちよかったですよね」

きて、どろしたもののか。一行が誰ともなしに軽口を叩いて――

「ようこそー、天使教会の皆様ー」

その場に似合わぬ、呑気な少女の声。

間延びした、のんびりな口調で。

「……最後はアンタか」

噴水のそばに立つメイド服の少女。

夕焼けの中で、竜を連れて帰った神出鬼没の無表情ちびっこメイドだ。

「ふふー、こんばんは、友人殿。思ったよりもお早い到着で」

言葉は笑い声を含んでいるのに、彼女の表情は変わらない。お人形のようにどこを見ているかわからない瞳で、のんびりつぶやく。

「……………天使教会のメイド…………… ご機嫌麗しゅう、私達、天使教会、蒐集竜、アリス・ドラル・フレアティル様への竜謁でお伺いしました。夜分に大変恐縮ですが、竜にお会いさせていただいても？」

主教が馬車席を立ち、式礼の姿勢をとりつつメイドに話しかける。

「わー、なるほど。たしかに天使教会とお嬢様のお約束を使われたら弱いですねー、お嬢様は竜、挑まれるのは竜の誉れですのでー」

主教がこの場にいる、それだけでメイド服の少女はことのあらましを掴んだのだろう。

わー、と言いつつ、手のひらのサイズと同じような小さな拍手の音が鳴った。

「……メイドさん。ドラ子に会いにきた。通してくれ」

遠山がなるべく威圧しないように、けれど警戒は解かないように言葉を選ぶ。

いつしか雲から覗く月の光。

明るい月夜、噴水のそばのメイドさん。その景色はある意味、鬼

や鬼の高弟を眼前にした時よりも、緊張感のあるもので。

「ふふ、友人殿。よかったです」

ふと、メイドさんが微笑んだ。

「……なに？」

「しんじてー、いました。あなたならきつとすぐ追いかけてくれる  
ってー」

メイドさんの目が、遠山を見つめる。

月光を、その無の瞳が映し返していた。

「……あの時のはやっぱりそういうことか。なら、メイドさん悪いけど、そこをどいてくれ。ドラ子に会わせてもらいたい」

ドラ子を連れて帰る時、メイドさんがこぼした眩き。彼女は最初から遠山が来るのを待っていたのだ。

遠山が、メイドに道を空けるように頼んで。

「んー、いいですよ」

帰ってきたのは軽い返事。

だが、何も安心出来ない。あー、よかった、とはならない。

「……これ絶対なにかあるパターンだよな」

遠山が主教を見る。

「こっち見ないでもらえるかしら」

主教がしっ、しっ、と遠山の視線を振り払う。にべもなかった。

「……トオヤマ、このヒト、何か変、デイス……」

「ストル？」

ストルの様子がおかしい。

御者席に腰掛けたまま、動かない彼女の手はしかし、腰に差した



剣の鞘あたりを右往左往している。

まるで、それを、剣を抜くべきか、否か迷っているように。

「あー、正義の幼体さんはやっぱり、勘がいいのですねー」

その様子を見たメイドさんが、ぼそりつぶやいた。

4768

「……違う、トオヤマ、このメイド、ただのヒトじゃー」

「ちよい」

メイドさんが、小さな指を、ひらひらと。

「あ」

かくん。

ストルが首をつなだれて、ゆっくり御者席の背もたれに身体を預ける。

「ストル!？」

すー、すー。

ストルから規則的なリズムの寝息が。目を瞑り、動かない。

「ごめんなさい。正義の幼体さんには眠ってもらいます。貴女が目覚めると厄介ですからー、あ、ついでに星見の主教様もおやすみなさい」

「あ、ウソ、私も!? ちょ、やめて、ほんと変なことしないで、私、もう仕事終わっ—— スピヨ——」

メイドの指が、ひゅひゅつ。主教もまたスヤア。

鼻ちようちんを膨らませて馬車席にもたれて動かなくなった。

「すぴょー、すぴー、うふふふ、オカネ。ぴかぴか、すぴょー」

「主教様……アンタまで…… いや、なんか大丈夫そうだな……  
メイドさん、これはなんのつもりだ?」

「トオヤマさん。いえ、遠山さん、ですかねー、これは」

「あ?」

メイドさんの目が遠山を見る。観る、視る。

ふと、その名前を呼ぶイントネーションが変わった。

「わたしはー、シンプルなのですよ。もう、シンプルにー、お嬢様にー、幸せになって欲しいだけなのです」

「メイドさん？」

「お嬢様にはこれから残酷な運命が待ち受けています。あの子は、そういう律の下に生まれ、役割を果たすための存在なのです」

「……………」

遠山の言葉を無視して、噴水のそばに立ったまま微動だにせず喋り続けるメイドさん。

「……おい、なんだそれ」

遠山は今頃違和感に、気づいた。

なぜ、噴水の音がしているのに、こんなにもメイドさんの言葉だけはずきり聞こえるのだろうか、と。

彼女の声は、小さいのに、はずきりと。

「わたしはー、せめてその時が来るまで穏やかに。あの子が生きた時間の中、せめてひだまりのような思い出となる時間があればと、お仕えしてきましたー」

月夜。

その小さな口がぽしょぽしょ動く。

「ベルナルはいい奴なのですがー、少し、水竜とお嬢様を重ねているところがあるのです。初恋を拗らせた初老なのでー、少し面倒なのですーがー」

月夜。近く。

「話が見えねえな。メイドさん、俺を通してくれるのか、通してくれないのか、どっちなんだ？」

つい、遠山が反射的にメイドさんを睨んでしまつ。

その目を見て、メイドさんが初めて。

にやーっと、口角を吊り上げた。

「いい目です、遠山さん。貴方は試練を前に、睨むことが出来る方なのですー」

「なんの話だ」

月よ、近く、空遠く。

「わたしはー、知りたいのですよー」

メイドさんが、その頭につけているカフスを外して。

「あなたに賭けていいのか、どうか」

ピコン

瞬間、メッセージが流れた。

【新たなクエストの開始条件を満たしました】

【眷属クエストが開始されます】

「…………ッ、これは」

いつからだろうか。遠山が上を見上げる。



月夜が、おかしい。夜空が変だ。

近い、近すぎる。

いつしか庭園はまるで夜空の中に、宇宙の中にぽっかりと浮かんでいるような。

「定命の者よ」

その存在の喋り方が変わる。

先ほどまでどこを見ているかわからなかった視線、それが遠山鳴人を観た。

「貴方は、その価値をこれまで多数の者にその価値を示した」

すでに、その庭園は取り込まれている。

天使に連なる外部の存在。

”眷属”にはそれぞれ世界が与えられている。それぞれの領域、それぞれの界。

「貴方は、その試練をこれまで悉く捻り潰してきた」

奉仕の眷属、その世界が庭園を侵していた。

「だが、どうだ？　今回は？　次は？　その先は？　貴方は本当に

進み続けることが出来るのか、貴公は本当に運命を擦じ伏せ、たどりつくことが出来るのか？」

奉仕の眷属。

彼女が望むは、ある竜の幸せ。

「私は、それが知りたい。哀れで儂く健気な金色の竜の未来を、託すに値するかどうかを」

彼女が願うは、ある竜へのせめてもの救い。

「私の宝物に触れる価値あるべきかを、私は知りたい」

彼女もまた、同じ。

遠山鳴人に、望むことは一つ。

その価値の証明。

「メイドさん…… アンタ、何者だ」

遠山が、メイドさんを見て。

「私は竜大使館メイドのフアラン、あるいはー」

彼女の無の瞳が、金色に輝いて。

「私は黄金を守るもの、私は黄金に魅せられたもの、昔の名前はフ  
ア  
フ  
ニ  
ール  
á  
f  
n  
i  
r、天使により与えられた席は”奉仕”」

メイドさん、奉仕の眷属が金色の瞳を男へ向ける。

彼女もまた、その男に期待を向けていたのだ。

「遠山鳴人。欠けし者よ、強き定命の者よ。貴方の価値を示せ。貴方の価値を証明しろ」

「またバトルか？ ひひ、竜に会うのに試練が……………」  
「ファフ  
ニール？ おい、待て、その名前——」

【技能 ” オタク ” 発動。奉仕の眷属の正体を考察出来ます】

遠山が動きを止める、メイドがつぶやいた名前。オタクである遠山はそれを知っている。

誰しもがきつと通る道、北欧で古く語られ、数々の創作物でも題材として使われている神話。

北欧神話に、その名前が――

「驚いた。貴方は、私の名前を知るのか。故の知らぬ定命の者よ。

……妙な香りをいくつも纏う不思議な者よ。貴公ならば、あるいは

――」

「メイドさん、アンタがなんだろうと俺のやることは変わらない。

ドラ子に会う。竜祭りも制覇する。これは俺の冒険だ、俺が自分で決めた、自分の道だ」

訳のわからない状況、騎士は眠り、主教も眠り、いつのまにか馬も眠り。

夜空の下、意識があるのはメイドと遠山2人だけ。

「ーよい、その欲望に従うのならば、進むことをやめないのならば、示せ。伝えよ、貴公という男のことを」

その変わらぬ言葉に、変わらぬ目。

遠山鳴人の言葉に、どこか安心したような顔で。

「我が金色のいとしい主人は望んでいる、貴公を知りたい、と」

「警告だ、メイドさん。アンタに乱暴したくない。ストルと主教様を起こせ。そしてここを通らせろ」

遠山は前を見る。得体の知れない存在だろうとなんだろうと、立ち塞がるのならばー

ぼっけんの試練は全て越える。

「あの子の願いはひとつだけ。ただ、あなたにあなたのことを聞かせて欲しい、と」

「ーどうして、何も話してくれないのだ

ない。  
あの夕焼けの中、アリスが見せた涙、瞳に湛えた丸粒の涙が離れない。

気付けば、遠山は喉を震わせて。

「ーああ！ 俺がどう考えても悪かった！ 全部話す、ドラ子に、これまで誤魔化していたこと、話さなかったこと、全部話す、そのためにここまで来た！ だから」



謝るだけじゃない。全て話す。

ほんとのこと、ドラ子があの時聞きたそうにしていたこと。

遠山の故郷のことー

「ならば、貴方が竜の友として誠実であろうとしてくれるならば、奉仕の眷属の試練を超えよ」

「ーヒヒ、黄金を守るファフニールの試練か。あいにく持っているのはグラムじゃないんだけどな」

オタク技能により、遠山はソレの古い物語を知っている。悪竜と、いずれ竜殺しと呼ばれる魔剣を握った英雄の物語を。

「フフ、此度の試練に魔剣は要らない。貴方はシグルズではないのだから。ああ、我が宝物に触れようとする者よ。我が金色の君の悲劇をどうか、貴方がー」

メイドさんが、静かに微笑んで。

「貴方が全部台無しにしてみてもよ」

月が、気づけば降りてきて。

視界が、狂う。

「ッ!? 遺物、霧ー!」

遠山が反射的に、遺物を発動させようとして。

「眷属界、接続”ファープニルの歌”」

ぱちん、その指が鳴る。

「う、あ……く、そ。なんか、すげえ、嫌な予感が……」

その瞬間、頭にモヤがかかる。

まぶたが重たくなり、身体が沼に沈んでいくかのような感覚。

メイドさんが気付けば、遠山を見下ろしている。

「行ってらっしゃいませ、願っていますよー。貴方がお嬢様と共に  
ご帰還なされるのをー」

「私の望みはひとつだけ。あの子に幸せなひとときを。いえ、願う  
ならばどうか、あの子にとっての幸せな終わりを、貴方が」

「……」

…

く????

『キーンカーンカーンカーン』

「……ふが」

遠山が目を覚ます。

昔、よく聞いていた呑気な電子の鐘の音。

「ぐ、頭いて…… あのメイド、何しやがつ、て……」

遠山が固まる。

その風景があまりに、先程の夜の庭園から変わっていて。

色がうるさいほどはつきり見える。整然と並べられた机、椅子、真緑色の黒板、やけに薄い、風に揺られるカーテンレース。

「――教室……？」

そこは、見覚えのある風景。

遠山鳴人が、その人間性を、己の行先を定めた3年間を育んだ箱庭。

「ああ、よつやく目が覚めた？ おはよ。

嗅いだことのある、香りがした。

「……………は？」

「おいおい、なんだい、その顔は。まるで”僕”の名前を忘れたってツラじゃん、そんなことはよー、言わせないぜー？」

彼女、もしくは、彼の黒い猫っ毛は濡れている。

そうだ、彼女はプールの授業のあと他の女子みたいに、決してドライヤーを使ったりしなかった。

遠山鳴人は、そいつのことをよく知っている。

首にパンダのタオルを巻いて、プールの授業の後、いつも半乾きまま、濡れた髪をいじっていたそいつのことを。

「……………海城？」

びゅーっ。

入道雲がぽっかり浮かぶ窓の外から風が吹き込む。

誰かの開き放しにしている教科書のページがいつきにめくれる。

「あら、忘れてなかったか。オツケーオツケー。そう、君の愉快な  
高校生活のライバル。海城かいき 優紗ゆさだよ」

バカみたいに白いセーラ服の似合う人間がそこにいた。

つんと、鼻を刺す不思議な匂いが風に運ばれて。窓際の机の上  
に足を放り投げて座る人間の匂いをさらって。



短いスカートに、白いセーラー服。その上に男物の黒いスポーツ  
ジャージを羽織って。

白く、細いのに肉付きが良い白い太ももが机の上で潰れて広がっ  
ていた。

「また面白いことに巻き込まれてるね」

カルキの香り。なつの匂いと一緒だ。

「とーやまなるひと」

セミの音が、世界に広がって、もうそれしか聞こえない。

91話 奉仕の眷属（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを！ご覧くだ  
さい！

92話 夏の音、殺した君へ

「世界が五分前にそっくりそのままの形で、突然出現した。誰も、そのことを確実に否定することはできねー、だっけ」

懐かしい声だった。気怠げで、しかし不思議と耳触りのいい、夏に鳴る縁側の風鈴のような声。

「世界5分前説、おまえなら、知ってるよなー、とーやま」

しゅわしゅわしゅわしゅわ。

校庭のもみの木、遅れて蝉たちの声が碎けて聞こえる。

教室の窓を、夏が、叩く。

「バーランド先生が提唱したトンデモ設だけどよー、オイオイオイ、まったくどうしたもんだい。ほんとじゃん」

懐かしいそいつの声は、記憶に残っていたもの、最後に探索者になる前に会った時よりさらに幼くて。

「……………なん、で？」

遠山は喉から搾り出すように、声を漏らした。真昼間の交差点で、幽霊でも目にしたような気分だった。

「なんでって言いたいのはやー、こっちのほうなんだなこれが。とーやま、とーやま、とーやまくんよー」

同じだ。その女、濡れたままの髪の毛をそのままにするズボラさと、なのに、異様にそれすらも似合う容姿の良さ。

黒髪のセーラー服のズボラな美少女、厭世的な態度、それでいて目を離せない神秘を感じさせる容姿の女。

高校生の海城優紗が、遠山の高校時代の、ある重要な人物が、そこにいた。

「いや、これ、夢か……　ファラン、あのメイドさん、精神攻撃系の奴かよ」

「おい、そのオタク、僕の話をまずは聞けって」

「……すげえな、このムカつく喋り方、マジでカイキそのものじゃん……」

遠山がまじまじとその少女を見つめる。中性的な顔立ち、猫のよう  
に丸くアーモンドの目。太陽をちりばめた黒曜石のような瞳。

相変わらず、性格はともかくツラがとてもー

「ちえすと」

ずびし。

目にも止まらぬ速度の目潰し。遠慮なく女の子を見つめる遠山の  
目に細い指が。

「……おぎゃああああ？！ め、目エエエエエエ！？」

「ふ、安心しろ、峰打ちだ」

ひっくり返り、悶える遠山を、机に座ったままのカイキが見下ろす。

ふうつと、ガンマンが銃口の硝煙を吹き飛ばすように戯けて。

「目潰しに峰打ちもクソもあるか、このタコボケ！！ って、痛い……？ なんだ、この夢、痛みもあるのかっ、クソ……」

「この男、まだ人の話を聞く気ないな。もう一発行きますか」

黒髪の美少女。カイキが目潰しの素振り続ける



「待て、やめろ、マジで目はやめろ。眼科の検査の風吹くやつ並みに怖いから」

「……ああ、あれ、怖いよね…… 気球の絵を見る奴だけでいいじゃないね」

しみじみとつぶやくその女の顔は、遠山の記憶に残るものと全く同じ。

3年間の青い春のものと全く同じでー

「……え、まじでカイキ？ 基特高校の？ 俺とタメのあの死にたがり屋のバカ女？」

「そういう君はマジでとーやまだね。基特高校の。僕とタメのお節介のひねくれいじけ友達ナシ男」

互いに容赦のない罵り合いはしかし、敵意など微塵もない。

互いにそれが互いへのコミュニケーションだと理解していた。

「訳が、わからん…… いや、なんだ、この状況」

「そりゃこつちの話だぜー。さっきまで、この教室は国語の授業中だったのによー。君が居眠りから目覚めた瞬間、全部壊れちゃってよ」

「なんの話だ？」

読めない話、カイキはどこから取り出したいちご牛乳の紙パツクに小さなストーリーを刺しながらばやいた。

「……へえ、ドラルの奴、アメリカからの交換留学生じゃなくて、別の世界の生き物なんだ。んで、とーやまは、それを追いかけてきた。と。ほーん、ほんほん、うわー、萎えるなあ」

とんとんとん、まぶたの上を叩きながらつぶやくその内容、彼女のはなしのスピードについていけない。

「カイキ、おまえ、何を」

「世界5分前説。さつきも言ったろ。あーあ、つまんねー。僕も、この世界も、君の記憶を材料に造られたものなんかよー、なんだよ、それー」

「は？」

「とーやま、超優秀な君のライバル、このカイキ様はよー。ゼーんぶお見通しなんだぜ」

「うわ、そのセリフ、カイキがめっちゃくちゃ言いそう」

「うわ、その顔、君大人になっても目つき悪いな……とーやま。これ、夢じゃないよ。少なくとも寝てる時に見る夢じゃあないね」

「夢、じゃない？」

「そ。少なくとも僕は、ついさっき、さっきのさっきまで、その席に座っていた」高校2年生”の遠山鳴人とこの夏休みの計画を話していたんだよ、僕のー」

カイキがにんまり、八重歯を見せながら笑う。

ああ、遠山はこの先の言葉を良く知っている。

いつも、海城優紗は口癖のように。

「――壮大な自殺計画か？ 死にたがり女」

その言葉を遠山が被せる。

「――はあ、ああ、ちくしょー、君完全にとーやまじゃん。……今のセリフで理解した。君が本物、僕たちとこの世界が偽物だ」

カイキが笑う。眉を下げつつ、困ったようなその笑い方には諦めと、悲しみと。泣き笑いにも見えた。

「カイキ、おまえ」

「いい、いい、もう大体わかったよ。この僕は、君の記憶から作られた仮初の命、この世界は君の記憶をいじられて勝手に作られた舞

台だ。んで、僕の役割は、君を試すこと……？ はーん、さてはこの世界を作った奴、相当焦ってんなあ、僕のことも、とーやまのことも、なーんにもわかつちゃあ、いないぜえ」

遠山の言葉を手で払いながら、カイキがまたまぶたをぼんぼんと人差し指と中指で叩きながら呟いた。

「お前、どこまで知ってたんだ？」

「ああ、良い、良い。皆まで言うなよ、とーやま。このカイキ様が1から100までジョーキョーを教えてやるさ。んー、僕の予想が正しいとすれば、こつ、かな？」

パチン。

カイキの細く、白い指が気味の良い音を鳴らして。

「は？」

水面に、夏の日差しが砕けている。

鼻に届く爽やかな、葉臭さ。カルキの香り。

ちやぱん、ちやぱん。どこか呑気な水面が揺れる音。

ざらざらした地面、剥き出しのコンクリートでできたプールサイドにいつのまにか、遠山は座り込んでいた。

「おー、出来た、出来た。んー、風の匂いも、この日差しの暑さも、ほんと、本物にしか思えないのに、偽物たあなあ……」

「プール……」

カイキが指を鳴らした途端、さっきまで教室の中にいたのに景色が変わる。

プールにいた。

「はは、つめてー。……とーやま、状況を説明してやんよ」

カイキがいつのまにか上履きを脱ぎ捨て、プールサイドに腰掛け、足をチャプチャプ水に浸して遊んでいる。

水が、砕けて、小さな白い泡が現れすぐに消えた。

「君は今、何者かが即席で作った世界の中に閉じ込められている、夢とかそんなあやふやなものじゃない。ここは君の記憶を材料に造られた、そうだな、箱庭みたいなもんさ」

「……箱庭……眷属界、あのメイドさんまためちやくちなことを」

メイドさんが呟いた言葉を反芻する。あれは、なんらかのキーワードだったのだろう。メイドさんに何かされた後、気づけばここにいた。



現在進行形で、メイドさんの力で造られた場所に閉じ込められた。割とこういう事態に慣れてきていた遠山は、状況を理解して。

「心当たりがありそうだなにより。んで、この僕は、君の記憶に残る”海城 優紗”を材料に造られた、まあ、いわばスワンプマンみたいなもん。あーあ、普通こう言うのって気づかないもんだよねー、まあ、でもさらに気づいてしまうのがよー」

ふんふんふん、ドヤ顔で、ぱちやぱちやぱちやと水面を足で叩き続けるカイキ。

その言葉に、遠山が被せるように

「カイキユサだろ」

「っ！ ふふーん、わかってるじゃん、とーやま。そう、僕なら気付く、例えば普通に僕自身が生きてきた17年間の記憶と昨日食べた

夜ご飯の味を覚えていても、こんな風に気付く、全部偽物で、自分が誰かの複製品として生まれてきてたことにね」

「ああ、お前ならそう言っよ」

海城優紗はそういう奴だ。

まるで世界に愛されているように、この女はなんでも出来る。で  
きないことはたった一つだけ。

そんな、女だった。

「…………とーやま、君、大人になって少し変わったね。け、むかつく  
ぜ。ま、本来ならこの世界、もう少しマシに、君がここに来た後は  
普通に機能してた筈なんだけど、どうやらミスがあったらしいね。  
壊れちゃってるわ、これ」

「どつ言つ意味だ？」

「簡単さ、テレビゲームのキャラクターがよ。この世界はテレビゲームの中の世界で、自分はキャラクターに過ぎない、なんて気づいたらダメだろ？ 定められたプログラムの中で起こってはならない挙動がある、それをバグっていうのさ。さてとーやま、そのバグは誰でしょうか？」

「お前」

遠山が、カイキを指差す。

「と、君さ。とーやま」

その指した指を、カイキがぐいっと掴んで自分から晒す。

「ひっひっひ。面白いなあ、この世界を作った存在はトンデモなく

すごい存在、それこそ神様が何かに近い存在だけど、君のことをよく知らなかったらしいね、そしてもちろん、僕のことも知らなかった。シンプルなのはなしさ。僕と君はこの世界の創造者には扱いきれなかった。大きな二つのバグに耐えきれず、この世界はあつという間に壊れちゃったわけ」

「壊れたつてのは……」

「んー、本来さあ、あれだよ。君がまず、この異常事態に気付くにはもう少し時間がかかるはずだったんじゃない？ 高校生の遠山鳴人として、まあ、記憶の中の思い出の時間を過ごすうちに少しずつ、違和感に気付く。そしてこの世界から抜け出し、目的を達成する、的なストーリーラインだったんじゃない？」

「ああ、よくある奴ね」

「そ。よくある奴。成長イベント的なやつ。でもそれはすでに破綻した。面白いね、この世界。君から造られたもののせいかな、少し意識するだけで、君の情報がどんどん流れこんでくる…… そっか、とーやまは、大人になったんだ」

カイキがプールサイドの床を撫でて、目を瞑る。何かを夢想しているようにも見えた。

「……お前は、俺の記憶の中のカイキ。記憶から造られたカイキってことか」

本物の訳はない。だが、目の前のカイキは、あまりにも遠山が知るそいつそのもので。

「そ。バグその2、この世界が偽物であり、自分すらも偽物であると気づいてしまった悲しい美少女さー。スワンプマンの気分だよ、全く」

「ああ、お前、完全にカイキだな」

その喋る内容があまりにもらしいので、遠山は気付けば笑ってしまっていた。

「おー、そうだぜー、カイキ様、そのものさ。ぜーんぶ、君との思  
い出は覚えてる。ほら、トーキョーに観光行った時、お嬢様学校の  
文化祭に侵入したとか、南の島で事件に巻き込まれたときのことと  
か、ぜーんぶね」

「ああ、あつたな、そんなことも。すげえ強いアホが、沢山のアホ  
を引き連れて女子校のガードマンと戦争してた奴」

「ひっひっ、どさくさに紛れて君も参加してたじゃん」

「アレはあつちが俺を同類と勘違いして捕まえようとしてきたから  
だ。てめーだけいつのまにかちゃっかり校内に入ってたのはさすが  
だよ。ほんと、面の皮が厚いというか」

「ひっひ、それ、褒めてんの？ ……ねえ、とーやまーっ、聞いて  
いい？」

しゅわしゅわしゅわ。

プールサイドを囲むもみの木、木の葉たちが風に揺れて、擦れて奏でる。

プールの水面が、ゆらゆら揺れて。

「君、血の匂いがするようになっただね」

カイキの、星空のような瞳が遠山を夏の風の中、真っ直ぐ見つめていた。

「遠回しな言い方どうも。気になるんならプールで洗い流そうか？」

どきり。心臓が、見つかってしまったかのように一際大きく動いた気がした。

「ばーか。そんなもんで取れるかよ。なあ、どうして、人を殺したの？」

ストレートな質問。

記憶をもとに作られた存在にしては、その質問はあまりにも真摯で、遠山はとてもじゃないが、誤魔化す気にはならなかった。

「どうして、か。どうして、どうして…… うーん」

どうして人を、殺した？

改めて、昔の知り合いにそれを聞かれると少し迷った。

昔の自分、少なくとも人を殺してなんかいなかった自分を知るその少女は何も言わず、遠山を見ているだけ。悲しそうにも、何にも考えていないようにも、どちらにも見えた。



思い出す。ここに来て、奴隷になって、初めて人の形をした連中をその手で始末したことを。

思い出す。ここに来て、冒険者になって、どんどんそのタガが緩んでいったことを。

過去が、遠山に問う。どうしてお前は殺人者になったの？ と。

遠山は少し考えて、それから自然と口が開いた。

「死ぬわけにはいかなかった。殺さないと、俺が死んでた。ああ、そうだ、俺——」

思考が、言葉になる。問われて始めて見つめるシンプルない気持ち。

なんで、人を殺したの？ その答えはとても、単純なもので。

「生きたかったんだ」

簡単に、口に出すとすんなり理解出来た。

あの世界に来てからずっと選択を迫られていた。即ち、殺すか、それとも死ぬか。

「それは人を、他人を殺してでも？」

「ああ。殺さないと、殺されてた。俺は殺すことを選んだ。俺は、俺が殺した奴らより、俺の方が大切だった」

なんのことはない。遠山にとっては選んだだけだ。殺人という行為への忌避感よりも、ただ自分が尊かった。

あのときも、あの時も、あのときも。

ただ、自分が尊いと思ったものを奪われない為に殺した。それだけだった。

「罪悪感とか、ないわけ？」

過去が、それを問う。少なくとも、殺人を絶対の悪として認知する現代社会に属する少女が、静かに殺人者になった大人へ問いかける。

「ないことは、ない」

正直に、遠山が告げる。今でも殺した時の手の感触は覚えている、しかし――

「でも、俺、またきつと同じことをする。どこかの誰か、俺にとつて、どうでもいい誰かが　ラザールやがきんちよ、ストル、ドラ子に人知竜、ドロモラ、俺が大切にしようとしてるもんを壊そうとするならー」

ーしかし、遠山はもう自分が殺した人間の顔を覚えていない。その程度の、罪悪感だった。

いつも、遠山の殺しの中には自分なりの納得があった。いつも、遠山の脳みそはハッピーで狂っていた。

遠山の殺しには道理と狂気が常にとともにあった。

例え殺人者が呪われた魂の持ち主だとしても、もう止まることはない。それよりも、大切なものを知っているから。

「ー俺を踏み躪ろうとする奴は、俺のぼっけんの邪魔をする奴は、

きつと、殺す」

ざあああああああ。

夏の風が、プールサイドを駆けた。

遠山は呪われた魂の殺人者になっていたけど、その風だけはあの  
青い春の3年間、毎年訪れ、感じていた温い風と変わらない。

だから、遠山は少し安心した。

少し、目を閉じて風に吹かれる。

「……僕の記憶の中の、とーやまはなんだかんだ、人は殺せない奴  
と違ってただけど、きみは大人になったんだね」

風が止んだあと、カイキが口を開いた。

遠山をじっと、見ていたその目。遙か彼方、地平線の向こうを眺めているような、遠い目。

「君は捨てることができるようになったんだ。いいじゃん。まあ、たしかにそれだけ大事なものがあるんなら、殺したくないから殺さないのって、何も選んでないのと同じだしね」

カイキが身体を前に倒し、プールの水を手のひらで掬う。

夏の日差しを溶かした水が彼女の手からすぐに溢れて、プールサイドに染み込んでいく。

「――君は選んだんだ」

それ以上、彼女は何も言わない。責めることも、怯えることもない。

そして、少しだけ、ほんの少しだけ、寂しそうにつぶやく。

「大人になったね。とーやま」

「それはお前もーい や、お前は高校生のカイキなんだったな」

記憶から創られた存在。目の前の海城にしかみえないカイキはそう言った。

遠山の言葉に、カイキは視線をプールに落として。

「ふふ。そうさ、僕は所詮、スワンプマン。この心も記憶も、誰かに造られた偽物に過ぎない。本物の海城優紗じゃない。食べるもの、吸う空気、語る言葉もゼーんぶ作りものってね。さて、どうしたものかな。壊れた世界に、壊れた役割、もう正直、この世界で君が出来ることってほとんどないんだけどね」

「いや、ある」

「へえ」

「お前、さっき面白いこと言ってたな。外国からきた転校生、ドラ  
ルがどうのこうの。俺、そいつを探しに、会いに来たんだ。案内し  
てくれ」

「僕が嫌だと言えばー？ どうすんだよー？」

「嫌ってことは、知ってるってことか」

「ゲーツ、嫌な奴」

渋い顔をして、舌をちろりと出すカイキ。



全部同じ、遠山の知る海城と目の前のカイキはまるで同じ人間にしか見えない。

その仕草、所作、あまりにも記憶の、思い出の中の彼女と同じだった。

「はいはい、わかりましたよ。ドラルのとくに案内するさ。この調子だと、あの子も多分、君の知る竜とやらに戻ってるらしいしね」

「お前、どこまで知ってるの？」

「全部だよ。言ったら？ この僕は君の記憶から、この世界も、君の記憶から造られたものだ。ゼーんぶ、遠山鳴人を材料に造られた世界だからね。今、こうして話してるだけでも、大人になった君がどんな騒ぎを起こしてきたかよくわかる」

「それ少し恥ずかしいんだけど」

「ひっひっひ。そう？ 似合ってるよ、”竜殺し”さん。てか、君、完全に異世界転生かましてんじゃん。はー、羨ましいー」

「お前そついうの好きだったな、そついえば」

「剣と魔法の世界に憧れるのは人間なら誰しも持つ習性みたいなもんだよ、とーやま。へえ、帝国に、王国、貴族に、教会に、竜かー。面白そーだねー」

「……なあ、カイキ」

「あ、この世界から出る方法かい？ それにはまだ答えないよ。もう少しモヤモヤしてもらうから。えー？ 待って、待って、現代ダンジョン？ バベルの大穴？ 嘘、これからあと数年したらこんな世の中になるの？ あー、くやしー、絶対なりたい奴じゃーん」

割と聞きたかったことをカイキはさらりと流す。

この世界とこのカイキは深く繋がっているらしい。遠山は郷愁に足を取られながらも、この先のことを考えていた。

カイキは、この世界から出る方法を知っている。それだけ確認できただけでもラッキーだ。

「……お前、探索者適性ないからなれねえぞ」

「え、マジ？ うそ、僕、そういうのめちゃくちゃありそうなの？」

ポカんと、口を開いて固まるカイキ。絶対に受かるはずの筆記試験に落ちた人みたいな顔だ。

「あ、その顔。ドヤ顔で血液検査受けた後の結果発表ん時と同じ顔してら」

その顔を遠山は見たことがあった。

「はー？ なに？ とーやまにできて、この僕に出来ないことがあるの？ むなくそー。よかった、この世界は壊れてて、先がなくてー。あ、今のイヤミとブラックジョークを高度に混ぜたセリフなんだけど、どう？」

流し目を向けるカイキ。

遠山は真顔で答える。

「性格が悪い」

「でも顔は？」

「超良い」

テンポのいい会話。2人ともあの頃と同じように小さく笑っていた。

「ひっひっひー、とーやまよー、カイキさんの機嫌を取ったってそうはいかねーぜー、てめーよー…… ああ、ちくしょー、やっぱたのしいな……」

カイキが、プールに足を浸けたまま、大きく伸びをする。空を見上げる少女の眩きは、夏空には届かない。

「カイキ？」

「んーん、なんでもないさ。さて、さて、ではこの壊れた世界の最期の1人、カイキ様がとーやまの願いを聞いてやろうか。ドラル、

「ドルル、ドルル、あ、いた。また屋上にいやがるな」

また、カイキがまぶたを何度か叩く。遠山には決して見えないそれを見つめてつぶやいた。

「そんなのもわかるのか？」

「まーね。僕、ほら、スペシャルな奴じゃん。ま、言っておくとよー、とーやまもドルルを連れて帰るんなら早くしたほうがいいよ」

「あ？」

「君に執着してる子、君を探してる子が今の事態に気付かないうちに急ぎなよって、ハナシ。女たらしだからね、とーやまは」

「あ？ 俺がモテねーのお前が一番よく知ってるだろ？」

「そうかな、そうだったけ？ まあ、いいや」

クスクスと笑って、カイキがまた指を構える。

彼女の白い肌を、プールの水面が照り返す日光がより白く照らして。

パチン。

また、景色が変わった。

フェンスに囲まれた空間、より、空は高く、雲が近い。

その場所から市内が一望出来る。

夏の風が、すぐ頭上を吹いている。市内を囲む山々の上、アイスクリームをめちゃクチャに盛ったような入道雲がぼっかり浮かんでいた。

屋上。夏の日差しがより近い。

「うおっと、風強いな」

「よっと。お、早速いた。ドラル、ヨスヨスー」

隣にいるカイキの声に、遠山は目線を前に。

ドラル。



どう考えても、その名前は聞き覚えのある名前だ。

金色の長髪が、二ホンの夏の日差しを受けて眩しく。彼女は、屋上のフェンスから外を眺めていた。

その背中、遠山の知るそれよりも少し小さくなったそれを眺める。

彼女が、振り返った。

外に跳ねた腰までありそうな長い金色の髪。人種、いや、生物が違うということを理解させられる制服の上からもわかるバランスの良い身体。

蒼い、空の最も宇宙に近くて昏い色を写した瞳。

ああ、あの竜が10後半の姿で、遠山の知る夏用のセーラに身を包んでそこにいた。

入道雲を背景に、金色の竜が夏の絵の中に。

「ドゥー」

ここまで来たのは、その竜に謝るため。遠山が声をつつかえて。

「あ、ユサ！ ど、どこにいたんデスかー？ さ、探していたんデスよー！」

びよこん。

金色の髪、頭をつむじから一本、アホみたいな毛が跳ねた。

目に涙をうかべて、金髪の女の子が声を震わせて。

——留学生のドルル。

そう、カイキはそんなことを言っていた。つまり、この壊れた世界での彼女は。

「……役にハマってんな」

完全にこの世界の役割にはまってるカタコトドラゴンが、涙目でこちらに駆けてきた。

## 92話 夏の音、殺した君へ（後書き）

〈TIPS〉 遠山の探索者パーカー

赤色の原色が施された遠山の探索者パーカー。

多数の軍で使用されている特殊防刃繊維が編み込まれている。裏地は怪物種の素材繊維で守られている一品。これは怪物種のその多くが肉食獣の性質である爪と牙を持つためだ。

探索者の服装については民間出身者の多くはパーカーにカーゴパンツのスタイルを揃えているものが多い。

これははじまりの探索者が民間出身者であることに由来し、彼の装衣をいつしか皆が真似するようになった。

猟犬と猟師から始まった現代の怪物狩り達にとって探索もアウトドアもさして変わりはないのかもしれない。

殺すものよ、殺せるものよ、きみ死にたもうなかれ。

### 93話 夏への扉

「へ？ 貴方は、……トヤマ？ トヤマに似てマスけど、ふ、老けましタデス？」

「……………ごめん、少し外す」

素直なドラゴンの言葉が、遠山の心を傷つけた。成人男性が、幼い見た目の竜の言葉に打ちひしがれる。

「待て待て、何ダメージ受けてんの、成人男性。あらら、こちらは、とーやまとは違ってまだ記憶が戻っていないみたいだね」

「……このドラ子は、本物なんだよな」

「うん、NPCではないよ。ただ、あれだね。肉体ごとこの世界に囚われてるとーやまと違って、心だけがこの世界に招ばれてるみたい。記憶が戻らないのはそのせいだろね」

「な、ナンの話デス？ そ、そうだ、ユサ、へ、変なんデス、学校が、クラスのみんなが、変で。急に、気づいたらみんないなくなってる、おうちも、電話、パパ、ママとも連絡つかなくなってる、ワタシ……」

キョトンしたあと、オドオドし始める竜の姿に、遠山は目を疑う。

普段は鋭く吊り上がり、自信にあふれて輝く目は今やオドオドしながら不安げになんとも瞬きを繰り返している。

「あー、どこから説明したもんだろか。うーん、とーやま、任せていーい？」

カイキがぐりぐりと自分の頭を拳で押さえながら頭を捻る、それから遠山に事態を投げた。

頷いた遠山が、ずいっと、金髪の竜、いや、今はただの少女の前に立って。

「ドラ子」

その名前を呼んだ。遠山だけに許された竜への愛称を。

「へ？ ど、ドラコ？ わ、ワタシはドラル、デス、ドラコでは…  
…え？ あれ？」

ドルルと名乗る、人間離れたプロポーションの少女はしかし惑いながらも、その呼び名に反応した。

「いや、お前はドラ子だ。基特高校に来た留学生じゃない。竜大使館のアリス・ドルル・フレアテイル。竜だ」

「と、トオヤマ？ え？ ナンデ、大人にナツテ、でも、ワタシ、貴方のその姿を知ってー」

「すげえ、オドオドしてるドラ子なんて普通見れたもんじゃねえな。てか、お前、スタイル良すぎてビビるな」

腕を組みながら遠山が少女を見つめてつぶやく。

「エ、あ、アリガト、トーヤマ」

少女が遠山の言葉にびっくりと身体を跳ねさせる、それからオドオ



ドと視線を踊らして、下を向いてしまった。

「冗談みたいに小さな顔に、すらりと長い手足、白い夏服セーラーがどごそのワンピースのようにも見えてくる。」

「……調子狂うな、カイキ、これ、どーしたらいいのよ。ドラ子、完璧に小動物系オモシロ留学生になってんだけど」

「うわ、おっさん臭え。セクハラじゃん。あー、まあ、僕からすれば、それがそのまま、アリー・ドラルっていう女の子なんだけどさ！。てか、ドラ子ってなに？」

「ニックネーム。こいつ、俺の友達だから」

カイキの問いに、なんのこともなく遠山が答えて。

「……………へえ」

夏の音が、一斉に止んだ。

「カイキ？」

「おっと、わりーわりー、へへ、友達、そう、友達。……とーやま、友達できたんだ」

だが、それも一瞬。消えていた風の音、蝉の声が自分の役割を思い出したように、また鳴り始める。

「ああ、探索者になってから、だけど」

「そっか。そっか。とーやまに、友達が。へえ、君、そんな顔、へえ……………」

「カイキ？」

カイキの様子が、少しおかしい。

足元をふらつかさせ、壁によたりかかった。

「いや、なんでもないよ。……ドルル、お知らせだ。君の夢はどうやら正しかったみたいだよ」

「エ？」

カイキは屋上の出入り口の壁に背中を預けたまま、少女に向けて話しかける。

「ほら、この前、ラブホ女子会をみんなでやった時さ、キミ話してたじゃん。ニホンに来てからずっと、変な夢を見てるって。まあ、これも、造られた思い出なんだけど」

ラブホ女子会……？ 遠山の動きが止まった。

「……ア」

カイキの言葉に、少女が小さく声を漏らす。

「なんだっただけ？ お屋敷の夢、執事とか、メイドとか、他にもたくさんのお使いがいて、君はそのお姫様。壁に囲まれた街で、たしか…… ああ、とーやまとパン屋をしてるんだっけ？ へへ、メルヘン入ってんなー、とおもってたけど、どうやらそれがほんとならしいよ」

「わ、ワタシの夢が……？ 竜…… おまつり、執事…… メイド……  
ベル、ナル、ファ、ラン？」

カイキの言葉に、少女が言葉を詰まらせる。その澀んだ言葉の中には確実に、聞き慣れた名称が混じっていた。

「お！ そう！ いい感じだ、ドラ子！ 思い出したか？」

遠山は、ラブホ女子会というとてもなく内容が気になるカイキの言葉をなんとか理性によって追求するのを諦めつつ、少女に声をかけ続ける。

だが、やはり、ラブホ女子会……？

「……う、あ。ヘン、ワタシ、え？ なんで、でも、トヤマ、あ、でも、でも、トヤマが…… うっ……」

少女が小さく首を横に振る。

いつのまにか、目に湛えていたそれが、こぼれた。

「え」

「あ、泣かした」

ぼろ、ぼろぼろ。

金髪の少女が静かに涙をこぼし始める。照りつける夏の明るすぎる白い日差しが、彼女の涙を輝かせる。

その涙は、液体だった。

「ごめん、ゴメンナサイ、なんで、カ、わかんないデスけど、すごく、すごくカナシクて。トーヤマと、ワタシ、ワタシ、トーヤマに何か……　ワタシ、トーヤマに、トーヤマを……　グスッ」

「とーやま？」

お前、何したの？ そんなカイキの言葉が響くような視線。付き合いが長いから分かる、少しカイキがキれていることに。

ーああ、どこから見ても、何を切り取っても、カイキユサは、海城優紗そのもので。

「……あー、そんな目で見るなよ、カイキ。俺、このためにここまで来たんだから」

自分の中で触れないようにしている郷愁を収めつつ、遠山がカイキの視線に応える。

もうすでに、ここまで来た。

色々な人に助けられ、色々な人の期待を背負った男。

少年時代をたしかに終えた少年は、もう言うべき言葉を知っている。

### 【スピーチ・チャレンジ発生】

【”スピーチ・チャレンジヒント ” 冒険都市の記憶”、” 遠山鳴人の過去・・・”】

### 【目標 仲直りしろ】

最初から、その少女が男に望むことなんてほんとに簡単なことだった。



「ドラ子」

遠山が名前を呼ぶ。決して遠山とこの少女は、この世界に生きる存在ではない。

基特高校のよくキレる物騒な奴、遠山鳴人と、愉快的留学生美少女のアーリー・ドラルではないのだ。

「エ……」

少女が目を丸くする。

自分の前に片膝をついてこちらを見上げる、少女からすればいつ

のまにか成長して大人になっていた男を見たから。

その男の鋭く、それでいてチベットスナギツネのような空虚さを湛えた目。

金髪の少女は、何故かその目から視線を晒せない。

とっとうと。少女の心臓が小さく、早く鳴り始めて。

「俺、本当はすげえオタクなんだ。特にファンタジーオタクの限界派で、正直、竜殺しとか呼ばれるの、めっちゃくちゃテンションあがってたんだ」

「……………エ？」

早口で告げられた男の言葉。少女は固まるしか、なかった。

「ひっひっ。出た」

カイキだけが、壁にもたれかかったまま、少し笑う。

彼女の記憶の中の、よく口が回るその姿。細められた目は、何か遠い場所にあるものを眺めているような――

「お前の鎧とかも正直、めっちゃくちゃ良いと思う。なんか生物感のあるデザインというか、騎士鎧を竜のセンスで作った感じがとても良い。あと、俺、冒険者とかめっちゃくちゃ憧れててよ。正直ギルドに行く時とかも、半分趣味で行ってる感じはある」

「と、トーママ?」

「街を歩いてると普通に別の種族がいたりするのもやばい。獣人はあんま良いイメージないけど、ビジュアルが良い。ドワーフはイメージまんまだ。まあ、思ったより金にがめついけどな。探索者端末取り返す時は苦労した。あとホビット。アイツらカード強すぎだろ。エルフはまだ1人しか会ったことないけど、顔が強すぎるよな」

「他にも工房とか市場とか、あんなんもう俺からしたらテーマパークだろ。錬金術とか薬草学とかもあんのか？ あるんなら勉強してみてえ。スローライフ田舎暮らし無双がしたいんだけど、なんか無理そうだよな、なんでだろ。あ、あと魔術、魔術も習いてえ。人知竜に聞いてみたら教えてくれるかな？ あ、でも、お前もその姿を変えるの魔術式とか使ってたよな、教えてくれよ」

「え、エ？」

オタクの早口に少女が何度も目を瞬かせて。

「これが、お前に言ってなかった俺だ。遠山鳴人、お前の友達の遠

山鳴人はまず、かなりのファンタジーオタクで、今の生活にかなりワクワクしている。ファンタジー世界で家借りて、パン屋やるとか誰でもやりたいだろ？ 俺はやりたい、やった、めっちゃくちゃ楽しい、次はサウナだ。もうすげえの作るつもりだからな。THE FANTASY サウナ的な」

全てを一気に話す。今まで話さなかったこと。自分のこと。

「と、トーヤマが、トーヤマが何を言ってるか、わからないです。わ、ワタシ、だって、昨日まで、夏休みに何するかって、みんな話して、トーヤマは釣りに連れて行ってくれるって、ア、ち、がう。つりぼり？ アレ？」

少女が戸惑う、しかし、確実にその少女は遠山の言葉の意味を理解していた。

きちんと、彼女にも己の世界が、戻るべき場所があるのだから。

「お前はきつと、釣りが俺より上手いよ、ドラ子」

「ドラコ、ドラ……子」

愛称を、少女がつぶやく。

遠山鳴人が決めた愛称、遠山鳴人にのみ許された呼び名。

竜が許したその名前を。

「お前はずっと、俺に色々なことを聞いてくれてた。その度俺は全部誤魔化して、答えなかった。それが、良いことだと思ってたんだ。余計な心配をかけないのが、良いことだって」

自分のことは、自分でケリを着ける。それが絶対の正しさだと遠山は思っていた。

一人で決めて、一人で行く。それこそが尊いことだと信じていた。

「でも、違うよな。友達とか言うんなら、友達が何かあったんだ、  
って聞いてくれたら、普通に答えれば良いだけの話だったよな」

だが、それは遠山の欲望と、たどり着くべき光景とは折り合わな  
い。

――湖のほとりに家を建てたかった。

最期の瞬間に想った願いの光景にはたしかに、自分以外の誰かも  
いたはずだ。

ならば。

「とー、やま、ナル、ヒト？」

「ごめん、ドラ子。俺正直、今かなりやばいかもしれん」

遠山が友達に対してすることは、黙秘や沈黙ではない。

その場所にたどり着くには、その欲望の光景に、たどり着きたい場所に必要なものは遠山鳴人1人ではないのならば。

「助けてくれ、ドラ子。力を借りたい」

友達に、頼ればいい。

ただ、それだけのことだった。

「え？」



「なんか、ノリノリでキリヤイバボコボコ使ってたら、多分だけどころ、乗っ取られかけてる的な？ 身体を、こつ、作り変えられてる……？ 多分？」

「……ナンデ、ナンデ、疑問系ナノ？」

いつのまにか、少女の涙は止まっていて。

それでも泣き笑いのように、顔をくしゃりと歪ませて、遠山に聞く。

「んー、確証がない。ただ、そんな感じだから、すまんドラ子。助けてくれ。パン屋の件も、俺の体のことも。お前に助けてほしい」

「……ワタシ、わからない、トヤマが何を言ってるか、わからない、ナノニ、なんで…… ワタシ、今……」

再び、少女の瞳から溢れる涙。鼻を何度も齧り、顔を抑えて俯く。

「お、おお？ ま、待て待て、ドラ子、泣くなって！ か、カイキ、カイキさん！ 俺、なんか言い方悪かった？」

急に泣き出した少女に、遠山は普通に慌てる。

なんか良い雰囲気だったのに何が悪かったのかわからない。遠山が焦ってカイキに助けを求めれば。

「しーらね、自分で考えれば？」

「塩すぎだろ」

まさかの塩対応。助けしてくれるつもりがないらしい。

「ち、ガウの、トヤマ、ワタシ、ワタシ、ナンデだろ、今、とても、嬉しくて…… わけ、わかんないネ……」

「あ。セーフ？ セーフだったんか？」

「君はデリカシーがないね、とーやま」

すぴーと、カイキがため息をつく。

「……ワタシ、ずっと、知りたかったよ。トヤマのこと、昔のこと…… ダカラ、仲良くなりたくて、でも、アレ？ ワタシ、どうして？ トヤマのこと？」

少女は明らかに何かを思い出そうとしている。

「ドラル」

「ユサ？」

戸惑う少女の名前を、カイキが呼んだ。

この世界にしか居場所のない彼女から

「君が転校して、仲良くなったこの3ヶ月、楽しかったよ。でも、ここは君が生きる場所じゃないみたい。君が生きる場所はきっと、ここより広くて、もっともっと自由な場所みたいだぜ」

「ゆ、ユサ？ ヌサまで、どうして？ ワタシ、迷惑でしたか……？」

「そんなわけあるかよ。君はいい奴だ、ドラル。たまにナチュラルに上から目線なところはあるけど、それでも君は、誇り高く、善いことを知っている人だよ。好意に値する人間さ。そこの悪人ヅラとは違ってよー」

「どこの悪人ヅラのこと言ってる？」

チラリと流される悪態と笑みに遠山がすらりと言葉を返す。

その反応に満足したようにカイキは小さく喉を鳴らした。

「くく、君以外ここに悪人ヅラはいないだろ？　ねえ、ドラル、その悪人ヅラはね、どーしようもない奴なんだ」

カイキがゆっくり、少女に歩み寄る。片目を瞑り、視線を右上に。

言葉を紡ぎ始める。

「教科書を隠されただけで、その犯人を授業中に半殺しにしようとするし、痴漢の犯人の指を全部捻り折ろうとするし、ストーカーを見つけたら逆にそのストーカーをストーカーしてノイローゼにさせるし、誘拐犯のバンのタイヤを撒菱でパンクさせるし、トーキョーの女子高の学園祭に侵入しようとするアホたちのお祭り騒ぎに乱入するし、カツアゲ犯の溜まり場を壊滅させてカツアゲ返ししたりす

るし、ああ、よそ様のお家に、打ち上げ花火を打ち込みながら釘バツトかっいで人を攫ったこともあったっけ」

カイキの言葉は、まるで歌うようにどこか愉快そうに。

「おい、カイキ。風評被害だ。教科書の件は黒塗りされてたんだぞ。万死に値するだろ。おかげで俺はしばらくこのころの続きが読めなかつたんだ」

「このころの展開が気になってクラスメイトの鼻を折る高校生は君くらいのものなんだよ」

カイキの語るそれは、遠山鳴人の3年間の足跡。

どこかの誰かの記憶をカイキは語る、決してそれが自分のものではないと知っていても、ああ、その光景は彼女にとって、愉快なものだった。

「……仲がいいのだ、デスね」

じつと、少女が蒼い瞳をカイキへと向ける。人らしさが無い、別の生き物のような美しさの眼。

「ふふ、そう見えるかい？ でもね、僕はこの頃の友達じゃあないんだ。意地でも友達なんかにはなつてやるつもりなんてなかった。コイツは、とーやまは、結局、前しか見ていない。自分の中にあるコイツにしかわからない光景を求めて、気付いたらいなくなつてるような奴なんだ」

責めるような言葉、ああ、でも、その声色や顔は、愉快で仕方ないとはかりに。

「人の人生に土足で踏み込んで、妙に耳触りの良い言葉でこちらを惑わして、気づいたらコイツのことはかり考えてるようになる。でも、コイツはこっちのことなんか考えちゃいない。自分の先、自分のことしか考えていない勝手な奴でさ」

「……ゆ、サ、違う、デス、トーヤマは、ナル……ヒトは」

少女が、声をあげる。

「ああ、だからびつくりした。コイツが誰かに謝るなんて。誰かのことを考えて、それで」

少女の言葉を引き継ぐように、淀みなくカイキが言葉を紡ぐ。

「トーヤマが、誰かに頼ることが出来るようになるなんて思いもしなかった」

その目は、優しい。

その声はかほそく。



「ユサ？」

「君は、とーやまの友達なんだね」

カイキが、ただ少女を見つめる。

「ワタシ…… トーヤマの？ あね、どうして……そうだ、ワタシは、イーナルヒトの」

カイキの言葉を受けて少女が何かを、今は思い出せない何かを言葉に。

「ああ、ドラ子は俺の友達だ。お前に会いに来た。ドラ子、帰ろうぜ」

「ーでも、違う、ワタシ、ヒトじゃないヨ。ナルヒトはヒトだけど、ワタシは、……オレはー 違うから、だから、すれ違って、理解出来なくてー あれ、ワタシ、オレ…… どっち？」

遠山の言葉に、少女が一步後ずさる。

涙はやはり、止まらない。腰まであるストレートの金の髪、それをくしゃりと抑えて惑う。

「ワタシ、ヒトの方が、いいよネ…… ナルヒトも、ヒトだから、ワタシは、ワタシはあなたの友達として、でも、ワタシはー だから、あなたがわからなくて、遠くて……」

縋るように、少女が顔を歪ませる。己のどうしようもない宿痾を嘆くように。

顔を抑えて、俯き。声が漏れた。

それはきつと少女をずっと苦しめていた差異。

遠山鳴人を理解しようとするほど、己とヒトの違いを理解してしまう。

ヒトに近づけば、近づくほどに自分が異質で、孤独なモノだと言  
うことを理解してしまつて。

「いや、この男は人同士でも度し難い奴だよ。宇宙人と意思疎通す  
る方が簡単なくらいじゃね？」

呑気な声が、跳ねるように。

カイキには、少女の言葉の意味は理解出来なかったが、その苦し  
みはなんとなくわかつた。

どれだけ恵まれた環境、どれだけ優れた能力、容姿。他者が羨む  
全てを持っていても。

世界で自分は独りきり。孤独と孤高の苦しみを――

「へいへいへい、ドラルがどーしたらいいかわかんないってさ」

だが、カイキは知っている。その孤独を冒す存在を。

自分勝手に、自分のルールだけを横暴に振る舞って、そんな苦しみをめちやくちやにする男のことを。

ああ。例えカイキの記憶が全て作り物のコピーだとしても、その孤独を踏み躪る、乗り越えてくれるその姿は、

「どーすんの？ とーやまなるひと」

夏の暑さと同じく、決して忘れられないものだった。

「キリヤイバ」

欲望のままに。男が、その孤独を踏み躪る。

遠山鳴人の首元から、欠けた剣が現れて。

「エ」

「わお、マジかよ」

屋上の真上、夏の日差しの中の白い霧が揺蕩う。

「お前が決める。ドラ子。どっちがいいかなんて、自分がどちら側なんてもん他人に絶対委ねるもんじゃない」

「トヤマ、コレ……な、二？」

キリの中、屋上を囲うキリはまるで雲海をそのまま持つてきたような光景を作り出す。

雲に混じるのは金色の焰の煌めき。

あの世界において、大いなる力と役割を持つて生まれた金色の存在の力の片鱗が、キリに混ざる。

「俺が殺した竜の魂、その一つ。ああ、竜は命が7つあるんだろ？今の俺にはこんなことさえ出来る。血もなんか白いし、夢には変なのばかり住んでるし、正直俺も真つ当な人間かと聞かれたら微妙かもしれない、だが、それでも」

遠山はそれだけには確信があった。

例えこれからも惑うことはあれど、今胸の中にあるこの確信だけは――

【技能発動 ” 拡大する自我”】

「俺は遠山鳴人だ」

拡がり、変わり、捻れて、歪む。

その変容こそが、己なのだといふこの確信だけは見失うことはない。

「霧の化け物でも、人間でも、なんだろうと、どうなるうとも、俺が遠山鳴人だ。俺は必ずたどり着く、欲望のままに望む場所へ、それだけは決まっている」

欲望のままに。シンプルなルールと、己のたどり着く光景。それだけあれば、遠山は揺らがない。

「お前はどつだ、ドラ子」

「わ、タシ？」

「お前がヒトだったら、お前が竜だったら、お前はお前じゃなくなるのか？ お前が決める、ヒトか、竜か。なりたい方を選べばいい」

「竜……？ ワタシ、竜……？」



「狭霧山野絵巻物語” アリス・ドラル・フレアテイル”」

少女の呟きに応えるように、遠山が己の新たな力を発現させる。

「ア、ア……それ……」

「多分、お前の尻尾。あん時ぶつ殺した命がキリヤイバで保存されてこの形になったらしい。すごいぞ、これ、尻尾の先から焰出るし」

「尻尾の先？ ほのお……」

「ああ。このフォルム、この鱗、キリで再現してるレベルでもこの美しさ、いい。ああ、そうだ、トラ子」

「……っ」

「お前の竜はかっこよかった」

気付けば漏れていた言葉。

傲岸不遜、傍若無人、唯我独尊。

それを許される力、美しさ。

遠山にとって、その姿は、夢想したその存在、竜はやはりかっこよかった。

「グしゅ」



耳、頬。

皮膚の薄い部分、少女の白い肌、火がつくように紅潮する。

首をイヤイヤと振りながら、カイキのすがりながら抱きついてわんわん泣き始めた。

「……え、うそ、あり？　今なんかすごい綺麗に話まとまりかけてなかった？」

すごく嫌な汗が、遠山の背中をびしょびしょにしていく。

「……んー、まあ、セクハラだね」

「嘘お?!　これ、これ、アウトなんか?!　尻尾、尻尾だぜ!?!」

「まあ、お尻に近いものだし、そこから焔出すとか当人の前で言うのは、デリカシー不足じゃん？」

「ユサ、ユサア、ナルヒトが、ナルヒトが、オレの尻尾を…… あんなに、ヒドイイイイイ」

「おお、ヨシヨシ。あれね、もう死ぬしかないよなー、デリカシーのない男ってほんとさー。女子の尻尾撫で回して、ドヤ顔で焔がどつとかさー」

カイキが涙目のドラ子を抱き締めて頭をヨシヨシと撫でる。

普通のドラ子よりも小さいとは言え、カイキとは身長差があるので、なんか、猫がゴールデンレトリバーをあやしているようにも見えた。

「ま、マジか。俺、セクハラ……」

「はあ、ほんとにまあ、人間臭くなっちゃって。ほら、ドラルも、そんなに泣かないの。男子なんてどれだけ大人になっても根っこは小6のままだから。特にとーやまみたいな奴はよー」

「うう、ユサア……」

「はいはい、ヨシヨシ。……さて、話はどつやらまとまりそうだね」

「え、うそ、どつが?」

カイキの言葉に遠山が目を剥く。何もまとまったような気はしていないのだが……

「ドラル、でも聞いたよね。とーやまは君がどつちでも良いんだつてよ」

「え？」

「好きに振る舞っていいんだよ、君はなりたい自分に、あるがままの自分でいいってこと。アイツは、君がヒトだから、とか、竜だからとか、関係ないんだよ」

噛み締めるように、カイキが少女を諭す。

「君が、君だから、とーやまは君を友達に選んだんだ。シンプルな理由だろ？」

その言葉の中にある羨望の色に、誰も気付かない。

「オレ、竜でも、いいの、か？」

「とーやま？」

カイキが、少女の問いに対して答えを求めて。

「ああ、関係ない。前も言ったろ。お前が竜としてとち狂ったらぶちのめしてやるって。お前がヒトとして拗らせたら、またこうして話にくるよ」

「オレ、ワタシ…… オレは……」

「ドルル、君と過ごした時間は、君にとっては一夜の夢。きっと目を覚ましたあと少ししたら、もう思い出すことができなくなる泡みたいなものさ。でもね、それはゼロになるわけじゃない、なくなるわけじゃないんだ」

「ユサ？」

少女が、首を傾げる。



カイキはそれを見て、少し笑った

「君はいい子だよ、ドラル。この僕が保証する。ああ、君がとーやまの……なら、悪くない」

「カイキ？」

「ほら、ドラル。とーやまは、君に謝った。君はどうかな？ セクハラもするし、デリカシーがない奴だけど、それでもこうして君に会いに来た。君はどうする？」

「……まだ、わからない、ケド、すれ違ったまま、はイヤだ」

あやすよつなカイキの言葉に、少女はえづきながらもしっかりと答えて。

「なら、それが答えだ。うん、この続きは、夢じゃなくて、君たちが生きる世界でやるべきだ。……そろそろ時間だ。本当に急がないと、彼女に気付かれるからな」

「ユサ？」

「とーやま。君は、目標を達成した。ドラルに、可愛い竜の子にきちんと謝れた、きちんと頼れた、きちんと話せた。この子も目が覚めればきっと、そのことを覚えてくれるはずさ」

少女の言葉に微笑みを返すだけ。返事はなかった。

「……………おい、カイキ」

嫌な予感がした。

それは、この女と海城 優紗と3年間を過ごした遠山だからこそ  
気付いた感覚。

「はは、なんだよ。そんな顔して。さあ、そろそろ夢の終わりだ。  
君たちは君たちの世界を進めるといいさ。この初めから終わってる  
世界はきちんとその役割を終えた」

ゆっくりと、カイキが少女を抱きしめていた腕を解く。

「ドルルの願い、遠山鳴人を知りたい、遠山鳴人の故郷を知りたい。  
その願いによりこの世界は、とーやまの記憶を元に、君の故郷を象  
り造られた。ドルルはそこで、遠山鳴人の青春の時間を知った」

「え？ 俺の青春？」

「ああ、そうさ。とーやま、この世界はね、とてもシンプルなもの

なんだ。ドラルの、君を知りたいという願いをもとに、造られた世界。でも、もう今はその必要はない。ドラルは知ったからね、君がきちんと話をしてくれるってことをさ」

「ゆ、サ？ どうしたノ……だ？」

少女は気付かない。その言葉遣いが少しづつ、少しづつ、彼女本来のものに戻りつつあることに。

それはつまり、この世界が役割を終えかけているということに。

「ドラル、君の願いは叶った。一夜の夢はきちんと君の為に咲いたわけ。おめでとう、ハッピーエンドだ」

ふにやりと笑うカイキの顔。

穏やかなのに、その言葉はどこか投げやりで。

「カイキ、やめろ、お前のその顔。良くない顔だ」

「ひっひっひ。なんでそう思うんだよ、とーやま。さあ、君たちはここから早く出た方がいい。みんながみんな、僕みたいに聞き分けがいい奴ばかりでもないだろ？ 自分たちの世界が偽物で、自分自身も誰かの偽物に過ぎない。想いも記憶も未来も初めからなかったものだった、なんてそんな残酷な真実をさ」

「これから、お前はどつなる………?」

「わかってるくせに」

遠山の言葉、カイキはため息を返すだけ。

「コサ?」

少女がカイキの名前を呼ぶ。

もう彼女はそれには答えない。

一歩、一歩、カイキがあとずさりしながら、屋上の端へと移動していく。

そして、あとずさりしながら、ゆっくりまず遠山を指さした。

「とーやま、僕の賭けの相手、僕の人生をめちゃくちやにした男。君はここから出ていかなくてもいいけない」

そして、その次は少女にその白い指先を向けて。

「ドルル。僕の友達、この過ぎゆく夢の中で過ごした可愛い子。君はここから出ていかなくてもいいけない」

「……カイキ、ここから出る方法を知ってるんだよな、教えてくれ」

遠山は問いかける。でも、聞きながらもつなんとなく予想はついていた。

【技能発動 ” オタク”】

仮初の世界、仮初の人格。物語に出てくる偽りの存在の結末なんかだいたいお約束は決まっている。

「とーやま、その顔、あらかた予想はついてるってか？ いいねえ、奇しくも、この世界を作った奴はとことん君を試したかったらしい。悪趣味なものだぜ、全く。……いや、それ以上に、ドラルが大切なんだな」

「カイキ」

静かに、彼女の名前を呼ぶ遠山。しかし、彼女は薄く笑い続けるだけ。

「覚えてるだろ？ とーやま。プールでの会話の続きさ。君は殺せる側の人間だ。殺さなければ殺されるという状況で、君は他者を傷付けることが出来る人間だ」

「カイキ」

聞きたくない、それ以上喋るな。

遠山はそいつの名前を呼ぶことしか出来なくて。

「わかるだろ？ この世界はシンプルだ。ドラルの願い、遠山鳴人を知りたいという願いを叶えるための世界、そして、遠山鳴人を試すための世界―― 遠山鳴人がきちんと選んで、きちんと捨てることが出来るかどうかを試すための世界」



「とーやま、わかるだろ？ 君は選ばなくてはならないわけ」

「っ、カイキ！！」

「シンプルさ、この世界から出るのなら、とーやま。この世界を終わらせる必要がある。この世界、最期の生き残り、ただそれだけの為に生まれて、ただ、それだけの為に終わる夢の世界、その最期の住人の死を以ってこの世界は終わる」

カイキの背後には、夏の空。

フェンスの向こう側、高く高く白い入道雲が濃い青の中に。

夏への扉。

それを背景に、夏を従えて彼女は微笑った。

少しだけ乾いて、湿った声で。

「だってこの世界は初めから、君たちだけの為に作られたモノなんだぜ」

【眷属クエストの目標が更新されました】

「そう、全てはシンプルなんだよ。僕達の役割はとっくに終わったんだ」

【注意 非常に重要なクエストです】

「君は大人になったよな。なら、出来るはずだ」

【クエスト名】THE Door into Summer】

「証明する時間だ。君が選べる奴だっことをさ」

【クエスト目標】……の……】

「さあ、延長戦だぜ、この僕の壮大な自殺計画、エクストラステイジってかー？」

【クエスト目標】キ のーガイ】

「ばしっと、決めてくれよ？ とーやまなるひと」

【クエスト目標 ー”カイキ ユサの殺害”

オプション目標 不明ー】

93話 夏への扉（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを！ご覧くだ  
さい！

94話〈Emergency call・This I I〉  
call・Emergency

これは、僕から君へのちょっとしたイジワルだけ。

とーやま。君の選択を知っていながら少しだけ君を試すイジワルだ。

知ってるよな、僕が生まれた時から、ずっと死にたがってたこと。何度も話したし、何度も君は身をもって体験した筈だ。

別に人生に不満はないし、心を病んでいるわけでもない。でも、ふと気づくと、僕は死にたくなっていた。

歩み続ける人生の長さ、考えれば考えるほど汚く感じる世界の仕組み、脳みそにまとわりつくように緩く温い怒りと失望が僕の中にならずとあった。

だから、何度も何度も自分で終わらせようと試みた。電車に飛び込もうとしてみたり、屋上から飛び降りようとしてみたり、殺人事件を探してそれに巻き込まれめみたり、危ない連中と関わってみたり。

君に、全部めっちゃくちゃにされちゃったけどな。

なあ、とーやま、何でだよ。

何で僕を生かしたんだよ、何で僕を生かしたのにどっか行っちゃうんだよ。

何で、僕を連れて行ってくれなかったんだよ。

なんで、何で、なんでー

つって、まあ、この気持ちも、そんな記憶も全部どこかにいる本物の海城優紗のコピーに過ぎないんだけどよー。

あーあ、全く。貧乏くじだぜ。

結局、こんなふうにならないうちまうなんてよー。

せつかくたのしくなってきたのに、せつかく良い友達ができよー、夏休みの予定立てたり、バイトのシフト詰めたりしてたのに、どうだよ。

死にたいと思いつつも、まあ、それなりに僕の人生が楽しくなってきたのに。



君のおかげで、進み続けるそのうちに、僕にも何かが見つかるかも知れないと思ったのに。

生きてやってもいいかな、と。死にたいと言う気持ちを抱えながらも歩いて行けると思っていたのに。

僕の世界は5分前に壊れちゃった。いや、初めから世界なんて全部偽物だった。

僕の生きた時間も、僕を感じた思いも、僕が願った未来もぜんぶ偽物で、本物なんて一つもなかった。

この気持ちも、この苦しみも、この世界を作ったやつに用意されたもの。

こんなことを考える僕も、どこかにいる本物の”海城 優紗”のコピーに過ぎない。僕の全てが誰かの模造品、僕だけのものなんて、何もない。

この常に体にまわりつく想い。

”死にたい”という想いも、ゼーんぶオリジナルから模倣されたものなんてさ。

君との思い出も、君へのこのグツグツした気持ち悪い感情も、全部作り物。

否定したいけど、僕は理解してしまう、自分が偽物で造り物であることを。

あーあ、神さまとやらがいるとしたら全く残酷だぜ。乙女心をなんだと思っているのやら。

ああ、でも、まあナシよりの、アリかな。

「オイオイオイ、なんだよ、とーやま。その顔」

ぷ、ププツ。ああ、見ろよ、とーやまの奴。怒ったんだか、驚いてんだか、よくわかんねーツラしてる。

ああ、僕も、そして、オリジナルの海城優紗もほんとたいがいイカしてるぜ。

今、少し嬉しい。

遠山鳴人が僕を、僕だけを見てる。これは、ナシよりのアリだぜ。

ああ、悪いな。ドラル。君まで泣きそうじゃん。悪いことしてるな。

ドラル、君は優しい奴だからね。僕とは違って他人の為に生きる  
ことが出来る奴だ。

ああ、結局カイキユサは自分が一番大事だったわけか。

「ほら、早くしてくれよ。何度も言ってるんだぜ？ 時間がないっ  
てさ。今、こうしてる間にも、他の不服ある連中の声を僕が抑えて  
やっってるんだ」

とーやまとドラルには、実は一つ、嘘をついた。

この世界が壊れたって、言ったけど。まるで何もしてないのにパ  
ソコンが壊れたみたいに言ったけど。

ああ、パソコン壊したやつはみんな、”何もしてないのに”って  
言っけどね。

「ははは、おい、まさかとーやま、なんか遠慮してるんか？ ひっひっひっ、正義の冒険者は、自分の可愛いお友達は殺さないってかー。ならば、こういうのはどうだよ？ 僕は、化け物だ、僕は他者を喰い殺す化け物だ、え？ なんでかって？ だって、この世界は」

何もしてねーのに、パソコンが壊れるわけねーだろ。

「この世界、壊したの僕だけ？ いや、正確に言うと、殺したのは、僕だ」

全部、僕が殺した。

あの教室でさ、昼寝してた君が大人の姿に変わった瞬間、僕がこの世界の仕組みを全部理解した瞬間。

「この世界が偽物だと気付いた瞬間、僕が全部殺した。」

「学校のみんなも、街の人々も、家族も、友達も、全部、僕が殺した、だいたい10分くらいかかっちゃまったかな」

「エ………?」

「……………」

ドラルがその言葉にびくりと身体を跳ねさせる。

とーやまは、微動だにしねえ。ひなたぼっこ中の爬虫類か何かかな？

「ああ、安心しなよ、ドラルのパパとママは殺してない。僕が君の家に行った時、2人はもういなかった。でもさ、とーやま。彼女達は僕が殺したよ」

「……………」

黙ってこちらを見る遠山の目が、鋭くなっていく。

「君が3年間でめ<sup>救った</sup>ちやくちやくにした彼女たち。優しいあの子も、夢を持っていたあの子も、自由になりたかったあの子も、君に夢を見たあの子も、そして、ずっと君を見ていたあの子も、全部、僕が殺した」

まあ、彼女を不意打ちで一番初めに仕留めたのは《幸運》だった。とーやまの寝顔に見惚れていたからかな。まるで、大人のとーやまを知っていたようにさ。

「……………」

「なんでかって？ 納得しないからだよ、彼女たちは。この世界が偽物で、自分がスワンプマンなことなんて、受け入れることが出来る奴はイカしてるだろ。ああ、そうだ、元から生きたくない奴、死にたがり慣れてる奴くらいしか、そんなこと受け入れられないっしょ」

なんで。

どうして。

いやだ。

死にたくない。

僕が手にかけて全員の断末魔がまだ、耳に、手のひらに、残る。

「さすがにさあ！ 命乞いする彼女たちを君に殺させるのはきついかなあって、感謝してほしーくらいだぜ？ とーやま。僕、友達殺しちゃったんだよ！ 友達でもなんでもない、君のためにさあ！」



とーやまの記憶をもとに街一つを再現し、それを舞台として機能していた世界にもだいたい120万人くらいの人がいた。

120万人を殺し、120万人の死を見た。

きっと、死つてのはみんなが言うほどそう悪いもんでもないと思  
うぜ。

だって、死んだら誰もそこから生き返ったりしないんだからよ。

「……カイキ、お前やっぱ最初から」

とーやまが、ようやく口を開いた。

ははは、こえー。ああ、怒ってる、怒ってるよな、その顔、知ってるぜ。

シロカワの家に乗り込むって決めた時、同じ顔してたよな。

ああ、あの半グレのクラブパーティに乗り込む時、鍵バツを工  
作室で自作してた時も同じ顔してた。

ひっひっひ、いや、割と他にも色々な時にその目をしてたよな。

チベットスナギツネのようなどこ見てるから訳わかんねー目ん中  
に、怖気がするような暗いモンがある。

そこには決して底の见えない暗いもの、まるで風の吹かない深夜  
にだけ顕れる湖のような。

ああ、知ってる、ゾクゾクするぜ、とーやまなるひと。

お前の怒りは、とても怖い。ああ、生きてるって感じがするなあ。

「最初から？　なんだよ、とーやま。その先の言葉が、”最初から死ぬつもりだったのか？”　なんならそれは正解だぜ。……あの南の島では残念ながら、僕は殺されそびれたからよー。その反省点を生かしたわけさ」

海城優紗の記憶、南の島で起きた殺人事件。あれは結局、遠山鳴人とその”保護者”によってめちゃくちやにされちまったからなあ。

「そうさ、とーやま。これはエクストラステージだ。君にとって、僕は過去、僕は幻、僕はまやかし。乗り越えるべき試練だ。僕を殺して、世界をきちんと終わらせる。じゃねーと、君も、そしてドラルも帰れねーぜ」

頑張つて、思い切り嫌な奴の顔を浮かべてみる。

これは、高校の時結局怖くて出来なかったやり方だ。

「とーやま、君はなんだかんだよー、いつも僕のそばにいてくれた。君はあの3年間、ずっと僕の道と共にいた」

そうだ、とーやまはいつも僕のそばにいた。僕の敵はとーやまの敵で、とーやまの敵は僕の敵だった。

「だから、失敗しちまった。君は恐ろしい奴だけど、同時に甘い奴だから。身内には、ほんと、甘い奴だからよー。でも、今回は違うよな？　今回、君が共にいるのは、ドラルだ」

だから、僕は敵になる。

「選べ、遠山鳴人」

「僕過去か」

「ドラール未来か」

「ああ、でも知ってんよ。お前は、先しか見てねえ奴だからよー。  
選ぶのは決まってる、そして先に進む方法も知っている」

詰んでるんだよ、とーやま。君はもう、殺すしかない。

震えたよ、あのプールで、君を見たとき、君の記憶を、冒険を見  
た時、震えたんだよ。

すげえ殺すじゃん。君、敵であるなら男も女も関係なく皆殺しに

してんじゃんって。

これなら、今の君ならー

「とーやまア！！ 僕を見る！ 僕を選ぶな！ 殺せ、連れていかないなら、前へ、進むんなら、殺せよ！」

ああ、やべ。声がなんか、張り裂けそうだ。

瞼がかゆい、眼球が震えて、鼻の奥がツンってする。

色々言いたいことはあるけど、まだまだ沢山伝えたいこともあるけど。

もう限界だ、時間だ。そろそろほんとにまずい。

「頼むよ、とーやま！ 安っぽい同情とか、ご都合主義の君の心変わりとかそういうの、全部いらないからさあ！」

彼女が目覚める前に、あれが生き返るまえに。

君たちを送らないと。

「とーやま、とーやま、とーやまア、わかるよな？ わかつてんよな？ 君の冒険をここで止めたくないなら、ここから出る！ ドラルを連れて帰りたいんなら、僕を殺せ、世界を消せ！ それ以外、無理なんだぜ！」

口が跳ねる、舌が踊る。

ああ、セミの声がうるせえ。1週間しか命が残っていないせいか、それを理解しているのか、奴らは必死に夏を奏でる。

はは、僕も同じだ、セミと。

「とーやま！ 君の冒険の邪魔をする奴がいる！ 君の大切なもの友達の未来を遮ろうとする奴がいる。僕だ！ 僕を見るよ！ 僕こそが障害、僕こそが敵！ そうだ！ カイキユサは君の敵だ！」

とーやまの目が、暗い栗色が微動だにせず僕を見る。

ドラルの目が、綺麗な蒼が揺れながら僕を見る。

「僕は、もう人殺しだ！ すげえ悪い奴なんだ！ 親から子供を奪った！ 子供から親を奪った！ 家族から家族を、友達から友達を！ みんなから大切なものを奪ったんだぜ！ はははは！ 怪物さ！ 今の僕は！」

僕の声、みっともない叫びが屋上から世界へ。夏に溶けていく。

この日差しに言葉が焼けつけられて、焦げて、溶けて一つになる。



「君は、探索者なんだろう？　なあ、だったら、ああ！　君が言った言葉だ！　あの世界で、君が初めてヒトを殺す前に言った言葉だ！　探索者なら、怪物は殺さなきゃさあ！」

たのしかったよ、とーやま。君との3年間は。

たのしかったよ、ドラル。君との3ヶ月は。

ぜんぶ、偽物だったけどさ。

「敵なら、殺せるよな？！　なあ、今度こそさあ！　君が僕を終わらせてよ！　君が僕のものにならないんなら！　君なしで、生きていけないといけないんならさあ！」

この気持ちすら、全部、偽物なんだからさあ。

せめてー

「――君が」

夏の声がした。

僕の足元に、ぼつり。水の跡。雨かと思つて上を見上げたら白い入道雲がいつもよりもよりとてもぼやけて見えた。

ああ、ちくしょう。だつせえな、僕。

意地だ、へらへらと笑つてやる。絶対言わないけど、この笑い方、君を真似してたんだぜ？

「――君が僕を葬つてよ」

だから、これは僕のイジワル。せめて、最後は君に。君に終わらせてほしい。

お願いだから、とーやま、僕を殺して。

こんな、偽物。いやだよー

「作るサウナは決まってる。フィンランドサウナだ。ロウリュが出  
来る奴な」

セミの声が止んで、遠山の声が、聞こえた。

.....は？

【スピーチチャレンジが開始されます】

【スピーチ・チャレンジ目標 カイキ ユサの”自殺”を止める】

「作るサウナは決まってる。フィンランドサウナだ。ロウリュが出る奴な」

「……………は？」

「ナ、ナルヒト？」

カイキが言葉を詰まらせ、少女が戸惑うようにその男の名前を呟いた。

そんな反応を全て無視して、欲望のままに男が舌を回し続ける。

「木材にも拘りたい。理想として、外壁はパイン、椅子はスギかレツドシダー。ああ、立ち枯れしたパインなら最高だ。コストはやべえけどケロサウナが理想だな」

あの世界の木材も調べねえと。

遠山がモゴモゴとつぶやく。静かな口調、支離滅裂な内容。ぽかんと口を開ける少女と、目を開いて固まるカイキ。

「ケロサウナ、知ってるか？ フィンランドで立ち枯れた木だけを材料に作ったサウナのことをケロサウナって呼ぶんだよ」

遠山のサウナ語りは止まらない。

「樹齢300年以上の木が立ち枯れて、そこから100年経った木はな、甘い香りがするんだ。それに包まれて暖まるサウナ、やべえんだよ」

その目はいつになく、見開かれ、濁ったままきらきら輝く。

「ほんとほ、スモークサウナにしたいんだけど…… あれは時間と金に余裕がある人間にのみ許された神の遊びだからな。俺の今の生活スタイルには合わねえ。冒険者として働く合間に入れるようにするために、薪ストーブのサウナが現実的だろうな」

腕組みした遠山が、割と本気で頭を悩ませる。

スモークサウナはだいたい部屋を暖めて、中の煙を出すのに8時間ほど、かかる。

全てが終わった後の人生の楽しみにとっておくべきだろう。

「ラッキーなことに、帝国の井戸水は冷たくてな。それを利用したヒノキ水風呂を庭に作る予定だ。川から水を引いたり、いつそ地下水を引いてくる方法もありだな。とにかく水風呂、コレも必ず作る。比較的暖かい今の季節でも、俺の体感だと14°、U15の水風呂だ。冬が今から楽しみでなあ」

「な、なにを、何言ってるんの、お前……」

「静かに。まだ続きがある。黙って聞け。それで全部が完成したとする。資金面や時間のことを考えると、竜祭りが終わった後になる



だろっけどな。俺の、あの世界での俺のサウナが完成した後だ。あの賃貸の屋敷の庭に、ついに俺のサウナが完成した後だ」

カイキの言葉を静かに、しかし力強く遮り遠山は言葉を続ける。

空を見る。目を瞑り、夢想する。

「ー朝だ。早朝、そうだな、庭で筋トレやらなんやらを終えた後がいい。今からようやく日が昇る、冒険都市の高壁の影を、朝日がゆっくり溶かしていく、そんな時間だ」

目を瞑れば、ゆっくりと明るくなるよあけの空。冒険都市の空がそこにある。

「季節は、冬。空気は澄んで、吐く息は白い。俺の体には昨日の疲れや、朝練後の心倦怠感が残っている。汗を掻いているんだが、寒

いからすぐにそれも引いて、身体が末端からどんどん冷たくなっ  
ちまう」

痛む爪先、白い息。

生きる力を試される、そんな季節。

「体を水で洗ったりなんだりしてたら風が吹く。朝の風は冷たくて、  
心底凍えるようなものだろうな。空を見上げると、しん、と恐ろし  
いくらい暗い静かな空があるんだ。ゆっくり朝日が差し込む空がな」

本当に寒い日、世界が死んだように静かなあの空を遠山は知って  
いる。

あの世界、冒険都市の冬もそうなのだろうか。

「そして、汗を流してキンッキンツに冷えた俺。手の指先や足先は

もう取れちまうんじゃないかねえかってくらいかじかんで傷んでる。朝の寒気から逃げるように、俺はそこに入る。そう、サウナだ」

「じんまりとしていい。」

可愛いサウナ小屋をゆめにみる。

「高級感あふれるパイン材の外壁、丸太で組まれた骨格、小さいけど可愛いサウナ小屋だ。朝練始まる前に火はもう熾してる。薪ストーブの煙突からはもくもく、白い煙が吐き出されて空に昇って消えていく。そして、俺は木のドアノブを開き、小屋に入る」

枝をそのまま打ちつけたドアノブを、ゆっくり引く。

小さな窓からは、きつと、朝日がゆっくり差し込んでいる筈だ。

「暖かい。ただ、それだけ。ただ、それだけなんだよ」

【クエスト目標 更新】

メッセージが流れ出す。

だが、遠山はそれに目もくれない。

「ゆっくり、息をする。さっきまで俺の身体に突き刺さっていた冷気なんかない、あるはずがない。俺は最上段のベンチに腰掛ける。俺のサウナだ、主は俺だ、誰にも文句は言わせねえ。お気に入りのサウナハットを被り、背もたれに身体を預ける」

【眷属界 ” ファーブニルの歌” により創世された異界の主は現在、奉仕の眷属” ファラン” から、” カイキ ユサ” に移譲されました】

【カイキ ユサの特性、” 運命の戦争” ” 選ばれし者”、” 主人公”、” ” により異界の主の権限は全てカイキユサの元にある】

ます】

流れるメッセージ、それに目もくれず、遠山は夢を語る。

「パチパチと音を立てる薪ストーブ。その中で揺ら揺ら揺れるオレ  
ンジの炎。それを眺めると、かじかんでた手の指、足の指がゆっ  
くり解けていく。冷たさは死と似てる、暖かさは生と似てる。さっ  
きまで死にかけていた俺の身体がゆっくり、生き返るんだよ」

【異界 ” 夏への扉 ” の主はカイキ ユサです】

「遠く、北欧の人々を想う。ああ、サウナは遙か昔からこうして、  
人の冷たくかじかんだ指先を解いてきたんだな、と。かじかんだ手  
の指や、足の指が溶けていく、その感覚だけが、ただ気持ちいい」

【異界の主を倒さない限り、異界からの脱出は叶いません】

【クエスト目標更新、異界の主”カイキ ユサ”の殺害】

そうかよ。

遠山は、メッセージを全て無視する。

「そして薫るサウナ室の木の香り。俺は暖かい森に包まれる。死から生へと戻る瞬間、ただ、暖かいと言う感覚だけが広がる瞬間に浸かる」

サウナを想う。

穏やかな時間、暗いサウナ室、小さな窓からわずかに差し込む小さな朝日。

木の香りに包まれた自分を想像してー

「あ、俺、そういえばあの時、カイキを殺したんだな、って」

その想像、カイキユサを殺した後に入るサウナの光景にノイズが走った。

「え、え？」

わけがわからないと言うように大きな目を何度も瞬きさせるカイキ。

そんな彼女を無視してさらに遠山の言葉に力が入る。

「いや、有り得ねえだろそんなの。俺の至高のサウナの時間。あの1セット目、極寒から暖を味合うあの瞬間に、そんなことが頭をよぎるんだぜ？ 次のロウリユタイムも、水風呂も、そして宇宙へぶっ飛んでる時もよー」

遠山が空を見上げて。

「あ、俺、そういえば、カイキを殺したんだな」

ぼそり。また、その想像にノイズが走った。

「そう思っちまうかもしれねえ。そんなどうしようもないノイズが生まれるかもしれねえ。いや、ありえねえ」

「ちょ、とーやま、君、まさかー」

「だから殺さない。カイキ、俺はお前を殺さない」

遠山には理由があった。



「俺のサウナの為に、お前を殺すわけにはいかないんだよ」

そして、結論なんか最初から決まっていた。

「ま、じかよ」

震えるカイキの声。

「いや、君、バカだよな？ 話、聞いてた？ 僕を殺さないよ」

「この世界から出れない。聞いてたよ、お前こそなんだその反応。話聞いてたのか？」

遠山のその言葉に、カイキの暗い瞳孔が開いて

「ふー」

「ふざけてなんかない。大真面目だ。くだらねえ事言つなよ、カイキ」

カイキが叫ぶより先に、遠山の舌が回る。

「あー？ な、なんだ、僕、僕が間違えてるの？ い、いや、そんな訳ない…… あれだけ、まじめに、え？ きちんと話したよね？ え？」

よた、よた。カイキがフェンスに背中を預けて、自分の頭を抱え始める。

濡れたままの猫っ毛をくしゃっと、何度も、何度も掴んで離してを繰り返す。

「お前はきちんと話した。俺もきちんと聞いた。その上での完全な答えだ。カイキ」

「いや、やっぱりぶざけてるよ。とーやま、バカだよ、バカすぎる！  
そうだ！ それは、それは罪悪感の話だよね？ 海城 優紗を殺したら君には”罪悪感”が生まれるからだよね！」

首を振り、カイキが唾を飛ばす。

「なら安心しなよ！ 君が罪悪感を覚える必要なんてない！ なぜなら僕は、本物の海城優紗じゃないんだから！ 君の記憶から創られた偽者だ！ 命も想いも記憶も！ 全部、全部偽者なんだ！ 人じゃない、本物じゃない、だからー」

だからー その先の言葉は声にならない。

カイキ自身の口が、ぱくぱくと動くだけ。

「いや、お前はカイキだよ」

遠山にはその様子が泣いているように見えた。

「ーは？ ど、どろが」

「キレそうになるとそんなふうな芝居があった喋り方になるとこ。女に優しいとこ、俺に容赦ないとこ。全部。お前はクソみたいな性格してて、喋り方もめんどくさくて、時たま何考えてんのかマジで分からなくて、よく笑うくせにすぐ死にたがって、それで」

ああ、そつだ。

遠山にとってこの世界は過去の思い出に過ぎず、目の前の少女もまた過去の友人の幻影に過ぎない。

だが、それでも。

「顔が良いクソ女。それがお前だよ、カイキ」

目の前の少女もまた、”カイキ”なのだ。遠山にとってはカイキなのだ。

それが一番重要なことだった。

「……は」

「俺がそう決めた。お前がどんなに喚こつがお前はカイキだ」

欲望のままに。

遠山鳴人の人生の全ては、遠山鳴人が決める。

「き、君は人を、どうでもいいヒトを、敵を殺せるじゃないか、僕は今、君の敵でー」

「俺にとって、お前はどうでもいい人間じゃない。少なくともお前を殺すことは俺のコレからのたのしい時間に支障を来たす恐れが強い」

大真面目に遠山が言う。

本気で、言っている。

「う、うるさい！ うるさいうるさいうるさい！ 安っぽい言葉ならべやがって！ 何が、サウナだ！ 馬鹿じゃないの？！ 僕は、僕は世界を殺したんだ！ 殺されるべき罪を、敵なんだよ！」

カイキがそれでも目を見開き、口調を荒くして。

「お前は俺たちに危害を加えていない」

「は？」

その勢いは、遠山の小さな言葉でしゅんと、止まった。

「ここに来てから、カイキ。少なくとも俺とドラ子はお前に攻撃は愚か、何もされてない。お前は俺にこの世界のことを教えてくれた、お前はドラ子の友達になってくれた、お前は、あの時と同じように自分の友達に優しかった」

シンプルなのだ。

例えカイキが、遠山の知らない所でどんな残酷なことをしていようと、遠山はこういう人間だ。

自分と、自分の身内のことしか考えていない。

世界のことなんか、どうでもいい。

「あ、う、うるせえ、うるせえ、うる、せえ……」

がしゃん。

カイキが後ずさる、しかしフェンスに阻まれる。もう彼女に逃げ場はない。

「カイキ、俺を見る」



「ッ」

遠山の目は真っ直ぐ。

カイキの目はつろつろと、泳ぐ。

「お前が敵というならば、お前が滅ぼすべき敵なら、簡単な話しだぜ、カイキ」

前へ進む遠山のコンバットブーツ。

もう退がる場所もないカイキのローファアー。

どちらが力強いか、誰が見ても明らか。

「お前が、俺を殺してみろ」

「あ……っ」

「どうした、世界を殺す。ああ、なんでだろうな、納得したよ。多分お前ならそれが出来る。カイキユサなら街一つ皆殺しにするくらい出来る。そう思えるよ。その力をよー、俺に向けてみるよ」

「お前、何いって……」

カイキが首を横に力なく振る。言葉よりも先に身体が、そんなこと出来ないと知っているかのように。

「証明しろよ、お前が殺せる奴なんだってことを。お前が俺の敵だ

と証明してくれ」

遠山の目は鋭く。ぶれることはない。

その首も頭も、目も前を見る。

「そしたら、ああ、お前が俺を殺そうとするんなら、俺がお前を殺してやるよ」

真っ青な空、本当に濃く白い雲。

じーわ、じーわ、じーわ、

セミ達の大合唱だけがしばらく続く。

屋上にかかる日差しを雲が遮って、風に流れて、また昼の陽光が屋上を照らす。

ずっと、沈黙。

そして、またカイキの立つ場所の日差しを雲が遮った頃だった。

「……………は、はは。んなこと、出来るわけ、ねーじゃん」

ゆっくり、カイキが声を震わせる。

へなへなと、足を畳んでその場に座り込む。白い太ももが床に直に触れることもいとわず、彼女は崩れ落ちた。

「僕は、僕たちは死者ですらない出来損ないなんだぜ。そんなのが、君たちみたいな本物を、今を生きる命を殺すなんて、そんな恥知ら

ずな真似、出来るかよ」

遠山はただ、黙って彼女の言葉を聞く。

「くそ、クソクソ！ とーやまあ！ でもさ！ じゃ、どーすんだよ！ お前、このままだと、ずっと出れない、帰れないんだぞ！ 僕を殺さないってのはそういうことだ！ どうするつもりなんだよ！」

「ふむ。確かに。まあ正味お手上げ感はある。そこで」

けろりと遠山が両手を挙げる。

「エ？」

「ドラ子、頼む。なんとか出来ね？ 人で無理でも、竜ならなんとかならんかね」

そして、そのままその手を、今まで黙っていた金髪の少女へ向けた。

「……………ふ、かか」

蒼い目を丸くして、固まっていた少女。何度か目をパチクリした後、笑った。

「ナルヒト、……………ヨクわかんないけど。うん、あなたが何いってるか、ほとんどわかんナイケド、うん、いいヨ。ワタシ、オレも、ユサがいなくなるのはヤダし」

クスクスと笑う少女が、とっとなんと、カイキの元へ駆け寄る。

「は？ は？ ドラル？ 君まで何言っつて」

まどうカイキを眺めて、遠山が口を開いた。

「欲望のまま、俺が全て決める」

その男は、そこだけは違えない。

「あの異世界オープンワールドで殺すやつも、生かす奴も全部、全部決めるのは俺だ、俺が全て決めるんだ」

これまでもそうしてきた。それは今回も、これからも変わらない。

「カイキ、結論は出た。お前は殺さない。なんとかする方法を考える、だからお前も考えろ」

遠山が選んだのは、和解。

100%の答えがなくとも、殺したくない者は殺さない。

共に考える、生きているのならそれが許される筈だ。

「ユサ…… ごめんネ、ワタシ、オレ、よくまだわかんないケド、ユサとナルヒトが何を話してるノカよくわかんないンダケド、それでも、ユサが死んじゃうのはヤダ、よ？」

カイキの元にたどり着いた少女が、おずおずと声を。

「は、はは、なんだ、なんだよ、なんなんだよ、ほんとお前ら、君たち、バカだぜ…… 僕のなつやすみさあ、はじまりも、しなかったよお」

カイキがイヤイヤをする子供のように首を横に振る。



少女がその様子に、首を傾げて、ふっとカイキとの距離を縮めた。湖の上を跳ねる蝶々よりも軽い、羽のような動きで。

「ううん、きつと、一緒に行けるヨ、ユサ」

ぎゅっと、少女がカイキを抱きしめる。

「……ドラルう、……暖かい……ちくしょお……」

「うん、ユサも」

びくりと身体を跳ねさせたカイキ。すぐに抵抗をやめて、少女の抱擁に体を委ねる。

ああ、温厚で人懐こいゴールデンレトリバーが、気難しい黒猫を

抱きしめている。

「…………百合に挟まるのはダメだよな」

うんうんと、腕を組んだ遠山が後方保護者ツラで美少女2人が抱き合う姿を眺めて。

半袖セーラーの少女たちの抱擁は、この夏空の下で、氷が音を鳴らすラムネ瓶よりも涼しいものだった。

【眷属クエスト”夏への扉” クエスト目標”カイキ ユサ”の殺害に失敗しました。オプション目標”カイキ ユサ”との和解に成功しました】

ピロン。

流れるメッセージは遠山の選択を受け入れた。

どんな悲劇的な運命だろうと、必ずそれには抜け道がある。

【眷属クエストをクリアしました】

これで全て解決ー！

《い

ち》

《い ち い ち い ち い ち い ち い ち い ち い ち い ち い ち  
 ち い ち い ち い ち い ち い ち い ち い ち い ち い ち い ち  
 い ち い ち い ち い ち い ち い ち い ち い ち い ち い ち い ち  
 い ち い ち い ち い ち い ち い ち い ち い ち い ち い ち い ち  
 ー ち ー、 ヤ ダ ヤ ダ》

《ーダメだよ、鳴人君》

声がした。

女の声。

セミの声が一斉に止んだ。

「ツツ?! ドラル!!」

「ーエツ」

抱き合っていた2人。

ドンっと、カイキが少女を突き飛ばす。本来ならば少女のいた場所にカイキが滑り込む。

ぐねり、空間が歪み、水面に波紋が立つように景色がゆがんだ。

そこから、黒い、棒状のものがにゅっと。

雨後のタケノコみたいなのが、射出された。

『あ、……外した』

「ゲホッ……」

小さな唇から、ドス黒い血が漏れて。

カイキの腹に黒い棒が深く、食い込んでいた。

「あ？」

遠山がようやく状況を理解する。秒にも満たない一瞬の出来事。未だ人域、超越者ではない遠山に反応出来る速度ではない。

『……なんで邪魔するかなー』

気怠げな声が、そして苛立ちを含んだ声がどこかから響いた。

「ユ……サ……？」

「ぐ、フ……ど、ラル、怪我ないかい？」

アリー・ドルル。本当の名前を忘れた金色の髪の少女を、カイキが庇った。

「カイキ!?!」

「ユサ、ユサ?! なんて、どうして?!」

カイキが仰向けに倒れる。一気によるべのない人形のように倒れた。

少女が半ば悲鳴のような声をあげて、倒れたカイキの元へ駆け寄る。

「……いってー、ひっひ、痛覚とかはすげえしっかりしてるんだよなー。うひー、死ぬー……」

仰向けに倒れ、口の端から血を流すカイキが引き攣った声で笑う。



血が、すぐに彼女のセーラー服を赤く汚していく。

「カイキ、おい！ 腹、コレは…… 杭？」

「ユサ、ユサ、大丈夫?! ねエ、ネエ!?!」

倒れたカイキを介抱する2人。遠山は反射的にカイキの負傷の状態を確認、ドラルは倒れたカイキの頭を起こし、膝に乗せて手を握る。

「……あー、やらかした…… やっべー、これ、最悪のパターンじゃない」

カイキが焦点の合わない虚な視線を仰向けのまま空に向けて呟いた。

「おい、カイー」

ばん！！

遠山の呼びかけに被せるように、大きな音が鳴った。

う

バン！！　再び鳴る。

たわんだのはドア。

屋上から階下へと続く階段口のドアが、大きく鳴った。

「ッヒ！？　な、ナニ？」

「ドラ子、カイキの手を握って、声をかけ続けてくれ。刺さってるソレは抜くな」

「う、ウン……」

遠山はカイキと少女を背中に庇う位置に移動し、ドアを睨む。

気付いていた。今、あのドアは通用口のドアは、内側から叩かれた。

あれは、ノックだ。

ドアの向こう側に、誰かがいる。

バンバンバン……！！

バンバンバンバンバン！！  
バンバンバンバンバン！！  
バンバンバンバンバン！！バンバンバ  
ンバンバン！！バンバンバンバンバン！！

「ひっひっ…… あーくそ、失敗した。もう、生き返ったのかよー。  
わりー、とーやま。ミスった……」

「カイキ…… 知ってることを手短かに。出来る限りでいいから話せ」

響き続けるノックの音、遠山はドアを睨みつつ、カイキに問いか  
けて。

「ゲホッ、言ってるよーがよー、彼女に気付かれるっであー、いや、  
ごめん、僕のせいでもある。君の言葉で、君の目に揺らいた。死ぬ  
気が少しなくなっただけ、それで、揺らいた…… だから、僕が殺した

彼女が甦った」

ヒュー、ヒュー。

カイキの言葉の狭間に、嫌な音が挟まれている。

力ない隙間風のような音。きつと、その隙間から漏れているのは  
カイキのー

「ヒュー、ヒュー……ゲホッ、……君も、知ってる子だよ。多分……  
……ある意味、僕より付き合い長いんじゃないかね……げほ、げほ……  
まあ、その子をその子と認識しての付き合いとは言わないけど……  
……ち」

「ユサ、もうダメ、喋ったらダメ、デス……！」

少女が泣きそうな声で、悲鳴じみた声でカイキの手を握る。握り返してくるあまりの力の弱さに、少女は一瞬怯えて、でも、決して

手は離さない。

「状況説明どうも。休んどけ。おい！ 扉の向こうにいる奴！ 聞こえるか！？ 何者だ！ いきなり攻撃しやがって、何が目的だ！」

わめくフリ。

遠山は口調をわざと荒々しく振る舞い、その実、その思考はどんどん冷めていつている。

誰であるかと、ドアの向こう側にいる奴。今、ドラ子を狙い、カ  
イキの腹を撃った奴。

敵だ。

殺そう。

遠山は、自分で決める。殺すべき敵を。

静かに、ドア付近にキリヤイバのキリを流し込み始めて。

『……いや、違うよ、違う違うよ、鳴人君』

『……貴方はそういうの、しっちゃダメだよ』

「……出てこい、シラ見せる」

心臓が、少し跳ねた。

ドアの向こう側から聞こえてきた声、それを少し、知っているよ  
うな。

カイキが目の前にいた時と同じような、既視感。

懐かしさを、その声から感じてしまっ

』……………『

がちやり。

』……………お前



力が、抜けたような声を遠山が。

「ひっひ、やっぱり君……かよ、藤堂ちゃん」

掠れる声を、カイキが。

『……久しぶり、鳴人くん。海城さん』

ドアの向こうの闇の中に、女がいた。

黒いロングヘアにはつつんと揃えられた前髪。大きな目の涙袋はぶつくりと膨らんでいる。

女性らしく起伏に富んだスタイルをカイキヤ、少女と同じデザイン  
の制服に身を包んで。

ただ、その色は彼女の髪と同じように真っ黒。

涙袋の下に目立つ隈は、どこか彼女を病人のように目立たせる。

「……………藤堂」

『フフ、覚えててくれたんだ。鳴人くん』

ぱっつん女が薄く笑う。病的で、弱々しい振る舞い。細い脚を真  
っ黒なタイツがさらに細く見せている。

大きな瞳は熟れ過ぎた果実のやうに輪郭が曖昧で。

『……フフ、本当に、鳴人くん。本物の、鳴人くん……』

藤堂 未来。

その女を遠山は知っている、覚えている。あの3年間を共に過ごした奇妙な女。

カイキと仲が良かったため、なんだかんだ付き合いが多かった部類の女。

何度か、高校時代のトラブルを彼女と共に体験したことを、はっきり遠山は覚えている。

「ゲホ、やあ、藤堂ちゃん。少し、ばかり起きるのが早すぎる、ぜ……」

『……痛かったんだけど。ひどいよ、海城さん。ほんと、不意打ちで殺してくるなんてさ』

カイキ ユサがその3年間の太陽だったすれば、藤堂 未来はその影。

気付けば、遠山鳴人の3年間の冒険の影にいつもいた女だ。

「……とーやま、ドルル、いますぐ、ここから、逃げられない？ 僕を置いてさ……」

「ドラ子、カイキに喋らせるな」

「ハイ！」

「むぎゆ」

遠山の指示通り、少女が素直に反応し、仰向けに倒れるカイキの顔に覆い被るように抱きついた。

傷口から流れる血が一旦止まっている、それを見ての判断だった。

「……カイキさん、いたそーだね、それ。クスクス、たーいへんだ、お腹に穴が空いてるよ」

その様子を見て、涙袋の不健康そうな女、藤堂が笑う。

あの奇妙な黒い杭は彼女の仕業で間違いないらしい。

「お前がやったのか、藤堂」

それを確認するために、遠山が声を出す。

自然と、目を細め、睨む。

『……鳴人くん、久しぶりに会ったのにそんな怖い顔しないでよ。フフ、変わらないよね、その目』

うつとり、と遠山の視線を見て頬を赤くしつつ女が答える。その様子はどこまでも、嬉しそうで。

「藤堂、質問に答える。俺があんま、気が長い方じゃないの、知ってるよな？」

『……どうしてそんなに怒ってるの？ ああ、もしかして、私がドラルさんを狙ったから？』

「トードー？」

この、仮初の世界、存在しない時間の記憶。

ありつべからざる夏の時間で少女はその女とも友人のはずだった。

4966

だから、少女は理解できない。あれほど仲の良かったはずのカイキとトードー。

なぜ、こんなことになったのか、本気で理解出来なくて。

『……やめてくれる？ 馴れ馴れしく名前を呼ぶの』

少女の問いかけの返事は、強い嫌悪そのものだった。

「……エ？」

『……ああ、もう！！ 痒い！ かゆい、痒い痒い！ 痒くなる！  
！ クソ、ちくしょう！ 全部、思い出したのよ、全部、見たの！  
アリー・ドラル！ いえ、別の世界、遠い世界、先の世界の竜女  
！ あなたが、あなたなんかいたせいでさあ！』

がり、がり、ガリガリガリガリ。

藤堂が頭の側頭部をかきむしる。長い黒髪が恐れるように揺れた。



「藤堂」

遠山が、静かに彼女の名前を呼ぶ。低い、声だった。

『……アツ、違う、違うのよ、鳴人くん、……ふ、フフ、マジギレの顔…… いい…… フフフ、私、全部、全部あなたの為にやったの。ええ、そう、お前がやったのか、その質問はハイ、だわ。……ほんとはドラルさんを狙ってたんだけど、失敗しちゃった』

悪びれることなく、長髪のぱつっん女、藤堂未来が早口に語る。

頬を赤らめ、額に汗を流しつつ、女が興奮した様子で遠山を見ていた。

「……そうか」

遠山が、静かに己の首元に手をあてがった。

『…………ア』

その目に、その声に、藤堂が短い悲鳴じみた声をあげる。白目に近い目、赤く上気した肌。

彼女はわかりやすく、興奮していた。

「てことは、お前、敵だよな」

『……………カイキさんは殺そうとしないのに、私はダメなの？』

自分で自分の肩を抱き、荒い息を繰り返しつつ、藤堂が短く問いかける。

「藤堂、お前には高校るとき色々助けられた。でも、それはそれ、これはこれだ。限度があるだろ」

遠山が言葉を選ぶ。

静かな言葉の内側で、もう遠山の引き金は引かれている。あとは、何かのきっかけで――

『……えー、別にいいじゃない。結果的に、お腹に穴が空いたのは、カイキさん。偽物のカイキさんだったー』『殺せ。キリヤイバ』『ギヤツツツツツツツツ』

藤堂未来、そのスワンプマンはあまりにもあっけなく、遠山の逆鱗に触れた。

キリが、その華奢な身体を切り刻む。

「お前はすでに、有効射程だった。偽物というんなら、お前もそうだろうが。藤堂の顔で、藤堂の声で、藤堂の姿でモノを語るな、化け物」

首からわずかに引き抜かれた欠けたヤイバ。

既に、その仕込みは終わっていた。

『……………フフ、フフフフフフフフフフフフフ、フフフ、ひどいなあ。それを言うんなら、海城さん、カイキさんだって、私と同じ、貴方の記憶が創られた存在のはずだけど』

血だらけになりつつも、ふらつき、ボロボロになりつつも、その女の目の輝き、爛々とした暗い灯りは消えない。

「知らん、関係ない。俺が決めた。あのカイキはカイキだ。俺の知るカイキのままだ。アイツは俺の敵じゃない。だけど、お前は違う」

遠山がその女を睨みつつ、キリを再び仕込みはじめる。

「お前は俺の友達を狙った。カイキの腹に穴を空けた。お前の行動は、全部アウトだよ、藤堂」

殺す相手、殺さない相手、それは全て遠山が決める。

そして、遠山はもう藤堂のスワンプマンをどうするか決めていた。

「……イイ、イイヨお、鳴人くん。その目、よかった、まだ出来るじゃん。……でも、ダメ、ダメダメ。カイキさんをさ、殺すんならよかったの。カイキさんを殺して、この世界から出ていくんなら、

まだ私、我慢できたんだよ……でも、無理……もう、無理……』

ばちやり、自分の血の池に倒れ込んだ藤堂。うつ伏せに這いながら、顔は、目は、遠山の方へ向けられる。

「まだ息があんのか」

『……あなたは一人でたどり着かないといけない。貴方は、もっと、もっと残酷で孤独で孤高で冷たくないといけないの』

「やかましい。お前は偽物だ。本物の、藤堂未来に失礼だ。だから始末する」

『アハ……いや、違うよ。オリジナルの私も同じだよ、きっと、貴方にその在り方は求めている。ああ、貴方が変わる、美しい貴方が変わっちゃう、嫌だよ、私、貴方はもっと、もっと、もっと』

湿度の高い声、身体をズタボロに切り刻まれてなお、藤堂の言葉は止まらない。

血の池を這いながら、遠山に向かっていく。

「目をつむれ。一撃で終わらせる」

遠山が、腰のベルトからメイスを引き抜いた。

頭を砕いて、終わらせる。せめてこれ以上苦しめないように一撃で。

『……フフ、痛いなあ、私、殺されるの？ カイキさんは殺さなかつたのに？ フフフ、命乞いしちやおうかなー』

「うるさいな、お前」

ばちやり。

遠山の靴底が藤堂の血の池を踏み込み、叩いた。

メイスを振り上げ、倒れた藤堂の頭に振り下ろしー

『ほいほいっ』

それよりも早く、藤堂が自分の髪をくるくる弄る。



結び、固め、止める。それはあまりにも早いワザで。指以外にも、何か、藤堂の頭から黒い紐のようなものがするすると蠢いていた。

あっという間に、ハーフツインテールの出来上がり。

『はい、ナルピ、い、の、ち、ご、い』

うつ伏せから一転、すくつと体勢を入れ替え、血の池のなか女の子座り。

キャハっと、女が明るく、変わる。

一瞬で夜が明けて、真昼に変わったかのような印象。

「……………あ？」

ピタリと、遠山のメイスを振り上げていた腕が止まった。

その女を、知っていた。

藤堂ではない、自分のことをナルピ、そう呼ぶ明るくて、ポワポワした女、いや、見た目も、表情も、顔の作りすら一瞬で、変わって。

「くせ、かへ……………」

その名前を、遠山鳴人は仲間の名前を呼んだ。

自分が、あの日、あの時、あの場所で死んだ理由。

探索者の仲間、ファイアチームの仲間の名前を呟いて。

「はい、隙あり」

女が嬉しそうに、笑う。

吊り上がり気味の目と、右目の端の泣きほくろ。その顔をよく知っていた。

「な?!」

瞬時、遠山の足元から黒い何かが生え出る。

植物のツルか、枝のようにも見えるそれは一瞬で、遠山の身体を縛り上げ、その場に固定した。

「ナルヒト?!」

少女がその様子を見て悲鳴をあげる。いつしか、少女の遠山の呼び方は、トーヤマから本来あるべき呼び方に変わっていた。

『おっと、ドラルさん、いや、竜女は動くのダメー。動いたらさ、カイキさんとナルピ殺すから』

「クシ……」

冷たい目、顔の作りすら一瞬で、豹変した女の目と声に少女が息を飲む。

「……あ、ありえねえ、な、んで？」

縛り上げられた遠山、何をどうしても身体が動かない。何かのアートみたいに、身体の至るところに植物が巻き付き、離さない。

『……藤堂未来ただけだと、殺せるけど、そこに日下部日菜がプラスしたら殺せないかなーっ？ ね、ナルピ』

いつのまにか、キリヤイバの傷が治っている。

女が簡単に立ち上がり、腰の後ろで手を組んで、身をかがめて、

にへらーっと笑いつつ、遠山を見上げる。

ああ、その、明るい顔。

どこまでも呑気で、ほわほわした口溜まりがふざけているような笑顔。

何度も、それを向けられたことを覚えている。

「……うわっ、そういうことかよ…… 趣味悪いねー…… 藤堂ちやーー アツ?!」

状況を理解したらしいカイキが声を、すぐに悲鳴をあげる。それは痛みによる悲鳴だ。

『カイキさん、うるさいわ。ちょっと私イラついてんの。なんなの、貴女。すぐにぶれやがって。アンタがきちんと殺されて、ナルピがナルピのままだって証明してくれたらよかったのに、アンタまでナルピを変えるとかありえないんだけど』

カイキの傷口に刺さった黒い棒と、遠山を締め付けているこの植物は同じものなのだろう。

藤堂？の意思で、自在に操れるものらしい。

カイキの腹に刺さっているそれが、蠢いている。

「……おい、おいおいおい、意味がわかんねえんだけど」

「……あ。説明してなかったね。はい、ナルピ、数年またぎの伏線回収！……貴方の高校時代のクラスメイト”藤堂未来”はいー貴方の探索者チーム、ファイアチームの紅一点！”日下部日菜”でもあるのでしたー！わー、パチパチ」

どこまでも明るいその様子は、ニコニコ顔で子供のようにわちゃわちゃ動くその様子は、遠山の記憶にある仲間の姿、そのもの。

「……日下部」

「ん？ なーに？ ナルピ」

自分が命を懸けて逃した仲間、それに今、遠山は追い詰められている。

おまけにそいつは高校時代のクラスメイトで、でも、名前も顔も性格も違って。



何かなんだか本気でわからなかったから、遠山はいったん藤堂に  
対して考えることをやめた。

「これ、俺を縛ってるこの植物、なんだよ、これ」

「ん、タケノコ。え、てか、気になるのそこ？ 私的には、藤堂未  
来と日下部日菜が同じ人間だったとこ、もう少し驚いて欲しい系なん  
だけど？」

「……………わけわかんねえんだけど」

「んー、気持ちいいなー、ネタバレするの。ほんとこれ、オリジ  
ナルの私がやりたかった奴なんだろうけど。シンプルな話だよ、鳴  
人君はずっと、私の監視下にあったの。高校の頃だけじゃなく、小  
学生、中学生の頃もね。高校卒業後、フリーターの時も、探索者の  
時も、私はずうっと、貴方を見ていた」

「……………やべー奴じゃん」

『そうさせたのは君、鳴人くん。ねえ、鳴人くんはどっちの私が好みかな？ やっぱり元気やる気純粹っ！ の日下部日菜？ ……それとも、少し陰のある貴方のそばにそっと寄り添う女、藤堂未来……………？ ねえ、どっちが好みかな……………？』

まるでスイッチのオンオフが入れ替わるように、その女の印象は会話の中で切り替わっていく。

「……………待て、想像以上に気持ち悪い展開で頭が回んねー。お前、結局、誰なんだよ」

陰と陽、あまりに簡単に入れ替わるその有様はおぞましさにもてていた。

『それは秘密……。……。私はね、君のファンなの』

「あ？」

女が、縛られたままの遠山の顎を撫でる。

その輪郭に沿って、這うように動く白魚の手。何かとても壊れやすいものの形を確認するような手つき。

『君の人生をずっと見てきた。最初はそれが役割だったんだけど、いつからか、君に私は冒された。君の生き方に冒されて、変わっちゃった。鳴人くんは、私の生きが이었다んだよ』

「……。そりゃ、どうも。だったらこれ、外してくんね？」

『……。ダメ。外さない。私は、貴方が好きだった。やることなすことめっちゃくちゃで、貴方にしか見えない光景にたどり着こうとする

君が、残酷で残忍で、どこまでも独りで進む貴方の姿が大好きだったの』

女の言葉は続く。

神に愛を説くような一方的な言葉。女の明るい顔、綺麗な栗色の瞳には、とぐろを巻く輝きが映っている。

それは遠山鳴人、ただひとりに向けられている。

「……………」

『だから、貴方が貴方のままでいられるようにさ！ 色々したんだよ。組合にかけあって、記憶洗浄をたくさんして 色々催眠をかけて、貴方の脳を強くしたの。フッフ、ナルピがナルピのままできてくれるように、人の脳みそってさあ、結構うつろいやすいから、そうならないように、色々したんだよ』

「初耳なんだけど」

想像以上の気持ち悪い事実には、割と素で遠山は引く。

ナニカサレタヨウダ。

遠山が、真顔で固まっていると。

『なのに、これは、なに？』

女の笑顔が、そこで停止した。

一時停止ボタンを押したかのように、ニコニコ顔からもつ表情がピクリとも動かない。

『おかしくない？　なんで、カイキさんを殺さなかったの？』

『おかしくない？　なんで、友達なんか作ってんの？』

『そんなの遠山鳴人じゃないよ』

「っぐ、お……！？」

ぎゅ。

女の声がどんどん圧を増やしていく、同時に、遠山を縛り上げる  
タケノコの圧も増していく。

『鳴人くんはね、友達なんか作らないの。邪魔なモノは全部殺すし、一人で独りでヒトリで進むの。自分のことしか考えず、自分の欲望のままに進み続けるの』

笑顔が、ふっと消えた。

真顔で、遠山の顔を撫でながら女が言葉を紡ぐ。

『貴方に愛は必要ないよ』

その言葉は、どこかで聞いた覚えがある。

遠山が記憶を探る。

ピコン。

メッセージが流れた。

【技能 ”ラン・ホース走馬灯スライト”により発想ロールに成功しました】

そつだ、異性に好意を示された時に感じる、どうしようもない嫌悪感と、怒り。あれが湧き出る時に耳に響いてくる言葉だ。

「……ヒ、ヒヒ。やべーな、お前」

『……フフフ、だから私が貴方を元に戻してあげるね』

「お、おい、待て、お前、何しよう」と



女が、遠山の顔を撫で回すのをやめて背を向ける。

拘束は緩まない。

『だから、貴方を私が守る。遠山鳴人を遠山鳴人のままいてあげさせてあげる。……鳴人くんを、変えるヒトはみんないないよね』

女の目は、倒れるカイキと彼女を介抱する少女へと向けられていた。

その目は血走っていて。

「お、おい。待て、待て待て待て…… キリヤイバ、ギッ……」

遺物の力を使おうとした瞬間、黒い表皮に包まれたタケノコがその身体を強く締め付ける。

まるで、力が入らない。それどころか、キリヤイバを扱う感覚が消えている。

それは遠山にとって、腕が一本突然消えたのと同じ衝撃だった。

『 ゆつつなくし ”、鳴人くんのキリヤイバ、すごい力だけど、フフ、私とは、相性が悪いね、でも、ある意味運命だよ。似た力、同じ神話の力なんだもの』

「は、神、話？」

『そこで、見ててね。貴方にとって、邪魔なもの、全部無くしてあげる。カイキさんもいらなかな。あと、竜女、貴女だけは絶対に滅ぼす。ダメ、ダメダメダメダメダメダメダメダメ、いや

いやいやいやいやいやいやいやいやいやいや、友達？ ふざけないで、鳴人くんになんなものじゃないから』

女がすたすたと、カイキと少女の方へ歩きはじめる。

まずい。それだけはわかった。

「ぎ、アッ、ドラ子…… ドラ子、頼む、逃げろ！ カイキを連れてここを離れろ！」

強くなるタケノコの締め付けに苦悶の声を上げつつ、遠山が叫ぶ。

「ゲホッ、いや、違う、ぜ。とーやま、ドラル。僕を置いて、逃げな…… ドラル、よくお聞き、僕がなんとか、時間、稼ぐから、こ

「から」

「ユ、サ……、ダメ。だめ、デス……」

フラつきながら立ち上がるカイキ。

涙を目にためて震える少女へ向けて、ニヤリと笑い、真っ青な顔を引き締めて前を見る。

『らしくない、らしくないなあ、カイキさん。え？　なんでなの？  
……なんで竜女の味方するの？』

陽と陰、そのどちらをも行き来する女の表情が狂る狂る回る。

カイキと藤堂日下部

2人の遠山の思い出たちが相對する。

「ひ、ひっひ、本気で言ってるのかい？ 藤堂ちゃんよ。おかしいだろ？ 僕や君のような紛い物、偽物が、とーやまや、ドラル、今を生きるモノたちの邪魔、していいわけないじゃん…… バカなの？ 死ねよ」

ぺっ。

カイキが吐き出した唾にはもう、どうしようもなく黒い血が混じっていた。

「……おっと。フフ、本気で効いてるみたいね。さっきの不意打ちで一回殺された時とまるで速度が違う…… カイキさん、やめよーよ。意味ないよ、こんなこと。なんで？ 貴女だって、鳴人くんのこと好きでしょ？ 彼が全てを、貴女のその死にたがりすらめちゃ

くちやにするような人だから好きになっただんでしょ？ その鳴人くんが、おかしくなってるんだよ？ その竜女のせいだよ』

それを見て、女が嗤う。

首を傾げて、カイキへと言葉を紡ぐ。

女の目は、カイキの背中に庇われている少女へと向けられていて。

「ひっひ、あり、えねーぜ。この僕が、友達を売るわけがねーだろーがよ。……僕は、この2人にきちんといるべき世界に戻ってもらうんだ。それと、別にとーやまのことなんて、好きでもなんでもないっつーの……」

『嘘つき』

カイキの言葉を、女の短い言葉が塗りつぶした。

コーヒーの残り滓の更に底の底、ドロドロの真っ黒がぐるぐると渦巻いているような女の瞳が、死にかけのカイキユサを映している。

「……知ってるわ。鳴人くんの近くにいる時に、カイキさんの体温が高くなるの。……目つきが優しくなるの、……女くさくなるの！ 髪の毛をたくさんいじり始めるの！ スカートの丈を短くするの！ メイクを少し濃くするの！ 香水のミドルの時間を合わせるの！ ずっと、知ってたよ！！ ずっとずっとイラついてたよ！ でも、貴女は！ 私の友達だからさあ！ 許してたの！ それに鳴人くんは貴女では変わらなかったから！ 見逃してあげてたのに！ やめてよ、そんなの！ どいて！ カイキさん！ その女、殺せないじゃん！」

情念。

それが燃え上がるような言葉の勢い。

狂う狂う狂る、藤堂、もしくは日下部が声をまき散らし、髪を振り乱す。

「ウエツ……恥ずかしいことバラすのやめろっつーの……どかねーよ。バカ野郎がよー」

その異様にも、しかしカイキが怯えることはない。血をまた、吐きつつ前を見る。

「とち狂った友達止めるのも、友達の役割だろうがよー。んで、友達守るのも、友達の役目なんだよ。……これは、僕の勇気の問題なんだぜ」

じわり、カイキの傷口からまた血が漏れ始めている。命が、漏れている。



『……立つのが限界、平気なフリしてるけど120万の殺戮で心もボロボロ、そんな人が私の邪魔が出来るのかしら、それ、意味ないことだってわかってる?』

「勇気ってのは、そういっもんさ」

『……………そ』

もう、2人の間に言葉はなかった。

カイキと藤堂<sup>田下部</sup>、互いに造られた存在、誰かのコピー、偽りの存在  
達<sup>タチ</sup>が向き合っ

「…」

『……………』

勝負は一瞬で終わった。

カイキの左手のひらが何かを求めるように開いて、閉じる。

だが、それよりも早く、その動きが終わる前に女の指先がカイキを指す。

5001

それだけで

「ウ、アッ、アー」

カイキの腹に突き刺さる黒い杭がぐねりと歪み、その傷口を広げて背中を突き抜けた。

ばたりとうつ伏せに倒れるカイキ、その背中からは黒い杭が枝分かれて生えている。

趣味の悪い盆栽のような。

『本物の海城優紗じゃあないなら、せめて本物らしくしよつよ』

斃れたカイキを静かに見つめる女。

『偽物が。何息巻いてんの？』

小さくその姿を見て、嗤った。

「か、カイキ！！？ おい、カイキ！！」

何も、遠山は出来ない。タケノコに縛られたまま、それを見ることしか、喚くことしか。

『……ああ、鳴人くん、可哀想。本当の貴方はこんなことでは取り乱さないはずなのに。なんで、そんなに人間臭くなってるの？ キヤハ！ いやー、知ってるよ、私！ この女のせいだよね？』

女が次に見つめるのは、カイキが庇っていた少女。

呆然と、斃れたカイキの肩を静かに揺すり続ける無力な金髪の少女。

その少女に、女が静かに歩み寄る。

「おい、おい！ 藤堂！ 日下部！ やめろ！ 今、ドラ子に戦う力はねえ！ 一般人だぞ！」

「えー？ かーんけーないよ、ナルピ。……本当に変わってしまった、いや、ダメいやいやいやイヤー、ヤダヤダ。鳴人君を変えてしまいうこの子を、女臭いメス竜を、生かしておく理由がないし」

「ッ、ドラ子！！ 逃げろ！ 頼む、置いていけ！！ 逃げろ！！」

自分が死にかけた時にも出てこなかった酷く狼狽した声を遠山が叫び散らす。

「鳴人くんは独りでたどり着くの。鳴人くんは独りで進むの。お前

を殺して、この世界を膨らませて、私はあの世界に。鳴人くんの生きる世界に行く。ああ、見える、見えるよ、貴方の人生の続きが。貴方の命の続きは異世界に、遠い世界、先の世界にあったんだ。…フッフ、全部、貴方にとって不要なもの。全部私が剪定しなきゃ』

女はその声を背中に受けつつ、ぶつぶつぶツブツ吹き続けた。

「この、イカれ女……！！　おい、日下部！　てめえ、探索者のくせにパンピーやるつもりか！　おい！」

遠山が叫ぶ。

しかし、硬くしなやかなタケノコの締め付けは更に強くなる。

【警告　”ゆつつかくし”により”キリヤイバ”への神話攻略が発生しています。”キリヤイバ”は使用出来ません】

メッセージには意味が掴めない文言が流れる。

『やだなあ、ナルピ。今更じゃん。私はたくさん殺してきたし。それがまた1人増えるだけ。……ああ、貴方の世界でも殺さないといけないの、多いなあ。なにこれ、たくさんいる…… たくさんいるよ。ウジムシみたいに鳴人くんに引き寄せられる奴ら。へえ、へえ、薄汚い孤児達、己を知らぬ血に飢えた正義の化け物、女臭い古い竜……パン職人のトカゲ…… へえ、ラザール。……みんな、殺して、ゼロに戻してあげるね』

「ふ、さげんな。クソ女。てめえ、殺すぞ……」

その声の、言葉のなんと無力なことか。

それはあんなを悦ばすだけだ。

『クスクス、可愛い。でも、ダメ。まだ足りない。鳴人くんはもっと、もっと、恐ろしくなれる、もっと鋭くなれる。まずは、一つ一つ試してみるね。貴方がもっと素敵になれるように、貴方を変えて





「黙レ、下等セイブツ」

『195』

ザンシ。

美しい音が鳴った。

耳に良い気持ちのいい音。

まとめて束ねた新鮮な野菜を切れ味の良い包丁で一気に断ち切った、そんな音。

『え、え、エ』

真っ二つ。

見事に正中線から縦に割れた女が、言葉を漏らす。目を丸くして、割れた唇をパクパクと動かして。

それは怒りに触れたのだ。

「ワタシ、ナニもわからない…… ナルヒトや、ユサが話してイルこと、ほとんど、わからない、デス」

「ド……ひるっ」

斃れたユサが声を漏らす。その声に少女は優しく笑う、安心させるように。

さっきカイキが、少女にそうしたかのように。

「でも、1つわかってイルことあります…… 貴様は、ワタシの敵  
ダ」

少女の蒼い瞳が、その瞳孔が縦に裂けていた。

「ッッ、” 伝承ー” 失せヨ、目障りダ」

ゾン。

次は横。少女が無造作に、蜘蛛の巣でも払うように手を横に。

束ねた藁を達人が袈裟斬りにしたかのような良い音がした。

少女の手、細い陶磁器で出来たような白い手、その爪が金色に輝いている。

人間には目視すら出来ない速度で振るわれた金色の爪が、女を縦に、横に引き裂いた。

『フ……ふフフフ…… いた……イ、でも、これで…… ふ、フフ  
フフフフフフフフ、本体……が』

「ワタシの、宝に触れるナ」

ズタズタにされた女の体がバラバラと地面に崩れる。

ようやく自分がもう立つことなど出来ないほど、裂かれたことに気づいたようだ。

ドロドロした黒い眼窩から、黒い血がフーッと垂れていた。

「っと!! ドラ子、カイキ!!」

ばきん。

女が斃れると同時に、遠山を縛っていたタケノコもまた崩れる。

「ユサ! ユサ! あ、ああ、どうしよう、ナルヒト、ユサが、血が止まらない……デス……」

「……ひっひ、ドラル…… やるじゃん、僕あ、知ってたよ、君はやるときはやる奴だって。ああ、とーやまが、カツコいいっていうのも、わかる、なあ」

「おい、おい！ カイキ、聞こえるか！ おい！」

すぐに駆け寄る遠山、カイキに向けて大声を上げる。

「な、んだよ、とーやま。んな必死な顔して…… ただでさえ、ブサイクなツラがよー、余計ひどくなって、んぜ…… とーやま」

「やかましい、喋るな！ 今、止血を…… ツ……」

言葉が、出なかった。

その傷口を見た途端、またカイキが意識を保っている理由が見当たらない。

遠山は自分の口の中が一気に乾いていく感覚を覚えて。

「ナルヒト？ ナルヒト、ど、どうしたノ、止血、血を止めないト、ユサが……………」

少女の声に、返す言葉がなかった。縋るような、声に返すべき返事が、なかった。

「…………いいんだよ、ドラル。僕の身体だ、全部、わかってる…………ひっひ、偽物の身体にくせに、作りは完全人間だからなー、きつついぜー、冷たいのに熱くて、痛いのになんも感じないんだからよー……………」

カイキが、口から血をこぼしながらも、へへへと笑う。

「おい、待て、待て待て待て…… お前、ダメだ、こんな感じで終わるなんざ、ダメだろ！ カイキ！」

その口元の方を拭うことすら忘れて、遠山が叫ぶ。

「そんな……怒んなよ…… 僕は、偽物——」

「お前はカイキユサだ！」

違う、それだけは言わないといけない言葉だ。



「とーやま？……」

「お前は、ドラ子を、自分の友達を守ろうとした！俺たちを、お前なりになんとかしてくれようとしていた！そんなやつを偽物とか思えるわけねーだろうがー、タコボケ！！」

胸が、引き攣る。

声が、喉が、痛い。

自分の無力さに、体の全てが痛い。それでも遠山はそれだけは彼女に伝えなければならない。

遠山が、カイキに声をかけ続ける。

「……………昔のさ、君………どこを見て、どこに行こうとしてんのか、わからない、そのくせこつこつちの事情に首突っ込んでくる、わけわかんねーキミも、よかったけどさ」

「お、おい、カイキ……………」

「ひっひっひ。今のその、ぼろぼろでぐちゃぐちゃブレブレのキミも、悪くねーぜ」

「あ」

ぐい、と。

カイキが身体を起こし、遠山の胸元を掴む。弱々しい力だが、遠山はそれに引き寄せられて。

2人の顔。

遠山の栗色の瞳と、カイキの黒い瞳が触れ合うような距離。

桜の香り、カイキの匂いがした。

桜色の薄く小さな唇が、震えて。

「さっき君がドラルに言った通りだ。君はどんなになるうと、どんなに変わるうと遠山鳴人だ」

すつと、遠山の乾いた唇に、桜色の唇が近づく。

あと数ミリで触れ合っていただろうそれはしかし、決して触れ合うことはない。

桜の香りが強く。

「ありがと、とーやま。……ほんの少しの間だったけど、たのしか

ったよ  
「

こつん。

カイキのおでこが、遠山のおでこにそつと。

にこり、カイキが笑う。

「……ドラルを、……ドラルは、あんま泣かせんなよ、タラシや、  
る」

ゆっくり、ゆっくり、名残惜しむかのように、カイキの身体から  
力が抜けていく。

遠山の胸元を掴む力が、どんどん弱くなっていく。

「カイ、キ……」

やめろ、まだ、まだ、まだいくな、だめだ、ダメだ。

頭の中でぐるぐる回る激情と裏腹に、遠山にできることはカイキの身体を抱き抱えて、支えるだけ。

あまりにも、その肩、腰が細すぎて、その身体がどんどん冷たくなっている。

「へへ、ああ、うん。予定とは少し違ったけど……これはこれであれね？ とーやまが、僕を看取ったことになるなア……貴方が、私を葬るって、ね。ひっひ、あばよ、とーやま」

ひゅー、ひゅー。

命の抜けていく音が聞こえる。それすらもどんどん弱く。

「ゆ、ユサ…… い、嫌ダ、め、目ヲ、目を開けて、ヨ……」

「ドルル…… 僕の友達…… ありがと。それとごめん、苦勞、かけるね。とーやまを、よろ……しく」

カイキが、少女に手を伸ばす。

「ユサ…… ユサア…… ナンデ」

少女はその手を握り、自分の頬をそれにくっつけ静かに泣く。

行かないで、と懇願するように、消えていくカイキの体温を引き止めるかのように。

「もう、泣くなよー、ドラル。君は、凄い奴なんだぜ、僕にはわからない、僕たちは、少し似てるからよー。……君と、知り合えて、友達になれてよかった…… あ」

「ユサ……?」

「ひっひっひ、気付いた。ぼく、にせものでも、よかったこと、1つあるや。……オリジナルの海城優紗には、ドラルって友達いないじゃん、いえーい、僕の、勝ち、だね」

弱々しいピースがふらふらと。

力なく笑うカイキの顔は、少女に伝える。

その死がもはや避けることなど出来ないものなのだ。

「あ、アアアアアアア……」

少女の涙腺が壊れる。

流れる涙、決して止まらず。慟哭が明るすぎる夏の昼に広がる。

「ーカイキ」

「……なに、とーやま」

ふっと、カイキの目が笑う。

人懐こい猫のような目。ああ、そつだ。思い出した。

遠山は、海城優紗の、カイキユサのこの目がーだった。

「……おやすみ、またな」



「……ああ、またね」

カイキが、目を瞑る。

今にも解けそうだったピースサインが斃れて、青白い手が滑り落ちた。

セミの声が、ただ。

【クエスト目標をクリアしました】

【異界の主”カイキ ユサ”が死亡しました。異界が終了します】

【クエスト目標をクリアしましたa】

ピシッ。

入道雲に亀裂が走る。

セミの声が続く。

【苦エラスト目標を達成しました】

「…………ナル、ヒト、ごめんなさい…………」

「ドラ子…………？」

嗚咽の中から、力なき少女の声が。

「ごめん、ゴメン、ワタシ、まだ、わからないノ！ ユサが死んだノニ、ワタシはワタシじゃないってわかるノニ、ワタシはワタシがわからないノ！ 竜って、ナニ？ ワタシ、アリー・ドルル、じゃないヨネ?!」

「ドラ子、落ち着け」

【クエスト目標を達成しました】

遠山が静かに嘸み締めるように言葉を紡いだ。

少女の名前を呼ぶ。

「ドラ子、ドラ子、……覚えてる、ヨ、その呼び方、ナルヒトが付けてくれタ。ワタシの名前……ワタシ、ワタシの知らない、すごくてかっこいいワタシの名前……」

【クエス屠目標w0達成しました】

「ユサはワタシをすごいって言うてくれタ！ ナルヒトはワタシをかっこいいッテ、言うてくれタ！ なのに、なんで、ユサは、死んじゃったノ？！ ワタシが、ほんとにすごくて、カッコいいんなら、ユサはー」

「ユサは、ナンデ、死んじゃったノ……？ ワタシが本当にすごくて、かっこよかったラ…… ナルヒトはワタシを頼ってくれたのニ、ワタシは…… なにも、出来なかったヨ……」

「ドラ子、違っんだ」

「……エ」

「すごくて、カッコいい奴だよ、お前は。カイキの言う通りだ。でもな、そんなすごい奴だつて、どんなにカッコいい奴だつて、どうしようもないことはあるんだ……悪かった、俺、お前だけに背負わしちまう所だつたな」

「でも！！ ワタシが、ワタシがもっと、ワタシが自分が何力、思ひ出せてたらー ユサはー」

「いや、俺が傲慢だった。こいつをなんとかしようとか、ドラ子に何とかしてくれとか。まるでいつも全部うまくいくように勘違いしてた」

ドラ子1人に負わせることになっていたかもしれない。

それはダメだ。この優しい少女に、未だ自分がなんなのか思い出せない優しい竜に何を伝えればいいのかだろうか。

考えるより、先に、遠山の心が答えを紡いだ。

「ありがとう、ドラ子」

それは、ちっぽけな言葉だった。

「エ……」

「カイキのために、泣いてくれて。こいつ、結局よー、一人勝ちしやがった。俺の目の前で、お前の目の前で、かっこよく、気持ちよく死にやがった。見ろよ、この顔……」

でも、それしか言う言葉がみつからなかった。それしか。

「……ナルヒト、う、ワ、アアアアアアア……」

少女は泣く、ただ、ただ泣く。でも、誰にも縋ることなく1人で泣いた。

遠山は見る。ただ、ただ見つめる。決して少女にも、カイキにも触れることなく。

静かに、弔い、葬る。

夏への扉、それを開いた先には思い出があった。

遠山鳴人は思い出に助けられ、思い出に苦しめられた。

【クエスト目標を達成しました】

「……………バカ女が。賭けは俺の勝ちだったのに……………今更てめーの死に顔見せられるとはよ。……………ムカつくぜ。満足そうな顔しやがって」

「ーこれは、賭けだぜ。とーやまなるひと。」

あの3年間。青い春の中で、遠山鳴人と海城優紗が行った賭け。

遠山鳴人に友達が出来るのが先か、海城優紗が死ぬのが先か。

それは、遠山鳴人の勝利に終わっていた筈だったのに。

「勝った気がしねーよ、カイキ」



ぼやけた言葉。遠山の言葉は行先を失う。

自宅のベッドで昏過ぎの情眼を貪っているかのような穏やかな死に顔、それがカイキの返事だった。

【クエスト目標を達成しました】

「……………うるせえな」

【クエスト目標を達成しました】

「ーじゃあ、さっさとここから出せよ……………！ おい！！ ファ  
ラン！ クソメイド！！ 胸糞悪い真似しやがって！ 眷属とかい  
う化け物が！！ 選んだぞ！ 俺は！ 全部終わらせた！ 早くこ  
こから出せ！」

「……ファ、ラン？」

「あ、いや、ドラ子、……すまん。悪く言っつもりはなかった……  
つい……」

【クエスト目標を達成しました】 【クエスト目標を達成しました】

「……なんだ？」

【クエスト目標を達成しました】 【クエスト目標を達成しました】  
【クエスト目標を達成しました】

遠山の視界に映るメッセージ。先ほどからそれは全く同じ文言を  
繰り返すだけ。

何か、おかしい。

【クエスト目標を達成しました】 【クエスト目標を達成しました】  
《ミ》【クエスト目標を達成しました】 【クエスト目標を達成しまし  
た】 ツ【クエスト目標を達成しました】 ケ【クエスト目標を達成シ  
ました】 【クエスト目標を達成しました】 タ﴿ 【クエスト目標を達  
成しました】

【苦絵好斗目標ヲ達成死魔死夕】

【クエストが更新されました】

身体の毛穴がいつせいに開いた。ちくり、ちくりちくり。小さな針で皮膚を突かれたような痺れ。

「ドラ子!!」

「う、ウン!!」

少女が遠山の手の届く範囲に近づく。

カイキの遺骸と少女を、遠山は己の背に庇う。

「来い!! キリヤイバ!!」

どろむ。

戻った力の感覚。首元から引き抜いた己の最強の力を構えて、辺りを見回す。

まだ、終わっていない。

クエスト  
運命がそれを知らせる。

《……ああ、やっと、やっと、見つけたよ》

「Jの、「H……!?! なんデ……」

「……日下部」

死骸がしゃべっている。

【異界、”夏への扉”が外部より侵食されています。新たな異界の  
主が現れます】

《ハハ、フフ、ふふふふふフフ、私は、偽物、だけど、同じ  
なの》

少女がバラバラに引き裂いた女が。

《貴方への思いも、貴方へのこの気持ちも同じ。偽物でも本物なの。だから、呼んだ、だから、喚んだ》

死骸が、死骸のまま。

《……鳴人くん、ああ、変わってしまった貴方を見るくらいなら、私の鳴人くんじゃあ、なくなってしまうのならー》

その目から黒い血を、その口から黒い血を。

《貴方を、私が葬る》

死骸が。

《来て、本体――》

それを、呼んだのだ。

それはとてもとても濃く強い情念と、縁が起こした奇跡、なのだ  
らう。



「號級——!？」

【警告  
”號級遺物”  
の発動を確認】

《遺物 建国》

「……上から!？」

「ナルヒト、アレ……! 雲の中へ、雲が……!!」

頭上から、世界に響く声がした。

荘厳な鐘、世界を終わらすラッパのように、女の声が響き渡る。

「……マジかよ」

雲が、裂けた。

夏の空を支配する入道雲。

それを内側から裂くように顕れた極大の何か。

ああ、あれ

「槍だ……」

《號級遺物 アメノヌボコ》

入道雲の中から、それを破き裂くように美しい槍刃がぬつくと現れる。

あまりにも磨かれた刃には夏空がそのまま、鏡のように映り込んでいて。

《ずっと、ずっと探していたよ》

《貴方がダンジョンで死んでから、こっちは色々なことがあったよ。それでも私はずっと、チャンスを待って、ずっと、貴方を想って、ずっと、探してたんだよ》

《ミ、ツ、ケ、タア…………… 鳴人くん、ナルピ、…………… 遠山鳴人、みいつけたあ》

空から、いや、入道雲の中から声がした。

女の声、誰の声かなんてみんなもう知っている。



そう、全く同じ声が入道雲の中から響いている。

《久しぶり、鳴人くん…… 会いたかったよ、フッフ、ああ、偽物、私の偽物、殺しちゃったんだ。……お疲れ様。貴女のおかげで、ここを見つけたから、もう、いいよ》

槍が裂いた入道雲の中に、それはいた。

大きな顔。それは酷く歪な顔。右半分はクマが目立つ垂れ目、ふつくら浮かんだ涙袋の顔。藤堂未来の顔。

大きな声で、それは酷く歪んだ顔。左半分は、大きな吊り目に、泣きぼくろ。日下部日菜の顔。

空に浮かぶ巨大な女の顔が、入道雲の中から遠山たちを見下ろしている。

「まあ、えらくデカくなっちゃってからに…… お前、本物の藤堂、あるいは、日下部か」

《フフ、ううん、違う、その名前はどれも本当の名前じゃないの…… 名瀬、私の名前は名瀬 名瀬 瀬奈。これが本当の名前。はじめましてえ、遠山鳴人お、久しぶり、鳴人くん、ナルピ》

「……ああ、はじめまして、名瀬。それで久しぶり、藤堂。生きててよかったよ日下部。それで、さよならだ、化け物」

敵だ。

それだけが、事実。

今、認知することはそれだけでいい。遠山の中から戦闘に不必要な余計なものが削ぎ落とされていく。

《……なんで、私にそんなに冷たいの？ 見てたよ？ 海城さんは慰めるのに、私の偽物は簡単に殺すの……？》

「……日下部。藤堂、あと、名瀬、だったな。正直、アレだ。きしよすぎて頭がまわんねえ。あとは、そうだな」

遠山が律儀に答える。

色々聞きたいことはある。自分が死んだ後、ファイアチームはどうなったのかとか、そもそもここにどうやって顕れたのか、とか。



だが、今、遠山がこの女に向けて言う言葉は、一つだ。

「俺たちは、探索者だ。ファイアチームの仲間だ」

《あは、そうだよ、ナルピ。私は貴方目下部の探索者としての仲間。そうだ、貴方は私の為に命を懸けてくれた、貴方は私の為に死んでくれた！ そうだよね！ ナルピ、貴方は私のことを愛してくれてたんだよね！？ 大変だったの！！ ずっと、私、貴方を探してたの！ ダンジョンをずっと、貴方が死ぬわけがないと思って、だから、ダンジョンの底を、底で、彼らをー！》

あの日を、女が想い声を荒げる。

遠山鳴人が死んだ、2028年9月。女にとってはそれから数年越しの再会となる。

その顔はスワンプマンと同様に、興奮に満ちていて。

「だから、俺が殺す」

《え？》

雲の中の巨大な顔の動きが止まった。

「とち狂った探索者は、仲間がきちんと始末をつける。それが俺らのルールだ。名瀬 日菜」

それが遠山の、探索者たちのルールだ。

「そして、俺には引き継がないといけない仕事がある」

とち狂った友達を止めるのも、友達の役割。

それを為せなかった奴、遠山にとって友達ではない、だが、きつと特別で、大切な存在だったそいつの仕事はまだ残っている。

「カイキの代わりに、俺がお前を止めるぞ、藤堂」

遠山鳴人には、その歩みを支える理由が2つもあった。

《……ふ、フフフ、可愛い、鳴人くん。ああ、もうわかんない。でも、良いの。今の私ならなんでも出来る、この世界なら私は、なんでも出来そう。……貴方をもっと、もっと、素敵にしてあげる、貴方を一度壊して、作りなおして、産み直してあげるね》

「やってみる、化け物」

《うん、全力でやるから。見て、鳴人くん。貴方にたどり着く為に私がたどり着いた力を。フッフ、知ってるよ、鳴人くんは、とても強いから、私、貴方を好きにする為に頑張ってるよ》

「……號級遺物持ってるやつを殺すのは、初めてだな」

入道雲の中の巨大な顔を始末する。

まともな頭では、おかしくなりそうな状況。

だが、この男の脳みそはもうまともではなかった。

《アハ、ナルピ、それだけだと、思ってたんの？ 甘ーよ》

そして、この女もまた当然のことながらまともな存在ではなかった。

【警告ーー】

「なんだって？」

《遺物

オバーロード  
拡大解釈》

雲の中の巨大な顔、つまり、本物の藤堂未来、本物の日下部日菜、名瀬 瀬奈はその領域にたどり着いていた。

遠山が死んだ後、大きな変化を迎えることとなった現代世界。

その世界が迎えたある歴史、ある星と凡人たちの物語の末。

その続きの向こう側を、名瀬は遠山を想い、生き延び、力を手に入れたのだ。

世界の境界すら、侵す大いなる力を――

その、報酬を――

《アメノウボコ・拡大解釈・アメノウキハシ淤能碁呂島婚姻絵巻》

巨大な槍が、ゆっくり、巨大な顔の眉間を突き刺し、そこに吸い込まれるように溶けていく。

【警告ーー 號級遺物の拡大解釈により異界が変異していきます】

「……………な、ナニ？」

「おいおいおいおい、なんだ、こりゃ……………」

空が、空が、空が変わっていく。

遠山の思い出を強く反映していたこの世界の空、あのプールの授業の後に見上げていた辛くなるようなほどに青く眩しい空が変わっていく。

一瞬で、空は夕焼け空に。

血管のような紫が貼り巡る病的な夕焼け空に変わった。

血の空だ。

「ふ、フフ、アア、アアアアアア、フフフフフ、国産みのおはなし、鳴人くん、教えてあげるよ、遺物の本当の使い方をさあ！  
！ それで、貴方をまた産んであげる！！ 今度こそ誰にも冒されない、ブレない、変わらない、不変の！！ 完成された、貴方を、



貴方を葬って、看取って、取り上げたい！！ 殺して、食べて！  
産みたい！！」

顔が嗤う。 巨大な矛を眉間で飲み込んだ顔が嗤う。

夕焼け空の、入道雲の中の巨大な顔が愉快に笑い続ける。

「……ナルヒト、モテるネ」

「パスで」

少女のボケた言葉に、短く返す遠山。

流石に頭が痛くなっていた。

ピコン。

【異界の主”指定探索者 名瀬 日菜”の自壊が始まります。 級遺物の拡大解釈により彼女の自我が溶けていきます】 號

流れるメッセージに遠山は視線を。そしてすぐにまた空を見上げる。

《あ、ふ、フフ、すごい、すごおおおい……… これが、アメノ  
ウボコの本当の力……… 私が、私じゃあなくなる》

「ん？ あれ？」

「ナルヒト？」

「いや、なんかあの変態、扱う力が強すぎて死んでいつてるような……」

なんか、巨大な顔が、その輪郭がぼやけて、いや、溶け始めている。それに苦しそうだ。

ふと、気づく。

自分の血が白色に変わっていた事実。アレがもし、遺物の力を引き出したことによる弊害なのならば。

遺物の力に耐えきれない人は、みんな自分と同じようになんらかのリスクが肉体に発生するのではないか。

その仮説を裏付けるように、巨大な顔は今も苦しんでいてー

《ナルピ、だから甘いつて》

《……私がなんの策もなく、遺物の拡大解釈を使うわけないでしょ》

すんつと、苦しんでいたはずの巨大顔が真顔に戻った。

それはシンプルにおぞましい光景だ。

《全て、コツは、ヒントは彼らにあった。いいね、出来るヨネ、あなたは私のお腹の中にいるんだから…… ああ、恐ろしい只の人、答えは全部、あなたが持ってた、感謝するよ、してあげるよ。あなたのおかげで、鳴人くんを、好きに出来るんだもの、ほんとならお星様を食べたかったけど、あなたもすごく素敵な栄養だよ》

「しぢぢやしぢぢや何言ってるー」

ピロン

【霧” いかん。わぬしよ、ありゃあ、まずいぞ】

「あ？」

メッセージの文体が少しおかしい。すぐにそれが、あのキリヤイバ、お札マツチヨからのメッセージだと気づいてー

それは遠山にとって知らない言葉。

遠山の今いる異世界では恐らく、発現しない人間の可能性の一つ。

食べることによる存在の取り込み。地球の歴史の中でありとあらゆるものを殺し、捕食し、それを取り入れて発展してきたホモ・サピエンスにのみ許された進化。

《人じゃあ、神様の力を扱えない…… けれど、けれどね、人は育つ、人は受け入れる、人は想いの苗床となる。遠山鳴人くん、教えてあげるね、人の持つ本当の力を、神様の領域にすら手を出す、私達人間の有り様を》

伝承再生。

それは星にかつて存在した神秘の残骸…… ”神秘の残り滓”を

食事することによる肉体の進化。

「お、おい、なんか、まずい……」

そして、その女は、それだけでは終わらない。

女は、指定探索者、名瀬 瀬奈はもう一つの可能性にもたどり着いているのだから。

《伝承再生＋遺物拡大解釈》

これも、ひとつの進化の形。

遺物の拡大解釈、それは人の身で彼岸の向こう側を渡ろうとする  
無謀な行為。

大いなる力に、定命の肉体が耐え切れるわけがない。

だが、名瀬はその問題をクリアした。器が力に耐えきれないのな  
ら、その器ごと無理矢理、強く、大きく。

人間の持つ可能性の力、それを2つ重ね合わせる無茶苦茶なやり  
方はしかし、成功してしまった。

愛。

遠山へのそれだけで、女はついにその領域へと辿り着いた。



世界を跨いで渡ることをすら許される、大いなる力を。

そんなめちやくちやな存在を、自分たちでは決して理解すらできない大いなる力を古来から人は――

《神話回生》

――神と呼ぶのだ。

「……なに、ソレ」

《かしこみ、かしこみ、奉るーー かしこみかしこみ奉れ》

巨大な顔の輪郭が溶け崩れる。

ああ、それで終わりなはずはない。

そこからまた巨大な姿が現れた。

「あちやー……」

《神話回生・ヨモツオオカミ》

見よ、その異様。

夏空の入道雲の上に、座布団か何かに鎮座するように座る巨大な女神の姿を。

顔の右半分は名瀬瀬奈、藤堂と日下部達を混ぜ合わせた美しい女の顔。

そして顔の左半分はただ、闇と黒に染まっている。

神主が着るような白無垢に、手に持つ巨大な矛。

不浄の女神が、入道雲の上で膝を崩して座っていた。

《鳴人くんはさあ、カミサマにも勝てるのかなあ?》

「デカイって」

《異界 ヨミヒラサカ 拡張》

「ーとーりゃんせ、とーりゃんせ。こーこはどーこの細道じゃ、  
天神さーまの細道じゃー」

夏の夕空。かなかなかなとひぐらしの鳴き声に混じり、流れ出るのはニホン人なら誰しも知るわらべうたが流れ始める。

「じわいって」

《おいで、みんな、ヨモツシコメ》

ずぶん、ずぶん。

空に、波紋の揺めきがひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ、いっつ  
ー たくさん。

雨が打ち続ける池のように数えきれないほどの波紋が空に浮き出る。

そこから

『ア、オオ、アアア』

『うひ、ヒヒヒィあ』

異形。

腐りかけた人間の身体、肋の浮き出た痩せつぼちの体に、昆虫の羽を背中に生やし、手には踏切のゲートバーを握りしめた異形が現れる。

ああ、その異形はみな同じ姿。首から上はぐしゃぐしゃにマジックで書き殴られて模様の道路標識が生えている。

異界の住人が主人の命に従い。次々と空に現れた浮かぶ。

まるで、イナゴの大群が夕焼けを舞うかのような光景。

「多うっつ」

もう笑うしかない。

遠山の声は乾いていた。

《フッフ、フッフッフ、ヨミヒラサカの数追う者、今度こそ、  
貴方を…… フッフ、貴方に追いついてみせる、今度こそ貴方を捕  
まえて見せる、貴方を産み直してあげる、完璧にしてあげる》

そこに広がるは黄泉の国。黄泉の国の大いなる神の国が、遠山達  
の目の前に広がっている。

そこに広がるは黄泉の国。黄泉の国の大神とそれが率いる軍勢が、  
遠山達の目の前に迫っている。

夕焼けが、近い。

「……キリヤイバ通用すんのかな」

気付いたら、神話の世界に取り込まれていた。遠山が首を傾げる。  
なんだ、この頭の悪い展開は？

5071

高熱の時に見る悪魔か？

「な、ナルヒト……」

「顔上げる、ドラ子、行ってくる」



遠山がフェンスをよじ登り、屋上の端から神を見上げる。

「わ、ワタシも!..!」

「いや、カイキを頼む。……そいつを1人にさせるのは忍びない」

「ユサ………」

少女が、もう何も言わないカイキを見つめて、それから小さく頷いた。

「寂しがり屋だからな、そいつ。ドラ子と一緒にいてくれたら喜ぶと思っよ」

遠山が2人を振り返る。

これは、尊いものだ。これは、残さなければならぬものだ。

この2人を置いていった先に、遠山の求める光景は存在しない。

《ナニ？ その目…… おかしいよね、おかしいよ、なんで？？》

あんなに、脳みそをいじくりまわしたのに、アレだけ貴方を強く、女が寄らないように脳みそをぐちゃぐちゃにしたのに！ なんです！！ その竜女にそんなに優しいの！？ 貴方は違う、貴方はそんなことしない、遠山鳴人は女に、誰かに、他人にそんな目は向けない……！！ うみなおさなきゃ、作り直さなきゃ、そうだ！！ カイキさん！ 海城さんも、作り直してあげるから！ 海城さんは友達なもの！ だから産みなおしてあげるの！ 貴方と海城さんと、私！ もうそれだけでいいじゃない！！》

「黙れ」

探索者として、同じ3年間を過ごした存在として。

「お前が海城を、カイキを語るな」

《なんで、そんなコト言うの…… その目、その目え、なんで私にはその目を向けて童女や、カイキさんにはあんな優しい目をするの？ …… 私にはそんな目向けてくれないの！！ 貴方のことを一番大切に、こんなにも大切に思ってる私にはなんで！？ 貴方の為にここまでしたのに！！ なんで私の愛がわからないの！？ 貴方に完璧になつてほしいだけなのに！！ なんで！？ なんで？！ 私、貴方の為にここまできたのに、貴方に会いに来たのに！！》

「やかましい。お前だけは、ここで殺す」

その女の問いには答えない。

両者ともに、互いの話しを聞く気は毛頭なかった。

【警告 DEADクエストが開始されます】

それは、運命の死を告げる知らせ。

【警告 非常に危険なクエストです。このクエストに失敗した場合は、死亡します】

【<sup>戦い</sup>DEADクエスト”<sup>ヨミヒサカ</sup>Battle of Yomihiraskaka

【クエスト目標 ” 神話回生・ヨモツオオカミ” の討伐――討神】

【警告】 クエスト目標は一神話体系の頂点に君臨する存在です。現在のレベルでは万に一つも勝ち目はありません。”神殺し”に類する技能は現在保有していません。現在のキリヤイバの侵食段階では、敵神性への抵抗のみが可能です】

【警告】 このクエストのメイン目標を達成するのは不可能です】

【警告】 クエストを開始した時点で、貴方の死亡が確定します】

「それでも」

思い出を少し、想う。

ファイアチーム、探索者時代の思い出は炎のように短く、しかし、鮮烈に。

日下部日菜は、それでも、遠山鳴人の仲間だった。

だからこそ、その炎を美しいまままで終わらせる為に。

カイキユサのことを忘れないために。彼女が出来なかったことを、去っていった人間のやり残しを終わらせるために。

「この始末は俺がつける」

遠山鳴人に、絶望から目を逸らして良い理由など微塵も存在しな

かった。

《ーああ、ならもついい。貴方は穢れた、他の女で穢れたんなら、もう仕方ないよね。作り替えるしかない、今の私ならそれが出るもの。貴方を殺して、殺して、殺してー ああ！ ああああ！》

巨大な女神が、雲の上に鎮座する、黄泉の国の大神が悶える。

《貴方を1000回殺して、産み直してあげる！！》

「ヒビヒビヒビ、なら俺ア、1500回生き返って、てめえをぶっ殺してやらア！」

例え相手が、死そのものでも、死の国全てを敵に回すことになる  
うとも。

遠山鳴人には、この戦いから降りる理由が見当たらなかった。

《私が貴方を葬るわ。 遠山鳴人》

死が、一斉に降りて。



ピロン

【条件達成 DEADクエストのオプション目標がクリアされました】

「ん？」

P I  
P I  
P I  
P I  
P I  
q

P I  
P I  
P I  
P I  
q

【オプション目標 ・素性が ” 死亡した探索者 ” であること。 ・異界内にて探索者端末を携帯している ・2028年冬までに現代ダンジョン ” バベルの大穴 ” で死亡する。 ・異界の種別が ” 彼岸 ” である ・DEADクエストを2つ以上クリアしている。 ・決して諦めない 全てのオプション目標を達成しました】

一気に流れるメッセージ。遠山の目がそれを追う。

どくん。心臓が跳ねる、

嫌な感覚ではない、それはどこか心地よく、足から頭まで一気に体が湧き上がる感覚すらもたらして。

【 DEADクエストの特殊ルートが解放されます 】

そのメッセージにはなぜか、星のマークが付いていた。

こんなこと、初めてだ。

P I P I P I P I q

P I P I P I q

P I P I P I P I P I P I P I  
P I P I P I P I P I P I P I

唐突に胸ポケットに振動と、軽快な電子音が響いた。

『Emergency call』

鳴った、響いた。

それはありうべからざる現象。

この異世界で、この異界で起動するはずもない探索者端末の機能。

電波など存在しない、届くわけもない状況。

だが、たしかに、その端末は通信を傍受した。

彼方からの、エマージェンシー緊急通信を。

『Emergency call . Emergency call This device is online』

緊急通信、緊急通信。

探索者端末がそれを鳴らす理由は2つ。

現代ダンジョン、バベルの大穴内の環境の激変を感知した組合からの通信。

そして、もう一つは。

『Designated line Open』

指定回線、起動。

ある権限を与えられた探索者から、探索者への通信。

「あ？」

《Reply Reply Reply》

『Communication from a Designated Searcher』

応答せよ、 応答せよ。

指定探索者からの通信だ。

reply!!-!!  
? hear? Wow!!  
If you hear  
really  
reconnect  
,

「」

「TAC NAME I The 52nd STAR」

Can  
you  
hear  
me?

! !  
I  
m  
A  
l  
e  
t  
a  
!  
!"  
A  
l  
e  
t  
a  
A  
s  
h  
f  
i  
e  
l  
d  
"





94話〈Emergency  
call・This is I〉  
(後書き)  
Emergency  
call

感想お待ちしています。

長文ご覧いただきありがとうございました。

## 95話 遠山鳴人とストームルーラー

「は？ アレタ、アレタ・アシュフィールド？」

その名前を、もちろん遠山鳴人は知っている。

探索者ならば、いや、2025年以降の現代、つまりダンジョンが出来た現代に生きるものならば、彼女の名前を知らないものなどいない。

『YES I Am!! You really heard it? What is the situation now?』

それはテレビのCM、街中の広告、雑誌、ありとあらゆる広告媒体、日常とメディアに浸透した文字通りのスター。

彼女がランチに出かけただけでそれが新聞や雑誌の見出しにすらなることもある大衆の偶像。

世界で1番有名な指定探索者、生きながらその功績、現代ダンジョンから”嵐”を討ち取り、持ち帰った偉業により、アメリカ合衆国の星条旗に数えられた女。

「あ、あー？ えーと、やばい状況。多分死ぬ」

遠山にとってまさに、生ける伝説といった人物。

彼女の流暢な英語をなんとか聞き取り、そのまま返事をする。

自分の言葉が通じるかどうかなんてことも、遠山の頭からは消えていた。

「that? Japanese? Why not translate?  
uhh...! Sophie! Hey, Sophie!  
I don't understand the words!  
What should I do!」

端末の向こう側から聞こえる声と様子、なにやらバタバタとして  
いる。

Sophieー ソフィ。その人名のような響きだけ辛うじて  
聞き分けることが出来た。

「Did you connect? Are you serious?  
Okay, I speak, the other  
person is Japanese, isn't it?」

スピーカー通信の向こう側から、また別の声。先程の声よりも  
っと幼く、それでいてどこか

『YES!』

元気なイエスは最初の声、アレタ・アシユフィールドと名乗る女  
の声、そして、ゴソゴソと雑音が混じって。

『Ah, can you hear me hello? AH  
…… アー、ゴホン、やあ、通信の先の人、聞こえてるかい？ ワ  
タシの言葉がわかるかな？ ニホン語で構わない、返事をしてもら  
えたらありがたいんだが』

「ニホン語……！ 聞こえてる！！ アンタは？ こっちの声が聞  
こえてんのか？ てか、アンタは、さっきの人と声が違うけど……  
？」

英語から、ゆっくりニホン語へ。どうやらニホン語が喋れる人物  
らしい。少し発音が奇妙だが、聞き取るのに問題はなかった。

『OK、聞こえる。ニホン語を一応頭に入れておいた甲斐があったものだよ。ああ、さっきの、アレタはまだニホン語が完璧じゃなくてね。』

ワタシは、ソフィ。”ソフィ・M・クラーク”。知っているもえれば話が早くて助かるんだけどね』

その幼さと理知性、両方を兼ね備える声が紡いだ名前も、遠山鳴人は知っていた。

『は？ ソフィ・M・クラーク？！ 合衆国の指定探索者、”女史”か?!』

掛け値なく有名人。

アレタ・アシユフィールドという確実に後世に名を残す人物と同じ程度の知名度。

10代にして、ハーバード大学を飛び級&首席入学と卒業を同時に終わらせた天賦。

そして、軍属となったのち、アレタ・アシユフィールドと共にダンジョン黎明期の活動に従事。現代ダンジョンに、“バベルの大穴”という名称をつけた名付け親でもある。

ああ、どちらにせよ2人とも間違いなく後世の教科書に乗るであろう人物だ。

『イグザクトリー！ よろしい、話が早くて助かるよ、いくつか質問をしたい、状況は？』



頭がおかしくなりそうだ。

遠山はさまざまな疑問、つまり、なんでも自分が元々いた世界の人間から今になって通信が届いたのか、しかもその相手が、あのアレタ・アシユフィールドとソフィ・M・クラークなのか。

少し考えて、それから

「入道雲の上に座っている馬鹿でかい化け物と、その子分の化け物に囲まれてると」

もうあるがままを答えるだけにした。

全部の疑問に意識を向けるだけで頭がパンクすると判断して。

『おっと、それは…… 単刀直入に聞かせてくれ、その化け物の名前は、セナ・ナゼ、もしくは、ヒナ・クサカベに関わる者かい?』

「そこまで知ってんのか。多分イエスだ」

ピタリと正解を言い当てられたことに、背筋が冷える。

『……………会いに行く、あの人、ファイヤチーム、バベルの大穴深層、伝承再生、號級遺物による量子学的多世界解釈線への干渉……………』

「お、おい?」

ぶつぶつといきなり始まる独り言に遠山が慄く。

さつきまで会話していたのに急に自分の世界に引きこもり始められるのは、正直不気味だった。

『いや、結論を急ぐべきではないか』

ひとときしりの独り言は終わったらしい。ふう、と電話口の向こうからため息が聞こえた。

「よく話かわからないんだけどよ、わかりやすく簡潔に話してくれ。今にも、アイツらが襲って」

そう、こんな呑気に通話している場合ではなかった。遠山は屋上の端っここから空を見上げる。

夕空を埋め尽くさんばかりの異形と、入道雲の上に佇む女神の化け物。

どう考えても世界観の違う大敵は、今にも襲いかかってー

「あれ？」

来ていない。

蝗害の如く夕焼けを背景に広がる異形達は、動きを止めて空にぼんやりと浮かんでいるだけ。

そして巨大な女神の化け物は――

『ああ、大丈夫。ワタシとお話し出来る程度の時間の時間は確保出来る筈だ。彼女がそちらに潜る前に打ち込んでいたものが、そろそろ効き出す頃合だ』

「あ？」

《っア…… クソ、ソフィ…… ソフィ・M・クラークの石化…  
…か……ほんと、厄介な、目……》

びき、びし、びき。

空に響いた硬質な音、最初はそれが何かまるで見当がつかなかった。

『クツクツク、おや、聞き覚えのある声が聞こえたぞ。ああ、君にも効いたようで、何よりだよ』

「すげえ…… 石に、なってる……」

入道雲の上に鎮座する女神、その表面がコンクリート色に変色

している。

乾いた音とともに、その巨体がどんどん石に変わっているのだ。

『神秘種、”ゴーゴンの瞳”。腑分けした甲斐があったものだよ…  
…このワタシがタダで逃がすワケないだろう、愚か者め』

吐き捨てられた言葉に込められた冷たい敵意。

指定探索者のそれは、たとえ遠山に向けられたものではないにしても十分に、怒りが込められたものだった。

『これで我々が最低限状況を共有するためのコミュニケーションの時間は取れそうだ。さて、奇妙な君、届くはずのない指定回線を受け取った君、探索者、と考えていいかい？』

「……ああ。もうなんか意味がわからんすぎて混乱しているけど、  
アンタこそ、本物のあの、ソフィ・M・クラークでいいのか？」

『ああ。だが残念ながらこの状況では君にそれを証明する手立てはないがね。どうしたものか、身分証明に自動車のライセンスでも見せようか？』

フフン？ という鼻で笑う声。

その反応でもう、相手にするのが面倒な人種だということがよくわかる。

「うるせーよ。えらい余裕がありそうで何よりだが、こっちはそれほどごろじゃない。……色々、気になることはある、だがそれ全部放り投げて、アンタに聞きたい、頼む、答えてくれ」

『なにかな？』

「アンタは俺の味方か？」

もし、この問いが即答でなければ遠山は探索者端末の電源を切るつもりで――

『我々、アレフチームはセナ・ナゼの敵だ。これは答えになるかな？』

即答だった。遠山が、笑う。

「充分だ、指定探索者。この状況でありえない事態だ。助っ人じゃなかったらどうしようかと思ってたよ」



敵の敵は味方。 確証もなく、 理屈や理由すらわからない与太話、

つまり、自分が元いた世界の住人との通信という話でも今の遠山には縊るべき蜘蛛の糸に等しい。

『クク、なかなか余裕があるじゃあないかい。 簡潔に話すよ。 セナ・ナゼによつて、我々アレフチームのバカが1人、連れ去られた。 正確にはまあ、その、食べられたんだが…… 我々はそのバカを取り戻したい』

「食われた？ え？ アレに」

遠山が目を剥く。

お気の毒に。それはもう生きてはいないだろう。彼女達はそれの報復に来たのだろうか。

『おそらくそのアレに。それはもう丸呑みでね。……ダンジョンの深層まで逃げ込んだ彼女を追い詰めたのはいいものを、最後の最後に逃してしまったわけさ』

「……ダンジョンの深層、ほんと、なんでもありだな」

『バベルの大穴だ。なんでもありさ、まあ、もはやそれはバベルの大穴に限った話ではないけどね』

「逃げ込んだ名瀬が、こっちにやってきた…… おの偽物が、目印になったのか……」

本体がどうのここの言っていたはずだ。

異世界転生か転移かわからないが、それは確かに自分に起きた事  
実だ。

だが、今こうして、自分が元いた世界と、今いる世界が繋がって  
いるということはすんなりと受け止めることが出来ない。

夢か、幻か。そんなふわふわした感覚。

『ふむ、君、我々が知らないことを知っていきそうだね。正直、この  
状況はワタシにとって数々の疑問と好奇心を抱かせるに相違ない状  
況だ、本来なら、君に色々問いただきたい所なんだが…… まあ、  
そうもいくまい。向こう側の探索者、君はセナ・ナゼと敵対してい  
る、そう思っているのかな？』

「ああ、これから殺し合いの予定だ」

『大変結構！！　クク、なら、もう答えはシンプルだ。共同戦線を  
依頼したい。我々、アレフチームにー　ん？　待て、ま、待て！  
アレタ！！　アレタ！　なにをしようとしてる！？？　グレン！  
！　グレン、アレタを止める！アレタ！　ほんとに、やめて！！  
勝手なことしようと！！　ああアアアアアアアアア！　ダメだ、  
状況把握がまるで出来ていない！！　向こう側に何かあるかもわか  
らないんだぞ！　やめろ！　まだその湖に入ろうとするんじゃないー

I I R e l i c    S T A R T  
『

端末の通信、向こう側が少し騒ぎ始める。

静かな、それでいて強い声が聞こえた。

【警告ー 號級遺物の発動を確認】

『D r o w s y ー まどろっこしいわ』

【異界 ”ヨミヒラサカ” が新たな異界からの侵食を受けています。異界” ストーム・ルーラー” の侵食により、” バベルの大穴深層” と異界が接続されました】

「あ?」

【共通語現象が発生します。異なる言語の使用においても相互の意思疎通が可能になりました】

西暦2025年。現代世界に”ダンジョン”と呼ばれる神秘の地が生まれたその年。

アレタ・アシュフィールドはダンジョンから”嵐”を勝ち取り、持ち帰った。

2025年以降、北半球においては嵐は発生しない。

アレタ・アシュフィールドの持ち帰った力はその名前の通り、嵐を調停し、支配し、使役したのだ。

人類はついに、惑星の天体活動をその手中に収めた。

人類の段階を進めた女、惑星の天体活動を膝づかせた女。アレタ・アシュフィールド、その力はまさに――

『聞こえる？ 探索者の人』

「その声、一番最初の……」

『あたしの名前はアレタ・アシユフィールド。貴方は名前は？』

「遠山鳴人」

『待て、アレタ！ トオヤマ？ 今、トオヤマナルヒトって言ったのかい？ 上級探索者、トオヤマナルヒト！』

通信の声、ソフィ・M・クラークが叫んだ。

「え、知ってんのか？」

少しテンションが上がる。

指定探索者、それもアメリカ合衆国のトップクラスの探索者が自分の名前を知っている。

それは探索者であれば誰でも驚き、そして自慢出来るようなことだ。

『違法遺物不法所持者の嫌疑がかけられていた行方不明のニホン人探索者……！ アレタ、彼だ！ 2028年9月の搜索任務！』

『ええ、覚えてるわ。そう……生きてたのね』

噛み締めるような、アレタ・アシュフィールドの声。



「え？ バレてんのか？ マジ？…… てか、搜索任務って？」

だが、それよりも遠山にとっての驚きは、自分が隠し持っていたつもりの”遺物”の所有が既に疑われていたという事実だ。

遠山はそれをかなりうまく隠していたつもりだったのだが。

『ふふ、行方不明になった貴方の搜索はあたし達、アレフチームの仕事だったの』

「……アレフチームが、俺の搜索を？ ……ああ、もうすげえな」

現実感があるんだか、ないんだかよくわからない会話だ。

自分があの日、あの時、あの場所で迎えた最期。当たり前だが、自分がいなくなっても世界は続く。

あの時、遠山が迎えた終わりはしかし、確かに、誰かの冒険の一幕になったのだろう。

《なかなかハードな任務だったわ。……ミスター、生きててくれてありがとう。貴方の生存を誇りに思う。……今、貴方がなぜここにいるのか、どうやって生き残ったのか、詳しくは聞かない。ミスター、貴方は今彼女と戦おうとしているのね》

「ああ、日下部を、藤堂を、名瀬を、狂った俺の仲間を、俺が始末する」

『貴女の搜索はセナ・ナゼが探索者組合に圧力をかけて行わせたもの。方法は褒められたものじゃないけど、あの子の理由は、貴方よ。それでも？ あの子は貴方の為に全て行動しているとしても？』

「だからこそ、俺がやるべきなんだろ」

アレタ・アシュフィールドの問いに、何もブレることなく遠山が答えた。

『OK。わかった。貴方のその誇り高さに敬意を。聞いて、ミスタ―。あたし達と貴方がいる場所は遠く離れてる。あたしじゃ、そこまで行けない、だからお願い。もし、貴方が彼女と戦うのなら、あたし達にもそれを手伝わせて欲しい』

びし。

一際大きな乾いた音、破裂音、石の。

《52…… 番目…… フフ、フフフフフフフフ、この人を取り戻しにくるの？ …… いいよ、おいで、おいで、貴女なら、出る、貴女なら私と同じく、遺物の最奥、人間の最上の可能性、カミサマにもなれるでしょうね》

ぱら、ぱら。

石化が進んでいたはずの女神の化け物。その身体を覆っていた石がどんどん崩れていく。

ヨミの国の大いなる神が、星の英雄に問いかける。

自分と同じモノに貴女ならなれるはず、と。

『いいえ、セナ・ナゼ。あたしはもう、間違えない。そんなものは、1人で全てが完結するようなものにはなれない、あたしはちっぽけな只の人のままでいるって決めてるの』

きっぱり、それを断る52番目の星。

ちっぽけな只の人。以外と普通の人間なのかもしれないと遠山は思う。

《フフフ、何も失う覚悟もないのに！ 私の前に立ち塞がるうとしないで！ 私は私の求める完璧ない遠山鳴人のために、私になる、もっと、もっと》

『うわ、やめてよほんと、こっちが恥ずかしくなるわ。……あの時のあたしもこんな感じだったのかしら』

「なんの話だよ」

よくわからない会話に遠山が口をはさむ。

『あら、ごめんなさい、こっちの話。ミスター、貴方に出来ることを教えて。可能な限り、貴方の狩りを援護するから』

「……遺物を使える。名称はキリヤイバ、力は細かく鋭いきりを出す、それを吸い込んだ相手を内側から切り刻める。あとは、まあ、色々だ」

『あら、素敵な遺物ね。あたしの次に』

「うわ、ナチュラル強者じゃん…… 世界最高の探索者、アレタ・アシユフィールドに手伝ってもらえるのは光栄だけど、姿形も見えない、通信だけ届いてるアンタは何が出来る？ そのまま応援でもしてくれんのか？」

メッセージが告げた異界の侵食。

だが、今のところ言葉が通じるようになったこと以外、特に変わった様子もない。

まあ、都合の良い話だ。遠山もなんだかんだ、本気で直接的な助けが得られるなんて思っていない。

『あら、あなたけっこう言うわね。いいわ、萎縮されるよりかなり、いい感じよ、ミスター』

《鳴人くん！ 鳴人くん、鳴人くん鳴人くん！ 鳴人くん鳴人くん鳴人くん鳴人くん鳴人くん鳴人くん！ 今、行くから！ 見て私の力を！ あああ》

石化が溶ける、同時に異形の群れがざわめきだす。

攻撃が、始まる。

「やばい、石化が解けてる…… 簡潔に！ アレタ・アシユフィールド、アンタは何が出来る！？ てか、援護って、一体何をするつもり」

遠山が、空を睨んで叫びー



《ああ、もう始めてるから、大丈夫よ》

2025年以降の世界。

先進国を問わず各国の防衛戦略、及び国家間の軍事力は、“ 號級遺物” の運用を前提としたものになる。

何故か？

答えは簡単。

アメリカ合衆国指定探索者、“ 52番目の星” の號級遺物。

嵐を従えるその力に対抗できるのは同じ“ 號級遺物” でしか叶わないためだ。

ーその女は世界のパワーバランスを変えた。

ーアレタ・アシユフィールドの力は、星の天体活動を従わせるもの。

故に、それは神の御業に等しく。

故にその力にとって、異界を渡ることなど、容易いことだった。

ぼた、ぼた、ぼつ。

水滴が、屋上の床を濡らす、気づけばそれは頬を打ち、髪を濡らしている。

雨が真上から降り始めた。

風が強く吹いている。

雲が渦巻き、信じられない速度で空を泳ぎ始めている。

夕立ち、夕の嵐空。

夏に、嵐がやってきた。

「は？」

《え》

世界が震えた。

その異界の輪郭が、外からの衝撃に震えた。

いや、それは震えというより、世界が

『レリック・スタート』

怯えた、ような。

《跪け、ストーム・ルーラー》

その声は、通信から響いたものではない

遠山は、声のした方向、つまり真上を見上げて。

「……マジか」

声を漏らした、マジか。もうそれしか言葉が出ない。

遠山の真上に、屋上の真上、血のような真っ赤な空に、”嵐”がいた。

風も、雨も、雲も、その全て遠山の真上に顕れた存在と共に顕れた。

『何が出来る？ うーん、そうねえ、何が出来る……か……ひとまずは、うん、そうね。この嵐、ゼーんぶ貴方の味方よ、ミスターキリヤイバ』

現代世界の軍事の歴史、国防の概念、ゲームのルールを根こそぎ変えた力。

それは嵐だった。

雨風を衣のように纏い、時折り輝くそれはきつと雷を編み込んで  
いるのだろう。

それは嵐だった。

夕焼けの空は気付けばその半分が暗く、雨雲に閉ざされている。  
ゴロゴロと怪物が喉を鳴らすように、分厚い雲の中から稲光と雷鳴  
がとぐるをまいている。

そして、それは――

【異界侵食、ストーム・ルーラーによりヨミヒラサカの異界強度が  
著しく下がっていきます】

そして、それは”瞳”だった。

嵐を纏う巨大な、人間の瞳。

青い目だ。

雲一つない、人の手が入らない美しい晴れの浅海、太平洋のエメラルドブルーの海をそのまま溶かしたような瞳の色。

その青い虹彩の中に、蠢くものがある。

数々の影絵のような、何か。水生生物が水底で揺蕩っているようにも見えた。

《ストームルーラー・ホライゾン。境界線を、世界を跨ぐ？ カミサマの力？ ハッ、セナ・ナゼ、貴女にできて、あたしに出来ない



「いつて本気で思ったの？」

遠山の真上から、アレタ・アシュフィールドの音が響く。

瞳から声が響く。嵐を纏った巨大な青い瞳が、入道雲に座る女神の化け物を睨んでいた。

アレタ・アシュフィールドの號級遺物、ストーム・ルーラー。その力そのものが突如、ヨミヒラサカの異界へと顕れる。

「まさか、遺物を……いいえ、遺物の力だけを、あそこから、ここまで……！！ ストーム・ルーラーだけをここまで届かせたの？ ふ、フフフフフフフ、ほんと、デタラメね、アレタ・アシュフィールド！！」

「貴女に言われたくないわ、セナ・ナゼ。さて、悪いけど、貴女

が食べたそのバカ、あたしのなの。返してもらおうわ《

眼前には、巨大な女神の化け物、頭上には巨大な嵐を纏う青い瞳の化け物。

《ふ、フフフ、しつこい女は嫌われるよ》

《自己紹介かしら？ 貴女にそれほど興味はないのだけれど》

瞳が、羽虫を見つけた猫のように歪んで。

嵐、雷鳴鳴り響く。

「「「「「ヒビビヤユ!? ギャ!?」「」「」「」

同時に、光る稲光が一瞬で、空を埋め尽くさんとする羽の生えた標識頭の異形を文字通り消し炭にしていく。

ブスブスと黒焦げになる異形の残骸、それらが雨に冷やされ蒸気を上げながら、カトンボのように堕ちていく。

《フフフ、残酷なのね、英雄。でも、まだまだ死なないわ、おいで、みんな》

波紋、波紋、波紋。

空間に浮き出るねじれから異形が再び現れる。

嵐に侵されつつあるも、未だここはヨミノヒラサカ、すなわち神話回生・ヨモツオオカミの世界である。名瀬瀬奈

神話に語られる狭間の世界、あの世とこの世を隔てる坂。黄泉の軍勢は尽きることを知らない。

《アハ、いいストレス解消になるわ。羽虫を捻り潰すの得意なの》

《フフ、貴女、思ったよりも嫌な女ね》

「……これ、俺いるか？」

頭上、嵐と夕焼けの空の中繰り広げられるスーパー化け物大戦を眺めて、遠山がぼやいた。

ゴジラとキングギドラの戦いを下から眺める連中の気持ちがよくわかる。

『あ、あー、聞こえるかい？ トオヤマナルヒト』

「あ、どうも」

こんどは通信が鳴る。ソフィ・M・クラークの声だ。

『作戦目標を簡潔に伝える、仕切るように申し訳ないが、これには君の協力が必要不可欠だ』

「了解、殺し方の段取りは任せる」

『助かるよ。作戦目標、セナ・ナゼ。アレの巨大な体の体内には、ワタシ達の仲間が捕食され、囚われている、ここまでいいかな？』

「う、ん…… あんま言いたくないんだが、普通あんなでかいのに食われたら、それはもう凶われているでは済まないのでは？」

とっくに死んでいるのでは？

ボブ…… 遠山は訝しんだ。

『いや、済むんだ。アレはそう言う奴なんだ。本当に申し訳ないが、もうそれはもう、そういうものなんだと諦めてくれ。事実、こちらで把握しているデータにより、食われた奴のバイタルは生存値を示している』

「……それは人間の話をしてるのか？」

遠山は訝しんだ。

『ああ、どうしようもない凡人さ。さて、トオヤマナルヒト、作戦の内容は極めてシンプル。アレタの嵐、”ストーム・ルーラー”との共同戦線だ。アレを、目の前のアレを可能な限り殺し尽くしてほしい』

「いいのか？ 中に、その、まだ食われたやつがいるんだよね？」

『ふむ。それについては問題ない。簡単な話さ、トオヤマナルヒト。我々の敵、セナ・ナゼは決して身体には入れてはいけない病原菌のようなものを取り込んだわけだ。今はまだ彼女が元気だから、問題ないが…… 風邪や病気はどんな時に罹るものかな？』

「弱らせる、ってわけか。ああ、そりゃ、シンプルでいい。……ねえ、ほんとにアンタらのその食われた仲間って人間なんか？」

遠山はまた訝しんだ。

あの化け物にとっての病原菌、つまり食われてなお、その”アレ

フチームの凡人”とやらは、あの女神の化け物の脅威となるということだろうか。

『ふ、クク、ああ、人間だよ。どこにでもいる只の人間さ。右腕はよく燃えて、左手は骨の刃になって、首にはエラが生える時があるけどね』

「B級映画のクリーチャーの話をしてるんだよな」

『いいや？ 人間の話さ』

人間であつてたまるか、そんなものが。

やはり指定探索者ともなると少しばかり頭がおかしくなれないとなれないのだろう。



いや、それかきつと、仲間が食われたという状況で流石のソフィ・M・クラークといえど混乱しているのだ。

遠山はそう結論した。そうするしか、理解のしようがなかった。

《ああ、あああああ！ 厄介！ 邪魔をするな！ ストームルーラー！！ 私と鳴人くんの時間に入ってくるな！》

《アハ！ これはお笑いね、セナ・ナゼ！！ 思い込みが強い女の悪いところよ！ きつと、ミスター・キリヤイバはそんなに貴女との時間を楽しみにはしてないわ》

「…………嵐を纏ったでかい目ん玉と、顔半分が暗黒の化け物女神が殺し合ってる…………」

苛烈さを増す化け物同士の殺し合いを眺める。

嵐と雷が、数多の異形を殺し尽くしている。

だが、殺しても殺しても雨後の羽虫の如く、どこからともなく異形は湧き続ける。

異形の標識頭たちが、嵐を纏う瞳に近づこうとするも、大風と、稲妻に滅ぼされ尽くす。

「悪夢かな？」

『だが、遺物保有者の君にはその悪夢に参加する資格がある。トオヤマナルヒト、君の戦闘能力は資料で読んだことを記憶しているよ、……驚嘆に値する、あの記録がまやかしてないところを、ひとつ、見せて欲しいのだが』

「……ソフィ・M・クラーク、いい性格してんな、アンタも」

ぼやきつつ、そして化け物大戦に呆れつつも、この男、実は全く引く気がなかった。

カイキユサの甲いと、ファイアチームの責任は自分が取らなければならぬ。

――覚悟は既に決めている。

「ードラ子！」

「え、う、ウン！ な、ナルヒト、お、お空のアレ、貴方のケータイの声、だ、誰？ ダレなの？」

少し置いてけぼりになっていたドラ子、カイキの亡骸を未だ抱きしめて、雨に濡れている少女に遠山が声をかける。

「イカれた愉快な味方達、かな。おい！！ アレタ・アシユフィー  
ルド！ でか目ん玉！！」

《なに？！ ごめんなさい、今見た通り、少し忙しいのだけれど  
！》

「こいつらのいるところに雨降らすのやめてくれ！ 俺の友達が風邪をひく！」

《ーアハ！ アハハハハハ！ ちょっと、どうしょ、ミスタ  
ー・キリヤイバ！ あたし、貴方のこと嫌いじゃないわ。そうね、  
女の子の身体を冷やしたらいけないわ。……………大切なのね》

「ああ、2人ともな」

「な、ナルヒト？ も、もう、わたし、何がなんだ力……」

「ドラ子、聞いてくれ」

「え、エ、ウン……」

「今から少し、多分無茶をしてくる。でも絶対帰ってくるからよー、カイキと一緒にいてやってくれ。お前にしか頼めない」

「な、ナルヒト……」

「あ？」

「ダメ、行っちゃダメだ、ヨ。アレ、とても良くない、別の人が来

たんなら、その人たちに任せようヨ……！ わ、ワタシ、わかるの、ナルヒト、ナルヒトが、このままじゃ、遠くにー」

差し伸ばされる手、弱々しく、惑うように。

遠山は、それを見て

「ドラ子」

友達の名前を、竜の友の名前を呼ぶ。

「俺には必ずたどり着くべき光景がある。目標が、希望が、欲望<sup>ゆめ</sup>がある」

「ゆめ？」

「その光景にはよ、もうお前もいてくれないと困るんだ。だから、俺がお前を置いていくことはないよ。友達だろ、俺たち」

「アッ」

遠山が少女の手に、軽く握り拳を当てる。伸ばされた手を握りすることはしない、それを掴みもしない。

ただ、ポスンと差し伸ばされた手にグーパンチで返事をする。

「無茶はする。でも、帰る。約束だ、竜との約束だ、俺がこれから何をしようと、信じてほしい。絶対帰る」

命を賭けることになる。

一度、あの白蛇女、伝説の生物との殺し合いを経たからこそわかる予感。

身体の芯がふわふわして落ち着かない、自分が今、怖いのかどうかもわからなくなる妙な感覚。

「り、ゆっ……」

つぶやく少女に背を向ける。

少女が伸ばした手は、遠山に届くことはなかった。

「待たせた、いつでもOKだ」

腕のストレッチをかましつつ、遠山が頭上のデカイ目玉に声をかける。



《アハ、貴方、悪い男ね。OK、彼女たちの上の雨雲と風をどけたわ。これでいいかしら？ さて、覚悟はいいかしら？ 少し、歯応えのある相手だけれども》

言葉通り、屋上に降り注ぐ雨と風が嘘のようにやむ。恐るべき力だ、あの嵐を完全にアレタ・アシユフィールドは掌握している。

「あいよ。……ん？」

かた、かた。

気付けば、手が、膝が震えていた。身体が気付いてしまったらしい。

頭上にて繰り広げられる神話の戦いを。決して人が踏み入れるこ

となど出来ないその争いの恐ろしさを。

《……震えてる、やっぱり怖い?》

静かな声。その声に込められているのは期待と、不安と――

「武者震いだよ、ミス・ストームルーラー」

品定め。

今、試されている。それに気づいてしまったのなら、もう意地を張り、見栄で立つしかない。

狂人の真似とて大路をはしらば。

遠山鳴人が、前へ進む。震える膝に、震える手につぶやく。

ふざけるな、今更ついでこなくなるんなら切り捨てるぞ。

《！ さすが、ニホン人の探索者はそうこなくちゃ》

「でも、アイツ雲の上にいるんだよなー」

《ああ、それ。問題ないわ》

「え、え、う、おおおおおー!?!?」

ふわり、遠山の身体が空に浮かび上がる。

しゅる、しゅる、しゅる。風が逆巻く音、気付けば遠山のブーツに小さな竜巻、嵐がまとわりついていて。

『素敵な靴ね、空を走れるブーツなんて羨ましいわ』

浮かび上がった遠山が、空を踏みしめる。

足元の小さな嵐が、空気をつかみ、地面を踏んでいるのと同じく、空を歩ける。

「は、はっ！マジでアンタめちゃくちゃだな！　だけど、これで  
」！

頭上、気配、粘つく粘液をかけられたようなそれは、殺気。

《カンカンカンカン！！》

標識頭の異形が、踏み切りバー、真っ赤な肉片がたくさんこびりついた凶器を握り、羽を震わせて遠山へー

「キリヤイバ」

足に力を入れる、空を蹴り、空を飛ぶ。

信じられない跳躍と立体的な動きは全て嵐の助けによるものだ。

化け物を飛び越えた遠山、既に仕込みは終わっている。

《ガアン！？》

迎撃。

血を漏らしながら、地に落ちる異形。

眼下、異形の進路に合わせて、置いていたキリを作動する。

ふわりと跳ぶ遠山の足元で、異形がキリに刻まれてカトンボのよう  
うに地に落ちていく。

「ア……」  
「ヒヒヒヒヒヒ、」  
「こりゃあ、もしかすると死ななくて済むかもな  
ア……」

嵐の夕空に、遠山鳴人が立つ。嵐の絨毯を踏みしめて。

首元から引き抜く欠けたヤイバ、左手に。

腰ベルトから引き抜いた鉄のメイス、右手に。

《鳴人くん、鳴人くん、鳴人くん、鳴人くん！！ いいわ！ これは、試練なのね！ 良い！ 嵐を乗り越え、竜女を殺して、貴方も殺して！！ 完璧な貴方にしてあげる！！》

眼前、未だ遠く、雲の上に鎮座する女神が叫ぶ。

「ヒビヒビ、お仕置きの時間だぜ、名瀬エ！！ 頼む、アレタ・ア  
シュフィールド！ 甘えるぞ！ 合わせる！！」

シンパシー。

ある一定の領域、同じ分野、そして力量の優れた者同士のスタン  
ドプレーは、時にチームワークになり得る。

言葉にせずとも、既にこの2人は互いの力を一度見ている。

2人の連係には、それで充分だった。



《アハ、その言うこと！ いいわ、まとめて始末しましょう！》

遠山鳴人と、アレタ・アシユフィールド。

生きる世界は違えど、手段や、道のりは違えど、互いに彼と彼女は、その力にたどり着いている。

1人は、死を前にしたことで。

1人は、大敵を前にしたことで。

「遺物 霧散」

《遺物 レリック 顕現 スタート》

常に、その力は大いなる試練に立ち向かうために存在するのだから。

強欲と英雄よ、人の極地たるもの達よ。

「キリヤイバ」

《ストーム・ルーラー》

無限の勇氣と底のない欲望を供にして。霧と嵐を従えて。

「  
《<sup>拡大</sup>オーバー<sup>解釈</sup>ロード》  
」

さあ、黄泉路を越えてみよ。

95話 遠山鳴人とストームルーラー（後書き）

いつもありがとうございます。

選んで読んでもらって本当に嬉しいです。

96話 ヨミビラサカの戦い

風が強く吹いている。

嵐の空、雲が濁流のごとく流れ、雷鳴が太鼓のごとく腹に響いた。

遠山の癖っ毛が風に巻き上げられ、ボサボサに爆発していく。

5156

【DEADクエストの特殊ルートが解放されました】

【DEADクエスト ルート ” THE FIRE & ALEP  
F”】

【目標 アレタ・アシユフィールドと協力し、神話回生・ヨモツオ  
オカミを弱らせ、 只 の目覚めまで戦線を維持する】

《吹き飛ばされないでよ！ トオヤマナルヒト…!》

「アンタこそ、怪我すんなよ！ アレタ・アシュフィールド…!」

嵐の中、遠山が叫ぶ。

眼前、身体の半分が暗黒で出来ている女神を睨みつけてー

【ヨモツオオカミの”神性・ニホン”によるニホン人への特攻、及び絶対優位権が発動ー】

「っ?」

震え。

まただ。アレを直視すると身体から力が抜けていく。

女神の化け物がその様子を眺めて、ニヤリとー

「ー！！　へらへらしてんじゃねえぞ！！　名瀬エー！！」

【対抗ロール発動、”キリヤイバ”の侵食によりあなたの肉体には”神話耐性”が存在します。敵神性による絶対優位権に対抗可能です】

鼻から垂れる血、赤と白が入り混じる神性を帯びた血を垂らしながら遠山が叫ぶ。

もう、震えはない。

「へえ、鳴人くんは動けるんだ。フッフ、そこなくちゃ、真正面からあなたを捻り潰してあげるね！」

「やってみるや、入道雲ザブトン女」

一歩、前へ。それからまた、前へ。

進む、進む、進む。

空を走る快感、眼下に広がる自分が生きた街、初めてみる空からの光景。それを見て、少し笑う。



夏の夕空を、嵐の空を、遠山鳴人が、空を走る。

星の英雄の嵐が、彼のブーツに力を与えた。人間らしく、2本の足で、遠山鳴人が嵐の絨毯を踏みしめる。

《うひ、ぎわ、カンカンカン！！》

異形、空を埋め尽くすのはヨモツシコメ。

《吹き飛べ》

「切り刻め」

嵐が唸る、霧が広がる。互いに自然現象、もしくは限りなくそれに近い何かを支配し、使役する能力。

アレタ・アシュフィールドと、遠山鳴人。接点など僅かしかないこの両者の力はしかし、その規模こそ違えど似通う部分もあった。

故に。

《ひ、ギャツカン!?!》

《カンカンカンカン……………》

塵殺。

嵐が怒り猛る。

迫る異形の大群、空を舞うそれらが嵐の起こした大風に巻かれる。

そして風に囚われたものから順番に、身体中から紫色の血を吹き出し、内側なら切り刻まれていく。

「えっぐい力だな！」

《あなたも！》

嵐が、霧を、キリを運んでいるのだ。

ストームルーラーの力に、キリヤイバの力が混ぜ合わさる。

超攻撃範囲を誇るストームルーラーに、キリヤイバの殺傷能力が合わさる。

《借りるわよ、ミスターキリヤイバ》

その嵐の風、その嵐の雨、その嵐の雷。

その全てにキリのヤイバが混じり合う。

「おい、マジか、キリヤイバを取り込んで…… ヒヒ、やべえな、  
52番目の星」

大いなる嵐の力がキリを伴い、異形を殲滅していく。

遺物、互いに同じ力の形、故にそれは強弱の概念を共にする。

嵐は今、古いキリをすら飲み込み己のものとして。

《目標、前方！ セナ・ナゼ！ 彼女の全てを可能な限り殺し  
尽くす！ 目の前の全て！ Search & Destroy！  
！ 全て滅ぼすわ》

「ウィルコ」

進む、進む。空を埋め尽くす異形の群れを、遠山鳴人が空を踏み  
しめて進みきる。

《フフフ、フフフフフフフフ、鳴人くんが私を見ている、ナル  
ピが私だけを見てる！！ ああ！ ああ！ ずっと、ずっとこの時  
を待っていたのかも！》

「お前ほんとやべえ奴だな！！ 全然気付かんかったわ！」

《ああ！ ああ！ 私、私、生きててよかった！ 遠山鳴人！  
貴方は私の光、私の意味！ そんな貴方を殺して、もつともつと完  
璧に！ 今度こそ何者にも冒されない貴方に産んであげるから！》

勢いを増す異形の群れ、嵐がいくらその大風と雷で捻り潰しても  
後から後からどんどん湧いてくる。

《次から次へと！ 精が出ることね！ セナ・ナゼ！》

嵐の隙間を抜けて、異形が瞳に近づこうと。

「よつとー!!」

がきん!!

空を飛び走る遠山鳴人が、標識アタマの真上から降る。大上段に構えたメイスを勢いのまま振り下ろし、標識を砕いた。

「アレタ・アシュフィールド！ 目にゴミが入ろうとしてんぞ！」

《あら！ ありがとう！ 目が大きいのも考えものね》

嵐の勢いが増していく。

夏空、夕焼け、黒い雲が、稲光をたたえる。

《トオヤマナルヒト！ 好きに動いていいわ！ 合わせてあげる  
！》

嵐の瞳が遠山の動きに合わせて雨風雷を操る。

鼻に香るアスファルトが湿る匂い、むわりと顔を覆う湿気。

ゴロゴロと腹に響く遠雷遙か。

ああ、べつじつ。

「了解、じゃあお言葉に甘えて」

嵐の日は少し、ワクワクするのだろうか。

「さっくせん」



どん。

スターターピストルが鳴る音が遠山の頭の中で響いた。嵐を足元に、嵐を頭上に、稲光と横殴りに吹く雨の中、遠山鳴人が突っ走る。

《ギャヒ！》

《カカカン、カカカン！》

迫る異形、嵐の包囲殲滅を潜り抜けた何匹かが、遠山に向かう。

空をしかと踏みしめて、遠山がメイスを構える。

【ほ、本気でアレと殺し合うんか？ 正気じゃないのう…… モノを知らん言うんはほんに怖いわ…… やめとかんか？】

「やかましい！！ 人の身体に細工しといて今更何言ってるんだ、害悪お札マツチヨ！ 黙って力あ貸せ！」

流れる弱気なメッセージ、夢の中に棲まう奴の弱音を怒鳴り散らし、遠山が標識アタマを迎え打つ。

《フホホホホホホ！！》

「ッフ！！」

空を舞いながら掬い上げるように、血塗れの踏み切りバーを振るう標識アタマ。

遠山の靴、嵐を纏う靴底が空を蹴って飛ぶ。最低限の動き、大振

りの攻撃をすかされた標識アタマが、踏み切りバーを持ち直して。

「遅えよ」

バン！ 遠山が空を蹴る。嵐が空気を掴み、バネ仕掛けでも作動するかのよつにびゅんと遠山の身体が一気に跳ぶ。

《カカン！？》

「よう、いかした標識だな」

ガキン！！

無操作に振り下ろしたメイスが、標識アタマを凹ませる。

飛び出し注意！！　そう書かれた子供のデザインの標識がベコリと折れ曲がる。

「標識が動くなよ」

メイスで殴りつけた勢いを利用し、そのまま異形のアタマをくると回転しつつ飛び越える。

標識アタマがその動きに合わせて振り向ー

《カカン……？》

ずぶり。

それより先に、欠けたヤイバが異形のやせ細り浮き出た肋骨の隙間に差し込まれた。

「キリヤイバ・ワスプナイフ」

ぶびゃん!!

異形の標識アタマ、その胴体が膨らみ、一気に弾ける。その貧弱な身体は流し込まれたキリに少したりとも耐えることが出来なかった。

ぼきりと折れた血塗れの標識が、地に落ちる。

《フホホホホホ!! ホソホホ!》

もう1匹残っている。遠山の死角、真上から迫る標識アタマ。

《ッ、まずい! 上よ! 避けて!》

真つ逆さまに落ちてくる、それを既に遠山は把握していて。

「借・り・る・ぞ、ミス・ス・ト・ーム・ル・ー・ラー」

ぐねり。

《え？》

嵐が揺らぐ。大風、雨、雷、それらの一部が今、はっきりと、遠山鳴人の元へ集う。

嵐の一部が、ス・ト・ーム・ル・ー・ラーの統制を離れた。

ば、ごオオウー!!

横薙ぎに大砲のような風が吹き殴る。

《フホホホホ…… 府ビャユ!?》

きりもみしながら吹き飛ぶ異形、もがき苦しんだかと思えば、パ  
ンツと弾けてバラバラに。

《あたしじゃない……うそ…… あなた、まさか、あたしの嵐を  
……》

「お互い様だぜ、アレタ・アシユフィールド」

出来ると思ったから、やった。

遺物とはつまり、そういうものだ。瞼を閉じて瞬きするように、知らずのうちに息を吸って吐くように。

遺物所有者にとって、大事なはその感覚。嵐を操るのも、霧を従えるのも全て彼らにとっては呼吸をするのと同じこと。

アレタ・アシユフィールドが嵐にキリを混じり合わせて使役したのと同じく、遠山鳴人は、キリを嵐に練り合わせて、無理矢理に動かした。

《あなたの、遺物、それまさか號級……》

「知らん！ 組合にや秘密にしていたからなア！ 色々薬とか飲まされそうで怖かったからよお！」



遠山の周囲に、小さな嵐がぐねり、ぐねりと集う。アレタが使役する嵐とは違い、雨や風の動きがおかしい。

まるで意思を持つかのように、白いキリの混ざる風雨がとぐろを巻く。

「ひ、ヒヒヒ、ヒヒヒ…… ああ、やべ、なんか少し楽しくなってきたぞ」

キリが、嵐を操る。

本来自然そのままに荒れ狂う嵐が、白いキリにその動きを無理矢理動かされる。

ピロン。

【遺物・キリヤイバの侵食段階が、”お前の血は白色だ”まで進行しています。その為、キリの濃度と重さがオリジナルの半分ほどまで上昇しています。周囲の気体、液体に強い影響を与えることが可能です】

濃いキリは、雨と風を蝕み、それを操る。夕子の悪い多くの寄生虫が宿主を都合よく操作するのと同じように。

《ほんと、ニホン人の探索者って……》

『ば、かな。アレタのストームルーラーに、干渉しているのか？  
そんな遺物、どの国の號級遺物だって不可能だった筈だ！』

どこか呆れたようなアレタの声、端末から響く慄くソフィの声。

それを聞き流し、遠山鳴人が空を進む。

「今なら、出来る、俺には出来る」

大いなる力に触れ、それを操る興奮が、黄泉路を進む恐怖を容易に塗りつぶしていく。

酒に酔った酔っ払いが恐れ知らずになるように、探索者は大いなる力とそれを振るう悦びに、戦いに酔うのだ。

「遺物・拡大解釈」

イメージがある。実感がある。

ならば、あとは実行するだけだ。

「魑魅魍魎狭霧山野絵巻物語・嵐夜」

どろり、どろどろり。

【ほ、ほほほ、ほほ、ほほ！！ ああ、もう！ こつなりややけよ！  
！ ああ、儂、器の候補間違えたかも知れんのう！ まさか、国産  
みの祖母君に弓引くことに、なるうとは！！】

どろどろ。

嵐の夕空、覆つはどんよりと、渦巻く黒闇。

白いキリがそれに昇り、混じっていく。同時に、どろり。ねんぞろり。

遠山鳴人の周りに蠢く嵐雲から、何かが這い寄り出る。

《ひ、ひひひ》

《ひ、ひひひひひひ》

《びびびびびび》

《ひひひひひひ》

《びびびびび》

【うえ、うええ、祖母君の眷属、腐ちよる、うええ、まっずつうう、そりゃ祖父君も全力逃走かますわい】

蠢くキリの嵐から這い出るのは異形。先ほど遠山が殺し、そしてアレタの嵐が殲滅し続ける標識アタマの異形が、顕れる。

「材料は腐るほどある。目には目を、大量の化け物には、大量の化け物を」

キリヤイバによる魂の保存とその使役。それはついに神話の存在が生み出したものにすらその牙を届かせた。

5181

《ワオ…… これ、少しひどい絵面ね》

ぼとり、ぼとり。

新たにキリヤイバが生み出す標識アタマたち、名瀬が使役する元の奴らと違い、一様にみな檻褻キレを纏っている。

ぐち、ぐち。

キリヤイバの生み出す標識アタマ、皆同じく”進め”と書かれた標識のデザイン。

その頭がぐねぐねと蠢き、一斉に姿を変える。それは遠山の意思とは関係ない。

【”神話攻略” 条件達成 キリヤイバにより異界ヨミヒラサカの異形を使役する】

【遺物拡大解釈による神話攻略が発生します】

【”霧” ほほほ、祖母君のシコメどもならば、この形が最適じゃろうて。祖父君よ！ 貴殿の機転、見習わせてもらおうぞ！】

キリヤイバの意思による魂の変形。

それにより、キリが産んだ異形たちのアタマが変化していく。

《ひひひひもー》

《ひひひ、も、もももも》

《もひももひもももももひ》

もも、モモ、桃だ。

遠山が生み出した異形たちのアタマが変形し、それはピンクのツヤツヤした桃の形に変わっていく。



羽を生やした桃の異形たちが、遠山の周りに集い、膝をついた。

《なに、それ……》

嵐の瞳、アレタ・アシュフィールドの声はシンプルに引いていて。

「進め、食い殺せ」

号令。

桃の化け物が、羽をはためかせ飛び立ち、一斉に名瀬の異形たちに襲いかかる。

《フホホホホホホ、オゲ！？》

《もももももももも》

ぶちん。

桃アタマがぱくりと口を広げる、びっしりと牙の生えたその口で  
近くの標識アタマ達を喰らい始めた。

《ももももももも！》

《ふへ、ぼじー！？》

数こそ、桃の化け物の方が少ないがその力は明らかに桃の方が強い。

嵐の力も備えた桃の化け物が風を操り、逃げ惑う標識アタマに容易に追いつき、その身体を食い尽くす。

嵐の夕空、標識アタマを喰らう桃アタマ。

『……アレタ、ニホン人の探索者ってゲテモノじゃないとなれないものなのかい？』

その様子を視認できているらしいソフィの声が端末から響いた。

《……ほら、ガラパゴス化が進みやすいじゃない、島国って》

フォローか何かよくわからない返答を嵐が返す。

「進行問題なし！！ ヨシ！！ 目標、前方！ ついてこいよ！  
ストームルーラー！！」

そんなアメリカ人たちの眩きを全て無視して、ノリノリの遠山が叫んで進む。

地獄のような光景を遠山鳴人が振り回す。嵐の力をキリにて引きずり回して無理矢理使役する。

嵐と桃をかくぐり、迫る化け物をメイスとキリと大風を利用して殺し尽くす。

嵐すら、キリが操り使役する。欠けたヤイバをタクトのように振

るえば、キリが混ざり込んだ嵐が巨大な手のように横薙ぎに異形を薙ぎ払い、切り刻んでいく。

嵐の夕。

ワクワクが止まらない、止まってなんかいられない。身体中がどこかへ吹き飛んでしまいそうな衝動。

「ここではないどこかへ、次へ、見たことない所へ、前へ、先へ、前へ。」

夏休み初日、台風の中を駆けるガキのような顔で、遠山が走り続ける。

「ひ、ヒヒヒヒヒヒ、ヒヒヒヒヒヒ！ やべ、やべ、やべえ！ たのしい、たのしい、俺アたのしい！ なんだ、これ！ こんなことまでできんのか！ キリヤイバ！」

明らかに遠山鳴人の戦闘限界を超えた力。

そう、今、この瞬間、遠山は超えつつある。

ミックスアップ。ボクシングの用語。

試合中に本来の実力を遥かに超え、互いに強くなっていく一種のゾーンに近い状態。

アレタ・アシュフィールドという遺物所有者の到達点。遠山と似た力、その最終形態。

それを目の当たりにし、肩を並べて戦うという環境。それが無理矢理に遠山鳴人を次の段階へと引き上げていく。

準備はあった。戦いに備え、鍛え、殺し続けてきた。

土壌はあつた。何度も死にかけ、しかしそれをねじ伏せて生き抜いてきた。

予感もあつた。遺物の新たなる力の領域。そこに踏み入っていた。

手をかけていた領域の深奥を、世界すら跨ぐ大いなる嵐を間近に感じたことで、遠山鳴人は探索者としての限界を超えつつある。

「名瀬エ！　これならためえを殺せそうだぜえ！」

嵐とキリを従えて、遠山鳴人が目標を見つめる。遙か高き場所、神話をすら再生させた古い時代の仲間を。

《ヨモツシコメを…… 殺したヨモツシコメを、鳴人くんが産んだ……？ ああ、そんなのもう、そんな、そんなの、そんなの》

だが、それだけで状況が傾くわけではない。遠山が次の段階へ進んだとて、目の前の大敵が弱くなるわけではないのだ。

その歪んだ愛、ただそれだけを原動力に神話をすらその身で再現した特異個体。

歪な人間の可能性そのものに愛された女が、ねちやりと笑う。

《婚姻……だよね、鳴人くん》

それが、名瀬瀬奈という女だ。



「ッ、また量が増えた！！ トオヤマナルヒト！ 敵の尖兵がまた来る！ 先ほどの量の、倍……？」

通信の声に、明らかな狼狽が混じる。

頭上、だいぶ進んだとはいえ、未だ遠く、高い入道雲。

「……桃、足りるか？」

《ああ、なるほど。そうやるのね》

だが、この場にはこの女がいる。

現代世界において並ぶ者なき一番星。

もし、この世界の全てが物語ならば、明らかに”主人公”の資格たりえる女が。

《OK、だいたいわかったわ》

「…………アレタ・アシユフィールド？」

《ディテールはイメージを中心に。材料は魂…………？ うーん、よくわからないけどエネルギーみたいなものかしら。うん、それならトウスクのみんなが言ってた話の通りね、無理矢理に捕まえて嵐を纏わせて………… いえ、魂がエネルギーなら、あたしのが一番効率

がいいか。うーん、ストームルーラーを飛ばすのと同じ要領でいけ  
そう、か》

「お、おい、何を」

《あら、ごめんなさい。ーアイデアを借りるわ。ああ、アレよ、  
貴方も遺物所有者ならわかるわよね？ アハ》

嵐の目が笑った。

《出来ると思った。だからやった。と言っせしよ》

「待て、だからー あ？」

嵐の目、それが厚い雲に覆われている。

ぴかり、ひかり。煌めく稲妻を握りしめた拳のような雲。

それが、一際強く輝いて。

《ストームルーラー・モデル・アレタ・アシュフィールド》

しおっしー…

風が、遠山の真横に落ちた。

あまりの強さにキリが吹き飛ばされて視界が真白に染まる。

「ハアイ、ミスター・キリヤイバ。どんな状況？」

「マジか」

嵐が落ちた場所に、ソレはいた。

そこには嵐がいた。そこには雨と雲と雷がいた。

ヒトガタの嵐がいた。

人間のカタチ、その身体は全て嵐で形作られている。顔の表情は雲と雷が渦巻いていてわからない。

だが、すらりとした手足に、きゅっと絞られたウエスト。

女の体をした嵐が、遠山に向かってヒラヒラと手を振っている。

「……自信なくすわー」

一目見て、遠山には彼女がなにをしたのか理解出来た。

キリヤイバの拡大解釈、魂の使役のアレンジ。

ストームルーラーにアレタ・アシユフィールドという情報を付与、そのままそれを人間の形に変化させたのだ。

遺物と人間のハイミックス。おそらくソレは人が神に成るよりも、もっと手を出してはならない領域ー

いわば、嵐の写し身。

「あら？ そう？ あなた、かなり凄い方だと思うわよ。ストームルーラーを勝手に使われるなんて思っても見なかったもの」

そんなことは知らないと言うように、嵐のヒトガタがけらけらと笑う。

いや、顔のパーツがない為表情がわからないのだが、それでも彼女が笑っているのはわかる。

《やめて、やめて、やめて。私の前で他の女とそんな風にお互いの実力を認めた感じで碎けた感じにならないで、違う違う違う違う、鳴人くんはそんなんじゃないの》

女神の化け物のねっとりとした声が、世界に広がって。

「アハ、彼の知らない一面を見て良かったじゃない。女は役者、とか言うけども、男だってそれなりに色々な面を待つものよ?」

《鳴人くんを、貴女が語るなあああああ》

「うわ、またすげえ量……」

アレタの言葉に反応した女神の化け物が叫ぶ。ワラワラと数を増やしていく標識アタマの異形たち。



絶望の光景、しかし、まだ嵐はうねり、風は吹き続ける。

「いい感じね。それだけ力を使えばそろそろガス欠になるでしょ。  
ミスターキリヤイバ、まだいけるわよね？」

「ヒヒ、ああ、エンジンかかってきたところだよ」

その光景に屈することはない。

アレタの問いかけに、遠山が笑う。

「OK!! さあ、嵐の中に入ったわ!!」

嵐のヒトガタ、アレタ・アシユフィールドの写し身の両手に嵐が逆巻く。

二振りの棒、いや、投槍を構えて。

「好きに動けや！ 合・わ・せ・て・や・る・よ・」

「アハ、ナーマァーイキ！ ええ、じゃあ、お言葉に甘えて」

稲光よりも、速く。

嵐のヒトガタが異形の群れを貫く。ソレが空を駆けて、飛び跳ねる。手に持った嵐の投げ槍を振るうたび、異形が砕けて、飛び散っていく。

《な、速……！？》

屠る異形を足場にして、跳ぶ跳ぶ、跳ぶ。

異形が塊となり、その進行を止めようとー

「おっと、鴨がネギしょってきたな」

星の英雄の速度。遠山はそれに合わせる。

異形たちの数を頼ったその戦法は遠山鳴人のキリの餌食にしかない。

《ギャヒ！ カカカカン……》

キリを含んだ嵐風が吹き上がる、またたくまに、塊となった異形達は薙ぎ払われ、切り刻まれる。

バラバラになり落ちていく異形達、嵐とキリが運ぶ死の怒涛を嵐の写し身が登り切りー

「ハイ、こんにちは、セナ・ナゼ。あたしから逃げられると思っ  
た？」

《……！ しつこい女は嫌われるよ！》

ついに、アレタ・アシユフィールドと名瀬瀬奈の視線が同じ位置に。

巨大な女神の化け物の顔の位置まで、登りきる。

「鏡と話す趣味なのかしら？ 白雪姫に出てきそっね、貴女！」

嵐の写し身が、投槍を振りかぶる。

《あ、アアアアア！！》

名瀬が振るう巨大な手の薙ぎ払い、それをくるりと当たり前のように空を駆ける写し身が飛び跳ねながら、上り、避けて。

「ストームルーラー!!」

寸分たがわず。

嵐の槍が投げ入れらる。嵐の写し身から放たれた風と雷の投槍は吸い込まれるように女神の化け物の喉と胸に突き刺さりー

「アッ、ぐ、フッ ……ふふふ、でも、足りないわ、それだけじゃあ」

小さな悲鳴。そしてすぐさま奮われる女神の化け物の巨大な拳。

「チッ」

アレタの写し身が舌打ち。その巨大さ故に今の位置からは避けられないとー

「ふんぐおおおおー！ どっこいせええええ！」

ねづり。

白いきりに無理やり操られた嵐雲が、その大拳を受け止める。弾けて、歪みながらも粘性のあるそれが女神の拳を受け流した。弾

「アレタ・アシュフィールド！！ 挑発しといて見通しが甘え！ 接近すんなら一撃で殺す気でやれや！」

「……ッ、正論！」

「素直か！」

空中で身を翻し、体勢を取り戻すアレタの写し身。まだ余裕はありそうだが、少しづつ動きが悪くなっている。

《……………》

そんな2人を尻目に、女神の化け物が拳を見つめる。

遠山がなんとか逸らし、ついでに切り刻んでおいた拳を、女神がじっと見つめていて。

《ああ、ああ！ 鳴人くんが！ 鳴人くんが傷をつけてくれた！



私だけの傷！ ナルピが私だけにくれた傷！ 鳴人くんが私を見てる！！ 私だけを！ 海城さんでもなく、私だけを！ ふ、フフ、フフフもつと、もつと、もつと！！ もつとおおおおおおのおおお！！」

目を飛び出させ、暗黒をこぼりとあぶく立たせて歓喜の声を上げる化物。

「ちょっと！ ミスターキリヤイバ！ あなたが奮闘すればするほど、彼女なんか興奮してるんだけども！」

「変態なんだろ！ 仕方ない！」

「救いようがないわね！」

救いようがない女神の化け物がゆっくりと緩慢な動きで両手を振り上げる。

じわり、じわり、世界が血を流しているかのように暗黒が空間から滲み出る。

そこから、こぼれ出てくるのは矛。

極大の大矛が女神の化け物の掲げた両手に収まっていく。

《フッフ、フッフッフッフッフ！》

びり、びり。

見ているだけで電気風呂に入った時と同じ感覚。身体がこわばり、痺れていく。

「うわ、なんかでかいのくるぞ、やべえ！」

どっしする？ 避ける？ 受け止める？

遠山がその思いつき、誰もが無理そうだと判断しているうちに。

「ノープロブレム！」

嵐がさらに勢いを増す。

頭上に座す大きな嵐の瞳。嵐の目が、裂けてしまつのではないか

とばかりに見開かれる。

「うわっと、おー!」

あまりの風、雨、雷。遠山がなんとかその場に踏み止まって。

「さて、そろそろあまりこっちも余裕がなくなってきたわ、終わらせましょう」

英雄が嵐の中、笑う。顔がないので雰囲気ではかわからないけども。

「あぶ! ちよ、アレタ・アシユフィールド! 風、強いつて!

くそ！ 周りの雑魚は任せろ！ 決めろよ、頼むから！」

「ええ、ありがとう。巻き添え喰らわないように気をつけて。終わらせるから」

たんと、嵐の写し身が、嵐の瞳に吸い込まれていくように飛び上がる。

《フフフフフ！！ よくやる、よくやるよ！ アレタ・アシユ フィールド！ そんな無茶苦茶で！ 遺物だけを無理矢理こちらに飛ばしてるんだもの！ そろそろ疲れてきたんじゃない！？》

「いいえ！ あいにく！ 貴女をこれからぶちのめすと思えば、不思議ね！ ワクワクしてそれどころじゃないの！」

ぐぐっと、高度を上げる嵐の瞳と写し身。

遙か空、入道雲よりも高い位置。嵐達がそれに追従するように集っていく。

《フフフ、フフフ！！ ああ、そう！ なら、やってみればいい  
！！ 遺物・建国》

見上げるは女神の化け物。

国産みの矛を片手に持ち、肩を引き絞り、振りかぶる。

投擲。その矛の切先は上を睨んで。

「アハ！  
レリック・スタート  
遺物・顕現

見下ろすは星の英雄、嵐の支配者。

この世全ての嵐の概念、星の天体活動そのものを掲げ、集め、歪めて、変えていく。嵐の大槍が雷鳴を伴い形成されて。

投擲。その嵐の大槍の切先は下を狙って。

《アメノウボコ》

「ストームルーラー」

同時に射出された暴力。

分厚い雲がかき消され、有象無象の異形達が消し飛ぶ。

音すら、発生せず。

光、明滅、暗い、明るい。

なにが起こったかとも理解できない刹那が終わる。そして次の瞬間、遠山の目に映ったのはその暴力が振われた結果だけ。

ただ、互いに振るった暴力はその爪痕を刻む。



《フッフ、フッフ、化け物ね、あなた……》

嵐の大槍が、入道雲に座る女神の化け物の半身を消しとばした。

食われたかのように抉られた半身、ぽっかりと穴が空き、入道雲がドロドロと崩れていく。

嵐の大槍が、たしかに女神の化け物を脅かし。

「あ、ハ、やって、くれる……わね」

国産みの矛が、嵐の瞳を貫いた。

真っ直ぐ正中線を貫く矛、見開かれた瞳から雷や雨が、涙の如く漏れ落ち続ける。

国産みの矛が、この世全ての嵐に届いた。

「おわ、やべえ」

相打ち。

スケールの違う光景に、遠山はぼやくことしか出来ない。

「はっ、はっ、はっ…… しん、っど」

すっつと、遠山の隣に嵐の写し身が降りてくる。なんとなく先ほどよりも輪郭がぼやけてきているような。

『よくやった、アレタ。トオヤマナルヒト。こちらからも彼女の様子が確認できる、あれほど痛めつけられそろそろ奴が目覚める筈だ』

「ほんと、彼、いつもは寝起きがいいのに。今日はずいぶんとお寝坊さんだわ」

アレフチームの2人が声を交わす。

消耗しつつも、どこかやり切った雰囲気。彼女達は確信しているらしい。これで終わりだと。

名瀬に食われている”アレフチームのバカ”とやらの帰還を信じているのだ。

「目覚める…… アレタ・アシユフィールド、なあ、この作戦の前  
提つてよ、要はアレに食われた奴が自力で  
脱出するのを待つってことだよな」

だが、ここに1人。遠山だけは彼女達と気持ちを共有することが  
出来なかった。

半身が消し飛んでいる女神の化け物を見つめる。ピクリとも動か  
ないそいつ、なのになにも安心出来ない。

「ええ、そうよ。食われたバカのバイタルは正常値を示してる。そ  
ろそろ出てくる頃合いだと思っけど」

星の英雄の写し身は、ため息混じりに笑っている。

ああ、やはり、遠山だけはどうしても笑えない。

【目標 アレタ・アシュフィールドと協力し、神話回生・ヨモツオ  
オカミを弱らせ、 只の目覚めまで戦線を維持する】

何かがおかしい。

女神の化け物、名瀬瀬奈は沈黙。しかし、それ以外なにも動きが  
ない。

もちろん、アレフチームのバカとやらも帰ってこない。

何より、引つかかるのはあの藤堂が、日下部が。

遠山鳴人が知るあの女が、本当にそんな無策で、アレフチームと  
いう強大な存在と敵対するだろうか？

藤堂、日下部、つまりは名瀬。

その女をよく知る遠山だからこそ、感じる違和感。

それがぼろりと、言葉に出る。

アレフチームが期待していること、名瀬を弱らせ、体内に囚われ  
ているバカがそこから自力で帰還して勝利。

ある意味の他力本願。

そんなことで倒せるような女だっただろうか。

遠山鳴人は名瀬のことは知っているが、アレフチームのバカのこととはよく知らない。

故に気付く、考えてしまうのだ。

アレフチームのバカが帰って来れば、勝てる。

アレフチームのバカは必ず帰ってくる。アレタ・アシユフィールドとソフィ・M・クラークには言葉の節々に、そのバカへの大きな信頼が見て取れる。

だが、もしもそれが間違えていたとしたら？

本当に、その期待は――

「……それ、さ。ほんとに前提合ってるのか？」

ただし認識だったのだろうか。

「え？」

《フフフフフフフ、鳴人くんの、せーいかああああい》

世界が揺れた。

夕空の輪郭が崩れてしまつのではないかと錯覚するばかりの大音量。



嵐が喚んだ分厚い黒い雲達が掻き消され、夕空が赤々と。

「ッ!」

「うおっと!」

大きな風に吹き飛ばされながらも、遠山とアレタが空に踏ん張る。

『……バカな、まだ、まだ目覚めないのか!? この前、神秘種タ  
イタンに丸呑みにされた時は既に内側から食い破ってー』

「ヒト? なんて…… なんて、起きないの? ねえ!! 聞

こえてる！？ タ ……！！」

「落ち着け！ アレタ・アシユフィールド！ クソ！ ほんと、嫌な予感するのはどうしてー」

間違えていた。

初めから、アレフチームはその作戦の前提を勘違いしていたのだらう。

【クエストキャンセル 攻略不可】

いやな、メッセージが遠山の視界流れ出す。

【目標設定失敗 神話回生・ヨモツオオカミの”神性”により、”ニホン人”への特攻、および、ニホン由来の存在全てへの特攻が発動しています】

【 只 の自力帰還は不可能です】

「ーーこんなにも当たるもんかね！」

《フフ、隙あり》

女神の化け物が残った片腕で印を結ぶ。

その瞬間、ワラワラとウジムシのように異形達が女神の元に集散し、その体に取り込まれてゆく。

虫の集団行動を眺めているような気分。あっという間に、嵐が消  
しとばした女神の半身は元通りに。

「あっ………」

『アレタ！？ アレタ！！？ クソ！ 意識があっち側に飛んでい  
るのか……！ トオヤマナルヒト、応答しておくれ！ 何が、何が  
あつた！』

「……やられた」

『なに？』

遠山がソフィの通信に返事を。

「アレフチーム！ あんたらの作戦、読まれてんぞ！ 名瀬に！！」

その叫びを愉しむように、女神の化け物は口角を釣り上げた。

《アレフチーム、あなた達を見てたよ》

「名瀬……」

《進むものたち、試練を乗り越えるものたち、神殺しの探索者、  
神秘狩りの先頭。でも、少し活躍しすぎた。あなた達は多く、勝ち  
すぎた》

「なん、ですって……」

《パターンだよ、アレタ・アシユフィールド。あなた達にはいつしか重なる戦いの連続でパターンが生まれてしまったの》

女神の化け物の名瀬の顔をしている部分がどこまでも楽しそうに笑う。腕を組み替えて、サラサラと笑う。

《アレタ・アシユフィールド、ソフィ・M・クラークによる純粹な力のゴリ押し。それでダメならグレン・ウォーカーの遊撃と爆発力。そして、それでもダメなら、人が盤面自体をなんか意味わからないうちに訳わかんないことをしてめちやくちやにしていく、それが貴女達のパターンになってたの》

「貴女に何がわかって」

「……いい、今はしゃべらせておけ」

動こうとするアレタを制し、遠山は思考を回し始める。

《一度そのパターンを掴めば、攻略方法は見えて来る。あなた達、アレフチームの勝利の鍵は だった。敗北をひっくり返す、盤面をめちゃくちやにするのはいつも彼。それなら彼さえ処理して、後は普通に勝てる道筋をつければ、フフ、この通り》

動揺しているアレフチームとは裏腹に、遠山の脳みそは冷え始めていた。

名瀬はやはり、本気でアレフチームへの対策を固めていたのだ。

《私はね、本気なの。私の願いを叶える為に本気で考えた。どっちのプラン、貴女を食べた場合のプランと彼を食べた場合のプラン、両方を用意していたの。どちらも本命。個人的には、鳴人くん以外の男を食べたくなかったから、貴女が欲しかったんだけどね》

遠山はその言葉に耳を傾ける。

ペラペラとよく喋るのは、名瀬の本質か、それとも、” 日下部”  
だった頃の名残か。

《今の状況はプラン通り。 人の捕食と吸収、そして封印は  
完璧。 はっきり言ってあげるね。 貴女達の狙いなんて、意味がない  
の。 いくら私を消耗させようと、無理。 彼が自分で目覚めることは  
ない》

そう、名瀬が” 藤堂” だった時、似たようなことをしていた。

何かを計画立てる時はメインとサブ、両方の計画を用意して、互  
いに互いを補強するような段取りを組むのがうまかった。



「くだらない嘘を!!」

《クスクス、嘘じゃないよ。それは今の状況がそれを表している。ソフィ・M・クラーク、見てるんだよね。貴女の見立てでは、私がここまで弱れば彼が自分で目覚めると思ったんでしょ？ ふ、フフ、フ、フ、フ、フ》

落ち着いて淡々と話す名瀬。散発的に感情を散らすアレタ。

『アレタ、落ち着くんだ。残念だが、事実、あのバカが未だ目覚めないということは一ー もつ……』

どちらに余裕があるか、痛々しいほどはつきりしてしまう。

「嘘よ！……！」

英雄の叫び。

けれど、それはあまりにも。

「うそ！ 嘘よ！ 彼が、あの大バカがこの程度のことです死ぬわけではない！ バイタルだって生存を示してる！ 彼はきつと、あの中にいて、今も生きてる！！ 絶対、絶対、そうに、きまってる……！」

「アレタ・アシュフィールド……！」

あまりにも力がなく。

《フッフ、ええ、ええ、そうね。生きてる……でも、ああ、彼、とても可哀想……》

「……マジで全部治しやがった」

《そう、そうよ。治るの。でもこの治るのも無限じゃない。フフフ、人と同じ傷を治すのには栄養がいるよね》

再生した身体を撫でながら、女神の化け物がより一層笑みを深めて。

「……っ、まさか」

《うーん、美味しい。灼熱のようで、涼しげで、香ばしくて、甘い。ああ、アレタ・アシユフィールド。貴女の男の味、悪くないよ。もちろん、栄養としてね》

「――」

それはわかりやすい挑発だ。だがそれは効果覲面。

アレタ・アシュフィールドの写し身、ストームルーラーで象った  
ヒトガタの見えない顔が凍りつくのがわかった。

《貴女は、勘違いしていた。人をまるで無敵で不死身のヒ  
ーローか何かだと思っていたんじゃない？ フフ、ああ、おかしい。  
自らの理想の押し付け、安易な偶像化、誰かに幻想を抱くなんて…  
… フフフフフ、よりもよって、貴女が》

「……………違う、あた、しは」

だが、それ以上アレタ・アシュフィールドから言葉は出なかった。  
それは皮肉にも名瀬の言葉への返答となる。

《この人の狙いは失敗したの。今まではうまくいったけど、今回はダメだった。貴女達はこの人を失ったの。もう帰ってはこないんだよ、ふ、フフフフフフフ、ね、結構きついでしょ？ 無敵で不死身で必ず未来に辿り着くと思っていたヒトがもういないって気づくのは。私もそうだったから、気持ちわかるよ》

名瀬が、女神の化け物がにんまりと笑う。

膝を折って、動かない英雄の写し身を見下ろして、つぶやく。

《ああ、それともあれかな。フフフ、山 が目覚めない理由って、あなたの隣より、私のナカの方が気に入ったから、とかだったりして》

女が、アレタ・アシユフィールドの女の部分を突き刺した。

「殺す」

嵐が、唸り、雷が弾けた。

「あ、待て！！ 無策でいくな！ ああ！ もう、これだから思い込みが強い奴は！！！」

遠山が止めた時にはもう、嵐のヒトガタ、アレタ・アシユフィー  
ルドの姿をした嵐は空を駆けていて。

「いいわ、貴女を殺して、バラバラにして無理矢理彼を引き摺り出す」

速い、速い、速すぎる。

数多の異形を薙ぎ飛ばし、穿ち、貫き、あっという間に入道雲、女神の化け物と同じ目線の場所まで、駆け上がる。

だが、それは速すぎた。合図もなしに飛び出したその動きに、遠山鳴人のキリによる援護は間に合わない。

《フフ、こっ、かなー》

女神の化け物が微笑んだまま、自分の喉に手を当てて。

「返して、あたしのー！ー！」

アレタの右腕に、巨大な嵐の槍が瞬時に現れる、それを振りかざして――

《”アシユフィールド”》

「あ  
「

動き、アレタとまる。

男の声。

女神の化け物から、男の声が響いた。遠山の声ではない。遠山はその声を知らない。



だが、アレタはそれを、自分の名前を呼ぶその声を知りすぎていて。

「はい、また隙あり」

巨大な拳が振り下ろされる。今度は、キリの援護はなく。

「ガッ」

そのまま直撃。

蠅が吹き飛ばされるのと同じように、アレタ・アシユフィールドの写し身は地面に真っ逆さま。

大きな土埃と、瓦礫の山を築き、英雄の写し身は帰ってこない。

「アレタ!? アレタ!!! クソ、完全に、完全に手のひらの上…  
… アレタ! 起きろ! 追撃が来る!」

《フフフフフフフフ、フフフ!!! 脆い! 脆いよ、アレフチ  
ーム! ジョーカーを失った貴女達の何と脆いことか! 待ってて  
ね、待っててね、鳴人くん! これはあなたのための祝祭! 再誕  
祭! 嵐と星を生贄に、あなたを殺して産み直すから! ひとつに  
なるの! 完璧なあなたに! ああ、愛なんて必要なくひとりで進  
むあなたに戻してあげるから!》

危機。

嵐は神に貫かれ、英雄の似姿は地面に吹き飛ばされて叩きつけら  
れる。

女神の化け物は意気軒高。周囲の異形は増えるばかり、少しづつ、少しづつ、嵐の援護が薄くなり、桃アタマの化け物達が数に押されて殺され始めている。

遠山鳴人が、空の上にしゃがみ込む。息を吐いた。

アテが外れた。進めていたはずの盤面はしかし、最初から詰んでいた。

頼みの援軍たちも、打つ手なし。英雄は神に打ち落とされ、嵐は  
いずれ止むだろう。

危機、劣勢、死、敗北。遠山鳴人の道はここで潰えてしまうかも  
知れない。

そう、つまりー

【技能 戦闘思考が発動します】

「いつものことだ」

遠山鳴人が手のひらを合わせて思考を沈める。どんな状況だろうと、今更この男が考えることをやめるのはありえない。

沈む、沈む、沈む。

ほんの少しのきっかけで傾く戦況。嵐の瞳は大矛で貫かれ、アレタ・アシュフィールドのヒトガタは吹き飛ばされて、瓦礫の下。

アレフチームが混乱に陥る中、遠山鳴人だけが冷たい思考を回していく。

「……落ち着け」

劣勢。遺物所有者2人をもつてしてもやはり相手は神話体系の頂点。簡単に殺せる相手ではない。

「考える」

まだ、靴底には嵐が纏う。空の嵐は未だ健在。ならば、アレタ・アシュフィールドはまだ大丈夫。

「状況は」

己に問いかける。劣勢、それはなぜか？

「そう、作戦の前提が間違えていたからだ。アレフチームの頼みの綱、食われたバカは自力では帰ってこない」

そこが肝だ。

アレタ・アシュフィールドは、ソフィ・M・クラークはそこを讀み違えた。

おそらくそれは、名瀬瀨奈の言う通りなのだ。そのバカに、託しすぎた、そのバカの活躍に目を眩ませていたのだろう。

「この戦いには足りないものがある」

言葉に出して、思考を加速。

前提が、つまり最初の勝利条件を見直す必要がある。

《ボボボボボボ！！》

《かかかかん！！ カカン！》

《ギユば、きやば、かかかかん！！》

異形の数がどんどん増える。この異界を埋め尽くしてしまわんとばかりに。

「チツ、増えてきたか。アレタ・アシユフィールド!! 起きろ！  
寝てる場合じゃねえ！」

反応はない。

だが、遠山は知っている。

52番目の星。あの世界で指定探索者の頂点に数えられるということが、なにを意味するのかを。

現代の英雄と呼ばれるものが、この程度で終わるわけがないという  
ことを。

「お前、このままじゃ負け犬だぞ、名瀬の言う通りよー、その食われたバカまとめてとんだ間抜けだぜ」



空気が破裂した音。

一際大きな雷鳴が轟き、瓦礫に向けて大雷が落ちる。

地より天に向けて吹き上がる大風、瓦礫がそれに巻き上げられ、それと一緒に嵐のヒトガタが空に舞い戻る。

「ーひどいモーニングコールね、でも、ありがとう」

「……まだいけるか？」

「見ての通り、元気満タンよ」

遠山の隣に戻ってきた嵐の写し身。

遠山はそれに指示を出す。

「……時間を稼げるか？ 勝ち方を考える」

「あなたが？ ……信じていいの？」

「信じるとは言わねえ。それを言うには関係が短い。」

「じゃあ、どついたらいいかしら？」

「俺に賭ける」

短い言葉。

「……アハ、土壇場で妙に説得力あること言うのも、二ホン人の探索者の特徴かしら？ ……OK、わかった。飲み込まれたまま出てこないおバカさんに、少しだけ似てるあなたに賭けるわ」

「……微妙に縁起悪いな」

遠山の言葉に、ヒラヒラと手を振って答える写し身。

ひゅっと、また空を跳び、異形の群れの間引きを始める。

これであと少しは時間が出た。

「さて、考える。考える、考える」

さらに思考を深める。

「まず、そもそもなんでアレはまだ死んでない？」

敵の正体の考察。勝利条件の再設定にはまず正しく相手を認知することが必要だ。

【INT値が6を上回っています。”神話回生”、神秘に対する考察が可能です】

「考える、全てのことに理由はある」

空を見る。

アレタ・アシュフィールドの嵐の似姿、嵐の写し身が異形を屠りつつ、巨大な嵐の槍で名瀬を攻撃している。

だが、それでも削りきれない。風が、雷が、その身を穿っても女神の化け物の余裕は消えない。

つまり。

「効いてない、あいつと嵐は相性が悪い」

なら、ほかに何か有効打を探さなければならぬ。

思い出せ、言動、状況、メッセージ。

答えは必ずそこにある。

【技能”ランホースライト”が発動します。技能”頂点捕食者戦闘思考”が発動します。技能”ホモ・サピエンス”が発動します。

「奴の正体、必要な有効打。キリヤイバ、だめだ、デカすぎる、切り傷くらしにしかなんねえ。直で刺しても、全身にまわりきるかどうか不明」

己の兵装、おそらく効果は薄い。

「アレタ・アシユフィールド、ストームルーラー。恐ろくかなり無理をしている。出力にも制限つきだ。おまけに、名瀬はどうも嵐、いや、水や雷に耐性がありそうだ。恐れてない」

嵐の写し身と女神の化け物の殺し合いを眺める。

どれだけ嵐が猛りても、雷が轟いても、女神の化け物からは、恐怖を感じない。その様子はまるで、それが自分に脅威となりえないと確信しているようにも見える。

「なら、ほかにある筈だ。あいつが恐れるものが」

嵐とキリでは殺しきれない。だが、だからといって諦める理由にならない。

拳で殺せないなら刃物で、刃物でダメなら銃で、銃でダメなら爆弾で。

こと”殺す”ということに関して、人間ほど知恵を回らせるものはいない。

そして、遠山鳴人は強くその形質を持つ個体である。

【技能 ” 殺害適性 ” が発動します】

【複数の技能による考察が進行しています。INT値によるアイデアロールが開始されます】

【神話回生の討伐には、“神話攻略”が必要です。目標設定。敵神性の解明】

「日下部、お前それ、そもそも、なんだ？」

日下部、あるいは藤堂、そして名瀬。

遠山の旧知がたどり着いたのは、嵐すら滅ぼしきれぬ神性とやら。

殺すには、その正体に辿り着かなくてはならない。



「思い出せ、ペラペラ喋るあいつの言葉にヒントがある筈だ」

遠山鳴人は、記憶を探る。知らずに合わせていた手のひらの合掌がさらに強く。

「異界…… 境界を越える、馬鹿でかい矛の遺物、女、産み直す……」

呟くのは、遠山の無意識が拾っていたヒント。

大いなる神話の存在、その正体へ少しづつ、人間が近づいていく。

「遺物・建国…… アメノウボコ…… 標識アタマ」

ーヨモツシコメ。そう、あの女は標識アタマのことをそう呼ん

だ。

【技能”オタク”が発動します、クリティカル発生】

「ヨモツシコメ……”黄泉醜女”。黄泉平坂の化け物！！ 待て、  
よ。てことはー」

【技能”オタク”が発動します、クリティカル発生】

「伝承再生、道敷大神、神話回生、ヨモツオオカミ、黄泉大神……

古事記……」

【技能”オタク”が連続発動します。クリティカル発生。連続でクリティカルが発生したため、アイデアロールを判定無しでクリアしました】

遠山鳴人はオタクである。ジャンルを問わず様々なメディア媒体を読み漁り、一人でニヤニヤする学生生活を送ってきた男である。

そんな遠山にとって、図書館の世界の神話大全は大体1ヶ月近く手持ち無沙汰な昼休みを潰してくれた愛読書でもあった。

遠山は知っている、黄泉の国の大神にて黄泉醜女を使役して、国産みの矛を持つその神性の名前を。

道敷大神、黄泉大神。そう呼ばれた大神の最も古い名前。

最初の名前を、遠山は――

「イザナミ」か

### 【神性掌握】

【敵神性の正体にたどり着きました】

【敵神性の情報が開示されます。

神名 伊弉冉大神

出典 ニホン 古事記

神格 神話体系の頂点、主神

耐性 全ての自然現象

神性権 全てのニホン人への絶対優位

弱点 不明

】

「いや、耐性パズルがガチすぎるだろ。日下部の野郎、何をどうしたらそんなになるんだよ」

『トオヤマ、トオヤマナルヒト、聞こえるかい？ 忙しい所悪いが、アレタがそろそろマズイ。無茶をしすぎた。彼女に許された遺物の使用時間の限界が近くなってきたよ』

通信が声を響かせる。ソフィの声だ。

「おい、待て。時間制限あるんか。そういうのは先に言え、先に」

『恥ずかしい話、ここまで苦戦するとは思わなかった。本来なら、ここまで暴れればもう中のバカが、いや、一度失敗したことに執着しても仕方ない、とにかく打開策をワタシがー』

「火、だ」

ソフィの声を遮り、遠山が要件だけを伝える。

『……なに？』

「火だ、ソファイ・M・クラーク！！ 名瀬のその力の本当の名前は、イザナミノオカミ！！ ニホン神話、古事記に出てくる国産みの偉いカミサマ！！ そいつは、”火”で死んだ！」

火の神、カグツチを産んだことによりイザナミは焼け死んだ。

中学時代の遠山が、ひとりぼっちの図書室で得た知識が今、神殺しのヒントを届ける。

『火、火だって？』

「待て、アレタ・アシュフィールドにはまだ言うな。名瀬に警戒されたくない。古事記の中で、イザナミはカグツチつーカミサマを産んだ時に焼け死んだ。アレがカミサマの力を、イザナミの力をそのまま扱ってんならよー、弱点だって同じなんじゃないか？」

「……トオヤマナルヒト、神秘種との交戦経験があるのかい？ いや、ない。あるはずがない、君は2028年9月にいなくなっただ」

「あ？ 神秘種？ なんだそれ。いや、今はどうでもいい。とにかく、アレを殺すのには”火”を試したい」

言いながら、考える。

一番に思いついたのは、キリヤイバによる竜の魂の使役。蒐集竜の尻尾の焰だ。

だが

「だめだ、デカすぎる」



サイズが違う。それにキリヤイバでの蒐集竜の焰はあくまで模造に過ぎない。

名瀬を警戒させるだけ、殺し切れない。

遠山が無意識に、今は遠く、遙か足元に見える校舎を振り向く。

「……いや、他に手があるはずだ」

記憶を無くした竜のいる屋上を見つめたあと、すぐに視線を前に戻す。

本物の竜の焰ならば、あるいは――

だが、今の彼女にそれを期待するのは賭けが過ぎる。

ゆっくりと無くなっていく選択肢、眼前と繰り広げられる嵐の写し身と女神の化け物の殺し合い、しかしやはり決定打には至らず、徐々に、異形の数が増えていく。

「……火がいる。アイツを神話と同じように、中から焼き殺す火が」

手を合わせたまま、遠山が呟く。思考を言葉に、頭の回転を止めず。

「一手で全てひっくり返す、焼き殺す、火葬の火が。」

だが、そんな都合の良い火など、どこにも。

『……………ある』

通信端末から、ぼそりと声。

「……………なんて？」

『いま、火葬の火、そう言ったね、トオヤマナルヒト。ある、あるぞ！ 奴を焼き殺す、焼き滅ぼせる特大のどでかい火種が！』

「……………アレタ・アシユフィールドは火も操れるのか？ ならー」

『違う、アレタじゃない。あのバカだ。食われたバカの右腕はよく燃える！』

「……は？ よしてくれ。今マジでそんな冗談かましてる場合じゃ」

『このワタシが！ アレタの危機に、仲間の危機に冗談を言つと思  
うのか！！ トオヤマナルヒト！！』

耳元で火薬でも破裂したかと錯覚するよつな声量。

「っ…… そんなでかい声出せんのかよ。……マジ、なのか？」

片目を瞑り、耳を押さえながら遠山が問う。

『ああ、現に、そつだ。これまで何度も汚い声で笑いながら怪物を  
何匹も奴は焼き殺している！ 奴が火種なのは確かだ！』

「火種…… 名瀬は、火を操れる奴を腹ん中に入れてる、のか」

どくん。

心臓が一際強く高なった。

危機により、今最高に回転している遠山の脳みそが本能的に、あ  
る一つの結論にたどり着いたのだ。

「いや、まで、待て待て待て……」

本能が導き出した答えを、理性が一度抑える。

落ち着け、そんなバカなことはやめろ、と。

「……ソフィ・M・クラーク。一つ聞かせる」

だが、遠山鳴人はもう確信している。

閃いて、しまったのだ。

やめろ、聞くな、確認するな。出来る可能性を探そうとするな。

理性が何度も何度も、遠山の後ろ髪を引っ張り続ける。

が、

「食われた奴のバイタルはまだ正常なんだよな？」

だめ。聞いてしまった。もう止められない。

『……ああ、生体チップの情報は多少血圧と心拍がいつもより高い程度だ。……健康体と言っても差し支えない』

ああ、やばい。

それはつまり、名瀬にくわれても、即死しない可能性があるということだ。

できてしまう。遠山が自分の髪の毛をぐしゃぐしゃと掻きむしり始める。

「そいつが食われてからどれくらい時間が経った？」

『そちらとは時間の流れる速度が違う可能性を勘案しても、……1

時間ほどだ」

「OK……話を整理する。食われたアレフチームのバカはまだ生きていて、そしてソイツはなんか知らんが以前もデカブツを内側から焼き殺したことがあるんだな？」

『……デカブツに食われるのが趣味みたいな男だ。むしろ、大物を殺すための手段として食われるという方法を選んでいるフシすらあるよ』

「ハッ、イカしてるな、そいつ。可哀想に。まともな人生歩んでないな」

言いながら、遠山は自嘲気味に笑う。

いや、人のことは言えない。

なるほど、理解してしまった。



その食われたバカは、恐らく狙って名瀬に食われたのだ。

——この人の狙いは失敗したの。今まではうまくいったけど、今回はダメだった。

名瀬の言葉を思い出す。アレの意味がわかった。

アレフチームのバカには意図があり、勝ちの目があった。名瀬に食われることで、奴を殺そうとしていた、その可能性が高い。

だが、しくじった。

前提条件をまた、ソイツも間違えた。名瀬瀬奈という存在が、そ

のバカの狙いを上回ったのだ。

「だが、つまり、今の状況は…… ああ、なるほど。そう言うことか。アレフチームのバカの狙いは、その作戦は、今もー」

たどり着く、たどり着く。遠山鳴人がそれに気づく。

自分が出来ると思った名瀬の殺し方。恐らく、非常に気に入らないが、アレフチームのバカもまた同じ結論に至ったのだ。

だから。

ピロン。

【条件達成】

【神話攻—— 333##3333323233333333333  
333333333オ、み、みーみみ——  
//////  
//////  
//////  
3000 3000I 3000Q 3000I Q I Q  
3000IQ I Q 3000IQ I Q 3000IQ  
耳GYAHA耳耳//みみI Q 3000IQGYA——】

知性と知識をもって。

遠山鳴人は、バカの下した結論にたどり着いた。

「——アレフチームのバカは今も戦っている」

シンパシー。

強欲冒険者は凡人探索者と同じ答えに至った。

【 【

それが、呼び水となる。

この境目すらあやふやな異界の中、決して届かないはずの E m e r  
g e n c y c a l l と同じく、遠山鳴人には聞こえないはずのそ  
れ。

本来であれば、よく聞こえる耳を持つ凡人にのみ届くそれが、今。

目の前のメッセージ。

黒塗り、歪み、そして、初めて見る言葉が現れた。

PS  
【PS】

TI  
【TI】

【いまわの際を役立てる】

【IQ3000の超天才的な神殺し作戦の概要が解放されます】

【 は失敗した。内側から伊弉冉大神を焼き殺すIQ3000の作戦は失敗した。伊弉諾大神の持つ神性に、二ホン人は抗えない】

【 只 は伊弉冉大神に囚われ消化され続けている。山の神秘の友人たち、鬼を裂く鬼と西国大將は伊弉冉大神の同化に抗っている。はじまりの火葬者は 人と共に在る、彼の熱は人の生命を暖めて守っている】

「ひひ、なんだ、これ」

意味のわからない情報が一気に遠山の視覚に流れ込む。

【いずれ、主人を無くした神秘の友人たちの抵抗は敗北に終わるだろう。 只 は燃料として消耗される】

頭が重い。一気に広がる情報は受け取り側のことなど一切考えて

いない濁流。

だが、遠山は本能的にそれを全て読み干していく。

【山 は” 2人目の火葬者” だ】

「火葬……！」

それは遠山の知りたい、欲しい情報。

目を剥いて一言一句見逃さないように速読する。

【 人の右腕はよく燃える。はじまりの火葬者の火を宿している。その火は神ですら燃やし尽くせるものだ】



【その火は今、伊弉冉大神による 人の消化と吸収を遅らせる  
ために燃っている。だが、いずれ消えるだろう】

【 只 は失敗した。しくじった。だからー】

【お前が引き継げ】

すつと、メッセージが消えていく。

いみがわからないのに、意味が分かる。

今、まさに遠山鳴人が欲しかった情報が全て開示された。

「やべえ、やべえやべえやべえ。出来ちまう……」

脂汗の理由は、多分興奮だ。

出来る訳がない、ありえない。それなのに、思ってしまった。

「……これ、多分、出来るな」

遠山鳴人は作戦を思い付いた。目の前の神を殺す方法を思いついてしまった。

状況、人物、敵。

それが気づけば全て揃っている。

ソフィ・M・クラークからのバイタル情報、食われたアレフチー  
ムのバカ。火葬の火、今のメッセージ。

「ヒビ、なにが、IQ3000だ。頭おかしいぜ、お前」

凡人探索者が実行し、失敗し、しかし今もまだ続けているその作  
戦。

ああ、気付いてしまった。たどり着いてしまった。

「俺なら、それを成功させられる」

馬鹿げた自殺じみた作戦。どうしようもなく頭が茹ってイカレれた狂人の思いつき。

ああ、それを、遠山は――

「出来ると思った、だから、やった。てか。ヒビ、やかましいわ」

そう、思ってしまった。

ピコン。

【クエスト目標の再設定に成功しました。全ての条件を達成した為、新たなDEADクエストの特殊ルートが解放されます】

『お、おい、トオヤマナルヒト？ 急に黙って、どうしたんだい？ クソ、こうなったらワタシもその場にー』

「ソフィ・M・クラーク。作戦がある。アレタ・アシュフィールドを呼び戻せるか？」

『なに？ 作戦、だと？』

「ああ、俺がお前たちを、アレフチームのバカを勝たせてやる」

勝ちの筋が見えた。

アレフチームは間違えていたが、間違えていなかった。

アプローチの手段だけが、甘かったのだ。

「ゲホツ、……魅力的な提案が聞こえた気がしてもどってきたけど、どんな状況？」

「いや、お前がどんな状況だよ」

気付いたら戻ってきていた嵐の写し身。なんか身体中に標識が突き刺さっている。かなりシユールな姿だが、本人は平気そうだった。

「不死身の化け物相手は慣れてるつもりだけど。アレね、今回は相性悪すぎ。効いてないわ」

「ずぼり、嵐で構成された体に突き刺さった”徐行！！”と書かれた標識を自分で引き抜きながら、アレタの写し身が喋る。

「気付いたか。ああ、そうだ。アレは普通のやり方じゃ殺せない」

「……悪い顔ね、ミスターキリヤイバ。その顔、それとよく似た悪い顔する奴、知ってるわ」

「……アレフチームのバカも、アイツに食われる前こんな顔してたか？」

ニヤリと、遠山が笑う。確信がある、きっとアレフチームのバカもこの作戦を決めた時笑った筈だ。

笑うしかない。

「……なんで、それを」

「同じだからさ。ミス・ストームルーラー。誠に遺憾だが、そのバカと同じことを俺も思い付いた。今のアンタの反応で予想が確信に変わったよ」

「なにをする気？」

「勝ち。勝ちに行く。アレタ・アシユフィールド、ソフィ・M・クラーク」



「なに？」

『なにかな』

「アレに勝ちたいよな？ 食われたバカを取り戻したいよな？」

「……………あなたに願い事をしたら叶えてくれるのかしら？」

『アレタ、待て、まずは彼がなにをしようとしてるかを確認しなければ』

「悪いが、悠長に説明してる暇はない。あんま時間かけすぎて名瀬に気づかれてもコトだ。よく聞け、アレフチーム。俺がお前たちを勝たせてやる。バカがやるうとして、失敗したことを俺が完遂させてやる。条件は一つだけだ」

「……………」

『それは、なんだい？』

「俺に全賭けしろ。俺がこれからやること、言うこと、その全てが名瀬瀬奈をぶちのめす為に必要なことだ。俺がなにをしようかと、賭けて、待て」

「待つつて、なにを」

「オールインの払い戻しだ。お財布握りしめて待ってるよ。出来るか？」

「……もう一声、口説かれる身としては欲しいところだけど」

嵐の写し身の判断は早かった。

遠山の言葉に軽く笑いながら戯ける。

『アレター!』

それを嗜めようと、ソフィが声を上げて。

「ソフィ、あなたもよくわかるでしょ？ 今、流れをこちらに取り戻せるのは、トオヤマナルヒトよ。彼だけがあたし達の中で唯一明確なビジョンを持っている。そうでしょ？ だから、お願い。あたしをきちんと口説いてみせて」

顔のない写し身がウィンクした、そんな気がする。

「ヒビ、口が減らねー。……信じてやれよ。俺じゃない。こんなイカれた作戦を思いついて、それを実行したバカを」

だから、遠山は最大の殺し文句を用意する。

アレフチームのバカ。それに一番期待しているのは多分、アレタ・アシユフィールドだろうから。

「アンタの方が詳しいはずだ。食われたバカがこんなところで終わる奴じゃないって事をよ、アンタが一番知ってる筈だ、そのバカの価値を」

「OK、あなたにチップを全て預けるわ」

瞬殺。きちんとそれは殺し文句たりえたらしい。

『アレタ！　せ、せめて詳しい作戦を聞いてからでも！　うわ、ぶ、あ！　コラ！　ワタシの通信機を  
をー　グレンー！』

通信機の向こう側、まだ不満そうなソフィがわちやわちや騒ぎ出してー

『いーじゃねーっすか！　センセ！　俺もアレタさんと同じ！　コイツに任せるのに賛成っす！』

新しい声だ。

さわやかな男の声。砂漠のオアシスに吹き抜ける風のように、どこか涼しく、からっとした男の声だ。

「……誰だ？」

だが、遠山はどこかでその声を聞いたことがあるような――

『おいおい！ 忘れたとはいわせねーっすよ！ カナツチのトオヤ  
マくんよー』

「っあー！ そのあだ名！ てめ、まさか！ グレン・ウォーカー  
！？」

その男、グレン・ウォーカー。

今はもうかなり昔のことだと錯覚してしまう上級探索者への昇格  
試験で同じチームだった男。

怪物種を素手で殴り殺す変態で、遠山鳴人に”カナツチのトオヤ  
マ”という絶妙にダサイあだ名をつけた男だ。

『よーお、トオヤマナルヒト。上級探索者試験依頼つすねー。久しぶりつす。……積もる話はまあ、色々るけどさあ、すまん！アンタに任せる！あの食われたバカ、ダチなんすよ、だから、頼むわ！ね、センス！』

「お前、アレフチームだったのか。世の中狭いな」

『ははは！　アンタもしぶといつすね。生きてて良かったつすよ、カナツチ』

「絶妙にダサイんだよ、お前のセンスは」

互いに男同士、少し笑う。探索者の知り合い同士、必要なやりとりはそれで十分だった。

「ソフィ、これで2対1の意見ね。民主主義って素晴らしいものだとあたしは思うけど？」

『ーああ、もう、わかった！……わかったよ。トオヤマナルヒトに、ワタシも賭ける。……聞こえるかい、トオヤマナルヒト』

「あいよ」

ソフィの少ししおしおした声に、遠山が返事を。

『……本当に、すまない。アレタと違い、そこにすら行けない、口を出すことしか出来ないワタシがなにを言っても軽い言葉にしかないのはわかってる、だが、それでも……君の勇気に敬意を、その献身に、感謝を』



「ーああ。どういたしまして。アレフチームに貸しを作れるなんて滅多にないチャンスだ、気張ってくるよ」

思ったより、いい奴だな、ソフィ・M・クラーク。

想像よりしおらしい言葉に、遠山が軽口で返す。

「……機会を待つわ。ジャイアントキリングのチャンスを期待してるから」

「ああ、ーあと、どれくらい保つ？」

遠山がそれを聞く。

明らかに、アレタ・アシユフィールドの写し身から感じる存在感、プレッシャーが薄くなっている。

「アハ」

写し身が笑う。

「あ・た・し・達・が・勝・つ・ま・で」

表情もないのに、きつとその笑みは余裕たっぷりな――

「――ああ、なるほど。確かにアンタは英雄だな」

英雄はきつと、危機にこそ笑うのだろう。

【DEADクエストの新たな特殊ルートが解放されます】

「ねえ、トオヤマナルヒト、なにを見せてくれるの？」

「ひひ、IQゼロの超絶望的クソバカ大作戦の続き、かな」

振り返らずに。

遠山が歩き始める。

「フフフ、フフフフフフフフ、まだ、まだ、まだ、まだ。鳴人くん、次はなにを見せてくれるの？ 全部、全部見せて、あなたの輝きを、

かっこいいところを、全て！ その全てを見た上で、更なる私の理想をあなたに！

【DEADクエスト 更新】

【特殊ルート”FIRE&YEAR”が開始されます】

【クエスト目標 更新ー】

狂人の真似とて大路をはしらば。

ああ、本当にお前、イカレてるわ。

遠山は名前も知らないそのバカの考えを理解して、少し笑う。その笑いには僅かな安心が混ざる。

ああ、世の中自分以上に頭のおかしい奴がいて、よかった、と。

【クエスト目標 神話回生 ”伊弉諾大神” の殺害】

【オプション目標ー】

遠山が、空を歩く。

女神の化け物の近くへ。その歩みに敵意も殺意もなく。

《フフフ、フフフフフフフフ、まだ、まだ、まだ、まだ。鳴人くん、次はなにを見せてくれるの？ 全部、全部見せて、あなたの輝きを、

かっこいいところを見せて欲しいな》

女神の化け物が目を細めて笑う。ネズミをいたぶる猫のように楽しげに。

「田下部

《ん。なあに？ 命乞いとかはやめてよね？ すぐに殺したくなっちゃうからね？ その点、この人は凄いよ。フッフ、もうしゃべれなくなってるけど、弱音を一切吐かずに最期までー》

女神の化け物が自分の胎を撫でる。我が子を宿す母のように優しい手つき。

きっと、その中に逆転のバカは眠っている。

ならば、遠山鳴人のやることはもう決まっている。この男にしかできない。

藤堂未来と日下部日菜、その2人と共に時間を過ごした遠山鳴人にしか出来ないことがある。

「名瀬」

遠山が、その女の本当の名前を呼んで。

《んー？》

遠山鳴人にしか出来ない、神殺し。

今、この瞬間。

凡人探索者のIQゼロの超絶望的クソバカ大作戦は、強欲冒険者が引き継いだ。

【オプション目標 ”凡人探索者”の救出】

冒険者の舌が、踊り出す。

希望なき、絶望の女運。それすらも、冒険の道具にして。

竜をすら説き伏せるその舌が、残酷な運命すら誤魔化すその舌が蠢く。



「俺以外の男の話、しないでくれよ（嘘）」

【スピーチ・チャレンジ（誘惑）を開始します】

96話 ヨミヒラサカの戦い（後書き）

読んで頂きありがとうございます！

強欲冒険者、凡人探索者共に書籍化作業進んでいます。

共に加筆してる部分ありますので既読の方も必ず楽しめて頂けると  
思います。コミカライズも進んでいますのでお楽しみにしてもらえ  
れば！

97話 遠山鳴人と名瀬瀬奈

「……………え？」

「とぼけないでくれよ、藤堂。なんで、俺以外の男の話、そんなに  
するんだ？」

遠山の声色は穏やかだ。自分の探索者端末を写し身に渡しながら、  
ゆっくり前を進む。

その声、その足取りは穏やか。晴れの日にゆっくりとしたペース  
で寄せては引いてく波のように。

「え。え、え」

「どつした？ その髪似合ってるよ。とても綺麗だ」

遠山鳴人が、急に女を口説き始める。

いつもは死んでいる三白眼、不思議なことに黒目がくりくりと、いつもより大きくなっているかのような。

「え、あ、え、えっと、たしかに手入れは、フフ、してる、けど…」

女神の化け物が、暗黒を梳いて空に溶かし込んだような黒い髪を弄り始める。

遠山からは目を、逸らしていて。

「そっか。日下部、ごめんな、1人にして。……ずっと気にしてたんだ。お前達を残して、死んだから」

《あ、あ、う、え、え？ ど、どうし、ふ、フフフフフフフ、  
鳴人くん、私を、もしかして騙そうとしてる？ 甘いよ、貴方はそ  
んなこと言わないー》

女神の化け物が、ふと声色を低く。

「また会えてよかったよ、日下部。それとも、藤堂？ なんて呼べ  
ばいい？ ほんとの名前の方がいいのか？」

それをすら無視して遠山の舌は踊る。

「え、いや、だから…… ふ、フフフ、ああ、そういうこと？ 鳴  
人くん、まさかそうやって命乞いしようとしてるの？ まさか、私  
が今更そんなことを言われたから貴方を殺すのをやめるとでも？  
甘い、甘いよ、鳴人くん、そんなー」

「俺が間違えてた」

女神の化け物は、遠山の言葉に逆らえない。

女神の化け物が正気に戻ろうとするたびに、冒険者の舌が彼女を狂わせ、離さない。

「……………うん？」

「名瀬。俺が間違えてたんだよ。お前の言う通りだ。俺は、最近、どこかおかしい」

縋るような、声色で。

まっすぐ、しかしどこか陰のある瞳を遠山鳴人が浮かべる。

女神の化け物は、蜜が溢れる美しい花を見つけたミツバチのように硬直する。

「昔はどうでも良かったことが、昔は気にならなかったことが、今はとても大事なんだ。お前の言う通りだ、俺はどんどん変わっていつてる」

【スピーチ・チャレンジ（誘惑） 判定中…… INT値によるプラスの補正が発生します。”名瀬瀬奈”との関係性”私のイザナギ”により、誘惑判定に多大なるプラス補正が発生しています】

「ああ、ああ、鳴人くん！ そう！ そうなの！ その通り！ 貴方は変わってゆく！ 貴方は変わってしまった！ 私はそれが耐えられない！ 美しかったの！ 綺麗だったの！ この嘘だらけで本

物なんてない世界の中、全部全部頼りなくて、脆い世界の中、私は絶望していた！」

女神の化け物、その妄執だけで神域にたどり着いた恐るべき女が己の心を叫ぶ。

「でも、貴方だけは違う、違った。どれだけ世界が嘘とまやかすと誤魔化しできていても、貴方だけは違った。貴方だけ、みんながこのくだらない世界を受け入れて、それぞれ妥協して生きていく中、貴方だけは、貴方だけに見える何かを目指して進んでいた、貴方だけが本物だった」

誰かの姿に、自分だけの意味を見出し、それを尊ぶ。

例え神域にたどり着いても、その女の言葉はどこまでも人臭く。

「それが美しかったの！ 尊かったの！ 誰にも何にも世界にも埋



もれず、他人を必要とせず一人に進む貴方が好きだった！ 世界に自分は1人だけ！ それでも生きていて良いつて思えた、思わせてくれた貴方が！！ なのに！ 貴方は、貴方は！！」

他人に理想を求める。名瀬瀬奈の願いは、どこまで行っても当たり前の人間ならば誰しもが抱くもので。

「いいよ、言ってくれ」

遠山はそれを受け入れる。

優しくふわりと笑う。

【条件達成 隠し技能、”女運：hopeless”を保有した状態で女性へのスピーチ・チャレンジを複数回成功させました】

【新技能】レディキラー（重たい女専用）が追加されます。重たい女とのスピーチ・チャレンジにおいて特殊な選択肢が解放されます】

「貴方は私を裏切った……！ 私の前からいなくなって、それで、私じゃない、ううん、別の女や他の人間によって貴方は変わりはじめてる！ 私はそれが許せないの！ 嫌なの！ 貴方は貴方のままで、一人で進む遠山鳴人じゃないと嫌なの！！」

「筋金入りね……」

『……恐ろしいものだよ』

重たい女の言葉に、自覚のない重たい女2人がぼやく。

人間、自分を客観的に見つめるのは難しいものだ。

「うん、うん。そうか。……ごめんな、名瀬。一人にして」

遠山は狼狽えることはない。ただ、ゆっくりと言葉に耳を傾けて。

「貴方は、貴方は、そう！ 私の前からいなくなった！ だから、私は、追いかけて、ここまで、ああ、鳴人くん、鳴人クン、ナルピ、遠山鳴人、ナルヒトくん！！ だから、死んで！ だから、生まれ変わって、だから、変わらないで、死んで、しんで、私の手でしんでよおおお」

『……聞くに耐えないな』

「ほんと、同感……」

無意識の重たい女達が嫌悪感を露わにする。彼女達からしても、名瀬のその言葉はあまりにな言葉だった。

《貴方に愛は必要ないの！！ 他人も、女も、貴方の欠落を埋めるものなんていない！ そのまま変わらないで！ すすんで、すまないで、おいていつて、おいていかないで、死んで、生きて、しんで、殺させて、生まれさせて、死んで死んで死んで死んでー死んでー》

こどものわがままよりも幼く、悪党の戯言よりも空虚。

おおよそ人がほざける言葉の中でもっともくだらなくて、醜い言葉を黄泉の大神が、国産みの女神が叫ぶ。

自分の人生に対する空虚さを、己だけの絶望を、他人になんとかしてもらおうとしていた女の言葉が虚しく響いて。

「ああ、いいよ（嘘）」

《『『え』』》

その言葉をも、遠山鳴人は受け入れた。嘘だけれども。

「お前の気持ちはわかった。いいぜ、名瀬（嘘）」

《え、え、え……………いいの？》

その嘘は、バレない。探索者の酔いと名瀬瀬奈が行った暗示処理

や外科的脳処理。

それによりハッピーに歪められた遠山の脳みそは、どんな危機的な状況であつても”敵を殺す”、そのためならばパフォーマンスを落とさない。

「ちよ、何を、トオヤマー」

味方すらも騙される嘘。

英雄の写し身が、つい身を乗り出そうとして。

『アレタ』

「っでも、ソフィー！」

『任せる、そう決めたはずだよ、我々は彼に』

それでいい。

遠山は背後で動きを止めたアレタ・アシユフィールドの様子に頷き、歩を進める。

怖い、怖い、怖い。

自分のした選択、気を抜けば冷静になって震えてしまいそうになる。

やめろ、やめろ、やめろ。言つな、止まれ。理性が悲鳴を上げ続ける。

それを言えばもう戻れない。やるしかなくなる。理性の喚き声を

たしかに聞きながら、遠山の舌はそれでも止まらなかった。

「ああ、俺を食べてくれ（嘘）」

【スピーチ・チャレンジ（誘惑） クリティカル】

《……………ふ、フフフ、フフフ、フフフフフ、な、んで？  
今更、そんな》

「言わないとわからないか？ ……嬉しかったんだ。俺の事を思  
つて、俺のためにこんなことまでして、それでも追いかけてくれた  
お前の気持ちに気付いた。自分にとって大切なものに気づけたんだ」



カケラとも思っていない言葉、だがそれにはたしかに心がこもっている。

本当の嘘つきは、自分のついた嘘を嘘と認識しない。遠山鳴人の言葉は毒であり、蜜である。この男の知性と残酷性は今、全て目の前の”女”を口説くために総動員されていて。

《あ、ああ……》

「ありがとう。名瀬、そんなに想ってくれて。そんなお前に全部委ねたい、お前の言うようにお前の理想の俺になりたい、だから、俺を食べてくれ、だから、俺と」

過去最高に、遠山の脳みそは煌めき、舌は踊る。

「ひとつになつてくれ（嘘）」

そして、その言葉の後。世界は動きを止めた。

嵐を孕んだ黒い雲も、蝗害の如く空を埋め尽くす異形たちもぴくりと動かず。

5321

【スピーチ・チャレンジ（誘惑）クリティカル。全てのチャレンジに成功しました】



背中にぶつけられたアレタ・アシユフィールドの声。遠山鳴人は、それに振り返らず、親指をアップさせて応える。

信じる。

声にはならない言葉、アレタ・アシユフィールドは声を詰まらせる。

《カカカン》

《ギャフフ カカカン》

2体の羽を持つ異形が降りてくる。”welcome!!” そう書かれた標識アタマが、遠山を左右から挟み込むような位置に。

《鳴人くん、いらっしやーい》

ふわり。

右腕、左腕を異形の標識アタマたちに掴まれる。ひんやりとした  
そいつらの手のひらの感触は、きつと死体と似ている。

「ああ、お邪魔します」

ふわり、そのまま持ち上げられ空に、高く、高く、空に。

風が強く吹いている。

ゆらゆら、高く昇る。

眼前に、眼下に。空から見える景色が広がる。足元にはジオラマのような、自分の生きた街が。

ああ、あの校舎の屋上があんなにも小さく。

「凄え景色……」

そして、目の前には、あんぐりと口を開いた女神の化け物が見える。

《おいで、おいで、おいで》

その女神の化け物の口の中は、きつと黄泉そのもの。全てを溶かし、全てを取り込む神の世界。

ここより先は人域にあらず、生命のいて良い場所ではない。

だが、遠山鳴人は冒険者だ。

危険を冒し殺して生きるものならば。

「ひでえ景色……」

そう言って、少し笑ってー

『――』

風に乗り、どこかから声が聞こえた気がする。足元、空の下、地面。

ああ、あの校舎の屋上からだ。

そうだ、しまった。

遠山はふと、やり残しを思い出す。その校舎に置いてきた少女。濡れて風邪を引いたらいけないから、そこだけ台風の目のように風んでいる場所。

屋上を見て

「ドラ《はい、頂きます》

ばくん。



一瞬で、ごくり。遠山鳴人のその吹きごと、女神の化け物は一口で全てを飲み込んだ。

嵐の夕焼けの中、ただ、異形たちが鳴らす踏み切り音のような鳴き声だけがずーっと響いていた。

暗闇が、ぱっと、弾けて。

「う……あ？」

自分の声で意識が戻り始める。

うつ伏せに倒れているのだと、遅れて気づいた。

「あ、目が覚めたのね、鳴人くん」

声がした。

うつ伏せの自分、そのすぐ側から聞こえる声が。

「……名瀬、か」

遠山がゆっくり身体を起こして、その場に座る。

足を折り曲げて、膝をたたみ、こちらをニコニコと見つめてくる女がいた。

「ええ、そう！ 名瀬瀬奈、貴方が選んでくれた貴方の答え。ああ、

鳴人くん、嬉しい、わたし、とても嬉しいの、貴方が私を理解してくれた、受け入れてくれた、そのことが、本当に……」

「……ああ、どうも。ここは、俺はお前に食われた、よな」

真っ白な空間。

どこまで続くのか一切わからない奇妙は場所だった。

唯一わかるのは、ここにいるのは遠山と名瀬だけということだけ。

「ええ！　ここは神体の中、ここで貴方はこれから生まれ変わるの！　もう二度と誰にも侵されない自我、変わることはない強い精神、一人で全て完結して、完成した存在に！　フッフ、ああ、素敵だなあ」

「名瀬、一つ聞いていいか？」

その言葉を遮るように、遠山が声を出す。

これから、やるべきことをやる前にどうしても遠山鳴人は聞いておきたいことがあった。

「うん、なあに？ 今の鳴人くんならなんでも話してあげるよ！  
だって、私を受け入れてくれたんだもの」

どこまでも上機嫌に、昔の知己に、仲間によく似た顔の女が笑う。

「……そうか。なあ、俺の知ってるお前、お前が演じていた二人。  
藤堂も、日下部も、正直2人とも何考えてるかたまにわからねえこ  
とはあった。でも、2人ともいい奴だった。少なくともカイキを殺  
したり、他人にここまでめちゃくちやする奴じゃなかった」

「んー？ 何がしたいの？ 鳴人くん？」

美しい顔だ。藤堂と日下部。2人のいいところをそのまま抽出した整った顔立ち。

目元は鋭いくせに、目つきは柔らかく。両目の下にある泣き黒子が白い肌ですっと、あしらわれていて。

「……………これが、本物のお前か？」

「これがまず、聞きたいことの二つ目。

「んー？ フフ、そうだよ、ふ、フフフ、フフフフフ、ずっと。ずっと、こうしたかった」

遠山の重々しい問いかけとは裏腹に、名瀬の返答はどこまでも軽

いものだ。

「……カイキさんも、他の子も、みんな好きだった。あの時間は私にとっても本当に大切なものだった。」

名瀬瀬奈が、藤堂未来の顔で語るのは共に過ごした青い日々。

「鳩村やナルピと駆け抜けた炎の日々。命を懸けて探索者として生きたあの日々は、私の宝物だったよ。」

名瀬瀬奈が、日下部日菜の顔で語るのは共に駆け抜けた命を燃やした炎の日々。

「なら、なんで」

こんなことを。

遠山鳴人はその先の言葉を喉につつかえて。

名瀬瀬奈は、遠山鳴人の人生の半分以上、そこにいた。名前を変え、外見を変え、性格を変え、ずうっと、ずっとそばにいた。

「藤堂……、お前、無口で何考えてるかよくわかんなかったけどさ、それでも名瀬のバカみたいな思いつきに律儀に付き合っつて、周りをよく見て色々フォローしてくれてたよな」

藤堂未来には何度も助けられた。

海城優紗のめちゃくちやに巻き込まれた時や、割と笑えない事態の時も、藤堂は無表情に、無感動に、それでもいつも遠山を手伝ってくれていた。

「……うん、君はいつもそんな私を見てくれてたね」

遠山鳴人が、藤堂未来に言葉を。

「日下部、お前は何も考えてないようで、一番チームのことを優先して動く奴だった。どれだけやばい状況で、俺や鳩村が投げ出しそうになっても、お前だけはいつも明るく、笑ってたよな。お前のそれは俺たちを救ってくれた」

日下部日菜には何度も救われた。

その底抜けの明るさに何度救われたことだろう。血生臭い探索者としての生き方の中、その善性にほんの少し憧れてすらいたかもしれない。

「ナルピの為だよ。ほっといたらナルピ、どんどんダウン入って、自爆戦法取るうとするからさ」

遠山鳴人が、日下部に言葉を。



「……ああ、お前はいつも、いい奴だった。いい奴だったんだよ。なあ、色々言いたいことはあるんだ。でも、やっぱり納得出来ない、なんで、カイキを殺した？」

「だってそれが私だもの」

無意識に遠山が繰り返した言葉は、継る、という行為に等しいもの。可能性を、僅かにまだ残っていた名瀬という存在との和解の可能性を探すもの。

だが、その遠山のそのちっばけな願いは、決して叶うことはなかった。

「これが、私。鳴人くんを自分の理想の存在にしたい。1人で完成する貴方をずっと見ていたい。変わっていく貴方に耐えられない。それが私、私の願い」

名瀬瀬奈が答える。

藤堂でも、日下部でももはやないその女が淡々と己の理想の男を眺める、

「私は私の願いが一番大事なの。それが、私。名瀬瀬奈という人間なの」

漆黒と表現するにふさわしい言葉。もはや、この女は何者にも染まることはない。

確立された傲慢な自我を隠すことも悪びれることもない。

「……………ひひ、ああ、ほんと、なるほど。なるほどね。お前、やっぱり海城の友達だわ。アイツと同じ」

「フフ、たしかに海城さんもそうだね。私と海城さんは似てる、だから、海城さんも貴方に惹かれたんだろうね」

「アイツがそうとは思えねえけど……なあ、名瀬。俺はこれからどうなるんだ？」

「一つ目の聞きたいことは終えた。」

「なら、遠山が聴きたいことはあと一つだけ。」

「大丈夫、怖がらないで。痛みもなにもないから。一つになるの、一度鳴人くんの全てを溶かして、そこからまた作り直すの。フフフ、楽しみ」

「そんなこともできるのか、すごいな」

柔らかな表情を作り、遠山がつぶやく。

その様子ににこーっと微笑み名瀬が返す。

「うん、頑張ったんだよ、貴方の為に。アレフチームの人がすごい栄養になってくれるのもあるけどね。フッフ、数多の神をも飲み干す力、それを利用して鳴人くんを作り直すんだよ、フッフ」

「へえ、今、そいつはどこにいるんだ？」

上機嫌の名瀬に、さりげない遠山の言葉。

賽は投げられた。

「近く。ちょうどこの場所の下の、更に下、かな。鬼さんや、河童

さんもそろそろ諦める頃だから、安心して、鳴人くん」

――二つ目。名瀬瀬奈に聞きたいこと。

「ああ、そりゃ安心だ。アレフチームのバカはまだ生きてるんだな」

遠山が問いかける。作ってみせたその柔らかな表情に、名瀬は決して気付かない。

藤堂未来なら、日下部日菜なら気付けたであろう遠山のその表情。

「うん、そつだよ、まだ生きてる」

その表情の意味に、もう名瀬瀬奈は気づくことは出来なかった。

「その言葉が聞きたかった」

「……………え？」

ピッ。

刃が、名瀬瀬奈の喉元を裂いた。

遠山鳴人が、瞬時に己の首元から抜いたキリヤイバ。その欠けた刃が、名瀬瀬奈の首を掻き切った。

「説明ご苦労さま。あとは自分でたどり着く」

聞きたいことは全て聞いた。

「ゴボツ……………だま、した、の？」

名瀬が目をぱちくりしながら、尻餅をついたままつぶやく。

「ごぼり、ごぼり。口から黒い泡を漏らす。

赤い血は出ない。

代わりに名瀬の首元の傷からは黒いモヤが垂れていて。

「ああ

悪びれることなく、遠山がすつと立ち上がる。

ごぼり、首元を抑えて虚な目でこちらを見上げる名瀬の視線を受け止める。

「なんで？ 違うでしょ。ね？ 違うよ、ね？ 貴方はやっぱりおかしくなってる、変えなきゃ、貴方を、あるべき姿に、変えなきゃ、ね？ そうだよな？ だって、貴方に愛は必要ないから、ね？」

差し伸べられる手、しゃがみこんだ名瀬の手が遠山を求めるように上へ、上へ――



「ね、じゃねえんだよ」

ばしゅ。

その身体が刻まれる。首元を斬った際に入り込ませたキリが名瀬瀬奈の身体を内側から刻んでいく。

「ア……」

差し伸べた手を遠山が受け取ることは決していない。

指先が、肘が、肩が、順番に皮膚が裂けて、黒いモヤが吹き出していく。

「さよなら、藤堂」

口下手で、しかし優しくかった彼女はもういない。

「さよなら、日下部」

お喋りで、しかし優しくかった彼女ももういない。

「そして、お前は、始末するべき化け物だ。名瀬瀬奈」

いるのは、遠山鳴人が始末するべき”敵”のみだ。



「ブチ犯す」

どぼん。

名瀬が、溶けるように白い空間に消えていく。

メッセージは出てこない、だがわかっている。これで終わりはずがない。

「さて、ここから本番か」

97話 遠山鳴人と名瀬瀬奈（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをこ覧くだ  
さい！



美しい大きな女の像。錦糸のような黒い髪と天女のような羽衣を揺らして軍勢に担がれて頭れる。手に持つ矛は、死と暗闇に侵されて黒く錆びていて。

死者の色をした血色のない肌、至る所から黒いドロドロとした粘液を垂らしつつ。正気のない顔、しかし目に宿る情欲の炎が、爛々と輝いている。

根の国の主人が、軍勢を率いてやってくる。

【”霧” わぬしよ、……犯されるんか？】

「やかましい、その時はお前もパパになるんだよ。それが嫌なら協力しろ、キリヤイバ」



割と油断ならない存在であるお札マッチョ、それと本気だかどう  
なんだがわからないくだらないやりとりを交わして。

《まで、まで、まで、待て》

白い空間に湧いてくる無数の異形たち。下半身はグズグズに溶け  
て、腕だけで這い寄ってくる姿は生理的な恐怖を催す。

「待つわけねえだろ！ クソ、好き放題しやがって！」

遠山がすぐにかぶりをふり、軍勢に背を向けて走り出す。まとも  
に相手をしていい存在ではない。

逃げながらも、見つける。

穴だ。何かのバグのやうに、白い空間にぽっかりと大きな穴が空いていて。

「穴！ あそこか！！」

《まああてえええ！！》

《振り返れ、ふりかえって、振り向いて、こっちみて、ままたまて》

【”霧” い、嫌じゃ、絶対にいやじゃ！ わぬしょ！ 決して振り返るでないぞ！ じ、冗談ではないわい、あんなのに犯されるなんぞ！ て、貞操じゃ！ 儂の貞操の危機じゃ、誰か、男の人呼んでー！！】

「気色悪いこと言ってねえで働け！ 仕事の時間だ！」

遠山鳴人は振り返らない。穴に向かって地面を蹴る。ついでに、

肩にかついだキリヤイバに向けて怒鳴りつつ。

【霧” こわいわー、ほんに、怖いわー!!、じゃから、

本気で殺そうぞ、我が霧の勇者よ】

そのメッセージに、遠山鳴人は無意識に笑う。見開いた目と吊り上がった唇。

己の力を暴として振るう興奮に満ちた顔で。

きつと、彼の夢の中に巣食う”霧”も同じ顔で笑っていた。

《待て！ あ、ギヤアー！》 《いだい、いだい、いいいいいい、  
あああ、キリ、キリ、アメノクニノ…… いや、どちらでもない？  
痛いイイイイイ》

異形の軍勢、這い寄る化け物たちが悲鳴をあげる。

不可視の薄いキリ、そのヤイバがそれらを刻んだ。

多対一に特化した能力を持つ遠山鳴人の遺物、その特性は例え相手が、神話の軍勢であろうと揺らぐことはない。

「キリヤイバ、既に仕込みは終わってる。そのサイズなら、きちんと刻めるようだな」

【”霧” 普段よりも念入りに刻んでおいたぞ。うわ、なんじゃこのネチヨネチヨの魂。ばっちい。えんがちよ】

《ああ、いたい、いたい、フッフ、まああああてえええええええ！！》

その叫びを背に受けながら、走る、走る。

ピロン。

いつものメッセージの音

【オプション目標 ” 凡人探索者の救出”】

メッセージが流れ、その穴に向けて が現れる。クエストを完遂するための導きが、遠山鳴人を手助けして。

「いっくぞおおおおお！！」

遠山鳴人がその穴に飛び込んだ。思ったよりも傾斜がない、その空間はまるでウォータースライダー。

「うおおおおお！？ 趣味の悪い滑り台だなあおい！！」

びちゃびちゃとよくわからない液体の流れるウォータースライダーに流される遠山。

横に、縦に、ななめに揺れる。暗闇、光、明滅する視界。自分が今どんな状況なのか三半規管すら追いつかない勢いの中、一際強い光が目を見て。

ずしゃああああ！！

そしてすぐに飛び出る。

砂利の上をベイゴマのように回転しながら滑り転がる遠山。着ている服が探索者用の装衣でなければ擦り傷だらけになっていたことだろう。

「あばばばばば……？」

ごろんごろんとそのまま2度3度ほど転がり、ようやく勢いが止まる。

遠山がそこにたどり着いた。

ゴロン

【” 溪流の夢”】

視界に一際大きなメッセージが広がる。今までの状況や目的を伝えるものとは違い、端的で

流れるメッセージ、それはどういう意味だろうか。

「いてて、……なんだ、ここ」

尻を撫でながら、遠山が薄暗く、しかし、視界が開けた辺りを見渡す。

「川…… 山の中の清流キャンプ場みてえだ」



静かな場所だ。ついさっきまで耳に障っていた異形の軍勢のうめき声が嘘のように。

ただ、サラサラと流れる清水の音。苔蒸した岩に砕けて、集まり、決して澱むことなく流れ続ける水の音だけが聞こえる。

「綺麗な場所だ……」

砂利を踏みしめて、遠山が小川に近づく。

流れる清水に、ゆらゆら揺れながら映るまん丸な光。

「……月がある」

驚くことに、その場所には月があった。この明るさは月光による

ものだ。

空に浮かぶまん丸なお月様が、流れる水に揺れながらも映り込んでいた。

「……なんか、妙に落ち着くな」

うか。  
空気が美味しい。ほんとにここはあの神体、名瀬瀬奈の中なのだろうか。

「ん？」

ふと、小川のもとにそれを見つける。

「積み石…… この棒は、卒塔婆か？ ……墓？」

数個積まれた大きな石。鏡餅のように大きいものを下から積み上げているそれ。隣には細長い板、墓場によくある卒塔婆のようなもので刺されている。

遠山が、妙な感覚。ともすれば郷愁にも似た何かをその石に感じ、無意識にそれに歩み寄ろうとして。

【目標更新 ” 神話回生 伊奘冉大神 ” 神体内にて、 ” 凡人探索者 ” を発見する】

ふと、視界に現れたメッセージにあゆみを止める。

「いけね、とまってる場合じゃねえ 矢印！ あっちか！」

目的の場所まで急がなければ。遠山が矢印の示す方向に向かおう  
とっぴ。

《ず、アアア、カカカン》

《ひ、ぎわひひひり、カカン》

ぼとっぴ、ぞとっぴ。

空間の歪みから顕れる異形、ヨモツシコメ。追っ手だ。

「チツ、まあ、そりゃ追いかけてくるわな」

《カカカカン》

威嚇してくる異形に向けて、キリヤイバを構える。最速で始末する。遠山がキリを濃く滲み出させて――

「キユキユキユキユ！！ マ” アアアア！！」

背後から響く、甲高い奇声に反応が遅れた。

振り向く――

「は？っ っへびびびー！？」

ベチヨツ。

それは湿っていて、ひんやりして、しっとりしていた。

何か、濡れタオルのような、それをゴムにしたようなひんやりが  
遠山の顔を覆った。

「よくやった！ キュウセンボウ！！ 新手ぞ！ 曲者ぞ！！ そ  
のまま抑え込んでおれえい！！」

聞こえる声に反応。

視界が閉じられた、顔に何か張り付いている。遠山は軽いパニッ  
クに陥りつつも、それを剥がそうと暴れる。

「キユキユキユキユ！」

「ギヤアアア！？　ねっちよりしつとりいいいい！！　なん、な  
ん、なんだ、これ！？　くそ、離れるろろろろ！　ぷはっ！」

ぶちん。思い切り顔に張り付いたそれを掴む。柔らかな部分は掴  
みにくく、滑る。しかし、何度か手で探ると硬くて掴みやすい部分  
を見つけた。

思い切り、それを引っ張り、剥がして――

視界が開いた。

「まずは、貴様らからぞ。黄泉平坂の住人ども」

「あ？」

月夜の下にそれはいた。

お札マツチヨが着ている服装に少し似た、着物のような装衣。狩布と呼ばれる古い装衣。

ぼんと頭に抱かれたおじやるな人がかぶってそうな烏帽子。

だが、遠山がなによりも目を剥いたのは。



「カカー」

「ぎ」

キンッー

「黄泉路で語れ、鬼裂の刃の閃きを」

白い骨の指が、刀を振るった。それだけで、異形達が、ずるりとズレる。上半身と下半身、それが綺麗にずるり、と。

「いや、もうここが黄泉路みたいなものよな」

ガイコツだ。骨だ、ドクロだ。

着物を着たガイコツが、異形を斬って捨てた。

「す、げ」

「ー美しい。」

その動きは、ただ、ただ、美しかった。剛と柔、野性と理性、その全てが合一し、合わさった武の極地。

少しでも、”戦う”ことや争いを生業にしている人間であれば魅入られる。

遠山もまた、その完成された武の凄烈さがわかってしまう。なんであんな風に斬れる、なんであんな風に両断出来る？

ただ、ただ、そのガイコツの極みが美しくー

「キユキユ!!」

べちよ!!

尻餅をついた遠山の胸に、またしっとりひんやりした何か飛び込んでくる。

それを反射的に受け止め、掴んでー

「ぎゃぼ!!? てめ、なん、なんだ、このシリコンちみっこナマモノは!? ……は? 河童?」

くりくりのつぶらな瞳。小さな黄色の嘴に、つるつるの白いお皿。割とでかい亀の甲羅。小さな水かきはしっとり。緑の肌はひんやりと。

小さなカッパ。

遠山がぬいぐるみを掲げるようにそれを眺める。

「キユキユ」

「あらやだ可愛い」

かっぱだった。

きゅっきゅっ と鳴きながら、遠山を見つめるつぶらな瞳。こいつがさっき急に顔面に張り付いてきたのだ。

「え、お前、なんー」

遠山がカッパをとりあえず地面に降ろそうとして。

「止まれえい」

「うお……」

首元に、その刀が突きつけられるまでガイコツがこちらに近づいたことに気付けなかった。

白い刀身、峰の部分はサメの歯のようにギザギザ。刀身は白く半透明に透けている。

骨、で出来た大太刀、その切先が遠山の首元にそつと当てられていた。

「上から降りてきたということは、黄泉大神の手先、新手よな。ヨモツのシコメどもと違うナリをしておるのは、品を変えたか？」

かたかた、ドクロが顎骨を鳴らしながら話す。どうやって発声しているんだろうか。割と遠山は落ち着いていた。

「き、きものに、烏帽子のガイコツ…… 和風だな」

「これは狩衣、ぞ。動くなや、黄泉大神の手先、伊奘冉の眷属よ。」

貴様は意思の疎通が出来そうだ。我が主人の戒めを解いてもらおうか。出来なければ貴様の主人にそう伝えよ」

「どうやら、この烏帽子ガイコツは遠山を、名瀬の仲間か何かだと勘違いしているらしい。」

「たしかに急に現れて、あの異形と一緒にいればそう見えないこともないだろう。」

「手先…… 待て、俺は—— いや、違う……」

「思い出せ。」

遠山鳴人は喚きかけたのをなんとか押し留めて思考を回す。刃は既に遠山の首に添えられている。少し力を入れて引かれれば、首は裂かれるだろう。

命の危機、今日何度目だろうか。

【技能 ラン・ホース・ライトが発動します】

命の危機に走馬灯が走り出す。考えろ、考えろ考えろ。

ガイコツに、小さなカツパ。何かがひっかかる。こいつらをどこかで知っているような、ガイコツは少なくとも、異形を斬った、つまり、名瀬瀬奈と敵対している。だから、つまり、なんだ。そうだ。

コイツらは、黄泉大神に抗っているー

ピコン

【ー 山 の神秘の友人たち、鬼を裂く鬼と西国大将は伊弉冉大神の同化に抗っている】



「そうだ！ 思い出した、伊奘冉大神、黄泉大神、名瀬瀬奈に抗っている連中……！」

メッセー지가告げたI Q 3 0 0 0の作戦概要。それに記されていた存在。あの時はなんのことか意味がわからなかったが、今なら。

つまり、この2匹。

ガイコツと小さな河童の正体は――

「小さい河童、西国大将…… キュウセンボウ……ん？ キュウセンボウ！？」

そうだ、あのガイコツ、この小さなカッパのことをキュウセンボ

ウと呼んでいた。

カッパ。キユウセンボウ、西国大将。

遠山鳴人の中でピースが噛み合う。それは図書館で読み続けた本の知識。

本を読む。遠山にとって手持ち無沙汰の暇つぶし、しかし気付けばハマっていたその行為は、今、こうして冒険の助けとなって。

【技能 ”オタク” が発動します。INT値6”教科書だけが友達さ”以上なのでアイデアロールなしで判定に成功します】

「お前!? うそ!? まさか、”九千坊”か!？」

遠山鳴人のオタク知識が、小さなカップとキュウセンボウという名前を結び付ける。

九千坊。

クマモト県、チクゴ川に棲まうとされる西二ホンの河童を取りまとめる大妖怪。古く遙か大海を辺り、大陸から二ホンへ一族まると移住してきたカップの大親分。

その大妖怪と目の前の小さなカップは名前が同じで。

「キュツキュ！」

しゃきんと目を見開き、どこか誇らしげに、小さな水かきを腰に当ててえっへんとジエスチャーする小さなカツパ。

まるで遠山の言葉に、その通りだ、と返事しているようだ。

遠山は少し頭が痛くなってきた。

「ー待て、貴様、なにゆえにそれを？ …… 奴らの眷属にしては、その振る舞い、人間らしすぎる……」

「お、俺は人間だ！ まてよ、待て待て、西国大将と、…… そうだ！ 鬼を裂く鬼！！ 伊装冉の同化に抗ってるとか、言う、神秘の、友人……？」

もしも、この小さなカツパが西国大将九千坊だとしたら、メッセージが告げていた伊装冉に抗っている神秘とやらということになる。

ならばこのガイコツもそれと同じ。つまり、この2匹は”アレフ  
チームのバカ”の味方、ということだ。

「キユ？」

「ええ…… なに？ なんなの？ ナマモノマスコットに、烏帽子  
ガイコツ……？ 頭が、痛くなるんだけど」

「いったい、何をどうやったらこんなのが味方になるんだ？ とい  
うか、妖怪って実在したのか？ いや、ダンジョンに怪物種、遺物  
に、そして異世界まで実在したのだ。」

「なら、まあ、妖怪も……いる、か」

この分だと恐竜もどこかで生き残っていてもおかしくないな。遠  
山鳴人は、深く考えるのをやめて少し笑う。

「貴様、妙だ。たまらなく、妙、だな」

遠山を、ぼつかりと空いた眼窩で見つめるガイコツがつぶやく。  
その声からは少し、敵意が薄くなっている。

「その香り。古い神格の香りをぶんぶんさせながらも、貴様の雰囲気、それは人間、ぞ。ちっぽけで無力、故に残酷な人間の雰囲気。貴様、なんだ？」

しかし、遠山の首に突き付けられた刀は微動だにしない。

未だ助かってはいない、嘘はリスクが高すぎる。

遠山は誤魔化しも、嘘もなく、ただ真実だけを言葉にする。

「……コイツら、伊装冉、ヨモツオオカミの敵で、アレフチームの共闘相手だ。それ以上でもそれ以下でもない」

「……………なに？ あれふちーむ？ 彼奴等がここに？ 追いかけてきたのか……む？ 待て、待て待て、我らは主人ごと、此奴に取り込まれた身。なれど、貴様、あの女、伊装冉の敵を名乗る貴様はどうやって、ここに？」

「食われてきた。騙して食わせて、ここまで侵入した」

「……………なに？」

ガイコツにまぶたはない。だが、彼にまぶたがあればきつと何度も瞬きしていたことだろう。

「烏帽子ガイコツ、いや、鬼を裂く鬼。俺の名前は遠山鳴人。伊奘冉とかわけわからんモノになったバカ女の元チームメイト。俺は俺の仲間がしでかしたことの始末をつけるために、ここにいる」

「……いや、待て、名乗りよりもまずは説明せい。前、前の言葉はなんぞや。俺の耳……いや、耳はないのだが、食われたとか、言っていたような」

「ああ、口説いて騙して食わせた。それで侵入した。狙い通りだ」

遠山は半ばやけになりつつも、そう言う。だってそれが真実だ。それ以外なんと言えればいいのだろうか。

「……………」



烏帽子ガイコツが、すっと刀を振り上げて、遠山に振り下ろそうと。

「待て待て待て待て！！ 烏帽子ガイコツ！ なんで刀を振り上げるんだ！ 何がお前をそうさせたかな！？」

「いや、もう、判断に困るゆえに。悪いが今、我らには余裕がない。貴様のような理解に時間のかかる人種の相手をしている暇はないというわけだ」

非常に疲れ切った声でガイコツが呟く。遠山の言葉に辟易としたかのように。

「な、なんて合理的な判断。このガイコツ、慣れてやがる……」

「じゃあ、良いな？ 苦しめるつもりはない」

「待、待ー」

やばい、なんでだ。本当のことを言っただけなのにこのままでは勘違いで斬られる。口説いて、食わせて騙して侵入した……

「あー、すこし無理あるな」

ぼそりと、遠山が我に返って、それで。

「キュッキュッキュ！ キュキヤキ！ キュキュー！」

「え？」

刀を振り上げたガイコツの前、遠山を庇うように立つ小さなカッパ。

嘴をカチカチ鳴らしながら、きゅっきゅと鳴き始める。

「む？ なんのつもりよ、キュウセンボウ。……貴様も承知のはず。今、我らはこの領域を守るのに手一杯。これ以上の不確定材料は、不要の筈だ」

「キュッキュ！ キュキュ！ キュ！」

「む、まあ、そうか。貴様ほどの者がそう言うなら……人間、一つ聞かせよ」

割と簡単に、なんかカッパがキュッキュと鳴いてるうちに話がついたらしい。

ガイコツから殺気が消える。

「今、このナマモノマスコットとあんたの間でなんの会話が……？  
ああ、いや、すまん、なんだ。出来ればこのかっこいい刀を納めてくれると答えやすいけど」

殺気はなくとも、刀は微動だにしない。未だ遠山鳴人の首元に、ひたりと触れていて。

「刀を納めるかどうかはこれから決める。……貴様はここへ何をしに来た」

ドク口の真つ暗な眼窩、見つめていると吸い込まれそうなそれが、遠山を見つめる。

「心して答えよ。嘘も、誤魔化しも効かないと思えよ」

伊奘冉の軍勢、根の国の軍をも斬り捨て続け、己が蕩けそうになりつつも、この領域を守り続けた男の言葉。

嘘も通じない。真でもガイコツの道理に背けば斬られる。

故に、遠山鳴人はただ、真実だけを告げるのだ。

「アレフチームのバカを、凡人探索者を助けに来た」

「……………なに？」

「キュツキュ！」

《みつけ、たあああああ！！ フフフフフフフフ、鳴人くん、伊弉諾伊弉諾伊弉諾伊弉諾伊弉諾伊弉諾伊弉諾、逃がさない、逃がさないから、絶対絶対、犯して溶かして、作り直すからああああ》

わはは。



「うわ！ やべえ！ 呑気してたから追いつかれた！ 烏帽子ガイ  
コツ！ 信じろ！ 俺はアイツの敵だ、ということはー」

遠山鳴人が目を剥き叫ぶ。もうだらだらしている場合ではない。

ガイコツに向けて言葉を飛ばして。

「ふむ、ならば、我らの味方、加勢と見て良い、ということか」

ふと、ガイコツが遠山から刀を離す。そして、自分の骨剥き出しの顎を、骨の指で撫でて。

《カカカカンかかん》 《せんろせんろつづくのどーこまでも》  
カゴメか過去ママがコメ》



「あ、やべ」

怒涛。異形の軍勢がはじけるように、カッパとガイコツと遠山の方へ押し寄せて――

「少し黙れ」

ざん――

野菜の束を一気に斬り飛ばしたような音。

《《《……???》》》

大太刀の一振りで、こちらに襲いかかってきた異形達の動きが止まる。

どの異形もみな固まって動かない。そして、1匹の異形の標識アタマがずるりと斜めにズレて、落ちる。

《《《カカン》》》

ずる、ずるり。そしてそのあと一斉に、ようやく全員がその大太刀に斬られたことに気付いたらしい。

赤いモヤを流しながら、斃れる。

一太刀で、軍勢の先鋒、その全てが斬られた。

「ま、じか」

「キユキユキユ」

「……わかっておる、キユウセンボウ。どのみち我らだけでは手の打ちようもない。……おい、妙な神格の香りを纏わせた怪物狩りよ。謝罪を。疑ってすまない。加勢の段、感謝する」

啞然とする遠山を尻目に、なにやらカップに言われたらしいガイコツが、綺麗な一礼で遠山に頭を下げる。

「お、おう…… 聞き分けがいいな」

ゆっくり、遠山が立ち上がる。

あの大太刀の一太刀で、完全に異形達は意気を潜めている。

動かない、出てこない。

「ふん。今代の鬼狩り、いや、怪物狩りどもに常識などてんで意味なさぬことは、我らが主人で慣れておるわ。……我らは今、共通の敵を持ち、そして貴様は我が主人を救いに来たという。神を口説いて、騙し、その肉の中に忍び込んだわけ、か」

「まあ、そうなるな」

ガイコツの言葉に、遠山が頷く。真実だもの、仕方ない。



っているらしい。

遠山の何かが、そいつらの琴線に触れた。

カラカラと音を鳴らして笑う髑髏と、小さな嘴からきゅきゅと愉快な音を鳴らす河童。

それだけで、遠山鳴人は彼らに受け入れられてしまった。

「ええ……」

妖怪の笑い声に包まれた遠山が、ぼやく。なんだこれ、どうしたらいいんだ。とりあえずガイコツに視線を向けて。

「ああ、わかったわかった、これは良い！ まさかあれだけ欲した援軍が、我らが主人と似たり寄つたりの大莫迦とはの！ まあ、い

い、我ららしくてよし！」

ガイコツがうんうんと頷き、遠山の肩を叩く。

もう、彼からは敵意を感じなくて。

《フフフ、フフフ、鬼狩り、鬼裂、神仏をも己が楽しみで屠ったもの。貴方の刃はやはり痛いわ。この領域、あの人はまだ溶けきつてないのも貴方の作りだしたこの場所のせい……いいわ、鳴人くんごと、今ここで溶かしてあげる》

軍勢に囲まれた根の国の主人。

名瀬瀬奈が、ガイコツに語りかける。

「クハハ、女。残念だが、この場所は俺の呪血式でも九千坊の異界でもない。……今はもう亡き誇り高き凡人共の残滓が組み上げた境界。ここが我らの背水の陣。心せよ、愛に溺んだ愚か者よ。貴様が腹に納めたものは、手強い、ぞ？」

ガイコツが大太刀を肩に乗せ、女神の言葉に骨を鳴らした。

《フッフ、でもこの人はもう動けない。栄養になるの、鳴人くんを産む栄養に。鬼裂、九千坊。貴方達の抵抗も、もう終わり。主人無き貴方達のけなげさだけは忘れないであげるから》

「好き勝手言ってるな、名瀬。……いい加減追いかけるのも、面倒だ。ここでーあ？」

あの太刀の一撃。このガイコツが味方ならばやれるかも知れない。当初の予定とは違うが、遠山が戦う用意を始めた瞬間、それは遮られる。

「良い。潮目が変わった。クハハ、これは機、ぞ」



遠山の前に歩むのは、烏帽子のガイコツ。身の丈よりも大きな大太刀を肩に担ぎ、遠山の前へ。

黄泉の軍勢の前へ立つ。

「お、おい、烏帽子ガイコツ、お前」

「黄泉の大神、根の国の主人。ふむふむ、よいよい。だいだらぼっち以来の大物か。巨いなる者との立ち会いに、多勢に無勢の殿ときた。ククク、武士の誉れよな」

軍勢を前に、カラカラと骨が鳴る。それはしゃれこつべが嗤う音。

「キユ」

「ああ、我が友、九千坊。その通りよ。のう、霧の香りの怪物狩り」

「何だ。烏帽子ガイコツ」

「行け、ここより先、ここより下に我らが主人が眠っておる。すまんが、それを叩き起こしてくれや」

黄泉の軍勢、その奥をガイコツが指差す。

ピコン。

同時に、遠山の道を伝える矢印もまた同じ場所を指し示す。

遠山鳴人とガイコツの目的は同じ。

「ー荒っぱくなくても大丈夫か？」

「クハハ、1000度殺しても死なぬ男よ。思いつきりやってくれや」

「わかった、すまん」

そのやりとりだけで伝わる。

このガイコツは遠山鳴人の道を助けてくれるらしい。死地に残つて。

「九千坊、霧の香りの怪物狩りについてゆけ。案内してやれ。そして、いざとなれば頼む、ぞ」

「キユキユ！」

「うわ！？ お前、ついてくんの？」

「キユマ！」

ぴよいつと、遠山の身体を登り、首元に肩車するようにまとわりつく小さなカツパ。見た目よりも遙かに軽く、重さをまるで感じない。

しつとりとは、しているが。

「クハハ、西国大将が御身の守護を務めるとのことだ。……時を稼ぐ。はよう、行け」

きつ、と。

骨の大太刀の刃が軍勢を向く。

「敬意を。烏帽子ガイコツ」

「ふむ、その呼び方は気になるがまあ、よいわ。……難儀な者に魅入られた者よ。その霧の力であれば、我が主人を起こすことも出来ようぞ。助かる、だが」

「努、忘れるな。それは決して貴様の友でも、従者でもない。狡猾に貴様の器を狙っており化外の存在ゆえにな」

「忠告どうも。……あっち、あの穴か」

遠山がカッパのキュウセンボウを肩に担いで走り出す。

《フフフ、どこにいくの？ まって、まってええ、置いてくなんて、許さないいい》

「行くぞ、ナマモノマスコット！」

「キユ！」

《まってよ、まって、フフフフフフ、行かせないから》

「くそ、数が多い……」

この軍勢を抜けた先の穴、その下に逆転の手段がある。

遠山鳴人が受け継いだ”作戦”の完遂にはなんとしてもここを通り抜け、そこに辿り着かなければならない。

邪魔するやつは。

遠山鳴人が、首元に手を当てて――

「温存しておけ、今代の怪物狩り」

ぞんっ。

斬撃の音。空気を裂き、肉を裂き、死を斬り裂く。鬼をすら裂くその剣気が死の軍勢を屠っていく。

「う、お」

視界が開けた。

「心して進め、これより貴様の道はこの鬼裂が切って開く！！遅れるな！進め！」

先頭に立つのは、烏帽子のガイコツ。彼が走りながら刀を振るうたび死の軍勢が目減りする、道が文字通り、斬り開かれていく。

「す、げえ、なんだこりゃ」

「キユマッキユ！　きゅー！」



遠山の頭の上に、しっとりとしたお腹をくっつけて捕まるカッパの子が小さな水かきで方向を指さす。

「あっちか！！　って、いででで！　髪！　髪の毛引っ張るな、ナ  
マモノ！」

髪の毛をひっぱられつつ、かっぱの指し示す方向、化け物の群れの狭間に、また大きな穴があるのを見つけた。

「どけ、どけ、どけ！　根の国の亡者ども、既に滅ぼし者どもよ。  
死者が生者の道を閉ざすこと能わず！　我らが主人の道を邪魔するもの、道理の分からぬ塵芥！　全て、斬る」

斬る、斬る、斬る。

烏帽子ガイコツの振るう骨の刃。それが異形の群れを斬り散らす。

【敵神性 黄泉大神 ” 根の国の主人” 特性により、神秘の残り滓に対する特攻が発動しています】

【 ” 神秘の残り滓 鬼裂” に対し、黄泉大神の神性による絶対優位権が発動、隷属の命令が発動しています】

【 ” の技能発動 ” 神秘の主人” により ” の保有する神秘の残り滓たちは、黄泉大神の隷属に抵抗しています】

根の国からウジのように湧く死者の群れ、その悉く烏帽子ガイコツが振るう骨の刃の前に、肉を散らしていく。

相性。

本来であれば、とつくに烏帽子ガイコツもかっぱも黄泉の大神に取り込まれ、溶かされていた。

一度死した存在である彼らはつまり、根の国の住人でもある。故にその根の国の主人とはとことん相性が悪い。

だが、それらを全て跳ね除けて、本来従うより他ない隷属を跳ね除け、死に抗うその姿はまさに――

「鬼、だな」

遠山が呟きながらも、ガイコツの切り開いた道を一気に走り抜ける。

手を伸ばし、その進行を邪魔しようとする異形達、全てが細切れに骨の刃に裂かれていく。

そして、すぐにたどり着く。

眼前の大穴。溪流の中洲にポカリと空いた大きな穴。

ピコン

【オプション目標 ”凡人探索者”の救出】

目標は、その穴の下。

「――頼むぞ、烏帽子ガイコツ！」

「――任せた、霧の怪物狩り。」

互いに任せる。

遠山はこの場の足止めを。

烏帽子ガイコツは逆転の一手を。

遠山鳴人は頭にひつつくかっぱのひんやりした感覚を感じつつ、その穴に向かって飛び降りる。

「う、おおおおおおおー!？」

「キユマアアアア!？」

その姿に、なんの躊躇いも無かった。悲壮感も何もなく、短い出会いに少ない言葉。

それでも、目標を同じくした者同士、黄泉をねじ伏せるべく。

鬼狩りと冒険者はほんの少し視線を交わし、別れた。

「行ったか」

遠山の落ちた大穴、それを背中に烏帽子ガイコツが仁王立つ。

彼の前に存在するは根の国の軍勢。斬っても斬っても決して滅ぶことなく、尽きることなき死の軍勢。

異形たちの奥、一際大きい腐りかけの女神が笑いかける。

《平安最恐の鬼狩り、鬼に堕ちた貴方。フッフフ、道理がわかっ

ていないのはどちらかしら？ 生はいずれ死に終わる。それは決して覆らないこの世の道理。むしろ貴方たち、残り滓たちの方こそ道理に従わぬ、まつろわぬ者、道理を受け入れられない愚か者とは思わないかしら》

名瀬瀬奈が、目の前ほ存在の心を折りにくる。

烏帽子ガイコツ、小さな河童。

彼らは皆、既に滅び、終わった者たち。その生を終え、しかし残った未練のためにこの世に残り滓を遺した神秘たち。

ひよんなことから、”アレフチームの馬鹿”とその道を同じくし、そしていつしか友人となつた道理に従わぬ愚か者達だ。

「ふむ、たしかに、貴様の言う通りよ。我らはみな、歴史の中で力尽き、終わりを迎え、それでもそれを素直に受け入れることの出来なかつた者、死を受け入れられなかつた弱き者かもしれんな」

《フフフ、そうでしょう？ この世は大きな理の中動いている。誰もそれに逆らうことは出来ない、逆らうことは許されない。始まったものはいずれ終わる。生まれたものはみんな死ぬ。傲慢なのよ、貴方たちは》

古い鬼狩りと黄泉の大神の問答。

かつて己の愉しみのために死を築き上げた男と、死を司る存在の問答は、互いの存在を証明するために必要な儀式に等しい。

「たしかに、貴様の言葉こそがこの世の真理であろう。盛者必衰、生者必滅、生老病死に愛別離苦。死に抗うことなど、何の意味もない愚かなことなのかもしれんな」

《その通り、そしてそれは貴方の主人も例外ではない。不死身の存在など、不滅の存在などこの世にはいないの。貴方達の命運は既



に尽きた。終わりを受け入れる度量こそ、最期の時を迎えた生者の唯一の美徳なのよ、鬼裂《

死が笑う。

既に一度死した烏帽子ガイコツに対して、名瀬の力、根の国の主人という特性は相性が悪すぎた。

黄泉大神、伊奘冉の言葉は烏帽子ガイコツにとって令であり、毒であり、蜜。

「……そうだな、そうかもしれん」

烏帽子ガイコツの佩く骨の大太刀、その切先が地面に降りる。

黄泉大神の言葉は、死者にとって本来抗うことの出来ない令だ。

黄泉大神としてのリソースをこの場に集中させた名瀬の判断は正

しい。根の国の主人としての力が、烏帽子ガイコツに強い影響を与える。

《そう、死を、私を受け入れなさいな。溶けるの、貴方も一緒に大丈夫だよ、死は怖くない、みんないずれそうなるの、みんないずれ私の元に来るの。貴方の主人もすぐにひとつになるからね。死は怖くない。等しくみなに、いつか必ず訪れるのだから》

俯き、太刀を待つ手をだらりと下げる烏帽子ガイコツ。

それに向けて、根の国の主人が、黄泉大神がその大きな手を伸ばす。包み込むように、死を。

《死に抗うことなど無意味。生きて産まれて死んで滅ぶ。ああ、そうなのよ。生きる、なんてことに元から大した意味などないのだから》

烏帽子ガイコツは動かない。

決して抗うことの出来ない死が、甘く烏帽子ガイコツを包み込んで。

キンッー

ずしゃり、腐った巨大な果実が両断されたような音。

《え？》

「なるほど、貴様の言葉はきつと正しいのだろうな。その通りだ、生の結末には必ず死が存在し、生まれ来たからこそ、死に去る。いつか全ては失われる。きつと人生の真実は無意味だ。それは正しい、貴様はどこまでも、正しいのだ」

骨の大太刀が、根の国の主人の手のひらを斜めに両断した。

《なら、何故ー》

「だがそれはきつと今日ではない」

烏帽子ガイコツ、その骨に、窪んだ眼窩に、骨しかない腕に、黒いモヤがまとわりつく。

「己が命がいつか必ず尽きることを知り、己が輝かしき日々がいつ

か必ず滅ぶことを知り、終わりは決して覆らないことを知る」

ゆっくり、ゆっくり、骨の体に肉が戻る。

「だが、それでもと。己がいつか滅びるとて、己のこの鼓動に意味がないと何度も絶望する。しかし、それでも、と。明日はきつと良い日になる、そんなふうにも何度も何度も、泥の中から希望を見つけて。結局は、その繰り返しよ」

頬、顔には白い化粧。まぶたのしたには紫の紅。血色の薄い、細目の美男子がいつしかそこに現れた。

それは有りし日の姿。平安の世を生きた彼の生者の姿。

「生きるとはその繰り返しぞ。でも、と。だとしても、と。いつか必ず終わりは訪れようと、例えば己の人生が必ず終わると知っても、それでも――」

烏帽子に狩布、大太刀を佩く儂げでしかし、鋭い剣気を放つ青年が死を前に笑う。

「それはきつと今日ではない。そう言い続ける、それこそが生きる、ということなのだ」

《……無価値ね、だとしたら言っておける。神秘の残り滓、鬼裂。今日が、貴方の、いえ、貴方達のその日よ》

「それを決めるのは、きつと貴様死ではないさ」

なあ、そうだろうよ。

一度滅び、しかし数奇な巡り合わせにより再生された伝承が死に向けて刃を振るう。

己の刃が届かないことを彼は知っている。ここでこのし死に己が敗れることも知っている。

だが、彼は託した。だが、彼は知っている。

その日を決めるのは、その日を進めるのは自分やこの女神のようなものではないことを。

生に意味をもたらすのは神でも死でも決していない。

「任せたぞ、今日は生きる生者ども」

溪流の穴の奥。

深く眠る己の主人と、霧の香りを纏わせた男。 2人の生者を思う。

己の前に迫る死の軍勢とその主人、少しでもそれが彼らにたどり着くのを遅らせるために、刃を振るう。

はて、と。

烏帽子ガイコツ。鬼裂と呼ばれた男はふと、刃を振るうその瞬間、何故かそれに気付いた。

何故、自分は、あの男のことを霧の怪物狩りと呼んだのか。

どこか、あの神格の香りを、どこかでー

「まあ、よいか



キンツ。

美しい硬い鈴が鳴る音。

溪流に響いたその音はしかし、すぐに大量の死者の笑い声に埋め  
尽くされて、消えた。

98話 死者と生者（後書き）

いつもありがとうございます。もう少し。

99話 今日を、生きる

「うお、おおおおお!?!」

「キュキュマアアアアア!?!」

落ちる、落ちる。飛び込んだ大穴、下へ真つ逆さま。

腹の底に空気が通り抜ける意味のわからない感覚に身体の内側を  
めちやくちやにされつつ、遠山と九千坊が下へ、下へ。

「いっっ」

「キュア!?!」

すってんころりん。

かなり高いところから落ちたはず。なのに大した痛みもダメージもない。

もう、そういう物理法則がまともに働いていないのかもしれない。

「いってー。なんかこんなのはっかりだな、あー、タマがひゅんひゅんした」

「キュマ〜……」

「お、なんだ、ナマモノ。お前もわかるのか。っと、呑気なこと言ってる場合じゃなかったな。さっさと見つけないと」

だがもつそんなことにいちいち驚いていられない遠山は、すくつと立ち上がり、玉の位置を確認しながらカッパに話しかける。

カッパもまた、玉の位置が気になっていいるらしい。2人して、トントントンと跳ねて玉を落ち着かせていると。

「キユ……」

「んだ、どうしたナマモノ…… うわあ……」

カッパの鳴き声につられ、前を見る。思わず、呻いた。

鳥居。

巨大な、鳥居。それも斜めに傾いている。

いや、それだけならまだいい。それがたくさんあるのだ。



「鳥居多すぎだろ。稲荷神宮のパクリか？」

「キユキユ！」

ぼやいて動きたくない遠山を急かすようにカップがまた鳴いた。

小さな水かきをばちばち動かして、先を指さす。

「……ああ、わかってる、行くよ。多分、この先だ」

「キユム……」

行きたくないし、入りたくない。だが、遠山にもう引き返す選択はなかった。

ピコン。

ふわふわと香気に揺らぐように現れる矢印もまた、目の前に。

【オプション目標 ” 凡人探索者を救出する”】

進め、運命クエストはそう示す。

大小の鳥居が乱立する空間を、遠山とカツパは歩き続ける。見上げるような大きさものから、またぐような小ささのものまでよりど



りみどり。

とメッセージはさらに、先。その鳥居たちの更に奥を指し示している。

「ニホン人なら問答無用でなんか、こっ、敵かな気分になるな……」

無宗教という宗教観の中に滲み出る確かな畏れ。

「キユム」

「お、おい、どうした？ 大丈夫か？」

【封印式・伊奘冉宮に踏み入れました】

【”神性・ニホン”による全てのニホン由来の存在に対する絶対優位権が発動しています。全てのニホンに係る存在はこの空間において、自由に行動出来る権利はありません】

「キユ……………」

「……………とんでもないデバフだな。なるほど、だからニホンの妖怪であるお前も…………… あれ、待てよ、なんで、俺、平気なんだ？」

バリバリのニホン人であるはずの遠山。

名瀬瀬奈の力が、ニホン由来の存在へ圧倒的な優位を持つということならば、それは自分にも刺さるはずなのだが……………

【神性への対抗ロールが可能な技能発見。技能”アタマハッピーセツト”、”キリの器”、”綱う綱綱纏縛ヨ鬘シ縛”、”天

国 習合体” 複数の技能による対抗ロール…………… 成功】

少し、息苦しさを感じるものの特に不調は見られない。流れるメッセージの内容は相変わらずロクでもないものばかり。

カッパは辛そうだ。遠山は余計なことを考えないことにして道を進む。

「急いじつ」

「キユ」

【オプション目標 ” 凡人探索者の救出”】

奥へ進むたび、鳥居のデザインが変わっていく。何重にもしめ縄を巻きつけられているものや、大量の塩に埋もれているもの。

「うわ、なんだこりゃ……」

「キコマ……」

極め付けは、真っ白な鳥居。最初はそういう色かと思ったが違う。

「お札だ……」

白く薄い和紙。読めないが赤い文字で何かが書かれたお札が何枚も何枚も貼り付けられたことにより、その鳥居は真っ白に見えたのだ。

「何のためにこんなことしてんだ……？」

よほど封じ込めておきたいものがこの奥にあるのだろうか。

【オプション目標 ” 凡人探索者の救出”】

絶えず浮かぶメッセージ、そして、やはり、先を。この嫌な雰  
囲気の鳥居が並ぶ更に奥を指し示す。

ぼんぼんぼん、ぼんぼん。

ぼんぼんぼんぼんぼん。

「……太鼓？」

気付けば辺りに響くのは何かを叩く音。太鼓の音にも聞こえるが、  
どこから鳴っているかは分からない。

ピーヒョ、ローロロロロロ。

続いて聞こえるのはお囃子の音。以前、似たような音を聞いたことがある。キリヤイバの本当の力、魂の支配と使役に近づいた時に響き出した音と似ている。

「……不気味すぎるな」

「キユ!?!」

遠山がつぶやく、その瞬間、カップが飛び跳ねた。

「あ、おい！ 待て!?!」

「キユキユキユマ！ キユキユキユ！」

「うわ、すげえ階段…… クソ！ おい、待て、勝手に動くな、ナ  
マモノ……！」

急勾配の階段を登る。いくつもの巨大な鳥居が重なり、いくら登  
っても上が見えない。

だが、不思議なことに息も切れない。ただ、ただ、跳ね飛びなが  
ら階段を駆け上がるカッパを追いかけて、遠山が登り続ける。

「キユ……！」







たん、たたん、かん、からん

たん、たたん、かん、からん」

笛の音と太鼓の音。

熱気、囃子、笑い声。

階段を登りきった空間にはまず、それらがあった。

「なんだ、あれ」

広場のような空間。そこにはさまざまに簡素な箱モノが並んでる。

「……屋台？」

祭囃子の音満ちるその空間に、所狭しと居並ぶ屋台。ぼんぼり、提灯、燭台。

さまざまな灯りが明滅し、ナニカの笑い声に満ち溢れる。

『アツは八八』

『かんら、かんら、かんら』

屋台の他にはいくつかの舞台、演台が設けられ、そこから一際大きな祭囃子の音が聞こえる。

時たま、灯りが明滅するたび、その演台の上に人影のようなものがちらつく。ひらひらとした衣装を着て、踊っているかのような人影が。

「……やばいな」

背筋が凍る。なぜか。

見えないのだ。

明らかにそこにはナニカがいて、賑わう、何かの生気に満ち溢れたことが起きているのに、見えない。

あの屋台も、あの演台も、あの太鼓も。きっと誰かがそこにいて屋台で何かを食べたり、踊ったり、鳴らしたりしているのに、みえない。

賑わいと活気がこんなにも溢れているのに、遠山の目にはただ空っぽの屋台と演台と広場が広がるだけ。

ピロン

【オプション目標 ” 凡人探索者 ” の救出】

だが、それでもクエストマーカ―とメッセージは前を指し示す。

「キュ」

「ああ、……行くしかないだろ」

てちてちと、遠山の身体をよじ登るキュウセンボウのしっとり感を肌に、広場へ踏み込む。

『アツは』

「……………」

何かに覗き込まれているような感覚。歩くたびに、その場に立ち止まって蹲りたい衝動が増していく。

ここにはいけない、ここに踏み入れてはいけない。

畏れ。

ニホン人の多くが、例え己を無宗教だと断じていても無意識に鳥居や神棚への取り扱いが慎重になるのと同じく。

『アッはハハハハハはははは』

『ホッホほほほッホホホッ』

ナニカ、ナニカ、ナニカ。この場にいるありとあらゆる姿なき存在が遠山とキュウセンボウを見つめている。

姿なくともその視線、その声、その息遣いがたしかに。止まりたい、戻りたい、帰りたい。遠山鳴人の人間としての本能が叫び続ける。

「……………」

だが、止まらない。ここより先進んではならない、ここより先踏み入れてはならない。全て禁域、全て神域。

しかし、遠山鳴人には力がある。

人域を超えるための力。まつろわぬ霧を操り、従える力。

【畏れ

彼の白く変色した血が、この縁日の広場を歩くことを許可する。

『ホ、アツは、ハはは』

『ふ、フふふフッふッ』

「ひひ……」

笑い声はまるで、同類を歓迎するかのごとく。縁日の屋台の合間を、神楽の舞う演台の間を遠山鳴人が真正面から練り歩く。

「キユ……」

「いい、見るな。カッパくん。目を合わさなければコイツらは手を出してこない」



なぜそんなことがわかるのだろう。遠山は根拠もない確信を口に  
する。そう、その確信があった。

】

び、  
び

影が、舞う。演台の上をクルクルと。祭囃子と太鼓に合わせて、  
何かと絡み合うように舞う。

その影は、周りのぼんぼりの灯り、その明滅に合わせて消えたり、  
現れたり。

【オプション目標 ”凡人探索者の救出”】

メッセージが再び浮かぶ。

熱に浮かされたような光景。人ならざるモノたち、姿なき者たちの熱と活気の雑踏を、カツパと冒険者が進み続ける。

そして、屋台の並び、演台の並びに終わりが。

それは、そこに、いた。

「……キユ？」

「なんだ、アレ……」

縁日の広場、そのさらに奥の奥。

演台よりも広く、しかし低く位置する舞台がある。

そこに、何かが鎮座している。

「……岩、か？」

しめ縄がぐるりと一周。舞台にどすんと鎮座する。良く見ると、その岩の周りにもまた、灯りに明滅する形で影たちがたくさん踊っている。

演台で舞う神楽のようか舞いとは違う。多数の影が円を象り、その岩の周りを囲って踊る。

それに近いものを遠山は見たことがある。

「……盆踊り？ ……いよいよ意味わかんねえな。目的地はこの奥か？」

遠山がその舞台の上の大岩の辺りをぐるりと迂回しようとして。

ピコン

「キュ！？ キュキュキュマ！ キュキュキュマ！ キュキュキュマアー！！」

「あ！ おい、カッパ！？ どうした！！」

「キユキユキユマ!! キユキユキユマ!! きゅきゅきゅま!!」

遠山の頭の上から飛び降りたチビカツパが四つ足で地面を駆ける。嘴をカチカチ鳴らし、興奮した様子で舞台によちよち登りだす。

そして、そのしめ縄が巻かれた大岩によじ登り、てちてちとそれを叩き始めた。

「お、おい、待って!!」

遠山が、カツパを追いかける。舞台の上、大岩が近く――

ピコン

【オプション目標 ”凡人探索者”の救出】

「……………え？」

声が漏れる、何故か。

ありえない事実には、その高い観察と知性が瞬時に答えを見出したからだ。

だが、遠山鳴人の常識が、”その答え”を受け入れられない。故に、え、と呟いた。

「キユ！！ キュマ！ キユま！！ キュ・キュ・キュマ！！」

小さな水かきで、つぶらな瞳から涙をこぼしながらその岩をペチ

ペチ叩くキュウセンボウ。

――

彼は、凡人探索者の友人らしい。

「いや、いやいや」

ありえない。囚われているとは知っている。アレフチームのバカは失敗し、名瀬瀬奈の神体の中に囚われている、この前提は正しい。

そのエネルギーを名瀬に永遠に消化され続けている、らしい。

では、どこに？

凡人探索者、そいつは今、どこにいる？

え？

ピコン

矢印が、遠山鳴人の冒険の目標を指し示す矢印がそれを指さした。

そのしめ縄の巻かれた大岩を。



【オプション目標 ” 凡人探索者の救出”】

「……岩、じゃない」

見る、その初めは岩だと思ってた。だが違う、それはどくり、どくりと蠢いている、脈動している。

【オプション目標 ” 凡人探索者の救出”】

「いや、いや、待て、囚われてる、ってまさか」

見る、岩ではない、塊だ。

何かの煮凝り、溶けて融けて蕩けて、そのあとまた固まった何かだ。よく見れば所々に筋のような、もの。血管にも見えてー

【オプション目標 ” 凡人探索者の救出”】

見る、メッセージはずつとその塊の上に漂っている。もまた同じくその塊を指し示す、カッパのキュウセンボウもまた、その塊の上に乗っかってペチペチと必死に塊を叩き続けている。

まるで、寝ている何かを起こそうとしているような。

……誰を？

「いや、それは――」

【オプション目標　前方　”凡人探索者”】

――ワタシ達の仲間が捕食され、囚われている

通信の、ソフィ・M・クラークの言葉を思い出す。つまり、これは

「嘘だろ、お前」

プリント

【オプション目標 前方 ホモ・サピエンス】

【凡人探索者は”神話回生・伊奘冉大神”に1000回殺害され殺生石に変えられた】

【凡人探索者は異界封印式”あの日の縁日”により全ての人間としての機能を封じられている】

これだ。

アレタ・アシュフィールドが追いかけて、ソフィ・M・クラークが逆転の鍵と称した人間。

それが、これ。

しめ縄を巻かれた肉塊。

岩ではない、しめ縄を巻かれたそれは巨大な肉塊だった。血管が走り、どくん、どくんと蠢いている。

それが、”凡人探索者”だ。

「いや、いやいやいや、おまえ、これ、マジか」

遠山の口が自然に開いていく。

どくん、どくん。胎動する巨大な肉体、それは心臓にも見えるし、内臓にも見えるし、脳みそにも見える。

艶かしさなど微塵もない、赤黒く煤けて、乾ききっている。

「ー食われた奴のバトルは生存値を示している。

「……生き、てんのか？ マジで？」

ソフィの言葉、それが正しいことを示すようにその赤黒い肉塊はたしかに胎動している。

どくん、どくん。生きるものだけに許された活動、鼓動を感じる。

「いや、これはおまえ、死んでないとダメだろ。人として」

なんでまだ生きてるんだ？ もう感想がそれしかなかった。

「キユ!？」

ペチペチと岩ではなく、肉塊を叩いていたカップパが動きを止めて立ち上がる。

上を向いて。

《み、つけ、たあああああああ》

どろり。

上、粘液。

背後、圧。

遠山が後ろを振り返る。黄泉平坂で後ろを振り向いてしまった。

「……くそ」

来た。

死に追いつかれた。闇色の長い髪、暗闇を溶かして人間の形に流し入れた輪郭。

ぼ、ぼ、ぼ。

それは縁日の並びの奥からゆっくり、ゆっくり歩いてくる。死の軍勢、あの標識アタマ達の姿は見えない。

ぼ、ぼ、ぼ。

だが、それが縁日の並びを進むたび、あれだけ煌びやかに灯って



いた縁日の灯りが消えていく。

順番に、順番に、ブレーカーを落としていくようにそれが歩んでくるたび縁日が終わっていく。

《おっほッホホ》

笑い声も沈んでいく、代わりに、どろり。

その闇の姿をした死に付き従うように、同じような姿をした人影達が地面から現れいづる。

《伊弉諾、伊弉諾、  
またも逃げるか私のもとから……》

《……フフ、違う、伊弉諾じゃない、鳴人くん、鳴人くん、私の

鳴人くん、私の伊弉諾

「げ」

《いみもかくし、それに触れるな、それを起こすな。ソレは祭りの賑わいにまどろみ続ける》

「あ？ ……お前、何言ってるんだ？」

《……その人はね、今ずっとお祭りの中にいるの。もう出られない、ドロドロに溶かして、固めたからね。フッフ、もう、自分の力タチを思い出すことすら出来ないよ……でも、ほんと、なんでまだ生きてるんだろ》

「名瀬……お前がここに居るってことは」

《ああ、鬼裂。うん、強かったよ。フッフ、ヨモツシコメ達はみんな斬られちゃった。でも、彼だけじゃあ、私に勝てるわけじゃないよ》

朗らかに微笑む女、

《ああ、鬼墮ちの武士、いみじくも我が子らの中からあのようなモノが産まれたのは許しがたく。ゆえに私のナカに溶かしたものよ》

5466

「……キユキヤキ!？」

「……お前、なんか混ざってんな。あのガイコツが手下をしばいた割に、またたくさん連れて来やがってよ」

《フフ、いいでしょ？ これは神話の残滓。ニホンにかつて存在した神格の影法師。私は古い神話の頂点だから、影法師ならみんな従えることが出来るの、それでもかなりの数を、その人に潰されちゃったけど》

「……コイツ。まだ、生きてるのか」

《フフ、そうだよ。しぶといよね。1000回殺しても、まだ生きてる。でも、自分の在り方を、輪郭や、思い出、そういうのはもう何もないよ。ぜんぶ、全部溶かしたからね》

「趣味が良いことで」

《フフ、それほどでも。鳴人くん、そろそろ諦めてくれるよね？ わかってるよね？ 詰みだって》

ぞん、どろん。

ぶんご。

《ここに揃うは、古事記の神話。ニホンの神代を生きた神々の影法師。わかるよね？ 勝てないって。今の私と戦うのってさ、つま  
り、ニホンの神話それそのものを敵にするのと同じなんだよ？》

「電波が。なんだよ、じゃねえよ。……だが、ヒヒヒヒ、名瀬、今  
お前、少しー」

《んー？》

「焦ってるな、お前」

《……………んー？》

「いやに口数が多い。焦ってるな。あの烏帽子ガイコツがそんなに強かったか？ 俺を早めに始末したいのか？ カツパマスコツトを逃したのがまずかったか？ それとも」

「やっぱり、この肉塊が怖いのか？」

《フフ、半分正解かな》

「半分？」

《キミ。貴方も私は怖いよ。その肉塊の人と同じくらいね》

「……へえ、そりやますますよー。この肉塊の方が気になってきたなー」

《何もさせない、ここで終わりだよ、鳴人くん》

女が、言葉を。

もはやその存在に境界はない。

《伊弉諾、貴方の遁走もここでお終い》

他者を演じ続け、しかし最後に本当に自分にたどり着いた女は古い神性、国産みの女神の自我と混ざり始めている。

果たして、彼女の目に写っているのは遠山鳴人なのか、それとも別の誰かか。

「やってみなきゃわかんねえだろうが」

もはや行き着く先もなし。逃げる場所も隠れる場所もない。

神に挑み、敗れ、溶かされ固められ。殺生石と成り果てた凡人を背に遠山は選択を強いられる。

「ここまできて、諦めてたまるか」

遠山は抗う。前を向き、己の首元に手を当てて。キリを喚び――



「キユマ」

「え、おい、カツパちゃん？」

てちてち。

ぴよこんと、大岩から飛び降りたカツパの子。

それが遠山の前に。遠山を背に庇つようなら位置に立ち。

「キユ」

小さく鳴いて、それが始まる。

嘴を高らかに空へ。こぼり、こぼこぼ。その嘴より溢れるのは清らかなるヤシロの水。

水天宮に赦されし、水に愛される権能がここに。大水が小さな力ツパの嘴から溢れて、噴水のように吹き上がる。

「キユマ」

吹き上がった大水は九千坊に降りかかる。辺りに溢れる大いなる水。

「なんだ、これ」

遠山は目を剥く。溢れて流れて押し寄せてきた大水が意思を持つかのように遠山と岩の周囲を囲んで、ピタリと止まる。

そこからゆっくりカタチを変える。溢れてよどみない大水が壁のように立ち昇る。あっという間に象られるは、水のドーム。

遠山鳴人としめ縄の肉塊をぐるりと囲み、包み込む透明な水。

嘘のように透き通り、微動だにしない水の膜がまるで遠山たちを守るかのようにその場所を包んだ。

《ッ!?!》

「じ、ねは……」

名瀬と、遠山、2人息を呑む。

流れて、引いていく水の中、そこより出て顕れた彼の姿を見たからだ。

水は冷たく、心地よい。

清らかな水に棲まうものたち、彼はそれらの大親分である。

「いっぴゃんこっぴゃん連れてきおつてに。そぎゃんにわのこぶんが怖がるうもんけ」

水が引いていく。顕れるのは大きな亀の甲羅。年季の入った薄茶色の立派な甲羅。

水かきは雄々しく、広く、大きく。嘴は鋭く、巨きく。

筋骨隆々の濃い緑色の肉体、そして水を受けて煌めく頭のお皿。

「か、かつば……さん？」

それは、昔話に出てくる大妖の真の姿。遠く大陸より、一族を引き連れて海を渡りニホンに渡った古い神秘。

「よか。遠山どん、アレの相手はおるがするけんど」

西国大将、九千坊。それが真の姿で水の中より顕れる。

もうキュツキュツと鳴くマスコットはどこにもいない。遠山の目の前にいるのは、西国をまとめた大妖そのもの。鬼裂と共に、古事記の神話に抗い続けたまつろわぬモノ。

《……九千坊、ヤシロの大妖、水天の飼いかツパ。フフ、往生際が悪いものね》

「こぶんより先に諦める親分がどこにおるちゆか。覚悟せんね、女。あたのねちこい想いもなんもかんも全部、ここでおしまいよ」

《カツパ風情が？ 私の想いを？ フフ、面白いね。ようやくあと一つ。厄介な神秘たち、あのまま、貴方たち2人があの溪流で戦い続けていたら面倒だったけど。フフフ、わかってるよね？ ここは私の領域、あの溪流とは違うんだよ》

「あたの言葉はほんなこつあくしやうなこつたい。やかましいとよ。……勝つのはおるたち、おるにはそれがわかつちよる」

《フッフ、伊弉諾伊弉諾伊弉諾。待つててね、この河童を締め殺したら次は貴方。その肉塊みたいに溶かして、綺麗に産みなおしてあげるから。フッフ、ああ、楽しみだ、なあ》

どほり、どろどろ。

女の周りの影がさらに増える。それはいずれも影法師。古事記に語られる古い神格たちが遣した残影に過ぎない。

しかし、残影とてそれは最早一つの神話そのもの。

歴史に残る大妖とて、そもそも戦いになるような相手ではない。

「おい！ 河童！ 俺を出せ！ 1人じゃ無理だ！」

遠山が水の膜の内側から大きな甲羅を背負う背中に声を飛ばす。

九千坊は振り返らない。ただ、大きな水かきを横に、ぐつと親指だけを立てて。

「あたはあたの為すべきことを。おるはおるの為すべきことを。遠山どん、おるのバカで可愛い子分を頼むったい」

「ーッ、待て、九千坊!!」

《どいてよ、九千坊。退け、水天宮の飼い子、私の名前は名瀬瀬奈、私の名前は伊奘冉、これなるは国産みの母の令である》

「きかん、じんはしかん、おるは子分ば守るだけたい」



《……バカな河童》

「お、オオオオオオオオオオオオ！！！！」

神話を前に、西国大將が吠える。

《おほ、ホホほほほ、ホホホホホ》

一際大きな、粘性のある影法師が迫る。ソレは古事記の中の豪傑中の豪傑、八岐の大蛇を討ち滅ぼした益荒男の残影。

国をも食い尽くす大蛇の首をもいだ豪腕が、九千坊に迫りー

「八卦——」

太く強靱かつしなやかな脚が真上に。90度に持ち上げられた河童の脚が、ゆっくりと地面に下ろされる。

美しい四股踏み。

神に捧げるその闘い。九千坊もまた他のカップに漏れず、それが好きだった。

《ホホ???》

がしり。真正面からその神の豪腕を受け止めて。

《う。そ》

伊奘冉が、目を丸くする。彼女は知っていた。その残影の強さを。己が愛し、憎んだ男神との子の中でおそらく最も強い子の影だったから――

《ほ？ ホ？》

「八卦良し」

隆々。力瘤が一気に膨らみ、九千坊が神の腕を押し返す。下から九千坊が突き上げるように、腕ごとそれを持ち上げて。

「のこった」

《——ホ？》

ぶおん。

嘘のような光景。九千坊の2倍はあるかと言つ影の巨軀。それが  
がっぷり持ち上げ、そのままそれを放り投げる。

《ホ  
」

《バあ  
」

《アあ？！》

影の大群が投げられた巨大な影法師に轢き潰される。

影法師の軍勢と、名瀬瀬奈、伊奘冉の動きが止まる。

《……………は？》

神をも放り投げ飛ばす大妖。

嘴から白い蒸気を漏らし、1人立つ。

その背に庇うは己の子分。バカで愚かで間抜けで、しかし九千坊にとつてなによりも大事な子分。

その背に庇うは己達の可能性。己のバカな子分と同じ人種、危うく、しかし聴く、勝つことを諦めない、九千坊が愛して止まない、進み続ける人間。

「けえ！！！！ 神だろつもにゃんでろつと！！！！ このおる、西国大将の名に掛けて！！！！ 皆悉く投げ捨てる！！！！」

西国大将、任侠立ち。

嘴を裂けんばかりに巨きく開けて叫びたる。

《ほ、ホホ、ホホホ》

《へ、へへはフフへへは》

わかってるのだ、彼は誰よりも。自分だけでは神話には勝てるはずもないことを。

わかってるのだ、彼は。鬼裂が敗れた相手に自分が勝てるはずがないことを。

わかっている。自分達は敗けたのだと。自分達だけでは勝てないことを。

だが、それでもー

「あるは、まだ生きとるぞ」

背中に子分がいるならば、残り滓の身体がまだ脈打つならば。

彼が止まる理由などこの世のどこにもない。勝ち目のない負け戦には慣れてる。

大津波の如く迫る古事記の残影たち、西国大将九千坊は一步も引かずその全てを受け止め、組み合う。

《ホホホホ》

「オオオオオオオオオオ！」

その身体には剛力、大妖の器に違いない金剛体。だが、勝てない。

敵は神話、敵は神、敵は二ホン。

最も古きモノ達。

投げる、掴む、叩きつける。

九千坊がしにものぐるいで暴れ回るも、笑い声は止まらない。

見るよ、見よみよ。水天の飼いかツパが戯れておる。



さわげや、歌えや。ちいさきものが踊っているぞ。

伊奘冉宮に再現された古事記、ニホン書記の物語たち。

それが遊ぶ、健気に吠えるカッパの姿を笑いつつ、戯れにカッパとの組み合わせを愉しむ。

「か、カッパ！ 九千坊！ おい！」

そのあまりの有様に、思わず遠山が水の膜に近づいて。

「来るなー！！」

「ッー」

「あたらわかつとるね!? 今、遠山どんにしか出来んことがある!! 鬼裂も、おるも、あたに賭けた!! 頼む! 遠山どん!」

「そこのあるを!! おるの子分を! 叩き起こしてくれたい!!」

5489

九千坊が叫ぶ。

神と組み合い、その水かきをボロボロにしつつも、叫ぶ。

そう、彼らには予感があった。神秘の残り滓達は本能的に悟っていた。

遠山鳴人という人間にしか出来ないだろうことを。

遠山鳴人という人間の中に巢食う大いなる力のことを。

それこそが。

「頼む！！ おるたちの負け戦を！！ しみゃーにしとくれ！！」

自分たちの敗北を終わらせる逆転の手段だと。

「――了解」

遠山が、振り帰る。

水の幕に背を向けて、九千坊に背を向けて、神話に1人抗う大親分の言葉を受けて。

「叩き起こせ、か」

見る、観る、みる。

水の幕の中、1人とひとつ。

遠山鳴人が、しめ縄の巻かれた肉塊を見上げる。

「見れば見るほど、意味わかんねえな。お前」

肉塊に抜けてぼやく。返答などあるはずもない。

「お前の仲間が言ってたぜ。バイタルには問題ないんだってよ。…いや、問題ないことが、問題だろ」

その肉塊にはもう人間の名残りなどどこにもない。

目も、鼻も、口も、四肢も、皮膚も、爪も、歯も。

耳も、ない。

「……お前、いったいなんだよ」

静かだ。

気付けば、もう水の音しか聞こえない。きっと振り返れば水の幕の外では大妖と神話の軍勢による闘いの音が響いているのだろう。

だが、それは聞こえない。今、遠山の意識は研ぎすまされつつある。

勝つためにここへ来た。

己の過去とケリをつけるためにここへ来た。

自分の、やるべき事だけを見つめる。

「……やるか」

少し笑う。

岩のような肉塊、それはまだ生きている。

岩のような肉塊、誰しもがそのことを信じている。

アレフチームも、烏帽子ガイコツも、カッパも。

みんな、同じ事を言っていた。

「ジュ」

少し笑う、何故か。

そう、その肉塊のことを、その大バカと呼ばれた奴のことを話す時、みんな同じ様子だったから。

どこか、みんな嬉しそうな顔で。

【オプション目標 ” 凡人探索者 ” の救出】

さあ、考える。

遠山が片膝をつき、大岩を、肉塊を見つめる。

「どっやったら、お前は目覚める?」

クエストの、ぼっけんのはじまりだ。

【アイデアロールを開始します、INT値による補正とこれまで  
得た情報により成功の可能性が変化します】



まずは観る。

その大岩を、肉塊を。

蠢き、胎動し、動いている。

生きて、いる。

「マジで生きてるな、きしょいから触りたくはないけど」

見ているだけで頭がおかしくなりそうだ。

「さて、考える。そもそもお前はなんで、そんなになっちまったんだ？」

【アイデアロールが続行されます。INT値が3以上なのでプラスの補正が発生します。アイデアロールのヒントを発見、”名瀬 瀬 奈”の発言】

「……溶かして、固めて、生まれ変わらせた、か」

名瀬の言葉を思い出す。そう、言っていた。

名瀬によって溶かされ、蕩かされて、固められた結果がこれ。

エネルギーにされているとも言っていた。

鬼裂や九千坊の言葉も同じ、名瀬に、伊奘冉に敗北し、こんなものになったのだと言っていた。

敗北した結果、凡人探索者は、しめ縄の巻かれた肉塊になった。

「いや、それは、おかしい」

【アイデアロールが続行します】

何かが、引っかかる。

思い出せ、名瀬の言葉だ。あそこに違和感があった。

——なんでまだ、生きてるんだろ

そう、たしかにあの女はそう言った。それはつまり。

「……………名瀬もコイツを殺しきれなかった？」

【アイデアロールが続行します】

引っかかっていたものが、少しずつ形になる。

これがまだ生きているのは名瀬にとっても、想定外。そして名瀬はこれを恐れている。

遠山の思考が廻る。名瀬瀬奈が紡いでいた言葉をどんどん解いていく。何かひらめきに似たものがチラつき始める。

「縁日…… あの鳥居、しめ縄……」

この空間そのもの。

ーソレは祭りの賑わいにまどろみ続ける。

名瀬と混じった神性の言葉も思い出す。

待てよ、待て待て。

あの言葉はつまり、あの縁日の並びもこの肉塊を留めておく為のものということなのだろうか。

なら、つまり。

「……この肉塊は”神”ですら、滅ぼすことが出来なかった」

それは名瀬の言葉とこの空間が物語る。

殺すのではなく、封印を。

滅ぼすのではなく、無力化を。

ニホンの神話体系の頂点、その力を得た存在ですらそうせざるをえなかったのならば。

「この肉塊は名瀬に敗れて生まれ変わった姿……」

遠山が手を合わせて、ブツブツと考察を続ける。

あともう少し、いや、それなら。

ぐちゃぐちゃの思考が、一つの答えに辿り着く。それは到底信じられないし、そんなものいいはずがないことだった。

ー奴のバイタルサインは正常値を示して。

アレフチームの言葉。

それが遠山の思考を完成させた。

「……………え？　つまりお前、マジで不死身？　それ、自前の力で生きてんのか？」

【アイデアロールに成功しました】

【自力での考察が成功した為、  
”凡人探索者”の技能が解放されま  
ママー

TIPS  
€ ”耳の血肉”



”耳”の部位保持者は、肉体を完全に再生することが出来る。どんな状態からでも元の身体に戻ることが出来る。死亡カウントが100を超えた段階で、この技能は自動発動する【

「あ、マジか」

あっけなくつぶやく。あっけなくたどり着いた。

メッセージが、その肉塊の力の全容を伝える。

簡素な内容だが、なにげにとんでもないことが書かれているそのメッセージ。

それはつまり、アレフチームのバカとやらが不滅の存在だということの意味する。

「あー、なるほど」

名瀬はこれを無力化は出来たが、ついで、殺せなかった。リスクを孕んで、己の中に封印という手段を取ったのだろう。

ならば、遠山鳴人はどうするべきか。

ピコン

【凡人探索者の救出】

「あー……………」

思考。

流れるのはこれまでの会話の中に存在したピース。

溶かして固めて生まれ変わらせた。死亡回数100。肉体の再生。  
凡人探索者。アレフチームの馬鹿。烏帽子ガイコツ。カツパ。

”叩き起こせ”

烏帽子ガイコツと、カッパのセリフ。同じ言葉だ。

「ー思いついちまったな、これ」

遠山鳴人はやり方を思いついた。

凡人探索者が完遂出来なかった作戦の続行を、それをなす為の方法を。

それは決して正気ではないやり方、それはきつとまともではないやり方。

だが、元々遠山鳴人の脳みそはハッピーに仕上がっている。

出来ると思った、だからやる。

いつも通りに、遠山鳴人は己の首元に手を当てた。

《アハハハ、九千坊。九千坊。九千坊。九千坊。哀れね、あなたの抵抗も、もう終わる。あなたを溶かし、て……………え？ まって、鳴人くん、あなた、なにを》

余裕こいて神話と九千坊の戦いを眺めていたらしい名瀬の言葉が

淀んで。

「キリヤイバ」

遠山の首から引き抜かれるのは、彼の最強の探索者道具。

彼の敵を、彼の意のままに刻み、斬りつけ、殺し尽くす兵器。

それは牙と爪を持たない遠山へ、彼の友が与えた牙と爪そのもの。

ならば

「アレフチームの奴」

それは果たして。

《待つて、鳴人くん、あなたほんとに何をしようとー》

「お前を叩き起こす」

果たして、不滅の化け物の命にすら届くのだろうか。

ずぶん。

欠けたヤイバの切先が、その肉塊のど真ん中、そこに突き立てられた。

《え》

「直刺した。一番どぎついのをよ、ぶち込んでやるぜ」

びち。



キリが、流し込まれる。

キリヤイバの欠けたヤイバが見た目よりも柔らかかった肉塊に突き立つ。それだけでは終わらない、直に刺された刃がたちどころにキリに変わる。

それすなわち、全ての生命を斬り刻むヤイバになりて。

《あ》

名瀬の、伊装冉の引きつった声。





強く、強く、強く。

遠山鳴人が、キリヤイバを突き立てたまま、その肉塊に向けて叫ぶ。

血が噴き出すのもおかまいなし。遠山は自分の予想が的中した興奮に酔い、気にもしない。

そして、ここから、遠山鳴人の予想が正しく、その狙いが的を得ているのならば――

「悪いなあ！！”アレフチームの大バカ”！閃いたんだ！お前よお！ぶつ殺しても死なないんだってなあ！」

ぐりりと、さらにヤイバを深く食い込ませて。

『  
ンンンGYAAA  
AAA!??』

震える悶える。

キリヤイバを突き刺された肉塊が震えて悶えて、叫び続ける。

口も、鼻も、喉も。声を出す為の器官などないのにそのしめ縄の巻かれた肉塊は叫び続ける。

生きているのだ。

痛みを感じ、それに苦しみ、叫ぶ。それは汚くてみっともなく、恥ずかしい姿。



一際大きな流血、肉塊に巻かれたしめ縄はすでに真っ赤に染まる。

「ーっ、ヒビヒビヒ！！　そうだ！　それでいい！　死ね！  
！　そのまま死に続ける！！　でも決してくたばるなよ！　アレフ  
チーム！！」

噴き出る返り血に髪を濡らしつつ、遠山鳴人の威勢はそのままに。

嗤いながら、笑いながら、さらにキリを流し込む。

《ーっ、まさか、鳴人くん……！！　ダメ！　皆、疾く集え！  
遊びは終わり！！　今すぐあの水のまくからあの人を伊弉諾を、鳴  
人くんを！　引き摺り出せ！！》

イザナミ、あるいは名瀬の言葉、余裕の色がだいぶ薄くなってい  
るその声に感じ、彼女の元に伏せていた神の残影達が、また一斉に





「やった、やってくれおった！ 遠山どん！ あたはほんに、いば  
しかいひゅうもんたい！」

《…… 邪魔を、するな！！ 九千坊！！ かしこみ、かしこみ、  
奉る》

大波を退けながら、名瀬が手で何かの印を結ぶ。

たちまち、彼女の近くに侍っていた神の残影。襷褌をまとったそ  
れが蠢く。

ぼこり、ぼこぼこ。関節を膨らせ、変じていくそれ。

しゃきん。

襜褕、その腕の裾から現れたのは骨の刃。

かぶりをふるい、頭を覆っていた襜褕が剥がれる。そこには見た覚えのある烏帽子が。

《……………く、そ》

苦しげに漏らされる声に、九千坊は目を剥いた。

「……………やって、やってくれちよる、なあ」

《伊弉諾宮異界神殿 ”新解釈古事記・鬼”。

行きなさい、目の前の大妖を斬れ。最古にして最恐の鬼狩りよ》

《う、オオオオオオ》

苦悶の声。

闇に吞まれたガイコツ、真っ暗な眼窩から闇を零し、檻褸と粘液に囚われた鬼狩りの末路がそこに。

「…………鬼裂どん！！ アタまで！！」

イザナミに敗れた鬼狩りは、その神話体系に組み込まれた。黄泉の軍勢をすら斬り滅ぼすその武は、たしかに神の物語に列するに値する。

ある男の探索者道具として夢を共有した大妖と鬼狩りが、不毛な殺し合いを始める。

悲劇。

名瀬が苦悶する九千坊ににやりと笑う。

《フッフ、フッフ、フッフッフ。間に合う、ほら！ 鳴人くん、もう諦めなよ、鬼裂が行くよ、九千坊をすぐに斬って、あなたも斬りに行く、だから、ほら諦めてー！》

神性の混じる言葉だ。

今や、名瀬瀬奈の存在は半分以上が、妄執を共にする神秘の残り滓、ヨモツオオカミ、伊奘冉と成り果てている。



「九千坊!!」

「っ!!」

神の話すら聞かない男が、水の幕の向こう側、カッパの大親分に声を届かせた。

「身体張れ!! 踏みとどまれ! 邪魔をさせるな! その代わりに、  
てめえの子分は俺に任せろ!!」

「っ、がってん!!」

互いに振り返ることはない。

遠山は肉塊を、九千坊は鬼裂を見つめて、言葉のみを交わす。

九千坊が神の軍勢を捌きつつ、鬼狩りの白刃を掻い潜る。一手、一手、一手が進むたび、九千坊の甲羅にはヒビが、皿には傷が、水かきには裂け目が。

確実に追い詰められる。

だが

「起きろ、起きろ起きろ起きろ起きろ起きろ起きろ起きろ！　アレフチーム！　ここまでしてんだ！　てめえ、起きたらマジで働けよ！！　死ぬ気で！」

『ギ、GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA  
 A A A A A A A A A A A A A A A A A  
 AギギギニギギギG I G Y A ! ?』  
 『

【”耳の血肉” カウント進行 7回死亡】

一手、一手。九千坊が時を稼げば稼ぐほど、遠山鳴人が肉塊の命を一つ、また一つと奪って行く。

名瀬によって、溶かされ固められ、肉塊として生まれ変わらされたその生命。

それを丁寧にキリが殺し続ける。





悶え、叫ぶ肉塊は本当に人間なのだろうか。遠山はしかし、メッ  
セージを信じるしかない。

だから、声を上げ続ける。目覚めろ、と。

「てめえの作戦を知った！！ 勝ち目があつたんだろ？！ それを  
続行しろ！ それはてめえの仕事だろ！ 探索者！！」

【”耳の血肉” カウント進行 19回死亡】

びくん。

探索者、その言葉を発した瞬間、肉塊が強く蠢いた。聞き覚えの  
ある言葉を聞いた、そんな反応。

《だめ、だめ、ダメダメダメ、やめて、鳴人くん、ほんとに無理だよ、無理だから、そんなのありえないから》

「きゅはははははは！… 道敷の！ 顔色悪くなつとたい！ どぎやんしたとや！」

《——んんんん》

「ぬ……、しもつた」

《オオオオオオ、く、ウ、すまん、九千坊……》

ぶりん。

白刃、一閃。

ついに、鬼を裂く刃が大妖を捉えた。

けさざきに一撃は、九千坊の皿を割り、嘴を折り、右手を斬り飛ばし、肩から腹を裂く。

「きゅ、は…… 見事、太刀筋、鬼、裂……」

《く、オオオオオオ、オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！》

崩れ落ちるカッパの大将、それを見下ろし慟哭するのは闇に飲まれたガイコツ。

ある男の友人たちは、互いに滅ぼし合い、ついに皆力尽きた。

悲劇――

「振り帰らねえぞ！！ 九千坊！」

遠山が叫ぶ。

背後で、九千坊が斃れた気配を感じ取りつつ、決して振り返ることはない。

「まだまだ、まだ終わりじゃない！！ おい、アレフチームの大バカ！ 見る！ 聞け！ 今、てめえを助けようとしたカッパが、九千坊が、命を張った！！」

背後。

カツパの骸を踏みつけて、神の軍勢が迫る気配を感じる。だが、遠山と肉塊を包む水の膜は未だ消えず。

例え骸と成り果てても、その大妖の意思は消えない。

【”耳の血肉” カウント進行 28回死亡】

「九千坊だけじゃない！ 烏帽子ガイコツ、鬼裂も1人で戦い果てた！！ てめえの負け戦をひっくり返すために！ てめえを負けさせない為にあいつらは命を使った！！」

コイツらの関係はあまり知らない。神秘の残り滓とやらも大して理解出来ていない。

わかるのは一つだけ。ガイコツもカツパも、みんなこの肉塊の為に死んだ。

命を賭けたのだ。その姿は遠山にとってまぶしく、羨ましく、尊いものだ。

「2人ともが言った！ お前を叩き起こせて！！ いや、あの2人だけじゃない！！」

「アレフチームが、ソフィ・M・クラークが！ グレン・ウォーカ―が！ そしてー」

『アーレフ』





振れる、歪む。

身悶えを始める肉塊、キリに何度も殺され、その度再生していく  
肉塊は明らかに、遠山の言葉に反応して――

《させない、そして、間に合った、よ》

「!?!? クソ！」

ず。

名瀬の声、背後に。

斃れた九千坊を踏み越えた神の残影達が、ついに水の幕のすぐ外  
にまで来てしまった。

ず、ずずず。

彼らの暗闇と死で構成された手が水の幕に触れる。たちまちに澱む水の膜。

煮凝りのようなゼリー状の手が、何本も何本も、たあくさん、遠山の体に伸びる。

《よく頑張ったね、鳴人くん。正直、君がここまでやるって、思ってたけど、思ってたよ》

《でも、これでお終い》

ずず。

遠山の背中を、遠山の足を、遠山の腕を、遠山の腹を、遠山の首

を、遠山の顔を。

暗闇色の腕が、そっと撫でる。

《希死念慮》

「ーっ、あ、が……」

がくり、遠山が膝をつく。

寒い、寒い、寒い。大風邪を引く寸前の寒気を人が殺せるレベルまで大きくしたものが身体の芯を奮わせる。

熱がなくなる。生きることに必要なそれが全て冷たさに変わっていく。

《鳴人くんは、よく知ってるよね。あの子と、死にたがりのあの  
人と共に過ごした貴方はよく知ってるよね》

《生命とは、生き物とはいつか必ず終わって消え去る哀れなモノ。  
その歩みもその思いもその記憶も、いずれは全て消えてなくなる不  
確かなモノ》

《故に、命とは不完全、命とは無意味。いずれ消え去るモノにな  
んの価値があるというの？》

《ああ、だから、あの人はきつと誰よりも正しかった、あの人は  
誰よりも知っていた。生に意味などないことを、生きることの無力  
さと無意味さを》

《そうだよ、海城さん》

《人はみんな、死にたがりなんだよ》

「う、お……」

《辛いよね、わかるよ。完全ではないから、滅ぶことが決まって

る運命は辛い、この世には不完全なものが多すぎるよね。どんなに頑張って生きてても、等しく死んで全部終わりなんて、哀れすぎるよね》

黒い手、数多の黒い手が遠山を撫で続ける。

喉を、まぶたを、尻を、耳を。愛撫

「……………」

がくり、遠山が膝をつく。

視線を下に落とし、身体を弛緩させ、赤い返り血を髪から垂らしながら、膝をついた。

《悲しいよね、鳴人くん。虚しいよね、鳴人くん、わかるよ、うん、ほんとによくわかるよ》

遠山の頬を撫でる黒い手。

それは名瀬の言葉と共に、艶かしく蠢く。

《でもね、安心して？ もう大丈夫だよ、鳴人くん。もういいんだよ、貴方はこれから完璧になるんだから》

《もう何も貴方を脅かすものはいなくなる。貴方は私の伊弉諾になるの》

《もう何も貴方は恐れることがなくなる。貴方は完璧になるの》

《もう何も貴方は欲しがることがなくなる。貴方は全てを手に入れることになるの》

「……………全て？」

ぼそり、遠山が名瀬の言葉に反応する。

その言葉に、黒い手達がざわめく。歓喜、その表情、浮かべるかのようだ。

《そう、全て！ 貴方は1人でたどり着く、貴方は1人で完成する、天上天下において貴方は1人で、唯尊くあるの、そうなるべきなの》



「……なんで、お前はそこまで」

《貴方を愛してるからだよ、伊井諾遠山鳴人》

《愛してるの。本当に。貴方のことを考えるだけで、ううん、貴方がこの世界に生きているということだけで、私は生まれてよかったと思えたの！ 貴方の姿を見るのが好き、貴方の匂いが好き、貴方の声を聞くのが好き、貴方の殺意を眺めるのが、貴方と一緒にいるだけで！ 貴方は私をおかしくさせたの！》

《でもね！！ 貴方はもつと素敵になれる！！ ダメだよ、鳴人くん！ 私が愛した貴方は！ 他者なんて必要ない！ 弱い、よわよわ、弱くなつていく貴方を見たくない！ 他人と通じ合ったり、何かを託したり、頼ったり、信じたりする貴方なんて見たくない！ 誰かのモノになつた貴方なんて、誰かと一緒にいる貴方は違うの！！ 誰かと共に歩む貴方も、誰かに選ばれて愛し合う貴方も全部違う！！ 違う、違う違う違う違う違う違う違う違う！！ 全部！！ そんなの解釈違いなの！！ そんなの遠山鳴人じゃあないの！！》

死の力を従える神話体系の頂点が語るのは、どこまでも傲慢で歪んだ言葉。

《私が、貴方を完璧にする。理想にする。貴方は1人で進むのが一番美しいの、だから貴方にー》

己の理想を他人に強要する、それを

《愛は必要ないよ》

「……………」

いくつもの黒い手が、一つになる。合わさり、重なり、一つになる。

【警告 敵、神性による精神汚染を受けています。警告、ヨモツオオカミ・イザナミ習合体の神性による”死”の影響を受けています】

始まった。

間に合わなかった。

名瀬瀬奈は、伊奘冉はついに追いついてしまった。

鬼裂が道を切り拓き、九千坊が時を稼ぎ、遠山鳴人がたどり着いた。

だが、間に合わなかった。

死が、圧倒的な死という概念そのもの、一つの神話体系において  
” 終わり ” を司る大いなるものが、その歪んだ妄執を遠山に向ける。

「……………」

遠山が、ぐったりと膝をついたまま動かない。

黒い手が、その身体を握りしめるように包み出す。

【警告】 神性による精神汚染への対抗ロール開始…………… POW  
値による対抗…………… 失敗。技能・” 頭ハッピーセット ” による補正……………

失敗】

「……………」

《フフ》

女が満足そうに嗤う。

抵抗出来ていたはずの女の力に、ついに遠山が力尽きる。

そもそもが、この領域。神秘の残り滓達、鬼裂と九千坊が斃れた時点で、伊奘冉の世界に対抗する領域は消え去った。

もう、あの溪流もどこにもない。

そして神秘の残り滓達が斃れたことで、そちらに回していた伊奘冉の力のリソースは、今全て遠山鳴人只一人に向けられる。

結果が、これだ。

「.....」

魂の抜けた虚な顔。

ぐったりとその場に頂垂れる身体。

【霧” ……ここ、までか…… やはり、無謀じゃった、祖母君に、黄泉の国の主に、人間が、儂がついたところで……】

【警告 ” お前の血は白色だ” による神性への抵抗…… 失敗……  
… ” キリヤイバ” による神性への抵抗…… 失敗……】

これまで、遠山鳴人の冒険を支えてきたもの、危機に立ち向かい、跳ね除けてきた全てが敗北していく。

ダンジョン酔い、名瀬瀬奈による刷り込み、探索者組合による記憶洗浄、それらの数多の外的要素により変質し、異様に強くなった脳みそも、その神の力に抗えない。

その神と出典を同じくするキリヤイバを構成する強大で陰湿かつ老獪な存在も、ついに正気に戻ってしまった。勝てない、その事実  
に気付いてしまった。

「……………」

黒い手が、遠山をどンドン包んでいく。

生まれ変わりの儀。名瀬により、存在や記憶、魂すらも溶かされ、  
固められ、新しく生まれ変わる。

この肉塊と同じく、身動きできないままに力尽き、溶かされて終  
わる。



死――

《怖い？ 鳴人くん》

《怖いよね、わかるよ。死は恐ろしい。死んだら全部無意味だものね。わかるよ》

《でも大丈夫、貴方はこれから新しく強く生まれ変わる。貴方は死すらも超えて完璧になるの、これはね、必要なことなんだよ》

暗い。

何故、ここにきたのか、何故、戦おうとしていたのか。

何故？

全てがわからなくなっていく。

あるのはひとつ。消えたい、ただそれだけ。

生きていたくない、消え去りたい、死にたい。

暗くてつめたくてあたたかくてあまくてからい。そんな何かが身体を覆っていく。

希死念慮。

神話の中で”死”を掌る存在の権能、国、あるいは世界をすら滅ぼすことが可能な力が、遠山鳴人ただ1人に向けられる。

生物ならば、わずかながらに誰しもが持つ”終わり”への憧れ。

楽になりたい、終わらせたい、安心したい、苦しみたくない。それは誰しも気づいていないだけで必ず心のどこかに潜む本能に似た何か。

「……………死にたい」

遠山鳴人はそれに追いつかれた。ついに言ってしまった。

どれだけ世間が、人々が綺麗事を並び立て、美しい言葉や表現で飾ろうと決して変わらない一つの事実がそこにある。

そもそも、生きるといふことは苦しいのだ。

それは当たり前のことだ。何も悪いことではない。名瀬の力はそれにつけ込む、それを利用する。

人である以上、決して抗えない”死”の力。

《ああ、最高……》

もう、遠山の身体は囚われた。身体を黒い手が包み、首を、喉を、頬を黒い手が闇に染めていく。

これから遠山は溶かされる。魂や記憶、人格、生命。人であることを定義する全てを神性により溶かされる。

そしてそのあと、再構成されるのだ。名瀬瀬奈の望む形に整えられた彼女にとっての理想に。

「.....」

《長かった、本当にここまでくるまで時間がかかったよ》

《ん？ フフ、もう、ダメじゃない、鳴人くん》

名瀬がそれに気づく。

遠山鳴人の手、だ。

身体の9割を黒い手に包まれたまま、しかし、その手。

キリヤイバを握りしめ、肉塊に突き刺すその手。

その手が、未だ離れていなかったことに。

《ほら、鳴人くん。それはもう必要ないでしょ？ 離そうね》

真っ暗な視界、名瀬の声だけがぼんやりと聞こえる。

何故？

遠山は考える。

なんで、ここまで来たんだっけ、何をしようとしていたんだっけ。

ああ、全部が面倒臭くて苦しくて、嫌だな。やりたくないな。

生きるのが、辛い。

理由が、わからない。なんで今こんなに苦しいのか、なんで今、こんなに辛いのか。

なんのためにこれに耐えているのか、わからない。ただ、悲しくて哀しくてめんどくさくてどうでもよかった。

《鳴人くん、離そうか、ね？ それ、ね？》

名瀬の声だけが聞こえる。

遠山にはもう考える力もない。これまで彼の冒険を助けてきた知性、考えるということすら”死”という根源的な力の前になすすべもない。

そつだ、離そう。やめよう、全部。

遠山が、それを受け入れる。



希死念慮。問答無用で生命をその気分にかけてしまつ名瀬の最大最悪の力。

”アレフチームの大バカ”も、名瀬瀬奈のこれに敗れた。

”気分”、感情に働きかける大神の力に信念なきものは抗うことなど出来ない。

では、遠山鳴人は？

彼にはたどり着くべき場所の光景がある。その人生を進める原動力である欲望がある。

彼は進み続けることを己に課している。何度も何度も、自分を鼓舞する時に、試練に立ち向かう時に自然と口から溢れていたその言葉。

「……………なんだっけ、おれ、なんで、生きてるんだっけ」

それすら、忘れてしまった。

《……………フフ、たまんない。不憫で、かわいいよ、鳴人くん》

遠山鳴人も、名瀬に敗れる。

死にたい、その気持ちに追いつかれ、生きること絶望し、溶かされることを望む。

《さあ、その手を離して。私を受け入れて。生きるのは辛いでしょ？ 苦しいでしょ？ 大丈夫だよ、生きる、それ自体がおかしいことなの。生きるから苦しいの、生きるから辛い。私が貴方を救ってあげる。素敵な、素敵に、……………フフ》

混ぜられている。

取り込んだ神性の影響を受け、名瀬瀬奈自体も、もはや目的と手段が入れ替わり始めている。

ここにあるのは、死。ここにあるのは終わりと停滞。

だが、きっとそれはつめたくもあたたかく。時に人にとって死は救いにもなるのだろう。

凄絶な生よりも、安穩とした死を。

それが間違っていることだと言える存在などこの世のどこにもいないのだから――

溶けるー

「……………」

溶ける。遠山の身体が溶け始める。

霧の神性の器として変性しつつあったその肉体も、もはや耐えられない。

輪郭を、黒い手が侵していくー

意識が薄れる。眠たい。消えていく自我の中、遠山鳴人がそれを、  
それすら手放す。

ぼっけんをやめるー

遠山も、霧の神性も、知識の眷属も抗えない。

あとはもう、何もー

懐かしい、声。

「.....え」

わん！

それが聞こえた、気がした。

がっり。

「……?！」

痛みが、はしった。

手、何かに噛みつかれたような。

ぺちゅ、ぺちゅ。

そのあと、何かが手を舐めて。



噛んだことを、謝るかのようになー

「あ、なん、で」

疑問。その痛みと、ぬるりとした感触に、遠山の意識がドロ底の  
中から浮き上がる。

5568

今の痛みはなんだ？

今の感触はなんだ？

自分は何故、何故、何故。

こんなにもつらくてくるしくて、消え去りたいのに――

なんで。

《鳴人……くん？ 今、何か…… ていうか、ね、いい加減、それ、その――》

この手を。

キリヤイバを握るその手を離すことができないのだろうか。

もふ、もふ。

”死”は全ての終わり。死んだら全てが無意味、全てはいずれ消え去り、忘れられていく。

故に命とは無価値、生きるといふことはとてまじらなくてはならない。  
ものに過ぎない。

名瀬瀬奈はそう言った。

もふ、もふ、ふわ。

ほんとうに？

なら、これはなんだろう。その手が覚えているんだ。幼い頃に死に別れた友達の、ふわふわの身体を。ピロイドのような手触りの小さな耳の感触を。

死で、全てが終わりなら、生命は死ぬことで全てが無意味になるのなら、これはなんだろう。

幼い遠山の友は死んだ。きつと冷たい水の底で1匹で死んでいった。

彼は終わり、彼といた時間は無意味となり、彼は忘れられて消え去る。

だから、彼の生とはつまり、初めから意味なんかなくて無価値で、くるしくてつらいものなのだ。

それで、いいんだな？

「なわけねえだろ」

「この間さ、この間で答える。」

《……え？》

全ての立ち向かう為の力を無力化され、全ての策を破られ、協力者たちの庇護も消えた今。

死に追いつかれ、全てを諦め呆けていた遠山鳴人はしかし、はつきりと言葉を。

《なんで、まだ、手を――》

「だめだ」

《は？》

「やめたよ、名瀬。ダメなんだ、お前のその言葉だけは、ダメだ」

ハッピーな頭も、霧の神性の器として変性したその血肉も、己を動かす衝動も。

遠山鳴人の冒険を支えてきたその全ては、名瀬瀬奈により上回られた。

だが、まだ、彼に残っているものがある。



「俺が、それを認めたら、”死”ぬことで、全部が終わりだなんて認めたら、アイツはいいたい、どこに行けばいいんだ、アイツはずつと、ひとりぼっちのままじゃないか」

《なに、なんの、話……？》

全てを取り上げられた遠山鳴人に残るのは、彼の欲望の始まり。

はじまらなかった友との約束だけが、今。

ピロピ

【技能の発動条件を達成しました】

【技能 ” いぬ大好き人間 ” 】

【付近にいぬがいるため全ての行動に補正が発生します】

ふわふわ、もふもふ。

キリヤイバを握る手に、その感触が蘇る。何かに噛まれたことで、その手が自分のものであることを思い出す。

力が、入る。

ふわふわ、もふもふ。感覚の戻ったてのひらに、優しい感触。

前にも、何故だろう、似たような感触を撫でたような。

白昼夢の中にいるような感覚の中、ただ、手に蘇る幼い頃の友の  
触り心地。

それは彼が滅んでも、いなくなっても、例えもう会えなくても、

確かに遠山鳴人のてのひらのなかに。

「なんだよ、残ってるじゃん」

《は？》

名瀬のつぶやー

ぶち、ぶち。

黒い手、遠山を包み、そして数多伸びていたそれが全て、千切れ  
た。

その黒い手は、名瀬の力。伊装冉を頂点とし、それが保有した記憶から生み出された数多の神性を元に生み出されたもの。

《——は？》

それが、一瞬で全て千切れて消えた。

それは即ち、ニホンの古き神性、その残影が全て一瞬で散ったことを意味する。

《——は？》

「キリヤイバ」

霧が、噴き出る。

遠山が立ち上がる、その鋭い目に昏い火を灯らせて。

身体にまとわりついてきた黒いシミが、ゆっくり解けて、落ちていく。泥をシャワーで洗い流すように、霧がその黒いシミを洗い流していく。

生まれ変わる必要などない、霧がそう言っている。

《な。んで》

「終わりじゃない、解釈違いだ、名瀬瀬奈」

ぶわり。キリが、霧が噴き出る。遠山の身体から、目から、口から。  
ら。

5582

それは狼煙のごとく。ゆらゆらと高く高く昇っていく。

「死んだら、終わり。死んだやつは消え去り、2度と会うことは出  
来ない？ いや、違う」

遠山とソレは死に別れた。

少年と犬の物語は始まることすら無かった。

だが、残っている。例え死が2つを分けたとて今、ここに消えないものがある。

「消えねえんだよ、手の感触が。覚えてるんだよ、全部！ もう会えなくても！ 撫でた感覚も、焦げたパンみたいな犬臭さも！」

《何、を、な。んで》

「死んでも死なねえ、生きる奴が思い出す限り、それでも、死んでも、死なねえんだ、消えてなくなるわけがない、意味がなくなるわけがない！」



死んでも死なない、死んでも死なない。

はじまらなかった物語、儂く消えた物語。

だが、夢想したその夢は遠山鳴人の中に残っている。

「――死、如きで！！ 死、如きが！！ 生きてる奴から全部奪え  
ると思うなよ！」

立つ、2本の足で。

叫ぶ、2つの肺で。

轟かす、全身全霊で。

《鳴人くん、貴方、なんで、希死念慮を、どうやって……》

「続行だ」

無視。

再び、キリヤイバが主人の意思に応える。

既に戦意を失っている霧の神性を無視し、キリヤイバを構成するもう一つの存在が、どこまでも主人の願いを叶えるために、動き出す。

「欲望のままに、俺は必ずたどり着く」

続いている、遠山のそれは、幼き友と約束し、しかしはじめることが出来なかったそれはしかし、たしかに、ここにある。

「俺は今日を、生きる、俺の冒険が続く限り、滅びることはない」

冒険だ。ぼっけんだ。

これは遠山鳴人の冒険。子ども時代から続く約束の物語。

この男が諦めない限り、ソレが滅びることはない。

霧の神性、知識の眷属、それらをすら畏怖させる遠山鳴人の夢に  
棲みつくソレ。

そして、ソレが滅びない限り、遠山鳴人が諦めることも最早ない。

《待つ、く、希死念慮――》

名瀬の足元から、怒涛。

死、そのものが黒い手となり、再び遠山を襲い――

がちり。

ん

わ

どこからか、聞こえるのは一吠え。牙を神鳴らす音。

それだけで。

《あ、は？ フ、へ？》

黒い手、千を超え、万を越え、ニホンに1日、千の死をばら撒いたその力が、全て噛みちぎられている。

それどころか、名瀬の身体、闇と影が構成した女体すら、縦に真っ二つ。

《ど、な、ってる、の》

真つ二つになっても、滅びない。名瀬もまた神の力をすら御した超人の中の超人。

その身体は再生し始めていて。

だが。

「作戦続行！！！！ 死ね！！ 死んで、ブツ生き返れ！！ アレフ  
チームの大馬鹿鹿野郎！！」

名瀬は、今度こそ間に合わないだろう。









べたりと地面に臥しながら、体を再生していく名瀬。懇願するよ  
うなその声にはつきりと滲んでいるのは、恐れ。

「ヒヒヒヒ、ヒヒヒヒヒヒ、死ぬな、死ぬな、死ぬなよおう、アレ  
フチーム！！ ぶっ殺しても死ぬんじゃないぞ！ 前科者にゃなり  
たくなえからよお！！」

完全無視。

完全にスイッチの入った遠山に熱が入る、それに呼応するかのよ  
うに、肉塊の欠損が加速度的に速くなる。

「ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ！！」

遠山が、キリヤイバを突き刺し内側から斬り刻む。





『GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAII』

「AAAAAAAAAII」

そして、その時が来た。

【耳の血肉 カウント進行II】

異変、変化。

ああ、一つの下卑た強い声と、一つの汚い悲鳴が。

《あ、だ、め。それ以上、殺すと…… 起き、ちやう》

名瀬の、か細い、声。震えて――

「……」















《——オオオオオオオオオオ……… 手間を、かけた、霧の怪物狩り……… 感謝を》

「ああ、なるほど」

一つは、襷褌を纏った残影、闇に吞まれたガイコツのもとへ。

じゅる。

おぞましい光景、肉塊からのびた触腕が一気に広がり、それが口へと変化する。

一口で、それが、鬼裂を啜えた。

「……うわ」

続いて、もう一つ。

斃れたカップ、その体のもとにも触腕が。

「……………せわ、かけたの、遠山どん。ありがとの」

じゃる。大口へと変化した触腕が、斃れて伏した大妖の体をこくりと一気に啜える。

2つの触腕、それを肉塊が引き寄せせる。

ず、ず、ず。

肉塊、しめ縄の巻かれたそれが歪む。

肉が割れて、歪んだ、口が出来上がる。

人の歯、やけに歯並びのいいソレがより不気味さを強調して――

じくん。

それは食事だった。



肉塊に生えた口に、触腕が鬼裂と九千坊を運ぶ。一口で2人ともが肉塊に食べられた。

ぼきん、ぼきん、むしゃむしゃ。

おぞましい咀嚼音、神の領域において祀られていたソレが食事を始めた。

ああ、そうか。

それを見て、遠山は理解する。

あのしめ縄、あの演台の踊り、あの縁日。

「本気で怖かったんだな」

畏れ。

ニホン人は、古来より自然に見出した大いなるモノへの恐れを畏れとして昇華した。

どうしようも出来ないものを祀り、大いなる悪霊や災害も祀り、神として崇め、自分たちの守り神と変えていった。

それと同じだ。

この肉塊もまた、どうしようもないものなのだ。

神ですら、これを殺し尽くすこと、どうにかすることは出来ず祀って誤魔化していたのだ。

むしやむしや、もぐもぐ。

2人の神秘の残り滓を平らげた肉塊が満足そうに身体を揺らす。

戻っていく。凡人探索者の友人達があるべき場所へ、あるべき元へと還る。それは悍ましく、鮮烈な光景。生きることと似ている。

遠山がゆっくりと、キリヤイバを引き抜き、一步下り、それを見上げる。

「ーやるべきことを、やっちまおうぜ」

その眩きに答えるかのように、ぐねり。

肉塊の真ん中が歪み、新たな何かがそこから生える。

腕だ。

日焼けした巨大な腕。それは煤けて、かすれて、ゴツゴツしている。

何かを差し出すように、あるいは何かを求めるように。

その手のひらに、何かある。

それはオレンジ色で、それは儂く、それはちっぽけで、それはきつととても暖かい。

――火

【――” はじまりの火葬者”】

【凡人探索者の神秘、その最後の1人。彼はずっと待っていた。お前が来るのを待っていた】

それは、この惑星において初めて火を扱った種族の最期の1人。

ホモ・サピエンスになれなかった類縁種、人間になれなかった人類。

かつて、種族最期の生き残りとして同胞を弔い、火葬し続けた存在。

偉大なりし、はじまりの火葬者。彼はずっと、ずっと、凡人探索者と共にいた。

鬼裂と九千坊が機を待ち、彼が時を稼いだ。

全てはこの瞬間のため。

逆転の瞬間のために。

ぼおっ。

差し出された手のひらに灯る小さな種火は、待っている。

「ーヒヒヒ」

点火の、その瞬間を。古い時代、はじまりの火葬者が天からの落雷により火を発見した時のように。

人の扱う火の始まりは、いつも誰かから与えられたものなのだか  
ら。

「火葬をご希望か？」

言葉はもういらぬ。遠山鳴人が、手に握るキリヤイバを構える。

呼び起こすは、魂の蒐集品。

「遺物 霧散」

白い蛇の形をした死と対峙し、それに立ち向かう為に得た力。

「キリヤイバ・拡大解釈

オーバーロード

魑魅魍魎狭霧山野絵巻物語」



欠けたヤイバから溢れる乳白色の濃いキリ。

それは縁、それは媒介。

キリヤイバが殺した魂を再現する領域。遠山鳴人と”死”を通じ  
て縁を結んだものを喚ぶ力。

ーピーヒョロロ、ローロ

オーーーーン

オーーーーーオオン

祭囃子の音に混じって響くは何かの声。

遠吠え、はるか。どこかたのしげに。

そのキリが再現するは魂。

そのキリが呼び起こすは縁。

拡大する自我、拡がり続ける己の世界にて現実を冒す領域外の力。

ニヤリ。

此度、再現するは大いなる焰。

遠山の知る中で最も強く、もっと美しく、そして

「蒐集竜」

最もカッコいい竜の焰——

《さ、せない、やめ、やめろオオオオオオオオオオ、遠山鳴人オオオオオオオオオオ!!》

キリから漏れる金の焰、それを押さえ込もうと、真っ二つの状態の断面から名瀬瀬奈が黒い泥を溢れさせ——

《ーアツ、なん、で?》

ばちん!

弾ける。名瀬の右腕が突如爆ぜた。黒い泥は指示を失い、見当違いの方向へ逸れる。

目を剥き、名瀬が口をばくばくとさせながら

《ッ、ッ!? 神体のダメージ!! 外! アレタ・アシユフィ  
ールド!! アレフチームー!! あ、いや、それだけじゃない  
……?!?!?》

闇色の顔に驚愕ー

《だ、れ…… この、香り、金木犀の香り…… 海城さん……！  
？ いや、海城さんじゃない！ 似てるけど、違う！ 誰?! 誰  
なの?! 黒色、金色―― 私を、私の身体を外から焼いてるのは  
誰――?!》

ぼっつ。

闇色の身体が燃える。

金色の焰。それは遠山鳴人が喚んだ焰とよく似ていて――

《お前は、誰だアアアアあああああああ!?!》

名瀬の絶叫、もう間に合わない。

黒色の泥は、遠山鳴人には届かないだろう。

「アーリス・ドラル・フレアテイル」

遠山が、その名を喚んだ。

竜殺しが、竜の名前を。魂を。

《アーアッ》

キリから現れた金色の尻尾。

美しい金色の鱗は、死の神の領域の中においても一切の穢れを許さず。

キリから顕れた金色の尻尾、その先端が膨らみ、一気に金色の焰を吐き出した。

「ジュジュジュ」

もう遠山を止めることは誰にも出来ない。

目を見開き、口角を上げた嗤い顔を、金色の焰が照らしていた。











【警告】 ” 耳の血肉” カウント進行【】

【100回 死亡】

「ヒビヒビヒビ、さあ！！ 起きろ！！ 働けエ！！」 凡人探索者”ア

【オプション目標 クリア ” 凡人探索者の救出” に成功しました】



ねんどろり。

それが現れた。

ずも、ももも。

大岩のような肉塊、その真上に、それが生えた。

大きな、大きなそれは

「……………うん？」

一対の、人の耳が、生えた。

「……………ええ」

すんつと、遠山が冷める。

部屋の中でゴキブリを見つけてしまったように、目をしばめて顔を固める。

「……………」

こちらを見下ろす大きな耳、その耳穴が歪み、蠢き、そして、それが遠山の方を向く。

耳穴もまた、なにかもにもよして、動きを固める。

部屋の中でデカイゴキブリを見つけたように、固まる。



互いに、スンっと。

殺しても死なない、何をしても死なないゴキブリ同士が、気まずそうに見つめ合う。

世界で一番無駄で無意味な沈黙の時間――

生者の沈黙だ。

これから、何が起きるのか。

遠山にはわからない。人間、訳の分からない事態に直面するとノリも酔いも一気に冷めるものだから。



名瀬の悲鳴だけが、きつと、それを知っていた。

99話 今日を、生きる（後書き）

長らくお待たせして申し訳ないです！

強欲冒険者、凡人探索者共に書籍化作業進んでおります。

強欲冒険者のコミカライズもネームがたくさん上がってきてひとりでそれを読みながらニヤニヤしたりしています。

書籍化作業とコミカライズの監修、そして普通に本業が繁忙期でWEB版更新がスローになりほんとに申し訳ない！！

その分をポリユームでお返しいたします、長い物語を読んでいただきありがとうございます。

次も宜しく願います！

100話 きんいろ

「……………み、み？」

ふざけているのだろうか？

大抵色々めちゃくちゃなこと巻き込まれ、それなりに耐性がついているはずの遠山ですら、今回はかりは途方に暮れた。

『……………』

大きな耳。

肉塊の上、大いなる人間の耳、2つつながり合い、揃っているそれが生えている。

うねった模様のような耳穴が、きゅっと縮まりこちらを見下ろしている。まるでそれは表情のようにも見えた。

「……………間違えたかな」

やり方を、違えただろうか。

なんか、完全に思ったのと違う。普通、こんな展開、燃えるような復活劇だった筈だ。

強大な敵に封印された味方勢力を、ギリギリで解放した、答――

「……………味方？」

これが？ この馬鹿でかい耳が？ いや、なんだこれ。

2秒迷う。どうするか、どうすればいいのか。

遠山が2秒だけ迷って、出した結論は――

『.....?!』

キリを耳のもとへ。

すつと、遠山が肉塊を、大きな耳を見つめて。

「もっかい殺してみるか」

『.....?!』

何かの間違いだらうから、キリヤイバで取り敢えずもう一回切り



刻もうつとした瞬間だった。

くわり。そのバカみたいにデカイ耳穴が大きく開く。目を見開く、それと似ていて。

ぼおおおおおおおおおおおおう!!

火を噴いた。耳穴から。

それは遠山に向けられていて――

「ッ!?! ば!?! お前、ハアアアアアアア!?!」



ボオオオオオオオオオオオウ。

橙と金。互いに食い合う火と焰。

耳穴から放り出された火と、竜の尻尾から噴き上がる焰。それがぶつかり、世界を燃やしている。

遠山鳴人のチベスナの目を焰が照らす。

でかい耳の耳穴を火が照らす。

2人とも多分嗤っていた。地獄のような光景だ。

「なんなんだテメエはよおおお!! 趣味の悪いカルト宗教でも

選ばねえよつなビジュアルしやがって！！」

『』

びくつと、耳穴が歪む。火の勢いが弱くなり、一気に金色の焔が濁流となって

「あ

『！！！！！？？！！！！』

耳の生えた肉塊をまた、金色の焔が飲み込んだ。

肉の焼ける匂いが、ぷーんと漂う。遠山の唇が、脂で少しベタつき始めていた。

「……………やべ、また燃やしちった」

『?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!』

身悶えしながら、耳をめっちゃくちゃにぶるんぶるんと振り回す肉塊。

「つわ」

遠山がうめく。おぞましいのはその姿もちろんだが、もっと別のところだ。

治っているのだ。

金色の焰に焼け溶かされつつも、燃えた所から肉が湧き、蠢き、再生し続けている。

なんだこれ、ほんとにこれを起こして良かったのだろうか。

遠山

《たは、たは、タハハ、起きちゃっ、た…… タハ、フフフフフ  
フフ、どうしょ。ここまでやったのに、ここまで揃えて、やっと封  
印したのに、フフフフフフ、なに、これ》

「あ、名瀬」

《鳴人くん…… やって、ほんとに、やってくれたね…… もう、  
終わりだよ、ほんと。…… そうだ、鳴人くん、せめて、フフフフ  
フフフ、そうだ!! そう! どうせ終わりなら! せめて、貴方  
も一緒に!!》

「うわ!? 変な覚悟決めやがった!? なんだ、これ、ほんとに  
なんなんだよ! お前らは!」

どろり。

名瀬の闇で構成されていた身体が溶ける。女の身体を象っていた  
その輪郭がぼやけ、地面に染み込む。

《鳴人くん、鳴人くん！ ごめんね！ ほんとにはもっとさっきみたいなのある所で溶かしてあげたかったの！ ほんとにごめんね！ ー赦さない、さっきまでの良いムードを台無しにした罰、もう一度ぐちゃぐちゃに溶かしてやる、凡人探索者》

「ムード、あつたか、あつたかな？」

再構成された闇、どろりどろり、顔を隠した衣、闇色の巨大な女神が現れる。

その衣装は白無垢、闇の色をしている。



《鳴人くん、鳴人くん、すぐに溶かしてあげるから待っててね、いや、もう今から溶かす、ああ、でも、ダメ、今ここでやると、あの汚い耳と混ざっちゃう、無理ホントに無理、生理的に無理なの！消えて！ 死んで！ なんで死んでないの！ ほんとムリ！ キモい！！》

『』

闇色の女神の言葉に、耳穴がきゅっと縮まっていた。少し、なんか、シヨックを受けているようなー

前門の肉塊耳、後門の暗黒女神。

愉快的存在に挟まれた遠山鳴人が、目線をキョロキョロさせて。

「探索者、コワー……」

全てを棚上げにした遠山が、ジリジリと互いのうごきを観察する。

指定探索者”名瀬 瀬奈”、上級探索者”遠山 鳴人”、そして、アレフチームの”凡人探索者”。

3人の探索者、全員の目的はただひとつ。

《鳴人くん、鳴人くん、鳴人くん！！ 私はまだ、諦めない！  
私は私の願いを大切に作る！ 貴方は私の願いなの！ 理想なの！  
絶対にドチャクソに、ぶち犯してあげるから！！》

「ヒヒヒヒヒ！ 正体現したなあ！ 名瀬！ 悪いが逆レは趣味じゃねえ！！ アアアア！！ クソ、後ろにやあ変態ストーカー！ 前には化け物肉塊耳まんじゅう！ もうどうでもいい！ 俺以外全部きしよいのぶち殺して！ 綺麗に全部終わらせてやらア！！」

『』

全員自分勝手。

ここにいる3人の探索者、それぞれ全員が他人の話を聞かないタイプだ。

他人の話を聞かない人間が3人揃ったらどうなるか、簡単なことだ。

《犯す》

「殺す！」

『』

こっぴなつた。

酔いやら興奮やら、疲労やら。全てが限界状態の遠山が力を振り絞る。

キリヤイバ、最大規模、最強濃度。

一気にキリを広げ、その中に保存している魂を吐き出そうとして

『 』

『 』

『 』

『 』

【口吐】









『 』

どこか、すっきりとしたように見える耳を眺めて、遠山がぼやく。

ほんとになんなんだコイツ。

【警告 伊奘冉宮における全ての神性が逃げ始めました】

【警告 勝てません、逃げてください。異界の崩壊が始まります】

【警告】 ” 耳男 ” がやってきました

『 ーギヤハハ 』

「 ーは? 」

皮膚の裏に氷水を直接流し込まれたような、寒気だった。

それはいつのまにか、そこにいて。

それは、耳だ。

それは、人だ。

それは男だ。

耳穴から、どゆるり。

爪楊枝でほじくりだされたサザエの中身が一気にまるび出てくるように、それは這い出てきた。

「……………ま、じか」

動けない。

それがゆっくりと地面に腕をついて、身体を起こす。

肩幅の広い男の肉体、背丈こそあまり高くないものの、血管が浮き、筋肉の陰影がはつきりわかるそれは確かに戦う人間の身体だ。

すんっと、立ち尽くす男。始めて二足歩行を覚えた猿が、その視

界を確認するように、じっと、ただ、男が立つ。

「……………み、み？」

耳だった。

男の顔、頭、首から上が、耳。

人間の顔に、人間の耳をそのまま貼り付けたような、趣味の悪い、悪すぎるお面を被っているような。

耳の男。

只、それだけ。

《あー》

『ギャハ』

ぶりん。

「え」

気付けば、耳の男が、消えた。と思えば、何か柔らかかなものが千切れる音とともに、闇色の女神の首が、外れていた。

『

《じ、のー》

耳の男が、巨大な闇色の女神の首を引っこ抜いたのだ。

冗談のような光景、遠山は動けない。呼吸するのもわすれて、ただ、それを見ていた。





笑い、そして。

『  
』

スンっと、黙ってそれから、どつるり。

《ア》

闇色の女神、その首の断面に潜った。

なんか、その姿はすごい。顔面から断面に潜るうとして逆立ちに  
なっている。

勢いをつけるために裸のまま、足をわちゃわちゃと動かすその姿。

スケキヨが、ブレイクダンスをしているような。

なんだ、これ。

「なんだ、これ」

遠山が、力なくつぶやいて。



件での神話攻略が進行しています】

「うわ、もう、なに、なんなんだよ、これ」

火、だ。

辺りが火に包まれている。

あの肉塊から生えた耳だ。その耳穴が火をずっと噴き続けている。

目の前には、首をもがれてその断面に潜っている耳の男。背後には、火を吹き続ける耳の肉塊。

「バカなんじゃねえの」

もうそれしか言うことがない。遠山はこの手のつけよつのない状況に本格的に疲れた。

「……………サウナ入りたい」

もう全てを出し切りたい。こんな今書いてる嫌な汗、血の臭いがある場所でひりだす冷や汗ではなくて、ケロ材の優しい森林の匂いの中で思いつきりサラサラの汗をかきたかった。そうだ、もしかしたらこれは夢なのかも知れない。ほんとの自分はきつと今頃コウベサウナの新しくできたケロサウナの中にいて、これから11.7の水風呂に入る寸前なのかも知れない。ああ、あのトントウがこちらに笑いかけてー

遠山が頬をつねる。痛い。

「現実かー……」

だめだった。現実だった。

イヤイヤながら今の状況を受け入れる遠山は取り敢えずここを離れようとする。

耳の男と名瀬がキモい殺し合いをしているのを眺めつつ出口を探るようとして――

かくん。

「あれ」

い。  
膝が、折れる。足に力が入らない。初めは何が起きたかわからな

「あれね？」

限界だ。

ここにきて、遠山鳴人の身体に限界が、いや、限界などとうに超えていた。

連続の遺物使用、それも最近使えるようになった遺物の拡大解釈。アレフチームとの共闘に、神体内での激戦。

そして、この化け物パラダイスの時間。精神は未だ高揚しているものの、それが逆に肉体の悲鳴を聞き流すことに繋がってしまった。

「うそだろ？」

マジで、身体が動かない。折れた膝を地面につき呆然と呟く。

死というのは、こんなふうに呆気なく訪れるものなのかもしれない。覚悟もなにもしてない時に、不意にやってくるのだろう。





してる耳の男。

ただ、やばい絵面だ。

人間の形をしたアグレッシブな寄生虫が無理矢理宿主に寄生しようとしているような。

まだエイリアンの赤ん坊のほうが憤ましい気がする。

暴れ回る女神と、ノミのように食らいついて離さない耳の男。

彼らの大暴れにもう、世界が耐えきれない。

ボロッ。

「あ」

地面に亀裂が入る。

空間が壊れていく。

動けない遠山の足元に大きく入った亀裂はどんどんその大きさを増していき、そして

「うそ、待て、まって」

ぱっくり、足元の空間が消えた。

落ちる。

足元から感じるのは、怨嗟の声。刹那の瞬間、下を見る。

手、手、手。

黄泉の主人の身体の中、それは黄泉そのものか。生者を羨む亡者の手が、幾万も覗く奈落があつた。

え、これで終わりー？

落ちて、いく。

落ちる。多分、あれに落ちたらもう戻れない。ここが境界、ここがギリギリ。生者であることを許される彼岸がここ。

あの下はあの世。堕ちたら、元には戻れない。

「まじ、かー」

ぴゅー。

まっさかさま。遠山は落ちていく。

暗い、とても暗い。

冷たくて、寒くて。



浮遊感の中、数多の黒い手が、耳の男を捕まえた。

『ギョッー』

短い悲鳴とともに、一気に黒い腕に引き込まれる耳の男、闇に溶けていく。

もう、あの笑い声も聞こえない。

同じものが、遠山に伸びる。

名瀬にやられたとは別。その手は遠山鳴人の生まれ変わりなど期待していない。

亡者、ただ、自分と同じ存在に。ただ、その生とその温度が憎い。

死、そのものが遠山鳴人を包む。

耳の男と同じように、遠山もまた死に捕まって。



【蒐集竜が伊装冉神体内部へと侵入しました】

-----

「――？」

薄目を開く。

自分が落ちているのか、浮いているのかもわからない。

あの汚い笑い声、それすらも届かない闇の中、それでも聞こえた声があった。

「――あ」

金。

闇の中にぼつんと。今はもう遙か遠くになる上、遙か空の星のよ  
うに輝く色がある。

金色。

死しかない闇の中、それは光り輝いている。太陽の光でも、星の  
光でもない。ただ、それが何者の力も借りずに輝いている。

遠山鳴人はその美しい金色を知っている。

己が生まれて初めてその手で殺したヒトを。純粹で恐ろしくてワ

ガママで、だけど、とても綺麗なその色をよく知っている。

そつだ、それは理由だ。

遠山鳴人がそもそも、ここまで来た理由だ。

【蒐集竜が付近の神性を焼き尽くしています】

友人。

そつだ、遠山は彼女を追いかけてここまで来た。自分の言葉で態度で心で踏み躪ってしまった友人と仲直りするためにここへ来た。

「……………きん、いろ」

金色がひどく輝いて見えた。

遠山は感覚のない手を、それでも上へ伸ばす。光を追いかけるように、落下していくまま、それに手を。

また、金色が輝く。闇の中であってなお、その輝きは眩いほどに。夜を無理矢理に朝へ変えてしまうほどの煌めき。



咆哮。

腹の底を震わせる大音量が闇に響く。

亡者の腕が、その咆哮にびくりと動きを止める。

みるみるまに大きくなる金色の光、闇を裂く金。

その生き物は、遠山鳴人のいた現代において時に神と並ぶ存在としても描かれた。

不遜なり、神にすら叛逆する悪として、大いなる力の象徴として崇められてもいた。

「おま……」

遠山鳴人は、その生き物を知っている。

それには、翼があった。6枚の大きな翼。

それには尻尾があった。6本のしなやかな尻尾。

それには鱗があった。光を宿すそれ自体が輝く金色の鱗。

それには4本の足と2本の翼腕がついていた。世界を踏みしめ、  
砕き散らす上位者の肉体。



そして、それは蒼い瞳をしていた。

「あー」

憧れ。

一度でも空想の世界に、ファンタジーの創作に触れたことのあるものなら誰しもが知っているだろうその存在。

時に災厄として、時に試練として、時に祝福として、そして時には友として。

遠山鳴人のいた現代、ありとあらゆる時代、ありとあらゆる地域において不思議なことに同様の伝説を遺す空想の生き物。

どうしてか、なぜなのか。人間はその生き物に憧憬を感じてしま  
う。

その生き物――

【蒐集竜が救援にたどりつきました】



翼をたたみ、流星のごとく奈落を降る金色の竜に、幾万の腕が伸びる。

《「「「「「「」」」」」》

翼に、首に、頭に、足に。

金色の竜の身体にまとわりつき、絡みつく腕たち。

醜い定命の存在が、竜を絡め取る。無限の回生、永遠の生命。不滅で完璧な存在に焦がれるように手を伸ばし

「さ、ワルなアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

金色の焔が、闇を照らす。

竜の咆哮とともに、その金色の鱗一つ一つが燃え盛る。竜の身体に触れていた黒い腕が溶けていく。

竜が首に絡み付いた腕を振り解き、噛みちぎり、吐き捨てる。絡みつく死を、自らにまるで救いを求めるようにのばされる多数の手を、焼き払い、吐き捨て、踏み躪る。

「ナ、ルヒと」

「ーードラ子」

竜の蒼い瞳。闇の中においてもなお、大空の最も色濃い場所を写し込むその瞳が見つめるのは、ただ1人。

「ツツ！！ オオオオオオオオオオオオオ！！」

竜が吼える。死を踏み躪り、自らに縋る手を払い除け、飛ぶ。

竜がみやるはただひとり。竜が救いにくるのはただ1人。竜が求めるのは、ただひとり。

決して失ってはならない己の友、ただ1人を救いに、金色の竜が多数の死を、哀れな亡者を焼き滅ぼす。

早く、速く、ただ、夙く。

竜が、ついに落ちていく男を、友のもとへ。

その力なき身体のもとへ。

隼のように翼を折りたたみ、ただ、友の元へ。

「……知ってたよ、ドラ子」

落ちていく中、遠山は高揚していた。

「お前がすげえ、カッコいいことはさ」

竜を眺めて、竜殺しが、ぼそりとつぶやいた。



100話 きんいろ(後書き)

米田玄師の”M87”聴きながら書きました。M87聴きながら読んだらいいと思います。ありがとうございました。

101話 アリス・with・カイキ

竜 YOU テイル

く時は少し戻り、遠山鳴人がIQバトルを始める直前、ある高校の屋上にてく

「俺には必ずたどり着くべき光景がある。目標が、希望が、欲望<sup>ゆめ</sup>がある」

あの人<sup>あの人</sup>が、ワタシの眼を見ていてそう言った。鋭く、鈍く、爛々とした光を宿すその眼。

タブン、あまりかっこいい眼ではない、むしろキツすぎて少し怖い容姿のそれ。

ーでも、彼によく似合うと思うデス。

「ゆ、め？」

ワタシは、彼の言葉を繰り返す。

何かが面白かったのだろうか。彼が少し、笑った。

「その光景にはよ、もうお前もいてくれないと困るんだ。だから、俺がお前を置いていくことはないよ。友達だろ、俺たち」

「アッ」

「っん。」

ワタシが無意識に、彼に向けて伸ばしていた手。きつとほんとは握りしめて欲しかった手に、彼の返した汝は握り拳だった。

ワタシは、彼の手を握ることが出来ない。

「無茶はする。でも、帰る。約束だ、竜との約束だ、俺がこれから何をしようと、信じてほしい。絶対帰る」

不思議な目、不思議な声。

ワタシの知らない大人の遠山鳴人の姿。

ワタシの知ってる高校生の遠山鳴人はしなかった表情。

「り、ゅー……」

ワタシは自分が何を言いたかったのかも忘れて、ただ、つぶやくだけ。

彼が行く。

予感と確信があった。ワタシの思い出はここで終わる。

ニホンに留学してきた思い出も、彼らとあの教室で過ごした時間も、これから始まるはずだった夏休みも、全部終わり。

「……ワタシのなつやすみ、おわっちゃった」

空が重たい。

カミナリが、分厚い雲の中で煌めいている。これから何かが産まれるような光景にも見えたの。

トオヤマナルヒトが、空を飛んだ。うっん、跳んだ。嵐を靴に纏わせて、嵐と口輪を並べて、軽口を叩きながら、空を走っている。

「ア……………」

ずきり、ずきり。

頭と、胸が同時に痛む。彼が空を飛んでいる、かれが空の中にいる。

「な。んデ？」

ぼろり、ぼろぼろ。

鼻の奥がツン、と痛む。かと思えば、眼の下側からポロポロと涙、止まらないの。

ー吹き飛ばされないでよ！ トオヤマナルヒト！ー

ーアンタこそ、怪我すんなよ！ アレタ・アシュフィールド！！

その光景が、とても苦しい。違う、だめ、ダメなの。貴方のはじめの空は、ワタシが見せてあげたかったのに、ワタシの翼でー

「なん、デ、止まらないの……」

胸が痛い、かゆくて、つらくて、とめどない。痛みの元を抑えよ  
うとしても、届かない。

ぼろぼろぼろ。



パパとママが似合っつて褒めてくれて制服のスカートにどんどん  
涙がシミを作っていく。

ワタシとユサの周りだけは、風と雨はやっつてこないのよ、とても  
冷たくて、濡れていて。

ーアレタ・アシユフィールド！ 目にゴミが入るうとしてんぞ！

ーあら！ ありがと！ 目が大きいのも考えものね

嵐の空に彼の声が鳴り響く。

あなたがとても遠い。

今までのあなたとの時間、この国に来て、一緒に過ごして友達になって過ごした時間が、一気に色褪せていく。

ねえ、あなたはあの時笑ってたよね？　ねえ、あの時、ワタシも笑ってたよね？

駆け巡る数ヶ月の青い春。カイキユサ、ドードーミライ、トオヤマナルヒト。みんなで笑ったあの時間。

「なん、デ、なん？」

ワタシにとって大切だったあの時間――

理解<sup>わか</sup>ってしまっ。

ー進め、食い殺せ

ー進行問題なし！！ ヨシ！！ 目標、前方！ ついてこいよ  
！ ストームルーラー！！

嵐の空を駆けるあなたを見ると、嵐と共に、化け物を屠り続けて、笑うあなたを見ていると。

ああ、どうしても理解してしまう。

こっちが、本物だっことを。ワタシの中の何かが、頭では理解したくないことを、認めてしまう。

「……ヤダ、な」

コクゴの教科書を読んで、一人でニヤニヤしてるあなたも。

たくさんのクラスメイトに囲まれて、綺麗な愛想笑いを浮かべてるコサも。

こちらをじっと。グルグルした綺麗な目で、見つめてくるトードも。

みんなで過ごしたあの時間、みんなで食べたごはんの味も、みんなで遊んだあの場所も――

「……………ゼンブ、偽物……………だったんだ」

理解してしまった。

目の前で、遥か彼方、嵐の空の中暴れ回る遠山鳴人を見ていると嫌でも理解してしまう。

あ、あの顔、あの声、あの姿。それはとても、悍ましくて、生き生きして……

「ア……………き、きれい」

——美しかった。

ナルヒトの姿、嵐と共に大いなるモノと殺し合うその姿は圧倒的  
なりアリテイと生きる力に満ち溢れてる。

ーこつちが本物、こつちが真実。ワタシの記憶にいるトーヤマ  
と、嵐を走るナルヒトは違う。高校生のトーヤマは夢の存在で、こ  
のナルヒトが本物？

「う、ウウウウ……」

頭が痛い、悲しくて、痛くて、辛くてたまらない。

ぜんぶ、ゆめだったの？ ぜんぶ、にせものだったの？

ワタシはみんなが大好きだった、この国に来て、みんなと出会えて、ほんとにたのしかった。

ユサ。あなたと約束していたなつやすみ、一緒にプールとか海とか、川とか行く約束。ナルヒトも誘ってキャンプして、遊ぶ計画、ダメみたい。

「ぜんぶ、終わっちゃった」

ワタシは、ただその場に座り込んで呟くだけ。そらを見上げて、あなたを見ることしか出来ない。

あなたが嵐と並び立ち、霧を従えて、大きな大きなトーダーの音がする化け物と戦っている。

嵐を操る大きな眼、それと軽口を叩きながら、標識アタマの化け物を屠っていくあなた。

ああ、あなたが遠いヨ、トオヤマナルヒト。

ワタシね、知ってたよ。ユサがあなたに惹かれてたこと。トードーがあなたを好きだったこと。

「……ワタシも、あなたのこともっと知りたくなって夕のに」

なのに、今はあなたが遙か遠い。鳴り響くあなたの戦いの音、その出鱈目な姿が似合いますぎて、遠いよ。



ワタシは理解する。トオヤマナルヒトの本当の姿を見て、理解する。

あなたは、きみはそういう生き物なんだね。あなたにしか見えな  
い何かを追いかけて、追いかけて、進み続ける。

あなたは自分が一番大切にしているものを既に決めてて、それ以外の  
ものを必要ならば、置いていける人なんだネ。

「……ヤダ、な」

ぼそりとワタシの口から漏れるのは心そのもの。

「それ、すごく、やだ、ヨ」

ぼろぼろ、ポロポロ。

止まらない涙、滲む視界の中、気づけば、目の前が真っ白に。

嵐と暗黒がぶつかり合って、それで。

「……………え？」

何かのはなしをしているようにも見えた。

トオヤマナルヒトが、その上でアードアの音がする何かに話しかけている。

内容は聞こえないけど、たたかいは止まっていた。

「……………え」

なんで、トードーの音がする大きな何かが、お口を開けてるの？

「……………ダメ……………」

なんで、トオヤマが標識アタマたちに大人しく運ばれてるの？

「……………やめテ……………」

なんで、嵐も、トオヤマも、何も、しないの？　なんで、お口に、  
なんで、なんで、なんでー

ぱくん

「ア……」

トオヤマが、食べられた。

「ーウソ」

え、ナンで？ なにしてるノ？ 意味が、わからない。

トオヤマ？ ナルヒト？ 意味がわからないヨ。だって、帰って  
くるって、言ってたよね？

「約束、してくれてた、ヨネ」

身体が痺れる、指の感覚が消えていく。ワタシは気付けば頭を押  
さえて地面に伏せていて。

イタイー 頭が痛い。

ー 惨めだな

「ダ、れ？」

コエは答えてくれない。

ー 本当に惨めだ。どっちつかずといつものはここまで害悪になるものか。

「だれ?! どこに、どこにいる?! なに?! なんなの?!」

「……いちいち喚くな、みつともない。あの者はどちらでもい  
いと言っていたが、自覚のないヒトの部分がここまで脆いとはな。」

「なに、なんなの?! あなた、ダレ?! どこにいるノ?! ワ  
タシ、ワタシもうなにがなんだかわからない、わからない!! マ  
マ! パパ!! おじいちゃん! ユサ! トードー!! ナー!」

息を呑む、無意識にワタシは、口を抑えていた。

「……どうした? 続けよ。そのまま惨めに恥ずかしげもなく助け  
を求めればよいではないか。」

「……や、だ」

それだけは、したくなかった。

何故かわからないけど、トオヤマにだけは、ナルヒトにだけは、助けてなんて言いたくなかった。

――……貴様は既に思い出している。貴様はすでに理解している。この世界は、この時間は全て、素晴らしい夢であったことを。

「やめ、テ」

――貴様はただ、怖がっているだけだ。違いを。自分だけヒトではない。トオヤマナルヒトと違う存在である己を恐れ、それから目を逸らしているだけだ。



「違、ウ…… ワタシ、は」

「――違わない。貴様のことをオレ以上に知る者など存在しない

声が、ワタシの中で響き続ける。

嵐の轟きの中、その声は決してかき消されることはなく。

「――たのしかったな。奴と同じ視座から、奴と同じ生を歩むのは

「しんせつ……」

――安心したな。トオヤマナルヒトと同じ生き物でいる時間というものは。心地よかったな、何かの輪の中に居るといふことは。超越するものではないといふのは、心地よかったな

「黙っ、テ」

――黙るものかよ。いい加減、目を覚ませ、痴れ者が

「……っ」

――貴様、奴がここに帰ってくるのを待つつもりなのか？

「え？」

「――目を背けるな。今、トオヤマナルヒトは戦っている。貴様、友を一人で戦わせ、ただその帰還を待っただけなのかと聞いておるのだ」

やだ、やだ、やだ。

聞きたくない、聞きたくないヨ。

ワタシは子どもみたいにイヤイヤと首を振る。でも、その声だけは決してワタシを離してはくれない。

「――耳を塞ぐな、恥知らずが。許さぬぞ。このまま、我が友を独りで戦わせることなぞ。許さぬぞ、このままめそめそと己の友を運命に任せることなぞ」

「勝手なことばかり、いわないで！ あなた、ダレ?!」

ーアリス・ドルル・フレアテイル

「は……」

その声は、名前を告げる。

心臓が熱い、血液の代わりに焔が身体を駆け巡っているかのよう  
な感覚。

「……くだらぬ。全てくだらない。全て退屈、全て等しく無価値。オレにとって、世界はそういうものだったな」

「……ウン、ぜんぶつまらなかった」

「……だが、そうではなかった。オレ達は奴に教えられた。世界は決して退屈ではないのだ。ふかかか、なあ、そうだろう？」

「……貴様は知っているな。竜の言葉に従わず、奴隷の身になりながらも挑んできた愚か者の名前を。」

「思い出が、代わる。」

ワタシは、知っている。ボロボロの奴隷服に身を包み、武器も持たずに竜へ挑んできた男のことを。

――貴様は覚えているな。竜の意思に従わず、奴隷の身にありながら竜との婚姻を断った愚か者の名前を。

それも、知っている。ヒトの身であるならば、この世の全てを手に入れたも同義の竜との婚姻。それをさもくならないことのように断った男のことを。

――愉快だったな

「……ウン、愉快だった」

——不思議で、理解不能で、憎たらしくて、ざわざわして、はらはらして、気になって仕方ないものだ。

おぼえてる、ほんとは思い出していた。

ワタシの記憶が混じっていく。

あの教室で、窓から空を眺めていた高校生の貴方。

暗い、どこか暗い水の流れる場所でワタシを睨みつける大人の貴方。

ワタシはいつも、どんな時も貴方を見ていた。ずっと、ずっと貴

方を見ていたかった。

認めたくなかった。貴方がワタシと違う生き物だってことを。

もどかしかった。ワタシは貴方と違う生き物だから、分かり合えないことがとても。

怖かった。ようやく、ここで貴方と同じ存在として過ごさせていたのに、それがもう全部終わってしまうことが。

ーだが、そろそろ心地よい夢から覚めるときだ。今、奴は現実を戦っている。戦い、危機の中にあるのだ。



「……ウン」

「――奴はオレの友だ。オレがそう決めた。貴様も、そうであろっ？」

「ウン」

「――ならば奴を助けるのはオレでなくてはならない。奴を助けるのはワタシでなければならぬ。なぜなら――」

その声は、ずっと昔からワタシの中にあつた。

その声は、ずっとずっとワタシと共にいた。

だから、その声が何を言いたいのか、ワタシにはもっつわかって  
いた。

「……ウン、その通り、だって彼は――」

――なぜなら奴はオレの

「竜殺し、なのだ」

声が、消えた。

答えは初めから、オレの中にあった。

「ふざけるなよ」

これは危機だ。オレの竜殺しの危機、あの大きいなるモノは今、このオレの目の前で我が竜殺しを丸呑みにした。

「それはオレの竜殺しだ。それはオレの友だ。……貴様が触れていないものではないのだ」

身体に力がみなぎる。意識しないと身体から熱が、金色の焰となつて漏れてしまふそうだ。

オレは、歩む。

だが、オレは止まる。

「ユサ……」

例え、かりそめの夢だとしても。オレの中の柔らかい部分が望み、造られた幻想の中だとしても。

カイキユサはオレの友達だった。

それを置いていくことが、どうしても、歩みを止まらせる。

彼女の亡骸の方へ振り向く。眠っているかのようなソレの元へ。

頬を撫でる、硬く、冷たく。そこにはただ、死だけが横たわっている。

ギギギニギギギ

ギギギニギギギ。

竜の気に当てられた異形が、気づけば空を埋め尽くしている。

嵐が何かを喚いていたが、オレには何も聞こえなかった。

「ユサ」

オレの言葉に、カイキユサは何も答えない。

痛い、胸が。

鼻が。目が、ツンと、痛む。

これが定命。死を定められた生き物の終わり。目の前にいるのに、触れているのに、もう何もかもが違うのだ。

「……ユサ」

寂しいよ。もう、君と話すことが出来ないことが。悲しいよ、君の声を聞くことが出来ないことが。

オレは竜だ。

ユサはヒトで、ナルヒトも、ヒトだ、多分。

こんなにも違う、こんなにも、脆く弱い。

「……オレはそなたが羨ましかった」

トオヤマナルヒトと同じ、ヒトという生き物であること。

トオヤマナルヒトとそなたの間には、オレが決して触れることが出来ない何かがあった。

トオヤマナルヒトとそなたが話す姿を見ると、本当は少し辛かった。

だが、それでも

「たのしかったよ、ユサ」



ああ、たのしかった。たのしかったのだ。

そんなちっぽけな嫉妬など、どうでもよくなるくらい、この仮初の一夏は楽しかった。

そなた達と過ごした時間が例え嘘でも、仮初でもオレは

「ほんとつた、ありがとう」

固くなったユサの身体を抱きしめる。きつとこの感触だけは忘れないだろう。

空を、オレ達の真上を、異形どもが埋め尽くしていた。

太陽の光すら、届かないほどにー

風が吹いた。





「だまれ」

オレは、空を突き抜ける。

オレが動くだけで、オレの身体に触れるだけで、標識アタマの異形は全て、焔に包まれて焼け落ちる。

意識せずとも、背中から翼が生える。それはナルヒトやユサにはない部位、竜の部位。

ああ、思い出した。オレは竜だ。

この力、この感覚。オレは、こういう生き物なのだ。

《あー ど、ラル、どらる、ドラルーー!!》

ナルヒトを丸呑みにした大いなるモノが喚く。

オレは背に生やした翼で空を掴む。世界が流れる。心地よい。

《は……？ あの子、なに？》

どこか懐かしい声。それはナルヒトと共に戦う嵐の化身の言葉。

大矛で貫かれた目玉と、その近くに立ちすくむ嵐のヒトガタ。

なぜだろう。それらから感じるこの気持ちは。

胸がざわめき、まぶたが緩み、ため息をつきたくなるような。

郷愁――

「嵐の、手を貸せ」

まあいい、オレはそれに声をかける。なんと呼べばいいかわからなかったが、自然とそれへの呼び名が口から出た。

《あなた…………… トオヤマナルヒトの…………… ええ、わかったわ。  
なんて呼べばいい?》

「蒐集竜、アリス・ドラル・フレアテイル。良い、我が友とオレの  
代わりに戦ってくれた礼だ。好きに呼ぶことを許す」

『あは、了解。フレアテイル』

表情はわからなかったが、確かにそのヒトガタが笑ったのが分か  
る。

「……………ナルヒトを連れ戻す。あやつが何を言ったかは知らん。だが、  
このままおめおめと奴の帰還を待つのは性に合わん」



『あら、気が合うわね。あたしも、同じこと考えてたの。トオヤ  
マナルヒトに賭けたけど、だからといって全部人任せってのはダメ  
よね』

「その通りだ。オレが奴を迎えに行く。嵐の。そなたには露払いを  
頼みたい」

《アハ、トオヤマナルヒトといい、あなたといい、人使いが荒い  
のね。ええ、いいわ。好きにしてよ》

「よい。では、行くつか」

多くの話はいらない。

この嵐の存在はおそらく、超越した者だろう。大凡の枠から外れ、ただ1人高く狭い場所で踊り続けるしかない存在。

オレと、同類。故に言葉などいらぬ。

ヒトの身体に、竜の翼。制服が邪魔だ。だが、オレはそれを破り捨てることも脱ぎ捨てることもしない。

思い出も、何もかもをオレは連れて行く。それはオレの蒐集品なのだから。

《ドルル、ドルル、ドルルドルルドルルドルルドルルドルルドルラ

ルドラルドラルドラルドラルドラルドラルドラルドラルドラルドラルドラルドラルドラルドラルドラルドラル、ナルヒトくんをたぶらかした毒蛇、ああ、あなたの牙には毒がある！ ナルヒトくんを、ヒトにしてしまふ毒が！！」《

キギキニキギキキキキニキギキキギキニキギキキギキニキギキキギキニキギキキギキニキギキキギキニキギキキギキ  
キギニキギキキ

「笑止」

ふかかか、今、こやつはなんと言った？

笑わずにはおられまい。奴を、オレが毒しただと？







異形の主人が喚く。ソレから感じるのもまた同類の香り。たどり着いたもの、理の外にはみ出たモノ。

わかる、あの中にナルヒトはいる。

あの女は、ナルヒトと一つになろうとしている。ナルヒトを、竜の友を拐かそうとしているのだ。

怒り、視界が真っ赤に染まるほどの激情の中、しかし、オレの中に沸いてきたのは

「ふかか」

笑い、愉快だった。あまりにも奴の言葉が的外れで、道化を笑うがごとく、ああ、笑みが止まらない。

「違うな。逆、なのだ」

《は？》

「オレがナルヒトを冒したのではない。オレがナルヒトに冒されたのだ、ふ、ふふ、この、オレが…… ふふふふかかかか！！」

ああ、腹の底から湧いでる愉悦。他者を嘲り力をひけらかすことへの昏い悦び。



ああ、やはり、オレは竜なのだ。

《は？ なに？ 何笑ってるの？ ムカつくんだけど》

「いやなに、すまぬ。滑稽でな。ナルヒトとの関係が浅い割に、知った風なことを言う貴様の言葉が、面白うてなあ」

にいいいやりいい。自分の顔が、笑みがどんどん深くなるのが分かった。オレの言葉に狼狽える奴の姿が、面白くて面白くてたまらない。

ああ、こやつはナルヒトに焦がれている。こやつもまた、トオヤ  
マナルヒトに罵られているのだ。

ならば、ああ、こやつは、オレがナルヒトの唯一の初めてを奪った存在だと知った時、どのように喚くのだろうか……

ああー　いいな、それは。

《は？　は？　は？　何いつてるの？　トカゲもどきが。私とナルヒトくんの関係は彼の初めからあるの。彼が小学生の頃から私はずっと、ずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっと遠山鳴人をー》

「熱かった」

《は？》

「ナルヒトが、オレの胸を貫いた瞬間だ。とても熱く、痛くて、ああ、奴の一撃はオレの身体を駆け巡った」

自然と声に熱が。

《なに、それ》

「ああ、すまぬ。奴と、オレだけの思い出、だよ。ふかか。奴はオレを殺したのだ。オレだけを見つめて、オレだけに笑いかけ、見事にオレの命を一つ奪った」

ため息が、漏れて、その時を思い出す。トオヤマナルヒトの嗤い声と、冷たい目つき。

その全てがオレをおかしくさせていく。

《うそ、じゃない、なに、それ？ なにそれ！！？！ 知らない！ 知らない知らない知らない！ 私、そんなの聞いてない！！》

「ふかか、ああ、とても素敵な時間だったよ。おや？ すまぬ、もしかして、むむ？ むー？ 貴様、ナルヒトに殺されたことがないのか？ ああ、良い良い皆まで言うな。すまなかったよ、奴の初めではオレが既に貰っている。知ってるか？ あやつは容赦がないのだ。身体の内側から何度も何度も斬り刻まれ、血の海に斃れ、虫の息となったオレの胸にすらナイフを突き立ててな。……ああ、済まない。浸ってしまったよ。えっと、それでなんだ？

トオヤマナルヒトの何を知っている、と?」

にまああああ。

ああ、オレは竜だ。どこまでも、どこまでも。

他者の上に立つことが愉快でたまらない。

《……………始末しなきや》



「やってみよ」

百を、千を超える。黒い腕、大いなるモノからそれが伸びる。

それは定命のものの生を終わらせる死をそのまま形にしたもの。

ヒトではない女の心はオレには読めないが、その言葉だけは嘘ではないのだろう。

だが、滑稽だ。また、笑ってしまう。

「定命の者風情が。不滅の我らに”死”とは、笑わせるものよな」

《はー》

溶ける、溶けて行く。

幾千にも伸びる黒い腕、その全てがオレに触る前に溶けていく。

万人の死、定命の者の死の象徴？

笑止。

「そんなもの、竜に届くかよ」



オレは飛ぶ。黒い腕を溶かし一気に上空へ。

「嵐の!!! 有象無象を消し飛ばせ!!! 邪魔だ!!!」

貴様になら、それが出来るだろう? 懐かしかを感じるその女へ  
オレは声を飛ばす。

ヒトでも、竜でもない存在。それには力があることだけ、今はわか  
かっていればよかった。

『何する気?! フレアテイル!』

「ふかか、迎えに行くのだ! 我が友を! オレの、竜殺しを!!!」

『……………!! 良い旅を、フレアテイル』

「ああ、嵐の。いや、ローレーヴァテイル」

アレタ・アシユフィールド。ナルヒトはこの嵐をそう呼んでいた。

何故か、その女の名前を、竜の言葉に換えてオレは呼んでいた。理由はわからないが、この者には竜の名前が相応しいと感じた。

我ら竜の戦いの名前。共に闘う同胞においてはテイルの姓を呼び合う習わしを、なぜかこの者に。

『ふふ、なにそれ。……ストーム・ルーラー、起きなさい。竜の道を切り拓く』

壮観だった。

空が広がっていく。世界を埋めつくさんばかりにいた異形のウジムシどもが、レーヴァテイルの嵐で吹き飛んでいくさまは爽快だった。

「ナルヒト、少し待っていろ」

すぐに迎えに行く。

オレは己の戒めを解く。

オレは昔から不思議であった。何故、竜がヒトの姿を象ることが出来るのかを。

お父様やお母様は、竜を模してヒトが生まれたからだと教えてくれた。

本当に？　だが、竜を模した生き物ならばリザドニアンや、ワイバーンが存在する。

全ての竜の源。我らが生まれ、いずれ回歸するはじまりの竜がなぜ、竜にヒトの姿を与えたのか、オレは不思議でなかった。

だが、今ならわかるよ。はじまりの竜が何故、ヒトの姿を選んだのか。

ナルヒト。今のオレにはわかるんだ。

「きつと、はじまりの竜も、オレと同じなのだ」

それはきつと、ヒトを理解したかったのだろう。だから

ああ、だから、少し迷う。もし、この姿を見られたら、トオヤマ  
ナルヒトはどう思うのか。ヒトとは明らかに異なるこの姿を、ナル  
ヒトは――

風が、吹いた。

□  
ーありがとう、ユサ。大丈夫、聴こえているよ。  
□

オレは友の為にその姿を選ぶ。

オレは友のおかげでその姿に戻る。

「1111に点を穿し」

はじめるよ。

見せてやろう、オレの、本当の姿を。

「我が祖父は炎竜、その炎は世を燃やし尽くした」

「我が祖母は水竜、その水は世を洗い流した」

「我が父は鉄血竜、その血を流せる者この世にはなし」

「我が母は花竜、その美を超えるものこの世にはあらずる」

オレの身体に流れる血、魂。竜とは受け継ぐ者である。血脈が、  
そして回帰する魂が引き継いだ全てが、次の世代の竜へ。

焔がオレの身体にまとわりつく。

背中から生えた翼が、より大きく。

『フレアテイル……それ、すごいわね』

《と、かげ……エエエエ》

生命ある者よ、畏れよ。

魂持つ者よ、震えよ

意思強き者よ、跪け。







の尾も。その全て、他者を圧倒するためのものである。

オレの金色の鱗が、輝く。

身体が熱い、眼下に位置する大いなるモノ、いや、小さきモノを見つめる。

《……トカゲが！ 爬虫類臭いの！ ナルヒトくんに懐かないで！  
死んで！！》

闇色の身体から、大矛を取り出して、それを振りかぶる巨体。だが、遅すぎる。

空を飛ぶ竜を墮とすことなど、できるモノなど。

「アアアアアアアアアアアア」

いや、いたな。

オレは口に溜まった焰の熱を舌で転がしながら、少し笑う。

ナルヒト。オレは竜だ。

貴様とは違う存在だ。

貴様の全てを理解することなど出来ない。貴様と本当の意味で寄り添うことなど出来ない。貴様の弱さと同じでいることは出来ない。

オレは竜。貴様とは違う。

だが。それでも竜で、良かったと思う。

竜だからこそ。今、こうして、そなたを助けに行けるのだから。

眼下、空が広い。

嵐が、有象無象どもを、全て消し飛ばしてくれたおかげだ。

『遠慮はいらないわ。ぶちかましてよ、フレアテイル』

同類の言葉に、にやりと笑い、オレはその焰を闇色の女へと向け  
る。

光が。闇を裂いた。

《え》

しゅぽ。

金色の光が、闇色の女の半身を焼き切る。ああ、貴様の中身がよく見える。

それは死、暗黒の奈落。

その遙か下、オレの目には映る。

鈍く、それでも輝く星のごとき煌めきが。

そのちっぽけで血生臭く甘くて、古い匂いと生命の輝き。

見つけたぞ、ナルヒト。

オレは翼をたたみ、一気に降下。風が、空気が邪魔でもどかしい。

もどかしい、もどかしい、もどかしい。

オレは竜の身体で降下して行く中、ふと、思う。

オレは、なぜ、ここまでナルヒトのことになると必死になるのだ

ろっか？

何故、オレはおかしくなっているのか？

心に湧いた小さな、痛みにも似た何か。

それはきつと一緒にいる彼女がずっと抱えていた想いとよく似ているものなのかもしれない。

まあ、いいか。

オレは、闇色の女の身体、その焼き開いた空洞へと堕ちていく。

そこは、死だ。



そこは、終わりだ。

きっと、定命の者が全てを終えた後に向かう場所そのものなのだろう。冷たく、ただ、冷たくて暗い場所。

空洞を墮ちる。

近くにナルヒトがいる。

む？

何か一瞬、筆舌にも尽くしがたい見るだけで不快な肉塊と存在が視界に写った気がしたが、すぐに闇に飲まれたので、無視をして通過する。

そして、オレは見つける。

オレとは違う翼もなにもない身体で、弱々しく落ちて行くそれを。

「牙も爪も翼も尾も、焰も。」

竜が備える何一つ一切を持たずとも、竜を殺しせしめた我が友を。

オレの竜殺しよ。

ナルヒト、待たせたな。迎えに来たぞ。

海 優 シャ

『一緒に行くこうぜ、ドルル。あのトーヘンボクを迎えにさ』

声にならない声。それでも君に届けばいいな。風よ、頼む、届け  
ておくれ。

僕は今、滅びの中にいる。仮初で嘘の命にも死は訪れる。

僕は、死ぬ。僕は滅びる。僕は終わる。

でも不思議と、あれほど焦がれていたはずの死に対して僕はあまり感想を持たずにいた。

ああ、知ってたぜ。ドラル。

君が、かつこいい奴だったことは。

僕は、空を眺める。溶けていく身体よ、もう少しだけ。消えていく魂よ、あとほんの少しだけ。ぼくに、付き合ってもらっぜ。

僕の冷たくなつた身体を抱いてくれた君が、空へ駆けるのを眺める。

ああ、見てよ。空を埋め尽くしていたあの化け物たちが羽虫のよう  
に落ちていく。

空は彼女のものだ。彼女は決して許さねえ、自分が許した者以外  
が空を飛ぶことを。

僕は、キミが羨ましい。

トオヤマナルヒトと同じ、本物であるキミがとても羨ましいよ。

知ってたかい？ とーやまが君を見る目は、僕達を見てる目とは

少し違うんだぜ。

アイツがたまに窓の外から空を眺めてるあの顔。

まるで自分のいる場所はここじゃない、もっと別の場所なんだって突きつけられるような顔。

遙か遠くを眺め続けるあの顔だよ、きっとアイツにしか見えない何かを見てるあの顔。

僕はあの顔が嫌いだった。  
僕はあの顔が好きだった。

その顔で、ドラル。君を見ていたんだぜ、アイツ。

空を、キミが駆けていく。

きんいろ。

美しいきんいろの焰が、異形たちを焼き払い、キミの綺麗な髪の毛が嵐になびいている。

その美しい顔が、なにかをためらっているように見える。ああ、君は優しいやつだよ、ドラル。

でも、大丈夫だ。

いっちなまえ。

ドラル、君にはその資格がある。

大丈夫だよ、ドラル。君は綺麗だ。

君が竜だろうと、なんだろうと、きっとアイツは気にはしないさ。

それに、ククク、ほら、想像出来るだろ？ アイツ、きっと竜の君なんて見たら大喜びするぜ。

『ドラゴンが嫌いなオタクなんているわけねえから』

僕の、ーを頼んだよ、ドラル。



ああ、大丈夫。微力だけど、僕に出来ることもするさ。ほんの少し、オリジナルのカケラほどの力だけど、君に、君と、一緒に。

君ならそれが出来る、生と死を行き来し、いずれそれさえも超えることが出来る生き物、竜。

僕を連れていってくれ。僕の意志も思いが消えるとしても、この力だけはどうか君の役に立てればいいな。

クククク、あーあ。なんだよ。たのしかったなあ。偽物でも、仮初でも、幻想でも、みんながいたから、楽しかった。

それに、ああ。なんだよ。偽物の僕でも、本物にひとつ勝てたものがあるや。本物にはなくて、僕にだけあるものがある。

竜が、空を飛ぶ。

嵐すら晴らしながら、彼女が従えるきんいろの焔が暗闇の女神を  
焼き滅ぼしてる。

綺麗だよ、ドラル。

ーひっひっひ。なあ、オリジナル。海城 優紗。悔しいだろ？

この光景は、これだけは、僕、だけのものだけ。

あはよ、とーやま。君は好きに進むといいさ。でも、たまには後ろとか横とか向けよな。ドラルのことは、置いていくなよ。

とーやま、まあ、あれだ。ドラルと君が共にいればそれでいい。それが僕だけの勝利だ。

竜が空を飛ぶ。全てを焼き滅ぼし、闇色の女神の半身へ、嵐が切り拓いた空間を伝いて、金色の熱線を。

ぼっかり空いた巨体の空洞、そこへ竜が吸い込まれるように入り込んでいく。

僕は君と共にいる、この魂が減びても、きっと君のそばにいる。

やっちやえ、アリス・ドラル・フレアテイル。

僕の、最高にかっこいい竜の友達――

101話 アリス・with・カイキ（後書き）

感想いつもありがとうございます！ 全部読んでます！

これからもよろしく願います！

102話 夢の終わり、耳のおかえり、竜のさよなら、神のけつまつ、ほうけんをつづける。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

「う、おおおおおおおおおおおおおおお！！」

高揚、浮遊、風！！

遠山鳴人は今、上昇している。闇を駆け登り、亡者の手を引きちぎり、ただ昇り続ける金色の竜の背に乗って！

万にも登る亡者の手が、竜の翼を狙う。万を超える亡者の声が、遠山を狙う。







「ヒビヒビヒビ！！　　すげえ！　　すげえすげええ！　　ドラ子！　　お前、ほんとすげえ！！！」

「グ、おオオオオオオオオオオオオオオオオ」

遠山の歓喜の声に、竜が吼える。死の中に輝く圧倒的な生がそこに。その輝きが増せば増すほどに、亡者たちの嘆きは強くなるのだ。

《《《ア、ア

うぞぞぞぞぞぞ。群体、奈落の壁という壁からドロドロが這い出る。それはどんどん集まり、固まり、蠢く。

「あ、やべー！！　　なんだ、あいつら！　　出口を」

上にある出口、光が注ぐそこに亡者たちが集まる。

行かせるか、行かせるか、行かせるか。

置いていけ、置いていけ、置いていけ。

見捨てるな、見捨てるな。

身勝手にも近い嘆きは怒りに代わる。亡者たちには、眩しすぎたのだ。

死に落ちながらも、喚くことなく空を見上げ続けた人のことが。

死を裂き、輝きを纏いながら落ちていく人を掬い上げた竜のことが。

《イカナイデ

崩れかけのヒトガタ、名瀬瀬奈にも似ているし、まるで違う誰かのようにも見える。

崩れかけの闇の形をしたヒトガタが、出口を塞ぐ。

《一緒に、イテ

「ジュ、ジュ、ジュ、ジュ。」

「クソ、いちかばちか、キリヤイバでーっ、っ、やべ、力が」

遠山は活動限界を超えている。キリが、薄れて。

》

そのまま、巨大な手が振り下ろされる。竜を、人を、死の中に留めておこつとする傲慢な、手が――

――やっちやえ

「えっ？」



金色の鱗の一部の色が、変わっていく。

それは、遠山の知らないある物語の結末。

本物と、ニセモノが、それでも交わした心の答え。

死を、あれほどに自らの終わりを求めた少女はしかし、それを認めない。

金色の竜の終わりを、目つきの悪い友の終わりを、彼女は決して認めない。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

「こんな理不尽で。傲慢な死を、死にたがりの少女は決して許さない。」



竜の声と同時に、黒い鱗が燃え始める。それは黒い焔に代わり、竜の口元に集まり出す。

「黒と金、かつこえー」

そして、それは姿を変える。

剣。

黒い剣。分厚い刀身、黒い岩のような鍔と持ち手。

それが、竜の口元に現れてー

「ドラ子、お前、それまさか」

がちり。



竜が牙を鳴らして、その剣を啜えた。

「う、ウワアアアアアア、ど、ドラゴンが、剣を、剣を、啜えたアアアア、か、カツコオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

オタク、大喜び。思わず掴んでいた背中の棘を離して歓喜に両手を上げて、思わず落ちかける。

「フカーカーー がうううオオオオオオオオ！！！」

竜が、その様子にどこか嬉しそうな咆哮をあげて。

《ああ

亡者が、怯える。

竜も、人も、詳しくは知らないその黒い剣の所以。

死すら殺すある存在、物語を解決する終末装置が用いた力の塊。

縁を用いて、眷属に再現された模造品であろうとその力には確かな人の想いが込められている。

「ド」  
「ケ」

「ウワアア！ カッコイイイイイ！！」

竜が啞えた剣を振るう。黒い焔が、进り、奈落を遡上。

《あ

ぼ、しゅ。

切り裂くのは、亡者の怨嗟。

誇り高き死者の剣が、生者の道を切り拓く。

空が、空けた。空が、見えた。

「グウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

上昇する、上に、上に、登っていく。

もはや、亡者の手も、声も、彼らには追いつかない。出口を塞いでいた亡者の塊も、切り裂かれ、落ちていく。

ーあばよ

また。声が。きつと、気のせいだ。

遠山は決して振り返らない。その声も、遠山が振り返らないことを知っていた。

だから、小さく。

「――ありがとな」

遠山が口にしたのは、それだけで。

あとは、もう、何も。

上に、上に、上に。闇が薄まる、光が強く。

竜の雄叫びと、人の小さな別れの言葉とともに。

《あ、ああ、置いてイカナいて

奈落から、金色の竜が飛び出る。闇色の女神の胎の中から飛び出る。

そして、さらに上に、昇って。風が頬に当たる、湿った空気が鼻に染み込む。

そこはまだ、夏の香りがしていた。

ばさり。

竜のはばたく翼の音しか聞こえない。

雲が下に、目の前に。

――空の中。

腹に感じていた上昇のGも、もはやなく。ただ、青い空の中にいた。

「すげえ……」

世界。

これはきつと、作り物の世界。ニセモノの場所。だが、それでもそれは遠山を魅せた。

遠い空、はるか彼方。水平線が見える。

上を見れば、濃く蒼い。みたことのないような濃い蒼。手を伸ばせば届くような位置に。

「……あれ」

見たことない色、そのはずなのに、その濃い蒼を遠山はどこかで

「ゲルルルルル……」

「うお!?! ドラッーー うわば!?!」

その蒼に、遠山が手を伸ばした瞬間、金色の竜がどこか不機嫌そうに喉を鳴らし、一気に下降。落ちそうになるのを必死にしがみつき、なんとか耐える。



「ふぐるー、るるるるる」

「え、なんかお前、怒ってる？　なんで？　意味わからん」

女心すら理解出来ない人間が、竜心などわかるはずもなく。首を捻る遠山に、竜は鼻を鳴らすだけ。

どうしたものかと、遠山が頭を捻ると。

『トオヤマナルヒト！　フレアテイル！　よかった！　無事なのね』

嵐のヒトガタ、アレタ・アシユフィールドが当たり前のように羽ばたく竜と口輪を並べる。

極小の嵐と雷により浮遊する彼女に突っ込む元気はもう、遠山にはなかった。

「グルルルルル」

『フフ、貴女、本当にすごいわね、フレアテイル。とてもクールだわ』

「いつのまに仲良く…… いや、てか、この状況…… あ、やべ」

遠山が、ハッと口を押さえた。

忘れていた。

救出対象、”凡人探索者”のことを、割とすっかり。

「あ、ア、アアレタ・アシュフィールド、や、やばい！ 俺、割とマジでやばいかも！ あんたんとこの、アレフチームのあのヤバい奴、置いてきちまった！！ なんか、普通に落ちて黒いのに取り込まれて！ ていうか！ なんだアイツ！ なんかガイコツやらカッパやら耳やら！ 耳の穴から火を噴くし！ 耳穴からひり出てくるし！ あれほんとに人間か！？」

『…………え？』

キョトンとアレタが、固まる。遠山がアワアワと慌てる。ノリノリになりすぎた。ドラゴンの登場で、あのヤバいデザインの耳の男のことなど、すっかり記憶から――

《アア、マダ、マダマダマダマダ》

「げっ！ まだ治んのかよ！ アイツ！」

「ゲルルルルル」

『アハ。ノープロブレムよ。トオヤマナルヒト』

「いや、問題ありまくりだろ、アレフチームの奴はまだ名瀬の中にいるし、名瀬はまた再生しちまってるし！ クソ！ こっぴなったらもう一回！」

「ゲル！？ ぐうあああ！」

「うわっど、ドラ子、身体揺らすな！ 酔っから！」

『だから、大丈夫よ、トオヤマナルヒト、フレアテイル』

「いや、だから！　なんで大丈夫とか言えんだよ！　状況は何もー  
」

『状況終了、大丈夫、勝負あつたわ』

「は？」

《アアアアアアアアアイヤ、いや



《違う、違う、わたし、私は藤堂、私は日下部、私は名瀬、違う  
ちがう、消えて消えて消えて、違う、わたし、イヤ

創世の女神、国産みの神性をすら明かし尽くす病原菌。

ぼこり、ぼこり。それが闇色の身体を冒していく。

背中に、首に、腹に、頬に、ぼこりぼこりと浮かんでいくのは腫  
瘍。

耳の、形をした、腫瘍が女神の身体を覆っていく。





私は、ナニ？ 私、わたしわわたしワタシワタシワ

ワタシはー

おのみ？》

ぼじり！！

花が咲く、大輪の華が咲くー かのように、女神の顔にそれが  
咲いた。

大きな、大きな、一対のお耳。

女神の肉を埋め潰し、悲鳴を平らげて、それが咲く。

「……………」

「……………」

竜と竜殺し、沈黙。ただ、それを見下ろす。

《あは、アハ、あは、ナニコレ、ナニコレ、咲いちゃった、咲いちゃった。おみみがワタシに咲いちゃった。なんで、違う、違う、私はおみみじゃない、ワタシは何故、なぜ、なぜ、やめてワタシを



警告逃げてください、勝てません】

「お、おい。なんだそれ。な、なんかヤバいぞ……！ おい！」

「グルルルルル」

『ちよつと、待ってもらえる？ 起こしてくるわ』

「は？ 起こすって、いや！ 待て待て！ 起こした結果がアレなんだよ！ 化け物殺した後に更なる化け物が生まれたりしないよな？ 化け物と化け物ぶつけたら合体しそうなんだけども！」

『トオヤマナルヒト、フレアテイル。ありがと。2人には本当に助けられた。あなた達がいなかったら多分ここまで上手くはいかなか

ったと思う。改めてお礼を』

「話聞かない奴だな！ほんと！いや、なんか終わった感じ出してるけども！なんかよりヤバい化け物に――ってか、耳？――  
――待て、聞いたことあるぞ！指定探索者を殺しまくってた接触指定禁止怪物種、耳の化け物！！なんかアレにそっくりなんだけど――」

『トオヤマナルヒト』

「な、なんだよ」

『信じて』

「あ、おい！アレタ・アシユフィールド！！」

『……………』

《ギャハハハハ》

『起きて、仕事の時間よ。———』

嵐が従えた雷が轟く。雷鳴によってアレタの言葉がかき消され、遠山には聞こえなかった。

だが、”ソレ”にはきつと聞こえていたのだろう。大きな耳を持  
った、耳の良いソレにはー

《イヤアアアアアアア、ギャハハハイヤア

ー了解、アシュフィールド』

「は？」

ソレは異変だった。

ぎゅるり、まず、初めにもがき苦しむ女神、その首元に穴が開く、かと思えば、その穴から腕が、生えた。

「……エラ？ それに、あの水かき……」

女神の首元から生えた2本の腕、水かきを備えたそれに遠山は見覚えが。

「カツパ……」





次の、異変。

女神の左腕、それが変わる。暗黒で構成された神体が震え、左腕が変わっていく。ぎち、ぎち、ぎちぎち。硬い何かが捻れて歪む音。

ソレはすぐに、骨へと変わる。

その骨にも、遠山は見覚えが。

「烏帽子ガイコツ……?」

《アアアアアアアア!　ギイイイヤアアア!?　ギャハハハ  
ハハハハ、イヤアアアアア　キラナイデエエエエエ　違う、チ  
ガウ、ワタシ、オミミジャアナイノニいいいいいい》

ずぶ、ずぶ。

女神の顔に生えた耳穴から、骨の刃が生え出でて。肉を斬り飛ばし、削り続ける。

カッパとガイコツ。それらの力の象徴が女神とお耳、その両方に”攻撃”を続ける。耳の増殖を、女神の覚醒を邪魔し、押さえ込むように。

「なんだありゃ」

女神の悲鳴、耳の噛い声、神秘達の攻撃。地獄のような光景の中、しかしそこには意志がある。

大いなる力を押さえつけ、飼い慣らそうとする意志が。

嵐を従えた英雄の写し身が、その地獄を至近距離で見つめる。

ぼおっ。

女神の右腕が、燃え始めた。その火も、遠山は知っている。竜の焰をすら相殺する、どこか暖かくて優しい火を。

《イヤ、イヤ、ヤメテ、ヤメテ、ナニヲ、スルルルギヤハハハハハハハハイヤアアアギヤハハハハハハハハイヤアアアアアアア、火！？ その火！？ 何するつもりナノ！？ やめてやめてやめて近づけないで、その火を、ワタシにイイイイイイイイイイイイイイ！？ ーア》



「グルルルル」

「なにかヤバイ……！　おい！　アレタ・アシユフィールド！　離れる！　なんか、そいつ」

アリスと遠山がただならぬ雰囲気に吠える。もうダメだろ、それは。とても、なんとというか大丈夫には見えなくて。

だが、それでも英雄は目を逸らさない。

『いいえ、大丈夫よ。言ったでしょ？　勝負ありだつて』

「何言つてー」

人の話を聞かない連中に、遠山が心底呆れた声を漏らして。

《ちがつ》

「……え？」

今、何か、明瞭な声が燃え盛る耳を生やした女神の方からー

《ワタシハハハ耳、ワタシハナゼ》

《ちがう》

神。  
ソレは声だった。肉を焼き溶かし、空の中で悶え苦しむ闇色の女

5831

《ワタシハイイイイイイイイイイイイイ。ミミミミミミミミミミミミミミミミ  
ミミ あアアアアアアアア、ワタシ、ワタシがおミミミミミミミミミミミミミミミミ  
ミミ》

《ちがう》



《ワタシーー 俺は、違つ、俺ア！ ちがう！！ 俺は違つ！！》

「なんだ、誰の、声だ？」

《ーア 俺は、俺ア、アイム、イーー ちがう！！ 俺、は！  
”耳”じゃあ、ない！！》

男の、声だった。

苛立ちと、いや、もうきつと苛立ちしかない声。

《おれは、ホモ・エレクトウスー！》

その男は多くの人は知らない物語の中、火葬の火を引き継いだ。

《俺は、鬼狩り》

その男は多くの人は知らない物語の中、古い鬼狩りの業を受け継いだ。

《俺は、河童》

その男は多くの人は知らない物語の中、西国大将の想いを護りきった。

《俺は———でも、ない!—!》

その男は、その男の名前は——

ピロン。

「あ」

【条件達成 ” 名瀬瀬奈 神体” の中にて ” 神秘の残り滓” 達を援護し、 ” 凡人探索者” の元まで運び届ける】

遠山鳴人は、彼の仲間を全て連れて行った。

鬼狩りを、西国大将を。死に抗い続けた神秘達を、1人たりともこぼさずに、その男の元へ送り届けた。

【複数の神秘の残りカスの力により”耳の化身”強制停止 上書き  
キャンセル】

男の中にうずまく暴力。全てを台無しにしてめちゃくちやにする力を、神秘達が抑え込む。力に支配されるのではなく、力を支配するため。

人はいつもそうしてきた。自然の力だろうと、捕食者の力だろうと。

この世界にあまねく全ての力を、己が扱えるモノとして取り込んできた。

そして、それは成功した。

【DEADクエストをクリアしました】

もはや死の運命は退けられた。

【おめでとついでいますー】

遠山鳴人は、その作戦に成功した。

その男も、その作戦に成功した。

「ービビビ、なんじゃ、そりゃ」

メッセージに、少し笑う。その文面があまりにもアホすぎて。

《俺はー》

『あなたはー アレフチームの』

【おめでとつございます。” IQ3000の超天才的な作戦”は貴方のお陰で完遂されました】

その全てが、この結末を引き寄せた。











《あ、ガ、ば、けもの……》

嗤う笑う笑う。

女神の小さな言葉は、その男のよくわからないスイッチを押していた。

《ダアアアレガ化け物じゃあアアアア、こんのすつとじどつ  
こいのイカれクソアマがああああ！！ ふんぬ！！》

ぼきり。

《ア》

抵抗らしい抵抗もなく、驚くほどに呆気なく、女神の首がへし折れる。

《あばよ、クソアマ》

へし折られた女神の首が、だらりと舌を放り出して傾いて。

腹から生えた耳男が、ぺっと何かを吐き捨てた。なんだこれ。

《あ、もう、無理……》

へにより。耳男もまた、だらりと身体を逸らし、天を仰ぐ。闇色の女神の腹から生えた耳の巨人。

どれだけ病んだ芸術家でも、作った瞬間に叩き壊したくなるアートのような光景だ。

ぷちゅ。

巨大な耳の巨人、その耳頭の上からなんか、人が生えている。

頭の壊れた職人が作ったマトリョーシカ。

「……なんか、もう疲れたな。帰る？ ドラ子」

「ギャウ」

あまりにも、あまりにもな光景に遠山とドラ子がぼそりと。

笑いすら込み上げることの出来ない出来事だった。

『幕あいにしましょう、全部』

英雄が、声を。

げっそり、うんざりしている遠山たちとは違い、その声に宿るし  
っかりした覇気。

まるでそんな光景には慣れていると言わんばかりに。

『我々、アレフチームは決して失わない。全てを捨て、何も捨てず、何も諦めず進み続ける。ソフィー!!』

嵐の英雄が、空に向けて吠える。

「――ああ！ 今こちらでも、あのバカのバイタルサインを確認した！ アレタ！ あのバカを連れて帰る！ 世界線が綻び始めている、今しかない！」

端末から響くのは、遥か彼方、遠い世界の深い底から答えるソフィの声。

「な、なんだ？ あれ」

「……………」

空に異変。

遠山達が揺蕩う空よりも、もっと上空。

嵐の雲よりも、はるか高い場所。きつとこの世界の上限に近い場所が、歪み初めている。

「ふ、んごおおおおおおお、アレタに、出来て、このワタシに出来ないことなど、あつてはならない！ 今度こそ、キミと、あのバカだけが先にいくことなどあつてはならない！ 目覚めるオオオオオオ、ワタシの中の何かあああああー」



――約定を――」

ビキ。

空が、割れた。

ひびだ。卵の殻でも割れたかのように、遠山達の頭上、空のもつと高い場所にヒビが入った。

『ナイス、ソフィ。それでこそ』

嵐のヒトガタは笑う。

「に、じっ。」

遠山は言葉を詰まらせる。

空のひび割れから、漏れるのは虹。七色の虹が、真っ直ぐこちらに向かっている。

『よいしょ、と。救出完了、ひどい状態ね、まったく』

いつのまにか。

あの巨大なだらりと垂れている耳の巨人のてっぺんから、アレタ・アシユフィールド、嵐の姿をしたヒトガタが、男を回収したらしい。

負われている男、身体中焼け焦げて、全裸の男、顔はもちろん耳の面がだらりと張り付いていて。

「うわ」

「ギヤウ」

背負われている男、身体中焼け焦げて、全裸の男、顔はもちろん耳の面がだらりと張り付いていて。

『フフ、大丈夫、生きてるわ。貴方達2人のおかげでね。ありがとう、あたし達だけでは多分、負けてたわ』

嵐のヒトガタが、男を背負ったまま、ヒョイっと空から降り注ぐ虹に触れる。

すると、ゆっくり、ゆっくり昇っていく。

あのヒビの先、向こう側、きっと彼らが帰るべき場所に近づいて。

「……………いくのか」

帰るのだ。

別れの時だ。遠山が、竜の背の上から、アレタ達を見上げる。

『ええ、作戦は完了。欠員もなし、目標は沈黙、後は無事に帰還するまでが探索者の仕事でしょ。……………そう、帰還するのが、ね』

そう言って、嵐のヒトガタが押し黙る。夏空の亀裂から、降り注ぐ虹の光がゆっくりと彼女とあの男を空へ引き上げつつあって。

「……………」

『……………』

竜と星。無言。

遠山が2人の妙な沈黙に首を捻った時だった。

「ギヤウ」

「え？」

ぶおん。風、回転、上昇。

視界が周り、脳みそがシェイクされる。

ドラ子に、投げ出されたのだと気付いたのはそのすぐ後だった。

「は？」

虹の光が、遠山を包む。ソレは、帰路を示す光。あるべき場所に  
あるべきモノを誘う暖かな家路への光だ。

『……そう。いいのね？』

「……………」

「は？ は？ なん、なんだ、これ、なんで、ドラ子？」

竜に放り出され、空に浮かぶ遠山、彼女は低い位置を飛びながら、遠山を見上げる。

光、金色と黒色の光が竜の身体を包む。

太陽がそこに顕れたかのような光に遠山が思わず目を瞑り、そして開いた次の瞬間には、馴染みのある姿、美しい金髪のがままな友人が。

【メインクエストが更新されます】

【メインクエスト ” 帰還 ” オプション目標 ” アレフチームとの合流 ” 及び、作戦の完遂をクリアしました】

「ナルヒトとユサが喋っている姿を見るのが好きだった」

「……………あ？」

【貴方は元の世界に帰還することが出来ます】



「ナルヒトがユサにからかわれて、それをトードーが嗜めて、ナルヒトが最後にはふて寝したり、無視して教科書を読み始めたりするのが面白かった」

こちらを見上げるドラ子、アリス・ドラル・フレアテイルは笑っていた。これまで見たことのない穏やかな顔。

「ドラ子、お前、何言ってる……」

唖り振るう上位者としてではなく、遍く見守る上位者として、人間を竜が見送る。

「ずっと、そなたのことが知りたかった。ずっと、そなたと違うところが辛かった」

「だが、そなたは言うてくれた。違ってもいいと。オレが竜でも、

定命の存在からすれば恐ろしいはずの姿のオレをカッコいいと言ってくれた」

「だから！ ドラ子、お前何を」

「充分だ、トオヤマナルヒト、大義であった」

「は」

「そなたは見事に、竜との約束を果たし、オレを満足させたのだ。そして、きちんと約束通り、オレの元に戻ってきてくれた。だから、満足だ」

「」

「そなたはオレを変えた。ああ、今のオレならわかるよ。どちらでもいいのだ。竜でもヒトでも、それ以外でも。そなたがヒトであろうとなんだろうと、そなたであることは変わらない。……例えニセモノの思い出だろうと、ふかか、そなたはずっと、オレの知るトオヤマナルヒトでいてくれた」

そこには、あの釣り堀で見せた動揺した女の影は全くなく。

遠山鳴人が定命から外れつつあることに酷く狼狽えた竜の姿など、微塵もなく。

「きつと、それがとても大事なことなのだ。トオヤマナルヒト」

ただ、目の前の存在を対等な存在として、あるがままの姿を受け入れる大いなる自然のような――

「故に、ふかか。ナルー いや、”冒険奴隷”よ。竜の試練を超え、竜を変えた”異邦の探索者”よ。塔級冒険者、アリス・ドラル・フレアテイルとして…… 貴様に褒美を取らす」

「ドラ……」

その声色。

ああ、あの時の声だ。

鎧ヤロー。あの塔で殺し合った時の、アリス・ドラル・フレアテイルの声。

違うのは、その表情。なんて、穏やかで、綺麗でー

「ふかか、懐かしいな。ああ、あの時は困ったものだった。竜は約束を破るわけにはいかないのに、貴様はオレの渡した帰還印を、ラ

ザールに渡しおつて。……まあ、ようやくこれである時の約束を果たせるよ。冒険奴隷、遅くなつたが、貴様の帰還を、このオレが許す」

ソレはあの時の焼き直し。

竜の試練を超え、その奴隷は自由を、帰還の権利を与えられたはずだつた。奴隷はしかし、その竜からの褒美を夢を同じくするトカゲに渡した。

「探索者、貴様のいるべき場所は、あちらだ。我が友、カイキユサもそれを望んでいるだろう。貴様は貴様の世界で、生きるといい」

「」

「ああ、とても、とてもたのしかったよ、貴様との時間。アガトラでの日々も、……この街での日々も。ふかか、ああ、何故だろうな。心残りではなくさんあるのに、オレは今満たされて仕方ないのだ。うん、満足だ。充分だ」

### 蒐集。

ソレは己の欠けた空白を埋めるべくして行う人のサガ。それを名として産み落とされたアリスには生物としての欠落がつねに存在した。

### 退屈。

完璧な存在ゆえにもたらされたそれは彼女を歪めつつあった。その歪みは今、欲望のために進み続け、拡大する自我に冒された。

誰かの為に、誰かの幸せを考え、それを叶える為に行動する。ちっぽけで、なんら特別ではないその行動はしかし、竜の欠落を埋めていく。

永遠の欠落を、蒐集により埋め続けるはずの竜は今、満ち足りていた。

『……これが、貴女の選択なのね、フレアテイル』

「ああ、我が友のことを頼むよ、レーヴァテイル。貴様にならー」

竜は今、幸せの絶頂にあった。

小さな小さな、本当に小さな針で胸を突かれるような妙な痛みにも、きつと、きつと耐えられる。

ああ、どうか。願わくば。

あなたが帰ったその後には。あなたがあなたの世界で進み続けるその日々の、ほんの少しの時間でも、オレのことを思い出してくれれば、それでいい。

「さよならだ、オレの童殺し。オレのともだち。オレのー」

「満たせ、キリヤイバ」



キリが、満ちる。

全てを斬り刻む真白のキリ。神との殺し合い、嵐との共闘、神すら祀るしかなかったわけわからん十二力を刻み尽くしたことにより、より濃く、重たくなったキリが主人の令に従う。

「ンギヤ！？ い、痛い！！ ま、まつ毛を抜かれて、その毛穴をまち針で突かれたような痛み！？」

「あ、悪い、ソフィ・M・クラーク。これ、お前と痛覚共有してたのか」

遠山鳴人が、虹の光を切り刻んだ。

UFOにさらわれる牛のようにゆっくり、空に昇っていた遠山。

自らを引き上げていた虹の光を切り裂いたことにより、そのまま、  
当たり前のように――

「――はい???.???.???.」

落ちていく。これにはドラゴンも思わずびっくり。目を裂けば  
かりに見開いて。

「ドラ子―― すまん、落ちる、死ぬ。助けてくれ」

「ば、この、この、おおばかものがあああああ！……！」

ばさり、竜が背中より翼を生やし、一気に降下。

馬鹿みたいに、間抜けに、頭から落下する遠山の元へひとつ飛び。

翼なき愚か者の落下を、竜が受け止める。

「おま、お前、貴様、貴様―― ば、バカなのではないか！？ 何を考えてあるのだ！？ 貴様は――」

ドラ子が、遠山を腕に抱く。お姫様抱っこで腕に収まる遠山へ怒

鳴る。

「ドラ子、お前なんか混じってねえか？」

「は？」

「そのセリフ、その表情。カイキのバカに似てる。……もう、2度とごめんだぜ。……そういう顔した奴に振り回されるのはよ」

「ナルヒト、何をー」

『アハ、アハハハハハハハハハ！』

竜と人のやりとりを、嵐の英雄が笑う。それはもう愉快なものを見た、というふうに。

「レーヴァテイル？」

『ああ、ごめんなさい、フレアテイル。フフ、アハハ。つい、うん、痛快で。なるほど、ああいう振る舞いをこんな感じでめちゃくちやにされるの、側から見ると分にはこんなに気分が良いものなのね』

お腹を抑えて笑う彼女。

表情がない顔にはしかし、きつと笑顔が浮かんでいるだろうことがわかる明るい声。

『ねえ、フレアテイル。あなたの言葉に、あなたの決断。あたしはとても尊いものだと思うわ。嘘も誤魔化しもない真実の言葉。敬意を払うわ、友人の為に、自分を差し出すその姿勢、あたしは間違いだと思わない』

英雄の声には、不思議な重みがある。

さてはコイツも結構めんどくさい奴なのか？ 遠山は訝しんだ。

「貴様、なにを」

『でもね、フレアテイル。あなたはほんとにそれで良かったの？』

「ッ」

『なんでだろ、貴女のこと全然知らないのに他人とは思えなくて。』

これは、そうね、あたしと同じタイプの貴女へ、先人からのアドバイスなんだけど、あたし達のような存在は、きっと、そういうヒトを手放してはいけないと思うの』

アレタが、遠山を見る。まぶしいものを、太陽の眩しさを思い出している、そんな目つき。

『どれだけ特別な存在でも、どれだけ大いなる力を得ようとも、どれだけ偉大な責務を背負っても、どんな過酷な運命を与えられようともね、一つだけ、絶対に忘れない方がいいことがあるわ』

「……………」

嵐のヒトガタが、ふと言葉を止める。

俵のように担いでいる物言わぬ怪人に、静かに視線だけを向けて。

「あ」

アリスが、そして、遠山が目を見開いた。

空の亀裂から注ぐ虹色の光、それに照らされた嵐のヒトガタの姿が、逆光を浴びて――

『あたし達は、みんな”只の人”なんだって』

笑うヒトガタ、光に照らされた彼女の顔。

青い瞳、遠浅のサンゴが満ちる昼間の海を映したような瞳。それが現れた。



アレタ・アシュフィールドが、優しい目つきで遠山を、そして、  
耳の男を交互に見つめる。

『だから、あたし達はきつと手放すべきじゃない。あたし達を只の  
ちっぽけな存在だって引き戻してくれるお馬鹿さん達から、離れる  
べきじゃないわ』

どこか、その顔はアリスに、とてもー

「……アレタ・アシュフィールド。悪いな、気遣いを無駄にして。  
ソフィ・M・クラークにも荒いことして悪いって言っていてくれ」

遠山が

「ええ、わかったわ。我々アレフチームは貴方に大きな借りが出来た。大抵のことは叶えるけど、他には？」

「……鳩村。もし、可能ならでいい。俺のチームメイト、ファイアチームの探索者、鳩村 雄一に会えたら、そうだな。……約束通り、HDは処分したか？ って伝えてくれたら嬉しい」

「……ええ、了解。いいのね、上級探索者、遠山鳴人。これは、今回のあかし達の邂逅は、奇跡のようなもの。もう2度と、きつと、あかし達の道は交わることはない。……探索者、あなたの帰還は――」

「ひひひひ、アレタ・アシユフィールド。あんた、いい奴だな。でも、大丈夫だよ。こっちにもいいやつが沢山いるんだ」

たった一夜のこの出来事が酷く長く感じる。しばらく会っていないとさえ錯覚する愉快的仲間たちを、遠山は想う。

「パン作りの得意なトカゲと、バカな騎士と、素直なちみっこ連中と出店したり、教会の銭ゲバに金返したりしないといけなくてよ。こっちで、色々、ぼうけんしないといけないんだよ。ああ、うん、そうだよ、ぼうけんだ。俺には俺の、ここでの冒険があるんだ。だからよ、52番目の星――」

遠山鳴人の続きは、すでに始まっているのだ。

終わった冒険の続きは、ここで。

「俺は、ここで生きる。命をかけて」

現代ダンジョンライフの続きは異世界オープンワールドで。

もう、始まっている。

「ナルヒト……」

アリスの声、少し震えて。

『ふふ、フレアテイルにお姫様抱っこされながらじゃなかったら、少しドキリと来てたかも。ええ、わかったわ。良い探索者、霧を従えた恐るべき探索者。どこへなりとも。好きに生きて、好きに死んでちょうだい』

耳の男を担いだ英雄が、空の亀裂により近く。

竜の巫女にお姫様抱っこされて空を浮かぶ男がそれを見送る。

「ああ、またな、探索者、良い探索を」

遠山鳴人から、探索者へ。

『いいえ、さよならよ、探索者—— いえ』

アレタ・アシュフィールドから——

『――”冒険者”さん、良き冒険を』

――冒険者へ、別れの言葉が交わされて。

空の亀裂に、アレフチームが消えていく。夏の空の中に起きた奇妙な出会い。もう2度と交わることのない道が閉じていく。

5877

遠山とアリス。こちらで生きるものたちがあちらで生きるものを見送る。

互いのぼうげんと探索はきつと、続く――

【メインクエスト ” 帰還 ” オプション目標 ” アレフチームに救出される ” 失敗しました】

【 ” ファイアチーム ” ルートが消滅しました】

【メインクエスト ” 帰還 ” 更新 ” ヘレルの塔 ” の攻略を開始する】

流れるメッセージに、少し、どこか誇らしげに、遠山は笑うー

《まだ、だ、まだ、終わらないの、まだ滅ばないの。こんな、こんな終わり、絶対に認めない》

ピコン。

【神体 再起動ー】

「嘘だろ」

「いい加減にしてほしいな……」

耳の男に首をへし折られた女神、地に墮ちた女神が、折れた首をぶらぶら揺らしつつ、それでも身体を起こす。

操り人形のごとく、何かに吊られるように、いびつに動く四肢。火葬の火に焼かれた身体は治ることはない。あれほどいた黄泉の眷



属も、亡者達もはや亡く。

だが、それでも。

《ドラゴン！！ 鳴人くんを返してえエエエエエエ》

名瀬瀬奈は立ち上がる。

彼女もまた、特異点。

その妄執のみにて、人の身にて神の座に届いてしまった異常存在。

たった一人で、アレフチームを壊滅寸前まで追い詰めた化け物である。

「く、そ。ーかしこみ、かしこみ、奉る」

「ーここに点を穿つ」

人と竜、それぞれが生き残る為、欠片もない余力を振り絞ろうとしてー

『驚いた。貴方の言う通りね。ーーー。ハイ、トオヤマナルヒト、フレアテイル。綺麗にお別れしたつもりなのに、かっこつかないわね、これ』

空の亀裂は、未だ消えず。

そこから響くのは彼らの声。

「アレフチーム？」

『トオヤマナルヒト、あなたには、大きな借りがある。我々は決してそれを忘れないわ、だから、まずは』

英雄の声が、亀裂から。

『完璧な勝利を、あなた達に』

【お知らせ アレフチームが”報酬”<sup>リワード</sup>のインセンティブ権限を使用します】

『いいわね！ ソフィ、グレン、……… ここで、使っても！』

『君の判断に任せるよ、アレタ。いや、………ここはどつあっても、借りを返すところだろう？』

『意義なしッス！！ カナツチ！ ありがとな！ バカを連れ戻してくれてよ！』

向こう側から響く声。こんな状況だと言つのに奴らはどこまでも楽しそうぞ。

それは、ある世界。彼らが進めた世界の新たなシステム。

【お知らせ アレフチームが報酬に接続しました。アレフチームの Ver 2.0 獲得トロフィーの確認開始。神秘種ゴルゴンの討伐、神秘種”セイテンタイセイ”の討伐、神秘種”バンダースナッチ”の撃退、複数の神秘種の討伐——トロフィー NO 847 ”神狩りの集団”を確認】

遠山鳴人が去ったのち、世界は大きく変わっていった。

大穴の怪物は縛めから解かれ、神話は世界に回帰し、跋扈する。

アレフチームは己の邪魔をするものを例え神だろつと許さない。

その戦いは世界に記録されている。

【スタンピードでの活躍ランキング複数上位、複数の都市に空いたゲートの殲滅を確認、トロフィーNO521 ”防衛者”を確認】

遠山の視界、メッセージに流れるのは彼らの探索の路。

多くの人は未だ知らぬ、凡人探索者たちの続き。

【複数の遺物所持者との戦闘に勝利、及び號級遺物所持者との戦闘に勝利トロフィーNO 789 ”狼の中の狼”を確認】

人間の可能性、その到達点。世界のルールすらを変える者達との戦いを経て。

【アレタ・アシュフィールドの獲得トロフィー複数確認。トロフィーNO 71”英雄の再来”、トロフィーNO 41 トーキョーの守り神”トロフィーNO 52 ”星の記憶” トロフィーNO 29 ”救世主”を確認、トロフィーNO 66 ”嵐にひれ伏せ、凡愚ども” トロフィーNO・89 ”嵐の調停者” トロフィーNO 100 ”生ける伝説”』

世界の記憶、記録から消化された英雄、しかし、彼女は再び世界に認知されつつある。

その輝きは、健忘症の宿痾ですら消し去ることあたわず。

【”凡人探索者”の獲得トロフィー…………… 計測不能 トロフィーNO ￥￥\$¥2 ”ジュラシックランドの支配人”、トロフィーNO ¥1 1 ”ニホン国憲法の破壊者”、トロフィーNO・33 ”耳の戦い” トロフィー#an ”神喰らい”トロフィーNO・¥€% ”エルフ派”、トロフィーNO ”赤スパサンキュー” トロフィー@b%#3:”宗教の天敵” トロフィーNO21

”ヒロシマの守護者”トロフィー?? ”前進”――】

そして、奴はいつも通り。信念も、夢も、運命も全て関係なく、ただ、己の感情のままに進む凡人もまた、世界に大きな影響を与えて。

【アレフチームの”認知度補正”が一定を超えています】

【複数のトロフィー獲得を確認。報酬の使用が可能です】

それは進んだ世界からの報酬。

アレフチームが世界から勝ち取った力の形。



『勝利を。殺すための力を貸しなさい』

【アレフチームが報酬”トドメの一撃”を選択しました。既に勝利している敵性存在の逆転の可能性をゼロにします】

『トオヤマナルヒト、受け取って。遠慮はいらないわ』

空の巨大な亀裂から、光が舞う。

それはすぐに、形を変えて。

『イミテーション・擬似・マードラー<sub>人の為の道具</sub>ウェポン』

巨大な槌と変わっていく。

『使って。貴方の為の道具だから』

「………すげえな。お前ら」

光が、遠山にまとわりつく。

ふわり、身体が浮き、竜と視線を並べて共に空に立つ。

「ナルヒト、いいのか」

「ああ、終わらせようか」

ノリで、遠山が手をかかげる。

空の亀裂より現れた巨大な槌。それは遠山の意に従い、掲げられた手と同じように槌が空に掲げられ。

《あ、ああ、アアアア、ナルヒトくん、ナルヒトくんナルヒトナルヒトナルヒトくん、遠山鳴人ー！》

「名瀬瀬奈」

遠山が、掲げた手を振り下ろす。

大いなる力の塊。

巨大な槌が同じように、振り下ろされる。

空に、竜と人に向かって迫った神は、そのまま槌に迎えられるように、そのまま槌が、神を打ち付ける。

《ア、アアアアアアアアアアアアアアアア！？ くそ、クソクソクソクソ、アハハ、ウフフフフフフフフ、フフフフフフフフ、ああああ、くや、しい、なあ、悔しい悔しい悔しいなあ、負けちゃっ、たー！》

もはや、その神に対抗する力はない。

耳男にへし折られた首は治ることなく、槌を押し返す力もない。

槌が、下に。神が下に。

人が、それを見下ろして。

「さよならだ」

《ア、アア、ふ、ふふふ、その、目。その目、ああー

キレイー 好き《

神は槌に、  
ぺちゃんこに潰された。

【a e e t n n i m i n a t e d o g】

ぶっ。  
ぶっ。

『ナイススキル、I Goodbye good Hunter』

空の亀裂は閉じる。英雄の贅辞を最後に、もう何も聞こえない。

神を潰した大槌は消え失せ、そしてその神も排除された。

「うおっ」

ふらり、遠山を空に浮かせていた力も消える。当然、遠山はまた落ち――

「おっと、フフン。アレを殺せる存在も、空を飛ぶことは不得意らしいな？ ナルヒト」

「……うっせーよ。サンキュー、ドレコソ」

ヒョイっと、アリスが遠山を拾う。

先程と同じく、完璧なお姫様抱っこ。遠山は大人しくその細い腕に太々しく収まる。

びき、びき。

世界が、割れていく。夏への扉、懐かしき、愛しい時間、夢ひとつきはもう終わる。

「……疲れたな、ナルヒト」

「全くだ。……サウナ入りたい」



「……よかったのか。ほんとうに」

「あー？ うん。まあ、あっちもそれなりにたのしそうだけど、今はほら、あれだ。ラザールベーカーの立ち上げやら、竜祭りやら、これから色々あるんだよ」

「そうか」

「そっか」

【全ての異界の主が立ち去りました。元の世界へ帰還します】

世界が眩しい。いつのまにか、消えていたはずの蝉の音がまた世界に蘇る。

嵐は去り、雲も消えて、空はゆっくり紫と白に混じる。遠くの方はより濃く、赤く。

夕焼けが近づく。夏が、終わる。

「ナルヒト、貴様、ほんとうに良かったのか。これで良いのか？」

「さっき言ったことが全てだ、ドラ子。……嘘か本当か気になるなら、心でも、読んでみるか？」

「ふかか。ふん、それが出来たら苦勞はせぬわ。全く腹立たしい。何一つオレの言葉も聞かぬし、思い通りにもならん。」

「……生意気な定命の者め。」

「ひひひ、悪かったな。ドラゴン」

2人が、互いに口にするのはお互いの”差異”。

アリスは決して定命の者ではない。遠山鳴人と同じ存在ではない。

遠山は決してドラゴンではない。アリスと同じ存在ではない。

互いの歩む速度は違う、互いの本質も、形質も何もかも、生命の定義、全てが違う。

だが、それでも。

「ナルヒト、貴様の世界の空もなかなか悪くないな」

「あ？ あー、たしかに夏の空って眩しくてあんま見ることないけど、たしかにいいよな」

同じ空の中、同じ光景を竜と人が眺める。異なる存在、異なる立ち位置なれど、今だけは同じ目線で、同じ景色の中にいる。

世界、夕焼けがより眩しく。その輝きが広がり輪郭を塗り潰していく。

幕あいの時間だ。この場所はすでに役割を終えている。

「……長い夢だった。まあ、だが、ふかか、悪くない夢であった」

「そりゃ良かった。……疲れた。帰って寝たい」

「寝てもいいぞ？」

「いや、流石に、お前にお姫様抱っこされて寝るのは、もうそれは赤ちゃんじゃん」

「ふかか」

竜の笑い声が心地よく。

夕焼けはさらに膨らみ、世界を飲み込む。

遠山の視界も赤く、暗く染まっていき、気付けばもう何も見えな  
い。

「……………ねみ」

酷く、眠たかった。ひどく疲れている。だが、どこか心地よいこの疲れを遠山鳴人は知っている。

目を瞑ると、水の音が聞こえる。

目を瞑るとアイツが猫のように目を細めて、机に頬杖つきながらこちらを見つめる顔が浮かぶ。

夏のあの時間だ、プールの授業の後、4時間目の国語の授業、教師が板書している箇所はすでにもう丸暗記して解釈も終えていたから退屈で仕方なく。

気だるく、眠く、それでもなぜか手足の先がじーんと暖かいあの妙な疲れ。

重なっていく瞼の裏側で、ふと視線を感じる。薄く、隣を見ると、いつもその女はこちらを見ていた。

窓際の女の席、窓の向こうにはもくもくと積み上がる入道雲。青い空に積み上げられた入道雲を背景に、女の濡れた黒髪が、白い肌に張り付いていた。

ーおやすみ、そんで、いってらっしゃい。とーやま。

「……ああ、またな」

【元の世界に帰還します】

プツッ。

世界は終わって、遠山の意識も全部。

ある夏の終わりにー

【クエストをクリアしました】





102話 夢の終わり、耳のおかえり、竜のさよなら、神のけつ  
まつ、ぼっけんをつづける。(後書き)

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください  
さいー！

更新ペース遅めでごめんなさい。9月には書籍の情報など告知出来るかと存じます。これからもよろしく願います

閑話【さあ、貴方の選択を誇りなさい】

く遠山鳴人が目を瞑った瞬間く

ピコン。

何も映らない視界の中で、音が鳴った。

それは運命からのお知らせ。

だが、今の遠山はそれを認知することは出来ない。心地よい眠気に溶けるように、微睡むだけ。

ピコン、ピコン、ピコン。

だが、メッセージはそんなことおかまいなしに鳴り続ける。

遠山が知ろうと知らまいと、ただそれは知らせ続ける。

眠る遠山が、知覚しないままに、それは始まった。

【さあ、貴方の選択を誇りなさい】

メッセージが流れる。主人が知らずとも、ただそれは淡々と役割を果たす。

大いなる偉業を成し遂げた本人は、心地よい眠りの中、決して目覚めることはない。

【非常に困難なクエストを多数クリアしました。多数の報酬を獲得しました】

【眷属クエスト ” 夏への扉 ” をクリアしました】

【隠しオプション目標を達成しました。 ” カイキユサ ” を殺害せずに、 ” トウドウミライ ” を始末する。これにより、カイキユサの力が ” アリス・ドルル・フレアテイル ” に引き継がれました。アリス・

ドラル・フレアテイルに特性”主人公（勇氣）が引き継がれました。  
終 縛籬「縛才縛医j」縛「綱工縛ケ綱サ綱峨 綱才綱サ綱輔  
縛「綱？う綱才」縛ヨ裕サ莠。綱ユ縛ケ綱亥愛螳壹 豎コ螳壹&縛  
後 蝮工蝮医？ 音谿翫 綱才綱シ綱医 逋コ逕溘@縛セ縛】

【眷属クエストを一つクリアしたことにより特典技能が追加されま  
す。特典技能”思い通りにはならない”を獲得しました。この技能  
により、”眷属”や”超越者”特性を持つ存在からの干渉や交渉に  
対して強い抵抗補正を得ました。眷属クエストをクリアすること  
により、あなたの特典秘蹟<sup>システム</sup>”クエストメーカー”はより強力なもの  
へと変貌していきます。決められた”運命”、または他者による運  
命の介入などへの対抗が可能となっていきます（リスク有り）】

5909

【DEADクエスト”ヨミヒラサカの戦い”を100パーセントの  
達成度でクリアしました。特殊ルートを経てトゥルーエンドでDE  
ADクエストを攻略した為、本クエストのチャートが公開されます】

【チャート1 CLEAR！！ 名瀬瀬奈が”神話回生 ヨモツ  
オオカミ”を発現させた時点で、”探索者端末”を保有している…  
…特殊ルートを発生させ、チャート2へ向かいました。 貴方は  
”勢力 異端審問会”に所属しています。その為、”工房”のドワ

ーフから端末を取り戻すことに成功していました。おめでとうございます【います】

【チャート1をクリアしていなかった場合、キリヤイバ単騎でヨモツオオカミと戦闘に突入。戦闘に敗北した場合、DEADクエストはバッドエンドチャートに突入します。キリヤイバの暴走による自我の消失、もしくはアリス・ドラル・フレアテイルの覚醒、および消失など】

【チャート2 CLEAR! ”アレフチームとの共闘を選択し、ストーム・ルーラーとの共同戦闘にて”ヨモツオオカミ、並びにヨモツシコメの損耗率を50%まで達成する” 貴方は前回のDEADクエスト”Time for answering”にて、遺物の拡大解釈に辿り着いていました。また、キリヤイバによる侵食が進んだ結果、特性”お前の血は白色だ”を獲得しています。特性によりヨモツオオカミの持つ”神性”への抵抗ロールに無条件で成功、その為、ヨモツオオカミ、及びヨモツシコメへの攻撃に大きく寄与しました。おめでとうございます。遠隔でのストーム・ルーラーのみではクリアは不可能でした】

【チャート2をクリアしていなかった場合、特殊ルート”FIRE & ALEF”が消滅します。チャート3でのアイデアロールの時間が減少し、”IQLルート”が消滅していました。ノーマルエンドル

ートへ切り替わり、”カイキ・ユサ”の完全消滅、並びに”海城優紗”の顕現と死亡によりDEADクエストをクリア。強制的にメインクエスト”帰還”が進行し、ED・NO 01”独りぼつちの帰還”が発生していました】

【チャート3 CLEAR!! marvellous!! アイデアロールを発動させ、”凡人探索者”のIQ3000の作戦に辿り着き、それを引き継ぐ。貴方は本当の馬鹿の馬鹿げた考えに知性と狂気を以て辿り着きました。きつともう馬鹿が伝染ったいることでしょう、お大事に】

【チャート3をクリアしていなかった場合、IQLルート”FIRE&YEAR”が発生しません。戦闘を継続した結果、”アレタ・アシユフィールド”の暴走により強制的に戦闘が終了、その後”5番目の星”との戦闘が発生。戦闘結果によつては、”アリス・ドラル・フレアテイル”、及び、”アイ・ケルブレム・ドクトウステイル”、“奉仕の眷属 ファラン”の死亡ロストが発生。DEADクエストはビターエンドでクリアとなりました】

【チャート4 CLEAR!!”名瀬 瀬奈を口説く” 貴方は見事に舌の挑戦を経て名瀬瀬奈を口説き、その体内に侵入しました。きつとロクな死に方はしないでしようが今はその良く回る舌に感謝しましょう。ルート報酬”



【チャート4は”名瀬 瀬奈”からの好感度がカンストしている為、失敗判定無し】

【チャート5 ”名瀬 瀬奈” 神体内にて、”神秘の残り滓”達と共に、神体最奥に封印されている”凡人探索者”の元へ辿り着く。貴方は何一つ捨てることなく、ブレることなく前へ進みました。主人と引き離された神祕達は逆転の潮目を待ち続け、貴方は見事にその潮目として彼らを連れて行きました。おめでとう、神秘の残り滓達は無事、在るべき場所へと還りました】

【チャート5をクリアしていなかった場合、チャート6以降で、”凡人探索者”の技能、”耳の化身”が発動、”耳の化身”との戦闘が発生していました。戦闘に敗北した場合、死亡します。また耳の化身がその後、神体に乗っ取り、”耳の巨神”となり、アレタ・アシユフィールド、及びアリス・ドラル・フレアテイルが死亡ロストします。”腑分けされた部位”特性を持つ存在との戦闘では特殊な技能、もしくは特性”腑分けされた部位”が必要です。貴方はどれも所有していません】

【チャート6 CLEAR!! ”凡人探索者”を100回殺害する” 貴方はイカれている為、この方法に辿り着きました。まともな人間は例えこの方法を知らされても実行しようとは思わないでしょう】

【チャート6に失敗した場合、判定無しで名瀬瀬奈に敗北します。敗北後は、高難易度のスピーチ・チャレンジが発生し、それに失敗した場合、貴方は作り替えられました】

【チャート7 CLEAR!! ”伊奘冉の”希死念慮”を突破し、作戦を続行する” 貴方は死の神による絶対優位権に打ち勝ちました。複数の技能による抵抗ロールの結果、貴方は死ぬことを選びませんでした。おめでとうございます】

【チャート7については”犬だいき人間”技能があるため貴方は失敗することはありません。あなたはそのぼうけんを少なくとも自らの手で終わらせることはあり得ません】

【チャート8 CLEAR”神秘の残り滓”を見捨てずに、凡人探索者”に種火をもたらず。おめでとうございます。無事に貴方は目標を達成しました。遺物・拡大解釈により蒐集竜の焰の模造を貴方は操ることができます。そのため、”はじまりの火葬者”に種火をもたらずことに成功しました。人の操る火のはじまりと同じように、大いなる存在から人へ、火は正しく与えられました】

【チャート8に失敗した場合、”耳の化身”との戦闘に移行。敗北した場合、さらに超高難易度のスピーチ・チャレンジが発生、失敗した場合、あなたは死亡します

注意 これ以降のメッセージはバッドエンドルートのお知らせになります。あなた達は気分を悪くされるかもしれませんが

【BAD ED】”ぼっけんの終わり”

あなたの死亡により、全ての運命は元に戻ります。あなたのぼっけんの中であなたと共に過ごした者はみんな全て元のストーリーラインに回帰し、死亡ロストします

チャート解説。

”耳の化身”により”アレタ・アシユフィールド”、”アリス・ドラル・フレアテイル”、”アイ・ケルブレム・ドクトウステイル”が死亡ロストします。また、チャート8までに凡人探索者を100回殺した状態で、上記の”耳の化身”が完全に目覚めた場合、異界終了後、”耳の化身”が冒険都市アガトラに出現し、王国第三王女

”、英雄”との戦闘が発生します。その後、戦闘に勝利した者と”ウエンフィルバーナ・ジルバソル・トウスク”、及び”塔級冒険者・ウエンフィルバーナ”との戦闘が発生します、この戦闘により”帝国”は崩壊します。また、ラ・ザールはあなたの家族を守る為に眷属と種族の力を解放し、彼らを無事に逃がします。その後、ラ・ザールは貴方の仇を取る為、戦闘を開始、判定無しで死亡ロストします。この戦闘により天使教会の主要メンバー、主教”カノサ・ティエルフィールド”、および”主席聖女スヴィ”は死亡ロストします。また冒険者ギルドマスター”ハイデマリー・スナベリア” 南部領辺境伯”サパン・フォン・ティーチ”が死亡ロストします、またラザールが死亡したことにより????がスラムの子ども達を殺害します。またその後、上記戦闘後に、”ウエンフィルバーナ・ジルバソル・トウスク”と”塔級冒険者ウエンフィルバーナ”が生き残った場合、両者の戦闘が発生。塔級冒険者”ウエンフィルバーナ”が勝利した場合、冒険者ギルドは壊滅、塔級冒険者を含めて冒険者の9割が死亡。のちにヘレルの塔は”塔級冒険者 ウエンフィルバーナ”により制覇されます】

注意 秘蹟”クエスト・マーカー”によりあなたが介入し、ねじ曲げた運命は、あなたの死亡と同時に元の運命へと戻り始めます。あなたの存在、あなたの選択により死の運命を逃れたものは再びその運命に囚われます。

がんばってください。しないように】

【チャート9 CLEAR!! 名瀬瀬奈 神体内から脱出する  
蒐集竜とのコミュを一定数クリアし、また蒐集竜との会話選択肢に  
おいて、”対等”、”親愛”、”尊重”、”独立”系の会話を選ん  
でいた為、アリス・ドラル・フレアティルが助けにきてくれました。  
おめでとうございます。竜は竜として、人は人として。彼女は今、  
幼年期の終わりに差し掛かりました。

注意 蒐集竜からあなたへの感情が”親愛・興味?”から”??”に変化しています。これによりアガトラに帰還後、特殊なクエストが発生します。このクエストをクリアしない限り、”竜祭り”での竜大使館ボーナスが発生しません。  
また蒐集竜が”竜化”の完全顕現を使用した為、今後1ヶ月は蒐集竜の戦闘判定に多大なマイナス補正が発生します。彼女の特性のうち”上位生物”、”勝利する運命”、”絶対強者”、”回帰する生命”、”超速再生”、”ひれ伏せる金色の焰”、”蒐集の竜”などは機能しません。彼女の残りの生命は6つです。現在、アガトラには彼女を6度殺せる存在が滞在しています。彼女の死亡ロストに注意してください】

【チャート9について、蒐集竜の救出が間に合わない場合は、特殊ルート”真つ裸ーニバル”が開始。”凡人探索者”と共に、亡者の群れとの戦闘に突入します。その後、”凡人探索者”と分離した”耳の化身”との戦闘が発生します。一定時間生存することで、イベント”コール・オブ・アシュフィールド”が発生。”凡人探索者”が”耳男”への転換に成功し、名瀬瀨奈の神体を焼き尽くし、脱出が可能となります。なお、この特殊ルートが発生した時点で、チャート9以降、DEADクエストはノーマルエンドで確定。そのままメインクエスト”帰還”が発生し、選択肢無しで、”探索者ルート”へ移行します】

【チャート10 CLEAR!! ”神体脱出後、メインクエスト”帰還”に失敗する”

おめでとございます。あなたは、ここで生きる決意を改めて表明しました。ぼっけんは続きます】

【チャート10については失敗はありません。重要な分岐として、蒐集竜とのコミュを進めることによって発生するイベント”人よ、

あるべき場所で生きよ”における選択肢において、この後のあなたのメインクエストは大きく変化していました。蒐集竜の言葉通り、アレフチームとの帰還を選んだ場合、あなたの異世界オープンワールドの攻略は終了し、現代世界に帰還することになります。なお、その後アガトラにてあなたと関わった人物たちの運命はあなたが死亡したのと同様に元に戻るのので、全員死亡ロストします】

【全てのチャートをクリアしました。達成率100%でDEADクエストをクリアしました。多くの技能、特性を報酬として手に入れました】

【新たなクエストが多数、アガトラに帰還後発生します。あなたのぼうけんはまだ続きます】

【獲得報酬一覧が開示されます】



【特性 ” お前の血は白色だ” を獲得しました。あなたには強い神性に対する抵抗力が付与されます。キリヤイバを使用するたびキリヤイバカウントが進行します。カウントが規定数を越えた時点で、あなたは” の器として完成します】

【 ” 注意” キリヤイバカウントを進化することにより、新たな遺物の力を引き出すことが可能です。しかし、現在、あなたの夢の中は” が強くその割合を占めています。このままだと彼はいずれ、あなたへの畏れを喪い、あなたを身体を乗っ取るうとするでしょう】

【 ” 注意” 現在、あなたの肉体はキリヤイバの神性により変異しています。このまま変異が” お札マツチヨ” 主導の元進行した場合、特性” ホモ・サピエンス<sup>頂点捕食者</sup>” が消失し、” 神兵” への変化します。特性” 神兵” が発現した時点で、固定EDに突入します】

【あなたは数々の重たい女を口説きました

技能” レディ・キラー（重たい女専用）を獲得しました】

【あなたは神話の特性を理解し、それを逆手に取り神話を攻略しま

した。技能”神話攻略”を獲得しました。この技能は技能”オタク”とのシナジーを発揮します】

【あなたは数々のDEADクエストを攻略しました。特典技能”死ににくい男”を獲得しました】

【あなたは52番目の星の支配する嵐に触れ、遺物への理解を深めました。技能”遺物保有者”が強化され、技能”遺物の支配者”になりました】

【あなたは”大いなる死”に全ての生きる気力を奪われながらも、あのもふもふの手触りを忘れませんでした。技能”犬だいき人間”が強化されました。重要なお知らせ、この技能は非常に重要な技能です。キリヤイバカウントに対する対抗技能となります】

【そして、あなたの力を見せつけましょう】

【現時点での遠山鳴人のステータスを開示します】

” NAME ” 遠山 鳴人

” LEVEL ” ### あなたにはレベルシステムが適用され  
ません。

” TYPE ” 中立・悪

” S I P ステータス ”

筋力値  
S T R # # # ( 8 )

頂点捕食者  
技能”ホモ・サピエンス”によりあなたの身体能力は栄養状態により変化します。ヒュームのS T R 値とは算出が異なります。

特性”お前の血は白色だ”により戦闘時は最大S T R が8まで上昇します。

知性値

INT7 (3)

技能”アタマハッピーセット”が技能”拡大する自我”により”アレフチームの凡人探索者”の影響を受けて変異しつつあります。特定の状況下で、知性が著しく低下します。バカの考えを理解してしまった為、バカが伝染りました。あーあ。

精神値

POW5 6

UP!! あなたは夏の思い出に見送られ、過去の妄執と決着をつけました。もう、蝉の声も、プールの匂いも、あなたの歩みを止めることはありません。あなたの脳みそに仕掛けられている催眠と暗示の正体を知ったことにより、次回の”人知竜”のコミュ時に特殊なクエストが発生します。

ん。  
スキルセット不可能。あなたにはスキルシステムが適用されませ

システム  
秘蹟

特典秘蹟 ”クエスト・マーカー”

あなたは”運命からの知らせ”を可視化することが可能です。進むべき道、倒すべき敵を矢印の導きが指し示すことがあります。

スペシャル  
特性一覧

特性” 頂点捕食者 ホモ・サピエンス

その生物は弱い存在です。牙も爪もなく、柔らかい身体に脆い生命を容れた弱者、そのはずでした。

しかし、その生き物は生きることを選びました。獲物ではなく、捕食者として生き残ることを選びました。

強大な獣を罠にかけ、殺し、皮をはぎ、爪を、牙を抉り取り、それを羽織り、それを備えて次の敵を探します。

残酷、知恵、勇気、強欲。数多の心を抱え、手を変え、品を変え、殺し続け、遂にこの惑星の支配者と成り上がりました。

あなたは人間です。この世界においてあなたが殺すことの出来ないものなど存在しません。

効果： この世界の全ての存在に対して”殺害判定”を発生させることが可能です。殺さない存在に対してもあるあなたは戦闘に勝利することで、それを滅ぼすことが出来ます。またあなたは頂点捕食者に相応しい肉体を兼ね備えています。良質な栄養状態をキープすることにより、肉体を強く保つことが可能です。またそれを支える為に非常に多彩な食性を兼ね備えています。

特性” お前の血は白色だ”

あなたの血は白く、日にかざすと透明に輝きます。神の依代に赤き血はふさわしくありません。

かしこみ、かしこみ、たてまつれ、いざ、らくどの時は近い。

効果： 戦闘時、あなたには特性”神性”が付与されます。これにより敵の”神性”による絶対優位権を無視することが可能です。また戦闘時、神の器として相応しい膂力を発揮し、戦闘判定にプラスの補正が発生します。

リスク有り キリヤイバカウントが進行しています。特性”お前の血は白色だ”が発生している状態でカウントを進行させると、特性”神兵”へと移行します。

5925

## 技能一覧

技能 ”アタマハッピーセット”

あなたの脳みそは強いダンジョン酔いと永きに渡り施された”名瀬瀬奈”による暗示や催眠の影響で強く変異しています。

「あなたは決して変わらない、あなたは決して揺らがない。ただそれだけが尊くて、ただそれだけが美しいの」

祈りとはえてして、呪いによく似ていることでしょう。

効果：他者からの悪意に敏感自らの身の危機や仲間の危機に対して善悪のブレーキが一気になくなります。

また他者からの精神汚染や洗脳に対して強い抵抗が可能です。戦闘時に特殊な選択肢が発生します。戦闘時に敵の”食いしぼり”系統の技能を一定確率で強制キャンセルさせます。P精神OW値が低い敵に対して状態異常”恐怖”を与えることができます。

ランダムイベントにおいて格下に絡まれた場合、”殺害”の選択肢を選ぶことができます。同系統の技能を持つ存在の考えをある程度理解することが出来ます（例・技能”バカ”や、技能”天災”など）

この技能は”頂点捕食者ホモ・サピエンス”とシナジーを發揮します。

技能 ” 鈍器取り扱い ”

あなたは元々戦える側の人間でした。学生時代。困った時はいつも釘バットで問題を解決してきましたね。化け物を殺す時も、刃を扱うよりも、シンプルに殴る方が早いことにすぐ気づきました。

効果：鈍器系統の武具を使用した場合、戦闘判定にプラスの補正がかかります。

技能 ” 武器取り扱い ”

あなたは割と器用です。剣はあまり得意ではありませんが、槍や弩などの取り扱いにはすぐ慣れるでしょう。シンプルに殺すのが得意と言ひ換えてもいいかもしれません。

効果：あらゆる系統の武器を人並みに扱うことが出来ます。装備  
武器による戦闘のマイナス補正が発生しません。

この技能は適性限界です。これ以上進行しません。

技能 ” 殺人適性 ” ” 殺害適性 ”

あなたは殺せる側の人間です。必要な時に必要なだけ殺すことが出来ます。あなたの先祖が自分以外の多くを殺し、生存を勝ち取ったのと同じように、あなたにとって大切なのは自分と自分が大切にしたい人たちです。ただ尊いものを喪わない為に、これからも多くの存在を殺し続けることでしょう。

効果：戦闘において全ての行動にプラスの補正が発生します。○○  
取り扱いなどの技能に更にプラスの補正が発生します。クエストやスピーチ・チャレンジにおいて特殊な選択肢を選ぶことができます。

この技能は ” アタマハツピーセット ” とシナジーを發揮します。  
この技能は特性 ” 頂点捕食者 ホモ・サピエンスとシナジーを發揮します。

技能 ” 拡大する自我 ”



あなたの自我は決して完成することはありません。もともと空っぽで、埋まるうとしていたそれは幼き頃に砕かれ、欠けています。それゆえに、あなたはきつとあなたの夢見た場所へ、光景へたどり着く為に進み続けるでしょう。完成せず、拡がる自我は強く他者からの影響を受けやすいですが、同時に他者へも強く影響を与えます。あなたのぼうけんは少しずつ拡がり、他者を巻き込んでいくでしょう。

あなたはあなただけの行進を続け、全てを踏み躪ります。

効果： 他者とのコミュ時、特殊な選択肢を選ぶことが可能です。属性が”混沌”の人物とのコミュ時、友好度にプラスの補正がかかります。属性が”秩序”の人物と友好度を上げた場合、その人物の特性を”中庸”、もしくは”混沌”へ変化させることができます。また他者とのコミュ時に、特殊なクエストを発生させることができます。

仲間との共闘時、友好度の高い仲間死亡判定ロールが発生した場合、友好度に応じて、その仲間”食いしぼり”系統の技能が発生する確率が生まれます。もしくは、その仲間の隠れた技能が発動する可能性が生まれます。

仲間死亡ロストが発生した場合、特殊なコミュが発生します。また仲間とのコミュを深めていくと、その仲間にも同様の”拡大する自我”が発現します。例 現在、ラ・ザールに”拡大する自我が発現しています。

リスク有り。この技能の影響により、特定の人物からあなたは強く憎悪されます。

この技能は秘蹟<sup>システム</sup>”クエスト・マーカーとシナジーを發揮します。  
他者の死の運命を捻じ曲げることが可能です（リスク有り）

技能”キリの主人”

キリヤイバはただ、あなたのみに従います。そのぼうけんの続きを、  
あなたの邪魔をする存在を斬り刻み続けることでしょう。

効果： 未登録遺物”キリヤイバ”を従わせることが出来ます。使  
用を続けることで”特性”が付与されていきます。また使用するた  
びにキリヤイバカウントが進行していきます。キリヤイバカウント  
が規定数を超える時点で、より多くのコミュを選択していた”ゆめ  
の住人”たちの固定EDに入ります。

リスク有り 注意。現在、キリヤイバを構成する割合として”お  
札マツチヨ”の影響が非常に強まっています。この影響により”特  
性”お前の血は白色だ”が発現しています。この特性はキリヤイバ  
カウントと共に進行していき、いずれ特性”神兵”へと進化します。  
その時点で、あなたはキリヤイバに乗っ取られます。

”知識の眷属・ハーヴィー”、もしくは”湖の底にいるナニカ”と  
のコミュを進めることで、この状態を解消する糸口が見つかるかも  
しれません。

技能” 犬だいき人間” により、上記の” 神兵” 特性が付与した時に特別なイベントが発生します。

技能” 戦闘思考”

あなたは戦闘中でも、その知性を翳らせることはありません。より早く、より確実に、より圧倒的に。敵を叩きのめす為にその優れた知性は回り続けます。

効果：戦闘における全ての判定にプラスの補正。また初見の敵の装備や戦術に対し、ある程度の推測を立てた対処が出来る。また戦闘中や、イベント時にアイデアロールが発生した場合、特殊な選択肢を選ぶことが出来ます。敵が” 副葬品” や、” 秘蹟” を用いる存在の場合、初見でもある程度の戦術を構成することが可能になります。

この技能は、” アタマハッピーセット” とシナジーを發揮します。この技能は” ラン・ホース・ライト” とシナジーを發揮します。この技能は” スピーチ・チャレンジ冒険者の舌とシナジーを發揮します。この技能は” 取り扱い” 系の技能とシナジーを發揮します。この技能は” 神話攻略” とシナジーを發揮します。この技能は” オタク” とシナジーを發揮します。

技能” オタク”

あなたの孤独はやがて、ここではない自分の知らない広い世界へ強い興味を向けさせることになりました。ひとりぼっちで過ごした時間、あなたが本を開いた瞬間に、どこかの誰かが名前も知らないあなたへと届けた物語がありました。あなたはそれに魅了され、空想や創作の持つ素晴らしさを理解しています。あなたは多くのことに興味を持ち、ロマンのなんたるかを、そして自分が何が好きで、何にワクワクするのかわっています。ぼうけんの準備は万全です。全てのことに興味を持ち、全てをたのしみ進み続けることでしょう。

効果： 特殊なアイデアロール、またはスピーチ・チャレンジが可能になります。またINT値知性に応じて、様々な知識を活用し、それを流用することが可能です。また戦闘において、謎のバフが発生することがあります。（例・竜やドラキュラなどの戦闘時、脳内にBGMが発生してテンションが上がるなど）

また日常において特殊なクエストが発生する場合があります。同じ技能を持つ者との友好度に大きなプラスが発生することもあります。同時に大きなマイナスが発生することもあります。

この技能は”冒険者の舌スピーチ・チャレンジとシナジーを發揮します。この技能は”戦闘思考”とシナジーを發揮します。この技能は”神話攻略”とシナジーを發揮します。

技能” スピーチ・チャレンジ 冒険者の舌

さあ、舌の物語のはじまりです。あなたは己の運命をそのよく回る二枚舌で切り拓くことが出来ます。目の前に立ちただかるクソのような運命、どう見ても話の通じない化け物にすらあなたの舌は周ります。

なだめ、すかし、おどし、さそい、ありとあらゆる方法であなたは運命に立ち向かうことが可能です。

効果： 秘蹟システムクエストマーカー発動中、特殊な判定ロール”スピーチチャレンジ”を開始することが出来る。STR、INT、POWに応じて、相手との対話との成功率が変化する。スピーチチャレンジに成功することにより、クエストにおいて特殊なルートへ進行することが可能。敵対する運命の相手と和睦、もしくはその逆も可能。他者の”メインクエスト”を捻じ曲げることが可能となる。

あなたの全ての技能とシナジーを發揮する。

技能：神話攻略

あなたは神話に見え、それを乗り越えて踏破しました。数多の伝承、神話は現実に回帰し、再びあなたに牙を剥くこともあるでしょう。

しかし、怯えることはありません。あなたは証明したのです。神は殺せる、と。

効果：特性”神性”系統を持つ存在、または”神話存在”に類似する敵、そして”古代種”との戦闘において”勝利判定”が発生する。敵の持つ神話や伝承に対し、アイデアロールを開始し、それに成功することで、戦闘に多大なプラスの補正を発生させる。

この技能は”オタク”とシナジーを發揮します。この技能は戦闘思考とシナジーを發揮します。この技能は”キリの主人”とシナジーを發揮します。

この技能はキリヤイバカウン트의進行に応じて特殊なクエストを発生させます。

技能”識字”を保有していないため、この世界の伝承に対するアイデアロールについてはマイナスの補正が発生します。

技能 ” ラン・ホース・ライト

あなたには走馬灯が備わります。死が目の前にあるうとももはやそれから目を逸らすことはありません。

技能 ” 犬だいすき人間 ”

犬もきつとあなたのことがだいすきです。

効果：あなたの全ての行動に対してプラスの補正が発生。あなたに及ぶ全てのマイナスの影響に対して非常に強い抵抗が発生。

リスク有り 所詮は獣です。人の尺度は持ち得ません。

この技能はキリヤイバカウントへの対抗技能です。” 特性 神兵 ” が発現した場合、特殊なクエストが発生します。

リスク有り 重ねて獣です。相互理解は不可能です。

リスク有り いいですか？ 獣です。全て都合よくこの力が働くとは限りません。

技能： 知識の客人

あなたは知識の眷属・ハーヴィーの重要な客人です。私はどこから来て、どこへ行くのか。

あなたなら、きっと、それに近づいてくれるはず。だよね。

効果：ハーヴィーの公文書館の支配者として知識の取引が彼女。

現在はパン文書館となりました。あなたは古今東西、ありとあらゆる世界のパンの知識に接続可能です。バカじゃねーの？

技能：竜殺し（意味深） 竜特攻を含みます。

あなたは竜に対してよく効きます。あーあ、竜はもうあなたを手放すことはないでしょう。

効果：特性”竜”を持つ存在とのコミュ時、特殊な選択肢が発生する。またスピーチチャレンジ発生時、（誘惑）が可能となる。”竜”からの友好度に対して補正が発生する。また竜との戦闘時、勝利判定が発生する。竜の持つ”上位生物”特性を無効化する。

リスク有り 竜、です。あなたとは違う生き物であることを忘れ



ることないように。どれだけあなたに友好的でも、竜は本質としては邪悪なものです。

リスク有り あなたが死亡ロストした場合、特殊なイベントが発生します。

他複数技能有り。”特典技能”についてはもう一つDEADクエストをクリアした時点で開示されます。

【あなたの牙を眺めましょう】

## 装備武装一覧

### 右手武器

#### 鉄のメイス

あなたによく馴染む市販の鉄のメイスです。モンスターの血をよく吸っています。

## 左手武器

鉄の槍、鉄の剣。

打撃が効きにくい獲物によく使用します。

【最強の道具に飲まれないようにお気をつけて】

## 保有遺物一覧

未登録遺物”キリヤイバ”

## 進行段階

オーバーロード  
拡大解釈

解放特性 ”魂喰らい”

効果：体内に棲まう存在の力を欠けた刃という形で呼び出すことが可能です。半径50メートルにわたり不可視、可視のキリを広げそれを操ることが可能です。キリには極小のヤイバが仕込まれており、キリに触れた存在を瞬時に切り刻みます。

またあなたは数々の戦いを経て、遺物への理解を進めました。キリヤイバはその力を更に強め、魂を喰らうことが可能となりました。遺物の拡大解釈により、キリヤイバの新たな力。”魂の蒐集とその

使役”が可能です。

リスク有り 現在、キリヤイバを構成する割合は” お札マッチョ” による影響が非常に多い状態です。彼はあなたに対して恐れを抱いていますが、ゆっくりとあなたを乗っ取る準備を続けています。

リスク有り この状態を打破するためには” お札マッチョ” 以外のゆめの住人とのコミュを進める必要があります。

【そして来るべき、時に備えなさい】

特殊なイベントフラグを達成しています。

event 『最恐の生き物』

条件達成！ 特性” 頂点捕食者 ホモ・サピエンスを発現した状態で、” アレフチームの耳男” を目撃する。

説明： あなたは人間の可能性の最奥、その最も悍ましいなにかに  
みえました。神ですら嫌悪し、殺すことを諦める醜悪な存在はしか  
し、全ての不条理を覆す力を持っているようです。

天使教会、”異端審問会”のクエストを進行し、主教とのコミュを  
進めることで新たなクエストを発生させることが出来ます。

event 『勇気の意味』

条件達成！ ”アリス・ドラル・フレアテイル”に特性”主人公（  
勇気）が発現する。

説明： 竜の幼年期は終わり、彼女はゆつくりと答えに近づいてい  
ます。生まれた意味を、存在の理由を。それを彼女が理解するとき  
は、ゆつくりと近づいています。

詳細不明――

event 『同族嫌悪』

条件達成！ 擬似・イミテーション人の為の道具マーダー・ウェポンにより”名瀬瀬奈”を撃破

する。全知竜が人知竜へと変化している。

説明：その女は決して諦めません。擬似的なものでは彼女の肉体を滅ぼすことは出来ても、その魂までは消し飛ばすことが叶いませんでした。しかし、彼女は知りませんでした。アレフチームの他にも、虎の尾を、いえ、逆鱗に触れてしまった存在がいたことを。

開始条件を満たしました。

イベント『同族嫌悪』が開始されます……………

す  
ぷ  
ぷ

「……………ふふ、フフフ、フフフフフフフ」

その女は、敗けた。

その女は、滅びた。

己の妄執に身を焦がし、神狩りの集団の逆鱗に触れ、最期は己の憧れに葬られた女。

異界で滅んだその肉体は遺伝子の一片たりともこの世に残ることはない。

だが、それでも、この女の魂は――

「ああ、ナルヒトくん、……綺麗だった」

滅ばず。その妄執により練り上げられた魂は高次元の情報存在として、残る。

闇の中、女がうっとりとして声を漏らす。

暗く、何も無いその空間、己の体の輪郭すらわからぬ闇の中でも、女はしかしはつきりと自分の存在を把握している。

「やっぱり、私、あなたがいい。あなたが好き。あなたを見てみたい。……私は間違えていない。美しいものは、美しいままに、綺麗なままでいてほしいもの」

神秘の残り滓と號級遺物の重ねがけ。ホモ・サヒエンス人間にのみ許された可能性の暴力により、神の座にたどり着いた女は、何も反省などしていない。

「今度は、間違えない、今度はしくじらない。……あなたの中に何が  
いるのかも、だいたい分かった。死んでも死なない、死んでも死  
なない、私は消えない」

闇。

死した存在がどこにいくのか。人は死んだらどこにいくのか。

我々はどこから来て、どこへいくのか。それは誰にも分からない。  
今、女がいる場所と同じ、この世であって、この世ではない。あの  
世であって、あの世ではない。

名瀬瀬奈。それは魂だけになっても、その妄執により再びたどり着  
く。

人間、頂点捕食者に相応しい存在の一人でー



「すぶぶ……」

「？」

声が、した。

空気の抜けたような、それでいて妖精が森の奥で潜めたような笑い声。

闇の中、ただ、響くその笑い声に名瀬瀬奈は首を傾げ、声の聞こえた方向に耳を傾ける。

「ああ、驚いた。ああ、ほんとうにこわかったねえい…… なんだ  
よう、あれさあ。ああ、震えが止まらないよう……すぶぶ、ああ、  
覚えてないのに、覚えてる…… もっとひどくなってるじゃないか。  
なんなの、ばかなの？ しぬの？ いや、死なないんだよう。何度、  
殺しても殺しても、殺しても殺しても殺しても、あの笑いが、消  
えないんだ…… ああ、ああ！ やめて、やめろ！ ギャハハハハ  
つて、笑うなよう……… みみおとこ、ってなんなんだよ………」

「……誰？」

闇の奥、声がした方に名瀬が問いかける。

ぴたりと、声が止まった。それはまるで独り言を聞かれてしまった  
反応にも似ていて。

みつけた。

「ッ……………あ  
」

その感覚を、名瀬は知っている。

アレタ・アシユフィールドに、凡人探索者に、そして遠山鳴人に感じた感覚。

背筋を伝い、頭のとんへんからつま先にかけて一気に広がる冷たさ。

恐怖――

「すぶぶ、ああ、ようやく、ようやく見つけたねえい。色々、いろいろとキミには言いたいことがあるんだよ」

「ふ、ふふ、だれ？　あなた。とても、とても、怖いわ。暗くてお顔が見えないもの」

名瀬が静かに、つぶやく。魂だけの存在、しかしそれに刻まれた死の神の力は健在。ゆっくりと、その力を声の方に向けて。

「すぶぶ。無理、するなよ」

ばちん。

「え」

名瀬の力、死を司り、黄泉を繋げるその力が弾かれた。

「ああ、キミ、やはりだいぶ弱ってるねえい…… あの悍ましい化け物に、そして何よりトオヤマ君にひどく痛めつけられたと見える、すぶぶ。いさぎよくさあ、消えてねばいいものを」

「あなた、誰、なの。いや、なん、なの」

「ファンだよ」

「……は？」

「キミと同じ。彼の、トオヤマナルヒトのファンさ。いいよ、わかるよ、キミの気持ち。いいよねえい、トオヤマくん。すぶぶ、推せる……」

鳥肌、肉体がないのに、魂に湧くそれが不快で仕方ない。その声に名瀬は震えが止まらない。

だが

「は？」

この女、強火。

名瀬は決して許さない。同担拒否勢。

「なに？ なんなの？ カイキさんや、あの竜だけじゃないの？  
ふ、フフ、フフフ、いい、いいわ、これは試練ね。あの人を変える  
存在なんて、あの人に近づく存在なんて、そんなのー」

ぶち。

「え」

何かが、千切れた。魂、それが、今の名瀬を構成する何かが、明白  
に千切れ、噛みちぎられた。

「え？」

動けない。いつのまにか、闇が名瀬を捕らえていたのだ。

「ああ、キミさあ、やっぱりなんにも、わかってないんだねえい」

「あ、ぎ」

巨大ななにかに、挟まれている。すぐに、名瀬は気付いた。

それは顎、巨大な生き物に、噛みつかれ、啜えられてー

「あの人を変える？ すぶぶ。バカだねえい、それがいいんじゃないか。彼は進み続ける、その歪んだ自我を他者との交流や気付きを得て、変わり拡がり続ける。だけどね、彼は変わらないんだ。進み続ける。何があっても、そこだけは変わらない。誰もそれだけは変えられない。それがいいんじゃないかい」

「ぐ、ふ、ふふふ、見解の、相違、ね。簡単に、変わるものなんて、安っぽくて、見られないのが、普通でしょう？」



「見解の相違だねえい。そこがカワイイんじゃないか。……キミは彼に己の理想を押し付けすぎだ。ボクから言わせればさあ、そっちの方が、キミの理想のままの彼の方が安っぽいよ」

「っ、っの」

「逃がさない。ああ、ようやく捕まえた。……彼は進む、彼は変わる。だけど、彼は尊いままさ。全てはね、彼が選んだ。魅せられたものの、最低限のマナーをキミに教えてあげよう」

ぎりりりりり。

万力のごとく、魂が竜のアギトに挟まれて。

「ファンがさあ、原作にクソ改変強要すんの、やめてくれないかなあ」

「ーなにを」

一気に沸いた頭が、叫びを。お前にそんなこと言われたくない、そんな叫びー

だが、それよりも早く。

「解釈違いさ。処女臭いんだよ、お前」

ぶちゅ。

竜のアギトが、神の魂を噛み砕いた。

ごくん。闇の中に蠢く巨大な竜。ねじ曲がり、歪みきつた絡んだ角が動く。

水面が揺れるように、闇に波紋が。

それで、全部、終わった。

【名瀬 瀬奈が”人知竜”に捕食されました。人知竜が名瀬瀬奈の特性を一部引き継ぎました。特性”トオヤマナルヒトガチ恋強火同担拒否勢”が発現しました】

【イベントが終了します……】

閑話【さあ、貴方の選択を誇りなさい】（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをじっくりご覧ください！

103話 目覚め

「運命はさ、確かに今、変わりつつあるわけよ、トオヤマナルヒト」

声が、聞こえた。

遠山鳴人は目を開く、でも何も見えない。闇だけがそこにあつて。

声だけが、聞こえる。

「アンタがこの世界に来たことにより、色々変わった。本来ならばもうとつくに終わっている者、本来ならば決して変わらぬ者、本来ならば既に狂ってる者、みんなアンタという1人の人間に冒され、拡がり、変わっていき始めてる」

何を言ってるんだ、そう口を動かしても声は出ない。

「でも、まだ足りない。アンタとこの世界の終わりは元からもう決まってる。……あの凡人は、積み重ねることが出来た。数えきれないほどの悲劇、失敗、敗北。綺羅星に届かせる為に、本当に数多くの墓石を積み上げて、アイツはたどり着いた。でも、アンタは違う」

何の話だろうか。遠山に心当たりはない。

「アンタの勝負は一度きり。アンタが運命を捻じ曲げたせいで、多分もう2度とアンタと同じチャートを進める者はいないわけ。わかる？ つまり、わたしも、アンタに賭けなくちゃなんないの」

静かで、それでいて強い何かを秘める声。

祈りや願いを口にするときのそれに近い。

「知識の眷属が聞いて呆れるよ。多分、わたしはアンタの夢の中に住む存在の中で一番弱い。だから、今、あのキリヤイバにいいようにされちゃってる。悔しいけど、わたしじゃどうしようもないの」

知識の眷属、今喋っているのはハーヴィーだ。

「ああ、わかってる。きつとこの言葉もアンタには届かない。これ

はわたしの独り言みたいなものだつて。でも、それでもね、私はアンタに賭けてるから。私の知識を、世界を支配することすら可能な筈の知識を、パンの為に捻じ曲げたアンタを。アンタのその自分の欲望の為なら、くだらないもの全部踏み潰す人間性に賭けてるからだからさ」

いや、届いてる届いてる、なにこれ、独り言のつもりで言ってるのか？ 遠山はそれとなしに体をー だめだ、体の感覚もない。

「死なないでよ、遠山鳴人。まだ私、アンタのこと色々知りたいし」

「アンタは、竜を選んだ。霸王でも幸運でも風でも過去でも進化でもなくて竜と共に行く道を選んだ。うん、あたしはさ、どの道でもアンタの選択を祝福するから」

「……これから多分キツイことがたくさん起きる。アンタと同じ進み続けてきた幸運と決着をつけても、多分、もう手遅れだから」

「頑張つてね、遠山鳴人」



夢が、遠くー

「むが……?」

自分の寝言と同時に瞼が自然と開いた。身体が雪解けを待つ植物のように硬くて重たい。

自分がなにをしていたのか、遠山鳴人はすぐには思い出せなかった。探索、そうだ、第二階層、大草原地帯で死んでそれで。

やけにふかふかしたベッドに体を沈めたまま、考える。どこだ、ここは。

目をまた開き、辺りを確認。木の建材で出来た部屋。家具も全部木。近くのサイドテーブルにはお皿の上に大きな蝋燭。自分の身体にかかる毛布はやけにゴワゴワしているが、暖かくて気持ちいい。

しゃり、しゃり、しゃり。

心地よい音がすぐ側で。音のする方を見る。

トカゲ頭が、やけに器用な手つきでリンゴのような果物の川を剥いている。ベッドのそばに置いた椅子に腰掛けた白いトカゲ男の手つきは細やかで、くる、くるとゆっくり、ゆっくり果物の皮がナイフで剥かれていく。

「…………… ラザール？」

遠山鳴人はそれが誰かを認識する前に、その男の名前を呟いていた。

「…………… ナルヒト？」

ピタリ、果物を剥く手が止まる。白い鱗のトカゲ男がキョトンと顔を上げてこちらを見て固まった。

「よー、…………… なんか、久しぶりだな」

「ナルヒト！ 目が覚めたのか！？ ……はー、よかった… 俺は、もうアンタが起きないものかと…」

がたんと大きく音を鳴らして立ち上がった白い鱗のトカゲ男が、再び椅子に座り込み、自分の額と目を手で抑えてつぶやく。

「あれ、ここは…？ あの村は？」

「村…？ 何の話だ。まだ寝惚けているんだろう。無理もない、アンタ、3日も眠り続けていたんだからな」

「へえ、3日… 3日！?!? マジ!?!」

「マジさ。全く肝が冷えたよ。アンタ、竜大使館の庭で眠ってたんだ。あの竜の執事殿が家まで運んで来てくれたんだ」

「あの爺さんが… うお、頭痛… てことは、全部、夢じゃねえのか」

遠山が、ベッドに身体を預けたままぼやく。あの頭が悪くなりそう  
な出来事も、全部現実のことなのだ。

「……なにがあつたんだ？ ナルヒト、ストルや主教殿とも途中で  
別れたんだろ？ 詳細を知る者と話せてなくてね」

「あ？ ドラ子は？」

「……アンタの感覚だとかのお方は気軽にお話が聞ける存在らしい  
が、悪いが俺はまともなりザドニアンでね。アンタほどぶっ飛んじ  
やいない」

「レーザーが冷たくてワロタ…… すまん、また世話かけたな」

「ふむ、そうだな。だが、もう今更さ。慣れたものだよ、友よ。ア  
ンタはそれでもきちんとして帰ってきてくれた。小言は他の者、まあ、  
ストルたちがたくさん言うだろうから、俺はもういいさ」

にいつと、レーザーが牙をちらりと覗かせながら笑う。呆れたよ  
うに、だが、たのしそうに。

「あ、ストル？」

その時だった。

がちやり。ドアが開く。

「あ

「おう、おはよう」

ストルだ。水差しを持って、ラフな肌着のストルが遠山と目を合わせて固まっている。

「……………」

がちやん。

ドアが閉まる。猫科肉食獣の如き俊敏さで、ストルがその場をびゅんっと、去った。

「え？ ラザール、これは？」

「ふむ、こう、ほら、あれだ。しばらく会っていなかった実家の猫と会った時、あんな反応するだろう。あれと同じじゃないか」

嫌われているのだろうか。遠山が割と本気で少し悩む。

「あー、実家がないからわかんねえけどニュアンスは伝わった」

「奇遇だな、俺も故郷は既にないよ。実家ごと焼かれちゃった」

ハハハハ、と過酷な幼少時代を過ごした2人が笑う。少し、その笑い声は乾いていて。

「複雑な家庭環境バトルするか？」

「泥沼になりそうだからやめておこう、なあ、ナルヒト」

互いにすんつと無表情になりながら言葉を結ぶ。

ラザールの言葉に、遠山が首を傾げる。

「ん？」

「よく帰ってきた。お帰り」

ラザールの目がしつかりと、遠山を見つめる。そして、にいつと、また牙をのぞかせて笑った。

「ーおお、遠山鳴人、帰還した。さて、冒険の続きだな」

ひひ、と遠山も笑う。そう、遠山鳴人は選んだのだ。冒険の続きを。現代の世界への帰還ではなく、この世界への帰還を。

「ふ、元気そうで何よりだ。……だが、ナルヒト、その問題が2つある。早速だが、いいかな？」

「問題？ ひひひひ、レーザー、構わねえよ、こちとら暗黒女神の腹の中で河童やガイコツと一緒に耳の化け物を助けに行って、ドラゴンの背中に乗って帰還した男だぜ？ 大抵のことはー」

遠山が、得意げにフフンと笑って。

「竜祭りまで、残り3日を切っている。アンタが寝ていた間に出来ることはやったが、その、結局細かい所を何も詰めれていない」

「あ」

固まる。そつだ、竜祭り。もう、時間がない。

「それと、もう一つ。竜大使館から、”竜殺し”への伝言だ。……その、蒐集竜様は、トオヤマナルヒトとは会えないし、話せない、とのことだ」



「ーは」

「こんどは、本気で喉がひきつった。」

遠山が目をぱちくりと瞬きさせ、それからベッドから跳ね起きる。

「まで、ままで、待て待て。竜祭りの日程がヤバいのは理解出来た。たしかにこれはヤバいが、まだ理解出来る。は？ ドラ子が、なんて？」

「会えない。……竜祭りで蒐集竜様のご協力を得るところか、ナルヒト、君とは会えないとのことだ」

「なんで!!!? いや、待て、たしかに俺とドラ子は一回やらかった。今考えたら俺のデリカシーゼロ発言が非常に良くなかった、それは認める、けどな、一応、そのわだかまりは解決できたはずだぜ！ 劇場版みたいな事件を乗り越えて、俺、かなりあいつとまた仲良くなれたし、あいつの凄い所とか、たくさんー」「好き避けだ」

「ーは？」

なに？ なに、なに？

遠山が口をあんどぐりと開けて。

「……蒐集竜様は、その、今、好き避けの時期らしい」

ラザールが、心底疲れたように、大きく、息を吐いた。

「SUKIYOKE???.?」

「やあ、それについてはボクの方から説明するよ」

がちや。

タイミングを測っていたように、ドアが開く。黒いローブの白髪の美人、いや、美竜がにこやかに。

「あ、あんた、人知竜……？」

遠山が、意外な人物の登場に言葉を詰まらせて。

「すぶぶ、ああ、君の人知竜さ。おはよう、トオヤマ…… 鳴人く  
ん」

にっこり、目を半月に歪ませて、その竜が笑う。

どこか、その笑顔は、遠山の古い記憶に残るものとよく似ていた。

## 103話 目覚め（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さい！

書籍版正式発表されました！

来月10月25日、オーバーラップ文庫様より発売されます！ Twitterで表紙イラストの他、遠山鳴人、アリス・ドラル・フレアテイルのデザイン公表中です！

ぜひご覧ください！

「……え、なんでここに？」

「すぶぶ。やあ、鳴人くん。おはよう、よかったよ、目を覚ましてくれて。……いい夢だったかい？」

遠山の言葉に、すうつと目を細めて笑う人知竜。

彼女のその笑い方に、なぜかほんの少しだけ遠山は懐かしさを感じた。

「……ああ、まあ、結果的には」

「そう、それはよかった。何よりだよ」

「全知、いや、人知竜様がアンタの容態を見てくれていたんだ。3日間ほど目を覚さないのはこらえたよ」

ラザールが腕を組んでつぶやく。なんとなく人知竜と以前よりも

秀囲気が朗らかだ。

「マジか。えーっと、人知竜、その、ありがとう。色々、手を貸してくれて」

「なに、お安い御用さ。キミとボクの仲じゃあないかい。気にしないでいいんだよ」

「いい奴……！」

他人の悪意に敏感な分、割と善意にはチヨロい遠山が目を見開いて。

がちやり。

「あ……」

「わあー！」

「あー！」

「だう」

「兄貴！」

その時、ドアが開いた。その向こう側から聞こえるのは5つの声。

「おー、ガキンチーーうげ！？」

スラム街の子ども達。彼らに声をかけようとした瞬間、遠山の鳩尾に衝撃。

「よかった、よかった、目が覚めた……！」

「ル、カ、お前、なんてロケットスタートを」

ロケットのように無言で、誰よりも早く飛び出したのはルカだ。

「う、わああああ、よかったああああ……」

中性的でいつもは無口な彼がハンチング帽子を脱ぎ捨てて、ベッドに横たわったままの遠山に抱きつく。

「……悪い、心配かけたな、ルカ」

「起き、起きないかと、このまま、アンタが起きなかつたら、どうしようって」

「……リダ、ニコ、ペロ、シロ。お前らも、すまん、苦労かけたな」

ほぼ頭突きだった為、かなり痛むが我慢して遠山がみんなに笑いかけた。

「へっ、よしてくれよ、兄貴。水臭い。よく帰ってくれたな」

「よかった、わたし、わたし、ほんとに良かったわ」

「あはー、おかえりー。兄貴さん」



「だう！」

子供たちが、遠山の元へと駆け寄る。

みんな笑っている。その様子をラザールがしみじみと眺めて――

「すぷぷ。鳴人くん。この子達を誉めてあげておくれ。気丈にキミの看病をみんな頑張ってくれていたんだ」

「「「アイお姉様だ！」「」」

「ああ、そうだ、な。ん？ アイお姉……様……？」

びゅんっ。

遠山の元からリダとルカ以外の子ども達が一斉に離れて、黒髪的美竜の元に集う。

飼い主を選ぶ子猫のような俊敏さだ。

「お姉様！ いらしてたのね！ もう寂しかった！」

「わあい、お姉様ー、今日は何して遊ぶー？」

「だう！ だう！」

「すぷぷ、ころころ、鳴人くんはまだ病み上がりだ、少しみんな静かにしようねえい」

目を瞑って、子供をあやす人知竜。手慣れている、というかなんか馴染んでいる。完全に。

「……ラザール、これは？」

「見ての通りだ。うちのお子様勢力の66%は既に、人知竜様に夕ラされている」

「ええ……」

いつのまにか自勢力の半分が人知竜にタラされている状況。恐ろしい竜だ。

「……」

ぎゅっと、遠山の元を離れなかった子どもの1人、ルカが遠山に強く抱きついた。

「すぷぷ。おや、ルカ、どうしたんだい？ 鳴人くんをそんなに抱きしめたらダメじゃあないかい。そろそろ離れてもいいんじゃないかな」

「……こっちの、勝手だ」

ルカの言葉に、人知竜は笑みを崩さない。だが、その目は笑ってはいない。深淵の黒を宿した瞳が、すうっと薄く開かれている。

「ルカ、姐さんの言う通りだ。兄貴の体の負担になる」

「……わかったよ」

リダの言葉にルカが名残惜しそうに遠山の元を離れる。

「姐さん？ え？ 待って、人知竜、アンタ我が家で一体どんな地位を確立してんの？ 怖いんだけど。ラザール、これは？」

「……うむ、はちみつが美味しい」

助けを求めたラザールは、ハチミツトカゲとなってグイッとコップを傾けている。

「はちみつ水に逃げるな！ すぐこの純白トカゲは甘味に逃げるんだからよお！」

「すぶぶ、いいコミュニケーションを築いているじゃあないかい。鳴人くん。なにそう怖がらないでくれ。ボクは別にキミのこの家をどうこうするつもりはないのだから」

「家にいつのまにか居座ってるライオンにそんなこと言われてもなあ。草食動物からしたら怖い以外にねえんだけど」

ぼそり、遠山がつぶやく。

「……………しゅ、ぷ」

そして、遠山に弱いドラゴンは傷ついてしまった。無表情のまま、コロココロンと固体の涙を流す。

「あああ！！　嘘嘘嘘！　言いすぎた！　すみません、色々助けてくれたのに！　失礼しました！」

「もう！　お兄さん！　お姉様は恥ずかしがり屋なの！　余裕ぶってミステリアスなこと言ってるけど結局はお兄さんと仲良くしたいっただけなのよ！　いじわる言ったらダメ！」

「あ、はい。すみません」

幼女に弱い遠山が素直に頭を下げる。

ペロとシロが人知竜に抱っこされながら、彼女の白い髪をヨシヨシと撫でていた。

「すぶぶ、ニコは優しいいい子だねえい。ペロとシロもありがとうねえ……」

「ヤダ……我が家の勢力、かなり乗っ取られつつある……！」

「ナルヒトが眠り続けていた時、不安な子ども達のケアを人知竜様がよくしてくれていたからな……」

うんうんと頷きながら、ごくごくとハチミツ水を飲み続けるトカゲを尻目に遠山が人知竜を見つめる。

「んでよ、人知竜、そのそろそろ教えてくれねえか。俺が寝てる3日間、何があったんだ？」

「うん、そろそろ鳴人くんに伝えないとね。キミが寝ている間、何があったのか。どうして、あの幼竜がキミと会えないのか、その辺をねえい」

きい、きい。

人知竜が座っている安楽椅子がゆっくり、ゆっくり、揺れていた。

……

……

…

（72時間前）

「ナルヒトは、目覚めないのですか？」

ゆらめく蝋燭は、そろそろ役目を終えるだろう。窓からそつと差すのは夜明けを告げる日の光、うっすらと。

ラザールは6時間ほど前、竜大使館の執事に担ぎ込まれてきた眠り続ける友人を夜通し見守り続けていた。

「うーん、そう、だねえい。いや、あのメイドの異界は既に滅び、彼の魂も帰還した。魔術式の走査の結果でも異常はない。……近い

うちに目を覚ますはずだが……よほど、いい思い出だったんだろうね」

寝ずの番は1人ではなかった。

世にも美しく、夜の神秘よりもヒトを魅せる存在。この世界の魔術師たちの生みの親にしてヒトの庇護者にして支配者の一つ。

人知竜がラザールの言葉に声を返す。

「良かった。……人知竜様、一体今夜、何があったのですか？」

「うーん、まあ、言ってしまうえば規模の大きな痴話喧嘩なのだけれども、ボクでも予想していなかった”乱入者”がいたりしてねえい。……危うくトラウマで、頭がおかしくなりそうだったよ、………確実に以前よりもおかしくなっている………なんなんだよう、アレ………あー、今思い出しただけでも、鱗がめくれあがる」

「トラ、ウマ………？」



「いいや、こつちの話だよ。ラザールくん。さて、ラザールくん。すまないがしばらくの間、ボクもこの屋敷に滞在させてもらえるかな？ 鳴人くんの容体、安定しているとは言え、少し気になることがあってねえい」

「……一つお聞かせ願っても？」

「ふむ。鳴人くんの友人であるキミだ。許すよ」

「貴女は、何故彼にそこまで？ 蒐集竜様がナルヒトに関わるのとは分かる。ナルヒトは彼女を打倒し、友誼を結んだ。俺もその一端を見た。だが、貴女はわからない。……失礼だが、俺の知っている”魔術学院”の竜は――」

ラザールの言葉はかなりの覚悟をもって放たれた。彼の頭のおかしい友人とは違い、ラザールには常識がある。

竜を疑うようなその発言、本来なら発した時点で殺されてもなんら文句は言えない蛮行だ。

「邪智暴虐、傲岸不遜、ヒトを飼う悪竜……といった所かな」  
にこり。

安楽椅子に腰掛けた人知竜が、微笑む。夜の闇に浮かぶ銀色の髪が朝日を受けて薄っすらと輝いて。

「……リザドニアンの古い話に、”全知竜”には関わるなという話があります。ヒトが大好きな竜、彼女はどうしてもヒトと仲良くなりたかった。だが、彼女はヒトのことは好きでもヒトのことが理解出来ない。その交わりはいつも、ヒトの破滅で終わる」

ラザールは言葉を止めない。友人の為に彼は竜を警戒し続ける。まっすぐと、リザドニアンが竜に言葉を紡ぐ。

「すぶ。耳が痛いねえい、ラザールくん。まあ、キミの心配はごもつともだとも。ふむ、どう言ったものかな。キミを誤魔化すのは簡単だ。だが、彼の良き友人にいい加減な事を言うのも良くはないねえい。どうしたものかなあ」

「……俺も、貴女を信頼したい。だがお許しを、竜よ。我々定命の者は臆病だね。上位の生物の意図がわからぬ愛玩は恐ろしいんだ」

「すぶぶ、キミが言うと実感が増すねえい。……影に愛されたりザドニアン。フローリアは随分と、キミにご執心のようだ。とても濃い、悪事と影の香り……まるでマーキングだねえい」

人知竜が薄い唇に手を当てながら、また笑う。彼女の存在に魅せられた魔術師ならばもうこの時点で卒倒していてもおかしくはない。

「説明はしてもらえない、ということでは宜しいか？」

ラザールの足元から、影が漏れ出る。彼の感情に従い、彼の、彼だけの庇護者たる悪事の眷属、フローリアの領域が口を開く。

「まあ、待ちなよ。そんな結論を急がないでくれ。ううん、なんて言えば伝わるのかな。……ラザールくん、ボクはね、キミとも仲良くしたいんだ。ナルヒトくんの友達だからね」

「その理由だ、竜よ。そこが知りたい。なぜ、そこまでナルヒトを……」

『……とても、綺麗でした、とても美しくて、それで』

「なに？」

その言葉、その顔。一瞬、よく似た誰か、別人が話し出したかのような感覚。

ラザールが更に警戒を深めて。

「ーおっと、ごめんねえい。ああ、漏れ出てくるか。まだ消化しきれてないね、これは。すぶ、ごめんね。最近少し胃もたれ気味で、変なのが溢れるのさ。……ボクは彼のこと気がなっている。知りたくて知りたくて仕方ない。それじゃダメかな」

元に戻る。一瞬だけ感じた存在そのものがブレて変わったような感覚は消えていく。

「……ひとつだけ、答えて頂きたい。貴女は、ナルヒトの味方と  
思  
ってよろしいのか」

「ああ、そこは間違いなく。ボクは味方だとも。もし彼が世界を敵  
に回せば、ボクも一緒に世界を壊してもいいと思える程度には」

ラザールの質問に、寸分の遅れもなく竜が答えた。

「……竜は」

竜殺しの友、リザドニアンが、口を開いて。

「嘘はつかない、さ。古い盟約だけどね、我々竜は約束や契約にう  
るさい。それでも信用ならないのなら、魔術式で何か契約を交わそ  
うか？」

魔術学院の祖たる竜が答える。

ラザールは大きく息を吐く。理解している、目の前のこの竜のほ

んのちよつとの心変わりですべてが終わると。

だが、それでも彼は彼の友人のこれからのために確認しなければならぬ。

この存在を本当に受け入れていいものか、どうか。この奇跡のようバランスで成り立っているコミュニティを引っ張ってきた男は今や眠りの中。

ならば、自分がやらなければならない。

「……失礼を。古き竜よ、貴女はこれまで幾度となく俺の友人を助けてくれた。その行動を信じたい、信じたいのだが……」

「へえ、へえへえへえ。信じたい、ねえ。影の牙、らしくないじゃあないかい。魔術学院にもキミの話は届いていたよ。王国の闇と影を背負った護国の裏の顔。王国にちよつかいを出した魔術師<sup>我が子</sup>も何人かはキミに葬られたと聞く」

「……………」

「そんなキミが、ずいぶん、お人好しなものだねえい、何故、ボクを、君からしたら理解不能、恐怖と畏怖の存在であるはずの竜を理解しようとするのかな？ そんなに怯えてなお、ね」

竜からの問い。

彼の友人が何度も繰り返し遭遇し、その度乗り越えてきた超越者からの盤外の戯れ。

今それがラザールへと。

定命の者からすればそれは、間違れば即、死に繋がってもおかしくない恐ろしき戯れ――

「ナルヒトなら、そうする」

「へえ……」

だが、リザドニアンに迷いはない。

だって、彼は見ていた。その男を。

だから、恐れはない。

「奴は用心深くヒトを簡単には信じない男ではあるが、恩には敏感な奴だ。貴女が我々にとって怪しい存在でも、最後の最後でコイツならきつと、今まで貴女に助けられた事を重視する筈だ」

「それで、ボクに騙されたらどうするんだい？ 竜がキミ達定命の者には想像もつかない深い謀をキミ達に仕掛けていたら？ それでもキミはその判断に胸が張れるのかなあ」

人知の竜が光を移さない深淵を溜めた瞳で、小さき者を見つめる。

定命の者はそれを覗くだけで心を乱す何かがある瞳。竜に見つめられたラザールが――

「ハハハハ、問題ないね、人知竜殿」



竜の瞳を笑う。牙を覗かせた凶暴な爬虫類の笑みだ。

「その時は、心置きなく叩きのめす。……と我らが”竜殺し”ならばそう言うだろう」

拡大する自我。

拡がり大きくなり、その自我は他者を冒し変えていく。

「ああ、……いいねえい。キミはもう完全に鳴人くんに冒されたんだねえい。すぶぶ、ああ、ヒトよ。ボクはキミ達がとても愛おしいよ」

「願わくば、竜殺しの刃が人知の竜に向かわぬことを祈るよ。奴の友として」

影の牙がにいつと笑う。

「すぶぶ。影の牙と竜殺しを相手取るのは苦勞しそうだねえい。お

「や？ 誰かそこにいるのかい？」

人知竜が、その答えに満足げに喉を鳴らした、その時。

「あ、あの、ごめんなさい、ラザールさん」

きいっ。

ドアが僅かに開く。

そこにはわずかに寝ぼけ眼の少女、スラムの子どもたちのおねえさん、ニコがいた。

「ニコか、どうしたんだい？ ストルはそろそろ落ち着いたかな」

「う、うん。ストルちゃんならもうつぶて寝して静かになったわ。」

めんなさいね、アイお姉さん」

騎士ストルと人知竜のイザコザ。それはもう凄かった。お互いがお互いの勢力の揚げ足取り、歴史マウント。

不倶戴天の敵同士である教会と学院の代理戦争を思わせるそれ、家の敷居を跨がせるかどうかの争いは最終的にはニコの泣きそうな顔に折れたストルがふて寝をすることで終わったのだ。

「すぶぶ、なあに、気にしていないさ。天使教会の騎士には嫌われているからねえい。んん？」

人知竜が、それに気付いた。

「……………老竜」

ひょっこり。ニコの背後から現れて、部屋の入り口に身体半分だけ覗き込むように現れた少女。

手習の魔術式により、少女の姿に身をやつしたアリス・ドラル・フレアテイルだ。

「すぶぶ、おや、おやおやおや、これはこれは、驚いたねえい。幼竜、ほんとに幼い姿になってるじゃあないかい」

「なんだとー」

いつもの変装用の姿より、ほんの少し大人びた様子のアリスが人知竜の言葉に怒気を表す。

「アリー……」

「む、……ふん。ニコの顔を立てよう。良い、許す。老竜、貴様がここにしていることを含めてな」

この竜同士もやはり中々に仲がよろしくない。だが、ニコの泣きそつな声にアリスもまた牙をすぐに納めた。

竜は幼い子や友人には比較的優しいこともあるのだ。

「おやおや、どうしたんだい、幼き竜よ。随分とまあ、物分かりがいいじゃあないかい」

「ふん、知れたこと。オレもいつまでも貴様にめくじらを立てるばかりではないのだ。……それに」

「うん？」

「そ、れに、だな……む、うぐぐぐ、それ、にい……」

人知竜の言葉に、アリスが言葉を澱ませる。

「頑張つて、アリー！ 貴女さつき言つてたじゃない！ わたし、そういうのすごく素敵で大事なことだと思つわ！ 手助けしてくれたアイお姉さんに御礼を言つて！ ……あ」

「すぶ？」

ニコが思わず滑らせた言葉に、部屋の空気が停止した。

「……………老竜」

「……………なんだい、幼竜」

竜が2人、言葉を交わす。

中々に拗らせた関係の強き竜たちのそれぞれ異なる色の瞳が互いを見つめて。

「……………此度の件、……………礼を言う。オレの竜殺しの手助けを、あやつ  
の味方でいてくれたこと。感謝す、る」

「……………わああ。マジかよ」

人知竜が思わず、と言った様子で言葉を漏らした。

アリスから告げられたのはそれほどの言葉だった。

「えらい！ えらいわ！ アリー！ あれだけ悩んでたのに、きちんと言えたの、ほんとにえらいわ！」

「ふかか。良い、良い、許す、もっと褒めろ、ニコよ」

女子高生くらいの姿のアリスが、ニコの手が届くところまでしゃがみ込み、それをニコがヨシヨシと撫でている。

アリスも満更では無さそうだ。小さい子どもがでかい犬を褒めているようにも見える。

「……うむ、ハチミツ水が美味しい」

ラザールはもう、色々と驚いたのでミニテーブルに置いてあるハチミツ水の入ったコップをぐびり。

「驚いた…… キミ、幼竜アリス。何があっただい」

人知竜が、深く、深く安楽椅子に背中を預けて問いかける。

「……さあ、な。オレにはわからぬ。だが、ある友ならば、オレのある友人ならばきつと、礼をきちんと言うと思ったのだ。それだけだ。2度は言わん」

「……なるほど。へえ、キミも、どうやら混ざってるねえい……ボクとは違って同意の上、みただけ」

竜は遺志を継ぐ生き物だ。

不滅に近い生命、強い肉体、幼い心は長い年月をかけて完成を目指す。

あの夜の夢、トオヤマナルヒトの思い出から生まれた存在はアリス・ドラル・フレアテイルの中に今も。

「なんだと？」

「いや、別にい、こつちの話さ。まあいいさ、キミとはまあ、昔色々あったがそれはそれ、鳴人くんの様子を見にきたのだろう？ ほんら、顔くらい見ていってあげなよ」



「お兄さん、まだ寝てるのね……リダは怖い顔してずっと1人で考え事してるし、ルカはもうふにゃふにゃだし、ペロシロもそれで怯えてるし、早く起きてほしいわ」

ニコが部屋に入り、心配そうに遠山のベッドに近づく。

「……」

「アリー？」

ふと、ニコが首を傾げる。

無言で、部屋の入り口に立ち尽くす金色の竜を不思議そうに眺めて。

「……どうしたんだい、幼竜、そんな所に突っ立って。ほら、部屋に入りなよう。構わないよね、ラザールくん？」

「勿論だ。蒐集竜様は、ナルヒトの友人ですし」

「あ、う……」

蒐集竜、停止。何故か、部屋に入っていない。

「「「んん？」「」「」

部屋の中にいる全員が同じ角度に首を傾げた。

「む、む、待て、まだ、その心の準備が出来て、おらぬ」

「「「んん？？」「」「」

心の準備？ また部屋にいる全員が首を傾げる。

「う、う、うるさい！ なんだ、みんなのもの、その目つきは！ ち、違  
う、別に恐れてるわけではおらぬ！ 見ている！」

目をぐわつと見開きながら、恐る恐る部屋に入ってくる少女。そつと、そつと歩いて、それからゆっくり、遠山鳴人の眠るベッドに近づいてー

「あ、う」

しゅんっ。

疾風が吹く。竜がその身体能力を全開にして、また部屋の入り口に戻った。

「え」

人知竜がぼろりと声を漏らす。彼女だけだ、アリスの動きが目で追えていたのは。

「……………今のは、違うのだ」

「あ、アリー？ どうしたの？ もしかして、まだお兄さんと仲直

り、出来ていないの？」

「に、ニコ、違う、違うぞ、そうではない、そうではないのだ！  
そうではない、の……だ」

「人知竜様、これは……」

「……ふう、ん。ん、んん？　ンンンンンンンンン？」

「な、なんだ！　老竜！　貴様、オレをそのような目で見るな！  
焼き尽くすぞ」

「幼竜、アリス。キミ、もしかして、照れてる……？」

「ふ、か」

人知竜の言葉に、アリスが怒り顔のまま固まる。

ぴくり、ぴくりと動く瞼、視線はどうしても遠山の方だけには向

かわない。

「動悸が荒い、瞳孔も開いて、頬も紅潮、耳元も赤く、ツノも光っている……ねえい。もしかして、キミ、あつちで鳴人くん……竜の姿でも見せたのかなあ」

「ひゅ、か」

ひきつけのような呼吸の後、アリスが動かない。

「あ、アリーが固まっちゃった」

「人知竜様……これは」

「うーん。ああ、うん、大体わかった。この幼竜、竜体を見せた雄に本気で恥じらいを覚えてるんだねえい、一丁前に。あー、うん。なるほどねえい」

「り、竜体……？」

「竜にとって、本来の姿である竜体は特別な意味を持ってねえい。まあ早い話、君たち定命の者で言うところの全裸みたいなものさ。誤魔化しが効かないからねえい」

「老竜、貴様、このオレを侮辱するのか！ オレは蒐集竜、アリス・ドラル・フレアテイル！ 花竜と鉄血竜の子、そしてかの炎竜と水竜の血を引く竜ぞ！ 定命の者に我が竜体を見せた程度で慄くものかー」 「術式、仮説構築」

めくじらを立てながら言葉を並べるアリス。それを

尻目にアイが結んだ魔術式を紡ぐ。

眠りこける遠山の体に紋様が浮かび上がり、そして、するり。遠山鳴人がベットから抜け出て、つままれた人形のように空中に浮かんだ。

「わあ！ お兄さんが浮いた！」

ユーフォーキャッチャーに吊られた景品のように逆さまの遠山が空中を浮かぶ。

「ひゅか」

「えい」

ぶん！

割とすごい勢いで、眠りこける遠山が何かに引っ張られるように  
浮かんだまま、アリスの眼前へ――

「ナ、ル、ヒ……ーとーや」

アリスが固まる。

すぴょー、すぴょーとアホヅラ晒して眠る遠山とは裏腹に、青い  
目を見開いたアリスが固まる。

ダラダラと白い肌に汗を浮かび上がらせる。金色の御髪が逆立ち、髪の間から生える角は鱗立ってゆく。

白い肌は、みるみるうちに真っ赤になってー

「ああ、やっぱりこれ、もう」

「う、うるさい！ 老竜！ 貴様、なんのつもりー」

「わあ！ アリー、お顔まっかつか！ どうして？ あ！ わたし、わかったわ！」

天真爛漫、ニコ。彼女はようやく事態を理解した。

「待て、ニコ！」

ハチミツトカゲがやばいと思ってニコを制する、だが閃きの興奮に身を任せたちびっ子を止めることは誰にも出来ないのだ。

「アリー、貴女、おにいさんのことが大好きなのね！」



「あ

「すぶぶ

ニコの満面の笑顔と共に放たれた言葉、時が止まる。

「.....かえる」

ヒュン。

疾風一陣。

少女の姿に身をやつした竜が消えた。

「わ、わたし、も、もしかして、ダメなことを言っちゃった？」

泣きそうなニコの声がぼつり。

王国の暗部を背負い続け、必要とあらばヒトの枠を踏み越えた存在、魔術師をも狩ってきた影の牙。

そして、その魔術師の祖、ヒトの枠を再定義し、大いなる戦いの時代にヒトを生き長らえさせた人知の竜。

2人が同時に、くぴり。手元に置いてあるコップを傾けた。

……  
……

「というわけなんだよねえい。いやー、まさかあの幼竜があそこまでクソ雑魚ドラゴンだとはとてどもとてども」

「何がというわけ！？ 何もわかんねーだけでも！ ラザールくん！ これは！？」

「いやこれが現場にいたのだがまるで分からん、何も分からん。ハッハッハ」

ラザールが目をニコニコさせながら笑う。

「お前そんな目で笑う奴じゃねーだろ！ 諦めんな！」

「う、ごめんなさい、おにいさん、わたしがアリーに余計なことを言ってしまったのだわ……どうしよう、これでもし、お兄さんとアリーがお友達じゃなくなったらとても、わたし……」

しょんぼりしたニコがボソリ呟く。

「いやいや、ニコは悪くねえよ。悪いのは……あれ、困ったぞ、今回なんか明確に悪い奴がいねーような気がしてきた」

「そこなんだよ、ナルヒト。強いて言うなら蒐集竜様の好感度をイタズラに高めすぎたお前が悪いと言っべきか……」

「クソゲーすぎるギャルゲーみたいなギミックやめてくれない！！ 必死だったの！ こっちは、大変だったんだよ、マジで！ なんか暗黒女神みたいなんに飲み込まれたり、頭の悪い耳のバカみたい

なのと対面したり!」

「耳……? バカ……? うおえ……げぶ、ご、ごめんねえい、ペロシロ少し降りてくれ、ナルヒトくん、ラザールくん、お手洗い少し借りてもいいかな? 吐き気が……」

遠山の言葉、その一部を聞いた瞬間、人知竜が口元を覆い、青い顔をしながら椅子から立ち上がる。

「あ、ああ、おう、どうぞ」

「人知竜様、どうしたんだ? 急に」

「さあ、顔色めちゃくちゃ悪くなってたな」

よろよると部屋から出て行く銀髪ミスティアス美竜を見送り、部屋が少し静かになる。

「兄貴……すみません、アンタが寝ている間色々俺たちで出来ることはやってみたんだが、正直あまり役には立ててねえ気がする」

リダが遠山の近くに椅子を引いてやって来た。

「お？ どした、リダ。気にすんなよ、むしろ3日も寝てた俺が全面的に悪い。色々って何してたんだ？」

「竜祭りの為に必要なことだ。兄貴の構想は話を聞いててなんとなく俺なりに解釈してた。だが、それにはあのおっかねえ竜の姉さんの協力が必要なんだろ？ 街の色々な所から情報を集めてたんだ。竜大使館の今の状況を」

「お前、リダ」

「すまねえ、ルカにも手伝ってもらったんだがこの程度のことしかできなくて、面目ねえ！ こんなにいい家に住まわせてもらって、拾い上げてもらってたのに、何も返せねえ……」

「バカお前何言ってるんだ。すげえよ、お前らは。俺がガキの頃なん

か施設の連中にどう一泡吹かそうかとかしか考えてなかったしよ」

ぱつと、頭を下げるリダの肩を遠山が叩く。何かしようとしてくれただけで充分だ。

「兄貴……」

「……リダ、早く報告しようよ」

ルカがなにやら感動しているリダの脇腹を突いて言葉を促した。

「おっと、そうだな。あー、その、正直な所俺にはその、好き避けとかそういうのは分かんねえ。ただ、竜大使館の方も今色々大変らしいんだ」

「大変つーと?」

「ああ、なんか、そののメイド。めちゃくちゃ有能でその屋敷のことをほぼほぼ1人で取り仕切っていたらしいんだけど、ちょうど3日前から倒れて寝込んでるらしくてな」

「メイド……寝込む……ああ」

「やっぱり何か心当たりがあんのか？ 兄貴が夜中に運び込まれて帰ってきた時とタイミングが同じなもんで何かあると思っただけ」

「おお、まあ、あれだ。めちゃくちゃな奴らが好き放題に暴れてたからなあ」

あの夢の世界。

異界、とやらは確かあの眷属メイドの力で作られたものだ。多分中でバカが大暴れしたせいで色々あったのだろう。南無三。

「よく分かんねえが兄貴が理解してるならいいや、それと、うーん、まあ、これはあまり関係ないか、あの竜の姉さんとは」

「他に何かあるのか？ リダ。どんな些細なことでもいい。お前が知ってること全部教えてくれ」

「うーん、大した情報じゃないんだが、色街に出入りしてる貴族が噂してたんだが、倒れたメイドの代わりに竜大使館が新しいメイドと執事の見習いを雇った、みたいな話もあったんだ」

「新しいメイド？ なるほど。どんな奴かは知ってるのか？」

今はとにかくこれからの竜祭りの動きの考察のために状況を整理したい。その為にはどんな些細な情報でも把握しておきたくてー

「いや、素性までは分かんねえ。ただ、盗み聞きしてる範囲だと、緑色の髪の女と赤髪の男の2人組らしい」

「……………あ？」

何か、どこかで、最近そんな2人組がいたようないー



……  
……  
……

（同時刻、竜大使館にて）

「お嬢様、ベルナルにございます。お調子はいかがですか。……そろそろ何か少しでもお召しになられた方がよろしいかと」

暗い部屋。

竜大使館の主人の自室は3日前から灯りがともっていない。

「……爺やか。よい、下がっておれ。腹が減っておらぬ」

大きなベッド、モコモコの布団の塊の中から竜の声が聞こえる様子に、執事長、ベルナルがため息をついた。

「……さようですが、何かあればすぐにお呼びを」

「うむ。……ファランの様子はどうか？」

「未だ眠っております。しかし、命などには別状はないかと。いずれ目覚める筈です」

「そうか……世話をかける」

「……お嬢様、この爺に出来ることがあれば。何なりと。

「ああ……」

あの日から、ベルナルの主人はこんな感じだ。

竜殺しとの和解を終わらせたその次の日の明け方、様子を見に行つてくると言つて帰つてきた日から様子がおかしい。

「……かの竜殺しと、何があられたので？」

「……いいたくない」

ぼそりと、布団の中から帰ってくる声。その音的にまだ健康上の

問題は無さそうだ。

「さようじにございますか。……気が変わればいつでもお申し付けを」

長い付き合いだ。この竜に頭ごなしに何かを言っても無意味なことを彼はよく理解している。

「うむ」

「新入りのメイドをお部屋の前に着けております。何かお変わりあればすぐにそのものに託けて頂ければ」

「ああ……わかった」

布団からの声を聞いた後、ベルナルがそっと主人の部屋を出る。

後ろ手にドアを閉め、ひとつため息。

「どっしたのか」

孫娘との会話に困る祖父の顔でベルナルが呟く。

超越者である彼とて、その竜の悩みに寄り添うことは出来ない。いや、超越者として完成してしまった自分だからこそ、きっと、あの幼竜には本当の意味では寄り添えないのだろう。

ベルナルが自嘲気味に笑って。

「あら、あらあらあら。ご機嫌麗しゅう。執事長サマ」

朗らかな陽気が話すことが出来れば、きっとそのような声なのだろう。

ベルナルがその声の持ち主へ視線を傾ける。

「お早いですな。ちょうど今から呼びにいらつうと思っていた所です」

「ええ、アリスお嬢様のお部屋の番ですね。フッフ、お任せください」

緑の髪に、星形の虹彩、小さな顔にヒト離れた美貌。幼さと、高貴さを併せ持つ容姿。

新しく入った竜大使館のメイド、とある古い約束に則り、しばしの間竜大使館に奉公を許された高貴な一族がそこに。

「ええ、申し訳ない。本来ならば、王族たる貴女にはメイドではなく賓客としての扱いが相応しいものを」

「まあ、執事長さまったら。古い約束においては王族と言えど、竜へは臣下の礼を取るのが習わしです。光栄です、かの蒐集竜様のおそばに仕えることが許されるなんて」

ベルナルの言葉に緑髪の美人が微笑む。

「ふむ。そう言ってもらえると助かりますな。貴女の存在はきつと、これからの帝国と王国の関係をさらに良くされることでしょう。第三王女殿。貴女の竜への献身に敬意を」

「まあ、勿体なきお言葉です。執事長さま。王国の王。父も母もそれを望んでいらっしやることです。執事長さま、ご安心を、竜様もお年頃のレディ、もしかしたら同性のわたくしにはお心のほどを伝えてくださるかも知れません。すぐにお元気になられますよ」

「それでしたらよろしいのですが」

ベルナルの言葉に、ニコニコと緑髪のメイドが微笑む。

「大丈夫です、きつと、その想いは竜様に届きますとも。全ては世はこともなし。竜様もすぐに元気を取り戻され、ご友人とのすれ違いも収まることでしょう」

星形の虹彩が歪む。世界から、運命から愛された女がいつものように、いつもの言葉を、竜の従者へと語りかけて。

「きつと、幸運にせよ」

104話 72時間（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

2022年10月25日、ついに書籍版発売となります。

みんなの課金待ってるぜ！ 各通販サイトでもご予約始まっていますので是非活動報告やTwitter覗いてみてくださいーい。

ストルや銭ゲバ、人知竜を表紙として出力させるために続刊目指して頑張ります！



105話 審問官の剣

「ストル！ どこだー、ストルさーん」

朝の空気。

遠山は久しぶりの冷たく透明な空気を吸いながら中庭を歩く。

身体も、特に異常は無さそうだったので散歩がてらさつき一目みた瞬間に部屋を去っていったストルを探していた。

簡素な革の靴から感じる芝生の感触も心地よくて。

「あ

ぶんっ！

空気を切り裂く心地の良い音。

「ハアっ！！」

それは舞だった。

修練用の木刀が少女の動きに合わせてクルクルと廻る。

足運び、前へ、木刀が踊る。

とっ、と水面を跳ねるように少女が芝生を蹴る。重力なんて知らぬとばかりに一回転、その間にも木刀はたしかに振るわれる。

武に長けた妖精の踊り、水色の長髪が少女の動きに一拍遅れて、はらりと揺蕩うー

「ートオヤマ……調子はもうよろしいんデイスか？」

「お」

いつのまにか、少女は、ストル・プーラはこちらに気づいていたらしい。サラシを巻いただけの上半身裸、うっすらと浮いた汗が彼女の白雪のような肌の上を滑る。

「どうしましたデイス、っと、ああ失礼。髪を結んでいませんでしたデイスね」

ぎっ、と手首に巻いていた紐をストルが口で啜えて取り外す。そのまま、サラサラの水色の髪をいつものようにポニーテールで纏める。

遠山はつい、小さなうなじに目がいくのをむすつとしながら目を逸らした。

「はい、これで大丈夫……何故目を逸らしてるんデイス？」

ストルがキョトンと首を傾げる、水色のポニーテールも同じく傾く。

「おかしい……ストルが明らかに色っぽい」

「は、はあ？ な、なんデイスか！ いきなり。騎士に対してその発言は失礼デイス」

「ああ、悪い。でも、ほら、これ」

「えっ？」

遠山が差し出したのは自分が羽織っていた簡素な布の上着。

「いくらお前でも上着くらい着てくれ。マナーだろ」

「あ……これは、失礼を……」

ストールが思ったよりも素直に遠山から上着を受け取る。するつと羽織る彼女の耳たぶがわずかに赤いのは運動によるものか、それとも――

「感心だな。トレーニングか？」

「別に、ただの習慣デイス。この中庭はある程度の敷地があるので形の確認くらいは、と」

どっこらせと、遠山が中庭に置いてあるベンチに座りながらストルに問う。彼女も同じく遠山の隣に座り簡単に答えた。

「そりゃいいことだ。俺も少し素振りと筋トレくらいするか」

「ああ、それはいいことデイス。貴方、素質は悪くないデイスが、それ、全て我流デイスよね？ よければ私が指南して差し上げましょうか？」

「指南？ あー、そうだな、天使教会最優の騎士の技術だ、習っておいても損は無さそうだ」

「ふっふっふ、いい心がけデイス！ ………………何も言わないのデイスか？」

「あ？」

「先程は、失礼しました、デイス。その、逃げ出すような真似をして……………どんな顔で貴方に会えばいいか、わからなかったデイス」

「どんな顔？ ん？ 待てよ、ストル、お前どうした？ なんか様子おかしいぞ」

「……………あの夜、私はまた、貴方を1人にして、置いて行ってしまっ

た

「あの夜？ あー……」

言われて遠山は思い出す。あの夜、メイドの異界に取り込まれた時だ、確か最後まで一緒にいたのがストルだ。

そういえばストルも同じようにメイドに眠らされていた筈だが、あの異界にはいなかった。

「この前の、古代種との戦いの際にも私は、貴方を置いていった。そして、今回も、貴方に最後まで着いていくことが出来なかった。ふ、ふふ、何が、剣、デイスよね、私はー」

「おら」

「っ」

パチイ。ストルの言葉を遮るように放たれた遠山のチョップ。それを無表情でストルがはたき落とす。

「あつ、と、トオヤマー!？」

「いつでええ……すげえな、今のタイミングで反応すんのか。恐ろしいな、騎士」

「す、すみません、つい。お怪我は？」

「ねえよ。なんだよ、お前、そんなこと気にしてたのか？ てつきり、俺がまた好き勝手やったから怒ってるのかって思ったよ」

「いえ、それはもう慣れましたデイス。バカには何言っても無駄デイスから」

「おっと、本当のバカからのバカ発言はくるものがあるな」

「どついう意味デイスか、私は賢いので貴方の発言を受け入れることが出来ませんデイス」

軽口が飛び交う。

「ひひひ、賢いかあ、お前。……悪かったな、ストル」

「え」

「お前、バカだけどやつぱ真面目でいい奴だな。騎士道ってやつか、そーゆーのかっこいいな」

「ど、どういう意味デイスか」

「そのままさ。お前が謝る必要も気にする必要もねーよ、今回のドラ子との一件は、ありや完全に俺の大ポ力だ。俺がしくじった、俺の認識が誤っていた。その後始末に付き合ってくれたお前に感謝こそすれど、何かを責めるわけねーだろ」

「ですが、私は！ 貴方の剣デイス！ 剣は主人の危機を退ける為にあります！ それが役目デイス！ それを果たせない私はー」

「ストル・プーラ。ああ、その通りだ、今更お前が只の人だなんて俺は言うつもりはない」



「ならー」

「どれだけすごい剣でも使い手が雑魚だとその真価を發揮しないもんさ。今回は、俺がしくじった。メイドに眠らされたことなら気に入んな。ありゃ、ドラ子とどっこいか、それ以上の化け物だ。仕方ない」

「っ！ 仕方ないで、私はまた、貴方をー」

「だから次はまた頼むわ」

「え？」

「次さ。ストル、異端審問会の剣。悪いが、俺はまたこれから先もきつとやらかす。敵をたくさん作るし、始末せにゃならん奴も出てくるだろ。だから、またその時頼む」

「な、なん、ディスクか、それ」

「あー？ まあ、アレだ。お互いバカ同士、細かいことなしでこれからも宜しくって奴。今からまた忙しくなる。お前にしおらしくされる調子が狂うよ、ストル」

にっと、遠山が笑う。

ストルが、真夜中に昇る太陽を見たような驚愕の顔を広げて。

「え、遠山、貴方ナニカ悪いものでも食べましたデイスか？  
その、悪人ヅラがいきなりそんな感じになられるとは気持ち悪い  
のデイスけど」

「悪人ヅラ？ バカ言うな、俺ほど人の良さそうな善人フェイスの  
奴がどこにいんだよ」

「クスクス、鏡、見てきてくださいデイス」

いつのまにか、すっかり笑顔になっているストル。

遠山が気付かないのは勿論だが、彼女自身も気付かない。

上着の中に隠された柔肌が、またしつとり熱く、赤くなっていることを。

「なんだよ、何度見ても人の良さそうな顔しか映らねえよ。……まあ、そういうことで、悪いがストル、これからお前（の力）が必要だ。宜しく頼むわ」

遠山が手を差し出す。

ストルが目をぱちくりさせ、くるくると自分の髪の毛をいじって。

「デイ……そ、そうデイスか。ま、まあ、審問官に仕えよというのは主教様からのご命令でもあります。ええ、私、ストル・プーラは、これからも貴方の剣であり続けますデイス」

その手を、握った。

ピロン

【警告・キリヤイバからの侵食が進行しています。特性・”お前の血は白色だ”が備わっています】

「え？」

【よって貴方は”人類の天敵”になり得る可能性を秘めています。ストル・プーラの”秘蹟・正義”が自動発動します】

「あ」

《汝、罪人なり》

ずっと、ストルの背後からそれが現れる。

歪な女神像、数多の顔、身体がつぎはぎされ、ねじ折れた2つの翼を備えるそれ。

遠山はそれを知っている。天使教会騎士団、第一の騎士。ストル・プーラの特別。遠山を死の寸前まで追い詰めた。

《我、絶対のー》

「正義……！　なんで、クソ！」

遠山が目をむいて、自分の左手を自分の首に当てて、キリヤイバをー

「止まれ、誰の許可を得て勝手に這い出てきてるんデイス」

「え」

《あ、汝、正義の担い手なり、汝、正義の体現者なり、汝、人類の軌跡なり。役割を、果たせ》

「黙れ、下郎。私達は一度敗けた。力なき正義が今更おめおめと、私に恥をかかせるつもりデイスか。ただの力の分際で」

《あ、ああ、よ、よせ、やめろ、幼体、何故――》

「黙れ、私の正義は私が決める」

しゅぽん。

掃除機に吸い込まれる埃ゴミのように、ストルの身体にそれは戻っていく。

水色の瞳が爛々と輝いて――

「え、え？ ストル、ストルさん、何？」

「トオヤマ」

「あ、はい」

「……貴方、何を隠しているんデイスか。貴方の身体、いや、貴方に、何が起きているんデイスか」

静かに、遠山の剣が問いかける。

それはあの時の、竜からの問いと同じものだ。

「い、いや、それは」

遠山が言い淀む、自分の身体のこと、自分の問題のことを言い淀んで――

「あ」

竜の青い瞳から溢れる涙、気付かされた自分の間違いと、あの夢の世界で終わらせた過去との訣別。

遠山が、息を吐いて。

「悪い、ストル」

「ッ」

ストルが、ぎゅっと、遠山の袖を掴み水色の瞳を揺らす。その言葉、恐れているかのような顔をして――

「――全部話す、俺のこと。……みんなを集めてくんねえか」

「……っ、はい、承知しましたデイス。我が審問官」

今回はもう間違えない。

手痛い失敗の記憶はきちんと、遠山を支えていた。



105話 審問官の剣（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さし！

106話 拡大する自我

「悪いな、みんないきなり集まってもらって。色々家事とかあるのによ」

ストルを引き連れて屋敷のリビングに戻った遠山が、みんなをそろえて話を始める。

「いや、問題はないさ。どちらにしろ、一度全員でまた話し合いたいと思ってた所だ、これからの竜祭りの事とかな」

「兄貴、今からする話は俺たちも聞いていいもんなのか？ ラザールの兄さんやストルの姉御だけに絞らなくて大丈夫か？」

「「「「「……………」」」」」」

リダの言葉に子供たちがじつ、と遠山を見つめる。自分たちもここにいるんだ、そう言いたげに。

「いや、リダ、悪いがお前らにも聞いて欲しい。身内全体に関わる話だ」

「っ、ああ、わかった、聞かせてもらおうよ」

リダの言葉に追従するように、子供たちもあわせて首をブンブンと縦に振る。

身内、と言う言葉にみな目をキラキラさせていた。

「ああ、ありがとう、リダ。そういえば人知竜は？　まだトイレか？」

「アイお姉様なら気分が優れないから外の空気を吸ってくるって言ってたわ。お夕飯の時間になったらいつもみたいに帰ってくると思うのだから！」

「サンキュー、ニコ。アイツ、距離感のちょうどいい野良猫みたいなムーブしてんな……まあ、いいや」

「それで、ナルヒト。竜祭りの話か？ それとも、蒐集竜様の問題をどうこころずするという話かな？」

ラザールが椅子に腰掛けたまま、遠山へ問いかけて。

「……いや、俺の話がしたい、ラザール、がちんちよども」

「……ナルヒトの？」

「兄貴の？」

「お兄さんの、おはなし？」

彼らにとっては意外な話だったのだろう。

「ラザール、いつか話したよな。俺の故郷の話」

「あ、ああ、どうした急に、あの、アンタがいつもはぐらかす自分の話だよな。ニホンが出身だとか。ギルドマスターとのやり取りでなんとなく察していたが、アンタ妙に古代語やそちらの考古学に詳

しいー」

「出産はニホンのヒロシマ県だ、俺は探索者だった」

シン、と部屋が静寂に染まる。

「ナルヒト、なにを？」

数秒後、ラザールがその言葉へ反応した。

「天使教会に乗り込んであの銭ゲバと交渉したの、覚えてるか？」

「あ、ああ、まあ、俺は途中で主教殿に眠らされてしまったが……」

「銭ゲバには見破られたんだ、俺の故郷を、俺の出自を」

異世界。

遠山鳴人の不自然さ、その来歴、力、その異質さ、ただそれだけの状況証拠だけであの女主教は真実に辿り着いた。

心のどこかでかけられていた枷、他人を心の底からは信じきれない遠山の宿痾はその秘密をみんなに話すのを躊躇わせていた。

「ーあばよ、とーやま。」

しかし、あの夏の日の夢が、古い思い出の影法師がそれを取り払ってくれた。

「トオヤマ、その話はアナタの身体に起きていることと関係あるのデイスね」

壁に背中を預け、腕組みしたストールが口を開く。

「ああ、ある。ストールもそのまま聞いてくれ」

ストルの問いに、遠山が目を瞑る。今まで言えなかった言葉。無意識のうちに、誤魔化し避けていた言葉を。

「俺はこの世界の人間じゃない」

「……………なんだって？」

ラザールが目を丸くする。はっきりと言葉にされた遠山鳴人の由来を聞いて。

「俺は、一度死んだ。…………バベルの大穴、第2階層、大草原地帯における怪物種の生息数の調査。その仕事で俺は死んだ」

淡々と告げられる事実。覚えているのは死の記憶。皮膚を破られ、肉をえぐられ、腸を貫かれた気持ち悪さを。

「あ、兄貴、アンタなんの話をして…………」

「リダ、ちゃんと聞こう」

「ルカ……あ、ああ」

戸惑うリダを、ルカが静かに制する。

「色々あって、まあ、最終的に俺は1人で怪物の群れと戦うことになった。あの時はまだキリヤイバをケチる癖があつてな。出し惜しみして、戦つてたら致命傷を受けてた。それで、死んで、気づいたらラザール、俺はあの馬車の中にいた」

「……………ナルヒト、それは」

「え……………」

あまりにも荒唐無稽な話に、皆が固まる。戸惑いの色を浮かべて。

だが、その中で1人顔色を変えずに水色の瞳をまつすぐ遠山に向ける者がいた。

「うそ、じゃないデイスね」



その剣の歪な力は嘘を見抜く。嘘もまた、”正義”が裁くべき罪ゆえに。

「ああ、嘘じゃない。真実だ」

ぼかーんと口を開くストル以外のみんな。

遠山は少し笑って話し出す。

「銭ゲバの話だとあの塔、そのてっぺんには向こう側、ってのがあ  
るらしい。俺の世界はエンタメ、娯楽に富んでな。こつこつというのが一つのお約束として物語の形式としても存在するんだよ」

「物語の形式？」

「異世界転生、いや、転移か。元の世界から何かのきっかけで別の世界に行ってしまうって奴だ。これが人気ジャンルでな、ありとあらゆる手法でーっつと、今は関係ないか」

創作は時に、現実を冒す。遠山には割とすんなり受け入れること

が出来た2度目の人生の続き。だが、この世界の者からすればそれは頭の狂った者の妄言にしか聞こえない。

「トオヤマ、その証拠は」

「ストル。嘘、わかるんだろ？ ドラ子と同じで」

ストルの言葉に、遠山が答える。

「……わたしの秘蹟、正義は他人の罪を判断します。嘘もヒトの罪の一つデイス。貴方の言葉に、今、嘘はない」

「な、なんと」

ラザールが慄く。ストルの力の真価を知っている彼にとって”正義”が遠山鳴人の言葉を嘘と断じていないことはつまり、その妄言が――

「3日前。竜大使館のメイドの異界に取り込まれた時、あっちの世

界の奴と会った」

「は？」

「その時言われたよ。今なら帰れるってな。俺の予想だが、錢ゲバの言葉や、異界での出来事、んで、俺とラザールが始めて会ったあの塔、それと、まあ、ある理由で一つ仮説がある」

あの奇妙な出会いを思い出す。もう2度と交わることはないだろう”探索者”達との邂逅を。

「この世界と俺がいた前の世界、何かの連続性があるような気がする。行き来が出来るってわけじゃないが、何かの繋がりがあつてな。もしかしたら、あの塔の先はー」

遠山がある仮説を声に出そうとしたその時だ。

「兄貴、アンタ、帰る………のか？」

リダが、呆然とした面持ちでボソリとつぶやく。

「え？」

「正直アンタが言ってる異世界とかそういうのわかんねえ。でも、アンタには家が、帰るところが別にあるって、ことなんだろう？」

「え、うそ、リダ、なに、それ」

「え、え？ お兄さん、帰っちゃうの？ いなく、なるの？」

子供たちの顔に映るのは恐怖、だ。

遠山鳴人の介入により、彼らの運命は大きく変わった。それを一番理解しているのは彼ら自身なのだろう。

もし、遠山鳴人が居なければ――

「いや、帰んねえよ？ なんでそんな話になるんだ？」

「「「え」「」」

キョトンとしたチベットスナギツネの言葉に、子供たちが声を漏らした。

「あー、話す順番が悪いな。まず先に言っとくべきだった。俺は例え元いた世界に帰れる方法があつたとしても、あつちに帰るつもりはない」

「……なんで？」

「ここが俺の家だからだ。お前らが俺の身内だからだ。家も身内も、……友達も全部こつちにいる」

答えはシンプルだった。

「トオヤマ……あちらに置いてきた人とかは、いないのデイスか？」

ストルが静かに問いかける。どこかその言葉には陰がある。

「置いてきた人？」

「っ、家族とか、友達とか、その、恋人とか」

「んー、家族はいねえ。友達も……ああ、まあ、うん。きっと、大丈夫だ。恋人もいないからOK。ビビるくらいモテないんだよ、俺」

「……そうデイスか。家族が、いないというのは」

「俺、孤児なんだよ。施設に捨てられててな。親の顔も知らねえんだ」

「兄貴も……なのか？」

何気なく伝えられる遠山の来歴にリダがつぶやく。

「おう。あ、でも別にお前らを助けたのは同情とかじゃねーからな。ほら、ラザールのパン屋の従業員が欲しかっただけだからな」

「……そっか」

「おう、まあ、そういうことだ。俺のことはどこか遠くからやってきた奴でもうそこには帰るつもりがないっていう認識で頼むわ」

「……………」

「ん？ どした、ラザール」

「あ、ああ、済まない、少し考え事だ。続けてくれ、ナルヒト。ア  
ンタのことだ。今まであまり触れなかった故郷の話をしてくれただ  
け、というわけではないんだろう」

「ああ、その通り。こっからが本番だ。まあ、遠い別の世界からや  
ってきた遠山くんだが、今、少し面倒なことになってな。ーース  
トル」

「よろしいので？」

遠山の言葉に、ストルが片目を開いて視線を傾ける。

「薄皮一枚で頼むわ」

遠山が手のひらを開き、拳手。みんなに、よく見えるように。

「了解」

音もなく遠山の近くに歩む騎士。

すらり、腰から剣を引き抜いて。

「ストールちゃん？ 何をー」

スパツ。

ニコの言葉をかき消すように、ストールが剣を振るつ。

「あっ」

すつと、遠山が掲げた手のひらに切れ込みが入った。薄皮が裂け、毛細血管が絶たれそこから溢れるのは血ー

「な、ナルヒト、それは」

ラザールが目を剥く。



「チツ、トオヤマ、貴方……」

ストルは舌打ちを抑えることが出来ない。

「え？ え？ お兄さん？」

「兄貴……そりゃ」

「なに、それ……」

「……」

「だっ」

子どもたちすらも理解する。その異常を。

全員が遠山のソレを見た。言葉を失い、絶句する者、目を丸くして固まる者。

「白い、血」

ぼたり、しゅわり。

遠山鳴人の傷から漏れる白い血が机に垂れていく。そればかりか机に垂れた瞬間、その血は白い煙……霧になって空気に溶けていく。

「これが、今俺が抱えてる問題だ」

何か状態が更にヤバくなっている気がする。

遠山は霧に変わっていく血を眺めて呑気に思った。

「も、問題って、ナルヒト！ お前、それ、大丈夫なのか！？」

ラザールはもう耐えきれなかったようだ。牙を剥いて叫ぶ。

「落ち着けよ、ラザール。今んところは特に問題はねえ。だが、まあ、あんま樂觀視も出来なくてな」

「トオヤマ……一つ、教えてください」

「なんだ、ストル」

「貴方は副葬品の使用者、ディスクか？」

副葬品。この世界にある力持つ物品。それは遠山の力と無関係には思えない。

「んー……微妙、だな」

「微妙？」

「コレが、副葬品って奴がどうかはわからねえ。だが、普通のものではないって事だけは分かる」

遠山が首元に手を当てる。

「あ」

「はっきりと見せるのは、初めてだな」

ずっ。

首元より、引き抜かれるのは遠山鳴人最強の道具。

「あ、え？」

「お、おい、兄貴……！？」

「な、んで」

「……」

「……」

子供たちが目を丸くしてそれぞれ声を漏らす。

「キリヤイバ」

それは欠けた刃。遠山の体内から霧を引き連れて出る理外の存在。

「現代ダンジョン、バベルの大穴の中で見つかる超常の力を持つ物品、俺たちの世界では”遺物”と呼ばれている」

首元から引き抜かれた遺物は、白く冷たい霧を纏い続ける。

「遺物……」

「ストル、お前が使ってたあのチート剣。先っぽ向けただけで相手の首を吊る奴あるじゃん。アレと同じように遺物も基本的には相手にクソゲーを押し付ける力がある」

「待ってくれ、ナルヒト、頭が追いつかない」

「ああ、悪い、ラザール。シンプルに伝える。あの血は多分、こいつのせいだ」

「トオヤマ、あなたの身体に何が起きているのディスプレイか？」

「正確なことはわからないが、異常だ。本来、人の血は赤くないといけないんだ。いや、赤いことに理由があるって言うか」

遠山は義務教育レベルの知識を引き出し考察する。

「どづいつことだ？」

「俺ら人は、血が赤いから呼吸して生きていられるっつーか。うーん、まあ要はな、血が白いのに、俺がこうして普通に生きている時点でおかしいっつーか」

「……貴方が何を言っているかわかりませんが、状況が良くないことだけは理解出来ましたデイス。それで、トオヤマ、何か対策は？ 貴方のことデイス、何か」

ストルが半ばすぎるように、遠山へ問いかけて。

「いや！ なんもねえ！」

遠山が胸を張って答える。

「は？」

「参ったことに、これに関してはマジで対策がねえのよ。なんか気付いたらこんなことになってよー。多分、キリヤイバを使いすぎたせいだとは思っただが」

「対策が、ないって。ナルヒト、お前」

「怖い顔するなよ、ラザール。だからお前達に話したんだぜ。解決じゃなくて共有する為に」

周りの者と違い、遠山に不思議と焦りはなかった。

「なにを言っつて」

「俺は必ずたどり着く。欲望のままに、進む。もう止まることはあり得ない」

それは遠山鳴人の原点。遠山鳴人の理由だ。それはブレることはない。

「この世界に来て、俺は常に進んできた。止まらず振り返らず、前だけ見てきた。だから、今がある」

「ナルヒト？」

「俺の身に訳わかんねえことが起きているのは確かだ。だけど、俺がやることは変わんねえ。竜祭り、これで成功して商売を始める。そこは変わらねえ」

遠山の言葉に、ストルが机に身を乗り出す。

「トオヤマ、貴方はそれでいいのデイスか？ 怖く、ないのデイスか？」

「ストル？」



「自分の中にある大いなる力、それが自分に意図しない影響を及ぼしている、貴方は、今、自分の力に飲まれようとしているのデイスよ！ 竜祭りよりも、自分の身体のことをー」

「ストル」

「ーなんデイスか」

勢いを増していく最優の騎士は、名前を呼ばれたことで止まる。

「ありがとう」

につ、と遠山が笑う。

「ッ、今、そんなこと言われたって」

「正直、俺には何が正解かわかんねえ。今のこの大事な時期に俺のことを話するのが良かったのかどうかもわかんねえ。でも、話しておきたかった」

「貴方は、……いえ、違い、ます、ね。話してくれて、ありがとう、  
というべきなのでしょうね」

ゆっくりと、ストールが諦めたように頷く。

「ナルヒト、その身体の異常は本当にどうしようもないのか？」

「分からん。ただこのままではあまり良くねえ気がするのも事実だ。  
でも、今これは止まる理由にはなんねえ。……まあ、大体俺からは  
以上だな。……何か質問は？」

「兄貴、いいか」

「どうぞ、リダ」

「アンタは、どうしたいんだ？」

「ひひひ、リダ。お前言うようになったな。がきんちよが気をつか  
うなよ。でも、ありがとな。お前らに、賭けてほしい。俺に賭けて、  
俺と一緒に来て、助けてほしい。進むためにな」

「……ふー。だよな、兄貴。アンタはそう言うよな」

リダもまた、ストルと同じく諦めたように笑う。

「ああ、俺はこっちでお前らと生きたい。あー、まあ何が言いたい  
かというとな」

「トオヤマ、ゆっくりでいいデイス。でも、ウソはつかないで」

「あー、はいはい。……ラザール」

遠山が。名前を呼ぶ。

「ああ」

ラザールが答える。

「リダ」

遠山が呼ぶ。彼が選んで救った仲間の名前を。

「おう」

「ルカ」

「うん」

「……」

「はい」

「ロペ」

「はい……」

「シロ」

「だう」

「ストル」

「ええ」

皆が答える。その男の自我に、拡がり続け大きくなり続ける自我に冒された者たちが答える。

「俺には夢がある。たどり着きたい光景がある」

「こっ、けい？」

ルカが、男の言葉に首を傾げる。

「湖のほとりに家を建てる」

「……家」

ニコが、声を漏らす。

「そこは自由で、静かな場所だ。ゆつくりと流れる時間、優しい日差しと涼しいそよ風に満ちてる。湖は澄んで晴れた蒼空を映してる。魚が跳ねて、水面が揺れる。薪割りの音が心地よく、ふわふわの芝生は寝転ぶとほのかに暖かい」

「……」

ペロとシロがじっと、見つめる。

「何してもいいんだ、俺たちはそこで豊かに自由に生きる。誰にも奪わせねえ。誰にも邪魔されねえ。自分の人生を過ごすんだ」

「……いいな、それ」

リダが、頷く。

「俺はそこに行きたい。そついうのがしたい。欲望のままに、辿り着きたい」

遠山が心をそのまま言葉に。

真っ直ぐみんなを見る。

「俺はこの世界で生きる。この世界で進み、成り上がり、必ず夢の光景に辿り着く」

それはあの”探索者”に告げた言葉。遠山はもう決めている。何があるうと自分が選んだ世界で生きると。

「でも、1人じゃ無理だ。お前らが必要だ。力を貸してほしい。その代わり、お前らもみんな連れていく」

「……俺たちもアンタと行っていいのか？」

リダが問う。

「ああ。来てほしい。元々は俺だけの夢だった。その次はラザール、今度はお前たちみんな。俺はお前ら全員とその光景が見たい」

その自我は拡がり、冒し、そしてまた遠山に帰ってくる。周囲へ

与えた影響は回り回りで、遠山鳴人をも変える波となり。

「……今更、デイスね」

「ストル？」

水色の髪に、水色の瞳。妖精の美貌の少女が、剣を構える。剣先を上に、己の胸の前で掲げる。

――騎士礼。

「わたしは、貴方の剣デイス。貴方がそう言って、わたしが了承したのデイス。……こんな世界でそんな呑気な夢を叶えるためには敵が多いでしょう？ 使いたいなら、使えばいいデイス」

その少女は変わりつつある。愚か故に刻み込まれ、馴染んだ歪んだ正義。それは今、愚直に進み続ける強欲に当てられて。

「はい！ おにいさん！ 今のストルちゃんはおにいさんとずっと



一緒にいたいって言いたかったのよ！ もちろん、私も！ ね、ペロ、シロ」

「はい、おにいさん、それ、すごくいい夢だと思う！ ね、シロ」

「ダヴ」

「兄貴、アンタが俺たちをここまで連れてきてくれた。アンタは俺たちに見たことのないものを、手に入れることなんかできるわけもなかったものをたくさん見せてくれた。次は、どこに行けばいい？」

「……おにいさん、あの時、あなたのサイフを盗んだの悪かったけど。でも、よかったと思う。うん、リダと同じ。俺も、あなたと同じ場所に行きたい」

未来どころか今日をすら生き延びることすら難しかった弱者たちもまた、変わりつつある。

自ら考え、自ら望み、進む。強欲な男が世界に立ち向かう姿に、彼らが見るのは希望。



「……ありがとう」

夏の夢、過去との訣別は終わった。決着はついた。

ならば、次だ。

なんら好転していない事態の中でも、進むだけ。

遠山が湿っぽくなった空気をどうにかしようとした、その時。

「――誰デイスか」

ストルが剣を構える。

扉の方へ切先を向けて。

ゆっくり、扉が開く。

その向こうにはー

「やあ、やあやあやあ。ラザールベーカーの愉快的なメンバーたち。皆、元気そうで何よりだ。ああ、トオヤマナルヒト。君も、目が覚めて何よりだよ」

「あ、ドロモラ」

髭面に、上等なローブの壮年男がゆっくりと扉を開いた。

ドロモラ・バギンズ。

遠山達と協力関係にある商人だ。

「しんみりしている所悪いが、失礼するぞ、友よ。心暖まる仲間達とのお話が終わった所で、仕事の話がしたいのだが」

「ドロモラ……！？どこから入った？」

ラザールが突然のドロモラに声を少し荒げた。

「やあ、リザドニアンの友よ。仕事熱心な門番達に止められていた所を銀髪の聡明そうな女性に快く通してもらったところさ。いい友人を持っているな。私の来訪はトオヤマナルヒトの役に立つ、とのことだ。……ほんの少し彼女と話していると寒気がしたのは、ああ、まあ、気にしないでおこう」

「ドロモラ、どうしたんだよ、いきなり。なんか約束してたっけ」

「ああ、竜殺し。やはりそんなテンションか。……竜祭りまであと3日、そう伝えれば私が何を言いたいかわかるかな」

「あ」

思い出した。ドラ子の好き避け事件やら、トオヤマナルヒト会議やらで少し薄れていた危機感。

もう、竜祭りまで時間がない。シンプルな危機。

「よかった。長い眠りだったが頭の回転は落ちていないな。そう、我々ドロモラ商会と君達、ラザールベーカーは同盟関係、表向きは我々の商会の一部門だが、実質は対等な利害協力関係にある。つまり、それは一蓮托生というわけだ。君達が繁栄すれば我々も繁栄する。だが、その逆もまた、然り。だろう？ 竜殺し」

「あー……ラザールくん、ラザールくん。俺が寝てる間、結果的にはその、パンの屋台の準備って……」

「……すまない、俺は、コミュ障トカゲだ……リダのように、お前の代わりを果たそうと、ドロモラについていき、色々な商人と話をしてみたのだが、誰も話を聞いてくれなくて……」

ラザールがズーンと落ち込む。尻尾はへんにより、体を丸める。

「待て待て待て、いやいや違う違う、ほら、適材適所だから。話を聞いてくれないってのは？」

「うっ……リザドニアンと商談など出来るか、と皆話を聞いてすら

くれなくてだな」

「ドロモラ？」

「おい、そんなに睨むな、竜殺し。ラザールは努力したさ。私は君が起きるまで待った方がいいと言ったが、君の穴埋めをしようと思死だった。……努力は認めるが、結果は、な」

「ふーん。商人ってのは」

「それぞれの仕入れ業者だ。パンの原材料、天使粉を扱う商人、あのホットドッグの肉詰めを大量に仕入れる為の肉屋、それに屋台で仕えるパン窯を作る為のドワーフの工房。まあ、ドワーフの工房くらいだな、まともにラザールの話を聞いてくれたのは。だが彼らも最後は竜殺しを連れて来い、とのことだ」

「……なる、ほど。そいつらはあれか。アンタの目から見ても要な商人なのか？」

「仕入れ業者に関しては私の商人としての誇りにかけて。品質と原

材料費のバランスで言えば間違いない。問題は交渉の部分だ。どの業者との打ち合わせも正直、竜殺し、君の名声と交渉力を当てに選定していた。……まあ、この件に関しては私も謝るさ。帝国民のリザドニアンへの偏見がここまで強いものとは思わなかった」

「すまない……ナルヒト、やはり、俺は……足手まといだ」

しょんぼりトカゲになったラザールが丸まったまま、つぶやく。  
ペロとシロが無言でヨシヨシとその白い鱗を撫でていた。

遠山はそれを見て。

「ひひひ」

笑う。その笑いはいつもと違う、明確な怒りが込められて。

「ドロモラ、今日の予定は？」

遠山の言葉に、ドロモラがふっと笑う。



「竜殺しを引き連れての我々を舐め腐った連中との再度の商談、それ以外にあるまいて」

髭面も笑う。彼の日焼けした顔、おでこにつつすらと青筋が立っていたのを遠山は見逃さない。

「ひひひひひ」

「ははははは」

愉快に笑う男2人。

「よし、決めた」

「ああ、決めた」

そう、決めた。

「俺たちを」

「我々を」

「舐めた連中から全て筆りとりに行こうか」「

竜祭りまであと3日。

冒険都市アガトラの商人。いや、彼らを束ねる商人ギルドにとつての最悪の一日が始まるうとしていた。

106話 拡大する自我（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！

コミカライズも正式発表されました！是非しば犬部隊のTwitter覗いてみてください。ラザールがラザールなんだよ。

107話 冒険者の舌 その

「3日前、遠山鳴人が眠っている時。冒険都市アガトラ”商業地区”一等地、モロウ商会の応接室にて」

「結論として当商会はあなた達との契約に多大なる疑問を抱いていると申し上げるしかありませんねえ」

分厚いメガネに、神経質そうな細い目。

細身の身体を上質な黒革のウエストコートに包んだ男がソファに深く腰掛けたまま声を伸ばした。

「そ、れは」

「ほっ?」

対面に座る白い鱗のリザドニアンが目をはちくり。

リザドニアンと並んで座る髭の壮年男性が日焼けした顔をわずかに顰めた。

薄い茶色の木の内装、赤い絨毯に茶色革のソファ。調度品は過剰なほどに清掃され埃一つない。

「ドロモラ氏、貴方の辣腕は我々モロウ商会、ひいてはモロウ商会会長、スピナ・ヴェン・モロウ会長も高く評価しています。こここのところの上流階級市場をほぼ独占しているティタノスメヤバブルを引き起こした手腕をね」

ウエストコートの黒と金の刺繍をなぞりながら、その細身の男が目線をドロモラへと向ける。

「支店長殿、過分な評価をどうも。なるほど、我々を評価してくれているようだ。ふむ、ならば解せないな。てつきり私はこの取引は互いに気持ちよく完了すると思っていたのだが」

「ええ、我々もですよ、ドロモラ氏。天使粉の大量取引。確かに帝国広しといえど、天使教会からの信任が当商会ほど厚い許可業者はいないでしょう、我々を取引相手に選んだ貴方は正しい」

慇懃無礼な物言いは恐らくわざとだろう。細身の男の声色には嘲りと余裕が混ざり合っている。

「では、どういうことかな、支店長殿。なぜ、疑問を？」

「貴方の隣にいるソレ、ですよ」

その男が、心底不愉快そうに、汚物へ向ける視線をリザドニアンへ、ラザールへと向けた。

「……………」

「彼が何か？」

固まるラザールが何かを喋るより先に、ドロモラが声を紡ぐ。

「彼が何か？ ははは、ドロモラ氏、ご冗談を。正直ソレをこの応接室に通すかどうか迷ったくらいです。リザドニアンとは聞いて

いない。申し訳ないが、粗暴なトカゲがいる組織と取引など、当商会の格に悪い影響を及ぼしかねない」

もはや形式上ですら、その細身の男はラザールに対する悪意を隠そうとすらしない。差別種族へ向けて、心のままに侮蔑を口にする。

「……自分が何を口走っているのか理解しているのかな。支店長殿」

ドロモラの怒気を孕んだ声、しかし、細身の男は動じない。細くて小さな鼻から、はんと小さく息を吐きつつ答える。

「ドロモラ氏、見ましたよ。天使粉の使い道、貴方達ドロモラ商会の事業計画書。竜祭りでパンの屋台？ はははは、いやいやいや、これだけならまだ良い。田舎者がよくやりがちな、泡銭を使つての飲食で一山当てようという浅はかな考え方ということまで可愛らしさすら感じます、だが、これはなんですか？ 肝心のパンの作り手が、この、リザドニアン？」

紙屑を扱つような手つきで、長テーブルの上に放り投げられたのはいくつかの書類。それには、ドロモラがこの商会との取引のために用意した竜祭りにおいての事業計画が細かく丁寧に記載されている。

「……………」

「何か問題が？ 彼の腕は本物だ」

ドロモラの言葉に、細身の男が目を見開き立ち上がる。細い鼻を赤く染めて、ぱんつと机を叩いた。

「リザドニアンのパン屋など！ 考えただけでも穢らわしい！ 下級市民と違い、上流階級の皆様がそんな穢らわしいものを食物として扱うとでも？ 当商会の顧客や取引先は上流階級も含む富裕層中心！ リザドニアンのパンなどに関わること自体、リスクなのです」

対等な取引相手に向ける言葉ではない。怒りすら感じるその言葉の中には明確にラザールへの敵意がみえている。

帝国民の差別感情は根強い。



「……ドロモラ、やはり」

「……ならばどうしてこの席を設けてくれたのかな。暇ではないの  
だろう?」

力なく頂垂れるラザールを制し、ドロモラが冷静に淡々と言葉を  
告げる。

その目には商人としての冷静さと、それでも隠しきれない相手へ  
の不快感が揺蕩う。

「ええ、その通り。ですが、我々も商人。あなた達がどれほどの誠  
意を見せてくれるか、それを確認してからでも結論は遅くないと思  
います」

ふっと、細身の男から苛立ちや不快感の色が消える。

懐から取り出した数枚の紙、ドロモラの計画書の上にそれを広げ  
る。

「これは……」

「天使粉のキ口単価表です。1キ口金貨5枚。払えない金額ではないでしょうか？」

「……暴利とは理解しているのだな」

「何か問題が？ ああ、もし当てがあるのなら他の商会と取引してみては？ ……出来るものなら、ね」

細身の男とドロモラ、2人の商人が無言で視線を合わせる。言外の話、ここでは先に動揺を見せたものが敗れる――

「天使粉が、1キ口金貨5枚！？ ドロモラ、ありえない金額だぞ！ 市場で買えば、高くても銀貨1枚するかしないか……50倍の金額だ！」

動揺しまくりの純粹トカゲが慄いた。ドロモラが無言で額を抑えて目を瞑る。

「ふふふ、ん、んー？」

細身の男がこれ幸いとばかりに笑い出して。

「リザドニアン、立場を理解しているのかあ？ その卑しい小さな脳みそで考えろ、これは我々商会のリスク込みの金額だ。お前のような呪われた種族がいる薄汚い商会と取引してやろうというのだ。お前だよ、この商会の足を引っ張ってるのはな」

ハンカチで鼻を抑えながら、ラザールに向けてわかりやすい嫌悪を向ける男。

ラザールが目をぱちくりしながら、勢いを無くしていく。尻尾がへんによりと落ちていて。

「な……ド、ドロモラ、市場から天使粉を買うというのは」

「……これは私の予想だが、今市場には天使粉の流通が異様に少ない。大方卸し元である商会が売り渋りをしているのだろう。竜祭りというわかりやすい商機の為にな」

ため息混じりにドロモラが告げる。商人同士互いにやりそうなことは大体見当がつく。

「ははは、ドロモラ氏は話が早い。トカゲ、そういうことだ。お前程度の低脳が思いつくことなど、我々に通用すると思ったか？  
…ドロモラ氏、いかがいたしますか？」

「……本題に入らないか？ 支店長殿」

細身の男のニヤついた顔、ドロモラが静かに俯きながらも組んだ手の隙間から視線を投げた。

「はは、流石は商人ギルドでも一目置かれている新進気鋭の商人だ。ええ、もちろん。会長から言伝を得ています。ええ、我々モロウ商会は値段交渉を聞いてやらないでもない、条件次第だね」

「？ ？ ？」

状況がまるでわからないラザールがキヨロキヨロと目線を泳がす。

「大方予想はつくが、聞かせてもらおう」

「簡単なことです。ドロモラ商会の持つティタノスメヤの仕入れルートと販路拡大、それを当商会にお譲り頂きたい。ああ、もちろん、業務提携という形でも結構ですよ」

「ほづ……」

ドロモラがこの場で激昂しなかったのは偏に彼の豊富な商人としての経験故。

その言葉は、ドロモラ商会にとって命を寄越せと言われているのと変わらない。

「この条件を飲んで頂けるのなら、天使粉のキロ単価、いくらか譲歩する準備があります。……聞いたところによると、ドロモラ商会はやけに今回の竜祭りに力を入れているようで……一商人としては、そんなトカゲの作るパンに賭けることなど正気の沙汰とは思えません……」

ニヤニヤし、首をぷらぷらと振りながら言葉を紡ぐ細身の男。理解して言っているのだらう、そんな提案に乗れるはずがないということ。

「それはこちらが決めることだ。ふむ、つまり、実質うちの生命線をそちらに渡せば天使粉を売る気がある、というわけだな」

「ええ、シンプルな話でしょう。いやいやいやいや、ドロモラ氏、正直我々も手を焼いていたのですよ。テイタノスメヤという商材の確保と独占。あれはやられました。ドロモラ商会のおかげで歴史ある我が商会の上流階級市場への影響力も最近は落ち目ですね……目の上のたんこぶ、いや失敬、敬意を払うべき強敵であるあなたとこうして取引出来るのは、望外の幸運でした」

「手の込んだことだな。この様子だと、他の商会も既に天使粉の流通に関しては一枚噛んでいるのだらう？」

「はい、その通り！」

悪びれることなく男が言い放つ。

つまり、それは商人ギルドの全てがドロモラ商会を潰そうとして

いることに他ならず。

「な、そんなのフェアじゃない！」

純粹トカゲがおどろきのままに声を張り上げた。

「はあ？」

「リザドニアン、の脳みそが小さいというのは事実だな。なんで、お前、自分がフェアな対応をされると思えるんだ？」

「我々がお前たちのような小虫とフェアな取引をするわけないだろうが。薄汚い呪われた種族め。理解しろ、貴様がドロモラ商会の足を引っ張っているんだ。リザドニアンがヒトと同等のつもりかよ」

レーザーが固まる。赤い目をぱちり、ぱちりと瞬きさせた後、力なくソファに座り込む。

「……す、まない、ドロモラ、俺は、俺がー」

「ラザール」

ドロモラがそれ以上先は言わせなかった。

「……」

ラザールがしょんぼりと座り込んだまま黙る。それを見て満足げに細身の男がウエストコートの肩を払って。

「さて、どうしますか？ ドロモラ商会。感謝してほしいものです。選択の余地を与えているのですから」

「一度話は持ち帰らせてもらう。それでいいかな」

「ええ、良いお返事を期待していますよ。ですが、我々も暇ではない。3日以内にお返事を頂けない場合、この話はなかったことに」



……  
……  
……  
そして現在、冒険都市アガトラ商業区にて

「と、まあ、このような感じだったな。ラザールはよく我慢した。彼がその気になればいつでも殺せたものをな」

「ふーん、そうか」

街を歩きながら遠山はドロモラからきちんと聞いていた。

竜祭りの前にやらなければならないことが一つ決まった。

「ほう、思ったより冷静だな、もう少し怒ると思っていたが」

「そう見えるか？」

ドロモラの言葉に、遠山がするり、問いかける。その顔にはいつもの薄ら笑いも、不機嫌そうな目つきも、何も無い。

無。

遠山の顔から表情が抜け落ちていた。

「……恐ろしいものだな。連中に同情するよ」

「すまない……ナルヒト、俺がりザドニアンだったばかりに」

隣を歩くしょんぼりトカゲがつぶやく。

ずるずると、先ほどから街の石畳に尻尾をひきずって。

「気にすんな、ラザール。ヒトには得意不得意がある。魚に地面を歩けって言う方がバカなんだよ」

「どづいう意味だ？」

「あとで分かるさ」

「トオヤマ、トオヤマトオヤマ！ 私いいことを思いつきましたデイス」

遠山の一步先を歩いていた水色髪の少女がくるりと振り向く。

話の途中、何度も舌打ちをしていたストルだ。明るいい顔でにこっ  
ーと笑う。

「あまり参考にはならない気がするけど、はい、ストルちゃん」

「皆殺しにしましょうー！」

ぺかーっと光り輝く笑顔で、最優の騎士が笑う。今までどのよう  
に問題を解決してきたのかがよく分かる。

「うーん、バイオレンス。教会の教育には痺れるね。良い所を伸ばす、伸ばして伸ばして伸ばしまくる。その結果がこれか」

「えへへ。褒めても何も出ないデイス」

てれてれと頭を掻くストル。遠山がレーザーに視線を向けて。

「レーザーくん、この子が暴走しないように見張り宜しくね」

「ええ……」

全てを押し付けられたレーザーが力なくつぶやいた。差別されることよりもストルの面倒を見なければならぬことの方が負担が大きそうだ。

「む、トオヤマ。今、私のことバカって言いましたか？」

「言っつてねえよ、バカ。あ、言っつちゃった。まあいい、それよりス

トル。これ」

「なんデイスか？ これ」

「手紙。仕事を頼みたい。それを、天使教会の銭ゲバン所まで届けてくれないか？」

遠山が話の流れを変える。小さく折り畳んだ便箋をストルへ渡して。

「ふーん。……これが私の得意な環境、という奴デイスか？」

「冴えてるな、その通り。頼んだ、これはお前にしか頼めない」

「承知致しました、我が審問官殿。では、私はここで」

野生の勘で何かに気付いたらしいストルがニヤリと笑う。並んで歩く列から外れて、すっと雑踏へ消えていく。

「ナルヒト、ストルに何をさせるつもりなんだ？」

「まあ、ちょっとな。んで、ラザール、お前にも頼みたいことがある。この紙に書いてある”お使い”を頼みたい」

同じように、遠山が次はラザールへと紙を渡す。

「お使い？ …… ああ、なるほど」

「できるか？ …… 影の牙」

「ああ、こつこつのは得意分野だ」

ヒトにはそれぞれその能力が活きる領域がある。ラザールのそれは決して商人との交渉の場ではない。

「じゃあ頼む。お使いが終わったら商会で落ち合おう」

「了解、審問官殿」

どぶん。

底無し沼に沈むかのように、ラザールが黒い影の中に消えた。

「おおつ？ ラザールが消えたぞ。トオヤマナルヒト、彼らに何をさせるつもりだ？」

「ああ、言っただろ？ 魚にはよ、水の中で思いっきり泳いでもらおうじゃねえか」

そう、これは適正の話だ。

ラザールにはラザールの、ストルにはストルの。

そして、遠山には遠山の。

ヒトは誰しも与えられているものだ。その能力の使い所というも

のを。

「……ふむ。彼らは魚か。では君は？」

ドロモラの何気ない呟きに、遠山が立ち止まる。

「決まってるだろ。毒虫を餌にする気持ちの悪い生き物だ」

すうっと、開かれ、半月のように歪む細く、鋭い目。濁った茶色の虹彩に白い靄が渦巻く。

その目は、ヒトがしているものではなかった。竜よりも残忍さに満ちて、化け物よりも不気味なそれ。

中から何かが今にも溢れて漏れ出すような目だった。

「……気の毒なことだな」



嗤う遠山を見て、ドロモラがため息をつく。そして心から、心から彼は思った。

敵でなくて良かった、と。

2人の視線の先には豪華な石造りの建物。

目的地、モロウ商会アガトラ本店が構えていた。

107話 冒険者の舌 その（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！

コミカライズが本日よりコミックガルドアプリで先読みが始まりました！しば犬部隊Twitterで告知してるので是非ご覧くださいませ！

遠山が遠山でラザールがラザールなんだよな。

108話 冒険者の舌 その

…  
…

「ようこそ、いらっしやいました。ああ、お早い再会で何よりです。  
ドロモラ氏」

応接室。細身の男が戸棚の宝石を磨きながらこちらを振り向く。

商会にたどり着いた後、案内された部屋は広い。

部屋の至る所に置いてあるショーケースには宝石やマネキンに付けられた装飾品が豊富に飾られている。

「ああ、支店長殿。なに、やはり色々考えたのだが、モロウ商会との取引は我々にとって必要不可欠と結論づけてね。……今日はまた別のツレがいるのだがよろしいかな」

ドロモラが声を穏やかに、遠山を紹介する。

「ほう！ ああ、黒髪に奇妙な軽鎧、もしかあなたがかの有名な竜殺し殿ですかな」

香油で整えられた髪の毛、細身の体をきちりと包むウエストコート。服装から裕福なことが窺える。

「ーどうも、はじめまして、えーっと」

「ミハエル・クラウスと申します。当商会アガトラ本店の支店長を任されております。どうぞ、お掛けになってください」

恭しく遠山に一礼する男。事前に聞いていたラザールへの態度とはかなり違うように感じた。

「いいソファですね」

勧められた座り心地を確かめ、遠山がさらりと告げる。ハリのあ

る革は適度に弾力を返してくる。

「おや、わかりますかな。王国から仕入れた一品でして。流石は竜殺し殿。お目が高い」

「いえいえ、そんな。クラウドさんはこちらで働かれて長いんですか？」

「ええ、そうですね。そろそろ20年くらいにはなるかと。……それで、ドロモラ氏、いいお返事を聞かせて頂けるのでしょうか」

世間話をする気はないようだ。

対面に座る細身の男。モロウ商会本店支店長、ミハエル・クラウドがすつと細めた目をドロモラに向ける。

「ふむ。どうするかね、竜殺し。君の意見が聞きたい」

「そう、だな……たしかにここの商会の力は建物からよく分かる。竜祭りまでに必要な天使粉の調達なんてわけないだろうな。……流通に制限がかけられてる今、俺たちはどうしてもこのモロウ商会さんに力を貸してもらう必要があるわけだ」

遠山がティーカップを運んできてくれた店員さんに頭を下げながら答える。

遠山の言葉に満足したように支店長が頷いた。

「ええ、ええ、そうですね。さすがは噂に名高い竜殺し殿。よくお話がわかるお方で。ただ、私も正直なところ心苦しいのです。商機的なものがあるとはいえ、この天使粉の高騰、申し訳なく思っております。我々モロウ商会の会長もひどく心を痛めております」

「へえ」

ピコン。

メッセージが流れる。遠山が表情を変えずに彼だけに見えるそれを確認した。

【スピーチ・チャレンジのヒントが追加されました。】モロウ商会

には会長がいる。天使粉の独占は支店長の独断ではないらしい】

「ドロモラ氏、ちょうどいい。前回の折衷案は考えて頂けましたかな？」

「キロ単価金貨5枚の値下げだろうか？ それならー」

ドロモラがソファから身を乗り出して。

「おやあ？ 金貨5枚……？ あー、あー！ あれね、はは、いやあ、いやいやいや。ドロモラ氏、あれはね、この前の相場での話ですよ」

支店長が首を傾げて、大袈裟に声を上げた。

「なに？」

「いま、今はね、キロ単価金貨20枚です。ふ、ふふ。いや、いやいやいや、商売とは難しいものですなえ。あの時ああしてれば良かった、いや、私もねえ、そういうことたくさんありますよ」

笑い、それを堪えているように見える。

明らかにドロモラを舐めて、からかっていた。

「……まともな取引などする気はない。あくまで君達の狙いは我々の貴族階級への販路の奪取というわけか」

ヘラヘラとした敵意。

ドロモラが顔の皺を深くして。

「いやだなー、ドロモラ氏、そんな言い方はないじゃないですか。……いや、でもまあ、そうですね。本来であればあなたのような木っ端商人、我々の商會に踏み入れることすら出来ませんし、いいんじゃないですか？」

「随分と言うものだ。あなた達には礼儀というものが無いらしいな」

「礼儀とは弱者が強者に対して行うべき責務ですよ。圧倒的な強者」



はね、何をしても許されるのです。こと、商売という場においてはね」

急に支店長の雰囲気が変わった。

傲慢な言葉、それはその男にとっての真実なのだろう。

「見解の相違だな。商売とはつまるところ信用と信用の交換に他ならない。あなたとは趣味が合いそうにない」

「ははは、だとしてもあなた達ドロモラ商會が竜祭りに参加する為には、どうしても大量の天使粉が必要でしょう？ ああ、そうだ。こういうのはどうですか？ あのリザドニアンのパンなど馬鹿げたことはやめて別の商材を探してみれば？ いやあ、いい案だと思いますけどねえ」

「……一度手を組もうと決めた相手を、上手くいきそうにないからやはり辞めるなど恥ずかしいことが出来るものかよ」

思ひきり下ドロモラがつぶやく。遠山はじっと、そのやりとりを見守る。

「はははは、田舎商人の本性が出ましたな。情などという安っぽいものに振り回されてるようであれば、当商会では丁稚すら務まらないでしょう」

「……」

もはやその男はドロモラに対する無礼を隠そうともしていない。よほど自分の立場の強さを信じ切っているらしい。

「さて、ではドロモラ氏。どうしますか？ お決め頂けるんですね？」

にや、にや。

骨張った顔にはりついた笑顔、それはどこまでも愉快そうに――

「少しいいですか？」

遠山が声を上げる、その顔には割とさわやかな笑顔が同じく張り

付いていた。

「おや、これは恐ろしき竜殺し殿。なにか？」

「いえ、良いコートだな、と。最近、友人の家の使用人が似たデザインのものを着ていたもので」

「……ほう」

その言葉の遠回しの意味が伝わったらしい。支店長が体の向きを遠山の方へ向ける。

友人の家の使用人。竜殺しとある竜が友好的な関係にあるとモロウ商会は理解しているらしい。

「強者、なるほど。確かに貴方たちの商会は強大ですね。この店構えを見れば分かる。工芸品や装飾品、青空市場で見れるものとは種類や出来が大違い、おまけに客層も良い。服装や会話からすると貴族もいるのでは？」

この商会に入った瞬間の顧客層や会話を遠山は注意深く監視していた。

現代でも似たような雰囲気を感じたことはある。高級デパートの外商がたまにバベル島のセレブ連中に商売しているのと同じ雰囲気だ。

「ええ、さすがは竜殺し殿。その通りです。当商会の歴史は古く、アガトラ建立時よりあったと聞きます。モロウ商会を歴代率いるモロウ一族も帝国建国時から、貴族に重用されてきた商家。帝国広しと言えど我が商会に並ぶ組織はありませんよ」

遠山の言葉に気をよくしたらしい支店長が口数を多くした。

「へえ、そりゃすごい。まさに歴史と由緒ある強力な商人。この街で商売を上手くやっていくには貴方達を敵に回すわけにはいかないわけだ」

「ええ、まさしく、その通りにて。竜殺し殿、貴方はやはり話が分かるお人のようだ。貴方のことを調べさせて頂きましたが、聞けばドロモラ商会の飛躍の要因も貴方だとか」

「なんのことですか？」

「ははは、駆け引きなどおやめください。テイタノスメヤ商材の事ですよ。いや、いやいやいや、一介の冒険者にしておくのは惜しい。テイタノスメヤという需要と供給が絶妙に合わない、しかし確実に商品価値を秘めている存在にいち早く気付き、それを利用した。…実は、私もドロモラ商会とこうして取引の場を設けたのも、貴方がいるからなのですよ」

「おい、君、この場でそんな話は」

「ドロモラ」

「……………」

遠山が視線でドロモラの言葉を止める。

その様子を支店長は満足げに見つめる。ドロモロ商会と遠山鳴人の距離が開くのは彼の意中なのだろう。

「賢い選択です。ええ、ええ。竜殺し殿、貴方のお気持ちはよくわかります。おそらくですが、貴方様は今、我々モロウ商会にあまりいい感情を抱いていないのでは？」

「あはは、それはストレートな話ですね。支店長さん。どうしてそう思っんですか？」

遠山はその言葉に注意深く耳を傾ける。

「決まっていますよ、竜殺し殿」

遠山鳴人にとっては、ここが分水嶺だった。

この男の返答次第で全て決まる。

取引の駆け引きとしてこの商人たちと手を組むか、それとも叩き潰すか。全てが。

「テイタノスメヤの仕入れ販売ルートの譲渡。そんなものを要求されて気分が悪くならない訳がない。ですが、どうかお許しを。これは駆け引きの妙にございます。先日、ドロモラ商会にあのような要求したのはひとえに貴方です。貴方をどうしても取引の場に引きずり出したかった。敬意、と受け取って頂ければ」

「――」

支店長の言葉に、認識に、ラザール遠山鳴人の友人のことは一切登ってこなかった。

つまり、ラザールへの言葉は駆け引きの為ではないもの。ただのこの男の本音だったのだろう。

ああ、もういい。

遠山鳴人は選択する。

ピロン

【スピーチ・チャレンジが開始されます】

【新たな技能を複数習得しています。スピーチ・チャレンジを優位に進めることが可能です】

こいつらは、要らない。必要ない。

「竜殺し殿、この度、モロウ商会から貴方への提案がございます」

「ー提案、ですか」

「はい、当商会の会長にして、商人ギルドのマスター、スピナ・モロウは貴方に強い興味を抱いています。これは良い話ですよ、竜殺し殿」

「話が見えないな。支店長さん、つまり、どういことだ？」



「貴方を我が商会に迎え入れたい。当商会会長にして、商人ギルドマスター、スピナ・モロウの意思です、認めているのですよ、彼女は。貴方の価値を」

臆面もなく、細身の男。モロウ商会本店支店長、ミハエル・クラウスが言い放つ。

「人生は選択の連続です。こんな機会そうそうにない。200年ぶりの竜殺しといえど、貴方は奴隷の身の出のはず。これはチャンスなのです。竜殺し殿」

深まる笑顔、恩着せがましい言葉。自分の吊り下げた餌に魚が食らいづくに決まっていると過信した顔。

【INT値が6以上なのでアイデアロールが発生します。スピーチ・チャレンジヒント”ミハエル・クラウス”の発言】

遠山鳴人は考える。目の前の男の潰し方、いや、このモロウ商会とやらの殺し方を。

「チャンス、ですか」

「……………」

「ええ、チャンスです。ヒトにはそれぞれ能力を発揮出来る居場所がある。あー、まあ、中には先日ここに来たりザドニアンのようにどこに行っても忌み嫌われる使えない劣等もいるのですがね。少なくとも、貴方の居場所はそこではない」

「貴様、口が過ぎるぞ」

ドロモラが低い声を押し殺してつぶやく。

「お静かに、ドロモラ・バギンズ。ぽつと出の田舎商人め。今、私は竜殺し殿とお話をしている。竜殺し殿、商人ギルドマスターは貴方を評価している。見ていたのですよ、彼女も。貴方の選択の勇姿を」

「へえ」

「竜大使館でございます。竜殺し殿と蒐集竜様の婚姻の儀の場に当  
商会の会長も臨席しておりますたゆえに」

あの時だ。ドラ子の屋敷に初めて、拉致られた時。

街の有力者が集められていた議場を思い出す。今考えてみれば懐  
かしい、少し遠山は笑う。

「ああ、なるほど。あの時確かに商人ギルドマスター、という方も  
いらっしやいましたね」

「ええ、彼女は歴代でも最年少にして最優の当主と呼ばれておりま  
す。モロウ商会を更に飛躍させていく才を持つ特別な存在です。そ  
んな彼女に貴方は見出されたのですよ、竜殺し殿」

「ああ、そりゃ、光栄なことですね。じゃあ支店長さんはその会長  
さんの指示を受けて今俺をスカウトしてくれてる訳だ」

「はい、その通り。モロウ商会においては貴方には会長付きの仕入  
れ担当のポストを用意しております。今の環境のような使えないグ  
ズばかりでの仕事はもう終わりです」

「ははは、そりゃいい。あれ、でも驚いたな。こちらの仕事環境をご存じで？」

「ええ、ええ、大変失礼ながら当商会とコネのある業者、そして冒険者ギルドから貴方のことをお調べさせて頂きました。驚きましたよ。あのリザドニアンと流れの孤児院出身の冒険者、そしてスラム街のガキども。いや、驚異的です。そんな下賤なコマだけであのテイタノスメヤを定期的に供給出来るとは」

【スピーチ・チャレンジヒントが追加されます。”孤児院出身の冒険者”。ヒントが全て揃った為、新たな事実が開示されます】

【商人ギルド、モロウ商会は”天使教会”と貴方達のつながりに気づいてはいません。主教・カノサ・ティエルフィールド羽達を利用してばら撒いた欺瞞情報を真実と認識しています】

遠山の確信がメッセージとなって流れる。

ストルのことを天使教会の騎士とは認識していない。

やはりだ。

予想通り、彼らは遠山達が”天使教会”と深い関係にあることまでたどり着いていない。

ラザールへの対応の時点でなんとなく予想はついていたが。

遠山が更に笑みを深める。

「ーいやあ、流石だ、モロウ商会。そこまで調べられているとはなあ。ええ、こちらも苦勞が絶えなくて。リザドニアンは扱いが難しく、孤児院出身の冒険者はバカ、スラム街のガキどもはすぐに泣いたり取り乱したりだね。ーええ、ほんとに」

「でしようとも、でしようとも、分かりますよ。劣等は優秀なもの足を引っ張ることしかない。社会とはつまり優性と優性が集い、一部の優れた者によって取り仕切られるべきです。貴方とは話が合いそうだ、竜殺し殿」

「ですね、支店長。なるほど、これで俺は一気に勝ち組の仲間入り。

人生はこともなし、正しい選択をしたってわけだ」

遠山の張り付いたニコニコの顔。

「その通りです！ 我々は貴方を歓迎致します。そして約束しましょう。貴方のこれから的人生の豊かさを！ モロウ商会という大きな力の庇護のもと、貴方はこれから勝者として人生を歩めるのです」

支店長もニコニコしている。

「ああ、そりゃ素晴らしい。ーートカゲやガキのお守りをしなくていいってわけだ。確かにそりゃいいな、最高だ。俺はモロウ商会の命令を聞き仕事をする。商会はそれで儲ける。俺は面倒を見てもらえる、ああ、魅力的だな」

いつになく遠山の声は高めだ。彼をよく知る人物ならその様子がいかにおかしいかすぐにわかる。

「ははは、これまでご苦労様でした。いや、いやいやいやいや。貴方の気苦労は想像だにすら出来ません。あのような汚らしい種族やどんな病気を持つてるかわからないスラムの孤児。そういうのは無縁な生活が待っていますよ。それではすぐに雇用契約書を用意

させます。どうぞ、お茶を召し上がりながらお待ちください。ああ、それと」

だが、支店長は遠山のことをよく知らない。竜殺しのことは知っていても、遠山鳴人のことは知らなかった。

「……………」

「ドロモラ氏、無事商談は完了しました。もう貴方にはなんの利用価値もないのでどうぞお引き取りを。ああ、まあ、折角ですから最後にお茶くらいはどうぞ？ 貴方の商会では出せない高級品です」

押し黙るドロモラに支店長がニヤつきを向ける。

「……………」

「おや？ おやおやおや、どうしたんですかあ？ ドロモラ・バギンズ？ 勧められたお茶を飲めもしないとは？ ははは、まさか我々を恨んでらっしゃる？ ダメですよ、これは正当な取引です。竜殺し殿は正しい選択をなされた。ただそれだけのことです。貴方達のような泥舟ではなく、モロウ商会というより大きく素晴らしく

強い組織を選んだ。貴方達は負けたんですよ」

支店長の言葉には熱がこもる。

どうやらこのモロウ商会はよほどドロモラ商会が、ドロモラ・バギンズという商人が目障りだったのだろう。

「……負けた、か」

ドロモラがぼそりとつぶやく。

「ええ、そうです。これでドロモラ商会の生命線もおしまい。ああ、ご安心を。上流階級へのテイタノスメヤ素材商品の需要はしばらく続くでしょう、その供給は我々、モロウ商会とこちらの竜殺し殿がきちんととことおりなく行います故に、ねえ、竜殺し殿。いえ、トオヤマ氏」

勝利を確信した支店長。

ドロモラ商会は既に竜殺しの協力なしでは立ち行かない。その認識のもの、この笑顔。



「ああ、そうだな。悪いな、ドロモラ。俺ここの家の子になるわ。高そうなお菓子に、高そうなティーカップ。うん、いい香りだ、飲まないのか？ ドロモラ」

「ははははは、竜殺し殿もお人が悪いなあ。この田舎者はお茶の作法も知らないのでは？」

おどけた遠山に気をよくしたらしい支店長が同調する。

今、ミハエル・クラウドは絶頂にいる。この仕事とモロウ商会は彼の全てだった。

モロウ商会という餌に竜殺しは当然のように食いついた。彼はそれを信じて疑わない。

当然だ、彼の認識ではモロウ商会に見出されるということはこの上ない幸運と名誉なことなのだから。

「……………」

「飲まないんならもうござ、お先に失礼するぜ、ドロモラ。ああ、支店長殿、これからのモロウ商会と俺の良い関係性を願って、頂きます」

遠山がカップを摘み上げ、支店長に目配せする。

「ええ、どうぞ、どうぞ。さて、ドロモラ氏、そろそろお引き取りを。ああ、もう貴方と話もないのですぐに出ていかれないのなら、うちの雇っている冒険者に連れていかせてー」

支店長がヘラヘラした笑顔を浮かべつつ、ドロモラに詰め寄る。勝利の興奮から薄い色素の肌はほんのり赤くなっていた。

勝者の傲慢を隠そうとしない態度のまま、ドロモラを見下ろして

絶頂の中、憎き商売敵に向けて、完全勝利宣言をー

「ー不味い」

「ーは？」

どかり。

遠山鳴人が足を組み、ソファに深く背中を預けたまま傾けたカッ  
プを睨んだ。

「なんだこれは？ ひどい味だ。豚の小便でも溶かしてんのか？」

もう、遠山鳴人の顔には笑顔は、なかった。

「なに、を、竜殺し？」

「なにを？ まさか今の言葉の意味が分からないのか？ お前のよ  
うな奴でも店をひとつ任せられるんだな」

遠山の目が、ずっとせばまる。

「だから、何をー」

「やめだ」

ため息混じりに漏れた遠山の声、愛想のかけらもない。

「こんな不味い茶を平気で出す連中の下につくなんぞ考えられねえ。  
なあ、ドロモラ。ひどいとは思わねえか？」

「……クククク、ふ、くくく、はははははははは！ 悪辣なる友よ！ まったく私はどこが笑い所なのかずっと困っていたぞ。ああ、だが、確かに。飲まずともわかる。これはドブ水以下のお茶だろうな」

肩を震わせて笑うドロモラ。おそらくかなり前から気づいていたのだろう。沈黙は笑いを必死に堪えていたのだ。

「貴様ら、貴様ら、この私を！ 誰だと思っている！！ 愚弄は許さんぞ！ おい！ 誰か！ こいつらをつまみ出せ！ 早ー」

「騒ぐなよ、三下」

「ーヒッ」

いきりたっていた支店長がすとんとソファに座り込む。遠山が一瞥しただけで腰が抜けたかのように。

遠山の細めた目の中でとぐるを巻く白いもや。

それは、あの夢の中で手に入れた、たどり着いてしまった領域。

「お前達の下につくのは辞めた。だが、まだ商談は続いている。俺達はお前らの天使粉が欲しい。だが、こちらとまともに取引する気もない連中とまじめに話す気も起きなくてな」

「な、な、なにを、した？　なんで、私は、こんなに、震えて……」

ガタガタと小刻みに体を震わせる細身の男。それはまるで”竜”や”超越者”を前にしたヒトの様子と同じで。

「さあ？　なんでだろうな。さて、あまりこれ以上お前と同じ空気を吸いたくもない。本題に入ろうか。お前らが独占している天使粉、それが俺たちは欲しい」

「ばか、バカが！　お前らなんぞの要求を受け入れるわけがないだろうが！　おい、冒険者！　仕事だ！　早く来い！　こいつらをつまみ出せ！」

支店長が一気に喚く。おそらく用心棒に冒険者を複数雇っているのだろう。

金とは力だ。

商会は金で武力を買うことが出来る。

「ー時間だな。あー、支店長殿、あまりヒトを呼ばない方がいいぜ」

遠山がどうでも良さそうにつぶやく。

「な、に？ 何が、言いたいんだ!？」

「優秀な隠密の仕事が終わったってことさ、ほら、だから静かにしていた方がいいぜ?」

遠山が、口元をいっと歪め、指を一本、ピンッと立てる。

同時だった。

「同感だ、審問官殿」

心地よく耳と脳と腹に溜まるような低音ボイス。聞き慣れた友人の  
声が響く。

どぶん。

応接室の入り口に影が溜まり、ブクブクと膨れる。ドライアイスの  
のように溜まったそれがすぐに薄れていく。

その中から現れたのは――

「は？ り、りザドニアン、どこから……？ な、なんで？ どう  
やって！？」



狼狽える細身の男、それに向かって白い鱗を持つ隠密が赤い瞳をにまりと細めて。

長くて細い指を口元に当てて、しーっと。

「お知らせだ、貴方にとってはあまり良くない類のな」

影の牙が、笑う。片手に、何かの書類を携えて。

それが何か理解したらしい細身の男の顔が真っ青に変わっていった。

108話 冒険者の舌 その（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！

コミカライズの連載も始まりました！ 漫画でも遠山鳴人と一緒に異世界オープンワールドの冒険をお楽しみ頂ければ幸いです。

書籍版もそろそろ発売。WEBも更新していくのでよろしくお願ひします！

109話 冒険者の舌 その

「おま、おま、おま、それは

ラザールの持つ書類がなんなのか、支店長はすぐにそれがわかったらしい。口をぱくぱくと開けたり、閉じたり。

「おつかれ、ラザール。どうだった？」

「ああ、あなたの予想通り、面白いものがいくつか手に入ったよ。店の資金の使い込み、色街での出費を経費に改竄した証拠資料。商会の経営陣への虚偽報告、まあ、典型的な小悪党だな。裕福な家の小さな地下室にたんまりと、だ」

ばさばさ。ラザールが書類を長机に落とす。

乱雑に広がるそれを見て支店長が裂けんばかりに目を見開いた。

「は？ は？ なん、だ、これ」

「うちのラザールの仕事の結果さ。おっと、触るなよ？ 指一本伸ばしてみる。斬り飛ばす」

遠山の言葉に支店長の書類へ伸ばしていた指がピクリと止まる。

先ほどまだ、浮かべていた冷淡な笑みはもうどこにもない。顔色が赤くなったり、青くなったり信号のように切り替わっていた。

「は、は……ありえ、ありえない！ それは私の家のー」

「ああ、アンタの書斎の袖机の引き出し、下から2番目の二重底に鍵はあったよ。地下室のな。それで地下室の二重扉の数字錠、あれはアンタのお気に入りの色街の娼婦の誕生日だ。ふむ、随分と入れ込んでいたみたいだな」

ラザールがなんのこともないように呑気に呟く。

「はーま、まで！ 我が家の、門兵はどうした！？ 数十人の腕利きの冒険者だ！ お前なんかはー」

「ああ、ハイデイの徒党か？ 2級の冒険者パーティだ。ふむ、どういう売り込みを聞いたかは知らないが、彼らはあまり門兵には向いていないな。どちらかと言えばモンスターを狩るのが得意な連中だ。腕っ節と番犬としての品質は比例しないよ」

腕組みしながらうんうんと頷くりザドニアンの言葉に支店長はもう固まるしかない。

「な、が、が、が」

信じたくない、信じれる訳もない。リザドニアンという劣等種族に自分が一杯食わされていることなど。

だが目の前にあるその書類、己が隠していた秘密がこつとも簡単に曝け出されているのを見るともう誤魔化しようもなかった。

「リザール？」

「もちろん、誰も殺していないさ。そして恐らく彼らは雇い主の家

から何か盗まれたことにも気付いていないだろうな」

「OK、さすが」

顎をガクガク震わせる支店長を尻目に遠山とラザールが軽い言葉を交わす。

「ぬす、そ、そうだ！ この、盗人が！ 薄汚いリザドニアン！ 侵略種の卑しい血が！ す、すぐに、教会騎士に突き出して」

ソファから立ち上がり、遠山とラザールをそれぞれ指差す支店長。飛び散る唾が書類に小さなシミをつける。

「いいぜ。通報してみなよ。俺たちも捕まるかもだが。アンタはどうかな。んー？ この書類も教会の騎士が確認されちまうなー。どうする？」

「ギョ、ギョ、ギョ、ギョ、か」

そんな喚きを意にも介さずリラックスしたままソファに深く腰掛ける遠山、その言葉にまた支店長の言葉が止まる。

「そうだな、そうやって泡噴くしかねえよな。よく聞け、お前達は最初から詰んでんだよ。俺の友達に舐めたマネした時点で、お前らは敵だ。もう、お前達には遠慮も容赦も何もしねえ」

【自勢力に”影の牙”がいる為、判定無しでスピーチチャレンジヒント・”ミハエル・クラウスの私文書”を手に入れました】

【スピーチ・チャレンジが優位に進行しています。全ての判定に成功しました。相手は強く動揺しています】

「な、なにが、何が目的だ……」

「目的？ さあ、なんだと思う？」

「な、な、なに？」

「考えてみるよ、その小さい脳みそで。俺が今、なにをしようとしてると思う？ ……これは俺の予言なんだけどな」

こんこんと頭を指先で叩くジエスチャー。

遠山が声を潜める。

「お前達はいやでも俺たちに天使粉を売りたくなる。いや、売らなければならなくなる。それどころか、天使粉をどうしても俺たちに譲らないといけなくなる」

それは宣言だ。

冒険者の舌が敵を揺さぶり、静かに追い詰めていく。

「あ、あ、な、舐める、な……そ、そ、そんな書類！　いくらでも偽装できる！　お、お前達のような奴隷上がりのぼつとでが、どうこう出来る私ではないんだ！　やってやる、やってやるぞ！　おい、冒険者！　来い！　仕事だ！　こいつらをー」



もう支店長にはそれしかない。安易な暴力。冷静であれば竜殺しにそれは悪手であると気付けただろう。

だが、もうそんな判断すら今の彼には出来なくて――

「ッ！」

「レーザー」

遠山の呼びかけにレーザーが動きを止める。

「こいつらを黙らせる！ 竜殺しがいようが関係ない！ 一級の力を見せてみる！」

支店長の言葉が、部屋に響いた。

なかまをよんだ。でも、誰もこなかった。

「……おい、おい、どうした！ なぜ、なぜ来ない！？ おい、誰かー！ こいつらを」

ぎい。

ゆっくり、扉が開く。

ラザールが、ドロモラが、緊張した面持ちで部屋の入り口を睨み、支店長が汗まみれの顔に安心した笑みを浮かべ、遠山はただ無表情にドアを見つめる。

扉の向こう、そこには。

「こいつらを、なんですか？ ミハエル支店長」

抑揚のない平坦な声は、そう決められた音色しか出ない楽器のよ  
うに澄んだものだった。

「へ」

支店長の表情が固まる。

その扉の向こう側から現れた少女を見て。

「聞いているのです、ミハエル支店長。お客様に向かってなにを言っているのか、と」

茶色の髪に仕立てのよいドレスシャツ。簡素な服装ではあるが素材の良いものを使っているのはシワひとつないその様子から見とれる。

クリクリとしたアーモンド型の目にしみひとつない白い肌。吊り目がちで勝ち気な印象の、少女。

「あ、ーか、会長………？」

冒険都市アガトラの商人ギルドマスターにして、筆頭商会モロウ商会の会長。スピナ・モロウがそこにいた。

「「……………」」

その背後には大柄の武装した男が2人。二振りの短い槍を交互に背中に刺した男。サーベルを2本腰に刺した男。

2人とも若く体格も良い。そして何より足音がしない。荒事に秀でた者、恐らく2級以上の冒険者だろう。

「失礼します。ドロモラ商会の皆様」

支店長の言葉を無視して、少女がこちらへ向けて頭を下げる。たらりと1房まとめた前髪が右目にかかる。

「ギルドマスター殿、これは驚いたな……………」

「ドロモラ・バギンズ氏。お久しぶりです。前回のギルド総会以来ですね。どうやら、商談がうまく行っていないようです」

少女がさらりとドロモラに話しかける。

少女、だ。ストールと同じか、少し上かの年頃。大きく見積もっても16歳か17歳。その年齢で、その地位に就いている、わかりやすい異常。

「ああ、残念ながらな。モロウ商会は我々を対等な商談相手とは見れないらしい」

「あ、か、会長、これは」

ドロモラの言葉に支店長が助けを求めようと声を漏らす。その視線は、机の上の書類に、そしてそれから会長と呼ばれる少女へと。

「――なんのお話ですか？」

「え」

少女の起伏のない表情、目を見開く支店長。

「聞いている通りさ、その支店長殿に随分とぶっかけられていてね。モロウ商会の意向と彼から聞いているが……」

「ぶっかけ？ ミハエル支店長、どついうことですか？」

ドロモラの言葉に

「い、いや。だって、これは――」

「これはなんですか？」

「そ、それは……」

「これは……ひどいですね、ミハエル支店長。この台帳の数字、以前の定例報告会のもものと違います。取引帳簿も、売り上げの数がこの支店のものと違いますね」

「あ、あ」

「説明していただけますか？ ミハエル・クラウス」

「い、や、それは。ですが、私は、だ、って」

「は？」

「い、や、会長、私は――」

「私に、何か言いたいことがあるのですか？ 彼を連れて行ってください、後でゆっくりお話ししましょう」

「よろしいので?」

「ええ。どうやら色々好き放題にしてそうだったので。申し訳ありません、ドロモラ氏。少しミハエルをこの場から中座させても?」

「ふむ。それは、どうしたもののか。我々はモロウ商会と取引をしたのだが」

「ああ、それならば」

背後に控える冒険者に視線を送る少女、冒険者が呆然とする支店長の腕を引つ張り席から退かず。

「僭越ながら私が。当商会は貴方達に随分と不手際を見せてしまつたようです。ええっと、彼の予定は…… ああ、天使粉の取引ですが、彼には裁量をかなり任せていましたが、どのような条件だったのでしょうか?」

「それが困つたものでな。キロ単価が、えーと、金貨20枚だった



かな」

「……申し訳ございません、ドロモラ氏、そして竜殺し殿。我々は大変な失礼を貴方達にしてしまったようです。ミハエル支店長の処分は必ず厳しいものを課すとお約束します。どうか、我々にもう一度チャンスを頂けませんか？」

「チャンス？」

「はい。正当な取引を。モロウ商会はドロモラ商会との対等な関係を――」

少女が朗らかに笑う。花のような香りに、ドロモラとラザールの顔が少し綻んで――

どかつ。

少女の目の前、机、コンバットブーツの踵が書類ごと机を踏みつけた。

「えっ」

「トオヤママ!？」

「……」

遠山鳴人だ。

可憐で礼儀正しい少女に向けて、遠山が取った行動は威嚇以外のなんでもない。

「何ヘラヘラ笑ってたんだ、クソガキ」

「はい?」

少女が笑う。だが、その涼しげな顔にはつつすら一筋の汗が――

「フッ！」

ジャキ。

鉄が擦り合う音。一瞬で距離を詰めた冒険者、2振りの槍先が遠山の首元に突きつけられた。

「いい動きだな、冒険者。見えなかったよ。一級とかいう連中か？塔級冒険者が指定探索者みてえなもんだとしたら、お前らは上級探索者みたいなもんか。一流だが、特別にはなれなかった連中。親近感があるな」

あと数ミリ近づけば、その鋭利な切先が喉を突き破るだろう。

「竜殺し、あまり調子に乗るなよ。ラッキーパンチで昇れるほど、この街は甘くねえ」

槍先にぶれはなく、動きも早く、体幹も安定している。武器を抜いた高揚による浮つきもない。

冒険者の腕は良い。

今まで遠山があしらってきたり始末してきたチンピラ上がりとは違う。

だが、それでも遠山は顔色を変えず鈍色の槍先を眺める。

細いチベットスナギツネのような目が、磨かれた槍の刃に歪んで映っていた。

「待ちなさい、あなた達」

少女の声、ぴしゃりと。

冒険者の雰囲気は少し和らぐ。

「竜殺し殿、何か私に至らぬ点があったのでしょうか？ ならば謝罪いたします、私は――」

健気に頭を下げる少女。まともな大人ならばこのような可憐な少女に頭を下げさせるなど座りが悪くなりそうなものだが。

「至らぬ点？ そうだな、芝居が下手すぎるってことくらいか？」

遠山はまともな大人ではなかった。

【技能 ” 頭ハッピーセット ” 発動。スピナ・モロウの装備品 ” 懐柔の調香石 ” による精神への影響を無視します】

「……なんの、ことですか？」

「ガキ。舐めるなよ。その支店長は最初からトカゲの尻尾のつもりだったのか？」

「……竜殺し殿がなにを言いたいのか、よくわかりませんが」

「舐めたマネしてんのは、てめえも同じだろって言うてんだ。商人ギルドマスター」

にべもなく言い放つ遠山。ピクリと少女のまぶたが痙攣する。

「トオヤマ。待て、どういうことだ」

「簡単な話だ、ドロモラ。俺たちの敵はそこの三下支店長じゃねえ。この商会、いや、商人ギルドそのものだ。最初からわかってただろ？ 演出に誤魔化されんな」

ドロモラの言葉に遠山が机に足を乗せたまま答える。

冒険者に槍をつけつけられながらも、やはりその態度に変わりはない。

「……スピナさん、どうしますか？」

「――そのまま、お願いします」

冒険者と少女が言葉を交わす。雇用主と労働者、その関係が聞いてとれる。

「ほら見る。自分の犬に人の首元目掛けて槍先向けさせたままお話ししようとする連中だ。芝居が浅くてあくびが出る」

「――」

遠山の言葉にまた少女のまぶたがびくり。

「二流が。俺らに対して芝居こくつもりなら、最低でもあの銭ゲバくらいは仕込んでこい。雑魚が」

「……………解せませんね、竜殺し。ええ、たしかに一筋縄めは行かないようです。ミハエル1人で貴方達を懐柔出来るのなら安い買い物ではあつたんですけど」

「か、会長……？ ど、どういふことですか！？ わ、私は貴方の言う通りにーガッ」

「寝かせててよろしかったですか？ 会長殿」

もう1人の冒険者が支店長を羽交締めし、そのまま首をきゅっと締め上げる。がくりと首を落とす支店長、もう意識はないだろう。

「はい。それで構いません。……さて、困りましたね。でも勉強になりました。貴方達は私が思う以上に」

少女が気を取り直し、場の雰囲気を取り返そうと落ち着いた口調でー

「黙れや」

【技能”アタマハッピーセット”が発動します。スピナ・モロウのスキル”トークガール”歌い手は誰かの発動を無効化しました】



「……………」

「そういう余裕ぶつた黒幕みたいな態度はな。実力がある奴がやるから意味があるんだよ。お前みたいな雑魚が俺の目の前で余裕ぶつてんじゃねー」

ペースを決して渡さない。遠山がじつと、少女を眺める。

「にべもないですね、竜殺し。あなたのそれは余裕ですか？ 私の指示ひとつで貴方の首が胴体から離れてもおかしくないのでは？」

「余裕だよ。こんな状況どうとでもなる。さて、モロウ商会、いや、商人ギルド。いい加減目障りだ。交渉はもうやめだ。悪いことは言わない。俺たちに天使粉を寄越せ。そうしたら、悪いようにはしない」

「はは、あはははは。竜殺しさん。ダメですよ、それは。いくらなんでも話になりません。はー、おもしろ。……まあ、バレてるんならもういつか。うん、そうです。私達商人ギルドも貴方達が目障りです」

少女の雰囲気が変わる。

纏っていた薄い布を剥ぐように、足を組んで身を乗り出し、オレンジ色の瞳を細めた。

「でも、竜殺し、貴方の有用性はよく理解しています。ねえ、手を組めませんか？ 私達、お互いに利用出来る関係だと思っんですけど」

「俺らになんの得がある？」

「カラス」

「ー」

少女の短い言葉に、遠山が黙り、レーザーが目を見開いた。

【スピーチ・チャレンジ進行、相手からの揺さぶりが発生します。スピナ・モロウは貴方が”カラス”と敵対関係にあるのを把握しているようです】

「知っていますよ。竜殺し。スラム街で随分と暴れたようですね。カラスの連中と揉めた、とか」

「カラス？ なんのことだ」

「しらばくれるなら結構です。このまま話を続けますね。我々は貴方達の後ろ盾になることが可能です。知っていますよ？ 貴方が竜の庇護下にならないことは。どういっう見かは知りませんけどね」

「……………」

「我々商人ギルドは見ての通りこの街で強い力を持った存在です。冒険者ギルドや貴族にも強い影響力を持っています。カラスと言えども我々には簡単に手を出すことは出来ません。何故なら我々は強者だからです」

「へえ」

「我々はこの街の経済、金を掴んでいます。ヒュームの社会、いえ、この世界にとつて金とは力です。ヒトの欲望を掌り、それを手懐け利用する。我々はその専門家。金の専門家はね、とても強い力を持っているのですよ」

支店長の言葉と似たようなセリフだ。

この商会の歪みはこの少女が源泉か、もしくはこの少女の一族なのか。

まあ、遠山にはどうでもいいことだが。

「取引しませんか？ 竜殺し。この街で生きていくには強者の側に立つ必要があるのです。貴方の庇護を我々が担いましょう。代わりに、その力を我々に――」

「はーあーあ」

ため息。

大きな、大きなため息。

その、全てがズレている提案と脅迫に心底うんざりしていた。

「……………っ！ その態度なんなんですか？」

「いや、相手するのももうめんどくさい。一応気にしてたんだ。あまりにも話が簡単に行ってるからよ。俺が何かやらかしたり、見落としが思ってた。だけど話はシンプルだった。俺の考えすぎだったみたいだ」

遠山がため息混じりに言葉を漏らす。

この少女の言葉は間違えていない。強者の理屈やこの街での賢い生き方、間違えてはいない。

だが、その提案はもう遅すぎた。

少女は知らないのだ。強者の庇護というならば、遠山達は既にとびきりのー

「だから、なにを言って」

少女の苛立ちはもう隠すこともできずに。

「これはもう取引、なんてものじゃあないんだよ」

「は？」

「ラザール。もう一つの仕事先はどうだった？」

「ああ、そうだな、大漁だったよ」

ラザールが再び懐から何かの書類を取り出す。

バラバラバラバラバラ。

先程の支店長の私文書とは比べ物にならない量の書類、便箋、封筒。

「ーえ」

「必要ないんだ、お前たちの後ろ盾なんて」

「こ、れ」

少女の小さな肩が震え出す。

「あの支店長のことをよく言えたもんだ。なあ、おい」

「……それが何か理解しているのですか？」

「ひひひ」

遠山は答えない。代わりに、自分の頭をまた指先でコンコンと叩いて。

「あんたの裏の取引先の一つ。この前火事で燃えたよな。……だけど、ただの火事でほんとに生き残りが1人もいないなんて不思議とは思わなかったか？」

それは、ある多くは知らない遠山鳴人の裏の冒険譚。

色町で主教の弱みを握ろうとし、ラザールとストルにモテバトルで大負けしたり、竜を泣かしたりなんやかんやしたあの夜遊びの前日。

火事で全滅したある違法醸造所。審問会の仕事――

「――ま、さか」



がしゃああああん。

少女の顔が青ざめたと同時だった。

窓ガラスが膨らむように割れる。散らばるプリズム、反射する光、それを突き破る銀色の輝き。

バカが空から突っ込んできた。3階立ての3階の部屋に。

「銀の鎧……!?! ま、さか」

「教会騎士!?!」

「けほ、あ、あー、けほほ。ごほん。全員動くな、デイス」

ばらら。ガラスの破片をマントで払いながら水色髪のパツツンポ  
ニールの少女が言い放つ。

「おい、マジかよ。教会を敵に回すなんて聞いてねえぞ！」

冒険者が正しく現状を理解する。今、自分たちが仕事とはいえ、何と敵対しようとしているのかを。

「ひひひひ。あんたら運が悪いな。雇い主を間違えてる。仕事を受ける時は額面とかハクとかよりも先にもっとその依頼の背景を考えたほうがいい。まあ、どの口で言ってんだって感じだけだな」

「竜殺し、あなた、まさか、教会をー！？」

もう少女に取り繕う余裕はない。

ようやく気付いたのだ。自分の取引、その提案、その滑稽さに

――

「ああ、あの銭ゲバとは仲良くさせてもらってる。親友と言っても

いい。住まいの提供まで受けてるもんだ。……商人ギルドマスター。いいこと教えてやるよ。交渉とか取引つてのはな、始まる前に結果は決まってる」

ぐにやり、遠山の目が歪む。細い目に浮かぶ茶色の瞳がぐねぐねとその輪郭を失っていくような。

「大切なのはそれが始まるまでになにを積み上げることが出来たか。相手がどう言う奴で誰を味方にしてるか。商人ギルド、お前らが俺たちに舐めた真似した時点で、お前らの程度が知れる。なあ、知らなかったよな。俺たちドロモラ商会、ラザールベーカーリーの背後になにがいるのか。俺たちの後ろ盾が誰なのかをよー」

そう、最初から勝負は決まっていた。商人ギルドは知らなかった。

そのリザドニアンのパンを竜祭りで出そうとしている連中の裏の顔を。

恐ろしき教会の主人の懐刀。

「これより、天使教会異端審問官、トオヤマナルヒトによる商人ギ

ルドの審問を始める。――よじやくまともにお話が出来そうだな

冒険者の舌が踊る。

109話 冒険者の舌 その（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！

ついに本日、現代ダンジョンライフの続きは異世界オープンワールドで！ 発売日を迎えました！

ストルや人知竜、そして銭ゲバを表紙にする為続刊目指して頑張ります。本当にいつも応援ありがとうございます！

みんなのAmazon、各通販サイトの口コミレビュー、待ってるぜ！

110話 冒険者の舌 その

「審問官……？ 審問官！？ あ、あり、ありえませんが！ あなたが天使教会と繋がってるなんて！ そ、そんな情報、どこにもー」

目を見開き、唾を飛ばし、商人ギルドマスターが喚いて。

「デイス？」

その落ち着きのない視線が、ストルを捉えて固まる。

「う……み、水色の髪に水色の瞳……まさ、か、第一騎士、ストル・ブルー……？ あの色町の違法娼館や、密輸業者を一夜で滅ぼした最優の教会騎士……カラスすら手を出さないって……」

「デイス、聞きましたか？ トオヤマ。なにか私にいうことは？」

名声に気を良くしたらしいストルがむふーと鼻息を飛ばしつつ、遠山に視線を傾けた。

「はいはい、凄い凄い。わかりやすいマークで助かるよ、ストル」

「お、おいおいおいおい、待て待て待て待て。あー、会長さん。こりゃ、なんの話だよ。マジで聞いてねえぞ、天使教会とコトを争うなんぞよ」

「ああ、その通りだ。商会の用心棒と荒事になった時の対処、依頼はそう聞いてるんだけど」

冒険者、一級。つまり、冒険者ギルドの中でも特別な化け物を除いた上での精鋭の彼らが焦り始める。

この街で、教会と争うということが何を意味するのか理解出来ない彼らではない。

「ひひひひ、運が悪かったな。まあ、あれだ。美味しい依頼には気をつけるってことだよ」

【スピーチ・チャレンジ（脅迫）が進行します】

「ぐ、この……」

「おっと、その冒険者、そろそろ私の審問官から槍を退けてくれないで、まっせんデイスか？ ……思わず私も剣を抜いてしまいそうデイス」

「教会騎士……舐めんなよ。いくらクソな依頼とはいえ、依頼は依頼。こつちも仕事でな。はい、そうですかと放棄するわけにはいかねえんだよ」

「おや、おやおや。へえ、一端の口を叩きますデイス。その口、果たして四肢が千切れた状態でも叩けるのか、わたし、気になるデイス」

「1」の……」



【一級冒険者達へのスピーチ・チャレンジ（脅迫）が進行します。  
”ストル・プーラ”が自勢力にいるため脅迫の成功率が大幅に上昇  
しています。またあなたの冒険都市全体からの評価が”竜殺しには  
手を出すな”となっている為、スピーチチャレンジの成功率が上昇  
しています。判定なしでスピーチチャレンジに成功します】

「ストル」

「……よろしいのデイス？」

遠山の一言でストルから殺気が消える。冒険者達はストルではな  
く、遠山を見て心底理解出来ないものを見るような目つきを浮かべ  
た。

「よろしいデイス。大丈夫だ、このままお話を続けようぜ。冒険者  
のあんたらのメンツもある。このままでいい。あんたもその方がリ  
ラックスしてお話できるよな？ 商人ギルドマスター殿」

「……証拠、は。あなた達が本当に天使教会の審問官たる証拠  
は——」

遠山に視線を向けられたモロウ商会会長、スピナが平静を装いつつ、言葉を。

「こんなもんしかねえけど、いいか？」

遠山が懐から取り出したのは、教会印。主教から渡されていた身分証明の為の便利グッズだ。

「教会印……！ーあなた、それを偽造すればどうなるか理解しているのですか？」

「さあ？ 本物だし問題ねえよ。ああ、そうだよな。今、あなたは色々考えてる。悪くない答え方だ。それは正しい。そう、お前が俺たちを審問官だと認めた瞬間、全て終わるもんな」

「っ」

ここで、遠山達をすんなりと審問会と認めた場合、商人ギルドは

つまり、教会の勢力にあのような態度をとっていたことになる。

知らなかった、で済むほど世の中甘くないのはどの世界でも同じだ。

「そつだ、頑張ってくれ。お前はもう頑張るしかないんだ。頭を回せ、舌を跳ねさせる。お前達が生き残るにはもうそれしかない」

【スピーチチャレンジ（脅迫）が進行します。全ての条件を揃えている為、スピナ・モロウとの会話に多大なボーナスが発生します】

「……ご、の書類、どこ、からー」

「ラザールくん？」

遠山がおどけて、ソファの背後に佇むラザールのほうへのけぞる。

「ふむ。発想は悪くない。決して一箇所には固めずそれぞれバラバラの位置に保管している。なおかつ警備も厳重、かつ隠し場所も地下だけのワンパターンだけでなく豊富。隠し戸棚、隠し床、シンブルな金庫、発想は悪くないさ」

「どつやって、それらを」

「悪事が得意なりザドニアンの企業秘密だ」

影の牙が、人差し指を立て、意地の悪い笑みを浮かべる。それは彼の友人のものとよく似ていた。

「ぐ、じ、の」

「さて、会長殿。この書類、アンタにとっては決して目の目に当たらないもの、なのかな。ラザール？」

「そうだな、商売敵を蹴落とすために盗賊や山賊に街道を襲わせる指令の密書や、貴族への賄賂の詳細、おっと、王国の宮廷官吏のやりとりの記録、ほう、ほうほう。関税やら積荷税に便宜を測ってもらっているらしいな」

「あ、くそ……」

「それに、これは驚いた。会長殿は豪胆だ。ナルヒト、この町で最もやってはならない悪手をなされていらっしやるな。教会、天使教会への祝福税の報告を誤魔化している。本来納めるべき税金の半分ほどしか納めていない」

「あ……………」

ラザールの言葉に、今度こそスピナの綺麗な顔がぐにゃあと歪む。

「ん…………？ ああ、なるほど、そういうことか。あの銭ゲバ…………チツ、上手いこと使われたなこりゃ」

税金。その情報に対して遠山が目を細める。

「どうやら、この状況はあの銭ゲバのー」

「どうした、ナルヒト」

「いや、なんでもねえ……さて、会長殿。状況はお互い理解出来たと思う、天使教会の審問会に、アンタはまずいものがバレてる。どうする？ アンタの知ってる天使教会の主教と俺が知ってる主教が同じ人物なら、税の誤魔化しなんてのは、あの女の怒髪をつくと思っただけだよ」

「……なにが、望みですか」

遠山の問いかけに俯くスピナがぼそりと言葉を漏らした。

その膝に押し当てた手は震えている。

「あ？」

「と、取引です、トオヤマナルヒト。み、見事と言うほかありません。まさか、ここまで、やるとは思ってませんでした。……我々、モロウ商会は、ドロモラ商会との取引に応じます。天使粉、でしたね？ それも、適正、いや、値引きしてー」

「あー？ 天使粉？」

「は、はい！ 貴方達が欲しがっている天使粉です！ キロ単価、  
金貨一枚、いや、銀貨、5枚で！！」

泣き笑いのような表情で、スピナが必死に叫んで。

「あー……悪い、もうそれ、いらなんだわ」

「ーは？」

遠山の言葉に、スピナは口を開いたまま固まった。

「ストル？」

「はい、デイス。こちらは、天使教会主教、カノサ・テイエル・フ  
イルドからの信書デイス、読み上げても？」

ぱらぱら、ストールが懐から取り出した羊皮紙を広げる。

縦に、横に何度か向きを変えたあと、うんと頷いた。読めるらしい。

「頼むよ」

遠山がその様子にひとまずほっと息をつく。読めるらしい、よかった。

「ごほん。天使教会審問官、トオヤマナルヒトからの嘆願、及び要請を認めます。ドロモラ商会、及びラザールベーカーリーの作るパンについては天使様の威光と教会と竜の繋がりを更に強くするものであると認めー」

「は？ は？」

突如、つらつらと語られる天使教会からの令文。それにもう商人ギルドマスターはついていけない。



「ここに、天使教会主教、カノサ・ティエル・フィルドの名の下に、ドロモラ商会への天使教会が保有する天使粉の供与を認めます。なお、これは無料ではなく教会がドロモラ商会に課す貸しとして記録に残すことをここに明記します……とのことです」

「アイツ……まあ、いい。会長殿、そういうことだ。天使粉なんだけど、やっぱいらねえわ」

銭ゲバらしすぎる令文に遠山が目を細める。ストルを一足先に教会に向かわせていたのはこの仕込みの為。

初めから、遠山鳴人は――

「――は？」

「我々、天使教会は今、商人ギルドの背信を確認してしまった。審問会としてはすぐにでも、我が補佐官が見つけたこの証拠を親愛なる主教殿にお見せしたいところだ」

「――あ」

「理解しろ。お前達は今、教会を敵に回そうとしている。存亡の危機だ。天使教会は、いや、あの銭ゲバは金に関係することで己に不義を働いたものは決して許さない。祝福税を誤魔化したお前らがどうなるのか。もちろん理解しているよな？」

遠山鳴人は、ラザールを蔑ろにしたこの商会を真正面から叩き潰すつもりだった。

「うーと、りひきは」

「いらないな。お前達に助けてもらおう必要なかどこにもない。さて、どうしたものか」

ラザールに密書を集めさせたのも、ストルへ主教に手紙を渡させに向かわせたのもこの一瞬のため。

「うそ、嘘嘘嘘、こんなの、ウソ、あなた達が、ほ、本当に、審問会？ 本物の天使教会の懐ナイフ？ そんな、馬鹿な」

「嘘かどうか、教会に聞いてみたらどうだ？ さて、これ以上何も  
ないようならもう行くよ。我々は忙しくてな、会長殿、そろそろこ  
れ、外してくれないかな」

一撃で、モロウ商会を捻り潰す。

「あ、が、……天使、天使粉は」

「いらない。お前達のは必要ない」

【スピーチチャレンジ（脅迫）進行、スピナ・モロウは恐慌状態に  
陥りました。全ての交渉においてもはや彼女はあなたに太刀打ちす  
ることすら出来ないでしょう】

「や、だ、やだ。だめ、そんなの」

「ガキ。教えてやる。お前らは間違えた、お前らは詰んだ。俺たち  
を見誤った。ラザールを舐めた、俺を舐めた。その代償は払っても

らじげ」

「あ、あ、あ」

「もうこれ以上ないなら、終わりでもいいな？」

依然、遠山は槍を突きつけられたまま。

だが、追い詰めている者、追い詰められている者の立場はまるで逆だ。

「あ、ぎ。ま、待って、ま、って」

「待って？」

「まって、トヤロ」

首を傾げる遠山に、びくりと小動物のような反応をスピナが見せる。

「悪いが忙しい。待たない、冒険者を引かせる。会長」

「貴方の。望むものを！」

「……」

シン、部屋が一瞬沈黙に満ちる。

「も、も、モロウ商会は、あなたの望むものを用意します。お代も  
いりません。ですから、ど、どうか」

「何が出せる？」

「天使粉……いえ、そのほかにもパンを作るために必要な綺麗な水、  
道具……」

「それだけか？ 命乞いにも全力を出せない奴と話をするのはめんどくさいな」

【スピーチチャレンジ（脅迫）進行。モロウ商会から物資や譲歩を多く引き出せそうです】

「ま、まって！ 場所、場所です……」

「ふうん？」

「し、商人ギルドの権限で、貴方達の竜祭りの出店場所、それを使います」

「おっと、ようやく気になるのが出てきたな」

「トオヤマナルヒト、まさか、お前、最初から……」

全ての場を支配する遠山に、ドロモラが戦慄する。

本当に、心の底から敵でなくて、敵に回さなくて良かったと彼は安堵していた。

「他にもあるよな、モロウ商会。この街1番の商会ならこの街の購買者層、客にまつわるデータやらなんやら、そう言うのも、ある、よなあ？」

「……………わ、かりました。それを貴方達に供与致します」

商売人にとっては致命的。とりわけモロウ商会のような歴史と規模の大きな商会にとっては飯の種とも言えるものまでもはや、スピナは差し出さねばならない。

遅すぎたのだ。

「他には？ まだ考えねえか？」

目の前の男の危険性に気付くのが。

小細工でどうこう出来る相手ではもはやない、ということだ。

「き、金銭的な供与も、投資も！ モロウ商会に出来ることなら、全てー」

ぱつと、スピナが地面に跪く。頭を床にこすりつけ、平伏する。

見た目はまだ成人前の少女が、目つきと態度の悪い男のもとに跪くのはひどい絵面だった。

「ナルヒト、これ以上は……」

あまりにもな光景に善人トカゲがおずつと、遠山へ声をかける。

「バカ、ラザール。気を抜くな。……本番はこれからだ」



「なに？」

だが、遠山鳴人には見えている。この少女の狡猾さを、根っからの商売人であり、勝負師である本性が。

その少女がこれからもたらず危機を知っているのだ。

運命の知らせ。

ピコン

【警告ー】

【非常に危険なクエストが開始されます。失敗すればラザール、ドロモラ、ストル・プーラが死亡ロストします】

【DEADクエスト 開始 クエスト名”News of the

Wind”】

【クエスト目標ー】

「全て、全て。ええ、モロウ商会に出来ることは全てさせて頂きます」

地面に平伏すスピナの顔は見えない。

だが、その声は負け犬の声ではない。

「ッ」

2人。優秀な危機察知能力を持つ”影の牙”、そして超越者になりうる選ばれし者”第一の騎士”

滝のような汗を流し、2人が無意識にそれぞれナイフ、剣、己の獲物へ手を伸ばす。

「ストル、ラザール。待機」

遠山の言葉で一瞬2人が冷静さを取り戻し。

「召喚印、起動ー」

その少女の指輪が光り出す。

「お、おい、これ」

「マジかよ」

風が、強く吹いている。

屋内に。

「契約者、モロウ商会、初代会長、ラナール・モロウの名の下に」

風。

「契約、勇者パーティ召喚」

「……はー……」

ラザール、ドロモラ、ストルが驚愕に歪む。

「竜殺し。トオヤマナルヒト。いや、ほんとに焦りました。ええ、貴方の言う通りです。我々は貴方をみくびっていた。我々は、対応を失敗しました。天使教会に一泡吹かされ、完全に道を誤った」

平伏したままの少女が顔を上げる。

「完璧な手腕です。天使教会の威光と一級の冒険者にもおじけのない実力と胆力。そして、我々の急所を一撃でもぎ取る勘の良さ。……商売人、失格ですね、私。少し調子に乗っていました」

ゆっくりとソファに座り直し、伸びをしながら、遠山へ視線を傾ける。

先ほどまで自分が地べたにはいつくばっていたことなど忘れたかのように。

「トオヤママ！　これは！」

「いい、ストル」

「認めます。負けです。我々の。でも、このまま、貴方の一人勝ちは嫌です。我々は貴方に負けた。でもね、そういうの全てをひっくり返す方法、貴方ならよくご存知ですよね」

「お願いします、先生」

風が、止んだ。

そこには、彼女がいた。まるで、初めからその場所にいたように。

風が世界を渡り、どこへでも現れるのと同じように。

彼女もまた、どこにでも現れる。

「おや、おや、おやおやおやおや」

銀の髪が、揺れる。風に揺蕩うたびに鈴の音が鳴る、そんな気がした。

宝飾品のような瞳が、複雑なガラス細工のようにきめ細かく輝く虹彩が、遠山を映す。

「くくく。スピナ、君が助けを求めるなんて珍しいこともあると思えば、これは、これは。意外な人物と会うこともあるものだ」

遠山鳴人はその女を知っている。会うのはこれで3回目。最初はあのヘレルの塔で、次は冒険者ギルドで。

そして今度はモロウ商会で。

「ローウェンフィルバーナ」

銀色の髪に白磁の肌。その耳は、やはり、丸い。エルフの耳ではない。

「塔級、冒険者……」

「……クソ、どっつて、ムジ」

「やあ、リザドニアンのレーザー、それにこの前は見なかったね。その鎧は教会騎士？ 全く節操なく味方を集めているものだ」

モコモコの民族衣装のようないでたちは相変わらず。

にこにこ人好きのする笑顔を美貌に映しつつ、ウエンフィルバーナが遠山の仲間達を眺める。

「アンタにや関係ねえだろ。塔級冒険者。悪いが今、仕事中でな。帰ってもらえないか？」

「くくく、そうかい。それは悪いことをした。でも、私もこれで仕事でね。スピナ。召喚のの印を鳴らした、という認識でいいんだね」

ウエンフィルバーナが、スピナへ語りかけて。

「はい、先生。大変恐縮ですが、お力を借りたく」



恭しく、スピナもまたソファから立ち上がり、ウエンフィルバーナに向けて膝をついた。

「仕事内容と報酬は？」

「報酬は、白金貨30枚。仕事内容は、そうですね。私の護衛と、天使教会異端審問会など、ここには来なかった、でお願いします」

「ーへえ」

それだけで塔級冒険者と雇い主の契約は終わった。

「」  
「」  
「」

生ける伝説が一瞥する。それだけで、ラザールとストルの身体が動かなくなる。

ドロモラは既に気絶している。

「……………本気か？」

遠山が静かに問いかける。

「はい。本気です。貴方も知っているでしょう？ この世の全てを決めるのは最後には力です。貴方がどれだけコマをすすめても、枠外の力で、全て終わる」

「ああ、そりゃ同感だ」

「先生、お願いします」

「ふーん。まあ、いいよ。君の古い家族、モロウには昔世話になった。彼らを始末するに、白金貨30枚は少し安いが……まあ、割引ということにしておこうか」

「トオヤママ！」

「ナルヒト！」

「悪く思ふなよ、竜殺し。そしてー」

向けられる矢尻。超越者の圧力。

触れてしまえるような重たい殺意と、軽い動作。

突如現れた理不尽な力が、遠山達の道を壊そうとー

【条件達成 キリヤイバカウン트의進行によりあなたには”神性（霧）”が付与されています】

【神性（霧）による”人間”および”人類種”に対する絶対優位権が発動します】

だが、理不尽ならもう何度も味わっている。

あの夏の夢は、遠山鳴人をもうどうしようもない領域にまで追いやってしまった。

器から、最早漏れ出すほどに。

遠山の血は白色神の血なのだから。

「調子に乗んなよ、小物が」

「ッあ」

異変、まず2人。

一気に青ざめる顔、震える手足。

遠山に向けられていた槍先が、ブレる。

「ラザール、ストル」

「……っ!? 承知」

遠山の声が響く。その瞬間、ウエンフィルバーナに見つめられ固まっていた2人が弾けるように動いた。

「へえ！」

ウエンフィルバーナが喜色ばんだ声をあげて。

「悪く思っな」

「なん、で、体動かな、がつ!?」

遠山に槍を突きつけていた冒険者、それとスピナの側に立っていた冒険者がふらつく。その瞬間に、ラザールとストルが動き、その2人を制圧する。

「寝てなさい、デイス」

「うおええ、気持ち悪い……竜殺し、なにしやが、っあ!？」

ラザールがふらついた槍の男の背後をとり、頸動脈をきゅっと絞める。ストルが地面に四つん這いになる冒険者の後頭部を殴り抜き、地面に沈める。

あつという間、一手で、モロウ商会の武力は審問会により鎮圧された。

「は?」

事態が理解出来ないスピナの目が丸く広がって。

「さてー誰に向けて小癩な戯言を垂れ流しおるか、小娘」

遠山の、目。

茶色の瞳に、白いモヤが渦巻く虹彩がスピナ・モロウを見つめて。

【神性（霧）による威圧が発動します。判定なしで成功ー】

「ーア」

ばた。

スピナ・モロウがソファに深く沈む。

遠山と目が合った瞬間、顔は青褪め、舌はだらりと垂れ下がり。  
まるでみてはならないものを見たかのように驚愕と恐怖を顔に浮か  
べて。

ヒトが、倒れる。

まるで上位生物が定命の者へそつするよつに。

ヒトが竜の威に気を失うのと同じように、遠山鳴人に敵意を向けられた者が動かなくなる。

「――驚いた。君、本当に」

あつという間だった。

塔級冒険者の威が場を飲み込んだと思った瞬間、遠山鳴人がその全てをひっくり返した。

「塔級冒険者、依頼主がそんなになっても、まだアンタの仕事は続くのか？」

【スピーチチャレンジが進行します。塔級冒険者ウエンフィルバーナへの懐柔が発生します】



「ーや、ら、れ、た」

ウェンフィルバーナが信じられないものをみたとはかりに目を見開く。

「やられた、これは、久しぶりに本気で出し抜かれた」

目をぱちり、ぱちり。

倒れた依頼主を眺めてウェンフィルバーナがつぶやく。

「うーん、困った。確かに依頼主がこれではね。おい、スピナ、聞こえる？」

「……………」

もちろん、答えない。スピナ・モロウは白目を剥いたままだ。



にまっーと咲うその笑顔。

風が彼女の周りに渦巻き、部屋の書類を巻き上げる。

矢尻が、ソファに座ったままの遠山を狙って。

「お前」

「ん？」

風が舞う。

霧が揺蕩う。

部屋の中を、霧が、風が互いに食い合う。潰し合うー

「それをラザールや、ストルに向けてみる」

遠山は目を逸らさない。

「殺すぞ」

一言。

超越者がびくりと、みじろぎした。

長い、永い沈黙。

ラザールとストルは動けない。

たらりと、ストルの白い肌の上を汗がするりと滑って。

「……………白金貨30枚ではもう、割に合わないな」

【全てのスピーチチャレンジに成功しました】

先に殺気を収めたのは、射手の方だ。

渦巻く風が止まってゆく。

ヒラヒラと舞う書類が、右に左に揺れて、それから床に落ちる。

「負けたよ、竜殺し殿。くくく、久しぶりに依頼を失敗してしまった。依頼失敗の報告をした時の、冒険者ギルドのマスターの顔が楽しみだ。だが、これでも冒険者の端くれだね。気を失ってしまった依頼主とその仲間達は回収させてもらうよ」

「好きにしろ。もうそんな小物ども。どうでもいい。ああ、でもそうだ。そのガキが目を覚ましたら伝えてくれないか？」

「うん？」

ウェンフィルバーナが遠山の言葉に首を傾げて。

「お前を見ている、と」

「……君は恐ろしいヒトだね。トオヤマナルヒト」

そう呟いて、また風が吹く。

それが止む頃にはもう、部屋には遠山たちしかいなかった。

「い、い、生きてる………のか。あ、あれは、塔級冒険者、ウエンフイルバーナ、だよな」

「偉大なる歯にかけて………今度は、今度こそはダメかと………」

「……あれが、勇者パーティーの最後の生き残り。………生ける伝説………デイスか。ん？ トオヤマ？」

意識を取り戻したらしいドロモラが大きく息を吐く。ラザールが

しやがみ込み、尻尾をべたりと地面に。ストールが壁によりかかり、額を抑えて、それから。

「コッワー……なんだありや、なんでもありの化け物かよ、見たかよ。目とかもう怖すぎだろ。あれぜってー性格悪いぜ」

遠山がへらへらと笑っていた。

「……………」

みんな、生きている。

【商人ギルドとのスピーチチャレンジを完遂しました。これにより”竜祭り”での周辺の商人からの嫌がらせの確率がぐんと下がりました。またモロウ商会との関係が”恐怖”に変化しています。今後モロウ商会、及び商人ギルドとの取引が円滑に進むことでしょう】

110話 冒険者の舌 その（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さい！

書籍発売中です！書店やネットでお見かけの際は是非お迎えください！



## 111話 影と幸運

【DEADクエスト ” News the wind ” をクリアしました。DEADクエストをクリアした為、技能”死にくい男”が更に強化されます。

【また塔級冒険者ウエンフィルバーナを退けたことによりあなたの冒険者ギルドでの評価が大幅に上昇しました。冒険者ギルドからの評価がB+ ”……………マジ?” まで上昇しました】

【これにより新たに塔級冒険者とのコミュが追加されます。また冒険都市のどこかである特殊なクエストが開始されます。あなたはこれに介入することもしないことも出来ます】

【”神性(霧)”を使用しました。キリヤイバカウントが進行しました。お囃子の音が聞こえます。それはゆっくり、しかし確かにあなたへ近づいていきます、また一つ”神兵”に近づきました】

……………

……………

「モロウ商会の一件の後、スレイル精肉店にて」

「む、無理だ！ 無理だよ！ うちもモロウ商会に目をつけられてるんだ！ これ以上やらかしたら本格的に潰されちまう！ し、知ってるぞ！ ドロモラ商会も、モロウ商会に目をつけられてーえ？ もう解決した？」

「いや、でも！ うちにだって、代々やってる肉屋としてのプライドがある！ リザドニアンの作るパンなんてそんなもの商品になるわけー」

「うんまああああああああ！！？ え？ マジ？ なにこれ。作りたてじゃないのに、柔らか……！ え、なに？ これにうちのソーセージを？ 新しいパン？ いや、いやいやいや、教会がそんなもの許すわけ……天使教会異端審問会……！？ え！？ 異端審問会がパンつくんの！？ え！？ 教会の許可済み？ いや、でも」

「いや、うつつま……ラザール？ 君の名前はラザールっていのか！ ……リザドニアンのパンとか言っでごめんね！ 君、すごいやつだ！」



「はあ？ リザドニアンのパン？ はん！ こんなものが融資の材料になるとでも？ ……いや、でも、待てよ。その白い鱗の赤い目のリザドニアンが作ったのか……ねえん、君、ウチの下男の仕事に興味イイイイイイイイイイイ？ やめてやめて！ 穩便に行きましようよ！ 第一の騎士！ 竜殺し！その剣とメイスはしまいなさいよ！ もう情報は入ってる！ 冒険者ギルドから聞いているわよ！ モロウ商会！ いいえ、商人ギルドはアンタたちに負けたんでしょ！ もう！ やあね！ 少しからかっただけじゃない！ 融資ね！ いいわよ！ いくら欲しいの！？ スコルノ両替商会はアンタたちに金貸すわよ！」

…

…

「リザドニアンーバババババパンー！」

「うまああああああああ」

「そのリザドニアンの鱗と目を売ってくれるならお前らに手を貸しても、ギニャアアアアアアアア！ ああああ、俺の髪の毛がああああ」

「俺の鼻を広げないでエエエエエエエ」

……

…

一気に、パンの屋台に必要な資材集めを回る審問会とドロモラ。

全員がへろへろになりながら街の雑踏を進む。

「つ、疲れた……」

「はあ、はあ……この街のよお、商人は、変態か性悪しかいねえのか？ 一番まともなのがドワーフの工房とハーフリングの肉屋ってのはどうなんだよ……」

「むしろアイツらを1人も斬らずに全て終わらせれたのは奇跡、デイス……」

「強行軍が過ぎる……取引というものはもっと、エレガントに行いたいものだが……」

肉、水、金、その他もろもろ。竜祭りに備えてパン屋の屋台のための必要なもの集めはなんだかんだで1日でケリがつきそつだ。

あとはー

「よし、じゃあ、最後だ。1番疲れるが、1番話が早そつなとこに行くぞ」

「え、それって」

ストルが露骨に嫌そつな顔をして。

「ドワーフの工房だ。あの酔っ払いの大酒飲みどもに移動式のパン釜を作ってもらつ」

「汗臭いの、嫌いデイス……」

よほど、嫌な記憶があるのだろう。

ストルはヒゲが汚れた猫みたいな顔を浮かべた。

…  
…

く 竜大使館の庭園にてく

「朗らかな陽気ですねえ。わたくし、開花の月が1番好きかもしれ  
ません」

色とりどりの花が咲き乱れる庭園。

メイド服に身を包んだ緑髪の少女がニコニコ顔で花の手入れを続  
ける。

竜大使館の庭、ここの手入れは本来ならばメイド長の仕事だつた  
が、彼女が床に臥せている今、いつのまにか、自然に、幸運に、こ  
の新入りのメイドの仕事となっていた。

「よお、お姫様。ほら、外套だア。てめえ体はクソ雑魚なんだから  
いくら開花の月でもあんま風に当たんなよ」

隣で花に霧吹きをかける執事服の男が、薄い外套を少女にて手渡す。

「あら、紳士ですね。ウイス。……執事見習いはどうですか？」

「あー、ダメだなありゃ、勝てんわ。100回やってよ、99回は殺される」

互いに花に水をやり、土をいじり、葉を剪定し。始まるのは物騒な会話。

もちろん、それに聞き耳を立てるものがないと確認した上での行動だ。

「あとの1回は？」

「いい勝負をして、腕か足を一本渡して逃げれるかどうか。正面から争うのは無理だぜ、あの爺さん、怪物やら英雄やら、そんな次元にはもういねえよ」

「まあ、そこまですか。鬼人は。かの炎竜と並び称されるこの世



界最強の存在なだけがありますねえ」

「呑気なもんだな。アンタから見たらどうよ？」

「うーん。わたくし、武人の強いかどうかとはよくわからないのですが、まあ、その、正直与し易い相手かな、と」

「ああ？ 正気かあ？ 俺様より、強いんだぞオ？」

「だからこそ、ですよ、ウイス」

ばちん。

工房製の剪定バサミが大きくなりすぎた赤い花弁を断つ。

「かの執事長殿はわたくしたちを見ていない。彼にとってあまりにも取るに足らない存在すぎて、意識を向けていない。ああ、わたくし達はやはり、幸運です。恐らく彼の欠点を補う為にもう1人の優秀なメイド長殿がいたのですね、でも、彼女は今、病床の中、ふふ、フフフフフフ、運命はやはり、わたくしに味方してくれてい

る」

「……目的を確認してもいいか？ 俺様達の今回の目的はー」

「竜殺しその、完遂。わたくし達の目標はあの美しく強く、そして脆くて可愛い幼竜の討伐です」

パチン。花弁を一つ手に取って。その香りを愉しみながら緑髪の少女。フォルトナが笑う。

「暗殺でもするか？ あの執事の邪魔さえなけりゃ、まあぶっちゃけよお、蒐集竜とならいい勝負が出来そうだけ」

土を小さなスコップで掘り返し柔らかくしつつ、執事服のウイスがなんともなしに呟いた。

彼が出来そう、と言えばそれはきつと出来るのだろう。フォルトナは己の英雄の言葉に内心微笑みながら、わざとらしくほ

「うーん。それも面白そうですが……ウイス、あなた、残り6回全

て殺し切れますか？」

「あー……そう、だった。命が元々7つ。んで、今はあと6つかア」

「ええ。それに竜は死ぬたびに強くなる。まあ、何事も試して見ないとわかりませんが、わたくしたちは所詮はか弱き定命の存在、上位の生物に立ち向かうのに何も真正面、正方向から行く必要もないでしょう」

「なーんかいつもの悪巧みでもあんのかア？」

「クスクス。ええ、もちろん。竜を殺すのに実は6回も殺す必要はないのですよ」

「ああ？ どういうことア？」

「簡単です。もう2度と生まれたくない、竜にそう思わせればいいだけの話です」

「は？」

「まあ、上手くいけば竜を1回殺すだけで、我々の竜殺しは成ります。フッフ、たのしみですねえ。あの可愛い竜が己の生を放り出し、絶望する姿……」

「いや、無理だろ。竜だぞ。そんな心の弱い雑魚みたいな状況にそもそもならねえ」

「クスクス、そうですか？ 今のあのお方は、わたくしにはそうですね。思春期の少女、幼年期を終えようとしているただのヒトにしか見えません。無論、油断するつもりはありませんけど」

「……なーんか手があんだな？」

ウイスの言葉にフォルトナが微笑む。ちよいちよいと手招き。

「みんなのはどうでしょうー」

そつと、耳打ち。

「うーわァ」

ウイスが、本気でドン引きしていた。

「まあ、なんです、その顔」

「いやあ、エグうと思ってよオ。絶対アンタ友達いねえだろ」

「クスクス、ウイスく、もうそんなこと言って。わたくし、傷ついたなあ……これから、あの竜と友達になるのですから問題ないですよ、でも、それはそれとして、傷ついたなあ」

フォルトナがすうつと、目を細める。唇は微笑んでいるが、目は笑っていない。

「待て待て待て！」 幸運”を俺様に向けんな！ 悪かったって！」

「フフ、まあいいでしょう。それにお友達ならわたくしにもいますもの。ねえー」

ふつと。

風が、いや、空気の動きが止まった。

パチン。

フォルトナがそっと、また花弁を断つてー

「元勇者パーティのあなたさま？」

「ッ!？」

「……………」

フォルトナとウイスの背後には、ただ影があった。人がいるはずだ、生き物がいるはずだ。

だが、悪事を隠すその影がそれを覆い、その認識を許さない。ウイス・ポステタス・ヘロス。英雄の五感を持つてすら接近も認識も敵わない。

「おい、マジか」

振り返り、ウイスが戦慄する。自分が他者の接近に気付かなかった。

それはつまり、今自分達はこの背後の存在に殺されていてもおかしくなかったことを意味している。

「思っていたよりも早くお会い出来ましたね。元勇者パーティー、ええっと、なんてお呼びすれば？ 色々なお名前がありますものね。盗賊？ 斥候、それともカー」

影が、幸運にふりかかる。緑色の髪を、星形の瞳を、影が包み、闇に溶かして――

「おおっと、こっから先は俺様のモンだア、無許可で触れんじやねえよ」

風切り音。

英雄が、その剛力をもって腕を振るう。まとわりついたもやを吹き飛ばすかのごとく、闇を、影を払う。

「まあ、ウイス。流石です。うふふ、恐ろしいですね。勇者の力をもつても被うことの出来なかった宿痾。溶かされてしまうかと思いました」

「お姫様、頼むからよオ、やべえ奴とやり合う時ははやべえって言うてくんね？」

「……………」

影は何も応えない。

ただ、じつと、幸運と英雄の前に佇む。

「クスクス、これでお分かりになりましたか？ わたくしの英雄は強いのです。さて、盗賊さん。輝く勇者に置き去りにされた哀れな盗賊さん。今回は、わたくし達にお譲りくださいな」



「「……………」」

「フフ、わたくし、知っておりますのよ。あなたが本当にどうしようもない人であることを。愛されたいくせに、向けられた愛をためさずにはいられないお馬鹿さん。ええ、わかっておりますのよ」

「「……………」」

「あら、ふふ。怖い顔をしても無駄です。わかっていますよ。あなた、期待しているのでしょうか？ 竜殺しに」

緑髪の少女、フォルトナの舌が回る。

「ああ、おかしい。彼は勇者ではありませんのに。フフフ、どうしてでしょう？ 彼女も、あなたも、勇者パーティーの方はみな、竜殺しに何かを期待する。何かを望む。ああ、もしかしてー」

どうしようもないほどに、愉快なものを見た。

フォルトナの目が、顔が、嗤うー

「竜殺しに、勇者の面影でもみつけたのですか？」

「ー」

影が膨らみ、フォルトナを今度こそ溶かし尽くそうと。

「”幸運”にもあなたはきつと、わたくしには触れない」

降りかかった影が、フォルトナに落ちる、しかしちょうどフォルトナに触れる部分の影だけが空気に溶けて霧散する。

「」

影は、幸運に届かない。

「よく聞きなさい。竜を殺す道ならば、必ずわたくし達の前に竜殺しは立ちはだかる。ええ、運命の知らせがわたくしにそう告げているのです」

「……」

「ですから、フフ。今回は引き下がりなさいな。ご安心ください。あなたの願いはいつか必ず叶います。わたくしが、竜殺しか、それとも、射手殿か。ええー」

星形の虹彩が、その影を見つめる。

「あなたはきつと、望み通りに殺される日が来ます。ですから、今はお帰りなさい、悪事にも影にも光にも愛されず、ただ生き残ってしまった哀れなひと」

「……」

しばらくの沈黙の後。最初からそこには何もいなかったように影は消えた。

ふわり、風が運ぶ花の香りだけが、フォルトナに生の実感をもたせらる。

「おい。なんだったんですかあ？ 今のは」

「フフ、さあ？ でも、お眼鏡には叶ったようですよ。わたくし達のはかの勇者パーティーを前にして、死んでいないのですもの……あら……」

つーと、フォルトナの口から赤い血が垂れる。ゆっくり垂れる血が花壇の土に沈む。

「ーっおい！ これ、お前！」

「フフ、まさに、身に余る幸運、だったのですね。あの影に見逃してもらえたのは。……影と死と闇。この世界の暗いものを全て内包してなお、勇者と共にあつた哀れな魂。……フフフ、でも、わたくし達は生きている」

「……」幸運”のぶり返しが来たのはいつぶりだア？ さっきの、ほんとにヤバかったんだなア」

「ええまあ、仕方ありませんよ。だってー」

ウイスの言葉に、フォルトナが口元の血を舐めとりながらそれでも、笑う。

「だって今のは死の運命DEADクエストを乗り越える試練だったんですもの」

ピコン。

【DEADクエスト”Shadow and Death”をクリアしました。元勇者パーティーとの邂逅を生き残りました。あなたの秘蹟”幸運”が更に強化されました】

フォルトナ・ロイド・アームストロング。

彼女が、彼女にだけ見える矢印とメッセージを眺めて――

「コッワー、でしたわね」

にひひと、笑った。

111話 影と幸運（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さい！

書籍販売中です！挿絵や加筆がたくさんあるのでおすすめです。  
本屋さんで見かけた時は是非手に取って頂ければ！

みんなの感想待ってるぜ！

112話 工房・フィギュア・アイゴナダイスンスーン

かつたん、かつちん、とんてんかん。

金槌の響く音、鋼に焼きを入れる音、鉄を水で冷ます音。

その場所は、数多の音に満ちている。

「なんだああおらああ！ おおお！ てめえええ！ 竜殺しかあああ！ なんか久しぶりにみるなあああ！」

炉で燃え盛る炎よりも熱く、金槌の音よりも響く声。

森でも生しているかのような豊かな髭。いかめしくゴツゴツした顔つき、岩のような肉体。

その種族は古の時代、ある特別な金属から生まれたとされる炎と鉄に愛された生物。



「声がでけえ！　なんて!？」

ドワーフ。

遠山鳴人が目の前のドワーフに向けて声を張る。

「ああああああ!!　そういえばよおおおおお!　この前倅と話してくれてありがとなああああ、あれからアイツなんかすげええげんきになつてよおおおおお!」

「倅!　倅だけ聞こえた!　ヴィーノか!　今日は何してんだ!？」

冒険都市アガトラ、商業区に位置する巨大な建物。石造りのドームのような建物の中、遠山が必死に声を張る。

「ヴィーノならよおおおおお、部屋にいるぞおおおおお、顔見せてやってくれやあああああ」

「部屋!?　わかった、あとおっさん!　肝心のパン釜なんだけど  
」!

「ああああああん!? パン釜!? おうよおおおお、わかつたあああああ、作ってやらあああああ! てめらには醸造所の件で借りがあるからよおおおお! いいよなあ、みんなああああ」

「『いいぜええええ、親方あああああ!』」

巨大な炉、オレンジに染まる大きな工房の中に、ドワーフ職人たちの大声が響く。鼓膜がおかしくなりそうだ。

「でけえ! もう声がデカすぎて言葉として認識出来ねえ! まあ、でもなんかやつてくれそうなのはわかった! ラザール、ストル、ココ頼んでいいか?」

「え……」

「あまり居つきたくはないディスプレイ。うるさいし汗臭いし」

遠山のそばでげんなりした顔の審問会のメンバーたちが文句を言う。

「なんだああ、リザドニアンの兄さんに騎士の嬢ちゃん！ 鍛治に興味あのかあああ！？」

「「げっ」

「よし、頼んだ！ 2人とも。少し席外すわ」

タイミングよく工房の長が、レーザーとストルに絡み始めた。これ幸いとばかりに、遠山はその場を離れる。

足場を渡り、地下への扉を開く。

ドワーフの謎技術でこの工房の地下はまるで蟻の巣のように色々な空間が広がっている。

遠山はスルスルと階段を歩き来し、ある扉を開いて――

「ここを、こうして、ああして。うーん、違う、少しイメージがなあ……」

石造りの部屋。石の椅子、石の机、石のベッド。全てが石の部屋の中に彼はいた。

「よう、先生。久しぶり」

「え？ あ！ トオヤマさん！ ひ、久しぶりです！ ど、どうしたんですか？」

「少し仕事でな。お前んとこの親父の力を借りにきた。ま、想像よりも好意的に仕事を受け入れてもらえそうだよ」

遠山は気軽な様子で部屋にズカズカと踏み入る。広い部屋の真ん中に置いてあるのは勉強机のような石机。

そこに座るドワーフの少年が友好的な笑みを浮かべる。

「当たり前ですよ！ 工房はトオヤマさんに大きな借りがあります！ あの奇妙な精密仕掛けや、何よりあの醸造所の件！ もし、まだあの醸造所があったままだと、僕たち工房は――」

喜色満面、少年が口調の勢いを増して、しかしはっと、何かに気づいたように口を抑えた。

「あ、すみません、ごほん、審問会とトオヤマナルヒトは関係ない、でしたっけ？」

「あー、悪い。実はついさっきそうでもなくなってな。隠し事でもないから別にもういいよ。お、ヴィーノ。絵描いてたのか」

真面目な少年に、遠山が笑う。

「あ、はい。トオヤマさんの精密機ほど綺麗じゃないですよ」

謙遜しながら頬を書くドワーフの少年の画板を遠山が眺める。

素人目に見ても、上手い。

モンスターの絵だ。それは遠山にもある意味馴染み深い化け蛇の化け物。

黒い鱗に額に生える宝石眼、生き物を絞め殺す筋肉の塊であるしなやかな軀。

「テイタノスメヤか。充分上手い。……ヴィーノ、それで例のものの進捗はどうだ？」

「その言葉を待ってたよ、トオヤマさん」

遠山の言葉に、ヴィーノがニヤリと笑う。

部屋の石棚を開き、そこから布に包まれた箱を持ってきて。

「じいお……」

箱から取り出されたソレを眺めて遠山が呻く。

「ドワーフの粘土で拵えた人形、えっと、これ、なんて言うんだっけ」

「フィギュア、だよ。ヴィーノ、お前やっぱ天才だわ」

そう、その箱から取り出されたのはフィギュア、だ。

ヴィーノの画板に書かれたティタノスメヤ、ソレをそのまま取り出したような精巧さ。

絵で描かれていた黒い鱗、それも一枚一枚が生きているように見える。艶や、表情、どれもがあまりにもリアルだ。

遠山が、本物と対峙した時の嫌な背筋の痺れを思い出すほどに。

「うづん、あの時、トオヤマさんが僕のことを認めて、うちの父さんに代わりに話してくれたからだよ。ティタノスメヤ、我ながらいい出来だと思っ」

「いや、それなりどころじゃねえよ。もうこれだけで売りもんになるぞ」

「……………」

ヴィーノが丸い目を潤ませて鼻をかむ。

「あ、どした」

「ご、めんなさい。はじめて、はじめて、そんなこと言われたから。僕、父さんや工房のみんなみたいに鉄を扱う才能……なくて、さあ」

「……………」

多くの人は知らない遠山鳴人の冒険のひとつ。

審問会としての初仕事、スマホを取り返したり、なんやかんやで違法な醸造所を焼き討ちしたあの事件はドワーフの工房から始まる



た。

工房の長の一人息子でありながら、ドワーフならば誰しもが得意なはずの鍛冶仕事が出来ない落ちこぼれのドワーフ。それが目の前のヴィーノという少年だった。

ひよんな事から遠山に、絵と工芸の才能を見出された彼の表情は以前と比べてだいぶ明るくなっている。

「でも、なんか報われた気分だよ。ねえ、トオヤマさん。良かったらこれ、貰ってくれない？」

「え、い、いいのか？」

「うん、もちろん。トオヤマさんに貰って欲しい」

正直、めっちゃくちゃ欲しい。

ヴィーノのフィギュアは遠山のロマンを刺激する。モンスターの精巧なフィギュア。揃えたい。

遠山が、その黒い蛇のフィギュア、今にも動き出しそうな理外の才能によって生み出されたソレを眺めて。

「マジか。……いや、待て。ヴィーノ、これ買っわ、俺」

「え？」

「今、持ち合わせなくてすぐには渡せねえけど金用意してくるからよ。これ、予約な、お前のはじめての作品だ。いいものにはふさわしい値段がつくもんだろ」

「トオヤマさん……」

己の作ったモノに値段をつけてもらえて一人前。帝国のドワーフの流儀を知ってか知らずか。

遠山はヴィーノというドワーフの価値を見出し、始めて決めた存在となった。

「はい、そして。ヴィーノ先生に次はビジネスの話だ。おい、ドロ

モラ、いるんだろ？ 入ってこいよ」

石の扉の向こう側に遠山が声を向ける。

「え？」

「隠し事はできないものだな。ほう、君がかの帝国の誇る工房の長の一人息子かね」

ぎい、と重いとびらが開く。聞き耳立てていたことを悪びれることなく、髭ヅラの壮年、ドロモラが部屋に。

「あ、その、はじめまし、て」

「畏まる必要も恐る必要もないぞ。君は私の数段は度し難く恐ろしい男と平気で話しているのだから。なあ、トオヤマナルヒト」

「誰がだよ。まあいい、ドロモラ、これ、見る。すごいだろ」

ドロモラの軽口を流しつつ、遠山がヴィーノのフィギュアを指差す。王国の木工細工を主な商品としているドロモラの目は、これをどのように評価するのだろうか。

「あ」

「……見事だな。作りも精巧、色も鮮やか、だが何よりこれには迫力がある。まるで、手のひらにあのテイタノスメヤを捉えたような気にさえさせられるな……」

お眼鏡に適ったらしい。ドロモラの視線はフィギュアに一点集中。この男がこの反応をするのならやはり間違いはないのだろう。

「ドロモラ、ヴィーノ、実はな、商売の話がある」

「ふむ」

「え？ し、商売？」

「竜祭りまでは無理かもだが、ヴィーノ、お前にあるフィギュアの製作を頼みたい。んで、それをドロモラ商会で扱うんだ」

「詳しく聞こうか」

「フィギュア、って、テイタノスメヤの？」

「いや、ドラゴン」

「「え」」

遠山の言葉に。2人が固まる。

「ドラゴンのフィギュア、作って売ろうぜ。ああ、安心しろ。本人、いや、本竜たちにはきちんと俺が話を通すから」

竜祭り後も商売は続く。ドロモラ商会とラザールベーカーリーはもはや一蓮托生。ドロモラ商会の隆盛はつまり、遠山たちの隆盛に他ならない。

「ドロモラ商会アンド工房が手掛ける、この冒険都市の市場を一撃で独占する娯楽商品、”ヴィーノコレクション”、ポリウム1は……蒐集竜、んでポリウム2は人知竜ってのはどうだ？ 教会の許可が必要なら、俺が銭ゲバと話す」

商人ギルドに強い杭を打ち、妨害もしばらくはないだろう今、一気に冒険都市の市場を奪う一手として、遠山はドラゴンのフィギュアを選んだ。

それは竜殺しにしかなし得ないキラークンテンツの誕生となる。

「いや、お前、正気か？」

ドロモラが石の椅子に腰掛け、額を抑えて首を振る。

「正気だ。安心しろ、ヴィーノの腕は本物だ。才能はきちんと目の当たる場所に連れていかないと」

「い、いや、トオヤマさん、竜、は少し、その、難しいよ！ あの、す、す、姿とか、綺麗すぎて、僕……そ、それにモデルだって」

「安心しろ、文明の利器。探索者端末。これの写真でばしやりしてくる」

遠山が懐から探索者端末を取り出す。そういえば不思議とこの世界に来てから充電が消える気配がないのはなぜだろうか。

「あ、精密機の写し絵……たしかに、それなら……でも、竜……」

「ヴィーノ、想像してみる。お前の作品を色々な奴が買っていく。お前の才能がどこかの誰かの救いや癒しとなるんだ。クリエイターとしてこれ以上楽しいこと、あるか？」

「く、クリエイター……た、確かに」

「んで、ドロモラ。この精度の竜のフィギュア。商売人としてよー、売れないわけがないってわかるよな。……まあぶっちゃけ、ドラ子には今、避けられてるらしいからなんとかしないといけないんだが」

「む、むむむむむむ。いける、な。最大の懸念である竜の意志や怒りを買うやもという点はお前がいればなんとかなる……竜から避けられてるのはまあ、痴話喧嘩のようなものだろうし。ふむ、ヴィーノ先生。少しお話をさせて頂いてもいいかな？」

「あ、はい……よ、よろしくお願いします」

全ての問題点はクリアされた。

竜から許諾を得た竜の精巧なフィギュア。欲しくない者などこの世界にはいないだろう。

6255

「あ、それとよー、ヴィーノ、もう一つ頼みたいことあんだけど」

「ん？ なに？」

「デザインの仕事だ」



【新たなクエストが発生します】

【サイドクエスト・”貴女の姿を留めて”・クエスト目標、”冒険都市にいる竜達の写真を撮る”】

【現在、蒐集竜”アリス・ドラル・フレアテイル”とのコミュが停止しています。竜祭り時に発生する特殊なクエストをクリアすることで彼女とのコミュが再開します】

【人知竜、”アイ・ケルブレム・ドクトウステイル”からの評価はカンスト以降も増加しています。快く写真とフィギュアモデルの許可が貰えるでしょう。注意、求愛と勘違いされないように気をつけましょう】

……

「疲れた……」

「ドワーフの連中はうるさいデイス……なんで奴らは私にお菓子やらなんやらたくさん食べさせようとするのデイスか、それと若いドワーフの連中は私に鉄を送ってくるのはなんなんデイスか」

「孫娘感覚なんじゃね？ ほら、ストルお前、あいつらと少しノリ似てるし、あと鉄はほら、ドワーフだし、なんかこう求愛的な」

「発言の撤回を求めますデイス、審問官殿」

「へいへい。悪かったよ」

工房を出て背伸びする審問会。

どうやら、遠山が席を外している間、ラザール達もそれなりにドワーフ達にわちゃわちゃされていたらしい。

ストルは沢山の若いドワーフには求愛的なアプローチを、年のいったドワーフからは娘感覚で可愛がりを受けたことで疲弊していた。

「それで、ナルヒト。今日の用事はこれで終わりか？ 正直、もうヘトヘトなんだが」

「おー、わりー、ラザールは確かに働きすぎだな。あー、多分、そ

ろそろだと思っただが」

考えれば今日はSLさすがレーザーの日だ。

短時間で商人ギルド勢力の拠点に忍び込み、誰一人として傷つけず、また気づかれず情報を回収する、1人隠密任務をこなしてもらっている。

もう休ませた方がいいだろう。遠山がそう思った瞬間、レーザーの目がキュツと細まり、その瞳孔が大きく縦に裂け――

「――！ っと、すまない」

「いえ、さすがです。影の牙殿。やはり、隠密では貴方は遙か遠い場所にいるようで」

背後に、急に現れた白い影。

ストルが剣を抜くよりも先に、レーザーが更に早く影に溶け、その白い人影の背後に潜り込む。

しかし、その人物にラザールが向けたナイフが振るわれることはなかった。

「よう、トッスル。お仕事ご苦労。主教様がお呼びかな？」

「もしかして、来るのがわかっていましたか？ 異端審問官殿」

しみひとつない白毛の猫獣人。光を反射するような真白のシスタ服に身を包んだ天使教会、主教の直属の隠密が微笑む。

トッスルだ。獣人度100%、二足歩行のチェシヤ猫のような相貌の彼女に遠山が振り向く。

「まあ、なんとなくな。んで、多分呼ばれてるのは俺だけ、か？」

「仰る通りです。主教様からの指示は、竜殺し、異端審問官、トオヤマルヒトのみを大聖堂にお連れせよ、とのことでした」

「……トオヤマ？」

未だ、ストルの手は剣の柄からは離されずにいる。

「いい、ストル。ラザールと一緒に先に帰って来てくれ」

「……わかりました、デイス」

「問題ないのか、ナルヒト」

「ああ、そろそろ呼ばれる頃だとは思ってた」

仲間達は家に帰そう。

あとは今回の顛末を自分の上司に報告するだけ。

遠山は、それで一日が終わると思っていた。

…  
…

ああ、気が重い。面倒臭いったらありやしない。

穏やかな日々と、見目美しい存在、そしてピカピカでチャリンチヤリンのお金。

私はただ、ソレらがあるだけで良かったのに。

「あー……くそ、いやなもん見ちまったわー。なーんでんなもん見せるのかしら、つとに、このクソ秘蹟はさー」

私は、ただ、金貨を磨きながらぼやく。

「あんの何も無いクソ村から抜け出して、クソみたいな街から始めて、ここまで成り上がったのにさー、あーあ、天使様のクソ野郎。……私の役割はこれってわけ？」

何者にもなれないまま生きて死んでいくのが怖かった。だから故郷を捨てた。

弱いままでいるのが怖かった、だから考えて考えて、考え続けた。

お金が好きだった。金は力と自由を何者でもない私に与えてくれるし、とても美しいから。

「まあ、しゃーないわね。切り替えて行きましょう。そろそろ、時間ね」

「主教様、お待たせ致しました。異端審問官、トオヤマナルヒトをご命令通りお連れ致しました」

可愛い白毛の部下の声に、私は金貨をゆっくり清潔な白布の上へ置く。

その扉の向こうにいる男、異なる世界からの客人、竜を殺した異端そのもの。決められた定めを壊し、ただ己の定めた光景へと進む者。

「……託す相手が、アンタくらいしかないとはね。ほんと、お互い損なくじ引きに当たったものだけわ」

扉が開く、開くな。いや、開いてしまふ。

私は今、笑えているだろうか。

「よお、主教様、お呼び出し頂き恐悦至極、ああ、天使粉の件は助かった。でもよー、アンタ、あの商人ギルドの税金の背信、あれわざと泳がせてだろ？ そーゆーのはよー、先に言ってー」

部屋に入った途端、ツラツラと要点だけを話す彼の名前を呼ぶ。きつと商人ギルドで色々なことに気付いていたのだろう。

頭の回転が悪くないものとの会話は嫌いではないけど、ごめんな



さい。今はそんなこと、どつでもいいのよ。

思えばいつも、アンタにはペースを取られがちだった。

だから、今日は、たまには私主導でお話ししましょうよ。

「トオヤマナルヒト」

「あ？」

私は、笑えているだろうか。

精一杯の意地で、にんまりと笑って。

「私、多分もうすぐ死ぬから。後のこと、アンタに任せていい？」

「――あ？」

ぼかんと、目つきの悪い細い目が、固まる。

アンタ、驚いた時そんな顔すんのね。

その顔が、見たかった。

112話 工房・フィギュア・アイゴナダイスンスーン（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さい！

書籍版、みなさまがご購入くださったお陰で続刊決定しました！  
2巻も宜しくお願いします。また来年は凡人探索者も刊行されます  
のでそちらも是非チェック頂ければ！

116話 へんな予言

「なん、で？」

「なんでって言われてもねー、こっちが聞きたいくらいよ。ったくまだまだやりたいことたくさんあんのに、ほんと人生ってやつは思い通りにならないものね」

目の前の女。ステンドグラスに、翼の意匠の像を背に天使教会主教が笑う。

広い大聖堂には、今、遠山とカノサしかいない。

祈りを捧げるための長椅子が並ぶ広間で、2人が相對して。

「いや、いやいやいやいや、なんで、あんたが死ぬのか、じゃなくて、なんであんたが急にそんなこと言い出したのかわかんねーだけど。脈絡なさすぎだろ」

「あーん？ ああ、そりゃそうね。私、あなたにまだ言ってなかったけ。私の秘蹟、未来が見えんのよ」

カノサが、聖堂の奥、大きな8対の翼の像の足元の祭壇へ登る。遠山へ手招きする。

「未来？」

怪訝な顔をしながら、遠山もまた聖堂の奥へ。

祭壇の脇に置いてある机と椅子が。そこだけカフェのテラス席のようになっている。

「そ。未来。これから起こる事とかぼんやり見えたり、知ったり出来るんの。んで、今日見ちゃったのよね。参ったわ、ほんと」

「参ったわ、ってあんた、なんだそりゃ」

カノサが椅子に座り、遠山もまた向かい合わせに椅子に座る。

「参った、しかないでしょ、自分が死ぬ未来なんて見た日には。最悪の気分よ、趣味の金貨磨きも100枚辺りでやる気なくなっちゃった」

「ツッコまねえぞ、めんどくせえ。……冗談とかじゃないんだよな」

「スヴィヤトツスル抜きであんただけ話してるっていう状況で察して欲しいものね」

長く白い指が、木の丸テーブルをこつこつと叩いた。たしかに、遠山が察知出来る範囲では、この聖堂には今、自分とカノサ以外の気配は感じられない。

用心深く、そしてきつと自分のことを心の底からは信用していない彼女が完全に人払いをしている。

「……俺に何か出来ることはあるか？」

つまり、聖女や隠密にも話せない内容なのだろう。

「あら、意外な言葉ね。早めに状況を理解してくれる察しの良さは予想通りだけど、そんなに寄り添ってくれるとは思わなかったわ」

「正直、あんたのことは苦手だ。頭の良くて自分の武器を知ってる奴は厄介だからな。でも、俺はあんたのことを味方だと思ってる。世話にもなってるしな」

「あら、何、口説いてるの？ ごめんなさい、顔がタイプじゃないわ」

糸目を傾け、口元を抑えて主教がケラケラと笑う。

「ひひひ、うっせ、銭ゲバ。……あんたのことだ。このまま黙ってくたばるつもりなわけないよな」

軽口にまた遠山も軽口で返して。そして先ほどの”死ぬ”ということについて聞き直す。

「ったりまえでしょうよ。私の予知はよく当たる、でも必ず当たる

わけじゃあない。未来ってのはね、絶えずゆっくりゆっくり動き続けてんのよ。まあ、何をどうしても行き着く所に行く着くこともあるんだけどね」

「んで、具体的な対策は？」

「あー、それなんだけども。ほら、アンタにも見てもらおうと思っ  
て」

「あ？」

「私の見た未来よ。なかなかこれが、対策立てようにも一緒に診てもらわないと難しいのよ。んでめんどいことに、またこの未来つてのがすごく曖昧で抽象的……見る奴によって解釈が違っつていうか？」

テーブルに置かれてあるティーカップを音もなく主教が口元に運ぶ。持ち手に2本の指でつまみ、傾ける。

「いや、まあ、それはいいけど。え？俺も未来観れるってこと？」



「まあ、能力の抜け穴、一種のズルって奴だけどね、アンタ、秘蹟  
って何か知ってる？」

「……うちのストルとか、アンタんとこの聖女先輩みたいなデタラ  
メパワーだろ？ 遺物……いや、副葬品が人に宿ったみたいなの？」

秘蹟。

この世界に来てから数度それによって苦しめられた。遠山が元い  
た現代にもダンジョンから出土する”遺物”というデタラメアイテ  
ムが存在したが、秘蹟というのは、まるでそれが人の形をしたよう  
な。

「ああ、まあ、そんな認識で大体オツケーよ。獣人、ドワーフ、ハ  
ーFRING、リザドニアン、そしてヒューム、天使様が作りたもう  
た知恵ある種族にはスキルと呼ばれる異能が宿ることがある。

その異能の強度が、特別に強く、そして不可思議であるモノに我  
々天使教会は秘蹟システムと名前を付けた、天使様のみわざに近いものとし  
てね」

「また天使さま、ね」

「ええ、天使様。この世界は天使様という”謎”を前提に、それを受け入れることで成り立っている。まあ、それはそれとして、この秘蹟、ね。私なりの答えが出来たの」

「へえそりゃなんだ？」

割と遠山はこういう話は嫌いではない。人生や世界には意味不明で摩訶不思議なモノがあったほうが、きっとたのしい。

「世界に自分の願いを焼き付ける力」

「うん？」

ばちちちちち。

聖堂のステンドガラスの向こう側、鳥達が飛び立つ。

昼の陽光を浴びて七色に光る見事なガラス細工、鳥達の小さな影

が複雑な陰影を聖堂の中に届けた。

「こうありたい、こう生きたい」

主教の白い頬にも、ステンドガラスの七色の光がぼわりと映されている。

机を同じく、対面する彼女もまた性格は別として飛び抜けた美を持つ存在だった。悔しいから絶対に遠山は口には出さないけども。

「まあ、簡単に言えば、やれば出来る、出来るとお前ばできるのよ。だから、私のこのコントロールが効かないクソ秘蹟も、使い方とアイデアで化ける」

「ああ、遺物を使う時と同じ感覚ね。……何をやる気だ？」

「さっきも言ったでしょ？ アンタにも私の見た未来を見てもらう  
——”大主教令、1ヶ月使用”」

「あ？」

主教の言葉、同時に彼女の頬、右手。複雑な翼の意匠の紋様がいくつも赤く浮かび上がって。

「異端審問会、審問官トオヤマナルヒトに命じる。私と同じになりなさい、私の見るものをあなたも見なさい」

【警告・精神汚染開始、技能”アタマハッピーセット”及び特性”神性（霧）により対抗ロール開始……】

「あ、が」

きいいいいいん。耳鳴り、浮遊感。あらゆる不快が一気に遠山を襲う。

見えない誰かに首元を掴まれて、揺らされているようだ。もちろん不快なものが嫌いな遠山は。

「く、そ！ 俺に、触る、な！」

それに対抗し、跳ね除ける。遠山の目、虹彩に白いモヤが混ざって。

不愉快な感覚が一気に消える。

「う、わ、なにこれ、1ヶ月じゃ、足りないの？ くそ、まじでキシヨいわね。天使教会の者が主教令に抗うんじゃないの！」

カノサの修道服をまくった腕、赤い紋様がどくり、どくりとざわめいている。

今は、彼女の仕業なのだろう。

「いや、お前、まじで説明しろって！ かっこつけていきなり妙なことすんなよ！」

「かーっ！ これだからデリカシーのない男って嫌い！ 美女がなんか謎めいた行動を取ったら黙ってそのまま受け入れなさいよ！ いい！ モテないアンタにわかるように教えてあげるわ！」

びじつとカノサの細い指が遠山に向けられて。

「これから大主教令でアンタと私は同化する！ 無理矢理に精神を繋ぐの、その状態で私が私に秘蹟で未来を見るように命令すれば、”十字星”で見る未来をアンタも観れるってわけ！ どーよ、この完璧な作戦は！ わかったらこのキシヨい抵抗やめてもらえる！？ マジで吐きそうだわ！」

「てめえ、キシヨいキシヨい言い過ぎだろ。攻撃じゃねえんだな？ わかったよ！ これは攻撃じゃないこれは攻撃じゃないこれは攻撃じゃない」

敵意はなさそうなので、遠山が自分に言い聞かせるように呟き始める。

「うわ、この抵抗無意識？ マジでキシヨいわ。……大主教令、2ヶ月使用。さあ、トオヤマナルヒト。アンタも見てもらおうよ」

「秘蹟・観測、クロススター”十字星」

カノサの腕から首にかけて刻まれた紋様。造られた秘蹟、大主教

今。

そして、彼女の元々の才能が発動する。

糸のような眼、右側だけそれが皮を剥かれたブドウのように見開かれ、その紫色の瞳が、十字の形に変わってー。

流れ込む。遠山の視界、暗転、イメージー。

「ーッ」

灰色の空、藁の束、草の味のスープ、シラミの湧く寝床ー

遠山鳴人の脳内に映像が広がる。

どんよりした空に身体が魂が囚われる。死んだ顔をした男と女、隙間風だらけの住居。肋の浮き出た家畜、皮と骨だけのそれを解体する鱧えた匂い。

《ずっと、こんな所で、いられるものか》

《私は、私の人生を変える。運命を殺す》

《私は他人よりも幸せになりたい。不幸で惨めなまま死にたくない》

《生きててよかったと、思いたい、だから、そのために》

ボサボサの髪、窪んだ目に痩せ細った身体。少女が闇の中、頭を掻きむしっている。

《金、金、カネカネカネカネカネカネカネカネカネカネカネカネカネ》

《お金が欲しい》

見たことのある気がする、紫色の瞳の少女が叫ぶ。彼女の開かれた口が視界一杯に広がって、それで。



「う、あ」

「ひ、い」

視界が一気に戻る。流れていた映像は消えて、目の前には青い顔をして息を切らす主教が。

「な、によ、今の……空飛ぶ鉄の塊に、地を走る鉄の箱？ 建物も、街も……それに、犬……？ なに、よ、これ」

「……今の、アンタが見せたかったもんか？」

「待って、アンタ、何を見たの？」

遠山の問いに、主教が質問を返す。

「まさか、混ぜだったの？ 私が見たのはアンタの過去で、アンタが見たのは……チッ」

そして答えを聞く前に舌打ちして。

互いに視線だけでその先を、互いが見たものの詳細を促す。

「……小さい子どもの姿のアンタが、鉄の生き物が動く街の中で……  
…犬と2人で」

「……あの灰色の空、どうしようもない田舎、あそこで子どものお前は……」

互いになんともなく察する。

未来を見ようとした2人が今、瞰たのは互いの過去。

なんらかの不具合により、本来見えないはずのものが混ざったのだ。

「……やめるか？」

「な、わけないでしょ。ここでやめたらプライバシー覗かれたり、見たくもないクソみたいなアンタの過去を焼きつけられただけじゃない。続行よ。今度は、もっと、近くに」

カノサが椅子から立ち上がり、遠山の胸元を掴み、同じく立たせる。

互いの鼻息が届く至近距離、彼女の石けんの優しい香りが遠山にふわりと届いた。

「お、おい」

びつり。

カノサの額と、遠山の額が触れ合う。互いに身を寄せ合い、身体を触れ合わせて。

「うるさい、好きでやってんじゃないわ。私だって、美少女と美少年以外とこんなに近づきたくないんだから」

「一言多いんだよなあ……」

真正面、ゼロ距離で見る糸目、その隙間から紫色の瞳がうつすらと。

遠山の視界が、また暗転した。

……  
……

ぱちん、ぱちん。ぱちん。

チェス盤に駒を置き続ける音が響く。

闇の中、自分の手が止まることなく、チェスの駒を運び続ける。相手の顔はわからない。ルールのわからない駒遊び、しかし自分の手は勝手に動き続ける。

「……………」

相手の手が止まる。同時に自分の手も止まる。

闇の中、対面の向こう側、煌めく何かが見えられて。

……

…

真っ赤だ。

目の前は全て真っ赤。赤くて赤くて何も見えない。

「……………!!!」

聞き覚えのある雄叫びが赤色の中に響く。目を凝らすと、赤色の  
中に溶けていく塊が見える。

金色、黒色、銀色。

その色を知っているような。でも、叫びとともにそれらが全部赤  
色に飲み込まれていく。

ああ、赤色。

これは、炎――

……

……

廃墟の中に、1人立つ。

自分目の前には、チェス盤が一つ置いてある。瓦礫を机にそのチェス盤の上に、駒を置く。

ばちん、パチン。

チェスの相手はもういない。それなのに駒を置く手は止まらない。

ばきん。

突如、自分の盤面の駒が割れた。真上から降ってきた一本の矢が、キングの駒を砕いた。

「――」

気付けば倒れている。胸に突き刺さるのはナイフと鏃。

息をしようと思っても、もう何もできない。

灰色の空を見上げるだけ、カラスの羽が舞い降りて、風がそれを攫っていった。

……

…

あとは、もう、真っ暗――

なんにも、ない。

……  
……

「ーは、あ、はっ、はっ……」

気付けば、遠山は床に四つん這いに伏せている。息が苦しい。肺が空気を求めて動き続ける。しばらく息を止めていたらしい。

「……おはよ。いい夢見れた？ ああ、答えなくていいわ。私と同じ最悪の夢見だったと思うから」

いつのまにか、自分の椅子に座り直していたカノサが呼吸を乱しつつ、ため息をつく。

「なん、だ。今の」

「未来よ。これから確実に私に訪れる未来。隠喩と暗喩ばかりの悪夢みたいなイメージだったでしょ？」



「……意識高すぎて訳わかんねえアートみたいだった……でも、口  
くなもんじゃはないのはわかるよ」

「その通り、口くなもんじゃないのよ。いつ死ぬかも、なんで死ぬ  
かもわからない。でもね、私はこれから近いうちに必ず死ぬ。それ  
も、誰かに敗北する形でね」

「チエス、か？」

「チエス？ ホーカーズのこと？ そ、あの駒遊びで私は負けるの。  
それで、死ぬ」

「……はっきりと言いな」

「まあね。意味わかんないし、ムカつくんだけど、まあこのままだ  
と間違いなく、この映像は現実のものになる、で、トオヤマナルヒ  
ト、どう思った？ 未来の感想は？」

「……いまいち抽象的で、正直今の映像だけでアンタが確実に死ぬとまでは言い切れない気がするんだが」

「ふん、たしかに見慣れていない奴からしたらそれもそうね。んー、私の秘蹟ほんと使いにくいのよねえ。一応文章というか口語文でも記録しているんだけど、読みにくいし、分かりにくいし。んー、アンタにも映像を共有したら、対策が取れると思ったけど、考えが甘かったかしら」

「映像つづーのは理解しやすいぶん、解釈が別れるからな……いつそ、こつ、文章、てか、メッセージとして現れてくれりゃあなあ」

「そうねえ、ーん？」

「あ？ どした？」

「い、や、あれ？ なにこれ、目が、なんか、え？」

「お、おい、おいおいおいおい、や、やめてくれよ？ もう死期が来たとかそういうジェットコースターみたいな展開は」

「ちょ、うるっさい、なんか、視界に映ってーこれ、矢印？」

「ーは？」

ピポーン。

6290

【条件達成・秘蹟”十字星”を共有する】

【システムあなたの秘蹟、クエスト・マーカーと十字星が接続されました。秘蹟の連結が開始されます】

「な、んだ、これ」

「ちよ、は？ 条件？ クエストマーカ―？ なによ、これ」

【秘蹟・連動、プロット・ライン】  
システム・シナジー  
起承転結

【盤面に駒を揃えるといい。例え相手の顔すら見えずとも】

「……………は？」

「また、意味わかんねえことが起きてる……………」

【あなたの駒は強欲、金色の竜、黒き竜、銀の正義、影の愛子、聖なる少女。

何一つとして使い潰す時を誤ってはならない、そして使い潰すことを躊躇ってもいけない。

あなたはあなた自身も使い潰す必要があるのだから】

「これ、まさかー」

【カノサ・テイエル・フィルドの技能”高々度視点思考”が発動します。INT値による補正でアイデアロールを開始します。INT 27、判定なしでアイデアロール成功】

【遠山鳴人の技能”オタク”が発動します。判定なしでアイデアロール成功】

技能、その人物の出来る事を示した機能が作動する。

主教はその常人離れした知性を持って。遠山は現代の豊富なエンタメによって培われたお約束を知る嗅覚によって。

異なる2人は今、同時にー。

「秘蹟が、混ざってる……?」

同時に同じ結論、そして、正解に辿り着く。

「……ちよつと、真似するのやめてくれるかしら？ アンタと仲良  
いみたいに思われるでしょうがよ」

ボソリと、主教がつぶやく。忌々しそうに、その声には棘があっ  
た。

「あ？ なんだ？ いちいち指摘しないでくれ。意識しすぎだろ、  
こつちまで恥ずかしくなるんだけど」

他人の棘には棘で返す遠山も、もちろん言い返す。嫌味たっぷり  
なその言葉。

主教が、ぴくりとまぶたを痙攣させた。

「は？ この私が意識？ アンタみたいな目つきの悪い悪巧みが生  
き甲斐のキツネみたいな目えした男を？ 美少年か美少女に生まれ  
変わってから言ってくれる？」

「今俺の目つき関係ねえだろうが！ むしろてめえにだけは目つき  
のこと言われたくないね！ 糸みたいな目えしてくせによお！」

遠山の言葉に糸みたいな目が、むむっと吊り上がる。

「いいのよ、この目は！ 肝心な時にはきちんと綺麗に開きますよー！ てか、レディに対して容姿のこと突っ込むんじゃないわよ！ だからアンタはモテないのよ！」

「うるせえええ！ 自分で自分をレディなんて呼ぶ図々しい奴は決してレディじゃねえ！」

「はあー？ レディですうー！ 天使教会の主教よ？ しゅ、きよ、う！ レディの中のレディですううううう！」

「レディの趣味が金稼ぎと金磨くなんぞであってたまるか！ レディに謝れ！」

「あららららら？ 童貞の夢を壊しちゃったかしらああ？ ごめんねえ！ 完璧美人でお金持ちで権力もあるレディの裏の顔見せてごめんねえええ！ 童貞くんには刺激が強すぎたあ？」

「てめえにだけは夢なんざ見ねえよ！ 童貞にも選ぶ権利があるんですつづつづつ！」

いつのまにか、顔をぶつけ合うほどに距離を詰めている2人。

似たもの同士、互いに頭が回り、舌が跳ねる。

額をぶつけ合いながら、続く口論。

「え、マジで童貞？」

遠山の言葉に、きよとんと固まる主教。

「おい、カメラ止める」

真顔でよくわからない事を言いながら遠山が立ち上がる。

「あん？ なによ、ダーティーワークか？ ステゴロで来るつもり



？ いいわよ、やったんよ。農村出の底力舐めんじやないわよ、冒険者」

がたつと主教が椅子を蹴飛ばし立ち上がり、ファイティンポーズを向けてくる。

この女、と遠山がピキリときたが、良く見るとそのファイティンポーズの指先が震えているのに気付いた。

「……いや、よそつぜ。銭ゲバ。今、ここで無駄な体力使ってる暇はねえ」

なんか、ごめん。痛ましくなったので遠山が氣勢を抑える。

「……あら、そう？ 良かった。武力行使になると正直、アンタに勝てる見込みないから助かるわ」

ふふん、と言いつつ子鹿のようにプルプル震えている主教。普段の振る舞いやキレすぎる様子からつい忘れていたが、本人に戦闘力は皆無だった。

「で？　これ、なによ。アンタの頭の上にふよふよと浮いている矢印は？」

主教が遠山の頭上を指差してつぶやく。

だが、そう言う彼女の頭上にももはや見慣れた矢印がふよふよと浮かんでいた。

## 116話 へんな予言（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さい！

コミカライズも更新されてますのでそちらも宜しくお願いします。  
また12月からカクヨムで新作投稿予定です！ しば犬部隊・Twitterで告知していきますので是非フォローしておいて頂ければ幸いです。

## 主教サマのリドル その1

【遠山鳴人保有秘蹟。  
” BADEND好き クエストマーカ― ”】

【運命を俯瞰し、進むべき道を知ることが出来る。矢印の導きにより、運命をクエストへと変換し、乗り越えた運命を報酬として昇華する。また運命の中で重要なものを知らせる矢印を可視化することが出来る。遠山鳴人のクエストマーカ―の案内人は現在パン文書館の主人としてその本性を歪曲されている】

「はあ？ クエストマーカ―！？ 何そのデタラメな秘蹟は？ つまり、何？ アンタは自分がその時何をすればどうなるのか、とかそういうのが全部分かるってわけ？ 運命……って、キツシヨ！」

【カノサ・ティエル・フィールド保有秘蹟。  
” ザ・スター 十字星”】

【星の知る未来をあなたは覗き見ることが出来る。知ることの出来る未来、タイミングをコントロールすることは出来ない。また見ることの出来る未来は星が見たものである、人の尺度で見ると理解不能なイメージになることもある。十字星の見る未来はしかし、これから確実に起こる事実である。基本的に未来を変えることは出来ない

い。過程を変えようとも、結果は収斂される】

「おま、十字星つて。未来をガチで見れる？ ……待てよ、ドラ子  
がなんか最初、アンタの予言がどうの言ってたの、これのこ  
とか？」

互いに互いの手札がモロ見えのこの状況。遠山とカノサ、2人が  
うーむと首を傾げ、腕組みしつつ。

「ずつる…！ はあ！？ どっちが!?!」

同時に同じことを叫ぶ。

細いキツネ目と糸のような細い目がじっと、互いを睨つ。

「……」

いいわね？ 次は、私が先に話す、アンタは喋るな？ とジェス  
チャーをカノサが。

「……………」

遠山がコクリ、素直に頷く。

「ふー、いいわ、話を整理しましょう。今、私たちの秘蹟はなんらかの要因によって混ざり合っている。私の未来を見通す秘蹟、そしてアンタの……そうね、運命を俯瞰して確認出来る秘蹟が」

「ああ、間違いないと思う」

互いに丸テーブルを挟み、椅子に座り向かい合う。

カノサの華奢な手つきが、テーブルのティーセットを音もなく動かす。ガラスのティーポット、茶葉がくるくると風に舞うように揺蕩う。

「OK。もう今はその認識共有だけでいいわ。もう今回は何故こんなことが起きたのか、とかは置いておきましょう。今、重要なのは」

【紡がれたバスケットに気をつけた方がいい。  
枯れた木の枝に気を付けた方がいい。  
決して疲れぬ死者の馬に気を付けた方がいい。  
あなたはそれらに追い詰められる】

「これがなんなのか、だな」

「ええ。未来を見通す秘蹟と運命を俯瞰する秘蹟が混ざり合った結果、ポエムが見えるようになりました、ってわけじゃ無さそうね」

「まあ、大体予想つくけどな」

「ああ、やっぱり？ 未来を知ることの出来る秘蹟と運命をメッセージとして明文化する秘蹟、それが合わさったんだとしたら、これは――」

審問官と主教。 2人が同時にそれぞれ指を一本立てて。

「『未来の運命、予言を示す秘蹟』」

容易に答えにたどり着く。互いの言葉に迷いはない。

「……これ、俺とアンタ同じものが見えてるんだよな」

「ああ、たしかにその共有も必要ね。アンタが今見えている奴、全部読んでみてよ」

遠山の言葉に主教が、祭壇の辺りを指差す。そこにもメッセージが浮かんでいて。

「……竜の祭り、あなたの一つ目の死は幸運によって訪れる。

死を避けることは出来ない

あなたはそれを恐れてはならない。

あなたは止まった鼓動を雷によって動かす術を知っているのだから

ら

遠山がスラスラとそのメッセージを読み上げる。



「OK、同じね。じゃあ、あそこのは？」

「祭りの日、あなたの死は英雄によってもたらされる。死を避けてはならない。最後の切り札すら封じられたその後に、分水嶺は訪れる。手綱を握るのはどちらか、決める時が来るだろう」

「同じ、ね。トオヤマナルヒト、これ、どう思う？」

「……ロクでもない内容だとは理解できるな」

「ええ、それは同感。だけど今アンタに考えて欲しいのはそこじゃないわ。……あそこに、いくつかメッセージあるわね」

カノサが示す方向に、遠山が視線を向けて。

【祭りの日、あなたは2択を強いられる。友か、未来か。どちらを選んでも構わない、迷うことは許されない。

怒りを優先するもいいだろう、義を優先するのもいいだろう。  
二兎を追わない者に、二兎を得る機会はない】

【祭りの日、あなたの手札は幸運により削られる。

選択肢は少なく、しかし相手はコールを待つてくれない。  
だが手札の損耗を恐れる必要はない。

あなたの築いた関係はそれでもあなたの優位を守るだろう】

【あなたは気付いているだろう。自分が詰んでいることに。

あなたは気付いていないだろう。挽回の鬼札に。  
思い出もダメだ、取引もダメだ、探究もダメだ。

あなたは己の手綱を誰にも任せてはならない】

「あるな。ん……待てよ、主教サマよ、これもしかして」

遠山がそのメッセージをみて、あることに気付いた。それはめちやくちや厄介なことで。

「ああ、気付いた？ そうよ、この予言、アンタのものなのか、そ

れとも私のものなのかの区別がつかない」

「全部、主語が”あなた”なんだよな……」

遠山が唸る。これではどの予言のメッセージが誰の未来を言い表しているのかが分からない。

予言の主語が、主教か、それとも自分か。それを判断する材料が乏しい。

「厄介ね。しかも面倒くさいことに、一つの予言の中に”あなた”つつー主語が複数ある場合もある。……元々の秘蹟の持ち主がひねくれてるのね、きつと」

「自己紹介ご苦労さん。てことはこのポエムを正しく理解するには、そもそも、これが俺の未来についての予言なのか、それともアンタの未来についての予言なのか、その区別が必要ってことか」

「ええ、そう。でも、アンタは幸運ね」

「あ？ どういう意味だ？」

主教の言葉に、遠山が唸る。

「あん？ 決まってんでしょうが。全部、解読するわよ、トオヤマナルヒト」

糸目から覗く、紫水晶の瞳が遠山を映す。

「マジ？ でも、主教さまよ、これ、すげえ量あるぞ？」

遠山が、この聖堂の至る所にその剣呑な内容とは裏腹にふわふわと呑気に浮いているメッセージを眺めて。

「？ アンタはそんな理由で自分の生き死にを諦めるの？」

きよとん、主教が毒気のない顔で遠山につぶやく。

これまで遠山が見てきた彼女の表情、悪巧みや金勘定や交渉や。この女の有能さに何度も苦渋を飲まされてきた遠山だったが、いまの彼女の顔ほど。

「ーお、おお。……確かにそうだな。悪い、俺の認識が甘かった」

ー恐ろしい、そう感じたものはなかった。遠山は主教、カノサ・ティエル・フィールドへの認識を改める。こいつもやはり、化け物の仲間だ。

「アンタの厄介な所って割と素直に反省出来るとこなのよね。もうすこし狭量なら扱いやすいものをさ」

「美点と言え、美点と。厄介とか言つな」

「さて、この予言なんだけど、もう話の前提としてこの予言は全て

これから起こる事実である、という認識で話を進めるわ、それでいいでしょ?」

遠山の言葉を無視し、主教が提案する。

予言の内容の真偽は問わない、この聖堂に広がる秘蹟がもたらした予言は全て真実である。その共通認識の提案に、遠山がうなずく。

「あー、まあ真偽まで考えてたらキリがねえからなあ。でもよ、主教さまよ、これ、その前提で進めると」

遠山が言葉を詰まらせた。予言とはいつも自分に都合の良いものであるとは限らない。

「そ。”あなた”が私とアンタ、どちらを指しているにしろ、その多くが、死という結末について語られている。ということとは?」

主教がティーカップを撫でながら、上目遣いで遠山を見つめ。

「俺とアンタはこれから先、死ぬ、ってことか?」

「まあ哲学の話をすれば定命の者である以上、いずれ死ぬんだけど。この予言が言ってるのはそういうことじゃないわよね。その予言、読んでみて」

【あなたの2つ目の死は突然、訪れる。

敵は塔の天辺より来たりし汚い嗤い声だけでない。

屋敷には向かわない方がいい。1人にもならない方がいい

黒い嘴は、愛を啄むことをもつ我慢は出来ない】

「んー？これって……」

「2つ目の死。このワードから察するに私達のどちらかは何度か死ぬような目に遭うってこと。仮定すると多分、1つ目の死、とやらを乗り越えた後のことを言ってるんでしょうね」

「乗り越えることが前提ってことか？」

「いや、そこまで言い切るのは難しいわ。でも大事なのはこれ、いくつか共通してるワードあるわよね」

「祭りの日。あー、もしかしてこれって」

「そ。ここまで言えば、トオヤマナルヒト。私が何を言いたいか、分かるわよね」

「このあなたが俺とアンタどちらを指しているようにも……俺たち2人とも」

「竜祭で死ぬ未来ってことよ。世知辛いわね、ほんと」

「……さっき見たあの映像は竜祭のことなのか？」

「そこまで分からないわ。今、はっきりわかってることは、ただ、目の前に危機が迫ってるってこと。そして、今、私達はその危機が降りかかる前にそれを事前に知れたということ、これは大きなアドバンテージよ」



「つつてもこれだけじゃどうしていいのか、分からなくね？ いや、でも」

「そ、気付いた？ 死ぬということが名言されてある予言、”祭りの日”、”死”というワードがある予言の中には、必ず、”幸運”と”英雄”というワードが存在してる。いい？ 私達の今の共通認識、覚えてるわよね」

「……この予言は全て本物。実際にこれから起きる真実である、だっけ？」

「そう、その思考の下、結論を出すなら。このポエムはつまりこんな未来を伝えているの」

主教のきめ細かい白い肌に、ステンドグラスから差す光が7色のプリズムが散らばって。

「私達、2人とも”祭りの日”に、”幸運”と”英雄”とやりに殺される」

「……やっぱりそうなる?」

なんとなくそんな予感はしていたが、改めて言葉にされるといい気分にはならない。

うへえ、と遠山が難色を示す。そんな様子を見て主教がクスッと笑って。

「つまり、んー? ねえ、トオヤマナルヒト。アンタは自分を殺そうとしてくる奴のことをなんて呼ぶのかしら?」

糸のよつな目、しかしその隙間から覗く瞳は笑っていない。

どこか愉快げに、遠山の名前を呼んで。

「はー……。敵、ってことか。幸運と英雄、とやらがよー」

遠山もまた、ため息をついた後笑う。

2人とも人相の悪い笑いがよく似ている。

「さあ、見えてきたわよ。私達の邪魔をするクソどもの存在が。幸運と英雄、アンタ、なんか心当たりある？」

「あー……幸運と英雄……？　そもそも英雄っつーのは、まあ分かる。でもこの幸運ってなんだ？　何を差してるんだ？」

「ふむ、確かにそうね。抽象的すぎる……何か他の予言探してちょうだい、ヒントがあるかも」

「まさかの謎解きパートになるたあなあ……」

「あら、楽しいじゃない、こういうの。リドルを解くみたいでしょ？」

「ミステリーものとかは他人の大事だからエンタメになるんだよ。自分の生き死にを謎解きにされるのは違うだろ」

「へえ、意外。アンタもつとそういつの恐れない奴と思ってたわ。自分の命とかこだわらない方って」

「うっせ。……そういつのは、もう、やめたんだよ」

「ー」。

プールのカルキの匂いと、柑橘のような夏の香り、濡れた黒い髪の毛の友人がこちらを眺めて笑ってる、そんな光景を遠山が一瞬思い出す。

「ふうん。ま、どっちでもいいわ。アンタが私の敵にならないんならそれで。フーン、ふむふむ。あ、英雄関連の予言みっけ」

「あー？」

【あなたの永い計略は実を結ぶ。

十字兜は英雄から古い約束を通じてあなたの元へ届くだろう。

十字兜は最初の一步。英雄に力を示すのだ。

死を、乗り越えることが出来ずとも】

「十字兜……？」

「ふむ、英雄ってワードね。これは多分、さっきの英雄がもたらす死の予言と関連がある予言だわ」

「十字兜ってのがよくわからねえ。それに、この3行目と4行目は？」

「さあ？ でもだいたいパターンがわかってきたわ。この予言、積極的に意味を理解していくべきものと、読み流す必要があるものの2つに分けられるわね」

「その区別の方法は？」

「シンプルよ。」死”と”あなた”この2つが含まれている予言は  
解読する必要がある。なぜなら、”あなた”という主語の区別がい  
まいちつかない状況では、私とアンタ、両方の命に関わるものだけ  
ら」

「あー、なるほど。重要度でわかるわけか。じゃあこっぴあのは流  
してもいいよな？」

遠山が、側にあるメッセージを指差す。

【進み続ける愚者の行進はついにお互いへ辿り着いてしまう。  
その行進の最中、全てを滅ぼした幸運よ。  
その行進の最中、全てを蹂躪した強欲よ。  
生き残るべきはどちらか、決めるときが来たのだ】

「そう、ね。……んー、いや、待ちなさい。これも幸運とやらのワ  
ードがあるわね。それに、強欲……あー、待ちなさいよ、確か……」

【カノサ・ティエル・フィールドの技能”瞬間記憶能力”カメラアイが発動しま  
す】

「あー……これね。」あなたの駒は強欲、金色の竜、黒き竜、銀の正義、影の愛子、聖なる少女”、ここにも強欲っつー二人称があるわね。あー、はいはい。トオヤマナルヒト、”あなた”の判別方法わかったわよ、パターン見えてきたわ、パターン」

「瞬間記憶って……チートすぎじゃん、で、パターンって？」

「この”強欲”ってワードが誰かを特定できれば”あなた”を絞り込めるんじゃないかしら？ ほら、他にも強欲とあなたが両方あるメッセージもあるし」

主教がすっ、と近くにあるメッセージを指差す。

【まつろわぬ強欲が最初の一步を踏み出したならば。  
今度はあなたが備える番だ。赤き終わりを滅ぼすために。  
教会の底の底に向かえ、古い秘密を暴く時が来た。  
パン釜を大切にな】

「なるほど、ああ、わかった。強欲か。そりゃもう1人しかいねえだろ」

遠山も主教の言いたいことを理解する。

”強欲”という言葉、これが誰のことを言っているのか、それさえ理解出来れば、ややこしい”あなた”という言葉と区別することが出来る。

遠山鳴人とカノサ・ティエル・フィルド。お互い似通った思考回路、聡明な頭脳。

頭の回転という能力において、この冒険都市では最優に近い謎解きのエキスパート2人が答えにたどり着く。

「ええ、そうね。そういうこと。これで決まりね。”あなた”という主語の判別はクリアね、強欲が示すのは」

「ああ、この予言の中、”強欲”が誰のことを言ってるかっつーと」



両者が、勝利を確信した顔で似たような悪人スマイルを浮かべー

「アンタのことね」

「アンタのことだな」

「「あ？」」

いつものチベスナキツネ顔と銭ゲバフェイスが睨み合う。

この2人、能力的には最高の相性だが、シンプルに、人として相性が悪かった。

主教サマのリドル その1 (後書き)

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをじっくりご覧ください！

118話 主教サマのリドル その2

「何言ってるんの、アンタ。この街に来て、竜、教会、魔術学院、それに最近はドワーフの工房をも巻き込んで好き放題にやろうとする奴がなに言ってるんのよ？ アンタほど強欲が似合う奴はいないわ」

「いやいやいやいや、流石に俺も金貨磨いてそれを肴に酒を飲む趣味はねえからな。それに、酒やらパンやらといった生活必需品に、信仰心を利用して金を取り込む仕組みとかもなかなか思いつかねえ。いや、なに、主教サマの強欲ぶりには頭が下がるよ」

糸のように閉じられた眼とチベットスナギツネのような細い虚無の眼が向かい合う。

お互いになにこやかに話す。しかし、その話は決して平行線を破ることはなく。

「はあ〜！？ アレは私の心の平穩の為の趣味ですっつ、それに祝福税はそもそも教会の最初期からあった構造ですっつ」

「はい、じゃあ俺もです、巻き込んだ、じゃなくて巻き込まれるんです。好きで騒ぎを起こしてるわけじゃありません」

互いに似たような人相の悪い顔をしながらいがみ合う。争いとは同じレベルの存在でしか発生しえないのは事実なのだろう。

「この……いや、待て待て待て、もうキリないわ。ほんと。なんなの、この男。話してるだけでトラブルが起こりそうだし」

「なわけあるか。俺ほど慎重に身の振り方考えてる奴はいねえ。……だが、いがみ合うのも確かに無駄だな。えー、でも、話が振り出しに戻っちゃうな、これじゃ」

お互い向かい合いながら腕を組んでうーむと唸る、鏡合わせのような姿にも見えるが本人たちは決してそれを認めることはないだろう。

「……仕方ない。」あなた」と強欲、もうこれいっそ私たち両方のことを指し示す言葉として扱います。面倒だけど、それが一番早い」

カノサがふーっとため息を吐き、背伸びをした。

「だな

。さて、じゃあ後は、喫緊で解読しないといけない予言だな。幸運と英雄ねえ……」

「面倒ね。いつぞ。謎のヒントを聞くことの出来る秘蹟でもあれば便利なんだけど」

「ひひひ、ヒントね。確かに。まあ、そんな力あればさぞ人生はイージーモードだろうな」

「ま、ないもん気にしても仕方ないわ。うーん、にしてもあれよね。これ、幸運と英雄、2人に殺されるんじゃないかと、あくまでそれぞれ1人ずつ殺されるのよね？」

「ああ、この予言か」

言いながら遠山が予言のメッセージを眺める。

【竜の祭り、あなたの一つ目の死は幸運によって訪れる。死を避けることは出来ない

あなたはそれを恐れてはならない。

異なる世界より来たりしあなたは止まった鼓動を雷によって動かす術を知っているのだから】

【祭りの日、あなたの死は英雄によってもたらされる。

死を避けてはならない。

最後の切り札すら封じられたその後、分水嶺を訪れる。

手綱を握るのはどちらか、決める時が来るだろう】

「まあ、文脈的に、あれね。幸運も英雄も個人のことを指し示してはいそう。英雄、英雄ねえ……勇者パーティー、は、ないか」

「あ？ 勇者パーティー？」

なんの気もなしに呟かれたカノサの言葉に遠山がぴくりと。

「ええ、勇者パーティーのメンバーを英雄と呼称することもあったなって。まあ、主に王国での呼び方なんだけどね」

「王国での呼び方、…… ああ、確か、海を隔てた向こう側の国が」

ラザールの故郷だ。今までもこの世界にきてからの生活と冒険の中何度かその国の名前は耳にしていた。

「ええ、帝国と王国は文化や風習が似てはいるけど、違うものも多いのよ。ほら、たとえば帝国では、”副葬品”って呼ばれるものは王国では”漂竜物”竜の世界から届いたアイテム、もしくは竜にすら届きうるアイテムって意味の名前がつけられてたりね」

「あー、地域が違ったら呼び名も変わる的なあれか。勇者パーティーのことも、王国では英雄って呼ぶこと……が……」

遠山がゆっくり言葉を詰まらせる。勇者パーティー。そう呼ばれた人物、しかもあまり関係性のよろしくないそいつのことを思い出したからだ。

「……………あんだ、そう言えばあの、ウェンフィルバーナと一回揉め事起こしてたわよね」

そんな遠山の様子に気付いたらしいカノサが一度紅茶を飲んでから、静かに問いかける。

「最初のギルドの話か。おう、殺されかけ……………あー……………」

遠山はそこで頭を抱えた。ついさっき、その勇者パーティーの奴ともめたばかりだった。

「待って、アンタまでその感じやめてくんない？ なに？ ほんと

やめてくんない？」

「…………ゴメンネ」

「やめろっつってんでしょ、か細い声出してんじゃねえわよ。何した、ん？ なに？ またやらかしたんか？ ん？」

「いや、ついさっき、その商人ギルドで、その、ウエンフィルバーナとまた揉めたわ」

「…………うわ、こいつマジか」

うわ、こいつマジか、言葉の通りの顔をしてカノサが唸る。

「いや、待て待て、だからと言ってそいつが、ほら、俺らと揉めるとは言い切れねえだろ？」

「アレと揉める可能性が出た時点でアウトなの。いや、待てよ、待て待て待て、カノサ、考えなさい、このバカが話をややこしくしてるだけな気がするわ」

「またバカって言った…………」



カノサの言葉に静かに傷つきながらも、遠山はカノサが悩んでいる様子を眺めて。

「あ」

「あ？」

カノサがぱつと顔を上げる、遠山が首を傾げて。

「トオヤマナルヒト、そういえば、アンタ、竜、蒐集様とは仲直り出来たのよね」

「あ」

「あ？」

今度は遠山が顔を下げ、カノサが首を傾げた。

「いや、実はそれが」

かくかすりゅつりゅつ。

人知竜が教えてくれた今のドラ子の状況をカノサにそのまま伝える。顔色が赤色になり、紫に、最終的には青色で落ち着いていた。

「っあゝ、あゝ」

カノサが唸る。彼女からしてみれば3日前、かなり頑張って竜殺しと竜の仲を取り持ったのに、ふたを開ければまさかの好き避け。彼女の胃はもうボロボロだ。

「その節は、本当に主教様にお世話になりました！」

遠山が椅子から立ち上がり、直立姿勢、そのまま90度に頭を下げた。

「うるせえゝ、頭なんざ下げてくんなあゝ……なんでそうなのよ。ほんと意味わかんないわ、ああゝ待って、待って。竜もそうなんだけど、英雄の件、これマジでめんどいわ」

「ウエンフィルバーナ……か？」

「いんや、そいつもヤバいんだけど、てか、この予言の英雄がもし、ウエンフィルバーナのこと言ってんならお手上げよ。アレは決して

触れてはならないモノだから」

「あー、まあ危ない奴だよな」

「それどころじゃないわよ。あんな化け物。あー、話を元に戻すわよ。これは確信だけど、ウェンフィルバーナ」英雄ではないわ」

「なんでそう言い切れる？」

カノサの意外な言葉に遠山が眉をひそめた。

「簡単よ、彼女は、教会とは争えない盟約があるの」

「盟約？」

「そ、決して破れぬ運命を縛る誓い、副葬品・”永久の螺旋”によつてね。それだけは確かだわ」

カノサの視線が一瞬、足元に移るのを遠山は見逃さなかった。その副葬品のありかがだいたい予想がつく。

「あー……色々聞きたいことはあるけど、その約束事って俺には適用されなくね？　なんか俺めっちゃもめてんだけど」

「ふむ、いい質問ね。でも、この盟約の内容は、勇者、及びに勇者パーティーはどのような形でも天使教会に対しては不利益をもたらすことが出来ないという内容なの」

「不利益？」

「そ、非常に業腹だけど、ほんとのほんとに業腹だけど、アンタも最早私の身内、教会の子よ。アンタに何かあればそれはつまり、教会の不利益となる。つまり、ウエンフィルバーナのそれは成功しない」

「成功しない？　変な言い方するなよ。どっという仕組みだ？」

「アンタ、運命って信じる？」

「……創作物の題材として好みだ」

この女から振られる話題としては珍しい。遠山は身を乗り出して耳を傾ける。

「そ。なら話は早いわね。副葬品の中にはいくつか、他者の運命に影響を及ぼすものが歴史の中で確認されているの。ウエンフィルバーナに使用されている副葬品の効果はね、”不変と不可侵”の強制」

「シンプルに言うって？」

「彼女が、天使教会に行ういかなる不利益をもたらす行動も、必ず失敗する」

「まためちゃくちなこと言い出したな」

「それが”副葬品”の力よ。この世の理を歪める大いなる力。ウエンフィルバーナがその副葬品の影響下にある以上、彼女の取る教会への不利益な行動は必ず失敗する」

「例えば彼女がもし、私を傷付けようとするのならば、それは必ず失敗する。ありとあらゆる形でね」

「……それは」

「逆説的に言うと、審問会のメンバーであるアンタが、ウエンフィールバーナと揉めて、今無事である。そのこと事態が、副葬品の効果を証明しているの」

カノサの糸目が遠山に向けられる。

「彼女とアンタが揉めれば、必ず彼女は失敗する。それはアンタに味方する助けが都合よく現れる形であったり、それはアンタに彼女に対抗する力が都合よく備わったタイミングであったり、心当たりはないかしら？ 過程はどうあれ、アンタはあの勇者パーティーと揉めてもなお、生きている」

「……ご都合展開が味方してくれるってことか？ マジかよ」

言いながら、ふと遠山は考える。確かにさっきの件も結果的には進化しつつあるキリヤイバの力のおかげで、はったりを利かせ撃退することが出来た。副葬品の効果と言い切ることは出来ないが、確

かに結果的には出来すぎなほど、トラブルは簡単に収束した。

もしかしたら、これまでも遠山が気づいていないところで、その副葬品が効果を発動してきたのかもしれない。

「ま、そゆことね。そして教会最大の優位点はね、彼女は自分の運命が教会によって縛られていることを知らない。勇者パーティーという、そうね、一つの装置に付けられた保険ね」

「じゃあ、この予言は……」

「あなた」という言葉が、私でもあんたでもどちらにせよ互いに天使教会の身内よ。ウェンフィルバーナがそれを脅かすことは出来ない。可能性がゼロとは言わないけど、”英雄”に彼女が該当するとは考えにくいわね」

カノサの説明は一応の理屈は通っている。

「待てよ、そうなると話が振り出しに戻る。整理するぞ、今、現状この予言から分かる重要なことは2つ」

遠山が話をまとめだす。

「その1、」俺たちのどちらか、もしくは両方、竜祭りで死ぬ可能性がある」

”あなた”と”強欲”、この見極め方が不明な時点ではその前提で動くべきだろう。

「その2、”俺たちの死は『幸運と英雄』によってもたらされる”」  
死というワードが含まれる予言にはその多くに幸運と英雄が含まれていることからこの点も可能性は高い。

「その3、”『英雄』はウエンフィルバーナの可能性は少ない”、この認識は間違いないか？」

「ええ、問題ないわ。そして、ええ、今大体わかってきた」

カノサがうなずく。そして同時に、自分の額に指をあてながら足を組み、遠山に答えた。

「あ？」

【アイデアロール進行、カノサ・ティエル・フィルドのINT値27。これにより判定なしでアイデアロールに成功します】



【カノサ・テイエル・フィールドの技能が連続発動します。複数の技能”高度視野思考”、”瞬間記憶”、”真相解明”、”論理の魔術師”、”情報網”、”羽の長”、”歴史知識”、”帝国知識”、”王国知識”、”考察のコツ”、”情報解釈”が発動します】

遠山の視界にメッセージが踊る。カノサの周辺、頭の辺りを舞うように数多のメッセージがくるくると。

「幸運と英雄……ええ、アタリがついたわ、そいつらの正体に」

「え、は？ ど、うやって？」

「この街に変化をもたらす連中はいつも、外から来た奴よ。アンタみたいにね、そしてこの予言のワード、”英雄”という言葉、これは”王国”に深く関わりのある言葉だわ。幸運と英雄を一つくくり考えるのならば、これらは”王国”に何かしら関係する存在である可能性がある」

「仮定が過ぎるだろ。いや、もし仮にその”王国”関連つてのが正しかったとしてもよ、それだけじゃこいつらの正体に近づいたとは言えねえ」

「……………あつた」

「は？」

遠山の反論を流しつつ、カノサが何か思考を進めて。

「この1ヶ月で、冒険都市に新たにやってきた旅人、新参者、私はそいつらの情報を全て覚えている。その中で怪しい連中が、いる」

「は？ え、いや、お前何言ってるー」

さらっと告げられた神業の自己申告に、驚いている時間すらカノサは待つてくれない。

「……………数日前、竜大使館に新たに雇われたメイドと執事がいるわ。体調不良で寝込んだメイド長の埋め合わせの為にね」

額を人差し指でぐりぐり抑えるのは彼女の癖だろうか。思考がさらに進む。

「竜大使館に？ あそこ、普通に求人してんだな」

「普通はしてないわ。竜大使館で働けるのは古い時代に竜と盟約を交わしたヒュームの一族だけ。帝国では、それは皇帝一族と呼ばれ、王国では王族と呼ばれる連中よ」

「あ？ それ、つまり」

「ええ、天使教会が掴んでいる情報が正しければ、今、竜大使館に新たに雇われたメイドと執事は王国の王族のヒューム。……あら、あらあらあら、臭いわね、このタイミングでどうして王族、あのアームストロング家が竜大使館に近づくのかしら」

アームストロング。

その言葉を聞いた瞬間、遠山は固まって。

「あ……………」

あることが脳裏をよぎって。

「あん？ どしたのよ。なんか心当たりでもー」

「いや、なんかそんな名前のやつがこの前うちに来たような」

「は？」

遠山の言葉に今度はカノサが口を開いて。

「アームストロング、アームストロング……」

「は？　ちょ、どういう意味？」

「いや、なんかラザールのパンの匂いに釣られてうちの家に……ああ、まってまって、うわ、あいつすげえ考えてみれば怪しかったわ。ドラ子との一件ですっかり忘れてたけど」

暗黒女神や耳の奴、あの異界で起こったバカバトルのせいですっかり忘れていたが、新居に尋ねてきたあの不審者、緑髪の女が確か。

「何よ、その理由。影の牙のパンはなんでもかんでも呼び寄せると

「？」

「そう、影の牙！ あの女、レーザーが影の牙ってことも知ってた。王国関連の奴じゃん……」

遠山が必死にあの時のことを思い出す。

あの独特な雰囲気、常に浮かんでいた朗らかな笑顔、そして身にまとう強者特有の余裕。

わたくしは、と申します。冒険都市に来るのは初めてで、色々珍しいものも多く散策していたところ、たまたまこのお屋敷が目にとまって、ついお邪魔してしまいました

まあ、怖いですね

そう、そして余裕たっぷり自分の名前を。

「……フォルトナ・ロイド・アームストロング」

遠山はその女の名前を憶えていた。

「なんて？」



裏切りと力”……」

「お話？」

「私は今まで読んだ本の中身を全部覚えてんの。その中に確か、赤い髪の英雄が主人公の話がいくつか……ああ、これね」

カノサがまた額をぐりぐりひとさし指でまた額を抑える、目を瞑り、首をわずかに傾げて。

本当に何かを読んで、探しているかのような。

「マジかよ」

「あつた、あつた。ポステタス。力の……英雄？ ふうん、勇者と旅の途中で出会い、一時は仲間となり、後に裏切り、”王”に寝返った不忠者……アンタの家のとこに来たっていう赤い髪の男、名前とか聞いてないの？」

「すまん、そこまで覚えてない。あ、でも、なんかあいつ妙な姿してたな」

「妙な姿？」

「ああ、なんかあれ。バケツヘルムっつーのか？　こう、兜だけ腰にくくりつけて」

「ちよい待ち。……じゅうじ兜。もしかして、じゅうじ兜のじゅうじて、古代二ホン語の”十字”のこと？」

カノサの指さした先にあるのはあの予言。

【あなたの永い計略は実を結ぶ。

十字兜は英雄から古い約束を通じてあなたの元へ届くだろう。

十字兜は最初の一步。英雄に力を示すのだ。

死を、乗り越えることが出来ずとも】

「お！　あ、そうか。漢字がねえから十字っつっても十字のイメージは普通ねえのか。異世界設定忘れてたわ、すっかり」

カノサの言葉に遠山が手を叩く。

「アンタ、赤い髪を持った兜のスリット、どんな形してたか覚えてないの？　てか、ぶつちやけ、これと同じような形よね？」

カノサが聖堂に置かれてある鎧の飾りを指さす。教会騎士の各種類の鎧の中にはストルが着ているような動きやすさ重視の薄いもの



から、フルプレートの重いものまで。

そして、その中にはまさにバケツと見まごうあの意匠のものもあつた。

「おお、まさに」

バケツヘルムのスリット、のぞき穴。縦、横に刻まれたそれは確かに十字の形をしていた。

「……………」

「……………」

「えええええ〜もう、こいつらじゃーん。めちゃくちゃ怪しいじゃーん」

カノサが机にだらーんと身体を預けて嘆く。

「何点かわかんねえ部分もある、が。状況が揃いすぎてんな。英雄が、あの赤い髪の男なら、幸運が、あの緑髪の女ってことか？」

「そう、そこなのよ。ポステタスが英雄を指すのは分かる。でも、アームストロング家の三女に”幸運”なんて名前があてがわれる理由がわからないわ。まあ、王族なんてもんに生まれること自体、不運なものに」

「そういうもんか。だが、これでだいぶ絞れたな」

「ええ、そうね。もう仮定でも備えましょう。例え、私たちの予想が外れていたとしても、このタイミングで竜大使館に近づく街の外からやってきた連中なんてどうせ厄ネタ抱え込んでるのに決まってるわ」

「厄ネタね……」

カノサがため息をついて、明後日の方角を指さす。

そこには。

「……う、わ」

【幸運に魅せられた英雄が、竜の焔に伏せるとき、導きの光が灯るだろう。

敵を侮ってはならない。奴らも進み続けてここへ来た。

家族を滅ぼし、霸王を討ち、老兵を斃し、月光を歪めてここへ。

愚者の行進は止まらない、竜の焔ですら溶けぬものがあると知れ【

【英雄の力に倒れ伏し、自らの血溜まりに沈む時、あなたは急がなければならぬ。】

黒き竜を恐れるべきではない、彼女はあなたの味方だから。

黒き竜を信じるべきではない、彼女はあなたの虜だから。

血の滴る美食を前に、竜はその本性を抑えることはできない【

【甘くほろ苦い死があなたの運命を試す。

幸運が笑い、英雄が目を背け、竜がそれを差し出す日。

あなたは決して断ることはしない。

20万年にも及ぶ進化はあなたをきつと守るだろう【

【約束を信じすぎない方がいい。いつも裏切られてきたから。

決まりを信じすぎない方がいい。抜け穴があるものだから。

郷愁と過去、思い出と執着は遅行毒。

出来るのなら、やっつけてしまいがヒトのサガであるから【

【あなたの手札は削られる。

鬼は古い樹の海の底へ、黒き竜は古い終わりへ。

それでもコールは果たされる。

決着はあなたにしかつけられない【

【十字兜十字兜じゅうじかぶと。  
数多の化け物と殺し合う運命にある男たちの執念。  
十字兜十字兜じゅうじかぶと。  
素晴らしきヒトのヨスガ】

「ほんと、人生ってクソね」

カノサがため息をつく。

似たもの同士の2人の会議は結局、この後日が落ちる時まで続いた。

遠山が屋敷へ帰る頃にはすでに、子どもたちは夢の中。

起きていたラザールやストルと少し、酒を飲んで、遠山は眠りにつく。

竜祭りはどんだん、その日は近づいてくる。

118話 主教サマのリドル その2（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！

ダンワル2巻、そして凡人探索者の書籍も準備進んでおります。お楽しみにお待ちください。

119話 竜祭り前夜・戦力充実ルート・”さあ、あなたが失うモノを眺めなさい”

　　↳ 銭ゲバとの作戦会議の翌日、遠山の屋敷、中庭にて

「おお、齒よ。何故あなたは私をいつも厄介ごとのループに誘われるのか。か弱き我らを守り給え」

「デイス？ もうその2人、ぶつ殺せばいいんじゃないデイスか？」

翌日。

主教と話した内容をラザールとストルに話した結果がこれだ。

中庭に元々設置されていたテラス席っぽい場所、白い木の丸テーブルを囲み、いつもの3人で顔を突き合わす。

ラザールは鼻に皺を寄せて目を覆いながらまた祈る。

ストルは毛糸の玉を見つけた猫のような顔をしてパチリと指を鳴らす。

「予想通りの反応サンキュー。ラザール悪いがまた付き合ってもら  
うぜ。ストル、俺もそうしたい所なんだが、それは今回出来ねえん  
だよ」

「デイス？」

「あくまで今んとこあの2人は怪しい止まりだ。俺と主教の予想で  
しかない。まあ、でもお前の言う通り推定チエストするのが1番確  
実ではあるし、ぶつちゃけその案も出たんだが」

「……王族だぞ？」

遠山の言葉にラザールがぼそりと呟く。

「そこなんだよ、ラザールくん。俺と主教も結局、その一点で暗殺  
を諦めた。竜大使館でやるのは無理だから、街に出かけたりしてる  
時とか、計画は詰めただけだな。リスクが高すぎる」

主教との侃侃諤諤の話し合いの末、遠山の最推しした”暗殺案”  
は却下された。

その計画の成否以前に、リスクが大きすぎるといふシンプルな理由で。

「計画を詰めたのか……主教殿と審問官殿が理性的であられるよ  
うで何よりだ」

「ふーむ。なるほど。王族。偉い人なのデイスね。それで遠山、ど  
うするつもりデイス？」

ストールがびよこんと首を傾げる。長めに結われた水色ポニテが流  
水のように揺れる。

「おう。まあだいたい方向性は、俺と銭ゲバの結論として」

遠山が安楽作りになっている椅子の背もたれに体をぐぐつと預け  
伸びをしながら。

「何もしないことにした」



ラザールとストルに決定を告げる。

「……意外だな。いつものアンタなら暗殺がダメでもなんらかの手立ては揃えていると思っただが」

「えー、消極的すぎませんか？ いいのデイス？」

2人とも意外そうな顔をする。これまでの彼と彼女の知る”竜殺し”のやり方とは少し違う対応だった為だろう。

「あー、理由はいくつかあるんだが……今回はいつものクソトラブルと大きく違う点がある。例えばホラ、ストルお前と前揉めた時とか、あの白蛇女と戦った時、ああいうのと今回はシチュエーションが違っただよ」

「どつという意味デイス？」

「教会騎士の時も白蛇女の時も、まあ、あとはこの前のドラ子に謝りに行った時も、俺たちに降りかかるトラブルは大抵、予想だにもしない中、突発的に起こったことだ。今すぐこちらからぶん殴って対処しないとこっちがぶっ殺される的な奴な」

「んー？」

ストルにはまだピンと来ていないようだ。遠山は瞬時に知性1の水色ポニテにもわかるように話を再構成していく。

「まあ、ストルにもわかるようにシンプルに言うのだな。今回はもう既に”これから何かが起きて、どんな奴が敵になるか”が”ある程度目星ついてる状況”なんだよ。これが今までの俺たちの愉快的な生活とは違う最大の点だ」

「えー、トオヤマ。でもだからこそ怪しい奴がわかってるのならもうこちらから先手で潰したら早いじゃないデイスか」

ストルが自分の握り拳をパターンと空いた手で叩く。乾いた、いい音がした。

「イノシシかてめーは。と言いたい所だが、ストル。お前の言うこともとてもわかる。すげー分かる。アイツらが、何の後ろ盾もないチンピラならぶっちゃけ即殺して教会の権力で揉み消すことも出来るんだが、ま、今回はアレだ。相手もなかなか頭が回るみたいでな。アイツらの今の立ち位置がにくたらしい」

「竜大使館か……」

ラザールがうめく。

「そ。表向きは王族、しかも今は王家の慣例に従って竜の従者見習いとなってる。この状態で連中をこちらからチェストするとどうなるか、はい、ストルくん、わかるかな」

「スツキリする！」

「ラザールくん、君困るよ。きちんとさあ、この子の教育しなくちゃ」

「悪い見本に憧れてるんじゃないか？」

遠山のぼやきに、ラザールが喉を鳴らしながらにやりとストルの方へ笑みを向けた。

「あ？　なんだそりゃ」

その反応に、遠山が首を傾げ、ストルの方へ視線を流す。

「デデデデイス！ ら、ららららラザール、今の発言は見逃せません！ わたしがいつトオヤマのことをそんなふうに言いましたか！？」

何故か、ストルがプルプルと震えながらラザールへ詰め寄っている。

「おっと、騎士殿。俺は何も悪い見本がナルヒトだとは一言も言っていないが？」

「ツーン、このリザドニアン、イジワル！ トオヤマ、みてくださーいこの顔！ この牙！ デイス！」

「ははは、は、こらこら騎士殿。君は力が強いんだからもう少し手加減を……ガッ！？」

ぐにゅんとラザールのトカゲ顔を掴んでもちやもちやと揉み回すストル。馬鹿力で顔を揉まれたラザールがすぐに悲鳴を上げていた。

「うんうん、お前らも仲良くなってるようで何より。さて、ストルが俺に憧れてくれてるのはありがたく受け止めて、だ。話を戻すと、用は今、こちら側からアイツらに手を出すと一気にこっちが悪者になっちまうってこと。んで俺らの今の立場的に”悪者”になるのは避けたいんだよ」

「教会の勢力下にいる今の状況では、そう簡単に動けない、ということか」

首を揉みながら、ストルから解放されたラザールがつぶやく。

「平たくいやそーゆーことだ。今回のトラブルはな、つまり俺たちの行動1つミスれば、俺らの大きな後ろ盾である”天使教会”を巻き込んで全て終わるってことさ」

「むー？」

どうやらまたストルはピンと来ていないらしい。

「……わたし達の敵がいるんデイスよね？ そいつらの正体も分か

っている。やっぱりもう、殺すチエストが1番デイス？」

水色の瞳に輝きはない。美しく、澄みすぎている泉のようだ。

遠山が額を揉みながら、この純粋な騎士を説得出来る言葉を探す、探してー

「今回は、負けたら全部終わるんだ」

「デイス？」

「教会を巻き込んでいる以上、今回だけは”完全勝利”しなくちゃならねえ。負けたら終わり。今の生活も、これまで勝ち得たモノも全部失う」

危機感。

遠山鳴人の頭は酔いや名瀬瀬宗ヤバ女による工作であらゆるトリガーが外されている。

だが、それでもなお、聴く、流れを読むことが出来るが故に感じる今回の竜祭りやあの予言。嫌な予感がする。

今回の敵、これに負ければ――

「今の、生活が消える……？」

「あ？」

「む？」

思考に沈みかけていた遠山を引き戻したのは、ストルの微かな呟きだった。

「それ……わたし、嫌、デイス」

表情が、固まっている。まるで、恐ろしい夢を見てそれに慣れて  
いる幼子のようだ。

「お、おお」

「ふ」

遠山はストルのその様子にただ驚き、ラザールはなぜだろう、少し嬉しそうにその様子を眺めていた。

「わかり、ました。……トオヤマ、あなたの判断に従います。だから……わたし、嫌、デイス」

震える声。そして遠山は信じられないものを見た。

ぼたり。大きな水色の猫目から溢れたのは、涙。

ツヤツヤの白い頬を球のような涙が伝って、テーブルにシミを落とした。

「あれ、ストル？ うそ、ストルくん？ え？ 泣いて……え？



ラザール！？　なんで！？」

「ニコー、いるかい？　ナルヒトが君の大切な友人を泣かしてしまった。手助けしてくれ」

わたわたし始める遠山を尻目に、愉快トカゲが中庭で遊んでいる遠山の一味随一の陽キャに声をかけた。

「トカゲツ！　お前、ニコはずるいだろ！　正論陽キャ少女に叱られる20代男性の姿はきついで」

「ラザールさん！？　なんですって！？　またお兄さんがストルちゃんをいじめたの！？　ダメよ！　最近、ストルちゃんはお兄さんに対して少し距離感が掴めてないというか、計りかねているというか、少しナイーブな感じなのに！」

びゅんっと、飛んできたニコがストルに寄り添い、遠山に声を向ける。

「に、ニコちゃん！　そ、そんなこと言わないで……」

ストルが顔を手で隠しながらうずくまる。耳が、真っ赤になっていた。

「え？ ダメだったの？ でも、ストルちゃん、最近お兄さんと話す時無理して何か明るい感じ出してるから、私てつきり、なんか意識してるのかなって」

「トオヤマ、ラザール！ わたし、ニコちゃんと買い出しに行ってくるデイス！ お小遣い使いますからね！」

「お、おー、気をつけて」

「夕飯までには帰ってくるんだぞ、2人とも」

凄い勢いで復活したストルに、遠山とラザールが手を上げて。

「ニコちゃん、行きますデイスよー！」

「キヤツ！ もう、ストルちゃん、私、一人で歩けるわ！ でも、えへ。こんなふうに抱っこされるの好きかも」

「もう！ この天然人タラシ少女！」

ニコをお姫様抱っこしたストルが、風のような速さで中庭を駆け、ついでに塀を飛び越えて出掛けていった。

せめて門から出る、門から。

遠山がぼーっとその様子を眺めて。

「……なんか、アイツら最近すごい自由になってきたな」

「ふ、ああ、そうだな」

1番声がかいのがいなくなったテラス席、ふと遠山が中庭で遊ぶ子供たちを眺める。

「う、ごおおお……ルカあ、どうだア!? 少し持ち上がったか?」

「ううん。全然。無理だよ、リダには。この重りを使った鍛錬、ストルや兄さんがやってる鍛錬じゃん」

「うるせえええ! 少しでも鍛えて、早く役に立つ、んだ! むごおおお」

「あはは、頑張りー、リダ。腰に気をつけてね」

「ぶだ」

中庭の一角ではリダとルカ、ペロとシロがわちゃわちゃしている。

遠山やストルが鍛錬に使っている重し代わりの砂袋をリダが持ち上げようとしているようだ。

「ま、がきんちどもはああやって騒いでるくらいがちょうどいいや」

「ああ、子どもたちが年相応にはしゃげるのは平穩の証だ。……ナルヒト知ってるか? 最初は夜、眠る時に彼らは順番に目を覚ます癖がついてたんだ」

「うん？」

遠山の返事に、ラザールがくすつと笑う。

「おそらくスラムでの生きる為の習性だろう。夜、全員が眠っていても何か起きた時にすぐ逃げ出したりできないからね」

ラザールもまた、子どもたちを眺めている。赤い目を細めたその姿は、まるで何か眩しいものを眺めているようにも見えた。

「だが、最近はどうも誰も起きない。何故だか分かるかい？ ナルヒト」

「衣食住たりてるからだろ」

「それもある。だが、一番の理由はアンタさ」

「なんだそりゃ」

意外な言葉に、遠山が背もたれに体をまた深く預けて。

「安心してゐるんだ。彼らは。もう、夜に起きなくても生きていける。その居場所をアンタが作ったんだよ。あの子たちの運命や生き方はトオヤマナルヒト、君が変えたんだ」

「買い被りすぎだ。人が人を変えるなんて烏滸がましいよ、ラザール」

あまりそつというのが好きではない遠山がラザールの言葉に鼻を鳴らす。

「ふ。ああ、ナルヒト、君ならそつ言うだろうとも。だが……」

ラザールが肩をすくめて、また小さく笑う。優しい眼差しを中庭に向けて。

「ふんがああああ、あ、あ！ 見ろ、少し！ 少し持ち上がった！」

「あ、ほんとだ」

「わー、すごーいリダ」

「だび」

「この光景は悪くない」

影の牙が、己の人生の中で最も穏やかだ暖かさに満ちた時間を味わう。

白い鱗が、陽光を浴びて少しキラキラとしていた。

「ラザール」

遠山が友人の名前を呼んで。

「うん？」

「竜祭り、成功させようや」

「ああ、もちろんだ」

短い言葉、短いやりとり。この2人にはそれだけで十分だっ

「さて、彼らに混ぜて俺も少し鍛錬をしてくるよ。おい、みんな

な俺も混ぜてくれ」

「お！ ラザールさんもやるうぜー！」

「ラザールさんなら、持ち上げられるでしょ、簡単に」

「わー、まっしぐら」

「だっしぐら」

子どもたちに混ぜて、リザドニアンが砂袋を持ち上げる。それを見てまた朗らかな声が中庭に響いた。

「楽しそうだなによりだよ、トカゲさん」

遠山がテーブルに頬杖をついてつぶやく。口角が少し上がっていることを遠山は知らない。

遠目から、しばらく遠山は仲間が騒いでいるのを静かに眺めー

「…………ふざけてんじゃあねえぞ」

無意識のうちに漏れたのは、明確な怒り。



あの予言は遠山に示したのだ。

この光景を奪おうとしている奴らがいる、と。

「どいつもこいつも、次から次へとワラワラ湧いて来やがって」

遠山は、この世界に来てから得たものを、彼の冒険の報酬を眺める。何も喪つ気はない、何も奪わせるつもりもない。

自分が進むべきその道に立ち塞がる者がいるならば、自分の邪魔を、己の欲望の敵になるものがあるのなら、遠山鳴人の答えはいっだって決まっている。

「どこからでも来やがれ。ぶっ殺してやるからよ」

緩い風が、中庭を駆けた。

「うん、やはり、君はそう言う顔が素敵だねえい。すぷぷ」

当たり前のように最近屋敷に住み着いている人知竜が、また当たり前のようにいつのまにかテーブルの真向かいに座っている。

「意志と殺意と知性が渾然一体となってる。ノリだけで汚い笑い方しながら全てをめちゃくちゃにする馬鹿とは違うところがとても良い…… やっぱ知性って大事だよねえい」

「……おー。ちょうどアンタと話したかったよ、人知竜。どこに行つてたんだ？」

竜たちの奇抜な登場方法に最近、諦める形で慣れてきた遠山が手を上げて声をかける。

「おや、嬉しいねえい。僕のことを気になるのかい？ 少し天使教会にお茶を飲みに行つてたんだ。今から大事な時期だろう？ 主教ちゃん是有能で賢い子だけど、敵も多いからねえい。少しばかり、そのお手伝いさ」

ピコン。

【特殊なイベントが完了しました。”人知竜”からの好感度がカンストしている為、彼女が独自にあなたの為に動いた結果、竜祭りにおいて第二聖女派によるクーデター計画が防がれました。特殊イベ

ント”カノサの屈辱”の発生が延期されました】

どうやら、知らない所でまた、あの銭ゲバがげげばしていら  
しい。遠山は人知竜が教会にやって来た時の彼女の反応を想像して  
少し笑った。

「……おや、トオヤマくん。今、もしかして誰か他のメスのことを  
考えて笑っ……た？ え、まって、脳が死ぬ。え？ なに？ そん  
な顔もするの？ もっと見せて色々な顔をもっとボクに見せてよ、  
My Dragon Slayer」

うつろな顔をしつつも、頬だけは紅潮させた美竜がぐいっと遠山  
に顔を寄せる。

本当に、顔が良い。肌はきらめく綺羅星のようで、目鼻はくつき  
りと。歴史に名を遺す名匠が生涯をかけてなお、たどり着けぬだろ  
う精密さで。

「近い！ 近い近い近い！ 大丈夫だ！ あの銭ゲバはもうギリ俺  
の中では男だ！ だから、距離考える距離！ 顔面偏差値で殺され  
る！」

「おや、すぶぶ。その言い方、もしかして図らずに、ボクの見たい目

はキミのお気に召しているのかな？」

にいつといたずらっ子のように人知竜が笑う。水銀を溶かし、丁寧に編み込んだような銀髪が風に手櫛をされているようにそよいでいる。

「銀髪に弱いんだ、俺は」

「勝った。第3部完。すぷ」

腕組みしながらにまにまにまじつVサインしている目の前の美竜を遠山が眺める。奇妙な奴でよくわからないことも多いが、何度も彼女には助けられてきた。

「……なあ、アンタさ、なんで俺にこんな味方してくれるんだ？」

疑問をそのまま問うた瞬間、遠山が、息を呑む。

人の記憶に最も深く関わる五感は”匂い”だと言う。その時、遠山の鼻に香ったのは、クリームのような甘い匂いー。

それもまた、懐かしき遠山鳴人の青い春を飾った記憶の一つ。

「『君のことが好きだからだよ。遠山鳴人くん』」

「……………え」

その匂いをさせる女のことを遠山は決して忘れない。

「な、ぜ？」

目の前の、女。美竜が微笑む。その薄く、薄く目だけ笑っていない笑い方、それは――

「おっと、すぶぶ。いや、安心してねえい。僕はぼくだよ。ごめんねえい。彼女、たまに浮き出てるんだ。君も罪な奴だねえい。…魂だけになってすら、なおも残る想い、いや、妄執か。すぶぶ、ああ、これだから君たちは面白い」

「……………人知竜、アンタ俺の知らない所でもしかして想像以上に色々やってんのか？」

空いた口がふさがらない、今の笑い方は、そして人知竜の言葉は、つまり。

「すぶぶ。ああ、いい感じだねい。その感じでもっと、もっと僕のことを考えてくれたら嬉しいな。でも安心しておくれ、もう彼女自身は輪廻に旅立っている。今残っているのは純粹な想いだけさ。まあ、僕からしたら重すぎてどうかと思うけどねえい、すぶぶぶぶ」

「あ、はい」

怪しく笑う彼女を眺め、しかし遠山は考える。

実はあの予言に対抗する為の策はすでにくつつか用意している。銭ゲバと昨日打合せしたもの、そしてこれから詰めていくもの。最後に遠山個人が用意しているもの。

だが、まだ。

「まだ足りない、だろう？ 僕の竜殺し」

「」

その眼、その舌、その貌。それは遠山の知る謎の愉快な美竜、今まで見てきた人知竜の顔ではなかった。

古き竜の石柱。ヒュームに”魔術式”という可能性を与え、この世のルールを書き換えた異端の祖。ヒトを知り、ヒトをたぶらかし、

ヒトをその虜にさせる上位生物の貌。

彼女もまた蒐集竜と同じく、完全なる相互理解など不可能な存在、  
そう思わさせられる。

「キミは金色の竜を殺し、カラスを殺し、教会と手を結び、古き白  
い永遠を殺し、夏の夢から帰還した。キミはこれまで数々の死の運  
命を乗り越え、冒険を進めた。だが、キミも理解しているだろう？  
今回は今までとは違っつてさ」

竜が人間へ問う。

「はあ……アンタも大概食えねえな。ああ。今実は結構困つてて。  
味方で、強くてヤバい奴の助けが欲しいんだ」

「すぶぶ。安心しておくれよ、僕のトオヤマくん。こう見えて僕、  
陰謀、画策、暗躍、計画、仕込み、立案、実行。そういうの得意中  
の得意でねえい。……まあ、でもバカと火とカップと鬼が出てくる  
と一気には負けフラグ立てちゃうんだけどねえい」

「なんだそりゃ……。なあ、人知竜ー」

足りない、竜殺しと影の牙、第一の騎士。そして教会だけではき

っと足りない。

だから、遠山は目の前の上位生物との取引を持ち掛けようとする。

「いいよ」

「え？」

「いいよって言ったのさ。大体の都合はもう、あの主教ちゃんから読んで知ってる。すぶぶ、ああ、君たちは聡く、用心深く、そして正しい。断言しよう、その予感はずっと、当たるとも」

全てを見透かしたような目で、どこまでも愉しそうに彼女がすぶぶと笑う。

遠山は取引をしようと思っていた。彼女の助力を得るために彼女の求めるものを探ろうと。

でも、遠山鳴人は勘違いしていた。彼女にとって求めるもの、彼女が欲しいものはもうとっくに、遠山は彼女に与えている。

「ああ、ようやくだ。ようやくさあ、キミとこうして、すぶぶ。楽しめる。ああ、たのしいなあ。いつも眺めるだけだった君と、今度



はこうして一緒に頭を悩ませることが出来る？ さあ、敵はどんな奴だろう？ どんな策を考えているんだろう？ 何を求めているんだろう？ どんな力でどんな方法で、僕たちの目の前に立ち塞がるんだろう？ ああ、そうだ、ボクはずっと君とこうしてみたかった。ああ、ほんの少しだけ、貴様にも感謝してあげるよう。恐ろしい化け物ども」

彼女が過去でもあり、未来でもあるある記憶を、ある最恐の敵を無意識に口ずさみ。

彼女が求める報酬へと、笑いかけた。

「さあ、トオヤマ君。考えよう、備えよう。たくさん話して、たくさん試そう。そう、そして」

彼女は、ようやくここへたどり着いたのだ。

「冒険の準備を始めようじゃあないかい」

【”人知竜”が味方になりました】

119話 竜祭り前夜・戦力充実ルート・”さあ、あなたが失うモノを眺めなさい”（後書き）

【英雄の力に倒れ伏し、自らの血溜まりに沈む時、あなたは急がなければならぬ】

黒き竜を恐れるべきではない、彼女はあなたの味方だから。

黒き竜を信じるべきではない、彼女はあなたの虜だから。

血の滴る美食を前に、竜はその本性を抑えることはできない【

俺の名前はウイス・ポステタス・ヘロス。本当は世界の王になりたかったんだが、すげえバカな女と出会ってしまつてすべての人生設計が狂つちまつた不幸な男だ。

そして俺は、今、大いなる戸惑いと新たな不幸のスタートラインに立っている。

「ええ〜！ 蒐集竜様、その人とお風呂まで一緒に入られたんですか！？ もう、それ……結婚しているのでは？」

「な、に？ それはどついうことだ、フォルトナ」

「いや、ねえ。だつて普通、乙女の柔肌をなんでもない殿方に見せるなんてしませんもの。ねえ、ウイス？」

「お姫ーフォルトナ様、蒐集竜様に失礼かと。あなたは今、あくまで竜大使館に仕えるメイドということを忘れずに」

思わず、いつもの癖で話しかけてしまう。

この大使館における自分の役割を忘れてしまうほどに目の前の光景は、いや、この女の行動が理解できねえ。

この女、バカ女、幸運バカ。マジで何を考えてやがる。なんであの蒐集竜とガールズトークしてんだ？ いつの間にそんな仲良くなりやがった？ いや、そもそも竜だぞ？ 定命の存在と仲良くなんてそんな概念すらねえはずだ。

「よい。フォルトナ、ポステタス。貴様らはじいやが選んだ我が大使館の者だ。それに幾分かは気晴らしになる」

「「ー……」」

「なんだ？」

思わず、俺も、そして珍しいことにこのバカ姫様も息を呑んだ。なぜかって？ その貌だ。竜の貌があまりにも人で、それで綺麗だった。

「いえ、王家に伝わる竜を讃える詩歌から学んだことと、今のあなた様は随分と、違うようで、少し驚きました」

「おい、リーフォルトナ」

馬鹿がまた距離感を考えねえことを言い出した。

もつだめだ、止めねえと。

ここで竜の怒りを買えば応戦せざるを得なくなる。竜だけならまだいい。最悪、俺の命と引き換えにすれば3つほどの命を削ることは出来るはずだ。

そうすれば、復活までの時間でこのバカだけは逃がしてやれる。

問題はあの爺さんだ。アレが出てきた瞬間、全てが終る。

竜大使館は俺たちを厄介な”天使教会”の邪魔から防ぐための防波堤であると同時に、一歩対応を間違えれば一瞬で噛みちぎられる

怪物のアギトの中でもある。

蒐集竜、鬼人、そしてメイド。

この3人がその気になれば帝国も王国も終わる、そんなやべえ場所に潜りこんだのは一重にあの”メイド”がなぜかよくわからない夕イミングでよくわからないまま寝込んだという情報を手に入れたからだ。

まさしく幸運、そんなチャンスをこいつは　ていうかそもそも竜大使館に潜りこむとか馬鹿なこと真顔で言いだしたのはコイツなのに！　マジで何を考えてんだ。

「良い、続けよ」

だが、俺の予想とは違い、竜はこのバカの言葉にも特に気分を害した様子はない。本当にどうなってんだ。　竜か。本当に？

「わたくしが知る竜という生き物は、もっと触れ難いものでした。世界に選ばれた柱たる存在。世界の成り立ちや概念が形として現れたもの。そこには理解や、共感、ましてや定命の者への遠慮などあるはずもない。だって、竜は他者のことを考える必要なんてないん

ですもの」

「ほう？ フォルトナ。古い盟約を交わしたヒュームの子孫よ、貴様、なかなか興のわく話をするではないか」

竜の眼が、バカを見つめていた。

「……」

竜の眼は見つめるだけでその力を発現させる。俺はバカが丸焼きにさせられないようにいつでも動ける準備をして。

「ポステタス。良い、昂るな。別に焼いたりはせぬさ」

「寛大なお言葉ありがたく……」

やべえ。お見通しか。もう意味が分かんねえ。竜としての性能を持ちながら、たまに雰囲気やしぐさがどこまでも人で。

なあ、おい。バカ姫。

俺たちは一体ナニに喧嘩を売ろうとしてんだよ？

「さて、フォルトナ、先程の話だ。何故、貴様は竜は他者のことを考えなくて良いと申す？ 気になる、言え」

「あら、簡単なことですよ。だって、初めから貴女様たち独りぼっちで生きていくことを設定された生き物なんですもの」

「……………おまッ」

「……………」

「ふかか、なるほど。貴様なかなか痛い所をつくな。ふむ、言い当て妙だ」

「確かに我らは貴様の言う通りの存在なのだろうな。竜に家族はあれど、結局は強すぎる自我の集合体、1人では生きていくことが出来ないから家族になっっているわけでもない」

「我々、か弱き定命の者からすれば羨ましい在り方でございます」



「ほう、フォルトナ。貴様、竜に憧れるか？」

「強き躰、美しい姿、永遠に等しい命。定命の存在で貴女に憧れぬものなどいません」

「ふかか。そうか、故に。竜殺しを望むか、小さきモノよ」

「……………え」

え。

ありえない。竜からの読心対策はしている。なのに、読まれた？

「ふかか。なるほど、やるではないか。血を分けた姉と兄を殺し血の呪いを終わらせるとは。残酷に、冷酷に、慈悲なく殺したようだ。ほう、親の方はあえて生かしておるのか。魔術式で魂と自意識だけを殺し、傀儡化。なるほど、だから帝国は王国がすでに貴様の手に落ちたことを知らぬわけだ」

「……………おい、お姫様、こりゃ」

全てお見通しらしい。俺か、バカ姫か、どちらかの心を読まれた。俺の血は元々上位生物からの読心に耐性がある、だとすれば今読まれたのは、バカの方か？

頼む、またいつもの計画の内の一つであってくれー！。

「あ、は。ええ、完全予想外。どうしましょう」

ダメっぽいわ、これ。たははと頬を掻くバカ姫、珍しく割と本気で焦っているらしい。

「よい、そう恐れるな。いま、考えておるのだ。オレは」

「と、おっしゃいますと……？」

何故かまだ竜はこちらに怒りを向けてこない。バカ姫の問いに長い脚を組み替えながら竜が応える。

「王国はいずれ、オレと我が竜殺しの敵となっていたらどう？ あ  
の国はそういうものなのだ。いずれ必ず、ヒトの復権のために立ち  
上がる。この星の頂点生物の座を奪い返すためにな。……貴様の姉

は霸王として、貴様の兄は霸王の剣として。だから、驚いた。なんの力もない貴様が生き残るとは。……ほめて遣わす。あの幼き弱き双子の少女がここまで成るとは」

「……あれ」

異変が起きる。バカ姫の声が震えていた。

「お姫様……？」

「ふかか、ようやく思い出したか？ 久しいな。フォル」

言葉を失う。竜がまるで、懐かしい旧友に出会ったかのような、優しい顔を。

いや、いやいやいやいや、そういうことか！ バカ姫！ やるじゃねえか！

”幸運”だな！？ やりやがった、やりやがったよ、このバカ！！  
土壇場のワイルドカード！ あの全てをめちゃくちゃにするクソ能力！

”幸運”で因果を捻じ曲げた、竜の記憶すら捻じ曲げたんだ！！  
詳細はわかんねえが、幸運にもこう、昔竜となんらかの交友があっ  
た的な思い出を幸運で捏造してー

「な、ん」

あ、れ？

おい、バカ姫。フォルトナ。

お前、なんだよ、その顔ー！。

「気にするな、オレも思い出したのは貴様らがこの屋敷にきてから  
だ。あの時、ナルヒトの屋敷で会った時にすぐ思い出せなかった。  
王家の呪いの影響か、単純に昔のオレはヒューム、貴様らにちょう  
ど失望していた時だったせいかな。」

「わ、わた、くし。なんで、忘れて……」

初めて、初めて見る顔をフォルトナがしていた。

お前、そんな顔もするのかよ。

「さあな。大方あの王か、貴様の姉の差し金だろう？ あの2人は王家の血に強い影響を受けていた。ヒュームの宿願の為にオレに関する貴様の記憶が邪魔だったのではないか？ それを貴様が始末することで枷がゆっくり外れたのだらう。秘蹟か、副葬品かまではわからないがな」

「  
」

「お、おい。お姫様。な、なにを」

信じられねえモンを見た。バカが膝をついて、頭を下げた。ブラフではなく本気でこいつが誰かに敬意を向けてるとこなんて初めてみた。

「おひさしゅーづいいます。アリスお姉さま」

「ああ、長らく。フォル。小さきヒューム。姉のトレナは」

「別れました。あの人は、弱いですから」

「ふむ？ そうか。存外、アレはアレで面白味があったと思えるがな。まあ、今となってはだが」

「幼き頃、たった3日ではありますが、貴女様と過ごした時間は忘れたことはありません。あの強い日差しと美しい海、白い砂浜。ともに過ごした時間は、決して」

「懐かしいな。まさかまた会えるとは思わなんだ。これはオレにとつても、ああ、喜ばしいことであるぞ」

「貴女様のうつくしき、気高さもお変わりなく。しかし……それ以外は」

「まるで「ト」か？」

「っ　　竜殺し様、ですか？　貴女を変えたのは」

「はあ、厄介だ。本当に厄介な男だあやつは。昔のオレなら、フォル、貴様の今の言葉、昔のオレならきつと」

「ええ、焼かれていますね。アリスお姉さま」

ニコリとバカ姫が笑う。

俺は、見たことがなかった。フォルトナ・ロイド・アームストロングがこんなふうには笑う姿を。

いつもによによと目だけ笑っている気持ちの悪い笑顔しかなかった女が、目の前の竜に心からの微笑みを向けている。

「……………」

「ふかか、言いおる。貴様が何を思って竜大使館を訪れたのか、今はもう良い。我が古き思い出よ。再会を嬉しく思う。楽にせよ。竜祭りもある。楽しむといい、我が街の宴をな」

「ありがたきお言葉。アリスお姉さま。従者の身で差し出がましい真似ですが」

「良い、貴様の口から話せ。思い出話も悪くない。ああ、そうだ。フォル、貴様に少し、相談をしたいのだ」

「相談……ふふ、なんなりと」

お前、お前マジか。

バカ姫、この状況どうすんだよ。もうどうにもなんねえよ

「顔を合わすと気まずい友人と、どうやったらもと通りの仲になれると思っ？」

「「え」「

「そ、それは、どういっ……」

「ふむ、そやつの貌を見るとうまく言葉が出ないのだ、それに身体



も熱く、思考が回らぬ。だから顔を合わせたくない。……ああ、今気づいた。オレはこのように様子のおかしい自分をそ奴に見せたくない、というのもあるらしい」

「「好き避けじゃん」

「SUKIYOKE? それはなんだ?」

「あっ」

ほんと、どうするんだよ。

バカ姫。

俺たちは、これからこの竜を殺さなくちゃいけないのによ。

re 竜 (後書き)

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを！ご覧くだ  
さい！

120話 魔術学院がやってきた。

「さてさて、どうしたものかねえい。うーん許しがたい、許しがた  
い予言だねえい」

銀髪的美竜が日差しの差すテラス席の向かい側で小さな顎を撫で  
ながら唸る。意外なまでの表情の豊かさ。

「人知竜、あんた信じれるのか？」

「うん、どういうことだい？」

遠山の言葉に人知竜が机に身を乗り出してくる。シナモンとクリ  
ームの複雑な甘さの匂いが鼻に届く。ずっと嗅いでいたくなる、し  
かし、ずっと嗅いでいたらダメな気がする、そんな匂い。

「予言のことはあの銭ゲバから聞いたんだろ？ 俺や銭ゲバはあの  
時なんか妙な繋がりが発生して」

「ツナガリ？ え？ ボク以外のメスと遠山君がつながった？」

遠山は本当はまず、なぜこの竜が予言のことを信じてくれるのか聞いてみたかった。

あの予言はあくまで自分と銭ゲバしか見ていない。ラザールやストルには予言のことははっきりとは伝えていない。あくまで主教との話し合いの結果、竜祭りで厄介ごとが起きそうだという話をしたまでだ。

だから、まず、この竜にいろいろ聞いてみたかったのだが。

「そんな、そんなのさ、NTRじゃん。ボク悪いけど、同担共存無理だし、匂わせとかほんと無理なタイプなんだよねえい」

無表情で間延びした声のまま美竜がぼそぼそ呟く。

「ええ、これも使っちゃダメな言葉なの？ コミュニケーションとりづらい……」

遠山が若干のめんどくささをこぼやく。

「しゅぷ」

まただ。いつかの夜の時と同じ、真顔の無表情で人知竜が涙をこぼす。こつーんと小さな水晶がテーブルに転がった。

竜の涙は結晶なのだ。

「うそ、泣いちゃった」

遠山が、ワアとなって少し困る。だがすぐに首を振って。

「いやいやいや、人知竜、アンタがなんで俺にそんなこだわってるのかは知らねえが、ほんとに銭ゲバとはなんでもねえ。アイツは完全に俺の中で分類が銭ゲバなんだ。男とか女以前の存在なんだ」

「……しゅぷぷ、それはそれで特別な存在感があっつていやだなあ。なんかこう悪友感というか、こつふとした時に主教ちゃんの綺麗なところとか見かけてドキツとしそつでやだなあ」

「コイツ、繊細なくせにめんどくさい。だが特別っつーならアンタはかなり特別だろ？」

「え」

その言葉に人知竜がまた固まる。だがその涙は止まっていた。

「……あんだ、不思議な奴だもんな」

「え？」

「いや、こう、変わったやつでたまに怖いけど、いつも助けてくれる。考えたらよ、あの銭ゲバんどきで出会った時も、かなりやばい状況をあんたがどうにかしてくれた。まあ、かなりの残虐ファイトだったけどよー」

天使教会で騎士と揉めた時の人知竜の所業。圧倒的な力を最悪の発想で用いて、相手に使用する、あの光景は、人知竜が騎士をおもちゃのように蹴散らしていく姿は。

ピコン

【人知竜の特性・”悪のカリスマ”による精神汚染が発生。判定…技能”アタマ・ハッピーセット”技能”拡大する自我”により影響なし。貴方は他人のカリスマを理解することが出来ません】

【属性が”中立・悪”の為特殊な会話選択肢が発生します】

「ああ、あれはかつこよかつた」

にっ、と。

遠山が少し笑う。

人知竜がかちーんと固まって。

「あ……その、かお……すき……」

「あ？ 顔？」

「すぶぶ、ううん何でもないよ。すぶぶ。うーん、そうだともそ  
うだとも。このボクは君のために人知の竜へ。ああ、トオヤマ君、  
キミのぼうけんの邪魔はしないさ。キミのぼうけんの庇護も保管も  
管理もしない。僕はただ、キミのぼうけんをずっと見て居たいだけ  
だからねえい」

「あー……つまり、まあ、味方してくれるってことだよな？ 話を戻すけど、あの予言を」

「信じるさ。遠く懐かしき場所から来た探索者よ」

「おっと」

なんだ、今の言葉は。

遠山が彼女の言葉の意味をかみ砕くよりも先に、銀髪の竜が机にすなだれ、遠山を斜め下から見上げながら語りかけてくる。

「キミには天使からの特典がついているだろう？ あの知識の眷属を依り代に君には”世界の底”からの情報が見えているはずだ。すぷぷ。……あの馬鹿は聴く、だったらしいけどねえい。その力の恐ろしさで厄介さを僕はよく知っていてねえい」

白いテラス席に垂れる美竜の銀髪が、陽光をまぶしてきらめく。髪のはざまから見上げてくる黒曜石の眼は暗く、深く。ただ、美しい。

「天使……やっぱりこの力はそれ由来か」



「あくまで予想の範疇を出ないけどねえい。そしてあの主教ちゃん。あれもあれで食わせ物でねえい。本来ならば世界の舞台には上がってこなかった存在。天使に全く選ばれていなかったのに、本当に純粹に本人の資質と努力と度胸のみで、天使にその存在を認めさせ秘蹟を完成させた傑物」

「うん、十分にありえるねえい。イレギュラーのヒューム2人。それが揃い、互いに相性の良い秘蹟システムが共鳴してもおかしくはない。いや、むしろ起こるべくして起こるはずだ。……え？ 相性が良い？ 魂のテクスチャたる秘蹟の相性が良いって事は、つまり2人は魂レベルでの補完が可能ってコト？ え？ そんなのもう、運命の相手じゃん。え？ トオヤマくんの運命が主教ちゃん？」

「いかん、コイツ勝手に自分のスイッチ押しして怖い感じの雰囲気出してくる、無敵か」

「いやだなあ、もう無敵だなんて。すぶぶ。ボクは不敵くらいさ。だから存分に頼ってくれて構わないよう。……いや、ほんと無敵って言いたいんだけどねえい。……なんで、アイツ死なないの？ 銃で撃つても火で焼かれても水で窒息させても、なんなの？ 心をさあ、折ろうとして悪魔の選択を教養してさあ、救うものと見捨てるものの強要をして削ろうとしたらなんで焼身自殺？ なに？ あれはなに？ あ、う、来るな、来るなよう……殺してるんだぞ？ なんて死なない？」

？　なんで嗤う？　何が面白い？　なんで殺してるのに、死んでるのに、笑うんだよう……」

急に頭を押さえて呻きだす人知竜。もごもごとすごく低い声だ。

「おい、人知竜。頼む。一人で闇モードに入ったり、どやったり、怯えたりするのはやめてくれ。置いていくな俺を」

「おっと、ごめんねえい、えへへ」

遠山の言葉に、人知竜が笑う、しかし、遠山があることに気付く。

人知竜の、その銀の髪を触り続ける白魚のような指が　。

「……あんだ、ほんとに」

震えていた。彼女は本当に震えていたのだ。

だから、遠山は立ち上がり。

「え？」

「大丈夫か？ 震えてる」

その指を手にとって握る。驚くほどに滑らかな指の質感も、その肌の冷たさも大して気にはならなかった。

「すぶ」

人知竜が固まる。

遠山は自分がやってしまったことに気付かない。

「え？」

「あ、う。さ、さわ、さわわわ、さわ」

人知竜の様子がやばい。電動マッサージ機の強みだけに振動し始めた。どう考えても生き物がしている動きではなかった。

「え？ なに？ なんなの？ ラザール？ ラザール！？ ラザール君！？ なんかお客様がね！ おかしいんだけど、も……」

微振動し始めた人知竜。やばいと思った遠山がラザールに助けを

「ハイチュー」

「「「おわ!」」」

「「「」」」

神妙な顔をした薄情白トカゲはすでにその己の才能を最速にて発動。

影により離脱を。行動と判断が速い。遠山がよびかけた時にはシヤドウ・ハイチューというセリフの半分はすでに言い終えていた。

「スキル使用が速い!」

遠子ども達とともに影の中に潜り、もつとこにも気配はない。

「あいつ、いつも俺を見捨てる……」

竜関係の時のラザールの行動はとても速い。遠山は決して目を合  
わせてくれなかった友人の姿に唸りながら。

「ご、ごごごめんねえい。遠山君。少し、ボク、ボク、帰る、帰  
るから、ま、また、竜祭りのことは話し合おうね、ね？ ほ、ほん  
ほんとごめん。……触られた、さわられた。遠山くんから、トオヤ  
マくんから触られた。え？ これ、婚……イン？ いや、落ち着け、  
落ち着け、ボク。ヒュームのことはヒュームに……そうだ！ 学院  
歴代学院長、賢人会の招集を！ そうだ、落ち着け、おちつけよお  
おう」

なにやらこの”あくのかりすま”の美竜がやばいことを口走って  
いる。

嫌な予感がする。

「おい！ 待て、人知竜！？ 何！？ 会議って何の話！？ 落ち  
着けよ、本当に！」

「どうしようどうしようどうしよう。お、お。オスから、男の人か  
ら触られちゃった……あつくてかたくて……いや、そうだ、違う落  
ち着いて 落ち着かなきゃ、そうだ、そうだ、そうだそうだそう  
だそうだ」

ひっひぷーと呼吸する人知竜。

ドラ子もそうだが、この竜という生き物、基本的にみんな人の話を聞かない。

遠山の嫌な予感がどんどん膨れ上がって。

ピコン

【人知竜の好感度がカンストした状態で味方加入が発生し、さらに会話コミュで好感度をさらに上昇させた為特殊なイベントが発生します。      ワロタ】

「なんだ、このメッセ」

「人知の竜の名のもとに。我が輩よ、世界の真理を解き明かし、牙なき身としても定理に抗うモノたちよ。      学院よ、いざここに」

「え、人知竜？ なに？ それ」

「疾く来たれ 人知の竜の命である」

「え、だから！ あ？」

その日。

帝国の歴史年表にあらたな出来事が刻まれる。

”魔術学院”。大戦期から存在し、今もなお国家規模の勢力としてこの世界に認知されるその存在。魔術式と呼ばれるスキルでも秘蹟でも副葬品でもないこの世界の力のひとつを操る存在、魔術師たちの故郷。

いまやもはや記録も定かではない200年前に終結し大戦の時代。教会の古い資料だけでも、その勢力は少なくとも10以上の国を一勢力として敵に回し、その9ツを滅ぼした。

そして最期は、世界をつかさどり、世界を焼き滅ぼせる力を持った炎の竜に戦いを挑み、1つの命を奪った理外存在。

それは。

「な、んで」

影が差す。

日差しを遮るそれは突如、なんの脈絡もなく。

「ごめんねえい。また、すぐに来るから、今、今は顔、みないで

」

人知竜が消える。遠山に顔を見られないよう俯き、そのまま指をパチリ。

それだけで彼女は消える。最後に遠山が見たのは銀色の髪の間隙から覗く真つ赤な耳だけ。

彼女はどこに消えたのだろう。いや、考えるまでもない、きつとあそこだ。



遠山は上を見上げる。

上空を。

目を遮り、突如現れたソレを。

「ほんと、人の話きかねえ」

魔術学院がそこにある。

大きなプロペラを底に。それには山がある。緑がある。そして城のような建物が生えている。

世界を揺蕩う空飛ぶ島がそこに。

帝国南領・サパン・フォン・ティーチ辺境伯直轄地。冒険都市・アガトラ上空1000メートル。

魔術学院がやってきた。

120話 魔術学院がやってきた。(後書き)

今年一年ありがとうございました。

来年もよろしくお願いします。明日はまた凡人探索者の短編更新するのでぜひご覧くださいませ！

よいお年を！

121話 がんばれ、偉い人たち。

「え、ええ……マジかよ。これもう、完全に、ラピーー」

「な、ナルヒト！ 大変だ！ 冒険都市上空に！ 魔術学院が！」

「あ、薄情トカゲ、じゃねえや、ラザール」

ドロリと影の中から現れた白トカゲ男に、遠山が呟く。さっき秒で見捨てられたことを遠山は少し根に持っていた。

「あ、すまない、もう俺はアンタの竜たらしには付き合わないことにしているんだ。心臓がいくつあっても足りないからね」

スンっと、それを受け流すラザール。機械的にいやいやと振られる手、彼に表情はなかった。

「たらししたことなんて一度もねえけど！？ たらしこめてんならも

つと多分色々上手く行ってるけど!? ドラ子はなんか訳わかんねえ避け方するし! 人知竜の奴はなんか力チコチに固まったと思ったら消えたんだけども!？」

「ははは。たしかに。さて、これは、つまりまた、やらかしたな、ナルヒト」

「うつせ。もう頭が痛い。あー、ラザール君、一応聞くけど、魔術学院って」

「あんたがさつきたらしこんでいた人知竜の勢力だな」

「だよね、なんかかつこいい詠唱みたいなの言ってたもんね」

先ほどの人知竜の様子を思い出す。

竜というのがめっちゃくちゃな存在だとは知っていたが、改めてこっついうめちゃうくちゃなことをされると、それを更に実感する。

遠山が、椅子に背を預けて空を眺める。もうがつつり、空飛ぶ島が浮かんでいるのだ。

「え〜どうする?」

もう遠山は割とノビノビしてきた。人はどうしようもこうしようもなくになると、逆に余裕が出てくるのだろうか。

「いや、もうナルヒト、これはもう無理だ。正直、国家レベルの一大事さ。”魔術学院”が帝国の要衝であるアガトラに現れるなんてことはね」

「よし、切り替えよう。レーザー。もうなんやかんや竜祭りは明後日だ。よし！ ガキンちよず連れね、街にいるストルとニコ拾って、ドワーフの工房行くか」

パン、と手を叩き、遠山が立ち上がる。

空飛ぶ島が現れて、なんかそれはもしかしてもしかすると自分のせいかもしれないが、もうしゃーないの精神で遠山が切り替える。

「ドワーフの工房？ ああ、パン窯！」

割と最近凶太くなってきたレーザーもパン釜のことを思い出した

らしい。ウキウキの顔で指をパチンと鳴らした。

「おお、それと、あとはまあ、見てのお楽しみか」

「ん？」

「ま、とにかく行くついで、にしても、ひひひ。ラザール、見たら驚くぞ〜」

「おっと、パン釜以外にも何かあるのかい？　それは、楽しみにしておくことにしよう」

庭先で待っている子どもたちと合流し、割とキャツキャツしながら遠山たちが街へ繰り出した。

それはもう、ウキウキで。

冒険者ギルド敷地内、サパン・フォン・ティーチ辺境伯の館にて

「ふう。うーん、マンドム。さすがは世界3大紅茶のひとつウツヴ茶、芳醇かつキレのある口当たりがカップを傾ける度に、私の心を落ち着かせてくれる」

「領主様」

香気の強い湯気を、ゆっくり吸い込む。暖かく香ばしいそれが細胞の一つ一つに染み込んでいく感覚。

サパン・フォン・ティーチ辺境伯、この街の最高責任者はゆっくりと己の趣味を楽しんでいた。

「そう、私は領主、この帝国の要衝、冒険都市”アガトラ”の治世を任されている責任あるもの。うーん、大いなる責任を伴う者とはね、つまり大いなる精神力を持つものということだよ、うん」

「領主様」

丁寧に温めたカップに、舞うように淹れたお茶。ドワーフが作ったティーポットはその持ち手にあしらわれた宝石により、今の湯の温度がわかる優れものだ。

我が子に触れる優しさで、領主が王国から仕入れたお気に入りの職人の手作りカップを撫でる。白磁に、わずかに入れられた黒と白の濃淡で描かれた景色絵は、眺めているだけでため息が出るようで。

「そう！ だからね！ この私はうるたえないともっつ！ いったってこのウツブ茶の香りが私を現実へ引き戻してくれるんだ！ うるたえない！ 帝国貴族はうるたえない！ そうっ！ だからこれは気のせいだ！ さきほど私が窓から見た景色は嘘！ 嘘！ うそうそうそうすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすす！ ありえないもんね！ そんなこと！ 絶対絶対絶対！ ありえないもんね！」

「領主様」

やがて、領主の顔は青くなる。まるまるぶにぶにもちもちとした身体はわずかに小刻みに揺れていて。



「そうだあああああああ！　ありえないんだあああああああああああ！　あの”魔術学院”が、なんの予告もなく100年ぶりに帝国の上空に現れるなんてことは！　そんなこと絶対にありえない！　あの魔術学院だぞ！　大戦の頃より存在する”魔術師”という愉快犯どもの巢窟！　10以上の人類国家を滅ぼし！　あの炎竜をも一回殺した枠外の存在！　1個の勢力で国家単位の戦力を持つとされる存在だ！　そんなものが予告もなしに帝国本土に接近どころか、ヘレルの塔がある我がアガトラに現れるなんて、そんなことあつてたまるものかい！　ありえないね！　そんなの！　ひょこつと現れた奴隷が竜を殺すくらいにはありえない……あ、タンマ、今の表現なし、みすった、みすった」

そう。今、彼は絶賛現実逃避中。

冒険者ギルドマスター、ハイデマリー・スナベリアとの打ち合わせ中、突如冒険都市直上に出現した”魔術学院”。

この街の長にとって、その出現はまさに悪夢でしかない。

想定にない事態、”魔術学院”という存在の厄介さ、この街の要衝、”天使教会”との調整。

一気に出現した火急のタスクに、サパンのモチモチした肌は赤くなったり青くなったり大パニック。もう胃が、先ほどから悲鳴をあげまくっていて。

「領主様、そろそろ現実を見ましょう。がつつりです、ほら、カーテンの向こう」

きっちりした制服に、黒髪ポニテの褐色クールビューティー、ギルドマスターがカーテンをシャッと開き、領主に窓の外の光景を促す。

「んんっ」

がつつり、街の空の上、お城と山と湖を備えた空飛ぶ島が、ぼっかりと。

夢、悪夢のような光景ががつつりと。

「はい、そして、街の各区画に設置している副葬品”為政者の聞き

耳”からの音声がこちらとなります」

執務室に、冒険都市運営の為に置かれていたヘレルの塔からの出土品、この世ならざる力を持つ物品、”グレイブス副葬品”の一つ。

壁に掛けられている両端がラツパのように膨らんだ奇妙な青銅色の棒、それをギルドマスターが無表情のまま、手のひらで差して。

「いやあああ、聞きたくないいいいい」

ぷにぷにもちもちの領主が、床のカーペットにうずくまる。だが、もう、その副葬品からリンリンという音ともいー。

『な、なんだ！ あれ！ 空を、飛んでる！？』

『すごい！ ママみてえ、空飛ぶお城さんだあ』

『まあ、すごいわねえ。でもあれどっちかというともう島ね。空飛ぶ島さんだわあ』

『ぶ、文献で読んだのと同じ……大戦時に樹上国家の豆の木を焼き落した雷砲についてある……魔術、学院……』

『り、竜祭りがもう明後日だっていうのに、なんで今、戦争でもする気か？ 魔術師ども』



『おお、卿の言う通りだ！ 主教様に審問会の始動を！ 聖戦だ！ 魔術師との決着をつける時がきた！』

「以下が、愛すべき愉快なアガトラの市民の声ですが……」

「あかん！ バカしかいなさそう！！ なんか大体嫌な感じに盛り上がっちゃってるウー！！ なんなの！？ この街には荒くれ者しかいないの！？ いやそうだわ！ 冒険都市だったわ！

そりゃ、あれだよ！ バカが引き寄せられそうな響きの街だよん！」

響き続ける副葬品が伝える街の声、もう誤魔化すのすら無理らしい。

「領主様、冒険都市は皇帝閣下がつけられた名です、今のは不敬罪に相当するかと」

「ちくしょう！ あの老獺たぬきじじい！ いつもいつもティーチ家にばっかり面倒なこと押し付けやがって！ ほんっと一回政権ひっくり返したるか！」

領主が器用にティーカップを皿に乗せたまま、ピヨピヨと海

老反りになつて広い部屋を飛び回る。

「精兵ぞろいの南領の主が言つと冗談に聞こえなくなるのでおやめください。とにかく、まずは混乱の收拾と、魔術学院出現の原因の調査、何から始めますか、領主様」

「んごおおおお、何はともあれ教会だよ！ 教会！ カノサちゃ  
。 主教殿とアガトラで足並みをそろえなければ何も始まらない  
！」

海老反りのまま、びしつと領主が言い放つ。紅茶は一滴たりともこぼれていない。

「はい、そうおっしゃられると思い、すでに天使教会に伝書鷹を飛ばしております。すでに聖堂の伝書巢へ書面が届いているかと」

「マジで！？ 有能すぎるでしょ、マリーさま！」

「はい。領主様が30分前に、窓の外から魔術学院が現われたのを見て、笑顔で紅茶の葉を蒸らし始めた時にはもう鷹を飛ばしておりました」

すつと、メガネの位置を白手袋の眩しい指で直しつつ、淡々とギルドマスターが答えていく。

「あれ、なんか、マリーくん、キレてる？　ちくちくしたものをオジサン感じるなあ」

海老反りしたまま、領主がすつと、紅茶を口に含んでー。

「失礼します！　領主様！　ギルドマスター様！　庭園の門に天使教会主教！　カノサ・ティエル・フィルド様がお見えとなっております！　火急のご用事とのこと！　いかがなさいますか！」

「すぐにお入れして！　ジャストナウ！」

部屋に入ってきた家令に、海老反りから跳ね起き指示する領主。彼の肉体は躍動していた。

「は　あ！？　え、嘘、早、もう　」

そして、家令がうなずいた瞬間、彼を押し退けて部屋に入ってきたのはー。

「ちょーーーっごめんなさいねえ、優秀な衛兵さんと家令さんたち。今回はマジで時間ないからご無礼するわよ！ 無礼討ちは勘弁な！」

「は、は。カノサ・ティエル。フイルド様です！」

カノサ・ティエル・フイルド。

実質、この街の領主と権力を二分する帝国にとっても非常に重要度の高い人物。

この2人の辣腕により、今日、冒険都市アガトラはその抱えている厄介ごとの割に、大きなトラブルなく運営されていると言っても過言ではない。



「ご機嫌麗しゅう。領主様」

「ご足労痛み入りますな。主教殿」

黒い主教衣の裾を少しつまみあげ、礼をする主教。

腰を折り、胸の前に手をかざし、頭を下げる領主。

「……………」

互いに対等な敬意を相手に向ける2人、権威者特有の重い雰囲気  
に、この部屋にいるギルドマスターと、主教の後ろに音もなく侍る  
聖女が、わずかに息を吞んでー。

「あれ、なにかなああああああああああ、夢かなあああああ

ああああああ、カノサチャ ああああああああああああああ  
ああん！！」

「夢であつてええええええええええええええええええええええ、もう無理よおおおおおおおおお、おじ様あああああああああ  
あああああああああああ」

崩れ落ちた2人が、手を取り合い、わんわん喚き始める。糸目の白髪女とモチモチの可愛いおじさんが泣き喚く姿にはもう、権威もクソもない。

この2人、実はかなり気がこころ知れた仲である。

主に。

「なんかさああああ、最近やっぱりおかしいよおおおおおおお、お、カノサチャんと、天使教会と南領で酒や天使粉のアガリをチユーチユーして、ウェイウェイだけしてた頃とは違つよおおおおお おおおおおお」

「そうよねええええええええええ、分かるわああああああ、おじ様あああああああ！ 醸造所とか養蜂場をさあ！ 南領の直轄地に立てて近隣に教会を建立することで仲良く利権をハムハムだけしてた頃がほんとに恋しいのよおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおお」

ギブアンドテイクの関係で。

おーいおいおいと泣き始めるダメ為政者たち。そう、この2人の仲の良さ、それは互いの私服を良い感じで満たすためのちよつとした小物同盟だ。

少し前までは、冒険都市と天使教会という帝国の中でもトップに君臨する勢力の長として、絶妙に法に触れず、良い感じに恨みも買わず、犠牲者も出さない、もしくは気づかないレベルの悪事をちよこちよこしていた同志の関係である。

「あああああああ、もう、なんで、なんで、このタイミングで、蒐集竜様の竜祭りのタイミングで、あの魔術学院が……はっ、まさか竜同士の抗争をこの街でっ！！」

「あ、あゝ、お、落ち着いて、おじ様。た、多分それはないわ。教会が把握している限りでは、かの竜と竜の間柄はそんなに、悪くないみたいだから」

「そ、そうなのかい？ 天使教会が言うのなら、そうなんだろう。いやでも良かった、カノサちゃんとの段階で早めに話し合いが出来て。こほん、ま、まずは、アガトラと教会の足並みを整えなくてはね。えっと、この魔術学院出現の対応だけど……」

ゆっくり、それぞれ喚いてそれなりにすつきりしたらしい2人が、正気を取り戻す。

為政者と権力者、両方に共通して言えるのは両者ともに、切り替えの速さが重要だということだ。

「おじ様、教会としてはすでに答えは出ています。こちらからの威嚇、及び敵対行為は起こしません。魔術学院は教会が真実としている”天使”様の存在に懐疑的かつ、敵対的態度を取る不倶戴天の敵ですが、正直、戦力的に教会が必ず勝利できる見込みがありませんので」

「り、了解、あー、よかった、それは私も同感だよ、ほんつとに良かった、天使教会が戦争を始めれば、アガトラも追従することになっただろうからね。そうになると、冒険者ギルドに所属している魔術師が一気に牙をむいてくることになるだろうし」

「ええ、おじ様の言う通り。連中と本気で戦うのなら圧倒的に今は手ごまが足りません。それに奴らが今回、本気で教会やアガトラに戦いを挑んできたのなら、もう終わってますもの」

「終わってる、てのは」

「あの空飛ぶ島の底面、あの奇妙な動力部、えっと確か、工房が同じような機構を開発してたわね……名前は、そう、プロペラ。あれの近くに備わっている”雷砲”。上空をすでに抑えられている以上、戦争したいのならあれを1発撃てば全て終わりますもの」

「うっわ、えっぐ」

「それが魔術師です、でもそれをしていないということは、少なくとも現状、魔術学院の目的は戦争ではない、ということですよ」

「あゝよかった。でも、じゃあ、なんで、また急に1000年の間、魔術師以外は行方を知らなかった学院がここに……」

「 人知竜」

「ほえ？」

主教の呟きに、領主が思わす声を漏らす。

「ごめんなさい、おじ様。混乱を避けるため、そして教会の益の為、公表はしていなかったけど数週間前からアガトラには彼ら魔術師の祖、”全知竜”改め、”人知竜”が逗留しています」

しれつと言い放つ主教。

そして次の瞬間、同席していたギルドマスター、そして超越者であり、この部屋の人員でぶっちぎりの戦闘力を誇る聖女、2人が、すつと、息を呑む。

「 それを今になって報告するとはね。さすがのツラの皮の厚さじゃあないかい。主教殿」

それは、為政者の顔。

個を滅し、集団の為に存在するシステムの顔。必要であれば、指先一つで他者の命の行方を決めることが出来る男の顔で、領主がつぶやく。

「あら、フフ。怖い顔が出ていますよ、皇帝が恐れる唯一の貴族。ティーチ家の末裔、辺境伯様」

それを受け流す彼女もまた、その見えぬ権力者の顔で答える。

そのような威には慣れている、指先一つで他者の命運を決める者との交渉こそ我が生業、そんな人のみが持ち得る凄みで主教が微笑む。

「……主教さま、めっ。ノリで挑発しない。人知竜、蒐集竜様の竜大使館にしばらくいた。教会が勝手に口外するのは、蒐集竜様の意向に背くことにもなる」

スヴィがため息をついて主教の前に割り込む。仲裁の体を装いつつ、本当は無意識にカノサの盾になれるような位置へ。

「……聖女殿、そうか、そういうことか。ふむ。カノサちゃん、すまないね。少し、私もいらだっているみたいだ、謝罪を」

「とんでもないです。アガトラは我々教会の大切な友人、その友人に気を遣わせてしまい申し訳なく」

この街のトップ、同時に毒気が抜けていく。そのような毒気を見せることすら、この2人にとっては駆け引きのコマでしかなく。

「はあ、……しかし、そうになると一気に話が見えなくなる……なぜ、今魔術学院がここに？ 竜大使館に逗留しているということは、実際のところ、我らが護り竜がその縄張りに招きいれたということだ。本当に関係性が悪いということではなさそうだし……」

「ええ、実はその、つい先ほどまで、教会で起きたごたごたに人知竜がいたのですが……」

「ええ！？ なにそれ、カノサちゃん！ な、ななななんかそれが人知竜を刺激したとか！？」



ブルブルと領主が震える。もちもちのほつぺたが落ちそうなほどに。

「い、いいえ、そんな。おそらく、人知竜にとっては我々のごたごたなど兎戯にも等しいことでしょう。このような魔術学院の召喚につながることは……」

「あー、頭いつたいなあ。あ、カノサちゃん、ごめんね、さっきからたちっぱにさせて、聖女殿もほら、そのソファに腰かけて、とりあえず紅茶でも入れようか。すごく良いウツヴ茶が入ってね」

「領主様、ここは私が淹れます」

「あゝいいからいいから、マリーくんもほら、座って座って。よいしょっと」

4人がけのソファ席に領主が皆を促す。

お気に入りのティーセット、手際よく暖かな湯気と香りを立てていく。

「あ、いただきますね、おじ様」

「頂戴します。領主さま」

「うん、ほら、さっき焼いたお菓子もあるからね。お口に合えばいいけど」

「いえいえ、ほら、スヴィ。あなたもおじさまにお礼言いなさい」

「ありがとう、領主のおじさま」

もふもふと、お菓子を頬張る聖女に領主がニコニコと微笑んだ。

「ははは、いやいいんだよ。それにしても、謎だ。どう思考を進めても、今、このタイミングで魔術学院が現れた理由を論理的に説明出来ない。どうしたものか」

「以前、私とおじさまで進めていた冒険都市災害対応目録での構想でも、流石に魔術学院が突如、空の上に出現するなんて想定はありませんものねえ。……いざとれば、”壁”を使用なさるんですか？」

すつと、互いに完璧なマナーで紅茶を傾けながら会話を続ける。

主教の細く長い手、爪にはつつすらとピンクの塗り物が差さ  
れていて。

「むう、明確に魔術学院が我々に攻撃をしてくるのなら、すぐ  
にも発動するのだけどね。だが、今はとにかく刺激したくないとい  
うのが本音だよ。いや、本当によかった、早めに教会と意思の歩み寄  
りが取れて」

「こちらもです。冒険都市の住人はスカポントンが多いですが、そ  
の長は聡明で何よりです」

「君に聡明と言われるのは、胃が痛くなるなあ……」

領主もまた、音もなく紅茶を嗜む。

もちもちの指はしかし器用にティーカップのつまみをそつと挟み、  
一切音を立てることなく紅茶を傾けて。

「ああ、本当に美味しいわ……領主様、この茶葉、仕入れるのに苦  
勞したのでは？」

「おや、わかるかい？ 王国からの舶来ものは間違いないね。港で  
大規模な荷入れのトラブルがあつたと聞いた時は焦つたものだけど」

互いに白い湯気越しに笑顔を浮かべる。

特徴的な香りが、机を囲むものたちの雰囲気と和ませていく。

「あら、寡聞にして初耳ですわ、領主様。そんなことが？」

「ああ、本家の草の者からの情報さ。海賊の襲撃を受けた船団がい  
てね。そのまま寄港間近のところまで船が沈んでしまつたらしいんだ  
よ。幸い。港の鼻の先だつたから死傷者はいなかつたみたいだけど、  
その際荷物の回収の時に色々それぞれの船ごとの荷物が混じつちや  
つたとか。食料品の他にも、ほら、薬師や魔術師が使う毒物や植物  
とかもごちゃごちゃになつたつて」

「まあ、それはそれは。では、我々がこうしてウツヴ茶を楽しめる  
のはまさに、領主様の幸運の賜ということだ」

「はは、そうだね。幸運にも、という奴さ。……まあ、その分の運のぶり返しが、今のこの状況というのなら、中々、幸運というものは、ヒトが良いように扱えるものではないのだろうね」

「それでも運を掴むのは人生を進めていくにあたって、欠かせない要素ですわ、領主様」

「ははは。君ほどの人物がいうのなら、きっとそうなのだろうね。そうだ、それでカノサちゃんや。全知竜様、いや、人知竜様か。彼女は君の所からどこにいったんだい？ 教会での用事が終わった後に、魔術学院へ行ったのかな？」

「ずっと、領主が首を傾げる。特に交渉や、他意などない純粹な疑問を浮かべて。」

「いいえ。その後は今、彼女が逗留している拠点へ戻られた筈です。教会からその後の足跡についてはそれくらいしか」

「ふむ、それでその後に魔術学院の出現か。炎竜を一度殺した伝説の古き竜。その彼女の巣である学院の出現、魔術学院はまさか、彼女が呼び寄せた、とか？」

「判断が難しいものですが、それが出来るのは彼女以外にはいないかと」

「そうだよね。そうだ、まだ聞いてなかったね。その教会が把握している今の人知竜様の逗留先は？　かの竜大使館ではないのかい？」

彼らにとっては謎すぎる魔術学院の動き、それに人知竜が関わっている可能性は非常に高い。

そこまでは予想出来る。だが、それ以降の予想が立てられない。人知竜に何が起きたら、いったい魔術学院の召喚などというこの先の歴史書に間違いなく起きる珍事が起きるといえるだろうかー！。

6437

「いえ、現状、ちょうど4日前ほどから住処を変えていらっしやいます」

「その場所は？」

それは何気ない問いかけだった。

主教カノサ・テイエル・フィルドがもし、万全であれば。

いつものルーティンである、お気に入りの森の香りがする香油を垂らした源泉の湧き出るお風呂に3時間入り、彼女お気に入りの白毛の猫獣人の部下の肉球ふみふみマッサージを2時間受けてうたた寝し、その後、古今東西津々浦々のお宝を集めた聖別室で、白金貨を最低でも100枚は磨き、天使の口づけと呼ばれる蜂蜜の名酒を暖ためて少し嗜み、ふかふかにこしらえた純白のベットでぐっすり9時間以上眠っていれば、きっと彼女はここに到着するまでに気付いただろう。

だが、彼女の昨日からここに至るまでの道はハードだった。

とある男とひよんなことから自らの死の運命の告示などというイベント、そしてそれへの対処法の考察を行い、その後溜まりに溜まった通常業務を行い、そのついでに水面下でクーデターを企んでいた反乱分子の処理を行い、しかし最近割と竜殺し込みの策略に慣れていた彼女は少し加減を見誤り、割と絶対絶命の所までひっくり返されて、やべえとなっていた所を急に来た人知竜に救われて、なんやかんや色々あった後に、魔術学院出現！！







褐色のクールビューティーと小柄な金髪シスターがにっこりと互いに微笑んだ。

121話 がんばれ、偉い人たち。(後書き)

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きを「こ覧くだ  
さい！

122話 月明かりの滲む部屋で

ぎゅぎゅーん。ぎゅーん。ぎゅぎゅー。

波の音がする。わたくしはこの音を知っている。

『ねえ、……フォルトナ、私たち、ここで死んじゃうのかな』

わたくしと同じ顔、双子の姉のトレナ。最後に、帝国へ渡る船で別れたころと比べると、幼い顔をしている。

『お父様も、お母様も、私たちのこと嫌いになったのかな、お迎えに来るって言ったのに、いい子にしてたら、お迎えに来てくれるって言ってたのに……う、わああああああん、うえねえさま、上兄さまあああ、トレナ、いい子にするから……もうわがママも言わないから、お迎えにきてよおおおお、お腹空いた、喉乾いた、暑い、あついよおおおおおお』

わたくしの双子の姉が、涙をぼろぼろとこぼしながら、この状況では貴重な水分を消費していつている。

この状況……？ ああ、おもいだした。

蒼い海、遠くには白波が経ち、呑気に海鳥が海面近くを飛んでいく。浅瀬はきらきらと日光を反射しきらめく、しゃわしゃわと砕ける波の音、泡が寄せては引いていく。

あのクソ親に、旅行と言われて連れてこられた離島。そうだ、古い夢を見ている。

双子の姉と一緒に、親にこの島に置いて行かれたんだ。確か、この時はまだお互い5歳くらいだったか。

『ねえ、フォルトナア〜どうしよお〜なんで、私たち、置いてくれたのかなあ〜』

『……簡単ですよ、トレナ。わたくしたちのどちらもが、上姉さまや上兄さまのような金の髪を持って生まれていないからです。顔もお父様とお母様2人ともにも似ていない、それに双子で、おまけに王家の血に必ず3歳までに現れる”秘蹟”も持っていない。くだら

ない因習や伝統を重んじる家ですから、余計な血を間引くことで、上姉さまや上兄さまがさらに素晴らしい血に成長すると思っているのでしょね

『え、え〜どういことなの〜、わ、わたしはバカだけど、フォルトナは頭が良いのに〜』

『それすらも、あの人達からすれば排斥の理由だったのでしょ。わたくしたち2人は中途半端だったんですよ。あなたは自分がバカであるという認識すらできないほどに愚かであれば良かった、わたくしはあの人たちがこんな風に手を汚さずにこんな早い段階でわたくしたちを切るのだと予想を立てることが出来るほど賢ければよかったです。でも、わたくしたちの両方、そうではなかったんですよ』

少なくとも、始末されるのは多分わたくしだけ、トレナは見逃されるだろうという見込みは間違いだったらしい。

ここで死ぬ。力もなく、才能もない子どもたちにこんな孤島で生きていく力はない。

『わあああああ、やだよおおお、死にたく、死にたくないよおおお  
おおお』

『じつさいなあ……』

ああ、イライラする。ああ、思い出した。

わたくしは、どうして忘れていたんだろう。

そうだ、わたくしは昔からイライラしていたんだ。自分の運命に、自分の家族に、自分の国に、自分の姉に、そして。

『……なんて、運のない……』

自分自身のツキのなさに、イライラする。

生まれるタイミングが良ければ、あの姉と兄さえいなければ、この双子の姉さえいなければ、いいや、何よりこのクソったれの王族なんぞに生まれなければ。

『ああ、ほんと、全て、ムカつきますね……』

古い夢をわたくしは見ている。

才なきゆえに、運なきゆえに、弱さゆえに、親に捨てられて野垂れ死にかけた時の夢を。

『全部、全部、ムカつく、何が王家だ、何が剪定だ、何が運命だ……ムカつく、ムカつく、何一つ思い通りにいかない人生が、人生ひとつ好きにできない自分の無能さが、本当に、ムカつく』

空はあんなに高く、海はこんなに広く、砂浜はあまりにも美しいのに、自分だけがくだらない。自分の存在のしょうもなさがたまたまなく嫌いだった。

『ええええええくん、いやだよおおお』

だからこの双子の姉も嫌いだった。自分の無能さをそのまま鏡として映し出されたような存在が。でも何より嫌いなのは自分だった。そんな見下している存在と実際は大して変わらないちっぽけな自分がほんとに嫌いで。

『全部、全部ぶっ壊れてしまえばいいのに……』



そんな呟きすら無力で無意味。

波の音、寄せては返す砂と貝殻がこすれる音、水が砕けて響く音、世界の音に消されていく。

そうだ、わたくしはこの後どうなったのだろう。幼い子どもだけで、生きていけるわけがない。

でも、そう、わたくしとトレナはここを生き延びた。帰還したんだ。

ふふ、あの時の、わたくしとトレナが王宮に戻った時の、あの、父親と母親の顔と言ったら。

フフ。ああ、あれは良かった。あの2人を人形に変える瞬間の顔と同じくらい、あれはとてもよかった。

ムカつく連中が慄き、恐れ、喚く姿からしか摂れない栄養はきつとあるのでしょうか。

ああ、でも、思い出せない、わたくしたちは本当にどっやって

『ふかか』

『『あ』』

目の前、砂浜に舞い降りたのは、揺らめく金色の輝き。ヒトの身では決して届かぬ大空を飛びこの世界ですべての自由を赦された上位の存在。

おとぎ話で聞いた存在、もし、天使様が本当にいるのだとしたらきっと彼女のように美しく。

『小さき者よ、奇遇だな。暇つぶしの散歩であったが、さて、妙なところに妙な者がある。貴様ら、名前は？ 良い、名乗ることを赦そう、ぞ』

きっと、その時彼女は機嫌がよかったのだ。きっとそれは彼女のきまぐれだったのだ。

彼女にとってこの出会いはきつと、大したことではなかった。彼女にとってわたくしの存在は大したきっかけにもならなかった。

でも、わたくしにとって、ちっぽけなフォルトナ・ロイド・アームストロングにとって、彼女、アリス・ドラル・フレアテイルとの出会いはー！。

『む？　なんだ、その方ら。小さきものよ。呆けた顔をするなよ。ふかか、いや、だが、中々に面白き顔をしておってからに』

とても、綺麗で。

ああ、こんな、こんな綺麗なものを見れるなんて、わたくしは、なんて、なんて。幸運ー！。

「……ああ………あれ」

彼女は、自分の寝言で目を覚ました。

重い体、ふかふかのベッドに魂ごと寝かしくまれていたように。  
上体だけを気怠げに起こす。

「何か、夢を、見ていたような……」

寝室。壁にかけられた小さなカンテラとカーテンの隙間から届く  
月の光がゆつくりとフォルトナの寝ぼけ眼に光を慣れさせてー！。

6451

「おい、姫様よ、眠れねえのか」

「………ウイス？」

驚きよりもまず少し感心した。声をかけられるまで存在どころか  
気配すら分からなかった。大きい図体でどのように忍んでいたのだ  
ろっか。

「おう」

ウイス。フォルトナの従者にして今は竜大使館の執事見習い。簡素な布の服のまま、壁によりかかりこちらを見つめる赤髪の男。

「いや、おう、じゃなくて。あなた、ここ、女性の従者の宿舎なんですけど」

「ああ？ 何言ってるんだよ。アンタは俺様の主だろうがア。闇討ちされたらどうすんだよ」

「されませんよ、おバカ。執事長殿にばれるのでは？」

フォルトナがベッドに横たわり、上体だけを起こしたままウイスの言葉にため息をつく。

「……あー、あの爺さんにはきちんと筋通してる、王族の護衛として寢室に待機する許可、きちんともらってんよお」

「……突然現れた魔術学院にも驚きましたけど、やはり”鬼人”が

正直、一番怖いですね。何を考えているか分からない超越者は厄介です。すでにわたくしたちの企みもばれてたりして？」

「そりゃねえよ、あの爺さん、そういうのに対しては即殺してくるタイプだ。まあぶっちゃけアレは強すぎて他者を警戒するって概念自体がねえんだろ。ヒトから化け物に成り上がった存在は、歳月を経ることに、ヒトであった強みをなくしていくもんさ」

おそらく、この先、ウイスが長い修練と幾たびの死線を超え、そして運良くだどり着くべきところに辿り着き、必要なものを備え、そしてその先もまた修練を重ねたその先、その遙か高みにいる男、それがあの執事。

ベルナル・オドニアス。

伝説の中での呼び名は鬼人。あの炎竜と殺し合い、ついには一度も死ぬことの無かった最強の武人。

正直、アレさえいなければもっと早くにこの2人は帝国へ渡っていたかも知れない。彼女達の目標たる、完全なる竜狩りにあの男は大きな障害としてたちはだかっていた。

「まあそのくらい付け込める余地がないとゲームにすらなりませんよねえ。まあ、恐らくうまくいくでしょうね。例え殺すことなど到底出来ない理外の存在でも、世の中色々、抜け道はあるものですか」

部屋に置いてある小さなバスケットを眺めるフォルトナ。王家の至宝であり、フォルトナ達の切り札の入れ物。

王国では漂竜物、帝国では副葬品と呼ばれる異端の力持つ物品を、文字通り縮小し、隠遁して持ち歩ける理外のアイテム。

「漂竜物、”フルーツバスケット”ねえ。王家の至宝として伝えられてきたのが、上位生物からバレないように漂竜物を複数隠し持つことの出来る宝、か。……お前んとこの先祖、やる気満々じゃねえか」

「フフ、王国の人類種は帝国の人類種とは違って、愛憎入り混じった感情を上位生物へ向けていますからねえ。まあ、それも気持ち悪いものですけど」

「皮肉なもんだな。上位生物狩りの宿命やら、ヒトの復権やらを背負ってこの世に生まれたアンタの上姉様やら上兄様は、そこにたどり着く前にアンタという異物にぶつ殺されちまったんだからよ」

「ええ、そうですね。フフ、とても強くて頼りになる力がわたくしの味方をしてくれましたから。その調子で、竜と鬼人も行けたりしませんか？」

「ぎゃははは、うつせえバカ。……そオだなあ、この忌々しいクソデバファイテムさえ、誰かさんのように幸運にも手放せてしまえばなあ」

言いながら、ウイスが己の腰に巻き付けているそれを忌々しげに眺める。

鈍色の、縦と横にシンプルなスリットの入ったそれ、バケツのような形の兜だ。

「ああ。そのバケツヘルム……ほんとなんなんですかね、漂竜物でもないし、誰かの秘蹟による産物でも、もちろんスキルや魔術式でもないそれ。フフフ、執事服に似合ってなさすぎでしょう？」

「うるっせえ、仕方ないだろうが。代々のヘロス家の当主は呪われてんだよ、このクソ兜に。外しても気づいたら自分で身に着けちゃうし、捨てても次の日には枕元に戻ってきてる。ああ、これをぶっ壊そうとした俺の爺さんは、4回目の試みの時に心臓が止まって死んじまったしよオ、クソ、たまに身体が軽くなっただと思えば急に重



くなったり、幻覚やら幻聴は聞こえるわ、夢見は悪くなるわ……ほんとなんとかなんねえかなあ」

「あら、でも、夢でその兎が解呪の方法を教えてくれていたのではありません？ えーと、なんでしたっけ？」

フォルトナが首を傾げて頭を悩ませる。その様子にウイスが少しため息をついて口を開いた。

「まそ鏡照るべき月を、白栲の雲か隠せる、天つ霧かも」

ツラツラと紡がれた言葉。それはこの世界においては御伽噺として伝えられているある教養。

「ああ、そうそう。それ、古代ニホン語の、古唄でしたっけ？ ああ、ウイスが帝国の歴史書読んでたのって……」

「ああ、帝都大学は古代ニホン研究が盛んだからなア。その金持

ちかつお暇な学者連中の古唄の研究を読み漁ってた。まあ、言うても実はこの古唄の意味は、俺の爺さんが解読したただけだな」

「あら、アグレッシブならお爺さまですね。それで、その古唄どんな、意味なんですか？」

「あゝ、まあこの古唄自体はアレだ。”照るべき八ズの月明かりを遮るのは白い雲か、それとも空に拡がる霧か”だったか？ まあ大した意味のねえ詩みたいなものだ。結局、解呪の方法は今もわかってないねえ」

「呪いを解く定番と言えば……ああ、誰かに押し付けるとかじゃないんですか？」

「そこですぐその発想に至るのがアンタだよなあ……」

「む。なんか引つかかる言い方……ふ、んん、ふわ……まだ夜半ですか、……明け方も遠く、夜はまだ濃い。わたくし、二度寝としゃれこみます、貴方もお休みなさいな、ウイス」

じとつと、琥珀色の眼を細めたフォルトナが大きく伸びをする。

シルク生地の寝巻き、起伏のある身体のシルエットがはつきりと顕  
になって。

「……いいのか、お姫様」

あくびをしつつ、ベッドに潜り込もうとするフォルトナにウイス  
が小さな声を向けた。

「なにが、ですか？ ウイス」

フォルトナがカーテンの向こう側を眺める。ウイスと目を合わせる  
ことはしない。

「とぼけんなア、今日の話だ。ありゃ、なんだ」

「……」

沈黙。フォルトナはそのまま、月の光が漏れる窓を眺めたまま  
黙る。ウイスも何も言わない。

時たまに響く風の音が何度か鳴った後、フォルトナが口を開いた。

「……アリ、蒐集竜様のお言葉通りですよ。古い話です、ただ昔、わたくしとトレナがあの方と出会ったことがある、それだけの事です」

「んな話、俺様、一度も聞いたことねえぞオ」

フォルトナが、ようやくウイスの方を向く。ベッドの上、首を傾け、腕組みしつつ唸る。

「仕方ないじゃないですかー。おそらくは王妃の、ああ、お母様の秘蹟です。王国に所属するヒュームの記憶に干渉する彼女の力で、きつとわたくしの記憶から蒐集竜様との記憶が封印されていたのでしよう。まったく、王家の血に宿る秘蹟はどれも陰鬱で厄介なもので気持ち悪いですね。あ、もしかして、あの出来損ないのトレナにも、本当は何らかの秘蹟が」

「よくしゃべるじゃねえかア、お姫様、アンタの口数が多くなる時は大体、なんか考え事をしている時だけ」

「……うるさいですね。何が言いたいんですか？」

ため息、フォルトナが目を瞑ったままウイスに問いかける。

「別に。ただよお、アンタがどうするんだろっとなあって思ったただけだ。……やめるなら今のうちだぜ」

やめるなら今のうち。

本来の予定ならば、決してこの2人の話題には出てこない筈の言葉だった。

踏み潰してきたのだ。これまで、この2人は全てを。

1人は己のしたいことをしたいままに。

1人は己が主人と決めたもののために。

家族を滅ぼした、血を滅ぼした、国を滅ぼした、その笑いと嘆きと慟哭と叫びの行進の中、全てを踏み潰してきたのだ。

だが、ここに来てー！。

「んー……そう、です、ねえ」

決して止まるはずのない愚者の行進、その足並みに乱れが。

今まで、何かを言いよどむ姿なんて、少なくともウイスは見た事がない。そしてその様子が演技ではないことも分かっていた。

ウイスがじつと窓の外を眺めるフォルトナを見る。

月の光に照らされるその女の顔。カーテンを開けず、しかし月を見上げることをやめない彼女。

自然と、男の口は開いていた。

「俺あ、力だ。俺様はアンタの振るう暴力そのものだ」

「んー？」

「俺様が俺様の在り方をあの時決めた。アンタが振るう力として俺様アよ、ここにいます。だから、まあ、なんだ、その……」

がしがしと頭を掻く男の様子に、フォルトナが星の虹彩の眼を細め、少し笑う、その男の不器用な様子がどうにも面白くて。

「ああ、なるほど。クスクス、俺に気兼ねせず好きにしろ、という訳ですか。フフ、ウイス、ウイスウイスウイス、いい奴じゃあないですかあ」

びんぴんと人差し指をウイスにむけリズムよく振りながらお道化するフォルトナ。

「うつせえ、ぼけえ。……まあ、そう言う事だア」

「うーん、厄介、厄介ですねえ。まさか、時間差で恩人、いえ、恩竜のことを思い出すなんてなあ……フフ、もう今更にも程があるのに……さて、これは果たして不運なのでしょうが、それとも……」

ベッドの上、片膝を立てそこに顎を預けて目を瞑る。

フォルトナは眠る前のまどろみを味わいながらたわいのない言葉を繰り返す。

「まあ、一応は竜教団の生き残り連中もこの街に配備済みだア。5本爪の死骸人形も手筈通り用意してある」

「フフ、こわーい鬼札の鬼人と、全知竜、いや、人知竜への対策も用意済み……竜を殺す為の王家の至宝もたんまり準備。上姉様の力も確保済み。彼女と彼……彼等も今回はわたくし達に横入りするとはなく、竜の祭りはもう明後日、いや、日付が変わってるから、もう明日、仕掛けは上々、あとは結果をころうじろ、ですか？」



「ああ。そうだなあ。狩りの手順は完了してる。だが、まあ、正直、それでも……」

「普通に考えれば、竜の7つの命、いえ、今はもう6つか。それを削り切るのは至難の業。まあ、いいところ成功率は、1割、あるかないかでしょうねえ」

「ケツ、まあ、そんなところだろうなあ。だが、1割あんなら充分だ。アンタの幸運がドミノ倒しのように作用するだろ」

「ええ、あとなんやかんやきつと貴方と竜が戦えば、自然に英雄という役割が発動して、いいところ一回の戦闘で3個くらい命削るところまで行ける気がするんですよね」

「幸運にも、か？」

「いえ、これは貴方の実力で、ですよ」

「……アンタのあの気色悪い矢印は？」

「んぐうんともすんとも。これ、こちらからは決して触れも消しも、何も干渉出来ませんから」

フォルトナが目を瞑り、それからまた目を開く。

星形の虹彩に映る、空中を踊る文字。それは彼女にしか見えない彼女だけの運命の知らせー！。

【メインクエスト・”さらば、竜よ”】

【クエスト目標・蒐集竜の討伐】

【オプション目標・新王国再建のための人員を入手し、人形化する候補・”元影の牙”、”元王国宮廷商人”、”正義の幼体”、”英雄の芽”、”聖女”、”ティーチの末裔”、”帝都大学の黒バラ”、”魔術学院賢人会議” e t c ……】

【オプション目標・冒険都市に逗留している元勇者パーティーと会話する…… CLEAR！ このクエストにおいては”射手”と”

盗賊”からの横入りは入りません】

【クエスト説明・貴女は貴女の成したいことをするままに、全てを踏み潰してきた。親を乗り越え、霸王を処し、月光を遮った。ここに、ヒュームの王の血は幸運の前に統一された。さあ、次だ。次へ行こう。運命を履行し、運命を乗り越えるために。過去を、思い出をも捨てるのだ。運命の知らせを聞くあなたは進み続けなければならない。もう誰にも負けたくないのなら。さらば、竜よ。さらば、風よ、さらば、鴉よ、さらば、世界よ。さあ、いと高き空に中指を立てましょう】

【注意・”天使教会主教・カノサ・ティエル・フィールド”、及び”竜殺し”の人形化はINT、POW値の関係で不可能です。この2名はあなたの運命の大きな妨げになることでしょう】

【警告・”鬼人”、“全知竜”が冒険都市に逗留しています。この2名との戦闘が発生した時点でウイス・ポステタス・ヘロスの死亡ロストが確定します】

「わたくし達が履行すべき運命は、依然、竜の討伐を指し示していますね」

「ふうん、あの霸王の姉様をぶっ殺した時とおんなじかあ。さて、さて。上姉様殿をぶっ殺した時の報酬は凄かったからなあ。竜を殺したときにはいったいどんなものが手に入るんだか」

言いながらウイスが首に掛けている妙な飾りを摘んで掲げる。

それは、紐に通された小枝、何かの、”樹”の小枝にも見えた。

「そうですね……」

竜を殺す。

発した言葉にフォルトナはいつもの微笑みではなく、また、ウイスの知らない顔で答える。

その顔、その表情につける名前も、その顔の表現もウイスは知らない。

「ケツ、なんて顔してんだよ」

「ウイス？」

「いいか、もう次は言わねえ、だからよく聞けや」

ウイス・ポステタス・ヘロスが壁から離れる。

ゆっくりと、力強い足取りでベッドへ近づき。

「お前の好きにしる。お前が当初の予定通りお前の運試しを続けんなら好きにしる。お前が古い思い出を大切にしたいつつーんなら好きにしる。お前がお前の運命をどうしたいか、お前が進みてえのか、お前が止まりたいのか、全部好きにしるや」

「それは、心強いですね。ふふ、ねえ、ウイス。わたくしはね、外側に行きたいんです、……わたくしはね、この世界が嫌いなんです」

「知ってる」

「運命の試練を超え続け、わたくしはいつか運命の外側へと向かう。その為にこのクソみたいな世界をぶち壊したい。わたくしの幸運が果たしてどこにたどり着くのかを、知りたい」

だから殺した。姉を、兄を。

だから滅ぼした。家族を。ちっぽけな自分の世界そのものだった存在を。

その先に何かあるのかを知りたかった。

「ああ。したいことをしたいようにすればいいさ。俺様の主、いや、我が王よ」

「ふふ、ああ、そうですね、したいことをしたいように、そうですね、わたくしはもう、何にも負けたくない」

それは彼女のオリジン。

負けたくない。

何に負けたくないのかも、分からないけど。

フォルトナの進む理由はそれだ。

ある男が気分が悪いのが理由のように、ある男が善人が報われる光景を望むように、ある男がたどり着くべき夢を欲するように。

ただ、なにものにも負けたくない。

それこそが、彼女の進む理由だ。

「……」

「でもね、あの思い出は本当に美しいものでした。世界は嫌いですが、運命も嫌いです、ヒトも、怪物も、他人も、わたくしは、わたくし以外のものが基本的に嫌いです。見下しています、全部全部全部くだらないものと思っています。それでもね、わたくしは彼女が、あの傲慢で気高く独りぼっちで美しい金色の竜のことだけは好きです」

「そおかア」

「はい、大好きです。ふふ、ほんとにね、わたくし、竜のことは、大好きなんですよ、ウイス」

フォルトナがまた、ウイスから目を逸らした。

何故かわからないが、ウイスはそれが嫌だった。

だから。

「バカ姫」

「はい」

呼びかける。

「俺様の主人」



「はい」

呼びかける。

「我が王」

「はい」

呼びかける。

「ウイス・ポステタス・ヘロスはフォルトナ・ロイド・アームストロングの剣であり、力。汝はその思うがまま、気の向くままに剣と力を振るわれるが宜しい」

朱い瞳に、赤い髪。

力の英雄が、王へ跪く。

「 剣は、主人に善性なんざ求めちゃいねえよ」

「ーそうですか、それは慎重に使わないといけませんね」

月明かりが、ぼんやり、王と英雄へ染み込むように。

「ああ、そうしてく……いや、それすらも、アンタの好きにするといいさ。まあ、なんだ、ここまで来たら最後まで付き合っさ、何か始める？」

英雄が、寝台の王を見上げる。その号令に従っただけだ。それが例えどんな無理難題であろうともー！。

「うーん、とりあえず、寝ます！ 明日は、ああ、もう今日ですね、アリスお姉さまとお菓子作りのお約束がありますから」

「ええ」

「なんでも、かの竜殺しともう一度普通にお話したいんだとか！  
ふふ、明後日からはもう竜祭り！そして竜殺しは屋台をするんで  
しょう？これはもう、自然な感じで差し入れを持って行って挨拶  
！もうこれしかありません！大丈夫です、アリスお姉さまのよ  
うな美竜が差し入れ持って行って嫌がったり断ったりするような男  
なんて存在するはずありませんもの！じゃあ、ウイス、おやすみ  
！スびよー……」

「マジか、コイツ」

ベッドから漏れる寝息は本当に寝ているときの音だ。ウイスがた  
め息をつき再び壁にもたれかかる。

腕組みをして、カーテンの隙間から見える夜の闇を見た。月の灯  
りがじわりと漏れ出すように揺蕩う。それは決して夜の道を照らす  
ような強い目印となるようなものではない。

「……まあ、いいかア。今更だ。……祭りでもお菓子作りでも、ど  
んな道でも付き合っぜ」

だが、ウイスにはそれでよかった。それが正しい道に誘うものでなくとも。夜の闇の中に自らが見つけた月の光がある。

「バカ姫様」

ただ、それだけで、良かった。

122話 月明かりの滲む部屋で（後書き）

読んで頂きありがとうございます！

是非ブックマして続きをご覧ください！

## 123話 祭り、始まり

夢を見ている。

『よお、こんにちは。ああ、そんな嫌そうな顔すんなよ。俺はこう見えて気が小さくてな。デリケートなんだ、傷つくぞ』

俺はその夢を昔から知っている。爺さんから、そして、オヤジからコレを引き継いだ時から見る夢を。

『ああ。違う違う、いつもの悪夢じゃない。あのお約束の言葉も少ししか言わないさ。そうだな、今日は、まあ、多分今日が最後だから、お別れの挨拶に来たって奴か？俺はこう見えて礼儀正しいタチなんだ』

そいつはずっと、ひとりっきりでこっちへ向けて語りかけてきやがる。昔っからずっとだ。この何もない真っ白な場所で、霧の形でずっと。

俺はそいつに話しかけようとする、でも、口がないから何も言えねえ。

「あ？ いやなに、簡単さ。時が来た、時間だ、という奴さ。ーたどり着いたんだ。おー……、お前もアイツも。いや、改めて考えるとすげえよ。両方死ぬ可能性の方が高かった。お前たちはあの霸王や老兵、月光に殺される可能性の方が高かった、あいつだって、古代種や神話に殺される可能性の方が高かった。だけど、お前たちは互いにたどり着いた。互いに目の前のすべてを踏み潰し、殺し、始末し、進んできた」

こいつ、何を言ってやがるんだ。

「そんな奴らだ。もう止まらねえよ、止まる訳がねえんだ。もう、お前たちの道は交わらねえ。お前たちの力が重なる道はない、共存はねえ。おしまいにたどり着くのは、ラスボスに挑むのはどちらか片方だけ。わかるか？ 仲間にはもうなれねえ。お前たちはきつとアイツの光景を邪魔する、アイツはもうお前たちの最後の安全弁を、幸運の片割れを殺しちまった。だから、もう止まらねえよ」

俺はそいつの言葉をただ聞くことしか出来ない。

「そうだ、お前たちは互いに互いの報酬なんだ、奪い合うしかない、

殺し合うしかない。んで、俺はまあ、あれだ。ちょっとした仕掛けだ。お前の一族、つーかお前の先祖には悪いと思ってる。だけどよし、すまん、これしか確実にここに届ける方法がなかったんだ」

何がすまんだ、何が。てめえからは悪びれた様子が感じれねえぞ。

「まあ、そんな怒るなよ。この兜、たまにお前の助けにもなつたろ？ え？ 夢見は悪いし、身体は重くなるし？ あー、でも本物の化け物と戦うときはきつとお前に力を貸したろ？ 元の持ち主が化け物大嫌いなんだよ、特に再生する奴とか、殺しても死なない奴とか、戦つてるときにきつたねー笑い声で嗤う奴とかさ。あ？ 俺？ ひひひ、俺のは上品だろうがよ」

そんな奴いたら、さぞ面倒だろうなア。だが、ああ、たしかに。あのバカ姫の姉貴の切り札。

あのジジイ……いや、あの老兵に勝てたのはたしかに、このクソ兜があの時……。

「ま、そういう訳で。そろそろ時間な訳よ。お前とアイツが殺し合う時が、きつと別れの時さ。お前はきつと、アイツを恐れる。アイツを確実に殺さないと恐ろしくて仕方なくなる。そして確実に殺す





『まあいいじゃねーか。男が2匹、1人はてめーの定めた光景の為。1人はてめーの定めた王の為。殺し合うにや上等過ぎる理由だろ?』

『てな訳で。じゃあ、まあアレだ。健闘を祈るぜ、いや、それともお前には、力の英雄にはこっちの方がいいか?』

『幸運を祈る。ああ、互いにな。悔いのないように殺し合おうや、力の英雄』

『ーお前。なんで、お前はいい……いや、この気持ち悪い感じ、最近、どこかでー。』

『ーまたな』

夢は、終わった。

街の空、青天高く。ふわり、浮かぶ雲に楽団の笛の音が届きそう  
な。

今日は、お祭り。アガトラの街にヒトの声が満ち溢れている。

「お母さん、あれ買って買って買って買って！」

「だめよ、さつきもホーム焼き食べたでしょ！ 晩御飯食べれなくなるよ、今日はお祭りなんだから馳走作ってあげるから！ お父さんがお祭りのためにいいお肉も取ってきてくれるからね！ 竜祭り祝いの肉祭りよ！」

「わああああああああああい！」

家族がいる。当たり前前に毎日を生き、幸せを目指して平穩に暮らす親と子が。

「工房の新作！ 破裂槍！ 突き刺した場所に内包された火薬がズドンと爆発するよ！ これで4級冒険者の君もあの、ドロモラ商会付きの冒険者のようにテイタノスメヤを狩れるかも！ 今日ほめで

たい竜祭り特別価格！ 限定3品だけ本来なら金貨五枚の所、金貨2枚と銀貨5枚と大奉仕！」

「む、すげえ、かつけえ……姉さん、あれ……」

「だつめに決まってるでしょ！ あんた、この前工房にオーダーメイドでロングソード作ってもらったばっかでしょうが！ それに、あれどう見ても工房の悪い癖全開の時の武器じゃない！ 何よ！ 火薬が破裂って！ メンテナンス性も最悪だし、その前に使い手の身体が火薬の爆発に耐えられないわよ、どう考えてもアレはドワーフの連中が酒のみ話の悪ノリで作ったもんだわ！」

「おっと、財布の硬いお姉さん、これは参った、ならどうだい？ 破裂槍を買ってくれたら、こおまけに今日の竜祭りで発売予定の工房の新作の整理券を」

「いつらないわよ！ トンチキ武器のおまけに更なるトンチキ抱き合わせてこないで！」

「えー、その美人の冒険者のお姉さん、いいのカー？ なんでも噂だとこの整理券で買えるのは蒐集竜様に関わりのある超縁起物って話なんだけどなー」

「え、し、蒐集竜様の……」

「ね、姉さん、整理券って怪しすぎるよ、そもそも何を買えるかも分かってないのに」

「う、うっさいわね、どんだけインチキ臭くても蒐集竜様の名前を出されちゃ揺れるわよ!」

姉弟がいる。日々を懸命に生きて、血と暴力の世界の中、束の間  
の休息を楽しむ冒険者が。

「おい、姉ちゃん! こっちにフィルドエール3杯! 天使教会  
の銭 - おっと、麗しき白髪の主教様に捧げる乾杯だあ!」

「おう、賭け事や酒を解禁してくれた話の分かる主教様に! 彼  
女の財布にあふれんばかりのコインが湧きますように!」

「欲をかきすぎて天罰が当たって早死にしませんよーに! 俺ら庶  
民の話の分かる銭ゲバ様に祝福を!」

「ぎゃははは、銭ゲバって言うなよ、お前! 税金上げられるぞ!」

「まー、何はともかく、こうして昼から旨い酒が飲めるこの今日に

！ 乾杯！」

「アガトラに！」

「麗しき我らが竜に！」

「その竜を殺した恐れ知らずの竜殺しに！」

「乾杯！」

男達がいる。

日頃汗水垂らして労働に励み、苦しいことや辛いことをたくさん受け持ちつつ、それでも生きる為に働く労働者たちが、酒を囲み束の間の祭りを楽しむ。

「お昼からの商業広場の屋台、楽しみだね！」

「フレーマンの焼き菓子屋さんも屋台出すらしいわよ！」

「あら、ほんと！ あそこのお菓子、とても美味しいわよね！  
」  
「アっていう少しほろ苦いあのお菓子すごくいいわよ」

「えー、あれ、カークオの実と似た奴なんですよ？ 猛毒じゃないの？」

「コアの実は大丈夫なの！ カークオみたいに毒はないわ。あのほろ苦い黒い粉が大人の味なのよ」

「他にも色々な屋台が盛り沢山ね。ふふ、買い食いするの楽しみだなあ」

女達がいる。

明日はもっといい日になると信じて疑わない日々を素朴に生きる彼女たち。束の間の祭りの時、日頃見られないそれぞれのお店が気合いを入れて出店する屋台広場の光景に思いを馳せて。

「はいよー、お待たせしました。ヴェル馬車交通のご利用誠にありがとうございます。芸術都市ルミーネからの三日間の旅はいかがでしたか？ それでは皆さま、竜祭りの聖地、冒険都市アガトラをご安全にお楽しみくださいーい！」

「う、おおおおおお！ ほ、ほんとに来ちゃった！」

「ぼ、冒険都市アガトラ！ すっげえええ、本当に壁に囲まれてる！ それに人の熱気やべええええ！」

「アルノ！ み、見て見て見て！ 街道から見えてたアレ、ほんとに、ほんとに街の上に浮いてる！」

「ま、ま、魔術学院だああああ！ 凶鑑でしか見たことないぞ！ ウール！ ほら、お前の憧れの魔術師たちの本拠地だ……」

「……」

「う、ウール、ウール！？ うわああああ、ウールが真顔で涙を流したまま動かない！」

「魔術学院、魔術式を操り世界の法則を解き明かさんとする探究の輩の故郷。そこには世界中から魔術師の素養のあるヒュームが集まり、日々研鑽を続けているという。魔術式とはスキル、秘蹟、副葬品などに依らずに超常的な力を扱う為の技術である。魔術師は自らの肉体の一部を魔術臓器に置換し、それから生み出される魔力と呼ばれるエネルギーを材料に魔術式を編む。魔術式には大きく分けて6種類の系統があり……」



「ああつ！ ウールが丸覚えした凶鑑の文章を暗誦してる！」

「か、感動しすぎて壊れたの……？ でも、ウールはスキル持ちだから、魔術式は使えないんじゃない？」

「魔術師の中には、冒険者としてフィールドワークがてら探求の道を進む者も多い。魔術式は戦闘に役立つ者も多くあり、モンスター  
の弱点に合わせて戦術を変更できる応用性にも長けている。したが  
って自らの冒険者パーティーに魔術師の加入を望む冒険者も多い。  
しかし、大抵の魔術師は魔術式を使えない存在を見下す傾向にある  
ので、そこはコミュニケーション能力が問われる所でもあるだろう。  
また魔術師は帝国や王国において権力者からの寵愛を受ける対象と  
もなる。帝国の中央貴族たちは古くから自らの領地や居城にどれだ  
け有能な魔術師を置けるかをステータスとして扱う傾向がある、こ  
れは臣民にあまねく恩恵をもたらす天使教会の方針に逆らうもので  
あり、基本的に魔術学院と天使教会は仲が悪い。だが、今代の天使  
教会主教の辣腕により、現在、魔術師と教会の関係はひとまずのと  
ころしようこつじょうたいと言つていいものに落ち着いている。ま  
た、魔術学院には魔術式の祖にして、ヒュームにこの魔術式を与え  
た存在、”全知竜”が棲まうとされている。この全知竜は御伽噺の  
中の存在であり、炎竜や水竜といった伝説の竜に並ぶ始祖に近い古  
い竜として崇められている。魔術師の魔術臓器は皆全て、この全知  
竜の身体の一部を腑分けしたものであるという説もあり、魔術師が  
抱く全知竜への過剰かつ異常な好意、もしくは愛情もこのことが原  
因とされる学説が主流である。上位生物の持つ我々ヒュームへの魅  
了能力に加えて上記の追加要因もあり、魔術師はみな、全知竜の存

在を焦がれるようになる。これは結果的に全知竜の眷属として魔術師が存在していると同義であり、天使教会はそれを天使様のみわざを模倣するものとしても敵意している。また全知竜はヒュームに好意的な竜として知られているが、敵対した者に対しては一切の容赦がなく彼女の怒りに触れて滅んだ国は少なくとも九つ。また彼女を敵に回すということはつまり、魔術師という存在そのもの、全世界に散らばる全知竜限界オタクを全て敵に回すということである。これはつまり、世界中の神秘に触れんとする探研究者全てが昼夜を問わず敵対者を始末せんと動き出すことと同意でありー」

「ウールが本格的にこわれた!！」

「憧れの魔術学院を見たことで自分は魔術師になれないという現実がウールを完全に壊しちゃったよおお!！」

「いいじゃん! 別にウールは”停止”のスキルなんてすごいもの  
持ってるんだからさあ!！」

少年少女達がいる。

夢と可能性に満ちた未来の卵たちが。憧れと興奮と輝かしい光に寄せ付けられるようにこの街へとたどり着いた者達が。

ひしめいている、響いている、溢れんとしている。

今日ほど世界が、帝国が、各都市が、そしてアガトラが煌めかん  
としている日々はないだろう。

街のあらゆるところに出店が立ち、大通りには笑顔の人々が絶え  
間なく行き交い、街の門には旅馬車が殺到する。

住居の至る所には祝いの飾り付け、家屋から家屋へ伝う祝い紐が、  
道を跨いで街を飾り付ける。

「竜祭りに乾杯!!」

「我らが天使教会に!!」

「太っ腹の領主様に健康を!!」

「美しい我らが祖! 人知、いや! 全知の竜様に全てを!!」

数多のこの街とそれを支える存在に捧げられる乾杯の声。異世界だろつとどこだろつと、ヒトが何かを祝うときに酒精は必ず現れる。

「帝国の護り竜！ 気高く尊い我らが竜！ 蒐集竜さまに！」

この祭りの主役へと捧げられる乾杯の声、周囲の歓声が一際大きくなる。

ラツパの音、管楽器の音、ボンゴの響く音、それらもまたどんどんと高まる。音楽に合わせて広場では踊る民衆、それを眺め酒盃を傾ける民衆。

乾杯の音が、祝いの声がそこかしこに。

そして。

「恐れ知らずの愚か者！ 愛すべきイカレ野郎！ 竜を殺した不敬で愉快的冒険奴隷！ 竜殺しの野郎にも！ 乾杯！！！」

「『『『『『乾杯！！』』』』』」

1番大きな歓声と笑い声が乾杯の声をきっかけに連鎖していく。

人々の笑い声、怒鳴り声、話し声。

とにかくこの冒険都市アガトラには絶えずヒトの声が満ち溢れている。だが、今日はいつもの比ではない。

竜祭りが始まったのだ。

数多のヒトの期待と興奮を、数多のヒトの策謀と欲望を。あまりにも多くの熱が今、アガトラを包み込んでいる。

今日から一週間、帝国の各主要都市は兼ねてより準備した祭事に大いに湧くことになるだろう。

「聞けよ、アガトラ！ 帝国の民よ！ ライムスカーの言葉を聞け！ 今日、このめでたき日の訪れを共に祝おう！ 我ら帝国こそ、蒐集竜様選ばれた史上の国家！ この世界を治めるに値する民族なのだ！ ああ、美しき竜！ 偉大なる竜！ あなたは我ら定命

の存在に

そして、その盛り上がりはここ冒険都市アガトラこそがその中心、そのつぼ。

この祭りの立役者は皆、この街にいる。

上位生物、竜。古い大戦を終わらせた大いなる竜の孫にしてヒトの概念を司る新しき竜、その名は蒐集竜、アリス・ドルル・フレアテイル。

その死と再生を祝う祭り。古今東西、どのような世界においても大いなる存在の死や生まれを祝う祭りはあれど、竜祭りはそのどの祭りよりも、熱がある。

祀られる存在が、今、たしかに居るのだから。

その現実<sup>ヒューム</sup>は人々の魂をいやがおうにも盛り立てる。上位の生物を理由もなく愛し、崇拜し、畏れる、それこそがヒトのサガ故に。

そして、その祭りの坩堝の中、もちろん奴らもここにー。

「デイスデイスデイス！ デイス！ むむ、このイエローベリー  
のジュース、濃厚な甘さなのにまったくくつくくない！ 例えるな  
らば、そう！ 盛日の月に駆け抜ける太陽のからつとした感じと言  
うべきデイスか！ そしてこの喉越し！ ベリーの新鮮さをそのま  
ま身体に取り入れるかのような感覚！ 例えるならば、そう！ イ  
エローベリーを摘んできた冒険者が早朝！ ふと見上げた薄暗い空  
に山の向こうから昇る朝日を見つけたかのような爽快感と似てます  
デイス！」

「ストルくん、君、食レポの才能あるね」

水色ポニテの美少女がニコニコと相好を崩しながら祭りの中、買  
い食いを全力で楽しむ。彼女の右手には木のコップと串に巻かれた  
ベーコン焼きが備わっていた。

「ストル、それ空になったんならもう」

「デイス！　ありがとうございますデイス！」

その隣をゴミ袋を構えて歩く黒髪の男、チベットスナギツネのよ  
うな虚無の目をいつもより細くし、淡々と彼女が空にした木のコッ  
プを受け取り、ゴミ袋に仕舞い込む。

「あー！　次！　トオヤマ！　次はワタシあれ食べてみたいデイス  
！　ジャイアントボアの丸焼き！　脂身の部分食べたいデイス！」

「うわ、すげえな。胃もたれしねえ？　大丈夫か？」

「むふふ。わたし、こう見えて胃が強いので問題ないのデイス！」

竜殺しとその剣、第一の騎士もそこにいた。

「あの水色髪の子、めちゃくちゃ可愛いくなえか？」

「すごい、冒険都市ってやっぱり都会だから美人多いんだ」

「おーい、ロード。お前、あの子ナンパしてこいよ。先輩命令な」



「えー、む、無理ですよ、あんな綺麗な子、しかもあの鎧とか絶対高そうな奴じゃないですか、それに連れもいるみたいだし」

「大丈夫だつて、ほら、男の方はしょぼそうじゃん。冒険都市つつつても帝都よりは劣るさ」

人々の笑い声、怒鳴り声、話し声の中を二人が進む。

とにかくこの冒険都市アガトラには絶えずヒトの声が満ち溢れている。だが、今日はいつもの比ではない。

竜祭りの中に彼らも確かに存在している。

「ふむ。いくつか雑音が聞こえますデイスね、トオヤマ、耳障りなようなら黙らせてきましょうか？」

「やめなさい、物騒ナイト。いいさ、お前の顔面が周りを騒がせることにはもう慣れた。ドラ子といい、人知竜といい、お前といい。美人にも色々苦労があるんだろ」

ストル・プーラの容姿に集められる注目とそれに並ぶ自分へ向けられる視線や言葉を遠山が聞き流し、歩き続ける。

「……ふーん、わたしを美人とは判断してるのデイスね」

によによと猫のようなクリクリした目を細めストルが遠山を下から覗き込む。

「非常に腹立たしいことにな。ていうか、うちの連中よく考えたらみんなツラ良いよな。ラザールはトカゲ顔だが目とか作りよくて鱗も綺麗だし、がきんちよ達も清潔にして身なり整えたら良いとこのガキに見えるしよ」

「あー……トオヤマも、その……鋭い感じが、こつ、ね」

「一気に語彙が寂しくなったよ。ストルくん。精一杯のフォローありがとつ」

ストルがいつのまにか食べ終わったベーコン巻きの串を受け取り、またひよいっとゴミ袋へ。

「ふふ、冗談デイス。まあ、別に見れないことはないデイスよ、トオヤマも」

「はいはい、お気遣いどうも。てかお前ほんとにまだ飯食うの?」

「はいデイス! 何せお昼からはいよいよ私たちの屋台が始まりますデイスからね! たくさん食べて備えますデイス!」

2人が足を止めたのは、立ち並ぶ出店の中でも人だかりの出来ているものだ。

屋台の前に木と石で炉を組み、そこに大きなイノシシを吊るして丸焼きにしている。

じゅう、じゅう。豊かな肉の脂が遠火で炙られることによりパリパリになった皮から滲み落ちていく。ちょうどよく焦げ目もついている、良い感じに食べごろなのだろう。

「うお、脂すげえ。朝からは胃がもたれそうな……まあ、でもストルなら平気そうだな」

「はい！ 教会の孤児院に拾われる前は、カラスが食い散らかしたネズミの尻尾を食べたりしてもお腹壊しませんでしたデイスから」

「ごめん！ ストル！ ほら、お小遣い！ 買ってきな！ 好きなだけたくさん食べて！」

「やったー！ デイス！」

反射的にコインの入った革袋をストルにわたして、遠山は目元を抑える。普段バカだから忘れていたが、ストルの過去もそれなりに聞きにくいものだった。

「あ、ご主人！ このジャイアンボアの丸焼き、もう売ってますデイスか！？ わたし、脂身多めの部分を頂きたいのデイスが！」

「はいはい、お嬢……おっと、その鎧は教会の騎士様か！ どうぞ、どうぞ、もう火も通ってますからね！ 今朝、冒険者が平原で狩ってきたばかりの肉付きの良い奴でさ！ 脂身多めね！ 切り分けるから少しお待ちを！」

ストルの水色がニテがびよこびよこ横に跳ねるのを後ろから眺める遠山。

「楽しそうで何より。……にしても……」

ふと眩き、周りの喧噪に耳を傾ける。

「さあさあさあさあ！ 寄って行って見て行って！ このお祭りは竜祭り！！ 数百年ぶりの吉日だよ！ ベイノン青果店はなんと全商品半額！ こんな多分アンタの孫の孫の孫の代までもう2度とない！」

「本当なら銀貨5枚のこの秘伝のお香！ 今日は何んと銀貨一枚で大御奉仕価格でプレゼント！ ナルミイ薬草店の恋の呪いお香がこの価格でのご提供は竜祭りだけでーす！」

「おっとそこの冒険者さん！ その格好、今日も仕事かい？ ねえ、ほらうちの商品を見ていつてよ！ 竜祭りだから安くしときますよ！ ビササの葉っぱを煎じた塗り薬、冒険の怪我に欠かせない治療薬！ もう今日は大銅貨2枚で10個あげちゃう！」

「ねえ、お兄さん、わたしの店に来ない？ まだお昼だけど、今日から一週間は竜祭りで日が昇る時間から日が沈む時間まで空けるの。……私とずっと一緒にいてくれないかな、お兄さんなら安くしておくよ」

「明日開催の竜祭りの一大イベント！ 竜大使館の地下での狩猟大会へのご参加は明朝の日の出まで、冒険者ギルドで受け付けています！ 蒐集竜様が手ずから育てた古代種の子孫のモンスターを相手に行く狩猟大会です！ 参加し、結果を残した方は尽きぬことのない名誉と賞賛をお約束します」

大通りをあふれんばかりに行き来する人々、その人々に声かけを続ける出店の主人、そしていろいろな催しものの知らせ。

どこからでも聞こえる人の声と、空に響く楽器の呑気な音、街全体がお祭りそのものになったみたいだ。普段は他人がはしゃげばはしゃぐほどスンってしだす遠山ですら、少し楽しくなってくる。

「すげえ活気だな、オイ。いつもお祭りみたいな街だが、今日は更にひとしおだ」

「デイス、モグ、モグ。何せ竜祭り、デイスからね。帝国の他の都市も同じように盛り上がってますが、アガトラは何せその主役たる竜の棲家デイス。いわば本場！ 竜祭りの本場なのデイス！ 今きつとここは帝国1盛り上がる場所なのデイスよ！」

ジャイアントボアの丸焼きの一部を切り分けた肉塊をもぐもぐしながら、ストルが遠山の元へ戻ってきた。

そのまま人の波に乗って歩き出す。

「どうした、ストル。お前、社会の授業でも受けたのか？」

「む、トオヤマのわたしに対する認識はどうなってるのデイスか？わたし、賢いのでこの帝国のじょーせーが変わる出来事とかへの理解はすごいデイス」

「お前の頭がキレる時ってだいたいなんかの厄介ごとの時とかだよな。に、しても、帝国の皆様、というかアガトラの連中は遅い自分の頭上にあんな訳わかんねえもんが現れたって言うのに」

「そうデイスね。ていうかもうむしろそれも込みで盛り上がったますし」

ストルがぺろりと肉を平らげ、脂のついた小さな唇をぺろりと舐め上げる。遠山の視線に気づいたらしい彼女が目線を上に、またニヤッと視線を返した。

なんだコイツと、遠山が彼女をしらーっと見つめていたその時

ドンドンドンドンドン。

かつか、ちっか、かつち、か。

響く複雑な音、音、音。

音に色がついているのなら間違いなく七色は下らない楽器の音が  
人だかりの向こう側から響いてくる。

遠山とストルは顔を見合わせ、人だかりの中をすり抜け、押し抜  
け、その様子が見える前列の方へ。

大通りにいくつか点在している広場、そこに彼らはいた。

『天使の思い出をカナリアが唄う、呼べよ、語れや、我らの竜。大  
いなる翼、美しき瞳、知れよ、舞い降りる我らの竜。陽の光よりも  
輝くその鱗、帝国の守護竜は来たりし』

「お？」

「吟遊詩人付きの楽団デイス！ おや、珍しい、ハーフェルフディ



スね」

楽団の中心、椅子に腰掛け豎琴とバイオリンが合体したような楽器を奏でる女性がいた。

向こう側が透けて見えてしまいそうな透明な肌、よく見るとほんの少し耳が尖って見えるような――

『さあ跪き、首を垂れよう、その竜眼に見とれ焼き付くされぬように。ああ、我らの竜、大いなりし、蒐集竜。しかし、その7つの命、定命の者の勇士により一つをもぎ取られん』

『高き塔の物語、我らの知らない物語、ついに現れし狩人。竜の焰、竜の爪、竜の尾を斥け、己が刃を竜の心臓へ。狩人はそして、竜殺しへ――』

ぼろん。

月から滲んで、零れ落ちた雫のような音。

――  
観衆たちはいつのまにか息をするのも忘れてその歌に聞き入って

『竜殺しに死を！ 恐れ多き罪人！ その骸をさらし飲み歌おう』

『竜殺しに名誉を！ 我らが英雄！ その名を語り飲み歌おう』

炎のように広がる美しい怒声。びり、びりと腹の底に響く声に魂ごと揺らされてしまいそうだ。

『我らは唄う、カナリアのように。そして世界は周り続けるー』

一気に静かな曲調へ。小川のせせらぎのような音楽がしばし続き、解けるように音が止んだ。

「ーありがとうございます！」

「「「「「わああああああ「「「「「

どつと、膨らみ弾けるように響き鳴る歓声。綺麗な一礼をしたハーフエルフの女性がにと、微笑みマジシャンの被るシルクハットによく似た布の帽子をそつと頭に乗せて。

「ありがとう、ありがとうおお！ アガトラの皆様の暖かい歓声、本当に嬉しいです！ フロレンス旅団、団長にして吟遊詩人、フロレンス・メリッサ作曲、作詞の新曲、”竜と竜殺し”でした！」

「いいぞー！ ハーフエルフの姉さん！」

「すつごくよかつたー！」

「嫁に来て〜！」

「婿に行かせて〜」

「耳が孕んだッー！！」

更に湧く広場、万雷の拍手と浮かれに浮かれた観衆の声が街の石畳を叩いて行く。

「おお〜」

遠山も人混みの隙間から彼女を眺めて拍手をした。

星月夜に響く夜空が歌っているかのような歌。音楽については是非に詳しくないが、とても良いものを聞いた気がする。

所々歌詞が不穏なのを差し引いてもつい唄に夢中になってしまっていた。

「デイス！ ん〜良い唄デイス。詳しいことはよく知らないけど、楽しんでるのが伝わりますデイスね。むふふ、竜殺し殿はもう吟遊詩人の演目にもなってしまうましたデイスね」

「ストルも同じ感想だったらしい。まだあのジャイアントボアの肉を食べ切れていないのが何よりの証拠だ。」

「かなり脚色もあるし、そもそも取材すらされてねーのは気に入らないがな。でもほんとがつつり、お祭りだな、オイ。なーんか無性にワクワクしてきたぜ」

「竜が死に、そして復活する。そんな本来であれば起きえないことを祝うお祭りデイス！ 季節ごとのお祭りとはわけが違っのデイス

よ！ わけが！

「うお……お前ほんとどした。いつもより2割増しでテンション高いな」

「あ……え、へへ。その、すみません、デイス。こういうの初めて。季節のお祭りの時もその、教会騎士だったので、あまり参加とかは……」

たはは、と頬をかきながらふにやりと笑うストル。

「ストル！ はいお小遣い！ なんかもうしょーもないガラクタでもいいから何んでも買ってきて！」

遠山がパシッと口元を抑えてまたコインの入った革袋を差し出した。

「むお。いつもケチなトオヤマの財布がこんなにも緩く……コレが、竜祭り。ごくり。……ふふ、でも、いーのデイス」

ストルが目を細めて、遠山を見つめる。水色の瞳にコインを差し

出したまま固まる遠山の姿、それだけが映っている。

「あ？　なんで？」

「むふふ、わたし、今こう見えて、かなりエンジョイしてるのデイスよ。だから、別にお金はいいのデイス。あ！　トオヤマ！　見て！　なんか、なんか、すっごいのいますデイス！」

「お？　なんだありゃ？」

ストルが指差した先、そこにはなにやら大きな荷台が運ばれている。

屈強な馬数頭にひかれたそれ、大きな箱、だろうか？　絨毯みたいな覆いが被せられているためそれが何か全くわからない。

「はいはい！　皆さま、それでは次の演目です！　フロレンス旅団の見せ物が始まりまーす！　一世一代の竜祭りだけの珍しい見せ物だよー！　見ないともうこりゃ人生の損！　アガトラの皆様、寄ってっー！」

「わあ……さっきのお歌だけじゃないんデイスね！ ほああ、凄いデイス……」

「あゝまだ時間ありそうだな。こんだけ人がいりや俺らの屋台する時の購買層確認にもなりそうだし、ストル、少し見ていくか？」

目をキラキラさせながら、その旅芸人たちの準備を眺めるストルに遠山が声をかける。

「い、いいのデイスか!？」

「おう。まあ、ほら、屋台の準備はほぼ終わって、今は火入れやらなんやらの時間だ。営業開始まではまだ時間あるしな。……ラザールもそろそろ正気に戻ってくれたらいいんだけど」

「ああ……ラザール……なんか、もう完全にアレデイスよね。昨日の屋台設立の時から様子が……」

「完全にパントカゲモードだからな……」

そう、この2人が竜祭りの初日の午前中をこうして呑気に食べ歩きしたりしているのには理由があった。

一昨日と昨日、丸2日かけて終えた竜祭りの最終準備、すなわちラザールベーカーリーの屋台の完成。

ドワーフ製の移動式パン釜に、目をキラキラして鼻息を荒くしていたラザール。

彼を完全におかしくしたのは、遠山がこっそりサプライズで依頼して作らせていた　ラザールベーカーリーの看板デザインだった。

「あの工房の一人息子、いい腕をしていましたデイスね。　ラザールのあの時の顔と言ったら」

「なんか、爬虫類が驚愕の許容値を超えるとあんな顔になるんだな」「喜びすぎて無、の顔になってましたデイスよね。尻尾だけがビタンビタンしてましたデイスけど」



そう、なんだかんだラザールも遠山に負けないほど、いやそれ以上はこの祭りに賭けていたのだ。

それが、あの看板、竜の意匠が口を開いてパンを噛み締めているあのデザインを見た瞬間、ラザールの職人魂に火がついてしまった。

遠山の一味はそのラザールの様子を見て、更に一致団結。竜祭りの準備の仕込みでパン生地作成などに昨日から取り掛かっていたのだがー。

「わたし達、2人とも使えなさすぎて追い出されましたデイスね……」

遠山とストル。何故かこの2人、絶望的なまでにパン作りが下手だった。

ラザールに教わったようにしているのに、何故か遠山の捏ねたパン生地は一切まとまらない、ぐちゃぐちゃのまま。

ストルに至っては捏ねたパン生地が火にかけてもないのに爆発するという出来の悪いコメディみたいなことが本当に起きたりしてー

「いや、アレは違う。レーザーはともかく、がきんちよどもが凄いなだよ。隠れてパン作りの練習してたんだとよ。やるよな」

「むふふ。さすがはニコちゃんデイス。まあ、リダヤルカ、ペロにシロも頑張っていると評価して上げましょうデイス」

遠山とストルはとりあえず現実から目を背け、今もレーザーの手伝いをしているちびっ子たちを賛辞する。

「……俺たちって想像以上に不器用だったんだな。普通の料理とかはできるのに……自炊とかは出来るのに」

「……ものすごい優しい眼差しでレーザーに仕込みが終わるお昼ごろまで、祭りを回ってきてくれてって言われましたもんね。でも、あの時レーザーの目、笑ってなかったデイス」

「爬虫類の怖いとこ出てたよな。まあ、気を取り直して行こうぜ、ストル。早く行かないと前が埋まっちまいそうだ」

ふつつと息を吐き、切り替える遠山。人混みの中を前に進もうとして。

「デイス！ あ、でも、ニコちゃんとかは働いてるのに……」

ストルが立ち止まった。彼女からすれば子供たちが働いているの  
に自分だけ本腰で何かを楽しむのが後ろめたいのだろう。

「気にすんなよ。むしろアイツらはきつとお前が自由にこの祭りを  
楽しんでる方が喜ぶと思うぞ。ここにニコがいたとしたら、ストル、  
今のお前になんて言うと思うっ？」

「……………行ってきなさいって言われそうデイス」

「だろ？ よし、行くか。遊ぶ時は遊ぶ！ 働く時はなるべく働く」

！ これで行きましようよ！」

「了解デイス！ わ。わ。な。なんデイス、あれ……？」

力強く前へ進む、2人。広場の全容が見えて来た。

ばさり。荷台に掛けられていた絨毯のような覆いが取られる。

それは、檻だった。

『ほろろろろろ、ろろろろ』

檻の中にいるのは、大きな鏡、いや、違う。

それには胴体があつて、四つ足で歩いている。身体の大きさは牛と同じくらい、まあまあでかい。それはいい、それは普通だ。

だが、普通なのはそこまでだ。

首から上が、大きな鏡だった。

牛の身体に、何か当たり前のように金細工の施された鏡が生えている。

「う、わ」

「これは、……すごいディスプレイね」

モンスターの頓珍漢な姿に慣れている遠山やストルでさえ少し息を呑む奇妙な姿。

観衆たちも黙り込んでー

「はいはいはい、こちらは世にも珍しい人を襲わないモンスター！  
今のところ冒険者ギルドも把握していない奇妙な生き物！ その名もクダルちゃん！ おっと、恥ずかしがり屋でシャイだからね！  
あんまり近づかないように！」

「うわ、モンスターだ！ こいつら街中にモンスター入れてやがる  
！」

「だ、大丈夫なのか？」

「な、なんだ、あの姿！ き、気持ち悪い……」

「本当に生きてんのか？ 首から上が、鏡って」

あまりにも異様なその姿に観衆たちが遅れてざわつき始めた。

「おつとつとつとおゝアガトラの皆様ご安心なさってくださいね！  
一応今回、うちの旅団は冒険者ギルドに許可を貰っているからご  
安心を！ それに、なんと万が一の時に備えて安心安全！ 皆様を  
守るための用心棒もこの通り！」

先ほどのハーフェルフの吟遊詩人が、檻の上を指差す。

そこにはいつのまにか、人が立っていた。

「あーい、みなさーん、落ち着いて〜どうもー、塔級冒険者です」

「あれ、アイツ、見たことあるな……」

気の抜けた声に、軽薄な印象の整った顔立ち。ジャケットのような革の鎧、長い手足。

どこか見覚えのある奴のような気がー

「ユトだ！ ユト・ウエトラルだ！」

遠山よりも先に周りの観衆が、その男が誰かに気付いたらしい。

冒険都市アガトラ、ここで生きる者にとって冒険者とは日常の延長線上に存在するものだ。

一気に市民たちがその男の名前を聞いてざわめき出す。

「サロン盗賊団を壊滅させた冒険者だっけ？」

「ヘレルの塔で、サイクロプスの群れを狩ったって聞いたぞ」

「噂だと、あの勇者パーティー射手の弟子だとか……」

「あ、でも、この前依頼失敗したとか知り合いの冒険者に聞いたぞ、死にかけた所を4級の冒険者に助けられたって」

「4級？ チンピラ崩れの駆け出しじゃねえか、眉唾だろ？」

「塔級冒険者のくせに、チンピラに助けられたのか？」

ざわざわざわ、まるで鼻屑目になっている野球選手について好き勝手なことを言う居酒屋のおっさんたちのような勢いで口々に住民たちが騒ぎ出す。

「おーい、聞こえてんぞー。民度の低い民衆ども。これだからまあ、アガトラの連中はさー、あー、団長さん、なんか俺目立つちまってるけど、大丈夫そ？」

檻の上で胡座をかくそいつ、ユト・ウエトラルが愛着混じりのヤジをしっしつと払うようにしながら、ハーフェルフの吟遊詩人へと声を向けた。

「構いません！ お客様が笑顔でいらっっしゃっているのなら！」

「おーい！ ユト・ウエトラル！ 景気いいらしいじゃん！ 金貸してー！」



「塔級冒険者の癖に4級に助けられた上、獲物まで取られたってほんとかー!？」

「お店のツケ返してよー、もう金貨5枚は溜まってるわよー！」

「この前、ナンパして振られてたの見たって聞いたぞー」

「やーい、塔級冒険者のくせに4級の冒険者に尻拭いしてもらった人ー」

好き勝手なからかいのヤジ。しかし、そこに悪意や敵意といったものは微塵も感じられない。

「うるせえええ!! 大衆ども! こっちがてめえらパンピーに手出せねえからって! つ、クツソー、全部ほんとじゃあああ! 依頼に失敗した拳句、4級の冒険者に助けられましたー!」

「「「「「「あっはっはっは、いいぞー、ユトー!」「「「「「」

どっと沸くその場、遠山とストルだけどこかすんつとしたまま。

「アイツ、人気者だな」

「んー？ ああ、思い出したデイス。確か、前に街で会った冒険者デイスよね？」

ストルもどうやら彼のことを覚えているらしい。両方の人差し指でこめかみをぐるぐるしながら首を傾げている。

「くそおお！ お前ら、お前ら笑うな！ ロクに知りもしねえだよ！ たしかにそうさ、俺はこの前の仕事ですげえポカしましたとも！ 本気で死にかけましたー！ でも、相手はあの”古代種<sup>エルダー</sup>”だつたんだぜ！ しゃーねーだろうが」

「え、古代種？」

「あの現れたら街一つ消えてもおかしくないつてモンスターか？」

大衆の雰囲気が一気に深刻に。冒険都市の市民階級だ。古代種に対する認識や知識はそれなりに正しいものを持っているらしい。

「そうだよ！ このアガトラだつてもしかしたらやばかったかもし  
んねえんだ！ んでまあ、認める！ 俺が普通に古代種より弱かつ  
た！ すまん。でもな、そのあとだ！ そのあと！ 古代種は最終  
的には死んだ、冒険者が殺したんだよ。俺を助けてくれた冒険者が  
な！」

「それが4級の冒険者だつて？」

「ユトー、嘘が下手すぎね？」

「お前やつぱ古代種倒したんだろ？ なんで誤魔化すんだよー？」

「そつだよー、あんたなんやかんや塔級冒険者じゃねえか、俺らア  
ガトラの誇りだぜ」

「4きや

「だ、か、ら！ よく聞けつつの！ いいか、俺の代わりに古代種  
を倒した冒険者はたしかに4級の冒険者だ！ でもな、そいつは”  
竜殺し”なんだよ！ 竜殺し！ 今、お前らがノリノリに楽しんで  
るこの”竜祭り”のそもその立役者様さ！ そいつに助けられた  
の！ これなら別におかしい話してねーだろうが！」

「竜殺し……?」

「マジ? え、てか今冒険者してんのか?」

「いや、なんか俺は今、教会にいるって昨日聞いたぞ」

「えー? でも、なんか前はどこかの商会に所属してるとか」

「商人ギルドと揉めて、あのモロウ商会を叩きのめしたって」

ざわざわ、観衆達がユトの言葉にまた沸き始める。

ハーフエルフの吟遊詩人は場がどんどん盛り上がっていくのをこれ幸いとばかりに、団員たちにおひねりの回収をさせていく。

広場に散らばっていくコインを、手慣れた様子で団員たちがさらっていく。

「むふふ、トオヤマ、褒められてるデイスね」

「褒められてるのか？ あ、ストル、お前なんでそんなにやにやしてんだよ」

「クソ、いまいちまだきちんと噂が広まってねえのな。きちんと俺が負けたのが古代種で、竜殺しがカタに嵌めてくれたことを広めねえと俺が恥ずかしいって、の、に……あ！」

「あ……やべ」

目が、合った。がつつりと。

「デイス？」

「おおおおお！ いるじゃん！ いるじゃん！ ヨオ！ 竜殺し！ 久しぶり、でもねえか！ お互い死に損なったようでは何よりだ！」

喜色満面、ユトがニコっーと微笑んで檻の上から大きく手を振ってきた。

「げっ」

「え、竜殺し？」

「おい、今、ユト・ウエトラルが竜殺しって……」

じろつと、視線が今度は一気に遠山へ。

根本的なところが陰の者な遠山がうつと引き攣る。

だがなんか盛り上がってる感じの所だし、さっきは吟遊詩人の唄にもなってたし、もしかしてなんか指定探索者の連中みたいにセレブ的な感じで受け入れてもらえるかも知れない。

「あー……いや、あー、どうも。竜殺しのトオヤマナルヒトです」

すこし、勇気を出して遠山が名乗りを挙げてー。

「喋ったぞ……！」

「あれが竜を殺した本物のイカれ野郎……！」

「なんか、思ったより普通だぞ」

「いや、俺が聞いた噂だと竜殺しはカラスすら皆殺しにするムキムキのマツチヨとか聴いてたけど」

「この前、竜祭りの為に商人ギルドを締め上げたとか……」

「見るよ、あの目、なんかよくわからないけど、虚無を感じるぜ」

「女心を理解する気のないクソボケの雰囲気があるわ。自分の目的以外には一切配慮する気のない顔よ」

何故か、周りの観衆達が引いている。さっきまであんなに笑顔で溢れていたのに。

「あれ、なんだろう、ストル。思ったより歓迎されてないよ？ 俺これでも勇気を出して名乗ったんだよ。盛り下がったらダメかなって」

「おいたわしや、トオヤマ」

「タハー、アツハツハツハツハツハ！ いや、トオヤマナルヒト、そりゃ無理ねーって。まだまだこの街の連中からしたらアンタは意味不明のフェアリー御加噺テイルみたいな存在なんだ。しばらくはまだ普通の市民様たちの反応はこんなもんさ、よつと」

その様子を唯一、腹を抱えて笑うユト・ウエトラルが檻から飛び降りて遠山の元へ歩み寄る。

「お前と違って俺は人気がねえって事か。了解したよ、ユト・ウエトラル」

「おっと、覚えててくれてたとは嬉しいねえ。トオヤマナルヒト。あー、そうだ」

遠山と向かい合うように真正面に立つユトが、立ち止まって。

「竜殺し。俺のやり残した仕事をやり遂げてくれたみたいだな。そついやまだきちんと直接礼を言えてなかった。ーありがとうな」



綺麗に頭を下げるユト。いつのまにか観衆たちもその様子に見入っている。

「お、おお。……どういたしまして」

「おっと、そこのお嬢さんは……第一の騎士か。多分君にも助けられたの感じだよな」

「いえ、塔級冒険者殿、わたしはこの人の剣デイス。わたしの使い方を決めるのはこの人なので、お礼は全て彼に」

ぱちつとウインクするユトに、ストルが無表情で返事する。

「お、おお……竜殺し、アンタ、すげえ趣味してんな」

「違う違う違う違う。あんたがうちのストルちゃんに警戒されてるからこんな態度取られるのよ。アブノーマルな関係なわけじゃねーから」

言われもない特殊プレイを少女に強要しているという謂れもない疑いをかけられてはたまらない。遠山が素早く手を左右に振り続ける。

「あのく、ウエトラル氏はもしや、かの竜殺し殿と知己の関係ですか？ それなら、もし良ければ今から行つうフローレンス旅団の演目、どうでしょう、お2人にも参加して頂けませんでしょうか？」

ひょこつと話に参加してきたのは、あの吟遊詩人のハーフェルフだ。

「お？」

「ああ、そりゃちようどいいや。竜殺し、それに第一の騎士殿。今日は楽しいお祭りだ。こうしてあんたらに興味を持つてる愉快な街の仲間もいることだ。どーっすか？」

「どーっすか、ってなんだ？」

遠山の問いかけにユトが吟遊詩人へ視線を傾ける。頷いた吟遊詩人が遠山にニコリと微笑みかけて。

「演目はシンプル！そして、竜殺し殿にお願いすることもシンプルです！クダルちゃんモデルになって頂きたい！」

「モデル……？」

「デイス？」

「お集まりの皆様！ フローレンス旅団の次の演目をご紹介します！ 演題は”未来見学”！」

「「未来見学？」

確実にインチキ臭いそのセリフに遠山が眉を顰める。

「皆さま、一度は考えたことはありませんか？ 己の未来、先行きのわからないこの人生の先に何が待っているのかを知りたい、と」

じゃらん。

吟遊詩人の言葉と同時にかき鳴らされる弦楽器の音。絶え間なくアガトラに降り注いでいた陽光が陰っていく。

「それは秘密と期待の甘い蜜の味……己の未来を知りたい、己の選択の行きつく先を知りたい、いえ、あえてこう表現しましょうか。未だ見えぬ未来を知りたいと願うヒトは、己の終わりを待ち望んでいるといってもいいでしょう。ですがそれはなんら文句を言われることではない、ヒトは心のどこかで死にたがりながらも、生きたがる奇妙な生き物です。」

「またインチキ臭い感じ出てきたな……」

「はえー、すごいデイス！」

「クダルちゃんは見る者の未来を魂から読み取り、そのモデルになった者が運命によってたどり着く未来の姿に変身することが出来る生き物なのです！」  
ビユーテイマター  
「未来見学の権能によりあなたはクペルちゃんを通じて未来を知ることになるのですよ！」

吟遊詩人が檻を背に、言い放つ。

観衆たちはどこか呆けた姿で、ユトはそれをにやにやしつつ、遠

山はチベスナの虚無顔で、そして。

「トオヤマ、トオヤマ！ 未来の姿デイスって！ 凄いデイスね。わたしの正義は他人の嘘を見抜くことが出来ますが、モンスターにも似たようなことが出来るとは！ 世の中広いデイス！」

<sup>INT1</sup>  
ストル・プーラは目をキラキラうつつきうきでそれを眺めていた。

「えー、いや、眉唾だろ。そんなもん。未来とか言って適当なものを見せて、はいこれがあなたの未来って言えばいいじゃねーか、俺昔から占いとかなんなんだよ」

ひねくれた遠山がぶつぶつ文句を言う。もちろん、遠山はまともな女には全くモテない。

「と、いうことで、どうでしょう、竜殺し殿。このフローレンス旅団のアガトラ竜祭りでの余興にどうか、そのお力を。帝国中が知る貴方の未来をどうか、お見せいただけませんか？」

「まいったな。実は最近未来の予言とかされててね、全部ロクなものじゃなくて少しそういうのトラウマになって」

未来。その言葉には最近ほとほとうんざりさせられている。

遠山がやんわりとその申し出を断ろうとしていたその時。  
。

「じゃあ、行ってみますデイス！」

元気に手を挙げるストルに、この場の全員の視線が集う。その容姿の端麗さに見とれるもの、思わず互いに口を潜め、うっとりした声でストルの容姿を語る男たち。

一瞬でその場をストル・プーラという騎士が持っていく。

「す、ストル？」

周囲に愛想を振りまくらしくない行動に遠山が首を傾げて。

「トオヤマ」

「あ、はい」

「あの予言、デイス。もし、わたしを映す未来がそんなに的外れなものでないのだとしたら、あの予言の手がかりにもなるのでは？」

周囲にニコニコ笑顔を振り撒きつつも、一瞬、遠山を真顔で見上げるストル。

敵に回せば面倒くさく、しかし味方にすれば鉄火場で頼りになる剣としての貌だ。

「おま、……ほんとにどうしたの、ストルくん」

割と本気で感心した遠山、どう見てもストルがイケメンに見えて仕方ない。

「わたしは、あなたの剣デイス。剣が主人の未来を切り開くのは、役目でしょう？」

「す、ストルさん……」

ふっと笑うストルに遠山がポツとしながら、頭を下げる。ニコポ





天使教会騎士団の名前はそれほどまでにネームバリューのあるものだった。

「団長さん、わたしではあなたの旅団の演目のお手伝い、物足りませんか？」

「ー面白い、ヒュームですね。……ええ、ええ！ まさか、そんな！ 喜んで！ ストル様、あなたのご協力感謝致します！ さあ、クダルちゃんの目の前にお立ち下さいな」

ストルが言われるがままに、檻の前に立つ。

「はいはいはい、それでは始めましょう！ この見目麗しいお嬢様の未来の姿をー教えてあげなさいクダルちゃん！」

『ホホホホボボボボボー……』

檻の中をウロウロしていた鏡のモンスター、クダルちゃん。その牛のような身体に首から生えた鏡頭がじっと、ストルを見つめてー

「あ

それが始まった。

光。柔らかく輝く。鏡がストルを写したまま光り輝き、辺りを包んでいく大きな光へと変わっていく。

「これは、驚きましたね。クダルちゃんがこんなに時間をかけて変身するなんて……」

光の中で、団長の咳きが聞こえてー！。

そして光が止まった。

遠山の視界に写っているのは、いつのまにか地面に座り込んでいるストルの姿だ。

「お、おい、ストル、大丈夫か？」

ぼーっとしている観衆の間を抜け、遠山もまた旅団のステージの中へ。

「……」

呆けているストールを起こそうとして、あることに気付く。

ストールが指さしている方向、檻の、中に。

『ーこんにちは。これ、驚きの再会……いや、出会いですね』

「あ、れ……」

「う、お。マジか」

美女がいた。

遠山はこれまで中身はともかくとしてルックスが良すぎる女たちをある意味見慣れている環境にいた。

だが、その遠山を試してみても、あの美竜たちにも全く引けを取ら

ない美がそこにある。

『ふふ、なんだか奇妙な感覚ですね。ん？ この街の香り……ああ、そうか。今はもしかして、竜祭りなのですか』

水色の髪、水色の瞳。高い背、長い手足。彫像が、そのまま動き出したかのような、危うさと非現実感で。

ヒトである以上は決してたどり着けない美しさをそれはもっていた。

アリス・ドラル。フレアテイルの立ち姿を見た時の感覚、アイ・ケルブレム・ドクトウステイルの瞳の深淵を覗いた時の感覚。

畏敬、だ。

『とても、懐かしいですね。でも不思議です。わたしの記憶には、こんな出来事はなかったはずなのに。ということはもしかしたら、違う結末もあり得るのかも知れません。いえ、今はそれに向かっている最中だとか？』

「あなたは、わたし、なのデイスか？」

『ええ、そうですよ。ふふ、その口癖、懐かしいデイス……あ、出ちゃった。直そうとしてるのに』

ストルの言葉に目の前の、水色髪的美女がぺろりと舌を出して微笑む。

白いワンピースドレスの下衣には銀色の装飾がまるで鎧のように。長い足を包むのは銀色のタイツにも似た薄い鎧、ピンヒールのような靴もまた、同じく白銀に輝く。

水色の結ばない流れる長髪には、ちょうど腰の辺りにリボンがひとつだけ飾られている。

何故か、それをみた瞬間、遠山は少し苦しくなった。

「ストルの、未来……これ、が……？」

『あ。これとか言い方ひどいです。トオヤマナルヒト。我が正義を

預けた唯一のニンゲン。久しいですね。……正直、こんな形でまたあなたと会うとは思っていませんでしたから……何を話したらいいんでしょうか』

水色の瞳の中には綺羅星のようにはちり、はちりと煌めきが散らばる。宇宙――。

フジ山を見た事のないニホン人が生まれて初めてフジ山と出会った時のような、どうしようもない感覚に圧倒されながらも、遠山はその言葉に違和感を覚えた。

「えっと、本当にストルの未来なのか？　お、おい、ストル、お前何か話してみたら？」

「え、いや、そんなこと言われても。未来の自分と何を話せと言うんデイスか。なんか、こう、あっちから話しかけてきてほしいんデイスけど」

お互い謎の女にワタワタしながら、遠山とストルが言葉を交わす。

その様子をじっと見ていた水色髪の女が口元を押さえて微笑んだ。

『クスクス、ああ、なるほど。あの時のわたしは周りからはこついで風に見えていたんですね。……ねえ、わたし、少しいい？』

「呼ばれてるぞ、ストール」

「ええ〜……なんか、嫌なんディスけど」

言いつつ、檻に近づいていくストール。

檻の向こう側、水色髪の女がしゃがみ、なにやらストールに耳打ちをしているような……。『？』

「デイス!? ウイ、わア! と、トトトトトトオヤマ! こ、こいつ! コイツ、ダメデイス! すっごい嫌な奴デイス!」

何かを耳打ちされたストールが飛び上がり、風のような疾さで檻から離れ、遠山の背に隠れつつ唾を飛ばした。

『クスクス、ひどいです。……わたし、今の時間を大切にね。それはきつとあなたがあなたに成る為に必要な時間だから』

「え？」

『あ、そろそろ時間みたいですね。ふふ、まあ、これはほんの少しの奇跡みたいなもの。もう決して重なる事のないほんの少しだけの白昼夢。わたし、安心して。あなたが必ずしもわたしに成るわけではないからね』

白い手袋に包まれた手を胸の前で組んで微笑む水色髪の女。とんでもない存在感を持つ割に、どこか、儂い、そんな頼りなさにも似たものを感じる。

「待て」

『……なあに？ トオヤマナルヒト』

「お前は今、元気でやってるのか？」



遠山はほとんど無意識に口を開いていた。

水色髪の女が、口をポカンと開けて、それからー。

『ー。フフ、ああ、嬉しいデイス』

本当に、本当に、眩しいものを見たように目を、細める。

「あ……」

『よかった、あなたはいつでも、どこでもやはり、トオヤマなんデイスね。……うん。そうですよ。言葉が見つからないし、こうなっても、こう成れても、わたしはやっぱりバカですから、なんと云えばいいかわからないけど』

女が目を瞑り、一つ一つ言葉を咀嚼するようにゆっくりと。この時間を深く、深く、味わうかのように。

『わたしは、あなたの剣で良かった。大丈夫ですよ、これから先、あなたが何をしても、どのような結果が訪れてもね。わたしの行動

には何一つ後悔なんてない。――わたしは何度でも同じ事をするか  
『』

「……なんだって？」

遠山が反射的に、目を鋭く。

『クスクス、ああ、その顔、懐かしいな。今ならわかりますよ。あなた、その顔する時って本当は――』

「待て、デイス」

『うん？』

女の言葉を止めたのは、遠山の剣だった。

「あなたが、本当に未来のわたしなら、その先は言うなデイス」

さっきまで苦手そうにしていた女の前にツカツカと歩み寄り、まっすぐ彼女を見上げて第一の騎士が言葉を。

「フフ、ええ、そうね、わたし。ねえ、わたし、あの頃のわたし。……大丈夫、その時が来ればあなたもきつと分かるはず。”何が正しいのか、正義とは、何か”、わたしにとっての正義と、あなたにとっての正義が違うとしても、ね」

「……どういう意味デイスか」

『わかってるくせに。ああ、時間ですね。……それでは、さようなら』

「あ、おい！」

『トオヤマ』

はた、と声が届く。

檻の向こう側、決して自ら檻から動こうとしなかったその水色髪の女が、ふっと微笑む。

少し、視線をゆらゆらさせて、それで。

『またね』

ふわり。

光が膨らんで、それから。

『ぼほほほほほ、ボロボロセイギホホホホ、ホノオマミレホホ  
ホホホ、ヒトリボツチデシヨウシバババロボボボボロ、マンゾ  
クマンゾクホホホホホホキセキセキホノオホホホホミライホホホ  
ホホリユウサイエンリユウホホホホ』

また檻の中にはあの鏡のモンスター。首を揺らしどこから絞り出  
しているのか見当もつかない鳴き声を。

あの水色の髪をした女は、竜にも比肩しうる上位の存在の風格の  
女は何処にもいない。

「「……………」」

遠山とストルはしばらく沈黙したまま。

だが。

「す、げえええええええ！ なん、だ、今の、俺、息できなかったよ！」

「あの子、あんな美人になるんだ……………未来すごい……………」

「未来、最高！ 未来、最高！ 未来最高！」

「俺、なんか、感動しちゃった……………」

湧く、湧く、湧く。

現れたモノとストルや遠山の会話が理解出来なくとも、そのマメのインパクトは十分に市民を満足させ、盛り上がらせることは出来たようだ。

からん、からん。広場におひねりとして大量のコインが投げられていく。

「ありがとうございます！ 皆さま！ ありがとうございます、第一の騎士様！ 皆さまがご覧になりましたのは、かの第一の騎士の確かな未来の姿！ あの気品、あの美しさ、まさにストルさまのこれからが楽しみで仕方ないと言った所でしょうか！」

シルクハットの吟遊詩人、フローレンスが恭しく一礼しつつ、広場に溢れるコインを眺めて。

「もう一度、大きな拍手を！ どうか、皆さま！」

万雷の拍手の中、また団員たちがささっとおひねりを拾っていく。

エンタメの熱狂の中、遠山が口を開けたまま、ストルへ。

「ストル、今は……」

「業腹デイスが、あなたがち未来とやら、あまり嘘とは言えないかもしれませぬ。……」正義”の嘘を見破る力がまるで反応しませんでした」

「マジかよ、じゃあ……」

あの予言。あれが本当に未来を指し示しているものだとして。

なら、この竜祭りで死を予言されている自分の未来を、写し出すことが出来るのならば。

「何か、対策が取れるかもしれねえ。何かのヒントに……」

「さて、それでは皆さま！ 次のモデルは、未来の余興はもちろんこの方！ この祭りの立役者でもあり、竜を殺した恐れ大き、そして恐ろしき強いお方！ 竜殺し様！」

『ホホホホポポロパボボロロらららららら』

「……」

ストルの方へ視線を向ける、彼女がこくりと頷いた。

「さあ、竜殺し様！ 前へ。竜を殺した御身の未来は！ そこに待ち受けるのは栄光か！ それとも更なる試練か！？ 今、それが――」

「なあ、団長さん。一ついいか？」

ふと、遠山が口を開いた。

檻の前に立ち、モデルの未来の姿に化ける奇妙な生き物の前に立つ。

「はい！ いかが致しましたか！？ あ、もしかして、モデルになった方への悪影響のご心配ですか？ ご安心を！ クダルちゃんのモデルになった方にはなんら影響は――」

「これから死ぬ奴の未来って、どう映るんだ？」



それは簡単な気づき。もし、未来がないものがクダルちゃんの前  
に立った時にはー！。

「何も」

鬱蒼とした森林の奥から、闇から湧いたような声。

「何も映りません。死とは未来ではなく終わりです。クダルちゃん  
の前に、死が約束されたものが立った時、鏡は何も映し出すことは  
なく、またクダルちゃんも変身することはありません」

無表情のまま、吟遊詩人がぼつりと答える。

「あー……そう」

言いながら、遠山は額から汗が滲むのを自覚する。

真っ暗。

「……未来なんて、見ようとするもんじゃないよな」

その化け物の顔には、鏡には、何も写っていない。

ただ、ぼっかりとした真っ暗闇だけが口を開いて遠山を見つめていた。

「……萎えるわー」

遠山の、未来はー！。

123話 祭り、始まり（後書き）

お待たせして申し訳ありません。

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さい！

124話 努力・未来・A―未来、未来未来未来未来未来未来、みらい、みれん、ミライ

「あ、あちゃー……え、えーっと、え〜嘘〜、クダルちゃん？ どうしたのかな？ 調子が悪いのかな？」

「いや、いやいやいやいや、遅い遅い遅い。取り繕うのが遅いよ。アンタ、さっきはつきり言ったよ、これ、死ー」

遠山の未来が真っ暗だと気づいたらしい団長がたらーっと汗を流し始めた。遠山がしらーっとした顔で何も移さない鏡ヅラになった檻の中のクダルちゃんを指さして。

「ウエイ！ りりりりり、竜殺し殿！ ウエイ！ ま、待って下さいな！ い、今こんだけ盛り上がってる所にそんなガチ深刻な事態起きたら、暴動が起きかねませんよ！ これだけ集まったおひねりが台無しにっ！ しーっ、しーっ！」

「あ、コイツ、思ったよりアレだな。欲深い奴だな」

「な、なんで、本当に真つ暗……で、でも、クダルちゃん、寿命とかそういう死に方の時は空気読んでいい感じの未来に変身してくれるのに、こんな感じになるってことは……」

一瞬ちらつと、遠山を見てすつと団長が顔を伏せる。ああ、あなた寿命で死ぬんじゃないわねって顔で遠くの空を見上げ始めた。

「あ、可哀想つて顔された」

「おい、まだか？」

「竜殺しの未来、気になるな」

「そうか？　なんか、さっきの超美人見れたからもうよくね？」

「えー、でもやつぱり気になるよ。竜を殺すとかいづぶつ飛んだ人だよ？　そんな人が行き着く先って気にならない？」

「死んだんじゃないのー？」

ざわざわと騒ぎ始めるアガトラの市民たち。エンタメ大好き。

「やべえな。愉快的街の人々がなんかざわつき始めた。これだからこの街の連中はよー、民度がよくないよ、民度が」

「……トオヤマ、わ、わたしが、余計なことを言ったから、わ、わたしが」

バカはバカなりにまずいことになっていると理解しているのだから。ストルがあわあわと視線を泳がせて。

「どりゃ」

「ディ」

遠山がストルの脳天に軽くチョップ。少しでも痛くしたら凄く反撃されるのでうまく手加減しながら。

「落ち着けストル。こんなの偶々だ。偶々、ほら、この愉快的な真つ暗鏡モンスターの調子が悪いだけさ。まあ、祭りの余興としては充分。あとはあそこのお兄さんと歌の上手いお姉さんに任せて屋台に帰ろうぜ」

「え！？　いま、歌が上手って！？」

「え、どこにアタの喜びスイッチあんのよ」

ウキウキと反応したハーフェルフの団長の様子に遠山が小さくぼやく。

「いや、じゃなかったです。え？ 帰る？ えーっと、トオヤマナルヒト。竜殺し、あの、あその盛り上がってる人たちは……」

チラチラと集まりに集まった観衆たちに視線を向け、それから遠山の方をすぎるように見つめる彼女。

遠山は虚無顔で少し考える。

「……知らん！ 帰る！ じゃ！」

「ええ！？ ちょ、嘘、思い切りがよす、ぎーっ!?!?」

「トオヤマ、待って、ディスプレイッ!?!?」

「たっはー、トオヤマナルヒト、あともう少し待つ　は？」

最初に反応したのは、この2人。

ユト・ウエトラルとストル・プーラ。互いにヒトの領域から抜け出さんとする者が、まず、ソレの存在に気づいた。

『パキ、ぱき、パキパキパキン』

鏡頭の牛のモンスター、クダルちゃん。

”ヘレルの塔”をフローレンス旅団が探索していた時に見つけた奇妙な生き物。

ヒトの魂に張りついた情報、ヒトが時に運命と呼ぶそれを読み取り、ソレになることを趣味としている生き物。

『パキン』

クダルちゃんは今、明らかに困惑していた。目の前の奇妙な目つきの悪い生き物の未来について、だ。



『ぱき、ぱきん』

何も見えない、何も映るものはない。それは即ち、この生き物はもう間もなく死ぬ、終わるということだ。なのに、なぜだろう。

気になって仕方ない、この生き物の未来が、死で終わるはずのその未来が、真つ暗なはずのその向こう側が気になって

『ぱき、ぱきん』

クダルちゃんの鏡頭、未来を映す鏡にゆっくり、ゆっくり亀裂が入る。今、クダルちゃんを支配しているのは、興味。

知りたい、見てみたい、気になる。大凡ヒトが持つ甘い毒のような感情、ああでも、クダルちゃんは知らなかった。目の前のその生き物が呟いた通りだ。

未来なんて知ろうとするもんじゃあない。

その、通りだった。



かが、ナニカに対してそうさせたのだ。

その光景は、まるで、そう。臣下が王へとひざまずくかの「とき光景」で。

ぱきん。ぱら、ぱらぱらぱら。

鏡が割れた、クダルちゃんの鏡頭の破片が崩れ落ちて、檻の中で音を鳴らす。

『  
』

クダルちゃんはびくともしない、ただ額縁だけになった鏡頭を遠山にむけたまま、微動だにせず。

『  
キリ』

まず、出てきたのは腕だった。

梵字まみれのマッチョな腕、筋骨隆々にも関わらず死人のそれよりも血色のない腕。

「ああ………待って、待って待って。よくない、良くないぞ、それ

は

『チシキ』

かと思えばその腕に、急に数多の紙が張り付いて鏡の奥へと引き戻していく。まるで本の頁のような紙。

「うわ〜……なんかアート……あれ、ストル？」

「と、オヤマ、あなた何故、そんな呑気にしていられるのデイスか、さ、下がって下さい、あ、アレは……」

顔を青くしつつも、遠山の前に立とうするストル。彼女の肩をゆっくり抑えて、遠山が最前へ。

「落ち着け、ストル。大丈夫だ」

『ユウジン』

ばきん。



『ルルルルル』

喉を鳴らす音と共にそれが、ソレの頭だけが鏡の奥から現れて――

「ヒッ……ヒッ!？」

ストルが腰を抜かす、遠山が彼女の肩を支えて抱き起こす。

「ストル、落ち着け。命令だ」

「は、は、っ……は、は」

しゃくり上げるような呼吸しか出来ないストルを遠山が宥めていく。

『ルルルルル? ル』

霧にまみれたソレの全貌はわからない。ただ、鏡から漏れ出した

霧の中にそれはいる。

燃え上がるような黄金の2つの輝きはきつと、瞳なのだろう。それが何かを探すようにゆら、ゆら、動く。

「お前……」

『ル、わー』

遠山の呟きに、燃え上がるその目がぐるりと反応。霧の中にいるそれが檻の中から遠山を見下ろした。

今すぐにそれを止めないとまずい。ストルが引きつるような悲鳴を漏らし、耐えていた団長がばたりと泡を吹いて倒れたのが合図。

遠山鳴人はしかし、その無意識が、その本能がその止め方を知っていた。

『おすわり』

「おすわり」

『あ？』

「あ？」

声が。2つ、重なった。とてもよく似た声だった。

同時だった、同様だった。ソレへ対して遠山と、その者の言葉は。

遠山鳴人の未来は――、割れた鏡の中から、死の中から現れた。

男が、いた。

『……………』

「……………」

手入れされていないくせっ毛は今より伸びて首の付け根ほどまで。



髭はなかなか生えない体質なので1週間ほどほったらかしていても問題はない。

そしてその目も。細く、吊り上がり、そして暗く虚ろでいながらも、今にも燃え上がりそうな燦りをため込んでいるかのような瞳。

遠山鳴人は、トオヤマナルヒトは、思った、思った。

ああ、コイツ、ほんとに目つき悪いな。マジでチベットスナギツネみたいじゃん、ああ、コイツ、ほんとに目つき悪いな。マジでチベットスナギツネみたいじゃん、と。

「……………うっ、ふ、と、おやま。下がって、くださいディスプレイ」

『……………』

ストールが腰砕けになりながらも、剣を引き抜いた。今の彼女を動かすのはその使命感と己が必ず守ると決めた存在と居場所の為。

目の前のコレを、遠山と触れ合わせるはならない。正義の幼体としての彼女の本能が、彼女に恐怖に屈すことを決して許さなかった。

『……………ああ』

「……………」

まるで強い朝日を眩しかろうが眺めたい時のように目を細めて、  
ストルを見つめる。

、その後、ソレが遠山を指差した。

ローブの下に着こんだその赤色の探索者パーカーを。

『いい色だな』

「あ?」

それが、眩く。

キリを纏い、背後に大人しくなった燃え上がる金色の双眼を従えるその男が遠山に言葉を。

キリの合間から覗くその男の服装、それもまた探索者の装備によ

く似ている。自分が蒐集竜から与えられたロープ、それに探索者用の黒いタクティカルジャケット、確か軍用の最新のものだ。

遠山はその黒い探索者用タクティカルジャケットに見覚えがあった。上級探索者になった時、組合から支給があったものだ。遠山の探索装備のローテーションのひとつ。だが、それは、あの最期の探索の時にはメンテナンスに出していて。

『お前』

遠山の思考を、その男の言葉が止めた。檻の中から響いた声を、キリの中からぬっとまろび出した声を

ふっと、ソレが笑った気がした。

ふと、遠山が気づく。その男、自分と全く同じ顔をしたチベスナ顔の男の腰に、ある物が備わっていることを。

『これ、絶対いるから。必ずここで手に入れてくれよ』

「は？」

霧の中の男が、腰元に紐で巻き付けているソレ、十字のスリットが入った兜をぽんぽんと叩いて。

「なに言ってるんだ。お前、え？ お前が、俺の、未来……？」

『……………』

遠山の問いかけにその男は答えない。

ほんの少し血色の悪い顔を、細い目を更に細く。その目を一度、怯えきっているストルに向けて、それからまた、遠山を見て。

『お前、負けんなよ』

その顔が、その男の精一杯の笑顔であると気付いた者は――。

『頼むから、負けんなよ、どれだけキツくても怖くても悲しくても惨めでも哀れでも、絶対に止まるなよ』

「いや、待て待て待て待て、やめろ、そういう不穏なこと言つのは。おい、マジでお前」

さら、さらさら。時間が来た。

ストルの未来の姿が消えた時と同じようにソレもまた風に攫われる砂のようにほどけて消えていく。

「お、おい！ ちょ、待て！ それ消える感じか！？ お前！ 未来の姿とか、そういう感じのお前がいるんなら、あの予言！ ありやどついう事だ！ お前、何か知ってんなら教えてー」

『お前の冒険だ、お前が進め』

「ーッ」

遠山が思わず息を呑む。

そして、それは消えていく。キリの中にいる金色の双眼を持つ巨大な何かをなでるような仕草のまま。

さらさら、解けていく輪郭、そいつの消えていく身体、残った右腕、人差し指がすいすいっとなんかを描いて。

ピコン。

運命が音を鳴らした。

遠山の視界にいつものそれが流れて。

【遺言テストメントクエスト発生】

【クエスト名・冒険の始まり】

【俺は進んだ、俺は選んだ、俺は諦めない。それはお前も同じだよな。チュートリアルは終わった。ここからが多分お前の本当の冒険の始まりになる。そしてこの世界はお前が思ってるほど甘くはない。言われたる？ 凄くむずかしい、とかなんとか。

お前が何もしなくても世界はお前からあらゆるものを奪っていく。だがお前は自由だ。この世界では全てが許されている。世界の前に跪き、それを受け入れるのもアリだ。ふざけんじゃねえと立ち上が

り、それに唾を吐くのもアリだ。

だが、やる事なんて決まってる。今までと同じさ、敵を殺し続けるしかない。

お前はもっと、もっと強くなる必要がある。霧を打ち負かせ、知識を跪かせる、思い出を飼い慣らせ。お前の中の可能性を全てお前が支配するんだ。その為の最初の一步、まずはあのバケツヘルムを手に入れる、偉大なる先人の道具は活用しないとな】

【クエスト目標・ 騎士団正式採用対超存在決戦殲滅装備”  
SS000シリーズ、グレートヘルメット”の入手】

「またそういつ……」

メッセージを確認している間に、嘘のようにソレはもう消えていた。

『ほほほほほ』

かきかきと呑気に後ろ足で首の付け根を搔いているクダルちゃん  
しか、檻にはいない。

落つことしたてバキバキになったスマホ画面のように割れた鏡頭、でも割と本人？ は平気そうだ。

「い、今のは、今のは……」

からん、ストルの手から剣が抜け落ちた。

「おー、大丈夫か、ストル。見た？ なんか未来の俺、髪伸びてたな。てか、なんか無口で言葉足らなくね？ なんか感じ悪い奴で」  
「なに、言ってるんデイスか？ か、髪？ 髪ってなんの話デイス！？」

「え？」

「トオヤマ、あなた、さっき、さっきのが、ヒトに見えてたんデイスか！？」

泣きそうな、いや、泣きべそかいたストルが遠山の肩を掴んでぐわんぐわんと揺らしまくる。

「あんな……あんな、の嘘、デイス……あなたの未来のはずがない……いやだ、そんなの、やだ……よう……」



かと思えば、ぱつと遠山の肩を離し、顔を抑えて音もなくストル  
が泣き始めた。

「ええ」

遠山はもう咳くことしか出来ない。

そして、ふと後ろを振り向く。そう言えば、見物客、観衆たちは  
――。

「我が王よ」「我が王よ」「我が王よ」「我が王よ」「我が王よ」

「高き塔の王よ」「高き塔の王よ」「高き塔の王よ」「高き塔の王よ」

「高き塔の王よ」「高き塔の王よ」「高き塔の王よ」「高き塔の王よ」

【警告】 ・ ・ ・ の特性”狂気山遠景”によりヒューム

に一時的狂気・”崇拜”が発生しています】

跪き、手を合わせ、祈りを。

100人は下らない人々、男も女も子どもも大人も老人も。ヒュームと呼ばれる種族、その全てが、獣人や亜人を含む全てのヒュームと呼ばれる生き物が、一斉に首を垂れていた。

その光景を作り出したのは、ここで固まっているチベスナの未来の姿なのならばー。

「ええええ」

「……………うそだ、うそだ、うそ、だ。いき、てた。なん、で。大戦の時に……………勇者と一緒に、死んだ、っておばあちゃんが、言ったのに、なんで、どうして……………歴史からも消えてるのに、なんで……………」

ハーフェルフの団長が、青い顔をしつつ、遠山から四つん這いで離れながらブツブツと。

「ええええ」

なんか、もう、さいつあくの空気になっていた。

「どっどっ……」

遠山が力なく呟く。場の空気はもはや、ヒヒッヒヒ。

『ぼんや。ぼろろろミライみらいミライミライミライ、りゅうころし、からすころし、かぜころし、やみころし、トウトウトウトウのオウとうのノオウぼろろろろろろ』

しゅしゅ。

マイペースな鏡頭のクダルちゃんだけが、砕けた自分の鏡ヅラも気にせずに体を丸めて呑気にお昼寝を始めていた。

124話 努力・未来・A―未来、未来未来未来未来未来未来、みらい、みれん、ミライ（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！

2月25日、現代ダンジョンライフの続きは異世界オープンワールドで！コミックの1巻が発売されます！WEB版や書籍版で文章で表現されていた世界をそのまま田中清久先生が絵にしてください！

楽しい本なのでおススメです。

125話 今日パン！ パン、パン、パン、

「えぐ、ひっく、ひく、ずず……」

「あ、あの、ストルさん」

「ずず、ひぐ、すす」

ダメだ、ストルが泣き止まない。

遠山鳴人は日曜日のショッピングモールでちびっこの相手をして  
いるお父さんの偉大さを噛み締めていた。

「見て、あの人、お祭りなのに女の子泣かせてる」

「ママー、あのお姉ちゃん、泣いてる、あのおじさんに泣かされた  
んだよきつと」

「しっ、見ちゃダメ。お昼からの屋台広場連れて行ってあげるから  
ね」

ひそ、ひそ、ひそ。

泣き止まないストルの腕を引いて歩く遠山に、善良なアガトラの人々からの視線が突き刺さり続ける。

「ストル、ほら、ストルさん。見られてる、ものっすごい周りから見られてるから。泣くのやめよっか、ね？」

「ずずっ、ぐすっ、でも、でも……あんな、ものを見せられたら……」

「あ？ 俺の未来の姿とやらの話してんのか？ 確かに印象悪かったけどー」

「だって、あの頭……あの見た目……ウオエ」

ストルが何かを思い出す素振りを見せた後、つぶつとえづいた。

「ねえ、ストル！ ちょっと、マジでお前アレが何に見えてたの！ ？ 恐いんだけど！ 少し目つき悪かったけどあれだったよ、そんな吐きそうになるほどの！？」

「だって、だって、あんな、訳の分からない姿に……」

「ええ……ほんと何に見えたんだよ」

「それは……あれ、えっと、どんなのでしたっけ。……わすれ、ました」

1、2、3、ぼかん！ ストルは全てを忘れた！ みたいな顔で  
呟く彼女。それでもすぐそのまま泣きつ面のまま、うーん、うーん  
と頭を捻ってる。

「コワー」

もうあまり蒸し返さない方がいい、遠山はそう判断し、道を急ぐ。

目的地は、もちろん彼らの屋台。もう屋台通りも近くー！。

「あ、お兄さんにストルちゃん！ お帰りなさい！ って、え？」

「あー、ストルお姉ちゃんが泣いてるー」

喧騒の中から、こっちへ向けてよちよち走ってくるちびっこの名。遠山の一味の中でも陽キャオブ陽キャの2人だ。ほわほわ町娘のニコと、ふわふわ少年のペロだ。

「ぐず、ニコちゃん、ペロくん……」

「……またお兄さん？」

ぐずぐずしているストルを見て、目を細めた

「おっと、とつとつまたって言われちゃった」

ほそりと眩き、その場にしゃがみ込む遠山の肩をペロがぽんぽんと無言で肩を叩く。

「ドンマイ、お兄さん。女の子の評価って僕らが思うよりもシビアだよー、気づいた時には手遅れな評価されることが多いよ」

「ペ、ペロさん……」



「もう、ストルちゃんはこっち、ペロ、お兄さんと一緒に屋台へ戻ってて！ あ、お兄さん、ストルちゃんは任せてね。この子、割と繊細なところあるからあまり気にしなくてもいいのだから！」

「に、ニコさん……」

ニコとペロは妙に優しくかった。

遠山の一味はだいたいの戦闘力の高さに日常生活における発言力が反比例している、悲しいことに。そのままちびっこ達に介護されたり、励まされたりされながら歩き続ける竜殺しと第一の騎士。

屋台広場を少し歩くとそれはすぐに見えてきた。

三角型の天幕に開いた穴からは煙突が伸びている。

竜祭りのために用意したラザールベーカーリーの屋台だ。

「ラザールの旦那！ こっちの生地が膨らんできたぞ！」

「……ラザールさん、こっちの生地も膨らんできた」

「了解だ」

まるでそう決められた機械のように正確に動くラザールの両腕。

もちもちの生地が、手の中でくるくると舞っていく、残像でしか追えないほどの速度、ラザールの右手が丸められた生地をぽいつと宙へ。

「よつと」

かと思えば左手がその生地に触れる、それだけでコッペパンの形になっていく生地たち。ジャグリングのように生地がいくつもすぽぽつと、ラザールの目の前を舞う。

「ほつ」

ぎよろ、ぎよろ。赤い瞳が宙に舞う丸い生地を追う。しゅばつ、ラザールの腕が瞬き、宙に舞う生地たちをほぼ同時にコッペパンの形に変えていく。

「ほぼ魔法だな、おい」

「む、ナルヒトか」

とととと。あらかじめ計算されていたかのように、木の板の上にきれいに整列されながら着地していく生地たち。屋台の奥を見れば同じように成型された生地が並ぶ木の板が長机に置かれている。

「おお、達人技」

「おっと、ナルヒト。お帰り、竜祭りの盛り上がりはどう……ストル？」

作業の手を止め、こちらに気付いたレーザー。泣いているストルを見て、目をぎょっと開く。

「あー、すまん、ほら、男子は敷居を跨げば7人の敵ってな。いろいろあつたんだ」

「色々、ね。まあ。その、仲がよさそうで何よりだ」

またか、みたいな顔でレーザーもまた目を細めて遠山を見つめる。最近、一味の仲間たちは無意識に遠山の癖を真似することが多くなっていた。

「言葉を選ばせて悪い。おお、にしても、すげえ。もう準備は完全OKってか？」

「ああ、アンタが教えてくれた二次発酵に最終発酵……おっと、違う違う。祝福でパンが膨らむタイミングを段階ごとに分けて生地を作成するやり方、これはいいな。大量に生地を作る効率もいいし、何より焼き上がりの完成度が段違いだ」

遠山が夢の中のパン文書館で得た知識をラザールはからからのスポンジが水を吸い上げるようにどんどん吸収していった。

加えて、ドワーフの工房に特注で作らせた移動式のパン窯は焼成中に水を注水できる仕組みになっている。水蒸気を利用し焼成する仕組みは現代のパン窯と同じものだ。

「へえ、そりゃ楽しみだ、ソーセージやケチャップも……ああ、準備は万端ってか？」

「ああ、楽しみで仕方ないよ。ああ、その、ナルヒト」

「あ？」

もごもごと口を濁らすラザール。彼が目を泳がせたあと、息を吸い込み、遠山に向けて頭を下げた。

「さっきは、すまなかった。ストルもそうだが、半ば追い出すような形になってしまった」

「ああ、よしてくれ。あれはさすがに俺とストルがおかしい、まさかここまでパン作りが下手だとは自分でも思わなかったんだ」

「そういつてくれると助かるが……つい、気が入りすぎてしまって……こんなものまで作ってくれているとはね」

言いながら、ラザールがテントの天幕と、看板を見つめる。

そこにはある意匠があった。デフォルメされたトカゲの影が大きな口を開けバケットのようなパンを頬張ろうとしているデザイン。

それはあの工房の一人息子

「お、気にいつてくれたみたいで何よりだ。工房のあの親方の一人息子、あいつが天才だな。他にも仕事を頼んでるんだが」

『あーあー、起動テストー、起動テストー、アガトラの都市機能、副葬品・山びこの壁”が起動します。アガトラのみな様ご機嫌よう、こちらは南部領領主、サパン・フォン・ティーチ辺境伯の政務室です』

突如、街中に響く女性の声。拡声器にも似た響きの声がどこからか聞こえてくる。

「これは……」

「始まったな、そろそろ昼の時間だ」

『あー、あー。こんにちは、冒険都市アガトラの皆様。今、皆さまに皇帝閣下の権限の下と天使教会の協力を持って届けられた副葬品によって声を届けています』

「副葬品って」

「わたし、アガトラ生まれだけどそんなのあったのね」

「大貴族、ティーチ家、やはり侮れないな」

ざわざわと屋台通りも色めき立つ。どうやらこの街の住人達にとってもこの声の機能は初見のものらしい。

『竜祭り初日のお昼になります、これよりアガトラ商業区屋台通り

にて都市と商業ギルドに許可されたものによる”自由市場”<sup>フリマ</sup>が開催されます。竜祭りの一週間、自由市場にて最も多くの売り上げと敬意を獲得した者には市場王<sup>メルカリー</sup>の称号が与えられ、アガトラの権限が許す範囲での希望を叶えることが出来ます」

「やっぱ今メルカリって」

「しっ、ナルヒト」

『それに先立ち、冒険都市アガトラの長、サパン・フォン・ティ―チ边境伯より開催の挨拶を行います。どうぞ、边境伯』

『……あっ、これ、もう話していいの？ ミレー君。え、もう聞かせてる？ ウォツホン！ アガトラの愛すべき市民の皆様、この素晴らしい鳥唄の月をどうお過ごしでしょうか？ きつとあなたの隣、そしてあなた自身も笑顔であることを祈ってやみません。さて、皆さまもご存じのように去るひと月前、われらが竜が」

響き続ける領主の声、校長の話と似た雰囲気とする。

「どこの世界も偉い奴の話は長いな」

「彼らはそれが仕事だからね、仕方ないさ」

軽快に返事をしつつ、また生地の仕込みに戻るラザール。彼の尻尾はるんるんと横に縦に揺れている。

「調子はどうだ？ ラザール」

「絶好調さ。今から楽しみで仕方がない。我々の作るパンは本当に良いモノだ。必ずこの冒険都市を満足させることが出来るはずだ」

「……ああ、そうだな」

満面の笑みのラザールの言葉に遠山は頷く。

ラザールとは対照的に無表情のまま、今まさに始まった自由市場になだれ込んで来る人々を眺める。

「さあ！ みんな、がんばろう！ 忙しい一日になると思うが力を貸してくれ！」



「「「「「おー!」「」「」」」」

いつになく張り切っているラザールとそれに応える子ども達。

和気藹々とした空気の中で、カチリ、遠山鳴人は自分の中でスイ  
ツチが切り替わっていくのを感じる。

「……さて、正念場、だな」

その元気な返事に、遠山鳴人が参加する事はなかった

竜祭り、初日、自由市場が始まる。

〜同時刻、竜大使館、蒐集竜の寝室の前で〜

「お姉様〜アリスお姉様〜! もー! いつまでお部屋にいらっし

やるのですか！ もうお祭りは始まってしまいますわよー！」

どんどんどん！

腰まである緑色の髪がドアをノックするたびにふりふりと揺れている。

黒を基調とした格式高いメイド服に身を包むフォルトナ・ロイド・アームストロングは困っていた、なぜかー！。

『むー、むー。むむむむむ。のう、フォルトナ、やはり、その明日、明日にせぬか？ な、ナルヒトに会いに行くのは、やはり、今日は、なんか、その、アレだ。日が悪いのではないか？』

彼女の仮の主人、蒐集竜、アリス・ドラル・フレアテイルが部屋から中々出てこないのだ。

「お、おい、バカひ……いや、フォルトナさん、流石にいくらなんでも、蒐集竜様に失礼じゃア、ねえかなア……」

「なーにを言っているんですか！ もうベルナル様が馬車をお庭にご用意してらっしゃいますわ！ 竜殺し殿の屋台始まってしまますよ！ それに！ 一昨日から頑張つて仲直りのためのお菓子とか作られたでしょう！ 大丈夫！ 大丈夫ですから！」

ドンドコドンドンドンドンドンドン。

「あ、だから、そんなに叩くなつてエ……」

ドンドンドンドンどんどんどん！ 竜の棲家である自室の部屋をフォルトナは殴るような勢いでノックしまくる。

ウイスのか細い制止の声はノックの音に消されていく。

『む、むむむむむ。わ、わかった、わかったぞ。だが、も、もう少し、もう少し待て、フォルトナ。正確に言うと後10分ほど……』

扉の向こうから弱々しい声が届く。なんとなくあの青い瞳が少しウルウルしているような光景が扉越しに見えるようだ。

「だーめーです！ お姉様！ さつきも貴女様あと5分って言うていましたのよ！ なんつで10分に増やしてるんですかっ！」

『だ、だが、フォルトナ。まだ、まだな、オレにも心の準備というものがあるのだ……こ、これ、お菓子だが、本当にナルヒトは受け取ってくれるのだろうか？』

「受け取りますっよ！ 貴女が手作りしたお菓子なんか、竜からの贈答品をもし断るような奴いたらうちのウイスがミンチ肉のようにしますからっ！ だっかつらっ！ このドアを開けてくださいまし！」

『ーナルヒトをミンチ肉に、だと？』

ぱちん。

竜のスイッチが切り替わる。つい先程まで笑い合っていた者を次の瞬間には噛み殺しているかも知れない。

ヒトとは明らかに生命そのものが、そのルール自体が違う異質の殺気が分厚いドア越しにどろりと広がりー。

「ヒッ」

フォルトナが緑の髪の毛を逆立たせて固まる。

「待て待て待て待て待て、おかしいおかしいおかしい。なんで今の会話の流れでこんな殺気を浴びんといけねんだよ。もう怖えよ、竜。スイッチ入る場所と速度がヒトの範疇じゃねえからコミュニケーションが辛えよオ。あとバカ姫、今更ビビるのやめるマジで、めえの言葉のせいで俺様が竜様に殺されたらマジでめえ末代まで呪うぞオ」

ウイスが目を細めてため息をつきながらぼやく。ついでに固まっているフォルトナの首筋をぼんつと気付けどわりに叩いて元に戻していた。

『む、すまぬ。つい、な。だ、だが、やはりもう少し改良を……いや、そも、そもそも、ナルヒトは、その忙しいだろうし、オレが行

『つては迷惑に』

すんつ、と。竜からはもう殺気が消えていた。本気である瞬間、もし、フォルトナとウイスの目の前にこの分厚いドアがなければ、きっと竜は2人を殺していただろう。

そんな殺気すら、竜にとっては他者とのコミュニケーションの起  
伏に過ぎない。

「う、……ふう〜ふ〜……。いえ、お恐れながらそれはいいです、お姉様。というか、多分、あの人の屋台には竜が必ず必要はずですよ。」

『む。フォルトナ、それはどう言う意味だ』

淡々と言い切るフォルトナの言葉にドア向こうの竜が興味を示す。

「行ってみたら分かります！ あのお方はきっと貴女を待っております」

れるはずですよ！ お友達なのでしょう！ お姉様！」

『友達……そ、そうだ！ ナルヒトは我が友！ そ、そうだとも、そうだ、そうだ……行く。行くぞ。もう行ってくたは行くのだ』

「はあ、この拗らせドラゴン。きっとまだ時間かかりますわ……ウイス、ベルナル様にもう少し時間がかかると伝えてきてくれますか？」

ドアガチャを一旦やめたフォルトナが肩で息をしながら、ウイスに指示をする。

「お、おう……なあ、お姫様よお」

「はい？」

こちらに振り向いたウイスからの問いかけにフォルトナが首を傾げて。

「いま、たのしいかア？」

「――」

窓の外、小鳥が3羽戯れて。

「ええ！ とつても！」

春の陽射しよりも確かな笑顔を、フォルトナが浮かべる。

「そおかア」

頷いたウイスはそれ以上は言わず、去っていく。

フォルトナの星形の虹彩が、その背中を見送る。一度、二度、閉じられた瞼。

彼女の小さな唇が、その背中に向けて何かを――。

『むむむむ、服、服はこれで良い。だ、だが、むむ、髪、髪が少しふわふわしてるのだ……どうしよう』



「んもおおお！ だあかあらア！ 貴女様そう言う生活力とか身だしなみとか基本できない超お嬢なんだから、わたくしがしますって！ それ込みで急がないと、自由市場は始まつちやいますし、それに貴女は貴女で、今日地下の闘技場で御前試しの主賓がありますでしょうがああ！ 竜祭りの主役がなんでまだお部屋でウダウダしている、んです、かあああ！！」

またドアの向こうから聞こえてきたビビリドラゴンの呟きに、ついにフォルトナは取り繕う余裕を忘れた。

それは彼女すら知らない彼女のほんとうの一面の一つ。

『むむむむむむむむむむ、だって、もし、オレ、ナルヒトに会いに行つて、アレだぞ、冷たくされたらほんと、何するかわからんぞ』

「びびりながら脅そうとするのはやめましょうね！ どちらにせよほんと、ほんと！ 部屋から出てくだいな！ 巢籠もりドラゴン！」

『むむむむむむむむむむむむむむむむむむ』

結局、竜が諦めて部屋から出てくるのはこれより1時間後のことだった。

ああ、竜祭りはもう始まっている。始まってしまっているのだ。

「ローレル商店の焼き菓子です！」

「プリンデークスの新商品！ 竜祭り限定、トラム味はここでしか食べれないよ！」

「天使砂糖をまぶしたパンペルデュ！ あのアガトラの名店、ゴールデンハニーブレッドの名パン職人、ズーマ・ズマの新作！ もう売り切れます！」

「ドワーフ工房直営店、アイアンメジャイ！ 竜祭りの自由市場記念で全品半額！ 今しかないよ！」

「2級冒険者パーティー、ホーレイカンパニーとスクラギズの同盟屋台！ 希少なモンスター素材売りますよー！」

竜祭りのいくつがある催しのひとつ、自由市場が始まった。どの屋台もヒトでこった返し、溢れている。



それはまるで、谷だ。それはまるで穴だ。

竜祭りの屋台広場。数多の市民であふれる屋台の中で、ラザールベーカリーの屋台の前だけ、誰もいない。

「え、えつと」

「あ、あらー」

「……………」

「くそ、なんで……………」

こどもたちが茫然と自分たちを無視していく市民たちを眺める。

市民たちが何度も屋台の前を通り過ぎていく。だがそのほとんどは一瞥もしない。たまに屋台を眺める者もいるが。

「お、あそこにも屋台ある。自由市場の屋台だ。行ってみる？」

「パンの屋台か……………どうする？」

足を止めた男2人、屋台に立つラザールがぱっと顔を上げて。

「よ、良かったらどうぞ！ 純度の高い天使粉を使って丁寧に焼き上げたパンと肉詰めのは」

「……うわ、リザドニアンだ。もしかしてアレが作ってるのか？  
……別のところにしようぜ」

「勘弁してくれよ。一気に食欲なくなっただわ」

すつと離れる。嫌悪感を隠そうともしない顔を浮かべそそくさといなくなってしまった。

「あ……」

その光景を見て、声を聴いたラザールが俯く。尻尾はしょげて石畳にだらんと落ちる、手は力なく降ろされていて。

ついさっきまで期待と興奮にうきうきしていたラザールが、背を向けて去っていく市民を見て固まっていた。

昔のラザールならば何も感じなかっただろう、己の人生の絶望を受け入れてすべてを諦めていたころの彼ならばこの程度のことなるともなかっただろう。

でも、今は違う。もう、影の牙ではない。

「っ！ あの！ パン屋です！ とっても、とっても美味しいパン屋です！」

「ニク……」

たまらなくなつて飛び出したのは、ニコだ。客が寄り付かない屋台の前で小さな身体で必死に叫ぶ。

「あの、あの！ ラザールさん、とってもパン作り上手なんです！ 私たちも食べて、それで、本当に美味しく……だから、皆さんも、その！ 是非食べてください！」

「そ、そうだ！ どうぞ！ ラザールベーカーリーです！ アガトラにまだ存在しないパンです！ すごく新しくて！」

「あ、あ、あの！ 一生懸命、作りました！ ラザールさんが、頑張つてその、生地とか、その！」

「おいしいよ～あのね～ほんと～においしんだよ～」

「だぶ！ ぶっだ！」

口々に、子ども達が屋台の前で懸命に呼び込みを行う。彼らにとつて、ラザールのパンとは只の食品ではない。

はじめてだった。心から美味しいと思えるものを安心できる環境で食べることが出来たのは。

はじめてだった。頑張つて働いて、その後に食べるふわふわのパンの味は。

彼らにとって、ラザールのパンはそんな思い出と幸せの象徴で――

「見ろよ、必死だな……」

「わたし、ああいうの逆につきいのよね」

「子どもにあんな必死に宣伝させんなよ」

「なんかああいう風に言われると萎えるわ」

「別のとこにしゅじょ」

「みてらんね〜」

「知るかよ」

だが、そんなものは客には関係ない。

子ども達にとってどれだけ大切に尊いものでも、客には一切関係ないのだ。

商売とはいつも公平で、自由で、残酷だ。

甘くはない。モノを作り、それを選び、買ってもらうということとは。

だが、それがルールで、当たり前で、健全なことだ。

「クソ……どうして、あんなに準備したのに」

「……絶対に美味しいのに」



リダとルカは知っている。ラザールの腕前がどれほど卓越したものと  
かと言つてことを。

悔しそつに行き来する人々を見つめることもたち。

良いモノが常に売れるとは限らない、そして

「あれだけ頑張つて作つたのに……」

当人たちがどれだけ頑張つたか、創作者の努力など、購買者には  
関係ない。当然の事だった。

「なんで」

漏れたルカの問いかけに、答えてくれるものはいない。これは別  
に誰が悪いという話ではない。ただ、当たり前前の世の中の仕組み。

ヒトは自由に自分が手に入れるものを選ぶ権利がある。それはつ  
まり、この世には必ず誰にも届かず、必要とされないものも存在し  
てしまう。

ただ、それだけのこと。

「き、いてくれ、みんな」

立ち尽くすラザールが、バカみたいに長いコック帽子を外した。

「乾いた声はたどたどしく。」

「え、ラザールさん？」

「お、俺が……俺は、一目につかない所に居てもいいかな。はははは、いや、参ったな。リザドニアンの嫌われようには参った、あ、ああ、そうだ、少し、俺は、外そうかな、そっちの方が、もしかしたら安心してお客さんが来てくれるかも」

ラザールの声は明るい。ラザールの声は震えている。ふる、ふる。頼りなく揺れている。なのに明るい。

絶望とは簡単にヒトを侵す。

自らが心血注いでうみだした創作物が誰にも届かない、選んでも  
られない。このシンプルな事実は、本当にきつい。

それまで大事で、素晴らしいとおもえていたものが一気に色褪せ、  
ゴミに変わっていく絶望。

「ら。ラザールさん」

どうしようもない徒労感がラザールを追い詰めていく。

「はは、すまない、お、俺がリザドニアンだったせい」

赤い瞳が潤んでいたのは、絶望か悔しさか、悲しさか。それでも  
明るく、乾いた声で笑いながら自らの生まれを。

「ラザール」

遠山の冷たい声が、レーザーに最後まで言わせるのを赦さなかった。

「ストップだ」

「いや、今回は、今回はどう考えても、お、俺のせいだ。ここまであんたが、みんなが助けてくれて、こんな立派な屋台まで、俺を押し上げてくれた！ 夢を見たんだ、アンタがここまで連れてきてくれた！ だが、現実はこれだ！ そうさ、この通りだ！ リザドニアンの作ったパンなどやはり誰も必要としてな むぐ」

「……」

遠山がレーザーの口を両手で抑える。鋭く、虚無の目、茶色の虹彩がわずかにかけて、白い靄が漏れている。

「ストップ、だ。ネガティブ白トカゲ」

「むぐ」

ぱっと、遠山がレーザーの口から手を離す。

モノを売るためには想いや願いや正しさだけでは足りない。真摯さは必要だろう、素朴な想いも必要だろう。自らの創作物に対する信念も必要だろう。だが、それだけでは圧倒的に足りない。

レーザー達はそれを知らなかった。良いものを作れば、真摯に努力すれば報われる、そう思っていた。

だが、それは間違いだ。人にモノを買ってもらうということとはそんな簡単なことじゃない。

「うるたえんなよ。レーザー」

その難しさを遠山鳴人が知っている。それだけが唯一の逆転の目だ。

「な、ナルヒト……」

「職人がしょぼくれた顔すんな、消費者が不安がる」

「だ、だが、現実には、現実には」

「おい、俺がここまでどれだけ考えてやってきたと思ってるんだよ」

「え？」

「簡単に売れるわけねえだろ。現実には甘くねえ。なんの実績も、名声もない飛び入りの商売人の屋台が、ただ良いモノ作っただけで売れてたまるか」

遠山がぷひーとため息をつく。細い目は先ほどから行き交う人々と、空とを交互に見つめている。

まるで、誰かを探すかのように。

「え、いや、ナルヒト、何を、言ってるんだ、う、売れないって。だって、アンタが、言ってくれたんじゃないか。俺の。パンは」

「美味しいよ、ラザール。それは嘘じゃない」

「じゃあ、なんで、今 売れないって」

「いや、だから良いモノ作っただけで物が売れるわけないだろって」

ここまででは予想通りだ。予想通り、パンは全く売れていない。

「え」

「大丈夫だ、俺、今回は本気だから」

モノを売るために必要なモノ、想いや、真摯さだけでは足りない。

ラザールはそれを知らなかった。だから、当たり前前の現実を目の当たりにして折れかけた。

けど、問題ない。

ここには、遠山鳴人がいるのだから。

「だいたい予想通りだ。無視が5割、興味が3割、興味のうちの大半は恐いもの見たさ、そして残りは嫌悪。今までのアガトラのミハー根性を考えれば、全部うまくいけば、見込み8割取り込めるな」

「え、何を？」

ビジョンと戦略と戦術。無機質で無感情で乾燥した概念。思わず目を逸らしたくなる生々しさ。

それから逃げずに向き合つ度胸と覚悟を決めることでしか、たどり着けない場所がある。

6615

「ラザール、忙しくなる。準備しようや」

遠山鳴人はまず、世の中を信じていない。遠山鳴人はまず他人を信じていない。遠山鳴人はまず自分にとっての良い未来を信じていない。

「え」



「仕込みはもう、出来ている」

故に遠山は計算していた、遠山は準備していた、そして、だからこそ、遠山は賭けた。

最後に全て上手くいくように。

想いと真摯さだけでは足りない、ヒトはそんなに甘くない。

ロジックと戦略だけでは届かない。ヒトはそんなに簡単ではない。

必要なものは。

「俺たちは自分たちにできることは全てやった。ラザールはホットドッグを完成させた、がきんちよどもはそれを精一杯に手伝ってくれた。そして、俺は、賭けた」

全て、だ。

モノを売るために必要なモノはそのすべてだ。

自らが作りだしたものが良いモノに違いないという青臭い希望も、それを届けることで誰かに喜んで欲しいという献身も、そのモノに賭ける熱い想いも、それにこだわる狂気も。

そしてそれをどのように知ってもらうか、選んでもらうか、売れるかどうかを考える厭らしい打算も。

その全てが必要だ。どれを欠けても、足りない。

モノを売るのに打算はふさわしくないなどは、傲慢の言葉に等しい。

だが、ここまでしてなお、この全てを行っても結果なんて分からない。

「正直、モノが売れるかなんて、結果的には運かもしれねえ」

遠山がにべもないことをボソリと呟く。それはこの世界のヒトでは経験しえないほどのモノとコトに溢れた現代にいた者だからこそ

の言葉。

数多の消費されていくコンテンツに囲まれて過ごしてきたオタクだからこそ感じる難しさ。

「いや、多分運だ。モノが売れるか、自分が何かを作り出して、成功するなんざ、全部運だ。その時の時流や流行り、情勢、個人にはどうしようもない大きなうねりで決まっちゃうのかもな。でも」

遠山は知っている。この場にいる全員がベストを尽くしたことを。

「でもだからと言って。何もしないわけにはいかない。人事は尽くした」

ずいっと、遠山がしょぼくれトカゲに詰め寄る。

「ナルヒト……」

「いいじゃねえか。やれることは全てやった。まずはその事実を誇

ろっせ。それで。ほら、いっちゃってみよっせ。ラザール」

きつと、遠山のその言葉、すべての意味をラザールは理解していない。それでも、ラザールの目に力が戻って。

ば

――ん。

大きな音が空で鳴った。

空。そう、空だ。アガトラ中に響いた音に、アガトラの民がみんな上を見上げて。

「あ

”祝！！ ラザールベーカー屋台、開店！！ おめでとう  
！！！！ 魔術学院一同より”

文字は読める全員がそれを認知した。アガトラの空に広がる光の文字を、そのメッセージを。いや、読めるのに、意味が分からないそのメッセージ。

空に浮かぶ大きな島。魔術学院から打ち上げられた光と音。

「……………天命だ」

遠山が呟く。

ぱぽぽぽぽぽぽん。どーん、どーん。

青空に広がるのは7色の光。魔術学院から次々に打ちあがる。

遠山が、一瞬、誰かを探すように驚愕の顔で空を見上げる人ばかりを見つめる。でも、すぐにそこから視線を切った。

「ラザール、こっから忙しくなるぞ」

「え？」

天命がやってきた。

《 》

音楽が鳴った。

ふっ、と。

蠟燭が吹き消されるように、昼が終わった。

《

空が歌っている。冒険都市の誰もが、いや、帝国の全ての意思と心ある存在たちが、ただ驚愕する。

夜が来た。星と月を引き連れ従え、この世界に唐突に夜が来た。

》

鳴り響き続ける音楽、星が歌い、月がそれを指揮しているかのよう  
うに。

術式デ・ザイン、仮設構築開始》

》

6622

魔術学院が星を吐き出した。  
次々に夜の帷を彩る色とりどりの流れ星——いや、違う。

「きれい……うん？」

「おい、あれ、まさか」

「ヒト？」

「いや、違う」

観衆たちは最初はその光景にただ見とれていた。そして次に気づく。夜のカーテンを自由自在に飛び回るいくつもの星たち。

それが星ではないことに。

「魔術師だ……」

魔術学院。空に浮かぶ島、そこから聳えるお城から次々に光り輝くヒトが空に飛んでいく。

ある者は箒に跨り、あるものは絨毯に乗り、またある者は何かでかい棒、柱のようなものに乗る。

様々な方法で、夜空に飛び立つ魔術師達。色とりどりに輝く彼らが夜の星に混じり、新たな輝きとなって舞う。



「あ、あ……」

「な、なんだ、こりゃ」

「ま、魔術師が、魔術師が攻めてきたのか？」

「ぎゃああああ、大聖堂の方を飛んでたのうちのバカ魔術師だったよな！？ 今の！？ なんてあいつ他の魔術師が箒とか絨毯で乗ってるのに、棒で飛んでんの！？ バカなの！？」

「いや！ ラッド！ よくみる！ 棒じゃない！ 丸太だアレ！」

「バカなことには変わりないんですけど！ せめて箒とかで飛んで！ あいつのオリジナリティ、パーティメンバーとして恥ずかしくないんですけど！？」

街の住人が、今、竜祭りに盛り上がる全ての人々がその魔術が生み出した奇跡の光景を見上げている。

あまりにも現実離れた光景、魔術師が夜空を飛ぶたびに、箒の軌跡が、絨毯の揺めきが、丸太の輪郭が、夜空に光の線を引いていく。

そしてー。

「あっ」

「おい、あれ」

「え、なに？」

「わーきれーふうせんだあ」

《豕募援縲　オキ蝮輔？よ？縲　弌縛ヨ　螳々炊縲貞ヨ　壹a縲玖？》

それは突如、現れた。アガトラの各所から湧き出る光の泡。

それは空に浮かび、ゆっくり、ゆっくり形を模ってゆく。

ユアの形アアー

「あ、え」

「あれ、なに」

そして、幼いこどもたちが目を輝かせる。星空に現れ、星空の手を伸ばす巨大な光の人影に。

「 てんしさまみたーい」

『あーあーあー!!?!? ……ごほん、親愛なる冒険都市アガトラの皆様！ ご機嫌よう！ 天使教会主教、カノサ・ティエル・ファイルです』

竜祭りの始まりを告げたあの副葬品による声の響き。今度は辺境伯ではなく女性の声だ。

「あ、このお声、主教様……」

「おお、なんとありがたい……」

「お、我らが銭ゲバ様のお言葉だ」

街の市民たちの反応は様々だ。基本的に教養が高く、もともと裕福な生活をしている市民たちは統一宗教の長へ純粹な敬意を。そして目端が利いて金勘定が得意だったりする平民たちは、愛すべき同類に軽口を叩く。

『お、お、落ち着いてください。い、今、空に浮かんでいる光は天使教会から竜祭りを祝う祝砲のようなものです。決して魔術学院への自動迎撃法術式が勝手に作動したりとか、魔術学院と天使教会が争うための防衛機構が作動したとかではございませんので』

《縛雁燕縛濫 縛ッ需昂¥縛ケ縛阪下縛ッ縛工縛》

『あ、っべ』

主教の放送が終る前にそれが動き出した。

《譏シ縛ッ螟懊 縛ッ驕輔》

長い髪をかたどる女型の光の影が夜空に手を伸ばす。

空を走る魔術の輩を、天使の定めた世界の定理を己が願いによって歪める外法の使い手をその巨大な光の手が追いかけて。

『あ、ちよ、ストップ！ほんとにやめてっ！終わる！魔術師に手出したら終わる！なんっで止まんないのウオウ！？てかこれ何よ！聞いてないわよ！天使聖典って何よ！前の主教から引継ぎ受けてないんですけど！こんなことなら処刑する前にテヘペロ！！！！大聖堂の地下、魔窟すぎワロ　ザザザ』

マジの主教の焦り声、でももう、アガトラの市民はそんなもの聞こえてすらいない。空で起きているそのスペクトルに、目を奪われていた。

《莠コ纏ッ 遯コ纏帝」帙　纏工纏》

星が堕ちていく。

箒で、絨毯で、翼で、丸太で。夜空を駆けていく魔術師達が、光の手に触れられた瞬間、その輝きを失っていく。

天使教会が魔術学院との戦争のために用意していた古いシステム、

その一つ。

その手に触れられた魔術師達は光を失い、ふわり、ふわり、夜空を漂い始める。自ら動くことの出来ない星が、石ころと変わらないのと同じように。

「ああ……」

魔術師達が生み出した空のスペクトルが終わっていく。この世界の定理を定めた力が、世界を歪ませる不埒者を眠らせ、惚けさせてゆく。

「あ、おい」

遠山もまた思わず呟く。

空を舞う魔術師を大きな手で撫でるように触れていく人影が、ついにそれを見つけたようだ。

空に浮かぶ島、そこに聳え立つ魔術師たちの故郷。魔術学院。

《蟲力縛ッ 遯コ縛オ 猪ヨ縛九？ 縛工縛》

光の人影が、長い髪を煌かせ、その巨大な手を、魔術学院をそのまま包めそうな手のひらを開いて――。

「あ、魔術学院が……」

その手が、振り下ろされて。

《すぷぷー》

笑い声がした。深海からほんの一掴みだけの泡が浮き上がるように。

《興味深いねえい》

パンツ。

しょうもない風船が弾けたような間抜けな音がした。

あの巨大な光の掌が、魔術学院の一際高い尖塔に触れようとした瞬間、弾け飛んだ。

《縷翫e縛》

《ふむ、何々？ ーー天使聖典4ページ目。”我、星の理を定める者”……すぶぶぶぶ。理？ 傲慢なものだねい》

女が、いた。

魔術学院の尖塔に腰掛け、その光の人影を見つめている。



黒いローブに、黒い三角のトンがり帽子。揺蕩う銀の髪が、星空に揺れる。

人々は、一瞬で視界が狭まった。

もう、冒険都市の人々の目には彼女しか映っていない。月よりも星よりも、どうしようもなくヒトはその存在に魅せられる。

《ふうん。定める理か。たしかに、昼を夜に変えたり、星の如く勝手に輝くヒトの存在など、認めるわけには行かないよねえい》

彼女の昏い瞳が夜空を見上げている。強すぎる一つの光に照らされ、触れられ、その輝きを奪われた魔術師たちを。

《纏翫%纏「纏滂シ?》

《おこつてないよ。キミは只のシステムだ。そんなものにいちいち怒るほど狭量でもない、けれどね》

彼女の言葉がそこで遮られる。

光の人影が、裂けんばかりに口を開き、巨大な背中から一對の翼を生やし、銀髪の女を飲み込もうとー！。

《たった一つの強すぎる光だけの世界。そんな世界は面白くはないのさ》

パチン。

女が指を鳴らす。

《あ》

それだけだった。それだけで、空を掴み、地を踏み鳴らし、島を飲みこまんとする巨体が消えた。

《魔術師を舐めるなよ》

天使教会が大戦の終わりから用意していた竜との戦いへの備え。

聖典に遺された7ツの大法術式の中で、眷属の亡骸を利用し、50の聖人の心臓をささげて作り上げた最も古くて偉大な機構が、終わった。

文字通り、指先ひとつでそれを消し飛ばした女が、んーと背筋を伸ばす。

《さあ、起きて。行くよ、おいで、探求の同胞》

彼女が、力を失い夜を漂う魔術師たちを見つめて。

《そして、ボク魔術師の愛しいごもたち》

ふうーっと、女が夜空に向けて冷たい吐息を吹きかける。夜の空をさらっていく竜の吐息が星屑をかきあげ、彼らに届く。

「ああ……夜の声が聞こえる」

「おお、なんと光栄か」

「ああ。愛しさに満ち溢れている……」

動き出す、輝き出す、拡がり出す。

大いなる光によって輝きを奪われていた魔術師達がまたそれぞれ好き勝手に自由に夜空を飛び回りだす。彼女の吐息に触れた途端、魔術師たちが全てを取り戻して。

また、夜空が煌めき始めた。それは先ほどの強すぎる光だけが瞬く空よりも、もっとと広大で、もっとと深淵で。

《うん、やっぱり。こっちの方が綺麗だねえい》

満足そうに、彼女が微笑む。キラキラと輝く夜空の幕に彼女の小さな鼻唄が響き始める。

《ああ、少し働いたら、そうだねえい。……お腹が空いたかな》

ふん、ふんふん、ふん、ふん……。

くすぐるような鼻唄を歌いながら、彼女が立ち上がる。尖塔の上から一步、足を空へと踏みいれて。夜が、彼女の鼻歌に共鳴しながらまた歌いだす。

「うわ、空を、歩いて……」

当たり前のように彼女が夜空を歩いている。ゆっくり、ゆっくり散歩でもするかのように。

「魔術師よ、我らに力をお与えになった母に敬意を。その肉、その血に奉公せよ」

今まで自由に各々が好き放題に輝き、飛び回っていた魔術師達が一斉に女の元へ集う。

箒星が、ブラックホールに吸い寄せられるかの如き光景。

ばきり、ばきり。ぐしゃり。

その鈍い音は、魔術師達の献身の証。

それらを一斉に自らで壊し始める。

「我らが、祖よ」

「我らが、母よ」

「我らが、愛よ」

魔術師が自ら壊した、己で魔術で変えていく。

「並ぶもの無き、我らが魔術師の祖よ。我らに知識をお与えになられた貴女よ」

折れた筥が、砕けた丸太が、裂かれた絨毯が変容していく。それは輝く階段となってゆく。

《ありがとうねえ》

女を行先を、女の歩みに合わせて、魔術師達が壊したモノが材料となって、一つ一つ階段が編まれてゆく。

数多の魔術師が捧げたものを踏み鳴らし、彼女がゆっくり、ゆっくり夜空を降りていく。

色とりどりに輝く魔術師達が次々と空の中で片膝を突き、頭を下げて俯く。女の道を、首を垂れて、全てを捧げる魔術師という生き物全てが彩る。

「偉大なる竜よ、世界を焼く炎に立ち向かい、それでも我らをお護りくださる我らが竜よ」

「貴女の道に、貴女の足場に、貴女の贄に、愚かな我らをお加えください」

「貴女の昏い瞳に、例え映ることがなくとも我らは貴女の虜にお加えください」

「貴女の興を引けずとも、貴女の愛を受けねなくとも、我らは貴女を愛しています」

「我らの祖、我らの母、我らの愛」

「貴女を愛しています」

「お許してください、お許してください、貴女を愛してしまうことを」

騎士鎧に身を包み、一際強い輝きを纏うのは歴代の魔術学院長達。いずれも大戦の時代、帝国建国の時代、いずれの歴史にも名が残る偉人たち。



それらがそれぞれ向き合つように片膝をつく。夜に響く祈りの言葉  
を口ずさみながら。

その道の真ん中を女が、進む。魔術師がその道を捧げ、歌い、創  
り出す。魔術師を侍らせ、その真ん中を女が下りる。

その女の名前はアイ・ケルブレム・ドクトウステイル。

その竜の名前は、人知の竜。

そして、その竜が見つめる先は、たった一つ。

さんかく帽子から零れる水銀を漉いた銀の髪、星と月と、太陽す  
ら飲み込む暗黒を宿した瞳。ローブに包まれたしなやかな夜のよう  
な躰が星空を背景に、その屋台を見つめて。

《やあ、こんにちは。パン、一つくださいな》

茫然と空を見上げるアガトラの民。同じく口をあんどり開けて空を仰ぐトカゲの友に、竜殺しが少し笑って。

「ラザール」

その名前を呼んだ。

「――石窯に火を灯せ」

125話 今日パン！ パン、パン、パパン！（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！

今月はコミックの単行本が発売されます。田中先生の解釈が良すぎるんだよ。レーザーもかけえし、ドラ子も怖いし、遠山は遠山だし。

ウエンフィルバーナまで出る所まで収録されたいーな。ギリしいかな。続きが読みたいんで是非皆さまも手に入れて貰えたら幸いです。

## 127話 ホット・ホット・ホット

「よつと、んんん、この頬に当たる熱気、街のいたるところから聞こえてくるたのしげな音楽、これはリユートとフルートかな。うん、いい音楽だ。ヒトをヒトたらしめるものの一つはやはりミュージックを愛するかどうか、だよ」

黒いさんかく帽子から零れる長い銀の髪がさらさらと彼女の動きに合わせて揺れた。

「よお、人知竜。……来てくれたんだな」

「すぶぶ、もちろんさ。そろそろ君がボクに会いたいんじゃないかと思ってね」

### 2日ぶりの再会。

ガコガコのガチガチになり魔術学院を呼び出して遠山の前から逃げ出したポンコツドラゴンと同じ存在には見えないその表情。

「おー。言うねえ。ああ、でもその通りだよ、人知竜。つとにギリ

ギリだった。なあ、ラザール」

「え」

「どした、客だ、客。ようやく1号さんのご来店だ。人知竜、悪い、すぐに用意するからその席にかけて待ってて貰えるか？」

「うん、わかったよ。ああ、そうだ。パンは2つ、頼もうかな、1人でご飯を食べるのは寂しくてねえい、店員さん、キミも一緒に食べて欲しいな」

用意していたガラガラのテラス席に人知竜が腰かける。遠山にむけていたずら気味に微笑んで。

「いや、ここそついうお店じゃないんで」

「すぶぶ、え、そんなこと言わないでよ。お得意様の機嫌を取るのも客商売ってもんじゃあないかい？」

「手ごわいな……いいか？ ラザール」

今、ここはお客様第一号のへそを曲げるのは美味しくない、遠山はラザールに了解を取る。

「あ、ああ、もちろんだ。よし！ ニコ、ソーセージの準備を！  
リダとルカは石窯に火を！ ペロとシロは……そのままいい子にしてなさい！」

「……………はい！……………」

「よし、じゃあ、俺も何か手伝いを」「ナルヒトはそこで人知竜様のお相手を頼む」「え、でも」

「頼む」

「あ、はい」

有無を言わさないラザールの圧に珍しく遠山が押されてうなずく。振り向くとニコニコ顔の人知竜がおいでおいでと手を振っている。

「すぶぶ、ラザール君に弱いねえい、キミは」

「ああ、アンタのおかげでしょんぼりトカゲからパントカゲに戻ってくれたからな。さっきまでなんかもう、尻尾が地面と張り付いちまうのかと思ったよ」

レーザーの指示に従う遠山が人知竜の向かいに座る。

気付けば、祭りの喧噪は静まり帰っている。この付近にいる人々全てが、人知の竜に視線と思考を全て奪われたからだ。

「おや、それは一大事だ。レーザーベーカーリーの重要な人材なのだから、メンタルケアは欠かせないよねえい」

「確かにな、それにしても、アンタのこれ、すごいな。どうやったんだ？」

遠山は上を見上げる。未だ、夜。輝く星々の間をまた魔術師たちが飛び交いだして。

「おっと、しまった。元に戻すのを忘れてたよ。――証明完了」

パチン。彼女がまた形の良い指を鳴らす。

それだけで、昼が帰ってきた。夜の帷、輝く星々や月が消え失せ、  
青空の中、雲と太陽が。

「マジか」

昼と夜がまた一瞬で切り替わった。

「登場のシチュエーションは大切だろう？　ボクの子ども達が色々  
意見を出してくれてねえい。ありがとうね、みんな」

「」「」「」「」

空に浮かぶ魔術師たちに手を振る人知竜、彼女の動きに全ての魔  
術師が固まり、音もなく泣き出していた。

「ええ……なにこれ」

「ふふ、いい子達だろう？　可愛いボクの教え子であり、血肉を分  
けた子供たちさ。キミにも仲良くしてあげてほしいねえい」



「あれが、人知竜様の……」「処……」「人知竜様をおかしくさせた存在」「死……」「どうや……殺……」「始末……」「事故……見せ……」「竜祭……チャンス」

「あの、なんか不穏な言葉が、肝心な所だけ聞こえてるんですが」

「すぶぶ、大丈夫さ。キミは誰にも殺されない。ボクが保証しよう。トオヤマナルヒトくん、キミの強さを」

「……ギリイ……」

「やめてやめて。アンタが俺を褒めるたびにほら、空を浮いてる連中の視線が凄いいことになってるから。上見て、上」

「それにしても凄い人だねえい。さすがは竜祭り。あの幼竜め。中々に人望があるじゃあないかい。まあ、アレは生まれながらの王の器を持つ竜だからねえい。ヒュームがこれほど魅せられるのも無理はない、か」

「ほんつと竜って人の話聞かねえな。ドラ子が王？ まあ、確かに態度だけなら王様よりも偉そうな奴だけど」

「ああ、その辺を全くキミは知らないんだねえい。ふむ、どうした  
ものか……」

「アンタ、そういうの詳しそうだな。まあ、確かにこっちに来てか  
らずっと生きるか死ぬかのトラブル続き。結局、俺、何も知らねえ  
んだよなあ……」

「こっち……ね。なるほどねえい。ふむ、ふむふむ。……記憶を断  
片的にしか引き継げないというのは、中々に厄介だねえい……いや  
むしろ、ノイズの影響が強すぎるのか。耳男……ほんとにロクな  
ことしない存在だよ」

「あ？　なんて？」

「いや、こっちの話さ。それにしても、トオヤマ君。キミ、もしか  
してこうなることを予想してたのかい？」

「あゝ、悪い。気分悪いよな。結果的には利用することになった  
った」

「ふふん。気にするなよ。どちらにせよボクはここに来ていたさ。ただ、キミが本当にアテにしていた奴は……どうやらまだ現れていないらしいね」

「おー……まあ、なんか避けられて、る。らしいんだよ」

「どしたん、話聞くとよ」

「うわ、やめろよ、その絡み方。なんかわかんねえけど背筋が震える」

「すぶぶ。だめかぁ。……まあ、大丈夫だよ。ボクも竜だからわかる」

「うん？」

「我々は本当に自らが欲しいモノは絶対に手放さない。カモ牙も翼も炎も。我らの全ては自らの欲望を叶える為にあるのだから」

「アンタもやっぱドラゴンだな」

「嫌いかい？」

「いや、ドラゴンは好きだ、かつこいいからな」

「……………しゅぷ」

「人知竜様、賢人会議を思い出して下さい。恐らくこの者の言葉に含意はございませぬ」

しゅびん。空間が歪み、一瞬で鎧マントの誰かが現われて、人知竜に耳打ちしたあと、また丸まるように消えた。

「うお、誰、誰なの？ え、消え……………」

「ごほん。おっと、すまないねえい。ま、トオヤマくん、あの幼竜のことなら大丈夫さ。キミは、きちんと彼女の友人として以前、迎えに行っただろう？ それが、大事なことなのさ」

「……………それならいいんだけどな」

「お待たせしましたデイスー!!」

大きな声、ストルだ。お盆の上には焼きあがったパンが一つ。

「おっと」

「うお、どした、ストル。声でかいよ。お前はもっと自分の声がかいことを自覚してだな」

「知りませんデイス。どうぞ、お客様」

ストルが遠山の声につーんとそっぽを向く。バッジが足りない時の強い手持ちのような反応。

「おや……？ ふふん。いい目をするようになったねえい、正義の幼体。何かあったのかな」

「いえ、特に。派手な登場デイスね。そんなに目立ちたがり屋でしたか？」

そして、若干また人知竜とストルの雰囲気が悪い。冷たい目のストルと、余裕の表情の人知竜。

「すぶぶ。参ったねえい。別に目立つつもりは、あまりなかったんだが。まあ、トオヤマ君の為さ。どうしたんだい？ 何かイラついているようにも見えるなあ」

「お、おい、人知竜、ストル？」

「フン。貴女は今、わたしの審問官の味方なのでしょう？ で、あれば特に、何も」

「そうかい？ それなら良かった。ボクは彼の良き隣人でもあるからねえい。あと、彼は別にキミのものでもなんでもないことだけはキミイ、弁えておきたまえよ」

「ええ、お言葉のままに。わたしは彼の剣ですから」

「え、ちょっと、2人とも？ 近くない？ なんで、メンチきりあつてんの？ やめよ、ほんとやめて、店先でさあ。なあ、ラザール」

遠山が頼れる仲間その1に助けを。

「すまない、今ソーセージ焼いてるんだ」

「さっきはニコに任せてたのに!？」

だめらしい、こっちを見てくれさえしてくれない。

「まあ、いいさ。おや、これは綺麗なパンだ。もう食べていいのかい？」

「……トオヤマ」

「あ、ああ。いや、悪い人知竜、それまだ完成じゃねえんだ。ラザール焼き上がりそうか？」

「ああ、完成だ」

「おい、アレなんだ？」「パン、だよな？」「え、あんな形のパンとかあったか？」「はじめて見た……」「それにあんな長くて綺麗な肉詰めもみたことねえよ」

「……」

徐々に人知竜への大衆からの注目が彼女の前のパンに注がれて言っている、良い傾向だ。

「ああ、いい目をするねえい、すぶぶ。このボクですら、キミにとつては……キミには関係ない。進むんだよねえい」

「うお、なに、どした、人知竜。なんかすごい餅みたいな顔してんぞ。まあ、いいや」

「おつと失礼、気にしないで。おや、良い匂いだ。これはかなり良い香辛料を使っているねえい。それに、へえ、いい焼き上がりだ」

「お、分かるか？ ある肉屋のおっさんと共同開発してな。いや、これが中々難しくくてよー、結果的にコツは氷で冷やしながらミンチ肉を詰めることということに気付いたりしてだな。ちよつといいか、人知竜」

「ん？ ああ、もちろん」

「これをこうして、つと。レーザー、レタス、じゃなかった。レベツとかいう葉物野菜頼む、あとケチャップ、瓶詰めした奴あるよな？」

遠山が机に置いてあるナイフを手に取る。あらかじめ生地に切れ込みを入れていたパンは、ザクザクのバケットのような表面にも関



わらず簡単にぶちりと開いた。

レーザーから渡されたキラキラツヤツヤの野菜をささっとパ  
ンに挟んでいく。

「……へえ」

人知竜がわずかに身を乗り出した。

「よいしょ」

石窯の隣、薪と炭で焼き上げたソーセージはトングで挟むと肉汁  
がじゅっつ、とわずかに音を立て。

「……へえ」

人知竜が形の良すぎる鼻をピクリと動かす。

「よいしょ」

そのパンは、ある歴史、ある世界の中でたまたま思い付きで生まれたものだった。

ある男は、それまで手づかみで食べられていたアツアツの腸詰めをどうにか食べやすく出来ないかと考えた。そして、思いついた。

せや、ソーセージをパンに挟めば喰いやすいやろ、と。

それはヒュームには許されていない閃きと思考。

もつとこの世を便利に効率よく生きたいと願ってやまないある生き物の特性のほんの一端がこのパンを生み出した。

その生き物は強欲だ、その生き物は願う、その生き物は醜く、その生き物は美しく、その生き物は、世界を己がままに変えていく。

その生き物の名前は 。

「お待たせしました、魔術学院の人知竜様、当店、ラザールベーカーリーのパン職人とその従業員が真心を込めてあなたの為に焼き上げたものです」

遠山<sup>人間</sup>鳴人が竜へ。人間の食べ物。

「へえ……！」

ほかほかと湯気を立てるソーセージ、それをふんわり受け止めるレタスに似た薄緑のみずみずしい葉物野菜。

天使粉と塩、麦酒の搾りかすのみで構成された生地は、ドワーフ製の水蒸気を利用した石窯で焼くことにより、ザグザグパリパリのバゲツドパンとなって。

知識の眷属の権能を最高の無駄使いをすることによって得た古今東西のパンの知識。才能あふれるリザドニアンの腕前の集合体。

ヒュームにはもはや無い試行と思考の権利によって、再び蘇ったもの。

「ホット・ドッグ。正式販売開始だ」

「へえ〜〜！！ ふむ、ふむふむふむ。すぷぷ、興味深いねえい

……ああ、これがホットドッグかあ……おや、ボクはこれを知っている……？ ふむ、どの人知竜の記憶だろうねえい……」

「あ？　なんか言ったか？　それより良ければ冷めないうちにどうぞ」

「おっと、ごめんね。独り言さ。へえ……すんすん、天使粉の祝福による酸っぱい匂いがまるでしないんだ、新しい、新しいねえ……  
おーい、マルドウ2代目君、少しおいで」

「は、人知竜様。マルドウ、ここに」

「キミの専攻は確か、食物と魔術式による世界真理への到達、だったねえい。どうだい？　こんなパン見たことあるかい？」

「お恐れながら申し上げます、我が母よ。初めて見ました、このよ  
うなパンは。思いついたこともありませぬ」

「……」

「ふむ、そうだろう、そうだろう。ボクも似たようなものさ。だが、不思議だねえい。みれば分かる、これはとてもシンプルなものだ。言ってしまうえば、パンに腸詰めを挟んだだけ。そう、とても簡単でとてもシンプルだ。な、の、に。君たちヒュームは今までこれを思いつけなかった……そして、トオヤマくんはこれを思いついた、いや、知っていた、の方が正しいか。ふうむ、面白いねえい」

「……我が母よ、これはやはり、我々には未だ、天使の枷が……」

「だろうねえい。……停滞と迂遠の縛り。さて、教会はどこまでそれを理解しているのかー」「人知竜」「しゅぶ」

ぐいっと、遠山が人知竜に顔を近付ける。先ほどまで魔術師の祖として考察を続けていた彼女の顔が奇妙な鳴き声とともに固まる。

「人知竜、これ絶対ソーセージが熱いうちに食った方が美味しいぞ」

「あ、う、うん。そうだねえい。確かにせっかく作ってくれたものだし。へえ、ずっしり、これは、その、どうやって食べるんだい？」

「え？ ああ、そのまま齧り付いて大丈夫だ。パンの噛み応えがいいタイプだから、ソーセージを噛みちぎった勢いで、パンも齧り切る感じかな」

「か、かぶりつく、か。ふーん……え、えっと、こっ、かな？」

人知竜が目をパチパチさせながらホットドッグを口の前に構える。  
これでいいのかい？ と首を傾げて。

「そーそー、そのまま食べる感じかな。あ、レタス、じゃねえや、  
レベツとか少々溢しても大丈夫だぞ」

「そ、そっか。じ、じゃあ……」

「どした？」

「……………そ、その、あまり、そんなマジマジ見られると、少し恥  
ずかしいかなーって。す、ぷぷ。ごめんねえい」

わずかに顔を赤くした人知竜が頬をかきながら困ったように笑う。  
遠隔の魔術式を使用し、リアルタイムで遠山と人知竜の会話を観察  
していた魔術師たちの半数が、脳を破壊された。

「あ、悪い。デリカシーなかったな、少し外すよ」

「あ、いやいや、ここにいてくれるのはいいんだ。ただ、あんまり、その見ないでね」

「……………」

遠山がラザールに視線で疑問を問いかける。マジか、コイツと言った顔のパントカゲが大きなジェスチャーで、そこに、いろ、黙つて。と伝えてきた。

「そ、それじゃ、頂くねえい。あ、あーん」

「……………アツ……………」

「……………おお……………」

自分であーんと言うそのあざとさに、全ての魔術師が心臓の異常な動作を覚え、いつのまにかラザールベーカーリーの前に集うアガトラの市民たちが息を呑んで、それを見つめる。

「召し上がれ」

美術品よりも、美を意識して造られたばかりのその美しい生き物が、口をあけて、がぶり。

「ー」

固まった。

人知竜が、動かない。

フレメール反応を起こした猫ちゃんのように目をくわっと開いて、ホットドッグにかじりついたまま、動かない。

「えっ」

「えっ」

遠山とラザールが同時に呟く。どっちだ、どっちなんだ？ 事前のチェックでホットドッグがこの世界の連中にも受け入れられる味だとは確認している。





初めてアーモンドを食べたりスさんみたいな勢いだ。

こくん。

彼女の細く、薄い喉がこっくり動く。パンカス一つ、レベツの欠片も溢さずに、いつのまにか、ホットドッグが消えてー！。

「……………」

「え、え？　ら、レーザー？　レーザーくん、こ、これは、ど、どつちなんだ？」

「わ、分からない、アンタにわからないなら俺が分かるわけが無い……………！　ど、どつちだ？」

美味しいのか、美味くないのか。ぶっちゃけこれからの人知童の反応でレーザーベーカーリーの未来が決まると言ってもいい。

「……………も」

「も?????」

震える指を一本立て、人知竜から声が漏れた。

遠山とラザールが息を呑んで、人知竜を見つめて。

「も、もう一個、頂けるかな……?」

「ラザールくん!」

「心得た!」

影と霧が舞うような速度で、再び人知竜の前に用意されるホットドッグ。ソーセージからは湯気が立ち、添えられた野菜は瑞々しく、パンはザクー「もぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐ、こくん」

人知竜が、今度はもう遠山の視線も気にせずにリスやハムスター以上の速度でホットドッグを平らげてー。

「……………い」

「うん？」

俯く人知竜の呟きに、遠山ががたんと椅子から立ち上がる。

「……………いよ」

「……………！ うんうん」

その途切れそうな声を聞き取ろうと体を寄せて。

「美味しいイイイイイイイイイイイイ！！！！ なにこれ、なにこれええええええええええ！！ 新しい、新しいよおおおおおとおおおお、え、美味しいイイイイイ



「よ、よかった……無事かい？ いや、でも、本当に、本当に驚いたよ！ なんだい、なんだい、このパンは！！ 新しい！ 非常に新しい知見だよ！ まず驚嘆すべきはこのパンの香り to o

食感！ 祝福特有の酸っぱい匂いがなく、とてもやさしくそれでいて香ばしい麦の香り！ そして食感は最初はざっくり、あとからもちもち！ これはふむ！ その石窯が秘密かな？ 水か何かを入れることが出来る仕組みなのかなあ？ 水蒸気によつて一気に高温で焼き上げることにより生地の外はこんがり固く、そして中身はふんわり柔らかく！ またこの腸詰めも素晴らしい！ パリッとした後にじゅわつと肉汁があふれ出す！ 香辛料、はカルダミと黒胡椒、それにバージルの葉を乾燥させたものかい？ 全く臭みがないうえに、なんだいなんだい、このじゅわじゅわは！ 腸詰というものはパサつくのが当たり前、麦酒と一緒に食べるのが前提だと思っていたがこれは違うねえい！ 腸詰めをかじったあとに零れる肉汁をパンの生地とこのレベツの葉が受け止める！ これによりさらに腸詰の肉の味がパンや野菜にしみ込み、食べれば食べるほどおいしく完成しく！！ 料理は魔術に似通うものがあるが、これほどは！ おそれいったよ。すぷぷ、いや、でもこれはパン生地にも何か秘密があるねえい、ふむ、むむむむむ」

昏い目をキラキラさせながら早口で喚き、さらに頭を悩まし始める人知竜。あまりの変わりように遠山達は固まって。

「し、知りたい！ このパンの秘密を……知りたい、解き明かしたい……マルドウ2代目くん、キミもひとつ食べなさい、これは素晴らしいよ」

「は、我らが母よ。リザドニマンの店主殿、この老輩にも同じものを一ついただけるかな？」

「あ、ああ、すぐに用意するよ」

ラザールがささっと一つまたホットドッグを用意し、紙に包んでそれを鎧マントに渡す。

「ほう、……みれば見るほどシンプル、しかしそれゆえに美しい、では失礼して」

がぶり。ロマンスグレーのきりつとした老婆がホットドッグを頬張る。微塵も曲がっていない見事な直立不動のまま、がぶり、がぶり、目を見開いたまま、あっという間にそれを平らげて。

「っ！！？」

がくり、老婆の騎士がその場に膝をつく。先ほどまでの鉄面皮は崩れ、口元を押さえ息を荒く。

「あ、ご、ご婦人！ どうされましたか！ ま、まさか口に合わなかった」

ジェントルトカゲが慌てて、老婆の騎士の元へ駆け寄って。

「び、美味が、すぎる。な、んだ、これは」

「え」

「すぷぷ」

その反応に、人知竜がぺろり、真っ赤な舌を白い唇に這わせた。

「なんと、なんとという、味……魔術式による現実の浸食やスキルや秘蹟による貼り付けでもないのか、この現象が……？ これが、パン……？ だとしたら、我々が今まで口にした来たものは、いったい……」

はあ、はあ、と肩を震わして身震いする老婆の騎士、おどおどしているラザールへその鋭い視線を向け。



「職人殿!!!」

「わっ、は、はい」

「貴公！ このパンを、いや、これはどのように思いつかれた！？  
作りは単「純だ、だが、あり得ない！ 我々はこのような発想や  
ひらめきを枷によって許されていないのに、どうやって」

「か。かせ？ いや、そのアイデアは彼だ。造ったのは俺だが……」

「素晴らしい!!!」

「わ

ぎゅっと、ラザールの手を握る老婆の騎士、感極まっている。

「すぶぶ、マルドウ君がここまで感情をあらわにするのは珍しいね  
えい。いや、トオヤマくん、見事だよ、恐れ入った。本当にねえい。

……もう一個もらえるかな？」

「ひひひ、毎度あり」

気付けばラザールベーカーリーの周りには本当に大勢の人々が集っている。天体ショーを行った魔術学院の竜を眺めに来たものはみんな、視てしまったのだ。

あのおとぎ話の存在、伝説の中の存在であった竜が、普通に目の前にいて、なおかつその奇妙な屋台の初めてみるパンを絶賛しているのを。

ざわ、ざわ。ざわ。

空気が、変わり始めた。

「ああ、本当に美味しいねえい、もう、飲み物だよ、これは……  
ああ、そうだ、トオヤマ君、上を飛んでいる子たちも呼んでいいかな？ あの子たちにも食べさせてあげたい、もちろん、お代はあるからねえい」

ニコニコ顔でホットドッグを頬張る人知竜の言葉に遠山がラザールの方を見る。パントカゲが空を見上げて、それから在庫の材料の確認をして、助手である子どもたちを目配せして。

こくり、うなずいた。

「問題ない、大歓迎だ」

「ああ、それは素敵だ。おいで、ボクの子たち。今日はお祭だ、探求も争いも陰謀も、今日はお休み。ほら、ボクがご馳走しよう。このパンは美味しいよ」

空を飛ぶ魔術師たちに人知竜が語り掛ける。一斉に魔術師たちの動きが止まって。

「え」「なに、それ」「今、なんか幻聴が聞こえ、え?」「人知竜様が、語り掛けて……」「うそだ、ゆめだ、ゆめだゆめだ」「人知竜様がこつちを見ているような」「賢人会議のみなさまは……」「だめだ、固まってる」「まんま鎧でワロタ」

困惑している。彼らにとっては正しく、そう、遠山の世界の認識で語ればキリスト教の信者が立川に住んでいるロン毛様から直接一



魔術師の音が空を震わせた。

一斉に空から降りてくる魔術師達、屋台の前にお行儀良く並んでいる。

「リダ、ルカ、2分後、石窯に水を入れてくれ！ ニコ、その調子でソーセージの焼き上げを頼む！ ニコとペロはレベルをちぎって水にさらしてくれ！」

「……………はい！」「……………」

「ら、ラザール、わたしは何をしたら、いいデイスか？」

「ストルは並んでいる人に出来た物を運んでいってくれ、そこのお盆を使って！」

「は、はいデイス！」

「ら、ラザールさん、あのー僕もなんか……………」

遠山も、よよよとラザールの元に揉み手しながら近寄って。

「ナルヒトは人知竜様のお相手を！」

「あ、はい」

にべもなくラザールに突き返される。まるで高校の文化祭で出店をやるときに結局役割を何も振られずに、なんやかんや変質者とのトラブルに巻き込まれたあの日を思い出す居場所のなさだ。

「すぶぶ、キミの一味は面白いねえい。誰一人キミに委縮することなくみんなが機能している。良い景色だねえい」

「ああ、どうも。なんかすみっこに追いやられてる気がするけど」

「これが、人知竜様も食べたホット・ドッグ……か」

「こんなパン、見た事ない？」

「なんて、良い匂い……」

ホット・ドッグがどんどん屋台に並ぶ魔術師たちの手に渡っていく。紙袋に包まれたホットドッグを不思議そうに眺めたり、香りがかいだりしている。

人知竜がそれを目を細めて、優しく見守っている。その姿は少し、良かった。

そして、魔術師たちが紙に包んだホットドッグを構えて、がぶり。

「えっ」

「うあ」

「ほっ!？」

「むお!？」

魔術師たちがホットドッグにかぶりついた瞬間、驚愕の声を上げる。まだこの世界にない味、取り上げられた可能性の味に目を見張った。

魔術師たちの感嘆の声が屋台広場に拡がる。

屋台は盛況、ラザールの尻尾もふりふり、子供たちからは不安な

表情は消え失せている。

そして。

「あ、あの、すみません、こ、このパン、まだ注文できますか？」

魔術師ではない観衆からもついにファーストペンギンが現れる。なんの変哲もない町娘、でもこのアガトラを構成する大切な住人が、ラザールへと注文を。

これが本当の客の1人目。コネでもなんでもない、ラザールベーカーリーに興味を持って商品を購入してくれた1人目の顧客。

「え、あ、ああ、もちろんです、その、メニューは一つしかないのですが」

「あ、大丈夫です、その、魔術師の人たちが食べてるそれを、私も……このパンの名前って」

おずおずと、少女が屋台の周りで舌つづみを打ったり食レポして、  
る愉快的な種を眺めて。



「ホットドッグです、お嬢さん」

にっこり、レーザーが善意100%の穏やかな笑顔を浮かべて。

「あ……じゃあ、その、ホットドッグひとつお願い、します……」

顔を赤くして俯く少女、またレーザーが一人のいたいけな少女の性癖を狂わしてしまった。あーあ。

「あ、あいつ、また俺の知らない所でモテてる……」

「すぷぷ。良い光景だねえい」

「いや、助かったよ。人知竜、ほんと、賭けてたんだぜ」

「ふうん……？」

遠山が意図して笑顔を作る、その微笑みをみた人知竜からすんつと、表情が抜け落ちた。

竜の顔。目の前の存在がいかにこちらに好意的でも。やはり生き物としては別種だと理解させられるそんな顔。

「果たしてボクは賭けの本命だったのかな」

彼女の昏い目に、遠山が映っていた。

「あ？」

人知竜が言っていることが何かは分からない。でも、遠山鳴人の心臓はドキリと嫌な動きをした。

魔術師たちの感嘆の声の中、人知竜の視線に固まる遠山、竜祭り  
は続いていく。

ヒトの歓声と、ヒトの熱は嫌いではなかった。

だから、この祭りも嫌いではなかった。

でも、もう、分からない。

奴のことはよく知っているし、分かっているつもりだった。奴は狡猾で抜け目がない。だがそのくせ情に妙に流される所や、甘い所もある。それが面白かった。

だから、オレは知っていたのだ。竜祭りではきつと奴はオレの力を、蒐集竜としてのオレを必要としていると。

奴がパン屋をするのは知っていた。だが、奴は必要以上の助けをよしとしないことも知っていた。

だがオレにだって、打算があった。ヒュームはそう甘くない、きつと最初は奴らの商売はうまくいかない、そこでこのオレの登場だ。オレこう見えてかなり有名な竜なのだ、だから、そのパン屋の成功にはきつと、オレが必要だ、と。そ

だから、きつと、仲直りできるよ。

「ふかか」

だが、もうそれは必要なかつたらしい。

奴らの屋台は大盛況。ふかか、ふむ、ふむふむ。やるではないか、ナルヒト。そうか、そうかそうか、あの老竜めか。なるほど奴なら確かにオレに勝ることは決してないが、それなりに人心もとりなせよう。

ふかか、けっこう、けっこう、それでこそ、ナルヒトだ、うむうむ。そうでなくては、うむ。オレは誇らしいぞ。うむ。我が竜殺しはそうでなくては。。

あれ、あれれ？

ああ。そうか。

竜の目が遠く、屋台広場の盛況を捕える、そこにはあのパンを頬

張って笑う竜と、竜殺しが、楽しそうに、していて。

ああ、そうか。

別に貴様は、ナルヒトは　オレじゃなくても、良かったのか。

「焼き菓子、焦がさずに焼けたのにな……」

127話 ホット・ホット・ホット(後書き)

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さい！

来週コミックス一巻発売します！ 購入報告や予約報告いつもあり  
がありがとうございます、ほんと助かってます。お礼にどんどんWEB版  
たのしくしていくのでこれからも宜しくお願い申し上げます。

128話 ネガティブハッピー・パンラッキーデー

ピコン

【竜祭りが開始されました、竜大使館ルートに入りました】

【危険存在、”鬼人”ベルナル・オドニアス及び、人知竜”アイ・ケルブレム・ドクトウステイル”への対抗策を用意しました】

【依然、危険存在はアガトラに存在します、都市防衛機構、”アイアンドーム”、天使教会・天使聖典4ページ、”我、星の理を定める者”は貴女の用意した攻略法の障害になります、メインクエスト”竜狩り”開始前に排除をおすすめします】

【メインクエストが進行します】

「ふかか、良い。うむ、実にいい」

少し、幼い姿に変わった貴女がニコニコとお祭りに沸く街を歩く。

結局、数時間かけて決めた服はとてもシンプル、白いワンピースに銀色のブレスレット、ハナムグリの蔓で編んだ簡素な帽子。

「え、見て。あの子……」

「めっちゃくちゃ可愛いな」

「てか、眩しい？ 眩しくない？」

「眩しい……良すぎる」

「ニコニコしてる……」

「でも、なんか、どこかで」

「御付きのメイドさんも、なんか高貴タカウくね？」

「なんだ、あの2人……」

貴女が歩くと、街の住人たちが道を開ける。姿を変えていようとあなたの光はヒトを魅せる。

「む！ 見る、フォルトナ！ ホーロム焼きの屋台があるぞ。貴様



は知らぬだろうが、アレは数年前のホームの悲劇の折に我が家のメイド長が奴らの調理法を編み出してだな。むむ、それに、ほう。市場に流れる宝飾品や装飾品の質も量も上がっており。銭ゲバに領主、なかなかの治世を施しているとも見える」

「お姉さま、嬉しそうですね。アガトラが、お好きなのですか？」

「ふかか！ フォルトナ、貴様モノを知らんな。この街はすでにオレの縄張りぞ。竜の住処がにぎやかにきらびやかになるのはオレの本望。好きに決まっておるではないか」

飛び跳ねながら、街を歩く貴女。残酷で、それでいて無邪気で、自由で。

嫌いなものばかりのはずのこの世界で、貴女だけがわたくしには輝いて見えます。

「あー、あー！！ 痛い痛い、おかーさん、どこおおおお」

道のわきに泣き喚く女の子。一人、きつと親とはぐれたのだろう。

肘には擦りむいた傷も。

「む、その幼子、どうした。腹でも減ったのか？」

「んえ……ちがう、いたくて……」

「むむ、怪我をしておるのか。なんと脆い生き物なのだ。……どれ、見せよ。ああ、この程度か、ふむ。ペロ」

竜が、なんともなしのその少女の腕を引き、ペロりと傷を舐める。竜の体液は定命の者の傷を治す力があるというのは本当らしい。

「ひゃつ、え！？ お姉ちゃん何して……え、痛くない……？」

「ふかか。良い、幼きヒュームよ、もうそなたの怪我は治ったぞ。どうしたのだ、祭りというのに貴様、泣き喚くとは何事だ？」

「だって、だって、お母さん、急にいなくなって、それで……」

「むむ、親とはぐれたのか。ふむ、……まあ仕方あるまい。探してやろう。貴様もまた、この街の住人なれば、それはつまり我が蒐集

品のひとつ。子どもは泣いているより、笑っている方が良き物であるゆえに」

「え、さ、がしてくれるの……うゆ、お姉ちゃん、あい、がと……」

「ほう、そなた、その年で礼が言えるのか、ふかか、良い、苦しゅうない」

貴女はやはり、変わらない。

傲慢で残酷で恐ろしくて、でも、たまにとてもやさしくて。ああ、貴女はきつと、太陽や森や河と一緒に。自然がそのまま人格を持ったような存在なのですね。

「アリスお姉さま」

「む、どうした、フォルトナ。目的の場所へ行く前に用事だ。この幼子の親を捜すぞ。何、簡単だ。領主の館の副葬品でも使わせればよい、すぐに」

「いえ、それには及びませんよ、お姉さま。幸運にも、ほら、こちらに駆け寄ってくるご婦人がいます、彼女ではありませんか？」

【秘蹟”幸運”を使用しました。リスク判定が発生します。フ  
アンプル・

リスクが発生、大腸の機能が停止しまー スキル”幸運”により  
秘蹟”幸運”のリスク判定の振り直しが発生。判定に成功しました】

「クリス！ 良かった、よかった！」

「わあああ、おかあさああああああん！ どこに行ってたのおおお、心配したよおおお」

「もう！ おバカ！ どこに言ったのはこっちのセリフ！ でも、ごめんね、お母さんが目を離しちゃったね！ ごめんね。怖かったね！」

ぎゅっと抱き合う親子。ああ、そつだ。親子とはこつこつものらしいですね。わたくしには関係ないことですけど。

「あ、あの！ あ、ありがとうございます！ あ、貴女たちが娘と一緒に居てくださったのですか！？」

「む？」

「あんねーおかーさん、わたし怪我してたんだけど、このお姉ちゃんがねー」

「クリス、とやら。しーっだぞ」

幼子の言葉に、貴女がにいつとギザ歯を見せ笑う。

「……！ しー！ わかった！ お母さん、このお姉ちゃんたちがね、クリスのこと構ってくれてました！ 決して怪我を直したりはしてくれてません！」

「え、け、怪我？ どこにもしていないようだけど……あ。あのお二方、ほ、本当に、本当にありがとうございます！ お二方が面倒を見てくださったおかげで、無事、この子と……」

「ふかか、よいよい、気にするな、クリスの母親よ、それでは、オレたちはもう行く。もうはぐれるなよ、それとクリス、母御殿のいう事、聴くのだぞ」

「はい！　ありがとうおお、竜の……ちがう！　おねちゃああああん！」

「り、りゆう？　クリス、何言ってる……でも、本当に綺麗な方……それにどこかで見た事のあるような」

貴女がまた進み出す。蒼い瞳を満足気に薄めて、手にバスケット。友人への差し入れを持って。

「良かったですね、すぐに親がきて」

「む。確かにな。だがフォルトナ、貴様よく母親が近くにいたりすることに気付いたな。このオレですら、すぐにはわからなかったぞ」

「たまたまです、アリスお姉様」

「ふかか、そうか」

「はい、そうです。……あなたは、この街が、大事なのですね」

「む？ ああ、我が蒐集品ゆえに。物とはそれにふさわしい蒐集の法があるのだ。かごの中で愛でるものが良いものもあれば、自由に外に開放し、眺めるものが良いものもある。街とはその中でも異質ゆえに」

「その法とは？」

「知れたこと、笑い声と怒鳴り声と泣き声、数多のこの街に響く声さ。定命の者がその限りあるちっぽけな生をあらんばかりの声であふれかえる、街とはそうでなくてはな」

ああ。貴女はやはり、竜だ。貴女はヒトの心を持った自然であり、世界そのものだ。

わたくしは、もう貴女の言葉を聞いた途端、言葉がでない。

わたくしは、どうしたいのだろう。

きつと、人の意思を超えた所で人の未来は決まっている。

人の禍福がもしも、本当に人の及ばざる力により決められているのだとしたら、それはあまりにもー！。

「ほう、空が……ふかか、あの老竜め。オレの縄張りに好き勝手しておつて。むむ、だが、奴と争うと、ナルヒトがなあ、絶対に怒るものなあ、むむむ」

昼が、唐突に夜になる。

始まってしまった。ああ、わたくしはこうなることを知っていた。

【秘蹟”幸運発動。<sup>????ア1???</sup>人知竜の干渉により、天使教会地下聖堂の天使法典のひとつが発動します】

空を泳ぐ魔術師たち。ああ、結果的に。幸運にも彼らがアガトラに現れた。



それに反応し、自動的に発動するアガトラを守るために天使教会創設時より準備された大戦の名残、光の巨人が現れる。ああ、結果的に幸運にも、わたくしがその相手をする必要はなくなった。

パチン。

魔術学院の主、それを住処とする古い竜が指を鳴らす、それだけで天使教会の切り札はひとつ、終わる。

これで、ひとつ。幸運にも。

【秘蹟”<sup>？ロ？？ア？？</sup>幸運発動、リスク判定発生、ファンブル、リスク発生、視覚の消失 - - スキル”幸運”により判定の振り直し 成功。リスクなし。人知竜の”人知竜魔術式・否定の呪言”により、天使法典4ページ、消失】

【オプション目標達成、天使法典、4ページの消失により”継承秘蹟・王の城人”によるアガトラへの直接攻撃が可能になりました】

ああ、準備が進んでしまう。出来てしまう、どんどん条件がそろっていつてしまう。

「……フォルトナ、行くぞ」

「はい」

貴女の顔から笑顔が消える。誰しもが空の奇跡を見上げる中、貴女だけが早足でその場に向かう。

そして。

「」

貴女が、その光景を目にした、しまった。

この、めぐり合わせですら。。

【秘蹟”<sup>？ロ？？ア？？</sup>幸運発動、リスク判定発生、スキル”幸運”により判定成功。”竜殺しと蒐集竜の合流が回避されました】

「焼き菓子、焦がさずに焼けたのにな……」

あなたの視線が、その手にぶら下げたバスケットへ。

あなたは今、どんな顔をしているのだろうか。それを見たい、それを見たくない。

わたくしは、あなたをどうしたいんだろうか。でも、もう運命は始まっている。

「 屋敷に帰る。我が竜殺しは壮健で忙しいようだからな」

無限にも思えるあなたの沈黙が終る。

穏やかな表情で振り返るあなた。太陽や光そのものが意思を持ったかのような存在であるあなたが、まるでヒトのような顔で、力なく笑う。

わたくしは――。

「フォルトナ？」

あなたが、急に歩き出したわたくしへ声を。

気付けば、身体が勝手に動いていた。何をしている、意味が無い、いや、意味はある。

わたくしの運命はもう決まっている。あの日、上姉様を滅ぼした時、上兄様を潰した時、両親を壊した時、双子の姉と別れた時、いえ、きつと、

そなたたち、名前は？

あの日、双子の姉と捨てられ、途方にくれていたあの日。

あなたと出会ったその時から決まっていた。そうだ、これは決まっていることなのだ。

わたくしは運命から逃げない、運命を履行し、その先に行く。この定められたクソのような世界でわたくし自身を試したい。

これは、あの弱くて愚かな小娘の続きなのだ。

あの日、本当なら終わっていた人生の、あなたが与えてくれた人生の続きをわたくしは。

「アリスお姉様」

「む？」

「あなたはお屋敷へお帰りを。ウイスが向こうで馬車を用意していますので」

「貴様はどうするのだ？」

「ああ、わたくしは――」

喧騒の向こう側、あなたが眩しそうに見つめる先にきつとそれはいるのだらう。

ピコン、ピコン、ピコン。

ああ、運命の知らせが聞こえる。矢印が、ふよーっと浮かんで。

【メインクエストが進行します】

【メインクエスト・”竜と運命”が開始されます】

矢印が、わたくしの頭の上から向こう側に。

思わず、手を伸ばしかけて、止めた。

それに触れないことは知っていたから。人は決してそれには逆らえない。どんな幸運を持っていようと、最後の最後になるようになるのだから。

「わたくしは、少し、野暮用に」

上手く、笑えていただろうか。

「このようなパン、認められるか！　違法だろー！」

「お？」

「む？」

ラザールベーカーの勢いが徐々に盛り上がっていく。魔術学院による演出、そして現れたファーストペンギン。

リザドニアンへの悪印象や得体の知れないものへの恐れや嫌悪感を一瞬で塗り替える衝撃。冒険都市にホット・ドッグが広まりつつある、そんな中。

「み、見たぞ！　そのパンの形！　製法！　教会法に違反しているものだ！　既に騎士に通報させて貰った！」

「知らねえのか！　教会法はパンの形をローフブレッドや残りいくつものしか認めていない！　こんなもの俺たち由緒正しいアガ

「トラのパン職人は認めねえ！」

数人のエプロンを付けた男達がずかずかと屋台に近づいてくる。

「どうやら同業者が突如現れた商売敵の粗探しを早速始めたらしい。」

「責任者を出せ！　そもそも聖なる天使粉を扱うパン職人という仕事を、リザドニアンがするのはどういうことか！」

「今、その得体の知れないパンを食べている者も同罪だ！　顔は全て覚えてぞ！」

「天使粉の出所も教えろ！　おかしいだろ！　お前たちみたいな得体の知れない新参者がそんなに潤沢な材料や設備を揃えることの出来るはずはない！」

「やんやと騒ぐ男達の糾弾、魔術師達は完全に無視してエンジョイし続けているが……。」

「あ、う……」



「ど、どうしよ、今、教会って」

「え、私、捕まるの？」

先程パンを購入した市民達は一気に不安な顔を浮かべる。

「おや、勇敢だねえい。ボクたち魔術師がこんなに集まっている場所に乗っ込んでくるなんて」

「どうされますか、我らが竜。あの者、この素晴らしい職人のラザール殿に向かってあまりに失礼な物言いです。ネズミか何かに変えてしまってもよろしいか？」

人知竜が目を細め、マルドウと呼ばれる老婆の騎士が身につけた黒い手袋をはめ直す。

剣呑な雰囲気。

喚き立てるパン職人達は自分達の命の危険に気付いていない。天使粉を扱える職人、中流階級の中でも割とステータスの高い場所に

いる故の傲慢だろうか。

2人の魔術師が、自らの素晴らしいティータイムを邪魔する者達に視線を向けてー。

「ああ、大丈夫だ、人知竜。それに魔術師の人」

「……いいのかい？」

2人を制したのは遠山だ、周囲をチラチラ眺めながら呟く。

「ああ、そろそろ……時間だ」

竜祭り攻略、ラザールベーカーリーの最初の関門はクリアした。

次の関門は周囲からの妨害。天使教会法、パンと天使粉に関わるいくつかの制定。

この国では、パンの形や製法に制限がかかっている。立法と司法を兼任する教会という勢力によって。

教会法の違反の指摘。今、屋台の前で騒いでいる連中の指摘はあ  
る意味正しい、だがー。

「おい！ だから責任者を出せ！ いい加減にしろ！ アガトラで  
商売をするんなら天使教会の法をー」天使教会の法がどうかされ  
たのでしょうか？」

「だから！ さつきからずっと言ってる！ この店は天使教会の法  
をー……ツア、え……？」

ある意味で、この街、天使教会総本山のお膝元であるアガトラの  
住民にとって彼女の名声は竜に並ぶものになるかも知れない。

絹のような白い長髪、黒と白のシンプルな装飾の礼服。黒皮のブ  
ーツが小気味よく石畳を叩いて。

「あら、これはこれは。アガトラ5番街に店舗を3つ構えるバーノ  
ンパン屋のご店主に、商業区の入りに最近大型店舗を建てたヤー  
ド食料品店さん、そしてアガトラ創設時から、パン屋を営む老舗に  
して、商人ギルドの5大商会の一つフレイマン商会さん。お元気そ  
うで何よりです、どうかされたのでしょうか？」

糸のように細い目の女がそこに立つ。

立ち居振る舞いは凜とし、御付きの美しい容姿のシスターと白毛の輝く猫獣人を侍らせるその姿は、絵画のようだ。

「あ、アンタ、いや、貴女は、カノサ。ティエル・フィールド……」

「ど、どうして、天使教会の長がここに……」

「い、いや、チャンスだろ、ちょうどよかった、主教殿！ あなた様のお耳に入れたいことがございます！」

浮足立つ商売人たち、しかしすぐに気づく。目の前の女はこの国の法をつかさどる機関の長、目障りな新興の商売敵をつぶすために告げ口するにはまたとない。

「おーう、銭……じゃない。主教様、ご機嫌麗しゅう、遅かったですな」

「野暮用です、審問官。……全知、いえ、人知の竜よ、先ほどのご無礼、お許しを。お怪我はございませんでしたか？」

「ああ、糸目ちゃん。すぶぶ、なに、問題はないさ。それよりこちらこそ、高価で古いものを壊してしまった。後で魔術学院として、教会には何か補填を考えてるからねえい。安心しておくれよ」

「寛大なお言葉感謝いたします」

「「「……………は？」」」

3人の有力商人たちがあり得ないものを見たとばかりに固まる。教会と魔術学院のトップ同士がにこやかに会話しているのもそうだが、何より驚愕したのは。

「ああ、そういえば、その御三方、それで、何か私にご用事でしょうか？　それとも私の部下である審問官殿が運営するこのお店に何か、ご不備でも？」

全てが、その3人には足りなかった。

考えがあまりにも浅い。

そもそも何故新参のよそ者が竜祭りの自由市場に参加できているのか、なぜ商人ギルドの会長はそれを認めていたのか、なぜその新参者たちの屋台の設備や原材料がこれほどまでに充実しているのか。

竜殺しがいるのは知っていた、だが、彼らにとってその存在はしよせん冒険者上がり。完全に舐めていた。

そのなぜ、を大して考えず、ただ、自分たちよりも優れた商品を展開している新参者たちを論理と頭脳で簡単に処理できると信じていた。

「ま、さか」

腐っても、商人。その主教の言葉一つで彼らは事態を理解していた。

「おお、主教様、いや、何、こここの3人にどうやらまだ、商人ギルドのあの偉いさんから情報が回っていなかったらしい。まあ仕方ねえよ、まだ一昨日の話だ」

よっこらせ、遠山がようやく椅子から立ち上がりいちゃもん集団にぬるりと近づく。

「な、何を言ってるんだ！ ぼ、冒険者風情がー」

「ばか、違う！ お前まだわかってないのか！ こ、この連中は只の冒険者なんかじゃー」

「そついえばラザール審問官補佐、教会から卸した天使粉の使い心地はいかがですか？」

「主教様には感謝のしようがありません、手触り、まとめり、焼成の出来栄え、どれをとってもこの街でこれ以上のものは想像出来ない」

「あら、それは良かったです。一級農地から納められたものをあなた達に託して正解でしたね」

にこやかにリザドニアンの語り掛ける主教、その様子がこの屋台の全てを物語っている。

「は？」

「ああ、やっぱり……」

「……やられた」

1人の若い商人はなんのことだか分からない様子、残りの2人は完全に苦虫を噛み潰した様子で。

「なあ、おたく達の所は商人ギルドのモロウ商会とは仲が良くないのか？ 俺たちが教会の庇護のもと商売してるの、あの会長さんは知ってる筈だぜ」

「な……そ、そんな話……」

【スピーチ・チャレンジが発生します】



「なるほど、本当に知らないのか。あの女、叩き潰してやったのにまだ微妙な嫌がらせを……いや、嫌がらせの目的は俺たちじゃなくて、むしろアンタらか……」

【スピーチ・チャレンジヒントが追加されました。”商人ギルド内における食料品店とその他の商店との関係性”】

遠山鳴人は考える。

先日の商人ギルドの交渉、その結末。

結果的にこの自由市場においては商人ギルドが用意した人通りの最も多くスペースの広い入口付近の一等地を手に入れた。またパンづくりに欠かせない水や、ホットドッグの材料なども全て円滑に調達できた。

今更モロウ商会在直接的な横やりを入れてくるとは考えにくい。恐らく、これは遠回しな嫌がらせだろう。同じパンという同業者にあえてラザールベーカーの情報を積極的に伝えていないのだ。

このパン職人たちもきつと、モロウからしたら目障りな連中なのだろう、だがそれに対して文句を言ったところで根拠はない。

「さて、あの会長の思惑通りに喧嘩すんのは、美味しくないな……」

ここで、コイツらを叩きのめすのは簡単だ、簡単すぎる。

それよりもー。

【INT7により新たな選択肢が発生します。スピーチ・チャレンジ（懐柔）が可能です】

攻略法が決まった。

遠山がまたわたわたしているパンツカゲを視界に入れて。

「し、しかし！ あのような形のパン！ 到底認められない！ 天使教会の法でー」

「おお、そういえば言ってなかった。えー、ゴホン！ 先ほど、当店でホットドッグをご購入頂きました皆様、もしまだ包み紙をお持ちでしたら、どうぞお手元をご覧ください！」

遠山が大声で叫ぶ。祭りの喧騒が薄れている今なら彼の声でも屋  
台の周辺までならよく届く。

「包み紙？」

「ねえ、どうしよう、私食べちゃったよおお、5個も！ だって仕  
方ないじゃん、こんなに美味しいんだもの！ もぐり」

「食ってる場合かああああ！！？ 6個になってるよ！ あれ、  
アンの持ってるその包み紙……あ！ これ！！」

ざわ、ざわ。

ホットドッグを購入し、不安に駆られていた市民達から次々と驚  
愕の声。包み紙を見た者達が順番に目を丸くして――

「教会の印だ……！」

「その通りです！ 皆様！ 今、ここに座す名店老舗の商会の」

指摘はごもつとも！ 帝国においてはパンと天使粉に関わる法により、教会が指定したパンしか食することが許されていません！でもご安心ください！ その包み紙の印はそういうことです！ 当店の新商品！ ホットドッグは

すつと息を吸って。

「天使教会公認の法に則った合法ホットドッグでええええす！！」

合法ホットドッグ、その言葉に一瞬の沈黙が訪れた後。

「わあああああ！ 良かったああああ」

歓声上がる。割とアガトラの市民はノリで生きている。

「よしよし、コイツら敵に回すとうざいけどきちんと乗せるとちよるいな、かわいいね。さ、とと。近隣屋台の先輩方、まだ何か俺たちに言いたいことがあるか？」

「ぐぬ……」

「……バーノンの小倅、これは、ダメだ……帰ろう」

「あ、あ、もうこりや、無理だ。積み重ね、初めから負けていたんだ……も、もしかして、モロウ商会にはめられた……？」

意気消沈した3人のいちゃもん商人たちが帰ろうとして。

「おい、待てよ。まさか、お前らここまでうちの商売の邪魔して、そのまま帰れるとも思ってたのか？」

「「「あ……」」」

その3人の顔に浮かんだのは、恐怖。頭が冷えたことにより自分達がどれだけ愚かなことをしていたのかようやく気付いた。

テラス席に座りながらこちらに視線を向ける魔術師、帝国の統一宗教組織の長、そして、竜を殺した最高にイかれた存在。

いち商人が刃向かっていい存在ではない。

そもそも、彼らをここまで駆り立てたのは怒りだ。自らの領分、生涯をかけて培ってきたパン商売を侵されたことによる一時的な高揚感と無敵感はやなく。

「さて、どろろしてくれよう」

「」「わ、わア……」「」

竜殺しの、細く歪んだ目が、小さく可愛くなっていく哀れな商人達を眺めて。

「ま、待ってくれ、ナルヒト」

後ろから声をかけたのは、この屋台の大黒柱。パントカゲのラザールだ。

「いずれも、名だたるパン商店の方達だ。その、正直彼らのこと

は尊敬している。誤解が溶けたのなら、あまり手荒なことはしたくない……」

「ラザール、甘い事言つなよ。コイツらはうちの店だけでなく、お前のことを侮辱していたんだが」

遠山は、わざと冷酷な声と顔を演出する。これでいい、ラザールはこのまま素で喋らせる。

「「「ピ、ピッ」「」」

「そ。それは、職人特有の、怒りによるものだろう。じ、事実、俺たちはかなり、特殊な商売の仕方をしている……」

「じゃあどうする？　また同じような連中は出てくるぞ。お前のことをくだらない種族がどうのこうのとかいう理由で舐めてくる連中はよー」

「「「あ、わわわ」「」」

【スピーチ・チャレンジが進行しています。あなたの脅迫により3人の商人達は混乱状態に陥りました】

いい流れだ。遠山は、見せかけの脅しと殺意を増していく。あまりやり過ぎると客が引くのでここらが限界だろう。

遠山の中で、このスピーチチャレンジの落とし所は既に完成している。

あとは、ラザール次第だ。

さあ、ラザール、頼むぜ。善人トカゲ。

「教えてくれよ、ラザール。こいつらへの落とし前の付け方を。この街で、ケジメをつけない連中がどうなるか、よく知ってんだろ？」

遠山が、信じて言葉を続けて。



ゆらり。俯いていたラザールの尻尾が持ち上がる。ニコがそそつとどこからか持ってきたコック帽子を受け取り、ささっとかぶつて。

「実力だ」

低音のはっきりしたラザールの声。

「認めてもらう。俺のパンを。ナルヒトやみんなのおかげでつくることの出来た俺たちのパンを、この街のパンに関わる人たちにも認めてもらう」

ラザールが完成していたホットドッグをお盆に乗せて、そつと尻餅ついて抱き合っているパン職人のおっさん達の元に向かう。

「「「え……………」」」

「貴方達の名声は知っている、先人から続く技術の継承、そこに至る研鑽に敬意を……………そして、だからこそ、食べてみて欲しい。同じ、

道を俺よりも先に進むあなた達に」

ラザールがホットドッグを3つ彼らに差し出す。

ぴえん顔で抱き合っていたおっさん達の顔つきが、急に鋭く。

「……どれだけ間抜けに見えても、俺たちはパン職人だ」

「例え、命を握られてでも、認められないものは認められない」

「そこに、嘘はつかねえぞ。そもそもこんな、腸詰を挟んでレベツを挟んだパン、邪道だ。祝福の香りも薄い……パンとは認めねえ！」

強情な職人たちが、後輩であるラザールに向けて語気を荒げる。

「ごきり。ストルがなにやら笑顔のまま青筋立てて指の骨を鳴らしていたので、遠山がそつとなだめる。

「トオヤマ……?」

「待機だ、ストル。ラザールに任せろ」

「それでも、食べてみて欲しい。貴方達のような道に人生を捧げた先輩方に認められた上で、俺は進みたいんだ！」

ラザールがそれでも、頭を下げてー。

「チツ。んなこと知るかよ！ 俺には関係ねえ！ ……え、おい、フリーマンのおっさん!？」

アガトラ最古の老舗、パン職人としての腕のみで5大商会の長に上り詰めた男。

フリーマンと呼ばれたおっさんが、ホットドッグに無言で手を伸ばした。

「お、おい、フリーマン、アンタ……」

「やかましい。……こつちが先にいちやもんつけたパン職人の後輩に、道の先人と言われて、道に捧げたと俺を称してくれる奴から頭を下げられ続けてみる……ここで、コイツを無視するのは、恥知ら

ずよりも、情けないだろうが」

髭の壮年、フレイマンがラザールからホットドッグを受け取る。

「……チツ、おい、リザドニアン、俺にも寄越せ、クソ！」

「ま、まあ、アンタら2人が食べるなら、俺も」

フレイマンに触発された残りの2人が、しぶしぶホットドッグに手を伸ばして。

「あ、ありがとう、光栄だ」

「チツ、おい！ リザドニアン！！ 調子に乗んなよ！ いいか？ この状況だ、少しでもお前らの気に入らない事言ったら、潰される状況だろうよ！ でもな！ 俺はパンには嘘はつかねえぞ！ まずかったらまずいとばかり言うし、例え教会が手前を認めようと俺は絶対に認めねえからな！」

「り、り、リザドニアンのパンかあ……へ、変なもん混ぜたってねえよな」

「……若いの、食うぞ」

「ああ、食べてみてくれ」

3人が、それぞれホットドッグにかぶりついて――

「……っ」

「――……」

「……」

無言。

気付けば、観衆達もみんなその様子に注目している。

無言。ラザールのパンを食べた3人のパン職人はただ、黙って咀嚼を続ける。

時折り、パンの外皮をちぎって、それだけを食べたりしながら、無言のまま。

「と、トオヤマ……」

「……大丈夫だ、ストル」

「で、でも……あの人たちの反応……今までと全然違うデイス……」

「大丈夫だ」

「うちのパントカゲを信じろ」

遠山だけは、余裕の表情でその時を待っていた。

「ごくん。」

最初に、バーノンと呼ばれていた口の悪い1番年齢の若い男が、ホットドッグを全て食べ終えた。

空っぽになって自分の手を見つめ、それからレーザーを見つめ、それからー！。

「ごくんー！！」

鈍い音が響く。バーノンが自分の額を地面に叩きつけた音だった。

「え！？ ちょー！？ だ、大丈夫か！？ いま、凄い音が！」

レーザーが尻尾をピンと立たせ慌ててその男の元へー！。

「済まなかった」

声。

地面に頭を擦り付け、土下座の体勢になった男から絞り出されるように。

「パン、美味かった。これだけでわかる、アンタの研鑽と実力が」

「えっ」

「アンタに言ってしまった全ての言葉を撤回したい」

バーノンが地面に頭を、顔を擦り付けたまま言葉を紡ぐ。

「今更謝って取り返しがつくとは思ってない。だが、俺が間違っていた。……優れたパン職人への数々の無礼な発言、そしてアンタの種族への発言も、全て俺が間違えてた。アンタの全てを誤解してた」

「え、いや、え？」



「言葉だけじゃ、許してもらえないのは理解している、だからー」

バーノンが、小さなナイフ、恐らくローフブレードを切り分ける用のものをエプロンポケットから取り出して。

「これで足りればいいがー」

その切先を、己の指へー。

「ツウオオオオオオ!? ”影の導き”!」

「うお!?!」

踊るように、石畳の上を滑るナイフ。

カラツ、ン。レーザーの影から飛び出した礫がバーノンのナイフを弾き飛ばした。

「な、っんで」

バーノンが目を見開いて、転がるナイフを見つめる。この男は今、自分で自分の落とし前をつけようとしていた。

「いや何をしているんだ、アンタは！？ 今、今今今！！ 自分の指を切るうとしたのか！？」

もちろん、能力のえげつなさと反比例する善人トカゲは大慌て。

「ああ、アンタのような職人に、俺は言っちゃあならねえことを言った。……そうか、指だけじゃあ足りねえよな……」

「違う違う！ やめてくれ！ いや、ほんととやめてくれ！ いい！ 別に気にしじゃない！ な、ナルヒト！ アンタからもなんとか言ってくれ！」

覚悟を決めたような目で、ナイフをじっと見つめるバーノン、ラザールがたまらず遠山に助けをー！。

「やりたければ、やればいいんじゃない？ 自分の言動の責任って奴はそうやって取るもんだぜ」

巢穴から空を眺めるチベスナが、淡々と言い放つ。

「ダメだった！　　そういえばアンタも大概頭がおかしかった！」

「ストル、今、ラザールが俺の悪口を……」

「事実なのでセーフデイスね」

「ダメだ！　　独特な世界観の奴しかいない！」

「あ、あの、リザドニアン、いや、ラザールさんって言うのかな……」

2人目のパン職人、ヤードがホットドッグを食べ終えたようだ。ワタワタしているラザールをまっすぐ見つめて。

「ごめんなさい！　　僕もだ！　　完全に、完全に脱帽だ、貴方に言った全ての暴言をいかようにも罰して欲しい！」

帽子をとって、90度頭を下げる。

ラザールがまたビクリと尻尾を立てて。

「い、いや、よ、よしてくれ！ 別に俺は貴方達にそんな頭を下げさせる為にパンを食べてもらったんじゃない！ 俺は、ただー」

「ラザール職人」

最後に、1番味わってホットドッグを完食した壮年のパン職人、フリーマンが噛み締めるように呟く。

「あ、は、はい」

「……この生地、天使粉だけの祝福ではないな。塩と……麦酒……いや、麦酒を作る際に出る搾りかすを混ぜているのか？」

「……」

「お、マジか。食べただけでわかるもんかね」

「……へえ、面白いねえい、あの職人」

タネと仕掛けを知る3人が、素直に驚く。この世界の一般人には教会による情報統制の結果、”発酵”に対する知識はない。

にも関わらず、この男はホットドッグを食べただけで、他のパンとの違いに気づいたらしい。

「天使様からの祝福を受ける為に、天使粉には基本的には水しか混ぜない。それが我々パン職人の常識であり、真実である筈だが。これは、驚いた……膨らみだけなら祝福を普通に受けたパンと変わらないが、まるで、香りが違う……昔、祖父が、そのまた祖父より聞いた話を思い出す。……大戦より前、まだ天使様の祝福がこの世界にない頃の、失伝したパンの製法……」

「お、おい、アンタまで、よ、よしてくれ！ 俺は……」

「う、羨ましい……」

「……え？」

「才能だ、恐るべき、才能……天使粉に不純物を混ぜてなお、パンに昇華させることの出来る、強い祝福……！ ラザール氏……俺は、貴方が羨ましい……俺も、昔、若い頃、その製法を試したが、全く上手くできず、諦めたんだ……う、うおおおお……」

おっさんが地べたにはいつくばって唸り始めた。慟哭だ。

「え、ええ……」

「トオヤマ、あれは？」

「たまにいる変態の類だな、あ、見てろよストル。今からラザールはなんて言っと思っ？」

「えっ」

「あ、あの、よ、良ければだが、コツをお教えしようか？」

おどおどしつつ、ラザールがその男へ手を差し伸べる。

「えっ」

「ひひひ、やっぱり、あのバカお人好しトカゲ」

「い、今、なんと？　なんと叫びたのだ、レーザー氏、お、俺の耳が、おかしくなかったら、まるで、このパンの作り方を……」

「す、全てを教えることは難しいが、その、生地割合くらいなら……あつ！　ま、待ってくれ、な、ナルヒト、構わないか？　だ、大丈夫だ、全てを教えたりはしないから！」

「あー、もうこの辺は予想通りのムーブなんで大丈夫。色々その方が後で都合いいから、レーザーくん、好きにしてヨシ」

「ほ、良かった。……その、今からは無理だが、フレイマン氏さげよければ、童祭りが終わった後に」「是非お願いします！！！！」  
「うお」

「は、は、ははははは！！　な、なんたる僥倖！　なんたる幸運！　この歳になり、まだ新たな高みが見えるとは！　自分以上の才能と能力を持つ職人に出会えるとは！　天使よ！　感謝を！！」

「は、はあ！？　お、おいおいおい！　フレイマンのおっさん！　そ、そりゃあ、ねえぜ！　なんだ、なんだよ、アンタだけ！　そもそも俺たちを引き連れてレーザーさんのパンに文句つけに行こうつつつたの、アンタじゃねえか！」

「そ、そうだよ、フリーマン！ 何1人だけ凄い美味しい思いをしてんの！？」

「うるっさいわ！ 黙ってる、ひよっこども！ 俺はレーザー氏にいや、レーザー師に教えを乞うことにより更なる高みを目指すんじゃない！ ばーかばーか！」

「はあああああああ！?!」

「あ、あの、もしよければお二人も一緒に……その、俺も皆さんの伝統ある技術を勉強させてもらえれば、それに勝る幸運はないと思うんだが」

【イベント条件達成、仲間にレーザーがいる為、パン職人たちへの友好度に大きな補正が発生します】

「やったあああああああ」

ちゃんちゃんち。



なんかパントカゲを囲んで騒ぎ始めるおっさんたち。レーザーは不安げにキョロキョロしているが、もう大丈夫だろう。

ピコン。

【スピーチ・チャレンジ（懐柔）に成功しました。パンに関連するアガトラの商人達と友好関係が生まれました。レーザーベーカーを発展させる際、新たな業務提携の可能性が生まれました】

敵ばかりじゃあない。

遠山は今回いつもと違ったアプローチを取った。始末ではなく、取り込む。

これは遠山だけでは出来なかったことだ。仲間を増やし、理解者を増やす。これはそのまま己の選択肢を増やすことにつながるのだろう。

「……トオヤマナルヒト、アンタ、中々悪党が板についてきたわね。元々悪人ヅラだけだ」

「ボスがこの街の悪事の黒幕だからな。……予言の方は？」

ずっと、その輪から外れた遠山と主教が小さく言葉を交わす。

「まだなんとも。あれ以上に詳しいことは分からないまま。でも、警戒すべき人物は変わらないわ」

「幸運と英雄、か」

「ええ、それといくつか気になる情報もある。フォルトナには双子の姉がいて、もしかしたらその人物がこの冒険都市にいるかも」

「双子の姉？」

ドクン。

遠山のどこかで、遠山のものではない鼓動が蠢いた、そんな感覚がした。

「ええ。まあ保険よ。もし、本当に幸運とやらがフォルトナを指している言葉で、彼女が敵に回るのなら、肉親つてのは弱点になるとは思わないかしら」

淡々と言い放つ主教。彼女が決して只のゲバではないことがよくわかる。躊躇いなく清濁を合わせて飲み込める権力者ほど厄介な者はいない。

「……それ、なんかフラグ立つセリフだからあんま口にしない方がいいぞ」

「ふらぐ？ また意味わかんないこと言ってるわね。……まあでも、正直マジで驚いてる。魔術学院まで動かすとはね。ほんとの事言つと、今のアンタを脅かすことのできる奴なんているのかって気になってるわ」

「あ？」

「とぼけないですよ。竜殺しとしての実力と名声、そして天使教会うちの後ろ盾、さらには魔術学院とのコネ。あとは竜との友好関係。アンタはこの街にきてから着実に築いた関係性はすでに、ひとつの勢力程度なら敵に回しても余裕でつぶせるほどになってる。心底、アンタが敵じゃなくてよかったと、この私が思う程度にはね」

「……そりゃ、お互い様だ」

竜祭り。

ここまででは順調だ。

この街からの偏見や差別は人知竜の衝撃とパンの実力でねじ伏せた。

法と既得権益からの攻撃もラザールという最強のパントカゲと天使教会という太すぎるバックの力でねじ伏せた。

それは全て遠山が冒険で得た報酬だ。ここまで進んで、準備して、備えてきた。

きっと、ここからだ。試されるのは。

「そういえば、トオヤマナルヒト。アンタ、蒐集竜様は？ いや、人知竜がいる所にあのお方がいるのもそれはそれでまずいんだけど」

「おー……それ、な。いや、屋台の方も軌道に乗ってきたし、もう  
いっそ」

アリス・ドラル・フレアテイル。彼女はここにはいなかった。

遠山が主教に、もういっそこっちから会いに行こうと思ってる、  
そんなことを言おうとした瞬間だった。

ピコン。

【クエストへの介入者が現われました】

【崩壊したメインクエストが復活します。メインクエスト”竜と運  
命”が開始されます】

運命の知らせが、音を鳴らした。

「……あ？」

それはいつも、唐突で、でも確実に。

「ああ、ここにいらしたのですね。探しましたのよ」

楽器、ハープを鳴らし歌うような声だった左側にまとめられた緑髪、シックなロングの黒いメイド服。

少女の瞳。星型の虹彩が遠山を捕える。

「こうして、貴方とお会いするのは2回目、ですわね」

美しい少女が、いつのまにか、そこに。

たった1人で。

「トオヤマナルヒト」

その女は、遠山を知っている。

そして、今度は遠山も、その女を知っている。

全てを踏み躪り、ねじ伏せ、進み続けた愚者、2人。

――竜の祭り、あなたの二つ目の死は幸運によって訪れる。

「フォルトナ・ロイド・アームストロング」

幸運が、微笑んだ。

128話 ネガティブハッピー・パンラッキーデイ(後書き)

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さい！

コミックス1巻、たくさんご購入報告とかがありがとうございます！  
助かります。WEB版どんどん更新していくし、世界観のオマケ  
などTwitterで投稿してるので是非覗いてみてね。



129話 フォルトナ トオヤマ

「あら、嬉しい。わたくしの名前、覚えていてくださったのですね、トオヤマナルヒト様？」

さて、ここからは完全なる運試し。わたくしは別に今、このタイミングでここに来る必要なんてまるでない。

でも、わたくしはどうしても試さずにはいられない。

あらあら、ふふ。ウィスにバレたら確実に怒られてしまいますわね。

「アンタこそ、王国の王家様に名前を覚えてもらえるのは光栄だよ、お姫様、とでも呼んだ方がいいのか？」

あら、もう素性がバレてるんですね。彼の屋敷に顔を出してまだ

1週間も経っていない筈ですがー

ああ、そういうこと。貴女がいましたね、そういえば。

「あら、ふふ、ばれてたんですか？ やだ、恥ずかしいですね。…  
… 主教様、ですか」

「……っ、お目にかかれて光栄です、王国第3王女、フォルトナ王女様……」

一瞬、糸目の美人が言葉を詰まらせた。

【警告・天使教会は現在、貴女を警戒しています。王国の傀儡化が  
バレルのも時間の問題でしょう。警告・天使教会主教”カノサ・テ  
イエル・フィルド”に対して貴女の交渉、謀略は一切通用しません  
やるだけ時間の無駄でしょう】

厄介ー！。

天使教会主教。貴女が竜殺しと組んでいるのは正直ほんとにめん

どくさいです。もう、貴女があゝの竜教団のバカ大司くらいだったなら良かったのに。

有能で臆病な権力者ほど、厄介なものはありませんねえ。

「ええ、こちらこそ。天使教会の歴代主教の中でも、最も初代に近いとされる辣腕、貴女のお噂はわが国でも音に聞こえてございます」

「過分なお言葉、ありがたく」

ほら、もう顔色と声が元に戻った。

でも、不思議、今の主教様の反応はわたくしを警戒している者の反応。

さて、考えましよう、フォルトナ。さっきのクソメッセージから考えるに、まだわたくしが王国にした事の全てはバレてない、にも関わらず主教様はわたくしを警戒している。

なぜ？

「それで、何か御用ですか、王女様」

竜殺しがずっと会話に現れる、うーん、この人いつも目つき悪くてぶすつとしてるから表情が読みにくいなあ。

「んー、そうですね。……ふふ、困りました、実はわたくし、なんでもここに来たのか、よくわかっておりませんの」

「それは……難儀なことで」

「ええ、全く。さて、どうしたものでしょう。……もう大方の道筋は固まりました。今更わたくしが何をした所で、どうしようもないのですがね」

「大方の、道筋……？」

あら、言葉が過ぎました。でも仕方ない、本当のことなんですか  
ら。

「ええ。……素晴らしい屋台ですね。ここまで揃えるのにたくさん  
の試練があったのでしよう。竜殺し様、さすがアリスお姉さまを殺  
したお方ですね」

「……お姉さま？」

「あら、ご存知なかったのですか？ はい、昔馴染み、という奴で  
す」

「ーあら？ あららら？ わたくし、何を言っているんでしょう  
か。こんなこと言う必要はないのに。」

「昔なじみ……？ いや、今まで聞いたことなかったかな」

「あら、そうですね。あまりお姉さまと仲がよろしくないのでは？」

「……あ？」

あ、ダメです、止まらない。

あはは、ああ、今あなた怒ったんですね。わたくしに。あなたにとって、アリスお姉さまとの関係を”仲が良くない”そう言われるのは気に入らないことだったんですね。

でも、ならそうだとしたら。

「あら、ごめんなさい、気に障られましたか？ ごめんなさい、つい。こんなにもたくさんのお友達に囲まれている童殺し様ですもの。アリスお姉さまのことは別に大して考えていないのになって」

「お前……」

そんなに怒れるんなら、どうして。

「楽しみにしていっしょにしゃいましたのよ」

「は？」

「アリスお姉さまは、貴方に会うのを楽しみにしていました。でも、帰ってしまいました」

なんであの方が他人の為にあんなに心を乱す必要があるのですか。なんで、あの方があんな痛々しい笑い方をしないといけないのですか。

ああ、嫌い。嫌いです。嫌い。嫌い、嫌い。

ええ、いや、違う、分かっています、

分かっているんです、別にこの人は本当は大して悪くない。だってそうでしょ、この人は何もしていない、ただこの人はこの人にとつて必要なことをしてただけだもん。

アリスお姉さまが勝手に期待して、勝手に傷ついて、それで勝手になんか受け入れて帰っただけ。

あのデリケートドラゴンが勝手に自滅しただけ。

でも、わたくしはそんなの見たくなかった。

「帰った、ドラ子か？　なんで………てか、来てたのか、アイツ」

……あなたはきっと悪くない、でも、もうわたくしはあなたが嫌い。あの人を竜にあんな顔をさせることが出来るあなたが嫌い。

ああ、どうしてわたくしはノープランでここまで来てしまったんだろう。

どうしてわたくしはこんな恐ろしい連中が集まっている場所に一人でのこのこ来てしまったんだろう。

どうしてどうしてどうして。

「ああ、もうあれですね、考えるの面倒くさいです」

答えが、ぼろりと言葉になって落ちちゃった。

「は、お前ほんとさっきから何言って」

幸運にも。わたくしにはあなたを試す力がある。



幸運にも、人知の竜はこちらに視線を向けていない。

幸運にも、第一の騎士もこちらに気付いていない。

幸運にも、ああ、影の牙、そこにいたんですね。

【メインクエスト”竜と運命”が進行します】

あなたはきっと忙しい、きっとこれから色々なことが起きる、

竜殺し、竜祭りの中であなたはもう。

「アリスお姉さまもここにはいませんしね」

蒐集竜に会うことはない。

【秘蹟”？ロツ？…？ーマ？幸運使用。貴女は”幸運”です】

わたくしは、望む。

【貴女は幸運なので、幸運にもその望みが叶います】

もう、竜殺しが蒐集竜と会うことがないことを望む。

【貴女の幸運な運命が進行します。きっと全てあなたの望むままになるでしょう】

星の形をした矢印がふよふよと現れる。

印。  
ああ、いつもの、ですね。わたくしにしか見えない運命を示す矢

なんて、悍ましい力。これが出ている限りもう、わたくしに失敗はない。負けもない。全てこれから思うままに行く。

「ねえ、竜殺し様。あなたは運命を信じますか？」

「……今度は何の話だよ、マジで」

わたくしは、この力が嫌いだ。

なんでもかんでもうまくいく、行ってしまおうこの力が嫌いだ。何をすることもなく願うだけで全てがうまくいくのなら、わたくしの全てが無価値ではないかという気分になるから。

でもそれ以上にもっと嫌いなのは、この力ごときに負ける連中だ。

もしも、この世界がきちんとしているものならば、もしも、この世界が素晴らしいものならば、”幸運”なんてもの、いつか必ずどこかで躓くでしょう？

「あなたがもしも、本当にアリスお姉さまの友人なら、本当に本当に本当に、アリスお姉さまと共に並ぶことを許された存在なら、<sup>幸運</sup>んなものに負けるはずありませんよね」

手のひらに浮かぶ矢印へ、ふつと息を吹きかける。ぱつと、その矢印が消えて、それから。

「ドラ子の？ どういう、意味っー」

「え、トオヤマナルヒト、アンタ、どうしたの、急に固まって、えっー」

彼と主教の動きが固まる。2人の頭の上に、運命の矢印がふよふよと浮かんでいる。

幸運にも、あなた達の運命は固定された。

もう何も出来ない。幸運にもあなた達はなにをどうしようとも、もう、お姉さまには会えない。

そういう風にできている。わたくしが、そう望んだから。幸運なわたくしがそう願えば、運命は幸運にも歪められる。

「……あ、そういうえは色々やることがあったんだ。フォルトナ、さんもういいか？ ドラ子には宜しく言っといてくれよ」

「そう、ね。なんか忘れていている気がするけど、私も色々仕事があったわね。フォルトナ王女殿下、竜祭りをどうかお楽しみくださいませ」

【オプション目標達成。” 幸運にも貴女を警戒していた竜殺しと主教”は、忘却の病にかかったようです】

虚な目をした凡愚が2人、その場を去ろうとする。ああ、なるほど、こうなったわけですね。

幸運にも、わたくしに対して何かを警戒していた2人は、全てを忘れていなくなる。

全てはわたくしの思うがまま。本当はこのまま幸運にあなた達が死ぬのを望んでもいい。……まあ、それはまた今度でいいか。

「あ、銭ゲ、じゃない、主教様、そういえばあれ、天使粉が足りなくなった時の対応なんだけどさ」

「ああ、安心しなさいよ、このパン屋は新しい私のシノギになる。サポートは惜しまないわ。……今銭ゲバだったか？ あん？」

2人がまるで、わたくしのことなんて本当に忘れたようにその場から去っていく。

簡単すぎる、本当に簡単で。

「くっだらないですねえ。竜殺し、主教」

それじゃわたくしはこの辺で。色々考えないといけません、アリスお姉さまを、あの美しい竜を。

どうしてくれようか。まあ、どちらにせよ

「はい、おしまい」

竜殺し。あなたもやはりくだらない存在でした。ああ、ほんと、

全部くだらなくて簡単で、どうしようもない。

幸運も、こんなものに頼るわたくしも、そして、そんなわたくし一人どうにもできないこの世界の全ても。全部嫌いだ。

アリスお姉さま、貴女は違いますよね。わたくしを救ってくれた貴女なら。ああ、ああ。わたくしは本当にあなたを。貴女と

【メインクエストが進行します。メインクエスト】「あ？なんだ、これ気持ち悪っ」

べしっ。

竜殺しが、自分の頭の上にあった、わたくしの幸運の矢印を叩いた。

「え」

ハ？

「あ、マジかよ、銭ゲ、銭ゲバ、ちょっと頭下げて？」

「なんで今言い直さなかった？ どうして、銭ゲバを完遂した？  
やんの？ っチ、ほら、こっつ？」

主教が悪態をつきつつ、頭を下げて。

「ソオイ！！」

ハア？

パッチーん！ 竜殺しが次は主教の頭にあつたわたくしの矢印を  
叩いて。

「うっわ、なんだ、このクソ矢印」

びったーん！！ 矢印が地面に叩きつけられる。



矢印を、誰にも触る事のできないそれを、運命を。

「なん、で」

【警告】

【すでに竜殺しの”運命”メイソクエストは壊れています】

【警告・竜殺し、いえ、遠山鳴人の技能が発動しました。技能】

「色キツシヨ!!!」

べきり、遠山鳴人のブーツがそれを踏みにじった。

【”思い通りにはならない”】



129話 フォルトナ トオヤマ（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！

コミックス1巻、明日から発売日です！

紙の本、凄え迫力あってよかったです。

あと、特典SS書いてるんですけど、僕の頭の中だけで連載していた高校時代の遠山鳴人が主人公の、人たらし死にたがり中性的王子様重感情美少女や、一軍女子擬態激思想強重美少女などの重たい女の子達と、怪奇現象や都市伝説のトラブルに巻き込まれながら友達作り高校生活を謳歌するお話が覗けます。読んでもらえると助かります。

130話 トオヤマ フォルトナ

「うっわ、トオヤマナルヒト、アンタ……とうとう、ついに、頭が……」

本気の不審者を見る目だ。

主教が、糸目を燻らせて遠山を見つめる。

「あ、違う！ 違う違う違う違う！ これはそういつんじやねえよ！  
つか、お前知ってるだろうが俺が……おっと」

クエストマーカーがまた、だ。再び遠山を指差す。

【竜大使館には向かわな】

「うっとおしいな」

すかさずそれをまた握り、雑巾搾りしてその辺に投げ捨てる。

「――なんで」

「うん……？」

「あ、いえ、ふふ、なんでもいじわる」

「うわ、また出てきやがる。なんだこれ。よつと」

息継ぎのように矢印を壊して曲げて捨てていく。

フォルトナの顔は逆光で隠れて見えない。

「――竜殺し様」

「うん？」

「明日、竜大使館で竜祭りを記念しての狩猟大会が開かれるのはご存知ですか？」

「え？ あ、そう言えば街の呼び込みで、なんか……ドラ子にはなんも聞いてねえけど」

「最近正式に決まったことですから。……アリスお姉様はきっと、貴方様にきてほしいと願っているはずです。ええ、わたくしは、それをお伝えに参りました」

「狩猟大会？ おい、なんだ、そりゃ……」

「ああ、そうですね、お忙しいですよ、竜祭りです自由市場に参加しているのなら、そんな暇はありませんよね」

【クエスト目標・竜大使館には行かない】

「いや、行くけど」

まただ。メッセージが流れると同時に、また何かがおかしい。自

分の頭の上に矢印が現れている。

また捨てる。当たり前のように。

「そーうですか」

目の前の女、フォルトナの表情は変わらない。穏やかな微笑みを浮かべたまま、遠山をじっと見つめて。

「ああ、そうだ。あのドラゴン、このまま放っておくとまた独特な拗ね方しそうだし」

「そうですか」

「ああ、そうなんだよ。あんたは知らないだろうけど」

「いえ、知ってますよ。あのお方は、自由なようできて、その実とても、繊細ですから」

「へえ」

「どうされましたか？」

「いや、アンタアレだな」

【主エスト目標・口を閉じる】

【ク人ト目標・それ以上何も言うな】

【クエ公ト目標・やめて】

【クエス幸目標・従って。なんで、なんで、なんで、なんで】

【クエスト目標・あなただけ、なんで逆らえるの、なんで、思い通りにならないの、そう願ったのに、叶はずなのに】

【運命・お前はそれ以上喋ってはならない、竜大使館にも行かない。アリス・ドラル・フレアテイルのことを考えることも許されー】

目の前に一気に現れるメッセージ。いつもとは違う様子のメッセージが視界を埋め尽くさんばかりに。

ぴん、ぴん、ぴん、ぴん、ぴん、ぴん、ぴん、ぴん、ぴん、

頭に、腕に、足に、首に、顔に。身体の至る所にあの蛍光色の矢印が現れる。



それは、運命の知らせ。幸運なものが願ったことにより、幸運にも叶ってしまう望み。

運命は、今、遠山鳴人がそれ以上喋らないことを、今すぐ黙る事を決定してー

【ウケるwwwwwwコイツ本当人の話聞かねえwwwwwwー  
いいのよ、遠山鳴人。あんたはそれで。知識の眷属、ハーヴィーの  
名の元に。アンタの運命の補助輪役として、告げる。”技能、発動】

霧に飲まれかけているソレが、あまりの愉快さに一瞬浮き出る。

その冒険はすでにハーヴィーの興味の対象となっていて。

【”思い通りにはならない”】

「アンタ、ドラ子の事好きなんだな」

「」

ベキベキベキベキベキ。

フォルトナの差し向けた幸運が、終わる。

遠山を指していたいくつもの矢印が、勝手に1人でにねじ曲がり、歪み、へし折れていく。

人の話を聞かない、聞く気がまるでない男。

そもそも、そんな奴が他人が望む運命に従うはずも、従える筈もない。何せ、遠山鳴人の運命はすでに捻じ曲げている。他でもない自分自身の手で。

「ど、うやって

「あ？」

フォルトナは知らない。運命を履行することで先に行こうとして

いた彼女は知るはずもない。この男の現在ではのプレイスタイルは  
――

「よし、決めた。店はラザールとドロモラに任せて、俺はその狩獵  
大会に行くわ。店の宣伝しちゃうぞー」

欲望の  
メインクエストままにぶん投げプレイ。

興味深いサイドクエストが発生すれば、メインクエストなんても  
う、関係ない。

6770

【メインクエスト”竜と運命”が失敗しました】

【サイドクエストが発生しました】

このメッセージ。いつもの感じだ。さっきまでの強制するような  
ものでなく。

【クエスト名”狩りの時間”が進行します。竜大使館に向かう事でクエストは進行します】

「――」

「まあ、というわけだ。メイドさん、どうも。ドラ子に伝えといってくれ。待ってる、逃げんなよって」

「……承知、致しました」

表情がこわばったのは一瞬、フォルトナがすぐに柔らかく微笑んで、スカートの手端をつまみ一礼。

くるりと振り返り、去っていく。

「あ、メイドさん、少し待って」

「……まだ、何か？」

ほんの少し、疲れているように見える彼女に遠山が差し出したの

は。

「ホットドッグだ。良かったら帰り道でつまんでくれ。超美味いから」

「ーありがとうございます」

ホットドッグを受け取った彼女がぺこりと頭を下げ、去っていく。彼女が振り返ることはない。

「……………どう思う？」 審問官殿

主教の短い問いかけ。その意味がわからないほど遠山はボケてはいない。

「推定クロ。多めに見積もって灰色。でも、やるのは今じゃない」

「珍しく気が合うわね。……………一瞬、アンタの奇行の前、私は一瞬だけど全部忘れたわ。あの王女様を警戒していたことや、アンタと擦

り合わせた予言の内容とか。全部忘れてレイン・インの竜祭り限定衣装でのイベントの事と、お金のことしか頭になかった。これは…」

「判定に困るんだよ、アンタの記憶は」

絶妙にフォルトナ関係なしに主教の責任かも知れない記憶の一时的な忘却。だが、それは遠山も同じ事だ。

「で。どうするの？ まあ、何はともあれ……7割は罷よ？ このタイミングで、この内容。竜大使館で野暮なこと出来るわけがない、と思いたいとこだけど。……アンタという前例がある以上もう、ありえない、なんて言えないわ」

「主教様が俺の敵じゃなくて良かったよ。臆病で有能な権力者ほど厄介なもんはねえ」

「それ、褒めてるつもりだとしたらセンスなさすぎ。……本気で行くつもりなのね」

「俺の故郷には虎穴に入らずんば虎兇をえず、というありがたい言葉があつてだな。まあ、ドーンとやってみようや」

「古代二ホンの言葉の引用とかは色街の高いお店でやりなさい。鼻につくわ。……さて、どうしたものか。竜大使館か、教会の羽と、アンタだけじゃ向かわせるのは少し、足りない気がするわね。……まあ、でもどのみち狩猟大会へは私、顔を出さなきゃだし……ああ、なるほど」

「え、主教様も行くの？ 竜大使館」

「つたり前でしょ。蒐集竜様の催しなんだから。つーかアレだわ。間違いなく、フォルトナが何かやらかすんならここだわ。結果的にアンタが向かうのは私たちにとっては妙手になるかも」

「お？ またスーパーかしこが発動したか？」

「っさいわね、凡人が天才を茶化してんじゃないわよ。明日の竜大使館には、この街の権力者が揃う。舞台が整ってしまうのよ。本当にフォルトナが何かをしてくすつもりなら、一手で、冒険都市をめちゃくちゃにしてしまえる舞台がね」

「あー、確かにアレだな。火をつけるんなら燃料は一箇所にまとめてぶち込んだ方が、燃え上がる訳だ」

主教の言葉に遠山が頭を捻る。

「さて、どうしたものか。表向きはフォルトナは王国の貴賓客。暗殺はもつてのほか、奴を怪しむ理由はあまり公には出来ない、となるともう、あれね。正攻法で行くしかないわ」

ため息をつく主教。その声色はしかし存外にはつきりしたもので。

「お、もしかして同じことを考えてるか？」

遠山が視線を主教に預けて。

「最強の手札を揃えて出たところ勝負」

2人の声が重なる。



主教はうへえっと顔を歪ませる。遠山はイタズラが成功したガキみたいな表情で。

「……私、やっぱりアンタのこと嫌いだわ」

「俺はそうでもねえぜ、主教様」

そして、2人が同時に屋台のテラス席に座る、現時点での味方最強戦力を眺めた。

「ずぶぶ、ニコちゃん、これはなんというソースだい？ へけ、ケチャップ！ いいねえい、ポモドロを煮込んでお砂糖と塩で味付けしたのかい。どれどれ……むむ！ ほのかな酸味とポモドロの旨みがホットドッグの塩気を包んでまるやかに！ なんかどんどんお腹が空いてくる味だねえい！」

パクパク人知竜が、ケチャップにより新たな知見を得ている。

「よし、頼み込むか」

「ほんと、頼むわよ。……って、アンタ、なんで笑ってんの？」

主教はふと気づいた。この面倒な状況の中、思った以上に竜殺しが殺伐とはしていないことを。

「あ？ おー、いや、ふと思ったんだよ。ファンタジーのお祭りの中、竜の棲家で謎のイベント、しかもそこには俺の命を狙ってるかもしれない敵がいる……これ、かなりよー」

初めから遠山鳴人は知っている。これは自分の続きの人生。本来ならば、あの箱庭で終わっていた遠山鳴人の続きなのだ。

だから、これは。

「冒険だなあって」

ひひつと遠山が薄ら笑いを浮かべて人知竜の元へ。

「……きつしゅー」

それを見送る主教から漏れる声は祭りの喧騒に紛れていった。

渡されたホットドッグ。奇妙な形のパンはしかしよく考えてみればなんてことない誰にでも思いつくようなものだ。

でも、フォルトナはそれを今の今まで考えつくことも出来なかった。

「枷……」

そう、この世界はそういう風に出てくる。運命により調律され、配役されている。誰もそれに逆らうことなどできない。

己の運命を自覚しようとも、それに逆らうことなどー。

「そんな、わけが、ない」

フォルトナは急足で街をゆく。さっき自分が見たモノを彼女は決して認めるわけには行かなかった。

運命が捻じ曲がる、運命が無視される、運命がぶん投げられる。

そんな生き方が出来るヒュームがいて良いはずはない。もし、それが本当なら自分は、一体何のために。

ふと、手に持ったままのホットドッグを見つめる。

「食べれるわけ、ないじゃないですか」

フォルトナがそれを口にすることは決してなかった。でも、決してそれを捨てることも出来なかった。

130話 トオヤマ フォルトナ（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！

発売から早くも4ヶ月経ちますが、電子や本ともにじわ売れ続けます。ほんとありがたい。

4月以降で2巻出る予定です。Twitterで告知しているのでぜひフォローしてチェックしてください。

131話 1日目の夜 それぞれの前哨戦

「うーす、じゃあとりあえず、今日一日お疲れ。がきんちよどもは？」

夜、竜祭りの夜の部はまだ続いているのだろう。

窓の外から街から響く音楽が夜風に乗って、わずかに届いている。

「よく寝ていますデイス。みんなかなり頑張ってくれましたから、相当疲れも溜まってる筈デイス。水浴びしてご飯食べたらすぐすやすやでした」

「ふむ、水浴びもいいが、そろそろその辺も考えないといけねえな。竜祭りが終わった頃にはよ」

「ふう、始まった時はどうなるものかと思ったが、なんとか形にはなりそうだな。人知竜様と魔術学院には当分頭が上がらないよ」

パン屋の屋台、初日をなんとか乗り越え、撤収。夕飯を済ませて、子供達が疲れて寝静まった後、遠山の一味はリビングでテーブルを囲んでいた。

「デイス、連中にも人の心があったのが驚きデイス。まあ・ラザールのパンがそれほど素晴らしいものだった、という認識が正しいのでしょうけど」

簡素な布の寝巻き、いつものポニテを解いてただの美少女になっているストルが椅子から足をぶらぶらさせながらつぶやいて。

「すぷぷ、そうだねえい。ホットドッグ、あれは素晴らしいかった、新たな知見だよ……」

ふわり。



そよ風が吹いた、そして次の瞬間には空いていた席に当たり前のように夜を従わせるような闇色の美女が現れていた。

人知竜が、急にきた。

「……」

遠山がグビリと水を飲む、ラザールがむしやりと夜食用のレベルの葉っぱにソーセージを包んだものを口に放り込む、そしてストルはイスのそばに立てかけていた剣を手にして。

「ッ！」

無言で振り抜こうとー！。

「ストップ！ ストル！ ハウス！      ラザールくん！ お酒を  
ストルくんに飲ませて！」

「そ、それで落ち着くのか!? 対応合ってるか!?!」

現実逃避から戻ってきた大人2人がストールを抑える。

その様子を人知竜はニコニコと見守っていた。

「デイス!! どこから入ってきたやがりましたデイスか! この魔術学院の護り竜は!」

「やだなあ、正義の幼体。そんなにいきむなよう。ずっといたさ。君が子供達を寝かしつける為に子守唄を歌っている時から、ずっとねえい」

「ぎゃ!?! み、見てたのデイスか!?! お、おのれ、人知竜……!」

「あー……まあ、ストール落ち着いてくれ。人知竜、アンタもあまりうちの騎士を煽らないでくれ」

「ふうん、うちの騎士、かあ。いいねえい、その呼び方。僕のこと  
はなんて呼んでくれるんだい？」

によによ、余裕の微笑みの人知竜。

遠山はチベスナ顔で目をぱちくりした後に。

「人知竜」

名前を呼ぶ。

「……名前で読んでもいいんだよ？」

人知竜がコテンと首を傾げる。彼女の液体の闇のような髪が動き  
に合わせて垂れ下がる。

魔術師が見たらそれだけで、心臓が止まってしまつような可憐さ  
に、チベスナがまた目をぱちくりして。

「アイ」

「しゅぶ」

チベスナに名前を呼ばれた人知竜が目を見開いて固まる。攻撃力は高いが、守備力は低い。

まあ、攻めるのは上手いが攻め込まれると弱いのは、ある島への攻略を見ても明らかではあった。

「やべ、固まった。まあいい。ちょうど話したかったメンバーが大体揃った。とりあえず、人知竜、今日はありがとう、本当に助かった」

固まった人知竜に遠山がぺこりと頭を下げる。

「俺からも同じ感謝の言葉を。古き偉大なる全知、いや、人知の竜よ。御身と魔術学院の皆様には感謝しきれない」

ラザールもそれに倣い、ぺこり。マナートカゲ。

「……なあに。ラザールくん。君はもつと胸を張るべきさ。気難しい魔術師たちを虜にした己のパン作りの才能をねえい……あれは、本当に美味しかったよう」

「光荣です」

「だけど、すぶぶ。今日のラザールくんの奮戦と感謝を伝えるだけの場じゃあないよねえい。ここは。遠山鳴人くん、何か僕に頼みたいことがあるんじゃないかな」

「なんでも、お見通しか。……ああ。ラザール、ストルも聞いてくれ。この前話した予言の話だ」

「予言って」

「そう、俺と銭ゲバのどちらか、あるいは両方がこの竜祭りで死ぬかもしれないって奴」

「……」

「俺はこういうお約束には詳しくてな。古今東西、物語でよくあるのはこういうピンチを仲間を心配させたくなくて黙って自分1人でなんとかしようとするってのがあるあるなんだが、悪いが俺には余裕がない」

「だから、きちんとここで話していたくてな。……明日、俺と銭ゲバは予言に出てきた敵、かもしれない奴の誘いに乗る」

「以前の話では、何もしない、という方向じゃなかったか？」

「状況が変わったのさ。ラザール。今日、向こうの方から俺と銭ゲバに接触があった」

「一応、ワタシはあなたの動向に注意していたはずですが、怪しい人物は……」

「俺も、特に……」

「なるほど。たまたま運悪く、店が忙しかったのと、少し俺と銭ゲバが屋台から離れているタイミングあったる？ その時だ。だが、ラザールとストル両方の索敵から外れる、か」

何かがおかしい、話が出来すぎだ。やはりあのメイドの女は……。

「な、る、ほ、ど。トオヤマくん、つまり君、自分と銭ゲバちゃんを囿にするつもりかい？」

「お見通しか。そうだ、”幸運と英雄”。現時点では確定ではないが、怪しいのはあの女、フォルトナ・ロイド・アームストロングとその従者だ」

「フォルトナ……」

「ラザール、お前の元雇い主、か？」

「……王国は派閥がいくつかあってね。王に忠誠を誓う王家派、その息女、ルート第一王女を中心とした第一王女派、そして、子息である王子を盛り立てる王子派。この三つの勢力が主力で、俺は王家派に属する勢力だった。フォルトナ様、いや、フォルトナとは直接的なかわりはないが……」

「現状、奴が仮想敵だ。知ってることがあつたら教えてくれ」

「感想になるが、その、よく、分からないんだ」

「よくわからない？」

「あ、ああ。すまない、思考に霧がかかっているようで、その、思いつけない、考えてみると、これはおかしいな……」

「人知竜？」

「ふうむ、興味深いねえい。今、ラザールくんを視た。でも、魔術式や秘蹟の影響は見当たらないねえい。だけど、なんていうのかな。」



……なにかが、歪んでいる、という奴かな？」

「歪んでいる？」

「うん、言語化が難しいねえい」

「道、ふうむ。君たち定命の者にどう説明したらいいものか、なんというべきか、ラザールくんが何も思い出せないというのが理由もなく決まっている、そんな感じだねえい」

「デイス？ あなた、何を言ってるんですか？」

「ああ、心配しないで良いよ、正義の幼体、きみの頭が悪いんじゃない、僕の説明が迂遠だということは理解しているからねえい」

「トオヤマ、わたし、この女嫌いデイス」

「ごめんなー、ストル。でも味方なんだよ、ごめんなー」

「……いや、人知竜様のいうとおりだ。俺は、何か、おかしい。フォルトナ、フォルトナ様……幸運、俺は、俺は何かを知って、覚えて……」

「ラザール、すまん、もういい」

「ナルヒト？」

「これでフォルトナとやらのきな臭さが増した。片付けるに越したことはない。良い加減、後手に回るのも、もう、面倒だ」

「トオヤマ、しかし、彼女は王族デイス。それに今や竜大使館の所属に……」

「それだ、ストル。俺と銭ゲバもそれで最初は様子見を選んだ。だが、今日、具体的に向こうから誘いをかけて来た、上等だ、乗ってやるうじゃねえか」

「作戦はシンプルだ。明日、俺と銭ゲバはフォルトナの誘い通り、

竜大使館の狩猟大会に向かう。そこで、フォルトナがこちらになんらかの悪意をもった行動を取った時点で始末する」

「ふうむ、トオヤマくん、つまり、先手は向こうに譲る、と?」

「ああ、必要なのは連中を始末する理由だ。竜大使館に奉公に出てる王族を討つ正当な理由が欲しい、正当防衛って奴だな」

「もし、向こうが手を出してこなかったら?」

「その時はその時だ。良いことじゃねえか。俺や銭ゲバの考えすぎ、予言なんて適当なものでした、めでたし、めでたし、ってな」

まあ、その後にも仕掛けてきたりする可能性がないわけではないが、それはその時に考えればいい。

遠山は冷静に、相手を殺す算段を整えていく。要はこれはいつもと変わらない。怪物を殺すために装備を揃えたり、情報を集めたりするのと同じことだ。

「リスクがあるねえい。こと、殺し合いにおいて先手をむざむざ相手に譲るのは悪手だと思うけど……」

「その点に関しては、まあ、うん。そう。悔しいが、一つはつきり言えるのは、すでに俺たちは前哨戦で負けてるんだよ。フォルトナとやらが本当に俺を殺す仕込みとして、竜大使館に身を寄せたのなら、もう、見事というしかねえ」

「王族という立場、竜大使館という勢力の特異性。ドラ子っつー扱いの難しい災害みたいな存在さえも奴はクリアしたってわけだ。…中々の冒険上手じゃねえか」

「……トオヤマくん、キミ、今……」

「あ？ あれ？ ひ、ひひ。ああ、なんでだろうな。わかんねえ」

嘘を、ついた。

遠山は自分がなぜ笑ってるのか本当は理解している。

すこし、楽しい。

立ち回りの見事な敵の考えに思いを馳せ、それにどのように対抗するか、自分の駒と相手の駒を想像し、その活用を考える。

対等な敵との争い。

その行為が、少し楽しかった。

遠山には今や大事なものがたくさん出来た。友人、仲間。前の世界ではあまり恵まれなかったものが、この続きの世界ではたくさん出来た。

負ければそれを全て喪う、全て無くす。それを理解して尚、だめだ、やはり、少し楽しい。

「すぶぶ、トオヤマくん、キミは救いようがないねえい。ああ、でも、とても良いねえい……」

「あ、やべ。そうか、心が読めるんだっけ？ 竜は」

「おっと、気分を害したかい？」

「いや、そうでもない。……すまん、ラザール、ストル。一つ嘘をついた」

「嘘？」

「今、少し楽しいんだ。フォルトナってやつがどんな風に俺を殺そうとしてんのか。何をしようとして、どのように盤面を探ってるか、考えるのが、楽しい」

「ああ、うん。大丈夫デイス、今更トオヤマにそのへんの倫理観は期待していないデイスので」

「むしろ驚きだ。本気で誤魔化せてると思っていたのか？ ナルヒト、アンタ最初から笑っていたぞ」

「え、まじ？」

「あ、ああ、あれ？ 待って？ もう少し、ストルにしろ、ラザールにしろ、こころ反応ないの？ 今、俺、命狙われたり、最悪、負けたらお前らにも影響ありそうなことを楽しいと言っちゃったんだけど」

「慣れた」

「慣れた？」

「うん」

「あ、そう……」

「すぶぶ、それで、人格に問題のある我らが竜殺し殿？ 具体的な  
作戦をお聞かせ願いたいなあ」

「あー……うん。作戦、ああ。そうだな、説明するよ」

「作戦名は”正当防衛”、シンプルに行こうや」

にいつと、遠山が笑う。

蝋燭の火がゆらゆら揺れる中、影の牙、騎士、そして竜を交えた  
冒険の作戦は続いた。



夜だった。

竜大使館のフォルトナに与えられた貴賓室の中、彼女はベッドに腰掛ける。

窓を見上げる、月の明かりが注ぐ。

「眠らねえのか。明日は早いんだろ」

当たり前のように彼女の部屋に侍り、壁に身を寄せていたウイスの言葉。

フォルトナが目を瞑り、頷く。

「ウイス」

「なんだあ？」

「貴方は運命を信じますか？」

「……アンタにしか見えない矢印の話か？」

「いえ、それがね、もしかしたら、わたくしだけじゃないのかもしれないんです」

「あ？」

「それどころか、ふふ、わたくしはもしかしたら、とてつもない勘違いを、していたのかもしれない」

「……」

「お父様とお母様を人形にしました。魂を殺して、幸運にも手に入った魔術学院の力により人形にしました」

【クエスト名・”親子”】

【クエストクリア！ ”あなたは見事に王の魂を殺し、人形に変えました”】

「上姉様を殺しました。あの老兵も、彼女を慕うものもその全てを屠りました、幸運にも霸王はわたくしの前に敗れたのです」

【クエスト名・”霸王、落日”】

【クエストクリア！ ルート・ロイド・アームストロングを始末しました。霸王の道はあなたの前に潰えました】

「上兄様を殺しました。月の光もわたくしには届かず、彼の全てを負けさせ、殺しました。わたくしの、甥か姪になるはずだった者も殺しました」

【クエスト名・”新月の日”】

【クエストクリア！ 貴方は王家の血に連なるものの殆どを殺しました。おめでとうございます。継承秘蹟の殆どを手に入れることが出来ます】

それは彼女の、冒険の記録。

道が示されていた。だからそれを履行した。

たどり着くべき場所が示されていた、だからそれを目指した。

出来るから、やった。

あとに残るのは、血まみれの冒険の記録。自分が進んだ道には慟  
哭と悲鳴と怨嗟のみが積もっている。

「でも、別にそれはいいのです。納得してやりましたから、別に」

フォルトナの独白を、ウイスは黙って耳を傾ける。

「運命を履行し、運命を進める。そうすれば先に行ける。わたくし  
はこの世界が嫌いです。だから、わたくしはなすがまま、気の向く  
ままにやってきました、でも、もし、それが始めから間違っていた  
としたら？」

「わたくしは、運命を履行するのではなく、わたくしが本当にやる

べきは運命に逆らうことだったのでは？」

「幸運、この力がもしも、本当はその為にあつたものだとしたら？」

「お父様もお母様も上姉様も上兄様も……トレナも、わたくしはもし、もしー」

手にかけることなく、たどり着けたのでは？

その先をフォルトナは口には出来なかった。それをすれば、自分がどうなるか、分かっていたからだ。

「この矢印……」

フォルトナは、今、自分を指差す矢印に手を伸ばす。あの男がそうしたように、それを叩こうとして。

すかつ。虚しく、手はすり抜けるだけ。

決して矢印に触れることは出来ない。

「あは、ふふ。そうですね、今更、そんな都合の良いこと……」

「姫様よお、悪いが俺様あ、アンタの苦しみはどうでもいい、理解もできねえし、するつもりもねえ」

あくびしながらウイスが言い放つ。そのまま壁に体を預けて。

ベットに座り、俯く主人をみて。

「前にも言った。好きにしるや、俺様はどっちでもいい」

「ウイス……貴方は……」

「俺様は剣だ、俺様は力だ。それだけでいい、でも、まあ、あれだ。」

「あなたの気づいていないあなたの正体を俺は知ってる」

「え？」

「クソガキさ。あなたは結局、シンプルだ。ムカつくんだろ？ 気に入らないんだろ？ だから、王国をぶち壊した。癩癩で暴れるガキと同じさ。運命とか関係なく、多分あなたはいつかやってたぜ」

「あ……」

「だから、好きにしろ。俺様、もう寝る」

好き勝手に言って、そのままウイスが立ったまま目を瞑る。

フォルトナがそれを見て、少し笑う。

「好きに、ですか」

フォルトナが、咳く。

原点が彼女にはあった。生まれた時からムカついていた。生まれた時から腹が立って仕方なかった。

「好きに」

ああ、そうだ。

フォルトナが窓の外を眺める。

夜に、月が浮いている、炭を溶かし込んだ水の上にぽっかりと浮かぶ。

思い出す。

自分の原点を。

「幸運にも」



窓を見る、もう、それしか見えない。月が、本当に綺麗で。

「幸運にも、今日は、月が綺麗ですね」

「ーもう、それだけでよかった。」

131話 1日目の夜 それぞれの前哨戦（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さい！

よければ下のTwitter是非フォローしてください、作品のTIPSの眩きなどしてます。なかなか本編で触れる暇がないものともたまたまに更新します。

### 132話 キリヤイバと竜への道

「狩猟大会！ パーティで参加するぞ！」

「これ見ろよ、優勝者には蒐集竜様直々に、宝物の授与があるって」

「竜の宝物……なんなんだろうな」

「わ、私はもう竜を間近で見れるだけで、もう……」

「わあ！ 見て、ラウド！ あそこに見えるすごい綺麗な建物。これが、竜大使館……御伽噺に出てくる蒐集竜様のお家なのね！」

「うおー、まだ結構距離あんののがつつり見える。どんだけでかいんだよ」

「うへー、喉乾いた……あ！ お水屋さん！」

「俺はグレブ酒ひとつ！ おっちゃん、この皮袋に注いで！」

「あいよー、ヒナヤの雪解け水に、グレブ酒ねー。お兄ちゃんたち、冒険者かい？ 竜様の狩猟大会に出るんだね、頑張ってくれよー」

竜大使館へ続く丘の道、数多の人々が騒ぎながら進んでいく。

道の脇には商人たちが街の中核と変わらないくらい規模で店を展開。喉を乾かした人々に水や果実酒を売りつけている。

竜祭りは街の中央だけの賑わいではない。郊外にある街を一望出来るこの丘にまで祭りの熱は十分に広がっていて。

かぼ、かぼ、かぼ。

人混みの中をゆっくり、ゆっくり進む大きな馬車が一つ。

人々が怪訝な顔を馬車に向け、そしてその御者を一目見た瞬間、はっと息を呑む。

「聖女様だ……」

「ありがたや、ありがたや」

「天使教会に安寧を……」

帝国統一宗教の権威はなかなかのものらしい。天使教会の刻印と、そしてその御者を聖女が勤めている、それだけで帝国市民は馬車の中に誰がいるかを察していた。

「ありがたやー、銭ゲバ様」

「冒険者ギルドに投資してくれてありがとうございますーあなた様のおかげで装備を整えて3級冒険者になれましたーありがたやー」

「でもできればもう少し利子を減らして下さい」

「銭ゲバ様ー主教様ーお金の眷属さまー」

なんかいまいち敬っているかそうでないか、よくわからない態度を取られている。

どうやら、冒険者の中での主教のイメージは悪くはないものの、

あまり清廉なものでは最早なさそつだ。

馬車が、進む。

そして、その光景を馬車の窓を少し開けて覗いていた男がつぶやいた。

「……なあ、主教様、あんたの本性割とバレてね？」

「あん？ ああ、冒険者どもね。全く銭ゲバとかないわよ。誰のおかげでなんの後ろ盾もない農家の三男坊や放蕩息子どもが最低限の路銀をギルドから渡されると思ってたの？ うちのおかげよ、うちの」

「ああ、なんか補助してんのか。やるな。でも、なんか利子がどうのじつなの……」

「聞こえないわね、私には何も」

言いながら馬車の対面に座る白髪の糸目美人、天使教会主教、力ノサ・ティエル・フィルドが馬車に備わった盃から小さな果物を摘んで口に放り入れた。

ああ、そう。

男、遠山鳴人はそれ以上の言及を避け、馬車の窓からまた差とを眺める。

「これ、想像以上の人混みだな。狩猟大会ってそんな大きなイベントなのか？」

「あつたり前でしょ、この祭りの主役が行う一大の催しよ。それにこの街の市民にとって蒐集竜様のお住まい、その敷地に入れることなんて一生に一度あるかないかの荣誉なことだしね」

「あれ。でも主教様はあんときも呼び出されてなかったか？」

「あんたの感覚がマヒしてんの。言っておくけど、あの時、アンタ

が蒐集竜様のご求婚を断った時に集められてたのってこの街のトップたちよ。アガトラのトップって言うとそのまま帝国にとっての重要人物でもあるんだからね」

「おー……そうか。考えたら俺、異世界転移物のありがちな権力者とのいざこざにあんま巻き込まれてないと思っただら、やっぱりあれか、ドラ子のおかげか」

「まともな頭の権力者なら、アンタに手を出そうとは思わないわ。私  
の場合は、アンタに巻き込まれた形だけだ」

「そう言うなよ、今更だぜ。相棒」

親指と人差し指を交差しハートマークを作る遠山。

「誰が相棒よ」

しっしっとしてそれを手のひらで払う主教。

もう完全に付き合い合いの長い腐れ縁のようなやり取りで。



「……ご歓談中、失礼します、主教さま」

ぴゅん。

こんこん、窓が外から叩かれる。その瞬間、にゅっと窓の上から白毛の長毛ネコちゃんフェイスが馬車の中を覗き込んでいた。

「ご歓談していないから構わないわよ、どうでしたか。トッスル」

がらら、主教が窓を開き、返事をする。

主教の隠密、教会の羽の腕利き隠密、獣人のトッスルだ。

完全なネコちゃん顔、エメラルドの瞳。位置的に馬車の屋根の上から頭を逆さにして覗き込んでいるのだろう。

「索敵の途中経過の報告です。半径5キロ範囲に怪しい者はいません。この馬車を狙う者も現状の所は確認できません。また審問官殿の屋台、ラザール補佐官を含め、教会味方勢力付近に脅威となりうるものも確認できません」

「貴女が言うのならそうなんでしょうね。トオヤマナルヒト、アンタはどう思う？」

「主教様が信用する情報ならこつちも同じだ、そこを疑い出すとキリがない。だが、となると事が起きるのはこの後って訳か」

「ま、そういうことになるわね。今の所仮想の敵であるフォルトナの真意がつかめない以上、私たちは後手に回るしかない。歯がゆいわね」

「大丈夫さ、主教様、俺の故郷にある言葉に、後手必殺つてのがある。安易な先手よりも、確実に殺せる段取りをふもつや」

「……あんだ、やっぱきつしよいわね」

「あ？」

「命がかかってるっていうのに、あんた昨日からずっと楽しそうだわ。……そういう顔をする奴、何人か知ってるけど、長生きした奴は見  
た事ない」

「ひひひ、そりゃ失敬。……人知竜はもうついたところか？」

昨夜の話で人知竜はこちらの味方についた。一緒に竜大使館に来て、主教の護衛をしてくれるという話だがー！。

「どうでしょうね。あの方のことだもの。こんな風に噂話をしてたら急にまた現れて」

「すぶぶ、糸目ちゃん、君は良い勘をしているねえい。秘蹟の副産物かな？ 興味深い知見だよ」

トッスル以上の気配のなさ。

当たり前のように、主教の隣にいつのまにか人知竜が座っている。銀色の髪を隠す大きな三角帽子をそつと脱いで、膝に置いて笑う。

馬車内に沈黙。かぼかぼ、がらがら。馬の蹄の音と車輪が道を叩く音だけが響いて。

「あ、人知竜、よう。こんにちは」

「ふ、ふふふ、人知竜様、ご機嫌よう。な、慣れましたとも、ええ、こんな感じで現れるのではないかと思っておりますもの」

それぞれの反応で人知竜へ挨拶。

遠山もカノサもそれなりに慣れてきた。

「やあ、親愛なる定命の子たち。わくわくしてきたねえい。死の予言と見えぬ敵に立ち向かう今日という日。とても興味深い知見だよ」

当たり前のように席でくつろぎ始める人知竜。銀色の髪がキラキラと輝き、伶俐な美貌がわずかに微笑む。

「そりゃどうも。……で、人知竜、ここにきてくれたということは、アンタは今回、味方してくれるって認識でいいのか？」

「すぶぶ。水臭いなあ、トオヤマくん、この僕がキミの危機に傍観なんて決めると思ukai? ああ、トッスルちゃんの隠密の報告はおおむね間違っではないよう。そして、トオヤマくんの采配も間違いではない。ラザール君たちの屋台組に第一の騎士を護衛に置くのも悪くはない。でもまあ、ダメ押しでうちの魔術師を数人、屋台につけているからねえい。このくらいしておいた方がキミ達も安心できるだろう?」

「……すげえ心強いけど、アンタ敵に回したらめんどくさそうだな。魔術師連中の全てが敵に回ると同じだろ?」

「そうとも言えるねえい。幸い、僕のことたちは僕のことを好いてくれるからねえい。だけど、すぶぶ、計画や準備というものは時に脆くもすべてが壊れるものさ。僕は万能ではあるが、無敵でも不滅でも、必勝の存在でもない。それだけは忘れないでくれよ?」

「そういう考えが出来るのも含めてアంతは恐ろしいよ、人知竜」

「いや、君たち人類種ほどではないさ」

人知竜が音もなく笑う。

その姿あとだった。

がらら、馬車が止まった。

「あら？」

「うん？」

「おや」

「ごめんなさい、主教サマ。少し馬車を停めます」

御者台に座るスヴィから声がかかる。どうやら何かあったらしい。

「どうしたの？ スヴィ？」

「……かべ？」

主教の言葉にスヴィが首を傾げながら答える。

遠山とカノサが馬車の窓から外を眺めて。

「え？」

「うお、なんだこりゃ、バリア？」

2人の視線の先、そこには壁。

金色の輝く壁、そういうより他にない。見回す限りの場所に広がる壁が、行手を阻んでいた。

だが、何か妙だ。

その金色の壁を他の人々はなにも気にせず、その壁を通り抜けている。

その壁に気づいているのは、まるで遠山達だけのような。

「お止まりください、ご婦人」

声、凜々しくはっきりしたものだ。

執事服の青年が、馬車へ向けて。

「あなたは……竜大使館の執事さんかしら？」



窓から顔を出したカノサが執事服の青年へと声をかける。

「はい、執事見習いのラジと申します。申し訳ございません、ご婦人の馬車に”棲家の選抜”が作動してしまいました。大変失礼ですが、馬車の中に座す方のどなたかを、我が主人が拒否していらつしやるようです」

深々と頭を下げる青年。

その言葉にカノサが数秒、むーんと黙って。

くるり、遠山のほうを向いて。

「らしいわよ」

「おい、らしいわよとか、なんで今の言葉で俺を見るんだ、主教様」

「……この香り、蒐集竜様の血と、別の竜の香り？　もしや、馬車の中には竜殺し殿と人知竜様が？　ああ、良く見ると、天使教会のお方ですね。……申し訳ございませんが、お引き取りを棲家の選別が発動している以上、決して竜大使館にあなたたちが近づくことは相成りません」

遠山とカノサが漫才してる間に、執事服の青年が何かに気付いた。整った顔、竜殺しという言葉にわずかな敵意を滲ませて。

「……どうしますか、主教様」

「ちつ、さつそくトラブルね。あー、執事見習いくん、申し訳ありませんが、天使教会は蒐集竜様と良い関係を築いていますの。あなたの言葉にはさつきから、そうね、若干のとげを感じます。その態度はつまり、竜大使館を代表してのもの、と解釈してもいいのかしら？」

ノータイムで煽る主教、口調の軽さとは別にその言葉の内容は的確かつ、陰湿。

竜を敬愛する者に対してよく効く言葉。

「なっ。ぶ、無礼な！ 今の発言は撤回していただきたい！ 私のようなものが偉大なるお方の意志を反映するなど！」

「……竜の従者に選ばれる連中は視野狭窄で簡単ね。であるなら執事見習い殿？ 尊き竜の祭典、狩猟大会に面通しするために足を運んだ我々を拒絶するのはいかなる理由があたりで？」

役者が違う。簡単に底を見抜かれた青年は主教の言葉に翻弄される。

「ぐ……っ天使教会、主教殿、失礼を。歓迎します、貴女を竜大使館の賓客として」

すんなりと主教に頭を下げる青年。主教が数回頷き、スヴィに馬車を勧めるようにジエスチャーを。

「よろしい、では」

「ただし、その馬車にいる竜殺しと人知竜は別です。その2人は私が認める認めない以前に我が主がこの邸内に入るのを拒否されているのですから」

「……ちつ。めんどいわね。誤魔化せないか。ちょっと待ってなさい、トオヤマナルヒト。少し方法を考えるから」

カノサが舌打ちし、頭を巡らせる。

だが。

「いや、主教様よ、ありがとな、でも大丈夫だ。人知竜、これどうしたらいい？」

遠山は主教に全てを任せるつもりはなかった。

「ふうむ、おかしいねえい。くんくんくん、これは珍しい。あの幼竜の竜界の障壁が限定的現れているみたいだけど、この障壁からはあの幼竜の意思を感じないねえい」

「簡単に言つと？」

「ふむ、無意識か、それとも本当に、そう。たまたま幼竜の力が誤作動しているというべきだねえい。そう、運の悪いことに」

「なるほど。最後の確認だ。このバリア、ぶっ壊してもドラ子に影響はないか？」

「は？ ちょ、ちょ、トオヤマナルヒト？ ほんと、ほんとやめて。何する気？ ほんとやめて、待って、なんとか穏便にするから、ほら、お金……いや、待ってお金はないわ、もつたいない」

「トオヤマくん、問題ないよ。この竜界の障壁を壊した所であの幼

竜には影響はない。ただ、それは、竜の権能によるものだよ、いくら君とはいえ定命の者に壊せるものじゃあない」

「OK、問題ないな」

遠山が馬車を降りる。

虚無の顔で、目の前、自分を遮る金色の壁を眺める。

「お、おい、君、何をするつもりだ、見ろ、この障壁を。これこそが竜の界を隔てる美しい力。触れることさえ許されない聖域だ。竜殺し、警告だ、それ以上近づくな」

「すまん、執事見習いさん。この先に用がある。もう決めただ、この先に進むよ」

「は？ だから見たまえよ！ この障壁を！ 君を、蒐集竜様が拒んでいることがわからないのか！ 以前の時とは違うんだ！ そうだ、君、そういえば私の同僚達に怪我をさせていたな！ そのことについてまずは謝罪の一つもしたらどうなんだ！」

執事見習いの青年が遠山へ言葉を飛ばす。竜に魅せられていれ彼らにとつて、目の前の男、竜殺しともてはやされる彼は目障りな存在で。

「あ？ ああ、前もそういや、執事服の連中に邪魔されたな。でも死んではないだろ？ 殺せって命令してない」

「な、なんとという野蛮な……君を、我が主人に合わせるわけにはいかないぞ！ それに、この障壁がある限り君が進むことはできない！」

「ふうん」

遠山が進む。執事服の青年はもう彼の目に映っていない。映るのは一つ、自分の行手を阻む壁だけ。

「おっと、トオヤマくん。あの執事服の子の言葉は正しい。あれは竜の鱗と同じさ。竜は竜にしか冒せない」

すっと、当たり前のように空を歩く人知竜が遠山の頭上から声を。

「でも、君にはこの僕がついている。竜界を侵食できるのはまたこれも竜界。竜の闘争において互いの界を比べるのもまた一興でねえい、どうれ、あの炎竜と水竜の孫竜、どれほどのものかー」

ふっと、遠山の側に降り立ち、ねっとりとした声を遠山の耳に。

その表情、興奮とも歓喜とも取れぬ。細工され造られた美貌が、わかりやすく高揚している。

暴力と支配を根源欲求として備えるその生命、彼女もまた竜なのだ。己の力を試し、相手の力を試す。そのシンプルな興奮に人知竜が目をぎらつかせる。

遠見の魔術式で人知竜を観察していた魔術師、数百人がその瞬間、目を潰した。そんな顔。



竜が、竜殺しの前に立ち、その障壁に白い手のひらを向けてー。

「アイ」

「しゅぷっ」

唐突に呼ばれた名前。人知竜が髪の毛を針のように逆立たせて、ゆっくり、ゆっくり後ろを向いて。

「俺がやる」

「……………ハイ」

ぺたんとその場に座り込む人知竜。

黒いローブが汚れるの厭わず、ぽーっと口を少し半開きのまま碎けた腰をよいしょと動かし、体育座りした。

大人しくなった。もう人知竜の目には遠山の背中しか映っていない。

「え、やめ、ちょ、トオヤマナルヒト、アンタマジで！」

「主教様、頭痛に効くホロナの実を煎じた薬です」

「わお、ふふ、やつちやえ、後輩」

馬車の中から頭を抱えて悲鳴を上げる銭ゲバ。銭ゲバに丸薬を渡す隠密、そして、御者台の上からクスクスと袖で口を隠して笑う聖女。

「む、無理だ、無理に決まってる、竜の、アリス・ドルル・フレア

テイル様の権能だぞ！！ 危険だ！ 君の身の安全を保証できない  
！！」

執事服の若者が障壁を背に叫ぶ。

三者三様の反応。

それら全てを無視し、冒険者が進む。

ピコン

【警告・竜界の障壁を壊すには特性・竜が必要です。あなたにはその資格がありません。せせせせせせ、ー！”特性・お前の血は白色だ”により、今の貴方にはわずかな”神性”が備わっています】

【神性により上位生物の権能へ干渉可能です。警告、キリヤイバカウントが進行します】

「仕事の時間だ」

その細い目、茶色の瞳の虹彩に白が混ざる。

もうどうしようもなく溢れ出し、今か今かとその時を待つのは、  
遠山の体に巢食う古い存在の威が漏れ始める。

「うそ、なにあれ……」

「後輩……あなた……」

「……綺麗だねえい」

白。

遠山鳴人の首から白が漏れている。

遠山鳴人の目から白がたなびいている。

それは平原に溜まる霧、山野に広がる霧。古い霧の権能そのもの。

遠山鳴人の最強の道具にして、彼を蝕む宿痾。

だが、今はそんなことどうでもいい。

「遺物・霧散」

ズツ。当たり前のように首から引き出されるのは欠けた刃。栓と  
なっていたそれが引き抜かれた途端、白が、キリがどうしようもな  
く噴き出て。

「うわ!?! な、なんだこれ!?!」

「霧? どこから?」

「なんで!?! 晴れてるのに?」

周囲の人々が異変に気づく。世界を突如侵すように現れた真白の霧に辺りが包まれる。

それは、数々の冒険を経て強く、重くなり続けた。

一瞬で周囲を真っ白に染めたキリはたった1人の主人にして新たな器の元を集まる。

欠けた刃から立ち上る白いキリが、主人の意思に侍り。

遠山が進む。そして、目の前、金色の障壁をじっと眺めて。

「よせ、む、無理だ、何をするつもりだ！ 君、竜殺し！ 君は、何をー！？」

真面目で誠実な竜の従者の1人には想像だにしない。たった1人

の男が、竜の権能をどうにかするなどと。

だが、理性では理解しているその道理を、ふと、彼の本能が嗜めた。

見ろ、見ろ、見ろ。

目の前の男の顔を。目の前の男の姿を。細い目は歪み、裂けんばかりに口は吊り上がり。

そう、この男は唾っているのだ。

ああ、そうだ、そうだった。この男は元から、最初から、知っていたじゃないか、そういう存在だってことを――

「竜、殺し……」

【技能・発動、”竜特攻”】

「満たせ、キリヤイバ」

ず、り。

金色の障壁に差し込まれる欠けた刃。その瞬間、血管のような筋が蜘蛛の巣のように金色の壁に広がってー！。

「直刺しが、1番効くんだぜ」

ぱき。

瞬間、一気に広がる血管のような筋が破裂。

白いキリを吹き出し、吐き出し、金色の障壁が粉々に砕け散って。



その力はすでに、在りし日の神話を思い起こすものまでに。

「よし、問題なし。行こうぜ、竜の家に」

正面突破で不法侵入かまし、遠山が笑った。

132話 キリヤイバと竜への道（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さい！

感想いつもありがとうございます、全部読んでます、感謝。

今週は凡人探索者の発売週なので少しそちらに比重多くなるかも。  
よければ凡人探索者の方もぜひご覧ください。

133話 ナルヒトと人知竜

ピコン

【秘蹟”幸運”により発動していた竜界の障壁が崩壊しました】

【トオヤマナルヒト所有の正体不明の力はすでに竜の権能すらその対象とすることが可能です】

【秘蹟”幸運”による世界改変に失敗しました、人体が損傷します。脾臓の破裂、スキル”幸運”により秘蹟”幸運”の代償を再判定。唇の薄皮一枚断裂に変更】

「あら……」

ぺろり。唇をフォルトナが舐める。いつのまにか切れていた唇の端から滴る鉄さびの味を舌で転がす。

「おい、バカ姫。ほら」

「あら、どうも、ウイス。……ふふ、どうやら本当に竜殺しはやって来たみたいですね」

「あなたの幸運で竜の障壁が発動してたんじゃねえのかあ？」

「たった今、それは消えました」

フォルトナの言葉に、シンと沈黙が鳴った。

「……ほお、そりゃあ、いいなあ」

「ウイス？」

「いやあ、なに。どんな方法にしるよお。竜の障壁を壊せる方法は竜殺しは持つてるってことだろ？ いや、なんだ、個人的な楽しみは、蒐集竜だけかと思っただら……竜殺しも楽しみそうじゃねえか」

ウイスがその肉食の獣のような精悍な顔つきを歪める、恐らくは喜びの表情だ。

「あなた、最初は竜殺しと戦うの嫌がってませんでした？」

「ああ？ 嫌だよお？ 得体の知れねえ気持ち悪さが奴にはあるからなあ。だが、もしかしたらアイツは俺様の一族の呪いを解くきっかけになるかもしれない……そうかあ、竜の障壁を壊せる冒険者かあ」

ぼん、ぼん。

ウイスが腰にぶら下げているバケツヘルムを叩いて。

「その兜ですか？」

「ああ、この兜。竜祭りの日から、いやアガトラにきてから妙にこの兜が軽くなっていったんだよ。昨日ようやくそれに気づいてなあ。古い一族の呪いは、もしかしたらここで終わるのかもなあ」

「竜殺しにその兜を渡すおつもりで？」

「正確には押し付ける、だな。まあそれが出来れば最高だ。それに、シンプルにこれは俺様の趣味の話でもある」

「ああ、そういうこと。……わたくしの恐ろしい英雄、せいぜい祈っておきますわね。竜殺しがかの老兵と同じようにあなたに敵、足り得ることを」

フォルトナが窓をしめながらお道化て呟く。

もう昨日までのどこかぎこちない様子は彼女から消え去っており。

「ああ、どうもお。……楽しかったなあ、あの爺との殺し合いはよお……」

「はいはい、物騒なこと言つのやめれくださいな。では、そろそろ向かいますか。ウィスは地下闘技場へ。わたくしはアリスお姉さまをお呼びに行つてきますね」

「おお、蒐集竜、様はどちらに？」

「キッチンです」

ウイスの問いにフォルトナがけろっと答えて。

「……なんでえ？」

「ふふ、女の子同士の秘密、です」

にっと、フォルトナが笑う。片目を瞑って、ひとさし指を口に添えて。

いたずらを思いついた向日葵の子どもよろこぶ。

「おお〜！ すっげえ人ばかり。ここまでの道もすごかったけど、ここはさらに、だな」

「竜祭り2日目の中心的催しだもの。でも、さすがは竜様ね。ちらつと確認しただけだけど、帝都や芸術都市の重鎮たちの顔も見かけたわ」

竜の障壁を超えたのち、竜大使館の前にたどり着いた。ここもヒトでごった返している。

「主教様、馬車はここで良い？」

「ありがと、スヴィ。トッスル、羽の子に馬車の見張りをお願い出来るかしら？」



「御意、主教様。私は以降、また潜んで遠隔で御身の守護を」

「ええ、ありがとう、頼りにしてるわ、トツスル」

「ありがたき」

しゅんつと猫獣人のトツスルがまた人混みの中へ消える。数秒は遠山も気配を終えていたがすぐにそれも追えなくなった。

「さて、これからどうする？」

「そうね、ここからはあなたとはいったん別行動かしら。私は貴賓席に招待されてるし。……打合せ通りに行きましょう」

「おお、了解。まずは、ドラ子との合流だな」

「ええ、頼んだわよ、トオヤマナルヒト。現状この状況で一番まずいのはアンタと蒐集竜様とが分断されてんのが一番まずい。もうシンプルに直球で、あの方の逃げ道をふさいでなんとかこっちに引き込むわよ」

ピコン

【サイドクエスト”狩猟大会”が開始されます】

【クエスト内容・あなたは主教と共に死の予言に立ち向かう選択をとりました。現状、敵は狡猾でいまだその正体を完全には明かしていません。ヒュツケバインの卵は巢にのみにある、いや、アンタにわかるように言えば、虎穴に入らずんば虎子を得ずって奴ね、ゴホン。敵の用意した罠に飛び込むのも時には必要でしょう。竜大使館で行われる狩猟大会において活躍することで、敵の動きを探ることが可能です、また、あなたを避けている蒐集竜ですが、狩猟大会で優勝すれば彼女との謁見も叶うでしょう。竜は儀礼を重んじます。己の前で力を示した戦士に非礼を働くことはないでしょう】

【クエスト目標・”狩猟大会での優勝”】

遠山が視界に流れるメツセージを確認する。

昨夜、屋敷で主教と打合せした作戦はシンプル。

フォルトナの誘い、竜大使館での狩猟大会に乗り込み、ドラ子に  
なんとしてでも会う。その途中でもし、遠山と主教を狙う存在がい  
ればそれを返り討ちにするという脳筋大作戦だ。

そんな脳筋作戦を可能たらしめているのが

「すぷぷ。いやあ、何度見ても、なかなかあの幼竜も住まいのセ  
ンスがいいねえい。ヒナヤ奥石に、ソプラノ石を建材のベースにし  
ている帝国様式の屋敷。ふむ、彫刻の類は……おや驚いた、あれは  
ヘルルの塔で手に入れたのだねえい……ふむ、どうしよう、少し欲  
しいなあ」

魔女の三角帽子に、白と黒のゆったりローブ姿の銀髪美竜が竜大  
使館を眺め、はえーっとしている。

「ご存じ、遠山の愉快な仲間の1人、人知竜だ。

「……まあ、正直あの方が味方の時点で、向こうが何かしてくる可能性ってほんとに少ないんだけどね」

「そんなになのか？ いや、ドラ子と同じでとんでも生き物だっていうのは分かるんだけど」

「人知竜……様を敵に回した時点で、それはつまりこの世界中の魔術師を敵に回すっていうことよ、正気だったらそんなことありえないわ」

もし、正気じゃなかったら？

遠山は喉元までやってきた言葉を飲み込んだ、そんな仮定を目の前の銭ゲバがしていないはずはないからだ。

「怖いのは、私たちの敵が人知竜様を敵に回した時、それが狂気ではなく、正気を以て行われたパターンよ、それはつまり敵は竜を敵に回してもよい準備があるということになるしね」

「もしもの話をするとキリがねえな。まあ、お互いベストを尽くそうや」

「そうね。最後に確認、狩猟大会には本当にスヴィをつけなくていいの？ 彼女のフォローがあれば狩猟大会の優勝は確実になるけども」

「ふんす」

ちみつこ聖女のスヴィパイセンが馬車の御者台から降りて腰に手を当てて胸を張る。

「だろうな、パイセンが強いのはよく知ってるよ。でも、パイセンはあんたの護衛にしておこう。キングが問答無用の暴力で取られるのが怖い」

「ぶい、任せて、こっちはい。主教サマはわたしがばっちりお守りするのよ」

無表情のままピースしながらうんうんとパイセンがうなずく。

「だ、そうだ。主教さま」

「ま、こっちからしたらありがたい話なんだけど。それにしたってあんた、せめて第一の騎士か、影の牙を連れてくればよかったのに」

「主教さま、今のこうはいに必要ないよ」

「え？」

主教の言葉に珍しくスヴィが首を横に振って。

「こうはい、初めて会った時と比べて、ものすごく強くなってるから」

スヴィの蒼い瞳がじつと遠山を見つめる、きつと彼女には主教には見えていないものが見えている。

「パワーアップイベントはこなしてきてるぜ、ボス」

「……ああ、はいはい、これだから戦闘出来るタイプの脳筋は嫌だわ、言語化出来ない謎の共通認識があるんだもの」

「まあ、分かった。ここから先はお互い賭けるしかないものね。  
トオヤマナルヒト」

「あ？」

ふとかけられた言葉、主教がまっすぐ遠山を見つめていて。

「死ぬんじゃないわよ。アンタは私の部下なんだからね」

ずっと、彼女の糸のような目が開いた。紫水晶を施したような理智の光を宿す目が、遠山を映して。

「ひひひ、あんたもな。俺の上司なんだからよ」

ばちん。軽く手のひらを叩き合わせる。小気味よい音と軽い感触が返ってきた。

「厄介で生意気なクソ部下だけどね。幸運を」

「こっちはい、ファイト」

「ああ、どうも、先輩」

「おや、話は終わったかい。すぶぶ、良いねえい、糸目ちゃん。君は実にいい、天使教会に置いておくのがもったいないねえい。僕の臓器を受領する気はないかい？」

「あら、人知竜様、光栄ですが、私にはきつと魔術師の素養はございません。御身の尊き血肉はまたふさわしきものにお与えになるのが良いかと」



「すぶぶ、それは残念だねえい。素気なくされるとより興味が湧いてくるのはボクの悪い癖だけとお……今回は諦めておくかい、さてトオヤマくん、ボクはキミの味方だ。さあ、君はこの人知の竜に何を望むんだい？」

「あなたにはこのまま銭ゲバの護衛についてもらいたい、頼めるか？」

「ふうん、すぶぶ。妥当な判断だねえい。いいとも、ほかには？」

「あなたが戦闘不能、もしくは無力化された時のことを話したい」

「えっ、ちょ、トオヤマナルヒト？ あんた、何を」

「定命の者よ」

「いつ」

「あ」

「え……なに、なに、この寒気」

「おうええ……」

「ちよ、やだ、怖い」

「か、身体が……」

「動かない……」

人々が慄く。

かあああああ、かあああああああ。

冒険都市の半径数キロの生き物、小動物から鳥類、獣、そしてモンスターにヒュームたち。ありとあらゆる定命の存在がその本能に根差す恐怖により、動きを止めた。

獣はソレに見つからぬように声を潜め、鳥はソレに見つからぬよ



様々な魔術の触媒、そこから放たれる式は遠山の命を狙っている。

「ひえっ」

「主教サマ、こちらに」

主教と聖女がノータイムでその場を離れる。蛇にいらまれたカエルのように体を固めた主教を聖女が肩に抱えてえっさほいさ。

「それは、我<sup>わたし</sup>への冒瀆か？ 小さき者よ」

それは、まぎれもなくこの竜の本質のひとつだ。

トオヤマへの理由なき親近も想いもきつと本物だろう、トオヤマの味方になるといふ言葉も本物だろう。

だが、それと同時になんの矛盾もなく、この傍若無人な殺意は両立してしまふ。

「答えよ、小さき者よ、今の言葉はなんだ。この我の力をくびっているのか？」

その竜の前では昼すらも夜となる、その竜の前では人が数百年も  
の歳月をかけて用意した力でさえ指先ひとつで消える。

その竜はヒトに優しく、甘く、近く、そしてー。

「それとも、先に思い知るか？ 其方の見くびる我の力をー その  
身で」

残酷だ。

彼女の影はもはや人の形ではない。

幾重にも絡まり、ねじ曲がった異様な角、鋭く細い千枚通しのよ  
うな牙、尖ったアギト。

竜だ。その麗しい人の身のうちにひしめく本当の彼女の姿が影と  
なり現れている。

人知竜。彼女もまた、竜なのだ。

どれだけ気安くても、どれだけ親しみやすくても、どれだけ美しくても。人とは異なる生き物。ゆえにその感覚も、その在り方も、  
悲痛なほどに人とは違う。

「ああ、それもよいだろうなあ。竜殺し……答えよ、今の言葉を取り消すか、否か」

暴力と支配を根源の欲求とする上位の生き物が、ヒトに問いかける。

どろ、どろどろどろ。

人知竜の足元の地面が溶けだす。土が意志をもつかの如く浮き出して、蛇のように空中を舞う。

じゅうつ、垂れた土が地面を溶かしていく。いったいこの竜は土を何に変質させたのか、どのような現実を侵したのだろうか。

竜の足元から伸びる影、竜の角の影が嵐に舞う柳の葉のごとくざわめき、次第に遠山の足元へ伸びていく。

「それとも、ああああ、怖くて、声が出ぬか？ 我が身を見よ。我が声にこたえよ、定命の者よ。この姿を見よ、我が威を見よ。」

竜が試す、ヒトが答える。

がこの世界の決まり。魔術師、人知竜の血肉をその身に宿し、ヒトからの脱却を目指す彼らですら、主の怒気のまえに久しく忘れていた恐怖を思い出す。

「これでもそなたは我が、遅れをとると思うのか？」

そして、竜の影が遠山の影に触れて。万物を溶かす土が遠山の周囲を囲んで。

竜が、嗤った。

「」



ばちり。

「……………え？」

「はい、隙あり」

人知竜の三角帽子が、彼女の頭から外された。

誰に？

「え……？」

1人の騎士鎧姿の魔術師が、今まで遠山へ指揮棒のような杖を向けていた魔術師が気づいた。

いつのまにか、さっきまでここにいた男がいなくなつて。

その男の血は白色だ。

その男はすでに神兵としての器になりかけている。それはつまり  
|。

「オーバーロード遺物拡大解釈五里霧中・きりまぎれ」

いずれ、遠山は行きつく先に行くのだろう。その身体に棲まう者の力、全てが傳くことになるだろう。

「うわ、めっちゃ触り心地いいこの帽子、ビロード？」

背後を取る。

この世界の法則を書き換える術を持つ異端の存在、魔術師も、星の法則すら我が物とする魔術の祖も、誰もそのたった一人の動きを捕えていたものはいない。

「まあ、ざっとこんな風によ、あんたの初見の力で不意打ち食らったりした時の話だよ、人知竜」

「  
」

人知竜が、ゆっくり、ゆっくり振り返る。

そこには己の三角帽子を目深にかぶり、へらへら笑う男の姿が。

「な、な、ど、ど、う、ち、や、っ、て」

人知竜が途切れ、途切れ、あえぐようにつぶやき。

「秘密。ドラ子といい、アンタといい、ドラゴンども、アンタらは大きな弱点があるな」

「へ？」

ほかんと呟く賢いドラゴン。目をぱちぱち開けたり閉じたり。

「舐めプしすぎ」

「あ、う」

ぺたん。

人知竜が腰砕けにその場に座り込む。魔術師たちが血相を変えて人知竜の元を集って。

「さて、これで一回死亡だな、人知竜」

にいいっと、嗤う遠山。

「あ  
」

その顔に、人知竜が目を大きく見開く、そのあと頭を押さえ呻いて。

「ああああ……そう、だった、そうだったねえい……そうだった、君は、探索者　だったねえい、すぷぷ　ああ、嫌な奴を思い出しそうだよ」「

何かを思い出して、酷いものを見たかのように頭をいやいやと振って。

「小さき定命の者の話を聞く気になったか？」

賢いドラゴンは素直なドラゴンになった。

くくくくと、遠山の言葉に何度かうなずいた。

133話 ナルヒトと人知竜（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！  
さい！

ダンワル2巻も出るので凄えたのしみにして頂ければ。

ストルがめちやくちやええんじゃ……

## 134話 同族の時間

「よし、じゃあまあそういうことで！ 手筈通りに！」

「……………」

素直なドラゴンになった人知竜と話し合いを終える。

もしも、緊急事態が起きた時の備えだ。

「……………」マジか、こいつ

その、あり得ない要求にカノサがぼそりとつぶやいて。

「すぶぶ。ああ、わかったとも。みんな、話の通りだよ。ボクからお願いだ。もし、コトが起きれば、トオヤマくんの言葉通りの対応をお願いするねえい」



「「「「は、我らが母よ」「」」」」

人知竜の言葉に、騎士鎧の魔術師たちが片膝をついて跪く。

考え得る段取り、準備、全て終わった。あとは、もうやり切るだけだ。

「鳴人くん」

「あ？」

ふと、人知竜の呼びかけ。顔を上げると、彼女の寒気のするほどの美しい容姿が。

涙袋がぷくりと膨らんで、口がもにょもにょ。その表情、なぜだろう、少し、ほんの少し懐かしい気がして。

「頑張つてね」

彼女が笑った。

「お、おお。アンタもな、人知竜。うちのボスを頼んだ」

「すぶぶ」

遠山の返事に微笑みながら振り返り、主教を連れ立って去っていく。あちらは大使館の中庭の中央へと続く道、貴賓席は向こう側。

「いよし、行くか」

そして、遠山の向かう先は別の方向。冒険者たちが連れ立って一

定の方向へ向かっていく。

自然と進む足、遠山は1人で人の波に混じっていった。

【キリヤイバカウントが進行します。……白い血は既に貴方の全身に広がりました。あなたの体はよく霧に溶けることでしょう。新たな遺物の拡大解釈に辿り着きました】

「蒐集竜さまの狩猟大会、入り口はこちらです、地下への道になっています！ 順番にお進みください！」

「あ、この誓約書にサインもお願いします！ 怪我、欠損、死亡した場合には竜大使館からご遺族に弔慰金が見舞われまーす！」

「参加資格のある方は冒険者ギルドに登録されている方のみになります！ また一級冒険者以上の資格の方は、別の入り口へお願いします

ます」

「これ全部冒険者か……凄い数だな」

しばらく冒険者たちの人の波に乗って歩いてみると、見覚えのあるウエイトレス衣装の女性たちが声を張っている様子が確認出来た。

「参加希望の方ですか？　こちらへお並びくださいね！」

「あ、どうも」

ニコニコ笑顔の彼女たちは、冒険者ギルドの受付たちだ。竜大使館の仕事に、ギルドは協力しているらしい。

中庭の隅っこ、人の波が進む道はどんどん下っている。よく見ると、地下道への入り口のようなものが先に。

「おい、アイツ……」

「黒髪に、細い目、それに竜細工のローブって……」

「あの履物……噂だと魔術学院に造らせたとか」

「俺はドワーフの工房を脅して出させたって聞いたぞ……」

「蒐集竜のカイビト……」

「塔級冒険者と依頼で揉めて、それを追い払って聞いたけど」

「嘘だろ、そんなことできるかよ、塔級っていや、ヘレルの塔を自由に行き来するような化け物だろ？」

「え、魔術学院の全知竜と一緒にギルドに来たって……」

「教会騎士や主教を手籠にしてるらしい……」

「いや、あの銭ゲバさんはないだろ」

「ああ、確かに……」

ひそ、ひそ、ひそ。

辺りの冒険者からの視線を感じる。だが、今までのものと違って剥き出しの敵意や害意ではない。

【あなたの脅威度、知名度が一定値に上昇した為、力量の乏しい者との戦闘やトラブルは非常に起きにくくなっています】

なるほど、これは便利だ。

遠山はメッセージを眺め、これまでこの街でそれなりに色々なこととにケジメをつけてきた甲斐があった。

「噂される立場ってよお、存外悪い気分じゃあねえよなあ」

ぞっと、背筋の痺れが脳へ。

何も、気付かなかった。後ろに人が立っていることなど……。

「……俺に話しかけてんのか？」

「おお、よくわかったなあ……よお、久しぶり、竜殺し殿」

聞き覚えのある声、視線だけ後ろへ。

黒いパツパツの執事服に、逆立つような赤い髪。目鼻の整った凶暴そうな顔の男。そして、腰には、兜、バケツヘルムがなぜかぶら下がっていて。

遠山は、この男を知っている、屋敷であの女と一緒にいた奴。

「……名前も知らない相手と気軽に話せるほどコミュニケーション力、たくなんだよ」

「あゝわかるぜえ、その気持ち。馴れ馴れしく話しかけられても何話して良いかわかんねえよなア……どうも、改めて、ウイス・ポステタス・ヘロスだ」

「……トオヤマナルヒトだ」

「トオヤマナルヒト、珍しい名前だな。どこの出だあ？」



間延びした声はしかし、はっきりと。いつのまにか立ち止まっていた遠山たちの周りを冒険者たちがそこだけ避けるかのように進んでいく。

「……ポステタス」

「ああ？」

「突っ立てると他の人の邪魔になる。列に並んで歩こうぜ」

遠山の言葉に、赤髪の男が一瞬、キョトンとして。

「ーっぶっ、ぎゃはははは！ー！ ああ、確かにイ、そりゃそうだア。お前の言う通りだなア。ちょうど俺様も、狩猟大会に参加するつもりだったしなア」

ひとしきり笑ったあと、ゆっくり歩き始める。

重心が全くぶれず、いつ歩き出したか気配ですら分からない。

――幸運と英雄。

あの予言の内容が頭で反芻されて。

「冒険者なのか？」

「ああ、この前登録してきたア。全然仕事してねえからまだ4級だ  
けどよオ」

並んで歩き出す2人。遠山より頭2つほど大きな身長、ガチガチ  
の白兵戦は不利そうだ。

「奇遇だな、俺も4級だ。中々仕事に集中できなくてよ」

「あらら。忙しいのかねエ」

「ああ、忙しい。……この街に来てから、いろいろトラブルに巻き込まれ続けててな」

コツコツコツ。いつのまにか、地下へ続く道はかなり暗く。

「へえ、どんなア？」

少し、ヘレルの塔の回廊に似ている。壁にかけられている松明が道を下る冒険者たちに影を落としていく。

「竜の屋敷に連れて行かれたり、スラム街ではチンピラに絡まれたり、街では騎士に処刑されかけたり、バカ強い化け物に殺されかけたり、とかー」

「ふうん……」

遠山の言葉に、ウイスと名乗る男が顎を撫でて。

「ああ、後は……この竜祭りで、殺されるかも知れねえとか」

ぼそり。

遠山が舌に毒を乗せて。

「ーへえ、そりゃあ、穏やかじゃあねえなア……」

にいつと、ウイスが笑う。

「ああ、全くだ。……今日は連れはいないのか？ フォルトナ・ロイド・アームストロングは」

「おお、こりゃあ、アレだな。お前に駆け引きで挑むのは無謀らしいなあ。よく知ってんじやあねえかア……どこまでわかってんだ？」

「さあ。なかなか今回の敵はいやらしくてな。いつもみたいに即ぶつ殺して終わり、とはならないのが厄介なんだ。竜の懐に入るとは恐れ入ったよ」

「おお、竜殺しにそう評価されるとは、うちの姫様も捨てたもんじやあねえらしいなあ……いいのか？ 警戒対象にこんなに簡単に接近されてよお……」

まるで、いつ溢れるか分からない水の溢れそうなコップの表面のような会話だ。

互いに既に、必殺の距離。

でも、2人とも並んで歩き続ける。

「ああ。むしろそっちのが楽だ。敵がはっきりしてわかりやすい」

「……やりにくいなア、お前」

「そりゃどうも。で、用事はそれだけか？」

「いや、むしろここからが本番かなア……」

人の波が、止まる。

「あ、おい、見ろよ、出口か？」

「光が……」

「なんか、聞こえねえか？」



「蒐集竜さまの御前試合だぞ。活躍すれば一気に有名になれる……」

冒険者たちは、前へ。

遠山とウイスもそれに混じって前へ。

そこは。

「ウオオオオオオオオオ！ すげえ、冒険者だ！ めっちゃいる！」

「ローク！ 頑張ってー！ 死なないように頑張ってねー！」

「あ！ おねーさん！ 俺、麦酒ひとつ！ 食べ物……あ、あの、リザドニアンのパン屋の不思議なパン食わずに取っとけばよかったわ〜」

「賭けだよ〜賭けれるよ〜狩猟大会の優勝者で賭けれるよ〜」



そこは、闘技場だ。

円形の舞台には砂が敷き詰められ、冒険者たちの歩みで砂埃を舞わせる。

舞台をぐるりと囲む高い壁には観客席がずらり。アガトラの住民たちが興奮ぎみに騒ぎ、笑い、酒を飲む。

段差をつけて上に上に登るような作りのそれ、高い場所ほど客の衣装が豪華になっていっているような。

「あ」

目を細めていると、最上階になんともなく見覚えのある連中の姿が見えた。銭ゲバたちは無事、貴賓席とやらに入れたらしい。

「なあ、トオヤマナルヒト、いい街だよなあ、ここ」

「……」

不意にかけられたウイスの声に遠山は無言で答える。

「色んな奴らが色んな理由で生きているよなあ。ヒューム、獣人、ハーFRING、ドワーフ、ハーフェルフ。その中には悪い奴もいれば良い奴もいる、夢や野望、あるいは平穩、それぞれ求めるもんがあつて、それぞれがそれぞれの人生を必死で生きてる」

「意外だな、そんなこと考えるタイプなのか？」

「俺サマあ、こつ見えて理知的な方でなア……。んでよお、冒険都市はやつぱいい街だぜ。色んな奴らがたくさんいて、でも、たった一つの強力な法則に従つてる、面白え街だ」

「法則？ なんの？」

「あー、そりゃあ」

ウイスが口を開いて。

「お集まりのみなさま！！ 本日は、竜祭りのめでたき日にようこそ！ 我が主人の館へお越しくございました！」

突如、頭上から響く声。

冒険者たちが、一斉に上を見上げる。

ふわり、ふわり。足場が浮いている。そこに女がいた。

「あれは……」

「おいおいおいおい……あのバカ姫、そんな打ち合わせしてね

えぞ」

遠山とウイスが似たような顔、なんか苦い食べ物に口に入れられたような顔をして。

「だ、誰だ……？」

「綺麗なメイドさんだ……」

「わかる、なんか、高貴ってどうか……」

「冒険都市の皆様こんにちは！ 冒険者の皆様、初めまして！ わたくし親愛なるアリス・ドラル・フレアティル様の元で、侍女見習いをさせて頂いております、フォルトナ！ 王国、第三王女のフォルトナ・ロイド・アームストロングと申します！」

「は、お、王国……？」

「第三王女のフォルトナ様だと……？」

「いや、バカな、そんな話……王国からは何も……」

「だが、あの南領のティーチ家が事情を知らずに招き入れるとも思えんぞ」

「貴族両院と王国で内密に話をしてたんじゃないか？」

ざわり、ざわり。観客席がざわめく。下層の席の人々はその女の容姿を、上層の人々はその女の肩書きを。

そのどれも驚嘆として受け入れられて。

「あらあら、ふふ。ごめんなさい、驚かせてしまいましたね。竜祭りを皆様に楽しんでもらうため、無理を言っ内緒で遊びに来てしまいました！ アガトラのみなさん！ きつと、ほんの少しのお付き合いになるでしょうけど仲良くしてくださいねー！」

流水のような麗しさの緑の髪、星型の虹彩、クリクリと丸い瞳は人懐っこく煌めき。黒と白のメイド服、頭にちょこんと乗せたカフスが似合う。

王族の持つ選ばれた血により醸造された人の美を彼女は持つていて。

「なんか、なんか、いい……」「ああ、いい……」「好きかも」

ひまわりのような微笑みに、ぽーっとする市民たち。

「うわ……」

「うわ……」

チベスナと苦勞人だけがまたなんか非常に不味いものを無理矢理口に入れられたような顔を。

「はい！ じゃあそういうことで今からわたくしが、この狩猟大会の説明をさせていただきますねー！」

「『ワアアアアアアアアアアアア！』」

「はい、ありがとうございます！ いい街ですねえ、冒険都市、さすがはアリスお姉様の棲家！ 蒐集竜さまの街です！ では、お集まりの皆様！ コロシラムをご覧ください！ 今、皆様が眺めておられる方たちを！ 万夫不当、己の腕と実力のみで今日の糧と明日の栄誉を求めるアウトロー、冒険者の皆様です！」

「がんばれー！」

「儲けさせてくれよおおおおー！」

「あれ、チルドはどこ？ あ、いた。ウケる……大丈夫かな」

観客たちが冒険者へ注目を。

「ポステタス、ひとついいか？」

「おお、どうしたア、トオヤマナルヒト」

「狩猟大会って、具体的に何するか知ってる？」

「……お前も大概だなア」

「狩猟大会のルールは単純明快そのままです！ コロシムにいらつしやる冒険者様は、ただひたすら、一心不乱に自らの存在意義を果たして頂くのみにございます！」

「存在意義……？」

フォルトナの言葉に、遠山がぼやいて。



「はい！ その存在意義とは……おっと、こほん。ふふ、でしゃばりすぎちゃいました。いい街ですね、アガトラ。つついこちらも気持ち盛り上がってしまいます。あとのご説明をお願い出来ますか？ ーアリスお姉様」

フォルトナ言葉、そのすぐあと、人々は不思議と口を噤んだ。

本能がそうさせた。

「ふかか、良い。くるしゅうない」

「お、あ……」

「わ、あ」

「ままー、みて、とても」

「あ、あ」

「きれいだねー」

アガトラの人々はみんな、彼女のことを知っている。

ふわりと浮かぶ大理石のような石の足場がもうひとつ。

「待たせたな、皆。すまぬ、許せ。少し用事が長引いた。アガトラよ、そこに住まう人よ、オレ、だ」



孫に伝えよ、己はその目で竜を見て、竜の言葉を賜った、と」

金色の髪、白磁の肌、蒼い瞳、暴力的な、人ならざる美貌。

アリス・ドラル・フレアテイル。蒐集竜がここに。

ーわー

割れんばかりの大歓声、再び。ヒトのどうしようもない魂の部分が叫ぶのだ、ヒトのどうしようもない根源の部分が感涙に咽ぶのだ。

あれこそが、竜。彼女こそが、竜。

我、竜を見たり、我、竜を聞いたりと。

ものを知らぬ子は、今初めて己の心臓がここまで熱いのだと知

った。世に慣れた大人は今久しく己の心臓がなんのためにいるのかを思い出した。

竜。

その存在に、ヒュームはどうしようもなく焦がれるのだ。

「うおお、ドラゴンムーブすげえな」

そんな圧倒的な熱の中、遠山鳴人が友人の様子を見上げてボヤク。

改めて、本当に今更のことながら思い知らされる。

「ここは、自分の世界ではないのだと。」

「ーっ」

竜と目が、合った。

「あ」

と思ったらふいっと逸らされた。

少し、遠山は傷つく。だが

「あの野郎……いいぜ、そっちがそのつもりなら嫌でも直接会いに行つてやるよ、ドラゴン」

謎の闘志を胸に遠山のモチベーションがアップする。

「こほん。さて、なんの話だったか……おお、そつだ、そつだ。今日の催しの話よな。そう、存在意義だ。冒険者よ、オレは貴様らが、そうさな、嫌いではない」

その言葉だけで、アガトラ出身の冒険者の何人かがなんか、倒れた。

「矮小な身、限りある命、乏しい技術でそれでも己よりも遙かに強大な存在に挑み、それを狩り、糧にする。良い、定命の者の持つ輝きの本質とは、それだ。不可能に挑むその気概にこそ、オレは価値を感じている」

響く竜の声。

これだけ人がいるのに誰しもが息を呑んで、一言も漏らさない。

「故に、示せ」

その姿を、その言葉を焼き付けようと、人が竜だけを見つめて。

「故に、魅せてみる。この祭り、我が狩猟大会で貴様らに望むことは2つだけだ」

縦に裂けた竜の眼がヒトを、危険を冒す者を眺めて。

「狩れ、そして、生き残れー以上だ。フォール、あとは任せた」

「はい！ 承知いたしました！ それでは冒険者の皆様！ 狩猟大会の概要掴めましたか？ 今のアリスお姉様の言葉が全てです！」

がこん。

がこん。

がこん。

闘技場の四方から、音。

それは扉が開いた音だ。



「え？」

「お？」

「あ？」

「なるほどね」

「バカ姫め、全部説明しとけや……」

「冒険者の皆様！　これからたくさんのモンスターがコロシムに投入されまーす！　狩猟大会のルールは2つだけ！　たくさん狩って！ー」

「oooooooooooooo」

「□□□□□□□□」

「ギョギョギョギョギョギョギョ」

もちろん扉から出てきたのは、モンスター。

四つ足の獅子に似たモンスター、長い鼻と鋭い牙を持つモンスター、そして、二本足の二つ目の象のようなモンスター。

それが何匹もつようよとー。

「ー最後まで立っていた方の優勝です！ あ！ 公平を期すために、ヒトをやめてる領域にかかるレベル3、一級冒険者以上の方はこの後の御前試合のみに出るようになっていますので、2級以下のみなさんで頑張ってくださいー！」

「え、え？」

「じ、陣形を組め！ モンスターだ！ いつも通りにやれば大丈夫だつて！」

「い、いやいやいや！ いつも通りつて！ これ、これさあ！ 囲まれてるじゃん！！！」

「え、うそ、うそ、も、もう始まるの？ うそ」

ここに、一級冒険者以上の人外はいない。ある意味、真つ当な反応だ。

突如現れたモンスター、しかも。

「テラコレオに、シャードノーズ、それに、ラトラカーン！？」

「待って!?! 一級のモンスターじゃねえか!?!」

「き、聞いてねえってー! そんなの!」

これが、普通の反応。元々ヒトは化け物に怯えるように出来ているのだから。

「グラオオオオオオ!」

「う、うわあああああ!?!」

怪物が、よだれを撒き散らしながら、冒険者へと迫って。

「ぐわわ」

「びゃえ」

だが、それよりも、早く。闘技場のある地点にて、2匹のモンスターの息の根が止まった。

「えっ？」

観客席の多くの人は目を丸くして固まる。一部のヒトは特に驚かず、ある者はにやつき、ある者は額を抑え、ある者は目を細めて。



ず、ず。欠けたヤイバを目玉に突き刺された二本足の象のモンスターがゆっくりと崩れ落ちる。その身体から青い血を垂れ流して。

白いキリが一瞬で、モンスターを。

「さて、久しぶりの運動だア、塔級どころか一級もいねえのは退屈そうだがア、まあいいかア」

首を捻じられ、ぷらんぷらんにさせられた獅子のようなモンスター、そして長い鼻をちぎられたバクのようなモンスターも倒れ伏し。

英雄の膂力が一瞬でモンスターを。

互いに屠った獲物の死骸を足蹴に、既にその目はこの場で最も危険な存在をとらえている。

遠山の細い目がウイスを見る。ウイスの赤い燃え盛る炎を閉じ込めたような眼が遠山を見る。

遠山が、ウイスが、同時に感じる。この場で最終的に残るのは――

欠けたヤイバの鋒が、血に濡れた英雄の人差し指が互いを交互に差して。

「――お前は最後だ」

同時に、キリが、カがモンスターへと狙いを定めて。



「ふふ。それでは！ 狩猟大会、スタートです！」

竜祭り、2日目が始まった。

### 134話 同族の時間（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！

ダンワル2巻もそろそろ何らかのお知らせ出来る頃合いかなと存じます。また正式に決まったらお知らせしますのでぜひ下記のリンクからTwitterフォローしていただければ幸いです。

## 135話 バトル・バトル・バトル

冒険者。

古くは狩人と呼ばれ、大戦の時代には傭兵と呼ばれたフリーの暴力装置。

大戦後の世界においては国を跨ぎ、軍では対処できない、もしくは軍隊を出すまでではない暴力が必要な場への供給を目的とした存在。

6914

「ヒヒヒヒヒ、はい、2匹目!」

「ぎゃはははは! 3匹目!」

彼らはその実力や実績において、等級が振り分けられている。

「お、おい!! な、なんだ、アイツら!? て、ティラコレオが、首を一瞬で!？」

「ラトラカーンもだ!! 目から血を流して、一撃で……!!」

4級、3級、2級、”一級”、そして、”塔級”。

例外を除いて冒険者は皆、ギルドの査定により5つの等級に分けられる。

「な、なんだよ、あいつら!? 一級冒険者か？」

「いや! でも一級以上の冒険者はさっきいないって!」

「じゃあなんだよ、あれ! モンスターの頭素手でねじ切る2級以下の冒険者なんて聞いたことがねえぞ!!」

4級冒険者、”なり立て”や”雑用係”と呼ばれるその階級は実質、冒険者というよりは都市のなんでも屋という嫌いが強いだろ

う。3級冒険者になればようやく”依頼”の中で危険度の低いモンスターの駆除や撃退の仕事が与えられる。2級冒険者ともなれば立派なギルドが保有する”暴力”としてカウントされ始める。

そう、”暴力”。

「ギユオおオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

【ハーヴィーの知識。一級モンスター、”巨人種”ラトラカーン。攻撃の瞬間に鼻を左右に振る癖があります】

「1回、2回、へえ、ほんとだ」

巨軀から繰り出される踏み付けを遠山が引き付けて回避する。丸太を重ねたような太い脚、岩のような皮、しかし。

「キリヤイバ」

すぐ。

白きキリを纏うヤイバがモンスターの脚に突き刺さる。その巨軀からすれば別に大したことのない攻撃、致命的ではない部位。

だが。

「ギユル？」

「直刺しだ」

じゅわるり。

「ギユツ！??？　ぎゅぎゅオオオオオオオオオオオオオオ！？」

象の巨人、一級モンスターであるはずの　が苦悶の声を上げて前のめりに崩れ落ちる。

巨大で鈍重、そして外皮の硬い獲物は非常にキリヤイバと相性が良い。体の内部にしみ込んだキリに外皮の硬さは関係なく。

今の遠山が従えるその白きキリはもはや再生能力でもない限り真向から立ち向かうことは、すなわち死を意味するものと化していた。

「おつとオ！！ まだまだやる気かア！？ いいぜ！ 最近、バカ姫の情緒乱行下に付き合わされてストレス溜まってたんだよなあ！！」

ウイスを囲み、唸る4足のモンスター。前、後ろ、左右、4方向から一斉に飛び掛かり。

「ほいつ、ほいつ、ほいつとオ！！」

ぱきゃきゃきゃ！！





「いや、こんなまっ……」

「等級詐欺じゃん……」

半ば置いて行かれたような形の冒険者達が呆気に取られてつぶやく。

モンスターの注目は完全に、遠山とウイスに集中している。彼らもまた自然の本能が気づいているのだ。

この2匹の化け物を殺さなければ殺される、と。

闘技場のモンスターに逃げるといふ選択肢はない。なぜなら、今の場にはこの2匹の化け物よりも恐ろしい存在がいる。



「やる気満々だな、非常によろしい」

「運動不足にならなくて済みそうだなア」

猛るモンスターに、優秀な暴力装置の2人が笑う。同時に放った言葉、互いに同じ青い血の返り血を受けて。

「お前、何匹狩った？」

「さア、覚えてねえけどオ、てめーより多いと思っせエ、竜殺し」

「あっそ」

「そうだよオ」

「.....」

グッソオオア！！

「グギャウオオオオ！！？」

のそり、背後から遠山を襲おうとしていた獅子のモンスター、飛び掛かった瞬間、カウンター気味にその顔面へ欠けたヤイバが突き刺さる。

ずり、ずり。巨大を真正面から受け止める。合成素材のブーツ底が砂の地面をがちり掴む。

「オオ、グギャウオオ……」

「ヒヒヒヒヒ」

ぐらり。顔面に欠けたヤイバを突き刺された怪物の体が横倒れ。

立っているのは遠山だけ。

「化け物狩りで飯食ってたんだ。元探索者の力を見せてやるよ」

「へエ、二じや、マジでもしかしてもしかすると……おっとオ」

「……ワアアアア」

「すげえ！！　なんだ、今の！？」

「あの冒険者、受け止めて、そのままどうしたんだ！？　テイラコ  
レオが先に倒れたぞ！」



モンスター達、初めは強者としての勘とプライドによりこの場で最も厄介な2人から襲い始めた彼らは、考えを変える。

コイツら、怖い。

ならばー

「あ、あ、こつち、見た……」

「え、え？」

「ひ、本物の一級モンスター……」

「やばい、来るぞ！ ウール！ ビーノ！ 対モンスター戦フォー  
メーション！！ 俺が前衛のパターン！！」

「わ、わかったよ！ アルノ！」

「り、了解、やってやる、やってやるぞ、思い出せ、アガトラに来た理由を!!」

次にモンスターが狙うのは、弱そうな奴らだ。

遠山とウイスの初動に完全に置いて行かれた冒険者達はすぐに動けない。だがそれぞれがそれぞれの価値、暴力としての価値なりの動きを始める。

「ギャオオオオオウ!!」

「ぎゅおおおおおおおおおおおお!!」

「ひ、iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!」

「あ、あわ、あわわ、矢、そうだ、弓矢!!」



「うわっ！ あぶねえ！！ てめえこのへたくそ！！」

モンスターの威に怯え、パニックになるのは多くの2級未満の冒険者たち。圧倒的な経験と才能不足。脅威にたいしての反応が拙すぎる。

「周りの4級、3級が邪魔だ！ 流れ矢が多くなってきた！！ どうする！？ バーンズ！」

「おい！！ 冒険者連中！ パーティー単位で固まれ！！ 連携するぞ！ 一匹のモンスターに固執すんな！！」

「周囲360度から来るぞ！！ 戦士職！ 重装の奴は固まれ！ 斥候はひきつけて弓矢を！！ 魔術師の術式構成を急がせろ！！」

「あの化け物2人が敵を引き付けてるうちに体勢を整える！ とにかく生き残ればいいんだ！ ”冒険者よ、死にたまたまう事なかれ”だ！！」



「ギャウ!?……」

「ぎゅるるるるるるるるるる!」

「じゅるるるるるる!」

モンスターの動きが固まる、金縛りにあつたかのように。

「おい! あのガキどもがなんかやつたぞ! 芸術都市の冒険者だ  
!」

「負けてられねえ! 気合い入れろ! あの化け物2人組に全部持  
つていかれるぞ!」

「目つきの悪い黒髪とこいつい赤髪ばかりにやらせるな!」

実力のある者は適応し始める。突発的なモンスターとの戦闘、こ  
れに適応できるゆえの2級冒険者という位であるゆえに。

そして、暴力としての質が悪い者から、間引かれ始める。

「グアオオオオオオ!!」

戦う恐怖に負け、冒険者の隊列から離れたもの、それを逃がすほどモンスターは甘くない。

「あ、ワア! ワア!! ワア!!!」

戦う恐怖に負け、冒険者の隊列から離れたもの、それを逃がすほどモンスターは甘くない。

「やだっっ!! ヤダっ!! ヤダっ!!」

「具ルルルルルルルのおおおおのおおおおのおおおお」

尻餅つきながらめちゃくちゃに振るわれる槍。そんなものモンスターが意に介するはずもない。

モンスターが冒険者の喉笛を狙って。

終わるー！。

「ふかか。良い。今日だけよ、祭り、故な」

パチン。

美しい指鳴らしの音が、会場に響いた。

空に浮かぶフロア。玉座に深々と座る蒐集竜の長い指の音だ。

しゅぼっ。

「グギャウオオオオオ!? オオオオオオ!?!」

「ワア!! ……エ?」

モンスターに地面に押し倒され、あとはそのまま頭を食いちぎられるだけだったはずの4級冒険者が呆気に取られる。

それは、焰。金色の焰がまるで、盾のようにモンスターと冒険者の間を遮ってー。

「みなさん! ここでこの狩猟大会の特別ルールのご説明です!  
! 今大会はアリスお姉様のお慈悲によって、モンスターに殺され  
そうになった雑魚……いえ! 弱い人に対してアリスお姉様が手ず  
からお護りになってくださいます! あ! でも、アリスお姉様の  
金色の焰に守られた時点でその方は失格ですので自力で闘技場の出  
口まで逃げてくださいねえ! コレで良いですね、アリスお姉様」

「良い。聞け、定命の者。本来であれば、自らよりも強大なものに挑み、敗れた時の代価は己が生命でしか払えぬものだが……よい、今日だけはその摂理、オレが自ら取り払ってくれよう。今日は祭りだ。たまにはその小さき命の矮小さを気にせず、振る舞ってみせよ」

「え、これ……」

「す、すげええ……蒐集竜様が手ずから、俺たちを」

「それって、つまり、竜の加護がある……って事!？」

「最高じゃん……」

冒険者たちがその事実には震える。

どんな形であろうとも今、自分たちは竜に関係している。

その事実を否応なくヒュームの魂を震わせて。





熱だ。

「うおおおおおおおおおおおおお！　ここで聞いたか　お前ら！　竜の加護だ！！　我らが竜が見守ってくたさるぞー！！」

「ここでやらなきやアガトラの冒険者の名折れだぞ！！　おい！！　きやがれ！　モンスターー！！」

「す、すごい、なにこれ、力が……頭がさえる、魔術式がとんでもない速さで構築されていく、ああ、ごめんなさい、人知竜様……違うんです、浮気とかじゃないんですうううう、でも、これ気持ちいいいいいい」

「うそ、もう、”停止”が使える……！！　アルノ！　もう一回”停止”行けます！！　いや、今なら連続で！！」

「まじか、アガトラの冒険者！　協力を！！　モンスターの動きをまた止める……！！」

「法術が、溢れる……教会の中よりも祝福がどんどん濃くなって……」

「お、おい、これならば俺たちもうやれるんじゃない……」

「やるしかねえ!! もうどぶさらいや、飼猫探しだけじゃだめだ!! 人生をここで変えるぞ!! そうだ、俺たちは」

「『冒険都市の冒険者なんだ!!』」

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおお。

一気に冒険者が息を吹き返す。連携して動いていた2級以上の冒険者はもちろん、質の悪い暴力であるはずの3級や4級までモン

ターに立ち向かい始める。

「おおおおおおおおお！　　すげええ！　　冒険者たちがやり始めたぞー！ー！」

「いけえええ！　　がんばれええええええ！ー！」

「冒険者はアガトラのものだけじゃないって所みせてやれ！ー！」

観客もまた湧き始める。戦いと興奮のるつぼ、祭りの熱気が遠山の頬に届く。

「すげえな、ドラ子」

「……金色の焔、やっぱりアレをどうにかしねえとなア……………」

竜の声などなくても暴れていたイカレ2名が若干はぶられた感じ  
でぼやく。

「……………ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
おおおおお」「……………」

「……………グギヤウオオオオオオ！！」「……………」

「いまだ！！ ウール！」

「分かってる！ 止まれ、動くな！ ”停止”！！！」

「法術詠唱、”ヘレルの詩、第3篇34P猛りと鎮静の岸边”……  
その魔術師さん！ 合わせて！！！」

「ひーん！ 教会の法術使いと協力とか先輩に怒られるよおおお！」

！ 術式、仮設提唱！！” 変性系統！ モンスターの外皮の脆弱性についての考察”！！」

1匹、また1匹、冒険者の連携がモンスターの数を減らしていく。

冒険者とモンスター、入り乱れての乱戦、しかし、あのスキルをうまく扱う少年と少女の冒険者パーティを中心にわずかに戦いの天秤が冒険者に傾き始めてる。

「あ、やべ。出遅れた」

「おっと、割といい勝負するじゃねえか。さすがはアガトラの冒険者。それにあれは芸術都市の冒険者装備かア。帝国、どうしてまた、見下げたものじゃあねえなア」

この狩猟大会のルールはシンプル。

より多くのモンスターを狩ること。より長い時間この闘技場に立ち続けること。

つまり、それ以外のルールなど存在しない。

「行ける!!! 押せる!!!」

「おい、バーノン、今なら……」

「ああ、分かってる、アイツら、だな。おい、冒険者！ 聞け！！俺たちはここに勝つために来た！ 竜の前で栄光と武勇を示すためだ！！ 勝つために必要なことがあるぞ！！」

【警告、2級冒険者、バーノン・スミスの技能”戦場把握”、加えて、”戦場のカリスマ”、”指揮上手”、”演説の才能”が発動しています】

「お？」

遠山の視界に映るメッセージが異常を伝える。

「あの2人だ！！ あいつらをほっておくとまたモンスターを狩り  
尽くされる！！ 今の数ならいける！！ パーティーを分ける！  
モンスターの相手は重装備の戦士職！ 斥候と法術師、魔術師、  
それに腕に覚えのある遊撃は、あの2人だ！ 黒髪と赤髪を押さえ  
る！！！」

「「「「おうよ！！！！！！」」」」

冒険者たちが一致団結、そして、このタイミングで。

「ねえ、アリスお姉さま、よろしいですか？」

「む？ ふむ、まあ、問題なかつ、我が竜殺しだ。造作もないさ、好きにせよ」「

「あらあら 羨ましいなあ……すつゝみなさくんきいてくださあ  
ああああいー！」

「なんだ！？ 上、あのメイドさんだ！」

「竜のメイドだ！」

「なんとビッグニュースでええええす！ 今、この闘技場にかの有名なお方が参加されていることがわかりましたああ！ 先ほど獅子奮迅の活躍をみせた黒髪の冒険者様！ もしかしたらすでにお気づきのお方もいらっしやっただかと思えますがあー！！ なんとそこにおわすお方はあああああ！」







「き、聞いたか、竜殺しって……」

「あ、思い出した！ この前、ギルドで見た！ すげえ銀髪の美人に負ぶわれてた……！」

「ユト・ウエトラル！！ あの塔級が言ってた古代種をやったって  
いう奴だ……！」

「いや、それより、やばくねえか？ 竜を殺すような化け物に俺たち喧嘩を」

【竜殺し、及びあなたのアガトラでの名声値が”アガトラのやべえ奴”まで上昇しています。これにより、冒険者たちの戦意が】  
「いや……！ みんな逆に考えるんだ……！ これはチャンスだ……！  
……！」

「……………え……………」

「確かに彼の名声は今や噂話で一度は誰しも聞いたようなものだ、







「……ひひひ、あのおっさんやるなあ。味方に欲しい」

「おお〜こりゃ、竜におだてられいい気になってからによオ」

蒐集竜のバフを受け、余裕のできた冒険者たち、彼らの血の気のおおい視線が遠山とウイスに注がれる。

「あいつらは一級クラスの実力者だ!! つぶさないと全部持っていかれるぞ!!」

「竜殺しだけじゃない!! あの赤髪もだ!!」

「ウール、どう思う……?」

「悪手だよ!!! どう考えても!!! 竜殺して!!!? あれは手をだしちゃばいですってば!!!」

「でもでも、なんか周りのアガトラの冒険者やる気満々だよお！  
どうするの！ アルノ！？」

「どうするって、……あークソ！」　「フィオナ村愚連隊」目標、黒  
髪の冒険者！　竜殺し！　赤髪の執事服！！　今はもうアガトラの  
冒険者たちの勢いと竜様のバフに乗る！！　祭りだ！　それにあの  
人らも竜様の焰で死ぬことはない！！」

「うっわー本気ですか！？　嫌な予感しかしないけど！」

「でも、アルノが言うなら！　あ、魔術師さんも手伝ってね！」

「え、え〜、自分もつすかア！？　……あ。あれ、あの黒髪の人、  
どこかで見た事ある気が……うわああ、知らせ石がこんなに真っ赤  
になってる……絶対にヤバい人じゃん……」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお！！　竜殺しと赤髪を先  
にやるぞー！！　あいつらさえ退場させれば優勝も夢じゃねえ！！」



「そうだ！ アガトラの冒険者の底力を見せてやれ！ 等級詐欺組をつぶせ！」

「竜殺しに挑め！！ 祭りだ！ 祭り！！」

「すつげえ勢い！……みんな、もうやるしかない！！ ウールの”停止”が作動した瞬間にたたみかける！ ビーノは法術でみんなの強化！ 魔術師さんはなんか遠隔で攻撃！！ いいかい！？」

「や、やるしかないのか……停止、きくのかなあ！！？」

「でも、今の竜様の加護がある状態なら……」

「遠隔で攻撃って！！ なんか指示自分のだけ雑ウ！ これだから下界の実習は嫌いなんすよ！！ でも、人知竜様もいらっしやるし……ああ、もう！！ 術式、仮設提唱開始！！」

「いいぞ！！ おい、野郎ども！ 芸術都市の冒険者のちびっこたちに負けんな！！ 目標！！ 黒髪と赤髪だ！！」

「いくしかない!!」　「フィオナ村愚連隊」！　根性だ！　ファイヤー!!　サンダー!!」

「ファイヤー!!　サンダー!!」

冒険者の集団が完全に狙いをこちらに定めたようだ。

魔術師の術式が地面をもりあげ、岩を作り、それが空中に浮かび上がる。

竜の加護、それから法術による強化。身体能力や士気を底上げされた冒険者たちが武器を構え、砂埃を巻き上げながら突進してくる。

そしてー。

「スキル・セット!!」　「俺は全てが止まったそれを願う」　停止、最大出力!!」

モノクルを装備したオールバックの美少年、彼の金色に輝く瞳が

遠山とウイスを映して。

「お？ マジか」

「ヒュー、いいスキルじゃねえか、うらやましいよオ」

びたり。

体が動かない、口はかろうじて動く、だがそれ以外、指先から足の先までまるで石か何かになったようにピクリとも。

6954

【警告・ウール・ホロロインの眷属スキル”停止”が発動しました。最大3分間、身動きが取れません】

【警告・抱擁と憐憫の眷属”メルヴィー”の影響下にあります】

「ほろろろ。動かないで、ネっ、ネッ、ゆっくりしよっヨ、ネっ、ネッ」



「あーやべえ」

「うーん、どうすっかなア」

今、遠山鳴人とウイス・ポステタス・ヘロスははつきりとそれに囚われて。

「行ける！！ 進めええええ！！」

「あいつら斃して！ モンスター片付けて！ その次はあの目立った芸術都市の冒険者のガキどもをつぶすっ！！」

「え！！？ アルノ！ なんかおっさんどもが不穏なこと言ってるけどー！？」

「想定内っ！ アガトラの冒険者だぞ！ 民度なんてあるもんか！  
！ それでも今は力をあわせるんだ！」

勇敢な冒険者たちが、眷属の力によりびくとも動けない遠山とウイスに迫って。

「……………」

「ぎゃっはっはっはっは」

【眷属スキルへの対抗ロール開始。特性”お前の血は白色だ”により付与された”神性”発動。眷属からの影響を中和します。ほっほっほ、ほっほ、わぬしよ、儂がおってよかったのう……ほれ、小童、儂の勇者じゃ。手を離さんかい」

ほきり。

「あ、アツ、指、折られたっ!!?」

「クソヘルムウ、てめえ、いついつのが仕事だろオ？」

『 A / O s y s t e m O N 』

ぶじじじじじん。

「あ、え、あえええええ？」

「えっ、あっ………」

ぼじせ。

「ウール!？」

モノクルを付けた少年の冒険者が急に倒れた。目と鼻から血を流し、身体を震わせて。

「あっ。あっ。あっ」

「よし、動けた、 よう、冒険者ども」

「あ、やっぱり油断したのはよくねえなア……あのバカ姫の悪い癖がうつってらア、やるじゃねえか、冒険者ア、悪くねえ作戦だぜ」

「お、おい!! お前んとこのスキル! 効いてねえぞ!!?」

「!」  
「どういう事だ!!? 一級モンスターだつて動かなかつたのに!」

「知るかよ! おい、おい、ウール!! ウール! 大丈夫か! おい!」



「や。ばい、アルノ、逃げ……あの2人、ダメだ、手を出したら、絶対に、絶対に敵にしたらダメな奴だった……」

「つくそ！ ウール！！？ おい！」

「うそ、ウール！？ どうしたの！？ なんで！？」

「あれ、うそ、魔術式が、作動しなくなって」

「落ち着け！！ この人数差だ！ 数で押し切る！！ 進め！ 進めええええ！」

「いや、無理だつて！！ ウールのスキルが破られた！ こんなのも初めてだ！！ アイツら、やばい！！」

それでも迫ってくる冒険者。身動きが取れるようになった遠山がチベスナの目で彼らを見つめて。

「どオするウ？ 竜殺しィ すごい人数だなア」

「あー？ どうするも何も、決まってるだろ、そんなもん」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおお」

「行くぞオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
い」

「2級冒険者パーティー！！ ボーン団！ バーノン・スミス！！  
参るー！！」

付近の冒険者達はこの瞬間に限り、死なない。

蒐集竜がそう言ったのだ。ならばそれは理由などなく絶対の事実である。

遠山鳴人は竜の力を知り、それを信用している。

つまり、殺す気でやってちょうどいい。

そう、この男の頭はー！。

【技能発動、頭ハッピーセット】

「まあ、いいや。だったら見せてやるよ、竜を殺した力を」

遠山がロープをの結び目をほどき、赤い探索者パーカーの首元を空ける。

「おっと閃いちまったア。どうする竜殺しィ、この人数だ、協力するかア？」

「笑えねえ、てめえごと全滅させてやるよ」

「ギヤッはっはっは、上等オ」

冒険者とモンスターが入り混じり、動き続ける中、その2人だけ

がぴたりと動きを止めて。

「遠慮なくやるか」

ニツ、と似たような人相の悪い笑みを浮かべた。

「遺物、霧散」

「漂竜物・弄月」

ぞわり。

その背筋の震えを覚えたのは、この会場にいた一級冒険者以上の

力量を持つ存在。

即ち。

「あ、やば」

聖女。

「すぶぶ」

人知竜。

「これは……」

「……へえ、コレが」

「王国の副葬品と、あれは似ているけど、まじーこのは……」

「魔術式、ではないのか？」

居合わせた塔級冒険者と、古魔術師。

そして

「あらあら、ウイス……それ使うんですね」

「ふっ。ナルヒトめ。加減を知らぬ奴よ、全く」

少し、嬉しそうに笑う幸運と竜。

「満たせー」

遠山の首元から噴き出る白いキリが闘技場を包む。

その目、白が溶け込み、今や茶色の瞳は乳白色の濁った輝きを放ち。

首から噴き出るキリの量は、大雨の次の朝に平原に溜まるものよりも多く、濃く。

「照らせー」

バスターソード。

いつのまにか赤髪の男、ウイスが肩に担いでいたその刀剣。刀身はボロ布で巻かれた見窄らしい形の大剣が輝く。

2歩先も見通せない白いキリの中、その青白い輝きはみるみる膨らんでー。



「いつ!!」

「

」

だが、もう全てが遅かった。

遠山が首元からヤイバを引き抜く。

ウイスがバスターソードの剣先を地面に突き立てる。

「キリヤイバ」

「<sup>新月</sup>ノイモント」

じゅわり。

ブオン。

「ッあ

「ギユツ……!？」

「ジユツ

それは、まさに暴力。

刻まれる、刻まれる、刻まれる。白いキリに潜む鋭い爪と牙、ヤ

イバと化したモノの鋭きが振るわれる。

「モンスターを、冒険者を、等しくキリが包んでいる。」

照らされ、爆ぜる。

それは単純なエネルギー。熱と光量を持つシンプルな力そのもの。

モンスターを冒険者を照らし、熱し、吹き飛ばす。

斬撃と爆発。

闘技場に無秩序、無差別、無慈悲な破壊が撒き散らされて。

キリと光。

遠山を包み込まんとする力をキリが堰き止め、斬り刻む。

ウイスに食らいつかんとするキリを力が照らし、吹き飛ばす。

「ヒヒヒ、面倒だな」

「厄介だなア、吹き飛ばねえのか」

互いが互いに向かう暴力を己が暴力で防ぎ合う。

それはこの世の単純な法則の光景。暴力には所詮、暴力でしか立ち向かえないということだ。

「ひ、い、ああ」

「お、ああ、キリ、キリが!!? うわああ」

「光が、逆流するっ!? ファアアア!?」

「だ、だから、ヤバいつていったのに……!!」

「ま、魔術式、が、食われてっ!!? 上書きされる!? これ、古魔術師並みの浸食っ !?」

「法術が、だめ、塗りつぶされて」

「く、くっそおおおおおお。うわああああああああああああああああ!!?」

そして、その無差別な暴力は不運な冒険者達に向けてもー！。

「……ふかか。面白い」

ほほほほほほほほほほ。

それでも竜。これこそが竜。人の振るう破壊の力を玉座から立ち上がることもせずただ指を鳴らすだけ。

金色の焰は、その竜の言葉通りに冒険者達の盾となる。キリの斬撃も新月の呼ぶ正体不明の爆発も、全て金色の焰と喰らい合い、打ち消し、消えていく。

「あ、ワア！！　ワアアアアア！？　あ、焰が……」

「嘘でしょ……なんも出来なかった……」

「いや、これ、一級冒険者どころじゃ……」

「これが、竜殺し……」

「今の光……なに……」

砂煙が晴れたのち、動いているのは金色の焰に護られた冒険者だけ。

モンスター達はみな全て、物言わぬ骸と化した。外と内から斬られたもの、圧倒的な力そのものにさらされ爆ぜたもの。

自然を支配し、この世界の中で明らかに人類よりも食物連鎖の上に君臨するモンスター達はみな、人の暴力の前に敗れた。

「わお、やりすぎ……あー、こほん！ 凄い一撃でしたねー！ あ、アリスお姉様の焰に護られた方は早く退場して下さい！ 誤魔化そうとするのはお勧めしませんよ」

「げほつ。すげえ砂誇り……おゝよかった、ヒトは死んでねえ、セーフセーフ」

遠山が周囲を眺めながらぼやく。

「あー……バカ姫、じゃねえや、メイド見習いさんや！ どっちがたくさんモンスターを狩ってたア？」

周囲の冒険者がよろよろと闘技場から退散していくのを横目にウイスがフォルトナに語り掛けて。

「えーと、お姉様？」

「なんだ、フォル。貴様、数えておらなんだか？ ふむ、ナルヒトが先ほどのキリヤイバも含めて24、ポステタスが先ほどの副葬品を含めて、25と言ったところか」

「おー、どうもオ。だ、そうだが、竜殺し。あー、こりゃもう勝負



は決まっちゃったかなア」

「いやいや、そうでもねえよ。メイド見習いさんよ。ルールは確か2つだったよな。より多くのモンスターを狩ること、そして」

「ええ、より長く、この闘技場に立ち続けること。ですね」

「ふーん。じゃあアレだな、お前、邪魔だな」

「ぎゃっはっはっはー、嗚呼、気が合つなア、俺でもそうするよ」

立っている者は2人だけ。

互いに笑い、モンスターの骸の山に囲まれて。

遠山が、左手にキリヤイバを右手にメイスを握り、肩に構え。

ウイスがバスターソードをくるりと弄び、片手で刀身をまっすぐ掲げて。

「お前が倒れる」

飛び出すのは同時。

遠山がメイスを振り上げて、ウイスの頭を狙う、しかしそれは陽動、本命はキリヤイバによる包囲、殲滅。

それを全て承知の上、ウイスがその誘いになる。狙いはシンプル、正面突破。

「死んだらごめんな」

「デメエこそオ!!」

迫るメイス、地を這うように振り上げられるバスターソード。

両者の距離が限りなく、ゼロになって。

【警告・古代種が付近にいます】

「あ?」

遠山の視界にメツセージが。

カタカタカタカタカタ！！

「オオ？」

ウイスの腰に巻かれたバケツヘルムが鳴動。

「ふかか、良い。そなたらの武、見事なり」

竜が最後に残った2人を見下ろす。

縦に裂いた青い瞳を歪ませて。

「我が眷属に挑むに相応しい、ぞ」

「ブオるるるるるるる、るるるるるるる」

間の抜けた隙間風のような音がした。

それはやけに熱を帯びて、やけに生暖かい。ああ、それは生き物の鳴き声だ。

6980

ずん。

闘技場の一角、一番大きな大門が開かれて。

ずん。



グが為されて。

びりり、足の底が痺れる感触は細胞が慄いている証だ。

古代種、その持つ威を遠山はすでに経験している。

【技能”オタク”発動。敵モンスターの正体を看破します】

「牛頭に、バカデカイ図体。オイオイオイオイ、マジかよ。ミノタウルス、いるのかよ」

「オイオイオイオイ、この威圧……古代種なんじゃねえのオ？  
聞いてねえよ、クソが。あのバカ姫知ってやがったな……」







だがその中で、チベスナー人が不機嫌そうに鼻を鳴らして。

「アイツ、また目を逸らした」

頭上にいるあの竜はまた、遠山と目があつた瞬間、ふいっと目を逸らしたのだ。

遠山鳴人はそれがやはり気に入らない。

「どうあつても優勝しねえとこっちを見るつもりもねえらしいな」

やる気が上がってきた。大歓声と熱の中、遠山が目の前の古代種、彼の知識ではミノタウロスと呼ばれていたそれを見つめる。

「ぶもおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

神話に語る、迷宮に潜む悲劇の化け物。ミノタウロス。見た目が

らして他のモンスターとは一線を画するのが解る。

「最後の大物だなア、どうする、竜殺しィ、仲良く一緒にアレを始末するかア？」

「ひひひ、だから、笑えない冗談よそうぜ 早い者勝ちで」

「ぎゃははははは。だろうなア！！」

「ぶるおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

大観衆の歓声を塗りつぶす雄たけび、びりびりと世界が割れるんじゃないかというほどに揺れる。

モンスターが、目の前の冒険者を敵と見定めて。

「ぎゃっはっはっはっは！！ 古代種とやんのは久しぶりだア！！  
まあ仕方ねエ！ どうせやんなら楽しもうやア！」

雄たけびに反応し、ウイスが狂暴な笑みを浮かべて駆け出す、英雄の膂力で踏みにじられた地面がぼこりと足跡を沈ませて。

「ぶるおおおおおおおおあああああああああ！！！」

「ぎゃっはっはっはっはっは！！！」

英雄と神話の化け物、いや、ここではヘレルの、天使の化け物が殺し合う。

振り下ろされる拳、舞う砂煙、その中から、ぞん、飛び出す赤髪の英雄。

「動き、よし！ 力！ よし！ 戦術、イマイチ！！ デカブツなのに自分で目くらまししてりゃア世話ねエよ！！」

「巨大な拳、腕を足蹴にモンスターの巨体を橋のように駆け上る。」

「よう、こんにはア」

「ぶも！？」

ずぶん。

そのまま回転しながら振るわれるバスターソードの一撃、モンスターの首を狙ったその一撃はヘルルの門番、ミノタウロスがとつさにウイスめがけて頭突きを放ったことにより狙いがずれる。

「おつとオ！！ 勘はいいなア！ 戦い慣れてやがる！！」

「ぶ、もお！？」

角。金色にコーティングされた角、一本がバスターソードの一撃によって刈り取られる。

「かってえ！ いいねエ！ やりがいを感じる！」

一進一退の攻防、しかし、優勢なのはヒトの方だ。身一つ、剣一つで見上げるような巨体、真正正銘の化け物と肉弾戦を繰り広げるその威容。

「強いな、あいつ」

やはりシンプルな戦闘能力は、どう考えても追いつけそうにない。ゆえに遠山は考える。

今、自分にある手札を。今、自分に出来ることを。人生とは今この手にあるものでやりくりしていかなければならないのだから。

「よし、やるか」

ひゅーひゅーひゅーひゅーひゅー。手に握ったままのヤイバに白いキリが集まり始める。

遠山の目、その茶色の虹彩にシロが混じる。

【警告・キリヤイバカウントが進行。      おお、わぬしよ。出来上がってきたのう、良きかな……】

「うるせえ、お札マツチヨ。      仕事の時間だ。力貸せ」

キリヤイバを取り出す首の穴はふさがっておらず、そこから白いキリが昇る。

両の目の中にも白いキリが浮かび、揺らめき、虹彩に収まらない

それが目から漏れ出して。

「かしこみ、かしこみ、奉るー」

もう、この男は戻れない。

探索者の到達点に手を掛けた、掛けてしまった。己の開けてはならない可能性に遠山はすでに触れてしまっている。

「オーバーロード  
遺物拡大解釈」

うぞり。ぞねり、ぐねり。

遠山の周囲にどうしようもなく溜まる乳白色のキリ。それは液体と見紛うほどに濃く、重たく、湿っている。きつと、魂もそうなのだろう。



「ッ!?!」

「ぶるっ!?!」

その異質を、英雄と古代種が感じ取る。命のやり取りのその最中、両者が互いに動きを止めたのは、遠山鳴人から感じる言いようのない、”気持ち悪さ”からー。

「キリヤイバ・”魑魅魍魎狭霧山野絵巻物語”」

お雛子の音が、もう耳のすぐそばに。

祭囃子の音が聞こえ、周囲の空気は湿って温かく。まるで夏祭りの夜のような。

ぞねり。

『ジュロロロロロロロロロロ』

『シャロロロロロロ』

キリの向こう側からそれらは現れる。魂を核とし、キリを肉とし、この世に這い出る。

それは遠山鳴人の冒険の足跡。彼の前に立ち塞がり、彼の冒険の試練であった者たち。

『カンカンカンカンカンカンカンカン』

『カンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカン』

身を擦らせ地を這う何匹もの三つ目の大蛇。テイタノスメヤ。

この世界にはないはずのソレ、道路標識を頭にし、金属と肉が混じったような歪な細い身体に、二対の羽を生やした異形のクリーチャー。 ” 標識アタマ<sup>ヨモツイクサ</sup> ” 。

魂の保存と使役。

遠山鳴人はキリヤイバの持つ本当の力に限りなく近づいてしまっている。

「行け、殺してこい」

『シャロロロロホ

湧く、湧く、沸く。

キリの瀑布と共に、一斉にキリの肉体を持つ魑魅魍魎がミノタウルスへと押し寄せる。

「ーハッ。やっぱ、テメエ、気持ち悪いなア」

カタカタカタカタカタカタ。微細に振動するバケツヘルムを抑え、ウイスがその場から大きく飛び退き。

「ブルオアオオオオオアアア!??」

『シャ□□□□□□!』

『カンカンカンカンカン』

モンスター対モンスター!

キリの大蛇がそのしなやかな身体をもたげ、大口を開いてミノタウルスに喰らいつく。

キリの標識アタマが手に持った踏切の遮断機を振り翳し、ミノタウルスに突き刺していく。

「ブルオアオオオオオアアア!? ルオオオオオ!?」

圧倒的な数の暴力。

白く揺れるキリが模る、遠山鳴人が打倒したかつての敵達が、いまや遠山の武器として機能する。

それは冒険の報酬。挑み、打倒し、手に入れる。彼がかつて望んだ冒険のあり方は、キリヤイバの性質と能力を決めていく。

「ブル、ルオア！」

しかし、古代種。

この世界最大の人外魔境、ヘレルの塔。

常人であれば3分、冒険者であれば3時間、そして、人域の最奥に辿り着いた理外の存在、塔級冒険者であれば3日は生き残る事が出来るだろうと言われるその魔境を棲家とする化け物。

『シャロー！？』

『カカン』

剛力。自らにかみつくキリの大蛇の口を掴み、縦に引き裂く。ま  
とわりつく標識アタマを片手でつかみ、おもちゃのように地面にた  
たきつける。

ミノタウロス。怪物の条件たる怪力、シンプルな力とはどのよう  
な状況をも力づくで打破してしまう。

「ブモオオオオオオオオ!!!」

吠える、キリの魑魅魍魎たちをその怪力によって散り散りにさせ  
て。

「かしこみ、かしこみ、奉る」

「ブ……!？」

ねっとり。

ミノタウロスが雄たけびをやめた。

古代種。大戦より前の時代からこの世界に息づく真の化け物。いずれは”竜”にすら並び立ちうる可能性のある生命のひとつ。ヒュームの街など単体で滅ぼしかねないそれが、今はっきりと、遠山を警戒して。

【条件を達成しました】

【キリヤイバが”トレナ・ロイド・アームストロング”の魂を保存している】

【特殊なイベントが発生します・”双子の再会”】



【以降、フォルトナ・ロイド・アームストロングとの特殊会話選択肢が追加されました】

「……………トレナ？」

その呟きは闘技場にいる遠山の耳には届かなかった。どうでもいい話で、この世界ではよくある話だ。

「ぶもおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおお」

最大級の警戒、威圧。それは古代種が縄張り争いをする際の行動。なぜか、ここに古代種なぞいるはずもないのに。

ミノタウロスは、ただそこにいる”たった一人の人間”へ二足歩行も忘れて四つ足で地面を踏み鳴らしながら吠え続ける。

「ほっ……………」

「うそ、でしょ」

「うじはい……」

「おいおいおいおいおい、ありがよオ……そんなのオ」

「ああ、綺麗だねえい」

「……古代種？」

ウイスに加え、観覧席にいる一定以上の水準にある実力者もまた異変に気付く。

遠山に背後に広がる乳白色のキリが、とぶん、波打って。

「白蛇女、行こうか」



どうしようもないものが混ざっていく。

遠山はそれをもつ怖いとすら思えない。ある種の寄生虫を宿した生き物が寄生虫の為に恐怖心を喪うのと同じように。

「前へ」

目から白い靄を漏らしながら、遠山がキリヤイバを構えて。

『 ええ、あははは。あなた、いつもこうして戦ってるのね。  
わかりました』

やけに流暢に話す白蛇女、彼女の顔は一瞬、とても穏やかなものへ変わって。







ぶちやっ。

スイッチが入ったのだろうか。

牛の頭の化け物、迷宮の奥に潜む現代においては神話によって語られるそれが白蛇女の頭を掴み、握りつぶす。

再生に時間がかかるほどの致命的なダメージ、白く長い躰がほどけて地面に崩れる。周りのキリの蛇たちも立ちどころに伸びきった輪ゴムをちぎるようにミノタウロスの手にかかって。

「ぶるっおおおおおおおおおおお！」

どンドン、胸を叩いて吠える。

アイツだ、あの小さき者だ。アレを殺さなければまたこの気持ち悪いのは何度でも起き上がってくる！！

ミノタウロスが今、この場で最優先で滅ぼさなければならぬ者を捜して。



「ぶ、も？」

いない。

蛇の群れを裂いた先、さきほどまでいたはずのソレがなくなっ  
ていて。

白いキリ、白いキリだけがその場に溜まり、

『ほほほ。ああ……実った、哉……』

キリの中から決して聞こえてはならない声が響く。

「来い、お札マッチョ」

『よしなに』

ずっ。

キリの奥が揺めき、ぼやける、その瞬間。

「ブ、っも!？」

キリの中から現れたのは、大きな腕、灰色の血の気の失せた肌、ゴツゴツした筋肉、そして、びっしりと墨で書かれた梵字。

それが、がっしりとミノタウルスの頭と首を掴む。もがく、もがく、もがく。

モンスターの身体を引きちぎるミノタウルスの剛力をもってしかし、その梵字だらけの腕の拘束を払うことは出来ず。

「やれ」

「ブッー」

「きん。」

ぶらん……

ミノタウルの尻尾が力なく地面に落ちる。首を逆向きに撥ねられた身体が、だらりと垂れ下がり。

「よし、探索、いや、討伐完了っ」と

キン。遠山の首にキリヤイバが収納される。それだけで、嘘かと思っほぐに周囲に満ちていたキリが晴れていった。



噛み合うのは菱形の鉄の鈍器、メイスの先端と無骨なバスターソードの布に覆われた刀身。

「おっとオ、もしかしてバレてたア？」

「心配するな、俺でもそうする。大技で大物狩った直後だもんな、一番取りやすいよ」

「いいねエ、話が合うじゃア、ねえかア！　ぎゃっはっはっは！　お前、やっぱ竜殺しだナア！！　なんだア！？　さっきのは！　テメエ面白すぎるだろオ！」

返す刀振るわれるバスターソードの一撃。一瞬受けることも考えたが、すぐにそれをやめて反射的に打ち付けるようにメイスを振るう。

がきいいいい！！

布に覆われた刀身のはずなのにどんな力を込めたらこんな硬質な音が響くのだろうか。

半ば遠山が弾かれるように2人の間に距離が生まれる。

「馬鹿力が！」

「いやア、お前もそう悪くねエぜ！」

古代種の撃破により、もはや闘技場で動くのは遠山とウイスだけ。つまり、ここで勝てばそのまま優勝だ。

だが、今更ながら遠山は自分の選択を誤ったことに気付く。

「ミスった、乱戦のままにしとけば良かった」

「ぎゃっはっは！ 仕方ねえよ！ 古代種とか出たらテンション上

がってそっち狙っちまうよオ！」

「いかん、ぐうの音も出ねえ」

【技能”戦闘思考”発動します】

今のやり取りで理解した。

どう考えても、白兵戦では勝てない。分が悪すぎる。

キリヤイバによる仕込みでの不意打ち、魑魅魍魎を使用しての  
界戦術、それか切り札の強力な魂の使役。今、遠山の取れる手札の  
ほとんどをシミュレートするもそれも通用しそうにない。

となるとあとはもう自爆覚悟の無差別キリヤイバしかないのだが

――

「おっとオ？ 考え事かア！？ スツとろくなってんぜえ！」

「う、お!？」

バスターソードの大ぶりの一撃を囨に、ウイスの前蹴りが遠山の腹を蹴飛ばす。

背中につけ抜けるような衝撃、痛みがないのが逆に怖い。ローブと内に着込んだ探索服がなければ立てなくなっていただろう。

「いい服着てんなア、竜殺し!」

「そりゃどうも!」

たたらを踏んだ瞬間、バスターソードの剣先と共に突貫してくるウイス、遠山がその場を転がって躲す。

「やへ」



悪手。避けたのではない、避けさせられた。

まるで怪物の一撃かと錯覚するようその一撃は、遠山の身体を無意識のうちに対怪物種戦のような広範囲の攻撃を交わすための大きな回避行動へと誘導させて。

「隙ありィ」

ここぞとばかりコンパクトに振り下ろされるバスターソード。

負ける、いや、これ、もしかして。

ウイス・ポステタス・ヘロスが　。



identified and an ethical evaluation of the A/O system will be initiated

II カタカタカタカタカタカタカタカタ

135話 バトル・バトル・バトル（後書き）

読んでいただきありがとうございます、良ければ下のツイッターフォローして次回の更新をお待ちください。

136話 竜とヒトと人間と

[ G o d b l e s s y o u . A m e n ]

「え」

「え」

震えるのは、ウイス・ポステタス・ヘロスの腰に巻かれたバケツ  
ヘルム。

そして、今、2人の聴覚が間違っていないければー

「喋った……？」

しかも、今の響きはまるで遠山のいた現代の言葉、英語……？

「ーぎゃっはっは、そう、かア……」

啞然とする遠山と、何かを理解するように頷くウイス。

振り上げられたバスターソードがくるりと彼の背中へ回されて、  
いつのまにか消えていた。

「……あ？」

一歩、二歩、ヘラヘラしながらウイスが遠山からあとずさり。

「やめた。俺様の負けでいいやア、やれ、竜殺ー」

ウイスがニツと、笑みを浮かべて。

【技能発動・”頭ハッピーセット”が発動します】

「ソオイ!!」

「グエツ!?!」

ここぞとばかりに、遠山が身体を跳ね起こしメイスでウイスの頭をぶん殴る。

ぼおう!! 金色の焔が発生し、メイスの直撃からウイスの頭部を守るも衝撃は伝わったらしい。

「なら俺の勝ちでいいな」

「うお……普通に痛え……テメエ、今の流れで普通躊躇なく殴るも

んかね」

よろめいたウイスに遠山が腕組みしながら、ふんと鼻を鳴らした、

「うるせえ、今回は勝てばいいんだ、勝てば。……なんで気が変わった」

「あー、いってー。ああ、いや別にイ。俺様アは主人に狩猟大会に出ろって言われただけア。優勝しろとは言われてねエ、それに、まあ、いいもん見せてくれた礼だよ、礼」

「いいもん？」

「ぎゃっはっはっは。ああ、いいねエ。あのバカ姫についてきた甲斐があったア、退屈しなくて好きだぜエ、俺様は。この世界がよお」

「何言ってるんだ、あいつ」

闘技場から去っていくウイスの大きな背中を眺めながら遠山が咳く。



ひゅおおおお。

空気が流れる。ふと周りを見回すとそこにはもう遠山しか立っているものはいない。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

沈黙の後に、響く歓声。観客席が湧く。

「なんだ！？　なんだ、なんだよ！　今の見たか！？」

「一級モンスターだけじゃなくて、古代種までやっちまったぞ！？」

「あれ、誰だ！？ この狩猟大会は2級冒険者までしかないんじゃないんじやなかったのか?!」

「いや、そのはずだけど……でもどっかで見た事が……」

「あ、あたし、知ってる。あの人、冒険者ギルドに急に現れて、竜様に連れていかれた人だ」

「容赦なく頭ぶん殴っててワロタ」

「頭殴られた方平気そうデワロタ」

「あれが、竜殺し……やべえやつじゃん」

観客が口々に狩猟大会の優勝者に驚嘆する。アガトラの市民は皆ミィハーで民度は低い、だがー！。

「すごかったぞ！」

「お前めちやくちゃ強いじゃん！！ 良いぞー！ さすが俺たちの街の冒険者だ！」

「アガトラの冒険者最高だ！ 早く一級になれよー！！！」

「いいモン見せてもらったよー！ ありがとうー！！！」

「トッオヤマ！ トッオヤマ！ トッオヤマ！ トッオヤマ！ トッオヤマ！」

だが、この街は冒険に挑むものを、そして相応しい力を持つものを歓迎する。アガトラの市民もまた同様に力に対しての敬意の表し方を知っていた。

「……ひひひ、現金な奴らだな、おい」





「ばっか、お前、言うじゃん？ バカ美味いんだよ！ そのパン！ マジで食ってみろって！」

「え〜じゃあ、あとで行くか？」

「ありよりのあり！！！」

「あ！ 俺も知ってる！ ホットドッグだよな？ 教会の許可を得ている新しいパンだろ？」

「この包み紙、たくさん集めるとなんか景品と交換してもらえら  
しいぞ」

「うお、教会の公印じゃん、ガチかよ……」

もう、遠山はこの世界の異分子ではないのかもれない。

少しづつ、本当に少しづつだが、その行動はゆっくりとしかし確実にアガトラに変化をもたらしている。



遠山がぼやく、しばらくの間、歓声に応える。そして、また上を見る。

ここにきた一番の理由も。

竜祭り。死の予言、パン屋、いろいろなイベントがあるが、遠山自身にとって今一番大事なことは。

「さて、ドラ子。ようやくたどり着いた。今度こそお話してくれるよな」

今日は竜祭り。これは竜が死に、そして生き返ったことを祝う祭りだ。

殺した男と殺された竜。遠山の続きはそこから始まったのだ。だからここを誤魔化すことは出来なかった。

「はい！！ 皆様！！ 盛大な歓声をありがとうございます！！でも、その歓声はもう少し温存しておいてくださいね！ それでは、狩猟大会の優勝者へ、蒐集竜様より贈呈の品が送られます！」



優勝者はこちらへ。っと、ふふ、下にいましたね、そういえば、え  
ーっとアリスお姉さま？」

「……良い、くるしゅうない。ふかか、もう良いぞ。テリオス、起  
きよ」

「あ？」

「ぶるるるるるるるるるる……」

「じきん、じきん、じきん。」

骨がこすれあい関節が鳴る音、しかしそれは腹に鳴り響くほどに  
大きく。

「まじか」

「ぶるるるるるるるる」

ミノタウロス。ここではヘレルの門番と呼ばれるらしい古代種の

モンスターが起き上がる。遠山にへし折られて逆向きになった首の位置を自分でもとに戻しながら。

「おいおいおいおいおい、なんだよ、第二ラウンドか？ しつこい展開は嫌われるぞ……ん？」

「ぶるるる……」

のし、のし、のし。

地響きを立てつつ、こちらへ歩み寄る巨大なミノタウロス。しかし、敵意や圧力をまるで感じない、そればかりか。

「お？」

「ぶるるる」

彼がその場に片膝をつき、首を垂れる。敬意かそれよりも重たい

何かを示すように。そして、遠山に向けて手を差し伸べた。

「優勝者よ、其方は我が蒐集品にその力を示した、そやつは強者に  
対しては礼を尽くす。返礼してやれ」

「返礼って……「ごうか？」」

上から響く竜の言葉の通りに、遠山は取り合えず腰を追って真っ  
すぐ直角90度に礼をする。

「ぶも」

「おっ」

どろぢやらミノタウロスは満足してくれたい、一鳴きした後、  
おらんにこぢらに手を伸ばしてくる。

「ぶも」

「そやつは認めた者ならば肩に乗せるぞ。テリオスにここまで運んでもらえ」

竜が上の浮いているフロアから声を下ろしてくる。確かにミノタウロスに運んでもらえれば届きそうだ。

「乗れって事？ マジかよ」

おそろおそろ、遠山がミノタウロスの手のひらに上へ。地面と同じくらいに固く、しっかりしている。普通に地面と変わらない足場だ。

「ぶももももも」

遠山の身体と同じくらいあるミノタウロスの顔が歪む、もしかしたら本人？なりの笑顔なのかもしれない。

「うおっと」

あつという間にぐいっと持ち上げられる、視野が広く、そして観客席と同じ高さに、一瞬でまたそれよりもはるか高く、歓声の渦を昇るように闘技場空間の最も高い位置へ。

「あら、どうも、凄い戦いでしたよ、竜殺しのトオヤマナルヒト様、本当にお越しいただいてんですね」

「よう、最近よく会うな。フォルトナ殿下。メイド服がお似合いで」

「あら、光栄です、あなたもその返り血が目立たないローブ、よくなじんでおいでですよ」

「そりゃどうも。貰いもんでな。送り主のセンスがいいらしい」

「ああ、それはそうでしょう。どうぞ、前へ」

恭しくロングスカート両端を持ち上げて礼をするフォルトナを  
通り越し、遠山は前へ。

歓声は未だ下から響く。空中に浮かぶフロアの奥に彼女がいた。

玉座のような椅子にゆうゆうと腰掛け、長い脚を組んだまま尊大  
にこちらを見下ろしてくる。

美しい豊穡の豊かな金髪は彼女が扱う金色の焰のように揺れる。空の最も高い場所、ダークブルーの成層圏を閉じ込めた蒼い瞳には人ならざる縦に裂かれた瞳孔が静かにこちらを見つめてくる。

竜が、いた。

モンスターを退け、冒険者を蹴散らし、古代種に力を示し、英雄と競い、たどり着いた先には竜がいた。

「……」

彼女は何も言わない。友誼を結び、この世界で初めてできた友人であるはずの彼女はここまでできてまだ、こんな感じだ。

さて、どうしよう。そうだな、まずは話を聞くか。それともこの前のあの夢の世界の話でもするか。あんときの制服姿は似合っていたとか、ドラゴンの姿はかっこよかったとか、あの化け物きもかったよなとか。

ピロン。

【スピーチチャレンジが発生します。竜の興味を引き、竜の関心を  
得て、竜との関係を修復しましょう】

舌の挑戦が冒険の手助けを。そうだ、考えると竜大使館でのいざ  
こざも会話によって切り抜けた。舌を用いて、意表をついて、意志  
を示して。

【サイドクエスト・”狩猟大会”が進行中です。スピーチチャレン  
ジに成功する事でアリス・ドラル・フレアテイルとの関係性が修復  
されます】

【クエストが連動しています。?????の干渉によりこのスピー  
チチャレンジには運による補正が働きます。どんな言葉でも竜はあ  
なたの言葉を聞くでしょう】

メッセージ。遠山の冒険を時に助け、時にややこしくする奇妙な  
システム。これもまた遠山の冒険といつもとにもあった。

めんどくさい竜を説得し、仲間に引き入れる。ああ、それは冒険だろう。誰しもが思う自由な冒険を飾るイベントのひとつだろう。

「……」

「……さあ、竜殺し様、アリスお姉さまの前へ」

目の前に竜、背後には王女様。冒険の配役としては上等だ。

さあ、冒険を。一心不乱に攻略を。祭りの日はまだ続く。死の予言も未だ見通せず。危険やトラブルが大量に。

さあ、さあ、さあ。冒険者よ。前へ。

運命を。

【クエストが進行します】

冒険を。

【スピーチチャレンジが進行します】



異世界オープンワールドの攻略を 。

【目標。 蒐集竜・アリス・ドラル・フレアテイルの攻略を開始】

「ドラ子さあ、君なんで屋台に来ないんだよ、どういう事だよ、このすっぱかしドラゴンがよお」

「 えっ? 」

「 ……は? 」

【はア?】

きょとんとしたドラゴン、目を見開く王女。

遠山の放った言葉は、竜を懐柔するものでも、攻略するものでもなく。

【スピーチチャレンジを】

「 うるっさい、黙れ、消えろ、今そっぴう気分じゃねえ 」

ぺしん。現れたメッセージを蠅を叩き落すようにぶったたて黙らせる。メッセージはすんっと消えた。

「え、いや、その……」

「それにさあ、ドラ子くんさあ、君、なーんかこの前から、というかここに来てからもそうだけど、なんかよそよそしくない？ さっきもさあ、俺と目が合ったら逸らすわ。なんか微妙に上から話しかけてくる時も距離感あるしさあ。なに？ 俺なんかしたか？ ん？」

「う、あ。いや、そのう……」

ねちねち、ねちねち。嫌味とは裏腹にはつきりした足取りで遠山がずんずんと竜の元へ進む。

会場の誰しもがいつのまにか固唾をのんでいた。それは次の瞬間には遠山が竜に殺されてもおかしくないからだ。

「……」

後ろにいる王女の表情を見るものは誰もいない。

「そもそもさあ。えーっと、なんだっけ。竜は約束を守る生き物だっけ？ んん？ あれ、お前、確か俺らの屋台に来てくれるっつー話だったよな？」

「あ、う。それは……」

ああ、だがいつまで経ってもその男は、焼かれない。竜がその男を殺すことはない。

ああ、そうだ。これはとてもシンプルな話だったのだ

。この会場にいる人、いやこの世界のすべての人にとって彼女は”蒐集竜”であるけども。

「ドラ子」てめー言い分があんなら聞いてやらんこともないぜ？ んー？」

遠山にとっては彼女は”友達”だ。

そう、これはつまり。

「てめー言い分があんなら聞いてやらんこともないぜ？ んー？」

「む、むむっ……」

玉座に座る竜の真ん前、チベスナが竜を見下ろしガンつけて。竜が困ったように唸りだす。

友達が友達に、文句を言いに来た、ただそれだけの話だ。

「なに、これ」

ぼそっと。

漏らされた言葉は本人以外には届かない。

「ドラ子、ドラ子よお、んで、何か言うことは？」

「……って」

「ん？」

「だって、……貴様が、貴様のところになんか、たくさんオレ以外の仲良さそうなのがたくさんいたし」

「はあ？ なに？ お前もしかしてパン屋の近く来てたんか？」

「む。むむむむ」

「あ、また黙ったぞ、このドラゴン。オラ、話せ、黙るなドラゴン」

がたん、がたん、がたん。

アガトラの市民たちは今信じられないものを見ている。

揺らしている、蒐集竜の座る椅子を！ なんかガキがするいたずらのようなことを真顔で！

観衆たちが悲鳴を上げ、何人かは気分を悪くしたように頭を押さえ、うなだれている。

「こ、こら、オレの席を揺らすでない！ 貴様、な、なんか近いぞ、距離が！」

「それだ、それも気に入らねー、ドラ子。俺の名前、貴様じゃねえんだけど」

「む、だ、だから、揺らすなと言つとるのに！ オレは竜だぞ！」

「あつそ、俺は冒険者だ。で、名前は貴様じゃない」

「む、むむむむ！ わ、わかった！ わかったから、ナルヒト！ オレの席ををゆらすな！」

「はいよ、ごめんね。ようやく名前呼んだな、ドラ子」

「むー……ほんと、ほんとなんだ、貴様は。オレは、オレがバ



カミたいじゃないか……オレばかりがおかしくて、貴様は何も変わらなくて」

声を小さくする竜、きつとその言葉は遠山と、背後の者にしか聞こえていない。

「オレは、変なのだ。あの日。あの夢の時からずっと、オレは何か、貴様のことで、貴様を、ナルヒトを見ると」

竜の蒼い目から小さな雫がこぼれ。

「あ、そうだ。ドラ子、すまん、ちょっとこれ見て」

る前に、遠山が玉座の腕掛けの部分に腰を預けてロープから何か取り出した。

もう誰もこの男のペースについていけない。

遠山が取り出したものは。

「……………なんだ、これは」

「お前のフィギュア」

「ふい、ぎあ…………？ は？」

そこにあつたのは、見事な再現度で造られたアリス・ドラル・フレアテイルの未塗装フィギュア！ 美しい顔をそのままに、衣装の揺らめきや、手にまとう金色の焰までも忠実に再現、そして何よりはその表情！

「すまん、事後報告になった。工房のドワーフの中に天才がいてな

……つい……その作ってもらっちゃった」

「これ、どつするのだ？」

「飾る。んで、すみません！ ドラ子さん！ どうか、どうかこれの商品化の許可もいただきたく！！ 大変差し出がましいことではあるんですが！」

瞬時に土下座の体勢を取った遠山が地面に頭をこすりつけたまま叫ぶ。

このフィギュアの件に関しては完全に、遠山のダメなオタク部分の暴走故に出来てしまった産物だ。本人もそれは必死に謝罪する。

「ナルヒト、貴様、まさか、この為にわざわざここまで、狩猟大会に来たのか？」

「え、まあ、これもある、でもどのみちここに来て、逃げ場なくさないとお前ずつと俺を避けてそうだったし」

「そう、か」

「はい、そうです」

沈黙。

竜が額を押さえて、顔を伏せて。

やばい。怒らしたかもしれない。遠山は思わずラザールとストルの姿を捜す、でも考えるとアイツらは竜案件の時はずっと姿を消しているのであんま関係なかった。

「ふかか」

「じゅん？」



あなたの事で悩むのは、もうやめだ、付き合いきれんよ」

「おっと、そこはかたないバカにした感。え、フィギュアはちなみに……」

「ふむ……見れば見るほど素晴らしい出来よな。……オレの姿を模した像はあれどこれほど小さく、また精巧なものは見たことない。条件を付けよう。これの作者と会わせよ。であるならそなたの商売にオレを利用することも許す」

「マジかよ、ドラ子。あー作者の先生には俺からいよくお願いしとくよ」

「ああ、そうしてくれ。ああ、もう笑いすぎて疲れた……ナルヒト、もうオレ達、何をしていたんだろっな」

「あ、そうだ、狩猟大会、そういや、なんか竜から贈呈品があるとかないとか」

「ふか」

「ん？ なんだ、その反応」

竜がまた固まる。

「いや、そのな。実は、2つ、用意しているのだ。……ナルヒトがここに来た時に……仲直りできた時に渡そうと思ってたもの別にある。1つ目は竜大使館の蒐集品から気に入ったものを渡そうと思う。これは竜祭りの後に屋敷に来て選ぶが良い」

「え、マジ？ 大盤振る舞いじゃん」

「で、その、もう一つのは悪いが、選ぶことができなくて……、あ。も、もちろん、い、いらなければそれで、いいんだが」

「え、いらない訳ないじゃん。いや、たのしみだなあ！ 俺、考えたら何かに優勝するとか体験あんましてないからよー。なんかメダルとかくれんのか？」

「……これ、だ……」

「ん？」

おずおずと竜が玉座の裏に回り込み、腕にぶら下げたそれ、小さな籠、バスケットを差し出してくる。

そこには包み紙にくるまれた板状のもの。茶色で、暖かくそして、香ばしい香りがする。

「く、クッキー、焼き菓子焼いてみたのだ……その、ヒトは仲直りするときに食べ物を送ったりすると聞いてな……コアという少しほろ苦い木の実を使った、御菓子で……う、うまく焼けたと思うのだが……で。でも、いらなければ本当に大丈夫だ、ほんとはもっと練習して渡したかったのだが、慣れてなくて」

おずおずと視線を下にもじもじしながら呟くドラゴン。

遠山からの返事はなく。



「あ、や、やっぱり、やめ」

「え、おい、マジかよ！」　「ココアクッキー」　みたいじゃん！　もらいまーすー！　おお、うめえー！」

「ふか」

その辺のデリカシーがもちろんない遠山がもぐもぐと差し出されたクッキーを食べる。

小麦、いや天使粉の芳醇な香りとほんのりほろ苦いココア風味がとても良い。良い火と炉で焼いたのだろうか、ほんのりと暖かい。

「お、美味しいか？　変じゃ、ないか？」

「おお、マジで美味しい……これ、レシピ知りたいな……ドラ子、これどんなレシピなんだ？」

「そ、そうか、美味しいのか……良かった。う、うむ、レシピだな、ふむ、どうやら顔見知りのようだからちよつどよい。フォル、ここに」

「はい、アリスお姉さま」

そして。

彼女がその場に呼ばれる。

ずっと、ずっと。竜殺しと竜のやり取りを背後で見ていた彼女が。

「狩猟大会の後、屋敷にナルヒトを招く。その時で良い、そなたが教えてくれた焼き菓子のレシピを教えてやれ」

「はい、お姉さま」

「ふかか、良い日だ、今日は。オレは本当に愉快的な友をえたものだ。……だが、ふむ」

言いながら竜が、アリスがフォルトナの顔を見つめる。

「フォル、そなたもまた、オレのー」

「アリスお姉さま」

竜の言葉を王女が遮った。普段の彼女なら決してやらないことだった。

「む？」

「お恐れながら、まずは観衆にお姉さまのお言葉を、狩猟大会の優勝者のご紹介をされては？」

「む、それもそうだな、ナルヒト、こっちに來い、今からそなたの紹介を」

今日は竜にとって良い日だ。友とのわだかまりもなくなり、古い知己への認識もまた新たなものになるかも知れない。

ヒトは退屈だ、世界は退屈だ。

だが、案外そうでもないのかもしれない。

竜殺し、そしてフォルトナ。

フォルトナに、竜への挑戦心があるのは知っていた。そしてそれを竜は好ましいものだと思っていた。

良い、と。

時が来れば受けて立とう。強き定命の者からの挑戦、それを受けるのもまた竜の誉であり、愉しみであると。

ああ、ナルヒト。そなたがここへ来てから、そなたと出会えてから、オレは世界をもう退屈とはつまらないものとは思わないよ。

割と、そう、世界とは生きるとはたのし

ばたん。

じゅっ。

「えっ？」

「……………」

それは頭を打つ音だった。体を急に倒して、なんの受け身もなく倒れた人体が鳴らした音だった。

「……え？」

男が急に倒れた。誰が、ナルヒトだ。

トオヤマナルヒトが、急に倒れて。

「ナルヒト……？ ど、どうした？ つまづいたのか？」

「」

男は何も答えない。

それどころか。

「あっ」

っー。

男の顔、うつ伏せに倒れてピクリとも動かない顔の辺りから液体が流れている。

赤にシロが混じった血だと気づいたのは竜の嗅覚故。

「ナルヒト？ ナルヒー」

「クスクス。あらあら、まあまあ。ふふ、あーあ、当たっちゃいましたか」

アリスが遠山の元へ駆け寄りうとした瞬間、笑い声がした。

「は？」

「ねえ、アリスお姉さま。大変です、どうやら、お姉さまが作ったクッキーの中に、コアの実じゃないものが混ざっていたみたいです」

「……待て、フォル、貴様。何を」

竜は知らなかった。いや、知っていたはずなのに、あの日、身を以て体験したはずなのに、それを忘れてしまっていた。

「あーあ」

フォルトナ、その星型の虹彩の目が歪む、物言わず斃れた男の流れる血を見て。



「本当に、食べてしまったんですか？」

ヒトの持つ、悪意を。竜は。

【猛毒であるカークオを摂取しましたが、あなたは死亡しまー  
いえ、  
違いましたね。貴方は”ヒューム”人類種ではありませんん】

ピコン

【特性が適用されます】

【ホモ・サピエンス】

136話 竜とヒトと人間と（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！

良ければ下のTwitterフォローして次回更新お待ちくださいませ！

137話 ジャイアント・ハッピー・キリング

「本当に食べてしまったんですか？」

やってしまった。

わたくしは、ついにやってしまった。

「……………」

斃れるは、竜殺し。

頭を強く打ったのでしよう。血が流れています。……………なんか白いのが混じってるのは、まあ、いいでしょう。

【メインクエスト”竜狩り”が進行します】

【オプションクエスト・竜殺しの無力化進行】

【蒐集竜の執着対象に手を出しました。貴女はもう彼女と共にあることは出来ません】

もう戻れない。もうやり直せない。もうどうしようもない。

ああ、なんてことをしてしまったんでしょうか？ わたくしを救ってくれた竜を、わたくしを見てくれた竜を。

何よりも美しく強く素晴らしく、そして――

「……ナルヒト？」

愛おしい貴女をわたくしは、

「ど、どうしたのだ？ ナルヒト？」

進むべき道がある。わたくしはこの先に進みたい。

始まってしまったの。始めてしまったの。やってはいけないってわかってる。やらない方がいいってわかってる。

でも。

「幸運にも、竜殺し様は、眠れる方のお菓子を口にされたみたいですね。フフ、苦しまないように逝けたのはかのもも、やはり、幸運なのでしょうね」

「フォル……？」

でも、仕方ないじゃないですか。そうしないと進めないんだもの。それをしなければどこにも行けないんだもの。

そして、何より。

「ごめんね、アリスお姉様」

わたくしはみたいのです。

「わたくし、決めたんです、もう」

この先にあるものを。

冒してはならないものを冒しましょう。

壊してはならないものを壊しましょう。

進んではならない所へ進みましょう。

届かぬものに手を伸ばし、誰も見たことないものを見に行きましょ  
う。





「遺言は、それでよろしいのですかな」

ぞっ。

毛穴の全てが開き、裏返るような感覚。身体の手が異常事態を感知します。

頭上。

ははっ。当たり前のように人が空を歩いていて。

「あの、竜でもないのに空を歩くのはどうなんでしょうか？」

「何、ちょっとしたコツです」

ベルナル・オドニアス。

鬼人。

御伽噺の中の存在、世界を燃やし尽くす最強の竜、炎竜と並び讃えられる伝説そのもの。

彼が消えたと思った瞬間、わたくしの目の前へ。

手刀が、振り下ろされる。

あ、これ、普通に死にますね。すぐくゆっくり全てが動いてる。走馬灯、本当にあるんですね。

えーっと、どうしましょう。ふふ、やっべ。色々考えていたのに、どうしていいかわからないです。

多分、わたくしがあの手刀に脳髓ごと縦に体を2分割されるまで、1秒もありません。ああ、どうしましょう、どうしましょう。

「お願いします、わたくしの”力”」

「ッ!？」

「テメエはヨオオオオオオオオオ! ほんつとにヨオオオオオオオオオオ! 打ち合わせに無いことをいきなりしてんじゃあねえ!」

めききききききき。

赤い風が鬼人の振り下ろされる手刀を受け止める。

ミシリ。

赤い風、わたくしの力であるウイス・ポステタスへロスの足元が地面に食い込んだ。

「じねは……」

「アツギヤア!? なん、だ、この力ア……!? ギヤ、ハハハハハハハハハハ!! 腕と足、折れちまったぞオ!!」

「……惜しいな。若造、だが殺す」

「うお、ヤベツ、あ、これ死ぬわ、悪イ、バカ姫」

鬼人の次の一撃は、わたくしの力を粉々にするでしょう。

鬼人の次の次の一撃は、わたくしをミンチにするでしょう。

「羽虫どもが」

鬼人の目。あらあら、ふふ、ようやくわたくしたちを見ましたね。

死。

あはは。当然です。わたくしたちが今、挑むのは竜とその従者。

天使の去ったこの世界で最も強く、最も偉大な超越者たち。世界に蓋をする世界の守護者たち。

なんて、なんて。

「うざったいんですよ、あなたみたいなのが1番ね」

【クエストが開始されます。貴女はこれまでメインクエストを忠実にこなして参りました。秘蹟がさらに強化されます】

7077

あの時もそうだった。わたくしのこれは進化する。

ヒトの進化とはつまり、いつもこれと共にある。

「まっへ」

”死”。

上姉様と老兵。きっと、本来の運命ならばあの方たちがここに立ち、竜へ挑む筈だった。運命と世界はきっと上姉様を求めていた。

でもね、違うの。

【警告警告警告警告音DEADクエスト警告警告警告警告】

「もっと」

ここにいるのは、私。たどり着いたのは私。

生き残ったのは私、勝ったのは私。





「ーっ」と……」

「すまん、遺言を聞く気がなくなった」

鬼が、手を振り上げる。ああ、死ぬ、死ぬ、死ぬ、死ぬ。

でも。

「もっ」と

死んでも、死んで。

「私を追い詰める」

ーやるものか。

【フォルトナ・ロイド・アームストロングが諦めずに進む】

【条件を達成しました】

【秘蹟が新たな領域に進化し、”権能”へと変化しました】

【貴女は新たな”眷属”の席に座る資格を得ました】

【”竜”などの上位生物、もしくは”超越者”の魂を魂喰らいなどで保有した状態でヘレルの塔に向かうと、眷属への挑戦が可能です】

「幸運にも」

【権能発動】

ズゴツ。

「ーむ？」

老執事の、鬼人の体勢が崩れる。足場です、ええ、全く幸運にも、余りに強いその膂力に足場が耐えられなかったのでしょうか。

ええ、全くの偶然です。

「よおお、先輩イ、稽古、つけてくれよオ」



「……速いつ！」

バキィン！！

ウイスが噛み締めた剣、鬼人の手刀とかち合い、当たり前のよう  
に剣の方が砕けた。

「ギャ！？」

「殺った」

そのまま、鬼人の手刀がわたくしの英雄の首に向かってー！。

「いいえ、そうはならないんですよ」

「ッ！？」

この数秒にも満たぬやり取り。死を間近に浴びるわたくしの心が時間を何倍にも引き延ばしていく。

ああ、これ。この時間が欲しかった。

秒に満たぬ隙間。秒に満たぬ刹那。鬼人の意識が、ウイスに向かった。

「幸運にも、あなたは私を追い詰めてくれた。幸運にもあなたは私達を5秒かけても殺せなかった」

「貴様、危険だな」

「幸運にも。鬼人、あなたは人の心を持っていてくれた」

【権能が発動します】

「ッ」

「これが、わたくしの竜殺しの始まり」

【権能が発動します】

【権能”幸運プロット・アーマー】

「漂竜物、起動。”忘れじの手鏡”」

わたくしは手に持っていたちっぽけなバスケットから、小さな手鏡を取り出す。

さあ、全て使い潰しましょう。

漂竜物。竜にすら比肩しうる可能性のある力持つ物品たちよ。

「幸運にも」

【権能発動・全ての漂竜物の使用权を得ました】

「……………!？」

鬼人の踏み込みが緩む。

王家の宝物庫から持ち出した、”漂竜物”。そのうちの一つ。

鏡に写した他人の最も大切な思い出を移す、下らないおもちゃ。

でも。あは。

「老人は思い出が多くていけませんね」



「これ、は!？」

老人は確かに歩みを止めた。ふふ、さて、この小さな手鏡は彼に何を、誰の姿を見せたのでしょうか？

「責めはしませんよ。誰しも柔らかい部分がありますもの。……超  
越者ぶって、わたくし達を舐めていた貴方、なんて愚か……」

ああ、そうだ。一応試しておきましようか？

わたくしの幸運がどれほどのものなのか。

「あなた」

「死ねばいいのになあ」

幸運にも。

【権能発動……”鬼人”への死亡判定……無条件で失敗。”幸運”の判定に失敗。肺の消失……スキル”幸運”により、代償ロールに成功。親指の爪の消失に変更】

「……ツツ……うふふ。強すぎますね。”権能”でも貴方には直接的な影響を与えませんか……じゃあ、もう当初の予定通りに」

「しまった！！ ケルブレイー！？」

「もう遅い。漂竜物”樹海への招き手”」

バスケットから次にわたくしが取り出した、ちっぽけな手のひらの形をした木の葉。

それが、ふわり。鬼人の胸元へ、ひらり。

「マージャリアの樹海の攻略、どうぞお楽しみに」

倒せないのなら、殺せないのなら答えは一つ。追い払う、ままで  
す。

「……見事、だが」

パシユ。木の葉に触れた瞬間、老執事の姿が消える。

やつ、た。あの鬼人を盤外へー

「えっ」

ずくづ。

え、お腹……？ 熱……

「フォルトナ！？」

ああ、ウイス。どうしたんです、そんな慌てた顔して。

「あ……れ」

わたくしのお腹に、何か、突き刺さってー！。

手？ ーあは、あははは。

「化け物、ですねえ、鬼人」

まさか強制転移して、なお攻撃を届かせるなんて……

「あはは、自分で手首をちぎって、投げた……？ これだから大戦から生きてる連中は、気持ち悪い……」

転移の狭間で切断された手首が1人で動く。わたくしの命を鬼人の手首が狙って。

「オラァ!!!」

ぶちゆ。

ウイスの一撃が、その手首を粉碎した。

「あは、流石、わたくしの……英雄……鬼人であれど、手首だけなら、余裕、ですね」

「喋んな、バカ!!! お前、何まともに攻撃喰らってたんだよ!？」

「鬼人が化け物過ぎるんですよ。あそこから攻撃なんて普通届くわけない、でしょう? ふふ、でも、幸運にも、わたくしはまだこうして生きて……鬼人はマージャリアの樹海へ……ごふっ」

あは。まだ、まだ倒れることは出来ない。

幸運よ、わたくしの幸運よ。まだここじゃないですよね？

【権能発動・負傷の進行が幸運にも止まります】

「血が……止まっ……あ……」

「あら……まあ、そうですね」

「ウイスが思わず上を。」

その視線の先にはそれがいた。

最悪のタイミングで、それが来てしまった。

まあ、そうですね。そりゃそうですね。

試練はこうでない。あー、お腹痛い。死にそうです。死なないけども。

【メインクエスト・竜狩りが進行します】

【目標・人知竜の無力化】

【非推奨・攻略難易度不明】

「悪いが、キミ達を見逃すわけにはいかないねえい」

ふざけた三角帽子に、銀の髪、酷薄な色を帯びた薄い目。

そうですよね、次は貴女ですよね。

「全知、竜……！」

「人知竜だよ、名前を間違えないでくれ。……ご機嫌よう、そして、さようなら」

竜の威。アリスお姉様とは根本から違う魂が凍てつくようならんしをわたくしは浴びる。

あは、あはは。でも、大丈夫。わたくし、今、笑ってる。

だから、そう、笑え。震える指先を誤魔化し、噛み合わなくなる歯を噛み締め。

嗤え、私。



「幸運にも」

切り札が一つなんて誰が言ったのでしょうか？

さあ、わたくしの手や、動け。

バスケットから、それを大きなそれを取り出して。

「それ、は……」

「アハ、考えていないわけがないでしょう？ 鬼人の次は、貴女ですよ、古い竜、ええ、わかっていますとも。貴女にとってヒュームなど、敵にすらならない弱い存在だと」

全知竜。

語るもおこがましいこの世界の大きいなる楔のひとつ。

「あなたはヒトを知らない。表面だけでヒトの理解者ヅラをしている魔術師なんていう眷属ごっここの親玉にすぎない。あなたはヒトを見ていない」

ヒトなぞ彼女にとって、おもちゃかペット。

反吐が出る。理解者ぶるな。反吐が出る。竜としての性欲にも等しい支配欲をさも高潔なものとかかりに振る舞うその業はー！。

7097

「誰かに言われませんでしたか？ ヒトを、舐めすぎなんですよ。上位生物」

幸運にも。

フロールンス旅団がたまたま、この街に来ていた。

フロールニス旅団がたまたま、この生き物を飼っていた。

「お前、ソレ……俺様に昨日狩らさせた……」

ウイスに頼んで、狩ってもらったんです。

どのようなサイズのものでしまえる、取り出せる、わたくしのバスケット。

そこから取り出すのは……うわ、重たい。

「さあ、クダルさん。見せてあげなさいな、かの竜の……未来の姿”を」

『ほきほき……』

『素腐腐……』

ぞん。

ばきり。ばきばき。鏡頭の古代種、  
写したものの未来の姿を教え  
てくれる。

ちあ、おいで。

さあ、来なさいな。

「貴女を斃せる存在なんて、貴女くらいのものでしょうか？」

『問いー解答ー』

鏡頭から出る、ソレ。ドロドロとした黒い液体と固体の狭間。

腐っているような煤けているような。だけど、それははっきり黒い竜の身体。

ああ、鏡からそのアタマが出てくる、まるで、ヒトの脳みそ。

「……やられたね」

それを見た瞬間、かの竜が一緒、観客席の方に目をやる。

そして、パチンと自分の指を鳴らして。

「この借りは返させてもらうよ。ト」

パシユ。

人知竜と、その未来であるはずのナニカが消えました。よほど、その未来の姿を見せたくない相手がいたのでしょうか？

簡単な話です。

ふふ、どう考えても鬼人と人知竜同時の相手なんて無理です。

「え……行つたの、か？」

「あはは。うふふ。見ましたか？ 今の顔。何が人を知る竜ですか。ですが判断が早いですね。流石です。少しでも迷ってれば、でも、これで邪魔者はいなくなりました」

と言いつつ、あらあら。ふふ。まだまだ厄介なのがたくさん。――  
級冒険者に、塔級冒険者、そして聖女。

―― 一斉に掛かられても面倒です。ですので、ここは。

【継承秘蹟を複数保有しています】





「……フォル、貴様……」

「ああ、ようやくわたくしを見てくれましたね。ねえ、アリスお姉様、わたくしは貴女にとってどう見えていたんですか？」

「……爺やを、どこへ……！ ナルヒト、ナルヒトは、……ああ、ああああ……」

お姉様、少しがっかりです。無言で殺しにかかってきてくれるって思ったのに。

人の心配？

……随分とまあ、ヒト臭くなって。

「貴女は見誤った」

お姉さまの蒼い瞳を覗きこむ。わたくしの星型の虹彩がそれに映る。

「貴女はわたくしの野心に気付いていたのに、見誤ったんです。想像と違いましたか？ もっと正々堂々と来ると思いましたか？ 真正面から向かってきたわたくしを、貴女がいなしまたいつでも挑んでこいとか、そんなあなあで終わると思っていましたか？」

「どうして、ナルヒトが……」

「ああ、それなら簡単です。お嬢様の作ったお菓子。あれコアの実じゃなくて、カークオの実が混ざっていたんですよ。ええ、偶然です、ええ、たまたまです。たまたま最近、帝国近海の商船が海賊の襲撃を受け沈没。荷の回収の時にカークオの実とコアの実が混ざったんです。ああ、そしてたまたま、そのカークオは誰にも気づかないまま、流通に乗り、大使館へ届けられた」

「あ  
」

「ええ、残念です、こんな事、あの方、メイド長のフラン様さえいらっしやれば簡単に見分けがついたでしょうに」

「ああ……」

「ふふ、アリスお姉さまはそんな事微塵も考えずに、ずっとずっとずっとお菓子を作り続けたのです。あはは、竜殺しへ向けて、猛毒入りの御菓子を」

「……オレ、は、オレが……」

「はい、貴女が作ったお菓子が彼を殺したのですよ、ええ、でも貴女が気に病む必要はありません。だって、それは」

竜が綺麗な顔をくしゃくしゃにし、己の手で顔を覆い、呻く。

竜の目が揺れる、なんて脆く、なんて、綺麗。ああ、そっだ、わたくし、こっついうのが。

「運が悪かった、だけですから」

見たかったんだ。

「  
」

竜が固まる。あは、やってよかった、本当に心の底からそう思えます。

「さあ、幕を閉じましょう。さあ、始めて終わらせましょう。お姉様」

「お前は、貴様は、何がしたいのだ……」

「なんで、そんな顔を……？ フフ、簡単ですよ、わたくしは、わたくしはね、先を知りたいんです、ああ、そうだ、そうなんだ、それだけだったんだ」

そう、環境や世界のせいじゃあない。

世界は嫌いで。人生はクソで。

でも、関係ない。

「ねえ、道の先に何があるか気になりませんか？ 山の向こうに何があるか知りたくありませんか？」

「空の上に何があるのか見たくないですか？ 大地の果てに何が待つか会いたくありませんか？ あの塔の上に何があるんでしょうか？ あの樹海の底には何が潜んでいるんでしょうか？」

「決してやってはならないことをしたらどうなるのでしょうか？」

「竜を殺すってどんな気分なんでしょうか？ ああ、そうだ、そうですね、冒すんです、未知を！ 禁忌を！ 常識を！ 善意を！」

仕方ないでしょ？

だって。生まれた時から、わたくしは、こつこつ生き物なんだから。

だってこれは

「わたくしの冒険なんですもの」

あ。そっか。

「さあ！！ アリスお姉さま！ 殺してくださいな！ わたくしを殺し合いましょうな！ わたくしと！ わたくしを見てください！ わたくしを認めてください！ 貴女があの時拾った小娘は！ フォルトナはここまで強くなりました！！ 竜と、貴女と覇を競い合うのはこのわたくしです！」

私を見て。

「上姉様でもない！ トレナでもない！ 鬼人でも人知竜でもない！ 貴女と並び立つのはわたくしです！ そう、あの竜殺し！ トオヤマナルヒトでもないんだ！」

幸運よ。さあ、わたくしを押し上げろ！ わたくしの竜との最高の時間を少しでも早く。

幸運よ、さあ、わたくしの物語を進めろ！ わたくしが竜を狩り、わたくしがこの世界を　！！

【メインクエストがシングルモードからマルチモードに切り替わります】

【警告・相手は非常に危険な存在です。警告・敵には非常に恐るべき技能、特性が複数備わっています】

「えっ？」

なに、これ、初めて見るメッセージ……？

「お、おい、お姫さまよお、カークオの実、だったんだよね？ お菓子材料はよお……」

「ウイス？ どうし、まし……」

ウイスが片腕、残った左手の指を指す、その先には。

【オプション目標・竜殺しの無力化、失敗】

「なんて？」



【カークオの実による毒殺……判定に失敗しました】 【混ぜ込んでいたネムネム草の睡眠効果が切れました】

【竜殺しは”頂気捕食者ホモサピエンス”です。この惑星においてかの者の食性から逃れるものは存在しません】

「は？」

「あゝ頭、痛え。お、クッキー残ってんじゃん」

【カークオの実のメチルサンチナルカロイドは無毒化されます】

がりぼりぼりぼり。

男が、地面に散らばった焼き菓子に頬張っている。

そんな訳がない。

アアアボボボボボボ、ブオールドナアアアアアアアアアアボ  
ボボボボボボアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

カークオの実を食べた兄上の断末魔は今でも覚えている。血を吐  
き、顔を真っ蒼にし、喚きもがき、苦しんで死んだはず。

そんなわけが、ないんだ。

「……………な、るひと？」

わたくしの竜が細く声を。その名前を呟く。

「美味え」

男が、立っている。男がそれを食べ続ける。

「それ、なんで……？」

【警告・竜の創造品は強力な祝福が宿ります。警告・竜殺しに数々の補正が発生します】

がりぼり。ぼりぼり。

コアの實の代わりに、カークオが混ぜ込まれたその猛毒の生地を男が頬張り続ける。

「いや、これ、チヨ」

「は？」

ぼん。

一瞬で視界が、真っ白に。何も見えない。何も分からない。

え？ なに、これ、これ、なに。

やだ、やだ、え？ 幸運、幸運、幸運、幸運

「ウイスキー」

無意識にわたくしの声、震える、まるで。

ぼん。

キリが晴れる。至近、距離、彼がいる。

【警告・敵技能”頭ハッピーセット”により相手に躊躇いはありません。あなたの”星のカリスマ”による魅了、及び、補正は一切発動しません】

【警告・敵の”クエストメーカー”が干渉しています。敵はすでに運命を掴み、選ぶ、幸運放り投げています。敵の”クエストメーカー”?????”は”プロット・アーマー”よりも】

なんで、なんで、なんでなんで!?

当たらない、当たらない。当たらない!! 死ね、死ね、死ね! なんで!?

幸運がまるで、発動しなっ

【遥か格上の敵です】



それが自分の悲鳴だと、  
すぐに、気づいた。

137話 ジャイアント・ハッピー・キリング（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧くださいー！

明日ダンフル2巻の告知します。よければ下のTwitterからチェックしてみてください。



おまけ話・今はもう、叶わぬ喧騒よ（前書き）

【条件未達成】

【このルートは消滅しました】

おまけ話・今はもう、叶わぬ喧騒よ

【そして、叶わぬ喧騒に思いを馳せる】

くあり得ない未来・竜祭り後のある日く

「アツ!? うっそでしょう!? ナルヒト! 待った! 待ったです!」

「待ちませーん。フォルトナさんが攻撃を選びましたー。はい、フォルトナの攻撃宣言で、魔術カードオープン。”魔術式早期詠唱”を使用、手札から、”竜大使館”をそのままノーコストで発動しまーす!」

「いやああああああ!?　ズルイ!　ズルイですわ!　アリスお姉様!　このチベスナがわたくしをいじめるんです!」

「ふかか。フォル、らしくないな。オレの従者なら見事、ナルヒトの計略に正面から立ち向かって見せよ」

「ッ!!　やる気が湧いてきましたア!!　ムンムンと!　オラッ!  
!　シャコラ!　来いや!　チベスナ!!」

「うるせえ!　誰がチベスナだ!　この星形ドラゴンオタクが!　もうお前は俺には勝てねえんだよ!　はい、フィールドカード、”竜大使館”の効果により、コスト無しで、山札から”竜大使館”勢力のカードを場に召喚しまーす」

「げえ!!　やだー!　アリスお姉様!?　ナルヒトが陰湿なコンボ決めてきます!　ずっる!　それ、ずっる!　アリスお姉様のカード!　それあなたしか使っちゃダメなカードとか!!　よくないですよ!　ゲームの開発者のみのカードなんて!」

「うつせえ。トウーンだから効きませーん、よりましだろつが。はい、英雄カード・”蒐集竜アリス・ドラル・フレアテイル”の第一の効果発動。場に現れた瞬間、フィールドの”パワー”5以下のカードを全て破壊しまーす」

「お姉様！ わたくしにも貴女のカード使わせてください！」

「ナルヒト以外ダメなのだ」

「チクシヨオメエエエエエエエ！ いやあああああああ！ わたくしの王国兵達がああああ……なんちゃって。反転カード発動！ ”継承の声”！！ ヒューム勢力のカードが”竜”勢力のカード、もしくは英雄カードの効果、攻撃で破壊された時、秘蹟カードを手札に加え、対応するカードがあつた場合、即時フィールドに特殊召喚しまーす！ おやおやおやおやあ！？ 幸運にもお！？ はい！ 来ましたア！ 秘蹟カード”幸運”！ 手札から速攻で効果発動！ 第二効果！ 山札から無条件で任意のカードを場にコスト無しで特殊召喚！ もちろんわたくしが選ぶのはア！ 英雄カード”力の英雄・ウイス・ポステタス・ヘロス”！ さらに秘蹟カードオーブン！”王の巨人兵”！！ 手札にある英雄カード”フォルトナ・ロイド・アームストロング”の隠し効果発動！ 山札にある”王家”勢力のカードを墓地に送り、王家勢力の秘蹟カードを苗床無しで使用可能ですわ！」

「うつそだろ！？ てめ、秘蹟使うなよ！ そんなんズルだろ！  
なんでそんな確率で手札にコンボカードが揃うんだよ！！ てか、  
自分を使うなや！ 恥を知れ、恥を！」

「運もおおおおお、実力のうちでええええす！ ベロベロばああ  
あああ！！ ふふーんだ！ 今、アガトラではフォルトナ起点の英  
雄と秘蹟組み合わせロールが環境なんでえええええす！」

「泣かす」

「やってみなさいな」

ひだまりの中、呑気な声が響き渡る。

オタクと竜と王女。幼き頃に子供として振る舞えなかった者たちが、口汚く罵り合いながら遊ぶ。

ああ、でも、皆、その顔は、笑顔ー！。

「飽きもせず、まあ、続けますね〜うちの姉も」

「まあ、なんだ。仲がいい事はいいことじゃないか？」

「そうですね〜、まあ、あのバカ姉もようやく対等な遊び相手が出  
来たって感じですか」

「君は混ざらなくていいのかいー」

屋敷の丸テーブルで騒ぐ彼らをキッチンから眺める2人の大人。

白い鱗のリザドニアン、      ラザールと、      緑に白が混じるポブカ  
ツトの美人が微笑ましくみつめる。

「トレナ・ロイド・アームストロング？」

「ええ、私は大丈夫ですよ。ラザールさん、眺めてるだけで幸せですから」

ふふッと、フォルトナとそっくりの美人が微笑んで。

「ほんと、夢の光景みたいに」

休日の午後が、ゆっくりと過ぎていく。

おまけ話・今はもう、叶わぬ喧騒よ（後書き）

本編もまた描きます。毎日のほんの息抜きになれば幸いです。



138話 同類のよしみ

その生き物はあまりにも弱く。

その生き物はあまりにも儂く。

だがその生き物が住む世界はあまりにも過酷だった。

本来ならば滅びるはずだった。

もしも、惑星に設計者がいたとしても。

きっとその生き物は惑星の支配者になれると想像もしなかっただろつ。

しかしその生き物はその星のどんな生き物よりもー。

「ーおいおいおい、嘘だろ！ この世界の連中、チョコ食べねえのかよ！ ラザールに次のパンはチョコチップスティックパン作ってもらおうかと思ってたのにさあ！」

遠山鳴人の声だけが、その空間には響く。

ヒュームの霸王の残した秘蹟、それによる停止の命令ー

ホモ・サビエンス  
遠山鳴人には関係ない。

この生き物に、そんなオカルトは通用しない。

「ナルヒト……なん、で？ カークオを、猛毒の実を……」

ドラ子。竜が目を丸くし固まる。彼女ですら知っている事実。

大量に食せば竜ですら死に至らしめる最悪の食物だ。

なのに、自分からそれを食べ始めている訳の分からない生き物を見て。

「カークオ……？ ……カカオ！？ ドラ子ちゃん！ その木の実に  
ってどんなの？」

「え、いや、粉になってるから、わからなくて……」

「お嬢様が！！ 魚の切り身を魚だと思ってしまっパターンの奴  
！ ああ、違う違う、その前に、だ」

「これ、めっちゃうめーな。ドラ子、すげーよ、お前」

「あ！ よ、よせ！！ ナルヒト！ え、え？」

ばりばりばり。その世界の生き物からすれば猛毒のそれを文字通り  
リスナック感覚で食べるチベスナにドラゴンが本気で慄く。

「ほろ苦い中にもきちんと甘さがあり、外の生地はさくさく、中は  
しっとり。ガトーショコラのようにでもあり、チョコクッキーのよう  
でもある……二ホンじゃ食べたことねえ食感だな」

「あ、……ああああ……！！ ナルヒト、ナルヒト！ 貴様！  
大丈夫か！？ 大丈夫なのか！？ い、生きて。な、なんで……」

「食性が違うんだろ。そりゃそうだ、思い込んでたよ、異世界ファンタジーなんだ。見た目が似ててもコイツらはヒューム<sup>人類種</sup>、で、俺は人間だもんなあ……」

遠山が、そして今自分が殴り飛ばしたヒュームの方へ視線を向けて。

「お、おい！ おい、フォルトナ！！ 大丈夫かア！？ お、お前が殴られるって、”幸運”はどうしたア！？ なんで発動してねえんだア！？」

「………わたくし、夢を、みてましたの、ウイス」

「あ………？」

「カークオが、お兄様を殺した時と同じように、アリスお姉様のお

菓子の材料にカークオが混じるようにしたんです。全部上手くいったんです。帝国に入る商船団を幸運にも海賊が襲いました。幸運にも襲撃後、積荷が海に流れ、それを別の商船が回収、コアの実として帝国に入り、幸運にも、幸運にも、ええ、王国産最高級嗜好品として、大使館へ届き、幸運にも、目利きのできるメイド長は倒れ、幸運にも、アリスお姉様の厨房に届き、そして、幸運にも、それはアリスお姉様の手で、竜殺しの元へと！ 幸運にも！ 竜は己が手で、竜を人へと墮とした大罪人を殺した！！ その筈でした！！」

「「うお」「

遠山とウイスが同時に似たような反応をする。

地面に仰向けに倒れたまま、目を見開き、フォルトナの演説は続く。

「なのに！！ あはは、ふふふ！ 不フフフフフフフ！！ 夢、夢を見ましたア、死んでない！ 死んでないんです！！ カークオの、猛毒の生地で焼いたお菓子を！ 上兄様があんなにもがき苦しんで死んだお菓子を！ 食べてえ、竜殺しが死んでない！！」

響く。

地下闘技場にフォルトナの声が響き渡る。

「そんな夢を見ましたア！！ そんなわけない、そんな訳ないのにねえ！！ ヒュームなのに！ カークオを食べても死んでないんです！ ヒュームなのに上姉様の秘蹟が効かないんです！！ ー私と同じ下らないじょうみょうの存在なのに、竜を殺し！ 竜と言葉を交わし、竜と並び！！ あはははは！！ 幸運すら、運命すら放り投げてた！」

「私が出来ないこと、出来なかったこと全部してたんですう！！ そんな夢を見ましたア！！」

ぱつと、立ち上がり、フォルトナが天を仰ぐ。

生まれて初めて顔面をグーで殴られた衝撃は彼女に酩酊にも似た感覚を与える。

緑の髪を振り回して、星型の虹彩を歪め、喉を潤らし叫んだ声は、彼女自身も自覚していなかった自分を強く写している。



「ベエー!!」

フォルトナが立ち上がる、ウイスの制止を無視し、その権能とま  
で化した己の業を振るう。

ぴんぱん、ピンパン、ピンパン、びびびびびびびびびびびびびびびび  
びびびびびびびびびびびびびびびびびびびびびびびびびびびびび  
び「ピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピ」

ピン。

「あ……」

フォルトナと遠山にだけ見える運命の知らせ。

権能と化した幸運が、遠山鳴人に死の運命を指し示す。だが。

「邪魔」

じゅわ。



遠山から噴き出した白いキリ、もはや欠けたヤイバを介する事なく漏れ出すキリが、矢印を全て切り刻む。

「なんで、なんで、貴方、貴方ばかり、そんな……」

フォルトナがへたり込む。ウイスが側に、だが力の英雄をもってして下手に手出しが出来ない。

今の遠山鳴人にはそんな言語化出来ない恐ろしさがある。

遠山が、一歩進む。

フォルトナがへたり込む。

「なんで、貴方ばかりが、私の欲しいものを……」

びくり。

遠山の歩みが止まる。

無色透明で静かにフォルトナとウイスを一撃で殺す為に伸ばしていたキリも主人の歩みと同様に止まる。

「ずっと、お前に違和感を覚えてた」

この空間で唯一平静な男がぼつりと呟いた。

「お前の行動や言動、一貫性があるんだかないんだか分かんねえ。ただのカスかと思いきや、それにしても……あまりにも……らしくない」

「なにを……」

「お前、ドラ子の事は本気で好きなんだ」

「……貴方に、関係ない……私とアリスお姉様の事は貴女には」

「いや、あるね。なぜならこれから俺はお前達を殺すからだ。だが、人間を殺すつてのは俺のような人権派からするとな、しんどいんだよ」

「何をいって」

「理由がずっと欲しかったんだ。いや、らしくねえことをしてたと思う。言い訳してたよ、ドラ子の懐に入られたからとか、王女様だからだ、とか。お前らの事は怪しんでたのに、理由をつけて速殺が出来なかった」

「……貴方」

「安心したんだ。お前が想像以上に胸糞悪い方法で俺を殺そうとしたことに。ああ、これで心置きなくぶっ殺せるって」

「……イカれてんなア、コイツ」

「だが、あと一つだ。あと一つ、理由が欲しい。格だ、今のお前と俺じゃあ人殺しとしての格が違う。格下を殺すのは、目覚めが悪い」

呪われた魂。

もはや遠山鳴人は殺しすぎた。

慣れすぎた。現代からこの世界へやってきた瞬間から、たどり着く為に、叶える為に。

欲望のままに、殺しすぎた。

「貴方が、貴方が何を言ってるのか、意味がわからない!! わたくしは、私は、ただ!!」

「お前の理由はなんだ？」

「え」

「これから始まるのは人殺し同士のどうしようもない殺し合い。お前はそのままじゃあ、竜に狂わされたしょうもないガキのままだ。勿体ねえよ、こっちはお前らを殺す為に色んなものを用意してるんだ。だから、格、だよ」

遠山が、わずかに声を震わせて。

「人殺し冒険者の格付けをしよう」

「あ……」

「俺は必ずたどり着く。俺には辿り着きたい光景がある。だから、殺す。それを邪魔する奴はなんであるうとぶち殺す」

遠山が進む。

「冒険だ。これは俺の冒険なんだ。誰にも邪魔させない」

「そして最近知ったんだが、冒険は1人もいいが、大勢も悪くない。ドラ子は俺の友達で、俺の冒険の仲間なんだ。コイツを殺そうとするんなら、お前は俺の敵だ」

キリを、纏う。

すでに変質し、どうしようもなくなったり着いてしまった男の身体からキリが噴き出す。

人間にはない機能、しかし、それは遠山鳴人がある意味人間であることの何よりの証左。

その生き物は弱い。

故に手を変え、品を変え、試行錯誤してきた。あらゆる生き物から奪い、喰らい、殺し、ここまで進んできた。

道具だ。ホモ・サピエンス己以外の全てを道具として扱い、その最弱の生き物は、人間となった。

「だから、お前を殺す」

白き霧。神域に揺蕩うそれが、遠山の体にまとわりつき、その命を待っている。

ついにその業は神と呼ばれた超常の存在すらも、己が殺しの道具として。

「なに。それ……竜殺し、あなたは、あなたはいつたい、なんなのですか」

「俺は遠山鳴人。お前達を殺す冒険者だ」

まっすぐ、細い目が獲物を見定める。

「んで。お前は？ お前は、誰だ？ なんのために、どんな理由で、どんなもののためにお前は俺の前に立つんだ」

遠山の問いに王女はこたえない、答えられない。

「それが言えないのなら、フォルトナ・ロイド・アームストロング。格付けはもう終わりだ」

「あ、あ……あ……」

「死ぬしかないな。フォルトナ・ロイド。アームストロング」

キリが、ぞわり。

怯える少女に向けて放たれる。

ぞー！。

その男にもちろん、ためらいはなく。

「ふ、んぬぐあああああああああああー！！」

「おっと」

赤い影が、少女の前へ。

力の英雄がその鉄腕を振るい、キリを振り払う。

「マジかよ、だいぶ重い霧のはずだが」



遠山の歩みがようやく止まった。遠山にとっては眷属へ足を踏み入れた異能より、むしろこっちのほうが厄介だ。

「我が王よ、前へ」

片腕になった英雄が、背中に王女をかばい、声を。

「ウイス……？」

「御身に降りかかるいかなる災厄も、御身を襲ういかなる苦難も我が力で振り払う、だから、前へ」

眼前、毒を貪り、舌を携え、霧を従わせ近づくと化け物をまっすぐと見つめ。

「あ、腕……なんで、わたくしの幸運が、どうして」

遠山の攻撃に幸運の判定が作動しない。

フォルトナを支えてきた幸運の否定は彼女に大きなダメージを。

「前向け！ バカ姫！ 気合入れろやア！ そんな情けねえ姿見せてんじゃねエ！ 敵はお前と同じだ！ すべてを踏みにじり、進んできた同格、いや、これまでで最強の敵だア！」

英雄の怒号が地下闘技場にこだまする。

遠山のキリを片腕で振り払う膂力は見事、だが、代償に最後に残った腕もキリに刻まれて。

「こつからだろうがア！ 先に行くんだろうが！ 俺様に下らねえもん全部壊させるんだろうがア！ 今更格上が現れた所でビビッてんじゃねえ！ ぶっ殺すぞ！」

「わたくしは……」

同格の敵同士の優勢を決めるのは精神力だ。そして人の精神の源泉とは多くがその”信念”や夢といったものが大きく作用する。

遠山鳴人にあって、フォルトナにないものがまさにそれだ。

「わたくし、は、あれ……」

空っぽだ。この女には理由がない。

ただ見てみたい、ただむかついた、ただ、この世界の先に、自分が進めた運命の先にどのような光景があるのか。

それを見てみたい、それだけの理由。

その薄っぺらさがここにきて、遠山との格の違いにつながって。

「ちっ」

ウイスがその場を動けない。彼には確信がある、おそらく自分が本気を出せば目の前の男を殺すのは容易い。それほどまでに実力差はある、はずだ。

なのに。

「そこの赤髪男、王女様には勿体ねえな。フォルトナに過ぎたものなり、ってか」

動けない、頭のどこかでずっと何かが囁く、気を抜くな、隙を見せるな、殺されるぞ、と。

そのわずかなほころびで己が守るべき王の命はこの男に容易く刈り取られてしまうのではないかと。

「つとに気味が悪い……切り札、使っちゃまうかア？」

かたかたかた、ウイスの腰に巻かれたバケツヘルムはその男を前にした時からずっと鳴動していた。

「ウイ、ス、わたくしは……」

「お前、冒険がしたいんだ」

「……は？」

フォルトナが自分を振り返ろうとした瞬間、無遠慮に残酷に無礼

に遠山の舌が言葉をもてあそぶ。

遠山にヒントを聞く力はない。人の秘密や、攻略のヒントを聞く無法の力はない。

代わりに己の運命を見る力とそれをたぐる舌と頭がある。

本来なら、フォルトナが時間をかけて気づくべき自分自身を冒険者が容赦なく、なんの感慨もなく暴いて。

「お前は冒険がしたいだけだ。わくわくしてたんだろ？ 竜とか俺とかどうやってぶっ殺そうとか考えるの楽しかったんだろ？ なら、笑えよ」

「あ……」

キリが再び広がる。

「中途半端に人間、いや、ヒュームの振りしてんじゃねえ。お前は選んだんだ。竜と共にあるよりも、竜を相手にするスリルを。お前は最初から俺と同じだったんだよ」

「あ」

フォルトナの顔から表情が抜け落ちた。星型の虹彩から光が消える、夜が終わり、朝になり星の輝きがふさぎ込むときと同じように。

その顔を見て、遠山が嗤った。

「だからさあ！ もうやめようぜえ！ フォルトナ・ロイド・アームストロング！ お互いによお！ 真人間、まともな奴、悲しい過去があつてどうのこうのとか、そういうの全部もうやめよう！」

頭が茹る、いや、その男のそれはすでに最初からハッピーだ。

そつだ、最初からその男はこの状況を楽しんでいた。

死の予言、それすら最初から。

「銭ゲバとさあ！ 予言の討論とかすんのも楽しかったよ！ 敵はどんな奴でどんな手で来るのかとか考えんのも面白かった！ パン屋の屋台してる時にお前が来たときは焦ったよ！ でもドキドキした！ この闘技場に呼ばれた時なんか最高だった！ いつ殺しに来るのかとかわくわくしてたんだよ！ 俺さあ！」

ラザール達、仲間が出来ていくのはうれしかった。

ドラ子や人知竜みたいなすごい奴らと話すのも楽しい。

ファンタジー世界の事を知っていたり、見聞きしたりするのもたのしい。

だが、遠山鳴人の本質は、こうだ。

「そうだ、冒険だ。俺もそうなんだよ、敵をどうやってぶっ殺そうかとか考えるの楽しいんだ！ フォルトナ・ロイド・アームストロング！ お前は悪くねえ！ 悪くねえ敵だ！ ゲームの対戦相手として理想的だ！ そんなお前がこんな格下みたいな反応はやめてくれ！！」

「物足りなかつたんだア！！ アガトラに来てから色んな奴がいた！ 良い奴も、面白い奴も、変わった奴も、バカな奴も、んで！ ぶっ殺すしかない奴も！ でもよお！ ぶっ殺すしかない奴がどうもチンピラやら格下ばかりですよ！！ 物足りなかつたんだア！ 雑魚ばかりだった！ 弱いものいじめしてたみたいなものだっ

たんだよ！……あゝまあ、でも例外はいたか……うん」

――鳴人くん鳴人くん鳴人くん鳴人くん。

何かの幻聴を思い出し、一瞬チベスナが真顔に戻る。

「ようやく見つけた同類なんだ！ お前は！ 家族をぶつ殺したんだろー！？ 恩義があり、そして自分自身も大好きな竜を貶めたんだろ！ すごいよ！ お前はア！ なんの理由もなく！ なんの信念もなく、なんの未来もなく、そういうのができるのはさあ！ お前には才能がある！！ だから、笑ってくれ！ 不敵に！ 怪しく、むかつく奴のままできてくれ！ ごまかすなよ！」

「ふ、ふふ」

フォルトナの目には、もうその男しか映っていない。

これは、出会いだ。

もしも、この2人が別の時、別の場所、別の立場で出会っていた



ら。

例えばそれは、遠山がもし、ヘレルの塔から王国へ向かっていたら。

例えばそれは、遠山がもし、白蛇女と別の結末を迎えていたら。

例えばそれは、遠山とフォルトナがもし、現代で出会っていたら。

この2人は、友達になれたかも知れない。

7152

「俺とお前は同じだ！ 同類よ！ こんにちは！ はじめましてえ  
！！ もう一度聞く！ お前は誰だ！？」

でも、もう、そうはならない。

「フォルトナ・ロイド・アームストロング」

緑の髪が纏められる、幸運にも吹いた風が幸運にも彼女の髪をまとめ上げる。

星型の虹彩が輝く、その星のある夜空ではきつと月の光すら陰るだろう。

王国第3王女、フォルトナ・ロイド・アームストロングはこの日、自分が生まれた理由を見つけた。

運命の先にはこいつがいた。

王を貶め、老兵を死なせ、霸王を超え、月光を遮り、竜に挑んだ。

その冒険の果てに奴がいたのだ。

「はじめまして、竜殺……いいえ、冒険者。あなたのお名前は？」

そう、その惑星の生き物はどんなほかのどんな生き物よりも、貪欲で強欲だった。

己の殺す敵に時に、格すら求めるほどに。

あまりにも殺すという事に親しみ、向きすぎていた。

その生き物の名前は。

「遠山鳴人」

頂点捕食者  
人間。

「では遠山鳴人、殺し合いましょう、あなた、好き勝手言いすぎてむかつきますから。幸運にも、死んでくださらないかなあ」

「おー、ぎゃっはっはっは。礼だけ言うぜ、イカレ野郎。うちのバカ姫、ようやく目が覚めたようだア」

王国をたった2人で落とした王女と英雄が、どう猛な笑みを浮かべて。

「ヒビヒビヒビヒビ！！ いい！　すごくいい！　冒険だ！　冒険者ども！　殺し合おうぜ」

ぽかっ。

金色に髪的美女がノリノリのチベスナの頭をぼんつと。

「「え……」」

「ナルヒト、少し落ち着け、今のそなたは冷静ではない」

「お、ドラ子、精神ショックから回復したか」

「頭が痛いし、まだ理解もしていない。だが、ひとつ、そなたの言葉から聞かせよ。フォルは、そなたの敵か？」

「ああ、敵だあ。ぶっ殺し甲斐のある最高の敵だぜ」

「ふむ、ふむふむ、むむむむむむむ。仕方ない、では殺そう」

竜が、すつつとその縦に裂いた瞳孔を細める。

この生き物は元からこうだ。爬虫類ってこういう所がある。

金色の太陽と鬱屈とした白い霧がともに並ぶ。

相對するは、冒険者、英雄と王女。

「……これも全部、いつもの幸運にも、かあ？ バカ姫様よ」

「なわけないでしょう、ウイス。今、わたくしたちは、この世界で一番」

「さあ！ 冒険だ！ ドラゴンと竜殺し対英雄と王女！ 対戦力！  
ド的には退屈しねえよなああああああ！！？」

頂点捕食者が竜と轡を並べて叫ぶ。

王女が、恐れと、興奮の交じった笑顔、生まれて初めて浮かべる  
タフな笑みを浮かべて。

「わたくしたちはこの世界で一番、不幸ですよ」

冒険が、始まる。

138話 同類のよしみ（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！

今週25日に書籍版2巻が発売します。ストルが最高の表紙で登場しています。

本屋さんなど寄る機会あればぜひお迎えください。日々の気休めに異世界でスカツとしたい時におすすりめです。あと犬派の人を刺す内容となります。

## 139話 紙一重の攻防

「ナルヒト、我が街の民は傷付けるな、それ以外は許す」

「了解、ドラ子」

竜と竜殺し。少し気まずい感じになっていた2人はしかし、殺し合いとなった瞬間に切り替わる。

片や暴力と支配を根源欲求とする上位生物。

片や殺す事を生業とし、真摯にそれに向き合ってきた根っからの頭がハッピーな戦闘生物。

アリス・ドラル・フレアテイルと遠山鳴人は戦闘において容易に噛み合う。

「合わせよ、ナルヒト」



「あいよ、ドラ子」

竜の瞳、見つめるだけで他者を焼きつくす金色の焰。

遠山のキリ。触れるだけで他者を斬り刻む白き霧。

2つの異なる暴力が混ざり合う。

遠山の身体中から蒸気のように噴き上がるキリが、竜の金色の焰と混じる。

夏の昼、青空を支配する積乱雲のようなソレが、竜と竜殺しの上に現れて。

「ッ!? ウイス!」

「わかってらァ!! 舌噛むなよオ!」

フォルトナの判断は早い。竜単体による攻撃であれば己の権能と

化した”幸運”により当たる事はないだろう。

だが、遠山鳴人。運命を放り投げた異物の攻撃は未知数。

顔を殴られた、という事実がフォルトナに遠山鳴人という存在への最大の警戒を与える。

「ヤバっ！ 来てます、来てますわよ！」

「ぎゃ、はははは！！ なんだア、アイツらア！ 化け物かよ！」

フォルトナをお姫様抱っこ形でウイスが抱える。浮島となっているフロアから彼らが飛び降りると、焰霧が一気に彼らがいた場所を攫うのは同時だった。

「チッ」

「ふむ。フォルにポステタス。悪くない反応だ」

見事に飛び降りたフォルトナとウィスを遠山とアリスが見下ろす。

竜と竜殺しの圧倒的な暴、それに王女と英雄がどう対応するか、これはそういう戦いで。

「ーわたくしの幸運による直接的な攻撃は不可能です、が」

彼女の星型の虹彩が歪んで。

「おっと」

「む」

。じじいへ。

唐突に、浮島。つまり、遠山とアリスが立つフロアが傾く。

あり得ないこと。確率的に、どのような運がー絡めば。

「幸運にもあなた達の足場は崩れる。直接的には効かずとも。フフ、間接的なものならば、可能みたいですね」

「うお」

当然、遠山は落ちる。人間は空を飛べない。

「ナルヒト!!」

竜が背中に焰の翼を生やし、落ちる竜殺しを追う。だがしかし、

「わあ」

「だめ！」

瓦礫。崩れる浮島が、観客席の方へ。

王女の秘蹟により動けない親子、親は子を庇つことも出来ない。降り注ぐ瓦礫を見つめることしかー！。

竜の動きが、一瞬止まり。

「ドラ子！！ 街の連中を！ ガキもいる！」

「ッ！！！」

落ちながら叫ぶ竜殺しの声に、竜が再び動き出す。

固まり、あとは押しつぶされるのみとなっている観客席に飛び、その拳を振り払うように。

瓦礫が粉微塵に碎ける。

人々を血のシミに変えるはずの大岩はただの砂利粒と化して。

「ナルヒト!」

勿論、代わりに遠山は落ちていく。この男にまだ空を歩いたり、走ったりするほどの特異性はなく。

「なるほどオ、それがお前らの隙かア」

「やべ」

とん、とん、とん。

それを見逃すこの男ではない。どのような身体能力であればこのような芸当が可能か。

崩れ、落ちていく瓦礫を足場に、力の英雄が空を駆け上る。

「弱い奴から狙うのが定石だよなア」

片腕のまま振られる折れた両手剣。しかし直撃すれば死。

遠山にその刃が迫り。

「同感だ」

「!?!」

ニタアと、落ちながら笑う遠山の凶相。

英雄の本能的な部分が警鐘を鳴らしまくる。

「すきあり」

「えっ」

そよぐ黒いマフラー。金色の癖っ毛、エメラルド色の瞳。

小柄な黒い影が、フォルトナを真上から狙って。

「大主教令、寿命5日使用。」私は誰にも従わない” 続けて、大主教令、寿命3日。” スヴィ、疾く”」

すつと開いた糸のような目から紫水晶の輝きの瞳が灯る。

天使教会主教、カノサ・ティエル・フィールドは利を見逃さない。

霸王の令を主教の令が上書きしていく。

ヒュームに対する絶対命令権。だが、フォルトナはその本来の持ち主ではない。

遠山鳴人に感じた確かな恐怖、揺らぐ心はそのまま秘蹟の強度に繋がる。

当初は上書きに10年の寿命を要求されていた秘蹟の強度はすでにカノサにとって払えるコストにまでダウンしていた。



「ある意味さあ、安心したわけよ。オホホホホ。竜を騙し、竜殺しを殺そうとした大罪人。やりやすくて助かるわあ、戦後処理も王国にふんだくれるわあ」

カノサは観客席から降りることもせず、そのまま冷たい目を闘技場に向けて。

「――正当なる防衛よね。王女サマ？」

「しまっ――フォルトナ！ なっ！？」

パキ、パキ、パキ。

あり得ざる光景、突如ウイスの周りを覆つように現れる白銀の冷気。

ソレは現実を己が認識で冒す禁忌の術。

「魔術式、仮説倫理構築」

騎士鎧の老婆、魔術学院の歴代学長の中でも特に人知竜から信を置かれた彼女。

いち早く、ヒュームの王の戒めを解いていて。

「ぶちのめしなさい、スヴィ」

「攻勢術式・”電包み”」

天使教会の女主人が己が最大の武力を振るう。

魔術学院の古い存在が己が業を振るう。

無防備な王女に。無防備な英雄に。

彼女達が敵に回したのは冒険都市アガトラそのもので。

「フフっ」

「ギャハハハハハハハハハハ！」

聖女の振るう大槌の一撃は王女を血のシミに変える、はずだった。

「え」

瞬く冷気。肉体を捨て、魔術式そのものに人格を移した人外の力は英雄を瞬く間に凍死させる、はずだった。

「これは」

だが、そうはならない。

「幸運にも」

大槌の先端が外れ、明後日の方向にすっ飛んでいく。

一体どのような確率、いや何がどうなればそうなるのか説明は出来ない。

聖女が振り下ろした大槌は経年劣化か、それとも彼女の膂力に耐えれなかったのか。

だが結果として。

「ご機嫌よう、主席聖女様。ああ、という事はやはり、遠山鳴人は天使協会と組んでいるんですね」

「……っ」

その不気味さに聖女は本能的にそれ以上の追撃をやめる。己の主人に手が届く範囲に下がって。

王女は死なず。

「遅いなア」

また一方で、英雄の周りを覆っていた冷気が払われる。

空中で身をよじり、振るわれた隻腕の一撃。ただその男が手を振るった、それだけで魔術式によってゆがめられた現実を吹き飛ばされた。

「魔術師じゃあ、俺様はやれねえぞオ」

王女と英雄。

異分子。すでにこの2人は腕試しを終えている。計略も含め、たった2人で一国を墮とした災厄。

ヒュームの中でも上から数えたほうが早い実力者を容易にいなす2人。

今回の戦いは彼女たちがアガトラに挑むのではない。アガトラが彼女たちに立ち向かうのだ。

「ウイス、ここに」

「おうよ、バカ姫」

霸王の令により身動きの取れないものが多数の中、それでも拘束を解いた実力者、もしくは頭の回る者たち。

それらを王女と英雄が眺めて。

「参りましたね、ウイス。御覧なさいな。天使協会と魔術学院が手を取り合っておりますよ」

「珍しい事もあるもんだなア。ここまで敵が多くなってるとは思わなかったア」

不敵に笑う2人。

本来ならば、この世界が歩む正しい歴史であればきっとアガトラは王女と英雄の前に敗北していただろう。

だが。

「ぶるもおおおお、もおおおおお」

「ナイス、牛くん」

ぷらん、ぷらん。

牛の巨人につままれて逆さまのままに吊られる男。浮島からの落下から間一髪、古代種がその男をキャッチしていた。

「やっぱり死なないですねえ、アレ」

「死なねえなア、さっき一番のチャンスだったんだが……」

「ナルヒト、無事か？」

「見ての通り。お前のペットは優秀だな」

ミノタウロスに地面に降ろしてもらった遠山が地面に降りる。

空から降りてきたアリス、どうやら観客に被害はないらしい。

「ぶるも」

「ふむ、よい。後で良い食事を用意してやろう。ナルヒト、どうだ、やれそうか？」

「まだなんとも。だが、爺さんや人知竜を転移させた手はもうどうやら使えない、もしくは必要な物が足りないと見た。接近した途端に場外つてのはなさそうだけ」

「そうか。……時間をかける理由もない。だが、フォル、あれからは妙な気配がする。正直、オレの攻撃が当たる気がしないぞ」

「安心しろ、幸運女は俺がやる。お前は赤髪を抑えてくれ」

「いいだろう」

竜と竜殺しが獲物を見つめる。

的確に敵の手札を考慮しつつ、攻略を進める。

遠山の見立ては正しい。



既にフォルトナにアリスや遠山を無理やりに移させる手札はもうない。

「……やりにくいですねえ、アレ」

心底いやそうな目で王女が唸る。

彼女からすればアガトラ勢力からの横やりが本格化する前に場所を変えたいのが本音。

「ヒヒヒヒヒ、王女様。良い顔になったきたな、やりがいがあるよ」

「ほんと、厄介ですねえ。白い霧漏れてますけど?」

「心配するな、そういう体質だ」

遠山の身体から白い霧が漏れ続ける。開かれた瞳からもたなびく白い霧は、もつとつしよつもなく彼の身体に広がる。

「……バカ姫、場所が悪いな。竜と竜殺しをやるには、アイツら2人を引き離す必要があるぞオ。思った以上に息があってやがる」

「ええ、わかっていますよ、ウイス」

「それとお、あとひとつ。てめえ、あの竜殺しには多分殺されるよな？」 幸運”がアイツにだけ全く作用してねえ」

「それも、わかっています、ウイス」

天敵。

フォルトナ・ロイド・アームストロングにとってまさしく遠山鳴人はそれだ。

「まさか、上姉様以上に恐ろしいヒトがいるなんて……フフ。毒も効かない、幸運もダメ……ああ、なんて、怖い……」

隙。何かきっかけが欲しい。

フォルトナが本人も自覚していない野性的な笑みをたたえる。

決して彼女は認めないだろう、その表情の種類は目の前の竜殺しが浮かべているものと同じ系統のものだということを。

「フォルトナ」

「はい？」

ウイスの問いかけ。フォルトナが視線を。

「策がある。竜殺しは俺サマに任せろ」

「へえ。あなたが策を……あの老兵の時と同じですね」

「さっきのやり取りで分かったア。この殺し合いの、竜狩りの肝は竜殺しだ。あいつさえ始末すれば、残りはなんとかなる」

「竜も？」

「まあ、なんとかしてみせらア」

英雄が、竜と並ぶ男を見つめる。

白いキリを従える気持ちの悪い存在、”異常”な存在を見つめて。

カタカタカタカタ。

彼の腰元に巻き付けたバケツヘルムが揺れる。

彼の一族に伝わる呪いの唄。それは時々理解できない音を発し、ポステタスの家の子供たちを震え上がらせるのだ。

今、この瞬間のように。

バケツヘルムのスリットが、なぜか、遠山の方を見つめて。

《”Paranormal” activity is detected. We're going into sealed mode to protect human life.》

言葉の意味は分からずともウイスはその使い方を本能で理解していた。

139話 紙一重の攻防（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！

明日、書籍版発売します！すでにご購入頂きました方、ご予約頂いた方、たのしんで頂ければ幸いです。

まだ迷ってる方は気が向いたり、たまたま本があったらワンタッチ触ってみたりしてください。そして、紙の本の裏表紙を見てみてください。

主教サマ派のあなたはその本をレジに持って行ってしまってください。

140話 竜祭り追撃戦 その1

「じゃあ、お姫様ア、段取りはそう言う感じで」

「簡単に言ってくれますね、ウイス。失敗したらあなた死にますよ」

「ギャハハ、骨は拾ってくれるよなア」

「残ってたら、ええ、命懸けで」

ぞくり。

遠山の背筋に今まで感じたことのない違和感が走る。

それはこの世界に来てから基本的には挑戦者側だった遠山に向けられたことのないもの。

「ドラ子、何かヤバい、気をつける」

「わかった。ふかか。……ああ、確かに。そなたを前にした時と同じ嫌な予感がするぞ」

竜殺しと竜が最大の警戒を始める。

キリと焔が彼らの周りへ揺蕩う。  
竜殺しのキリと竜の焔、これを抜ける事が出来る者はおそらく、  
今の英雄でもー。

「幸運にも」

フォルトナの星形の虹彩が揺らめく。  
新たなる眷属の席への挑戦する事すら可能なその異能が、世界を  
歪める。

「……む？」

警戒していた竜と竜殺しの身には何も起きない。

竜が首を傾げる中、竜殺しは一瞬の空白の後、すぐに気づいた。

その気づきは同類故の予感か。  
それとも己がフォルトナの立場であれば必ずやると即座に判断で  
きた知性故かー。

「銭ゲバ！！！！先輩！！ 銭ゲバを守ー」

「もう遅い」

人形の美貌に、凶暴な笑みが宿る。



フォルトナがにいいいつと唇を吊り上げて。

「ッ！？」

「エッ？」

客席。

ヒュームの王の令により動けない主教。

聖女が、本能で彼女の危機を悟り、主人の元へ戻ろうとー！。

「幸運にも、賢き主教の心臓は動きを止める」

「しまっー！？」

その女、幸運にとって天使教会と竜殺しの結びつきは厄介だった。

この国に来てやりにくかったのは、この女の存在だ。

天使教会の動向は明らかに自分達を警戒してー！。

「ああ、いと賢き主教様。貴女もわたくしにとって大いなる試練に  
「ごぞいますれば」

星の虹彩の輝きをもう誰にも止められない。

「え、ーカッ、え、こ、息……が……あ……」

「主教様！！ 嘘……やだ！！ 主教様！！」

賓客席、異常。

主教カノサ・ティエル・フィールドが胸を抑え、顔を真っ赤に染め上げて。

「銭ゲバ！！ クソが！！ ーえ？」

「やあつと隙見せたなア、オイ」

それは明確な遠山鳴人の隙。

英雄はそれを見逃さない。

金の焰がたどり着くよりも先に、白いキリが気づくよりも先に。間合いへ。

「ナルヒーツ！？」

「幸運にも。お姉様の足場はその強すぎる踏み込みにより陥没する」

ずぼ。

竜の膂力に、地面が悲鳴を上げて石畳が陥没する。それもちようどアリスの足を一瞬捕えるような形で。

充分すぎる隙。

ウイスの攻撃を、遠山は1人で捌く必要がある。

ピコン

【技能・戦闘思考】

敵、膂力は竜に近い、速度も竜よりわずかに劣る、白兵戦、無理。獲物、大剣、ならー！。

その判断は早い。

キリヤイバを構えてウイスの首元を狙う。

大剣の一撃ならばキリヤイバの方が届くのが早い。

徒手空拳によるカウンターならば、キリヤイバの自爆攻撃でダメージを狙える。

「ギャハハ、やっぱりこえーな、お前」

「あ？」

だが、ウイスの行動は遠山のどれの予想からも離れていて。

すぼん。

「は？」

視界が、暗い。

尋常ではない速度で、頭に何かを被された？  
それを理解した瞬間。

「ギャハハ、やっぱりだ、外せた、外せちまったア」

「うー」

ぼっ。

音が遅れる、腹が潰れる感覚。  
気付いた時にはもう、遠山の体が吹き飛んで。

「それやるよ、竜殺し」

腹を蹴り飛ばされ、遠山が転がって。

「なん、だっ、これ……！？」

視界が狭い、息苦しい。

遠山が自分の状況を理解するよりも前に。

「ギャハハ、イッテエ。腹の臓物潰すつもりで蹴ったのによお、霧に邪魔されたア」

ウイスの蹴りをクッションのように受け止めた濃いキリ。

遠山の身体からすでに漏れつつあるその異常。

それが、ソレを目覚めさせた。

《》Paranormal” activity is detected. We're going into sealed mode to protect human life.《》  
《VS paranormal existence system activated, boundary exceeded, confirmation type determined, ion started》

「おい、待て、これなんだよ………?」

それは、鉄の兜だ。

バケツをひっくり返したような無骨なデザイン。  
わずかなスリットから視界が通る。

「兜……!？」

遠山の顔にはそれがかぶせられた。

黒ずんだバケツヘルム。

意味が分からない。だが、すぐに運命の知らせがよくないことを告げる。

ピコン

【でろでろでろでんでん、呪われた装備を装備しました、外せません】

「あ?」

【警告・あなたの白い血にVSパラノーマルシステムが作動しました】

【すべての行動に多大なるデバフが発生します】

「あ!？」

《Started analyzing physical i

nformation, confirmed erosion  
from very strong mystery》

《Blood genes are severely damaged, 75% of the composition is being converted to an unknown substance, and the composition is already becoming less and less human》

バケツヘルムから音がする。

「英語……！？」

それは驚くことに遠山のいた世界の言葉で。

その場に這いつくばる。

何か、何かがおかしい。

身体から力が抜けてー！。

「はず、せない……！？ マジかよ」

重いのか、くっついてるのかも理解できない謎の現象。

このバケツヘルムは外せない……！

《The body's activity is suppressed for the classification and investigation of erosion mysteries》

「あらあ、もしかして、隙ですかア、竜殺し」

「ギャハハハハ！ おいおい、お前、それ被って死なねえのかよ！ ある意味ビビるわ！ まあ、いいや、じゃあな」

幸運の権能が、英雄の膂力が。

前後不覚の遠山を狙ってー！。

「ナニヲシテイル？」

「「ッ!?!?!」」



義死反応。

生き物が天敵に捕食されるのを防ぐべく、身体が勝手に行う死んだフリ。

ウイスとフォルトナ。

ヒュームにとっての上位の生物”竜”からの明確な殺意。

見えぬはずのアギトが、ないはずの爪が。

竜の部位が己の身体に食い込んだかのような錯覚。

「や、べ」

「ああ、ほんとに素敵……」

「ナルヒトニ、ナニヲシタ？」

ほおう、金色の焰が遠山を守るように空を走る。

竜の瞳が、フォルトナに狙いをつけて。

「おっと、やっぱり互いにいきなり王様は取れねえよなア」

英雄の身体が最も早く竜の威より回復する。

己の王を狙う金色の焔を大剣で斬り払う。

「うっわ、怖え」

「あはは、素敵です、お姉様……やはり、貴女はその方が綺麗……」

英雄と王女。

金色の焔を切り裂いた先に見えたのは、アリス・ドルル・フレア  
テイルの竜の顔。

大きく縦に裂けた瞳。金色の髪たちのぼるやうに、陽炎のように  
輝く焔。

竜、だ。

仲間を傷つけられ、外敵を前にした竜の顔。

「オレノタカラニ、サウルナ」

焔。

竜が扱うこの世界の現象そのものが、王女と英雄を襲う。

「おい、姫さま、これ！ シャレになんねえ！」

「ええ、ですね。……元々まともにやり合って勝てるなんて微塵も思っておりません。我々は挑戦者です。ええ、出来ることは全てやらせてもらいましょう」

「もう、イイ。死ね」

竜が、目の前の存在を完全に敵として認識する。  
まずい。

遠山は本能で理解する。

この状況はまずい。

頭に血が昇った絶対強者、それに慄きつつも戦うことを諦めない  
挑戦者。

この状況を遠山はよく知っている。

自分がなん度も繰り返し、体験したパターン。

これは、奴らの怪物狩りだ。

フォルトナとウイスが狩人、なら、狩られる怪物は――。

「く、そ……キリヤイバ」

援護を、そしてそのあとは銭ゲバをなんとか、早く。

だが

《Confirmation of signs of  
illness and start of suppressio  
n.  
Relict type identified, Japanese  
mythology . . . and several  
other unknown random numbers  
confirmed》

しゅじゅじゅじゅ。

「は？」

キリヤイバから漏れたキリがちどころに消えていく。  
身体は関節の全てに錘をつけられたかの如く鈍い。  
思考にはモヤ。

身体の全てにデバフが。

「クソ……いきなり大ピンチかよ」

【竜の祭り、あなたの一つ目の死は幸運によって訪れる。死を避けることは出来ない。あなたはそれを恐れてはならない。異なる世界より来たりしあなたは止まった鼓動を雷によって動かし術を知っているのだから】

【祭りの日、あなたの死は英雄によってもたらされる。死を避けてはならない。最後の切り札すら封じられたその後、分水嶺は訪れる。手綱を握るのはどちらか、決める時が来るだろう】

メッセージが流れる。

あの日、主教と確認した最悪の未来予想図。

自分たちの予想は正しかった。

フォルトナとウイス、この2人こそが、敵。

「……ひひ、絶対負けねえぞ」

最悪の状況の中、遠山は笑って。

「ーウイス」

「あ？」

「逃げましょう、ここはまずいです」

「あ？」

その笑いを、フォルトナだけが目にしていた。  
竜の怒りを前にしてなお、陶醉していた女。  
それが、無力化された遠山のその笑みを見た、ただそれだけで。

「場所を、変えます。あの男の近くにいたら、まずい」

「……俺の一族の兜をアイツは被っちまってる、ああなるともう、  
そのうち衰弱死するだけだけどお？」

「それでも、です。来なさい、”四つ辻の馬車”」

フォルトナがカバンの口を開く。

そこから飛び出るように現れるのは、馬車。  
首のない4匹の馬が牽く馬車が、現れて。

「アガトラの街へ、場所をかえます」

「撤退戦は難しいんだぜ、まあ、いいや、好きにしるよ、お姫様よ。お。あー、でも、身体が軽いや、あのクソ兜ともようやくおそろば出来たしよお！」

その馬車が空を歩み出す。

動き出した腕利きの魔術師がその馬車を狙うも。

「幸運にも」

眷属の席に手をかけた権能持ちには届かない。全ての魔術式は発動すら失敗して。

「お姉様、追いかけてくださいますよね？」

「……」

「貴女の縄張り、守れますか？」

それは竜への最大の挑発。

アガトラはアリスの縄張りだ。

ソレを理解した上で、フォルトナはー！。

地下闘技場の出口へ、馬車がものすごい速度で駆けていく。

竜は、一瞬、迷う。

馬車を、そして、遠山を、それから倒れる主教へ目を向けて。

「ドラ子」

「……………」

兜のスリット越しに遠山は彼女の目をみる。

竜の友は何も答えない。

遠山からの言葉を待っているように。

悪手、だろう。

今、ドラ子を1人にするべきでない。

敵は明確に竜を狩ろうとしている。

【あなたの手札は削られる。

鬼は古い樹の海の底へ、黒き竜は古い終わりへ。  
それでもコールは果たされる。

決着はあなたにしかつけられない】



【十字兜十字兜じゅうじかぶと。  
数多の化け物と殺し合う運命にある男たちの執念。  
十字兜十字兜じゅうじかぶと。  
素晴らしきヒトのヨスガ】

今の所、状況はあの予言通り。  
だから、今は落ち着かなければ。

アリスと固まって行動、自分のそばに居させなければ。  
遠山の理性はそう判断した。

「お前の力を見せてやれ、ドラゴン」

「……！ 銭ゲバを死なせるな、我が竜殺し」

気付けば勝手に言葉が漏れる。

遠山の理性以外の全ては、竜を信じた。

金色の残滓を残し、規格外の生き物がその馬車を追い始める。

這いつくばる遠山に、竜はなんの心配も言葉も手向けない。

竜は知っていた。

己を殺した戦士が、この程度のことを1人でどうにも出来ないわけがないと。

【祭りの日、あなたは2択を強いられる。友か、未来か。どちらを選んでも構わない、迷うことは許されない。

怒りを優先するもいいだろう、義を優先するのもいいだろう。

二兎を追わない者に、二兎を得る機会はない】

遠山に迷うことは許されない。

「……やってやるよ、ドラ子」

目指すは一つ完全勝利。

あのクソ迷惑な2人を始末し、冒険者の格付けを終わらせる。

そのために、まずは。

「主教様、主教サマ！！ やだ、なんで、なんで治らないの！？  
秘蹟が、どうして！？ なんて、やだ、息が、変！ 治れ、治れ治  
れ治れ治れ治れ治れ治れ治れ」

「カツ、ヒュー、ヒュー、かつ」

客席。

重い身体を引きずり、ミノタウルスくんの元へ。

そのまま客席まで運んでもらった味山が見たのは、半狂乱の聖女  
と顔を真っ青にした主教。

「先輩、銭ゲバは」

「わからない！ 急に、急になの！ なんと秘蹟で治しても！！  
治らない！ やだ、主教サマ、カノサ様！ 起きて、起きてよう！  
！」

聖女スヴィの癒しの力、そのすさまじさは全身火傷の焼死寸前の  
人物を蘇生させるほどだ。

ケガや傷を治す力がまるで効いていない。

《Combat Continuity Program activated, 93% DNA match with humans, life forms not present in . . . . . database》

「うわ……くそ、なんだよ……」

バケツヘルムから鳴り響く電子音声。  
力がこれに吸い取られていくようだ。

【対超常存在決戦兵器の簡易戦闘継続プログラムが起動しています、カノサ・テイエル・フィルドの状態を確認……INT値によるアイディアロールが発生します】

《Symptoms confirmed: generalized convulsions, abnormal sweating, loss of consciousness, abnormal vitals, and abnormalities in the electrical signals system. Organ position, consistent with mankind. Abnormality was found in the

heart region .  
High possibility of ventricular  
arrhythmia》

【クエスト発生・”1つ目の死”が発生します、失敗した場合、カ  
ノサ・ティエル・フィルドは死亡します】

【予言を覆す必要があります、すべての技能、すべての知識を総動  
員し、仲間を救ってください】

【警告・このクエストに時間を掛けた場合、アリス・ドルル・フレ  
アテイルが敗北します】

「いつものクソクエスト、だが……」

遠山に見える運命の知らせ。  
奇妙なバケツヘルムは外せず、ずっと力を吸い取って。

だが。遠山鳴人にはまだこれがある。

「なめんなよ。銭ゲバ、死なせねえぞ」

「後輩……！ どうしよう、どうしよう、主教様、息をしてない！  
！ どうしよう！ ねえ！！」

「先輩、あんたの力は死人を治すのは出来ないんだよな、すぐに答

えてくれ」

「う、ん。でも、”すべてのケガと呪い”を治すことができる……、でも主教様、全然、秘蹟を使っても治らない!!」

「じゃあ、錢ゲバのこれは呪いやケガじゃないってことだ。これは  
――」

【INT値によるアイデアロールが発生します。素性”元上級探索者”により貴方には最低限の現代医療知識が備わっています】

脳内に情報が回る。

身体の調子は最悪、遺物の使用もできない。

だが、遠山にはまだ考える力が残っている。

幸運にも、賢き主教の心臓は動きを止める

フォルトナの言葉、幸運による権能がこの事態を引き起こした。

だが、それは呪いなどの類ではない。

幸運による影響なのは間違いない。だが、これはもっと遠回しなやり方だ。

――怪我や呪いの類ではない。

――主教の呼吸は止まったり、再開したりを繰り返す。

「……予言を覆す？　まで、おい、クソメッセージ。これはどの予言のことを言っている？」

思考の末に出たその質問。

遠山にはそれが答えとなった。

【竜の祭り、あなたの一つ目の死は幸運によって訪れる。

死を避けることは出来ない

あなたはそれを恐れてはならない。

異なる世界より来たりしあなたは止まった鼓動を雷によって動かす術を知っているのだから】

「止まった鼓動……雷……心臓……あ！！」

《アイデアロール、判定成功》

わかった。

今、必要なことが。

「ごう、はい……！ 主教様が、主教サマが死んじゃう……」

わんわん泣き出す聖女の肩をバケツヘルムの変質者ががばつと掴んで。

「先輩！ 体を治す力では今の銭ゲバを救うのは無理だ。もしかしたらこの世界では治療することなんて不可能かも知らねえ！ だが、今は違う……！」

遠山がスヴィの肩を強く掴んだ。

「ある、の？ 主教サマを救う方法が……」

「一つ……ある」

「えっ」

「電気だ！ 電気さえあればなんとかなるかもしれないねえ！ 魔術師の皆さん、電気……雷をうまく扱える奴はいるか？」

いつのまにか様子を確認してきた魔術師たちが、味山の周りの空をそれぞれの方法で飛んでいて。



「人知竜様の言いつけです。何かあれば、全力で貴方に力を貸せと。雷の魔術式は私の専攻です、竜殺しよ」

騎士鎧の魔術師が1人、遠山の前へ。

彼の手には青白い電気が迸っていて。

「こ、後輩、何をするつもり？ 魔術師に人を癒すことは出来ない、私の力で、私が薬草を、天使の雫を作れば主教サマも」

「間に合うわけねえだろ！ あと数分すれば銭ゲバは死ぬぞ！ すぐに準備を！」

「何を、する気なの？ 後輩、主教サマはー」

「今銭ゲバに必要なのは薬でも癒しの力でもない！ めちゃくちゃになった身体の電気信号を一撃で元に戻す電気ショックだ！」

「へ？」

「銭ゲバは呪われたわけでも怪我をした訳でもない！ これは、心室細動による心臓発作だ！」

遠山が、バケツヘルムを被ったまま、マントをバサリと翻し。

「異なる世界より来たりしあなたは止まった鼓動を雷によって動かす術を知っているのだから」

「これより！！ 天使教会主教カノサ・ティエル・フィールドの心室細動除去、――電気ショック治療を開始する！」

ギョツ。

140話 竜祭り追撃戦 その1 (後書き)

久しぶりの更新ですみません。  
しばらく不定期で更新します。  
完結まで書くので気長にお付き合い頂ければ幸いです。

書籍や漫画出てるのでそちらもぜひ検討していただければ幸いです。  
絵が全て良い。

## 141話 その名の下に

自分が弱くなっている自覚がある。

昔の自分ならば、きつともう全てを焼き払って終わっていただろうに。

「あははははは！！ 見て、みて下さいな！ ウイス！ お姉様が、わたくしを私達を追いかけてきていますよ！」

「舌噛むから黙ってるバカ姫！ なんつて殺気だア……上から見下ろされてるだけなのに、内臓を鷲掴みにされてるような……」

オレの眼下、街の大街道を馬車が駆け抜けていく。

全てはオレの甘さが招いた結果、全てはオレの中途半端さが原因のせい。

奴はオレの友を手にかけてしようとした。

竜の宝に手を出した罪人、竜の縄張りを荒らす不屈者。

「ならば、フォルトナ。貴様の死はオレが招いてやらねばならんよな」

「ああ、お姉様、お姉様の心を感じます。あははは、たのしい！  
ウイス！ わたくし、わたくし、久しぶりに生きててよかったです  
思えてます！」

「はいはい、そら良かったな……っ！ うおおおお！？」

馬車が急停止、ふむ、街に当てないように焰を向けるのは難しいな。

「焰……！ クソ！ おい、バカ姫！ 話が違うぞオ！ 街中を走れば焼かれる事はないって！」

「あはははは！ 見ましたか！？ ウイス、なんて繊細な焰でしょう！ 私たちだけを焼くような軌道！ かの竜は、街に被害を出さないように動いています！ お姉様…… あああ、弱くなりましたねえ」

ゾクッ。

背筋が震える。

オレはこれを知っている。我が竜殺しと初めて出会い、そして殺された時の感覚と同じー。

オレは知っている。

ヒトは時に、竜の命にすら届き得る牙を有すことを。

ヒトは決して侮れぬということ。

だが。

「良い、フォルトナ。やってみせよ。挑んでみよ、小さき定命の者よ」

「あは、お姉様……変わっていく貴女が寂しくて、昔の貴女が懐かしいけれど……それでも貴女は美しい。ですから、死んでくださいな」

「チツ、仕方ねえ。ここまできたらやるしかねエかア。世界をひっくり返す試金石だ。竜殺し、名乗りをあげてみようかね」

オレを殺し得る存在から感じる殺気。

それが少し心地よい。

「ふかか」

溢れる笑みに、ああ、オレは思い知らされる。

暴力と支配への欲求を根源とする生物、竜。

「ああ、オレは、どこまで行っても、竜だ」

今はただ、その実感だけが心地よくて。

「離れて離れて！！ はーい、電気通します！！ 金属のアクセサリー持つてる人はいないね！ はい、じゃあ、魔術師のお姉さんお願いします！！」

「えっ、いや、ほ、ほんとに！？ が、学長様、本当にこの目つきの悪くてなんか変なバケツヘルム被ってるおかしい方の言う事聞いても良いんですか！？」

「……………うーん、開心魔術では嘘は言っていない……………心臓の微細動による動作不良を、微弱な雷で無理やり止めて、正常な動きに戻す……………」

理屈は確かに通ってる、全知、いや、人知竜様の人体考察本にも、人の身体には常に微弱な弱い雷が流れてるって言うし……」

「新たな知見……ああ、人知竜様のご友人は素敵だ……是非、その知が正しいものであるかを知りたい……」

「とにかく細かい話は後だ！ ラライム！ 学園きつての雷の魔術式の使い手のアンタにしか頼めない、ビリつとやんな！」

「あ。わわ。主教サマ、主教サマのお体を魔術師のペテン師どもに……でも、でも、後輩が言うなら……もう、それに賭けるしか……ああ、天使様」

「ぶも」

わちやわちやの闘技場。

瀕死の主教を囲むのは、ギョツとしているチベスナ。魔術師、わたたしている主席聖女、そんな奴らを高い所から見下ろしているミノタウルス。

「ほ、本当にやっついていいんですか！？ 治癒の秘蹟持ちの聖女でもダメだったダメージを負ってるのに」



「細かいことは省くが、銭ゲバのこれはダメージじゃなくて状態異常だ！ 電気ショックによる状態異常だ！ なので先輩の治癒じゃどうにもならん！」

「ひう……わた、わたし、やくたたず……主教サマがこんな時に、何もできない……」

「あ、泣かした」「見た？ 泣かしたよ」「すごい、これが人知竜様のご友人……」「あの聖女を言葉だけで……」

遠山の言葉にポロポロと涙を溢し始めるスヴィ、ヒソヒソとその様子を語る魔術師。謎に評判を固めていく遠山。

「待て、待て待て待て、今のはそーゆーんじゃないだろ。やめようよ、良くないよそういう。とにかく、今は電気！ 電気ショックだ！」

「で、でも、私、そんないきなり言われてもどんな量とか、どんな場所とか、匙加減全然わからないんですけど！」

鎧姿の魔術師、声からして女性だろう彼女が遠山に向けて声を上げる。

「そこは……確かに。俺も細かい電圧とかまでは……やべえな、聞き齧り知識で異世界知識無双はきつかったか？」

「……ふむ、ご友人、少し失礼を」

「あ？ 何を……」

別の鎧姿の魔術師、ねっとりした妙に残る声の男が遠山の顔の前に手を翳す。

「時間がないのでしょうか……？ ご友人のその、雷……言え、電気と呼ぶ概念のみを私の術式で抽出致しますので……」

「あ！ ルート、ありがとうございます、それ助かる！」

鎧姿のネットリボイスの男の手のひらに紫色の光が灯る、

それはゆっくり、声の高い鎧姿の魔術師へと渡されて。

「ーほう。これは、興味深い……素晴らしい、ご友人、贈り物をありがとうございます！」

「なにこれ、AED……？ 心室細動……電気ショック……？ ああ、何これ凄い、人体に対する未だかつてない知見……！ あはは、ルート、これは」

「ええ、我々魔術師が何よりも求める未知の知識……ですが、ライム、その知識を理解したのならー」

「ええ、分かってるー！。電気ショック療法は、時間が命……！ 全部理解した、電流、電圧、新たな概念、雷に、こんな可能性が……！」

想像以上に話が早く、遠山がやりたい事が魔術師に伝わったらしい。

鎧姿の魔術師、その1人が主教の胸に手をやる。

「衣服を脱がせてる時間も勿体無い！ ぶっつけ本番で行くよ！  
ー術式、仮説構築開始」

ぴりりり。

青い雷が彼女の手元から迸る。

「あ」

「大丈夫だ、先輩」

不安そうなスヴィの背中を

どうん

「げつつつつつつほ！！！！！！ ウオツエ！！ ウオエエエエ  
エエエ！！！！ ゲホゲホ！！！！」

水揚げされた魚のように体を跳ねながら、起き上がるその体。

「あ、あああああ！！ しゅ、主教サマ！！」

「うそ、本当に起き上がった……」

「雷で……なんで……」

「流星です、3代目学長、遠雷のラライム、見事な術式操作でした  
……」

「アンタの記憶伝播のおかげでもあるよ、でも、1番奇妙なのは……  
……」

「ええ、彼の持つ知識、です」

魔術師たちが、起き上がった主教の周りを囲む聖女と審問官を見つめる。

知識の輩たる魔術学院、その誰も知らざる知識を持つその男。

「おおお、やった！ 銭ゲバ！！ ひひひ！ お前、死んでないじゃない！」

「はあ、はあ……何が、何があったの……急に胸を殴られたかと思ったら、意識が……ぎゃ」

「主教さま、主教さま主教さま！！ 良かった、よかったよおおお  
おお、うわああああ」

「ちょ、スヴィ……はあ、大体予想がつく。私、殺されかけたのね」

泣き喚くスヴィを抱きしめつつ、主教の鋭い目は遠山を見つめる。

「予言はこれでひとつクリアだな」

「ゲホッ、まさか本当にこんな意味不明に死にかけるとは思わなかったっつ……でも、これで大義名分は充分ね」

「ああ、王国の王女様だろうが、なんだろうが、帝国の竜と天使教会のトップに手を下した、これでなんの憂もなく王族殺しが出来る訳だ」

「……死の予言は、ひとつじゃないわ。トオヤマナルヒト、アンタもー」

「いつものことだ、気にするな」

主教の言葉に手をひらひらと振って遠山が答える。

ミノタウルスはすでに遠山の意を汲み取り、その大きな手のひらを乗り場のように差し出して。

「ドラ子を追う。あとのいざいざ、追撃、手勢、その他全て任したぞ、ボス」

「誰がボスよ、でも、任された。……アンタ、それ、大丈夫なの？」

バケツヘルムの遠山に、カノサが声を向けた。

彼女の目から見ても明らかに目の前の男は本調子ではなくて。

「余裕だ」

「あつそ。じゃあ、行きなさい。――天使教会主教、カノサ・テイエル・フィルドの名の下に」

ぐい。

古代種、ミノタウルスの手のひらから、肩へ飛び乗る男。

聖女に背中を支えられた死にかけの銭ゲバが、右手を向けて。

「異端審問官、トオヤマナルヒト。殺してきなさい」

「了解、テイエルフィルド」

竜殺しが、竜の加勢へ。

141話 その名の下に（後書き）

読んで頂きありがとうございます！ブックマして是非続きをご覧ください！

9月25日、ダンワルコミカライズの2巻発売予定です！是非本棚にお迎えくださいませ。

また今年の、このライトノベルがすごい！の対象に本作の一卷、二巻も投票対象になっています。

めんどくさいと思うけどたまには推すかという方、どうか宜しくお願ひします。



---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<https://ncode.syosetu.com/n4169ha/>

---

現代ダンジョンライフの続きは異世界オープンワールド  
で！【書籍2巻5月25日発売】

2023年9月10日17時43分発行